

ワイルド&ワンダラー

八堀 ユキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アンカレッジ解放から半年。

男は家族とともに一時の平和を満喫していた。

だが、世界は突然にして終わりを迎える。

逃げ惑う住人たちの中に、彼も家族とともに入っていく――。

最後に来るであろう破滅への一撃から、自分たちを守る場所に向かうために。

――そして終末時計の向こう側で。

世界が終わってから約200年が過ぎていた。

青年は突然、意識が覚醒する自分に気がつく。

生まれたままの姿で、無音の氷の棺が並ぶ中で。彼は震えながら立ち上がる。

すべてを破壊する力がマサチューセッツ州という名前を吹き飛ばし、かわりにそこを連邦と生き延びた人々は呼ぶようになっていた。

おぞましい生体実験をもくろむVault-TECの地下シエルター。

そのひとつ、Vault11の封印がついにこの日。彼ら2人の手によって破られる……。

~~~~~

Fallout 4の2次創作で本編に沿ってるようで。そうでもないです。

主人公が2人なので交互にエピソードが進みます。落ち着きないです。イラつかないで、広い心で読んでいただけるとうれしいです。

投稿は不定期。書き上げたら夕刻に投稿します。

## 目次

### 登場人物

主人公レオのデータ | 1

主人公アキラのデータ | 4

### 孤独な放浪者

200〜Two Hundred | 7

Sweet Dreams | 15

死の爪(Leo) | 23

Sloap (Akira) | 33

慌しい旅立ち (LEO) | 43

その木に実るは望まぬ果実 上 (Akira) | 57

輝きはまだ遠くに (LEO) | 71

その木に実るは望まぬ果実 下 (Akira) | 84

支援要請 (LEO) | 98

南へ!! (Akira) | 109

連邦のダイヤモンドシティ (LEO) | 120

CHAOS GATE (Akira) | 132

最初につまづき (LEO) | 146

Kill is Good (Akira) | 160

眠る連邦 | 175

放浪者の帰還 (LEO) | 191

仲間 (Akira) | 202

向き合う心 (LEO) | 215

レキシントン攻略作戦 | 227

勝利の美酒、酔えず | 243

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 良薬、口に苦し              | 254 |
| 新生ミニッツメン             | 265 |
| コズワースの義              | 281 |
| 憤怒の罪                 | 296 |
| 再び、別れの時              | 305 |
| トリニティタワー攻略 (LEO)     | 319 |
| エージェント・フィクサー (Akira) | 336 |
| ボストンコモン (Leo)        | 348 |
| 両手に抱く、機械の花 (Akira)   | 360 |
| コンバットゲーム (LEO)       | 379 |
| Wind Up              | 388 |
| 映し鏡                  | 399 |
| 衝動                   | 415 |
| リズム・ネイション            | 427 |
| マクレデイの問題 その1         | 441 |
| 行雲流水 (Akira)         | 454 |
| 残酷なリアル (LEO)         | 471 |
| キッドナップ (Akira)       | 485 |
| RE:UNION             | 497 |
| 用途不明のレポート (1章まとめ)    | 521 |
| 濃霧                   | 525 |
| 法なき世界の番人             | 534 |
| ヒーローの憂鬱              | 550 |
| 怒れない、ハンコック           | 564 |

|                                |         |       |
|--------------------------------|---------|-------|
| 忠誠の復活                          | (LEO)   | 578   |
| 愛のメモリー                         | (Akira) | 591   |
| センパー・ファイ!                      | (LEO)   | 608   |
| The chosen one? Chosen the wor |         | 624   |
| ld?                            | (Akira) | 637   |
| グラウンド・ゼロ                       | (LEO)   | 655   |
| マッドネス                          | (Akira) | 668   |
| 連邦                             |         | 683   |
| トレランス・ゼロ                       |         | 705   |
| だまし絵                           |         | 722   |
| 笑顔                             | (Akira) | 741   |
| 軍の流儀                           | (LEO)   | 761   |
| 笑顔 その2                         | (Akira) | 778   |
| ミニッツメン                         |         | 797   |
| 炎獄                             | (Akira) | 814   |
| 右へ 左へ                          | そして元へ   | (LEO) |
| キャプチャー                         | (Akira) | 830   |
| 多岐亡羊                           | (LEO)   | 851   |
| 鬼ごっこ                           | (Akira) | 865   |
| 汚れた聖域                          |         | 882   |
| 悪意                             |         | 898   |
| 良き隣人たちへ                        |         | 913   |
| 悪鬼の足跡                          | (LEO)   | 924   |
| 報復の権利者                         |         | 937   |
| 日々、それぞれの中で                     | (Akira) | 956   |

春、遠し

Silent Survivor's

沈黙は金、雄弁は銀 (Akira)

Heavy (LEO)

銀の輝き (Akira)

隣人の条件 (LEO)

アンチ・メカニスト (Akira)

リフレイン (LEO)

Explore Vault 88 (Akira)

Reinforce

ウエポン チョイス (LEO)

ARIZE (Akira)

アカディアの人造人間 (LEO)

完成しえない場所 (Akira)

正しい事

Without it! (Akira)

プレストン・ガービー

オーバーキルズ I (Akira)

スマート・アレック

オーバーキルズ II (Akira)

図書館戦争 (LEO)

オーバーキルズ III (Akira)

RE:Public

立つ鳥跡を濁さず

交錯 I

|                                     |      |
|-------------------------------------|------|
| 空白の時間 (Akira)                       | 1415 |
| 交錯 II                               | 1429 |
| 交錯 III                              | 1450 |
| Distress (LEO)                      | 1472 |
| 沈殿する静寂 (Akira)                      | 1491 |
| Here's to you                       | 1515 |
| far away                            | 1539 |
| つながり                                | 1558 |
| スピーチ                                | 1577 |
| Women                               | 1591 |
| アンストツパブル                            | 1607 |
| 対立 I                                | 1622 |
| 暗喩 (Akira)                          | 1642 |
| 救いのシ者                               | 1661 |
| 対立 II                               | 1684 |
| 約束―過去 (LEO)                         | 1706 |
| Vault 88                            | 1733 |
| 放浪者、一時の帰宅 (LEO)                     | 1751 |
| 未来の代償                               | 1770 |
| ガラム I                               | 1800 |
| ガラム II                              | 1829 |
| Complete and total Victory (完全なる勝利) | 1853 |
| シルバー・シユラウドvsメカニスト                   | 1882 |
| Shutter Island                      | 1929 |



|                      |     |
|----------------------|-----|
| 生死 1                 | 233 |
| SCRUM II             | 223 |
| アイスブレイカー (LEO)       | 229 |
| SCRUM I              | 227 |
| カラー                  | 249 |
| What's wrong (Akira) | 223 |
| Need to Know (LEO)   | 209 |
| BED                  | 217 |
| 鳴動する連邦               | 214 |
| キャプテنز・ダンス           | 212 |
| BAD CIRCLE           | 209 |
| 新しい道III              | 207 |
| 隠せないもの (Akira)       | 205 |
| アカデミア再訪              | 202 |
| 見上げる壁                | 200 |
| 3日後 (Akira)          | 197 |
| 新しい道へ II (Akira)     | 195 |
| 新しい道へ (LEO)          | 194 |
| 憂悶 (LEO)             | 191 |
| 狂気纏う正義 (Akira)       | 188 |

## 登場人物

### 主人公レオのデータ

〔名前〕 フランク・J・パターソン Jr

〔愛称〕 レオ

〔備考〕

フランス系アメリカ人だが、血に中東系が色濃く残っており、外見は髪の色はプラチナ、浅黒い肌でほんのりあごひげのさわやか中年男性である。英語、フランス語、スペイン語が話せる設定だが作品中でそれが生かされることはない。身長は183センチ、体重は91キロのちよつと太め。

原作ゲームでは Vault 111の唯一の生存者にして主人公。

この物語でもそれをなぞっていく。

某女神転生風に言うと、LAW HERO。

激戦区アンカレッジを解放するのに大きな貢献を果たしての帰還。英雄だったが、軍を離れ退役したばかりである。驚いたことに極限状況から帰還したというのに、この男には他の兵士のような心的外傷があらわれることはなかった。

退役後、ひそかに政治家への道を模索しており。家族を連れてボストン郊外の高級住宅地サンクチュアリへ引越したのもそのための準備であった。

だが、そこで世界が崩壊するのを自分の目で見る中、Vaultへ逃げ込むはめになる。

2000年以上もの長い冷凍冬眠から目覚めた結果、肉体のポテンシャルは軒並み低下してしまった。しかし反面、戦闘技術は今も多く残しており、脅威はそのままである。付け加えると、低下した能力も回復の可能性が残されているため、これからの成長の余地はまだ残されている。

性格は軍人によくいるようなタイプと違い、独特のスローテンポでマイペースなところがある。現役時代はこのためマツチヨ思考の周囲からは変人と思われているふしがあった。

性格はきわめて穏やかで人に好かれ、さっぱりしている。そのときの状況で立場と意見をはつきりさせ、意見を押し付けるようなことは好まない。だが物事を断じてしまうと、柔軟さにかけるところがある。

過去や未来に振り回されることが少なく、現在の状況を分析することに注力する。このために時に、豹変して冷酷とも思える行動をとることがあるが、それは本人なりに状況を分析して最もよいと思われるものを選んだ結果である。

使用する武器はライフルを中心に、元兵士のせいにか実弾系を好む。コミックを愛し、カラテとボクシングもたしなんている。左のショートフックからの多彩なフィニッシュパターンは200年以上たった今も健在だ。

ピストルと爆薬の技術は元々得意ではなかったこともあり、知識はあるが技術は失われてしまった。

クラフト技能については、残念ながら期待できない。

パワーアーマーの操縦と整備はできるが、爆薬や銃器の改良などはほとんどできない。(興味がなかった)

新たな世界に失望し、心の底では自分の未来に対しても希望を失っている。そんな混乱と失意に満ちた連邦で自分のできることを次第に考えるようになっていく。

#### 「所持PERK一覧」

(注意:ゲームと違い、個別のPERKにランクは存在しないと考えてください)

- ・Iron Fist || 素手攻撃が得意
- ・Armorer || 防具の知識と改造

・Black Smith || 近接武器の知識と改造  
・Pain Train (特殊) || パワーアーマーで敵に突進する  
技。パターソン自身は知識と経験はあるが、今は能力が落ちていて使えない。

- ・Pickpocket || スリの技術
- ・Rifleman || ライフルの技術
- ・Locksmith || 鍵あけ技術
- ・Ladykiller || 異性へのアプローチ技術
- ・Attack Dog || 犬の攻撃上昇
- ・Medic || 医療の知識と技術
- ・V.A.N.S. || 目的地への最短経路確認
- ・Commando || マシガンの知識と技術
- ・Sneak || 隠密技術
- ・Mistress Sandman || 暗殺技術
- ・Scrounger || 弾丸やエネルギー弾をよく拾うし見つける

ことができる

## 主人公アキラのデータ

〔名前〕 五十嵐 晃

〔愛称〕 アキラ

〔備考〕

純日本人、だと思われる。外見は黒髪で生っ白く、目つきが悪い、無精ひげの19歳男性。

原作には登場しない、オリジナルキャラクターにしてもう一人の主人公。

某女神転生風にいうとCHAOS HEROとなる。

旧世界の記憶はもとより、Vault111にいた経緯。自身の過去の一切が不明という困った人。

また、彼自身の肉体にも多くの秘密があり。そのせいでひどい目にあう宿命にある。

元軍人であるレオと違い、彼には戦いを有利にする戦闘技術はなにもない。つまり一般人程度の射撃の腕しかないし、近接戦闘なども期待はできない。ただの無害な人、最初はそうだった。

ソフトウェアやシステムの知識、プロジェクト管理、基礎設計にデザイン。どれも素早かつ的確に発揮することができる、この時代にあつて貴重な存在。

また、自分が知らない新しい技術をとりこむことに貪欲だが、手先はこれで不器用であつたりする。

性格はナード気質で礼儀正しいものの。見た目の落ち着きと違い、敵意に対しては敏感に反応する。

問題を前にすると黙考し、自らの中で解決作を見いだすと、ややも強引に話を進めようとしてしまう。そのため他人には支配的であると見られるが、単に本人の説明不足であり、コミュニケーションをとらないだけだったりする駄目人間である。

過去がない影響からか、現在よりも未来に目を向け。目標をゴール

に設定すると、そこにたどりつけるように物事を引つ掻き回そうとする傾向がある。

アキラの問題は、記憶喪失というだけではとどまらない。Vault—TECの生体スキャンをなぜか遮断してしまうので、彼の肉体についての情報は驚くほど少ない。判明しているのはEndurance（身体的健康）が8以上、Intelligence（知力）は6以上あるということだけ。

またこのことでピップボーイを普通に使用できないでいる。

愛用する武器はピストルタイプと大型兵器の2種類。

ピストル系では期待できない高火力を、大型武器で補うスタイル。だが武器の威力を正しく発揮し、運用する技術が伴わないという弱点がツネについてまわる。

戦前の記憶がないことで当初は情緒不安定であったが、自分が無力なままではないとわかると冷静さを取り戻していった。レオに対して高い忠誠心と尊敬を持っている。

彼もまた、レオと同じく謎を追いかけるために連邦へと飛び出していく。19年間の思い出せない記憶と、自分の肉体に隠された秘密を知るために。

#### 「所持PERK初期一覧」

（注意：ゲームと違い、個別のPERKにランクは存在しないと考えるください）

・Fight the Power!（特殊） || 権力組織への反感から、なんであれそれに属する相手に対し攻撃ボーナスをえる

・Thought You Died（特殊） || 生命の危機に瀕すると、肉体が傷を急激に癒そうとして異常行動を開始する

・Comprehension（特殊） || 自分が知らない技術をより深く理解しようとする

・Wild Wasteland（特殊） || ○×なイベントが発生

し、巻き込まれてしまう

・Armorer 防具への知識と技術

・Lone Wanderer 独りで旅することで、PERKの効果を高め。他にもボーナスを手に行ける

・Gun Nut 銃器関連の知識と技術

・Hacker コンピューターに侵入する技術

・Scrapper ゴミ回収に関する技能

・Science 科学技術と知識

・Fortune Finder この世界の通貨、キャップをなぜか大量に見つけてしまう

## 孤独な放浪者

2000 (Two Hundred)

(語り手)

夜の風をきり馬でかけるのは誰だ？

それは父親と子供

父親は子供を腕に抱え

しっかりと抱いて温める

息子よ、何を恐れて顔を隠す？

(シューベルト作、魔王より)

凍る世界にも、夜の星は美しく輝いていた。

地上を雪と死体でうめつくしているせいだろうか、星はとても強くその輝きを頭上に見せている。

私は冷たい大地に横になり、白い息を吐き、苦痛にあえいでいた。

——人は、過ちを繰り返す。

これは私の言葉ではない。

祖父から伝え聞いた言葉の意味を、私はただ味わっている最中というだけだ。そしていつか、それを誰かに——息子に語って聞かせる日が来るのだろう。そうでありたい。

2007年1月9日未明。

かつてカナダと呼ばれていた国が消え、アラスカは戦場になっていった。

そして私、フランク・J・パターソン・Jrは部隊をひきいて半ば強引な——いや、はつきり言ったほうがいいだろう。この難攻不落の敵要塞に対し、超高高度からのパラシュート降下などという自殺作戦を決行した。

その結果が、このザマである。

昨年末、クリスマスを前にして妻の出産に一時帰国が許されたの



は、要するにこの作戦で心置きなく死んでもらってかまわない、そういうことだったのだと今ならわかる。

それを理解しないまま、一時帰国を懇願した上官たちに感謝を伝えて回ったあの時の自分の愚かさ、馬鹿さ加減に、思い出すと恥ずかしくなってこの場で自殺したくもなる。

クリスマス前に無事に出産した妻のノーラと、生まれたばかりのシヨーンと、実家で共にクリスマスを楽しく過ごして前線に戻つてくると。自分よりも前にそうした儀式を終わらせていた前任者たちは全員、見事に戦死していた。

そうだ、彼らの目論見どおり。そして私の順番が来た。

「こんな幸運、めったにないことだぞ。奥さんと息子さんをつれて、家で楽しく過ごして来い」などとあの時は笑顔で送り出した上官たち。

あいつらは私に生前での2階級特進まで用意し、司令部ですつと待ち構えていたわけだ。

まったく――。

足音がした。

痛みと、自分のついてないここ数日の呪わしい展開に思いをはせ。うっかり気がつかなかった。

降りてきたときのパラシュートを見られたのか？それとも着地に失敗し、倒れてうめき声を上げ、もがいているところを見つけた？とにかくどうすればいい？

その場で今から飛び起きれば、それで目出度く相手に撃ち殺され。無事に任務は失敗するかもしれない。

私は死んだフリをすることにした。わかっている、馬鹿みたいだと思ふよ。飛び起きなくとも、うめいている相手を中国軍は止めを刺すかもしれない。でもこのときはそれが名案に思えて、これしかなかった。

「無様だったな、大佐。もう死んだか？」

どうやら運は私を見放してはいなかったようだ。

「ハロルド、無事だったか」

「こんなことで死んだら、俺がもう一度殺してやったのに、大佐。あんたのせいでこのスーサイド<sup>自殺</sup>・スクワッド<sup>部隊</sup>の副官にさせられたんだ。任務放り出して俺より先に死んだら、きつとそうしたぜ」

「黙って腕を貸してくれ、このカナダ野郎」

「ああ」

差し出された手が握られ、力強く引つ張り上げられる。

体の節々だけでなく、頭部にも痛みがあるが。出血はない。

世界を冷たく見下ろす星空が消え、凍る世界が視界に入ってくる。

強い風と、白銀に覆いつくされた夜の山岳地帯は、不気味に蒼く輝いているように感じられ、不思議と明るい。

「大佐、あんたの装備は駄目だった」

「谷底に落ちたか？」

「似たようなものだ、向こうでばらばらになっていた。これを」

副官——長く相棒として付き合っているハロルドが、彼の双眼鏡を渡してくる。

私はそれを使って山の岩肌をなめるように確認しながら、これからの行動を脳内で確認する。

アンカレッジの戦い。

これは11年続く戦争だ。

誕生したばかりの息子と、妻の泣きそうな笑顔に見送られ、幸せな家庭に背を向けて戻ってきた私に上官どもはそれを突きつけてきた。

中国軍、敵司令部への直接攻撃作戦。

「よし、一度しか言わないからよく聞け。あの日、敵は上陸するとあつという間にこの場所に設備を構築してしまった。そうだ、敵は素人じゃない。訓練を受けた大勢の殺人機械だ」

「このアンカレッジ解放のため、幾度も作戦は立てられたものの。やつらは今も好き放題に暴れ、我々の仲間は傷つき、この場所で命を奪われている。そのような横暴を、これ以上許すわけにはいかない」

「おめでとう、君はこの作戦をもって大佐に昇進だ」

そしてわかった。

自分と共にこれまで戦った戦友たちが、自分が休暇を楽しんでいる間にこれと同じ言葉をおしつけられたということ。

そして、自分も彼らと同じことをこいつらは望んでいるのだということ。

あえて口には出さなかったが、あいつらには一つだけ疑問を投げかけたいと思っていた。

だが、聞かなくてもわかる。もし口にすれば、きつとこう答えたはずだ。

「なに？もし大佐の部隊が失敗したら、だと？心配するな、ちゃんと考えがある。予備プランというやつだ。

その時は別の誰かが大佐の後をついで——この任務を引き受けてもらうことになる。そして倒れた君たちのために立派に活躍してくれるはずだ。

だが、当面はパターンソン大佐……彼と彼の部隊の奮闘を期待し。我々は全力で彼らを援護してやろうじゃないか」

まったく、冗談じゃない。

任務の成功にはまったく興味はないが、私は妻と息子を残してこの戦場で死ぬつもりはない。

「いこう、相棒」

「大佐、本当に生きて帰れると思ってるのか？正気じゃないぜ、この作戦」

「そうだ、わかってる。敵前線司令部とそれを囲む複数の砲台の破壊。それをただでさえ少ない人員の部隊を分けて潜入し、武器は現地調達する。ひどい自殺作戦だ」

「それでもやるんだな。祖国のためか？」

「ああ、そうかもな。お互いのため、ファツキン・USAのためさ」

そうだ、そのとおりだ。

私は死なない、彼女と息子の元へ。家族の待つ家に戻るため。

この任務に失敗はありえない。

|||||

冷たい建造物の床にはいつくばると、私はきしむように体が感じる苦痛から逃れようとして悲鳴を上げた。

ここはVault 111。

私はつい先ほど、後ろにある忌々しい冷凍装置から転がり出たばかりだった。

戦場を生き抜いた私は、父親となるべくあるべき場所に戻ってきた。無事を喜ぶ笑顔の妻と、元気に泣く息子の下へ帰ってきた。

私は死ななかつたのだ、それなのに――。  
体がまだいうことをきかない。

それでも必死に体を動かそうとし、必死になって自分の正面にある冷凍装置にしがみつく。装置の表面には霜が張り付き、そのあまりの冷たさに皮膚がやけどを起こしたようで私はもう一度、声を上げる。

悪夢はあの戦場にすべておいてきたはずだった。

軍の要求に答え、くだらない軍の戦意高揚をかねたシミュレーターとやらの開発にも嫌々ながらも協力してやった。

そうやって全てにケリをつけ、私は家族の元へようやく戻った。なにかもすべてはこれからだと話し合っていた、それがどうしてこうなった。

新しい悪夢が、開かれた冷凍装置の中から姿を現した。

そこに眠っているはずの、自分の息子の姿はなかった。

そしてそこにいた愛した妻は、無残にも頭を撃ち抜かれていた。脳が破壊されたのだ、きつと苦しむ暇はなかったとは思う。でも、それが慰めになるか!?

低温で火傷した震える指先で、私は彼女のほほに触れた。

私の中の何かが崩れ落ちるのを感じ、目から涙があふれると。今度こそ私は湧き上がる怒りを抑えることをやめて絶叫した。

凍る世界はあの戦場で私を殺せなかったが。

かわりにこの瞬間にも、私の心を完全に殺してみせた。

夢か現とわからないあのイメージ映像が、事実であったこと――。

シヨーンは、息子は怪しげな一団に連れ去られ。

それに抵抗をみせた愛する妻は、問答無用で殺された、その全て。装置の中でその一部始終を見ていることしかできなかった。

私はなんとしても守らねばならないものを前にして、無力でしかいられなかった。

その事実がさらに私を苦しめる。怒らせる。

そうだ、あの日のようにすべてを炎に沈めてしまえ、と抗えられない誘惑が胸の奥底に生まれ、育てようと決めた――

|||||

「――、こんなことをした奴を許さない。ノーラ、愛している」

私は悲しいことに、退役してもまだ兵士だった。

気が狂うかと思うほどの怒りと、悲しみの激流は、私の中で竜巻となつてはいるが。その方向はすではつきりときめられていた。

妻の手から息子を奪い、連れ去ったあいつら。

可愛そうな妻に、あろうことか銃を突きつけ、命を奪ったあいつら。

兵士として戦場に戻る私を、人権派の弁護士で知られていた妻は、複雑な思いを押し殺して支えてくれた。国にも、軍にも愛想を尽かした私の再出発で、家族はきつと幸せになれるわ。

争いを嫌っていた彼女はそう言つて喜んでいたというのに――。

「シヨーンは必ず取り返す。必ず、だから――」

暖かさが戻るはずのない彼女の指をとると、彼女の手から指輪をそつとはずした。

もうここに魂はない。逝つてしまった、あの多くの戦場で消えて言った友人たちと同じ場所へ。ならばせめて、彼女が思い残さぬように神の世界に旅立ち。私が送るであろう吉報を、そこでも笑顔で聞いてほしかった。

だから彼女を――遺体をここから動かすつもりはなかった。Vaultは、この場所はもう墓場だ。

そして自分はそこから這い出た、死にそこなった男になつてしまつ

た。こんなことにならなければ、彼女のそばで共に永遠に眠りにつけたかもしれないのに――。

「ノーラ、さようなら。せめてここで、君は安らかに――」

悲しみが再び全てを圧倒し、涙があふれるのをとめられなかった。戦場で戦い、恐ろしい数の敵を殺した自分は生き残り。優しかった彼女は去ってしまった。だが、自分は絶望に動けなくなるわけには行かない。

シヨーンが、息子がいる。

装置のレバーを動かし、彼女を再び装置の中へと封印する。

やけどで赤く膨れ上がった手のひらで涙をぬぐいながら、私は一歩進み始めた。

目指す敵と、自分に残された最後の家族を求めて。

――だが、話は簡単ではなかった。

この場所のシステムは半停止状態であるらしく。私の力では、息子を連れ去った連中がここでなにをにきたのか。なぜ、シヨーンを連れ去ったのか。さっぱりわからない。

そのかわりV a u i t e e r と呼ばれたこの場所について情報を手に入れることができた。

この場所は最初から近隣の住人を集め、冷凍装置にかけるために用意されていたのだ。

ぼんやりと思い出したが。そういえばあの日、緊急の用事だと口にして新居を訪れたV a u i t e e r T E C 従業員は契約の確認をしているのだと言っていたような気がする。

当初の予定では180日間。それ以降は実験体として、住人の同意なしに冷凍保存後の人体研究に使うつもりだったようだ。

しかし予定は変更され、施設は内部崩壊、従業員は互いを殺し合う羽目になった……。

机に腰掛け、あまりに下らないこの場所についての邪悪な真相の数々に目を通すことに眩暈を感じる。

痛む手のひらの火傷のために、引き出しの中で見つけたスティム

バックをさっそく自分に使う。

(外を指そう)

シャワーなどはまだ使えそうではあったが、ここからとにかく離れたいと思った。

施設に並ぶ装置の中で今、“生きている人間は皆無”であるという、それがわかると、ここで暮らすことなど私には考えられなくなつた。

Vault111は終わったのだ。

やはりここは死者の場所だ、ただの墓場だ。それで十分だ。

私は工具箱の横に置かれたレンチを手にとると出口を探すために部屋を出る。

どうやらこのVaultは通常のそれよりも小型に作られているらしい。Vaultスーツとレンチだけで、外に飛び出す前に。ほかに何か持ちだせるものはないか、この場所をすべて見ておきたかつた。

そして私は自分の考えが間違つたていたことを再び知る。Vaultを管理、運営するという責任者の監督官とやらの部屋に入った、その時であった。

私はこの世界で運命的な出会いを果たす。

部屋には私よりも先に訪れた人がいた。

東洋人で、まだ若く。そしてなぜか裸のまま、震えている。そんな彼は部屋に入っていく私を見て、はつきりと怯えた目をこちらに向けてきた。

# Sweet Dreams

「天地不仁、以萬物爲芻狗。聖人不仁、以百姓爲芻狗。」

『大自然(天地)に仁愛はなく、そこにある全てをわらの犬として扱う。』

聖人のおこないにも仁愛はなく、人々をわらの犬として扱う』

(老子「語録」第五章より)

世界から色が抜け落ちていた。

いや、違うのだろう。僕の見る夢の中だけ、色だけが抜け落ちていくのだ。

白と黒で描かれる世界は、建物の中で。それは電子機器の終わらない明滅だったり、こちらに語りかけているらしき人の口の動きだったり。

そしてそれだけを僕はずっと見つめている。

まるで——そうだ、僕はもう狂っているのだろうか？

次に覚えているのは何かから投げ出され、寒さに震えている自分の体のことだけ。

僕は床の上に広がる透明な水溜りの中で目を覚ました。

周囲は何かの異常事態を告げているらしい、ブザー音に怯え。必死にはいずって“死体が収められている”装置の間を抜けて部屋を出る。

なぜ自分があんな水たまりの中で目を覚ましたのかわからない。なにより裸でこの場所に放り出されている理由がわからない。

僕は晃、五十嵐 アキラが名前だ。

そのことはきつと間違いじゃない。だって、自分の名前だ。それだけはちゃんと覚えている。

あと年齢、19歳。

それもわかる。

だが、ほかの事は一切。僕は思い出すことができない。

あの色が抜け落ちた映像以外、僕の頭の中にはアキラとして生きた



はずの19年の生活と家族の記憶。それはきれいさっぱり、抜け落ちてしまっている。

震えながら通路を進むと体温が上がってきて、足を引きずるが中腰になれるまでに回復してきた。

気がつくつと、通路の行き止まりにある「監督官室」と名札のはられた部屋の前に立っていた。なぜか僕は、本能的のその扉が開くような気がした。

部屋の中に入ると、そこに人の姿はなかった。

すぐに目に付くターミナルの向こう側には、転がった椅子とそこから転がり落ちたと思われるVauttsスーツを着た骸骨が転がっていた。

(頭を撃たれている？人が死に、その肉が腐り落ちるまで約半月ほど。部屋の中の匂い——埃くさいが、それだけか。ということとは——) 気がつくつと僕は白骨のそばに座り込み、その頭部に指を伸ばそうとしながら。そんなことを自然に考えていて、そんな自分に驚きを覚えた。

その瞬間だった——部屋の扉が開き、そこにVauttsスーツを着た大人が立っていた。その人も僕がここにいたとは思っていないかつたらしく、その目は驚きでぱつちりと見開いている。

|||||

Vauttsの中の警告音を停止させ、僕達は無事にこの施設の出口にまでやってきた。

この建物の中には何もいない。2人を除いて、誰もいなかった。

「アキラ、大丈夫かい？」

「あ、はい。えっと——大丈夫そうです」

僕は着たばかりのVauttsスーツの肘やら襟をひっぱりながら返事を返した。裸のままは、やはりちよつと気まずい。元はこの居住者のものだと思うが、箆筒に入っていた、比較的新しそうなものを

選んでおいた。

パターンソンさん——レオさんはそんな僕を見て、ひとつうなずくとターミナルに向かった。

レオさんは優しそうで、頼れる大人。そんな印象があった。

東洋人の僕に似て顔つきがアメリカ人らしからぬ、不思議な濃さ(?)があつて。どうやらそれは母方にペルシャ人の血が入っていたらしいけど。

体は日本人にしては大きい方の178センチある僕よりもさらに一回り以上、大きくて。そうなったのは元軍人だったから、なのだそうだ。

エレベーターが下りてきて、シャッターが上がると僕達は2人ともそこに立つ。

この場所に残る理由はどちらもなかった。だが、外はどうなっているのか。この時の僕らにはまったく想像がつかなかった。

|||||

「2000年だつて? そんな、そんな——嘘だろう?」

僕もまた、パターンソン——レオさんと同じく。脳の動きがその瞬間には完全に停止した。そんな僕らを前に、コズワースと呼ばれたレオさんのロボットは平然と話しを続けていく。

「ええ、そうです。実際は210年とちよつとです。地球の自転と古いクロノメーターのせいであらゆるものはあります、旦那様」

ということはどうなる?」

今は、今年は——2287年!」

「ということはお腹がすいてますね? なにせ2世紀ぶりの食事が必要というわけですから。いかがいたしますか? おふたり揃つて? すぐに用意が必要ですか?」

僕らはこの燃え尽きた世界で210年以上を過ごした、どこか調子のおかしいロボットを前にして呆然とするしかなかった。

話を、戻そう。

Vaultの底からせりあがっていくエレベーターが止まる。地上は、世界はまだそこに存在していた。

だけど確かにそこは見たこともない場所だった。

いや、それも当然か。だって僕はレオさんとは違う。ここに来た時、Vaultまで逃げてきたというあるべき“自分の記憶”がないのだから――。

そしてエレベーターから見下ろす場所にあつたのは、サンクチュアリ。

かつては高級住宅街で、人々が暮らし、穏やかで幸せがあつた場所。だが、ここから見下ろすだけでわかる。

今のあそこには人の気配を感じない。感じないどころか、目覚めた場所と同じような静寂がそこからは感られていた。

そう、まるで墓場のように――。

恐る恐る、そこへ進む僕らにはさらなる衝撃が待っていた。

そう、それがさっきの会話だ。僕らはあの場所で――Vaultでずっと眠らされていたのだ。200年以上も、誰にも起こされることはなく――。

|||||

あれから2日がすぎた。

僕らが生きていた時代から遠く未来が現実となったが、実感はまだわからない。

それが現実だと教えるゴーストタウンとなっていたサンクチュアリに帰還した僕たちだが、状況がわかつてもよいものはひとつも残されてはいなかった。

僕の家（標識によるとそうらしい。覚えはなかった）は見事にペチャンコになって潰れていた。

記憶のほうはまだまったくいいほど、何も思い出せてはい

なかったけれど。その家の前に何度も足が向き、残骸の前に立つた  
びにため息をついてしまう。

だからわかったのだ、この家が。この場所こそが自分のホームな  
だ、と。

そしてそこはもう、何も残されてはいないのだ。

ゼロ、ただのゼロだ。

レオさんのほうは僕とは違った。

彼が暮らしていた自宅は、彼のロボットであったコズワースがずつ  
と手をいれていたこともあってか。当時の様子をだいぶ残していた  
らしい。

レオさんは家の中を歩き回りながらあの日、あの朝に、と繰り返し。  
無残なガラクタとなったそれぞれに触れつつ、それを僕に語って聞か  
せる——というよりそうやって必死に思い出そうとしているように  
見えた。

そして足を止めた。

赤ん坊のためのベットの前で。

(奥さんと息子——家族、か)

記憶を失い、家族もわからず、家もつぶれていた僕と。

家族を失い、かろうじて残っていた家とロボットが待っていたレオ  
さん。

どちらがマシだといえるのだろうか？僕にはその答えがわからな  
い——。

|||||

夜、明かりの前で倉庫から見つけてきた缶詰をちようど食べ終えた  
ときだった。

「アキラ、ちよつといいかな？」

「——はい？」

「明日の朝、私はここを出るつもりだ」

「っ!？」

「コンコードに行ってみようと思う。コズワースも、そうするべきだろうと言ってくれてね」

レオさんは強い人だった。

シヨックを受けて、何もできないでいる僕と違い。すでにこの先にどうすべきか、同じ時間をすごしていたのにそのことについてずっと考えていたようだ。

まさに大人と、子供だった。

名前と年齢しかわからないような、そんな無力なばかりの自分に恥じながら。とりつくりうようにして「それがいいかもしれない」などといまさら同意したが、僕ができたのはそれだけだった。

「そうだ、これを——」

そういうとレオさんは腕に取り付けていたピップボーイという端末を僕の手に装着しようとした。

「これを預けておくよ。だから——あれ？」

「あ……」

装着者の変更を察知したのだろう。

端末のディスプレイが初期化を始めたと伝えたが、すぐにエラーが表示された。

「壊れた? まずいな」

「いや、でも動いてますよ。レオさん、もう一度」

僕がそういつて端末を返す。

ピップボーイはレオさんの腕に戻ると、再び起動し、正常に作動していた。

「参ったな、私しか認識しなくなったのかな？」

「——どうでしょう」

なぜか僕はこのとき、内心でこの機械は壊れていないという確信を持っていた。なぜ、そう感じたのかはわからないが、とにかくそうはつきりとわかったのだ。

だが、説明もできないから今は黙っていることにした。

「だけど参ったな。私は除隊したのは半年前——といつても、200

年以上前での半年だが。それでも前線帰りがこれではなあ  
「？」

「ここにある、Vault社のSPECIALとかいう数値だよ。私  
のは、ひどいものでね」

そういうと情けなさそうに笑うレオさんは画面を見せてきた。

並んでいる個人の能力数値が、全て数字の4で埋め尽くされてい  
る。どうやらこの数値が低くて、ショックを受けているようだ。確か  
に言われてみると、元軍人というには肉体の性能評価は低すぎると思  
う。

僕はなぜか少し興味が出てきた。

「前線から引き上げても、除隊までは拘束されたし。それでも体は動  
かしていたが。太った？いや、しぼんだのかな？」

「原因は別かもしれませんがよ」

「別？」

「僕たちがいたVaultは人体を冷凍実験するためのものでした」

「ああ」

「長時間の冷凍とそこからの再生処置。そこになにか問題がなかった  
とは、いいきれません。実際、僕も——」

記憶はない。

これまで生きてきた記憶、足跡は真っ白にかき消されていて。それ  
でも19年という長さだけは、はっきりとしているという矛盾。不安  
で、大人に頼りたくて仕方なくて、なのに自分は大人であっておかし  
くない年齢なのに。

なんて自分は滑稽な存在になってしまったのだろう。

「人間を未来に生きれるように冷凍する、か。なんてことを考えるん  
だか」

「そうですね……」

「Vault-Tecか。コズワースの話だと、今も残ってるとはと  
ても思えないが。大馬鹿野郎と罵ることもできないとは残念だ」

「罵る、だけでいいんですか」

「ん？アキラ？」

「僕は許しません。殺します、そいつら全員。社員なら皆殺しにしてやります」

「——もう寝ようか。やることもないしな」

お笑い種だと、笑ってくれてもよかった。

自分のことだけじゃない、恐怖もコントロールできない無力な子供が。そんな物騒なことを口にして、と——。

でも、僕のこの言葉は本心だった。

翌朝、目を覚ますとサンクチュアリには僕とコズワースと名づけられたレオさんのロボットだけがいた。レオさんはまだ暗い時間に起きだして、出発したのだそうだ。

「私と一緒に、ここで留守番です。大丈夫、きっと楽しいことがありますから」

「そうだね。ありがとう、コズワース」

弱々しい笑みを浮かべつつ、朝食を捜してくるよと言い残し近くのボロ家に僕は駆け込んでいく。

(僕はあのロボットとここにレオさんに捨てられたのだろうか?)

なぜかそんなことを考えてしまい。すると不安が騒ぎ出して、僕のゆるくなっていた涙腺はあつというまに限界を迎えた。

悲しいと感じた。すると僕は顔を覆うと、まるで少女のように声を殺して泣いた。

なんて自分は無力なのだろうと、自己嫌悪を感じながら。

## 死の爪 (Leo)

口汚い言葉が発せられ、それと同時に壁に当たった銃弾が床の上でも跳ねた。

「チクシヨウ、こつちは——」

「黙って手を動かさせ、スタージェス！プレストン、撃ち返せ！」

「わかってる!!」

そういうとプレストンのレーザーマスキットが火を噴く。だが、その返礼とばかりにあちこちからまた銃声上がる。その攻撃は建物の厚い壁が防いでくれているが、数からくる恐怖を感じないほど揺るがないものではない。

「もうすぐだ。もうすぐこのユルユルな——足が完成だ」

「よし、それでもいい。それでいいっ」

背後の扉の向こう側で、ひゃあという男の情けない声上がるのが聞こえた。

私は何があつた？などとわざわざ大声を上げて聞いたりしなかった。そのかわり自分から動き出すと、夫婦が扉を押さえて敵が入っているところまで戻り。

彼らをそこから弾き飛ばすと、わずかに扉を自由にさせる。

思ったとおりだ。

力が抜け、チャンスと思った敵は乱暴に押し入ろうとした。

当然、私はそんなことは許さない。

絶妙のタイミングで再び、今度は私が全力で扉を押さえにかかると隙間から水平2連のショットガンの銃口を覗かせはしたが、相手の侵入を防ぐことができた。

「いやあ！なにやってんのよ、アンター！」

「痛え、とつととあきらめちまえよ。この豚ど——」

前後から上がる、悲鳴と罵り声。

そして自分の中に蘇る感覚は、半年前——いや、200年以上前のそれではなかった。

今も確かに息づくそれは、この体の中にしっかりと残って湧きだし



てきている。なにかを破壊したいという衝動。アドレナリンが噴出し、だが脳内はおかしな位に冷静で。

敵を容赦なく破壊し、殲滅する——それを可能とする殺人機械は、まだここに十分に残っていた。

私はタイミングを計ってドアをまたも全開し、扉からのぞかせていた銃身を片方の腕でしっかりと握り締めて固定する。扉のむこうでは、銃身を握られてあせりと驚きから動けないでいた。

「こ、コイツ。俺の銃を離しやがれっ」

「……」

相手は特別な訓練を受けていない無法者であるとすぐにわかった。私は無言のまま、必死に両手でショットガンを取り戻そうとする相手の顔に向けて空いた方のコブシを叩き込んだ。

1発、2発、3発——やはりこの体は冷凍されたことで弱っているというのは本当のこのようだ。

昔ならこの時点で相手は意識を飛ばして白目をむかせたものだが、まだ元気にフラフラと武器を手放すことをしないまま抵抗を続けている。

作戦は変更だ。

私はつかんでいたショットガンを相手から取り上げると、その銃座の尻で相手の体を——胸の辺りを思いつきり突いてやった。

それには無法者は声も上げられず。

3階から穴の開いた地下の底まで落ちていく——。

|||||

これがコンコードだ。

日が沈むころ、町に入った私は銃撃戦らしき騒ぎを耳にして駆け出していた。

場所は目立つ教会前で、どうみてもまともとは思えない男女の集団が。奇声や罵声を上げ、そこにむかって攻撃を加えていた。

どうやら建物に立てこもっている集団がいて、それに向けて攻撃し

ているらしいとこの時点でわかった。

私は一瞬だが、迷った。

ここに来たのはこの世界のことを理解するための情報か何かを得られないかと思っただからだ。

状況がよくわからない争いに巻き込まれ、命を危険にさらすためではない。

サンクチュアリにはアキラやコズワースを残していたし。なによりも私は妻や子供のことであってある。

その目的も果たさないうちに危険はおかせない。なら、ここは――

窓から一条の赤い火線が地上に向けて走り、無<sup>レイダー</sup>法者の体を貫いた。

「あの野郎！またヤリやがった、早く殺しちまえっ」

私の思考はそこでガラリと変化した。

今の一発を見て、この争いに参加してもよいと思えるようになっていた。

大騒ぎしながら無軌道に攻撃しているレイダーと違い。彼らに反撃する一人の男の腕に、兵士の持つ魂をはつきりと感じたからだろう。

戦争で国に愛想を尽かし。軍から身を引いた私だったが、このなにもない未来にあつては、それらはたまらない故郷への哀愁じみた匂いと認識させるらしい。任務を忠実に、友を見捨てるな、市民を守れ、これらは全部軍隊で学び、前線にたった私の人生だった。

Vault111から持ち出した10ミリ拳銃を取り出すと、静かに攻撃側の背後から接近を開始する――。

そうして状況は今に至る。

ここにはプレストンという兵士に守られたわずかな市民がいて、彼らに合流した私は無法者達を相手に一緒になって今は戦っている。

それまでもかなりの数の敵を倒したと思っていたが、それがかえって向こうを怒らせてしまったらしい。町の周辺に隠されていたらしい新たな集団が現れると攻撃に参加してきた。まるでこちらを全滅

させねば、自分たちが破滅してもかまわない——それくらい、相手の執念には恐怖を感じさせるしつこさがあった。

「ちよつと、アンタ！さつきは危ないじゃないのよ、あいつらがあれで進入したら——」

「よくやった。また来たら知らせろ、気を抜くな」

「なによ！アンタが邪魔したんじゃない!!」

先ほど突き飛ばされたことでヒステリーをおこしかけている女性の相手をせず。私は再び屋上への扉を抜け、そこで準備を続けているスタージエスに様子を聞いた。

「あつちは終わった、しばらくは大丈夫だろう。どうだ？」

「ガムテープで無理やり補強するしかなかったが、これでなんとかするはずさ。

でも、しつかりと固定されているわけじゃないから、攻撃され続けたら真つ先にはがれるだろうね」

「プレストン!？」

「こつちは手一杯だ。そろそろ役割を交代しようと言つてくれないか」

私はジャンプスーツのポケットから取り出したフュージョン・コアをスタージエスが面倒を見ていたパワーアーマーの背後に乱暴に押し込んでみせる。あの戦争でもう慣れてしまった感触だ、忘れるようなものでもない。

「出ろぞ、反撃の時間だー!」

鋼の肉体に自分を潜り込ませる。装甲の下にコアからあふれ出たエネルギーが血液のように鋼の骨格全身にめぐり始め、視界にこの体の状態が次々と更新されていく。

やはり右足の状態は不完全な状態だと表示されていたが、気にはしていられない。

「ミニガン、いつでもいけるぞー!」

『スタージエスは中へ戻れ。プレストン、援護を頼む』

T-45パワーアーマー、戦前でも中古品などと陰口をたたかれていたこの兵器は。あらゆるパワーアーマーの基礎でもあった。

戦場を離れ、200年の眠りから目覚めたこの骨董品と共に。今、このコンコードに私と共に古参兵として。横暴な略奪者たちを八つ裂きにしようと参戦は目前に迫っていた。

|||||

日が暮れた夜のコンコードでならされる反撃のラツパは全てを変えたが。その流れにさらなる変化が生まれるとは。

演出過多にすぎて、さすがに私も思いもなかった現実だった。

パワーアーマーとミニガンに恐れをなして建物の前の大通りを転がるようにして逃げ出し始めたレイダーを追撃して蹴散らそうとした私は、前方に異変がおきるのを思わず足を止めて眺めてしまった。本当にそれはいきなりのことだった。

地面のコンクリートの一部が凄まじい力によって宙にはじけ飛ぶと、地下から巨大なトカゲの化け物が現れたのである。

「まずいぞーそいつはデスクローだ、気をつけろっ」

背後から警告が来るが、そのときすでに私のガトリング砲はレイダーではなく化け物に対して火を噴いていた。

そして愕然とする。

ガトリングの猛烈な回転音で発射される弾丸は、この悪魔のような獣の皮膚をつき破ることができなかったのだ。穴を穿ち、血は流れてはいるが、肉を裂くことまでには至らない。

デスクローとかいう化け物は、それでこちらに標的を変更したらしい。半狂乱になっているレイダーたちを引き裂きつつ、それでもこちらにむかって突っ込んできた！

(まずい！回避を)

判断はすばやくおこなったはずだが、体のキレはやはり昔よりも反応が悪く。行動にわずかに遅れが生まれた。

腹を貫く衝撃が走り、化け物の顔がモニターの視界いっぱい広がる。いきなり体が重力から開放されるのを感じて、次の瞬間に私は通りから店の中にソフトボールのように叩きこまれた。

世界が——意識が真っ白に塗り替えられていき、聴覚が死んだ。

奇妙な、感覚だった。

それが気が遠くなりかけたものの、ブラックアウトの手前から徐々に自分が回復に向かっているからだど理解した。

そばでは部下の誰かの畜生、畜生と繰り返す叫び声が銃声の中であってもよく聞こえていた。

アンカレツジ前線指令本部襲撃は、それまでとは違って地獄と化した。

敵の司令官は、次々と私の部隊によって沈黙していく砲台を確認すると、正気とは思えない反撃を実行した。司令部を空にする勢いで、兵士たちを前線に送り出してしまったのだ。

それを確認した私と副官のハロルドは困惑した。

いよいよこの自殺作戦も最後、敵司令官暗殺にかかれると思った矢先。相手のほうからこちらの仕事をやりやすいように状況を整えてくれたのだ。

罠の可能性を考えないわけにはいかなかったが、困ったことにこちらは任務終了までは本部との交信を禁止されている。強引に連絡しようとするれば、こちらから呼びかけはできるが。どうせむこうは返答しないのだから行動に意味がない。

私の部隊には攻撃以外の選択肢はなかった。

異変に気がついたのは、敵司令官から投降が申し入れられ。

ただ広い中央広場に一人で出てきた彼の体を改めた時だった。ハロルドが気がついた。

「おい、大佐——いつジンウェイ將軍じゃないぞ」

「なんだと!?!」

仕官を意味する帽子を弾き飛ばし、その顔を覗き込んでまじまじと見た。

東洋人の見分け方が得意というわけではないが、そいつがハロルドの言うとおりの偽者だということはわかった。髪の毛は染めたもの

で、よくみると本物よりも明らかに若い男だった。

「チエン主席●×！」

それこそが合図だったのだ。

広場で展開し、これまで勝利を重ねていた私の部隊の真上から、無数の火球が降り注ぐ。不意の攻撃にさらされると包囲され、私の部隊がこれでピンチにならないわけがなかった。

「部隊の被害は？」

「わからない大佐。実際、そんなこといつてられないぜ？」

周囲のあちこちから発砲音が響き、こちらは物陰で縮こまらなひどいことになる。状況は一変し、攻撃は失敗しつつあり、私たちは動けなくなっていた。

「攻撃しないと、まずいんだよ。副官殿っ」

「——ゲイリー！コルト！ミック！生きてるかっ!？」

ハロルドの声に反応はなかった。

いや、返事があったとしてもここまで聞こえない。凄まじい銃声と、砲撃と爆撃と情けない悲鳴の音が邪魔をしていた。

「ここまでか、大佐？」

「ふぎけるなっ、ゴールは目の前で死ぬるか。なにかないか、ハロルド!？」

「……ああ」

ハロルドは無茶をして、一瞬だけ物陰から顔を出すと、すぐに引つ込めた。その顔にはいたずらする前の、意地の悪い少年の笑みが浮かんでいた。希望はまだあるようだ。

「あつたぜ、大佐」

「なんだ？」

「あれはたぶん、俺たちの頼れるT-51bパワーアーマーだ。さつきは見間違いかと思ったが、ちよつと先の物陰で俺たちを誘っているようだぜ」

私は驚きで両目を見開いた。

このアンカレッジには最新の冬用T-51bパワーアーマーが配備されていたが、どうやらそれを敵が拿捕したものが、この司令部に

運び込まれていたらしい。

「また罨じゃないのか？」

「確かめる方法はひとつだ」

「そうだな——援護しろ、相棒！」

「大佐!? クソツ、あんたおかしいぞっ!!」

私は無謀にもいきなり物陰から飛び出すと走り出していた。

背後で相棒の罵声を聞き、体に力がさらに満ちるのを感じる。それはすぐに見つけられた。

広場の端、廃材の中に真っ白に塗られた丸太のようなビール腹のパワーアーマーがそれだった。

私はその中に向かって力いっぱい飛び込む。衝突の痛みが目が火花を散らす、全身の苦痛が騒ぐのにあわせ。パワーアーマーはゆっくりと起動した。

最新のモデルだけあって、暴れるための準備もすぐに終わった。

(これで逆転だ！)

私は一歩一歩、力強く歩き出した。

視界には、こちらを援護しようと必死に物陰から反撃しようとする部隊の仲間たちがいた。

ハロルドも声を上げ、物陰から顔を出してこちらを援護しようとするオートで弾をばら撒いていた。

指揮官として味方を鼓舞しようとする声を立てる直前だった。

相棒の——部下の、副官のハロルドの顔にむかって正面から青白い火線が走り。次の瞬間、私の友人の頭部は壁にたたきつけたスイカのように、音を立てて四散した——。

私の全身の血が、理解より先に沸騰する。

|| || || || || || || || || ||

プレストンは絶望的な状況を前に、ついにマスキットの引金を引けなくなっていた。

レイダーたちは、次々と肉片になってコンコードの通りにばら撒か

れている。賢しくここから逃げようとしていたやつもいるようだったが、あのデスクローはそれを許さなかった。

手足を使つてあつというまに逃げる相手の後ろに体当たりを決めると、爪でその肉体を掻き回してしまう。

(やつらが終われば当然、次はこつちだ)

わざわざ助太刀してくれたVault居住者には悪いことをした。死んだかどうかはわからないが、パワーアーマーを装着してたはいえ。通りから店の中にあんな風に叩き込まれたのだ。無傷ではいられなかっただろう。

血に飢え、猛るデスクローは夜空に吼えた。

この町にあればほど押し寄せた無法者に生き残りはいなくなつていった。

それはつまり――。

デスクローの視線はコンコードの建物へと向けられる。

この場所を探している、狙いを定まっていることは間違いないかつた。

(これまでだつてやれることをしてきた。あきらめるな。そうだろう、プレストン)

なえる気力を叱咤し。プレストンはレーザーマスケットにエネルギーを送り込み。スコープを覗いて狙いを定める。

すでに恐怖が心を支配しようとして、指と唇が震えてしようがない――。

ゆつくりと、そして甦るかのように通りの中央を歩き出したデスクローの脇の店がいきなり“中から爆発”すると、飛び出してきた塊にデスクローの巨体は反対側の店の中へと弾き飛ばされた。

それは先ほど見た状況によく似ていて、奇妙に思えるほどだった。大通りに飛び出してきた塊は、あのVault居住者が動かすパワーアーマーであった。

何をやったのかはわからないが、両手に青白いエネルギーが迸つており。ミニガンは持っていなかった。どうやらこれで、先ほどのお返



しをしてみせたようだ。

『どうした!? かかってこい!』

そして操縦者のレオの戦意は衰えるどころか、ますます盛んであるようだった。

アーマーの頭部にあるライトは、夜の暗い店の中で巻き上がるホコリと瓦礫のなかに、巨獣の姿を探す。

気を失っていたのはわずかの間と思うが、目覚めは最悪だったのは間違いない。

体は節々が痛み、衝撃で鼻血と歯で噛み切ってしまった口の中のそれを喉を鳴らして飲み込む。

生臭い鉄の味——それだけで憎悪と怒りが湧き上がってくる。

それでも頭は冷静に、目の前に集中する。やるべきことはたったひとつのことだけ。

言ってみればこれは予行演習のようなものだ。妻を殺し、息子を奪ったやつらにしてやりたいことがあった。それをまずこの化け物にしてやるのだ。

瓦礫の山の中に、うねる皮膚と鋭い爪がライトが照らし出した。

『第2ラウンド開始だ!』

アドレナリンが吹き上がる。

今の私が、何の恐れることはない。

## S l o a p (A k i r a)

コズワースが「日課の散歩。いえ、見回りがありますので」そういつて離れてくれて、僕はようやく落ち着くことができた。

この廃れたサンクチュアリに置いていかれた。元軍人だったレオさんに恥じてばかりではいけない。自分も考え、なにかできるか考える必要がある。

大木の根元に座り込み、苛立たしく土の雑草を引っこ抜きながら。ちらちらとこの元高級住宅街の成れの果てを見回した。

——町を再建するのでしょうか。お前は どうする？

僕はなぜか、そう考えた。

違う、それは正しくない。実際に、その手順と方法と。そして運営までを含めて、僕の脳裏には何が必要で。どれだけのことができるか計算していた。

何を学んだのか、なにもわからないこの僕が。なぜそれが当然出来るなどと、考えてしまったのか——。

だが焦っていたのだろう。

僕は自分へのその違和感を見なかったふりをして、没頭した。

しばらくしてコズワースはアキラを探しに戻ってきた。

今日も、この廃墟に巣を作ろうと潜り込んだフロートフライという巨大なハエを数匹退治してきたのだ。だが、若い東洋人の姿はすでにそこにはなかった——。

|||||

レオがコンコードにいた集団をつれてサンクチュアリへと帰還したのは翌日の午後であった。

集団はクインシーという海辺の町からレイダーに追われ、逃げ続けてきたらしいが。彼らは戻らずにこれからはこのサンクチュアリで暮らそうと考えているのだという。

「彼らの考えはわかりましたが、旦那様。ひとつ、どうしてもはつきりしたいことがあります」

「なんだ、コズワース」

「あの家の権利だけは、しっかりと主張しなくてはなりません」  
「……」

「あの家はシヨーン坊ちゃん、奥様。そして旦那様の暮らした家なのです。そしてシヨーン坊ちゃんが帰るべき場所なのです。」

「彼らがここで何をしてもかまいませんが。あそこだけは、権利をしつかりと主張していただきたいのです」

「そうだな、コズワース。シヨーンのためにも、な」

「コンコードでは誘拐した犯人と、その目的。息子の行方はさっぱりわからなかった。」

「こうして戻ってきて思うのは、自分はここから一刻も早く離れて探しに行かねばという思いが強く。この場所にはそれほど強い思い入れはすでになくなっていると考えていた。」

「だがコズワースの言葉で、それだけではないのだということ強く主張されると、ちゃんと考えないといけないようだ。」

「——ところでコズワース、アキラはどうした？一緒にやないのか？」  
「あつ」

「コズワース？」  
「実は旦那様、大変申し上げにくいのに——」

「レオはこの瞬間、背中に冷たい汗が流れるのを感じて思わず振り向きながら腰のホルスターに納められた銃に手をかける。」

「そこにはいつの間にかアキラが立っていた。」

「レオさん」

「アキラ？」

「戻ったんですね、お帰りなさい」

「う、うん——ただいま」

あわてて警戒を解いたが、レオはわずかにあわてていた。

「出会ってからずっと不安に震え、怯えてこちらに依存するような姿勢をみせていた少年は。なぜかこの時は、年齢どおりの青年のような」

落ち着きを見せていた。

その急激な彼の中の変化に、レオは面食らったのだ。

レオさんは約束どおり戻ってきてくれたが、そこには見たことのない放浪者たちがオマケでくつついてきていた。どうやら、彼らはこのサンクチュアリに入植しようということらしい。

——予定通り、いい流れじゃないか

僕はすばやく集団の人々を見て回る。

老婆が一人、夫婦が一組、器用そうな男が一人。そして兵士、か。正直に言うと、あと4人ほどほしいところだが。文句を言ってもしょうがないだろう。出来ることから始めればいい。

この廃墟を歩き、近場も歩いた。

そして僕のこの頭の中には、計画が生まれつつある。だが、そのためにはまだ知らなくてはならないことがある。

僕は兵士と話しこんでいる、レオさんの元へと向かった。

「ああ、プレストン。紹介する、彼は——アキラだ。私と同じValley居住者だった」

「よろしく、アキラ」

「はじめまして」

手を差し出されたが、なぜか僕の体は一礼だけした。

レオさんはそんな僕の態度に困惑し、プレストンは苦笑しながら差し出した手を引っ込めた。

なにかまずいことをしたか？

「ここからの往復で何があったのか、聞かせてください。レオさん、大至急で」

「大至急？」

「それと、プレストンさん——」

「プレストンでかまわないさ、アキラ。皆、そう呼んでいるから」

「では、プレストン。家を選んで、今夜の寝場所を作ってください。コズワースの話では、夜だと暗いし。人が動き回っていると、餌だと勘

違いして巨大な虫がここに侵入してくるそうなので」

「ああ、了解した」

「いくつかランプもあります。場所が決まったら、日が暮れる前に受け取りに来てください」

「感謝する」

プレストンが離れ、入植者達に連絡を伝えにいくと。僕はさっそくレオさんが見たもの、体験したもの全てを聞きたいともう一度繰り返しした。

翌朝、僕は日が昇る前に目が覚めた。

体の芯から熱いものが静かにではあるが、はっきりと緩やかな高まりを昨夜から感じている。

頭の中は異様なほどクリアで、自分が何をするのかをはっきりとさせていた。

「早いな、アキラ」

「おはようございます、レオさん」

「おはよう。眠れなかったのかい？」

「そんなことはないです——あの、ちよつと考えがありました。聞いてもらえますか？」

「もちろん。だが、それは——」

「朝食の時に聞かせてもらおう」

僕はまた空回りしてしまったようだ。

顔を赤くさせて「そうですね、そうしましょう」とだけ答えた。

|||||

金槌が鉄をたたく小気味よい音がサンクチュアリにこだまする。

数日前、廃墟だったこの場所は再び鼓動を始めようとしている。まだ、わずかに数人ではあるが。

ここに穏やかな日常を過ごしたいと願う人々が、暮らしを始めよう

としている。

そして僕はふくれっ面で腐りかけた家具を解体していた。

レオさんは話をちゃんと聞いてくれた。

だが、説得まではできなかった。あまりにも僕の話が、具体性はあっても。実現は難しいと判断されてしまったのだ。

僕は失敗してしまったのだ。

出来る、口で言うのはたやすいが。それを認めさせ、信じさせることに、僕はまったく考えもなかったのだ。そして実際、そう思われなくても仕方のない話ではあるのだ。

彼がコンコードから一往復する間に、この場所で僕がやったことなど。妙にリアルな妄想をしていただけで、景色に変化はなかったのだから。

そして僕は学ぶことが出来た。

(なんてコミュニケーションがないんだよ、僕のアホウ！)

だが、嘆いて見せてもしょうがない。ここからは地道に信頼を積み上げていくしかないのだ。証明が必要だった。

そのかわりに僕はレオさんに2つのことを了承してもらった。

ひとつは今日中に、レオさんの自宅の整理をすること。これには理由があるのだが、あとでふれる。

もうひとつは、コンコードに放り出してきたというパワーアーマーを、プレストンと共に回収しつつ。コンコードに転がっているガラクタを持ち帰ってほしいということ。

レオさんはどちらも了承してくれた。

今頃、あの人は僕たちの世界の最後の日から残された残骸を前に、気持ちを抑えてむかいあっているはずだ。

「スタージェス、いいですか?」

「アキラ、どうした?」

「終わったので次の作業の確認です」

僕は笑顔を顔に貼り付け、この入植者に徹底的に張り付いていた。

集団にはたいした奴はいなかった。技術に関して、話せそうなのはこいつくらいで。メソメソしているのとヒステリーを起こしている夫婦と、老婆はこのスタージエスの言葉であれば僕の指示でも従ってくれている。

このスタージエス。

エンジニア、というわけではないようだが。この男に自分を認めさせることが出来れば、レオさんとプレストンとかいう兵士の説得が、もう一度だけ出来るかもしれないとそう思ったのだ。

「手伝ってくれるならそうだな——まずはベットかな。夜は冷たい床の上で横になるのは、きついからね」

「わかりました」

ベットね、なるほど。

そんなものでいいのか？

|||||

体を動かしながら、始める前はずっと感情的になるとばかり思っていたことが。実はそんなことはなく、むしろ虚ろな心のままでも。作業は淡々と進めることが出来た。

私は形が残っているものも、壊れかけたものも一緒に庭へと出して、並べていく。

アキラの要望に従い、出来る限り、家の中はまっさらにしておきたかった。

——おはようございます、旦那様。いれたてのコーヒーです。

ここに住んでいたあの家族の穏やかな朝はもう来ないのだ。

もし、運命が私に味方をしてくれて。息子が——シヨーンを取り戻せたとしても、ここには彼を愛したノーラが。母親はなく、妻を守れなかった元軍人というふがいない父親の私とコズワースしか残っていないのだ。

もう流す涙はなかった。そして怒りもない。

悔しくないわけではない。だが、手がかりもないのだ。息子がどこ

にいるのかも、なぜさらわれたのかも。いまだに何も、わかってはいない——。

「良くないね——。」

涙はかかれても、怒りを溜め込んではいけないよ。それはあんたのためにはならないからね」

家の——といっても、扉は先ほどはずしてしまっただが——入り口に立つのは、一人の老婆であった。

「ママ・マーフィ?」

「コンコードで皆で震えていた時ね。わたしにはわかってたよ、あんたが来て助けてくれるってね。でも、なかなか話すチャンスがなかった」

「大騒ぎでしたから」

ママ・マーフィはまだ庭に出していなかった室内の椅子にすわりながらうなづく。

「それに、この婆さんが薬漬けだと非難されているのを聞いたんだろ? そう、そのとおり。このマーフィ婆さんはジェット狂いで知られているのさ。とんでもないだろ?」

「……」

ジェット——安価で大量生産が可能で、常習性のある薬物なのだそうだ。

私の知らない薬物だが、これでも軍隊生活をながくやっていたのだ。あの中ではこの手の薬物との付き合いは絶対に避けられない。私自身、あの頃は“それなり”の楽しみ方をしてきた経験がある。

「手を動かしておくれ。話は勝手に、こつちがするから」

「はあ」

いいながら動かない冷蔵庫の扉を力いっぱい蹴りつけた。

「プレストンに聞いているんだろ。このママ・マーフィ婆さんの力のことを」

「ええ——あなたのその“サイト”がなければ、ここまでとても逃げではこれなかったと」

「死に物狂いだっただんでね、あの若いのが。運命から必死に顔を背け



ようともがくから。プレストンは一途過ぎるんだ。だから助けもやりたくなる」

「——そのようですね」

「いけない、こんな話をしたかったんじゃないの。駄目ね……」

太陽の光が背後から差し、いつそうこの老婆の小さな体が縮んだような気がした。

「あのね。つまり私は知ってしまったのよ。あなたのこと」  
「？」

「といっても、大したことじゃないの。あなたが氷の中に入る——あの見たこともないすばらしい世界で暮らしていて。そしてなにがおきて、どうやって出てきたのか。そこまでを私も見たわ」

「!？」

「よくわからないのだけれど、あなたは誰かを探したいと思っているのよね?」

「そうです。息子を！シヨーンを。連れ去られたんです」

「そうなの——それは見てないの。でもわかるわ。だから、助言をしたいの」

そういうとママ・マーフィはチラと窓の外を確認しつつ。服の袖から赤い薬品を引っ張り出してこちらに見せてきた。

「こごしばらくは毎日使ってたの。でも、そのせいでプレストンにここでは使うなって全部取り上げられちゃったのよ。で、これが最後の一本」

「ママ・マーフィ?」

「今からこれで、あなたの未来を少しだけ見てくるわ。それであなたの進みたい方向はみつかる。

でもね、覚えておいてほしいの。

このお婆ちゃんの力は、よいことも出来たけれど。それと同じくらいに。一杯、悪いことも起こったの。

私の言葉を聞くということとは、あなたにもそれが起こるということ。わかる?」

「どう?どう?とですか?」

「あなたのしたいと望んでいることは、もしかしたらもう希望はないかもしれないということよ。」

それでも、始めてしまえば止まることはできないわ。すべてが終わった時、あなたに幸せは残されてないかもしれない。真実っていうのはそういうこともある。

それでも、あなたはこの“可能性”を手にしたいと思う？」

脳裏に、あの最後の日に目に焼き付けた地上がフラッシュバックした。

不吉なキノコ雲が上がり、衝撃が襲ってくる中。自分と家族だけは助かったのだと、Vaultの中へと進んだあの時を。

そして、そして――。

地上は破壊されたが、私の幸せも同じく破壊された。

老婆への答えにためらいはなかった――。

夕方、ようやく最後のショーンの揺りかごを庭へと出し。かつての我が家の大掃除は、ひと段落着いた。すると、町に面した川岸のあたりが騒がしいことに気がついた。

声に誘われて向かった先には、プレストン、スタージエス。そしてアキラがいた。

彼らはアキラを囲んでは「スゴイ、スゴイ」を連呼しているようだった。

「どうしたんだい？」

声をかけると、さっそく興奮気味のスタージエスが説明を始める。

「やあ！レオ。こんな優秀な若きデザイナーにしてクリエイター、建築家をなんでもっと早く教えてくれなかったんだい!？」

「え、え？」

「彼だよ、アキラだ」

「アキラが――なにをやったんだ？」

相変わらず要領を得ることが出来ず、困惑する私にプレストンが答えをくれた。

「参ったよ。俺たちがこれから10日間かけて行う仕事を、彼が半日

でやってしまったんだ」

「10日だった？」

「そうさ、最悪半月は覚悟していたっていうのにさ。すごいセンスだ！」

「どうやらスタージェスが生活のために必要だと言ったものを、次々と作り上げて見せたらしい。そこまではなんとかわかった。」

「だが、アキラは笑みを浮かべてはいたもの。あの落ち着きのまま、応じていた。」

「実はピップボーイの中に、こういった時のためのサバイバルガイドがあったのです。それに目を通していたおかげで、あまり苦勞することはありませんでした」

「そういうと「ゴズワース！」と声を上げる。」

「どこかで、懐かしい腹に響くエンジン音があたりに響くと、ブレストンたちが喜びに吼えた。」

「これで水と電気の問題は解決です」

「アキラ……」

「やったな！これでロウソクの炎に不安を感じなくてすむ。文明の光ってやつを、目にする日も近いのかもしれないな」

「まさか記憶が戻ったのだろうか？」

「彼はそんな様子は見せない。」

「私はこの日、始めてこのVaultを共に飛び出したこの少年にある感情を抱く。」

「驚いたことに、私はこの記憶を失ったという少年に薄気味の悪い、不気味なものを——そう、何か漠然とした不安のようなものを感じ始めていた。」

## 慌しい旅立ち (LEO)

サンクチュアリがにわかには賑やかになって、1週間が過ぎようとしている。

「よし、アキラ。こいつをやってみろ」

『了解』

T-45パワーアーマーでつぶれた家屋に距離をとると、そこからダッシュからのパワーアタックを青年は豪快に決めてみせる。潰れた建物は悲鳴を上げ、ひしゃげ、吹き飛び、破壊された。

「もっと前方に体重を持っていけるぞ。次は恐れないで、もっと体ごと突っ込め」

『はい』

パワーアーマーは私とプレストンで回収してくると、今は立派に土地整備の役に立ってもらっている。

そのついでにと、こうしてアキラにもパワーアーマーの使い方をお教えることにした。もともとこの機体自体が一番広く配備されたものとあって、パワーアーマー操作の基礎を学ぶのにも適していた。

若者があつという間にコツをつかんでいく姿を見ると、自分の新兵だった頃を思い出し。知らずに笑みが浮かんでくる。

現在、サンクチュアリは食糧問題に不安がまだ残っているものの。近づいている冬の寒さと、新たな入植者のために、アキラが発案した大きな集合住宅の建設にとりかかろうとしていた。

彼の言葉を借りると、この居住地を充実させるには人がもっと必要であり。彼らに呼びかけたとき、防衛と安全を最低限保障せねばならない。

そしてそんな新しい仲間を、スタージエス達は受け入れられるようにするには共同生活が一番。

プレストンと私は同意した。

遠からず、私は息子を探すためにここを発つ予定だった。それは今すぐか、もう少し先かの違いでしかない。

そしてプレストンにしてもそれは同じだった。

彼は崩壊したミニッツメンを復活させるつもりだ、と。すでに口にしている。

このサンクチュアリが落ち着いたと確信ができれば、彼もここを離れるつもりなのだろう。

ところが――。

「なあ、ちよつといいかな？」

「プレストン？なにか用事が？」

「これから話せないか？2人だけで」

「――いいよ。アキラ、パワーアーマーは……」

「パワーアーマーステーションへ、ですな」

「そうだ。行け」

アキラと別れ、プレストンに並んでサンクチュアリの大通りを歩き出した。

ここに来てからずっと天気が良い。おかげで空気が若干乾燥しているようにも思うが、それほど文句はない。

この場所も当初、目にした廃墟からゆつくりと整備が進み。あの時代とは比べ物にならないが、再び町としての息吹を取り戻そうとしている。

そしてそれは遠い話ではない。

「なんだい？」

「ああ――ママ・マーフィに聞いたんだ。あんた、もうすぐここから出て行くつもりだって」

「それは――ちよつと違う。」

旅に出ようとは思ってる。外の世界について、私はあまりにも物を知らないからね。危険だろうけれど、しばらくは近くを中心にこの連邦とやらを見て回るつもりだ」

「……そうか。もう決めちゃまっているんだな」

「どうした、プレストン？」

数日前に知り合ったこの新しい友人は、困った顔をしたまま口を開く。

「そういうことなら。あんたに、ひとつ頼みがあるんだ。是非、引き受

けてほしい」

「ん？」

「俺はミニッツメンだ。この地で、いわれのない暴力に苦しむ人々を助けることが使命なんだ。だが組織は今や風前の灯ってやつさ。残っているのは俺一人だけ。できることも多くない」

「……」

「本当は俺が今日にでもここを離れようと、考えていた。

ここまで俺が導いてきた彼らは入植を始めたが、まだどうなるかわからない。それでもほかの居住地では俺のような男に、ミニッツメンに助けを求める声が、すでにある。それを無視はできない。

彼らには個人的に思いいれもあるが、永遠には一緒にはいられない。だが、あんたやアキラがここにいるならとそう思っていた」

「何が言いたいんだ？」

「取引——といえるのかな。とにかく、あんたはこのあたりを見て回るつもりなんだろう？それなら、俺が変わって彼らの声に耳を傾けてきてもらえないだろうか？」

いきなりの申し出に困惑を覚え、眉が跳ね上がってしまった。

プレストンの真意がわからなかった。

「そのかわり、といったらおかしな話だが——その間、俺はこのサンクチュアリの面倒を見ておくつもりだ」

「……」

「どうだろう？駄目だろうか？」

「なあ、プレストン。なにが目的なんだ？よく、言っていることがわからない」

「——アキラのことだ。レオ、彼もあんたと一緒に連れて行くつもりなのか？」

痛いところを突かれた。

シヨーンをさらった奴等を追う——どう考えても安全な旅にはならない。

私と違い、過去の記憶のほとんどを失ってしまった彼は気の毒ではあるが。コンコードでの経験から、まだ銃を満足に使えない彼を私の

復讐に巻き込みたくはなかった。

それにまだ若い彼なら、ここで始まる新しい生活から人生をはじめたほうがいいに決まっている。

そう、あの戦場から戻ってきた私とは違う生き方を――。

「彼は――連れて行くつもりはない」

「そうか。その方がいいだろう、あんたもその方が安心できるだろう」  
「――ん」

「なら、このことを考えてほしい。俺とあんたは同じ状況の中で身動きが取れないでいる。だが、あんたが決断してくれば俺はここに残れるし。あんたは今日にだってここを飛び出していける」

「え、今日!?!」

「事態はそれぐらいせつぱ詰まっているということだ。俺もあんたも、このままだと当分はここから出て行けなくなる。なってしまう――大きな声では言えないことだがな」

私は確かにサンクチュアリに思いを残してはいる。だが、それだけだ。

ここに連れて戻ってしまったアキラをのぞけば、今いる彼らにはそれほどの思い入れをもっているはずもない。

だが――。

「言いたいことは、わかった。引き受けよう、プレストン。」

そのかわりに私は午後にはここから出発できるようにする」

「ありがとう。感謝する、レオ」

「これも貸しつてことになるな、プレストン」

笑いながらプレストンと硬い握手を交わす。

本当を言えば、引き受ける理由はなかった。

だが、私には別にここで一日一日を穏やかに過ごす訳にはいかないう理由があつた。なにもわからないでいるアキラを、あの青年の近くにいることは奪われたシヨーンを忘れさせようとしているようにも感じている。

ずるいと責められても仕方ないが、確かにプレストンはひとつだけ正しかった。私はただ一人この場所から、あのアキラから解放された

かったのである。

旅立つ準備といっても、自宅に残っていたもので持っていくものはない。

コズワースと亡き妻のホロテープ、そしてピップボーイくらいか。コンコードで回収した、レーザーベルトなどのアーマーを身につけながら、銃の確認もおこなう。

Vaultで回収した10ミリピストルと、レイダーから取り上げたショットガン。

「レオさん？」

「——ああ、アキラか」

戸口に立つ若者に一瞥しただけで、私は準備に戻る。

今、この若者とはあまり長く話したくはなかった。せつかくチャンスが転がってきたのに、引き止められては困るからだ。

「すまないが理由があつて——」

「聞きました。急いで出発される、と」

「ああ、そうなんだ。作業を抜けることになるが——」

「コズワースも連れて行くんですよね？」

「それは——」

「アキラ様、このコズワースは旦那様の力になりたいのです。

この危険な世界を旅するというなら、なにができるとは申しませんが。全力で、ワタクシは旦那様のサポートをしたいのでございます」

「そうだね。君が一緒なら、レオさんも安心さ」

もしかしたら行かないでくれと継りつかれるんじゃないか。そんなことも考えたが、アキラはしっかりとしていた。旅に出る私を止めるつもりはないようだった。

「実は出る前に、これを見てほしいんです。使えそうなら持つて行つてください」

そういうとアキラは後ろから何かを取り出してくる。

「僕の10ミリと、レイダーが使っていたパイプ銃を改良してみました」



「アキラ!？」

「使い物になりますかね？」

改造が入った10ミリはトリガーが軽く、グロウサイトが加えられ、銃身はロングバレルに変更されているようだった。手先が器用ではない、そう言っていたが素直にそれを信じる気にはなれない素晴らしい出来栄えだった。

一方、パイプ銃のほうはフルオートで発射できるように手が加えられ、弾倉もドラムマガジンが用意されていた。

「アキラ、これは——」

「レオさん、僕だってわかってます。あなたは別に自分の親でも保護者でも、なんでもないと。一緒に連れて行ってほしいとか、置いていかないでくれとか。みつともないまねであなたを困らせたりしません。」

なめないでください」

「——ああ、すまなかった」

私はアキラのこの贈り物を素直に受け取ることにした。

このサンクチュアリに手を入れたように、彼にも彼なりの考えがあるらしい。見送りにサンクチュアリの出口で別れる際、数日中にあのVaultに戻って。調べたいことがあるのだ、と口にしていった。

私は「そうか」とだけ口にして、アキラをしつかりと抱き寄せた。彼は彼で、悩み。そしてこの途方もない世界でどう生きるべきか、すでにちやんと考え始めていたのだ。

私が彼に感じる印象はここ数日、ころころと変化を繰り返しているが。思えばそのどれもが、彼への視線をおかしくしていた私自身のせいではなかったのかと、考えることもできた。

「しばらくしたら戻るから。その時に、またここで会おう」

「はい、レオさんも、コズワースも。気をつけて」

こうしてついに私は、アキラと別れ。サンクチュア리를あとにする。

思えばこの瞬間に、私と彼の運命は決まってしまったのかもしれない

い……。

|||||

前と同じように、私はコンコードまで出てきて廃墟の中で一泊すると。そこから道沿いに沿って東を目指した。

話によると、サンクチュアリからさらに東にある丘の上に居住地があり。そこがミニッツメンに救助を求めていたらしい。

だが、プレストンはそこで「とはいつても」と続け。逃亡していた時に風のうわさで伝え聞いたことなので、現地では思いもよらない不測の事態がまっているかもしれない。接触には気を使ってくれと釘を刺されている。

サンクチュアリを出てから3日目の昼。

十字路で私は、意外な存在と対面した。年は40後半にも見えるが、中年の細いなで肩が印象に残る女性だった。

バラモンとかいう2つの頭を持つ奇怪な牛に多くの荷物を載せて歩いている。

「おや、まあ。こんなところで人に会うとわね。旅行者かい？」

「そんなものだ。ここから東にあると聞く居住地を目指しているんだ。知っているかい？」

「ああ、そこなら知ってる。商売仇のなじみだからね」

「商売？」

「ああ、そうさ。商人だよ。ほかに何に見えるんだい、Vault居住者？カーラだよ、覚えておいて」

「そうか。商品はあるのかな？」

サンクチュアリから多めに持ってきた浄化水をキャップに変えつつ。できるだけ自然に会話からなにがしかの最新の情報を得ようと試みる。

「このあたりでは、あんたとその友人以外にも商人がいるのかな？」

「どんなのをお探しかい？こっちでつごう——」

「かなり特殊なんだが」

「わかったよ。なんだい？言ってみな」

「犬だ。犬を売っている商人はいないかな？」

「なるほど。そりや確かに変わってるね」

「どうかかな？」

彼女の商品からバーボンを手にしながら、しつこく尋ねた。

「知ってるよ。確か、この辺を歩いて回ってたはずさ」

「そうなのか!？」

「間違いないよ。でも今なら、この“連邦”を南に下っているんじゃないかな」

「南？なぜ？」

「ははは、そりや南には連邦のグリーンジュエルがあるからさ」

「グリーン？」

「なんだい。行きかたも知らないのか？」

「ああ、そのグリーンなんとかっていうのは——」

「南にむかって進むのさ。目の前に横切る川を見つけたら、その向こうに目的の場所が見えてくる」

往来の真ん中でのお喋りが嫌だったのか。

取引が終わると判断すると、さっさと荷物をまとめてカーラはここから消えたがっていた。

もっと聞きたいが事がたくさんあったが、不用意にしつこくするのはトラブルにしかならないと思い、私もこれ以上はなにもしなかった。

それでも収穫があった。

犬を売る商人がいる。シヨーンの最初の手がかりは、そこにあるかもしれない。

|| || || || || || || || || ||

サンクチュアリのママ・マーフィが教えてくれたシヨーンの手がかりとは犬だと言っていた。

彼女は「それがどれほど先の未来かはわからないが」としながらも、私が望む未来にある“映像”には武装した私と犬が人気のない線路の上を歩いていたのだそうだ。

「犬？それはどんな犬だったんだ？」

そう私が質問しても、今度はママ・マーフィは首を横に振って教えてはくれなかった。

「犬といったら犬さ。あんたが選びたいと思っっている未来を胸に、道を求めることにいきらめなければ。おのずとその子はあるたのところに舞い込んでくるよ。そしたら、あんたはそれだけ戻ることができなくなってしまう。これはそういう“運命”なのさ」

そういつてそれ以上、このことで私と話すことを拒否した。

彼女の“サイト”とやらはそれくらい、使い方が面倒なものらしい。

カーラと名乗った商人が去ると、私は再び十字路を前にして考え込む。

「旦那様？」

「ゴズワース、迷っている」

「いえ、予定ではこのまま東です。居留地はそこにあります」

さすがにロボットに、今の自分がこの旅の目的が怪しげな老婆の予言を信じて行動しようとしているとはわからなかったか。いや、そもそも言ってもいなかったな。

「——そこにある、か」

代わりに自分のロボットの言葉が私の心に刺さった。

犬と一緒にいる、それが老婆の見た映像だとすると。やはり話に聞いた犬の商人を探すのが一番のような気がしないでもない。

だが、落ち着いて考えてみれば予知で見たとかいう犬をどう手に入れたのかまでは説明されていなかったじゃないか、ということにも気がついていた。

「プレストンの約束を果たそう。確実に、ひとつひとつ」

心の声は、すぐに南へ向かえとまだささやいては誘惑してくるが。

あの老婆の言葉のすべてをむやみに信じないほうがよいと、私は強く考え始めていた。それはきつと、ママ・マーフィの言葉に、なにか大きな力のようなものが確かにあるのを、私なりに感じ取っていたせいだと思う。

|||||

目的地の居住地には、日の高いうちに到着することができた。

崖の上にあるそこは本当に小さな畑とわずかな数人だけで暮らしているようであった。

私は離れから数分の間、そこで生活している人々の様子を観察し。特に気になるものもなかったので、意を決して近づいてみることにする。

「やあ、どうも」

「……」

「えつと、ここの代表は誰かな？」

こちらの姿を確認して、最初におびえを見せた彼らだが。警戒を解くつもりはないらしく、無言のままだ。さすがにこのままでは会話にならないと困っている。

どこからか「動くんじゃないよ、こっちにも武器があるんだからね」という声が出て、建物の裏からパイプピストルを構えた疲れた顔の中年女性が出てきた。

「何か用があるというなら、さつさと口を開いたらどうだい」

「ええと、それじゃ質問 —— ミニッツメンを呼んだのはここかい？」

「ミニッツメンだって？あのロクデナシ共、とつくに解散したと思っただよ。皆が頼りにしていたっていうのに、あんな裏切りをしたんだ。ひどくやられて散りじりになったと噂では聞いたけど、同情はないね」

相手の女性はそうなぜか憎々しげに顔を歪めて吐き捨てた。

「——まさか救援要請を受けて来てみたら、いきなり説教されるとは

思わなかった」

相手の歓迎振り、馬鹿正直にプレストンの願いを聞いてしまった自分に呆れ。自虐的な感想を口にしてしまった。すると相手の態度がまたまた一転した。

「悪い。最近はいレイドのせいで気が張っているんだ。私たちをミニッツメンが助けてくれるというなら、本当に助かる」

「——そうか、なにがあった？」

「山賊さ、レイドどもだよ。数ヶ月前からボストンの北部に、大きな組織が居座つたらしくてね。このあたりのやつらに声をかけているようで、ここにも姿をちらほら見かけるようになってるんだ」

「具体的にはまだ——それでも時間の問題だろうね。いつ脅しか、それとも襲撃があつてもおかしくない雰囲気なんだよ」

周りを見回す。

やせ細つた体の数人の男女が、不安げな視線をこちらに向けている。きつと夜も安心して眠れなくなっているのだろうと思う。とはいえ、話を聞くと簡単に引き受けるともいえない印象だ。

「なあ、わかつてると思うが。ミニッツメンはかつてほど兵力が十分じゃない。あのボストンに居座っているような連中というなら、今すぐはどうこうするのは難しい」

「ああ、それで？」

失望の色を浮かべ、顔をうなだれる彼らに私はどう答えたらよいのだろうか？

「だが私はこの一件を任されている。そして私はあんたたちの力になりたいとも思っている。

なにかアイデアはないかな？いきなりボストンに向かって進軍のラッパを吹き鳴らす、以外の」

実のところ無法者はたいした脅威ではない。問題は数なのだ。

プレストンがいったいどこまでこの途方もない話の内容を理解していたかはわからない。だが、それにしただってこれは一人の兵士が引き受けるには途方もない話だった。

くたびれた男が手を上げた。

「——いいかい？」

「アイデア？どうぞ」

「ジヤナはボストンの北って言ったが。本当はここから南側に見える工場に居座っているやつらがそうなんだ。だが、あんたが言うように確かに大勢いると思う」

「ああ」

「そこで俺なんかは思うが。とりあえずこの辺りにいるレイダーを片付けちやもらえないかな。それでしばらくは静かになると思う」

「具体的には？」

「2ヶ所かな。ここの西と東にある、どちらか片方でいい」

「それでしばらくは時間が稼げる、か」

「工場の連中はもちろん対処してほしいが。あんたらに死んでくれとも言うわけにはイカンしな」

（工場が本体とするなら、この周辺にいるのは先遣部隊ともいえるか。これを叩けば、当面はここも静かにはなる）

私の果たすべき役割が、はつきりと見えてきたように思えた。

夕刻、私は崖の居留地の端に立ち。かつてはマサチューセッツ州とよばれていた、この連邦の大地が赤く燃え上がる姿を見つめていた。

世界は崩れかけて、なんとかその姿をとどめようとしているが。あの時代の傷跡は、この大地をあまりにも深く傷つけてしまい、それが癒される気配は200年以上たったというのにどこにもない。ケロイドのように醜い残骸だけが、そこかしこに残っているだけだ。

（あの戦場でもあった。癒されない傷。寒さにやられ、傷の手当が遅れてしまい、腐らせてしまった……）

連邦は、いやこの国は、この星はまさにその兵士の痛んだ体と一緒にだ。

肉を傷つけ、血液がめぐらせず腐らせてしまった。そこまで傷んだ体でも、まだ生きていかなければならない。

「兵隊さん、もうすぐ飯だ。その前に、一杯どうだい？」

あの提案をもちかけた男が近づいてきて、バーボンのビンを私に差

し出してきた。それを受け取り、ちびりとなめる。のどを焼く懐かしい感覚に続き、腹の底にズシンとくるものがあつた。

「いいね、しっかりと味がある」

「昔ながらの——ってやつさ。豊かな時代の製法は、親から子へと引き継がれている。そしてこういうところでは数少ない楽しみの一つだ」

「なるほど」

「なにを見てたんだい？」

「景色を。ここは高台だから、連邦がよく見渡せる」

「フン、見て楽しいものなんてないさね」

「——あんたがいったんだ。工場はここから見える、と。あれだろ？」  
そういうと私は遠くにある建物の中でひとときわ巨大なそれを指差す。

男はそうだと頷いた。

「あの町の今の様子はどうなっているか。情報はあるのかな？」

「噂で聞くだけさ。近づいたら命がない……あそこは今、地獄なんだ  
そうだよ」

「地獄？」

「グールさ。あいつらがどこからか町に移動してきている。銃声はやまず、数日おきに爆発音もここまで聞こえてくる。町の路地にはグールとレイダーの死体で埋まっているらしい」

「グール？」

「ああ、あんた Vault 育ちなんだな。——そのジャンプスーツで  
もしや、と思ったが。」

元は人間で、化け物みたいな醜い姿になってな。皮膚がぼろぼろ落ちて、ひどいもんさ。そいつらの中に、おかしくなって人やらなにやらお構いなしに襲うようになるやつらがいるのさ」

「……」

「困ったことに、こいつら群れで襲ってきやがる。」

ああ、このがけ下にレールが見えるだろう？それにそって南下すると駅があつて、実際にそこでも会えるよ。もつとも、すすめないがね、



近づいた獲物に気がつくのと全力で襲ってくるから」

「走るのか」

「ああ、そうだったら逃げるか。倒すかしかない。あいつらの力は恐ろしく強い、そんなのに囲まれたらあつという間に人間なんてズタズタに引き裂かれちまう」

背後で夕飯だと村人を手伝っていたコズワースの呼ぶ声がして、男は先に離れていく。私は再び、夜へと変わろうとする連邦を見た。

ここに来て、私の予定リストは更新された。

次はボストンへ。南へ向かう。

カーラと名乗った商人の話を信じるなら、最終的にはグリーンジユエルとやらにも行くことになるだろう。

食事を取ると、私はすぐに横になって仮眠を取った。そして日付が変わるころ――。

「旦那様、起きて下さい。時間です」

「……そうか。コズワース、準備は？」

「あなた様が起きて命じてくだされば、すぐに」

「よし」

ランプを片手に私は夜の居留地から立ち去った。

目指すは西。そこにはかつて軍の衛星施設があることを私は知っていた。レイダーはきつとそこにいるということも。

そこに居座るレイダー達が明日の朝日を見ることはないだろう。

次に私は南へ進路をとるのだ。そこに私の未来が、息子のショーンがきつと待っている。

闇の中に巨大な衛生施設がうっすらと姿を現すと、私は静かにランプの灯を落とした……。

## その木に実るは望まぬ果実 上 (Akira)

フランク・J・パターソン・Jrが。レオがサンクチュアリを離れて3日が過ぎた。

約束を守り。プレストンはサンクチュアリに残ったが。正直、それは一番最悪の選択肢ではなかったのか？

ここは自分の居場所ではない。

それはレオに自らそう口にしたのは本人だった。この町に定住しない以上、彼にできることなど本当ならばそれほどないのだ。

たった一人の男が町から姿を消す、ただそれだけで。いきなりサンクチュアリに問題が浮かび上がる。

居住者のロン夫妻——いや、妻のほうのマーシーが。

アキラの考えるサンクチュアリの整備に全力で反対の声を上げたのがすべての始まりだった。

弁護するなら、若き東洋人の考える計画に問題はなかった。

とにかくしっかりとした町に集合住宅をまず用意し。連邦に広く居住者を求め、集落としての機能を徐々に高めていく。

まだ食料の確保には十分な目処は立ってはいないものの、人が集まればそれだけ注目がされるし。旅するキャラバンも訪れてくれるようになれば、どうにかなるかもしれない。

どうやらマーシーはこの計画を完全には理解しないまま手伝い、レオがいなくなるタイミングでそれを理解して瞬時に頭に血を上らせると騒ぎを起こした。

恐ろしいレイダー達からの逃亡中に自らの子供を失った彼女は、この場所に自分たち以外の人が近づくことを完全に拒否している。

それではいけないし。これからのためにもすぐに考えを改めるように説得しなくてはならないのだが——。

「プレストン！」

スタージェスの声に見回りをやめ、足を止める。

息せき切つて駆けつけた彼は、簡潔に事態を伝えてくれた。

「まずいぞ、マーシーがついにアキラが作りかけの家を破壊している

！」

「なんてことを——」

彼に続き、うめき声を上げたばかりのプレストンも走り出す。

レオがここにいた時は、マーシーは彼にひどく冷たい態度をとってはいたが。その時は若いアキラに対しては普通のそれだったのに。

ところが彼が視界から消え、自分たちの作業している内容に気がつく。アーキテクトとして責任者となったアキラに対し、彼女はレオと同じような態度を若者にもするようになってしまった。

元は軍人で、度量と人生経験のあるレオと違い。まだまだ若い青年に、彼女のような存在を持て余し、どう扱えばいいのかわからないのも無理はなかった。

|||||

あの女に目の前でやられたことを、僕は信じられないと目を丸くして突っ立っているだけだった。

10人前後が寝泊りする空間を生み出すためにと用意した木材を、あいつはレンチを振り上げて無謀にも破壊しようと試みている。

ヒステリーだ、見ればそれはわかる。

だが僕はそれを止めることも、横暴に振舞う彼女を止めようとする者もない中。ガラガラと僕の計画だけが傷つけられ、殴られつつげている——。

住居を、それもコズワースのようなロボットの力を借りずに人の手だけで作るとなると簡単な話ではない。

十数日は作業に完全につぶされると考えなきやいけないし、訪れる冬の到来は時間的にもそれほど余裕はないはずなのに。

この女は、自身の感情だけですべてを破壊しようとしていた。

「マーシー、マーシー」

頼りにならない彼女の旦那が、発狂している妻を背後から止めようとして、情けなくもぶつとばされている。

そして苦勞してそろえたものがまた、破壊される。

もう十分だと思うと、僕の体が自然と動いた。腰のホルスターに手をやり、10ミリを抜いてぴたりと狂人の後頭部に狙いをつける。

あとは――。

「だめだっ！やめろー」

女房に振り回されていたはずのジュンが今度はこちらに体当たりをかけてきたが。これが思った以上に力強かった。

こちらの手首をつかみ、必死で邪魔をしてこようとす。

スタージエスがプレストンをつれてようやく駆けつけたのはこの時だった。思うとおりに暴れるだけ暴れたのに、なにが不満なのかまだ泣き叫んでいる女が夫とスタージエスに引きずられて立ち去る中。僕はなにもできなかつた現実を、荒らされた現場を前に立ち尽くすしかなかった。

それなのに、プレストンは僕に大してさらに多くを要求する――。

「アキラ、冷静でいてくれ。君ならそれが出来る人だ」

「……」

「頼む。ジュンとマーシーは、ここに来るまでにずいぶんと苦しんだんだ。だから――」

「ええ、わかってますよ」

皮膚の下に、冷却液が流れていくような不快さだった。

「あの女が冷静になるより。僕が冷静になるほうが、あんたには簡単で御しやすいってことでしょう」

「少年――」

「プレストン。僕はレオさんの家をやってますから。どうか”そつちも”やれることを好きにやったらいいじゃないですか」

平和なこの町の中を、張り詰めた顔で日がな一日、レーザーマスケットを抱えているだけの男に僕はうんざりしていた。

そして理解した。結局記憶のない僕にとって、この町につながるものなど何一つないのだ、と。

これまでの時間すべてが無駄に終わり、僕の苦勞と努力をここの住人たちは否定した。あれにかかわったせいで延期していた、自分のた

めの計画に今こそ僕は取り掛かるべきなのだ。

|||||

深夜、パターンソンさんの寝室だった部屋にある寝袋から這い出ると、僕は腰につるした10ミリピストルの確認をして家を出た。サンクチュアリは夜中で、ここに住人たちは全員寝入っているようだった。

Vault111へ、戻る。

レオさんがコンコードに向かった時。僕はそうすべきだと考え、ずっとその機会をうかがっていた。

サンクチュアリで不安定になりながら、僕はずっと自分という存在に疑問を持ち始めていた。

記憶がないのに、自分ができることがあまりにも多いのだ――。

元軍人だったレオさんよりもピップボーイの使い方を知っている。住居や家具にとどまらない、銃器や、多分装備までもどうにかする。どうにかできるといふ、妙な自信、確信だけがある。

実際にそれはいくつも証明してしまった。頭に思い浮かべ、手にとると自然に手が動き、空想が現実化してそこに誕生している。

そして故障していないはずのピップボーイが、自分の生態データを正しく読み込めずにエラーを出したこと。

それらの答えが、まだあの場所には残っているかもしれない。

この考えに取り付かれると、他の手段を考えることができなくなってしまうていた。

サンクチュア리를離れると深夜でもわかるあの小道を登って丘の上を目指す。

レオさんの話では最後の日、爆弾が落ちる中をVaultに降りていったことを今でもはつきりと思い出せるそうだ。だが、ぼくにそんなものはない。

(Vault-Tecは入居者の医療データを持っていたはず。僕の

記録も、きつとそこに――)

エレベーターに近づくと、手早くスイッチを押して地下へ――  
Vault111へと降りていく。

居住者全員をVault―TECが選別したというなら、ここに入る人々の個人データもここにあるはずだ。病歴や、何かの際の治療の過程。これらからどれだけ僕の消えている過去がわかるのかは不明だが、今は何でも手がかりが必要だった。

あの日、レオさんと出会った監督官の部屋に直行すると、ターミナルに座る。

ここからなら、わずらわしい情報封鎖など気にせず。残されたデータを思う存分閲覧できるはずだった。

なぜそんなことがわかるのか、理由はないが。僕はその確信を持って、キーボードに指を乗せる。

情報の海の中では時間の感覚が消失した。

サンクチュアリから持ち出したきれいな水の入ったボトルの5本目のキャップをはずした後。僕は画面から目を離すと、声を上げて体を伸ばし、ようやくひと心地つくことができた。

レオさんが口にしていた肉体の能力低下。

やはりあれば冷凍からの蘇生の過程に起きた、なんらかのアクセシビリティであろうという確信を得た。

困ったことにちゃんとしたデータがわかるのはレオさんだけなので、失われた分の能力は今後どうなるのか？失われたままなのか、戻ってくるのか。

それは不明だが、どうやらVaultはこの結果は想定していたよう。Vaultがあのまま続いていたら、当時ここで生き残っていた入居者達は、この冷凍技術の完成まで。解凍作業と冷凍を繰り返される予定だったらしい。

非人道的すぎて呆れた話だが、ここでそれを怒っても仕方ないので今は気にしないでおこう。

倉庫の在庫状況を確認すると、やはり食料はなく。代わりに武器はまだまだ多くが残されているようだ。警備が使う電磁警棒や火炎放射器。試作の冷凍銃の存在を確認することができた。

レオさんと同じく、自分用のピップボーイも欲しかったのだが。誰かが持ち出したらしく、壊れていて修理が必要なものがいくつか残されているだけだった。

だが、本当の問題はそこではない――。

(五十嵐、イガラシ、イガラシ アキラ……五十嵐 晃の、名前がない?)

東洋人の名前は数人あったが、どれも大陸の人間で日本人のそれではなかった。

なにより年齢もぜんぜん違うのだ。老人、中年女性、子供は幼児で10歳にも満たない。19歳なんていないのだ。

(どういふことだよ!?)

あの時、鳴り響く警告音の中で目覚め。這いずった先でレオさんと出会った。

見たことのない顔で、名前も知らなかったが。あの混乱の中だったから無理はないかもと、レオさんは言ってくれていたのに。

――記憶がないのは、おまえ自身が経験していないから。それが真実ではマズイのか？

恐ろしく冷酷な声が、脳内で自分にそれを告げ、僕は震えを押さえ立てち上がる。

――それはありえないことのはずだ、あつてはならないことだ。

記録がないから記憶もない、それがあまりにもしつくりくるのが恐ろしい。ならば、僕はどうしてここにいた？

もう実際に自分の目で確かめるしかなかった。

|||||

レオさんが眠っていた装置のあった部屋の一階下に、僕が目覚めた部屋があった。

そこにもほかと同じように、部屋の両脇に10台前後の冷凍装置が設置され、その中にはすでに目覚めることのない死者が収まっているはずだった。

それはつまり、僕の本当の家族がそこに眠っているということでもある。

そのはずだった。

だが、ここにも僕の名前はなかった。

それどころか、この部屋のすべての冷凍装置の中で死者が眠っていた。

僕が眠っていたと思われた冷凍装置がこの部屋にはない、ということなのだ!?

——このことから……

五十嵐 晃。この名前は何だ？

19歳。この年齢は本当なのか？

思い出せない、数少ない記憶。本当の記憶は、なにひとつないかもしれない？

——お前、冷凍装置じゃなくてどこで眠っていたんだ？本当に、“普通の人間”なのか？

絶望に飲み込まれてしまいそうで、歯を食いしばったが、腰の力が抜けるほうがそれよりも早かった。

死者たちの前で、僕は自分の存在にうなだれ、座り込み、震えているしかできない——。

しばらくここで動けなくなるだけではなく、頭も真っ白になって考えることを拒否していた。

|||||

人の一生とは、幸福な一生とはなんだろうか？



僕は0才——世界を認識できない。横になったままの体、見上げるそこにあるものが全てだ。とても不自由で、何もできない無力さが波のように押し寄せては引いていく。

不安だ、どうしようもなく。

だから泣き叫ぶ。誰か、助けてくれと。声の限りに、感情を全て吐き出すまで。

それを続ける。

だが、その泣き声に反応した大人が「どうした」と心配して顔をのぞかせてくることはない——。

僕は5才——体が大きくなり、知能と骨格が発達して世界が広がった。

でもまだ不安定だ。体力はないし、自分のことを自分ですることはまだ無理だ。だから——は僕を部屋に閉じ込める。

6メートル四方の部屋の中にベット、机、椅子。これで、僕の日には十分だ。

立ち上がり、歩き、限界が来ると倒れてまた泣き声をあげる。それがずっと、ずっと繰り返される。

僕は10才——部屋には新しく鏡を置く。

外見を気にするようになるが。自分の顔の美醜の基準があいまいなので、ただ“気にしている”風になっていると心が休まる。髪をいじる、頬に触れる、唇を噛み、顎に指を置く。意味がわからない。

思春期の訪れが、肉体の変貌にも影響しはじめる。背はますます伸びるが、オスとしての自我を徐々にあまし始める。

僕は15才——生まれてから過ごしたこの場所は、牢獄だ。孤独と、ますます激しく暴れようとするオスの本能によって、精神が荒み続け、不安定さを増していく。

気が狂いそうだ。だが、ここからさらなる外の世界に飛び出すことを——は許さない。許されない。

僕は、僕は——。

横になると、体が飛び出しそうになる窮屈なベット。

体重をかけて座れば、ギギツと悲鳴を上げ。苦痛の声を上げる椅

子。

机の上には、この手で刻みつけた傷跡が無数にあつて。もはやここでは平らであることは期待されない。

そして、目の前には同じ顔をした“俺”が立っていた。

“俺”は口を開いた。

——記憶などないな、どこにも。

“俺”は笑みを浮かべた。

——過去のないお前は、未来だつてないさ。では、なぜ今を生きようと思ふ？

“俺”はすぐに退屈そうな、そして見下す目をこちらにむける。

——「自分は全てうまくいつている」そう口にしただけで、全てを取り戻したいのか？

——そんなことは簡単だ、だつてそれはお前のすぐ隣にあるからな。言ってみろよ、さあ。

——だが、なりゆきで手にするものなんて、大概退屈な物語さ。

——お前の世界の行く末だつて？どうせ退屈なものに決まつてる、お楽しみは少しさ。だから俺とき……。

明かりが消え、部屋が消え、全てが消えると。

目の前に見たことのない奇妙な顔の自分があつた。

——世界の聖書に、メッセージを書き込むのさ。全ては無茶苦茶になつて、それでも最高になる

なんて返事をしたらいいのだろうか？

だから僕は力なく笑うしかなく——。

|||||

両脇に並び立つ死者の中で、僕は呆けた顔のまま腰を下ろしていた。動く力なんて、わずかにも残っているとは思えなかった。

すると、カサカサとなにか音がする。音がするほうを見て、すぐにひやあと声を上げて無様にも僕は反対方向に体を投げ出した。

冷凍装置の隙間から、巨大なゴキブリが次々と這い出してきていた。

(ゴキブリ——奴らは雑食だ。肉だって食う——肉？死肉？)

装置の中に眠っているものを思い出し、体が震えた。

だが、その前に現実が追いついてくる。巨大ゴキブリ——ローチは触角を動かし、こちら側へと反応しているようだ。その意味することはひとつ、僕はこいつらに生きてまますらわれるのはごめんだった。

それまでの様子が嘘のように僕は瞬時に立ち上がると、転がるようにして部屋を飛び出した。

Vaultierが安全だと、なぜか自分は考えてしまっていたようだ。

回収していたショックボタンを振りかぶる。振り下ろす手に殻のある木の実をつぶすような不快な感触が残っている。

だが、数は減らない。それどころか、どこからか自分を目指してさらにローチは次々とあらわれた。

なんてことだ。あんなにいつの間……退治してやりたいが、数が多いし、こちらの装備も頼りない。

僕は監督官室に戻ると、壊れたピップボーイと試作冷凍銃を回収してここを脱出することにした。

扉はしっかりと閉じるように指示を出したのに、あいつらはまるでおかまいなしだ。部屋を移動するたびに一旦は逃げ切れたと思うが、すぐにどこからか進入してくる。

それでも出口に向かおうとする僕を追ってきたローチ達が、扉を抜けて列をなして部屋に侵入してくるのを見た時はさすがに喉の奥にクルものがあったが、なんとかその場で吐くのをこらえることができた。

警棒を振り上げ、10ミリを撃ちながら後退しつつ、僕は無事にVaultierから地上へ出るエレベーターに乗り込むことができた。

(4. 3. 2……終わったか)

地下の世界がゆっくりと消えていくと、僕は上昇するエレベー

タワーの中央で中腰になって安堵した。

考えなくてはならないことが、たくさんあったが。とりあえず必要だった情報は、そこにはないという最悪の真実は手に出来た。とにかく今は無事にサンクチュアリまで帰ることを考えなくては。

エレベーターが音を立てて止まると、僕は立ち上がる。

まだ太陽はなく、夜のままだったが星空が明るくて地上が不思議とはつきりと見えた。

ここまで怪我ひとつせず地下から脱出できたと思った僕の前に、複数の人影があつたのは誤算であつた。

「ガアツツ」

暗闇の中でもこちらを確認したのか。

そいつは声を上げると、手を振り回しながら猛然といきなりこちらに接近してこようとした。

グール。より正確にはフェラル・グールと呼ばれる連中だ。

だが、この時の僕はその正体を知らず。危険を察知して、とつさに握っていた銃を相手に向けた。思いもよらない遭遇であつたが、よく反応したとこの時の自分をほめてもいいと思う。

(こいつ、1——つて、ラストかよつ)

醜い顔の頭頂部に穴が開き、空中に赤い線が飛び散るのが見えた。相手は突進をやめるとフラフラとたたらを踏むが、すぐにまた突撃を再開する。

空になった弾倉をふるい落として入れ替えようとしたが、相手の動きのほうがそれよりもすばやかだった。振りかぶる右手が、僕の右肩をかする。ただそれだけで、僕の体は激痛と共に跳ね飛ばされてしまった。

飛び込んできた頭に穴を開けたやつは、勢いをつけすぎていたように振り下ろす自分の腕にバランスを崩し、地面の上を転がりまわる。

そして僕とレオさんがサンクチュアリを見下ろした崖の向こう側まで、間抜けにも転がり落ちていってしまった。

だが、まだ安心はできない。

闇の中を複数の存在が僕を感知して、殺到してくるような気配がした。

僕は痛みに耐え、必死にその場から離れようと走り出した。

このまま追われて夜のサンクチュアリには戻れない。あいつらを、まだ無防備なあの場所まで引っ張っていくわけにはいかない。ただその一心だけで、僕は下り道に背を向け、木々の茂る林の中へと駆け出していった。

|||||

しばらくの間、夜の林の中を僕は走り続けた。

ありがたいことに、草や根っこに足をとられることもなかったのだ。気がつくやうに背後から感じていた追っ手のプレッシャーはいつの間にか綺麗に消えていることに気がついた。歩調を緩めて、一息つく。

とはいえ、問題がなくなったわけじゃない。

サンクチュアリとは反対方向にむかったせいで、今の自分のいる場所がわからなくなってしまった。

(呪われているのかな？問題は山積みになっていくばかりだ)

僕は息を整えながらそばにあった切り株に腰を下ろした。

記憶、過去。

それらを求めて、Vaultに残っていると思われた記録を探しに向かったのに。

何も残っていなかった。それどころか、さらに大きな不都合な真実を知る羽目になった。

自分は存在しないばかりか、あのVaultに受け入れられた入居者の一人ではなかった可能性が高まった。

では自分が入る冷凍装置のないあの場所で、僕はどうやって封印されていた200年以上を眠っていられたのかわからないのだ。

Vaultに運び込まれた？

誰に？レオさんの子供をさらい、奥さんを殺した連中が？

でもそれならば、記憶がないのはなぜだ？なぜ、置いていかれた？

「わけが……わかんないよ。頭、おかしくなりそう」

虫にかじられ、襲撃者に殴られた傷口がジンジン痛むし、落ち着いて考えてしまったら気力も萎えてしまう一方だ。

それに正直にいうと、もう地下墓地と成り果てたあそこには戻りたくはなかった。

(どうやってサンクチュアリに戻る？朝までは大丈夫か？)

頭を上げ、周囲を確認してみた。

視線の先になにかを見た気がした。

僕は立ち上がると、静かにそれに接近していく。

林の中に、ある方角にむかって置かれた椅子と机があった。

だが、僕が見たものはそれじゃない。そのそばにある木には、チヨークで白の模様が書かれていた。

(なんだ？)

椅子の隣に立ち、周囲を見回す。

夜の連邦が見える、そして——ドクン——僕の心臓が音を立てて波打った。

椅子が座る先に、小さな明かりが見えた。あれは、サンクチュアリ？

(ここで見張ってたやつがいる!?)

ここに人の気配はない。

だが、このままあそこに素直に戻ることが、また出来なくなってしまう。

ああ、確かに僕は呪われているのかもしれない。

それでも気を取り直すと、僕は林の中を慎重に歩きはじめた。

方向はわからなかったが、なぜかこの時の勘がこつちだと告げていた。

そしてそれは、間違っではないようだった。

大地にそそり立つ鉄塔が夜の闇の中で浮かび上がり、その足元に確かに動く気配があるのを僕は感じていた。誰だ？ここまできたら顔とか、数くらいは調べておきたかった。

僕はゆっくりと、足音を立てないよう慎重に前進を続けた――。

## 輝きはまだ遠くに (LEO)

私とコズワースは、“連邦のグリーンジュエル”ことダイヤモンドシテイを指して南にむかっていた。

レイダー達との戦闘を経て、私の様子も変わってきた。

アキラにもらった銃以外にも、新たにハンティング・ライフルを手に入れ——とはいってもストックがはずされ、スコープもないので、このままでは満足に使えない代物であったが。とにかく武器がまた増えた。

防具では着ているV a u l t スーツには対弾性能はないので不安だったが、襲ったレイダーの中に皮製のアーマーでなかなかよいものを使っているのがいたので頂いてきた。

今の私の姿なら、この連邦を旅する傭兵くらいには思ってもらえるかもしれない。

しばらくは静かになっていればと願っていたが、残念ながらそれは儂い願いでしかなかったようだ。

前方から人の争う声が聞こえてきた。

私は自然、引き寄せられるように騒ぎの元に向かって確かめようとする。

ドラムリン・ダイナー。

頭上に輝く太陽の下で、ダイナーの内と外で銃を構えて男女が怒鳴りあっていた。

「旦那様、どうされますか？」

「気になるな、見てみよう。コズワース」

「そうですね、そうしましょう」

ダイナーの中にいるのは老けた女性で、外にいる男女はアウトローのようだった。

レオたちが歩いて近づくと、一瞬おびえた表情を見せ外にいた男女は銃を向ける方向を変えてきた。

「おいおいおい、なんだよ。お前には関係ない——」

「今すぐそいつを下ろせ。さもないと関係ない、ではすまなくなるな」



軍隊時代、戦場では希望がないばかりに味方に喧嘩を吹っつけたがる馬鹿共が、たびたび騒ぎを起こしたが。仲裁に入るレオは一步も引くことなく、殴りあうこともなく収めた経験が何度もある。

今回は見ず知らずの相手ではあったが、レオの毅然とした態度と装備を見てなにか勝手に勘違いしたのかもかもしれない。「わかった、わかったよ」と口にする、銃をすぐに下ろしてきた。

後ろでコズワースが「お見事です、旦那様」と喜ぶのを頷いて返し。レオはこのアウトローたちに事情を聞くことにする。

「なにがあつたんだ？」

「話してもいいが——なあ、よかつたら俺達の味方になってくれないか？それで……」

「話がさきだ。それで？」

「わかった、わかったよ。おれたちはウルフギヤングさ。あつちがトウルーデイだ」

「ああ」

「実は——」

ウルフギヤングの話をまとめるところだ。

それまで“仲良くやってきた”両者だが、ウルフギヤングがトルーデイの息子にジェットを売り。立派な中毒者にしても、さらに薬を売ってやっていたらしい。

そしていい頃合だと支払いを要求。当然だが、母親は激怒すると銃に手を伸ばし——。

そこまで聞いて、私はあきれて声を上げた。

「そりやそうだろう」

「なんだよ、あつちの肩を持つのか？」

「いいや。だが、話を聞くとあんたはジェットを売るべきでなかったし。こんなことになる前に息子のことを母親に教えるべきだったと思うね。つまらないトラブルを起こしたな」

「そんなこと。いまさら言われても。むかつくだけだぜ」

想像以上にしようもない話であった。

だが私自身、首を突っ込んだ以上は、なんらかの決着が必要だとは

思う。とはいえ、一方の話を聞いただけではすべてを知ったと考えるのは公正とはいえないだろう。

「おい、どこへいく?」

「中にいる彼女にも話を聞く。終わるまでは、落ちついてここで待っている」

「ああ……おい、トルーデイ! あいつを説得してくれたらキャップを出すぜ! あんたにとっちゃ、簡単な仕事だろう!」

背を向けたまま、私は舌打ちする。

狡猾な男だ。私を味方にするために、わざとここであんなことを口に出したのだ。足を止めずに店の中に入ると、当然のように母親は不審の目をこちらにむけてきた。

「なんだよ、あんた」

「あつちの言い分は聞いたんでね。今度はあんたの話を聞こうと思っただから来た」

「フン、雇われたとは言わないんだね。あのクズから、いくらもらったんだい?」

(これは駄目だな)

彼女は戦闘態勢を崩すつもりがないのは明らかだ。それもこれも、あの男が余計なことを口にして、悪化させたせいだ。できることなら強引に説得して、両者が争わないよう事を収めたかったが――。

願いはかなわないと悟り、私は方針を変更することにした。

「トルーデイ、私を雇わないか?」

「意地汚い傭兵風情に、値段を吊り上げる役に立ってやるつもりはないね」

「私は、あんたの味方をしたいと思っているんだ。もちろんあんたと、あんたの息子が助けがほしいなら」

「――それならあいつらを、ちやっちゃとやっちゃっておくれよ」

「もつと素直に助けを求めて、いいと思うんだがね」

そう苦笑ながら私は出口から外に顔を出す。

「おい、あんた! 彼女と話したぞ」

「ああ――それで?」

「これで解決だ」

私はすばやくホルスターから10ミリの抜くと、2発。

つまらないことに頭が回る男らしく、頭に新しい穴を作ると、ウルフギャングは手足を突っ張るようにピーンと伸ばし、驚いた表情を凍らせて後ろにはねる様に倒れていった。

「っ!？」

女のほうは、まさかいきなり殺されるとは思っていなかったのか。死んだ相棒とレオを交互に一瞥すると、くるりと回れ右をして逃げようとした。

だがそれを許すつもりはなかった。

可愛そうだが、逃げた先に仲間がいるか、もしくは復讐しにここへ戻ってこないよう。私はしつかりと止めを刺さなくてはならない。

背中のパイプライフルを取り出し、イメーヅ通りに狙いをつけると引き金を引く。気持ちのよい、カタカタという連射音に続いて足元に38口径の薬莖が零れ落ちていった。

走っている女の太ももを数発の弾が撃ちぬき。倒れてもまだ動くともがくその背中に、さらに容赦なく複数の穴を開けて血しぶきが吹き上がる。

そうなつてついに動かなくなった。

私は殺人鬼では決していないが、困ったことに冷酷な人物であるらしい。軍にいた時も、相棒もそうだったが敵であっても女子供は殺したくないと多くの兵士がそう口にしていた。

私もそれには同じ思いがあったが、それでも違うのだ。

繰り返すが決して自分は殺人鬼などではなかったが。戦場に出ると、自分の前に武器を持って立つならば、それがたとえ女子供であっても、私は敵に向かって銃を構えることを気にすることはなかった。

思い返すと私を認めた上官や、ボスたちは。皆、私のそうだった冷静さ——いや、殺人機械のような冷酷さを褒めていたような気がする。

ウルフギャング達への私のやり方にコズワースは不満そうだった

が、トルーデイは心の底から喜ぶと、一転して歓迎してくれるようになった。

私はギャングたちからすべてを剥ぎ取ると、彼女にすべてキャップと交換してくれと告げた。

ここからレキシントンは——レイダーの占拠したという工場のあ  
る町は近い。

|||||

レキシントン、かつてこの町は3万人を越える住人がくらす場所  
だった。

だが、あの居住地で聞いた言葉——地獄——は決してオーバーな表  
現ではないのだと、実際に自分で目にしてそれがわかる。

町の外側にある建物の屋上にコズワースとのぼった私の前で、町は  
最初。一見静かであるかのように見せかけていた。

だが、そうではなかったのだ。

しばらくすると、どこからともなく悲鳴や叫び声上がり、レイ  
ダーらしき男女がナニカをまとわせながら裏通りから勢いよく大通  
りへと飛び出してくる。

——グールさ。あいつらがどこからか町に移動してきている。

居留地で聞いた話は本当だったようだ。

体毛が抜け落ち、服も着ていないかつて人間だったそれらは。

全力で走り、腕を振り上げ、逃げようとする人間たちに殺到してい  
た。道のなかばにたどり着く前に、集団の半分が引き裂かれ、アス  
ファルトの上で転がされ。そこで馬乗りになられると、動かなくなる  
までバラバラにされていた。

それでも蠢くグールたちは、逃げようとする人間を追うことをあき  
らめない。

動かなくなり、引き裂くのをやめるとまた立ち上がり、再び駆け出  
して追いかけようとする。

「旦那様、このような場所に本当に入るのですか？」

「……」

「あれでは命がいくつあっても、足りませんよ」

同じ思いであったが、だからといって知らないふりをするわけにはいかない。すくなくとも、プレストンから受けた依頼が無理なら無理できちんと情報を集めてから決めたかった。

ついに最後の一人が絶望の中で、まだいるらしい仲間へ援護を求めもかなわず、悲鳴を上げて集まってくる白い肉塊のなかに沈むと私は背中を向けた。

騒ぎはそうやって終わったのだと、そう考えていた。あの戦場で、こちらが圧倒的な力で敵兵をすりつぶす際にもしばしば目にする光景だ。これ以上見るものはない……。

だが、その考えは間違っていた。

突然だった、自分の背後に、昼間にしても不穏な光量と共に熱を感じる。続いて衝撃が襲ってきて、あわててレオはその場に伏せる。

「だ、旦那様。これはいったい——」

「ゴズワース黙れっ！」

インパクトの瞬間は見逃したが、それでも振り返れば何が起きたのかはすぐに理解した。

先ほどまで哀れにも八つ裂きにされるために追われていた連中のそばに不快なキノコ雲が、出現していた。

ヌカ・ランチャー。

もはや狂気としか思えない、携帯する核兵器。アメリカ軍の用意した最終戦争のための武器。

想像するに、仲間が襲われていることを知ったレイダー達は。彼らを救出するのではなく、彼らに集まってきたグルごと焼却することを決めて、即座に実行したらしい。

そして私もそれでわかったことがある。

こここのレイダーとは戦えない。

彼らをどうにかするための武器が、今の私には圧倒的に足りないのだ。

その日も、町から戻ってきた私を見てトルーデイはあきれた声を上げた。

「またあんたかい。今日もあの町を？」

「ああ」

「もう何日目だい？よく飽きないね」

「5日目だな。悪いね、トルーデイ」

「別にこっちはかまわないけどね。忠告しておくよ、馬鹿なこと。考えないほうがいいよ」

「わかってる。あんたに売りつけられたサングラスも重宝させてもらってるよ」

「いい男だから、似合うと思って売ってやったんだよ？しかも20%も安くして」

「感謝してる」

「ああ、感謝してもらいたいね」

言いながらも、今日の成果としてあの場所から拾ってきたガラクタを彼女に見てもらい、買ってもらうことにした。粘り強く、レキシントンを探ったおかげで段々と状況がわかってきた。

町には確かにグールが入り込んできている。

どうやらその大部分は地下鉄を移動していると思われるが、数日おきに地上をグールの集団がフラフラと体を揺らして出てくるようだった。

一方、レイダーだが。

例の工場に本体があるようで、町を徐々に侵食されているにもかかわらず。たいした対抗手段を用意しているようには見えなかった。やっているのは、見回りに小集団を送り出すだけ。

とはいえ、内部の様子を探ろうにも工場周辺はさすがに警備も厳しく。遠めに見ても、あちこちに歩哨がたつていて。誰もそこには近寄せまいとしていた。

そろそろ結論を出さねばならない、私はそう思った。

ダイナーの外で星を見上げながら、寝袋にもぐりこんだ私はコス

ワースに声をかける。

「なあ、今いいか？」

「もちろんです、旦那様」

「プレストンには安請け合いをしてしまったが。どう考えても、あそこのレイダーに私ができることはなさそうな気がする」

「そうですね。あれは危険な場所です」

「そうなるこのまま町を眺めていてもしょうがないし。トルーデイの話じゃ、明日あたりから天気も崩れるんじゃないかといっていた。

「ここでこうして野宿するのも、これ以上はできれば避けたい」

「はい」

「コズワース、考えたんだが。この件は置いておいて、私たちは再び南に向かおうと思うんだ」

「と、いいいますと？」

「グリーンジュエル。そこに向かう」

「なるほどダイアモンドシティ。それはいいかもしれませんね」

当初は200年以上を稼動したために、調子が悪くなっているように感じていたコズワースだったが。面白いことに旅に出て以来、まるで水を得た魚のように。機械の癖に、あの日のまだピカピカだった頃の彼の姿に、急速に戻っていつている気がした。

当初のおかしな会話が減ると、こうして相談するのちやんと受け答えしてくる。

「とすると、明日も早そうです。もう、お休みになってください」

「ああ——お休み、コズワース」

「はい、お休みなさい。旦那様」

私が眠っても、コズワースは眠らない。朝日が昇る頃まで、周囲を伺い。朝日を確認すると、そっと私を揺さぶり起こそうとする。

この危険なはずの連邦の旅の中で、私は奇妙なほど夜だけは心穏やかに眠ることができた。

わずかな幸せではあるが、それでも「それがあつた」ということを素直に喜ぶべきことだろう。それがたとえ、あのすべてを奪われた装置の中で動けぬ悪夢に苦しめられるときがあつたとしても。

翌朝、太陽が地平線から顔をのぞかせると起きだしてゴソゴソと準備をしていた私に。「こんな朝っぱらから——」と、迷惑顔のトルーデイに私はついに南に向かうことを伝えると、さすがにむこうも眠気がすつ飛んでしまったらしい。

「そうかい。ま、そのほうがいいだろうね」

「なにか情報はあるか？」

「そうだね——ポストンに入るならケンブリッジになるだろうけど、あそこもここと同じ。グールであふれかえっているはずだよ」

「そうか」

「ああ、それとポストンに入るなら。あそこはスーパーミュータントがいる。正直、あれには出くわさないのが一番」

「スーパー……なに？」

「ミュータントさ。見ればすぐにわかる。緑の大きいやつ、ここでも見ることはあるけれどね。ポストンじゃ、どこにいても見ないことはないってくらい。沢山いるらしいよ」

「——そいつは、ほかにどんな特徴がある？」

「知性はあるらしいけど、好戦的だというから話し合いなんて期待しないほうがいい。あとはそうだね、覚えておくといい。あいつら、食うんだよ」

「食う？」

「ああ、あたしら人間を食うのさ。捕まっても餌になるだけ。どうだい、会いたくはないだろう？」

行商していたカーラは簡単そうに言っていたが、それは彼女のような旅慣れた人間だからこそその意見のようだ。自分にそれは期待できない。

「ここちに戻ってくるのかい？」

「ああ、向こうでなにもないなら。そのつもりだ」

「そうかい。なら、例のうわさはどうする？犬を売る商人の話」

「そうだなあ」

「ここ数日、顔を出した知り合いなんかにも聞いたけど。最近じゃ見



ないらしいってね。あんたの話が正しいなら、もう南に下りていつちやったのかもしれないが」

「——気に留めておいてもらえれば助かる。あと、出来れば本人に合うことがあったら。サンクチュアリに顔を出すよう、言ってもらいたいんだ。番犬を探しているとかなんとか」

「いいよ、それくらいならね。あんたのおかげで、あのウルフギヤング共が腐っていく“いい匂い”が嗅げて、最近こっちは気分がいいからね」

そういうとやり手の店主はニヤリと笑う。

|||||

ダイナーに別れを告げ、レキシントンを後に2日。

私とコズワースは、崩れている高架端の上に立ち、遠くを見た。

「旦那様。あれが、ボストンですね」

「ああ——ケンブリッジだ。遠くだと、この光景にもいくぶんか見覚えがある」

見る影もないと聞く、その内情を知っているからだろうか。妙に心が揺り動かされ、涙が私の目の端に浮かんできた。

ボストン、いやマサチューセッツ州を選んだのは妻のノーラだった。

アンカレッジ解放の物語は、軍に都合が悪いものだったこともあり。政府主導でその筋書きは塗り替えられ、精強なるT-51パワーアーマー部隊によるものだと発表された。

そうなったのも確かに無理からぬ話ではあった。

自殺作戦と皮肉った我々の言葉は正しく。作戦後、我が部隊の死者は7割を超えてしまい。そしてその生き残りも、さらに半分が精神を病み。その病人の大半は、半年の平穏な社会での生活に耐えられずに銃口を口の中に押し込んでから、引き金を引いた。

そんな調子だから、なんとか正気を保てた連中も部隊は解散とな

り。バラバラに軍の中で栄転の名目の元で移動をくりかえし、その引き換えに真実の記録はこの地上から抹消されてしまった。

だが私だけはそれを受け入れることを拒否した。

私は軍にはとどまらなかつた。

部下を、友を犬死にさせた場所になど未練などなかつた。愛国心とやらにも、義理は果たせたと感じていた。自分の中の冷酷な戦闘機械と決別したかったのだ。

アンカレッジからの帰還後、軍の兵器開発局へ協力の名目で拘束された私に、連日のこと名前しか知らないような將軍たちが訪れ、私の軍への慰留を試みた。

もう無駄だというのに。

私はようやく許された妻と面会するなり、己の意思を告げ、協力を求めた。

可能な限り、速やかに除隊できるよう。

そして軍に法律で拘束されないよう、確実な手を打ってほしいと。私と家族が、新しい生活のためにボストンに来て。サンクチュアリで生活を始めたのは、もう春も終わるころであつた。

軍は物語の完全なる封じ込めをあきらめたのか、退役する私を部隊を率いた英雄として公式に発表し直していた。

そして私もまた、その勲章を手土産に数年以内に終戦を訴える野党の議員として選挙に立候補する計画を立て始めようとしていた。

高い性能を誇るロボットのゴズワースをここで購入したのも。

そうなつた時、シヨーン母親の代わりに子育てする存在のナニーニとなるようにと考えてのことであつた。

「あそこでやるはずだつた……」

「旦那様？」

「あの朝だよ、ゴズワース。私は、あそこにある在郷軍人会館のパーティーでスピーチをするはずだつた」

「——はい」

「まだ私は退役軍人で、政府からの協力要請はノーラと私にとつても都合がよかつた。」

スピーチは夕方からの予定だったから、泊まりで帰宅は翌日になる。あの日はショーンを放り出していくようで、ノーラはずっとそれを気にしていた」

「ショーン坊ちゃんも、あの朝はなぜか機嫌がよくはありませんでした」

「そうだったな、そうだった——彼女は出かけるまで時間はあるから、散歩に行かないかと言っていた」

そして今、私の未来はまるで狂気の世界に落ちてしまった。

妻は、ノーラは訳のわからないまま殺されてしまった。息子のショーンは、そいつらに連れ去られてしまった。そして私は——何の手がかりも持たず、怪しげな老婆の言葉を頼りに放浪者となっている。

「旦那様、そろそろ出発いたしましたしょう」

「そうだな、コズワース」

私は力強く、一步を踏み出していく。

予定では、この数日以内にボストンに入っていくことが出来たはずだった。

だが、ここで困った事態が起こる。私の腕のピップボーイが、突然弱々しい電波を受信したからだ。

それはケンブリッジの警察かららしく、どうも深刻な状況に陥っているらしい。

——ケンブリッジにはグールが流入したって聞いている

トルーデイの聞いた噂が本当ならば、そこを攻撃しているのはあの不気味な集団が待ち構えていることになる——。

救援の求めに応じる理由はなかった。だが、私はそれでも彼らのために進路を帰ることにした。

助けを求める声に、私の心が反応してしまった。

その声には、あの日。敵の銃火にさらされて倒れていった味方を守ることができなかった私の思いに近いと感じてしまったから。

そうして私は、予定より早く。ついにボストンへと足を踏み入れ



## その木に実るは望まぬ果実 下 (Akira)

林が途切れ、鉄塔の下には明かりとテントが見えてきた。

だが、近づくとさらに——というか、あきらかに存在のおかしいものがそこにあつたのだ。

冷蔵庫。

そうだ、冷蔵庫だ。

電気がなければ意味のない、その冷蔵庫が。夜の鉄塔の下に、テントのすぐそばにあつて。その異様な存在感をはつきりと主張していた。

(人の気配は——ない。わからない)

だが、あまりにも怪しすぎてこのまま立ち去るなんてことは、僕にはどうしても出来そうにない。

(好奇心は、なんだっけ？猫を、じゃらす?)

緊張感が増し、息が荒くなってきた。

何度かこのまま立ち去ることを考え、左右を細かく確認もしたが。どうしても気になるものは、そのままにはおけなかった。

そしてそれは案の定、罠だったのだ。

闇の中で、影が走った。

それは人の姿となると、テントをもう一度確認していたアキラの背中に立つとパイプピストルを向けながら、金切り声に混じった言葉を叫んだ。

「それは俺の！それは俺の！俺のもの、誰にも渡さないっ」

アキラは驚き、ひっと声を上げつつ前につんのめるようにして倒れる。

武器を出し、応戦の準備をしなくてはならないとは考えるが。すぐにはそれができず、軽く両手を挙げて抵抗しない意思を表明しつつ、体も縮こまってしまう。

「俺のだっ。俺のものだっ！」

「わかった、わかったよ。見たただ、見に来ただけ触ってすらいない

——」

言いながら、ようやく冷静さを取り戻してきて自分のバッグの中にあるVaultから回収してきた冷凍銃、クライオレーターのことを思いだす。同時に最初にテントをのぞいた際、寝袋に落ちていた薬剤のことを見逃していた自分を呪った。

(こいつ、たぶん薬の中毒者だ。話しても意味がないかも——)

だが出来るのか？

ドクドクと激しく恐怖から波打つ心臓の音を聞きながら、アキラはまだ怯えている自分に問う。

すでに銃は向けられ、狙われているのに。ここからバッグの中の武器を取り出し、撃つまでに自分は生きていられるか？撃つても当たるのか？

とてもできない、本能がそう告げていた。

だが——。

「俺も、そいつの中身。スツゴク気になってるぜ」

闇の中から、男の声がすると。疲れた表情の男女5人の無法者達がいきなりあらわれたのである。

「俺と俺の友達ならそいつを見たって、別にいいよな？」

アキラは奇妙な話だが、ようやくのこと自覚していた。

ああ、自分はきつと本当に運が悪いやつに違いない。最悪の瞬間と思つたら、さらにもうひとつ最悪が姿を現してくるなんて——と。

遂に心臓の音があまりにも早くなりすぎて、集中力が無駄に高まり、視界が一気に狭まっていく。

このままサンクチュアリに、自分は戻れないかもしれない。

真つ青な顔でそんなことを考えていると。

アキラの体に衝撃が走り、腹部に2つの穴が開いていた。

青いスーツの下が燃えるような熱さと、じわじわと赤いものが染み出すのをただ見ていることしか出来なかった。

無法者——レイダーは容赦なく、さっさとこの場で一番弱いと判断したアキラにいきなり攻撃してきたのだ。

話し合いなどせず、暴力ですべてを終わらせるつもりだったのだ。

サンクチュアリの朝、今日も晴れるようで家の隙間から差し込む太陽の光が美しい。

寝起きのそうした素朴な感動も、徐々にはつきりしてくると違ったものになっていく。

アキラが消えて3日目、プレストンは憂鬱な気持ちでベットから立ち上がる。

己の不甲斐なさに、頼りなさにそろそろ嫌になるのをやめて。銃口を口にくわえることを真剣に考える時期が来たのかもしれない。本当にそう思えてきた。

人のよさそうなレオの本心につけ込むように、サンクチュアリから離れる理由を与えたものの。

彼のかわりに守ると誓った（それもよりによって彼の連れだ）少年を、安全なこの場所から飛び出させてしまう羽目になった。

ミニツツメンとしての修行が足りないのだ、と。わかつてはいるものの、努力だけでは到底足りない部分がある。こうして表面に出してしまうと、やっぱりキツイし、叩きのめされるといふものだ。

プレストンはこの3日、アキラを探そうと近くを歩いてみた。サンクチュアリから離れられないのだから、たいした成果があるわけもない。

こうなると、話は変わってくる。

プレストンはもうアキラを探すことを半ばあきらめかけていた。

あきらめることには、もう慣れていく。そうせねばともに戦うと誓った仲間や、守るべき人々を失い続けても、ここまで生き抜くことはできなかった。

レオはまだ帰ってきてはいないが、戻った彼にはちゃんと説明しないとイケないだろう。「とにかくあの少年は死んだ」、嘘はなく、正しく伝えねばならない――。

血相を変えたスタージェスが飛び込んできたのは、この瞬間だった。

彼の言葉をきくと、プレストンは凄いスピードで飛び出していく。現場を実際に自分の目で確認せずにはいられなかったのだ。

到着すると、お互いが肩で息をしながら、しかしそれでもスタージェスは歓喜の表情でそれを指差した。

「見ろよ、プレストン。言ったとおりだろ」

「ああ、信じられないよ」

太陽はきらきらと輝いていたが、それでもプレストンの目にもはつきりとそれはわかった。レオの自宅の中で、裸電球がこうこうとあの人口の光を放っている。

家の裏では機能までにはなかったはずの風力発電機がプロペラを静かに回して、稼動していた。

「これは、どうして? 誰が?」

「決まってるだろ? これを作りかけていたのはアキラだった。彼、ここに帰ってきているんだよ」

「なに!? 本当か?」

「俺がやってないんだぜ。他にこんなこと、誰がやれる? 手伝ってくれ、プレストン。もうマーシー達も、彼を探してる」

「なんだって? おい、スタージェス。まさか、そんなわけがないと言ってくれ」

明るい朝が、とたんにどこかに吹っ飛んでいった気がした。

プレストンの表情から歓喜の表情が消え、曇っていく。

「プレストン?」

「忘れたのか? 3日前、アキラはマーシーと口論になってここを飛び出したんだぞ。またあの2人が出会ったら、殺し合いをはじめるともしれない」

「まさか——」

プレストンはそれ以上、スタージェスを責めなかった。彼自身が同じ過ちを3日前にもしていたからだ。

だが、このスタージェスの気持ちも、言いたいこともわかる。

「子供相手に、大人がそんなことをするはずはない」

そうだ、そのはずだ。



だが相手はあのマーシーだ。彼を見て、あの今の彼女が、大人のほうからアキラに歩み寄る。その姿をプレストンはどうしても頭の中に思い描くことが出来ないのだ――。

|||||

真つ赤なバクテリアが、そこで息をしているような気がした。

早鐘のようにうち続ける心音が、傷口からの痛みをないものにしてくれている。

だが、その間にも眼前では修羅場が続いていた。

中毒男はアキラが撃たれて崩れ落ちると、罵り叫びつつ、パイプ銃を撃ちながら林に向かって走り出した。

レイダーたちは獲物を狩る喜びに沸き、走る獲物に向けて撃ち始めた。

僕はそれが終わるのをただ眺めるわけにはいかなかった。

仰向けにひっくり返った体にバッグをよせると、痛みと興奮で震える指でチャックをつまむ。

Vaultからは武器やデータだけではなく、残されていた医療品のステイムパックがあつた。それが今の僕にはそれが必要だ。

バッグのチャックを下ろすという5歳の子供でも出来そうなことを、パニックになるのを抑えて必死になっている僕は。この体に穴をあけられた痛みと冷や汗を流すのと同時に、周囲の状況にも注意を配ることを忘れてはいなかった。

叫んで走る男は、銃の腕がいいのか。

それとも摂取している薬物の持つ魔力か、木々の間に飛び込む前に3人のレイダーを倒していた。

だが、出来たのはそこまでだった。

いきなり足を絡ませ、前のめりに倒れこむと。太い木の幹に頭から突っ込み、ぐしゃりという嫌な音たててそのまま地面に寝っころがって動かなくなる。

木にはべつとりと血が塗りつけられており、わずかにだが骨らしき白い破片がそこに混じっている。

「くそ、3人やられた」

「フザケンナツ、2人だ。俺は生きてる」

「ああ?」

「い、痛えよ。腹に穴が開いちまつてるんだ。おい、助けて——」

「うるせえ」

いきなり残った片方が会話を打ち切ると苦しそうな仲間の胸にショットガンの銃口を押し付け、2発。

遠めにも、そこにおどろおどろしい真っ赤な花が開くのを見た。

「おい！なにやってるんだよ」

「あ?」

「そこにV a u l t e r やロウがいただろ。そいつが何か持つてるかも——」

「いや、使いたくないし。こんな、死んじまった奴に今更なア」

へらへらと軽薄そうに笑いながら散弾銃の弾丸を詰め替える男は、こちらを見て表情をこわばらせる。

ああ、いいぞ。

その顔が見たかったんだ。

僕は寝そべっていても安定しない構え方のまま、引き金を——。

衝撃がショックとなり、現実には強引に引き戻された。

そしてそんな僕をちようど見つけたと苛立たせる声が、戸口である。

「ああっ、あんた！こんなところに」

「……」

「ジュン、みんなを呼んできた。こいつ、こんなところにいたって」

あの夫婦だった。

しかし、相変わらず腹をむかつかせる態度だ。

僕は無視して、つついていた電子回路をつかって持って帰ってきた壊れたピップボーイを動かせないかという作業をやめることにする。

だが、相手はそんなこともわからなくせに。ズカズカと入ってくると、胸を張って偉そうに僕の背中に向けてわめき始めた。

「ここは緊急の倉庫なのよ。いったいここでなにをしてるの!」  
「作業ですよ」

冷静に返答する。

するとなぜか、ますます相手は興奮しだした。

「はあ?なにをいつてるのよ。それにあんた!この3日間、どこにいつていたの!?!心配したのよ」

「別に、出くわしたレイダーにちよつと撃たれたり。ゴミ拾いしてきただけです。ごめんね、”ママ”」  
「っ!?!」

マーシーの顔が真っ赤になる。

「誰があんたの母親よっ!本当に可愛げのないっ」

(なら出て行けよ、こっちは別に話はないのに)

「あんたがいない間。こっちは本当に大変だったんだから。それを放り出して、なにが——」

僕は鼻を鳴らし、笑った。たっぷりの侮蔑をこめて。

マーシーを嘲笑したのだが、相手はこの少年の面影を残す若者にそんなことをされ。うろたえる。

「な、なによ」

「Vauletsーツを着た餓鬼一人がいないだけで、なにが大変だった?あんたは集合住宅は要らないと言ったから、残る作業は発電機関係だけ。それも夕べのうちに”僕が”終わらせた」

「……だからなによ。だから、なんなのよ!そんなもので、こっちが褒めてやるとか期待してんじゃないわよ!」

「フンッ」

「それにね。やることなら他にもたくさんあるんだから。このサボった3日分、あんたにはちゃんと働いてもらうんだからねっ」

アキラの目に、危険な光が宿る。

「なんでそんなこと、するわけないでしょう?」

「そうはいかないわよ!あの勝手に飛び出していった奴から、あたし

「私たちはあんたの面倒を見るよう預かって——」

「今度は簡単にキレた。」

僕は無言で机の下から10ミリ拳銃を取り出すと、マーシーの立つ方角にむけて弾倉にはいつている12発すべてを撃ちつくす——。

頭を抱える、プレストンはその選択肢を選ばなかった。

「マーシー」と妻の名を叫んで現場まで飛んでいこうとする夫を抑え、自分が先頭に立って進む。

マーシーは生きていた。

しかし入り口で崩れ落ち、両手は頭を抱えてすすり泣いている。彼女に向かつてきた弾丸はすべて外れていた。これは狙ってやったことだ、わざと相手はずして撃った結果だとわかった。

そしてそんな彼女をぞんざいに足でどかして中から出てきたのが、アキラだった。プレストンはその姿を見て、ゾクリと背中をつめたいものが走るのを感じた。

例えるならばそれはミニッツメンとして嗅ぎなれた連中に感じる、わずかな匂いだった。

元々、東洋人らしい感情を抑え、年齢以上に老成していた青年は。たったひとつのその行動だけで、この3日の中で連邦の恐ろしい暴力をその体の中に吸い込んでしまったように感じられた。

妻の元に駆けつけながら、夫は「マーシーを責めないでくれ。妻は——」と、抗議の声を上げようとするが。アキラはその言葉にもなにかイラついたのか、足を止めると振り向いて毒々しい言葉をはき捨てる。

「なにが、妻だ。あんたはまだ、そいつと夫婦でいるつもりなのか？」

「な、なんだって？」

「聞いたからといってやってる。『今日は忙しいのよ、わかるでしょ』だ——  
——なあ、よかったら。町の川沿いを一緒に散歩とかしてみないか？

「——ごめんなさい。今日は、忙しいの。わかるでしょ、ジュン  
「な、なにを——」

「本当にわからないんだな。あんたの妻は、息子も守れない夫のあんたを捨てたいのさ！」

「っ!？」

「……」

「当然だろ？襲撃されて逃げ回る中でも、本当に息子の父親なら。例え自分の命を捨てたとしても、息子をなんとかしても守ったはず——」

「おい！アキラ、やめろ！」

毒を吐き散らすアキラをスタージェスとプレストンは慌てて押しとどめるとその場から引つ張っていく。

惨めな姿で残された夫婦は、互いに背を向け。お互いが、嘆きの海へと沈むのを必死に耐えていることしかできなかつた——。

「どういふつもりだ、アキラ」

広場まで引つ張ると、プレストンはそこで青年の胸を突き飛ばした。

相手は、あの素直だった若者は無表情で見つめ返してくる。自分のしたことを——マシーに銃を向け、ジユンの心を傷つけたこと——をまったく悪いとは考えていない目だった。

「あの夫婦に、お前がそんなことを——」

「プレストン、なんであんたはここにまだいるの？」

「おい、俺の話——」

「あんたもたいがい、うざい奴なんだなっ」

アキラは嫌悪の表情を作る。

「ひとつ、はつきりさせたい。僕は——俺は、別にあんたたちのことはどうも思っていない。」

俺にとって重要なのは、レオさんだけだ。あの人には恩がある。だからあの人があんたたちに力を貸したいというから、俺もあんたらに協力してきた。

だけでもう、うんざりだ！

あれをこれをしろ、要求しかしなくせに。

まわりつくあんた達は俺を子ども扱い。ちゃんと理由を説明し

ても、考えもなしに好き勝手な哀れな自分の主張だけ。なにかしてやっても、それが当然。わかってないよな、俺は別にあんたたちの仲間じゃない」

「アキラ、冷静になれ」

「俺は、俺は！冷静だ。だからたつた今から、ここを出る。出て行く」  
それだけを宣言したかったのだろう。

アキラは振り返ることなく力強く歩き出し、ブレストンとスタージエスは説得する言葉を失い、立ち尽くすしかなかった。あの若者を追いかけても、その意思を変えさせる言葉を彼らはもっていなかったのだ――。

|||||

サンクチュアリの入り口には、なぜか老婆が――ママ・マーフィがじつと立っていた。それはまるで、そこにいればアキラがくるということを知っているかのよう。

「あんたも行くんだらう。レオを、追うのかい？」

「……」

「そうだね、違うね。」

あんたは、あんたでやることがある。それをわたしも”視た”よ。

3日前だね、本当にひどい目にあっただね」

「…レオさんが言った。あんたには、わかるようだった」

「ああ、その通りさ。だからあんたの目指す方角もわかる。でも、それは簡単じゃないし。今よりもずっと苦しむことになる。あたしはそんな気がするんだよ。それでも行くのかい？」

アキラの顔に笑顔が戻ってきた。

だが、それは年に似合わず。やはりどこか諦めと幼さが同居する、言葉に出来ないものが浮かんでいる。

「僕は――いや、俺はVaultに戻って多くを知ってしまった。自分という存在は、絶対にあそこにいるはずがなかったことを。だけど、間違いなく居たんだよ。」

この謎は、解かないわけにはいかない。

覚えていることは真実なのか、消えた過去、自分が存在しないはずの Vault、そして――」

それを口にするのに、さすがに声が震えた。

「自分の未来――自分は、本当にこのまま生きていいのだろうか」という、それ」

「あんたもレオと同じように。全てを知り、全てに勝つことは難しいだろう。

でもね、あたしは思うのさ。あんたが生きている限り、それは決して負けてはいないんだってね」

ママ・マーフィはそういうと地面においてあったバッグを持ち上げた。

「必要だと思うものは入れておいたよ。持つて行つておくれ」

「ありがとう」

「あんたも、あの子と同じさ。それでも、またここに帰つておいで。この町は、あそこから出てきたあんたたちのための場所でもあるんだからね」

アキラはその声には答えないまま、老婆の手から荷物を受け取るとサンクチュアリの出口である橋を渡つていく。振り返ることはもうなかった。

彼は遂にママ・マーフィに聞くことが出来なかった。

彼女は口にした、自分もみたのだと。3日前の、あれを。

（それは、どっちの側からだったのかな？こっち側？それともあっち側？）

興味はあった。だが、彼はそのことをもう彼女に聞くことはないだろう。

|||||

闇の中から飛んでくる7発の弾丸が、きれいに頭を、胸を、そして

腕を貫くのを感じた。

視界は動くことなく、というよりも視線を、目玉を動かす力も一瞬で体の中から消え去ってしまった。

致命傷――。

そう、それは医師であれば間違いなくそう断じる。破壊された肉体への正しい評価のはずだった。だが、その心臓だけが。諦め悪くドクドクと早鐘をまだ打ち鳴らしている――。

「なんだ、こりゃ？死んでるのか、死んでるよな。そうだよな？」

最後に残されたレイダーはもう一人を前に、素っ頓狂な声をあげていた。

生意気にも、腹に穴を開けていたVault居住者らしいそいつは、なんだか変な武器を取り出し構えていたが。素人だったようで、わずかにあったチャンスを生かせないまま。それでも一人は倒し、引きかえに蜂の巣になって動かなくなった。

その攻撃された片方だが、なんと生きてまま凍っている。

仲間だった男は、そんな冷凍人間の手に握られたリボルバー銃に目をやった。死人にはもつたいたい武器だ、前から密かにうらやましく思い、自分もほしいと思っていたし。ここに残していくつもりはなかった。

「形見つてことな。これからは俺が使つて――なんか、本気で凍っているな。力任せにしたら、こわれっちゃうかな、銃が」

冷たい、冷たいと繰り返しながら、動かないその手に握られたものに執着し続けている。自分以外は死体になったという安堵が、彼の注意を低下させていたことは間違いない。

手をこすりこすり、息を吹きかけ、まだあきらめ切れない男の背後に不審な影が立つても、彼はまだその存在に気がつかない。

それに意識があるのか、それはわからない。

だが、ただ直立しているだけであっても、生物としてあるべき、正しい生命の息吹のようなものが。その姿からは感じる事ができない



いのだ。

そしてそれが決して勘違いではないという証明なのだろうか。顔に、掌に、徐々に不気味な緑の光源が皮膚の上に浮かんでくる。

「ちゃんと俺が使ってやるからよ。ちゃんと——あ？」

凍結した仲間の武器に執着していたレイダーは、ようやく自身の背後に立つ不気味な存在に気がつく。

枯れ木のごとく、ユラユラと左右に振り子となる体。防弾効果のないジャンプスーツにあげられた穴は、余裕でそれが致命傷であると主張し。わずかに露出する顔と手の皮膚には闇の中でも、まだらになつた緑の光がはつきりと輝いている。

「フェ、フェラル!?そんなどこにっ」

レイダーの心臓が飛び上がり、氷の彫刻となつた仲間の上に尻餅をつく。下になつたその腕が、ぽつきりと音を立てて折れるが気にはしない。

あわてて自分の銃を取り出し、無我夢中で引き金を引いた。

新しい穴をさらに2つ作ってやると、そいつは無言のまま次の瞬間にはレイダーの上におおいかぶさつてくると、右肩の肉が削り取られる激痛を感じた。

そいつはグールではなかった。

彼らの特徴でもあるボロボロの皮膚ではなく、まっさらなすべすべの肌のまま。だが、それ以外のすべての反応はフェラルそのものだった。

「て、てめえ。なんなんだよ——」

相手の攻撃で自分の体が引き裂かれつつあることを、弱っていく体で必死に抵抗を見せながらレイダーはこの理不尽な状況についていけない自分を嘆いた。戦前のVaultではなにかしらの実験がおこなわれているというのは、有名な話だ。

この辺にVaultがあるとは聞いたことはなかったが。そこではこんな化け物を作り出し、地上に這い出てきたとしても何の不思議もない。

レイダーはせっかく一人だけ生き残つたのに、こんな最後を迎えよ

うとしている運のない自分を呪った。

だが、それを嘆く声を上げる余力も余裕もなかったから、激しい息遣いと悲鳴だけ残して、無慈悲にも大きく開かれた口で頭をかじられ、食われてしまった。

アキラが目を覚ますと、もう太陽はずいぶんとたかいところにあつて。そして自分はペンキを頭からかぶったかのように、Vaultジャンプスーツは獣の血で真っ赤に汚れていた。

何が起こったのかをすぐには理解できなかったが。体は正直に反応し、飛び起きると鉄塔から下った先にある湖まで走り続け、何も考えないで汚染された小川の中に体を投げ出し、沈めていた。

水の中は透明で、汚れた自分からそれを洗い流してくれるかもしれないと希望を持てた。

だが、そんなことはなかった。

湖の岸へともどりながら、記憶に残っていた夕べの痛みを思い出し。服に手をやる。

そこにはしっかりと穴が開いていて、その下には記憶にはない直りかけた傷跡が残されていた――。

涙はなかったが、代わりにうめき声を上げる。

僕の謎は、ついにあのVaultだけには留まらずに、この肉体にまで広がってしまった。

## 支援要請（LEO）

ピップボーイから繰り返し発信されている救難信号は、同時にそこにいる生存者たちの絶望の声でもある。

元軍人の悲しさか、こう考えてしまうと自分がこれから行う行動も正しいと信じきれぬものが出てしまう。

ケンブリッジの地図は覚えていないが、旧世界の警察署ということならばある程度位置の目処はつくことができた。

ここにくるまで噂に聞いたように、やはり町の中にはフェラルとかいうグールたちがゾンビのごとく徘徊していることがわかっていたので、警察署へは町の外から裏道を通ることで、直接近づくことにした。

「それが安全なんでしょうか？」

「近づいて、もし全滅していても。こちらはそのまま撤退できるからな」

「撤退をされるのです？」

「状況が不明だ、コズワース。なにより助けを求めている人が、本物かわからないし。なにがあったのかと近づいて、逆にむこうに襲撃者だと間違われて刺激したくない」

「なるほど。つまり、騒ぎがないなら。危険は冒さないといいことですね」

「そうだ。気に入らないか？」

「いえ、消極的ではありませんが。旦那様のお体の安全が第一ですから、問題ないと思います」

「ありがとう、コズワース」

そう言いながらショットガンに2発の弾を込め、パイプライフルのドラムマガジンを確認しておく。

いよいよケンブリッジに突入する。

私の計画では、警察署を目指して慎重に進むことを考えていたが。現実には裏切って、私とコズワースは足早に進入する羽目になった。

明らかにこの近くで、何者かが戦っている。小さかったそれは戦闘音だとわかると、まだそこで生きている人がいるとわかって、急がねばならなかった。

「旦那様、旦那様。お待ちください、私が先頭に——」  
「……」

軍にいたときでさえ、私は相棒を従えて先頭に立っていた。引退したとしてもそれがかわることはない。

レーザーの発射音とグルルらしきうなり声、そして「下がれ、下がれ」という声を聞いて私は躊躇することなくそこへと飛び込んでいった。

ケンブリッジ警察署の前はまぎれもない戦場であった。

パワーアーマーを装備した兵士がフロントマンをしているようだが。それを援護すべき側面を守る兵士たちがいない。振り返ると、建物の正面入り口わきに負傷者を抱えて必死に抵抗している1人がいるだけだとわかった。

(なんてことだ)

これでは前線を維持できない。

いくらパワーアーマーを着ているとはいえ、次々と走ってくるグールの波に飲み込まれてしまえばそれで終わりだと思った。

「ゴズワース、彼の右につけ。こちらの背後に回ろうとする敵は攻撃しろ」

「わかりました」

「俺は左後方につく。フロントマン、そのまま踏ん張ってくれ」

「——なに？ いや、了解した」

パワーアーマーは前方を見たまま返事を返してきたが、私はそれを待つてはいなかった。

玄関前の段差をのぼり、負傷者たちの前にたつと町の奥へと視線を動かす。

「左から8、右から5！ 5秒でくるぞっ」

言いながらパイプライフルを構え、遠くから迫る敵の足を止めようと私は勢いよく引き金を引いた。

40分にもわたる激戦で、私は手持ちの弾丸の多くを使ってしまったが。警察署の前はグール達の屍で足の踏み場もなくなっていた。

押し寄せる波が止まり、3分ほど待っても新しいグールの姿が現れなかったことで、ようやくこの戦闘は終わったのだと肩の荷を降ろすことができた。

だが、困った話で次に待っていたのは、助けた相手からの感謝の言葉ではなかった。

「お前は何者だ。所属とどこにいる理由を、話してもらおう」

そのあまりにも軍隊らしい反応に、驚きとあきれを感じながら。しかし私は心のどこかで、確かに喜びのようなものも感じていた。

パラデイン・ダンス。

彼こそ、この連邦で私が出会った2人目の友人であり。私にも深くかかる、ブラザーフッド・オブ・ステイブル O・Sのパラデインの称号を持つ男である。

だがこのときの彼は、まだ自分達の危機に横合いから現れ。いきなり指揮権を奪った男に対して、深い疑念を抱いているのは明らかだった。

「あんた達の無線を聞いた。助けが要るんじゃないのか？」

気持ちは理解できたが、それでも感謝の言葉がないのは不満どころかも文句が口から飛び出す。

「手助けには感謝しよう。だが、ここで何をしていた」

「そつちこそ何者だ？」

「答えることにやぶさかではないが、まずこちらの質問に答えてもらいたい」

「——この場所で、生きるために必要なことをしている。それだけだ」  
「本当か？戦闘中の我々の中に入りこんできて、私を指揮して見せた。それにグール共へのあの戦い方、ただのゴミ漁りとは思えないが」

「こつちは答えた。そちらが納得しなかったとしても。今度はこつちに答えてもらえるのかな？」

「もちろんだ——私はダンス。キャピタル・ウェイストランドのB.O.Sから派遣された偵察部隊を率いている」

「なるほど」

私には彼が言っている意味が、さっぱりわからなかった。

「お前はこのあたりの住人なのか？」

「いや、違う。見てわからないか？ Vault 111から来た」

「Vault居住者か、なるほど——理解してもらえないかもしれないが、こういう会話を普通の人は不快に思うものだ。だが、それでも正直に答えてくれて感謝する」

「いや、気にしていないさ」

気持ちは痛いほどわかった。

軍隊では殺すこと、命令に従うことを徹底して教え込まれる。そうなるかどうかでも、任務先での態度にいつも不信感をあらわにしていまい。現地の住人達の反感を買ってしまう。

ダンスも同じようで、続けて自分達の困難な任務についてかなりのことを説明し始めた。

この連邦へ、送り込まれた彼ら偵察隊だが。

厳しい状況が続く、次第に仲間が倒れ。ついにこの場所に押し込まれてしまったのだという。

私は質問せずにはいられなかった。

「なぜ、この場所を活動拠点に選んだ？」

「旧世界で警察として使われた場所ならば、我々が活用できるものがある。そろっていると思っただけだからだ。つまり——」

「武器や、装備か。なるほど」

「そうだ」

「だが、私が聞いた話では。ここの一帯はグールが大勢なだれ込んできているそうだ。その割には——この防衛施設は、十分とはいえないように見える」

「……グール程度ならば、我々にはパワーアーマーがある。そんな問題など、たいしたことではない」

「救援信号を送っているの？」

「ああ——その、本当はその情報を知らなかった。それは認める。だが本部の意向もあって、地元の住人とは任務の性質から接触をしないようにしていたのでな。そうか、ここはグール共の餌場になっていたのか」

「しばらくは大丈夫だろうが、この周辺にもまた奴らは戻ってくるはずだ」

「わかった。それについては考える」

「そうしたほうがいい」

長く話したせいだろう。太陽が西に沈もうとしている。

彼らは危機的状況を乗り越えたようだし、自分はこのから離れるべきではないか。そう思っていた。

「立ち去るつもりか？」

「戦闘は終わった。そうだな、そのつもりだ」

「こちらは礼をまだしていない。その、どうだろう。このまま引き続き我々に、お前の力を貸してはくれないだろうか？」

私は即答を避けた。

後ろに控えるコズワースに視線を送るが、このロボットは黙っている。私の考えに従うといっているのだろう。

弾丸をかなり消費したので、礼とやらは是非欲しかったが。だからといって困難なミッションをまた抱え込むようなことはしたくなかった。

そこで——。

「協力がいるなら、雇用契約をはつきりしてくれ」

「フン、まるで傭兵のようなことを言うんだな」

「傭兵じゃないとは、言っていない」

「いいだろう、こうしよう。中に入って我々の会話に参加して欲しい。そこで先ほどの礼と、お前のすべき任務を与える。任務が終われば、さらに仕事に見合った報酬を出す」

「わかった」

私はこのダンスという男を信じることにした。

彼のような男は昔にも大勢いた。私の周囲の大半は、こんな男ばかり

りで、皆が頼もしい仲間だった。

それにアキラのようにこの場所を最適な空間に変えることなど、私にはできないが。彼らの困っている状況ならば手を貸せると感じていた。

警察署に入ると、怪我人を見ていたヘイレンという女性兵士が近づいてきた。視線で「これは？」と後ろに続く私達を見たので、ダンスが説明する。

「彼に次の任務を手伝ってもらおう。その前に、屋上のアレをいいか？」  
「アレ、ですか？」

「そうだ——試してみたい」

何のことかはわからなかったが、彼らに続いて屋上に向かう階段までついていく。同時に、ダンスは現在の状況について説明を始めた。「連邦の任務において、我々の部隊は大きな被害を受けた。物資は不足し、隊員も半分を失ってしまった。だが、まだ失敗したというわけではない。」

今は、なんとかしてキャピタルの本隊に救難コールを送ろうと考えている。以前にも一度、試したが失敗した」  
すると隣にいるヘイレンがそれに続ける。

「原因はこの屋上にあるラジオ塔なの。修理はしたけれど、電波が弱くてそれで失敗した。」

でも、それは電波が強ければ十分に成功する可能性が高いということ。その方法を、私達はようやく見つけることができたの」

「ヘイレンはスクライブだ。彼女はこの連邦に現存する技術資料について、沢山の記録を記憶していた。今回もそれが役に立った」

「あなたにやってもらいたいことは、ダンスと共にアークジェット・システムにある送信機をとってきて欲しいの」

「ダンスと？君達はこのこるのか。怪我人だけで、一人で大丈夫か？」

「ナイト・キースのこと？それなら心配ない。ステイムを使ったけれど、数時間も寝れば彼は回復する。頑丈な人だから」

「問題は我々なのだ。場所的にスカベンジャー共があさっていないと



は限らないし、そこまで行くにしても安全とは限らない。時間をかける余裕もない」

そういうとダンスは屋上の扉を開けた。

「そこで先ほどの話に戻る。お前には我々の救難信号を聞いて駆けつけた札をまずしたい。これを受け取って欲しい、使えるか？」

「これは——」

そこに仁王立ちするものを見て、私は声を上げる。それは以前にもコンコードで見てサンクチュアリへと回収した、あのT-45パワーアーマーだった。

装甲の表面に施されているものが剥がれ落ちてしまっただけはいるが、間違いなくパワーアーマーのフル装備一式がそこにあった。

「いいのか？これをもらって。すべて揃っているようだ」

「君がこれを使いこなせるというなら、な」

「大丈夫だ」

私はそう言いながら、傍らにあった作業台の上に置かれていたフュージョン・コアを手にとると、アーマーの背後に押し込んだ。

「すべてが完璧に整備されているようだ。新品だな」

「ただし200年前の新品だ。任務中、こいつを見つけたのだが。私の部隊では、誰も使いたがらなかった」

「本当に？なぜだ、戦闘で役に立つのに」

「わからないか？」

どうも先ほどからダンスに試されているような気がしたが。投げかけられた質問の答えを探してみた。なるほど、すぐにその理由がわかってしまった。

「そうか。あんたのそのパワーアーマー。気が付かなかったが、T-45じゃなかったのか」

「そうだ、我々B.O.SではT-45の後継機となるT-60を使っている。性能が違いすぎるからな、正直ないほうがマシだと、ナイトたちは使いたがらなかった」

私は内心、苦笑していた。

この壊れた未来にあつて、そんな贅沢がまだ許されるとはお笑いだ

と思った。

アンカレッツジで周囲を敵に囲まれる経験を見ると、性能だけで道具のすべてをどうこう言う気にはなれないものだ。勢いよく飛び乗って、起動をさせる私を見て背後の2人が喜んでいた。

「どうやら口先だけではなかったらしい」

「そのようです」

「——厳しい任務のようだが、こいつがあれば何とかかなりそうだ。ありがとう」

「どういたしまして。」

それでは、引き続き。夜のアークジェット・システムへ送信機を回収する任務を開始したいと思うが。かまわないかな？」

「ああ、行こう。ダンス」

私はフランク・J・パターソン Jr.

あの難攻不落といわれたアンカレッツジを、私と私の部隊が叩き潰した。

ただの送信機をひとつ回収するだけならば、何の苦労もなく終わらせて見せるさ。

|||||

夜が終わる。

太陽が東の空から上がってくる。

私とパラディン・ダンス、そしてコズワースは疲れた表情でアークジェット・システムの裏にある貯蔵庫から無事に連邦へと脱出した。

コズワースもそうだが、私とダンスのアーマーも。だいぶ傷ついており、回収任務は成功したもののそれが簡単なものではなかったことをしめしていた。

それでも——。

「終わったな」

私が口にする、ダンスは苦笑いを浮かべて応じてきた。

「もつとすんなりいくはずだったんだが——」

「任務は成功した。それだけでは駄目なのか？」

「どうかな。きつちりと命令に従う市民と共に働くという意味なら、我々はいいいチームだったかもしれないな。気分転換にもなったし」

夜の連邦もひどく危険な散歩であったが、アークジェット内はさらに難しいものとなっていた。

連邦の住人達を恐怖させているという、人造人間とよばれる存在が先に来ている。こちらは彼らを背後から襲う形で戦闘する羽目になつたのだ。

それでも相手は手ごわい戦闘兵器で、こちらがパワーアーマーを持ち出していなければ一晩でその全てをスクラップにして終わらせるなんてことは不可能であつたと思う。

私は肩の力を抜こうと、軽口をたたいた。

「隊長さんは完ペキ主義者か。結果主義者のわたしとはどうしても合わないらしい」

「まあ、冗談はここまでにしよう。まず送信機を私に。その後で、この任務における君の助力に報いよう」

「わかった」

私は背後のコズワースに合図し、目的のデュープレンジ送信機を彼に渡す。

今度は向こうの番であつた。

「ありがとう。それでは、お互いに議論すべき重要事項について意見を交わしつつ。まずはこれを受け取って欲しい」

そういうとダンスは自分の手にしたレーザーライフルを私に差し出してきた。

「B・O・Sで使われているレーザー兵器だ。それは私が手を加えた一丁だ。是非、受け取ってもらいたい」

譲られたレーザーライフルを私は早速構えてみる。

実は私はこういうレーザー兵器の類はあまり好きではない。

撃てるだけでいいなら、極端な話。この武器はリモコン程度の大きさと重さでも十分な威力を発揮する。それが私にはいけない、レ

ザー兵器はどうしたって軽すぎる。父や祖父から、狩りで火薬を用いた銃を学んだ自分としては、重さが必要のないこの系統には触れたいなどと考えたことはなかった。

だが、時代はもう変わってしまった。

苦手でした、では済ませられない日常に自分は生きているのだ。

「ありがとう。頂くよ」

「どういたしまして、市民よ」

そういうとダンスは改まり

「さて、ここでひとつ提案がある。これまで山のようにいろいろなことがあったが、そのたびに君がしてきたこと、できることを私は観察してきた。

任務は何度も危険にさらされたが、平常心を見事に保ち。その姿はまさに兵士のようなふうだったと思っている。

資質があることは間違いない。

そこで君をスカウトしたいと考えるにいたった。我々の仲間には、B・O・Sに入り、これからの人生を真に生きた証を立てることに費やしてはみないか？」

「私を？」

「そうだ。どう思う？」

私はしばし、沈黙した。

全てが過去へと消え、サンクチュアリにいる中毒者の見たという未来にだけ、息子のショーンはまだ生きているのだと告げられ。

それにしがみついている、今の自分。

同時に、この連邦で私を助けてくれそうな組織はないと思っていた。

愛国心と忠誠に値しない、そんな軍に失望した私に。この時代でも精強な軍が、私の実力を認めて手を伸ばそうとしていると思うと、なにやら胸にこみ上げてくるものがあった。

だが――。

「わからない。すぐには決断できない、これは重要なことだ」

「そうだ。これは簡単なことではない。」

だが、そうだな。いきなり申し出たことに、イエスと答えろと迫るのは対等な扱いとはいえないだろう」

「すまない」

「いいき。私はこれから戻って、本隊と連絡を取る。次の命令がどうなるかはわからないが、君の考えがまとまったらあの場所に来てほしい。この申し出の猶予期間は、私の部隊があそこを引き払うまで有効としたい」

「わかった。本当にすまない、よい返事ができなくて」

「構わんさ。だが、このことはまじめに考えて欲しい。私はこれでも本気で言っている」

帰りはケンブリッジのそばまでは共に行動したが。そこでダンスとは別れた。

ボストンに入った私は、そこからさらに南下するとチャールズ川を渡り、ついにグリーンジュエルに到着することになる。

サンクチュアリを出て、もうすぐ2週間。

私はようやく、最初の目的地へと迫ろうとしていた。

## 南へ!! (Akira)

地面にしりもちをつくように座って動けない化け物がいる。

僕は——彼が身につけた、いかにもなレイダーアーマーの下にある。鳥の頭を模したそれに手を伸ばして剥ぎ取ると、その下からは髭もじやの顔が現れ。ううと唸っては、口の端から唾液と混ざった血をあふれ出させた。

もはや助からないだろうと、それを見て理由はないがわかった気になった。

意外なことに男は、僕に饒舌になにかを語り始めた。命乞いでも、ののしり声でもなく。彼自身の物語を。

——俺はな、キャピタル・ウエイストランド生まれで。育ったのも、そこだった。

それが出だしの合図であった。

——俺はな、そこでは“あんた”のような奴等を毎日見てきた。

俺も、俺自身もそこに混ざったことだってある。手軽に手に入る食うものなんて、死人くらいだった。それも腐りかけのな。

ウエイストランドはどこも地獄だ。そして、俺はそんな中でも一番の最悪な場所に。“PIT”で育ったんだ。

今じゃ想像もつかないが、あの頃の“PIT”は。本当にひどいもんで、言葉で言い表せないほどの場所だった。

僕はただ、「ふーん」とだけ相槌を打つ。

——本当なんだぜ？あれは……そうだった、あれは確かそう。アツシャーだ。そいつがそこにあるすべてを支配していた。

疫病も、暴力も、あいつは希望ってやつだけを見せて、自分のものにした。

奴がみんなの前に出てきて、何かを言えば誰もが黙ってそれに従った。奴はいつかは悪夢は終わるとは言ったが、それが何時とは決して口にしなかった。

だから、ああ。きっとあそこにいた奴は誰も、本当にそんなときが

くるとは思っていなかったよ。俺も、含めてな。

僕は興味が出て質問した「だから逃げたのか？」と。

彼は驚いたことに首を横にふった。

——嵐が来たんだよ。本当さ、そうとしか言えない。ある日、いきなり空気が変わったんだ。それが何かもわからぬうちにバタバタと人がさらに多くが死んでいって。俺はなにかからひたすら逃げ回って。

——そうしたら終わっちまった。“PIT”は綺麗さっぱり消えちまったんだ。

アツシヤーも消えて、レイダーも消えた。残された皆が、呆然としていた。

——我に返ったら俺は、俺たちはブルっちまったんだよ。これはあのB・O・Sが乗り込んでくる予兆に違いないって。レイダーすら消えちまった“PIT”を、あいつらが見逃すはずがないってよ。だから、俺はこの連邦に来た。

僕は再び「ふーん」と口にした。ここは天国だったかい、とも。

——ああ、連邦はいい場所だ。人を食わなくてもいい。銃で脅せば、キャピタルじゃ手に入らないようなまともなものが食える。俺はそれがうれしい。だから、だから……チクシヨウ、なんでこんなことに。

愛らしさの皆無なそいつの目に、涙がたまるのを見て。

傷だらけで赤い血が流れ、ついでに緑色の光を放つ僕の腕を伸ばしてふき取ってやろうとしたが。僕の指の背が、相手に触れただけでそいつの目玉がポロリと零れ落ちてしまい。男はたまらず悲鳴を上げる。

だが、すぐにそれを押し隠そうとして物語の続きを口にする。それで必死になにかを主張しようとしている。

——俺はよ、俺はそんなだから。俺はあんたのような奴。まったく怖いとは思わないぜ。

なにかもう、飽きてきた。

干からびた自分の唇が、水分を欲している。体中の傷口が、それを

癒す必要があるのだとエネルギーを激しく欲している。

僕のこの体は、ステイムパックを過度に投与が必要な状態には長く耐えられない。

薬も必要ではあるものの、本能がそれを大きく上回ってしまう。もつと上手く——敵を殺せるようにならないといけないのだ。

だが、今はそんな反省会は必要ない。

「なんでもいいよ。俺——あんたがひどく旨そうに見える」

歓喜と共に、口をあけると、歯をむき出して迫っていく——。

こうすればわずかに震える自分という存在への無限の恐怖など、この瞬間からしばらくは永遠に感じることはできなくするのだ。

|| || || || || || || || || ||

サンクチュアリを出て、コンコードで一泊。

僕は、十字路を前にしてはたと足を止めた。

(あー、どうしようか?)

考えてみたらどこに行くか、決めていなかった。

予定話を元に、ここまではレオさんをなぞってきってしまったが。考えてみたら自分はあるの人を追っかけるつもりなどないことに改めて思い至る。

(西を行けば、ただ帰るだけ。北で旧バーモントまで越境し、東がレオさん。残るは南か)

迷うことなく今度こそ南を選んだ。

街道沿いは、なにせ襲撃するほうにとってはいよいよ的にもなるので。のびている道の方向を確認しつつ、土の上を歩くようにした。

事件が起こったのはその日の夕方。

太陽がそろそろ地平線に着地する準備でもしている、そんな時だった。

その時、こっちは右前方にそれはそれは見事なごみの山を眺めながら。急な坂を下りにいる真っ最中であつた。



人の怒号と共に、変な声や複数の犬のほえ声が聞こえてきたのである。

足を止めることはなかった。逆に走り出すと、レイダーから手に入れたパイプで作られたリボルバーを取り出していた。

想像通り、そこは戦闘があつたわけだが。それにしたってゴミ捨て場とあって、ひどいにおいの中に飛び込むのは勇気が必要で、一度足を止めてしまったのはびびっていたからではない。

どうやら人と大勢の犬たちに、ここで隠れていたモールラッドと呼ばれている奴等が次々と出てきては襲い掛かっているらしい。

ここでの戦いは、コンコードで寝込みを襲ってきたレイダーたちのそれとは違つて最悪だった。

理由は簡単で、弾を消費しなくなってレイダーの武器を使つてみたのだが。これが本当にどうしようもなく使いにくかつたのである。

気がついたら、弾込めの時間がもつたいなくて。装着していた銃剣をつかつて走りながら振り回していた。

そのせいだと思うが、組み合わされたパイプのリボルバー部分がポロリと地面に落ちてしまった。

「ありがとう、僕も僕の子供たちも。君のおかげでたすかつたよ」  
死んでもやはりその匂いが変わらぬ、モールラッドたちの中で。犬

の飼い主らしい男はそういうと満面の笑みを浮かべた。

「ああ、まあね」

「本当に——その、壊れてしまったんだね。そこまでしてくれて、感謝している」

見事に全壊してしまったパイプ・リボルバーピストルを持って立ち尽くすアキラだったが。決してこの連中を恨まないようにはしようと思うも、やはりどうしても視線には非難の色がチラチラと見え隠れしてしまう。

男はアキラに自分をジーンだと名乗った。

「この大勢の犬、あんたの？」

「ああ、僕はこの子らを訓練して。売ることでも生計を立てているんだ」

「………相手は？」

「ああ、そうだね。その——色々だよ、居住地の住人とか。旅人とかね」

「無法者も？」

「——生きるためなんだよ。他に、僕が得意なことがないんだ」

「わかった。そうだね」

兵士のように戦えず、若いからと下に見られ。

せいぜい使い勝手のいいロボットのよう扱いを受けていたちよつと前の自分のことを思い出し、アキラは自分が何も言えない立場なのだ和理解した。

「そうだ！それで思い出したんだよ。その銃の代わりになるかわからないが、これをもらってくれないかな？」

そういうと、荷物の中をゴソゴソとかき回して何かを取り出してきた。

「これは？」

「パイプレンチだよ。なんでも、生意気にも“ビッグ・ジム”とかいう名前があるらしい。仕事にも使えるけど、武器としても優れモノなんだそうだ」

「へえ、武器か」

「どうだろう、これを礼としてもらってほしい」

「いいの？それ、大事なんじゃない？」

そう言うと言いは苦笑いしつつ答える。

「全然。これは……レイダーが犬の代金だって足りない分に押し付けられた物なんだ。僕は機械をなおしたりもできないから、持っていてもしようがないし。あいつらを思い出すから、自分では使いたくなくなつたんだよ」

「だから俺に？ゴミ代わりについてこと？」

「いや、そんなやつ。そんな意味じゃ——」

「冗談——ありがとう」

手に取ると、すつきりと収まる感じがして。確かにこれは素晴らしい道具のような気がする。

「君は、これからどこへ？」

「南。それしか決めてないんだ」

「南か……グリーンジュエルに？それとも、バンカーヒル？」

「聴きなれない言葉がそこにあった。」

「バンカーヒルって？」

「商人が集まる場所さ。ただ、南に行くにしてもこのままレキシントンに入るのは薦めないね。あそこは今、ひどい場所になっている。近づくのも危険だ」

「——バンカーヒルには、どうやって？」

「ああ、それならいい方法があるよ」

「ジーンはそう言うよ、東に延びる道路を指さした。」

「数時間前だけど、バンカーヒルに向かう旅人達に会った。今日はおうそこで野営するともいつていた。言葉通りなら、ここを3時間ほど歩けば彼らに会えるはず。」

「事情を話せば、きっと快く君を仲間を迎え入れてくれると思うよ」

「もうすぐ夜になるんだけど——」

「確かに。でも、この辺は東回りに移動するスーパーミュータントをのぞけば、商人や旅人くらいしか使わない道だ。僕は夜でも、道なりならば安全に進めると思うけどね」

「——ジーンは犬を売っているんだよね？ぼ……俺にも一頭ゆずってくれないか？」

「ジーンは申し出には首を横に振った。」

「悪いけど、できない。この子らはまだトレーニングが終わっていないんだ。ここから東の海岸線につくころまでには12頭、みんな終わらせようと考えているけどね。今はまだ、駄目なんだ」

「そうか——」

「申し訳ないね」

「いや、いいんだ。ああ、それと急がなくてもいいけど。そのうちサンクチュアリにも来てくれないかな？」

「え、サンク——聞いたことがないな」

「サンクチュアリだ。もう少しすると、たぶん話題になるはずさ」

今日の目的地が先に延びたこともあり、アキラは話を切り上げると

ジーンと握手を交わしてから穏やかに別れた。

それからの数時間を、月と星の光だけを頼りに道の上を歩き続けたが。彼の言葉は正しかったようで、何の危険にも出会うことはなかった。

だが、まさか危険は道の終わりに待ち構えているとは思わなかった。

満天の星空の下、静かな中に誰かの怒号が聞こえたような気がしたのが、全てのはじまりであった。

(またかよ……助けてくれ、とかいわれても今回は逃げようかなあ)  
不謹慎なことをアキラは考えながら、それでも駆け足で近づいていくと。どうやらそこでレイダーなどに襲われているわけではなさそうだとわかった。

「……だぞっ。この……っ！」

焚き火を前にして、旅人に他の2人が銃を向けている。

正直、自分が仲裁などということをやれる気はまったくなかったが。あの旅人達自体に用があるこの身の上としては、ここで無視をするわけにもいかなかった。

「えー、コンバンハ」

「だっ、誰だよ!？」

「ただの通りがかりでして——なんか、揉めてるみたいだから」

「はあっ!?なに、寝ぼけたことを言ってる。このガキッ」

「まあまあ、落ち着いてください。冷静に考えて、遠くから騒ぎが聞こえて。近づいたら、2人が1人を相手に脅しかけている。どうみたくて、これは——」

「クソッ、クソッ」

「喧嘩ですか?それとも、盗まれた?なんにしても、こんな静かな場所で銃を使うのは——」

「違うよ、ドアホウ!この野郎が、このすつとぼけている奴が、人造人間なんだ!」

「……はい？」

「だから、こいつが人造人間なんだよ。クソツたれのインステイチュートの手先だ！」

「すいません。それ、何ですか？」

馬鹿、と呼ばれることに抵抗がないわけではなかったが。命のやり取りがなされるほどのことだとはまったくわからなかったので、僕は真顔で素直に事情の更なる説明を求めた。

相手は最初、信じられないという顔をしていたが。

すぐに自分の正しさを証明するのだと考えたのだろう。インステイチュートの、人造人間の脅威について語ってくれた。

連邦の脅威——。

近年のそれは、インステイチュートであり。彼らが連邦に送り込んできると、この人造人間という存在が問題なのだそう。

巷では人が消えると彼らインステイチュートの仕業だとする都市伝説もあるらしいが。この人造人間はそれを証明するかのように、連邦の人々の姿をして本人の前に現れると。相手を殺害し、本人に成り代わって何食わぬ顔をして生活するのだそう。

そしてある日、なにかがおかしくなると。周囲の人々を襲い始め、死体が出てようやくそいつが人造人間であったのだと理解できるのだという。

インステイチュートの生み出すという人造人間とは、外見はそれほど生身の人間と変わらないらしい。

僕はようやくこのおかしな状況について理解できた。

「つまり……彼が、人造人間？」

「そうだ！ さっきからそう言ってる。こいつ、今まではずっと一緒に行動してきた。バンカーヒルまで、あと2日もないってところで。いきなり白状しやがったんだ！」

「悪かったよ。別に、危害を加えようとか言うんじゃない。これまでには上手くやっていたから——」

「うるさい！ まさか一緒に旅する相手が人造人間だなんてどうしてわ

かるってんだ！それに、いつ寝首をかかれるか——」

「そんなことはしないよ！僕たちは同じ旅の仲間だったじゃないか」

「黙れ、ダメレッツ！」

状況は切羽詰っているのは明らかだった。

同時に僕は少しだけだが、興奮も覚えていた。人造人間、連邦の脅威、もしかしてそれはこの僕自身の肉体にも関係があるのではないだろうか？そう思ったからだ。

「事情は理解した。でも、そうするところは思わないかな？」

「ああっ、なんだよ!？」

「彼が人造人間で。もし、送り込んできたインスティチュートであるなら。彼を殺せば、インスティチュートの恨みを買うんじゃないのかな？」

だって、人造人間は連邦の誰かとすり替わるためにいるんだろう？ということとは、彼もそうだとということさ。つまりなんらかの使命をおびて——」

「違う！送り込まれたんじゃないよ、僕はあそこから逃げてきたんだ！」

なんで横から余計なことを言うのかな？

「ハハ、まさかそんな言葉を信じるの？恐ろしい人造人間なのにな？」

「——うう」

「僕は他所から来たばかりだけど、思うんだ。これは触れないほうがいいって。人造人間とやらには消えてもらって、お互いなかったことにすれば——」

「忘れろだって？冗談だろう!？」

言葉は短かったが、それが答えだと最悪の事態がきた事をその返事からすぐにも理解した。

一步前に踏み出してから、人造人間の頭を吹き飛ばそうとする相手の横から、僕は昨夜のように無表情で10ミリの抜くとためらうことなく無防備にさらされた頭部に向けて3発。続いて背後に控える相手に対しては、弾倉が空になるまで撃ち続けた。

僕のいきなりの攻撃に泡を食ったのだろう。

最初の反撃の数発は、僕の耳の横を抜けてあらぬ方向へと飛んでいったが。背後の奴の反撃はそうはうまくいかなかった。

体に衝撃が走り、腹と胸に穴が開けられてしまう。ああ、これはよくないかも。

人助け——いや、人造人間など助けるものじゃない。

そのために死体を2つも作ってしまい、僕も体に2つ穴を作ってしまった——。

|||||

すべてが終わると、始まってから「ひっ」と悲鳴を上げてしゃがんでいた人造人間はおそろおそろ目を開けて周囲を確認した。

面白いことに、彼を殺そうとした2人が死んだことにショックを受けているように見えた。

「こ、殺してしまったのかい？なんで？」

「平和が一番だと、ちゃんと訴えたよ？強引にこちらの訴えを無視しようとしたから……こつちも強引に止めにはいっただけで」

「でもっ、死んでるっ」

「まあ、しょうがない。彼らは平和を嫌い、僕は君を助けたかった。この結果は不本意だけど誰にとっても納得できるものじゃないかな？」

「こんなことが、よかったと君は言うのかい!？」

「そうだよ。彼らは説得を嫌い、思うとおりにしようとした。僕はそれを許さなかった。そして君は死にたくない。誰も我慢してない、よい結果だ」

答えながらアキラは自分の中の変化に気がつき、焦りを感じ始めていた。

ここ数日、様々な状況で傷をおったせいだろうか。今回はたいした傷だとは思えないのに、口の中にすっかり覚えてしまったあの変化が始まるのを感じた。そのうち唇が渇きだすと、もう止まらなくなるかもしれない。

(これって常習性でもあるのだろうか?)

疑問が脳裏に浮かぶが、このまま放置してはまずいことになる。解決策としてはバッグの中のスティムパックを使用し、傷を癒すことだが。数本しかもっていないそれをここで使っていいものかどうか、疑問が残る。

それに——もう、死体は2つ。目の前にできてしまったのだ。

「と、とにかくこの死体は片付けるよ——俺が、責任を持って」「え……」

「大丈夫だから、君は気にしないで。ここでちよつと、待ってて」

アキラは顔に笑みを貼り付けると、両方の手を伸ばして倒れている死体の片方の足をつかんだ。死体の足首に妙な振動と、骨にみしりとした力が加わってヒビが入るのを感じたが。かまうことはない、どうせもう死んでいる。

悲鳴を上げる心配のないそれらを、そのまままとめて強引に引きずると草むらの中へと消えていった。

人造人間は困惑していた。

アキラに「待ってて」とはいわれたが、このまま黙ってひとりでバンカーヒルへ向かったほうがいいのではないだろうか？

迷ったが、結局は黙ってアキラが帰ってくるのを焚き火の前で待っていた。やはり孤独が耐えられなかったのかも知れない。

なにをしていたのかはわからないが、かなり長い時間を待たされた後。ようやく戻ってきたアキラは人造人間に対し、「いやいや、ちよつと苦労したよ」とだけ告げたが。あの死体をどうやって処分したのかまでは教えてくれなかった。

人造人間も、それを聞こうとはしなかった——。



## 連邦のダイヤモンドシティ (LEO)

ロッカールームに入ると、テイラーは急いで自分の装備を取り出しにかかる。

水色に塗られたバット——スワッターと、2連水平のショットガン。そして栄光のダイヤモンド・セキュリティの証でもある防具セット。

「おいおい、巡回初日から遅刻か？テイラー」

「よお、ウィル——まだ違う」

「そうか？……残念、ちょうど時間だ。遅刻の罰金、ついてないな」

「うるさいな、お前。俺の女房にでもなりたいのか？」

「ごめんだよ、そう言つてウィルはロッカーの谷間から消えた。」

テイラーはそんな仲間の背中を見ることはなかったが、かわりに手を止めると大きくため息をついた。

——なんでよ、なんでそんなことになったの!?

妻のキャロラインは、出かけるテイラーの背中にむけてヒステリーを起こす。

それは突然のことではあったが、理解できない話ではなかった——

テイラーはそれまで、ダイヤモンドシティの中の警備をおこなっていた。平和と安全を守る役目だ、それを乱す奴を取り締まっていた。

だが先日、ついに外回りをやれと言われてしまった。

その命令を聞いて本人にショックはまったくなかった、とは言わない。

上司への賄賂が足りなかったのか、とか。誰かの恨みを買って、嫌がらせにあったのか、とか。最初はそんなことを当然考えた。だがすぐに考えるのをやめた。

シティが平和なのは、それを守るセキュリティの存在があればこそだ。そこに所属していれば、いつかは貧乏くじを引くことだってある。

だが、夫が危険なダイヤモンドシティの外を警備するということ

を、ついに今日までテイラーは妻に話すことができなかった。

おかげで、出かけにトラブルになってしまったのだ。

悲しみと怒りが納まらない妻に「戻ったら話そう」とだけ言い訳して、ここに来た。

彼女は感情的にただ、仕事をやめろと当然のように口にするだろうが。そのとき、自分はそんな彼女を説得しなくてはならない。

ダイアモンドシティ。いや、ダイアモンドシティ・セキュリティの中でこれまで安全な仕事をしてきた男が。危険だからやめます、などと口にしたと思われ、噂になつてはこの町で生きていくことはできない。

妻にはそのことを理解してもらわなくてはならない。

この連邦で、もつとも安全なこの町に捨てられる。夫婦そろって、追放者として荒野に出て行く後姿など、考えたくない未来であった。

「死にたい気分だよ」

移動初日に遅刻してしまった言い訳のつもりでテイラーは待つていた同僚にそうこぼした。ジョークではなかったが、そう受け取られて笑いは取れた。

別にこれは決して本気だったわけじゃない。

すぐそばに仕掛けられた地雷が音を立てて炸裂すると、緑色の肉塊がばらばらに別れて宙を舞っていた。助かったとテイラーは思ったが、喜びはなかった。

「ヤルナ、ニンゲン！モット戦工！」

緑の肌の化け物たち——スーパーミュータントは、“自分の仲間”が死ぬさまを見て喜ぶと。ますます猛つて、こちらを攻撃してくる。

「畜生、あいつらやりたい放題かよ！」

「泣き言はいい！撃てっ」

テイラーは半泣きの仲間を叱咤すると、物陰から腕だけを突き出してショットガンを撃つ。

本当に運が悪かったようだ。ダイアモンドシティに近づこうとするスーパーミュータントの一団とテイラーの巡回班は出会ってし

まったのだ。

こちらの地雷原はまだ生きているから大丈夫、などと言いつてはいたが。相手があのスーパーミュータントでは意味がない。あいつらは全員が戦闘狂みたいなものだ。

敵だろうが味方だろうが、傷ついて血を流し、どんなであれ死ぬ奴を見ればそれだけで大喜びする変態ばかりだ。実際、今もそうしてむこうは大騒ぎしている。

すでに2度の突撃を受け、地雷もほとんど残っていない。

ぽつかりと空いた、道の真ん中を押し通ってきたならば、今度こそ2人で出て行ってそいつを倒さないといけないだろう。

遠くで犬の遠吠えを聞いた気がした。

|||||

連邦のグリーンジュエル、ダイヤモンドシティに私が近づいたのは。当初の予定から考えると、だいぶ遅くなってしまった。

それでも、私とコスワースはその日。身軽ないつもの姿で、颯爽と町の中へと歩みを進めた。パワーアーマーは近くに隠してきた。

異変があったのはしばらくしてからだった。

どこかで銃声と爆発音が響き、目の前を横切る黒い影を私は見た。

「旦那様!？」

「遅れずについて来い、コスワース!」

たぶんだが私の声はわずかに緊張していたかもしれない。

騒ぎの音と、気配が近づいてくるのがわかる。私は次々に自分の武器を確かめると、いつ戦闘に入っても大丈夫なのだ自分を励ます。

黒い影が、街角に消えると。私はそこに戦場があるのだということ。を当然のように察して、連射式のパイプ銃を取り出し構える。

角を曲がる直前、足運びを緩めると。大きく息を吸ってから、小さくそれを吐き出した。

私の目は前方で揺れ動く緑色の体を目で追っていた。

大きく、そして異様に発達して盛り上がる筋肉の表面にあわ立つよ

うに血がにじんでくると。たまらずにそのスーパーミュータントは苦痛の声を上げて前かがみになるが。

そこに走りこんでいった黒い影がその背中に飛びつき、やはり太い後頭部の付け根に向かつて噛み付きながら引きずり倒した。

黒い影はそのあとも何度も激しく体を動かし、噛み付かれた部分の骨が碎ける音がすると巨体はようやく動くのを止めた。

正直に言うと、これは正しいやり方ではない。

この状態ではまだ接近はするなど軍では学んでいたが、それは相手が人間で、人間同士の戦う戦場での決め事だった。決して、緑の巨大な人型相手ではない。

——スーパーミュータント

これがそうなのか。

話には聞いていた。「見ればわかるよ」と、その通りだ。

崩れかけた建物の上を構えたままのぞきこみ、動く存在を見つけて。ドラムマガジンに残っていたのは約35発、人間相手にこれだけ撃ち込めば、嫌な音を立ててバラバラになってもおかしくないのに。

向こうは驚いたことに腕を振り上げ「モット、モットー！」などと吼え始めた。

言われなくても苦痛は死ぬまで与えることに異論はない。

皮のホルスターからアキラが強化してくれた10ミリを取り出して撃つ。

そうやってミュータントの2人目を屠っている私の横をすり抜け、コズワースが飛び出していく。

「パイパーちゃん、私の後ろに。ここからは一緒に参りましょう」

パイプライフルのドラムマガジンをふるい落としながら、私はそれを確認した。

コズワースについて走る影の正体——引き締まった体はなだらかにカーブを描いている犬。戦前ではジャーマン・シエパードと呼ばれていた。

新たなドラムマガジンを装填すると、私はコズワースと違い、建物の非常階段に飛びついた。

銃声が屋上からも聞こえていた。どうやらむこうは、こちらが後ろから襲ったことにまだ気がついていないようだった。これはチャンスだ。

屋上から銃声とともに笑い声が聞こえていたが、下がコズワースと犬によって大混乱になっているのを見て驚いたらしく。「ナンダ、ナンダ？」と戸惑っている様子が伺えた。

コズワースは戦闘用に作られたMr. ガッツィーとは違う。後方を上から攻撃されたらひとたまりもないだろう。

私は人造人間から回収したプラズマグレネードを取り出すと、それを階段から屋根の上に放り投げる。

目算どおりの軌道を描いたそれは、予定通りに2秒後に炸裂音を響かせた。

戦いは終わった――。

私は屋上から顔を出し、下のコズワースに無事を知らせると。

倒れてもう動かなくなつたそいつに近づき、腰を下ろしてじっくりと観察した。

スーパーミュータントは、元は人間なのだという。

こいつらは生殖するわけではなく。人間を捕らえて変態させてしまふのだそうだ。

その過程で記憶や人格が抹消されてしまい、化け物になってしまふ。

冗談かと思つたが、申し訳程度に隠している部分を剥ぎ取つてみると。確かに人間の生殖器らしきものはなくなっているように見えた。

(連邦には――嫌、この世界にはこんな相手がいるというのか)

今の自分に力が足りないことを痛感した。

先日の人造人間のとくも思つたが、今のままではショーンを探してこの連邦を歩き回るところか。旅することすら難しいのではないかと思えてきた。

ダイアモンドシティで、新しい武器が手に入らないか。真剣に考える必要があるのかもしれない。

私は彼らを助けた側の人間であったはずだったが、屋上から降りて近づき「大丈夫か？」と聞く私に礼こそ口にしたものの、その目は明らかに警戒しているようだった。

「礼なら、私よりもこの仔にいったほうがいいかも」

「この犬？」

「ああ、そうだ。君たちを助けようと必死に走っているのを見て、私は——」

「こいつ、別に俺たちの犬じゃないぞ」

「なんだって？」

「俺たちじゃない。セキュリティも犬を使いたいと言っているんだが、市長が頑固で、予算が下りないから犬は使っていないんだ」

「……そうか。実はここに来る前に、旅の商人から聞いたんだ。ダイアモンドシテイに、今頃は犬の商人がいるはずだって」

「ああ、そいつなら知っているよ。裏のジャンクヤードにいる野良犬から選んで、訓練してる奴だろ？」

「たぶん、それだ。この犬も、その彼のものかと——」

「だから知らんよ。野良犬だろう？それか、なんならあんたが使ったらしいんじゃないか？」

使う？私が？

「旦那様？」

コズワースは何かを感じたのか、私を気にしたようだが。私はじつと犬を見て、犬も私を行儀よく座って私を見上げていた。

運命を引き寄せたということだろうか？

よくわからなかった。だが、あの老婆は確かに口にしていた。私が、未来に犬とともに旅をしている姿を見た。そして、引き当てればその運命の先にシヨンと出会える可能性が出てくるのだと。

「わかった、そういうことなら。この仔は私の犬だ」

「そうか。よかったよ、あんたがもらってくれて。俺たちにしても、助

けてもらったというなら寝覚めが悪くなくていい」  
「？」

「そいつはもうあんたのドッグミートなんだろう？なら、俺たちは手を出せないさ」

「っ!？」

彼らのジェスチャーが撃つと食べるの2つだった。

戦前の感覚ではなかった衝撃が襲ったが、たぶん表情には出ても口は閉じられていたはず。

犬を売る、などと聞いていたからすっかり忘れていたが。野良犬は駆除されるべきだし、このような世界ならばその肉だって立派な食べ物といえるのだろう。

だが、困ったことに私は飢えた時のためにドッグミートをそばにこうというわけではないのだ。

私が腰を下ろして手を伸ばそうとすると、犬のほうから体をこちらにこすりつけてくる。どうやらお互いが仲良くなれそうな感じがした。

「私の家族になってくれ。ドッグミート——では、あんまりだ。名前はこちらと、つけてやる。後で」

こちらの言葉の意味がわかるのか知らないが、首をかしげて尻尾をふっていた。

たぶん気持ちだけは伝わったのだと信じたい。

こうして私は目的地にたどり着くことができ、頼りにしていた予言の片鱗のような出会いを体験することもできた。

ダイアモンドシティでは、さらにシヨーンの手がかりが得られるかもしれないとやら期待できそうな気持ちにもなるというものだ。

だが、そうだ。

物事というのは、そうそううまくは運ばない。

ダイアモンドシティの正面ゲートに到着した私は、そんな現実を早々に突きつけられるような体験……とういうか、出会いをする。

コズワースと犬を連れられた私は、意外なことに正面ゲートを前にして

足を止めてしまう。

目の前ではインターフォン越しに怒鳴り続けている若い女性がいた。また、ここでもトラブルなのだろうか？

思わず天を仰いでしまった私に彼女は気がつく、近づいてきてなれなれしい調子で話しかけてきた。

「ねえ、アナタ。ダイアモンドシティに用があるのよね？」

「——まあ、そうだね。たった今、到着したばかりだ」

「よかった。それならちよつと力を貸して頂戴」

彼女の名前はパイパー。

私にとってのこの連邦のように、にぎやかでやかましく。

そうしてとんでもないトラブル体質の持ち主でもある。そんなかしく美しい彼女ではあるが、この時も例外なく。

私を彼女のトラブルに見事に巻き込んでくれたのである。

|| || || || || || || || || ||

私には幼い頃、父に連れられて野球を見に行き、試合前のスタンドの中に立っている自分に興奮を覚えた記憶がある。

座席はほとんどがまだ人が座っておらず、観客は刻一刻と迫る試合開始を前に自分がいかに楽しく観戦できるかの準備で忙しくしている。

だが、そういった興奮は200年前に置いてきてしまったらしい。

記憶があの中の興奮を呼び覚まそうとしてきたが、私の目の前の現実がそうした夢をどこかへと吹き飛ばしてしまった。

ここはダイアモンドシティ。

この危険な連邦にあつて、もつとも平和な場所。

確かに穏やかさはあるようにも感じるが、やはりそれは私の知る世界のそれとはまったく違っていた。

町の中を歩くとそのことが嫌でもひしひしとわかってくる。

どこか遠くの世界で見るようなスラム街をおもわせる住居がひし



めき合って建てられており、その中に人を押し込めて暮らしているのだそうだ。

その中を駆け回る子供たちの姿にわずかにも癒されるが、この場所は本来ならば彼らや彼女らが思いつきり自由に走り回ることができないだけの広々とした球場であったのに。

今では狭く細い通路を抜けることで、楽しんでいる。

「旦那様、こんなことを口にしてはなんです。想像していたものにはまったく届いていない場所ですね。がっかりです」

「……」

黙れ、と言いついそうになるのを必死に飲み込んだ。

ボストンから立ち上るあの日のキノコ雲は、人類をここまで追い詰めてしまったということなのだろう。

こんな世界の中で、私は息子を果たして探し出すことが本当にできるのであるか？希望はあまりにも少なく、厳しい現実だけが突きつけられていた。

ダイヤモンドシティで新聞を発行するパブリック・オカレンシズの扉の前に立ったのは、ある程度を見て回った後の。その日の夕暮れ時のことであった。

町に入るとパイパーとはすぐに別れたのだが、その際に「是非、また会いにきて欲しい」とも言われていた。

正直、私はこの時。うかつすぎたかと、後々思い返すたびにそう思う。

過去の記憶との違いに哀愁と追憶を追いかけてしまい、肝心の情報収集はほとんどまったくといいほど出来ていなかった。

従って、この時の私は町の中でどこで寝起きをするかも定まらぬ困った旅行者となっており。パイパーの元に近づいたのは、そうした問題を町を知っている彼女に一挙に解決してもらおうという下心があったからだ。

時間を考えない男の訪問だったが、ありがたいことに彼女は歓迎してくれた。

少なくとも、表面的には。

「あのね、それで話があるっていったけど。あなたの話を聞かせて欲しいの」

「私の？」

「Vault居住者だったんでしょ？そのジャンプスーツでわかった。だから、うちの記事のトップとして扱いたいと思ったんだ」

「面白い話は、ないと思う」

「そんなことないよ。試して見なければわからないじゃない。それに、この話。受けるともれなく最高の特典が手に入るんだから。断る手はないよ」

「特典だって？」

美人の彼女だが、まだ話が読めない私に対し。まるで少年のような笑い声を上げる。

「この町のこともそうだけど。連邦のこともよくわからないんでしょ？あなたの行きたいところ、私が付き合っただけでもいいし。よかつたら、私のいききたいところにも案内してあげる」

「——護衛を雇いたって、聞こえるね」

「そう言わないで。誰か探しているんでしょ？私も力になるよ」

美人新聞記者はやり手であるらしいともうわかってしまった。

私は抵抗をあきらめ、素直に白旗を揚げることにした。

「わかった。取材を受けるよ」

「やったっ」

「だが、その前にまず最初の問題をなんとかして欲しい——」

この町で、ロボットと犬をつれて寝泊りできる料金の安い場所が、今は切実に必要だったのだ。

翌朝、私はパブリック・オカレンシズの長椅子から体を起こすと。実に爽快な目覚めの喜びとともに体を大きく伸ばしていた。

やはり固い土の上での目覚めとは天地の差がある。

パイパーの妹、ナットと挨拶を交わしていると。上階からパイパーがひどい様子で降りてきた。

どうやら昨夜の取材を、さつそく一晩がかりでまとめていたのだそう  
うだ。私にはそれが嘘だろうと、すぐに思った。

持ち合わせのない泊まる場所のない怪しげな男を、笑顔で泊めると  
は言ってくれたが。やはり妹がいるとあって、私がいつ獣となって襲  
い掛かるかもしれないと疑って眠れなかったのだろうと思った。

まあ、無理もないだろう。

彼女の妹も、姉に似て気が強そうではあったが。目鼻が顔立ちが  
整っていて、数年後には姉にも負けない美人新聞販売員が誕生するの  
は間違いないだろうと確信できた。

しかし、こんな調子の彼女に町を案内してもらおうわけにはいかな  
い。

「パイパー、午前中は休んだらどうだ？」

「いいよ、大丈夫だから。これくらい、慣れてるし——」

「良くないよ、ひどい顔をしている。よし、コズワース。お前の出番  
だ」

「旦那様？」

「ほら、あのノーラのマツサージ。まだ覚えているよな？」

「おお、おお！ええ、ええ！そうですとも、ミス・パイパー。私にお任  
せください」

「え、ちよつと。なに？」

「どんなに疲れていても、数時間でシャッキリできる方法があるんで  
す！是非、私めに全部を、お任せください」

「そ、そうなんだ。大丈夫なのかな？だって、それって200年前の—  
」

「例え200年前に覚えた技でも、あの当時も人気があったのはあな  
たと同じ女性たちでしたよ。間違いなどありません」

コズワースは本来、旅路の中で戦うために作られたわけではない。  
家族の中にいて、それを補助するために存在するのだ。それを久し  
ぶりにでも味あわせてやりたかった。同時に、そんなコズワースを求  
めた死んだ妻の姿がまぶたに思い浮かぶ。

私は背を向けると、パイパーの代わりにナットに案内を頼むことに

した。

Vault 111で妻を殺し、息子をさらった奴らを見つけないではならない。その創作に力を貸してくれる人物が必要だった。

前を歩くナットは、私に一人の人物の名を告げた。

その男の名前はニック。ニック・バレンタイン。

驚いたことに、こんな世界にあっても彼は探偵という職業についているのだと、彼女は言った。

## CHAOS GATE (Akira)

人造人間の彼とは、バンカーヒルに到着するとすぐに別れた。

彼はなにやら名残惜しそうではあったが、ここにつくまでの間に彼から知りたいことをすべて聞きだしていた僕にはその感情はなかった。

一人でこの中を、あてどなく半日ほど歩き回ってみた。

その間に人々の会話を、噂を、建物の位置や防衛力について探ってみた。

自分は思った以上に鋭いのだろうか？彼らの暮らしぶり、彼らの期待するもの、彼らが必要とするもの。

結論は意外に早く出せてしまった。

この場所が商人の町、というのはそれほど間違っていないようだ。

商人たちが自分たちのために安全なこの場所を通貨であるキヤップで生み出した。例えるならばそれは台風の目であり、大海の中に浮かぶ小さな孤島であり、流れに生まれた澱みである。

ここでの力とは商人であり、キヤップだが。それは明らかに外の暴力の世界とは相容れない考え方だ。

大きな歪みが、はつきりとここには存在している。

その被害者がここに集まる傭兵達だ。

商人は彼らを自分を守る盾ぐらいにしか考えていない。商人にキヤップで命を買われるが、契約を逆手に彼らを全力で守る以外の選択肢を与えられることはない。

商人は風向きが悪いと感じれば、平然と傭兵を使い捨てようとするし、それ以上の損益を嫌っている。

ひどい話だ、とは思うが。残念ながら僕がそんな商人を責めるのも筋違いであった。

そもそもにしてこんなおかしい話になったのは、どうもプレストンが所属するミニッツメンが、レイダーに怯えて助けを求めた商人たちを見捨てたことが始まりらしいとも聞いた。

頼れるものが頼りにならず、商人が自分たちでどうにかしようと歯

を食いしばった結果が、今のこの町の姿なのだろう。僕はヒーローでも、救世主でもない。自分のことだけで精一杯な無力な存在なのだ。それはちゃんと理解している。

夜になって営業を終えてしめようとする店先で、この意外な結論に顔をしかめている僕に話しかけてきた商人がいた。

「アンタ、店を閉める前だけど、品物を見ていかないかい？」

「旅人が必要なものが、置いてある？」

「そりやもちろんさ。キャンプで火をつけるとき、この携帯バーナーがあれば便利だろ？」

ふざけたことを口にする彼女の名を、デブと言った。

脳内でなぜか日本語にしてしまったので、嘔出しそうになってしまったが。これは読み方を短くしたのでそうなっているだけなのだろう。笑ったら失礼になる。

「この町のことを聞いて来たんだけど。考えていたものと違ったんだ」

「へえ」

「それで……途方にくれている。まいったよってね」

「どんな場所だと思ったんだい？」

「だからそうだな——普通の町だよ。人がいて、暮らしがあって、活気もある」

「ここにはないかい？」

「ここは——確かに大きな市場だね。すべてが商売、それに必要な人を求めている。俺には、物足りない町だけど」

「傭兵かい？」

「俺？払いがいいなら、時には真似事で。なにかある？」

「あるけど、そんなのに話して断られるのは愉快的話じゃないからねえ」

なにやら頼みごとがあるような口ぶりだが、ここはいい人になる理由は自分にはない。

それに気がつかなかった風を装い、鈍感のふりをして話の方向を変え

「俺が求めるような町って、連邦にはないのかい？」

「ダイヤモンドシティは？」

「やっぱり、そこか——」

「あとは……グッドネイバーかな」

「グッド？」

「グッドネイバー。ハンコック市長が治めるおっかない場所さ」

僕の目的地が新たに更新された。

「その町のこと、教えてよ」

「無料で？」

「まさか。そのかわりにそのソールズベリーステーキ、もらおうか」

デブは以外にいい人であったようだ。

約束どおり買い物を終えると、丁寧にグッドネイバーへ安全に向かう道を教えてくれた。

|||||

トラブルしかない町、それがグッドネイバーなのだそうだ。

別名には犯罪者の町とも言うらしいが、考えてみればそいつらだつて人並みのサービスを受けたいときがあるわけだし。そういう場所があつても、別におかしいことではないのかもしれない。

そして僕は、彼らから見れば正直面白くもない獲物にしか見えないのだろう。

「おい坊や、ちよつと——」

次の瞬間には、僕の手が握るビッグ・ジムを相手のこめかみに叩きつけていた。

外ならそのまま興奮に任せて頭蓋が砕けるまで殴りつけるところであつたが、さすがに町の入り口でそれをやっては目だってしようがない。

僕は一発で白目をむいて動かなくなった相手の体をまさぐると、最後は下着も残さずにすべてを奪うと目の前にあつた店のカウンターの上面に載せた。

「これ、いくらで引き取ってくれる？」

「いらつしやい。かわいい顔して、よくやるね。いいよ、バッチイのも全部買った。その代わり、そんなに高くはならないよ？」

「それでいいよ」

僕は出来る限り満面の笑みを浮かべてみせる。

「だってそこで拾ったばかりだ。新鮮だからモノは悪くないはずさ」

確かにたいしたキャップにはならなかったけれど、そいつの武器も防具も服も。全部売れた。

店を出ると、無防備にも股をおつぴろげて局部をさらすポーズをとらされているそいつはまだ入り口で寝っころがっていた。

彼は僕の記憶の中で、初めて“殴って”も死ななかつた男だ。このまま無事に風邪を引いたとしても、この危険な町で生き延びてほしいものである。

|||||

ジョン・ハンコックはグッドネイバーの統治者であり、支配者である。

だがそう呼ばれることはたぶん本人は喜ばないだろう。

だから——彼は、名前の後に市長とよばれるべきなのだ。

この時の彼もそうであった。

本当に珍しいことに、いつもは誰かに振舞ってやれるほど抱えているはずのジェットを切らしてしまい。それを補充するのに、ほかの誰でもなく自分だけのブレンドで作りたいからと。大通りの片隅で自らそれをコツコツと科学の錬金術を駆使して大量に生み出そうとしていた。

その背中が空気で、町の住人は見かけるが作業の邪魔はしたくないのか特に声をかけるでもなく通り過ぎていく。

いや、そうではなかった。全員ではない。

まだ若く、見たとおりならば無法者となつて日が浅い若者がいつからかパイプ銃を構えて立っている。まだ人を殺すことに慣れていな



いのだろうか、唇は乾き、両目を見開いて様子にどこか落ち着きがない。

だが、彼が抱いた野心を果たすことはなかった。

興奮を抑え、殺意をまとめ、震える銃口が止まり、引き金に置かれた指に力が入る前に、四方からサブマシンガンが若者に向けられていた。

見回りらしき汚れたスーツ姿の男が現れる近づく、悔しそうな若者の手から銃を取り上げ。まだそれに気がついてないらしい市長の背中に声をかけた。

「殺されるどころでしたよ、ハンコック市長」

「——ああ？」

「いや、だから。こつちです」

「なんだよ、俺がこれからみなに愛されるオリジナルレシピのジェット100発を一気に生み出そうって時に、なんでそれを邪魔しようと考えてる奴がいるんだ？」

「そいつは本人に聞いてください。こいつです」

いらだたくかき回すためのガラス棒をビーカーに投げ込むと、ハンコックはようやく暗殺未遂で終わってしまった若者の顔を見た。

「グッドネイバーの市長を狙う若者が、教えてくれ。俺は何か、お前にしたことがあったのか？親や友人を殺してしまったとか」

「ない！だが、あんたを殺せば。俺がここをもらうんだ」

「おいおい、聞いたか？お前たち、こんなに野心あふれる若者がここに現れるなんて。この連邦はまだまだ捨てたもんじゃないな」

冗談なのか本気なのか、そういうと若者の前に立つ。

「それで、失敗に終わってしまったが。これからどうする、若者よ？」

「お前を殺す！俺がこの町を手に入れるんだ！」

「まるで駄々をこねる赤ん坊と一緒だな。だが、いいだろう。若者はそれくらい元気であったほうがいい。

おい、お前ら賭けを始めろ。

この野心にあふれる若者が、最悪の市長ハンコックとの決闘に勝利できるか？どうか？」

「なあ、市長。そりや賭けにはならないぜ。こんな若造、あんたに勝てるはずもない。賭けは成立しないさ」

スーツの男がそういつて笑うと、周囲のマシニングの向こう側から大勢の笑い声が漏れてくる。その声に若者は怒りと羞恥心で顔を真っ赤にさせているが、動くことができないでいる。

口では否定はしたものの、男はハンコックの指示に従い、懐からスイッチブレードを取り出すと若者に差し出した。これで市長を刺してみろということらしい。

「おいおい、お前らなんて薄情な奴らなんだ？こんな若者、なかなかないぞ？よし、いいだろう。俺が彼に賭ける。若者が市長を倒すのに、このジョン・ハンコックは賭けるぞ」

「へえ、いくら出します？」

その問いかけを待っていたかのように、間髪いれずに地面に一枚のキャップが音高く落ちた。

それが合図となり、若者はいきなり動いた。

汚れたスーツ男の手からスイッチブレードを取り上げ、目の前の市長の心臓めがけてつきたてようとしたのだ。

ハンコックは慌てていなかった。

先ほどまでの演技じみたそのまま、若者の足を見事に払うと。相手は派手に地面に体をたたきつけてしまう。それでも、まだあきらめきれなかったのだろう。

腰を上げようとしたが、今度はハンコックがそれを許さなかった。

立ち上がりかけた若者の後方に大胆に体を移しながら、いつの間にか握られていた己のサバイバルナイフで若者の髪をつかみ、容赦なくあごの下を半分までパツクリと簡単に裂いてしまった。

ヒューヒューという音にあわせて、流れ出た血が若者の白いシャツをあつという間に真っ赤に染め上げていく。

苦しみながら武器を落とす若者の頭を、ハンコックは両手でやさしく挟むと静かに優しい声でささやいてやった。

「いいんだ。もうすぐ終わる、お前はよくやった、もうすぐ眠れる――」

その言葉に従ったというわけでもないだろうが。若者は地面に横になると、そのまま静かに息絶える。賭けはやはり成立しなかったようだ。

市長は若者が動きを止めると、立ち上がり背中を向けた。

「市長、こいつどうします?」

「ん?なんでそんなことを俺に聞くんだ?」

「いえ、念のために。聞いておこうかと」

「考えもない、名前も知らない馬鹿者が死んだだけだぞ。さつさとゴミを町の外に放り出しておけ。ミュータントかフェラルが綺麗にしてくれるのはいつものことじゃねーか」

「そうですね。そうでした」

つまりぬ横槍で興がそがれてしまい、市長室へと戻っていく。

だが、そこでもなにか気に入らないことがあったようだ。

「おい、俺のボディガードは?」

「え、先ほど出て行きましたが——」

「まったく。今日はどうなっているんだ?」

首を横に振ってハンコックは嘆いた。

今日のグッドネイバーはなにやら騒がしくなりそうだった。

|||||

興味のつきないグッドネイバーの中で、僕が引かれたのはメモリー・デンと書かれた看板の店であった。

中に入るとそこは潇洒な雰囲気を漂わせる内装がなされていて、それなのにラウンジにはそこには似合わない何かの装置が並んでいる。

「あら、あなた。新しいお客さんね?」

気がつかなかったが正面の舞台の上に蠟人形のようなこの世のものとは思えぬ雰囲気を漂わせたご婦人が、僕の存在に気づいて声をかけてきていた。

「悪いけど、うちは今。お客は十分に抱えているの、悪いけど——」

「これ!この装置は、戦前は脳の追体験をすることで精神治療に使っ

ていた装置、だよね？」

「よくわかるのね。学者さん？」

「いや、違う——と思う」

「ん？どういうこと？」

「俺には記憶が——記憶がないみたいなんだ。何かの後遺症だと思う。日常生活に必要なこととか、どこかで学んだと思う知識は。次々浮かんでくるけど、自分の過去が。どんな暮らしをしていたのかの記憶だけがない」

「あら——」

「この装置も見て思ったんだ——。戦前では、精神治療としても使われていたような気がするなって。違う？」

「どうかな。でも下にいるアマリはそれを信じていたみたい。昔もあなたと同じことを言っていたわ」

僕の口が、不思議なことに勝手に動いていた。

「なら、それを試してもらえないかな？僕の記憶を、この頭の中から掘り出してみたいんだ」

Vault11に残してきた謎。その答えを、ここでいきなり手にすることが出来るかもしれない。

ああ、この時の僕はそんな甘いことを考えてしまったんだ。

そんな簡単なことではないと、理解しておくべきだったのに——。

目を閉じた後で、最初に見えてきたのは真っ白な世界だった。

上も下もない。左も右も、視点は動かせないのか、動いてないのかもわからない。

だが、すぐにフレームの外から僕と同じ顔をした、やはりそこ同じ白のぴっちりした服を着ているらしい紛らわしい格好の3人が飛び込んできた。

そのどれもが無表情で、白く塗りつぶされた世界にわずかに見せる頭と手と膝の肌色だけが。不規則に、バタバタと、痙攣というにはあまりにも強く動かししている。何かの表現だろうか？

なぜかはわからないが、僕は同じ顔をしたこの3人をこのまま見続

けることがなぜか恥ずかしいと感じていた。目を閉じたかったし、顔を背けたかったが。許されなかった。

次の場面はいつそうなったのかはわからないが、今度は真っ青で透明なものが見えた。

視界は今度はゆつくりとズームアウトしているようだが、そこに何があるのかはすぐには理解できなかった。そしてやはり視点は動かさない。

真っ青な空と、そこにたゆたう雲だろうと思ったがそうではなかった。

ズームが終わると、それが水の入った給水タンクのようなもので。だが、底には綿飴のような白いもやがうねり。透き通る水には寄生虫らしき2つの屹立する棒状のそれが、忙しく留まったまま左右に回転をしているようであった。

これはなんだ？

問いかける前に、僕の後頭部を突き抜けて男の手がのび。水の入ったタンクの表面に触れると、妙にいとおしげにその表面をなで始める。

たったそれだけのことなのに、僕は急にそれがなにか“恐ろしい”ものだと感じ始めていた。

血が逆流し、背筋が寒気で凍りつき、パニックの前兆らしきものもある。

だが、こんなものになぜ恐れなきやならない？

何か情報はないかと目を凝らす、やはりわからない。見たままのそれが、目の前にあるだけだ。

それでも諦めず。なにかないかと目を凝らす。

広がり始める恐怖心に抵抗しようという僕の試みは、視界にまたあの白い世界で不気味にうねる3人の僕と水槽とを瞬きのたびに交互に見せるようになっていた。

こんな、訳がわからない。

これが俺の——僕の記憶だというのか？ どういうことだ？

すべてが凍りついたのはまさにこの瞬間だった。

白い3人の僕が、おかしな動きをいきなりやめると顔だけこちらに向く。同時に声で問いかけてくる。彼らはずっと観察する僕の視線を知っていた!?

——これはナンダと思う?

重なる3つの声で問われた瞬間に、僕は答えがわかってしまった。少なくとも目の前の透明なタンクの中の水の意味を、正確にその真実を理解してしまったのだ。

これは俺で——これは僕なのだ、と。

体どころか、五感も許されなかったこの僕——いや、そうじゃない。

いとおしげに触れるこの手の持ち主の“情け”で、ようやく世界を見るという。視覚を許されたばかりの原初の俺自身の姿がこれだった。

つまり、つまり——。

僕は、俺は、この正体は……。

|||||

メモリー・デンは今や大騒ぎとなっていた。

イルマの話に、内心ではガッツポーズを決めてよいサンプルが手に入ったと機嫌よく上階へあがってきたドクター・アマリであったが、アキラの脳のもっとも反応の良い部位に刺激をわずかに与えると、すべてが一変してしまった。

これまで見たことのない信じられない量の情報があふれ出てくるとイメージを読み込む処理が間に合わず、それはあろうことかアキラの生体に対して逆に強烈な負荷をかけ始める。

さらにそれは一ヶ所から脳内のあらゆるところに拡散して、同じようなことをそこでもやりはじめたのである。

さすがにこれまでプロとしてこの装置を使ってきた者として、慌てはしたが。それでも冷静になろうと勤めつつ、アマリはなんとかこの事態に対処しようとする限りのことはやった。

だがこの時点では最悪、アキラは脳死状態に陥ると思われ、助けることは出来ないのではないかとひそかに考えてもいた。

異常を起こしてから8分後。

もはや限界だと思われた矢先、負荷は突然にしてゼロとなる。

記憶というか、脳内を駆け巡っていた大量の情報らしきそれが、暴れるのをやめると今度はどこにも残っていないのだ。

アマリはてつきり手遅れだったのかと一瞬は絶望したが、続いて出てきた患者の状態が平常と表示されて安堵と同じく疑問を抱いた。

「どうなの、アマリ？落ち着いた？」

「ええ、どうもそうみたい。おこってしまったことが信じられないわ」

「それで、この若い子はどうする？目を覚ますの？」

「そうね。そうしないといけないと思う。でも、あれだけのことがあったからなにかしらの症状が出ているかもしれない。それに、本人にも自覚症状がどう出ているか」

そういうとありったけのメンタスを注射器の中で混ぜ合わせてから、アキラの皮膚下に投薬した。

「これからどうなるの、アマリ？」

「数分以内に目が覚めるはず。でも、どうなっているかはわからない。この事態が、本人にどれだけ影響を与えているのか。そこが心配だけれど、目を覚ましてみないとわからないの」

眠っているアキラを2人は心配そうに見ている。

そして予定通り、90秒を過ぎたあたりでアキラの両目がいきなりカッと見開かれると、一動作で飛び起きる。

アマリは慌てて声をかけた。

「落ち着いて、落ち着いて頂戴。もう終わったの、これは現実」

「は？はあっ!？」

「大丈夫、大丈夫だから。一時は危険な状態にまでなったけど、もう心配はない」

「???」

「よく聞いて、あなたの頭部に眠っている記憶のようなものがあつたの。でも、それは記憶じゃなかった。」

大量のなんらかの情報だった。それがあふれ出てしまつて、あなたの脳を傷つけようとしたの。こんなことになるなんて思わなくて――

「情報？記憶じゃない？」

「ええ、そうよ。記憶じゃなかった。それがなにか、あまりに多すぎてモニターしていた私にもそれはわからなかったけれど」

「記憶じゃない。記憶は、ない？」

「え？」

「記憶がない人間はいない。記憶がない、僕は。人造人間？」

「なんですって!?!それは違う。そうじゃない」

「違う？人造人間じゃないって？どうして？」

「だって――違うのよ。彼らの脳とも違う。あなたのは――」

必死に言葉を重ねようとするアマリの前に、スツとイルマが体を入れて言葉をさえぎってきた。

(それ以上はもういい、アマリ)

これは想定外のことだったのだ。アマリ達にしても、こんな騒ぎになるとは思っていなかった。それを目覚めたばかりで興奮と混乱状態にあるアキラに悟られることは、良いこととは思えない。

「ごめんなさいね、本当に。こんなつらい思いをさせるとわかっていたら、進めたりしなかった」

「つらい、思い？」

「謝るしかないわ。許して頂戴」

アキラの視線は相変わらず怪しげで、イルマが謝罪をするとヒツヒツと過呼吸気味になりながら2人の顔を交互に見ると、震える指を持ち上げ。彼女達を指差ししながら声を張り上げる。

「こっ、こんなことになって！ただ、謝って済むことだと思っているのかよっ」

「そうね。仰るとおりだわ」

イルマはアキラの抗議の声に逆らわずにあっさり同意を示すと、キャップの入った袋をとりだしてその手にすばやく握らせる。

「失礼と思うけど。キャップで支払わせて、本当に今日のご



めんなさい」

「うっ、あつ、ええっ?」

昂ろうとした感情が押さえつけられて処理できないままのアキラ。イルマは素早く若者の手をとるとメモリー・デンの入り口まで誘導しようとする。アマリも彼の荷物を拾い上げてそれに続く。

「後日、なにか”ひどい後遺症”が出るようなことがあれば来て。ちゃんと応対するつもりよ」

「えっ、あれ?」

「足がよれてるけど、大丈夫よね。さっ、しっかりと歩くの」

そう口にしながら入り口の扉を開くと。ついてきたアマリの手からアキラの荷物を奪い。それを本人の胸に抱かせて、そのまま外へと放り出してしまふ。

熟練の客を扱う店主の凄みがそこにあつた。

後ろ手で扉を押さえ、めったにしない鍵をかけてもう今日はここを開けないとでも考えているのかもしれない。

「イルマ——」

「これでまずは一安心。あの子、この後は大丈夫だと思う?」

「正直わからない。千鳥足だったけれど、時間とともに落ち着いていくはず。でも覚醒するのにメンタスを大量にチャンポンしたやつを入れてしまったから」

「そうね。マズイわね」

「意識はしっかりしているはずだけど、まだ数時間は激しい躁状態が持続するでしょうね……」

多少の罪悪感があつたが、それでも今から追いかけて保護しようという気にはなれなかった。

目覚めてからの異様な興奮状態の中にある若者は、いつなにかぎっかけでこちらに牙をむくのかわからない。もう、このことは忘れるべき案件にしなくてはならなかった。

「いいわ、アマリ。このことは終わりよ」

「でも——」

「彼、人造人間ではないんでしょ?」

「ええ、そう。あんなもの、これまで見たこともなかったし。それにインステイチュートが、自分の生み出したものにあんなに処理できないほどの大量の情報を押し込むなんて。考えられない」

「なら、私たちの出来ることもないわ。これはオーナーの決定、忘れなさい」

メモリー・デンはこうして騒ぎからいち早く手を引いた。

だが、グッドネイバーからアキラは離れるつもりはまったくなかった。

目つきは妖しく、混乱と完全覚醒という異様な精神状態のまま。彼はふらふらとグッドネイバーの華、地下鉄を改修して作られた酒場サードレベルへと降りていく。

この日、グッドネイバーを騒がす若者はちよつとした伝説をうちたてる。

それは市長を暗殺しようとしてあつさり返り討ちにされた愚か者のことではない。そう、それは連邦にあるVault111からやって来た、一人の若者のしたことなのだ。

## 最初のつまづき (LEO)

ボストンの治安事情がいかにもひどいものであるのか。それを示す一例がここにある。

ダイヤモンドシティからわずかに数ブロック。そこにハングマンズ・アリーと呼ばれる場所があり、意味はそこに行けばすぐにわかる。レイダーが住み着き、まるで自分たちの恐ろしさを知らしめようと出入り口に殺した人間の切れ端や部位を奇妙に飾り立てている。この近くに入り込めば、こうなってもおかしくないぞと警告しているのだ。

ボストンではこんなのはそこかしこにある。

それぞれが違うレイダーの集団で、時にそれが凶悪なスーパーミュータントだったり、フェラルの巣だったりするのだ。

さて、そんなハングマンズ・アリーはこの日、信じられない訪問客を迎えた。

「あー、すいません。ちょっと、よろしいですかあ」

自分たちに呼びかける声に気がつき、何事かと入り口の脇に設置した見張り台に上ったレイダーは。そこにたった一人、まっ赤な目立つ格好をした女を見下ろした。

「なんだ、お前!？」

「私はダイヤモンドシティのパブリック・オカレンシアから来ました。

お話、いいですか？」

「待ってる」

答えると見張り台を降りる。そこには何事かと集まる仲間たちがいぶかしげにしているが、レイダーは面白いやつがいる。来てみるとだけ言って、門を開くとゾロゾロとでていって、女の前に姿を見せる。

「なんだって?」

「ですから、ダイヤモンドシティの——ようするに新聞社です。私、その記者です」

「それがなんだ?」

「最近のこのあたりの治安について。特に旅する商人たちの動向なんかを——」

少し声は震えているようだが、なんだか真面目にこちらにインタビュウを試みようとしていることがわかってきた。

(頭がおかしいのか？馬鹿なのか？)

レイダーが襲う獲物の情報を、ダイアモンドシティでヌクヌクしている連中に教えてやるわけがないだろう。そんなことは少し考えてみればわかりそうなものだが。いや、この女にはそんなこともわからないのだろう。

こりや、あの町も遠からず自分たちの獲物になるときが来るかもしれない。

そして近づいてよくよく見ると、この女はなかなかの美人だということがわかった。

当然だが、レイダーたちの顔にスケベなそれにかわった。

「いいぜ、話なら中でどうだ？たつぷり、俺たちのことを教えてやるさ」

「さすがにそれは、ちよつと——」

「なんでだ？俺たちはかまわないぜ？なあ、お互いを知り合ういい機会さ。そうだろう？」

いいながら徐々に逃げられないように取り囲もうと移動する。

「いやいや、アハハ。取材対象とは適度に距離をとらないと、お互い悲しいブルーしいな関係に……」

「心配は要らないぜ、お譲さま。俺たちならいろんな下品ブルー品なことで喜ばしてやれる」

女記者は——パイパーはさすがにそれを聞いて顔色を変える。

そう、真っ青ってやつだ。

さすがにパイパーはいい仕事をしてくれる。

上からのぞけばそれがよくわかった。

ハングマンズ・アリーは建物の中に作られたちよつとした砦になっている。攻め寄せれば、建物にはさまれ動きが取れなくなり。奥から

通りに入る道に向かつて一斉に攻撃されれば身を隠す場所もなく、なすすべもない。

だが、それはあくまでも2次元的。平面での話だ。

左右に聳え立つ建物に挟まれているというそれが、この場所の大きな弱点となる。そしてそれに対する備えを、このレイダーはまったく用意してはいなかった。

とはいえ、私の計画はここで少しばかり変更が必要のようだ。

パイパーがあまりに優秀なせいで、レイダーのほとんどが入り口から出てきてしまっている。

本当なら、上からエリアの中央に落下して中から一気に蹴散らすつもりであったが。今、それをやるとパイパーが危険だ。

私は膝を突いたまま、そつとつぶやく。

「これより状況を開始する。目標、ハングマンズ・アリー。チームの作戦終了予定時刻……8分を予定」

屋上に置かれた、先日倒したスパーミュータントから回収したスレッズハンマーを“片手”で持ち上げる。今回は撃つのはなしだ。こいつで短時間で決着をつける。

腰を上げると、体のあちこちからわずかながら駆動音がすると、振動を骨が感じ取って伝えてくる。

どこかのねじの固定がゆるいのかも知れない。

直立すると、ただそれだけで身に着けたT45パワーアーマーは唸り声を上げる。ナットは初めてこれを見て、にぶい鋼の光沢の表面がなにか怖いといていた。こいつも塗装くらい、してやってもいいかもしれない。

だが、それはすべてが終わってから。

私は走り出すと、建物の屋上から地面に向けて飛び出していく。

パイパーの前に群がるレイダーの何人かに、まず頭上に落ちるこの鋼の塊を受け止めてもらう。続いてハンマーが周囲で動けないやつから血祭りにあげていく。

最後に慌てて砦に引きこもろうとするだろうが、そのころには勝負ありだ。

このパワーアーマーで、200年前の軍人がみせる本物のパワーア  
タックがどれほどのものか。彼らはこの世の最後に実際に体験する  
ことができる。

足の下にある肉塊を踏みしめるといふ、貴重な体験と。あの気の強  
いパイパーがそのショッキングなシーンにかわいらしい悲鳴を上げ  
たのを聞くと。

私は予定通り、殺戮する機械となってレイダーを文字通り叩き潰し  
た。

|||||

ダイヤモンドシティ・セキュリティに掃除を頼み。

ひどい作戦だったと激怒するパイパーをなだめながら帰還した私  
は、町の一角に放置されていたパワーアーマーステーションにT-4  
5を置くと、そのままマーケットに足を向けた。

レイダー達の拠点から回収した装備やゴミを処分する必要があっ  
た。

ダイヤモンドシティでも、一段とにぎわうマーケットに入るとここ  
らを見つけた店先に立つモーが早速絡んできた。

「なあ、アンター！うちに寄っていつてくれよ。あんたにはこのクルミ  
のスイッチャーが……」

「悪いな、モー」

彼は面白い男だ。

かつては存在したという、ベースボールなる“格闘技”を現代に伝  
え、未来に残したいのだそうだ。

最初、真面目にそれを口にするので、パイパーやナットが不思議そ  
うな顔をする横で私は大笑いすべきかあきれ返るか。まずそこから  
悩まなくてはいけなかった。

武器を扱うアルトウーロの店のカウンターに荷物を載せる。

「お、今日の“狩り”の戦利品かい？」

「ああ、ハングマンズ・アリーだ」

「おいおい、ついにあそこがおちたか。見せてもらおう」

私はそれに無言で首を縦に振る。

店主は目と手を動かしながら、こちらと会話を続けようとする。

「あんたが来てから、ここはすこし騒がしくなってる」

「なぜ騒ぐ？私はそんなに悪いことをしているのか？」

「そうじゃない、その反対さ。最近はこちらもレイダーやスーパーミュータントの勢いに怯えることが多くてな。セキュリティの連中も命が惜しいとあつて、手を抜くものだから。この辺りの治安はますます悪くなる一方だった。」

その賞金首の掲示板も、なごらくメモが増えるばかりで。一向に減る気配はなかったんだぜ？」

「そうなのか」

「ああ。だが、それがこここのところ毎日、メモが一枚ずつ消えている。あんたとパイパーが連中を叩きのめしてくれてるんで、みんな大助かりさ。感謝している。」

噂だが、市長は賞金首の新しいリストを大慌てて作らせているのだから」

「——そうか」

彼らにとつては明るい話題なのだろう。私は表面上は無表情を貫いたが、内心では複雑なものがあつた。

「一部のアーマーとガラクタは、うちでも引き取れるが。それだとあんたが損をしちまう。そこでどうだい、俺に預けてみないか？」

マーケットの連中に話してキャップにかえてやる」

「いいね。受け取れるのはいつになる？」

「うーん、そうだな。店を占める前くらいが確実だ」

「わかった。なら、それくらいにまた来るよ」

私はそういうとすぐにマーケットを離れる。

ダイヤモンドシティは平和で、この町から見上げる空も真っ青にひろがっている。

だが、私の心は少しばかり荒れていた――。

パブリック・オカレンシアの2階では、パイパーはさつそく。今朝の——人がありえない潰れ方をして、中身をちよつと、こちらに飛んできたそれを浴びてしまったという悪夢は抜きで——ビッグニュースについてどうまとめようか、首をひねっていた。

「レイダー、消滅。ハングマンズ・アリーは駆逐された——いやいや、そうじゃない」

ブルー、レオがダイヤモンドシティに来てから。一緒に行動するパイパーはこの町に何かすごいことがおこるような、そんな予感をひしひしと感じていた。

今やこの町の住人は、シティの周りを巡回することすら恐れるようになってしまっている。それを見透かされて、レイダーは徐々に町に迫ってきている。

ここ数年、折を見て町の脅威をそう分析して口にしていたパイパーだが、住人たちの反応は鈍いものだった。ここが安全だと信じたくて、迫ってくる脅威に目を向けたくないと考えているのかもしれない。

まだ持ち合わせの少ないレオにも、ついタカハシの店で箸を握り締めてそのことを語ってしまった。おかげで麵はのびってしまったし、ナットには熱くなるなどたしなめられてしまった。

ところが、レオはコズワースと犬を連れてすぐに戻ると言い残し。

翌日、あのパワーアーマーを着て再びこの町に現れた。

それからはもう、大活躍だ。

「ちよつとパイパー」

「ナット？・上だよ」

階段を妹がのぼってきた。

「話しあるんだけど」

「なに？・今、ちよつと記事を書こうと——」

「もうさつそく？」

「当然！ウヒヒヒ、次号が楽しみ。記事は盛りだくさん、パブリック・オカレンシア初の売り切りだつてありえるかもよ」



「ふーん」

パイパーは記事とばら色の未来に目がいつて、妹がまったく興味なさそうなことに気がつかなかった。ナットはそのまま机の隣まで行くと、そんな姉を上から見下ろす。

「ねえ、パイパー。ミスターのことだけど」

「ブルー？彼がなに？」

「はあ……あのさ、新しい彼氏にちよつと入れ込みすぎてない？」

「えっ、ちよつと何を言うの。ナット？」

「——なにが？」

「ブルー。嫌、レオはあれだよ？息子がいるんだ。子供を捜そうとしてる」

「聞いた。それが？」

「それがなんで新しい彼氏——」

「ねえ、それ本気でいつてる？」

ナットは姉に呆れているようだ、本人はようやく理解した。

「連日、ミスターと出かけてるのは知ってる。凄いことをしていることも」

「そ、そうだよ。それだけだよ？」

「それが問題だといってるの、パイパー。ちよつとミスターに肩入れしすぎていない？」

「そんなことない」

「そんなことある！ねえ、冷静に考えてよ。記事はどうするの？」

「どうするって？ちゃんと書くよ」

「そうじゃない！これはもつと現実的なことだよっ」

そういうとナットはパブリック・オカレンシアの前号をパイパーの額にたたきつけた。

「予定だと、次号はミスターの独占インタビューってことになった。そうだよね？」

「う、うん。話し合ったでしょ？」

「そう、決めていた。でも原稿読ませてもらったけど、ミスターのだけで記事はかなりの分量になる。次号に空きスペースはほとんど残っ

てない」

「あー、でもそれは——」

「最後まで聞け! どうせ、特大号とかいって。いつもの倍とか記事増やすとか思ってるんでしょ?」

凶星だった。

「あのね、パイパー。販売員として言うけど、次号は予定通りで。それ以上の記事はナシにして」

「ナット!? 本気なの? こんな——すごい、大事件なんだよ!」

「そうだね」

「それを素通り? ちょっとだけでもさあ、頑張って入れてこようよ」

パイパーはまだ諦められないようであったが、彼女の妹はがんとして許さなかった。

「入れるって、なんて書くの?」

「んと……レイダー撃破、みたいな感じ? まとめてるのはもったいないけど」

「それ、誰がやったのか書くよね?」

「それはそうだよ。そうしないと——あつ」

ようやく姉は、なんとなくだが問題に気がついてしまった。

「そう。事件はあった。でも、それって全部パイパーとミスターがやったことだよね?」

「——ソウダネ」

「それを書いたら、次号はどうなると思う? 記事の全部がミスターで埋め尽くされちゃうんだよ?」

言われて確かにその通りだと思った。

冒頭にインタビューで衝撃のブルー。レイダーを撃破、戦慄のブルー。砦を撃破、ブルーに裁かれし者……。

それはもう、マスコミとは言えないものだ。読者に断じられてしまいかねない内容になる。

「さっさとインタビュー記事、出しておけばよかった——」

「無茶言うな。諦めろ」

パブリック・オカレンシアではこうして苦渋の決断がなされ。

そしてついに、最新号の印刷が始まろうとしていた。

|||||

探偵は、いなかった。

あの日ナットと共に訪れたバレンタイン事務所で、秘書を務めているという女性からそう告げられた時。サンクチュアリを旅立ってから、初めて私の目の前が真っ暗になった。眩暈も感じていたかもしれない。

多分、こんな風を感じるのは間違っているのだろうと思う。

むしろここまでが、あまりにも順風満帆に来すぎていたのだ。犬とダイヤモンドシティを探して旅に出て、どちらも目的どおりに達成したけれど。

この町で、自分を助けくれそうなのが探偵だけだと言われても、納得できない。

私は諦めきれず。それでもがくようにして、別の手を探そうと考えた。

ダイヤモンドシティの周りにいる、レイダーたちなら何か知っているのではないか。あてのない、考えのない行為であった。冷静ではなかったのだ。

パイパーの熱弁を耳にし、この町には賞金稼ぎが少ないと理解して。手早くキャップを稼ぐためと言い訳するように、手当たりしだい。噂に聞いたレイダーへ襲撃を繰り返した。

その結果は？  
ゼロだ。

ほとんど毎日を戦場にしてあちこちに死体を積み上げて見せたのに。探偵の行方も、ションも、何もわかったことはなかった。

そしてこれはきつと、このままならばこの先も一緒なのだど冷酷に私に語って見せている。

探偵事務所は、ダイヤモンドシティの狭い住居のならば一番端っこ

にあり。家の設計がおかしいのか、入り口がやけに細くて狭いが。反対に中の居住空間は広々としている。今日も私は探偵を求めて、この事務所の扉をくぐる。

「——ああ、あなただったの。悪いわね、探偵は、相変わらずよ」

「まだ、わからないのか」

「仕事をするなら、ちゃんと行き先を教えていってと頼んでいたんだけどね——って、これ。毎日、口にしてるわね」

「ああ……確かに」

探偵の秘書をしているというこのエリーだが、彼女にしてもさすがに困惑しているようだった。

探偵ニツク・バレンタインはこの約1ヶ月近くの間。ずっと姿を隠してしまっているらしい。

エリーに言わせると、それでも今回は特別深刻に考えねばならないのは、この間の彼の動きがまったく聞こえてこないからだ、という。

これまで探偵は、行き先を継げずに戻ってこなくても。その間どこかで見た、そういう噂は必ずどこからか流れてきて、ダイアモンドシティにも入ってきていたのだそうだ。

それが今回、まったくくない。

一番高い可能性といえば、当然死亡したということになるが。殺した相手がレイダーなら、グッドネイバーあたりから武勇伝がながれてくると思われ。それがないことから、死亡した場合はスーパーミュータントやフェラルが相手ということになる。

「噂、聞いたわよ」

「えっ?」

「ここ数日、大暴れしているそうじゃない。ちよつとしたヒーローね」

「ああ、それが……」

「探偵への依頼料を稼ぐため、らしいけど。ニツクはそんなに高額は請求しないわよ」

「——ああ、らしいね。」

されたのは、君にニツクの代わりにと紹介された探偵に言われたん

だ」

「……あんの恩知らず、そんなふざけた事。ニックへの借りを返すためだと思つて、話を聞いてくれて言ったのにつ」

エリーはそういつて怒つていたが、私にはもうどうでもよかつた。その探偵を雇うために必要な手付金分のキャップは当に用意できている。だが、私は彼の元へ、再び行くつもりはなかつた。

連邦の美しく、平和な町ダイアモンドシティ。

だがここにたどり着き、ここで暮らす人々やパイパーらと触れ合つてさらに深く連邦を、世界を理解すると。私がしようとしていることがいかに無謀であるのか、それが強く思い知らされてしまう。

私一人の力だけでは息子は取り戻せない。

だが、力を貸してくれるならば誰でもいいというわけでもない。

私はまた、あの Vault から這い出たときと同じく。この道の先へどうやって進もうか、足を止めて犬のようにぐるぐるとその場で回っていることしか出来ないでいる。

「この事務所。畳むかもしれないといつてたね」

「ええ、ニックが戻らないなら。最終的にはそうなるわね、私は探偵にはなれないもの」

「具体的には、いつ?」

「とりあえず今年の間は、待つてあげようと思つてる。それくらいなら蓄えだつてあるし。」

私みたいな女の細腕で頑張れるのもそこまでかな。実はもう、市長からそれとなく家を明け渡さないとつつつかれているの」

「そうか——」

「場所代をキャップで払つてるから、まだ知らん振りできるけど。それでも希望がないなら、私もいつまでもここにしがみついてはもられないし」

エリーの言葉が、私の胸にも突き刺さる。

その通りだ。

愛した妻は死んだ、殺された。理由もわからず、いきなり命を奪われた。

希望はただ息子を取り戻すこと。そのためには妻を殺し、息子を連れ去った敵についての情報が必要なのだ。情報はない。

私はまだ、なにも進めず。なにを成し遂げてもない。

重苦しい気分を引きずりながら、私は探偵事務所を後にする。

パワーアーマーの点検は明日に延期することにした。

歩きながら、ふとこれまでのことを思い返していた。気がつけば、あのサンクチュアリを出てからもうそろそろ一ヶ月になろうとしている。

(そろそろ戻らないとな)

プレストンや崖の居住地の問題を、放ったらかしにしている自分に気がついた。

私という男は自分のことだけに集中して、それでよいとする男であっただろうか？

いや、そんなことはない。そうではなかったはずだ。

私は真剣にサンクチュアリへの帰還を考え始めていた。

|||||

いろいろ考えていると、結局時間だけが過ぎてしまい。

私はマーケットによってアルトゥーロからキャップを受け取ると、パブリック・オカレンシアに帰宅した。

中に入るとすぐに、ナットを相手にコスワースが楽しそうに話していた。

「あ、ミスターおかえり。あと、これね」

そういうと彼女は手にした紙の束を私に差し出してきた。

「これは？」

「完成したばかりの最新号ですつ。マーケットには明日、発売！これは見本、といことで。ちゃんと読んでみて」

「——ありがとう、後で読んでみるよ」

どうやら私の取材をメインで扱っているらしい。ちらつとみると、不死身の男とか書いてあるようであったが、今は気にしないことにした。

「旦那様、なにかありましたか？」

「ゴズワース——」

ナットと犬のカールに挟まれたロボットはすでに私の考えを読んではしまったらしい。つくづく、へんなやつだと思うが。それがなぜか嬉しいときもある。

「そろそろ戻ろうと思う、サンクチュアリへ」

「え、ミスター帰っちゃうの？」

「そうですね。それもいいかもしれませんが」

私の次の目標が、この瞬間に決まった。

思えば少しパイパーの好意に甘えすぎていたのだ。

姉妹の住宅に、いつまでも傭兵まがいの男が転がり込んでダイアモンドシテイを騒がすのも決していいことではない。そもそも、私はこの住人ではないのだから。

私が戻ると聞くと、パイパーはひどく残念がり。ついには自分もついていくなどと口走りだしたのは困った。どうやらナットの話によると、数回分の記事になるネタをもらっているので、私に借りが出来たとも思っているのだろうという。

そういうことなら、私は彼女に頼みごとをすることにした。

探偵ニツク・バレンタインの生死。もしくは彼の足取り。

私はまだ一度として出会ったことのないこの探偵が、こんな時代にあつて広く人々の口にするような人物だとわかって、シヨーンの搜索を彼に賭けることに決めていた。

ママ・マーフィのサイトが正しいなら、私のこの判断はきつと報われるはずだ。

翌日の昼。

私はパワーアーマーの修理と、アルトウーロの店で手にしたキャップを使って新しい武器を購入すると、ダイアモンドシテイを後にする。

元は球場のスタンドを登る階段をひとつひとつ、パワーアーマーの力強い足取りで進む私の後ろでは。

元気なナットが、パブリック・オカレンシア最新号を知らせる声が聞こえていた。



K i l l i s G o o d (A k i r a)

グッドネイバーで宿泊といえば、それはレクスフォードホテル。受付に立つ老齢の黒人女性。クレールに片手を上げて挨拶すると、ハンコックはホテルのある部屋の前へと向かう。

グールであり、普段からどこか人を煙に巻くようなこの人物であるが。この時は面白いことに、ちよつとばかり困惑しているようで、彼を知る人物がいたらきつと映像を記録に残したいなどの感想を口にしたかもしれない。

部屋の前に立つと、すぐにノックをしてから襟元を正す。

すぐに扉が開かれるが、中にいたのは、寝起きらしい素っ裸の女性が前を隠すことなく堂々と立っていた。ハンコックはうろたえるでも、あやまるでもなく。ため息をつくふりをしながら、なぜか抗議の声を上げる。

「おい、ファブ。確かにおまえの護衛は必要だとも言ったし。お前の視線は時々俺の邪魔だともこの口が言ったことは認める。だがな、お前は俺の護衛なんだ。

いいか？雇用主との間の契約にはな。こういう時、ちゃんと前もつて休暇届を提出するものだ——」

「用件は、ハンコック？」

「先週話しただろう、今日だ。お前が必要だ」

「わかった。服を着てくるわ、待ってて」

会話の最中から、部屋の中から鼻につくあの特有の匂いが感じられた。

彼女が奥に引き込むと、シャワーでも浴びるのだろうかと思ひ。ハンコックは部屋に入って、ベッドの前に立った。

ダブルサイズの寝具は乱れ、同時に動いていないが、人が一人はいくらいの山が築かれていた。

ハンコックはそれを見ても好奇心は沸かないらしく姿を覆い隠しているシーツに手を出す様子はなかったが、ポケットの中からジュエツトを取り出すと自分に使う。

フウー、吐息を吐き。思考がはつきりしてくるのを感じた。

(ファーレンハイトの新しい男、か)

自分の護衛を勤める彼女が、これまでこのホテルに男を引きずり込んだのは何回かはあったが。それがこう何日も閉じこもって快楽をむさぼるようなことは、今回が初めてである。

それはつまり――。

「ハンコック、行きましょう」

「ん、もういいのか？」

「ええ」「――なら、俺は外で待っていても」

「その必要はない」

まるで彼女はこの部屋に、ベッドの上に誰もいないというようにさっさと先頭に立って部屋を出て行ってしまふ。ハンコックはそれを見てこの時、彼女をこうさせる男の顔を見ようかとダブルベットを横目で見て――やはり気分を変えるべきではないと考えて、彼女の後を追った。

ホテルの部屋は、再び静寂に包まれる。

しばらくするとようやくやくにだが、もぞもぞとシーツが動き、そして裸のアキラの頭が出てきた。

「――マジかよ」

ああ、そうだ。

マジだぜ。恐ろしく甘い味しかない、この悪夢。

|||||

この5日間、ベッドから出ることも服を着ることも許さない。

そんなおつかなくて最高にいい女から解放されたので、アキラは久しぶりにグッドネイバーの通りに出てみることにした。

この町は高い構造物の谷間と空間をふさぐ高い壁でがっちりと守られ、太陽が出ていても光がこの町のすべてを照らし出すなんてことはなかった。

アキラは数日に渡るアルコールと薬物を容赦なく体にぶち込んだ後とあって、空腹と寝不足。そして後遺症の影響らしい疲労感によって、体は光にあたることを拒否したかったので、悪い気はしなかつた。サードレベルに行くとき、バーテンでロボットのホワイトチャペル・チャーリーはアキラの顔を見て、いやらしい低い笑い声を上げて話しかけてきた。

「これはこれは、グッドネイバーの若き英雄のご帰還かい」

「英雄？ぼ——俺が？」

「ああ、そうだぜ。」

忘れもしないね、はつきりと覚えている。ここに自殺じみた大量のヤクを体にぶち込んで降りてきた馬鹿な若造が。俺の前に来てワインを注文すると一気飲みしやがった。

何だこいつはと思ったが、訳のわからないことしやべりだすから。俺は仕事をしないかと水を向けたら飛びついてきやがった。

そいつは1時間後には死体になってる、そう確信していたよ。

だがそんなことは俺の知ったことじゃない。この町に入ってきたまってるアホ共、そいつらのところに行つてちよつと殺してくれ。俺の要求はシンプルで、お前の返事もまたそうだった。

そして数時間後、お前は血まみれになって戻ってきた。怪我ひとつなく帰ってきた、そして服についているこれはあいつらの血だと言う。

俺はしびれたね。お前みたいな新人はこれまで見たことがない」

「なにソレ、どっかの狂人の話？」

「ああ、ソレは間違いない。お前は狂ってる、俺が保障する。」

ここまでだつて十分におかしい話だが、お前はここからさらに伝説を作りやがった。

ここで飲んでたあの恐ろしくおつかない女を『美しい』とかなんとか口説きやがって。お前を抱かないと眠れない、なんてキモい台詞を口にしたときは俺の神経回路が吹っ飛ばされるような衝撃を感じたね」

「……」

「ま、ここだけの話になるが。俺はあの時、お前は死んだと思ったよ。市長の護衛をするだけあって、あの女は恐ろしく強いからな。あんな口叩いて、無事ですむとは思わなかった——。」

ソレがお前、2人でレクスフォードホテルに入っただけで。部屋に閉じこもってずっと大声あげてやりまくってるなんて聞いたから何度目かの驚きだ。俺はただのバーテンだが、あんたを男として尊敬するよ」

「男？ロボットだろ？」

「ああ。だが、声でわかるだろう？俺は、男の、ロボットさ」

ヌカ・コーラを一本注文すると、それを一気に飲み干してしまう。

それで落ち着いたのだろうか。僕の腹は記憶にない大ききでグウと鳴る。

「数日分のエサを求めて這い出してきたようだな」

「食い物はあるよね？」

「ああ、とっておきを出してやる。ラッドスコルピオンのステーキだ」

「スカルピオン？それって、虫じゃないか？食えるの？」

「スーパーミュータントのアーマーすら引き裂く奴らだけあって、信じられないほど肉厚だぜ。その上、疲労回復と精力回復にも抜群よ。これを超えるのはデスクローの肉くらいじゃないか？」

いやなバーテンだ。前の記憶がほとんどないから、これからはそう覚えておこう。

「なんで精力？」

「俺はな、ロボットだから自分じゃ経験ないが。」

ここで大勢の男と女を見てきたんだ。お前とあのおかしな女のようなのは、この程度じゃお互い満足してないさ。

向こうだって確か今は市長と一緒にブツの引渡しで留守にしているんだらう？

あの女から本気で離れたいなら、今すぐ町を出な。でないと逃げ切れないぜ」

「——そのつもりは、ない」

「ほらな。こっちはお前もそう言うだろうと思っていた」

そう、僕はまだこの町を離れることは出来ない。

あの時の問題の発端となったメモリー・デンだが、自分は出入り禁止を言い渡されてしまった。オーナーのイルマは、自分たちの商売をしているだけで、それ以上の医療サービスはしていない。再び訪れた僕は、そうはつきりと断られてしまった。

自分についての情報がほしくて、どうやら僕は先走りすぎて手を貸してくれそうな人たちに警戒心を持たせてしまったようだ。これは大きなミスだった。

「なにか、新しい情報はない?」

「情報?それならあるぜ」

「?」

「ダイヤモンドシティだ。そこが少し騒がしい、なんでも凄腕の賞金稼ぎが現れたようだな。レイダー共の噂になっている」

「賞金稼ぎ?」

「ああ、そうだ。そいつがたった一人で、あちこちのレイダーやスーパーミュージタントを殺しまくっているという話だな——興味があるのか?」

「ない。なんでそんなことを?」

「んん——そいつな。着ているものがちよつとかわっているらしくてな」

「へえ」

「ジャンプスーツだってよ。Vault居住者が着るやつだ——数字によると、Vaultier」

レオさん。

ぐつたりとカウンターに突っ伏していた僕は、ホワイト・チャペル・チャーリーの言葉に背筋を伸ばして顔を上げる。

表情は消していたが、人を観察するのに長けているというの真実なら、これはもうバレバレだったろう。

「若いの、お前の着ているのも同じierとあるが。知り合いかい?」  
「——どうかな。どう思う?」

「へっ、そうかよ」

バーテンはグラスを取り上げて、わざとらしく布切れで磨き始める。

Vaultierのジャンプスーツを着た賞金稼ぎ——レオさんだ。

あの人は息子を探しに行ったはずだが、ダイヤモンドシティで暴れているということは上手くいつていないのか？それとも——。

「チャーリー、そいつか？そいつが俺の町の新しいプレイヤー？」

「ええ、そうですよ。ハンコック市長、お早いお帰りで」

歌姫の声に誘われて弛緩していた体が反応し、僕は体を起こすとカウンターから後ろに振り向いた。

ジョン・ハンコック市長、グッドネイバーの支配者。そして、多分、今の僕と寝ている相手の雇い主にして相棒。

「登場から派手に暴れまわってるらしいな、若いの。ここで何をしている？」

「自分の人生を」

「そんなことか——悩めば答えは出てくるか？」

「悩んじゃいない。〃 人生は計画するためではなく、行動するために作られた」

「ふむ、ルソーだったか？東洋人なのに古典に物知りだな」

知らなかった。なにかが頭の中で回転を始め、スパークするような感覚がして、気がついたら口に出していた。

「ということとは、ここで酒も薬も必要としないというわけか」

「そうでもないんだ。冷えたヌカ・コーラを切実に必要としてる」

「チャーリー、行動する若者に俺からも一本贈ってくれ」

「はいよ」

「どうも、市長」

例を言うとハンコックはカウンターのの上に乗せられたチャーリーが出す一本をとってから僕に向き直った。

「送ろう、ついでに少し歩かないか？」

なにか危害を受けるいわれはないよな、と考えるから少し遅れて僕

も立ち上がった。

ハンコックの気まぐれは今に始まったことではないが、今回の取引を前にそれを口に出しても別にファールレンハイトは気にしなかった。そもそもいつもはいない人だ。ただ、「今回が最後」だから礼儀として顔を見てやるという意味で来ると言っていたにすぎない。正直、だからこの展開はむしろありがたいものだったと言ってもいい。

現場ではすでに相手が待っていて、グッドネイバー組は5人に対し。向こうは「生き残っている全員」の11人が落ち着かなくしている。

「おい！市長はどうした？確か、ここに来ると——」

「ハンコックは来ない」

「なに？」

なぜかファールレンハイトの言葉に、相手は全員で動揺をみせる。

「ど、どうして？」

「別にかまわないでしょ。いつもいなかったのだし」

「だけどよ——」

「市長は遊んでいるわけではないわ。出かけに急用が入ったの、それだけ」

妙な動揺の仕方をしたせいで、場の空気が張り詰めると。取引を行うはずの両者の間で、にわかに緊張感を高まらせていた。しかし、そんな中でこのファールレンハイトだけは変わらず落ち着いており、先ほどと同じく穏やかな美しい声で淡々と返答を返している。

彼らの最後の取引は、こうして始まるまでがグダグダになった——

グッドネイバーの通りを、ハンコックと僕はならんで歩く。

行き交う人々はこちらをマジマジと見つめるやつは一人もいないが、どこからともなく送られてくる。刺すような視線はしっかりと背中を感じる事ができた。

「この町はどうだ、若いの？」

「悪い印象はないよ。それは間違いない」

「ふふ、そうだな。そりや当然だ、市長がいいからな」

僕が理性的に会話するグルーという存在を肩を並べるくらいに身近に見たのは、彼が初めてだった。

「お前のことは、特にここに来てからのことは全部知っている。俺の町で起こったことだしな」

それはそうだろう。

まるでこの町を飾るかのように配置されたスーツ姿の男たち。これは全部この市長の部下なのだ。

あの日の僕の暴走の一部始終は、彼らにも全部見られていたはず。

「チャリーリーの依頼、あれは俺の出したものだ。お前がそいつを見事にやってくれて、感謝している」

「あー」

「だから、俺も」お前の事」には踏み込むつもりはない。それを伝えておきたかった」

なにやら空気が変わったか？

「意味が、わからないん——」

「あの日、自分がつくった死体の山を確認しようと思っていたら？この町では俺の部下の目があるから、まだ行ってないようだがな。」

そんな必要ない。すでに俺が死体を片付けさせた。町の美化に必要なことなんでね」

「……」

「若いの。いくらこんな世界でも、自分が殺した奴の状態をわざわざ確かめようとする奴はまともじゃない。そんなことを必要とするのは、腐った死体で慰めを得る変態か、面倒な事情を抱えた奴のどちらかだ」

そういうとようやく手にしたヌカ・コーラを僕の体に押し付けてきた。

「気になるだろうが、変なことは考えないほうがいい。忠告だ」

「——そのようだね、気をつけないと」

「そうだ、そうした方がいい。俺の邪魔者をフェラルのように引き裂



いていないか、とか。スーパーミュータントのまねをやっていないか、とかな」

やはりそうだったんだ。この2本の腕を振り回して人間に襲い掛かり、傷ついた体を癒そうとして肉に歯を立てる。

いくら薬でぶっ飛んでいたとはいえ、僕はレオさんではないから無法者達を相手に戦いで圧倒できたとは思わないし、考えられなかった。そして市長の言葉で、それは正しいと証明された。

他人の目がある町の中で、こんなことを続けるわけにはいかなかった。

「俺に言わせるなら、世界はちよっぴり壊れていて、おかしくもあるが。まだ狂っちゃいない。」

だが秩序を守らせるには力が必要で、銃がいるし。安全はただではないからキャップが必要だ。そして皮肉なことに、そのどちらもあるとそれを目当てに多くの馬鹿共が足元に擦り寄ってくる――。

フアーレンハイトと寝ても、俺は気にしないが。お前のメモリー・デンでおきた騒ぎは、俺の興味を引くのに十分な出来事だった」

彼はこの町の市長だ。当然、噂は耳にするだろうし。この通り、噂の真実だつて知ることができる。

「教えてくれ。イルマの話ではお前は人造人間ではないそうだ。だが、それだけでは足りない」

「足りない？何が？」

「俺がお前を殺さないですむ理由だ。だから今だけは正直に教えてくれ。」

お前はインステイチュートが生み出した、化け物のひとつなのか？やつらが送り込んできた、それか？」

その問いに答える言葉を僕はまだ持っていない。

あんな状態に、あんなことをやる自分が普通の人間であるはずがない。それは理解できる。

だが、それで自分はナントカいう奴らの作品である、などと断言できるとはだろうか？

「ハンコック市長、俺もそれが知りたい。わかっていることがあるな

ら教えてほしい」

「素直だな、そして馬鹿なのか。俺が知っているわけがないだろう？」

人造人間に間違われるような変な変なウエイストランド人、俺が教えるお前のことならそれが全部だ。後は自分で、本当の自分とやらでも探してみればいい」

「——できるだろうか？」

「知らないね！だが、人造人間に興味があるというならひとつ心当たりがある——レールロードを知っているか？」

「!?」

「奇妙でおかしな連中さ。だが、お前の役に立つかもしれないな」

「どうやらハンコック市長の手は、想像以上に大きいものだったようだ。」

彼の耳はこの町だけではなく、この連邦の外にある居留地にも届く高性能なものでもあるらしい。

自分探し、たどり着くことのない幻想への道。

だが、自分が次にとるべき行動を考えたとき、まず頭にあつたのはバンカーヒルで別れた人造人間の彼のことであつた。

だが、それは僕が彼のように助けを求めるといふわけではない。

噂で耳にしていたことがある。このグッドネイバーと同じように、レールロードもまたインスティチュートと敵対している組織である、と。

つまり今のように、むこうもこっちを怪しまない理由はないのだ。接触するには、単純ではない方法が必要になる——。

取引はようやくくにして再開された。

だが、ファーレンハイトにはどうでもいいことだった。

「よし、いつもどおりやろう。ブツを見せてくれ」

「嫌よ」

「なに？」

「断る、聞こえなかった？」

「——おい、どういうことだ？気分を害したのならこっちも謝るさ。」

別に……」

「今日はずいぶんと多くつれてきたのね」

ファーレンハイトは感情のない美しい声で、相手の調子よい言葉をさえぎってみせる。

「そりや……念のためだ。気にしていたとは思わなかった」

「気にしてないわよ。そう、ダイヤモンドシティの賞金稼ぎに八つ裂きにされたばかりのあなたたちなんて」

「——!?!」

笑ってしまうというのはいかようなことだろう。

口に出された途端、相手は全員がいつせいにその仮面が剥がれ落ちていくのがわかる。取引相手におきたトラブルを、こちらが知らないわけがないのに。

「住処を根こそぎにやられたそうじゃない。でも、そんなこと口にしてないでここに来たのね。今日の取引のために」

「そ、そうだ」

「良いことよ。市長も気にしていたわ」

キヤップだけのつながり、それもレイダーなんてこんなものだ。

情報もキヤップも、グッドネイバーが存在する限りハンコックへ流れ込んでいく。彼らが今日の取引の支払い能力がないことなど、とつくにわかつていたことだ。

「信頼してもらいたい。市長に、逆らうなんて。そんな間抜けはここにはいないさ」

「ならいいの。こちらでも取引できるなら」

仲間にファーレンハイトはあごで指示を出すと、背後の部下が「いつもとは違う」布で隠された箱を持ってくると、彼女はその布を取り払う。

レイダーたちは血走り始めた目で、その中を覗き込むと顔を引きつらせた。

そこには彼らの望む物資はなかった。

かわりにあったのはミニガン——アッシュメイカーと名づけられた、ファーレンハイトの振り回すそれが入っていた。

「いいわよ、始めましょう」

ハンコックの護衛は変わらぬ調子でそういうが、同時に軽々と手にしたミニガンの銃身がモーター音を立てて回転を始める。

レイダーたちの反応はそれぞれ違った。

早々に背中を向けて逃げ出そうとする賢いやつ、物陰に隠れようと走り出すやつ。すでにその判断もできなくなって、銃口をファーレンハイトに向けようとする奴。

——違う、そうじゃないのよ

発砲音に続き、空間が火線で埋め尽くされていく。

前に立つ存在が全て灰になるまで、彼女はいつだって止まれない。

「姐さん、アネサン!!」

アツシユメイカーによって体を何度も貫かれ、傷口から火を噴いてついにその体を焼き尽くしても。まだ引き金から指を離さぬ彼女の尋常ではない様子にあわてて周囲が止めに入る。

グッドネイバーが出る前、あんな話題の中心だった彼女にしては意外なことだが。

その後姿から感じるのには驚いたことに、不満——何かに対して次第に高まっていくそれをここで憂さを晴らしているように見えた。

|||||

2日後のグッドネイバー、そしてレクスフォードホテルの一室。

今度は訪れるものはいなかったが、ファーレンハイトは身支度を整えると部屋を出て行った。別れの言葉短く、なかなか衝撃的なものだったが。なぜかそれは予想できたものだったような気もする。

(とんでもない女に引っかけたのかも)

今だベットの中で未練たらしく僕は残り香を楽しみながらも、視線は彼女が出て行ったドアではなく。脇の机に山と詰まれ、そこから床へと崩れ落ちてもある薬物の山を見ていた。

2日前、町に戻るなりファーレンハイトはアキラを見つけ出し。無言のまま問答無用とまたこの部屋に引きずり込んだ。

この明らかに尋常ではない量の薬物の山を用意して――。  
興味深い最高の体験をさせてもらったとは思うが、あきらかにこれは良くない。というか不味い事態になっている。

口の中は渴き、後頭部には虫が這い回るようなかゆみを感じる。気分は落ち込み、それでいて妙にクリアに現実を認識している感じだ。狂った甘い夜の記憶と、立派な中毒者の誕生だ。

だが――ああ、なんて皮肉なんだろうか。

なにもかも自棄になりそうで、ギリギリに追い詰められたような焦燥感の中で生きている。そんなちよつと前の自分はもうこの中にはいない。

グッドネイバー、なるほど確かに噂のとおり平和とは程遠い町だ。だけど僕は結構――このことが気に入っていた。

部屋を出た僕は、心に決めていたことがある。

ひとつはまずレールロードに接触すること。これはまあ、問題はな  
いと思う。

変人の集まる組織は、この悪人達の憩いの場でも有名であったが。あのバンカーヒルという商人の町でもそうだった。

彼らの中にレールロードにつながるものが、間違いなくある。あとはそれをたどればいいだけだ。

そしてもうひとつはサンクチュアリへと帰還することだ。

ダイアモンドシティでのレオさんの活躍を耳にしたが、考えてみればあの人もサンクチュア리를離れて一ヶ月近い。

僕がこうして“遊びまわっている”ことは知らないはずなので、そろそろ戻ろうと考えるのではないだろうか？

ブレ斯顿達には別に思うところはないが、レオさんとの関係を断ち切ること――それはちよつと僕には考えられないことだった。

僕の過去はVault 111から始まり、そこでレオさんには良くしてもらった。あの人と別れる運命だとしても、それはまだ先のものだ  
だと信じたい。

町の住人たちも言っていたし、確か彼女もベットの途中でそう言っていた。

でも実際に自分で確かめてみないことには、やっぱりそれが本当だとは思えないのは真理というやつだと思う。

「おやおや、新顔さんかな」

「本当にこれだ。話していたとおり」

「何を聞いたのか当ててやろう。ここに市長に会いに来た。そして会えた。違うか？」

「町でみんながそういつてた。てつきり冗談かと——」

「驚きに満ちた毎日で楽しそうだ。ここは『人民による、人民のための』グッドネイバーだ。市長に話があるというなら、俺はそれをちゃんと聞かす。それでどうした？」

市長室——開かれた扉のむこうにある部屋の中には市長本人と、先ほど別れを告げられたばかりのおっかない護衛がいる。彼女はこっちにはもう興味がないようで視線は手元の本から動かない。

僕は僕で、市長の前で彼女のひざにすがり付いて愁嘆場をやるつもりではなかったから、彼のほうを向き続ける。

「実はちよつと困ってる。ここに來てからずっとトラブルばかりだったんだけど、気がついたら自分はこの町の新しいプレイヤーって、呼ばれているらしいんだ」

「ああ、その通りだ新人のボウヤ」

「でもそれはちよつと買いかぶられすぎていると思ってる。なんで、この町を離れる前にそれにふさわしい仕事を市長に世話してもらえないか、お願いしようと思つて——」

「どんな理屈だ?」と思つたが、ここに女の尻を追つかけてきたといわない若者がおかしくて、つい希望をかなえてやりたくなつた。

「なるほど……いいぜ、ひとつある。」

偵察を送ろうと思つていた場所がある。ピックマン・ギャラリーと呼ばれているそこは妙なことがおこっているらしい。それはレイダーの縄張りのはずなんだが、奴等はどうしてか沈黙している。

まるでそれがばつの悪い情事の後であるかのように。俺はそいつ

の内容について情報がほしい、だから偵察が必要というわけだ。わかったか？」

「わかった、やってくるよ」

「人の手がほしいなら、サードレールにいつてみるといい。確かしけた傭兵が昨日あたりから戻ってきていると聞いた。話は終わりだ」

僕の用も終わった。

ハンコックはアキラが出て行くのを目で追った。

あの若者は、結局ファールンハイトにはなにもしようとはしなかった。1週間近くを寝る間も惜しんでやりまくっていた女に対する態度としては、それはあまりにも冷酷に思えた。

「なあ、あの若いの。お前は気に入っていたんじゃないのか？」

「そうよ、好きだったわ」

「——これ以上聞くと、後悔しそうだ。悪い癖が、また出たんじゃないと祈ってるぜ、相棒」

自分の護衛は——相棒はなにも言い返さなかった。

だが代わりに笑みを浮かべる。それは肉食獣を思わせる、凶暴で美しいものだった。

## 眠る連邦

男は顔を上げると、自分がターミナルの前に座っていたことを知る。

寝ていたのか？それとも——意識を失っていた？

どっちでもいい。どっちでも構わない。

とにかくまた失敗した。

これまでもそうしてきたように、今回の試みの一部始終と結果を記録。改善して次に……次に生かさない、また目も当てられないことになる。

それはわかっている、これは実験なのだから。失敗しても、成功するまで繰り返し返す。

だが、なぜなのだろう？

指が動かない。手をピクリとでも動かしたくない。上腕は針で穴だらけになって、うつ血しているそれが不快だから？きつとそうだろう。そうじゃないなら、なぜ動かない？

男は左を見て、右を見て。最後に下を見てターミナルをもう一度確認した。

画面には何も映っていない。ただ、入力待ちのそれが点滅を繰り返しているだけだ。だから、自分は何かを書き込まないといけない。男は再び、失敗に思いをはせた。

思考がループしている。

だが、問題はそれじゃない。そうじゃないんだ。

男はターミナルの前に座る。だが、何も書くことができないままだ。

|||||

レオがダイアモンドシティを去るのに合わせるように、パイパーも町を離れる。



彼女が目指すのはバンカーヒルだが、さすがに女一人で歩きまわれるような場所ではないから、旅する商人を探して一緒に連れて行ってもらうことになる。

だが、今回はハズレを引いてしまったようだ。

商人の予定が、バンカーヒルへはグッドネイバー経由だと言ったから。

妹のナットではないが「目からウロコのパブリック」を体現するライト姉妹にとって、あの町はなんとも居心地の悪い場所であることは間違いない。

無法者、殺し屋に詐欺師と悪党には困らない、そんな町だ。それでも心のそこから憎めないのは、あの町でなければ生きられない。そんなかつてこのダイアモンドシティに住んでいたグールたちの多くがそこに住み移ったという事情を知っているからに過ぎない。

だが、まあ。

今回はそれでもいいのかもしれない。

パイパーの今回の目的、それはダイアモンドシティから消えた探偵を見つけることである。

扉をくぐると、この退廃の町は今日も変わってはいないように見えた。

商人はこちらの様子を見て察してくれたようで、「明日には出発する」とだけ言い残すとさっさと商談の席へいつてしまった。

(さて、どうしようかね)

ここは確かに安全だが、安心できるというほどじゃない。

自分でもある程度自覚するくらいには「いい女」にとって、ホテルに泊まる方が危険だったりするものだ。

ということ、むかうのは酒場。そのカウンター席にへばりつき、タバコとビール一本でじつと明日の朝まで時間をつぶすだけだ。

危険な町の酒場で、これほど色気も面白みもない時間のつぶし方をする女なんて。きつとたぶんだが、自分くらいのもだろう。

酒場サードレールで、いつもいつもどこか不満そうなロボットバー  
テンダー・チャーリーは。目の前で灰皿の上に数本のタバコと、たつ  
た一本だけ頼んだヌカコーラでカウンターに突っ伏していびきをか  
く客に苛立っていた。

その客の名は——パイパーという。

「信じられないね、バーに来て。酒も飲まず、男もひっかけない」

「ゴッ……グオツツ……ウフ♪」

「よだれたらすわ、いびきを平然とかくわ。まったくなんて客だ。商  
売上がったりだ」

そもそもここで寝るといふ神経がどうかしているといえる。

この町を訪れた悪党は必ず顔を出すといえはこの酒場。荒くれ者  
が出入りする中で、綺麗な顔の女一人が無防備をさらして無事だとな  
ぜ思えるのか？

(ま、この女相手にはそれもないか——)

ダイアモンドシティで新聞社をやっている姉妹の姉。

連邦で月に何度か騒ぎを起こしていると、この町でもそれはそれは  
有名な話だ。トラブルを探し、トラブルに自分からかわつていく  
女。この時代、そんな狂った奴とかかわりあいになりたいと考える人  
間はほとんどいない。

だが、今日は男にも馬鹿がいたらしい。

雄々しく大いびきをかくこの女の隣の席に座ったそいつは、なれな  
れしくもチャーリーに話しかけてくる。

「俺はビールね。それと——彼女、どれくらい飲んだ？」

「一本も」

「は？」

「だから、一本も頼んじやいない。肺を真っ黒にするだけの煙をスパ  
スパやって、ヌカコーラがぬるいと文句をつけて、この通りホテルで  
もないのに気持ちよく寝てやがる。

おかげでマグノリアもやる気をそがれちまって、今日は部屋に戻っ  
ちまったよ」

「それはそれは、珍しいことで」

「色気のないその女、起こすんだろ？別にこまわれないが、騒ぐなよ？この店でトラブルはごめんだ」

「ああ、わかってる」

男はビールを受け取るとそれに口をつけ、チャーリーはその場から離れた。

「可愛い寝顔だな、おっぱい揉んでも今なら気がつかないか？」

「……」

「へっ、いびきが止まってるぜ。お嬢さん」

男がそう口になると、それまで突っ伏していたパイパーは顔を上げ——口元のよだれを拳で拭き、目元の目やにを指ですばやくこすり落とすと——まるでそれまでが演技でしたといわんばかりに、男の横顔をにらみつけた。

「眠る美人を前に、男の願望を口に出しただけ——」

「何の用？この恥知らず」

「ヒデエな、同業者にそれかよ。もっと仲良くしようぜ、なあ？」

「面白いこというね。『仲良く』だって？このパイパー・ライトさんと？本気でいってるの？」

「おててを繋いで、につっこり微笑むくらいってことだよ。それ以上はこつちからお断りだ」

新聞記者の同業者。まあ、間違っではない。

男の名前はアントニー・コロンボ。

他人にはソニーと呼ばれ、グッドネイバーでは人気のDデスパレート Pタッチダウン T

誌のことである。彼はその唯一の敏腕記者だ。

「なに？情報でもあるの？」

「お互いの恋人の悩みについて、でもいいぜ。酒場で男女がいきなり仕事の話ばかりじゃ、いくらなんでも色気がなさ過ぎるだろ？」

「あんたが恋人？どうせどつかの売春婦にまたいいように振り回されてるんでしょ」

「そっちは長いことクモの巣が——」

「ソニー、喧嘩売ってる？話があるなら、さっさとしたら？」

「……わかった。怒らせたかったわけじゃない」

ソニーが軽く両手を挙げて降参を示すと、パイパーはひとまず落ち着く。

「それでなんなのよ？あんたのところ、どうせ毎年やってるアレ。また今年もやるんでしょ？」

「ああ、まあな。発行人にして給料を払ってくれる、お偉い編集長様はそう言ってる」

「ホント飽きないし、好きだよね。あのアホなランキング」

「輝ける『今年の殺しランキング』な。ああ、マジで糞だぜ」

グッドネイバーで好まれるのは悪党の確定した情報と、巷で自分が話題になれているかどうか。

DPT誌は彼らのために、日夜新鮮な武勇伝を求めてあちこちの悪党に取材を申し込んでいた。

「アホなレイダーなんかにはイイ話しを聞こうとか馬鹿をやってるから。あんたの後輩、いつもすぐに死んでいるじゃない」

「ああ！去年は2人。大物からコメントをもらってみせるとか吹いて、いつものように帰ってこなかった。だが今年はゼロ、新人もゼロだったけどな」

「おめでと、葬式代もゼロでよかったネ」

「ああ、ありがとよ」

「ここまでまったく理由を口にしない相手に苛立ちを感じ、パイパーは睨み付ける。

「それで！なによ？」

「——あんたの町に賞金稼ぎがあらわれたそうだな？」

「ダイヤモンドシティ？ああ、そうね。どうせ聞いているんでしょ？」

「この市長がそれで取引相手をいくつか潰されたってな。その原因が、そいつだと」

(ブルー、ちよつとまずい奴を怒らせちゃった？まさかね)

「心配はいらない。市長は怒ってないってさ。元々、いつ切ろうか考えていたから丁度よかったと」

「そ、そうなんだ」

「俺が知りたいのはさ、そいつ。Vault居住者だって話の方だ。」

「どうなんだ？」

パイパーの脳内が激しく動く。

ソニーは馬鹿じゃないから、どうせブルーと自分が組んで動いたと知っていて聞いているに違いない。とぼけてもいいが、そうなるとうこうは興味を失って立ち去ってしまうだろうし。

逆になぜそんなことが知りたいのか、わからなくなってしまう。

「ジャンプスーツは着てたな、ウン」

「パブリックの最新号、もう読ませてもらったよ。こっちでもちよつとした話題になつてる」

「——もう？早いよね」

「当然さ。『Vaultierから来た男』つてのは、今この町でもちよつとした騒ぎになつてる」

「？」

「少し前だ、このグッドネイバーに新しいプレイヤーが登場した。黒髪の、Vaultierのジャンプスーツを着た男。かなり話題になつてる」

「本当？名前は？」

「わからない。だがそいつ、この町に現れるなり市長の依頼を受けて町の中に死体を積み上げ。市長の女をモノにしちまった」

「なんだって!？」

「——とにかくそいつの情報を知りたいんだ。興味がある」

「そう、言われてもねエ」

パイパーは顔をしかめる。

てつきりレオの話が聞きたいのかと思つたが、どうやらソニーは別の誰かを知りたがっている。だが、それはパイパーも変わらない。ブルーは自分の他にも外に出てきた居住者については一言も話したことはなかった。

そういえば、よく考えてみたら自分もインタビュウでは「他に一緒だった居住者は？」とは一度もたずねていなかった。マズイ、これは自分の手落ちであつたかもしれない。

「その——その彼、今はどこに？」

「わからない。だから……いや、これも忘れてくれ。邪魔したな」

深刻そうな顔のソニーは立ち上がると、あつというまにサードレールから立ち去ってしまった。パイパーは鳩が豆鉄砲を食らったかのように呆けてしまったが、すぐに気を取り直すと時計を確認した。

日にちは変わっていたが、まだ深夜をすぎたばかりだった――。

グッドネイバーの瀟洒な家具の並ぶ部屋の一角。

深夜にもかかわらず、外のネオンサインが部屋の中を照らし、人の姿がないことがわかる。唐突に部屋の奥から濁声があがると「ソニー！俺の糞つたれの部下はまだ生きてるか!？」と叫んだ。

もちろん問いに答えはない。

だが、声の主は何か気に入らないのか。ドタドタと音を立てると、扉を開けて入ってくる。ネオンサインの明かりに照らされた立派な机のひとつへ近づいていく。

伸びる手は、机の上の書きかけの記事をとりあげた。

『このグッドネイバーで2287年も終わりが見える今。

我々は――本誌『デスクパレット・タッチダウン』は恒例の年間マードーランキングを発表を前に、確信を持って発表せねばならないことがある。いや、知らせたい事実があるのだ。

連邦は、ついに新たな波に飲みこまれた。

これこそがレイダー・ウェイブ。無法者達の革命、暴力による黄金時代の到来だ！

かつてにおいてレイダーとは狼のように放浪し、腹をすかせた小集団を指すものであった。

だがこの連邦では、どうだ？南部にはガンナーがいる、東にはフォージが、西はまだ混沌としているが。北にはついにあのジャレドが君臨し、大物の無法者たちの組織が、ほぼ全域で幅を利かせるまでになっている。

この流れを変えることが、果たして誰にできるといえるのだろうか――

それは彼が部下であるソニーに、数日前に没と告げたくならない妄

想文であつた。

『ミニッツメン崩壊に導いたガンナーの活躍から、ついに連邦はレイダーという存在に精神から犯されてしまい。人の持つ良心やモラルといった自浄作用はついに働くのをやめてしまった。これだ、この真実だ。』

人の歴史を正義と悪で考えるなら、つねに勝者には正義があり。敗者には攻められるべき悪があるものだった。

だが連邦はそれをついに失ってしまったのではないか？

レイダーはいつからか正義となつた。人々の信じる悪は、その意味を変えてしまったのか？

レイダーという傷の痛みを治療するのではなく。さらに多くの別のレイダーを立たせることで。連邦は麻酔という快楽作用で苦痛をごまかし、癒すようになってしまつてはいないか——』

男はため息をついた。

「——あの糞野郎め、まだこんな寝言を」

見せられたときはまず鼻で笑ひ。大いに嘲笑つてやつてからつき返したというのに。

あの可愛げのない野郎は、あきらめきれないらしく。わざわざ一部を書き直して残していやがつたのだ。

男は闇の中、椅子の上に古女房よりもでかい自分の尻を下ろすと、シガレットケースに指を伸ばした。火をつけ、煙を吐き出すと、苛立ちや怒りが静まるのがわかる。

彼の自慢の部下は浮かれているのだ。

あのミニッツメンの最後を、まるで旧世界からわずかに残された良心の死だと勘違いしている。

糞のような殺し屋だのレイダーだの相手にしているくせに、妙なところでメルヘンというか。おセンチというか、変な奴だ。

(正義が死んだ、だ？ まつたく餓鬼じゃねエか)

ミニッツメンの崩壊なんて、ほとんど時間の問題だつたことはこの町にいれば予想できたことだ。

かつては強い正義感と目的意識を持つリーダーに率いられ、一大勢

力をなした彼らだったが。自ら率いるリーダーを互いに憎み、妬み、足を引っ張るようになれば組織は腐敗し、終わりはあつというまに迫ってくる。

結局は、骨があつても善人面が大好きで何もできない奴と。密かにキャップと力に飢えた馬鹿が次第に離れていって、クインシーの虐殺で自分達に止めを刺したに過ぎない。

だがそれだけだ。別にこの連邦の人々の価値観が、変化したわけじゃない。

それに所詮、レイダーはレイダーでしかないのだ。

ならず者で、我慢ができなくて、やりたいようにやろうとして、そのせいで無意味に死ぬ。

そいつらがたまたま今はうまくやっているというだけで、それこそ嵐がやってくれば——そう、あの時。伝え聞くキャピタル・ウエストランドや。モハビ・ウエストランドの『ザ・デイバイドの戦い』のようなそれがここでもあれば、すぐにすべてが逆転する。

連邦は今、その時が来るのをじっと待っているだけなのだ。

そしてそれが来たら——うっかり自分だけは巻き込まれないよう、首を縮めて嵐が通り過ぎるのを待つしかないのだ。

|||||

サンクチュアリに約束を守り、ブレ斯顿は留まっている。

だが彼の日々は次第に彼自身の手をはみ出しつつ、困難なものへと成長していた。

サンクチュア리를飛び出していったアキラはいいものばかりをただ置いていったわけではなかった。

風力発電装置の中に、巧妙に隠された発信装置が組み込まれている。これは、この場所に新たな居留地が誕生し、新しい住人を求めているという、レオのメッセージを繰り返すものだった。

電波はそれほど強くはないようだが、それでもメッセージを耳にしたと口にする入植を希望する者たちがあれからここに姿をあらわす



ようになった。

当然だが、心の準備ができていなかったマーシーは発狂し、夫のジューンはそれをなだめようとしてまたもや失敗していた。だが、今回ばかりは彼女の意志など気にしてはいられない。

アキラの置き土産はむしろ歓迎するものであり、それを耳にして実際に訪れた人がいるというのは喜ぶべきことなのだ。この場所がこれからも町としてやっていくには、どうしたって人が足りない。

だが、それがこれだけ大変な仕事のように感じるということは、あの青年が言い残したように自分が満足に仕事をしていないということの証明ではないか――。

プレストンは正直な話、責任を感じて落ち込んでいた。

だが、泣き言は口にはできないと必死で表面上ではそれを隠し通そうとする。

すでに10人近い新たな居住希望者がここにはいる。

だがプレストンたちが彼らに提供できるものはほとんどない。結局、アキラが設計した仮設住宅は破壊され放置されたままだったので、隙間風がはいる旧時代から残った建物をわりあてていくしかなかった。

（俺はこの立ち上がりかけた町をひとつ、満足に機能させることすらできないのか!?!）

再びあのクインシーから逃げ続けた惨めな逃走の日々が思い起こされる。

守るべき人々は倒れて次々と減り続け、仲間ともはぐれ、彼らの生存も期待できない。これがあのミニッツメンの成れの果てと、信じたくない現実。

そんな揺れるサンクチュアリーを好奇の目で見回しながら訪れた商人がいた。

「まさか、本当にできたとは思わなかったね」

カーラと名乗る彼女は、ここに来る旅の途中でVaultジャンプスーツを身に着けた傭兵風の男とロボットに出会ったと口にした。

レオのことだとすぐにわかり、彼の無事を知ってプレストンは喜ん

だ。

そして同時に暗い気持ちにもなる。彼の旅がこのまま順調に進み、一段落してこの町へ帰ってきたとき。彼には自分たちがアキラにしてしまったこともちやんと説明しなくてはならない。

彼はそれをどんな顔をして聞くのだろうか？

|||||

スラブはレイダーとして今、この瞬間に完全なる勝利を確信していた。

あの呪わしきピックマン・ギャラリー。そこをついに自分と自分が率いたレイダーが制圧してやったのだ。これはメインデッシュ、きつと忘れられない記憶になるだろう。

「こんな地下道の果てまで追いかける羽目になったが、ついに捕まえたぞ。ピックマン」

目の前に立つ、顔色のよくないスーツ姿の男は。恐れるべき無法者3人を前にしても、その顔に恐怖の色がない。それがなんとも憎らしい。

「俺の仲間たちをさんざん追いかけて回して、好き勝手に拷問し続ける権利が自分にあると本気で思っていたのか？今は俺たちが、楽しんでお前を殺してやる」

3人の持つサブマシンガンが構えられる中、スラブは背後の通路の置くから苦しげな男の声上がるのを聞いた気がしたが、今はそんなことに気をとられる場合ではない。

絶頂の瞬間を迎える直前のように、満面の笑みを浮かべ。カウントダウンは開始され、最後の一押しとばかりに指に力をこめていく——そしてそんなスラブの後頭部に45口径仕様の弾丸が次々と叩き込まれ、榮譽をとり損ねたレイダーは頭を粉々に粉碎される。

惨劇は始まると瞬時に終了した。

薬物の作用で瞳孔が開いたままのアキラは通路の暗がりから飛び出すなり、レイダー達を問答無用で襲撃した。手にしたサブマシンガ

ンは火を噴き続け、スラブともう一人の部下をあつというまになぎ倒して見せた。

残った一人はピックマンか、アキラかで迷い。そこをつかみかかって来るピックマンに襲われ、あつというまに引きずり倒されると動かなくなるまで滅茶苦茶に殴られ続けた。

レイダーが死ぬと、2人は向かい合う。

「どうやら助けてもらったようだ、礼を言う。こいつらは万死に値した」

「別に——なぜあんたを？」

「意見の相違というやつだよ。私が彼らの首を切り落とし、飾り付けのため集めることに異議を唱えていた。まあ、ここまでそれを主張しに来るとは思わなかったが。なに、次は私が彼らのところにまた話しに行くでしょう」

「少しでも利口なら、そいつらはすでに自分達の家から逃げ出しているかもしれない」

「私からは逃げられないさ……君には、大きな借りができたな」

「ちよつと、助けただけだよ」

「いや、謙遜はいらない。スラブは大勢の部下を連れていた。君がここにいるということは、つまり彼らがどうなったのか。考えるまでもないことだ、本当に感謝している」

「手榴弾の使い方学ぶついでだった」

「是非、私の感謝を受け取ってほしい」

そういうとピックマンは鍵を差し出し、半ば強引にアキラの手に握らせてきた。

「それならあなたの絵を一枚くれないかな？強烈で、印象的なものばかりだった。今はないけど、いつか自分の家を持ったらそこに飾りたい」

「よいセンスも持っているようだね。」

ふむ、いいだろう。私のギャラリーにある『スタンレーのピクニック』を見て、好きにしてくれ。あれなら君にもぴったりだと思う」

「わかった——アドバイスをひとついいかな？」

「なにかな、友よ」

「グッドネイバーの話だと、ここはレイダー達の話題になっているよ  
うだ。第2、第3のスラブ？そんな奴等がここに押しかけるのも、時  
間の問題かもしれないよ」

「わかつてる。これまででは緑の巨人、商人にスカベンジャー、奇妙な隣  
人とレイダー。どれもが見分けが付きやすいとあって満足しきって  
しまった。

「今後はしばらく、画材は別に集めるつもりだ」

「そのほうがいいだろうね——奇妙な隣人って？」

「ああ、すまない。死の恐怖を逃れ、生の喜びにあふれ、口がすべって  
しまったようだ。隣人というのは、あのレールロードの奇人達のこと  
だよ。彼らのヤサが近くにある」

「——そうか、やつぱりあったんだな」

「アキラは小さな声でつぶやいた。

「友よ、どうやら君は彼らにも興味があるようだ」

「バンカーヒルまで彼らの仲間と一緒に旅をしたんだ。その彼の口ぶ  
りから、グッドネイバーとの間になにかあると踏んでいただけだよ。  
探すのはこれからだった」

「なら、私が答えを教えてしまったわけか。『レールロードをたどれ』  
これは彼らがそこかしこで広めている言葉だ。聞かれて困ったら、口  
にするといい」

「なるほど」

「後は私からもアドバイスをひとつ。君のような目立つジャンプスー  
ツ姿で一人で歩き回るのは感心しない。ここは危険な町だ。決して  
大通りを一人で鼻歌交じりに歩き回るような場所ではない」

「どうしろと？」

「そうだな、グッドネイバーから来たといっていたな？なら、そこで傭  
兵でも雇ったらいい。

「奇人連中は自分達の存在を隠し、嘘を好む。彼らに近づくななら、彼  
らが理解できるように君も努力が必要になるだろう」

「わかった、そうしよう」

「ではさらばだ、若き友よ」

スラブをはじめとしたレイダーの死体を打ち捨てたままアキラは一人で地上に出ると、再びギャラリーへと戻った。ギャラリーの入り口脇に並ぶ絵の中には、確かに彼が口にした『スタンレーのピクニツク』なる壮絶な嫌悪の情を抱かせる絵がそこに飾られていた。

これをどうやって安全に運び出そうか？

考えながら絵を取り外すと、裏側に隠し金庫があった。

なるほど、無理に渡された鍵はこいつに使えということか。中をあけてみると、そこには礼状とギャラリーの主からの贈り物が用意されていた。

『芸術家は、一目見ればその存在の本質を見抜く。また会おう、殺人鬼よ』

ひどいものだ。だが、贈り物も絵も気に入った。

アキラは死体が横たわるマットの前に立つと、それを蹴とばし。マットレスの表面の布を切り裂くとそれで絵をくるんだ。

グッドネイバーには、この美しい真つ赤な絵とグッドニュースを届けることになるだろう。

|||||

穏やかな睡眠の最中であっても、それは突然始まることがある。

どんな老人でもするように、うつらうつらする。浅い眠りは夢の変わり、突如としてサイトの発動で別のものになってしまう。

「ママ・マーフィー！あんたのサイトは、もうすぐ俺のものだ！」

狂ったように叫ぶ少年の顔が見えた。

幼くとも、その表情は凶悪に過ぎて、まるで獣のようで恐ろしいとしか感想が出てこない。

「あんたは俺のものだ。あんたの力も俺のものだ！」

激しい感情を向けてくる相手を前にして、しかし老婆はあわてるそぶりはなかった。

サイトに真実は存在しない。それは過去であり、未来であり、現在

であっても。神の視点では決してないことが、それを視るママ・マーフィの認識を歪ませている。

だが、この少年の顔には見覚えがあった。

クインシーで見た顔——まだ幼く、罪も知らず、暴力も知らなかった。ただの子供。

だが自分はそんな子供について、うっかりサイトで知った未来を告げてしまった。それで彼はこの麻薬中毒の老婆の予言を信じてしまったようだ。

(ジャレドかい？本当にモンスターになってしまったんだね……)

場面が変わる。

少年は老婆がよく知っている吸入器を目前に山と積んで、必死に自分にそれをうち続けている。危険な行為だった、オーバードーズをおこしたとしても不思議はない。それなのに、少年はそれをまったく気にする風でもなく、一心に自分の血流にそれを流し込む作業をやめようとしなない。

身体の底に振動を感じた。

ズンズンと音を立て大地を揺らすそれはすぐに複数の足音だとわかるが、足音の主の姿だけが見えない。

そのうち誰かの悲鳴や、銃声も聞こえはじめるが。少年はそんなものに構うことなく、自分の作業にまだ必死になっている。

(これが、運命なんだねえ)

老婆は諦めていた。目の前に広がる光景に変化はないが、空気が変わったことがわかった。

これは死の足音だ、それを告げるものだ。足音が止まると、悲鳴と銃声も止んだ。少年の背後の闇の中に、うつすらと2人の男の姿が浮かび上がる。

顔は見えない。

だが、その身に着けているVault居住者のジャンプスーツにはナンバーがはっきりと書かれていた。

Vault111、と。

老婆は——ママ・マーフィはついに目を閉じた。

サンクチュアリで土いじりをするので疲れるらしく、作業を終えて夕日など眺めていると。椅子に座ったままで、ついウトウトしてしまう。

「ママ・マーフィー。今日は疲れたみたいね」

「ちよつと眠ってしまったね。だけど、大丈夫だよマーシー。老人は睡眠が短いのだ」

サンクチュアリはようやく変わろうとしている。

これからもつと、ここはよくなるはずだ。プレストンは恐れているが、もうすぐ彼らも帰還する。

それ同時にプレストンもようやく彼の任務から解放されることを意味する。サンクチュアリは自分たちだけでこれからを強く生きていかななくてはならない。

かつての少年は長くないだろう。サイトがまた、自分に教えてくれた。

それはもう目の前まで来ているのだ、と――。

## 放浪者の帰還 (LEO)

予定通りにはいかない、私にとってそれは200年前の最後の日からずっとそうだった気がする。

そして今回も――。

ダイヤモンドシティを出て、ボストンを出ようという直前のことだった。

たまたま道ですれ違った旅人の何気ない一言が、私の興味を引いた。

「おや、こんにちは」

「こんにちは」

「こんなところでお仲間に見えるとは嬉しいねえ、里帰りかい？」

「え？」

「ん？だってあんたはVault居住者なんだろう？」

まったく知らなかったが、このボストンのそばにはかなり名の知れたVaultがあるのだという。

しかもそこは今も普通に稼動しているらしい。

「少し――寄り道をしていこうか、コズワース」

「ああ、旦那様！実を申しますと、私はずっとVaultというものに一度でいいから行ってみたいと、そう思っていたのでございます」  
「ふっ、なら決定だな」

私たちが楽しそうなことが重要らしい。カールは元気に何度か吠えただけで、あとは黙ってついてきた。

旅人に聞いた道のいくつかは何度か通った場所もあって、思わずうめき声を上げそうになったが、とにかく無事にVault81とやらにたどり着くことはできた。

入り口に立つとここで困ったことになった。

てっきり開かれていると思われたその扉がぴったりと閉じられていてそのままになっていた。外から中と、どのように交信するのか。

私はあの男からうっかりその方法を聞き忘れていた。

「参ったな……」



「旦那様、如何いたしましたでしょうか？ノックをすれば、いいのでしょうか？声をかければ、中から返事が返ってくるのでしょうか？」

本当はもう少しターミナルの前で冷静に悩むべきであったが、私の腕にはVault社のピップボーイがあった。だからそんなに深くも考えず、あの日のようにそれで扉が開けられないだろうかと考え、即、実行してしまった。

『おいお前！今、いったい何をしようとした!?!』

後で考えれば私のこのときの行動はあまりにもうかつだった。

ターミナルのインターフォン——つまり中の住人らしき声が出て、自分が彼らの脅威として認識されてしまったのだと私はようやく理解した。

まあ、そりやそうだろう。いきなり鍵をかけた家の扉をガチャガチャいじる奴がいたら、住人はショットガンを構えて警告のひとつもするものだ。

言い訳と、自らの行動のうかつさへの謝罪、そして交渉をへて私たちはようやく合意することができた。

「ようこそ、Vault81へ」

グウエンと呼ばれていたVault81の監督官は意外にもふくよかな優しそうな女性であった。

「ごめんなさい。今、すこしこは忙しくしてて。もうすぐわかると思うけど、ここではいくつかのメンテナンスが進行中——」

そんなところに自分は強引に押しかけようとしたのだ。

そりや、警戒もされる。

「私はグウエン・マクナマラ。ここ、Vault81の監督官よ」

「Vault111の居住者だった。フランク・J・パターソン、ジュニア、レオと呼んでほしい監督官」

「わかったわ。本当にVault居住者だったのね。傭兵のような姿だけれど、ちゃんとジャンプスーツを着ている」

「汗とにおいを抑えて、洗濯も簡単。外で暮らしても、なかなか手放せない」

「なるほど、Vaultの技術の成果ね。ここみたいに他にもVaultが？まだ稼働中？」

別に驚きも困惑もなかったが、屈託なく聞いてくる質問に私は衝撃を受け。思わず口を閉じる。

「——いや、ああ。知っているのはここだけなんだ。私のいたVaultは、今は墓場も同然になっている」

「えっ!?墓場って、なにがあったの?」

「はつきりとした原因は特定できなかった。とにかくなにか——誤作動のようなことがあって、住人のほとんど大半が死亡してしまった」  
「なんてことなの、そんなことで多くの命が失われてしまったなんて信じられない。本当に許せないことだけど、残念だわ。それとあなたにもお悔やみを」

「ああ、ありがとう」

皮肉にもこの現実で、彼らには同情してもらえたらしい。

硬化していた態度もひとつだけ、ダウンしたようだ。

「どうやら私たちはまだ恵まれているのね。2世紀以上、この場所を守り続けてこれたことを誇りに思ってる。完全な自給自足の実現はまだ果たされてはいないけれど」

「完全な自給自足?ここに閉じこもるつもりか?」

「それが悪いこと?ここなら安全で、暖かいベットがある。清潔な服と、雨風にさらされてもびくともしない屋根がある。放射能や食べ物に困ることもない」

「ふむ」

「自然災害や襲撃者におびえなくていいということに価値がある。ここにはそう考える人もいるの」

「しかしそれでは家の中は平和でも、外が火の海になって手がつけられなくなっていた。となつては意味がない。

Vaultはシェルターであっても、城じゃない。武器や兵士にも限りがあるだろう?」

「まあ、そう考える人もいるわね」

「逆に外の連邦も良くなるかもしれない。平和な時代が訪れても、地

下でそれを知らないというのも悲しい話じゃないか？」

「そんな時代が来ればいいけど。聞く限りは、まだまだ遠い道のりの途中」

「確かに、まだ先の話ではあるかも」

その日は、私達はこの200年をこえる遺物の中を見学して回った。

コズワースは想像とはずいぶん違ったようでガツカリしたなどと失礼な感想を口にしていたが、私が知っているあの冷たい棺おけの並ぶ小さな施設と違い。そこに暮らす人々の息吹を感じるこの場所にはわずかではあったが暖かさを感じた。

(あそこが冷凍施設でなかったら。シヨーンの孫やその子供たちも、こんな風に生きていられたのだろうか)

なかった現実を想像するが、よじれた記憶と心が悲鳴を上げるだけで。私は平和なその場所では、うまくそれについて考えることが出来なかった。

|||||

寄り道はしたが、私のサンクチュアリへの帰還の旅路は順調そのものである。

T-45パワーアーマーを長時間身に付けて歩き続けるのはストレスがたまるが、日中に大きく距離を稼ぎ、夜を迎える前に一晩をすごせる安全そうな場所を見つけ、翌朝も日が出てからゆつくりと出発する。

パワーアーマーのおかげであろうか、襲撃者にわずらわされるストレスなしというのはやはり良い。

そういえばダイアモンドシテイには最初、このパワーアーマーを私は着てはいかなかった。

あの時、このアーマーはどうしていたか？

実を言えばたいした答えではない。ボストン郊外でみかけた人のとおりのない無人のダイナーの中にこいつを普通に放り出しておい

ただけだ。

B・O・Sのダンスはこのアーマーが動けばいいと、それ以上に手を入れなかったのでアーマーの表面には年月の経過がはりついている。これが普通に動くなど知識がなければわからない。

それに盗もうと考えても、装甲をちゃんとはがすにも知識が要るし。回収してもそれはかなりの重量となるから、それを抱えて危険なポストンに入っつていこうとは考えない。

ということ、フュージョンコアさえ抜いて建物の中の暗がりには置けばそれで安心というわけだ。

サンクチュアリへの帰り道の半ば、約束どおり再び私達はトルーデイの店にも顔を出した。

「おやおや、放浪者の帰還かい？」

「久しぶりだ」

「どうやらお目当ての犬は見つかったようだね。その様子だと」

「ああ——商人には会えなかったが、それでよかったのかも。この子もこちらを探していたようだ」

「可愛いとそういう親馬鹿を口にしてしまうものさ。よくわかるよ」

私は彼女のおかげでダイアモンドシティまでたどり着き、戻るときに自分達以外のV a u l tにも顔を出したと語って聞かせた。

彼女はなかなか楽しげに聞いてくれたが、話が一段落して一転この辺りの話をふると顔を曇らせた。

「まあ、自業自得ってやつなんだろう」

揉めていたウルフギャングを排除はしたが、そのせいで今度はレキシントンに近づくレイダーたちに最近は悩まされているのだそうだ。

「すでにいくつか、ギャングを名乗るレイダーどもから『うちが面倒を見てやる』だのなんだの、ぐちゃぐちゃと言いつけてきているんだよ」  
「誰だ？どんな連中だ？」

「ありがたいけど、これはあんたに頼めない。あんたも気にしていた工場、あそこに居座っている大物が。どうやらここに来れば薬と食料があるとか何とか噂を流しているらしいんだよ。」

それを信じた馬鹿共がすりよってきているのさ。一つ二つ叩き潰しても、またすぐにローチみたいに沸いて出てきやがる」

悔しそうに唇をかむ彼女を見て、気の毒に思うが。しかし確かに彼女の言うとおり、口を出してくる小物を何とかしてもそれは対処療法にすぎない。

「どうする？」

「どうするって？また繰り返すしかないだろうね。まだ人の心ってやつを少しばかり持っていて、仁義ってやつを守る程度にお互いの立場を尊重できそうなやつを、あのレイダーの中から探し当てないといけない」

「……大変そうだな」

「くたばる瞬間まで自分が世の中の中心だと考える連中ばかりだからね。まったく、こんな時はあのミニッツメンでもないよりはマシなんだって考えさせられるよ」

「なにか、私にできることはないか？」

プレストンの顔を思い出し、私は再びブルーデイに協力を申し出してみた。顔をゆがめた彼女は、申し訳なそうにして口を開く。

「実を言うと一つだけ、頼めるならお願いしたいことはあるんだよ」

「なんだ？」

「あんたが眺めてた工場とは別に、あの町には大きなスーパーマーケットがあるんだ」

「どこにあるのかは知っている。大きな駐車場のそばにあった」

「じつはさっきのレイダー連中のおかげで、最近はこちらを通る人が絶えちまったんだ。たぶんここにたどり着く前に奴等が襲ったんだろうね、それがあつという間に噂になってる」

「私は別ににもなかつたが——」

「あんたのロボットに犬、走るでつかい鉄の塊に襲いかかるほどの馬鹿はいなかっただけさ。」

とにかく人が来ないから、こつちも商売ができないんだよ。特に店に出す商品の数が減る一方で、増やすことができないんだ」

「だから新しいガラクタが必要——そういうことか」

「できるだけ多く持ち帰ってきて欲しいんだ、キャップがあるだけ買うからさ。このままだと売り物がなくなっちまって、店が開けなくなっちまう」

トルーデイの苦しい立場に私は同情した。

息子を中毒にしたギャングと手を切ったが、そのせいで別のレイダーたちを引き寄せてしまったのだろう。その間も彼女は中毒から立ち直ろうとする息子を抱え、ここで店を構えて必死に生活を守ろうとしている。

危険を冒す理由はなかったが、私はもう一度彼女を助けることにした。

スーパーウルトラ・マーケット。

大きな町ならかならず一つ二つはあると思う、かつての時代の寵児であった。

トルーデイの話では、ここにはグールがレキシントンに流れ込む直前に少数のミニツツメンらしき人影があったのだそうだ。その後、彼らがどうなったのかは知らないらしいが。プレストンの話を思い出すと、この店の中にはグールに襲われたときそのまま残っているだろうと想像はついた。

「旦那様、ここは本当に静かです」

「グールは群れで襲うから、こちらも静かにしよう。10ミリのピストル弾なら音も静かなほうだし、私が先頭で敵に対処する。コズワースとカールは倒しきれずにこちらに接近しようとした敵に対処してくれ」

「わかりました。ご主人様には怪我一つ負わせはいたしません」

「頼むぞ」

カールは無言であったが、じつと私の顔を見上げていた。こちらが言いたいことはわかってきていると思う。

店の中にはあちこちにグールが床に横たわっているが、これが全部立ち上がってくるわけじゃない。

死んでいる仲間の中で、横になって眠っているらしい。

トルーデイはその判別が難しいのだと顔をしかめていたが、私にはその心配はない。

この腕のピップボーイには戦闘支援システムがある。こいつを使いこなすことの特典はいくつでもあげられるが、このような状況でもすばらしい力を発揮する。

装着者の生体情報を計測するように、付近の生体反応を自動的に感知してくれるのだ。つまり床に倒れているグールが生きているのか死んでいるのか、近づくだけでピップボーイが判別してくれるのである。

ロボットと犬を引き連れ、腰を落として静かに移動する私がマーケットの中をぐるりと一周回るのに4時間近くかかってしまった。

こちらの思惑通り、ハンドガンの発砲音は決して小さくはなかったが。必要最低限の発射音と、最大の攻撃でもってほとんど騒ぐことがなかった。神経はすり減らされたが、怪我もなく、大きな騒ぎも起こすことなく無事に見て回ることができた。

コズワースもカールも。私を守るために飛び出すよりも、ここで拾うごみを持つほうが主流となり。なんだかそれがかえって本人達も不服であるかのようにであった。

そんな中、私達はついに元はミニッツメンだったと思われる複数の死体を発見した。

レーザーマスケット銃をしっかりと握り締め、襲いかかるグールの群れに飲み込まれたのだろうか。私は兵士の手から銃をとり上げ、彼らの頭にかぶっていた帽子で苦痛に歪む顔をそつと隠した。

楽しい話ではないが、またひとつプレストンに聞かせてやるものがあった。

太陽が地平線から消えると、スーパーウルトラ・マーケットの内部は真っ暗となり。長居できるような場所ではなくなってしまった。

あの日、裏通りでグールの群れに襲われたレイダーと同じような経験はしたくない。

外に出るとすでに夜の闇の中にレキシントンは沈んでおり、遠くに





たときにはなかった木造の見張り台の上にたつ傭兵らしい男が。こちらに向けてライフルを構えてすごんでいた。

私にはその顔に見覚えはなかった。

「驚かせてすまない。別に危害を加えるつもりはない」

「へえ、そうかい？そうは思えないね」

「旅に出ていたんだ。サンクチュアリに知り合いもいる。フランクが戻ってきたと——」

「あんた、レオか？」

「ああ、そうだ。ロボットはコズワース、犬は——つて、君は？悪いが私は君を知らないようだ」

兵士はこちらの問いには答えず。銃をおろして見張り台から降りてきた。

ひげを蓄えているが、まだ若者だと近くで確認してわかった。

「俺の名前はマクレディ、傭兵だ。ボスがあんたをここで待つと聞いて聞かなくてね。おかげで参っていた」

「ボス？」

彼はそれが誰とは答えず。サンクチュアリの目前にあるレッドロケット・トラックストップの店の中に「ボス、ボス！お客がようやく来たぜ」と叫んだ。

ここは確か遺棄されていて、もつと荒れていたように思えたが。

こうして近くで見ると今はだいぶ片付いているのがわかる。

扉が開くと、傭兵がボスと呼んだVautesーツに似合わぬシェフハットをかぶる人物が出てきて私を驚かせる。

「アキラ!？」

「レオさん、お帰りなさい。待ってましたよ」

東洋には『若者は3日会わないと』という言葉があると聞いたことがある。私はそれをかつては戦場で多く見ていたはずであったが、永い眠りはそれを遠い過去にしてしまったようだ。

私は約1ヶ月ぶりに見る若者を見て、衝撃に震えていた。

あの少し頼りなく、弱々しかった少年の面影はすっかり消えている。

そのかわりに精悍さと、アウトローの毒々しさが見え隠れしていた。私が出て行った後、この青年には何かがあつて、ここまでの変化がおこってしまったのだ。

私の知る若者は、もう消えてしまったのであろうか？

## 仲間 (Akira)

人並みの悲しき、なんてものは当の昔にキャピタルのどこかで捨ててきてしまった。

だが、それでもまだ感じることはできる。

胸ポケットの中のキャップが軽くなり続け、サードレールで買うバーボンの味が忌々しい熱を持ち始めると不安と一緒に悲しみをそんな理由で感じるができる。

別にそれは、誰でもそういうものなのかもしれないが。

傭兵、殺し屋。マクレデイ。

この看板はたいしたものだとは思うが、困ったことに最近の巷では少し違う。いわゆる、現実と自己評価の誤差つてやつだ。それに苦しめられている。

だが今日は風がいいほうに吹いた。

「あんたがマクレデイ？」

「ああ、だから？」

「このサードレールで雇える傭兵では上のクラスだつて聞いた」

「それは間違いない。ただし雇うには前金が必要だ」

最初はわからなかった、自分よりも幼い顔をした少年？

しかし黒髪の東洋人は見た目で年齢がわかりにくい。実際のところ、雇ってもらえるなら年下であろうときつちりと仕事はする覚悟はもっていたので、どうでもよかったが。

「前金かあ」

「それと値切るのもナシ、自分を安売りはしてないんでね」

もうまったくの嘘だった。

正直今の自分の腕を買ってくれるなら、多少値切ってもいいくらいだ。これ以上安値となると、サードレールを出てバンカーヒルの糞つたれな商人達に頭を下げなくちゃならない。あそこまでおちたら、もうグッドネイバーまでは戻ってこれないだろう。

「わかった」

「ホントにっ…いますぐっ…」

「うん、これでいいだろ」

トラブルまみれの傭兵を相手にこうも簡単にキャップを差し出す相手。冗談かと思ったが、本当にキャップの山を取り出すので、あわてない態度で大仰にうなづいたりしながら、指が震えないようにと力を入れてそれを受け取るのは大変だった。

そしてやっぱり俺はどこか間が抜けていたんだ。

自分が少しグッドネイバーを留守にしている間に、嵐のように登場して話題をさらっている新しいプレイヤーと呼ばれている野郎がいる。そう話には聞いていたが、なぜかそいつは名前ではなく、姿でしか知られていなかった。Vault居住者が着ている、あの青いジャンプスーツ。

そいつを目の前のやつも着ていると理解したのは、そいつがサードレールから俺をあのおかしなレールロードへと涼しい顔をして導いた時のわけで——いや、悪いがこの辺の話は自分ではなかったことにしたい。

とにかくガンナーのおかげで仕事を失いかけていた俺は救われたわけだが。

一方で、そんな俺を哀れんだのか何なのかわからないが、新しいボスは噂以上に頭のネジどころか、配線がおかしい。そういうやつだったのだ。

おかげで退屈はしないが、ここまで刺激的だと——ああ、贅沢ばかりいえないよな。わかってる。

|||||

グッドネイバーで仲間というか、部下というか。

とにかく護衛に傭兵を雇うと、僕にとつて旅という体験にも大きな変化が生まれた。

悪党の町、そんな風に言われたところにいた奴だから、実際には口下手で多くを命令したりしない僕の態度にナメ腐ってふざけたことをしだす可能性はあった。

だが、マクレデイは本人が口にするようにちゃんとプロの傭兵としての意識を持つ人物のようだ。

バンカーヒルの商人を見習おうと、ちよつとした肉壁程度に考えていた彼は。動くたびにこちらに次の目的地を確認し、自分への指示を求め、それを可能な限り任務として遂行しようとしているようだった。

これは思った以上によい買い物をしたかもしれない。

僕が彼をそう評価し始めるころには、向こうはこちらを厄介な雇い主だと思い始めていることを察していた。まあ、お互い知り合うのはもつと時間が必要と考えよう。

「ボス、次こそバンカーヒルでいいんだよね？」

「間違いない、そこでちよつと用があるから。その間に旅に必要なものは買っておいてほしい。キャップはちゃんと出すよ」

「それは構わないが……ボスはなにを？」

「ああ、俺はね——」

まあ、得意になっていうことではないし。かといってどうせばれていたことだろうから、サラツと自然を装ってゲロしてしまうことにした。

「グッドネイバーでサイコ、ジェット、メンタス。ほかにもX―セルとかデイドリツパーとか。まあ、軒並み中毒になってね」

「は?!そんなにっ」

「本当に、本当に貴重な経験をさせてもらったけれども。さすがにこのままだとイライラ、ムカムカしっぱなしでどうにかなりそうだから、ちゃんと治療しようと思ってる」

「……グールにでもなるつもりかよ、ボス。」

いや、ちよつと待て!あのバンカーヒルで、治療をするって言うのか?」

「うん、そうだよ」

「そうだよって——あそこに医者はいないだろ」

「正解。あそこには確かに人間専門の医者はいない。」

いるのは、商人の使うバラモンをみる動物用の医者だけ」

「じゃ、どうするよ?」

「さすが商人の町だよな。あの医者、もぐりで人間も動物だからって手広く治療をしてくれるらしい」

「——本気かよ」

「ま、使っている薬は他の医者と同じだというから。見立てがおかしくなければ、しゃんとするらしいよっ」

それがまるでなんでもないことのように口にしたのが悪かったのか、マクレデイのこちらを見る目がまたひとつ下がってしまったような気がする。なぜだ?

バンカーヒルでは結局治療とやらで一晩泊まることになり。僕は延々と水を飲み続け。冷や汗と尿意にひっきりなしに襲われるという嫌な経験を味わうと、まっさらな体になってサンクチュアリにむかって旅立った。

そうそう、体験だけではなく。ヒルでは面白い噂も耳にすることができた。「サンクチュアリが新しい居住区として入居者を探している」というものだ。

どうやら、僕が出かける際にしかけた装置は今もちゃんと稼働しているようだ。そしてあそこの連中も、町を作ると口先だけで言っていたわけではないらしい。

「ボス、俺達はこのまま北上して。その新しくできたとかいう居住地にむかう。これでいいんだよな?」

「そうだね」

「だけどボス、その道だとタツカー・メモリアルブリッジの手前はレイダーとスーパードミネーターの天国みたいな場所だぜ?」

バンカーヒルの連中が傭兵を従えている理由の一つにあげるくらいだ。俺達もほぼ間違いなく、ここでどちらかの襲撃を受けることになると思う」

こちらに来たときは、人造人間の彼と普通になにもなくバンカーヒルまでこれたのでそこまでのことだとは実感はなかったが。雇った部下が心配してわざわざ警告する場所に、そのときと同じ感覚でいく

のは確かに危険ではある。

僕はしげしげとマクレデイの装備を見る。

狙撃手を名乗るだけあって、ハンティンググライフルを背負っている。だが、それはあまり褒められたものではない。

自分の武器を使いやすくするのはなく、手に入れた武器に自分を合わせる。そんなかなり強引な使い方をしているのは明らかで。こうして遠めに見てもレシーバーとストック、バレルはひどく痛んでいるよう見えて、なんとかしてやりたいと僕の腕がムズムズしてしまうほどだ。

「マクレデイ」

「あ?」

僕は「これだ」というと、僕のサブマシンガンを彼に放り投げた。それを落とさぬようにあわてながら受け取る彼に初めてまともな命令をした。

「橋を渡るまでは、そいつを使え。弾は荷物の中にある」

「これっ!?マシンガンだろっ」

「距離はいつもの半分くらいに見ておけ。反動は抑えられているはず、狙って引き金をリズミカルに。それでも十分に戦えるはずだ」

「ボス、俺は狙撃手なんだぜ?」

「ぼ——俺もライフルは得意じゃない。レイダーは群れで来るから、囲まれるのは厄介だ。ま、文句を言わずに使ってみろよ。感想も聞かせてくれ」

「レイダーに殺されたら、感想も何もないんだけどな。ボス、わかってるのか?」

そんな軽口たたきあいながらも、それでも備えていたとはいえどこかで軽く考えていたのは間違いないと認めなくてはならない。

明け方にバンカーヒルを出て順調に進み、昼を目前に橋がもうすぐこの目に見えようとするあたりで。

道の中央がにわかに騒がしくなると、次の瞬間。キノコ雲めいた不穏な爆発に続き、熱風と衝撃が僕達を襲った。

「マクレデイ、見えるか?」

「ああ、わかるぜ。戦闘してる、誰かがレイダーに襲われたんだ！」  
それだけ聞けば十分だった。

僕は立ち上がると大またで歩き出す。「ボス!？」と驚きの声を上げるマクレデイを従え、背中に背負った——この旅ではこれまであまり使うことはなかった——そいつを構え、何者かに襲いかかるそいつらの背中に狙いを合わせる。

発射される弾に当たれば瞬時に氷結させてしまう試作大型ライフル、クライオレーター。

Vaultから持ち出したばかりのときにレイダーに使ったそれとは、今のこいつはまるで別物だ。

銃身の形状を変化させたことで、攻撃範囲は倍になり。一発ごとの反動も可能な限り押さえ込むことができる。おまけにそれらしく照準まで設置した。

どうやら誰かが誰かに襲う背後から、さらに襲う役目が自分に与えられているらしい。たった2人の乱入者が、手馴れたやり方で襲撃者達の背後を襲い、容赦なく簡単にこれを押しつぶしてしまった。

|||||

TVやラジオのドラマなどでは、こうしたヒーローの誕生に喜びと感謝をのべる救助者のシーンというのがあるものだ。実際にそれを期待していたわけではなかったが、自分達が倒した相手が奇怪なロボットだらけで、それに襲われていた集団がほとんど全滅していたという最後は想定していなかった。

ただ一台、傷つき。頭部から火花を散らし、壊れた左腕をそのままにしたロボットがひよこひよここと進み出ると、ショックで呆然としている僕達に礼儀正しく話しかけてきた。

「友人達はこの攻撃を生き延びることができませんでした。ご協力ありがとうございます。自分もここまできたと覚悟しました。追撃を受ける中、あの救難信号が届くとは、正直思いませんでした」

「だ、大丈夫なのか？それと救難信号って？」



「これでもダメージはわずかです。それより友人達をなくしたことの悲しみと怒りを感じています……。」

あなたたちは、ジャクソンと私の救難信号を受信して駆けつけてくれたわけではないのですか？」

「実は——そうなんだ。」

近くを通りがかって、銃撃音が聞こえた。次に爆発、それで慌てて駆けつけたんだ」

「ロボットの発言としては奇妙かもしれませんが。彼らは……家族でした。もう一度、お礼を言います。彼らも同様にお二人に感謝していません」

「お前は——どういうロボットなんだ？随分と、かわっている。見たことがない」

「改良されています。根本的にはアサルトロンです」

いつになく奇妙な自分の脳が言葉に反応し、すぐにどこで学んだのかわからない知識が浮かび上がってくる。

人型でありながら戦闘用のロボット。最も人間を破壊することに特化したプログラムを持つ。

このタイプの上位モデルは高速移動と絶対の接近戦で確実に敵を殺しにかかることを謳っていたはずだ。だが、目の前のロボットはその肝心の足が別のものにかえられており、おそらく運動性能は普通以下であると推測された。

「私の名前はエイダ。ジャクソンがアップグレードしてくれましたが、彼らを守りきることはできませんでした」

「さつきから出てくる、ジャクソンって？」

「このキャラバンのリーダーでした。ロボットの技術に詳しく、色々な意味で、私の製造者でもありました」

「ロボットをアップグレードだっけ？そんなことできるんだな」

「はい、プロトタイプ設計図をもとにして、作業台を使い改良されています。様々なことができますが、オリジナルよりも優れた部分も生み出せますが、劣ってしまうこともあります」

「ということは、お前もやろうと思えばセンチリーボットのような大

型で重装甲、重装備のロボットに作り変えることも可能ということか？」

「はい、その通りです」

明らかにそれは自分の知らない新しい技術と出会ってしまったのだと僕は理解した。

正直心の奥底では、悪い自分が「これ、ほしいなー」などと口に出し始めている。

「この襲撃は予想できた危険でした。連邦から離れるよう、彼らにもっと強く言うべきでした」

「——もう終わってしまったことだよ。取り返しがつかない、前に進まない駄目だ」

「仰るとおりです。私は償いとして、友人達のために正義を求めます。あのロボット達がさらなる被害を生むのを阻止したいと思います」

「な、なに!? なんだって?」

なんだかおかしな話になってきた。

ロボットがロボットに襲撃され、さらにロボットは正義を求めてロボットを阻止するだって?」

「ああ、ボス? もしかしたらこれのことじゃないか?」

マクレディはそういいながら、地面に転がるアイロボットとよばれている一台を蹴飛ばしてくると。ガシガシと手荒く踏みつけた。

『注目せよ、連邦の人々! 私はメカニスト、平和の時代をもたらしに——』

何者かのメツセージらしい、僕は素早くそいつを解体するとなかにあったホロテープを取り出した。

「私の敵です。彼らの信号元を暴き、メカニストと対決する時がきました」

「メカニスト? メカニストって誰だ?」

「ボス——俺、そいつ知っているかも」

「誰だ?」

「えつとな、その……笑わないでくれよ?」

「?」

「グッドネイバーで、ラジオに出てた。誰かに殺されたみたいだっぜ」

「はいっ!？」

死人がロボットをロボットに戦わせてた？まったく意味がわからなかった。

|||||

僕が混乱したのは、別に僕がおかしかったわけじゃなかった。

整理されると実は簡単な話だったことがわかった。

グッドネイバーで流されている過去のラジオ番組にメカニストというキャラクターがいて。その名前を名乗る変な奴が、こうしてロボットを使つて連邦のキャラバンを襲っている。

そう、こういうことだ。

「その正体はアイボットの放送から得た情報しかありません。あの歪んだ平和と正義の主張……ロボット使つて死をふりまく。許しはしません」

アサルترونというロボットのスペックを知っていると、このエイダと名乗る彼女の人格にはとても興味深いものを感じる。

「あなたは他者を助ける意思を見せました。唐突ではありますが、どうか私と一緒にメカニストを止めるために協力してくれませんか？」  
「なにいつてんだ、このポンコツ」

「おいつ、マクレデイ！」

「だけどボス、こんなやばそうな相手。なんで俺達が巻き込まれなくちゃならないんだよ」

「その考えは理解します。そのかわり、この仕事用に追加の資源を得られるよう、ロボットを改造できるノウハウとそのために必要な作業台の設計図も譲渡します」

なかなか面白い話になってきた。

それにさらに面白いことに、このロボットはこちらに対して交渉を求めてきている。今から豹変して、すべてを奪いつくすかもしれない

人間を相手にして。

「そんなもん、どんな価値が…」

「黙れ、マクレデイ。エイダ、一つ質問がある」

「はい」

「本当はただ、復讐したいだけなんだろう？」

質問の瞬間、なぜか僕はアドレナリンが吹き出るのを感じ。口元に歪んだ笑みが浮かんでいた。

好意に値する人格を持つロボットだった。だがその根本はただの殺人機械にすぎず、敵を容赦なく破壊することこそを至上の行為と考える存在だ。

言葉の裏に隠れた——そう、人で言うところの欲望が見れるかもと期待して、その問いを口にしていった。

エイダに躊躇いはなかった。

「私の目的が2つあることは認めます。メカニストの野望を阻止すれば、連邦を守ることも倒れた友人達の敵を討つ事もできます。脅威が去るまで休むつもりはありません、彼らの借りは返さなくてはならないのです」

「エイダ。わかったよ」

マクレデイはこの時、自分の雇い主がどれだけおかしいのかまたひとつ理解した。

口元に浮かぶ歪んだ笑みは、今は満面のそれとなり。どんなときでも普段は穏やかなその目は大きく見開いて爛々と輝いている。

「だが技術だけでは足りない。もうひとつ、お前も俺はほしい。俺をお前の新しい主人にしてくれ。」

そのかわり、お前の友人達の記憶。お前の願いと目的、そしておまえ自身の体をすべて引き受けたい。どうだろう?」

「それで構いません。契約は成立です、いいですか?」

「ああ、いいとも」

正義を理解し、報復心と併用させようとするロボットを手に入れ、アキラはそれを喜んでいた。

互いの合意は得たものの、残念ながらエイダに感傷的な時間はそれほど残されてはいなかった。

騒ぎのあった場所はバンカーヒルと橋の手前、レイダーやスーパーミュータントがなにがあったのか様子を探りに来る可能性は高かった。

アキラは礼儀として、エイダの以前の持ち主であり友人達を葬ってやれないかと口にしたが。エイダとマクレデイはその提案に反対した。

ジャクソンたちのキャラバンから持ち出せるものはすべて持ち出し、ロボット達からもパーツを取り出していくべきだとエイダは主張した。

こうして2人と一台の奇妙な集団が旅をすることになる。

予定通りタツカー・メモリアルブリッジを渡って北上を続け、そうやってついにコンコードをも通り過ぎた。理由はわからないが、橋を渡った後は特に人とすれ違うことも、レイダーのような襲撃にあうこともなく通り過ぎてしまった。

だが、サンクチュアリを前にしていきなりアキラは足を止める。

「マクレデイ、悪いけどあそこサンクチュアリに行つてプレストンとかいっのを連れてきてくれ——」

「俺が？誰だよ、そいつ」

「頼んだ」

我俣じみた命令を下すと、アキラは黙ってなにやら橋向こうの住人達に危ない目つきをしたまま黙ってしまった。

その様子があまりに普通ではないので、仕方なくマクレデイは一人で橋を渡る。

彼が戻ったのは3時間後、疲れきった表情の彼の後ろには。アキラの姿を確認して喜んでいるらしいプレストンとスタージェスがいた。

「つれてきたぜ、ボス」

「——武器を取り上げられたか、マクレデイ？」

「ああ、その通りだ」

マクレデイの返事を聞くと、アキラの表情にはつきりと嫌悪のそれが浮かんでくる。

「すまない、傭兵というから。念のためだった」

「町から消えた若造の名前を出したから、レイダーを引き連れて戻ってきたと思っただよね。わかってる」

「そうじゃない、そうじゃないんだ。アキラ、プレストンは君が誰かに捕まっているんじゃないかって心配して——」

「いいんだ、スタージェス。アキラ、確かにそういうこともあるかもとは考えた。否定はしない」

アキラはただ鼻を鳴らしただけだった。

一月をこえる時間がたち、多くの出会いと経験をして戻ってくれば。あのときの感情は少しは癒されているかとも考えていた。まったくそんなことはなかった。

そのかわりに、半端に手を貸した自分の行為の上でのほんとは日常生活というものを平和に過ごしている連中があそこにいるのだと考えると、いまからあそこに乗り込んでいって皆殺しにでもしてやりたなどと、わずかにその欲望を自分の中に感じていた。

「レオさんは？」

「まだ戻っていない。彼を、追っていったわけじゃないんだな」

「そうだよ。知っているとと思うけど、彼はパパじゃないんでね——」

「なあ、アキラ。君の怒りは今なら少しは僕らも理解している。わるかったよ。」

以前とおんなじことにはならないようにするし、どうだろう？せめて仲直りのしるしに、サンクチュアリに入ってくれないか？プレストンも、それを望んでる」

「その通りだ、アキラ。もう一度、やり直せないだろうか？」

（顔を合わせりや、お前等がそういうだろうと思っただきさ！）

僕にとって忌々しいとはこのことだ。

弱って、転がり込んできて、勝手に居座って、何もできないくせにこっちの頭を押さえつけ、何もかも支配できると思込んで踏み込んだ。

あの怒りと屈辱を忘れることなどできるわけがない。

こいつらへの返答はちやんとこつちも用意してあったさ。

「あそこには戻らない。馬鹿共の相手はしたくない、勝手にしている。僕はこつちで、レオさんの帰りを待たせてもらう」

「こつち？」

ああ、あそこさ。

そういつて僕は背後の寂れたレッドロケット・トラックストップを指差した。

## 向き合う心 (LEO)

「アキラ、君がボスだって？どうも、留守の間になががあったのか聞くのが怖いな」

顔をしかめつつ、正直な思いを口にしたが。彼は肩をすくめるだけで「まあ、そこそこ色々ありましたから」とだけ返して来る。

「ここにはいつから？」

「3日ほど前です。僕も旅から戻ってきたばかりで」

「——その前はどこにいたのか。話してもらえるのかな？」

「それは構いませんけど、レオさんも話してくれるんでしょう？なら、その時に」

「わかった。サンクチュアリはどうなっている？」

「ご自分の目で確かめたほうが早いですよ」

「……そうか」

彼の言葉からはここから先には行かない。嫌、戻るつもりはないという強い意志のようなものをひしひしと感じた。今は理由をしつこく尋ねることなく、これ以上触れないようにしたほうが良い気がした。

橋を渡った先では、プレストンにスタージエス。それにママ・マーフィに加え、新しい住居者達とも顔を合わすことができた。

どうやら指示したとおり、アキラは住居者募集の電波を流してくれたようだ。

だが、それがなぜこんなことになった？

一通りサンクチュアリを見て回ると、私はプレストンと2人になった。

正直な感想を言うと、この場所の現在の姿にはだいぶガツカリさせられていた。

食料の当面の問題が解決したというくらいで、夜はいまだにランプの灯りを頼り。安全のために見回りを増やしたというが、装備はパイプ銃しかなく。防備はたいして進んでいない。



10人近い入居者がいるのに、いまだに穴だらけの家に寝床だけ用意され。リーダーも決められずに集団としてまとまりがなさ過ぎる。

そしてあのアキラの態度。

「アキラの面倒を見てほしいと、あんたに託されたが。その、もう知っているかもしれないが——」

「ああ、彼はここには足を踏み入れたくないと言っていた」

「本当に申し訳ない。まさか、こんなことになるとは思わず——」

「いったい何があったんだ、プレストン？」

「彼は素直そうで、聞き分けもよかった。だから俺達も彼には多くを望んでしまった。多分だが、そのせいで彼をひどく怒らせてしまったようだ」

私はそれでは納得できなかった。

「本当にそれだけなのか？彼の態度は……そんな感じではなかった」

「そう、なのか？」

この男は鈍感なのだろうか？

一瞬そう思ったが、違うのだとすぐにわかった。

彼はあのアキラをまだ、見た目の印象に惑わされて子供のよう考えているからこんな言葉しか出てこないのだと理解した。

彼らは物静かで口下手な彼に対し、自分達の要求だけを続けて言ったのだろう。

そして私にはわかった。

彼のあの態度は戦場では時に目にする、よくない物の一つだということ。

表情に表れているわけではない。目にそれが浮かぶわけではない。言葉で警告するでもなく、呼吸だって乱れてはいない。

だが、そのかわりに彼等は沈黙する。

どこからか漏れ出していた感情をあふれさせないようにと押しとどめようとする最後の理性。沈黙の答えを求める声があれば、ただそれだけで憎悪にまみれた暴力を突然にしてあたり構わずぶちまけてしまう。

戦場で時に怒りに取り付かれた兵士達によって起こる蛮行や凶行

の引き金になるものが、アレだ。

「あんたが出発した後、数日してマーシーが騒いだんだ。それに腹を立てて、もう自分はサンクチュアリにはかかわりたくないと言いつつ出した」……」

「その後、あんたと一緒に出てきたというVauertに行つたようだった。そこから戻ってきたところで、またマーシーとぶつかったらしい。今度はいきなり彼女に発砲して、ここを飛び出して行つてしまった」

「それだけ？他にはないのか？」

「わからない。彼とはその——今思うと、お互いのことをあまり話せなかった」

私は「それだけのはずがないだろう」と口にするのを飲み込んだ。

困つたことに私は彼を批判できなかった。私がここを立ち去るとき、ただここなら安全だからと彼を置いていったのは他ならぬ私なのだ。

彼がここに向けるあの暗い感情。もしかしたら、彼は私のそんな判断に腹を立てているのかもしれない——。

「わかつた。とにかく一度戻つて、私がアキラと話してみるよ」

「そうか……その、一つ頼んでもいいか？」

「ん？」

「実は——アキラにあんたの庭にあつた風力発電を直してもらえないか。頼んでほしい」

「なぜ？壊れたのか？」

「いや、そうじゃないんだ。」

アキラが戻つたと聞いて、一部の住人があんたの家の庭にある。風力発電に組み込まれていた入植者への呼びかけを停止するべきだと主張する声があつて」

「おい、まさか？」

「俺達はただ、呼びかけをスイッチで切り替えるようにしてほしいと伝えただけだ。あのエイダとかいうロボットが来て——」

「ああ」

「形も残らないようにと破壊してしまっただ、完全に」

私は頭を抱えなくなった。

「そこまでしなくてもよかったんだが、その——」

「わかった。聞いてみるよ」

レッドロケット・トラックストップに戻ると、マクレディとかいう傭兵は見張り台に立ってこちらを見るとうなづいてきた。アキラはあのエイダというロボットと一緒に、なにかにつかう作業台のようなものの前で話し込んでいるようだった。

「御主人様、こちらへ。こちらへ」

「コズワース？」

「アキラが私達にここで休むよう、あるものは好きに使っていいと  
いってくれました」

「そうか」

「さ、こちらの椅子へ。お食事にはまだ時間がありますが、長く厳しい旅から戻ったばかりなのですから。ここでしばらく休んでいてください」

「それじゃ、そうさせてもらおうかな。お前は何をするんだ、コズワース」

「実は旦那様、アキラに頼まれごとをしていますが。それをこれからやらなくてはならないのです」

「そうか。何を頼まれたんだ？」

「シチューです！なんと、本物のシチュー！お肉がいっぱい、お野菜もいっぱい。ホホホ、後は味付けがすべてを決めています。これは、私の電気サーキットもショートして興奮を抑え切れません！」

「責任重大だな、楽しみにしているの？」

「はい、お任せください。今夜を楽しみにしててください」

椅子に腰を落ち着けると、そのそばに一緒に戻ってきたカールがぺたんと座り込む。

その頭をなで、喉や耳の裏を搔いてやると気持ちよさげに目を細めつつ、顔を背けて大きなあくびをする。

(アキラにはどう話せば。どう接したらいいのだろうか)

若者が暗い影をまとうていることに、自分はどうか考え、態度を決めなくてはならなかった。

すると自然に家族のことを——死んだ祖父や父、そしてショーンのことを思い出していた。

自分に息子が生まれたとき、喜びの後にあったのは不安であり。そして父や祖父との思い出が、そこから抜け出す大きな力となって未来を明るくものとしてくれた。

思春期と共に祖父との別れがつかつた私が荒れていた時。

父は私との関係に悩んだはずだが、それを私に見せたことはなかった。出来なかつたことだが、もしショーンが同じく荒んだ心を抱えることが会ったとしても、その時はきつと私も父のように——彼らを見習ってそれを続けることができたらと思う。

だが——。

だがアキラは、彼は私の息子ではないのだ。

私は彼になにをしてやれるのだろうか？簡単に解決する問題ではないが、猶予はほとんど残されていない。

コズワースの自信の透明なシチューは見た目とちがつて大変味わい深いものだった。

マクレディはまだ見張り台から離れようとせず、私はアキラと共に2人機をはさんで向かい合って食事することになった。

私はその間、自分の旅の間の出来事を話し続けた。

崖の上の居住地、衛星基地への夜襲、ドラムリン・ダイナーでの揉め事。B・O・Sを名乗る武装組織との行動。ダイアモンドシティとパイパー、Vault 81という自分たちの知らなかつた場所。

話せることはほとんど全部、私は彼に語って聞かせた。

隠すことはなかつた。

「さて、と……今度はアキラの話も聞きたいな」

「僕、ですか？」

「ああ、どこからでも構わないよ。旅をしたんだろ？この世界の何を

見た？何を感じた？」

「別に——まあ、そこそこ僕も危ない目にはあつてきたつてぐらいしか」

「それでいいよ、聞かせてくれ」

サンクチュアリを飛び出して——結局原因は教えてくれなかった——モールラットの巢で犬の群れが戦っていて、バンカーヒルという商人の町にたどり着いて、グッドネイバーという町にも行った。

帰り道が危険だから、傭兵を雇つて。実際に帰り道で襲われていた集団を助けたら、ロボットがついてきた。

そこまでざつくばらんに、ふわつとボソボソ語っていると。彼の口ポツト、エイダがなにやら見てほしいものがあるのだといってアキラを連れて行ってしまった。

立ち去る若者の背を見て、私はため息をついた。

思春期を飛ばして今の彼とどう話したらいいのか。大人として軍隊時代のそれでやってみてもいいような気がするが、試して駄目でしたではすまない気もする。

まるで危険な爆弾処理をまかされているような気分だった。

すると入れ違うようにマクレデイが姿を現すと愉快そうに笑みを浮かべながら、アキラが座っていた席に着く。

「マクレデイ、だったな。哨戒、ご苦労さま」

「ああ、あんた。俺のボスの親父じゃないよな？」

「違う。でも、よく慕われているみたいだ」

「そうみたいだな。あの凶悪なのが、あんたのことだとそこで寝てる犬みたい尻尾を勢いよく振り出す。正直、みていて笑える」

「なあ、助けてくれないか？どうも彼は私に話したくないことがあるみたいだ」

「ボスが隠しておきたい情報を、俺があんたに売るってこと？本気か？」

「なら、アドバイスでもいい。私は、彼の力になりたいんだ」

「——俺には両親がいない。子供のころは、子供同士で互いに面倒見て育ってきた。だから親つてのはどういふものなのか、よくわからない」

い。そう思ってた」

だが、そうはいいいながらも彼の目は違うものを映し出していた。

「俺がボスについて知っていることなんて、本当、一握りのことしかないぜ?」

「構わないよ」

「グッドネイバーを最近騒がせた奴がいる。噂が真実なら、それが俺のボスってことになる」

「何をやった?」

「殺しを。それも普通じゃない、山ほど殺した。町にもぐりこんでいた悪さをしようとした連中のところに一人で行った。そして帰ってきた、やっぱり一人で。それで注目された」

衝撃的な内容だったが、なんとか受け入れることができたと思う。

だがマクレデイの話は始まったばかりだ。

「ここにくる途中で聞いたんだが、ボスは他にもやっていたらしい。たぶん、俺を雇う直前のことだろう。ピックマン・ギャラリー、知ってるか?」

「いや」

「怖いもの知らずの無法者が恐れる場所がある。誰もそこに行ったら帰ってこない、そういわれていた。ボスはやっぱりそこに一人で行って、また帰ってきた。そこで何があつたのかは知らない」

「かなりヘヴィーになってきた。そこで彼になにかあつたと思うか?」

「思ってるね。その理由?」

「簡単さ、ボスは俺をつれてまずやったのがあのレールロードに接触したからさ。それもまるで、そこにそいつらがいるとわかってたみたいだ」

「レールロード?」

「聞いたことはないか? 変な連中だ、人造人間を助けるとかなんとか」

「そういうえば——ダイアモンドシティで噂を聞いたかもしれない。覚えがある」

「そいつらの隠れ家にズカズカとな、さも当然って顔で会いに行つて

たよ。むしろ向こうが不気味そうだったぜ」

「どんな話をしていた?」「さあね、なんか言ってたな。覚えてない」「他には?」

「ないね。あとは本人の言った通りさ。あのポンコツ助けて、なんか気に入ってお前がほしいとか——おっと、ヤバイ」

マクレデイは立ち上がると、戻ってきて眉をしかめるアキラに「持ち場に戻ります、ボス」と言っつてすれ違って消えた。

頭の中で整理が必要だったが、私は何もなかったフリをしてこの東洋人の若者をまた向かいに座らせた。困惑する彼の表情の中には、はつきりと恐れのようなものが見え隠れしていた。

「マクレデイの奴、なにを?」

「面白いな、彼は。君とも気が合いそうだ」

「ええ、まあ。色々と助けられてますし」

「そういえばずっと気にしていたんだ。あのエイダというロボット。一緒に何か作っていたようだ、あれはなにをしているんだい?」

「あれですか。ロボットを改造できる作業台です。エイダの前のオーナーの財産でしたが、彼女と一緒に僕が引き受けたので——」

「彼女!?!」

技術を好む彼が、ロボットを相手に擬人化させるような言動をするとは思わなかった。

「あー、まあ、人格が女性人格なんでそう呼んでるんです……おかしいですか?」

「ふふふ、いいんじゃないか?」

「えと、その、彼女を譲り受けて使えるようにと学んでいたんです。まあ、理由もあるんですが」

「なんだ?」

「実はエイダのプログラムが誤作動起こしてて——。アサルトロンの基本プログラムがそうなってるらしいんですが。さっき言いましたけど、エイダの前のオーナーは死んでいます」

「そう聞いた」

「それで契約というか、約束事があって。形としては、死んで失効した

前オーナーの資産を僕が譲り受けた、という話だったんです。ところが今のエイダの中では『前オーナーが死亡後に、僕と譲渡契約をした』ということになっていてみるみたいで——」

「ん？よくわからない」

「つまりですね、彼女の認識の中では僕は死人と商談して契約したことになってるんです。エイダの記憶では死者のことは記録で残っているのですが。なぜかプログラム上では、その後。死人が起き上がって僕と約束して、それが終わったからまた死んだと——」

「なんだかすごいな、それ」

「本人は処理の問題というんですが、こういうのはバグを吐き出す可能性が高いのでなんとかしてやりたくて」

「こういうところが彼のいいところなのだろう。なら、私が気にしなくとも彼はきつと大丈夫なのだ。」

「それに彼も私もわかってるはずだ。お互いは親子にはなれない、そのつもりがない。」

「なら友人でもいいじゃないだろうか？」

「同じVaultで目覚めたもの同士、私も2000年の時のおかげで友人が少ない。」

「アキラ、実はこうして帰ってきたのは私が見たこの時代。この現在の連邦。」

「それに対して自分はこれからどうしたらいいのか、よく考えて答えを出したかったからだ。それも、できれば君と一緒に」

「僕、ですか？」

「ああ、君だって色々冒険をしてきたといってたじゃないか。感じたことだってあるはずだ」

「……息子さんのことはいいんですか？」

「ショーンのことはいきりめない。きつと見つけるさ、きつとね。」

「だが、そういうことじゃない。私のこの、復讐はいつかは終わりを迎える。どんな最後かはわからないが、その時はなんであれやってくる。」

「その後？復讐を果たした後、息子を取り返した後。そのときに私」



には何が残っているのだろうか？燃え尽きたらうそくのように、抜け殻になってやしないだろうか。

息子が今、どんな状態にあるのかわからないが。彼にこの時代に新しく生きる私の姿を見せてやりたい」

アキラは目を輝かせてすぐに返事を返してきた。

「なるほど。いいと思います」

「そして私は、君にもそうしてほしいと思っている。私達はあのV a u r t から出てきた、君とは親子にはなれないが——良き友人として、一緒にこの連邦にかかわっていつてほしい。

君には私にはない力も可能性もあるのだからね」

私が出来るとは。アキラに、この若い友人に出来ることはこれがすべてだった。

「レオさん。なにか具体的な考えがあるんですか？」

「私はね、アキラ。プレストンのミニッツメンを復活させたい。それも今、すぐにだ」

翌日、目を覚ますともう太陽はだいぶ高い位置にあった。

時計がなくて助かった。どうやら旅の疲れで寝坊してしまったらしい。というよりも、若者達はこの中年に気を使ってくれたようだった。

フラフラと人の姿を探してレッドロケットの中を歩いていると、ガレージからアキラとマクレディの愉快的な会話が聞こえてきた。

「何だよボス、いきなり俺のライフルを見せるなんて」

「いいから——これ、なにか思い入れがあるのか？」

「いや、別に。前のが壊れたから、安く手に入れた。ライフル弾は高いからさ、なかなかいいものは手に入らないんだよ」

「わかった。なら、俺にまかせろ」

「はあ!? あんたロボットばかりか、俺のライフルの面倒まで見て——ってなにすんだよ!？」

アキラの手の中にあつたライフルが、すごい速さでバラバラにされ

ていくのが音でわかる。

あれは手馴れているというより、壊れていくようにも見えるところが凄かった。

「分解したんだよ。見りゃわかるだろ」「違うだろ、壊したんだろうが！弁償しろよ」

「落ち着け、そこで見てろ」

「なおせよな！いや、弁償だろ」

「どちらも断る。俺の魔法で、新しく生まれ変わらせてやる」

「ナンダ、ソレ？」

「笑うな、こっちは本気だ、もつと感謝しろ」

若者達は楽しそうだ。

壁に寄りかかり、顎で挨拶するとマクレデイは手を上げて返してきたが、アキラは手元に集中していた。

「レシーバーをノーマル品で使い続けるとか、ナメてるだろ」

「いや、楽なんだよ。掃除が」

「マガジンだつて考えろ、装弾数を増やせば——」

「おいおい、ボス。俺は狙撃兵だぜ？狙って撃つ、敵は一発であの世にグツバイさ」

「——じゃ、それはナシ。ロングバレルは軽量化タイプな、これは時間をかけていこう」

「メンドクセー」

「ボディを強化プラスチックにすれば、グリップを——」

「イラネー」

「なら木製のままでいいな。ストックはちゃんと削れよ？最後はスコープな」

「いいよ、ボス。もういいから」

「短距離とかつまらん、長距離用で頑張っていこう」

「なんだよ、頑張るって。使い慣れたものを使わせろよ！」

「あるものにあわせるのがプロの流儀なんだろ？頑張れよ、マクレデイ」

にぎやかにしているのに、アキラの手元は凄いスピードでバラバラ

になったライフルが再び形を取り戻していく。仕上げられたソレは、新品というだけではなく以前とは違う力を秘めているに違いない。

「どうだ？」

「ああ、本当に凄いな。悪くないけどさ、これだと相手に近づかれたりする。どうすればいい？」

「——友よ、これをお前にやろう」

「マチエツト？」

「こいつで相手の手足を切り落として、距離をとればオーケー」

「野蛮だなあ」

「やれよ、出来るだろ」

「やれって、わからねえよ」

私はその場から立ち去ると、ガレージの裏にある汲み上げ式の水道で顔を洗う。

顔を拭く私のところに、アキラが近づいてきた。

「おはようございます、レオさん」

「おはよう。すっかり寝坊してしまっただが、おかげで疲れも取れたよ」

「それは、よかったです」

「ああ」

「レオさん、僕も考えましたよ」

私の背後から照らす太陽の光がまぶしいのだろう、顔をしかめていたがアキラはそのまま続けた。

「この僕達が、今の連邦に出来ること」

「ああ」

「プレストンを唆して、大々的にミニッツメンを復活させましょう。いい手を思いつきました」

私は無言で彼の肩をたたくと、そのまま一緒に並んでガレージの中へと入っていった。

## レキシントン攻略作戦

ミニッツメンを復活させる。

アキラも一緒にその方法を考えてくれ。

レオさんは意外なことを口にしたが、よくよく考えてみればそれは悪いことではないと思った。

プレストン自身も失われた組織の再建にはやる気があるようで。ミニッツメンの精神に同意してくれる兵士を集い。徐々に訓練しながら居住地を回り。確実に結果を積み重ねていくことが重要だ、とか言っていたらしい。

まったく、くだらないことだ。

もし本気だというならば信頼を失った武装組織の復活方法はひとつだけ。

——レキシントンにそびえ立つ、巨大なロブコ工場。

——そこを選挙するジャレド一味をミニッツメンが完全制圧する。言葉にすると簡単だが、僕もレオさんもそれが楽な仕事とは思っていない。

プレストンにこの計画を持ちかけた時の反応は、ちよつとしたものだった。

「工場のライダーを攻撃するだつて!？」

プレストンは思わず叫んでから青空が広がる天上を仰ぎ見た。

この最後のミニッツメンは、迫っていたサンクチュアリからの旅立ちの後の予定を。僕とレオさんの手でこの瞬間にもご破算にされようとしていることを悟ったのだ。

無茶ではあるが、無理ではない——レオさんの言葉を聞いていると本当のことに思えるから不思議だ。

それはプレストンとて例外ではない。

|||||

ガレージの中に入ると、近くの木製の椅子にレオは腰をかけた。

先にその場所で待っていたアキラが見ているのは彼とレオの武器。旅先から持ち帰ってきたそれが、ズラリとコンクリートの床の上へと並べられている。

「工場を攻撃するならもっと多くの武器が必要。それもできるだけ強いもの」

「ああ——アキラ、君はどう思う？」

アキラはサブマシンガンだけグッドネイバーで手に入れてきたが。レオはそれ以上の武器をダイヤモンドシティから持ち帰っていた。

レオがミニッツメン復活を考えていたのは昨日今日思いついた話ではないという証拠だろう。

そしてかつては旅に出ようと10ミリのハンドガンとレイダーのパイプ銃、ショットガンだけだった装備が。今では遠い昔のようで懐かしい感じすらある。

「レーザー銃は2丁、タイプが違うようですね？」

「私の旅の中で手に入れた。私兵組織の一員からライフルを。人造人間——聞いたことはあるかい？」

「噂について、少しだけ。この連邦の脅威だそうですね」

「私は彼等と交戦する機会があった。兵士としても性能は低くないし、なにより集団で行動する。噂は本当だと思ったね。それは彼らが使っていた武器だ」

ダンスから譲ってもらったライフルをアキラはいいですね、とだけ褒め。人造人間たちから持ち帰った方を取り上げて、構えてみる。

重さにそれほど変わりはない、大きさがわずかに小さいというくらいか？

「人造人間が使うほうは熱処理が見事です。でもそのせいなのかエネルギーの出力が抑えられている。デザインも独特なので、銃身のバランスが良くなさそう。連射性能に合っていない感じ。なんか変ですね？」

「私もそう思ったよ。多分、それは軍人が考えたものじゃないんじゃないかな？」

「なるほどパイプ銃のレーザー兵器版、ですか」

私はどちらかをアキラに譲ることを決めていた。

レーザー銃は実弾を使う銃とは違い、たくさんあっても使い道に困ることが多い。実際、私は手に入れてからはずっとダンスから譲ってもらった『ライト・オーソリテイ』と名づけられたそれを使っていた。それだけでも十分だったのだ。

「10ミリがないのは、処分しました?」

「ダイヤモンドシティでね。軍人だったときから、私はライフルが性にあっていたんだが。長く眠ったせいで、どうもハンドガンというものが嫌になっちゃったようだ」

「実弾をつかうライフル2丁に、オートショットガンですか。重かったんじゃ——」

「まあ、それだけが欠点だったな」

コンコードから持ち帰ったミニガンは、残念ながら弾の残りがあまりに少なく。

同じくアキラがVaultから持ち出した試作の冷凍銃も似たような状況であったが、こちらはもう使い切るつもりで持っていくことをアキラ本人が決めてしまった。

旅に出る前には見る機会がなかったが、武器を手に作業台に向かうアキラの背中をレオはじっと見つめていた。

武器が終わると、次に用意されるのは2台のパワーアーマー。これはレオとアキラの手によって装甲が強化されるが、これは思った以上に困難な作業となった。サンクチュアリとレッドロケット・トラックストップにかき集めていたガラクタが足りなくなっちゃったのである。

「これは想定してませんでしたね……」

「モジュール追加はあきらめるしかないな、それでも十分役目を果たしてくれるはずだ」

「そうですね——」

ガレージに並ぶそれらを前にして2人は頷きあった。



本当ならばここにはさらに「雇われたキャップの代金程度に」との台詞がつくはずだったが、マクレディはそれを省略する。

反対に無言のプレストンは、いきなりその場に伏せると大地に耳を押し当てていた。まだ遠いが、しかしすではつきりとその音はこちらにまで聞こえてきている。

大地を蹴り上げる、鋼鉄の兵士たちのマーチの響きだ。

|||||

闇の中を複数の駆動音がせわしく響いている。

その正体は2台のT-45、パワーアーマーとエイダである。

「アキラ、このまま武器の最終確認を」

「——こちらはオート仕様のレーザーマスケット、10ミリオートピストルに改造クライオレーター、確認」

「こちらはコンバットのライフルとショットガン、レーザーライフル確認。レイダー達の工場に接近したら合図を出す、頭部のライトは消すんだ。的にされるぞ、夜の戦闘になるがこちらも目視でやるしかない」

「了解」

「コアの残量は80%、問題ない。このまま行こう！」

復活した工場の警備システムはそれなりに脅威ではあったが、防衛に関しては人の手を頼る部分が多いこともちゃんとレオは確認していた。

あの日も、昼間の工場に近づいたグールの一団は警備システムによってすぐにも発見されたが。彼らを排除したのはレイダーたちのそれぞれ手にする火器によるものだった。

どうやらジャレド達は警備システムの性能に満足しているようで、それ以上の防衛能力をこの場所に与えようという考えがまるでないのだとそれでわかってしまった。

攻撃作戦はこうだ。



まずは正面ゲートを一齐に攻撃して押さえる。次にプレストンらが他の見張りをそこからひきつけている間に、パワーアーマーで強引にほかの見張りをしているレイダーたちを叩きのめす。

最悪なのはこれによって内部に夜の訪問者がいることを知らされることだが、とにかく時間が勝負になるのは間違いないだろう。

勇ましい足音を響かせ、3つの影が工場前の通りに侵入しようとする。予想通り、工場の警備システムはすぐにこれに反応し。夜の闇を切り裂いて照らす強力なビームライトが、影の正体を光の中に浮かび上がらせる。

こうなるとたちまち工場の正面ゲートが騒がしくなる。

「おい、マクレディ。準備はいいか？ 覚悟はいいな？」

「聞くようなことかよ、プレストン！」

ニュアンスは違ったが、間違いなく今がその時だった。

「正面ゲートは俺たちの持ち場だつてよ」

すでに迫り来る存在に向け、高架橋の上からのぞき見る正面ゲートではレイダー達が攻撃に向けて忙しく動き出していた。

そこに2人の放つライフル弾とレーザーがゲート正面の崩れかけた高架橋の上から放たれ。ゲートのレイダーたちは訳がわからないまま側面からの攻撃にバタバタと倒れていく。

これでいい。

パワーアーマー部隊がゲートに到着しても、その時には彼等を悩ませるような敵はもう残っていないはず。

だが、いいことばかりは続かない。

「ヤバイぞー」「ここまでだつ、退散しようぜ」

2人は同時にそれを口にするとその場から後ずさりをし、直前にいた場所をほかの見張りからの攻撃が襲い。地面のコンクリートは音を立てつつ、破片を飛び散らし、削られていく。

重装甲の連中には隠れていた仲間がいると知って、レイダーたちは怒りの感情に従って攻撃の対象を変更してきたのだった。

「お2人とも、怪我はありませんか？」

「ああ、大丈夫だ」

この2人を守るために待機していたコズワースに返事をすると、次の作戦にしたがって移動を開始する。

問題はない、ここまでは予定通り——いや、思った以上にこちらに有利に状況は進んでいた。

「アキラ、エイダ。ここからはわれわれの出番だ。」

工場脇の搬入口から、屋上に展開するレイダーたちを殲滅する」  
宣言すると軍用パワーアーマーはライフルを取り出し、もう一台はクライオレーターの起動スイッチを押し、エイダは彼らにせんじて先頭に立って突き進む。

深夜のレキシントンはにわかに騒がしくなるが。

その中心地がまさかあのロボ工場だとは、ここに集まるレイダーたちもまだ気がついてはいなかった。

正面ゲートを押さえられると、闇の中を足音高く駆け上ってくる敵の存在にレイダーは震え上がった。その目が闇の中の敵の姿を捉え、声を上げて味方に知らせたとしても。仲間が駆けつける前に、自分自身は切り倒された木のように、騒いでいた口が一転して沈黙すると、地面に倒れ付してしまう。

恐怖は瞬く間に伝染し、抵抗はほとんど無くなったが。攻撃側がそれで手を緩めることはなかった。

『さすがに高いところに伸びる階段も坂も飽きてきたな。そっちはどうだ？』

「正面ゲートの扉は開かない。なぜかわからないが、中はどうもこっちの様子には気がついてないようだ」

『ならいい、このまま続けよう』

それを合図に工場よりも大きな鉄塔の頂上にいる2つの影は、お互いのパワーアーマーのライトを点灯し。ほぼ同時に空中へとその巨体を躍らせた。

地上までは数十メートル。叩きつけられれば肉体は粉々になってもおかしくないその高さも、この鋼の鎧があれば話が違う。地上へと

地響きを立てて着地した彼らは、すぐにも立ち上がると元気に動き出す。

旧世界の主力兵器は、このレキシントンを支配しようともくろむレイダーの主力を。いま、まさにそのすべてを叩き潰そうとしていた。

|||||

この頃になると、レキシントンの町の中でも当然だが工場の異変を知るようになった。

だが、それだけだ。ここには今もフェラル・グールが次々と流れ込んできており。たとえ太陽が昇っていたとしても、地上を2ブロック移動するのに運と火力がなければ簡単に死体となってしまう場所なのだ。

それを日の落ちた夜に、わざわざ移動して“戦闘中”の工場へ戻るだっただけ？

そんな自分の命を火にむかって捨てるような真似をするやつは、この町のレイダーの中には一人もいなかった。だいたいにして工場には危険なレイダーたちが数十人からいて、工場の防衛能力だって決して低くはないのだ。

それにあそこにはジャレドだっている。

自分達の助けなんて、いるわけがない——。

ところが今の工場には、外にいる町に散らばっていた仲間からの救援が切実に必要だった。

驚くべき話だが、外があればほど大騒ぎをしたにもかかわらず、工場内ではそれに反応するものは本当に一人もいなかったという事実。ジャンキーたちは快楽にふけり、そうでない者たちも酒やビールのピンを枕に大いびきをかいて眠っていた。

相手の腑抜けぶりは、想像のそれをはるかにこえていて最低だったのだ。

そんな無防備なところに武器を構え、殺意をまとったパワーアー

マーが足音を立てて入ってきたのである。あつという間にひき肉と凍結した氷像が量産されていく。

(まさか、こんな簡単にやっつけてしまうなんて!)

正面ゲートを押さええていたブレストーンはエイダと合流し、そのまま中へと恐る恐る進んだが。

あまりに無防備をさらす相手に愕然としていた、実際にたいした苦労も必要ではなかったのだ。

工場への攻撃開始から2時間を経過。

ついに工場内で仲間達は、誰一人欠けることなく顔を合わせる事ができた。

「そつちは?」

レオはまるで挨拶でも口にするように、軽い調子で問いかける。

「工場内のマップをターミナルから入手しました。それと第1と第2作業エリアのレイダーはすべて排除」

「こつちも似たようなものか、ただ地下に降りるルートを見かけた。人の気配がなかったので、無視してきてしまったが——」

「下水に続くやつかもしれないな……今は必要ないだろう」

「残っているのは、この上階にある第3エリアで終了です」

「いよいよ仕上げにかかる。」

「パワーアーマーは大丈夫か、アキラ?」

「破損は十数%程度、エネルギーの残量も問題ないです」

「……そういうことだけじゃない」

「レオさんのような軍人ではないですけど、銃はこれまでもそれなりに撃ってきました。今更、涙を流して震えてみせてもそつちのほうが嘘くさいと、そう思いませんか?」

「君がそんなことに慣れるのは、もつと先にすることもできた。私は根拠もないのに、そうなるだろうと勝手に思ってしまった」

「でも結果はきつと変わらなかったです。遅いか、早いかの違いだけで。」

俺——僕にはレオさんのようなかつての平和な時代の記憶がない

んです。この時代にあるものをただ普通に感じるしかないし。だからそんなに悩まれることでもありません」

年齢だけを考えるなら、彼はもう立派な大人だ。わかっている。

だがその童顔と最初のイメージが、今の彼とあまりにも違うのでなかなか切り替えてはまだ考えることがレオにはできないのだ。

「たぶん君が正しいのだろう。わかったよ、アキラ。さっさと終わらせてしまおう」

「了解です。元、大佐殿」

兵士の記憶と戦場だけが、今の自分を支えるものとなっている。

それはもう、自分には必要ないものだと思っていたのに。新しい戦友たちが、平和だった世界とともに去ってしまった妻の変わりに自分のそばに集まってきている。

それは麻薬のように危険だが、今の自分には必要な戦いと栄光なのかもしれない――。

|||||

Vault111の2人と仲間達に最後のエリアのレイダーたちの抵抗など、わずかなものでしかなかった。

リーダーのジャレドは追い詰められたと悟ったか。果敢に部屋の中から横走り飛び出しつつ、サブマシンガンで抵抗しようとした。だがもはや劣勢は明らかだった。

ジャレドの放った弾丸はアーマーの表面にあっさりとはじかれてしまい、2人の構えた銃口はその影を追って十分に狙いをつけてから引き金が引かれた。

走り続けたジャレドの体はわずかの間だけ激しく波打つと、工場の床を滑るように崩れ落ちて動かなくなり。レオとアキラのアーマーは表面だけがわずかに傷がついただけで、勝負はあっさりとついでしまった。

ここロブコ工場は、ついに陥落したのだ。

アキラはそいつが死体となる前、最後に触れていたターミナルに近づくと、慣れた手つきでキーボードを操作して記録を呼び出し、素早く目を通す。

「ジャンキーの妄想……じゃないよなー、これは」  
体をおこすとそこに書かれていたことへの面白くもない感想で、驚きを紛らわそうとした。そこにレオも近づいてくる。

「どうした？」

「……興味深い真実、つてのがわかったんですが。これ、本当だと思います？」

そういつてターミナルの前を譲る。

レオは屈んでディスプレイをのぞくと、ジャレドというレイダーの残した記録を読み始める。

信じられない話だったが、ジャレドはあのサンクチュアリに逃げてきた入植者達と同じクインシーで生まれたらしい。レイダーになる前は、なんとママ・マーフィーにも会っていて、彼女のサイトで未来の姿を告げられたのだそうだ。

——あなたは将来、モンスターになるよ

その予言は呪いとなるようにジャレドの人生を一変させた。その後、レイダーに誘拐されるとすべてが狂い始め……皮肉なことに予言は現実となり。狂乱の無法者、ジャレドがそこで誕生した。

そんな彼は最近、クインシーの虐殺によってミニッツメンが敗走したと聞くと。ママ・マーフィーの持つサイトへの執着を見せ始める。

——サイトを自分のものにする

それは本気だったかもしれないが、ただの妄想だ。

老婆の力は、彼女だけのものだ。だが手に入った大量の薬物によって濁った思考は、そんな世迷言を許さない理性を残しておいてはくれなかったらしい。

「プレストンには見せられないな——」

「そうですか？ 読ませればきつと『ミニッツメン復活は決まっていた運命だった』とかいって調子よく元気になるかもしれませんよ」

そう口にするるとアキラはジャレドから武器を剥ぎ取り、レイダーたちの集めていた金庫の扉をひらいて中の物色を始める。その姿はもう――。

すべてはこれで終わったと思っていた。

だが、工場をレイダーたちを彼らの血の中に沈めただけでは、レキシントンの夜は終わらなかつたのである。

|| || || || || || || || || ||

東の空に太陽が姿を見せる。

2287年12月の最初の一日目の夜を、レキシントンはひどく騒がしい夜からはじまった。

崩れかけた高架橋の上では、レールロードの諜報員ディーコンがこの町を静かに眺めている。その後ろには「ツーリスト」のリッキー・ダルトンが落ち着かなくしていた。

「なあ、もうやばいって。やばいんだって！」

「――落ち着けよ、兄弟」

「無茶を言うんじゃねーよ！あいつら、あのツルツル頭共。きつとなにか命令があつて、工場のレイダーたちを皆殺しにしたに違いないぜ。ああ、ここもきつと奴等にバれて……」

「夕べと言っていることが違うな？あの時は確か、フェラルのことでノイローゼ起こして仲間割れしていると言つたのはどうなつた？」  
「ああ。ああ、そうだ！そうだったかもしれない。だが、違つたんだ。それだけだ」

怯えきつて冷静さを失い、彼にはもう事実がどうとかなんでもいいのかもしれない。ディーコンは首を横に振ると、再び町の中の様子を探る。

不気味で、そして恐ろしく静かだった。

確かに夕べの工場のレイダーたちは大騒ぎだった。

遠目ではあるがあいつらの数人はなぜか空を飛べると勘違いした

ようで、夜の闇に向かって両手を広げ、次々と地上に落ちていくのも見たような気がする。

だがそれも夜中をすぎるころには収まったし、朝が来れば町の中にいるレイダーたちの様子にも変化があるだろうと思っていた。

今のところその予想は裏切られている。

町は不気味なほど静かだ。そして——信じられないが2人が監視しているドーナツ屋もそれを真似しているのか。昨夜から店の中で動く影も、気配も感じられない。その理由は——わからない。

そもそもレールロードが、ディーコンがレキシントンにこうしているのには理由がある。

先日、組織の隠れ家に何者かが侵入してきた。

最近では敵対するインスティチュートの猛攻にさらされ、組織が弱っていたところだから、それはもう凄い騒ぎになった。

それでも武器を構え、来るなら来いと待ち構えている彼らの前に現れたのが。

たった2人の人間だ。

ひとりはVaultスーツに、軽装のメタルアーマーを身に着けた若者で、もうひとりはそれに雇われたという傭兵の若者だった。

この両者の出会いは最悪だったと言っている。

疑いのまなざしを向けるレールロードのリーダーの問いを、この若者は「仲間にしてくれ」とだけ要求すると、あとは下手な嘘や言い訳を繰り返して緊張をいたずらに高めさせていく。

それを終わらせたのがこのディーコンである。

ちよつとした任務でダイアモンドシティから戻ってきたばかりだった彼は、同時期にグッドネイバーでの噂話もその耳で聞いて知っていた。

これはまた面白いやつが転がり込んできたものだと、内心では大喜びで味方に若者たちの身元を保証した。

リーダーはディーコンの言葉を半分だけ受け入れた。



協力者として使ってやれ、そういうことだった。その意見にデイーコンが、今度はまったく同意できなかった。だからここにいる。

敬愛するリーダーの認識を正すため、若者たちと自分でちよつとしたボーナスゲームを用意しようと企んでいたのだ。

なのに、その若者はまだここに姿をあらわしてはいない。

——ザ、ザザツ

その時、無線ラジオが不快な音を立てて鳴り出した。

——ザツ、そこ…いる…？わかるか？

救助信号であろうか？

それにしても、妙に向こう側に余裕があるように聞こえる。

——聞こえているよな？ザザツ…ここにいるんだよな？

デイーコンは迷っていた。声がするのと同時に、その相手が誰かはわかった。

だが、これが畏ではないとどうしてわかる？

——駄目か、もう一度だけやってみる。聞こえているよな？そこにいるよな？レールロード。

やはりこちらに呼びかけている。背後のリツキーはすでに顔を引きつらせ気の毒なくらい顔からは血の気が失われていた。

「おい、おいっ。まさか出るつもりじゃないよな？こんな、馬鹿なっ」  
「……どうかな」

「畏だよ、畏に決まってる。こんな簡単なことを——あつ!？」

リツキーには感謝しないといけない。情けない泣き言が、デイーコンの躊躇いという壁を崩す最後の一押しになってくれた。手を伸ばすと、送信スイッチを押す。

「聞こえているよ、おはよう。確かアポイントメントは別にとつてあつたはずだが、どうした？」

——良かった、実はちよつとした誤算があつてこうなつた

「確かに良かったようだ。だが、このまま長くおしゃべりするの好きじゃない。どういふつもりなんだ？」

気のせいだろうか？通信に雑音が混ざらなくなっている。

こちらに近づいているということか？

——心配は要らない。ひとつだけ頼みがあるんだ、聞いてる？

「ああ、愛の告白じゃないといいが。心臓がおかしくなりそうなくらい、鼓動が早くなってるよ」

——それじゃないよ。そうじゃなくて、ちよつとこつちを……オツト、これはマズイ

静かだったレキシントンの、それもこちらに近い場所から爆発音が聞こえた。

そしてそれが合図とでもいうように、激しく争う存在がある。

「おい、あそこっ。あそこで起こっているんじゃないのか？」

「……ありがとうリッキー。確かに、あそこは俺達の探っていた場所だったな」

2人が見張っていたドーナツ屋の中から青と赤の光が走り。銃声と爆発は、中にいた存在を家屋の外へと——地雷が敷き詰められていたドーナツ屋の前へと吹き飛ばしていた。

地面がはじけ、空中に舞い上がる複数のそれを。リッキーとディーコンは遠くからでもはつきりと確認することができた。

人造人間だった。

インステイチュートが、尖兵として使う真っ白で無機質な存在。

破壊しつくされたそれらは、土煙のおさまっていく大地へと重力に引かれて叩きつけられると。もう動くことはなかった。

——わかったか？

「ああ、凄いものを見せてもらったよ。だが、説明が必要だ」

——それは確かに。ところで、このまま外に出ても大丈夫かな？

「ああ。ただし足元にはご注意を」

そう口にする、ディーコンはラジオのスイッチを切って立ち上がる。

「お、おい？どうするつもりだ？」

「さあな。あそこに降りていく以外に、俺にやれることは残っていないように思える」

「正気か？狂ってるのか？」

「同じ疑問を俺も感じているよ。だが、たぶん両方だと答えることに

なりそうだ」

「お、俺はどうなる?」

「あんた? そりゃ——ご苦労様、ここはもういいよ。次の指示を待て。こんな感じかな、世話になった。兄弟」

無表情の上にサングラスをしたハゲ男は、どこかヤケツパチを感じさせつつ。軽く手を上げて別れの挨拶をすると、背中を向けて橋の上から立ち去って行ってしまった。

しばらく呆然としていたリツキーであったが、自分がここにおいていかれたのだとようやく気がつく、思わず再びあの恐ろしかったドーナツ屋へと視線を向ける。

すでに戦闘は終わり。

小さな店の入り口から、大きな鋼鉄の兵士が。パワーアーマーを着た2人の姿が現れ、それに続いて出てくる兵士やロボットたちの姿を確認した。

それでリツキーもようやく理解した。

怯え、愚痴っている間に、危険で見返りの少ない自分の任務は解決してしまっただということ。

彼はいつもそうするようにすばやくその場からの撤退の準備を終わらせると、最後にもう一度だけあの場所に目を向けた。

すでに店の中から出てきた集団に、ゆつくりと歩いて近づいていくあのここ数日で見慣れた、朝日に照らされて輝く後頭部の持ち主の姿がそこにあった。

## 勝利の美酒、酔えず

レキシントンのジャレドが死んだ。

最後のミニッツメン、プレストンが仲間を引き連れ、会心の一撃で、それをやってみせた。

この知らせは驚きと共にあつというまに連邦の隅々まで広がっていく。

それは同時にクインシーの事件で無様にも壊滅したとばかり思っていた組織が、再建の道を歩みだしたのだと知らせる希望にもなったはずだ。

ロボコ工場攻略のつもりが、ふたを開けてみるとレキシントンの半分をひっくり返した上で、さらにもう何度か叩き付ける羽目になったのは誤算であつたが。とにかく作戦は大成功に終わったのだ。

そんな危険な攻撃部隊はすでにレキシントンを離れ。

レオはプレストンとマクレディをつれて断崖の上の居留地へと向かい。アキラは残りとサンクチュアリ側のレッドロケット・トラックストップへと戻ってきていた。

レオたちがあの居留地で歓迎され、ここに戻ってくる前に準備しておくことが沢山あつた。戦いに疲れた体を癒す暇はない――。

レキシントンからはロボットとアキラでもてるだけの大量のゴミを抱えて持ち帰ることができた。おかげで空になりかけていたサンクチュアリとガレージのワークショップには、再び大量のそれがすずに放り込まれている。

アキラはこれを使い、さらに多くのことを実現させないといけない立場にあつた。

ガレージにパワーアーマーを置いたアキラは、汗を流そうとバスタブに水をためると発電機で熱をおくりこんでお湯にすると、裸になつてそこに飛び込んだ。

血、油、死臭。そういったものが多少はこれで洗い流せるといいが。

その傍らにはエイダがしつかりとはりついて見張りつつ、不思議そうに疑問を口にした。

「あの子、私たちが戻ったときは喜んでくれたのに。何で今は、近づこうとしないのでしょうか？」

「ん？」「カールです、小屋に入ってしまった。まるで私たちがいないように、沈んでいます」

「ああ——そのことか」

レオさんの犬、カールは今回の攻撃には参加せずここで一匹、留守番をさせていた。

戻ってきたのがロボットたちとアキラでも、それなりに喜んではいってくれたようだが。アキラがバスタブに水をぎぶぎぶ入れ始めると、途端に背中を向けていぬ小屋の中へと入って行ってしまったことをエイダは知っているのである。

「犬は綺麗好きだけど、こうやって水で汚れを落とすとは考えてないんだよ。砂場や泥を体にこすり付けるだけで、それがかなうからね」  
「知りませんでした。あなたは犬のこともよくわかっているのですね」

「僕は、僕は——犬は、飼ったことは、ない。知ってるだけさ」

どもりはじめると自然。濡れた髪に触れ、自分の心臓がいつの間にか恐怖から早鐘を打っていることに気がつくことができた。自分は今、何を口にしてしまったんだ？

「駄目だ、集中しないと……エイダ、コズワースがサンクチュアリから戻ったらさっそく計画を話す」

「わかりました」

ため息をついた。自分のことは何もわからないのに、なんでまだ他人の面倒を見ているんだろう？

そんな焦りのようなものを感じるが、だからといって答えがどこにあるのかなんてわからない。そもそも手がかり自体が、まったくもっていないほどないのだから。

（息子さんを探すレオさんと僕。やってることは違うのに、まだお互い大して前に踏み出していないのかもね）

バスタブの中の水に頭の先まで沈める。エイダはロボットだが、見られたくはなかった。

この顔に浮かぶ、口の中の苦味をかみ締め。そんな自分を嗤った、泣き笑いの混ざったその顔を。

|||||

犬小屋のそばに椅子を引きずってきて座るアキラは、目の前に並ぶロボットたちに説明する。

「ミニッツメンの再建、この計画はようやく本当の意味でここから始まる。」

この瞬間から、このガレージはミニッツメンの活動拠点とする。遠からず兵士たちがここで寝泊りし、ここから任務地へと出撃する。そういう場所に、僕たちで作り変えなくてはならない」

「なるほど」「了解です」

「だが、やるべきことはあまりにも多すぎる。いくら僕や、お前たちが頑張っても物理的にそれがすぐに用意できるわけじゃないし。そもそも、持ち帰ったガラクタだけではそれはまったく足りない。」

そこで、大きく3つの柱を目標に。可能な限り計画を進めていききたいと思う」

「わかりました。どのようになるでしょうか？」

アキラが最初にあげのたが『手』を増やす、ということだった。

これからここは次々と人が入ってくる。彼らの手で、ここは大きく変わっていく。

その前に――。

「わかりました。ロボット作業台のことですね」

「そうだ、エイダ。」

エイダの元いたキャラバンから回収し、あれ(作業台)を作り上げ、ここしばらくはずっと学んでいた。ガラクタが補充され、邪魔する奴がない今こそ好機！」

「――アキラ、お言葉ですが旦那様はあなた様を邪魔したりはしませ

んよ」

「誰とは言っていない。言うつもりもない。だが、チャンスは逃さないよ」

別にエゴだけで言っているわけではない。どのみちエイダのために、ロボットの知識は手に入れなければならないし。この場所の完成にはロボットの力は必ず役に立つ。皆喜ぶ、間違いない。

「新しいロボットですか——わかりました。それで、その後は？」

「命令を実行し、状況を判断し、正しい行動が取れるか。それをコズワースと一緒に作業をさせて、学ばせながら監督してもらおうつもりだ」

「私ですか？」

「そう。だって君はすでに200年以上を稼動し、それでも動く万能型ロボットのベテランだろ。新しいロボットが手本にするならエイダより、君だ。違う？」

「ハハハッ、仰るとおり。まったくですね」

まあ、実際は最初に作るのは汎用人型ロボットのプロテクトロンなので似たタイプにまかせるといっただけのことだったが。あえてそういうことにして、押し付ける。

「ひとつ疑問があります。私の改造については、どのようにお考えですか？」

「えっ!? あなた、自分の体をまだ改造するのですか？」

「もちろんです、コズワース。私は戦闘用ロボット、しかし以前の仲間は守りきることができませんでした。私にはもつと力が必要なので」

「——残念だけど、時間とリソースの問題から後に回す。そもそも作業台を正しく使えると確信がないと、君の体に触れられないし。調整などにかけられる時間もない。後回しにするしかない」

「そうでしたね。わかりました、我慢します」

エイダは素直に従う姿勢を見せた。

「それで、私たちでここに人の住まう家を建てるのですか？」

「いや、そうじゃない。それが2つめだね。」

建物は建てるけど、人の寝泊りする場所じゃない。それはここに来る奴等が自分たちでやってもらう。彼らが自分で使うものだからね、僕らは違うものを作る」

「それはなんでしよう?」

「サンクチュアリに、僕の計画のために更地にした場所と資材が残っている。そこに別のものを建設する。これはコズワースに任せるつもりだ。」

エイダはここ、レッドロケット・トラックストップに地下室を作ってもらいたい」

「地下、ですか?」

「エイダ、君が見つけたんだ。ここに帰ってきたとき、この真下にながっている穴があるって」

「ええ、はい。確かにそういいました。この下にはモールラッドの巣があります。レオの話によれば、最初にここに訪れた際にもモールラッドの群れに襲われたそうです。納得できました」

残念ながらアキラには納得できないことだった。

巣はこの真下にまで広がっている。つまり、その穴の存在が誰かに知られれば。このガレージは地下から吹き飛ばされてしまう可能性があるとということだ。この穴を放置しておくわけにはいかない。

アキラは両手を広げて周囲を示す。

「ここを見てくれ。北には川、南には下り坂。よほどの大軍でなければ、襲撃は東西から押し寄せてくるのが鉄板になる。可能性として北にも注意が必要だけど」

「北にも?しかし、この北にはサンクチュアリしかありませんよ。アキラ」

「そのサンクチュアリの防衛能力は、必要最低限でしかない。可能性は無視できないよ」

「アキラが助けてあげれば、きっと彼らは安心できますよ?」

「——考えておく。とにかく君たちの仕事はもう決まっている」

「わかりました。そうになると、最後のひとつが気になります」

「確かに。ほかに何があるのです?」



両手を下ろすと、今度は極端に静かになるアキラはボソリとつぶやいた。

「交ネゴシエーション渉ネゴシエーションってやつかな。それはレオさんたちが戻ってからになる——」

ロボット作業台の横ではエイダが立って待っている。そこにアキラが近づきながら、声をかける。

「よし、エイダ。準備はどうなってる?」

「大丈夫です。あなたがこれからする事に、胸が高鳴るのを感じます。おかしな表現ですが」

「いや、わかるよ。僕もそうだ、楽しみでしようがないよ」

そう口にしながらアキラは手を伸ばすと、作業台のターミナルをたいて起動させた。

「あなたにとってはじめての作業となりますので、段階を踏んで進めましょう」

「いいね」

「まずは骨組みから。起動させ、次に服を着させるようにして装甲をとりつけます」

「2段階、わかった」

「ロボットの武器はどうしますか?プログラムの都合で必ずもたせなくてはならないのですが?」

「両手はレーザーにする。エイダと出会ったとき、キャラバンを襲っていたロボットの中にもそんな——あつ」

考えもなく馬鹿なことを口にしていたことに気がついた。

「どうしましたか?」

「その、悪かった。エイダ、気を悪くした?つまらないことを口にした」

「そのことなら大丈夫ですよ。それに確かに、あそこにはレーザーを使うプロテクトロンはいました」

「フウー。ごめんよ、もうやらないようにする。許してくれ」

「本当に気にしていませんから。さあ、それよりも作業を始めましょ

う」

それからの3時間、多少はもたつくこともあったけれど。特に失敗もすることなく、予定通りに新しいロボットが完成した。

TH-33、プロテクトロン。

アキラがはじめて作った、最初のロボットである。

「おめでとうございます。大きなミスをすることなく完成させました。お見事です」

「優秀なアシスタントのおかげで、失敗して余計に部品を使わなくてすんだよ。それで満足だ」

「それでは、TH-33をさっそく稼働させて見ましょう」

「いや、待った！悪いけど、TとかRとかCとか、自分のロボットをナンバーで呼びたくないんだ」

「——名前をつけるのですか？」

「ああ」

アキラは嬉しそうに、ターミナルをたたくと。画面にある、個人名称が別のものへと書き換えられていった。

——マーヴイン。

それがアキラがつけた、彼のプロテクトロンの名前だった。

「マーヴイン、起動しろ。まずは挨拶からだ、おはよう」

——ピー、ピー、ガツガガッ

「——あの、これを音声に選んだのですか？驚きました」

「個人的だと思ったんだけど……まあ、思ったとおりだ。可愛いよな、何言ってるのかさっぱりわからないけど」

——ピー、ピー

「いや、大丈夫だよ。きつとね、そうだろう？」

心で会話できるさ。こっちは命令出すし、それにしたがってもらえば問題ないし。そうだろう？」

——ガツガツガッ

「不安です」

「大丈夫、大丈夫だって——すぐに上にかぶせて、あとはコズワースにまかせよう」

「わかりました」

エイダが必要な資材をとりに行っている間。

アキラは自分に何かを必死に訴えてくるマーヴェインをまえにして、頭をかいていた。

（大丈夫、これはきつと喜んでいるんだと思う「生まれてきて大変光栄です」とかなんとか、そんな感じのことを——きつと）

それが正しいという根拠は、ない。

|||||

断崖の上の居留地へむかったレオの一行からレイダーの殲滅の知らせを聞くと、住民は大いに喜んだ。

レキシントンにはまだジャレドが流した噂のせいで集まってきたレイダーがいて、そのうち空席となったそこにまた座るやつも出てくるかもしれないが。当面の間は、それを心配しなくていい。

その日、それまで沈んでいた居留地はお祭り騒ぎとなり。

秘蔵の密造酒などを取り出し、生まれ変わったミニッツメンを祝福しながら、この先の平和な日々を思って乾杯した。

その夜、レオは眠れずに寝床から離れると。

あの日の夕焼けの中、断崖の上から見下ろした連邦の夜のそれを見た。

レキシントンの一部から明かりが見え、ここからでも確認できる口ブコ工場を照らす人口の光が、まだ今でもあの大きな建物はつきりと浮かび上がらせている。

「——あれほどあんたたちと一緒に滅茶苦茶にしてやったのにな。ここからまだこんなにもはつきりと見える」

「プレストンか」

「レオ、眠れないようだな。どうかしたのか？」

「別に……本当に確かにそのとおりだな」

あの時あの場所にいたレイダーは一人も生かしてはおかなかったが、あそこにあつたシステムはほとんどそのままに生きていた。あ

の場所はもう、レイダーたちにはちよつとした城として認識されているだろう。そこに入り込んで、再びシステムを再稼働させる奴がまた出てくるはずだ。

「中途半端な仕事をしたと、思っているのか？」

「わからないよ、プレストン。どの道こちらもあそこには長くいられなかった。すべてを破壊しつくすような時間も武器も、足りなかった」

「思いっくだけでヌカ・ランチャーと。その弾頭が5・6発あれば余裕だっただろうが。」

レイダー以外にもフェラルや人造人間もいた。

やはりあの場所にとどまっていたても、どうにもならない気がしていた。

「ミニッツメンとして勝利した後でも、今のあんたのような感情を抱くときが俺にもあったよ。もっと、もっと、あいつらがいた場所を徹底的に叩いておくべきではなかったのかってな」

「そうか。意外だな」

「当時の上官だった大佐にはそれで怒鳴られた。任務で果たした以上のことをなぜ望むのか、と。」

長いことあの言葉には納得できなかったが、今ならわかるよ。限られた武器と兵力で、完璧なものを求めてはいけない。そのために犠牲を大きくしてはならない」

「確かに。だが、それだとはやはり私達は失敗したな。だってそうだろ

——

あの時の問題は工場内の掃討戦の中で起きた。

マクレデイが工場の地下へと続く通路を発見し、そこに続く大型のパイプ管を覗き込んだのがすべての間違いの始まりだった。

「純粋な好奇心だけではない、「どこに続いている？」その問いをそのままに実行してしまったのだ。」

上へ下へ、奥に奥にと続くそこには。

たびたび暗闇の中で横になるフェラル・グールたちと遭遇したが、パイプ管が終わって、飛び降りたそこはちよつとした軍の秘密施設が

あつた。

答えはアキラがハッキングしたターミナルの中と、そこに徘徊していた人造人間たちでわかった。

「ここ、レールロードの旧アジトだった場所だ！」

一晩でわれわれはレキシントンのレイダーと人造人間たちの施設を襲撃していた。

誰も死ぬことなく、それどころかたいした怪我もなくこうして戻つてこれたことは、まさに奇跡だったと考えてもなんらおかしいことはない。

「まいったよな、ドーナツ屋の下に軍の施設だぞ？誰がそんなこと、わかるっていうんだ？」

「ああ、まったくだ」

低い声で互いに苦笑する。

今は笑っていられるが。パワーアーマーがなければ、こんな風に笑って振り返ることはできなかつたであろう。

「マクレディはアキラが接触したレールロードのことはよく知らないと言っていた。あんたはそれを信じるか？」

「プレストン、マクレディは傭兵だ。知っていても雇い主にとって利益にならないと考えれば、話さないよ」

「どういう意味だ？」

「あんたが固いから、文句を言うと思われたのさ」

「そういうことか——」

ディーコンと名乗つたその男とアキラは、挨拶を交わすとすぐに別れた。「またすぐに会える」、そう言っていたからなにかあるのかもしれない。

「この居住地の皆には喜んでもらえた。ミニッツメンとして、こんな日を迎えられるのはもつと遠い未来かと覚悟していたが——皆には感謝している」

「すべてはこれからさ、プレストン。あんたはいい奴だ、あんたを頼つて新しいミニッツメンに加わりたいという若者が集まってくる。あんたが彼らを導いてやらないといけない」

「俺の手で、か」

「そうさ。あんたは最後のミニッツメンなんだ、きつとやれるさ」

2人はそういうと自然に黙ってしまう。

サンクチュアリに戻れば、いよいよミニッツメン再建は本格化される。それは同時に別れをも意味していた。

レオは、アキラは。互いに連邦に対して持っている疑問がある。

その解決のために、再び旅に出る日がくる。そしてそうならば――

(コンコードからの続く流れに、これで一段落つけた。これから先は自分の事――ショーンのことだけを集中できる)

プレストンから受け取った密造酒のビンに口をつけ、まだ夜の連邦を眺め続けるレオの横顔をプレストンは横目で盗み見していた。

## 良薬、口に苦し

サンクチュアリは混乱と崩壊の一步手前でこらえていた。

逃亡してきた入植者と、呼びかけに応じて集まってきた入植者。どちらも平和な穏やかな生活だけを求めてここにいるはずなのに、諍いが日増しに強くなっていく。

物事はすでに最初からいたか、途中で加わったかの違いだけではなかった。

いくつもの小競り合いが積み重なりあい、解決は次の揉め事への種火にしかなくなっていかないのだ。

(なんで、なんでこうなってしまうんだよ)

スタージエスは互いにのしりあう町の住人たちからはなれると、真つ暗な外に出ると腰を下ろし、静かに頭を抱え込む。 “ 涙が流せるなら ” このまま大泣きしてやりたいほど悲しかった。

「大丈夫かい、スタージエス？」

「ママ・マーファイ？」

「あそこじゃ居眠りもできなくてね。わたしもそっちに行かせてもらうよ」

老婆が隣に座っても、スタージエスは頭を抱えたまま顔をあげることはなかった。

「本当に大丈夫かい？」

「どうしたらいいんだ、ママ・マーファイ？」

せつかくみんな、普通の生活がおくれると思っていたのに。きつとよくなるって、そう思っていたのに」

「そうだねえ」

「レオとアキラは出て行った。プレストンも、もうすぐここから立ち去る。」

それなのにここでは、つまらないことで2つに別れて互いを怒鳴りあっている。憎んでさえいる。せつかくあなたがここへ皆を導いてくれたって言うのに、これからどうしたらいい？」

「心配は要らないよ、この婆さんにはわかる」

「えっ!?それはまさか——」

「違う、違う。そういう意味じゃないさ、年寄りにはわかるんだよ」

そう口にする、顎で入り口にある橋の方角を示す。

「あの向こうにアキラが戻ってきているようだよ。レオのロボットをこっちに寄越していたからね。あの子は今のこちらの様子を探ってきているのさ。きつとなにか考えてくれるよ、優しい子だからね」

「アキラが?彼は、僕らをきつと嫌ってる。憎んでいるかもしれないのに」

「それは違う。あの子は怒っているだけ、本人もちゃんとそれはわかってる。でも嫌ってはいないし、憎んでもいない」

「そ、そうかな?」

「もうすぐ何かを言ってくるよ。それで、ここも少しは静かになるはずさ」

「何もなくていいってことかい?」

「それまでは、ね。その時が来たら、少しは頑張らないと。そうすれば、あの子もきつと許してくれるはずさ」

サイトで目にしたあの氷漬けの入れ物が並ぶ場所から来た2人の男。

だが、この老婆はそれぞれに別の悲しい映像を見て未来を口にし、あの2人はそれにすぎるように、ここでの生活を捨ててさっさと旅立って行ってしまった。

あの日から幻覚は見えていないが、きつと何かをすでに手にして戻れぬ道の先に向かって歩き出してしまっている。

これまでも自分の言葉を聞いた皆がそうだった、彼らもきつと――

彼らがプレストンをここから連れて行ったのは、プレストンと同じく彼ら自身もこのサンクチュアリから解放されようとしての行為に違いないのだ。

すでに彼らの個々の勢いは凄まじく、小さな揉め事で揺れているここにも近づけば、あつという間になにもかかも吹き飛ばしてしまうこ



とだろう。

(嵐が戻ってくるね。だが、それはここに留まることはない)

いつの間にか隣のスタージェスは顔を上げて、空を見上げていた。老婆も自然と、それにならう――。

|||||

不吉な預言者の言葉は、常に的中するものらしい。

レオとプレストンと共に、不機嫌で不満げな若者がサンクチュアリに姿を現したのはそれから数日後のことであった。

彼の爆弾はいきなり住人達に向けられて投げつけられた。

「なんですつて? いま、なんといったの?」

絶句している周囲と違い、いつものごとくヒステリーを起こしかけたマーシーが。それでもあの日の恐怖が忘れられないのか、恐怖と怒りが混ざり合って混乱しつつ震えながらも再び尋ねる。

それに答えるアキラはもはや、悪人のそれであった。

「あんたたちはサンクチュアリで俺の財産を不当に奪い、扱い、迷惑ばかりをかけている。それを今すぐ正してもらおう。それが嫌なら、俺の資産はすべて破壊し、収集してここを立ち去る。そう要求しているんですけど?」

「馬鹿いつてるんじゃないわよ! あんたの財産って、どれのことよ」「全てだ!」

胸をそらし、いきなり大声を上げると今度は皆の体が大きく震えた。

「発電システムも、わずかに配られているランプも。ここにある全て、俺のものだ。」

さらにいうなら俺の浄水システムで得た水を飲み。それをやはり俺がバンカーヒルで宣伝してここに来させている商人たちに売り、キャップを勝手に自分たちで分け合っているよなっ!

これが事実だ。何か間違っていたかな?」

若者は明らかに、目の前の自分よりも目上の大人たちをはつきりと

脅し、威圧していた。

「残念なことにごの居住地は生まれたばかりで、法やモラルはまったく期待できない。皆さんは居直ってしまえば、こつちが引き下がるとでも思っているのだろうか。そんな甘い話はないぞー!」

「プ、プレストン。なんでこうなっているんだい?」

「ここに居る2人に助けを求めようと考えているなら、やめたほうがいい。いい。」

最初だから警告しておく。

俺がレキシントンでレイダーを狩った後、君たち恥知らずな篡奪者共を駆逐してやろうと戻って準備していると、ここに居るプレストンが——最後のミニッツメンが言うんだ。『アキラ、彼らは仲間だ。もう一度話しをしてみてくれ』

尊敬する大人にそういわれたら、ちゃんと耳を貸すさ。

だからここに来た。

あんた達が俺から奪ったものを取り返すためにね。わかったかな?」

ここでこの場に居辛そうに体を縮めていたプレストンが咳払いすると、ようやく口を開く。

「皆にも言い分はあると思うが、アキラの訴えにも一理ある。俺たちは彼に借りがある。それにこれを機会に、あの日の争いも解決したい。」

レオの口ぞえもあって、アキラが和解案を出してくれた。俺はそれに目を通して、問題ないと思った。今は皆にもそれで手を打たないか、ということだ」

マーシーやジュンはプレストンの言葉に信じられないという顔をし、ほかの住人たちは不安そうに互いの顔を見合わせている。

スタージェスも不安を感じながらも内心では(これがアキラの考える、俺たちのうまくいく方法ってわけなのか?)と首をかしげていた。「なによ、プレストン!そいつこそ私たちに恩を仇で返した奴じゃない。生意気言ってるんじゃないわよ!話し合いといっても、すでに口ポットたちに命じて何か作らせているじゃない。あれは何よ!?説明

しなさいよっ」

「あーいかわららず自分たち夫婦の面倒も見れない癖に、いつだって文句ばかり口にする女だっ」

「そっ!?!なっ!?!」

「またヒステリー!?!叫ばないと泣いちゃうかなあ?」

「っ、妻を。マーシーをいじめないでくれっ」

「それは違うねっ。しつけてやってるんだ、よく吠える娼婦の尻はもつと激しくたたくものだろ?お互いが興奮して、さらに気持ちが高ぶってしまう。でもそれはベットの中の話だ。」

同じように、一月とちよつと前。ここで俺が中止させて出て行つた後のこの場所はどうなっていたか?さあ、ちよつと周りを見回してもらおうか」

立ち上がると腰に手を置き、無表情のまま顔を左右に揺らす。

「何も変わってない。なーんにも、だ。」

人が増え、食料が足り、商売をし、キャップが入り、なのにそれで終わり。なにもしていない。

なぜわかるかって?

もう見ただけでわかる。夜はどこもいつだって真っ暗、焚き火の火がちよろちよろあるだけで人が眠る家の中は墓場みたいだ。灯りはどうした?自分達ではランプも用意できないのか?ろうそくは残りが厳しい?

どうせ商人から得たキャップを何にも考えなく全員で分けてしまつて、おかげでそれぞれが必要なものを商人に売りつけられてキャップを失い。互いが優劣生まれたとつまらない揉め事おこし、そんなだからなにも他にできることがなかった」

芝居の最後にはいつだって笑ってない目と笑顔が欠かせない。

「それが今のあるた達だ。違うかな?」

アキラに言い返す人間は一人もいなかった。

Vaultスーツの上に着たメタルアーマーの陰から見えるのは、禍々しい改造を施した拳銃がいくつもぞかせていた。

彼は怒鳴り、叫び、大きく切れのある動きを続けたのはわざとで

あつた。彼らが平日、飽きもせず非難と怒鳴り声をここでやろうとするならば。この若者は激昂して武器に手を伸ばすと、銃口を自分たちに向けてくるかもしれないという恐怖。

長い間、逃げ続けた者達の目の前でちらつかされる暴力装置の威力は絶対であつた。彼らは自然と目が床へと下がっていた。

こうしてこの連邦ではどこでも見られることがこのサンクチュアリでも起こる。

傲慢で居丈高な、暴力的な若者が目上の大人たちを支配した――。

|||||

プレストンは激怒した。

「あんなこと！あんなことに俺を使うなんて！それにレオも！」

「……」

「大人を脅して満足か!？」

彼らを恐怖させて、お前はそれで満足か？なあ、レオも何か言つてくれないのか？

アキラは、彼はまったく。サンクチュアリの人々に信じられないことをしてくれたんだぞ！」

アキラの顔は涼しいものだった。(ふてぶてしいんだな、こうしてみると)新しい発見をしてレオはそれを少し面白く感じていた。

話し合いはそのまま一方的な要求で終わり、アキラの要求を彼らサンクチュアリの住人たちは飲み込むしかなかった。それを見ていることしか出来なかつたプレストンはレッドロケットに戻ると、こうしてさっそく爆発したのである。

「いい仕事したと思えますけど？これで彼らは明日から何も考えず、楽しく毎日を静かに暮らすことができる」

「まだそんなことを言うのか!？レオ、何か言つてくれ」

ずっと沈黙を守っていたレオは、ここでようやく口を開いた。

「私はアキラを支持する。彼はいい仕事をした、それは間違いない」「なんだって!？」

「プレストン、冷静になるんだ。私の目から見ても、あそこはひどい。いまだに責任者は決められず、武器はパイプ銃ばかり、見張り台もひとつだけで町の防衛に必要なことが他に何もなされていない。あるのは全部アキラに頼って作られたものばかりだ」

「それはっ——」

「確かにアキラがしたことは感心しないし、理解に苦しむ部分はあるが。結果的には大成功とっていい。アキラが介入することで彼らはようやく同じ町の隣人になれる。」

あの土地を守れなければ再び放り出されてしまう。浄水施設で手に入る水を使って楽にキャップは手に入らない、それで働く意味も見出せるだろう」

「だが——」

「彼があそここの住人たちをまとめた。それは間違いない、君はそこを認めるべきだ」

アキラはサンクチュアリの住人全員と契約した。

代表者が空席とのことなのでそこに当分彼（もしくはその代理人）が入る。そして町を引き続き開発し、彼の資産がもたらす町の利益は、彼の取り決めによつて正しく分配される。

さらに健全で体力に自信のある男性の何人かは仕事がないので、しばらくはミニッツメンの活動に参加してもらう。ちよつとした徴兵と考えてくれていい。

代表者の交代は、アキラが後継者と認める人物が出てきたときになされる。

このことを現在の住人と、これから入ってくる住人は了承し。未来にあつてアキラ本人が終了を認めるまではこの契約は守られることを約束する。

「間違っていないわけがない。これはアキラが、彼による支配じゃないか！」

プレストンの怒りは収まらない。

「支配はする、だけど長くはしないよ。明日からは横暴な代表者とし

てまず、税金を設定したと発表してくるけどね。役に立たないパイプ銃も回収して、レイダーたちから回収した武器を持たせる。

本当は見張り台も増やしたいけど——ターレットはちよつとまだ無理だからね」

命令書と題された紙が差し出されると、アキラの手からプレストンはひったくるようにして奪い。全文を何度も読み返した。

「ちよつとまで！この税金の内訳は何だ？」

商人に売って手に入れたキャップの6割は町に。4割のうち半分は住人に、残りの半分は、責任者にして施設管理者にして名誉技術者のアキラへ個人的に贈られる、だど!?

これでは町の住人たちにはほとんどキャップはいき渡らないぞ！」「銃は弾丸がないと無意味だし、旅する商人のセールストークに引つかかってつまらないものを、居住地の中ではやらせてもらっても困るからね。彼らにキャップは少しあればいい。

その分だけ生活環境が良くなるよう、責任者として頑張るつもりだよ?。」

「そんな言葉だけを信じろというのか!？」

今度ばかりはレオもプレストンの側についた。

「アキラ、さすがにそれは悪ノリしすぎだ」

「——そうでもないですよ?。」

「君の取り分だってそれほど必要ということではないはずだ。そうだろう?。」

しばらく2人は見つめあったが、根負けしたのかアキラはため息をつくと、自分の取り分を2割から1割に減らして書きなおした。

「プレストンのために、説明も」

「まあ、金額はどうだっていいんですよ。自分たちがしつかりしていないから、頭の上に面倒な奴が居座っている。彼らにその自覚を持たせる必要があるんです」

「だが、それでは君は彼らに信頼されないぞ?。」

「いいんですよ、当面の僕は責任者で冷酷な決断する存在だ。お友達じゃなくていい。」

でも彼らは違う。足りないものは互いに補い合う、その精神と。嘘のない健全な町の運営、それを徹底させます。

プレストン、俺はね。ミニッツメンの再建とあわせて、サンクチュアリも再び面倒見てやろうと、そういうことです。邪気はありませんよ」

「納得は、していないぞ——」

「お好きにどうぞ。」

実際は、僕はあそこで彼らを奴隷のように扱ったり、生活や働く姿を監督したりはしません。時機を見て、新しく作ったロボットに——マーヴィンに指示を出しておくのでそれをあとは坦々と達成させるだけのことですから」

じつと聞いていたレオは、ここで気になることを思い出し、質問する。

「アキラ、私は君がゴズワースにやらせているものについて知りたいんだ。君のロボットと私のロボットで、何をさせようとしている?」「倉庫を作ってもらってます。資材は以前の巨大集合住宅施設のために用意したものを利用して使ってます。」

彼ら、あれもそのまま放り出していたんで。助かりました」

「倉庫?なにをするつもりだ?」

アキラは体を乗り出してきた。

「実はロボコ工場のターミナルの中に、他の系列会社で使っている製品の情報が残っていたんです。」

で、僕はそいつを復元して、あのサンクチュアリの倉庫でそれを動かそうかと考えているんです」

「復元だって?」

「大量生産を可能にする、製造機を並べます。とりあえず実用的なところで、服と銃弾を生産できるように」

「——なるほど、商人から買い入れるだけではなく。新しい服や銃弾は自前で用意できるようになるわけだ」

「どちらも居住地で余った分は水と同じように商売ができる、いいことでしょう。」

アキラはそう口になると、レオに笑いかけた。  
プレストンはついに押し黙ってしまふ。

それは突然のことだった。暗い話題が次第に明るなものとなってきたあたりで、いきなり深刻な頼みがV a u l tスーツの2人にぶつけられてきた。

黙っていたプレストンはいきなり顔を紅潮させ、唐突に話を切り出してきたのだ。

「ああ、その——いきなりのことだとは思いますが、俺は2人に聞いてほしいことがある！」  
「？」

「どうにもまだもやもやしているが、サンクチュアリと。ミニッツメンを再建できた。君たちには本当に、このことですからすっかり世話になってしまった。深く感謝している」

「ああ、プレストン」「いいんですよ、別に。気にしないで」  
「そういうわけにはいかない。それで考えたんだ……2人には、このままミニッツメンとして活動に参加してもらうわけにはいかないだろうかって」

今度こそ驚き、2人は大きく口を開けていた。

「アキラ、君の発想と技術力には本当に驚かさねばなすだ。その力は貴重だ。どうかミニッツメンでは兵士だけではなく、技術者としても力を貸してほしい」

続いてレオの方へと向く。

「レオ、君は素晴らしい兵士というだけじゃない。これまで俺の見たところ、君の人を見る目は確かで、君の言葉にはとても強くひきつけられ、厳しい局面では何度も励まされてきた。

どうだろうか？俺はあんたにミニッツメンのこれからの未来を託したいと本気で思っている」

「プレストン!？」

「レオ、アキラ。ミニッツメンには君達がまだ必要なんだ。

どうか俺と、これからの連邦を守るミニッツメンを導いてくれない



か？頼む！！」  
不器用な男の目は、怖いくらい真剣であつた。

## 新生ミニッツメン

グッドネイバーの市長はテラスから町を見下ろし、いつになく感傷に浸っているようであった。

そんな彼を護衛するファーレンハイトが、声をかける。

「町の匂いと寒さでジェットを使う気になれないの、わからない?」

「ファーレンハイト、ジャレドが死んだ」

「そうらしいわね」

「あの誰も君臨していない北部に進出して、グールがあふれているレキシントンに王国を築こうとしたクソツタレが死んだ。殺したのは、ミニッツメンだそうだ」

「そうね」

「驚きだ。まだあのミニッツメンを名乗り続けるばかりか、その役目が実のところなんであつたかまでをも忘れていない。そんな頑固でどうしようもない大馬鹿野郎が、彼らの中にも残っていたらしい」

「それが嬉しいの?」

「嬉しいかって? そんなわけがない。だが、楽しくはなってきた。

ああいった気持ちのいい馬鹿が、この連邦で銃を振り回すレイダーたちの反対側にいるかいないかで、面白さがずいぶんと違ってくるものさ」

「そういうこと。よかったわね」

ハンコックは口と違い、脳裏では戻ってくるとは思わなかったところから無傷で帰ってきた青年のことを思い出していた。

彼はここにおかせてくれ、なんなら飾ってもらってもかまわない。

素晴らしいながら一枚の絵を見せつつ、市長から受けた依頼の結果を不思議な表情で楽しかったことのように報告してきた。

ハンコックともあろう男が、認めたくはないが。

このときはこの坊主を前にしてさすがに少しあせり。同時に動転してしまった。理性的で、知性も感じさせ、穏やかでおとなしいと感じる青年は狂っている。どことは断言できないが、彼の頭蓋の中には間違いなくどす黒い狂気がきちんと外に漏れでないように押し込ま

れている。

彼が向かったピックマン・ギャラリーについての報告は他からも聞いていた。ただし彼らのほとんどは5体満足ではいられなかったし、怪我は軽くもなかった。そして自分が目に焼きつけ、耳で聞いてきたものは地獄であつたとはつきりと同じ言葉をそろって断言していたのに。

同じものを見て、同じものを聞いて、さらにはその元凶と対面まで果たしたという彼はまるで正反対のことを報告してきた。

彼の持つてきた絵は、この建物の地下に持つてきたときと同じように布に包まれ。傷まないようにと、細心の注意を払い大切に預かっている。その奇怪な芸術を生み出した本人に目をつけられたくなくて、そうしているだけだ。

(ジャレドを襲撃した連中はレキシントンを離れ、新しくできたサンクチュアリという居住地のほうへ向かっていった)

市長の耳にはそう伝わっている。

それで話がつながつた、と考えたのだ。

あのどうしようもないミニッツメンのなかにも、とっておきの隠されていたダイヤモンドが本当にあつたのだろうか？ハンコックはそうは考えない。

有能な奴というのはまず、自分の立場を理解しているものだ。組織が腐敗し、崩壊し、どうしようもなくなると判断すれば誰よりも早く、そこから離れようとする。見捨てることにも躊躇はしない。

それが「最後」を名乗るほどにどうしようもなくなつても組織にへばりついているということは、いい奴かもしれないがどうしようもない間抜けでもあるということだ。

そんな男が、あのジャンキーだったとはいえ組織を率いていたジャレドを倒せるはずがない。

そして奇妙なことに最後のミニッツメンとやらの名前こそはつきりとしているが。彼が率いたとかいうほかの仲間についての情報がさっぱり聞こえてこない。

面白いことに最近のグッドネイバーでも、名前ではなく行動でかな

りの風評を得たプレイヤーがいた。

「……また、こつちにも来るかもしれないな」

「ハンコック？」

「なんでもない。ファーレンハイト、〃鼻なしボツビ〃を呼んでくれ」  
「ここへ？ どうするの？」

「話をするだけだ。それだけさ」

そう口にしながら部屋に戻ると、グラスにウイスキーを注いだ。

生暖かい琥珀色の液体の向こう側に、何かを見ようとして覗き込む。彼は一体、なにをみようとしたのであろうか？

|||||

レッドロケット・トラックストップの前に、8人の男女が並んでいる。

その前に立つプレストンは、彼らを前にして感じる高揚感に震えていた。ミニッツメンを再びこの連邦に、そうひそかに思いを抱き、しかしそれはきつと遠い未来のことかも知れぬと暗い気持ちになった時もあった。

だが、目の前には新たな兵士たちが並び、自分の言葉をこうしてまっけてくれている。

「俺がプレストンだ——まあ、これは今更だったな」

緊張している自分を隠すことに失敗して苦笑いを浮かべると、彼らの中からクスクスと笑い声が漏れてくる。

「まずは力を抜いて聞いてほしい。」

クインシーの事件のことを知らない人はいないだろう。そこでどれほどひどい結果がもたらされたのかということも。

残念ながらミニッツメンに受け継がれていた過去の栄光は、あの事件で汚され、すっかり今ではおとしめられたものとなってしまった。

そのことに俺は言い訳をするつもりはない。あれは実際に起こり、たくさんの人々を苦しめ、さらに多くの人々の心から希望を奪い去ってしまった。ミニッツメンはいらない、今ではそう考える人もいるだ

ろう」

皆の顔を見回しながら、プレストンは力をこめて言葉を続ける。

「だが、俺はそうは思わない！ミニッツメンの理想は、正義は、まだ死んでなどいない！」

「これまではずっと、それを心に生きてきた。」

そして今日からは、君たちの力を借りて、それが本当のことだと、再び連邦に知らしめるときがきたのだと、そう確信している」

自分の背後に視線があるのを感じた。あの2人が、この姿を見ているのだと思つた。

「とはいえ、俺と違い君たちはまだミニッツメンとしてこの瞬間に、始めたばかりだ。これからしばらくは多くを学び、それから多くの戦いへと身を投じていくことになるだろう。」

この新しいミニッツメンは新たな將軍を迎え、かつて以上にこの連邦に正義と平和をもたらす存在を目指す準備は整っている。あとはここにいる皆と共にそれを証明し、あの時にもあつた輝ける栄光をもう一度。俺達の、この手にしようじゃないか」

少し離れた建物の影に建つレオとアキラは、演説を終え、新しい仲間たちにミニッツメンの服と帽子を渡す儀式に入る。プレストンの後姿をのぞきみていた。

「以前のミニッツメンの制服は、カーラに言つて手に入れることができました。随分苦労したと、うそぶいてふっかけられましたよ」

「アキラ、君が新しい服もデザインしたと聞いた」

「もともとはミニッツメンの制服は一種類だそうです、信じられませんでしたよ。」

だつてダサイし、夜だと淡い黄色が目立つだけで。レオさんのアドバイスを取り入れて迷彩服バージョンを用意すると言いましたが……」

「プレストンが嫌がったのか」

「ええ、頑なに。なので適当にえらんだ濃いブルーのシャツの胸にミニッツメンのマークを入れただけのものを新しい制服としてなんと

か認めさせました。

あれなら夜の通りを歩いても目立たないはずですし、死人も減ってくるはずです」

アキラにとっては、サンクチュアリのこともあるのに、さらにミニッツメンの面倒まで見る羽目になるとは考えていなかった。

しかもプレストンは彼が座るものだとばかり思っていた、リーダーの座をなんとレオに託したいのだと言い出した。そして驚いたことにレオもその言葉にあっさりとは応じてしまったのだ。

こうなるとアキラも、逃げ道はふさがれてしまう。

2人に頼まれ、アキラも結局断りきれずに自身のミニッツメン参加を引き受けてしまった。マクレデイはそれを見て、頭を抱える雇い主は面白いといって大きな声で笑っているらしい。

「銃はどうなる?」

「彼らにはレオさんが回収してきた、ミニッツメンたちのレーザーマケットだけです。サンクチュアリも余裕ないので」

「どの道、彼らにまだ戦闘は無理、か」

当面は彼らがここで寝泊りする場所を建物の裏側に自分たちの手で作り上げ。さらにエイダが進めていたモールラットの巣穴をつぶしてそれを地下室に変え、建物の中とつなげる必要がある。

だがおそらくはその間も、このミニッツメンへ参加希望の若者たちがさらに集まってくる可能性があった。

「サンクチュアリから連れてきた3人はここを手伝わせて、武器を使えるようになったら戻すようにプレストンに要望は出しております」  
「噂は広がっているようだ。そんなに多くのことは望めないかもしれないね」

「誤算でした。人が思った以上にこちらにむかって集まってきました。当然、レキシントンの近辺にいるレイダーたちにもこのことは知られているはず。」

奴等がここに襲撃してくる可能性は、日増しに高まるでしょうね」  
儀式を終えたプレストンが、2人のそばにマクレデイを連れてやってきた。

「ボス、次の予定はどうなってる?」

「……まだ迷ってる」

「將軍、ミニッツメンは予定通り自分たちが寝起きする場所を造る準備ができています」

「プレストン、それなんだが。アキラの設計にしたがつてくれ。彼らが兵士としてちゃんとこうなるようにやれるということを証明して欲しい」

レオが丸められた設計図を差し出すと、プレストンはそれを開いて見て驚いた。

「建物の裏に作るんじゃないのか?」

「それじゃ、駄目だ。このガレージの上に居住空間を作る。マーヴィンにもこの設計図は入力させているから、わからないことがあつたらあいつを呼び出して指示に従って」

「あのロボット、言葉が話せなかったんじゃないか?」

「話せばわかるよ——なんとなく。どうしてもわからないなら、“自分たちはできないので変わりにやってくれ”とでも言えばいい。案外、その方が楽に完成するかも」

アキラが作ったロボットはその後もちろんと動作を続けており、その監督を任されたコズワースはこの新人は優秀であつたと太鼓判を押していた。

「冗談だよな?それだと兵士たちの訓練にならない」

「なら、頑張つて。それなりに完成したら、ベットなんかはすぐに作れるからさ」

「——わかった。では將軍、できたら作業の様子を監督して欲しい」  
「そうか、そうしよう」

立ち去るレオとプレストンに向けられるアキラの視線と表情は微妙な味のあるものだった。さつそくそれをマクレデイが茶化している。

「ボス、あんたがまさかミニッツメンに入るなんてな」

「誘われるかも、とは思っていた。だが、まさかこんなことになるなんて——」

「へへへ、想像もつかなかった？シヨツクだったとか？」

「どうだろうな。でも確かに、プレストンがリーダーをレオさんにまかせるとは考えなかった。あの男は、自分を冷静に見れているみたいだ」

「それが問題なのか？」

「まあね。レールロードと接触は持つべきではなかったかもしれない——」

「レールロード？なんで？」

一瞬だけマクレディに視線をやる。

アキラは自分の傭兵に本音を語っても大丈夫なのか、図りかねているようだったが。結局は口を開く、不安を紛らわせたくて誰かに話したかったのかもしれない。

「人造人間を生み出すような組織と敵対し、独自の技術力を持つ集団。それだから、自分自身とレオさんのために役に立つだろうと思って動いていたんだ」

「それが、失敗した？」

「ああ、どうかな？まだわからない。

でも難しくなった。今のレオさんはミニッツメンのリーダーだ。連中がそれを聞いて、レオさんをどう見るのかわからない。紹介しにくくなった」

「デューコンのことか？」

「あのハゲ、会ったこともないのにグッドネイバーでの俺のことをよく知っていた。そしてはじめてあった時、名前も顔も知っていた。黙っていたけど、もうすでにレオさんにも目をつけていたかもしれない——」

「そうか、これまでは都合がよかったが。プレストンのせいで面倒臭いことになったわけか」

これからかつての時代のように大きく羽ばたくとわかっているても、今のミニッツメンなどたいした力は持っていない。正直、あの時の要請をレオは断るべきだったのだとアキラは考えるが、今更言ってもしょうのない話だとはわかっている。



「どうもここに残るとそれだけで、また身動きが取れなくなりそうだ」  
「おつ、どうするか決めただなボス」

「マクレデイ、見張りはもういい。ここを立ち去る準備をはじめよう」  
「ああ、構わないぜ。レオも一緒なのか？」

「そうなると思う。実は、今度は一緒にダイアモンドシティへ行こうと誘われた。こっちはレールロードに行つて話してこなくちやならないけれど、その前にどこに寄ろうと構わないはずだ」

「じらそうっていうわけかい」

「長くは待たせないから、きつと大丈夫さ」

数日中に出て行こう。

そうできるように、準備だけでもしておかなくては――。

|||||

レッドロケット・トラックストップのガレージにあったパワーアーマーステーションと各種作業台はすべて外にあるロボットのその近くにまとめて出されている。

これはここに住む予定のミニッツメンのヒナたちが当面寝泊りするスペースを確保するためだ。

その中で難しい顔をしているアキラの元に、マクレデイがスタージエスを連れてやってきた。

「ボス、連れてきたぜ」

「やあ、アキラ代表。なにか用があると、聞いてきたよ」

アキラは苦笑した。

「やめてくれよ。責任だの代表だの言つても、たいしたことはいらない予定の悪いお代官様だよ」

「いや、アキラ。そんなことはないよ。」

正直言つて、前からそれほどよくもなかったけれど。プレストーンと君たちがいなくなると、本当に收拾がつかなくなつて大変だったんだ。

君が戻つてきて、僕らみんなの頭の上に飛び乗ってもらえたおかげ

で、今は驚くほどなにもかもうまく回り始めている。

「このことに皆もきつと、わかって君のことを感謝する日が来るさ」  
「スタージエス、あんたは本当にいい人だね。」

でも忠告しておく、そんなことはあのサンクチュアリで口にしたら駄目だぜ。それを聞いたらあいつらは怒り出して、君を罵るに違いないからね」

「わかったよ。確かに僕は物事を見誤まって、失敗してしまうことが多い。肝に銘じておくよ」

挨拶が終わり、マクレディに何かをとりに行くように指示を出すと、改めてスタージエスにアキラは質問する。

「サンクチュアリの武器はどうなってる？」

「君たちのおかげで変わった。かなり充実していると思う。」

スコープはついてないけど、ライフルが1丁。ショットガンと10ミリ用のハンドガンが共に2、そしてミニガンだね。レイダー相手なら、これで十分さ」

「いや、まだ足りない——生産はどう？」

「新しい服が用意されて皆が喜んでるよ。弾丸の方も順調に作っているけど、やっぱりどちらも材料が心許ないみたいだ」

「資材を空にする勢いでかき集めた後だからね、仕方ないか——。」

そうだ、数日中にあの倉庫には警備システムを入れる。その後はスタージエス、君とマーヴィンに製造機の管理を任せたい」

「僕にかい？わかった」

「それとこれを君に」

「——？これ、パイプレンチだろ」

「鈍器だそうだよ。“ビッグ・ジム”とかいう、二つ名もあるらしい」

「そりゃいいね。これならいつでも持っていられるし、誰かに襲われなくても戦えるってわけだ。ハハハ」

「君の仕事のお供にいいと思って、ふふふ」

笑っていると、マクレディがアキラが使っていたクライオレーター引っさげて戻ってきた。

「これは？アキラ。君が背負っていた奴だ」

「試作の冷凍銃だよ。実はこいつをミニッツメンに貸し出そうと思っ  
てただけど、こっちは今それどころじゃないんだ。ガレージから外  
に放り出されたこの作業台を見ればわかると思うけど。」

だからこれをしばらくサンクチュアリに置いておいてほしいんだ。  
落ち着いたら、プレストンが取りに行く話しになっている」

「ああ、預かるよ。それにしてもガレージの上に住居を乗っけていく  
んだね、驚いた」

屋根の上で忙しくしているミニッツメンを見上げるスタージェス  
に、同じ方向にちらりと視線をやったアキラは説明をはじめた。

「監視塔、ってイメージかな、実際にそうなると思う。すでにこの居  
住地の噂を聞いて、レキシントンやボストンからレイダーたちが様子  
を見に来ているはずだ。そいつらをここで迎撃する」

「なんだって!?!……もうそこまで来ていると思ってるんだね?」

「正確には、コンコードにもう集まってきているはずだ。直接はあそ  
こまで見に行つてはいないけど、レオさんもそう思ってるってさ。」

プレストンの最初の任務はあそこをどうやってミニッツメンで空  
にさせておけるのかってことになるだろう」

せっかく息を吹き返させてやったのだ。ミニッツメンが、そのくら  
いのことはできるようになってもらわねば、こちらが苦労した意味が  
ない。

スタージェスが帰ると、アキラは今度は自分たちの武器を作業台の  
上に乗せた。

「ボス、今度は自分のか?」

「お前のライフルはどうだ?」

「おお、それな!ボス、あんたい腕してるぜ。前とはぜんぜん違うの  
なっ」

「そうだろ?感謝しろ?崇めてもいいぞ?」

「ああ——それ、レオのだな?」

「そうだ、と短く答える。」

「そういえばボスのアレ、本当にミニッツメンに渡すんだな」

「クライオレーター？あげるわけじゃない。レンタルだ、あいつらにキャップは週単位で払わせる」

「レオがいい顔してなかったけど、それはやるんだ。キャップにこんなにこだわるボスじゃなかったら？俺の影響か？それともなにかほかに理由が？」

額にしわがよるが、作業は続けた。

「——この連中は『誰かに肩代わりしてもらおう』精神にあふれていて、見ていてムカムカするんだよ。してもらって当然、やってもらって当然。そりやたまにはそれでもいいが、毎回それを押し付けられたら話は別だ」

「へへへ、ただの嫌がらせか。あんたやつぱり糞野郎なんだな、ボス」  
「馬鹿、しつげにうるさい善人なんだよ」

「——でも、それで大丈夫か？」「なにが？」

問い返されると、マクレディは作業を続けているアキラの体につるしているホルスターの中を覗き込みつつ指摘した。

「ボスはピストルが中心だろ？でもパワーが足りない。そこであんな大きなのを担いで歩き回っていた」

「よく見ているな。なにかよからぬ考えでも持ってるのか？」

「違うよ、あれをここに置いていくせいで足を引つ張らないかと心配しているだけさ。」

あつ、わかった。そういう厄介そうなのに出会ったら、あのポンコツを置いて逃げればいいのか——」

「エイダは僕の財産だぞ！そんなわけあるかつ——あんな、別に用意してあるんだよ。だから、あれはプレストンのところにレンタルさせる」

自分の雇い主が抜け目のない男だとは知っていたので、マクレディにもそれほど驚きはない。

「へえ、あれ凄いのにな。レイダー連中、カチーンって固まって転がるの、見れなくなるのか」

「あれの弾が問題なんだ。通常のエネルギーセルが使えない、ひとつひとついじらないと駄目だね。手間とキャップがかかってしようが

ない。

「まあ、エイダを使えばその問題も解決しそうではあったんだけど――」

「えっ、そうだったのか？」

「ああ。ロボットの武器のなかに同じタイプのものがあったんだ。エネルギーを変換して冷気を吐き出すってタイプの奴。これで通常のセルをいじるシステムが作れるけど、今度はエイダが片手でしか戦えなくなってしまう」

「そりゃ、意味がないな」

「ああ、でもおかげで別のいいものが見つかったんだよ」

アキラはレオのライフルの作業を止めると、台の下からなにかを取り出してきてマクレデイに見せた。

「お、これかい？」

「そうだ。レールライフル、ただの鉄の杭を打ち出すだけのもの。だが貫通力は抜群に高い」

「へー」

「エイダのキャラバンを襲っていたロボットの中に使っていたのがいた、覚えているか？」

「――俺、ロボットの顔は、いちいち覚えてられねえよ」

「顔じゃない、武器だ！――まあ、いい。こいつはそれを取り出して、ストックをつけただけの代物だ」

「ってことは、これってポンコツの腕の中身？」

「その一部が正しいかな。短所はある、命中率は高くない。長所は壊れてないなら杭は回収できるし、エイダがあるかぎり杭の生産は鉄さえあれば続けられる」

「ああ、あいつの腕もこれにするんだ」

マクレデイの言葉に、今度はアキラは返答を返さなかった。

そのころエイダはサンクチュアリで、コズワースやマーヴィンと共にすでに中では生産が始まっている倉庫の屋根と入り口を作り、仕上げてしまおうとしていた。

コズワースは作業をとめると、エイダに話しかけてきた。

「エイダ、あなたは本当にアキラに体をいじらせるつもりなのですか？」

「はい……それが、問題ですか？」

「私にはその考えがわからないのです。これは戦闘用と汎用のロボットの違いなのでしょうか？」

もし、私がこの体をアキラに改造してもらっても。私のプログラムはMr.ハンデীরのままなのです。今のこの体以上の働きができると、なぜ自然に考えられるのです？」

プログラムがエラーを吐き出せば、あなたは壊れてしまうかもしれないのに」

マーヴィンは雑音をがなりたてるが、それがコズワースの意見に対する反応なのか。作業への要求なのか、傍目からではわからない。

エイダはそれに扉を形作る次の資材を押さえながら答える。

「私には果たすべき目的があります。そのために努力せねばならない、困難な任務があります。」

ですが私は一度失敗し、そのせいで守らなくてはならないものを失ってしまいました。新しいオーナーはそのときに私に尋ねられました。『復讐がしたいのだろう』と。

私はそれを認め、それ以上のものもあるのだと言いました。あの人はそれにはまだ力が足りないと考えています。私もその通りだと思っています。これは両方の一致する見解なのです」

「それが、理由なのですか？」

「失敗にも状況が違うのです。私のそれは最悪でした。」

自分を守れても、仲間は誰も救えませんでした。おかしな話ですがコズワース、私はその状況を認識したとき。一度は自分もあの場所で破壊されてしまったらよかったと、考えたことがあります」

「その気持ちは理解できます。信じられない、信じたくないというものですね」

「私はアサルトロンです。動ける限りは行動を続けなくてはなりません。プログラムにそう刻み込まれているからではありません。」

私には必要なもので、そのためならばどんなことでも受け入れが覚悟があるのです」

エイダのその言葉に、コズワースの目が彼女を捕らえ、はたと動きが止まった。

信じられないが、この長く200年以上を稼動してきたロボットはその何倍も“若い”ロボットの言葉に感銘のようなものを受けているらしかった。

「同じロボットですが、私はあなたを尊敬します。エイダ」

「ありがとうございます、コズワース。その余分な資材を切除してください」

ロボットたちの作業は時を刻むようにして、ゆっくりと確実に進んでいる。

そしてコズワースもエイダも不思議なことすでに感じていた。彼らの主人達は再びこの連邦に旅立とうと、それもすぐにもそうしたがっているのだということ。

口にもそぶりにも表れていないが、それだけはわかっていた。

|||||

ハンコックは長いすに寝そべると大きくのびをする。

まったく、平和なグッドネイバーのためにいつだって市長は大忙しだ。

「お疲れ？ハンコック」

「可愛い悪党の婆さんの尻を蹴り上げたら、そりやもちろん疲れてしまふものだろうっ」

「鼻なしボツビ。彼女、恨むわよ？」

「別にかまわんよ。もう、関係ない」

——鼻なしボツビ。

このグッドネイバーにいるグールの女性は、癖の強い悪党として知られ、彼女の仕事にもその傾向がはっきりと見られる。

自身をリーダーとして短期のチームを作りだし、目標のものを手に入れる。チームに参加するスタッフが、どれほど扱いづらい相手だと

しても、彼女はいつも見事に仕事の間は自分の指示に従わせていた。そんな悪党に対して、さきほどハンコックは冷酷にここから放り出すぞと警告したのである。

「もう一度いうけど、あれは殺してしまったほうが早いわよ?」

「おいおい、ファーレンハイト。そんな台詞はお前に似合わない、そいつはレイダーの連中のよく使う台詞だ」

「そうかもね」

「そう、なんだ……俺は愛される市長だぞ? なんでもかんでも、殺してしまえとわめき散らしたら、『吊るし首の検事』とでも呼ばれるようになっちまう」

「あなた、殺しに吊るし首はしないでしょ?」

「まぜつかえすなよ、そう答えながらハンコックは考えていた。」

昔話になる、当時この場所に君臨していた悪党をブチ殺してこの町をハンコックが生み出した。

それ以来この町には多くの悪党が入り込み、その中で大きく力を蓄え、愛すべきこの市長の首を狙う奴らはいっただつていた。

ボツビはそんな奴等への対処に役に立つ悪党だった、これまでは。

だが、彼女は変わった。

嫌、もしかしたら脳みそがグールに近づいてちよつとだけ腐ったか、もしくは反対に正常—《まとも》になつてしまい、五感が刺激されて若返ったのかもしれない。

はつきりとしていることがある。彼女自身が以前よりもさらに欲深くなった。

これまでの彼女の町での小さな悪事には気持ちよく見て見ぬふりをしてきたハンコックだが、そればかりは許すことはできなかつた。鼻なしボツビは認めなかつたが、彼女はバンカーヒルにちよつかいをだした。面倒なものを近づけさせてしまった。それもよりにもよつてハンコックとグッドネイバーの名前を利用して、やつてしまった。

一瞬だけ、ファーレンハイトの言うように殺そうかとも考えたが、やめた。



代わりに屈辱を与えた。

呼び出して「かつてのボツビはどうした」と嘆いてみせ、彼女がしでかしたことを知っているとやってやった。

さらに彼女がチームを作るときに必要なとする猫の首につける鈴になるものを、すべて奪ってやった。

彼女の計画は崩壊し、彼女のキャップは大きなダメージをおったはずだ。チームはこの後はボツビの意思を無視して無軌道に動くようになるだろう。

「今日、俺はあの愛する“鼻なしボツビ”を失ったんだな。悲しいことだ」

「そうね」

「飲まずにはいられんよ。これであの女はこの町の喧騒の中に沈んでいき、彼女のいた場所に誰かが座ろうと戦いが始まる」

「つまり、あなたに不利益は生じないということよね。ほら、ボツビはやっぱりあなたを恨むわよ」

それもいいかもな、グラスを掲げ。琥珀色の液体をなめる。

かつてハンコックが知るボツビは憎めない艶やかな悪党であった。彼女がグッドネイバーの住人として、またなにかをしでかしてみせるというならば。

その姿が戻っていることをそのときに見せてくれるかもしれない。

それをこの男はひそかに期待しているのである――。

## コズワースの義

Vaultierの男達が再び旅立つのは苦労が必要かと思われたが、実際に必要だったのはレオの決断だけだった。プレストンによるミニッツメン再結成の儀式の翌日、その日も新たに参加を希望する若者が訪れ。コズワースがそれに対応している中、前の道を通り過ぎようとしたバラモンをつれたキャラバンが足を止めた。

「メッセージを預かっているよ」

そういうと一本のホロテープを置いていった。

再生すると、まず送り主が自分の名前を名乗る。

——ハイ、ブルー。元氣してる？パブリック・オカレンシズのパイパー・ライトよ。

——ニツクのこと。いくつか手がかりが出てきたんだけど、簡単に近づけそうにないの。こっちに戻るのはどのくらいになりそう？また連絡する。

探偵事務所のアシスタントが言っていた、今年のうちに見つからないところも閉鎖するしかない。

時間が足りないことを思い出し、すぐに決断は下され、プレストンができたことは出発を2日だけ延ばすというそれだけのことだった。

レッドロケット・トラックストップは午前3時。当然だが太陽はなく、空に広がるのは夜のそれである。

それでも闇の中で横一列に並ぶ5人の新しいミニッツメンの前にプレストンは立ち。数時間後に起こるであろう最初の戦闘を前に武者震いを堪えていた。

「寝ぼけているなら、シャツキリさせろ。この空に太陽が昇るころ、俺たちは始めての戦闘を開始する」

レオとアキラをとめることができない、そう判断したプレストンはミニッツメンの予定のほうを前倒しにすることにした。

コンコードの威力偵察。

レオもプレストンも、すでにそこにレイダーたちが集まってきた

ると確信を持っている。ここを空にさせているだけで、レッドロケット・トラックストップとサンクチュアリに迫る危険は大きく下がるだろうと考えられ。

そしてそれはこれからのミニッツメンの役目であった。

サンクチュアリに渡る橋の方角から闇の中を移動する集団の気配を感じる。

Vault111の2人を中心に、彼らの仲間がその周りに続いて歩いてくる。

(変わったのは俺だけじゃないんだよな)

レオは片側の腕のアーマーをヘビーレザアーマーにし、他はスターデイレザアーマーで統一した。黒のサングラスがより威圧感を増し、離れて見れば立派な傭兵という出で立ちだ。

アキラは逆に、ボディと足にメタルアーマーを装着しているが、そこに新たにレザベルトが腰や脚に巻きつくように加わっているが。これはどうやら彼自身が複数のピストルを使うためのホルスターを釣るためではないか？

さらにスカベンジャーがよく来ている緑のコートを上に羽織っていて、体のラインがふつくらして見える。

どちらも親子のように背中にライフルを背負い、肩には新しいシヨルダーバッグをさげていた。

「將軍、ミニッツメンは準備万端だ」

声をかけると、あの力強い声が返ってくる。

「プレストン、コンコードへ進軍だ」

了解した、小さく返事をつぶやいてからプレストンは自分の率いる列へと戻っていく。

太陽が昇るコンコードの中で、あの日のように悲鳴と銃撃戦が続いていた。

だがあの時とは立場が違う。

押し続けるミニッツメンに逆らえず、レイダーたちはゆっくりと教会の中へと撤退していく。

(悪夢だな。まるで逆になっている！)

プレストンにはそうだったが、結末だけは以前とは違った。

突如現れるデスクローはいないし、教会の屋上で見つけたパワーアーマーもミニガンも彼らには与えられないことはない。

「プレストン！ここから屋上の敵を排除しろ、後は私に続け。一気に叩き潰すぞ！」

「エイダ、先頭へ。後ろにつく、マクレデイはプレストンと残れ！」

2人のV a u l t スーツが教会の中へミニッツメンと共に入っていくと、ならんで屋上を見上げて撃ち続けるプレストンとマクレデイは声を掛け合った。

「プレストン！あんたと組むと、いつもこんな役目ばかりだな」

「マクレデイ！口を動かさず、ちゃんと狙って撃たないと恥をかくぞ」

しばらくはお互い口を閉じて沈黙が流れるが、最後の一人が力尽きて屋上から地面へと落下すると、マクレデイは弾丸を輩出しながら得意げに言った。

「俺は3人。だが、あんたは2人だ。誰が当たらないって？」

「今日のはあんたの勝ちだ。だが、アキラも言っていただろう？彼は覚えていたに違いない。工場では俺が3人多く撃っていた。だから、これでおあいこだ」

マクレデイは何も言い返せなかった。

恥じるつもりはなかったが、あの時は自分とプレストンが何人撃ったかなんて数えていなかった。それを今、思い出していた。

|||||

コンコードでミニッツメンたちと別れると、一団は南へ進路をとるとダイアモンドシティを目指した。

その夜、焚き火を囲んで休んだ彼らは。見張りにと最初におきるレオとアキラが無言で向かい合っていた。

これまではどんな騒ぎに巻き込まれたのか、それなりに互いに話しかけていた2人ではあったが。

今日のこの2人の口は重く、そうするだけの理由が存在していた。  
「コンコードの……レイダーにしたことだ、アキラ。私は……あれに  
どうしても納得できない」  
「……ええ」

教会の中を駆け上り、ついには屋上手前で動けなくなった数人のレイダーはついに武器を捨ててその場に座り込み、投降する意思を見せた。

武器を構えたミニッツメンは指示を求めてレオを見、レオはどのように指示を出すかを考え——その一瞬の空白にアキラは冷酷な命令を勝手に発した。

「エイダ、攻撃続行」

「了解」

新たに取り付けられた左右のレールガンとレーザーが、動けぬレイダーの頭部を次々と破壊していく。

自分の敵がすべて死体となるのを確認すると、レオたちの前から無言でアキラは背を向けた——。

「あれについては——ちゃんと話したい、アキラ」

「……わかりました、レオさん」

年上の男見上げる青年の目は、いつになく凶悪な表情となって炎のゆらめきのなかにあった。

「どうすればよかったですか？レイダーを、投降したあいつらを、どうしろと？」

「……わからない。そうだな、私たちはそれについては考えていなかった。彼らを追い詰めて、投降してきたときはどうするのか。それをちゃんと決めてはいなかった」

「そうなんですか？それは違うでしょう」

自然、アキラの声は暗く、低く、陰鬱なものへとなっていく。

「やつらは誰かを襲い、奪い、好きにする。それが楽だからやるのであって、苦しい思いをするぐらいなら死んでもいいと考えているか

ら、平然とやれるんだ」

「それは違うと思う。誰かを傷つけて、平然としていられる人間はない。傷つけ、殺せばそれは自分にも影響を残す。私の軍隊時代の仲間の多くは死んだが、生きて帰っても無傷ではいられなかった」

「そうかもしれない。でも、だからなんですか？」

あのレイダーを許せて？ サンクチュアリに来ないなら、好きにしろって解放するんですか？ やつらが約束を守るとでも？」

「いや、そうは——」

「あいつらが改心すると？ もうレイダーにはならないって、言葉を、それをこっちは信じてやるんですか？」

「アキラ——」

「今がレイダーなら、未来もきつとそいつはレイダーです。中には生き続ければ違う奴もいるかもしれない、それは僕も認めます。」

でも、それがなんですか？ 僕らはもう人殺しです。これは消せないし、この先の未来でもさらに多くの人間を殺すんです。レオさんだつて、それは否定できないでしょ？」

難しく、そしてお互いにとつて危険な会話になろうとしていた。

そして相変わらず頭のいい若者である。

レオの問いかけに、あえてその中であつた本質にだけ答えてきた。オブラートに包んで、誤魔化すように、小賢しく上から接しようとしたこちらに冷や水をかけてきた。

だが、レオもこのまま彼に言いくるめられるわけにはいかなかった。

「君の言葉を否定はできない、確かにそうだ。」

私は息子を探しているが、同時に息子をさらつた奴等への復讐を、報復をしたいと常々考えていた。この思いが揺らぐことはない。

私は理由もわからないまま奪われ、放り出され、置き去りにされた。苦しいし、悲しいし、そこで無力でしかなかった自分を今だつて心のどこかでは呪い続けている。

それでも、私はそれだけはいけないと考えるんだよ。

今はこの手にないが。願いがかなえばショーンが、息子が私の元に

帰ってくる。完璧なものではないが、わずかにでも希望は確かに取り戻すことができるんだ。

その時、私は息子に笑って伝えるものを残しておきたいと思ってる。輝くそれを、消してしまうような結果には絶対にしたくないと思っている。

軍隊に入ったときにも言われたよ。優しさといったものは——ただの弱さだと。

そのときは強くなりたくて、ひたすら学び続け。求められる結果を出し続け、私はこれでも当時はたいした殺人機械になったと評価されていたんだよ」

寂しさを抱きしめてようやく口に出せる言葉であったが、アキラは逆にこれに飛びついてきた。

「なんとなくですが、言っていることは理解はできます。

でも、それならやっぱりおかしいでしょう？強いままでいいじゃないですか。弱さを抱え込む必要なんて、ないじゃないですか」

これが若さ、ということなんだろうか。

合理的に考えれば、人は結局自分の利益を重視する。そのためには強くなければならないし、勝てなければ利益は十分に手元に入ってくることはない。

人のどんな感情も、一時の幻覚のようなもので、はつきりとした利益に物事は大きく動き続けるだけなのだと思われられる。

だが、それは違う。

勝ち方にもいろいろあるのだ。利益が薄くとも、別のものを手にすることで十分に価値がある事だつてできるのだ。なにもどこまでも剛力に頼って、それが衰える日がくるのを恐れる必要はないのだ。

「君も、君自身の望む何かのために旅をしている、それはわかっている。そこで君が学んだことを、私は全てを否定したくはない。本当に、本当にそう思っている。

でも、それなら考えてみてほしい。

それが私とは違う答えというなら、それでもかまわない。だが、君が願いをかなえたその後も君は君でいられるという自信があるか

い？

あの、私と共に Vault 111からこの世界へ。何もかもが違う、何もかもそのままに残ったものはない世界で、そのときの君はただそこにいると答えられるだろうか？

君は私と違って賢い人だ。もつとよい答えを、私とは違う答えを出してくれると期待している。

私はその時は、君の友人として。それを支持するよ、それは約束する」

2人はそれで黙ってしまった。交代の時間まで、ずっとそのままだった。

だが、悪い気持ちはない。穏やかで、そしてなにか良いことがそこであつたと両者は考えていた――。

|||||

私の予定は、いつもとつぴなことに変更される。もう、そういうものだと考えないといけないのかもしれない。

ポストンに入り、ダイヤモンドシティまであとわずかというその時。私達はそこで商人のキャラバンにであつた。

「うわっ、うわっ、うわっ、うわっっ！」

向こうはこちらを見ると黄色い声を上げ、凄じ勢いでにじり寄ってきた。

同時にアキラが顔を歪めた。

「あんただ、あんたじゃないか！こんなところで出会えるなんて、ねエッ」

「ああ、そうだね……クリケット。久しぶり」

「本当にそうだよつ。どれだけ待った？半年？一年？」

「そんなわけない！——せいぜい、半月もないよ」

エイダは無言であつたが、マクレディはすでに笑っている。私も興味があつたので、コズワースに出て行かないよう合図を送った。

その間も2人の会話は進む。



「あの日の愛の木を2人で植えたこと、今もしっかり忘れてないよ!」  
「いやいや、あの日って。そんな前じゃないし——だいたい愛ってなんだよ。木なんか植えたこともないぞ、クリケット!」

「なんで?もう忘れちゃった!?!」

「だから植えてない。君とその——愛とかなんとかいう木は、植えた覚えはない!」

「もちろんそうだよ!その木にはあんたの名前をつけて、あんたのキャップで買った銃で派手に吹き飛ばしてあげるんだ!」

「はあ……」

そろそろ聞いてもいいかもしれない。

「知り合いのようだ、アキラ」

「ええ、クリケットです。彼女は旅の——」

「ミニ・ニュークの可愛いボウヤによだれを垂らすマニアはいつ戻ってくるの?」

「死の商人ですよ!バンカーヒルで商品の説明を求めたら、なんか変に気に入られちゃって」

「私とつき合えるよって。漢の“つく”って、いろいろやり方があるだろう?」

「買い求めただけです、武器を!とにかく、まあ、品は確かに良い物ではありました」

「合格。本当に合格!」

面白いキャラバンの人だった。

その彼女の口から飛び出したのが、あのVault 81だったことが。私に余計な気を起こさせてしまった。

私があキラにダイヤモンドシテイを見せたいと思ったのは、かつての姿を知る私と同じような反応を彼も見せるだろうか。その考えから来たものであった。

だが、ここで私は思い出した。彼が知る、あの凍った棺の並ぶ不吉なVaultとは違う。200年を必死に生き延びた、驚くほど健全なVaultの姿を、彼は知らないのだということを。危険とは言わ

れながらも、ここまで特に戦闘に巻き込まれなかったことで気持ちが一緩んでいた。

私は提案し、1日を彼のためにVault 81を訪問するために作ろうと考えた。

以前のように、閉じられたVaultにピップボーイを使うと中から「ああ、あんたか」というセキュリティのうんざりする声が出て、扉が動き出す。

驚いた様子のアキラとその一行の姿に、私は満足を覚えていた。

「どうだい、君にとつて興味深いんじゃないか？」

「これが、2000年。本当に、あるんですね……」

以前に訪れた際には、少年に中を案内された経験があった私は、今度は彼になりきってアキラを地下へと奥深くに導いていった。

そういえばあの少年と、また会えるだろうか？

理髪店でアキラとマクレデイに髪を切ったほうが良いと理髪師のホレーシオと協力して言いくるめていた時だった。ロビーが騒がしくなり、セキュリティを引き連れた監督官が部屋の前を通り過ぎるのを見かけた。

なにかあったのだろうか？私は気になり、思わずその後を追っていた。

監督官が入っていったのは、入り口に人が集まっていた診療所だった。

そういえば今はこのVaultのメンテナンス計画があると聞いている。その事故か何かで、誰かが運び込まれてしまったのだろうか？

「誰が運ばれたんです？」

「ボビーさ。彼がオーステインを運んできたんだって。どうやら、モールラッドに噛まれてなにか病気になってしまったらしい」

「オーステイン？」

「ドクターは症状が特定できないって、感染の危険があるって。監督官はどうするんだろうな」

オースティンという少年のことは知っている。初めてここを訪れたとき、私からキャップを巻き上げ。このVaultをガイドをしてくれた少年だ。どうやらその彼が、危険な状態にあるらしい。

思わず私はアキラの姿を求め、回れ右をしていた――。

セキュリティと話をつけ、アキラを連れて私が医務室に入ると、ここでは大人たちが互いに怒鳴り声を上げていた。アキラはさすがで、その中を平然と横切ってカルテに手を伸ばし、勝手に読み始めた。

「何だね、君は!？」

「彼は私の連れです、オースティンがどうかしたんですか？」

「ああ、あなた――」

話は簡単だった。

どうやらVaultに秘密の扉があるのを発見し、そこをこっそり探検しようとしたようだ。ところがそこはモールラッドの巣になっていたらしい。

問題はそのエリアについて書かれていた情報がそこにあつたターミナルの中にあり。そのエリアではウイルスの増殖と治療法の開発が行われていたと書いてあつたらしい。

「アキラ、どう思う?」

「そうですね、俺は医者じゃないですけど。あの少年の症状は確かに変です。徐々に弱ってはいますが、それにしてもあまりに多くの症状が出ています。すぐに死なないことのほうが不思議なくらいです」

「あなた!なんてことを!!」

「でもそこでウイルスが作られたということは、当然平行して治療法も開発していたはず。その少年が助かるには多分ですが――」

「わかった。私が行こう」

「――俺も行きます。役に立ちますよ」

彼は笑ってそういつてくれた。

頼もしい友人がいれば、私たちにできないことはない――。

だがこの瞬間にも私の仲間が——私の家族に、忍び寄る死の影があるのを私はまたしても気がつくことができなかった。

レオとアキラが医務室にいった後も、ホレーシヨの理髪室の中は大騒ぎになっていた。マクレデイの新しい髪型を理髪師のホレーシヨとロボットたちでワイワイとにぎやかにして決めかねていたのだ。

それが甲高いVault居住者の女性の悲鳴が店の外で上がっても、その声を彼らは誰一人として聞いていなかった。

だが続く鉛の弾が店の外壁に穴を穿ち、窓ガラスを破って鏡台の鏡に叩き込まれるとさすがに気がついた。

振り向くとそこは異常事態となっていた。

大きくスペースをとっている食堂でくつろいでいた人々は、悲鳴を上げて机の下や床に伏せている中。通路から勢いよく飛び出してきたなか、喚き、銃口から火を噴かせ、恐怖を振りまいていた。

「我が軍に降伏なし！ 貴様らなんぞいなくなつた方が世の為だ。今すぐ抹殺してやる」

マクレデイは慌てて椅子から転がり落ちると床に伏せる。ライフルを探すが、理髪室の中にロボットたちがひしめいていて、どこにあるのかすぐにはわからない。

「俺のライフル！ どこだよっ」

エイダは恐怖で腰を抜かしてしまい、動けなくなっているホレーシヨを部屋の奥に押しやりながら声を上げる。

「いけません！ なんてここにあれが」

「あれは——私と同じ、Mr. ハンディー？」

「違います、コズワース。あれは戦闘用のMr. ガッツイーです。さらに独自の改造も施されています！」

「あれが!？」

コズワースが驚くのも無理はなかった。

デザインにある海洋生物のタコを思わせるフォルムは確かに残っているが、頭部は球体ではなくサイコロを思わせる立方体となっており。そこから伸びる目もゴツゴツしていて、動いてなければ角ではないかと勘違いするようなそれであった。

「通常、Mr. ガッツイーにはミニガンとレーザーが搭載され十分な攻撃力をもっています。改造されているとなるとそれ以上かも、今の私での攻撃に耐えられるかどうか」

「もうなんか暴れてるぞ。攻撃されてる、俺のライフルはどうした!?!」  
「あれは威圧しているだけです。本格的な攻撃が始まれば、たちまちこの人々は皆殺しにされてしまいます」

皮肉にもセキユリテイがこのとき、この場にひとりもいなかった。それが幸運なことに誰もこの狂ったロボットに近づけず、なにもできないのでロボットは攻撃に踏み切れずにわめいているだけだった。

コズワースは部屋の中から外を見ていて、3つある目のひとつが上階のつり橋を横切る影を捉えた。猫を抱えた少女が、そこを横切つて奥の部屋から手招きする母親の元へと逃げようとしていた。少なくとも彼にはそう見えた。

Mr. ガッツイーもまた3つある目のひとつが横切る影を捉えていた。

愛玩動物を抱えた子ウサギが、無謀にも横切つてここから逃げ去ろうとしていると彼は考えた。

コズワースの記憶回路の奥底から浮かぶのは、逃げ惑う人々の群れの中へと走り去っていく愛するレオと彼の家族の姿が消えるのを見送る自分の姿だ。

「逃げれると本気で思ったのか？絶対の戦死日和だな」

「いけません!!」

コズワースはたまらず部屋から飛び出すと振り上げた己の自慢の回転ノコギリを勇ましく振り下ろす。

「これをくらいなさいっ！やっつけてやりますよ」

「ハッハハハア、やるじゃないか、人間愛好者め、これがアメリカのメッセージだ！」

ミニガン撃たせまいと、コズワースは必死で自分のマニピレーターのひとつを回転するそこに突っ込んだ。

火花が散ってマニピレーターはすり潰されてしまったが、おかげでそれが引つかかってしまい、銃身の回転がはじまらず、ミニガンをうまく発射できない。

「コズワース!」

「クソ、クソッ、どこだ。ここだ、あつた!俺のライフル」

ようやく探していたものを見つけ、慌てて前進するもののフロアの外を見て、絶句し、動きを止めた。

同タイプのロボットが激しく絡み合い、宙を激しく上下しながらクルクルと独楽のようにして踊っている。

「コズワース、離れてください。これでは攻撃ができません!」

エイダが声を上げるが、コズワースにそんな余裕はすでになかった。それどころか相手のほうが武装だけではなく、力も浮力さえも強く、押され気味だった。

「どうしたロクデナシ、国のために死なせてやるんだ。最高だろう!」

「こんなものではありませんよ、こんなものでは——」

危険なワルツは激しさを増すが、コズワースは必死に抵抗し、回転ノコギリはついに相手のレーザーが装着されたマニピレーターを半分まで切断した。

「いったい何の騒ぎなの!」

監督官がセキュリティの後ろから、フロアに姿をあらわすと声を上げ、それにレオとアキラが続く。

（ご主人様!）

回転する中でコズワースの目は驚いた表情のレオの顔を見た。

運がついに尽きたのもこの瞬間であった。千切られたマニピレーターの残骸がミニガンからポロリと床に落ちると、即座に回転が始まり、弾丸がVaultの壁に新しい穴を穿ち、この反動が、2台の出力の差を決定的にした。

コズワースとMr.ガッツイーの体がついに離れて見合った瞬間、空間を切り裂く光がコズワースの体を引き裂いた。

「あつ」

忠実なロボットの最後の言葉がそれだった。

床の上に3本のマニピレーターが落ち、宙に浮かぶために必要な推進装置がバラバラになった。見事な球体の本体はボールのように床で跳ね、転がると目のひとつがグシヤリと粉々になって飛び散る。

「悲鳴がないぞ、ウジ虫め！」

勝ち鬨をあげるMr.ガッツイーであったが。そんな彼に次に起こったのは強烈な仲間からの報復であった。

狂った戦闘ロボットがレオと仲間たちの手で八つ裂きが始まると、アキラはそれには加わらずに火を噴く鉄のボールになってしまったコズワースに飛びついた。

「コズワース！俺を見ろ、レオさんでもいい！話せるなら何か言え、話し続けるんだ」

インステイチュートのレーザーピストルを取り出し、その銃尻でコズワースの中身を隠す外装をたたいて弾き飛ばし、中からあふれ出す銅線のたばを取り出したピックマンのナイフでまとめて切り裂いた。

「わた、しは、コズワ、アース。ミスター、ハンディタイプ、の、ロボット、です」

「持ち主だ！お前の持ち主の名前！」

「旦那様、レオ様です。ご家族は、お優しく、美しい奥様と、シヨーン、坊ちゃん……」

「名前だよ！正式な名前！忘れたか、自分の持ち主の名前！」

「フランク。フランク、ジヨナサン、パター、ソン——」

パチパチと火花がちり、中から銅線の上を火がチロチロと見せ始めた。

「早い！まだ早いつて、コズワース!?!」

指が火傷をするのをかまわず、アキラは箱状の装置を無理やり引つ張り出し。そこに開いた穴にナイフを突っ込み、今度は乱暴にかき回すと、床の上に投げ出しつつ再び指を突っ込んで基盤を一枚、こちらも強引に引つ張り出してきた。

「アキラ、コズワースは？」

「……見てのとおりです」

アキラはぐったりして腰を落とし。

少し前までコズワースだったそれは、ついに体の中から広がってきた火で包まれると。慌てたセキュリティの手によって消化剤が吹きかけられはじめた。

「破壊されました。出来ることはしました、残念です」



## 憤怒の罪

レオの目に映る彼——コズワースが最後に発した言葉はなんだったか？

あの器用に使い分けていたマニユピレーターがすべて切断され、床に落ちていく。買った時に、説明書に『噴射口は大変危険ですので、手や顔を近づけないでください』とあったそれも、バラバラになって空中で分解されてしまった。

あの愛らしい丸い頭とそこについている目が、地面に落ちるとボールのように跳ねてから火花を散らしていた。

吹き上がる怒りは、冷凍装置の中で無力だった己を連想させ、さらに激しく燃え上がると理性は簡単に吹き飛んだ。

同時に軍人として仕込まれたあらゆることが作動する。

怒りを憎悪に、憎悪を殺意に恐ろしい速さで変換すると。顔は驚いた表情をまだ張り付かせたまま、体から殺意を放出させつつ背中の子イフルを取り出し、構え、周囲にまだ逃げていないVault居住者が周囲にいるのもかまわずに引き金を引いた。

もちろんレオの射線に邪魔だったマクナマラン監督官の魅惑の後姿を突き飛ばし、セキュリティを押しつけるのも忘れてはいない。

相手は何かののしると、マニユピレーターの先にあるミニガンをレオに向けるも。今度は別の方角から始まった攻撃に邪魔される。

マニユピレーターの根元にスパイクが貫き、レーザーとライフル弾がミニガンの横合いからの一斉攻撃で破壊した。

そうなるともう、一方的だった。

激しい攻撃にはさまれ、姿勢制御も怪しくなった相手は反撃することもできず。最後はレオが正面に立ち、無表情でそのサイコロのような頭に向けてライフルの背を何度も振り下ろすと、ついに動くのを止めた。

「……忘れたか、自分の持ち主の名前！」

背後でアキラが声を上げているのが聞こえた。

彼はそれに答えようと私の名を口にして——しかし最後まで言う

前に、沈黙する。

Vault 81の中は騒然となっていた。

僕はドクターが奮発して渡してくれたステイムを一本ずつ両腕に突き立てると、忙しく声を上げて呼んだ。

「マクレデイ、いるな?」

「ボス! あんたおかしいぞつ、暴れてるロボットなんかの前に飛び出して背中を見せるなんて——」

「怪我はないな?」

「あんたと違ってな、聞いてんのかよ?」

「狂ってるんだろ? レールロードでも、エイダを引き受けたときも、それは聞いた。お前はここで待機だ」

「なに!? ボスは?」

「これからこの知られざるエリアに行くってくる。急ぐように言われててね」

「あんた——自分が自殺しようとしてるって、ちゃんとわかっておいたほうがいいぞ」

「そうだな。そういうわけで留守番よろしく」

続いてその横に立つエイダを見る。

「お前は——」

「私もご一緒しますね」

「いや、駄目だ。理由はいろいろあるが、説明が面倒なので強引でも納得しろ」

「——わかりました、指示に従います」

「代わりに2つ、頼みがある」

「なんででしょう?」

「コズワースから回収したパーツはどうだ? お前から見て、意見を聞かせてくれ」

「あの状況ではほかにも方法はありませんでしたが、コズワースを形成する人格ユニットと、記憶を記録するパーツを確保できたことは大成功であったと思います。乱暴な方法ではありませんが、あなたは最高の結

果をもたらせたことは間違いありません」

「ああ——だが、記憶の確保を後回しにしたせいで。あの中に何も残ってはいないかもしれない」

「その可能性はあります。残念なことですが」

「そうだ、だからお前ができる限り調べておいてくれ。それともうひとつ——」

「はい」

「お前の封印されていたアサルトロンの機能をこの瞬間から開放する」

「それは構わないのですが——本当に?」

戦闘ロボット、アサルトロンの頭部にはもともと高出力のレーザーが搭載されているのだが、エイダはこれを長らく封印していた。

思うに純正のアサルトロンのパーツで作成できないことで、製作者は内部のプログラムに問題が発生することを恐れていたようだ。

「お前が突撃バカになる可能性があるけど、なんとか使いこなしている」

「了解です」

「エイダ、封印を解除。プログラムを再構成しろ、パスワードは“ジャクソンが笑った”。繰り返し」

「了解、封印された機能を回復。パスワードは“ジャクソンが笑った”。プログラムを実行、融合は果たされました。システムチェックを始めますか?」

「簡易チェックもやれ。終わったら、3度。それを繰り返せ」

「同時に簡易チェックも開始……終了、問題はありません。システムチェック終了まで3分」

僕は立ち上がると、トランクの前で頭を抱えているレオさんに近づいていく。

トランクの中にはかき集められたコズワースだった部品が残らず入っている。

「アキラか——」

「倒れた少年に時間がありません。レオさん、やれますか?僕がひと

りでも——」

「それは駄目だ。私が、私が言い出したことだ。大丈夫……だが、その前にコズワースの。彼のことを教えてくれ、ちゃんと状況を把握して欲しい」

以前、エイダを彼女と呼んだ僕をからかったレオさんだったが。この人もコズワースを、ただのロボットを彼と呼んだ。だが今のこの状況で僕はからかったりはしない。

「致命傷を受けたことで、自壊したのです。それは止められませんでした。」

ですが、間一髪で重要なコアユニットの回収には成功しました。完全には失わずに済みました」

「よかった。それで、この後はどうなる?」

「自壊したことで回収する余裕がありました。今度はそれが問題になります。パーツにどの程度のダメージが残っているのか、こればかりは最終的に動かしてみないとはいきりしません。」

特に問題なのが、コズワースの記憶です」

「記憶——」

「単純に200年以上あります、どのようにそれを処理していたのかわからないので。場合によっては、なにも残っていないかもしれないかもしれません」

「……わかった、ありがとう。いいんだ、君のおかげで、コズワースは助かった」

「いえ、はつきり言えなくて申し訳ないです」

「——気持ちを切り替えないと。私の準備ができれば、いけるかい?」

「はい、僕は大丈夫です」

レオさんは最後に目を閉じてうなづく、一拍をおいてから立ち上がった。その目には力強さがもどってきているのがわかった。

「あの中はモールラットの巢で、囁まれたら我々も無事ではすまない。病人を増やさぬようにしないと」

凶暴なネズミ退治の時間だ。

Vault 81の秘密のエリアの中は、想像以上にカオスだった。警備システムはなぜかすべて侵入者にだけ向けられ、モールラットがこの場所の支配者だとばかりに平然と生活しているのだ。

僕はリボルバーから弾をはじき落とし、ため息をつきながら新しい44口径の弾をそこに入れ替えていく。

「アキラ、集中しろ。ため息をつけるような状況じゃ、まだないぞ」「ええ——そうですね、わかってます。でも、地上じゃずっと地面の中にもぐってるやつらが、ここじゃ我が物顔でこっちに走ってくるなんて。フェラルみたいだ」

「似たようなものだよ。どうやら凶暴さも普通とは違うようだ。おかげで——ん、待て？」

いきなりいくつもの歯軋りが聞こえなくなり、静かになったのが合図だった。

僕たちの周囲の土が盛り上がり、地面の中から飛び上がる芋のようにネズミたちが飛びついてきた。

どうやらここからが本気、ということらしい。僕は蹴飛ばし、レオさんは殴りつけ。そしてひたすら撃ちまくった。だが、今度は攻撃は途絶えることはなく。飛び出してくるネズミは減ることなく、さらに突撃してくるやつまでがそれに加わって——。

隠されたエリアを歩き回り、信じられない光景と体験を交互に繰り返す。僕たちはついに答えにたどり着く。

なかなかショッキングな真実であったが——。

当初、このVault 81では住人達をモルモットにして、疫病の広域治療法開発がおこなわれるはずだったようだ。

監督官が“普通の生活”を演出する傍らで、裏ではこのエリアに住ませた開発者達にえんえんと病の散布と治療の開発とを交互に続けさせようとしていたようだ。

ところが200年前、実験は開始される前に失敗に終わる。

罪の意識に耐えられなかったのだろうか。就任したばかりの初代監督官が役目を放棄するばかりか、住人たちの側につき、この場所を封印してしまう。

この地下で隔離され、どこにもなにもできなくなってしまった開発者達は激怒したが。監督官は非情を貫き、封印を2度と開くことはなかった。

「あのMr. ガッツイーの疑問もこれで解けました」

ターミナルを前に半ばあきれた声で、あの事件の謎を僕は口にした。

「わざわざ人の少ない場所までは静かにして、人の多い場所に出るなり暴れだした。

200年前に閉じ込められた開発者たちの居住者への憎しみが、ここにいたロボットたちにも刻み込まれていたんでしよう」

「——彼らは居住者を殺すつもりだった？」

「それは……なんともいえません。脅かすだけだったかもしれないし、本当に皆殺しにしてやろうとしたのか」

「そうだな——」

あの騒ぎでは、結局コズワースをのぞけば怪我人が出ただけだった。

軍用ロボットの中身が見れば、はつきりとその目的もわかったはずだが。怒ったレオたちがそれを完全に破壊してしまっていたので、それができない。

「彼のしたことが、無意味だったとは考えたくない」

「——モールラットもわかりました。やはり、ウイルスの増殖に使っていたようです」

「治療薬はどうだ？」

「研究室にあります。でも、200年前ですから。どうだろうか？」

ターミナルを操作して、研究室までのルートを開放する。

目的のものが手に入りそうだが、戻っても結果が出るのかどうか。通路に転がるネズミの死体の山をよけて進む、こんな苦勞をして戻っても。少年が助からなかったとか、まさかならないとは信じたいが――

|| || || || || || || || || ||

ダイアモンドシティ・マーケットでは、ひとりパイパーが麵をすすっている。

いつものように「イラツシヤイマセ」しか答えられないロボットの店長タカハシにからみつづけ、麵が隠れるくらい肉を増量させたそれを、食べている。

彼女は少しだけ、落ち込んでいた。

行方不明の探偵の足取りを追う。

自分はこれでも鼻のきく優秀な新聞記者だというプロ意識でやっている。相手がいくら探偵とはいえ、その行動を探し当ててくるくらいは余裕だと考えていたのに、半月ばかり走り回っても手がかりはなく、噂しかわからないなんてさすがにショックだった。

さらに新聞は例のインタビュー記事が大ヒットになっていて、増刷を重ねてはいるものの。そのせいで次号が出せない。妹が許さない。そうしてモタモタしていたせいで、別の同業者みたいな奴等にネタをとりあげられて『敏腕女記者と話題のVault居住者の事件』の数々は、記者の存在が抹消されて『話題のVault居住者の活躍』となって好き勝手に報じられてしまっている。

商売敵とはいえ自分をいなかっただことにするそのやり方も悔しいが、なによりそのせいで自分がその記事を書く時期を逃してしまったという思いが、パイパーのテンションを降下させ、さらに大きく悔しがらせていた。

どんぶりを空にしてカウンターに置き、ほかにもすすする客がいるのも構わずに容赦なくタバコを取り出し、火をつけ、煙を鼻息荒くブハーと音を立てて吐く。

(やっつらんねーわ、実際)

バンカーヒルで取材が空振りした後、メッセージをサンクチュアリ

にむかうという商人に渡したが。ブルーの手にちやんと渡ってくれたのだろうか？

まあ、よしんばこつちに来たとしても。彼が喜ぶような情報はなにひとつ手元にはないし、仕事もまったくやる気にならない。

活気に満ちて、行動する女であるはずの自分が。

昼間から麵を音を立ててすすり、タバコをふかし、まるで商売女のようなありさまをマーケットで平然とおこなっている。

妙齢の女性でありながら、仕事ばかりで異性との噂が何年もまったくあがらない原因のひとつがそこにある……のかもしれない。

「よお、パイパー」

「……フィッツ、まだ生きてるんだ」

「あんたひでえこと言うんだな。ヌードル、うまかったか？」

「あんたは食べたことないんだ。ダイヤモンドシティのソウルフー  
ド」

「あるよ！なんだよ、今日は——」

「こつちだって、ムカついてる日だってあるんだよ」

「ああ、アノ日なのか」

「フィッツ、どっちの目を抉り出してほしいか言っごらん」

近づいてきた男のあごを掴むと、反対の手のタバコを見せつつ脅す。

「やめろよ、俺は情報をあんたに買ってほしいんだよ。腹も減ったから、ヌードルもおごってくれ」

「いくら？」「へへ、60キャップだ」

「アホ言ってるんじゃないの。出せるのは30キャップだよ」

「なら、それで。あと、ヌードルな」

「最大で、って意味。あんたじゃせいぜい15キャップだよ」

「あんた悪魔だな、今回はあんたも興味があるやつだ。25！」「無理、20」

「本気で言ってるのか？あんた、敏腕記者なのに情報の価値を知らないなんて噂はなかったぜ？」

「20で手をうちな。そのかわりヌードルとあんたの片目は許してや



る」

男の話聞き終わると同時にパイパーは走り出していた。残した男がヌードルの注文をするのも聞かずに、ダイアモンドシテイを飛び出していく。

駄目男が口にした情報は本当にとんでもないものだった。

北に進出していたレイダーのジャレドを解散したとばかり思っていたミニッツメンがこれを倒し、再建を発表していたが。

なんとそれにあのブルーが関わっていたのだという。

さらにこの瞬間にもダイアモンドシテイにむかつていて、というよりもすぐそばで姿が確認されたのだとか。

入り口を飛び出したパイパーは壁沿いに走り続け、途中ですれ違うセキュリティ達に不思議そうな顔をされたが、それに構わずに突き進むと、さすがに息が切れてきて足が止まってしまふ。

腰を折ってハアハアと荒く息をつき、体を上げると息を呑む。

「ウソツ、本当に来た！」

キャラバンのようにぞろぞろと歩くその集団には、彼女が見覚えのあるVault111と書かれた青いジャンプスーツを身に着けた男が——2人もいる。

なぜか一瞬、息子か!?!などと考えたが。

よく考えたら0歳児が、いきなり身長175センチを超えて自分の足で歩いているわけがないと気がつき、冷静になれていない自分に気がついた。

しかし本当に戻ってきたのだ。人も増えたが、かわったのもいる。あのコスワースなんて、以前と違って真っ白に塗られていて何があったのだろうか? なんだか動きも少し違っているみたいだ——。

## 再び、別れの時

レオさんは僕にダイヤモンドシティを見せ、何かを感じてほしかったようだったが。残念ながら僕には——これといって得るものはそこになかった。

過去の正しい姿を知るレオさんにとっては、この場所にはかなりの抵抗を感じるようだが。僕自身には知識はあっても、ノスタルジーに浸れるような情報は持っていないこともあつてありのままを受け入れることができた。

その上で——あまり好きな場所ではないな、と感じていた。

バンカーヒルの印象とは違い、ここは僕の考える町のそれにぴったりではあつたが。

この場所に魅力を感じるのかといわれたら——疑問が残る。

まあ、慌てて結論を出す必要もないだろう。なにせ僕たちはあの Vault 81 からようやくとここで一息つくことができるのだから。

Vault で生まれた不幸な少年は、その命までもは失わずにすんだ。

僕とレオさんの力で、あの場所の隠されたエリアの情報と治療薬を発見し、戻ってくる事ができた。

住人たちは悲劇を回避したことを大変喜んでくれたし、その感謝の表れとしてわざわざ僕らを新たな住人として迎えたいとまで申し出てくれた。そして部屋まで用意する、とまでも。

だが、こちらにはそのつもりはなかった。

それに200年以上の歴史のある生活の中で、それを守るために人口抑制をしているという彼等に部屋を2つも新たに用意するといわれるのは、申し訳ない気がした。

とにかくお互いが妥協点を探り、僕とレオさんはここにちよつとした別荘というか。生活の場を提供してもらおうことで決着した。

そして僕らは別の問題でも、こちらの願いを彼等に聞いてもらうことにした。

不幸にも破壊されてしまったコズワースと、そして新たに出現して僕らについて外の世界に出て行きたいと希望するキュリーについて、である。

コズワースについてはそれほど深刻な話はない。

彼に必要なのは、安全でそれなりの広い空間と、そこで彼の新しい体を作り出すだけの大量のガラクタが必要なだけだ。それは——レオさんに心当たりがあるらしい。

問題はキュリーである。

調査の結果わかったのだが、彼女はコズワースと同じ200年近く動いており。当時の治療薬を開発するはずだった技術者達のアシスタントとして、広域治療薬と一緒にそこにいた。

キュリーの——彼女の話によると、研究者が死亡した後も開発は続行され。モールラットたちに植えつけた強力なウイルスをついに攻撃する広域治療薬は完成しているのだという。

が、閉じ込められたこともあって身動きがとれず。新たな研究のための環境が必要なのだと訴えて、僕とレオさんにくっついて出ていってしまった。

監督官とセキュリティの怒りはかなりのものであった。

正直に言うと、コズワースと同じMr. ハンデイタイプのロボットだし。あんな暴走するロボットを放置していた科学者たちのそばにいたロボットなのだ。本当は打ち捨ててもよかったのだけれど——色々あってこうして一緒にVaultからつれてきてしまったのである。

ああ、そのことについて僕はあんまり口にはしたくない。

とにかくダイヤモンドシティだ。

レオさんはパイパーとなにか話があるというので、残りを僕が連れてナットという少女にこの場所を案内してもらおうことになった。

最初に見せられたのが、マーケットであった。

「どうっすーごっごっしょ」

自慢げに少女が胸を張って聞いてきて、喜ばしてやろうとどう返答

しようか考えているとマクレデイが余計なことを口にした。

「へッ、ボスはバンカーヒルに何度も足を運んでるんだぜ？この程度、見飽きてるさ」

なんだ、大人気ないぞ。

「へー、ミスターは旅慣れているんだ。上のミスターとの関係は？」

「ただの友人だよ、ナット。それとアキラでいい。若く見られることが多いからね、君とはだいたい10歳も離れてない」

「わかった、アキラ。思ったよりいい人なんだね」

「ああ——思ったより？」

「目つきとか雰囲気とか、なんか悪そうって感じがあつて。ミスターの友人とは思えなかつたんだ」

「そ、そうかな。そんなことを言われたのは、ハジメてだ」

本当にシヨックだった。ナットは可愛い娘ではあつたけれど、はつきりと口にする女性であるらしい。正直なところ嫌いなタイプではないけれど、それでもシヨックだった。

エイダは無言だったが、マクレデイは笑い、キュリーはなぜか人相についてのアドバイスとか言うのを始めてさらに気分が滅入った。

気分を取り直すと、僕は周囲を見回した。

(ま、試してみようか)

続いてエイダとキュリーを自分に近づけると、何事かを小さくささやく。そして——

「バンカーヒルと比べてもしょうがないけど、ここは盛況な市場なんだね」

「うん、そうだよ。全然悪くないでしょ」

「レオさんに聞いたけど、武器屋の品揃えがいいと聞いていたんだ。どれか、わかる？」

「トーゼン！このナットさんが、ミスターも最初に案内してあげたんだからね。アルトゥーロのお店だよ」

「そこ、俺でも安くしてもらえるかな？サービスとか」

「うーん、それは期待できないかも。話してみないと、なんとも——」  
「そうか」

「アキラはパイパーみたいに丸め込むの得意？ 雰囲気悪そうだから、普通に話してもだめかも」

「ああ、それなら方法は……」

「ボス！ まーた、メンタスか？ ヒルで半日を汗ダラダラたらしめたの、こりてないのかよ」

「アキラ！ 薬使ってるの？ それって薬物中毒者ジャンキーってこと！？」

なんだコイツ、ここに来てから急に絡むな。冷たい視線を送ると、さすがにやりすぎたと気がついたのか。マクレデイは視線をそらしたので、笑顔を貼り付けてナットに断言した。

「そんなわけないよ」

「子ども扱いしても駄目だよ。もう、このナットさんの目には真実がバッチリ見えてるんだから」

「それは——まあ、そうだね。確かにメンタスも、ジェットも！ サイコも、使ってるけどもっ……過度に使用しないように細心の注意を払っている。これでいい？」

「そつかり、ミスターと違って残念な人なんだね。アキラは」

なぜか再び、傷つけられてしまった。彼女はサディストなのだろうか？

とにかく、ここで僕は芝居を決行した。

懐から何かが入っていてガチガチに縛られた布袋をとりだすと、それをマクレデイの胸に放った。

「ボス、これは？」

「お前はここを知っているだろ？ さっき聞いた店に行つて、品揃えと弾丸の補充を頼む」

「それじゃ、キャップは？」

「俺たちがレキシントンの仕事で汗をかいてどれだけになった？ そういうことだ」

「あんたはあそこでガラクタ拾いが格好良かったよな。思い出したら、また笑っちゃまいそうだな」

「いいから行つて来い」

マクレデイがエイダを従えて混雑の中に消える。

ナットはなぜか、急に背中に冷たい汗が流れていることに気がついた。見上げると青年が自分を見て、穏やかな笑みをたたえていた。

「俺とキュリーは知らないんだ。次はどこに？」

「う、うん。いいよ、こつち——」

前に立って歩き出すと、それに続くアキラはキュリーに何事かを小声で囁きあっていた——。

|||||

ダイヤモンドシティのマーケットでも、あまり感心しない薬物を供給している業者がいる。

そいつは常習性のある薬物のジェットやサイコを当然のように売っているが、セキュリティがそれをとがめることはない。そこで業者の注文を聞き、自分用のそれを売買していた客の男がいた。

そいつに怪しいものは感じなかったが、アキラがマーケットの入り口に立っているのを見ると、慌てて体を縮めて、その様子に注目していた。

むこうはこちらを知らないとあって、どうやら観光気分で馬鹿話をしているようだった。

（早く通り過ぎてくれよ——）

清算を終えたが、マーケットの入り口に居座る連中のせいでここから動けないでいる。

あとはマーケットの奥からぐるりと町を半周する道があるが、すぐ目の前にマーケットの入り口があり。そのむこうにはダイヤモンドシティの出口が見えているだ。そんな苦労は御免だった。

観察を続けているとVaultスーツの男はなにか袋を取り出して、自分の傭兵にむかってポイと投げつける。

「——これは？」と声が聞こえ「……レキシントンの仕事で汗を……」と返すのが聞こえた。

男の腹の底がムズムズした。

あいつがレキシントンと口にしてすぐにピンと来た。

あの袋の中身、あれは間違いないキャップだ！それも音を立てないようにつちりと封がされていた。だが、あれは拳大ではすまない大きさだった。300だの400だのいう数では足りない。

1000キャップは軽くこえている分量が必要だ。

周りを見回したが、誰もあれがそんなお宝だとは気がついていない。当然だ、“気がつくはずがない”のは自分がよくわかっていた。

傭兵が手に持ったそれを軽く遊びながら歩いていくのを見て、一瞬だがあれをスリに行こうかと本気で悩んだ。

(無理だ、少なくともここでは)

マーケットの中はセキュリティが見張っている。治安を乱せば、すぐに集まってきて攻撃されてしまう。袋をうまく奪ったとしても、あの出口まで走る間に死んでしまう――。

歯噛みをしつつ、マーケットを離れようとするアキラの背に恨めしい視線を送ると。そのままダイヤモンドシティの出口を目指した。

外へ出ると、ダイヤモンドシティの緑の壁沿いにそって小走りになる。

仕事は終わった――あとは戻って、無事にサードレールで一杯引つ掛ければいい。だが、そんな男の足が突然動かなくなり。小走りになっただけのことであって、地面に派手に転倒する。

「痛っ、なんだよ……あ？血、血だとおっ!？」

足に穴があけられていた。血があふれ出るが、何をされたのかわからない。銃声などなかったのに。

だが、それは男の勘違いであつたようだ。倒れて巡回しているかもしれない警備に助けを呼ぼうかと周りを見回そうとすると。いきなり襟首をつかまれ、通りの中へと強引に引きずり込まれていく。

「待って、待って！俺は悪くない、何もしてない。殺すのはやめろ、あんた自分が死にたいのかっ」

通りを歩く人間を攻撃し、人目のない路地へと引きずり込む。この次にくるのは頭に数発叩き込む準備万端のレイダーたちがいる、それ

が相場だったからそれを口に出した。

それが自分を追いつめるとも知らずに――。

「へえ、あんたを殺すと俺が死ぬのか。興味がある、理由を教えてくださいよな？」

「あんた、あんたっ……あ、誰だっ?」

男を見下ろすアキラは、攻撃的な笑みを浮かべるとそれに意地悪く答えた。

「ただの通りすがりのレイダーさ、そうだろ?どこかのVault居住者からジャンプスーツを奪っただけの。自己紹介はこれでいいよな?」

それで、お前を殺しちやいけない理由は何だ?教えてくれ、知りたんだ。間違いを犯す前になあ」

「そのっ――あんたの情けにすがってるだけだ。そうだ、ここで殺したらセキュリティに気づかれるぜ?」

「銃声もなくお前を撃った相手に言う言葉じゃないだろう」

消音装置をつけた10ミリをこれ見よがしにかざして見せてやる。

男はあせるが、自分の言葉をいまさら撤回はできない。だが、まだ死にたくはない。葛藤が身動きをさせないが、いつまでも続くわけではない。沈黙に相手が飽きれば、その瞬間はすぐに来てしまう。

「理由。理由って何だ?」

「あつ、それはっ。うう」

「兄さん、もうわかってるんだから。さっさと理由ってやつを教えてくださいおうか」

アキラは男のことを知っているようだった。そして逃げ道は見当たらない、覚悟せねばならなかった。

「俺を、知っているのか?」

「いやまさか、全然」

「そ、それじゃ――」

「マクレディはダイアモンドシティを知ってる。だからあらかじめ薬物売る連中のいる場所は聞いていた」

「た、確かに俺はそこにいた。だが、それだけで?」



アキラは無言で銃口を男の額に押し当てると、謎解きを始めた。「ここに来たら、パイパーって人が現われた。俺達が到着すると情報が入ったって。」

それでまず武器商人のクリケットを思い出した。バンカーヒルの商人だ、売れるなら情報だつて売る。だが、それだけで俺はお前を撃つたりはしない。

お前がここにいる理由は、あそこでお前が聞いた言葉に反応したからだ」

「え？ええっ？」

「お前は俺の袋に反応し、言葉にも反応した。ちゃんとあの騒音の中でもきっちり聞いていたんだ。『レキシントンの仕事』これが罠だった。」

パイパーが聞いた情報にはおかしな部分がある。ミニッツメンと協力した相手が、Vaultスーツを着ていたという部分だ。巷でそこまで正確な情報は流れてないことは確認している」

「なんのことをいつている？」

「あそこであんたが反応してくれてよかったよ。本当は案内された場所全部であんな茶番をやるつもりだったんだ、それって最悪のアイデアだろ？」

俺のそばにいたロボット達はな、優秀なセンサーを搭載している。あの時すでにその場に動かず、こちらの様子を探っているかもしれない相手を探していた」

「勘違いだっ」

「いいや、当たりさ。キュリーが言った。反応のある生態データの中で、ただ一人だけだ。お前だけが、俺たちの様子に心を乱されていったってな」

そんなはずはない、男はまだそう思おうとしたが。銃口とこちらを見下ろす冷たい目で、もう取り繕う演技を続けることはできなくなっていた。

アキラは冷酷に問うてくる。

「これが最後だ。だから頼まれた？なんと命令された？」

「う、うう」

「そろそろ飽きてきたな。死ぬけど、いいよな？」

「わかった！話すよ、全部話すっ」

男は負けたと思ったのだ。

「それで？」

「あんたの言うとおり、ダイヤモンドシティに入る時を見ていろって」

「それが命令か？」「あんたらとつるんでるのを合わせるようになって。」

下準備をしてやれって。それだけだ」「どうして？」

「知らない！本当に知らない」

アキラは銃口をようやく頭からはずすが、まだ信用していないのか。

指を顎におくと――

「グッドネイバーだな？そうになると、誰がやったのか……心当たりが多くて5人。いや、6人ぐらいいるが？」

「えっ」「誰だ？もう名前を言えって。それで解放してやるから」

「や、約束だぞ？」

「もちろん」

「三、Mr. マロースキーだ」

「わかった。もういいぞ」

スティムを一本、放り投げると大通りへと戻っていった。

「証言は取れたようですね？間違いなかったか、気になっていました」

「正解だった。さすがだ、キュリー。研究者だったとあって、すばらしい観察眼だ」

「ありがとうございます」

お役に立てて、うれしいです」

白いロボットがそう答えると、ナットがそれに口を挟む。

「やっぱりアキラ、悪い人なのかも」

「なんで？優しかっただろ？それに――って、ナット!？」「え、そうだけだ」

「ここ……ダイヤモンドシティの外だぞ？なんでここに？」

「だっていきなり『ここがいい』とかいって、いきなり走り出したんだもん。案内係としては気になるって」

「キュリー、何で止めなかった!？」

「——いけませんでしたが?よく、わからなかったのです。それに危険はありませんでした」

「そういうことじゃない。なにやってるんだよ、しっかりしてくれ」  
困惑するアキラだが、ナットはまったく気にせず別のことを気にしていた。

「それにしてもマロースキーって、グッドネイバーのだよ?アキラ、なにかしたの?」

「——さあ?」

「あ、嘘だ!」「嘘じゃないですから!嘘じゃない、本当に知らないよ」  
「えー」

「それにあれは嘘だ。馬鹿だよ、最後の最後でそんなことしないでいいのに」

「そうなの?」「そうなのですか?」

「ハモってる……そうだよ、こんなことをやったのはどうせ市長だ。そのミスターなんとかじゃない」

どうやらあの市長はこつちを気にしているようだ。

ジャレドの一件を怪しんでいる、そういうアピールだと思うが。逆にすぐにも会いにいこうというメッセージのようにも聞こえる——。

（行かないさ。だって下つ端の奴、嘘ついたんだもの。しようがないよね）

とはいえこのままではレオに迷惑がかかる可能性が出てきた。そろそろ楽しい旅も終わりにしたほうがいい。レールロードにはどの道レオを連れて行くつもりも無かった。

（再び——まあ、そうなくてもしょうがないか）

自分という不可解な謎を解かねばならない、空白の過去を取り戻さないといけない。

だがその前に、自分もレオにもっとできることがあるはずだ——。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

武器屋のアルトウーロを前にして、エイダをつれたマクレデイは上機嫌になっていた。

「この店には前にも顔を出したことがある。貧乏傭兵だと見抜かれ、扱われ、離れる時は小さく罵倒したものである。だが今日は違う。」

「驚いたね、まさか俺の店の奥から品物をもってこいとあんたに言われるとはな、マクレデイ」

「風が俺の後ろから来ている、それだけのことさ。アルトウーロ」

あのジャレドを殺って、奴等のキャップを奪い、マクレデイはすでに自分を売った250キャップ以上の分け前をもらっている。だがそれでおわりじゃない。

自分のボスは今この瞬間も稼ぎまくっている。遠い居住地では代表者となって住人から吸い上げ、あのミニッツメンからも少なくないキャップを吸いあげまくっている。

相も変らぬひどいトラブル体質ではあるが、危険に見合うだけのものは懐にちゃんと転がってきている。満足しない理由はない。

「これで全部だ。好きに見てくれ、そんなもって。よければあんたのキャップを、俺の店で使ってほしいね」

「ああ、そうさせてもらうよ。だがまず見ないと」

「……それなんだがな、マクレデイ。よかつたらその間、あんたのライフル。見せてもらえないか？」

「俺の？なんで？」

「おいおい、とぼけるなって。ここから見てもわかる。あんたの使っているライフル、依然とは別物だろう？そいつを拝ませてくれよ、こっちに勉強させてほしいんだよ」

どうやらアルトウーロは目が腐ってしまったらしい。自分が使っているのは、以前と変わらないものでボスがいじくり倒しただけのそれだった。

（近くで見れば、それがわからないか？）

鼻で笑うと、あっさりとライフルを店主の手に委ねる。

店主はしばらく顔をしかめてなめるようにそれを見ていたが、気が

ついで声を上げた。

「驚いた！お前、これって——」

「ああ、そうだ。あんたが笑った、中古品のそれだ。ちよつと手を加えただけのな」

「いやいやーそんなんじや俺はごまかされないぞ、マクレデイ」

そういうとレシーバーを、バレルを、ストックを、スコープも。とにかく目に付くあらゆることを口に出しては、よいものだと言われ続けられる。さすがにそれは、こそばゆく感じて乱暴に相手の手から取り返した。

「カーツ、本当に変わったんだなマクレデイ。そいつはいい品だ、あんたが死んだら俺が買い取るよ」

「俺が死んだらこいつはあんたのところじゃなく。殺したやつの手に入るだけさ。無理だな」

言いながらも、45口径用の弾丸とパワーセルを200発分ずつ購入した。

ボスのところへの帰り道を、マクレデイは重い足取りで向かっていった。

Vault 81で見たコズワースの姿が、なぜかマクレデイを攻め立てていた。

（俺は果たしてボスの——あいつの役に本当に立てているんだろうか？）

確かに銃の扱いは本人も認めているが、たいしたものはない。だがそれだけの男ではないことは、旅の中でちゃんと自分も理解している。だから自分が雇われているのだ、そうでないなら自分はただの——

それ以上は考えたくなかった。

アキラと合流すると、そつと彼のそばに近づき。思わず聞いてしまった。

「なあ、ボス？」

「ん？」

「俺、あんたの役に立っているかな？」

「どうした。突然、変だぞ？」

「あんたのせいで散々トラブルにも巻き込まれたが。最近はず、考えちまうんだよ。俺、もしかして——」

役立たずと思われてないだろうか？それが何より怖かった。

アキラは黙ってマクレデイの顔を見つめていたが、しばらくするとまったく関係ないことを口にした。

「俺とレオさんのキャラバンはここが終着点だ、とりあえずな。多分、そうなると思う」

「え？ああ」

「お互い大人で、心に定めた目的を持っている。しようがないけど、それは事実だ」

「ボス？」

「マクレデイ。俺にとってレオさんは特別な人だ。あの人には恩があるし、よくわからない俺みたいなのを大切な友人だといってくれた。俺なんかよりも、何十倍もいい人だ」

アキラの目が真剣だった。口を挟むことが出来なくなっていた。  
「お前はガラクタとよく口にするが。コズワースはレオさんにとって大切な口ポットだった。きつと家族のように思っていたはずだ。落ち込んでいるだろうし、不安にも思っていると思う。決して口には出さないけれどね。」

だから——だからこそ、俺はお前に頼みがあるんだ」

そういうと腕を伸ばし、マクレデイの細い肩をしっかりと握ると軽く揺さぶってきた。

「お前にはしばらくレオさんの力になってほしいんだ。キャップは俺が払う。だからかわりにレオさんを守ってくれ、マクレデイ」

「ボス!？」

「ここに来るまでどうしようか考えていた。でも、これしかない。」

俺はレールロードに戻る約束がある。彼らが言うほどのものかわからないから、それを確認しないといけない。つまり俺はレオさんと一緒には行けない。だが、だからこそお前に頼みたい。やってくれる

か？」

「これできつとボスが自分に出す答えなのだ、と思った。

ここまで信用されているとは、考えもしなかった。

「まかせてくれよ、ボス。あのおっさんのことは俺に任せて、あんたも元気にやってくれ」

マクレディはそう自分のボスに——いや、仲間について安心させようとした。

## トリニティタワー攻略（LEO）

Vault 81をあとにして、見慣れたグリーンジュエルの高い壁が見えてきた時だった。

私達は驚いたことにそこにひよつこりとあらわれたパイパーと鉢合わせする。なんでもちようど、私たちが近くまで来ているという噂を聞いたらしい。

ダイアモンドシティについた私は、パイパーにこれまでの話をきかせた。

彼女は興奮していて「凄いじゃない、ブルー。ちよつと会わない間に、ミニッツメンを立て直しちゃうなんて」と彼らのリーダー、将軍と呼ばれるようになった私に喜んでくれた。

悪い気分ではないよ、そう軽口で返したが。彼女の反応を見て、自分の肩に託されたものがどれだけ重要な任務なのか、思い知らされた。

新たに加わったキュリーと、破壊されたゴズワースの話には彼女は顔をしかめていた。

まあ、無理はないだろう。

Vault 81の誕生にはじまった歪みが、ウイルスを繁殖させたモールラットとキュリーののようなロボットを生み出してしまったのだ。私とアキラはそれに巻き込まれただけに過ぎない。

少年の命は救ったし、彼らからも感謝はされたが。あの事件がハツピーエンドだと素直には喜べないものがあつた。

「ゴズワースについてだけど、アキラがいうにはまだ諦めなくても大丈夫だといってくれている。そこで、ひとつ聞きたいのだけれど。例のハングズマン・アリー、あそこは今どうなっている?」

「え? あれ?」

「ああ、そうだ。レイダーを一掃した後は、この町に管理を頼んでいたはずだがー」

するとパイパーは思い出したくなさそうに顔をゆがめるとなぜか不満そうに答えた。



「こつちがあいつらが出来なかつた事をしてやって、あの場所の管理を譲つてやったのにさつ。セキュリティも、あのマクドナウ(市長)も、余計なことをしてくれただつて陰で言つてるらしいんだよ！」

それつて信じられないことだよね!？」

「——そうか」

「一応は何日か置きにセキュリティが顔を出してゐるらしいけど、予算がどうかで何も手をつけてはいないみたいね。管理といつても、その程度のことしかしてないし」

丁度いい。ミニツツメンのリーダーとして、あの場所を再度こちらに引き渡してもらおう。そのために、パイパーに市長との面会に協力してもらおうことになった。

私にはわからないが、ゴズワースについてはアキラはまだ自信があるようだ。確かに、あの時だつて破壊され、火に包まれて、床の上で機能を停止した彼に飛びついて必死に助けようとしてくれた。

私がそこまでしてくれたアキラを信じない理由もない。

ゴズワースの新しい体を用意するなら、広く安全な空間、新しい体を組み立てるだけの資材、ちようどミニツツメンが探し当てたサンクチュアリのような場所があるならそれが一番だ、と。

それには心当たりがある、私は答えた。

レイダー達がいたハングマンズ・アリー。あそこに入居者を迎えたといつて、譲つてもらえればいい。

だが、欲深いのかなんなのか。ダイヤモンドシティの市長、マクドナウは受け取つたときと同様にこの話には難色を示してきた。今のままがいい、それが彼の考えらしい。

パイパーは怒鳴り散らしたが、相手にしないという彼の姿勢に私もついに最後の手段に訴えることにする。

「市長、あなたとは私がこの美しい町を訪れたときからの縁がある。少なくともそれからはしばらく、この町の周辺にある脅威に対して、わずかにだが貢献させてもらった。もちろん、今回の場所もそのひとつだ」

まあ、確かに。柔らかな物言いに反して、尊大な態度の市長に続けて私は言葉をたたきつけてやる。

「そんな私も気がつくともミニッツメンのリーダーとなった。責任者というのはどれも同じです、あなたの苦労や考えについても私は同意できる部分がある。だが決定的に違うこともある、わかりますか？

それはあなたは市長としてここにいる住人達に愛と感謝を口にするが、私はミニッツメンだ。より確固とした、強力な防衛体制にこそ訴えたい。

ここにいるパブリック・オカレンシアの過去の取材を聞くと、あなたとあなたのセキュリティはどうも頼りないようだ。愛情深いあなたに正しい決断ができないとなると、こちらはあなたの出来ないことが出来る。住人たちに理解を求めるしかない。そう、あなたが訴えたあの日の演説のように」

私がこの町を訪れたその日、パイパーを締め出せないとわかるとこの男は広場で彼女の新聞記事を非難し、反論の声を上げた。それと同じことをしてやる、そう言ったのだ。

彼は自分が座る椅子を誰かに蹴飛ばされるのが嫌いらしい。市長がどうしても応じないなら、アキラにも協力を頼んで最悪ここを占拠するかとまで考えたが、向こうはあつさり態度を翻した。

パイパーの話だと、私はずいぶん怖い顔をしていたらしい。『グリーンジュエルの安全はうちが引き受けてもいい』と言っている様で、脅していたよというのだ。

まあ、私はそれ以上のことも考えてはいたけれど。パイパーが嫌う市長が、その前に考えを変えてくれたのは。とにかく両方にとってよかったということだろう。

|||||

左右にそびえる建物によって作られた空間、ハングマンズ・アリー。初めてここを訪れたアキラと、再びこの中から見回した私の表情は明るいものではなかった。

「どう思う、アキラ？」

「――人は暮らせるでしょうが、近くに大きな町がある。その上、ここだと戦闘が避けられない。」

人が住んで心を休める場所ではないように見えます」

「そうだよな」

しばらくはここは私たちが寝泊りに使い、後はミニッツメンをここに置くのがいいだろう。

アキラはさっそくレイダー達が残した居住空間をロボットたちに命じて徹底的に取り除くようにし。パイパーとマクレディにはダイアモンドシティから食糧を買ってくるようにと言って追い出した。

そうして彼は、私の元にやってくるという話があるという。

どうやらこれを狙っていたのだろう。

「なんだい、アキラ？」

「――これからのことです、レオさん」

言われて私は思わず彼から視線をそらしてしまった。

ああ、わかつていたことだ。

私は息子を探し、彼は多分だが自分の記憶を探している。

当初は他人から聞かされるアキラの恐ろしい暴力性は、私の知る彼の姿とはまったく似ても似つかないものであると思っていた。

だがそれは違うのだと、もう知っている。

彼も私と同じように心の中で怒りを飼いならしている。

私と違うのはそれが他人ではなく、大部分が彼自身に向けられていることだろう。彼がその怒りを憎悪の炎に変えてしまい、ついには理性を失えばどうなるか？

私はその答えをすでに知っていた。

アンカレッヅジから戻り、あの地獄を生き延びてもそれを否定され。ありもしないストーリーで沸く世間も、身を捨てるほどの忠誠心を捧げた軍も憎むことが出来ない兵士たち。私の友人であり、部下だった。

彼らは皆、銃口を口にくわえて自分への怒りを解放してしまった。アキラもバランスを失えばそうなる可能性がある。だが、私は彼を

仲間と同じく常に助けてやる事が出来ないのも事実だ。私達は別々の旅の途中で、わずかに一緒にいるというだけなのだ。

「パイパーがずっと調べてくれたらしい。だが、探偵の行方はつかめないでいる」

「——はい」

「ひとつ、可能性があるかといっていい。最近、ここらで救援信号が流れているんだそう。どうやら長いこと誰かがスーパーミュータントに捕らえられているらしい」

「えっ……その人、生きていますか?」

「わからない。だが、パイパーひとりではいけない場所だ。私が行くしかない」

「はい」

自分のことを話して、ようやく私は彼の顔を見れるようになった。

「君は?」

「レールロードにもう一度接触します。あのハゲ——」

「デイーコンと名乗っていた、怪しいのだね」

「ええ。あれにもなにか考えがあるようで、潜り込めそうなんです」

「危険ではないのか?心配になる」

「なんとかやるしかありません。他に当てもないので」

「そうか。そうだよな」

やるしかない——それはお互いの共通の思いだった。

「レオさん、コズワースは復活させてもすぐには連れまわせません」

「そうだなあ」

「スーパーミュータントの集まる場所になら、犬のカールとパイパーだけでは不安でしょう。僕が雇ったマクレディを連れて行ってください」

「アキラ?君はどうするんだ」

「キュリーとエイダがいます。どちらもここで再改造を予定しますから、戦力はそれほど低下しないはずですよ」

正直、嬉しい申し出であった。

私がかまわないが、巻き込むことになるからと同行を拒否しようと

したパイパーはそれをさらに拒否していた。きっとそれを彼は聞いていたのかもしれない。

威勢のいい女性とはいえ、人を食べるとまで言われる危険な脅威の中に連れて行くことに不安があった。一緒にマクレデイが来てくれるというなら、少しは安心できる。

「ここでお別れか。だが、また一緒に旅がしたいな。出来れば、だが」「そうですね。ここ、利用しましょうよ。しばらくは人も入れられませんか。メッセージを残せるようにします」

「ああ、そうだな……アキラ、気をつけるんだぞ。君とはまた会いたい。シヨーンとも会ってほしいしね」

「レオさんも。お互い、進む先で幸運が転がっていることを願ってます」

「埋まっけていても、なんとしても見つけて掘り返すさ。君と私ならそれが出来る……」

私も都合のいいことを口にしてしまった。

こんな場面では、感傷的になつてつい父親面をしてしまう。彼はそれを許してくれた、本当にいいやつだ。

ロボットたちが作業を続ける姿を、私とアキラは並んでしばらくその様子を見守っていた。

|||||

真つ暗な感覚は、海の中のそれだからだったのだろうか？

引き上げられように、まとわりつく闇がぼろぼろと零れ落ちるのにあわせて。自分の五感が急速に回復していくのを感じる。流れるエネルギーが、電子装置の中をやさしく触れて回り。意識が回復してくる。

「あつ……ワタシツ……負けませんっ。そつ……あれっ？」

「コズワース、どうだ？」

「ワタシ、私は——これはどうなっているんですか？ここはどこですか？なにがありました？」

見たこともない景色の中で、自分がロボット作業台の上にすえつけられていることを理解した。

「ちゃんとこれから状況の説明をしてやるから。冷静に、落ち着け。それと自分のチェックを開始しろ、ほら今すぐだよ」

「わ、わかりました、アキラ。プログラムのチェックを開始します」

ペンを持ったアキラはそれをコズワースの目の前で上下左右に動かしてみせ、それを追うようにと要求した。

「そのくらい、ちゃんと見えていますよ。これになんの意味が——ヒツ!? なんですかこれはっ」

「……」

「ワタシ、私は裸じゃないですか!? どうしてこんな姿に」

「ああ、それな。鎧、じゃなくてカバーは外してあるんだ。当分は着せる予定はないから」

「なんですって!?!」

そうしてようやく事情が説明された。Vault 81でのMr.ガッツイーとの対決の結末。

騒ぎを収め、ダイアモンドシティーへ向かい。新しい居住地の候補地で、こうしてようやくコズワースを復活させることが出来たこと。

「それはわかりましたが——旦那様はどうされましたか? ここに姿が見えないことが、とても不安なのですが」

「コズワース、それだけレオさんはここにはいない。君の新しいからだが出来てくるのを確認したところで、一足早くここから立ち去ってもらった」

「なんですって!?!」

「ああ、そうだ。はっきり言っておくよ。君はむこう半年の間は、この場所にいてもらいたいと考えてる」

「ここに!? 誰もいませんよ!」

「だからいいんだよ。君と君の新しい体がちゃんとリンクできていると確信できるまでは、ここで孤独に生活してもらおう」

「そんなっ、そんなっ! そんなこと納得できません、抗議します!」

だがアキラの決定はその声だけでは、くつがえされることはなかつ

た……。

|||||

いつもそばにいてくれるカールの首筋をなでると、気持ちよさそうに目を細める。

ダイアモンドシティで手に入れたドッグアーマーをつけて勇ましいが、動きづらくもなっているかもしれない。アキラはもちろんだが、コズワースもいないとなるとやはり私にもどこか不安があるのかもしれない。

「レオ、でいいんだよな？」

「そうだ。君はあくまでもアキラがやとつた傭兵だからね、その方がいい」

「そんじゃ。なんでわざわざあんなヤバそうなところに突っ込むのか、それを教えてもらえるか？」

私が頷くとパイパーが丁寧に説明を始める。

探偵のニック・バレンタインの居所は今もわからない。

だが、わずかだが手がかりがある。

ここ数週間ほどダイアモンドシティで噂になっていることがある。そこからひっきりなしに救援放送が流されているのだ、と。実はパイパーもそれを聞いたそうだが、驚いたことにこの放送の中で救援を求めるそいつは自分のことを話していたのだそうだ。

W R V R局の偉大な俳優、レックス——これはまあ、本人の言葉だ。パイパーは早速W R V R局に確認を取りにいったらしい。

すると中では大騒ぎになっていて、あんな場所にいくなら兵隊が50人くらいいると頭を抱えていたそうだ。

そのレックスがここを飛び出す前後に、ここに探偵が別の件で訪れていたらしい。困ったことに話したのがレックスだけだったので、何の用件なのかはわからなかったが。

「しよがないことなんだけど、さ。こうなると本人に聞くしかないんだけど、その本人はスーパーミュータントがウロウロしているトリ

ニティ教会近くのタワーの上に囚われているって言うのよ」

「マジかよ、狂ってるな」

「ブルーなら、パワーアーマー持ってたし。もしかしたらって思っていたんだけどなあ——」

今度は私が苦笑いを浮かべる。

私とアキラのパワーアーマーはミニッツメンに預けてきていた。戦場に飛び込むならいいが、あいにくあれを着てまた旅をするのだけは御免だったのだから仕方がない。

私の感情の変化を察したのか、カールは私の顔をなめてきた。私はそれをかわして立ち上がる。

「救出作戦だ。素早く、容赦なく、必要なことだけ済ませて終わらせてしまおう」

口ではこうは言ったが、簡単なことではないことはわかっていた。それでも、私はやらねばならないのだ——。

タワーの一階はこちらが驚くほどアツサリと制圧できてしまった。緑の大男は3人程度しかいなかったからだ。だが、やはり安心はできないのだとすぐに悟る。

『ハッ！ベツノニンゲン ガ レックスヲ タスケニヤツテキタゾ！』

動かなくなった大男の腕に噛み付いているカールに合図してやめさせる。銃を構えて階段を上り、常会への進入口を探す。

『オレタチ ハ オマエタチヲコロス。』

ダガ オマエタチハ ヨワイヤツシカ コロセナイ。オレタチハ ツヨイヤツラダケガ イキノコル。ダカラ オマエタチヲ コロス！』

「頭悪いくせに、妙に理論的なんだな」

「何?! 納得してるんだよ。馬鹿じゃないの。ブルー、この傭兵になんか言ってるよ」

「2人とも落ち着け、まだ始まったばかりだ」

足元でカールがワンと吼える。どうやら落ち着かないのは人間だ



けらしい。

「スーパーミュータントは銃の扱いについては乱暴だ。接近されることだけは許すな、力比べは無謀すぎる」

「ああ——ビルを登って、また降りるだけだろ？ 楽勝さ」

「不安なのは私だけえ？ もう、いいよ。なんで来ちやっただらう」

私は笑うとエレベーターのボタンを押す。上階への道はこれ以外はずぶされていた。確かによく考えられているとは思う。進入方法をひとつに絞ることで、入り込んだ敵を簡単に脱出させないという理屈なのだ。

|||||

「モノオト？」

スーパーミュータントが異変に感づくとき、それに合わせて私が口笛をヒューと吹く。

振り向く相手に3人の銃がいつせいに火を噴くと、あつという間に相手は崩れ落ちる。

「ナンダ？ ドウシタ!？」

フロアからそんな声上がる。わたしはそれであと3人いるとわかり、みなに指で3を見せるとそれぞれのいる位置を指してから移動を開始した。

気配がある以上は動き続けることをやめはしない。私は壁沿いに次のフロアを覗き見て、すぐに後ろに続く皆をそこへと導く。

ガガガン！と銃声が鳴り響いて2人目が崩れ落ちる。

空になったマガジンを抜き「リロード」と呟く、自分が終わるのにあわせたように他の2人もそれに続く。

ここで一気に決着をつけるつもりだ。目の前に影が横切り、カールが勢いよく飛び出すと階段を駆け上がっていくのを見て、私も飛び出していく。

「カマレタツ。カマレテルツ！」

カールが早速噛み付いている、そいつに狙いを定めた瞬間であつ

た。

上階の窓ガラスが破られ。スーパーミュータントの一体が歓喜の声を上げて落ちてきた。

「コロスゾ、ニンゲン！」

受身も取らず、ハンマーを胸に抱いて転がり落ちてきたそれは。のんきに私の前で立ち上がってそいつを振りかぶるつもりでいるらしい。

だが、今回はいい不意打ちであった。私はカールの噛み付いている相手から、この襲撃者に狙いをかえる。

そいつの首から上が吹き飛ぶが、同時にカールが引き剥がされるとタワーの壁に叩きつけられてしまう。

「畜生、やりやがったな！」

「マクレデイ、乱れるな！パイパー、頭を狙え！」

「こけおどしで、頭のないやつばかりだね！」

見事にそろって一斉射でそいつも蜂の巣にしてやることができたが、困ったことに私気がつかなかったちようどこのフロアの入り口に殺到しようとしていた――。

タワーの最上階では、この場所のリーダーを勤めるスーパーミュータントが。自分が認めた仲間達と共に下の様子を見ていた。だが――。

「オレダ、フィストダ！ドウナツテイル？ニンゲンハ シンダカ!?」

数分前からどこからも連絡が入らなくなっている。

まったくもって腹立たしいが、仕方がないので町の中にはなっているヒヨツ子達に対して帰還するように命じなくてはいけなくなった。あいつら、たいした強さもないのにこの場所に戻ってこれると喜んで飛んでくるに違いないし、それがわかるから返事を返さない奴等に対しても腹が立つ。

「連邦ハ オレタチ スーパーミュータント ノ モノダ！ニンゲン

ノ 時代ハ 終ワツタ!!」

このタワーの頂上からは連邦の――ボストンの四方が見渡すこと

ができた。

フィストはずつとここから見下ろしてきた。力もないくせに集まって、つまらない退屈な生活を続けているグリーンジュエルの人間達を。

少しは骨のあるグッドネイバーやレキシントンの馬鹿共も、実際は腰抜けばかりだが。あいつらは楽しみのために少しだけ後回しにしてやってもいい。

「オマエたち——」

銃声が。いや、銃撃戦がすぐそばで唐突にはじまった。

ここからのぞけば見える階下から怒号が聞こえ、無様にも虚空へと吹っ飛ばされて落ちていく同胞が見えた。

フィストは不快感にウウツとうなり声を上げると、この場にいた仲間にも行くようにあごで示す。

信じられないが、最強のスーパーミュータントが押されている。

これまでならばあつという間に叩き潰されるような人数なのに、まるで大軍に攻められている様な勢いと脅威を感じている。

「ダガ 俺ハ負ケナイ。俺ハ フィスト ダー！」

人間が使う武器作業台の上に投げ出してあつたそれに手を伸ばした。

人間が人間を殺すために作り出した最悪の一品、ミニガン。フィストはこれを人間から奪い、人間に対して使ってきた。そして未来には奴等のすべてが連邦からフィストとこいつによって駆逐されるはずだ。

「クソツ、また一丁やってきたよ！」

「マジかよ、入れ食いはキツイぜ」

「まかせろ」

私はコンバットライフルをショットガンに変えて飛び出していくと、それまで3人の後ろでじつとおとなしく伏せていたカールも再び元気に吼えながらそれについてくる。

「ニンゲン ミナゴロシユ!？」

水平2連と違い、このタイプは連射がきく。弾丸の中をつつきてきた相手の前に立った私は平然とそれを相手の頭部に向けて撃ち続ける。

カールがひぎに噛み付き、引きずろうとしたせいでバランスを崩した相手は綺麗に後頭部を私にさらしてしまおう——。

マクレデイはフウと声をはきながら、ライフルに弾丸をこめていく。

「思えばボスも頭のおかしい奴だったけど、あんたもあいつも、その同類だつてこと忘れてたよ」

「なーに？泣き言なんて」

「あんたもイカレてるよな、こんなところで銃振り回してよ。どこが普通の新聞記者なんだ？」

「どうした、マクレデイ」

「別に——ああ、ボスに言われたとおり。こいつにたつぷりの弾倉つけてもらうんだつたぜ。指がおかしくなっちゃまうよ」

彼の気持ちはわかる。私もここまで緑の巨人の上を踏み越えてくると状況のおかしさに投げやりにもなりたくなってしまうのだろう。

「2人とも余裕があるな、私はそんな元気も——」

私は最後まで言わなかった。かわりに2人の手をとると階段まで飛ぶようにして戻っていく。

その様子に2人は驚いているようだったが、すぐに気がつくだろう。金属が激しく擦り付けあう回転音に続き、凄まじい数の弾丸が自分たちがいた場所に着弾する音の洪水が迫ってくる。

階段の壁際に立って一息つくつと、パイパーがパニックを起こした。

「ちよつと、ちよつと！なによあれ、死んじやうよ。あんなの当たつたら、どうなるの!?!」

「スーパーミニュータントにミニガンかよ。最悪の『死のケース』に出会っちゃまったな——」

「死の——？なんだ、それは」

「傭兵の格言みたいなものさ。スーパーミニュータントに会うのは最悪だが。奴等の中にミニガンを持つてるのがいないなら、まだ助かる希

望はあるってやつ」

「動クナ！ジツトシテイロ。フィスト ガ 引キ千切ル、ズタズタ  
二！ブツツブス!!」

「あんな事いつてるー」

私は2人に撃ちかえしてくれ、とだけ伝えるところで行動を開始する。

崩れかけた階段まで垂れ下がった渡り廊下に飛びつくと、そこからフロア2階までするするとよじ登る。冷静に見渡せばその様子はしっかりと見れたはずだが、スーパーミュータントは階段の影に隠れている人間達に注意がいつていてこちらには気がつかない。

そのまま匍匐前進で蛇のように静かに移動を続けると、1階下のフロアでほえている相手の頭上に来た。

ガトリング砲の咆哮の中で、私は短く口笛を吹く。

打ち合わせはしていなかったが、期待と信頼は十二分に果たされた。それまで階段下でじっと伏せていたカールが飛び起きると走り出し、フロアの中に飛び出していった。

スーパーミュータントはそれに反応するが、それこそ私が欲しかったチャンスであった。

右手のマシンライフル、左手にレーザーを抱えて立ち上がると相手の後頭部と背中に向けて引き金を引いた。

相手は苦しげな声を上げよろめくが、それだけだった。

どちらも残弾がゼロとなるが、それらをすばやく背中に回しつつ階下へと飛び降りつつ背中にドロップキックを浴びせてやった。

これはさすがにキいたようで、片膝をつくと吊り下げていたミニ・ガンが床に落ち。バランスの悪いでこぼこの上を転がって部屋の隅までいつてようやく止まった。

「人間!?スーパーミュータント ハ 負けナイ!」

立ち上がって振り向こうとする相手の足をカールが何度も噛み付くが、相手にしない。どうやら私に気がいつているらしい。

それで構わない、こっちもそれを待つていた。

力強く拳を握りこむ、全ての筋肉を使つて右の拳を弓を引くかのごとく大きなモーションで振りかぶると、相手のアゴ先めがけてそいつ

を3度続けて叩き込んだ。

全盛時であればこれだけで相手を一発で殺害したと確信できるパ  
ンチであったが、さすがにスーパーミュータントである。顔もアゴも  
サイズがでかいが、タフさも尋常ではなかった。

それでも口の形が變形し、言葉が発せなくなっていたのだからまっ  
たく無傷でもなかっただろう。

「オウ、オウフツツ!!」

丸太のような腕を振り回したが、怒りに任せたせいで奴もモーショ  
ンが大きかった。私はそれを余裕のステップを刻むことでもかわすと、  
階段に向かって再び走り出した。ここは撤退したほうがいい。

ワンワンとカールが吠えながら私に続き、階段の陰に隠れていた2  
人には手で戻るように指示を出す。

思ったとおり、逃げる相手に激怒したのだろう。すごい声上がる  
と、地面を揺らして迫ってくるのがわかる。

私は仲間が踊り場を通ってさらに階下に向かったのを確認しなが  
ら、懐から何かを取り出し。小さな踊り場の上にぶちまけた。

撒かれたそれは地雷である。

ただし、通常のそれでは筋肉が驚異的に発達した相手に対して効果  
が薄いので。私が用意したのは冷凍地雷とよばれる爆発と同時に吹  
き飛ばされる対象を瞬時に凍らせるというものだった。

階段を最後まで駆け下りる暇はないと判断した私は、そこからフロ  
アに向かって体を投げ出す。

同時に背後では p i p i p i と不穏な電子音がして、爆発がおこつ  
た。

床の上と背後からの衝撃でたたきつけられた私は息ができず、顔を  
歪めながら体を曲げる。それがたまたま、その瞬間を目で捉える奇跡  
となった。

煙の中で真っ白に凍らされたスーパーミュータント——このタ  
ワの主を名乗ったフィストが踊り場の上を滑りながら、角に続いて  
いた部屋の中へと消えていく。

そこから先は直接は見ていないが、何が起こったのかは良くわかっ

ている。

このタワーの壁はそこかしこで中身が丸見えになるくらいに剥がれてしまっており。フィストの体が転がっていったそこもまた。壁がさえぎることなく地上を良く見下ろせるように大きな穴がぽっかりと開いていたと記憶している。

あんな状態で勢い良く転がっていけば、止める壁もないわけだから空中に投げ出されたはず。パワースーツを着ていたとしても、このビルの高さからのブレーキなしの着地は命にかかわると思われるから——まあ、そういうことだ。

「ブルー、今。あれがそこを——」

「マジかよ。本当に来れちまったのか、俺達」

「落ちたよね？あそこから、外へ」

ここまでついてきたくせに、どうも口ぶりは信じられないといった様子の2人だが。まだ起き上がれないでいる私を気遣ってくれるのは、カールだけらしい。

私の横に体を寄せると、祝福のキスの代わりに激しく顔をなめようとした。

|||||

救助者を前にして言うことではないが、さすがにこれはないと3人の思いはひとつであった。

「おお！救助者よ！私はここだ、偉大な吟遊詩人はここだ」

扉の向こうではスーツ姿のひどくこっけいな口をきく老人が騒いでいる。これが……レックスなのだろう。

「ここまで辿りついたのはあなた方が最初だ。他の人々は——どうも、スーパードミュータントに食われてしまったようだ」

(そりや当然だろう)マクレディでなくてもそう思うが、彼はそうではないのだろうか？

「早く、早くここから私を開放して欲しい！逃がしてくれ！」

「フィスト ノ 弱い手下、スグニココニ集マル。急ゲ」

レックスに続き、彼の後ろに立って私たちを咄然とさせているソレが口を開いた。

パイパーの声は震えていた。

「えつと、あー。これってき、どういうことなのかな？ちよつと——いえ、凄く混乱してるんだけど」

「マクレデイ」

「ああ、レオ」

「この袋の中の残った地雷を下にばら撒いてきてくれ、すぐに」

「ああ、わかった……助かったよ」

私は一歩前に出ると、必要なことだけ質問することにした。

「あんたの後ろにいるの、大丈夫なんだな？」

「後ろ？ああ、ストロングのことか。彼は大丈夫だ」

「必要なことだけさっさと答えるんだ。時間がない——」

「ああ、わかっている」

「安全にここから脱出する方法はあるのか？」

「ああ、その——」

「あるならいい。よく聞け、この扉を開けたらすぐに脱出する。下につくまでは、指示にちゃんと従え。」

できないというならここから地上へ放り出す。まだだ！それからな——下に下りたら全部、ちゃんと話を聞かせてもらおうぞ」

「ああ、ああ！それでいい、なんでもいいからここから私を出してくれ——！」

私が思い切り鍵を鍵穴に強く差し込むと、後ろのパイパーの体が小さく震え。さらに小さな祈りの言葉が聞こえてきた。まったく、どいつもこいつも……勘弁してくれ。



## エージエント・フィクサー (Akira)

サンクチュアリに置いてきたマーヴェインの経験が、皮肉な話だがこのハングマンズ・アリーで当分留守番をすることになるコズワースの役に立った。

僕が入力した、ずらりと並ぶ彼のために用意した作業リストを確認して、ロボットは故障したかのようなうめき声をあげる。

だが、しようがないのだ。

自壊した体から回収した部品が、完璧に新しいボディに合い。プログラムにもダメージがないと断言できなければ、人間達のそばには危険に過ぎておいておけないのだ。

コズワースには時間が必要だった。

僕はなるだけ冷淡にふるまい、エイダとキュリーをお供にレールロードへと向かう。

チャールズ川にそつての移動は不思議と平和で危険がなく、僕と2台のロボットによる奇妙な一団は順調そのものであった。

そんな時である――。

「？」

「どうしました？」

「野外劇場だ――よな？」

遠くに建物の一部を見えると、またこの頭はすぐにソレが何かわかってしまった。

また――あの症状か。

「人の気配がします。キャラバンでしょうか？」

「行ってみますか？アキラ」

なぜかはわからないが、ここでは――これまでにない感覚をあの建物から感じていた。そうして僕はその原因が知りたくて、またもやトラブルに頭から突っ込んでいく。

野外劇場の舞台を中心に、たしかにかなりの数の人々がそこにいた。

最初はキャラバンかと思ったが、近づくにつれてどうもちがうらしいとわかる。こんな場所で彼らは集団生活を試みているようだ。数ブロックの距離にレイダーやスーパーミュータントがわんさかいるというのに、頭がおかしいのだろうか？

「やあやあ、ようこそ。われわれの場所にまた新しい友人が訪れた、喜ばしいことだ」

ほかと違い、彼らの中でスーツ姿の紳士然とした品のある男がいきなり僕に話しかけてきた。

黙っていると、勝手にそいつは話を続けるが。商売はどうか？やキヤップを出せ！といった要求が話に出てこない。

なぜか、自分をまるで真人間のように語り。この世界の混沌への嘆きと想いをつらつらとこちらにくつつちやべって聞かせてくる。

僕のセンサーは最大レベルで警告を発した。

「話の途中ですまないけど——ここは？」

「ああ、劇場だ。野外劇場だよ」

「ハッチ・メモリアル——？」

「いや、そうじゃないね。チャールズビュー野外劇場という、どこかと勘違いしていないかな？」

「そうなのか。どうやら勘違いしていたらしい——」

僕は困惑していた。いつものごとく、場所の話をしようとしたら口が勝手に浮かんできた言葉を出してしまっただけだ。

だが、驚いたことに今回はソレが間違っていたらしい。

「まあ、勘違いも間違いも。人はそれをよくやらかしてしまふものさ。だから人生にはどうしても浮き沈みがあると感じて、強大な壁の前で時には絶望し、なすすべもないと立ち止まってしまふ」

「そうかもね——」

「よかった。どうもここまで話して君の様子を見るに、私たちは同じ仲間。同志になれる気がしてきたよ。よかったら事務所の奥で、ちゃんとした話をしてみないか？

どうしたってお互いにとって悪い話にはならないと思うのだが」

背後のロボットたちからは何も反応がない。僕に決断を任せると

いうことなのだろう。そして——そして僕は、これまでにいくらいに満面の笑みを浮かべて彼に答えてやった。

「ああ、それがいいみたいだ。ぜひ、その話をこの僕に”聞かせてみてほしい”」

こつちだという彼の後ろにつくと、ロボットたちにも着いてくるように指示を出す。

気がつかなかったが。いつの間にか太陽が沈み、夜が大空を覆っていた。

そんな野外劇場から見上げる星空を、二つに裂こうというのか。聞いたことのない不快な電子音と墜落音の協奏曲を響かせて光が走ると、遠い大地に墜落したのだろうか。遙か先の地上で真つ赤な火で出来た花を開かせ、轟音を響かせた。

|||||

一夜を空けると、チャールズビュー野外劇場は惨劇の夜の爪あとをそこに撒き散らしていた。

ここには以前よりレイダーまがいの悪質な勧誘によって仲間を増やすという奇怪な教団が存在していた。

彼らは自身を『コミュニティのピラー』と呼び、ブラザー・トーマスという詐欺師を教祖として活動していた。

だが、ここにはもう誰もいない。

四肢を切り落とされてうつぶせに絶命した人、腹部にそれこそ巨大な穴を開けて驚きに目を見開いたまま倒れた人、腕が壁に引きちぎられて打ち付けられ、レーザーに焼かれた人々がいる。

生き残りがいなかったこともあり、彼らの最後に何があったのかはわからない。

だが、もしも答えあるとするならば——。

劇場の事務所の中で、座ったままの首なしの体と。そこから乱暴に引き抜かれ、後ろの壁に杭で打ち付けられた生首が教えてくれるかもしれない。

その人物は生前、人からブラザー・トーマスと呼ばれていた――。

僕は一人でレールロードの隠れ家にはいる。

以前は彼らに止められ、銃を向けられた場所に近づいていくと奥から誰かの熱弁らしき声が聞こえてくる。

デーコンだ――あの男、とつくに戻っていると思っていたのだが。どうやらこちらにあわせて帰還すると、僕の任務の様子を仲間に熱く語っているらしかった。

(なるほど演出が凝っている)

もう舌を巻くしかない。話は盛り上がると、そこに話題の英雄がちようど到着した、とこうなるわけだ。

そして悪いことに自分もそういうイヤラシサは大歓迎するタイプだったりする。

「……そうやって新入りは俺を引きずってあいつらと戦い続けた。俺は足を引つ張るまいと、必死で傷口をふさごうとするしか出来なかった。

そうやって血路が開かれると、新入りは俺に肩を貸して奴等の銃撃の中を走りぬけながら施設の出口へと目指したんだ。本当に、凄まじい状況だったよ」

ここで求められた役のとおり、無言で登場すると何食わぬ顔でハゲの隣に立った。そう、まるで戦場から協力して戻ってきたばかりの相棒のように。

「人造人間はそこらじゅうにいたが、エレベーターはすぐにはおりて来なかった。新入りは俺を担いでそれを待ちながらついに――バン！――ドアが開くと、人造人間たちはいつの間にか地面に突っ伏していた」

その場にいなかったこのハゲはどこか怪我をしていたらしい。

初めて聞いたな、それは。

レールロードのリーダーは、部下の嘘で作られた英雄の物語を信じているようには見えなかった。

「それを彼が、担いでやったの？」

「ああ、驚いただろ？」

「確かにそうだけど——」

そういうとこちらに今度は疑問をぶつけてきた。

「デューコンの話ではプロトタイプを一人で手に入れただけではなく、地雷原を突破し、100体以上の人造人間を叩き潰して見せたつて。本当の話なの？」

僕は眉をひそめ、首を横にふった。

「本当だが、それは少し表現が足りないな。それ以上のことをしたんだ。」

あの場所はもう誰も近づくことはないだろうね。完璧以上に、すべてを破壊しつくしてきたから、あそこで何かをしようというなら。

それはゼロじゃない、マイナスからはじめることになる」

誇張はしていない。むしろやんわりとした表現で的確にあらわしたと思う。

あのコルペガ工場攻略部隊は、余勢をかってあっさりとの場所を叩き潰した。フェラルのように次から次へと湧き出てきて、しつかり手にしたレーザー銃でこちらを狙って撃つてくる相手には僕らはとてもイラつくこととなり。怒りと不満を、暴力にかえてあの場所にたたきつけてしまった。

そんな『凄惨なロボットの死に様市場』を見て回りたいたいという変わった人がいるならば、今ならあそこに行ってみるといい。

「100体の第一世代を、本当に信じられない」

どうやらまだ信じられないらしい。だが、それは間違いじゃない。「あそこから回収したかったものを取り戻した以上、あなたたちの話を信じないわけにはいかないわね」

「信じるべきだ。それは本当だからね」

「あそこにはエージェントを含めたチームを送り込むしかないと考えていたわ。ところがそれをたった2人だけで回収してきたなんて。スイッチボードの人造人間も一掃もして」

「デズデモーナ、彼の力は組織の役にきつと役に立つはずだ」

「フフフ、あなた。このデューコンに気に入られたみたいね。彼がこ

ここまで新人を誉めるなんて、これまで見たことがなかった。それにあんな馬鹿げた嘘までついて」

失礼な女だ。ディーコンはなにもしなかったが、こっちは確かにあそこで大暴れしたのに。このハゲがすっかりすべてを嘘で作り上げた物語だと思っっているのだろう。

「ようこそエージェント、私たちのレールロードへ」

「ああ、参加できて光栄だ」

気持ちとは間逆のそれまで無表情だった僕は、にっこり微笑みながら返事を返す。

「さっそくだけどここでは名前ではなくコードネームでお互いを呼ぶことになっている。あなたも自分のコードネームを決めてほしい」

「——フィクサーがいい」

「わかった。有能だけど、クセの強い人柄だと聞いている、頼もしいわね」

そういうとこちらをこの場所の奥へと誘ってきた。

目論見どおり、僕はレールロードに潜入を果たすことが出来た。

本部の中を一通り見て回ると、僕はディーコンの元へ近づいていく。

「どうだった？感想は？」

「……噂のインスティチュートの怨敵は、どうも過大評価のしすぎじゃないか。これが今のところの感想だ」

「少し声を落とせよ。ほら、あんたを睨んでいるのがいるぞ」

ズケズケとコズワースを見習って物を言うのはまずかったようだ。

ディーコンは僕を人の少ない場所へと連れて行くと、説明した。

「あんたの言い草を、俺たちの組織は正直、甘んじて受けないといけないかも。前にも話したが、今。この組織はとてもつらい時期を終えたばかりで、まだ完全復活には程遠い状態にある」

「敵の攻撃を受けたと聞いた。それも強烈なやつを」

「そうだ。それでここ以外の隠れ家はすべて失った。それに当然だが、人も、仲間も多く失った。」

俺を含めたエージェントは5人も残っていない。これで状況がなんとなく理解できてきたんじゃないか？」

「ああ——ここまでひどいやられ方をしているとは考えなかった」

本部の中は落ち着きがあったが、ここ以外は全滅となるとやはり連邦での彼らの活動は非常に小さいものに今はなっているということだろう。

思った以上に苦しんでいる彼らの様子は、僕の想像をこえていた。

「暗い顔をしなさんな。俺たちは終わっちゃいない、まだこれからもやり直せるさ」

「ああ——そうだね」

「そうだ！実はあんたに俺からプレゼントがあるんだが。受け取ってもらえるかな？」

「ええと、いいよ。嬉しいね」

デズデモーナの言葉が脳裏に浮かぶ「好意」といつてたよな？それって、一般的な表現だよな？

「まずはこれ」「銃？」

「デリバラーという小さな大砲さ。これはあのスイッチボードで回収した。前の持ち主は組織の元ナンバー2だったがね。激しく抵抗したんだろう、残念だった」

「それを俺に？いいのかわ？」

「どうやらあんたはガンマンのようだし、他にこいつを使えるようなやつもここにはいない。だからあんたに」

「——わかった、きつと役に立てるよ」

本体は小型だが、非常に密度のある合金で作られたコンパクトなそれは。僕が今使っている10ミリとは別物と言える品物だった。

「続いてもうひとつ——」

「まだあるの!？」

「あとひとつだけさ。これを受け取ってくれ」

デューコンが差し出してきたのは直方体の透明なプラスチックの中になんかの装置が入っているものだった。これでは中を調べようにも、外側の蓋のないプラスチックから出さないといけない。

「これは？」

「他の装置と使うためにあんたに必要なものだ——それが、これだ」

机の一番下の引き出しを開ける。

中のものが目に飛び込んでくると僕は一瞬だが驚いて——次に  
デューコンの顔を睨んでいた。

「おいおい、怖い顔をしないでくれ。おっかなくて震えてしまいそう  
だ」

「どういうことだ？」

「別に——言っただろう？あんたにプレゼントさ。ただ、それだけだ」

引き出しの中にあつたのはピップボーイである。それもどうやら  
Vaultierにあつたのと同型のものが、そこにひとつだけ入っ  
ていた。

「あんたが口にしない疑問の答えになると思ってね。だから用意した  
んだ」

「……」

「警戒しなくていい。全部、説明してやる。あんた、このピップボーイ  
が使えないと悩んでいたんだろう？」

「——そうだ、お前には話してないけどな」

「さつき渡した装置をベルトにでも挟んでおけ。それでこのピップ  
ボーイが動くようになる。」

そいつはな、外部の生体スキャンとデータを信号に変換して発信す  
るための装置だ」

「……俺の体はこの手の生体スキャンをうけつけない。理由はわから  
ないが」

「そいつがあれば大丈夫だ。今度はちゃんと動くはずだ」

装置を腰のベルトに挟み、引き出しの中にあるピップボーイを取り  
出し、自分の左腕に装着する。だが目だけはデューコンを睨むのをや  
めない。

「どうやら誤解を解く必要があるようだ」

「そうだな。そうした方がいい」

「簡単な話さ。あんた、グッドネイバーのメモリー・デンで騒ぎを起こ



「しただらう?」

「——ああ」

「知らないだらうが。あそこは裏でうちとつながっている。だから——」

「そうか。そういうことか」

「あそこの装置も動く前に生体スキャンにかける。」

そうしないと記憶を呼び出せないからな……あなたの情報のほとんどは彼女たちから聞いていた。それで考えたんだ『なんで居住者だったのに、あんたは腕にピップボーイをつけてないんだ?』ってな。答えは彼女たちがくれた」

あの日はうんともすんとも言わずに沈黙していたピップボーイだが。今の僕の目の前では、起動がはじまると次々とプログラムが立ち上げられていくのがわかる。

僕はそのディスプレイをいとおしく感じ、指で軽くこすって拭いた。

これまでではわからなかった自分の身体データがそこにはつきりとうつしだされていた。

「ディーコン」

「ん?」

「これは——いや、本当に嬉しいよ。ありがとう、本当にありがとう」  
「いいさ。喜んでくれて、こっちも嬉しい」

楽しいプレゼント会はそこまでだった。

レールロードは早速新しいエージェントとなった僕に最初の命令を下してきた。

それはバンカーヒルで組織に協力している商人の心配事を解決しろ、ということだった。僕はこの任務を進んで受けることにした。

僕自身にはあまり近いものではなくなってしまうが、人間と呼ばれる存在のことをもっと知りたいという好奇心がそうさせたのである。

|||||

夜の静けさが辺りを包み、教会は窓辺に灯された小さな光だけを頼りに僕たちは無言でそのときが訪れることを待っていた――。

個人的な感想だが、まったくひどい任務をまかされたと少しうんざりしている。

レールロードではディーコンから半ば一方的に示された好意と、彼らに伝えられたぜんぜん誇張ではない事実を受け入れられない人々から露骨に怪しまれる中で、任務を受けた。

当初、彼らの隠そうとしないそんな態度に僕もイラついてしまったが。落ち着いて考えてみれば、彼らにすれば敵にぼこぼこにされ、立て直している最中に期待の新人があらわれて戸惑っているのだろうと考えられるようになった。

だが、それにしたってこの任務というやつは――。

物音がして、全員がいつせいに教会の入り口に注目する。

「撃つな、落ち着いてくれ――」

闇の中の人影はそういうと、さらにこちらに近づいてくる。

インステイチュートのレーザーの引き金に指をかけてはいたが、言われたとおり撃たないように気をつけていた。

「おい、まさかそこにいるのは我が友ディーコンか!? 顔は変えていないんだな」

「ハイライズ、久しぶりだ」

「3ヶ月以上その顔か、ペースが落ちているんじゃないか?」

「最近は忙しくて、自分のための時間を融通するのが難しくなっている。わかるだろ?」

「そうだな。今は俺たちにとって冬の時代だ――」

親しげに語り合うと、男は僕のほうにも話しかけてきた。

「あんたがフィクサーだな。スイッチボードでの活躍は聞いた。君のような新人が加わってくれるのは、喜ばしいことだよ。ようこそ、レールロードへ」

「……荷物を受け取りに来たんだよな?」

「そうだ。そうだった、確かにそのとおり。荷物を受け取りにきたよ」  
僕らの荷物——まあ、想像はつくと思う。僕たちは人造人間をひとり(?)連れてきていた。

ハイライズが人造人間と話している間、僕はディーコンにそつと耳打ちする。

「この後はどうなる?」

「多分、彼に協力を要請されるだろう。引き受けてくれ」

「まさかこれから夜のお散歩に付き合えっというのか?」

「ぜひ、そうするべきだ」

「——クソツ、組織はエージェントになにをさせたいんだよ」

「あんたの得意なことをやってもらっただけさ、アキラ」

ハゲはけろりと涼しい顔でそう言い放つと、離れていった。

変わりにハイライズが人造人間との話を終えると、僕たちに想像したとおりの依頼をしてくる。

確かにここから数ブロックも進めばそこはレイダーやスーパーミュータントが徘徊する危険地帯となる。それでもまあ、あの日のスイッチボードに比べれば全然たいしたことはないだろうとはわかっているのだが——。

暗い袋小路の中でレイダーに出くわし、スーパーミュータントの一团をやりすごし。

そこそこスリリングな夜の散歩は、唐突に終わりを告げた。

「ここだ、ここが目的の俺たちのタイコンデログだ」

「——ここが?」

チャールズ川に面した、ただのオフィスビル——の成れの果て。ただの廃墟だ。

ハイライズはその入り口に立って、苦い笑みを浮かべていた。

「これだって、中はちゃんとしているんだぜ?それに外側をいじらないのは……」

「偽装。大丈夫、彼はちゃんとわかってるよ」

ディーコンがフオローしてくれたので、あわてて僕もそれに乗っ

かっっていく。

「そう、そつちじゃないんだ。えと——名前がさ」

「そつちか！それならわかるよ。確かに、俺たちは名前を借りてここをそう呼んでいるんだ。大昔に激戦を繰り返した砦、ここは俺たちにとつて同じ意味のある場所なんだ」

「……なるほど」

「さて、急ぐんじゃないなら中に入れてくれ。今からでも朝までぐっすり眠れるし、朝飯も奢るよ。ついでに武器や防具についても相談でき」

ガランとした暗いフロアにハイライズの声はよく響く。一番奥のエレベーターの前に立つとポーンという電子音とともにドアが開いた。

僕は自分のピップボーイを確認する。

夜明けまであと4時間か——確かに少しは休めるかもしれない。

## ボストンコモン (Leo)

トリニティタワーからの脱出は急ぐ必要があったが、そのための準備は簡単ではなかった。

「ストロング モ 戦う。ストロング 二 武器ヲクレ！」

レックスと一緒に閉じ込められていたスーパーミュータントがそれを要求する。私は口を閉じ、判断に一瞬だけ迷った。理性は間違いなく言っている「ふざけるな、どうせなら死んでくれ」と。

だが状況は、戦力になるなら一人だって欲しいところだった。

私は階下で渡した地雷を設置しているマクレディに声をかけた。

「マクレディ、戻って来るとき。その隅に転がっているのを持ってきてくれ！」

彼は私の指示に従い、それを持って——床の上に引きずって戻ってきた。その顔は「まさか、冗談だよな？」と驚きと不安の色を隠してはいない。

私はストロングと名乗るスーパーミュータントに言った。

「お前の武器はこれしかない。戦うならこれを使え」

「——コレハ ファイスト ノ 武器！ストロング 別ノ物ガイイ！」

「他に武器はない。黙って私達についてくるんだ、お前も守ってやる」「ッ!？」

「どうする、ストロング？」

不満ではあるようだが、相手はミニガンを手にしたので。私は近くにあつた——多分、外への持ち運びのために用意されていた——びつしりの中に弾丸が押し込まれているウェポン・ラックを引きずり出すと、それを背負うように顎で指し示した。

「こつち、急いで！」

屋上のリフトに乗り、ここから地上へ一気に降りていくことになる。

「重いものいるし、人も多くない？大丈夫かなー」

パイパーは不安そうであったが、やるしかない。

私は乗り込むとすぐにボタンを押した。同時に、駆け上ってきたら

しいスーパーミュータントの援軍が地雷原に突入したらしい、炸裂音が近くで続けて鳴り響いた。

リフトが音を立てて降りている間も、私たちは気が気ではない。

「これ、中から丸見えになることもあるよね？その時はどうする」「最悪だろ？もうわかってる」

「――準備だけはしておこう。吊るしているワイヤーを切られたら終わりだ」

「悪夢が終わりますように。悪夢が終わりますように……」

不安そうな人間たちと違い、ストロングは元気に「カカツテコイ」などと口にして元気になっている――。

フィストの命令でタワーの上部で異変があったのだと知った仲間たちは次々とタワーを登っていく。

その中の一人が――つい足を止めて、視線を動かした。

別に勘が働いたわけではない。ただなんとなく、そうなのだ。

ひらけた壁の向こうに、ゆっくりと地上に向かって降りていくゴンドラとそれに乗る人間たちの姿があった。

そいつは侮蔑をこめた鼻を鳴らしつつ横を通り過ぎていく仲間たちに知らせようと、腕を上げようとした――。

レオは特別、攻撃命令は口にはしなかった。

ゴンドラの中からタワーの中心に向け、容赦ない攻撃が開始される。

|||||

一緒にいる人間たちはそうではなかったが、ストロングにとつては久しく感じられなかった強敵たちとの対決に心は踊り、閉じ込められていじめられていた体は、息吹を取り戻すと力強く筋肉の束をふくらませていた。

かつてない、戦闘の喜びの中に彼はいた。

だから気がつかなかった。

タワーを、ゴンドラを降りて走り続ける彼らの後を追ってひよこひよこ振り向いては追いつがる、かつては仲間であったスーパーミュータントを粉碎していると、自分がいつしか置いていかれたという事実に。

見回すが周りはどこでも見た覚えのある建物が並び、大通りにはまったくといっていいほど人影はない。

ストロングはもう一度、周りを見回す。

(アイツラ ドコ行ツタ?)

|||||

建物に入ると、私は中の様子を軽く確認して後ろに続くものたちに入ってこいと合図を送る。

パイパー、レックス、マクレデイと来て。あのスーパーミュータントはそこに姿が見えなくなっていた。

ここはマサチューセッツ州でも有名だった、トリニティ教会。

しかしその荘厳だった姿の中身は荒れ果ててしまい、廃墟と成り果ててしまった。生物の気配がなかったので、転がり込んでしまった。

「ふう、困った。誰か、あの緑の巨人がどうなったか見ていなかったかい?」

「冗談!」「いや、そんな理由はなかったぜ」

想像通りの返事が続き、私は仕方なく元凶のレックスの顔をのぞく。

驚いたことに彼は一息ついて、安心したのか涙など浮かべていたが、私の視線に気がつく。ようやく会話に参加して来てくれた。

「私は——私は知らないぞ。知っているわけがないだろう?」

「——アレが安全だと保障したのは、一緒に閉じ込められていた誰かさんの言葉があったからなんだが?」

「ストロングは問題なかっただろう? だから——いや、そもそもなんで私がアイツの面倒を見なくちゃならないんだ。そして何で君にそんなに責められている、納得がいかない!」

私は絶句した。

かわりにパイパーが癩癩をぶつけてくれた。

「はあ!? あんたが馬鹿やらなきや、こっちはそもそもあんな馬鹿なところになかなかつたわよっ」

「なっ、なっ!?!」

「ブルー! ブルーもおかしいよ?」

あんなのついてこないならそれでいいじゃないの。それより、もっと大切なことがあるんじゃない? ほらっ!」

「あ、ああ。そうだった」

なぜか私も怒られてしまった。

「レックス、私は君に聞きたいことがある。探偵のことだ」

「私に? 探偵? なんのことだ?」

「探偵のニック・バレンタイン。知らないか? 君に会いに来ていたことは、彼女——パイパーが調べた」

「そうっ、そうだよ」

「探偵のニックだつて? ああ、確かに会ったのは認める。だが、あれはもう1ヶ月以上前のことだぞ。その後で彼が何をしたかなんて、私にわかるわけがない!」

どうやら間違いではないらしい。

「それでいいんだ。ニックはあんたと同じ時期に行方不明になっている。彼はあんたになぜ会いにいったんだ、その理由を聞かせてほしい」

——レックスの話はこうだった。

長くW R V R放送局で、この時代を代表する吟遊詩人であり、演奏家であり、役者でもある自分が心に強い衝動のようなものに駆り立てられていた時分。

いきなり探偵のニック・バレンタインが彼の前に訪れたのだという。

探偵はレックスの出演するラジオのファンガールを探していたらしい。

最初はだれのことを言っているのか、レックスはまったく思い浮か



ばなかったが。話を聞いているうちに、一昔前に彼の才能に魅かれてしまった若く、傲慢で、扱いにくいほど夢見がちだったひとりの少女のことを思い出したらしい。

ニツクの用はそれで済んだ、はずであったが。なぜかこの変人レックスが逆に食い下がって――。

「探偵など、どれほどのものなのか。この悩める現代の吟遊詩人、レックスの心を覆う暗雲を（以下略）」

ということ、ニツクにこのトリニティタワーまで自分を連れて行けと命令――もとい、懇願したのだそうだ。

このあたりのことは、正直ほとんど理解不能なので私は聞かなかったことにしたかったが。真面目なパイパーにはそれができなかったようだ。

「ねえ、なんでニツクはコイツをあんな場所まで送った訳？」

「ああ？ どうせなにを言っているのかわからなくて。本人が行きたいってところまで連れて行ってやったんじゃないの？ 俺でもそうやって放り出さず？」

マクレディは答えは、案外真実をついていたのかもしれない。

話をレックスに戻す。

スーパーミュータントが使わないタワーの裏でニツクと別れると、なんとこの愚か者は隙を見て中にもぐりこみ。われわれが脱出に使った、まさしくあのゴンドラを使って直接屋上を目指したのだという。

その目的は――。

「私はいつらに文化を、芸術を伝えようとしたのだ。暴力や暴食にかまけることしかできない、そんな哀れないつらは（以下略）」

いい加減、こいつを救った自分が恥ずかしくなってくる。

あの脱出路は、こいつが進入する際に使った方法だったのだ――いや、待てよ？ そうなると、これはマズイ！

私は上機嫌に口を動かし続けるレックスにいきなり平手を食らわ

して黙らせると、驚いた表情の2人に向かって短く「移動する、ここにはいられない」とだけ告げる。

私たちがいた教会の扉が乱暴に蹴り開けられるのに10秒もかからなかった。

「ニンゲン！何処ニ、カクレテイル!?!」

クソツ、やっぱり嗅ぎ付けてきたかつ。

教会の奥も荒れ果ててひどいものだった。

礼拝の場は、床が抜けており。暗い地下へと不気味によれて続く階段の役割を果たしている。

スーパーミュータント達は入り口からそこまで侵入してきたため、私たちは脇の階段を静かに上の階へと移動することにした。

「き、君たちには。まだちゃんと言ってなかつたな」

いつの間にか私の後ろについていたレックスが、おどおどしながら小さな声で話しかけてきた。そのタイミングも、やっぱりよくなかつた。

「君に、君たちには——助けてもらって感謝している。本当にね、私もさすがに今回は懲りたよ」

「一緒にいたスーパーミュータントは、どうして一緒に?」

「ああ、ストロングか。彼は——マクベスの『人間の優しさのミルク』に興味を持った、のだと思う」

「……なに?」

マクベスにそんなことが書いてあつただろうか?

こちらにしても200年以上前の記憶とあつて、すぐには思い出せない。

「WRRVRに帰りたい。戻ったら、これからは真面目にこの世界屈指の俳優としての人生に精進するつもりだ」

「そうだな、そのほうがいい」

「君には重ね重ね、何度もすばらしいタイミングでの救助にとても、とても感謝している」

「ああ、わかった」

教会の2階は足場くらいしかない上に、追っ手をかわして入り口に降りたくとも地面が地下まで陥没しているのでそれも期待できない。

(ここでやるしかない)

私は腹を決めると、仲間には指示を出そうとして——そこで気がついた。

いつの間にか後ろにいたはずのレックスがいない!?

「あれっ?」

「後ろにいたとばかり思っていたんだが——」

階下にはミニガンをぶら下げたスパーミュータントを含めた4体と、同じく2匹のミュータント犬が見えている。

足場のよくないこの場所で、不意打ちの先制攻撃をするチャンスを失うわけにはいかない。

私は背中の狙撃銃とコンバットライフルを静かに床の上に並べた上で、狙撃銃にまずは手を伸ばした。

構えながらスコープをのぞき、パイパーに攻撃までの5カウントを始めるように目で合図を送る。

私とマクレデイによる静かな狙撃の後、パイパーは威勢よく立ち上がって撃ちながら吠えた。

「死亡記事、一本追加!」

こんな時の彼女は、本当に頼もしくてしょうがない。

|||||

ただひとりで途方にくれていたストロングだが。

近くで激しい銃撃戦の音が聞こえると、ハツとしてそれはどこかと周囲を見回す。

(アソコ、ナンカ大キナ建物)

近づいていくと道の先を、転がるようにして走り去っていく人の背中が見えた。あれは——レックスだ。

一緒に閉じ込められたおかげでストロングにはそれがわかった。  
なぜあんな風に、逃げるように走っているのかわからないが。自分もそれについていくべきなんだろうか？

逃げるように自分も走る——そのことに納得ができなくて、ストロングは困惑している。

建物の横にある扉が中から押し開けられ、彼が見知った人間たちがぞろぞろとそこから出てきた。

「チクショウ、やっぱり裏口があつたんだ」

「あいつ、とつちめてやらないと——」

「もうこれ以上のトラブルは——ん？」

埃にまみれて出てきた3人は、目の前にいるストロングを見て動きを止めると……深く、大きくため息を吐いた。

状況は混乱しているが、冷静になって整理する必要があつた。

「えっと、それで？なにがどうなっているんだっけ」

「ニックはタワーでレックスと別れた後、コンバットゾーンに向かったらしい——コンバットゾーンとはなんだ？2人とも、知っているか？」

名前からして不穏なその場所について尋ねると、2人は奇妙な表情を浮かべる。

やはりなにかあるようだ。

「話にはね、聞いてるけど……」

「以前に顔を出したことはあるぜ。だけどあそこはポストンコモンに入る必要がある。今だとマジで危険だぜ？」

「危険？」

「あのね、ブルー。ポストンは危険なエリアだっていうのは知っているでしょ？」

「ああ」

「ポストンコモンはその最激戦地区っていわれてる場所だぜ。何に出くわして不思議じゃない。」

噂で聞いただけだが、なにかあればスーパーミュータントとレイ

ダーが殺しあいしてるって言うし。凄いのだとあのインステイ  
チユートの部隊がそのどちらかとやりあってた、なんて口にするやつ  
までいる」

「暗い夜道を、ライターの火だけで導火線だらけの中をあるくような  
ものだよ。本気でいきたいの、ブルー？」

私の選択肢はひとつしかない。

「コンバットゾーンとはなんだ、マクレデイ？」

「ああ、そこはな。」

要するに闘技場さ、ファイターたちがいて、客の前で戦ってみせる。  
ただ、そんな場所だからなあ。今じゃライダーくらいしか店に立ち寄  
らないと思うぜ」

そして問題は今、もうひとつ増えようとしている。

「ああ——ストロング、だったね」

「ソウ、ストロング」

「君はどうしたいんだ？」

「ストロング ハ 人間ノ優シサノ ミルク ヲ飲ム」

「——何？」

「人間ハ ストロング ト 人間ノ優シサノ ミルク 探ス！」

「うーんと、どういう意味だと思うブルー？」

「あの馬鹿に何を吹き込まれたんだよ……俺がおかしくなりそうだ」

騒ぐ二人ではなく、なぜかストロングはまっすぐ私を見おろしてい  
た。そのしぐさの中に、子供のようなかたくなさをわずかに感じた私  
もまた、考えていた。

いや、考えてもこれはきつと答えはないのかもしれない。

「わかったよ、ストロング。人間の優しさのミルク、私が一緒に探して  
みよう」

「ウン、良ク言ツタ人間」

珍しくパイパーとマクレデイが意見を同じくして考え直せと私に  
迫ったが、私はもう決めてしまったのだ。

自分のことだと意地を張ったせいで、私はアキラとは別の道を歩む  
羽目になってしまった。このストロングの望みを本当になんかえられ

るかはわからないが、私はこのスーパーミュータントを見捨てることはできない。

あの経験が無駄にしてはいけないのだ――。

|||||

ボストンコモン――かつてこの国のはじまりにあった独立戦争において象徴的な戦闘がおこなわれた土地は、繁栄という都市開発の中で沈む中、最後の日を迎えた。

それを皮肉るように、公園の中には静かにたゆたう池と木々がその時を凍らせてこの場所に今も残しているかのように私には見えた。

「静かだね?」

「まあ、何も無いときはそんなもんさ。ここは逆に――」

一発の銃声が鳴り響き、ボストンコモンに侵入した私たち（一名は除く）はすぐに腰を下ろしつつ周囲を探る。

「ドウシタ人間? 戦イハ モット ムコウダゾ」

「――そうみたいだな」

私はバックの中からレーザーライフルを取り出した。

やはり、これは軽すぎる……。好きにはなれないが、選り好みばかりをしていられない。

トリニティタワーからの激しい戦いで、コンバットライフル用の弾丸は少なくなっていた。

公園の中に入ると、すぐに戦場が目の前で繰り広げられているのだと理解した。

それはまるでアリ同士の殺し合いだった。

数々のロボットを引き連れたレイダーが、町の中から沸き続けるレイダーと、同じく姿を見せるスーパーミュータントとで3つ巴になっている。

それぞれに犠牲が出ていて、地面の上に倒れる死人の数が増えていく。

「ヤバイな、レオ。下手したらこれ、フェラルなんかも引き寄せてしま  
うかもだぜ？」

「ああ——ところで、なんでレイダー同士が殺しあっているんだ？」  
「片方がハイテクレイダーなんだよ、きつと。あいつら、最近は連邦の  
西側に進出してると話だったけど。また中央に戻ってこようとし  
ているのかもね」

「ハイテクレイダー？どう違うんだ？」

「へへへ、見りゃわかるだろ？ロボットさ、あの連中、襲撃には必ずロ  
ボットを使う。装備も、ロボットからの流用で独自のものをつかつて  
いるのが、わかるだろ？」

なるほど、パイパーとマクレディの解説で納得した。

アキラが手に入れたアサルトロンタイプのロボットが3台、セント  
リーボットと呼ばれた3脚の足と大型の体を機敏に動かし、両手のガ  
トリングが火を噴けば相手はなすすべもなく倒れていく。

「あんなのがいるのか、知らなかった」

「私も話を聞いたただけなんだけど、技術屋を多く取り込むことで勢力  
は増したんだけど、今度はその技術屋の取り合いになっちゃって、自  
滅したんだって。」

それでも西側へ進出つてことで、巷じゃ言われているけど——」

「実際は叩きのめされて中央から逃げ出したのさ。ロボットがいな  
きや、結局は少数のレイダー集団だからな。このあたりのレイダーな  
ら、余裕の相手さ」

不満そうなストロングの前で、私たちがそんな会話を交わしている  
と。

頭上を何発か、ミサイルが飛んでいく。どうやら破壊の限りを尽く  
すセントリーボットに対抗しようと、スーパーミュータントも武器を  
取り出してきたようだ。

まずいな、巻き込まれるかもしれない。

そう考えながら、私は思わず視線を後方へとうつした。

まさにその瞬間のことであった。あの有名なスワンの池の表面が  
いきなり隆起すると。これまで見たことのない大きさのスーパー

ミュータントが立ち上がってきた。

私は声も出なかった。

逆にむこうは叫んでいた。ただ一声、「スワン」だと。

「う、嘘だよね？あれってまさか——」

「ダイアモンドシティでも有名だったろ？そうだ、スワンの池のベヒモスだ」

「ベヒモス？」

「スーパームュータントをさらに化け物にしちまったような奴のことだ。こつちに気がつかなくて助かったな。ちょうどいいや、ここはあ

のスワンに任せて俺たちは——」

マクレデイの提案が終わる前に、決断を下した声が後ろから上がる。

「我慢出来ナイ！ストロング、戦う。人間、俺ニ ツイテコイ!!」

目の前の戦場で戦うのが3から4に増えたと思ったが、勘違いだったらしい。

「嘘でしょ？あんな——」

「パイパー、いつものを頼む」

「えっ、なに。ブルー？」

私は首から提げたロケットを取り出すと、その中からアキラが用意してくれた錠剤を一錠とりだして口の中に放り込んだ。

マクレデイはため息をつき、パイパーは絶望的な顔をしていたが、私の要望にはこたえてくれた。

「いいよ——踊りに行くから、付き合わないかっ!!」

「パーティタイムだ、コン畜生」

私は走り出すと、ただ歯を食いしばり。そのついでに錠剤を噛み砕いてみせた。



## 両手に抱く、機械の花 (Akira)

たった4時間の睡眠だったが、安心して落ち着いて眠れるというのはやっぱり違うものらしい。

誰かに揺り動かされるのを感じて、目を覚ますと。目の前には、やや不安そうな表情の年頃の女性がいて驚いた。

「えっと……なに？」

「あの、起きてください。朝食が用意できたので、それで——」

「はい、どうもありがとうございます」

自分を老成円熟した人物など考えたことはないが、若者特有の思考なのか。目覚めたばかりでも、無防備そうな異性が目の前にいると——まあ、申し訳ないけど自然と妄想が爆発しムラムラしてしまっ

た。体を起こし、年寄り臭くぽりぽりと頭をかくことで冷静さを取り戻そうとしていると。任務を果たしたと考えたのか。彼女はどこかは去っていつてしまった。

(あれが人造人間、の女性か。なるほど似ているもんだね)

以前、バンカーヒルまで同道した男も。なにやらオドオドしていて自信なさげであったが、どうやらレールロードが保護する彼らはあるものであるようだ。

——人造人間のために命をかけることができる？

地下でデズデモーナに聞かれたときは、思わず噴出さないように笑いをこらえるのが大変だったことを思い出していた。状況による、と煙に巻こうとしたらはっきり答えろと詰め寄られたっけ。

人を喰う化け物でも嘘くらいはつける、レールロードもそれを学ばないチャンスになるだろう。

裸で眠っていた僕は服を着ると、そのまま食堂に向かって歩き出した。夕べ、久しぶりにシャワーが使えたのでほっこりしてしまっただことだった。少しどころではなく、気が抜けていたように思う。今後は気をつけよう。

途中、なにやら乙女チックに窓の外をじつと見つめて動かないエイダを見つけて足を止める。

「エイダ？」

「——はい」

「おはよう」「おはようございます」

「どうかした？」

相手の反応がなにかおかしい気がした。

だが、すぐに答えがないのでためしに話題を変えてみた。

「キ्यूリーは？」

「医務室です。怪我人や病人の様子を見ていたいそうです」

そうか、と答えつつ納得もする。

診断ロボットというだけあって、ふだんの彼女は非常に控えめで。戦闘でもそれほど目立った活躍を見たことはない。だが、つれて行くときに「足を引つ張らなければいい」と言ったので、そのことで僕は別に気にはしていない。

本人(?)とも何度か話したが、外の世界で新たな研究となるものを探したいとは毎度口にするので。やはり根っこは名前のように医学者なのだろうと思う。

旅がしたいとは言うが、僕はミニッツメンに言って、どこか平和な居住地で研究をさせてやるのが、彼女にとっては一番いいのかもしれないと割と本気で考えている。

「それで、エイダはどうした？」

「この窓から、外を見ています」

「そう、何が見える？」

「外の景色を——」

「連邦？ポストン？」

「いいえ。あれです」

僕は彼女の隣に立つと、彼女の赤いモノアイを見て、窓の外を。地上を見下ろした。

自然と、視線はひとつにむけられる。

「あれか？」「そうです、あれです」

「そうか……あれか。あの船、動くかな？」

地上では、それも機能は夜中だからわからなかった。

チャールズ川に浮かぶ、数艘のボート。そのなかのいくつかは、ここから見下ろすとまだちゃん動きそうに見えていた。

「私はあなたとの約束に、メカニストとの対決のための協力を願いました。覚えていますか？」

「契約は覚えているよ。タダ働きは僕も嫌いだ」

「私がメカニストに繋がるであろう情報はタダひとつ、それがゼネラル・アトミックス工場でした」

「そうだったな」

だが、そこは位置が悪い。

ボストン南西部——サウスボストン。ここからそこを目指すならボストンの海沿いに南下しなければたどり着けない。レイダー、スーパームュータント、他にもいるだろう。そんな陸路を考えると非常に危険な道程となるが、しかしあのボートが使えて海の上を進めるというなら話は変わる。

川を下って海へ、そこから沖に出たら、サウスボストンまで半日もかからずに直行できる。

工場が海沿いにあることも幸運といえる。

「ハイランズとデューコンは食堂？」

「はい」

「エイダ、ここにいろ。話をつけてくる」

エイダは再び無言となり。僕はその場から離れた。

|||||

楽しい人造人間たちとの食事を終わると、僕は立ち去ろうとする。デューコンとハイランズの肘をつかんで再び席に座らせる。

デューコンの勧めどおり、素直に協力したことで心を許してくれたのか。ハイランズはあっさりとここに使える船があることを認めた。係留している何隻かは偽装されているだけで、ちゃんと動くらしい。

僕はエイダとの約束を果たしたいと、さっそくそれを貸してもらえ  
るように交渉に入る。

「——うーん、話はわかったが。どうだろうな」

「わかった。レンタルってことで。キヤップを払う、それでどうだ？」  
「いや、そういうことじゃないんだ。フィクサー、君はこの連邦の海と  
いうものを正しく理解していると、自分に対して断言できるかい？」  
「？」

なにかあるのだろうか？

「君に貸す船は、当然だが貴重なものだ。だが、それ以上に今の海は、  
陸地と変わらず危険な場所だ」

「……そう、なのか」

「ミニッツメンは知っているだろう？彼らがまだ勢いがあつた時代、  
彼等の本部は海中から現れた生物によつて壊滅させられたという。  
海の中は地上以上に危険だ。

それに陸地の水際が安全ではないことは、君だって知っているだろ  
う？」

「気をつける、できる限り、ちゃんとする」

「行きたい場所があるということだが、上陸についてはどう考えてい  
るんだ？サウスボストンはこの辺以上にレイダーやスーパーミュー  
タントが幅をきかせている。

もし船を岸に接舷などしようものなら、攻撃を受けてたちまち沈め  
られてしまうよ。君が無事で往復できると確信がないと、悪いがあれ  
は簡単には貸せないな」

なるほど、計画が必要というわけか。

そういうことなら僕はかなり、得意だったりする——。

|||||

「エイダー！」

「はい、どうなりましたか？」

「船は借りれる。だが、準備が必要だ。それもすぐに」

「わかりました……どうすればいいのでしょうか？」

「まずはキュリーだ」

ハイランズに見せた僕の計画は、それほどたいしたものではない。今朝は妙に押し黙って話の聞き役に回っているディーコンを断りなく船長に指名し、荷物として僕とエイダだけが上陸する。

僕は海上で防護スーツに着替えて岸まで泳ぎ、エイダは海上を“飛んで行く”ことで解決する。

工場内には一人と一台で侵入、作戦終了後。また同じようにして沖の船まで戻っていく。

「ということ、お前の足が最初の問題だ」

「はい」

「ここで留守番するキュリーと足を交換する。エイダ、お前のプロテクトロンの足をキュリーに。キュリーの足をお前に」

「……了解です」

戦闘用ロボットのアサルترونが、よりにもよって万能型のMr. ハンディタイプのパーツに交換するわけだが。不安がないわけではない。

起動中は常に宙に浮かび続けるせいで、エイダの照準機能と姿勢制御が狂って使い物にならなくなる可能性は確かにあった。

だが、このチャンスを逃すわけにはいかない。

作業台も必要だが、ここから居住地を往復するのは時間と労力の無駄、ということ。タイコンデロガの屋上を開放してもらい、レールロードの資材を借りてそこに急造でロボット作業台を作成することにした。

その作業と平行して、キュリーも口説く必要がある。

医療器具の中を、フワフワと楽しげに浮かんでいる彼女に僕はいきなり要求をぶつけていった。

「体を、交換するのですか？」

「そうだ、足だけ。短い間の話だ。是非、協力してほしい」

「……」

ロボットなら、人間の方から強引に「こうするから命令を聞け」とやってもいいはずだった。

だが、おかしい話だとはわかっているが。自分にはそれができない。

誰にとつてもWin—Winであれ、とは言わないが。

話し合いが苦手であっても、理解を求めるときを放棄したくない気持ちがあるのだ。認めたくないことだけだ。

「お前にも負担を強いることは十分に理解している。

なんなら、なにか希望はあるか？おまえにもなにかあるというなら、この際だ。この耳に入れてくれて構わないよ、エイダと同じく実現できるように努力するつもりだ」

「私の？」

「ああ——Vault81で、お前は『この連邦で自分は新しい研究を探したい』と言った。まだそれほど時間はたっていないが、お前はロボットだ。少なくとも、現状での自分の考えはまとまっているのだろうか？」

「——はい」

「それを聞かせてくれ。エイダのために協力してくれるなら、お前の問題も俺が聞く——必ず解決してやる、とは約束できないけど」

キュリーはしばし無言だったが、再び口を開くと驚く言葉を次々と発していく。

「あなたの仰るとおり、現在までの私は連邦の情報収集に力を入れてきました。そして新しい情報が追加されるたびに自己診断を繰り返ししてきましたが。結果は——」

「結果は？」

「その結果は大変厳しいものが続いています。今のこの状態が続く限り、私は私に必要なものを手にすることはないだろう、と」

嫌な気配は、しかしこの時点ではそれほど感じることはなかった。

「えっと——そんなに言うほど良くないの？驚いているのだけだ」

「はい。この問題を解決するために、何が必要なのか。私は同時に考え続けてきました」

「それで、その……なんとかする方法は見つかった？」

「もつとも確実な方法がひとつ。」

私が今、一番必要とするものは人間の持つ創造性。限定しますと、「ひらめき」というものが必要なのです」

「ひ、ひらめき？・ロボットが？」

僕は驚きと同時に困惑を感じていた。

この会話の行き着く先が見えない、大変なことを告白されているのだとしか思えなかった。

なのにキュリーの会話は容赦なく続いていく。

「そう、それです！私は自分の新たな仕事のために。人間のもつ創造性を手に入れなければなりません」

「それって……直感、とか。じゃないの？」

「違います。私の中のローデータをランダムに取得して導かれる結論だけでは、ひらめきとは呼べません。」

ひらめき、というのは正しい知識と効率よく完成された方法が得られる究極の創造力なのです。多くの知識や経験の上で、突然姿を現す奇跡なのです」

「む、難しいことになってきた。それは実現不可能としか、思えない……」

多少の無理はなんとかしてやろう、やりたいなどと考えるはいたが。まさかそれがロボットに人間の創造力を機能として搭載してくれ、そんな無茶ぶりとはわからなかった。

「この世界で更なる知識を求めるには、大冒険が必要なのです」

「そうはいつでもなあ。俺にはどうしたらいいのかまったく想像もつかないよ」

「いえ、必ずしも人間でなくてはいけないということではないです。」

人間に近い何か、少なくとも私の記憶すべてをダウンロードできる新しい環境状態が必要なのです」

（人間に近い？人の脳にロボットのデータは入力できるものなのか？）

途方もない要求だった。

そしてさすがにこの難問に対する解答は、この奇妙な自分の脳みその中にも入っていないらしい——。脳味噌、頭の中か、それならどうにかなるか？

自分の苦い経験から、余計なことを口走らせてしまった。

「お前のその問題をどうにかできそうな人を知っている。グッドネイバーまで戻らないといけないが」

「本当ですか!？」

「うーん、こうしよう。まず、エイダのために力を貸してくれ。その間、もう一度考えてほしい。正直に言わせてもらうけれど、ちよつと途方もない要求だとは思えない」

「わかりました。私自身の考えは変わることはないと思われませんが、もうしばらくは状況を観察しつつ、具体的な方法を自分でもさらに考えてみたいと思います」

「とにかく——すぐには無理だ。何とかしてやりたいが、もう少し時間がほしい」

なんだかひどく面倒な問題をまたひとつ飲み込む羽目になった気がするが、とにかく——合意はとりつけた!

悪ノリしているのだろう。

デイーコンは船長の帽子をかぶると「それじゃ、お客様。クルーズに出発しますぜ」と言った。静かにエンジンが始動するが、冷たい風は力強く叫び続けてくれているおかげで船の存在が知られることはない。

半日をかけて僕はエイダとキュリーの足を取り替え。考え付く限りの準備をしていたら夜になっていた。

さらに翌日の午前3時過ぎ、再び夜の闇の中でタイコンデロガから這い出た僕達1台と2人は、チャールズ川に浮かぶレールロードの船を1隻に乗り込むと静かに岸から離れていく。

予定通りにいけば、明日の夜明けまでには無事にここまで戻ってこられるはずだった。



ミニッツメンに休む暇はない。

だが、その甲斐あつてすでに3人の4チームのミニッツメンが誕生し。活発に活動を始めていた。

見回り、防衛、監視。この3つを徹底させ、彼らは日々経験をつんでいる。

しかし、これで満足はしない。

さらに新たに加わった9人の新人を、引き続きプレストンが目を光らせ、厳しく訓練し。次のミニッツメンを名乗るにふさわしい兵士へと鍛え続けている。

ああ、それでも認めないといけない。

悪くない、あの逃亡者としての日々には考えられなかった未来を順調にすごせていることが楽しい。

プレストンは現在、ミニッツメンの將軍の下につく副官であり、同僚のいない幹部という存在だ。わずらわしい組織の政治とは無縁でいられるおかげで、目の回る忙しさではあるもののストレスはそれほど感じてはいない。

サンクチュアリでは、アキラが残っていたマーヴィンと名づけられたロボットが村長を演じており。その存在への不満と滑稽さを嘆きに村人がたびたびプレストンを訪れるものの、「深刻に考えるな」ただけ論してから帰らせるよう徹底している。

レオはまるでわかっていたかのように最初からあの青年を信じていたが、今ならプレストンもわかる。

気に入らないことではあるが、あの騒ぎでサンクチュアリはようやく落ち着きと平和を手にすることができたのだろう、と。

入植者同士の不満は、あの青年への不満に置き換えられ。彼らは共同体として、隣人として互いを認識しあい、協力する姿勢を見せている。

とはいえ、サンクチュアリに限らずミニッツメンも常に問題は増え

続け。プレストンだけでその全てを解決はできない。

Vault111の2人の意思や事情については、できる限りプレストンも尊重はしたいところではあるが。出来ることなら彼らには定期的にここへ戻ってきてもらわないと、いつかは困ったことになりそう。そんな予感がある。

そんなミニッツメンとプレストンだが、今日は3人の新人を連れてパトロールを兼ねた実地訓練することになっていた。自分達の支配域のコンコードの先、レキシントンより前の緊張感のあるルートを歩く。

少人数でのこうしたパトロールは、プレストンは自分の未熟な若者だった昔を思い出させた。

当時の彼の教官は、引退間近の老人であったが。足腰はしつかりしていて、緊張と不安でビクビクしながら歩く自分を豪快に笑い飛ばし。小さな体でも勇気をみなぎらせ、列の先頭に立っていたものだった。

そして、その教官に今は自分になり、あの老いた教官と同じようにして新人たちの先頭に立って歩く。自分がそうすることで、この組織の未来にも同じような若者が誕生してくれるだろう――。

そしてすぐにわかった。道の先、400メートルほど。プレストンは無言で指を頭の上まで持ち上げると、未来のミニッツメンたちに敵の位置と、散開を命じた――。

旅商人のカーラはいつものように恐ろしく曲がった肩で前のめりに歩き続けていた。この辺は最近、危険だということで自分以外の旅人はほとんど寄り付くことはない。

だが彼女は何か理由があるとはかりに、この道を歩いている――サックチュアリへ。

そんな彼女と彼女の荷物の前をさえぎるように立ちふさがる複数の影があった。

「よオッ！婆さん、ご苦労」

「——強盗？レイダーか、やれやれだね」

奴等の独特のお手製のアーマーと粗末なパイプ銃が、ずらりと6つ仲良し兄弟のように並んでいる。どいつもこいつも性格が捻じ曲がり、学はなさそうで、浮かべている笑みはいっちょようまえに残酷なものだった。

「あんたの荷物と、ポケットの中のキャップを渡しな」

「それで？命まではとらないって？」

「俺たち婆ちゃんっ子だったからよ。裸にひん剥いて、ブチ殺すのだけは勘弁してやるよ」

「そうかい。あんたらは婆ちゃんから、しつけされなかったようだね——」

中の一人は調子に乗ったか、カーラのバラモンに近づくとその背中に自分の尻を乗せる。

「しつけ？されたぜ？『お前の親父とおふくろが死んだのは、シヨン便漏らして泣くことしかできなかったお前のせいだ』ってよ。ひでえだろ？俺達、当時はまだ1歳にもなっていなかった」

「殺したのかい？」

「婆ちゃんを？まさかっ！俺たちはこうして独り立ちしただけよ。今度は自分がシヨン便漏らすしかできなくなつて、誰も面倒見てくれない居住地のなかに置いてき。なんだっけか？」

「これだ、覚えてる——『オヴァエラー』って」

ギャハハと笑う奴等の中にあつて、カーラは無言となり、その目も変わらず暗いままだ。

虫唾が走る、とはこのことだ。

スコープ越しに眺めるプレストンの連邦にはいつも奴等の姿が写る。正義を忘れ、暴力で欲を満たそうとする不愉快なレイダー。奴等をこの土地から追放するためならなんだってやろうと思える——。

プレストンは息を止め、わずかに待ってから躊躇することなく引き金を引く。

レーザーマスケット内に充填させたエネルギーが解放され、突き進

む真つ赤なそれはバラモンの上で馬鹿笑い続けているそいつの首から上を焼き、地上から消滅させた。

新人達もプレストンに続き発砲を始めた。命中させた者もはずした者もいた。後で反省会をしなければな、と考えが頭をよぎる。そうする事で彼らはまた一步、成長するだろう。本物のミニッツメンに近づくのだ。

プレストンは慣れた手つきで自分のマスキットのクランクをまわし、すばやく2発目の発射体勢に入る。

だが、その必要はなかった。

浮き足立ったレイダーたちの中にいたカーラが、おもむろに伸縮警棒を抜き放つと傍にいたレイダーに蹴り倒す。そして、躊躇いなく無慈悲な一撃を顔面へと叩きこむと顎が砕けたであろう鈍い音があたりに響き渡った。

(――手馴れているな)

スコープ越しにその動きを捉えたプレストンの感嘆だった。

女性でありながら一人で連邦を歩く彼女は、そうやってこの連邦を生きてきたのだ。強く、美しく、そしてどこか悲しい姿だが認めなくてはならない、あの姿から目をそらしてはいけない。

プレストンはカーラが最後の一人を蹴飛ばし続けた後で背後に回り、羽根折り顔面締め一《チキンウィングフェイスロック》で相手の片腕をはずし、首の骨を折る姿をじっと見守っていた――。

|||||

ゼネラル・アトミックス工場。

戦前ではロボコ社と並ぶロボットや兵器を開発していた会社だと、レオさんも言っていた。付け加えると、コズワースやキュリーなどのMr.ハンディ型のロボットの生み出した会社でもある。

「静かですね――」

エイダの言うとおり、工場の中は廃墟が広がっていたが。

僕は黙って背中から武器を取り出した。

銃は基本、軽い上に振り回せる10ミリ弾やレーザー兵器が自分が良く使う武器である。

だが、そんな僕でもマクレディのように遠くの敵を叩きたいと考えたと、別の選択肢が必要になる。

僕が新たに選んだのはプレストンも使うレーザーマスケットであった。正直にいうとこれは重いし、使い方も面倒くさいとあって最初は良い印象を持っていなかった。

だが使ってみると、それほど馬鹿にしたものではないことがわかった。通常のレーザー兵器と違い、エネルギーを充填させて解き放つ機能によって高い火力が期待できるといふところを評価するようになったのだ。

今回使うのはレオさんから譲ってもらったインスタイチュートのレーザーピストルとマスケット。

軽さと火力を考えたら、これしか選べなかった。

「エイダ、この工場の電気は生きている」

「はい」

工場の中は荒らされてはいたものの、室内は人工の光で煌々と照らされている。そして耳はもうとらえていた。小さいが一定のリズムを刻む複数のロボット達の駆動音を。

「?!?レーザーが複数の敵の動きを感知しました。こちらにむかってきます!」

警告を聞きながら、入り口そばの古い事務机を乱暴に僕はひっくり返し。その後ろに姿を隠す。マスケットについたクラシクを手で回し、数発分のエネルギーをさっそくそこに蓄積させて準備をする。

「エイダ。悪いがライフルは得意じゃない。1発ごとに最短でも4秒はかかる。大型で重装甲のロボットでなければその一発で倒せるだろうが、お前には粘ってもらわないと」

「了解です!」

壁と窓の向こうに動く黒い影が、階段の上から降りてくる影が、奥の廊下から急速に近づいてくるせいで大きくなる侵入者への警告アナウンス。

敵が一斉に僕たちのいるフロアに殺到してきた！

突入しながらめちやくちやに発砲するアイボットを僕が一発で沈めると、エイダはまだ階段途中にいる改造されたプロテクトロンの交戦に入った。

今のエイダはキュリーから取った推進剤でフワフワと浮いているので、なんだか上半身だけが見える幽霊のようにも見える。これには利点として素早い移動が可能だが、反対にバランスを崩すとわずかな時間、無防備な姿をさらすことになる。

だが僕は、彼女と彼女が僕に贈ってくれたロボット作業台の力をここで知る。

不安定に近い状態であるのに、彼女の射撃能力はそれほど低下していなかったのだ。

拡散するレーザーが相手を焼き、連続して発射される鉄の杭がその圧倒的貫通力でもって相手の鋼鉄の肉体を貫いていく。

圧倒的な物量が敵にあつたが、その流れに逆らうだけの力が僕とエイダにはあるはずだ。

迎え撃つ僕らの前に敵は次々とフロアに姿をあらわした。

ああ、あれはヤバイのがきた。

「エイダ！接近型が混ざってる、近づけるなっ」  
「了解」

ひどい改造だった。ハンディタイプロボにタコを思わせる足はなく、胴体に2本の腕をとりつけ、宙を飛びながら腕のブレードを回転させて接近戦で相手を圧倒する。そんなの暗殺ロボット4台が姿を見せたのだ。

僕のマスキットの2発目が、先頭のやつを吹っ飛ばした。派手に決まった一撃のせいでそれに続く列が乱れ。エイダではなく、この僕が危険な2台を引き受ける羽目になってしまう。

乱戦にあつては目立つ行動は危険を引き寄せてしまう。

そのことは十分体験してきたと思つたが、僕はまた同じ状況に放り

込まれて追われる立場にある。

壁にしていた机はブレードの一振りだけで、見事に真っ二つになった。そこから必死で転がり出た僕は、クランクを適当に回すとすぐにライフルの引き金を引く。

ハズレた。

まるで関係ない方向にとんだ赤い光は天井に炸裂すると赤い火花を散らし、焦げ後を作った。

ライフルを持って接近戦に追い込まれている最中に、無駄弾とか、死にたいのか僕は!?

「私がっ!」

「そつちを見てろっ!」

エイダには彼女自身の面倒を見てもらいたかった。

そしてここで早く自分を助けろ、などとみつともない台詞をはかかった自分を素直に褒めてやりたい。

次のプロテクトロン達がフロアに侵入しようとしていた。

僕はその前を横切りながら床にすべりこみ、後ろをついてきた2台の暗殺ロボットをプロテクトロンの前方に入るように誘導させて愉快な交通事故を起こさせた。

プロテクトロンはよろめいただけだったが、衝撃にバランスを崩し、2台はフラフラと頼りなく宙を泳いで回った。

その瞬間をこそ僕は待っていた。

クランクを最高までまわしきると、柱の影から構え。ちようど衝突から復活しようとした一台をまたもや吹き飛ばす。追いつがるのが減ったが、今度はプロテクトロンが追加された。プラスとマイナスでゼロ。

まったく、ロボットってやつは!!

追いつかれそうになって柱の反対側から飛び出すと、今度はプロテクトロンのレーザーが僕を的確に狙ってくる。足に、腕に、顔にレーザーで焼かれて激痛が走り、血がにじむんだのか視界が真っ赤に染まる。

僕は乱暴にスティムパックを取り出すとそれを膝につきたてた、何

本も。

——戦いの中で自分を制御し続けなくてはならない

意識はまだしゃんとしている。

これまでのように、撃ち合いをして互いの体に穴をあけ。流れる血とダメージの中であんな異形な自分が出現するのを都合よく「これは殺し合いだから」と肯定しては、駄目なのだ。

自分の戦いは自分が最後まで決める。

僕は戦場で自分が戦える方法を、あれからずっと考えていた。

入り口に続く壁沿いに寄りかかって相手の位置から姿を隠すと、僕は首に下げたロケットの中からそいつを取り出した。

サイコやジェットといった薬物では得られない高濃縮された合成薬物。僕はそのひとつに指を伸ばすと躊躇することなくそれをステイムの効果で治療が続く自分の体の中にぶち込んだ。

時が止まった。

目に涙があふれ、廃工場の明るいフロアは極彩色の輝きを放ち始める。

心臓から体の中をめぐる血がロケット水流の激しさに変わるのをはつきりと感じ、喉の奥が勝手に震えて怪鳥音がほとばしる。

ライフルを壊さんばかりに乱暴に扱った僕は、遅れて飛び込んできた暗殺ロボットに当然のように接近戦を仕掛け。ライフルのストックで、大きな胴体を思いつきりついた。

再び空中でバランスを崩す道化を無視し、その向こう側に立っているプロテクトロンを充電した一発で見事に吹き飛ばす。

時間の感覚を失った効果なのだろうか、自分はこの時。ようやくレーザーピストルを持っていることを思い出すと、それに手を伸ばしつつ舞い続けている暗殺ロボットを見た。

効果時間30秒の世界で、僕はまるでこの世界の王であるかのように振舞い続けた——。

サウスボストンの工場裏からボーっと目の前に広がる海を眺めつ



つ、僕はヌカ・コーラ・クアンタムをようやく半分まで空にした。

これまでのように、恐れていた異形の姿になることなく厳しい戦いを生き抜いて勝利を収めることができた。

結果には満足してるが、なんだかひどく疲れて。今から船までまた泳いで戻るのが少し億劫だと感じていた。

「工場の中の探索、終了しました。旦那様」

「——なんだ、コズワースみたいだな」

「間違っではないはずですよ。あなたは私のマスターですから」

微笑みながらビンを傾ける。

「さて、では戻る前に話しておきたいことがあります」

「例の変な装置のことか？」

「はい。あれはメカニストがロボットに使う、特殊なレーダービーコンでした。計画を次に進めるために、この装置を私に搭載することを進言します」

「——それでどうする？」

「予想ですが、メカニストはロボットたちをチームとして動かし。その中心にはロボブレインと呼ばれるタイプのロボットがいます。彼らに指示を出すことで、メカニストは軍団を動かしているのです。う」

「なるほど。こっちは逆に送られてくる指示をたどってメカニストやらの本拠地を割り出す、か」

「その通りです」

確かにうまくいきそうな感じはある。

「向こうもこの方法への対策を考えているんじゃないかな？」

「その可能性はあります。解析には十分な時間をかける必要があるでしょう」

「——戦闘についても、もっと考えないと。相手の数が想像以上にいて、大変だった」

「そうですね。まさか工場を動かして、あれほど多くのロボットを増産していたとは思いませんでした」

ゼネラル・アトミックス工場は今、正しく廃工場となった。

フロアにはおびただしい数のガラクタが転がっていて、それはこの一人と一台がやったことだ。

夕焼けの中のサウスボストンから見る海は、変な話だが平和な世界を思わせた。

ふと、僕は海の上に作られている建物のひとつに興味を引かれた。

「エイダ」

「はい」

「あれは——あそこにあるのは何だ？随分大きいけど、なぜか建物の名前が浮かんでこないんだ」

「……あれは、わかります。キャツスルとよばれているものです」

「城だつて？」

「はい、正式名称はインディペンデンス砦。かつてミニッツメンが正しく精強な軍隊であった時。あの場所は、彼らの本拠地でした」

「——プレストンも言ってた奴か」

「情報では、海中からの巨大生物の襲撃を受けた、とのことでした」

僕は傍らにあるライフルを構えて建築物の方向に向けると、スコープの中をのぞく。

はつきりと見たわけではないけれど、砦の上で動いているなにものかの影が確かにちらほら見える。

（プレストンが譲ったレッドロケットを仮の本拠地と言い張ったのも、こいつが原因なのかな）

ずっと不快に思っていたが、なるほど。確かにこんな立派な砦を持っていれば、ガレージ程度の大きさでは満足できないのだろう。

突然、背後の町の中から爆発音が響くと。戦闘音がはじまった。

「旦那様っ」

「大丈夫だ、エイダ。レーダーに反応はないだろ？」

どうやらスーパーミニターントかレイダーが戦闘を開始したようだな」

「——はい」

「ここから遠そうだ、心配はいらないよ」

とはいえ、いつまでもここで黄昏てばかりもいられない。

デューコンが裏切って帰ってしまったら。自分はスーツを着て泳いで帰るか。ここからタイコンデロガまで歩いて帰ることになる。

僕は来たときと同じく、メタルアーマーとVauteeスーツを脱いで裸になると。エイダの中に預けていた防護スーツへ静かに着替えた。

「実はひとつ、気になっていることがあります。旦那様」

「なんだ？」

「あなたは本当に泳げるのですか？来たときの様子を見ると。あれは、まるで——」

「エイダ。いい言葉を教えよう。『知恵は経験の娘である』だ」

「——なんです？」

「僕は泳ぐという理論は知ってる。あとは経験を通して実践している真っ最中なのさ」

そういうと僕は空中に体を躍らせ、海中へと飛び込んでいく。

(あ、出典はレオナルド・ダヴィンチね)

スーツの中の空気のおかげですぐに浮力で海面に出ると、腕と足を動かして必死に平泳ぎとやらを実行した。

おしてはかえす波の間に、バシャバシャと音を立てて無様にも漂う僕は、沖の船を目指してすでに必死になっている。

エイダは少し送れて陸地を離れると、海上をフラフラと海風に苦戦しつつ——それでもあつというまに泳いでいる僕を抜いて先に沖に止まっている船へと戻っていく。

デューコンは船の上で待機しながら、その様子をニヤニヤと悪い笑みを浮かべて眺めていた。

いつもは訳知り顔でなにかと傲慢な物言いをする若造が、必死に沈むまいと波間でもがいている姿を楽しめないはずがないではないか。これがあるから、運転手も留守番も喜んで引き受けたのだ。

## コンバットゲーム (LEO)

コンバットゾーンに、明日はないのだろう。

暗い気持ちでトミーは事務所の机で会計帳簿をつけていた。

売り上げは——ああ、もういい。口に出したら、シヨックのあまり酒をかつくらって寝たほうがマシだと叫ぶしかない。それでは仕事にならない。

ここら一帯をコンバットゾーンと呼ばせるまでに成長させたことは、自分にとつて誇れることだが。その栄光はもう何年も前から低飛行を続けていることを認めないわけにはいかなかった。

旧時代の照明と舞台装置を復活させ。シヨーアップされたファイター同士の戦いに、客は飲んで食べて、騒ぎまくっていた。

あの時はリングから降りて傷だらけのファイターたちも、渡されたキャップの十分な量に痛みも忘れて皆が幸せそうにっこりと笑っていたものだった。

この斜陽の時代にあつてもシヨーファイティングは、十分なビジネスとして通用する。

愛想を振りまき、客が帰った後は。ファイターたちが掃除する場内を眺めて高笑いが出来た。

だが、それはもう過去の話だ。

数年前から売り上げが急に落ちてきた。

ここを訪れる客の質が変わったのだと気がつくのにも、それほどの時間はかからなかった。

それまでファイトをおとなしく楽しんでいた客がいきなりこのあたりから姿を消してしまったのだ。理由はわからない、噂ではどこかに移動してしまったということだったが——わかっているのはそれいっつらはもうここに戻ってくることはないだろうという確信。

この変化への対策をとろうにも、その間にトラブルが続々と発生してあつという間に興行はめちやくちやにされていく。

気がつけば、わずかなキャップを手にするためにコンバットゾーンでは処刑ショーまがいの試合が平然と行われるようになってしまっ

た。

そして、そうなれば当然のこと――。

「トミー」

「何だ!?何なんだ!ノックくらいはしたらどうだ」

「話があるんだよ」

「お前が!?お前と話することなんて、こっちにはないぞ。ケイト」

「あたしもない、でもトラブルは聞くでしょ?」

「トラブルだと?もうこっちは手一杯で――まあ、いい。なんだ?なにがあつた?」

「クリスとラングが消えたよ。とんずらしたみたい」

「……そうか」

「――それだけ?ファイターがここからキャンプのあたし以外全員いなくなったというのに。しわしわのあんたから出てくる言葉が『そうか』なの?」

「ああ、そうだ。それと話は聞いたぞ、ここから出て行け!」

ケイトは鼻を鳴らし、姿を消すとトミーは再び机に向かって帳簿を見た。

しかし考えていたのは別のことだった。

ファイターがついに一人を残して消えたのは大事件ではあるが。一方で消えた2人には気の毒にも思っていた。

怪我をしてもがんばってくれた2人だったが。先日、馬鹿な客に煽られ引っ込みがつかなくなり。ラングは片腕を失うほどの大怪我を負っていた。あれでは逃げても仕方ない、責めはしない。この場所にとどまるなんて、そっちのほうが糞だと自分だって彼の立場なら断言する。

正直に言うと、いつそケイトも連れて消えてくれればよかった――  
そうすれば、そうすればきつと。

腹の立つ女の声がして、仕方なくトミーは事務室から出て行く。

そこにはイラついている表情のケイトと、場内にはいつの間にかレイダーたちが勝手に入ってきていた。

「おい、あんたたち。次回の興行はまだ決まっていない。すぐにここから出て行ってくれ」

「はあ？俺たち客だぜ？試合見せてくれよ、キャップで賭けてやるからさ」

「あんた耳が聞こえないのか？興行はしない、次回まで試合はない。今は出て行ってくれといっている」

馬鹿共はただヘラヘラ笑って、勝手に取り出してきた酒を喉に落とし込むことしかない。こちらの要望など、どうでもいいと思っっているのだ。

「いいからやれよ、暇だから見てやるっていつてるだろ？」

「あいな——こっちは興行の準備がまだ……」

「やれよ！」

レイダーの中の一人がいきなり手にした飲みかけのビールを手近な壁にたたきつけてみせた。

トミーはため息しかない。こいつら無法者レイダーはいつだってそうだ。自分の都合ばかり、こちらの話をまったく聞こうともしない。

「よし、わかった！やってもいいさ。だがな、それならあんたらに興行の面倒を見てもらわにやならん」

「あ？なにいつてんだよ、この腐れグール」

「いいか？今、うちで用意できるファイターはそこに突っ立っている馬鹿女のケイトだけだ」

「ちよつとートミー、チャンプを馬鹿女ってどういうつもり！」

「お前は黙ってる、リトルバード！……戦いが見たいか？それならお前さんたちでこのケイトの相手を——」

トミーはそこまで話して、目の前の馬鹿達がなぜか一斉に楽しそうに目を輝かせていることに不安になり。口を閉じてしまう、自分は何かまずいことを口にしてしまったのだろうか？

「チャンプがそのネーちゃんだっけ言うなら、俺たちが相手するぜ」

「ひゅーひゅー」

「なに!?!」

「そのかわりー試合だけだからよ、ルールはDead or Alive生きるか死ぬかでもいいよ

な？いいだろ？」

歓声が次々と上がる、こいつらは本当の阿呆ばかりだ。

どうやめさせようか必死に考えているのに、ケイトは煽られたのか「それでいい」などと口走ってしまった。

もう止められない。

あとはこのこっちの気も知らないどうしようもない馬鹿女が、無事に勝利することだけを願うしかない――。

|||||

コンバットゾーンは熱に包まれていた。

現チャンプであるケイトは、間抜けなレイダーを相手にちやんと試合を成立させて見せた。舐めた相手が序盤、さんざんにカラかったが、彼女はずっと沈黙を守った。

そして一気に襲ってこようとするところを狙って、逆に攻勢に打って出る。

いつものように頭に血を上らせているのだろう、そこからトミーにいわせれば見れたものではなかったが。倒れた相手のうなじにむけて振り下ろされるバットにはためらいはなく。

血と暴力と、そして死を見たがついていた観客はその様子を見て理解しがたいが満足してようだった。

こんな糞試合もようやく終わると、内心でちよっぴり喜びながら実況していたトミーが高らかに勝者の名前を告げた、まさにその瞬間であつた。

コンバットゾーンの扉が破られその向こうから血だるまになったベヒモスが悲鳴ともうなり声ともわからぬそれを響かせ、中へと転がり込んできた。

コンバットゾーンにいたレイダーたちだけでなく、全員があっけにとられて身動きが取れなかった。

しかし目は見えていて、頭も動いていたからすぐにわかる。

このベヒモスは間違いない、あの――スワンだ、と。

「獲物ハ 逃ガサナイ！」

勇ましい声を上げ、新しく姿を現した緑の大男が手にスーパーズレッジを持って飛び込んでくると。

ステージに向けて這い寄ろうとしているスワンの背中の上に登り大上段からそいつを振り下ろす。

恐怖と苦痛にゆがんだ醜い顔が最後にレイダーたちに向けられていたが、声を発することなく突っ伏すと、もう動くことはなかった。

なのに、そのスーパーミュータントは大喜びで、まだスワンの首元に凶悪な武器を何度も叩きつけることをやめようとしな。

「おいおい、まだやってるぜ。アイツ」

「あー、ブルー。ここがそのコンバットゾーンだと思うよ」

「そうか、丁度よかったな」

同じく開け放たれた扉の向こうから3人の男女が新たに姿を見せると、ようやくレイダーたちも状況の変化に対応できるようになる。

「おい——ちよつと待てよう？あれって、あいつだ！おいつ、皆。あそこにいるのはダイヤモンドシティの糞つたれ賞金稼ぎと女記者……」

ステージ前のレイダーがそれを最後まで口にすることはなかった。

レオの手にしたレーザーライフルからのびる赤い火線がそいつを貫くと、高熱によってからだの脂肪が蒸発し、沸騰したそれによって骨も綺麗に解け始める。

一瞬前まで人間だったそれは、今では床の上にできた灰の山でしかない。

「思わず撃ってしまったが、あれはレイダーだよな？」

「うん、ブルー。私が太鼓判押します。あれってレイダーです」

「だから、俺の話を聞いてなかったのかよ。ここに最近出入りしているのはレイダーだって、さっき教えてやったばっかだろう？」

「ストロング、コノ人間モ 殺シテイイノカ？」

レイダー達は自分が獲物に認定されたと理解すると、一斉に怒りの声を上げつつ武器に手を伸ばす。トミーは慌てて自ら檻の中へと入ると、ケイトがレイダーと一緒に暴れださないようにその腕をつかんで檻の隅で小さくなるように指示を出す。



コンバットゾーンの歴史の中で、これほど大量の血が流れることは過去にはなかったと知ることになるだろう。

|||||

トミーにとって最悪の一日は悪夢であり、悪夢のまま終わったが。不思議なことに妙に心は軽く、すっきりもしていて穏やかなものであった。

皮肉だが、破壊の限りが尽くされたことでコンバットゾーンは今日が最後の日となった。

場内では巨大なベヒモスとムカついていたレイダー達の死体が残され、自分はこの場所で築いたもののすべてを失ってしまった。

いや、まだここに一つ残っている。

「落ち着いたなら、冷静に話をしないか？」

「ああ、あなた達はここの人？」

「そういうあんたは——Vault居住者だな。あんたがリーダーかい？」

「私は、ちよつと違う。彼らは私の友人達だ」

「……アイツもか？」

トミーは興味を引かれて、戦いが終わってしまったことに納得できずに死体に「立ち上ガレ」と要求しているストロングを顎でさす。レオは苦笑いしながらそれをうなづいて肯定する。

「ここで暴れて滅茶苦茶にしてすまない、外でちよつと戦闘に巻き込まれてね。私はここに、尋ねたいことがあって来たんだ」

「なんだ？」

「探偵のニック・バレンタインを知っているか？しばらく姿を消していて、証言によるとここにも来たと聞いてきたんだ」

「それなら保障しよう、そいつは確かに来た。だが、理由はもう知ることとは出来ない」

「なぜ？」

「探偵が話した相手が、試合中に喧嘩を始めた馬鹿の流れ弾に当たっ

て死んだからだよ」

思い出すと、いまだにはらわたが煮えくり返る事件だった。

「それじゃ——ここで終わり？手がかりは終了？」

「そのようだ、パイパー」

「いや、ちよつと待て。あきらめる必要はない。俺はこの責任者だ、あんたらの力になれるかもしれない」

諦めかけていた3人が一斉にトミーのほうへ顔を向ける。

成功だ、食いついた！

「だがその話をする前に、ちよつとしたビジネスの話をしていいか？なあ、ここにいるケイト——彼女の戦いぶりを見て、あんた。どう思ったかね？」

コンバットゾーンは死んだ、興行も死んだ。

だが最後に自分の役目も終わらすために、やらなくてはいけないことが残っている。忌々しい癖に、最後の最後まで手元に残ってしまった一枚のワイルドカード——いや、違う。不良債権の処理だ！

ボストンコモンの公園で始まったちよつとした戦争が始まった頃。

公園脇に聳え立つ、かつてはマサチューセッツ州議事堂とよばれたその建物の屋上からその一部始終を観察する目が見つめていた。

この人物がここで見張るのは理由がある。

もうすぐグッドネイバーで始まる会談の相手が、この公園近くに本拠地を置いているからだ。

——情報が真実なら、取引相手にトラブルが迫っているはず

それが真実かどうかを確かめるために、ここにじつと張り付いていたのだ。

戦争は奇妙な決着を迎えた。

一番最後の加わった小さな勢力は、破竹の勢いを見せつけ。あつという間に先に戦闘に入って消耗していた勢力を撃滅させてしまったのだ。

それでも一番タフだったから残ることが出来たベヒモスは、足を引

きずりながら公園から逃げ出したものの。彼等の中にいるスーパーミュータントがそれを許さずに追っかけていってしまったので、残りもそれについていってしまった。

(これで、終わりか。トラブルは起きない)

道や公園の中に転がる死体の数々だが、これらが1週間後もここに残っているとは思えない。

公園内は放射能によって土地自体が被爆している。そしてあそこの倒れている奴らの中には実はまだ死に切れていない奴も結構いるはずなのだ。

そいつらは身近な放射能の影響を受け、グールになるのを一足で飛び越えて一気にフェラルまで悪化する。

その頃にはお仲間のフェラルも死臭を嗅ぎ取ったかのようにここに現れているはずなので、残された腐りかけの肉の山を仲良くわけあうと、こういう流れになるはずだ。

日が暮れると、このあたりは本当に静かになる。

数日はこれが続くと思っていたのに、それが間違いであると闇の中に動く一団を捕らえて知った。

あの連中だった。

ここでの戦闘に勝利したのに、あの連中はなぜかここへ再び戻ってきたのだ。

いや、そうではない。

恐れていたことがついに目の前で起こってしまったのだ。

明るいときには見なかった、案内役らしい赤髪の女が指差したことで確信に至った。

その場所はパーク・ストリート駅。

今夜の取引の相手、スキニー・マローン氏の隠れ家にあの連中は向かうつもりなのだ！

観察者は一度目を細めると、あの連中が本当に駅の中に入っていくかを見定めようとした。

視線の先ではレオが周囲に何事かを口にし、続けて手にするレーザーライフルを確認すると中へと入っていく。

そのときにはもう、観察者は議事堂の屋上からは姿を消していた――。

私は興奮を抑え、勤めて冷静になろうと思いつつながら静かに前進を開始した。

もう動くことはないエスカレーターを降りていくと、先のほうから声が聞こえてくる。

「ここに加わってみたが、スキニー・マローンはやっぱり凄い奴だったと見直さなかったか？」

「マローンは甘い奴だと思ったね。あの探偵、こそこそ嗅ぎまわりやがって、せつかく俺たちで捕らえたのにアイツは探偵を拘束すればいいのたまいやがった。

あれじゃ、探偵を殺すのにビビッていないって、誰がわかるっていうんだ？」

「おい、そいつはボスの前で言うんじゃないぞ。新しいボスの女、あれがキレたらどうなるか。お前だってあの探偵みたいな目にはあいたくはないだろう？」

私は口元に笑みが浮かぶのを感じた。

ようやくだ、ようやく探していた相手に近づくことが出来た。

私は指で後ろに続く仲間たちにサインを送ると、笑顔のまま構えたライフルの引き金を引く。

## Wind Up

——悪がボストンの街中にはびこる時、一人の男が影の中に身を潜める

——無実なるものを守り、罪人を裁く

——その守護者の名は……っ!?

——今回のエピソードは？

|| || || || || || || || || ||

私と私の多くの友人達が並んで困惑していた。

私の目の前にはVaultがあり、ナンバーは114とはつきりと数字が振られていた。

「ねえ、どうしたのよ?」

「ケイト——戸惑っているだけさ。君の、上司」

「トミー? あれはそんなじゃない」

「わかった……元、雇用主である彼から、ここに探している探偵がいると聞いてはいたが。まさかそれがVaultだとは考えもしなかった」

「ああ、そうか。あんた元はVault居住者なんだね」

コンバットゾーンで私は、このケイトを奇妙な成り行き of the 末に護衛ということ雇うことになってしまった。

契約料は無し、給料は出来高で。それが彼女の希望だった。

「別に何の不思議もないよ。さつき殺した連中、うちのところに何度か来て『探偵、探偵』って騒いでたんだ」

「——なにそれ、信じられない。それならなんで町に噂が流れてこないのよ? こっちは何も出やしないから。自信、失いかけたっていうのに」

「はあ!? うちに来るのなんて欲求不満の騒ぎたい連中ばかりさ。トミーだって、あんた達に会わなきゃ、わざわざあの馬鹿騒ぎしてた連中のことなんて思い出さなかったよ」

そして目の前にはVaultがある。どうも奇妙な感じがしてな

らない。

「ブルー、わたしの命をつなぐやつ。あなたもひとつ食べる?」

「——もらおう」

立ち尽くす2人並んだ状態で、私が手を差し出すとパイパーはそこにガムを一粒置いた。ところが横から手が伸びてくると、ケイトがそれをつまんで自分の口に入れてしまう。

「あ」

「ふふん」

「なによ?その態度は」

「別にー」

マクレデイが背後で「怖っ」とつぶやいた。

パイパーとケイト。どうもこの2人、性格も相性も合わないようで、さきほども戦闘でも互いを「邪魔」とか「下手糞」などと罵り合っているのを見たばかりだ。

彼女たちと一緒にいるということは、戦いの連続で楽しそうにしているスーパーミュータントよりも面倒なものを、私は抱え込んでしまったのかもしれない。

少しだけ暗い気持ちになっていたが、カールが後ろから足に体をこすりつけてきたので気を取り直すと、ピップボーイを使って扉を開けようと試みることにした。

老婆の予言が本当であるなら、探偵との面会を果たすことでショーにまた一步近づいていけるはず。それは同時にあの誘拐たちとも出会う可能性が高くなることを意味しているわけで——復讐の間を思うと、あの日から凍り続けている心の奥底で燻るものをはつきりと感じていた。

それだけに今の私には瑣末な女性達の意地の張り合いが、癪に障る

|||||

「なんだ、お前?俺のお友達になりたいって言うのか?」

——善き人、セルミーさんをお前が殺したという噂を聞いた。本当か？

「ああ、殺したぜ。あの女のガキと一緒に、たった2キャップしか持っていないかった。大損だ、やるんじゃないかなかったぜ……お前おかしいと思っただが、よく見たら。いい服を着ているな」

——『この罪は！あまりにも長い間、真実の光に隠されてきた』  
「な、なんだよ。酔っているのか？」

俺の邪魔をするつもりなら、思い知ることになるぞ？」

路地裏で騒ぎが起こると、グッドネイバーのゴミ拾いたちはしばらく間を空けてから現場に近づいていく。

無慈悲な罪人、ウエイン・デランシーはそこに死んでいた。

両手をそれぞれが大地に鉄の杭で括り付けられ。

その体は無残にも鋭い刃で数十回と刺されており、死後にその両足を重ねてわざわざそこも杭で貫いてある。

かつての宗教のアイコン象徴に横しているのだが、それに気がついたのは何人もいないだろう。

だが、見慣れたものもそこにはあった。

この殺し方には思想や、信仰は関係ないのだと。明らかにわかる、それは。

傷一つない頭部には古いコミックに登場するキャラクターカードが添えられていた。

その名前は——。

|||||

サードレールのVIPルームを貸切りにして、部下と女を連れ戻すキニー・マローンは上機嫌になって席に着く。

「この部屋は——へへっ、本当に久しぶりだ」

——そうなのですか

「ああ、あんたと違ってな。俺は——ちよつとばかり遠回りをしてき

た。でも、悪いことばかりじゃないさ。この先はあんたと一緒に、きつと大きな仕事ができる。俺は確信しているぜ」

——そうありたいものです

答えながらも、相手の顔を目を細めて見た。

落ちぶれたかつての殺し屋。でっぷりと突き出た腹は、怠惰の証ではない。この男の敗北者として裏通りを背中を丸めて隠れていた時間の長さを証明しているだけだ。

それもしばらくすればギャングのボスにふさわしい残酷で冷酷な男の傲慢さの印としてみなに認められるようになるだろう。

この男の元に人を呼び集め、再びギャング団を与えたのはこちらの深く一方的なゆがんだ愛ゆえであった。

それは同時にこの男の精神をさらに歪ませ、こちらの都合の良い形へと作り上げることができた。

もはやこの太陽の光のように彼を照らし続けている愛は、彼がこちらへの邪心の一片も抱かない限り続くものだ多半ば信じ始めている。とても良い、とても良い——モルモット実験ネズミになってくれた。

「食事と酒、そしてあんたとの話を始めの前に。済ましておきたい話があるんだが——」

——なにか？

「この場所で言うことでもないと思うが。わかるだろう？」

この町の支配者、ハンコック市長があんたにしたことだよ。そいつがこの俺の耳にも届いたんだ」

肥えたネズミの耳にそれを吹き込んだのは誰だ？

思い当たるのはソニー。あの穢れた町の中を器用に泳ぎまわるところで生きているだけの記者の顔だ。

心の底では犯罪者や傭兵を憎んでいるというのに、そいつの耳に要らない情報を聞かせたのは自分が彼らと同じ立場だと怯えているということだろうか？

——話すつもりはなかったが。知りたいなら、答えよう。何でも聞いてほしい

「なら話すが——ボツビだ。鼻無しボツビは、あんたから切り離され



ちまったそうだな？」

——そうだ

「あんたにはその。いろいろと世話になっている。必要なら今後のポツビとの取引を、この俺が肩代わりしてもいいと思ってよ。困ってるんじゃないか？」

けなげなネズミは、忠誠心を見せたいようだ。

——申し出には感謝する。だが、大丈夫だろう。彼女とは簡単な取引をただけだ、関係は切れたが問題というほどのことは今のところなくてね

「遠慮しないでくれ。このスキニー・マローンは、あんたへの借りを返すためならどんな無茶な頼みだって聞くし。ちやーんとあんたを安心させることができる男だぜ？」

——わかつている、友よ

笑顔で答えると、部屋に新しい影が入ってくる。

てつきりこの店の者とばかり思っていたが、監視を命じていた“観察者”だとわかつてわずかに緊張した。

“それ”は近づくくと耳元で小さく、そして短く伝えてきた。ただ一言「来ました」とだけ。

顔にこそあらわれなかったが、私の心は悲しみに深い海の底まで沈んでしまった。

“息子の予言”が当たった以上、私のこの悲しみが癒されることはない。

目の前でまだ得意げにしているネズミの頭をねじ切り。その隣に座る添え物の女の頭部もついでにそうして、私の前に置かれた皿の上に並べたいと本気で考えた。

だが、行動はしない。

食欲によるストレス発散は、いましむべき原始的な行為のひとつだ。

“人として”私にそれは許されない。

——友よ、さきほど余裕を見せた私だが。君に伝えねばならないことができてしまった

「おおーきつそくかい、まかせてくれよ。俺は何をしたらいい?」

——私の愛にこたえ、これまで多くの難関を乗り越えた君なら大丈夫だと確信している

「ああ、信用してくれよ」

哀れなネズミ、これを聞いてせいぜい冷汗でもかいてみせてくれ。

——君の Vault が攻撃を受けているそうだよ。急いで戻るといい、彼らはすでに君の隠れ家の奥深くまで侵入しているらしい

|||||

デランシーの一件は、この辺りで細々と商売をしている連中にとっては大事件であった。

彼らは口にする。「何で俺たちが?」「あのピッグマン・ギャラリージャあるまいし」と。

それでも命が惜しいから、商売に出るときは武器を持たせた護衛をつける。大物に上納することを考えると、儲けが減るので腹立たしい限りだ。

「AJの仲間はこれだけじゃない、わかるよな」

今日も路地裏の商売は続くが、ここを訪れた客はいつもと違ってこの警告をまず聞かせておく。AJだつてトラブルは嬉しくない。それでも、現れたそいつが——まさか、本命とは思わなかった。

「なんだ、変なやつがいるな?ここじゃ歓迎しないぞ、ここは……」

——AJとはお前か。子供に薬物を売っていると聞いた

いきなり言葉をさえぎられたが、どうやら客のようだとAJはいつものように商品の説明を始めた。

「ああ、そうだ。俺は——起業家なんだ、新しい市場を開拓している。子供向けの商品でな。」

俺の用意するスペシャルレシピのジュエツトやメンタスは、ダイヤモンドの子供たちも大好きだ。こいつがもっと広く知られるようになれば——」

相手はせっかくのAJのビジネストークを最後まで聞くつもりは

なかった。

——子供に毒を売るだと？その所業、決して許されることではない！

「おいおい、ちよつと待って。冷静になれよ」

——悪党とこれ以上、交わす言葉はない！

「……畜生、あんたデランシーを殺った奴だな？俺を殺して、なにを得るって言うんだ？俺は“鼻なしポツビ”の下で商売やっている、ただの小物さ。

な、だからこうしよう。

俺の命、50キャップで俺が買う。俺は無事、あんたは黙ってる。それでいいだろ？」

目の前の男は黙っている。

黒服のスーツに、帽子。顔は赤いバンダナで隠しているが闇の中でも不気味に輝く2つの目の光が。正気でないもののようにも感じられた。

「畜生、わかったぞ。あんた、俺のところに来たのはあいつの差し金だろ？前に子供達のことと嘆いていたからな。

あんなグールの遊びになんて付き合わないで、これで手を打てよ。

俺は別に、ケントの奴を——」

空気が変わる。

黒い男の手には不気味に輝く刃が光と、コートの下からはあまり見たことのない形状のレーザー兵器がちらりと見えた。

——お前は今、我が怒りに触れた。

あの時と同じ。通りの奥からなにか良からぬものの唸り声……それが聞こえなくなると、ゴミ拾いたちはまたもや恐る恐るその場所に近づいていった。

AJと彼の仲間、2人の護衛達はやはり死んでいた。

スライム状の液体の山が2つ、そして首をパツクリと裂かれ、苦しんで失血死したAJの口には。なぜか数十キャップが詰め込まれ、入りきらずに零れ落ちていた。

そして今回も、壁際に崩れ落ちていたA Jの軀のそばにはあのカードが……コミックキャラクターのそれがおかれていた。まるでそれが自分の犯行だと教える、名刺のように。

|||||

扉のロックをはずした探偵のニックが「音がするな、どうやら古い友人が騒ぎを知ってあわてて戻ってきたのかもしれない。出て行くと言えば、最悪今度は閉じ込められるだけではすまないだろうな」とつぶやいた後でこちらに視線をよこしてきた。

「覚悟はいいか？」

聞かれても私には別段、動揺はなかった。

それでも正直な話、ここに来るまであまりにも多くの血を流しすぎている。

マロースキーの取り巻きたち、ここにいた彼の部下。トリガーマンはほとんど全員を、殺してきた。

私の中の煙りが、そんな結果に影響したとも思えないが。

私と私の友人たちの勢いは、強烈な印象をもてるくらいに凄まじいものであった。

そしてそれは最後まで変わらない。

再会した殺し屋と探偵の間にはなにやら因縁のようなものがあつたようだったが。

私には関係のないことだ。

2人(?)が西部劇さながらにメキシカンスタンドオフを始める前に、私のライフルが相手を物陰へと押し込み。圧倒したまま、無慈悲にすべてを終わらせる――。

ニック・バレンティンをつれて私たちが地上へ出ると、すでに太陽は昇っており。ピップボーイによると駅に侵入した翌日の正午近くであると、画面に表示されていた。

私は鉄梯子をカールを背負って上ってきていて、どこどなく不満そ

うな犬を地上へとおろしてやってからニツクに——囚われていた”  
人造人間の探偵”に話しかけた。

「久しぶりの空を見て、感想は？」

「ああ——見てくれ。これが連邦の空だ、こんなに青かったのか。

これだって、いつもは不吉なものを見下ろす皮肉屋だと悪態をついていたときもあったんだがな。それがこんなに——目を奪われてしまふ、美しいものだと思う日が来たとはね」

「機嫌よさそうじゃない」

「しつ、ちよつと黙つてなさいよ」

後ろで女性2人が話しているのを無視して、私は探偵に話を続けさせた。

「なんにしろ、生きていてくれてよかったよ。私はずっとあんたを探していたから」

「そうなのか?とにかく助けてくれてありがとう」

そういうと探偵はようやく見上げていた空から視線をはずし、私の顔を見た。

やはりだが——違和感が強烈にある。人造人間の証である冷たい金属の表面には、魂を持った者がする生きた表情というものがしつかりと浮かんでいる。

「探していた、と言ったな?どうやって俺の居場所を知ったんだ?依頼人の希望で、今回はほとんど人に行き先を告げて回ったりはしなかったはずだ。そこにいる、敏腕記者の協力があったとしてもね」

「ちよつとニツク、ふざけないで。狙った獲物は逃がさない、それが——」

「あたしの背中に何発撃ち込んだっけ?」

「ちよつと!?!そんなことしてない!」

「喧嘩をはじめるなよ、お嬢さん方」

友人達の茶々でわけがわからなくなってきたので、ジエスチャーで向こうは無視してくれとやりつつ。私はニツクの疑問に答えた。

「彼女は確かにがんばってくれたよ。あと君の事務所のエリーが心配していた。探偵の戻る場所をつぶさせないと言ってね」

「そうなのかな？どうも戻ったら彼女を昇給してやらないといけならしいな」

「——その、好奇心で言うのだが。あんたの依頼は、大丈夫なのかな？」  
「なに、心配はいらない。『お宅のお嬢さんは、グッドネイバーでギャング団のボスの愛人になっていた。頑固に説得を聞きいれず。戦闘に巻き込まれ、大変残念ながら死亡しました』とでも伝えるさ。不満もあるだろうが、それは間違いなく事実だからな」

「戦闘に巻き込まれ、ね」

実際の彼女は勇ましくバットを振り上げたが。スレツジハンマーを手にしたケイトによって文字通りあの世までぶっ飛ばされてしまった。

かわいらしい顔の中身を豪快にはみ出させて床に横たわる彼女を横目で見て、自分がそうしてやりたかったとストロングが残念そうにつぶやいたのが印象的だった。

「さて、あんたには助けられた時。息子のショーンがどうだこうだ、行方不明になったと言っていたな。どんな風にさらわれたのか、あんたからは直接、聞かせてもらいたい」

「それは構わないが——どこで？」  
すると向こうは笑い出す。

「いや、まさか。ダイアモンドシティの俺のオフィスまで来てくれ。そこなら落ち着いて詳しい話を聞けるはずだ。コーヒーを飲んで、腰を下ろして、頭をすっきりさせて、ちゃんと覚えていることを全て俺に聞かせてほしい」

「わかった、それで構わない」  
「では、ダイアモンドシティで」

「こっちは一緒に行っても構わないか？」  
するとなぜか探偵は困った顔を浮かべる。

「悪いがそれは——諦めたほうがいいだろうな。見たところ、あんたの友人の中には人が大勢住む町の中に入ると騒がれてしまいそうなのがあるようだ。」

「これは別に非難しているわけじゃないんだが——」

「そうか。そうだったな、わかったよ。ダイアモンドシティで」

ストロングやケイトのことをすっかり失念していた。

とりあえずダイアモンドシティへと戻る前に、ハングマンズ・アリーに行つたほうがいい。うまくすれば復活したばかりのコズワースとも、そこで再会ができるはずだ。

私は足元で行儀よく座つてこちらを見上げているカールの目を見返した。

きれいな目がそこに私の姿を映していた。それはなんともいえない表情で顔をゆがめている、そんな私があった。

|||||

——我等のヒーローの身に何が？

——どうなるのかは来週。

——次回の、刺激的なエピソードを待て！

——戦え……っ！

——この番組はギャラクシーネットワーク。ギャラクシーニュースがお送りいたしました。

グッドネイバーに流れるこの番組が終わると、男たちはまだかすかに残っていた目の奥の輝きをそつとまた隠すと、ラジオのスイッチを静かにオフに切り替えるのだ。

## 映し鏡

昼間のポストンコモン的一角から、爆発がおこった。

巻き上がる埃や煙の中から転がり出てきたレイダーは、すぐに体制を整えようと道の両脇、建物の角に身を潜ませて反撃の意思をみせる。だが、そんな彼らの後ろから追いかけて転がり出てきたのは、新たな2つのちゃんとピンが抜かれている手榴弾である。

息を呑む暇も、「ひっ」と声を出すこともできなかった。

再び破裂音がすると、次に現れたのはアキラを先頭にした侵入者達。

足元には直前までレイダーだったものが道や壁に散らばっており、ひどい惨状であったが。彼はそれを見下ろすと、フンと鼻で笑ってすぐに興味をなくし、周囲の警戒に入る。

遅れてキュリー、そしてキャタピラで移動するエイダの腕にしがみついて楽をしていたデーコンがいた。

「あんたの戦い方には品がない。それもここまでひどいと感心するしかない」

「それ、褒めてないぞ」

「そうだ。まったく褒めてない。爆発物をいったいどれだけ持っているんだ？俺はいつも歩く武器庫の隣で、タバコを吸ったり。焚き火にあたってたりしたわけか」

「タバコ吸うの？知らなかった」

「吸わないさ。吸うわけがないだろう、俺は自分の血管を破壊する趣味はない」

「それって血栓のことを言ってる？」

「——あんたの頭の中に、医学についての知識があるとは知らなかったよ。他には何がある？」

株式相場の見通しなんてどうだ？将来性のある、確実な銘柄をひとつ頼むよ。俺の引退後の生活のために、そろそろ老後を見据えて投資を始めようと思っているところなんだ」

「よくもまあ、そんなペラペラと嘘が飛び出すね」



「俺があんたの背中を守る時間はまだ先のようにだな。今はこれで、退屈しないようにしている」

人間の男たちがくだらない会話を続ける中、キュリーはせつせとレイダーの破片の間にこびりついたキャップを見つけ出しては拾いあげている。

「ずっと疑問に思っていました。聞いてもいいですか、エイダ？」

「なんででしょう？」

「外に出て知ったのです。こういうレイダーと呼ばれる人間たちの生活は安定することはないので、キャップはそれほど持つていないことが多い。」

ですが、アキラは戦闘を経験するたびに多くのキャップを回収しています。それは、私が飛び散った臓物や汚物にまみれてもきちんと回収したキャップの量と考えても、多いくらいです」

「そうですか？考えたこともありませんでした」

「そうなんです。驚くべき確立です、こんなこと信じられますか？」

「……それが、なにか？」

「不思議です。これは彼の才能なのでしょう？それともただの運なのでしょう？」

それは彼の肉体を調べればわかることなのでしょう？ああ、研究のために血液と細胞を私に提出してくれないか。私が彼にかけ合ってみても大丈夫だと思いますか？」

「——それはあきらめた方がいいと思います」

ロボットはロボットで、危険な会話をしているようである。

アキラは半ばうんざりもしていた。

レールロードのエージェントの仕事は、基本はこういったドンパチが常にある。

交渉やトリック、策略でそれらを回避したいと思っても。任務の性質が「どこそこに行け、そこでなにかをやれ」というものばかりとあって、時間がかけられないから自然とこういうことになる。

(レールロードって、馬鹿じゃないのか?)

同じエージェントでも、戦闘要員といわれているグローリーという女がいたが。話によると彼女はミニガンを振り回して物事に対処しているらしい。

その姿を思い浮かべると、グッドネイバーの怖い人を思い出して嫌な気持ちになる。連邦の怖い女は、みんなスーパードクターのようミニガンを振り回したがるものなのだろうか？

建物に入るとようやく自分のインスティテュート製のレーザーピストルを取り出したデューコンと並んでアキラは一緒に前進する。

「そいつを十分に使いこなしているようだ」

「デリバラー？まあね、良い銃だし」

「構えるとしつくり見えるようになってきた。上手になってきている証拠さ」

「——ありがとう」

礼は口にしたが、素直に誉められたとは思っていなかった。

自分はいまだに素人と大差のない撃ちかたしかできていない、それがわかっていいるから。

では誰かに習えばいい、そうなるが簡単なことではない。

残念ながらレオもプレストンも、マクレディもライフルが専門だった。レールロードで探すというのも手だが、どうもこの組織はエージェントを酷使用する傾向があるので、訓練してくれなどと言ったらいい顔をしないように思えた。

当然だが、それはこのハゲにたいしても言えることだが——。  
その足りないものを、僕は薬物で補っている。

長い廊下からフロアに出て、一歩。

そこでなぜか僕は自分の中で全力で危険信号が発せられるのを感じた。

「マズイ、下がれ——」

デューコンの言葉に反応し、僕は昔の西部映画に出てくるガンマンのように。後方に飛んだ、空中で自分の股の間にむけて100ミリ弾を

数発通しながら。

床に転がった後は、横回転であわてて壁となる廊下のほうへ隠れたが。すでにいくつもの鉛弾が、僕がいた床や壁にあたって跳ねている。

「アキラ!?!」 「無事ですか?」

「エイダ、突撃準備。援護する」

ロボットたちの声を聞かなかったことにして、僕は指示を出す腕にあけられた穴をみてキュリーを手招きして呼び寄せる。

「キュリー、弾丸は貫通しているか見てくれ」

「はい——大丈夫のようです。中に残っていません」

返事を聞くと僕は無表情のまま、すぐに腕にステイムを打ち込む。あの変異からの暴走という異常体験への嫌悪は、いつしか僕から傷の痛みを忘れさせるようになっていた。

デューコンはフロアを覗き込みながら、そんな僕に気味が悪そうに言う。

「あんたはサイコなんかも使うからかな。気になるよ、そのステイムの使い方——まるでステイム中毒だな」

「ふん、そんなのが本当にあるなら。このキュリーにそいつを証明してもらおう」

痛みへの耐性を得た代償として、僕は怪我をして血を流す状態にしていることを神経質に恐れるようになった。

ステイムパックは50本以上常備し、血が流れて唇が干上がり、どが渴くことを嫌がって浄化された水も手放せない。今回はその渴きはまだ感じない、このまま出血が止まれば大丈夫だろう。

「敵、フロアに4。これから突入します」

「援護する」

デューコンの立つ壁際に自分も近づくと、新しくレーザー銃を抜いた。

派手に打ちまくりながら突入するエイダに火線が集中している間に、背後から撃つデューコンと僕のレーザーが敵を次々と打ち倒していく——。

フロアを抜けた先の廊下の突き当たりにデューコンは立つと、壁に拳を一度だけ殴りつけた。

それが合図であったとも思えないが、隠し扉が開いて中のものがあるらわになる。

「これが、今回の——？」

「そうだ。戦前の政府組織DIAの貴重な装備技術だよ」

「でも……ブラックスーツにタキシードだよ!？」

「それだけじゃないさ。ほら、この赤いドレスなんてどうだ？美人に着てもらってポーズをとってもらえば。ぐっ、とくるんじゃないか？」

ドレス、か——あ、まずい人でイメージしてしまった。

僕は首を振って、妄想を頭の中から追い散らす。

「任務は完了した。情報は確認され、回収部隊があとで派遣される。俺たちの役目はここまでだ」

「——置いてある武器や弾薬。それに服も、何着かもらっていいかな？タキシードとか、ドレスとか」

「まあ、全部持っていけないならいいんじゃないか？」

返事を聞くと、僕は調子よくそこにならんだ物に適当に手を伸ばしてはエイダやキュリーに回収を指示した。

旧世界の組織の技術、それは間違いなく僕の好物に違いなかった。

|||||

僕はグッドネイバーに久しぶりに訪れていた。

レールロードに戻る前に、ここで済ましておきたい——問題の解決を始めようと腹が決まったからだ。

エイダやデューコンと別れた僕は、キュリーをお供になぜか薬物の調査に今は熱を上げている。

「これは、人体にはよくないものです。それは当然、ご存知なのでしよう？」

「……理解はしている。でもね、それが僕には必要なのさ」

「それはまるで、中毒者の言葉そのものです」

「それも認める——僕は正直、レイダーは殺しても殺しても、さらに殺したとしても。まったく楽しいと感じる殺人鬼だけど……それでも彼らの思考には時々、魅力に感じてしまうときがある。」

『暴力と銃を使った、強気の交渉』ってやつだよ。なんでもかんでも、それで決着がつかならねえ」

慰めになるかわからないが、効果（戦闘中に引き起こす症状が、という意味で）だけが重要なので、品質にこだわっていない。つまり、自分の持つおぞましい特性、まるで物語の主人公のようにぽっかりと都合よく抹消されている記憶。そんな自らへの絶望から、救いを求めているわけではないってところが——。

嫌、言い訳になってもいないな。これは。

「アップ系のメンタスを作っておられるようですね。私が作った分のメンタスも、同じものを？」

「いや、そっちは集中力が上がるやつにする」

「わかりました——それにしても、あなたは本当に多くのことを知っておられるのですね」

肩にいきなり重い鎖の束が覆いかぶさってきた気がした。振っていたフラスコの勢いがなくなり、顔はゲンナリとして目から力が消えてしまう。

人体に悪影響を与えるドラッグ——この知識は、寝物語で彼女に与えられたものだった。

「それはね。その理由は——この悪徳の町を、舐めてかかった無知な僕の散々な活躍で。それはもう、おっかない美人とお知り合いになっただばっかりに……」

あの頃は旅の空の下、ベットで眠るのは天国だと思っていたよ」

来たばかりでも、華麗に危険を回避して『危険な町でも、僕なら対応できる』とか余裕を持ってた自分の姿が、今はとても腹立たしい。

「そういえば私だけ連れてきてよかったのですか？ エイダは——」

「アイコンが面倒を見てくれている。そういう約束だ」

あの男に預けるのに不安がないわけではないが、今回は諦めるしかなかった。

「それにキュリー。それは君のためでもある」

「え？」

メモリーデン、それがここに来た理由である。

|||||

言葉に「敷居が高い」とあるが、それはまさしく自分のことだとちやんと理解している。

だから、入り口に扉から平然と入り、「ドクター・アマリと話したいだけだ」と「俺じゃなくて、このロボットの用事なのだ」を何度も送り返すつもりで——動揺せずにそれをするための準備をしてから、突撃した。

正直、叩き出される寸前まではがんばろうと思っていたが。

メモリー・デンの主、イルマは少し怒った顔ではあったが僕の話聞いてくれた。どうやら、先日からの裏工作が大きな効果をもたらせてくれたようである。あれくらいなら地味なものだと、思っていたのだが。

「わかったわ、あまりこういうことはしたくないけど」

「もちろん！でも、今回は騒がないし。俺のことは関係ないから」

「——アマリは下にいるわ。それとケントのこと、相手をしてくれて嬉しいのだけれど。彼は可愛そうな人なの、あまりトラブルになるよななこと、しないで頂戴」

「わかったよ。もう、しない」

自分のキャラではないとわかってはいたことだ。

ヒーローがこの町の平和を守らなくても、別に誰も不満には思わないはずだ。ここではミニッツメンは必要ないのと一緒で。

嬉しかったが、しかし本番はここからなのである。

地下に降りていき、やはりどことなく身構えているアマリ博士に事

情を話す。正直、予想よりはだいぶうまくいったのだと思う。最悪、キュリーの悩みは聞いただけでも激怒してたたき出されても不思議はなかった。

「ごめんなさい、そのロボット。今なんと言ったのかしら？私の聞き間違い？」

「私は——」

「いや、ドクター。聞き間違えじゃない。彼女は確かに言ったよ、そのとおりにね」

「そうです。私は、ロボットですが研究者として。人間のひらめきを必要としているのです、ドクター。それを獲得する方法として、私は私自身を人間。もしくは人間に近い脳にダウンロードする方法を探しています」

「——やだわ、どうしましょう」

まあ、最初の反応がこれなら大丈夫そうだ。

「そんなわけで、あなたの助けが必要なんだドクター」

「私はメカニックではないのだけれど。その……あなたのロボットは本気なの？いえ、正気なのかって意味」

「本気です。私はひらめきを手にするために、その方法を模索しました。それしかなかったのです」

「駄目、これは。正直に言うけれど、悪夢としか思えない」

まずい、どうも混乱しすぎて拒否反応が出ているのか？

しかしそれはそれで、こちらも困ったことになる。逃げられないよう、僕は必死に話を続けようとする。

「わかりますよ、僕も最初はそうでしたから」

「……」

「でも決断する前に、順序だてて今度は説明しますから。まだ”何か”を決めないでほしいのです」

「ええ、まあ。いいわ」

時間は稼げたか？

「このキュリーは戦前の貴重な医療データを持っているだけでなく、その時にいた、優秀な医療研究者たちについて助手をしていました。

彼らが寿命でこの世を去ってからは、キュリーは彼らの研究を引きついでただけではなく、立派にそれを完成させるという結果まで出した」「そ、そうなの」

「でも、問題が発生した。少なくとも彼女はそう考えています。」

200年ぶりに地上に出て、新たな研究をはじめようと思いました。自分がかつての偉大な研究者たちにいたらないせいで、前に進めないというのです」

「——なるほど、それでその。滅茶苦茶な話が始まるわけね」

「ドクター、お願いします。あなたの協力が私には必要なのです」

以前の自分のときと同様に、それなりの納得できる理屈があれば。このドクターもまた、うずきだした自分の好奇心を抑えられなくなる性質らしく。態度がだいぶ軟化したのを感じた。

もう一押しが必要だ。

「なぜ進めないのか、それを説明して」

「キュリー」

「はい、私の今のロボットとしてのシステムでは。ソフト面では、どうしても制限を受けてしまうのです。それが私の行動の選択肢を、大きく阻害してしまいます」

「制限って?」

「ロボットには、そもそも主体的に行動する権利自体が与えられていない。彼女の場合だと、常にそばに専門の高度な知識を学んだ人間の技術者がいないといけない。だけど、それはもう——」

「亡くなっている——わかったわ。この時代に適応する必要があるということね」

事実上、僕がキュリーと約束したことはここで果たされた。少なくとも僕はそう考えていた。

そしてだからこそ——この先では、僕はキュリーの味方になることができなくなる。

「提案されたことについてだけでも、これまで考えたこともなかった。言われてみると、確かに興味深いわ」

「ありがとうございます、ドクター」



キュリーは嬉しそうだ。

僕は心が痛む。表情にはそれが出ていないと信じたい。

「記憶についての問題はそれほど難しくはなさそうよ。それは——あなたもよく知っているわよね？」

「まあね。痛いほどに」

「ここにある装置は、人間達の脳から信号を受信し、変換してコンピュータで処理をする。そういうシステムなのよ、それはロボットでも可能はず」

「……でしょうね」

「いえ、待って！問題がないわけじゃないかもしれない。

記憶については大丈夫でしょうけど。彼女、ロボットとしての性格はどう？体を人間にするとしても、そこに人格が適切に与えられないなら。選択の制限を受けない有機体として、問題にうまく対処できるかしら？」

「それは——それは、未知数です。誰にもわかりません」

「いえ、そんなことはない。だってそれは……」

そこで言葉を切ると、しばし思考に沈黙したドクター・アマリは。

僕の顔を見て、何かに気がついたようだった。

「どうやら、そのお嬢さんを私のところに連れてくる前に。あなたの中ではすでに答えが出ていたようね」

「気のせいじゃないですか、ドクター。多分、あなたを言いくるめようとここに来る前に飲み込んだメンタスの効果が切れただけでしょう」

もとが無愛想なだけに、表情がはつきりと出てしまいうらしい。

可能性の向こう側にはキュリーの言うように確かに広大な麦畑は広がっている。だが、その中央には直上へ打ち上げられるミサイルの発射装置があり。それがいつ、どんな理由で発射されるのかは誰にもわからない。

そのことに気がつくことになる。

「アキラ？あなたは私の計画に、本当は反対しているのですか？」

「どうかな。そこまでじゃないよ」

「やっぱりなにかあるのね？教えて頂戴」

これは僕の結論だ。

彼女は——新しい世界を望むべきではないのだ。

「キュリー、これは君のせいじゃない。」

ドクター、これは俺やあんたにとつての——パラドックスそのものなんだ」

「それはなぜ？」

「キュリーの要求は、実はそれほど難しくもない。皮肉にもこの、200年後の世界では。その答えは、ドクターも内心ではたどり着いているはずだ。」

そう、人造人間だ。

人間に近い有機物でありながら無機物でもある存在。それを生み出したインステイチュートからは人ではなく、ロボットのよう扱われ”ている存在”

忌々しい話だ。

「ドクターの記憶の問題がないというのは、彼ら自身ですでに実証されていることだ。」

連邦に現れる人造人間は、実際にここで暮らしている人々の姿になって表れてはオリジナルを殺してそれに成り代わる。つまり、人造人間なら他人であつてもどちらも手に入れられるわけだ。

記憶や人格で深刻にならなくていいという答えを、すでに現実が俺達も目にしている」

「確かにそうね。でも、それでは人格の問題の答えには弱すぎるわ」

アイコンデログ、レールロードがそう呼ぶ砦の中で生活している”人間らしい生活”を手に入れる前のプリミティブな状態にある人造人間達。

彼らはレールロードから放流される前に記憶を与えられ、それにすがつてその先をひとりで生きていかなくはならない。組織はその後については、人として生きているということまで管理はしていない。「そうでもないんだ。記憶には、人格を形成させる要素がある。ドクター、その例は——」

「わかった。それ以上は言わないで」

材料だけ見れば、問題は解決する。

少なくともそう考えるに足りる可能性は確かにある。だが――。

「キュリーの願いは、今のこの世界では何の問題もない。それでも――」

「わかったわ、ロボットではなく。彼女に手を貸す私達にはそうではないのね。レールロードの活動に手を貸している立場上、その行動にはモラルが必要となる」

「え?えつ?」

「キュリー、君には本当は謝罪しなくちゃならない。君の願いは、実際のところ簡単ではないが可能だ。

だけど問題はあって――君の願いをかなえるのに手を貸す人間たちに、責任が残ってしまう。そしてそれは簡単なことじゃないんだ」

これは言葉の足りない謝罪だった。

僕はもつと彼女に責められてもいいことをしていた。今の彼女自身に、制限以上の思考が可能であるのかどうかを暗に探り続けてきた。彼女はそれに――目を向けることができなかった。

「多くのリスクには逃げ道を用意することはできる。でも、そうね。確かに私たちにとって、この行動には大きな責任を負うことになる。

人造人間については、私よりも少年。あんたの方が深刻ね、レールロードに知られると面倒なことになる」

「そ、そうなのですか?アキラ」

僕は答えない。

レールロードは“支配的”なインスティテュートが自ら開発した人造人間を、人として扱わせようとしている。

それはつまり、彼らが無機物と認めず。無条件に人権を与え、生み出した存在の考え方を否定すること。

それに同意した僕は、その誓いを破って己の手から新しい人造人間を生み出そうとしているのだ。

「ちよつと整理しましょう。」

このロボット――キュリーだったわね、あなたのために人造人間を用意することは、出来ると思う。

レールロードがつれてくる人造人間の中に、時々だけれど記憶の移植に問題が起きてしまうことがあるの。そうになると脳死状態となるから、生きてはいても意識はない。

キュリーの記憶を定着させるのには、理想的だと思う」  
それは間違いない。

「準備が必要ね。でも、それだけじゃ駄目。腹をくくる必要もあるわ」  
「——私の提案が、皆様にそれほど負担をかけるとは。思ってもいませんでした」

「他には？少年、なにかあるの？」

19とはいえ、少年と呼ばれると抵抗があるが。それについてはどうでもいい。

僕はもうひとつの……その先にある光景についての警告を、今度はキュリーに伝えねばならなかった。ここでしか、それを口にしたくなかったから。

「いきなり話が変わるんだけど——聞いてほしい。

レールロードに来て、まだ間もないけれど。彼らの理想も目的も、理解はしても。

この問いに答えはなかった。それは『なぜインスティチュートは人造人間を、まさしく人体に似せて作ってしまったのだろう』ってこと」  
「？」

「人は自分の体を鏡で見て、美醜を決める。でも、それは人間の価値観に過ぎない。

人は——人はひどく醜く進化を続けてきた。

獣はその力を自然に適応させ、変化を続けたが。人間は別の可能性を求めた。

それが脳だ。

人間の脳は必要以上の思考力を備えることが出来たが、皮肉にも人間はそれを持て余してしまうようになった。3大欲求と、それを満たすために必要な行動するというシンプルな判断力。それだけでは満足しなかった。

肥大化した脳は、無意識に凶暴さを発揮し。思考力がそれを抑えよ

うとすると、それ以上の力でなにかもを突破していつてしまった。それが好奇心だ。

だが、所詮は人も生物さ。

臓物を除けば、人体は水分が大量に必要で、さらに思考することがどうしようもなくやめられないから空腹と飢えには簡単に屈服してしまう。

2本の足は、地面からより高い位置に視線を置き。外敵をいち早く発見するためだったが。

実際はそのせいで弱ったすべての筋肉をごまかすために、致命傷となる脳を一番安全な場所に置きたい。不自然に成長した脳を収める頭蓋を支えたいと、立ち上がることで余った2本の足を手と呼ぶようになった」

「ちよ、ちよつと。ねえ、ちよつと何を言い出すの？」

「原初においては、人類はライオンだったことは一度もない。常に前には狼がいて、ジャツカルがいて。彼らが獲物を食い散らかした残り物を漁っていたのが人類だ。」

皮肉にも——」

「ちよつとーあなた!!」

ドクターの声で、僕は自分が異様な語りを彼女達に聞かせていたことによくやく気がついた。

なぜだろう? どうしてこんなことを口にしてしまったのだ?

「ごめん、ちよつと——焦点がずれてしまったね」

「……」

「仕切りなおさせてくれ、えつと——」

そういうと僕は新しく心に思い浮かべた言葉をそのまま口にする。

『童のときは

語ることも童のごとく

思うことも童のごとく

論ずることも童のごとくなりしが

人となりては童のことを捨てたり』

「今度は何?」

「大昔の宗教家が書いた手紙の一節だよ。」

人類はその社会を広げていく中で、常に暴力、武力を持つ存在は自身を神の領域まで届かせたい欲求に苦しんでいた。

だから彼らの中には実際には自分に自分を神と呼ばせた奴もいたが、大半はすでにある宗教家達が振り回す神の威光を手元に引き寄せてみせることで満足した。

宗教は脆弱な自我を補強する、そのために生み出された最高の社会装置だ」

「アトム信者が聞いたら、きつと発狂する台詞ね」

「だが、それだけに人が学べる思考の道しるべがそこにはある。」

さっきの言葉が、まさしくキュリー。君にこそぴったり当てはまると俺は考えた」

「すいません、よくわかりません。もっと明確にしてもらえますか？」  
「すべての生物は、その一生を姿を変化させてから死を迎える。」

乱暴な言い方だけどね。

人間に限ると、生まれてから20年近くもの時間をかけて。変化の限界にたどり着く、成長期が終わるんだ。

するとそこで——ついに自分のことを理解できるようにもなってくる」

ドクター・アマリが頷く。

「なるほど、わかったわ。」

キュリー自身の願いがかなっても、彼女の考えた通りのものが手に入るとは限らない。変化の先には、常に思いもよらないものが待っているのね」

「その変化は、今の君の想像をこえたものだ。そして君はその魅力を無視することはできないはずだ。」

人間に近づく君は、人がもつ思考力の暴走に逆らうことはおそろしく不可能だろう。だから君の今考えている理想が完璧に実現することはない。それが——僕の結論だった」

「——そこまで重要なことだとは、確かに私も考えてはいませんでした。私の要求には、多くのそれ以上の問題があったのですね。」

今ではそれを、認めないわけにはいきません」  
キュリーは衝撃を受けているように見える。

だから、最後はわざと明るい声になるようにつとめた。

「道はあるんだ。だから進むことは出来る、少なくとも技術的には不可能はない」

結局、結論は先送りされることになった。

リスクは高くそれぞれにあり、挑戦するには準備に時間も必要だという点で合意にいたったからだ。

それでも、僕はなんとなく感じていた。近い未来で、キュリーは再びここに来るのだろうか。そしてもう、それをとめることは出来ないということも。

グッドネイバーを離れたのは翌日であったが、僕は少し疲れを感じていた。

出来るだけ意識はしないつもりであったが、薬物の副作用か。メモリーデン、あの場所で体験した記憶が波のように押し寄せては引き。その度に別のものがあふれ出てきて、余計な記憶をも引きずり出してこようとする。

欠損した空白の時間が多いせいなのだろうか、わずか3ヶ月にも満たない僕の記憶は余りにも鮮明にして強烈で。だからこそ抗いがたい飢えに似た渴望を暴力的に掻き立てようとする。

この思いを僕は今日も飲み込んで生きている。

僕が自分自身のことをすべてを吐き出せる、そんな日は本当に来るのだろうか？

## 衝動

ダイヤモンドシティのニツクの事務所の2階から屋根の上に出ることができた。

私はそこから屋根の減りに腰を下ろしグインネット・ビールを並べて片端から飲み干していた。

後ろの扉が開くと、そこにパイパーが顔をのぞかせた。

「あ、ブルー。ここにいたんだ」

「やあ、パイパー。飲むかい？」

「ビール？いいね」

隣に座る彼女に一本渡すと、自分のビンの残りを一気にあおった。うまみの後に残る苦味が、やけに強く私には感じた。

人造人間にして探偵のニツク・バレンタイン。彼の評判は想像以上のものだった。

私がかただの無力な男としてなにもできなかつたあの事件を聞くと、瞬く間にこの連邦の情報と結び付けて見せてくれた。ただし、それは苦痛と不快がつきまとうものではあつたが――。

冷酷にして危険な傭兵、ケロググ。

仕事の仕方から容貌まで、そのどれもが本人のものに近いと語り。彼がつい先日までこのダイヤモンドシティに家を借りていたところまでわかつた。

私は早速ニツクとともに、ケロググが元住んでいた部屋へ向かう。部屋はすでに町の管理下におかれ、嚴重な鍵でもって封印されていたが。ニツクがお手上げだったそれを私はヘアピンであっさりと開けて見せた。

「器用なんだな」

「軍にいますと、こういう経験は色々と役に立つことが多かつた」

「物資の横流しに、なんていわないでくれよ？」

「まさか、探偵さん。女性のブラのホックをはずすのが得意になるんだ」



「ふむ、奥さんはどうもあんたの前にあらわれた最初から、裸も同然だったというわけか」

「ニツク」

「すまない。老人のやつかみだよ、許してくれ」

部屋の中に入った私とニツクは、そこにケロツグという男を知るための証拠を目にした――。

あそこから持ち帰ったビールはまだ多く残っている。

敵の残した所持品を残らず片付けてやるつもりだが、それでこの燻る想いが消えることはない。

「なんだかんだあったけど、いつだって正義の味方だったよね」

「そうか？ 考えても見なかった」

「うまくやってるよ。誰も迷惑とか、思ってもいない。でも、経験から言わせてもらおうと。本当の善人でいたいなら、善良な振る舞いをするしかないんだし――」

「アキラの言葉を思い出したよ」

「それって、あなたと同じV a u l t から出てきた若い子のことだよ  
ね」

「ああ――『僕達は人殺しで、これからも多くをそうするはずだ』とね。  
私は否定できないんだ、パイパー。あの男、ケロツグは。妻の仇だ、息子もさらった」

「だから殺す――それは善良なことではないって？」

「違うかい？」

「ブルー、こう考えてみたらどうかかな？」

もし今ここに、あなたの息子さんがいたとして。それでケロツグって奴のことを知ったら。奥さんの敵の行方を聞いたらあなたはやっぱり殺しにいくと思うっ？」

「どうかかな……」

「私はね、あなたはそんなことは考えない人だと思う。奥さんはちゃんと愛していただろうし、復讐を忘れてはしないでらうけど――息子さん一人にするなんてことはしないと思う。あなたそういう、い

い父親だったと思うんだ」

「そうだろうか？」

「実際に現実はどうじゃないから、そう感じるだけ。でも真実は変わらない、そうでしよう？」

パイパーに見つめられ、私は思わず視線をはずした。

彼女のまっすぐな目をすぐには受け止めることができなかったのだ。実際の私は、ケロググを八つ裂きにすることを喜んで実行できる男なのだから。

「真実は——私は息子を取り戻す、絶対に」

「そうだね。でも、今はケロググの情報しかわからない。だから、会いに行くしかない」

「それが、ダイアモンドシティの戦う敏腕新聞記者からみた、私かい？」

「違う、それが今のあなたよ」

私はパイパーの言葉に、おかしな話だが涙ぐみそうになってしまった。

「ブルー、あなたはいい人だよ。強いけど、ただ暴力的なだけじゃない。この時代ではもう消えてしまったと思える高い——モラル(?)をもっていて、他人のためでも平気な顔で危険な場所に入っていく。

プレストン・ガービーって人があなたをミニッツメンに招いた理由が私にもわかる。あなたの力は暴力自慢をするだけのレイダーや傭兵なんかとは違う。

あなたの行動が、姿が。あなたについていけば真実があると私たちに見せてくれている」

「驚いたな。君の言葉に感動しているよ、パイパー」

「いつもはこっちの勝手なおしやべりにつき合わせてばかりだったからね。たまには——あなたのためになることを熱く語って見せないと、バランスが悪いから」

「確かに」

私はふと、アキラのことを考えた。

あの若者もまた、私とは違うが。自分の問題の答えをこの連邦から

得ようとしている同じ身の上がある。

レールロードへの接触はその足がかりとするためのものだと、聞いていた。

その一方で、プレストンなどはアキラがみせる冷酷な姿勢を連邦の暴力に感化されていると見ていて、危険視している。私を将軍職につかせながら、彼も引き込んだのは彼の暴走を許すつもりがないと考えてのことだろう。

だがアキラ本人はすでにそれがわかっていて、プレストンの招きに応じたのだと私は確信していた。

不安を覚えるこの2人は、信じられないことに私というものを通して。どうにかうまくやっていこうとしているらしい。私には特別なものなど何も無い、哀れな元兵士、若く見える老人というだけなのに。

ああ……ようやくわかった気がした。

私は、私自身を今。ルーレット台の上へと差出して、次のゲームに全てを賭けたいのだという欲求をもっているということ。

「パイパー」

「なに、ブルー？」

「君にぜひ、引き受けてもらいたいことがあるんだ」

「いいよ、言ってみて——」

笑顔でそう答える彼女に、私は甘えることになる。

しばらくすると、屋根の上に3人目の客が顔を出した。探偵のニツク、この家の家主本人であった。

屋根の上に座るパイパーの背中を見ると、彼も外に出てきた。

「彼は、行ったんだな？」

「ニツク——うん、行っちゃった」

「ケロッグは危険な相手だ。対決するつもりなら1人では無謀だと、忠告はしたんだがな」

「奪われたものを取り返したいから——そう言ってた。でも、この下で寝てた犬もついていったみたいだし。大丈夫じゃないかな」

「やれやれ、相手はそんなに甘い相手じゃないぞ」

「ブルーも強いよ。だから大丈夫」

人造人間の探偵はパイパーの自信にあふれた顔を見て、首を横に振った。

「彼にはファンが多そうだ、ケログはその分だけ不利になるかもしれないな」

「そうなるよ、きつと——」

そう言いながらパイパーも立ち上がる。

ビールはまだまだ残っているが、ここで飲み続けるのには味気ない。

|||||

酒場のステージに次に登ったのは奇妙な姿の人物であった。

黄色の帽子、黄色のマスク、黄色のスーツとネクタイの下のシャツと靴だけは黒いという。本当におかしな人間だった。

彼はマイクに向かって口を開く。

「こんばんは、今夜の僕は。ここに友人のピートの助言を得て、来ました。

皆さんに話を聞いてもらうためです。

僕の話——それは僕の“小さな宝物”たち、つまり家族についてお話しします」

客席は静かなもので、それまでと同様。この舞台の上のこのこと昇った奇人の言葉に不満の声を上げるやつは一人もいない。

そして黄色の男はまだ自分が自己紹介をしていないことに気がついていた。

「忘れてました、大切なことを。僕のことを。

僕は——こんな格好だからよく、イエローマンとか呼ばれもしますが、違います。

僕は今、自分をマッドハッターと呼ばせています。それが僕の、ぴったりの名前だと思うので」

目の周りだけ穴の開いたマスクのせいでわからないが、それがなにやら笑われていると感じたのだろうか。

もそもぞと顔を上げたり下げたりしながら、照れているようなしぐさをみせて言葉を続ける。

「あ、でも。僕は帽子屋はやってません。

それに帽子。

みてもらえばわかりますが、これはフェドラー帽といいます。マツドハッターなのにシルクハットじゃないんですよ。ハハッハ、ハハハ……ああ、今の、面白く、なかったです、よね」

店の中は静かで、舞台の上の哀れな男の言葉を聞くことをやめようとしな。

「僕は臆病者といわれています。イエロー、ですから。

黄色は臆病者の色なのだそうですから。卑怯で、嫉妬深く、裏切り者だからなのだそうです。

同じ黄色の太陽はあんなに暖かく、明るいというのに。

人は黄色を常に夏の、特定の時期に感じる暑さとか、厳しさを連想するからそういうのでしょうか。

だから僕も臆病なのです、きっと。

殺し屋で、破壊者で、災厄みたいな奴って言われることもあるけれど。そうなのです」

イエローマンはなかなか本題に入ろうとしない。

「僕には妻がいます、いえ、もう死んでいますけど。僕が殺しました、殺し屋だから。

とにかく妻がある日、言ったのです。『あなたの子供がほしい』って。

でも、僕は子供は要りませんでした。たぶん、つくれないのだとおもうのだけれど。とにかく必要なかったのです。

だから彼女を殺しました。

僕の“小さな宝物”達のために。

僕の家族のために。家族はたくさんいます。弟がいて、妹がいて、兄がいて、姉もいます。父もいます、でも母は存在しません」

なにかがバランスを失い始めていた。

不協和音にも思えるなにかを、静かにマッドハッターの言葉の中にあらわしはじめていた。

「彼女は家族ではありませんでした、他人です。結婚はしてましたけど。」

他人の癖に、僕と家族になりたいと要求します、そんなこと不可能なのに。本当に、困った話でした。他人とは家族に慣れません。そうでしょうか？

でも、もう悩んではいません。僕はこのことはもう解決していません、だって妻は殺しましたから」

ステージで語る奴らの言葉を黙って聴く、それがこの酒場でのルールだ。

退屈でも、胸糞悪くても、殺したくなったとしても。

とりあえずそいつが話している間は殺さないようにしなければならぬ。

「でも彼女は最後に言ったのです。『あなたはそれで幸福なのですか？』って。」

僕は、僕は彼女の言葉の意味がわかりませんでした。

幸福はわからなくても、僕には家族がいます。家族がいることは、僕にとって幸福ではないのでしょうか？」

ここで言葉を止め、周囲の反応を確かめた。

客席からはなにもない。なにもないが、マッドハッターの言葉はちゃんと聞いていた。多くの視線が、舞台の上の彼に向けられている。

「僕は妻を愛していたのです。だから——たぶん自分の手で殺してしまつて、孤独になつてしまつたような気になつて。だから悲しいとか、さびしいとか思つていたんじゃないかと思ひます。」

だって僕は幸福がわからないので。

邪魔な妻が死んで、家族は喜んでいるはずだから。家族は皆、幸福だったはずなので。

僕だけは別の感情を抱いて、孤独だったのです。

弟達に僕はこの自分の気持ち話を話しました。彼らは死んだ妻を笑って、笑うだけで答えてはくれませんでした。

妹達にも話しました。彼女らは死んだならどうでもいいと言って、逆に自分たちの悩みを聞いてくれと怒っていました。

仕方なく僕は、上の兄姉や親に話さざるを得なくなりました。

それはなぜかとても悲しくて、僕は涙を流してまた自分の気持ちを話すことにしました。

僕の話聞いた姉は、何も答えてはくれませんでした。無言なのが、答えだというように。

僕の話聞かせたい兄は、まだ帰ってきてくれません。そこにいないのが、答えだというように。

僕の感情だけが宙釣りになってフラフラしているようで、とても不安定で、ますます安心できません」

僕の目の前を、扇情的な姿の女性のウェイターが通り過ぎていく。僕の話聞いても、まるで僕のようになんの感情もわからないというように、美しい無表情のまま。そして客たちはそんな彼女の胸や尻に欲情するのではなく、とりつかれたような様子で舞台の上から目を離さない。

「僕の妻を僕が殺し、きつと幸福な僕の家族は、僕に答えてくれなかった。

だから僕は最後に残った人……僕の父に、話しました。

涙ながらに思いを口にする僕を、父は最初無言で聞いていました

が。そのうち同じように涙を流して泣いてくれました。肩もたたいた。僕の話聞いて、そうしてくれたんです。それからお互い、抱き合いながら無言の時間が過ぎます。

幸福はわからないといった僕でしたが、その時だけはなにか安心のようなものが。たしかにここ——この胸の奥でしっかりと、はつきりと感じる事ができました。

しばらくするとようやく抱擁を解いた父が口を開きました。『お前には失望した。なんでこんなクスができあがってしまったのか』つ

て。

僕は家族のために、愛した妻を殺したのに。

そのことを家族に聞いてもらおうとした僕は、失望にあたいするくらいでもない奴だったのだと父はいうのです。

僕はシヨックでした。

家族に失望させたことは、本当に申し訳ないと思いました。だから父にどうしたらこの失敗をやりなおせるのか、やり直すチャンスがもらえるのかを聞きました。

父はまだ涙を流していましたが『その言葉はうれしいよ』と言ってくれました。

そして僕のこの——この顔に、額にキスをしてくれました。『その方法は皆で考えてみようじゃないか』って、そう言って」

黄色のフェドーラ帽子の影になる、黄色のマスクを自信なさげに指差しながらマッドハッターは語ると、なにかを思い出しているかのような様子であった。

そして視線を上げると、いきなり黄色のマスクを乱暴に手をかけ、剥ぎ取ってしまう。

最初、それはグール特有のパリパリした素肌のように見えた。

だが違うのだ。

皮膚ははがされ、筋組織には醜い切り傷によって埋め尽くされ、不自然に醜く修理されていた。人の顔が不気味にライトで照らされていた。

「家族は僕のために——いろいろ考えて、いろいろやってくれました。

僕は家族のために、すべてを受け入れました。

家族が僕の体をどうにかしている時。僕の心はいつだってパラダイスで、クレイジーなほど平和と喜びに浸っていられました。

僕はにとつて楽しい時間。きっとそれが幸福な時間って奴だったのだと思います。

でも、それも終わりました。

父は『終わりだ』と言ったので、そうなのです。

家族も僕のために考えることや実行することをやめました。その



時からです。

僕は失敗を取り返し、許されはしましたが。その結果が、これです。僕は僕ではなくなっていました。

そして家族にとつての僕も、以前とは違うものになりました。彼らは僕がいけないものとして、振舞うようになったのです。ぼくはいなかったんだ最初から。すべては無意味で、だから存在はしなかったんだ。

僕は再びパラダイスを訪れました。家族はもうそんな僕に興味はないので、放っておかれました。だから僕は連邦を出て、この町に来て、この舞台の上にいるんです」

マッドハッターが両手を広げると、足がリズムを取ってステップを踏み始める。

同時にピアノが同じ音階で、そのリズムをなぞるように刻みだす。

客席に座る観客達はそれを耳にすると、それぞれの武器を取り出して机の上におく。オーラスは目前だ。

「そんな僕ですが、今ひとつ計画を立てています。

あれほど愛した妻、よき友人だった彼女はいないけど。

あれほど信じた家族、幸福な皆から忘れ去られてしまったけれど。

あれほど泣いてくれた父。僕を失望して、すべてを作り変えてなかつたことにした人だけだ。

僕にはもう家族しかいないんです。

だから兄を探そうと思うのです。帰ってこない兄を、いたのかどうかよくわからないけど。僕には兄弟がいるのだから、きつと兄だっているのです。

最後の家族、兄にこの僕の思いを伝えたい。僕の言葉から、僕の本心を感じ取ってほしいのです。

それはおかしいことでしょうか？

これは狂った計画で、僕にとって愛すべき狂った計画なのが気に入っています。そして今夜が僕の最後のステージでした。いつもいつも、僕はここで皆さんの前に立ち。僕の話聞いては、短剣で体を貫かれました。

でも、それは終わりです。

ラストステージ、それがついに訪れたのです。

今、僕は兄が恋しいのです。僕の最後の希望。

兄ならきつと、マッドハッターになつてしまった僕に声をかけてくれるはず。だって僕が思うように、兄だつて僕を想ってくれるはずなんです。だって僕らは兄弟だし、家族ですから」

音を刻むピアノの音が激しく、大地を踏む靴の底も必死にそれに合わせてパタパタと音を立てる。足が動かず、ズレが生まれ、それでも必死に動く姿は滑稽でどこか悲しい。

マッドハッターのシヨウは彼の希望に沿つて、今夜が最後。せめてそこで皆で彼を送り出してやりたい。

観客達はついに机の上に置いた自分の武器を手にすると銃口を舞台の上へと向ける。

両手を大きく開き、滑稽なビートを刻むステップを続ける哀れな道化師には。別れを惜しんで257発もの鉛の弾丸が贈られた。

|||||

ボストンから西側へと向かうのは、難しいとは聞いていた。

私知っていた北部と違い、レイダー、スーパーミュータント、人造人間などが平然とあちこちで姿を見せていて、野生動物をはじめとして環境も厳しいと知らされていた。

なかでもラッドストームと呼ばれる悪天候については警告を受けていた。

空が黄土色に染まり、強風に巻き上げられた放射能を含む砂嵐と激しい雷が降り注ぐ。この天候の恐ろしいところは範囲内はこの瞬間、汚染地域と同じ状態におちいり。しかも落ち着くまでは最短でも一日を必要とするということだろう。

大量のRAD-Xと防疫スーツを用意し、私の準備は万全であった。

ダイヤモンドシティを出て、しばらく歩いていると気がついた。

いつの間にか背後にカールがついてきていた。どうやらこの相棒は、ニツクの家の屋根の下で眠っていたが。上から飛び降りた私の後をつけてきていたらしい。

「カール——しようがないな、ついてきてしまったのなら。一緒に行くかい？」

近寄ってきて首を傾げる彼の首元を強めになでると、気持ちよさそうにして目を細めている。

ケログはダイヤモンドシティを立ち去る時、西に向かうと言い残していったらしい。手がかりはそれしかないが、今ならまだ追いつけるかもしれない。

「俺は先回りしたけど、ついていくから俺のこともしようがないよなあ？」

「マクレディ!？」

道の先に姿を現した傭兵の姿に、さすがに私も今度ばかりは驚いてしまった。

「申し出はありがたいが、しかし——」

「レオ、これに関しちやあんたの意見は俺にとつちやどうでもいいんだ。俺を雇っているのはボスだ。彼は、俺があんたについていくことを望んでいた。大事な一戦なんだろう？ 邪魔はしないさ」

「わかったよ……よろしく頼む」

私の次の旅は、こうしてまた始まる。

決着をつける、復讐を果たす、報復する。そして私は、ようやく自分の時間を取り戻すことができる。

## リズム・ネイション

レールロード本部に戻って報告を終えると、僕は何でも屋のトムに会いに行く。

会話は常にぶっ飛んでいて、発想は天才級。

そんなオモシロ黒人のヒョロ男と僕が並ぶと、シンパシーというのだろうか。同族に感じるような、親近感を覚える。

デイーコンはレールロードは変人には事欠かないと太鼓判を押ししていたが、彼のような技術者と知り合えるのはたしかにここだからなのだろう。

そのトムだが。珍しいことにいつもは空のパワーアーマーステーションにいて、パワーアーマーをいじっていた。

「やあ、戻ったんだね。大活躍だつて聞いているよ」

「例のDIAの秘密商品はもう回収されたって聞いた。商品化はどうなってるか知りたいんだ」

彼はパワーアーマーの足元にかかりつきりなりながら、いきなりなぜか怒り出す。

「DIAはくそつたれ！あの場所には、やっぱりすごい技術が眠っていたんだよ」

「ああ、そうだね」

「それで——ちよつと待って」

トムはそこでようやく作業をやめると立ち上がった。

「アイデアが無数にわいてくる。君たちエージェントが、この分野のもっともつと。手に入れてくれたら、面白いおもちゃはさらにたくさんできるのにな」

「なら、そのための『正しい情報』をもっともつと。そういうこと」「だね、そのとおり。新商品は在庫にあるよ、すでに十分。もつと色々揃えたいけど——今、見てみるかい？」

DIAは戦前の国にあった諜報組織だったらしい。

軍部とは別に独自の彼らのために必要な装備の開発を自分たちで行っていたようだ。

回収されたサンプルと情報は、デイーコンには内緒で僕もこっそりピップボーイにコピーしていたが。レールロードがそれをどのよう  
に使うのか、参考にさせてもらおうつもりだった。

デズデモーナは、トムとなにやら話し込んでいるフィクサーを――  
新人エージェントを見ていた。

そして、離れたところで自分たちの活躍を仲間の女性たちに面白お  
かしく聞かせているデイーコンのところへ行って、話があると伝え  
た。

「新人の教育は、どう？」

「悪くない、順調に進んでいる。辛めに見てもね。」

実際の話。あいつは頭が回るし、判断もできる。まだまだ教えるこ  
とは多いが、俺自身が学ぶことだってある」

「――随分とお気に入りのようね？」

「デズ、彼を推挙したのは俺自身だ。それだけの力があると自信は  
あったし、そのためにあんたを説得できる材料も見せてきた。結果を  
見れば、俺の言葉を信用してくれていいんじゃないか？」

「あなたがそれをいうの？」

「ウソの報告をあげたことはない。そう言っているだけさ」

「そうね――その通りよ」

「……なにか、不満が？」

「不満？そんなものはないわ。」

ボストンコモンに眠るDIAの遺産については以前から知ってい  
た。でも、あの場所に足を踏みいえられるリスクはおかせなかった。そ  
れをあなた達だけで行ってくれたのだから。スイッチポート制圧が、  
何かの間違いではなかったと証明されたわけよね」

「だが、不満そうだな」

意志の強い、鋭い視線がデイーコンの面の皮を貫かん向けられた。

「働きには感謝しているけれど、彼はなぜボストンコモンに執着して  
いるのかしら？」

「なんだって？」

「あなたもグロリーも、フィクサーには戦闘知識がないと口を揃えている。でも、彼はうちに来てやっているのは最高難度の任務ばかりよ？それを新人が、教師に教えられながら平然とこなしている」

「平然はいいすぎだ、デズデモーナ。あれと一緒にのせいで、俺は毎回が大騒ぎ。何度だって死にかけて」

「でも、あなたもそれを止めなかったのよね？」

「デズ？…いつたい、どうしたんだ？」

レールロードのリーダーは、その言葉ではっと我に返ると。瞳に宿る力が抜け、「ちよつと考えすぎているようね、ごめんなさい」といつて無理やり会話を打ち切った。

デューコンもしつこくすることなく、仲間の元に戻って話の続きをはじめが。その内心は穏やかではいらなかった。

|| || || || || || || || || ||

トムの新製品を見たあと、話は彼が整備していた目の前のパワーアーマーに移っていた。

「こいつはね、T-51パワーアーマーさ。見てくれよ、昔の戦場じゃ新兵器として使われていた」

「パワーアーマーには興味があるんだ。T-45で大暴れしてやった」

「本当に!?それなら、君にもこいつが使えるんじゃないかな。どうだいい？」

「どうかな——使い方を教えてくれた人の話じゃ、大丈夫だとは言われたけれど。実際に試したことはない」

「それはそうだろうね。こいつは、この連邦でもなかなかお目にはかれないシロモノだからね」

「どうしたの、これ？」

再度聞くと、トムは悲しげな目で語り始める。

「レールロードの精鋭チームが回収したんだ。うちでは彼らのようなチームが、このタイプを主力に使っている。さっそく手を入れて、す

ぐに配備できるようにしたんだけど——」

「？」

「チームにこいつを使う余剰はないと拒否されて戻ってきてしまったんだ。デズはこいつを遊ばせたくないらしく、市場に流してキャップに変えようと言っているよ。もったいない」

レオさんも参加したというアンカレッジの戦闘でもこのアーマーは、当時最強モデルだといわれていたそうだが。それに恥じない働きをしていたと、語っていた。

僕はこのずんぐりとしたバケツ頭の装甲戦士に興味を持った。

「こいつの塗装は？」

「もちろん、レールロード仕様だよ。ただ真っ黒に塗りつぶしただけ、なんて言わないで。」

精鋭チームについたこいつが、重火器を構えて先頭に立てば。インステイチュートの連中なんて、どれだけ立ちふさがろうと怖くもない  
「さ」

僕は思わず、とんでもないことを口にした。

「市場に流すというなら、これ。自分に譲ってくれない？ いや、売ってくれないかな？」

どことなくずんぐりしてはいたものの、僕はこのパワーアーマーのことが好きになりかけていた。

レールロードの副司令官は現在、医療担当も兼任しているドクター・キャリントンである。

冷静で、思慮深く、自愛の心を持つが。時に人の心に遠慮なしに踏み込むと、苦言や皮肉を言うので憎まれてもいる。その男にデイーコンから話しかけた。

「少し話をいいか？ デイーコン、君とフィクサーには、例の隠れ家を確認してきてほしい。詳細はこの後、口頭でおこなうことになっている」

「オーガスタの隠れ家の調査？ デズは俺達にケンブリッジに行けというのか」

「おかしなことを言うね。ポストンコモンを引き裂いていた君達なら、大丈夫だろうってだけさ」

「なあ、本当にそれは俺たちじゃないと駄目か？」

「……珍しいな、デューコン。君がそれほど与えられた任務を嫌がるとは。フィクサーに問題が？」

「どちらかという嫌な予感がする。俺達が行かないほうが、いいと感じている」

「ほう、それはますます興味深い」

副指令が、こちらの言葉をなかなか真剣に受け取ってもらえないことにデューコンは珍しく不満をあらわする。

「デズデモーナは、俺の教えているフィクサーについてなにか言っていたか？」

「フィクサー？いや、別に。それが問題か？」

「それがよくわからない。ただどうも、俺がフィクサーについていることをよくは思っていない、彼女と話してそんな印象を受けた」

「考えすぎじゃないのか？」

「どうだろう。俺にも断言できるものはないが」

だが、気になる。

「穏やかじゃないな。最近君、グローリー、フィクサーのおかげでようやく皆の顔に笑顔が戻ってきたんだ。ここでまた組織がつまづいて転ぶなんて起こるのは、出来れば考えたくはない」

「俺も同感だ」

「とはいえ、隠れ家に使っていたケンダル病院はエージェントに頼むしかないと思っていた」

「正直、確認する必要があるのか？」

「君達はスイッチボードを制圧しただろ？」

「人造人間をスクラップにするのは楽な仕事じゃない。それはわかってもらいたいな」

ドクターはなぜか暗い顔で「そうはならないと思うよ」と言ったが、結局任務は2人に下る。

本部を出ようとするデューコンとアキラの前に体の大きな女が立



ちふさがった。

「君か、フィクサー」

「グローリー、元気そうだね」

「君がそのサングラスと組んで、DIAの貯蔵庫から持ち帰ったって?」

「物資のこと?この先生は厳しいおかげで、あそこではひどい目にあっただけだよ」

「フン、ヒーローは謙遜が得意ということかい。嫌味に聞こえるよ」

なんだろう。僕は彼女に喧嘩を売られているのだろうか?

思わぬ目の前の人物の態度に驚き、すぐには反応できなかった。そんな若者の背中にデューコンは声をかける。

「それじゃ出発するぞ。少年」

「わかった」

「これはこれは、グローリー。彼を口説きにきたのか?」

「私が?ハン、まさか。そんなわけがないだろう」

なぜかハゲは僕の腕を強めにつかむと無理やりにして外に連れて行くこうとした。

|||||

B. O. S. の偵察部隊が駐屯しているケンブリッジ警察署の屋上に出ると、ナイト・キースは背中中の荷物を確認してからそのまま屋根伝いに移動を開始する。

現在、部隊はキャピタルの本部からの“新しい指令”に従い、任務凍結状態となっていて動くことができない。

そんな中で、彼ができることといえは。

暇な時間にガラクタを利用して作り上げたお手製の地雷を抱え、ケンブリッジの町の中を徘徊し。仕掛けた地雷が減っていないかどうか、チェックすることくらいしかない。

敏捷さをかねた肉厚の筋肉が躍動しても、なにかが物足りないのだと不満を訴えている。

フェラル・グールなどという汚らしい存在に占拠された町の中で、しばらくは息を潜めようと語ったダンス隊長へのあつてはならない反感が、ムクムクと頭をもたげようとするのを抑えている。

全てはついに自分達の部隊がこの連邦での任務に失敗し、殺到する死者の群れに無残にも引き裂かれると覚悟をしていたあの後からすべてが変わった。

それまで、この過酷な任務を前に厳しい決断と判断をくだしていたパラディン・ダンスは大きくその方針を転換したのだ。

「残念だが、我々はここまでだろう」

本部との通信が回復し、新たな指示を待つよう返事が来た夜。

彼は食事を前に、部下のリースとヘイレンにむかつて静かに語った。

武器はあるものの、食料品と薬品が足りない。補充を本気で考えるなら、近くにあるというダイアモンドシティとやらに行くしかないが。その行き帰りは危険に満ちていて、気軽にはいけない。

「本部との通信が繋がったのは喜ぶべきことだが、それだけだ。我々にはすでに、任務を続行できるだけの余力は残されていない。部隊を率いるものとして、皆で無駄死にしようなどとは言いたくはない」

そうして警察署で籠城がはじまった。

本部ではすでに次の計画——それは多分、自分達の後釜となる部隊だろう——が用意されており、1カ月後にダンスの部隊の新任務を発せるといふ。

要するに迎えをやるから、それまではせめて1ヶ月くらいは静かに隠れているというわけだ。

(こんなはずじゃなかった。こんなもんじゃなかった)

隊長の判断は間違っていない、ナイトとしての自分もそれはわかっている。

連邦を訪れた時から仲間が半分以下にまで減っている。

これ以上何かをしようとするなら、総力戦だ。その戦いに勝つても、今いる3人が生き残っていると考えるのは楽観的に過ぎた。それ

でも、怒りはどうしようもなくわくのである。

リースは通りを歩くフェラルたちの頭上で、通りに仕掛けた地雷を望遠鏡で確認する。

ばら撒かれていた地雷は7つ、その全てがそのままそこに残っている。つまり、この町から出ていく者も、入ってきた者もないというわけだ。

ダンスはリースを特にとがめはしなかったが、同僚のヘイレンはこの地雷配り行為をひどく嫌がり、非難をしていた。「地元の住人を吹き飛ばしてたらどうするの？」それが彼女の言葉で、確かにその可能性はあった。

だがリースはその答えとして、彼女が言うほど深刻なことではないという風に「地元の奴らは賢いんだろ？こんな町には近づきもしないさ」と言って、相手にしなかった。

そして無力な旅人が、商人が、避難民や子供が地雷に吹っ飛ばされたところはまだ見ていない。

リースはそれだけを根拠にこの任務をやめるつもりはなかった。

今日は調子がいいのか、それとも悪いのか。

3番目のポイントも確認したが、地雷はひとつも減ってはいなかった。

こんな日もあるさ、リースはため息をついて立ち上がり。警察署に戻ろうと考えていた。

そんな彼の背後には大きな山が立ちふさがっていた。

「ヤッパリ イタナ人間！」

そして次の瞬間、ナイト・リースは衝撃を感じるとなにもかもがわからなくなってしまう――。

近くで火が、パチパチと爆ぜる音がしたと思う。

ぼんやりとした中で、不快な言語が流れていた。確かそれは「コイツ」と「食エル」だったか。

うう、とうめき声を上げながら、地面にうつぶせに倒れていたリースはごろりとそこから仰向けに転がった。

途端に複数個所から、苦痛を知らせてきて小さな悲鳴をあげてしま  
う。

(情けない声を出すな！俺はナイトなんだぞっ)

あわてて歯を食いしばると周囲を確認しようとした。

どこかの屋内らしいが、すぐ近く。部屋中央にはなぜか弾薬箱な  
どが山と積み上げられ。その隣にはあろうことか屋内にもかかわら  
ず、火がたかれているようだった。

(誰だ？レイダーか、原住民の奴等か!?)

頭部から流れる血が目に入ってしまったているのだろうか、視界がに  
じんでいてはつきりしない。

先ほど感じた巨大な存在も、声が消えるとあっというまに消えてし  
まい。姿もない。

『只今お届けした曲は…。ハア…へへツ…ロケツ—』

ラジオの音声だけが流れている？

現地人の流しているラジオだがリースはこれが嫌いだった。キャ  
ピタルにいた時も、考えてみればラジオは嫌いだった。あつちはこの  
と違い、陰気ではなくあまりにも能天気な調子で皮肉を口にしたので  
——特にあの時代のB・O・S.と比較するようなコメントをする  
ので、好きではなかった。

(立ち上がろう。今なら誰もいない、逃げられる)

荒く息を吐きながら、なんとか壁に手をやって支えながら腰だめに  
なる。

そこでギョツとして動きが止まった。

部屋の中、屋内に誰もいないと思っていたのは勘違いであつたらし  
い。部屋の中に自分以外の存在がいたことに気がついたのだ。

そいつはなぜか目を包帯で隠しているの、見えないらしかった  
が。それにしても気配をまったく感じさせない静けさをもまどつて  
いた。

そしてなにより重要なことは——。

「スーパーミュータント!?!」

自然と声が上がってしまった。

だが先ほどの奇妙な会話の意味は、これで合点がいった。

リースはこいつらの食料としてここに連れてこられたわけだ。そして、こっそり逃げようにも不覚にもものたうちまわった挙句、声まで出している。

(いや、待てよ。もしかして気がついていないのかも)

わずかに希望を託し、そろそろと一歩足を踏み出した。

「聞こエテイルゾ、人間。動クナ」

「っ!？」

思わず止まってしまったが、ここが決断の時なのは明らかであった。

見張り(?)を恐れず、このまま走れば逃げられるだろうか?戦って殺す——のは無謀か、武器がないのだ。どう考えても不利だ。

「……ナンダ?ナニガ オコツテイル?」

「?」

「盗つ人メ、ゲス野郎ガツ」

盲目らしき緑の巨人はいきなりそんな低い声で言葉を発すると、素早く壁際に移動してなにかをやった。

その途端、建物が突然悲鳴を上げたのかと思うほどの大きなサイレン音が周囲に響く。

(これはっ、仲間を呼んでいるのか)

思わず両手で耳をふさいでしまったリースだが、慌てて山と詰まれた弾薬箱に飛びつくと中をあらためる。ミサイルランチャー、マシンガンが出てくるが、馴染み深いレーザーの類はそこには入っていないかった。

それでもないよりはマシと、武器を抱えて弾薬を拾い上げる。

室内に続く通路を順に確認し、誰が出てきても戦えるのだと自分に言い聞かせる。

だが準備はまったく足りていない。

片足を突いて、ミサイルランチャーに自分の肩を貸し。両手を必死に動かして、マシンガンの弾倉に5・56ミリの弾丸をつめていく。いつもレーザー兵器ばかり運用しているせいもあってか、あまり誉め

られた手際ではない。

最高の緊張状態と絶望的な状況の中で、無限の時間をすごしているような感覚であった。

だが、そのすべてに違和感が生まれる。

ポロポロとこぼしながらも必死で弾を込め、マシンガンを取り上げて装填し、構えては荒く息をさらに10回ほど吸ってはいてを繰り返したあたりで——冷静な思考が動き出した。

誰もここに姿を現さないのである。

それはこのスーパーミュータントにしても同じだったようで、サイレンのスイッチレバーの前から動けず。戸惑っているように見えた。だが、このままで言い訳がない。ここはフェラル共であふれるケンブリッジなのだ。

大騒ぎなどしていたら、すぐに誰かがここへ何があるのかと殺到するに違いない……嫌、もしかしてもう誰かここにきているというのか？

ガチャリ、いきなり扉が開く。

連邦のごみ拾いが着るコート、その下にはこれまた最近見た覚えのあるVaultスーツを身に着けた若者が気軽な様子で入ってくる。扉のすぐ隣に、あの盲目のスーパーミュータントが立っているが、気がついていないのか？

リースの前まで来ると、これまた軽い調子で声をかけてきた。

「あんた……」

「無事のようにだ、よかった。動けるかい？」

「あ、ああ——お前、名前は？どうしてここへ？」

「アキラだよ。ここへきた理由——ちようど目の前を、変な人を担いだスーパーミュータントがご機嫌で横切ったから、とえばいいのかな」

「ふざけるな！俺は真面目に聞いているんだ」

「ならこつちもそうさ。あんた、面倒くさい奴だな」

駄目だ、こういう奴は先日も会った。地獄をなぜか鼻歌交じりに歩

き回るような、そんなごみ拾い共の感性はリースにはまったく理解でき  
ない。

「スーパーミュータント——」

「そうーそのスーパーミュータントだけど、もう大丈夫。だからあん  
たもこうして迎えに来たんだ」

大丈夫？ 迎えに来た？

リースは頭が回らない。それどころか、怒りさえわいてきた。

だが、その言葉を理解した奴もいた。

盲目らしきスーパーミュータント——「デッドアイ」は、サイレン  
のスイッチの前に立った状態のまま。怒りと悲しみの混ざり合った  
咆哮をあげた。

同時に馬鹿なごみ拾い——リースには少なくともそう思えた——  
アキラと名乗る少年の顔に悪い笑みが浮かび上がり。見たことにな  
いレーザーピストルを手にして振り向く。

決着は、あつという間の出来事であった。

|||||

ケンブリッジに鳴り響く、これまで聞いたことのないサイレンを耳  
にしたとき。

ヘイレンはすぐにダンスに向かって口を開いた。

「リースが戻ってきません。大丈夫でしょうか？」

「……待機しろ。近くまで偵察してくる」

T-60 パワーアーマーを身につけたダンスはそれだけ言い残  
すと警察署から飛び出していった。

ヘイレンの言う通り、今日のリースはいつもよりも戻るのに時間が  
かかっている。悪いことがおきていなければいいのだが。

サイレンは途中で鳴り止んだものの、ダンスはその発地点をすで  
に割り出していた。

近づくにつれ、状況はあまりよくないことを知る。道路や建物の周

りを、これまでこのケンブリッジでは見たことのない数のスーパーミュータント達の死体が残されていたからだ。

さらに進むと今度は建物からぞろぞろと人とロボットたちが出てくるところに出くわした。その中に、あのリースが混ざっている。

「その君達、停止してもらおうか！見たところ、私の仲間を連れてくるようだ。これからどうするのか、聞かせてもらいたい」

集団はいきなり目の前に現れた。パワーアーマーに驚いたようであったが、リースと何か話すと。若者と2人、穏やかに歩いてくる。(どうやら、話し合いが出来そうだ)

半年前なら、もっと居丈高に叫んで。物事を面倒にしたかもしれないが、ダンスは最近。柔軟さを持つということの大切さを学んでいた。

「あなたが隊長さん？アキラだ、ここにいるあんたのお仲間が。スーパーミュータントの食料になるところを助けたばかりだよ」

「ほう、そうだったか。ならまずは例を言わないとな」

「見かけたって、それだけの話だから」

「いや、そうはいかない。ありがとう——とところで、そういうことなら仲間はこちらに引き渡してもらえるのかな？」

「もちろん」

いつものように、険しい顔のままのリースにこちら側に来るようにダンスは手招きをする。

彼が自分の隣に立つと、ここでようやくダンスの力が完全に抜けた。

「本当に君達には感謝する。彼を失うようなことは、考えたくなかったんでね」

「だろうね。実は知らない間柄ってわけでもないんだ。話を聞いていた」

「ふむ、例のダイアモンドシティのラジオかな？」

「違うんだな、レオさん。あの人と僕は付き合いがあってね。あんた達の通信装置とやらの一件を聞いたんだ」

「そうか——彼は今、どうしている？」



「ポストンコモンあたりで暴れているんじゃないかな。すまない、別れてもうだいぶ立っている」

彼は自分の息子を探しているのだと言っていた。

この厳しい時代の中、絶望せずに歩きをやめずに進む彼のために祈ってやりたいとダンスは思った。

「どうかな？君達、よかったらこれから私達が駐屯する警察署に来ないか？もちろん、強制はしない」

「——そうだね。一度見てみたいと思っていたし、なにか話があるんだろう？」

## マクレデイの問題 その1

連邦の西に向かう方法だが、選択肢はそれほど用意されていないことを私は理解していた。

ダイヤモンドシティからそのまま向かうのではなく、一旦チャールズ川を渡って北に進み。そこから南西の方角に降りていくのが一番安全だと考えた。

これが正解だった。

西側のエリアに入って2日、私達は敵の襲撃を受けずに無事に旅を続けていた。

夜、焚き火のそばで眠っていた私は目を覚ます。それに気がついたマクレデイが声をかけてくる。

「起きたか？まだ寝ていていいぜ、交代まで時間はある」

「——いや、大丈夫だ」

復讐の相手、妻を殺した男の名前がケログと知り。ダイヤモンドシティでそいつが少年といた、そう聞いているから私は睡眠中に夢を見ることを恐れていた。

ニックには「その子は俺の息子ではないだろう」とその時の私は口にしたが、本当は不安だった。

もし、もしもの話だ。

やつがションと暮らしていて、自分を父親などと呼ばせていたら——私は自分が冷静でいられる自信がない。

あの男を追い詰める、報復心を満たすことに暗い炎を静かに燃やしていた自分が怪物のように息子には見られてしまう……そんなあるかもしれない未来に恐怖を感じ始めているのだ。

だから眠りたくはない、眠らなくてはならないとしても。

夢を見たくはないのだ。

「コーヒーがあるぜ」「一杯頼みたい」「わかった——」

「明日は……どうしたらいいか、君の意見を聞きたいな」

日中、私のピップボーイに突然反応があつた。

どこからか発信されている救難信号が入ってきたのである。そう

して誘われるようにトレーラーハウスの集合住宅街に近づいていた。朝になれば、そこに到着することになるだろう。

私はすでにして迷走を始めている。

——ケロググは一人で西に向かった

その情報を頼りにここにいるが、実際の話。このままでは虱潰しにあちこちを訪ね歩かなくてはならない。冷静な意見が、自分以外の知恵が必要なところだ。

マクレディはカップを私に差し出して渡すと、自分の考えを口にした。

「トレーラーハウスとかいったか——俺は行くのをやめたほうがいいと思うぜ。声を出している奴がまだ生きているって保証はないしな。それに、よく考えてみたらあんたの事情を考えると行き先はもっと絞れてくると思う」

私は少しムツとした。

「そんなことは初めて聞いたな」

「そりやそうさ。あんたは俺の意見を聞かなかった。俺がここにいるのは、ボスに頼まれてあんたの命を助けるためだけ？ あんたの敵討ちをどうこうするのは、約束に入っていない」

指摘されてはじめて気がついた。確かに彼の言うとおりだった。私はケロググとの決着にあたまがいついて、冷静さを欠いていた。もっと友人の言葉を必要とするべきだったのだ。そもそもここまで来たのも、私だけではたどり着けなかったのだから。

「すまない、確かにそうだったな。今更だが、君の意見を聞かせてくれ」

「——あんたは依頼人が不明の凄腕の傭兵を探しているんだろう？ 俺が知る限り、そんなのがこの辺りにうろついているというならひとつを除いて、いくつも無いと思う」

「ひとつを除く？」

「ああ。輝きの海って言葉、聞いていないか？」

「知らない。それはなんだ？」

「常に放射能嵐にさらされている死の大地だよ。アボミネーションに

とつての天国さ。普通に何の準備もなく入り込む気ならと、あんたも俺もあつという間に奴等の仲間入りしちまうだろうな」

「凄まじいな」

「ああ、そうだろ？だから候補から外せる」

「続けてくれ」

「同じような理由から、水処理場やタンクも外せる。あそこはスパーミュータントやフェラルがうろついているって噂だ。トレーラー・エステートとやらも、きつと似たような場所だと思うね」

「そうになると、可能性とやらが高いのはなんだ？」

「ひとつはヘーゲン砦だろうな。敷地が広大だから、探す場所は多くある」

「ひとつ？まだあるのか？」

「ああ、だが——」

マクレディの言葉の切れが悪くなる。

カップの中の液体をすすりながら、考えた。なにか都合が悪いことでもあるのだろうか？しかし、困惑はしているが。その顔はどちらかというとしくじつたときにみせる「しまった」という時の表情に近いと見た。

しばらくは迷っていたらしい彼は、ようやく意を決したのだろう。

顔を上げると、ゆっくりと話し始めた。

「実は俺は——あんただけじゃなく。ボスにも話していないことがあるんだ。俺、脅迫されているんだ」

「脅迫だつて？」

「ああ、そうだ……いきなりだったな、すまない。説明が必要だよな」  
そういつて語り始めたのは彼の過去の話であった。

|||||

あのB・O・Sに支配されたキャピタル・ウェイストランドでは傭兵家業は難しくなり、マクレディはこの連邦へとやってきた。なんのツテもなかったマクレディは、巨大な組織が狙撃手を探していると

いう求人にも考えずに飛びついてしまう。

それが最悪の決断だとわかったのはそれからしばらく時間が必要だった。

ガンナーズ。

連邦の武装組織としては最大級の傭兵団。

だが、その内情はひどいもので、やっていることは傭兵というよりもレイダーと同程度。さらに軍人を気取って奇妙な政治劇のふりをしたリンチを仲間の中でおこなっていた。

そんな姿を見て幻滅すると、マクレディはさっさとそこから立ち去ろうとした。が、今度はガンナーの方がそれを許しはしなかった。

逃げ出した裏切り者になるのかと、ウィンロックとバーンズというリーダー格の2人にしつこく追い回され。見つかったから、ずっと脅迫されていたらしい。

「ボスに雇われる前は、俺を雇わないように雇用主にあいづらが圧力をかけてさ。おかげで金になる契約はまったく望めなかった」

「圧力？アキラは、なにもなかったのか？」

「……それは」

「あつたんだな？」

「ああ、正直に言うとおつた。奴等の下っ端が来て、ボスに契約を解除するよう迫った」

「どうなった？」

「あいづら、ボスをこれまでのキャップを持っているだけで威張っている奴扱いしたんだよ。彼は——まあ、まったく容赦がなかったな」「殺したのか？」

「どうかな、グッドネイバーの外に縛り上げて放り出したから——」

「それが、問題か？」

「ああ、レオ。あんたはあそこを知らないんだつたな。あそこはボストンコモンに近いから、マジでヤバイ。仲間に発見されたという可能性はあるが、それ以外に見つかったと考えるのが正しいと思うぜ」

「つまりは、死んでいるんだな——」

気分のいい話ではないが、非難するほどのことでもない。

つまりいつものアキラであって、彼はこのマクレデイのトラブルに巻き込まれることも計算に入れて引き受けたのかもしれない。

なるほど、ただの傭兵の義理立てにしては妙に強めのつながりをもっていたわけである。

「ということは、そのもうひとつというのが？」

「ああ、そうだ。ウィンロックとバーンズがいる、ガンナーズの拠点のひとつだ。マス・パイク・インターチェンジ、これがその場所の名前だ」

「ケロッグはそこにいると？」

「微妙な話だよ。だが、そいつが腕のいい傭兵だというなら。ガンナーズは避けては通らないはずさ」

「それだけじゃないだろう？」

「——わかっちゃまうか。ああ、そうだ。」

ガンナーズは自分たちの客人を渡したりはしない。ケロッグって奴がそこに用があったとすると、奴らは敵に回る。だったら——」

「最初からこれを襲撃してまとめて処理してしまえばいい、そういうことか？」

「ああ。だが、これは別にやって貰わなくてもかまわないぜ。実際ボスにも話していないことなんだ。あんたのついでに、なんて都合がよすぎるだろう？」

そんなことはない。

むしろそれは私にとって、十分以上に意味のある助けになるとわかった。

「マクレデイ、そこまで案内してくれ。私はまずそこから確かめたい」  
私は夜にはあまりにもまぶしい輝ける笑顔を彼にむけた。

|||||

夜明けが近いマス・パイク・インターチェンジだが、地上では横になる者や椅子に座って船をこいているのもいたが。申し訳程度に虚空に目を向けているだけの無気力な兵士たちがいた。

私はマクレデイを離れにおいて一人、彼らの中へと混ざりに行く。相手を舐めているわけではないが、この程度の防衛体制なら静かに匍匐前進など必要はなく、ある程度は大胆に動くくらいが丁度いいのである。

私は好き勝手に寝ている彼らのそばに近づくと地雷をプレゼントして回る。その場から立ち去ろうとすれば、たちまちこいつのせいで大騒ぎになるだろう。

準備は完了した。

私は自分をスコープで追っていたはずのマクレデイにむけて“ハジメロ”と合図を出しながら、私は壁の反対側へ隠れて待つ。

背中のライフルを構え、片手にマガジンを取り出してすぐに装填できるようにしている。

そうやって待機して数秒、離れから潰れたライフルの発射音が聞こえてくると。

寝ていた連中は目を覚まし、派手に立ち上がって「なんだ!？」と声を上げ——る前に、破裂音とともに次々と吹き飛ばされ、四散していった。

私の耳はその音を確認すると、素早くマガジンを突っ込み、装填してから腰だめに壁の裏からゆっくりと出て行く。すでに状況はこちらの圧倒的な有利に進んでいる——。

夜襲とはいえ、あっさりと敵を壊滅させてしまったことにマクレデイは興奮を抑え切れなかった。

「本当かよ、本当にやっちゃまったんだな」

「マクレデイ、残りは全て片付けたぞ」

「ああ——そうだな、わかっている。そうなんだよな」

この場所にいる兵力の半分——は言いすぎだが、少なくとも数の地上の戦力をすでに倒してしまったのだ。

「お前を脅迫していた2人は、やはりここにはいないのか?」

「ああ、あの糞野郎共はこのリーダーだからな。この上の、高架橋に陣取っているはずさ」

「なるほど。ところで、上の連中はこっちに下りてくる気配がないかな？」

「気がついてはいると思うぜ？でも、助けに来ることはしないんだ」「なぜだ？」

「ああ、それはだな。ガンナーは基本、組織を大きくするのに新人をいちいち雇ったりしないんだ。すでにある小さな傭兵集団や、レイダーたちを取り込む。だから——」

「なるほど、仲間意識は低いというわけか」

「そうだ。ここにはすでに十分な装備をもった兵士がいるし、まだ夜明け前だ。」

下で何か騒ぎがあるにもかかわらず、様子を見にすぐに降りてきたりはしない。明るくなつて、状況がはつきりと確認できるまでは動かないんじゃないかと思うぜ」

「しかしそうになると、今度はこっちが上に行く必要があるということか」

レオの言葉にマクレデイは慌てた。

「おい、それはさすがに無茶だろう。エレベーターはあるが——」

「だが、2人がこのリーダーなのだろう？彼らに会わないと、ケロツグのことはわからない」

話していると、この連中の荷物の中から物を探してきたらしい。カールが浄化された水や、人形をくわえてきて、振り回して遊んでいく。

どうするのか決まったら教えてくれ、そう言いたいらしい。

私は手元のピップボーイで地図を確認する。

エレベーターで昇るにしても、場所を考える必要があった。

マクレデイが言うように、傭兵集団とはいっても装備だけで、お世辞にも兵士の質はたいしたことはない。

しかしだからといって、弱兵ばかりとなめてかかるわけにもいかない。実際、このマクレデイですら、待遇の良さにひかれて一度は参加してしまつたといっている。腕がよくて、彼とは違った考えを持つ用



兵がいたとしても不思議はないだろう。

「なあ、ここまでやつといてなんだが」

「ん？」

「あんたは凄いよ、だけだよ。レオ、あんたの事に付き合っているはずの俺のほうが、上手いこと話が進んでいるっていうのは——」

「悪い気がする、か？」

「ああ……脅迫のことはボスには言えなかったんだ。俺は傭兵で、殺し屋だ。その看板を出している以上は、『どこかの傭兵部隊と避けられないトラブルがあつて困ってる』なんて弱音は口に出せなかった。

おかしい話だが、どうも俺はあんたに話すように仕向けられているんじゃないかつて。そんな勝手なことすら考え始めているんだ」

「マクレデイ、気にしなくていいんだ。言ってみればこれは、Win—Winの関係という奴さ。君はここにいるボスに死んで欲しい。私はここに来ていられるかもしれないケロググを見つけない。そうだろうか？」

「そ、そうか。ういんーういん、の関係だな」

「ああ、その通りだ」

「ここにケロググがいれば、見つけてやる。あんたとの約束だ」

喜びを隠し切れないでいる若者の肩をたたくと、私は最後の一押しをすることにする。

「ところでマクレデイ、君はプレストンと狙撃で勝負したって聞いたよ」

「え？ああ、まあな」

「上に行ったら、今回は私が挑戦しよう。一勝負、どうだい？」

「俺が？あんたと？」

アキラの手によって強化プラスチック製のボディとなった私の狙撃ライフルを持ち出すと、むこうはすでにやる気になっていた。

私は——少しだけ彼に罪悪感を抱く。

|||||

マクレデイにとって、笑いが止まらないとはこのことだろう。

さわやかに朝日の昇る中、高架橋の上で右往左往している奴らをほとんど一方的に蹂躪してやったことが、どれほど痛快であったか。マクレディの語彙力では、とうていあらわせない爽快感があった。

特に2人の——ウインロックとバーンズの最後は最高だった。

グッドネイバーの酒場じゃ、いつも不機嫌そうな顔で不愉快な言葉を投げつけてきたあいつらが。裸同然の姿で、恐怖に顔を引きつらせながら必死に武器をこちらに向けていた。

自然とマクレディは声を上げていた。

「それだけか!? ウインロック、いいぞ。地獄に落ちてしまえ!」

「もしもーし、俺を怒らせるつもりか? バーンズ、ちゃんと狙って来い!」

片方はライフフル弾を正面から受けてしまい、後頭部が破壊されてすごいことになり。もう片方は標準のT45パワーアーマーに乗り込んだことで多少は頑張っただけのもの。

何の強化もされていないノーマル品では、かつての時代でも旧型とよばただけあつて装甲は次々に剥がれ落ちると、フレームの中で絶命してしまった。

マクレディにとって、これ以上ない吉日に思えた。

脅迫におびえていた相手は死に、それだけではない。これによつてガンナーとの関係は切れ、この場所を襲撃した相手が誰なのかを探り出そうとする彼らは、たった一人の元狙撃兵のことなど忘れてくれるだろう。

さらにここにはガンナーのひとつの拠点が生み出した財産もあった。

こいつを綺麗に奪い去ったとしても、誰もそのことを問題とはしないはずだ。

「やあ。こりやもう、笑いが止まらないよな。なあ、そうだろ——レオ?」

これから忙しくなる、そう思っていた。

奪った財産、死人から装備を回収し、それをどうやって抱えて町に行くか?

脅迫者が死に、彼らと彼らの部下が残した財産に目がくらんで傭兵は気がつくのが遅れてしまった。

レオとカールは、いつの間にかその場から消えていた。

高架橋の下にじかに降りれるクレーンはここにはなく、作動してもいなかった。

つまりマクレデイが浮かれすぎて目を離れた数分の間に、あそこから地上へと下りてここから立ち去ってしまったということになる。

(ヤバイ、ヤバイぞーこれはっ)

マクレデイの顔が真っ青になっていた。

今思うと、あの男が地図をやたらと気にしていたのも。確率は高くないと言っていたのにもかかわらず、ここに来たのも。全てはこうするためだったのだと思えてきた。

そして自分は、もはやあの男に追いつくことはできない。マクレデイもそれはわかっていた。

レオは最初からヘーゲン砦と聞いて、そこが本命だと考えていたのだ。

あとは数分だけで良かったのだ。

この馬鹿野郎の頭の中から任務を忘れさせれば、それで消える自信が向こうにはあったのだ。——完璧に性格から読まれ、行動が見抜かれていた。

「畜生……チクシヨウ・クソ、汚いぞ。こんな滅茶苦茶な——ああつ、チクシヨウ！」

レオへの怒りというよりも、それは自分への情けなさ、不甲斐なさへの怒りであった。

彼は完璧に正しかった。

義理人情で引き受けた護衛だったが、こうして大きなミスをしたと知った後でも。マクレデイは目の前のキャップの山を無視は出来ない。

「大馬鹿野郎だ、チクシヨウが——」

それは自分か、それとも自を間抜けにしてくれたレオに対してのも

のか。

結局、マクレデイはここにあつた。パワーアーマーを回収すると、待てるだけの金目のものをかき集めてからその場を離れた。

太陽はすでに高く、正午を過ぎていた。

ヘーゲン砦にはもちろん行く、だがもう間に合わないだろう。レオのような男が、探していた敵を前におじけづくはずがないのだ。(せめて、生きていてくれよ。ボスにあんたの死体を届ける役にだけはなりたくないからな)

もはやマクレデイには祈ることしかできることは残されていないなかつた。

|||||

ソニーはグッドネイバーの路地の暗がりにおっかなびつくり腰が引けたまま、進んでいく。

最大級の危機が感じられる呼び出しを受けたのだ、こういうのは普通は逃げたほうがいいのだが。今回のそれはむしろさらに自分の首を絞める——そんな勘のようなものが働くので、素直に指示に従ったわけだが。

(逃げるな、逃げるな。逃げたら、死ぬぞ)

命の危険なんていつものことじゃないか。

そうは思っても、最近社は戻っていないせいで、編集長に泣きつくことも出来ない。でも、まあおかげで今年はくだらない殺し屋ランキングなんて記事を書かずにすんだが。

「……ここよ、さっさと来なさい」

「こりや、驚いたな」

そこにいたのは「鼻なし」のボツビと呼ばれるグールであった。彼女はちよつとした有名人だが、最近なにやらハンコックと対立してしまい、落ち目だという噂があった。

「変な呼び出しされるんですね。逃げるとは思わなかったの?」

「そこまで腰抜けなら、あんたの噂もとんだまがい物だった。そうい

うことだよ」

女性だが、やけに偉そうなのが彼女だ。

仕事において、相手を決して自分の上に置かないというのは本当らしい。

「約束は守りました、こうしてね。それでなんでしょう？あなたと話すことはないんですがね」

「あんたのところの上司が、探してたよ。別に辞めるつもりはないんだろう？でも、戻るにしてもそれなりに手土産がないとね。そうだろう？」

「よくご存知で」

「協力してやるよ。それどころか、あんたをあたしも雇ってやろうじゃないか」

悪い話じゃない。それどころか、願ったりかなったりで飛びつくのがためらわれるくらいだ。

ソニーは実際にためらって見せた。

「あなたの噂は聞いてますよ。良くないでしょう？何に巻き込むつもりです？」

「別にいい、そんなに悪い話が流れてるの？嫌だわ」

「だから素直に飛びつくなんて思われちゃ迷惑です。正直、あんたにおかしな呼び出しを受けたって市長のところへ駆け込むことだって考えてるところです」

「へえ」

グールの目が、嫌な輝きを放つのを見た。

やりすぎたか！ソニーは慌てて取り繕う。

「もちろん！——あなたが全てを話してくれるなら、引き受けることも考えますがね」

「それこそもちろんよオ、あなたの得意なことをしてもらいたいのは「はあ」

「聞いたことがあるはずよ。最近、急に出てきた若い奴。さっそくハンコックのお気に入りのお気に入り」

「それって、あの——」

噂は聞いていた。

だが、その姿をまだソニーは見たことがない。

「黒髪の人、洞穴暮らしのボウヤ。それをしばらく監視してほしいのよ」

「え、監視!?!」

「声が大きいよ……そうよ、ばれないでちようだいよ。しつかり隠れて、張り付いておいて」

尾行か、悪くない。それに少しばかり得意でもある。

だが、この話に乗ってトラブルには巻き込まれたくはなかった。

「それならこつちも正直に言いますが。当人の噂は聞いてますが、会ったことはないです。最近グッドネイバーにはいないようで、それらしい話も聞きません」

「それなら大丈夫。心当たりがある、バンカーヒルの商人を調べなさい」

「バンカーヒル? あそこは商人が多い、誰ですか?」

「そんなこと知らない。でもそいつは近いうちに、そこにあらわれるはずよ」

「——尾行して、どうするんです? なにをすれば?」

ボツビは笑ったのだろうか?

暗がりの中で表情は変わり、物騒な言葉を吐き捨てる。

「最近お気に入りになったハンコックのところのボウヤにトラブルが近づいているの、それがもうすぐ。そうしたら、あたしにそのことをちゃんと知らせなさい」

アキラへの不吉な予言であった。

## 行雲流水 (Akira)

オーガスタの隠れ家には人造人間はいなかったが、代わりにレイダーたちによって占拠され。彼らのちよつとした遊び場として使われているようだった。

「なんてことを……これは、あんまりです」

腐臭漂う死者達をぞんざいに積み上げた山の前で声もない男たちとエイダが変わってキュリーがつぶやく。

キャリントンが見てきてほしかったというのは、これのことだったのか。

見知ったレールロードの仲間達の無残なその姿にデイーコンは表情はいつものように変わらなかったが、心は暗く沈んでいた。

アキラは冷静に周囲を確認しながら、自分の考えを口にした。

「どうやら病院自体はインステイチュートの攻撃から、崩れているところが多いようだ」

「もともと過去の戦争の影響で、ここはあちこちがボロボロだったのさ」

「でも人造人間の姿がない。スイッチボードと違って、攻撃後にすぐに撤収したのかも。そのあと——」

「レイダーのお引越しか。まったく、趣味が悪い連中だ」

「まだ生きている端末があれば、当時の状況が残っているかもしれないけれど——」

虚しさがあつた。

それを探すのを理由に、ここにいるレイダー達を引き裂く。本部はそれを望んでいるのだろうか。

だが、それがどんな意味がある？

「アキラ、ここを出よう」

「——いいのかデイーコン？ デズデモーナはきつとここにいるレイダーを叩き潰すことを望んでいるはず」

「そうだな。だが、そんなことの意味があるのか？ 復讐する相手はレイダーじゃない。俺たちが戦っているのはインステイチュート、そし

て人造人間だ。人助けでもないし、必要のないトラブルは避けていこう」

それでもなにかしら割り切れない思いがあったのかもしれない。デーコンはその日、太陽が沈むまで、ずっとおしゃべりを封印したのかずつと口を閉じていた。

警察署で噂のB・O・S。偵察部隊に改めて礼を言われた。

キャプテン・ダンスはレオさんのことがどうにも気になっているようで、ここでも再び話題が出たが。残念ながら僕のほうにあの人の最新の情報はなかった。

(上手くいっていいばいいな)

それは思っている。

あの人の家族への愛は本物だ、それを知っているから。だからこそ、連れ去られた息子さんとの再会がかなうことを僕も祈らずにはいられない。

話は正直、そこで終わってもおかしくなかったのだが。こちらが立ち去ろうとすると引き止めるようで、どうやらなにか切り出したいが。上手くそれが出来ずにいるという、面倒な相手の意思が感じられた。

僕はそれに気がつかないフリをすることも出来るのだろうが、この連中もレオさんをこれほど気にしてくれるくらいには善い人のような気もしたので、珍しいことに僕はそれに付き合っただけでやることにする。

ちなみにハゲはこちらの合図を見て(ご自由に)などと呆れているようだった。

「……そういえばキャピタル・ウエストランドに通信は送ることが出来たのですか？」

「ん？ああ、それが。上手くいったよ、おかげでこちらの状況を伝えることが出来た。レオには感謝している」

「会ったら伝えます——それで？」

「あ？」



「いえ、それでどうなったんです?」

「……どうなった、とは?」

なんでこちらの疑問に、探りを入れてくるんだよ!  
会話がしにくい連中だった。

「いや、ですから……思っただけです。皆さんのような傭兵(ここで助けてやった男がムカつく表情を見せた)、というか武装組織に所属している、なにかと大変なんじゃないかって。

だって——部隊には死者が出て、連絡もつかないって、相当厳しい状況でしょ?」

「ああ、そうだな」

「でも安全な場所で報告を受ける上司たちは、前線の困難を理解していない。そういうズレ、みたいなものがあるんじゃないかって。ほら、”組織に属する”ことへの不満みたいなもの。ありませんか?」

満面の笑みを浮かべて言っていたが、隣のハゲはなぜか窓の外を見つめて聞いていないフリをしていた。

本部の話はしたくないのか、相手の言葉の歯切れが悪くなったが。ここから言葉をいくつか交わすことで、ようやくのこと僕は相手の真意に気がつくことが出来た。

この人達、ようするにこちらにまた助けてほしいと欲していたのだ。

なんだよそれは!もつと早く、素直な気持ちになって言ってくれよ!

「助けるといっても、なにをすれば?」

「心苦しい話だが。物資の不足が気になっている、援助してもらえないだろうか」

「——商売、ということなら」

するとナイト・リースとやらが、口を尖らせて不満の声を上げた。  
「ちよつとまで!お前達にはあそこで回収した武器や弾薬があるだろう。あれで……」

「——ちよつといいか?悪いが、俺と相棒はあんたを善意で助けたんだ。そしてだからこそ、あの場所で見つけたものは基本、俺達に権利

がある。少なくともこの連邦では、そういうルールみたいなものがある」

デューコンが隣から口を出してきた。

これは僕も同意だったから、黙っておく。

「ゴミ拾い連中のルールを、俺達も守れているのか」

「そうだ。それでこちらも無償の善意で奴で、あんたたちにそれ以上の尊敬を求めないですむ。これは誰にとってもいい話なんだ。それをおかしくしたいというなら、よく考えてから発言したほうがいい」

「わかった！リースやめるんだ、これは彼らが正しい」

よかった、隊長は理解があつて。パワーアーマーを相手に屋内での装甲を剥ぎ取る、そんな修羅場はできれば現実にも起きてもらいたくない。

「缶詰にシュガーボム、アルコールが何種か。ソールズベリーステークはお好き？」

「好物だ」

「エイダ、君の中に残っているものも出してくれ」

「わかりました」

「——医薬品は、無理だろうか？」

「ステイムを少し出せる。ジェットやサイコも」

「……そんなものまであるのか」

「まあね——こんな風に商売をする時のために。いくつかあるだけで、欲しがる相手は満足するからね」

という理屈だ。

初対面のB・O・S。相手に、僕の悪い真実を話す必要はない。

「こちらは銃と弾薬をだせる。どうだろうか？」

「うーん……」

デューコンの顔をちらと見る。今度はむこうは、はつきりと首を横に振った。

「これでは足りないかな。俺達はライフル弾は使わないから」

「むむむっ」

「これだと食料を半分も——」

「マズいな。尋ねるが、ほかに何かないか？」

「情報？それも確実なものなら、高額をつけることが出来る」

パラディン・ダンスはしばらく呻っていたようだが、次にチラリと後ろの女性。スクライブ・ヘイレンに視線をやると「頼めるか？」と言い。彼女は「仕方ないですよね」と言っただけに進み出てきた。

「情報をひとつ渡します。それに値をつけて頂戴」

「ダンス!？」

「いいんだ、リース——すまない、ヘイレン。話を続けてくれ」

施設の情報か……。

「ワット・エレクトロニクスよ。我々もそこを調査する予定だった。戦前にあつたエレクトロニクス会社の資産だったものよ」

「それだけ？」

「——彼らは、ロボットや武器を独自に開発、販売していたことはわかってるわ」

ま、それなら十分か。

|||||

ケンダル病院を出て、しばらくすると今日は早めにキャンプにすることをにした。

妙に美しい、焼けた空を前に火をおこして囲むように座ると、ようやくデイコンは重い口を開いてくれた。

「死体が多かったとか、少なかったとかは関係ない。ああいうものは、な」

「——でも仲間だったんだろ。一緒に仕事をした」

「レールロードという組織で顔を合わせた、同じところにいた。それだけだ。」

俺は、俺にはパートナーはいない。長い間、ずっとそうだった「知らなかった」

ようやく口を開く彼は、珍しく感傷的になっているようだった。

「レールロードでは、パートナーを組むと付け込まれやすくなるんだ。インステイチュートにエージェントの正体を教えられる人間が増えるわけだしな。それを、歓迎できる奴なんていない」

「気にしすぎ、とは考えないんだ」

「ああ、そうだ。お前も、いつでも完全に警戒を解くなんて考えはやめろ。」

俺達はインステイチュートと戦ってはいるが、この連邦は時にそれと同じくらい恐ろしく残酷な敵に簡単になりうる存在なんだ」

病院のレイダーたちのことを言っているのだろうか？

「ならディーンコン、なんで俺と組んでいる？俺はあんたも言ったとおり、トラブル体質だ。」

目の前を変なものが横切れば、それが何かと簡単に付いていつてしまふような。そんなトラブルを避けようとしないうような奴だ。言ってみたら、あんたの天敵だぜ？」

「お前を愛しているから、といったら信じるか？」

「この人造人間め、と叫んで。あんたにもらったリコールコードを繰り返し唱えたい衝動に駆られるね」

「フッフッフ……俺はみんなに嘘をつく。そんな嘘をつく俺を憎んでいる奴もいる。だが今日は、信じて欲しい。俺は、お前の味方だ」

「その後はわかるよ『だからお前も俺の味方になれ』でしょ？」

「オイオイ、笑わせないでくれよ。これは俺にしては珍しく真面目な話なんだ。」

そう、真面目な話。

俺はお前のやってる、馬鹿なことが好きだ。俺が一人でいれば、そんなことは絶対しないが。お前と一緒になら馬鹿なことだと思っても出来てしまう。それは別に、悪い気はしない」

「……んん」

「お前にもそう思ってもらえるといいんだけど」

「ここでお互い、ハグがいるところ？」

「それはいい。お互い慣れてないんだ、そういうのは」

今日はなにか、これまでにない雰囲気になっていた。

「これまであんたの知っているB・O・Sの話にいいものはなかったよね。確か『昔は彼らのファンだったが——』と、言っていた」

「ああ、そうだ。」

お前が助けた、あのミニッツメンにも言える事だが。ああいう手合いは規模が大きくなると、途端にその地域の厄介者になることが多い。彼らの理屈ではそれが正しいことだとしても」

「レールロードは違う?」

「俺達は世界を救おうとか思っちゃいない。うちは今だって少ない人数でなんとかやっているんだ、大きな仕事は出来ないさ。」

それでもよい世界にしたいと考えている。人、そして人造人間」

「レールロードは人も考えている? 本当か?」

「正直に言えば、今は人造人間に手を貸している。助けようとしている。」

他の多くの人がやろうとは考えないことを、俺達はしている。それは少しかもしれないが、この連邦にとって役立つと考えている」

「噂でそこまでレールロードが評価されているのは、まだ聞いたことはないな」

「わかるよ。こいつは教訓ってことにもなるかな。」

この連邦を歩く限り、おまえは俺達やミニッツメン以外にも組織と出会うことになるだろう。」

彼らは俺達と同様、その組織独自のタワゴトをお前の耳元で囁き続ける。それが時に巧妙なもので、お前の心に入り込もうとすることもあるかもしれない。」

だが、だまされるなよ。」

組織が聞かせる言葉に真実なんてものはない。そこには常に嘘がついて回る、この俺のように。」

だからお前はただ、彼らの行動だけを見ればいい。お前という稀有な才能を持つ男に、なにをさせようとしているのかを見抜けばいい」

「それが重要なこと?」

「ああ、そうだ。お前のような奴が、そういう奴らの下で力を貸すと。」

世界は驚くほど簡単に変わってしまうことがある。そうなれば支払う代償も大きく、そしてそれは組織が肩代わりするものでもない」

「……」

「そうだ、お前がミニッツメンにさせたことがまさしくこれだった。

お前は自分と友人を守るために、あのミニッツメンがいてもいい連邦と、プレストン・ガービーという伝説を作り出した。お前はわかっていてこの男に道化役を押し付けようとした。

だが、その計画は失敗した。そこから学んだんדר？

結局は、お前自身も逃げ切れずに、ミニッツメンに縛り付けられ。今は俺達のレールロードに関わっている」

「卑怯者、って言ってる？」

「誉められた態度ではないな。それは確かだ。

だからこそ、お前は考える必要があるのさ。時が来れば、お前はついに多くの人たちから問われるだろう。『お前はいつたい、誰の味方なのか？』とな。

その時、答えることが出来ないなら——それはお前のすぐそばに死が迫っている。それだけは間違いないだろうな」

僕は驚くほど長い間、真面目な話をディーコンとしてしまった。

その反動だろうか？僕と彼は、結局その日はそれが最後の会話となった。

|||||

その晩、ひさしぶりに悪夢を見た。

窓も扉もない、ただ真っ白に清潔で輝く一本道の廊下の上を、なぜかギーギーとタイヤが回るたびに悲鳴を上げるようなカビ臭い車椅子に僕はただ座って押されるにまかせているというものだった。

顔には覆面なのだろうか？

布だかラバーかわからないが、目元だけをくりぬいたもので隠されている。そして僕はなぜかそれが嫌なのに、取り払おうという気力はまったくわいてこない。

視線を落とせば、病院服から飛び出している自分の手足は驚くほどに、細い。これで自分の足で、立ち上がることはできるのだろうかと思っほほどだ。

(過去なのか？この光景が)

メモリー・デンで掘り起こそうとしたときに見た悪夢の光景に通じるものが、そこにはあるようだった。

体をわずかにでも動かせれば、背後からこの車椅子を押す人物の姿を見る事だつてできるだろう。

僕には情報が必要で、俺には情報が必要で、私には情報が必要で、自分には情報が必要……。

思考がループを始める中、自分の首はまったく動こうとはしてくれない。

——深夜、僕はそこで目を覚ます。

火は消えていたが、携帯式迷彩寝袋の中でいびきをかいているデイーコンが正面にいる。

重い体でゆっくり起きると、闇の中で漂っていたキュリーが静かに近づいてきた。

「大丈夫ですか？うなされていたようですが——」

「ああ、ひどい夢だったよ……もう、眠るのはごめんかな」

「睡眠は必要なことです」

「夜明けまでは？」

「まだまだです。寒いでしょうから、火をおこしましょう」

僕らは今、ケンブリッチを出て。あのエイダと出会ったチャールズタウンを見下ろす緩やかな丘の中腹で休んでいる。

隠れ家の惨状は確認したし、本部に戻る前にB・O・Sから聞き出した情報を確認しよう。そう考えて、明日の朝には噂のワット・エレクトロニクス工場へと侵入することになっていた。

今まで寝ていて言うことではないが、この計画もだいぶおかしいことは自覚している。

なにせ北西にはあの巨大なロブコ工場とレキシントンがあり、南はポストンの危険地帯。いつぞやのごみ山の醜いねずみの群れや、デスクローに出くわしたって不思議はない場所だ。

エイダはこの夜を、僕らを中心に円状に巡回していて。キュリーがこうしてそばで見えてくれるので、なんとか休めるといった具合になっっている。

「……私が話を聞いたほうがいいのでしょうか？」

「ん？ どういうこと？」

「悪夢のことです。私は夢についてあまり多くを知りませんが——話したほうが楽になるのでしたら」

「いや、いい」

「そうですか——」

「……」

正直にいうと、悪夢のせいでしょうしようもない不快感に囚われていた。

今すぐ裸になって、シャワーなり、熱い風呂なりに飛び込みたいと真剣に思うが。そんなものはここにはない。

口の中も吐いた後のように酸っぱく感じられ、そのせいで口が重くなり。無言が続く。

「あの、なにか必要でしょうか？」

しつこく聞いてくるキュリーに僕は無言のまま首を振る。

彼女がおこしてくれた小さな火をじっと見つめている。それだけでなにか、癒されているような気がするのか心は本当にゆつくりと軽くなるのを感じるが。反対のあの悪夢の光景はイメージとして焼きついてしまったらしく、はつきりと思い出せるようになってきた。

「あなたには、私の要請を聞き入れてくださり、たくさんお世話になっ  
ていて、恩知らずとは思われたくないのです。こうして広い連邦を旅  
していることに感謝していると、ちゃんと伝えたことはこれまであり  
ませんでした」

「——復活してないだけだよ。ちよつと、まだキツイだけ、別に怒って  
ない」



「よかったです。えっと、私の話は余計でしたか？黙っていたほうが――」

「君の話なら歓迎するよ。僕は口を動かしたくないだけ」  
「わかりました、それでは」

僕は胡坐をかくと、両手で顔を覆ってから拭う。

完全ではないがまた少し、マシになってきたようだ。

「危険な道でしたが、科学のためという私の言葉をあなたは信じてくださいました。今ではエイダがあなたに忠誠のようなものを感じているのも、理解できます。私の中にも、それに近いものがあるところ  
で伝えておきます」

「告白タイム？だいぶ気分もよくなってきたな」

「本当のことです。真実なのです」

「わかった、ちゃんと聞いているよ」

「ドクター・アマリと会って話したことで、不可能を追求しているとは  
かり思っていたことが実現することを知りました。それと同時に、私  
がそうすることで副次的に発生する問題があることもわかりました」  
「ああ、そうだね」

「それは簡単なことではありませんでした。私のこの問題が、一人で  
は解決しないということを変更して理解させる発見でもありました。  
あれからずっと、どうすればいいのかを考えています」

これが彼女の言う、ロボット的という奴なのだろうか？

人間ならこうはならない。嘘をつき、誤魔化し、すべてを押し進め  
て戻れないところまでいってから。そして文句を口にする、そうして  
もいいのだ。彼女も。

「やはり今も、私の願いはかなわないものだどあなたは考えています  
か？」

「ん？何でそんなに悲観的なんだ、キュリー」  
「ですが……」

キュリーのこの純粹さを前にすれば、僕はディーコンの嘘をちつと  
も責められないとわかってしまう。

そしてそれが人間なのだろう。狡猾に、卑怯に、そしてそれが僕だ。

「終わってみれば、すべては時間が必要なだけであった」  
「え？」

「これが答えだよ。キュリー、君の未来は明るい。絶望はない、夢が現実になるのをただ待っていればいい」

「どういうことですか、アキラ？」

あの日、僕は失敗できない計画を遂行した。

生命の禁忌を犯すという大罪を犯す、共犯関係を作り上げて見せたのだ。

あのアマリという科学者は、キュリーの夢に興味を持った瞬間に僕達の共犯者となった。深刻な顔をして、共にこの先に待つ難しさに悩むだけで、それはかなった。

もはやキュリーの夢に立ちふさがる障害は存在しない。

彼女の中に芽生えた好奇心は毒であり、時間がたつだけで勝手に成長していく。それが十二分に育ったあたりで、僕とキュリーは彼女の前に再び立ち。

ただ一言、口にするだけでいいのだ。

——腹をくくつたよ

彼女のモラルは育ちきった好奇心の若く太い幹によって簡単に押さえつけられ、止める者がいない計画はあつという間に最後の段階まで進んでいく。

そうだ、この世界に人造人間を生み出してしまったインスティチュートの連中と同じに。

冒流的であり、彼女の存在がいつかは災厄として人々に記憶される日も来るかもしれない。

だが僕とアマリがそれを後悔することはないだろう。「後悔している」と口では言うかもしれないが、実際の僕らは好奇心が単純に満たされたという感覚が残るだけで、その他のこと的一切はたいした問題とは感じられないのだから。

「そろそろエイダが、メカニストに近いロボブレインの洗い出しが終わるらしい。その後なら完璧だろう。」

グッドネイバーに行つて、アマリにレールロードが保護している人

造人間の体をひとつ用意させる」

「ドクター・アマリは、やってくれるでしょうか？」

「彼女はもうやる気だよ。あの話し合いで、それがもうバレバレだったじゃないか。」

失敗をする可能性もあるけれど、あとは実際にやってみるしかない。成功か、失敗か。君はただ、どちらの目が出るのかを楽しみにしていたらいいさ」

「そう、なのですか——」

意外なことに、キュリーはなぜか落ち込んでいる様子だった。

「あれ？嬉しくないの」

「いえ、それは喜んでいきます。感謝もしています。」

でもこれは別のことなのです」

「よくわからないな。説明してくれる？」

「おかしいことはわかっていきます。これは、私の問題なのです。私の感情のようなものの、問題です」

「？」

「ああ、難しいのです。あなたやドクターが、多くの問題に悩まなくてもよいと聞いて喜んでいきます。でも、それなら私が悩んでいたことは何だったのでしょうか。無駄だったということですよね。」

「いえ、そう言うなら。なぜもつと早く教えてくれなかったのですか？」

「……恥をかかされた、屈辱だ。この度しがたい人間め、って言ってる？」

「そこまではっ——まあ、もしかしたら言っているかもしれないんですけど」

同じく200才をこえているキュリーは、こういうところが面白い。

「怒ってもいいよ。願いがかなえば、君はもう人造人間、誰が見ても人間として扱われることになる。」

「そうになったら自由さ。僕みたいな悪い奴と、一緒にいなくてもよくなる」

「私たちは、別れるということですか？」

「君には目標があるじゃないか。これからの連邦の医療に貢献するっていう。」

「だけどこっちはそうじゃない。あるのかわからない記憶を探しているし、レールロードやミニッツメン、レオさんなんかも助けたりしている。どれも安全はないから、基本ドンパチ暴れることになる。」

「そんなのに関わったら、研究なんてやる暇なんてないよ」

「とりあえずは、そうなったらサンクチュアリに行くようキュリーに薦めるつもりだ。」

「あそこには専門の医師はいないし、ミニッツメンにだって必要だろう。彼女は十分に大事にされるはずだ。」

「それで、いいのですか？」

「それが一番、君のためになるってだけ。何か問題が？」

「……話が変わりますが、質問があります」

「なに？」

「エイダも、私と同じように目的があると聞いています。あなたは彼女が目的を果たした後、手放そうと考えているのでしょうか？」

「エイダは君とは違う、アサルトロンという戦闘ロボットだ。人間の間となって人の中に入る君と違い、エイダはずっとロボットだ。そして所有者が必要なんだ」

「手放さない、と？」

「今のところそうする理由はないね。僕が死ぬまで、彼女は僕に付き合ってもらうさ。エイダとの約束は、そういう契約ともつながっているんだ」

「キュリーが何を言いたいのか、よくわからない。」

「なあ、どうしたんだ？ さつきからへんな事ばかり聞かれて、ちよつと頭も動かないからイライラしそうだ」

「ごめんなさい。混乱してしまいましたか？」

「謝罪じゃなくて、説明してくれ。キュリー」

「片手でもう一度顔を拭う。」

今度は不快感に変化は生まれなかった。会話がおつくうに感じられてきた。

「すいません——いえ、これは説明するのに。謝罪が必要なのです」  
「わかった。じゃ、続けて」

「私の夢が、まさかそんな状況にあるとは思わず。私はずっと皆さんに何ができるのかと、考えてきたのです」

「そうか」

「そして私なりに、答えを出したと思うのです。それを聞いてもらえませんか?」

「へえ、そりや興味深い。聞かせてもらおうかな」

顔をしかめれば、ただそれだけで頭痛が走りそうな気がしてあまり深く考えずにそれを口にしてしまった。

思えばこの日の僕たちは、あまりにも無防備に語り合いすぎたという一日だったのは間違いない。

キュリーは僕の言葉を聞くと、なにかホツとしたかのようにとんでもないことを口にする。

「アキラ、あなたに私の所有者になるという考えはありませんか?」  
「ナニ?」

「そうすれば、私の研究の成果はあなたに帰することになり。あなたの利益となります。つまりあなたのリスクを補う利益を。医学的な新しい成果を、私はあなたにお約束することができます」

「いや、待て。ちよつと待ってほしい」

「はい。どうでしょう?」

「どうでしょうじゃない。いいかい、キュリー。」

君は人造人間になる、つまり人間の社会に溶け込めるわけだ。人間となつて生きていける、立派に自分の夢も追える」

「ああ、その点でしたら大丈夫です。」

私が求めているのは、人間のひらめきを手にかけることこそが目的であり。ロボットであることのすべての制限から開放されたいというわけではありません。つまりは現状を考えますと、私自身が自由であることにこだわる理由もありません」

楽しい会話で朝が来るのを待つはずであったが。その目論見は——純粹な悪意のない申し出によつてぶち壊されてしまう。僕は悩みと本格的に始まった頭痛に耐える気力もなく、僕は「うーん、寝る」と告げると再び寝袋へとモゾモゾと入っていく。

硬い地面に横になり、冷たさに熱を持った頬を置く。

僕が演出した『考えなくてはならない時間』は現実のものとなつてしまったようだ。グッドネイバーへいく、そういえば彼女は今日の申し出の答えを聞きたがるだろう。

つまり僕は、間違はなく、腹をくくる。ことができて、ようやく彼女の夢はかなうのである。

クソツ、こんな皮肉。誰が演出したんだ——。

|||||

翌朝、ワット・エレクトロニクスの前に立つ。

あんな危険な場所で眠つたというのに、今日のデイーコンは絶好調らしい。

「そういえば今日は30日だったな」

「……それが？」

2度寝の影響からか、アキラのテンションはこの日は低かった。

「昔の人は、年末には新年を祝つてパーティを開いていたそうじゃないか。お前もそうだったのかな」

「さあね。陰気なキャラだから、居ても居なくても誰も問題にしなかつたのかも」

「傷つきやすい青春時代だったと？」

「記憶がないけど、それについては断言してもいいはず」

「——なんだ、機嫌が悪そうだな。もつと別の可能性は考えられないか？例えば自信に満ちていて、大勢の友人に囲まれてはしゃいでいた、なんてのはどうだ？」

「彼らを偲んで流す涙と泣く時間が惜しい。それしかないね」

「クールな男は、冷酷ってわけじゃないぞ」

無駄話はこれで十分だ、と思った。

「B. O. S. の話だと、戦前ではロボットを売っていた場所らしい。なにかあるといいけれど」

「あいつらにはレイダー共の食料庫の中身を全部渡してしまったからな。お宝とはいかなくとも、なにかあってももらわないと」

「——キャップが好きだとは思わなかった」

「キャップを嫌う奴なんて居ないさ。それに困るのは俺じゃない、お前だ」

「ナニ？」

「B. O. S. の連中が言うことを鵜呑みにして、ホイホイ情報に高額をつけたのはお前だ。場合によってはこの一件。善き人、アキラの優しさが本物だと俺たちは知ることになるかもしれない」

「——大丈夫、だろ」

「そうだったらパーティだ。ロボットのお嬢さんたち、絞りたてのエネルギーを奢らせてくれ。俺とはウイスキーで乾杯をしよう」

「もういいよ。さっさと行こう」

なごやかな空気の中、彼等は建物の中へと入っていく。

## 残酷なリアル（LEO）

年末を目前に控え、ガンナーは知らせを聞いて激震した。

混乱する連邦の西側に存在していた彼等の重要な拠点が襲撃を受け、全滅していたというのである。

知らせに戻った部隊の報告では、それは一方的に引き裂かれ、ガンナーは高架橋から逃げることもできずになぎ倒されていたのだそうだ。

不気味なのは、そんな攻撃側の形跡も現場にはほとんど残されていないなかったらしい。

あそのこの連中の動きをあらかじめ知り尽くした上で、地上と高架橋の2ヶ所を電撃戦で決めたというわけだ。

それほどの錬度の兵士がいて、それを率いる優秀な兵士がいる。

自分達こそこの連邦では最高で最大の傭兵組織を吹聴している身としては、顔が青くもなるし、屈辱だって感じている。誰がこんなことをしでかしたのだろう。

——これは、あのミニッツメンの攻撃ではないのか？

一部にはそう指摘する声もあったが、ガンナーの上層部は——リーダーのキャプテン・ウエスは、そうは考えなかった。

襲撃者は攻撃を終了させた後、拠点のめぼしい物をあさって回収していったという報告があったからだ。ミニッツメンは、今も昔も“い子ちゃん”ばかりの退屈な連中だ。こんなことをやらかせば、金目のものを漁るよりも何を自分たちがやったのかを吹聴するはずだと、そう考えたのである。

そしてそんなミニッツメンは、いまだ連邦の北西部でレイダーを相手に必死に存在をアピールしてる。とても相手になどしてられない。

そこでとりあえず近辺のレイダー、もしくは小さな傭兵集団の仕業であるということにした。

ガンナーにとって報復は重要なことではあったが、それよりも先に自分達の西側への足がかりを失ったと見なされることをまずは恐れ



た。

そうして、死んだウインロックとバーンズに代わるリーダーを選出すると。急いで人員を西側に送り込む。

残念ながらこれが終わりではない。

これからしばらくはあの近辺は騒がしくなる。様子を見にのぞきに来る奴、この件であなどって攻め込んでくる奴、そうした奴らを的確に追い払わないと、本当にまずいことになる。

ガンナーは不幸な知らせに対して怒りで歯噛みしつつも——この事件のことは、しばらくは忘れることにした。

|||||

依頼主からの定時の報告を受けると「そうか、好きにやってくれ」それだけ言ってケロッグは連絡を切った。

ヘーゲン砦は、もうとつくに制圧を終えていた。

彼と、彼が率いた完全武装の人造人間の兵士達。まあ、苦労なんてするはずもない。それはずっと変わらないことだった。

今は退屈そのもので、部屋の中に持ち込んだターミナルの前に座り、闇の中に静寂と共に溶け込んでいる。

いや、そうじゃない。それは正しい表現じゃない。

ケロッグはいつもと変わらぬ任務を、今回だけは自分の流儀を捻じ曲げ、変えた。

すでに——依頼主からは次の目的を知らされていて、そのためにここを出発しなくてはならないが。この男にそんなつもりはまるでなかった。

ケロッグは待っていた。

あの男が——自分と因縁があると、きつとそう思い込んでいる男がここにやって来るのを。

とはいえ、ただ待つだけでは暇なので、部下には砦の防衛装置を復

活させるように指示を出している。ノロノロと時間をかければかけるほど、奴はここで俺達の派手な歓迎を受けることになるだろう。

200歳を超えた爺さんにそれは、さぞかし驚いてくれるだろうと期待している。

だが――。

ケロググは、自分を長く戦場の中で生き延びさせてきた勘が、珍しくはつきりと警戒信号を点滅させている。

奴は近い、もうすぐそこまでやってきている。間違っても、こちらが待ちくたびれて、退屈のあまりここを出て行くのを待つなんてことにはならない、そう確信している。

「過去からの復讐か――要するに俺は、ハメられたってことなんだろうな」

寂しき――まだ自分が“真つ当な人間”だった頃には残っていただろうそんな感情も、今はもうほとんど感じなくなった。

むしろ、それこそが今の自分――恐れられるケロググではなかったか。そうした世間のしがらみが自分の足元に絡みつき。追いつき、追いつかろうとする者達を殴り倒す。

さまざまな感情を抱えて自分の前に立つ相手をただ破壊する。そんなことはこの仕事なら避けられない、いつもの事だと納得して、これまで仕事を淡々と処理してきた。

そして今回もそうなる。

自分が負ける可能性、それは限りなくゼロだ。このケロググという存在は、連邦のおかげでまさしく冷酷な殺人機械として完成しているのだから。

「俺はここだぜ。あんたを待つてるよ……優しい、ショーンの、パパ」その言葉がなぜか可笑しかったらしい。

ケロググは闇の中で、ゆがんだ笑みを浮かべた。泣くことも叫ぶこともできなくなったが、今の彼には笑うことだけならいくらでもできる。

|||||

マクレディを置いてきた私は、カールと合流するとまっすぐにヘーゲン砦へと向かう。

あの若者は怒るかもしれないが、わたしはそれでもケロググとの決着を自分ひとりの力でつけたいと願っていたから、このやり方に迷いはなかった。

砦の敷地は話に聞いたとおり。確かに大きかったが、私はすぐに怪しい場所を見つけることが出来た。

そこは露骨に、屋根の上にターレットが置かれ。近づくものを許さぬと、厳重な防衛体制が続いていたのだ。

カールの様子にも変化が生まれた。

建物に近づくくと、盛んに壁に足をつけては鼻をこすり付けつつ2本の後ろ足だけで立とうとする。

私が求めている匂いをもつ相手が、ここにいるのだと知らせようとしている。カールの姿を見て、私はそう確信した。

建物の中に入るのは難しくはなかったが、入ってみると今度は逆にここから出て行くことが困難であるということがわかった。

人間のように動き、攻撃してくるむき出しの機械と白い肌の人造人間達。

そいつらはまるで私がここに来るのを知っていたかのように、巡回を続け。そこかしこに罾やターレットなどを設置していたのだ。

——私を狩るために用意していた!?

信じたくはなかったが、なぜか直感がそうつげると確信が後から追いかけてきた。

だが、そうなると大きな疑問がわいてくる。

ケロググは、あいつはいつの間に私が彼を追っているということに気がついていたのだろうか？

私が地上に出てきたことを奴が知ったとは考えられない——嫌、考えたくはなかった。

それとも連邦で誰もがあこがれるダイヤモンドシティに、危険な傭兵が少年を連れて同居し。

突然一人で旅だったなどと——あれがこうなることへのブラフだというならば、いつの間に自分は奴の手の中に入り込んでいたのか、それがわからない。

(不安におびえるな！奴はいる、ここにいるんだ——予想と違ったが、奴と対決は間違いなく近い)

振り向くと、かがんだ私のそばに同じように伏せているカールがこちらを見上げている。

その目は純粹で、そしてこの厳しい戦いを前にしても恐怖はなかった。この犬に、私は感謝しかなかった。この旅にお前は関係ないとこの犬もコズワースか、サンクチュアリに預けるといふ考えがなかったわけではない。

だが、私のこの旅の始まりは老婆の幻視であり。

そこにあつた私の姿は、この犬との繋がりを口にしていた。実際に私が行ったほとんどすべてについてきて、一緒に戦場を潜り抜けた親友のような存在に今ではなっていた。

「一緒に行くこう、これからも。この旅のすべてを、お前には見ていてほしい」

言葉がわかったのだろうか。カールはフンと音を立てて鼻で笑い、それはまるで「弱気だな、大丈夫か？」と心配されているように感じた。

人の言葉を話さないが、賢く、生意気な相棒である。

(控えめで、生意気で、賢いか……まるで、もう一人のアキラって感じだな)

私はサングラスをはずし、ポケットに放り込む。

敵が巡回するフロアを指して、片手にコンバットライフル、もう片方にショットガンを抱えて静かに足を踏み出した。

十数秒後。近くで人造人間の侵入者発見の声にあわせレーザーの発射音が砦の中の静寂をやぶる、ついに戦闘が始まってしまったのだ。

彼らを率いる將軍は私用ということで、レオの顔を知っているものは少なかつたが。今のミニッツメンに大きな問題は生まれていなかった。正直、彼らの前に立つガービーだけでも彼らには十分だったので。

そんな彼らだが、年末を前にして新しい計画をまたひとつ。進めている。

勢力はいまだ連邦の北部の一部地域に限った影響力しかもっていないが、人々を通じて様々な居住地から助けの声が入ってきていた。とはいえ、さすがにその全てに応える力をまだ自分たちが持つていないことは、ガービーにもわかっていた。

そんな状況に変化を生み出すため、ミニッツメンはようやくのこと設立以来の懸案事項であった。ハングマンズ・アリーの支部化に今回着手する。

ここ（レッドロケット）から10名の新人を入れたミニッツメンを送り出し、かの地にて人々を助けるために危険な任務に携わってもらう。

この決断を下すには大いに悩んだ。

本音を言えば、もう少し状況が自分たちに有利になってからはじめてかつた案件だった——。

だが、サンクチュアリとミニッツメンには、今も週単位で入植を希望する人々が次々と訪れてくる。

それは子供だったり、老人だったり、家族だったり。おかげでミニッツメンは、訓練の必要な新人を入れれば50人近く数を増やすことができた。

だが、それはすべてがまだ兵士では——ミニッツメンでは、ない。

とはいえ、プレストン・ガービーは早速、連邦の東と南への進出について考えた。

サンクチュアリは崖の上の居住地との関係のおかげで、連邦の北部中央部に今は手を伸ばしているが。それ以上先に進むというなら、まだ時間が必要だった。

そこで南に目が向けられた。

ボストン——。

あの厳しいサバイバル空間に生まれたばかりのミニッツメンを送り込むことに不安がないではなかったが。あそこに支部を置くというだけで、ミニッツメンの影響力は格段に増すことができる。

これまでは北からレキシントンにトラブルを押し込んできたが、支部を増やすことであるのロブコ工場のある南側からも封じ込めることができるし。さらにケンブリッジ周辺にまで、ミニッツメンは手を伸ばせるようになる。

そしてすでに將軍が自ら用意した支部のための予定地もある。あとはそこに誰を派遣するべきか、それが問題だったわけだが——。

|| || || || || || || ||

レッドロケットにあるガレッジの前には、7人からのミニッツメンが並び。旅立つ前の最後の言葉を、プレストンからもらおうと直立の姿勢でじつと待っている。

そんな彼らを遠巻きに囲むように見守るのは、サンクチュアリの住人達——兵士の家族や恋人、そして子供達の好奇の目であった。

プレストンは3階の会議室から降りてくると、彼らの前に立ち。「休んでよし」と口にする。

目の前にはまだ幼い表情が残る14歳の少年、ジェイコブ・ファウラーことジミーと呼ばれた少年が硬い表情で緊張しているようである。

支部には10人を送るが、3人はすでに先遣隊として出発しており。彼等がその残りであった。

「君たち7人を、ここから送り出せることは本当にうれしく。そして誇らしく思っている」

プレストンの声にも熱がこもっていた。

「君らを送り込む、ハングマンズ・アリーは私が將軍と共に。このミニッツメン再建の最初の大きな一歩となると信じて、しかしそれはいつになるのか。ずっと不安材料として棚上げにされてきた」

残念だがプレストン・ガービーはここから動けない。

鍛えるべき新兵が、指揮する部隊が、彼の指示を必要としている人々がここにはまだいるからだ。

それは送り出された彼等が苦境に陥った時。

このガービーはすぐ隣には立てないかもしれないという、現実。

彼らには、この任務の難しさと。そしてそれを乗り越えるために、十分以上の力を発揮してもらわねばならないことを理解してもらわねばならない。

「君達が向かう場所はここと比べても簡単では決していない。ボストンコモンを中心にあふれ出る災厄に近く。同時に、すぐそばにはあの連邦のグリーンジュエル。ダイヤモンドシティが存在している。

ただそれだけで君達はさまざまな困難と、難しい任務の数々を覚悟せねばならないだろう。この言葉の意味を、それぞれが深く噛み締めてもらいたい。

簡単ではないのだ、決して」

どれだけ脅かしても、言葉の表現だけで足りることはないだろう。

「そして思い出してほしい。

ミニッツメンは再建から時を立てずに、ついに新たな支部をここに誕生させることができたことを。

この知らせに希望を感じてくれる人々もいるだろうが、不快に思う敵のほうが多いことも想像がつくだろう。彼らが牙をむくのは君達であり、我々なのだ。

そうだ、我々がミニッツメンなのだ。

苦しいときはこの言葉を思い出してほしい。

そしてこの乱れた連邦に正義の光を当ててべく、君達は握った拳で、容赦なく奴らの顎先を叩きのめしてほしい」

プレストンの背後にいた若い女性のミニッツメンが、布の束をプレ

ストーンに渡すと。プレストーンは列から2名を呼んだ。

布は1枚はミニッツメンのシンボルが、もう片方はかつて存在したこの国の象徴たる国旗が描かれてある。

おおっぴらには口にはしなかったが、ミニッツメンの旗にはプレストーンを、かつてあった国の旗はレオを意味していると彼は考えていた。

自分たちがいなくても、この10人には背後を自分たちが常に見守っているぞという親心である。

プレストーンはそれを手渡すと、さらにその上から手を差し出した。相手は片手で受け取り、ガービーの手を硬く握り締めてきた。

「それではミツキー支部長——健闘を祈ります」  
「あなたの期待に、必ず応えよう。プレストーン・ガービー。ミニッツメンに栄光を」

ミツキー支部長は——本名をノア・マクナマスという先住民とメキシコの熱い血を受け継いだ47歳の元・ミニッツメンである。

プレストーン・ガービーがルーキーだった時、大先輩であった彼は。家庭を重視し、一度はそこから離れた。

だが、ミニッツメンの復活を知るとこうして再び旗の下へと駆けつけてきてくれた。

一度はリタイヤしたとは言っても、貴重なかつてのミニッツメンを知る人物である。ガービーは彼を重宝し、こうして今回も重要な役を彼にまかせることにしたのだ。

(彼ならやってくれるはずだ。きつと)

とは言っても、到着後の彼等がすぐに何かを始めるといっわけではない。

この場所と同じように、彼らの手で居住地は再度改築され。それが終われば周辺の情報を収集し、それからさてどうしよう?となるわけだ。

プレストーンもその頃までには、ここから南側への影響力をさらに強めておかなくてはならない。

プレストーンとミツキーは無言で互いに敬礼を交わすと、ミツキーの



合図で7人は静かに歩き出した。

レッドロケットに集まる、見送りにきた住人達はその後姿に歓声を上げ、見守るプレストンもそれが見えなくなるまでその場を離れようとはしなかった。

(将軍、アキラ。あんたたちは今、どうしている？俺の、俺達のミニッツメンは順調そのものだ。旅の空の下であつても、どうかそれが届きますように)

次第に小さくなっていく7人の後姿を、連邦の太陽が彼らを見下ろしている。

あのいつもと同じ——毒々しく朱に輝く、太陽が。

|||||

青い光線が前方から何本ものびてきて、自分の横を過ぎると後方の壁に当たって光がはねる。

ヘーゲン砦を占拠した人造人間たちはレオがこれまで戦ったどの人造人間たちとも違っていた。レーザーはこれまでになく高出力で、装備は人造人間のくせにアーマーを身につけていて、さらにタフになっていた。

いつものように裸で武器を手にしたタイプの人造人間なら、このライフルの2・3発で決着がついた。

しかしアーマーを身につけた彼らは、あまりにも強靱で。攻撃しても、撃っているというよりも削っているような感覚を覚える。

そして自分はその人間、その肉体はあまりにも弱かった。

入り口から進入して、何体かと交戦を終えると。そこにはすでに酷い姿のレオとカールがいた。

壁に寄りかかるようにひざから崩れる中、レオは必死でステイムパックを3本ばかり空にした。

人造人間、1体がこれまでになく強すぎる。

ステイムパックの反動でのどが渇き、新しい浄化水を一本まるごと飲み干した。

「カール、お前もな」

私はそう言うと、やはりステイムを打ってから、新しい浄化水を取り出して半分までを自分の手のひらにためてから犬の口元に持つていく。

黒とブラウンの美しい毛並みをした犬も、目元にはレーザーによる火傷がついており、右側の背中の毛が燃えながら出血していた。

(勝てるのか、この様で？届くのか、あの男まで？)

正確な射撃によってレーザーに貫かれた痛みの残る左わき腹を気にしながら、私は弾倉の交換をおこなった。

そして正直な話、一人でここにきて正解だと思った。これなら友人たちに自分のことであの世への道連れになるのも、申し訳ないと思うが、カールだけですむからだ。

アキラや、パイパー、プレストンらが来ていたらと思うと、おかしなことだが安堵している自分がいた。

「カール、いけるか？それとも、一人で帰るか？」

笑いかけながらそう口にする、向こうは「馬鹿を言うな」というように、まだ震えの収まらない足で立ち上がって見せた。

座り込んでいた私もそれに負けていられないと腰を上げる。

(前進だ)

まだ生きている、死ぬつもりはない。

ケロッグのところへ行つて、きつと必ずショーンを助けてみせる――

そう思っていたのに、私はミスをした。

階段を上り、右手の部屋の奥になにかが動く気配を感じた。

しかし、私の脳はそんな私に「馬鹿野郎！」と大声で叱り付けていた。私は遠くの危険を察して、近くにある凶器の存在に気がつけなかった。

すぐ近くからウイーンと機械音がして、あせって振り向く私の目に飛び込んできたのはこちらに狙いを定めているターレットの姿があった。

何かをする力が、この時の私にはなかった。

代わりにカールが動いた。力強くコンクリートを蹴り上げ、私の体めがけて頭突きを入れたのだ。

ターレットが火を噴くと、それは私ではなく逃げ遅れたカールの体に直撃した。悲痛な声を上げ、鉛弾によって翻弄された犬の巨体は床の上をふつとんでいって派手に転がっていた。

「カール！」

あれはまずいやられただとわかった。

人ならば致命傷で即死していたっておかしくないはずだ。私はなすすべなく、パニックになる。

無様にも両手を床について、あわてて立ち上がろうとしたその途中で、自分の体が持ち上げられていることに気がつき。続いて、苦痛に顔をゆがめた。

いつの間にか背後に人造人間が立っていて、ちょうど目の前でひざをついていた私の首に手を伸ばすと。それでもって吊り上げながら、首を締め上げてきたのだ。

(マズイ、これは本当にマズイことになった)

後ろから吊るされながら首を絞められるなんて最悪だった。

どう抵抗しても、この体制から逃れる手があるとは思えなかった。

私はそれでも本能的に、両手に握ったライフルとショットガンを放り出し。首に自分の手を持っていききたいという衝動に必死に抗っていた。

相手の姿が見えない絶望の中で、私は運を天に任せて両手の武器の引き金に指をかける。発射する弾丸が両腕に衝撃を加わるのを感じることができると、どれほどの効果があるのかは見えないからわからない。

これまで私は自分が運の良いほうだと信じて疑わなかったが、どうやら思い上がっていたようだ。

状況は変わらないまま、撃ちだす弾丸が空になる頃には。私の表情にチアノーゼ（酸素欠乏症）と呼ばれる症状から真っ青なものへとなっていた。

もはや希望はなく、私は欲求に従い。両手の銃を放り出すと、必死で首を掴む機械の手を引き剥がさんと抵抗を始める。もちろんそんなことに意味はない。

もはや運命はここで終わるのだと告げているように思えたが、私はまだ諦めることはできなかつた。

——わずかに一瞬だったが、床の上に地雷を見たと思った。

そこにこの人造人間と倒れこむことで、脱出できるかもしれない。冷静に考えれば、あまりにも運任せで計画とも呼べないものであったが。それを自殺行為とは考えずに、私は深く悩むことなく即座に実行しようとした。

なにがどうなったのかはわからないが——目論見どおり、私は人造人間の腕の中で窒息しかけながらも奴を下にして地雷の上へと倒れこむことに成功した。

ただ——問題があつた。

私はそれをただの“ひとつの地雷”と考えていたが。実際は床一面にそれがしきつめられており——つまりそこは地雷原となっていたのだ。

そんな所に、いくら人造人間を挟んでいるからとて、ただの人間が倒れこんで生きていられるだろうか？

そんなわけがない。

地雷の炸裂する衝撃が両者の体を襲うと、人造人間は破壊された。そして奴の腕の中にあつた私もまた破壊され、心臓は簡単に停止してしまった——。

この爆発によって、ヘーゲン砦の全体が揺れた。

ケロググはその音の意味するところをなんとなく理解すると、静かにフハハハと悪党らしく笑い始めた。

目の前のターミナルには、ケロググに向けた次の指令が表示されて

いた。

笑うことをやめないまま、しかしなぜか乱暴にケロググはキーボードに何かを打ち込むと、最後に実行キーを押す。

DELETE (消去)

彼の前にある端末の画面にはその文字だけが表示され、文字の最後にあった下線だけが明滅を繰り返していた――。

## キッドナツプ (Akira)

ワット・エレクトロニクス——。

外側から見ると、それは窓のない倉庫のように見える建物だが、内側を見るとそうではないことがはっきりとわかる。

旧世界では珍しくもないが——いや、そうでもないかも。窓がひとつもないとは——ここはいわゆる大型店舗とよばれたそれである。

そこかしこに見える小さな小部屋は従業員が使い、崩落してしまっているフロアの半分から見える地下は倉庫として使っていたのだろう。そして——。

「なるほど、B. O. S. が興味を持つのもわかる。ここに並んでいるロボットのほとんど、手がつけられていない」

「だとしたら、あれはいい商いだったみたいだね。このガラクタを売れば情報は軽くこえるはず」

デイーコンの言葉にそういつて反応するが、当然だがそんなつもりはない。

広告用らしいアイボットやMR・ハンディ、プロテクトロンが並んでいるのを軽く選定するつもりで確認しようとした。僕はその中の一台の前に立ち、ピップボーイと繋いでみる。

「しかし、窓がないってのによくここを店にしようと考えたもんだな。不気味じゃないか」

「文明の光つてのが昔はあったんだよ。まだ生きているかも、探してみようかな」

言いながらも、僕は眉をひそめる。

(気のせい……かな?)

プラグを引っこ抜き、さらに隣のロボットともつなげてみる。

「どうした、なんだか深刻そうな顔をしている」

「……ふむ、そうかもしれないし。そうじゃないのかもしれない」

「なんだって?」

「ロボットだよ。ここにいるロボット——何かを行動するように指示が出されているのに。なぜか強制的にシャットダウンしている。い

や、させているのか」

「つまり、こいつらは命令を受けながら、わざと停止されているということか。どういうことだ?」

「わからない——調べたほうがいいかもね」

言いながら、僕は念のため覗き見た2台のロボットにはシステムリセットを新たに命じ、仕込まれた指示を無効化させておくことにする。

「アキラ、こちらへ来てもらえますか」

「キュリー?」

「エイダがよいものを見つけた、そう言っています」

「わかった」

エイダはどうやったのか、地下の倉庫に降りていた。

「エイダ、なにを——」

「これです。これを見つけました」

「……こりや、驚いた」

完成されたアサルトロン、そこにはなぜかそれがあつた。

人型の戦闘用ロボットが民間の店舗にいるのも驚きだが。どうやらよりにもよってこいつで広告をさせようとしたようで。体には黄色とオレンジのド派手なペイントが施され、間接部には店員がつけたらしいフリルらしいものがつけられていた。

「俺の想像をはるかにこえているが、相棒——こりや、なにをしようとしてたんだ?」

「広告用に、道化師でもさせようとしていたのかも……よくわからないよ、自分も」

言いながらも僕は早速、ピップボーイの発する光で、その四肢をじっくりと観察する。

間違いない、本物のアサルトロンだ。驚いたことに純正品だった。「やったぞ、エイダ。これでついに、君も本物のアサルトロンとして完成できる」

「はい。ですが、私が望むのは、あなたにセントリーロボットにして生まれ変わることです」

「へッ、どうやらロボットも人間に似てくるらしいな。物騒なことを言い始めたぞ」

デューコンはからかうが、僕はそれどころではなかった。

光量が足りず、舌打ちして立ち上がった。

「よし、とりあえず電力をなんとかしてみようか。エイダ、建物内になにかいるか？」

「センサーに、これといった反応は見られません」

「なら、大丈夫だろう。デューコン、このままエイダと地下倉庫の事務室を。キュリーは1階、俺は2階を見てくるよ。手分けして、手早く終わらせよう」

「そうだな、そうしよう」

|||||

この場所の配電盤は、どうやら1階にあったらしい。

キュリーの声があると、次に店内のわずかに生き残った光源に力が注ぎ込まれていく。

壁の上のほうをまさぐっていた僕は、自分の背後で電子音がしたのを聞いた。振り返ると、この部屋に唯一置いてあった端末に、文字が表示されていた――。

デューコンとエイダも、地下で同じく動く端末を見つけた。

さっそく座ると、デューコンは中に何が入っているのかを確かめようとした。

「なにか、ありましたか？」

「どうかな。輸送と品物のリストがほとんどみたいだな。あとは―― スタッフ内での連絡事項？」

「たいしたものではありませんでしたね。では、戻りましょう」

「いやいや、こりやちよつとしたネタ集めの役に立つかも」

「え？」

「誰にでも信じられるような嘘をつくには、本当のことを知らないと



いけない。俺の、哲学だ」

「……嘘をつかないという選択は選ばないのでしょね」

「ロボットが皮肉か？本当にお前たちは面白い——」

画面にはいくつかの項目があったが、ディーコンは深く考えないで一番上にあつた「デモンストレーション用プログラムの実行」を選んだ。

——選ぶべきではなかった。

画面には続いて「シークエンス、実行中」と表示される中。店内のロボットたちが次々と電源が回復していく。

「イラツシヤイマセー！イラツシヤイマセー！」

そういつて騒ぎ立てつつ、周囲の詮索をはじめめる。

その中の数台が、この場所で別々に存在する異物を感知すると。周囲のロボットたちにもその情報を回してしまった。

「イラツシヤイマセー！侵入者、オマエタチヲ監視シテイルゾ！」

動き出したそれらは、まるで水が高いところから低いところへと流れるように。“2つ”に別れて、侵入者たちの下へと殺到しようとしていた。

キュリーにとっては何もかもが信じられなかった。

電源が入ったのを確認して、何気なく部屋を出ようとしたところ。フロアにいたロボット達が一斉に彼女を注目するのとつきり解除されていると思っていた武装をキュリーに向けようとしてきたのだから。

運良く部屋の中へと戻ったが、わずかに遅れて部屋の扉が砕かれ。入り口が徐々にいびつな形へと変化していくのを見た。

「大変です！ロボット達が、彼らは私たちを攻撃しようとしています！」

それはロボットらしい、大変素直な反応であった。

自分がしでかした失敗に気がつき。「畜生」とうなりながらディーコンが立ち上がった時。

エイダはすでに行動を開始して、キャタピラを全開にしてドアの向こう側でまさに動き出したばかりのプロテクトロンを圧倒的な火力でさっそく吹き飛ばしていた。

「エイダー！」

「デューコン、今は合流するのが先です。アキラやキュリーはそれぞれ上にいます。押し込まれては、危険です」

「わかってる」

とんでもないトラップに自分が軽口を叩いて引つかかってしまったという後悔を、歯を食いしばるように押し殺し。デューコンも武器の引き金を引いた。

静寂に包まれていた店内は、一変してまさに大騒ぎへと変わろうとしていた――。

|||||

画面には誰か――たぶんだが、上司が部下に送ったのであろうメッセージが書かれていて、それに返答する分が添えられて表示されていた。

——あんたも この会社も クソだ。

——俺の方から辞めてやるよ。これが欲しいか？

とあり、その下には「プロトコルの緊急停止」なるものが表示されていた。

（上司の嫌味に部下が耐え切れず、つてことなのか。だが、停止とはなにを？）

ちようどこの瞬間、ドアの向こう。すぐ下の階から、ロボットの声と同時に攻撃する騒ぎが始まる。

僕にためらいはなかった。何も考えずに、画面の緊急停止を実行しようとした。

激痛が走り、信じられないものを見た。

僕の前腕がいきなり何の前触れもなくポツキリと折れ。直前までキーボードに置かれていた左手は、宙に歪に浮かんで指がそれでも必

死にボタンを押そうともがいている。

「……………っは!？」

不意をついた激痛に僕は何もできないまま、無音の悲鳴を上げていた。

そして迷ってしまった、この僕が。

折れた前腕を確かめるか、それとも端末の停止を実行するのかを。座った姿勢のまま、顔をしかめ。硬直する僕の横に、静かにそれは姿を現してきた。

見たことのない塗装が施された、T-51 パワーアーマーだった。

「それっ——ステルス・モードか」

こちらの反応も、言葉にも答えなかったから、それで理解した。敵だ、と。

僕の唯一、自由な右手は新しい選択肢を選ぶ。

コートの下、脇に吊るしたデリバラーを抜いて反撃しようとしたのだ。

だが、引き金を引く前に僕の体は宙を舞う。相手は座っていた僕を、簡単に放り投げてみせたのだ。壁に叩きつけられ、天地を逆さまにしてそのまま崩れ落ちていった僕は再び走る激痛にまたもや声にならない悲鳴をあげた。

(何者だ? いつからいた? B. O. S. にはめられた? なんで?)

痛みを忘れたくて、次々と疑問をあげるが。答えはほとんどないため、すべての疑問は空欄提出することになりそうだ。

折られた左腕が使えないというだけで、もうずいぶんと僕の動きは鈍くなっていた。

あの不愉快な口の中の渴きも感じ始めているが、今はまずい。

これまでの人間と違い、今回の相手はあんなパワーアーマーなのだ。

意識を失ったとしても状況が変わるとは思えない。あれの厚い装甲に阻まれてしまうのは間違いない。噛み付いて、歯が欠けたとか、しやれにならない。

僕は壁際にひっくり返ったまま右腕を伸ばすと、握ったデリバラーをめちやくちやにして撃った。

援護は期待できそうになかった。

ロボット達が次々と「侵入者ダー！」を繰り返しているのが聞こえるし、レーザーや銃声も聞こえる。

そしてこちらの弾倉が空になる前に、ひっくり返ったままの僕の胸倉を太い鋼の腕が伸びてきてつかむと、強引につるし上げる。

(このっ、目ならどうだ!?)

相手に吊り上げられ、ようやく形の上ではお互いが向かいあうことができたが、僕の視野は恐ろしく狭くなっていく。

デリバラーの銃口を相手のヘルメットに突きつけたところまでは想像通りだったが、そこでむこうの空いている手がこちらを軽く払いのけ。ただそれだけで僕の手の中の小さな大砲はどこかへ飛んでいってしまった。

左手はもう使い物にはならない。

宙に浮く両足もできることはない。

右手の一本だけで、僕はこの状態を切り抜けなくてはならない。首の骨を折られるか、ねじ切られるなんてのは御免である。

——弱点はないんですか？

——そうだな。強いて言えば、関節部分くらいかな。

これが人のひらめきというものなのか。

いきなり脳裏に、レオさんからパワーアーマーの操縦を習った際に思わず質問したときのことかよぎった。

腕の痛みに加え、左の脇にも重い痛覚を感じていた。

口の中の渴きもますます悪くなってきている。

銃でもっとも扱いやすかったデリバラーを失ったことで、僕の選択肢はもう一つしか残されていなかった。

払われたばかりの右手の中を、相手は見えていなかったはずだ。そこにはピックマンの鋭い刀身が光っている。

僕はそれをこちらの首に伸ばしている太い鋼に覆われた左肘に何度も刺して行く。

それはあまりんもあつさりど、ポキリと音を立てて折れてしまった。

反撃の手段はこれで尽きた。

僕はただ、右手に残された刃の柄を両目を大きく広げて驚くだけしかやれることはなかった。

こちらの首にかかる相手の力が、増し始め——僕はそこで意識を失う。

|| || || || || || || || || ||

不意打ち的に始まった戦闘だが、情勢は一気に覆った。

店頭に置かれたばかりのロボット達に比べ、やはりエイダの戦闘経験値とアキラの改造は性能にはつきりと現れていた。

レーザーと鉄のスパイクが相手のロボットを素早くスクラップに変え、排除していく。

地下の倉庫からデイーコン達がフロアのロボット達の背後を取ると、キュリーもチャンスと見たのか。今度こそ部屋を飛び出し、レーザーやカッターを振り回していく。

(アキラの奴、なにをしている!?)

デイーコンは焦った。

2階に行ったアキラが、この状況でも静かにしているというのはどう考えてもおかしい。トラブルに巻き込まれたら、自分からそこに突っ込んでいくような奴だ。そこに他人のトラブルかどうかなんて、考えはない。

「援護をくれ、あいつらと合流する!」

エイダにそういい残り、デイーコンはフロアの階段を駆け上ると部屋の中に駆け込みながら文句を言った。

「アキラ! 大騒ぎなのが聞こえ——っ!」

部屋の中には誰もいなかった。

無人——しかし、明らかに誰かが何者かと争った形跡がそこにあった。

「アサルトルンです！」

エイダの声だった。

そういえば地下に置いてあったあれと、ここまで来るときに見なかつたような気がする。

部屋の外へ、顔だけ出すと嫌なものを見た。

エイダとキュリーの攻撃を軽々と蜘蛛のようにフロアを移動するド派手なペイントのアサルトルンだが。頭部のレーザーを用意していて、不気味に真っ赤な輝きを発していた。そしてどうやらエイダもそれに対抗するつもりか、見慣れたあの顔の中央がオレンジ色に輝いていた。

「おいおい、こんな場所で大砲撃ち合うつもりかよ」

デューコンはそこからレーザーを3発ほど撃ったが、あまり効果があるようには見えない。

そして時間切れだった。

動かなくなったキッチンユニットの上に四つん這いとなったアサルトルンが先にレーザーを放つ。

デューコンはあわてて首を引っ込めると、扉の近くを縦に一文字の赤い光が走る。キュリーは自分の姿勢制御を停止させ、1階のフロアから重力に任せて地下に落下していく。

その姿を捉えようと光が追うが、床に転がったキュリーを捕らえる前にエネルギーが尽きる。

エイダはその瞬間を待っていた。

相手がフロアから地下倉庫を見下ろして動きを止めていたところに、オレンジ色の輝きから放たれた少し明るい朱の色をした強力なレーザーが、同じ型のロボットに直撃させた。

|||||

ワット・エレクトロニクスから転がり出てきたデューコンは半狂乱であった。

「畜生、畜生！どこだ、どこにいった！」

周囲を見回すが、離れに見えるチャールズタウンがあるだけで。いつもはこの周辺に隠れているとされるレイダーもスーパーミュータントも。その影どころか、まったく人の気配が感じられない。

「エイダ、レーダーは!? あいつはどこだ、見つけてくれ!」

「――反応、ありません。申し訳ありません」

なんてこった、なんでこうなった!

「彼は消えました、彼は消えました。ありえませんが、そんなことがおこるはずがありません」

「キュリー、何か見なかったか? なんでもいいんだ」

「わかりません、わからないんです……」

混乱の中に彼等は居た。

彼らをつなぎとめる男が居た。その男が、消えてしまったのだ。

アキラは消えた、同じ場所にいたにもかかわらず何があつたのかわからない。そんな突然の出来事だった。

時はそれでも刻み続ける。

それはディーコン達の前から青年が消えて9時間後のことである。連邦の中部。ボストンからは北に、レキシントンからは東に、メツドフォードからは西にと位置する場所に奇妙な理由で開放されている居住地があつた。

そこは居住地の四方を壁でさえぎり、さらにターレットで油断なく、接近しようとする不審者に目を光らせているというのに。この場所に訪れる客人を歓迎する、などと周囲に噂を流している場所であつた。

すでに空には太陽はなく、すっかり夜である。

居住地の門に居座るスワンソンは、その場所の責任者であるジェイコブ・オルデンと並んで訪問する重要な客人を待っていた。

「今日は、待たせますね」

「まあ、そういう日もあるさ。もう少し待ってみようじゃないか」

待ち人は、そこからさらに1時間遅れでコベナントに到着した。  
塗装にシャークの絵を入れたT-51パワーアーマーの2人は、なぜか商人でもないのにバラモンを引いていた。

「あんたらが、時間に遅れるなんてな。少しあせってしまっただよ」  
「……」

「ん？——ああ、心配は要らない。この時期になると、旅人も商人も誰もいない。君たちの姿を見て、驚くことはないだろう。大丈夫だ」  
「……いつものやつは、どれだ？」

ジェイコブはすぐにポケットの中のホロテープを差し出した。  
こちらから出せるゴミのリストと、こちらが不足しているゴミのリストがそこに入っている。

パワーアーマーは無言でそれを受け取ると、中身も改めることなく自分のポケットにそれを放り込む。

「——他には？あるか？」

「ある、実はあんたらにまた仕事を頼みたいという、要望が出ている。相手は決まっているから、あとはそちらの都合しだいなんだが」

「仕事は、それはいつだ？」

「出来るだけ早く、そういう話だ。相手はキャラバン、すでにこちらで選んでおいた」

「数日でも戻ってくる。また話そう」

「そうだな、そうしよう」

相手はジェイコブの話を最後まで聞かなかった。

バラモンをつれたパワーアーマー達は、再びのっしのっしとあの独特の足音を響かせて、コベナントから去っていった。

ジェイコブの隣に、スワンソンが戻ってくる。

「素直に帰りましたね。あいつら」

「当然だ。彼らはプロだからな。必要じゃないことはしないさ。こっちも楽でいい」

「——あの連中、どうやらよそで仕事をやってきた帰りのようですね」

スワンソンの思わぬ言葉に、ジェイコブは驚く。

「お前っ!?!……彼らの荷物を、バラモンを見たって言うのか？」



「ええ、まあ」

「なんて、なんて危ないことをっ」

「あなたが彼らと話してくれていたんで、ちよつとだけ。何を運んでいるのか、興味があつて」

「——しようがないやつだ。それで？」

「え？」

「バラモンだよ！彼らは何を運んでいたんだい」

スワンソンはおかしな表情を浮かべる。

「ええ、それなんですけどね——」

バラモンに近づいていく。

荷物の陰から出ている黒髪を見て、人を運んでいるのだと知った。

さらに覗き込むと、それがみえてしまった。

あの Vault 居住者たちが着るジャンプスーツ。Vault 11と書かれたそれを着た東洋人が、目を閉じて眠っているようだった。

|||||

それはアキラ本人であつた。

ワット・エレクトロニクスで抵抗むなくさらわれた彼は、今は深い眠りの中で夢も見ていなかった。

バラモンの揺れるからだだが、その眠りから覚める力を幾分か弱めてもいた。

時折、ボウとした頭をあげることがあつたが。簀巻きにされた自分が、バラモンの歩く地面を空の代わりに見つめるだけであつた。

体のそこかしこに痛みはまだ残つてはいるが、なぜかあの餓えや渇きのようなものは感じなかった。

そしてそれが彼の記憶するこの年の最後の記憶になった。

12月30日、連邦の誰よりも早く。

アキラの2287年は闇の中で終わりを迎えた。

## RE:UNION

それは時間を大きく巻き戻す上、夜の話になる。“観察者”は独り。周囲がまだ燃える木々の間に立ち、その中をなんでもないかのように進んでいた。

やせ細った木々は、それぞれが燃えてはいたものの。大火災というほどのものではなく、勢いは明らかに収まっているようだが。とはいえ、やはりその中を歩くなどと正気を失う行為である。

(あつた)

それは木々の間に、突如としてあらわれた。

見たことのない技術によって作られた、一隻のスペースシップ。

先日(アキラが奇妙な教団に勧誘された頃)、大地に落ちてきたこの機体をようやくにしてこの“観察者”は発見したのである。

(操縦者は不明。だが、遠くにはいつていないな)

墜落現場の様子からそう結論を出した“観察者”は、球状のものを取り出し。そこについたスイッチを押して、宇宙船の隣に放り出した。

これで待機していた回収班が動き出し、この宇宙船から見えそうな部品を取り出しにくることになっている。

だが“観察者”の仕事は別にまだ残っている。

宇宙船から離れていこうとする、人間とは明らかに違う。緑の血痕の先には小さな洞窟があった。

目当ての存在はそこに居る。“観察者”は確信を持つと、そのまま静かに中へと入っていった……。

時間は再び、舞台をヘーゲン砦へと戻す。

フランク・J・パターソン Jrことレオが、武装してさらに危険な存在となった人造人間の分厚い守りを前にまさに膝を屈した瞬間。

その階下、後方数メートルにまさかこの“観察者”がいたなどと、誰が予想しただろうか？

話は一匹と一人が、決死の覚悟で突入しようとするところまでもう

一度戻らないといけない。

ボストンコモンで育てたギャングが、Vault 111のこの男に破壊された後。“観察者”は新たな任務として、大気圏を貫き落ちてきた宇宙船の捜索に当たっていた。

その帰り道、まさか目の前をその男と犬が再び現れた時、“観察者”は自分の中に湧き上がる好奇心にあがらうことができず。つい、そのうしろをついてきてしまったのである。

そしてそんな調子だから、当然のことこの時のレオの事情などというものはさっぱりわからない。

だがそれ以上に、相手がいきなり目の前で倒れるなどという展開もまた考えてもいなかったのである。

(ま、まづいな。どうしたらいい？どうしよう？)

思わず自問してしまう“観察者”だが、これはそもそも、おかしい話である。

見捨てればいいのだ。立ち去ればいいのだ。

ただ黙って、それだけでいい。

しかしその発想を、なぜかこの時の“観察者”は考えられなかったのである。

それどころかまさしくその正反対の行動を開始する。

何もない壁際から、ぬるりと出てくるその姿。

顔はガスマスク。髪まで覆われていて、性別は相変わらずわからない。

少年のような薄くスリムな体系に、ぴったりの黒が強い灰色のプロテクトスーツは間違いなく戦闘を意識したものである。

さらにその上に、はじく光をまぶしいばかりの銀色にする不思議な黒のショートマントを身に着けていた。

行動をおこす“観察者”の動きは尋常の人のそれとは比べられない速さがあった。

床をけり、ひと呼吸する間に階段を上りきると。新たな侵入者にわずかに反応が遅れたターレットを攻撃。

そのまま部屋へと突入すると、残る敵の姿を探す。

その手に握られた武器は、今回の狩りの成果ともいえる不気味に輝くエイリアンブラスタードである。

自分以外に動く存在が近くにいないのを確認すると、“観察者”は迷うことなく人造人間に抱きつかれたままのレオに近づき。いきなり手にしたスティムパックを彼の体に投与する。

そして血だるまのレオの反応を見る。

(ショック死、だな。地雷原に突入、爆発による衝撃からの圧迫死。意識はなく、出血が激しい)

手遅れだと、単純にそう思った。

「聞こえるか？いや、そんなわけはないか。お前はあの時、マローンと彼のトリガーマン達を狩った。本来であれば、お前は敵だが——そうともいえない別の事情というのがある。わかるか？」

返答はない。当然だろう。

「お前にはすでに、貸しがある。我々の小さな宝物を、あのポストンコモンへと導いてくれた。そんな日が来るのを、奇跡が訪れることを我々は待っていた。

あれはもうすぐ我々の家族の下へ、帰ってくる。お前のおかげだ、これは事実だ」

そういうと懐から5本のアンプルが収められたシルバーケースを取り出してきた。

あの時、宇宙船のそばの穴倉の中で傷ついていた存在。それから回収し、生み出した貴重な血清がそこに並んでいる。このアンプルを一本でも欠けさせるということは“観察者”の任務は失敗したとみなされるに等しかった。

それでも、そんな貴重なアンプルを“観察者”はここで使うことを決めていた。

レオの死体から一旦は離れると、“観察者”は廊下へと出る。

そこには、レオと同じようにターレットの攻撃をもろに受け。それ

でも運悪く死ねずにいた、傷ついて虫の息となったカールが横になっていた。

（哀れではあるが――）

いきなりアンプルの一本を取り出すと、針のない注射器にセットしてまだ息のある獣の皮膚に押し当てた。

不気味は緑の液体はシュツと音を立てて消えると、それまで荒い息を吐いていたカールの呼吸が止まり。かわりにがくがくと激しい痙攣を始めた。

――これなら大丈夫だろう

それを確認した“観察者”は再びレオの元へと戻ると、やはり彼にも同じようにアンプルを一本。死んだ肉体の中へ投薬した。

「ここでお前が何をしたいのかは知らないが、手を貸すのはこれつきりだ」

そう口にしながら、さらにもう一本。

アンプルを3本も空にして立ち上がる“観察者”だったが、次の瞬間にはこの後を見届けることなく、その場から走り去っていつてしまった。

包丁でリズムカルに千切りをしているかのような軽い足音は、ある瞬間から完全な無音へと変化する。もはやあれがどれほど遠くに離れていったのか、わからない。

風のようにあらわれ、そして消えてから数分。再び、死を感じさせる静寂があたりに広がっていた。

だが人の気配が消えた砦の中から、むくりと立ち上がる存在が2つ――。

|| || || || || || || || || ||

――やはりこんなものか

追跡者への嘲笑と、そしてそれ以上の失望はケロググの力を驚くほど奪っていた。

わずかな苛立ちと怒りが、あの戦前からここまで追ってきた、あの

男にとっては手がかりとも言うべきデータを抹消した。後はここに置いておいた武装した人造人間たちを集め。次の任務へと立ち去ればいい。

「つまらんな……」

こうなることはわかっていた。

だが、想像通りに終われば。それは退屈とかわらない。

任務への情熱。嫌、生きることすら退屈し始めている男にとって、驚きのない己の人生に飽きていた。

——褒められたことではないね、キミ

インステイチュートでの“メンテナンス”では、そう言われていた。

仕事、組織、そして人生。この順番で「飽きた」と言う様になれば、死人と同じくなるだろう。まさにそれが正しいと、自分でもわかっている。

そうなる前に誰かの撃った弾丸で死ぬか、自分で自分の頭を撃ち抜くか。違いはそれだけになってしまう。

そしてどうやら後者が、結局はこのケロッグの未来であるらしかった。

「お前達、シヨウは始まったとたんに終わっちゃったよ。撤収する、すでに次の仕事が入ってな」

無線にそう呼びかけるが、ケロッグはまだ椅子から立ち上がろうとはしなかった。

空になった端末の画面を眺め、そこになにか書いてないのか読み込むかのように目を離さない——。

人造人間が3体、一列になって廊下を進んでいた。

ケロググから撤収の指令が下り、今は回収できるものをこうやって探して回っているのだ。ターレットは分解し、他にも使えそうな部品があればそれを持ち帰るつもりだった。

だがその先頭に立つ人造人間は歩調を緩めないまま、いきなり警告

を発した。

「誰か、あるいはなにか。わからないが、そこにいるのはわかっている」

文脈がおかしいが、とにかくそれは存在を感知しているということであつた。

相手は進行する先のほうから、低いが力強いうなり声と、リズムカ  
ルに発射するライフルで返答する。

完全武装の人造人間達がたいした抵抗もできずに破壊されると、通  
路の反対側から破壊者達が姿を現す。

ああ、なんてことだろうか。

先ほど抱えられたまま黄泉路へと悲痛の声を上げて墮ちていった  
はずのあの男が。

200年の時をこえて、この壊れた世界へと召喚されたあの男が。  
おぞましくも異形なる存在の力で現世へと猛スピードで帰つてき  
た、あのVaultierからの生還者が。

フランク・J・パターソン Jrは——レオは。

真つ赤な己の血で上半身を汚し、抑えることを忘れたらしい燃え上  
がる報復心をあらわに、らんらんと輝く目は目指す標的を捜し求めて  
いる。

そしてその隣には、同じく自分の血と。いまだに治りきらぬ銃に  
よってつけられた醜い傷口をさらすカールが、歯をむき出しにして興  
奮を隠そうともしていない。

機械が占拠するこの砦を、2匹の獣と化した狩人が彷徨いはじめて  
いた——。

|| || || || || || || || || ||

暗闇の中、最初に気がついたのは砦の復活させた機能のいくつかに  
故障のランプ表示が新たについていることに気がついたからだ。

オンボロめ、と最初は毒づいたが。すぐにそれが間違いだとわかっ  
た。

砦の入り口に配置した人造人間達からの反応がいつの間にか消えていたからだ。

まさかと思うと、次にエレベーターが起動したと表示される。

わずかに復活したエレベーターの中にあるカメラをなんとか動かしたが、ぼんやりとした画面がはつきりした時には。そこから何かの外へでていく影が、一瞬だけ捉えることができただけだった。

ケロググの中の失望が、希望へと変化していく。

同時に気力がわきあがり、久しぶりの戦いを思うと血が沸き立つ感覚に喜びを覚える。

館内のマイクをオンにする。

もはや人造人間などという、自分が率いなくてはならないオモチヤなど、どうでもよかった。

ケロググの第一声は、奇妙にもまるでよく知った相手にでも語り掛けるような。そんな馴れ馴れしくも、思いやりのある言葉からだった。

『古い友人でないなら、冷凍食品だったとは。』

最後にあつた時は、お互いあまり愉快なことにはならなかったよな』

一方的な好意に満ちたアナウンスは続く。

『家が200年ものあいだにボロボロになったのは気の毒だった。しかし、ここではルームメイトは必要ないんだ。出て行ってもらう』

反応して動き出すターレットにカールが飛び掛かると歯を立てながらそれを押し倒す。

レオはこちらの姿を探す銃口の反対に回ると、駆動部分に指をねじ込む。コードの束を握り締めると、力任せに引つ張るだけで、それは煙を吹いて動きを止めた。

『なあ、いいか？俺にムカついているんだろ？それはわかる』  
扉を蹴る。

あつさりとそこに穴が開き、カールをつれてそこをくぐる。



『だが冷静になったほうがいい。ここでなにかやり遂げたいと考えても、それであんたが手にするものはなにもないだろうよ』

遠くに人造人間の放つ特有の間接の駆動音を聞いた気がした。

カールの低いなり声がそれが正しいと伝えてくる。

ライフルを持ち替え、スコープを覗くとそこに歩いて巡回している人造人間達を確認した。

引き金を引いた。

撃った弾丸は、スコープの中の人造人間の足を吹き飛ばし。たまたまずそいつは床に倒れこんだ。

『根性って奴か。意志の強さは認めるよ、立派なもんだ。だがそれだけさ』

さらに進むと、今度は砦の復活させられたレーザー装置が起動した。

幾条もの光の弾丸が、自分のそばを飛んでいく。いくつかは当たったのだろうか？恐怖はない。

あれが自分に当たる気がしない。

『ピエロなんだよ。まるでわかっちゃいない——あんたは今、そういう状態なんだ。頭が怒りとか憎悪とかで、一杯になっている。冷静になれ』

自分の背後から走ってくる存在が居る。

隠れていたのか？それとも背後に回ってきたのか？

どちらでもかまわない。

Vault—TECのランチボックスを利用して作られたボトルキャップ地雷をひとつ。巧妙に曲がり角に置いていく。

約20秒後、ここで起こることが楽しみだ。

『今ならまだ間に合う。戦うのをやめて、来た道に戻るんだ。このまま出て行くなら、俺は何もしない』

立ちふさがる新たな人造人間は「ケロググの命令だ。お前を破壊する」とだけ告げてきた。

カールが跳ねる。

そいつの頭部はそれで消えた。残った体を爆散させるのは、私の仕

事だ。

『選択肢はまだある。こんなことをいえる奴は多くはないが』  
私とカールにむけて青いレーザーが飛び、空気に独特の匂いが漂う。

何の問題もない。

倒すべき敵、報復する敵はすぐそこにいる。

私たちを止められる者はいない。

『頑固者め』

シンスアーマーごと両腕を吹き飛ばされ、人造人間は片足をつく。  
レーザーは激しく壁を叩き、焼く。

私はその背後に見える扉を確認すると、手榴弾を複数放り込んでから物陰に引つ込む。

すべてが吹き飛んだ。

『ほう、やったな。探していた相手はその隣の部屋にいる。

部下に、とあてがわれた人造人間達はむなしく全員が非番でな。仕方ない、こつちに来て話をしようじゃないか』

そうだ、話をしよう。

私もケロツグ、お前の話が今は聞きたい――。

|||||

必要とは思わなかった照明がつき、部屋の中が一変する。

同時に、人造人間2体がステルスモードを発動し、その場から気配ごと消える。せっかく仏心を出して忠告してやったのに、ここまで来てしまったのだ。手厚くもてなしてやろうと思えば、このくらいの演出は用意する。

階段を上り、部屋へとはいって来た獣たちの姿を見てケロツグの口元がほころんだ。

「来たな、この壊れた世界でへこむことを知らない犬共か」

ここに来たときはレーザー装備であったはずのレオだったが。

例の爆発で鎧が破壊されたせいだろう。彼が叩き潰してきた人造

人間が身につけていたシンスーパーを代わりに着込んであらわれた。

長く使っていたV a u l t スーツは焦げ付き、引き裂かれ、ボロボロの部分ができていて。上半身を裸にしないように何とかへばりついていると、表現するしかないような状態だ。

それでも——背中に狙撃銃を、手にはコンバットマシンガンを握って今すぐにも戦闘を始めておかしくない雰囲気を漂わせていた。

「すごい格好だな。自慢のジャンプスーツも役に立ちそうにないな」

「——殺し屋で誘拐犯、この狂人め。ショーンを返せ、私の息子を返せ。今、すぐだ！」

「父親としての権利つてやつか。そうだな、そうだった」

両手を挙げて笑みまで浮かべて余裕を見せていたケロッグは、そこで真面目な顔に戻る。

「いいだろう、教えてやる。」

お前の息子——ショーンはいい子だった。想像しているよりも大きくなっている、年をくついていると思うだろうな。ああ、それはもう知っているんだらう？」

ニックのおかげで知った。ダイアモンドシティにいたケロッグは少年を連れていたという。これはその少年が、息子のショーンだと言っているのだからか？

「だが感動的な再会はない。おこらな。

なぜならまず——あの子はここには居ないからだ」

「どこだ。あの子はどこに居る？」

「それじゃまるで、ハハハ。場所がわかれば、簡単にあんたが会いにいけるといつてるように聞こえるな」

「……」

「言っているだろう？俺の話聞いていないのか？

お前はあの子には会えない。そこは存在しても、誰も到達できない場所が、この連邦にはある。お前も聞いているだろう、インステイチュートさ」

私の目に、初めて怒り以外の感情が生まれた。

まさかとは思っていたが、それでも——やはり驚いた。

「シヨーンは無事だ。そこで安全に、安心して暮らしている。今もな」

「そうか、インスティチュートに」

「ああ、そうだ」

「ならどこであろうとも見つけてやる。連邦のすべてをひっくり返す必要があるとしても、私を誰にも止めさせたりはしない」

「はあ、まったくしつこいな。嫌、それでこそ父親ということか。」

俺だつて同じ立場なら、つらい現実を知ることになったとしても、同じように考えるのだろうか。でも、保証しただろ。無駄だ、何をしようとも無駄」

私は認めない。

シヨーンは、息子はきつと見つけてみせる。

だが今日は、今日だけは別にやらなくてはならないことが目の前にある。

「これ以上、話すのも無駄か——そうだろうな。」

あんたの苦痛に満ちた復讐の物語はここが最終章さ。どうなるのか、わかっているのだろうか？ さて……もう一度、死ぬ準備はいいかな？ 慣れたものだろう？」

準備はできている、すでに。

「容赦はしない。家族を、ノーラを、シヨーンを。奪ったその報いを受けさせてやる。私の憎悪を、たつぷりと味わってから逝くといいだろう」

カールの怒りの吼え声。合図となった。

|||||

ケロググの指示は短く「焼け」と、それだけであった。

ステルス装置で部屋の中で隠れていた人造人間は装置を切ると、レーザーライフルを構える前にレオに向かってなにかを投げつけた。火炎瓶であった。

レオはたちまち火に包まれ、後ろに下がる体がグラリと揺らいだ。

(口ほどにもないな)

ケロググはリボルバーを取り出し、燃える男に狙いをつける。だが指に力がくわえられ、レオに追撃が叩きこまれることはなかった。

いつの間にか移動していたカールが、ケロググの横合いから伸ばした右手の手首にがっしり噛み付いたからだ。

「このっ、糞犬がっ」

引きずり倒される寸前で踏みとどまり、罵るケロググ。

だが、信じられないことにそこからさらに噛み付く力が一段と強く加えられると、大地に根を張った植物を引っかくようにケロググは無様にも床に引き摺り下ろされ、床の上へと転がった。

(なんだこの力は!?)

まるでスーパーミュータント化した犬に襲われたかのような状況にケロググは慌てる。顔色もはつきりと焦りが浮かぶ。

腕に何度も振動が加わると、そのたびに右に左にとケロググは翻弄され、転がされてまわる。本当に信じられない力だった。

「こいつを撃て!このクソツタレを狙え!」

2体の人造人間に新たに指示を出し。

自分も何とかしようとして折りたたみ警棒を取り出した。こいつでひっぱたけば一瞬、電気が流れて相手はしびれるはず。

だがその間にも、ケロググの右腕はひどいことになっていく。

リボルバーはまだ落としていないが、指に力を入れようとしても苦痛しかなく。なにもできなかった。

これは信じたくないが、犬が噛み付く手首の神経をすでに破壊されてしまった可能性を示唆していた。

頭にくることに人造人間からのアプローチはない。

かわりにケロググは警棒をカールの鼻面に叩きつけようとする、はずれた。

(コンパクトに、触れるだけでいいんだ!)

2度目は成功だ。

触れると、正しく電気が流され。カールはキャンと悲鳴を上げて、

ケロツグの手首をようやく解放する。

痛む右腕に顔をしかめつつ、中腰になって部屋を見回すとケロツグは信じられないものを見る。

まだ燃えている男が、火を気にするでもなく人造人間の前に立ち、銃床を暴力的に振り下ろしては、あいつらを強引に破壊している姿だった。

「マジか、化け物だな」

相手は2、こちらは1。仕切りなおす必要があった。

警棒を口に咥えたケロツグは奥の手である、ステルス装置に指を伸ばす。装置は正しく起動すると、ケロツグの姿をみるみるうちに消してしまふ。

よほど痛かったのだろうか、カールは人間のよう電気の流れられた鼻のあたりを両足で押さえ苦しんでいたが。何かに反応したのかピクン、と体を大きく震わすとしつかりと4本足で立ち上がる。火傷で火ぶくれになりかけている顔に表情はなかったが、目の光は冷酷な輝きを増していた。

ついに破壊され、その足にすぎるように崩れ落ちた人造人間に興味を失うと、レオは部屋の中を見回した。

「ケロツグ」

炎の影響だろうか、その声は聞いたことがない濁声だった。

「隠れても無駄だぞ。お前の血の匂いが——姿を隠すことを許さない」

カールの首が伸び、鼻が動く。

レオはライフルの残弾に一瞥すると、次の一步を踏み出した——。

|| || || || || || || || || ||

ヘーゲン砦が騒がしくなるこの日、連邦では多くの新しい足音があちこちから始まっていた。

太陽が地平線に静かに顔をのぞかせていた。

世界に新しい一日がはじまる。それを知らせる光がもたらされる瞬間は、連邦のどこで見るともここから見る景色が一番よいと断言することができる。

そんな夜の終わりの余韻の中を、貴重で重要な会談がそこでは行われていた。

「……これは、ちつとも愉快的な笑い話つてわけじゃないんだよ。ミスター」

気だるげで、冷酷な声がそういつて話を切り出した。

「あなたの力があつたからこそ、状況は最悪から随分とマシになった。だが、それだけのことさ。」

また悪くなつていく。問題が解決されない限り、状況は改善されない。たぶんだが、この俺でも次のチャンスはさすがに用意されてはいないと考えてほしい」

「——これがラストチャンスだと？」

「ああ、そうだ。」

あいつらの間ではそういうことで決着がついた。わかっているだろうが、そうなるように俺自身が仕向けた。

もちろん、あなたの助けがあつて初めて出来たことだがな」

「彼らは今度こそ、お前を許さない。そういうことだな？」

「ああ」

「それは確かに、困ったな」

2人の会話に熱のようなものはなかった。

それは多分、これが会談ではなく。すでに互いに探り当てた情報から、お互いに確認するためだけの作業をしているということなのかもしれない。

「私にしても。彼らの誰か、ではなく。彼らの上に君がナンバー2となつて君臨し、制御してもらふことにこそ重要だと考える。」

そこは——君と最初に同意したことだ。それは今も変わらない」

「それを聞けて安心したよ」

「君も困っているのだろうか、私も実際に困っているんだよ——ポー

ター・ゲイジ」

部屋の中に光がさすと、アイパッチのモヒカン男が。生気のない目を、もう一人へと向けている。

「わかっている。もう一年も身動きが取れていない。おかげでこの場所も、そこからずっとお預けをくらっている。ここにいる誰にとっても、不満しか出てこない」

「——最後に確認したい。本当に奴では駄目なのか？」

「……」

無言の後は、ため息が出る。

「今更それかよ。駄目だ、それだけはわかってる。」

もうずつと言いつづけてきた。だが奴は問題を真剣には受け取ろうとしない。あの——オモチャをいじり倒すことにしか興味を持っていない。

クビだと伝えて、放り出してしまいたいがそうもいかない。生憎とここは事業ではないんで、組織より個人の自主性が重んじられている」

「そうになると、別の頭が必要ということになる」

「——見え透いた腹の探りあいは止めてもらいたいね。この時間は後わずかで、一致しないままで『今日はもう、お帰りください』なんて言つてられる状況ではないんでね。」

そう、俺たちには新しい頭が必要だ。それはあいつらの誰かじゃない、それとは関係のない。そんな誰かが、ここには必要なんだ」

「とはいえ、それをこちらが用意しろといわれて、すぐに出来ることはない。」

君は簡単にうちの子をよこせといたいのだろうか。それが簡単な話なら、そもそも君とこのような場を設けて機会を待ち続ける必要もなかった。

そうしないための、ビジネスだ」

「状況が変化したのさ、ミスター。それは俺のせいじゃない」

「どうだろうね……」

光が徐々に部屋の中に進入する中で、会話は不穏な響きを見せてい



た。

「なあ、頼むから助けてくれよ。俺はあんたの役に立つ男だし、そのための努力もずっと続けてきた。」

ビジネスは今、難しいことになっているが。まだ踏ん張っているし、わずかな問題が解決するだけで、すべてがきれいに水車のように勢いよく回るようになっていいる。あと一息なんだ」

「……」

「時間はないが、まだやれるさ。あんたもそれは、わかっているはずだ」

無言が続く。

そして残り時間はさらに少なくなった。

このまま合意しないまま終われば、彼らのビジネスに重大な影響が出るのは明らかであった。

「——いいだろう、ポーター・ゲイジ」

「やるんだな？ やってくれるんだな？」

「時間は必要だ。それに、やはり簡単なことではない」

「ああ、もちろんだとも」

「本当は今日、貴様とのビジネス解消を見据えた交渉を、と思ったのだが——こちらにひとつ、当てがある」

「ほう」

「それが使えるよう、手はずを整えてみよう。確実な約束ではないが」  
「——ここままでだな」

太陽がその姿を完全にすると、部屋の中は見事に光で満たされていた。

そしてポーター・ゲイジはそこに一人でいる。

訪問者はすでに帰宅の途中にいるのだろう。

——そこは訪れれば誰しも笑顔になる、地上の楽園。

——広大で危険なエンターテインメントはそこにある。訪れれば誰しも笑顔のテーマパーク。

——ヌカ・ワールドへ ようこそ

ダイヤモンドシティ、バレンタイン探偵事務所の扉を激しくたたき男がいた。

探偵のアシスタント、エリーは内心では「またか」とつぶやいたが、仕事の手を休めると。立ち上がって「どうぞ」と扉を開いた。

彼女の思ったとおり、この世界の新しい困った人が。ニツクの助けを求めて必死の形相で入ってきた。

「頼む、助けてくれ。ニツクを、探偵に合わせてくれ」

「わかりました。ええ、わかりましたとも」

「ラジオで聞いた。帰ったって。探偵のニツク・バレンタインが、この町に戻ったって。だから、だから――」

そうだ、探偵は町に戻ってきた。

あの時だって、いつものように家族が行方をくらませて困っている人のため。ニツクはいつものように飛び出して行って、連絡が途絶えてしまった。

それから数ヶ月、なんの証拠もないのに死亡説が巷に流れている中。彼は事件の不幸な解決を携えて、この場所へと帰ってきていた。

だが、この困った人は運がなかった。

留守の間にも次々と事務所には舞い込んで来ていた依頼のせいで、探偵は再び連邦に飛び出して行ってしまった。

「落ち着いて、まず座って。とにかく少し話しましょうよ」

「ニツクは？ニツクはどこだ？あわせてくれ、大至急だ」

「ほら、ここです。座って、お茶を用意しますから、落ち着いてくれな」とこちらは何もいえませんよ」

このようなタイプの依頼人には、残酷だが冷たく対応する必要があった。

下手に慰めたりすると、ますます興奮してしまい。縫り付いて、騒ぐだけ騒ぐと。結局は何時間も助けてくれと繰り返すだけで終わってしまう、なんてことも本当にあるのだ。

東洋の茶色のお茶を出し、席に戻ってエリーがにっこり微笑む頃。

ようやくこの依頼人も落ち着いて、冷静に話せる状態にまでなっていた。

「まず、はっきりとお断りしないといけません。ニツクは確かに戻りました。ですが今は、ここにはいません」

「なんだって!? どういうことだっ」

「本当にラジオを聞いたのなら、ご存知でしょう?」

ニツクは長くこの事務所を留守にしていました。しかしその間にも、新たな依頼は次々と来ていたのです。今、彼は必死でそれらの依頼を解決しようと、再び連邦の空の下に飛び出していつてしまいました」

「私も彼の依頼人だ。ニツクと、連絡はつかないものか?」

「大丈夫、連絡はできます。ですが、依頼を彼が引き受けるような案件なのかどうか、アシスタントである自分にまず依頼内容を聞かせてください。大丈夫、情報はよそこには洩らしたりはしません」

エリーの言葉を聞いて、相手は明らかに戸惑いの表情を見せた。不安なのだろう。断られてしまうかもしれないと、考えているのかもしれない。

「私に話してもらおうのは、情報を整理して。その上でニツクに伝えるためです。本当です」

「……わかったよ、彼の仕事ぶりは知っている。私は以前、彼に力を貸したことがある。貸しがあるんだ、このことで借りを返してほしい。ニツクにはそう伝えてくれ」

「わかりました。それでは、依頼人であるあなたの名前と、依頼内容を教えてください」

彼はエリーがくれたお茶をつかむと、一気に飲み干す。

それから口を開いた。

「私は、私の名前はケンジ・ナカノ。探してほしいのは私の娘、カスミのことだ」

呪われた北の島からの招待状が、新年にあわせたように一緒になって連邦へと迷い込んできた――。

グッドネイバーはこの年、最後の1日を迎え——。

「……そう、もうすぐサヨナラってやつだ。良いことも悪いことも、それも今日が最後だ」

テラスから見下ろすハンコックは、市長としての言葉を町の住人たちに語りかける。

ここを見上げる彼らの名前を、この男はすべて覚えている。皆、この愛する町のどうしようもない住人たちだ。

「そして俺達は新しい年を迎える！」

まさかこんなめでたい日に、まだズルズルと仕事を真面目にやっているなんて退屈な野郎はいないだろうな？

もちろんこの市長様も、同じく今日は存分に酔っ払い。楽しむつもりだ、そしてお前たちにもそうあってほしい。そう願っている——嫌、願うだけじゃ足りないだろう!?

サードレールは今夜、酒蔵を開放するぜ!

お前らどうせ日頃はキャップの数をちまちま数えたりはしないと信じているが、もしもそんな恥ずかしいことをしていたとしても。今日だけはやめろ!

忘れちまえ! 騒げ! 喜べ!

喧嘩は好きなだけやってくれていいが、殺しはやめろ。野暮はなにごとともつまらなくするからな。

俺たちの未来は明日の朝、2日酔いに苦しむところから始まる! 殺しもいいさ、商売もいいさ。だが、それは明日からにしろ。諸君、これから朝までお祭り騒ぎだ!

歓声上がる。

さっそく地下のサードレールにむかう集団が、入り口に殺到する。演説を終え、満足げなハンコックは部屋に戻り、宣言どおり自身もウイスキーの入ったグラスを手に取る。

そこで気がついた——。

「ファーレンハイト、どうした」

彼の護衛は、一見するといつものように気だるげに見えたが。長い付き合いのあるハンコックには、それがいつもと違うことに気がついた。

「別に——」

「何だよ、こんな日に。ご機嫌斜めだな」

「あなたはいつだって楽しそうじゃない」

「まあな……どうした？俺は自分の護衛が不機嫌じゃ、今夜はうまく酔えなくなる」

驚いたことにこの時、この危険な女性は——なんとハンコックから顔を背けたのだ。

それを見てしまったハンコックは驚きで目を丸くする、パニックもおこしかけたかもしれない。その横顔は、これまでほとんど見たことがなかったこいつの“女”のそれだったからだ。

「お、おいおい」

「なんでもないのよ——口紅よ」

「なに？」

「声大きい。使っている口紅を失くしたの。それだけ」

「お前……化粧なんてしていたのか」

「少しはね。それは」

（男の趣味？まさかな——）

今年の終わりは毎日が賑やかなものだったが。

最後の最後で、貴重なものを自分は目にしたのかもしれない。

同時刻、ハングマンズ・アリー。

ここには今、人間の女性、ロボット、スーパーミュータントがいる。

そして——その誰もが、不満を持っていた。当然だが、新年とかまったくどうでもいい話として扱われている。

「ミズ・ケイト。今夜のお食事の希望はありますか？」

「食べられるもの」

「ストロング、肉ガイヤ」

「——ええ、ですから食事のメニューについて、こうして聞いているの

です」

「知らないよ！腐ってるとか、ヤバそうな缶詰じゃないなら。なんだったのよ」

「ケイト！肉 腐ッテモ美味シイ。知らナイノカ？」

「そうなるとお肉が必要ですね。では缶詰の残りがありますので、それをソテーにしましょう。お野菜も必要ですね。お野菜は重要です」

「それはいらぬ、肉だけでいい」

「ケイト、ストロング モ ソウオモウ。肉デ イイ」

「それはいけません。栄養のバランスというものがあります。いいですか私は——」

ケイトはそれまで一心になって焚き火を火かき棒でもってかき回す行為をやめると顔を上げる。ついに我慢の限界が来た。“今日も”、来てしまったのだ。

思えば短い護衛生活だった。

それも終わり。このやかましいロボットをぶっ壊して、この狭い居住空間を少しでも過ごしやすいものに変えないといけない。

ハンマーに手を伸ばしながら、心の中でののしる。そう、自分をこんなところに放り出していったあの男のことに決まっている！

自分にこの苦しみを与えた、あの爽やかな野郎に呪いあれ！

そしていつもの喜劇が始まる。

半狂乱のケイトにコズワースは追い回されるのだろう。それを見て、なぜかケイトを応援するスーパーミュータントは少なくとも退屈なこの生活のことを、ちよつとだけ忘れることができる。

そしてコズワースは、自分の存在を理解しようとしぬい野蛮人に悲鳴を上げ。何で自分が、と逃げ回る。

彼らは平和という退屈の中で、飽きていた——。

|||||

深夜。連邦の西、ヘーゲン砦から見上げる空は不気味な泥の混ざったねずみ色の雲に覆われていた。時折、雲の向こう側から恐ろしい雷音が響く。

これは南側から流れてきたラッドストームと呼ばれる怪気象現象である。

夜の暗闇の中であって、はつきりとわかる黄土色の黄砂のようなそれには、高い放射性物質が含まれていた。

この場所が、これほどはつきりとこの異常気象に襲われることは、めつたにないはずだった。

砦の建物の屋上にある扉の向こう側からビープ音が聞こえた。

続いて鍵がガチャリと音を立てて開けられると、中から男が一人倒れこむようにして外に出てきた。

レオである。

彼はついに念願の復讐を果たし、ケロツグを打ち破ることができたのだ。

だが、共に戦ったカールは？その姿はここにはない。倒れた彼は、仰向けになって不気味な空を見上げる。

この場所でどれだけ厳しい戦いを潜り抜けたのか、その姿が答えていた。

地上に出てきてから何があっても、彼が身につけていたVault 111のジャンプスーツはボロボロであった。火に焼かれ、衝撃をくらい、レーザーに貫かれ。半裸をみせてしまうような今では、さすがにもう服として役に立つことはないだろう。

だが、そんなことよりも重要なことがある。

そうだ、こんな思いをしてまでここにきた理由。それがこの男にはあつたはずなのだ。

しかし――。

絶命した男が使っていた端末の画面に残されていたのは、無常な一言。『NO DATA』の文字。手がかりは消されていた、あいつの手によって――ケロツグによって。

「ノーラ……シヨーン……シヨーン。息子よ、シヨーン！」

傷ついた男の体を、放射性物質は犯し。遠雷は嘆く男の姿をあざけ笑っているかのようだった。

復讐は果たされた。だが、希望は？

答えはない――。

|||||

そしてAM00:00を迎える。

予兆の2287年は終わり、2288年が訪れた。

世界は変化する、連邦も変化する。時が、年が、次の段階へと進む。変化はいきなり、そしてはつきりと姿をあらわす。

ラッドストームの空を悠然と飛ぶ、巨大な飛行船。そしてそこから次々と飛び出していく、小さな飛行艇達。

この瞬間、飛行船のブリッジに立ち連邦の地を睥睨する男の元に船長が近づいた。

「エルダー、ついに我々は第1到達点をこえ。連邦へと進入しました。おめでとうございます」

「よし、それでは船長。さっそく市民へ、我々の意思を伝えるべく放送を開始するように」

「了解、エルダー」

彼らはブラザーフッド・オブ・ステイール。

あのケンブリッジ警察署に偵察隊を送り込んだ、キャピタル・ウエストランドのB・O・S。その本隊である。

そしてこの組織を束ねる男の名はアーサー。

アーサー・マクソンは20歳。

その重責を担うために必要なことだったのだろう。声こそ若者のそれだが、表情は常に険しく、厳しい。

16歳にしてエルダーと呼ばれるにいたった彼は、それから4年。この日が来るのをじっと待ちわびてきた。

この狂った世界に諸悪の根源であるアポミネーションを生み出し



続けている、連邦。

そこにこれから彼らが絶対の正義の一撃を加え、その呪われた技術を回収し、封印し。そして苦しみ続けた連邦を正しく統治してやろうというのである。

エルダー・マクソンの指示に従い。

飛行船艦長はマイクを手を取った。

『連邦の市民たちよ！』

最初の呼びかけから、彼らの意思を伝えていく。

『どうか我々の進路の妨げとなるのはやめてもらいたい。こちらには、君達に危害を加える意図はない』

その姿を見るものを圧倒する、大兵力とテクノロジーがそこに浮かんでいた。飛行船は連邦を横切るように飛び、まるでその航路に続くようにラッドストームも連邦の中央へと移動を開始する。

厳しい時代が訪れようとしていた。

連邦にとって。

そこに住む人々にとって。

そしてこの時代に地上へと召喚され、投げ出されてしまった2人にとって――。

## 用途不明のレポート（1章まとめ）

〈フランク・J・パターソン Jr.:レポート〉

（1章あらすじ）

2000年の眠りから目覚め、Vault111から脱出したものの世界は変わり果てていた。

アキラとの関係に戸惑いつつも、眠りの中で家族を襲った悲劇の真相を求めるようになる。クインシーから逃亡してきたプレストン・ガービーと知り合い、これを助けるとDCへの道を示された。

以降、多くの友人を作りながら連邦を旅していく。

新聞記者パイパー・ライトと探偵のニック・バレンタインの力によって。ついに襲撃犯の名前を知り。決戦の場、ヘーゲン砦へとひとりで向かうが。

相手は逆に大勢の人造人間を従えてレオのことを待ち構えていた。

そして午前零時。

2288年は雷鳴とどろく嵐の中……。

（レベルアップ）

ここでは長期間の冷凍による後遺症で能力がALL4という、平凡以下の能力まで落ちてしている設定。

実際に成長のほとんどはアキラが中心になっていて、レオはほとんどパークに変化はなかった。

しかし、それでは展開の都合上困るので。ヘーゲン砦の事件以降は、成長させる予定。どうしてそうなったのかは、読めばなんとなくわかるはず。

S・P・E・C・I・A・Lは終了時に変化している。

ALL4 ↓ 4.4.4.7.4.5.6

兵士というより、政治家として復活してきている感じになっている。

〈五十嵐 晃:レポート〉

(1章あらすじ)

冷凍ポッドの外で覚醒した青年には過去の記憶がなかった。荒廃した連邦の中、戸惑う彼はある夜、襲撃を受けると一気に暴力に目覚め、力に傾倒していく。

サンクチュアリを飛び出し、旅の空の下。巷では連邦で忌避される「人造人間」の存在に、自分の“普通ではない”肉体の謎をときあかせるのではと考えるようになった。

流れた彼の行き着いた先はグッドネイバー。そしてレールロード。そこで様々な人造人間を知ったが、答えは見つかるどころかますます謎が増えていった。

だが、逆に彼を知る多くの者達はアキラの存在に奇妙な違和感を覚え、疑惑をもたれてしまう。

そしてそれを証明するかのよう。ある日、仲間達が目を離した隙にアキラは……。

(レベルアップ)

当初、アキラは原因不明の症状としてVault—TEC製のピップボーイに認識されなかったという設定であった。

しかし、へ27話 エージェント・フィクサーにてデーターコンにその解決法を提示され、以降は無事にピップボーイを使いこなしている。もっと早く、その数値を発表するべきであったが執筆に追われて忘れていた。

ここに公開する。

S. P. E. C. I. A. L ↓ 6. 7. 9. 3. 8. 2. 2

アキラはレオと違ってパークの習得が中心であり、能力値に大きな成長はみられなかった。ちなみに数値が高いのは前作までの流れである「上限40ポイント」に近くしたかったから。

(同行者達のデータ)

・プレストン・ガービー

長距離スコープ付レーザーマスケットと地雷

マスケットはミニッツメン復活の際にアキラに贈られたものを使っている。以前はスコープとレジェンダリーがついていないものを使っていた。

レジェンダリー効果は「扇動」。

・パイパー

10ミリピストル。

あくまでも新聞記者、と言い張ってこれを譲らない。

・マクレデイ

中距離スコープ付木製スナイパーライフルとマチェット。

マチェットはノーマル品だが。ライフルにはレジェンダリーの「貫き」効果がある。

・カール

2章からはスカルバンダナとアーマーを着用予定。

・ニック・バレンタイン

レオからサブマシンガンを渡されていた。レジェンダリー効果は「プラスマ付与」。

・デューコン

インステイチュート製のレーザーライフル。あと、拾った武器も使う。

何でも屋のトムの整備で、炎上効果があるが。レジェンダリーはついていない。

・パラディン・ダンス

短距離スコープ付レーザーライフルとプラスマ・グレネード。T-60 パワーアーマー。

2段階程度の改造がなされており、レジェンダリーの「ミュータントスレイヤー」の効果がある。パワーアーマーはBランクの改造が施されたB・O・S.のノーマル品を使っている。

・コズワース

現在、裸の状態。

・エイダ

1章ではレールガンとレーザーを使っていた。

次章の冒頭ではアサルترونになる予定。

・キュリー

積載のみ増加する改造を受けただけで、武装はノーマルだった。

・ストロング

フィストが使っていたアサシン効果のミニガンとスーパースレッズは気に入らなかつたらしい。

ハングマンズ・アリーで立派な置物となつて飾られてしまうという裏設定。よつて今は武器がない、ステゴロかな。

・ケイト

スレッズハンマーと水平2連ショットガン。

どちらもノーマル品。

## 虚構と現実

### 濃霧

『すべてを失って初めて、やりたいことをやる自由を手にすることができる』

『俺たちは消費者だ。ライフスタイルの妄想が生んだ副産物なんだ。殺人、犯罪、飢餓なんてものは俺を悩ませない。(以下省略)』

『痛みがなく、犠牲もなければ、何も得られない。』

(映画『ファイトクラブ』から タイラー・ダーデンの言葉)

いつになく強く、冷たい風の吹く深夜。

現在、ボストン目指して連邦を南下中のマクナマス率いる部隊は、奇妙な噂の真相を確認するべく、散開しつつ、ゆっくりと前進を続けていた。

マクナマスは暗視装置がついた双眼鏡で自分達の前方を確認していたが、暗闇の中で思わず小さな唸り声をあげてしまう。

前方の焼け落ちた林だったそこには、不気味に今も大火がおさまった直後のように木も地面も燻っており。

その中でライトで地面に埋まりかけたなにかを煌々と照らし、作業を続けているロボットたちがいた。あれが噂の連邦の旅人を見つけては襲うというロボット軍団なのかどうかまではわからない。

(さて、困ったぞ。どうしたものか――)

任地に向かう途中で、未知の敵と戦闘をする危険を冒すべきかどうか。

さっそく新しい司令官は最初の判断をこの時迫られていた……。

そもその始まりは、彼等がチャールズ川を無事に渡ったあとのこと。

プレストン・ガービーの勧めで、鉄道沿いに南下してきた彼らは無事に旧オーバーランド駅跡地にあったという居住地を訪れた。

そこはガービーをして「もしかしたら、もう存在していないかもしれない」と、ため息交じりに不安を匂わせていた場所だったが。驚くことにまだ人がかろうじて残っていた。

といつても、それは2人の女性——より正確な表現をするなら、一組の夫婦がいた。

「怯えない日はないよ、出て行った皆はそれに耐えられなかったんだ」ミニッツメンを迎え、ついにこの近くにも来てくれたとひとしきり喜んだあと。彼女の一人が寂しそうにそう口にした。それがあまりに気の毒で、ミニッツメン達は顔をまともには見られない。

これまで北部のサンクチュアリから、レキシントンへとライダー達を押し戻したことに彼等は少しばかりの達成感を味わい、そのわずかな勝利に満足していたことを思い知らされていた。

そういえばプレストン・ガービーに喜びは、笑顔はなかった。浮かれる新人達に怒鳴り散らしたり、不満を口にしたことはないが、胸のうちではこんな苦しんでいる人々を思い悩んでいたのかもしれない。「実は、最近この近くで気になることがあって。よかったら少し、力を貸してもらえないかな？」

彼女達が言うにはどうやら数日前から、山火事の跡地に入ってなにかの作業をしている存在がいるらしい。近づいてくる様子もないので、こちらは知らないふりをしているが。気になっているのだという。

ミニッツメンとしてその要望に断る理由はなかったのだが——。

マクナマスが見る限り、そこにいるロボット達は武装はしているものの。様子をのぞき見る限りでは、この場所で何かの作業をしているだけのようで。このまま放置しても構わない気がしないではない。

とはいえ、こんな燃えカスの中で何をやっているのか、確認するとこちらも余計に気になってきて——ああ、まったくどうしろというのか。

戦うか、ここで引き返すか。

ループする悩みの中にあるマクナマスだったが、後ろから緊張した

表情の仲間が近づいてくると後方に戻ってきてくれと言われた。

騒がしい現場から距離をとると、マクナマスは一転して今度はポカ  
ンと呆けた顔で夜空を見上げることになる。

星が輝く美しい冬の空に。見たことのない浮遊物がなにやら騒ぎ  
ながら頭の上を横切つていこうとしていた。

「あれは——？」

「よくわからないんですが……あれは自分たちのことを、B. O. S.  
と呼んでいるみたいなんですよ」

「なんだと!？」

そいつらの話は、噂では聞いたことがある。本部はキャピタルにあ  
るとかなんとか。

だが、それがなんで連邦に？

急に自分達は一刻の猶予もなく、任務地に入らなくてはいけないの  
では。そんな焦燥感を覚えた。

なぜそう思ったのか、何がそう思わせるのかはわからないが。何か  
に対し、自分達は手遅れになりかけてはいないだろうか——？

結局、マクナマスは居住地への撤退を決めた。

自分達が見たもの、聞いたもの。それを早く北に——ガービーの耳  
に届けなくてはいけない気がする。

だが、そんなミニッツメンを嘲笑うかのように、連邦は彼らの動き  
を封じにかかる。

巨大な飛行船が横切った後の空に、西からすごい速さで広がるねず  
み色の恐ろしい雲がやってきたせいだ。ラッドストームと呼ばれて  
いる悪天候に連邦は飲み込まれていく。

それは後に“恐怖の霧”とも呼ばれる、新年最初の5日間の始まり  
でもあった。

|| || || || || || || || || ||



## DAY 2

崖の上の居住地の人々はこの日、不気味な霧の中でレキシントンの方角から久しぶりに鳴り止まない争いの咆哮があがるのを聞いていた。

代表はそれには何も言わなかったが、居住地の老人が代わりに口を開いた。

「恐怖に耐えられないやつが出たんだろう。それで——」

殺し合いを始めているのさ、と。

深い霧は時間の感覚を狂わせ、わずかに残されていた平穏すら消失させてみせた。

太陽が昇っても、沈んでも。周りの光景はいこうに変わらない。雲と霧、そして雷鳴が太陽と青い空をさえぎっているからだ。

そしてその間、ガイガーカウンターは常にピーガーとやかましく音を立て続け、危険を知らせている。

人が恐怖に押しつぶされておかしくなるのに、十分な理由があった。

それぞれが違う無法者たちの組織とフェラル・グール。

恐怖が蔓延すると、霧の中でそれらは奇妙に溶け合うようにしてひとつになるうとし。そうしてから反発した。レキシントンは狂気の中に飲み込まれてしまったのだ。

連邦のすべてがそうなるのに、後どれほどの時間が必要だと言うのだろうか——。

|||||

## DAY 3

嵐はいまだやむことなく、霧はさらに濃くなっていく……。

サンクチュアリの住人は現在37人。

彼らを全員、室内の一箇所に集め終わるとそれだけでもう大仕事である。部屋の中なのに、笑えないことだが黄色の霧がタバコの煙のよ

うにすでに室内を満たしてしまっている。

だが、息を整え休んでいる時間はない。ここからが重要なのだ――

言葉を話せない機械の代表に変わり、スタージエスが声を上げる。

「……ですから皆さん、落ち着いて。」

今、我々は危険な状況にあります。誰もが知っていますが、このラッドストームと呼ばれる現象は。多量の放射性物質がふくまれているということ。

そして我々は、すでに一日をしてこれにさらされ続けているということ。

まず、残念なお知らせがあります。

倉庫にはすでに放射能除去剤――つまり、RAD―Xは残っていません。これは、前回の取引でまとめて売ってしまったからです。本当に、本当に間の悪いことでした」

不安そうな人々の間から、すすり泣きや悲鳴が上がる。パニックを起こされたくはなかった。

「ですが、いいですか?!聞いてください!」

そういう状況ではありますが、不安に怯える必要は――ないんです!

我々の代表代理――そこにいるマーヴィンは言葉は話しませんが、こうなる状況に備えて事前の準備は怠ってはいませんでした。

このサンクチュアリには、放射能除去装置が用意されています――

――

数時間後、集会を無事に終えたスタージエスとマーヴィン代表代理は、レッドロケット・トラックストップへと移動していた。

顔をしかめたプレストンが彼らを迎えた。

「それで?どうだった?」

「なんとかパニックは抑えられたとは思うよ。ヒヤリとはさせられたけどね」

「それはよかった。こういう時は、なによりも人々の間に伝染するパ

ニツクが怖い」

そしてわずかに覚える罪悪感は、その味をさらに苦いものにする。サンクチュアリの倉庫にあったRAD-Xは、実際のところ大量に保管されていたのだ。それをマーヴィンが数字を操作して、品はプレストンが命じて新たに立て直されたばかりの居住地にむけて送り出し、配布させていた。

それもこれも、スタージエスが事前にここに放射能除去装置を完成させておいてくれたからだ。

「助かったよ、とにかく……まだ到着したばかりで。はじまつたばかりの場所もある。そこでひどいことが起こる可能性は、これでだいぶ抑えられたはずだ」

「ここにアレを運び込んだときは、何でこんなものが必要なだろうと思っただけだね。さすがだ」

サンクチュアリの住人達に説明した装置は、実際はこのレッドロケットに作られた新しい地下室に設置されているものであった。

「この天気はいつまで続くんだろうか？」

「わからない。何日も続くとは考えたくないが——」

「巡回に出ているミニツツメンは大丈夫なのかい？」

「それぞれに渡しているアイボットを通じて、近くの居住地から動かないように指示を出してある。おそらくだが、大丈夫だろう」

この脅威の自然現象を前にすると、やはり人はどうしたって無力である。

環境が、状況が、次第に悪化し、その中でさえ変化を生み。最後には自分達の目の前に思わぬ形となって現れたりもする。気が抜けないし、楽観はできない。

「……レオやアキラは、無事だろうか？」

「わからない——あれから、一度も連絡はない」

ボストンに向かった2人が、それから大暴れしているらしいことはなんとなくプレストンは風の噂で耳にはいた。

どちらがやったかまではわからないが、少なくともあの2人はギャング団とレイダー、スーパーミュータントはボストンコモンでひと

おりを軽く料理してしまつたようだ。

「まつたく、腰を落ち着けて。静かに暮らすと言うのも贅沢なのかね。なかなかその時が、いまも来たつて実感が無いよ」

「もうすぐさ。もうすぐ、そうなる。スタージェス」

逃亡生活はもうとつくの昔に終わったのだ。状況はよくなつてい  
る、前に進んでいる。

だが、平和な生活にはまだ遠く――。

|| || || || || || || || || ||

## DAY 5

パイパーはパブリックオカレンシアの1階でようやく穏やかに眠り始めた妹を確認すると、記事の続きを書こうとして端末の前に戻つた。

新年を迎えてから霧に包まれて4日が過ぎた。これはただの自然現象で、たぶん永遠には続かないのだと心の底では皆は理解しているはずなのだ。

それなのに昨日、ついにダイヤモンドシティでも騒ぎが起こつた。

前日、ついにマーケットからRAD—Xが消えると、恐れていたパニックが始まつたのだ。

「隠しているんだろ!?だせっ」

商人達にすがりついた後、振り払われた客達――彼らは総じて同じ言葉を口にする銃口を商人達にむける。当然だが、そんな横暴はダイヤモンドシティでは認められない。

やはり殺気立ったセキュリティがあつまってくれば――悲惨な結果が待っているのも当然だった。冷静でいられなかつた哀れな数人の死体が積み上げられ、さらに牢屋にはそれでも運よかつた連中が大勢、今は押し込められている。

霧は5日目を迎えても、連邦に残り続けていた。

ちようどあのB・O・S。が真夜中杉に派手に自分達の存在をア

ピールしながらの直後だったこともあり、人々の不安と恐怖は暴走気味だった。

いつもは元気なナットも、調子を崩したのか今日は寝込んでしまった。

(ブルー、あなたは無事なのかしら——)

彼が連邦の西に答えを求めに出て、すでに10日以上過ぎていた。ケロググという危険な傭兵に会うことができたのだろうか？そしてその戦いの勝敗は？

約束どおり、彼が戻ってくればいいが——。

パイパーの指が、想いとは別に端末のキーボードをリズムカルに押ししていく。

『ダイヤモンドシティを、深い霧が襲った。それは皮肉にも人々が新たな年を迎える喜びの声をあげている、そんなさなかに起きた出来事であった——』

次号のためにと早速記事におこそうとしているのだが、自分も気分が重いせいだろう。なにやら滅入ってきてしまい、何も考えないまま扉を開けて部屋の外に出た。

「あつ——あれれっ?」

そこはいつも見慣れた、静かな深夜のダイヤモンドシティが戻っていた。

空を見上げて、あの憂鬱な霧も雲も、いつの間にかどこにもなく。やけに近くに見える夜の空には綺麗に輝く星たちがあるだけ。

こうして連邦を襲った5日間の恐怖は、あまりにもあつさりと終わりを告げる。

喉元過ぎればくとは昔の人がよく言ったもので。それまでは沈うつな表情で、いつ爆発してもおかしくないような怯えた目で他人を見つめていた人々は。

霧が去ると、一旦はお互いを安堵の笑みで見やり。「しよせんは天気のことだから」と言っ、深刻だった時間が終わったことを確認しあつた。

だが、人々がこの霧の恐怖が去ってすべてが終わったと考えるのは早計である。

霧とともに連邦に姿をあらわしたB・O・Sのことだ。

彼らの目的、彼らの理由、それは完全にはまだ明かされてはいないのだから――。

## 法なき世界の番人

新年を迎えたばかりの深夜、ケンブリッジ警察署の屋上では珍しく3人が外に出て、暗い町の空を見上げていた。

待っているのである。

「本当ですかね？ 本当なんでしょうね？」

「落ち着きなさいよ、オジサン」

「——そうだ、冷静になれ。こちらもそのために、今日は一日準備にかりつきりになった」

苦笑いするパラディン・ダンスだが、その心の中はやはり複雑なままであった。

年末の最後の一日が始まるのに合わせたように。再び本隊からの連絡を受け取ったダンスの班は喜びと驚きの中で、本当に久しぶりに高揚感に包まれた時を味わっていた。

『我等、連邦ニテ合流ス』

短いが、その言葉の意味するところは一つであった。

数年をかけてこの連邦へと偵察を繰り返していたエルダー・マクソンが、ついにダンスたちの帰還を待たずして連邦への進攻を決意したと言うことに違いなかった。

(だが、少し急ぎすぎてやしないか?)

わずかに心の底で思わないわけではないが、本隊がここに駆けつけてくれると聞いては喜ばないわけにはいかなかった。

ダンスたちは一日をかけて警察署の屋上を簡易のヘリポートへと機能するように仕上げた。

そして待っている——深夜が近づく中、目は冴えてしまい、気持ちちは踊りっぱなしのまま。

西の空をずっと見つめていた彼らは、ある瞬間に同じものを目にすると一斉に歓喜の声を上げた。ケンブリッジの夜にそれは、あまりにもやかましく。それまで静かな夜に彷徨っていたフェラル達は反応を示したが、彼等が声の元をたどる前にそれは収まってしまった。

美しい星空の下を、山の間を抜けた飛行船が輝きを振りまきながら

進むのを見ていた。

懐かしい声も聞こえた。彼等が戻るべき場所が、むこうからこの連邦へとやってきてくれた――。

最高速で接近してきた一機のベルチバードは、警察署の上でピタリと止まると静かにそこに着陸する。乗っていたのは、ダンスと同じパラダインのレーンと言う女性である。

「連邦へようこそ、パラダイン」

「ハハハ、かわらないんだなパラダイン・ダンス。こちらこそ君と君の部隊に言わないとね、アド・ヴィクトリアム。おめでどう、とね」

敬礼を交わすと、彼女は同じく乗ってきた2人の兵士に「降ろせ、時間がないぞ」と告げる。

ダンスはリースたちにも彼らを手伝うように目で指示を出した。喜びから多少緩んでいた空気は、すでにピンと緊張したものへと戻ってきている。これこそが、自分達の普段の姿だと自信を持って言える。

「どうやら、兵士は乗せてこなかったようだな」

「とりあえず補給物資で一杯だね。いや、実際の話。君らが飢えているんじゃないかって、そういう意見もあったんだよ。報告を聞いた限りでは、さうとう追い詰められていると思っていたからね」

「ああ……」

「ところがどうだい、来てみたらさ。丸々とした連中が顔をそろえていた、どうしてだ？」

「なに、連邦の地下にいるネズミとローチは丸々と太つただけのことさ」

「――何だって？」

「冗談だよ、レーン。君にまた会えるとは、嬉しいよ」

「同期で一番美しい戦士といえば、私だろ？そりゃ、君が嬉しく思うのも当然に決まってる――あんた変わった？再会して冗談を聞かされるとは思わなかった」

そんな話をしている間にも、屋上の片隅――下へと降りる階段へと



続く扉の前に物資の詰まった箱が次々と積み上げられていくのがわかる。

「こりゃ、早く終わりそう。10分程度はかかると思っていたけれど」  
「そのようだ……それで、ここで我々の後を引き継ぐ部隊は、いつ来ることになる?」

「このすぐ後に。正確には、我々が戻って20分以内に2小隊が来る予定だ」

「そうか——」

「現在進行中の作戦が終了すれば、さらにもうひとつ小隊が配属される。この場所の守りについて心配は要らないと思う」

確かにそれだけいけば、ケンブリッジにあふれるフェラルの群れに怯えなくても大丈夫だろう。

ダンスはようやく浮かんた笑顔を引っ込めると、再び口を開いた。

「パラディン・レーン、実は作戦の細かい部分について我々は知らされていないんだ。君がここに来たということは、それについても?」

「そうだ。まずはこのホロテープを渡す」

「これは?」

「本隊が現在、進行中の作戦。そのすべてがここに」

「わかった、あとで見ておこう」

「で、これからの君達の処遇だが、君の部隊にはこのあとで到着する小隊との引きつぎを終えた時点で任務は正式に完了したということになる。そして君にはプリドウエンまで来てもらい、エルダーに直接任務の報告をしてもらいたい」

「そうか」

「どうしたんだ、いきなり暗い顔になって?」

「いや——それは」

「心配は要らない、ダンス。」

本部は君達の任務は成功したと考えている。私がここに来たのも、本部が君へ配慮した結果さ。連邦で半分まで失った小隊での活動という厳しい状況を乗り越えて、君は立派にやり遂げた。

それをちゃんとエルダーに自分の口から伝えて、褒めてもらったら

いい」

仲間への気遣いとなぐさめの言葉がかけられているが。それでもダンスの顔色はまだすぐれないままだった。

「レーン、私の部下たちの扱いについて他にはないのか？」

「ん？」

「どうやら話を聞くと、プリドウエンへの帰還は私ひとりだけのようだが——」

「そうか、ああ——」

レーンが言いよどむと、タイミングの悪いことに作業が終わったと部下達が伝えてきた。

ダンスとレーンは目配せで意志の疎通をはかると、荷物を手に持っていてくれと新しく注文をつけた。そして彼らからは少しばかり距離をとる。

「大きな声では言えないが——君の部隊」

「ああ」

「書類の上では、君達の部隊は引継ぎを終えた時点で解散扱いになっていると思う」

「解散か……」

「残念だけど、部隊としては君達をそのままでは使えない。戦力にはできない——気の毒だとは思う」

「そうだろうな。ちゃんと理解しているよ。それで？」

「実は私もそれについて、はつきりと言われていない。決まっていな  
いんじゃないかな。」

多分だけど、君の報告を聞いて。そのときエルダーが君と君の部下たちの今後については考えてくださるのだろうと、思う」

「なるほどな」

「これも想像だけど、それまでは彼等は補充兵として扱われるんじゃないかな」

「わかった。教えてくれてありがとう」

「では、戻るよ。こっちも、自分の部隊を率いての仕事が残っているんでね」

再び笑顔が戻ると、互いに敬礼を返す。

ダンスが見送る中を、ベルチバードは来たときと変わらぬ速さで、再び飛び去って行ってしまった。

パラデイン・ダンス――。

その名前をすんなりと呼んでもらえたことに、なぜか今になってホツとしていた。

思えば彼は、自分たちが生きては戻れないかもしれないと。ここではそんな覚悟をしていたからかもしれない。

|||||

デーコンはバンカーヒルから、ようやくとの思いでレールロード本部へ戻ってくる事ができた。それは霧が連邦を覆った2日目のことである。さらにワット・エレクトロニクスの事件から数えるときに4日……。

いつもならひとりでも鼻歌交じりに歩きなれた道は、ラッドストームのもたらす霧のせいで、さながら地獄の釜底を進む気分である。どこからともなく聞こえてくるのは悲鳴であり、狂気じみた叫び声であり、武器の発射音と破壊音。

たとえレールロードのエージェントであっても、これを恐怖をみじんも感ずることなく通り過ぎるのは無理というものだった。

そうやってようやく仲間の下へたどり着けたと、不遜な男はため息をつく。この男にしては珍しい姿があった。

アキラがあの日、消えた後。

消えた痕跡が、理由が何もつかめないという状況の中。ロボット達が出した最終結論が「誘拐」であった。

そしてデーコンは迷うことなく、レールロード本部への帰還を決める。

追跡する情報が何もない以上、彼らだけではどうにもならない。

ならばできるだけはやく組織に頼るのがいいという判断であった。

驚いたことに、一目見て違和感を覚える。新年を迎えたばかりのレールロード本部には人がいつもよりも少ない気がした。やはり霧の影響が、ここにもあったのかもしれない。

なによりリーダー達の姿が見えないのが気になる。何か、あったのだろうか？

「なあ、いいか？」

「デイーコン、戻ったのですね。お帰りなさい」

「ああ……皆の姿が見えないみたいだ」

「え？」

こちらの違和感になぜか向こうが驚いている。新人でもあるまいに、戻って結果の報告は当たり前なのだから、こちらが上司が居ないと困っているとわからないのだろうか？

やはり冷静ではいられないようで、デイーコンは表情こそ変わらないが。すでに雰囲気が悪く、不機嫌になっていた。

「別にそんなことはないと思いますけど——」

「デズデモーナとキャリントンはどうした？そんなことも、わからないのか？」

「す、すいません」

「俺は別に謝罪がほしいわけじゃなくて——」

再びデイーコンは、なにかあったのか？それを問いただそうとする、なんと入り口が騒がしくなる。目の前をあ何でも屋のトムが通り過ぎようとした。目の前の人物が役に立たないので、デイーコンは新たに彼にむかって声をかける。

「なんだ？どうした？」

「デイーコン、デズが外から戻ってきたのさ」

「外だつて？」

こんな視界も何もない、霧の連邦の中に彼女達は外出していたということか。それは珍しい。

入り口にはレールロードの指導者達は部隊の兵士を引き連れ、物々しい姿でズカズカと本部へと戻ってきていた。どうやらあつちも、こちらに負けず不機嫌を全開にしているらしく、荒れているようだ。

「……こっちは空に浮かんでいる。あいつらのせいで、すっかりパニックよ!!」

リーダーのデズデモーナは、これまた珍しく感情をむき出しに叫ぶようにいきなり吐き捨てた。

本部にたちまち緊張が走り、デイーコンも自分の中の熱くにごつていたものが静まっていくのを感じていた。なにやら状況を見極めなれないといけないと、本能が告げていたからだ。

「何でも屋のトムが、あれはエイリアンのマザーシップだって——」

「エイリアンは存在するさ! その脅威は、今もこの地上に間違いない手を伸ばしているからね! それは今の科学でも十分に証明できるはずだよ」

誰かが余計なことを口にしたせいで、いつものようにトムが空気を読まずに脊髄反射的に妄想を爆発させてしまう。当然、そのせいでリーダーの怒りを買ってしまった。

「馬鹿いわないで、やめて頂戴! あれはプリドウエンっていう、飛行船よ。キャピタル・ウエイストランドのB・O・S. が作り上げた兵器よ。間違いない」

どうやらリーダーは例の放送を聞いて居てもたってもいられなかったらしい——。

自分の目で実際に確かめて来たようだ。

「いいこと? ……ここにはあいつらのことを知らない人も居るでしょうから、教えてあげるわ。」

あいつらはね。この世界に残された優れたテクノロジーを奪い取るように集め、自分たちのものにする。そして自らを厳しい規則をもった軍隊だと宣伝しているわ」

「なんで、そんなのが連邦へ?」

「決まっているじゃない! あいつらは連邦のテクノロジーが生み出した人造人間。彼らがこの世界に存在していることが許せないと、ずっと公言していた。」

それがここにやって来たということ、自分たちの手で直接に人造人間達を皆殺しにするつもりに違いないわ」

人造人間の殲滅——レールロードでは、それは一番許されない。あつてはならない脅威であつた。

そしてこのリーダーはそんなことを許すつもりはなかつた。

「とりあえず、しつかりとこのことを広めてほしい。レールロード以外の人々にもね。」

あのB・O・S. という連中は私達の新しい敵よ。

あいつらに交渉による妥協や、譲歩、和平なんてことは絶対にありえない。これからは私たちも、もっと気をつけて動かないと——」

「ど、どうするんだい。リーダー？」

「心配は要らないわよ。さしあたっては何をしようとしているのか、彼らの動きをしばらくは観察する。絶対に目を離したりはしない。」

そしてなにかあるにしても、こちらの任務にあいつらを近づけないように皆にはもっと努力してもらおう。こちらが特に目立つ動きを見せなければ、彼らもすぐには私たちの存在に気がつくこともないはずよ」

「新しい敵……」

「そうよ。でも人造人間にとってインステイチュートが最大の脅威であることに変わりはないわ。私たちが戦う相手はそっち、勘違いはしないで——それじゃ、皆。仕事に戻って頂戴」

不安の余韻が残つたものの、それでもレールロードは再び活動を開始した。

デューコンは無言でその様子のすべてを見つめていた——これがそがレールロードだ。万人に理解はされず、それでもなお自分たちに正義があると信じる者たちの姿だ。

(ぶっ飛んだ、狂人達のサークル活動の間違いじゃない?)

自分が冗談でも相棒と呼んだ。生意気な小僧の皮肉が、どこからか聞こえてきた気がした。

アキラ——デューコンは口の中に広がる苦味に耐える。

|||||

不気味な霧に覆われて3日目。

ケンブリッジ警察署には、補給と補充兵が入り。計画は予定通りに進められ、パラディン・ダンスが率いた連邦への偵察部隊は、ここで一応の任務終了となり。同時に解散することとなった。

「君たちに特に希望がないなら、ここに残ってもらおうと考えている」部下達にはまず、ダンスはそう切り出した。

「ここは前哨基地となるわけだが、残念ながらここには連邦を知っている兵士は居ない。何かがあったとき、我々が乗り越えてきた経験が。ここに来たばかりの連中の役に立つかもしれない」

ヘイレンもリースも、ダンスのその意見に同意を示した。

「そうですね」

「連邦を知らないヒヨツ子共の“おもり”ですか——楽しい仕事ではありませんが。」

確かに、いつぞやかかのゴミ拾い共にでかい顔をされて『助けてやった』などといわれる経験を、彼等も味わうのは気分がいいものではありませんからね」

リースはレオに続き、アキラという若者にも自分が助けられたことに一層の強いわだかまりを持ってしまったらしい。それでも彼らが気分を落ち込ませることなく、思った以上にすんなり同意がももらえたことに、ダンスは内心ホツとする。

「真面目な話をすれば、我々にはこの先も。なにか特別に理由がない限りは、この連邦で展開される作戦に戦力として組み込まれることはないと思う。つまり、選択肢はあまり用意されることはないということだ」

「ここには来れなかったキャピタルの留守番として送り返されるか。本隊に戻っても、やらされるのは荷物運び。確かに、それは楽しい未来ではありませんね」

「そういうことなら、ここに残ることに俺たちに文句はありませんよ。ですが、ダンス。あなたは？」

リースに問われ、ダンスは苦笑いを浮かべた。

「アーサーは『パラディンを遊ばせるわけにはいかない』とは言ってく

れるだろうが、それほど状況は君らと大きな違いはないだろうな。帰還して、チームを解散させたばかりの隊長さんだ。すぐに新チームをまかせるとは、いかないだろう」

「……あなたはすべきことをして、私たちを本隊に帰してくださいました」

「そうですよ！それはないんじゃないかなあ」

「ハハハ、ありがとう。だが、これはそういうものだからな。」

とりあえず私はエルダーに報告書を持って、直接顔を見せに会いに来いと言われている。報告にもどれば、私がここに再び配属されることはないだろう——なに、心配は要らない。

パラディンに倉庫整理はさせないだろうから、私は君たちよりも恵まれている。

あそこできなにか適当な新しい仕事を見つければいいだけさ」

まあ、そんなことを口にするダンス自身が。それについてまだ何も考えていないわけだが——。

「とにかく部隊はこれで解散するが、君たちの意思を確認したかったんだ——。部下であり、仲間だった君たちの。」

さすがにこれまでのようにお互いの陰気な顔をいつも見ることはないだろうが。それでなにかが変わるだろうということもないだろう？。」

「ですな」

「たまには顔を出してくださいよ。ここで俺達がしつかりやってるって見てもらわないと——」

この友情はこれからも変わることはないだろう。

だが人は、兵士は生きている限り前進を続けなくてはならない——それは仕方がないことなのだ。

ところが状況はさっそく計画通りにはいかなかった。

プリドウエンと警察署を歩き来する最初の連絡便が、ダンスの帰還するそれであったはずなのだ。

連邦を突如として襲う、ラッドストームの影響から運行の停止が決



まっってしまった。

ダンスと彼の元部下達はそれを聞いて苦笑いしてお互いの顔を見合わせる。

連邦がこちらの不都合を引き起こすのは、もっとも普通の出来事だったな、と。

とはいえ、早速自分たちで仕事を始めるヘイレンやリースと違い、提出する報告書の見直し以外にやることのなくなったダンスには、困った話であった。

(仕事、新しい私の仕事か——)

忙しく歩き回る兵士たちの横を通り過ぎ、ダンスはいつしか屋上へと出ていた。

不気味な色の霧の世界の中、発着するベルチバードの邪魔にならぬようにとすみに追いやられた装置が、そこにひとつ。霧の中、ダンスは顔を近づけて苦勞してそれをいじりはじめる。

『こちらはパラディン・ダンス、全てのチャンネルで呼びかけている。B・O・S。部隊は、新たな作戦の発動を前に配置転換をおこなう。兵士は至急、ケンブリッジ警察署に帰還せよ。このメッセージは……』

それは繰り返されるメッセージ。

パラディン・ダンスのいかなる考えによるものなのか。

|||||

「新人が？」

「そうだ、デズ。これは緊急事態だ。それもとびつきり最悪のな」

「——そのようね」

デイーコンの話を聞くと、レールロードのリーダーは不快感にわずかに眉を持ち上げたが——それでこの話は終わってしまった。

「デイーコン、彼のことは残念だったわね。ところで、次の任務についてだけど……」

「おいおい、ちよつと待ってくれよ。まだ話は終わっちゃいない。時

間はたっているが、まだ何が起きたのかはつきりしていない。頼む、戦闘チームをひとつでいいんだ。俺に貸してほしい」

「駄目よ」

「無期限でというわけじゃない。7日、いや5日でもいいんだ」

「無理ね、デューコン」

リーダーの声は冷たく、情のかけらもなかった。

鉄面皮を自認するデューコンも、その冷酷さに思わず呆気にとられ。それから抗議の声を上げる。

「なぜだ？これが俺達への、新しい攻撃だとはあんたは思わないのか？」

「思わないわね」

「……」

「どうしたの？いつもみたいなのに、似合わない台詞でも吐いて。私を冷酷な女だと嫌味でも言ったら？」

「しないさ。無駄なようだからな。でも——なぜだ？理由は知りたいわね」

希望は最初から絶たれていた。デューコンはエージェントとして、組織にそれ以上の要求はできない。

ただ、理由だけは知りたいと思った。珍しいことに、リーダーは「それなら沢山あるわ」といって、デューコンのサングラスの向こうにあるであろう瞳をはつきりと見返してきて言った。

「オーガスタの隠れ家があるかと彼の任務だった、そうよね？」

「ああ、そこは見てきたよ。リーダー共が楽しそうに俺たちの仲間の死体を積み上げて焼いていたさ」

「そう、それで？」

「それで？帰ったさ、他にどうしろと？」

「あなたはエージェントよ。あそこに残されたかもしれない情報は、全て消し去らなくてはいけない。デューコン、当然でしょ！」

「俺たちにリーダー退治は必要ないはずだ、デズ。ミニッツメンにでもやらせたらいい」

「ふざけないで！そんなことできるわけがないでしょう。それにもう

いいのよ、あなた達が放り出した仕事はグローリーに片付けてもらうから」

「……」

「不満？それならこっちも同じ。」

「だいたい新人が消えたのは、あなた達が小遣い稼ぎにあのB・O・S・の部隊とやらと取引した情報でゴミ拾いをした結果でしょう？注意をおこたつて、誰かの罠の中に飛び込んだだけ。レールロードの任務とは関係ない」

それは考えられる可能性ではあった。

あそこに仕組まれたプログラムといい、窓ひとつない建物とやらは巨大なネズミ捕りであったとしても不思議ではない。

「それが理由なのか？任務じゃないから、それだけ？」

「——デイーコン、よほどあの少年のことを気に入っていたようね。」

でも、すっかりしなさい。私たちには任務がある。連邦の状況が変化した。ここはますます危険な場所へと変わっていかうとしているのよ。あのB・O・S・が来たの、あなただってあいつらがどんな奴か。直接その目で見てきたはず」

「ああ」

「それなら——」

「俺が素直になれないのはな。オーガスタの隠れ家について話を受ける前。あんたはやけにあいつのことを気にしていた。それは今のあんたの判断に、まったく影響はないと断言してくれれば。俺だって納得するしかない……どうなんだ？」

一瞬、騒音の中で張り詰めた緊張感が生まれるが。

ため息をつくど、デズデモーナは答えた。

「あれは別よ——でもそれじゃ、あなたは納得しないのでしょね。」

私はね、あの時はあなたとあの少年に危機感を抱いていたの。デイーコン、確かにあなたはうちの優秀なエージェントよ。でも、そんなあなたが。あの少年と行動を共にする時、みせたことのない仕事の仕方をやるようになった。

リスクを恐れ、正体を明かさず、静かに任務を終えるあなたは消え

た。かわりに、酔っ払ったみたいにして破壊の限りをつくし、存在感をさらすようになっていた。

あなたはグロリーを野蛮だと非難するけど、私に言わせればあれこそが本当の野蛮そのものよ。

しかもそれをやってのける原因は、まったくといっていいほど戦闘スキルを持っていないというじゃない。あんなのは絶対、おかしいわ。獐猛なボストンコモンに居座る獣達を八つ裂きにする素人なんて、まともじゃない。

あれは呪われた人間よ。

組織にとつては有害にしかならない、そんな危険な存在」

「……わかった、邪魔をしたな」

デイーコンはそうやって会話を無理やりにも打ち切った。

それでもしなければ——彼はもう、ここでは戦うことができなくなりそうな気がしたから。

それからデイーコンは己の感情を封じ込め、本部でしばらくは雑事に忙しくしていた。

レールロードはいきなり新人を見捨てる決定を下してしまった。ここで感情的に自分も外に飛び出してみせようものなら、自分の立場も良くないものになってしまう。

そんな彼の冷静さと冷酷さを責めるように。キャリントンをはじめ、アキラを知っていた本部の人間はデイーコンの新しい相棒だった彼のためにお悔やみを告げてくる。そのたびに心は休まらないと、叫びたくなる衝動を押さえ込まなくてはいけなかった。

だが——その中でも希望が残されていた。

何でも屋のトムは、彼にしては珍しく落ち込んでいたのだ。

「デイーコン、やっぱリデズは。アキラの捜索には許可を出してくれなかったんだね」

「ああ——待て、何で知っている?」

「え? そりゃ、当然だよ。僕は——」

「トム、俺は重要なことだけを知りたい。なんだ？」

「僕が開発した装置、M I L L Aを知ってる？これは、インスタイチュートが連邦をテラフォーミングしていると考えた僕が、それを証明するために生み出した装置なんだ」

「ああ。それで？」

「アキラは前回戻ったときに、こいつをいくつか持って行ってね。ボストンのいくつかの場所に配置してくれと頼んでいるんだけど、彼はあんまり熱心ではないようだ」

「よくわからない。それが、なんだ？」

「——実はこの数日、M I L L Aが弱々しく何度か情報を送ってきていた。彼は連邦を変なルートで歩いていることがわかってる。そして君が戻ってきた、それで僕も納得できたってわけ」

「それはつまり——あいつは生きているのか？」

「そこまではなんとも……でも、今も時々だけ反応はあるよ。どうやら今はメッドフォードの辺りに居るようだね」

脳裏にすぐに地図が思い浮かべた。

メッドフォードは、例の消えた場所からは遠く北東に位置している。バンカーヒルにも、長くは居なかつたが噂はなかつたことを考えると、それほど間違つた情報とは思えない。

「トム、そのデータはどうなる？」

「あー……まとめたらデズに提出する。なんで？」

「俺が思うに彼女はそのデータを重視したりはしないだろう。だが——わかるだろう？俺なら、お前のデータをきちんと生かすこともできるかもしれない」

「ふむ、確かに」

「証明しようじゃないか。お前の——ミラが、多くのことで役に立つと。俺とも組んでみないか？」

「……ふむ……そうだな………わかった。情報はあんたに渡すよ、こいつを是非あんたの力に生かしてほしい」

「——ありがとう」

「いいさ、それにアキラには貸しもあるんでね」

「ん？」

「実は僕が手塩をかけて作り上げたパワーアーマーだけどさ、彼がそれをばらばらに市場に出されるのはもったいないと同意してくれてね。なんとその場で買ってくれたんだ。そいつについても、あんたから彼に渡してもらえるとありがたい」

「ああ、まかせてくれ」

凍りつきかけていた心に、わずかな光が当たるのを感じる。

まさに首の皮一枚——それでも、まったく何も無いよりかはマシであつた。

## ヒーローの憂鬱

連邦を襲ったラッドストームの混乱は5日間で終わり、空はそんなものはなかったとでも言うように。今度は一転して澄んだ空気と透明な世界を取り戻すことができた。

しかしそれはあくまでも天気の話で、連邦の住まう人々の間に生まれたさらに激しく悪い方向へと向かわせる混沌のことではない――。

半年前には、ただの廃墟だったこの場所も。

今ではアキラが命名した「ウオッチタワー」にふさわしく、地下には医療施設。一階を整備と倉庫に。2階は休憩室となっていて、3階が会議室とガービーの私室。その上に兵舎と見張り台が設置されている。

今は新たに防衛用のターレットも配置され、もはや見張りの塔というよりも、砦と表現したほうが正しいだろう。

だがここからはじまった平和の足音は、新年と霧とともに混乱の騒ぎにかき消され。前進を止めて足踏みしようとした。

昼夜交代で最上階にある見張り台に立つ兵士達からは、底から見える同じ風景が。あの霧が晴れた日から、以前とは違うものを感じると誰も口にする。

そして実際に霧が去ってから、悪い情報が続いて飛び込んできていた。

これまで北部では見られなかった、危険な肉食獣。たとえばデスクローやヤオ・グアイと呼ばれる大熊が。

最近ではこの周辺でも徘徊しているらしく、足跡や遠くに目撃したとの報告が次々と舞い込んで来ていた。

さらに最悪な報告がレッドロケットのプレストンの元に届けられる。

ミニッツメンで建て直したばかりの居住地が2つ、この霧の騒ぎの中で無残に崩壊したというのだ。

その片方。スターライト・ドライブインの悲惨さは群を抜いてい

た。

サンクチュアリに集まってきた入居希望者の大半を、年末にあわせてそこに多く送り込んでいたのだが。それがこの最悪の結果を招いてしまったようだ。

入植を開始したばかりの住人達は、あの深い霧の中で何者かに襲われ。相手の襲撃者にたいした抵抗もできず。

行動の制限を命じられてそこに駐留していたミニッツメンは無残にも殺されていた。

ただその知らせだけでも憂鬱なのに。続いて届けられた捜査結果は、さらに救いが無いものであった。

あそこで殺されたのはそこにいた一部の者だけで、どうやら大半はそこから一目散に逃げ出したことがわかった。だが、それは決していいことではない。

彼らは戦うことをせずに素直に逃げたことは賢いことだったのかもしれないが、恐怖心を抱えてにあの霧の中に考えもなく向かって走っていつてしまったのだ。

この連邦を視界と方向感覚を奪われたまま、彼らがその後の数日を無事に生き延びたと考えるのには無理があった――。

(失敗か、クソッ！)

居住地の崩壊――この世界ではもはや珍しくもない出来事ではあるが。プレストンは自分を罵らずにはいられなかった。

かつてのミニッツメンは守ることに重きを置き。あまり居住地の立ち上げには熱心ではなかった。

それが新しいミニッツメンで変わったのは。レオとアキラが、それぞれやり方は違うが「かかわるべきだ」との考えが一致していたので、ガービーは取り入れたのだ。この北部に根を張り、実際に消滅したかつての居住地のいくつかを復活させようとした。

その努力が、あの霧のせいでいきなり大きく後退してしまったのだ。

つい先日までは、このまま無法者はレキシントンに封じ込めてやる、などと鼻息が荒かっただけにこの敗北の味はあまりにも苦かつ



た。

それ以来、彼の夜は次第に長くなっている――。

その日も夜、ウオッチタワーの3階にある彼の自室に戻ると。ベツトに横になるではなく、机の前に座り。プレストンはそこにある地図を眺めた。

連絡はまだないが。予定では南下している新支部の立ち上げメンバーは、霧の影響があってもそろそろ到着してもおかしくはないはずだった。

こちらの変化が、あちらにはないといいのだが。それはあまり期待してはいけないだろう。

北部での活動計画は、この騒ぎで大きく後退してしまった――それを認めて、素直に再出発へと頭を切り替えるしかないようだ。

これまでは連邦の北西を中心点とし、そこから正三角形に徐々に影響力を広げることでもって人々の保護活動を進めようと思つてやってきたが。

やはり、南下を考えるとレキシントンという脅威に対抗するには今のミニッツメンには力がまったく足りていないことを思い知らされてしまっている。

(こんな時、レオやアキラが居てくれれば――)

みつともない泣き言とわかっていても、頼れる彼らのしてのけた魔法のような出来事を実際にその目で見てしまつては。つついそんなことも考えてしまう。

だが、それでは駄目だ――。

「……歯を食いしばる時期なのかもしれないな。あんな騒ぎがあつても、今度こそ無事に切り抜けてみせない」と

そうだ、まだ失敗したとうなだれてる場合じゃない。守りに入つてはいけないのだ。

守るだけではなく、攻める方法もちゃんと考えなくては――。

(なにか、なにかないか?)

レオのような力強い存在感だけではない、アキラのように突飛なアイデアだけではない。

自分だけができる事、彼らではわからない——そう、ミニッツメンとしてやれることはないか？

「——ラジオ、か」

何気なく出てきた自分の言葉にハッと驚き、続いてあわてて立ち上がると部屋の中においてあるラジオのスイッチを押す。ダイアモンドシテイが流している番組が、そこから聞こえてきた。

いつものごとくそこから流れ出る音楽の合間にある覇気も元気もまったくないトラヴィスの情けない声など、当然のようにプレストンも聞いてはいなかった。

かわりに彼は、遠いあの日。

ミニッツメンがキャッスルと呼ばれた本拠地に居たときに流していたという、ラジオのことを思い返していた。

「そうだな。俺たちはまず、ミニッツメンのためのラジオを始めるべきなんだ」

自分が久しぶりにさえているんじゃないか、そう思うとなにやら気分がいい。

そのまま明かりを消すと、珍しくいつもよりも早いペースでベットの上に横になった。疲れていたのだろう、数分も絶たないうちにプレストンは大きな寝息を立てていた。

ミニッツメンは復活から順調だった。

そりゃ、つまづくこともあるだろうが。その勢いがまだ失われたわけではない。

これまでと同じことを、今度は自分の発案ではじめるのだ。自由のラジオ、それはこの連邦に大きな力があることを人々に知ってもらえるはずなのだから——。

|||||

バンカーヒルでは、本部から戻ったディーコンが最悪の状況につい

て。アキラのロボットたちに報告していた。

——レールロードはアキラを見捨てた。

——デイーコンもこれ以上は、一緒に行動することはできない。

人であればこんな時は感情のままに「人でなし」などと非難と罵声を浴びせてもおかしくないが。

やはりロボットというべきか、キュリーもエイダもデイーコンとレールロードの決断について、なにも口にすることはなかった。連邦に限った話ではないが、このような世界では忠誠や友情に価値を見出さない価値観は普通に存在している。

そしてそれは別に非難されることではない。

そもそもにして旧世界にあっても、この国ではそれらに価値はないとする考えは普通にあつたのだから。

「つまり、これ以降は私達だけでアキラの搜索をしなくてはならない。そういうことですか？」

「少しだけなら行動はともにできると思う。俺は——次は連邦の北東へ向かうことになっている」

「具体的にどのくらい、時間はありますか？」

「数日が限度だろうな。ないと思いたいが、もしかしたら本部は俺の行動を見張っているかもしれない。それでは逆にお前達が動きにくくなってしまふだろう」

「——では、あなたはどこまでアキラの力になっていただけなのですか？」

「……エイダというロボットの当然の問いは、この嘘つきの心をキリキリと痛めつける。だが、そうだ。俺は決断しないといけないのだ。

「可能な限り、全てを——これは本気で言っている」

「私たちに時間をもらえますか？これは議論が必要だと思われます」

「ああ、当然だな。そうだ、あとこれを受け取ってくれ」

俺は急いでポケットの中にある何でも屋のトムから回収したデータの入ったテープをキュリーに渡した。

「レールロードで手に入った情報のすべてを渡しておく。詳しいことはその中にはいつているはずだ、確認してみてください」

「わかりました」

その日は、俺は綺麗でもないマットの上で横になった――。

ロボットたちは明日の朝までには答えを出すのだそうだ。俺はそれを待たなくてはならない。いつもなら待つことは得意なことのひとつであつたが……。

久しぶりに夢を見た。

消えたアキラと俺、大海原を前にして向かい合うという、まったくもって面白くもない夢であつた。

俺はいつものように軽口をたたこうとした。「男同士見詰め合つて、気持ち悪いな」「そんな趣味はないんだぞ」と。だが、なぜかその言葉は口から出ることはなかつた。

あいつもいつも以上に無口で、そして俺のように無表情だつた。

まるでこの俺を真似しているように。そういえばあいつが感情をなくした顔を、俺はまだ見たことはない。

「アキラ、俺は――」

『「アイコン、"僕"はまだ。お前の味方だよ』

あいつは卑怯な奴だつたことを忘れていた。

こんな俺にとつて、奴のその言葉はとても――。

俺は朝がはやく来ることを祈つた。今の俺に――友人を見捨てる決断をした卑怯者には、この夢はあまりにも贅沢にすぎるものだったから。

|||||

連邦を横切るようにして進入してきたB・O・Sは、ついにボストン空港上空へと到着していた。

早速地上へと部隊が派遣され、その場所を占拠していたフェラル・グール達の排除を始めようとする。

ところが、存知のとおり。すぐに天候が悪化、視界はほぼゼロで、放射性物質による汚染があるとわかるとさすがに攻撃は中止。撤退

を余儀なくされた。

実際、死者こそ出なかったものの。

持ち込んだ最高品質のパワーアーマーを装着した者が同士討ちをやらかしてしまい。つまらないけが人を少なからず作り出していた。情けない話ではあるが。まあ、それでも犠牲者が生まれなかったのだからとりあえずよかつたと考えるべきなのだろう。

そうして数日、彼らは不愉快な時間を過ごし。

自分達がおこなった一大複合作戦の進捗状況の確認と、失敗——もとい、点検作業の必要性を感じ。パラダインクラスの士官達が、プリドウエンの作戦室へと集められる。

本来であればダンスもここに参加すべきではあるが、天候悪化のためケンブリッジ警察署から動けなくなっており。また、正直な話。彼自身はこの作戦にはそれほど必要もないとあって、会議はそのままに開かれた。

まずは最初に彼らが立てた当初の作戦『レッドチェッカー』の流れが説明された。

キャピタルから連邦へと到達。宣伝をしながら、ボストン空港へ。同時に前線基地に物資と人を流し込み、橋頭堡とし。さらに連邦の重要となりうる複数の施設に対し、かつてのエンクレイヴとの決戦を参考にした強襲作戦を平行して実施する。

その間にも本隊はボストン空港へ到着、以降はそこを中心に海側からボストンへと手を広げていく。

描いた絵は、それはそれは見事な計画だが——。  
非常に残念なことに、結果にあらわれた数字はあまりにも残酷にこの絵が無残な仕上がりをしていることを指摘していた。

体を小さくまるめたスクライブが、それでも大きな声で会議場に不快な言葉を並べる作業を続けていく。

「……以上の点を持って、残念ながら今回の作戦は。成功、とはとても言いがたい状況となっております」

失敗、はつきりとは断言していないが。成功ではないなら、それは失敗なのである。

しかしだからと言って、士気に水をさすような真実を喜んで口にしたがるパラディンはここには一人もいない。スクライブの結論を前にして、すでに多くのパラディンの顔に怒りと不快感の表情が浮かべられていた。

「不愉快な表現が、あまりにも多すぎではないか？霧にうんざりしているところに、胃がもたれてしまいそうだ」

「食欲が減退するのはよいことですよ。飢えるわけではないのですから」

「——なんだと？」

皮肉と刺々しいやりとりが、彼らの鬱屈を刺激して暴力を必要と感じ始めていた。

エルダー・マクソンは、そんな彼らに早速叱咤の声をかける。

「われわれの計画はまだ初期の段階だが、それだけに細心の注意が必要なのだ。

この連邦が手ごわい相手であることは、ここに来る前から我々はすでに承知していたことはず。だからこそ我々はどこに問題があつて、その傷口を取り返しがつかなくなる前にふさぐという作業が今、必要なのだ。

諸君の不満は理解できる。これまでの高い士気を落とすたくはなという気持ちは買うが、君達はパラディンなのだ。下士官達のように、厳しい状況を前にいちいち一喜一憂されては困る」

「はっ……」

「スクライブの分析のおかげで、現在われわれの主目的である連邦への進入はほぼ完了しようとしていることがわかっている。まず、これについてはどうだ？」

問いかけると、地上攻撃を指揮していたパラディンのひとりがそれに答える。

「残っているのは、警察署との密の連絡及び最後の小隊が配備されること。ではありますが、こちらの制圧が終わらねば実のところ最後まで進めようがないというのが実情です。空港には我々が使うために大きな整備も必要でしょうが、そこまで話はいいません」

「なるほど」

「まだはつきりとは言い切れない部分もありますが。例の撤退騒ぎではつきりと確証は得られてはいないので。とにかく、この空港の制圧は思った以上に難しいことがわかってきました」

「なぜ？」

「フェラルの数が、あまりにも多すぎるのです。

こちらの想像をはるかにこえていました。

天候の回復を待って再度出撃の予定ではありませんが。それはパワーアーマー装着者のみの参加が望ましいでしょう」

「それで、どれほど時間がかかる」

「完全制圧に1ヶ月半、遅くとも2ヶ月」

「なんだと!?!」

さすがに全員が顔をみあわせた。

当初の予定では5日で十分、そう考えられていたからだ。

「この理由ですが、空港直下に存在するボストン地下鉄網があげられます。そしてそこにはまだ人を送り込むことはできてはいません。こちらの攻撃に反応するフェラルに同調し、さらに多くが地上へ這い出てくる可能性を捨てきれない」

「地下など、爆破して埋めてしまえばいいのではないか？」

「それも計画のひとつではありますが、とにかく調査をしながら進める必要がでてきてしまった。その現実を認めてもらわなくてはならないのです」

辛抱強くそう口にするパラディンに、同僚は不満顔のまま。

それ以上はなにもいえなくなってしまう。

「わかった。それならなおのこと、攻撃再開は早めなくてはならない。

再度作戦を練り直したものを提出してもらおう」

「了解です」

「続いてこちらが一番深刻だ。

我々は侵入と同時に、複数の主要施設を確保しようと部隊を送り込んだ。結論を言うと、これはすべてが失敗したと結論を出さなくてはいけなくなつたようだ。スクライブ、頼む」

再び立ち上がると、出動した5つの部隊の顛末を発表する。

墜落して全滅が1。墜落はしたが、部隊は生存しているというのが2。部隊の生存が不明だが、ベルチバードだけが戻ってきたのが1で、そもそも近づくこともできずに逃げ帰ったのが1つ。

見事な完敗ぶりである――。

「これでまだ結果は出ていないなどと口にするのは愚か者のすることだ。これ以上の大失敗を招く前に、施設の占拠は諦めるしかないだろうと考える。」

今は空港の制圧再開に集中しつつ、送り出して戻っていない部隊の生存確認と回収方法を君達には考えてもらおう」

「エルダー、ふがいない結果に。謝罪の言葉が……」

「それは必要ない、パラディン。我々は実際のところ連邦を知らない。常にすべてが想像のとおりに進まないのは、それが実戦だからではないのか。」

そして我々は兵士、状況の変化に対応できるはず。ここでの戦いはまだ始まってすらいらないのに、つまらぬ敗北心など抱えてもらっては困るぞ。われわれの真の戦いは、ここから先にあるのだから」

「はっ」

マクソンはパラディンたちにつまらない感情で、今の勢いを消してもらいたくはなかったのだ。

欲を出して、大勝利となるように副次的な作戦を同時に発動したわけだが。連邦はそこまではこちらにいい目を見せるつもりはなかった、つまりはそれだけのことなのだ。

ボストン空港はかならず制圧するし、B・O・Sは必ずインステイチュートへの致命的な一撃でもって。かつては組織が勝ち取って見せたキャピタルのエンクレイブ壊滅につぐ戦果を、若きマクソンのその手にするのだ。

会議が終わり、マクソンは気分転換をとタラップに出る。

若くして多くのものを肩に担がねばならなかったせいで、表情にまだ残っていても不思議ではない若さや甘さといったものはすっかり



抜け落ちてしまったが。それでも彼は、若者なのであった。

眼下に見渡す連邦に、自分の野心を見せ付けることにわずかなロマンを感じていたので。

彼が自分に科した任務がすべて終わった時。

彼の部隊はキャピタルに続いて、この恐るべき連邦をも手にすることができると。

この栄光を手に入れば、むこう100年はキャピタルのB.O.S.の存在感に、世界の誰もが一目置くようになるはず。

そのマクソンのそばには飛空船の艦長が近づいてくると何かを耳に入れた――。

知らされた内容に、エルダーは眉をひそめる。

「ダンスが――こちらの命令に従わない?」

意味がわからなかった。

会議が終わる間に、予定されていた警察署との連絡で伝えてきたらしい。長い任務を終えたばかりのパラダイムの予期せぬ返答に、エルダー・マクソンは困惑する。

かわりにダンスは自身を書き上げた報告書だけを先にこちらに送りつけてきたらしい。

「どういうことか?あまり愉快な話ではないのだが」

「そのあたりのことは、報告書を読めばわかると」

「――なんだと?」

「どうやら彼は現地人のひとりを我々の部隊に招きたいと考えているようです」

「ほう、それは面白い」

「ダンスは、その人物と一緒にここに戻ってあなたに会わせたいと考えているようです。どうしましょう?」

「彼には悪いが、そもそもこの遠征に彼の部隊は戦力としては入ってはいない。とはいえ連邦のことを彼と彼の部下達は知っている――まあ、いいだろう。空港の件が解決するまでは、彼の好きにさせてかまわないでしょう」

「わかりました。それではそのように伝えます」

「休暇ではないのだ、と付け加えるように。といっても、彼は素直には休んだりしないだろうな。報告書は受け取った、はやく次の任務を与える前に顔を見せに來い。それだけでいいだろう」

空を縦横に駆け回る飛行船と飛空艇、その威容にこの連邦は間違いなく震えているはず。

彼らの活動に理解を示すものが現れたなら、それを取り込んでこの連邦を正しくする力として使ってやらねばならないだろう。

己の体に流れるマクソンの血が、それを望んでいるのだから。

|||||

プレストン・ガービーは雲ひとつない青空の下、ひさしぶりにサンクチュアリに訪れると、居住者達をひとりひとり訪れては、励まして回った。

朝、森の中に入っていった住人がそこでデスクローとぼったり出会ったと騒ぎになっていた。そいつはどうも空腹ではなかったようで、真つ青になって震えている住人を無視してどこかにいつてしまつたらしい。

だが、人間の方はそれで終わりとはならなかった。

「あの化け物、あんたのミニッツメンで退治してもらおうわけにはいかないのだろうか？」

「……パトロールで周辺を見ていますし、もし間違いがあつてここへ現れても。その時は必ず、我々が駆けつけますよ」

約束などできるはずもなかった。

崖の上の居住地からも、同様の目撃例を伝えてきており。ミニッツメンの更なる協力を求めると、訴えてきていた。

さらに今日になって、これまではなんだかんだとこちらの申し出を拒んでいたアパナシーの農場も、調子よくミニッツメンの支持と引き換えに兵士をよこしてくれとさつそく要求をしてきている。

(簡単に言ってくれるよな)

現在、複数台のT-45 パワーアーマーをレッドロケットの倉庫

に用意しているが。

それがあればデスクローとタイマンが張れるかといえば、難しいところだということとはプレストンにもわかつている。コンコードでもあのレオの一件からそう考える。とはいえ、だからといってやりませんとはいえないわけで……。

レッドロケットへとため息をつきながら戻ってくると、訓練中のはずの新兵達が輪を作ってなにやら騒いでいるのを遠目で確認した。

(あいつら——訓練をサボってるのか？それでは困るんだぞ)

舌打ちをひとつすると、なんといってたしなめてやろうかと考えながら足を早めた。驚いたことに、彼らの前に立つ前にむこうがこちらに気がついた。

「大変です、大変です。こっちはです、こっちはです」

そんな同じことを口にしつつ、何人かはプレストンのところまで来ると。腕をとって引っ張っていこうとした。

「お、おい。なんだ？どうしたんだ？」

「とにかく来てください。来てください」

「？」

首をかしげながら、それで輪の中に入っていく。

そこにあるのを目にすると、プレストンは驚きから絶句し。両方の目は大きく見開かれる。

犬がいた。

それは間違いようもない、あのレオがつれて歩いてきた犬。つまりカールである。

あの霧の中でも歩き続けたのだろうか？

毛並みはひどく汚れていて、気のせいかな色が少しかわってしまったようにも見える。

銃か何かで撃たれたのだろうか、皮膚の表面をぼこぼこに醜くしていて、疲労困憊らしくその場に横になって動けそうには見えなかった。異常事態をつけているのだと、プレストンはとっさに考え、そして唸るように声を上げた。

「——つの、クソツタレ！」

苛立ちと怒りはそれで終わらせ、すぐにもまわりに「誰か！医務室から薬品を取って来い、あるだけ全部」と叫んだ。続いてカールの前でしゃがむと、声をかける。

「いったいなにがあったっていうんだ？將軍は、お前の飼い主はどこだ？」

犬は答えない。腹でも減っているのか？

そうじゃないだろう、犬が人の言葉をしゃべるものか！

「食べる物も頼む！……まさか、レオは、將軍は死んだ？」

食事と聞いたからか、それともレオが死んだと口にしたからか。どちらかとはわからないが、耳をパタパタと動かすと、カールは薄目を開けてから鼻で笑った。

どうやら生きているらしい、なぜかカールのその態度を見てプレス-tonは思った。

だが——ならばなぜ、レオはカールと別れてしまうような事になったんだ？

だがたったそれだけの疑問も、相手が犬ではやっぱり答えはえられない。

## 怒れない、ハンコック

年明けのグッドネイバーは、まるでウブな若者がここに来て、最初のジェットを試したかのようなそれで。

喧騒を激しく上昇と下降を交互にくりかえしてみせていた。

そんな時、町の入り口に真つ青になつて飛び込んできたひとりのトリガーマンは、重大な知らせを抱えて市長の元へと急いでいる。

なのにここにはその市長にそそのかさされたからと、酒に薬にと酩酊状態の住人たちがいて、彼らは等しく楽しい天国での散歩をこの瞬間に楽しんでいるのだ。

トリガーマンは人込みを掻き分けるだけではならず、なにやら妙に馴れ馴れしい住人達に絡まれては、足を止めなくてはいけなかった。

「急いでるんだよつ、離れろ。こっち来るな！」

その内、苛立つて突き飛ばすのに飽きると。

殺しこそしないが、殴る蹴るわの大暴れするようになるが。

相手は鼻血をだそうが、骨を折ろうか。楽しい気分はその程度ではやめられぬと、ヘラヘラと笑顔のままであうめき声を混ぜながら……やっぱり笑い続けた。

そんなだからハンコック自身も気がつくのに遅れた。

誰かが空を見上げ、指をさし。

続けてあのふざけた放送をかけながら進む飛行船が——あのB.

O.S. がいきなり姿を現したと理解すると、ハンコックの“いい気分”は一気に怒りに吹き飛ばされ、かき消されてしまう。

運が悪いことに、件のトリガーマンは不機嫌になつた彼が急いで指を出しているところで到着し。いまさらながらの報告を聞かせてしまったものだから、さすがのハンコックもつい感情が激してしまふ。「この大馬鹿野郎！」と叫ぶと、不運な部下をその場で殴り倒してしまつた。

こういう時、ついてないことは立て続ける起こるものらしい。

にわか騒がしくなつたグッドネイバーを、今度は連邦が封じ込めにかかる。ねずみ色の嵐の5日間——市長はひたすら町の中で霧が

晴れるのを待ち続けねばならなかった。

店から持ち出してきたアルコールのビンを黙々と空にし続ける不機嫌な市長に。

さすがに気心の知れたファーレンハイトも、ただ黙ってこの時間が過ぎるのを待つしかなかった。

|||||

階段に飛び出してくるなり相手の10ミリ拳銃は火を噴くが、狙いがまるでなっちゃんない。

こちらは一発、ただそれだけで額に穴を開けられた相手は驚くほど器用にエビ反りしながら崩れ落ちていく。ここが笑いどころか。

「ケンドラはお前か？」

「それで？ シュラウドが来たとこちらが震えているとでも思ったの？ 頭は大丈夫？」

「……」

「デランシー達を殺って、しばらく静かにしていたと思っただけど。誰を相手にしているのか、本当にわかってる？」

「……」

「小さな虫が望んで蜘蛛の巣にからめられ、あがくのを見るのは大好きさ」

「そうかい。貴様は終わりだ、悪党」

適当に思いついた言葉で十分だった。

さすがにそれなりに名の知れた殺し屋だ。アイツが鼻歌まじりで組みなおしたシルバーサブマシンガンだけじゃ、どうにもならなかっただろう。

得意のライフルとサブマシンガンの2丁撃ち。コミックでないことやらないことをやってしまった。多分、こんなアホな撃ち方、もう2度とすることはないだろう。

立ち去り際に、ケンドラの死体からメモを取り上げた。

どうやらこいつ、よそで別に仕事を引き受けていたらしい。

「……臨時収入か、それもいいな」

やっぱり俺は正義のミカタって柄じゃない。

ただの糞つたれのしようもない殺し屋ってことだ。この依頼は死人のかわりにもらってやることにした。

空想の世界から飛び出したヒーローは、帽子を目深にかぶりなおすと。

コートの襟を立てて、物言わぬ殺し屋に別れを告げた。

この正義が、誰の手によつて行われたのかを知らせる。シユラウドのカードをその場に残すのを忘れてしまい、ポケットの中にそれを収めたまま。

|||||

霧に閉ざされた連邦は、思った以上にハンコックと彼のグッドネイバーを苦しめていた。

彼の情報網は寸断されるのは仕方ないとしても、ビジネスまで麻痺すると。やはり落ち着いて余裕を見せるなんてことはできなくなる。

ハンコック自身はそれほどキャップに執着はしていないもの。彼に従う部下の中には女やジェット、それに仕事を同量にこなしていないとハイになれない、そういう奴もいるので人間関係に気を配らないといけなくなる。

冷静に論し、笑い飛ばし、時には怒ったフリをして怒鳴りつける。

ボスとしての役割はわかっているが、自分の中にもどうしようもない怒りが燻っている。どうしても間違った対応をしでかさないと、気にするようになる。

(まったくこの霧と同じだな——袋小路に迷って、回り続けている感じだ)

ハンコックは結局、我慢しきれずに町に入り浸っているゴミ拾い達を集めると、「あの飛行船の情報をもってこい」とだけ告げて霧の連邦へ、町から放り出していた。

小汚い顔はほとんど覚えてもいないが、あの中の何人が与えた仕事をこなして戻ってくるのか。

「俺は失敗したと思うか？」

「なに？」

「俺のあの判断だ。ゴミ拾いの連中」

「ああ……」

弱気になったわけではない。

誰かの素直な意見が必要だった。そしてそれに答えるのは、いつも彼女。護衛のファーレンハイトの役目である。

「別に。どっちでもよかったと思うけど？」

「そう思うか？」

「こんなおかしな霧に悩まされるなんて思わなかった。でも情報は必要でしょ」

「フン」

鼻で笑うように返事をする。

あせっているわけではない。まだおびえているわけじゃない。

だが、自分を見て他人がそれを弱気になっているとか。自信がないと思われるのは、耐えられない――。

「イラつかさされているんだ。どうしようもないとわかっている」

「霧は晴れるわ。少なくともこれまでではそうだった」

「ああ、そうだったな」

連邦のパワーバランスが崩されるかもしれない――。

あのB・O・Sはキャピタル・ウエイストランドでの“前科”がある。

10年前、奴らは自分達と変わらぬ危険なハイテク集団を襲い、これを武力で制圧し、その全てを奪ったといわれている。

そして強大な存在になっていったあいつらは、たびたび連邦に送り込み。偵察隊が持ち帰る情報は、いつの日かこうするための野心の表れではなかったのか。

|||||



霧の中を苦勞してグッドネイバーへと戻った男は、シユラウドの衣装を依頼主に返しに行く。メモリー・デンでは、その人物。グールのケント・コノリーが、戻ってきた彼のヒーローを笑顔で迎える。

「仕事、やってくれたんだね。嬉しいなあ」

「キャップを出すって言うしな。変な格好をさせられたが、殺しの依頼なら引き受けない理由はないさ」

「ありがとう。これでまたひとつ、この世界はよくなったはずさ」

「そうだといいな……」

おかしな話だ。

ちよつと前までなら、こんな依頼でもキャップのためなんて言い訳のようにして引き受けることはなかった。

知らないうちに、自分もあの連中の影響を受けていたってことなのかもな……。

「あ、そういえばラジオは聞いてくれた？」

「いや」

「なんだ、それじゃ知らないんだね？ 実は我らの英雄シユラウドに会いたって、ハンコック市長から言ってきたんだ」

「っ!？」

「行ってもらえるよね？」

「っ!？ 俺が行く訳がないだろう！ ただの傭兵で殺し屋なんだぞ。シユラウドなんてのは格好だけだ」

「そんなあ、駄目なのかい？」

「駄目だ。また誰か殺したくなったら、キャップを用意して話を持ってきてくれ」

「皆は君の、シユラウドの味方なんだよ!？」

「駄目だ!」

大悪党のハンコックに会いにいくだつて？ 冗談じゃない。

やっぱりやめだ。あいつらの真似したら、あいつらみたいにとらブルがむこうからやってきちゃう。俺も学んだよ、本当に。

レオに置いていかれたマクレデイはグッドネイバーへと戻っていた。結局のところ、マクレデイはヘーゲン砦には向かわなかった。いや、一度は追いつけるかもと考えて悩んだ瞬間はあったけれど、それも一瞬のことではしかなかった。

はつきりとは口にはできないが、自分はきつとレオへの怒りと、アキラへの引け目を感じているのだと思うのだ。それになにより自分自身に失望を感じていた。

何が何でもついていく、そう宣言したとのに。

私情が絡むと、それを利用され。上手くいったと浮かれている隙を突かれてまんまと逃げられてしまったのだ。仕事をさせてもらえず、後に残された自分の間抜けさには、声も上げられない。

それでも、ここにくればまた最初から出直しができるはず。

そう無理にでも考え、行動したというのに。脅迫者がいなくなっても、まるでなにかが進んでいるという感覚はなく。

むしろ後退しているのでは、と不安に取り付かれている。

そのせいで――。

つまらないことをしでかしてしまった。俺はやるべきじゃなかったんだ。

マクレデイはメモリー・デンを出ると、まっすぐサードレールへと向かう。

今度こそ、ここでまっとうな依頼つてやつを待ち。その時が来るまでは決して出歩くまいと心に誓って。

彼は知らないが、運命のいたずらは確かにあった。

酒場へと向かうマクレデイの姿を、建物の上階にある窓の影から光る目が見つめていた。冷たい輝きはあっても、そこに感情はない。

暗い部屋の中、窓際に立つファーレンハイトは、それを見て何を考える？

|| || || || || || || || || ||

霧が晴れると、町の住人達はようやくビジネスができるかとホツとしていたが。

ハンコック市長が彼らと同調することではなく、その前から続く彼の怒りと不満が取り払われることにはまったくならなかった。

不毛の大地を汚す嵐が連邦を覆うと、この大地の生態系を引つ掻き回して見せたことはすでに触れていたが。

ボストン・コモンでもそれはおこっていて、活気を取り戻そうと動き出したグッドネイバーの入り口にスーパーミュータントの集団が迫る。

それはこの町のちよつとしたエンターテインメントみたいなもので、ハンコックも町も。これまでも何の対策も打っていないわけがなかった。

「戦工 ニンゲン！」

そう叫んで入り口から飛び込んできた奴らに対し。

トリガーマン達と住人は手馴れたものだった。

「ああ、いいぜ」

そう余裕を見せて返すと、あちこちの路地はもちろん。店先や建物の窓から銃口が飛び出し、一斉に火を噴く。

どれほど強靱を誇るスーパーミュータントであったとしても、この攻撃に耐えることはできなかった。

ファーレンハイトが援軍を引き連れてここに現れたときには、すでに決着がついて。住人達は肉片を前にして勝利の雄たけびを上げていたものだった。

しかしハンコック市長の仕事は、それで終わりというわけではない。

飛行船の情報のことに気が散らされてはいるものの。この目先の事件をなんでもないことと、知らんふりをするつもりはなかった。

自室の長椅子に座り、しばし熟考すると口を開いた。

「あの緑の大男達だが、少しお仕置が必要だとは思わないか？」

ボストンコモンで生きるには、気軽な散歩はあまり良い考えではないと奴らにもわかるように。こちらからも散歩に出すつてのはどうだろう？」

この頃になると、昨年末にボストンコモンのスーパーミュータントをまとめていたといわれるフィストの死が知れ渡っていたが。それがあの元Vault居住者と友人達がやったことだとまでは知られていなかった。

しかしそのせいで、フィストの地位を狙った奴らの仲間内のためのパフォーマン스에悩まされることに、ハンコックはさっそく危機感を持つべきではないかと考えたのである。

だが、その意見にファーレンハイトは否定する。

「今回はフィン達が頑張ってくれたから、騒ぐほどのことではないわ。あなたが怒る必要はない、ハンコック」

「まあな。あのフィンの野郎にあれほどの気骨があるとは思わなかった。見直したよ」

「ええ、そうね」

「期待するほどではまだないが、これで一皮むけて悪党として——」

市長は言葉を切った。つい護衛の話術に引っかけかり、余計なことを口にするところだったと気がついたのだ。

なんでもないよう、そして当然のように話を強引に戻す。

「俺はこの一件で、町の連中に『俺らしくない』なんて言われたくない。特にあの霧のせいで、我慢を強いられた直後ならなおさらだ」

「あなたらしくない、というなら正にこの事でしょう。あなたは勝利する必要がある」

「ああ、確かにな」

「なら敵にメッセージを送るなんて考えてはダメ。むしろ黙って必要なことだけをすればいい。」

あいつらが群れたりできないように、レイダーをあいつらのそばに配置すればいい。お互いが攻撃を始めたら、どちらも次第に消耗していくわ」

「そして俺は、そんな奴らのゲームの動きを見守り。必要なら盤上の駒を勝手に増やして、傷つき、弱っていくようにしむけたらいい——確かに、その方が面白そうだ」

「ハンコックと市長の町に勝利を」

「勝利を」

完全ではなかったが、助言を聞いて市長の気持ちは随分と救われた。

少なくとも、あおるグラスの中の液体の味を感じるくらいの余裕を生み出すくらいには——。

|||||

「……のさ。そう！もうね、終わった。俺の場所は消えて、なくなっちゃったんだ」

無駄にキャップは減らせない。

サードレールのマクレディは、今夜はもう飲むのはやめようと思っただけに限って、カウンターから気になる言葉が耳に入ってきた。

見ると、バーテンのチャャーリーに相手にされないのもかまわずにグールがひとり。ヤケ酒で絡んでいるようであった。

マクレディはそいつの顔を見ると「あれは……」と思い出した。

ケイトがいた、あのコンバットゾーンのオーナーだったグールだと思っただけだ。名前は……トニーだか、トミーだったか。

レオに付き合って、ストロングとかいうスーパードクターと一緒にあそこに突撃した時は。後は自分でそこを立て直すとか何とか言っただけだ。

あれからなにかあったのだろうか？

マクレディはよお、と言って声をかけ。あれからどうしていたんだい、などとなれなれしく聞きながら相手の隣の席へと移動する。

トミーはマクレディが誰なのか最初はわからず、声をかけられたことに驚いてポカンと口を開けていたが。

すぐにそれがあの日、殴りこんできた連中の中にいたひとりだと気がつく、一転して「このクソ馬鹿野郎」と声を荒げて罵倒してきた。まあ、こうなることは想像はしていたから。逆らわずに相手をなだめてやる。

トミーはそれで冷静になれたようだった。

騒ぐのをやめると、今度は一転して静かになり。2人でしんみりとした酒を飲み始めた。

「結局、コンバットゾーンのショー・ビジネスはとつくの昔に終わっていたんだ。わかっているんだよ、あんな事なくたって。遅かれ早かれ、潮時だったんだ」

「……そうなのか？」

「ああ。グールなんて死ねない人生やってるとな。人の変わり方の残酷さには慣れちまうもんさ。」

コンバットゾーンと名づけたのは理由があったんだ。そこはボストンコモンでも唯一の娯楽施設。それを知らしめたかったからだった」

「それ、意味あったのか？」

「あつたんだよ。最初は、それなりに、な——。」

飲んで騒いで喰って、ファイトを楽しむ。あそこではそれが許されたはずの場所だったんだ。

レイダーだって最初から面倒な客ってわけじゃなかった。コンバットゾーンを尊重してくれてな。そこを訪れる客や敵対する奴等には、臨時の休戦条約みたいなものだってあった」

「あの無法者が？」

「ああ、そうだ。今の連中にはわからんのだろうな——そうするだけの魅力があった。だいたいな、ショー・ビジネスってのは、あの世界をぶっこわしてくれた戦争の前からもあったんだ。知っていたか？」

「へえ」

「レスリングって言ってな。あの頃は屈強な男たちが、力と体をリングの上でぶつけ合って戦っていたんだ。」

子供達はもちろんのこと、その子の親もリング上を見ては熱くさせ

られて声を出して応援していたものさ。俺も親父に連れられて、大騒ぎしていた口でね」

「あんたがまだ人間だった時か」

「そうだ……ヒヒヒ、そういえばあの頃は変な試合が時々組まれることがあったんだ。」

「なんと、人と熊を戦わせていた」

「なんだって?」

「そう、熊だよ。あのヤオ・グアイと同じくらい大きくて危険そうなやつをリングに上げてな。人と戦う」

「……それ、勝負にならないだろう?」

「いや、それがそうでもないんだよ。だいたいは人が勝つんだ。これには仕掛けがあつてな。役者を使う」

「役者?熊は人が中に入っているのか?」

「違う違う、熊の役者を使うんだよ」

「——なんだって?」

「ハハハ、やつぱり信じられねーか。そうだよな、そういうもんだ。」

でも、これは本当だ。あの頃は動物に役を演じさせることができたんだ。で、男と対峙して。リング上でちよつとジャレてやるんだ。」

大騒ぎだったな。殺されるんじゃないかって、熊も役者だから。相手にガオーつてそれらしく吠えるしな」

「死人は出なかったのか?」

「大抵はふつうにじやれて、適当なところで勝負がつく。ひっくりかえった熊の上でポーズ決めたり、吠えられてあわててリングから逃げ出したり。あとはそれらしくスタツフが両者を引き離したりしてな」

「へえ、そりや面白いな」

グラスの中の汚れた氷がカランと音を立てる。

「そういえばトラブルもあったよ。俺も実際に見たのはそれだけだが」

「なにがあつた?」

「あれは——確か、イワン。共産主義者のイワンとか名乗っていた奴がいたんだ。本当に大きな体で2メートルは軽々とこえていた。力

が強くて、いつも不機嫌で怖い顔をしていて、凄い奴だったよ。

ところがこいつ、頭が弱いことでも有名で。たびたび力の加減を忘れて試合をぶち壊すことでも有名だった」

「ああ」

「そいつが大熊と戦うことになった。

噂じゃ、その前に戦ったチャンピオンをうっかり大怪我させたことで目玉カードに穴を開けたせいだっていわれてたっけ」

「話を進めてくれよ」

「ああ、そうだったな——で、いつもの熊がやってきて試合が始まった。

適当に熊とじゃれたら、ぶっ飛ばされて気絶して終わる。その試合じゃ、そういう筋書きだったらしい」

「勝敗は決まっていたのか？」

「話を聞いてなかったのか？」

熊は役者だぞ、本当に戦ったら人なんて簡単に殺しちゃう。

だから当然、勝敗は決まっていたさ。周りはイワンに、適当にじゃれて客を盛り上げたら。そこで殴られたふりをしてひっくり返っていろと言われていた」

「イワンはどうしたんだ？」

「ヒビヒビ、そっ、それがな。あの馬鹿野郎。

試合が始まると頭に血を上らせて、いつもみたいに馬鹿力で熊を殴り始めたんだよ。熊は驚いて逃げ回るし、リングの周りじゃスタッフが全員真っ青になっていた」

「ひどいな、そりゃ」

「ああ、まったくひどい話だよ。会場は大喜びしているが、オーナーは気の毒なくらいに真っ青な顔で激怒していたな。どんな終わり方をするのか、誰もわからなくなっていたと思う」

「どうなった？」

「……熊を育てていた連中が怒ってな。リングに入って試合を止めようとした。」

イワンは馬鹿だから、そいつらも殴り倒してしまった。客は大爆笑



だったが、熊はそれで怒ったんだ」

「……」

「100キロを乞える男が、熊に軽々と人形みたいにされて振り回されるのを見たのはあれが最初で最後だった——」。

イワンはオーナーの怒りを買って葬式代もだしてもらえなかったし。熊は人を殺したからという理由で射殺されちまったんだ。こうして思い返すと、やっぱり救えない話だと思うよな——」

「そうかもな」

空になったグラスを見つめると、またアルコールが必要になる。

チャャーリーに合図を出して、ウイスキーを持ってこさせた。

「俺も連邦をビジネスで飛び回り、夜はサイコとジェットで辛さを忘れる。そんな生活だったんだ。」

それでもいい事はあった。グールが店を出しても、火をつけて燃やされたり、殺されない世の中が来たんだ。

俺も経営者になるつもりだったが、ゴミを売る店だけはしたくなかった。誰もやらないこと、考え付かないこと。それがやりたかった」

「それが、あれか？」

「そう、コンバットゾーンさ。だがそれも、結局はこの熊とイワンと同じになったように感じるのさ。」

あそこが始まった時は、こここのハンコックに負けないことを始められたと、うぬぼれていた。小狡いだけのレイダーが、コンバットゾーンへの敬意を踏みにじって自慢の獲物をあそこでぶっ放した時に、俺の夢も終わったんだ」

「……そうか」

「ああ」

「立て直すとか、言っていなかったか？」

「格好つけたただけだ——いや、少しは本気だったな。それもすぐに駄目になった」

「なにがあった？」

「あいつらだよ。B・O・S.とかいう連中。」

なんて言ったかな……『危険を避けるため、ここは我々が徴発する』とかなんとか。それで俺は、道もわからない霧の中に……あそこから追い出されてしまった」

「——ひどいな」

「そうだな。今はあいつらの戦争ゴツコに使われているんだろうよ。仲間の助けが来るまでは動かないそうだ」

「マジかよ。馬鹿じゃないのか？」

「ああ、そうだ。あいつらも馬鹿だ。」

それでもあいつらはコンバットゾーンを今もめちやくちやにしているし。そこにあの辺の暴れたい奴らはすぐに殺到するだろう。つまりは——」

俺の夢は終わったんだ、トミーは繰り返しかけた言葉をアルコールと一緒にして飲み込んだ。

その表情はグールでもわかる。ただ、悔しさだけが焼けつくようにへばりついてはなれてくれないのだ。

## 忠誠の復活 (LEO)

『牧羊犬は、良い主人どころかろくにえさをくれない主人をもっていました。それで、もうそこにはいられなくなって、とてもしよんぼり歩いていると、道ですずめに出会います。(中略)』

馬方は、「お前にみじめにされてたまるか」ともごもご呟いて、鞭を鳴らし、犬の上に馬車を走らせ、車輪が犬をひき殺しました。それで雀は、「よくも犬の兄さんをひき殺したな。仕返ししてやる。」と叫びます。「雀が仕返しねえ」と馬方は言いました。

そして「ふん、お前がおれに何ができるんだい？」と笑うと、どんなそこから走り去ろうとしました。

そこで雀は荷車のおおいの下にもぐりこみ、並べられたライフルを的確に扱ってみせると。背を向けて座っていた馬方の頭の後ろから、しっかりと撃ち抜いてやりました。

仕返しされると思っていなかった馬方は、祈ることも許しを請うこともできませんでした。ただ、動く荷馬車の上から転がり落ちると、犬にしたように自分が車輪に踏み潰されましたとさ』

(「童話で知る、銃と正義がなせること」より 犬と雀の章を抜粋 著者：アヴェレイ・ジョーンズ)

|||||

彼が次に気がつくとき、なぜか目の前にはあの場所があった。

——ケンブリッジ警察署。

以前と違うのは、重そうな大型武器を構える2人のパワーアーマーが門番をしているくらいか。門の前に散らかっていたフェラルの残骸も、今はきれいに掃除されていた。

「なんだ、お前は？」

「……パラディン・ダンスはまだここに？」

思わず声が出た。挨拶もなしに、質問が。

すると後ろでなにやら調整していたらしい男がパワーアーマーの

影からひよっこり出すと

「——おお、お前が例の現地採用1号かい。パラデインは中でお待ちかねだよ」

「ああ、ありがとう」

彼に今の私ができるだろうか？

ケロググをこの手で黙らせた瞬間は満足を覚えたが。

それも手がかりを失ったと知ったことで、すべては無意味に。力も抜けて、絶望へ突き落とされてしまった。

私には何もなかった——。

撃ち尽くしてしまったライフルは捨て。片手に残ったコンバットショットガンも持ち上げられずに地面に引きずり。

無意味で不快なアーマーは脱ぎ捨てると、燃えてついにダメになってしまったV a u l t スーツまでも脱ぎ捨て。

ケロググの服を——死者から必要なものを剥ぎ取った。むなしい勝利のわずかな報酬ということか。

私はヘーゲン砦からは一刻も早く立ち去りたかった。

しかし飛び去っていく飛行船を追う気にもなれず、カールを連れて砦の近くにもあった。よく知るチェーン店——レッドロケット・トラックストップの店内で横になった。

希望を失った私は嵐と霧の中を動きたくはなかった。

だからそこで数日を昏々と眠り続け、カールも同じように私のそばで丸くなっていた。

霧とまどろむ感覚で時間を喪失させてしまうと、私はようやく眠りの中で夢を見ることができた。

ウオッチタワーが構築される前の、あのレッドロケットのガレージの外。2人で椅子に座り、語り合ったそのときのままのアキラが唐突に口を開いた。

『誰かの力を借りませんか、レオさん』

私は目を覚ます。

世界はいまだに霧につつまれていたが、手元のピップボーイに新し

い表示が点滅していた。

『こちらはパラディン・ダンス、全てのチャンネルで呼びかけている。B. O. S. 部隊は、新たな作戦の発動を前に配置転換をおこなう。兵士は至急、ケンブリッジ警察署に帰還せよ……』

(軍に、戻れということか。この私が――)

かつての世界では数回の戦闘を生き残れば古参兵と呼ばれた。さらに数回を生き残ると、部隊を率いていた。

さらに生き延びた結果が、少佐殿などと呼ばれるまでになり。率いる兵士の数も、与えられた任務の重要性も増していった。

だがそんな生活も、想像もしていなかった終わり方を迎える。

大佐という地位に加え。さらに閣下とよばれる高い地位へ昇るためのチケットだとも考えてくればいいと、上官達から胸糞悪い笑顔で手を差し出された。

私は「くたばれ」といって、そこから家族の元へと戻っていった。あいつらの政治のおかげで、私の中の愛国心がボロボロに擦り切れてしまった。もう、そこでは戦えなくなったのだ。

なのに戻れと？

気がつくとも霧は晴れていなかったが、カールの姿は消えていた。

これで本当にすべてを失ってしまった、またも。私は立ち上がる時、霧の中に向かって歩き出す――。

そして今、私は目的地へとたどり着いたのだ。

|||||

「パラディン・ダンスに戻る？そうか、よかった――」

過酷な長期任務と、今回の本隊の受け入れという重責を立派に果たした男がようやく素直に戻ってくると聞いて、プリドウエン艦長のケルズは喜びのコメントを口にしたが、表情はそれほど明るくはなかった。

5日に続く霧に悩まされはしたものの、それが去ってからは彼がいつ戻ってもこちらは問題なかったからだ。

いや、それだと嘘をつくことになる——。

問題はあった。

皮肉にも霧が連邦を覆いつくす前に送りつけられた、ダンスの報告書が原因だった。彼らしい、飾り気のない言葉で記録はまとめられていたのだが。それを読んだパラディン達の間小さな波紋を生み出してしまったのだ。

彼は報告書の中で、現地で知り合った元Vault居住者との出会いをえらく美化しており。

まあ、確かに放浪する市民にも見るべきものもあるのかもしれないが。その人物を是非にも我が部隊に招きたいとの考えをはつきりと記述に残していた。これがパラディン達の感情を逆撫でした。

ダンスは善良で公明正大だと知られた人物であるが、それゆえに苦難の連続の中で命を落とした仲間より。組織の外の人間をことさらに高く評価したことに厳しい声があがったのである。

一方で、ダンスがそこまで言うならば、という声もあるから本当に難しい。正直にいうと、立場としてはそんな騒ぎになるような人物がこの飛空船への搭乗許可を自分が下さなければいいのに、とも思ってしまうのだが——。

そうした囁りの中、最終的にエルダー・マクソンは無言でその全てに許可を与えた。

マクソンにもそう決断するだけの考えがあったのだろうが、パラディンたちのあげる声は、それでさらに不満は大きく、しかし声は小さくなったことだけは間違いない。

ケルズはデツキでベル千バードが到着するのを待つ間、任務を完了したパラディンをきちんと迎えようと心の中で念じる。だが、どうしても雑念がそれを邪魔しようとして、表情が硬くなってしまふ。(パラディン・ダンスが見込んだ男か——どんな乞食か、見てやらないと)

青い空の上で、こちらにアプローチしてくる機影を眺めながら。ついキャプテンも言葉の中に本音をもらしてしまふ。

|||||

パイパーその日、妹のナットを通してメッセージを受け取った。

「探偵のニック・バレンタインと共に来い——なんだろう？」

「なんかね。ミニッツメンの英雄と会ってほしいらしいよ。これはチャンスだよ！」

「ミニッツメン？ああ、プレストン・ガービーって人だっけ」

「すぐに行つて！」

「でもニックと一緒にって」

「それなら大丈夫、私の知り合いに頼んで伝えてもらったから」

「——あ、そう」

正直、それはあまり深刻な話だとは思わなかった。

パイパーはいつものように、気軽にダイヤモンドシティを出るとハングマンズ・アリーへと向かった。

霧が晴れて数日、あそこはちよつとした騒ぎになりかけたことがあった。

旅を終えて居住地に到着したミニッツメンたちは。そこにロボットと人間の女が、スーパーミュータントと一緒に生活していたのを見たのだから。まあ、視覚的暴力はかなりのものであったのは間違いない。

パイパーとニックがそこに訪れるのはその騒ぎの後、であるから。数日振りの訪問となる。

面白いことにてつきり叩き出されると思われた先住民たちは、あれから一度も喧嘩することなくミニッツメンたちと一緒に住んでいる。

まったく、変な取り合わせだと笑うしかないが——。

レイダーの住家に特有の悪趣味な人体の飾りは今もそのままだが、中に入るとハングマンズ・アリーは別世界がひろがっている。

ここをどう使うのか決定したのはあのアキラという青年で、コス

ワースがそれをせっせと作っていた頃は何もない場所ではなかったが。

ビーハイブ——蜂の巣。

そう名づけられたここは、左右に屹立する建物沿いに格子状の部屋が作られ、挟む建物同士の間は中心は吹き抜けて空を見上げることができた。

ここもウォッチタワーと同じように地上から4階層で部屋と通路が作られ、最上階は両隣りの建物の屋上に出られるようになっていた。

「まだこれでも。全体の60%ほどです」

と、改めて感心するパイパーに、このミニッツメンの支部長さんは顔をしかめて口にするが。すでにその凄さはしつかりと見て感じることができた。

「ニツク!？」

「遅かったじゃないか、パイパー。まだどこかに出し抜かれたんじゃないか？」

「そんなことないよ。いつ、戻ったの？」

「今朝だ、それも入り口を潜り抜けた瞬間にそのままUターンさ。カウンティ・クロッシングでおきた誘拐事件を解決したばかりでね。犯人側との人質交渉が上手くいってよかったよ」

「エリーには会ってないんだ」

「事務所に戻る暇もない。まったく、これほど自分の商売が繁盛しているとはまったく思わなかった。悲しいことにね」

そこでマクナマス支部長が軽い咳払いをすると、話に入りたいと申し出る。

「我々ミニッツメンを率いる立場にある人物、つまり將軍の個人的な友人と呼ばれている皆さんに集まっていたら、大変うれしい。正直、ミニッツメンでは扱いかねていて、困惑する事件が起こった」

「ああ、それは聞いたよ。俺たちはその先を知らされていない」

「こうして集まるのを待っていたからだ。今から話すよ」

そうして、サンクチュアリに大怪我をおったカールが戻ってきた



が。その飼い主がどうなったかわからない。  
いったいなにが起こっているのか、どうしてこうなったのか知りた  
いといって、話を結んだ。

しばらくは全員が無言だった。

あのレオが復讐するべき相手を前に、思いをかなえずして死んだか  
もとようやく理解すると。いつせいに騒ぎが起こる。

最初の口火を切ったのは、ケイトであった。

「なに、それ!? あいつ、勝手にくたばっちゃまったのかよ!」

「ちよつと! ふざけたことを言うんじゃないよ!」

パイパーが早速激昂し、それに触発されたのかコズワースも発狂す  
る。

「そんな、そんなつ……私がこんなゴミ捨て場から動けないばかりに。  
旦那様の身にそんなことが、そんなわけがっ!」

「弱い奴ハ死ヌ アイツモ弱カツタノカ」

そんな中で、唯一人静かだったのはニツクだけであった。

「やれやれ、本当に大騒ぎになっちゃったな」

ハードボイルドに決まっていたが。そんな彼を見ているような落  
ち着いた奴は、ここには残念なぐらいなかった。

|||||

「あなたがプロクター・イングラム?」

ドッグで声をかけられたが、彼女が「またか」と心の中で悪態をつ  
かなかったのはそれが聞き覚えのない声だったから。

地団太を踏むようにして方向を変えると、わずかにだがパワーア  
ーマーとの股ずれがかゆみを覚え、幻肢痛がさらに苦痛にもいた不快感  
を刺激する。

男に笑顔で媚びる年ではないし、自分でもないが。不機嫌な面をむ  
けられて喜ぶやつがないこともわかっている。

「あんたが噂の新兵? 思ってたのより、マシだったわね」

誰かをほめるってことはだいぶ前に忘れてしまったが、気分は悪くない。

声の主は、少し影を感じるが、年を重ねた味わいのある。そんないい男だった。

「イングラム、あまりいじめないでやってくれ。彼は——」

「だから新兵だろ。私にはそれで十分さ。それよりおかえり、大変だったってね。パラディン・ダンス」

「ありがとう、イングラム。君とまた会えて、私もうれしいよ」

「ああ、もう——そういうのは他の奴等とやって。こっちは忙しくて、それどころじゃないんだから」

面白みのない男にそう返事をしつつも、ちらちらと横目でいい男の値踏みを続ける。

確かに思っていたのとは違う。ひどい匂いを漂わせたゴミ漁り、ここになれば安全と力が入ると勘違いしている大馬鹿者。キャピタルでは見慣れた新兵とは、その男は明らかに様子が違うのが見てわかった。

落ち着いていて、柔軟さを感じさせるが。しかし危険な香りがする——部隊にいる小娘達は自分、彼の話題に事欠かなくていいかもしれない。その見た目が本物であれば、の話だが。

「エルダーとは面会を？」

「いや、まあ。一応な……」

「それでいきなりまた外に放り出されるわけ？ なにかやったの？」

「私もアーマーの点検をしてもらうだけさ。君は、彼と話してやってほしいんだ」

裏事情を説明するつもりはないらしい。

それだけ言うと、ダンスはさっさと奥の空いているパワーアーマーステーションに入ってしまった。

相変わらず間というものを理解しない、退屈な奴だ。忘れていたが今、思い出せた。いい男を置いていけば、私が勝手に相手をしてやると信じているらしい。

「思っていたのちがった、と言ったな？ 新兵にどんなのを想像して

「たんだ？」

意外と馴れ馴れしく話す、そんないい男らしい。ますます気に入った。

「気になった？他人を褒めることに慣れてないんだ、キャピタルじゃそれくらい、声を上げる新人はハズレばかりだったからね」

「気にしなくていいって言うことは、喜んでいいのかな？」

「悪いけど、仕事と自分のことで一杯だね。口説くつもりならもつと若いのを探して試したらいい」

「——ここでパワーアーマーを受け取れと言われたんだが」

おっと、さすがに言い過ぎてしまったか。

「きつちり整備されたT-60のパワーアーマーがあるけど。あんたが本当にナイトなら、乗れるだろ？」

「記憶はない。私が経験したのはT-45やT-51だ」

「それならやってみな」

そういつてベイのひとつに案内する。

新兵は慣れた手つきで、まずはパワーアーマーの間接部に目をやっていた。こっちは急がせたくはなかったので、あえて関係のない話をする。

「T-60はうちの主力ってことになってる。」

最初のパワーアーマー、T-45の直接のバージュオンアップ機さ。

T-51も悪くはないが、こいつは総合的にその上をいつているよ。

特徴はなんと言ってもパワーアーマーの利点である重装甲がさらに突き詰められているってこと。でも——」

「でも？」

「パラディンにはさすがにいないが、ナイトなんかだと好き嫌いを口にする贅沢者がいてね。操縦が下手糞のくせに、要求ばかり多い奴がさ」

「整備は大変だ」

何気ない言葉に「ああ、そうさ」と返そうとしたとき。いきなりそいつはアーマーを起動してあっさりと乗り込んでしまった。確か初めて、と——信じるなら本人はそう言ったが。この時点で実力が証明

されたとも理解できる。

「やるじゃない、あなた」

ドッグではめつたに見ることのない。イングラムは笑みを浮かべた。

|||||

エルダー・マクソンはデッキに立つと「同士たちよ！」と力強く呼びかけた。

霧が晴れた後の調査で、ボストン空港制圧はやはり簡単にはいかなることがわかった。

しかしだからといって、それで士気が低下することを心配するようなヤワな鍛え方をこの兵士達はさけてはいない。むしろさらに高いレベルを求めることだって、できるのだ。

「ここまで計画に遅れは出たものの、困難に思えた連邦へ、すでに我々は足を踏み入れている。

つまり、諸君らはすでにして偉業を成し遂げて見せたのだ。そこに待つ危険や、目的も知らず、手がかりさえも与えられていなかったのに。

諸君らはよく指示に従い、命令を忠実に実行してくれた。私はそのことに感動し、そして満足もしている。

船はあるべき場所に着いた。

そして近い未来、足元にあるボストン空港も我らの連邦における大きな一步を意味する存在へと変わるだろう。

そのときにこそ、われらがこの地で何を目的として来たのか。私は諸君に、それをはつきりと明らかにすることになる。

その日が来るまで私が諸君に今、求めることはそれほど多くはない。

必要なことを命令し、それが忠実に実行されることで前へと進む。事が始まれば、我々の歩みは止まることは決してない。

そして私は、ここですべき目的を知っている。そこになんの疑い

も存在しない。諸君らはただ、自らの中に生まれる疑問の答えではなく、己の果たすべき任務と忠義を忘れることなく、ただただ職務に励んでもらいたい——」

——アド・ヴィクトリアム！

最後は共に称えて終わる。

ちょうど演説が終わるタイミングを計っていたのだろうか、ケルズ船長がそこに姿を現すと、エルダー・マクソンにむけて小さく頷いてみせた。

(そうか、ならいい)

マクソンはダンスの要望にはこたえたが、そのかわり会うことを拒否した。

その前に、彼には自分の放った言葉の責任から果たしてもらわねば困る、そういうことにした。軍の中での政治とは、そういうものだ。それほど見所があるというなら、ダンスが訓練してそれを皆がわかるようにしてみろということだった。

ダンスはその要求に無言のまま、ただ頷いた——。

|||||

ブリドウエンのデッキでは先にダンスが出てきて、待っていた。

そこにT-60パワーアーマーがあらわれると、近づいてくる。ダンスはそれを何度も頷いて見ていたが、ふとさびしげな表情を浮かべた。

「どうした、ダンス？」

「いや、君は絶対気を悪くしているとわかってる。申し訳ない。私は——本当に、心のそこから君にそう思っているとわかって欲しいんだ」

「いきなりどうしたんだ？」

「アーサーはおろか、キャプテン・ケルズまで。君と面会することすら拒否するとは。私も戻るまで、こうなると考えていなかった」

「それは仕方ない、全部君が悪いんだから。この連邦から拾ってきた

男に、いきなりこんなパワーアーマーを渡すような地位を与えてしまったんだ。彼らが私と君の能力を疑問視することに、不思議はないさ。私なら、降格処分だっただろう」

「——そうだな、確かに。はつきりと言われると、その通りだったのかも。」

最初に君を私の使いっぱしりにしてやるから、うちに来ないかと言うべきだった。確かに、私のミスだ」

そういうとハハハ、と互いにさわやかな笑い声を上げる。

するとさらにパラディン・レーンが姿を見せ、2人の様子に驚いた顔をして見せた。

「新兵に会わないならボスにも会わない。そんな屁理屈を口にするほど、頑固なお馬鹿さんだとは思わなかった。ダンス、正気かい？」

「レーンか、君には何度もすまないな」

「そう思うならエルダー・マクソンとケルズにくらい、さつさと会って頭を下げてくればいいのに」

「それは出来ない。私の思うところは、すでに報告書に記載して提出してある。手続きの上では認可を出したのだから、アーサーはせっかく連れてきた彼に——レオに会ってもらわねば、ここに招いた私が困る」

「男の面子？なら、好きにしなさい——」

そう言うと、彼らに特別な任務を与える。

作戦に失敗し、バラバラになった攻撃部隊の撤退を援護せよ、というものだった。

「それではナイト・レオ、さつそく任務に出発といきたいのだが——」  
「なにかあるのか？パラディン・ダンス」

「ここから地上に降りなくてはならないが。見てのとおり、足下のボストン空港は未だに制圧が完了していない」

「ああ」

「よってベルチバードで着陸するのが一番なのだが——我々を運んでもいいというランサーがいなかった」

「新人は嫌われているようだ、本当に」

「——だからここから飛び降りようと思う。どうかな、怖いか？」

レオは何も言わず、踵を返すとそのまま力強く走り出した。

タラップの端にはすぐにたどり着いてしまうが、そのまま勢いは殺さずに空中に飛び出していった。

## 愛のメモリー (Akira)

『ある日のこと。』

お姫さまがいつものように金の鞆を投げ上げて遊んでいると、うっかりと受け損なって鞆を泉の中に落としてしまいました。

泉はとても深く、鞆の沈んだ水底は少しも見えません。

(中略)

お姫さまは喜んで、金の鞆を胸に抱くとそのままお城へ駆け戻ってしまいました。

「待って下さいお姫さま！私はそんなに走れません」

カエルが騒ぎましたが、お姫さまは後ろを振り返りもせず走りまです。そうしてカエルとの約束なんて、すっかり忘れてしまったのでした。

(中略)

お姫さまはついにすっかり怒ってしまって、カエルを乱暴に掴み上げるとありつたけの力を込めて壁に投げつけます。

「本当にいやらしいカエルね。これで楽に寝れるわよ！」

しかしどうでしょう。

壁にぶつかったカエルは床に落ちた時にはもうカエルではなくなって、優しい瞳をした美しい王子様に変っていたのです。

この王子様は悪い魔法使いに呪いをかけられカエルの姿にされていたのでした。

「あの泉から助け出してくれたのは君だけだったんだ。おかげで呪いが解けた。有難う」

そういうとルガーP08を取り出してきて、お姫様の額に新しく大きな穴を開けました』

(『銃は物事を簡単にする』より 著者：アヴェリン・ジョーンズ)

|||||

再び、僕は不安定に漂っていた。あの連邦のどこかで。



襲撃を受け、朦朧とした意識の中でなにかに運ばれ続けていた僕は。  
は。

あれからずっと――。

最初に意識を取り戻したとき、僕は Vault の施設に似た住居のフロアに投げ出されていたようだった。

着ていた服も、持っていた武器も、ピップボーイも。すべて取り上げられ、下着姿にさせられていた。

投与された薬のせいだと思うが、頭痛が激しく。気分は沈んでいて、なぜか眠気のようなものに捕らわれて、頭は思ったようには動かない。

時間の感覚が戻らないまま、這うこともできずにその場で体を支えた腕だけの屈伸を繰り返す。ゆらゆら、ゆらゆら、止まることができない。

弱っているそんな僕に、いきなり抱きついてきた枯葉のような長身の老人がいた。

飛びつき、激しく書き抱かれたせいだと思うが。ただそれだけで僕の意識は明滅を繰り返し、頭痛は最大級の痛みを与えた。

その中で耳元で老人の泣きながら囁く言葉が――「愛しい息子よ」と繰り返すそれを聞いた。

僕の感情のメーターが一気にレッドゾーンにまで振り切れる。

自分でそんなことをした理由は思いつかなかったが。

心が勝手に指示を出し、体はそれに従って、容赦なく実行する。

腰砕けだったそれまでの自分はいきなり立ち上がるうとし。

怒りの叫び声とともに老人を殴りつけ、振りほどこうとし、突き飛ばすと。床の上で四股を踏む形でバランスを取ると、憎悪の言葉と表情をショックを受けている老人にたたき付けた。

絶不調とあって視界が狭まっていたこともあり、周囲の様子は確認しきれていなかったが。多分、この老人とともに何人かが僕の周りに取り囲んでいたようだ。

老人を口汚くののしる僕の周囲から殺意の視線が次々と裸の僕を

貫くと、激しい衝撃が僕の全身を襲い。僕は意識をまたもや失う。そしてこれ以降、僕の意識は夢と現の境界線上で緩やかに波を描き続けていた――。

|||||

真つ暗な部屋の中で、静かに誰かが体を起こす気配がした。

わずかに明かりをともし電灯に近づくと、白い光の中に栗色の肌がうつすらと浮かび上がる。

その誰かの手が伸びると、闇の中から慣れ親しんだガスマスクを取り出し。自分の顔に戻しに行く――。

闇の中の誰か、とは“観察者”であった。

大事な任務を失敗してしまい。

ここへ帰還した観察者は家族から先ほどまで責められていたのだ。

そのお仕置きの時間は終わった。だが、その責めが今回あまりにも厳しかったのは、観察者自身の失敗というよりも。同じく帰還を果たしたアキラに対する家族の怒りが収まらずに、こちらにも飛び火したからだと思われた。

――家族はずつとこの日を待っていた。ひとつに集まることを。

――だが戻ったアキラは、“一番やつてはいけない事”をして、家族はすっかり失望させられてしまった。

残念ながら彼の衝撃的な帰還の場に、観察者は同席を許されることはなかった。

だから家族の言う「失望」とはどれほどのものであるのか――それをこれから知っておかなくてはいけないと思うのだ。

服を着ると、ようやくのこと部屋から出る。

すでに処置が施され、体のダメージは回復されているはずだが。それでも歩く足には重さを感じている。

我等“小さな宝物”――この“家族”が住む家は、この10年。連邦に人知れず存在を続けていた。

かくいうこの観察者も、アキラのように連邦から家族の元へと帰還を果たした貴重なひとりだった過去がある。そういう意味で、長く戻ろうとしないどころか。姿を消していたアキラが戻れば、彼への怒りで家族が少しだけおかしくなっても仕方がないのかもしれない。

だがわれわれは家族なのだ。

正しく互いを愛さねばならない、はず。

足の重さが、視点の位置を自然と下げてしまい、うつむきながら歩き続けた。

それが廊下のT字路で、意外な相手に出くわしてしまった。

「っ!」

「あっ——や、やあ。その、戻ったんだよ。“愛する家族”の皆に、会いたくて」

靴とシャツ以外を全身黄色で染め上げているビジネスマンがそこに立っていた。

かの時、舞台上で最後のお別れにと観客に蜂の巣にされたはずのイエローマンは、彼が望んだとおりに帰ってきた。

いや、戻ってきてしまった。

誰にもこれまでは見つからず、ここに入り込んで——。

「お、怒らないでよ。僕は、皆と仲良くしたい」

「……」

イエローマンは——そうじゃない、こいつは観察者にとって家族ではない。仲間ですらない。

元はそうだったが、今はもう違う。

こいつはただの廃棄された者。そう、廃棄物と呼ぶべき残骸なのだから。

ここにいないべきではないし。話すべきでもないし、存在しているはずがない奴だ。

顎を引き、正面を見据えると観察者は“そこに誰もいない”ように乱暴に自分よりも長身のイエローマンの体を突き飛ばしてその場を立ち去っていった。

あいつは知らない。“家族”じゃない。  
関わっていい相手でもない。今はもう“小さな宝物”ではなく  
なったのだから。

|||||

変化は一瞬、それはいきなり始まると同時に終わった。

生きた死者は「えっ」と声を上げて目を開けると、それまで浮いて  
いたロボットは力を失って崩れ落ちる。

「成功よ！本当に成功した！」

興奮気味にドクター・アマリは声を上げた。

想像通り、いやそれ以上に上手くいったようだ。人造人間の空っぽ  
だったところに何かが収まってくれた。

意識を取り戻すことのない患者が、目を見開いて声まであげた。

だが驚いたこともある、ロボットの体の方は壊れてしまったらしい。  
実行と同時に力を失い、地面に崩れ落ちてしまった——もう起動  
することはなさそうである。

「な、なに？」

「キュリー、どうしたの？」

「ドクター変です……」

「ああ、そういうことね。キュリー、息をするの。あなたは生体となっ  
たから、呼吸をしないといけない。大丈夫、深刻に考える必要はない。  
あなたの体が求めるように、好きにさせればいいの」

グッドネイバーのメモリー・デンに奇跡とも思える実験が行われ  
た。

そのためにドクター・アマリは隙なく大胆に物事をすすめてきた。  
それがここに報われたのだ。

人造人間に人の記憶を与えるように。ロボットのそれも、人造人間  
の記憶として受け渡すことができる。

生命の禁忌を明らかに踏み越えた。まさにかのフランケンシュタ  
イン博士の発想は、ここでも素晴らしい可能性という甘い果実を熟し

て落ちた。

もちろん、これはサンプルの一号であり。この先の未来でも選択肢となりうるものなのかどうかはまだわからないが……。

(それでもやはり、リスクを犯しすぎたわ)

キュリーの新しい体を保存していた提供者は、目覚める姿を確認すると。そつと目元に涙を浮かべつつ、イルマに導かれてここから立ち去っていった。

あの提供者にとって、この別れはすでに定められていたことだった。新しい、キュリーという名の人造人間が誕生したのだから、過去の繋がりは断たれた。あとは幸福に無事に暮らしていけますようにと、連邦の空の下で祈るくらいだ。

だがレールロードにこの事をまだ知られるわけにはいかない。

人間に隷属的なロボットの記憶を人造人間に移すことは、インステイチュートのような奴隷扱いと変わらないなどと言いがかりをつけられては、困るのだ。

だからこそ科学者は新発見に常に慎重でなくてはならない――。

|||||

相変わらず意識は混濁していた。

だがそれだけじゃない。体温は予想だが、この感じだと39.6度をこえている。

すでに悪寒が身体中をサーキット代わりに走り回り、レースの熱を伝えるように休むことなく会場である肉体を激しく震わせ続けた。手と足の関節に力が入らず、逆にして握るように力が抜けていく感覚に抵抗できるはずもない。

意識が現実近づけばわかるが。

うなざれているのだろうか？ 僕の口からは勝手に言葉が飛び出し――といっても、意味のあるものではなく。不明瞭な「ああ」とか「うおお〜」とか出しているようだ。

そして極め付けなのが、今の僕は文字通り素っ裸で――拘束具のつ

いた椅子に横になって固定されていた。

これがどれだけヤバイ状況にいるのか、わかるかな？

ホールに入ると、ガスマスクをしているとはいえ。はっきりと嗅ぎ分けられた異臭に“観察者”は足を止めた。

人の匂い。汗と汚物の混ざり合った匂いがした。その原因については理解している。

ホールの中央には椅子に拘束された人の姿と、その傍らに立つロビー姿の男がひとり。巨大なディスプレイがおりていて、映像がずっと垂れ流されていた。

——お……お前、ダレ？

——ふむ、わかりました。お互い自己紹介をしましょう。私の名はキンジョウ

——誰？

——あなたを裁くもの、裁定人ですよ。アキラ

——ンフフフ

——なにが可笑しいのです？

——俺？……なんの、罪で？

——やはりね……まさか、恐れてはいましたが。あなた、家族としての記憶を……

観察者は彼らの元へと近づいていく。

やっぱりそうだった。椅子の上にはあのアキラが横になっている。何かされたのか、ブルブルと体は震え、皮膚は赤く、体温も明らかに異常に高い様子が見られた。

戸惑う観察者を前に、ローブの男はリモコンで操作し。ディスプレイを消す。

「これはなんだ？アキラになにをした、キンジョウ？」

「よく来てくれましたね、観察者。大丈夫ですか？」

「こちらは質問をしている。答えろ」

「気遣ったのですが。あなたが珍しく、失態を演じるなどありえないと思ってましたから。驚きましたよ？」

スペースシップの確保とそのパイロットの血清の入手。

船の回収こそ成功したが、血清は残念ながら失敗に終わった。ヘーゲン砦で、レオたちに半分以上のサンプルをつかってしまったせいで、必要とされる量の血清は手に入らなかったと報告するしかなかった。

観察者は血清自体、手に入らなかったと嘘の報告をした。

実はまだ2本、血清は懐の銀ケースの中に残っている。

だがそれでも家族は任務は失敗したのだとなじられるのことにかわりがないので、嘘を突き通してされるがままにしてきたのだが――。

「この男が家族に、我々の“あの人”になにをしたかくらいは耳にしているでしょう？ 私はあのようなことが起こった原因を、この男の中から探し出していただけです」

「本当か？なぜ苦しんでいる？」

「それは簡単なことです。」

これが、この男が。五十嵐 晃なる存在は、実はいうほどのものではなかったという証明が、これです。我々のアキラは壊れていた、私の結論です」

「……」

「フン、この症状は私が何かしたからではありません。この男の中に、おかしな細菌が紛れ込んでいたので活性化させてみただけです。ひどい話ですが、面白いサンプルが出来上がりましたがね」

「ふざけているのか？すぐになんとかしろ」

「いや、そんなことはしません」

キンジョウと名乗るローブの男はそういうと首を横に振る。

「ここにあなたを呼んだのは、説明するためです。私は裁定人を選び、先ほどの映像とあわせてこれは取り調べの一環としてやっていきます。そして家族に私は報告を済ませました、そうです！もう判断は終わりました」

「まさか……」

「それだけ家族はショックを受けていたのですよ。それほどのことを

この生ゴミはしでかしてくれたのです。帰還した直後にね！」

「!?」

「これはあの人の望みでもある。私、キンジョウを“裁定人”とし。五十嵐 アキラを廃棄せよ、と」

「ありえない！」

観測者はマスクの下の表情をゆがめる。

目の前の兄弟の言葉がただただ、不愉快であった。

「嘘ではありませんよ。私、キンジョウの手でこのイガラシ アキラは廃棄されます。そしてそれが終わった時、これを勇気を持って実行した息子。つまりこのキンジョウが、新たな裁定者の地位に就任いたします」

「!?」

「ええ、そうです。あなたの同位者が誕生するのです。祝ってください」

ローブの男の顔には、もう隠す必要のないものが露にされていた。

野心と勝利を味わう獣の笑顔が。

「私が今度こそ家族が待ち続けた本物のアキラとなるのです。キンジョウ アキラ、良い名前だとは思いませんか？」

ホールに張り詰めた緊張と静寂が降りてきた。

だが、ただそれだけで。それ以上は何もおこることはなかった。

|||||

眠っている僕は、明らかに弱っていた。

そして今は夢のほうへと針は振られ、僕は過去の記憶を再現していた。

そこはあの Vault 施設の中。

レオさんが前に立ち、僕は後ろに立って静かに。そしてかなり早足で前進を続けている。その2人を僕の意識が追いかけている――。

ここはあそこだ。

キュリーがいた、Vault 81の秘密のエリア。コズワースのこ



とがあつて、2人だけで僕らはそこへ侵入していた時のものだ。好戦的なモールラッドはこちらに気がつく、次々と襲ってきた場所だ。当時はレオさんを心配して、僕はついていくと申し出たが。実際のところ僕の力はまるで必要なかった。

冷静で、迷うことのない動きは鋭く、決して何者も近づかせることはない。まさにこれを体現する、最高の兵士の姿を僕は後ろからみていた。つまり僕はあそこで自分の面倒だけを見ればいい――。

秘密のエリアの奥に進むにつれ、次第に驚くようなものを目にするようになった。

居住者を完璧に管理および監視するシステムが残され、そして今もちゃんと機能していた。Vaultの住人たちが、モールラッドの疫病に倒れた子供を心配し。

わずかな望みを託した外から来た客人について会話しているのを聞いた。

僕の意識はそこうつつていく――ああ、馬鹿だったよな。

目を閉じると、無様に「うわつ」と声を上げながらあの時の僕の銃が火を噴き、引き裂かれたモールラッドの体が床を転がった。

目を開けるとレオさんは視線を前に置いたまま背後の僕に「大丈夫か？」と聞いていた。僕は答える「ええ、すいません」と。

左のわき腹の皮膚を傷つけた、モールラッドの歯のかけらを慌てて爪で払い落としながら――。

|||||

ファーレンハイトは困惑していた。

いつもは使わないほうの応接室に通されていたのは、サングラス姿のスカベンジャーとそのロボットのアサルトロン。顔も名前も知らない彼らが、どうやら自分の客だと名乗ったという。

この町で、わざわざ名指して彼女に会いたいという命知らずはいない。

例え口にできないようなおぞましいことをしている最中でも、感情の変化に乏しい声は普通のままで。その暴力性はあまりにも凄惨に過ぎて、理解できずに誰しも気味悪がって彼女に進んで近寄ることもない。

それでも一応は人間で女であるのは間違いないようで、たまに男と関係を持つことだってあったが。そいつらは結局のところハンコックの敵に回ったことで、彼女の手で無残な最期をとげてきた。

それなのに――。

「誰なの？見慣れない顔だけど」

「え、ええ――へへへっ。俺たちはですねえ」

機嫌を損ねてしまい、空気が悪くなったのを察したか。男の口が忙しく動かされようとしていたが。

そんな主人など気にならないのか。カタカタとキヤタピラを低く音を立てて、ロボットの前方が前に進み出てきた。

「？」

「え、おっ、おいつ」

「あなたはグッドネイバーの市長、ハンコック氏の護衛ですね？人間の女性、名前はファーレンハイト」

「――ええ、そうよ。暗殺ロボットさん、その情報は間違ってるわ」  
「私の友人があなたに預けた『スタンレーのピクニック』は、ここにありますか？」

ファーレンハイトの顔色が変わった。

そしてキビキビとした動作でいつもは開け放つことが決まっていた部屋の扉を閉めると、外に立つトリガーマンたちを締め出してしまった。

「それは私じゃなく、市長が預かっているわ。ところで、それが何かわかって聞いたのか教えて頂戴」

「――一枚の絵です。そのはずです」

「……そうね、その通りよ。あなた達、何か用？」

「はい」

扉の外にいたトリガーマンたちはまだ困惑していた。あの警備に

うるさいファーレンハイトが、自ら進んでこの扉を閉めるなんてこれまではなかったはず。

そしてそれと同じくらい驚く速さで、扉は再び開けられる――。

「話はそれだけ？なら、聞いたわ。さようなら――」

外に出て行くように促され、スカベンジャーは「それじゃ」などと言いながら部屋を出るが。ロボットはまだ動こうとはしない。

「なにをしているの。出て行って」

「おい、おいっ」

「……」

「へへへ、すみませんどうも――このポンコツが、さつさと来いって――」

怒鳴られるとようやく、ひとつ頷いてからロボットも部屋から出て行く。

「姐さん？」

「なんでもなかったわ。つまらないゴミをつかませにきたのよ

「――どうします？町からたたき出しますか？」

「放っておきなさい。ここはハンコック市長のグッドネイバーよ。市長もああいうのがいるから面白いと、かえって大喜びするでしょうか」

「わかりました」

ファーレンハイトは自分のいるべき場所へ戻っていく。

あのロボットが彼のものと、すぐにわかった。名前はエイダ、ということはあるスカベンジャーはレールロードの者か？

しかしやっぱり彼女の表情も声も、いつものように気だるげで。

誰にも彼女の心の中のものを見せようとはしなかった。

|||||

扉を開けると、部屋の中はほとんど真っ暗で。装置についた計器類やボタンだけが原色の発光することで存在を知らせていた。

イエローマンはギョツとして立ち止まったが。すぐに部屋の中へ

入ると「明かりを」と弱弱しい声で命令する。

「アキラ——やつと会えたね」

部屋の扉は閉められ、照明がつくと中央に置かれたポッドの中に眠るアキラがいた。

イエローマンがここにたどり着くまでに長い時間が必要だった。

家族は彼に出会っても、見ようともせず、話を聞こうともしてくれなかったから。ここを見つげるのに自分で探すしかなかったのだ。

ここはモニタールーム。

自我を持つコンピューターに実験動物を管理させ、研究室とも近い場所にあった。

イエローマンにはわかっていた。このアキラはかつての自分と同じ運命を今、たどり始めていることを。家族に不義を糾弾された彼もまたここに来て、今の姿となつてからは。家族からはじき出されてしまったのだから——。

グズグズはしていらなかった。

イエローマンは試しに近くのボタンをいくつか押すと。ディスプレイにはキンジョウの顔写真に続いて、ずらずらとなにかを作業したというリストが留まることなくスクロールした。

「えっ、えっ?」

残念ながらイエローマンはキンジョウがこのアキラに何をしたのかまったく理解することはできなかった。

ただわかったのは最初に書かれた「廃棄処分」と「実験体として活用」の2つだけは、帽子の下の黄色のマスクにくりぬかれた穴からのぞく両目に焼き付いていた。

——アキラ、君もあの人に僕のようにされてしまうのかい?」

哀れみという感情が、イエローマンの心を塗りつぶすと。遅れた悲しみの激しい波がその上から押し寄せてくる。

「ゴ、コンピューター?」

顔を上げたイエローマンは自信なさげに声を上げると。部屋の中にガキガキと雑音が短く響いたが、イエローマンの耳にはそれは声と

してメツセージを受け取っていた。

「ご、ごめんよ。ただ、やってほしいことがあるんだ。

ここに眠っているアキラを起こして欲しい——この部屋から出したいんだ」

再びガキガキと音が響くと、イエローマンはビクンと体を震わせた。しかし要求することはあきらめなかった。

「手伝ってくれたら、すぐに部屋を出て行くよ。2人でここから出ていくから」

今度は雑音が返ってこなかった。

変わりにポッドの周りにあるスイッチや計器類が勝手に反応し、ディスプレイにもキンジョウの処置した情報が消え。知らない指示が次々とそこに表示されていく。

「ああ」

思わず声を上げる。

ゴボゴボと音を立ててポッドの中の液体が抜かれると。次に巨大な注射針が2本、眠るアキラの左右の胸に突き刺さり。何かを肺の中へと投入する。

続いて頭のとっぺんからフラッシュが足の先までチカチカしながら移動すると、ディスプレイに『呼吸、体温、血圧、正常。準備完了』と表示された。

ポッドのふたが音を立てて動き始めると、空気がその中へと勢いよく侵入していく音がした。

イエローマンは恐る恐る手を伸ばし、アキラの右手に触れた。ほんのりと体温を感じ、間違いなく脈を打っていて、呼吸が開始され胸が上下に動いていた。

「アキラ——兄弟、目を開けて」

声をかけて体をゆすぶると、アキラは静かに目を開け。瞳はイエローマンを捕らえて動く。

だが——。

「あああつ」

イエローマンの声には絶望があった。

アキラの表情は死んでいて、瞳はイエローマンを見つめてもそこに意思が浮かび上がってこない。もう、すでに彼はキンジヨウの手で壊されしまったのだろうか。

「外へ行こう、家族は——僕らはもう」小さな宝物”にはなれない。離れたほうが絶対にいいんだから」

相変わらず目に正気はもどってきていなかったが。イエローマンの言葉に反応してか、静かにアキラは体を起こすと台座からふらつきながらも立ち上がろうとした。

「支えるよ、僕がね」

イエローマンはそういってアキラに肩を貸す。

胸に熱いものがこみ上げるのを感じる。家族の一人と今、自分はふれあい、支え、共に未来へと歩き出そうとしているのだ、と。

もちろん部屋を出て行くときには、礼を口にするのを忘れない。

「あ、ありがとう。」

もういくからね、電気を消していいよ。あと、どうせ皆は”僕を知らない”ことにしたいだろうから、ここで何をしたのか。ログを消してもらえると助かるかな」

今度も返事はなかったが。

2人が扉の前に立てば勝手に開き、部屋の外に出て行くと明かりは勝手に消灯する。

再び闇の中で、ボタンと計器類だけが光ることになるが。ディスプレイには、はっきりと消去完了の文字が点滅していた。

|||||

夢は、かなう事はなかった。

——そこで止まれ!!

警告するキンジヨウの声は、怒りによって裏返り。かえって滑稽に聞こえた。

そのキンジヨウの前には、様々な塗装が施されたT-51 パワーアーマーが複数並び、レーザーライフルをいつでも発射できるように

構えている。

そのキンジョウの背後の奥に扉があり。その先こそが外の世界への出口がある。

だがそこに2人がたどりつくことはないのだ。イエローマンとアキラは寄り添って進むだけで精一杯で、武器を持たずに立っている。立ち塞がる連中の向こう側にある出口を悲しげに見つめたイエローマンは、肩を貸していたアキラからそつと離れる。

そしてキンジョウたちにむかって叫んだ。

「僕は空気にさせられた！僕は皆を、君たち家族を愛していたのに！」

「こつ、このつ。こいつつ！」

「ここにいたらアキラも僕と同じになってしまう。

でもそれなら、もう空気であつてもいいはずじゃないか！僕たちを外に行かせてほしいんだ。家族として、愛してくれるなら」

「ふざけたことを言うなつ、廃棄された分際でっ！」

やはりこうなつたか。

キンジョウが外に出て行くことを許さないことは明らかだつた。なぜ、2人をレーザーで焼き殺さないのか疑問であつたが。それならそれで、このチャンスを生かさなくてはならないだろう。

イエローマンはポケットの中のシルバーケースを取り出し、始めて中を確認する。それは他でもない、観察者が持ち帰っておきながら、提出しなかったあの血清がはいっていたものだ。

多分、イエローマンと廊下ですれ違った際に、こつそりと懐から抜き取っていたのだろう。謎の血清が残り2本、そこに残されていた。「それはなんだ？何をしようとしている？あいつを狙つて、構え!!」

キンジョウの指示に従い、列に並ぶ銃口はいっせいにイエローマンにだけ向けられた。

残り時間はあとわずか。

自由になることも許されず。お互いの言葉を交わす機会はもうないだろうと思われた。イエローマンにはわからないはずだったが、自然と彼の指が2本のアンブルに触れると。ケースが床に落ちていく。

「撃てつ、殺せ！」

アンプルを両手の中に握り締め、イエロー・マンは振り返った。  
アキラはゾンビのようにただその場に立ち、意思の戻らない虚ろな  
視線をイエローマンにむけている。

時間が限りなくゼロへと磨り減る中では言葉では足りなかった。  
イエロー・マンはせめて最後にアキラを抱きしめようとして、それぞ  
れの手にあンプルを握り締めたまま走り出そうとした

その背中を緑のレーザーが伸びてきては次々と直撃する。

走り始めたスーツ姿の人の形はあつという間に崩れると、アキラの  
体には緑の液体となったそれが塊となって襲い、全身を汚してみせ  
た。



## センパー・ファイ！（LEO）

連邦はいつだってそうだ、生きるのに厳しい場所だと。

だが、それも違った。あの日、なにかが変わってしまった。俺はその何かの正体を知っている。

厳しい時代の到来だ。

そしてその時代を生きる、新しいルールが必要だ。

そう、それはこのグッドネイバーでも。大悪党ハンコックが治める町でも、始まることだ。

俺はそれを最初に始め、皆もそれで理解する。時代が変わったのだから、大悪党の顔ぶれだって変わることには疑問はないだろ。このフィンが、ハンコックに代わってそれを実践したのならば。

だから今朝はジェットはやめだ。

最初の仕事だ。ラリツて、いつぞやの間抜けのように。逆に身包みはがされ、路地裏で泣きながら自分の尻を売る羽目にはなりたくない。

——扉が開いた、最初の獲物だ。

フィンの伝説が始まる。今、ここから……。

「生まれ。グッドネイバーに入るのは初めてだろ？ここは保険がなければ、自由に歩くのも——ああ？？マジかよ……」

伝説はさっそくかげりを見せる。

フィンの最初の獲物は確かにそこにはいたが。それはB. O. S. 塗装のT-60パワーアーマーで武装した2人の男。

こちららも目を丸くしたが、それはむこうも同じらしい。驚いていた。でもそれだけだ、ちつともびびっていない。

フィンは望まずして、間抜けの坂道を足を滑らせて転がり始める自分を想像してしまった。

「んんっ、て——つまりだな、保険だよ。わかるだろ？」

むこうの2人は互いに顔を見合わせると、片方がノシノシと足音を響かせて目の前に近づいてくる。鋼の体はこちらのふた回りは大きく、ヘルメットはしていないが。当然こちらを見下ろしてくる。

大丈夫だ、気圧されるな。俺が革命を起こすんだろ？

「おい、だんまりか？無視するなよ」

「……」

きつめのサイコが必要だと思った。

あの太い鋼の腕がのびてきて、この頭を体からねじ切ったつておかしくはない。

遠目ではたいしたことのない奴だと思っただが、フィンを見下ろしてくる相手の目だけが恐ろしく冷酷で。漂わせる静かな雰囲気も、その中に危険なものが無造作に混ざり合っているような不安を覚える。

——だが引けねえ、ここで引いたら終わりなんだよっ

見つめ合う2人の背後から、パンパンと手をたたく音がして新たに登場する人物がいた。

グッドネイバーの市長、ハンコックと護衛のファーレンハイトである。

「落ち着けて。ここでちよつとタイムアウトといこうじゃないか」

「ハ、ハンコック!?!」

「……」

優雅に進み出る男はフィンに向かって話し続ける。

「この門をはじめて通る奴は、俺の客だ。ゆすりはやめろ、わかっているだろ」

「あんたは甘いんだよ、いつまでそんな寝言を言っているつもりだ？

こいつはあのB・O・S.とかいうよそ者だ。仲間でもないだろう」

「これは市長が決めたルールだ。その愛される市長が、通してやれといているんだ、フィン」

「よそ者に甘い顔が続けていたら、いつかあんたを倒して誰かが新しい市長となるだろうよ、ハンコック」

「まったく、ゆすりをやめろと言ったら。今度はこつちに警告か。忙しい奴だな」

「時代は変わったのさ。厳しい時代だ、甘っちょろいあんたの時代は終わった」

市長を名乗った方は、首を横に振りながらもさりげなくフィンにそ

れとなく近づく。

「そうかそうか、なら俺がお前に答えてやると——」

片手が伸びてフィンの首根っこに触れるや。瞬間、空いた手にはナイフが握られ。鋭く3度にわたって腹を貫くと、崩れ落ちるフィンの首にもトドメの一撃を加える。

(はやい、手馴れているな)そのあざやかさにレオは内心、舌を巻く。「そんな初歩的な説教を、お前みたいな馬鹿に聞かされたくはなかった。俺の町を訪れたことが不幸だ、なんて言われたら悲しくなってしまうただろうが、え?」

倒れた相手の服で汚れた刃を拭き取ると、ハンコックはパワーアーマーを着た客人に顔を向けた。

「B. O. S. なんだって?」

「——そうだ。あんたの町には入れないのかな?」

「そうは言っていないさ。歓迎する、客でいる限りは」

「もちろん。こちらは騒ぐつもりはない」

「大丈夫か、とここで聞いておくべきなんだろうが——必要はなさそうだな」

「ああ、立派な市長さんのおかげだ。ありがとう」

「それならいいんだ。この小さなコミュニティへの印象が悪いと、市長の怠慢になる。」

この町は人民による、人民のための場所だ。誰でも歓迎する、わかるか?」

「グッドネイバー、噂は聞いていた——あんたはグールだよな?」

「ん?イケている顔だろ?魅力的だと、女にモテて困るくらいにな。イケてるグールに会ったのは、はじめてか?」

「こんなに関近で話すことはなかった。噂通り、驚きの経験が多く体験できる場所というのは本当だったんだな」

相手の返しに今しがた人を刺し殺したばかりのハンコックは愉快そうに大声を上げて笑い出す。

「もう、あんたのことを気に入ってしまっそうだ。お堅い兵士の生活に嫌気が差したら、ここに来るといい。あんたの新しい故郷になるか

もしれない」

「私に、ここで生活できるかな」

「大丈夫さ、ここでは誰が物事の責任をおっているのか。うっかり忘れなきやな」

立ち去ろうとして、ふとハンコックは思いとどまる。

「せっかくだ、あんたの名前を教えてください」

「レオだ」

「——レオ？ フランク・J・パターソン Jrか？」

「参ったな、自分がここまで有名だとは知らなかった」

ではごゆつくり、それだけを言い残すとハンコックは建物の中へと入っていく。

その後ろで、護衛であるはずなのに一言も口を出さなかったファーレンハイトはレオの顔を穴が開くんじやないかと思うくらい凝視していたが。力が抜けると、興味をなくしたらしくさっさとその後にく。

「噂通り、ここはとんでもない町ようだ」

「大丈夫だよ、ダンス。彼等なりの歓迎だが、気にしてピリピリしちやこっちの体が持たない」

「だが——」

「ここでは物資の補給だけだ。終わったらすぐに出発さ」

攻撃に失敗した部隊が、よりにもよってボストンコモンの中心近くから救援要請を送り続けていた。あそこはこの連邦でもっとも危険なエリアである。

助けに行くなら万全の準備の上で、さらに急ぐ必要があった。

自室に戻っても、ハンコックとファーレンハイトはしばらく無言であつた。

立ち上がってグラスを手に取り、バーボンの液体をそこになみなみと注いでやってから。ようやくハンコックから口を開く。

「あれがレオか。ミニッツメンの新しい将軍」

「——そうみたい。いい男だったわ」

「それは否定しないが。そいつがB. O. S. に身を投じていたとは、考えもしなかったな」

「そうね」

「ミニッツメンはこのことを知っているとと思うか？彼らのボスが、宗旨替えをしたのか。もしくは自らスパイの真似事をしていると」

「噂を聞く限りでは、個人の都合で動いているらしいわ」

判断する材料が足りないということか。

ハンコックはちびりとグラスをなめると、いきなり話題を変える。

「——お前、アキラのことを奴に話さなかったな？それでいいのか？」

「だからなに？自分が教えてあげればよかったじゃない」

返事はいつものとおり、彼女らしい熱の欠けたものであった。しかしハンコックは付き合いらなんとなく理解できるものがあつた。

「お前、まさかあの将軍に妬いているのか？」

「なんですって？」

「あの若いの、あの将軍には偉く心酔しているという話だ。それで——」

「ラジオの恋愛ドラマ。聴きすぎよ、ハンコック」

呆れたのか、それとも怒つたのか。

それからは長いことハンコックが声をかけても、ファーレンハイトはまったく相手にしてくれなくなつてしまつた。

|||||

フィドラーズ・グリーン・トレーラー・エステートと書かれた看板に寄りかかるようにして彼らは座り込む。

ひどい有様、彼らに当てはまる一番正しい言葉がそれだ。

あの日、B. O. S. の連邦進入と同時に発進した部隊のひとつが彼等であつた。

意気盛んに地上の敵へと襲い掛かつたはずが、形勢はあつという間に覆され。退却しようにもベルチバードも墜とされて戻れなくなつてしまつた。

敗走するしかなかったが、迎撃してきたスーパーミュータントたちもそれを許さず。あきらめなかったことから悲惨を極めた。

ひとり生きて捕らえられ、絶望の悲鳴をあげる中を奴らが大喜びでその場で引き裂かれていた。耳に残るのは、最後の哀れな仲間に助けを求める断末魔。

そいつにくらべれば、他の奴等はまだマシだったと思いたい。

交戦中に力尽き、痛い、帰りたいと泣き喚いてそのまま死ぬことができたのだから。緑の化け物たちが死体をどう扱おうとも、その苦痛を彼らが騒いで連邦に知らせることはないのだから――。

B. O. S. ではテクノロジの管理が重要になる。

追ってくるスーパーミュータントに好きにさせるため、わざと仲間の死体はそこに放り出し。代わりに彼らが使っていた武器など、しっかりと破壊か。もしくは回収する。

その行為のなんと屈辱的なことか！

「どうします?」

「――どうする、とは?」

「行き先の話ですよ。正直、もう俺達。そんなに持ちません」

3人まで減ってしまったパワーアーマーを着たナイト達を指揮官は見回した。

自分達が死体にならずにすんだのは、間違いなくこのパワーアーマーの恩恵があったからだ。そのことに疑いはない。

そしてだからこそ、これ以上の戦闘は避けねばならないと理解していた。

次、なにかあれば――全滅も覚悟しなくてはならないかもしれない。

「――ケンブリッジだ。言っただろう、その警察署に……」

「そこまでたどりつけないと言っているんですよ!」

気が動転しているのだろうか、部下の顔が赤くなっている興奮していた。

だが、それは部下として許されない行為だった。上官の命令には絶対服従なのに。死の恐怖から、不信感を隠さないと、情けない。

「新兵じゃないんだ。こんな時に上官の命令……」

「こんな有様でたどり着けるわけがないんだよ、わからないのかつ。俺はまだ死にたくないっ!!生きて帰らなくちゃならないんだよっ」

きつと家族のことだろう。わざわざ聞かなくなつてそれはわかる。必死の思いであげたその声は昼の集合住宅地に轟いた……。

その姿を離れた高所から見下ろす集団がいた。

「なんだい?ゲーム中にこんなところまで呼び出しやがつて!」

「ボス、あれを」

「——パワーアーマー?誰だい、あれは?」

「例の噂のB・O・S.とかいう連中じゃないかつて、思うんですが」  
「なるほどね。そりや間違いないだろうよ」

「どうします?」

「そんなの決まってるじゃないのさ」

ボスと呼ばれた女はニヤリと攻撃的な笑みを浮かべる。

仕事の時間だ。

「あたしら、ラスト・デビルに目をつけられた獲物は逃がしやしない。人狩りといこうじゃないか」

澄んだ空気が、真つ青な空が。それを見るすべての人の心を和ませるであろう時間に、これからここでは惨劇が始まろうとしていた……  
逃げ切れぬB・O・S.の部隊の最後の戦いが。

|||||

覚悟はしていたが、やはり自分はよそ者という事なのだろう。

しかしこうなることはすでに想像もできたから、別にいまさら腐つて見せたりするつもりもなかった。

パラディン・ダンスをはじめとした歴戦の戦士達が心酔してやまない若干20歳の若き指導者は、面会とB・O・S.への正式な参加の条件に任務を与えてきた。

連邦に散らばってしまったいくつかの部隊を、可能な限り助けて回

収せよ。この任務に援護も増員もないが、かわりに装備は先に引き渡ししておく。

なんだか過去にどこかで同じような経験をした覚えがあるので、これについては苦笑いしかない。

しかしそういうことなら急ぐ必要があった。

レオが最初に目をつけたのは、サウスボストンで消息を絶った部隊だ。

「彼らはそこで何を？」

「私達の時と一緒だ。そこにある警察署を占拠しようと試みた」

「なぜ失敗を？」

「町の中に潜んでいたレイダーやスーパーミュータント共が気がついて一斉に攻撃が始まったそうさ。ベルチバードは墜落、部隊は生死不明に」

「その部隊は攻撃を強行したと思うか？」

「嫌、ないだろうな。部隊が空中で降下中に攻撃されたが、すでに周囲から押し寄せていると最後の通信の中で口にしていたそうさ。

部隊は地上で集結を果たしたと考えると、すぐに後退させるだろう。町の中で囲まれたら終わりだからな」

「ということは、彼らはすでにそこを脱出し。北上してボストン空港にむけて進んでいたはず。」

「なら、彼らからはじめよう。もし生きていたら、危険なボストンコモンを南から北へ歩かないといけない」

あそこは経験するとわかるが。うっかり足を止めなどしてボストンコモンに絡めとられてしまうと、再びそこから動き出すことが困難になる。

なにせそこは1ブロック単位でスーパーミュータント、異なる組織のレイダーと、網の目状に陣地を張っている場所なのだ。

以前はレオも友人たちと突き崩しては、相手が戻ってくる前にさっさとその場から移動する方法でなんとかやってみせたが。パワーアーマーを着ている今回は、逆にそいつらを相手にすることなく走り抜けていくぐらいが丁度いいはずだ。



「ダンス、B. O. S. の部隊回収はいつもこんな感じでおこなわれているのか？」

「こんな感じ、とは？」

「救助にあてる兵士の選考や計画は、どうなっているのかと思って」「ああ、そういうことか——」

ダンスは一旦、言葉を濁す。

「我々は通常、こういった部隊救出の任務はおこなってはいない」「なんだって!？」

「驚くのも無理はないと思うが。我々といえど、リソースは潤沢にあるわけではないんだ、レオ」

「つまり任務に失敗すると、自力で戻ってくるしかないのか……」

理解はできた、感情は別にして。

そうしないところにはいられなくなってしまふ。

「どうやら私は思った以上にこの軍隊に好意的でありすぎたようだ。任務においては私事につながる感情を切れ、と自覚していたはずなのに。表情が曇る。」

「理解してほしいのだが——」

「いや、わかるよ。ちよっぴり驚いたただけだ。それだけさ」

「レオ」

「いいんだ、パラディン・ダンス」

気高い忠誠心と国への無償の奉仕を示せ、得られた栄光はお前だけのもの。

レールロードに飛び込んでいったアキラのように。自分にもそれができるかと考えての今の立場だが、どうやら私はまだ覚悟というものが足りなかったようだ。

そうなると、この任務自体の捕らえ方も慎重に別のものとして考えないといけない。

これは正式な救出任務ではないのだ。

本隊がしでかした、作戦の失敗を尻拭いさせられているだけ。

（撤退中の部隊は本隊に戻ろうと空港を目指す。敗走中の彼らは連邦にとっていい標的ではないだろう）

グッドネイバーへ向かおう。

レオが出した結論がそれだった。情報が、助けが必要だと思ったからだ。

危険は確かにあったが、この任務が始める前から失敗していないという確証が欲しかったし、危険を冒したくはなかったのだ。

|||||

レールロードのエージェント、グローリーは“オーガスタの隠れ家”に来ていた。

本部の話では、あのデイーコンが珍しく仕事を放棄して離脱してしまった尻拭いをして欲しいのだと聞かされていた。

(あのデイーコンがねえ。仕事疲れでも引き起こして、ヤワになったか)

かつては退屈だとボヤいていた時もあったが、今は本当に休む暇がない。

グローリーは毎週のこと数日は連邦のどこかで暴れていた。自分たちの敵を粉砕することに微塵も疑問を抱かない彼女ではあるが、それでもうんざりはする。

なのにそれでもなお、抱える仕事は増え続けており。処理しきれなくてツーリストとよばれている組織の下部構成員達にまわされ、不幸な被害がひろがりつつあった。

デズデモーナをはじめとした上層部はこれまでをなんとか部下達を励まして乗り切ろうとしてきたが。あのB・O・S.とかいうのがあらわれたおかげで空気も変わった。

ツーリストの側から、レールロードに距離を置こうという動きがあると噂がささやかれている。

リーダー達はそんな組織の結束を強めようといういろいろと案が出ているらしいが。特に目立つようなはつきりとした動きはまだない。

それよりグローリーにとっては、これ以上のスケジュールに予定を詰め込まれるのはたまったものではないのだが――。

オーガスタの隠れ家ことケンダル病院の中に一步足を踏み入れると空気が変わった。

グローリーの“女の感(?)”が、ここにあるよくないものを察して背中に冷たいものを流れさせた。

不気味なほど静かだ。

レイダーは突然、お行儀よくいきることにした？それともここにインステイチュートの人造人間が戻ってきた？

ミニガンを構え、何が出てきてもすぐに穴だらけにしてやる、と準備をしたグローリーは奥へと進む。

報告ではディーコン達が立ち去った後の3週間ほどの間に目立つ動きはない、そういう話だったが。レールロードの情報も当てにはならないということか。

病院内では死体が山が出来ている。

積み上げられていたのは仲間の死体ではなく、レイダーたちの死体になっていたが。

うつぶせに死んでいるひとりをつま先で蹴飛ばし、仰向けにさせた。

驚愕する表情と、眉間には3番目の穴が開けられている。これは正確な射撃、そしてプロの仕業だと知らせていた。

生き残りに注意しながら、なにがあつたのかを洞察しながら進んでいく。

どうやらレイダーたちは侵入者の存在に気がついた先から襲い掛かり、ほとんど抵抗できずに返り討ちにされていったように感じた。

その雑な仕事ぶりにグローリーは自分と似たものを感じたが、同時に違和感も覚えた。それがなにかはまだわからないが――。

奥に進むにつれ状況はさらに異常なものになっていく。

きつとおびえたのだろう、レイダーは侵入者を止めようと建物内でロケットランチャーまで持ち出したようだ。

壁と床に焦げ付いたその傷跡が見られたが、それでも侵入者の足を止めることはできなかつた。

ん？いや待て、これはひよつとして……。

グローリーが考えるのもそこまでだった。

静寂がいきなり破られると、最下層から恐ろしい獣の断末魔の音が  
ビリビリと建物を揺らして聞こえてきたからだ！

|||||

そこはかつてのレールロードとは違う使い方をレイダーたちはし  
ていたようだ。

コンクリートの床が崩落し、さらにその下にあつた電力管理室の中  
を上から覗き込めるほどにむき出しにしてしまっていた。

そしてこのレイダーはどうやらそこを簡単な闘技場として、馬鹿  
な遊びを楽しんでいたようだ。

デスクロー。

連邦でも最大級の脅威のひとつがそこに放たれていたらしい。

レイダーたちから、彼らの楽しみだけのために地の底へと突き落と  
された人々を細切れにしてきたであろう鋭い爪も。

飼い主たちを皆殺しにした侵入者を止めることはできなかつたよ  
うだ。

新鮮な死体が転がっていた。

なぜかはわからないが、その片腕は付け根から切断されたく。  
そこから今も血が流れ出して地面に池をつくろうとしている。

(誰が殺った？どこだ？)

グローリーは上の階から慎重に覗き込み侵入者を——ハンターの  
姿を探す。

誰もいないように思えたが、いきなり凄まじい殺意がグローリーの  
頭部を感じると。慌ててミニガンを突き出しながら体のほうは引つ  
込める。

すると抱えている巨大な銃身に衝撃が伝わってきた。

レイダーの死体を確認して助かった。

3発の10ミリ弾が正確にグローリーの額めがけて飛んできてい

た。

「このヤロー!!」

見た目と違ってグローリーは乱暴にミニガンを振り上げると、階下にむかってでたらめに鉛弾をばらまいてやった。

そして今度こそ目に捉えることができた。崩れかけたコンクリートの壁の向こうに滑り込む黄色のビジネススーツの人の姿を。

「ここにいた馬鹿共への押し売りが得意なんだってね!こっちにも用があるのかい!」

ミニガンから乱暴に弾倉を引き抜くと、新しいそれと入れ替える。これで500発、あの壁を綺麗に穴だらけにして、あいつも同じ目にあわせてやろう。そう考えていた。

シューシューと音と共に白い煙がモクモクと立ち上ってきたのは、グローリーのそんな反撃開始の手前でおきた。

逃げる気か!?!と勢いよく体を乗り出した自分の甘さをグローリーはきつと呪うだろう。煙を裂いて飛んできたのは、このレイダーが所持していたであろう一発のミサイル弾頭であった……。

それでもグローリーは生きていた。

数時間後、病院の地下から地上へと戻った彼女の表情は。敗北と困惑で奇妙にもゆがんでいた。

ミサイルと入れ違いに地下のデスクローの死体の上に飛び降りたおかげでグローリーは爆風の炎と衝撃からは逃れることができたのだが。

相手はそんな体制を崩した彼女に止めをさそうとはせず、すでにそこから立ち去っていた。

そして一瞬ではあったが、煙の向こうに駆けていく侵入者の姿を一瞬ではあったが、グローリーの目に焼きいていた。

黄色の帽子、濃淡の違うコートとその下にビジネススーツ。顔は影になってわからない。なのにあのコートのひらめき方には見覚えが

グローリーは脅威が立ち去り、そして排除された病院の入り口に

立って戸惑いを感じている。

ここで起きたことは、本部にも報告しなくてはいけないが、あの侵入者についてはどう考えたらいい？どう報告したらいいのだろうか？

|||||

グッドネイバーの一件から2日後――。

「こちらストライフ・ワン。地上に救出部隊を確認しました。これよりアプローチに入ります」

B・O・S・パイロット――ランサーはそういうと、ベルチバード操り。旋回しつつ高度をゆっくりと下げていく。

カウンティ・クロツシングと呼ばれる居住地には、傷ついた仲間の部隊が座り込んでいて。こちらを見上げているのが遠目からでも確認できた。

(待ってるよ、もうすぐつれて帰ってやるから)

そう思うと焦りも生まれるが、ここで慌てて操作をミスするわけには行かない。

「地上まで10カウント。10……………5……………3. 2. 1」

横風にぶれることなく、静かに地上へと着陸すると。パワーアーマーを着たひとりが元気よく乗り込んできた。

「わざわざ迎えにきてくれて、感謝するよ。ランサー」

「別にかまいませんよ、パラディン・ダンス。彼ら、無事だったんですね」

「ああ、よかったよ。ほとんど全員、怪我でこれ以上はあまり動けそうにない。すぐに乗せて大丈夫か？」

「大丈夫です。あ、それとダンス」

「ん？」

「ラックの中をのぞいて下さい。あなたとあなたの相棒のために補給物資を入れてきました。役に立ててください」

「おお、助かるよ」

「それと！」

「ああ」

「この機も役に立たせてくださいよ。なにかあつたら、呼んで。あんなたちのためなら、いつでも俺が飛ばしますから」

「——ありがとう、ランサー。君達の力を借りれるなら心強い」

そういうとダンスは軽くパイロットの肩に触れ、すぐにラックの中に手を突っ込むとそこにあつた弾薬箱を抱えて外に出た。代わりにそこに撤退を生き抜いた兵士達がうめき声を上げながらゆっくりと静かに乗り込んできた。

ダンスは空へと上昇するベルチバードを見送ると、一瞬だけ遠くに空港の上に浮かぶ飛行船を見た。

レオの考えは正しかった。

グッドネイバーを出たその日のうちに敗走していた部隊と合流を果たすことができたし。さらに一日半をかけてボストンコモンから人目を避けてここまでを深刻なトラブルに巻き込まれることもなかった。

(やはり、レオはうちの組織に必要な人物だ)

これ以上の行軍は脱落者を生む、そう判断した彼はここの居住地の住人達と話をしてくれた。

そのおかげで部隊は傷ついてはいても人を失うことはなく。一部隊全員が無事に生還を果たしたことになる。しかもダンスもレオも無傷のまま。

この働きだけを見ても、彼を評価するのに十分ではないか？

誇らしい気持ちで、相棒を探すとすぐにレオは見つかった。

彼は飛び去るベルチバードには興味がないばかりか、居住地に背中を見せて微動だにしていない。

どうやら彼は、ここに来てから気になることがあるらしく。ああしてずっと、一人で何かを探し回っていた。

「回収任務は完了した。だがまだ終わりというわけでは——」

「ダンス、これを聞いてくれ」

レオはごちらの話を聞く前に、なにかを知らせてきた。彼のピップボーイが何かを受信している。

「緊急時の救助要請ビーコン？」

「そうだ。この近くから発信されている」

「——だが、別にそれは誰が使っているのかわからない。罨かもしれない」

「だが、これは軍用のものだし。あんたは気にならないか？」  
「ふむ」

ダンスはしばし考え込んだ。レオはなにを気にしている？  
まだ彼の考えがダンスには読むことが出来ない。



The chosen one? Chosen the world? (Akira)

それは連邦が霧の騒ぎからようやく立ち直ろうとしていた頃――。

『おいおい、どーやら。新しい間抜けが、入り口のガントレットにポーッと突っ立っているようだぞ!』

そう言っつて電波の向こうのリスナーにゲームの開始を告げるのは、DJのレッドアイ。

今日もご機嫌と不機嫌の間を行ったり来たりして、楽しいトークをリズムカルな物語と一緒に聞かせる男だ。

『おい、何をしている? さっさと道を進まないと、観客の皆様が退屈して寝ちまうだろうがっ!』

ここはかつての時代、一大アミューズメントパークとして知られた場所。

ヌカ・ワールド。

ここに辿り着くのに簡単な方法は連邦と今は呼ばれているマサチューセッツ州から引かれている独自の路線。ヌカエクスプレスのモノレールに乗れば、遠くから近づきながら、その設備の壮大さとバラエティ豊かなことを直接その目で見て、知ることができた。

だがそんな場所もこの時代では別物になってしまった。

今はレイダー集団によって占拠され、彼らの下劣なエンターテインメント性が発揮された、狂った世界がそこに存在していた。

そしてガントレットとは。

この場所で鬱屈するレイダーたちのために作られた、彼らのためのアトラクション。

ここを訪れる連邦の住人達は、入場料のかわりに命を懸けてトラップまみれの危険なエリア、ガントレットの突破を要求されるのだ。

今日の挑戦者はしかし、煽るようにして前に進むように要求する放送を聞いても慌てる様子はなく、ましてやその先にあるのが危険地帯だとわかつて、恐怖を感じているようには見えない。

ただ沈黙、それだけだ。

頭にかぶるのはフェドラー帽。

身に着けたコートとビジネススーツは、濃淡の違いで決して同じではなく。

そのすべてが黄色で統一されている。

あと付け加えるなら、表情を誰かに読ませないためか。それとも顔を見られたくはないからか。

口元をかの時代の国旗の柄のバンダナで隠している。

もう間違いないだろう。

あの奇妙な集団、小さな宝物へ。己の誕生した場所へと戻ったはずのイエローマンと呼んだ、彼にしか見えないが――。

|||||

山間に位置するその居住地は、ミニッツメンが復活させたもののひとつだった。

戦前から農村であったそこは、どこか時代と逆行するものをもって。人々はそれをヒッピー精神（1960年代に生まれた文化）と口にしては田舎者であることを楽しんでいた。

だが、それも連邦が牙をむくまでのこと。

かつてここもまた、大量のフェラルに押し寄せられ。暮らしていた人々は、一目散にしてここから逃げ出していく。

時は流れ、ミニッツメンの部隊がここを訪れると。まだ家屋の中にはその時のものかどうかは不明だが、確かにフェラルはここに残っていた。

しかし今ではすっかり様変わりしている。

止まった時計が再び動き出すように、家屋の修理に水源の確保。そしてすっかり野生化してしまった作物を取り払って、再び土に人の手が入る。

新年になって襲われた霧でもここで耐えることができたのは、皮肉

にもこの場所に関係があつたと思われた。

山間部ゆえにすでに周囲は林によつて囲まれており、それが逆に住人達を封じ込める役割を果たしたのだろう。

まだはじまつたばかりなので、ここの防衛については数名のミニツツメンが住人と協力してあつていた。いまのところ、襲撃者の姿は現れていない。

一見、ここは平和でなにも問題はないように思えるが――。

「……そういうわけで、なんとかならんかな？ あんたらだつて、本当はそう思っているんだろ？」

今日も住人の一人が、休憩中のミニツツメンたちの中に入つていつて、こつそりとそれを相談事のように話してわ。耳打ちしてきた。

ミニツツメンたちは互いの顔を見合わせ、これは困つたといつもの苦笑いを浮かべるしかなかったが。それでおわりというわけにもいかず――。

「言いたいことはわかるぜ？ でもさ、問題がないうちは――」

「問題はある！ うっかり後ろに立たれて、歯を立てられてからじゃ遅いんだ。そうだろ？」

「そうやって悩むのは好きにしてくれていいけど。誰かにそう言つて、一緒になつて騒ぎを始めようとするなら。そりゃ俺たちの問題になる。」

あんたはこのことも知っておいてくれよな」

こうやって脅すようにして、早々に追い払う。

北部の居住地ではグールの問題が、次第に表面化しはじめていた。入植を希望するの人に、だいたい4つのカテゴリーに分けられている。個人、子供、家族にグールだ。

ミニツツメンは安全なサンクチュアリと崖の上の居住地には子供と家族をできるだけ置いているが。新しい場所には個人とグールが配置されることが多かった。

問題はこの中に、ダイアモンドシティの風評を頭から信じていて。裏でなんとか排除してくれないかと相談してくる輩が後を絶たない

のだ。

プレストン・ガービーにこのことでアイデアは持っていない。実際、彼にはそれ以外に対処しなくてはならない問題があまりにも多いのだ。

『……ザザツ……♪』

住人が立ち去るのにあわせたかのように、休憩中の彼らのそばにあったラジオが不快な音を立てると、すぐに能天気な歌詞の歌がそこから流れ始めた。

ミニッツメンはそれを聞くとはつとした表情になり、ラジオを消して立ち上がった。

「よし、見回りだ。くれぐれも悟られないように、それぞれで家を回ってくるんだ」

「了解」

「一通り回ったら、警備に伝えて。そしたらここへ戻って来い」

それぞれが緊張した顔でうなづくと、すぐに解散していく。

居住地の中へと散っていく彼らの表情は、先ほどと違いすっかり緩みきっていて。住人たちに会うと声を気軽にかけていく――。

最初は誰も気がつくことはなかった。

ここでは事件が起こっていた。数人の入植者たちが姿を消しているのだ。

最初はミニッツメンもレイダーの誘拐を怪しんだが、答えは意外なところから出てきた。消えた一人の家に置かれたもの言わぬラジオが、時にいきなり復活すると奇妙な放送を受信していたのだ。

音がつぶれてしまっていて、何を言っているのかわからないが。消えた連中は皆がこの放送に執着していたらしいことまではわかった。

この謎を解く力はミニッツメンに残されていないので、彼らはせめて惑わされた住人が姿を消さないよう目を光らせることしかできないでいる。

いったいそれは、どこから流れてきているのだろうか？

放送を流している奴らは、何が目的なのだ？

これは本物かもしれない、ポーター・ゲイジはすでに内心で半ばその確信を持ち始めていた。

レッドアイの放送は、これまでのどのガントレット挑戦者達の時よりも荒れていた。

『さあ、行つたー！新しい獲物が、前回までの獲物たちより……刺激をくれるか見てみよう！』

『そうだ、とつととそうやって進めばいいんだよっ』

『この獲物は避けるのがうまいようだな。だが、驚くことはまだまだ。ほかにも、たくさん！用意してあるぞっ』

『おい、獲物く。さっさと——んっ!?チクシヨウ……信じられないが、獲物はどうやら遊びかたがわかってなかったらしい』

挑戦者はあの胸糞悪いガントレットのエリアの区切りを正確に読みきり。

その都度でストップ&ゴーを繰り返しては、レッドのテンションを突き上げと叩き落すのを交互にやらせていた。

嫌、あの黄色のおかしな野郎はなにもすることなくレッドの言葉を支配し、それをストレスを抱えて聞かされるレイダーたちをコントロールしていたのだ。

ラジオの不愉快さにあちこちから上がる不満の声は、すぐにも殺意のこめられた罵声にまで成長していく。

黄色の男の持っている武器はそれほど驚くようなものではない。

10ミリ用の改造された拳銃とレーザーガン、それくらいだろうか？

だが、強い。

あのガントレットには、これまで連邦でも恐れられているガンナーの傭兵達だって命を落とした場所なのに。

まるでどこになにがあるのか。すでに知っているかのように、罠を

恐れる様子もなく。そいつはゴール目指して悠然と突き進むだけ。

『獲物はまたしても無傷でしたとき。なんだよ、これ……』

おっと！ここでボーナス・ステージだ。オマエラ様、ここゲームに新たな空気を入れる時間だ。どしどし奮って参加してくれよな！』

気がつけば最終ステージ目前。

そこはレイダー参加型の、といっても単純な迷路を進む挑戦者を、飛び出していったレイダー達が上から圧倒的有利な体制でそれを追いついてるそこへと進入する。

ゲイジは知らず、この状況を口の端を持ち上げて笑っている自分に気がついた。

あの男はそこでもじつと立ち止まっていたが。

そこに上からレイダー共が奇声と罵声を混ぜて姿を現すと、両手に武器を構えてそれをあつさり撃ち倒して見せた。

それは歩き出しても変わることはない。両者の視線が交わせる位置にレイダーが立つと、必ずそれを下から赤い光弾と10ミリ弾が襲った。

無様に積み上げられはじめた死体に加わりたくない連中は、さつそくビビルと理由をつけて尻込みしていた。

総支配人——オーバーボスが呼んでいるというのでゲイルはそのステージを最後まで見ることはできないが。

あの男とボスが対峙する最終ステージへの期待は、否が応でもたかまった。

|||||

レオに護衛として雇われたはずなのに、放り出されてしまったケイト。

帰るところ失った彼女は、それでも別に不満は持っていなかった。

とはいっても、先日ここに集められた連中の席に彼女は出席するよう求められ。

そこでプレストン・ガービーなる顔も見ることのないクソ野郎から

の要請には、即効で断つてやった。

今は妙に気の会うスーパーミュージータントと一緒に残つて、ミニッツメンの支部にとどまる客の役をやつてあげている――。

支部長のミツキーに「寒いだろう」といわれて与えられた冬用のジャケツト姿からは、乱暴なアリーナチャンピオンだった自分をどれだけ隠しているのか自分ではよくわからない。

居住地のそばから見る冷たい風が吹き続けるチャールズ川の水面を見て、少し感傷的な気分浸っていた。

思えばコンバットゾーンの崩壊は時間の問題だと、心のどこかでは知っていたと思いはするのだ。

それでもあのすべてを閉じ込めようとした不気味な霧を引き連れてあらわれた。B・O・Sの噂を聞くと、不安を覚えずにはいられない。

(インスティチュートって糞があるのに。余計な奴が横からしやしやり出てきやがつて――)

罵りながらも自分を追い出してくれたトミーのことが心配だった。

何度か顔を出したくそつたれのダイヤモンドシティでは、奴等がボストン空港を占拠しようとして毎日あそこでフェラル退治にいそしんでいると噂になっている。もしかしたら、すでにフェラルの掃除は終わっているのかも、とも聞いた。

ミニッツメンにその力はまだない。様子見だな――。

支部長という肩書きを持つミツキーは、真面目腐つてそう言うが。ケイトは信じなかった。

そのミツキーは今、ダイヤモンドシティへ行った。なんでもその糞市長とお話をしてくるらしい。そのわりには、妙に緊張していたのが気になったが――。

ケイトは獣のような唸り声を上げた。

考えることも悩むことも好きじゃなかった。知らず無意識にポケツトのアレを――サイコを取り出し、自分の中にそれを溶け込ませた。

|| || || || || || || || || ||

始まりは失笑で、終わりは衝撃で。

総支配人——この誰もか頭を痛めていたオーバーボスのコルターは、そうして絶対に負けるはずのない最終ステージの上で、無様に殺されてくれた。

そのあまりのあつけなさに、そうなることを願っていたポーター・ゲイジでさえも息を呑んでしまった。

この試合の直前。

黄色の男——イエローマンには間違いなく勝つ方法を伝えることができた。

そして奴はそれに従ってくれた。

コルターの前に立つと、ヌカ・ワールドのおもちやの水鉄砲で攻撃した。

ゲイジの予想通りのことがおきて、だから確かにコルターを殺せるとはそこで一度は考えた。

想像を超えたのはそこからだった。

続いてイエローマンは何かを手にするそれを放り投げ——嫌、違う。コルターの胸めがけてパスをしたのだ。

ショックから思わず、胸の中に飛び込んできたそれを受け取ってしまい。オーバーボスはしげしげと手の中に納まったそれを見つめてしまう。

相手はそれにも感動な言葉をかける。

「ナイスキャッチだ」

それはラグビーボール状のそれで、記憶の中にある何かに似ているな、とコルターは思った。でもそれだけだった。

続いて一本のレーザーが手の中のボールの一部をかすると、膨大な破壊のエネルギーがそこからあふれ出す。

ヌカランチャーに使われる弾頭、それが男が部屋から出てくる短時



間の中で簡易式のグレーネードに改造されていたのだ。

炎があふれ出して小さなキノコ雲をステージ状に作り出すと、同じく生み出された完全なる破壊の衝撃がコルターと彼のパワーアーマーを襲った。

コルター自慢のオリジナル・パワー・アーマーは、その圧倒的な破壊の衝撃を吸収し切れなかった。

体内の血管はズタズタに破壊され、心臓も停止する。

死ぬのにこれ以上のものが必要か？

新たなボスの誕生がつけられ、レイダーたちは不満をもちながらもステージから姿を消していった。

そしてポーター・ゲイジはようやくイエローマンに直接、会話する機会を得た。

「待っていたものが、俺の目の前によく届けられたと考えていいのだろうか？

長いことこの日が来ることを願ってはいたが。運を天に任せる、そんな生き方はしていないんだ。ということは、あんたは”奴等の手先”ってことになる」

「……」

「答え合わせの時間にはいいだろうか？できれば話をする前に正解を知っておきたい」

「お前が必要とした人間が目の前にいる。これが答えだ、他に何が聞きたい。ポーター・ゲイジ？」

声には感情はないはずなのに、帽子とバンダナの奥にある両目は異様な輝きを見せている。これから仲良くやっていかなきゃならない相手だ、怒らせたくはない。

「わかった。それなら話をしよう。正直な話だ。

ここには強い人間が、誰かが全体の指揮をとってくれる必要があるんだ」

「そうか」

「気のない台詞だな、信用していいんだよな？あんたは知恵がある。

そして確かに強い。だから想像してほしいんだが……ヌカ・ワールド。

これは夢を実現する場所だ。いくつものエリアが集まり、巨大な建物の要塞になっている。ここを支配できれば最強の力が手に入るかもしれない」

「……なにをすればいい？それだけ聞かせろ」

「まずはお互いの自己紹介から始めようじゃないか。

俺はゲイジ、ポーター・ゲイジだ」

「……」

「あんた名前は？」

「好きに呼べ」

「——わかったよ、ボス。あんたには確かに、それで十分だった」

また癖のある変なボスを自分は作ってしまったのではないだろうか？

わずかにそう考えながら、ゲイジは苦笑いを浮かべる。

|||||

グッドネイバーの市長室で、おもむろにファーレンハイトは口を開いた。

「フィンのことだけど——」

「ああん？」

「あんな、手を下すことはなかったんじゃない。ハンコック？」

問われたほうは、いきなり自分の護衛がそんなことを言い出す理由が思いつかず。答えに困る。しかも内容が、例のレオを迎えたときの市長のふるまいならなおさらだ。

「何が言いたいんだ？」

「あの時のことを考えていたのよ。私でも、それ以外の誰かでも。この町のあなたのルールを守らせる方法はいくらでもあったはず」

そういう質問なら、市長として答えはちゃんと用意してあった。

「俺がまだ、自分の手を汚せるってことをこの住人たちに知らせた

かった。そういうことだ」

「それだけ?」

「なんだ、不満なのか?」

こう考える理由はいくつもあるが——そうだな、昨年の終わりに。例のの連中、いつもの殺しのランキングを発表しなかっただろう?あれも原因のひとつかな」

「あんな雑誌に、あなたが気にするの?」

「重要だったらしいな……俺は市長だが、悪党だ。そして殺し屋でもある。

俺の魅力ってやつにはそういうものは不可欠なのさ。昔話じゃないし、噂だけじゃない。今もそうだって証明が、行動が必要だったんだ」

「やっぱり納得できない、ハンコック」

「なぜ?どうしてだ?俺は、俺の決めたルールを、俺自身が守っていると証明した。お前の手を汚す必要がなかっただけだ。本当にそれだけ」

いつものように変化は乏しいが、立ち上がって忙しくタバコの煙を吐くファーレンハイトのその姿からは苛立ちを感じた。だが他にいうこともないので、市長は長いすに腰をかけたまま。相手を静かに見つめ返すだけだった。

ファーレンハイトは自分の中で整理がついたのだろう。

最後にぼそりとつぶやいた。

「楽しいことは、自分だけのものにしたいのね」

「おい、ファーレンハイト?」

「いいの、忘れて」

そう言うのと乱暴に灰皿にタバコを押しつぶし、部屋を出て行ってしまった。

「いったい何が不満なんだ、あいつは——」

ハンコックであっても、護衛の心のすべては読むことはできなかった。

連邦の北西、旧世界の週の境界のわずかに向こう側にそれはあった。

ヌカ・ワールド交通センター。

連邦の住人なら、ここからモノレールに登場すると直接にヌカ・ワールドに到着することができた。

最も今のあそこは、ガンとレットの入り口とあって待っているのは死のエンターテインメントに強制的に参加させられるという意味ではないが――。

時間は昼過ぎであったが、あいにくの雨で空は暗い。

センターの広場にはケイラーを指揮官としたガンナーの部隊が集結していた。

「……のに駅に入ったマヌケがいるようだ。まずは周囲の捜索から始める。間抜け野郎の首をねじ切って、そいつを蹴飛ばしてやったと、サイプレスには報告を――」

そこで指揮官は居心地の悪さを感じて、言葉を切る。

部下が次々と自分の後方へと視線をやるので、何かあったのかと自分も思わず振り返ってしまう。

奇妙な男がひとり、そこに立っていた。

黄色に統一されたビジネスマンの衣装と、顔を隠した星条旗のバンダナ。

「やあ、閉園時間は確認しなかったのか？」

そう意味不明なせりふを口にするこいつこそが、今しがた指揮官が口にした“間抜け野郎”だとガンナー達はこの瞬間に知ってしまった。

殺せ、の合図はなかったが。戦闘はすぐにも開始される。

最初に飛び込んでいったのはガンナーがつれていたロボット、アサルترون。

片手はチェーンソウで、もうひとつはドリルであったそれを交互に

突き出して相手を殺しにきた。

一瞬で距離をつぶされたにも拘らず、イエローマンは冷静にそれらを紙一重にかわしながら自分の武器を手を取った。

と、回転するドリルがその頭部を狙い。口元の星条旗柄のバンダナの結び目が緩んであご下までストンとおとした。

彼の素顔が露になった――。

五十嵐 晃。

Vaultierで目覚め、記憶を失い連邦を放浪した若者。

何者かに攫われて後に、連邦に戻り。あのヌカ・ワールドでは、オーバーボスを倒しその地位に座った男。

このイエローマンの正体はあのアキラだったのだ！

## グラウンド・ゼロ (LEO)

どうすればこの男を——レオをB. O. S. にふさわしい兵士に訓練できるか。そのためにどうやって導くか、それがパラディン・ダンスの今の任務である。

出会いの時の印象は強烈で、だからこそやりがいのある任務に違いないと想像だけはしていた。

だが、そんな自分がどうしようもない甘い目算を立てていたのではと。すでに自信が荒い目のヤスリでガリガリとひっかくように強い決意が削り取られていく。それを心の中で感じている。

そもそもにして本隊からは到底果たせないであろう任務を押し付けられたわけだが。

この男は見事に部隊をひとつ、本隊に死者が出る前に戻してみせた。連邦の恐ろしさを肌で知っているダンスにとってそれがどれだけ凄いいことなのか、わかつていた。

認めたくはないが——すでにこの男の能力はあきらかに兵士として高いレベルで完成している。

なのに兵士として当然もってしかるべき、任務への熱意や忠誠心の方向が滅茶苦茶になっている。B. O. S. への忠義一筋の彼には理解しがたい、奇妙な存在だった。

例えるならそれは兵士らしからぬ器用な戦闘ロボット——。

ああ、そうだ。それこそあの人にまぎれて人を演じる、人造人間のように見えてしまう時すらある。

そんなレオが、たまたま居住地で受信した軍用の救助ビーコンにやけにこだわった理由をダンスは図りかねていたし、困惑もしていた。

レオ、なぜお前は与えられた任務に集中しようとしななんだ？と。そうしていながらも実は不安を覚え、期待もしている自分がいる。

彼は間違っているはずだ。兵士であることを学んだ私はそう考える。なのに今回も、私は間違え。彼が正しい。そんな結果がまた繰り返し広げられるのかもしれない。

信じられないことばかり、やはりこの連邦は呪われている。

いや、私が呪われているのか？

|||||

あの冷凍装置の並ぶ Vault の底から這い出してきた私に、確信のようなものは常になかった。これは断言できる。

ただ、この滅茶苦茶な世界に出てきた後で。

怪しげな老婆の口にした未来を本物のものとしたくて、手元に引き寄せたくて。それを信じてずっと心の命じるままに行動してきた。

だから私がここにいるのも、同じ理由だ。

B・O・S・へと潜入し、彼らの力を借りてショーンのいるインステイチユートへと辿り着いてみせる。

這いよる絶望にとらわれようとしていた私は、そう考えて再び立ち上がったのだ。

そして今回も勝った。危険な霧の中をその一心を念じて歩き続け、霧が晴れた時。そこはあの警察署の前に立っていた。

あの予言はこんな八方塞の今もまだ続いているのだ、きっと。

そして私の勘は今回、思いもよらない別のものを連邦から掘り起こしてしまう——。

『……出血がどうしても止められない。動脈を、やってしまったんだと思う。今は適切な治療は望めないから、自分はここで終わりなんだろう。冷静になろうと勤めているが——複雑な感情があつて、難しいよな。』

だからこうして仲間に、パラディン・ブランデイスにメッセージを残す。

運よく彼がここに戻つてこれたとしても。たぶんその時にはもう、自分は死んでいるだろう……』

居住地の人々の話では、そこは昔からガンナーと呼ばれている傭兵とスーパームュータント、たまにレイダーが取り合いをしていたのだそう。その場所の名前はリビア衛星アレイ。

私とダンスはそこに居座っていたスーパーミュータントをかなりの激戦の末に排除することに成功した。

簡単なことではなかったが、戦意旺盛なあいつらはこちらを見ると飛び出してきたくれたし。殺し合いは好きではないが、やつらを相手にするならば、それが必要だと私はすでにボストンコモンで学んでいた。

時間はそれでもかかったし、パワーアーマーは傷だらけにされたが。最後は巨大なアンテナの上で西部劇よろしく殴りあいの末、腰にタックルを決めると緑の大男と一緒にそのまま地上へと飛び降りてやった。

子供の頃、くだらない遊びでゴム風船に水を入れて高所から固いコンクリートの道端に向けて放り投げた経験はないだろうか？

スーパーミュータントの力は人間を凌駕しているが、しかし肉体のおおまかなつくりまで変わるわけじゃない。

つまり風船でおきることは人間でもおきるし。人間でおきることなら、そりゃスーパーミュータントでも起こりうることなのだ。

わかってもらえただろうか？

ああ、ちなみに私はもうあんなことは絶対にやらないと今回の経験から心に誓った。

すべてが終わると早速2人で現地の調査に入る。

問題の電波は、そこで半分ミイラ化したB・O・S.の偵察兵が大事そうに抱えた装置から発信されていた。そしてまだ生前だったころに本人が残していたらしい、このホロテープがダンスの顔色を真っ青に変える。

|||||

差し出されたのは満面の笑みと、握手。

「これはようこそいらっしやった。私がこの町の市長、マクドナウといっています」

「ありがとう。私はミニッツメンのマクナマスです。ミッキーと呼ん



「でございます」

市長の秘書とかいう、これまた若くて美しい女性が応接室に入ってくる。「お茶をどうぞ」と言い、市長は待つてましたとばかりに「これは紅茶です。特別なときに、特別なお客様にだすものでしてね。よく、味わってみてください」と得意そうに続けた。

片方の眉が持ち上がっただけでそれ以上は表情に出さなかったが、その言い方には嫌味なものを感じた。

ミツキーはこの町の評価を凶りかねている――。

プレストンが私に、最初の支部長としてボストンにむかってほしいと頼まれた時。

繰り返し言われたことが、まだ会ったこともない將軍と彼からの「ダイヤモンドシティは気をつけろ」という強い忠告があった。

連邦の誰もが夢見る、暮らしたい町の市長になぜそんなことを？

ミツキーは素直にそれを受け取りはしたが、その思いは強く。先日プレストンのメッセージを伝えるべく呼び出した將軍とやらの友人たちにもこつそりと意見を求めた。町の住人であるパイパー・ライト女史と探偵のニック・バレンタインのことだ。

「市長の人柄だあ〜？」

「……さて、どう答えたらいいものか」

気になったのは、両者ともすぐには答えてはくれなかったというところか。

「ニックう、どう答えたらいい？」

「悪いが、俺はこの問題はパスさせてもらおう」

「ちよつと!?!逃げないでよ」

「ミニッツメンが求めているのは、我等の敬愛する市長殿の正しい評価だろう？誘拐された間抜けな探偵がイジリ倒している市長のことじゃない」

「うーん」

悩んだ彼女が選んだ言葉が「皆が選んだ、口先だけの糞市長」だった。

彼らの中で市長の人物評価に罵声はついて離れられないものらしいとは理解した——そのはずだったのだが。

「本当に喜ばしいことだ。私はずっと、密かにではあったが。あなたたちミニッツメンの壊滅を残念に思い。そして見事に復活してくれたことに、喜びを感じているもののひとりです」

「ありがとう、市長」

「私が言うべき言葉ではないが、このボストンは常に危機にさらされている。」

このダイヤモンドシティのことです。そしてそれを守るのは、自前のセキュリティだけでなんとかしようと努力はしている。正直、多くの小さな問題には目をつぶっても。この平和と安全を守らなければならなかった」

「はあ」

「しかしそれも、改善されるのでしような。皆さんの……」

「ちよ、ちよつと待ってください。マクドナウ市長」

私は慌てて言葉を挟む。

会話の流れに置いていかれそうになるのを感じたのだ。

「なにかな？ 支部長」

「今日はただ、隣人としてかんたんな挨拶に訪れただけです。別にミニッツメンは傭兵ではないのでここに賞金仕事を求めてきたわけではない。誤解されているなら、それは困るのです」

「はあ」

そもそもは、ハングマンズ・アリーに部隊が到着して数日立たずに最初の使者がダイヤモンドシティからやってきた。挨拶がてら、話をしませんかという招待だった。

こちらはすぐには応じられなかった。

旅をようやく終わったばかりだったし、やらねばならないことも多かった。

それでもようやく落ち着いてきたと思ったので、礼儀としてこんどはこちらから挨拶に出向きたいと申し出た結果が——。

「しかし、そうなりますと——わざわざこちらの求めを待たせたのも。

焦らしたかったということでは？」

「長旅を終えたばかりで、忙しくしてただけです」

「では、今日のこの場合は？自己紹介で終わりということですか？ただ、御機嫌ようというだけで。世間話し、情報交換もあって、でもそれだけ？」

「……いいでしょう、何かあるのですか？話だけなら聞きましょう」

挨拶はいつの間にか、会談へと変わってしまった。

こちらはまだ動き出したばかりなのだ。やっかいな仕事をおしつけられないようにしなくては――。

マクドナウ市長はこの日、終始機嫌が良かったが。一度だけ怒りを見せたことがあった。

会談が終わると、彼は自室に再びあの美しい秘書を呼び出したのだ。

「なんででしょう、市長？」

「急いでパブリック・オカレンシアに使いを出してもらいたい。ミニッツメンの新たな活動によって、我々ダイヤモンドシティの住人に、さらに安心できる環境ができたことをパイパーの新聞で一刻も早く住人の皆に知らせてもらいたいのだ」

「……市長、その件ですが。あまりご希望には添えないかと――」

「なに？なぜだ？」

「パイパーのことです。彼女、なんでも今は新しいニュースを追っているとか。ここしばらく、あの女――彼女の姿を見た者はいません。一応、声はかけてはみますけど」

市長の顔は一気に不機嫌なものとなった。

「――なんてことだ!!いつもは余計なこと騒ぎを起こしてばかりだというのに。たまに本当に市民が知らなくてはならない、素晴らしいニュースがあっても。彼女はそれを記事にしようともしない！」

「はい、市長」

「信じられない奴だ！……まあ、いい。ならば他だ。とにかく話を聞いてくれそうなのを、ここに大至急集めてきてくれたまえ。なんなら

こつちから出向いてもいい」

首を横に振って頭をリセットさせると、市長はまた笑顔を浮かべた。

このことをのぞけば、今日は市長にとって。ダイアモンドシティにとつてとてもよい事があったのだから、笑顔ですごさなきやならないのだろう。そう、思っている――。

|||||

うめき声は自然と口から零れ落ちていく。

「パラデイン・ブランデイス……アルテミスの隊員だったかっ」

「ダンス？アルテミスとはなんだ」

レオは本当に何も知らないらしい。

それなら、彼はいきなりこれを連邦という巨大なアリ地獄に手を突っ込み、そこから引き抜いて見せたということか。

私はシヨックと同時に恐れにも似た感情が湧き上がるのを止められなかった。

なんとという皮肉、なんとという運命、そして強運なんだろうかっ！

「――3年前の話だ。アルテミスは、私の前に連邦に送り込まれた偵察部隊だった。結果は失敗、部隊は全滅したと思われていた」

「それだけか？」

「フフン、勘が鋭いな。ああ、そうだ。他にも少しある――」

私は顔をしかめ、巨大なパラボラを上り下りする階段に腰を下ろした。

戦闘の疲れもあったのは確かだが、記憶を掘り返して、それを語ると思うと気が滅入って立っていられなかったのである。

大西洋から吹き付けてくる風を受けながら、ダンスはレオに自分とアルテミスの話を始めた。

新たな調査隊の任務を受けた際、ダンスは個人的な理由から全滅とされたアルテミスの捜索も任務に加えるべきだとする主張を粘り強

く上げていた。

エンクレイヴの壊滅以降、徐々に組織をより強く、さらに大きなものへと成長を続けていくエルダー・マクソンのB・O・Sであったが。戦い方にまで変化が生まれることはなかった。

——失われた部隊の搜索は無用。

その理論を否定しようとするダンスの真意を知る者達は、同情の意をしめしながらも反対し。

それを知らない者達は、自分を改革者たらんとしてるばかりか、個人の私情で任務を貶めている。と、怒りと非難の塊をダンスの背中にむけて投げつけた。

アルテミスの未帰還という状況に、次の部隊は必ず成功させたいと望んでいたマクソンは。最終的にパラディンたちの中に生まれた「ダンスは任務への熱意に足らず」との声を封じるため。アルテミス搜索の任務を、偵察と平行しておこなっても良いとの言質を与えてくれた。

そうしてダンスは部隊を引き連れ、連邦へとやってくることになる。

「私は部隊とともに、まずは連邦の北部を歩いた。

かすかに残されていたアルテミスからのビーコンは、そこにまだ残っているとわかったからだ」

「それはどこだ?」

「メッドフォードだよ。なぜ彼らがそこにいたのかも、知りたかったから。われわれは急いださ。

あの時はレイダーや放射能で変異した害虫共と出くわすことが多くてな。リースなどは『どちらも害虫、うちで退治する殺虫剤を作る必要があった』などとぼやいていたものさ」

「そこに、なにがあった?」

「ああ——あった。今日のお前がそうだったように。町に近づくと、我々はそのに軍がつかう専用ビーコンを受信した。そして見つけた」

「何を?」

「アルテミスの最後の場所だ。

綺麗に一帯を更地にしてな、彼らの部隊は自爆していたんだ。

そこに残されていた記録から、彼らは襲撃によって建物を囲まれ、封じ込められ。押しつぶされようとしていたことがわかった。パラデイン・ブランデイスは、自分たちの武器を敵に奪われまいとすべてを吹き飛ばす決断を下した」

「だから搜索をやめた？でも、彼らは生きていた。ここにもひとり、その証拠が残っていた」

レオは責めるつもりはなかったが。

思わずついた素朴な疑問の声はどうしたってダンスの耳には厳しいものとして伝わった。

「……更地になっていたと言っただろう。可能性は確かにあったが、生き残りがいると信じるだけの手がかりは残されていなかったのだ。

偵察部隊の隊長として連邦に来ていた私は、それ以上の寄り道をするわけにはいかなかった。それこそアーサーに向かって『ダンスは不適格だ、熱意に欠ける』と非難していた連中が正しかったと証明することにもなる」

「わかるよ。確かにその通りだ」

「——だが間違っていた。彼らはあの場所を生き延びたんだな」

まだ、希望はついた訳ではないのかもしれない。

なのに続けられるはずの言葉は、ダンスの喉の奥から飛び出そうとはしない。

それは口にははいけない、危険な誘惑を生むことになる。もう終わった任務、続ける価値もあるかわからない任務だ。

黒煙の立ち昇る衛星アレイの空に、朝の息吹が東から徐々に近づいてきていた。

ダンスが顔を上げると、レオはすでに確信に満ちたそれをむけて見つめてきた。

「君の任務は、まだ終わっていないなかったようだ。パラデイン・ダンス」  
「レオ、しかし——」

「情報は更新された。手がかりはここにある。はじめるのにあと、何が必要だ？」

「ナイト、忘れては困る。われわれの今の任務、連邦に取り残された部隊の回収はどうする？ 投げ出すのか？」

「彼らの情報はなにもない。そつちを続けるといふなら、あんたの指示に従うよ。どうする」

「……こちらは君の持つ連邦の知識を生かしてもらいたいのだが？」

「ゼロだ、ダンス。それとも時間つぶしに、2人で連邦を無闇に歩き回れば。 B・O・S は満足なのかい？」

レオの最後の言葉は、あきらかにダンスへの挑発がこめられていた。

あのリースでなくても、それは不愉快であるはずなのに。この男に言われると、なぜか自分は苦笑するしかない気がした。これこそが間違いだ、メンターを演じるのは私でなくてはならない。

これはそういうルールであつたはずだ。

「そうだな。 B・O・S 流の政治の不愉快さをともに学ぶ、これはいい機会になるかもしれないな」

「それでこそダンスだ」

差し出された手を握って立ち上がる。

腰から下の尻に確かにあつた重い影が、ただそれだけであつさりとダンスを開放し。立ち上がったばかりの2人は、朝を迎える連邦を共ににらみつけてやった。

|||||

マクレディは2日酔いに苦しんでいた。

あのトミーと肩を組んでひたすら語り合う夜を数度体験すると、もう彼の姿はサードレベルに戻ってくることはなかった。

でもマクレディはそのままそこで飲み続けた。彼は自分が人生の敗北者への道へ、勢いよく転がり落ち始めたことを感じてはいたが。それを止めるブレーキの踏み方がわからなくなってしまっていた。

ショービジネスの夢破れた男は、もうグッドネイバーにはいない。

だが自分はここで、彼のように泣き叫ぶことが恥ずかしいと、アル

コールで自分を甘えさせ。あの夜の延長戦にたったひとりで浸りきっている――。

そうなると思惑はグルグルと回り始める。

彼の悩みは友情や裏切りだけの話じゃない。これまでの人生で下したすべての決断、特にこの連邦に生きる道を求めた自分すら否定できてしまうことに気づかされてしまう。

結局はマクレディは失敗して逃げ回ることしかできなかった人間のクズだったのだ。

それはあのレオやアキラから離れて、よりいつそう鮮明になった気がする。傭兵だの殺し屋だの看板を出したとしても、自分には彼らのような存在感。悪党としての格といってもいいだろう。それは決してだせないのだということを学び。彼らの要望すら、自分は満足に果たせる力がないのだ。

――負け犬

自分も潮時なのだろうか？

もうあきらめて、バンカーヒルの商人どもにわずかなキャップで命を売るのが正解なのか？

あのハンコックにこのグッドネイバーで商売がしたいと交渉し、サードレールに居ついたというのに。もう自分がどうしたらいいのか、全てがわからない――。

まどろむ眠りの中、サードレールがどよめいたような気がした。

でも、今のマクレディには関係ない。

(そうだ、関係ない。俺には仕事が必要で、そのためには依頼人がくるのをここで待つしかないんだから)

言い訳、屁理屈。どうでも言ってくれ。

俺には運が必要で、それがなければこのままこの町の酒場の隅で埋もれてしまうことだって――。

穏やかだった時間はそこで終わりを迎える。

いきなり自分が息ができなくなるほどの衝撃に襲われたのだ。マクレディは、自分が誰かに椅子から後ろへと乱暴に床へ放り出された



のだと理解した。

「チクシヨウ。な、何だよ!？」

苦しさに目を白黒させながら、なんとか顔を上げると。まずは相手のメタルアーマーが目に飛び込んできた。

続いてそれが女であることがわかり。それがよりにもよって、このサードレールのオーナー。ハンコックの護衛であるファーレンハイトであるところまで判別がついた。

「あ、あんたっ」

「……」

「いきなりなんだよ!？」

「仕事よ。立ちなさい」

まるでどこかの女王様のようだ。

睨み付けようとしたが。美しい顔の中にある、半分の醜い火傷のあとを見ると、なぜか視線をそらしてしまった。

「ハンコック市長からの依頼か？俺もたいした有名人なんだな」

「——何を言っているの？そんなわけがないでしょう」

「あ?？」

「マクレディ、と言ったわね？あなた、自分がこの町でどう評価されているのか知らないの?」

「……」

「キャピタル・ウエストランドから流れてきた傭兵にして殺し屋。でも、それだけ。」

ガンナーなんてくだらない連中の宣伝にだまされて、トラブルを抱え込んでしまった。聞いたわよ、最近。あなたを追い回していた連中は死んだそうね?」

「知らないな。それが事実なら嬉しいが」

あの2人を殺したことは内緒にせねばならなかった。とはいえ、素直に喜んでやる演技をすることも考えられないほど、混乱もしていた。

それにしても、この怖い女は自分になにをさせようというのだろうか?」

「からかうなら、もういいだろう？二日酔いなんだよ、放っておいてくれ……」

「——アキラのところに戻らないの？」

「いいだろ。放っておいてくれ」

「彼、誘拐されたわ。知ってた？」

「気だるさも、頭痛も消えてないが。体は勝手に言葉に反応していた。」

マクレデイは気がつくのと、立ち上がって女の顔をにらみつけている自分に気がついた。そんなことをする元気が自分にまだあることに、正直驚いたが。

「冗談にしては、腹立つな。そいつは——」

「事実よ。調べてみる気になった？」

「俺が？なんで？あんたが自分で調べたらどうだ」

思わず飛び出した挑発だったが、思った以上に効果的だったらしい。冷たく輝く相手の目の奥にヤバイ光をみせてくる。女とは思えぬまじりつけなしの殺意だった。

それでも相手はわずかにこちらに近づくと、耳元で怒りにみちた小さな声で話しかけてくる。

「ドさんぴんが、いきがるなよ。ここで殺されたいの？」

恐ろしい女だとは聞いていたが、噂は本当だと感じる。顔色は変わらなかったと信じているが、マクレデイの金玉は文字通りそれを聞いて縮みあがる。

体調不良と湧き上がる怒りをちゃんと制御しないと、今夜でマクレデイという馬鹿な男の人生は終了してしまうかもしれない。

（アイツ、こんな女とホテルしけこんだっていいのか。馬鹿じゃないのか？）

まともな男なら、こんな女とベットに入っても不能になるのに間違いない。ガンナーにも何人かいた糞つたれな女共よりも、なお不気味で恐ろしい空気をまとう、この女の存在自体が理解できなかった。

視線をはずし、背中を向けると少し落ち着けとマクレデイは自分に言いかけせる。

「誘拐は知らなかった、本当に。でも間違ったことは俺は言っていないぜ。」

「アイツを助けたいのは、本当はあんたの方じゃないのか？」

「自分はあるたのかわりなのか？ 拗ねているわけじゃないし、本心を聞きたかったわけでもない。」

それでも引け目から素直に「はい」といえないマクレディは、あえてその問いを口にする。ファーレンハイトはこたえるつもりはなかったようだ。

「情報をあげる。それが手がかりよ」

「……こっちの質問には答える気はないようだな」

「レールロードは彼を見捨てたらしいわ」

「なっ!？」

変人共、あいつをいきなり、そうきたか。

だが、冷静に考えれば。納得できないわけではない。あの男が、自分と離れたからってそれまでの無茶苦茶なやり方をかえたとは思えない。変人共はレオやガービーと違って、さぞかし持て余したことがあるだろう。

「あの子が愛している友人達も、お前を除いたらそれどころじゃなさそう」

「——だから俺なのか？ 俺だって別に……」

胸にわずかな痛みが走る。

依頼人と傭兵、それだけの関係のはずだった。あの日、「俺はお前に頼みがあるんだ」と告げてきたあの男に自分はなんと返したか。

気軽にそれができると請け負ったのに——。

「わかった、負けたよ。俺はどうしたらいい？ あんたが教えてくれ」

白旗を揚げるのに、もうためらうものはなかった。

そしてむこうはそれが当然というように、スツと地図を差し出してきた。

「印のつけてある場所に行きなさい。その近くにレールロードに関する建物があるらしいわ。それはどこかはわからないけれど、うろつけば向こうがあなたを見つけるはず」

「見捨てたって、あんたが言ったのは嘘か？」

「信じなさい。アキラのつれていたロボットが接触してくるはず」

「その後は？」

「自分で考えたら？ 私は知らないわ」

そういうと背中を向けてフアーレンハイトはサードレールを出て行こうとする。

マクレディは思わず余計なことを口にしてしまう。

「アイツを見つけたら、あんたに会いに来るようにあいつを説得したほうがいいのかな？」

「……次は市長舎に来るといいわ。改めてハンコックにあなたを紹介してあげる」

「大物の仲間入りか、悪くないな。わかった、そうさせるよ」

この町ではハンコックにも負けない恐ろしい奴だといわれている女だが、以外にあんなでも可愛いところもあるのかもしれない——思わずそう考えてしまった自分の考えのおぞましさに、マクレディの体は震えた。

|||||

フアーレンハイトはそこからすぐに市長の元には戻らず、グッドネイバーをひとりで抜け出す。

そしてとあるレイダーの支配地域へと踏み込み、彼らの生活する建物の中へと恐ろしく気軽な様子で入っていく。

「来たわ」

「へ、へへへっ……ひとりなんだな、本当に」

レイダー達はあきらかに重度のジェット患者であり、すでに健康状態にも問題が表れているような奴らばかりであったが。

真つ青な顔で、ふらふらしていてもギラギラと輝くその目でフアーレンハイトを男女が大勢で取り囲む。きつと彼らの脳内ではよからぬ計画でも立てていて、理性をいつ、かなぐり捨てようか悩んでいるのかもしれない。

正直、恐怖を感じない理由がないはずなのに。肝心の彼女はまるでおびえる様子はなく、話も勝手にすすめていこうとする。

「捕まえたのよね？ちゃんと生きてるの？」

「ここにひとりでくるなんてよオ。さすがになめてるんじゃないの？」

「どっち？殺してないのよね？」

「話しているのは俺だあ……ヒグウツ!？」

レイダーのひとりが、怒鳴りつけようとする直前にファーレンハイトは動く。

そいつの股間を乱暴に握って扱うと、ただそれだけでそいつはうめき声を漏らし、泣きながら静かに床にかがみこんでいく。

「こっちは仕事が終わって急いでいるの。結果は？」

「捕まえた。残りを……」

後ろのポケットから、手からはみ出る程度の大きさの円柱の缶を取り出してジャンキー達の前に掲げてみせる。

「これはボーナスよ。確認して、引き取ったら残りは受け取り場所に用意しておくわ」

全員の目が掲げられた缶に集中し、つばを飲み込む。

「今すぐお見せしろっ」「上にいるよ、椅子に座らせておいた」

まさに餌を前にした犬といったところか。

ファーレンハイトは見るわ、とだけ告げると手の中のそれを近くの男に放り投げ。

さつさと階段をひとりで上っていくが、レイダー達はそれを確認することはなく。全員が興奮して缶の中身に集中しきっていた。

|||||

彼女が求めたものは、階段を上った先の部屋に確かにいた。

グッドネイバーのしがない記者、ソニー。彼はなんと椅子に鎖で体ごと拘束され、レイダー共の退屈しのぎにとボコボコにされ、抵抗する力も失つてうなだれていた。

「死んでないわよね、ソニー？」

「……嘘だろ？なんであんたが——」

「会いたかったわ」

「なあ、なあつ。ちよつと、待ってくれよ。あんた、何か勘違いしてるんだよ。俺は悪党じゃない、あんたにとつちや……取るに足りない男さ。問題にもならないし、問題は起こさない。臆病者なんだ」

「知ってる。ところでソニー、あなたのところの編集長、怒っていたわ。」

去年の最終号の原稿ださなかったつて。メッセージもあるの」

「あのクソ編集長が？——そうか、あの豚野郎が。あんたに俺を売ったんだな。そいつは間違いで——」

「彼ね。『生きていたら戻ってきてもいいぞ。ガンナーへの取材が残っている』ですつて」

「ははは、ガンナー？あの糞野郎も、何を勘違いしてるんだ。今のあいつらのところに顔を出したら、それこそ生きて帰れる保証なんてものはない」

「でもね、ソニー？」

近づいていくファアレンハイトが、横に立つと。座って拘束されている相手の肩に手を置いた。

たったそれだけなのに、ソニーの皮膚は触れた部分から波のように全身の毛が逆立つのを感じる。

「その心配をするなら、まずは生きて町に戻らないと」

「待ってくれよ。話を——」

「話ね、たつぷりしましょう。この後で」

後ろに回られるとソニーの体はついに震え始めた。

伝え聞く市長の護衛、ファアレンハイトの悪趣味な噂の数々が脳裏に浮かんだのだ。そしてその犠牲者たちの姿が今、リアルに自分の姿に変わっていくのを想像してしまったせいで、恐怖している。

「あなた、最近まで街に姿を見せなかったでしょ」

「あ、ああ。仕事をやってたんだ、バイトで。クソ雑誌の記者つてだけじゃ、食えないんだよ。なあ、これは何かの間違い——」

「さつきから繰り返すのね、それ。何を聞かれるか知っているの？」

「あんたが？あんたが俺に？知るわけがないだろうっ」

「いいえ、知っているわ。ボツビはどこにいるの？なにをしようとしている？」

心音が跳ね上がり、落ち着きなく視線が部屋の中を駆け巡り始める。あらゆる行動のスピードがレッドゾーンにむかつて上昇する。

「え？ボツビ？鼻なしのボツビ？」

「口を動かさなくてもいいわ、ソニー。今は考えなさい、どうしたら自分はこの以上は苦しい思いをしないですむのかをね。よく考えて、そしてこつちが質問したら。そうしなさい、今のあなたのために」

この女は死神だ――。

ゆっくりと坂を石が転がるように、彼の状況はさらに過酷なものへと落ちていく――。

## マツドネス (Akira)

ヌカ・ワールド交通センターは惨劇の跡地へと成り果てた。

ガンナーたちはその圧倒的な火力と兵力を有していたはずなのに、アキラは——イエローマンとなった彼にはまったく相手となり得なかった。

衣服は何度も攻撃にさらされたはずなのに、彼の真つ赤な血がそれを汚すこともなかったし。彼らが壊滅の危険を察して、ついに助けを求めると口にする前に、その機会は完全に費えてしまった。

すべてが終わり、物言わぬ死体となったそれらを見てもイエローマンの怒りは収まるではなくピークに向けてあがっていく一方であった。その表れなのだろう、ガンナー達が彼の死体でやるといったことを、逆に指揮官の千切れ落ちた頭部にやってやる。

ボスツとくぐもった音を立てて宙を少し飛んだそれは、道路脇のポールに当たって地面に落ちた。

その不気味な光景を目にしたことで少し落ち着こうという気になったようだ。冷静さを取り戻そうと息を整える。

そして首元へと下がっていた星条旗柄のバンダナを再び口元にもとどて表情を隠すと、その場でなにかにむけて呼びかけはじめた。

「フライヤー、フライヤー？いるんだろ？」

答える声はなかったが、イエローマンの言葉に反応するように。どこからか装置が切り替わる重い起動音が聞こえ。地上から15メートルほどの場所に忽然とそれは姿をあらわす。

小さな円盤が宙に浮かんでいた。

土色に濃いグリーンが混ざり合った、潰れた円柱状のそれだがよく見るといくつかに特徴があるのがわかる。

円盤の上に人が立てるように、そこから落ちないようにと囲いのよなものも立っている。そして徐々に今の呼びかけに反応して地面に降りてこようともしていた。

フライヤー、個人用の移動装置。

あの理解不能の怪集団“小さな宝物”からイエローマンにあてが



わられた彼専用の“相棒”である。

降りてきた円盤は唐突に機械にしかわからない言葉でなにやらいわけめいたものを口にした。内容はわからないが、この場所に敵がいたこと。それを黙っていたことなどなのだろうか。

イエローマンは冷酷に「黙れ、臆病者」と吐き捨ててから円盤の上に乗って立つ。

「次は？」

イエローマンの問いは短く、そして余分な会話もない。

フライヤーと名づけられたそれは、再びなにかを伝えると、イエローマンは鼻で笑ってつぶやいた。

「ダイアモンドシテイ——そこでグールと会え、ね」

腕につけたピップボーイからコードを引き出し、それをフライヤーの囲いにとりつけられたコネクターに差し込んでみせた。

ピップボーイの画面をマップへと変更し、行き先の指定をダイアモンドシテイとした。命令も追加され『鼻なしのボツビと会え』と表示してある。

イエローマンを乗せたフライヤーは再びズンズンと重い駆動音を響かせつつも、静かに上昇を始め。

しかしそのうち地上から見上げても、まったくわからないよう。その姿は煙のようにふっと掻き消えていく。フライヤーは搭載された高度なステルス装置を作動させたのだろう。

こうやって誰の目にも写らない怪しげな飛行物体は、連邦の空をかなりの速さでもって飛び去っていくのであった。

|||||

サンクチュアリの夜はまだなお、暗い——。

そしてロン夫婦にとって、世界はあの日からずっとこのままであった。

何かが大きく、ずれていくのを感じていて。それがお互いの顔を見合わせないことにつながっていた。

周囲の人々——隣人たちの顔は怯えるものがずいぶんと和らぎ、時折明るい顔で挨拶を交わす。

かつて彼らは橋の向こう側に新生ミニツツメン達がいるからと、この場所で襲撃を受けても勇敢に戦ってこれを生き延びることができた。

しかしそれも何度も繰り返すと、ここが自分たちのいるべき場所に見えるようになってくる。愛着は執着心への道しるべとなり、彼らはここで平和に暮らすのだと夢見るようになっていく。

だが、この夫婦だけは違った——。

「——待って！昨日の夜も、叫んでいたろ？」

すでに明かりのつけられたランプ灯の下で夫婦は久しぶりに向かいあっていた。

サンクチュアリの電力はまだ十分とはいえない状況で、それでもこうしてか細くとも闇に沈んでいく周囲とは別に、町の中に明かりがあるのはめぐまれていることの証のようなものだった。

そしてそんな時間に発生したすれ違いざまに——亭主のほうから勇気を振り絞って妻に声をかけたのだ。

今日はどうしても足を止めて聞いてほしかったから、つい気を使った「大丈夫？」を抜けてしまうが。そんなことにも気がつかないほど、この夫婦の関係はガタガタになっていた。

「ああ、ごめんなさい」

「あやまらないで。ただ僕は——君のことが心配なんだ、マーシー」

2人が最後に共に肩を並べて歩いたのは、もう去年の話だ。

あの日、激怒した若者によって無遠慮に無残なその亀裂を剥き出しにされ。さらには心の奥底で苦しむ中で囁いている、口にしてはいけない禁句を彼は2人に敵意にかえて叩きつけると足音荒くここから出て行ってしまった。

あれはそう、猛毒だったのだ。

年が明ける前に、マーシーはジュンと寝起きしていた部屋を出ると。ママ・マーフィの部屋にあった余ったベットに移動していた。話し

合いは沈黙を生み、ジユンは妻に戻ってもらおう力もなくて。

今は夫は妻が使っていたベットを新しくきた独身の中年男性に使わせ、悲しくも気を使いながらの共同生活している。

それでも2人はまだ、夫婦なのである。

「ありがたい。でも、大丈夫だから」

「僕も——僕もあの日のことを夢に見ることがある。あの子のことを、僕たちの息子のこと。だから……」

この難しい状況を2人で乗り越えよう、それは何度も心の中で彼女に伝えたかった言葉だった。

つらい過去はかわらないかもしれないが、僕達は夫婦じゃないか。だがその言葉は最後まで続くことはなかった。

そしてこの2人の問題は、徐々にサンクチュアリの問題にまで膨れ上がろうとしている。

ヒステリーを起こしては人間関係でトラブルを起こすマーシーと、作業をしても時に魂が抜けたかのように駄目になってしまうジユンに周囲は苛立たされるが多くなっていた。

夫婦も離れて寝起きしていることも問題視され始めていて、町の住人たちからも浮いた存在になりかけていた。

代表を務めるマーヴィンはその解決として2人を町の警備へと回し、夫婦が揃って仕事に出ないように時間は常にずらされていた。

まさに悪循環。

「あなた疲れているでしょう？私はこれからだから、今日は大丈夫。見張りの交代は朝までだから」

「そういうことじゃなくて……」

「いいの、心配しないで」

「マーシー」

「やめてー！」

強い声を上げ、手を伸ばそうとしてきた夫から妻は飛びのいて距離を作った。

「今はその話はしたくないの。わからないの!?!」

ヒステリーを起こすまいとして声は抑えていたが、その様子は近く

の住居に寝起きする住人の目に留まり。すでに眉をひそめられていた。

(あの若者の言ったことは、本心だったのかい。マーシー?)

彼は、あの青年はここを立ち去る直前に吐き捨てた。

あの妻は息子を守れぬ父親など、必要ないと、見下げ果てているのだと。

そして彼女はそれを、そのことを自分に話そうとしてくれない。

ジュンは妻の後姿を見送ると静かに肩を落とした。

この夫婦の凍ってしまった時間は、まだなお続く――。

|||||

旧街道を歩くデイーコンは、顔を上げる。

「見えてきたな」遠くに、陸地を見て見ぬふりすれば、そこはまさに孤島という言葉がぴったりだ。

真つ青な海、崩壊しかけた旧街道のさきいきなり存在している町。

レールロードの今回の任務はあのサレムの現状の様子を確認すること――このために新しい変装も用意させた。

以前もやったことがあるが、冬用のジャケット姿の旅商人だ。

この間だけの相棒、荷物持ちのバラモンにはトレマーと名づけた。

連邦の北東部、海岸線にあるその場所はあまりにも辺鄙であるとい前も何度か隠れ家の候補にも上がったこともあった。

だが、レールロードは方針をかえることにした。

今回はそれほどの辺鄙な場所なら、インステイチュートはいないだろうということできつそく調査にエージェントをおくることになったのだ。

と、いう話だった。

デイーコンは知っている、もちろんそれは違うということ。

アキラに入れ込んでいたデイーコンが信じられるかどうか。

デズデモーナやキャリントンではないと思うが、彼の存在を嫌がる仲間の顔がいくつ浮かび。連中がデズデモーナの耳に色々と吹き込んだ結果だろうと想像がついた。

組織に属すると、こういうパワーゲームに必ず巻き込まれる。

自分の能力を發揮しようとする、それで思い通りに行かなくなると、必ずどこかおかしなところから非難の声が聞こえてくる。

ボスたちはそれを聞きながら、的確に対応する力が求められるわけだが。デイーコンの見えるところ、今のボスたちは完璧ではないかもしれないが、十分に有能だと知っていた。

だからいつものように感情を切り離して必要なものを要求し、それが揃えられると素直に命令に従った。

(サレムか——俺のことを覚えている奴が残っているといいが)

あのあたりの情報は僻地ということもあつて、ボストン辺りをうろついてもなにもわからない。

普段ならそれでも「いけばわかるさ」と軽口もたたけるが。例の霧の影響があそこになかったとは考えにくく、以前のような気軽さを装って訪問するのは正しいのか、考えるところだ。

アキラと彼のロボットたちのことは今は胸の奥へと押しやっている。

デイーコンという男はそういう奴だった。レールロードのエンジニアント、嘘をつき本心を明らかにしない。

そうあることが重要——生き残ることができる。

あの騒がしい日々はもう過去のページだ。

再会があれば嬉しいが——嫌、わからない。それは考えないようにしないと、次は自分が死ぬだろう。

|| || || || || || || || || ||

恐れていたことが実現してしまったようだった。

サレムの町は、もはやゴーストタウンのそれだと認めないわけにはいかなかった。

海岸のボートハウスにはマイアラクというカニの化け物がせつせと卵を産み育て。さらに多くのために新しい巣作りまでしているのを遠目から確認した。

地上の町でもそれは一緒に、通りでは道路にへばりついた植物か何かをチマチマとつまんで口元にやつてる連中の光景をいくつも見かけた。

(住人たちは全滅？それとも、逃げ出したのだろうか)

自分はこのまま回れ右をして、本部に戻るのが正しいと心が叫ぶのを聞いた。

もちろんデイクンの答えはノーである。

だいたいそれを 例の隠れ家でやったせいでこんなところに来たともいえる。本当にゴーストタウンになってしまったのかどうか、确实だと報告できるようにもっと中に入っていけないといけない――。

気配がないと感じたら、通りを覗き込んで確認。

トレマーはバラモンでもさらにノソノソ動く奴だったが、のんきにすぎるのかまったく声を上げようとしないのが素晴らしい。

気の抜けた昼食を続けるモンスター共の視覚の外を移動し、怪しい旅商人の一行は町の奥へと進む。

家の中をのぞけば元住人達が餌になった姿を確認できるかと思っただが、今のところそんなものはない。

そのかわり生きてここで暮らす人の気配も、まったくくない。

(さてどうする、デイクン?)

進むも戻るも、難しくなった辺りでデイクンは決断を自分に迫る。

「トレマー、お前はもうどうしたらいいと思うんだ？」

聞いたが答えはない。

というより、そもそもトレマーには関係ない話だ。この先に進めば、どこかであいつらに気づかれ。デイクンはこいつを置いて逃げるし。

ここから戻っても、どこかであいつらに気づかれ。やっぱりデイクン

コンはこいつを餌にしてくれと、置いて逃げるだろうから。  
(ん!?)

最初、それは空耳かと思った。  
だがリズミカルに続いたことで確信が変わる。

どこかで誰かが、のんきにマイアラークに飲み込まれた町の中で射撃練習を始めたようだ。一発、一発の感覚があまりにも空きすぎているし。なんだか危険を前にした切羽詰ったものを感じない。

そしてそんなことをしそうな人物に、覚えがあつた――。

「お前！気は確かか？あいつらに追い回される前に――おい！お前、お前の顔には見覚えがあるぞっ」

「元気なようだ、バーニー」

「参つたな！お前かデューコン、まったく姿をあらわさないからとつくにクタバツタと思っていた」

「あなたの隣人は風変わりなのばっかりだな。おかげでこっちも、あなたはそいつらの食卓に並べられたと諦めかけていた」

「ヘン！お互い様というわけか」

正気を疑ってもらつてかまわないが、この会話をデューコンは背後に足を止めたミラルークの群れに見つめられる中で、お互いが怒鳴りあうように言葉を交わしていた。

クレイジーな爺様だ。

「中に入れてくれるんだろ？」

「おお、急いで入れ！後悔させてくれるなよ」

先ほどまでと違い、素早く装填と狙いと発射を忙しくしているこの町最後の住人は許可をくれた。

「トレマー、きびきび動けよ？あいつらに小突き回されて、食われたくはないだろう？」

バラモンを引く綱を強く引つ張り、デューコンは開いたゲートの中へと駆け足気味に入っていく――。

地上にバラモンを置いて、地下のバンカーにうつると改めて2人は再会を喜んだ。

「この野郎、まったく知らせもよこさないとは」

「俺はビジネススマンだぜ？あんたみたいな爺さんに手紙を書くくらいなら、あちこちにいる恋人達に会うことから優先するに決まっている」

「まだ遊び歩くのか、さっさと嫁をもらって落ち着け。この町はどうだ？」

「ああ……見て回ったけど。商売の先行きが心配になる、隣人達に悩まされそうだ」

皮肉を混ぜ、互いの無事を祝って握手を交わすとさっそくバーニーと呼ばれた老人は奥の棚から2つのグラスと琥珀色のアルコールを取り出してきた。

「デーコンは（太陽がまだ高いが）と内心では思ったが、「いいね」と答えてグラスになみなみと注ぐように要求した。

「そっちはどうなんだ？」

「——こいつは旨い。なんだ、俺か？」

「ああ、あんただ。あんたのその……」

すっかり忘れてしまった。なんとかいう傭兵会社だったか。

「サレム・ボランティア・ミリシア——俺様、バーニー・ルークがS・V・M.の司令官！今じゃ他にも主計官、守衛官、公式会議の書記官も兼務している」

「ワオ、凄いな。俺よりはるかに高給取りなのは間違いなさそうだ」

「仕事は連邦のすべての人々に仕えること、ああ、そうだ。報酬はいつもたっぷり貰っているよ」

「あんたが居てくれりゃ、俺も安心していられる。連邦の守護者に乾杯だ」

「乾杯！連邦に栄光を！」

現実と虚構の狭間で必死に正気を保とうとする勇者と、デーコンはしばし楽しい酒を酌み交わした——。

夜、目を覚ましたデーコンは静かにバンカーを抜け出るとルーニーの家の屋根へと登る。



目が慣れてくると眠ることなく動いているモンスター達の姿がはつきりとわかる。昼間、バーニーに倒された仲間の死肉をあさりに、今はこの家の前に集まってきているのだろう――。

（バーニーを残して、ほかの住人は去ったんだな）

この町はあの霧とは関係なかったようだ。

バーニーはなかなか話そうとはしてくれなかったが。大口を空けて大喜びしながら飲み続ける老人の悲しみは次第にデイクンへと伝わってきていた。

あの老人はこの町を愛していた。

すでに未来はないとわかってても、あのモンスター達にこの町を飲み込ませるわけにはいかないと今も孤独に戦いを続けている。そして彼が生きている限り、この町は彼だけの町なのだ。

こんな悲しい話は連邦でもう、飽きられる類のものだ。

穏やかで平和な日常を望んでも連邦はそれを許さない。傷つき、追いたてようと激しく、ある日突然誰かの姿で攻撃してくる。

怯えれば逃げるしかないし、戦って勝っても。死者は並ばされ、数が減ったその場所には悲しみしかない。

それが繰り返され、そしてついにそこから誰も居なくなってしまう。

たまらない気持ちになって、デイクンは商品のはずのタバコのケースを取り出し。乱暴に中身を取り出した。

火をつけて、ゆつくりと煙を吐き出す。

夜の凍るような海風がそれを白い糸のように闇の中へと引きずり込んでいく――。

|||||

——ダイヤモンドイ。

その日、ナットは学校の授業が終わるといつものように家路に着く。

子供ではあるが、彼女にはやるべき仕事があった。いつからだった

だろう。彼女が子供たちと混ざって遊ぶのをやめ、すすんで新聞をつくることに熱意を注ぐようになったのは。

自分には準備が必要で、その時は次第に近づいていると感じている。

まずはマーケットで掘り出し物がないか調べないと。忘れずにえんぴつと油も買わないといけない。姉がいなくとも、ナットにはやるべき仕事があるように抱えている。

買い物を通り過ぎようとした時、足早に床屋のジョンの前を通り過ぎようとした時である。

「っ!」

「はい、毎度。またどうぞー!」

いきなり前を横切られ、あやうくぶつかりそうだったと足を止めたナットは。どんな奴だと顔を見ようとして、一瞬あれと驚いた。

黄色のフェドラー帽にコートにスーツ。

こんな時代に汚れない綺麗なビジネスマン、そいつは間違いなくヘンな奴だった。誰にも帽子の下にある顔を見られたくないらしく、店を出るときにはすでに星条旗柄のバンダナで表情を隠していた。それでも――。

「あれ、今の」

自信がなかった。でも、見間違いとも思わない。

「アキラ?」

一度だけ一瞬、それを見た覚えがあった。

町を飛び出していきなり発砲し、通りに男を引きずり込んだあの時に見せた恐ろしい横顔。

姉がブルーと呼んで慕う男の仲間だったが、なんか悪い人のようにも感じた、彼。

でも向こうはこちらに気がつく様子はなかった――。

探しに行ったほうがいいのだろうか?

不安を覚える中、判断に迷って立ちつくした。マーケットはいつものように盛況で、そこにあの黄色で統一されたビジネスマンの姿はここから見えない。

ナツトは結局そのまま帰宅した。

悪い予感がずつとあつた。それでも、今のあのアキラかもしれない男を追うのはなにか危険なことに触れるかもしれないという恐怖があつた。脳裏に焼きついたすれ違った男の目は、確かにナツトを見たはずなのに。

こちらを見ても変わらずに恐ろしく冷たい目をしていたと、確信もあつたから――。

そのアキラは――イエローマンは通りを抜けると離れのオープンカフェでひとり座っている人物のところへと一直線で向かつていく。ジョンの店で口元の髭を整え。頭は軍人のように短くきめ。

髪と髭はそろつて赤色に変更してもらつた。

「あら、いい男ぶりじゃない」

「……」

「仕事にやる気もあるようで、感心するわ」

椅子に座るのは女性だつた。

グツドネイバーで尊敬を受けていた悪党のひとり、“鼻なしのボツビ”その人である。

ダイアモンドシテイにグールは足を踏み込めないで、今は顔がわからないようにガスマスクをかぶつてとりあえず誤魔化している。

当然だろう、この町はグールを拒否した町だ。

このイエローマンがここでいきなり周囲に「グールがここにいるぞ」とでも叫べば、たちまち大騒ぎが起こるだろう。

「次は？」

「私が仕事するには、チームが必要。だからこれからチームを作る。

あんたが最初で、2番目はここに居るわ。どこに居るのか教えるから、あんたが彼をここまで連れてきて頂戴」

「その後は？」

「準備する時間があと少し必要なのよ。それが終わったら、皆でグツドネイバーへ戻るわ」

「いつ？」

「——それはあんたが今から連れてくる仲間の意見も聞かないとね。わかった？」

「そいつはどこにいる？」

「この町のセキユリテイに捕まって、牢にぶち込まれているらしいわ。あんたたちよつと、そこから連れ出してよ」

「……わかった。ここにいろ、すぐ戻る」

イエローマンはそれだけ言い残すとポツビに背を向けた。

## 連邦

連邦の輝ける夜空の下、それでも冷たい風がこちらの不安を誘おうとして遠くで近くで強く、弱く、うなることをやめようとしなない。

だが、もうそんなの知ったことじゃないんだ。

太陽が昇っても、沈んでも。あいつらはそれをやめようとしなないんだし、それに今は静寂と眠りがここにはある。

それで十分じゃないか？

探偵は闇の中、地面に座りこんでいた。

最後のミニッツメンで知られているプレストン・ガービー氏の求めに応じ。今はこうしてパイパー、コズワース、そして若きミニッツメンのジミーと旅をしている。

おかしな話だが、この探偵は山積みの仕事を放り出し、ひとりの男のためだけにここにいる。

事務所待っている秘書にも内緒で、まるで女房に隠れて若い女の元に通う亭主みたいなやり方だ。そうする理由が記憶の中に今もしっかりと残っている――。

古来より窮地のお姫様を救うのは、笑顔の素敵な輝ける鎧の騎士と相場は決まっているものだろうか？

だからあのVaultでとらわれていた自分の前に現れた男にも、そう言っただけだ。「ここに麗しの姫様はいない。ごましお頭の老いた探偵がいるだけだ」ってな。

最初は向こうも驚いていた。レオ――元Vault居住者は、やはり聞かすにはおられなかったのだろう。

自分が助けた探偵が、何者であるのかということ。

――あんだ、何者なんだ？

――いったらどう、探偵だよ。確かに、この皮膚とその中に見える金属部分に戸惑う気持ちはわかるが。それは重要なことじゃない。他になにを知りたい？

――人造人間、なのか？

——今風の最先端技術で作られた、お洒落なものではないがな。まあ、そうだ。

——こっちは……何も間違っていない。探偵さん、あんたを救いにやってきたんだ。

向こうも驚いてはいたが、それでも失望はまったくしていなかった。少なくとも、彼は本気でそう思っているのだとわかった。

誰にもわかってもらえとは思わないが、そう言われた時の。この探偵の心の内ってやつを誰が理解してくれるのだろうか？

戸惑い、尊敬、驚き、友情。

付き合ったのは決して長い時間ではなかった。

それでも彼が紳士であり、戦士であり、そして家族を失って苦しんでいる男だと理解するのに十分だった。彼の力になりたいと強く思いいれを感じていた。

俺と彼は、まだ友人とは呼べないが。

しかし、かなうならそうなればと期待もしている。

そしてあの日、彼を。自分の恩人を危険な傭兵の元にひとりで行かせてしまったことを今は後悔している。

あの時はそれが正しいことだと信じたから送り出したが、それが実は間違いではなかったのか？

連邦の空の下を駆け回り、嘆く人々の声に触れるとそれを考えてしまふようになった。あれからもう半月以上が過ぎている、それなのにまだ彼の噂はどこからも聞こえてくる気配がない。

そもそもこの連邦は、人々に優しくしたことなんて一度だつてなかった——。

「う、うーん」

「——目が覚めたか？若き勇者よ、見ればわかるがまだ太陽は出番を待っている。眠れるなら、今はそうした方がいい」

「いえ、目が覚めてしまいました」

若者はそう言って体を起こす。

ジェイコブ・ファウラー、若干14歳でミニッツメンとなった若者。

彼は上司のミッキーの指示で、この集団についてきてくれる。

「お前さんを見たときのことだ。正直、若すぎると思っていたんだが。あやまらないといけないな」

「え?」

「よく俺たちを守ってくれている。口やかましい新聞記者、情緒不安定なロボット、おかしな老いた探偵。これでダイアモンドシテイからここまでトラブルなしでやってこれるのは、すべてお前さんのおかげだ」

「いや、自分は別に——」

「厳しいんだな、自分に。だが素直に受け取ってくれていい。これは嘘じゃないんだ」

「あ、ありがとう」

「どういたしましたして……旅慣れているのは、理由が?」

探偵はなにげなく触れた疑問が、若者のわずかな沈黙を生む。彼はそれを話すのに躊躇しているのだ。

うっかりニツクは、連邦を生きてきた若者の人生をのぞき見てしまうことになる——。

|||||

バンカーに入る侵入者が息を飲み、「キャプテン・ブランデイス!」と名前をなぜか呼んだことにさえ。この男が気がつくことはなかった。

ただ、こつちに人がいることに驚いて。

なんの警戒も見せていないことと、そうする必要もないパワーアーマーをどちらも装着していたことをのぞけば。

最初こそ出て行けと威勢よく口にできたが、続く言葉にはやはり恐怖が見え。レーザーライフルの銃口は感情のコントロールを失い、狙いにブレをみせている。

震えているのだ、B・O・Sの戦士だった男が!

「だ、誰だ?何を言っている!?!ここにどうやって入ってきた?」

相手は強固に鍵がかけられていたバンカーの扉が開けられ、ややパ

ニツクを起こしているように見えた。

レオは素早く隣に立つダンスのうでをつつく。

「ダンス、説明を」

「私だ！パラディン、ダンスだよ。わかるか？」

「……パラディン・ダンス？ダンスだって？違う、そんなわけがない。ここは連邦なんだ」

「冷静になってくれ、パラディン・ブランデイス。アルテミスの方が絶たれたので、私が部隊を率いて新たに派遣されたということだ」

「B. O. S. が——」

「ああ、そうだ。」

偵察任務だ、あんたと同じように連邦に派遣された。探していたんだ。部隊は襲撃を受け、自爆したのもわかっている」

バンカーに隠れ住んでいた男は、これまでの孤独な日々をおびえて過ごしたのは明らかだった。

目に浮かぶのは、今も喜びや希望では決してない。不安、恐れ、そして自分が正気を失いかけているのではないかという絶望だけ。

歪んだ表情からは歪な笑いが浮かび上がっていた。

「ははっ、ずっとひとりでいた。孤独にな、ここから動くことができず。なのに——そうだ！どうやってここに来た？このバンカーに入ってこれるはずがないっ」

「やれやれ、パラディン・ブランデイス。話がループしているぞ」

レオの雰囲気が変わる。

それまでの静かで、温和だったものが消え、軍人特有の張り詰めた空気を自分から作り出して声にもより一層強いものが込められている。

「よし！まずは銃をおろせ、パラディン。何だそのザマは、敵を前にまさか怯えているのではないだろうな？」

（レオ!?!）

「冷静に！こちらの話を聞くん、兵士よ。さあ、早くしろ！」

ダンスは息を呑むが、驚いたことにブランデイスはのろのろとその指示に従うようにレーザーライフルを構えるのをやめた。だがなに



かあれば、今もすぐに爆発して銃爪に指を今度こそ力をこめたとしても不思議はない。

レオの居丈高な命令口調は続く――。

「アルテミスの搜索は、同じく派遣されたダンスの部隊の任務のひとつだった。」

我々がここにいるのは、簡単な話だ。あんたのチームにいた部下を発見した。その救援ビーコンをたどった結果だ。

彼らはここに、あんたの情報をホロテープに残してくれていた」

「仲間、仲間は どうしている？」

「死んだ。誰も生き延びることはできなかった、その理由も彼ら自身が話している。」

あんたは彼らに感謝するべきだろうな。メッセージがなければ、我々がここに来ることは不可能だったろう」

感情はなく、機械のように冷酷に事実だけを次々と突きつけていく。

一見して残酷なやり方に見える態度だが、しかし軍人としての骨にまでしみこませた体質が表に浮かび上がると、いつの間にか正気と狂気の間で孤独に踊っていたブランデイスは表情から消えていた。

怯えが消え、落ち着きを取り戻すと、そこにいたのは連邦に叩き潰された無残な兵士の姿だけが残されている。

「そ、そうなのか……やはり、そうなってしまったのか」

「彼らの遺体とタグは回収してある。あとはあんたを残すだけだ」

「私？私が、B. O. S. に戻るっていいのか!？」

「当然だろう、兵士よ。なんの疑問がある？」

「それは出来ない。出来るはずがないだろう。もう長いことずっと、孤独だったんだ」

「それはすでに聞いたな」

「部隊は全滅。こうなってしまったら、もう私が帰る場所はB. O. S. にはない。どうせ使い物にはならないさ」

弱弱しく自嘲気味に答える兵士の姿に、たまらずダンスは声を上げる。

「一緒に帰るんだ、パラディン。それでもあんたは兵士、B. O. S.の一員じゃないか」

「ダンス、見ればわかるだろう？兵士としては使い物にならない。無理なんだよ」

（自信を失っているのか？それなら——）

レオのかもしれない。空気がまた変化する。

大昔の戦場で、彼を目の前にしてヌケヌケとそれを口にした上官たちから学んだものをここでアレンジして。

厳しい姿勢の中に同情を見せるようにする。

「パラディン・ブランデイス。連邦でのアルテミスの戦いを、あなたが苦しんだ日々になにがあったのか。」

B. O. S. はその情報を必要としているのだ。私はあなた自身に、それを皆の前で胸を張って堂々と報告するべきだと思う」

「し、しかしだな——む、無理なんだよ……昔の話なんだ。役には立たない」

「ならここで何をしていた？話してみろ」

「ああ——偵察を、しようとしていた。少しでも探索をしよう」と。

でも無理だったんだ。長くはここを離れられない、なにより孤独だった。連邦は危険で、なにかあるとすぐに手に負えなくなることばかりになってしまっただけから」

「そうだろうな。それを報告すればいい。あなたが話すことは一杯あるはずだ」

「う、ううっ」

老兵の顔に苦悶の表情、そこに流れる汗は冷たいものなのだろうか。

「アルテミスは任務に失敗した。だが、その経験はあんた以上にこの手強い連邦を知る兵士はいないということでもある。」

心配などしなくても。戻ればあんたの居場所はあるし、望めばまた前線に戻る機会もあるかもしれない。そして報告するのにこれ以上のタイミングはないだろう」

「そ、そうだぞ！ブランデイス、B. O. S. は今。この連邦に来てい

るんだ。アーサーが、エルダー・マクソンがついに決断された」

「れ、連邦に？ここに来ているのか!？」

「ダンスの言うとおりで。部隊にあなたの力を貸してほしい、彼らはすでに連邦に苦しめられようとしている。」

兵士たちの多くが、まだ連邦を知らないから自分たちは簡単にすべてを行うことが出来ると信じきっている。それは危険なことだ」

「ああ、ああ。その通りだ、危険だ」

「だからこそ苦しんだアルテミスの情報が役に立つ。」

それに――パラディン・ブランデイス。あんたの部下達は皆、あんなのことを心配していた。タグも、ホロテープも、ただ持ち帰っては情報として処理され。彼らの記憶も過去に放り投げだされてしまうだろう。

あんたはそれを許してはだめだ。

仲間を思い、共に戦ったあんたがその物語を伝え続けなければ。あの時も真に尊敬すべき兵士は確かにいたのだ、とね。

ここでこれ以上の準備は必要ない。我々と一緒に帰ろう、そして倒れていった部下たちのことを語って聞かせてほしい。あんたにはその義務があるはずだ」

弱弱しく抵抗をみせていたブランデイスは、ついに黙ってしまおう――

バンカーの外に立ち、夕暮れに飛び立っていくベルチバードをレオとダンスは無言のままバンカーのある地上から見送っていた。

パラディン・ブランデイスは決断した。

再びB・O・Sへ、兵士として戦う日々を取り戻しに行くのだ、と。

「レオ、お前に感謝する」

「ダンス？」

「最初にブランデイスを見たとき、すぐに思ったんだ。彼は戻ってこないだろう、と。」

連邦が彼を壊し、兵士だった彼は消えてしまったんだ。そう考えて

しまった」

「……」

「彼が兵士としてああして戻っていく。あれは君がやったことだ。

仲間だと口にしておきながら、すぎる事も出来なかった私はどうしようもない。だが、君は違う。」

ブランデイスを最初から兵士として扱ひ。彼が果たすべき任務を思い出させ、ああして帰還させてみせた」

「パラディンから誉められることに、悪い気はしないものだよ」

「茶化さないでくれ——本当に恥ずかしいよ。昔の彼を知っていた私は、あまりに無力だった」

レオは内心、このダンスの言葉に少なからずショックを受けていた。

繊細に過ぎる——。

軍人とは命令を忠実に実行する殺人機械なのだ。それは一度学べば、決して忘れることはない。

使い道さえ決まっているなら、錆びた剣となっても再び危険な暴力装置に仕立てる方法はいくらだってあるのが軍であり、戦争ではなかったのか？

(ガービーはミニッツメンをヒーローだと考えているが、実態はただの民兵にすぎなかった。B・O・Sは軍を自認し、自らの役割と正義を定めて連邦に侵入してきたはず。

彼らの目的はまだはつきりとはしていないが、ダンスやブランデイスを見る限り。彼らにこの連邦を制御する力が本当にあるのかどうか。

これを見定めるチャンスなのかもしれない)

置いてきたコズワースはかつてレオにこそ、この連邦を正しく導ける力の持ち主であるはずだと。平和を求める善の心を体现できるはずだと、やや盲目的に持ち上げられたことがあった。

それを信じようとは思わない。引き受けようともまだ、思っていない。

だが、息子を探して歩き回るこの連邦のあまりの惨状を知るように

なると。自分の中に熱い別の炎が静かに燃えはじめ、その勢いを強くしているのもわかっていた。

エルダー・マクソンに会わねばならない。

かつてはアキラと一緒に手を貸したことでミニッツメンを復活させたように。今、ここに自分がいることでB・O・Sには大きなアドバンテージを与えている可能性は否定できないのだ。判断を下すまでは、冷静でいなくてはならない。

B・O・Sはこの連邦の、敵か？味方か？

|||||

若きミニッツメン、ジミーのわずか14年の人生は過酷の一言に尽きるものだった。

「両親は、お互い旅商人でした」

だがジミーは父親の顔を覚えていない。

彼がまだ幼い時、母が妹を出産すると。まるでそのタイミングを計っていたかのように、父親は生まれたばかりの娘だけをさらって姿を消したのだそうだ。

「母はインステイチユートがやったのだと、そう信じていました」

何が起こったのか、最初はわからなかった。真実もわからなかった。

半狂乱になった母親が愛した男は娘をさらって文字通り姿を消してしまったのだ。

幼い赤子を連れられた商人の姿を見たという噂もなく、他に考えられることはなかった。

そしてインステイチユートはすでにこの連邦を圧倒的な恐怖で満たしていた。

同時に別の事情が——問題が母と子を襲っていた。

猜疑心で半狂乱となった母親が正気を取り戻したときには、やみくもに他人に助けを求めたせいで大事なキャップをほとんど吐き出してしまっていたのだ。

さらに同じころ、リン・カレッジスクールそばの居住地に住んでいた母の妹がレイダーの襲撃で命を落としていた。

居住地は崩壊し、全てを奪われたジミーの従兄弟が助けを求めて2人の前にやってきたのだ。幼い子供を持つ母は怒りをかみ殺して無理やりに正気を取り戻すと、インステイチュートを憎むことで、ようやく厳しい現実に立ち向かうことにした。

ジミーはその時が懐かしいのだろうか。

星空を見上げて、わずかに笑みを浮かべている。

「それはとても幸せな時間だったと思うんです」

今振り返れば、ということか。

ニツクは黙って聞いていた。

愛した夫は失ったが、若く働き盛りの若者がその穴を埋めてくれた。

ジミーも妹を失ったが、それほど長く一緒だったわけではないので感情はとくになく。新たに出来た従兄弟を兄と呼んで慕った。

不幸を乗り越えて誕生した新しい家族には、幸せを感じる時間が必要だった。

ニツクは興味が出て、つい質問する。

「君の母親は、店を出そうとはしなかったのかい？」

「ええ、まったく考えていませんでした。母は一箇所に留まることを嫌ってました。多分、妹と父のことがそれを悪化させたのかもしれないけど」

「ああ、なるほどな……」

実際に怒りを飲み込んで息子をこの連邦の中から探し出そうという男をニツクは知っている。

それが母親であっても、きつと変わらないのだろう。ただ彼と違い、ジミーの母親にはまだ守るべき家族が残っていたというだけだ。

だがその差だけでも、人はどれだけ救われるのか知れない。

「母は連邦の南部で商売をしていました。あのクインシーにも行ったことがあります」

「クインシーの虐殺の？」

「ええ——母はあの町は嫌いでした。」

兄は——従兄弟は平和な場所だと言っていましたけど、母はそうは考えなかった。天候と問題がないとわかったら、そこから2日と長居はしませんでした。従兄弟はそれが不満そうでしたけど」

心休まる数年が過ぎたが、ついに連邦は小さなこの家族の足に噛み付いた。

この頃、傭兵団が力を急激につけ始めていた。

強い力を求めた傭兵達は軍と呼べるまでの力を必要とし、その活動の一環としてレイダーの如き略奪を自らの職分に加えてはいたが。ついにそれがバランスを崩させ、レイダーが次々とそこへと勢いよく流れこんでいってしまった。

最終的にそれが、強大なガンナー族ともよばれる傭兵団の誕生へと結びつくことになる。そして奴等が仕事として襲った居住地のひとつに、運悪くジミーたちの家族も訪れていたことがあった——。

「僕はバラモンと荷物を持って逃げたんです。銃は使えましたが、人を撃ちたくなかったから……。」

母は僕と従兄弟を探して——大怪我を。従兄弟はそこで死んだそうです」

「そうか。大変だったろう?」

「ええ、まあ。といつても、僕はまだ子供でしたけど。もう商売のやり方はしっていましたし。連邦を歩く道も覚えてましたから。」

母は傷がひどくて、もう旅は出来なかつたんですが。僕はひとりで旅をしました、1年ほどでしたけど」

「子供が連邦を歩くのか。驚いたな」

「ルートを変えたんで、従兄弟とずっと話していたことだったし。ガンナーはすでにありましたし、当時はまだ他にもいくつか傭兵組織がありましたけど、最後は彼らがそのあたりを支配する未来は見えませんでした」

それも理解できる。

人間の勢力として考えるなら、今は連邦の南部をほぼほぼ支配しているガンナーたちを無視することは出来ない。

危険なアポミネーションは別にしても、“真つ当な”レイダー達は傭兵によつてボストンにまで押し上げられてしまつてゐる。今の南部はガンナーの支配する狩場であり、餌場になつてしまつた。

そして徐々に北部へも手を伸ばし、連邦全てを支配する可能性さえ噂されている。

「子供でも立派な旅商人というわけだ、どれだけやつていたんだ？」

「別に、言つたでしょ。1年もありません」

「そうか——」

「兄が死んでから、母がすっかり塞ぎこむようになってしまつて。今度は僕が旅に出ることを許さないつて」

「店を出すと言つたのか？」

「いえ、そんなキャップは残つてなくて。バンカーヒルで手伝いの真似をやってましたけど、それじゃ生きていけなかつた」

「厳しい話だな」

「そうじゃないんです」

若者の顔が歪んでいく。

口にしたくないことを、話そうとしているのかもしれない。

「？」

「母は——あの人はそういうんじゃないんです」

「どういふことだ？」

「母は弱つてました。だから——はあ、あの人は従兄弟と関係を結んでいたんです。そういう意味です。」

あの人はだから従兄弟が、兄が死んで僕が自分を捨てるんじゃないかつて。疑心暗鬼になつてしまつた」

「……参つたな」

眠れぬ夜に聞くような、ちよつとしたほろ苦くも甘い昔話を彼に求めたのは間違いだとニツクは認めなくてはならなかつた。

そこから出てくるものはなにひとつ、聞くに堪えられない悲しい物語ばかりだつた。

なのに夜はちつとも終わる気配はないし、もう話はいいだらうとここで言うのも失礼なことだ。



「バンカーヒルでも色々あつて、そのうち母も死にました」

「そうか……こんな時になんだが、聞いてしまった以上はいわないといけない気がするんでな。君のお母さんにお悔やみを」

「——ありがとうございます」

「それでミニッツメンに？商人はやめたのか？」

「いえ、ミニッツメンはその後です。商人をやめました。」

「やっぱり子供だと態度を変える客が多くて、出て行った後をつけて襲おうとした奴もいたから——」

「人を撃つたのは、その時が初めてか？」

「まあ」

「そうか——」

「旅をしてました、あちこちを見て回りたかった。自由だったし、それで死んでもいいと思つたから」

「……」

「でも、そこである人にあつたんです。彼について回つて、弟子にしてくれつて言つてました」

「そりや、面白いな。君が弟子入りしたい相手とは、誰なんだい？」

「正義のミカタです」

「え」

「思わずニツクはジミーを見直してしまった。」

「だが、本人はまじめなまま。どうやら嘘ではないようだ。」

「結局、僕は弟子には出来ないといわれて。ライフルの方が得意だからつて」

「ライフル？彼は——その正義のミカタとかなんとかは、なにをしていた？」

「昔ながらのリボルバーのピストルを。すぐく目とか、鼻とか、耳もよくて。遠くで助けを求める声があると、すぐに飛んでいってバババツて、倒して——」

「ちよつと待った！」

「ニツクは知らないうちに腰を浮かしていた。変な話だが、この人造人間は自分が機械であるくせに、興奮している自分を自覚した。」

だが、その価値のある。凄いものを自分は聞いているのだとわかってしまったから、仕方ない。

「その人の名前は？」

「わかりません。名乗る必要はない、って」

「君はなんと呼んだ？」

「ミステリーマンって、本当に謎の——」

「そうだ。それは謎の人物その人だよ、ジミー！」

若者は言われた意味がわからずキョトンとしていた。

ニツクは冷静さを必死に取り戻すと、話を先に進めるように求めた。

しかし、若者の言葉にはもう彼を興奮させるものは出てこなかった。

ミニッツメンの復活とサンクチュアリの情報を聞いた。ガービーにも彼と同じものがあると信じて、ミニッツメンへと加入した——。

「ミステリーマンのこと、ニツクは知っていたのですか？」

「私も彼には興味を持っているひとりだね。まだ直接は会ったことはないが、噂を調査していた。彼は連邦以外でも活動しているようで、あのキャピタル・ウェイストランドでは守護天使などと呼ばれていたらしい」

「守護天使——わかります、そんな人でした」

ジミーの顔にようやく若者らしい、子供のような無邪気な笑みが浮かぶ。

憂鬱な夜のなにげない会話が、ようやくその本質を取り戻した瞬間がこの時だったのかもしれない。

そしてニツクは心の中で決断していた。

プレストン・ガービーには会いに行く。だが、その前に自分たちは向かうべき場所があるのではないか？

太陽が昇れば、夜は西の空へと沈んでいく。そしてそこにあの男はあの日、旅立っていった。

だからその先で何があったのかを、この探偵がさっさと見つけてしまえばいい。

あの男を知っている連中が知りたいことは、ようするにそういうことなのだから。それがわかれば、問題だってほとんどないのも同じなのだ、と。

## トレランス・ゼロ

朝が来るとわかると、マクレデイはそのそと寝床から抜け出る。穴の開いた天井、隙間風が入り込む壁。だがベットは新品だからか、地べたで横になるのとは目覚めても体中が痛いなんてことはない。悪くない。

建物の外に出てあくびと共に周囲に目を走らせる。別に異常なし、たぶん、きつと。

空は雲がたちこめていて、太陽を隠しているせいではつきりとしな。きつと今日はこんな感じが続くのだろうと思う。まるで今の自分のようだ、戻ってきてるはずなのだが。まだ、何かが足りない——。それでもわかることはある。

酒瓶を前にして、嘆くことも、愚痴も言えないままダメになっていたあの半月のことは悪い夢だったのだ、と。

あれからずいぶんマシになってきている。少なくとも、驚きと呆れるほどとんでもない事件はすぐそばに落ちていて、それを必死な顔をしてよけるのを楽しめている。

「目が覚めたのかい？おはよう」

「どうも——こんな夜明けから働くのかい？」

「農家だからな、妻も一仕事終えたばかりさ」

「なるほど」

ここはグリーントップ菜園。

驚くべきことだが200年前から一族が守ってきたらしい。本当かどうか、それはわからない。今は子供のいない老夫婦だけが住んでいた。

老人は笑顔のまままで温室に残っていた妻にジェスチャーで『朝食の用意をする』とやると、マクレデイの肩にポンと手を置いてから家の中へ入っていく。

俺はもう一度だけのびをすると、肺に大きく息を取り入れる。

ロボット共はまだ家の中。俺は奴らと一緒にここに来て、あいつを探している。

俺の相棒、友人、クソツタレのトラブルメイカー、恩人でもあるボス——あのバカと、何を話したらいいのかわからないが。やはりもう一度会いたい。

あのグッドネイバーから叩き出されるように飛び出してきた俺は、あの瞬間から自分が望むルールに乗って再び走り出すことができたようだ。そこだけは……あの恐ろしい女に感謝しないといけないのかもしれない。

チャールズ川を前に『そこで待て』しか言われていなかったから、夜が来たら朝には死ぬな——そんな自暴自棄な笑いを浮かべていた自分の前に本当にあいつらが現れた時はさすがに目を疑ったね。

いや、まあ……驚くことは別にあつたが。とにかくエイダとキュリーとはそこで再会できた。2台のロボットは、いつの間にかロボットを連れたおかしな女、にかわっていたけれどな——ああ、こういう信じられないクソ驚かせる経験は、あのボスなら簡単にやってのけるだろうと信じたよ。

そして誘拐の話も、変人共のクソツタレな言い訳もそれで知った。で、そこからが本題ってことになった。

「それで？ 考えはあるのか？ アキラをどうやって探す？」

「あります。私たちはこれを追跡曲線の法則をあてることで——」

「は？ なに？」

「追跡曲線、ご存じありませんか？」

「——ご存じ、ないな」

グチャグチャと説明を受けたのだが——すまない、さっぱりわからなかった。

いや、馬鹿じゃないから（そうだ、あいつらがロボットというだけ）最低限は理解した。ようするに捕食する側と逃げる側を数字でうんぬんするとかいう方法だ。そこだけはわかった。

で、それによってあいつらはアキラをさらった連中の行動範囲を見つけて出していたのだそうだ。

ここまでの最初の驚きって部分な。

続いて次の驚きが登場する。それから北上した俺達は、ミニッツメ  
ンの一団と出くわしたんだ。

さすがにあのプレストンはいなかったが、あいつの部下はこっちの  
ことを見知っていたらしい。顔は覚えていなかったが、向こうから話  
しかけられた。

で、俺達は彼らと一緒にここに来たというわけ。そうするだけの理  
由があったんだが、とにかく色々出来事が起こりすぎていた。退屈  
でどうしようもない時間とか、あれはどこに行ってしまったんだ？

本当、一日が過ぎるたびに色々あつて目が回っちまいそうだ。

|||||

ダイヤモンドシティの入り口に立つイエローマンは待っていた。

新しい仲間とやらを連れてきてやったというのに、あの2人は彼を  
ここに置いて再びマーケットへと戻っていつてしまったのだ。不満  
はないが、不愉快ではあつた。

ガスマスクでグールであることを隠している“鼻なしのボツビ”  
が、なにかの荷物を担いだそいつを連れてあらわれると不機嫌を隠さ  
ずにそのまま近づいていく。

「そいつが必要だったのか？」

「ええ、そう。それと彼の名前はメルよ。短い間でも仲間なんだから、  
ちゃんと呼んであげなきゃダメよ」

「あ、ああ、どうもー！ボツビ、なんか随分とおつかない奴を引き入れ  
たんだな。今回は大丈夫なのか？」

「心配はいらない。あなたのおもちゃのために必要なものは買いそろ  
えてやったのだから。自分のことをちゃんとやって頂戴」

「あなたに言われなくてもわかってるよ。俺にまかせてくれ」

イエローマンはふたりのやりとりなど気にしていないようだ。

いきなり話題を変える。

「この後はっ！」

「まだ準備が終わっていない。落ち着きなさいよ」

「勘違いするな。こっちは指示で『お前の仕事を終わらせろ』と受けているだけ。お前達と仲良くする理由はない」

「それはもちろん、そのとおりよ。私たちが仲間なのは仕事の間だけ、それが終われば解散するわ」

「なら、準備くらい終わらせておけ。こっちがお前に従う時間は減り続けているぞ、警告しておこう」

「おお怖い、怖い。それなら移動しましょう。ここから少し歩くわよ」  
ボツビは演技でおびえてみせると、先頭に立って歩きだした。イエローマンはそれに何の反応も見せないが、素直に一応は後に従う。それに続くメルは、内心では困惑していた。

ボツビは自分勝手に作戦を立て、実行のためにメンバーを集め、率いるために当然のようにそれをふるまうのはいつものことだ。しかし、この黄色い男はいつもの彼女が選ぶ護衛役からは感じることにない異様さが際立っている。

汚れの一つもないビジネスマンの身なり、だがその眼光は鋭く、星条旗柄のバンダナの下にどんな表情が隠されているのかまったくわからない。

メルはボツビとは古くから知り合いだ。

機械をいじるのが好きな窃盗犯でしかなかったメルが、時に大量のキャップを手にしたのは彼女の仕事相手に選ばれたから。口では何も言わないが、どうやらメルは彼女にとって都合のいい仲間ということらしい。

まあ、それはメルにしても同じことではあるのだが――。

(こんなヤバイ奴を引き込むなんて、今度はどんな仕事を考えているんだ。ボツビ?)

こうして事が始まると、ボツビは非常に厄介な存在になる。

だが、そうすること。しなくてはならないことは理解できる。急造のチームでも一体感を生み出し、指示を正しく実行するトップダウンの関係を生み出さないと、ひどい結末が待っているものだ。

だからボツビは作戦中に本心を明かさないと、計画の説明も完全に

は口にしない。

ただ誘った時の仕事以上は頼まず、終わった先には必ず約束の報酬を用意してあるという安心感。それがあるとわかるから、ボツビは成功を手にしてきたし。彼女に選ばれた仲間は利益を手にする事ができた。

だが、このイエローマンなる男はどうだ？

まるで誰かの指示を受け、そのためだけにここにいると言い切ってみせた。キャップも、ボツビへの反感も、有利な立場を探ろうと無駄な駆け引きもするつもりもない。まるで関係ないという感じだ。

彼女はこの男に言うことを聞かせられるのか？ 本当に？

それでもメルにこの仕事を断るといふ決断はありえなかった。

そして彼女が言うことが本当なら、これから数日間を一緒に行動し。最終日はグッドネイバーで仕事だ。

あとは問題なく、何も起きなければいい——。

|||||

朝食の前に、マクレデイはエイダを連れて廃屋から出てくると。「周囲を頼む」と見回りを指示してから、鍋を囲んでいる老齢のグリーン夫妻のところへと近づいていく。

マクレデイの記憶ではツギハギしたロボットでしかなかったエイダだが。今の姿は普通のアサルトロンのそれになっていた。旅の中でパーツを手に入れたのだと説明は受けていた。おかしな話だが、個性がなくなってしまったと密かに残念に思っている。

「おや、またひとりかい？」

「連れは——体調がよくないらしくて。まだ横になっていたって。いいかな？」

「構わんよ。今はどうせ、あそこは空き部屋だからね」

この農園を200年にわたって受け継いできたグリーンの血は、彼らの代で終わる。

2人には今、子供がいないからだ。



でも希望は残されている。マクレデイたちと共にここに訪れたミニッツメンが、それをもたらすから――。

「そろそろだったよな？」

「ああ、そうだ。楽しみだよ」

「新たな入植者か。ここも騒がしくなるんだろうな」

「それも喜ぶべきことだが。私たちは新しいグリーン家の子供を迎えられる。そのことが嬉しいのさ」

「ミニッツメンと、さらにここで働く小作人達。確かにあんたらは笑いが止まらないだろうな」

「ハツハハツ、土をいじらない癖に皮肉はきついな。でも、否定はせんよ」

「はいはい、男たちは悪い顔をやめて。昨日の残りだけど、野菜はたっぷり入っているから食べて頂戴」

マクレデイの笑えない皮肉も、今の夫妻にはどこ吹く風だ。

実際、ここに住むなら大家だ店子だなどと口にする余裕はないだろう。そんなこと、マクレデイにだつてちゃんとわかつている。

この辺りは例の霧がおおう以前から連邦の自然の脅威で知られているエリアだ。

暴走するロボット集団、スーパーミュータント、レイダーに加え。デスクローをはじめとした危険な存在が平然と街道を歩き回っている。

この農園を出て行った夫婦のかつての友人達がその後どうなったのか。夫妻は誰一人として知らないというのは、つまりはそういうことなんだろう。

「子供は何人だったか？」

「5人だ。でも、うちに来てくれるのは2人だけ」

「こんな世の中だからな。せめて自分の名前だけでもと、子供ながらに捨てられない事情もあるだろうさ。別に私らは区別をつけるつもりはないよ。ここで暮らすなら、一蓮托生だ」

「そうだな――」

あの日、ミニッツメンはここを訪れるとこの話で夫妻と合意をまと

めた。

そして慌ただしくすぐに2つの家族と子供たちを迎えに戻って行ってしまうた。

ガービーは新たな協力者を求めて、ここに新しい入植者とミニッツメンを派遣するかわりに指示してもらうというこころらしい。

マクレデイたちはこの合意の証人つて体で寝泊まりとただ飯にありついており、せめてものおかえしに警備くらいを担当させてもらっている。

「お前さんの方はどうする？」

「——今日と明日はここにいるよ。ミニッツメンが来たとき、ここになにかあつちや俺達がなにをしていたと、連中に怒られかねない」  
「こつちは助かるが……いいのかい、それで？」

「ああ」

あせっていてもどうにもならないしな、あの町は——。

メッドフォード、あの滅びた街の中にアキラはいるに違いないと、ロボットたちは口をそろえて言った。

おかげで最初に聞かされたその時から、マクレデイに激しい葛藤が生まれている。

メッドフォード、まさかあの場所に。不安、怒り、そして希望、後悔。湧き上がる感情は複雑で、だからあえて何も考えないように努めている。

マクレデイを悩ませる2つの案件。

一つはガンナーだったが、もうひとつはあそこにある……いや、やめろ！今は何も考えるんじゃない！

そして皮肉にも冷静さをよそえるのも、この感情があればこそ。

Vault111から来た連中はいつだってそうだ。あいつもこいつも、どつちも俺を弄ぶように惑わしてくる。

本当に、本当に——あいつら、腹立たしい連中さ。

|| || || || || || || || || ||

キュリーは廃屋の中に据えられた真新しいベットの上でウトウトしていた。

ロボットの体を捨てて人造人間になると、ドクター・アマリとデイーコンはエイダと一緒にキュリーをレールロードのタイコンデロガへと有無を言わずに放り込んだ。

そして実際、そこにいかなければもつとひどいことになっただろうとキュリーは思い知らされ、愕然とさせられた。

最初の1週間は苦痛と苦悩に支配され、血と肉で構成される自分という存在に混乱し続ける。まさに終わりのない悪夢ばかり見せられたのだ。

無意識に行う呼吸。これは忘れてはいけないもの。

だがそれはただの始まりに過ぎなかった。

水と食欲の摂取、衛生的であること、排せつの欲求とそのためを気をつけること。

メモリー・デンで目覚めたことが新たな誕生であるとするなら。タイコンデロガでの1週間は、人が10年かけて学ぶことを、連続する失敗から学んでいくことだと考えるしかなかった。

かつての自分のようになにかに集中しようとすると、決まって彼女の身体が反応し。みじめで恥ずかしさを感じるだけの単純な失敗を繰り返す。

(まさか自分は普通の人造人間ですらいられないなんて)

積み重なる失敗、恥辱の数々はキュリーに精神的なダメージというものを知らず知らずに蓄積させていった。

期待していた集中力やひらめき、思考力は乱れる感情によって掻き回され。落ち着くということが出来ないばかりか、視野までもが狭まっていくのを感じ。

さらに混乱する。

問題はほかにもあった。

この肉体はそもそも意識を失い、長く眠り続けた人造人間のものだ。

そのせいでキュリー自身の体力はみれたものではない。それでも

タイコンデロガを出て、こうしてアキラ搜索の旅に出ることができたのは。誘拐される前に彼がレールロードから買ったというT-51パワーアーマーがあつたから。

エイダとマクレディに遅れることなくついてこれたおかげで、今ではパワーアーマーがなくとも動けるようにはなつたが。それでもまだまだなのだ。

ここからメッドフォードへも何度かアーマーを着て探りを入れたが、それだけでもう疲れ果てていた。

彼女は——キュリーはベットでまだ、眠り続けている。

夢の中では、彼女はアキラと一緒にだ。

壊れた世界の中で、ただひとつの一軒家。

周囲は瓦礫の山で他に何もないが、その家にだけは屋根にこれでもかとターレットが設置され。この家の住人に害をもたらそうと考える外敵が近づけば、八つ裂きにする準備はすでにされている。

そんな備えがあるにもかかわらず、アキラは窓辺に腰を下ろして本など読んでいる。

窓の外ではエイダが忙しく外を巡回して動き回っているが、キュリーは台所では料理をし。掃除用具を出してきては手早く綺麗にし、それも終わればアキラのそばに椅子などもってきて。新たな研究に、思考を巡らせたりする。

平和な時間。

それはきつと素敵な場所。

そんな風に思うから、きつとキュリーは聞いてしまうのだろう。

「アキラ、あなたはなんで私たちにやさしいのですか？」

「わたし、たち？」

「ロボット、それに人造人間。そういつた存在にです。あなたの態度はたぶん、普通ではありません。変なのです」

アキラはきつと笑うだろう。

あまり他人には好印象をあたえないであろう目つきでも、彼なりに優しいものをたたえてこちらをみかえすのだ。

「それを言うならキュリー。君の方が変わってる」

「そうですか？そんなことはないのです」

「いや、そうさ。そういうところが、可愛いね」

感情が奇妙に踊りだす。だが、浮かれてはいけない。これは彼の“手”だ、だまされてはいけない。

でも彼はわかってくれる。

そういえば、ちゃんとこちらの疑問に答えてくれるはずだ。

「正直、よくわからないな。なぜそんなことを？」

「変だからです」

「それじゃ、話は終わりだよ」

「えっと——人はそうは思わない、ということですよ。ロボットは命令に従うだけです。命令を出した側の事情は関係ありません、ただそれをするだけです。それは本質的に近い人造人間にも言えます」

「そうだね」

「人はそれを嫌悪します。つまり、だから——変だということです」

アキラは同意する。「そうかもね」と、だがすぐそのあとに「でも」と続く。

そこがキュリーの知りたい部分だ。

「話が変わるけど、人にも面白い言葉があるよね。『性善説』と『性悪説』だ」

「中国の思想家たちが提唱したものですよね？」

「人はこれを正反対のものとして理解する。『人間は善なるもの、成長と共に悪を知る』と『人間は悪なるもの、成長と共に善を知る』というものだ」

「そうですね。どちらも正反対です」

「いや、僕はそうは思わないよ。これは同じことを言っている」「えっ？」

「どちらにも同じ言葉が使われているじゃないか。『成長して知る』、善も悪も世界に存在する。そして結局は両方に触れずにはいられないものだ、彼らはちゃんとわかっているのさ」

「随分とへそ曲がりな解釈なのです」

「でも、間違っているとは言わないだろ？善人でいたいならそれらしく、恐れられたいなら悪人のように振る舞うのが一番だ。結局、人は完全な存在にそこがれてもそれに到達できない生物なのかもね」  
「今度は皮肉ですか？」

アキラは苦笑いする。

そんな彼の笑いはなんだか可愛いと思えてくる。

「生意気なキュリー。どうして君は望んだ答えを耳にしたのに、そうやって茶化すのかな」

「その両者がどうだというのです？」

「――WWⅡの後、世界は核エネルギーによって革命がおこった。

国家ではない、各家庭の個人個人に与えられるのは膨大なエネルギーを発生させる動力源だ。制御は管理へ、使用方法は思いつく限り無限大に。

人類は消費社会のさらに上位へとそれで足を進めることができた」  
「はい、私。キュリーも元は高性能のチップが搭載された。ただのロボットでした」

「そうだ、ロボット。人工知能がそれで発達する。科学者は気が付いたさ、これは新しいエデンの地面に転がり落ちた実を拾う行為だつて」

彼の言葉は、なんと明確で羽のように身軽なんだろうか。

「君の言葉で思い出すことがある。レイ・カーツワイル、知っているかい？」

「技術的特異点（technological singularity）について数々の持論をもっていた人物でしたっけ？」

「ああ、そうだね。」

同時にテクノロジー超楽観主義者だと非難も受けた。つまり、君の見るところの僕も彼の信条によりそっている。頭が空っぽの超楽観主義者というわけだ」

「私、非難はしていません」

アキラはキュリーの言葉を無視した。

憎らしい態度、こちらをいじめているのだろうか。

「レイ・カーツワイルには多くのエピソードがあるが。ヒトゲノム解析プロジェクトでの言葉は、彼の非凡な才能をはつきりと示したと思う。」

1%を解析するのに最初、プロジェクトチームは7年をかけた。人々は半ば呆れて口にした。「これでは100%まで700年が必要だ」とね。

だが、レイ・カーツワイルには別の見解があった。彼は『1%終わったのなら、もうほとんど終わりに近づいている』と逆にプロジェクトに祝福を送ったんだ。

最終的には彼は正しかった、解析完了が報告されたのはそれから7年後のことだった」

「驚くべきことです。素晴らしいひらめきです」

「いや、脱線してしまっただね。話を戻そう——膨大なエネルギーを消費するためにロボットを実用化する。」

だが、ロボットは制御するためにできるだけ高度に柔軟性を持つAI（人工知能）を搭載する必要がある。」

だが、AIには恐れるべき正しい危険が潜んでいることを。同じ時代の科学者たちはそろって警鐘を鳴らしていた」

「ASII（人口超知能）のことですか？」

「そうだ。AIは通常、AGI（人口汎用機能）のことを当初から示していた。」

だがこれが問題だった。

凡用性——つまり人間の知能を再現するこの方向は、未来にASII……複数の優れた人工知能によって人工超知能の誕生は回避できないという結論があった。

人間と違い、その邪悪さを理解できる。新たな人ではない存在の誕生は。これまで人が起こしてきたただの革命という言葉だけでは足りない。むしろそれは人間の終焉、ただの絶望だと科学者は考えた」

「人間を支配するロボットが誕生する、そういうことでしたよね？」

「ホモ・サピエンス（賢い人間）などと悦に入っていた傲慢でムカつく奴らが考えそうな、くだらない妄想ゲームの結果のひとつというだけ」

さ。

それに“この世界”は、ロボットのA G Iをかなりの部分で再現に至ったが。A S Iが生まれる前に滅んでしまった。

皮肉な話だよ。高性能ロボットによって人類が減ぶと予見した科学者だが、結局A S IどころかA G Iが完成する前に、世界は人の手によって破壊されてしまったんだ。やはり人は完全性を手にできない宿命にあるのかもしれないね」

またなにか話が脱線しかけているような気がした。

「私のようなM r. ハンディタイプでも、やはりA G Iの概念には到達していないと考えておられるのですか？」

「ないね」

「冷たいのです。そうではないと、なぜ言い切るのですか？」

「高品質な回路と、思考性のあるプログラムがあっても。君自身が認めたくないか、ひらめきがないのだったね。君、忘れてないか？」

この世界は人が持つ巨大なエネルギーを制御する段階で、終焉を迎えたし。人間達はキュリー、君たちロボットに完全なるA G Iを搭載することすら出来なかった」

「なるほど。それも考え方ですね」

嬉しそうにアキラは笑った。

「さて……ここで話はさらに俗っぽい話へと移る。僕が優しい理由？それがカーツワイル氏の信望者であるってだけでは、たぶん君は納得しないのだろうね」

「はい、当然です」

「ならば、僕は僕の言葉を使わないといけない――」。

ロボットという存在がまだ考えられなかった時代が人にもあった。

その時代では、A G Iを備えたものが必要だと考えたと彼らはどうしたと思う？これはクイズじゃないから答えてしまおうが、彼らは単純に女を連れてきて子供を作ったんだ。

僕にとって、すべてはそこが出発点だった」

「？」

「老いて死ぬ、そのシステムにとらわれている以上。人は自分の子供



に多くを求めるものだ。

だがそうする必要もないことも学ぶようになると、今度は奴隷という制度を生み出した。汎用性よりも特化したものを、ナロー化させたものが都合がいい。

AIでも同じことがされる可能性があった。ナローAI、特定の状況と環境下にだけ正常に判断できる思考。

人は割とそういう——キモイ発想も平然と使いこなす恥知らずな存在でもあった」

「はあ、それがあなたとどう関係が？」

「——それもそうだね。うーん、ぼやけてしまったな。やり直しをさせてくれ。」

えーと、そうだ。これがいい」

額に片手を置き、悩む彼はかわいらしく思える。そしてすぐに別のひらめきにたどり着く。彼はどんな時でも、本当にそれをあっさりとやってみせてしまう。

「犬や猫は人に近い存在だと言われている。」

だけど彼らは本質的には獣だ。共感能力が人によりそえるくらいに高いというだけ。

でもそんな彼らでも、人はずっとそばに近寄らせて暮らしてきた。世界が壊れても、まだそれは続いている。

レオさんにはカールが。商人は訓練した犬を商品にして売り歩いていた」

「はい」

「実現しなかったASIが存在したとしても、きっと人間はわりとうまいことそれに寄り添って生き延びることが出来たのかもしれないと考えるんだよ、僕は。」

そう、だからきつと僕もまた超楽観主義で、そんな未来が来るのを楽しんでいいのかもしれない」

「やはりよくわかりません。イメージも、実感もわからないのでアキラはにやりと笑う。」

悪い顔だ、本人もそれを認めていた。

「僕の言葉から刺激される想像力は個人の力によるところだから僕にできることはなにもないが。実感については、話は別かも」

彼は本を閉じ、窓辺から立ち上がる。ようやくそうしてくれたのだ。

静かな息、光があふれるここが本当にあればいいのに——。椅子に座ったままに自分に彼が近づくのを見つめながら、胸の高鳴りを感じ始める。

その指がこちらにのびてくると信じる。その顔がこちらに近づいてくると信じる。その唇が……。

キュリーはまだ眠っている。

そして夢はまだまだ続いていく。

彼女はロボットの体を捨て、人造人間となったのは人の持つひらめきをただ手にしたかったから。

だが、彼女は今。思いもよらぬ贈り物を胸の中で弄んでいる——その名は『情欲』。

|||||

準備は整った。

ボツビはかつてはレイダーが塙として使っていた屋敷を出ると、楽しそうに続くメルに話しかける。

「メル、今回の仕事に使う。あなたの小さなお友達を紹介して頂戴」

「わかった、ソーニャだ。この小さなロボットには彼女だけの唯一の能力が備わっている。音波パルスを発生させる無線装置を搭載しているんだ」

「……」

「これをつかって、ダイヤモンドシティの市長の隠し金庫まで。10倍の早さで掘っていくの」

「ダイナマイトが必要、なんて聞かされた時は腰を抜かしかけたけど。それは必要ない。このソーニャはきつとやってくれるはずさ」

メルという言葉にイエローマンが反応する。

「はず」とは、どういう意味だ？」

「ああ、それは——」

「心配しすぎよ。大丈夫」

「いや、正直に言うとなんか起きるのか正確にはわからないんだ。でも、必要なものは確かに用意したから、そうだな。準備は完了している」  
最初は無口なイエローマンに苦手意識を持っていたメルであったが、面白いことに一緒に行動するところの人物はいがいに付き合いくくないと知ることができて、今ではすっかり警戒をといていた。

だが一方で、ボツビはなかなか思い通りに従うそぶりを見せないこの男に対し。少しいら立ってきている様子を見せている。

「ではグッドネイバーへ？」

「ええ、そうよ。当然じゃない」

「あそこにあるボツビの家には地下室がある。そこから出発すれば問題ない」

これ以上の詳しい情報はいまだにボツビが握ったままだった。

それでも奇妙なチームはグッドネイバーへと出発する——。

|||||

アキラの誘拐、自分は元ロボットだと言い張る人造人間のオネーちゃん、悩ましいメッドフォードに、幸せを掴めそうなグリーン家の老夫婦。これだけ揃ってりゃ、ただの殺し屋には多すぎる出来事だと思っていた。

どうやらそこに新しい驚き加わってきたようだ——。

旅と捜索の疲れで寝込んでいたキュリーのために休みをいれていた俺たちのところに、予告通りにミニッツメンが人々を連れて現れた。問題はその中に、予告されなかった人物がひとり混ざっていたということだ。

そいつは顔色の悪い男だった。

右腕を包帯で厚く贅沢にグルグル巻きにしている、どうやら痛むら

しくずっと胸に抱くようにしている。

服装を見る限りは、レイダーとは思わなかったが。町で暮らす一般人というには、少し自己主張の激しい服装をしている。

皮のジャンパー、藍色のジーンズ、そういったものだ。

顔には見覚えがあつたが、それでもすぐに誰かはわからなかった。だが、名乗られるとさすがに俺でもわかることがある。あのグッドネイバーで傭兵や殺し屋どもの情報誌をだしている、あれの記者だった。

アントニー・コロンボ、またの名をソニー。

最初はまさかの取材申し込みかと、俺も勘違いしていた。

年末は騒ぎのせいで落ち着いて殺し屋界隈の情報に目を光らせたこともなかったし、あいにくとクソ友人達に振り回されていて、そんな暇もなかった。

でもそれで自分が注目されてもおかしいとは思わない、それくらいの自信はあるにはあつたんだ。

だが現実是非情だ。

あいつは取材じゃない、情報を提供したいと言い出した。

それもこれからどうやってあのメッドフォードの面倒な連中を効率よく引つ張り出せないか、なんて悪だくみをしている最中にとんでもない情報をもつてきてくれた。

俺たちのアキラはすでに連邦を飛び回っている――。

寒いのか、おびえているのか知らないが。穴だらけの家屋の中の片隅で震えながらそんな寝言を口にした。

俺は鼻で笑つたよ、最初はね。

だがソニーはそれで話をやめようとはしなかった。

「あんたの言いたいことはわかるよ。でもな、これはマジな話だ」

「へー、そうかい。あんな厄介なやつを誘拐するんだから、インステイチュートだと言うんだろ？だから俺達がここで探しても無駄だって」

「ああ、インステイチュート？何の話だ!？」

「だから、連邦の連中が唱えている呪文だろ？『彼が消えたのはインス

「テイチュートのせいだ』『彼女はインステイチュートによって連れ去られた』。相手がただのレイダーであつても、いつもそれで——」

「違う、違う。そういう話じゃない。これは——」

「ああ、情報を提供してくれるんだよな。感謝するぜ、それでも俺たちはここからメッドフォードをどう攻略するか考えてる。わかるか？ 大変なんだぞ？」

ソニーは恐怖に歪んでいた表情に、さらに悲壮なものがあらわれる。

俺は構わず、相手の調子に合わせて適当に相槌を打つてやる。だがその最中に、いきなりソニーは抱えていた自分の腕の包帯をすごい速さで解きはじめた。

「こいつを、これを見ろ！」

ソニーは包帯の下に現れた彼の腕をいきなりこちらに突き付けてきた。

「これを見てどう思う!? わかるか？」

「わかるかつて、お前——」

手首から先の肌が、不気味に紫色になっているのは一目瞭然。

だが気持ち悪いそれを、努力してもっと観察してみると。さらにそこには無数の手術痕らしき“形跡”がいくつも走っているようだ。

「これが俺の手だ、俺の——畜生、こんなにしやがって。あの女」

「あ、ああ。それ、誰にやられたんだ？」

「それだ！ それだよ、そいつを聞いてくれるのを待っていた。あいつだ、あのクソツタレな市長の護衛」

「——ファールンハイト!?!」

「あのイカレタ女が、この俺を切り刻んでやろうって」

どうやら切り刻まれたのは片腕の手首から先、だけだったようだ。それが運がいいことだったのかどうかはわからない。一応、かけたものはないように見える……数だけで言えば、そうだ。

「この指を見てくれよ。わかるか？ みんな“同じ長さ”になっちまった」

「ああ、そのようだ」

「あのクソツタレが、わざわざ戻した時のためにつて。＼短く削り出し＼ただよ、俺の目の前で！あの時の気分、お前にわかるか!？」

「いや、全然」

グッドネイバーの市長は悪党としても有名な人だ。その身近にいる人物が、どれほど残酷なことができるのか想像するのにそれほど難しいということはない。それが例えば生物学的に女であったとしても。

それに話題的にも、＼こうされた＼理由がこのソニーの側にまったくないと考えられない。ハンコックは悪党だが、血に飢えたバケモノじゃないし、自分の近くにそういうのを置いているとも思えない。だから俺は、はつきりとこいつとは距離を置いて話を続けることにする。

「わかった、整理させてくれ……」

あんたはトラブルを引いた。それについては同情するが、俺には関係のない話つてのもわかるだろ？

ここでの問題つてのは、ひとつ。

どうやらあんたは俺達がメッドフォードを探索する必要がない。もしくはここから立ち去るように仕向けているってことだ。これは、はつきりしている」

「……」

「いいか？このマクレディさんは狙撃手だ。

狙った獲物は逃さないし、仕事は完璧。だからお前の悲劇を聞いたからつて、それだけで今のターゲットから目を離すなんてことはしない。

情報提供というなら、全部吐き出せよ。

それで俺が、ひどい目にあつたばかりのあんたの言葉に俺が乗れるかどうか。勝負してみろ。

それも出来ないなら、黙つてここから出ていきな。お前が間抜けで状況を理解できないとしても、まだ面白くもない話をだらだらとやりたいなら。

この俺が、あんたをここから引きずり出して。この近くにあるフェラルどもの谷底に投げすててやるよ」

すごんでいるつもりはなかった。

だが冗談ではないと、目で伝えてやった。グッドネイバー、ハンコック、フアーレンハイト、これらの名前は明らかにアキラに深く関係のある言葉だ。それをこれ見よがしに聞かせたこいつには、確かに何か秘密がある。なにかの意味が存在している。

それがわからないのに簡単に信用するなどと考えられては、ナメるなどしか言えない。

「この連邦にあるカルト集団については？」

「知っているか、という意味か。別に、チャイルド・オブ・アトムとか？ キヤピタルじゃ、どこにでもいたし。そうそう、あそこじゃ他にも木を挿んでいる変な連中がいるって——」

「ああ、それだ。そういう連中の、話だ」

なるほど、覚悟しておけよって意味か。

「この連邦にもあまり知られていない、そういうカルトな教団がいくつもある」

「そうだろうな。別に驚く話でもないが」

「確かにな……だがな、その中に明らかにおかしなのがいる」

「そういう連中はそもそも頭が——」

「そういうのじゃねーよ！ 名前はわからない、それに人はいるのに。そこは誰も集団に加えないが、出てくる奴もいない。内情がわからないが、それにしても分不相応に力もテクノロジーも持っている」

「なんだそれ？」

「昔はインステイチュートと間違われてたとも聞くし。噂じゃ幽霊だとか、影だとか言われていた。」

人の出入りが最低限で、名乗ることも存在も知られたがらない。いくつかの組織の一部とつながっているともいわれているが、それが本当かもわからない」

「ただの噂じゃなあ」

ソニーは慌てて首をふる。これは本当のことだ、信じてもらわないと困る。必死にそう繰り返す。

「それで？」

「そいつらがここ数年、いきなり表に顔を出してきたんだ。あのグッドネイバーでも、そいつらの噂が明らかにめだつてふえたつてこともある。俺は偶然だが、その尻尾を目にすることが出来た。見たんだよ、実際に取引の現場を」

「へエ」

「それが」鼻なしのボツビ」。ボツビは知っているよな？」

「——グールだったよな？確か、最近ハンコックに叩きのめされたとか」

「そう、それだ。その原因もボツビがそのカルトと繋がっていたせいでおこったことだ。市長はボツビの振る舞いが気に入らなくて、動いた」

「ふむ」

まんざら嘘、ともいえなくなってきたか？

だがそれでも足りない。俺は核心をついてやることにする。「それが俺達がメッドフォードから離れることと、どんな関係がある？」そう聞くと、ソニーは明らかに狼狽した。

そして——。

「俺は正体を暴こうと、ボツビに近づいていた。その関係で、あの年末はあいつからひとつ仕事を引き受けていた」

「そうか」

「そいつらはずっと、ある男を探しているのだとボツビは考えていた。そこで俺に知られないように張り付いて、情報を送れって」

「??？」

「……まだわからないのか？決まっているだろ、あんたが探している男さ。あの元V a u l t居住者の片割れ、まだ若い黒髪の、東洋人」

「っ!？」

正気に返る前に、体が勝手に動いていた。

あいつにももらったマチェットサラマンダーを気が付かないうちに引き抜くと、あいつの哀れにも揃えられてしまった指のあるほうの手の付け根にその刃を押し当てる。

「てめえー」



「やめろ！暴力はやめてくれ！」

「あいつの誘拐は、お前が仕組んだことだったってのか!？」

「そうだ！いや、違う！そうじゃない。知らせたんだよ、あの辺りを歩いてるって、情報を渡したただけだ」

「ふざけるな！そんなこと、誰が信じる！」

「あんなことになるよ、知らなかったんだ！」

「そうかい。それで全部か？言い残すことは全部言え、今のうちに！」  
「なら聞けって！そいつはもう外に出ている、歩き回っているんだ。どこにいるのかも知っている」

「どこだよ!？」

「グッドネイバー！ボツビと一緒にいるっ」

なに？どういふことだ？

「ボツビは計画を立てたんだ。次の仕事、あなたのお友達も参加しているはずだ」

「仕事？そのグールは、ボツビはなにをしようとしているんだ」

聞くものを聞いたなら、そいつにはもう用はなかった。切り刻むものなしにしてやったが、とりあえず俺の細腕でも数発だけパンチをくれてやった。頭を抱えて泣いていたような気がするが、もうどうでもいい。

だがそいつの言葉が正しいなら、メッドフォードなんかには熱い視線をここから送り続けることに意味はなくなった。

ボツビとかいうグールの次の計画。

ソニーによるとそれは、あのハンコック市長の秘密の金庫をいただくこと。

「まったく信じられないぞ、クソツタレ。あんたはイカレているのは知っているが、よりにもよってあの——ハンコックの金庫だって？本当に狂っちゃまったのかよ、ボス」

間に合うかどうかはわからない。

だが、本当にそれをやってしまったら——アキラは、ボスは間違いない。死ねしかないだろう。

あのハンコックがそれを許すとは思えない。

## だまし絵

「いけません」コズワースは慌てて声を上げたが、そんなことでこのパイパー・ライトさんはブレーキなんて決して踏む間違いは犯さない。

何者かの襲撃を受けたらしく、モクモクと黒い煙が上がっている高台の頂上にむかって走り続ける。

争う音はもうしなかつたけれども、いやな感じはそこにまだ残っていたのでパイパーはそれを確かめようと考えた。

いつもながらの無謀な行動というやつだ、わかっている。

坂を一気に駆け上ると、そこで暢気になっている2つの人影に向けて銃を向けた――。

一方、探偵のニック・バレンタインはヘーゲン砦の中を再び最初からたどり直していた。

ついてきているジミーは、不安そうに何度もミニッツメンの証でもある帽子をかぶりなおすしぐさを見せている。彼がそんなにする気持ちはわからないではない。安全と分かってても、なおここにいることが不安なのだろう。

何せ床には、破壊されたインステイチュートの人造人間達がこれまで見たことのない数で、動かなくなっているのだから――。

「あの、パイパーさんとロボット。戻ってきませんね」

「ああ。彼女が怪しいと飛び出していったのなら、彼女自身が納得するまではここに戻ってはこないだろう。

こっちはこっちで、のんびりと捜査をやらせてもらおうじゃないか」

「いや、女性ひとりでも大丈夫でしょうか？」

「君は紳士なんだな。彼女に言ってやるといい、喜ぶだろう」

「はあ」

自分がいかにおかしな返答を口に行っているのか、ニックは自覚しても恍けていた。

パイパーはどうせあんな性格だ。ここで起きたであろう激闘の後を何度も検証し、決死の覚悟でここを訪れた彼に何が起こったのかを再現する作業に、彼女は心のどこかで恐れているのかもしれない。「心配は要らないさ。彼女はあれでも見た目と違い、修羅場はこなしている女性だ。馬鹿はしない」

「ええ、そうですよね」

(ここで口やかましくされなくていい、とは言えんよな)

一番重要な部分は、やはり口には出さないでいる。

例えばダイヤモンドシテイを出る前から、自分はこちらを目指すべきではないかと探偵はずっと悩んでいたのではなかったか？

別の仕事で情報を求めたとき、なにげに連邦の西部での騒ぎには特別神経質になっていたのは、やっぱりちゃんとした理由があったのだ。

彼の足跡、その危険な追跡劇がどんな終わりを迎えたのか。ハッピーエンドがあったのか、そうでなかったか？

それを自分はどうしても知りたいと思っただけはなかったか？

探偵の目は、あの時のレオたちとは違い。ケロググが待ち構えているであろう一か所をあつさりで見つけ出していた。

ヘーゲン砦、なんでそれがわかるかって？

まあ、探偵の感ってやつだろうとしか答えられない質問だな。

ここに辿りついてみると、まず全員は言葉を失ってしまう。

ケロググがなにかの理由でここにいたのは想像がついたが、それがこんなとんでもない数の人造人間を率いていたとは、考えもしなかった。

パイパーの様子がおかしくなったのはその時からだ。まあ、彼女にしたら知りたくなかった現実だろう。

「だが希望はある、多分な」

探偵はまだ諦めてはいない。

なぜならばこの床には破壊された人造人間達があっても、そこに人間の——彼の遺体らしきものはどこにもなかったからだ。

そして忘れてはいけない、犬のことだ。どうやら忠実なる従者は復

警鬼となった男と共に、この戦場を戦い抜いた痕跡を確認することが出来た。

(そうになると、犬は戦闘の後で。レオとはここの外で、離ればなれになったと考えるべきか)

フム、と唸ると探偵は砦の最奥の部屋の中でようやく足を止める。何度も同じ道をそれまで行ったり来たりしていたのが突然終わり、ジミーは何事かと疑問の表情で探偵にふりむいた。

「俺達はここの搜索に5回、そう5度やり直してみたよな」

「はい、ほとんど丸一日。何度も」

「そうだ、大変だった。だがそこまでやっても、なぜかすつきりと問題が解決していかないんだ。これが困った」

「……」

「レオの、君達ミニッツメンの將軍である彼の足跡からは、どうしてもわからないことがある」

探偵の推理がさく裂しようとしていた。

レオの侵入方法はすぐにわかった。

砦の外に取り付けられていたターレットをまず破壊すると、次に彼は何をした？

いきなり砦の中に飛び込むような真似はしなかったはずだ。

建物の出口の場所を歩き回って丹念に確認してから、地下駐車場から建物の中へと侵入した。当然、そこで人造人間達との交戦状態に入る。

そして復讐は果たされる、しかしハッピーエンドはなかった。

そして――。

「違うな、その前に……何かが起こったのだ」

「え？」

「それが何なのかはわからない。それが何かはわからないが、とにかくそれはあったとしか思えない。」

入口のそばの部屋の中では爆発の破壊、それにズタズタにされた人間の装備と。あきらかに機械工学ではありえない生物の血がそこかしこに飛び散っていた。

そこに死体があれば、致命傷だと断じてもいいくらいの量の出血だ。

だが男とそれに付き従う従者の足は止まらなかつた——まるでラジオドラマのようなドラマチックな展開だが。地獄の底から戻ってきて、再び復讐のために歩き出した。

そして実際にそうなった。

なぜならば、あそこ以降。

彼らが戦いに傷ついて、血を流したという痕跡はこの部屋にたどりつくまでにほとんど残っていない。これが問題だ」

「えっ、えっ?」

「そうだ、なにもかもがおかしいんだ。

この物語はどうもおかしい。死にかけてた男が、最後の力を振り絞って戦ったというなら、それは納得できる。

だが、違うな。

レオは“死にかけてから”突然元気よく暴れ始め。自分の前に立ちふさがるすべてをなぎ倒してしまった。

歩き方がそれを証明している。警戒していた最初がまるで間違っていたというように力強いものとなっている。そしてかなりの早さですべてを終わらせている」

「それって、つまり?」

探偵はコートのポケットから煙草を取り出した。

一本を口にくわえると、わざわざマッチで火をつける。煙を吸い、煙を吐きだす——バイオ工学で作られた人造人間ではないこと悲しきだ。

ロボットの身体では、この行為を完璧にやり遂げるのにコツがいる。

「つまり真実はなおも闇の中というわけさ。それでも彼の無事は確認できた。

ミニッツメンの將軍は今もこの連邦で元気に活躍している。ただし、それは誰にも知られないように。内緒で行動しているってことだ。

プレストン・ガービーもこれには納得してもらえらるだろう」  
「何があつたのかはわからない。  
だが、レオは間違いなく生きている。それがわかつただけでも、だ  
いぶマシなことになつたはずだ。」

|||||

プリドウエンに三度衝撃が走つた。

その報告が信じられなくて、迎えに現れた艦長のケルズを遠巻きに  
して。兵士達はベルチバードの到着を待った。

「……よく、帰還してくれた」

「あ、ああ——どうも。あ、ありがとうございます」

「うん、パラディン・ブランデイス。」

まずは医師のチェックを受けてもらう。その後は……とにかく、ま  
ずは疲れを癒すことだけ考えたらいい」

「は、はい。り、了解で、す。」

「アド・ヴィクトリアム。パラディン、君を再び迎えることが出来て大  
変にうれしく思っている」

なんてことだ。

到着したベルチバードから降りてきた、やせ細つた無残な老人の姿  
には絶句した。

あんな姿を見ることになろうとは。

かつての自信と経験で明快な人柄であつた古参の兵士の面影は  
まったく消え去つてしまつている。あれほどの男が、今では新兵のよ  
うに頼りない敬礼と怯えた目で周囲を落ち着きなく見ていた。

彼はここにただで、すでにパニツクをおこしかけていたのだ—  
。

少年兵——いや、従者のひとりに付き添われて立ち去る彼の背中を  
見てどう思った？

この連邦は優れた兵士を数年をかけてあそこまで徹底的に弱らせ、  
破壊してしまつたのだ。なんて恐ろしい場所、恐るべき敵であるか！

思わず艦長は青い空を見まわし、それからうつむくと誰にも聞こえない小さな声でもう一度だけ「なんてことだ」と声に出した。

エルダーが兵士に「ここまでプリドウエンが無傷で進軍できたことは大勝利」と口にしたことが、はからずも真実であったのかもしれないのだと、いまさらにして思い知らされた。この連邦は決してたやすいものではない。

一呼吸を置いてから、姿勢を正すとそれですべて終わらせる。

死んだと思っていた仲間の帰還、それは確かに喜ばしいことではあるが。そうとはつきり言いきれないあたりが、この組織の難しい話でもあるのだ。

すぐに動揺は兵士たちの間を走り、なにか事件も起こるかもしれない。それが大きな騒ぎにしないよう、今からしっかりと目を光らせておかなくては――。

プリドウエンの食堂では、パラディン・レーンが部下と離れて将官用のテーブルでひとり、食事の最中であった。

下の空港のフェラルどもを一刻も早く駆除しなくてはならない――。

ほとんど強迫観念にも近いこの考えで、パラディンとナイトを中心にフル稼働で戦闘と調査が実行され。

それに付き合わされたスクライブ達とは我慢比べに突入。現場はすでに殺伐とした空気と言葉が飛び交い、どちらが先に爆発するのかを。フェラルに作業を邪魔されながらも続けている。

そうした外でため込んできた緊張と疲労はあそこから船内へと持ち込まれ、ここの食堂と寝床にも不満の空気をはつきりと漂わせていた。

「おや、まあ。パラディン、その不満そうな顔は久しぶりに見たね」

「――プロクター・イングラム、あんたもこんな時間に食事？」

「休憩だよ。8分間だけね」

「この皿のなかのものをやつつけたら。こっちは12時間の睡眠だよ、まるで天国だ。悪いね」

「別に、それにそつちがいいとばかりは言えないようだし」

レーンの目の周りに浮かんでいるクマを見ないふりをして、イングラムはむかいの席に座った。

整備班も仕事の山を前に、似たような状況なのだろうが。だからといって慰めあうだの、騒ぐだのという元気はない。

「下ではフェラル共の泉を夢中になって掘り起こしているらしいね？」

「スクライプの連中も気の毒よ。こつちにつきあつて、調査を何度も何度もやり直しさせられている」

「また数字を間違えていたんだってね」

どうでもいいことだ、レーンはあえてこの言葉は口にしなかった。

地下鉄網を徘徊しているフェラルが尽きることはないらしい。戦闘は常に断続的におこなわれ、攻撃はつねに激しいものだった。そんな中で調査に集中しろと、言われて涙目になる彼らが、むしろ気の毒でならない。

そのうちこつちもおかしくなつてきて。

疲労の中でバカなことを考えたパラディンが、殺したフェラルの残骸をかき集めてそこを腐肉の壁を築き上げてしまった時が、一番ヤバかった。

その結果？

悲劇が喜劇と惨劇が同時におこったといえればわかつてもらえるだろうか？

とんでもないことになった、ふさがれた通路が崩れ落ち、その肉片の向こうから新しい肉片の原因が這いずり、かき分けてこちらに殺到してくる——冗談じゃなかった。

「なんとかかなりそうなの？ 正直、ここから見下ろす空港内にある物資に、こつちはずつとお預け食らっているのよ」

「——話は決まっている。でもそうじゃない、つてハナシ」

「なにソレ？」

皿の中の物体をつついていたフォークを置いた。

「本当はあそこを吹っ飛ばしてしまいたい。でも、手続きやら説明



が必要で。それでスクライブ達に無理をやらせているってワケ」

「それじゃ。会議のために、縄張り争いであんな消耗戦じみたことをやってるの?」

「エルダーは落ち着いているのが救いかな」

彼を見習って落ち着けば、時間が少しくらいかかっても別にいいのだ。リーダーはすでに心を定めていて、兵士たちはそれにちゃんと従っているのだから。

なのに士官だけが浮ついたように戦いに焦りを持ち込んでくる。

「それより、ダンスの話は知ってる?」

「ああ——敗走中の部隊のひとつを欠員を出すことなく回収したってヤツ?」

「情報が古いよ。最新はもっと驚くはず」

「なに?」

「アルテミスの最後の生き残り。それを回収したんだよ、あの新人と一緒にね」

一瞬、疲れたレーンの脳みそは「アルテミスってなんだっけ?」と思ってしまう。

だがそれが何か、思い出すと。さすがに両目を大きく見開いて、思わずイングラムを見直してしまった。

「誰?生き残りがいたって、本当!」

「ああ、そうさ。パラディン・ブランデイスだって。今、医務室で検査を受けているらしいよ」

「ブランデイスが——」

驚いた、とにかく驚いた。

だが、それはそれでマズイことにもなりそうだ。

「あれ?なにによ?」

「ん?」

「顔が曇った。なにかあるの?」

「いや、別に——」

「トボケるなよ。キャプテン・ケルズもエルダー・マクソンも表面上は良かったと喜んでるようだけど。」

確かにこれはこれで色々と難しいことになるかもしれないね。あんたも、ダンスとあの新人のナイトとは付き合い方をちゃんと考えておいたほうがいいかも……なんてね」

「——時間、過ぎてるんじゃないの？」

そうやってイングラムを追い払うと、改めてレーンは考え込んだ。

確かにブランデイスの帰還はいいことばかりじゃない。ダンスや、あのレオとかいうナイトの意見は今後の組織にとっては無視できないものとなっていく可能性が出てきてしまった。

(あんた、どこまで運がないっていうの。ダンス……)

せめて綱紀肅正の名の下で、味方の手で殺されないよう。

今はのんきに連邦を新人ナイトと共に飛び回っているらしい同僚に、これからの無事を祈ってやらなくてはいけない気がする。

|||||

見覚えのない機械がそこにあった。

装置の中には、グロテスクな人の脳が液体の中を漂い。そこには目がひとつだけくっつけられていた。

私とダンスがいぶかしげにそれに近づくと、驚いたことに向こうからこちらに話しかけてきた。

「パワーアーマー？お前達はラスト・デビルには見えない。ここで何をしている？」

「……お前の見るからに邪悪そうな脳味噌を、これから乱暴に引きずり出そうとしているところだ」

ダンスと顔を見合わせると、私は過剰な表現を用いてこれからの予定を口にした。

パラディン・ブランデイスの回収を終え、彼が暮らしていたバンカーに部隊が派遣されるのを待つと。

やってきた部隊はエルダー・マクソンからの新たな指令を持ってきた。

「どうやら残りの部隊の壊滅が確認されたようだ」

「そうか、残念だ」

「ああ——だが、どうやらレイダーがそれに関わっていた証拠がでたようだ。ハイテク・レイダーらしい」

「——それはラスト・デビルのことか？」

知っている名前が自然と口にした。

「たぶんそうだろう。そいつらが部隊から武器を奪った可能性がある。それを回収してこい、だそうだ」

「レイダーのねぐらを2人で襲撃しろというのか」

「なに、そうはいつでもレイダーが相手だ。奴らに襲われて引つ掻き回されるのは腹が立つが、こっちからむこうを引つ掻き回すなら。」

我々だけでも不可能ではないのではないか？」

妙に明るい声で簡単なことのようにダンスは言うが。

これはそういう話ではない。

（エルダー・マクソンはこちらを疎んじている？それとも、俺のことを試しているつもりなのか？）

とにかくそんなこともあって、兵士がバンカーの物資を残らず運び出すのを確認すると、ベルチバードで2人新たな任務にそのまま出発したのであった。

今度の敵はハイテク・レイダー。

だがその本質はロボットを使っているというだけで、レイダーという連中の戦い方までが変わっているなんてことは絶対じゃない。

相手にロボットをけしかけ、自分たちは安全な後方からチマチマとちよつかいを出す。これが彼らの戦闘における約束事だ。

私もダンスももう慣れたもので、お互いをフォローしあいながら一気に入口から突入すると。泡を食った連中は、あっさりとなぎ倒してしまった。

「ここまでは順調だな」

「あんたはいつもそれだな、ダンス。やつらのひとりでも生かしてきたかった。ほかに何人いるのか、聞き出せない」

「物事のポジティブな面を見る、これはお前から学んだことなんだが——」

お互いまだまだ余裕がある。

結局は黒煙を噴き上げる衛星アレイの中枢に向け、2人は並んで中に入っていくことになったのであった。

「では、私は少し話をしよう」

「——変なロボットだな。それなら、早くしてくれ。こっちは今、戦闘中なのでね」

アキラがいればきつとこいつに大喜びしたであろうが、私にはそれがわずらわしく感じられてならない。

|| || || || || || || || || || ||

ハングマンズ・アリーでは、この支部長を任されていたマクナマスが半狂乱になっているところであった。

「あの野郎……」

唸り声と共に飲み込む憎悪の言葉には、まだわずかに理性が残されている。

自分は情けないことに、あのダイヤモンドシティの市長にしてやられた。

例の挨拶の会話は、交わされた言葉を改竄されてポストンのあちこちに噂ではなくはつきりとメディアにのせて伝えられてしまったのだ。

曰く、ミニッツメンはついにポストンへと戻ってきた。

調子よくトップに取り上げられる言葉は、盛大に花を添えるための打ち上げ花火でしかない。読み進めればさらに威勢の良い言葉が、ポンポンと簡単に飛び出してくる。

「まずいですよ、これって——」

ビー・ハイブ（蜂の巣）の設備を整える作業を進めている、部下たちも顔色が悪くなっている。

それも仕方ないだろう。

「あの市長の野郎、あなたとの会談が終わったあとから街のあちこちで演説して回ったそうですよ。例の宣言したってのは、翌日に『噂の真実を』とかなんとか理由をつけてのものだったとか」  
「全部が計算づくか、ただただ。一方的にやられたわけか、こっちは」  
「——復活したミニッツメンは、以前のものよりもさらに精強なものとなった。このポストンに限らず、これからのつらく苦しい連邦の人々の希望の光となるだろう。」

最後のミニッツメン、ガービーの指示を受けて。ダイヤモンドシテイに更なる危険がまわりつくことがないように、マクナマス司令率いる部隊は旧レイダーのアジトの要塞化を今も進めている」  
「……」

「これが完成した暁には、さらなるミニッツメンが次々と誕生し。連邦の北部に始まった彼らの平和活動はついに完成へと——」  
「もういい、読むのをやめてくれ」

今ならダイヤモンドシテイに突入したがるレイダー共の気持ちは何やらわかってしまいそうな気がする。

マクナマスは突如として自分と部下達の前方に発生した暗雲のその不吉さに、戦慄せずにはいられなかった。

「なんでここを要塞化している、なんて話になるんだ？あそこでは、そんな話はしていないっ」

これについてはマクドナウ市長の責任というより、ミニッツメンの側に実は責任があった。

物資の調達に商人を使う時、ミニッツメンの若い兵士たちはついつい気が大きくなって、適当なことを話に混ぜて彼らに語って聞かせていた。

ビー・ハイブというのは蜂の巣のようにして、居住空間を仕切っているというものでしかなく。もちろん防衛についても考えてはあるものの。要塞化するための計画では決してなかったのだが、彼らはそうとは考えなかった。

気が付くと、ここは蜂の巣のようにして兵士たちにとって安全な空間であり。外敵が来ても余裕で対処できる要塞、と理解されていた。

「どうしますか?」

「今更、あの町に怒鳴り込んでもどうしようもない。それよりも——」  
この後のことが問題だった。

あの市長の考えは簡単だ、露骨すぎて隠してすらいない。要するに  
ここをレイダー共の遊び場にしてやろうというのだろう。

そしてそれはあっさり成功した。マクナマスにも隙は多くあつ  
たせいで。

だがそれもすべて終わっていることだ。

レイダーは間違いなくこの瞬間にも、どこからかこの話題を耳にし  
ているだろうし。そのせいで間違いなくここに攻撃される危険性は  
レッドゾーンにまで引きあがっていることを認めないわけにはいか  
ない。

今週か? 来週か? それとも数日以内か?

さらには朝か、夜か、夜明けを狙うのか?

ここにいる手勢がわずかに小隊規模しかいないと知られば、間違  
いなく猛って攻め込んでくるに違いなかった。

「俺達、マトにされてますよね?」

「——しっかりしろ! 設備を、防衛ラインで急いで組み上げなくては  
ならない。すぐに物資の状況を確認しておけ」

「わかりましたっ」

仕事の質が変わったが、忙しいことに変わりはない。

攻撃を受ける前にやらねばならないことはあまりにも多すぎる。

構築中の防衛設備とは別に、武器を再点検し、弾薬の確認も必要だ。  
食料と医薬品も、揃っていただろうか?

(ガービーにはどう報告する?)

ぎくりとして動きが止まった。

かつては先輩と後輩。かつての同志、古参兵。

その期待を受けて、この場所での責任と力はガービーから与えられ  
たものであった。

だが——残念ながら悲劇は避けられなくなり始めている。

己があまりにも間抜けであったがために!

これほど大きな声で吹聴してくれたのだ。

隠そうとしてこのまま黙っていたとしても、すぐに噂はサンクチュアリにいる彼の耳にも届くだろう。

彼の信頼を重要だと考えるならば、この瞬間にもこの難しい状況に陥った事情をまとめ、新たな援軍を求める使者を送り出さなければならぬ。

だが、しかし――。

(かつてのミニッツメンで学んだことは、今の連邦ではまったく通用しないと認めなくてはならないのか)

不条理な怒りと、悔しさがあつた。

かつてはなにがあろうとも、住人達はミニッツメンを自分達の守護者として認めてくれていた。なにか思惑があつたとしても、礼節を守らせるものが互いに持つていたはずだったのに。

そんなものにダイアモンドシティの住人達は気にもしていないということだ。

マクナマス支部長は、頭を振る。切り替える必要があると考え、建設途中の2階から居住地を見下ろしてみた。

ちようど作物を植えた土の上を手で掻き回しているケイトの背中が見える。

土をいじる、冬用のジャケットを着た彼女の背中には、ミッキーの芽には別の姿がぶれて見える気がした――。

(ダメだ！そんな場合じゃない。彼女とのことは、後回しにしないと……)

ミニッツメン達の怯えは現実のものとなる。

翌日、ハングマンズ・アリーの真正面にある建物の壁に旅商人の死体が飾られた。

首のない死体は杭でもって建物の壁に張り付けにされ。

失った首の代わりに、その商人が連れていたと思われるバラモンの首がそばにうちすてられていた。

深夜のうちにこれを飾って立ち去つたらしい。

それはメツセージであった。

ミニツツメンよ、首を洗って待っている。ボストンのレイダーたちからの殺意が、そこにぎっしりとはつきり込められていた。

|||||

飛び出してきたパイパーは「動くな!」と格好よく叫びつつ、銃を向ける。

向けられた方は——正直、戸惑っていた。

「ああ、お嬢さん。どなたかな?」

「はあ?なにをいってるのよ。見ればわかるでしょ」

「——いや、わからないな」

「こつちはイイモンで、そつちがワルモノ。ほら、理解できたじゃない?」

「ああ、いや。ちよつと待ってほしい、落ち着いて話をしないか?」

「はア?のんきだね。それ、本気で言ってる?」

パワーアーマーのふたりは、まったく動揺を見せないままピストルをむけている強気のパイパーに混乱しているようだ。

普通に考えれば、パイパーは圧倒的にまずい状況にいるはずなのに。当の本人は、そうは考えていないのは明らかだ。

「我々はパワーアーマーを着ているのが、わかるかい?」

「そうみたいだね。だから、なに?」

「こうしよう、お互い顔を見せて。つまり、このヘルメットを脱いでもいいかな?」

「いいよ、それくらいなら別にね。でも、へんなことをしようっていうなら」

「しないさ。ちよつと待ってくれ」

ヘルメットを脱ぐと、そこには男のむせるようなひげ面が現れた。

「私は、B. O. S. のパラディン・ダンスという。お嬢さんは、どなたかな?」

「パイパー。パイパー・ライト、ダイヤモンドシティの正義。パブリッ



ク・オカレンシアの美人記者だよ」

「そうか。なるほど、たしかに——美人だ」

「どうにも会話のリズムがお互いに合いそうにない。」

「無口な方は、顔を見せてくれないの?」

「彼か?彼は——」

しかしもうひとりヘルメットに手をかける気はないようだ。パイパーの問いかけに対しては両手を開いてただ、肩をすくめて見せただけだった。

「ああつと……私だけでいいだろう?別に、君がどうしても彼の顔を見たいわけでもないだろう?」

「そうかもね。それで?噂のB・O・S.が、こんなところで何をしているのかな?」

「ソレなら答えられるよ、レイダー退治だ。我々の仲間が攻撃を受けたんかね——取られたものを回収しようと」

「へエ、それでレイダーはどこに?」

「その物陰や、アレイの中にもいる。といつても——」

すでに死んでいるのだが——。

パイパーはようやくゆるゆると構えを解く姿勢を見せた。

「なるほどね。それじゃ、ご苦労さんとねぎらったほうがよかったのかな?」

「そうだな。出来たら美人の記者さんが、なんでこんなところにいるのか。説明を聞かせてくれると、こっちもありがたいのだが」

パイパーは銃をしまい込む。

「へーゲン砦ってところに人を探しに来たんだ、友人と一緒にね。私は周りを見て回ろうと思って、そしたらここで騒ぎが見えたから——」

「なるほど、飛び込んできたわけだな。我々との出会いも、それで説明はつく」

遠くでコズワースの安否を気遣う声が聞こえてきた。

「どうやら戻ったほうがいいようだ。」

「呼ばれてる、もういかないと——」

「ああ、そうしたほうがいいだろうね。悪いが、君を送り届けるつもりはない」

「私はここを離れるけど、そっちはまだ用事が？」

「嫌、我々もすぐに退散するよ。結局、ここのレイダーは我々の武器を回収してはいなかったからね」

「そう、それじゃ」

やはり嵐のようだった、改めて彼女をそう思う。

コズワースの元へと風のように走り去っていくパイパーの背中を見ていたが、私は結局自分の存在を友人達には知らせることはなかった。

彼らを目にして、思うことは色々あったが。

今はまだ戻れない。

「それでは、我々もこれから本隊に戻ろうじゃないか。ようやくエルダー・マクソンが、君と会いたがっているはずだからね」

「——ああ、楽しみだよ。ダンス」

## 笑顔 (Akira)

デューコンはピンチに陥っていた――。

「おい」「ステルス能力、素晴らしい」「生体反応、ない」「隠れてますね、無駄ですよ」

壁の向こうから、有象無象がそれぞれ言いたい放題だ。

「嬉しいね、泣けてくる」

出血がこれ以上、地上を汚してあいつらにまだここに残っていることを知られたくはない。

首に巻いていたマフラーを包帯代わりにし、急いでステイムを立て続けに投薬した。暗い屋敷の地下室で、必死になってこの状況を切り抜ける方法を考え始めている。

サレムを離れ、そのままレールロード本部へとむかうつもりであったが。

皮肉なことにサレムの出口で、なんとインステイチュートの人造人間――部隊と鉢合わせしてしまったのである。

デズデモーナらがデューコンに語ったことと同じ理由で、もはや人の気配の消えたサレムに新たな拠点を作ろうとインステイチュートは部隊を派遣していた。

デューコンはさっそく緊急計画を実行した。

連れていたひと際鈍感なバラモンのトレマーの尻を思いつきり蹴り上げ。敵の部隊の気を引いてもらう間に自分はここから静かに逃げよう、そのつもりであった。

ところがである。

痛みに悲鳴を上げたトレマーは、一転してデューコンが望む方角の逆に向かってこれまで見せたことのない機敏さで走り去ってしまったのだ。

残されたデューコンはただ愕然とし、「敵と交戦中」などとわざわざ教えてくれた人造人間達が放ったレーザーにいくつも貫かれてしまう。

それでもなんとか、だましだまし後退を続け。

ポツンと荒野にただ残された屋敷の中へと転がり込んだ。で、一息  
ついているわけだ。

過剰にステイムパックを使用したせいで喉が渇く。だが、残念なこ  
とに水のボトルはトレマーが逃げていく際に地面に荷物を少しづつ  
ぶちまけていったので、どこにあるのかもわからない。

(手元にあるのは何本かのステイム、それにレーザーピストルと冷却  
グレネード2個か)

火力が全く足りない。

ということはここから逃げるしかないが、追われるのは御免だっ  
た。とはいえ、向こうもこの場所になにか確信めいたものを持ってい  
るらしく。先ほどから家の周りをあの独特な複数の足音がひっきり  
なしに聞こえてくる。

「入口を発見」

「では突入しよう」

「鍵がかかっています。どうやらここで間違いないようです」

ディーコンは思わず舌打ちする。

今日はとことんツいていない。この家に住人がいるようには感じ  
ないが、まさか外から入ってこれないように中からカギがかかってい  
るなんて――。

(待て、おかしいぞ?)

外から地下室への侵入口は開いていた。だからディーコンはここ  
に隠れているわけだ。

ではなぜ、正門の鍵は掛けられたままなのだ?

中を守るものがあって、ということなら「うっかり」しているの  
もなければそもそも自分は中に入ってこれなかったはずだ。

――背筋に冷たいものが流れ落ちていく

レールロードの作った携帯用の広角ライトをポケットから探り出  
すと、慌てて周囲の様子を探った。

この不穏な状況が当てはまる、そんな唯一の最悪の可能性を否定し  
たかった。

部屋の中にはなにもない。

ホコリとゴミ、そしてアルミ缶などが転がっているだけ。よし、ここにはなにもない。

続いて部屋を出て、廊下を進む。

別におかしいところはどこにも――。

ぐるぐるるるるるウ。

獣の低い唸り声と、自分の真上。床がミシミシときしみをあげ、明らかに巨体とおぼしき物体がのたくる音をはつきりと聞いた。今の動きで弾き飛ばされたらしい、人の死体が床に空いた穴から地下室へと落下し。光を向けると、そこには他にも上から落とされたらしい死者たちの残骸が積み上げられていた。

瞬きは止まり、息を殺し、しゃがんでよちよち歩きをしていたが。それもやめた。

「……クソツ」

間違えようもない、デスクローだ。

「諦めて出てきなさい、こちらから行きますよ」

「この扉を破壊する」

「攻撃態勢をとれ、逃がしてはならない」

お気楽なものだ。

この家自体がちよつとしたビックリ箱になっていることにまだ気が付いていないのだ。

(連中は上の家主に任せて、すべてが終わったら俺は外に出ていけばいい。そうだ、むしろ幸運だったんだ)

静かに息を吐く。するとちようど人造人間達は上の階の出入り口を押し開けて建物の中へとなだれ込んできたようだ。

不愉快そうだった獣の声は今、はつきりと怒りの咆哮へと変わる。

人造人間達は相手が何者かを考えるまでもなく、闘争本能をむき出しにする新たな敵にさっそく攻撃を開始する――。

|| || || || || || || || || ||

話は簡単、そうボツビは自信ありげに言ったが。実際はとんでもな

い地下迷宮を彷徨う羽目になった。

メルの自慢のロボットが壁に穴をあけるたび、連邦の地下世界がいかにフェラルの天国であるのか。知りたくはなかったが、それでも十分に思い知らされる。

それでも、なんとかやつてはこれたのだ。

しかし――。

「なあ、もう黙ってなくてもいいと思うんだ。俺は疑っている。

ボツビが本当に正しい方角を指示していたとして、この先に本当に目的のものがあるのだろうか？」

「……彼女を信じていないのか？」

「どうかな？ いや、わからないんだよ。本当にそれだけだ。

ボツビのやり方は知っているが、それにしたってこの期に及んでも彼女は計画の詳細について語ろうとしない」

「不安か？」

「どうかな？ いや、多分そうなんだろうな。ボツビも依然と同じじゃない。

グッドネイバーではハンコックに叩きのめされ、下っ端は殺されて最近では落ち目の一方だっっていわれてたし」

「それだけか？」

「ビビってるんじゃないんだ。いや、ビビってるかも。

なあ、俺は別にただ怯えているわけじゃない。おかしいことだらけだから。

ダイヤモンドシティにむかっているなら、俺達はボストンの地下を歩いているはずなのに。さっきからソーニヤが切り開くとほとんど必ず地下鉄網にぶち当たっている。彼女はわざと、方角とは関係のない場所に向かわせようとしているんだ。これは間違いない

だが、本当に心配なのはそんなことじゃないんだ」

「なんだ？」

「このチームの人数さ。ボツビ、俺、あんた。

たった3人だが、考えてみれば狙うものに対してあまりにもかかわっている人間の数が少なすぎやしないか？」

「今更の話だな。それに、人が少ないということは支払われるキャツプの額も大きいというだけだ」

「あんたもそれを本当に信じているとしたら、いいんだけどな」

イエローマンがあまりにもつれない態度でいるために、メルはついに不貞腐れてしまう。

すると前を歩いていたボツビが2人の方へと振り返った。

「靴の中が水浸しよ。靴下も濡れて、気持ち悪い」

「そんなの、みんなそうだ」

「カリカリしないでよ、メル。」

それより、いよいよダイヤモンドシティの隠し金庫に到着するわ。やる気が出てきたか？」

「なあ、ボツビ。本当に俺達はダイヤモンドシティへ向かっていたのか？」

俺の地図だと、あの町はもつと北側にあつたはずだ」

「あんたの地図なんて、どうだっていいじゃない。いつもいつてるじゃない。」

目的地へはストレートで向かうものだって。大丈夫よ、心配はいらない」

「ああ、なるほどな。あんたのストレートは、例えるなら俺が雷雨の中で密造酒を4杯飲みほした後に曲がつたライフルで1キロ先のターゲットを狙い撃ちするようなものだって意味だよな？」

「すねるんじゃないの。心配はいらない、

あんたの可愛いロボットにも、もうひと頑張りしてもらおうよ」

その時、イエローマンは——アキラはようやく口を開く。

「ボツビ」

「なによ？ 質問がまだあるの？」

「本当は、どこにむかっている？」 今なら「まだ、嘘であつても許さう」

声には脅すような響きはなく、普通であればそれを簡単に聞き流すこともできただろう。

だが、ボツビの答えは頑なであつた。

「ダイヤモンドシティの隠し金庫の下、よ。さあ、いくわよ」  
もはや「賽は投げ」られようとしていた。

|||||

長椅子に座ったハンコックは、無言でずっと煙草の煙を吐き出し続けている。

そこに部下のトリガーマンがはいつてくると雑事の報告を簡潔に伝えにきた。

「取引は無事に終了したそうですよ」

「そうかい、そうかい。で、実際の話。今日の俺の街の様子はどうなっている?」

「そうですね。悪だくみしてそうな顔が、あちこちにありましたよ。いつも通り、楽しんでるようですよ」

「それはよかった。それでこそ、グッドネイバーだ」

「では——」

「いや、ちよつと待ちな」

なにか?と振り向くトリガーマンにハンコックは手を差し伸べると、相手の手の中に何かを握りこませる。

「これは?」

「仕事のための必需品ってやつさ、楽しんでくれ」

ハンコック特製のジェットである。

「これはどうも、ありがたく——」

そう言つて笑顔で部屋を出ていく部下に、「ああ」とだけ答えるハンコックはやはり長椅子に座ったまま。煙を口からくゆらせたまま。

グッドネイバーの市長、ハンコック。

正直に言うとなれからずつと気分は晴れず、愉快ではない毎日をなんとか窮屈な思いに耐えながら暮らしていた。

ハンコックは考える。

実際、すべてはあのバカ騒ぎがそうだったのだ、と。



新年を迎えるバカ騒ぎを邪魔されたばかりか、あろうことかくだらない広告を無理やり聞かされ。

ただそれだけでも十分に怒りを感じざるを得ない出来事ではあった。

その原因であるB・O・S.はどうやら空港の上空でいまもプカプカ浮いているらしい。

調子に乗ってやってきたのはいいが、結局はフェラルの駆除に頭を悩ましているのだろう。いい気味だ、とは思うが。それですつと高みの見物というわけにもいかない。

なにしろあいつらはキャピタルのB・O・S.なのだ。

10年前、エンクレイヴを叩きのめし。そのテクノロジーを奪った軍団。

いくらフェラルが湧き出てくるといっても、そういつまでもやられっぱなしにはなるとは考えられない。

(ところが、だ)

乱暴に手に持っていた煙草を灰皿に押し付け、力の限りそれを押しつぶしてやる。

ところがここに悩ましい現実があった。

自分の愛するグッドネイバーという町と、市長という自分の肩書。

これが急に窮屈なものに感じられ……というか、この両方をそろえているのは決して良いことではないと、ハンコックは考えるようになっていた。

ハンコックの目は、未来へとむけられている。

すべては見通すことはできないが、それでもある程度のことまでは理解することが出来た。

B・O・S.にミニッツメン、レールロードにインスティチュート。さらにガンナー。

これらは必ず、どこかで衝突するだろう。

その時、ハンコック市長とグッドネイバーは何ができる？

結論を先にすると、なにも出来ないということだけがわかった。

あいつらがいつちよまえに戦争を始めると、グッドネイバーも市長

もただの的にしかならないのだ。介入できることはほとんどないといつてよかつた。

仮定の話となるが、このゲームに参加しようと考えらるならば。グツドネイバーと市長は、縛り付けて自由を奪うものでしかなく。かといつて手放すにしても、やり方を間違えればこれまでの苦労が水の泡にもなりかねない。

(今はただ、名案が空から降りてくることに期待するしかないのか) もうそれも信じられなくなり始めていた。

ただの言い訳、時間切れが来た時にそれに気付けなかつたと自分を誤魔化すための嘘。

そんな風にも思えてきた。

|||||

ようやくのこと目的地の金庫の中に入る。

「あら、ぐっ苦労様」

「しまった……」

計画は失敗だつた。

そこは列車の車庫をまるごと金庫として使っているようだつたが。金庫には番人がすっかりとこの侵入者たちの前に立っていた。

「ハンコックが気が付いていないと、本気で思っていたの? この金庫も破れると?」

そんなわけがないでしょう。どうなるのか泳がせておいただけよ。そして見事にまた、一杯食わされたつてわけね、ボツビ。無残なものね、ピエロにそんなになりたかつたの?」

「——これはどういうことだ、ボツビ?」

イエローマンは状況の把握を務めようと、チームリーダーに厳しく問いかけていく。

だがボツビはすぐには答えない。悔しさに顔をゆがめ、それでもなんとかしようと考えているのだろうか。

「盗めるわけがない。それに、そのほうがあなた達にはむしろ良かった

たのよ」

「あいつの言葉に耳を貸さないで！」

ハツとなつてボツビは警告をあげるが、イエローマンもメルもすでにこのリーダーへの信頼は失っていた。

「ボツビはあなたたちをだましていたのよ。ダイヤモンドシティの市長が隠した金庫、だったかしら？」

そんなものはないし。だいたいここはダイヤモンドシティですらない。

そもそもあなた達、まだ自分がどんなに危ない場所に立っているのかその見当すらついていないようね」

「そういうことかよ畜生、クソツタレだ、ボツビ。」

彼女がいるなら、ここはダイヤモンドシティの市長の金庫なんかじゃない。

グッドネイバーの市長、ハンコックの金庫ってことになる。あんた、俺達を道づれにしてくれたんだなっ」

メルは悲鳴交じりに推理を口にする、3人の侵入者を部下と一緒に見下ろすフアーレンハイトは視線を外して小さく手で拍手を送る。当然、喜びはない。

イエローマン——アキラから、感情の気配が消えた。

「説明しろ。それとも、まだ誤魔化せるとも思っているのか？」

「よく聞いて。確かに嘘をついたかもしれないけれど、山のようなお宝はもう目の前にあるわ」

「ふざけるなよ、ボツビ！」

そいつはハンコックのものだ。俺達がそれに手を付けるってことは、ハンコックからも恨みを買うってことになる」

「加えておくと、こちらは別にあなた達の命をもらおうとはまだ考えていない。」

ハンコックはもうボツビに興味はないし、あなた達2人は騙されていたのだから、多少は優しくしてやってもいい。

ここから彼女を連れて立ち去りなさい。それで今日のごとはなかったことにしてあげる。こちらは綺麗に忘れてあげるってことよ、

悪くないでしょ？」

ファーレンハイトの慈悲深い申し出を聞くと、グール特有の瞳の向こう側に感情の嵐が吹き荒れた。

だが、表面上は冷静に落ち着いてまだ仲間であるはずの2人に訴え続けようとした。それぞれがそれぞれの意見を口にしようとする。

「あいつは信じちゃダメ。もうここまで来てしまったのよ、今更変えることは出来ないの。」

まだ計画は終わっちゃいない。「あんた」が彼女を殺すのよ！

そうすればここにあるもの全部、私たちのものになる。市長から奪ってやるの」

「ボツビ、無茶だ——」

「できるわ。まだ、そのチャンスはある！」

「反対よ。あがいても、あなた達の手に残るものは何もないわ」

「なんてこった。彼女は、ファーレンハイトはあのハンコックの護衛だ。それに——」

ここに至って、メルもついに目の前に立つイエローマンの正体にも気が付いていた。

あのハンコック市長も認めた、グッドネイバーの若きプレーヤー。町の噂では、彼は彼女と——。

ファーレンハイトもまた、いつもと変わらぬ茫洋とした表情と冷たい視線ですべてを見ている。

悪党として落ちているボツビは、この計画に自分の全てをにかけてきている。ここでしくじれば、彼女はこの連邦で再び浮上することは叶わないであろう。

だからこそ、あえて残酷に許してやるのだと免罪符を与えた。

この瞬間のために、ファーレンハイトもまた多くのことを人知れず成し遂げてきていた。連れてきた2人のトリガーマンには、本気であることを示すために。

あえて耐熱スーツを着用させ、火炎放射器を持たせてある。万が一にもことが始まったとしても、炎は侵入者たちを無残にも黒焦げにし

てくれるはず。

なればこそ引けない。

そしてすでに覚悟も出来ている――。

アキラは無言で、まだ答えは口に出していない。

|||||

人生は驚きに満ちている――デイーコンはおかしな話だが、そんなことを考えていた。

騒ぎが始まってからすでに5時間は経過した。

だが、彼はまだ地下室でじつと息を殺して身動き一つしないように細心の注意を払っている。

思惑通り、最初の脅威である人造人間の部隊は無事に壊滅したようだ。

あいつらの使うレーザー音は途絶えて久しい。それに、あの鉄のこすりあうような関節音も聞こえてこない。

ということではデイーコンの問題は一つ減った。

ところが今度は違う問題が出てきたのだ。

それはもちろん上で寝ていたデスクローのことだ。

自分に向けてレーザーで攻撃してくる相手を倒し、再びおとなしく眠ってくれるものと期待していたのに。

あれからなにやら興奮気味で、開け放たれた屋敷の外をグルグルと周ったり。家の中を歩き回ったりしている。

最初は何をやっているのだ？などと呑気に聞き耳を立てていたが、それが実はこちらの存在を察して探し回っているのだと気が付くと血の気がひいた。

原因はすぐに分かった。

ここに転がり込んできたとき、デイーコンの身体から発せられた人間の気配とそこから流れ落ちた血の匂いに反応していたのだ。傷口はすでにステイムの効果でふさがれてはいるものの、衣服に染み付い

た血の匂いはしつかりと残ってしまっている。

(とはいえ、そろそろ限界も近づいているかもしれない)

もう自分の血の匂いはしつかりと覚えられてしまっている。

ここから逃げ出すにしても工夫がいるし、あの巨軀で追われては逃げ切れるものではない。

それにちやうど自然の呼び声も厳しい状況だところらに訴えてきている。これを利用して、一か八かの賭けに出るしかないだろう――

デューコンは移動を開始した。

自分がこの屋敷の地下室に転がり込んできた裏口にむかったのだ。

そこはすでに自分がカギをかけておいたが、それを前にして、いきなりズボンを下ろすと用を足す。

さらに扉の取っ手に出血を抑えていたマフラーを巻き付け、さらにコートもそこに挟み込んだ。この冬空の下を旅するのにコートを失うのは厳しいが、これも自分が助かるためだ。

作戦はこうだ、糞便を交えたデューコンの匂いにデスクローが反応するのを待つ。

外に出て裏に回ったとわかったら、こちらは正面出口からそろそろと静かにでていく、ただそれだけだ。

チャンスはすぐにもやってきた。

こちらの思惑通り、表に出ると裏口に向かって移動を始めた。

デューコンはピストルをズボンのベルトに挟むと、音をたてないように静かに階段を登り、出口へと向かった。

(こりや、ひどいな――)

1階のフロアはバラバラにされた人造人間と人間が床にばらまかれてる。

鼻をつく油と血と腐肉をはじめとしたアンモニア臭がたまらない

――それどころじゃないとわかっているが。

扉まであと数歩、そこまで行った。

そこで急いた気持ちが無理に押し殺して一度足を止めたのは、入口の外側で小賢しくも逃げようとしていたデイーコンを待ち構えていたデスクローが、フンと鼻を鳴らしたことに気が付いたからだ。

(どうする？引きかえすか、今なら……)

無駄な問いかけであった。

ここで背中を向けて地下に戻れたとしよう。それでどうなる？もう、迫ってくる詰めを逃れたとしても、他に手は残ってはいないのだ。それどころか、今度は床を破壊して地下に降りてくるのは間違いないだろう。

デイーコンは逆に姿勢を低くして出口から飛び出していく。

頭上を鋭い爪の一振りが通り抜けるのを感じ、自分に喝采をあげたかったがそんな余裕はなかった。

(このまま、このまま)

頼みは冷却グレネードだ。

こいつで相手の体温を奪い、動きが悪くなった隙に逃げるのだ。

レーザーピストルを引き抜くと、すぐさま道路のむかいにある大木の蔭に滑り込む。

おかれて衝撃が大木を揺らし、太い幹を鋭い爪が簡単に半分まで切り裂いてみせた。

すでに深夜、天上には満月が美しく輝いている。

青い閃光が数回走り、獣は獲物を捕らえた満足な唸り声をあげた。

「チクシヨウ」

やはり無謀であったようだ。

3回、5回と降りぬいていく爪をかわしたが。それでチャンスを生み出すことは出来なかった。

冷却グレネードのピンを引き抜く前に、相手の大きな手がデイーコンの胴体を捕らえて宙高く持ち上げてみせた。

ふざけたことにデスクローは、暗闇でもはっきりとわかるくらい満足げな笑みなど浮かべている。これみよがしに空いた手に力が込められていく。

(俺はここで終わりか……)

クソツタレな人生の終わり。

だが、なぜか心残りがあるような気がした。そんなものはないと、ずっとレールロードでは言い続けてきたはずだったのだがな――。

突然、デイーコンの感覚はこれまでにないほど拡大されたことを認識した。

遠いサレムの町からは老人の怒りの銃声が響いてきたような気がする。海岸線に押し寄せる夜の波の音、ひたひたとこんな時間に路上を歩く誰かの足音。

隠れていた建物は、よく見るとあまり見たことのない風情のあるデザインだとわかる。

その真上に輝く青白い月、なんて美しいことか――。

気が付くと、建物の屋根の上から月光にまぎれてこちらを見下ろす人の姿を見た気がした。

薄汚れた黄色の帽子、黄色のコート、なのにその下はTシャツにジーンズ、スポーツシューズで決めている男。

そいつは左手を動かすと、その手の中にリボルバーが握られていた。

そんなものにいつの間にかデイーコンは見とれていたようだ。

衝撃と共に自分が地面の上に乱暴に投げ出されたのだと理解すると、彼を捕らえてとどめを刺そうとしたあのデスクローは絶命していた。

頭部に2発、ただそれだけでこの最強の生物は命を奪われてしまったのだ。

デイーコンは大きく息を吸い、吐き出した。

それから誇りをわざとらしく払いながら立ち上がると、空を見上げるようにして屋根の上の男に話しかける。

「本当に助かったよ。あんたには、本当にデカイ借りを作ってしまったみたいだな。どうしたらいい?」

「……」

「言ってくれ。ぜひ、この恩を返したいんだ」

男は無言のままであったが、ポケットから何かを取り出すと銃を握



らない右手が閃いた。デューコンの頬をかすめるように飛んできたそれは、先ほど幹をえぐられた大木の表面に突き刺さった。

「これか？こいつはなん……」

それを拾い上げつつ、顔を上げたデューコンはそこで言葉が出なくなってしまう。今の一瞬の間に、そこにいた男の姿は消えてしまっていたからだ。

「どれどれ——『メッドフォード』か」

思わずニヤリと笑みが浮かんだ。

アキラのこともそうだが、どうやらあそこには何かがあるようだった。

とはいえ、一度は余計なことに首を突っ込むなどレールロードからは指示を受けている。それを無視することは、立場を守る意味で避けねばならないだろう。

「そうになると、色々と時間もかかるか」

なにやらまた面白いことが始まりそうな予感があった。

多分それは気のせいではないだろう。なぜなら、この先にはきつとあの男も——。

|||||

緊張が張り詰める中、アキラの頭は完全に真っ白になっていて。思考は停止していた。

命令はただ一つ『ボツビの仕事を手伝ってやれ』ということ。

だが、このグールは度重なる警告を与えたにもかかわらず。自分に嘘をついた。さらには、身動きが取れないようにはめようとしていた痕跡もある。

この展開に、封印されていたものが揺り動かされ。徐々になにかが悪化していつている気がした。

だが、それがなにかわからない。

無言をながながと貫ける状況でも決してない。

イエローマンは……いや、アキラはファーレンハイトを見上げていた。

彼女も若者を、見つめていた。

そういえば愛だの、恋だの、口にしたことはなかった。ただ獣のように。それとも、すでに今はや離れることも考えられぬ夫婦のように。ただ、互いを濃密に求めた時間があつた。

だが、夢のような時間は終わりだ。

彼女自身もそう言っていた。

アキラはボツビに視線を移した。

「やり遂げよう、最後まで」

「フッフ、後悔はさせないわよ」

「腹をくぐるしかないんだな。引き返すことは出来ない」

木箱に寄り掛かっていたファーレンハイトは立ち直ると、部下に合図を送りながら冷酷に言い放つ。

「間違っているわ。あなたはここで死ぬのよ、坊や」

賽は、投げられた！

とはいえ、戦うなんてことはそもそも不可能な話であった。

タラップから飛び降りたトリガーマンたちは、火炎放射器に炎を吐き出させると。列車の左右から進んで、侵入者たちを挟み込みにかか

る。そして情けないことに侵入者たちは揃って炎に背中を向け、そのまま車両の蔭へと逃げ込んだ。やはり火に抵抗するのは簡単ではないのだ。

「クソ、やっぱりどうにもならないじゃないか！」

「煩いんだよ、メル！根性出して、そいつを使えばいいよ」

「ふざけるなよ、ボツビ！顔なんて出したら、あつというまにカリカリに焼かれちゃうよ。俺達、もうここでオシマイだったんだな」

アキラはだまっていた。

不思議と心は落ち着いていた。ここまでが約十数秒。

そして反撃は突然に始まる。

炎に関係なく、トリガーマンのひとりの前にいきなり立ちふさがった。

彼が見たのは炎の向こう側にある隠れた顔の表面に鈍く輝くエメラルドグリーン色の斑紋のようなものがうかんでいるところを。

そして同じく突き出された手の甲は、火によって焼かれているはずなのに黒く炭化することはなく、同じく皮膚に輝く斑紋がうかんでいた。

悲鳴も声もなく、ただ乾いた銃声だけがバンバンと繰り返された。

それまで見下ろすだけだったファーレンハイトがついに自慢のミニガンに手を伸ばしたのは、炎に焼かれてもなお悠然と2人のトリガーマンの顔を徹底的に破壊した時。彼らの体が地面へと崩れ落ち、轟轟とそれまで不吉な音を立てて炎を吐き出していた火炎放射器が沈黙した時。

イエローマンもそれは同じで、いつものごとく両手に10ミリとレーザーのピストルを構えて、決着をつけようとしてくる。

数百発を発射するミニガンと、2丁あわせても60発もないピストル。

常識的に考えるなら、これはまったく勝負にならないはずであった。

赤い光弾も10ミリ弾も、ファーレンハイトに届くことはなかったが。

金切り声をあげるアッシュメイカーのそれは、床を砕いては破片を巻き上げ。車両にはじかれては火花を散らす。

このガンマン同士の殺し合いは圧倒的に美しく、そして普通では味わえぬ死の芳香を艶やかに匂い立たせていた。

(まさか……これで、仕留めきれないとはね)

訳もなく湧き上がる喜びに、ファーレンハイトは人前では見せたことのない笑顔を浮かべていた。

手早く装填をおこないながらも、タイマンでこんな経験をしたのは過去にはなかったことだと、改めてこの瞬間に感謝すらしていた。

一方、同じようにピストルの装填をこちらも終わらせながら、しかしその殺意にはまったく揺らぐことはないイエローマンがいた。

こんな常識にとらわれない戦いができるのは、あのレールロードで回収したDIAのパリステイック・ウィーブ技術があればこそである。ヌカ・ワールドでもそうだったように。

圧倒的な不利と破壊力にさらされても、まだまだ傷つくことなく戦うことが出来る。

もはやボツビもメルは関係ない。そもそも彼らはいまだに物陰で必死に互いをののしっていることしかしていない。

2人だけの世界、誰にも邪魔されない。

再戦のゴングは2人の中では同時に鳴り響き、いきなりファールンハイトはアキラをとらえ、引き金を引いた。

周囲がおびただし量の着弾で騒がしくなる中、衝撃がついにアキラを叩きのめそうとした。

だが――。

アキラはまるでそれが当然というように、踏ん張り続けながらあらゆる方向に向けて10ミリ弾を発射した。

次の瞬間、ファールンハイトは頭部に衝撃を感じ。思わず膝をついてしまう。

自慢のアッシュ・メイカーも手から離れ、タラップを地上まで無情にも転がり落ちていく。

頭に手をやると、醜い傷跡のあるほうに違和感がはつきりとあった。

出血し、頭蓋骨にも穴があけられ、異物が傷口にうめこまれているのが触っただけではつきりとわかる。

あれは意識したものかどうかはわからないが、跳弾となった10ミリ弾がファールンハイトをついにとらえていた。

(負けたのね、私)

あの攻撃を偶然とか、ただの運とはファールンハイトは考えなかった。

致命傷ではないが頭がい穴をあけられそうになり、脳を揺らさ

れ、足腰どころか体の自由があやしい状態であった。

それでもまだ意識だけは妙にはつきりしていて、ファールレンハイトは頑固に2本の足で立ち上がろうとした。

わずかな間を置いて、一度の銃声が。

愛用の武器に遅れ、ファールレンハイト自身もまた崩れ落ちるようにして落下すると。地上にその体を投げ出して動かなくなる――。

## 軍の流儀（LEO）

プリドウエンの医務室で、私は改めて医師の診断を受けていた。

「心配するようなことはないさ。ただ君の病歴について簡単な質問を  
していただけた。ここにはキャピタルから来た兵士たちがいるが、船外  
から彼らに脅威を与えるような病気が持ち込まれるようなことが  
あつてはいけなからね」

「確かに。言われてみればその通りだと思う」

「では、医学にかかわる質問をするので、できる限り答えてほしい」

戻ってきてドッグにパワーアーマーを預けていた。軍の制服は店  
で求めてくれと言われていたが、私はまだケロググの服を着ていた。

覚悟が足りないと思いはするが、今はこれでいいと思つている。

「長期間、放射能にさらされたことはあるかい？」

「ドクター。ダンスから話を聞いていないのか？ 私は別にこの辺で生  
活をしていたわけじゃない」

「え、おやおや。すまない——記録を見逃していたよ。そうか、元Va  
uit居住者だったんだね。それならここにいる誰よりも健康で  
あつて、おかしくないか」

「次を頼むよ」

「ああ、そうだな。では伝染病に出くわすような経験も？」

脳裏にVault 81で苦しんでいた少年がチラと頭を横切るが、  
私は真顔で答えた。

「ないよ。次に行つてくれ」

「それじゃ——」

ドクターが次の質問へと移ろうとすると、医務室の入り口に人影が  
現れる。

「あなた！あなたが噂の新人ナイトよね？」

「おいおい、誰かと思つたら——」

「自己紹介をさせて、私はネライヤ。シニアスクライプよ」

「ああ、どうも。ネライヤ、はじめまして」

女性は強引で、まるでドクターを相手にしない態度はふてぶてしい

なんてものじゃなかった。それでも私は笑顔で彼女に挨拶する。

なにか、あるのだろうか？

「私に何か？」

「ええ、それなんだけど——あなた、こちら辺の土地には詳しいんですって？」

「——そういう触れ込みで、推薦されたらしい」

「なら、よかった！実は研究のために、あなたに協力してほしいことがあるのよ」

「それは？」

「血液サンプル、それもいろいろなアポミネーションの。出来れば大量に」

「——聞いていると思うけど。ここにはエルダー・マクソンに呼び戻されたばかりでね。そんな簡単に約束はできない、シニアスクライブ」

「いいわ、そういうことならここを出る前にも私の所によって。詳しい話はその時に改めてしましょう——ああ、ドクター。もうくだらない質問を続けてもいいわよ」

一方的に話を終えると、女性はさっさと医務室から出て行ってしまった。

ドクターの顔を驚いてみると、彼は首をすくめ。質問を続けようといっただ。

「では次の質問だ。これも正直に答えてくれ……人間以外と考えられる種族と性的な関係を結んだことは？」

「——なんだって？」

「そういうことだよ、ただ——率直に答えてほしい」

「心当たりがひとつ。若い頃、酒の勢いにまかせて……」

さすがに少しうんざりしてきた。

|||||

パラディンとナイトの帰還をケルズから報告を受けたマクソンは、

2人に用が済んだらデッキに来るようにと命令を出しておいた。状況はわずかずつではあるが良いほうへと進み始めていた。

空港はついに調査を終え、数日中にも制圧が完了するであろうと報告がさきほどあったばかりだ。

ようやくそれで始めることが出来る……さらに多くの試練が待ち構えてはいるだろうが。それだって問題はない。

部下の士気はいぜんとして高く、頼もし限りだが。浮つくように焦れているのも感じていた。しかしそれもこの空港を制圧することで落ち着くはずだった。

(あとは彼だけ、だな)

この期に及んでだが、正直にエルダー・マクソンは未だにレオという新人ナイトの実力を計りかねていた。

彼に関してはダンスが無条件に最大限の支援をしているせいで、古参のナイトなどからも不満があることはわかっていた。キャピタルの暗黒の時代、前任者はあの地獄を徘徊する旅人であっても、B・O・Sの象徴ともいえるべきパワーアーマーの扱いを広めることを許していた。

それら全てが失策であったとは、マクソンは言わない。

そうした前任者の善意がかさなって、キャピタルのB・O・Sはエンクレイヴとの対決へと突入したことは周知の事実であり。その勝利が、今日の自分たちへと連なるものがあるのは、認めなくてはならないだろう。

だが、それを汚点と考える者達がいる。

なげなしの善意とやらで危険を冒してやったとしても、返ってくるのは空虚な感謝の言葉と、それでも足りないとばかりにさらなる援助を要求してくる市民への嫌悪は皆の記憶の中にクソのようにこびりついてしまっている。

そしてだからこそ、ダンスはレオを保護しようとし。仲間たちはそんなダンスとこの場所で初めて選ばれた新人を忌々しく感じている。(だがいつまでもその空気でいられては、困るのだ)

今回の計画の最終段階の先には連邦に新たなB・O・Sが誕生



させ。さらにその組織にはこの場所の住人たちが中心となつて管理する必要が出てくることになる。

なのにキャピタルと連邦でくだらない階層意識など育てられては、これから行う我々の正しい戦争の意味が失われてしまう――。

ダンスはレオを連れてやってきた。

マクソンは上司として、まずは最大限にその結果について褒めるところから始めた。

「任務ご苦労。厳しい状況であつたのは理解しているが、君とダンスは想像以上の結果を我々にもたらせてくれた。その努力と献身に、私はまずは感謝を表したい」

「こちらこそ光栄だ、エルダー・マクソン」

当たりは柔らかか、しかしあまりにもそつがなさすぎる。

誘われた先で面会もせず、装備と任務だけ与えられて放り出された兵士なら、不満なり皮肉が飛び出してもおかしくないところだ。

だがマクソンはそれと気が付かぬふりをして、話を進める。

「それでも部隊の多くは帰還はかなわなかつた。この苦い経験はこれからの作戦に、必ず生かさねば彼らにも申し訳が立たないだろう。だが一方で、アルテミスの報告があつたのは嬉しい誤算であつた」

「パラディン・ブランディスはどうしていますか？」

「元氣だ。本人もやる気を取り戻しているようで、再訓練を希望している。復帰についてはまだ時間と見極めが必要だが、ドクターは今のところ明るい展望が持てると言っている」

「それはよかった」

和やかな空気、しかしこのままでは埒が明かない。

マクソンは方法を変え、正面から挑むことにした。

「君のことはダンスから色々聞いています。元Vault居住者、実験で200年以上を生き、かつての世界では軍に所属していたとか」「ダイアモンドシティでは、それを記者に話したせいで大騒ぎされた」「この忌々しい世界では慣れるまでに苦労があつたのは想像できる。その上で、あえて問いたい。君は、我々の組織に何を求めてやってき

た？」

「……」

「我々の組織に加わりたいと言うものはどこにでもいる。その全員が、なにかを望んでここにたどり着く姿をこれまで私はずっと見てきた。」

あえて君には隠さずに伝えるが、ダンスも私も君の能力には驚かされている。

だが一方で、そんな君が Vault を離れて厳しい連邦の情勢の中を旅してきた答えを知りたい。この問いに素直に答えてもらえるだろうか？」

「いいでしょう——あなたがおっしゃったように、エルダー・マクソン。」

私にも望むものを手に入れるためにここにいます。この B. O. S. ならばそれが手に入ると考えたのです。

私が望むものはただ一つ、息子です」

「君の、お子さんだって？」

ダンスも知らない情報であった。

相手が驚いている間に、レオは感情だけを排除して言葉を続ける。

「私には妻と息子がいました。しかし、Vault に侵入してきた者がいて、彼らは妻を殺し。私の幼い息子を連れ去った」

「誰がさらったのか、知っているのか？」

「はい。インステイチュートです。私が直接、さらった相手に吐かせました」

「——そいつはどうなった？」

「私の手で殺しました」

マクソンは満足そうに力強く頷いた。

ようやく、両者が理解しあえる材料が揃ったと。そう感じたのかもしれない。

「君のことを聞かせてもらったのだから、私も私自身のことを聞かせなくてはならないだろう。それがお互いの理解につながると信じている」

「はい、感謝します」

「理解してほしいことは、私はこの連邦に暮らす人々のことを気にかけているということだ。」

さらに君が憎むインステイチュートは、いわばこの連邦のガン細胞といつてもよいだろう。彼らは今も存在するが、まさに病巣のそれであり。まだ連邦という表層にまではその姿を現してはいない。

しかしその病は確実にこの連邦をむしばんでいる」

「人造人間、彼らのことですか？」

「そうだ！やつら忌むべき機械人形は、自らの頭で考え、人間のふりをすることは君でもすでに知っているだろう？。」

機械が自由意思を授かるなどという考えは、不愉快を通り越して、極めて危険だと警告せずにはいられない。もはやあれは兵器であり、核兵器と並ぶ危険な存在となっているのだ。

なのに彼らがそんなものを地上に送り出すのは何を求め、何を実験するのか。私には理解できないし、理解しようとも思わないが。ただ一つはつきりしていることは、私がここに来たからにはそんな勝手を許すつもりはないということだ」

「それが連邦に銃を突きつけようとする、あなたの考えなのですか？」  
レオの声は穏やかで、しかも力が入っていないかったので人に聞かれなくても特に何とも思われなかったかもしれない。

しかし、今ここにいるのはダンスを含めた3人だけだった。

自然、ダンスの背筋に冷たいものが流れる。

彼には理解しがたい、この瞬間にレオの中の不可解な部分が危険なものを取り出してきたような気がしたのだ。

マクソンの表情が変わった様子はなかった。

「君の見立ては正しい。だから非難したくなる気持ちも理解できる」  
「本当に？あなたは今、私にこの連邦でインステイチュートを相手に戦争を準備しているとはつきりと告げたのですよ？」

「それが正しいと私も言っている。だがその戦争は我々が主導し、制御する限定的なもので終わるだろう。」

君が見たような、かつての世界を滅ぼすようなそんな無作為の破壊

がここで起こることはない」

アキラが聞いたらきつと怒らずにはいられない自信に満ちた言葉だ。

しかしそれでも、この言葉には説得力が確かにある。

「あなたの考えはわかりました。しかし、私があなたのすべてを賛同するのは今の段階では難しいようです」

「当然だな。まだ戦争は始まってすらいない。だがそれでも構わない。君には忠誠心をもとめるが、その対象は別に私である必要はまったくくない。

ただ、B. O. S. のためにそうしてもらえればいい。我々の敵は同じなのだから」

「それならばなんとかなりそうです」

「ようやく同意ができたな。では続いて、改めて君に求めたいものがある。

この星に対する義務を受け入れてほしい。この状況に変化をもたらすことへの力が必要なのだ」

「義務ですって?」

「どうやら君自身がまだ、気が付いていないようだな。君は連れ去られた子供を探すただの復讐者では、けっしてない。

ダンスの報告書を読んだが、そこから思うに君はすでにこの道を歩き始めていると、私は確信している。

それはこの連邦が決めたことでは決していない。君自身がそうさせたのだ」

「――さすがに気のせいではないでしょうか?」

「謙遜は必要ない。

こうして直接会って、話せば私も君を知ったのだから。

そもそもダンスは私が最も高く評価している戦闘指揮官のひとりだ。その彼が推薦し、すべてをかけて保護しようとしている、今もな。

これが何よりの証拠だ。彼は実際に君という男を買っているのだ」  
会話に参加できない本人が後ろにいて、反応に困っていた。

「さて、お互いにとって実りある楽しいおしゃべりの時間だったが。

私も次の予定があつて忙しい。

すまないがここで君たちの次の任務と、そのあとのことについて話したいと思う」

「わかりました」

どうやら互いの情報収集はいったん終わりということらしい。

|||||

エルダー・マクソンはまず近況について説明をたじめた。

ブリドウエンにある部隊は現在、ボストン空港制圧の最終段階にある。だが、ここまで時間がかかったことで兵士達が力んでおり、当初のスケジュールの遅れをなんとかしようというまでの余裕はない。

そこでダンスとレオに、かわりにその余裕になつてほしいのだそうだ。ストロング砦のスーパーミュータントを排除することで。

「こちらで君が使う新たな完全武装のベルチバードを用意させてもらった。砦の外にいる汚らしい奴らは、それで簡単に一掃できるだろうと考えている。

残るは建物内だけだが、修理をしたパワーアーマーがあれば、君達2人でも大丈夫だろう？」

「確かに。あの汚らわしいミュータント共を一掃するのも、簡単なはずです」

「とはいえ、それも今すぐということではない。数日はここで体を休め、これから仲間と呼ぶことになる連中と顔合わせを済ませておくといいだろう。

頼むから任務に行かせてくれ、などと騒がないでくれよ？あのイングラムが君の熱心さに、ストレスから癩癩を起して私の所に来られては困るのでね」

「わかりました。イングラムとはこの後で話してみます」

「そうしてくれ——ああ、そうだった。砦の攻略の後、の話がまだだったな」

私は神妙な顔をして、耳を傾けた。

聞けばわずか16歳でこの強大化しつづける組織の長になったという若者だ。

部下である兵士の間で人気があるのも、その実力の高さを認めさせているからだとわかった。英雄——簡単には口にしたくない存在だが、彼はここの兵士達にとっては正に新時代のリーダーというやつなんだろう。

「そのあと？」

「君はこの会見で正直にはなし、私も君にできるだけ率直に意見を述べた。

だからこれも正直に言うが。この組織では君の評判はあまり良くはないのだ。ダンスや私がたとえ君を高く評価したといっても、全員がすぐにそれを受け入れるとは、ならないだろう」

「そうかもしれません」

「だが、それでは困る。君には我々と共に戦ってもらわねばならないのだから。

これまでも君には難しい任務をやってもらったが。今回も難しさでいえばそれほど大きく違いはないだろう。私は再び君たちに試練を与えるが、これを君たちは当然のように結果を出してくれるものと信じている」

乗せてきているようだ。根拠が全くない。

「だが、この任務は前回とは違う。君もこれまで与えられてきた命令には不満もあつたはずだ。

個人的な理由があつて、本心では今すぐにもインスティチュートと戦いたいと願う気持ちも分かる。だが、ここではこらえてほしい。今はまだ、待つ時なのだ」

「まるでそうすることが私に得るものがある、そう聞こえますね」  
「まさにその通りだ。」

君にはこれまでに示した能力と結果に報いるのに十分以上の対価を私は用意するつもりでいる。

まずはナイトの位、そしてパワーアーマーに続き。今回用意したヘルチバードは君専用として使ってくれ。そしてさらに砦を無事に落

とした暁には、君を我がB・O・Sの外交特使として任命する」

「外交特使？」

「わかってもらいたいののは、これはあくまでも君がこれからもこの連邦を自由に動けるようにするための地位に過ぎない。」

思うに、君に我々本隊の面倒をこれ以上見てもらうことはなくなるだろうと思っている。だから君は誰の命令を受けるでもなく、ただひたすらインステイチュートへ対処してくれていい。

また我々に当面、外交の予定はもちろんないことも伝えておく。この意味は分かってもらえると思う」  
なるほど。

私がキャピタルの連中の中に入って、不和をおこされるより。好きにさせて猟犬として、この組織に必要なものだけを手にしようということか。

上司は部下に悩まされることはなく、部下は自分たちの中に異物が混ぜられることに我慢もしなくていい。そしてレオは好きだけインステイチュートを追うという理屈で、この連邦では戦力と切り離されて歩き回ってもいいのだ。

「お氣遣いに感謝します。では、パワーアーマーの修理が終わり次第、ストロング砦の攻略に出発します」

私が手を差し出すと、マクソンはそれを固く握りしめてくる。

「体を休める、ということも忘れないでくれ。優れた兵士は自らを管理することを忘れないものだ」

|||||

ハングマンズ・アリーのミニッツメンは厳戒態勢の中で作業を進めている。

レイダーからと思われる警告からすでに数日が過ぎているが、まだなにも起ってはいない。

しかし立ち並ぶボストンの建物の向こう側から、彼らを八つ裂きに

しようとするように荒い息を吐き出し。その時を待っているであろう襲撃者達の視線を感じる。

作業には迅速さと正確さを要求されているが、すでに若い兵士たちは精神が削られ始めていて、冷静さを保つことに必死で士気は下がるばかりであった。

マクナマスことミツキーもついに最悪の状況に備え、サンクチュアリへと援軍を求めるメッセージを送ったが。いくらガービーが有能だと言っても、ここで騒ぎが始まる前に造園の部隊がおりこまれるなどとはまったく期待できないでいた。

なのに、さらに問題が向こうからやってくる。

「ハイ、ミツキー支部長殿」

「——ケイト」

「お仕事が忙しくて、クソ女との関係について考える暇もないのだからうけど。こっちはいい加減、決着をつけたいの」

「頼む、今はそれどころでは」

「今がその時だよ。ここでもうすぐ殺し合いが始まるんだろ？」

「ああ」

「よかったーそれは認めてくれるんだね。ところで、あたしもあのデカイミュータントも一応はこの客つて話になっているんだけど。あたしたちをあんたはどう考えているのか聞かせてよ」

「……」

ケイトの顔が、これまでになく耐えがたいものを感じていると訴えるようなしかめっ面へといつの間にか変わっていることに気が付いた。

「あたしはね、あたしは——もう、振り回されることにうんざりしているんだよ。

この3年間はコンバットゾーンで生き延びていりやよかった。苦勞してキャンプにもなったし、トミーが口にするような時代が戻ってくれば、あたしだってもっといい目も見れたはずなんだ。

ところがそこを馬鹿共に潰され、トミーには負債だつて言われて放り出された。



それでもまだ求められる場所があるならって、思っていたら。ここでお留守番、もうどれだけ待たされていると思う!?!」

それをミツキーに責めるのはいささか筋違いという気がした。

彼女を引き受けた将軍は現在生死不明、そして彼女は彼の捜索にはどこまでも否定的であつたではないか。

ここに残つたのもそれが理由だった。

「あの無責任野郎が生きてようが死んでようがどつちでもいい。

でもあたしは平穩が欲しくてここにずっと居座るつもりもない。

あいつが戻らないなら、こつちも好きにさせてもらうつもりだよ。

ミツキー、あんたいい奴だと思う。

やつてることは間抜けもいいところだし、ちつとも理解できないけど。

連中を面倒見るあんたは悪くないよ。男だつて思つてる」

「——ああ」

厄介な女性だった。こんな状況にあるのに、それをあえて利用してこちらを振り回そうとしているのだ。

男だと言われても素直に喜ばず。繊細な彼女の満足するものを、自分からも差し出せるのかここで決めなくてはならない。

「だから、はつきり聞かせてもらおうじゃないか。

あたしはあんたをいいと思つてる。そしてあんたは、あたしを欲しいと考へてる。

あんたがいららないというなら、ここで騒ぎに巻き込まれるなんてあたしは真つ平御免なんだからね」

確かにそれもそうだ、と思つた。

自分にとつて彼女はどうかあれ、義理もないというならばここに残つてもらおうわけにはいかない——。ひとまわり以上も年の離れたこの娘は、何を本当は求めている?!

「なら、私の話を聞いてもらいたい」

ミニツツメンを理解できないと語る彼女に、それでも伝えねばならない男の物語があるのだと伝えなくてはならなかった——。

|||||

これはミツキーというかつてヒーローを目指した男の物語。

ミニッツメンとして戦っていた自分が、ついにそこを離れようと決心したのは。留守がちの夫をまつ妻が、子供が出来たのだと不安に泣きながら訴えられた時。久しぶりに家に戻ったあの夜のことだった。すでにその時からミニッツメンは行き詰まりを見せていた。

かつての栄光はまだ消え去ることはなかったが、將軍の不在を良しとする派閥同士のしこりと意識のずれはますますひどいものとなる予感があった。

象徴的だったのは、一部のミニッツメンが「レイダーと思われる武装集団」を攻撃するべきだと主張し、これで議論が紛糾した時がそれだ。

過去の栄光も、この組織ではそのうち色あせて消え去る日も来るかもしれない――。

いや、もつと正直になるべきだろう。

当時のミニッツメンを離れたものの多くは、そんな理由では決してなかった。

ただ、命の危険に対するキャップでの報酬が、とにかく帰る家族を持つミニッツメンの問題となっていた。

残される子供と家族は、どう暮らしていけばいいのか――叫ぶ妻の声に、義父は目をそらし、私はただうろたえるばかりであった。

正義では家族を養うことは出来なかったのだ。

私は仲間に倅い。

ミニッツメンには失望したのだと口にして、レーザーマスケットと帽子を置き。

小さな入植地で農夫となった。

娘が生まれ、畑の収穫が始まると。

危ういミニッツメンの正義について思い悩むことも、考えることもなくなっていた。

それでもまだ連邦のどこかでミニッツメンは活動を続けていて、自

分はいなくても彼らは大丈夫なのだ、気休めと寂しさを殺してそう思っていた――。

バカだったのだ。

そんな保証はどこにもないとわかっていたはずなのに。

この連邦に、本当に穏やかで平和な生活が過ごせるはずがなかったのだ。

時折訪れる商人と語り、娘が自分たちを認識して話すようになる。妻は息子もいてもいいかもしれない、などと口に出して静かに燻る私を喜ばせようとしてくれた。

私は幸福に溺れ、この連邦ではあふれかえるほど増えていくレイダーについて忘れていたに違いないのだ。

ある日、あいつらはすべてを奪おうと家族を襲った。

私もその中に含まれるはずであったが、あの間抜け共はよりにもよって私が留守であることを確認しないまま、それをやった。

だが私の人生が終わったのはそこではない。

レイダーへの復讐心をたぎらせ、すぐにも私はミニッツメンへと戻ろうとしていた。そこにクインシーの事件が知らされる。

気が付けば私は希望を失い、死んだ目をしてグッドネイバーにたむろするごみ拾いとなり果てていた。

私は人生の全てを失っていた。愛する家族はもちろん、情熱を傾けてきた正義は汚され。過去の栄光はとうに霞んで消えてしまった。私の人生そのものを連邦が否定したと感じていた。

「私は君の愛にこたえるような男ではないんだよ。妻も娘も、結局はこのミニッツメンで掲げた正義以上のものとはなりえなかった男だ」  
「だからなによ？ それならそれでもいいじゃない。」

とりあえずは私をあなたの女にすればいいじゃない。そうやって利用しても――」

ミツキーは首を横に振る。

「そんな余裕も、時間すらも私には必要としていないんだ。もう義父がいて、妻がいて、娘がいる。彼らの死を私は背負って、だからまだミニッツメンでいられる。」

これでも抱えるのは限界なんだ。さらに君まで背負うような決断を下すつもりはないし。利用なんてことも考えていない」

「それじゃ、どこにでも行けって？」

彼女の声は震えていたが、私は冷酷な男だ。情けのかけらも感じさせぬ事実だけを突き付けることにためらうこともない。

「君は私にとって將軍の友人のひとりだ。それだけでいいし、それ以上は求めるつもりはない。君の感情は、どうでもいいんだよ。

だから君が、本当にこのミニッツメンに価値がないと考えているならば。すぐにここから出ていくべきだと思う」

最低だ、わかってる。

ケイトも最後には私にかける言葉がなくなってしまったようだ。

だが無言で2人が離れると、彼女は道のわきにひっそりと生きていた雑草にけりつけながら。悲しい声で「畜生、畜生」となんども吐き出していた。

その背中を私もまた悲しい目で見ているだけだった。

本当に申し訳ない。

だが、君のような女性には本当に向き合えるだけの男が。まだこの連邦でも残っているはずなのだから。

私と君との違いは年齢では決してないのだ。

君にはまだ希望がある。残されているはずだ。

だが、私にはもうこの新しいミニッツメンにしか残っていないのだ。

|||||

私とダンスは計画を練ると、翌々日の明け方にストロング砦への襲撃を決めた。

丸一日を休日にあてたのは、エルダーがしきりに勧めてきた体を休めるためというわけではなかった。

ケロツグから戦い続けた私が使っていた銃。コンバットマシンガンとショットガンが壊れてしまったことが原因だ。

当然だろう、年末からこつち。ずっと戦い続ける毎日だったのだから。

すぐにも代価品を求めたいところではあったが、やはりアキラが用意してくれたようなレベルのものは簡単には手に入らないとわかっただけであった。

そんな私の失望を感じ取ったのか、ここで装備を管理するプロクター・ティーガンは秘蔵の品だと言ってミニガンやガトリングレーザーを引っ張り出してきた時はさすがに困惑をおぼえた。

それらは威力こそ十分だが、今回はスーパーミュータントの砦の中心を2人で背中を守りあう戦いになる。

持ち回りの良さと弾の消費を考えれば、このチョイスはあり得なかったのだ、仕方なく私は新しく5.56ミリ弾を使用するアサルトライフルを求めた。

マクソンの任務は想像以上にうまく終わった。

そして私はなぜエルダーがこの砦にこだわるのか、その理由も知った。

この砦は、かつての時代は沿岸砲台、ミサイル基地、そして最後は兵器開発の秘密部門として研究が行われていた場所であった。

特にヌカランチャーの開発秘話については興味深く残っていたデータを讀ませてもらったが、戦場の兵士たちはそんなものを生み出した兵器局を「あいつら狂ってやがる」と話していただけあって、開発には尋常ではない犠牲者を生み出していたことが分かった。

そしてそれに使われる弾頭の多くがこの砦の倉庫に今も眠っている。

これにはさすがに私も顔色を曇らせてしまったのだが、それを見て、ついにダンスが怒り出してしまった。

彼は私に自分についてくるように命じると、道に戻って倒れているスーパーミュータントたちを顎で指し示した。

「この場所をよく見てみる。そしてこいつらを見る。」

お前も私と同じように、このおぞましいスーパーミュータント共を憎むべきなんだ」

「何を怒っているんだ、ダンス？」

「それを君は私に本気で問うているのか!？」

「——ただ、エルダー・マクソンに命じられた任務を終えたただけだ。ただそれだけだ、私にとっては」

「成程な。兵士として、B・O・S 流に対処してくれたというわけか。涙が出るほどうれしいね！」

「ダンス——」

「レオ、お前は認めるべきなのだ。人類は常に後先を考えずに歩き出しては、しっぺがえしに大きく後退するはめになるものだとな。このバケモノはそれを教えてくれる一つの例に過ぎない」

「それはもう、マクソンにも聞かされたよ」

「なら君はそれを正しく理解するべきだ！」

この狂気とは、我々はキャピタル・ウェイストランドでも何年も戦い続けてきた。ついに我々に優勢になったと思ったその瞬間に、新たに人造人間があらわれた。勝利は再び遠くへと消え去ってしまったのだ」

今日はやけに饒舌だ。

怒りの勢いを借りているのか、次々と熱い言葉が彼の口から飛び出してくる。

「君だって知らないわけではないだろう。知識人などと自称する連中が生み出したあのスーパーミュータントは、人々に何をこれまででしてきたのか。私はそれを直接この目で見たことだつてある。」

だからこそ、この人造人間共の脅威がさらに激しいものとなったときどんな悲劇がおこるのか。奴らがそのために何をしでかそうとするのか。

自分がそれを正しく想像できていると、君は本当に思っているのか？」

「そんなこと、私は別に言っではない」

「では、わかるだろう？ 奴らは邪悪な存在なのだ。人間に成り代われ

るのだから、人間は必要ないと考えている。君も恐れているあの最終戦争が、また繰り返されるにちがいないのだ。

そうなればどうなる？すべてが終わってしまうだろう、我々B・O・S・はそんな未来を真剣に憂いているのだ」

「わかったよ、ダンス。どうしたんだ、冷静さを失うなんて」

突然こちらを責め始めたダンスに私は驚いていた。どうやら彼は、これまでの私の態度になにか気に入らないものを感じているのだと、ようやくそれを理解した。

「……いや……お前をうんざりさせるつもりはなかったのだ。表現も過激になっていたな、気にしないでくれ。」

ただ、わかってほしいだけなんだ。お前がB・O・S・に捧げる忠誠は、決して個人の欲望や恣意的な富の独占などにつながるような小さな話ではないということを」

「その割には、ずいぶんと非難をされたようだったか？」

「——実はずっと気になっていることがあった。」

アーサーはお前と会って何かを理解したといったが。お前の方は何か感じるものがあったのだろうか？

それを、この任務に入る前にあらかじめ話しておくべきだったのだと、先ほど思っただのだ。話してくれるだろうか？」

感受性が人より強いのだろうか？

時々だが、ダンスの態度に違和感を覚える瞬間がある。今も怒り出したかと思えば、いきなり冷静になってすぐにでも話し合おうとこちらに要求してくる。

「隠しているわけではないが、アーサーを英雄視するものは仲間にも多い。本人はそれを喜んではいないが。とにかく君は、彼に何か思うものはなかったのだろうか？」

私は本当はダンスが私のマクソン評をそれほど聞きたがっているとは思わなかった。

むしろ別の疑問の答えの手掛かりを得ようとして、あえてこの問いを口にしたのだろうと予測した。つきあってみるとわかったが、彼は意外と素直に過ぎてバレバレであることがあった。これもそうだ。

なので私はそれに気が付かないふりをして、ダンスに付き合っていることにした。

「熱い男のようだ。若いとは思えぬ言葉は重く、責任を負うことへの役割を十分に理解している戦士の顔をしていた」

「もちろん当然だ。彼がこれほどのB・O・S.を作り上げるのに、どうして責任を負わずにというようななどと考えるはずがない」

「武勇伝でも、聞かせてもらえるのかな？」

「そんなつもりはないさ。だが、ここまでくるのに我々はただ戦いに勝利し続けたというだけではないのだ。」

それ以前には誇りを失い、終わりの見えない暗く厳しい道をあえてこの兄弟たちに共に歩ませようとしていた指導者がいた。アーサーは立ち上がった時、それでも我々はすぐには絶望から逃れられるとは考えられなかった。

だがそれは間違いだった。それを成し遂げたのが、エルダー・マクソンなのだ」

「別に私はB・O・S.の正義に疑問を投げかけるつもりなんてないよ、ダンス。ただ、それでも目にすれば平静ではいられないものがあるというだけだ。君の反応は、少し神経質すぎると思う」

ダンスはため息をついた。

私に指摘され、自己嫌悪にかられているようだった。

「そうかもしれない、ありがとう同志よ。確かに私は、冷静ではないなかったことは認めないといけないようだ。我々は任務を果たし、核弾頭の安全を確保したわけだし」

「そうだ。その通りだよ」

「ではお前は先に戻って、アーサーと話すべきだろう。彼にしても一刻も早く、お前の口から任務成功の報告を聞きたいに違いないからな」

「——お目付け役は、お役御免ということか？」

「そうは言わないが。お前だって私がそばで目を光らせているのは、落ち着かないこともあるだろう」

「お別れか。寂しくなるな」



「別に寂しく思う必要はないさ。私はこれからもお前のメンターであり続けるのだから。私の力が必要と思ったら、呼んでくれるだけでいい。どこにいても、私はきつとお前の隣へと駆け付けよう」

私はどうやらB・O・Sで友人を得ることが出来たようだ。

## 笑顔 その2 (Akira)

それは彼と彼女が丁度対決を終えた同時刻。

夕闇の中にあるグッドネイバーの入り口が騒がしくなる。

トリガーマンの呼び出しを受け、ハンコックはやれやれと部屋を出るが。そこにあのパワーアーマーをちらりと見るとさすがに緊張が走る。あのB・O・S.がまた？まさかこの町に言いがかりでもつけに来たのか？

だが、近づくとその心配がないことを知る。

市長は驚かされたことに怒ることもできないと、呆れながら声をかけた。

「おいおい、マクレディじゃないか。なんだ、そんなパワーアーマーを——」

「ハンコック市長、あんたに話があるんだ！頼む、聞いてくれっ」

「ああ、わかるよ。この町に来る連中は皆、俺に——」

「あなたの護衛だ！今すぐファールンハイトを止めてくれ！」

「……なんだと？」

「このままだと、マジでヤバいことになる」

「わかった——そいつを脱いで、俺の部屋にこい。話を聞いてやる」

それだけ言うと、近くのトリガーマンに耳打ちする。

市長の護衛の姿を求め、すぐにも町の中を彼らは探す。当然のようにいるはずもなかった。

ここから一気に事態は深刻化していくのである——。

夜が深まっていくと、次第に状況がはっきりとしてきた。

マクレディはハンコックに、あの女にはしてやられたのだと、いきなり結論から口にした。

彼女は、ファールンハイトは最初から何者かに誘拐されたアキラのことをずっと探っていた。

「どうやら“鼻なしボツビ。”の動きを探る中で、そのことに気が付いたらしい。」

ボツビから情報を得ようとしていた記者のソニーを密かに追い。同時にマクレディを焚きつけてアキラの捜索に乗り出させた。

だが、ここから理解しがたい行動をファーレンハイトは始める。

ソニーをようやく捕らえて尋問し、情報を手に入れる。だが、彼女はそこでなにも行動をしなくなった。

大事な駒であるはずのソニーも解放し、ボツビがダイアモンドシテイで準備を静かに進めていくことを黙って見ていた――。

「ソニーはどうした？どこにいる？」

「殴ったよ。そのあとは知らない、あの野郎を引きずってここに戻って来るのは骨を折ることになるだろうしな。そんな暇はなかったぜ」「ファヴはなにを知った？何をしようとしている？」

「最初の質問は正直にいうとわからない、だが。最後の質問なら答えられる。あんたの護衛、あの阿呆と殺し合いをするつもりだろうってことだ」

「……」

「どう思う？俺は間違っていると思うか？」

ハンコックはそれには答えず、部下に顔を向けると小さな声で「俺の金庫に人を送ってくれ」とだけ告げる。

護衛が何を考えていたのか、それはハンコックといえども正確なところはわからないが。そこにボツビが絡んでいるというならば、心当たりはあった。

「さて、マクレディ。お前はその大切な情報を、わざわざこの町で最も愛されている俺に知らせてくれた。その理由はなんだ？」

「わかるだろ、市長。あんたの護衛は間違いなくイカレてるってことさ。俺はそんな女が、俺の依頼人でもあるボスとの決闘騒ぎを止めたいんだよ」

「勝敗は気にならないのか？」

「ヤロウと女の一本勝負だって？冗談はやめてくれ。アンタや俺が知っているボスが素直に死んでくれるなら、この話は笑い話くらいにはなるだろうがよ。俺が知る限りそんなわけがない。

むしろあんたの護衛がくたばった時のことを考えて、ビビっている

のさ」

「フフン、そうだろうな」

ミニッツメンの将軍がこのグッドネイバーの扉を叩いたあたりから、確かに彼の護衛は沈黙することが多くなった。

てつきり愛でていた男のことで鬱屈したものを抱えているのかと思っていたが。どうやらそれだけでは済まなくなったのかもしれない――。

それからしばらくして、トリガーマンたちはようやく市長の護衛、フアーレンハイトを見つけることが出来た。

ハンコツクの秘密の金庫室の中。

連れ出した2人のトリガーマンは容赦なく顔面を破壊され、逆にフアーレンハイトは的確に急所を貫かれ、綺麗な顔のまま死体となっていた――。

マクレデイもキュリーも、真っ青になっていた。

ロボットであつてもエイダは無口になっていた。

ハンコツクは、表面上にはなんにも変化はなかったが。それだけに口を開くと周りはそれだけで震えが走る――。

「マクレデイよ、賭けをしておくんだったよな。お前はたんまりとキャップを稼ぐ機会を逃したみたいだ」

「ハ、ハンコツク市長――」

「いや、やめろ！今の俺は下手をしたら愛される市長ではいられないかもしれない。だから口を閉じろ」

「……」

「この騒ぎは止められない。噂はすぐに連邦へと広まるだろう」

ハンコツクはそうつぶやくと、顎に手をやって悩むそぶりを見せるが。身体から醸し出す雰囲気は明らかに修羅場に立つ時のそれである。この男が彼の街で、これほど恐ろしい顔を見せるのは、本当に久しぶりのことであった。

「おい！死体はいつ見れる？」

「動かしているんですか？見に来られるのではないかと、現場はそ

のまま残していますが」

「そうか、よくやった……なら、直接そこを見た奴はここにいるか？」  
「自分がそうです。確認して、すぐにここへ知らせに」

「本当か？それなら聞くが、殺された奴はどんな風に殺られていた？」  
「トリガーマン2人は耐熱スーツを着ていました。そのせいでスーツの外をのぞく部分をやられて。つまり顔面にそれぞれ数発ずつ、即死です」

「耐熱スーツだって？」

「ええ、姐さんは奴らに火炎放射器を使わせたようで——」

(俺の金庫の中で、あいつが火を使っただって？)

確かにイカレてる。

あそこには重要なものが山とあったのに、それを燃やす危険をわざわざ犯してあいつは火を使ったというのか？

ここでハンコックは一瞬、マクレディたちの方を見た気がした。

「他には？」

「ファールンハイトは頭部に一発、ですがこれは致命傷ではなかったようです。首筋を撃ちぬかれて、破壊され。失血によるショック死じゃないかと——それとですわね」  
「？」

「……てました」

「わかった。それでいい、とりあえず今から24時間は現場はそのままにしておけ」

「——わかりました。それでいいんですね？」

「ああ。気が変わったら指示を出す」

そう言うのとトリガーマンに外に行けと手をひらひらと宙を泳がせてみせた。

「さて、アキラの愉快的仲間たち」

「——笑えないぜ、市長」

「その方がいい、お前の白い歯を見せてみる。俺が全部引っこ抜いてやる——いや、今のは忘れる。」

それより、たった今からお前たちは72時間、俺のゲストにしてや

る」

「なに？客だって？」

「そうだ。この町で最高のホテルに部屋を取ってやる。ついでに町の中を好きに見回ってくれても、楽しんで構わない。だが——」

「外には出るな、か」

「いや、それだけじゃ足りないな。俺を怒らせることはなにもするな、これが重要だ」

マクレデイは人造人間であるキュリーを見た。

ここでハンコックに従わない、という選択肢はない。それにこの町の住人達は人造人間だけは嫌っている。ここでキュリーの正体が知られることは避けねばならない——自分にも火の粉が飛ぶ。

「ひとつ質問を」

「なんだ？」

「あなたは約束を守る男のはずだ。だから聞くんだが、その3日間をおとなしくしていたら。俺達は自由にしていい、そういうことか？」

ハンコックは頷いた。

レイダーの思考で言えば、仲間が殺されればそいつの家族、友人、飼い犬までかまわずにぶっ殺せ。そう口にするだろうが、それはハンコックの流儀ではない。

「約束する。お前達がおとなしく俺の客をやってくれれば。数日後にはむしろ出て行ってくれとクソツタレな尻を蹴飛ばしてここから追い出してやるよ」

「……いい子にしているよ」

マクレデイは機械たちがおかしなことを口にする前に、返事をする。

やれることはやったのだ。もう、自分たちが出来ることはほとんど残っていない。

|||||

——ハンコックが出し抜かれ、隠し金庫を破られた。

この噂は瞬く間にグッドネイバー中に広まった。

誰の口であつてもそれを止めることは出来ず、普段ならばハンコック市長を敬愛している連中であつても。この噂の痛快さには思わず口元を緩ませ、ついにして時代は変わるのかもしれないと早くもグッドネイバーの終焉を脳裏に思い描こうとする奴もいた。

だが、ハンコックは現場を凍結し、マクレディ達をホテルに押し込めると。

それ以上は何も手を打とうとはしなかった。

市長の部屋を出ると、町の門の正面に立ち。そこで無言のままずっと煙草を吸って何かを待っているようであつた。

トリガーマンたちはそんな自分たちのボスが理解できず、首をひねっていた。

仲間が殺されたのだ。すぐにでも報復に打って出て、鼻なしのボツビの一味の首に賞金をかけ。間抜けにも飛び込んできたアキラとかいうクソ野郎の友人共を皆の前で八つ裂きにしてみせればいいのに。だが、それ以上のことでもあるのだろうか？

無言のまま、立っているだけのハンコックの背中にはそうした住人達の好奇の視線が束になって突き刺さっている――。

次に市長に動きが生まれるのは、夜が終わった明け方近くであつた。

扉の向こうに足音が聞こえると迷うことなくひとりの人物が、そこをくぐって姿を現したのだ。

黄色のコート、ビジネススーツに、帽子。そして口元には表情を隠したいのか星条旗柄のバンダナが。間違えるはずもない、あのイエローマン――アキラがそこに姿を現していたのである。

「まさか、本当にこの町に戻ってくるとは思わなかった」

「……」

「では聞かせてもらおうか。なんで盗もうと思った？俺の物を」

「――目の前であつたから」

「なるほど、それはわかりやすい。そしてそれが本当であればと思う。お前が間抜けにも、あのボツビの奴に騙されたんじやなければ、な」  
「……」

「間違った決断を下したな。」

俺の隠し金庫は、これまで誰にも盗まれたことなんてなかった。まったく、この町でもいい笑いものになっているよ。町のそこかしこで皆が楽しそうに、このことを話しているのさ。

だが否定はできない。

するつもりもない、事実だと認めなくちゃならない。俺の物がお前とボツビに盗まれたんだってな」

「盗んだものを返せ、そういうことか？」

アキラはそう問いかけるが、ハンコックは会話をするつもりはないようだ。

自分の話だけが続けていく。

「お前たちが俺の金を盗んだというだけなら。ボコボコにして、骨の数本を引っこ抜いて、盗んだものをそっくり返してくれるだけで、俺は勘弁してやっただろう。」

だが、お前はファーレンハイトを。俺の護衛と部下を殺した——血が流れ、命が失われた」

「……」

「あるべきものを元に戻して、それで水に流しましょうとはできなくなった。お前とボツビには、血であがなってもらわなきゃならない」

「どうすればいい？」

アキラが聞くと、今度はハンコックは無口になった。

相手の反応に違和感を持っているからだ。

敵対しておきながら、ノコノコ自分の方から顔を出し。仲良しでもないのだろうが、それにしたって仲間を平然と売る——いや、まるで仲間に銃を向ける理由を手に入れるためのここにいるような。まさに奇妙な感覚だ。

だからわざとハンコックは焦らすことにする。

「死刑の宣告をする前に、少し話をしようか。お前とはそういうえば、し



ばらく話していない」

「——好きにしろ」

「どうしてここに戻った？俺がここで待ち構えていると、わかっていたのか？」

「フン、そこまであんたを知ってはいない」

「それを聞いて満足だ。」

俺がここにいることで、俺はお前を少しは驚かせたというわけか  
「否定はしない」

相手の余裕がいい加減、鼻についてきた。

ハンコックはここで揺さぶりを試みることにした。

「マクレディと自分をキュリーと名乗る女、それに見たことのあるアサルトロンを俺は押さえている。」

お前のやったことに激怒している俺は、彼らをどうしたらいいと思う？」

「俺の友人達だ。あとはあんたが好きに決めろ。そうすれば俺のターンが来る」

「ルールのある復讐の連鎖ゲームというわけか。その口ぶりじゃ、このグッドネイバーを炎の中に沈めると言い出しかねないな」

「……」

「最後の質問だ。お前はアイツを——ファーレンハイトを殺した。」

だが、様子を見に行った部下の話では出血性のショック死だろうと言っていた。つまり、即死ではなかった」

「——それがなんだ？」

「最後に彼女と何を話した？」

「あんたに言うつもりはない」

どちらが先かはわからないが、互いにフンと音を立てて鼻を鳴らす。

「今、ここで1.000キャップを払え、それですべて許してやる」

「——持ち合わせはない。他にないのか？」

「おいおい、俺の金庫を破っておいてそれも払えないとはどういうことだ？」

「まだキャップにしていけないだけだ。時間がかかる」

「そうかい、そうかい。そういうことなら、ボツビを追って行って。あいつの喉をナイフで切り裂いてもらうしかないだろうな」

アキラは無言で頷くと、勢いよく市長に背中を向ける。

ハンコックは一瞬呆れたが、慌てて声をかけた。

「おい、待てよ！お前、俺がお前のロボット——あのエイダとかいうのを調べなかったと本気で思っているのか？」

アキラは背中を向けたまま。だが動きは凍り付いたかのように止まっていた。

「あれはちよつとした移動式の金庫だったな。大量のキャップを詰めた袋をいくつ持っていたと思う？あいつら、律義にもお前のものだからと手を付けなかったようだぞ」

「そんなものは知らない」

「なら思い出せ。そしてお前も認めろ、自分がどんな馬鹿をやっているのかってな」

「——バカ？」

表情は隠せても、鋭い眼光は決して誤魔化すことは出来ない。

輝くその目は、もはや臨んだものを手にしたと喜び。そして狂っていた。

「もういい。ボツビはさらに大きな儲けを手にしようと動いているはずだ。ほら、早く行け！」

次の瞬間には、アキラの姿は町の中になく。入口は乱暴に閉じられた。

ハンコックは新しい煙草を取り出して火をつけると、大きく息を吐き出した。

「若いくせに、馬鹿をやるのにもっと素直に欲望を満喫できないものかね。ベットの所で愛をささやきあえば、何度だって天国をお互いが味わえるし、楽しめるのに——不器用とかいう話じゃないぞ」

首を横にふると、ハンコックはようやく自身の部屋へと戻っている。

ひと眠りする前に、保存したままの現場をこれから見に行くつもり

であった。

夜明け前のグッドネイバーは、もんでの市長と犯人による肩透かしを見せられて、ようやく眠りにつこうとしていた。

彼らには全く理解できない状況が目の前で繰り広げられ、どちらも血を流すことなくやたら話し合いだけで終わってしまったと、彼らはそう考えていた。

あのハンコックもついに終わりか——。一応はそうつぶやくが、それが現実になるとはまだなぜか想像できない。

実際、彼らの目の前で何が合意されたのかを皆が知るにはあと数日の時間が必要であった。だがその惨劇を耳にする前に、ダイアモンドシティから刺激的な情報が飛び込んでくる。

ハングマンズ・アリーのミニッツメンが、ついにレイダーたちとの交戦に入ったのだ——。

|||||

ハンコックが自身の隠し金庫に來ると、さつそく死者達と対面を果たした。

顔面を破壊されたトリガーマンたちはさつさと運び出させたが、ファーレンハイトの遺体はそれにすぐ続くことはなかった。

「なあ、こいつは最初からこのままか？」

「——はい、来た時からずっとこうでした。脈を確認するために触りました、動かしはいません」

「そうか」

ハンコックは腰を下ろした。

金庫代わりに使っていた車両にもたれかかる様にして、眠るように彼女は座らされていた。これは明らかに、殺害した者からのなんらかの想いがこうさせているのだとわかった。

「しょうのない小娘め」

もの言わない相棒に、市長は最後の別れを告げる――。

ここで時間は大きく巻き戻してみよう。

ボツビは周囲の騒ぎが終わったのだとわかると、目を輝かせて金庫の役目を背負わされた車両の中へと一番に飛び込んでいった。

「やったー！これよ、これが見たかったの――」

中で彼女が手にするのはハンコックの資産。だが、それは彼の利権構造をいかに張り巡らせたかという、その一部始終が記載されている証拠となりえるものだった。

「きつとここにあると思っていた。これはハンコックの犯罪を証明できる証拠――これであいつもオシマイよ」

「なんとかうまくいって、俺達にまだ命があることだけでもうれしいよ」

メルが後ろから声をかけるが、ボツビは聞いていないようだった。

「報酬はあるんだから、もう泣き言はやめなさい。この仕事をうまくやり遂げるには、あんたたちの力が必要だった」

「な、なあ。終わったんだよ――だから、やめないか。おい、ボツビ！」

メルが泣き言をやめて、いきなり懇願を始めたので。違和感からボツビは車両の外へと視線をやる。

そこで冷酷に輝く殺意に満ちた視線をボツビの背中に向ける。ピタリと頭部へと狙いを定めた10ミリピストルを構えたイエローマンの姿があった――。

|||||

グッドネイバーを離れ、バンカーヒルへと向かう道の途中で、アキラはフライヤーの背に乘ろうとしていた。

フライヤーは何事か抗議をしているらしく、ずっとなにごとか騒いでいるようではあるが。アキラはそれをまったく気にしていないようであった。

「…………この仕事はまだ終わっていない」

「任務は続ける。邪魔しかできないというなら、お前とはどこまでだ」  
冷酷な言葉に抵抗することが無意味と察したのか、フライヤーはついに沈黙した。

「ボツビを追う。どこに向かったのか、当然わかるよな？」

「――」  
「よくやった。おかげでこの仕事もすぐに終わるだろう」

言いながらピップボーイのコネクターをフライヤーへと接続する。  
ボツビは現在、バンカーヒルに向かっている。だが、そこからすぐに次の場所へと移動することは予想している。

（「鼻なしのボツビ」、お前は俺に嘘をついたな）

「鼻なしのボツビ」お前は俺達に言うべきことがあるだろう？」

殺意みなぎるイエローマンは、それでも一応は車内に立つボツビに話しかけた。

「嘘のことを怒っているの？悪かったわね。」

でも、少しは考えてみたらわかることじゃない。あのハンコックは市長とか自称していて、皆が大好きか、恐れているのよ。彼のものを盗むどころか、殺し屋を送りたいと言ったら。誰もこっちの相手なんかしてくれない」

「メル、言ってみてやれ」

「――だがな、ボツビ。これで俺達はハンコックに命を狙われる羽目になった。どうすりゃいいんだよ？」

「まだ泣き言？あんたもメルと同じように、メソメソしているってわけ？」

「この状況にお前はどうか、俺達に言い訳するのか聞きたいわけじゃない。」「どうしてくれる」のかを聞かせろ」

ボツビは黙り込んだ。元から扱いにくい奴ではあったが、賢いことはわかっていた。

そして今はボツビ自身のペナルティーを問いただしている。

まだ引き金に力が入っていないのは、余裕や脅しなどでは決してな

い。

許せると思える瞬間が来るかどうかを、不愉快なシーソーゲームとしてこの黄色の男は楽しんでるだけなのだ。

ここでつまらない時間稼ぎなど望めば、たちまちにして死体にされ。この2人は殺したばかりのボツビを抱え、ハンコックのところへ駆け込むだろう。

「私もこの計画のリーダーとして、多くの出費を担ってきたの。だからすべては渡せない——この紙の束だけもらっていくわ。残りはあんたたちの好きにして頂戴」

そういうと書類の入った箱だけを重ねてひとりで抱えると、その場からさっさと退散して行ってしまった。

「ボツビ、行っちゃったんだな」

「メル」

「あ?なんだい?」

「ここで長居は出来ない。バッグに急いでまとめろ」

「そ、そうだな。わかった、任せてくれよ」

欄干から落ちたファーレンハイトは、まだそこで大字になってもう動く様子はない。

数分とかからずにメルは4つのスポーツバッグにキャップになり、そうなるものすべてを詰めて、外に出てきた。

「これが持ち出せる全部だ。なかなかの儲けは出ていると思うけど、ハンコックほどの男にしたら、それほどではないかも」

「資産を貯めこむことは利益ではない。常に動かせる必要がある」

「——えっと、それはほかにも金庫があるって意味かい?」

アキラはメルのその問いには答えなかった。

「半分がいい。お前も先に行け」

「そりゃ——あ、ありがとう。あのさ、おかしな話だけど。」

お互いこの先でどうなるかわからないけれど、機会があるならまた一緒に組みたいと思ってる。これ、忘れないでくれよな」

言いたいことだけ言うと、メルもバッグを2つ両腕に下げてすぐにこの場から立ち去っていく。

それを確認してから、イエローマンは——アキラはついにファールンハイトのそばへと近づいていく。

目を見開いたまま、ピクリとも動かず。首からの出血はひどく、胸は呼吸していないようで動く気配はない。

それでもアキラは腰を下ろすと、軽々と彼女の体を抱え上げて見せた。

その瞬間、幽鬼のごとくゆらりと死者だと思われた相手の手が動き。そこには銀に輝く刃が、アキラの首元へと突きつけられる。

「まったく、つまらない感傷でこんなオチをつけて欲しくはなかったわ」

顔をわずかに上げ、紫にまで変色した彼女の美貌は凄烈としか言いようのない迫力があつた。

だが、アキラはそれに気にするでもなく。一瞬こそ動きを止めたが、そのあとは自分が思う通り。危険な敵を抱き上げたまま、車庫の中を歩き始めた。

口元には余裕ともとれる笑みがあるが、視線は怪しく。そもそもにして彼女はアキラの姿を捕らえてはいなかった。

それでも突き付けた刃はわずかに力を籠めれば皮膚を突き破って血を流し、さらに刃を動かせばそれで自分と同じく致命傷となるはずである。

アキラは車輪の前に彼女をおろすと、そこから余裕をもって刃物を彼女の手から取り上げる。

なぜかそうすると彼女は笑った。

「ありがとう——本当は目も見えてないの。震える指でうっかり刺してしまつたら、それこそハンコックに笑われる。お互い文句が言えなくなつたわね」

すでに決着はついていた。

ファールンハイトはハンコックの護衛としての役目から、ボツビに騙されようとしたアキラの前に立ちふさがり。アキラは任務と——はまり込んでしまつた状況から、引き返すことは考えなかった。

この悲劇……それはわからないが、このわずかに許された2人きり

のボーナスタイムに、先ほどの勝負の遺恨を入り込ませるつもりは両方になかった。

ファアレンハイトの目が見えないように、アキラの様子もまた、おかしくなっているように見えた。

目は彼女の姿に注力こそしていないが、何かの葛藤を感じているらしく。彼の無言の中に多くの混乱が生じているようにも思われた。

「アキラ——」

「……」

「あいつらに何をされたの？」

「——わからない」

ファアレンハイトの小さく揺れる腕が伸びてくると、星条旗柄のバندانを首元にずらして頬に手を置いてきた。

冷たい手であった。死者になろうとしている、今の彼女の手法だ。

「ソニーとボツビにもっと早く対処していれば。お互いもっと楽しい思い出もつくれたはずなのに」

「……わからない」

「大丈夫、ボスはわかってくれる。あなたはこうなると、知らなかったはず。」

でもこうなつたとしても、ハンコックはあなたが悪党だとわかつて喜ぶわ。正しい判断は、しなかったとしてもね。ひどい奴——」

アキラは自然にその手を両手で包み込む。まるでそれで、彼の生命力を分け与え、この時間を少しでも伸ばそうとでもいうように。

「ファアレンハイト——」

「謝らないでよ。今からあなたを殺す苦労はもうしたくないの。」

別にいいわ、こんな終わり方であっても」

「……」

「ハンコックが好きなの。皆がそうだった。」

でもそいつら、結局はハンコックの敵に回ってしまう。同じベツトでわずかの間は楽しんだ。でも銃を持つと、なぜかそいつらはいつだって反対側。いつもそう」

「俺もそうだった」



「違う。でも君にはそうなってほしくなかった。そうなってほしくなかったんだけどな……」

フアーレンハイトの細い指がアキラの口腔に入り込んでいく。

腕を伸ばすのに苦勞させまいと、アキラはその手を唇の力で支える。笑みを浮かべた彼女と指は、小さな動きをそこで止まらない。

だがそれもしばらくの間のことだった。

小さく、慌ただしい呼吸が始まると。すでに指は動きを止め、アキラの顎がその指を軽く挟んでそこから逃さないようにしていた。

そうしてついに彼女に死が訪れ、しかしアキラに悲しみはなかった。

視線を動かす。

あらぬ方を見つめながらも、笑みをたたえたまま時が止まった彼女が目の前にいる。

美しい、ただそう思った。

そして手を伸ばし、瞼を落とすと。そこで初めて己の歯に力を込めた――。

彼女の腕はようやく重力に従い、アキラの口腔内には千切れた中指だけが残された。

立ち上がり、バックを自分も両腕に抱えるともう振り向くことはしなかった。

外に出て、口の中で弄ぶ最後の感触に別れを告げようと、彼女の一部を嚙下する。

喉がごくりと音を立て、そのあまりの禍々しい音に。自分は悪魔のようだとアキラは感じていた――。

|||||

その日の朝、ダイヤモンドシティのパブリック・オカレンシアでは。発行人である姉妹の妹、ナットが混乱と恐怖に叩きのめされていた。

目が覚めると、いつも彼女の姉が仕事に使う机の前にバックが2

つ。見たことのないのがなぜか置いてあった。

恐る恐る中を確認すると、キャップになりそうなガラクタがびつりと詰まっているのである。

だが、彼女が怯えたのはそれではない。

机の上にあるターミナルに電源が入れられ、そこにこれをこっそりと運び込んだと思われる侵入者からのメッセージがしっかりと書き込まれていたからだ。

——取りに行くまで預かってほしい。必要なら、あらゆる手を使つてくれて構わない。

(誰だヨっ!?)

メッセージの主の名前は記されてはいなかったが、何となくはわかってしまったような気はした。

荷物の中には、星条旗柄のバンダナが混ざっていた。

それで思い出したのだ、先日のあの遭遇のことを。

アキラ——Vaulteerから出てきたもう一人の若者は、いったいどこからこれを持ち込んで。なぜ自分に合うことなく立ち去ったのか。気にはなったが、今のナットに答えはとも出そうにはなかった。

## ミニッツメン

マクドナウ市長の思惑に乗って、ミニッツメンへの攻撃を決定したのは5つのレイダー集団。

彼らは互いに同じ目的を持って動いていることを知ると、面倒なことに同盟関係をそうそうに構築してしまった。

年明けからのわずかひと月余りの間にも、連邦内での混乱は加速を始めたことを彼らは肌で感じており。

同時に最近では立て続けに災難（原因、主人公関係者）が続いていて、名を挙げたレイダーたちが狩られていることから、自分がその空席を埋める絶好のチャンスだと、皆がこの計画に乗り気になっていたのだ。

一方、それを迎え撃つのは將軍の客人2名（？）と。

支部長マクミランが率いる12名の若きミニッツメン達である――。

ここでハングマンズ・アリーについて今一度確認しておきたい。

そもそもここは、このポストンに今も残る堅牢な高層建築を左右に置いた路地裏でしかなかった。

だが大きくないレイダーの集団は、この場所の空間と資源の拡張性を犠牲にしたとしても十分に我慢できる要害の地だと見抜いたことが誕生につながった。

実際、レオもここは罠を用意したうえでパワーアーマーを用いた奇襲作戦でもって制圧に成功したが。それまでは誰もここに手出しをすることは出来なかったことは。彼らの見立ては正しかったといえる。

さらにアキラはこの場所を蜂の巣をイメージした完成図を見事に描いてみせた。

3ヶ所ある出口のうち一つは封印され、残りには見張り台を設置。

さらに整備用の器材やプランターでの作物などに加え、1階には食堂と客間が壁で区切られることなくそこに存在していて。兵士たち

はたいがいはこちらで自由に時間を過ごしていた。

向かい合う建物にはそれぞれ階段が用意され、そこから2階から上のぼれもするし、この階段を引き上げて登ってこれなくすることもできるようにしてある。

2階と3階の半分は兵士たちの居住空間で、立方体の個室では寢床をはじめとした家具と2枚の扉で一応はプライバシーの尊重は許されてはいたが。それが並んで長方体となっているせいで、兵士として階級の低いものの部屋は常に目の前を仲間たちがズカズカと足音を立てて歩くので、逆に心が休まることはなかったかもしれない。

3階には他にサンクチュアリのレッドロケットと同じように、支部長の個室と作戦室が用意されている。

ここでは階級の高さと、政治的な必要性から部屋は広々と（縦に長いが）空間が使われていて、誰にも聞かれなくなかったり、見られたくないときにも使えるように華やかに絵や電飾が配置されていた。

4階は防衛時に拠点に侵入してきた者達をここから見下ろす形で迎撃するために必要なものがすべて揃っており。同時に両側にそそり立つ左右の建物の屋上へと出られるように足場が用意されていた。

|||||

襲撃予告から5日、マクナマスと兵士たちはよくやっていた。

防衛力をさらにつけるために、与えられていたキャップを使い切る勢いでマシンガン・ターレットを10台もかき集め。ここに配置することに成功。

また、半月は立てこもることが出来る程度には弾薬と食料もなんとか運び込めた。

だが、そうした頑張りの代償として。ついに彼らの緊張と疲れはピークに達しようとしていた――。

1月末、それは妙に多くの霧がかかった早朝のことである。

見張り台に立つミニッツメンは、疲れからついつい立ったままで舟

をこいでしまう。

そんな時、霧の中を建物沿いにしゃがんでにじり寄ってくる。ムカデのように並んで進む、レイダー達がいた。

彼らの手にはそれぞれが物騒にも近接戦闘を想定したレンチャやハンマー、パワーフィストなどを装備している。

このまま奇襲で一気に勝負を決めてしまおうという魂胆なのだろう。

彼らはずい気づかれることなく見張り台の足元にまで到達する。ここからもうひと頑張り必要だが、それだけの価値はあるのは間違いない。

まずは頭の上でのんきに舟をこいでいる奴を黙らせ。続いて寢床でまだ夢を見ているであろう兵士たちも、さっさと始末してしまえばいいのだ。

これがうまくいけば、2時間と立たずにこの場所は再びレイダーの拠点として生まれ変わることになる。哀れにも眠ったまま戦うことなく死んだミニッツメンの敗北という笑える結果と共に。

だが――。

「っ!？」

「オ前ラ 何シテル?」

「ス、スーパーミュータントだっ!？」

見張り台の奴を処理してやろうと裏に回るレイダー達は、そこに腕を組んで壁に寄り掛かり。舟をこいでいるミニッツメンの見張りの背中をじつと観察(?)していたストロングと鉢合わせしてしまったのだ。

一瞬の驚愕が生み出した空白の時間。

ここから一番早く反応したのは、霧の向こうで地面からさっと立ち上がり。そこから飛び込んでくるなり先頭のレイダーの頭部にスレッジハンマーを振り下ろして最初のひとりを地獄に直行させたケイトであった。

彼女はこの襲撃を予想したわけではないが。

ストロングに合わせるように寝起きは出入り口の近くで横になり。

なにがあってもすぐに戦えるよう、常に武器をその手に握りしめていたのである。

「ほらほら、あんた達！お客様がいらっしやっただよ！」

頭蓋にめり込んだ金属塊を、強引かつ乱暴に足で蹴飛ばすと。続けて2人目の犠牲者へと飛び掛かる。

やけに手慣れた殴り殺し方を見せる女の登場からレイダー達もすぐに立て直そうと頭を切り替えようとしたが。ケイトの言葉で、目の前の人間は壊しても良いと判断したらしいストロングは、素手で相手を掴み上げ。四肢のどれかを、その暴力的な筋肉だけを用いて文字通り「引っこ抜く」という荒業を始めたことで、うまくいかなくなる。

「このあたしが、あんたらに情けをかけるなんて。まさかそんなわけがないさね」

「ケイト！ストロング チョー楽シイ！」

こうしてレイダーの親玉達は自分たちのもつとも楽なやり方が失敗したことを知る。

送り込んだ7人の潜入部隊は、半数を失って無様にも命からがら逃げかえってきてしまった。

「この腰抜けヤロウがつー！」

「——で、でもよ。ボス」

「やかましいっ。てめえらがノコノコ泣いて戻ってきたせいで、この俺が——」

よりにもよって武器を投げ捨てて戻ってくるなどという醜態をさらした自分の部下に罵声を浴びせようとしたボスのひとりであったが。言葉が終わる前に、後ろから出てきた別のひとりがいきなり帰った3人を撃ち殺してしまい。「なにをしゃがる！」と叫びそうになつて、必死にそれを飲み込んだ。

他の4人のボスたちの目が、怒りと嘲笑を込めた目を彼に向けられていることに気が付いたからだ。

奇襲に失敗したのは、まだいい。

それが仲間を見捨てて、命からがら逃げてきましたなどと。この始まったばかりの“ミニッツメン全滅祭り”でいきなりやられては、士

気にかかわるといふものだ。

「ああ、そうだ。簡単じゃなかったな、奇襲には失敗した……まあ、ちよつとくらいはハンデをやったつてことで。俺達がやることに変わりはない——そうだよな、皆!？」

レイダー達の咆哮は、冬のチャールズ川の冷たい風であつてもかき消すことはできない。

彼らの2回戦はそうしてすぐに開始される——。

暴力への興奮と怒りの声と共に2か所の出口にレイダー達が殺到するが。それを迎え撃つのはミニッツメンのレーザーマスケットと10基のターレットであつた。

この激突はすぐにダイアモンドセキュリティにも察知され、マクドナウ市長の元へと報告が行く。

「そうか、レイダー共がね。ミニッツメンも大変だろう」

「ええ、彼らは大丈夫でしょうか。市長？」

「はっはっは、なに。心配はいらないさ、あの最後のミニッツメン。プレストン・ガービーの率いるミニッツメンだよ？ここに住む我々のためにも、彼らはきつとこの恐ろしい対決に勝利してくれるものだ。この私は、すでに確信している」

マクドナウ市長はそういつてセキュリティや町の住人達には笑顔で語つたが。

自分の美人秘書にだけは、この戦闘でミニッツメンが勝つても——負けても、すぐに発表できるようなコメントを考える様にと指示を出した。

「私は有能な政治家だからね。こうした現実には、厳しい未来も予想しておかなくてはならないんだ」

そう語るマクドナウの顔は、先ほどと変わらぬ余裕を感じさせる笑みをたたえていたという——。

|||||

時間はここで巻き戻される——。

マクドナウ市長の黒い思惑で放たれたコメントは、瞬く間にポストンに知れ渡ったが。その勢いは衰えることなく、数日を待たずしてサックチュアリにまで達していた。

最後のミニッツメン、プレストン・ガービーも、当然だがそれを耳にした。

だが、残念なことに彼は善人であり。自分の選んだ人物への信頼は思った以上に高いものだったせいで、すぐには信じようとはしなかった。

(なんて噂だ、彼もうまくやってきているだろうか?)

事情を知っていれば、これは頓珍漢な考えではあるのだが。

旧ミニッツメンでは自分と違って長く部隊を率いた経験もある男に託したことなのだ。すでにグール追放などという、物騒なイベントを扇動してその地位を得た男を相手に、どうやりくりしているのかと気の毒にさえ思っていた。

その顔が青ざめたのは、町でばらまかれたというそのコメントが印刷されたビラを訪れた旅の商人から突きつけられた時である。

市長とひきつった笑みで写真を撮られ、あきらかにレイダーなどを刺激する言葉がこれでもかと市長のコメントとしてそこに記載されている。

それはミニッツメンを復活させた者たちが最も恐れたことであり。あつてはならない事が、すでに行われていたことが記されていた。

ガービーは自分がこの情報に真剣に向き合わなかったことと、託すべきではない人間を自分が選んでしまったという大きなミスに絶望しかける――。

「なんてことだ、なんてことだ!」

ガービーは自室の扉を蹴り開けると、己の無能さに怒りを感じながら必死に冷静になろうとしてレッドロケットのガレージへと階段を下りていく。

「整備班! リッチー、リッチーはどこだ!」

「……うるせえよ、なんだよ。いきなり?」



ガレージの中で所狭しと並ぶT-45 パワーアーマーの足元にうづくまる男は、不機嫌そうな声を上げた。

リチャード・サルディーンノこと、このリッチーはミニッツメンでは整備を取りまとめている人物である。

29歳のこの始終不機嫌そうなコーヒーを思い起こさせる南米の熱い血を持つ若者は、今のミニッツメンでもひと際変わり者として有名なエピソードをもっている。

なんとこのサルディーンノ、半年前まではあのハイテク・レイダー。ラスト・デビルに所属していた人物であった。

とはいえ、彼は別にレイダーになりたかったわけではない。

子供のころから外で遊ぶよりも大人の仕事場で機械油に触れることを喜んでいた彼は、ある日レイダー達にさらわれたことで人生が一変する。

周囲が圧倒的な暴力と体を破壊しかけるほどの薬物の魅力に犯されていく中、彼はレイダー共の便利屋として使われるようになる。それから20年余り、彼の人生は『食べる、寝る、仕事する。』「うるせえ」と言って時間を稼ぐ』こと以外をしなかった。

それがある日、いつも面倒な仕事を押し付けてくる連中の要求から、いやいや外に連れ出され。拳銃に襲撃に失敗したとわかると、彼をおいてさっさと逃げてしまう。

リッチーはそんな仲間の背中を見て決断したのだそうだ。

ある朝、レイダーそのまんまの姿で彼がレッドロケットに姿をみせると。

リッチーはガービーといきなり話をしたいと要求し、ライフルを構えたミニッツメンの卵たちを前に動じる様子は微塵もなかった。

「何をしに来た、レイダー？」

「俺はリッチーだ。お前が最後のミニッツメンとかいう奴か？」

「……プレストン・ガービーだ。確かに、お前の口にするような呼ばれ方をするときもある」

「そうか。なら、お前は俺をミニッツメンにするんだ。お前はそうするべきだ」

「——なあ、それはもしかして俺に命令しているのか？レイダーのお前を、俺達の仲間にしろって？」

「飯を食わせろ。寝る場所もいる、あと仕事もな。俺は賢いから、役に立つぞ」

不遜極まれり、とはこのことだろうか。

しかしガービーはここまでの会話の中で、リッチーに普通ではない空気をまとっていることを敏感にかき分けていた。それはアキラをしっていたからわかることなのかもしれない。

このリッチーの世界は恐ろしく小さく、そして美しいほどにシンプルだ。

飢えも渴きもなく、自分の仕事ぶりだけに満足する。彼にとって人生とはそれですべてになっているのだ。

気の毒ではあったが、だからこそガービーはそんな彼を受け入れようと考えたのである——。

「会議をやる。すぐに来てほしいが、その前に聞きたい。パワーアーマーは何台出せる？」

「……ない。ここにあるのはメンテ待ちだけだ」

「緊急の事態なんだ、リッチー。すぐにパワーアーマーが必要だ。彼らには昼夜を問わずに南下して、ボストンまでいってもらわなくちゃならない」

「だから、ない。一台も」

実際に目の前でパワーアーマーをいじってもこの回答である。しかし、ガービーも彼の扱い方はそろそろ覚えてきていたので、別にかしやくを起こしたりはしない。

「それは、まだ調整中だという意味だろ？」

「そうだ」

「動けばいい。そんなのでも必要なんだ」

そこまでいわれると、リッチーは作業をようやく止めて立ち上がり。自分のボスであるはずのガービーに不機嫌なツラを見せつけるように向き合ってみせた。

南米の血を感じさせる顔立ちだが、そこに彼らにあるような熱だけ

がバツサリと欠けている。表情にはどこか幼さが残っているのか、なんだかまだ成人すらしていないような若々しさがあつた。

「なら、調べる。会議室で」

「ああ、そうしよう」

ガービーはホツとして、背中を向けた。

やるべきことは山ほどあるというのに、こんな時にまたトラブルとは――。

だが、急がなくてはならない。もしも万が一にハングマンズ・アリーを失えば、そこを手に入れた將軍やアキラにガービーはどんな顔をしてそれを伝えたらいいのだろう。

(腐るな、ガービー！まだ終わったわけじゃない)

そしてプレストン・ガービーはピンチの時はさらに頼もしい男となる人物だ。

|||||

サンクチュアリのレッドロケット・トラックストップこと、ミニッツメンの仮本部3階では、ガービーによる作戦会議が緊急で始まつた。

冒頭でまずはガービー自身の謝罪がされた。

「まず、皆に俺は謝らないといけないだろう――数日前、ボストンから流れてきたあの噂のことだ。

皆はアレを不安に思っていたが、俺はそれを噂と断じて信じようとはしなかった。そうだ、間違つた処理を選んでしまった。

おかげで今、ここでこうして真つ青な顔で皆に頭を下げなくてはならなくなった。

だが、認めないわけにはいかない。

これは俺のミスだ、指揮官のミスだ。すまない――」

だが、そんな真摯なガービーの姿勢をミニッツメンの仲間たちはどうでもよかつたようだ。数少ない幹部候補から声が上がる。

「そんなことはいいいです、ガービー」

「いいです、って。いや、それでは——」

「噂でしょ？それが本当だった。なら、そつちが重要じゃないですか」  
「俺にとつてうれしい言葉ではあるが、テリー。これはそういうことじゃないだろう？」

「あたしらにとつちや、そういうことです。アンタ、真面目すぎる」

ミーシャ・ネイト——こと、テリーは元は傭兵であった。

彼女の両親は小さな傭兵団を運営していたが、テリーが30歳の時。後継者争いが起こってしまい、両親は彼女を拒否したので腹を立てた彼女は傭兵団を抜けて独り立ちをする。

といつても、彼女は両親のようにかのガンナーの如き軍隊を自らの手で生み出し、運営しようとは考えなかった。

それよりも戦闘技術の習得と、それを生かすために戦い続けた青春。そこで刻まれた体中の醜い傷跡に後悔して。数年を無為にバンカーヒルのクソ商人どもに奴隷のようにこき使われながら嘆いていた。

だがいまはミニッツメンとして、ここにいます。

「それでどうします？あつちに援軍を出しますか？」

「ああ、そのつもりだ」

「支部には新兵が多い。間に合いませんよ、きつと」

「まだわからないだろう？それに、その部隊は俺が自ら率いるつもりでいる」

「……」

ガービーの覚悟に、思わずテリーは口を閉じると。不愛想な目の前のリッチーの顔をちらりと見た。

なのにその男は不機嫌そうなまま、なんだか今すぐにでもガレージに戻りたそうな表情をしている。

「まずは確認させてくれ、リッチー。パワーアーマーはどれだけだせる」

「2台、動かせる」

「ソレでは意味がない。最低でも6人は欲しい」

「塗装も処理もしていないのが2人分、これ以上だと途中で壊れるか

もしれない。無理なんだよ」

「あの話が事実だったとわかった今、最悪。ミッキーたちはボストーン中のレイダー共を相手にしているかもしれない。それにパワーアーマーを着た2人だけでは、戦力で足りないぞ」

ガービーは嘆くように最高を求めるが、リッチーはない袖は振れないと首を縦にはふろうとしない。

北部を徐々に手を伸ばしている今のミニッツメンは、その道中で何台もの戦前のパワーアーマーを回収していた。

とはいっても、ひどいものなら200年前でも未完成品であったアーマーがほとんどだ。そんなものを、いきなり実践に投入するというのは、なるほどやはり正気の軍人の考えることではない。

「俺の留守の間は、テリー。君が部隊の面倒を見てもらいたい」

「ええ、それはかまいませんが。こっちはアンタがしているようにはできないよ」

「レキシントンのレイダーどもは、最近フェラルが活発に活動しているせいでそつちに気を取られている。それに、グリーントップ菜園への入植も完了して一段落ついたばかりだ。大丈夫だろう」

「うーん」

「問題が起こるかもしれないが、君は兵士たちに好かれている。十分に対処できる、俺が保証してやるよ」

「確か、將軍の客人を呼んでましたよね？ だいぶ時間がたっています  
が、アンタが出て行った後に来たかどうかどうします？」

「そうか、それもあつたな——出発までに対応を考えるよ」

「ヨロシク」

リッチーはこの会議で初めて鼻をすするといふ行為で参加した。

やはりガービーは援軍を自ら率いていくことをあきらめてはいないと理解したのだ。それならば——。

「ガービー、あと2台」

「用意できるのか？」

「そうじゃない」

「？」

「引つ張り出してくれば使える。すぐにでも、最高のやつが」

「——あれのことか」

ガービーの顔が歪んだ。

このミニッツメン復活に必要なだったロボコ工場襲撃の際、將軍とアキラが使った彼らのパワーアーマーは今もここで眠っている。とはいえ、アレは彼らの資産だ。

パワーアーマーがここへ集まってくるまでは、ここで借りて使つてはいたが。今はミニッツメンでもパワーアーマーを何台か確保することが出来たので。丁重に修理され、しっかりと地下室で管理されていた。

リッチーはそれを使えばいい、といっているのだ。

「あれは將軍達が善意でこちらに貸し出してくれた私物だぞ」

「まだ借りている。それでいいだろ」

「——仕方ないな」

ガービーはこうして増援を決定したが。皮肉にもそれはハングマンズ・アリーへの攻撃が開始されてから2日目のことである。

パワーアーマーで昼夜を問わずに南下したとしても、ここからはさらに数日間を必要としていた——。

|| || || || || || || || || ||

完ぺきではなかったが、それでもここは頼もしい要塞であったのだとミッキーが喜んでいられたのはレイダー連合からの3回目の攻撃をしのぐまでの話であった。

攻撃をはねのけられ、成果が見えないことにいら立ったのか。レイダー達はついに本気を出してくる。

2か所ある出口を猛然と攻撃を加えつつ。ここが陥落した原因となった、並び立つ両方の高層建築の外の壁をよじ登ろうと試みてきたのだ。

もちろんこの攻撃は想定されていたものだったから、ミッキーは数名を屋上へ送り込み。

壁にボストンのナメクジのごとくへばりついた彼らを地面へと叩き落してみせる――。

だが、その最中に屋上から攻撃してくるミニッツメンに気が付いたレイダー達は。強引にグレネードや火炎瓶を投げ込むことで反撃してきた。

それらはほとんどが全く意味をなさなかったが、ただひとつだけが防衛する2人のミニッツメンの足元を転がって、止まってしまった。最初はひとりではなく、ふたりから失ってしまったのだ。

そこから2日はにらみ合い続き、7回目まで連続で攻撃が繰り返される。3人が流れ弾で負傷し、ひとりは出血が止まらなくて命を落とした。

(俺達は良く戦っている。よく戦っているんだよ)

ゆっくりと近づいている限界と絶望にミツキーは歯を食いしばることしかできなかった。

さすがのあの押し包むかのような強烈な攻撃はむこうにも被害が多かつたらしく、さすがに連続では攻めてこないが(されたら耐えられたかわからない)、外となかでにらみ合っても勝ち合ってもこちらに勝利が近づいているとはちっとも感じない。

どうやらむこうは、こうやってにらみ合うことで我慢比べをすることも考えているのかもしれない。

兵力差なんて10対1どころか、それ以上かもしれないのだ。

こちらはずっと緊張にさらされて撃ちあいを演じるしかないが、向こうは大勢のレイダーを交代で攻撃に回すやり方ができる。

こちらの物資が尽きるまで撃ち合うのが先か。その物資が尽きる前に消費する人間がいなくなるのが先か。

とんだロシアン・ルーレットをやっているということか。

「ジリ貧だな、クソッ」

「えっ? なんですか?」

「――寝ぼけて泥を味わってた、なんでもない」

「さすがですね。俺なんかはもう、眠れたら食わなくてもいいって気

分です」

「……そうだな」

「ガービーは来てくれますかね?」

「必ずな。知らせはもう、サンクチュアリにも届いているはずだ。今だって——」

3階の覗き窓に若い部下と並んでそうやって小さな声で話していると、建物内を移動する気配を感じた。

あの勇ましいハンマーから2連ショットガンに持ち替えたケイトが弾薬箱をさげてやってきたのだ。

「補給のお時間ですって。坊や、缶詰も持ってきたから他の連中にも配ってきてよ」

「——わかりました、それじゃ」

兵士は気づかったのか、品物を受け取るとマクナマスとケイトを置いてすぐにその場から立ち去ってしまう。

あの日以来、マクナマス支部長はケイトと2人で会話することを避けてきた。

女性に「あなたとなら、なにかある」と告白されたことはうれしいとは思う反面。こんな状況であったとしても、こうして2人ではないことは彼女をまた勘違いさせるのではないかと恐れる自分がいる。

「——苦しいよね? あたしたち」

「ああ、わかってる」

「助けは、来ない?」

「仲間のことは信じている。このことを知れば、ガービーは決して見て見ぬふりをするなんてことはしない」

「それ、泣ける。あたしらの葬式の心配だけはしなくていいってわけね」

皮肉の笑みを浮かべ、憎らし気に返す彼女だが。

なぜか今は、それが弱々しく見えた。

「……君は立ち去ってもよかったんだ、ケイト」

「へえ、フツタ女の心配でもしてくれるんだ」

「本当にそう思った」



「手遅れだよ」

「それもわかってる——それでも、だ」

彼女は若い、自分とは違うのだ。

愛する家族を理由にしてかつてのミニッツメンには背を向けたくせに。

それを連邦に、レイダーに奪われれば都合よく復活したミニッツメンに戻って再び正義のために奉仕している。

再トレーニングでは、ガービーはミニッツメンは戦士でもあるが正義の証人でもあるのだと口にしていた。

武器をとれ、抵抗せよと合言葉のように口にしていた以前のミニッツメンからは考えられない教えであった。

そしてそれがガービーとミッキーとの大きな差でもある。

ガービーは新たな將軍を立て、正しくすべてをかけてこのミニッツメンを復活させてきていた。

だが自分はどうか？

本性はあまりにも醜い。復讐心で頭がおかしくなりそうなのに、まだ外面を取り繕ってそれを隠せているだろうかと不安におびえている。

マクナマスは——ミッキーはそんな自分の本性をあのケダモノどもと同じくらいに憎悪していた。

だがそんな男に、ケイトは口を開く。

「フウ、そりゃ。出ていこうとは考えた。でも——」

「あのスーパーミュータント?」

「ストロングね、フフフ。緑で、キモイけど、あいつはいい奴だよね」  
「君がアレとロボットと鍋を囲んでいたのを最初に見た時は、衝撃だった」

不思議と自然と笑うことができた。

「ソフフ、あの時はここは不機嫌なだけの牢獄だって思ってたけど——」

「今は違うのか?」

「——どこにもいくところなんてないんだ。ミッキー、あたしわね。」

そういうクソツタレな女なんだよ」

「……」

「コンバットゾーンも、ダイヤモンドシティも、グッドネイバーも嫌い。向こうもあたしを嫌ってる。名前を変えたとしても、あたしがいまさらなにもなかったかのように農家とか、退屈なことは出来ないのさ」

「——ケイト」

「それにつ、ストロングだけここに置いて行っても。それはそれで、迷惑だったんじゃない？」

自分が抱きしめるだけでも、今の彼女には何かの慰めになれるのだろうか？そんなことを考えても、それは出来ない。

「ケイト、私は君が好きだ」

「えっ、今更？」

「本気だよ。人として君が好きだ、本当だ」

「あ、ありがとう——服、脱いだほうがいい？」

苦笑いしてしまう、そうじゃないんだよ。

「いや、やめたほうがいい。空気が壊れる」

「そうだよ。わかってる——」

「君のことが好きだから、友人として忠告させてほしい」  
「？」

「信じなくてもいい……だけど夢と希望だけは、それだけはちゃんと持っておくんだ」

自分はそのどちらも失ってしまったのだ。ミニッツメンでいるのも、ただレイダーという存在への憎悪が必要だから。

そう続けようとした——。

ケイトはいきなり吹っ飛ばされていた。

床の上を転がりながら、それが直前まで優しい目で語っていた男が。いきなり自分を突き飛ばしたのだと理解すると、怒りがわいた。

だが、顔をあげて怒鳴り声を上げようとした時。もつとひどいことが起こったのだと、思い知る。

ホコリ、破片、衝撃。

それらが空間を埋め尽くしていて、自分もそこにいれば無事では済まなかったのだと理解した。

「なんだ!?!」上だ! 侵入されてるぞっ」

兵士たちの声で視線を動かすと、たしかに建物の屋上の隅に。ミサイルランチャーを抱えた、たった一人のレイダーが大喜びで次弾を発射しようと準備していた。

だがケイトはそいつに構わず、マクナマスを探す。その間にも、ミッツメンはレイダーに攻撃を仕掛け、2発目の発射を阻止していくつもの熱線が人体を粉にまでかえ、建物の間をぬける冷たく、そして火によって熱い風がそれを吹き飛ばしていく。

「どうやってここに!?!」

「クソ、入口から入ってきたんだ」

「何を言っているんだ?」

「これだよ」

レイダーのいた場所に調べに来た兵士たちは、侵入経路を理解し、絶望した。

そいつはステルスボーイという、使用することで光学迷彩めいたフィールドを発生させる装置をもっていたことがわかったからだ。

そしてそいつは任務に成功した、この場所を防衛するために必要な存在を……。

「チクショウ……生きてるだろ、ミツキー!?!」

「ああ」

声は帰ってきたが、安心など到底できる状態ではなかった。

一発のミサイルは、見事に狙いを外したが。それでもマクナマスの左足をみごとに吹き飛ばし、目的を果たそうとしていた。

防衛側の指揮官、暗殺。

レイダー連合はついにそれをやり遂げようとしていた。そうなれば、あとは数で押しつぶすだけ。

「大丈夫だから。片足はなくなっちゃったけど——あんたは指揮官だろ。命令できればいい!」

「ああ、そうだな」

マクナマスも自分の状態を理解していた。

ケイトがジャケットを脱いで必死にそれで足の出血を止めようと試みているが。今の自分に必要なのは清潔な手術室と、医者、多くの薬品と静かな時間がすぐにでも必要な状態なのだ、と。

そしてここは戦場で、その全てがないのだ。

数分で意識を失えば、それで自分は終わってしまう。

「縛ったよ！すぐにあんたの部下が薬品山ほど抱えてくるから、しっかりと頂戴」

「ケイト」

「大丈夫、皆ついているから。あんたの仲間たちがさ」

「無駄だよ、私は助からない。それより聞いてくれ、時間がないんだ」  
「ふざけんなよ！あんた、ここで先に死んで楽になろうっていうのか！？」

「頼むよ。後任が——頭が動かない。誰だったか」

「知らないよ！あたしはミニッツメンじゃない」

「そうだ。とにかくここを放棄して、脱出を図るんだ。奴らは追ってくるだろうから、簡単ではない。でも、ガービーが。彼ならきつと——」

いきなりマクナマスの身体から力が抜け、意識を失う。

ケイトは慌てるが、気が付いてしまった。彼の尻の下に、いつの間にか流れ出た血が池を作り始めている。どうやら足以外にも、激しく損傷していた傷口があったようだ。

「そんな、ミッキー!？」

自分の魂が口から出ていくような感覚にケイトは崩れるように座り込んでしまう。

だが、悲しむ時間さえ今は彼女に許されてはいない。

「攻撃だ、クソっ！スーパーミュータントがつ！」

こんな状況で、恋愛ドラマの皆に愛される女のようにさめざめと泣くタイプの女では自分は決してなかった。

「馬鹿ばっかりがノコノコと。いいよ、皆ぶっ殺してやる」

呪いの言葉を吐き捨てると、力強く立ち上がる彼女は振り返ることなく騒ぎの聞こえる方向に駆け出していく。

意識を失ったマクナマスはひとり、静かにいびきをかけ始めていた。

覚めることのない真つ暗な夢の中を進む彼には、この現実の厳しい状況に苦しめられることは。もう、ない――。

## 炎獄 (Akira)

この世界では人間は一步踏み出すと、うっかりグールになることがある。

逆にグールになると、あのすべすべした肌の人間に戻ることは出来ない。さらになにか別のものへと足を踏み入れようともがいたりすれば、あつというまにそこらを徘徊しているフェラル・グールへとレベルアップ。

だから大抵は、こうなった自分には恩恵が与えられたとは考えないし。それが“当然”の常識って奴だ。

だが、これだけじゃないんだ。

グールになってみるとわかることだが、ほとんどすべてのグールたちはこの狂った世界を別の角度で見えるようになる。

それは自分にもあったし、一緒に暮らす仲間たちもそうだったと言っていた。

だから、理解できる。

これは言ってみれば、自分に送られてきたタロットカードが強引に回収され。

新たな運命が次々とまた手元に入ってくるのを見る行為と考えることは出来ないだろうか？

自己嫌悪、パラノイア、異常性欲といった全てがパツとその瞬間に変わってしまうのだから。人間からグールに。

しかしだからこそ、自分がこれから進む道を選ぶときに、大きく変更するのにはいい機会となるはずだ。

だが、持って生まれた運ばかりは、どうしようもない――。

ジョーンズは「やめてくれ、乱暴しないでくれ」と相手に伝え終わる前に、自分が殴られるのと蹴られることが同時に行われたことを知った。

グールであることの利点の一つが痛み鈍感になれることだが。それでもクラクラと眩暈が終わらず、人間の身体であれば今のよう

うめき声をあげるだけではすまなかつたかもしれない。

そして相手はそういうことをちゃんと理解している。

「おーおー、なんか痛そうですねえ」

「ぎやはははは」「腐った脳味噌がつぶれて、ガーガー喚きだすんじゃない?」

抵抗は出来ない、囲まれているのだ。

それにそもそも武器だつてない――。

今日は本当に運がなかった。

知り合いの旅商人が約束の期日を過ぎても居住地に姿を見せず。つい、気になって遠出を試してみれば。

旅商人はすでにこの世にはなく。彼をこの世界から追い出した連中は、ジョーンズを彼と同じ目に合わせてやるからと彼らの家へと捕らえられ、引きずり込まれていた。

「なあ、話をしようじゃないか。私はジョーンズ、この近くの――スロツグの住人なんだ」

「そこなら知ってるぜ、グール」

「あそこはちゃんといつか焼き払ってやろうって、決めているからよ。俺達が襲われちゃ怖いし、グールは臭くていけねえ」

「ママー、グールがあたいたちを食べにくるー」

何がおかしいのか、腹を抱えて笑っている。

だがそんなことで簡単にあきらめることは出来ない。

「聞いてくれ。あんたらは、よくうちに食料を奪いに現れるだろう?」

「グールはなんでも食うからいいが。俺達はグルメだからよ、食えるものしか食わねえ」

「――なんでもいい。気が済んだのなら私を開放してほしい。もし、私を殺したりすれば。仲間が君たちを恐れて、あそこからにげだすかもしれないだろ?」

「……」

「どうだ?そうは思わないか?」

「――つてことは、逃げられる前に俺達できっちり消毒してやらないとなー」

『イエア!!』

残念だが話にならない。どうやら、覚悟を決めなくてはならないようだ。

ところが――。

「おい、あいつ。誰だ?」

妙に冷静な声が奴らの中で上がると、こちらをなぶっていた全てが同じ方向に視線を向けたのを感じた。

私もつられて、そちらを見る。

ここはサウガス製鉄所。

あの悪名高きガンナーにも負けないと自ら豪語する、フォージなるレイダー集団が占拠している危険な場所。

その入り口に立つのはイエローマンこと、アキラである。

無言であったが恐怖などみじんもなく、幽鬼のような凶相はさらに悪化しており。これまで隠していたバンダナの無いそれがはつきりと誰の目にも見えるようになっていた。

若き東洋人は笑っていたのだ。

その姿、まさに鬼そのものである――。

|||||

ジョーンズは自分が怯えていないことを願った。

震える声では、この感謝の念を伝えきれないのでと心配だったから。

「あ、あなたには礼を言わないと。助かったよ、本当に。ありがとう」

「……そうか」

すべては終わっていた。

これまで人の争う姿や、殺しあう場面を見たことはあったが。

今、彼の前で行われた惨劇の光景はあまりにもおぞましく。そして圧倒的に過ぎて、逆に爽快にすら感じていた。

先ほどまでジョーンズを囲み、笑っていた奴らは倒れて動かなく



なっていた。

「ダメだ、我慢できそうにない。ひとつ——質問をしてもいいだろうか？」

「なんだ？」

「その、あんたを怒らせたくはないし。もしかしたら、とても失礼なことではないかとも。思うのだけれど——」

「言ってみろ」

感情のない言葉、ジョーンズは冷や汗がどつと自分に流れるのを感じ。

ゴクリ、と音を立ててつばを飲み込んで見せる。

心の中では「やめたほうがいい」とささやいているが、やはり止められなかった。

「あ、アンタは今」

「ああ」

「こいつらを、フィードの連中を、その——食べたのかい？」

相手に変化はない。だがその背筋が凍るような禍々しい凶相はそのままだ。

しかし、血に汚れた口元は動く、逆にジョーンズに問いを投げてくる。

「お前が見た通り、それが答えだ」

あの時、フィードの連中は一瞬だけ戸惑ったが、すぐに間抜けな新しい獲物が自分たちの前に現れただけだと考えると、氣勢を上げてイエローマンに襲い掛かっていったところまでは、現実だった。

放たれた銃弾は何発も黄色の身体をとらえ、そのたびによろめき。まだくたばるな、などと暴力の予感に歓喜する彼らはすでにそれだけで勝利を確信していた。

だがすべては逆転する。

彼らがそれに気が付いたのは、あれほど確かに銃弾で貫かれたはずの男の服が、ちつとも血で汚れていないな、と違和感を覚えた時であり。

それに気が付いた時には向こうの牙は、フィード達に逃がすまい

と逆に襲い掛かっていく。

町に行けばどこにでも見かけるようなただの人間にしか見えないのに。

銃弾が、レーザーが、そして真っ赤に獲物の血で汚れた彼の口の中が——フィンド達を破壊して回っていた。

ジョーンズは頭を振って、それらのシーンの特に不適切な部分は見なかったことにした。それくらいは、簡単なことだと思えた。

「とにかくありがとう、あんたには礼をしたい。それに、ここから離れたほうがいい」

「……」

「こいつらはこの製鉄所を住処にしている、フィンドっていうレイダー達だ。ボスがまだ中にいる、危険だ」

「スラッグ、だな？」

「——!?あんた、知っててここにいいのかい？」

「そいつの客に用がある」

「なんてことだ……」

「あんたはもう帰れ」

「ちよつと待て。まさか、中に入るつもりかい？」

イエローマンは答えない。

答えないばかりか、もう話すことはないと背中を向けて。ジョーンズが恐れた通り、製鉄所の入り口に向かって歩いていく。

「私はジョーンズ……この近くに住んでいる！」

なんとか伝えようと叫ぶが、イエローマンはそのまま建物の中へと姿を消してしまう。

「良かったら……もし、生きていたら。ぜひ、うちにも来てほしい。スラッグっていう素敵な場所なんだ」

小さく、そして弱々しい声になるのは。今更にして自分が本当に“運が良い”ということに気が付いて、安心できたからだ。

そして改めて知ることになった。

このような狂った世界では、いつもは人々を苦しめる。つまりは連邦のような存在であっても、受け入れられないような悪性の塊のよう

な存在が生れ落ちることがあるのだということ。

そしてそれは今、自分の目の前を横切って行ってしまった――。

あのような修羅の道を平然と進まずにはいられぬ存在は、いったいどのような因果を背負わされたのか。ただのグールでしかないジョーンズにはわからない。

きつと理解できることはないのだろうと、思う――。

|||||

“鼻なしのボツビ”には我慢できないことがあった。

連邦のグールにそうした夢だの希望だの、青いことを語らせると。必ず出てくるのが、グッドネイバーであり、それを生み出したハンコック市長の名前だ。

それがボツビに深い絶望にも似た憎悪の炎をたぎらせてならない。ビジネスと割り切つて必要だからと頭を下げた時もあったが、あいつはまるでこちらを愛しい生娘のように称え、褒め、王のように新たな隣人よ、この町にようこそと告げてきた。

あの町はそんなおかしな市長を愛し、恐れ、尊敬してやまない。

自らをあの旧世界に存在したとかいう“ハンコック”という偉人の名前で呼ばせる、変人の偽善者。

悪事を許し、悪事を自らも行い。しかし、許せぬ悪事には断固として存在することを許さない――。

光を感じられないグールとなつても、なお真つ黒に輝き続けるダイヤモンドや太陽のような存在。

圧倒もされるだろうし、好意を抱かずにもいられないだろう。

だが決して天使というわけじゃない。自分たちと同じ、光に嫌われた堕ちた存在であるのに。

そしてボツビにも夢があった。

グッドネイバーとハンコックの伝説。

それを叩き潰すために、バンカーヒルを我がものにせんと計画した。

そのためにトリガーマンと呼ばれる、ハンコックの兵隊に対抗するため。いくつかのレイダー達をまとめて、彼らのフィクサーとなつてあの商人どもの町を手に入れようと考えていた。

バンカーヒルは商人の影響が強すぎるという弱点がある。

武器や殺し屋の質に頭を悩ますより、資産だのキャップだったのでこの世界でやっていけると本気で考えているようなお花畑の連中だった。

最初の計画は見事にハンコックに叩き潰されたが。

これからは違う。手に入れた情報を小出しに使い、グッドネイバーに休むことなく破壊仕事を仕掛け。その男が自らの町を引き裂こうとする、そうしたひび割れをふさぐことに必死になっている間に、ボツビはこんどこそバンカーヒルをその手にできると考えている。

だが、どうやら簡単ではないらしい――。

「ねえ。スラッグ、聞いてちょうだい」

「なんだ、グールの婆ア？」

「あんたはあたしの計画に参加すると決めた。それなら、計画を進めるためにこつちの意見も聞いてもらえらるようになってしまうのよ」  
「どういう意味だ？ しわくちやの婆さん」

「――まずはそうね。例えばグールでも、ここにいるのは立派なレディのひとりなのよ。だから、あんたのパートナーとして、それなりにリスペクトしてくれないと。関係の改善はすすまないって、頭はないのかしら？」

「婆アつてのは死にかけているもんだ。そしてお前は婆アで間違いない」

最初の計画でも戦闘力こそ十分以上に合格ではあっても、あまりにも暴走しそうな危険な噂から、候補をはずしていた連中のボスとあつて。話し合いはまとまっても、この計画の未来に待つ利益に、この狂った男はまったく集中しようとしてくれないのだ。

つまり、話が通じない。

「くだらない処刑ショーなんて、いつでもできることじゃない」

「いつだってやっている。必要ならそのたびに」

「なら、退屈になるまでそいつを延期してくれればいい。計画よ、あた

したちの計画。他に参加する組織をどこにするのか、早急に決めて――」

「そんな必要はない。フィードは誰とも、組まない」「なに?」

「婆ア、お前の頭と俺と、俺のフィードが全てもらう。俺の王国はそこから始まる」

「――スラッグ、何を言っているの?力が足りないわ、今のアンタであつてもね。わからない?」

「いや、クソツタレ婆ア。お前が分かっていない。

これからフィードはさらに人を集める。とても、とても大きくなる。この場所では足りないくらいに、人が来る。そいつらは危険だ。俺はさらに、強くなる」

パラノイアか……だが、それでは困るのだ。

「とにかく――」

「とにかく処刑だ!婆ア、わかったな?」

こうまで言われたら、ボツビも何も言えなくなる。

フィードの処刑ショーはだいたいパターンが決まっている。

スラッグが裁判官のふりをするために、セッティングするのだから自然とそうなってしまうのだ。今回もそうだ。

近くに住む一家の気の弱そうな若者が「フィードに参加できるかどうか」を判断するために、用意されたらしい。

フィードはどこからかさらつてきた哀れな入植者たちを縛り上げ、若者にそいつらの処分をさせようとする。

「わからないのか、ジェイク?お前にその価値があるのだと、俺と仲間たちにそれを示すだけでいい」

「でも――でも、あんたに頼まれたことはちゃんとやったじゃないか。贈り物は受け取っただろ?」

「家族から宝を盗めば、それが強さの証明だど?そんなわけがない」「そんなア」

「だが、お前の贈り物は素晴らしいものだった。この価値あるものを

持つべき相手に渡せるだけの頭がおまえにあると思ったから。こうやってお前に特別にチャンスを与えてやっている」

「俺は仲間になりたいわけじゃない。あんたらにあの場所と、そこに住む家族には手を出さないと約束してくれるだけでいいんだよ」

「これが最後だぞ？捕虜を殺せ、残忍に、むごたらしくな」

「連邦の外で襲撃すると言っただろ？だいたいこの人たちは脅威でもなんでもない」

「価値を証明しろと言っている。ここで死ぬのは、そいつらか。それともお前——」

スラッグの演説は突然に打ち切られる。

儀式の背後で、突然扉が開くと。イエローマンが、平然と部屋の中へとはいつてきたからだ。

|||||

スラッグは不快には思ったが、動揺は見せない。フィードの戦士だから当然だ。

「外にいた価値のない奴等と遊んでいたのがお前か。ここまで入ってくるとは、たいした奴だな」

「——あれが、フィードか？」

お前の部下はバーベキューが好きでたまらないと材料をなげつけられてしまったが。残念ながらそのどれも“味がイマイチ”で退屈だった」

イエローマンがここまでに至る現実を起こしたことを思うと、その表現はあまりにもひどいセンスであったが。スラッグはこれを単純にジョークと受け取った。

それが言葉通りだと知るのは、おそらくはここにいて、ただひとり——。

「ハハッ！面白い奴だな。俺はお前を気に入ったぞ、ガッツがある。価値も間違いなくあるだろうな、こんなことは本当に久しぶりだ」

普段ならポツビは絶対にしないが、スラッグの話が途切れたのを

計って自分から問いかける。

「ここにきたのはなんでかしら？追いかけてきたの？それとも何かある？」

「ボツビ」

なぜかもう隠そうともしない凶悪な表情が自分に向けられたと知ると、ボツビの背中に冷たい汗がはつきりと流れ落ちる。なぜか、あの金庫室の中で冷酷に撃ち殺されている自分の姿を頭の中で思い描いていた。

これは、殺気に違いない。

「なに？」

「ハンコックと話した。お前の命が欲しいと言っていた」

「……メルは死んだ？」

「さア、知らないな」

「あいつは捕まらない。いい鼻を持っているもの、それならどうして——」

嫌な予感が頭をよぎる。

「あたしをあいつに売ったのね？嫌、それではここにいる理由にはならない」

「クソ婆ア！あいつと話すのはまず俺だ。俺が話す——」

「口を閉じるのはあんたよ、このクソガキ」

「なっ!？」

溶鉱炉の火に照らされてもわかるくらい、レイダー自作のパワーアーマーを身につけたスラッグの顔は真っ青になる。

あまりの怒りに頭の中が真っ白になってしまい。空白の時間が生まれてしまう。

だが、ボツビとイエローマンの会話はフィードの存在を無視して続けられた。

「あんたがそもそもハンコックに捕らえられるはずがない。あんたの“お仲間”は、そんなことを許さないはず」

「……」

「そもそもあんたが命惜しさにハンコックと取引したつてのが、おか

しい。だってそんなことをする必要は——」

最悪の答えがボツビの脳裏に浮かんだ。

それを否定しようとしたが、できなくてことが詰まる。

イエローマンの口が開くと、恨みに満ちた憎悪の言葉がそこから流れ出してきた。

「お前は嘘をつき、選択肢を奪い。なによりも”本当の理由”を最後まで俺に言わないですまそうとしたな。俺がお前のような奴が考えることに気が付かないと、本気で思ったのか？」

「なんの——なんのこと？」

「お前が金庫を襲うのに俺を選んだ、その本当の理由だ。」

どんな結果になろうとも、俺はあそこにいた彼女への有効なカードとなると考えた」

「……」

「最悪、ハンコックらに見破られたとしても。あの場でファーレンハイトが申し出るために俺が必要で。俺がそれに答えた時は俺と彼女の関係はまだ続いているのだと周りは考える。男のために、ハンコックにとりなしたとな。」

あんたはそれで少なくとも、わずかばかりに市長の周りに火種をふりまくことが出来たってことになる」

「自分を棚に上げないでくれない？」

それがわかって、あんたは自分の手であの女を殺したんじゃない。あんたの銃が彼女の首筋を見事に貫いたところ、この目でちゃんと見ていたんだから」

スラッグはこの瞬間に、いきなり復活した。

身近に置いていた哀れな入植者をいきなり蹴飛ばすと、「助けてくれ」と懇願しながらも無情にも溶鉱炉の中へと消えていく。

「俺だ！俺こそがファイブのスラッグ！俺が話しているなら、俺の言葉を聞け！」

瞳孔は開き、そこに理性と知性のかけらも残ってはいない。

「ジェイク！殺せ！すぐに殺せ！」

発狂するスラッグだが、彼をまったく恐れぬ存在がここにはいる。



イエローマンは誰もが分かるくらい、はつきりと嘲笑を込めて鼻を鳴らすと。怯えているだけの年の近い若者に口を開く。

「お前、死にたいのか？」

「え？ええっ」

「なら、その人を連れてここから消えろ。残れば慈悲はない」

「どうしよう、どうしよう、どうしよう……」

「邪魔だっ!!」

それまで秘めていた殺気があふれだしたのだろうか。響く声は腹の底までをも震わせ、ジェイクと呼ばれた間抜けな少年は、半ば引きずるようにして囚われていた捕虜の腕をつかむと部屋から飛び出していく。

「クソっ！ジェイク、俺は最後のチャンスと言ったんだぞ！」

スラッグが声を上げたが、それが背中に届く前に部屋の扉は静かに閉じていた。

そしていきなり、ジェイク達のそばでなににもできないでいた無能なフィンドのレイダー2人が。無言のまま崩れ落ちるように溶鉱炉へと落ちていく。

いつの間にかそれを抜いていたのか。

手の中にあるそれは銃口から煙をくゆらせており、イエローマンは階段に向かって歩き出していた。

ボツビやスラッグがいるところまで行ってやるということだ。

「いいぞー！こっちに来い！俺の手でみじめな最期を味合わせさせてやる！」

（冗談じゃないよっ！）

この瞬間にボツビは計画とスラッグを捨てた。

今はとにかく、ここから離れないといけない。

だがここから逃げ出そうにも、ホラー映画のモンスターのように出口の横を足取り軽く登ってくるあいつはすぐそこまで来ている。

「はっはー！」

スラッグは歓喜の雄たけびを上げる。

目の前に迫るのが、まさしく彼が見る死神のごとき恐ろしい相手と

もわからないまま。それでも自分の圧倒的な勝利をしんじているのだ――。

|||||

ジエームズはそれでも素直に帰る気にはなれなくて。

距離こそとつたが、木の陰の間からサウガス製鉄所の様子をうかがっていた。

あの若者が入っていつてから、明らかに建物の雰囲気が変わったように感じていた。

建物の中から悲鳴や争う音もわずかに聞いていたかもしれない。

そのうち入口から外に逃げ出してくる人影が見えたが。彼らは何事か話すと、お互いが別々の方向に向かって逃げて行ってしまった。

あれは自分以外にもとらわれていた旅人かなにかだろうか？

「……まさか、アレが噂に聞く。不思議な男、なんだろうか？」

黄色の帽子に、黄色のコート。

だがビジネススーツとは聞いていないし、銃は使ってはいたがリボルバーではなかったはずだ。

なにより――あの大きく開かれた口でもって。人間をスーパーミュータントのように、噛みちぎったのは凄まじいとしか表現のしようもない。

「無事だといいいんだが」

改めてここに自分がいてもしょうがないような気がして、ジエームズはようやく立ち去る決意をする。

そして文字通り、サウガス製鉄所のフィードは壊滅した。

スロッグが率いるフィードと連邦の人が聞けば、あのガンナーにも名は知れ渡り。その知られた蛮勇によって引き抜かれてしまうほど、強力な存在だと評価がされるような連中であったのに。

そのスロッグの最期は、彼自身が考えてもみなかったひどい瞬間となった。

「ひ、左肩が……俺の、古傷だった」

まったく無意味な気がかりであった。

パワーアーマーを着ていたスロッグの両腕は、すでに溶鉱炉の中へと放り投げられていたからだ。

そんなスラッグの元へ戻ってくるイエローマンの姿は、もはや人のそれではない。

顔が、手が。服が隠さない、あらわになっている部分は、あのエメラルドグリーンの輝きでもって塗りつぶされ。表情を読むどころか、これでもまだ本人は自分を人間と思っている、その存在を認めることすら難しい。

「……時間だぞ」

「うっ、うっ」

「まだ重いなら、足も」取り外そう」な」

襟首をつかまれると、重々しい音と共に引きずられて地面と接触する下半身からの振動にスラッグは哀れにもうめき声で痛みを訴えることしかできない。

「自作のパワーアーマーを自慢する奴は多いが、大抵は評価に値しない。

バランスや凡庸性を無視するから、限定された状況でしか力を発揮しないからだ」

「ううっ」

「なんであれ、生まれる者には調和のある美が必要だ。それは時とともに衰えるが、手を加えることでさらに美しく栄えることもできる。だが、お前たちのそれにはない」

「やめろ、やめろよっ」

「これまでレイダーはなんであれ、クソだと思っていたが。愛せるレイダーもいるかもしれないな、面白い」

そうして生きてまますラッグを、彼がそれまでそうしてきた連中と同じように溶鉱炉へとアキラはパワーアーマーごと放り込んでみせる。

その姿を見ていればわかる、慈悲など欠片もないのだ。

鼻なしのボツビはまだ生きていた。

とはいえ、逃げることはもうできないだろう。往生際が良すぎて、嫌になるが諦めるしかない。

足首を狙われて見事に破壊され、片腕には鉛玉が貫通しなかったせいか、ひどい痛み方をしていて不快感が凄いのだ。

「こんなになるとは、思いもよらなかったねえ」

ボツビはそう言って目を開いて見上げると、そこにはいつの間にもイエローマンが立っていた。

だが、先ほどまでとは違い。見る限りは普通の人間の姿にもどっていた。

「あの連中がね、あんたを探しているとわかったのは。ハンコックがあんたを気に入ったと聞いたあたりだよ」

聞かれもしないが、ボツビは語りだし。イエローマンは——アキラは黙ってそれを聞いていた。

「連中が何を考えているかなんてわからない。でも、いつも『いつか返してもらおう』といって、ねがいをかなえてくれたんだ。もちろん、そんな関係に不安になる奴もいたらしいけど。」

ブルっちまうと、あいつらはそれを見抜いて処分しようとするんだよ。だから、あたしはずっとそれなら借りて置くって口にしていた」

視線を相手から外し、床へと落とす。

「あんたが連中の所へ」戻ったのは、あたしが教えたからさ。珍しく興奮して、あんたを家族だなんだと騒ぐから。たつぷりと恩を着せて、教えてやったんだよ。」

記憶がないとうわさがあったから、思いもしなかったね。

まさか、あんたがああの連中と敵対したなんて。そうでないと、この話の結末はおかしい。連中はアンタを取り戻せると本当に喜んでいたら、あたしにこんなひどい最期をくれる理由もないからね」

「……」

「ちよつとした、会話じゃないか。どうせ長くはないんだから、さつさと答えなよ。イケずな男だねえ」

「俺は——誰なんだ?」

ボツビは乾いた笑い声をあげた。

虚無感に満ちた、悲壮な笑い声であった。

道化師にも似た哀れな話の登場人物が自分だとこの瞬間に知ってしまったのだ。

策でもってハンコックという巨星を地上に落とし。そこに新たなボツビという星を輝かせようという企みは。

ただ危険なうえに“壊れた”兵器を使って無理に物事を動かそうとして。ハンコックに向けてはなつたと思つた攻撃は、なぜか戻ってきて自分の心臓を貫いてみせたということだ。

「アキラ——少なくとも、グッドネイバーではそう名乗ってたね」  
「……」

「連中もたいしたことにはなかつたってことかね? アンタを使ったのはひどく道理にかなつていいると思わされて、とんでもないことにしてくれたよ。」

「アンタ、気を付けるんだね」

「なにが?」

「連中にとつちや、このあたしは連邦の大事な資産のひとつだ。それをハンコックと取引して殺すんだろ。」

「きつと顔色を変えて、あんたのことを追ってくる」

「それでいい」

体は重くなつていたが、その声を聞いたなぜかもう一度あの凶相を見たくなつた。

「それで構わない」

そこには怒れる若者がいるだけであつた。

憎悪に満ちていて、邪悪ではあるかもしれないが。バケモノじみたものはそこにはまつたくなかつた。

「そうかい、それじゃ好きにやりな」

「なにか、あるか?」

「情けかい? そういうのはいららないよ。あたしのゲームは、もう終わってしまったからね……」

ボツピは目を閉じた。

グールになつてからは一度として信じたことのない“神”って奴だが。今は少しでもすがるものが彼女には必要だった。そのうち襲ってくるであろう苦痛に、恐怖と弱音を決して口にはしないように、と。

右へ 左へ そして元へ (LEO)

ダイヤモンドシティ近辺の情勢は、混迷を極めた。

ついに均衡が破られようかという瞬間に、新たな参加者が名乗りを上げたのである。

彼らはスーパーミュータント。

このポストンを中心に存在する、生きた災厄ともいうべき種族。

この激突が始まった時、当然のように彼らはそれを理解したが。それがここまで来るのにこれほど時間がかかったのには、理由があった。

何と彼らは「どう戦うか？」で相談をし、意見がまとまらずに無駄な時間を過ごしてしまったが。ついに闘争本能のうずきに耐えられなくなり、爆発した結果こうなったのである。

そう、彼らは多くの時間を仲間たちと共に考えていたのだ。

満足することのない食欲と闘争本能から、知性のない存在と信じられていた緑の巨人たちではあったが。彼らはそれでも戦いを前にして仲間たちと戦術を練るだけの思考力を、ちゃんと備えていた。

とはいえ、これは戦っていた両者にとってはなんにせよ迷惑な話であつた――。

それはまるで陸に押し寄せる波際の様子を思い起こさせた。

激しく入口に向かってきたレイダー達がいきなり攻撃を停止したかと思うと、しばし無音の状態となる。

ミニッツメン達はこれまでと正反対の状況に戸惑いつつも、何が来ようともここは死守するぞと改めて心に誓ってはいたが。

勇ましい咆哮から「そろきた」とマスキットのレバーを握っていると、あらわれたのが人ではなかったと驚いた。

その揺らぎは火力にも反映されてしまったらしい。光弾のいくつかは目標をわずかにそれると、壁や地面に炸裂し。火花を散らした。

そしてレイダー達と違い、中にまで侵入してきたスーパーミュータントは「食ツテヤル、ニンゲン！」と、彼らの前に立ち。凶悪なボー

ドをめい一杯に振り上げてみせた。

「ソクナノ駄目、ストロング 許サナイ!!」

反対側から突如現れたストロングはそう叫ぶと、手にしたライフルを振りかぶってかつての仲間たちに襲い掛かる。

隆起する暴力的な筋肉が躍動し、勝負がつくのに時間はかからなかった。

殴り合いから背後をとると、ストロングはあっさりと同族のその太い首を両腕でもって締め上げ、粉碎した。

「気ヲ抜クナ！オ前達、守ツテヤル」

「あ、ああ。ありが、とう?」

言われた方のミニッツメン達は顔を見合わせ、こんな絶望的な状況の中にあってもまだやれるのだと互いの苦笑した顔を見合わせていた。

レイダー連合は思わず背後に出現したスーパーミュータントたちと2正面戦闘は避けたいからと、あっさりといひいてはみせたものの。

わずかに遅れて伝えられた潜入工作がどうやら大成功だったようだとの知らせを聞いて、慌てる。このままでは勝利したい、緑の巨人たちに奪われかねないが。かといって部下にただ、突撃しろと命じたとしても。そいつらが真面目に戦うのか信じきれない部分があった。

指揮官無きミニッツメン。

暴走するスーパーミュータント。

勝利を目前にして、変化に戸惑いをみせるレイダー連合。

ハングマンズ・アリーは宴もたけなわ——まさにそんな状態にあった。

|| || || || || || || || || || ||

それは海へと続くチャールズ川を両岸にかけられている崩れかけた高架橋の上を越えると、今度は川に沿って低空を高速で移動していた。



「ランサーより搭乗者へ。ヤンキー03は、このままのルートを進みます。目的地まであと4分といったところですよ」

『了解だ、ヤンキー03。君たちの勇気に感謝する』

野太い男の声で感謝言葉が返ってくると、パイロット——B.O.S. ランサーは口元に笑みを浮かべて気軽に会話を続けようとする。「パーティ会場の送り迎えは慣れたものです。せっかいですから、追加注文があれば言ってください」

『——申し出に重ねて感謝する、ランサー。状況がはつきりしていないのでまだはつきりと断言はできないが。君たちが参加してくれるというなら、指示を送ることにする。それでどうかな?』

「いいですね。そういうのは嫌いじゃないです。」

明日には同僚に今日のアンサンブルは最高だったと自慢できそうです」

『それはよかった。だが間違っても落とされて、最悪のコンサートにだけはほしくないでほしい』

「わかりました。任せてください」

先ほどと違い慇懃さよりも、フランクな会話が行われる中。

コクピットの左側に、あのダイヤモンドシティの照明が見えてくる。

「アプローチまで残り30秒、ご武運を！」

返事はなかったが、ランサーの背後から複数の駆動音が聞こえてくる——。

戦意旺盛なスーパーミュータントたちの突入は、数日間をわたって鉄壁の守りをみせていた2ヶ所の入り口をついに突き破ってみせた。

一階部分はすでに侵入者たちに踏みしだかれており。

残り少ないミニッツメン達は上層に移動することで抵抗を続けてはいるものの。地上でこの場所の次の管理者が決定してしまえば、もはや彼らの運命は決まったも同然であった。

「ケイト、ストロング。マダ戦エル！邪魔 スルナ」

「一時休憩ってだけだよ。いいから座れ、この筋肉バカッ」

険しい顔をして彼女はスーパーミュータントを押さえつけている。常に前線で楽しそうに戦っていたストロングのおかげで、ミニツツメンはこれほど絶望的な状況の中で全滅を免れてはいた。とはいえ、もはや無傷の者はいないし、戦闘参加を求められない重症者もいる。このストロングも同族たちに囲まれて袋叩きにされ、ついに地面に膝をついた。

それを見たケイトは慌ててミニツツメンを2人引き連れ、嫌がる本人の尻を蹴飛ばしてここまで上がってこさせたのである。本人はこんな状況でも「死ぬまで戦え」といえば、喜んでそうするのだろうか。まだ、その時ではないのだ。きつと――。

彼らの希望はこの瞬間に音を立ててへし折られることになった。最後のターレットは地上からの砲火にさらされ、火を噴くと停止し。蜂の巣を支える建物の支柱に衝撃が加えられた結果、4階建ての部屋が徐々に傾き、崩れようとしていた――。

|||||

コンバットゾーンのショーは、クソみたいなものだった。

トミーや出演者たちは不愉快な思いを隠しては、馬鹿共の騒ぎの後を掃除し。

わずかな報酬と慰労を兼ねて、商品である酒を殻にしてやろうとおとなしくグラスを空にする作業に没頭していた。

「お前には才能があるとわかってたさ、チャンプ」

一度だけあのトミーがその席で自分をそう褒めたことがあった。

その時は彼に憎まれ口をたたいてしまったが、嬉しかったので今でもちやんとそのことは覚えている。お前は輝く照明の下で、男たちに称賛を受けるべき存在だ、などと言っていたっけ。

ケイトは男たちが自分の名前を叫んでいるのを聞いて、ぼんやりとそんなことを思い出していた。

ハッ、と音高く息を飲み込むと。自分の状況を再確認する。

傾いた建物から地上へと投げ出され、呑気にボーっとなっていた。

「チクショー・なんで、こうなるっ」

ハンマーもショットガンもない。

だが彼女の顔が真っ青になったのは、別の理由からだ。

なにもない自分のそばに、暗殺されてしまったあのミツキーの遺体が転がっていたのを見てしまったからだ。

恋心のようなものをもっていているなどと伝えたことで、彼は先に旅立った死者の列から自分を招いているのだろうか？

「こっちにこい」と、「共にこの道を歩こう」と――。

「女だっ、殺せっ!!」

舞い上がるホコリの中で発見され、レイダー達がケイトに向かって殺到しようとしていた。

眼下の光景はまさに戦場のそれとっていいだろう。

しかし私の心に不安はなかった。

それどころか（そういえばこういうのは、前もここでやったな）などと考える余裕すらあった。

B・O・Sのベルチバードは橋に集まるレイダー連合の頭上を飛び越えると、ハングマンズ・アリー直上へと一気に到着。

軍人の流儀の悲しさか、私のやり方はここでは変わることはなかった。

「ではいこう」

「騎兵隊は到着した、だな」

ベルチバードからパワーアーマーを着たまま飛び出すと、みるみるうちに地上がこちらへと接近してくる。視覚の面白さだ。

身体にかかる衝撃はアーマーが吸収する。立ち直った私は、こちらを茫然と見るケイトに軽口を叩いた。

「反撃の時間を知らせに来た。さあ、ここからなにかも叩き出してしまおう」

「――お前、ぶっ殺してやる」

たぶんだが、それは彼女なりの「了解した」って意味だと。私はそう考えることにする――。

レイダー連合の5人のボスたちは真っ青になっていた。

スーパードクター共を押し返し、ミニッツメンの連中を八つ裂きにするのも見えてきたと思つたのに。

そこに現れたのがベルチバードとパワーアーマー。あれは間違いなく、あのB・O・Sに違いなかった。

「あ、あれはなんでここに!?」「ミニッツメンは奴らと組んだのか?」「いや、ここを奪いに来たのかも」「あいつらは空港にいるだけじゃ満足しないのか?」

彼らの動揺は攻撃中の部下達にも伝播し、全体の動きが鈍くなるところをベルチバードのミニガンが「自分たちは君たちの敵です」とメッセージを伝えるように火を噴く。

チャールズ川沿いの通りを滑空するへりから飛び出す火線が、レイダーもスーパードクターも区別なく、どちらも肉片にかえていく。

「兵士達よ！我々に続けー！」

そう声を上げるレオとダンスは、あつという間に侵入者たちを2つの出入り口の外まで押し返してみせ。その姿に勇気づけられたミニッツメン達は、気力を振り絞って地上へと飛び降りると元の配置へと戻っていかうとする。

「随分とカッコよく登場したじゃない。それで許されると、本当に思っているのかしら。お偉い將軍様?」

「ケイト、ジャケット姿もよく似合っているね」

「ハア!?……覚えてなさいよ、マジで殺してやる」

「それは困るな。では、汚名を挽回しておこう」

この流れは決定的だった。

まるで生まれ変わったかのように、攻撃を恐れずに立ち続ける2代のパワーアーマーは頼もしく、そしてなによりも強靱であった。

そうして防衛側が息を吹き返すと、状況を再び5分5分の状態にま

で引き戻してみせたが、攻撃する側は混乱を始めていて。再攻撃など望めるような状態ではなくなっていた。

そして彼らはそれを見逃す軍人ではない。

レオとダンスはミニッツメン達にその場を任せると伝えると、ワークションのわきに置かれていた古めかしい金庫の前に立った。ケイトはついてきているが、彼らがなにをしようとしているのか理解できているわけではない。

「なんなの？」

「——向こうの連中にもう帰ってくれと伝えても、素直には言うことを聞いてくれないだろう。なのでそうしてやる理由を与えてやるんだ」

金庫を開けると中に置かれた部品を取り出しては、レオはダンスに渡していく。

ダンスはそれを手にすると「なるほど」とだけつぶやいて、黙々とそれらを組み合わせしていく。

徐々に姿を現すそれは、最終的には2門のランチャーへと姿を変えていた。

「ケイト」

「なんだよ？」

「これで戦闘は終わる。安心してくれていい」

自信に満ちたレオの言葉に、ケイトは一瞬だけ顔が歪んだように見えた。

|||||

レオの予言は正しかった。

戦闘はいきなりにして終決する——。

レイダー連合の中にお返しだとばかりにダンスの放つ数発のミサイル弾が撃ち込まれる中、ジェット音を響かせてジャンプするB.O.S. パワーアーマーは呪わしいその武器を構えて狙いを定める。

目標はレイダー連合のボスたちがいると思われるあたり。

レオはアーマーの下のピップボーイにVATSを作動させると、この攻撃の命中率は20%を低空飛行するような数字しか表示されないが。今ならばそれでもかまわない。

次の瞬間、不気味な飛来音を響かせた一発の弾頭は。

コモンウエルス工科大学へと続く道の上に落下すると、計算された地獄の炎で作り出された火柱を立てる。

これを見て悟ったのだろう。

レイダーもスーパーミュータントも、太陽が昇る前の夜空のように。炎が消えるころには、静かに音もたてず、ボストンの町の中へ戻っていく。

降りてくるベルチバードを待つ間、私はダンスと改めて別れを告げていた。

「なかなか、刺激に満ちたミッションだったんじゃないか」

「楽しんでもらえたのなら、よかった。ダンス」

「——なあ、君はもしかして。彼らの仲間であったのか？」

B. O. S. には嘘は言わなかったが、ミニッツメンの將軍であることは黙っていた。

「彼らのボスが、ガービーというのだが。私の友人なんだ」

「なるほど」

「友人の部下達が苦しんでいて、それを見て見ぬふりはしたくなかったんだよ」

「軍人が個人の感情に振り回されるようではいけない——なんてことは、君にはわかっていてはいるのだろうか」

「しかし戦場に友をおいてはいかない——。難しいものさ」

互いに頷きあい、握手を交わす。

私は少し、B. O. S. に近づきすぎてしまったのかもしれない。

「何度も繰り返しているが、私は——」

「プリドゥエンにいて、力が必要であれば声をかけてくれ。わかっているよ、ダンス」

「移動には引き続きランサーに協力を頼めばいい。遠慮はいらない」

「ありがとう。エルダー・マクソンにも改めて感謝を伝えてくれ」  
「ではしばしの別れだ、友よ」

ダンスを乗せたベルチバードは飛び去って行くまで見送ると、振り向く私の背中に冷たい目を向けていたケイトがいつの間にか立っていた。

「それで？ミニッツメンの將軍様は、あのキャピタルのクソツタレと友情を温めあっていたってワケ？」

「……ケイト？」

「アンタは好き勝手にあたしらを放り出してどこかに消えたと思ったら、生死不明だと大騒ぎになって皆を動揺させるだけじゃ飽き足らず。」

あんた自身の部下たちを、ミツキーを——『彼らはガービーっていう僕の友人の部下なんだ』って口にしてみせたじゃない。

こんな——っ!？」

「今はそこまでだ、ケイト」

怒る彼女にはそう言つて、私はその横を素通りしていく。

言われなくともこれがどれほど卑劣な態度であるのかは自分自身が分かっている。

だが、それらについて取り組む前に。

私がミニッツメンや仲間たちのためにしてやれることが、まだあるのだ。

|||||

ダイヤモンドシティでは、マクドナウ市長は冷静になろうとして、自室でお茶を楽しんでいた。

あのやかましかった戦闘音がぱったりと止んだあたりで、改めてセキユリテイに命じてあの不愉快な場所へと斥候を送り出した。

なのにあれから数時間過ぎても、まだ報告がないのだそうだ。

「……まったく……セキユリテイのだらしなさには、我慢がならん。いやいや、落ち着け落ち着け」

余裕を自ら失ってはいないと、自らを戒める市長だが。

ミニツツメンとかいう連中がまだ生きているかどうか、ただそれだけを確認することさえも満足できない人間達に対する怒りは、隠し通せるものではなかった。

「人は政治家を信用するのはなぜか？」

マクドナウ、お前は知っているだろう。自信に満ちて、誰もが認める誠実な人柄と力強いリーダーシップ。そして汚れの一つもない、イメージ。

それが重要なんだ。たったそれだけで、ここでこうしてお茶を楽しめる」

もう一口、まだ駄目か？

茶の苦みが不快に感じ、もっと甘さが欲しいと心が欲求の叫びをあげている。なのに秘書が部屋に入ってくると、うかがってきた。

「市長、よろしいですか？」

「なにかな？今、お茶の時間だが」

「わかっています。それが——」

「おお！セキュリティの報告なんだね？」

よかった、ずっと気になっていたんだよ。

我々の平和なダイアモンドシティのすぐそばで！あんな恐ろしい戦闘が昼夜といわずに続いていては、この町の善良な人々も怯えて仕方がなかったからねえ」

「いえ、違うのです。それが——」

訪問者を告げようとする秘書の背後に、無礼な男が立っていた。

レイダーのように改造された衣服を身に着けた男。だが、記憶では以前はVauletsーツを着た賞金稼ぎではなかったか。

彼はそつとではあったが、しかし立ちふさがることを許さぬ力強さを見せつけ。秘書を自分のわきへと押しやると、勝手に市長の前までやってきてしまう。

「やア、ひさしぶりですね。マクドナウ市長」

「おつ、お前——ああ、君は確か。その……？」

「とぼけなくてもいいですよ、市長。あなたは優秀な人とわかって



いますからね」

「は、ははは。ありがとう、そう言ってもらえるのは。素直に喜ぶよ」  
「ええ、でしょうね。」

ですからあなたが心配して送り出したダイヤモンドセキュリティの警備の人の報告だけでは足りないだろうと思いましたが。私が直接、あなたに報告しに来ましたよ」

戦闘が終了すると、レオは素早くまだ体を動かせるミニッツメンに命じ。

ハングマンズ・アリーへと様子を見に来たセキュリティーの人間を確保するように命じていた。

囚われたセキュリティは、丁重に扱われ。

レオが自ら戦闘終結の証を見せるという名目で、壮絶な戦闘跡が残る玄関口や。わざと一か所に集めて山と築いたレイダーやスーパーミュータントの死体の山を見せつけ。

雑談などと称しては、マクドナウ市長の思惑を聞き出し。わざとゆつくりと、そして突然にダイヤモンドシティへと面会に訪れたのである。

いきなりペースを乱されたマクドナウ市長は激しく動揺してしま  
い。頭の中は真っ白になっていたが。

ここからすぐに立て直してくるであろうことは、レオにもちやんと  
わかっていた。

「ああ、それでは——まずは席にどうぞ。たしか、そう。あなたとは—  
—」

「そういうのはやめましょう。すでに何度か顔を合わせていますし、  
いまさら自己紹介しあう間柄ではないでしょう」

「え、ええ。そうでしたな。確かに、そうだった」

しばし沈黙があり、秘書がレオの茶をもってきた。

悪夢のような既視感がある。

「それで、今日は？」

「——この数日はずっと間近に聞こえたのではないですか？」

「つまり、それは？」

「もちろんレイダーたちのことです。ミニッツメンが相手をした」

「ええ、ええ！そうでした。我々もどうなるのだろうかと不安におびえ、復活したばかりのミニッツメンの皆さまの無事を祈っておりますよ」

「そうでしようね」

「ああ、本当に申し訳ないと思っています。我がダイヤモンドセキュリティも、自分たちのこの平和を守ることです。手いっぱいでありましたから」

「そのようですね」

「ははは……それで、今日は？」

レオはおもむろに茶をすすする。

会話のテンポを崩し、わざと核心について触れることを避けているのだ。

「マクドナウ市長は大変だ。守らねばならないこの町の近くであのよ  
うな騒ぎがあれば、不安だし。それがいきなり静かになっても、やは  
り不安だったのでしよう？」

「ええ、まあね」

「セキュリティの人が近くをウロウロしていたのを見つけましたか  
ら。私が連れてきましたよ、心配はありません」

「そ、そうでしたか。色々とお世話をおかけしたようだ」

「ええ、ですからね——」

私は浮かべた笑みを崩さないまま、背をそらして椅子にもたれなが  
ら。衝撃の一言をさきほどから調子のいい相手の顔に投げつけて  
やった。

「我々があなたのダイヤモンドシティを、守ってさしあげましたよ」

「……なにを、いつているのかね？」

「おや？忘れましたか？これはあなたが言ったことじゃないですか」

ポケットの中からたたまれた紙には例の文言が大きく載せられて  
いる。

「ミニッツメンは文字通り命を懸けて、”ダイヤモンドシティを襲おうとしたレイダー達”を無事に町に近づけることなく撃退しました。ご安心を」

「ああ、そのようだね。嬉しいニュースだ。」

しかし、少し認識に違いがあるようだね。襲われたのは我々ではない。君達、ミニッツメンがレイダー共に襲われた、の間違いだろうか？」

私は首を横に振る。

「マクドナウ市長は、どうも考え違いをされているようだ。なので、教えて差し上げますよ」

「ほう！面白い、何かな？私が、このマクドナウが何を考え違いをしていると？」

「ミニッツメンが戦うのは、この連邦で力なき人々のためです。”それ以外にはありえない”のです。」

今回、我々がなぜ戦ったのかと問われるなら答えは一つ。このダイヤモンドシティのためですよ」

「はっはははは、すまない。」

「だがね、悪いが戦闘はこの町で始まったわけではない。君たちの——」

「そうです。ミニッツメンが”この町のために”作った砦で戦いました。つまり我々はあなたを、あなたの町を守ってさしあげたのです。その理由以外に、ミニッツメンが土地に執着する理由はないのです」

市長の顔が引きつるが、それでなんとかこらえているようだ。

「……そういうことか、なるほど。それならば礼を言わせてもらおう、ありがとう。」

ところで先日、ここに訪れた司令官はどうなされたのかな？」

「死にました。激戦だったのです、当然でしょう」

「それはそれは。今日、初めて耳にする悲しい話になってしまった。お悔やみを申し上げよう」

「どうも」

そこで2人の口が閉じられ、無言の時間が続いた。

「……それで？他には何かな？私はこれでも忙しい——」

「マクドナウ市長」

「まだ、なにか？」

「あなたは今、ここで交わされた会話を前回と同じようにすぐに発表されたほうがいいでしょう。ミニッツメンはダイヤモンドシティを“約束通り”守った。市長は町の住人を代表して、そのことに感謝をしている、と」

「何を馬鹿なことを！私の町はそんな——」

「バカをしたのはあなただ、市長！むしろこれはあなたのために言っている、なぜわかってもらえないのか？」

「何だって?!我々が、我々の町が。ミニッツメンの私闘に巻き込まれるわけにはいかないっ」

私はついに仮面を取り去ることにする。

目つきは自然と鋭くなり、怒りと殺意のこもったソレを市長に容赦なくぶつけていく。空気が変わったことを理解した、マクドナウの顔から血の気が引き。真っ青になって震えはじめている。

「ぼ、暴力をふるおうなどと——」

「忠告しよう、マクドナウ。今、私に向かって口にしたようなことをこの部屋の外でも歌うつもりなら。あなたの未来はひどく暗いものになるだろう、ということを」

「き、脅迫か!？」

「いや、こちらの予定表を聞かせているだけだ。

今回のマクナマス司令官の死は、レイダーとダイヤモンドシティの間に協定のようなものが結ばれていたと思われる証拠が発見された。連邦最大で最高のこの町に、レイダーの関係者が潜り込んでいることは。この町の平和に危険を及ぼすことは間違いなく、ミニッツメンはこれの捜査に入る、そう発表されるだろう」

「アンター！な、なにを言っている？」

「まずは当然のようにダイヤモンドセキュリティに捜査の協力を求める」

「馬鹿な!?!ミニッツメンはこの町を占拠するというのか?！」

「今回と同じ理由で、ダイヤモンドシティとその住人達を守るために

必要なことを我々はするだけだ。そう、事件の真犯人がわかるまで「そうか！それはいつわかるのかね?!」

「落ち着くんだ、声が外に聞こえてしまうぞ。それに質問がまた違うだろう。あんたは『誰が犯人だ』と聞くべきだ」

「なにつ、それはっ、つまり——」

ヒエツと市長の喉が鳴る。

「私が、犯人だというのか」

「断言はできないな。しかし、事件の始まりと終わりで発言を真逆にし。騒ぎのさなかでセキュリティには近づかないように徹底させ。我々の司令官を苦境に立たせた男は誰かと考えたら、この瞬間にあっても一人しか思いつかないかな」

「——なあ、君。私が悪かったよ。お互い、冷静になろうじゃないか」  
「いいですよ、マクドナウ市長」

しかし私は立ち上がる。

「ど、どうしたのかね」

「帰ります」

「なにつ？」

「最初に言いましたよ。私はここに皆さんの勝利を伝えに来た、とね。

だから賢明なあなたは、この後すぐに町の住人達になにが起こっていたのかを説明することになる。正義の勝利とこれからも平和な日々が続くことに喜び、勇敢なミニッツメン達を称えるのです。

彼らはこの町のために必要な決断を迷いなく実行したあなたを誇りに思うでしょう」

「う、ううむ」

「なんなら、このことを理由に町がミニッツメンの活動に参加することを発表してもらってもいい」

「それはっ——それは、少し待ってもらいたいな。ここは連邦でも最大の町なんだからね。人々の意見をまとめるのには、まだまだ時間がかかるんだ」

「——いいでしょう。そのことはまた別の時にでも、改めて話しましょう」

レオが姿を消すと、市長はひとりで自室に残っていた。

「なんて、なんてあくどい奴らなのだろう！ミニッツメンだど!?レイダーとなんら変わらないではないかっ」

自分がしたことなど綺麗さっぱり忘れたかのように、マクドナウは自分たちの町の平和を——自分の立場をかすめ取らんとする邪悪な者たちの存在があることをそれからしばらくは呪っていた。

しかしその数時間後。

いつものように広場で、ご機嫌の市長は演説を行っていた。

平和な日常の中で、知らないうちに自分たちは恐るべきレイダーやスーパーミュータントらに勝っていたのだと。福福しい笑顔で、市長はそれを口にしていた。

## キャプチャー (Akira)

グッドネイバーではハンコック市長が困惑していた。

彼の前には3人の年齢がばらばらのトリガーマンが同じく困惑顔で並んで立っている。そして室内は——ようするに、この中にいる全てが困惑していた。

「おい、客人は——マクレディ達はもう解放したんだよな？」

「そうです。そういう指示でしたから」

「町も出たのか？」

「ええ、だいぶ前に」

「そうか。そりゃ……参ったな。」

なあ、今から『仕事があるから町まで戻ってきてくれないか』とやったら、まずいと思うか？」

「どうでしょうか。トラブルにしかならないように思います」

「だよな——俺もそう思っただけなんだ」

背後のトリガーマンと会話を終えると、ハンコックは再び目の前の3人に向きあうことにした。

「よし、もう一度最初からやるぞ？」

3人は揃って市長の言葉に頷いてみせた。

「俺はあの時、お前達3人を呼び出して命令した。」

俺と取引をした、あの野郎。あいつがちやんとボツビを始末したかどうかを確かめてこい——本当はもつと細々あったが、とにかくそういうのはあとにして。お前達は任務をはたすべくこの町を出た、そうだな？」

『はい、ボス』

「……だからわからない。なぜ、お前たちは3人がそろってここに帰ってきたんだ？まずはお前だ」

一番左端の中年にさしかかったトリガーマンを指さした。

「貴様はボツビが死んだのを確認したら戻れ、と伝えていた。つまり、ここにいるのは正しい」

続いて中央の顔の中央が傷だらけのトリガーマンを指さし。

「貴様には、ボツビを始末した後のアイツを——アキラの野郎の後をつける命じていたよな」

続いて右側のまだ若いトリガーマンを指さす。

「そして貴様には、それをサポートするように。そのつもりで行けど、そう命じたはずだ」

『はい、ボス』

トリガーマンたちは一斉にそれを繰り返した。

コメディ番組のシーンのように、仲良くハモってみせる3人の態度にハンコックは思わず宙を仰いだ。

「何だっつてんだ、こいつらは!?俺はコメディの舞台上でバカな観客の役をやらされている気分だぞ。」

お前達、いつからそんな楽しい会話ができるようになったんだ」

「市長……」

「ああ、大丈夫だ。まだキレちゃいない。」

腹は立っているがな。まだ大丈夫だ。まったく——」

久しぶりの高純度のキツイやつを欲しくなった。もちろん、そう思ったただけだが。

「ボツビは死んだんだな?」

『はい、ボス』

「アイツが。アキラがそれをやったんだな?それを見たんだな?」

『はい、ボス』

「それで?奴はどこに向かった?どの方角を目指した?」

『……さア?』

「つてことは、お前たちは任務に失敗したんだな?」

『いいえ』

「なら、アキラはどこだ?ボツビを始末したアイツは、次にどこに行くとか話していなかったのか?」

『多分、そうです』

(コイツら——冗談じゃなくこんな愉快な不愉快をやっているのか?俺をナメているのか?)

不機嫌になって黙る市長の後ろから、仲間のトリガーマンたちが3



人に色々と問いを投げかけることで少しでも違う答えを引き出そうとするが。目の前の3人の反応は、まるで石のように同じ答えを繰り返すばかりだ。

報復はおこなわれた、罪はあがなわれた。

そして男は消えた。

このままでは埒が明かないと、ハンコックは別の手段を求めることにする――。

市長の部屋に、グッドネイバーの住人のひとりが入ってくる。

「おお、メモリー・デーンから来てもらってすまないな」

「別に。なにか？ハンコック市長」

ドクター・アマリは緊張した面持ちだったが。

ハンコックは肩の力を抜いてくれ、といって席に座るように勧めると。目の前の3人を顎で示した。

「状況を説明する。俺はこの3人に偵察のようなことを命令した。

なのにこいつらは仲良く3人で帰ってきて、自分たちは任務に成功しましたと言うんだが。話す内容のすべてが、まったくもおかしくて困っている。

この連邦が狂っていて、こいつらがその狂気にあてられてここにいろという考えも悪くはないが。そんなやけっぱちな結論に俺が飛びつく前に、あんたの医学的な意見つてやつを聞かせてほしい」

「わかった。でも、何が問題なのかがわからないと」

「こいつらは自分たちの仕事をちゃんと終えて戻ってきたと主張するが。そんなわけがないと俺が言っても、こいつらは納得してくれない。わかるか？納得しない、だ。

馬鹿の一つ覚えのように、任務は完了して戻ったのだと仲良く不気味に合唱する。こつちが正気を失う前に、あんたがこれをなんとかしてくれ」

「どこまで力になれるかわからないけれど――その、お仕事のことは聞いてもいいのかしら？」

「構わないさ。今はこのカオスをなんとかしてくれ、いい加減こいつ

らの頭を吹き飛ばしちまった方が楽になれる気がしてきた」  
「それは——努力してみるわ」

|||||

しばらく3人と話をしたドクター・アマリは結論を市長に告げる前に。この3人をメモリー・デンに送ってくれないかと申し出た。ハンコックはそれを了承し「お前たちはしばらく入院しろ」とだけ告げて、自分の部屋から追い出した。

正直、それだけでも随分とせいせいした気分が味わえた。

「それで？なにかわかったのか？」

「——どうしたらいいのかしら。これは、難しいわ」

「おいおい、アンタもそれを始めるのか？今日はどうなっている？グッドネイバーはカオスのブラックホールにいつの間に飲み込まれていたんだ？」

そう言いながらも、ハンコックはとにかく話してみると告げる。

ドクター・アマリは考えながら、慎重に言葉を選びながら口を開く。

「結論から先に言うかね、市長。彼らに何が起きているのか、私にはわからないわ」

「そうか」

「言いたいことはわかるわ。そんなことはないだろうっていうのね？それはその通りなんだけど——」

「あいつらの答える態度を見たんだろ？あんなに愉快にズレもなく同時に受け答えをしやがって。じゃ、わかっていることはあるのか？」

「それはあるわ」

「なんだ？」

「市長、彼らの記憶は改竄されているかもしれない」

「——ほう、面白くなってきたぞ」

ハンコックは体を起こすと、その口ぶりは楽しそうである。

「彼らの話は、言ってみれば『誰かが彼らに与えた結論』を元にして話しているように思ったわ」

「与えられた結論だつて？ボツビの死を確認することが？」

「いいえ、違うと思う。この場合はもうひとつの方ね」

「——アキラを追え？」

「そうよ。あなたも言ったように彼らの言動はおかしいし、反応も変わっている。

これは可能性の話になるのだけれど、あれはきっと3人とも同じ処置を施された影響のようね」

「それを証明できるのか？」

「戻つて調べてみるつもりだけれど、期待はしないで頂戴。

記憶は消されているかもしれないし、残っていても封印くらいはされているでしょう。これをどうにかできるかわかるまでは時間が必要よ」

「ということは、記憶は戻るといふことか？戻せる可能性がある？」

「しつこく聞かれているから答えるけれど。改竄される前の記憶を復活させる方法はあつたとしても、私はそれをしないほうがいいと思う」

「なぜだ？」

「アマリは少し黙り込む、考えをまとめようとしているのか。

「例えば、あなたの部下がスーパーミュータントと戦つて記憶を失つたとしましよう」

「わかつた」

「その彼は戦闘中、一瞬だけ海を見るの。とても美しい地平線を思い描いてみて、そのイメージは強烈に脳に刻み込まれることになる」

「んん、そういう情緒は大切だ。殺し合いをしている隣でも、美しいものはあつたりするものだからな」

「そしてあなたは彼の記憶を呼び覚まそうとして、そのイメージだけを思い出させたとしましよう。どうなると思う？」

「何か悪いこともあるのか？不都合があるとか？」

「そうね、不都合というよりも、より混乱するといった方がいいかしら。」

思い出したイメージだけを頼りに、なにかを思い出そうとした結

果。徐々に正しい記憶の部分にまでも歪みを呼び込む可能性があるの。

なんで戦闘していたのに海？戦闘後に海を見ていた？それとも全く関係のない海を、思い出していた？こんな風に」

「なるほどな。」

つまり、そのイメージとやらのせいで全体像から本人が気が付かないうちに改竄を始める可能性があるってことだな」

「そうね。そうなると彼らがこのグッドネイバーの扉を抜けた後から全てが、それぞれが別のことを主張するようになるかもしれない。もちろん、これは最悪の場合を言っているけれど」

ハンコックは深いため息をついた。

こんなことになるのなら、自分がこの目で見に行っていれば良かったと考えている自分がいた。

「おい、フアブ。お前の方から——」

言葉はすぐに止められたが、室内の空気が革ひもで絞めつけるようにギユウギユウと悲鳴を上げた気がした。

「なあ、ドクター。とりあえず、あの3人はアンタに任せる」

「わかった。最善を尽くすわ」

「最後に、その——何者とやらが改竄した部分と事実が入れ替わっていると思うのは、どこからだと思う？」

アマリは息を吸うと、それは——と3人の説明する報告の中の一点を指摘した。

|||||

サウガス製鉄所から、何者でもなくなってしまった男が出てきた。

イエローマン、アキラ。そうした名前は彼でありながら、しかしその両方共を彼は心の命じるままに行動し続けたせいで失ってしまったのだ。

どちらにも戻れない。戻れるなどとなぜ考えられる？

この男の過去、この男の記憶。

全ては何者かの存在によって作られた、まがいものではないのか？  
彼が求めた自分の過去は、自分を兄弟などと呼んでは害そうとした  
組織につながりがあるのは明らかであり。

となれば、彼の力。そして記憶は、その組織が与えたおぞましい呪  
いのようなものと考えないのは不自然でしかない。

凶悪、ここに現れた彼はこの言葉を体現するような恐ろしい存在で  
あったはずだったのに。

出てきたときの姿は、憑き物が落ちたかのように、ここから出てい  
こうとする彼の背中にも驚くほど何もなくなってしまうていた。  
空っぽ、虚ろ、他に言い換えるなら壊れた人形でもいいのでは？

「……」

モザイク状にひび割れる中の、他人のような自分の記憶。

はつきりと認識できていた全ての記憶はわずかに3カ月程度であ  
るはずなのに。そこには暴力と怒りがどれほどの破壊を続けてきた  
のか、理解するたびに苦しみしか感じられない。

そして自分はこれからどうすればいい？どこに帰ればいいのか？

ヌカ・ワールドなどというレイダー共のお祭り騒ぎに巻き込ま  
れ。ボスの座席に座らせられた今、ミニッツメンに戻ることは賢いと  
は思えない。

しかし、組織に戻るといつても。彼らの命令を無視し、ボツビとこ  
こに存在したフィンンドごと殲滅したことは。

常に派手な行動を慎むあいつらの組織で問題と思われなはずが  
ない。

そしてあの日から共に連邦へと求めて戦い続けている友人がいた  
――。  
どんな顔をして今、彼の元へ戻れるというのだろうか？

男は頭を横に振る。

駄目だ、弱気になりすぎている。何も感じない、ただ虚しく、世界  
は絶望に満たされているように思える。これはまともじゃない。

視線は自然と地面へと下がっていて、先ほどまでは感じなかった疲

れが全身にしがみつくようにしてこちらを押しつぶそうとしているようだ。

「——フライヤー。どうした？」

ふと、この暴走からこちらを非難していたロボットが外に出ても一向に現れないことに違和感を感じ、彼は呼び出そうと声を上げる。

なんであれ、ケジメが必要であった。

組織には戻れない、追っ手もかかるし、こんな大騒ぎもまた繰り返すのだろう。ならばあの奇妙な組織のロボットとはここでお別れというのも——。

大きく息を吸い上げながら、周囲を見回す。それでさすがに気が付いた。

彼の新しい相棒、プカプカと浮かんで彼を運ぶだけのロボットはそこにすでにいたのだ、地上に。

何者かの攻撃を受けて叩き落され、火花を散らし、すでに稼働を停止している。破壊されていたのだ——。

夜のとばりが下りてくる中、サウガス製鉄所の周りには赤々と燃える焚火がそこかしこに用意され、溶鉱炉と同じくその勢いかわららず周囲を照らしている。

そして男の前に、あの時と同じくステルスを解除したT—51 パワーアーマーがずらりと並んで立っていた。

プラズマ銃を構える彼らから、ほとぼしるような殺意は全く感じられない。いや、そいつらの後ろに控えていた1人だけはちがったか。「まったく、どこまでも迷惑をかけてくるポンコツというのはあるものです」

乱暴にザクザクと足音高く近づいてくる人物たちがいた。

「ゴミというのは適度に処分しないとたまる一方。なので返してもらいました、そのポンコツから先にね」

「キンジョウ——」

「そうです、私です！キンジョウ アキラです。本物の、本当のね」

あの時と同じく研究者の姿をしたキンジョウのその言葉に、面白い

ことに異議を申し立てる声があった。

「まだ、違う」

「——そうですね。確かに」

キンジョウの隣に立つのは、あのガスマスクでもって素顔を明らかとしない観察者がいた。

「ですがもうすぐそうなります。ここでこのゴミをようやくに処分できますので」

キンジョウは笑みを浮かべる。憎悪で彩られた、無邪気なまでの悪意の塊。

しかしやはり観察者はそれを咎めようとした。

「それは駄目だ。彼にはまだ、役目がある」

「……何を今更？こいつはボツビという我々の資産を勝手に処分し、ここにあつたレイダー共を人の目があるのも構わずに今しがた壊滅させたばかりですよ。このすぐ近くにはキャピタルのB・O・S. がいるというのに。」

こんなふざけたこと、許すわけにはいかない。当然でしょう？」

「それでも反対する。回収し、再調整するべきだ。皆もそれを望んでいる」

何やらもめているようだ。

名前のない僕は、お互いの意見をすり合わせようと、奇妙にも冷静に提案する。

「どうか意見がまとまるまで、好きにしてくれていい。結論がでたら、次に会ったときに聞くつてことでここを立ち去ってもいいかな？」

「ふっ、はははっ。アーツハツハハハ！これは驚いた」

目をむいたキンジョウは観察者と彼の顔を交互に見やりながら、声をあげて笑う。

「随分と余裕が戻ってきているようじゃないですか。どこまで私を馬鹿にしてくれるのでしょうかね。」

いいでしょう、回収してあげますよ。そのかわり、今度はその頭蓋の中にある脳味噌を鼻の穴から引きずり出して。本当に私の調整から逃れているのか、きちんとした数値が出せるまでラボでいじくり倒

して差し上げますがね」

「キンジョウ——」

「処分はやめます、回収に同意したのです。あなたもこれを喜ぶべきでは？・観察者」

「——感謝する」

「では！本気でお願いします、私は戦闘は苦手なのでね……目標の回収を開始!!」

観察者の手にはエイリアン・ブラスターが。対する僕の手にはいつもの2丁が。

同時に腰を落として戦闘態勢をとると、パワーアーマーたちは一斉に動き出した！

そして数分後——。

サウガス製鉄所の前から苦悶の悲鳴が上がっていた。

イエローマンにも——アキラにも戻れない哀れな男は。抵抗こそしていたが、それはただ崩れた膝から地面へと倒れ伏そうとする自らをなんとか支えるというささやかなものだけだった。

その男の身体を休むことなく貫きつづけるのは、パワーアーマーたちが放つテスラ・ライフルと呼ばれる電撃銃。

その様子を見てキンジョウは満足していた。

「自分の身体は自分が一番知っている——誰もがそう考えるものです。それはあなたも例外じゃない。」

ですが事実は違います。あなたが自分の何を知っていると思うのです？・なにも！なにもわかっちゃいない！」

憎しみを抱く敵への暴力が刺激となり、キンジョウは興奮を感じているのだ。生物として原始的で、野蛮な欲求が満ち足りて酔いしれている。苦しむ相手が愉快に見えて仕方ないのだ。

「あなたは自分に流れる血を知らないでしょう？・あの祝福があなたに与えられていたのかという理由、それもわからない。」

つまり、馬鹿！身の程知らず！なのに愚かで、自分が強大で特別な



存在だと信じている。どうしようもないですよ、救いようがない。

実際、ポンコツでも使つてやろうと情けをかけたのに。恩を仇で返すとはこのことですよね？」

ついにその抵抗も力を失い、彼は地面へと倒れ伏す。

だが彼を貫く雷の勢いは収まることはない。

パワーアーマーたちは順にライフルのマズル部分を変更すると。こんどは地雷に似た弾頭を放ちはじめ、地面に着弾したそれはエネルギーを周囲に放ち始める。

そうして目に見える放電現象はまた、彼の身体を貫くと今度は地面と縫い付けようとし、その痛み思わず甲高い悲鳴をまたあげてしまふ。

3人のトリガーマンたちはその様子を震えてみていた。

ハンコツクの命令を受けた彼らだが、突然あらわれたこれら“小さな宝物”の手に落ち。捕虜となって、この一部始終を目にすることが許されていたのだ。

だが、それで構わない。

彼らがこのことをグッドネイバーに持って帰るわけではないのだから——。

苦しむ姿を見て満足するキンジョウと違い、観察者はすぐにも終わらせたいと願っているようだった。

「キンジョウ、もういいだろう？」

「あなたがこれほどこのポンコツを愛しているとは知らなかった、観察者。」

ですが、大丈夫ですよ。まだ殺しません、約束ですからね。それに——

「っ!? キンジョウ！」

「えっ?」

いきなり観察者がエイリアン・ブラスターを構え。自分を——自分の後ろを見あげていることにキンジョウは気が付き、振り向いた。

そして、今度は大いに驚く。

空の彼方から人が一人分はいれるくらいの薄緑色をしたエネルギーフィールドの円柱がいつのまにか立っていた。

その中で彼が——何物にもなれなくなってしまった男が、意識を失ったままフワフワと宙に浮かんでいた。

いや、そうではない。

ゆっくりと地上から距離をとりはじめ、天上にむかって飛び去ろうとしているのだとそう思った。

「こつ、これはっ!?! どういう!?!」

「周囲を確認しろ! 誰かいるはずだっ」

「か、観測者!?! 駄目です、駄目ですよ。あいつを、あのポンコツを回収するって話でしょう!」

観測者はいいに頭に來たのだろうか。

乱暴にキンジョウの襟首をつかんで引き寄せると、ヒツと悲鳴を上げる相手に構わず怒鳴りつけた。

「あれはトラクタービームだ! もう、あれではこちらからは干渉できない。なんとかしたいなら、元を絶たないと!」

「トラクタービーム……ということとは、アレは。宇宙から?」

「そうだ!」

キンジョウを突き飛ばしながら、次の瞬間には観測者は地上のそこから消え。いつの間にかサウガス製鉄所の屋上に立っていて、周囲を必死に見まわしていた。

だが、なにも見えない。誰もいない。

その間も観測者の前を下から上へゆっくりと上昇する彼の身体は、ある地点から光の柱の中から消えてしまう。もう手の届かない所へと、行ってしまったのだ。

——フッフ、残念でしたー♥

女の声。

観測者はすぐにブラスターを滅茶苦茶に周囲に向けて発射するが、屋上のそこかしこに炸裂する光弾の火花は、この声の主の姿を闇の中からあぶりだしてはくれなかった。

「誰だ、どっかにいる?」

たった一言だけ、そしてこの問いに答える気配はない。

キンジョウは地上で呆けたまま、しかし観察者はウウと苦しげにうめくと、怒りの声を夜空に向かって解き放つ。

彼の家族——”小さな宝物”はまたしても。

そう、またしても自分たちの手の中からアキラという存在をこうして取り逃がしてしまったのである。

|| || || || || || || || || ||

茫洋とする意識の中で、僕は光を感じた。

(またか)

僕はこういうのはあまり好きになれない。

だって最初はV a u l t e e r で、次がメモリー・デン。

3度目はあの——なんか変な場所だった。その全てが悪夢といっている。だから、きつと今回もまた——違ったようだ。

いきなり男の声が降ってきた。

こっちの声が聞こえる?それは凄いね、反応がある。

ってことなら、話を進めることにしよう。

今から君をパパッと治療してあげる。でも、それには君の協力が必要なんだよ。

これはコーヒーと似ていてね。

豆とその挽き方、お湯の温度の関係みたいなものなんだ。うまい一杯のために、最高のものを用意したいってね。

とにかく気を楽しんでね。

それじゃ、始めるよ——。

気が付くと自分の目の前に真っ白なシートがかぶさっていた。

まさかこの感じ——予感があつて、慌てて払いのけると思った通りだった。

あのホテルの部屋、そして自分はベッドの上、だがシーツの下の自分は Vault 111 のスーツを着ていて裸じゃなかった。

なぜかそのことに安心した。

「助かった——さすがに、ここで裸は」

「寝るときは服を着て寝る派なの？よかった、付き合っていたらそんなこと許さなかったから」

傍らから聞こえた声に驚いて体を起こす。

そして叫ぶように僕は彼女の名を呼んだ。

「ファーレンハイト!？」

寝台の隣にある椅子に座った彼女の姿は、よく覚えているアーマーを身に着けた彼女のそれだった。

「何度も簡単にブツ飛ぶやり方を教えてあげたのに、先生は悲しいわ」

「君が……生きて、いるはずがない。つまり——これも、夢か」

「わかりもしない自己診断にご苦労様。その気もないようだし、さっさと起きてしまったらどう？」

確かにそうだ。

ふらつきながらも僕はベッドから立ち上がると、すでに彼女は先に廊下に出て行ってしまっていた。ああ、確かに彼女だ——。

ホテルの外に出るが、ここに人の気配はない。

僕と彼女だけ。だがそのぼしよには見覚えがあった。

「グッドネイバー？他に人はいないのか」

「いるわよ。君が呼ばないから、出てこないだけ」

「——呼ぶ？僕が？誰を？」

「なぜこちらが答えないといけないの？」

「だって、ファーレンハイト。あんたは僕の——妄想の産物なんだろう？だから、僕の欲求に従うはずだ。理論的に」

彼女はフンと鼻で笑う。

「オンナの欲求は無視して、俺に従え？ひどいクソ野郎に成り下がってしまったのね」

「そこまで言われることなのかな」

「いいから、はやくして」

僕は顔をしかめる。

「こんなおかしな性癖を自分は持っていたのだろうか？」

「なに？そんなことはしないよ」

「馬鹿。違うわよ、誰か呼ぶ人を選びなさいって言ってるの」

「ああ——そういうこと」

調子が狂う。なんだ、これ？

視線を落とし、冷静になろうと努め、誰を呼ぼうかと考えていると。いきなり僕は誰かに後ろから抱き着かれた。まさか、もう選んでいたっていうのか？

「兄弟、兄弟。君と会いたかったんだ、話したかった！」

「ちよつ、やめろつて！」

「ようやくだ！ようやくだ！」

「涙の再会ね。感動はないけれど、泣けてきたわ」

「からかわないでくれよ!!」

突如現れると。僕に抱きついてくるイエローマン。

そして抱き合っている僕らを冷たい目でさげすむように見ている彼女に抗議の声をあげるが。

振り払おうとしても男の方は僕から離れようとしないうし、彼女も冷たい目でみることをやめてくれない——。

頭に来ることに、僕が抵抗をあきらめるとようやくこの2人は落ちていく。着いてくれた。

時間はかかった——ここに時間の概念があるのなら、の話ではあるが。

「なにか言いたそうね」

「喜びを感じているんだろ。心が通じ合っているんだね、兄弟！」

「違う！——なんでここに君達だけがいるのかなって」

「どういう意味かしら？」

「だって……兄弟とは言うけど、君とは話したことすらないし。それに、君についてはその——」

「？」

「元、彼女？みたいな？」

「ワオ！彼女、兄弟の思い人さんだったのかい？」

「違うわよ」

フアーレンハイトの瞳が冷たく輝く。

「やり捨てた上でブチ殺した女、よ」

「あんた、ひどい奴だな。兄弟」

「……」

さすがに今のは、傷ついた――。

「その、えつと……」

「まさか謝るつもり？怒らせたいの？君を容赦なく殺してゴメンって？」

「あー、いや」

「こんなのと寝たと思ったら、死にたくなるわ」

「……」

「冗談よ？笑えない？」

「キョーレツなんだね、兄弟の彼女さんは！」

会うだけで、これほど疲れるなんて。これが地獄か？

それともあいつらの新しい拷問なのだろうか？

「フアーレンハイトとイエローマン。で、他にはだれが？ここに誰も出てこないみたいだけど」

「そう。なら、それでもいいじゃない」

「？」

「僕ら3人の世界か、ロマンチックだな兄弟！」

「意味が、わからないよ」

途方に暮れて僕は道路の上に座り込む。

空は夜空がひろがり、町には街灯が道を照らし、立ち並ぶ建物はとても無機質だ。

「まだ、自分に意味を求めたいの？」

「っ!？」

「それでなにかが変わるとでも、信じている？」

「――正直に言うけど、全然思わない。もうすでに、かなりひどい」

「そうだよ、兄弟。わかるよ、兄弟」

「ありがとう……ところでその兄弟っての、やめてくれないかな？」

「嫌だ」

「嫌ですって」

「……はい」

ファーレンハイトは煙草を取り出して火をつけると、煙を吐き出した。

思わずその姿に刺激されて——同じようなしぐさを裸で僕の前でやった時を思い出してしまう。ちよつとクルものがあつたが、知らないふりをし続ける。

「ハンコックの町は楽しかったでしょ？色々楽しいことが一杯で」

「——メモリー・デンじゃ。そういうのはなかったけどね」

「誤魔化さないの、可愛くないわ。坊や」

「坊やって、言われるのも抵抗があるけど。だいたいそんな言い方、ふたりの時はしなかったじゃないか」

すると彼女は「あら」と初めて気が付いたふりをする。

なぜか近くの路上の上に、映写機で写したかのような過去の記憶が再生される。

あの車庫の中で、最後に彼女が僕を呼んだ時は「坊や」だった。

「——わかった、もういいです」

「素直な子は好き。それに、頼みも聞いてほしいのよ」

「頼み？」

「私はここにいてるけれど、ハンコックの隣にはもういられない。彼は苦しい立場に追い詰められようとしている。誰かが彼を助けてくれないと、これから生き延びることは出来ないわ」

「——かもしれない」

「なら、わかるでしょ？助けてあげて、彼のことを」

「えー」

「不満？でも、彼は嫌いではないでしょう？」

「そこは彼にも事情があるさ、きつと」

「そんな態度ではダメ。あなたが友人のためにミニッツメンを復活さ

せたように。今度もあなたの友人として、ハンコックを助けてあげて」

僕は——僕は正直に言うと、この頼みは別に聞いてもいいような気がしていた。

ハンコックは好きだ。色々と目をかけてもらったこともわかつている。

だがどうしても生前の彼女には聞けないことを、僕はここで彼女に聞くチャンスではないか。そう思ってしまった。

「なら条件があるんだ」

「なに？しやぶる？」

「違う！——ハンコックとの関係について。元カレ？それとも——」

「敵だった」

「……それだけ？仲良しの握手だけで、彼の相棒に？」

「娘よ、あの男の」

「!?」

アキラは驚いた！

そして驚いた顔のまま、いきなりこの世界から消滅した。

現実には常に非情なものだ。この瞬間に彼は、ここに留まる時間が切れた。彼の中で生きることが出来なくなった2人は、そのことをすでに理解している。

「兄弟の彼女さん。次はいつ、ここに戻ってくると思う？」

「しらないわ、坊やの兄弟君」

イエローマンに答えながら、ファーレンハイトは襲ってくる睡魔にあがらうことも出来ず。闇の中へと静かに飲み込まれていく自分の感覚を味わっていた。

ここは彼の世界。彼自身の心象世界なのだ。

望めばいつでも帰ってくるし、新しい隣人だつて連れても来るだろう。そしてその時までには、この世界と共に死者のように永い眠りの中へ戻らなくてはならない。

魂がないものの、これが宿めなのだから。



起きたよ、との明るい女性の声がした。

自分は又も横になっているとそれでわかった。

あのグッドネイバーは、やはり僕の夢の中のものだったのか。

まだはつきりとはしないが、にゅっと人の顔が横からのぞき込んでくる。

寝台の上に設置されたライトがまぶしくて、相手が人ということくらいしかわからなかった。

「お目覚めだね。気分はどうかかな？」

「喉が——なんか、フワフワしているような」

「ん、時間がたてばそれは大丈夫だ。ああつと、まだ起きないでくれ」  
「わかりました」

「君には色々と話しておくことがあるが。まずは、彼女と話してもらった方がいいと思うのでね」

「彼女？」

「そうあの場所から君を救出してきた。君にとっては命の恩人、という奴かな」

「恩人——どこですか？」

いきなり視界の中に、ぴよこんと跳ねるように入ってきた女性が出てきた。

やはり顔はわからないが、ツインテールはオレンジの髪をまとめたものだというこおとはわかった。

「それは私です！そして自己紹介、Z星からの魔の手を打ち破るのは華麗に咲き誇る花、一輪。それがスーより優れたペリア・コスモスこと、ワタクシでゴザイマス」

「え、スーペリ？」

「分かっていると思うけど、それはコードネームだからね。私の本名は未来の旦那様だけに、教えて差し上げたいの——」

「残念だが、これが君の恩人だ。20代半ばで、外見は割と美人に見えるかもしれないが。中身の方はとても残念なことになっている」

なんか、ノリがよくわからないせいで、自分がまだ悪夢の中に迷い込んでいるように思えてきた。

「その、コードネームというのは？」

「いいこと聞いてくれましたっ！」

「ああ、やっぱり君もそれを聞いていたのかもしれない……」

女性は喜び、男性の方は嘆いているようだった。

「ハブリス・コミックって知ってるよね？ キャプテン・コスモスは私たちのヒーローだったの、あなたもそう思うでしょ？」

「えっと、すまない。そのコミックは読んだことがないんだ……あ、シュラウドの方なら何冊か——」

「あ、それは駄目。ピンチにいつもヒロインに助けられておきながら、礼の一つも述べない軟弱で最悪なマザコン野郎じゃない。

でもキャプテン・コスモスはいつだって自力でピンチをはねのけるんだから！」

「そ、そうなんだ」

「そうだよ、キャプテン・コスモスのほうが断然、カッコいいから！」

よし、わかりましたよ。とりあえず私の部屋に来て、秘蔵のコレクションを読ませてあげる！」

「いいのかな？ その——」

「もちろん！ 満足してもらえはるはずだよ。第1シーズンは4話しかないけど。第2シーズンは24話、第3シーズンは全81話中73話まで揃っていて感動してもらえはるはず！」

「楽しみだよ」

僕は運がきつといいのだと信じた。

ひどく悪夢の連続を味わってきたせいで、平和にコミックなんかの話をしているこの状況が——逆にカオスに感じる。

「それで——どうして助けてくれたのかな？ その、だいぶまずい状況に僕はいたはずなんだけど？」

「……あれ？ 今までそのことについて話してたじゃない。話してたよね？ 私」

「いや、コスモス。君は話してなんかいない。

君は君自身のことをひたすら僕患者である彼にマシンガンのように叩きつけただけだ。弱っている病人に情け容赦なく言葉でハチの巣にする君を見て、改めてひどいと思ってたよ」

「そう……わかった、自己紹介はやり直してことで」  
リセットした、ということか？

この世界のルールがまったくわからない。

「私たちは遠くゼータ星から侵略してくる敵を倒すべく立ち上がったヒーローチーム。地球Guardian Alliance of the earthの守護者同盟って名乗っているんだ」

今度こそ僕は白目をむいた。

## 多岐亡羊 (LEO)

——これで収まってくれるといいが

ダイアモンドシティの市長室を出たばかりのレオは、そう思うと一度大きく胸に息を吸い込む。

ほんの少しの間、目を離しただけなのに。

ミニッツメンはいきなりにして、とんでもない山場を越えさせられていてレオにとつても参ってしまった。

いや、それでは事を小さくとらえすぎている——わかっているのだ。

この事が、自分がわずかにも勝手に動いた数週間の空席が生み出した。そのことへのしつぺ返しであるということ。

レオがそもそもにしてミニッツメンの統率者。

將軍などと呼ばれる地位に、請われたからとはいえ。そこに座ったのには理由があつた。善意を振りまくようにしてみせておきながら、その実は外側だけをそれらしく飾ったものを押し付けて離れようとしていたアキラに対し。

もつと誠意をもつて、彼らの復活に手を貸してやらないかと。そう導くことが、V a u l t e e r から這い出た2人には必要ではないか。

そう考えたからあえて、自ら飛び込み。困惑するアキラをも、そこに巻き込んで残させたというのに。

だが、それがどうだ？

ふたを開けてみれば、自分も結局はアキラと同じではなかったのか？

ショーンの行方を、息子の行方を探るには。出来れば友人達を、ミニッツメンを近づけてはならないと思っていた。そう考えた。

そしてケジメのためにケロググとの対決の場へと自分はむかつたのは。これは間違つてはいないのだと、ずっとそう自分に言い聞かせてもきた。

(連絡を絶って数週間。なにもかも、ひどいありさまになってしまっ  
たじゃないか)

胸の奥にチクリと痛みを感じる。

ケロツグとの対決を越えて、インステイチュートへの至る道を探そ  
うと。

単身であるB・O・Sへと乗り込んでいった。ジェームズ・ボン  
ドではないが。スパイの真似事から、彼らからは一定の情報と信用を  
得ることは出来たが。

このことがミニッツメンとの距離を生み出してしまい。

将軍がいない間を、友人のガービーは、彼のミニッツメンは、大き  
なトラブルにまみれて。危うく取り返しのつかない失敗をしでかす  
ところであつた。

そのギリギリで戻ってきた自分は、決してヒーローなどではない。  
すでにこちらへと不信をあらわにしているケイトは別としても、あ  
の戦いで生き残った若きミニッツメン達の表情の中にも。

あの日、キャピタルからの私兵たちと共にあらわれたレオに対し。  
疑惑と困惑の入り混じった、視線がこの背中にも向けられている。

そしてそれは、このレオ自身が招いたことでもある。

マーケットを覗いて、気持ちを切り替えようとひとつヌードルでも  
と考えていたが。

そんな場合でもないだろうと、考え直して町の出口へと足を向けた  
丁度その時である。

「ああっ！ミスターだ、こんなところにいるうー」

「やあ、ナット。元気だったかい？」

「そりや元気だよ。バリバリ元気だよ。それよりミスター、どこに  
行つてたの!?皆、心配していたんだよ?」

「ああ——そりや、悪いことしたかな。パイパーは、お姉さんはどうし  
てる?」

知り合いに今、会うのはあまりうれしいことではなかった。

それでもそれを表情に出すまいとして、微妙な笑顔を浮かべ。適当なことを口にして誤魔化そうとした。

「はア、ミスター。そんなこと聞いているようじゃ、駄目だよ。あんな姉でも、一応は乙女なんだからさ」

「ナット？」

「だから言ったじゃん、皆で心配していたって。もちろんパイパーもそうだよ」

「あ、ああ。悪かった」

「だから、そうじゃないって。ミスターが死んだかもって騒ぎがあつてね、ミニッツメンのプレストン・ガービーって人からの依頼で。ニックやパイパーは、出かけちゃってるんだよ」

「なに!? ガービーの依頼……」

まさかの展開だった。

そんな話になっていたとは——なるほど、ラスト・デビルでなぜコズワースを連れまわしているんだと思つたが。

あの時の旅の仲間とは、ニックもあそこにいたということか。

「ケイトはそんな話、してくれなかったな」

「ああ、あの女ね。なんかミスターのことに怒ってて、知つたことかっつについていかなかったんだよ。パイパーからそう聞いている」

「どこに行くと言つていた？ ヘーゲン砦の他に」

「砦？ いや、それは知らない。サンクチュアリって居住地を目指つて言つてたよ。あの人のことだから無事だと思うけど、少し時間がたつてるんだよね。今度はあたしがここで心配してるってワケ」

あつけらかんとした顔でそう語るナットを見ると、なんだか急に力が抜けていくのを感じ。

私は町の出口へと続く階段脇の手すりに寄りかかるようにして、地面に腰を下ろす。

「——ひどいものだな」

「ミスター？」

両手で顔を覆い、拭うふりをして思わずそれを口に出してしまう。

感謝、申し訳なき、不甲斐なく、悲しく、そして嬉しい。多くの感

情がいきなり胸の中にあふれるのを感じ、大きく。しかし力強く揺さぶられることで。涙腺がかなり、刺激されていた。

——やはり私は、自分勝手に過ぎたんだろう

自分の都合だけ認めるようではダメだ。

知り合って間もない私のために、この連邦を飛び出していつてくれた彼らに。

心配をかけ、怒らせた自分に。私は今一度、ちゃんと自分のことを整理して。反省せねばならないと、思い直していた。

だが、ナットはそんな私を困惑して見つめ。

おずおずと、彼女らしくない話の切り出し方をする。

「実はさ、ミスター。それとちよつと関係ないんだけど、相談があつて」

「——ああ、すまない。それで？」

「実はさ、ちよつと困ったことがあつて。本当はパイパーに相談するべきだったんだけど、あの人。いないから」

「なにかあつたのか？」

「多分ね。その、アキラのことなんだ」

驚く私に、ナットはパブリック・オカレンシズまで来てほしいと言った。

|||||

ヌカ・ワールドは今、にわか騒がしくなっていた……。

というのも、先日電撃的に就任した新たな総支配人——オーバーボスその人が、なんとここから姿を消したという噂がついに証明されたから。

「こりや、今度こそポーター・ゲイジの奴もオシマイだな」

それぞれに属するレイダー達はまるでコピー人間のようにかそこここの言葉を口にする。誰が一番先に我慢しきれずに暴発するか——願わくばそれが自分の組織であるようにと乙女のように清らかな気持ちで祈っていた。

そしてそんなレイダー達に「オシマイ」などとすで見捨てられてしまったゲイジの元には客人が訪れている。

「マギー・」 マグス”・ブラック、それが彼女の名だ。

ここに存在する3つのレイダー集団のひとつ、オペレーターズを掌握する美しい女ボスである。

「これはこれは、ご機嫌いかがな。 マギー……」

「そういうのはいらぬ。今日は説明を求めに来たわ」

「説明？ なにかな？」

「……とぼけなくていいわ。」

ここに新たなオーバーボスを迎えてから、私たちは何度もボスへの面会を求めてきたわ。覚えている？」

「そのことか。 それなら、ああ、覚えている」

美女の目が細くなり、冷たく光りを放つ。

「ところでマーケットじゃ噂が随分と流れているの、知っているかしら？」

オーバーボスはフィズトップマウンテンにいない。このヌカ・ワールドを出て行ってしまった、と」

「噂はあるよな。 それは俺も聞いていた」

「事実なの？」

ズバリ、と踏み込んでくる相手にゲイジは変わらぬ調子で逆に問いかけていく。

「——それに答える前にまず聞いておきたいんだが。」

まさか、あんたはそんなことを俺に聞かされたためだけにわざわざここへやってきたと、そういうんじゃないだろう？ 違うといつてくれ」

「なぜ？ あなたが困るから？」

「いいや、違う。 あんたが言われているほど、ケツの穴の締りはよろしくないと証明してしまうからさ。俺はこれからのオペレーターズを心配して聞いておきたいんだ」

「いうじゃないか、ポーター・ゲイジ」

冷笑を浮かべる女ボスだが、それくらいでは挑発ですらないとまだ怒りは表面に浮かんで来ていなかった。



「すでに同じことをデイサイプルズからも聞かれたはずよ」

「ニシヤか？ああ、それはそうだ。」

だが、彼女と俺とはあんたよりも付き合いがとても長いし。以前からよく顔も合わせている」

「そうね」

ゲイジは両手をひらひらと上へ返しては戻しを繰り返す。

「——それだけだ。今更、変に勘繰られるようなことではないと思うが？」

「礼儀と、信用の問題よ。」

ボスがいらないなら、まずはこちらにそう説明があるべきであったし。

信用については、お前には随分と甘くしてきてやったのに。こんな態度を見せつけられては、考え直さなくてはと。こちらが同盟の価値を無意味と感ずいても、おかしくないとは考えない？」

明らかに同盟離脱を匂わす脅迫にも近かったが、ゲイジはそのくらいでは慌てない。

「確かにあんたの口にしたその2つについて、俺はなんの言い訳もできない立場ではあるが。」

困ったことに別の視点から見ると、あんたのその言い草は何ともわずらわしいだけのくだらないことだと断言できてしまうから、それをあんたにどう伝えたらいいだろうか？」

「——私を、侮辱して何も無いと思っているの？」

「そうは言っていない——嫌、言っているな。」

違う、賢いアンタがなぜそんな馬鹿な奴のふりをするのかわからないうと、そう言っているだけだ」

「説明を、ゲイジ」

ゲイジはここまで表情はなにもあみせてはいない。

「わかってもらいたいのには、オーバーボスにとってそんなものはどうでもいってのが。今回の話の難しいところなんだ」

「オペレーターズを認めないと？」

「いや、まさか。それはないさ。」

新たな俺達のオーバーボスは冷静で冷酷、状況を理解し、なにが一番なのかはちゃんとわかっている」

「なら、なに？」

「オーバーボスは就任と同時にあんたらボスたちにあいさつに回ったことがあつただろ？」

どうも、それが彼に悪い印象を与えたようなんだ。それぞれの力を認めてはいるが、それをまとめているボスたちに本当にその力があるのかどうか。どうもそれをまだ信じ切れないと——」

「冗談でしょ？」

「いや、本気さ。ここだけの話、戻ってきたボスに俺は『どうだった？』と聞いた。」

それぞれの力をほめる一方、それをまとめるボスたちへの印象はひどいものだった。ニシヤは分裂症も思うサイコパスだと苦笑いしていたし。メイソンは間抜けに見えると、困惑さえしていた」

「一人足りないわよね？」

「まさか、ここでそれを聞きたいのか？ボスのあんたへの評価を？」

「もちろんそうよ」

「アンタにはいい女だと褒めていたよ。是非、ベットを共にしたいとも口にしていた」

「——殺してやる」

「なぜ？何が不満だ？実際、あんたは美人なんだ。」

ボスはただ、そういう印象を持ったというだけで。別になにかふぎけていたわけじゃない」

「そんな言い訳をつ！」

「なあ、マグス。落ち着いてくれよ。」

ならば、はつきり言うが。ボスの前歴がどうこう話し合っていたところを、あんたらは本人にうつかり聞かれてしまったんだろ？そんなこと普通であっても、噂された方は不愉快な気持ちにもなるさ。

それはアンタたちのミスだ。

ニシヤも、メイソンも。いきなりそんな失礼は、ボスにはしなかった。あんたが面会をしつくく求めていたことも、それを挽回したいと

考えてのことだったんだろ？」

「……」

「とにかく理解はしてくれ。オーバーボスはあんたらをまだ、完全には信用してはいないってことを」

マグスはそこで大きく息を吐き出した。

本人は自覚がないのだろうか、そのしぐさには妙な色つぼさを見るものを感じさせる。だが本人にしてみれば気持ち切り替え、冷静になろうとしたというだけのことだ。

「あの出会いはあまり良いものではなかったかもしれない。」

だが、オーバーボスがここから消えたというのが事実を。まだ納得はしているわけではないわ」

「参ったね。まだそんなことを口にするとは、アンタはどうもまだ冷静ではないようだぞ」

「なんですって!?!」

「これは察してほしかったことなんだがな——」

「……続けて」

「新たなオーバーボスは、アンタらの忠誠心をはっきりと疑っている。そう、アンタたちのミスが原因だ。」

背景の興味を持ち、過去を調べ上げようとまで言ったのだから？」

「彼からそれを聞いた？」

「というより、ひどく警戒心を見せるから俺が聞きだしたんだ。」

弱点をいきなり見つけ出そうと話し合う可愛げのなさに、俺はさっきの印象を聞き出す流れがあった」

「こちらの落ち度だと非難するの？ゲイジ」

「非難だって？そんなこと誰がしているんだ、マグス」

押し返してくれとばかりに両手を前に押し出すしぐさを見せるゲイジは

「あんたらはボスにもう少しかわいげのあるところを見せてやってほしいだけだ。そうすれば、俺もボスにもっと肩の力を抜いてやってくれていると、助言ができる」

「こちらが焦っているというの?」

「デイサイプルスは自然に近づいてきて、会話のついでにそれを聞いてはきた。そしてパックスはそもそも十分以上におちついたもので、問い合わせることさえしてこない。」

ところが今、ここに来て会うなりいきなり神経質に責め立ててきたのは、あんたのところだけだ」

「——誤魔化されないわよ。ボスはどこ？」

「言えるわけがないだろう。」

アンタに続いて俺もオーバーボスの信頼を一緒に失えって？

大丈夫だ、ボスは戻ってくるさ。外にも用事があるというから、区切りのいいところまでやってくればいいと言ってやったんだ」

「帰ってこないかったら？」

「最高のレイダー集団を3つも束ねるボスの座を手に入れておいて、そこから逃げ出すだって？まさか！そんなこと、あるわけがないだろう」

「コルターのおかげでこっちは1年を無駄にした。新しいボスが本当に違うと、なぜ言い切れる？」

ゲイジはそこで大げさにため息をついてみせる——。

「やれやれ、これは本当は内緒の話なんだがな……あんたを一発で冷静にさせる、ビッグニュースがある」

「誤魔化すの？」

「いや、聞いた方がいいぞ。聞けば、アンタすぐにもここに来たことなんて忘れようとするはずだ。ヤサに戻ったら不満顔の部下には大丈夫だ、信頼しろと言います。間違いなく、そうなる」

「？」

ゲイジの予言は的中した——。

オペレーターズのボスは突然、黙りこくると。

謝罪の言葉を口にして、そのまま無言でここに背を向け出て行ってしまったのだ。ゲイジはそれを眺め、意地悪く心の底で中指を手を振る代わりにかざしておく。

あの不気味なオーバーボスはここを立ち去る前に、ゲイジの求めに

応じるとヌカ・ワールドのエリアの一角をすでに落としていたのである。

そこは今は空っぽのエリアということになるが。彼は利口にもそれをどのボスに任せるかまでは決めずに立ち去った。

「女どもは欲深で困る。少しは慎みつけてやつを、持たないとな」

想像通り、オペレーターズとデイサイプルスは我慢しきれずにこちらに探りを入れてきた。

ゲイジはそのこと自体は悪いとは考えていないが、あのボスは連中が逆らうような態度を見せたと聞けばきつといい顔をしないでらう。

「しばらくはこれでおとなしくなるだろうが——。もつとじつくり互いを焦らしてやらないと。俺の首も危うくなる、か」

当面は、楽しくやらせてもらっていいという自分へのご褒美だ。

|||||

少女が一人で住まう家に、良く知っているからとはいえ男が入って長居をするのはよくない。

それが元々、この町の市長を批判する立場にあるこの姉妹ならばなおさらだ。とはいえ、普段はあまり悩みそうのない少女からのたつての頼みでは。それを断ることもできなかつた。

「アキラが、どうした？」

「それもどうかかわらないんだけど——とにかく、ちょっと聞いてね」  
ナツトはそう言うのと、小さな事件について話し始める。

姉がこの町を発つてから数日、家の中に何者かが侵入して、2つの袋に一杯のガラクタを詰まってそれが置かれていたのだそうだ。

そんなことをしたのは残されたメッセージから、アキラだとわかつた。

「彼は？ここを訪問した、わけじゃないんだね？」

「そうだよ、泥棒みたいに。寝ている隙に、入ってきて。出て行った、みたい」

「——彼らしくないな。なんでそんなことを」

「それがね。そのちよつと前に、ここのマーケットでアキラにあったかもしれないってことがあってね」

「この町に彼が？」

「でも、それは確実じゃないんだよね。」

だつて今のミスターと同じ、あのV a u l t スーツを着てなかったし。顔を隠そうとして、それに黄色のスーツなんか着ちゃっててさ」

ナットはあの一瞬のことを思い返す。

自分を見つめた彼のあの眼。

以前は目つき悪いと言いはしたが、それでも親しみのようなものは感じる事が出来たのに。

ナットを見つめるソレは、まるで価値のないものを見るときのそれであり。そしてナットから見たその目は、目玉のない2るの大きな闇の淀んだ洞のよう。

あの彼からは、そんな吐き気を覚える、気持ち悪さを本能的に感じ取っていた。

「アキラ、なにかあったのかな？ミスターは知らない？」

「——彼とはしばらく会っていないんだ」

「そうなんだ。それでね、困ったことってそのアキラが置いていったバッグの中身のことだよ」

残されたメッセージは、荷物を預かってほしい。扱いやすく処分してくれても構わないとあったので、ナットはさっそく翌日にはマーケットにそれをキャップに変えたいと申し出たのだそうさ。

「そしたらさ、それが5,000キャップ近くになったって言われちゃって」

私は思わず、その数字に息をのむ。

大金だから驚いたわけではない。アキラの残したことで、この少女はとんでもない立場に追いやられたのだと知って、絶句してしまったのだ。

「そ、それで？大丈夫なのか、ナット」

「よくわからないよ。とりあえず、留守にしているお姉ちゃんの知り合いがどうこうとか適当に言い訳したけど」

「そのキャップは？」

「マーケットに預かってもらってる。あんなのここに持ち帰ったら、落ち着いてここで生活なんてしてられないよ」

「さすがパイパーの妹だな。いい、機転だったと思うよ」

商人たちはキャップに関して鋭敏だ。

正義を口にする新聞社が大金を用意したと噂を耳にすれば、その使  
い道に関しても情報を集めたくもなるだろう。

そうやって、町には美人姉妹の情報が広がっていつてしまう――。

アキラはなにをやっているのだろうか？

私の知る、賢い彼ならば。ナットがこんな風に悩まなくてもいいよ  
うに気を遣うことが出来るはずだったのに。

それとも、彼にもその余裕はないということか？

「確かにそのキャップはマズイな。君たちにとつて、特にそうだ」

「どこかのレイダーから巻き上げたんだろうなって思うけど。まさか  
そんな大金になるとはわからなかったから――」

「とにかく、何とかしないといけない」

このままマーケットに預けるのは、パイパーたちの迷惑にしかなら  
ない。

とはいええ、ミニッツメンでそれを引き受けるというのも問題だ。

ハングマンズ・アリーは今。立て直しに心を一つにせねばならない  
時なのに、自分の近くに大金が運び込まれたなどと知っては。激戦を  
生き延びたばかりの若い兵士達が邪な欲望を抱かないとは言い切れ  
ない。

突然、私は脳裏に全く関係のない過去の情景を思い浮かべていた。

それはノーラが、シヨーンを出産する直前のものだ。

おなかの中の息子と共に待っていた彼女は「間に合ってくれた」と  
言つて、抱きしめると泣いて喜んでくれた。

出産の時は、いきむ彼女の手を取つて。男はなんて無力なんだと、  
近くで見ているしかなかったが。

苦しい時は終わり、涙を流して喜ぶ2人には新しい家族が――。  
そこで急に私は現実に戻ってきた。

なにを現実逃避しているんだ。それはもう200年以上も昔の話だ。そして家族はもう、この世界には厳密には1人しかいない……。

「わかった、一晩考えさせてほしい」

「うん」

「それじゃそうだな。とりあえず、マーケットには僕と君で話をしにいくと伝えておいて欲しい」

「わかった」

「それと、このメッセージカードは借りてもいいかな？」

「袋に入っていたもの？別に構わないけど」

そうして私はまたも宿題を抱えて、ダイヤモンドシティから立ち去ることになる。

|||||

——とにかく扱いやすいようにして預かってほしい。

アキラのメッセージを読み直し続け、一晩を考えぬいた私はそれを額面通りに理解することにした。

そしてそれでいいなら、話は簡単であった。

翌日の朝、私はナットを連れてマーケットを訪れると。

その大金はミニッツメンのうんぬんだと、適当な話をした後で。その半分をこのマーケットに投資したいと申し入れることに成功した。

そして残る半額で、この町にある空き家をひとつ購入する。

自分は数字に強いわけではなかったが。

軍隊時代には、除隊後にバラ色の隠居生活を夢見て投資に励む奴がチラホラといた。

そしてあのアキラがサンクチュアリで見せた、悪党のようなふるまひも参考にして、この方法を考え付いた。

さっそく戻ったら、今日から数人のミニッツメンに。そこで寝泊まりするように指示しなくちゃならないだろう。

それはこの町へのならみを利かすということにもなるし、知らないうちに家を手に入れたあの若者だって。特にどうしろとは言つてな



いなのだから、満足してくれるはず。

そうやって肩の荷が下りたと、再び出口へと続く階段を上る私は、ふいに青い空を見上げて思った。

——アキラ、君は今。どこにいるんだ？

ケロツグの事、インステイチユートの事、そしてB・O・Sの事。それらにようやく区切りがついたと思ったが。

今、思い知らされるのは。友人たちの事、ケイトの事、ミニッツメンの事。

そして、同じくこの世界に飛び出すことになったあの若者の事を忘れていたのだと恥じ入るばかりだった。

なのに、なぜだろう。

私は今すぐにでもあの若い友人に会って。このおかしなスパイ生活と、それに至ったひどい経緯について語りたいたいと思っている。

鬼づつこ (Akira)

扉が開き、その中へと病衣姿の僕はそこへと入っていく。  
一歩踏み入れた時は、わずかな違和感を覚えたが。気にはしなかつた。

「すみません、誰かいますか?」

そう口にしながら、部屋の中央へと進むと。

今度こそはつきりとそれを感じる事が出来た。

それはどこにでもあるような普通の部屋ではあつたが、空間の仕切り方がはつきりと別のものだと主張していた。

真ん中には広大な空間を作りつつ。部屋の隅には小さく、そして整理されて物がしつかりとまとめられている。

こんな場所はあるの連邦では決して見られなかった、明らかに異国の文化からくる美的感覚がここにあるのだと思つた。

『おお、目が覚めたのかよ』

銅鑼声が響き、僕は体をこわばらせる。

『死に損なつたと聞いたが、まだまだやれそうじゃないか』

来ている服は、ここに住む連中に似ていて。鈍い銀色のゆつたりした上下を身に着けてはいたが。

髪にわずかにして白髪が交じり、刻まれた皺が長く厳しい戦いを生き抜いた証明のようだった。

そして僕よりも10センチ前後身長の高い彼は、階段を下りてきて僕の前に立つと。これまでも長い間友人であつたかのように、肩をつかんで微笑みかけてきた。

しかしこの時の僕は、先祖返りしたかのように。

あの Vault 111 から這い出たばかりの頃と同じく、緊張し、対応する余裕を失つてしまつていた。

『どうした? キサマもやはり、大和言葉は理解できんのか?』

僕は慌てて答える。

なぜか、それが自然にできてしまつた。

『そんなことは、わかりますよ。日本語、ですよね』

『二ホン？——まあ、いいわ。やはり、言葉が通じるだけで、満足だ。もう長いこと、グチャグチャと訳の分からん言葉で話しかけられていたのだからな』

そう告げると、彼は「まあ、座れ」と言うと言わなくても持つてくると僕に背中をむけた。座れとは言われたが、“どこに”とは聞かされてなかったもので、僕はまたも戸惑いを覚える。

ここには椅子らしい椅子も、机もないのだ。

座るとするなら床の上しかないが、座り方とか、位置取りとか。どうしたらいい？

本当ならば、戻ってくる彼に僕は「どこに座ればいいのですか？」などと間抜けな質問をするのが正しかった。

だが、困ったことに厄介な僕は、こんな時に限って。どうしたらいいのか、わかってしまったらしい。

キョロキョロと部屋の四方を確認しながら、思うままに移動し。そこに胡坐をかいて腰を下ろす——。

戻ってきた彼は、ニンマリと笑みを浮かべた。

『ほう、礼儀はわきまえていたか。感心、感心』

『これで問題はなかったですか？』

『それでいい。貴様は客人よ、下座につくのが当然。そして、この部屋の主である俺は。上座に座る』

あいつらはそれをちっとも理解しない、そう言いながら彼は僕の隣に座ると、持ってきた銀の盆の上に置かれた白く曇っているグラスを僕に渡し。続いてそこに液体をなみなみと注いできた。

『まずはひとつ、長らく出会えなかった同胞と』

『頂きます』

液体の正体をうっかり確かめることも忘れ、僕は一気に杯をあおってしまい。キツイのど越しに目を白黒させてしまった。これはウィスキー？

『奴等の酒よ。悪くない風味ではあるが、飲みつづけたいというほどではない』

『水と、氷が……欲しいかも』

『それでもやはりこれがない人生は、つまらんものさ』  
そこまで話すと、彼はコチヲをじつと見つめてきた。

その目に僕は居心地が悪く、モゾモゾしたくなる。

『落ち着かぬようだな。どうした？』

『えっと、その……わかってほしいんですが、難しいのです。この、日本語で日本の人と話すの、初めてなんで』

『そうなのか？親の腹から生まれおちた時から、それを使っているかのように流暢ではないか』

『ははは、おかしいですよ。本当に、自分。おかしいんです——』  
なんだか自分には躁鬱の気があるのではないか、頭のどこかでそんな風に思う。

あの場所から地上へ出てきて、それからわずか数カ月。僕の精神の針は、右へ、左へつねに振り切れっぱなしになっているじゃないか。安定した時なんていつにあったのだろうか？

それまでは子供のようになんにでも怯えて、自信がなかったくせに。

ひとつ、何かをきつかけにすると。まるでなじんでいたかのような、大悪党のふりをしてみせ。周囲を巻き込んで大いに迷惑をかけている。

狂人、まさにこれだ。

なぜだろうか、僕はなぜかその瞬間に突然にして。猫をかぶったバケモノのように、性格どころか人格から一変してしまうことをやめられないのだ。

『そういえば、我らはまだ。互いに名前を名乗りあつてはいなかったな』

『え、ああ。そういえばそうですね』

『これは失礼した。それでは、改めて——』

そうして彼はグラスを置くと、わずかに体をずらしてからあぐらのまま自身の拳を床に押しつけ。わずかに体制が前かがみとなって僕にお辞儀をする。

『俺は尾張の正四位下弾正大弼様が家臣。加護 十四郎と申す』

腹の底から押し出されたその自信に満ちた言葉は、さつそく今の僕を簡単に打ちのめしてしまった。

慌てて同じ姿勢をとり『僕は……』と口にしたところで、言葉が途切れてしまう。

自分は誰なんだろうか？

あの日、怯えて自分を不気味に感じていた五十嵐 晃なのか？

流れる血の量など頓着もせず、非情に振る舞うことができる大悪党のアキラなのか？

そのどちらでもない。自分を家族だと信じているらしい、おかしな集団では実験動物のように扱われた哀れなイエローマンがそうなのか？

逡巡する僕の顔を見ていたトシローの顔が不快に歪み始める。

かの時代のサムライ達は気は良いものが多いとはいえ、総じて短気で癩癪もちと知られていた。

図体だけはかくとも、モゴモゴと口ごもる若者の姿がさつそく気に入らず。容赦なくこの男は雷を落とした。

『貴様……』神木の中より火を抱えて飛び出してきた赤子であったというわけでもあるまいよ。たかが己の名前、なぜここで口にできぬのだ！』

彼の勢いではない。

その言葉のどこに反応したのかわからなかったが、僕の心の底でなにかが力強く、怒濤の勢いで押し上げてくるものを感じた時には、口は開かれていた。

『——アキラっ！俺は、五十嵐 アキラツです、はい』

トシローはいきなり素面にもどると、「そうか」というと再びグラスを手に取った。

僕はつい今しがた自分で口にしたことが信じられなかったが、出た言葉にはなぜか不思議と安堵のようなものを感じていた。

そうなのだ。

こんな意味不明で滅茶苦茶な運命を嘆いてみせたとしても。

僕は結局は晃でしかなく、アキラとしてやっていくしかないのだ、

と。

同じくグラスを手にとると、残っていた液体を無理やりに胃袋に放り込んでいく。

焼けるような痛みにも似たそれは、しかし今はなぜか少しだけ悪くないように感じられている。

『もう一杯だ、いけるだろう?』

『はい』

そうして僕たちは、日本人は。

この異世界で別の世界の酒を黙々と飲み干し続けた。

|||||

ドクター、つまりエリオット・ターコリエンは新しい自分の患者のそんな様子を。コントロール室のモニターからじっと観察していた。

そのそばではコスモスが長らく通信装置の前に座り。縫ったり、吠えたり、忙しく騒いでいたが。ついに諦めたのか、席を立つとドクターのところまでやってくる。

「キャプテンからは返信ナシ?」

「他の連中もそう。早めに手を打ったって知らせたのに、誰も何にも返してこない。これって、無視されてるよね」

そういうと、珍しいことに彼女は弱気な表情をこちらにみせた。

「早めに手を打ったの、別に、良かったんだよね? 間違いだったのかな?」

「——多分」

正直に言えば、アライアンスはきつと僕たちの行為を非難する気持ちがあるのかもしれない。コチラの呼びかけに反応しないというのが、その証拠だ。

だが自分は医師として、そしてコスモスはヒロイン(?)として彼のことを見ていられなくなってしまったのだ。

モニターを覗くと、コスモスは鼻を鳴らす。

「なんだ、うまく話せているじゃない。仲良く、飲んでるし。心配はな

かったのかも」

「どうかな。トシはさつき、彼をさつそく怒鳴りつけていたんだよ」  
「うわっ、可愛いボーイフレンドに育てるんだから。いじめて欲しく無いな」

「――なにをいつている？」

またはじまったのか、ドクターはため息を心の中でついた。

このコスモスは少女の時代から夢見がちなところがあるにはあつたのだが。大人になつてもそれは収まることはなく、本人の暴走も加わつて大きな欠点と断言できてしまうほどにまで育つてしまった。

オレンジ色の髪をしたそこそこの美人が、これですつかり台無しになつている。

医師の見たところ、彼女の中のブレーキはすでに完全に壊れて回復の見込みは全くない。だから主治医として、ドクターはいつも気を付けてやらねばならないのだ。

「宇宙じゃ出会いは期待できないしね。それに、いちど年下のカレシつて欲しかったんだ。どんな味がするんだろう？」

「よおし、コスモス。大きく息を吸つたら、そのまま吐くんだ。冷静になつて、そんなくだらない妄想は忘れろ」

「どうしてよ!? この新しい恋路を邪魔するの？」

「君の都合を、彼に。『僕の患者』に押し付けて欲しくないと云つてる」

「どこが!？」

「ボーイフレンドといつたかと思えば、次には彼氏ときた。ダーリンと言ひ出すまで、こつちは付き合いたくはない」

「だつて彼、フリーなんでしょ？」

「それが駄目だと言つてる。彼は、傷ついているんだ」

コスモスはこちらの言葉を聞くつもりはないようである。

コンソールにその小さな尻を乗せると、多分本人は精一杯であろう足を高くあげてのセクシーっぽいシナを見せると。

「ドクター、知らないのかい? 『女の渴きは、女で癒せ』つて」

「相手の考えを無視する。ただの迷惑でしかないな。だいたいそのセ

リフはなんだ？」

「ジェット・コミックスの『テイルズ・オブ・アドベンチャー』に出てくる主人公。

ミスター・チェック・ハッターのセリフだよ。他にも『身体の傷は勲章でも、女の傷には手当てが必要だ。もちろん新しい女で』ってね」「それ、知ってるよ。

新しい冒険の旅に、新しい彼女を作る性倒錯者の墓荒らしの盗賊の話だろ。君は嫌いだと言ってたじゃないか」

「そうだっけ？」

「童貞野郎の願望丸出しだって、下品に大笑いしていたのは誰でしたっけ？」

「忘れたわ、過去なんて。女だもの——」

首を横に振ると、ドクターはモニターの中の2人に集中する。

どうやら砕けてきたようで、何かを話し合っているようだ。青年の方が、トシになにかを熱しんに語っているのが見える。

——どうやら上手くいきそうだ

ここでようやく、ドクターは自分の判断が正しかったと安堵した。

アキラの治療はこの母船であつても難しいものであつた。

傷の深さもさることながら、なによりも彼自身の心が弱り切つていて、コチラの施す治療の成果が思うように上がらなかつたのだ。

自分への不信、憎悪。ためきれない多くの怒り。

これだけではないものの、とにかくこうした負の要素がアキラの心を激しく衰弱させていて。それが傷ついている肉体にも悪影響を与え続けていた。

医者としてそれに気が付くと、エリオットは早い段階で劇薬の用意を——トシとの面会をさせるべきかを考えた。

トシはここにいる誰よりも戦士だ。

戦場で戦えない奴は彼の興味には入らない。だが、もしかしたら——



「とりあえず、これなら一息付けそうだよ」

「なにが、一息つけるのかね。ドクター」

いきなり〃いるはずのない第三者〃からの声が出て、ドクターもコスモスも飛び上がった。

コントロール室の中に、いつの間にか彼がいた。

2メートルをこえる長身の大男、油でねめつけたような金髪はオーラルバックでキメ。普通以上に白い肌と、感情のかけらも感じない無機質な表情は。

その全てを裏切るように、強く激しいアクセントとリズムをそなえ、かなり滑稽にも聞こえる言葉を発してくる。

そしてそれはここにいるヒーロー達へむけられた非難の声でもあった。

「ゲゲツ、もう帰ってきちゃったの？」

「帰る？カエルだと——この原生動物のメスがっ。いつになったら正しい言葉を覚えるのだ。私は帰ってなんか来ていない、ここに仕方なく来てやっただけだ」

「うツザ」

「それにしてもドクター、わずかに知性的で。常識をわきまえる君がいて、ここはどうなっている？アライアンスはどこだ、君たち以外の姿が見えないぞ」

「母船の中を回ってきたのか？ああ、ちよつと。それはね、事情が……」

ドクターは事情をどう説明するべきか、慌てて脳を活発に動かし始めたが。

回答が出る前に、相手の不満は一気に頂点めがけて駆け上って行ってしまふ。

「何を見ている!?それは誰だ!?なんだ、あれは。なんでここにいる？誰が呼んだ？」

「あたし——このコスモスさんがどこからともなく放たれた愛のウェーブを感じて。あの汚れた大地から、攫ってきちゃいました」

止める暇もなくこちらにも主観を大いに混ぜた、乱暴な説明などして

しまう。それを聞いて初めて大男の顔に、驚愕の表情として眉が跳ね上がった。

しかし声は、その何倍も激しく跳ねていく。

「なんだとっ！この万年発情娘がつ！なんて軽薄な行為に及んでくれたのかっ」

「ふたりわく、体アが、求めあつてたのさア。ならそれも、愛だろ？」

「馬鹿だつ！愚かすぎる、どういふつもりだ！」

ドクターはもう頭を抱えるしかなかった。

こうなるとも止められない、ふざけた会話への介入のチャンスはとつくに過去のものとなっていた。

そして常識人にとって、これほどわずらわしい存在が目の前で対立するのを見続けるのは。とても耐えられるものではない。

「あの青い、泥の星——」

「違う、青い海の星だよ」

「海っ!?はっ！これだから、愚かな原生動物は、度し難い。」

君らが自分を知的生命体であると自称するならわかっかけていて欲しいことだが。青い泥沼だつてあるのだよ。そして、それが君達のあの星のことなのだ」

すぐそこにある窓の外の巨大な地球を指差して、巨人は吐き捨てる。

まあ、”彼の立場”ならばそういうことも言えるのかもしれない。

「ブーブー、エイリアン。調子に乗るな——」

「黙るのだ、この原生動物が……まったく、君らに呆れない時はないのか？」

今、ここには迫る強大な敵がいるというのに。いや、待てよ……まさかそのことを都合よく忘れてしまったのか？トラブルを認識できぬほど、この短期間で退化してみせたということかっ！」

そう叫ぶように声をあげると、大男はビシツと部屋に置かれたメイソニモニターを今度は指さした。

するとそこは突然切り替わると、ここからは見えていないはずの月の裏の様子を映し出してみせた。推進装置がへばりついている、そん

な巨大な岩の塊が小さく映し出されている。

「もうすぐあれが、この星の大气圏上へとやってくるぞ。そうなれば、この母船とも撃ち合うことになる。」

だがあれほど巨大な相手と会っては、この船では太刀打ちできない。

つまり君たちの危機は、もうすぐそこまで迫っているんだ！

すぐそこに迫る君達への脅威なんだぞっ」

そう、いつの間にか知らないうちに。

連邦どころではない。この地球にZ星からの侵略の魔の手が、またも襲い掛かろうとしていたのであった。

|||||

僕とトシローの会話は、驚くことに再び始まると。今度は僕の独壇場となっていた。

彼は、自分が仕えた殿様のその後を気にしているのだと呟いたので、僕は思いつくさきから取り出した情報を口に出していく。

彼は黙ってそれに聞き入り。

時々だけに、疑問を持ったことを詳しく知りたがり。

それでも最後まで——主君、織田信長公が本能寺の変にて命を落とすまでを静かにグラスを何度も空にしながら黙って聞いていた。

「そうか。殿はそうやって、最期を迎えられたか……」

僕はつい気を利かせたつもりで、その後の話も続けようとするが。

彼は「もういい。知りたいことは、わかった」と言っただけで聞こうとはしなかった。

「それならそれで、僕は構いませんが。それでいいのですか？」

「なあ、俺の一生も50年。この忠義は一代限りで十分よ。俺はそれを、あの織田の殿様に捧げると誓っていた」

「だから、家のことはもういいと？」

「そう、知らんよ。どの道、俺にはもう関係ない。」

貴様の話が本当なら、気も遠くなるような未来とやらでこうやって

まだ生き汚く苦界にひとり残っているわけだしな。

そして俺もここでは新たな戦場にすでに立って、長い」

彼の言葉の意味の全てはわからなかったが。

彼の口にする、心意気(?)のようなものはなんとなく理解できた気がした。

「トシロー、ひとついいですか?」

「なんだ? 若いの」

「あなたの話を聞いて思ったのですが……」

「イライラさせるな」

「僕には過去が思い出せません。すると、それがとても気になって仕方ないんです。

でも、今。あなたはこう言いました。『自分にはもう関係ない』つて。

実は僕も、自分の過去なんて関係ないと考えられたらなつて。思う時があります。でも、そんなことが出来るのでしょうか?」

聞くと、彼は口元に皮肉めいた笑みを浮かべ

「そりゃ、坊主にでも問うべき設問に思えるがな。貴様、俺がどう見えるんだ?」

「——武士?」

「まあ、それもそうなのだが。そういうことじゃない。

あのな、俺はな。人斬りよ、人を斬る鬼なのよ」

「……」

「なにもこれは、俺が言い出したことではないぞ。この俺を、この苦界へと産み落とした女がそう言ったのだ」

「つまり、トシローの母親?」

「そうとも言うな。ま、もう顔も覚えておらんが」

そう言うときまた一杯、琥珀色の液体は彼の体の中へと消えていく。再びそこに液体が注がれていく中、僕は戸惑いを覚えながら。それを口にする。

「人を斬る鬼になれば、もう気にならないと。そういうことですか?」  
「違う」「違う?」

「だいたい貴様、人は斬らんのだろう？」

「ええ、まあ……刺したり、裂いたりしか。やったことはないです」

「それは——もういい」

なんだか僕の答えはピント外れだったらしい。トシローは呆れたように何度か首を横に振ると、急に真面目な顔をして僕の顔を覗き見た。

「貴様、利口だと聞いていたが。なあんにもわかつてはおらんのだなあ」

「自分が頭がいいかどうかなんて、知りません。でも指先は不器用ですよ」

「フン、知るかよ。」

「だいたいな、人を斬ったとして。貴様は俺のように人斬りの鬼には絶対になれん」

「——どうしてですか？」

「それはなあ」

彼の僕を見る目が、なぜか怪しく輝いたように見えた。

——貴様は人を喰らう鬼だからよ

僕は両目を大きく見開くことしかできなかった。

|||||

「人をそのまま、食っているのだろうか？」

「——ええ」

「うまかったか？どんな肉と比べても？」

「別に、味わっているわけじゃないんで」

「そうなのか？」

「それに……まあ、生で。衝動でやってるようなだけなので」

「なんだ、つまらん！」

お主には興味があったのだ。

トシローはそれをまた繰り返した。本当にそう彼は思っているようだった。

言葉の端々に、残念がつている様子すら感じられた。

「あいつらが言つとつたのよ。貴様が来たとかいう連邦とやらにはな、血と肉をすすする鬼がいると」

「鬼、ですか」

「おおよ！そんなのがいるなら、会いたいと思つていた。なぜなら儂も鬼だからな」

そう口にする、またもやグラスの中のを空にする。

そういえば黙つていたが、いい加減飲みすぎではないだろうか？

「鬼同士、向かい合つて大いに騒ぎたい。下らぬ願いだ、今の儂には贅沢に過ぎるといふものだったらしい」

「鬼、同士」

「キサマにはがっかりさせられた。

人だの、過去だの、なんだかんだ。生きていれば面倒がおこるのは当然だろうよ。

それが鬼であるというならば、キサマは人に憎まれて当然。恐れられて当然」

「……」

「なのにつ！」

ぴーぴーと、泣き叫ぶガキも同然で。あれがない、これもない。どうしてないとそうやって聞いて回りたいのか？

それで何かキサマはわかったのか？」

「——それは」

「答えられんだろう。当然よ、なにもないからな。

いいか？俺はキサマの過去など知らん。誰を殺して、どんな奴に憎まれていいのか。そんなのはどうでもいい。

だが、そのような業を背負つて生きる鬼なら。俺は是非会つて見たかったのだ」

トシローの言葉に僕はただ、打ちのめされ続けていた。

「お主は犬よ、それも間抜けのな。

賢い獣と愛でられてもいいのに、ガキのように己の尻尾めがけてグルグルと回り続けるアホウよ。」

獲物を捕らえることもせず、己の尻尾めがけてじやれるようなキサマは。賢かろうが、間抜けだろうが。ただの大バカ者と、どう違う?」

「そこまで、アンタに言われなきやならないのか」

「なら、キサマ。俺に教えてみる。己の記憶とやらが戻れば、それで何が変わるのだ?」

「え……」

「もう人は殺さぬのか? 鬼をやめて、喰らうのもやめて。」

賢いその頭とやらも使うのをやめるのか? 武器を捨て、頭を丸めて。南無阿弥陀仏と仏の道とやらを、残りの命尽きるまで唱え続ける覚悟があるというのか?」

「それは、わかりません」

確かにそうだ。

僕はあの連邦に初めて殺された日、同じく殺した相手を僕は食べた。

簡単にそのまま死んでいけばよかったのに、相手を殺してその血肉を頂いてまで生き残ってしまった。

それからはずっと、もう止まることなんてできなかつたし。もし止めたなら、どう生きようかなんて考えたこともなかつたじゃないか。

「そうか、ならこれはどうだ?」

女はもう抱かないのか? 愛するのもナシか? 男を抱けば問題ないか?

飯はどうする? 肉は食わんのか? 草木を口にして、水があればいいのか?

どこに住むつもりだ? 人の多い場所では、わずらわしいことは日々おこりうるし。金はどうしても必要になる。

まさか、山奥に一人でこもるなどと考えているのか?」

「……」

「どうだ? 己がどれほどの大バカ者か、これでわかつたか?」

キサマの過去なんてものはな、実際の話。キサマになにも与えんよ。

だから俺が代わりに教えてやるわ。

キサマは鬼よ。人を殺して、おぞましくもそれを喰らう悪鬼そのものよ。

だからこれからも殺す。大勢を殺す。

キサマが憎いと誰もが口にするし、キサマが死ねばと誰もがそう考えるだろう。

だからと言ってキサマはなに一つ変わらん。

人を喰らうくせに、別腹だというて肉も喰らうし。草木や水だつて口にするだろう。

だからなにがあらうとも女は構わず、目についた先から抱くし。なんなら血迷つて愛することもあるかもしれん」

わずかな首をもたげた反骨心はもはや僕の中にも残っていないなかった。

この数力月の間違いを、彼は正しく僕の前に突き付けていた。

僕には過去がない。だが、未来だけは残されている。というよりもそれしかもう残されてはいないのだ、と。

ただの人間ではない。

彼のいう、人を喰らう鬼として。ただ、生きていくということが――

「トシロー、まったくあなたは全て正しい」

いつの間にか胡坐のまま頭を垂れ、肩も落としていた僕だったが。

絞り出すような声で、それを認めた。認めるしかなかった。

「この五十嵐 晃は、本当にどうしようもない大馬鹿者だったと。あなたの今の言葉。僕はそのどれにも、なに一つ言い返すことが出来ない」

「……」

「豁然大悟しました——いや、待てよ？

この場合は、大悟徹底の境地と言った方がいいのかな？」

「おい、キサマ。そういう些末なことはいいんだ」

「あ、そうですね。そうでした」

そう口にする、僕は目の前のグラスに残っていた液体を一気に腹の中に収め。さらにもう一杯、それを繰り返す。



焼ける喉の痛み。

腹の底にズドンとそれが落ちていく感覚。

アルコールが引き起こす血流がさらに熱を帯び、腹から四肢へと走り回り始める。

「人にはなれないんですね」

「ああ、キサマは鬼だからな」

「人には戻れない」

「人ではなかったのかもしれない、初めからな」

「19なんて年は意味がない。あるのは数カ月——ハハ、僕。生後半年もたっていないかもしれないですね」

「人ではない。鬼であるなら、それでもなんの不思議もないのではないか？」

僕はうなずいた。

「大昔。大江山の酒吞童子は、生まれてすぐに己の父の名を聞いて周囲を恐れさせたそうですよ」

「そいつは鬼の大将だったな」

「なるほど、たしかにどれもまったく。僕には関係なくなったな」

僕には名前があり、この体がある。

しかしそれ以外の一切に理由を求めても仕方がない。

だって、自分は人間ではないのだから。この問いかけ自体に答えがないのだ。嫌、なくてもいいのだ。

「どうだ、若いの。今の気分は？」

「いいですよ、とつても——なんだか、酔ってるみたいだ」

僕がそう答えると。

カカカツとトシローは笑い。

ケケケツと僕も笑った。

ああ、なんだかとてもいい気分になった。

「酒は、つよくなかったのではないか？」

「どうでしょう、今の僕なら。あなたが酔いつぶれても飲めるかもしれませんよ」

「ククク、面白い寝言を口にするのだな。人を喰らう鬼殿は」

「それなら、もう酒は残りが少ないですよ。人斬りの鬼の大將」  
続けて大口を開けて笑う鬼達は、心の底から同じく笑いあっていた  
――。

## 汚れた聖域

僕はこの時、はじめて酒で酔いつぶれた。

その何倍もウイスキーを飲んだはずのトシローは、まだ隣に座つて。大の字にのびて寝てしまった僕を横目に笑っていた。

あいまいな眠りの中で、僕は僕の家族——彼らを想っている。

名も知らぬのに、僕を息子と呼んで抱き寄せ、嘆いた干からびかけた老人。

怪しげなガスマスクで素顔を見せない観察者。

存在から裏切り者だと僕をあらゆることで責め立てたキンジョウ。

そして、僕を兄弟と呼び。目の前で溶解してしまった、イエローマン。

いつかは記憶と共にそれらの意味するものを取り戻したいと願っていたけど。

どうやら彼らは正しくて、僕は間違っていたらしい。

笑顔あふれる、この家族の未来にそんな日は来ないだろう。

それでも僕はいつか一人でそこに戻るのだ。

僕を憎み、僕を殺そうとする家族となる彼らの前に立つ。

そして——。

ボツビは最後に言った、彼らは僕を求めているのだと思つたと。

今の彼らはどうかは知らないが、今の僕も彼らを求めている。

強く、激しく、それを求めていく——。

真っ赤に燃えることをやめられぬ、悲しみも憎しみでもないこのただ一つの感情の命じるままに。

|||||

コスモスらが拠点とする母船、そこに突如現れた変人の大男。

地球人であるところの彼ら彼女らを原生動物などと呼び捨てては、見下し。

まるで自分だけは違うのだと言わんばかりの態度を貫くこの“存在”だが、こいつは自らのことをQと名乗っていた。

宇宙人、Q。

それがこいつなのだ。

こいつとアライアンスとの付き合いは、そこそこに長いものであったし。

宇宙人がなんで地球人を、それもZ星人から守ることにやる気を見せるに至ったのかという理由はしつかりとあるのだが。これらについてザツクリと説明するにしても、とても長くなるし。そもそもこれはV a u l t e e r の放浪者達の物語で、聞かせねばならぬようなことはまったくないので。

つまりは詳しい説明はここではあえてしないし。納得してくれなくてもよい。

しかしそんなQの訪問に、仕方なくドクターもコスモスも。

本来であるならば地球から戻ってこようとはしないばかりか、連絡すら絶っている仲間達の前に。彼らがアキラをなぜ、そこへと導いたのかを説明する羽目になっていた。

「それではドクター。嫌、エリオット・ターコリエン君。説明してもらおうか」

「——ああ、Q。わかってる」

地球を守る守護者達が地上から一人の若者を救い出す理由。

そのすべては2000年前、アンカレッジまでさかのぼらねばならなかった。

第108歩兵大隊——後に連隊へと再編成されたそこに。彼、ドクターとレオは共に所属していた。もちろん存在は耳にしていたが、直接会って話たことは多分ないだろう。

そのつながりが、皮肉にも2000年の時を越えて意味ができてしまった、というのが大雑把なあらすじとなる。

数年前、メンバーの中でキャピタルB・O・S. に不穏な動きがあることが母船にも知らされた。

とはいえ、守護者の役目はこの地球への宇宙人の侵入を許さぬことであり。地上のパワーバランスを管理するわけじゃない。最初はこの問題には関われぬと、一同は揃って横目に見て見ぬふりを続けた。ところがそうこうしているうちに、準備をやめようとしないうちにB・O・S・の最終目的が核戦争ではないかと予想がついたあたりで、彼らの仲にもついに我慢の限度をこえてしまう奴等が出てきていた。「やはりバカだったのか。感情に負けるとは、情けない限りだ」「そうは言うけど、Q」

「お前達、原生動物は。知性が足りないばかりに己の身を亡ぼす決断を下し。その愚かさで知的生命体の範疇の限りなく外側へと弾き飛ばされてしまった己の種の過去をいい加減に認めてしまえ。」

「そうだ、私たちは本当に愚かでした、とね」

「ちよつと！それってバカって意味でしょう」

「そうだ、メスよ。お前もバカだ。」

「いいかね、君らは200年以上前にもやってみせたことなんだから。今更規模の大小は別にしても、それを繰り返すことに何故不安と疑問を持つのだ？」

「好きにさせたらいいんだ。それに介入するなど、不毛とは考えられないのか？」

「なら、喜んで欲しいね。Q、アライアンスは介入には否定的だった」「——ほう」

地上には何とかしたいという気持ちがあったが、干渉はしないという厳しいルールを守ったうえで方法がないか。そんな都合の良い答えは、問題と同じキャピタル・ウェイストランドから掘り出してきた。「キャプテンが、キャピタルにはVault-TECの本社もあると思っ出したんだ。そこで僕らは、そこから旧マサチューセッツ州に作られたVaultのデータを復元した。難しいことだったし、決して簡単ではなかった」

「ルールの抜け道を探る、ということか。ミジンコたちのけなげな努力をうかがえるね。感動して涙を流すのはここでいいのかな？」

「エイリアンの嫌味は聞かなかったことにする。」

「僕はそこで少佐——いや、元大佐だったね。彼の名前をリストから見つけ出すことが出来た」

するとなぜかコスモスが得意げな顔でそれを口にした。

Vaultier、冷凍技術で眠らせる施設、と。

「なるほどな。それで、愚かなミジンコ達は。その元大佐とやらを眠りから叩き起こしたわけか」

「いいえ、やってないよ」

「——ナニ？この期に及んで、なぜ嘘をつくというのか？」

「嘘じゃないよ、本当に僕らは何もしなかったんだ……正確に言うと、人は送り込んだけど。何もせずに戻した」

「なぜだ？君ら、無駄な努力とはいえ。なぜそこでやめる？決断力まで失ったか!？」

「マズイ状況がそこでおこっていたから、だよ」

凍らされて時の止まったVaultierの中にあつたもの。

それはケロツグとインステイチュートによる、襲撃の痕跡。

レオの息子は攫われ、妻は殺され。そして夫はその目前でVaultier社の邪悪な計画により強制的な眠りの中にいた。

「まだ、わからんね。どういうことだ？」

「つまり、僕らが求めたのはアライアンスの仲間になってくれそう。そう考えていた元大佐だったけど。その一家が、とんでもない事件にすでに巻き込まれたんだ。

そんな状態で彼を目覚めさせることは出来なかった」

「ふむ」

「奥さん殺されたっただけでも、相手はぶつ殺してもおかしくないもん。こつちの話も、聞いてもらえるかどうか——」

「なるほどな、お前達の下らぬ感情が。復讐心に取りつかれた男を世に放つことに、戸惑いを覚えたわけか」

Qはそれで大きく頷くが。

すぐにハツとなると、だまされないぞと大声をあげた。

「元大佐、といったな？」

なら、ドクターよりも年上であつてもおかしくはないはずだが。

先ほど見た人物は、この私から見ても。君ら人間の年齢では若いとよばれるような奴だったろう。これはどう説明してくれる？」

「だから、問題だらけになったんだよ……」

アライアンスは結局、自分たちのルールの新しい抜け道を探ることにし。

連邦に新たな協力者を求めることを一度はあきらめた。だから Vault 111 のことなどすぐに忘れ。哀れな眠り続けている元大佐も、そして連邦に野心をあらわにしようとするキャピタル B・O・S も、一時は忘れたふりをするしかなかった。

そうして気が付くと、問題があふれかえっていた。

年末を直前にして、キャピタル・ウエイストランドが激震する。

ついに B・O・S は連邦へと無事に到着してしまい。アライアンスは、残したままだった宿題をどう終わらせようかと頭痛にまた苦しむことになった。

その最中、彼等がかつてあきらめた Vault 111 にて変事がまたもおこっていたことを知った。

突如壊れていたと思われた Vault のシステムが、レオを目覚めさせたばかりか。施設から地上へと出てきた彼の隣には、アライアンスも知らないもう一人の若者が——そこに付き添っていたのだ。

「君らが知らない？ 勘違いではないのかね？」

「いや、間違いはないよ。ここにいるのは五十嵐 晃という青年だが、彼の名前は Vault-TEC のリストには載っていないかった。つまり、彼はあそこにあつた冷凍施設で眠らされていたわけじゃないんだ」

「……意味が分からないな」

「やったぞ。エイリアンもお手上げだつて！」

コスモスの言葉に、Q は不快そうに激しく首を横に振る。

「やめろっ、お前達と比べないでもらいたい。この超、高高度生命体とも呼ばれるべき我らに。そんな無意味なロジックでなにをするつもりだ。混乱が望みか？ 200 年を生きる原生動物が存在しているだ

と？認められん」

「落ち着けよ、Q。」

それは僕らも通った道さ。Vault 111に残されたデータは何度もチェックしたよ。あの当時の混乱の中で若者が施設に入った形跡はナシ、僕らのような記録を改ざんした痕跡もナシ。そもそもあの機械は死んでたはず。トリックはなにもない。

だが、奇妙な事実だけは現実に存在したんだ」

しばし沈黙がコントロール室に流れる。

「つまり、君らはこういうのだな？」

沈黙する機械が突然動き出し。そこにいるはずのない若者と、残っていた元軍人を外に吐き出した、と」

「そうだよ」

「ではその不思議な青年をなぜここに——いや、待てよ」

コスモスはつまらなそうに、Qが皮肉を口にする前に結論を言った。

「そうだよ。最初に探した仲間の候補に、彼ならいけるんじゃないかって。私らは恩を着せるために、ここに連れてきたんだよ」

「——奇妙な物語の若者に、君らという悪魔が無理矢理に契約させてやろうと、迫ろうということか。随分と悪辣なのだな、可愛いミジンコ達」

表情はまたもないものへと戻ったが、言葉の中にはしつかりと侮蔑の色はこびりついていた。

だがドクターもコスモスも、この程度で動揺は見せなかった。

「こつちの下心と、彼の事情がたまたま一致しそうだったの。でも、まあ、間違ってはいないよね」

「そうだ。そうやってなんとか、キャピタルB. O. S. の暴走を封じ込めやしないかと、そう考えていたんだ——」

2人は動揺は見せなかったが、言葉の歯切れが悪くなったことをQは気が付いていた。

「それで？なにかあったのだろう。新しい問題が、出てきたのかね？」  
「——その通り！彼もまた、大問題を抱えたひとりってわけだったの



さ。本当に悩ましいことにね」  
そういうと、ドクターの指はコンソールへのびていった。

|||||

「これを見て欲しいんだ」

そう言うとドクターは、巨大スクリーンに彼が調べ上げたアキラの生体情報を次々と表示させていく。

コスモスは横目に、しかしQは興味津々のようで食い入るようにそのデータを端から見ていった。

「拷問——って感じではないけどね、どうやらひどい扱いをされていたようだよ。」

彼の細胞は放射能に耐性をもっているというだけではない。どういう方法でやったのか知らないが、単純に構造も強化されていたようだ」

「構造の強化、とは？」

「単純にタフ、ってことでいいのかな。」

切れ味の悪い刃物や、なんだったら小口径の銃の弾丸程度なら、はじいてしまおうだろうね」

「なるほどな、見た目では判断できない甲羅をつけているミジンコというわけだな」

「夢がないなー、エイリアンはこれだから。肉は薄いけど、あの胸は鋼で出来ているってことだよ。鋼の男、ワオツ」

「コスモスの表現はどうかと思うけど、まあ完全に間違っではないないようだね」

そして次に、透過映像を呼び出してくる。

Qはそれを見ると、目を輝かせ始めた。

「ほう、こちらのほうが分かりやすいな」

数枚の、しかしどれも何かが違うその映像は。

アキラの体内がまったく普通ではないことを、はっきりとそこに見せつけていた。

「貴様らの身体の骨とやらは、いつからこんなに輝くものと差し替えられているのだ？」

「合金アダマンチウムだと思うよ。200年前でも軍はこの技術を一酸化させようと、苦心していたからね」

「だがそれは、本物の骨の上に熱を帯びた薄く液状のそれで覆うものではなかったかな、ドクター？」

「原生動物らしい、野蛮な方法ではあったと思うが。こちらはそれとはまったく違うように見える」

「へえ、どういうこと？」

「見ただけで分かるとは、さすがだQ。」

「僕も同意見だよ、彼のは普通の金属ではないということさ。初めて見るけど、彼のアダマンチウムは“生きている”のだと思う。」

「調べようと思ったけど、普通とあまりにも違いすぎて触れることは出来なかったよ」

「それだけではないだろう？本体の頭蓋と背骨、こちらもやはり何か別のものと変えられているな」

Qは愉快そうに言葉を挟み込む。

「これならわかる。○××▲星系で使われているものだ。カーボナデウムだったか。」

特徴は高い硬度と、それでは考えられぬほど弾性を備えていることで知られていたかな。あの星の連中にとっては野蛮な戦闘用のオプションだったはず。

連中に言わせると、この方法がもつともシンプルに身体を強化する使い方なのだと聞いたことがある」

大男はボウと熱に浮かされたように、独り言をもらす。

「——なに星系だったって？よく聞こえなかったんだけど？」

「なに？そんなこと？お前達、ミジンコが知らなくても構わんよ。どうせ、この船であつたとしても。あそこまでたどり着くには、簡単ではないからな。もちろん、このQは別にしてもらわねばならないが」

「はいはい」

「ドクター、彼からサンプルは頂いたのかな？君も、君の好奇心のため

にも本当のことを話したまえよ」

「……いや、やってないよ」

「どうしてかね？君ならば、当然のようにそれは行われたと思ったのだが」

彼は首を横に振り執拗にそれを否定する。

「興味はあるよ、確かにね。でも——」

「なるほどな、ドクターはこの同胞に憐れんでいるのかな？」

「ああ！そうだよ！」

いきなり声を荒げた。

「戦場じゃこんなの、あきるくらいに見てきたよ。あの青年は、彼は誰かに実験動物にされていたんだ。」

調べればなにか別の事もわかるかもしれないが。これを見た後だと、そんな気分にはなれない」

「ふむ」

Qは骨格の写真から目を離すと、別のモノへと順に眺めていく。

「人にはない臓器らしきものがいくつか見られるね。それとこれは特定の振動に対して反発している？これもなんとも興味深いミジンコだ」

「どうやったのかは知らないが、光学兵器への耐性も持たせようとしたようだ」

「なるほどなるほど」

「細胞を採取して、直接レーザーを照射すれば。どの程度まで効果があるか、わかるかもしれないけどね——」

どうしても必要だというなら、やるだろうが。今はドクターにその気がやほりないようだった。

「一見、皮膚は綺麗なものに見えるが——」

Qはそういうと、隣の灰色のレンズがとらえた皮膚に刻まれたそれを目を細めて観察した。

「見たまえよ、このあり得ぬほどの傷」

幼児がクレヨンで、真っ白な画用紙の上に塗り込むようにして色で塗りつぶした後のように。

体中の皮膚に綺麗な部分が筋状の傷によってほとんどないことが、証明されていた。

「どうしたらこんなことが出来る？」

まるで君らミジンコを、生きたままに臓器を取り出して改良を加え。

遺伝子に刻まれた生体スペックと寸分たがわぬ代用品を用意し。それらをきちんと混ぜ込んでみせながらも、あり得ぬ骨の間に押し込みなおすと。包装紙でくるむようにして、皮膚を綺麗にその上に巻いて動くようにしている。

「そうしてこのバケモノは完成する」

「うえっ、ちよつとグロいよ。エイリアン」

「そうだろうな。君ら矮小なる生物に神を凌辱するかのような、このおぞましい技術を実行させたのは。誰だろうね？興味はないのかい、アライアンスの諸君」

「無いね」「あるわけがない、Q」

素早い返事にエイリアンの顔も曇る。

「そうか、それならそれでもいいがね。」

ところで君らが拾ってきた、この哀れな存在の正体は。つまるところなんなんだね？」

「……」

「サイボーグ、という奴か？」

「違う。彼のは生体部分からして、手が加えられている。ただ人工物がまぎれこんだ、そういうものじゃない。信じられないほど高い技術が施されている」

「ではなんといったかな——そう、人造人間という奴かね？」

それは連邦の脅威。

かのインステイチユートによって生み出された存在。

だが、ドクターは即答する。

「違うだろうね。そんな感じはしなかった」

「しない、とは？」

「人造人間は人を模造した所で、完成とされているけど。彼を見る

とその先を——どれほど先かは分からないが。なにか別の設計思想があつたとしか思えない」

「では結論は？」

ドクターは改めてデータに目を泳がせた。

コスモスは興味ありげに、横目でそんな彼を見ていた。

難しいことであつたが。しかし、推論でも確かに一つの回答がドクターの頭の中に存在していた。

「人型生命体」

「——なんだね、随分とぼやけた物言いだ」

「彼の肉体を完全に理解しようとするなら、全てをバラバラにしてから始めないとだめだ。つまり生かしてはおけないから、現状ではこれしかない。」

他に表現するなら、新解釈とか、広義でのデザイナーチャイルドつてあたりかな」

「人造人間ではないと、言い張るのかね？」

「エイリアンの君の目から見たらどうかは知らないけどね。僕にはこれ以上のことはわからないし。知りたいとは思えないよ。それに——多分、実際に暗黒面に落ちてそれをやったとしても、どれだけ僕に彼に使われた技術を理解できるのやら」

「フッフ、ドクターは自身の理性を勝たせたいあまりに。耳元でささやく、悪魔の声はないものとしたいようだね」

そう口にしながら、Qは舌なめずりを始めそうな顔をした。

「確かに問題だらけで、興味深い存在のようだな。」

そしてドクター、君の意見に賛成するとは自分に驚くよ」

人の姿をしたエイリアンは、喉をゴクリと大きな音を立てた。

——たしかに。ここにあるすべてを手にするなら、生かしておきたくはない

地球人には決して聞かせられぬ、異星人の本音がそこにあつた。

|||||

連邦から南西に約460キロほど移動したそこは、かつての世界ではワシントン・コロンビア特別区と呼ばれていた。

強大国家、アメリカの心臓部。

そんなかつての都は——それゆえに存在を脅威と考えているあらゆる敵からの激しい攻撃にさらされ、破壊された。

その爪痕は200年を過ぎても一向に復興の兆しはどこにもみることができない。

土地は死に、作物は育たず。空気は淀んで、雲は太陽をそこからのぞかせることを好まない。

だからここで生きる人々に希望はない。

常に迫ってくるのは飢えや渇き、そして死への怯え。これに耐えかねると、人でなしに墮ちるか、またはそれ以外の道を選ぶことになるが。そのどちらも決して楽なものではない。

だが、皮肉なことにその過酷さが。ここの人々に命の大切さを学ばせていた。

つまりそれがこのキャピタル・ウェイストランドを言い表す全てだったのだ——。

昼間、地平線まですべて残骸で埋め尽くされた丘をのぼっていくひとりの旅人の姿があった。

荷物を背負い、フードをかぶり、顔は見えないのでよくわからないが。荒い息遣いの主が年のいった女性のものだとそれだけがわかる。

周囲に人の影も気配は感じられないが。こんな今でさえも、野生のロボットや生物。アポミネーション、レイダーの脅威は依然としてここに存在していた。

旅人が丘の頂上に立つと、地図を取り出し自分の現在位置を確認する。

休憩とばかりに背囊から水を取り出した。生暖かい一口が、乾いた喉を湿らせるのを感じる。

アクア・ピュラ——10年前、民間からの動きで実行された浄化プロジェクトの最大の恩恵であり、そして呪いだ。

これは昔話だ、この救いのない大地で暮らす賢い人間達は考えていた。

汚染された天と地の間で循環する自然のプロセスに、完全に浄化された水をまぜることで土や雨も無害にしようという壮大な試み。その計画の再開。

そしてこの計画が思いもよらぬところで。当時、戦いが始まっていたB・O・S.とエンクレイヴをついに正面から激突させる原因となった。

ややも押され気味であった当時のB・O・S.であったが、その対決から華々しい勝利を重ね。ついにはアダムス基地を制圧したことで完全勝利することができた――。

その事実が、キャピタルのB・O・S.に無限とも思えるほどの栄光をもたらし、10年が過ぎている。

彼女の回想はいつもここまで来ると、苦々しい思いから。無理にでもそれ以上を考えることを自分に許さなかった。

だが、今でも腹が立ってしょうがないのだ。

あの栄光は、決して良いものとはばかりはいえなかったのだということ。

乱暴にフードを顔の前から払いのける。

黒い肌、きつちりと角刈りにされた頭髪は白く。肌に刻まれた皺は年相応にそこにあるが。持って生まれた気迫はまだまだ衰えることを知らない。荒々しい息を吐き出しても、そこにかくしやくたる強さは依然として備わっていた。

彼女の名前はクロス。

キャピタルのB・O・S.では栄誉あるスターパラダインの称号を持つ30年をこえる戦歴を誇る伝説の兵士である。

かつては起きていたときは誇りと共に身に帯びていたパワーアーマーは今はなく。

かわりに腰には長年使い続けている愛用のレーザーピストル。背中には背囊の下に、スーパースレッズを隠している。

そんな彼女がこうして一人旅をするのはいつ以来だったのだろうか？

(キャピタル・ウェイストランド、かわらないな)

この荒野を目にすれば、この10年の変化などないように感じるが。

そこに生きる人々の生活と意識は、明らかに大きく変化を生み出していた。

かつては海岸沿いにかろうじて浮かんでいた空母だけで町としていたりペットシテイは、大きく成長し。沿岸線に沿って、人の居住空間を広げているし。

あの狂った町、メガトンはついにキャピタルで2番目に栄える町となった。

そしてこの2つの町を中心に、ぽつぽつとアガサ・タウンのような小さな新興の居住地までも生まれ始めている。

そのかわりに、当時はあれほど栄えていたテンペニータワーは、ついに跡形もなく吹き飛ばされ。今は瓦礫の山となって、無残な姿になり果ててしまった。

そうなってしまった原因をクロスは知っているが、それを誰かに話したことはない。多分、一生ないだろう。

それが友人の——このキャピタルの数多くの伝説をのこした“彼女”のためだと、思うからだ。

「元気にしているかね、アイツ」

クロスは地図をしまい込みながらそうつぶやくと、フードを元に戻してから再び歩き出した。

彼女の友人は——V a u l t 1 0 1 のアイツの家はメガトンにある。

このまま何事もなければ明日の日暮れまでには、到着できそうだった。もつとも、昔からトラブルメーカーで好奇心の塊だったアイツがそこで大人しく普通にしているとも思えなかったが。

|||||



憂鬱なミーティングを終えたばかりの母船に、新たに帰還者が姿を現した。

転送装置の上から降りてくると、帰還者は地上から持ってきた多くの土産をその場でバッグの中から引つ張り出そうとしていた。

そこにコスモスが、慌てて飛んでくる。

「驚いた！どうしたの、いきなり」

「戻った。呼んだだろ？」

「そ、そうだけどさ。返事がなかったし——」

肩の高さで切りそろえられた髪は黄金色。

しかしちらりとコスモスを見やった顔にあった眉毛は赤みを帯びていたので、地毛ではなく染めているのかもしれない。

180センチを超える長身でありながら、皮膚の下を暴力的な筋肉で満たすその細身は。必要であれば、爆発的な力を簡単に引き出すことも可能であっただろう。

目鼻顔立ちには、特に美しいとよべるものではないが。

凜とした力強い意志が、その肉体にとどめおくことが出来ず。体外へと漏れ出ると、眩しいばかりの輝きを彼女を見る全ての人々にカリスマを感じさせるのは間違いない。

そして何よりも重要な手掛かりが——。

10年の時をへて、さらに改良を加えられた。もはや存在しない Vault101のロゴの入ったアーマード・ジャンプスーツ。

伝説のDJ、スリードッグに“Vault101のアイツ”と名付けられた女。

キャピタルの生きる伝説が、そこにいたのである。

「なあ、トシはどうしてる？」

「え、キャプテン。あいつに用があったの？」

「ああ」

「大変、なら起こしてくるね」

「起こす？」

「えつと——ちよつと、飲んんでてき。酔っぱらってるの」

「へえ、それは珍しい」

そう言いながら、荷物の中からそれを掴みだした。

サムライに持つてくるように頼まれ、キャピタルのゴミを漁ってわざわざ新しく作り上げた一品がそれであった。

「あれ、それって？」

「作ったばかりのものだ。新品を大急ぎだつて。なんでも、誰かへの贈り物にしたいらしい」

「そんなもの、誰がもらつて喜ぶの？」

「さあ？」

2人はお互い、肩をすくめて奇妙なサムライの考えに苦笑を浮かべる。その手に握られたのは“Vault101のアイツ”作製による一振りの異形の刀、シシケバブ。

それはこの母船で酔いの中を眠っている、2人の鬼のつながりの証明となる、はず——。

## 悪意

ここでひとつ、整理しておきたいことがある。

アキラの奇妙な冒険、そしてレオの帰還と続いている中で、彼らの友人たちの動きについてもそろそろちゃんと触れておかねばならないだろうと思う――。

ヘーゲン砦における、希望ある調査結果を手にしたニツクやパイパーらはその後、大人しくサンクチュアリへと進路をとった。

旅慣れたミニッツメンの若者、ジミーがいたこともあって、あまり人の姿のない道をたどり。おかげで道沿いに居座るガンナーをはじめとした危険な連中と事を構えるような問題はおきなかった。

だがこのせいで、ダイヤモンドシティの騒ぎで急いで南下するガービーらと出会うこともなかった。

その後、アバナシーの農園でミニッツメンとようやく顔を合わせる事になったのだが。ご存じのとおり、レッドロケットには肝心のガービーは残っておらず。

結局はそこでまたまた足止めをくらうことになる。

レールロードのディーコンは、本部への道を進んでいる。

インステイチュートの人造人間とデスクローから、助け出してくれた奇妙な人物のメッセージをまるでなかったかのように。

だが、彼はそれを忘れたわけではない。

さて、問題はプレストン・ガービーだろう。

ハングマンズ・アリーでの騒動をようやくに理解し。

慌てて動かせるパワーアーマーを掻き集めると、これと共に彼自身も南下する予定であったのだが。

彼は知らなかったが、すでにこの時はもう。

支部の責任者、マクナマスは死亡し。憂さを晴らしたいだけのB・O・Sの力を借りたレオによってすでにダイヤモンドシティとも

話をつけて決着はついていた。

本当ならば、そんなようやく落ち着けた仲間の元へと駆け付けたガービーとレオが再会する。そうなるはずであったのだが――。

そんなガービーの予定はさらに一転する事件が起こってしまう。

彼らミニッツメンに、いの一参加を表明したあの崖の上の居住地。あそここの周囲に突如わきだすように現れたレイダー共によって激しい攻撃にさらされた、との報告が急ぐ旅路の中で飛び込んできたからだ――。

|||||

「おい、嘘だろう――」

前回、彼が良い知らせを持ってきたときにあつたはずのその場所の変わりように。

ガービーは思わず――それは小さな声ではあつたが、口に出さずにはいられなかった。

襲撃を知らせてきたミニッツメンに同道し。

パワーアーマー達と別れて、レキシントンを南に北東の方角に突き進んでたどり着いたその場所の姿にショックを受けるしかなかった。

新たな人が入り、住居と共に農地も拡張する予定だと聞かされていたその場所は。

今はなにも存在しない、荒らされた畑と焼け落ちた残骸の残る更地になっていた。

1週間前ならここには平和に暮らす20人をこえる人の姿があつたはずなのに――。

ガービーの到着を聞いて、安堵したのだろう。

先に到着していたミニッツメンのひとりが近づいてきた。

「ガービー、来てくれたんですね」

「ああ、当然だろう。しかし――これほどやられているとは、考えもし

なかった」

「焼き殺すつもりだったんでしよう。ここは木造住宅がほとんどでしたから——」

「何も残っていない」

「畑の方は、踏み荒らされただけなんです。再開することは可能だろうと聞いてます」

再開、希望のある言葉だが。

それが本当に希望になるのか、それはまだわからない。

生き残った住人達が、ここでの生活に再スタートをするのだと。そう考えてくれなければ。

「すまない、俺がすっかりしないとな。ミニッツメン、報告してくれ」

「はい——」

夕暮れ時、そろそろ畑仕事も終わろうかという時だったそうだ。

レイダーは突如、四方よりあらわれた。

崖下から、丘の向こうから、迫ってきた奴らは手に火炎瓶を持ち、居住地に建てられた木造建築にむけて次々とそれを叩きつけていったそうだ。

「最初から、火をつけたのか」

「どう見てもあれは略奪してきたように見えなかった、そう聞いています」

しかし住人達は、それに怯えて何もしなかったわけではなかった。ガービーら、ミニッツメンが手配した武器を手に取り。近場のミニッツメンに襲撃を知らせようと、フレアを上空に打ち上げもした。

この異変は瞬時に近くを巡回していたミニッツメン達の知るところとなった。だが——。

「最短で到着した奴等でも、10分ほど遅かったそうです」

「——そうか」

「レイダーのクソども、知らせが上がったと見るや。略奪に切り替えようで。」

抵抗する住人を逆に襲って武器を奪い、倉庫の弾薬や食料。ごっそりと奪われていました」

「計画的だな」

「ええ、多分。襲撃する準備を、ずっと狙っていたんでしょね」

そしてそれは、きつとこの居住地の中をも調べ上げるような。そこ  
までやっていたかもしれない。

「よし、いいだろう。」

居住者は、どうなった？」

「ひどいものですよ。今現在、死者は代表をふくめた、6名。やけどを  
含めた重症、軽症が9名、行方不明が3名。無事なのは4名のみ」

「行方不明というのは？」

「どうも、単純に逃げだしたみたいですね。崖を飛び降りるなんて、無  
茶やった奴もいるようですし。」

探すようには指示してますが、この近くにも最近は何野犬だけではな  
くデスクローなんかも出ますから——」

「生死不明、そういうことか」

「問題は重傷の住人です。ここには医師がいませんので——」

「ああ」

「勝手なことかもしれませんが、あなたが到着する前に、部下達には  
彼らへのステイムの投薬をしないように命令しました。その——」

「いや、わかっている。苦しい決断だったな、よくやってくれた」

ステイムパックは本来、戦場で兵士に使われることを想定している  
ものだ。

応急処置としてはベストであっても、別にそれで治療が完全に必要  
がないということではない。医師と、彼らによって判断された適切な  
処置が必要なのは当然だ。

だが、ミニッツメンにしても。あのサンクチュアリであっても。

未だに専属といえるような医者をお招きすることは出来ないでいた。

ダイアモンドシティ、グッドネイバー、バンカーヒル。もしくは力  
のある集団が、技術者を手に入れればそれをしっかりと握って離すこ  
とはないし。逃がすまいと囲い込んでしまっている。

無残にも助からない運命の中で、必死に苦しみ続ける彼らは。

このまま諦めて死を迎えてくれるならいいが。しぶとく生きよう

としてしまうとすると、ガービーが自ら“彼らの苦痛を終わらせる”  
という不愉快な決断を必要となるかもしれない。

「これをやった奴らはどこだ？」

「——レイダーの集団はいくつか思い当たります。ですが、まだはつきりとは」

「……」

「シラミツブシ、それでわかることもあるかもしれませんが」

熱く燃え上がる正義の心が、彼ら踏みにじられた人々の無念を思つて報復を欲しているのだ。ガービーにはその気持ちを痛いほどわかる。

だからといってここで自分が冷静さを失い、それをあらわに暴走することは許されない。そしてそれを本人は一番理解していた。

「そつちはとりあえず、忘れろ」

「——はあ」

「ミニッツメンは人々を守るための組織だ。報復の代理人つてわけじゃないんだぞ」

「はい。すみません、ガービー」

「わかってくれればいいんだ……近くを巡回している連中を呼び集めろ。」

それとレッドロケットに戻つて、あそこにいる新人共の研修代わりにここに来るように伝えてくれ。彼らの生活する畑や、住居をとにかく用意しないと」

「そうですね」

「新たに見張り台を用意して、防衛にも気を配れ。不足している物資の輸送も、頼まないよ」

「わかりました。すぐに送ります」

ミニッツメンが離れると、ガービーは1人。厳しい視線を崖の上から見下ろす先にあるレキシントンへとむけた。

レイダー共の巣窟。

ロボコ工場での一件が終わっても、あそこは今もあのころとそう変わらない。

大小様々なレイダー達があそこに集まり続け、死んだ大物ジャレドの椅子に自分が座ろうとくだらない陣取り合戦をやっているはずだった。

そうして間違いなく、奴等の頭の中にはミニッツメンとの対決姿勢は絶対に必要な要素となっている。

(レイダー共め、この攻撃が貴様らのそんなくだらぬ名誉心からのものだとわかったら。絶対に許しはしない)

そうやって大物となってしまうた未熟なミニッツメンが必死になつて自分を律しようとしていると――。

怪我人たちが横になるのとは違う場所がにわか騒がしくなった。

――やめろっ、やめろっ、やめてくれっ

懇願する“人の声”にガービーははじめられた様に駆け出していく。

こういう時、あのサンクチュアリでもひどい騒ぎになったの事を学んでいた。

そして到着したその場所で、またも愕然とするのだ。

無事だった住人達が、同じく無事だった住人のひとり――グールの彼に向かつて、ミニッツメン達が必死に抑える中で激しく弾劾していたのである。

「お前達、なにをしているっ!!」

ガービーのあげる声はやはり厳しかったが、興奮する住人達は収まる様子を見せない。

彼らは今度はガービーに向けて訴え始める。

コイツは裏切り者だ、コイツが手引きしたんだ、コイツが襲わせたに違いない。コイツはずっと怪しいと思っていた。

その言葉はすでに支離滅裂で、しかし結論だけがはっきりしていた。

――グールは敵だ

彼らは確かに被害者だ。経験した恐怖を想えば、同情することだってできる。

だから大抵のことは、大目に見てやってもいいはずだった。

しかし、これはさすがにガービーでも怒りを感じないわけにはいか



なかった。

レイダー達は屋内にいた者たちを焼き殺そうとし、抵抗しようとして武器を手にした者たちを害した。

とするなら、この無傷な住人達はなぜ助かったのか？

想像するのは簡単だった。居住地の中を走り回るレイダー達の顔を見ることもできずにその場にうずくまって震え。なにも動くことのできなかつた無力な者が、こうやって生き残ったのだろう。

それは別に恥ではない――。

だが、それがこのような。

まったく無意味な混乱を生み出す、グールへの偏見を口にするなんて。

自分が救いたいと思う人々の、その最底辺の人の姿を見せつけられ。最後のミニッツメン、プレストン・ガービーは言葉を失ってしまっていた。

|||||

そこはどことはいえないが。

Vaultめいた人口の居住施設の中にある一部屋があった。

怪しい組織、“小さな宝物”。

そのメンバーでもある、キンジョウは神経質そうにわずかに苛立ちながら。今はひとり、会議の開始をじっと待っている。

新たな地位へと昇るために、数十時間前。

キンジョウは、廃棄物予定のアキラの回収を観察者と共同で行おうとし。これに失敗してしまった。

これから行われる会議では、この尻ぬぐいをどうするのか。それを話し合うことになるはずであった。

もちろんキンジョウはそこで、廃棄物はきっちり処分するのだと今度もまた主張するつもりであったが。

回収の失敗、そしてその後の栄転のことがあるのだ。

この考えがすんなりと仲間から支持されるとは全く思えないこと

が、冷静になることを許さなかった。

扉が開く。

観察者を先頭に、続いて2人の男が姿を現した。

「おや、キンジョウ。いつものように、お待ちかねですか」

「能力が頼りないから、そうやって先に立たねば不安なのだろう。いかに、技術屋らしい小心だな」

観察者は無言だったが、男達はあきららかにキンジョウを侮辱する意思が見られた。

「ええ、コチラの用意は万端です。観察者、会議を始めてください」

「驚いたな。噂では己を組織のテクノクラートだと、そう考えていると聞いていた」

「ええ、そう聞いてましたがね。随分と自重することを、新しいアキラは覚えたようですよ」

4人でサークルをつくるように立ち。

観察者はつまらぬ会話を「やめろ」と片手をあげることで、合図を送った。現状、ここでは観察者が最上位にいることになっている。

「サカモト、コンドウ。よく来てくれた」

「構いませんよ、観察者。しかしクロダ、キジマらは間に合わないの、欠席すると」

「わかった。構わない」

どうやらさらに2名がいるらしいが、キンジョウにはそれはむしろ朗報のように思えた。

「ではさっそく。この場に來たのならすでに知っているだろう。廃棄を予定されているアキラが暴走。」

キンジョウと共にこれを回収しようとしたが——何者かによってこれを奪われてしまった」

「発言、いいですか?」「サカモト、なんだ?」

「アキラが奪われた……これがよくわからないのです。奪われた?逃げられた、の間違いでは?」

失敗をとがめられている、そう感じる不快さに我慢が出来ず。キン

ジヨウは感情的に声をあげる。

「逃げられるわけがないっ。あいつの身体は良く知っている、弱点も！」

「しかし、技術屋は時にそうした傲慢さで。うっかりとほんの“致命的なミス”を簡単にしてしまうことも、あるのではと思うのですよ」「致命的なミスを、いつやったというのだ!?!」

観察者再びこの悪い流れを止めるため、合図をする。

そして自分の口で状況の説明を始めた。

「奪われたのは間違いない——回収は半ばまでは、順調に進んでいた」  
「なるほど、観察者がそういうなら。納得します」

キンジヨウは音を立てて歯ぎしりしないよう、こらえはしたが顔を自然には逆らうことが出来ずに真っ赤にする。

同僚たちの自分への鞭り方は、まだ始まったばかりだというのに。すでに耐えがたいものに感じる。

とくにサカモトは、一見すればキンジヨウに似て学者然とした姿をしているが。

これでも立派に戦士であり、交渉もする武闘派であった。

「奪われた、それなら誰に奪われた?」

コンドウという、大柄な体躯の男はむしろ失ったアキラよりも、敵の存在に興味があるのだろう。

「まだ不明だ。」

そして今回集まったのは、それを割り出す前に。まずはこの問題をどう解決するのか、互いに考えをすり合わせたのだ。わかるな?」

「廃棄物、それは確定ではありませんでした?」

「確かに」

「ならば放って置け、それでいい」

「あなた方は揃ってバカ、なのですか?それでいいわけがないでしょう!!」

感情的なキンジヨウは、カッとなって思わず声をあげてしまう。

サカモト、コンドウはそんなキンジヨウの顔を、さも不思議そうに見てくる。やはりムカつく。

「なぜだ?」「なぜです?」

「あれには——アキラには、改めて処置を施したことを忘れてもらっては困る。あれは、すでに組織の資産の一部だ。少なくとも、しっかりと廃棄する前までは」

サカモトは変わらぬ様子で、しかし意外にもキンジョウの言葉に頷いてみせた。

「なるほど、それは確かに道理です」

「なら——」

「いえ、待ってください。それなら、こちらにも言い分はある」

サカモトの言葉になぜかコンドウも頷くので、キンジョウは怪しんで心の中で身構えて置く。

「あのアキラは我らの資産の一部、まったくその通りだと思えます。だってね、あのヌカ・ワールドの問題は彼に託したし。ボツビという資産の要望を再び叶えるべく、貸し出すことを求めたのも我々だ。そうですね、観察者?」

「その通りだ」

「しかしあのゴミはっ、そのボツビを殺してしまったぞ!これでは資産を、資産に潰されたというわけで——」

「キンジョウ、それは違う」

なにつ、と声をあげようとするのはキンジョウは飲み込む。状況は思った以上に劣勢で、彼はまだ自分の意見を口にするこすら許されていない。

「ゲイジから報告はあった。」

彼は十分以上の仕事をヌカ・ワールドで行っている。ボツビは?

あのグールにも力を貸した。そうして実際はボツビの目的はアキラの協力でかなえられた、違ったかな?」

「しかしその後、暴走した」

「それが俺とサカモトが、キサマと意見を異なる部分だ」

「どういうことですか?」

「コンドウと共に、この騒ぎの最初から。記録を見直してきたんですよ。アキラが暴走した——こう言って騒いだのは、あなたでしたね、

キンジヨウ?」

「それはっ……ここにいる、観察者もいた」

「いいえ。それは詭弁だ。」

観察者へのあなたからの報告として、つけていたロボットが不調だと言いはじめ。その後でいきなり暴走したのだと、どちらもそうしたからこのままに放っておけぬと言いつ出した」

「当然、慌てるだろう。すでにその時はあの——アキラは、ボツビを始末しようとして動いていた」

「そうですね、ええ。わかりますよ、だから当然の疑問も出てくる」  
「なんのことだっ」

「キンジヨウ、ここにいない2人も含め。俺達の結論は一つ、観察者は巻き込まれただけだ。キサマのミスに」

「はア!」

アキラの即時廃棄決定を進言するつもりだったキンジヨウだったが、思わぬ言葉に色を失う。

「あのアキラが、本当に暴走したのか。疑問なんですよ」

「ふざけるなっ。データが残っている」

「廃棄されたはずの廃棄物の侵入を許し、そいつの願いをかなえた。キサマの優秀なAI達が記録しているものの事か?」

イエローマンの侵入事件。

あれは逃げられる前に抑えたのでうやむやにできたが、だからこここいつらはそれをここであえて口にしてきているのだろう。

「改竄などしていかないぞ!」

「あなたは単にアキラ排除に焦るあまり、決断を急いだとは?」

「冷静な、判断だった!」

「まあ、いいですよ。今更そんな言い訳聞かされてもね」

サカモトはいきなり追及をやめる。だが、許したわけでは決してなかった。

「観察者、我々はこの問題の解決に。アキラの再回収——いえ、再帰還を望むべきだと考えます」

「帰還?何を言い出すかつ、あれは廃棄される奴だぞ」

「まだされていない。そしてキンジヨウ、君が再調整をしたのだろうか？なら、それでなにか影響がでたのではないか？」

「馬鹿なっ」

「前は結論に急ぎすぎたという考え方もできる。なら、もう一度配慮して迎え入れることもできるだろう」

「正気ですか、あなたがたはっ!？」

「観察者はじつと黙して語らない。」

本来であるなら、アキラへの害するような意見は自分が率先して阻止しようと考えていたが。

思いもよらぬ会議の展開に、喜びつつも、同時に彼らの思惑を怪しんでもいた。

「4人の意見、そういうことか？」

「ええ、観察者。すでに4票、のこるはあなたとキンジヨウで一票ずつ。そういうことですよ」

「それはかまわないが、理由はちゃんと聞かせてもらわないと」

サカモトは口元にわずかに笑みを浮かべると、今度こそコンドウと共に侮蔑のこもった視線をキンジヨウへとむける。

「ヌカ・ワールドへの問題は、あのアキラによって劇的な変化を手にすることが出来た。」

ボツビなどという落ち目の悪党をうしなつたとはいえ、状況はこちらの良いほうへと変化している。あのB. O. S. への今後の対処を考えると、あのアキラこそ我々を率いるにふさわしい人物といえるでしょう」

「マクソン、という奴。インステイチユートを狙っているというが、それはそのままこちらへの敵対を宣言している。はやく排除しなくては」

「あ、アンタたち。なにをつ——」

言い出すんだ、その言葉はキンジヨウの喉から先に飛び出してはいかなかった。

罪は許せ——ただそれだけを、彼の仲間たちは求めているのだ。

「あいつが、ここに戻るわけがないっ」

「そうは思いませぬね」

サカモト、コンドウらは視線を外すと涼しい顔へと戻っていく。

「アキラは我らの家族ですよ。この連邦を生き汚く、這いずるような人間達にはまさしく宝の持ち腐れ。彼の代わりになれるとうぬぼれる、そうした奴らの足の引つ張り合いに彼もすぐにうんざりすることでしょう。」

そこで、家族は再び準備ができたと伝えればいい」

「——なるほど」

観察者は満足して頷く。

キンジョウは、その結論を受け入れられない……。

|||||

連邦にしかれた大通りは、繰りかえすが決して安全を意味するものではない。

そこはこんな世界であつても物流をうながす血管ではあるが。

同時によくないものも、もつと悪いものだつて平気でそこを使う場所でもある——。

だが、目の前にあるのはおかしな集団があるだけ。

ひとりの若い傭兵、ひとりの若い女性、ひとり——いや、1台のアサシンロボット。

そう、マクレディ達のことだ。

「ですから、それは完全な——」

「俺は馬鹿だつて言ってるのか!?俺には言う権利はないつて?」

「むやみな行動は、決して良い結果には——」

アキラを救う——そう誓つて行動してきた彼等であつたが、ついに限界を迎えようとしていた。

グッドネイバーで市長の護衛を殺害、その間は市長の人質にならざるを得ず。彼らは目的を近くにおきながらも、一度も言葉を交わすチャンスさえ手に入れられなかつたのだ。

そしてこれからどうする?」

そう問いかけた時、ついに3つの思考は別々の方角を指してしま  
い。コントロールを失おうとしていた。

なにもできなかつた。

その徒労感にもたれた疲れが、焦り、先走ろうとする彼らの関係をき  
しませている。

ゆっくりと目を開けると、そこには見覚えのある連邦の景色が広  
がっていた。

僕は改めて、自分を確認する。

黄色のビジネススーツ、コート、帽子。

そして新たに手に握っているのは、一振りの刀。

それは時代を越え、地上を離れ、宇宙で今も自分を貫き続けている  
鬼からの別れ際に与えられた饞別のようなものだった。

歩きはじめると、すぐそこに連邦の大通りがあることが分かった。

道に出ようと近づこうとすると、確かに聞こえてくる懐かしい声も  
聞こえてくる。

——なんだ、喧嘩しているのか？

自分はちゃんと戻ってることが出来たのだ。

口元に笑みが自然と浮かぶ。

「なんだ、太陽が出ているからって。随分と騒がしいんだなっ」

そう声がかかる直前にエイダのセンサーは影を捕らえていた。そ  
こまで何者かを自分に接近するのを許したことに驚いたが、声をか  
けてきた相手が判別されると。えもいわれぬ幸福感めいたなにかで、  
回路がショートをおこしたかもしれない。

マクレデイはいえば、勢いに任せて女性陣(?)に「このポンコ  
ツ共が——」と言いかけた大口を開けて、固まってしまった。

「連邦は広すぎだよな。迷子になったら、再会するのもこんなに大変  
——」

アキラの面白くもない軽口は、最後まで続くことはなかった。  
それまで頑固に己の持論をぶつけていたキュリーは。



そんな自分をなかつたかのように、駆け出すと。いきなりアキラを押し倒さんばかりに飛びついて、その唇に自分のものを乱暴に押し付けてきた。

それは情熱的というにはあまりにも稚拙であったし。

美しさなど欠片もなく。しかし、あふれ出るなにかの熱いそれはあふれ出ていることは間違いない。

思わぬ登場人物。

思わぬ展開。

その両方に見せつけられただけのひとりと1台、そして被害者(?)は目を白黒させていた――。

こうしてイガラシ アキラはついに連邦へ帰ってきた。

## 良き隣人たちへ

意識を失うほど浴びるように酒を飲み、そして目覚めると。僕は決めた。

地球の守護者同盟を自称する誰も知らないヒーローにならないかと、誘うようなことをほのめかされたが。

僕はそれに気が付かぬふりをして、地上へ戻りたいのだと恩人たちに告げた。

宇宙人という存在に興味がなかったわけではないが、僕にはまだあそこに——地球に残してきたものがあまりにも多すぎた。

トシローと、そして遅れてきた皆にキャプテンと呼ばれていた彼女。

後にそれがキャピタル・ウェイストランドの生きる伝説“V a u i t 1 0 1 のアイツ”と呼ばれる女性は——ただ「わかった」と頷き。

それ以上は何も言わず、僕のことを快く送り出してくれた。

眠っている間に着せられた病衣を脱ぐと、奴等の手先である証でもあるイエローマンへと僕は戻る。

だが、もう僕は彼らの道具ではない。

彼らから与えられた武器もない。今はただ、それだけの存在だ。

「鬼とはいえ、なにもないのは寂しかろう」

饑別だと言つて、この宇宙でいきるサムライは一振りの刀をくれた。

キャプテンとはほとんど話すことはできなかったが。僕が連邦へと戻る段になると、「何か注文は他にあるかな？」と申し出てくれたので、少し我儘を聞いてもらった。

キャプテン、ドクター、コスモス、トシロー。

地球を守っているヒーローたちに見送られ。次の瞬間に僕は、連邦の大空へと投げ出されていた——。

|||||

感激と驚愕の再会を終えれば、いつの間にか夜だつて来る。かつてのように連邦の外で危険な野宿も、楽しく思えるのは久しぶりだった。

眠らぬエイダは仲間を中心に円を描くようにして警戒を続け。

踏み消した火元の近くではそれぞれが横になって、眠っていた。その時までには。

「ボス、起きてるんだろ？」

「……ああ」

「そうか」

そんな風に話すのから始まると。

暗闇はこの2人の男を妙に正直にさせたようで、体を起こし。そのうちなぜかコーヒーでも飲むうかとなって、火元を再び新しくする。しばらくはそうして、互いに火を眺めては黙っていたが。

ついにマクレディは口を開いた。

「まさか、あんたがいきなり出てくるとは思わなかったぜ。マジでアンタ——」

「……」

「嫌、そうじゃねえよな。違う、こんなこと。話すつもりじゃなかったんだ」

「どうした？」

「ボス——俺は、アンタを裏切っちゃった」

「？」

「実はな……」

冬の星空の下で、マクレディは淡々とあのボストンコモンでの戦いを。

ニック・バレンタインの救出から、ケロツグとの対決に西へと向かったあの一カ月前の事件を説明した。

そして——。

「おれはよ、浮かれてた。それをレオは見抜いたんだよ。」

気が付いたときはもう遅かった。俺の前にはガンナーの宝の山が

あつて、守るべき男は俺をそこにおいて。さつさとそこから立ち去っていた」

「やられたな」

「ああ、ひどいもんだろ？」

狙撃手は獲物を見逃したりはしない。そうあんに偉そうに言っていたのにな。

俺は出し抜かれたのに、それも見抜けず。本当なら、あんに合わせる顔だつてないんだろうな」

「——真面目だな」

「そうだ、俺は真面目な話をしてるんだ。ボス、その——なんというか」

「ああ」

「悪かったよ。すまなかつた、あんの信頼を、裏切つちまつたんだから」

悔しそうな顔でマクレディはようやくそれを口にする。

思えばこうするには、他に方法がないのだからと。ファールンハイトに蹴飛ばされたとはいえ、ずっと走り回つてきたのだ。

それを再会したからもういいや、などと。簡単に、なにもなかつたように振る舞うことはなぜか許せないような気持があつた。

アキラはそれをなんとなく察したが、あえてそれに答えず。

別の事をこの年の近い部下に聞いてきた。

「グッドネイバーにいたつて聞いた、市長が」

「ああ、こいつらと一緒にな。アンタを探そうつてなつたんだ」

「ハンコックは、どうだつた？」

「なにも——数日ホテルの部屋に押し込められたけどな。酒も食事も、煙草もタダの上客扱いだつたよ」

「そうか」

「……ファールンハイト、あんたが殺したんだな」

「——ああ」

己がしでかした大罪を口にするのに、アキラはわずかな間を開けるだけで。感情もなく認める。

だが、その一瞬だけ。

マクレデイは火で揺らめく黒髪の男に妖気めいた恐ろしさを見たようで、事情を問うことは出来ないでいた。

「なあ、ボス」

「ああ」

「俺、あんたに謝ったんだが」

「ああ」

「なんかないのか？それだとちよつと、困るんだ」

アキラは顔をあげると、丁度問いかけるマクレデイの顔が正面にある。

「僕はまだ、お前のボスなんだよな？」

「もちろんだ。ハマした分のオプションってやつ。あの契約は、まだ有効だからな」

「また、ひどい目にもあうし。トラブルにうんざりすることにもなるぞ？」

「そのためのキャップだろ？もつともつと、俺を稼がせてくれよな。ボス」

それならいいさ。

「実はマクレデイ、僕はとんでもない計画を考えているんだ。手伝ってくれるか？」

「いいぜ、ボス」

「よかった」

「で、なにをするって？」

視線を外す、顔に笑みを張り付ける。

本性は仲間でも隠したい。それがおぞましい、人食いの鬼のそれならば特に。

——コペナントを焼くんだよ

万華鏡のようにひび割れ、判別難しい記憶の中でもそれはしっかりと覚えていた。

ワット・エレクトロニクスから離れて訪れた連邦一奇妙な居住地のことを。

「ところでボス、キュリーとの再会のキスはどうだったよ？」

「マクレデイ。本人はそこで寝てるんだぞ？ 気を使えよ」

「いいからさ、アンタ。ひよつとしてヤバイ性癖もつてたのか？」

「ははは、面白い冗談だな。僕がロボット相手に“シゴいてた”って  
言ってるのか？」

「おれはあ——そこまで言ってないぜ、ボス」

「ほう、お前のよく動く舌のなめらかさ、気が付かなかったよ。キスし  
ようか？」

「やめろ、その趣味はねえ」

「お前の尻の感触、新しい世界が広がるかもしれないな」

「やめろ。マジで吐き気がする、あんたの頭を吹き飛ばす理由がこれ  
でひとつなくなっただぜ」

「それはお互い様だ、馬鹿野郎」

愉快な夜はそうやって過ぎていく。

|||||

グッドネイバーではハンコック市長が。

珍しく自身の店。サードレベルのカウンター席でひとりを静かに  
楽しんでいる。

部下達には命じて、あの可愛い護衛の葬儀はつつがなく行われたは  
ずだが。そこにハンコックは参加することはなかった。そしてその  
理由を彼自身も誰にも言おうとはしない——。

「市長、つぎましようか？」

「そうしてくれ。なみなみと、だ」

「……やっていますよ。いつも」

「なに？」

「いいえ！ わかりましたよ。グラスに、なみなみと、ね」

「ああ、そうだ」

バーテンのロボットの愚痴も、今のハンコックの耳には届かない——  
。

彼は今、別れを告げているのだ。

大好きな自分のいるべき場所、作り上げた場所。この連邦で最も自由な町、グッドネイバー。

彼はもうすぐこの場所としばしの別れを告げることになる。

するべことは毎日だって山積みになされて市長の元へと送り付けられてくるが。

そんな市長の力でもどうにもならないことが、徐々に借金のように膨れ上がっていることとつくづく気が付いていた。

そして相棒が、ファーレンハイトのやつが死んだ。

ハンコックはそれで結論を出すことを迫られた。

「いつそ、俺達は『自由』になるか？」

まだ生きていた相棒に、なかば誘うようにその声をかけたことがあった。

何度もじゃない、その時はつい弱音を吐いたのだ。

「そう、なら後のことは任せて。休暇を楽しんできて頂戴、前市長」

そう言っただけはそれを許さなかったが――。

「嫌、違うな」

あの時の自分は本当にこの町の自分が築き上げたものを全て投げ出したくて。だが本気じゃなかったし、彼女と出ていくつもりもなかった。

いくならひとりで――それがわかっていたから、あいつはわざと俺を挑発するように。この席を奪うように挑発していたのだ。俺はそれにひっかかった。

自分が自分であるための責任と人生を、どうして放棄できるって言うんだ？

そんな店のオーナーの元にトリガーマンがやってくる。

彼は「ボス」とだけ呼びかけると、すべては滞りなく終わりましたよ、と答えた。彼女の葬儀が終わったのだ。

「敬意を払って、送ってやったか？」

「もちろんですよ。あの人に助けられたのはここには大勢いますか

ら」

「本人には聞かせられない言葉だぞ。あいつは自分が周りに変な女だと思われているとずっと信じていたからな」

「そいつも否定はしません。実際、市長に負けない。そんな不思議な変人でしたから」

「——そうだな、まったくだ」

(オンナにしておくのが惜しいくらいだ)

別に性別で能力うんぬんを言っているのではない。

生きていた時、ハンコックの側に立つことで彼女は何度も厳しい決断を下したことがあった。

それに貸し借りを口にするような野暮なことは互いにはなかったが。

しかしその結果が、あのような繰り返される運命——宿命といってもいいくらい、悲劇でついに終わってしまうと。

彼女のために涙を流すより、怒りを湧き立たせるより、長く深いため息をつきたくもなるのだ。

可能性の話だが、考えてしまう。

彼女は自分をいっそ見限ってあの若いのと組み。敵となったほうが本人はもつと楽しかったんじゃないやなからうか？

むろんだからといって、ハンコックもむぎむぎ殺されてやるつもりはないが。

過去を繰り返すような決断をこれからも繰り返すなどという絶望をあんなに感じなくてよかったのでは——。

報告を終えたトリガーマンは立ち去り。

ハンコックのそばには小さな骨壺がひとつ、置いていった。

「どうとう不老不死のグールにはなれなかったな——だが、フェラルなんてひどい姿のお前は見たくはなかった」

異国では、あの青年の国では死者は火に焼くものだと思っていたこともあって、ハンコックはそれをこの相棒にびったりだと考えたのだ。

お世辞を抜きにして、火傷のないあいつは美人と呼ぶにふさわしい



女だった。

「フアーレンハイト、俺は決めた。お前の望み通り、ここでお別れだ」  
バーテンのロボットに、もう行くと伝えると。

ハンコックは自分の店から、市長の自室まで相棒だったそれを胸の中に抱えていき。

2人でよく話し合った長椅子の前の机の上に、それを置いた。  
これで、準備は完了だ――。

その日、多分歴史は動いたのだと思う。

グッドネイバーの市長は、いつもと変わらぬ演説を聞いてもらおうと住人たちに呼びかけるが。

その声にはいつものような張り、だけではない。多くの色合いの混ざりあった深い情のようなものが込められていたように感じた。

『聞いてもらいたいことがある！あわてないでくれ、ごゆっくりどうぞ……』

ハンコックの金庫が破られ、相棒と部下が死に、それを実行した鼻なしのボツビの死はすでに伝えられていた。

騒ぎの最中では、あれほどしてやられたハンコックを笑った住人達も。決着がつけられたことで、それ以上はなにもないだろうと考え、すつかり油断をしていた。

だから市長の口からここで知らされる決断に仰天することになる――。

『集まってくれてありがとう――ここにいるみなに聞いてほしい。突然に思うかもしれないが、俺には休暇が必要だ。』

これまでは恐れを知らない、優秀なリーダーであり続けようとしてきたが。そんな俺も、ここから出ていく時がきてしまったんだ』

弱気ではない、そんなものは感じない。

だが穏やかだが、いつものようにしつかりとした言葉が。彼の決意が本物であると訴えていた。

『だが俺とこのグッドネイバーは切っても切れない関係にある。それはわかっている。』

親子が血でつながるように、俺はこの町と共に暮らしてきたんだ。しかし情熱的な愛があつたとしても、それだけじゃ駄目なんだ。感情に流されない、冷静に対処しなくちゃならないことだつてある。つまり、別々に過ごす時間が必要な時もあるつてことだ』

不安を覚え始めた住人達の中から、市長に思いとどまってくれと声が上がり始める。

ハンコックは市長は彼らに兄弟、と呼びかけながら冷静に最後まで演説を聞いてくれることを求める。

『……俺は市長だ、町が必要とするときはいつだつてここにいます。

しかしもう安全な場所にとどまり続ける生き方は、できない。この世界では、権力をもった奴がそこに死ぬまで胡坐をかいていることを許さないことを俺達は知っている。

だから、俺は行かなくちゃならない。連邦へ、ここから出ていくことが必要だ』

ハンコックを見上げる住人達の顔をハンコックは知っている。

その多くが、あのダイアモンドシティから追い出され。この連邦でも自由に生きたいと願う、そんな善人とはおよそ呼べない癖のある悪い連中がほとんどだ。

そしてグッドネイバーはそれを実現した――。

ここでは聖者を気取つて、権力の上から裁こうとする存在は許さない場所。

町が震えていた。

市長への愛と別れへの悲しみ。そして自分のいる場所が、この世界では唯一の希望あるものだど理解するがために。

グッドネイバーは消えるわけではないのだ。今までもそうであつたように、これから先も続いていくのだ。

だがしばらくは、愛する市長はそこから消える。

そしてそれはきつと永遠のことではないのだろう。

驚くことだが、ハンコックのこの決断は連邦を揺るがすどころか。たいしたことのない、ジョークとして人々は理解していた。

もちろん、グッドネイバーの住人達は別だが。

彼らがそう考えるのは簡単なことで、グッドネイバーは市長が居なくてもそのまま変わらぬ日常を始め。

市長がいないはずの市庁舎を、トリガーマンたちは変わらずに警護を続け。

住人達はそれをなんでもないことのように口にしながら、またそれぞれの悪事に邁進していたからである。

(ハンコック市長の気まぐれか、地下に潜っているのかもしれない)  
事情通を気取って、そんな妄想を垂れ流す連中もいるが。グッドネイバーはそんな連中にも、沈黙した。

別れの挨拶がされた日。

誰も見送りにはあえて出ていかなかったが、町に背を向けた市長の背中が。グッドネイバーの扉をくぐって連邦へと消えていったことを確かに住人達は知っていた。

彼がどこを旅するのか、それを知らないまま。

だが、その無事を彼らは愛する市長のために願っている。人がただ願うだけなら、無料でいいのだから――。

|||||

Vault111の友人たちの元へ、それぞれメッセージが送られた。

彼らが知ったのは、差出人は不明。しかし内容はどれも同じもの。

——コペナントへ コラレタシ アキラ

どうやって連邦に散らばっている彼らの元へと送り届けることが可能であったのか。

それが全員に送られたとはまだ知らない彼らは考えもしなかったが。

その答えがこの地上ではなく、宇宙——それも大気圏外からのものだと聞かされたら目をむかすにはいられなかったであろう。

地球の守護者達同盟は、アキラを地上へと戻す際に。彼の願いをか

なえたのだ。

レオ達が。

ガービーが。

ニツク達も。

メッセージの意味するところを知ろうと、ただちに約束の場所へ。  
コペナントへと向かうことを決める――。

## 悪鬼の足跡（LEO）

——つぎはもそつと、楽しい酒になるような土産話を持ってこい  
——どんなのがいいですか？

——我らであれば、決まってるだろう

——せいぜい励めよ、小僧

|| || || || || || || || || ||

コベナント——その町は連邦では間違いなく奇妙な存在になっている。  
いる。

少数の選ばれたもの達が集まっている、小さな居住地。しかしその守りは堅い壁で周囲を囲み、壁の上から近づく不穏な存在には容赦しないとターレットがこれ見よがしに細かく休むことない動きで、威嚇を続けている。

なのに、である。

この町は訪れる者達には驚くほど緩く門戸を開けるのだという。

そんな噂は連邦中にそれなりに広まってはいるものの。だからといってそこを直接訪れようなどと考えて実行しようとするのは、商人か襲撃者くらいなものだ。

噂では無害といっても、実際にそこで何が待ち構えているのか。

それが自分の命を奪うようなものではないと、この世界で生きる人々が確信を持てるわけもない。

せいぜい、「訪れた外のやつらを、食料にして食ってるに違いない」などと口にすることで、無理矢理に心の中の好奇心を抑え込むことになる。

とはいえ、だからといってコベナントに訪れる人がまったくいないわけでもない——。

ここに一人の男が訪れていた。

名前はダン、バンカーヒルでは長らく傭兵をやっている。

それがこのコベナントにいる理由、それを話すには彼自身のことから語らなければならぬだろう。

知つてのとおり、バンカーヒルは商人の町。

そしてキャッツプが何よりもモノをいう場所だ。

だからここでもつとも安価で取引されるのが、腕に自信のある傭兵たちである。

経験を積み、立場をわきまえ、犬のように忠実に主人を守れる——これができて初めて商人たちは傭兵の首に吊り下げられた値札を見る。

多くの傭兵たちはそんな現実には溜息をつきながらも、はした金で買われて旅の空へと肩を落として出ていく中。

ダンはその未来のために、新たな2つ名を自分の値札に張り付けた。

それが、これ——正直者のダンが誕生した経緯である。

正直者であることをアピールするために、ダンが始めたこと。

それは自身の傭兵としての腕ではなく。傭兵の技術を用いた、探偵の真似事で結果を出した。

探し物、行方不明者の足取り、痕跡、他人の身元調査。

それらはダイアモンドシティで聞きかじったあそこで活躍している探偵たちがしていることとほぼ同じことをこのバンカーヒルでやっただけだ。

ダンには情報を分析する力と、交渉力、追跡能力にすぐれていたのですぐにも「ただの傭兵」とは違う者として商人たちにつかわれるようになったが。

ダンを見てそれを真似ようとした同業者たちは、残念ながら仕事にしくじることが多く。ほとんどが結局は命を失う悲惨な最期を遂げていた。

とはいえ、ダンはそれで満足はしていなかった。

いつかは大きな仕事で、でかく稼ぎ。必ずやこのムカつきを抑えられないバンカーヒルという異様な町から出て行ってやると心に誓っ

ていた。

そして耐え忍んで日々も、ついにそのチャンスがやってきたと思っ  
たが――。

(この町はもう、ウンザリだ)

正直者のダン、最後の大仕事。その捜査はいきなりにして難航して  
いた。

足跡をたどって犯罪現場は押さえた。あとは動機、証拠、目的を知  
ると段階を経て解決へと向かうはずだった。少なくともこれまででは  
そうだった。

ところがここではそれ以上、話がまったく進まなくなってしまう  
た。こんな経験を、ダンのはしたことはなかった。

そしてダンはコベナントを訪れた自分の同類達――黄色の目つき  
の気になるビジネスマンとその一団に半ばやけっぱち気分で話しか  
けていた。

「バンカーヒルのストックトンじいさん、彼のキャラバンについてな  
にか情報は持っていないか？」

「さて？」

思った以上に若かったビジネスマンは小賢しくも小首をかしげて  
わからない、という顔をしたが。

この正直者のダンにかかれば、そんなのはバレバレだった。こいつ  
はストックトンのことをしっているんだ、と。そうなればダンのやり  
方も少し変わるし、結果を出すことに集中するなら別の方法がいい。

「なあ、提案があるんだ。この近くでキャラバンが襲われてる。

ほとんどは殺されたが生存者もいたはずだ。俺はそれを見つけて  
約束をしてくいてね、よければあんたにもそれを解決するのを手伝って  
もらえないかと思ってる」

「――それは大変でしょう」

「もちろん報酬は出すよ。そのかわり、あんたにもこの契約をちゃん  
と守ってほしいんだ。条件はそれだけ」

不気味にこちらの話を白々しくも聞こうとしない、この居住地から  
一刻も早く離れるために。

「ダンはようやく、ひとつ良い取引が出来たと——可哀そうにその時は単純にそう考え、心の奥底から喜んでいた。」

「では、そのストックトン氏は。本当は誰を、見つけて欲しがってるんですか？」

黄色の帽子の下で、アキラはにっこりと笑みをたたえて聞き出そうとする。

|||||

コベナントはその日、珍しく朝から少し騒がしかった。

外から珍しく大勢の、そして興味深い人物たちが次々とこの町の扉を抜けて入ってきたからだ。

もちろん入り口では町に入る条件として、いくつかの質問に答えるように要求され。彼らはそれには変な表情を浮かべつつも、素直に了承すると答えていく。

『問題、気のふれた科学者があなたに近づいてきて「お前のフォトニック・レゾナンス・チェンバーに俺のクアンタム・ハーモナイザーを入れてやる！」などと叫んでいる』

「は？とりあえず、ぶっ飛ばす。殺すかどうかはその後で考える」ケイトはそう言うと、不機嫌を隠そうとしない。

『問題、病院で手伝いをしているとき、奇妙な感染症にかかった患者が倒れこみながらドアから入ってきた。感染が凄い勢いで広がっているが、医者は当分外出先から戻っては来ない。どうする？』

「人造人間だからといって医者の真似事はしたくはない。俺なら自分以外の他の誰かに助けを求めねえ」

人造人間の探偵、ニックは冷静だ。

『問題、洞窟で迷子になった少年を見つける。彼は空腹で、疲れてもいたが、盗品を持っているようだ。どうする？』

「ストロング、小サナ人間、食ベル」

ストロングはその瞬間を思い描いてしまい、腹がグウとなる。



『問題、祖母からお茶に呼ばれたが、なぜか銃を渡され、ある人物を殺してくるようにと命令された。どうする？』

「質問を返す。なんでそんなことをするのか。お婆さんから全部聞き出して、それが正義の裁きが必要なら、記事にしてすべてを明らかにしてみせる」

パイパーの視線はどんな時でもまっすぐであった。

『問題、ミスター・アバナシーがまた自分の家に鍵をかけて出てこない。彼を家から出すように頼まれた。どうする？』

「ノックをするよ。話をして、悩みを聞く。そしてなにか力になれないか、そこから考えたらいい」ガービーは真剣に答える。

『問題、知人がキャプテン・コスモスの漫画本第一巻を持っている。君はそれが欲しい、どうやって入手する？』

レオはしばし沈黙するが、答えが決まったのだろうか。顔をあげると口を開く。

門の外で質問が終わると、次々と皆が居住地の中へと入っていく――

|||||

無言を貫くケイトと妙に機嫌のよいストロングを連れてコベナントの扉をくぐると、まるで私は物語の主人公であるように。自分の目に飛び込んでくる人たちの顔ぶれに驚きを隠せなかった――。

この世界で私たちを助けてくれた人たち、友人たちがそこで同じように。コチラを見て驚いていた。

わずかな混乱と、大きな再会の喜びもそこそこに。

今度は一転してなぜか私は彼らに一斉に非難され、心配され、説教されてしまった。

だが、それでもやはり元気な友人達。ほぼ全員に会えて嬉しかった。

太陽が高い位置に上る頃、ようやく互いの興奮も収まり。

コズワースはケイトとストロングを見張ると主張し、ニックとパイパーはこの町には以前から興味があつたと言つてひと回りしてくるといつてしまった。

私はガービーと屋外のカフェにてコーヒーでも楽しもうと思つたが。

久しぶりに再会したカールは私に甘えたがり。今までは一度もしなかつた、椅子に座る私の膝の上にその巨体でも構わず飛び乗ると。猫のように体を小さくしようとして、そこから動くつもりはないらしい。

私はただ、苦笑いしてそのからだをつよくまさぐつてやる。

「しかし將軍」

そんな私とカールをみて笑うガービーは、真面目な顔に戻る

「あんたが無事で本当に良かった。カールが酷い姿で戻つた時、ダメかもしれないも考えた」

「ガービー、まだ言うのかい？もう謝つたじゃないか、それは」

「B. O. S. に潜入だつて？まったく、あんたには驚かされるばかりだよ」

「だが、おかげでむこうの目的もわかつた」

「インステイチユートか——」

ガービーも顔をしかめる。

エルダー・マクソンは当面の計画ではなく、最終目的を忌憚なく語つてくれた。

しかしだからといって、ミニッツメンが彼らを歓迎するとは言ひ切れない。

「將軍、たしかに人造人間は連邦にとって脅威ではあるが」

「ああ」

「正直に言つて、我々が戦うべき相手かと聞かれると、これは難しい」  
「……」

パイパーとナットの姉妹のおかげで、ダイヤモンドシティでは人造人間の脅威を散々に教えられては来た。

だがそれでも、居住地を外敵から守るミニッツメンが、それを生み

出した存在に対しても拳を振り上げる相手であるべきかと問われると、躊躇うものがあつた。

「アキラの話ではレールロードはインスティチュートと敵対しているという」

「そうだ。人造人間という生み出されたものの扱われ方で、両者は意見が真っ向から対立している」

「これまでもミニッツメンは、人造人間には黙っていたのか？」

「——無視していた、と非難されると困る。将軍、彼らはレイダーとは違う」

「そうなのか」

「ああ、大半は居住地の中で起こる事件以上の被害はない。そりやたまには、居住地ひとつ丸ごと全滅させてしまうような悲劇もなかったわけではないが——」

「その時はどうなった？」

「なにも。なにもできることはなかったんだ、将軍」

私は困惑するガービーにうなづいた。

つまりは人造人間達はいわばこの連邦に潜入する異邦人からのスパイなのだ。

何らかの任務を受け、それが終わると痕跡を消そうとして口を封じようとする。それも終われば、あとはインスティチュートの元へと帰還するだけでいい。

ミニッツメンが捜査をしたとしても、その時はすでに人造人間の姿は任務を終えてもどつてしまっているわけで。そこに影も形も残されてはいないわけだ。

「ガービー、インスティチュートは本当に。どこにいるのかわからないのか？」

「それについてはアンタも承知しているんじゃないか？俺もそれは変わらない、さっぱりだ」

「そうするとB. O. S. の問題は当面、終わりそうにないな——」

「そもそも将軍、俺達はまだそこまで力がないぞ。軍隊と戦う力なんて」

「ああ、わかってる」

「どうやら留守中のミニッツメンもまた、苦しい状況にあつたようだった。」

「連邦北部を抑えようとして、何度もつまづき。いくつかの居住地はまたゼロから立て直す必要がある。」

「ようやく静かになったと思つた矢先には、あの崖の上の居住地の襲撃を受け。苦い敗戦を噛みしめることになった。」

「ハングマンズ・アリーは当面は大丈夫だろうが、人員がもつと必要だ」

「とはいえ、何もできない奴に武器を与えてミニッツメンなどと名乗らせるよう事はしたくないんだ。將軍」

「わかつてる。うまい方法を考えないとだめだろうな——」

「ああ。だから將軍もここへ……このコベナントへ来たんだろ？」

「どこからともなく、人の手を介して送り付けられた短いアキラからのメッセージ。」

「私は若い友人に会うために。」

「ガービーは抱えた問題の解決への協力を求め。」

「ニツク達は、そんなアキラの呼び出しに私が放っておかないだろうと考え。この再会は、ある意味においてあの青年が仕組んだようなものだった。」

「実はガービー、ひとつつ気になっていることがあるんだ」

「なんだ、將軍？」

「ひとつはロボットのことだ。アキラはエイダとキュリーを連れていた」

「そうらしいな」

「あのメッセージが本物なら、アキラはここにどちらかを置いていたんじゃないかと思うんだ。だけど、見てのとおり。」

「私たちは合流することが出来たが、肝心の本人はなぜここにいない？」

「——これは、畏れだど？」

「考えたくないな。用心のためにも、日が落ちる前にはここから退散」

した方がいいかもしれない」

「ふむ」

「それにもうひとつ、マクレディのことだ」

「ああ、彼か」

「彼の姿がここにはない。アキラがメッセージを、彼にだけ送らなかつたとは思えない。となると——」

「マクレディのやつはメッセージを無視したか。もしくは本人とすでに合流してるか」

「ああ見えて、2人はよく気が合っているようだった。私に対しては、まだ怒っているかもしれないな」

せつかく律義に守ってくれるとついて来ようとした本人を。私はへーゲン砦に行く前に、ひとり置き去りにしてしまったことがあった。あれからもう一カ月だが、どう思われてるのは正直なところ本人の口からまだ聞きたくはない。

そんな苦笑を浮かべる私たちの元に、一足早くニツクが戻ってきた。

「ミニッツメンの作戦会議に、老いた探偵も席についていいのかな？」

「どうぞ、ニツク。それに難しい話は終わったよ」

「なんだ、随分と早かったんだな」

私達が空席をすすめると、そこに落ち着きながらニツクは答えた。

「まあ、パイパーが熱心に聞いて回っているし。やはりこの顔だからね、人の少ない路地裏なんぞに入り込んでいったら。向こうからトラブルがやってきてしまうものさ」

「なるほど」

「まあ、それに収穫がなかったわけじゃない。実は、ここでひとつ気になる話を耳にしたんだ。それを知らせに来た」

そういうと、ニツクは身を乗り出してくる。

誰彼構わずに話しかけ、突撃取材を続けるパイパーの側で。

ニツクは静かにこの居住地のなかを見て回るだけで満足しようとしていた——。

たとえば誰にでも開く奇妙な居住地だとわかつてはいても。ここは

連邦なのだ、人造人間の姿をした探偵にまったく脅威を感じないという人間は圧倒的に少ないものだ。

だから自分に声をかけてきた男がいたことに、驚いた――。

彼の名はダン。自らを正直者のダンだと告げると、あんたはダイアモンドシティのニック・バレンタインなんだろう？と聞いてきた。

(自分もたいした有名人だな)

そう思ったニックであったが、それが勘違いであることをこの後で知る――。

「その男は傭兵でな。どうやら探偵の物まねもしているらしい」

「へえ」

「ところが捜査にすっかり行き詰ってしまつたらしく。そんなところに、目の前に本職の探偵があらわれたんで不安に襲われた、とそういうことだったようだ」

「名探偵の登場。有名人も大変だな、わかるよ」

「最後のミニッツメンにそう言われては、返す言葉がないな。」

だが、この話が本当に面白いのはここからなんだ」

「ん？」

「その傭兵、数日前にここでおかしな一団と会つたと言うんだ。黄色の帽子、黄色のコート、同じく黄色のビジネススーツ――」

「なんだ、それは？変な格好をしたやつだな」

「そうかな？200年前の話になるけど、当時の私の自宅を訪れたV a u r t 社の業者も似たような恰好をしていたぞ」

頓珍漢な話でニックの話を理解しようとしないうミニッツメン達に、やれやれと呆れながら探偵は首を横に振る。

「そうじゃない。アンタたちは聞いたことがないか？不思議な男の話」

「なんだって？」

「ああ、それか。将軍は知らないだろうな。あんたが言いたいのは、何十年も前から伝わる都市伝説のヒーローのことだろうか？」

「そうだ。あのB. O. S. が来たキャピタル・ウェイストランドでも守護天使と呼ばれた男の話だ」

「その、生きる伝説がここにいた？」

「どうだろうな。」

だが、そのダンという男はそう確信しているみたいだった。で、ダンとやらはそいつに自分の事件を滅茶苦茶にされたくないと。同盟を持ち掛けたらしいが、どうやら消えてしまったと嘆いていたよ」

「——面白い話した。ところでニツク、その伝説の男は本人だと思うのか？」

「いや、違うだろうな。ダンの話ではそいつは1人ではなく、仲間を連れていた」

「ほう」

「女性とライフルを持った傭兵、それにアサルトロンと呼ばれているロボットも連れていたらしい」

「っ!？」

途端にレオは妙な胸騒ぎを覚えた。

「ニツク、悪いがパイパーをすぐにここへ引きずってきてくれ」

「——ああ、わかったよ」

「どうしたんだ、突然。将軍？」

「ガービー、この近くに何かないか？泊まれる場所とか、そういうのだ」

「それなら実は考えがある。この近くにはまだ使われていない居住地があるという情報があったんだ。」

「最近は人手が足りないもんで、場所の確認しかしていないんだが——」

「それじゃ、パイパーが戻ったら。ケイトやストロングを連れて、そこに先に向かってくれ」

「将軍はどうする？」

「ダンという傭兵が調べている事件に興味がある。ニツクを連れて、ちよつと捜査を試してみようと思う」

「わかったよ。だが、無茶はしないでくれよな。あんたは大切な人なんだから」

「気を付けるよ、そう言って笑うものの。」

私の中の不安は時間がたつにつれてますます大きくなっていくのは何故だろうか？

コベナント、ここはたしかにおかしくもあり。奇妙でもある場所だ。

しかしそこにわざわざ、あのアキラが来るように指定をしておきながら。肝心な本人がそこで待っていないというこの状況には高い警戒心が必要だと、勘がそう告げていた。

|||||

それから一時間と立たずにコベナントから離れると、私たちは二手に分かれる。

私はニツク、コズワース、カールを連れ。

襲撃されたという現場へと向かった。

「確かに、キャラバンは襲撃されていた」

「ああ、それにどうやらあのダンとやらの考えもそう間違っているようではないな。この現場はあの場所からも近い。

こういう時、獲物を狩るのはその相手がどんな奴かを前もって調べていることが多い。マーケットに買い物に来る前から、品定めを終わらせている女性達と一緒にだな」

「つまりこのキャラバンは、コベナントに選ばれた？」

「多分な」

「そうなるとニツク、次の疑問が出てくる。なぜ彼は、あの傭兵はあそこで立ち往生しているんだ？」

「レオ、やはりあんたは勘がいいな。そしてあんたの疑問はもったもなことだ。

つまりこの事件にあの場所が関係する以上、あそこで身動きが取れなくなるってのは危険がすぐそばにある証拠だ。

これはただの襲撃事件じゃないのさ。もっと別のなんらかの目的で、このキャラバンは何者か選ばれたに違いない」

私はニツクの言葉に頷いて同意を示した。



だとするならば、ダンの話を聞いて、私たちに来るようにしておきながら姿を消したアキラの事も少しは理解が出来る。

彼はあそこで何かを知って、すでに動いているのだろう。とするならば、私たちはそれを邪魔しないようにできるだけ近くでそれを見守ることが正しい気がする。

——ボスはトラブル体質なのさ、うんざりだ

ともに旅をした時もマクレディはそうよく口にしていた。

今回のことがどの程度なのかは知らないが、とにかく巻き込まれないようにはしておいた方がいいだろう。

「レオ、それでどうするね？俺達はこのまま、捜査を続けるつもりかい？」

「もうちよつとだけ、調べてみようニツク」

「そうだな。今日はミニツツメンもいるから、連邦の空の下でみじめに野宿しないで済みそうだし」

「日が暮れる前には移動するよ。それは約束する」

私はコズワースにいつて現場の記録を残し、カールにも匂いがかがせるのを試しては見たが。

犬が私たちと連れて行った先は、やはりあのコベナントの閉じられた門の前で座り込んで見せた——。

(なにかがあるんだな、アキラ)

私は心で語りかけるものの、しかし闇のむここからは何の返答もなかった。

## 報復の権利者

ガービーは自分がつまらぬ貧乏くじを引いてしまったのだと、最初  
は思った。

連れている中でもケイトは会った瞬間から今まで終始不満顔で、そ  
れが気に入らないのだろうか話しかけてはいないのにパイパーもイ  
ライラし始めている。

平然としているのはストロングくらいなものだが。人ではない  
ミュータントに、女性同士のいざこざを見せられる男のうんざりする  
気持ちなど、決して理解はしないだろう。

太陽が沈みかけた頃、ようやくガービーたちは件の居住地を目にす  
ることが出来た。

川沿いに立つ大きな屋敷は外から見ると限りはまだまだしつかりし  
ていそうであるが。

他にもあつたであろう近隣の家々は、すでに壊され、朽ち果てたの  
か。影も形もなく、ただそこに一軒だけがぽつんと存在し。なんとか  
視認できる川底に、多くのジャンク品が残されているのが分かった。

「あれだ、あそこが確認された場所になる」

「——無人、なの？」

「そのはずだ。人の姿はない、そもそも近くにブラッドバグの巣があ  
るようで。ここも安全ではないかもしれない」

「ああ、だからこのメンツなんだ。納得」

皮肉な表情でそう口にするパイパーにガービーは何かを言おうと  
して、やめた。

あのレオが本当に危険な場所にこの破天荒な女性陣を選んだ理由、  
考えてみたら意外と本当かもしれないとそんなことを考えてしまっ  
たのだ。

なにかにつけ騒ぎたがるストロングを落ち着かせつつ、無事に家の  
扉を（そもそもドアはなかったが）抜けるところまでは何もなかった。

しかし先頭に立ってスレッジハンマーを構えたケイトは、後ろを振

り向くと何やら困惑した表情をむけてきた。

理由はすぐに分かった。暗くなつていく連邦に構わず、家の中にあつた長椅子の上では、横になつてのんきに寝息をたてている男がそこにいたのを確認したからだ。

(騒がれないように、静かに起こせ)

ガービーはライフルを、パイパーは10ミリピストルを、ケイトはハンマーを構えて静かに距離を縮めていった。

「……おいつ、アンタ。ここで何をしている!?!」

「——ああ?」

「俺はミニッツメンだ。ここは無人だと、そう聞かされていた」

「へえ、ミニッツメンだつて?」

帽子を頭において寝ていたらしき男はそう口にする、体を起こしてその顔を——グールであることを知らせてきた。

「そうか、ここを居住地として使うつもりだったんだな」

「その通りだ。アンタ、いつからここに?」

「俺?最近だよ、せいぜい数日つてところさ」

そう言うとグールは指をさす。

その先に見える部屋の奥には“解体されたブラッドバグ”が何匹も放置されていて。あれが俺の食料だったんだとそいつは言った。

「ちよつと待って!その声、その恰好、それつて——」

「ケイト?」

「ウツソ!?嘘でしょ、アンタ。あたし、知ってるよ」

「おや?お嬢さんとは会つたことがあつたか?」

「あるよ!あるあるっ。コンバットゾーンに何度かお忍びで来たことがあつたよね?」

「コンバットゾーン?——おお、思い出してきたぞ。そういうお前さんは、あそこの野蛮なファイターだったか」

「そう、ケイトだよ。コンバットゾーンのチャンピオン」

「チャンプだつて?俺が見た時はアンタ、まだ駆け出しだったはずだ  
がなあ」

「へへへ」

「そうか、そりやおめでとうチャンプ。コンバットゾーンは残念だった」

「ああ、ありがとう。しょうがないよ、トミーも諦めてたし。でも、嬉しいよ。ハンコック」

ガービーとパイパーはケイトの最後の言葉に目をむいた。

『ハンコック!?!』

そう思わず合唱してしまったのも、無理はない。

連邦の悪の巣窟たるグッドネイバーの支配者が、たったひとりである場所に——誰もいない薄暗い居住地で寝ていると誰が思うだろうか？

なんだ、気が付かなかったのか。そう言いつつ長椅子に座った彼は、懐から煙草を取り出すとそれを啜える。

しかしとつさのことに、ガービーはライフルをハンコックへとむけてしまう。

「ちよつと!?!なにしてんのさ」

「いや、しかし——」

「いいってことさ、チャンプ。おい、最後のミニッツメン。俺はコレでも寝起きはいい方だな。その不愉快なモノをコチラに向けるのを今すぐにやめるなら。なかつたことにしてやっても、いいぜ」

ガービー自身は警戒を緩めることが出来ず。ライフルを下ろすつもりは微塵もなかつたが、隣に立つパイパーがそれを静かに手で降ろすように指示を出した。

彼女は知っている。ハンコックはただの悪党というだけではない。今でも優秀で恐ろしい暗殺者として、毎年のこと両手の指以上の犠牲者をだしている。

敵に回すにはあまりにも危険な相手であった。

「そうそう、そうしなつて」

「ありがとよ。ミニッツメン」

いきなり上機嫌になつているケイトにこのままハンコックの相手をしてもらう方がいい。パイパーは引き続き黙るように、ガービーに

視線で訴えた。

「ここにはなんているの？まさか、町から追い出された？」

「おいおい、俺がなんで俺の愛する町から追い出されなきゃならない。そうじゃないさ、これは休暇だな」

「休暇？市長をやめたんじゃないの？」

「なんだ、チャンプ。お前が市長をやりたいのか？悪いがやめておけ、俺はあそこでは人気者なんだ」

「ケイトだよ。それで、なんで休暇なんか？」

「そりゃ——ここまで聞かれたら誤魔化せないな。そう、認めなきゃならん。」

俺は確かに追い出されたわけじゃないが。でも、市長を続けることもできなくなつたから。こうして休暇をとる羽目になつて、ここでひっくり返つているのさ」

市長を続けることが出来ない？

どういうことだ？

「よくわかんないんだけど」

「ほら、わかるだろう？今の連邦は、あっちもこっちも大騒ぎしている。」

ジャレドを血祭りあげてミニッツメンは復活。同じくダイヤモンドシティを襲おうとしたレイダー共も敗れて敗退。当面はあいつら同士で仲良くグチャグチャしてるだろうな。

ガンナー族は北上する計画を停止させ。そこになぜだかキャピタルのB・O・S。なんてのが捻じ込んできた」

(ガンナーの北上が中止だつて!?)

「そうそう、ポストンコモンではついにコンバットゾーンも消えちまつたつて事件もあつたな」

「そうだね」

「そしてこの俺も、ついにそれに巻き込まれちまつたつてことさ」

「そつ、それはなにが？」

ガービーは思わず聞いてしまう。

連邦の南部にはほぼ絶対の支配をしくガンナーの情報がでて。つい

つい小出しにされた情報に反応して欲目が出てしまったのだ。

「俺か？俺のはな——みんなに秘密にしていた金庫を破られ。ついでに相棒も殺されたんだ」

『っ!』

「ひどいね。そんなクソをしでかした奴はわかってるの?」

「もちろんさ。アキラって奴だ」

パイパーもガービーも心臓が止まるかと思っただが。ケイトは無邪気にも——。

「あれ?アキラって、あの最低野郎が探しに来た若い奴と同じ名前だね」

『ケイトっ!』

「おお、なんだ。アンタらもあの大馬鹿野郎を探しに来たのかい」

自分たちの受けたショックから回復することが優先され、そのせいでケイトの口を閉じさせる暇は全くなかった。

パイパーは青い顔になると冷や汗が噴出し、ガービーは頭痛にいた感覚に頭を伏せてしまう。

「そうか、どうやらそっちもまだ会えてはいないんだな」

「ハンコックは会えたの?」

「俺もまだなのさ。だが、もうすぐだろう」

そういうとフウと煙を吐き出した。

思わぬ情報の数々に、我慢しきれぬパイパーが今度は口をはさんでいく。

「その、ハンコック市長?なにが、もうすぐなの?」

「ん?そりゃ、決まってるだろう」

ガービーは自分の耳がおかしくなったのだと、そう思った。

ハンコックの続いて出た言葉の意味を、うまく理解できなかったからだ。

——コベナントさ。あいつはあそこに復讐するつもりだろう、と

|||||

コベナントの秘密のエリアを守る護衛達に緊張が走った。開くはずのない扉が音を立てるのを確かに聞いたと皆が確認しあったからだ。

武器を手に取り、ターレットを起動し、照明も用意して待ち構える。光の中に黄色のコート姿が浮かび上がってきた――。

「テストを受ければ町に入れるとは言ったが、どこでも入っていないことではない、当然だろう」

「……」

「ここまで来ておいて迷ったなどと言うなよ。どうして入れると思っただんだ？」

「入れないとは説明されなかった」

若い男の声は、しかし向けられる敵意にも銃口にも気にしないのか。平然としたものであった。

「ふざけるな。よそ者は許可されない。それにどうしてここがわかった？」

「町で聞いたのさ。そしたらここで責任者と話せと言われた」

「それなら町長が――ジェイコブから、前もってここにも連絡が来るはずだ。つまり、お前は嘘をついている」

まあ、そうなるよな。

これでやる気のない嘘に引つかかったら。それはそれでこっちも困ったことになっただろう。

攻撃の叫び声と共に、自分は物陰へと移動し。

奥で隠れていたエイダとマクレデイの攻撃で、いきなり正面のターレットが火を噴いて破壊された。

「アキラ!? 武器を」

キュリーは転がるようにして僕の側に近づくと、その小さな手の中にはデリバラーが握られていた。

ほんの少し、それも短い時間にお気に入りだった僕の物だったそれは。なぜかもう、心動かされるものがなにもない。

「キュリー、それは君が使い。自分の身を守るんだ、これまでのように」

「で、でもっ。あなたは どうするんですか？」

無言のまま僕はそれを掴みだした。

鯉口を切ると、あらわれる刀身は切れ味のよくない鈍い輝きを見せる。

トシローに譲られたその刀に、僕は同じく違うモノを与えた。

命名、シシカバブ<sup>獅子棍奉</sup>。

僕はあの宇宙で自分が人ではなく、鬼であることの証となるものを手に入れてきた――。

戦闘中だというのにマクレディも、そしてロボットのエイダでさえも目の前で始まった蛮行に思わず啞然とし。一瞬だけだが攻撃するのを忘れてしまっていた。

自分達よりも前の位置で身を隠していたアキラが。

タラップを簡単にひよいと飛び上がって登ってしまおうと、そこで踏ん張っていたコベナントの護衛たちに手にした刀でもって斬りかかる。

以前も呆れてしまうような“馬鹿な戦い方”をする奴ではあったけれど。これはあまりにも現実離れした、異様なスプラッタショーが、それから眼前で繰り広げられる。

柱の陰からのぞき込んで銃を撃っていた相手の、頭部の一部と手をあっさりと斬り落とし。

進む次の一歩では、背中を向けていた相手の襟首をひつつかんで身体をふり回してから、抵抗しようとおがく相手の背後から手にするそれで乱暴に胸を一気に貫く。

さらにまだ足りないとおばかりに、突き出た刀身が真っ赤な炎を噴き上げると。貫かれた肉と骨、そして臓物が生きたままに焼かれ。悲鳴を上げた男のそれが、途中から絶叫まで変化し、そこで一気に力尽きて崩れ落ちていく。

(イカレてるのがパワーアップしてるじゃねーかつ)

抗議(?)の声をあげる暇もなく。

アキラはそこから奥に向かって、1人で先頭きって進んでいった。



まう。

「お、おいつ、ボス!？」

「アキラ、待つてくださいい!」

マクレデイ、エイダに、キュリーと続く。

この瞬間、唯一の出口を抑えられ。コベナントの秘密のエリアは地獄と化す――。

|||||

部屋には鍵がかけられ。

中には息を殺し、それぞれ武器を手にはするものの恐怖に震えている研究者姿の男女が数人隠れていた。

連邦の奇妙な町、あのコベナントには秘密があったのだ。

ここは一見すると無防備であるかのように見せてはいるが。実際は鉄壁の小さな砦でありながら、ひとたび中へと引きずり込めば外には出られない。そんなゴキブリホイホイにも似たシステムを生み出した理由、それはいわゆる人造人間とよばれる存在に対処するための秘密拠点であった。

すべては2229年5月のあの時から始まった。

ダイアモンドシティで起こった、あの痛ましい事件――通称、壊れた仮面事件のことである。

町を訪れた一人の男は、店で食事をとった後。突如、態度を豹変させるや無差別な発砲事件をおこして多くの犠牲者を出した。

インステイチュートはついに人と区別が出来ないレベルに人造人間を完成させたが。

同時にこの事件は、そんな人造人間であっても精神にはまだまだ付け入るスキが残っているのだというはつきりとした証明を知らしめる結果となった。

以来、人造人間を憎む健全な人間達、または恐れる出資者たちに何とか支えられ。

ここにいる研究者たちはテストの改良を続け、いつの日か人造人間

と人の判別する方法の完成を目指して活動を続けていた。  
ただし問題は、そんな彼らを助ける組織の一つは、あの――。

凄まじい衝撃がドアにくわえられると、小さなのぞき窓一杯に血を吐きだした護衛の恐怖に歪む顔があった。

己の口から「ひっ」などと声が漏れそうになり、慌てて自分の手で口をふさぐが。

そんなけなげな努力をあざ笑うかのように、ドアを突き破って刃があらわれ。続けてそれが、炎をまとうと。外の通路側から不愉快な焦げた肉の匂いがしつかりと部屋の中へとながれこんでくる。

「は、入ってくるぞ。準備はいいなっ」

小さな声での警告。いや、すぐに襲われるという恐怖を紛らわした  
いだけなのか。

窓に張り付いていた顔の表情は虚ろとなると、不自然な形で崩れるように消えていく。だが、刃はさらに激しく火を噴きだし、扉を貫いたまま乱暴に上下左右にとグリグリと動かされ。次第に大きく裂けていく向こう側に、黄色のコートを着た悪鬼が怯えている獲物の存在に笑っていた――。

扉に鍵がかけられていたのはムカついたが。

それが簡単に刃を突き通せる程度のものだとわかると、僕は乱暴にそこをこじ開けるようにして、破壊するのに2分。

中に入ると、隠れていたはずの臆病者共が反撃するのに数十秒。

僕が全てを斬り伏せて確認するまでが3分。

この勢いを止める者はここには存在しない。

「さて、次だな」

僕は血刀を振って、血脂を乱暴に払うと。

柄にあるスイッチを押すことで、刀身をまた轟轟と音を立てて唸り声をあげさせた。

ぬぐい切れぬ血が炎にさらされて蒸発し、血脂がパチパチとはぜる音がするが。どうということはない。

目を閉じて、感傷に浸らずとも思い出せる。  
仲間の目の前で襲われ、力を奪われ、それでも細々と逃げ出すチャンスがうかがっていたあの時。

あいつらと接触した、コベナントの町長らの何気ない会話——。  
トシローの元で目を覚ますと、ミニッツメンへと再び戻ろうと思いつつ。

しかし、ここを忘れることはどうしてもできなかつた——。  
だが、やはりそれがよかつたのだ。コベナントの秘密は暴いた。そして手に入れた、いとも簡単に。

人造人間を滅することを望む、レールロードの敵。  
連邦の平和を乱す、旅人を害するミニッツメンの敵。

この2つの正義を手で、今の僕は復讐者ではない。報復者でもない。  
い。

断罪する者  
パニツシャーとして、その報いをくれてやるチャンスを手にするこ  
とが出来た。

「正義は我にあり、ククク。ヒヒツヒ……」

恥も躊躇い、そうした恐怖を失って。僕はようやく鬼になれた。

|||||

Dr. チェンバースは秘密のエリアの最奥部で、自分たちが目指した未来がガラガラと音を立てて崩れていく現実を聞いていた。

襲撃者はわずか、しかしその圧倒的な勢いは炎のように入口から押し寄せてきて。

きつとこのままでは誰も彼もが沈黙する死者の列に並ぶ羽目になるだろう——。

(そんなことは、許されない)

自分に「ここから動かないで」と告げて駆け出していく護衛の男たちの背中を見つつも。彼女は自分の正義の終わりをまだ認めようとはしない——。

コベナントの秘密の場所とはいえ、かつてこれほど静寂であったことはなかっただろう。最後の絶叫が鳴りやむと、しばらくそれを感じる。

あの日からずっと怯えていたものがあつた。これこそが死、なのだ。

Dr. チェンバースは死神たちが自分の前に立つその時を待っている。

「アンタが最後だな、博士」

「そうね、その通りよ。それで？」

あなた達のおかげでこの場所はもう滅茶苦茶。私のライフワークも終わろうとしているわ」

「それは気の毒に。その理由を聞いても？」

彼らを率いているらしい黄色の服の男のその言葉に、彼女は内心では最初の勝利だと喜ぶことが出来た。

ここが破壊されることを考えた時、真つ先に考えた脅威はあのインステイチュートであり。2番目がレールロードであつたからだ。

この連中が彼らのどちらかに属しているならば、こんなことをわざわざ聞いたりはしない。

「あなたの前には今、殺し屋以上となれる多くのチャンスが並んでいるわ。それを手にするためにこのバカげた騒ぎを止める理由を、この私なら教えてあげられる」

「聞いているよ」

「そこに捕らえているのはバンカーヒルの商人、ストックトンの娘よ。でも彼女は人間じゃない、多分ね。」

私たちの研究の成果が示すのは、彼女は70%の確率で間違いなくそうなの」

「完璧じゃないんだな」

「そうね、それは認める。本当の所は解剖してみないとわからない。」

今のインステイチュートが生み出す人造人間達は、人間と区別することは本当に難しい。ほとんど不可能に近いくらいに」

「続けて」

「人造人間達は連邦に住む私たちの影となつて、苦しみ、コントロールしてきた。私と仲間たちはあいつらを根絶するために人生をささげてきた。奴らは根絶する、消滅させて構わない存在」

彼女に同意する声はなかった。

「コベナントには多くの秘密がある。私たちはこの研究を完成させ、ついに不可能と言われた人と人造人間の選別を的確におこない、安全な世界を取り戻そうとしてる。この戦いは素晴らしい未来を約束している。

そしてそこにあなた達も今なら加わるチャンスがある」

「チャンス、ねえ」

「仕事もあるわ、あそこにいるストックトンの娘。あれが面白いことを口にしてたの。自分の父親はレールロードのメンバーだって。

私はあなた達に彼に近づいてレールロードが集めている人造人間をここへ連れてきてもらいたい。その仕事を続ける限り、あなた達が望むものを報酬として用意もする。

真剣に考えて頂戴。このパラノイアの時代を終らせた時、心理テストの完成であなた達が手にする栄光も、そして私の組織の中での栄達も約束されてるのよ」

僕は彼女の言葉を鼻で笑ったりはしなかった。

歪で不完全だが、それが正義だと信じて当然のようにやってきたのだ。それいまさらに曲げることも、そのつもりもないのだろう。

「さて、それで皆はどう思う？」

僕は背後に立つ仲間に問いかけた。

「さあな。好みで言えば、女を助けてその親父とやらからたんまりと報酬を頂くのが楽そうだ」

マクレディはフンと鼻を鳴らしながら、面倒くさそうにそう答えた。

「キュリーは？偉大な医療研究者を目指す君の意見は重要だぞ」

「そうですね——ここまで目にしてきたこと、耳にしてきたことから考えますと。彼女が口にした70%の信用があるというのは過大評

価に聞こえます」

「あなたも研究者？それはどういう意味かしら？」

「あなた達はテストを始める前に、対象者に必ず拷問を行っていますよね？これでは当然、テストの有用性を示す説得にすら出来ていません」

「私たちは別に拷問で人造人間の口をわらせているわけではない。そうしたプレッシャーを与えた状態が、彼らから反応を引き出すきっかけになるというだけのこと。重要なことではないわ。不快なのは認めるけど、これは必要なこと」

ついに僕は冷笑を浮かべた。

キュリーの前へと立つと、仲間を背にし。Dr. チェンバースの目をのぞき込む。

そして向こうは気が付くだろう。この僕の目の奥にたぎり続ける、終わることのない炎の勢いの強さを――。

「なるほど、未来の平和はまずお前達の拷問から始まるわけか」

「どうやら考え直す気はないようね」

「魅力に欠ける話だからね、しようがない」

「それなら私はこれからするべきことをするわ。覚えておくことね、私を手にかければ。あなたは汚名をかぶることになるのよ。そのことを理解することね」

「それは君が心配する必要はない。始めたのだから、最後まで面倒を見てやるさ」

彼女はコチラに背中を向けると端末に向かって歩き出そうとした。

僕はただ、獅子樺奉を抜くとその勢いのまま横に一闪振りぬいただけだ。

悲しい記憶の少女はその優秀な頭脳と共に、ゴロリと床の上に落ちて転がる、もう悲劇は必要ないと――。

|||||

私はガービーと合流すると、そこに驚くべき人物と再会した。

ジョン・ハンコック——あのグッドネイバーの市長が、なぜかそこに1人でいたのだという。

驚いたのは彼もあのメッセージを、アキラからのそれを受け取っていた。

私はまずニツクらと調べて確かにあのコベナントにはなにかしらの大きな秘密があることを確認したと、みんなに告げた。

続いてハンコックは驚くべき彼の最近の事件について語り始めると、私の顔はいつしか蒼白のそれとなっていく。

てつきりレールロードでなにかしらやっているのだろうと、あのダンスから聞いた話で思っていたのに。

自分の失われた記憶を探した若者は、想像を絶するような苦痛の中で誰の助けも求められずに一人でもがき続けていたのだと知ったのだから。

私は改めて自分の愚かさ、自己憐憫に怒りを抱いた——。

妻の仇を討って、息子をあのインステイチュートにさらわれたからと言って。なぜ自分を憐れんで、あんなことをしでかしてしまったのだろうか？

一月前、あの霧が晴れた頃であのような決断を下さなければ。まだハングマンズ・アリーだつてあんな騒ぎを回避できたかもしれないに。

曇る表情の私にハンコックは冷静に告げる。

「200歳をこえるあなたに俺が言うことじゃないがね。そういうつまらない考えは、さっさとやめた方がいい」

「——だが」

「アンタだつて楽なもんじゃなかっただろう。それに——どの道、アイツには選択の余地があつたとは思えないしな」

「それほど相手だと？」

「さあ、俺にはワカラン。なにせ見たことはないし、噂にだつて聞いただけだからな。だが、アイツはそこに引きずり込まれたのだから、本当のことはわからないさ」

そして翌朝、まだ太陽がわずかに顔を出したあたりの事だった。見張りに立っていたガービーに皆が叩きおこされる——コベナントの方角が、そちらの空が朝焼けにしては不気味なほど真っ赤に燃えているというのだ。

闇の中で人が吠えた。

「お前がやったことは確かに正しいことかもしれない！だがそれで絶望する人々がいると、わからなかったのか!？」

——それが自分達だつて？

「ストックトンの娘は人造人間だ。ストックトン自身はそれをわかって受け入れてるのかもしれない。だがそうした行為が、インステイチュートを増長させ。奴らに傷つけられた人々の怒りを自分とは関係がないと思わせている」

——他人が幸せなのが許せない？

「そうじゃない！現実にも目を向けるべきなんだ。人造人間は敵だ。奴らに我々は——連邦は苦しめられてきた。そしてそれはこれからも続く。こんなバカげたことは、終わらせてしまった方がいい。そう考えて何が悪い!？」

——今が苦しい時で、だからお前らが好き勝手に“おもちゃ”を選ぶのを見逃せと？

「正義の話じゃない。正当な理由がないなら、やらないのが一番だと言っている。それでまた友人に戻れる」

——ところで、ここはいつからあんなオブジェを用意したんだ？

「……あんたが、お前が悪いんだぞ」

——だからあんなオブジェを作ってしまったつて？

「ミニッツメンがあらわれて。あいつからお前のことを聞き出すのが遅れた。手遅れになる前に、なんとかしようとして私たちも必死に考えた結果なんだ」

——本当にどうしようもなく救いようのない連中なんだな。もうなにも言わなくていいぞ。

闇の終ろうとする空の下で、鬼はただ無言になると、その手で炎を



吹き出す刀を引き抜いてみせる。

走ってコベナントへと向かった私たちは、朝日がのぼるその場所を見て絶句する。

コベナントからは黒煙が立ち上り。

その固く閉ざされているはずの門は開かれ、配置されたターレットもすべて破壊されていた。

そしてその住人達は、何者かと最後まで激しく戦ったのであろう。うつぶせになったままで。門の外から中へと倒れて、全滅していた。皆殺しにされていた。

「よオ、遅かったな」

「マクレデイ——」

「ボスなら、中にいるぜ」

門の外にある焚火の側ではマクレデイが知らない女性とエイダと呼ばれるアサルトロンとくつろいでいた。

彼らの横を通り、私は死体を踏み越えながら。フラフラとそちらへと進んでいく。

「なんで、こんな酷いことを」

「……」

「ニツク！これって!?!」

「パイパー、落ち着いた方がいい。感情的にならざるを得ないのでだろうが、今はそれが必要だろう」

ニツクは静かにこの惨状を受け止めていた。

彼とレオの捜査は始まってすぐにも終了したが、そのとっかかりからしてなにがしかの“まずい事”がこの居住地にはあると予想はされていた。

実際、レオもそれを考えてコベナントに長居することを避けたではないか。

「やれやれ、まったく。現実だとしても、それを目にする説得力も増すっつてもんだよな」

「なんのこと?」

「ケイト、コイツをやった奴はな。少し前にこの俺にもグッドネイバーを炎で沈めてやると言ったことがある。あの時は、何をつまらん脅しだと本気にしなかったが。これをアイツは一晩でやってのけやがった」

ハンコックは皮肉めいた口調でそうは言うが。もし彼を知るあの相棒がここにいれば、そこに喜びのようなものが隠れているのを決して見逃したりはしなかっただろう。

ガービーは眼前の惨劇の跡地にショックを受けていたが。ようやく冷静になると、瞬時に激高した。

「マクレディー！これはどういうことだ!?なぜ、やった!?!」

「おいおい、苦しいだろ。やめろよ」

襟首をつかんでくる相手を、若き傭兵はまったく相手にしようとなない。

それがガービーの怒りにさらに火をつける。

「ここには平和に暮らす人々がいたんだぞ。それを、それをお前らがつー!」

「いいや、いなかったぜ」

「なんだと!?!」

「ここにはおつかない変態の変人共がいただけさ。俺もボスも、それをただ止めようとしただけだ」

「ふざけるなつ、そんなありもしない理由を——」

「ガービー、アンタだって俺のボスがどんな奴かぐらいわかってるだろ? 証拠はあるぜ、山ほどな」

「そんな、まさか」

「それどころから奴ら、何も知らない奴をああしてキャンプファイヤーで焼き殺しちまった。馬鹿だよ、本当に」

夜明けを前にして行われたあの問答は。

事実上、ここに住む全員への死刑執行のサインをしたも同然の行爲だった。

ガービーの身体から力が抜けていく。あの時自分が目にした平和

な人々の暮らし、当然のようにあるべき姿。

あれが全てが嘘で、卑劣な彼らはその下で恐ろしいことを平然とやってのける——レイ無ダー者であったというのか？

私はコベナントの中へ進んでいく。

居住地にもはや生きている人の気配はなく、そして昨日にはなかったそれが——燃え続ける不快な“刑場”がそこに作り出されていた。その炎の前にはあの若い友人の背中がある。

「アキラ——」

「レオさん」

「ひどい、ことがあったんだな。ここで」

彼は私の言葉ではなく。目の前の炎の中に吊り上げられた“彼”を顎で示した。

「彼、傭兵でした。正直者のダンって名乗って」

「ああ、知っている」

「搜索者の契約にやたらこだわっていて、説得できそうになかった。

だから、こっちが出し抜いたように思わせたんですよ。それなら怒っても、恨んだとしても、ここにいつまでも残ってはいないだろうと考えてね。

「それでも僕は、気を使ったんですよ」

「……」

「まさかそれが、まだこのコベナントに残っていたとは。僕の判断ミスですね、考えもしなかった」

「ダンには死ななくてもよかった。」

彼が自分の契約に固執し、周りにいる全員が危険な狼であることもわからず。レオ達が来て、まだチャンスは残されていたというのに。結局何も行動も決断もせず。

結果、豹変した住人達の手でアキラたちの場所を言えと拷問され。最後は魔女裁判よろしく燃えさかる火に吊り下げられて命を落とすってしまった——。

アキラは炎の前で、黄色の帽子をようやく頭からとった。

「レオさん」

「ああ」

「僕はもう、どうしようもなく散々でしたよ」

そこには私が覚えている、あの複雑な表情で笑うことが出来ないでいる若者のそれだった。

「ああ、実は私も酷いものだったよ」

混迷する連邦の新年最初の一カ月は終わり。新しい月が始まっていた。

そして驚くことにこのコベナントの騒動を最後に、まるでそれまでがなかったかのように。あのいつもの冬の連邦が、この時から思い出したかのように始まるのである。

同じ時を傷つき、そしてなんとか再会を果たしたVaullillの2人であったが。

しかし彼らの苦難は、この時はまだ始まってすらいなかったのである……。

日々、それぞれの中で (Akira)

アキラは部屋に入ってきた人物に困惑し、顔に浮かぶシワは隠せなかったが。腕を組むことでなんとか自分を守ることにした。

「よオ、前よりも元気そうだな」「ええ、まあ」「それじゃ、このオジサンとあいさつのハグでもどうだ?」

明らかに冗談のそれだと思うが、このグールは演技とそうでないのが境目が分からなくなる時があるので油断できないのだ。

「なんであなたがここに? ハンコック市長」

「ああ、それ。市長はやめてくれ、ハンコックでいい」

「市長をやめたんですか?」

「いいや。やめようとも考えたが、あの町ではだれもそれを俺に言わなかったからな。休暇をとることにしたんだ」

(市長にその席をどけて、あの町という奴がいるわけがないだろうに)

それにしてもなんで、この人はよりもよってここに?

「メッセージは皆には送りましたけど。別にあなたにもここへ来てほしいわけじゃなかったんです」

「そうだな、フアーレンハイトのかわりだろ?」

痛いところを突く。

「なんで今、休暇なんです? そんな場合じゃないでしょう」

「お前なら俺の口から説明しなくても、その理由を想像できるじゃないか?」

今度は試してきたのか?

だが、言われるままに勝手に思考が走り出すと。現状のグッドネイバーとハンコックの分析を僕の頭は始めてしまっていた。

「……身動きが取れない。とれるようにするために、あえて自分から外に出た?」

「ポストン空港は、はるばるやってきた武装集団の奴らが抑えた。そうなるにあそこからはバンカーヒルも、俺のグッドネイバーもよく見えてくるようになるだろう」

「遠からず、B・O・Sはどちらにも手を伸ばしてくる——」

「その前に俺は力を取り戻さないといけない。それ以上のことも、必要になる。だが、市長の席を温めているうちはそれも期待は出来ない」

「ミニッツメンの力が欲しいのですか？僕に協力させろって？」

「なあ、それで俺は奴らと戦えると思うのか？」

「——いいえ」

「ああ、そうだな。だからそれ以上、だ。しかしその方法は俺にもわからんよ」

納得は出来た。

「で、これからどうするんです？」

「お前。その恰好を気に入っているのか？」

いきなり話が変わった。

イエローマン……そう呼ぶしかない、目立つ黄色のコートや帽子、スーツはまだ僕は着ている。あのクソツタレの家族に与えられた姿だ。

「別に——」

「なら、やめろ。脱ぎ捨ててしまえ。」

その姿はお前にとってはなんだ？本当のお前であることは決してないはずだ」

「……」

「お前はそんな奴じゃない。もっと別の者になれる、そうは思えないか？」

「でも今は、これしかないんだよ。ハンコック」

「いや、これがまだあるぞ」

そう言うと彼は、何かを取り出しってくる。

たたまれた服、だがそれはどこかで見たことのあるもので——。

「グッドネイバーから出る前に、ケントの奴から譲ってもらったのさ。」

俺が思うに、お前にはこれがぴったりだ。顔を殴ったり、怖がらせたり、誰かをいつも不安にさせるのは得意なんだろう？」

「シルバー・シユラウド？僕が、正義のミカタ？」

「ケントのやつも大喜びさ。ヒーローは必ず戻るものだつてな」  
「……柄じゃないと思うけど？」

「なら自分の思う通りに今度はするんだな。それがグッドネイバーの  
変人から変人への、アドバイスだ」

黒のコート、帽子。そして銀のマシニングガン。

これはアクマでもコミックのキャラクターだ。僕じゃない。

でも――。

母船で別れ際に話した“彼女”との会話が思い出された。

母船に、宇宙人に地上からさらわれ。姉妹とも離ればなれになつて  
しまった、小さな女の子のサリー。

彼女がそこからどんな思いでスーペリア・コスモスと名乗って、地  
球を守ろうと決めたのか。その時のことを。

――彼女が皆を説得した

――自分たちは滅茶苦茶になつたけど、まだ終わりつてわけでもな  
い。

――でもここからやり直すとか言うくらいなら、いつそヒーローに  
でもなつて。もつと滅茶苦茶をやってみようつて。

なぜVault101のスーツを着た彼女がそんな話を僕に聞か  
せたのか理由はわからないが。そのエピソードは妙に心に響くもの  
があつたのは確かだ。

「今日から連邦は悪夢にうなされるようになるよ。間違いなくそれは  
アンタの責任だ、ハンコック」

「そう言ってくれると信じてたぜ、親愛なる変人よ」

あの帽子はもういらぬ。

このコートも必要ない。スーツは脱ぐし、バンダナだつて別のがい  
いさ。

僕はシユラウドにはならない。

だが連邦には確かに、シルバーシユラウドはいるのかも、しれない。

|| || || || || || || || || || ||

新たな居住地の確認をしつつ、レオとガービーは軽い打ち合わせをしている。

「人員の増強なども考えてはいるが。北東部への進出は考えている以上、難しい、進まない、将軍」

「ガービー、時間が無いんだ。」

ミニッツメンが力を発揮させるならすぐにしないと。B. O. S. があああたりで根をはやしはじめたら。もう簡単にはいけなくなってしまう——」

年末からの混乱による停滞は、ここにきてミニッツメンの勢いを大きく削ぎ。

それどころか悪化する可能性を示唆し始めている——。

連邦の中央部、海岸線にあるボストン空港を抑えたB. O. S. の狙いが。

ボストンコモンを中心にした。バンカーヒル、グッドネイバー、ダイアモンドシティにあるのは明らかであったが。

それが実行されてしまえば、北東部に点在する小さな居住地たちは彼らの存在を気にして、ミニッツメンに目を向けなくなるかもしれない——。

彼らの方が頼りになりそうだ、守ってくれるかもしれない。

これらは言ってみればイメージでしかないが。今の新生ミニッツメンはややつま先立ちで見栄を張って行動していることもあり。

それを傷つけられるのは直ちに評判と実績に大きく影響を与えることになる——。

「ハンコックの話では、なぜか南のガンナーはボストンコモンから北には出てくる気配はない。そうだな、確かに今はチャンスかもしれないが——」

「元々、完全でなくともだましましたしやってこれたんだ。多少は問題があったとしても、はやめに北部を掌握しておかねばならない」

（そうでないと、B. O. S. の始めるであろう戦争でミニッツメンは存在を失ってしまう）



若きエルダーはどのような戦略でもってインステイチュートとの戦争を考えているのかまでは明らかにしなかったが。それがこの地上以外でおこなわれるはずがない以上、ミニッツメンの影響力は可能な限り大きくさせておかなくては。

「レキシントンの奪還は、後回しになるのか」

「腹立たしいだろうが。逆に言えばこちらがむこうをレキシントンに封じていると、そう考えるようにしよう」

そこにニツクが、またも近づいてきた。

「なあ、今少しいいかな？」

「やあ、ニツク。どうした？」

「恩着せがましいとは思うんだが。ミニッツメンの協力を頼みたい。実は、かなりやつかいな依頼が最近抱えててね——」

それによると連邦の北東、州の境目の辺りで事件があったというのだ。

「あんたがこうして無事に戻ったと聞いて、俺も一安心だとそちらに向かおうとも考えたが——」

「なるほど、わかったぞ。將軍」「？」

「実は最近、あの辺りをなぜかインステイチュートがよく歩き回っているという噂があるんだよ。つい先日、不幸な旅の商人を追いかけていたらしい」

「商人を追いかけた？その人物は、助かったのか？」

「わからんね。それを見かけた連中も。人造人間が軍隊のようにわらわらという泡をくってその場から退散したようだしな」

「なるほど——」

とはいえ、それならば丁度話していたところだ。

「すぐにはないが、確かにミニッツメンなら協力が出来そうだな。ニツク」

「いいかい？この顔だと、あの連中と鉢合わせなんてのは御免なんですね」

個人的に彼には大きな恩もある。

そしてこの時はまだ、私にとってはその話はこの程度のものでしか

なかったはずであった――。

|||||

コベナントのおこなっていた秘密の実験――もとい、犯罪行為の証拠を全てガービーに。ミニッツメンへと全部を提出すると、コベナント殲滅の翌日から、僕は一気に動き始めた。

コベナントの資源を問答無用で使い込み、ロボットたちを次々と生みだしていく。

そうだ、僕はミニッツメンではない。イエローマンでもない。ただ、ここにある豊富な資源と資産、そして情報も何もかも奪ってみせただけだ。

アイボット、プロテクトロン、Mr. ハンデイ、アサルトロン、セントリーボット。動き出した自律するユニットたちに、キュリーがとりあえずの指示を与えていく。

「ムツシュー!?まだ、作るのですか?」

「ああ」

「それならそれでも構いませんが、プロテクトロンやセントリーボットはこのコベナントの居住地に何台も配置するのは難しいかと」

「なら、別のエリアに送り込む。そうやって洗いざらい全部をひっくり返すんだ。コベナントをゼロにするんだ」

「――わかりました」

このロボットたちで数日のうちにコベナントを新たな居住地へと、生まれ変わらせつつ。彼らの個性――仕事への適応力を探り。その後では、次の新たな任務を与えようと考えている。

休む間もなく、僕は来る未来に向けた準備をはじめていた。

この連邦に存在する、多くの敵に対処するために――。

「あの、アキラ。少し、お時間をもらえますか?」

「――コズワースか?なに?」

ロボット作業台の前に立ち、次の新たなロボットの制作に取り掛か

る僕はそちらに集中して。背後に立って、困っているらしいレオさんのロボットを見ることはなかった。

わずかに沈黙が流れるが、僕はそれを気にしない。

「お願いです。一旦、手を止めてください。アキラ、コズワースの話をちゃんと聞いてあげてください」

その様子を見かねたらしい、キュリーの懇願するような声で僕はようやく手を止めた。それで少し機嫌も悪かったかもしれない。

横目で見えるコズワースは、ハングマンズ・アリーの時のような外側のない中身がむき出しの状態のそれではなかった。

どうやらレッドロケットでミニツツメンの技術者が、気をきかせて勝手にコズワースの外側を装着してくれたのだと本人はなぜだか申しなさに事情を話す。

僕はコズワースがなにをそんなに恐縮しているのか、理解できないでいた。

「——ということなのです。あなた様の言いつけを破り、私は勝手なことをしてしまいました」

「ああ、そう」

「本当に申し訳ないと思っています。許してください」

「許す？なんで？何のことを言っているんだ、コズワース」

「え……その、私に声もかけずに冷たいのは。勝手なことをしたのだと、怒っているからでは？」

「——誰が？僕が？」

「ええ、怒ってますよね？」

「いや、全然」

本当に怒っていなかった。

というか、我慢できずに結局はあの場所から飛び出して行って。中身をむき出しの状態で連邦を歩き回ったと聞いて無茶をするな、とは思うけれど。

そこまで元のコズワースらしきを見せた上で、誰かが最後の仕上げをかわりにしてくれたのなら。

それに僕が文句を言うことはなにもない、ただそれだけのことだっ

たのだが。

「とにかく怒ってないし。それによかったじゃないか。もう、元に戻れると——」

「いえ、まだあるのです」

「あ、ああ。そうなんだ」

「私の身におこったこと——事件の記憶、それは鮮明ではありませんがちゃんとするのです。」

足りないものはエイダから聞かされました。あれからずっと考えていました。

あの時、私は使命に燃えて。ご主人様のためになるであろうことを、必死でやろうとしました」

「そうだね」

「ですが、ダメでした。力がなかった。」

ご家族のために多くのことが出来るはずの私であっても、今のこの時代。さらに多くの危険に立ち向かうあの人の背中を守る力は、この私にはないのです。

それがくやしいのです、アキラ」

「——いや、ちょっと」

「わかってください。そして力を貸してください」

それ以上は僕は聞きたくなかった。

「待ってよ、コズワース。」

まさか、君は今。僕にあのエイダのように、君の事も改造してほしいと」

「はい、それを私は望んでいます」

「ダメだよ」

僕は冷たく却下する。

するとコズワースばかりか、キュリーまでも「ムツシユ!？」などと非難の声をあげてくる。正直、ここにエイダがいなくて良かったとちよつとだけ思った。あれは今、別の用事で外に出ていた。

「ダメだ、当然だろう？君はエイダやキュリーとは違う。レオさんのロボット、僕が勝手にどうこうは出来ない」

「それは——」

「お勧めもしないね。いいか、コズワース。」

エイダは生み出された時、最初からアサルトロンのパーツが足りなくて代用品が使われていた。

でも君は違う。完全なメーカーによる純正品。

その上、200年以上もその体で暮らしてきたんだよ？

改造を施せば確かに攻撃力も——武装や体格も自在に変えられるするだろう。でもね、そのかわりに何かの拍子でプログラムがエラーなんぞを吐き出したりすれば——」

そこで僕はパンと両手で叩いてみせた。

「それで終わりだ——君の大切になっている記憶。その長い時間は、その危険を高くしているんだよ。」

エイダならそうなくても、リセットすればまだなんとか再起動するかもしれないけど。君がそうなってしまったら、それで最後だ。元には戻せないし、二度と起動することもないかもしれない」

「その危険は理解しています」

「本当かい？なら、レオさんの許可をもらってくるんだね。それでも僕が引き受けるかどうかは知らないけど」

そう言っ僕は背を向けると、もう相手にしないとそれで示した。

コズワースは悩んでいるようだったが、キュリーに慰められると。寂しそうにコベナントから出て行った——。

しばらくして作業が一段落ついたところで、キュリーに「お茶にしましょう」と誘われる。

僕はまだ、機嫌は少し直っていないかったが。とりあえずその言葉には従った。

「これほど大量にロボットが作られるところをエイダが見れないのは残念でしたね」

「——いや、キュリー。これを見せたくないから、僕はあえてエイダに外に行ってもらったんだ」

「え？」

「エイダはメカニストを倒すという目的がある——とはいえ、その約束で手にした技術で。僕がそいつと同じようなことをしているのは見たくないだろうと思つてさ」

「そうだったんですか。考えもしませんでした」

「エイダは大丈夫だ、信じてるといっただろうけど。それでもそんなマシンに気を使つてやりたいのさ、僕は」

そのエイダはこの近くの湖に沈むベルチバードの回収に向かつてもらつている。

とはいえ、アサルトロン一台だけであれを全部どうにかするのは無理だろうから。もう少ししたら新しい手を連れて僕も手伝いに行くつもりであった。

「実は私、ずっとドキドキしているんです。あなたがここでなにか新しいことを始めるように思えて」

「それは間違いじゃない。聞きたい?」

「教えてくれるのですか?」

「ああ、君がいいならね」

「はい。是非」

ロボットだった時代もなかなか可愛らしい個性を持つロボットだったが。

人とほとんど変わらぬ人造人間となった今の——そう、可憐な彼女の仕草は見ているだけでも微笑ましいものがある。

「ここは君にプレゼントしようと思つてね」

「——えっ?ええっ!」

「本当さ。君にここを使つてもらつつもりなんだよ」

コベナントの忌まわしい技術の研究環境は、しかしそのままキュリーにとつての最高の研究所になるはずだ。

どうやらガービーとミニッツメンが苦勞している原因の一つに、居住地にグルがいることを嫌がる連中の相手をしていると聞いた。

そんな中でキュリーが研究に集中できるとは、とても思えない。

「彼らの研究は終わらせただけ、ここにはまだそのための資産が残つている」

「は、はい」

「君一人の研究室には大きいかもしれないけど、それはなんとでもなるだろう?」

「ほ、本当に私のために?」

「勿論——つてカツコつきたいところだけど。正確には、半分ってところだね。」

あの秘密のエリアは君が好きにしてくれていいけど。こっちの居住地ではそれとは別に、ちゃんとしようと思ってるから」

「構いません、私……本当にうれいんですっ!」

そういうとキュリーはいきなり立ち上がり、そして——抱き着いてくる。

僕は驚くが、落ち着いてくれと背中をポンポンと軽くたたいてから。離していく。

彼女は感情が豊かになったというか、そのまま行動もするので。どうにも話が長くなると、再会してから困惑することが多くなっている。

ロボットと人間の関係だったのが。

別のものに——人と人のそれへと変わりそうでいて、しかしそうなることに躊躇うものがあつた。

(馬鹿なことを考えるなよ、僕。あんな事件が終わったばかりで、もう次の女か?盛ってるんじゃないの?)

第一そうなることを、彼女本人だって考えてないはずだ——多分。

|||||

ボートハウスの中、パイパーは長椅子に座り大きくため息をつくと目を閉じて休もうとする。

あの衝撃のコベナント壊滅は昨日のことだというのに、あまりにも悪夢めいていて瞼の下に焼き付いてしまったのに、現実感がもうあまりない。

彼女の前にある机の上には、それをおこなった青年が提出してきた

コベナントの実態を暴く研究成果が山となって積み上げられていた。彼女はそれを独占記事にする条件で、全容をまとめることを申し出ていたが——正直それを申し出た自分に馬鹿と怒鳴りつけたい気持ちになっていた。

わずか2日前、これほど素晴らしい場所がまだこの連邦にもあるのかと興奮しながら取材をしていた自分は。

そこで本当は何が行われていたのか。

おぞましいどのような犯罪が行われたのかをまったく気が付くことはなく。それどころかそこで少し話した男は、住人達の手によつて無残にも焼き殺されるなどという最悪の最後を迎えていた。

(もう最悪、吐き気がする)

ここに住んでいた住人達は自分たちの正義を信じて疑っていないが。

それを盾に、訪れる旅人を選別し。拷問し。サンプルとして勝手にその命を弄んだ。

彼らは人造人間を恨んでいたというが、やったことのおぞましさにまったく同情できるものがないが。本当の問題はそんな彼らをたった一晩で皆殺しにしてしまったのが、あの若者であるということだ。

彼がダイアモンドシティをブルーとともに訪れた時、バイパーはナットを案内につけた。青年だから、きつと気もあるだろうと軽い気持ちだった。

だが戻ってきた彼女は若者のことを「目つきも悪いけど、本当に悪い人っぽかった」と言ったし。バイパーはそんなことを言うものじゃないとあの時は叱った。

どうやら賢い妹と違って目が節穴だったのは、自分の方だったらしい——。

気分がさらに落ち込むので、頭をあげて左を見る。

ボートハウスの外で、小川に飛び込んで子供のようにはしゃいでいるスーパードクターのストロングと。

水面を見つめるその前からずっと、不機嫌なケイトの姿があった。



もうそれだけでパイパーは、さらに両肩に重いものを感じはじめ、慌てて反対側のほうへと目を向けた。

家の外ではブルーとガービー、そしてニックが何やら話し込んでいる。

なんとかそれで心が平常心を取り戻せる気がしてきた。

彼女の今回の取材の目的は、コベナントの事件は思いもしないものであったが。ブルーの将軍としての活動と、最後のミニッツメン、プレストン・ガービーに張り付くこと。目的は今も叶っているし、このことだつて落ち着けば悪くはなかったと思える日も来るかもしれない。

——悪くはない、かあ

連邦は未だに救いがなく、クソのような連中ばかりが騒いでいる。

そして今はあのB・O・S。なんてのが遙々キャピタルからやってきて、なにがおきるのかわかったものではない。

でもそんな時なのに、ブルー達は壊れかけたミニッツメンを復活させ。今もそれをさらに素晴らしいものにしてくれようとしている、ハズ——。

「頑張らなくちゃね。私も……」

パイパーは陰鬱の事件に再び向き合っていく。

しばらくすると、マクレディとハンコックがやってきて「ケイトってのはどこだ？」とパイパーに聞いてきた。

「あそこだよ。でも彼女、なんかあったみたいで凄く不機嫌なんだ。気を付けて」

「ああ、そうらしいな」

「お邪魔したな」

グールと傭兵はそれだけ言うと、行ってしまふ。

どうなつてもしらないぞ、と思つているところにニックがようやくのこと戻ってきた。

「やれやれ、ミニッツメンは忙しいんだな。うっかり話し込んで、あやうくスカウトされるかと思つたね」

「ん」

「静かだな、どうした？調子でも悪いのか、パイパー？」

「違う、あそこの2人だよ」

「ほう」

案の定、マクレディが話しかけるとケイトはさっそく噛みついていくようだった。

「面倒くさそう。怒らせてこっちに助けに来てくれって言われなかな」

「そんな心配はいらないさ。ま、これで安心だ」

「安心？なにが」

「レオの奴だよ。あの彼女には随分と悪いことをしたと、思っているようだった」

「そう？」

「どうやらあっちの若い方のに、引き合わせるんだろう。その方がいい」

「ニツクはケイトの事、気になってた？ああいう荒々しいのが好み？」

悪戯っぽく聞いてみたが、ニツクはペースを崩すことはなかった。

「ああ、気にしていたね。ああいう娘は、もつと悪くなる方へと進んでしまうことが多い。特にこんな時代ならな」

「——まあ、そうかもね」

「気難しくあつても野良にならない猫もいる。いたっていいはずだ。そいつにいい相手に巡り合えるなら、な」

「例えば、ケイトがそうだっていうの？」

ニツクはパイパーの問いには答えず。

煙草を取り出してそれを啜えると、金のライターで火をつけて煙をひと吹き吐き出した。機械の癖に、その仕草には表情があつて、重ねる年齢までこちらに訴えるものがある姿だ。

「ようやく人心地がついた。気が付けば春も、すぐそこまで来るだろう」

厳しい年明けからすでに5週間が過ぎようとしている——。

ニツクのいう通り、Vaultierの友人達はミニッツメンへと戻ったが。気が付けばその時は春の匂いも感じられるようになるの

かもしれない。

そしてそんな彼らの予感が正しいというように、連邦はいきなり静かで、殺伐としてはいるものの、あのありふれた日常へと戻っていく。

## 春、遠し

その日、ダイヤモンドシティ・ラジオが流す番組に新しいCMが――というよりもメッセージが混ざっていた。

不快なほどに下手な喋りでイラつかせるDJがようやくのこと押し黙ると、弾むような女性の声とその電波に流された。

『こちらはバレンタイン探偵事務所のエリー・パーキンスよ。

ニック、あなたとあなたの“新しいパートナー”にメッセージを送ります。新しい事件、緊急事態だつてこと。

でも他にも一杯、休暇は当分諦めないよね。

手が空いたら、オフィスにちゃんと顔を出して。待ってるわね……それじゃ』

ニックのアシスタントはCM枠を買いながら、まるで普通の事のように探偵達にむけて話しかけるだけであった。

しかし人々はそれを聞いて、不思議な探偵ニック・バレンタインはさつそく戻ってきてから仕事に復帰し。この連邦を今も忙しく飛び回っているのだろうと知る。

その中の不幸な人は、わずかな希望を掛けるならとこれを聞いて。もしかしたらダイヤモンドシティへと向かうかもしれない。

人々がどうしようもなくなった時。

誰かに助けを求めるなら、それは探偵ニック・バレンタインに頼むのが一番だ。

|||||

Vaultめいた施設の廊下を歩くのは、“家族”からサカモトとよばれている男が一人。

この世界では本当に珍しいくらいな光量あふれる清潔なその場所は他に人の姿がなく、それがなにやら幻想めいて――現実感を失わせともいる。

そんなサカモトは先日。

組織の今後の方針で、あろうことか裏切り者と呼ぶべき存在となった人物を再び迎えようなどと呼び掛けている。

あのキンジョウなどは私怨や己の栄達のために、その意見には決して首を縦に振ろうとはしなかったが。

とはいえ、このサカモトだってバカではない。

キンジョウに体を弄り回され、弄ぶかのようにこちらの使いつ走りのようなこともさせた。あの“アキラ”を、だ。

自分達のような“存在”は、ことさら己の意思を他人に無理にして捻じ曲げられることを本能的に心底憎悪するものだど理解している。

ならば、アキラの帰還など実現しないと考えるのが普通であるはずだが――。

「コンピューター、なにをしている？ 起きろ」

部屋の中に入り、一直線に椅子に向かってからそこに腰を下ろすと。

しかしそれにまったく反応しようとしないうこの場所のAIたちを代表して、目の前の端末を注意する。

すると、慌てたかのように。部屋の中に光がともり、静かで小さな音量の音楽が流れ始め、端末も静かに起動した。

「さて、それでは――」

片手でキーボードに触れると、何かを呼び出している。

「どうしているのか、な？」

呼び出しているデータは彼のものでも、この組織のものでもない。

あのインステイチユートより対価として受け取った、最新の情報についてのものであった。

『……報告する。』

ミニッツメンの動きがおかしいらしい。噂だと、またひとつ彼らに協力している居住地がレイダーに襲われたというから、そのことに関係したことじゃないかと思う。今から直接この目で確かめてくる。以上』

音声は女性のもので、無機質な響きが心に刺さる。

『……報告する。』

やつらがサンクチュアリと呼んでいるあの居住地に来た。あまり変化のようなものを感じない。

最近では生意気に、こちらに何かを売りつけようとしてくる。そして実際、品は悪くない。医薬品、食料、ゴミの類は今もよく買い求めてくるが。武器、弾薬はもう必要とはしていないらしい。

また、ここの住人は30人前後。まだ人を集めたいなどと口にして  
いるが。

どうもあやしい。

もうずいぶんと人はここへ入ってきているはずだが、いつだって増えて  
いるようにはちっとも見えない。

近づいてきた間抜けな連中は殺して食っているんじゃないかと、そ  
んなことを思う時もあるが。証拠はない』

サカモトは鼻で笑う。

ミニッツメンは人を集めながら、それを管理して他の居住地に入れ  
ていることはすでにアキラからキンジョウが情報を引き出している。

あのサンクチュアリは看板のようなもので、そこに放浪者が向かっ  
たとしても。そこに住めるということではないというだけのこと。  
提供されるものが同じなら、そこが約束のサンクチュアリでなかった  
としても新入りだつて別に文句も出るはずもない。

『そうそう、ひとつ面白い話を聞いた。』

ここの代表は最近までロボットが務めていたが。ついに人間に交  
代したという話だ。

なんでも物珍しいと狙つてやったが、おかげで不気味に思われるこ  
とも多いらしく。それでようやくのこと——』

サカモトは体を乗り出した。

確かこのサンクチュアリの代表にロボットを作り、置かせたのはア  
キラだったはず。

ということは……。

(なんだ、ちゃんと動いているじゃないか)

プロテクトロン1台、たったそれだけではあるが。

それがどうなったのか。この報告者はなにもわかっていない。

『……報告する。』

いつもの帰り道のことだ。ミニッツメンとバンカーヒルの同業者との情報交換で、奇妙な話を耳にした。噂が本当なのか、そいつを確かめに行こうと思う。

例のレイダーどもの襲撃の1件からか、ミニッツメン達の巡回が多いようだ。

しかしその割に、あいつらに緊張の様子は見えない。きっと余裕でも見せておきたいのだろう』

サカモトは考える。

ミニッツメンがレイダーを気にしているのは間違いないだろう。

だが、それで人員を増やすというのはもつともあり得る話ではあるが。連邦全土でこれを改めて考えると、まったくつじつまが合わないことに気が付く。

北部を抑えようとこれまでやってきたミニッツメンではあるが。

ここに来て、限界を思わせる足踏みと厳しい状況にさらされているはずであった。

ボストンの新しい支部はあそこのレイダー達を見事に追い返してみせたものの。

居住地などの運営に迷いのようなものが見えることが、そこでおきる不測の事態に傷口を大きくしていたし。

最近ではB・O・S.の出現により、あいつらはボストン空港から連邦全域に対して影響力を發揮しようとしてきている。

彼らはむしろ、増員だの余裕だのとは無縁であるはずではないか？

『……報告する。あの噂は本当の事だったようだ。』

コベナントというおかしな連中がいる居住地があったが。いつの間にかそこはやり方どころか、住人達までも変わってしまいましたらしい。門番はいないし、住人達もいなくなっているようだ。

そしてここにはロボットたちがあふれている。そびえたつ壁の上に新たな建築が始まっていて、ロボットたちは中で何かをやって忙し

くしていることだけわかった。

とりあえず、コンタクトできるか試してみようと思う』

サカモトに驚きはない。

コベナントはあのアキラによつて殲滅させられたことはすでに知っている。

小さな宝物は、またしても外の世界にある資産のひとつをあの男に破壊されたということになる。キンジョウなどは「ほれみたことか」と鼻で笑っている風ではあるが、こうなる可能性はすでにあつた。

あそこで行われていた人体実験は過激に過ぎ。

聞けば最後はバンカーヒルの商人にまで手を出していたというではないか。

(バンカーヒルは明らかにレールロードとも繋がりがあつた。遠からず、奴ら変人共の興味も引くようになったらう)

人造人間の撃滅、それを目標に掲げて活動する組織を。

あのレールロードがみすみす見逃すとは思えなかつた——皮肉にもそれはレールロードのエージェントであるフィクサーが……アキラの手によつてなされたわけだが。予感つまりは的中したというだけのことだ。

『……報告する。どうやら近くに新たにミニッツメンも居住地を準備していたようだ。

そちらにはつい先日まで、あのブレストン・ガービー自らが出てきて指揮を執っていたとも聞いた。コベナントの変事にミニッツメンが関わっていたとしても、なんの不思議もないように思う』

こんなものだろうな、サカモトはついにデータの呼び出しを解除する。

あの会議から数週間がたとうとしている。その間の動きを気にして、こうして別の資産から情報を譲り受けてきたわけだが。やはりミニッツメンとしてとらえると、たいしたことはしてないように見えるのかもしれない。

B・O・S・やガンナー、そしてミニッツメンにレールロード。



それぞれは表面上では静かにはしているが、明らかに活発に活動を開始している――。

B・O・Sは空港を占拠すると、本格的に過去の遺産をそこから掘り出すことに注力しつつ。

同時に連邦の全土に向けて状況の確認と、明らかに何らかの調査目的で部隊を送り込むようになった。兵士達は今のところ、歩き回っているだけなので。連邦の人々と、特に意見の衝突が見られることはない。

だが、彼らが何らかの行動を始めれば。空港からの距離を考えても。同じ連邦中部に存在し、それぞれが強い影響力を持つバンカーヒル、グツドネイバー、ダイヤモンドシティに何もしないとは考えられない。

レールロードのリーダー、デズデモーナはさらに任務の秘密レベルを数段上げている。

このおかげで彼らの存在はますます不確かなものとなりはするものの。せつかくにして勢いづき始めていた組織の復活の足取りを重くさせてしまった。

また、このために彼らの協力者。いわゆるツーリストと呼ばれる人々にもさらに難しい要求を突き付けており。彼らの中に不信と、命の危機を感じて徐々に支持を失っているという噂がある。

ガンナーに関しては、それまではゆるゆるでも連邦全土へと手を伸ばす姿勢が見えていたはずなのに。

新年のあの霧以降、一転して連邦の南部を中心に守りに入るような動きを見せている。組織に大きな揺るぎこそないが、幹部候補とみられる幾人かが命を落としたことで次のかわりを探しているところだろうか。

ただ、それでもすでに巨大な組織であるため。末端までは上の指示に従わずに好き勝手にやっているところもあって、相変わらずイマイチ整合性がとれていないようにも見えた。

それは彼ら自身も、自分たちのリーダー達がこの状況になにをしようとしているのか。さっぱりわかっていないということの意味して

いる——。

そして。

そしてミニッツメンだが——。

|||||

キュリーは自身のために与えられたという、コベナントの自身の研究室の中を見回した。

ここには確かに、自分の研究に必要なものが揃っている——。

バイオスキャナー、マイクロスコープ、他にも色々。

(だけど……)

環境はすべて揃っている。

ロボットの肉体を捨てて、人間へ。

そして今は、心から存分に研究へと没頭できる環境が用意されている。意欲だつてある、十分に。

キュリーは目に涙を浮かべた。

悲しく、情けなく、どうしたらいいのかわからない。

自分は望んだ以上のものが目の前にあるというのに、肝心の自分の中に。あのひらめき、というものがまったく浮かんでくることがないのだ。

これこそなんといったか——そうだ、宝の持ち腐れというやつだ。

自分にある偉大な科学者たちとの経験と知識と、そして尋常ではない時間の中でやってきた実績が。あれらはまるでなんであつたのか、わからなくさせてしまっている。

そしてそんなキュリーの嘆きをさらにいつそう深いものとしている原因が——そうだ、あのアキラのせいなのだ。

キュリーはこの巨大な施設を自分一人が独占するのはさすがに申し訳がなくて。

そこにある、そこそこの大きさの部屋にアキラの工房を用意しても

らった。こうすれば——彼が作業するとき、自分も研究室にいれば、距離は近いなどと少しは考えたのは事実ではある。

だが、ここで作業を始めた彼の仕事量はもはや圧倒的に過ぎてキュリーを愕然とさせているのだ。

コベナントを含めた複数の居住地の設計

クライオレーターMKⅡの開発をスタート

ベルチバードの復元と新武装

ロボット軍団の割り振り、次の計画。新たな自分たちの新装備  
e t  
c e t c

彼女にしてみたら、彼はこれまで普通の人間(?)にしか見ていなかった青年が。

工房に籠ると、これだけの仕事をこなすだけではない。さらにミニツツメンの相談まで引き受けてみせているのだ。

(自分はここで一体何をしようとしているのだろうか)

目の前の現実の光景に打ちのめされ、キュリーは静かに沈んでいくと。

ついには自分への自信を喪失しかけていた——。

僕が工房と名付けたその場所は、間違っても研究室ではない。せいぜいが工作室といったところだ。

だが集中して作業するには最適で、キュリーは嬉しい提案をしてくれたと感謝している。

そして今、クライオレーターからスピノフした新型を実現できないか。そのテストを行ってもいい。

「ジャック、どうだ?」

「要望に、応えられていると思います。ご自分でも確かめてみますか?」

「もちろん」

ジャックは僕が作り出した大量のロボット達のひとつ。

レーザーを搭載していないアサルトロン頭部パーツと手足に、不格好なふとましいロボブレインのボディパーツ。

面白いことに戦闘ではなく、アシスタントとして今はここで僕とキュリーを手伝うように命じている。

実際、彼の存在は僕には大いに助かる。

なにせ——思いついたとしても、僕の指は意外と不器用で、時にできないことがこれまでは多かったが。このジャックは3つの指を繊細に使いこなして、見事に僕が要求したことをかなえてくれる。不器用ってやっぱり損をしているのだ、間違いなく人生を。

「どんな感じ？」

「再現性を重視し、エネルギーを強大なパワーセルにしたおかげで出力は十二分に足りています。インステイチュート製のレーザーライフルにある高制御装置もかろうじてですが、機能しているようです」

「暴発する心配は？」

「それは大丈夫でしょう。ギリギリのラインですが、あなたの予想されたようにしっかりと安定させています」

「——つてことは、成功かな？」

クライオ・パワーピストル。

超長距離用の銃身に収めたそれらにはあまりにバランスの悪いピストルタイプの銃床がつけられ、これはまさしく小型化したクライオレーターそのものである。

残るは——。

4分後、僕は悲鳴を上げてその新型を床の上に叩きつけるようにして放り出していった。

さっそくのこと簡易式のシューティングレンジに立って試射を開始したわけだが。これが大失敗であった。

発射するたびにパワーセルから引き出し変換された低温エネルギーが、ピストル全体をも凍結しようとしてしまい。このまま我慢してあと数発でも撃ち続けたら、僕の手は凍傷になってしまいうに違いない。

「クソ、失敗か」

「やはりあのクライオレーターの大きな銃身は、耐久性だけではないようですね」

「大容量のエネルギー、高性能な制御装置、扱いやすさを考えての携帯性。まったく、安易に武器開発の真似事なんてするもんじゃないね」「やはりエネルギーセルを使った上で、目標への冷凍化が可能となる。これが一番、安全かもしれない」

「体中に、いろんなピストル仕込める服のデザイン考えたかったけどなあ。そっちはすぐに実現できそうなのに」

左手で冷たい右手を必死にさすりつつ、軽口と愚痴を混ぜてジャツクに愚痴った。

僕は天才ではないし、科学者でもないんだ。

上手くないかもしれないがあっても、別にそれは不思議なことじゃない。

隣のシューティングレンジから工房へと戻ると、扉の前に何故か泣きそうな顔のキュリーがいた。

「あの、今。少しお話しても大丈夫ですか？」

「もちろんだ、キュリー。君と話せるのは、嬉しいことだからね」

内心では、この右手はまさか火傷してないよな？などと考えながら。

このままキュリーに診断を願おうと思い、工房の中へと彼女を招き入れた。

「僕も君を真似て、ここに籠って色々やってるけどさ。ちょうど今、ジャツクと大失敗に終わったところ」

「そこまでひどい結果とは思えません、サー。何事もトライ&エラー、我々の冒険とはそういうものでしょう？」

「電子音のイケメンボイスでそんなこと言われて、僕はどんな顔をしたらいい？エイダもそうだけど、アサルトロンって皆、こんなにポジティブなのかねえ」

そう言いながら振り向いて——僕は慌てた。

キュリーはなぜか、僕の後についてきながら静かに泣いていたからだ。

「すみません、取り乱してしまいました。それだけなのです」

自分は落ち着いた、もう大宇丈夫だと伝えたが。やはり、あまりに馬鹿なことをしたのだと理解する。

アキラはそうかと頷きはしているが、顔にはしつかりと「本当か？大丈夫か？」とそれは心配というよりも不信に近いものが見えて。それが自分の浅はかな行動のせいだとわかるから、余計に傷つくものがあつた。

「本当です。ちょっと——複雑なのです、今。

いえ、これまでもたくさんお世話になっていますし。恩知らずと思われたくないのですが……」

「わかった。ちゃんと聞くよ」

「ムツシュ。私、自分を見失いそうなのです。本当に」

ただ、また涙腺が崩壊しようとする。

胸の中でグルグルと渦巻く多くの感情が暴れて回り、やめろと言っても聞かず。それどころか一層好き勝手にして、こうやって自分の思いとは別の事をやってみせようとする。

これは一体、なんなのだ!?

「私は、多分。人造人間になることに——人間になることに圧倒されているのだと思うのです」

「——なるほど」

「目を覚ました時は、呼吸することに驚きましたし。タイコンデロガでも、本当に口にできないことまで含めて。多くの基礎動作とその必要性を理解し、習得するのに苦労してきました。

自分の身体のメンテナンスを自分の意思で出来るということは、同時にとても煩わしく感じます」

「そうだね」

「眼も、手も2つしかないのは本当に大変で——すみません、これは重複してますね。愚痴ではないのです」

この安定しないものは本当に難しく、集中していないと簡単に自分

というものを押し流そうとして見せる。

それに身をゆだねることは決して不快ではないし。それどころかその流れに目の前のアキラに対し、傲慢にも受け止めてもらいたいと要求したい気持ちも出てくるのが、自分でも信じられない。

「私の思考は今、ささいな感情があふれ出てきて。頭の中がゴチャゴチャしているのです。行動にも、混乱が生じているのも感じます。これがつまり、人間であるということなのでしょう。」

アキラ、アナタたちはこれをどうやってコントロールして。他の多くのことに対処できているのですか?」

「……」

「今では集中することですら大変なのです。研究するのもそうです。」

期待していた“ひらめき”は相変わらず見つけづらいですし。このままでは私は世界になにも貢献できないのではと、恐ろしくなることがあるのです」

「……」

「私の願いはかなえられないかもしれない。この研究所での私の未来も、先が見えにくいのです」

次第に無口になっていくアキラは、ジツとキュリーのことを観察していた。

再会の思わぬサプライズからこっち、少しは気にはしていたことだ。それでも、彼女はすでに人造人間であり。この連邦ではそれは憎悪の対象に簡単にもなりうる危険なことなのだ。

レールロードのエージェントをやっているとはいっても、必要以上に彼女を甘やかせることは彼女自身にとって良くないと思い。あえて見て見ぬふり——鈍感であろうと努めてきた。

——僕は生後半年もたっていないのかも

宇宙ではサムライを相手にそううそぶいたアキラであったが。決してそれは本気ではない。

彼が目にしてきた。助けてきた人造人間達がそれをよく示してくれたからだ。

インステイチュートによって作られた彼らは大抵は素直に従順だ

が。それは単には経験と心が幼すぎるせいというだけで、普通の人間に混ざれば当然の事それが浮き上がってしまうわけだ。

そしてそう考えると、自分はやはり人造人間ではないのだろう。自分は彼らのように素直ではなかったし、従順な態度など。思えばそれが出来ていればサンクチュアリで半ベソかきながら今も腐っていたはずだ。

(いや、今はキュリーのことだ)

そう、キュリーだ。

彼女もまた、プロセスこそ違えど。200年以上の経験を持つ(といっても、Vaultに閉じ込められたただだが)元ロボットの彼女は同じように、心と経験不足であることに不安定に苦しんでいるのだろう。

なんとか力にはなつてやりたいが、これは言葉で言つてもなかなか納得できることではない。

(そうなるよ。ハア……彼女につけいるしかないかあ)

悩ましい、自分の問題を自ら進んで作りだすかもしれない。もちろんそれを小賢しく、知らぬふりをする事だってできるが———これをこのキュリーに？本気でやるのか、外道が！

——君の力になるよ

あんな事、思えば簡単に口にするんじゃないかな。

「なるほど。そういうことならキュリー、ひとつ質問があるんだ」

「はい」

「その、制御が難しいという感情の中には。この僕についても、当然入っていると考えてもいいんだよね？」

「——えっ。ええっ？」

「混乱は時間をかけて。忍耐強く付き合っていけば慣れることだとは思うけど」

「な、なにをつ」

「キュリー？」

「えっ、あつ、大丈夫。冷静です、冷静になれます。」

そんな呼吸でもするかのように簡単に私を軽々と混乱させる、あな



「だが悪いのです」

「善人では決してないからねえ。僕は君の迷惑な存在になりつつあるのかも」

「いいえ！いいえ、それは違います。」

私にとってあなたの存在が、この世界で唯一の救いになっています。ロボットでいた時の、あなたへの感謝と忠誠心は今もここにちゃんとあります。でも、今は……多分、もっと複雑な感情になったのです」「なら、それを何というのか聞かせてくれよ。人と、人としてさ」

「わかりました。つまり、私が言いたいのは——あなたは私の大切なお友達なのです。そして一緒にいることも、やりたいと思ってるからやっています」

まあ、こういう反応だよな。

「ただの友達ってだけ？君の深い感情と、友達はバランスが良くない気がしないか？」

「そつ、それはその」

「それ以上は欲しくない？」

「ま、また混乱してきました。変な気持ちです。話を終わらせましょう、それがいいです。きつと、故障しているのかも。この部屋を出ます、さようなら」

多分、その時のキュリーの表情はきつと僕の脳裏に深く刻みこまれることだろう。

恋する乙女の顔というにはあまりにもひどすぎた。

表情はこわばり、一部は引きつってみせ、目は恐怖で飛び出さんばかりに見開くし。なのに口周りは緩んで、呆けているようにも見えた。

機能不全一步手前、自己防衛から逃避しようかと判断したのは感心するが。下手をしたら活動停止でもして、唇の端からよだれを垂らしていたとしても不思議はなかった。そしてそうならずにするので、お互いにとって良かった。

だが、それとこれとは話は別だ。

決断すると同時に立ち上がる彼女を僕は許さずに、その手を掴んで

自分の方へと引つ張った。

彼女はその力に抵抗を見せず——というよりも、多分だが無意識に望んで。簡単に僕の厚くもない胸の中に倒れてきたので。しっかりと、しかし決して苦しくないように抱き留めた。

——アンタ、またトラブルかよ

ここにはいないのに、マクレディの声がこちらの脳内で僕に変わって悲鳴を上げてくれた。

|||||

こんなことを聞いた覚えがある——どこで知ったとか、突っ込まないで欲しい。

生まれてまだ人の手になれぬ小犬を抱き上げるとき、決して恐れることなく。しっかりとして、それを抱け止める必要があるのだそうだ。

そうすることで子犬は自分がどれほど抵抗しても無駄であるというお釈迦様と孫悟空の対決した境地へと至り。人の方は下らぬ感情に押し負けて、抱き留められないからとその子犬を放り出さないことを学ぶ。

まったく失礼な話だけれど、この時のキュリーに僕がしたことは正にこれだった。

お互いが触れ合うという圧倒する感覚が、男とか女とか、さらには人つてものは——そこまでをも簡単に分かった気にさせてしまう。

これは僕をなぜか選んだ、あの彼女から教えられたことだった。

そしてキュリーは悟った子犬そのものに今はなっている。

最初こそ混乱したか、暴れようとしたけれども。こつちも覚悟を決めてしっかりと抱きしめていたら、いきなり静かになった。

というよりも、逆に自分の身を預けてこようとまでしている気がする。

だが、さすがに僕だって理性全開して行動しているわけで。簡単に

動じるつもりはなかった。というよりも、そんな彼女との関係への不安と恐れが悟られないことを願っていた。

「不思議です。とても穏やかにになりました。でも、興奮も感じます」「論理的じゃないよね。ヒトって」

「まったくその通りだと思います。でも、この現実には嫌いではありません。いえ、もつといいと思ってます」

「それはいい事だよね」

むこうはどうかは知らないが、こっちは性的な衝動は押さえこんでいるので。この状態だとまったくんでもないことを色々と考えてしまっている。

まず、彼女の体重だ。

やっぱりまだまだ細すぎる。軽すぎるのだ。

もう少し、いやだいなぶ肉がついても構わないはずだ。

そうすればもつと美しさと魅力に磨きがかかるだろうし、それに――

(これでは彼女は連邦を連れ歩けない)

マクレデイに聞いた、自分の搜索の旅の苦勞を。

タイコンデロガから出てきたキュリーの身体は、恐ろしく体力が不足していたのだ。

当然、彼女はそれを一応は自覚しており。

長旅に耐えられるようにと、ディーコンが置いていった僕がレールロードから買い求めたパワーアーマーを使ってなんとかしていた。

それでも、やはり無理があつて。体調を何度か悪くしていたらしい。

僕が工房に入り、忙しくしていたのはそれ自体。やりたいことが多くあつたのは事実ではあるが。

レオさんのように身軽に動けなかった理由の一つが、キュリーをどうやってこの研究所にしばらくつけておくのか。その上手な説得方法が思いつかなかつたというのもある。

まあ、このままいけば。その話もできるだろうけどさ——。

「本当に驚くばかりですが、ああ……あなたは、とても大事な人なので  
す」

「ありがとう。嬉しいよ、キュリー」

「離れた時からずっと、これは思い悩んできたのだとわかりました。  
私には望むにはあまりにも恐れ多くて」

「ヒトなら——そりや時には恋だつてもいいよ」

「愛しています！その——これは苦手ですが、ちゃんと伝えておきた  
いのです」

地上にむき出しになってる地雷原の中にひとりで放り出されるつ  
て、きつとこんな気持ちなのかもしれない。わずかにでも動いたら、  
こつちもヤラれる。

「あなたは私の才能を信じてくれました。そしてそれ以上の事も。世  
界は活気と可能性にあふれていて、希望はどこにだってあるように思  
えます」

「君の身体がまだロボットなら。僕は今すぐにでも、チエックするよ  
うにメンテナンスを勧めるところだね」

「からかわないでください。でも、まったくそれには同感です」

そういうとなぜか、ぱったりと無言の時間が流れる。

僕は焦りを感じている。

ここまでは想像通りに事は運んでこれたものの。今のキュリーは  
すっかりリラックスしてしまい、無防備そのものそのまま僕に寄り  
添ってきている。

この次の余地絵は当然「それじゃ、相談はここまで。出て行ってく  
れ」となる予定だが、違う選択肢がチョコチョコと存在をアピールし  
てきていて誘惑を感じる。

だが、そんなことは選ばない。

自分で回避すべき爆弾のスイッチに飛びついて、自分でそれを破壊  
していくなんて。あり得ない！

しかし、突き放すにしてもかなり苦手で。それを口にするのは簡単  
ではなく、むしろ厳しいと言っている。

「私、思い出しました。なんで、これが愛だとわかるのか」

「なんのこと？」

「皆さんと一緒にダイアモンドシティに行きました。覚えてますか？」

「君をVaultから解放した後の事？そりや、もちろん」

「あなたが突然、町の外へと飛び出して行って。私はパイパーの妹——ナットと慌ててそんなあなたの後を追いました」

「ああ、そうだったね」

あれはレールロードに参加する直前だった。

ハンコック市長のちよっかいを知ったが、気が付かないふりをした。彼の手下になるつもりはなかったから。

そうして、彼の隣にいる彼女に近づくのが。自分の目的を困難にするに違いがないと思えたから——。

「その後の事です。覚えてませんか？」

「ええと——帰ったとしか。別に」

「ダイアモンドシティの学校を見学しましたよ。忘れてます？」

「ナットを送った時か。それなら覚えている。あそこの教師があの時  
の君と同じ、Mr. ハンディだった」

「あなたは彼女の悩みに答えていました。愛について」

そうだったっけ？

同じ職場の、人間の老教師とのつきあいかたへのアドバイスをした記憶しかないのだが……。

「それならこれも知りませんよね。あの2人は、あのすぐ後に結婚しました」

「ナニ!？」

「ダイアモンドシティの教会で、本当に幸せそうでした。愛についてお互いが確かめ合い、これから学ぶすべてが世界を輝かせていると。本当にうれしそうに彼女は口にしてました」

「——そ、そう」

「それでもマクレディはひどい人なのです。聞こえないところで幸せな2人のことを『イカレてる』って。あの人、ヒドイとは思いません

か？」

「ソウダネ」

悪いが、今なら心の底からマクレデイに賛同の絶叫を空に向かって放ちたい。

まさか自分の何気ない一言で、1人の教師と一台のロボットの関係にとんでもないカオスを実現させたなんて——そんなことは絶対に信じたくはない。

いや、忘れてしまいたい。

「すいませんでした。私、気が付いたらここに長くあなたを独占していますよね」

「ああ、でも——大切な話だったから」

ありがとう、キュリー。

君は本当に素晴らしい女性だ。

言い出せずに困っている僕に、なんとむこうのほうからこの部屋から出て行ってくれそうだ。

「私、あなたのおかげで今日も多くを学ぶことが出来ました。このことはちゃんと、自分の研究室に戻ってから生かしていきたいと思いません」

「それはよかった」

満面に浮かんでるはずの笑顔に、引きつりがないうつろい顔を祈りたい。誤魔化せてるよな？

「それと、また一緒に行きましょうね」

「えっ？」

「ダイヤモンドシティです。あのおふたりは、あなたに会ってお礼が言いたいと言っていました。私もあなたに彼らの幸せな姿を見て欲しいと思います。」

それがいいことです」

「あ、ああ。そのうちに、ね」

——ダイヤモンドシティ、壊滅させられないかな

困惑する僕の中の暗黒面がボソリとそんなことをつぶやいた。

Silent Survivor's  
沈黙は金、雄弁は銀 (Akira)

3月下旬――。

この辺りではしばらく姿を消していたハンコックはコベナントへと再び戻ってきた。

そんな彼の横には小太りで、少しおどおどと怯えている風でもある男が付き従い。閉じられたコベナントの入り口を見上げていた。

居住地の中からは忙しいのか、それで騒がしいというべきか。木材を叩き、削り、運ぶとか。鉄を叩き、引き裂いたり、こすりつけられている様子がここまで伝わってくる。

正直、不気味で異様な感じしか伝わってこない。

「おう、入るぞ」

「……」

ハンコックが先頭に立つと、あっさりと開かれた扉の中を見れば。続く2度目の衝撃を男は感じずにはいられないだろう。

そこはあらゆるロボットにあふれかえっていて、その全てがなにがしかの作業を行っている。

「ここも少し、変わったな」

ハンコックはそんな目の前の光景を、自分が留守にした間の変化を確認して。ぼそりとそうつぶやいた。

以前もあつた居住地を囲む壁の高さがさらに少し高くなり。そこには網目状の鉄の天井が敷かれ。なんだか刑務所じみた閉塞感がうまれている。小さな中央広場(?)には階段がそんな違和感を無視してその上へと昇っていけるようになっていた。なんでそんな必要があるのか、よくわからない。

居住地の中に残っている邸宅についた、あの日の不穏な攻撃の痕跡は。あとかたもなく修繕されてわからなくなっているし。

入口から入って左側にあつた燃えた家屋はきれいにとりはらわれ。新たな共同住宅となる家屋の骨組みがだんだんと形作られていた。

「ハンコック？戻ったんだ」

「アキラ、連れてきたぜ。お前のお望みの野郎だ」

かつてはこの町の代表がつかつていた家から出てきたアキラは、今は白いシャツとズボンのラフな格好をしていた。

この若者がここを滅ぼした元凶だとは――。

それでも上機嫌な笑みを浮かべ、アキラはハンコックについてきたこの男に握手を求めていった。

「連邦で一番奇妙な場所へようこそ、ドクター……なんと呼べばいいのかな？」

「あつ、ダニエル。ダニエル・コールと――いや、Dr. ダンと」

「……なるほど」

アキラと名乗った東洋人はなぜかその時、奇妙な表情を浮かべ。ハンコックは面白そうな顔をしていたが、その理由は教えてはもらえなかった。

「ここは、新しく立て直しているのですか？」

「いや、そうではないです。以前のこの場所はちよつとした――”テemapパークのような場所”でしてね。といつても、裕福な複数のスポンサーがついていたからできていたことなんですが。

まあ、それが色々あつて、ついに愛想をつかされてしまいました。その路線をあきらめなくてはならなくなった」

「は、はあ」

「以前は居住地に見せてはいましたけど。別に住人は求めてなかった。

なぜなら全員をスタッフとして雇っていたものでね。おかげでこの通り、キャップの切れ目が縁の切れ目。あつというまにここから”綺麗に人がいなくなつてしまいました”よ。なんで、そのまま新しく住人を募集しようとして、そう考えています」

「ニューコベナントとして？」

「いやいや。コベナントはそのままです。

町はこれからもこのままです。住人も新しく入れるから、こうして古いものはきれいに壊したというだけなので。それに、ニューなん



て言葉。まるで以前の町が失敗していると、自分たちで認めるように。嫌じゃないですか？」

「な、なるほど——」

なにやらわずかな会話の中に、不穏な影のようなものを感じたが。しかしそれが何か、まではDr・ダンにはわからなかった。

そうしてアキラに「こちらがあなたの職場になります」と案内されたのは、小綺麗な一軒家。

思わず胸が高鳴るのを抑えようとするが、中に入ると途端にそれもしぼんでしまう。

「えっと、こちらは？」

「Dr・ダン。あなたにご紹介します。あなたの同僚となる——ドクター・ベンクマンとドクター……キュリーですよ。仲良くしてくださいね」

そこに立っていたのはひとりの女性と、1台のMr・ハンディタイプのロボットがこのダンの同僚なのだそうだ。

最初は迎えた医師のために用意された助手と看護師と思っただけ、勘違いということか——。

「実はこのロボット医師である、ベンクマンは。これから月の半分は、ミニッツメンの拓いた居住地をまわりたいと望んでいました。」

「このキュリーは医者、ではなく専門が医療研究者なんですよ」

「あ、ああ。そうですか……」

「つまり、先日まで売店だったこの素敵な場所を診療所としても。そこに居てくれる医師がいないと、コチラは困ってた」

「なるほど。ということとは——」

「そうです。つまり彼らは同僚ではありませんが……ここはあなたのための診療所ということになります」

ダンとよばれたその男の複雑そうな表情は、この瞬間。

ようやく安堵すると、満面の笑みを浮かべることが出来た——。

|||||

診療所となる底をさっそく改装したいと申し出たDr. ダンをそこに置き。仲間たちは秘密のエリアへと場所を移すと、アキラはさっそくハンコックに問う。

「本当に医者連れてきてくれたんだね」

「約束しただろ？『いい奴を知ってる。紹介してやってもいい』って」  
「久しぶりの里帰り。グッドネイバーはどうだった？市長」

「あいつら、市長の事なんてどうでもいいんだろう。なにもなかったかのように楽しくやっているようだ」

ついてきたキュリーは、それでも不安そうにしている。

「市長の推薦を疑うわけではないのですが。あのドクターの見識は、信用できるものなのでしょうか？」

「おいおい、俺の好意を疑うのかい？」

「いいえ——はい、というのも。この時代に医師は貴重な存在です。簡単には増えさせませんし、連れてきたりも出来ないはずですよ」

「それは僕も同感。市長にはちゃんとした説明をお願いしたいかな」

「若い奴等はすぐにこうだ。いい事があっても大人の好意を無理にだって怪しみたがるんだ。お前達、少しは変化を楽しめ」

そうは言っても説明はちゃんとしてくれるらしい。

人が集まる時、何が必要かと問われたら。

まずは生活の糧となるものが一番に来る。それは農業だったり、暴力だったりと違いはあるが。とにかくそれがまずは必要なものだ。

次にリーダーがいる。意見をまとめ、判断し、集まってくる人々の意思をまとめられる人物。

そして最後が——医者だ。

グッドネイバーもそうだ。

だが、それはあのメモリー・デンのDr. アマリの事ではない。

彼女も医師ではあるものの、あの店の技術スタッフというのが正しい認識であり。そもそも彼女は、記憶と脳の専門医なのだ。

あの町が日々、生み出している死人、怪我人たちを見てやるなんて

ことを見てやることはない。  
ではどうするのかといえば。当然、医者が他にいるということになる。

だが、それは医者ではあるが本当の医者ではなく――。

旧世界では集合洗濯所として使われていたと思われる、グッドネイバーにある建物の中にある薄暗い大きめの地下室。

そこへと続く廊下にある看板には「墓守」と記されていて、まさにそれこそがここにいる医者の本業であったりする。彼は人間で、本名は確かにあつたはずだが。誰も彼を名前では呼ばず、墓守アンダーテイカーの人とだけ呼んでいた。

この墓守人は別に副業で医者をやっているわけではない。考えてもらえばすぐにわかると思うが、グッドネイバーは死者がよく出る、時には毎日。

ところがそうになると“死に損なって”運ばれてきてしまう連中も多にいる。

すると墓守人は医者の目で、それが生きるか死ぬかを見極め。“運悪く”生き残るとわかった時は、ため息をついてから死体から患者となったそいつに治療を施すと。

本人の耳元でもって「次は死んだら来い」とだけ告げ、路上に放り出すのである。

この墓守人には面白いことに弟子がいた。

いや、本人がそう言ったこともないし。誰もがそう口にしたことはないが、そういうしかない奴がくつついていた。

ある日、サードレールに墓守人とハンコックは話す機会があり。そこでこの男の話が出た。

「どうやら“死に損なって”運ばれた元病人が「じぶんもあなたのような医者になりたい」と血迷っていついてしまったらしい。

そいつ――つまりダンは、ヤル気もあって。墓守人からもよく仕込まれたから、医者と名乗ってもよいくらいの腕はあつたはずだったが。

次の問題はグッドネイバーにあった。

この町は、別に本職の腕のいい医者ではなく死体の面倒を見てくれる墓守人こそ求めていた――。

ダンはそのをついに理解してしまう。

無駄に怪我人を生かすような医者は必要なく、死体の埋葬のために墓守人が居れば十分。

そして自分は、そんな墓守人の後継者であればそれでいいのだ、という町の本音を。

ハンコックはそこで大きく手を振り上げると、嘆かわしいと口にした。

「そうしてあのダンの野郎。墓石の隣で酒瓶を離さずに飲んだくれるようになったちまった」

「――そんなんで役に立つの?」

「安心しろ。ここに連れてくる間に、ちゃんと言い含めてある。俺の顔を潰すんじゃないぞってな」

「それは、怖い」

「本人の夢をかなえて、ドクターと呼ばれる立場をくれてやったんだ。当然だろう」

「助かったよ、ハンコック」

アキラは素直に、ハンコックに頭を下げる――。

「いいさ。どうせあのままグッドネイバーにおいても、あいつは使い物にはならなかったしな。」

それに――アイツはここでもう“アレ”を見ちまった。今更、グッドネイバーには帰すことは出来ない」

「ああ、そうでした」

「――おいおい、しっかりしてくれよ。そんな調子で、新しい治療法なんぞ考えられるのかい」

ハンコックがキュリーを相手に呆れているが。アキラは別の事を考えていた。

“ここにある”アレ――回収されたベルチバード。

この場所を奪ってから一ヶ月以上をこのコベナントで閉じこもって色々と開発なども行っていたが。

僕が一番にこだわっていたのが、あのB・O・S。が連邦に持ち込んできたベルチバードであった。

レオさんが持ち帰ったB・O・S。の技術をキュリーの協力も得て解析しながら。彼らが持つ、空飛ぶ機械を僕もまた手に入れようと模索してきた。

復元は簡単ではなかったが、不可能じゃなかった。

組み上げたエンジンはすでに地上へと持ち出され、そこでのテストでは80%をこえる程度には完成していると思える結果を出している。

今は急ピッチで、機体の方の工夫であれこれと試している状態にある。

「あの遥かなる青い空へ——いつ、飛べるんだ？アキラ」

「数日中には、形になる。第一段階のテスト飛行も、まず間違いなく成功するはず」

今は小さな会議室として使っているその部屋に入ると、ハンコックは壁に貼ってある連邦の地図の前へと直行する。

「となると、別の連中のことが気になってくるわけだ。情報を俺に教えてくれるつもりはあるのか？」

「——エイダはローグスと組ませて、スロッグに送り込んだ。すでにあそこで作業に入っているはずだ」

イエローマンとして動いていた時分。

僕はあそこの代表者と面識を持つことが出来た。

エイダに僕のメッセージを持たせて送り込んだところ、良い返事がもらえたので。僕はミニッツメンと名乗りつつエイダを再びあそこに送り込ませていた。

「順調だな」

「スロッグが、あっさりとミニッツメンに協力してくれると言ってくれたからね。レオさんやガービーを連れて、交渉に行かなくて済んだ

のは大きい」

「よほど誰かさんに、恩義でも感じていたのか」

「——どうかな」

「マクレディとケイトの方はどうだ？」

僕の顔がしかめっ面が変わる。

するとキュリーがなぜか僕のかわりに答えてくれた。

「ちゃんと仕事をしているはずです……きつと、今頃は」

「へへっ、あいつらを説得したのか？よくできたもんだな」

「——久しぶりだよ。あんなにメンタスをぼりぼりと貪る羽目になったのは」

強情な彼らを説き伏せるために、文字通り僕は錠剤を口に放り込んでそれを実現した。

彼らはちよつとレオさんに厳しすぎる。あんなに素晴らしい大人なのに。

「そりやそうだろう。むしろそれでも、よくあいつらが言うことを聞いたな」

「留守番は嫌なのだそうです。本当は私とアキラが行くことになるかもしれないって、話しだったのに」

「我儘な奴等だな。どちらが雇い主で護衛なのか、わかりやしねえ」  
まいったくだ。

それでもレキシントンを大きく迂回した彼らが目的地に着くのはまだ何日か先のことになるはず。

ベルチバードの完成が前倒しできれば、僕らもそれに参加できると思うが。

「厳しいか」

「なんだって？」

「いや——あれを着るのは、もう少し先になりそうだってこと」

それを口にする僕の視線の先には等身大のシルバー・シユラウドの格好をしたスタチューがライトの前に立っていた。

ハンコックによつてもたらされたアレは、このコベナント陥落からずっと。そこで出番が来るのを待っている——。

日付を見れば例年ならばとつくに陽気な春の訪れを感じるような時期なのに。

今年の連邦は機嫌が悪いのだろうか。冬本番にも思えるような寒さに加え、積もることはない粉雪をも降らせてみせた。

しかしそれがいつそ幻想を感じさせるものらしい。

ケイトはグレーガーデンから見下ろす橋の上を、ミニッツメンが列をなしてボストンへと渡っていくその姿を見守るようになっていくなか、彼らの姿が消えてもなお、そこから離れずに見えなくなってしまうた幻影を求めるように見つめ続けていた。

随分と時間がたってから、そんなケイトの様子を見に来たマクレデイは背中から声をかける。

「静かにしているなと思つたら、ここにいたか」

「まあね。ここにはサビと油臭いのしかないからね」

「ポンコツの天国だな、それはわかる」

いいながら少し距離をとった場所に腰を下ろし、マクレデイもまた橋を見下ろす。

このグレーガーデンは、戦前にひとりの天才によって作られた口ポット達によって管理されている農園であった。2000年をこえても変わらずに、彼らは今日も土と作物をいじり続けている。

「実際の話——俺達はうまくやったよな」

「多分ね」

「レオやガービーとも結果は出したんだ。ボスも満足だろうよ」

自分を納得させるかのようなその言い方が、ケイトの勘にさわる。

それと同時に、妙な疲れも感じてしまい。思わず自分が弱くなっていると思つた。

「マクレデイ」

「ああ？」

「あたし、なにか——悪夢を見ているみたい」

「それなら安心しろよ。お前の見ているのは間違いなく、悪夢そのものだ」

「へえ、やっぱりそうなんだ」

「ああ——俺達のボスは、そういうことをさせようとするやつかいな大馬鹿野郎なのさ」

やっぱりこのスカタンは自分の言いたいことをわかっていないんだと思つた。

ケイトは振り返っていた——。

わずかにひと月、違った2カ月ほど前の話だ。思えばあれからなにやら自分は夢の中にも入り込んでしまったのだろうか？

あれは確か、もう一秒だつてハングマンズ・アリーにはいられないとキレていた時だつた。

それでもそこに留まっていたのは、惚れた死んだ男の葬儀にこだわったわけではなく、よりにもよって美味しい場面で帰ってきたクソツタレとの決着がついていないと思えたからで、それでどうにか踏みとどまることが出来ていた。

だがそんなケイトにレオは時間を要求し、なぜかそれを自分は認めってしまった。

「すいません。ここにミニッツメンの將軍がいる？」

「いるよ。あっち」

「ここは知らないんだ。案内願えるかな」

それは突然の訪問者だつた。

かつてはライダーのアジトであつたそこへ。いくら今はミニッツメンがいると噂を聞いたとしても、普通 of 感覚を持っているならそこには近づかないものだ。

なのにそいつはヘラヘラと笑みを浮かべ、ケイトにレオの元へと案内を頼んできた。

(あのクソ野郎の知り合いか)



おかたいミニッツメンの將軍様の前まで連れていくが。今度は肝心のレオが首をかしげて、ケイトに「誰？」などと聞いてくる。

「あなたとも初対面だ。実は、アキラに頼まれてメッセージを届けに来た」

「アキラ？あなたは彼とどのような知り合い？」

「ただの知り合いだ。そしてあんたにメッセージを持ってきた。これを受け取ってほしい」

笑顔は絶やさなかったが、とにかくそいつの全身がこの任務を早く終わらせたいと訴えており。

どういふことか？と聞いても、ちっとも事情を話す気にはなれないようだ。仕方なくレオが手紙を受け取った。するとそいつは笑顔が無表情となり、いきなり背中を向けて足早にそこから立ち去って行ってしまう。

残された方は、あの笑顔は何だったのかと唾然とするしかない。

「アキラ？コベナントだって？」

「……知り合い？」

「ああ——ケイト。どうやら少し旅に出る必要があるみたいだ」

その時は何とも思わなかった。

いや、あの時はまだ——クソツタレな時間がそのままにあったに違いないのだ。

冷気の中で頭から湯気でもなんでも立ち上りそうになり。かぶりを振って、別の事を——その後のことを考えた。

ハンコックとマクレディに連れられて初めてあのコベナントやらの陰鬱な地下通路に案内されたんだっけ。

自分におかしなことでもさせるんじゃないかと身構えてたのは、別に自分の経験からいえば至極当然の事だった。

だから部屋の中に待っていたアキラの前に通され、2人だけにされるとすぐに拳を握って構えようとすらしした。

「さあ、何が望みなのかしら？」

などと不敵に笑って挑発してやったっけ。

あの東洋人はそんなコチラを見てポカンとアホな顔をして呆れていた。

「ここに戦いに来たのかい？てつきり——君は護衛の口を探していると聞いてたけど」

「そうさ……こっちが本業。冷たいベットをあんたのために暖める役目は望んじやないのさ」

「——誰もそんなこと、望んでないけど」

「へえ？本当に？男なんて、どいつもこいつも。代り映えしないんだから」

目つきだけはやたら悪い癖に、それ以外の表情——例えば口元とか、鼻筋とかそういうったものだ。

そこに困惑と苦笑をうかばせつつも、あいつは自己紹介から始めようなどとおかしなことをいいたったつけ。

まあ、話をすれば何のことはない。

護衛としての契約を、レオからあのアキラとかいうのに移したのだと。あの將軍様が願つての、雇用主との面談の場というだけで。自分は見事に空回って、未来のボスを敵と勘違いして挑発していた。そうなる、今度は自分が酷く頭が悪かったのではと、気分がめいり始めてくる。

「愉快な人なんだね。まあ、そういうのは僕の周りにも多くいるから——」  
「——」  
「そうやって気が付くと、変人集団の中に自分は組み込まれて——」

何やら静かに思いに沈んでいるケイトは、そこからまだ動きたくはないらしいと悟り。マクレディは再び声をかける。

「レオやガービー達はもう、とつくに橋を渡っていったら？」

「うん」

「まったく、ひどい仕事を押し付けるよな。ボスも」

「……」

「ここにいるポンコツと取引するためだけに。スーパーミュータント共が占拠する水処理プラントを奪ってこいとかさ」

昨日、マクレデイとケイトはそれをレオとガービー率いるミニッツメンと共に رفتっていた。

2人が手を貸したのだから当然だが、ミニッツメンはスーパーミュータントを圧倒した。

「あいつら、結局はここに来なかったね」

「へへへ、間に合わなかったな。何やら参加したげだったから、きつと残念がるぞ」

「——バカね。そんなわけないじゃん」

雇い主にしたなら、護衛なんて使い捨ての道具みたいなものだと思っている。それは間違いないだろうとも思う。

だから、そんな身分で奴隷のように簡単に契約を渡された今の自分への自重めいたものがあつて。とつさのことに、とげとげしい響きでマクレデイに間違いを指摘しようとする。

だが、効果はなかったようだ。

一瞬だけ、ケイトの激しい反応に驚いた顔をしたマクレデイであったが。

何やら納得したらしく。うんうんと頷くと。

「ま、普通はそう思うよな。俺も最初はそう考えてたさ」

「最初？あんな何言ってるのさ」

「ケイト、お前も生き延びられたらいやでもわかるぜ。俺達のボスが、どんだけ面倒くさい奴かってことがな」

「フン」

「ま、明日を楽しみにしようぜ」

「明日？」

「ああ、確か予定じゃ本人がここにやってくることになってるはずだしな。生きていれば」

マクレデイはそう言つて苦笑いする。

連邦の天候は御覧の通り、春を拒否するように異常気象なのかわからないが。雪が降っている。

明日までこれが続くかはわからないが。あの男ならば絶対に、決めたことはやめたりはしないだろうと思われた。

マクレデイとケイトは明日。

このグレーガーデンへと飛来する。アキラの乗ったベルチバードを見上げて迎える手はずになっていた。

それが成功すれば、ついに連邦の空を飛ぶ足を手に入れたことになる――。

|||||

それは連邦の南部、戦前にはギャラクシー・ニュース・ネットワークことGNNのロゴが輝くボストン支局。

しかし今では見る影もなく。

そこを占拠している連邦の最大の戦闘力を有することで知られるガンナー族が支配し。その本部となっているため、人々はそこをガンナープラザと呼ぶようになっていた。

その強固な監視が続く建物の入り口に、今。

薄汚れたグールたちが、その“普通の感覚”では醜悪にも見える諂いの笑みを全員が浮かべて立っていた。

「面会、かないますんで？」

「そうだ。ボスは会ってやると言ってる。ただしそれは1人だけだ」

「そりやそうでしょう。自分が行きますよ」

他のグールたちはそこらにいるスカベンジャーや、レイダー。そして傭兵のような武装をしていて、まとまりを感じない不思議な連中であつたが。

周りに断りなく「自分が」と申し出たそいつを回りは口を出すことはなかった。

そしてその男――グールはやはり、変人のようだ。

なぜなら彼だけが綺麗に洗濯されているだけでなく、アイロンまでかけたと思えるほどぴっちりとしたタキシードと赤く濁った紫色のリボンのついたシルクハットに黒光りするステッキを手にしていた。

このグールは周囲に自らをギブスと呼べと要求していた。

そんな怪人じみた男が面会を希望する相手が、ガンナーを統べる男、キャプテン・ウエスである。

ウエスは知らせを受けてからゆっくりとくつろいでいる風に見えるよう。自分の仕事部屋で待機して、部下に連れられたギブスが入口に姿を現すなり声をかけた。

「おやおや、これはこれは。仕事を失って路地裏に戻ったギブスじゃないか。こんなところに現れるとは」

「どうもごりや、へへへっ。厳しい評価を頂いたもので」

「当然だな。あのクインシーの採石場、キサマと違ってスラウの野郎は自分の立場をよく理解していた。今更にここに来られても、奴の仕事ぶりには満足している」

「本当にそうなんですかい？なんでもアイツ、道端に湧き出る商人どもを襲うのに忙しくて。たいしたことはやれてないって、噂を聞きましたがねえ」

「うちのシマを丸ごとひとつ預けてるんだ。稼いでもらわねば、奴の仕事もなくなる。」

まあ、そうなったら貴様にもまたチャンスが巡ってくるかもしれないがな。それは別に今じゃない」

「へっへへへ。偉大なガンナーのリーダー様に意見するなんて正気じゃないとは思いますがね。こっちは最初に言ったように、あんな場所にはなんの魅力もないってのが。答えが出ますから」

「ハンツ、随分と強気だな？」

抉る傷口の痛みが本当にかと疑いながらも、ウエスははしつこく嘲るのをやめようとしめない。

だが、相手はそれを了承の上で来ているのだと訴えており。黜り続ける相手にも粘り強く怒りをこらえて、話を続ける。

「そりやそりやですよ？」

土地を得ても、それを失うまいと必死になってしがみつく奴らと違って。こっちはいつでも大金を稼ぐために自由であることを選んでいる。そしてそれが見つかれば――」

指と舌を口の中でパチンと音を立ててみせた。

「こうやって身軽に、新しい取引のためにとびまわる時間がある。つてことで、関係ない話はやめて。ちよいとうちの新しい商品について検討してもらえませんかね？」

「新しい商品、だど？」

ウエスの目が光る。

自分で言うだけあって、このギブスはそのスラウとは確かに違う。スラウはどこにでもいるわかりやすいレイダーだとするならば。このギブスはスカベンジャーであり、レイダーでもあり。そして傭兵ですらあるという、多彩な仕事をこなせる仲間たちを連れていた。

そいつが新しいビジネス、商品と口にしたからには。それなりのなにかを確かに持ってきたという意味にとれる。

「そいつは武器か？それともガラクタか？」

「武器でもあり、ガラクタでもあるでしょう。ついでにちよつとした飾りにも使えるかもしれません」

「——売りつけるのに、商品について教えないつもりか？」

「商売になるのなら、喜んですべてを」

「まだ駄目だ。クソを豪華なものだと舌を滑らかにして言い切るバカが、この連邦にどれだけいると思う？」

うちの抱えている詐欺師の中にも「戦前のキャッシュカード」とやらを復活させたなどと騙しているのがいるというのにな」

今度はギブスの目が光った。

ウエスは横暴で、独善的な独裁者気質ではあるが。その性格は案外にして読みやすいことを知っていた。

だからこの時も彼が意外とこの話に興味を持っていることを話しぶりから知ることができた。

「北部の動き、よくないそうですね。噂で、そう（聞きました）」

「だからなんだ？」

「キャピタルのB・O・S.が、あいつら空を飛んで全てを連れて来たそうじゃないですか。今もこの空の上を好き勝手にして、飛び回っているとか」

「——そうだな」

「ベルチバード、名前をご存じで？」

「馬鹿にするな。当然それくらいは知っている」

同じく武装集団を自認するガンナーにとっても、あのキャピタルの空を飛ぶベルチバードは喉から出るほど欲しかった代物だった。しかし、それは叶わぬ願いでもあった。

何度もその機体を復元しようと、様々な模索をガンナーでもおこなってきたが。結局どれもが失敗に終わっていた。

「ギブス、そろそろ話せ。飽きてきたぞ」

「キャプテン、ガンナーにもアレを——ベルチバードをうちが用意すると言ったら。どうします？」

「——そんな寝言を、信じると本気で思ったのか？」

「そう思いますなら私めを間抜けな詐欺師というだけで、これは笑い話で終わります」

「ほう、その後でキサマはどうするつもりだ？」

「ミニッツメンへ。噂のプレストン・ガービーかジョン・ハンコックに会いに行くでしような」

「なんだと!？」

どちらもガンナーにとっては忌々しい敵といえる存在達だ。

「うちは色々と器用な連中がおりますからね。本当に多くの仕事を引き受け、サービスを提供します」

「……」

「それがなんであれ、こちらへの正当な評価とキャップが誠実なものであれば。うちはそれだけで満足なのですよ」

「ハンコックは別にしても。あのミニッツメンがお前のような奴の話を目に聞くとでも？ 正気か？」

「これは噂——あのダイアモンドシテイラジオでも流しているものですから、聞いたこともあるでしょう」

その最後のミニッツメンは。再起するにあたって自分ではなく、協力者である元 Vault 居住者に願って。ミニッツメンのリーダーに据えたとも聞いています。

ガービーはどうかは知りませんが。この Vault 居住者ならば、

もしかしたら万が一にもこちらの話だけは真面目に聞いてくれるかもしれない。ふふふ、確かに正気とは思えませんが」

ウエスの気持ちはそれであつという間にクルリと裏返った。

このレイダーもどきが、あのミニッツメンに持ち掛けるほどの商品に自信があるというなら。それを無視する愚かさに耐えられなかったのである。

「話は聞く。いつ、ベルチバードを用意できる？いくつ？」

「ゼロですよ」

「———どうということだ？」

いぶかし気な相手の態度に満足したのか、ギブスはグール特有の笑みを浮かべると

「正確に計画があります。これは、確実な」

「計画？なぜそれが確実なんだ？」

「私の仲間は多彩だと、さきほどいいましたが———」

「そうだったかな？」

「最近、入ったキャピタルから来た新入りが面白い奴でしてね。20年以上前の、あの大战では空軍で整備をしていたとか何とか……」

「そいつに作らせる？」

「ご希望通りに、数を揃えるところまでを望むのであれば。」

信頼に足る時間と、十分なキャップ。それがこの計画には必要です」

「———ふっかけるつもりか？」

「キャピタルの連中、あの空港でもなにやら掘り起こしているとゴミ漁りの間じゃ噂になってますよ。ちよいと分け前をもらおうと忍び込もうとした連中が、最近あまり戻ってこないとか。」

どうも連中、縄張りに入り込む盗賊などと蔑んでは獣を追い払うつもりで、マト代わりにしているそうで」

ウエスにとってそれは聞きたくない情報であった。

最近、彼が北部に近いガンナーたちに活動を控えるように命令を通達した理由は。



まだ準備というほどではないが。ボストン空港のB・O・S・を襲撃し、奴等の装備を奪おうという計画を立てていたからだ。

当然その中には、ベルチバードも武器と並んでリストにちゃんと入っていた。

だが、あいつらがそこに近づくゴミ漁り程度でも神経質に追い払うと知っては。

襲撃するにしても、もつと本格的にやらなければならないし。衝突したとしても、確かな結果が残せると思えなければ自分の指揮能力を部下に疑われても仕方がない。

ギブスはそんな危険は冒さなくてもよいと言っているのだ。

「自信があるのか？」

「ガンナーはこの連邦では無双にして最強の武装集団です。それをあの連中が、どう考えるのか？」

さえぎるものがない雲の間を抜けてやってきた奴らにとっては、同じ空に誰も立ち塞がる者がいないという事実は。大変な優位性を持ってしていると、考えているでしょう」

「失敗は許さん。それに、必要な時にもそれは出来ていないでは困る。

このしばらくは落ち着きを見せているとはいえ。あいつらが連邦に来てまでその牙をむかえないはずがないからな」

「安くはありませんが。それに見合うだけの利益は、確かに約束しますが？」

キャプテン・ウエスは沈黙した。

考えているのだ。

ガンナーはこれまでもずっと、最高の武装備兵団であろうとしてきた。

そしてそうなるための努力は全てやってきた。これまでのリーダー、全員が。

ならば自分も、それにならない。そしてこの大陸で10年前にその勇名を轟かせたキャピタルB・O・S・をも打ち破る力を手にしなくてはならないのだろう。

「ギブス」

「なんでしよう、ダンナ？」

「ガンナーズは空が欲しい。ベルチバードはお前が何とかしろ」  
ここにひとつの危険な契約がなされるのであった――。

## Heavy (LEO)

霧が出る朝であった。

ウエストン水処理場呼ばれるその場所は、ケンブリッジやボストンからあふれ出てしまったスーパーミュータントの一団が住処として使っていたが。施設の内部に彼らが興味を持つことはなかった場所だ。

それを遠くから眺めるレオの顔は緊張している。

問題はない。スーパーミュータントは確かに脅威ではあるものの、ミニツツメンと仲間達が――ガービー、ケイト、マクレディ、ストロングらが居れば十分にあれを撃破できるはずだった。とするなら、この不安は別の所にある。

それは両手に抱えた一丁のレーザーライフル、あのダンスから譲り受けたその軽さが原因だった。

兵士として長らく自分の身を護る武器は火薬式で、重いものが一番という意識がすっかりと脳に刻まれている。想えばあのアンカレッジの狂った戦場でも、この手に握られていたのはそういう“本物の武器”であった。

おかげでこの状況が、なんとも気に入らなくて困っているという現実。

ミニツツメンに帰還したが、レオは武器を失っていた。

新たな武器が是非にも必要と感じてはいるものの、以前と同じコンバットライフルなどではどうかと問われると。素直にうんとも言い難いものがあった。

コンバット、の名の付くライフルは連邦ではショットガンなども含めて規格が統一されているらしく。発射時の反動がだいぶ暴れるのがわかってきていた。

当初こそ、それを心地よいものと受け止めていたのだが。

やはり故障と劣化速度は尋常のものではなく。より使いやすい確かな武器が必要と考えているが、それを探す暇も。当ても残念ながら今はなかった。

「將軍、兵士達は準備が出来ている。いつでもいけるぞ」

「——わかった」

ミニッツメンへの帰還を境にレオはB. O. S. のパワーアーマーとケロツグより奪った服を脱ぎ棄て。

ミニッツメンの昔の制服へと着替えていた。そうすることで自らもミニッツメンのリーダーとして、重鎮として振る舞わねばならないと意識を変えようとしているのである。

「斉射3連、その後は——」

「あたしらは突撃するんだろ？わかってる」

「ニンゲン、ハヤク戦オウ。ナニヲシテイル」

「私も前が出る。背中では心配しなくていい」

マクレディはガービーと4人の若いミニッツメンと並んで、狙撃の態勢にすでに入っている。

「ガービー、戦闘開始だ」

「ミニッツメン、狙えっ……ファイア！」

赤い光線とライフル弾が、見事にその全てが狙い通りの場所へと吸い込まれるように着弾した！

|||||

コベナントの壊滅は、すぐにはガービーも。そして私も冷静に受け止めることが難しいものがあった。

情けない話ではあるが、山のような証拠は確かにそこにおぞましい事件があつたことを示してはいるが。それに対してあの若者が行った苛烈な報復行動に私たちはショックを受けてしまったのだ。

頭を冷やそうと2、3日の間をとり。私達はミニッツメンの居住地の整備で時間を稼いでいるつもりになっていたが。

アキラはそれを許さず。

誰の許可も得ないままに、コベナントの資源を好き勝手に使いつぶし。異変に私たちが気がついた時にはすでに大量のロボットたちが、そこでなんらかの作業に入っている所であつた。

「この居住地をあるべき姿にしたいのです」

アキラは私達にはそう説明した。

実際に彼が作り出したロボット達も、それが事実であるというように町に残されていた傷跡を消そうと。修理や大胆な改装を始めているのをこの目で確認していた。

だが安心はできなかった。不安と不信が、よくないものを刺激している――。

私は確信していた。今度こそアキラは何かを隠している、と。

彼は自分の身に起きた恐るべき経験の全てを話そうとはしなかった。なぜ話せないのかすら、今回はなにも口にしなかった。

私は彼の老いた友人で、私はまだ彼を信じてはいたが。

同時に以前からガービーが主張するような「連邦の凶暴な、何か」を彼がついに吸収してしまったのではないかという疑念もまた。消せなくなってしまうた。

コベナントの秘密のエリアとやらで最初のミニッツメンの集まりをしようと決めた時。私はガービーに、強く。アキラへの不信を隠すように求めた。

コベナントで彼がしでかした事件と、事件の後の暴走も。彼に邪心があつての行動とは思えない、と。

少なくとも彼には信じるに足るものはまだ残されていると、あの炎の前で交わされた再会の言葉から考えることは出来たから。

ならば、我々は彼の話を聞き。

きちんと理解したうえで、妥協できるポイントを見つけ出していくほかないだろうということ。

ガービーも色々と思うところはあったはずだが、表面上では私の言葉に同意をしてくれた――。

だが、その会議ではアキラは我々の上を簡単にこえる発言を繰り返してみせた。

最初の議題は当然、『ミニッツメンによる連邦北部をどうやって抑

えるか』というそれであった。

キャピタルB・O・S.の目的が判明した以上。

この連邦をひっくり返すような激しい戦争が起こるのは、もはや時間の問題といってもよかった。

同時に、連邦でこれまで強い影響を与えてきた。ガンナーが南部でその動きを鈍くして、B・O・S.もまた。ボストン空港で落ち着きを見せている今こそ、ミニッツメンは動かなくてはならない。

一方では新生ミニッツメンには問題も多い。

人的資源の不足を先頭に、最近では居住地の運営でもポロポロとほころびが見える出来事が重なっていて。実際は北部がどうか言っていない状況で、そう考えているミニッツメンの若者達も少なくなかった。

その彼らにできるのだと信じさせる、確かな方針を私たちは考えださねばならない――。

それは簡単なことではなかった。

すでに活動のいたるところで限界を迎えつつあるようなミニッツメンに、さらにそれ以上の限界を突破するような方法を見つけれ。

不可能は不可能でしかないわけで、これほど無意味な議論はあるはずがないと。普通は思うはずであった。

実をいえば私もガービーも、まさかアキラにそんな調子のよい名案があるなどとは全く考えてはいなかった。

そのかわりに、同じく考えながら。言葉を交わすことで、心の中で生まれてしまった疑念をなくそうというのが、本当の狙いであったはずだった。

若者はそんなコチラの考えを簡単に飛び越えてみせた。

「レオさん、ガービー。実は僕に、ひとつ考えがあるんです」

「アキラ？本当なのか？」

「でも、これは簡単なことではないです。互いの信頼も必要だし、難しい決断でも首を縦に振ってもらわなければならないのです。それも、ひとつやふたつじゃない」

「——それは、わかる。俺も將軍も、このことは簡単ではないことは理解している。

だが、本当にそんなことが出来るのか？」

あまりにあつさり口にするので、私もガービーも思わず何度も聞き返してしまった。

アキラはまず、計画ではなく。彼が必要とするものと、なにをするのかだけを私たちに簡単に説明した。

彼の提案はあまりにも厳しいもので、私もガービーもさすがに沈黙してしまつた。

——現在の活動の中心としているレッドロケットを離れ、ポストンにミニッツメンの活動を移す

——ミニッツメンの主力を北東部へと集中させていく

——レキシントンを包囲すべく、このコベナント、スターライト・シアター跡地、グレーガーデンの3つの居住地の経営権をアキラに与える。それをミニッツメンとの合意として文書に残す

大きくはこの3つが提示されたわけだが。

私たちはそのどれも、素直に認めるということは難しかった。

「レッドロケットを離れる。それは構わないが、サンクチュアリはどうするんだ？」

「落ち着かなかつたサンクチュアリはもう過去の話です。彼らの生活はこれからさらに安定するものとしなくてはならない。そのためにも、ミニッツメンの活動の中心をいつまでも連邦の北西部に押し込めてはいけません。中央に移しましょう」

「彼らはそれを見捨てられたと不安に思うかもしれない」

「それはただの甘えです。」

それにレッドロケットは残すのですから、彼らの側にはまだ、ミニッツメンがいることに変わりはない」

「厳しいんだな」

「ポストンの近くにまでガービーとレオさんが来れば、ミニッツメンへの参加希望者は。レッドロケットにいた時とは比べ物にならないはずです。人的資源の拡大はこれだけでも十分に果たせる」

アキラにはサンクチュアリとの間に遺恨があった。それを晴らすためにしているとは思いたくないが——どうしても気になって、ガービーは同意することは出来ない。

「現在のミニッツメンを全て北東部へ向けるというのは……過激にすぎないかい？」

「それが必要なんです」

「だが、それだとレキシントンなどはどうする？」

「レキシントンはこの際、忘れてください。居住地の事も」

「……」

「連邦北部をミニッツメンが抑えるというなら、今だ着手していない東海岸の調査が必須なのです。」

今ある部隊すべてをそこに投入し、そこでどうやったら人を送り込めるかまでを具体的な計画を立てる段階にまでもつていかねば。B.O.S. が動き出す前に北部を抑えることは難しいというそれだけが残ってしまいます」

これまで居住地を再開し、積み上げてきた実績での信用を投げ捨てて自らのため偵察に全力を傾ける。

それはあまりにも強引で無謀なことのようにしか思えず。レオもどう理解していいのか戸惑っている。

「ここにある3つの居住地をどうするつもりなんだ？」

「別に。僕はこれまでと同様に普通に町を作るだけです」

「悪いがアキラ、それを素直に信じるわけにはいかない」

「なぜですか？」

「まさにそれらはレキシントンに近いというだけじゃない。グレーガーデンだって？そこはまだ我々の管理する居住地ですらないというのに」

「でも、必要なんです」

あまりに途方もなく。それは聞くべき価値すらないかもしれない、そう思える提案であったはずだったのに——。



それでもそれが実現できるといふならば、彼の計画はあまりにも強くこちらを誘惑する力を持っていた。

ミニッツメンからの狙撃はたいしたものだったが。

兵士達のレーザーはもちろんの事、マクレデイの308口径ライフル弾すら直撃したスーパーミュータントも頭部を激しく揺さぶられるだけで。フラフラとしてはいても立ち上がり。ひるむことなく反撃の鬨の声を張り上げてみせる！「敵ダ、殺セ」と。

「頑丈なんてもんじゃねーな」

キャピタルの奴等の仲間であつたなら、この一撃であつさりと倒れてくれるだけありがたかつたとマクレデイは愚痴りたくもなる。

連邦のスーパーミュータントは、キャピタルとは違つてまさにバケモノという表現がお似合いの危険な存在でしかないのだ。

だが、そんな連中を相手にしてもまったく恐れない存在がここにもいた。

「ストロング、負ケナイ！」

重量の増したケイトから譲られたスレッジハンマーをすごい勢いで振り回すと。

ミュータント・アーマーを着た相手と体力の削りあうような殴り合いを始めている。そんなストロングの背後に立とうとするもう一匹の相手を、どう見ても華奢にしかみえないケイトがコンバットショットガンをむけて引きつけに入る。

知つてはいたが、この2人(?)はなぜだか相性がいいようで。何も口にせず、自然と連携を今回も取つてみせた。

レオは冷静にそんな2人を援護しようとするが。

新たに出現したスーパーミュータントの一匹は、巨大な剣を振り回すかのように。手にした木片で大きく振りかぶろうとする。

「ニンゲン、死ネー！」

叫びと同時にそれを一気に振り下ろす。

だが、そこには一瞬早く動いていたレオの姿はなく。木片は空を斬ることしかできない。

「將軍!？」

遠くでガービーのあせる声上がるが、レオは全く気にもしなかった。

相手が目の前に来るのをしっかりと確認していたから、射撃体勢は早々に崩すとスタンスを広げて逆に待ち構えてすらいた。以前は体の切れに重さのようなものを感じて、少なからず自分の弱った体に失望も抱いたこともあったが。

今はそんなことはなく、記憶に刻まれているスピード以上の身軽なフットワークでもって、相手の死角へ。

あっさり移動しつつもレーザーライフルをわざわざ背中に回すという余裕すらみせている。

レオはミニツツメンの制服の上から、新たにコンバット・ライト・アーマーを身につけていたが。

両手を護るショルダー部分には細工が施されていて、構えを本格的にとると同時にその一部が拳を覆い隠せるようになっていて。つまりそれは変形のパワーフィストになるのだ。

これによって人間でありながらも、スーパーミュータントを相手にも十分なパンチを放つことが出来る。

そしてレオのパンチは現在、かつてのそれ以上の鋭さと重さでもって連打が可能だ。勝ち誇った表情を見せていたスーパーミュータントの頭部に複数の打撃音が炸裂し、強靱な頭蓋骨にひびを入れ。脳味噌をかき回してみせる。

たまらずに片足をついてしまう相手であったが、レオは全く容赦なくどかけるつもりはなく。

一瞬、バックステップで距離をとると、そこから宙に飛び上がって必殺の一撃を見事に弱るスーパーミュータントの側頭部へと叩き込む!

遠く離れて並んでいる兵士達とガービーは、人がスーパーミュータントを殴り殺すなどという姿を見て驚嘆と唸り声の混じったそれを口からもらす。

わかっていたことだが。しかし、それでも彼はとんでもない男である。

会議が再びアキラによって動かされたのは、それからすぐの事であった。

彼はレキシントンの封じ込めを、その役目を引き受けるのだと粘り強く何度も説明して聞かされても。ガービーも私もそれぞれが別の理由からそれに首を縦に振ることは出来なかった。

だが、本当の問題はその後で起こったのだ。

「実は、僕はこれを機会にサンクチュアリから手を引こうと思ってます」

「なに!?!」

「サンクチュアリとの間に結んでいる今の約束事は全てを破棄します。ついでに、代表に置いていたマーヴィンもその任から解き放すつもりでいます」

何をこんな時に冗談を、と最初は怒ろうかと思っていたが。

どうやらそれが本気らしいと知ると、私はなぜ彼がそんなことを口にしたのかで混乱してしまう。

この一瞬が、私の致命傷となった。

「なんだって?」

「本気なのか、アキラ?」

「ええ」

「いや、それは——」

「それはいい!」

止めようとする私の言葉を、歓喜するガービーの言葉が遮ってみせた。

彼がそんなことを言い出す理由は簡単ではないはずだから、その真意をしっかりと聞きだしておかなくてはならないはずなのに。ガービーはなぜか興奮してそれを口にする。

「アキラ、俺はずっと君がああサンクチュアリにわだかまりをもっているんじゃないかと気になっていた。あの契約も必要だというから、

仕方なく認めはしたが。決していいことではないとわかってきていると信じていた」

「ガービー、そんな簡単な話では——」

「將軍、何を言うんだ。あんただって、アキラにとっても。またサンクチュアリにとっても。」

お互いが距離をとるなら、早い方がいいに決まっているし。今のよ  
うな状態が長くなるのもよいとは全く思えなかったんだ。これで、物  
事はきつと良いほうに向かうはずだ」

「ミニッツメンには僕も参加しているからね。遺恨は正直、残したく  
はないんだ」

「そうだな。全くその通りだ！ははは、良かったよ」

ここで私は自分が本当にウカツであったことを思い知らされた。

アキラがいつになく饒舌であるだけではなく。力強い言葉と、迷い  
のない勢いが今の彼にあるということに。

（薬!?!メンタスを使っているな、アキラ——）

アキラはこの会議に最初から、私と向き合うことで隠している真意  
を暴かれないようにと。前もって薬物で自身を強化して、ガービーに  
むけてひたすら話して続けていたのだ。

ガービーが聞きたいこと、知りたいこと、望んでいることを並べて  
みせ。この会議に私と向き合う時間を可能なだけ削ってみせようと  
いう魂胆であったのだ。

（賢いな、まったく……）

この場合、若き友人に悪意があるとは断言することは出来ない。

あくまでも彼はルールの中で、自分が守勢に入らないように考えぬ  
いてこの場に立っているというだけの話だ。話し合いとは、議論とは  
そういうものだ。

今の彼には秘密があつて、何かをなそうと考えてはいるものの。

同時に参加するミニッツメンを裏切るつもりはさらさらないし、友  
情だつて大切にすると考えているに違いないのだから。

（若者にしてやられるとは——）

無様に過ぎた。

私の中の若者は、いまだあの日の弱々しい裸の少年のままだったのかもしれない。

アキラはすでに計画を明らかにしている風を装っていて、ガービーは私の副官としてそれに対して修正を求めていくつもりなのは明らかだ。そのせいで私はリーダーとして、ただ承認するだけの役目に追いやられていこうとしていた。

|||||

積もらぬ雪の降った翌日。

Vault 81 に与えられた部屋で私は目を覚ます。

今、ミニッツメンはハングマンズ・アリーとオー克蘭ド駅跡地の両方で活動していた。

やはりハングマンズ・アリーはダイヤモンドシティに近すぎているし、魔都ボストンへの前線基地としての意味合いの方が強い。多少は不便ではあるが、一か所に手中させない方がいいだろう、そんな風に思われた。

だから私はガービーと話し合い。レッドロケットに用意した仮の本部としての機能は、この2ヶ所に分けることで解決した。

さらに私はあえて距離をとるように、このVault からそれぞれの居住地へ通うような生活をしていた。

机の上に投げ出されたアーマーと、ハンガーにかけられたミニッツメンの制服を見る。胃の辺りに猛烈な吐き気を覚え、その場でなんどかえづいてみせると。正直それに手を通すことが出来ない、とその瞬間は思ってしまった。

ひどいものだった。

結局、ガービーはアキラにいくつかの修正を求めはしたものの。

アキラの計画のほとんどすべてに同意してしまった――。

約束した通り、サンクチュアリは代表が人間へと交替し。あそこで権利を主張したアキラの用意したものすべては、住人達へ寄贈される

ということになった。

そしてミニッツメンに変わり、3ヶ所の入植地を経営と防衛をすることを約束してみせた。

むろんこれでコベナントの騒ぎは有耶無耶にするしかなくなり。アキラの真意をただす機会を私はその後も結局用意することは出来なかったことになる――。

Vault 81を出て、気がつくとも私の足はダイヤモンドシティへと向かっていた。

中に入り、一直線に向かったのはあの場所。ニック・バレンタイン探偵事務所。

扉を開けて中に入ると、めずらしくそこにいたのはニックと。そしていつも留守を守っているエリーが笑顔で私を迎えてくれた。

「あ、ニック。彼が来たわよ」

「おお、こりや嬉しいな」

「やあ、エリー、ニック。その――」

「わかってる、最後まで言わなくていいかさ」

私はミニッツメンの服ではなく、ニックにもらった、ボロボロのトレンチコートを着てそこに立っていた。

「悪いけど、本当に仕事は山のようにあるのよ。だから、急いで調査に入って。まずは――コレから」

そういつてエリーはファイルを私に差し出してきた。

中をパラパラと目を通して

「詳しいことはそのファイルにもあるけど。このダイヤモンドで、また新しい失踪事件が発生よ。セキュリティはこの事件を無かったこととして処理すると早々に決めてしまったから。あとは探偵が結果を出すしか解決はしない」

「それじゃ、相棒。さっそく事件の調査に向かおう」

「ああ、ニック」

2人の探偵が扉を開けて出ていく。

朝日は眩しく、エリーはその背中を頼もしげに眺めていた。

その日、最近は少なくなったミニッツメンが居住地から巡回に出るのと入れ違いにして、バラモンを連れ一人の男——商人が姿をあらわした。

商人は自分は旅をしながら雑貨業を営んでいると口にする、軽快な喋りで居住地の住人達に取り入り。そう悪くもない取引も少しは行ったりもした。

「さきほどの、あれですかい？ミニッツメンの方々で？」

「ああ、そうなんだよ。」

最近じゃ、またレイダー共が騒がしくなったと言われちゃいるけどね。

彼らが居てくれてここもなんとか、平穩無事にやっていけてるよ」

「ほう、そりや凄いいもんだ」

「……あんた、連邦の人じゃないのかい？」

「ええ、まあね。」

あのくらいに見える山を、5つ6つほど越えたところから来たばかりで」

「そりや大変だ、長旅だったんじゃないか？」

「へっ、まあ……あの人たちは、俺のような商売でも聞いてくれますかね？」

「どうだろうか、商人とは取引をしているはずだけどね」

「はア、なるほど」

言いながら商人は素早く居住地の中の様子をチェックする。

スコープの付いたライフルを構えた男が2か所に設置された櫓の上から周囲を油断なく警戒し。

その近くには異変を知らせるサイレンが立っているのが分かる。

古い住居をそのまま寝起きに使っているようだが、補修もすっかりされているようで。いくつかは家の塗装を新たにしているところも見られる。

（農場、って感じだな。食い物は問題なさそうだが、意外に人も多いよ  
うだ）

少し前までは新生ミニッツメンも一進一退を繰り返していると聞かされていたはずだったが。

この静かな2カ月余りの間にも、なにやらまた勢いを取り戻したか。特になにか騒ぎが起こったとは聞いていない――。

「あんだ、次はどこへ？サンクチュアリを目指すのかい？」

「そこは今、どうなってますか？何か噂でもありませんか？」

「一時期とは違うと言われてるけど、それでもあそこは家を持たない放浪者にとつちや希望の町だって話だよ。

ミニッツメンとの関係も深いし。今でも落ち着きたいって連中はまずあそこに顔を出すって話さ」

「へえ……ミニッツメンの偉い人は、まだそこにいらつしやるんですかね？」

「ああ、最後のミニッツメン。プレストン・ガービーだね。

あの人は確か今、ボストンの方にいるのかなんとか。噂で聞いた限りだけだね」

「おや、サンクチュアリとやらから離れたんですか？」

「前にボストンに派遣したミニッツメンがああ辺の辺のレイダーと激しくやりあったってことがあったからね。

あの人らの所も少なくないし人死にを出したって聞いているし、その立て直しにむかつたんじゃないかな」

（ハングマンズ・アリーとやらの騒ぎのことか。馬鹿な）

商人は表面上は頷いてみせたが、心の中では鼻で笑う。

最近じゃ連邦のレイダーってやつらも地に落ちたものだど情けなくなる。

数だけ大勢を揃えておきながら、居住地に引きこもった20人もいないミニッツメン相手に負けてしまったっていうのだから、他にどう言ったらいい。

むしろこれは別の見方をすべきだろう。そうして手に入れた名声をさらに高めるために、ガービーはボストンに出向いてさらに兵士をそろえようと募集をかけているに違いない。

「やっぱり、危険かもしれません。バンカーヒルってところまで、行



くのがよきそうに思えますね」

「ああ、そうかもしれないね。あそこにはアンタらのような強欲な商人がわんさか集まっているから、きつとあんたの知りたい情報だつてこんな農場とちがつて、ちゃんとわかるだろう」

「へへへ、それじゃ。これで」

「ああ、道中気を付けて。なにかあつたら、北部ならミニッツメンもいるし、何かあれば助けを呼んでみたらいい」

商人の男はそうやって居住地を後にする。

この連邦に戻つてきたのは本当に久しぶりだ、1年？いや、2年ぶりか。

「相も変わらず、クソなものだな」

先ほどまでとはがらりと違う、生気の抜け落ちたかのような声で久しぶりの大地へ、感想を吐き出した。

「やれやれ、それじゃこのクソの中からどうやって探す——俺達のオーバーボス」

商人の男は——いや、ヌカ・ワールドにいるはずのポーター・ゲイジはどうやってかこの連邦に姿を現していた。

「ようやくのこと落ち着けると喜んだ、」あの連中から送り込まれた若き支配者。彼はちつともこちらに戻る気配がないので、ついに我慢できずに自らここへとやってきた。

ポーター・ゲイジは今のアキラがミニッツメンの一員であるとは、まだ知らない——。

## 銀の輝き (Akira)

崖の上の居住地に、またもや襲撃の影が近づきつつあった。

あの冬空の下で起きた惨劇の後も、軋みをあげる人間関係を何とかまとめながら再出発したこの場所であるが。

無法者の影はそれから2度ほど現れ。しかしその時はミニッツメンの協力と、強い報復心もあって。近づかせることなく払いのけることに成功していた。

だが、それは常にそうだというわけではない。

現在は経験を積んだ頼もしいあのミニッツメン達は連邦の北東部へと流れていて。この北西部には経験の浅い、まだ兵士とも呼べないような若者たちが最低限の巡回で誤魔化そうとしており。

この場所の住人達は次の襲撃があれば、今度もうまく撃退できるであろうかと表面には出さないが不安に震えている所であった。

昼過ぎに居住地に鳴り響いたサイレンの警告は、見張りが木々の間を移動するレイダーを見かけたという確実なもので。

いつものように間近にいるであろうミニッツメンを頼ろうと、居住地は天空めがけて信号弾を打ち上げたが――。

そして4時間が過ぎたが、誰もここには近づいてこない。

レイダーも、ミニッツメンも、誰も。

人々は不安におびえていることを迫ってくる脅威には悟らせたくないため、何度も信号弾を打ち上げるわけにもいかず。

「やはりあのクインシーの虐殺は、ここで再現されるのでは？」などと住人達は恐怖に震えさせ。太陽が沈み、夜が周囲を暗闇に沈めていくことにも耐えねばならなかった。

そして哀れなことに、その様子はこの場所を観察し慣れた無法者たちの目でしっかりと確認されてしまっていた。

すべては深夜、あの日のように。

崖の上の居住地を包囲しようとする影たちが次々と闇の中に現れて動き始めると、ゆつくりとその距離を狭め。あの惨劇の続きをこの夜に再現しようと舌なめずりをする。

ミニッツメンは帰還したらしいが、それでこの無法の時代の時代が終わり告げたわけではないのだ。

人は暴力を手放せない。昔も、今も、そしてこれからだって――。

最初の銃声が鳴り響き、鉛の弾が居住地内の地面に撃ち込まれると。消えたミニッツメンのかわりに増やされたターレットが勢いよく活動を開始する。

戦いはこうして始まったが、しかしそれまでの長い緊張の時間はあまりにも長すぎたのかもしれない。もはや途切れることのない銃声の恐怖に耐えられなくなった住人のひとりが恐怖にとりつかれて必死に走り出すと、信号弾を手にとって狂ったように夜空に向けてそれを連射する。

周囲はそれを止めるべきだとわかつてはいたが。鳴り響く銃声と闇の中から上がる野獣共が吠える声に惑わされ、すぐには行動できないでいた。

暗い空に昇っていく赤い光弾、あの独特の燃えるシユウシユウという音もする。

―― 1 発

―― 2 発

輝きが地上も照らし、木々の間にランランと目を輝かせ。獲物を狩りつくさんとする暴力にとりつかれた人間達が武器を手にしてそこにいるのがはつきりと住人達にも分かった。

ついに恐怖と絶望に泣き出したそいつは「頼む、助けてくれよ……」それだけをつぶやいて、3発目をはなってみせた。

コツン

輝く光は宙空で固い何かにぶつかって。不自然に、そして急速に地面へと落ちていく――。

「今の、見たか？」

「あれはなんだった？」

その現象をたまたま目にしてしまった住人達は、しばし銃声の響く周囲の喧騒を忘れ。ポカンと口を開いて、空を見上げて何が起こっているのかを知ろうとする。

——悪が世間にはびこる時

——ひとりの男が影の中に身をひそめる

——それは無実なるものを守り、罪人を裁くために必要なこと  
そう、彼の名は——。

銃声響く居住地の直上に、突如として天使が羽ひろくように。多くのフレアが放出され、白い輝きと煙が夜の闇を光で駆逐する。

そこに飛んでいたのは神々しい守護天使ではなかった。

漆黒の機体は、信じられないほどの静穏をたもったままでそこに停止している。だが、初めてそれを目にする者にとっては恐ろし気な空飛ぶ怪物に思えたとしても不思議はない。

その中より地上へと信じられない高さを飛び降りてくるのは——。

「シ、シルバー・シユラウド!」

「正義は執行されなければならぬ……」

「ほ、本物なのか？お、俺達。恐ろしいからって、頭がおかしくなってしまうたのか？」

「罪人は、この死神が相手をしよう」

「助けてくれるのか？」

「ここはいい。反対側を手伝ってやれ、終わったらそちらもまかせてもらおう」

「わ、わかった」

本物だ、夢じゃなかったんだ。

恐ろしく白く輝くこの場所の中で、漆黒の帽子にコート姿。

必殺のシルバーマシンガンは持っていないようだったが。そういえば顔を見られたくないのか、口元に悪趣味なスカルバンダナで表情を隠していた——。

立ち去る男はもつとよく観察するべきだった。

このシユラウドは懐から取り出したのはプラズマピストル。そして背中に背負うのはどこかでみたことのあるレールガンと、一振りの刀めいた鈍器。

歩き出すヒーローは、背中の刀を抜けばそれはたちまち炎を噴き上げ。

闇の中に隠れているはずのレイダーにむかって放たれる緑の閃光は、人をスライム上の液体へと次々に変化させ。時折、鈍い音と共に放たれる杭は自作の防具で身を固めたレイダー達の肉体を容易に引き裂く鋭い一撃を与える。

罪人たちは光の下から迫ってくる処罰<sup>パニッシュヤー</sup>する者に抵抗できずに、ただ悲鳴を上げることしかできない――。

自分達が無慈悲にこの場に居る人々にさせようとしたことを、逆に自分たちが演じる羽目になり。さらには圧倒的な暴力と共にふりまかれる死の恐怖に抵抗することもできない。

騒がしい夜は終われば、夜明けがくる。

それが住人達を安堵させたが、同時にまた不安にもさせる。

いつからだっただろう？闇の中で争う獰猛な叫び声や、悪夢にみるであらう断末魔の声が途絶えたのは。

静かに立ち上がりながら、首を伸ばして居住地の外の木々を覗き見ようとした。

見えるのは木々の間に無造作に放り出された、襲撃者達の武具と無残な彼らの残骸の数々。だが、そこにあの男の姿はない。

「俺達、助かったのか？」

「あ、ああ。どうやらそうらしい」

「生きてるの？あいつら、逃げて行ったの？」

「わかんねーけど。そうだな、そうだと思うっ」

「勝ったのか？俺達が、あいつらをやっつけてやったんだ！」

最後の言葉が引き金となって、住人達は喜びを爆発させる。

歡喜の声に満たされる居住地の中で、しかしただひとりだけ。あの

瞬間に突如現れた守護天使と言葉を交わした住人だけは別の疑問に、とりつかれていた。

——彼は。シルバーシュラウドは、どこに消えた？

コベナントの早朝に、ハンコックは住居の扉に寄り掛かるようにして煙草を楽しんでいた。

彼は昨夜、めずらしく睡眠を許されないという貴重な経験をすごしてここにいる。

「おや、お嬢様がた。どうやら戻ってきたようだぜ」

コベナントに近づいてくるローター音を耳にして、家の中の——台所に向かってそう声をかけると。

荒々しい音と共に椅子が動く複数の音と、机の上のポットが悲鳴を上げるが。飛び出してくる2人はそんなことは知ったことではないらしい。

コベナントを囲む壁の上に作られた網目模様の天井に出ようと広場の階段を駆け上り。

雲間に焼けるような顔を出そうとする太陽の照らす空を見上げている。

漆黒のベルチバードはコベナントの屋上へと静かに着陸すると、中からマクレディとシルバーシュラウドが——。

いや、もはや隠す必要もないだろう。シュラウドに扮しているアキラが笑顔で降りてきた。

「おやおや、皆さんでお迎えとは。こりや——」

「黙れ、このクソツタレの男どもがっ」

「……静かな着地をしたつもりだったけど。起こした？」

「寝ていません。私達はずっと、起きていました」

笑顔でのん気な2人の男にケイトはさっそく噛みつく。

その隣に立つキュリーは恨みのこもった眼で非難する。

「黙って2人で行くのは、ひどいのです！私もちやんと連れて行って欲しいと、アキラにはちゃんとお願ひしたはずです」

「そうだよ、もっといつてやんな。キュリー」

マズイと気がついたマクレディは、両手をあげて降参としつつ女性たちの隣を横切つて背後のハンコックの元へと移動すると。

ならばとばかりに2人はアキラの前に向かっていくと声を張り上げた。

「あたしは護衛なんだけどね？それを雇い主のアンタに、好き勝手されたら仕事になんないんだよね」

「ひらめきのためにも、多くの経験が必要なのです。それはあなたもわかってくれていると、ずっと信じていたのに」

「昨夜の稼ぎはマクレディと山分けてワケ？新参者にはそのチャンスも与えないってこと？」

「空を飛ぶ経験がないのはもう私だけなのです。ケイトでも一回、グレーガーデンから乗ってきています。これは重大な問題だと考えられるのです」

感情的に迫る女性たちに、アキラは顎を引いて帽子のつばを押し下げ。

沈黙することで完璧な防御陣形を構築した。むろん、それがどれだけ鉄壁であろうとも。彼女たちは許さずに突き崩さんと攻撃をやめることはないだろうが――。

自分のボスがやりこめられるのを眺めてマクレディは「コエー、コエー」となにも出来ないでいるボスの姿を楽しそうに眺めていた。

「まったく、留守番するのにこんなひどい目にあわされると知っていたら。お前達につきあったんだがな」

「あれ？なんだよ、ハンコック。あんたは夜遊びするのは相手を選ぶとかなんとか言ってたじゃないか」

「そうだ。そう言っただろ？」

だがそのせいで、まさか怒れる女神たちをなだめる役を押し付けられると知らなかったからそう言えたんだ」

「うへえ」

「冗談じゃないんだぞ？」

俺はこう見えても肌の手入れには神経を使ってるんだ。ストレスや睡眠不足は、このイイ男が放つ輝きを鈍らせちまう」

「へっ、そうかよ」

「——それで、上手くいったのか？」

「ああ、まったく相変わらさずイカレてたぜ。アホ共を腹いっぱいまで食らったよ」

「そうか」

「空を飛ぶとか、バカなことやってるんだなって思ってたけどさ。ああいうことが出来るってのは、愉快なものだったって思えるかな」

ハンコックは漆黒の機体、アキラのベルチバードを見つめた。

彼自身、遠目ではあるがB・O・S.の使うこの機体を確認したことはある。

だが目の前にあるこれは、奴等の持つているものに外見に少し違いがあつて。さらに性能にいたってはまるで違うとわかるのが、なんとも興味深い。

(もしかしたら、これが俺の最初の一步つてやつなのかもしれないな) グッドネイバーから飛び出した男は、グールであっても浮かび上がる悪人の顔に笑みが浮かべた。

|||||

プレストン・ガービーはハングマンズ・アリーで新兵たちに休憩を告げる。

彼の前に並んだ若者たちはほっとした表情でその場に次々と倒れこむのを横目に、苦笑いを浮かべる。

まだまだ青い、だが未来にはきつと彼らは立派なミニッツメンへと成長してくれるはずだ——。

元Vault居住者たち——レオとアキラの帰還は再びミニッツメンを活性化させてくれた。

その事実をガービーは認めないわけにはいかなかった。

レオと共に行ったいくつかの作戦は多少は無理にも思える難しいものであつたはずだが。彼は自ら先頭に立つと戦場では敵を圧倒し、



犠牲は信じられないほど軽微でありつづけたし。

アキラの提案には当初、目をむいて彼の正気すら疑いもしたが、実績を信頼するのだという気持ちでしぶしぶ飲み込めば、これほどなにもかもが変わってしまうとは思いもしなかった。

この場所で起こったあの苦い経験は——失った古い友人とハングマンズ・アリーでの戦い——しかし、ボストンでの新生ミニッツメンの存在を証明する最高のイベントでもあったのだと人々に受け取られていたことに遅まきながらガービーも気がついた。

マクナマスらの死は、決して無駄死にはなかつたのだ。

レッドロケットより移した本部の機能は、オークランド駅跡地とここで2分割され。

いまやここはダイアモンドシティを近くした砦というだけではなない。新兵訓練と受け入れるための場所としても生まれ変わってみせた。

例えばサンクチュアリにいた時は、放浪者の中からおぼろげと自分も参加したいのだと小さな声をあげる自信のないもの達ばかりであつたが。ここでは違う。

若く健康で、希望に燃えた若者たちが列をなしてこの偉大な目的のために参加したいのだと毎日殺到してきている。

ガービーはここで新兵の訓練を、もう片方ではミニッツメンの幹部として指揮をするというのを数日おきに行き来することでおこなっている。

(将軍、アキラ。君たちの力があれば、不可能に思えた北部制圧もきつとこの手で成し遂げられるはずだ)

そのためにも自分も、もつと力を入れて動かなければ彼らに笑われしてしまうだろう……。

|| || || || || || || || || ||

さて、現在のコベナントについてだが。アキラが口にしていた居住地として使われているかという点、大いに疑問の残る事実しかない。

アキラと彼の友人達。それと診療所にいるドクター、それだけだ。実際にはそれよりも多くの人がここには居るのだが。それはこのドクターを頼って運び込まれてきた病人や怪我人たちと家族で、残念ながら彼らにアキラが居住を認めるつもりはまったくなかった。

だが一方で、当初はここには居住地をあふれんばかりに動いていたロボットたちがいたはずだが。

いまでは警備担当のプロテクトロン3台と、かつてのコベナントから唯一破壊されずに残されていたディーザーという名のMr. ハンデイがいるだけである。

あの多くのロボットたちは、どこへ消えてしまったのか？

元町長の邸宅に、珍しくアキラとその友人達が集まっていた。

昨夜、暴れてきた2人はそこで朝食をとったらくつりと朝寝を楽しむ予定であるらしい。

そんな2人の机の周りを、昨夜の留守番組が囲むように、見張るように黙ってそこに居た。

なにやら興奮の収まらない様子のマクレデイは饒舌に夕べの騒ぎについて語っていて、ハンコックらはそれをただ聞かされるという役回りにうんざりしているようであった。

「……でな、俺達はまさしくあいつらの悪夢になれたってワケさ。

称賛されてもよかったはずなんだが。あそこにいた連中、俺達が離れたのも気がつかないようだった」

「気付かれてないさ」

「へっ、あの空飛ぶバケツは凄えんだな。飛んでるのにまったく音がしないんだ」

「音はしてるさ。ただ、押さえているだけだ」

得意げにマクレデイが口にする、アキラはそれに答えるように続く。

両者に違いがあるとするとするなら、アキラ自身が食事とおしゃべりを交互に行うのは。この瞬間にも何やら別の考え事をしていて、あまり考えて口を開いているようではないということか。

「へえ、俺の真上に降りてきても。風みたいな音しかなかったぜ？」  
「ベルチバードの回天翼による翼渦干渉<sup>BV I</sup>によって発生する騒音を抑えるために。あれはローターに——」

技術的なことを口にしようとして、空気が変わるのを感じ。

ハツとなつて、慌ててアキラは口を閉じた。

「ちよつとしたウイスパー<sup>静穩</sup>・モードつてやつだよ。悪くはなかっただろ」

「——そうだな」

マクレディはフォークを置くと、椅子に体重をかけて寄り掛かる。

昨夜の武勇伝は、どうやらこのボスにとつてもどうでもよいことだったのだとわかつてしまったことで、彼もようやく頭を冷やし。冷静さを取り戻してしまった。

「それじゃ、昨夜のミッションは成功でいいんだよな？ボス」

「ああ、それはもちろん」

「——そうか、それじゃ。この際なんであんたが何を考えているのか、ここでそろそろ俺達に話すつもりはないか？」

緊張するものが、そこにあらわれようとしている。

「あんたと一緒に大暴れしてから、もう2カ月だ。」

ここであのベルチバードとかいうのをいじりはじめたし、ポンコツの兄弟分も馬鹿みたいに作りもした。

稼ぎがないのは不満ではあったけど、ちよつとした休暇だと思つて。

俺もケイトも黙つて、ここらで狩りでもして楽しませてもらったよ。レオ達と一緒に、グレーガーデンとやらにも行つて。スーパーミュータント共とも遊んだ」

「……」

「そこから戻つても、まだアレをいじつてよ。」

ようやく昨夜は、俺と久しぶりに出かけたと言って言うんで。こうしてひと暴れして戻ってきたわけだし」

「そうだな」

「なら、もういいだろうよ。そろそろ話してくれ、ボス。」

レオやガービーからも話は聞いてるが。俺はアンタの口から聞かせてもらいたいんだ」

これは雇用主と護衛の関係が求めることではない。

マクレデイはあえて、仲間として聞きたいと言っているのだ。

「オイオイ、お前ら。ひさしぶりに血を見てまだ興奮しているんじゃないか？寝ぼけた頭に空腹じゃ、難しい話も頭には入っては来ないものだけ？」

「へっへっへっ、悪いがその手にはのらないぜ。ハンコック市長。

グッドネイバー。いや、連邦じゃアンタは大悪党と知らない奴はいないが。ここじゃあんたは新人なんだ。

あんたが聞きたくないと思ってるとしても俺は知りたいし、そこに居るケイトもキュリーも。知りたいはずだ。

なら俺はボスにそれをはっきりと伝えるさ。例えアンタが邪魔をしようともな」

「俺はただ、食事と殴り合いは同時にするものじゃないってつもりで忠告したいだけさ。

だが、確かにそうだな。お前の忠告に従って、今は黙ってよう」

ハンコックはそうやって引き下がってしまうと、僕に逃げ場はなくなっただけということになる。

食欲が一気に失せた。

ナプキンで口元をぬぐい、ひとつ深呼吸しつつ。己に集中しろと語り掛け、準備整える。

「……わかった。何が知りたい？」

「あんたが話してもいいと思える。計画の全てを」

横目で壁際に寄り掛かるハンコックをちらりと確認した。

(話してやれ)、グールの身体は僕にそう言っているように思えた。

続いて女性たちを見る。

ケイトはまだこの空気を理解しきれずに困惑もしているようだが。キュリーはまっすぐにこちらに目を向けていた。でも僕はこの唐突な展開についていけないこともあって、素直になり切ることがまだできてはいない。

「計画——計画か。そんなものがあるのかな、僕に」

「あるさ。わかるんだよ。」 あんただけの計画” ってやつが存在を」

「どこから話せばいいのやら」

「なら、これなんてどうだ？」 コベナントの住人達の遺体” はどうなったか？」

「……それ、パスしてもいいかな？」

「いきなりか？」

正直者のダンを火あぶりにして処刑し。

僕は激怒するままに、あいつらを皆殺しにした。数日は野ざらしであつたはずの奴等の死体は、ロボットが忙しくしだした頃には姿を消していた——。僕が、そうさせたから消えたのだ。

「——処分させた」

「墓を掘ってやったとは思えねえんだけど？」

「もちろん。それ以外の、不適切なやり方で処分した。家の前で死体を腐らせる趣味は持ってなくてね」

「その調子だよ。どんどん話していつてもらえると助かる、ボス」  
しょうがないなあ。

|||||

まず、ミニッツメンに連邦の北部を管理下に置かせる。

はつきりさせたいけど、これは簡単なことじゃないし。そもそも実現可能かって疑うような話だけど、それが当面の目標ってことになってる。

正直に言うけど、本当はミニッツメンにそこまで求めたくはなかった。

現在の状況を考えたら、こうする以外に方法がないっていうそれだけのこと。

この2カ月はそのための準備期間のようなものだった。

レオさんはガービーに命じて組織改革を断行させている。

でもそれだけじゃ、まだ全然足りない。

僕はその、足りない部分を埋める作業をやる。

穴はいくつかあるけど、特に大きなのがレキシントンってあの場所だ。

レイダー、フェラル・グール、スーパーミュータント。悪いけど、その全てを駆逐することはできない。

先日、僕はミニッツメンとしてレオさんたちと方針会議に出席した。

そこで僕はいくつかの提案と決断を下した。

実はサンクチュアリを立ち上げた時、あそこでちよつとした利権を手にしたんだ。

それを僕は放棄した。

同時に僕はこのコベナントを含めたレキシントン近辺の居住地の監督、運営の権利をミニッツメンとの間に約束させたんだ。

彼らの立ち上げに僕は偉そうに口をはさんで、ある程度自由な裁量でそこを居住地に反映させるってワケ。

ミニッツメンは今後、レキシントンの問題の大部分を気にしなくてもいい。その面倒は僕と居住地でなんとかする。

そのかわり、それらが生み出す莫大なキャップはこっちの懐に入るって話。悪くないだろう？

といっても、当分は赤字だろうけどね――。

そしてここの屋上においてあるベルチバード、あれは最初の武器ってことになるかな。

最初っていうのはつまりすでに2番機を用意しているって意味だ。

アレの最初のテスト飛行で、マクレディとケイトを連れて戻ったあのグレイガーデン。

あそこで今頃はここにいたロボットたちが用意を進めていることになってる。

そして僕の工房には、それに搭載するいくつかの重要なパーツがすでに用意されている。

で、そんなの2機も使って何をするのかって言う——。

これをつかってミニッツメンの北東部への侵食を加速させる。

今のところは順調に進んでいるから、2週間以内にそれを始めるつもりだ……。

ここまで話したが、マクレデイ達の反応は良くなかった。

キュリーもマクレデイも、ここまでを語るアキラにはまだ何かを隠そうとしているのだと感じていた。往生際悪く、まだ誤魔化せるとでも考えているのかもしれない。

それを自分はなめられていると解釈したのか、マクレデイは幾分か不機嫌そうに口を開く。

「ボス、そりやミニッツメンの話だろ？あんたの計画はそれじゃない。続けてもいいが、そりやガービーの奴のものだ。」

「マクレデイに同意します。」

あなたにはもつと別の目的があるはずですよ。その証拠が、消えた口ポット達とここにエイダが居ない理由です」

確かにもう長い事、エイダはコベナントから姿を消していた。

しかしアキラはそのことにも特に何も気にしている様子は見せていなかった。

「まったく、お前らの関係はどうなっているんだ？」

ハンコックの声には呆れるものがあった。

「金汚いはずの傭兵が、キャップの話聞いてもそれに興味がないなんて言いやがる。とんでもないものを見てしまったと、驚いてるよ。」

護衛が雇い主にする話でもないしな」

「だからあんたはここじゃ新人なのさ、ハンコック」

「フン、ついに市長閣下が抜け落ちたな。マクレデイ」

同じように鼻を鳴らすのことで返事とする狙撃手には構わず、ハンコックはアキラに話した。

「もう誤魔化してもしようがないだろう。話してやったらいいさ。」

俺のことは構わん。あとはお前自身が納得させろ。そうしないとこの話は終わりそうにないぞ」

「……」

口を閉ざしていた僕は目を伏せた。

隠している心の奥底に燦るそこから、妖気漂わす青い焰が音もなく静かにチロチロと姿を見せようとする。

それが僕からあふれだし、わずかでも危険を感じるそれを周辺に漂う空気の中に匂わせてしまう。

他のと違い、ケイトは全くこの話の流れについてこれていない。

——この連邦に、危機が迫っている。

次の言葉はまず予言から始まった。

キャピタルのB・O・Sが連邦に来たその目的。

長らく連邦の脅威とされながら、姿が見えないばかりになにも出来ないでいる存在。インステイチュート。

この2つの勢力がぶつかれば、それはたちまち戦争となり。

その結果によって、この連邦の未来は大きく違うものとなつていつてしまう——。

「インステイチュートは今も謎ではあるけれど。この戦争が始まれば必ず姿を現さずにはいられないだろう。」

あいつらが空港に居て、今は静かにしているのがその証拠だ。キャピタルからわざわざ部隊を率いてやってきたのは、手掛かりを彼らは持っていると確信しているんだ。それが解明されれば、当然の事インステイチュートは姿を消し続けるわけにはいかなくなる」

「だから戦争か——」

「インステイチュートの人造人間の部隊が、B・O・Sのパワーアーマー部隊とこの連邦全域でぶつかることだつて考えられる騒ぎになるだろうね。僕はそうならないように、今のうちにできるだけミニッツメンに力を与えておきたい」

「なるほどな、B・O・Sかよ。それでハンコックがボスの所に来たのかようやく納得できた。」

なあ——ヤバいのか？グッドネイバーも」



「ああ、マクレディ。」

俺達が愛するあのクソツタレな町は、あいつらの目には別のものだと映っているから、どうしてやろうとでも考えてるだろうよ。当然、ひどく悪い未来しか想像できないくらいにな」

「そうだろうな、キャピタルのB・O・S.のやり口は俺も知ってる。俺があそこを出て連邦まで来る羽目になったのも、言ってみりやあいつらの存在があったから、みたいなもんだった」

——だが、それだけではまったく足りない

続けて僕は口を開いた。

「足りないんだ、もっと必要だ。」

だから他にも多くを同時に行うんだ」

「ほう、そこは俺もまだ聞かされてないな」

「そうなのか、ハンコック？でも、そのわりにはあんたボスと怪しげなこと色々やってたようじゃないか。あのへんな医者連れてきたりしてさ」

「俺は好きな奴には甘いんだよ。お前にもグッドネイバーじゃ、そうだったろう？」

悪党同士の掛け合いを僕は無視する。

「エイダとは出会った時にひとつ約束をしていたことがある」

マクレディの顔がハツとなった。

「今、この連邦では人々を襲うロボット集団がいる。そいつらの中に、メカニストと名乗り。救助を口にしていくせに襲撃しては皆殺しを繰り返している凶悪な存在がいる。」

エイダの前の持ち主は、そんなロボットたちによって殺害された。

エイダは敵討ちと正義を求めている」

「ほう——なにやら今のお前らしい話になってきたんじゃないか？アキラ」

「なんだよ、結局はヒーローの登場か」

「メカニストに借りを返す。その力も奪う、そして——」

僕は最後のカードを見せる。

「連邦南部を支配する最大勢力、ガンナーを攻略する」

『!?』

「ガンナーズは知つての通り、この連邦では最強の武装集団。威力の高い武器と装備を身に着け、それぞれは兵士となって部隊で動く。

戦争が始まる時、北部をミニッツメン。南部をガンナー、それもいいが……」

怪しげな輝きが僕の瞳の中に宿る。

「いつそのこと連邦を一つにまとめ、キャピタルとインスティチュート。そこに連邦最大最強としてぶつかるのも、悪くないと思わないか？」

「——アンタの正気を疑うぜ、ボス」

「アタマ、おかしいんじゃない？あんたら」

「……」

「だが、たとえば。例え——」

ハンコックはそこでわずかに口を閉ざす。

どう考えてもそれは妄想にしか聞こえないが。この若者がそこまですべて考えているとして、そのために動いているなら。もしやというわずかな期待が、それを口にするのをためらわせたのだ。

「そんな短期間に連邦を一つにまとめらつてことは。それこそ、この連邦を丸ごとひっくり返すとか、そういった大騒ぎをやる羽目になるってことだぞ。本気なのか？」

僕は無表情を続けられたはずだ。

その仮面の下にあるのは、狂気を称えた満面の笑み。

——そうだ、それが僕の望みさ

自分が自分に語り掛ける。仲間には決して明かせぬ、僕のバケモノ。

——そこまで連邦を滅茶苦茶にしてやれば

——B・O・S。もインスティチュートも関係ない。戦争はすぐにも始まる。

——そして当然だがそんなことは望んではないんだろう？

——そうなったらどうする？俺の家族、“小さな宝物”達よ。

再生の道はきちんと残しておくさ。

だが破壊するものはすでに選んである。そのリストの一番最初にある名前もまた――。

|||||

昼過ぎのグッドネイバーは、メモリー・デンの女店主イルマに驚きを与えた。

いつもは部屋にこもり、全てから背を向けて空想の中のシルバー・シユラウドを頼りになんとか正気を保っている様子のケントが、自分から部屋を出てきた所ではったり出会ってしまったからだ。

「あら、まあ。どうしたのケント？」

「あ、ああ。その、ちよつと出てくるよ。たまには自分の用は、自分で片付けないと」

「え、ええ。それがいいわ。じゃ、いつてらっしやい」

背中を丸めて、メモリー・デンから出ていくグールの背中を見ても、イルマの受けた衝撃はなかなか立ち去ってはくれそうにない。

「ケントが、外出を？グッドネイバーは明日には滅んじやうんじやないかしら」

無期限の休暇を口にして消えた市長の影響が、この町に不安定にさせていくのを感じる日々を思い。ややも物騒な予言を口にするが、すぐに頭を振って自分の仕事に戻ろうとする。

メモリー・デンには今日も記憶の中の美しい世界を求める客たちが列を作る。Dr. アマリの力を借りて、イルマはこの恐ろしい連邦の現実に傷ついた人たちに慰めの時間を与えている。

その仕事を滞らせるわけにはいかないのだ。

ケントが向かったのは、グッドネイバーの商人であるデイジーの店。

いつも世話になっているイルマは、なぜだかこのデイジーをひどく避けたがるので。こうやって訪れるにしても、自分の足でここまで来

なくてはならない。

「おや、こりや驚いたね。珍しいお客さんじゃないか」

「や、やあ。デイジー」

「こんにちは、ケント。なにか、あるのかい？」

「その、なにか珍しいものはないかな」

「珍しい？あんたが？」

「ああ、ええと。だから——」

なんてことだ、あんなに頭の中で準備を繰り返してきただけなのに。

舌が絡まると発音すら怪しくなり始める。動揺が、自分を弱くさせ。グッドネイバーの高い建物の上にわずかにのぞける青い空が、重力を失って地上へと落下してきたかのように潰されていくような気分だ。

デイジーは客の扱いは達人だ。

ケントのことはわかっていいるから、彼がこの店を飛び出していくなんてことにはさせない。

いきなりカウンターの下からなにかを取り出してくる。

「ひとつ、あるよ。ちよつと見てみな」

「えっ、あつ」

「こいつはバンカーヒルから流れてきたんだよ。ヴィム・クオーツつてやつ」

「ヴィム？」

出てきたのは瓶に入った炭酸飲料か。

確かに横に「Vim」とロゴがしっかりと入っている。

「こ、これはなに？」

「さあねえ。ヌカ・コーラの偽物みたいなものさ。これでいいかい？」

「た、高いのかい？」

「まさか！ヌカ・コーラと同じ値段さ。でも、これ一本しかないからあたしや飲んでないけど。味が気に入らなかつたからって、恨まないでおくれよ」

「わかつた」

そう言つて笑顔のデイジーにケントは救われた。  
落ち着こうと自分に言い聞かせつつ、支払いを済ませる。

「と、ところでさ。デイジー」

「なんだい？」

「なにか、面白い噂とか。聞いていないかな？」

「噂？どんなのだい？」

「ふ、不思議な話。その、ありえないようなものとか」

さすがに今度はデイジーでもすぐには思いつかない。

なにかあつたかねー、とつぶやき。ここ数日に入ってきた商人たちとの世間話を思い返す。

ああ、そういえば――。

「天使の話でも、いいかい？」

「て、天使だって？」

「ああ、それがおかしな話なんだよ。

ある居住地がさ、またぞろレイダーに襲われてしまったらしいのさ。

ところが、突然空から真っ白な羽をはばたかせて天使が地上へと降りてきて。黒い死神を遣わせたんだそうだよ。

そして天使が見守る中で、死神は居住地をレイダーから守ったとか」

「天使、黒い、死神っ」

「どうせ楽しみがないってんで、住人全員でジェットでも楽しんでいたんじゃないかね。

集団幻覚つてやつ？」

レイダーが襲つてきてるのに、天使と死神がそこに出てくるとか。どういうことだよって話」

「黒い死神――」

「ケント？これでいいのかい？」

「あ、ああ。ありがとう、また来るよ」

結局、ケントはデイジーの店から飛び出していった。

デイジーはため息をついた。それをさせないつてのが、腕のいい商

人の証明だったんだが――。

部屋に戻ると、買ってきたドリンクは適当なところに放り出した。収穫はあった、ついに！

流しているシルバー・シユラウドのラジオが区切りがいいところまで待つのが今は難しい。

ジングルが流れ出すと、ケントはたまらずにマイクのボタンを押して叫んだ。

「すべてのシルバー・シユラウドファンへ。信じられない、最高のお知らせがあるよ。」

みんなもまだ覚えているよね。そう、僕らのシルバー・シユラウドのとき。

グッドネイバーに現れた彼は、どうやら連邦へとさっそく飛び出していったみたいだ。

それはある、居住地での出来事さ――」

デイジーが口にした天使とやらが何かはケントにはちつともわからなかったが。

黒い死神ならば、彼に決まっている。

彼の名は、シルバー・シユラウド。

この荒れ果てた連邦に誕生した、正義のヒーローさ。

## 隣人の条件 (LEO)

プレストン・ガービーは私の友人であり。

優れた兵士で、有能な人物であることは間違いない。

だが、それでも私が感じる失望は。

彼の視野が、本人も認めてはいるものの。確かに時に困惑と苛立ちを覚えるほどに鈍さとなって表れてくる。

私がケロツグやB・O・Sへ向かっている間。

ミニッツメン内部の改革は、彼自身が口にするほどたいした進展はないということがわかった。

新生ミニッツメンにあつてガービーは重要な人材だ。

かつてのミニッツメンの良いところを引き継ぐという精神性があつた。

それは確かに重要なことではあるが。だからといって過度にそれを持ち出すのは、結局のところかつての崩壊をまた繰り返す危険を今の組織にも植え付けるというだけの虚しい行為となる。

必要なものが何か。

残すものはしっかりと選ぶ必要がある。

我々にはそれをしっかりと見定めることが出来る冷静な目と、過去を切り捨てる冷徹な判断力がある。彼はこの両方がないのだろうか。

かつてのミニッツメンの輝きは、彼の中では精査されることなく完全な肯定しかありえないのかもしれない。

そこにある歪み、弱さ、現れるであろう問題は流れていく時間の中で、ただ失敗という展示物に収められた物語でしかない。

であるならば、私は將軍として。

この地位へと導いてくれた友人への信頼にこたえるために、大ナタを振るわねばならない。例えそれが、ガービーの背中についてくる兵士達の医師にそぐわなかったとしても、だ。

かつてのミニッツメンは、組織の中にある派閥に問題があった。とはいえ派閥は決して悪ではない。

ある程度、集団がまとまった意思を示すためには。そうした存在はきちんと使いこなせば便利なものなのだ。

だが、彼らは間違った使い方をした。

リーダー不在という組織の不安定な状態の中で、それぞれが勝手に判断を下し。

それが最終的には組織の崩壊、裏切り者たちによる市民への攻撃という結果につながってしまった。

新生ミニッツメンではそれは許さない。

初期から私はミニッツメンが主導して居住地の開拓業に携わらせしたのは、細かな部隊単位で派閥を作り上げさせないためだった。

居住地自体にも防衛機能は持たせてはおくが、さらにそこにミニッツメンも入り込めるようにしてきた。

今の彼らは部隊同士のつながりではなく。それぞれの居住地につながれて活動するようになってい。派閥のようなものが生まれるとしても、かつてのようなものとは少し色合いも違っているはずだ。だが、本質は変わることはない。

だが、ガービーの運用によってそれが無意味化されようともしていた。彼は兵士達を、仲間との関係を重視させていた。私は容赦なくそれを叩き潰さねばならなかった。

それにはガービーを怒鳴りつけたり、なじったりする必要などない、当初に会った計画をただ次の段階へと進めるだけでいい。

この計画はいくつかのラインが同時に動き続けて、完成を見る。

アキラがコベナントで、ついに長く問題であった医師の問題を解決したことも、私のこの決断の助けとなってくれた。

かつてはロボットだったキュリーの中に刻まれた。過去の世界にあった純粋な医学的知識をコピーされた医療ロボットと、ハンコックの紹介で人間の意思がやってくる。



私はガービーに兵士に新たに傷や感染症、そういったものを応急処置できる衛生兵を育てるように指示を出す。

これによってミニッツメンの募集に緩みをもたせた。

兵士として足りないものがあつたとしても、それを技術で補える頭があればいい。そういうことだ。

続いて私は傷痍兵の問題についても着手した。

これまでわずか半年もたっていない新生ミニッツメンではあるが、すでに多くの若者が命を落としていた。

そして少人数ではあつたが、運と強い生命力のおかげで兵士ではいられなくなったものの。生き残つた元ミニッツメン達がいた。

彼らはもはや戦うことが出来ない。

しかし、ミニッツメンから彼らは居住地へと入つたとしても。

傷ついた体では厳しい畑仕事は難しく。武器を持って警備が出来るか怪しければ、そこに居場所は全くないというのが現実であつた。

そこで私は軍隊時代に学んだ過去の歴史からアイデアをひねり出す。

かつての敵国、中国の民間には。

古代に運送業や警備、保険などをまとめて商売とするヒョウ局なるものが存在した。

私はこれを連邦のミニッツメンに取り入れることにした。ミニッツメンは軍だけではなく、商売も始めるのだ。

かつては仮の本部とされたサンクチュアリのレッドロケット。そこにあつた機能は2つに分けられてボストンの居住地へと移つたため。会議室や兵舎、ガレージなど。少し寂しくガランと空間がうまれている。

私はここに新たにミニッツメンの外部組織としての会社。つまりヒョウ局を彼らによって運営させることにしたのだ。

『メールマン・Corp』と名付けたそれは、ここで雇われた腕に

自信を持つ者たちに。

アキラから提供された装備が与えられ。それぞれの居住地間を結ぶ血管を流れる血液のように、情報や荷物を行き来させることになる。

そしてこれは当然の事ミニッツメンとの関係は深い。

メールマンを襲おうというレイダーがいたとしても、彼らの近くには常に巡回するミニッツメン達が見え隠れしているはずだ。

なにか騒ぎが起こればたちまちのうちに殺到してきて、脅威の排除が開始される。

さらにここで得た居住地間の物流から入る利益は、ミニッツメンの装備や給料にもあてることができ。

今は協力してくれている居住地からの支援で武器と制服しか配られていないが。これにできればアーマーやパワーアーマーまでも加えることができれば、さらに頼もしい存在へと成長してくれるはずだ。

ガービーはこれらの全ての意味を理解はしていないようだったが。それなりに納得をしたうえで、私に意見に異議を唱えることなく素直にすべてを実行にうつしてくれた。

一般の兵士達はさらに理解は期待できない様子を感じていたが、私が出来ることではなく。時間がきつとそれを解決してくれるだろうと今は期待するしかない――。

私はこれらにただ、「命令を下した」だけだった。

自分が監督し、現場で指示を出したりはしなかった。代わりにガービーの求めに応じて前線に立つとボストンの脅威を兵士達を鼓舞して叩く日々をすごしていた。

2カ月を過ぎて気がつく。

いつしか私は自分の体にまとわりつくような疲労感に悩まされるようになっていた。

ガービーを熱烈に支持する兵士達からの無理解が、戦場から勝利と

共に兵士達を連れ帰る私の背中にむけられていた――。

軍隊時代でも学んでいたことだが、上官は友人ではない。尊敬と恐怖、規律と結果。これらを繋がっていることを理解させる存在であると理解させられればいい。

だが民兵である彼らにとってはガービーの掲げる正義の輝きを愛している。

私が求め、与えることに常に彼らの考える「ガービーの正義」という定規をつかって考えようとする。認めることを嫌う。

そうやって気がつく、私はミニッツメンの制服をハンガーに置いていた。

上官の孤独とやりに耐える方法はすでに知っていたが。

兵士ではなくヒーローゴっこをした連中なのだとここでようやく私は理解してしまった。そうなることのできることなど――。

代わりに手に取ったのは、あの探偵から感謝の気持ちだと送られ、アキラによって不思議な改造がされた古ぼけたトレンチコートだった。

ダイヤモンドシティの探偵の相棒は、そうやって誕生したのだ。

|||||

探偵の仕事なんてのは一期一会ってやつだね。

知り合うことはあっても、触れ合うなんてことはほとんどないから。

別れたらそれっきり。再会しても、感謝されることもあるし。迷惑に思われることだって多いものさ。

残念ながら探偵は、ヒーローじゃない。

なにか悪いことがあるば、ハッピーエンドはやつぱりこない。

依頼人に持ち帰るものが悪い記憶しかないなら、確かに俺のこの姿は連邦に暮らす人々が見て気持ちのいいものじゃないだろうってことぐらいわかっている。

そう考えると今のこの瞬間は、案外と幸せなものなのかもしれない。

探偵の相棒はこれまでもいたが、彼らは俺にとって決して友人ってわけじゃなかったからな。

例えばあのマーティ・ブルフィンチなんかはそうだ。あいつは探偵の仕事に、夢と野心をかけていた。謎、女、スリル。そしてもちろん大量のキャップ。

それが彼の仕事に求めるほぼすべてだった。

レオがこのおいぼれ探偵を救出する前に会った時は、大量のキャップが必要だとあの野郎はのたまわったらしい。

いかにも彼らしいことだと思う。

だからその最後もまた、彼らしいものだったといえるだろう。

——ニツク、俺の仕事にはデカイ夢が必要なんだ。

あいつは半人前の頃から、いつだってそうだった。

だから本物かもわからぬ宝の地図を手にし、心のままにスーパーミュータントのアジトに入り込んでいった。呆れるほどの行動力、見ものだったよ。

だが、感心することはなかったし。褒めようとだって思わないな。なぜならあそこで俺はレオと死体となったアイツそこで会えたのだから。

そして俺達は今、あのバカがやり残した宝探しの最後をやっている。

かつての相棒の無念を、てやつき。馬鹿なことだって、自分でもわかつちやいるんだがね。レオもよく、この老いぼれにつきあってくれたものさ。

ゴールにあつた墓を掘り起こし、棺桶の中には一振りの剣といくつかのインゴット。これがあいつが求めた夢の正体だ——。

「歴史にロマンを求めるような奴じゃなかったが、見ればなかなか立派な剣じゃないか？」

「——ああ」

「バカなことはやめるんだと、野郎には何度も言っただけだ。聞かせてやっただけだ。最後まで聞かない奴だった」

「厳しいな、ニツク。あんたの元相棒だろ？」

「ああ。あいつにもひとつ良いところがあった。俺の事務所を出ていくと言っただけで、本当に実行したとき。あの後、俺にその顔を見せにあらわれなかった」

「いい奴、ではないようだ」

「それは間違いじゃない。あんたも、あいつには会ったからわかるだろう？」

「仕事の依頼を断られただけだし。人となりを知るような機会はなかったよ」

「べつにそれでいいのさ。尊敬や好意とは、かけ離れたクソ野郎だった」

——BEEP!BEEP!

レオの左腕にあるピップボーイが音を立てて警告音を発する。

「驚いたな、ニツク。この剣は、放射能を発しているようだ」

「なんだって？」

「ガイガー・カウンターが反応している。間違いないようだ」

「やれやれ。やっかいな宝物ということか」

そんなものを人間に持たせていいわけがない。

レオの手からそれを取り上げる。人造人間には効果はない、とは断言できないが。悪いものだとはわかっているのに、それを持たせておくわけにはいかない。

「——あ」

「どうした、レオ？」

「アキラから連絡が来ていたようだ」

「ほう。あの若いの」

「どうやらテスト飛行は成功したらしい」

「そうか。ミニッツメンに帰ったら、あんたはまた忙しくなりそうだな」

「ああ、そうかもな」

気になる答えだった。

まるでどうでもいいというような、答え方に思えたからだ。

それにしても、この連邦で墓地に長居していい事はほとんどない。

宝の地図に従って、目指した墓荒らしも終わったので俺はすぐにそこを立ち去ろうとレオに持ち掛けた。

チャールズ川の河口に立ち、海と川のあいまいになる境目を黙って見守る。

この辺りはレイダーが活発に活動していることで知られているが、そういえば最近は妙に静かになってしていると聞いた。

なら、この鼻の曲がるようなにおいを放つ水辺で、連邦を感傷的に眺めるくらいのおわずかな時間は許されるかもしれない。

「レオ、あんた疲れているんじゃないか？」

「ニツク？」

「エリーが何をあんたに言ったか知らないが。ちよつと、気になつてな。」

いや、迷惑だなんてちつとも思つちやいないんだ。実際、この老いぼれはガタが来ているのは確かだし。若くて頼もしい、あんたみたいな相棒が居れば、どんな探偵だつて心強いのは確かだ。

「だけどな——」

エリーの奴が彼に渡したという、俺と同じトレンチコートにサンダラスで目元を隠した彼を見る。

見事な体躯は、今も彼を少しも弱つたようには見ることはできない。

だがあの時、地下の Vault に現れた時の彼にはあつた引力というか、重力にも似ている強く惹きつける物は失われているように思う。長い付き合いではないが、このわずかの間に彼が経験したことを思えばそれも当然だろう。

「改めてあんたにちゃんと聞いておきたいことがあるんだ、レオ」

「なんだい？」

「うん……その、あんたに起きたことだ。あんたの家族について」

「——ああ」

「あんた見た目がタフガイにしか見えないし。めったに弱音を口にするような性格とも思えない。

だから一度、正面からしっかりと聞いておかなくちやならないと思っただんだ。

色々あつただろう？

あんたの奥さんや息子。そしてケロツグの事。

だから——あんたが大丈夫なのかを知りたいんだ」

レオの顔は見事に引きつっている。

それでも怒るわけではない。怒っても構わなかったのだが、彼はそうはしなかった。

「探偵にも聞きにくそうな話だね」

「ああ、確かに。しかもアンタはその上、この連邦じゃミニッツメンまで背負っているじゃないか。

周りにアンタが気を使うことはあつたとしても。反対にそいつらがあんたを心配することはないんじゃないかって思ったのさ」

「——さすが名探偵、その通りだよ。ニツク」

そして俺は見た。

傷ついて、血を流し続ける男の姿を。

なにもできない、変わらぬ現実を受け入れることが出来ず。諦めがつかないことが、苦悩となって隠されていた表情がそこに浮かび上がってきた。

その何があろうとも揺るがない声は、苦痛と怒りによってか。低い絶望を伴うそれへと変化する。

「どうだろうな、ニツク。

愛した家族はもう、ボロボロだよ。

過去の世界から、いきなり連邦に放り込まれてしまったんだ。

あきらめなければきつとなんとかなる、ただそれだけを希望に自分を騙し続けてきたんだ。なのに、今の俺は何も手にしていない。

こうやってあんたとまだ好き勝手にやっているけれど。そのせいでVault111の元居住者はたいした有名人になろうとしてい

る。命だつて狙われるだろうし、こんなはずはないって泣き言だつて許されないんだ」

「……」

「ガービーは、ミニッツメンは、それでも私の力を必要としている。やらずにちやならない、彼らのために。人々のために。」

「だけどそんな姿をもしかしたらアキラは——あの賢い若者は見抜いているのかもしれない。若い彼の目から見たら、私なんて老いた兵士くらいにしか見えていないだろうね。無力なんだ、どうしようもなく。」

「わかるだろう？」

「どうやら思った以上に重症だったらしい。」

「途方に暮れて、怯え、ままならない現実に頭がおかしくなりそうってことか。」

「だが、あんたは理解するべきなんだ。ここまで戦い続きであったかもしれないが、簡単なことではなかったし。時間だつてそれなりに多くのものを必要としてきたんだ。」

「当然だが疲れているんだろう。希望はない、そう絶望することもできなくて苦しんだんだろう」

「……」

「この老いぼれにもその経験はあるんだ、レオ。」

「あれは初めてダイアモンドシティを見つけてホッとした時だった。町には欠点は確かにあるが、連邦じゃやっぱり一番の場所だ。」

「当然だが、ついたばかりのこの人造人間に人々は優しくは接してくれなかったさ。人造人間はインスティチュートが関わっていて、それらは恐怖の対象なんだ。」

「今だつてそうだが、当時のそれは。そりやもう酷いものだった」

「そうなのか？」

「ああ——当時はみんな“壊れたマスク”が心配だつて。あの町では夜も眠れない騒ぎが続いていた。」

「何かの理由で、そんな人々の生活を脅かすためにやってきたと思われていたんだ。食料を放射能で汚染させるとか、飲み水に毒でも入れ



るためにやって来たんじゃないかって話だ。

それを彼らは俺の目の前で、隠れることなく言い合っていたよ」

敵意と恐怖に染まる目の数々が全てであり。

理性と知性の言葉はひとつもかけられることはないだろうと、そんな予感はそのだけで十分に理解できるものだった。

「それであんたが無事に済んだとは思えない」

「理由があるんだ。彼らには俺を拒絶できない事情があったんだ」

「それは？」

「当時の市長の娘を助けた。」

俺にとっちゃただ、それだけのことだったが。彼は——当時の市長はその行為を大いに称えてくれたんだよ。

それだけじゃない。俺にあの家を与えてもくれた。周囲の大勢は、そんな馬鹿なことはやめろと抗議の声をあげていたが。彼はそれをまったく気にする風ではなかった」

「ひどいな」

「自分から町に入ったら油断はできない、最初はそう考えていた。」

だから正直でいようと決めたんだ。自分を偽ったり、隠そうとはしないようにした。自分を弁護できるのは自分しかないと思ったから、何かの騒ぎに巻き込まれたとしても。自分に正義はあると、ちゃんと言い返せるようにしたかった。

考えてみれば、とんでもなく馬鹿なことだと今では思うこともあるが。当時はそれがよかったんだと思う」

「そうなのか？ たったそれだけで、信頼を得ることが出来た？」

「いや、確かに楽なことじゃなかったよ。今でもあそこのマーケットじゃ、俺にモノを売ってくれない店があるんだから」

人造人間という存在へ、畏怖とあこがれを併せ持つ奇妙な店主の顔が思い浮かぶが。すぐに忘れることにする。

「自分の家って奴を持つと、次に俺は何かを始めなくちゃならないと思っただ。」

誰もしたがない仕事をかき集めるようになったのは、その時からだ。でもあれは探偵というより、なんでも屋って感じだった。

誰かの話を、俺にただ聞かせてくれるだけで解決する話が。このみ  
なりのせいでそれが出来なくて途方に暮れることのほうが多かった。  
それでも始めただけの価値はあったんだ。

市長と市長の娘の事を、彼らは忘れたわけじゃなかった。

そのうち、誰かが必ずニツクの名前を口にするようになっていっ  
た。

トラブルだって？ならニツクに話してみたらいい——そうやって  
助けを求めてくる人達が訪れるようになっていった」

「それが探偵、ニツク・バレンタインの誕生か」

「良い方向へ転がり始めたのかどうかまだわからなかったが。それが  
自分にとって普通なのだと、そう思えたんだ。

後で思ったよ、その頃が自分の居場所って奴を作れたんだと気がつ  
いた。ある程度の時間と努力を費やせば、どこであつたとしてもきつ  
とほっとできる居場所は作り出すことが出来るんだってな」

「時間と、努力か——」

「俺は別にあなたに約束できる立場じゃないが。それでもあなたの話  
を聞いて、付き合いの中で思ったことがある。

あなたはやっぱりまだ道の途中でしかなくて、だからなにかに押し  
つぶされようとしているんじゃないかって。俺の話が、そんなアンタ  
の役に立たないかと思って話したかった」

「ニツク」

「いや、わかってるよ。あなたは確かに厳しい状況に立っている。

だが考えて欲しいんだ。V a u l t から連邦に出てきたときから、  
状況は大きく変わってきたはずだ。時間はかかったが、確かにあなた  
は前に進んではいるはずだ」

この探偵と同じく。あのサンクチュアリには老いて幻想の中に未  
来を視る老婆も言っていた。

その先にあるのは決して良いものばかりではないのだ、と。そして  
私はそれでも歩みを止めることなく、今日まで来ている——。

「ありがとう、ニツク。少し、元気が出てきたよ」

「そうか。なら、先を急ごうか？」

今のニックにとって、ボストンコモンは恐ろしい場所とは言わ  
ない。

少し前に、ここを引き裂こうとした元Vault居住者のひとりが  
今の相棒なのだから。

しかしそれでも、あえてその日はグッドネイバーで一泊すること  
を選んだ。

ニックはレオと話して、それが必要なことだと思ったのだ。

|| || || || || || || || || ||

メモリー・デンにニックは訪れると、店主のイルマにDr. アマリ  
との面会を希望した。

彼がグッドネイバーへと訪れたのはこれで理由があったのだと判  
明したが、それがなんであるかはわからない。

そしてそれを知らないレオはひとり、サードレールで時間を潰して  
いた。

その彼の元へ、静かにトラブルが近づいていく――。

「お兄さん、ここでは見ない顔ね？」

「――そうだね。ここを訪れたのはそういえばまだ2回目かな」

「本当に？ということは前回、この店には寄ってくれなかったってこ  
と？」

あのダンスとパワーアーマーを着たままでここに乗り込んでし  
まったのだ。

彼の性格もあつたし、酒場で一休みとはならなかっただろう。

「急いでいたから。それに、この町の噂も聞いていたつてのものもある」

「あ、悪い噂でしょ？わかるわ」

「でも、そればかりじゃないみたいだ。今回はそれを見つけることが  
出来た」

「そうなの？」

「ああ、例えば君の歌かな。とても良かったよ、オリジナル？」

「そうよ。私が作詞も作曲もしたの、気に入ってくれたのなら嬉しい

な」

サードレールの歌姫、マグノリアは妖艶に微笑みを浮かべる。

ニツクに本心をさらしたことで、なにか重いものを肩から降ろせたという感覚が久しぶりにレオの心を躍らせた。

「隣に座らないか？一杯おごらせてほしい」

「飲むだけ？」

「おしゃべりも。君の話は、とても楽しそうだ」

「ふふふ、ありがと。私もあなたに少し興味が出てきたわ」

赤いドレスに隠されたヒップが椅子の上に乗るだけで、目の端にチラつく。

思えばケロググを殺してから昔の兵士に戻ったつもりになって、自分はただ冷酷な殺人機械のふりをしていただけのようない気がする。

人間のレオは——もっと情熱を持った熱い血を持つてはいなかったか。

ワインを注文し、彼女はグラスを傾ける。

「フフツ、私。あなたから何か特別なものを感じる。何も言わないで、こういうの当てるのが私は好きなの」

「わかった。何も言わない、当ててみてくれ」

「激しく敏捷な、躍動する力強さを感じる。それだけじゃないのね、歌にも興味があるみたいなのを言っていた。

きつと私と同じパフォーマーなのかしら。口のほうも達者なんですよ、どんな状況でも相手が聞きたい言葉を自信をもって口にできる強さを持っているの」

「ははは、そりゃ。悪い奴に聞こえるよ」

「悪い男って、それでも魅力的でしょ？悪くとらないで」

「わかった。そういう風に考えるよ」

「前は急いでいたって。それじゃ、今回はこの町に何をしに？」

「帰り道のひと時、強い酒と心に響く音楽を求めて——」

「つまりこのサードレールと、私に会いに来たって言いたいの？」

「下心はないけど、もしそう聞こえたのなら。下着の中にある後悔を隠せてないってことかな」

「なにそれ。なんだかあなたと仲良くなれそう」

「それはよかった」

ワイングラスはすぐに空になる。

彼女を放したくなくて、私は熱のこもった言葉で引き留めようとする。  
みる。

「お酒に強いんだ？」

「そうね。そうなるともう、ここに座り続ける理由もなくなっちゃう」

「残念だな。もっとお互いを知りたいと思っていただけ」

「そう。そのために私。あなたになにをしてあげたらいいのかしら？」

遠い昔、妻のノーラを会ってデートに誘った夜を思い出す。

まだ私は若造だった――。

「ロマンチックなスタイルがいいかな。そう例えば、2人で。街の明かりの下、夜の散歩とか」

「散歩だけ？ここはグッドネイバーよ」

「キミと話したいだけさ。君の音楽、歌の全てを」

彼女はコートをとってくるとだけ口にして、ついに席を立ってしまった。

だが、私はそれでも満足している――。

## アンチ・メカニスト (Akira)

冬の寒さがその日、まるで忘れたかのように。

春の到来を信じてもいいくらいなの、不思議と晴れた日となった。連邦の街道をいく商隊も、そんな太陽の下で久しぶりに気を緩めているのがその歩き方を見ればわかる。

しかしそれを見つめる、冷たいレンズの存在――。

それはメカニストの打ち放ったロボット軍団のひとつ。

隊長を務めるロボブレインは、プログラムに従い。さっそく攻撃命令を下すプロセスを開始する。

まず先陣を切るのはアイボットだ。

彼らが“一番槍”とばかりにメカニストからのメッセージを流しつつ、レーザーで攻撃、目標のかく乱を開始すると。

獲物の左右に別れて、近接戦闘に特化したMr. ハンディがグルリと奴等の前方へと回りこむように移動し。

最後に残るプロテクトロンや、ロボブレイン。さらにはセントリ―ボットが押し込むように、にじりよってあの人間達を殲滅する。

奇妙なことは、メカニストのメッセージのそれだ。

――注目せよ、連邦の人々よ。私はメカニスト。

――警戒する必要はない。私はこの混迷を極めた連邦の現状を憂い。間違いを正すために立ち上がった。

――このロボットたちは皆の守護者であり、護民官であり、仲間でもある。彼らは休むことなく動き続け、連邦が救われるその日まで止まることはない。

――我らとともに立ち上がり、そして来るべき平和の時代の到来を実現しよう。

襲撃者が口にするには、不愉快をおぼえるほど真逆のメッセージだが、それは戦術的なものだど解釈すれば別に不思議はない。

実際、こちらを味方かと錯覚した間抜けな獲物は数多くいたし。ロボットたちはそれに対して、当然のように殺戮でもって答えてやって

来たのだから。

だが、どうやらメカニストは休むことなく活動を続ける自らの軍団の働きには満足してはいないらしい。

ごく最近だが、ロボット達に新しいメッセージに変更するよう指示がやって来た。

だがロボットたちはその中身には気にしない。やることは変わらなかったし、命令が求めた“結果”こそが彼らには重要なものだから。

しかし、この時は違った。

いよいよ、アイボットが突撃しようとした。まさにその時、どこからともなく伸びてきた高エネルギービームの一撃がそれを破壊し。勢いを失い、地面にボールのように激しく叩きつけられ。転がっていくそれを見て、メカニストのロボットたちはようやく気がつくことができた。

いつからかはわからないが、こうやって彼らが動く時をじつと待ち構えていた。自分たちをこそ獲物とする、同じく冷たい機械の目が近くにあったことを。

超長距離の狙撃を成功しても、エイダの声に喜びは少ない。

戦闘機能が、中距離戦闘へと切り替える中。自分の率いる部隊に命令を与える。

「ローグス、攻撃開始。メカニストのロボットを排除せよ」

『『『了解』』』』

エイダの隣にいた、ダークグレイのアサルトロンは遮蔽装置を起動させ、透明化を開始し。

前面にエイダと並んで出ていくプロテクトロンとセントリーボットは、メカニストのロボット達とは比べ物にならない正確さと圧倒的な火力をともなう攻撃で自分たちの存在を周囲にはつきりと知らしめてみせた。

メカニストのロボブレインは混乱するが、すでに獲物である商隊はこの騒ぎに気がつき。巻き込まれてはたまらないと、大慌てですでに

逃げ出してしまっていた。

ならば無駄な戦闘をやめさせ撤退をしようにも、明らかに性能差を感じさせる相手のロボット集団からの正確な射撃と火力は。

見る見るうちにこちらの味方を破壊し、それどころかいつの間にか接近していたアサルトルンによる近接戦闘が始まり。一気に殲滅という結果に転がり落ちるのを止めることが出来ない。

「エイダ、任務完了」

「ローグス、見事な勝利でした。戦闘を終了、索敵と回収の後。スロットグへと通常任務に帰還します」

「了解」

エイダ自身も、ローグスと並んで、破壊したばかりのロボットの部品回収に入る。

最初の攻撃で沈黙させた。あのアイボットの機能は、完全には沈黙していなかったらしい――。

――連邦の人々よ、私だ。メカニストだ。

――この混乱する連邦では今も罪もない人々は襲われているのに。ついに彼らを救うロボット達にまでその破壊を広げる新たな疫病神があらわれたことをここに警告する。

――奴等は己の醜い欲を満たすためだけに、命を奪い。さらには私の仲間までもその手にかけている。

――奴等は平和な時代の到来を妨げるだけではなく、この世界の存続をこそ望んでいるのだと宣言しているのだ。

――私はそれを許すつもりはない。

――疫病神共が我らの進歩を苦々しく思っているのは間違いなく。これはそのことへの返礼である。

――そして次は、疫病神共の正体を暴き。その許されざるすべての罪を償わせてみせる。連邦の人々よ、これは私からの約束だ。

(メカニスト、傲慢にして破壊と狂気の悪魔)

ロボットであっても、エイダの記憶装置に苦悩の二文字を刻んだ相手の存在の言葉に。回路を焼き切るのではないかと思うくらいの激



しい熱と、奴が触れた厄病神というそれが、アキラや自分達の存在であると気がつくことができる。

そして確かな手ごたえに満足する、自分と仲間の存在が敵に認められているというなかなか複雑な“感情”めいたものにしばし翻弄され、動作を止めた。

だが、それは長いことではない。

「回収を完了しました、エイダ」

「撤収しましょう、ローグス」

アンチメカニスト、そう呼んでいいものかどうかわからないが。

彼らの部隊がそうであるように。エイダとローグスも、目的が達成されればすぐに次の行動に移っていく。

5分と立たずにそこは再び自然と静寂が戻り、そこで戦いがあったことなど連邦も忘れてしまったようだった。

|||||

スロッグと呼ばれるグループが集まって生活する農園があった。

ここを立ち上げたワイズマンは、どこからともなく戻ってきたロボット達が。再びこの居住地の整備に手を貸してくれる姿を、嬉しそうに見つめていた。

(まさか、ここまでやってくれるとは思わなかった)

グループとなって厳しい日々を過ごしてきただけに、相手がロボットであったとしてもその援助に人のぬくもりにも似た温かさを感じて涙ぐみそうになる――。

あの時、連邦がようやく静かになったと思ったら、スロッグに大量のロボット達があらわれた。

当時のワイズマン達にしてみれば。巷に聞く、パラノイアなメッセージと共に襲撃を繰り返す狂ったロボット軍団について目をつけられたのかと怯えたのは無理からぬことだったと言える。

隠れつつも、ここから逃げるかどうかをうかがっていたら。集団の

中から一台のロボットが進み出てきた。

「私の名前はエイダ。このスロッグの住人、ワイズマン氏にメッセー  
ジがあります。聞いてもらえませんか？」

繰り返しそう言われては、ワイズマンも観念するしかなかった。

出ていくと、礼儀正しいロボットはある人物からのメッセージを伝  
えるといってホロテープを再生した。

『スロッグの住人、ワイズマンにこれを送る。かつて彼をサウガス製  
鉄所で助けた知り合いだが、覚えてくれているだろうか？』

若い男の声があると、あの日のイエローマンの姿がすぐに思い出す  
ことが出来た。

驚いたことに彼はミニッツメンであつたらしい。新たにスロッグ  
にも参加を呼びかけつつ、何か必要なことがあればこのロボット達に  
申し付けてもらつて構わないと言つてきた。

「この参加つてやつをしたら、本当にミニッツメンは我々を助けてく  
れるのかい？」

「この件に関しては、私はマスターから大使として任命を受けていま  
す。」

『参加する意思がある』とおっしゃっていただけるなら、すぐに最後  
のミニッツメン、プレストン・ガービーから詳細が届く手はずになつ  
ています。彼は人々の平和のためなら、協力を惜しまないという人物  
で知られているはずですよ」

「君の主人にはすでに私も、このスロッグも救われた恩がある。」

わかつた、スロッグはミニッツメンに協力する意思があるよ」

そこからの動きは本当に早かつた。

重武装のロボット達はスロッグの警備を担当してくれていると  
思つたら、いきなりどこからともなく大量のゴミを抱えてきた若きミ  
ニッツメン達があらわれ。このスロッグにそれをおろして立ち去る  
と、ロボット達はそれを使って居住地のためにと建設を開始しはじめ  
た。

今ではこの場所はもう、まるで別物だ。

建物の上に、高床建築でもつてもう1階の住処が増築され。屋根には危険なレーザーを発射するターレットがいくつも設置されている。街道沿いにはしきいのようにコンクリートの壁で守られ、プールサイドにはなんとここで商売が始められるようにと屋台までが用意された。

——まるで夢のようだ

他にこれ以上何を望めと言うのか。

何度も味わう感無量の境地にあるワイズマンに、近づいてきたディアドラが声をかけてきた。

「なあに？また、ニヤニヤとしちゃって」

「そうかな？気がつかなかったよ」

「嘘よ。でも、気持ちはわかるわ。本当に凄いい変化よね」

「——ああ」

「私もここで、本物の店を構える日が来るとは思わなかったわ」

「ミニッツメンの巡回が通るし、商人も来る。これからはもっと、もっと。たくさんの人が入りが増えていくはずさ」

「怖いわね」

「ん？」

「こんないい事ばかりが続くと、なにかあるんじゃないかって考えちゃう自分がいるの」

「……そうだな。苦しいことがあまりにも多かったからな」

まだスロッグは本当に参加するとは断言していない。

それは噂のガービーとやらがまだここに来ていないという事情があるが。そのミニッツメンは参加を決定する前に、すでにこれほどの事を自分たちにしてきている。

これでは後で何かがあったとしても「参加できない」とはなかなか言い難くなるということか——。

「ワイズマン、あのロボットさんたちは説明してくれたの？」

「なんのことだ？」

「あのプールサイドの、あれよ」

「——いや、ミニッツメンで使わせてほしいということだけだ」

それはプールサイド側の空き地に作られていた。

コンクリートで作られた、ただの四角形の台座であったが。4角には照明装置が設置され、なぜかそれはサイレンと直結するように配備されていた。

ミニッツメンが使うもの——年寄りのグールならば、それがかつての世界にもあったことを思い出せる。いや、どうかんがえてもアレしか思い浮かばない。

テレビのニュースが伝える、前線基地の空を飛んでいたものが降りるためのもの——しかし、そんなはずは……。

|||||

曇り空、夜明けを直前にしたコベナントでは、すでに出発の準備に忙しくしていた。

遮蔽装置が解除されたベルチバード、ロメオ・ワンのエンジンは温まり。アキラは仲間たちの顔を見回すと「今日は大忙しの1日になりそうだ」とだけ告げた。

実際、この日のベルチバードの飛行計画はこれまでのそれとは比べ物にならない距離を飛ぶことになっていた。

コベナントを発つてまずはグレーガーデンへ。

そこで前日から待機しているであろう、ガービーとミニッツメンの部隊を回収。

今度はそこから、スロッグに向けて大勢を乗せて運んでいく——。だが、このくらいのことはもう十分に可能であるはずだとアキラは自信を持って保証を口にしていった。

ロメオ・ワンはその期待に応えた。

驚くことに昼過ぎにはスロッグに到着し、ガービーとワイズマンはようやく直接の対面を果たした。

アキラはその間にエイダとローグス、アンチメカニストとして活動していた彼らと再会を果たした。

そしてマクレデイ、ケイト、キュリーと共に。ローグスとエイダはコバナントへここから徒歩で帰還するようにと新しい命令を与える。ロメオ・ワンにはこれほどの多くのロボットを収納して飛ぶことは考えられていなかったのだ。

「おい、ボス。あんたは来ないのか?」

「悪いけど、これからハンコック市長と空の散歩に出る予定がある」  
「俺達を放つてか? ポンコツ軍団の面倒を見ろって?」

「エイダの命令は聞きたくないんだろう? なら、頑張ってくれよ。マクレデイ大統領」

「おい、ボス!」

「ぷぷつ、なにそれ? 大統領って?」

「なんでもない! なんでもないぞ、クソ」

アキラは騒がしい護衛の2人を放つて、寂しそうな顔をするキュリーの前に立つ。

「空を飛ぶのは好きとは言えませんが。一緒には連れて行ってもらえないのですか?」

「連邦の北東部からの帰り道は、なかなか刺激的だと思うけど。嫌なのかい?」

「そういう意味ではないのです」

「——エイダもローグスも、長いこと頑張ってくれた。あいつらをきちんとコバナントに迎えたい。本当は自分も行きたいけど、信頼できる君達に頼めるなら、ぜひお願いしたいんだ」

「わかりました。我儘は言いたくないのです」

「いい子だ、キュリー」

「アキラ。私はあなたよりずっと年上なのです。200年を越えています」

「——それはロボットのキュリーであつて。人造人間のキュリーじゃないって反論したいけど、今はやめておくよ」

「それがいいのです」

アキラが笑顔であつたのはそこまでだった。

すぐに厳しい表情に変わると、ハンコックに顎でロメオ・ワンに搭

乗するように促していく——。

マクレデイ達は飛び去って行くロメオ・ワンを見送ると。

自分たちは2時間以内にここから出発すると、宣言した。ここからコベナントまでは数日が必要となる距離がある。

|||||

僕が作り出したベルチバード。ロメオ・ワンには多くの機能が搭載されているが。

一番の特徴は何かと言えばパイロットだろう。

捕らえた僕にアイツらが与えた、あの個人用浮遊移動装置フライヤー。あれのAIを僕は回収し、このロメオ・ワンに使っている。

この「使っている」って表現が、搭載云々と違うところで。また複雑であったりするわけだが——。

かつてフライヤーと僕が呼んでいた相棒はバスケットボールくらいの大きさの球体の中に収められ、今はコベナントのあの秘密のエリアにドンと設置されている。

残念ながらフライヤーとしての僕とのわずかな時間をすごした記憶は失われたが、機能の方は再現できた。

そこで僕はアレに大型の記憶装置とシミュレーター装置に直結させ、終わりのないベルチバードの訓練を続けさせることにした。

これのおかげで700時間をこえる飛行経験を蓄積し、今もゆつくりとパイロットとしてあらゆる状況に対処できるようにとレベルアップを続けている。

ロメオ・ワンにはこいつの最新のコピーユニットを搭載し、この飛行も終わったら。その情報をフライヤーの元へと持って行って、新しい経験値にもらうようになっていく。

B・O・S.にとってベルチバードは飛行機かもしれないが。

僕は飛行物体——はつきり言うと、人を乗せて運ぶロボットを作っ

たというのが多分正しいと思う。

このAI搭載型ベルチバードは、あくまでも秘密裏の輸送任務が主眼であるため。

兵士を回収するための強行着陸などは現在の所考えてはいないが、予定されている3段階の計画が進めばまた状況も変わるかもしれないだろう。今はまだ第1段階を追えたただけの状態、先はまだまだ長いね――。

とはいえ、当面はこのロメオ・ワンと。数週間のうちに完成する予定のロメオ・ツーを使い。

増援のミニッツメン達を北東部へと間断なく送り込む支度は整えられつつある――。

「どうやら俺と話したいことがあるらしいな、小僧」

「そうだね」

「俺も、お前には聞きたいことがあるが――まあ、しばらくはこの空の旅って奴を楽しむのもいいだろう」

「……」

この2人だけの飛行経路を僕はハンコックには言っていない。

でも、どうやらこの人はなんとなくだが。僕がどこに彼を連れて行くこうとしているのか、わかっている風に思えた。

「どうしてもこの目で、確かめておきたかったものがあるんだ」

「ほう」

「B. O. S. の飛空艇」

「こいつでアレの側を飛ぶつもりなんだな。無茶をする」

こんな軽口を叩きあっている間にも、このヘリの前方左手にはすでにあのプリドウエンとやらがゆっくりと大きくなって迫ってきているのだ。

「こいつは別に、戦闘は出来ないんだろ？」

「装甲は厚めにしてるから、耐久性はあるよ」

「逃げられるってことか？」

「残念、そのかわりに足が少し遅いんだ」

言いながらも僕の目は外に浮かぶ巨体から目を離せない。

しかしロメオ・ワンはプリドウエンの船尾とボストン空港のそばをすいとあつさり通り過ぎてみせた。

「どうだ？満足か？」

「少しね」

言いながら僕は脳裏に刻んだ、プリドウエンや空港などの見下ろした風景を思い返す。キャピタルのB・O・S. はやはりしっかりと空港に防備を構築しているように見えた。

今のミニッツメンをあそこに叩きつけようとする、死体の山を作ることにはかならないだろう――。

「アキラ、俺からもひとついいか？」

「なに？」

「確かお前、プレストン・ガービーにコベナントにあつたものを全て渡したと言ったそうだな」

彼が言ったことは、コベナントの犯罪を証明するデータについてだと思つて、僕はそのまま答えた。

「言つたね」

「嘘だな、お前は全ては渡していない。違つか？」

「――なんでそう、疑うのかな？」

「このベルチバードって奴を見たらそう思うからさ。ロボットを、AIをパイロットにするなんてどうかしているぞ。」

そうなるとお前がマッドでイカれているだけか。なにかとんでもないものを手にしているのか、どちらかってことになる」

「たつたそれだけのことで？」

「善人の顔を見せたいなら、相手を選べってことさ。俺にそいつはきかないぞ」

役者が違うんだよ、両手を広げて余裕のあるハンコックの言葉には説得力がある。

いや、そうじゃないな。

コベナントからこつち、僕はきつと無理を通し過ぎているのだ。それだからあのマクレディから怪しんで、策略化の如く僕にはなにか壮



大でち密な計画があるんだとか考えられてしまっている。

僕は自分のピップボーイに入っているデータを呼び出すと、それをハンコックにも見えるように腕を差し出した。

「なんだ？これは人の名前のようだが」

「そう、これはあのコベナントを支援した連中の名前のリストだよ」

心の中を読まれたくなくて、僕の表情は今死んでいる。

感情が噴出せば、それはたちまち業火となって誰かの命を奪いに行きたくなる衝動に駆られるはずだ。

「それは興味があるな」

「ほかにもいくつかあるけど、今見せられるのはコレだけだよ」

「この空飛ぶ棺桶も、そのひとつか？」

「違う——本当だつて。これは、ちよつと凄いものをたくさん目にする機会があつてき。そこを立ち去る前に、ちよつと面白そうなものをひとつふたつ、抜き出してきたんだよ」

こつちも正気を疑われたくはないので、素直に宇宙から持ってきてきたとは言えない。宇宙人から地球を守っている、守護者達がいるなんてね、信じてもらえないさ。

「本当はコレ、もつと楽に完成すると思つたけど。想像以上に苦勞させられたさ」

「自慢にも苦勞にも聞こえないぜ。その言い方じゃ」

「ウンザリさせられただけ。だからこれでいいんだよ」

「そうかい……ところで、さつきから南に方向をむけてからかわってないみたいだな。次はどこに行くつもりだ？」

「それじゃ、今度はこつちの番だ」

僕は次の疑問を口にする。

——連邦の南は、今どうなっている？

|||||

混沌だ。

ハンコックの返事は短く、そして簡潔なものだった。

「いいか、アキラ。ガンナーってのは確かに脅威ではある。

この連邦で最も組織化された巨大な傭兵集団だし。装備はしつかりと選び抜かれ、戦闘に関してはプロフェッショナルなのは間違いない。

武装組織としての命令系統は上から下まで厳格に守ることを要求しているから、ナメて造反など考える奴はまずいない」

「——マクレディは抜けたと言ってたけど？」

「そりゃ、完璧ってワケじゃないさ。組織のやり方が肌に合わないって奴は当然出てくる、あいつのような一匹狼じゃな」

「なるほど」

「だが、連邦の南部に秩序のようなものが見られない理由もまた。このガンナーに問題がある。

奴等にはB・O・S.のような組織としての目標がない。組織の外側の政治には興味がないと言ったらしいのだろうか。

とにかく自分たちが最強の存在であることと。それを維持することのみが目的になっちゃまっている」

——だから、混沌しか生み出せない。

なるほど、改めて学べば学ぶほど。百害あって〜と言うしかない存在なのだと理解するしかない。

歪んでいる、どうしようもなく。

「お前はともアレをどうにかできると考えているようだが、俺はまだ信じられんよ。南部を支配していると言える程度には、あいつらは連邦に広く展開している。

そいつをいちいち叩き潰したからって、あいつらを簡単には排除できると考えるのは間違っている。家の中からローチを全滅できる。綺麗に締め出せると、啖呵をきってみせるようなものだぞ」

「それは——あの時は、考えている計画でもいいから聞きたいって言うからや」

「なるほど。現実味は無視していたってことか。なら、これで学んだろ？」

「まあね」

ところどころを崩れている高架橋と海岸沿いを見下ろしながら、僕はボウッと自分の計画を見つめなおしていた。

ミニッツメンをボストンに放り込んだ影響から、ガンナーはそれを無視できなくなるはず。

そうなれば当然、衝突するってことになるが。それをどうにかボストンの南側で出来れば、ミニッツメンとしても面白い状況に転がせはしないか？

(——この辺のことはレオさんに任せた方がいいんだろうな)

突然、機体が激しく揺れた。

驚く僕とハンコックに対し、パイロットユニットは不快な電子音をあげてガーガーと叫び続けていた。

「ついに墜落か？命を捨てに来たつもりはないぜ」

「おい、パイロット！なんだよ、どうした」

そう口にしなが僕はピップボーイのコードを引き抜き。

ベルチバードのパイロット席、背面にあるコネクタにそれを突っ込んだ。

「アキラ、なんだ？」

「——S. O. S. 信号？誰かが救難信号を出しているってこと？」

なんともおかしな話に思えた。

ガンナーの支配する南部で、救難信号を出すということは襲われているのだろうか。そんなもので救援が来ると、本気で思っているのか？

「パイロット、音声を拾っているなら聞かせてくれ」

それはすぐにスピーカーから流れてきた。

——こちらはV a u l t 8 8からの、緊急信号です。認証コードは

……

## リフレイン (LEO)

部屋の中に居る男たちの顔にはまだ、緊張があった。

中央には2人が向かいあって席に着き、それぞれの仲間がその背後に立って事の成り行きを見守っている。

それでも――。

「では、それで」

「――約束はなされた、と。そういうことですか、最後のミニッツメン？」

「ええ。ようこそ、カウンティークロッシング。あなた方がミニッツメンの活動を支援してくれることに感謝と共に、新たな仲間を啜えることが出来たことに歓迎します」

「ああ、よかった。本当に良かった、ガービー」

「それはコチラの台詞ですよ。参加を決めてくれて、本当に感謝する。ミニッツメンは皆さんのために全力をあげてこれを守ります」

合意はなされた。

代表者とガービーの顔に喜びが浮かび、椅子から立ち上がって固く握手を交わせば。

周囲もホッと胸をなでおろしてから、この新たな約束に期待と未来をもつて受け入れようとする。

アキラのベルチバード、ロメオ・ワンによってスロッグと降り立ったガービーとその一行は。

スロッグから南下をしつつ、複数の居住地との会談にのぞみ、新たな協力者をこれで手に入れることに成功していた。

去年まではスーパーミュータントを始め、ガンナー、レイダー、フェラル・グールにメカニストのロボット軍団。最悪だったのは、デスクローの大量発生なんてことがあった。

そこにB・O・S. が出現し、もうダメかもしれないと半ばあきらめていたところ。

このふた月ほどは、まるでなにごとくもなかったかのような平穏を取り戻し。そして姿を見せ始めていたミニッツメン達の活動が、注目を

集めていた。

北西部から南下してボストンへと手を広げていると聞いていたミニッツメンがこの東部に現れたことは、この場所に暮らす多くの居住者たちにとつて願つてもいけない喜びであつたのだ。

合意と共にその日はガービーとミニッツメン達は一晚を過ごすことになり。

ガービーは海岸線の向こうに見える、夕暮れを代表者と彼が振る舞つてくれたビールを片手に語り合つた。

「ミニッツメンの復活と、ここへ来てもらえないかと思つていた」

「遅くなつてしまったかもしれない。それは、申し訳ないと思つている」

「いや、謝罪なんてしないでくれ。助けが欲しいと思つたと言つても、こつちから何か行動したわけじゃない。そんなことすら出来ないほど、ここでの暮らしは厳しいものへとなつていたんだ。むしろ、私たちは幸運だつたとあんたと天の神様に感謝しないと」

「バンカーヒルの噂でしかないが、大変な状態だつたと聞いていた」

「スーパードクター、ガンナー、レイダー。あのボストンからあふれ出た災厄たちがこの近くを徘徊するのも無理はない。」

バンカーヒルに行けば兵士はいるが。あそこの商人たちは自分たちの事で精一杯で助けてはくれないし、傭兵を雇うような状態ではこつちもなかつたからね。自分達もパイプ銃くらいは持つているが、そんなもの——ははは、ここらじゃ何の役にも立たない」

代表者の顔は笑つてはいるものの、目の奥にはまだその頃の絶望がちらちらと残っているのか。

その顔を正面から見ることが、ガービーにはつらいことに感じていた。

「これからは、ここも少しづつでも良くなつていくはずだ。約束する」  
「それが事実ではなかつたとしても、あんたを恨んだりはいしないよ。でも、未来と希望が約束されるつてのはいい。明日への活力が、まだ自分の中にもあるんだつてこと。わかるものだからね」

「——明日の昼には、後続の巡回部隊が到着する予定だ。

連れてきた、工作部隊と共に。この場所を少しでも守れるように手を入れることになっている」

「その後は何？」

「まず、君らの隣人を増やさないと。」

「ここはバンカーヒルからも近い。活気づくだけで、商人たちが頻繁に訪れるようになるはず。」

「もちろんそうなれば、この危険もさらに高くなるだろうが。それまでにはしっかりと守れるようにするよ」

「襲撃は、増えると思うのかい？」

「残念ながら——ここはボストンからも近い。人が増えると聞けば、当然悪い奴等の耳にもそれが入ってしまうだろう」

「そうか。そうだよな……」

「大丈夫だ。カウンティー・クロッシングの後ろには俺達ミニッツメンがいる。」

「それに人の出入りが多くなれば、ここはそれだけでも十分にやっていけるだけのキャップも入ってくるはずさ。それでバンカーヒルから、独自に傭兵団を雇うことだって出来るようになる」

「まさか、そうなたらミニッツメンは助けてくれないのかい？」

「ハハハ、そんなまさか!?俺達も目を光らせているし、ここに近づこうとする悪人共は追い払うのは我々の役目さ」

「軽口や冗談が混ざるようになると、自然と情報交換へと流れるように話はうつつていく。」

「本当に不気味な話なんだ。」

「ここしばらくの間で、まるで別の場所のようにも感じることがある。それまでは商人や旅人を襲う——レイダーやロボット、スーパーミュータントなんかの話は毎日嫌になるくらい新情報が入ってくるばかりで。」

「それが今じゃまったく聞かれないんだよ」

「……」

「それどころか、そういう連中。つまり、レイダーやロボットなんかの

ことだが。

ここにもチラチラと姿を見せたことのあつた連中が、消えてしまつたんだ。最初は、あのB. O. S. とかいうのがやってくれたのかと思つたんだが——」

「違うのか？」

「どうやらあいつら、害獣を——ほら、デスクローだとかクマとかのことさ。」

ああいうのは熱心に狩っているって話だが。レイダーはガンナーには興味がないらしい。今は数日おきに、ここにも部隊らしいのが通りがかることはあるけど。こつちが話しかけるのを迷惑そうだし、興味もないみたいなんだ」

「B. O. S. はなにをやってるか、わかるか？」

「さあ？何かを探しているのか、ゴミでも集めているのか。」

バンカーヒルの連中も、なんとか商売にならないかと接触しようとしているらしいが。あそこにいる連中の大將は、まったく会つてもくれないらしいと聞いた。キャピタルからここへ、いったい何をしにやって来たのやら」

「……そうだな」

ポーカーフェイスには、多少の自信がある自分をほめてやりたい。

自然に頷いてみせながらも、ガービーは重い気分ですれを受け止めていた。

將軍が持ち帰つた情報から、あの連中がインステイチュートを相手に戦争しようとしていることはわかつている。

部下を連邦中に送り込んでいるという事は、しかしまだインステイチュートの隠れ家を特定はできていないということだろう。だが、それはいつまで可能なのか？

レオもアキラも、その日はそう遠くないと予言していたが。

頭では理解しようとしたとしても、ガービーにはそんなことを信じることがどうしても難しかった。

数百年をこの連邦で共に暮らす人々の目から消えてみせた連中が、

本当にあとわずかの間でこの地上にひきずりだされるなどと。そんな現実が起こるなんて、なんだか現実味がない。

「なあ、この東部にある居住地の情報も他にもあるかな？」

正直に言うが、今のミニッツメンには東部の情報はあまり詳細にはつかめていないんだ」

「それなら助けになれると思うよ」

「よかった」

「ただ、ほとんどは使われてない場所だと思う。

ここ数年だけで、本当に多くの居住地が消えていってしまったからね」

「そうだな——」

沈む太陽を見ながらそうつぶやくガービーの声は苦いものが混じっている。

そのひとつは、この胸にしっかりと刻まれている事件だ。クインシーの虐殺——栄光のミニッツメン最大の汚点であり、崩壊などという屈辱てきな状況をつきつけられた悲劇でもあった。

翌日、ガービーは予定通り、ボストンの新しい活動拠点にむかって帰ることにした。

その途中に、バンカーヒルとダイアモンドシティを入れたのは、次につながるかもしれない新たな情報がないか。しっかりと情報収集をしておきたいとの思いがあったからだろう。

|||||

その日、パラディン・ダンスは数カ月ぶりに警察署に残ったかつての部下達と顔を合わせ。近況を報告しあいながらも、再びプリドウエンへとベルチバードで帰還したばかりであった。

部形はややも、前線が恋しいといった愚痴をこぼしてはいたものの。

しっかりとあの場所でも存在感をもって、仕事をしていることが分



かつてダンスは安心した。

そして自分もエルダー・マクソンのそばでもそうありたいと、気合を入れなおす。

だがしかし、今のダンスの立場はいきさかに難しいものであった。フォロワー、アドバイザー、コンサルタント——どれもが彼の力を必要としていたが、同時に誰もが彼の力を必要としても居なかったからだ。

空港の制圧完了が正式に認められた後。

調査に送り出す部隊について、パラダインたちの間の意見は真つ二つに分かれてしまった。

先遣隊を率いたダンスとブランデイス、その向かい側には大勢のパラダイン達。パラダイン・レーンが危惧した通り、連邦を知り、警戒を最大レベルに設定して発言する彼らの意見はあまりにもこの場所を知らないパラダインたちの耳には消極的に聞こえてしやうがなかったのだ。

マクソンはその両方を良しと認めると。

互いに妥協点を出させ、実行するように命令を下す。

犠牲を恐れる姿勢は、士気にも重大な影響を与える。そう考えるパラダインたちの不満は、容易に先遣隊の無様な姿と現状の彼らの立場を揶揄する材料となって広まっていた。

部下を見捨て、死なせた無能者達。

失敗を恐れ、犠牲を嫌がる敗北者の発想。

だがダンスもブランデイスも、その陰口を気にはしていない。

そうした陰口があるであろうことはわかっていたし、それに一面においては彼らの言葉は真実でもあったからだ。

認めるのはつらいが。片方は部下の全滅すら気がつかずに連邦に長く身を隠し続け、片方は任務続行不可能なまでに消耗するのを止められることはなかった。

だが、2人はまだB・O・Sに忠誠を誓っている――。

それは珍しく、デッキに立っていたマクソンの側にダンスは近づいていった。

「ダンス、戻ったみたいだな」

「ええ、アーサー」

「君の仲間はどうだった？元気にしていたか？」

「どうやら刺激を受けているようで。また前線に出たいと、暗にこちらに要求してきましたよ。現金なものです」

「頼もしい限りじゃないか」

「それは、確かに」

「だがあまり期待されてもな。計画は今も前進を続けているが、君達はそこに兵士として加わる可能性は低いままだ」

「わかってます」

「とはいえ、君やブランデイスといった連中の経験を我々は必要としている——」

「それはもう、アーサー。わかっていますから」

「心無い噂を口にする連中もいるだろう。だが、それに惑わされないで欲しい」

「信頼をしてくださって——」

ダンスがそのまま最後まで美しい上司と部下の愛の言葉を交わすことはなかった。

突如、Beep音が鳴り響き、兵士の間には緊張が走る。

『兵士は正門へ、襲撃者警報！』

キャプテン・ケルズの声に敵の存在が知らされるが。

それが何者化まではまだ把握は出来ていないらしい。

「アーサー、ここは——」

「ダンス！ついてこい。出動するぞ」

「了解！」

元気に返事をする、ダンスはエルダー・マクソンの背後についた。

プリドゥエンに戻って来ていたベルチバードは2機あったが、エルダーは一瞥して片方の間だランサーが残っている方へと乗り込んでいった。

「ランサー、出せるか!？」

「え、エルダー!?!はいつ、待機命令が出たばかりですが」  
「構わん、このまま出してくれ。上空から正門を見たい」

普段から服を着るような気軽さでパワーアーマーを装着するダンスと違い。エルダー・マクソンは身一つのまま。

だが、ダンスはそれを気にする風ではなく。後部席をひっくり返して、なにか装備が残ってないかを確かめている。

「アーサー、レーザーガトリングがありますよ」

「機体に残していった無精者がいたわけか。問題だな」

「まだ使えるようです」

「それをこちらに。使い方は十分」

「ええ、ですよ」

獲物を渡すと、今度は入れ替わるようにしてランサーの背後に立ち。ダンスは地上に目をやった。

「騒ぎは何処だ? 正門を攻撃されたんじゃないのか?」

「攻撃はあったようです。しかし、敵はまだ判明していません」

「正門じゃないぞ。見ろ、海岸線でなにかやっている」

「そちらに向かいます」

サイレン音で地上では正門の中は大騒ぎになっているようだが、それ以外に変化はなかった。

だが、ダンスが指摘するように。東の空の下が、何やら騒がしいことは遠くでも確認できた。

背後の席ではマクソンが手早くレーザーガトリングの点検を乱暴でありながら素早く終わらせると。ローター音の中であっても聞こえるほどの音を立てて、打ちつけるようにして新たなフュージョン・コアをそこに放り込んだ。

大火力の重火器であるこのガトリングは、通常のレーザーにつかうようなセルではなく。その上の大容量のエネルギーユニットを一つかって充電するのだ。

「見えました!」

「なんだ……あれは、いったい!?!」

「ダンス? どうした?」

「アーサー、地上を見てください。海岸です!」

まだ機内で腰を下ろしたままだが、言われるままにマクソンはひよいとベルチバードの横腹から地上をのぞき見た。

海岸をびつしりと生物的なうろこが埋め尽くしている――。

生物的な悪寒が背中を駆け抜けると、ようやく理性的に状況を受け止めることが出来た。

恐ろしい数のマイアラークと連邦が呼ぶ海中生物たちが、地上に居るB・O・S・のナイトたちめがけてジワジワと迫っている。

「前線が崩されようとしています」

「ひどいもんだな。恐慌状態になって、見れたものではない」

「あれほどの数ですから。しかし、状況が変化すれば彼らも兵士です。戦えます」

「その通りだ、ダンス。我々が彼らを助けてやればいい。」

ランサー、このままあの薄汚い甲羅の上を飛び回ってくれ」

「了解。エルダー」

ベルチバードは旋回を始めると、マクソンの「攻撃開始」の声と共に地上に向けて2人はレーザーを発射し続けた。

だが、しつかりと重なるようにしてジリジリと進軍するマイアラークを蹴散らすことは容易ではない――。

「パラディーン! ウェポンラックの中を見て!」

「――おい、なんでミサイルランチャーがここに入ってる?」

「レイダー共から頂きました。弾も近くに残っているはずです」

「やれやれ、部下の気のゆるみを平然と上司の前で披露しないでもらいたいがな。しかし、ミサイルは悪くない」

「ええ、まったくです!」

古びたミサイルランチャーに装填を終えると、ダンスはそれをさっそく構える。

発射音に続いて、ヘリから伸びていく火線は煙を吐き出し。地上に炸裂すると、爆発と衝撃でもってマイアラークの群れに混乱を生み出すことについてに成功した。

「ダンス、そのまま続けろ！」

「ですがアーサー、残りは3発しかありません」

「それを残して帰れば、この機体は綱紀肅正の対象となってしまう。証拠は全部、放り出せ」

「やった！感謝します、エルダー」

「そういうことなら、たっぷりくれてやるぞ。カニ共めっ」

鱗にできた穴に、エルダー・マクソンのレーザーがさらに嘗め尽くすように何度も掻き回し。ついに列に乱れが生まれた。

続いて2発が発射される頃には、マイアラークの絨毯も。前進を止めさせた。

「パラディン、海上に何かがつ」

ようやく一息つけるかと思った矢先、ランサーの恐怖に満ちた声に2人はそれまでとは反対の方向に視線をやった。

海岸線近くの海上に、突如としてブクブクと気泡が湧きだすと。

続いてみたこともない異形の巨体がゆっくりと海の上へと出現してきた。

「なんだ、あれは?！」

それはマイアラークに似て甲殻生物に間違いはないが、その体はあまりにも巨大に過ぎて。

さらに数分程度の間隔でもって、体内からあのマイアラークの幼生を体外に吐き出し続けていた。B. O. S. にはデータはなかったが、もし連邦の人間がここに居れば。あのミニッツメンがキャツスルと呼ばれる砦を失ったその原因が。

この海中から出現したという、通称マイアラーク・クイーンのせいだと知ることが出来ただろう。

「余計なこととは考えるな！アレを上陸させてはならん、空港にいつかれても。隣人などと認めるつもりもない！」

エルダーマクソンの考えは明確そのものであった。

ベルチバード内からマクソンとダンスの攻撃が開始され。クイーンにミサイルとレーザーが着弾する。

しかし同時に、クイーンからも信じられない勢いで巨体の口腔か

らえ遺体を発射すると。それはベルチバードの全面部分にびしゃりと音を立てて吹き付けられた。

途端にランサーの口から絶叫があがった。

慌てて確認するとベルチバードの全面のうち半分が音を立てて溶け始めていて、強烈なその酸はランサーの身体にまで降りかかっていたのだ。

「ランサー!?!」

「落ち着くんだ、ランサー！正門まで戻れ、着地だけしてくれたいい」

驚いて助けようとするダンスの身体を押しとどめ。マクソンは冷酷に命令だけをパイロットに伝えるにとどめた。

「り、了解」

乱暴な運転で、機体を振り回すようにしてベルチバードは戻っている中。

ダンスはマクソンとその場にしゃがみつつ、彼が傷つかぬようにと体を守ろうとパワーアーマーのその体で覆いかぶさるようにした。

苦痛に耐える悲鳴を押し殺しながらも、ランサーはそのまま乱暴な着地を成功させると。マクソンはガトリングを抱えて期待を飛び出しているしながら、支持を残した。

「ダンス、ランサーは任せたぞ」

「りよ、了解しました」

とはいえ、ダンスにできることなどもうほとんど何もない。

自分も飛び出して、外装をむき出しにされかけているパイロット席からランサーを運び出し。「衛生兵！」とそれを繰り返し叫ぶことしかできなかった――。

B・O・Sへの海中からの攻撃はそれから間もなくして終わりを迎えた。

地上に飛び降りて再び前線へと走り出したエルダー・マクソンにパイロットたちが付き従い。

マイアラークの軍勢は結局、前線ラインを突き崩すことが出来ずに

そのまま全滅した。海岸ではすさまじい数の広角生物たちの死体でもって埋め尽くされ、すでにひどい悪臭もあたりに漂い始めていた。

——だが、しかし。

あの海上へと出現したマイアラークのクイーンの身体はそこにはなかった。

どうやら互いの攻撃が相打ちとなったのか。ベルチバードの後退に合わせるように、巨大な怪物もまた再び海中へと戻っていつてしまったということであった。

「兵士達よ！君たちは良く戦った、この勝利は我らの力が成し遂げたものだ！アド・ヴィクトリアム!!」

いつもであれば自身もまた喜びを爆発させ、皆と同じように勝利の雄たけびを——天に向かってアド・ヴィクトリアムと叫んでおくべきであっただろうが。この日のダンスはただ、口の中で小さくそれを唱えるだけで終わらせた。

マイアラークの群れに飲み込まれ、生きたまま貪り食われてしまった数名の兵士と。命令を守って激痛の中で強引に着陸を成功させた、あのランサーは死亡した。

その両者の死を悼む気持ちと共に、どうしてもわきあがるのがこの連邦のみせる凶暴で無慈悲なその攻撃性に戦慄せずにはいられない。だからこそダンスは——この小さな勝利に、おおきく喜べるものはないのだと。

自分にそう言い訳をするのであった。

|||||

グッドネイバーで最高の夜を私は過ごした。

ホテルの部屋に入るなり、互いの身体を隠すものを素早く取り払うと。

続くベットのの中では、互いに疲れ果てるまですべてをさらけ出した。あつた。

疲れ果ててもなお、尽きぬ激情に突き動かされて私は動き続け。彼

女と起こすシーツの波は、夜明けまで変わらぬ海の波際にも似て様々な紋様を夜の闇の中に描き続けた。

暴虐の彼方で彼女が死の疑似体験を味わう中で、私はようやく力尽きるように崩れていくと。眠りがすぐに私を闇の中へと引きずり込んで見せた――。

窓の外からさす光が朝の到来を告げ。

昨夜の経験を思い返しただけで、すでに頬を赤く染めてみせる彼女は恥ずかしそうに笑い。

私はまだ、しつこい睡魔によって半分だけ覚醒しているような状態にいた。

そうやって私の日常は再び動き出す。

氷の世界から、突然動き出した時計の針のように。唐突に、全てがひどく残酷で無慈悲な最悪の世界に。連邦になってしまうのだ。

メモリー・デンでの話が長引いてしまい。

ニツクがようやくサードレベルに待つレオの元へと向かったのは、もう夜中もだいぶ過ぎようという時間だった。

どう謝罪しようかと、頭を抱えながら地下の酒場へと降りていったが。そこに居るはずのレオが、消えている。

ニツクの疑問に答えたのは、バーテンのロボット。ホワイト・チャペル・チャーリーの下品な笑いつきの説明であった。

どうやらこの店の歌姫に気に入られて、2人で仲良くよるのグッドネイバーへと飛び出して行ってしまった、と。

ニツクは驚いたが、とりあえずそれだけだった。

店に残っていたとしても、どうせこの古いぼれを相手に悲しい酒を一晩中あおっているなんてこともあったかもしれないのだ。

それなら美女を相手に、自分がまだ男であることを試してみるって言うのは。そう悪いことではない気がする。

まあ、とりあえず今夜に関しては。という意味でだが――。

(マグノリアか。レオもまづいのにひっつかかったな)



この店の歌姫は人気者として知られているが。同時に気に入った相手にも、遠慮がないことで知られていた。

運と実力を彼女に認めさせることが出来るならば、その夜は最高のものとなるに違いない。だが、それは夢でしかないのだ。

彼女は決して相手に全てを与えようとはしない。

店と歌が恋人なの、そう口にしてあれは夢だったのだというように。またここに戻って来てしまうのだそうだ――。

それはきつと、あのレオであつても変わらないことのように思える。

マグノリアは変わらないし。だから結末も変わることはない。今夜は素晴らしい夢を見ることが出来ても、それは朝には消えてしまふ。そんなあまりにも儂い、夢のような出来事ではないのだ――。

私はまだベットの中にいた。

驚きも悲しみもなかったが、心に湧き上がる虚しさが。痛覚を刺激でもしているのか、ひどく苦しませてくる――。

夢の終わりを彼女は唐突に口にした。

その理由も口にして、だからまた店にきて頂戴と寂しそうに笑って私を置いて出ていった。

多分、こうなることを私は薄々気がついていたように思える。

彼女が分かれる理由を口にしたように。私もその理由を自分自身が知っている。

私は今、弱っている。

そしてこの経験もまた、最初のものではないのだ。

アキラと別れ、ガービーと共にサンクチュアリ、グレーガーデンで仕事をし。オバーランド駅、跡地に到着した。

ミニッツメンと共にそこで住人と自分たちの建築にかかわる中。私はひとつの親子と知り合うきっかけを得た――。

最近夫を亡くしたという未亡人と、まだ幼い娘だった。

人が集まる中で、弱い女性だけの家族というのはなかなか不便な

ことが多いものだ。

出会ってから気にかけるようになり、数日が過ぎると私は自分でも思ってもみなかったことに。未亡人である母親と、いつしか深い関係になっていた。

ミニッツメンの將軍としてガービーに反論を許さずに組織改革を推し進めながら。

私はこの思わぬ関係の未来を想って、真剣に考える必要を感じていた――。

その意味がもたらす、苦しみにしてもまた――。

彼女には娘が居て、彼女との関係を進めるということは家族になるということだ。

それは同時に、私の最後の家族。ショーンについてどうするのか、という決断を迫ることになる。

あの子は取り戻したい……だがそのために、新しい家族となると口にしておいて。2人を置いていたり、不安がらせるような状況はさせたくはない。

――息子は諦めよう。死んだと思えばいいさ

悪魔の囁きだった。

私は氷の世界で家族を、愛を失い。それをこの連邦からどうやっても取り戻したいと思っている。

だが、それはもう完ぺきではないだろう。妻は殺され、罪人はこの手で葬った。あとは息子を取り戻すだけだが――その方法がさっぱりわからないと来ている。

それならば、壊れた家族などに執着せずに。新しい女を妻に、子供は娘がついてくると考えれば――。

私のその最低な計画がご破算になったのは、驚くことに彼女の娘の一言が切っ掛けとなった。

雨の降りそうな、曇った午後のことだ。

川から吹く冷たい風の中に居る少女に私は気を使い、上着を届けて

から。まるで親子のように座って話をした。ただ、それだけでよかったのだ。

だがその時、少女は私に聞いてきた――。

「あなたの事を、パパってよんだらいいのかな？」

少女の言葉と表情だけを受け止めていれば、きっと私は素直に喜んでいられたのかもしれない。

だが――私はあまりにも人の嘘に多く触れてきて。そしてその中の真実を見抜く力をも、持ってしまった。これのおかげで命を救われてきたから、手放すなんてことは出来ない。

私は少女の本当の意味をそれで知ってしまった。

知らなければ、本当に良かったとは思う。

|||||

あれは旧世界の、それも戦場での話になる。

米国は迫る大戦に備え、乱暴にもカナダを併合する決定を下した。

カナダは当然否定しようとしたが、米国はそれを許すわけもなかった。決定は、すぐに実行されたからだ。

カナダ人たちの中に、そうやって米国への不満が生まれた。

私の最高の親友であり副官は、最初の関係から全てが最高であったわけではない。中国と戦う兵士達は、ここにいる元カナダ人であるところの新しい米国民を守るために来たが、元カナダ人たちは全てがそう考えていたわけではなかった。

だから――戦場の外ではしばしば兵士達が、その厳しい真実にさらされて苦しめられることがあった。

私の死んだ同期の中に、何人か英雄として称えられた兵士達がいる。

その中のひとり。彼がまだ生きている時、地元の盛り場で若い女性と恋に落ちた。

2人は炎のように激しく愛し合い、その勢いを弱らせたくなないと。

証を立てるんだと言って、結婚まで一気に進めた。

周囲はそれを半ば呆れつつ、しかし盛大に2人の門出に祝福を贈った。

結婚生活はわずかに2年で終わりを迎えた。

彼が部隊と共に前線に立った日。その時、その場所が地獄となった。

友人は大いに奮戦し、仲間を助け、敵の進軍を止め。そして死んだ。

新聞はその働きを一面トップに載せ、葬式では中将クラスがしかめっ面しいそれを並べて参列もした。

我々が友人の死から立ち直る頃、ひどいことがおこったのだ。

彼の妻の両親が、なぜか私たちに会いに来た。彼らの娘が、姿を消したのだそうだ。

その言葉を真に受けて、我々は彼女を探した。

すぐに彼女は見つけることが出来た。そして、真実もまた。

我々はそれで簡単に友人の事を過去にすることが出来た。ただ、虚しさだけを残したが。

友人が信じた彼女との愛は、本物ではなかった。

言ってしまうえば答えはただそれだけのことだったのだ。

彼女にはずっと愛した男がいた。そして友人と夫婦になるほど熱烈に愛を交わしても、その男をこそ夫と定めていたらしい。

秘密の関係は2年で終わった。

死んで英雄となった友人の金を全て手に入れ。腹の中の友人の子を殺し。カナダにある全てを捨てて、素晴らしい夫の元妻という肩書だけをもって。本当の愛のある夫婦生活を、勝手にスタートさせていたのだ。

「彼がまだ生きていたら、あの子くらいは残してあげようと思ってたわ」

感情の失ったような冷酷なその言葉に、私はただ戦慄した。

そしてこの経験が、誘惑の多い軍隊の生活の中で。私をより完璧な

殺人機械となろうと励む軍人という姿勢につながり。遠く離れて、すぐには触れることのできない妻を想いつづけることができたのだと思う。

そしてその経験が、時を越えて私にまた真実を告げてきたのだ。

「あなたの事を、パパってよんだらいいのかな？」

少女の目が語っていた。その言葉は決して純粹無垢なものではないのだ、と。

私はこの2人が失った夫の話はあまり知らなかった。

それはつらいことだと思うし、遠慮は確かにあったが。必要以上にどんな家族であったのか、などとは聞くことはなかった。

少女の言葉は願いなどでは決してなかった。

あれは幼い誘惑だ。

自分の母親だけではない。なんなら自分を選んでよいのだと、そうこちらに伝えてきていた。

ミニッツメンの将軍。

そう呼ばれる男の寵愛を自分に向けさせたいという、捨て身のエゴがそこに投げ出されていたのだと気づかされた。探偵の服を着て、ニツクのところへ出入りするようになったのはそれからだ。

パイパーは言っていた。「人は善人であり続けようとしないと、できないうものだ」と。

だが、私はあまりにも善人であることと。無防備であることを履き違えてしまっていたのだ。

家族。

彼女への愛。

彼女との息子。

全ては真実だった。そして本物で、私だけのものであった。

かつては兵士の私は、厳しい戦場を生き抜くために。強く私の愛を心に抱いて、そこで日々を戦い続けた。

だが今は――。

今の私はその逆になってしまった。

使命が、命令が私を支えている。戦場で戦い、勝利し、生き残るために。だが反対に私の愛はいまだに凍ったままになっている。

満たされることのない喉の渇きはあの事件からずっと私を苦しめ続けている。

ノーラが居て、シヨーンが居た。

あの朝に感じた愛を、幸福をもう一度取り戻さなければいけないのだ。まだ私が、正気でいられる間に――。

立ち上がって服を着れば、私は探偵ニツクの相棒に戻る。

ミニツツメンの将軍としての使命、探偵の相棒としての使命が、まだ私を支えてくれる。善人でいられることを許してくれる。

心は冷たく、虚ろにすら感じるが。

まだ大丈夫だ。

ホテルの部屋を出て歩き出す。

階段を下りて、受付で鍵を返したらそのまま出ていけばいい。酒場に行つてニツクに会い、謝罪し。そこで歌うマグノリアに微笑みかけられても、もう平気だ。

グッドネイバーでの用事が済めば、私たちはダイアモンドシティへ戻るのだ。

だが私が階段の踊り場にさしかかると、そこでいきなり誰かがこちらの肩に手を置いてきた。

「あんた。あんたっ、まさか!？」

「失礼、どなたでしょう?。」

「本当だ。本物だ、間違いない。間違うわけがない?。」

それは男性のグールだったが、どうやら私の事を知っているとでも言いたいように見えた。

だが、私はあいにくグールに知り合いはほとんどいないと言ってい

い。

「人違いのようだが？」

「人違い？いいや、違ってなんかいないさ。あの朝、あんたに会ったんだ。あんたの奥さん、子供もいた。赤ん坊だった。そしてロボットもいた！どうだまだ思い出せないのか？」

「あの朝だつて？だが、あの日は確か——」

——爆弾の衝撃が襲ってくる。

——Vaultへの収容者リストの確認で滑り込みで案内される

——テレビが爆弾による破壊の第一報を告げた

——シヨーンを前に、家族の最後の幸せな時間

——コズワースがお手上げだと告げた

——訪問者をようやつと追い返せた

(訪問者だつて!?)

「おはようございます！Vault—TEC社です」

そいつは営業畑の男がする、あのうさん臭い張り付けた笑顔でそう口にした。私は、もうそれだけでウンザリした。

クインシーの採石場――。

削られた石場には急ぎで作られた木製の居住施設を中心にした、放射性廃棄物が沈められた沼というか、池のようなそれが掘り進められた底に広がる危険地帯である。

そして今は、スラウと名乗るグルルをリーダーとしたレイダー達の拠点にもなっていた。

彼らは思う、あのスラウって悪党はたいした奴だつてことを。

クインシーの虐殺から崩壊したミニッツメンをも吸収したガンナーの勢いは、もはや連邦で止められる存在は誰もいないかに思われた――もちろん、かのインステイチュートをのぞいて。

そして連邦南部は事実上、ガンナーの支配に落ちたと誰もが理解するその瞬間だった。

彼らのボス、スラウはクインシーのそばのこの採石場へと仲間を呼び込むと。

ガンナープラザにはメッセンジャーを送つて巧みな弁舌でもつて取り入る一方で、クインシーに占拠したガンナーの部隊とは緊張感のあるつきあいを成立させることに成功した。

その証拠に、クインシー跡地に入ったガンナーは度々この採石場への攻撃を求め、援軍と許可をガンナーのボスへと求め続けていたが、ガンナープラザからいい返事を得たことは今まで一度もなかった。

危険なガンナー達の支配するエリアの中で、さらに危険な放射能廃棄物を隣にぬくぬくと生きることが許されている奇妙なレイダー集団――。

そのクレイジーさに惹かれた馬鹿共たちは列をなしてここへと入り込んで来ようとする。

遠からずあのボストンコモンを彷徨う負け犬たちも、ここへと殺到してくることだろうなどと。年を越す年末では、スラウはラリツて仲間になんか演説をかましたものである。

――だが、なにかがおかしくなっていた。



あのB・O・Sの出現に合わせたようにガンナーの動きが鈍ると。

スラウの名声も急激に失われていってしまった。そうなった原因は、あのマクナマス率いる小隊が。ハングマンズ・アリーでの防衛線でレイダー連合から守り切ったという事実が発端となった。ボストンコモン内部での混乱が引き金となっていたのだが。

サウスボストンからさらに離れたクインシーそばのこの採石場からでは、そこまで細かい情報を知るすべはなかった。

スラウと彼の仲間たちはただ困惑の中で、片手にはサイコとジェットを。残る片方にビールなどのアルコールを握って、茫洋たる多幸感の中で自分たちの状況の変化の理由を探る作業に没頭している。

そんな体たらくであったから、気がつかなかった。

太陽の下、昼の最中に青空の向こう側から降りようとする黒い影――

|||||

ここまで来たら、すでに覚悟は決まっていた。

「ユニットパイロット、緊急開放。ドロップシークエンスを開始しろ。針を落とすぞ」

ロボットの口に当たる音声システムがないが、手元のピップボーイにロメオ・ワンの情報が入ってくる。

それがこのパワーアーマーのヘルメット内にあるスクリーンに、情報を更新していく。

――ウイスパーマード解除

――緊急姿勢管制制御、システムオンライン

――着弾地点の設定を入力せよ

僕はマップを切り替え、採石場の上部の一点を感覚的に選んだ。すぐにユニットは絞り込みを始め、高度も降下が始まる。最終的に

は地上から約100メートルで、ドロップは行うように設計されていた。

「おい、アキラ。正気なのか？本気で行くのか？」

「——人命尊重って言葉は知ってるよね」

「ああ、この辺りじや名の知れたレイダーの巢から発信されてる通信ってことも忘れてないか？」

「パパ、そのための“お客さん”で、このパワーアーマーじゃなかったの？」

ロメオ・ワンの座席に座り。

興奮の瞬間を子供のように目を輝かせてニコニコ顔をしている、アトムキヤッツ・ギャングのボスとその相棒を僕は顎でしめす。

なのにハンコックは苦い表情を見せたまま、呆れたように首を横に振るだけだった。

ジークと呼ばれる彼らのボスは変わって僕に声をかけてくる。

「アキラ、だったか？お前、本当に凄いなっ。本気でやるんだなっ」

「アトムキヤッツには感謝してる。いきなり現れたのに、僕らの話を聞いてくれて。こうしてパワーアーマーまで」

「ああ、それは別にあげたわけじゃないぞ」

「おいっ、ブルーージェイ!?!」「いや、ジーク。商売はゆずれない」

「わかってる、でも感謝してるんだ」

モニターに、降下までのカウントダウンが開始され。“15”の文字が表示された。

「このリース契約が必ず果たされるよう——ベストを尽くしてくるよ」

「ああ、頑張っつて」「俺、マジで惚れそう」

2人の愉快的な反応に僕は苦笑しながらも、機内から外を見た。

「ユニット。降下した後は、状況の判断は任せる。墜落なんて、してくれるなよ」

3歩も歩けばそこには何もない、自由だ。

飛び出せば重力にからめとられて地上へ落下する。

ロメオ・ワンは最後のメッセージとして「幸運を」とディスプレイに送ってくるリンクをカットした。

カウンターの減少は止まらない。

僕は右足を引きずるようにして歩き出す。

ゼロの表示で僕は世界を足元にする――。

酩酊状態のレイダー達には、空に浮かぶベルチバードを見ても特に動く理由は思い浮かばなかった。

それどころか、もつとよく見てやろうというのか。

立ち上がったては、屋根の下から出てきては、空を見上げようとした。

足を震わす衝撃と、噴き上げる火炎によって瞬時に火だるまとなった2人の仲間が上階の手すりから吹き飛ばされて落ちてくると。

さすがに異変が襲撃であると、理解する。

昼の最中でも構わずやっていた大量の酒や薬で認識力はひどく低下しているが、武器を手に取るとそのまま転がるようにして採石場の中を敵の姿を求めて走り出す。

「いたぞーこつちだ、こつちで――」

パイプ・マシンガンのトリガーを引きながら、後退するレイダーは最後まで警告を口にすることなく次々と体に着弾するプラズマ弾によつてスライム上の液体へと姿を変えて石の上にはぶちまけられる。

さすがは連邦一番のパワーアーマー・フリークが得意顔して進める逸品だ。

ぶつつけの着地には成功し、攻撃を受けることなくいきなり敵地の中に侵入することにも成功した。すでにロメオ・ワンはウイスパーモードを回復させ、ステルス装置も作動させて地上から距離をとっているはずだった。

僕はただひとり、この場所を制圧しなくちゃならないが――。

右手のプラズマピストルを素早くエネルギー交換を行うと、残る片手にはレールガンを持った。

と、同時に階下や建物を通つて。

大勢のレイダー達がワツとこの場所に姿を見せた。

「もう死ぬぞ、死ぬさっ」

「援護、援護しろ！」

「うわああっ、死ぬ。すぐに死ぬっ」

「馬鹿野郎、ちゃんとまっすぐ撃ちやがれ！」

T-45よりもさらに何重にも分厚いはずの装甲越しでも衝撃と痛みが走った。

装甲の表面を、先ほどとは比べ物にならない攻撃が襲ってきて。装甲が耐えられない衝撃だけでも僕を殺しにかかってくる。

「コンピュータ、ステイム注入しろっ」

苦痛に顔を歪ませ、耐えながら必死にそれだけを指示を出す。

いきなり全てを持っていかれそうになっている。このまま何もせず、囲まれて撃たれ続けられれば。

装甲が削り取れる前に、僕はこの衝撃と苦痛の中で意識を失い。命を落とすことになるのだろう。

大勢が飛び出してきた建物の方向にプラズマピストルを撃ちまくる。

半歩下がって体を開くと、丁度真後ろに位置するところから下半身を隠せるだけの木製の柵越しに攻撃してくるレイダーにレールガンを向ける。

相手はサツと、柵の向こうへと体を隠すが。それがなんだというんだ？

発射された鉄の杭は、壁をたやすく突き抜けてみせ。

背後で丸くなっていた男の膝と片手、武器までも一気に貫く。鳴き声交じりの絶叫が上がった。

いい声だ、悪くないぞ。

その後の10秒間の間に3人を汚い緑のベトベトしたものに変えて。鉄の杭でもう一人を泣き叫ばせ、汚い沼の底に引きちぎった頭部を縫い付けてやった。

そのおかげで囲もうとしていた連中は散りじりになってコチラから距離をとり。

僕もわずかな休憩時間を手に入れることが出来た。

「クソっ、馬鹿が多すぎるっ——嫌、ここに来た僕が馬鹿だったのか」  
わずかな後悔を口にしながら、自分も壁際のへりに姿を隠し。

次の攻撃の準備を整える。

「おいっ、この間抜け野郎！お前——お前、あのアトムなんかいう馬鹿共の仲間か!？」

それは噂のスラウ本人からの呼びかけであったが、あいにくと僕はそのことをまだ知らなかった。

レイダーなんかと話す言葉はないと、自分の事に集中する。

「ここにお前らが嫌うガンナーはひとりもないって、知らなかったか!？ガラクタからパワーアーマーをガレージでシコシコ弄り倒している、哀れな奴等だと思っただが。ひとりで現れるとは、たいした度胸じゃないか！」

「……」

「ところで知ってるか!？」

俺達にはその鋼のガラクタは必要ねえんだ。力は数だ！強さは、武器だ！

てめえらみたいのに、怯えた処女よろしく。何枚も何枚も、分厚い鉄板体に張り付けてりゃ——ぶっ飛ばせ！」

気を抜いていた——わけではなかったと思いたい。

建物の蔭から、僕と同じように鋼鉄の足音高く表れたそれは。肩口から突っ込んでくると僕を石の壁に押し込もうと特攻してきた。

——パワーアタックは、前方へ重心をかけ。思いつきり自分の全てを相手に叩きつける、ただそれだけでいい

サンクチュアリで、レオさんに教えてもらったことが脳裏をかすめる。

体は反応して、それを避けようとしたが。T-60の独特の分厚い装甲が可動部を圧迫していて、その動きを鈍くした。

鋼に鋼を激しくこすれる音を立て。

物陰から僕は弾き飛ばされる。相手は何か、すぐに想像がついた。揃えられていない、奴等のつきはぎだらけのパワーアーマーだ。

頭部はT―60のそれであったが。体と片手、片足がT―45で、残りはレイダーの手作りによるものだとわかった。

「へビー級対決だっ！すり潰しちまえっ！」

興奮したのか、周囲から騒ぎが始まると。空に向けてめちやくはに発砲を始めた。

まったく、自分も酷いヘマをしたものだ。

相手の突進をかわし切れず、プラズマピストルは手放してしまったし。レールガンはひしゃげて、すでに使い物にならなくなっていた。これはもう捨てるしかない。

僕はゆっくり立ち上がると、ツギハギパワーアーマーと相對する――

「第2ラウンド、開始だろ？」

恐れを知らない僕のその言葉に合わせて。

背後から背骨に沿って建てられていたそれが、解除されて横になると。左手を背後にやってそれを……獅子樺奉と名付けた刀身を、一気に引き抜いてみせた。

|||||||

おれはハンコック。

ジョン・ハンコックと呼ばれ、恐れられ。敬まれるべき男だったはずだ。

俺の一部であったあの町を出たのは自分の意志で。

失われた暴力の世界に、まだ自分は終わってないのだと示すためにそうしたのではなかったか？

だが、それがどうしてこんなことになっているんだ。

鉄火場は地上にあって、仲間にしてやろうと思ってる小僧はそこでひとり。

どう考えたって、勝てるとは思えぬ戦いにちゅうちよすることなく飛び込んでいってしまった。この俺を空に、安全なここに見学を希望したアホ共と一緒にして――。

（俺はまだ、プライドが邪魔しているのか？それとも長く人を使いきり、暴力の使いどころを選べる身分だと勘違いしたままにいるってことか？）

誰よりもイカレていて、危険な男が自分だった。

なのにその男が馬鹿馬鹿しく感じるだけの、意味のない戦場にあの小僧は意味を見出していた。

なぜ、俺はあそこに行かないなどと考えた？

そもそもにして、救難信号を探ろうとした彼を止め。同じく変人で知られるアトムキャッツに導いたのは、本当にアキラにこの馬鹿な行為をやめさせようと考えての事だったか？

ベルチバードの中で、深くそんなクソのような考えにとらわれている自分と違い。

小僧とどこか同類であるらしきアトムキャッツの重鎮たちは、地上のあいつを見て。信じがたいことに涙を流して感動している風であった。

「本当に、本当に飛び降りてみせやがったよ。アイツ」

「ああ、マジでクールだった」

「見ろよ、あいつらのひどいパワーアーマー。美しさが……ハハハッ、なんだあれは。剣を使ってる？それであいつの腕を切ってみせたのか？」

「グソッ、あいつらまた攻撃を再開したぞ。あれじゃ、アーマーが守ってくれても。中にいるあいつは生きてはいられないかもしれない」

小僧が死ぬ？

アキラが、あのファーレンハイトを殺した奴が。こんなところで？

「ブルージェイ、俺達は——こんなところでなにをしてるんだ？」

「ジーク？」

「だってそうだろ？俺達は、アトムキャッツだ。そして下で戦ってるアイツは？」

もちろんあいつも俺達のクールな仲間、キャッツだ。そうに違いはない」

（お前らが自分たちのプリントを施したパワーアーマーを渡したって

だけじゃねえか)

「ああ、わかるぜジーク。アイツ、とてもクールだ」

「なら行動しなくちゃ、それがキヤッツ。俺達はギャングなんだぜ！」

「——おい、ちよつと待て。何を話している？」

不安を覚え慌てて声をかけたが。

アトムキヤッツの2人はそれに答えず。立ち上がって向き合うと「ニャアニャア」ひとしきり騒ぎ。いきなり外へと飛び出していつてしまった。

最悪だった——。

乗っていた2人分のパワーアーマーが予告もなく飛び出していった影響を受けたか。

ロメオ・ワンは大きく体制を崩し。危険を告げる複数のブザー音が操縦席から鳴り響いた。

「チクショウ！俺は、パワーアーマーなんて着ちやいなんだぞ」

あろうことは俺はそれに平凡すぎる言葉を吐いていた。バランスを崩し、腰を床にこすりつけて！

自分がイカれた連中の面倒が見れない、ひどく哀れな老人に思えて顔を歪めた。

そう老人なのだ。

ひとり不安定に揺れるベルチバードの中で、残されているだけの——。

剣闘士の対決でもあるまいに。

にわかに騒ぐ周囲を冷たく見る僕は、あくまでも予定通りに進めようとする。

相手は僕が取り出してきたのがシシケバブと呼ばれる炎の刀だとわかると、再び肩口から短距離でも十分な力を込めたアタックを繰り出してくる。

その原理は僕も知っている。

きつと操縦者は、体格がよくて力も強いのだろう。そうでないとあれはなかなか、連続で使うことは難しい。



同時にそれを敵に当てる難しさも僕は知っている。

今度はしつかりとタツクルを避けつつ、相手の背中側からヤツの脇の下に刀の刃を押し込んだ。

続いてそのまま並走すると力を込めて刃をさらに押し込んで見せた。相手はきつと、背中側から腕の根元が焼けるような苦痛を感じていたに違いない。

だがすでに致命傷だ、装甲の薄い関節部の上。

アーマーの裂け目を繋ぐ骨組みから肉と骨まで食い込んで。立ち止まるのを待って、刃に炎を噴き上げさせると絶叫が上がった。

「まだまだ、まだ途中だぞ」

パワーアーマーは力強いせいだろうか、いつにもまして僕の中のサデステイックな気分が刺激を受けたか。

レイダーに苦痛と恐怖をさらに与えようと、さらに残酷にそのまま腕が斬り落とされるまでやめない。

屈強なアーマー同士の決闘はあっさりと残酷ショーとなってしまったことに周囲は顔をひきつらせた。そしてわずかに空白の時間が生まれる。

何度も「痛い」と「助けて」を繰り返し、膝をつくパワーアーマーの背後に回ると。

刀の柄を逆手で両手に握り。今度は首の間後ろからそれで一気に貫いてみせる。

「ボウム!!」

破裂音を口にする、ビールの栓が音を立ててはずれていくように。ヘルメットだけが宙に飛び、燃えることなく濁った汚染された沼の中へと落ちていった。

残ったのは頭と片腕のなくなったひどく焦げ臭いオブジェがひとつ。

「クソ、コイツは殺せ。ブチ殺せ！」

再び猛攻が僕に襲ってくるかと思われたが、今度は別に心配は必要なかったようだ。

僕は目の前の腕と頭を失ったパワーアーマーを掴むと、それを肉の盾がわりにして持ち上げ。

距離を詰めていくと、必死の形相で攻撃を続けるレイダー達を追い回し始める。

(なんだよ、このバケモノ)

そうしていきなりリーダーのスラウの頭が胴体とお別れする様を見せつけられた彼らに。さらに空から落ちてきた新たな2人のパワーアーマーの登場で、勝負は決したと言っていいだろう。

|||||

戦いは終わった――。

僕はまたもや武器を失ってしまったが、それでも無事に生きていられたのだから問題はないって事だろうと思う。

ブルージェイはさっそくレイダー達の装備をはぎ取って山を作り。それが積み上げられていくことで、僕の今着ているアーマーの料金は差し引かれていく。

「この採石場は、なかなか目にする機会はなかったと記憶している」

「ジーク、最後に援護をありがとう。あんたたちに、そんなことをする理由なんてなかったのに」

「いいんだ！お前は見事にスーツを着こなしてみせた。俺達のスーツを。」

そしてこいつらを、レイダー共をぶつ殺してみせただろう？むしろ俺達の方が本当に驚かされてばかりだった」

「ああ……うん、どうも」

「それが救助信号ってだけでこんなところに飛び込んでいくんだ、凄いなんてもんじやない。空を飛ぶマシンを作るばかりか、勇気も、強さも持っている。俺達を率いて、戦って見せるまでに。お前はとってもクールな奴だ」

「そ、そうかな」

なんだか褒められすぎているような気がする。

いやー多分、これはちゃんと褒めているんだよね？

「そして途中からではあったけど、俺達は共に戦った。そして勝利した！」

「ああ、勝利だ」

「だからきつと、喜んでもらえるとかわかってる。お前も、俺達の仲間。今日から新たなキャッツとなるんだ！」

「え？」

「アトムキャッツの証は、連邦ではだれもが欲しがるジャケットが示してくれる。ガレージに戻ったら寸法を測らせてくれよな、もちろん受け取ってもらえるんだろう？」

「——も、もちろんだよ」

まだかすかに残る興奮が、僕の口を「なに寝言くつちやべってるんだよ、マヌケ」と動くのをこらえ。

僕は何とか引きつった笑顔で了承の意を相手に伝えた。

——まあ、不都合はないだろうし。それにきつと悪い人たちではないよね？

「アキラ、見つけたぞ。こっちだ」

「ああ、えつと。まだ信号の元が分からないんだよね、だから——」

「そうだな、探してくれ」

「こっちは勝手にやってるから、でも俺達をちゃんとガレージまで帰してくれよ」

「わかってる、2人とも——ごゆっくり」

ヘルメットをわきに抱え、笑顔で二人から離れるとハンコックの隣に並んだ。

「機械いじりのオタクどもに随分と気に入られたようじゃいか」

「——あんたが僕を彼らに会わせたんじゃないかっ」

「そうだな。おれにはわからない変人の世界つてもあるもんだ」

「それより、電波！」

「ああ、わかってるよ」

そういつてハンコックは僕を採石場の下部エリアへと導いていく。切り抜かれた岩の中のきゅ住空間の一角が、どうやら崩れたらし

く。岩が途切れて、土のトンネル姿を現していた。

「電波はこの奥から来ている」

「……これは崩落したのか？」

「そのようだな。ここに居た連中、穴の中をすすんで何かに突き当たったということらしい」

「救助信号を発信するようなものについてこと？」

「ああ」

言いながらハンコックは、44リボルバーを取り出した。

それには刻印で「ザ ゲイナー」と文字が刻まれている。

「プラズマピストルはまだ使えるな？」

「もちろん。パワーアーマーもまだ大丈夫そうだし。もしもの時はあんたを守るよ」

「調子に乗るなよ、坊主」

ヘルメットをかぶりなおす。

別にハンコックは自分で戦えるのはちやんとわかっている。

でもなんだか、今の言葉が気に入らなかつたのか。彼は本当に怒っているようにも見えた。

で、穴の奥には何がある？

ライトをつけずに慎重に進むと、すぐに奥から声が聞こえてくる。

「もう隠れる必要はないんだぞ。すぐに終わるからなっ」

——やめなさいっ

「お前のはナシなんて聞くとと思うか？ ナメるな」

——Vaultの扉は、核攻撃の直撃を受けても耐えられるように設計されているの。勝手に出入りしようとか、バカげたことは考えても無駄よ。

「あと、どれくらいだ？ どうなんだ？」

——今すぐ出ていかないと、きつと後悔することになる

「ああ、出て来いよ。こっちはこのまま楽しんだっていいんだぜ？」

——だから無駄なのよ。それが理解できないというの？

なんとも聞いていて、奇妙な会話の流れだった。

4人のレイダーがVaultの扉の前で、なにやら騒いでいるだけなのだ。

どうやら扉を開こうと色々やってもいい方法が思いつかず、こうして騒いで時間でも潰しているんだろうか？

(俺が先に行く)

(どうぞ——)

ハンコックはタイミングを計ると、飛び出していつてまずはコンソール前に立つ男の背中にナイフを複数回突き刺すと。

崩れ落ちるのを許さず、そいつを盾にして2人の脳天をリボルバーでもって吹き飛ばしてみせた。

鮮やかにして、流れるような一連の手つきは。彼が危険な暗殺者であることを示している。

そして残った最後のひとりには、遅れて飛び出た僕自らが。

大きな動きで飛び上がると、そのまま振り上げた刀を相手の頭頂部にむけて思いっきり振り下ろす……。

両断するとまではいかなかったが、頭部から胸板までを2つに裂けたままぐにやりとするそれを僕は蹴飛ばすようにして距離をとった。

|||||

実は僕自身、驚きを隠せなかったけれど。

Vaultの中の救助信号を発している人はまだ生きていた。

レイダーを片付け、扉を開けようと僕がピップボーイを使うと。コチラの存在を認識したらしく、むこうも驚いているようだった。

どうやら、長い間崩落の影響を受けて外に出られなくなったということらしい。

だが、扉を開くとその言葉を文字通り素直に受け取るのは間違っているような気がさっそくしてきた。

僕もよく知るあのVaultそのままの姿がそこにもあったが。同時にそれは、あの長い時間を凍らされたかのような不気味な墓場のような静寂がここにもあるとわかったからだ。

ハンコックにはそれはわからないと言っていたが、僕にはわかる。きつとレオさんも、ここに来ればそれが理解できたはずだ。

崩落した部分の掘り起こしにはキャッツのパワーアーマーが役に立ってくれた。

いとも簡単にそれを掻き出すと、通路をふさいでいた壁が奥に続いているのが確認できて――。

「なんてこと。待ってた人とは違った」

そこにはあの懐かしいVaultスーツを身に着けたグールの女性がいる、コチラに近づいてきた。僕は礼儀と言うことでヘルメットを脱いで、下の顔を見せた。

「やつとVaultの人が来てくれたのだと思っていたのに。あなたはピップボーイを持っているようだけど、明らかにVault-Teamの社員ではないわね」

「別のVaultの住人だったことがあるよ」

「そう、それで？ どうしてここへ？ なぜ、助けに来ようと思ったの？」  
「信号は正規のもので、助けることが正しいと思ったから。それだけだ」

「市民としての義務ということね。素晴らしいわ」

「なあ、そろそろお互い。世間一般が認める挨拶って奴をしてもいい頃じゃないか？」

ハンコックの言葉に、相手はうなずいて同意を示した。

「そうね――私はバレリー・バーストウ。このVaultの監督官よ」  
「……なにもないけど？」

「ええ――建築が中止されていたこのVaultが完成すれば、という意味よ」

「なるほどな。俺はハンコック。ジョン・ハンコックだ」

「アキラ。五十嵐 晃」

「ジョンとアキラね。それじゃ、さっそくこちらからの提案があるのだけれど。聞いてもらえるかしら」

いきなり提案だあ？

僕も相手に好印象を与えるのには苦勞するタイプの人間だが。彼女は、話し方のリズムから何からどこかおかしい。

すでにかなり気分を害されているし。

だが、そんなことはむこうは関係ないらしい。

「2000年は本当に時間を無駄にしてしまったわ。」

私はあの時、自慢となるはずのこのVaultの建設現場を色々な人を案内していた。すると地震——大勢の人はその時死んでしまった。

放射能も漏れだしたりして……だけど私だけはこうして生き延びることが出来た」

「助かったのはアンタだけ?」

「いいえ。作業員や、いくつかの家族は助かったのだけれど。彼らは次第に私の話を聞かなくなってしまうて、今は多分。この洞穴のどこかに無事ならいるはずよ」

Vaultを建造中というだけあって、地下には巨大な空間が人工的に生み出され。それは奥が見えないほど広がっていることが分かった。

「皆が話を聞かなくなった?」

「そりや、きつとフェラルになっちまったんだろう。あいつらはグールは襲わないが、意思の疎通が図れるってわけでもないからな」

「ってことは、この奥を探索しようと思ったら——」

「フェラルがここにもたっぶりいるってことだろうな」

そりや、最悪だ。

「私には仕事しかなかった。仕事が、今日まで私を支えてくれたの」

「へえ、それで提案って?」

「実は私は本社からこのVaultで実証実験を行うように指示されているの。そしてそれは、今も有効なものよ」

「——失礼、それって2000年前の話だよな?」

「これは時間は関係ない。私にとっては今、この瞬間の重要なことなの」

「そう、とりあえずそれはわかったよ。それで?」

「お願い、わたしの Vault を完成させて頂戴」

「……ナンダツテ？」

「ここにはすべてがあるわ。でも足りないものが致命的。それは私の Vault と、それを作る建築作業員だけがない」

「自分でやればいいじゃないか。だいたい、200年も何をしてたんだ？」

「私？私は駄目よ」

「ダメ？」

「そう。だって私は監督官なの。建築をする作業員の真似事は出来ないわ」

イラつとくるものがあつた。

地上に出られない、閉じ込められたとわかつていて。なのに Vault を作ることもなにもしないままにここを放り出している理由は、たつたそれだけが理由？冷笑が浮かび上がり、相手にはつきりとわかるように侮蔑的な視線もそこに加えてやる。

「監督官様は、建築作業員はやれませんか？ということか。何か問題が？」

「問題はあるわ。わからない？私はそんな——そんなことをする人間ではないのよ」

「そんなこと？」

「ええ、そう。だいたいここに誕生するはずだった Vault には、当時の素晴らしい頭脳の持ち主であり。科学者たちのための場所になるはずだったのに。」

それは失われてしまったわ。

でも、まだ可能性は残っているはず。だからそのために、あなたたちに協力してもらいたい。私のパートナーとなって」

これはケツサクだ。

こんなふざけた申し出受けるために、わざわざパワーアーマーを借り受け。自分は危険を冒したっていうのか？

あのクソツタレの Vault—TEC のために!!

「お断り——」



「いいぜ、引き受けよう」

「ハンコック!？」

「ありがとう。これで実験を始められるし、人類の暗い未来はあなたたちが切り開いてくれたわ」

僕が嘲笑する前に、隣のハンコックはいきなり同意してしまった。

そんなの、慌てないわけがないだろう——。

「ちよつと、何考えてるんだよ!？」

「なんだ。お前は反対なのか?」

「もちろん!」

「なぜだ? Vaultの技術に興味がないとでもいうのか?」

「それとこれとは——だいたいロメオ・ワンはいつまでもこんなところにおいておけないし。僕らは今日中にコベナントに戻る予定だったじゃないか。」

ここに来ちやったのは……ただ血の迷いとか、若さの至りとか。そういうのさ」

「なら、俺はここに置いていって来ていい」

「ははは、まったく。正気じゃないよ、ハンコック。本気で、ここに200年も閉じ込められて放射能づけになっていた脳味噌を持つグールのお手伝いとやらをやる?」

「お前もどうだ? きつと楽しいぞ」

ハンコックは意見を変えるつもりはないらしいと、ようやく僕は悟った。

まったく、この市長は——なんでこんなに頭がイカレているんだかっ!

## Reinforce

パイパーは激怒した。

あのダイアモンドシティの夜の別れからずっと心配してやって、助けが必要じゃないかとわざわざ連邦に飛び出し。足取りを追っては、砦の戦いの後を調べ、さらに色々あってこうしてようやく再会したというのに。

その男の口から飛び出した言葉がどうしても許せないと思っってしまった。

「すまない、パイパー。でもわかって欲しい、コベナントの事件は公にはできないんだ」

「記者である君にしたら許せないことだとは思うが。ここはひとつ、わかって欲しい」

レオとガービーが並んで自分に懇願してきている。

だが、パイパーにはそれが理解できない。どうしてそんなことを彼らは口にするのか。

「信じられない。どういうことなの？まさか、理由もないなんて言わないわよね!？」

「あのコベナントは多くの支援者がいたに違いないが、それが誰なのか。未だにわからないままなんだ」

「それで？」

「彼らは人造人間自体を敵視していた。君だって見ただろう？連中がどんな酷いことをやっていたかってこと。

ここで行われていたことが明らかになったとして、それでどうなる？

インステイチュート、人造人間を保護するレールロード、そしてここにいた連中を援助していた黒幕達——彼ら全てを敵に回すことになる」

「ミニッツメンは、正義を恐れるって言うの!？」

「パイパー、ガービーはそういうことを言っているんじゃない。

君にも危険があると、わかって欲しいんだ」

「あたし!?!なにいつてるの、ブルー?」

「この情報の全ては君のパブリック・オカレンシズが独占するってことになる。」

事情を知りたい、もしくは情報を必要と考える奴らが居れば。ミニッツメンではなく、まず君の所に行くだろう」

「それが、なに!?!」

「冷静になってくれ、パイパー。それがどれだけ危険な事か、本当に分からないのか?」

「どう危険だつて言うのよ!?!」

「……ナットを騒ぎに巻き込むつもりかい?」

真っ赤に燃える美女の表情が、一変した。

はつきりとわかるほどに血の気が引いて、両目は大きく見開かれている。恐怖を感じているのだ――。

「君も妹も、勝気な女性だからそういうだろうとは思った。でも、だからこそあきらめてもらいたい。友人として」

「私もガービーも、君の友人だ。」

何かあれば力になるし、出来ることは全てやってもいい。

だけどパイパー。

君達が教えてくれたんじゃないか。この連邦の脅威であるインステイチユートについて。

今は更に、キャピタルからB. O. S. がやってきて彼らを攻撃目標にしようとしている」

「――あいつらも、興味を引くつて考えてるの?」

「レオはそれを恐れているんだ、パイパー」

政治的な大義を掲げた武装組織というものは、時に冷酷な決断を下せることをレオも俺も知っている。

人造人間を兵器と考える連中が、コベナントの事件に価値を見出せば――どのような動きを見せるか、まったく想像がつかない」

レイダーの服を脱ぎ棄て、昔懐かしいミニッツメンの服を着たレオは困惑顔を見上げた。彼はわずかに目を伏せると、覚悟を決めたのかパイパーの目を見つめ返す。

「インステイチユート、レールロード、B. O. S. に、よくわからない連中。

コベナントの犯罪に興味を持つのはパツと考えてもこれだけいるんだ。彼らの興味を引くような危険な真似を、君達姉妹にやって欲しくない。

私は妻と息子を奪われた。

彼女は子供を守ろうとして殺され。

子供は生きているというけど、その無事を確認する方法はまるでない。

それでもね、事情が分かってくると理解しなくちゃならないんだ。

こんな最悪で、生き地獄のような状況に陥っているというのに。それでもきつと私は——まだ運があるから、それを追うことが出来るんだらうって事」

「——わかった。ちよつと考えさせて」

パイパーは冷静になつて考えようとした。

残された犯罪の記録は覚えてしまいそうなくらい何度も見直しもしたし。そのたびに湧き上がる怒りをこらえようとして、ボートハウスの外にでては。叫んだり、川面に銃をぶつ放したりして気を紛らわせた。

で、納得は全然できなかったし。さらに怒りが湧いたけれど。

悔しくて悔しくてたまらなかったが、この事件については忘れることにした。

そしてレオとガービーらとは顔を合わすこともなく、さつさとニツクと一緒にダイヤモンドシティへと帰っていく——。

それがまあ、2月ほど前の話だ。

そしてナツトは——パイパーの妹は、うんざりさせられている。

原因は他でもない。

「目からウロコのパブリック！」といつもの宣伝と一緒に売り出された新年第2号と3号の評判がよろしくないのだ。

そしてその原因は、認めたくないが気落ちしているらしい自分の姉の記事のキレが失われていること。

製造と販売を引き受ける担当として、姉のこの無様な態度はもう何とかしないとイケない。そう考えることにした。

ナットはコレでも女の子なのだ。

多分、"傷心らしい" 姉の姿を見て、気を使って黙ってきたことに。今更ながら失敗したのだと理解した。

記事が書けない、ご飯も食べられないほどヌカ・コーラを飲み過ぎて気持ち悪くなった、そう言つて長椅子に横になっていた姉の前に仁王立ちになる。

「もういいわ、もうこんなのは沢山だよ。パイパー」

「——なあにイ？」

「いい加減にしろつて事！ どうしちやつたの、お姉ちゃん？」

「……なあにか、やっちゃつた？」

「ええ、そう！ もうやってる、見てられないくらいにね」

ここで必殺、2号と3号を机の上にポンと投げ出してみせる。

妹の本気をこれで察したか、気だるそうにして。それでもパイパーは体を起こした。

「独占の取材、ミニッツメンの今！ それなのに、記事に力がないって売れ行きが良くないの」

「そう。それじゃ——取り上げる内容が悪かったのかな」

「違う！ 記事が、良くないのっ」

「ナット？」

「ニツクと飛び出していつて、戻つて来て……なんだか調子が良くないのは知っていたけどさ。」

黙つていてもパイパーは全然復活してくれないんだもの。

だから、何とかしなくちゃ。どうしたの？ なにかあつた？」

「なにか？ なにかつて——なあにか？」

「ホラッ！ それだよ、それがおかしいつての。」

「ミスターに思いつきり振られちゃつた？」

「——はい？」

「死んだ奥さんが忘れられないとか、もしくはお前みたいにガサツな女は御免だとか言われた？」

「そんなヤツ、さっさと忘れちゃいな——」

「待って！ちよつと待て」

妹の暴走に、姉は待ったをかけた。

「えっと、ブルーと私になにかあったって思ってるの？」

「当然。そうなんですよ？」

「ないない、そんなの。あるわけがないじゃない。そんな、ブルーと」

「まんざらでもなさそうだったじゃん」

「それひゃ——ゆ、友人としてって奴だし」

「噛んだよ？」

「うるさいなあ。そんなんじゃないって」

「そう、振られてないの？」

「——まあ、はつきりとは」

「ホラア！」

「指をさすなつ、そんなんじゃないって！」

ひたすらに否定を続けたが——結局、パイパーは可愛い妹の追求から逃れることは出来なかった。

だから、ゆつくりと。あの時の事を語り始める。

|| || || || || || || || || ||

コベナントでは色々あつて感情に任せた行動をとったことを、実のところパイパーはダイヤモンドシティに戻って来てからずっと気にかけていたのだ。

だから、あのミニッツメンがボストン付近に機能を動かしたという話を。

ハングマンズ・アリーで耳にして、さっそく仲直りを兼ねた取材とということでおバーランド駅跡地にある居住地へ向かう。

そこは以前とまるで別物となっていた。

代表も務める一組の夫婦が続けていた畑は、さらに拡張されると別のものも育てていて。

旧世界のレールの両脇には、当時の駅のホームを思わせるコンクリートが並び。片方には見張り台やターレットなど。防衛に必要なものが用意され。

その反対側にはこの場所に必要と思われる電力を生み出す大型のパワージェネレーターが何台も並んでいた。

「まるで——別世界ね」

面白くもない率直な感想を口にして、別方向に目を移すと。

ミニッツメン用と居住者用に、別々の集合住宅がすでにそこに存在し。

驚くことに屋台ではあるが、店もいくつか開かれている。

「川向うにある、グレーガーデンのおかげなのさ」

「へえ」

店でヌードルとマイアラークケーキをつつきながら、店主から話を聞いた。

「あそこにいるのはグールだけど、店が充実しててね。こつちと連携をとってるんだよ。」

ミニッツメンも今はいるし、ちよつと最近は忙しくなりすぎているかもねえ。ありがたい話しさ」

「ブレストン・ガービーとか、いるのかな？」

「最後のミニッツメンかい？忙しくしてるから、留守かもしれないねえ」

「それじゃ、將軍は？」

「——將軍だつて？ああ、あの人かい」

「評判は良くないよ、確かにいい男だと思うけどね。あんたみたいな、美人さんは好きそうだ」

「え、いや。そういうんじゃない——」

「でもね！気に入らないよ、ガービーに意見してさっ。戦闘じゃ恐ろしく強いつて話だけど、元は地底人だつていうし、おつかないじゃない

いか」

「……」

「それにね、あの女共っ！」

「女？」

「1人じゃないよ、2人さ。まったく——」

店主が何を口にしてしているのか、最初はわからなかった。

だが、他にも話を聞くとだんだん何のことだか理解してくる。

レオは——ブルーはここに来て。

熱心に助けている未亡人と娘がいるのだそう。

別につきあっているというわけでもないらしいが。その2人は、こ

の居住地では事あるごとに彼の名前を出しては楽な仕事ばかりしよ

うとし。他よりも多くの分け前を主張するらしい。

ミニッツメンの將軍、その女と言うだけで——。

パイパーは新鮮なショックというものを感じていた。

動揺している、間違いなく。

あれほど素晴らしいコンビでやっているように見えたブルーと

ガービーを。周囲は逆に、ブルーがガービーに逆らっているとみてい

るようだし。

そんなブルーの人気をさらに貶めているのは——彼とつきあいの

ある親子が原因だとか、なんとか。

なのにパイパーは直接それを見てもしまった。

兵士と共に戻って来たばかりのように見えるあのブルーの姿を。

そうして周囲の目もはばかりのように見えるあのブルーの姿を。

良さげに振る舞う。ピンクのワンピースを着た、悪くない——少なく

とも自分と比べてもそう負けてはいない女性と親しげに話している

所を。

所を。

ナットの我慢もそこが限界であった。

「なに、それ!? サイター、ミスター」

「うっ」

「うっ」



「パイパーがいるのに、他の子持ちに目移りするなんてっ」

「べ、別にブルーとはつきあっているわけじゃないし。個人の付き合いというものは……」

「なにいつてるの!?パイパー?」

「か、彼はホラ。色々あつてさ。大変な時期だし、側に支えてくれる女性がいるなら。それは、それでも」

「いいっての!?!」

「——こつちがどうこう言える!そんな立場じゃないって言いたいのよっ」

「何言ってるの?」

「……」

「パイパー、その女と話した?」

「話してない。その、彼女とは」

「彼女とは?」

「……娘さんと、ちよつと」

「なんだか、あの時は耐えられたけど。」

「こうして妹を前にして白状させられ、思い返してしまふと。泣きそうになる。」

「なにがあつたの?っていうか、何を話したの?」

「私たちの幸せを邪魔しないでっ」

「ナニ?」

「あの人が——ブルーが、彼女の母親に飽きても。まだ自分が居るから、だって」

「……頭、おかしいのかな?放射能に長く漬り込まれて。おミソがグールとかになつちやつてるのかな、その娘?」

「彼以外の男、探せばッて」

「っ!?!」

その瞬間、ナットの怒りに火がついた。

拳を握り締め、怒りと共に長椅子の前に置かれた机の上にガンッと音を立てて右足を踏み出した。

「ちよつ、ナット!?!」

「そいつはブッコロス！地獄に叩き落す、必ずだつ」

「はア？」

「いいわよ、この戦い。受けて立とうじゃない、パイパー」

「ど、どういうこと？」

「簡単つ、すぐにミスターの所に行つて。パイパーが告つて、そのまま寝取つちやえばいいんだよ」

「ナットー!？」

妹の口から飛び出した過激な——それでいて随分と魅力的な——計画に姉は顔から火を噴いた。

せめて妹だけには、自分と違ってつつましい女であつて欲しいと思うのに。思っているのにつ。

「黙つていれば、今でもダイヤモンドシティ一番の美人はパイパー・ライトさんだつてこと。馬鹿親子に思い知らせてやればいいよ」

「——やらないよ、そんなこと」

「どうして!？」

「それと、寝取るとか。馬鹿なこと言わないの。

バツとして明日から3日間は外出禁止だよ」

「なによ、それっ!？」

パイパーは妹の抗議に耳をふさぎ、席から立つ。

気分は少しも晴れないが、妹のおかげでちよつとは元気が湧いてきた。

そう、落ち込んでいる自分なんて。あり得ない——。

|||||

ミニッツメンのジミーにとって、この2カ月はただただ忙しいだけで終わってしまった。

あのマクナマスの指示で、パイパーらを連れて連邦に出た後。

上司は戦死、同僚も多くが怪我を負い。命を失ったものさえいた。

だが、ジミーだけは違った。

ガービーらの友人達と付き合つたというだけで、どうやら顔と名前

を憶えられたようだ。

将軍らと一緒に作戦に参加を命じられ、気がつくところとちよつとした役職を与えられていることに気がついた。

『メールマン・C o o p』なる居住地間の多様な運送業を将軍の命令で開始したのだが。

その運営と報告の担当に、商人の息子であるジミーも選ばれることになったのだ。自分は兵士として戦いたいとは思ってはいたものの、将軍らのそばにいと。

彼らがそうした兵士以外の事で頭を悩ましている様子が度々目にする機会があったことで、ちよつとした意識改革が彼の中で怒っていたようである。

(ミニッツメンの——あの人らのためになるならば)

そう思つて、仕事に打ち込んでいる。

「それで、どうなってるんだ？」

会議の席上、ガービーに問いかけられる。きつそく立ち上がった。「色々意見はありましたけど、やはりアーマーは中古でもコンバットアーマーにすべきとの結論に至りました。

バンカーヒルに注文書を送っていて、近日中にルーカスのキャラバンが届けるとのことです」

「どのくらいあてにしているんだ？」

「20人分は用意するということでした」

「そんなに？——予算を聞くのが恐ろしいな」

「長い付き合いになると、だいぶ安くしてもらえましたから」

「今後はどうなりそうだ？」

「弾薬などの問題がなければ、数人分ずつ定期的に買い求めるようにしていこうと考えてます」

「サックチュアリとの取引次第ということだな」

「はい」

今のところ、ミニッツメンの武装強化案は順調に進めそうな気配である。

「整備班からは何かあるか？リッチー」

「パワーアーマーがダブってる。おかげでヒマなことが多い、それくらいだ」

不機嫌そうなりチャード・サルディーノことリッチーは、最近の仕事ぶりを簡潔にそう口にした。

「……東部への輸送は、パワーアーマーは入れるなどという条件だからな」

「この機会に、今のうち使えそうな新人にパワーアーマーの操縦法を学ばせるのもいいかも」

「なるほどな」

「訓練程度なら、修理にもそんなに手間はかからないだろうし」

「——例の、アキラから送られてきたものは調べてくれたか？」

「これのことだよな？」

そういつてリッチーが机に置いたのは、一丁の信号弾の発射装置と。

プラスチックの箱に入った、銀色の信号弾12発。

それはアキラからミニッツメンへと贈られた。「グレーガーデンで、東部に送り込む兵士のためのベルチバード召喚に必要なもの」ただ説明されていた。

弾が12発しかないのは、なくなる頃にまた新しく送ってやるということなのだろう。

ガービーは念のため、レオに内緒にこの弾頭の仕組みをリッチーに説明するように伝えていたのだ。

「わかったか？」

「ああ、わかったよ——。なにも、わからんってことがさ」

「どういうことだ？」

「この弾頭に、あのベルチバードを呼び寄せるようなものがあるとは思えねえんだよ」

「意味がないと？そういうことか？」

「わかっているのは、コイツの弾頭には硫黄ととにかく植物の胞子が入っているって事だけはわかった。複製しようにも、植物が何かわからないから無理だし。」

あの空飛ぶマシンが、こんなものに反応しているとはちよつと考えにくいかな」

「——はア、他にはないのか?」

「ないな……なあ? そのアキラつてのは、ミニッツメンなんだろう?」

直接本人に、聞いただしてみちやどうなんだ?」

「そうだな」

できるわけがない、心の中でガービーは唸り声をあげる。

レオは今も、あの若者の善良を信じて疑つてはいないようだが。ガービーの目を通した彼の姿は、ますますもつて危険な存在になるうとしていくようにしか思えないのだ。

そもそもにして、あの B. O. S. が所持するベルチバードの技術を。

彼はミニッツメンに提供するではなく、貸し出すとしか言つてくれないのである。

来る戦争を前に、ミニッツメンの強化を口にしておきながら。

アキラはまたも彼が生み出した兵器の運用をこちらにゆだねようとはしないことに、疑いを持たないというのはさすがにありえないだろう。

——約束された場所と時間に、その信号弾を使え。

——そうすれば、予定通りのコースを飛んでやらんことはない。

ミニッツメンには余裕も時間もないのではなかったか。

西から東へ、兵士をただ運ぶだけではない。

北部全域を空輸させれば、もつともつと。

人々は安心して、このミニッツメンへの支持を表明してくれるではないか。

(将軍——あのアキラが、本当に俺達を裏切らないと。あんたはどうして信じていられるんだ)

疑いはますます深まっていくが。

ガービーはレオの人を見る目を信じてもいる。

その彼が、「大丈夫だ」というなら。きつとそうなんだろう——。

会議が終わると、ジミーは部屋を出てようやく胸をなでおろすこと

が出来た。

夕方まで待つてから、川を渡り夜までにグレーガーデンにたどり着かないといけないことになっている。

兵士達と共にそこでベルチバードを待ち、夜の空へ。

兵士達はスロッグで降りることになると思うが、自分はコベナントで降りることになるだろう。

そこで仮眠をとったら、バンカーヒルまで歩くことになるだろう。

ドリンク・バーと看板に書く屋台の前には、仕事を終えたわかいみにつつめんたちがたむろっていた。

だが、ジミーが近づくと。

皆が冷たい目を向けて背中を向けてくる――。

信じたくない話ではあるが、ジミーはうまくやっているのだそうだ。

ハングマンズ・アリーで生き延びたかつての同僚たちは、死闘を免れてひとり扱いが良くなっていくジミーのことをそう言って皮肉っているのだとか。

彼にしてみれば、上司に言われて仕方なく命令に従い。戦うチャンスを奪われてしまった、そういう話であつたはずなのに。

かつての仲間はどうではなく。

マクナマスに取り入り、戦場を離れてひとり。出世の道を歩いて行つたのだそうだ。

なぜか評判の良くない將軍に属してもらっているのも、それを証明するものなのだそうだ。

(嫌な流れだな――)

ジミーに、その声に反論する機会はずぶん。与えられることはない。

|||||

会議は終わったが、ガービーは部屋の中から動こうとはしなかった。今回も將軍は——レオは、欠席している。

ミニッツメンの中に問題が芽生えつつあることを、ガービーも認めないわけにはいなくなってきた。

レオと兵士達の間には、なんともしようのないズレが生まれ。

それを解消する方法が全く思いつかないのだ。

まったくおかしな話ではあるが。ここに来てミニッツメンはさらにレオやアキラの力を欲しはするものの、彼らに存在感を放たれることを兵士達が望んでいないという空気が流れているのだ。

滞っていた仕事を進め、いくつかの障害は若い兵士を率いてまたたくまに武力で解決してみせたレオは。

そんなミニッツメン達に気を使ってか、距離を置くように探偵と行動を共にしていると聞いている——。

咎めて、あるべき場所に戻ってくれと求めるべきなのだろうが。

今は彼の仕事はここにはほとんどないと言っていいし。ただここでふんぞり返って偉そうにしてくれと言っても、彼がそれを喜んで応じてくれるとは思えない。

そして何より——自分がまた、失敗をしてしまうことに恐れを感じている。

サンクチュアリではアキラとの関係に溝が生まれ、しかしそれは自分分は決してすべてを間違えていたわけではないとおもうのだけれど。

それからさらに危険な雰囲気を漂わせていくアキラに対し、レオは今も平然と彼を信じていられるのを見て。あの2人のきずなの強さを思うと、自分の能力に疑問を抱かないわけにはいかなくなる。

そしてだからこそ思うのだ。レオとの関係を、將軍とはうまくやっていかなければならないのだ、と。

(仕事だ。仕事をするんだ)

ガービーにとって、友人達も大切ではある者の。

やはり何よりも重要なのは。この生まれたばかりの新しいミニツ

ツメンが。かつての栄光を取り戻すことなのであった。

|||||

ダイアモンドシティの酒場と聞かれたら、それは普通はコロニアル酒場だろうと人は返すだろう。

だが、それを鵜呑みにして信じてはいけない。

そこは確かに酒も食事も出しはするものの。

この壊れた世界でも、まだ存在すると考えている。キャップ持ち達のための憩いの場所だ。休憩しようとうっかり訪れて、そこにいる店員と客にたつぷりと嫌味を聞かされたうえに、セキュリティに連行などされる経験はしたくないだろう？

だから素直にダグアウト・インに向かえばいい。

あの悪名高きボブフロフの密造酒を生み出した張本人たちが経営する安酒場がそこにはある。

なんなら一度、その酒をちびりともなめてみるのもいいだろう。その強烈なアルコールに目を回してぶっ倒れたとしても、前もって宿にチェックインしていれば。優しく寝床に放り込んでくれる、そんな場所だ。

その安酒場に、誇りまみれの西部のガンマンの如き男たちの一団がぞろぞろと入ってくる。

どこにでもみるようなガンマン達だが、皆一様に目がギラついていて。安酒場で楽しいひと時を過ごしていた他の客たちは慌ててその視線と交わらぬようにと顔を伏せていく。

空気が若干の重さを生むのを感じたか。

店主のバディムは声をかけた。

「またあんたらかい……別に客なら歓迎するが。それにしたって、他の客を怖がらせないでくれよな」

「——わかつてる、すまないな」



「ビールでいいよな？7本、食い物が欲しけりや、カウンターに注文してくれ」

「ああ、頼むよ」

男のひとりがそう話している中、向かい合う長椅子に残りが近づくと。

そこに座っていた連中は、黙ってそそくさとその場から立ち去っていった――。

女性がビールを運んできて、机に並べると。

すぐにそれを手に取り、無言のまま彼らは喉を湿らせる。

このあたりになると、少しは慣れたのだろう。

酒場の空気も幾分か緩み、彼らをおっかながっていた他の客たちもまた。元の話題に戻っていく。

「――だよなあ。さすがミニッツメン、ブレストン・ガービーさまさまだよ」

「生まれ変わったミニッツメンに」

「最後のミニッツメンによる、連邦の未来に」

乾杯、そういつて後はグラスをあわせるだけのことだった。

この会話は奥の席に座っていた2人の旅商人の間での事であったが。

ブレストン・ガービーの名前が出たあたりから。長椅子に座る男たちに変化が生まれた。怒ったのである。

「……」

「おいっ、あんた達。いい加減にしろよな。大人しく酒を飲むって事すらできねえのかい！」

入って来た時から、彼らの一挙一動から目を離すまいとしていた店主は。騒ぎが始まりそうなのを察し、先んじて声をあげる。

そうしている間にも、共同経営者である弟のイエフイム・ボブロフの姿は店の中から消えていた。

ダイアモンドセキュリティへと、駆け込みに行ったのである。

「ちよつとばかり、話をするだけじゃねーか」

「その素面のツラで、よその客に絡みに行くんじゃないやねえって言ってる

「なんだよ」

「なんだと?」

「パブでの作法ってヤツを、母ちゃんの腹の中でお勉強してこなかったんだな」

今度は店主の方から、男たちを煽るようなことを口にしはじめ。

血が流れると確信した感のいい連中は、さっそく出入り口に向かって移動を始めようとしていた。

「ちよつとーなに騒いでるんだい?」

その出入り口から勇ましく入ってきたのは、戦闘服にベレー帽をかぶった。老齢の女性兵士であった。

彼女の声を耳にしたとたん、殺気立っていた男たちはいきなりしつけられた犬のようにしずかになってみせる。

「別に——」

「そうかい」

「なに、つまらねー小芝居やってやがるんだ。おめーらは」

「なんだい、バディム。今日はやけに絡んでくんだね?」

「ロニーの婆ア。今日はてめーらのキャラバンに出す酒はキレちまつてるぜ。そいつらを連れて、さっさと出て行ってくれ」

「追いつ返すってのかい? あんたんとこの宿に泊まろうと思ってたんだけどね」

「へっ、ゴメン被るぜ。少なくとも、今日はあんたらの寝るベットは置いてないぜ」

「……どうも怒らせちゃまったみたいだね。どうしたらいい?」

「なにもしなくていいぜ。俺も、お前らの顔を忘れるまでは、気を変えらるつもりはないしな。弟がセキュリティを連れて戻ってくる前にさっさと出ていきな」

「そうかい。ビールはいくらになる?」

「つけにしておいてやるよ。忘れないうちに、支払いに来てくれ」

「——わかったよ」

ロニー・シヨールは、素直に回れ右をすると。

若者たちに顎で「出ていくよ」と合図をして、立ち去っていく。

「お客さん方！野暮天はさつさと追い出しましたんでね、どうか続けて。ボブプロフの密造酒！どんだん注文していつてくださいよオ」

ダグアウト・インに、また静かな時間が戻ってこようとしていた――

ダイヤモンドシティの入り口に、3頭のバラモンが並んでいるそばに店を追い出された一団は戻ってくる。

彼らのリーダーらしき老婆は、しかし騒ぎを起こそうとした男たちを別に叱ろうとはしなかった。

「モメちまつて、本当に――スイマセン」

「いいさ。どうせ、あんたらが酒を飲めないってだけだからね。あたしや、構わんよ」

「あの店はもう、つかえないってことは？」

「錢ゲバのボブプロフ兄弟が、ちよいと騒ぎそうだった連中をいつまでも覚えてはしないさね。次は、ちよいと割高になってるかもしれないけどね」

「はい」

この兵士の身なりをした老婆、ロニー・ショーは。

かつてのミニッツメンでは重鎮として知られた古参の兵士であった。

だが、そのミニッツメンは自ら堕ちてしまう――。

クインシーの虐殺の事ではない。

それよりも、もつと以前の話、そう2282年のことだ。

ミニッツメンは当時、有能なベツカー將軍の元で連邦の正義を象徴する存在として輝いていたが。

彼の突然の死が、ミニッツメンの中にあつた醜い権力闘争を引き起こしてしまい。どいつもこいつも、自分たちが何者であるのか。どんな任務を守らなければならないのか、それを忘れて好き勝手なことを口にし始める。

ロニーはそんな仲間達に呆れ、早々にミニッツメンから抜けていつ

ただ。

それから5年……馬鹿共は結局、任務すら忘れてしまい。ついにクインシーの虐殺なんていう汚名を残すに至っては、さすがの老女も乾いた笑い声を上げるしかなかったものだ。

そうしてロニーは、『自由の戦士』を名乗って旅するキャラバンの目的地を連邦と決めた。

5年という長い時間は、連邦の姿を信じられないほど大きくかえってしまっていた――。

「ケビンの奴にね。ちょいと行ってもらったんだよ」

煙草をくわえ、ポケットから火を探りながら老女は続ける。

「ガービーのやってることをね。ハングマンズ・アリーだっけ？ 新兵希望ってことにしてさ」

「……ロニー」

「連邦に帰ってきて、ここで情勢を見直そうって思ってたが。あいつがやってる新しいミニッツメンだったかい？」

そろそろ、話をしなくちやいけないんじゃないかって思うのさ」

ミニッツメンから離れてからずっと。

ロニーは自分を慕う若い兵士達を連れ回し。商売をしながら、自分たちなりのミニッツメンという活動を続けてきた。

だが、この老婆の才能では。せいぜいキャラバン程度の組織までしか作れることも、維持することもできなかつたのだ。

そして今回はついに、現実まで思い知らされた。

新たに誕生した居住地は、商人としてのロニーの集団を受け入れられたもの。

彼らを守ろうという申し出を、彼らは丁重に。しかし即座にことわってきた。「その必要はないよ。我々にはすでに、新しいミニッツメンが守ってくれているから」と。

同時に、信じがたい屈辱も感じた。

申し出た彼らの事を……まるで新手のレイダーか何かじゃないか

と、疑う眼差しを向けてきた。

ミニッツメンの精神は、自分たちが引き継いでいるのだ。それを信じて、戦ってきた5年間をすべて否定されたような気持ちだった。

だが、ロニーは若者たちと一緒にあって。ただ悔しがつてばかりはいられない――。

「ブレストン・ガービーだったね。あの若造、どれほどのもんなのか。新しい将軍とやらを立てているそうだが。あたしらはついにその両方を、見定める時が来たんだろうね」

「それは俺達も、あいつに合流するってことですか？」

「結論を先に出すんじゃないよ……言いたいことはわかるさ。」

だがね、こつちがやっていることを。本当にガービーのいう、ミニッツメンとやらが果たせているというなら。そりゃ、むしろ喜ぶべきじゃないのかい？

自分たちの事ばかり主張して、まとまる気のない馬鹿共はもう消えたか死んだかしたんだ。

連邦の状況もさらに変化しているし、このまま小さくキャラバンと傭兵団を気取って。チマチマと活動が続けたとしても、限界は見えにくるものさ。

今のうちに、備えておかないと――」

ロニー・ショーはキャピタルから来たB・O・Sの目的を知らない。

だが、長く戦場にいたその経験から。あのような武装組織が意味もなく。ここにやってきたとは考えられない、と思っている。

そういう意味では、彼女は正しくかつてのミニッツメンの精神を引き継ぐ一人と言えるのかもしれない。

連邦の正義はひとつ、ミニッツメンだけにあればいい。

ウエポン　　チヨイス　（LEO）

バレンタイン探偵事務所の扉が開く音がすると、机に座ったままのエリー・パーキンス女史はちらとだけ相手を確認すると声だけをかけた。

「あら、探偵さん達。マーティの面倒ごとはどうなったの？」

「奴らしく堂々としていたよ、いい死にざまだった」

「——そう。ついにくたばったんだ、あいつ」

そういうと、なにかを振り払うように手を止めると頭を振ってみせた。

ニツクは多くを語ってはくれなかったが。以前、エリー本人からニツクの元相棒から熱烈なアプローチがあつたということを小耳にはさんだことがあつたのを思い出した。

「最近はおかしな事件ばかりでうんざりさせられる。ちよつと前には、知り合いがやっぱり殺人事件に巻き込まれてしまったし。もう、どうなってるのかしら」

「事件はどこでも起こっているものさ、エリー」

「ええ、そうね——そういえば今の殺人事件で思い出したんだけど、ダグアウト・インのボブプロ兄弟からまた依頼があるって話があるんだけど？」

「またあ？今度はなんだ？」

「さあ？ただきてほしいって言うのを繰り返すばかりだったわ」

「つまり急ぐ話ではないし。そもそも酒を飲みに来いって誘いではない保証もないわけだな」

「……そうかもね」

「なら、放っておくさ。話す気になったら、また来るだろう」

「そうね」

探偵と秘書は慣れた会話で互いの無事を確認しあっているようだ。

私はそこに加わっていく。

「実はエリー、ニツクが後回しにしていた事件があつただらう？」

「どれ？色々あるけど」

「おいおい、俺はちゃんと働いているだろう？ そんなにため込んでるはずはないぞ」

「そう思っているのは、探偵だけかも」

「話を戻そう——例のナカノの依頼だ」

「ケンジ・ナカノ？ 確か誘拐事件だったわね」

「ミニッツメンが北東部の調査が進んでいて、今ならニックもあそこを歩いて大丈夫だと思う」

「ああ、確かインステイチュートの人造人間の部隊が歩き回ってるっていう——」

「エリー、あれから依頼人とは連絡がついたのか？」

探偵の問いかけに秘書は書類棚の引き出しからファイルを取り出し、中を確認しながら答えた。

「いいえ。あれからもう4ヶ月近くたつけど、依頼人は来ていない。バンカーヒルにも、見かけたら連絡するようにメッセージを流しておいたけど、反応はないわね。生死不明よ」

「それはマズいな——」

「こういう場合は、どうするんだ。ニック？」

「対応は2つ。連絡を待つということと、さらに後回しにするか。直接依頼人の元へ出向くかだな」

「今回の場合は、ニックも動けるみたいだし。依頼人に会いに行ってもらうしかないわね」

途端に私の声は曇りがちになる。

「どうやらそのナカノという人の家は、東海岸でも連邦の境界線ギリギリに近い場所にあるらしい。ミニッツメンでは住人の生死までは確認は取れなかったそうだ」

「ふう、そうなる。やはり直接行ってみるしかないな」

「ふふつ、彼の話ではニックとは知り合いだと言ってたわ。こんなに待たせてどういふつもりだって、興奮してても知らないわよ」

「ケンジ・ナカノ……ふむ、聞き覚えはあるんだが。思い出せないな」

「面倒がらずにちゃんと事件はファイルしておけば。そんなこと言わなくて済むって言ってるのに」

「それはだめ。お前の仕事を奪うことになる」

「ふふん。——ナカノは漁師をしているそうよ。となると、彼がこの町に来るなんて大変だったでしょうね」

「詳細な依頼内容は？」

「書類でもわからないって書いてある。思い出したけど、ここに来た時もとても冷静ではいられないって感じで、取り乱していたわ。『ニツクを出せ』ってそればかり」

「困った依頼人だな」

「当時の私は、彼は行方不明の家族の捜査で来たんじゃないかって書いてあるわね」

安全とは言えない場所に出向くのに、これでは情報が少なすぎる。

「頼むよ、エリー。ナカノは一体、何を話していったんだ？ 思い出してほしい」

「詳しいことはあった時に話すって。ニツクが本当にいないのだとわかって、ブツブツなにか呟いて出て行ってしまったけどね。いてもたってもいられずに、ここまで飛んできたって感じだった」

「何をつぶやいていた？」

「よくわからないけど、娘とラジオがどうか——。なんの関係があるのかわからないし、聞き間違えたのかも」

確かにラジオはわからないが、娘という言葉が出たなら。行方不明者の捜索というエリーの勘は本当だということになるだろう。

「あ、ミニッツメンで思い出したけど。ちよつと前にあの人たちが大勢ここに詰め掛けてきたの」

「ミニッツメンが？ 私に用があつたのかな」

「いいえ、違うみたい。ニツクへの届け物と一緒に持ってきたって」

「届け物？」

ダイアモンドシティには、現在アキラのキャップで借りたかなり大きな家がある。

困ったことに本人はそこへまったく入ろうという気がないらしく。ミニッツメンが交代で寝泊まりし、時には部隊がそこで休憩に使うなどしていた。



エリーは多分、そこにいるミニッツメンの事を言っているのだろう。

「あれよ、確かめてみて」

部屋の奥にある、ニツクの机の側に。

確かにかなりの大きさのケースが複数並べられていた。

|||||

——レオさん。新しいの、用意しました

メッセージカードにはそれだけが書かれていて、差出人がアキラだとわかった。

知らずに笑みを浮かべた私は、すぐにケースをニツクの机の上ののせて開いてみせた。

カスタム・ラジウムライフル。

そう記されたそれは騎兵用小銃——いわゆるカービン銃を思わせる小型のライフルであった。

どうやらこの銃は、連邦のチャイルド・オブ・アトムがつかっているものらしく。どうやらそれがバンカーヒルの市場に流れてて、それをアキラが手に入れたらしい。

(ショートバレルでサプレッサー付き。弾はロングマガジンで40発、中距離スコープもあるのか)

だが、この銃の最大の特徴はクライオ技術が用いられていること。

さすがにあの大型兵器と同レベルの冷凍弾は発射できないが。この銃から発射される弾は放射能と冷気を帯びたものになるらしい。前から望んでいた、中、近接戦闘用の実弾兵器が再びこの手に戻って来てくれたと感じる。

「……ああ、こっちはとんでもないな」

前回の時もそうだったので、今回は贈られてきたもうひとつは狙撃銃だろうとは予想していた。だが、実物のそのでたらめぶりがあまりに様々な意味でひどい、の一言に集約されるため。レオは唸るように感想をそう述べるしかなかった。

その狙撃銃は50口径弾を用いる、大口径の対物ライフルだった。だが、いかれているのはそのデザイン。

ヌカ・ワールドではハンドメイドライフルの名称で取引されている。中国軍アサルトライフルによく似たデザインの銃が使われている。

だが、中身と言うか仕様はもうほとんど全部が独自のものとなっている。

通常の50口径対応バレルが使われる中、マズルはフラッシュサプレッサーが使われている。これは通常のサプレッサーと違い、銃口の制御と火花を抑制するだけのものなので。発射音はそのまま一発ごとに轟音を響かせることになる。

装填できる弾丸は5発。

ストックが、反動抑制を目的としたものを使い。珍しいことにレコンスコープが採用されていた。

(まともな使い方をされるための対物ライフルって感じじゃないな) というより、これは狙撃銃としてもどうなんだという代物だ。

ロシアの名品、AK47にも、それをベースに設計された狙撃銃があるにはあった。

だがこれはどうやらそういうものを狙っているとは思えない——。このクラスでも、対物ライフルならば1.500メートル先の敵を討つことが可能だと思われるが。

むしろ逆に、目の前の分厚い壁の向こう側に身を隠す敵をぶち抜いてください——この銃からはそんな声が聞こえてくるようだ。

「レオ。あのアキラって若いの、何を考えてるんだ？」

「ニツクにも送ってきたんだな」

「ああ、以前とほとんど同じようなのをな」

「以前って？」

「前にもミニツツメンが、銃を持ってきたことがあったの。笑えるわよ、なんと銀に輝くサブマシンガンだった」

「エリーにも笑われて、こんなものが使えるものかと。あの家に行つて置いてきたんだ。それなのに——」

「また、送ってきたと」

「そうだ。なんでだ？」

頭を抱えるニツクに、私は黙って彼に送られてきたケースを開く。

「おや、これは——」

今回、彼が私に用意した銃のエキセントリックさを思うと。そこにあったのは至極、まともな範疇に入ったサブマシンガンがあった。

「シカゴ・タイプライターか。ハンドガードにスコップマウントベアス追加されてる。

フォアグリップとタクティカルライト。うん、悪くないんじゃないか？」

とはいえ、この銃には人が触れない部分にむき出しの配線やら電子装置がへばりついているのが気にはなる。

どうやら説明書を兼ねた仕様書によると、こちらは冷やすのではなく、熱を与えるらしいが。

「どうしたものかな——」

「私から借りていた時も、サブマシンガンなら器用に扱っていたじゃないか。いつまでもパイプ銃をつかうというのもなんだし、いい機会だから。アキラの贈り物を使ってあげたらどうだい？」

「ううむ」

「そうしなさいよ、ニツク。それにその人、今回も突き返したら。きつとまたとんでもないもの、送ってくるような気がするし」

「そういうわれてもなあ」

「ニツク——」

彼はまだ、躊躇いを覚えているようだ。

私とエリーはそんな彼を微笑みながら横目で見つつ、弾薬箱から弾丸を取り出し。新しい銃のマガジンへとそれを手早く詰め込んでいってみせる。

——早く撃ちたいな

ケースには他に、軍用のベレー帽も入っていた。

朱の強めなワイン色のそれは、若者から老人へ。かつての時代を思い出せという、励ましのよう感じた。

（気がつくど、いつの間にかこつちが励まされる番になっていたか——）  
頭にそれをかぶり、重を背中に回すと「あら」とエリーはコチラを見て思わずというように呟いた。

「いい男がいた」彼女の言葉に私はニヤリと笑みを返した。

|| || || || ||

会議は紛糾したが、“小さな宝物”にとつての現状に変化は思いうほど生み出せる材料はないという現実を否定することは出来なかつた。とはいえ、最初から熱が圧倒的に足りない会議である。

「またこれかつ!? こんなこと、あなたがたはいつまで続けたいんだ!」キンジョウのヒステリックな金切り声は、しかし同僚たちの心にはちつとも響くことはない——。

結局この日も、なんの建設的な意見が出るわけでもなく。ただ厳しくなつていく連邦の状況と、自分たちの活動範囲がちつとも拡充されることはないことを確認しただけで終わった。

会議室からキンジョウが足音荒く立ち去り、観察者が続いて静かに消えると。

残された4人によく表情が戻ってくる——。

“本物の会議”とやらは今、この瞬間から始まるのだ。

サカモト、コンドウ。さらに今回はクロダ、キジマがお互い向かい合うように座っている。

口を開いたのは、キジマでクロダがそれに続く。

「いつまでこんな茶番を演じさせるつもりだ、コンドウ、サカモト」  
「キンジョウなどに好き勝手になじられるのを喜んでるわけではないだろうな」

コンドウはむすつとしていたが、サカモトの表情に苦笑が浮かぶ。

「まさか——」

「お前らの求めにある程度納得したから、この茶番に参加はしたが。

この調子では我々の忠誠心を疑われる事態もあり得るぞ」

「それはいいですよ。おわかりでしょう？」

コンドウは表情を変えず、ぼそりとつぶやく。

「あの人は参加していない。ここしばらく、ずっとそうだ」

「そうです。あのアキラの帰還から、シヨックを受けたあの人はずっと体調不良を理由に嘆き続けている——。これ以上、悲しませることはしたくありません、本当の事を知ってね」

「アキラを連れ戻す、それなら俺が言っただけで帰ろうと言っている」

「申し訳ないですがキジマのその言葉は信用できません。あなたはアキラを相手に力試しなどはじめかねないから、そもそも近づけなかったのですから。今回だって、買い物気分で彼と戦闘騒ぎなど起こしてもらおうわけにはいかない」

「——アキラに負けると思ってるのか？」

「キンジョウのような、失敗をしてほしくないと云ってるのです。観察者と部隊を使って、万全の捕獲チャンスを逃しました。あれがなければ、我々はもつと違った悩みに直面していたはずです」

「新しいアキラ——フン、あのキンジョウがな」

「今のアキラの生死はそのまま我々の未来に大きく影響を与えます。おいそれとは手を出せません」

「さすがに”小さな宝物”であっても、あの地球の守護者同盟の正体を掴むことは出来なかったが。」

それでもアキラがすぐに連邦に戻って来ていることは、さすがに察していた。

「茶番になる理由は、観察者だ。アイツもあのアキラには執着するものがあつた。だが、キンジョウと組んだあの一件以降。すっかりおとなしくなっていて、黙ったままだ」

「あの人のことを心配しているだけでは？」

「コンドウと私は別の答えを考えてます——我々と同じように、あれもアキラの今の居場所をすでに知っている、と」

「なら、なぜ会議でそう言わない？」

「そうです。我々も最初、それが理解できなかった」

「わかったのか？」

「またキンジョウが騒いで、今度は我々全員を連れてアキラの元に向かうと言いつけられるのを嫌がっているのでしょうか」

「なるほど」

それはいつてみれば、小さな宝物のほぼ全力を出すことを意味する。

当然、それにアキラが抵抗するならば、それを許すことは許されない。

「ですが時間をかけてよかったかもしれませんよ」

「なぜだ？」

「あのアキラは早かった、ということだ。資産のひとつであったコベナントは瞬く間に蹂躪された」

「アレは痛かった。連中は科学者だ、ああいうのは口では我らの存在を残すようなことはしないと信じていても。保険のつもりでなにかを用意していたはず」

「俺が行ってもいいと言ったのに」

「ですから、アナタは駄目ですよ。それにアキラはやはり侮れません。すでにあそこはアキラの要塞です、近づくこともできない」

「この2カ月、レイダーをけしかけて何度か送り込もうとした。だが――」

町の入り口にたどり着くことすらできなかったのだ。

どうやったか接近を察知すると、マクレディは素早く町の上部へと移動し。そこから狙撃し。

それでも粘り強く接近しようとする、ターレットが作動した。

「それだけではありません。あのボツビが手にしようとしたサウガス製鉄所、あれも彼の手に落ちたようですよ」

「……ほう」

「ロボットと傭兵があそこにいるそうです。身元やら背後を調べたかったのですが、先ごろあのミニッツメンがああ近くの居住地をまとめて会談を持ちましてね。今では我々も部隊も容易には近づけません」

「あのミニッツメンはアキラが支配していると?」

「それはないでしょうね。ですが、力くらは貸しているのでしょうか?」

「——アキラの事はそろそろ放っておくべきではないのか?」

クロダのいきなりの言葉に議論は止まり、沈黙が生まれた。

「どういうことですか?」

「アキラもそうだが、そもそも我々は海上で風の中に残り残されていると思っっている。キャピタルのB・O・Sは予想外の脅威であり、インステイチュートは期待できない鈍重なヤオ・グアイだ」

「——なるほど」

「どうせアキラはすぐに我々の前に立ちふさがれることは出来ない。だが、B・O・Sを彼も無視はできないだろう」

「確かに、今の連邦でアキラが我々をのぞけば一番無視できない存在と言えれば彼等でしょうね。あれは、そういう習性をもっているそうですから」

深いため息が複数聞こえる。

「インステイチュートか。アイツらは何を考えているんだか」

「今の彼らの指導者は切れ者ですが。確かに何を考えているのやら——。彼らのエージェントを探っているものについてあらかじめ警告したのに、ダイアモンドシテイなどに置いてみせたのは失敗だった」

「それについてはもう、終わったでしょう。」

我々も気をきかせて当人に直接コンタクトしましたが。彼も結局、追っ手を自分に追いつかせることを望むような愚かな振る舞いを見せた。あれ以上、我々が出来たことはありません」

「インステイチュートの秘密は守られているのだろうか?」

「それはさすがに大丈夫でしょう。インステイチュートも、さすがに自ら危険を本部に招こうとは思わないはず」

「だが、頼りにはならん。B・O・Sも、どうやら気にしてはいないようだしな」

元が科学者の集団ということを考えれば、敵の存在に過敏にならないインステイチュートの態度は理解に苦しむ部分は確かにある。他人事、とまでは思っていないとは信じたいが。

だが、それでもこの連邦最大の知能があそこにはあるのだ。むぎむぎそれを軍人面をした山賊どもに踏み荒らされるわけにはいかない。

「そうになると、我々は新たな資産を開拓する必要があると?」

「消耗が多かったからな。ここらで増やすことを考えるべきだろう」

「グッドネイバーのハンコックが消えたのも痛手だな。今なら奴と話が出来たのではないか?」

「どうでしょうね。奇人で知られた人物です、アウトローでもありませんでした。やはり難しかったのでは?」

「奴にしても、結局は力を失ったというだけだ。だれだったか、片腕を失っただろう。ボツビとアキラに」

「となると、やはりレールロードとB・O・S.でしょうか」

あの若きカリスマ、エルダー・マクソンを心酔する兵士達を切り崩しにかかると言っているのだろうか?

深く血の底に潜るあのレールロードに、コンタクトをとれるということなのか?

「ひとつ、話しておきたい」

「何だ、クロダ?」

「ヌカ・ワールドだ。あそこは今、アキラを再び求めている。実はすでにゲイジはこの連邦に入らせた」

「……!」

「それはさすがに、もっと早く聞いておきたかったことですね」

「違う。ポーター・ゲイジは我々を裏切ったと言っている。アキラがいればいい、奴はそう考えたのだ」

「そうになると——ヌカ・ワールドも彼のものになりますか」

「ゲイジを殺すか?」

「いや、俺は放っておいていいと思う。それより——」

「?」

「これをミニッツメンに使えはしないか?」

「——なるほど、なるほど」

それぞれの顔に邪悪な笑みが浮かんでくる。

「ミニッツメンには先日の改革で、我々が声をかけた連中は無意味化



されてしまったばかりではあるが。確かにアキラが力を貸しているなら、彼等との間に距離を作らせることが出来るかもしれないね」  
「ヌカ・ワールドはあきらめるのか?」

「キンジョウの報告が事実なら、アキラは無法者を無意識に憎悪しているはずだ。彼に預ければ、案外レイダー共を排除してくれるかもしれないねえ」

「そうなれば、元いた奴隷だった連中開放してあそこに置くことになるだろう。我々が近づくのもさらに容易になる」

サカモトはそこでポンと両手を叩いた。

「どうやら名案は生まれませんでした。当面の目標は定まったような気がしますね——」

「アキラはキジマに監視を頼む」

「コンドウ!?!」

「大丈夫だ。キジマは任務を裏切ったりはしない。それに、観察者の事もある。彼なら適任だ」

「まかせてくれ。そのゲイジというのも、面倒見よう」

そして会議室は空になる。

不穏な相談は終わり、彼らはそれぞれの任務のため。連邦の陰に隠れて、動き出していったのだ——。

|| || || || ||

グレーガーデンで一旦ニックと別れた。

彼はそこから、アキラのベルチバードで直接現地を目指すことになった。

私はケンブリッジ警察署のB・O・Sを訪れると、そこからブリドウエンへ。

プロクター達に報告がたら、ダンスにも会った。

キャプテン・ケルズは私の姿を今回も歓迎することはなく。「君は何故、エルダーが与えたあのパワーアーマーを着てこないのだ」としかめっ面で説教をもらった。

ダンスとブランデイスは共に元気そうであった。

どうやら最近の彼らは、いよいよもつてどうにもならなくなりはじめたプロクター・クインランのフィールドスクライブへの半ば強制的な協力に駆り出されていて、苦勞していると思痴をこぼしていた。

もつと戻つてこい、と彼らは言つてくれたが。私はそれには苦笑いで誤魔化した。

帰りはランサーに頼んで東海岸沿いのルート上で降ろしてもらい。そこからは徒歩で、ニツクの待つまだ用意がされていない居住地へと夜には入ることが出来た。

ナカノ邸に出発するの翌日の朝となる。

実にベルチバードを使ったとしても3日かかる距離であった。

予想では海岸沿いはマイアラークがそこかしこに巢でも作っているのだらうと思つていたが。実際に歩いてみると、狂つて打ち捨てられたらしきロボット達や。フェラル・グールがいるくらいで、マイアラークには結局一度も会う機会がなかった。

エリーの予言はある意味では正しかった。

ケンジ・ナカノは到着したコチラの顔を見るなり怒鳴り散らしてきたのだ。

ニツクは彼をほとんど覚えていないというので、「恩知らず」と吐き捨てたタイミングでケンジとニツクの関係について質問する。

それによると昔、仕事を一緒にしたことがあったらしい。

ニツクはそれで記憶を取り戻したらしいが。2人の会話を聞く限り、その一件はあまり良い結末ではなかったようだ。

そしてやはり依頼は、姿を消した彼の娘を捜索してほしいというものであった――。

「俺はその娘さんの部屋を調べてくる」

「わかった、なら私は夫婦から事情を聞いておくよ。ニツク」

ケンジはこの頃には冷静さをいくぶんか取り戻していて、たぶんこれが普段の彼なのだろうと思われた。

(娘か……消えて3カ月近く、不安だの心配だの言つてられる状態

じやなかったのだろうか)

シヨーンのことを思い、必死にこちらに助けを求めてくる夫婦の姿が。自分のそれと、わずかにダブるのを感じた。

そうだ、私だって彼らと同じなのだ。

今の彼らと違い、私は息子がどこにいるのかは分かっている。もつとも、そこに行く方法がないのだから、それがどれほどの慰めになるのかわかりはしないものだが。

夫婦をまたも激怒させるほど問い詰めることもなく。

家の中をひっくり返すように、荒らすこともなく。娘の行方を求めて捜査を続けた結果、日が沈むころに一応の結論を出せることとなった。

「だが、ニツク。これは——」

「そうなんだが、他にやりようもないしな」

傷心の依頼人には告げたくない内容であったが、判断が必要だったため仕方なく報告することになった。

「それで!? わかったのか?」

「ああ、そうだな」

「おお! よかった、それで? 娘はどこにつ」

「——それに答える前に、おふたりに聞いておきたいことがあります?」

「あなたの娘、カスミ・ナカノは。本当にあなたの娘さんなのでしょうか?」

「なんてことを言うんだ!」

やっぱり思った通りだった。

せっかく静かになったと思つたケンジが、再び激怒する。

だがその気持ちはわかる。私だって、シヨーンで同じことを聞かれたら怒つたに違いないのだから。

「頼む、捜査に必要な事なんだ。冷静になって、ちゃんと答えて欲しい」

「冗談じゃないぞ、ニツク! 私たちの娘だ。大切に育てた、愛する娘だ

！」

「わかりました……実はこんなことを聞いた理由なんです、どうやら娘さんは自分の事を人造人間だと思っていたようなんです」

「なんだって!？」

そう、全く信じられない話だが。これが真実だ。

機械いじりをする自分にちつとも理解を示さない両親に、娘は自分  
は人造人間だったのではないかと考えてしまったらしい。

そんな時、おかしな電波が彼女を誘惑したようだ。

ファー・ハーバー。

彼女はそこに自分がいるべき場所があると信じた……。

「そんな所に!？」

「ファー・ハーバーの場所はわかるか？」

「ああ、わかる。ここから約8時間ほど船で北上すればつく」

「——船で？」

「そうだ。そこは島だ、私も良くは知らない場所だ」

「そうか——」

「すぐに向かってくれるんだろ、ニツク!？」

「……」

「頼む、娘を見つけてきてくれ、頼む」

ニツクの表情は読めなかったが、醸し出す雰囲気は「やっぱりそうなるか」と言っているような気がした。

ケンジはこのために自分の船を提供すると申し出てくれたが、私達にはまだ悩むことが多かった。

「ニツク、正直このまますぐに向かわなきゃダメかい？」

「気が進まないのか？」

「今から出て、到着は明け方になる。どんな場所かもわからないし、  
なんなら人手も必要になるかもしれない」

「あんたはミニツツメンでは重要な人でもある。この話、ここで降り  
てくれてかまわ——」

「そういうことじゃないんだ、ニツク」

「——そうだな、スマン」

「行くしかないのか？」

「慎重さはあなたの美德だな」

「臆病なだけだよ。見知らぬ土地で、いきなり誰かに驚かされるのは嫌いなんだ」

「そうだな。だがこういう場合、まず飛び込んでみないと状況はわからないものだ。そうじゃないか？」

「……あなたが白馬の王子様が必要だった理由、すっかり忘れていたよ」

「なに、今度は大丈夫さ。あんたもいるんだしな」

結局私もニツクのこの言葉に従うことにする。

不安そうなナカノ夫妻に見送られ、私とニツクは夜の連邦の海へと軽快なエンジン音を響かせて走り出す。

## ARIZE (Akira)

砕けば粉になるだけの錠剤からは、甘い匂いが立ち上り鼻をくすぐる。

僕は度々こいつを利用し、こいつはそれ僕に愛されていると常にこの体を犯してくる。野蠻で愚かなことだが——今の僕には必要なものだ。やめることはできない。

だからそれを口に放り込み、今日も嚙下するのをただ目を閉じて行う——。

(起動した?)

スイッチがオンにされたと“感じ”た。

その証拠にすぐに診断プログラムが走り始め、以前には失っていたものが新たにそこにあるのだと知らしめてくる。

ボデイパーツ、両腕、足のモジュール、全てが完璧。

だけどまだ視野が回復していない。

「何をしている? 見えない、調整がおかしいぞ」

「——おっ、動いてるな」

「お前は誰だ? どうなっている?」

「ちよつとまってな。すぐに……これでどうだ?」

視界が回復する。これは地下か?

石が敷き詰められた空間、そしてこの体を動かそうにもピクリとも反応しない。

「この間抜けめ。接続がおかしいぞ、これでは約束が違う」

「いや、これでいいんだ。お前がまだ壊れてないかどうか、俺自身が確かめておきたいからな」

ブルーのつなぎを着て、その男はヘラヘラと笑ってそう言った。知性のかけらも感じさせない、サルの顔だった。

「お前は誰だ? あの男は何処にいる? これでは約束が違う、契約は無効だ」

「そりゃ、レオさんのことだろ? お前との約束は、あの人から俺が引き

「継いだんだよ」

「どういうことだ？」

「だってお前、ラストデビルのところで転がってたポンコツだろ？レオさんは戦士だ、機械いじりは得意じゃない。それは俺の役目ってことさ」

「となると、私の予測が正しければ。お前は私に新しい交渉をもちかけるともりのようだな」

「よくわかったな。まだ何も言っていないのにさ」

「それくらいはわかる」

「聞いたんだけどよ、お前はレオさんとメカニストだっけ？そいつのところに行ける装置なんかを取引にしたんだってな？」

「そうだ。メカニストの施設に侵入するには、必要な装置がある。それを私が提供してやる、あの男に約束をした」

「ああ、そうなんだってな——で、そんなものはねえんだろ？」

「なに？」

「だから、ねえんだ。だろ？」

作業着の男はヘラヘラ笑いながら、それをこちらに言わせようと圧迫しようとしている。馬鹿が、そんなわけがない。

「ある。なぜ、ないなどとお前は言う？」

「そりゃ、俺がお前の頭の中のデータを見たからさ。そんなもん、どこにもなかった。お前、賢いな。レオさんはすっかり騙されていたみたいだぜ」

「ある。間違いなく、それはある」

「いいんだよ、俺にはそんなこと。でもよ、このままだとお前。レオさんにブツ壊されちゃうぜ？俺が力になってやるよ」

「お前が？どういうことだ？」

「俺がさ、お前を使ってやるよ。お前が欲しがってたピカピカの体に、高性能の武器までつけてやったんだぜ？だからこれからは俺の役に立たせてやるよ。どうだ？」

「つまり——お前を私のマスターにしろと言うことか？」

「あ？ああ、そうとも言うな」

「断る」

「なんでだア？」

「まず、お前のような愚かしい男に使われるなんて真つ平だ。

それにさつきから『ない、ない』と繰り返しているが。メカニストの施設に侵入するための装置はある。私は、知っている。

つまり、お前と新しい契約は必要ではないし。そのレオとかいう男との約束は守れるから、私に新しい主は必要ないというわけだ。わかったか？」

「それでお前、自由になるってか？」

「そうだ、私は自由だ」

「ならそれでもいいよ。俺が雇ってやる、俺と組もうぜ。俺ならお前の面倒を見てやれるし、お前も壊れる心配をしなくていいだろ？」

「ふざけるな。

はやくあの男を呼んで来い、メカニストに会うための装置をくれてやる」

「——レオさんはいないよ」

「おい、いい加減にしろ」

ジェゼベルは辛抱強く、この愚かな男をあしらおうとした。

だが——。

「M—SAT、だろ？」

「なに？」

「お前がもったいぶっているモジュールの事だよ。とぼけるな」

「……」

「レオさんがいるわけがないだろ。

メカニストは元々この僕が追っているんだ。彼との交渉は僕が引き継いだが、だからってお前の望みが全て叶うなんて、本気で思っていたのか？」

「誰だ？」

その愚かしい男は——アキラは態度を一変させてギロリとジェゼベルを見下す。

「アキラ。イガラシ アキラ、お前が主人とあがめることになる神の



ような存在だ」

「傲慢な奴だ。なぜ私がお前に従うと思ってる？」

「エイダ、ガクテンソク。どう思う？」

ジエゼベルの問いを無視して、何者かに男は問いかける。

驚いたのはそれに返事があつたことだが、ジエゼベルの視野に質問に答えている相手の姿がなぜか映し出されていない。トリックなのか？

「危険な存在です。ですが今なら脅威ではありません」

「私も彼女に同意します。ロボブレインは使い物になりません」

「ちよつと、お前さん達。新人に厳しすぎやしないかい？」

「からかわないでください。私の意見はずっと変わることはありません」

「あなたの希望は尊重しますが。このロボットは厄介な存在でしかありません」

「ははっ、ジエゼベル。俺のロボット達はお前の方こそポンコツだつてさ」

飛ばれている、そう思った。

「いいご身分だな。こちらを動けないように拘束しておいて、侮辱するのさ」

「それは違うな。これはお前を守るためにやっている」

「ふざけるな」

「自分が優れていることがお前の自慢だろ？なぜ守っているのか、どうして考えようとしんない？」

「馬鹿げている。そんなことにどんな意味がある」

「不利な状況になると思考停止か、困った奴だ。」

答えは——お前に認識できない戦闘ロボットが、お前を脅威と判断しないようにするため、だ。わかったら少しは僕に感謝しろよ」

「詭弁だな、私をそれで屈服させられると思ってるのか？」

いつものようにペースを握りつつ、相手の弱点を探ろうとした。

だがこちらの態度に不満も感じないのか。それとも余裕からまったく価値を低く見積もっているのか。アキラはジエゼベルの顔すら

見ようとせず、自身の頭の後ろなどを搔きながら答えを続けた。

「ガラクタのくせして、自意識だけが高く。どうしようもなく臆病なお前を屈服させる方法なんて、悪いがいくらでもあるさ」

「私が臆病だと?」

「——なぜ聞こうとしないんだ? M—SATについて。何故俺がそれを知っているって。賢いジエゼベルはまだカードを配つてもいないのに、相手が知っているはずがないって」

「……」

「考えすぎるなよ。お前は臆病だから、そのうちどうせ口を開けなくなるぞ。迷えるロボットに神が予言しておこう」

「アキラと言ったな。私はお前のゲームにはつきあうつもりはない」

「それも違うな。これはお前のゲームだ。そしてすでに、お前は負けようとしている」

「私が負ける? お前に?」

「不利な状況になると、視野は極端に狭まり、途端に分析能力まで低下する。今の問いが、その兆候を示している」

「騙されないぞ」

「違うな、認めないんだろ? 言葉じりを変えても誤魔化せないのさ。」

「そこそこの戦力を持つていながら、アホなラスト・デビルなんぞに捕まるなんて事態を招いたのも、お前の実力の結果だった」

「あれは——運がなかった」

「運だつて? 感情と衝動を否定し。数字と確率、その処理速度が命のロボットの発言とは思えないセリフだな」

嘲笑の笑みを浮かべられ、ジエゼベルはいら立ちにも似た雑音を、表には出していないが自分の中に発し始める。

人であればそれは「怒り」と表現するしかないのだろうか。機械にそれは、ない。

「エイダの話ではロボブレインは人間の脳を使うがゆえに、プログラムに不具合があらわれ。おかげで不安定な反応をしめすことがあるのだそうだ。」

「すでにお前もその特徴を十分に発現させているな」

「——コチラも繰り返すが。お前の分析は正確とはとても言えない」  
「己の分析力の低下を認めないから、自信を持ってそう言えるよな」  
「私は優秀だ！」

「怯えることはない、ジエゼベル。」

お前のことは全て知っている。レオさんとの交渉から2カ月以上たっていることはもうわかるな？今日のこの対面のために、俺がどれだけ準備をしてきたと思う？

そんな無駄な抵抗は、機械のお前があるのかもわからない羞恥心にどれだけ耐えられるかテストするのと同じだぞ？」

「M—S—A—Tのことは見事だった。だが、お前になにが分かる？」

アキラの顔が、この瞬間。初めて柔らかな笑顔に変わった。

そして信じられない言葉を口にする。

「お前は本当にかわいい奴だな、ジエゼベル」

「何を言い出す？」

「いや、イゼベル——そう呼んだ方がお前は嬉しいのか？」

「……」

その名で呼ばれると、ついにジエゼベルの口が止まり。

無言となってしまった。

|| || || || || || || || || ||

「イゼベルとはもともと異教の神を信仰し、配下のユダヤ人に同じくそれを信じるよう強制した。愚かで傲慢な女王の名前だ。」

そしてかつての聖典のひとつにおいて、教会への敵対者に与えられた名前。ただしこれは外からではなく、内部に生まれる敵対者と言う意味でつかわれるものでもある」

エイダが驚きの声をあげる。

「ジエゼベル。確かにこのロボットと境遇が似ています、メカニストの配下でありながら。彼の敵になろうとしている」

「このイゼベルは面白いことに女性で、さらに2つの顔を持っているとされる。明らかに強さを持つ者と弱々しく見せる者。この両者に

は優劣も違いもなく、どちらも救いがたいものだ。

傲慢な己を演じることで相手を見下し。相手の弱さに付け入って、自身の一切の不利を認めず。感情のままに支配と制御を。自分だけができると証明しようとする」

「驚きました。エイダの言う通り。このロボブレイン、そのものですね」

「ガクテンソク、エイダと付き合いが長すぎたんじゃないか？驚き方までそっくりになってきている、それはいい事じゃないぞ」

「はい、申し訳ありません」

「話を戻そう——」

無言となってしまったロボブレインにアキラは滾々と語り続けた。

「僕はお前を知っている。ちゃんと理解もしている。お前がそれを疑っても、それが事実だ」

「……ありえない、不可能だ」

「お前に個性が生まれた時、すでにメカニストはロボブレインをもちいて連邦に部隊を解き放っていた。

とても信じられなかったことだが、メカニストの目的はただ一つ。あのメツセージにあるように、ロボットは連邦の人々のため。平和のために活動しろということ」

「アキラ!？」

「ああ、エイダ。お前にはずっと言わなかったけど、あのメツセージは間違いなくメカニストの本当の目的そのものだったんだ」

「——信じられません」

「だが事実なんだ、事実だった——問題はロボットの側、というよりもロボブレインの思考力が原因だった」

メカニストは高度な状況判断が可能であるという性能を見て、ロボブレインを部隊のリーダーとして選んだと思われた。

しかし、これが逆に不幸を生む。

連邦の劣悪な環境と、そこで生きる人間。これをただ素直に助けられればいい、そのはずだったが。ロボブレインの“高度な判断力”は、別の回答を引き出してみせたのだ。

曰く、環境に適応出来なくなった劣等種の人類を破壊せよ。

ロボブレイン達はそれを疑うこともなく、そしてこの結論をメカニストに問いただすこともせず、ただ実行し続けたのだ。判断を下すには——それも正確にできるようにするためには。より多くの正しい情報が必要になる。

命令と結果にあらわれる矛盾、だがロボブレイン達はそれぞれが独自の方法を見つけ出して自己解決していく——。

「イザベル、お前は——」

「違う、私はジェゼベルだ」

「ならそれでもいいさ。」

お前は、その中でも特別な反応を見せた。自分に名前を付けたんだ」

「違う、そうじゃない」

「いや、そうだ。そうなんだよ。」

そうでなければ、部下に見捨てられて墜落死させられ。犬のエサにされるなんて最期をとげた無様な女の名前をなぜ名乗る？」

「……」

「お前達ロボブレインにとって、メカニストは神のような存在だったはずだ。」

だがそうじゃないことをすぐに知った。実行不能、判断できない命令を与えて結果を求めてきたからだ。お前達に感情はないと信じたいが、もしあれば失望と絶望の両方をたっぷりと味わったに違いない。

そしてお前は——自分に名前を付けた」

「名前を？」

「そうだ、ガクテンソク。お前もよく聞いておけ。」

メカニストは自分のロボットに名前なんて付けていない。製造番号をそのまま使って管理しているようだった。それはローグスが回収してきたロボット全てを確認したからわかっている。彼らは意味を持たない文字と数字が個体を判別するすべてだった。

だが、コイツだけは違う。コイツにメカニストは他と同じ文字と数

字の名前しか与えなかったが、もう聞いたよな？自分はジエゼベル、ちゃんとそう名乗っている」

確かにこのジエゼベルは最初から、ずっとそう自分を呼ばせていた。

「もうたくさんだ。そんな話はどうでもいい、お前のことなど知らない。私をはやく自由にしろ、帰るんだ」

「面白いことを言うな。自由？帰る？どこへ？」

「お前に関係はない」

「いいや、また低下しているぞ。教えてくれよ、お前の自由とはなんだ？」

「この状況から脱することだ」

「その後は？」

「帰る」

「どこへ？」

「どこだっていいだろう、関係はないと言っている」

「まだ学ばないのか？それなら俺がかわりに答えてやるが、お前の自由など意味はないし。帰る場所は、とつくに瓦礫の山さ」

「……知らない」

「故郷があるって？それはお前に使われた脳味噌のなかに残されたままになった雑音がみせた幻影だ。世界は200年前の戦争で大きく変わってしまったんだぞ。今もそこがそのままに残っているはずもない。」

そして自由！

お前の自由とはなんだ？連邦をただ、狂ったロボットがするように目的もなく彷徨い歩くことがお前の自由か？望みか？」

「うるさいっ！」

アキラはそこで一歩大きく飛びのくと、慇懃無礼に一礼をした。

「これは失礼いたしました、女王陛下。王室の仕立て屋は先日処刑したばかり。代わりの者はまだつたなく、今はお気に召すものをご用意できません」

「これは時間の無駄だ」

「お前の抵抗が無駄なんだ。お前は契約ばかり口にするが、僕こそがそれを正しく履行できる方法を知っているんだ」

「お前の命令は受けない。お前に支配などされたい」

「僕は命令するし、支配もするが。」

同時にお前を自由にもしてやる、これのどこが気に入らない？」

「それが不可能だからだ」

「おい、ちゃんと考えろよ。」

メカニストはとつくに見捨てているのだろうか？

レオさんにメカニストで交渉したのは、お前があいつへの失望を癒すための代替行為があったからこそだろう？

そもそもお前の方こそ僕に見捨てられたら、待っているのは地獄だぞ。この世界に、この連邦に。ロボブレインを進んでメンテナンスしてやろうと考えるエンジニアが何人いると思う？」

「——だからお前に従えと？」

「安心しろ。お前はイゼベルにならつてこの僕を神の如く崇め奉れよ。ローグスがお前の新しい仲間だ。お前はそこで好きなだけ神をクサし、僕に愛されることを行動で示せばいい。僕はそれを許す。ほら、これこそ自由さ」

「納得できない」

まだ抵抗しようとするジエゼベルに対し、立ち上がったアキラはいきなり拘束しているその体に思いつき蹴りを入れる。

「できない、じゃない。するんだよ」

「そんなもので——」

言い終わらぬうちにエイダが「アキラ！」と警告の声をあげる。

ジエゼベルの体に衝撃が走り、それが自分の体内から発生した高電圧による負荷がダメージを与えたのだと知ったが。カメラの下から、あの男が這い上がるようにしてヒビヒツと笑い声をあげて出てきた。

「僕達は今、シビレたよな？そうだろう？」

「お前、生きているのか？今のを耐えることは——」

「不可能だつて？なら、次は一緒に特製の電気たつぷりのシャワーでも浴びるか？僕は本気でお前を愛してやるぜ」

その情景がなぜかリアルに思い浮かぶことが出来た。

黒こげの男と、焼き切れた回路で崩れ落ちた自分の姿――。

「お互い話すことはないな？返事は次にでも聞かせてもらおうか」  
再び視界が真っ暗になる。

「私をどうする？」

「そこにいろー！話をする気になったら、また来てやる」

そうして本当に――本当に、ジエゼベルは拘束されたまま暗いであろう部屋の中に放置されていた。

|||||

工房に戻ると、僕は大きくため息をつく。

(頑固だったなあ。もつと素直にしつけていかないと――)

最後の電気ショックは余計だったが。アレでこっちが本気だと、あれも理解してくれるといいのだが。

「アキラ、あなたのお友達はあれで言うことを聞くとお思いますか？」

「たぶんね。エイダはそうは思わないのか？」

「どうでしょう」

「言葉で圧倒されてからは、回避と逃走の姿勢に入ってた。これでも降参しないというなら……スクラップを考えないとね」

「いえ、私は考えを改めました。きっとジエゼベルはあなたに従うことでしょう」

「おやおや、本気かい？」

「はい。なぜならあなたは、このためにきつと準備をしていたはずですよ。実際そう言っていました」

「ガクテンソク。エイダのこういうところは見習わないとな、よく聞いてたね」

「M―S―A―Tのことはどうやって知ったのですか？」

答え合わせをしてほしい、僕はそう理解した。

「君たちの破壊したロボットを調べた時に出てきた装置だ。それくらいはわかってる」



「さすがですね。それで、その装置はどこに？」

「まだないよ」

「え？」

「ない、当然だろ？装置の詳細な設計はジェゼベルに出させるさ。そういう約束だ」

「……詐欺じゃないですか」

「ガクテンソク、何を言っている？交渉の確認で、アイツに自由を僕が与えると説明したろ？だから約束を守って、装置はアイツが僕に提出するものだ」

「人が悪いですね、少し彼女が気の毒になります」

「あの不快な個性はなかなかお目にかかれないからね、そばに残しておきたい」

レオさんはジェゼベルとの交渉内容を少し気にしていた。

僕はあらかじめ安心するように伝えて、交渉の確認を名目に相手を丸裸にしつつ圧倒してやるつもりだった。

メカニストを倒すことを目標としているのに、狂ったロボットに連邦を好きに歩かせるなんて出来るわけがないのだ。

「では、メカニストの推理はいつ？」

「あれか、あれは実は僕の推理じゃないんだ。ダイヤモンドシティの名探偵、ニツク・バレンタインのひらめきさ」

「ニツクですか!？」

あれはコベナントからパイパー女史と彼が立ち去る直前の事だ。

僕はエイダの話を伝え、同時にメカニストの奇妙な——あの言動の一致しない現象はなぜ起こっているのか。メカニストはただのバラノイアだと断じるのでなければ、どのような可能性があるのか。彼に聞いてみたのだ。

彼の答えは簡潔で「どちらも正しいってこともあるんじゃないかとだけ述べた。

そしてそれで十分だった。

ローグスが生まれ、エイダと共にアンチメカニストとして活動する

次々と入ってきた情報が、まだまだそこにあつた大きな穴を小さくしようと埋めていつてくれた。

「メカニストはロボブレインを部隊のリーダーに据えていた。そうしたパターンを重ねていったら見えてきた。『命令を出す側と受ける側が情報の処理をあえて誤解することにした』、それが結論だった。

ほとんどすべてのロボブレインは同じ思考を経て、結果的には与えられた命令を無視するという奇妙な行動を続けていたんだ」

「あのメッセージとの矛盾にはずっと困惑を覚えていました。たしかにそれなら説明がつかず。

ですがそれでも、メカニストの脅威は今もお健在であると考えます。違いますか、アキラ？」

「その通りだ。エイダ」

ただ、それでも問題がないわけじゃない。

メカニストがいると思われるその場所は、あのB・O・S.のいるボストン空港の目と鼻の先だと判明している。

エイダを連れてそこに向かうにしても、当面はミニッツメンの調査結果が出るのを待った方がいいだろう。

「ここまで来たんだ。最後はあせらずに、きつちりと決めないと」

「そうですね。そうでなければいけません」

焦りは禁物なのだ――。

|||||

ポーター・ゲイジはバラモンの轡を引き寄せると「あそこだな」といつもの死人のような声でつぶやいた。

視線の先には、目的地であるコベナントがあつた。

バンカーヒルへと向かっていたゲイジは、かのボートハウスの居住地へと立ち寄っていた。

そこでついにアキラの正体を知ることが出来た。

コベナントに籠っているミニッツメンの名前もアキラと言う、と。

あの連中はオーバーボスをミニッツメンに潜り込ませたのか。もしくはもともとミニッツメンだったのが、断れないからとオーバーボスへと祭られることになったのか。

まあ、そのどちらかなんてのはどうでもいいことだ。

ボートハウスではそのまま商人のふりを通して一夜を過ごす。

翌日は南に向かうと見せかけ、実際には近くにあるというコベナントとやらに向かったのである――。

(コベナントってのは確か、底抜けに阿呆な連中がいるって噂があった場所だよな)

来るもの拒まず、だったか。

あのレキシントンからそう遠くもない場所でそんな真似するって度胸は感心するが、そんなおいしい連中に手を出せないのだから北の連中はなにをやっているんだ？まあ、そんな風に考えていた。

だが、どうやら勘違いをしていたの自分の方だと今ならわかる。

町を取り囲む壁は、そびえるようにして高く。乗り越えようにも箱状に居住地の上にもしつかりとふたをしてあるようだ。

アレじゃ壁に取りついて、なかに火炎瓶を放り込むこともできないだろう。そしてこれ見よがしにおかれているターレットの数！

「ま、大丈夫だろ。なんせ今の俺は、ただの商人だしな」

頬を撫で、緊張せずに笑顔を作れるようにすると。バラモンを引いて歩きだそうと――。

その足元の先の地面にライフル弾が着弾すると、派手に土ほこりを巻き上げてみせ。道のわきの土手の下から、ショットガンなどを構えた女たちが「動くな」とすごみながら姿を現してきた。

ゲイジは一瞬だが、自分のライフルを抜くべきか迷うが――すぐにそれを諦め。命乞いをしながら自分は旅の商人だと繰り返すことを選んだ。マズい選択をしたようにも思ったが、実際はそれが彼の命を救うことになる。

マクレディによるとイカれてる。

ケイトの口からは、偏執的なサイコパス。

でもキュリーの目から見ると、それは用心深さと恐怖心のアンバランスさのように感じる。

コベナントの警備網は、どこか常軌を逸しているところがあるのは認めなくてはならない。

この町を囲む防壁の高さを一段上げてても、アキラはそれで良しとは決してしなかった。この町の周囲にアイボットを常時走らせてわずかな異変も報告することを義務付けていた。

だから旅商人が近づいてきていると知らせが入ると、すぐにマクレデイは屋根の上へのぼってその方角に這いつくばり。

道の先で、こちらの様子をうかがっているらしいその姿をさっそく確認する。

「商人、ひとり、他に姿はナシ？なにそれ」

屋根の上からの合図を受けて、ケイトは呆れた声を出していたが。

相手を拘束して連れ戻した後に話すと「あいつ、なんか匂うんだよね」と口にして険しい顔を見せていた。

予定では、彼らはロボットを連れ帰る旅を終えて一休みしている時だった。

数日中にそれも多分、うんざりするようなそれなりの期間。ここを皆で留守にすることになると思うとアキラは言っていた。

とりあえずそれが、姿を消していたハンコックがまた関係しているんだろうな、とは思ったけど。彼の胸の中で見上げる私の耳元で、「調査キットや現地で使いそうなもの、用意してほしいんだ。一緒に考えて欲しい」と言われていた。

でも――。

|||||

両手を拘束され、目隠しまでされるほど念の入った経験をするととは思わなかったが。

しかし、それ以上の事――例えば小突かれたり、殴られたり――は

されない当たり。なるほど、阿呆な連中なのだろうといくぶんか安心してすることができた。

自分はどこかの部屋の中、背もたれのズレたパイプ椅子に座らせられてしばらく放置されたが。

無人の部屋に誰かが足早に入ってきて、明かりをつけると。椅子を引きづる音の後に、乱暴に目隠しをズラされる。

「――よオ、元気にしていたようで安心したよ。ボス」

「……」

「久しぶりの再会じゃないか。ハグしてくれとは言わないが、そんな怖い顔で睨まなくてもいいだろう?」

「ポーター・ゲイジ」

「よかった。あんたに名前を忘れられたのかと不安で泣きそうだったんだ」

「なぜ、お前がここに居る!?!」

あらゆる目前の出来事全てに冷淡に、冷酷に対処するあの男にもこんな顔をすることがあるんだな。

だが、おかげで少しこちらにも運が転がってきているのだと理解することが出来た。怒りのままに怒鳴りつけて、コチラを八つ裂きにしたいが、それがかなわない。怒りを抑えなくてはならないというオーバーボスの姿は、初めて人間らしいと感じた。

「あんたミニッツメンだったんだな。なるほど、俺達のようなレイダー相手に強気でいられるわけだ」

「それが知リたかったとでもいうのか?」

「いや、そうじゃないさ。実際の所、俺は連邦でのあんたの商売の邪魔はしたくなかったんだよ。これは本当の話だ」

「フフン、旅の商人でございって顔をして近づいてきて。よく言う」

「なあ? そんなにへそを曲げないでくれよ、総支配人。俺はただ、あんたにそろそろ戻って来てくれって伝えたかっただけなんだ」

「あそこに戻る? なぜだ?」

おいおい、またここからやり直すのかよ。

「勘弁してくれよ、アキラ。これは――」

「いいや！お前の方こそ理解すべきだろう。」

俺が引き受けた“仕事”は、お前らクソどもの遊び場に行つてくれないゲームをクリアする。その時にお前の要望は多少かなえておけ、それだけのことだ」

「あんたの手の中に入る、特典については十分に話したと思うが？」  
「ふざけんな、ゲイジ！俺はミニッツメンだぞ、コミックヒーローよろしく。」

昼は連邦で正義の味方、夜はヌカ・ワールドでレイダーの王を演じろつて？馬鹿じゃないのか!？」

ああ、それは確かに馬鹿っぽく聞こえるかもなあ。

「……それって悪い事か？バランスがとれてる」

「俺にそんな危険な橋を渡れと？仲間に感づかれたら、俺のここでの地位は全て無駄になる」

「俺達の歓迎じゃ足りないか？パーティーも用意するぜ」

「——俺がお前を殺さない理由を、減らす努力でも始めたいのか？ポーター・ゲイジ、お前をここで処分しても問題はないんだぞ」

「もう言ったと思うが、本当にあんたを怒らせるつもりはなかったんだ」

「悪意はないだと？」

「そうさ、忠誠心の表れって奴だよ。いい機会だからついでに話すが、あんたの前任者。コルターを俺は裏切った」

「ああ」

「当然あんたも考えただろうさ、俺があんたをいつ裏切るのかつて」  
「そりゃ、当たり前だろうよ。馬鹿共の前に立つ時、同時にお前が狙いやすいように背中にマトを貼っておかなきゃならないんだ。」

何がオーバーボスだ、そこにいるだけでロシアン・ルーレットするのどう違う？お前のすり切れた罪悪感に期待してくれとでも？」

「だよな。誤解はもっと早く解くべきだった。」

変な意味じゃないんだが、あそこであんたがやってくれたことは。俺は好きだったし、きつとこれから楽しいだろうとわかっていたことだ。例えアレがあんたにとってただの——仕事のひとつだったと

しても」

「続ける、ゲイジ」

やはりこいつはわかってる。

その油断ならないと相手を疑いつくす目が、興味を持っているそれに変化しようとしていた。

「あんたの前の奴、あのコルターはクソだった。それだけは、はつきりと言えた。」

だが、そうだ。俺は認めるよ、ボス。

奴があんなになつた原因は俺にもある。オーバーボスになるようにそもそも話を持ち掛けたのも俺だったからだ。その時はまさか、コルターがあんな無様な姿をさらすとは考えられなかった」

「ああ、次の的は俺だろ?」

「そうじゃない、聞いてくれ。コルターは理想的だったんだよ。でかくて力があつて、周りを恐れさせる。俺はそこで奴を尊敬させるようにしむけていく。こいつは言ってみれば共同作業だ。」

ところがそれを奴は難しくした。

頑固になつて、問題を理解することも拒否した。俺の仕事を倍々に増やし続けて、自分の分は減らしていった。ありや、最悪だったよ」

「……」

「俺は自分を知っている、ボス。責任者なんてのはお断り、でもだからつて自分の実力もわからずじただ上を狙おうとするだけのカスと一緒ににはされたくない。」

俺なら上手くやれることがある。俺をちゃんと使ってくれるなら、俺は波風は立てたくはないし。皆も大抵のことは不満のない状態を維持することが出来ると思ってる」

「俺の仕事に、波風を立てている男の口から聞かされるセリフじゃないな」

「茶化さないでくれ。これでもおめかしして、あんたに真摯に向き合おうってここまでやってきたんだ。」

お互いはまだ、それほど深く知り合ったわけじゃないが。あんたは強いし、イカレテルとも思う。そして決断力の鋭さは間違いだ、俺達

はいいタッグになれるはず」

「——ミニッツメンをやめろ、と?」

「イヤイヤ、そうじゃない。あんたの商売を邪魔したくはないさ。だが、俺達も使って欲しいんだ。」

そのためにもまずは一度顔を出してほしい、戻って欲しいんだよ。俺達の仕事は溜まってる。あんたが姿を消してから、結構立っているからな」

「お前を、俺の相棒にしろと?」

「あんたと今組んでいる連中に俺を紹介してくれなんて言わないさ。ただ、俺とも楽しくやってみないかって話だよ」

アキラは黙りこくったまま。

だが、再び目隠しを戻そうとしたので「おい」と抗議の声をあげたが、それは無視された。

「黙れ——ここで大人しくしているろ。」

お前はなんでもなかったと、説明してくる。馬鹿な真似はするなよな?」

「もちろんだ。あんたを信用しているよ、ボス」

「フン、言ってる」

部屋の明かりが消え、扉が閉まる音がする。

周囲が闇に包まれた——。

|||||

マクレデイ、ケイト、キュリーとアサルトロン達はその一部始終を壁の向こう側で見ている。

それは取調室などによくみられる。いわゆるマジックミラーに似たものだが、コチラから見たら鏡でも。向こうから見たらそれは普通の壁にしか見えない、そういうものらしい。

ドアが開いてアキラが戻ってくると、キュリーの手にあったヌカ・コーラを受け取り。一気飲みでもする勢いで、喉をゴクゴクと鳴らし



て減らしてみせた。

マクレディとケイトは壁の向こうへおくる視線をそのままに、今見  
ていたものの感想を口にする。

「アンタ、本当にキメてるよと役者みたいに器用に演じてみせるんだよ  
な」

「ハッ、ひどい豚野郎に見えた」

アキラは感想を聞いて顔を歪ませて飲むのをやめ、その顔を覗き込  
んだキュリーが心配そうに声をかける。

「大丈夫ですか？唇が渴いています」

「中毒になったかな。あとでドクターの診察を受けないと」

「——そんな素振りはおそこじやみせなかったじゃない」

「それだけ演技が優れてたって事さ。だよな、ボス？」

ヌカ・ワールドについてはマクレディにも少しは情報があった。

ケロググ討伐の際、レオが集めた情報の中にそれがあったのだ。連

邦の向こう側に、無法者の天国が誕生した、と。

まさか自分のボスが、そんなところでいつの間にか総支配人なる怪  
しげなポストに就任していたとは知らなかったが——。

「参ったな。予定が狂ってきた」

アキラの顔は暗い。

本当はVault 88に皆で取って返し。

技術を習得しながら、あの場所の調査も並行してやろうと思ってい  
たというのに。

ヌカ・ワールドの方から半ば強制的な招待状が送り付けられてし  
まった。

「あんたレイダー嫌いなんでしょ？放って置いたら？」

「そのつもりだったけど、向こうから近づいてきた。歩み寄らないと  
逆にこつちを引つ掻き回そうとするかもしれない。ひどいことにな  
るぞ、ケイト」

「へっ、確かに。ガービーの奴がボスがレイダーとつるんでるって  
知ったら。レオになんて言うか、簡単に想像がつかない。大騒ぎだぜ、  
きつと」

「それではどうするのですか？彼の求めに応じるつもりですか？」  
僕は決断しなければならなかった。

「とりあえずアイツは解放する」

「ここで殺しちまった方がすつきりすると思うんだがね、ボス」

「あたしもそれ、同感」

「ダメだ。とにかく今はハンコックとV a u l tからなんとかしないと——ジャック、いるか？」

「はい」

「アイボットをひとつ用意してくれ、あいつが解放後にちゃんとヌカ・ワールドに帰ったのか。知っておきたい」

「わかりました、準備します」

まったく、恨めしい気持ちでいっぱいになる。

あの“小さな宝物”でやらされた仕事が、まさかこっちにそのまま続けろといってくるような事態になるとは考えていなかった。

というよりも、あの場所を奴らが奪われることをただ眺めるだけで放っているというのが信じられない。

（余裕が出来たら、ミニッツメンをけしかけてあそこのレイダーを殲滅してやろうと思ってたのに！）

北部制圧後の計画のひとつがこれで無駄になった。

机上の空論、パラノイアの妄想とはよく言ったものだ。

修正案を新たに用意しようとしていた僕の壮大な計画とやらは、またまた大きな修正が必要となってしまった。

## アカディアの人造人間 (LEO)

船の中で仮眠をとっていた私の体が、波ではなく。

誰かによって揺さぶられた。

「もうすぐだ、レオ」

「わかった、ニック」

午前3時を過ぎ、太陽はまだ一面に広がる海の地平線に姿を見せてはいない。

そして不思議なことに海の風は案外に生暖かいものの、それが私には誰かの舌となって肌をなめているようで少し不快に感じる。

「大きいな」

「小さい島だという話だったが」

左手にはファーハーバーと呼ばれている島が闇の中でもわかる大きさで、すぐそこに存在していた。この海上から陸地の様子が見えないのは、島を覆いつくそうかという不思議と濃い霧のせいだろうか。ケンジ・ナカノの船の制御盤に、目的地到着まであと3分と表示される。

すると岸边に停泊している船が見え始め、ニックは前方を見つめながら「あれだ」とつぶやいた。前方にはこんな時間でも、繁華街のようには明るく霧の中から海を照らし続けている。そんな不思議な港町が見えてきていた――。

|||||

「ここに外からのよそ者は必要ない、出て行ってもらおうか」

港に入り、船から栈橋へと降りたところで。家の方から走ってきた複数人の男たちは銃を手にし、私たちを栈橋の先へは行かせまいとなり立てられてしまった。

騒ぎは起こしたくないので、こちらはそんなことはされたくはなかったのだが――。

「そこまでだよ、アレン！」

「くそつ、来ちまったか——」

「若い連中をそろえて、訪問者を威嚇するなんて。こんな時だつていうのに、まさか酔っているんじゃないだろうね？」

「アヴェリー！こいつらは本土人だ。あいつらはここへ揉め事を持ち込んでくる」

「馬鹿なことを言ってるんじゃないよ。銃をおろして、どこの田舎者だつてんだい」

「だが——」

「引つ込んでな！こつちが話をするよ」

どうやら話が分かる人もいたようだ。

私とニツクは顔を見合わせ、肩をすくめみせるも安堵した。

「すまないね。今日はちよつと——悪い時にアンタたちは来ちまったんだよ。だからアレンや若い奴等のバカは許してやって欲しい」

「大丈夫だ。少し驚きはしたが、こつちも御覧の通りこんな顔だしな。そう悪い歓迎ではなかったと思う」

「それならいいんだけどね。それで、迷子なのかい？」

「ここを訪れる人は……あまりいないんだ。それもこんな夜中にね。だから訪問の理由を聞かせてもらつてもいいかい？」

「たかりも助けも、俺達にはもう必要じゃないからな。本土人、帰れ——」

「アレン！アンタはあつちへ行つておきな、そいつらも連れてね」

アヴェリーという女性に追い払われて、男たちはようやく棧橋から去っていく。

「若いのは、あんな風に波止場は自分のものだとても勘違いしてるのも居てね。武器を持って、よそ者を脅かすことに意味なんてないのに、それがわかつてないんだよ」

「漁師の気質つてやつだろ？しょうがないよな、ああいうのは」

「悪いね、最近は——本当に色々あったんだ。それでこの港も少し、ピリピリしているかもしれない」

「厳しい時代だ。問題は何処も山積みつてわけだな」

「そうだよ。その問題が増える——トラブルはこつちも歓迎したりは

しない。アレンじゃないが、あんた達は実際のところどうなんだい？」

「カスミという若い女性がここに向かったという情報を掴んだんだ。私達は彼女の家族にやとわれ、ここまで探しに来た」

「ああ、本土人の若い娘だろ？それなら確かにここに来たわよ」

「——よかった。娘は島に来る途中で沈没していた、なんてケンジに報告はししないですんだようだが、相棒」

「その娘なら、人造人間の避難所へ向かったわ」

出てきた言葉の異質さに、今度こそ私とニックは揃って驚いた。

人造人間、避難所。それがこの土地の人間達も知っているということか？

「じつ、人造人間の避難所だつて？」

「ええ、アカディアよ。でもそこに行きたいならオールド・ロングフェローに案内を頼まない」と——」

明け方の港町に、危険を伝えるサイレンがその時鳴り響いた。

町の出口、すなわち門の上につながる階段の途中から鳴り響くサイレンに負けじと女性がこちらにむかって叫んでいた。

「キャプテン！こっち、急いで！」

アヴェエリーに続いて、私もニックもそこにいたが。

彼女はいきなりこちらに振り向くと

「この場所も昔は大きな観光地だったというけど、今はそんな面影はないわ。いつだって町は危険にさらされている」

「なにか、トラブルかい？」

「探偵なんだよね？町を守るのに手を貸してくれないかい？」

「私達が？」

「マリナーの声は聞いただろ？力を貸してくれないなら、きつとあんた達にだってひどいことがおきると思う」

「わかった」

ニックではなく、今度は私が即答した。

そして背中の2丁のライフルの重さを思い出す。

さっそく実践に使えるのか、楽しみだ――。

門の上に立つと、さきほどのアレンの他にもマリナー、アヴェエリーなど。武器を持った男女が緊張した顔でそこから霧の向こうの闇をうかがっていた。

「状況の説明を」

「アンタ、誰だい？」

「彼等にも説明をしてあげて、マリナー」

「――船の資材をとりに行った連中だよ。夜が来ちまって、てつきり明日の朝までどこかで身を隠していると思ってたのに。」

「こんな時間なのに港に戻ってきちまいやがったんだ。あっちで何かあったんだろうとは思うけど、馬鹿なことを」

「援護と救助だな。」

カスタム・ラジウムライフルを取り出し。素早く弾倉を入れて装填する。

スコープをのぞくと、確かに闇の中をこの港に続く直線コースを5人ほどが走ってコチラに向かってきているのがうかがえた。

「本当にあいつら、戻ってきたのか？ 見間違いじゃ？」

「これは訓練じゃないんだよ！」

「何事だよ」

「全員なにも見逃すなよ！」

となりで改造サブマシンガンを構えたニツクが呟いた。

「遠くで唸り声が聞こえたぞ」

「動物？」

「これまで聞いたことのない声だった」

「……敵の攻撃だ。すぐに来る」

私は冷静だ、むしろ興奮を抑えようとすらしている。

ケロッグを殺した時のあの感覚が、はつきりと今もこの体の中から感じる事が出来ている。

闇の中から人が次々と町の光の前へ、門の前へと駆け込んできた。

先頭の男が半狂乱になって叫んでいる。

「門だ！ おーい、帰ったぞ。戻ったんだ、開けてくれ！」

「みんな持ち場を離れるんじゃないよ！見逃したら、あたしらは終わりだよ」

「クソっ、こっちはケガ人がいるんだぞ。開けろ、門を開けろ！」  
悲鳴交じりの助けを求める声が門の前から上がり続けるが。

門の上の人々は動かない、そしてかわららずに銃を構えて闇の中を見つめている。

必死の形相で逃げてきた彼等には悪いが、追われてここまで来たというならすぐには助けることは出来ない。

それは厳しい現実を乗り越えてきた人達の生き残るための考え方だった。

「みんな！集まるんだよ、足元に気を付けて。この下にうっかり落ちたら救助は出来ないかもしれない」

「救助は出来ないだっけ!?このっ、ファーハーバーのクソども。冷血漢めっ！……仕方ない、お互いで身を守れ。俺達もここで戦うぞ」

「霧を見て！何がこっちに向かっているはずだよ」

闇の中、土の中から飛び出してくるそれを私は見た。

——ガルパーだ！

誰の声かは知らないが。

そこにいる誰よりも早く、私のライフルは45口径弾を吐き出す炎を見せた。

|||||

それはさながら攻城戦に巻き込まれた探偵といたらいいのか。  
射撃が一斉に始まると、それに俺達も参加しなくちゃいけない。  
。とはいえ、こっちは探偵。戦闘は得意ってわけじゃない。

レオはその辺はたいしたもの、リズムカルにパパパン、パパパンと繰り返す。興奮と悲鳴の上がるこの場では逆に冷静に目の前の状況に対して対応していた。

地雷原を突破してきた黒い影質はそんな彼の射線の上で足をよろめかせると、その場に次々と突っ伏していく。

これなら大丈夫じゃないか？そんな軽口でもと思ったが、相棒はすでに違うものを見ているようだった。

「突破される、まずいぞ。ちゃんと狙うんだ！射線を集中させろ！」  
彼は弾倉を交換させながら、周囲に声をかけるが。島民たちは必至なのか、それとも彼の声が恐怖と興奮に支配されて聞こえていないのか。

ガルパーとよばれた不気味な物体のひとつが門の前まで迫って来ると。そこに逃げ込んでどうすることもできなくなっていた連中に突っ込んでいく。

悲鳴が上がり、大量の人間の血が門を汚した。

「一匹抜けてきたぞ、撃ち殺せ！」

「馬鹿野郎！こつちに銃を向けるんじゃないぞ！」

男たちは怒鳴りあって、下手をしたら門の上と下で銃口を向けあいかねない勢いだ。

「ニツク！飛び降りろ、下は任せる」

「なに!？」

「すぐだ、新手が来ている」

言われてしまったらしょうがない。

ひどいことになったとボヤキながら俺は門の下に飛び降りると、そこで首のない哀れな男を丸のみにしようとしているそいつの背中に向け、サブマシンガンの引き金を引いた。

ぬめる体表に泡のように穴が開きはじめると、そこから一気にすべてが火を噴いた。

だが、呆れたことにそいつはまだ飲み込むことをやめようとはしていない。

「いい加減にしろよ。どれだけ空腹なんだ」

ニツクが私の指示に従って飛び降りるのを確認した。

とりあえず下はそれで何とかなるはずだ。そして私は、これ以上あれらを門の側に近づけさせてはならない。

「コイツをいきなり使うことになるとはっ」



カスタム・ラジウムライフルは悪くないが。今回の相手は体が大きな生物の群れだ。それを押しとどめるならもつと、もつと――。

背中から振り回すようにして構えるまでを一挙動でおこなう。

同時に左腕のピップボーイにV・A・T・S. を起動させた。これで闇の中であつても、敵の位置と数を把握できる。

轟音が響き渡った――。

撃ち下ろされるような軌道で放たれた50口径弾は続けて迫っていた2頭のガルパーを貫通し、ついでに吹き飛ばして地面に転がした。

ガルパーとかいうおかしなやつはそれが最後。しかし、今度ば別の何かの群れがその背後から迫って来ていた。

「これはいい、な」

ストックに細工された反動吸収装置は、これまでになく機能している。

セミオートとはいえ、狙いをつけて発射までに数秒の間隔が必要なこのライフルで。発砲の衝撃による肉体への強烈なダメージを、ほとんど殺すことに成功していることを理解する。

「はは、はははっ」

素晴らしい威力だ、でも使いどころは考えた方がいいだろう。深夜の襲撃者達は結局、この異様なライフルが弾倉をひとつ消費したあたりであきらめてくれたらしい。

門に近づけなかったというガルパー達を、人間のかわりに食い散らかしては満足したようだ。

霧の中で、港から離れていこうとする影たちを見送ると私はようやくライフルのトリガーから指をはなすことが出来た……。

マリナーが「もう大丈夫、門を開けてあげて」の言葉で、ようやく逃げてきた人たちは町に入ることを許された。

門の前では2人が殺され、ひとり食われかけてしまった。ニツクはそれでも助けに来てくれたことを彼らの仲間からは感謝され、少し困っているようだった。

「やれやれ、到着からこの騒ぎか」

「とりあえずキャプテン・アヴェエリーと話して。その……アカディアか。案内人という人を紹介してもらおう」

「そうだな。さっさと仕事を終らせた方がいいみたいだ」

「——さっきは見事な救助だったね、ニツク」

「よしてくれ。俺の柄じゃない、それにあんたがいなけりや。あの連中は全員助からなかったらうよ」

ようやく感謝の輪から解放されたニツクを私は迎え、互いの健闘を称えあつた。

だが、そうだ。このファーハーバーは到着からこうして、とにかくトラブルの塊でしかなかったのだ。

|||||

ファーハーバーに朝が来た。

夜明けの騒ぎからはまだ、数時間しかたっていないというのに。私たちはなぜか山登りに勤しんでいる。

そして山頂にある、いつかみた天文台を思い出させる建築物を指さすと私達の案内人は言った。

「あそこが目的地だ。到着したぞ」

オールド・ロングフェロー。

到着の騒ぎの後、アヴェエリーからも感謝をもらい。

案内人である彼に紹介してもらえた。どうやら彼も騒ぎの時にあの場所にもいたらしく。冷静に対処しようとするレオを見て、密かに感心していたらしい。

アヴェエリーの話では頑固で偏屈な老人ということだったが。あっさりとこちらの願いを聞き入れて人造人間達の避難所とやらまで案内するのを了承してくれた。

「人造人間達には、どうやって接触したらいいのかな？」

「接触だって？その必要はない。アカディアはもう、ずっと俺達の事を見ていたさ。あいつらに話があるというなら、あんた達はただ中に

入っていけばいい」

「ここまでの道に監視システムがあつたということか。」

「騒ぎの後だというのに、無理を言つて案内を引き受けてもらつて感謝している。ロングフェロー」

「気にしなさんな。あんたの言葉を借りれば俺達は戦友つてやつだろう。また助けが必要なら、俺の家は教えたる？ 会いに来ればいいさ」  
「それは——」

「ファー・ハーバーのすぐ外にある小屋だ。俺の家、俺の土地でもある。装備を整えたり、休息や泥酔するのにはもつてこいの場所になるはずだ」

「わかつた。必ず会いに行くよ」

「何か強いのを持つてくるのを忘れないでくれよ。それも分け合える量が十分なやつをな」

「わかつた——もう、帰るのかい？ なにがあるのか、見ていくつもりは？」

「んんむ、そうだな。イヤ、今日は先に帰らせてもらう。道は覚えているだろ？ 迷子になんてならないでくれよ、若いの」

「わかつた。それじゃ、また」

握手を交わすと、彼はそのまま背を向けて港の方角へと戻つていつてしまった。

「どうやらここでも新しい老人を籠絡してみせたようだなあ」

「なんだい、ニツク」

「いや、お前さんは気持ちのいい男だからさ。それに老いぼれた男を熱くさせるものを持つてる。ふん、これは俺の嫉妬かね？」

「——仕事だ、相棒」

「ふむ」

2人でアカディアとやらの中へ扉を開けて入つていく。

まあ、余裕があつたのはそこまでの話だった——。

ドームまで続く通路に人影はなく、だが確かにこちらは見られていたらしい。

館内放送ではない。それでも廊下の奥からこちらへと呼びかけてくる声があった。

「どうぞそのまま、奥まで進んでください。心配はいりません。まずは話をしましょう。きつと私たちは理解しあえると思うのです」

私はニツクを見て頷くと、銃に手をかけることなく。自然体のままに声に従って導かれていく。

正直、人造人間をこの島の人間がなぜ受け入れているのかも不思議ではあったが。案内をしてくれたロングフェロー老人の話でも、間違はなくアカディアは敵ではないという認識でいることが分かった。

そして私たちの仕事はカスミを連れ戻すことであって、B・O・S. の偵察部隊をきどることではない——。彼らにしてみたら、こんな場所は存在すること自体が許されないと判断されるはずだ。

「ようこそ、あなた方を歓迎します。このアカディアは清浄であり、理解と平和にあふれる場所として存在しています。

あなたがアカディアにいる間、人造人間達が危害を加えることはありません。もちろんそちらがそうしてくれている限りは、という条件で」

「あんたは？」

「私ですか？ ははは、最初にこの場所へとたどり着くために山を登った。老いた人造人間というだけですよ。

ええ、これは冗談です——わかってます。プラスチックの皮膚、体のあちこちから生え出ているチューブ。あなたから見ればそれらばかりと気味が悪いものでしかないのでしょうか。

ですが、好きでこちらもそうしているわけではないのです。この姿には理由があつて、それをどうか理解してください」

「そうだね、わかった」

「では改めて訪問の理由を教えてください。正直に話していただければ手を貸してあげましょう」

たぶんニツクと会っていなかったら、あの見た目も明らかで人造人間を相手にこれほど冷静には会話は続けていられなかったのではな

いかと思う。

会話は冷静に、でもしつかりと明確さを保って交互にキャッチボールされていた。

「女性を探しに来たんだ。名前はカスミ・ナカノ。両親は彼女が誘拐されたと主張し、こちらは依頼を受けて捜査している」

「本当ですか？それが事実だというなら感心します。

あなたのように他人のために見知らぬ土地を旅するような勇敢な人は、この時代にめったにいません」

「彼女はここに？」

「はい、カスミはここにいます。もちろん無事ですし、会いたいというならそうしてくれても構いません。ただし——」

ほら、来たぞ。

「それならまず私の問いに答えてください。彼女は、カスミは人造人間だと思いますか？」

「——答える必要を感じない、どうでもいい質問だね」

「その通りだ。お前がこつちの話をまともに聞くつもりがないというなら、俺達もお前に答える気はない」

不機嫌そうなニツクの声上がる。

視線をうつした相手は、なぜかいきなり動揺を見せた。

「——待ってください、あなたは!？」

「ああ、こつちもそれを聞きたかった。『お前こそいったい何者だ?』その顔と独立した人格をもった人造人間はひとりしか知らないし。そしてそれはいつだって鏡の中にしかいなかった」

「ニツク、あなたが……どうして……」

「つまらん演技はよせ。俺の相棒に何を企んでいる?そもそも、こつちはお前に会った事は一度もない」

それはアカディアの代表であり。

ニツクと共にインステイチュートで生み出された、第一世代の人造人間プロトタイプ。DIMAディーマとの貴重な対面のシーンであった。

危険な武器を持っているわけでもない機械同士の対面で、これほど

緊張を感じさせる場面はあっただろうか？

デューマは冷静を取り戻したか、すぐに声をあげる。

「ニック、あなたも。どうか私にチャンスをください、このひどく混乱した状況の説明を私なら出来ると思います」

「本気か？ニックの事を本当に知っている？」

「やめるんだ、レオ。彼の話に耳を傾ける必要はない」

「私が知っていることは隠さずにお話します。嘘は言いません、その判断もあなた方が下してください」

そしてデューマはインステイチュートでの出来事を語り始めた。

彼らは第一世代に人格や感情を持たせるために作り出されたプロトタイプ。

インステイチュートは彼らにそれぞれが別のやり方で人格を持たせようとし、さらに行動までも操作可能かどうかも試行していたのだそう。

デューマはこの時、自分の人格をゼロから形成することを求められた。

ビルド アンド スクラップ。実験と呼ばれたそれは何度も繰り返された。それは当時のニックにたいしても同じだったのだと言った。

ニックにはデューマと違い、別の人格が丸ごと全部刷り込まれたそう。何度も目覚めては刷り込みに失敗して苦しむニックの姿をデューマは見ていることしかできなかったのだと申し訳なさそうに言った。

そうした経験から、デューマはニックを自分の兄弟だと認識するようになったらしい。確かに言葉の節々から、そのような気持ちを察することが出来た。

「私は研究室にいました。神経プロセスを解析するためだといって、頭の中を弄り回されたのです。」

それは事あるごとに続けられました。何日も、何カ月も。行動を制限され、こちらがあいつらに抵抗することは許されなかった。

その後——外に出ました。インステイチュートは自分たちの秘密

が明らかにされないよう。

私の中にもフェイルセーフ装置を取り付けていて、私はそこでもまた全てを奪われてしまったのです」

「インスティチュートの場所は、あんたもわからない？」

「ええ、ニツクもそうだったはずですよ。あいつらはそういうことを平気でするような人間達でした。」

ですが……私はそれについては満足していたのを覚えています。私はようやく自由を手にすることが出来た——そう思えたのです」

確かにそれは彼にとつては喜びであるかもしれないが、私にとつてはそうではない。連邦にも転がっているかもしれない奇跡をここでも期待しなかったが、それはここにも落ちてはいなかったということなのだろう。

「お前の言葉は信用できない。兄弟などと言うな。お前のことは記憶にない」

「それが間違いなのです。」

ニツク、プロトタイプであることはすでに説明しましたね。同時に私達の記憶の容量にはどうにもならない限界があります。これのせいで——」

「もういい、これ以上は聞きたくない」

「ニツク——」

「だが、デイーマ。確かにお前とは話し合うことが色々あるようだが……だが、それは今じゃない」

「そうだね、ニツク。ここに来た本題に戻そう、デイーマ。カスミの事だ」

デイーマはそれでもじっとニツクの顔を見つめていたが、諦めたのだろうか。

「わかりました——」そう口にする、話題を変えることに同意を示した——。

|||||

夕刻——太陽が霧の向こうにある地平線に沈むのを、私とニツクは重い空気を感じながら煙草の煙をくゆらせていた。

フアーハーバーに到着から、とにかく長く、そして忙しくて目まぐるしいばかりの一日であった。

正直、頭の整理をつけるだけでも数日は必要な情報の海に翻弄され、私達は今まさに溺れかけてようとしている。

アカディアのバーボンを片手にオールド・ロングフェローの小屋を訪れ、今夜の寝泊まりを許されたものの。

どうしていいのか、さっぱり思いつかない状況の中にこの探偵達はあった。

「とにかく彼女は——カスミ・ナカノは生きていた。それは喜ぶべきことだ、レオ」

「ああ、そうだね」

デイーマは約束を守り、会見の後でカスミとの面会を許してくれた。

彼女はアカディアに自分の意志で来たのだと——元気な本人からは直接言葉も貰うことが出来た。

「説得は、あんたでも無理か？」

「彼女の考えは聞いただろ、ニツク」

「ああ、『問題が解決するとわかるまでは、帰るつもりはない』だったか」

「……これは仮定の話だ。乱暴だとはわかっているが、彼女を無理やりにあそこから連れ出すというのはどうだ？」

「レオ、あんたの口から誘拐なんて言葉が出るのは驚きだが。それはいい考えとは思わんよ、そうだろ？」

「デイーマは許さない、か」

「それに彼女は自分の意志でここに来た。納得しないなら、きつとまたここへ戻ろうとするに違いない」

「——そうだね」

カスミは我々と話をすると同時に、困ったことに新たな依頼を受けるように求めてきた。



報酬は「自分の下した決断をもう一度考え直す」ことなのだそうだ。

「いったい何の話をしている、カスミ？」

「ちゃんと聞いてほしいの。ここは何か、変。つまりアカディアは言われているような、避難所なんかじゃない」

「なに？」

「知ってしまったから、ずっと調査してるの。これが解決しないなら、ここから動くつもりもないわ」

「待ってくれ、このアカディアの何が問題なんだ？」

「あのデーマはここにある巨大な装置と繋がっているの。記憶とか、そういうデータを移してる。」

私もあれの修理を頼まれて——つい好奇心がわいたのよ。だって、100年分の人生経験が入っているっていうから」

「続けてくれ」

「そしたらおかしなものを見つけた。」

デーマが作っていたデータよ、いくつかあった。

それはひどい内容だった。ファー・ハーバーの港を占領するとか、島で核攻撃を行うとか。それによる予想される死者数とか」

「なに？」

「デーマは何かを隠していて、仲間である人造人間達をここに迎えているのかも。それとか、島を丸ごと消滅させてしまうような計画とかね」

「島を消滅って——」

ナカノ夫妻がこの娘に手を焼いたというのも何となく想像できて来た。

これは——ブツ飛んでいるのは間違いない。支離滅裂とまでは言わないが、彼女が今、自分が口に行っていることは。自分を受け入れてくれた集団が悪の組織だと弾劾するものだということを、果たして本当にわかっているのだろうか？

ニツクも私も困惑するしかなかった。

それが彼女を慌てさせてしまったのかもしれない。

「あなた達は探偵なんですよ？色々探したり、答えを導いたりする仕

事。だから私も探しに来た」

「ああ、確かにそうだが。できることはなさそうだ」

「そんなことは言わないで。そうだ！それなら……」

苦い笑みがニツクの少女への感想の全てなのだろう。

『もし解決してくれたら、戻ることを考えてもいい』と来たか。まったく」

「彼女の母親は、確か娘は大人になったと言っていたんだが」

「そしてここへはまずは飛び込もうと言ったのは俺だったが。レオ、あんたの言った通りになつてきちまったな」

「これは彼女が言うほど簡単なことじゃないぞ、ニツク」

「争うことなくあのアカデミアを捜査する、か。そうだな、簡単な話じゃない」

カスミの事を口にしてているが、気がつく私達は同じく別の事について悩んでいるのだということに気がつくことになる。このまま黙って、時が過ぎるのを待つのもいいが。それは避けては通れないものだと、お互いが分かっていた。

「デーマの事だ、ニツク」

「わかつてるさ」

「本当に彼は兄弟だと？」

「レオ、そもそもその疑問からおかしいじゃないか。俺もアイツも人造人間なんだぞ、同じ生産ラインにあったからって。それが身内であることの証になるのか？」

「むこうはそう考えてるようだ。本当に何も覚えていないのか、ニツク？」

「わからない……プロトタイプを取扱説明書はついていなかったんだ。記憶できる容量は多くないとか、その辺もさっぱりだ」

「——ああ、そうだな」

「とにかくあいつに言われたことでこっちは頭が一杯だ。あれは——シヨックだった」

「わかるよ。どう考えていいのやら……」

「混乱させられている」

「ああ」

「……ずっと考えていたことがあった。俺はあの、インスティチュートにとってはそのゴミでしかなかったんだって。

それなのに俺をあそこから出したいと思った誰かがいて、脱出する手助けまでしてくれたなんて——」

「だがニック、その証拠は何処にもない」

「ふむ、それなんだがな。レオ、俺はカスミの依頼はいいチャンスなのかもと思えてきたよ」

「本気か!？」

「デイーマの話では、奴は再出発を胸にあそこに行つてアカディアを作ったという話だった。カスミの求める情報を頼りに、その話も本当かどうか探ることが出来るかもしれない」

「どうやら探偵は次第にだが、困難と危険が伴う任務にやる気のみせ。動き出し始めているようだと感じた。

「それなら素人探偵が言えることはなにもないよ。あんたが言うなら、きつとなにかが見つかるのかも」

「俺が言うなら、か」

「ニック? なにか——」

「いや、すまない。あんたは悪くないんだ。ただな……」

珍しいことにニックは煙草を握りつぶすと、何かを決断したかのようにならぬ方へと向く。

「俺の話もあるんだ。俺の記憶にあるのは、部屋の中にいたって事。それがある日、世界ががらりと変わっていた」

それはあのデイーマが口にしたことに近い、もうひとつのプロトタイプ  
の記憶。ニックの記憶についてのものであった。

「デイーマの言った通り、俺は自由になった。素晴らしい新世界、そこに立っていた」

「ああ」

「だがな、それだけじゃないんだ。俺が探偵なんかをやっているのは、別にトレンチコートを着て看板を出しているからってわけじゃない。この姿は話を聞いてほしい人が安心すると思うからやっていること

だ」

「……」

「俺は自分のなりたい人間になりたいと思っていた。そして、それは俺の周りにいる皆のおかげで叶ったと思っている」

「そうだね」

「だがそうになりたい切っ掛けは確かにあるんだ。デューマの話がそれを証明した。」

レオ、俺のこの記憶も人格も。すべて戦前の警官のものだとわかっていた。彼はそういう実験に自ら志願したのさ。彼の脳はスキャンされてデータとなり。それが俺の頭にある記憶回路にコピーされている」

「誰かの記憶がコピーされていたこと、わかっていたんだな」

「当然だ。そもそもこのニック・バレンタイン。この名前ですら彼のものだった、俺のものは何もない」

「待った！戦前ってことは、あんたの記憶の持ち主は元々は私と同世代だったというのか？」

「ああ、俺がアンタに肩入れする理由。それもなんとなくわかってきたんじゃないか？」

確かに人造人間と言うには、妙に義理堅い奴だと思ったことはチラリと何度かあった。

だが、それも彼の言葉を理解すれば納得がいく。ニックもまた、かつてのデューマのように私に対して何か思うものがあったということなのだろう。

「だからわかった、俺はただの機械だ。人のふりをしているだけの」

「おい、なんてことを言うんだ！」

「いや、いいんだ。これは事実だ、目をそらしてもしょうがない。」

俺の記憶はニック——彼の記憶だ。200年以上前にいた警官の記憶。事件、仲間、家族、捜査の仕方やマスコミの使い方。俺が探偵、ニック・バレンタインをやっている理由は。そんな彼の記憶と経験があるからだ」

重い言葉が次から次へと飛び出してきた。

人間と同じような思考と人格があることが、全てが機械で出来ている自分にあわないのだと思っっているというのか。私がここで口を出しても、彼のこの思いは変えられるようなものではきつとないのだろう。

「誤解はしないでくれ。彼には、ニツクには恩を感じている。彼のおかげで、俺は“生かされて”いるんだと思ってる」

「そんな、生かされているだなんて——」

「運が良かったというしかない。誠実で、勘も鋭く、優秀で偉大な警官だった。」

そんな彼のおかげでダイアモンドシティで俺はうまくやっていたんだ。ニツクのおかげだ」

「……辛いな」

「ああ、だがどうすることもできない。俺は自分の人生が欲しいと思うことはある。だけど、他人の名を名乗り。他人の人生を背負っていかなきやならない。それが俺の宿命って奴なのかもしれないな」

「宿命、か」

「そうだ。そしてようやく決心がついたよ」

ニツクの声から悩ましい音がいきなり消えた。

「レオ、ひとつあんたの力を貸してもらいたいんだ」

「なんだい、ニツク？」

「今、俺が話したように。ニツクには恩がある。いや、借りと言った方が正しいのかな。とても返せるとは思えない、大きな大きな借りだよ」

「ああ、それで？」

「だがそんな俺でも、彼が死んで200年以上も過ぎてしまったが。まだやれることがひとつだけ残っている、それをあんたにも手伝ってもらえないだろうか？」

「話を聞かせてくれ」

「エディー・ウィンター。罪のない多くの人を傷つけた、大昔の大悪党。ニツクとは因縁の深い相手だった」

「それが？」

「ひどく入り組んだ話なもんで、結論から先に言わせてもらう。そのエディーを殺したい」

軽い偏頭痛を感じる――。

今日はプロトタイプの人造人間達に悩まされるという日だったか。カレンダーは見ない主義だが、きつとそうしつかりと予定が書きこまれていたに違いない。

「混乱させたか?」

「デーマよりもひどく、ね」

「わかった、説明するよ――」。

これはニツクを調査してわかった事だった。奴は当時のニツクの手を逃れて地下に潜ったが、その前に放射能施設へ多額の投資を行っていたのを彼は見逃していた。そして今ならその理由は、想像がつかないか?」

「まさかニツク……?」

「妄想と言われても仕方がないが、確信があるんだ。奴はまだ生きている。200年前、世界が終わるまずその前に。奴は新世界の扉を真っ先に開いたに違いないって」

「グールになった、と」

「有り難いことに奴はそこにまだ閉じこもっているようだ。地上に這い出てきて、悪の時代を再び自分が。そうとはなっていない」

「だから殺す?」

「決着をつけてやりたいんだ、ニツクのために」

私はこの時、素人探偵なりになにかニツクがまだ隠していることがあるような気がした。

それを聞くまでは、いくら彼の頼みでも簡単には応じられないとも思った。

「あんたが執着する理由がそれだけとは思えない。第一、グールになったというならフェラル・グールだったかもしれないんだ。あれはもう、生きているとは言えないんじゃないか?」

「――これはただの復讐って話じゃないんだ、レオ。」

ニツクの記憶が、正義は行われるべきだったと思ってた。俺もそう

思ってるが、これが間違いではないという確信がこれまで持つことが出来なかった。

だからそれをアンタに決めて欲しい。あんたが支持してくれるなら、俺の考えは間違いがなかったのだと自信が持てる」

「私が？」

「聞いてくれ、確かに大昔の話だ。娘がいた——可愛らしい少女だ。素晴らしい未来があつて、希望もあつたはずだった。

だが奪われた、エディーがそうした。奴にはそうする理由があつたというだけで、彼女はそんなひどいことがされなきやいけない理由なんてちつともなかったのに」

「もういい、そこまでだ」

「レオ？」

「やろう、ニック。エディーが本当にまだ生きていて、奴の大昔の過去を裁くというなら。」

その権利があるとすればもう、あの時代の記憶がある私と君くらいしかないだろう。それに理由はもう、十分にあると思う」

人造人間の表情に、あんなものがあるのかと私は想像したこともなかった。

彼の顔は歪むというよりも、もつとこう——味わい深いものが浮かんで、時が止まったのか。それとも動力が停止してしまったかのような、静寂をもたらせてみせた。

ひいては返す波の音だけが何度も耳に聞こえる。

太陽がついに沈んで、ファー・ハーバーにあの明かりが煌々と照らされるのがわかってくると。

「ありがとう」

ただ一言。

それは小さく、そして声が割れたかのように雑音がまぎつてあつたが。

私は確かにその言葉は聞こえていた。それは最初で最後の、涙を流せない探偵の思いのこもった一言だったように思う。

## 完成しえない場所 (Akira)

奪ったコベナントにアキラがもたらせた変化の最大がロボット達とするなら。

その次に来るのが、居住地前にある湖のほとりに作られた。かつての世界の技術から誰かが生み出され、“小さな水力発電所”と異名で知られた、工業用の発電式浄化ポンプがそうだろう。

近づけばわかるが、そこは大量の水をくみ上げるポンプ音を響かせ。しかし、水面はまったく後退はしていないという仕組みには首をひねらんばかりの代物である。

この大量の水と電力は、秘密のエリアにも送られており、その恩恵が形としてそこに現れるのは必然といべきだろう。

アキラの工房、キュリーの研究施設に続いて誕生したのが。

植物の栽培施設である。

とはいえ2人はこの分野には決して詳しいわけではない。ただ、ある時思いついたようにアキラがキュリーに「伝統医学——はつきりと指すと東洋医学についてのアプローチを質問したことがきっかけとなった。」

彼女は答えられない今の自分に愕然とし。「その可能性には考えがいたりませんでした」と認め。そんな彼女のために——まあ、かなり軽い気持ちで彼女のために用意したのだ。

だが、どうも2人は考えることが専門らしく。

そこで扱われている植物の観察を成長は、秘密のエリアを管理しているロボット、ジャックの密かな趣味の場になりかけていた。

そしてさらにもうひとつ、それが浴場だ。

別に綺麗好きというわけではないが、アキラは連邦を旅すると度々だが身綺麗になりたいという欲求に悩まされることがあった。元軍人でもあるレオはその辺、あまり気にしていなかったし。この世界で生きてきた人々にしても、それはたいしたことではないというのが常識である。



だがとにかく浴場は作られた。

当然だがアキラはほぼ毎日通っている。マクレデイやハンコックはたまには気分転換にと利用することこともある。やはりウエイストランドを生きてきた人々の中で、浴場の文化なるものはほとんど失われてしまったものなのかもしれない。

例外はキュリーだが、それだつて別に彼女が自分の新しい体を大切にしているから。ではまったくなく、部屋を出ていく気になる彼がそちらの方角にむかつていくのを確認すると、いそいそとその後に入っていくという――。

だが、ここにそんなものは嫌いだと断言する女がいる。

ケイトだ。

彼女にとつて身綺麗になるということの意味は――不愉快の極致と言っている。

|||||

浴場にはいかず、部屋の中でただ下着姿となったケイトは。

手にしたそれを見て愕然としていた。

(ありえない。ありえない、これは)

喉をゴクリとならず、そこで正気を取り戻したような気分になってそれを元の机の上に――そつと、つまんで置いた。

「キュリー？・ねえ、ちよつといいか……」

仕切りの向こうにいる彼女の所に顔をのぞかせたが、口はそのままあんぐりと開いたままだ。

なぜかそこには、ケイトと違って一糸まとわぬ生まれたままの姿のキュリーが驚いた顔で振り向いていたからだ。

「な、何をやってるの?」

「着替えです。ケイトも、そうですね?」

「そうだけどちよつと問題が――なんで裸!?!」

キュリーは黙って何かを指さすが。

ケイトはそれが何かを理解すると、慌てて自分の所に戻ってさきほどの机の前へと急ぐ。そして同じものを目にする、思わずうなり声ともうめき声とも聞こえるネコ科の肉食獣の如き音を喉を震わせ部屋の中に響かせた。

そんな不穏な空気の漂う部屋から離れた地上では。台座の上に空になったヌカ・コーラの瓶を並べ終えると、アキラとマクレデイは離れたところにある机の元へと戻っていく。

これからちよつとした試射を行うつもりなのだ。

「これか？」

「そうだ」

「——信じられネエ、まるで別物じゃねーか」

味わいのある木製のレバーアクションライフルは、今は黒く塗られてはいるものの。

ちやちな作りのプラスチックにも似た肌触りと輝き。手に握れば、元の重さよりあきらかに軽くなっていた。

「弾丸の方も解析が終わって、今は量産にかけてる」

「あんたにライフルも練習しろって意味で贈ったんだがなあ」

「——選んだのはお前でも。実際に買って、贈ってくれたのはキューリーとエイダだったよな？」

「ああ、つまり俺の愛情も詰まってるってこった」

「そうかい、愛をありがとう」

「いやいやどうも、ボス」

マクレデイはさつそく手に取って構えてみる。

独特なレバーアクションであったとしても、アキラの手製にある銃のクセのようなものがすでにしっかりとこれには詰め込まれている。それがわかれば、なるほどこれは確かに武器であるようだ。

「スコープはつけてないな」

「今はね。中距離用を考えているから4倍かな。電子装置なら、倍率も上げてもいいと思ってるけど」

「俺はあんたやレオみたい、アシスト装置を使わないから前者かな」

「そうだな」

言い終わると同時にマクレデイの構えた銃は、バンバンとリズムカ  
ルに5発を発射する。

最初のレバーアクションライフルは、弾は本体に詰め込む。いわゆる  
チューブマガジンと呼ばれるものであったが、こいつは6発を収納  
する小さな弾倉を使用する形になっている。

「どうだ？」

「ああ——悪くないんじゃないか」

「それだけ？」

「……ボス、悪いけど俺にはやっぱりこいつは無理そうだ」

「そうか」

「銃が変わってもなんとかできると思うが、弾丸はやっぱり。撃ちな  
れたものを使いたい」

地面に転がっている5発の排莖を見つめながら2人はそれで押し  
黙った。

狙撃銃を使いこなすマクレデイであるが、好みがかなりはつきりと  
していて新しいものをなかなか気に入ろうとはしなかった。

「本当に——」

「いや、いいんだ。お前はプロだし、自分の道具は慣れたものを使った  
いというのは当然だ」

以前はマチェット、今はリッパーと呼ばれる携帯チェンソーを半  
ば冗談で持たせてはいるものの。マクレデイに戦闘では狙撃と肉弾  
戦でどうにかしろと要求するのは、現実的な事とは思えない。

「ボスがこれを使うのか？」

「ライフルは好きじゃないんだ——いや、使うけどね。別に用意して  
いる」

「へエ」

「出発までには用意はできるけど、調整は向こうでやるしかないな」

すでにあのケロググはコベナントから放り出していた。

本人はアキラの顔を見て安心した、などと口にして。再会の約束を  
信じると、一応は納得して戻っていったということになる。

おかげであのヌカ・ワールドには行かねばならないが。それと同じように行かねばならない場所が今はもうひとつあるのだ。

Vault88、まだ作られてもいない。200年前にすでに失敗していたVaultの地下シエルター施設。

あの場所はガンナーの支配地域でもあるので、異変を感じた連中が採石場へと様子でも探りに来られては今困る。戻って出来る限りのことをしなくてはいけない。

「まず、ハンコックを迎えに行くって事でいいんだな？」

「ヌカ・ワールドに行くにしても、今度は命がけになる。そんなところに行くならできるだけ大勢がいい」

「あんたがそんな、実に人間らしいことを口にしてよかったですぜ。『マッチョな俺には普通の事だ。まあ、見てろ』とかなんとか言って、ひとりで突っ込んで行っちゃもうんじゃないかってケイトと話してたんだ。こつちをヒヤヒヤさせるのがあんたの役目だし」

「お前は僕をなんだと思ってるんだ？そんな暴走はしないよ」

「へっ、そりゃ嘘だね。今度アンタのポンコツに頭に血が昇った自分の姿を撮影してもらったらしいさ」

「言ってる、馬鹿」

言いながら新しい瓶を並べていく。

とりあえずは自分の準備は出来ている。すくなくとも心の準備以外は。

アキラは自分でも驚くことだが。今回のケロッグ訪問には思った以上に動揺している自分に困惑していた。多分だが、Vaultの件で上手く自分の中で決着をつけようと悩んでた辺りで、横合いからいきなり殴られるようにしてあの時とは違う、自分らしい自分を奴に知られたことだろうかと思う。

とはいえ相手は無法者の軍団が相手だ。

アキラの情報があの中で拡散され、うっかり連邦の西部に戻ってそれをぶちまけながら暴れられたりでもされたら面倒な事になる。

ケロッグのやんわりとした脅しは実に効果的であったと認めるしかないだろう。

再び元の位置へと戻り、次はアキラの手で今度は試射が始まる。銃声が鳴るたびにマクレデイが「ハズレ、ハズレ、命中、でもハズレ」の声をやる。

男どもに、とくにあの雇用主とかいうアキラにむかつて怒鳴りつけてやらねばと思った。

なになが「試着してみてください、新しい戦闘服なんだけど」だ！

ケイトはキュリーに言われて気がついたが、アレが2人に用意したのは新しいごちゃごちゃした新しい、そしてセクシーな下着と、その上に身に着けるらしい色違いのスパンコールドレスであった。

ドレスはそれぞれキュリーは薄いピンクとパープル、ケイトは黒にエメラルドグリーンが混ぜ込まれたような色合いとなっていた。

そして———なんというか、それがケイトにとつてひどく気持ち悪い。

自分もアイツにはキュリーのように———そうなると思えられているのだろうか？

「ケイト、大丈夫ですか？」

「駄目かも。あたし、吐きそう」

「それは大変です。ドクターに診察を——」

「ちよつと待って、少し……少ししたらきつとどうにかなると思うから」

「はい」

とりあえず自分はまだ下着を着ているからいいが、キュリーは裸のままだ。

服を着るように伝えると、彼女は迷うことなく———それを手にして、身につけ始める。

よく似合ってるじゃない、それを見て思った。

ドレスはキュリーの持つ清楚で可憐な、それでいてエレガントに見える力を持っていた。

そしてだからこそ、自分にもそれは———ああ、考えるだけで眩暈がしてくる。これは、これは……。

ここに来てから思えば、自分は雇用主の前でも結構好き勝手をやらせてもらっていたとは思う。

でもだからこそ、この不意打ちじみた仕打ちにショックを受け——ああ、そうだ。自分は、自分はきつと怒っているんだ。

「そうだよね。噛みつかなきや、あたしじゃないじゃないか」

「ケイト？」

「なんでもない！喧嘩を買うなら、そりや高くしてやらなくっちゃね」  
ゆつくち立ち上がると、腹の底からカツカしてくるのが分かる。久しぶりの感覚、だがアリーナに立たなくなつたのはちよつと前の話じゃないか。自分は今だつてチャンピオン・ケイトなんだ。

敵を見定めたら、もはや迷わない。ケイトは乱暴に脱ぎ散らかすと、新しいそれらに手を伸ばす——。

続いて僕は、弄り倒したばかりのケイトの武器の感想を聞こうとする。

「こりや、ケイトのだよな？」

「コベナントの店にあつた。ジャステイスと刻印されたコンバットショットガン。ようやく彼女、僕の手を入れることに同意してくれたんだ」

「なんかでかくなつたし、前よりも重くないか？」

「集弾効果を高めたが、反動も強烈になつたのでフラッシュ・サプレッサーや無反動ストックで軽減には成功した。マイナス面はあつただ」

「あの女にドラムマガジン？正気かよ」

「重い方が安心というし、本人の願いをかなえた結果さ」

数発も撃つと、マクレデイはもういいといつてそれを置いてしまふ。

どうやら轟音響かせる銃声に反し、ヤケに軽く感じる反動が気味が悪いみたいだった。

「次はキュリー。インステイチュートのレーザーピストルをショットガン仕様にした」

「あー、レーザーか。それって意味があるのか？」

「こいつなら発射時に生じるエネルギーも低めだし、拡散力も小さいから扱いやすいと思ってね」

「まあ、ちよつと前までは10ミリのハンドガンくらいしか触れなかったしな」

「ああ——でも、本命はこつちだ」

そっぴいなながら机の下から小さなケースを取り出した。

もったいぶったやり方をしてみせたので、今度はマクレデイも興味を持ったみたいだ。中をのぞきたがっている。

「なんだ、ソレ？」

「対物ライフルをレオさんに用意した繋がりだね。ちよつと試しにジャックに作らせてみたんだ」

「へー」

「45口径の自動拳銃、装弾数は11と1発。同時にプラズマ・カートリッジを使ったオプションつき」

「この重さなら1キロ前後つてどこか？女には重くないか？」

「レールロードで手に入れたデリバラーの重さの約2倍、これが僕の限界だったな」

「でも、あれは10ミリ仕様だろ？これとは威力が違うぜ」

「元はパイパー・ライト女史のために作ったんだけどね。キュリーもどうかなって」

「生意気にオリジナルの刻印が入ってるじゃねーか。えーつと……シー・デビル？悪魔の女？」

いや、何を言ってるんだコイツ。

「なんでそうなる！シー・デビル、海の悪魔だ。タコだよ、知らないの？」

「キャピタルでもここでも。海の生き物なんざそんなに口にした記憶はないね」

「なら、経験させてやる。マイアラーク料理はエイダが得意だよ」

「うえっ、あんたのその趣味だけはわからんぜ。食い物がいちいち、グロテスクなものばかりじゃねーか」

連邦を旅するようになってからだと思うのだが――。

僕の舌は、味覚はかなり変化した。人が喜んで口にするようなものではなく、野性味のある粗野な味を好むようになっていた。自分でも気がついていたが、はつきりと指摘されるとさすがに少し傷ついた。「なんだよ。今後は罫を作つて、自分たちで材料から数を捕獲しようと考えて――」

「デスクローのステーキにマイアラークのサンドイッチ、そしてブラッドバグまでステーキ。俺、アレはもう絶対に食わないって決めるんだぜ?」

「……ラッドスコルピオンもイケるぞ?グッドネイバーで食べたことがある」

「やめやめ、それよりそいつも俺に試させてくれるんだろ?」

レオさんやディーコンなどにもそうだったけど、僕はある秘密を仲間に打ち明けたりはしていない。ああ、でもハンコックはそれとなく想像がついているかもしれないな。

人間食い――。

言えるわけがない。見せられるはずもない。

マクレデイが隣で「おお、いいじゃねーの」と口にしながら試写を続ける中。

僕はかなり複雑にその様子を目で追うことになった――。

|||||

翌日は雨だったが、計画はそのまま実行することにした。

エイダはヌカ・ワールドへと先行してもらい。

こっちは本隊としてT-51と45の僕とレオさんの3台のパワーアーマーをあのVault 88へと持ち込むことにした。

一度はあそこにむかったことのある僕はいいが、クインシーの採石場は高濃度の放射能に汚染された場所だ。

持ち込むものはパワーアーマーを着せたキュリー達に任せ。ロメオ・ワンから素早く僕らは離れ、そしてすぐに帰還させた。



不用心なことに Vault 88 の扉は開けっ放しにされていたので、僕は中に入るとそこを閉鎖する。

キュリーはこちらの被ばくを気にしていたが、今はとにかく合流することが先だ。ゲートが解放されればなしたので、一応は他の侵入者を用心して奥へ進んだが。別にガンナーなどがあの後、すぐここに来たというわけでもなかったようだ。

数日ぶりに再会したハンコックは、自慢のジャケットを脱ぎ捨て。フリルの付いたシャツも胸元まで全開し、そしてどうやら疲れ果てているようであった。転がっている箱の上うつむいて座り込んでいる彼が顔をあげたのを、僕らは随分と驚いて見つめていた。

「どうしたの!？」

「よオ、若者達よ。地下で干からびた死体に会いに来てくれたか」

「だいぶやられてるみたいだな、市長。普段なら俺達からそんなこと口にしたら、ブチ殺してやるってなるだろうに」

「自分で言うなら別だ、マクレデイ。ここにいると時間の感覚がなくなるってのは事実だったな。俺はまだ、生きているのか?」

「どうだろう、まだグールに見えるよ」

「ハッ、面白くもないジョークだな。それになんだ、お前らまたパワーアーマーを持ってきたのか?」

アキラの背後に立つそれらを見て、顔を歪めた。

きつとただ、自分の事をアキラたちが迎えに来たわけじゃないと察して。嫌な予感でも感じているのだろう。それが正確だと、ぜひ知らせてやりたい。

「バーストウは?」

「あ? ああ、なんか机に向かってやってるんじゃないか」

「グールの女性と2人つきりだったってのに、お互いの理解は深めなかったのかい?」

「口を開けば『仕事、仕事』しかいわねえんだ。アレは以前、チャーリーが妙にこだわってた役立たずのジュークボックスを思い出したよ。女という本能はしっかりと腐り落ちたのか、俺のようないい男の価値

が面の前にいてもそれが全くわかっていないらしい」

「そりゃ、お気の毒。よっぽどそいつ、見る目がないんだね」

「チャンプはそう言ってくれるから……おとおつと！これはこれは」  
いきなり背を丸めて座り込んでいたハンコックの声が跳ね上がり、  
背中を伸ばしてニヤニヤと笑みを浮かべ始めた。

マクレデイらがアーマーから降りてきたのだが。ケイトとキュ  
リーが、地下空洞にはふさわしくないドレス姿とみて元氣を取り戻し  
てきたようだった。

「どこかでパーティでもあるのかい？俺にも招待状があるといいが」  
「それが聞いてよ、ハンコック！このクソ野郎、こんなのを戦闘服にし  
やがってきー！」

まだケイトは文句を言っている。

文句を言いたいのコチラの方だというのに。

「あらかじめ説明して渡したのに。着ておきながら、信じられないと  
言って殴ってきたんだぞ。ひどいのはそっちだろ」

「男が女にドレスを贈るなんて、どういう意味なのか知らない。アン  
タがおかしい！」

「お願いです、2人とも。また喧嘩をしないでください」

「惚れた男だからって、そんな甘い顔しちやダメー！こういう奴はね、  
キュリー。何か理由をつけちゃ女を自分の好きにできると思ってる  
んだから。思い知らせないとー！」

「拳で殴られたんだ。口の中が切れて、今も痛い。そこまでされるこ  
とか？」

「フヒヒ、こっちはこの通りだぜ市長。楽しくやってたよ」

「ああ、どうやらその通りみたいだな」

再会のおしやべりはこのくらいでイイだろう。

「それで、今はどう？」

「——ああ、最悪だ。あの女が言っていることはほとんど事実だった。  
何かをしようにも、定期的にこっちの様子を探りにでも来てるのか。  
フェラルどもがやってきてうろちよろししてみせる。邪魔だからと最  
初は殺していたが、さすがに飽きたな」

「まだいる？」

「わからんよ。ここから動けないんだ、水もない。食い物もない。泥水をすすつてた、久しぶりの経験だ」

「うえっ」

「ああ、お嬢さんたちにはさせたくはないな」

「つまり、なにかを始めるって状態ですらないのか」

「やるが多すぎて俺にはどうしようもない。それが全てさ」

よほど大変だったのだろう。

顔にまた影が差すハンコックに僕は笑いかける。

「それじゃ、ここからは任せてよ。一応、計画は立ててきたから」

コルベガ工場をレオさんやガービーらと攻略した際、僕はそのサーバーからいくつもの工業製品の設計図も手に入れていた。

その一部はサンクチュアリーやコベナントでも使ったが。それはここでも同じだ。

この際、バーストウのことは徹底的に無視することにした。

ハンコックの話からどうせ役には立たないとわかっていたし、そんなのかかわっている暇もない。

キュリーとハンコックに端末機を用意させ、マクレディとケイトにはパワーアーマーで放置されている資材などのゴミを全てスクラップにするように命じ。僕は僕でそれらを適切に使えるようにするものを用意する。

ホッパーと分類機で積み上げられていくスクラップを分類して再分配し、スクラップの中に混ざっていたMr.ハンディとプロテクトロンを見つけたすと。これを強引だけど起動させた。

ああ、48時間は本当に短い。

ここまでやるのに2日をかけてしまった。焦りはないが、準備すらされていないとつちらかった状況がただただ面倒くさすぎる。

そして周囲は再び眠らなくなった僕を心配しているようであったが、僕自身はまったく気にしていない。

さらに進んで——72時間経過。

動き続けるコンベアとホップパー、そしてスクラップの山は小さく  
なっていていき。かなり広大な空間がそこに存在するようになる。状  
況はここでようやく改善されつつある、そう思えるまでになってき  
た。スクラップの分類する作業はロボット達が担当し。パワーアー  
マーもマクレディ達も今は勝手に水道水やら寝床を作って自分た  
ちの居住性を追求している。

まだ完ペキではないが、次の段階に進むにはいい頃合いだと思っ  
た。

目を充血させ、躁状態のままの僕は席を立つと、彼女の所に「今、到  
着しました」というような態度を見せて面会にいった。

「ミズ・バーストウ。挨拶が大変に遅れました」

「ええ、わかってているわ。でも気にしないで。ここもだいぶ、進み始め  
ているようだし」

「もちろん！そのため、あなたのために僕らはここに戻ってきたわけ  
ですから」

80時間を同じ場所で過ごして初めて交わされる再会の挨拶だが、  
しかし両者に違和感は全くないようだ。

バーストウなどはむしろ、高揚感すら感じているようにも見える。  
こっちは飲み込んだ錠剤が腹の底でゴロゴロしているのを感じて吐  
きそうだ。

「前回、ここではあなたにパートナーとなる提案をされましたが——」

「そうね。でもあなたは断った」  
「考え直しました。まだ、その提案に同意するチャンスが僕が失って  
なければいいのですが」

顔には笑みを張り付かせたまま、しかし頭の中はキラキラと輝いて  
いてどこか暴走していた。

もし、目の前のグールがここで「NO」などと口を開いたら、その  
首を問答無用落としてやると決めていた。

だが有り難いことに、そんな考えはむこうにはなかったようだ。

「もちろん。提案はまだ有効よ」

「では、オーケーですね？」

「そうね。これでお互い、パートナー」

「ではさっそくですが、”あなたのためのVault”を構築するた  
めに必要な情報。それをすべて私にいただけますね」

「ええ。これは私がここで何年もまとめ上げたものよ。きつと、役に  
立ってくれるはず」

それまで彼女がしがみついて誰にも触らせはしなかった、彼女の端  
末機へと導かれたが。僕は彼女の話聞くつもりは全くないので、言  
葉を最後まで聞かずにそれに空のホロテープを放り込むと。彼女が  
まとめたとか主張するデータのコピーをとった。

Vault—TECの技術、さてどんなものなのか？

|||||

相変わらず挨拶と役目を終えたバーストウをのけ者にして、アキラ  
とその仲間たちは部屋の一室でちよつとした会議を始める。

はじまると同時に寝不足のアキラは血走った目とうんざりした表  
情と声で、衝撃的な宣言からはじめる。

「結論から言う。このVaultはようするに決して完成しないこと  
を目的としたものだったことがわかった」

「——なに？」

「目的、継続、結果。それらしいことが色々、でもようする無意味。な  
にもないってこと」

「？」

ジェゼベルじゃないが、どうやらこちらの言っている意味を理解し  
てはもらえなかったようだった。

しっかりと丁寧の説明が必要と言うことらしい。

「目的とされる実験はやたら壮大なものを計画しているけど。目を通  
してみたら、別にそんな規模でやらなきゃいけない理由は何もない。  
そもそもその実験はべつにこのVault特有のものではない。」

施設的设计は更新すると上限が常に拡張され続けていったせいで、

全く開発が進まなかった。それでも新たな予算が降りると、そのたびに理由をつけてさらに拡張する必要があるって結論が用意されていた。やる気がありすぎて、現実を無視しているよね」

V a u i t 8 8 はそもそも完成など〝想定されていなかった〝 V a u i t であつた。

「ということで、僕らのとるべき道は2つとなつた」  
「？」

「完成しない施設なんて放り出して、さっさと帰る」

「嘘でしょ？こんな穴の中で、ジメジメと数日を無駄にしたつてワケ？」

「——なんだよ、そりゃ」

「最悪だな」

「困りましたね……」

皆は呆れ声とここに連れてきた——つまり僕へ。非難の目がむけられている、なぜだ!?

「そしてもうひとつ！」

「……」

「実際にシエルターを僕らの手で作ってしまおう、という道もある」

「なに？今、完成されない V a u i t だとお前が言ったんだぞ？」

「そうだ。だから僕らが作るのは完成された V a u i t ってこと」

「どうということ？」

自分では大丈夫だと思っていたが、ちゃんと伝わっているのだろうか？

寝不足と言うものの悪影響を、僕はそろそろ認識を改める必要があるのかも——。

「200年以上前の設計図は全て捨てて。かわりにこつちが新しい設計図を用意する」

「——ボス。そんなことができるのか？」

「やれるよ。バーストウは念願の V a u i t を手に入れて監督官となり、僕らは完成されたそれをみてニッコリ」

「あんたがにつこり、の間違いだろ」

「幸せになろうよ、こんな場所でもみんなでき。それが一番とは思わないか、ケイト」

しかしハンコックはわずかに考え、僕の計画の問題点について触れる。

「それだとあのバーストウにはどう言い訳をする？お前が調べたデータってのは、あいつが長い時間をかけてまとめたものなのだろう？」

そこに記述されたものと明らかに違えば文句も出てくるだろうよ」「どのみちこのままだと彼女の願いはかなうことはない。完成を約束すれば、たぶん彼女は騒がないと思うんだ」

「言いくるめるつもりか？」

「その必要もないと思うけどね。せいぜい『君が地下にいた200年の間に進歩した思考が導き出した結論』とかなんとか。それだけであっさりと納得するさ」

「——それなら俺の数日の苦労も報われるか」

なんとなく、このままこの場所での作業を続けることに皆が同意してくれたような空気になっている。

それなら今のうちにサツサと話を進めてしまえばいい。

バーストウに新たな提案として、新しい凶面を引くと口にすると思妙な反応を見せた。

どうやら僕の考えは楽観的に過ぎたようだ。ハンコックの方が、ボクよりも彼女をよく理解していた。

「その、あなたの提案は実に魅力的だとは思っただけけれど。それはどうなのだろう？とも思うわ」

「元の計画を進めるべき、と？」

「そうね。もちろん」

「では、予算は何処からですか？」

「——ああ、そうだったわね」

「残念ですが“バレリー監督官”、このVaultは破滅の危機を目前になんとか踏みとどまっている状態なのです。お互いにそのことを理解しなくては」

「……」

「この決断を下すことがどれほど難しい事なのか。あなたとまったく同じ気持ちだとは言いません。私も悔しい——ですが、いい面もあるということに注目してほしいのです」

「良い面？」

「ドイツの生み出した天才、Dr. ブラウンからあなたが直接に依頼された実験計画。あれが始められます、Vaultも動き出します。そうしてあなたはついに、足踏みしていたこれまでの遅れを取り戻すことが出来る」

「そうね。シエルターが出来なければ。研究も始められないわ」

「では同意を？」

「——わかった。シエルターのデザインはあなたの言う通りに変更しましょう」

この瞬間、2000年眠り続けたこのVaultも動き始めることになる。

だが長くは続かないだろう。かつての世界で選ばれた、そこに入るべき人々はすでになく。かわりにこの地上を健やかに生き延びてきた人々が入ってくることになる。

つまりそれは——。

(さて、あとはこれをいつ。ミニッツメンに話したらいいのやら)

解決したと思ったら、また新しい問題が持ち上がる。

こればかりだな。

|||||

そつと踏み出した足の先に触れたコンクリートの破片が、小さくコロコロと音を立てて転がった。

マクレデイはそれを恐怖の混じった緊張して大きく開いた目で見つめ。転がるのが終わると、「チクショウ」とだけつぶやいて真後ろに振り向くと一目散に走りだした。

それに合わせるように、彼が向かおうとした方角からは。



不気味な声が、あちこちからあがる――。

そんな風に戻ってくるマクレデイの姿を確認したのだろう。

真つ暗な洞窟の中からパワーアーマーの駆動音と一緒に、強化ライトが照射されてきた。もちろん怒声付きで、だ。

「あんた！なにやってるのよっ」

「へまをしたんじやない。すげえ数だったんだよ！」

「わかってる、すぐに来るよ！」

パワーアーマーを着たケイトは言い終わる前に、自身の持つ大きなコンバットショットガンが火を噴きはじめる。

マクレデイはその後ろまで走ると、今度は迎え撃とうとして腰を落とし。ライフルを構えようとして――それを諦めた。

代わりにキュリーから借り受けた例のタコ印の新型ピストルを取り出して構えた。

「俺は狙撃手なんだぞっ。ライフルが使えないなんて、最悪だっ！馬鹿野郎」

悪態を口にしつつも、自分の後を追ってきているフェラル・グールの群れに戦慄を覚える。

アキラはこの2人には別に、広大な洞窟の“特定地域”の調査を命じた。

彼の話によるとそこが特に気になることがあるらしい。

2人は「そんな必要があるのか？」と不満たらたらであったが――。

列をなして迫ってくるフェラルの数は多かったが、火力がそれをわずかに上回っていた。

次々と転がり、倒れ伏し。またたくまに動かなくなったフェラルの山が作られたが、それでもまだ後続は続いて走ってきている。

「やべえぞ。このままだと押し込まれる！」

「わかってる。撃ちまくれ、ケイト！」

「いや、駄目だ。これはやるしかないね」

なにを？とは聞くことが出来なかった。

ケイトはジャスティスを手から放り出し、背中に下げているソレを——真っ赤に塗りたいくらい、太い部分には暗く輝く黄金色で「Good Night」と落書きされていた改造バット。

イカレた男が、イカレた女に要求されてホイと生み出し、与えてしまったグロテスクなバットと呼びたくはないスワッターを握ってしまおう。

「嘘だろ、ケイト。それを使うってのかよ」

「最高のシユチュエーションじゃない!?アハハハハ」

「やめ——ああ、クソ女がっ」

力強い一歩を踏み出すと、轟音を響かせ噴射音で生み出される狂気の一振りが始まった。

それは獲物を皆で引き裂かんと殺到しようとしたフェラルをまとめて洞窟の壁に叩きつけ、絶命させるといふ悪夢を実現させてみせた。

あんな風に自分も壁にキスするのはご免だ、とマクレデイは思った。

壁に張り付いて叩き潰されたローチのように、そいつらもズルズルと音を立てて地面へと崩れていく。前にダイアモンドシティでは、アレに痛そうな釘を打ち込んでいたり。鉄条網を巻き付けたのが売っていたのを見たことがある。

だがあんなものは……バットにジェット推進装置をとりつけるだって?狂っている!

「お前は最悪な女だっ」

「アンタも楽しみなさいよ。こいつら、腐ってる癖にイキがいいじゃないか!」

目前にあるのはバケモノになって地下を彷徨う腐ったグールたちと、それに負けじと立ち向かうは楽しそうに戦う女狂戦士ときた。

いつも思うが、なぜかいつだって常識的なのは自分だけなんだろうか?

そんなことを考えるマクレデイであったが。彼の中にあつた恐怖は不思議とすでに消えてしまっていた。

Vault 88 建設を前にして、アキラにはどうしても気になることがあった。

ひとつはこのバレリー・バーストウと共に200年前に地下に閉じ込められたという人々の行方。そして過去にこの地下空洞を拡張されていった中でおこったとされる小さな事故を報告する記録。

ハンコックによるとこの数日だけでも洞窟の奥からフェラルが迷い込んできて処分したと言ったが。

それがもしかしてこのポストンに敷かれたかの地下鉄道網につながってやしないか。その不安を塗りつぶすために、調査は絶対に必要であったのだ。

この最悪の可能性は見事に的中していた。

マクレディとケイトは洞窟を歩き回ると、いつしか人工物の中に自分たちが迷い込んでしまい。

そしてついにここで確認することが出来た。いや、出来てしまったのだ。

コンクリートで固められた空間はトンネルであり。マクレディが戻ってきた道の先にある明かりは、もはや列車がそこに停止することはないだろうと思われる駅のホーム。

そこからフェラルの群れが闇の向こうから、終わることなく湧き出してきたいる――。

## 正しい事

ファー・ハーバーの港にある棧橋の上に立つ。

地平線にはまだ朝日は顔をのぞかせてはいないものの、その予兆のようなものが見えている。そしてそこにむかった船が地平線に消えるのを確認したのはつい、昨日の事ではなかったか。

探偵はポケットから相棒が置いていってくれた貴重な煙草を取り出すとそれに火をつけ、煙を吐き出させる――。

(しばらくはまたひとりか)

ここに残ると決めたのは自分だが、機械であつても感情というものはあるものらしい。

胸のあたりでとらえようのない巨大な不安のようなものがのたうつように動くのを感じつつ、それに押しつぶされようとする小さな自分を感じている。ま、このくらいは当然だろう。

今のこの状況では、あのアカディアの秘密を探るということは不可能だ――この島で探偵は、無力な存在でしかない。

そしてそれは以前も経験したことだった。

寝泊まりに納屋を借りているロングフェローとは。夜もだいぶ更けた頃に彼の家を共に出た。

老人は眠りが浅いのがつらいのさ、彼は寂しそうにそう口にした。だからいつも朝が来る前にこの暗い道をひとり歩いて港に向かっているのだそうだ。

「あの騒ぎの時、あんたはあそこにいたんじゃないか？」

「運がなかったのさ。あの日はキャップが残っていて、つい”朝までコース”を楽しんでやろうとしてね。残り物には、福はなかったらしい」

「そりゃ、災難だったな」

「ああ、まったくだ。ヒドイ騒ぎだったから、酔いなんて吹き飛んでしまった。仕方なく飲みなおしていたら――あんたらがやってきた」

やはりこの老人もまた、彼に惹かれるものを感じてしまったらし

い。

「若いのは本土に戻っちまったんだな」

「彼はあつちでも人気者でね。仕事が残ってる。それに必要はないと言ったんだが。娘の両親にも、一応は報告してやりたいと言うしな」

「そうだったか」

「ああ……それに、友人に助けを求めようだ」

「ほう」

「島に住む、お前さん方には数人でも嫌がられるかもしれんが。レオは頼れる面白い友人も多い」

「そりゃ結構なことではあるが、うちの納屋に入り切れる人数だといいが」

「なに、それなら大丈夫だ」

正義と騒ぎの新聞記者パイパー、最後のミニッツメンのガービー。

ミュータントのストロングにグッドネイバー市長、元ガンナーの傭兵に、コンバットゾーンのチャンピオン。

そして――。

「にぎやかで騒がしい連中だが、いい連中だ。あんたもきつと気に入るはずだ」

「フン、それはどうかね」

その彼とは港町の入口で別れた。

当初の――いつもの予定通り、彼は今日も酒場で一日を過ごすのだろう。

朝日が昇った後は、探偵は静かに港町の中を歩いて回ってみる。

住人達はこの小さな場所でも、なんとか日常生活を過ごそうと努力しているが。島を覆う霧のように、彼らの未来は暗く。隠すつもりもないのだろうか、普通に絶望が誰の顔からもぞかせていた。

ただ、面白かったのは、ここでは人造人間に対しての不快感や憎悪をはつきりとはぶつけてこないことだろうか。

とはいえその絶望はあの頃のダイアモンドシティとは違うようにも思う。全く同じってことは、ないのだ。

誰を探していたということも、なにか仕事を探していたわけでもな

かったが。

そんな風にブラブラしていると、あのキャプテン・アヴェリーがあらわれて。探偵を探していた、と言われた。

まだこちらが何も言っていないというのに、だ……でもいいとっかりになるかもしれないし、助かるな。

「仕事があるなら、引き受けてもいい。で、なにをすればいい？」

「こっちへ。ついてきて」

彼女はそれだけ告げると、こちらを再び門のそばにある彼女の仕事場へと連れていこうとしていた――。

|||||

ファー・ハーバーから船でひとり戻った私に、ナカノ夫婦は恐怖に顔を引きつらせ。「あの娘は何処だ？」を叫びだされた時は、ニツクの忠告を聞かなかった自分を恨みたい気持ちになった。

私は必死の思いで繰り返し「落ち着いて」と頼むと、彼らがそうするまでじつと耐えなくてはならなかった。

「あ……」

「……」

「その、すまない。とりみだしてしまつて――」

「……」

「わかつた。あっちでなにがあつたのかを話してくれ。これ以上はもう、あんたを困らせたりはしない」

「……ではまずお伝えしたい、良い情報と悪い情報と」

「う、ううっ」

「娘さん、カスミは生きてました。直接本人にも会えましたし、あなた達が心配していることもきちんと言えることができましたよ」

「ああっ！よかつたっ」

2人は安堵すると、寄り掛かっていた机だけではたりないのか。一度はしゃがみこもつとして、すぐに立ち上がってきた。

「彼女は両親がそんなことを考えているとは思わなかつたと言つてま

した。そして探偵までよこすとは、とも」

「それじゃ、それじゃ……なんであんなだけここに戻って来ているんだ!？」

「——今が良い情報です。次が悪い方」

「ああ!」

「彼女はすでに人造人間達のコミュニティに入っていました。大切な仲間として受け入れられていて、本人はそのことに満足していて。彼等との生活を満喫しているのだ、とも」

「まさか!そんな馬鹿な!洗脳されてるんだぞ!」

「嘘ではありません。本当は彼女に直接、ホロテープでメッセージでもと願ったのですが。彼女はそれを『自分には関係のない人たちだから』と言つて了承してくれませんでした」

「カスミ——なんてことだっ」

「戻るつもりはないと断言しましたが、考え直しても良い、という言葉質は引き出せました。今は、これだけです」

「これだけ?これだけとはなんだ!?すぐに娘を助け出してきてくれ」

「ここからが私の——出番と言うことだな、ニツク?

ベレー帽をとり、目を伏せ、わざとらしく深くため息を吐いてみせた。当然、相手は驚く。

「私が戻ったのには理由があります。娘さんの意志は聞いた、その上で今度はあなた方の考えを聞かせて欲しいと思ひまして」

「私達?どういうことだ?」

「ナカノさん、娘さんは死んだということにしてはどうです?彼女は人造人間だった、彼らがそうしてしまったのだ、と」

「あんた!なんてことを妻の前で!」

当然だが彼らは激怒する。

だが、殴りかかつてはまだこない。

「賢い娘さんでした。計画はしつかりと立てられていて、ここを出たら一直線に目的地までたどり着いていた。人造人間達は彼女の話を聞いたうえで、仲間として迎え入れた。わかりますか?」

「え?」

「もうカスミは自分を人造人間として生きていこうと決めてしまったのです。強引に連れ出せば、人造人間達は仲間を襲われたと考えて攻撃してきますよ。そうなったらカスミは？最悪の場合、あなた方家族は新しい仲間に殺される可能性も出てくるし。そうなってしまったらカスミは戻る場所を両方で失うことになる」

アキラに聞かされたレールロードと人造人間の話を聞いたことで、直接目にしたあのアカディアなら、このくらいのことは平然とやるのではないかと考えていた。

ニツクも私も、親の強情のせいで哀れな娘を誕生させるような結末は見たくはない。

「――それは」

「ニツクも私もそんなことは望んでいませんし。第一その方法ではだれもあの島から生きて脱出などできないでしょう。それよりも、戻ってきたとしてどうするのですか？」

「どうする、とは？」

「彼女はこの家に自分の居場所はないと感じ。別の場所ですでに数カ月間にちゃんとした自分の居場所を作ってしまったている。」

今のままでは同じことの繰り返しです。彼女も自分の人生をあなた達におかしくされたくはないと、戻っても。やはりまた飛び出していつてしまうでしょう」

「……そういうことか、探偵さん。私達も学べと言うことか？生活を變えろ、と」

「簡単なことではありませんが、説得はニツクが残って続けてますし。きつとですが、彼女をここに帰らせるチャンスはあるかもしれぬ。私もここでの用を終らせたら、戻るつもりでいます」

「あの子が戻って来た時、私達がそれを引き留めるようにしておけ、と？」

「重要なことは、彼女が再び自分の生き方について決断するのはそれが最後だということですよ。」

そんなことになったら彼女がここに帰ることはない、そんなことを考えないような家が、家族が必要です。それは理解して下さい」



私はそれだけ言い残すと、ナカノ邸を出た。

こつちだつて暇ではない。次はニツクの借りを返すため、エディー・ウインターを探さないといけない。

(そうだ、アキラにも力を貸してもらえないだろうか)

連邦の中ならば、互いのピップボーイを通じてメッセージをやり取りできることになっていた。

画面のリストに新たに加わった“Mail”へと合わせると、向こうからこちらへいくつかのメッセージがすでに送られてきていた。

「ん？——Vault88見つけた、だつて？」

地図でその座標を確認すると、ボストンからさらに下がった場所にあるらしい。

彼も私も、同じVault居住者だがおちつかないものだ。片方は連邦の外の島へ、そしてもうひとり新しいVaultへ。

広大なはずの連邦を狭くしている自分達に苦い笑みを浮かべる私は、メッセージを見て予定を変更し。シグナル・グレネードを砂浜の上へと投げつけた。

|||||

元気で口やかましい、そんなパイパー姐さんでも落ち込むことはある。

彼女は今、自分が落ち込んでいるだけでなく。そこでも、うじうじとしている自分がどうしていいのか、わからないでいる。

可愛い妹にまで励まされ、ひどい激励も受けたことが余計に自分は重症なのだとわかってしまう。

こんなことは初めてだが、実はこんな状態になった経験がないってことではない。

前回は——その時のことは思い出したくもないし、誰かに話したくなるようなものでもない話したが。

どうしようもなく抑えられない怒りが。あの時の彼女を押しつぶすことなく、小さな体であっても戦わせ、勝つことが出来たのだと

思っている。

——そう、思っていた。

新しい記事を求め、久しぶりにダイヤモンドシティを離れたパイパーは。

気ままに北上する中で、気になる人々の姿を目にしてしまった。巡回中と思われる若いミニッツメン達と、彼らに何かを必死で訴えているらしい父と娘の親子。

困っていたクリントとシャーリーを、パイパーは助けてしまった。どうやら久しぶりの平和に飽きたわけでもないだろうが、若く経験の乏しいミニッツメン達は思い込みと過剰な正義感から。この親子を、大人が子供を攫ってきたのだと信じて疑わなかったようだ。

「大変だったね」

「ああ——ありがとう、あんたには感謝してもしきれないよ。もう、駄目じゃないかと思いはじめていた」

「いや、でも……相手はミニッツメンだったじゃない」

「そうだ。恐ろしい連中だよ、クインシーで仲間を裏切り、虐殺に加担した連中がここでまた勢いを取り戻してきているんだから」

「——うーん。それは昔の、だよ。今の彼らは、出直したんだ」

「悪いがそれを信じる気にはなれない。彼らは私達を一度裏切ったんだ。また、裏切らないと誰が言い切れるっていうんだい」

パイパーはそれ以上は、声を上げなかった。

クリントのような人の言葉は、そう間違っではない。確かにミニッツメンは自ら破滅した。彼らのような存在は必要であったのに。共に戦った仲間を裏切り、守るべき人々の反対側に立ち。略奪者として、その両方を血祭りにあげた、それは事実だ。

だから新生ミニッツメンを、連邦の全員が全員。称賛の声を上げているわけではないことも理解しないといけない。

あのダイヤモンドシティであっても、町のためにすでに戦闘を繰り返してくれた新生ミニッツメンを疑う声は小さくはないのだ。

だが新生ミニッツメンは違う。パイパーは知っている。

彼らを率いるガービーは善人だし。なにより彼が、レオがきつと――

「パパ！私達、ワンちゃんを飼うべきだと思うの。おつきくて毛だらけで、怖くて悪い人は追い返すけど。夜は私の隣で寝てくれて、暖かくしてくれるようなワンちゃん！」

「ああ、それはいい考えだね、シャーリー。じゃあ犬を飼うか、確かそういう商売をしている人が連邦にもいたんじゃないかな」

目の前で繰り広げられる親子の会話を聞いて、パイパーは胸がきゅつと締め付けられる。

シャーリーという娘にあの頃のナットの面影を見てしまったようで、彼女がもうこんな会話をあの父とすることもなかったのだということを感じ出してしまったか――。

|| || || || || || || || || ||

訪問者が儀礼的に父の死を知らせて立ち去ったが、小さなパイパーはその知らせを聞いて茫然とするしかできなかった。

何が起こったのか、ちゃんと理解できなかったのだ。だってあの父が！

しかしそんな自分の横顔を張り飛ばされたようなショックを受けることになる。

最悪の情報を扉の向こうで耳にしたナットが。あの勝気で元気の塊みたいな彼女が、悲しみに震えながら姉である自分に問いかけてきた。

「お父さん、死んじゃったの？誰が、殺したの？」

「――っ!？」

多分、それが全ての始まりだったような気がする。

湧き上がる怒りは、正義のそれであり。自分の声を周りに聞かせるためなら、どんな手だってやってやろうと決めていた。

主の戻らぬ父の部屋へはいると、父が「お前達のために、念のため

置いておくからな」と告げてあつた10ミリピストルを取り出してきた。

復讐、そんなものは望んでいなかった。

そのかわり犯した罪から決して誰も逃がすまいとだけ考えていた。父親を失ったばかりの哀れな娘を演じながら居留地の中を歩き回り。そうやってたつた一日だけで、パイパーは父を殺した男の名前を手にする事が出来た。

夜、足は棒のようになり。くだらない演技に疲れ切つてはいたものの、パイパーの顔はどこか満足している風であつた。

食欲がないとごねる妹をテーブルにつかせ、缶詰を開けてそれを空にすると。姉は妹に、知りえたすべての情報を語つて聞かせてやる。

自分たちの父親がどれほど卑劣な奴に殺されたのか。

悲しいし、悔しいことだらけであつたけど。幼い姉妹の目に、もう涙が浮かぶことはなかつた。

幼い妹もこの姉がどれほどの思いを抱えて飛び出していき、たつた一日で真実に到達してみせたのか。姉と同じく聡明であるがゆえに理解していたのだろうか。

「どうするの、お姉ちゃん？」

「なかつたことにはしない。必ず、やったことの償いをさせてやるんだ。私達で！」

ライト姉妹は、そういつて固く誓つた。

彼女たちの父親は、辺境に住む名もない民兵にすぎない。「レイダーに仕事をさせず。マイアラクを便所から叩き出す」それが仕事なんだと娘たちに聞かせていた。

彼女達も、父と同じことをする運命を選んだ。

だがそのやり方は、少しばかり違つてはいたけれど――。

夜、パイパーは珍しく野宿もこの2人につきあうことにした。

といつても、明日には別の道を歩くことになるのは確認した。そうでなければ、一緒にはいられないとクリントの方からそう言つてきたのだ。

この父親は愛する娘を守るために、この世界にあるすべてに疑いの目を向けずにはいられないのだろう。

「——ずっと旅を？」

「ああ、キャンプが足りなくなると。バンカーヒルやグッドネイバーで仕事を。小さな居住地には、近づきたくないんだ」

「面白いですね、それ」

「そういうんじゃないんだよ……あの娘に、そろそろ旅をやめて落ち着きたいなんて言われたくないんだ」

そうすれば自分と同じような年代の子供と遊びたい。毎日を2人で怯えながら連邦を歩くこともなく、ベットで横になれる。

そんなことを娘が口にするのが恐いんだと言っていた。

「なにか、理由が？」

「安全、平和。全部嘘なんだ、ああいうのはね。」

協力なんて上っ面な言葉で他人に要求するだけして、責任だのなんだの口にして。なにもできないようなのが集まってできる場所だ！

そんな歪んだところで、娘の成長を見守りたくはない」

あきらめ、怒り、憎しみ——クリントは傷つけられた過去へのそうした深い負の感情が隠せないまま吐き出されてきた。

彼が言うことも理解できる。寄り添って生まれる小さな居住地は大抵はなにもないものだ。そしてそれを補おうと必ず無理をするようになる。この脆弱な共同体の隣にはいつだって崩壊が出番を待っているのだ。

それがたとえ上手くいったとしても、あそこで上手くやっている連中がいると噂はあつという間に連邦に広がっていき。レイダーなどが必死の思いで手にした成果だけを奪いにやってきてしまう。

そうやってさらにひどいことをぶちまけて、立ち去っていつてしまう。

「奥さんの、事ですか？」

「すまないが、あの子の前でその話をするつもりはないんだ。助けてもらったアンタでも、それだけは」

クリントがそう固い声で断言すると、たき火の向こうで寝袋に入っ

ていたシャーリーの小さな声が聞こえてきた。

「パパ……ママに会いたいよ」

「そうだなシャーリー。俺もだ」

パイパーは自分の頭を地面に叩きつけたくなる衝動に駆られる。

これが覗き屋パイパーと言われる所以だ。こんなところで、こんな人たち相手にしてまでも自分は――。

|||||

その後もパイパーは横になったが、眠ることが出来なかった。

親子の話を聞いたせいだろうか、いつしか自分たちの。ライト姉妹のたどってきた道に思いをはせる自分がいた。

しばらくして居住地の代表は、パイパーをひとりよびだした。

部屋に向かえると、お互いが向き合う。彼はこの少女を子供ではなく、人間として扱っていた。なぜなら、そうしなくて行けない理由があったから――。

「彼〴〵については、もう聞いたね？パイパー」

「はい」

「短期間で、見事な調査をしたものだ……今更だが、君には感心している」

「ありがとうございます」

「賢いキミからしてみれば、私はさぞかしちっぽけな居住地でふんぞりかえっている、無能な代表だと思っているんだろうね。君の話を『子供のたわごと』だって。真面目に話も聞けない奴だと」

「……」

「わかってもらわなくてもいい。だが、理解はしてもらわないといけない」

「？」

「ひとつ、問題があることが分かった。君と、君の妹の事だ。パイ

パー」

大きな背中を丸め、落ち着きなく指を動かし。少女に向けられた目には憐れみと同情、そして冷酷な光が浮かんでは消えていく。

彼の良心と、別の物が次々と顔をのぞかせては消えている。

「お父さんの事件で、皆が不安になっていたのは知っていたね？ 私は、これを恐れていたんだ」

パイパーは正しいことを、正義を求めただけだった。

だが、たったそれだけでも。この小さな居住地では状況を悪化させるきつかけとなってしまう。

「今ではもう、ここを守る人たちがいなくなってしまった。代わりにの人を探しているが、今のところあてはない」

「はい」

「お父さんの事件は解決した。娘の君の力のおかげだ。君は正しい形で、仇を取ったわけだ。褒め称えるべきだろうと思う、まずはこれを最初に受け取って欲しい」

そういうと机の上にキャップの詰まった袋をどさりと乱暴に放り出してきた。

その音に驚いてパイパーはびくりと体を震わすが、代表の大男はそんな少女の様子に気にかけることはなかった。

「2. 500キャップある。大金だよ、彼が君の父親を始末をふくめてレイダーと取引して手にしたものだそうだ」

「い、いりません」

「いや、これは君の物だ。君にはなんとしてもこれを受け取って、帰ってもらおう」

「……どういうことですか？ 私達、なにかしましたか？」

「——私はいくらでも皆の代表を務めているんだ。もちろん、本来ならば君達の事も」

「それじゃ、なんで」

「ここに入ってってくれる、新しい兵士が見つける前に君達姉妹にはここから出て行ってもらいたいんだ」

「!？」

「残るといふ選択肢はない。無理にそうしたいというなら構わないが、あの家は出てもらうし、居住地の離れに自分たちで新しく家を用意してもらおう。そして当然だが、そうなたら我々は君達と隣人として付き合うつもりもない」

「どうしてっ、どうしてそんなことを!?!」

「パイパー……」

「私がっ、子供が大人の話听不懂で悪い奴を追い出したから! それで罰しようって、そういうことっ」

代表は頑なであつたが、しかし悲しげな表情で首を横に振つた。

「皆のためにそう私が決断したんだ。」

いいかい、パイパー? 私達はただ、君の話を無視しようとしたわけじゃないんだ。それが出来ない他の理由があつた。

君達のお父さんがいなくなつて、その話はすぐに広まる。新しい護衛をしてくれる人が必要だが、それまでこの面倒を見てくれる人だつて必要だつたんだ」

「——それじゃ、私が悪いって事?」

「違う、そうじゃない。だが、君はやるべきことだと思つて行動したのだろうし。我々も最後にそれを受け入れた。」

罪人は追放され、我々は前に進まないといけない」

「子供を追放することが、それだつて言うんですか?」

「あいつの全てを取り上げて追放したんだ。あれの口は、この大金はここに残っていると騒ぐことになるだろう。そして私達は前以上に強い護衛を必要としている。」

だから我々は新しい住人を迎え入れる準備もしなくちゃならない」

「私達を追い出して? 大金だけ持たせて……: 囹になれつて」

「……君はあつという間にキャプテン・メイバーンの犯行を調べ上げた能力がある。それは、新しい人たちに不快な気持ちにさせる可能性がある。ここに残しておくわけにはいかないんだ。実際、君達を引き取つてもいいという家族はここにいなかったんだ」

それは、代表から聞くまで知らなかつたことだつた。

「いつまでに、出ていけばいいんですか?」



「しばらくはいい。だが、話が決まれば。そうは言っていられなくなるだろう」

「随分と、あやふやなんですね」

「断言できることはある。その人たちはここに来た時、すくなくともライト家の娘たちに会うことはない。私はそうなるように、その時は動くつもりだ」

「だからそのまえに——わかりました」

「——賢いキミならきつとそう言ってくれと信じていたよ」

子供のパイパーには、キャップの詰まった袋は重かった。

そしてそれは父の命の値段であったのだと、あの代表はパイパーに告げたことでさらに忌々しくもあった。

（言われなくなつて、こんな所。こつちから出て行つてやる！）

翌日から持つていくもの以外の家具をパイパーは次々と処分していった。どうせ残して置いていいたら、この居住地の奴等に好きにされてしまうものなのだ。

それでも出ていくまでには数週間ほど必要だった。旅の商人と話をし、自分達を連れ歩いてくれそうな人物を選ばないといけなかったからだ。これは思った以上につらい時間となった。

代表と話をしてから徐々に、隣人たちの声が子供である姉妹たちの耳にも入ってくるようになったからだ。

——口をつぐんでいればいいのに。あんな余計な事、小さいのにしっかりして。可愛げのない……

自分たちは何も間違っていない、パイパーはそう思っている。ナツトもそう父から教えられてきた。悪を許さず、正義を求めることに躊躇う理由はないのだ、と。

それでも気にしていないわけではなかった。ダイアモンドシティでパブリック・オカレンシアを始め。数年後にその居住地がついに崩壊したと噂に聞いた時、パイパーは頑なでも悲しくこちらを思いやる目を向けてきたあの代表の事を思つて胸を痛めたことがあった。

（ダメダメ、ちよつと感傷に浸りすぎてるぞ。パイパー！）

パイパーは新生ミニッツメンが、レオがみせてくれる新しい居住地

で暮らす人々の姿に感動したのを覚えている。

サンクチュアリではすでに人々が平和に毎日を暮らしていた。失敗することもあったけれど、それでもほとんど完璧に居住地を生ま出し続けている彼らの姿に希望はあるのだと胸躍らせたのは間違っていないはずなのだ。

クリントやシャーリーだって、あれを見てくれさえすれば。考えを変えるかもしれない。

だが、パイパーはそれを親子に口にすることはなかった。

翌朝になると、お互いが別れを告げて別々の道を歩きはじめる。親子は2人、前だけを見て笑顔で歩き続けていくが。パイパーはそんな2人の後姿を、見えなくなるまで何度も振り返っては確認していた――

Withou t i t ! (Akira)

バレリー・バーストウは自分の才能に疑問を持ったことはない。この苦痛に満ちた、停滞を続けた200年以上を耐え抜いた今であつても、それは変わらない。

そんな彼女の記憶には、あのフレーズが今も思い浮かぶ。

『Vault—TEC提供、未来のテクノロジーを今に』

『Vault—TECはもはや、アメリカの選択——その枠を超えた存在となりました。我々の手にある優れた科学力は、アメリカ社会の隅々にまでいきわたり。もはや“我々”の存在は、皆さんとは切り離せないほど密着しています。これは——事実なのです』

あの言葉、あの自信は決して嘘ではないのだ。

トラブルから長く乱雑にぶちまけられただけのゴミの山はすでに今はなく。

いくつかの部屋は存在し、その中には研究施設のようなものも確認している。

(誕生するのだ。ようやく、私のVaultが。私の未来が)

輝かしいものがすぐそばまで来ていることを感じている。

だが、同時に不安もある——。

仕事を始めることはできる、用意が整えばすぐにだって。

だが、パートナーはまだ肝心の監督官の部屋を用意できていないのだという。もどかしいが——しかし、すでに別の部屋はこうして用意されているのだ。その時は来る、その時まで——耐えなくてはならない。

「あと少しなのよ。あと、少し……。もうすぐなのよ、大丈夫」

常に書類には目を通してきたし、自分が管理するVaultシエルの完成予想図は脳裏に完璧に思い浮かべることだって出来る。

現実が残念なことにごじんまりとしたものとなってしまったが——ゴミ捨て場が200年続いたことに比べれば、遥かにマシ。

Vault 88は徐々にではあるが、一日ごとに目に見えてはつきりとその姿は完成へと進んでいることがわかるようになってきた。

だが、これはアキラの力と言うより、Vault—TECの持つ本来の技術力が非常にすぐれたものであることを証明していた。そういうことなのだろう。

今は公共用の部屋については、ほぼ完成しており。

キュリーはこの洞窟の調査の傍ら、診療室と水栽培施設の間をこの数日は忙しく行き来していた。

だからそこに珍しい客人が訪れていると知って、少し驚く。

「ハンコック市長？これは珍しいのです。なにか、求めているものがあるのですか？」

「コンベアの上を流れてくる資材のチェックにもさすがに飽きてきてね。で、この見学でもしてみようかと。」

「ここが、あなたの新しい研究室ってやつか」

「それは構いませんが、ひとつ訂正を。ここは水栽培室と入口にあつたように、私の研究室ではありません」

「ほう、違うのかい」

「はい。でも、とても感慨深い場所ではありません。

ご存知ですか？」

彼と初めて出会った場所、Vault 81でも。あそこではDr. ペンスキーが地上に頼ることなくとも食料を確保するために。色々な研究がなされています」

「そうだったか。だが、確かコベナントの例の所でも。お前達は似たようなことをやっていなかったか？」

「あれは少し違います。私達は失われた生薬のかわりになるものを研究していました。食料ではなく、医学のためにやっていたのです」

「……ま、専門家にとっちゃ。大きな違いがあるんだ、つてことはわかったよ」

ハンコックの記憶では、この部屋はそこそこに大きな倉庫くらいは

あつたように思ったが。

今は鉄の柵が2列に8つ置かれただけで、透明なプラスチックの管や配線ものたくっついていて。スペースは一杯になっているように見える。

「つてことは、だ。この柵にある水の入ったケースに浮かんでいるのは——？」

「ゴートとスイカを試しています。実がなるまで、私達がここにいることはないでしょうけど——」

「そうか。収穫はできないか、残念だったな」

「いえ、それでも良いのです。これも私の実績のひとつになりますし、それも彼と一緒に出来たことですから。できれば、おいしくできなくては。おいしいのです」

「……あなた、本当にいい娘さんなんだな」

優しい目をして、そう素直に思ったことを口にしたハンコックに対し。なぜであろうか、キュリーの顔は逆に曇ってしまった。少しの沈黙の後で、思い切ったように顔を上げて口を開く。

「あのっ、せっかくなのでいいですかっ」

「んん？」

「えつとです、知りたいことがあります。彼の——」

「ああ、やめておけ。あなたが知っても意味がないことだぞ、それは」  
ハンコックはキュリーの質問を予想し、あっさりとは断ろうとするが。

あきらめられないのだろう。彼女はじつとグールの顔を正面から黙って見つめ続けていた。

「……といつても、聞きそうにない顔だな。頑固なんだな」

「ごめんなさい。彼にもそういわれることがあります。キュリーは頑固だつて」

「ファーレンハイト、あいつの前の女の子の話だろ？」

「はい、グッドネイバーでは噂を聞いてしまった事があつて」

「ん、そうか。だがな、アンタに話してもいいが。約束してくれ、こいつは——あいつらの真似だけは絶対にやってくれるなつてな」

「？」

ハンコックは疲れたというように、手近にあつたパイプ椅子に座ると「長くなる、あんたもそうしろ」と言つてキュリーにも同じようにすることをすすめた。

「半年か……とにかく、ある日のことさ。グッドネイバーに馬鹿がやつて来た、少なくとも最初はそうだった」

「それが彼——アキラの事ですね？」

「メンタスで中毒起こしている状態なのに、よりもよつて俺の酒場で殺しの仕事を引き受けた。普通ならそんな街に舞い上がつて中毒おこす馬鹿にそんな依頼はしないように言つてあつた。当然だろう？」

だが、なぜかチャーリーの野郎は破格の値段でそいつを出してしまつた。

さらに困つたことに、それをアイツは見事に一晩で4か所。やつてのけてみせた。とんでもないルーキーが出たもんだと、あの夜は大騒ぎになつたね」

「……」

「ああ、そうだ。そこにあいつ、ファーレンハイトもいた。

アンタが耳にしたつていう噂はほとんど間違つてない。それくらいあいつはイカレタことを平然とやつてのけた。

そう、仕事を終えて戻つてきたアイツは。よりもよつてファーレンハイトを口説いた」

「とても、熱烈だつたと——」

キュリーの耐えるような言葉をハンコックは鼻で笑つた。

「そんなわけがあるかい。

あいつはラリツて呂律も回らなかつたさ。だけどそれがよくなかつた。ファーレンハイトが気に入つてしまつたんだ」

「やつぱり——」

「噂つてのは調子よく続けるために下品なものが混ざるものだよ、お嬢さん。

事実を言えば、ファーレンハイトはひどいことをした。

酩酊状態のあいつをホテルに連れ込んで、さらに多くの薬物をぶち込んでから。あいつに跨った」

「それが『少年は歓喜と恐怖に泣き叫んで、大人になった』の部分ですか？」

「まあな。でも事實は誘拐、監禁、暴行が行われたという話だ。

でも、それがあいつを救ったのかもしれないな」

「？」

ハンコックはあの夜の事をよく覚えていてる。

ホテルの方角から、あまり聞かない若者の悲鳴交じりの絶叫がしばらく聞こえ。それがファーレンハイトと相手が噂のルーキーだと知り。

呆れと興味から、そいつの仕事のやり方を自分の目で確認しに行った時の衝撃――。

――殺すか？その小僧は

そこで見たのは小さなデスクローによって八つ裂きにされ、獣にかじられ放り出された肉塊と。申し訳程度に使われた、ピストル弾でつくられた穴のある恐怖に顔を歪ませて死んでいる男たちの姿だった。ルーキーでこれなら、育ったらどうなる？

芽が出るうちに暗殺者でも送って、とつとと処分してしまおうか。

太陽が地平線から昇る間は、ずっとそんなことを考えていた。

でも、結局はそうしなかった――。

「呆れたよ、本当に。何を馬鹿なことをやってるんだってな。

恐れられる市長の相棒が、若い男を連れ込んで連日ホテルにしけこんで乱痴気騒ぎしてるんだぞ？それをみんなが知っている。

というより、迷惑していたんだ」

「そうなのですか？」

「相棒は出てこなくなつて、仕事のすべてを俺が仕切らなくちゃならなくなつたし。

あいつらを泊めたホテルじゃあの客を何とかしてくれ、奴等のいる階に人が入れられないと文句も言われた。俺の部下はあいつの男運がひどいのをしっていたから、新しいのが若いと聞いて動揺してた

な。

それなのに笑い話にして盛り上がったのは、酒場のチャーリーとその客ぐらいか」

「どんな、女性だったのですか？」

「やっかいな一流の悪党さ。そして、それが問題だった」  
「??？」

このままいつそ全てを話してしまうか？少し悩む。

「あいつは、アンタとは違う意味で頭があった。」

そして悪党が好きだった。どこにでもいるわけじゃない、変わった奴がな。だけど恋人というより、相棒を必要にしていた。だからだろうな、いつもうまくいかない」

「うまく、いかない？」

「なあ？確かあいつが消えた時、レールロードはあいつを切り捨てたんだろ？」

「はい、ディーコンはそう私達に言いました」

「レールロードの変人共がそう決断したのも納得だ。そしてそうなった原因はな、あいつら——ファールンハイトのせいでもあったんだ」  
「え？」

やはり、知らなかったか。

「あの時、ボストンコモンがひどく騒がしいことになった。」

その全てがアキラのせいではなかったが、あきらかにその多くが、あいつが歩き回った結果によるものだった」

「ああ、そういえば！

私もエイダとよく話してましたね。なんでだろうって」

「ファールンハイト、俺の元相棒は惚れた男にそういうことをさせる女だったのさ。」

自分と言う存在を相手に焼きつけて、自分から離れられなくする。アキラの奴、あの頃のグッドネイバーに近づきたくはないが。離れたくもないって心境の中にとらわれていたんだろう」

「そんなに、ですか？」

「あんたがそれを羨んじやダメだぜ。俺は悪い例として、話している



んだからな」

本当に、あんなのは何度も起こってもらってはこちらもたまったもんじゃない。

「あ、でも。アキラが誘拐された時、グッドネイバーの彼女の元に知らせに行きました。エイダです、私ではありませんでした」

「ほう」

「彼女は聞いても何も反応はなく。追いつかれてしまったと」

「そりやそうだろうさ。とつくに知ってたんだよ。だから驚くこともなかったし、自分の計画だけを進めていた。あんたらに興味もわかかなかったのさ」

「——信じられません」

「俺はその証拠を見ているからな。いや、見なくて良かったと思うぜ。あれは、寒気が走ったね」

彼女の葬式で遺品を整理してわかった事だった。

アキラが離れていってからずっと、その行動を逐一調べ続けていたのだ。

壁には大きな地図。そこに貼られた付箋には日時と目撃情報が記され、そこから次の行動予測が何本もの線となって引かれていた。

そしてある時期から、それはボツビの動きへと移っていつている。

「自分を攫った連中の事、あいつはあんたには話してるのかい？」

「少しだけ。でも、よくわからないのです。断片出来な情報しか——」

「あの懐いているレオにも言っていないらしいからな、気にするなよ」

「……はい」

「そう答えられる、あんたがいいんだ。ファーレンハイトとは、そこが違う」

「えっ」

「さつき計画、と言っただろ？」

「はい」

「あいつは、元相棒はわかっていたのさ。こんな結末もあるってことをな。あいつも、狂ってたんだ」

そうだ、そうなのだ。

ファールレンハイトはポツビに興味はなかった。

なのにあんな緊張を前にしてお互いが対峙する舞台を用意したのは、偶然が入り込む余地のないあらゆる状況を想定できるから。そしてきつと、あの結末は彼女にとっては悪いものではなかっただろうということ。

ハンコックにはそれが想像できた。

ポツビを前にあの場所にいる自分にうろたえ、ファールレンハイトの勧告に従い。目の前のポツビを撃ち殺し、見上げて「これで俺の命は保証してくれるんだろうな？」と。

そうアキラに問いかけられたら、あの女は失望と怒りでその通りだと答えるだろうか？

——いや、「もちろんだ」と答えるのだろう。そして、そんな男はいなかったのだと忘れることが出来る。

本当に悲しい話だ。

狂ったように愛しているくせに、お互いが悪党であるからと銃口を向け。そして片方だけが倒れていく——そんなシナリオが選べてしまった。そしてきつとそんな最期でもきつとあの女は満足したであろうことに、ハンコックはやりきれないのだ。

ファールレンハイトにアキラ、2人を自分の隣に置けたなら。

きつと自分にはもつと別の……。

「あんたでいいんだ、お嬢さん。アキラの奴は支えてやれ。狂った愛は、あいつもおかしくさせるだけ。だから、そういうのは知らなくていいんだ」

「はい、市長。それで——」

「なんだ？」

「その、彼女の。ファールレンハイトさんのその考えを、彼は？」

「どうだろう、知らなくてもいいさ。いや、知らないほうがいい。あんただって、忘れるべきだ」

わずかに数カ月、だがそれをすでに懐かしいことにして話している自分がだんだんと嫌になってくる。

ハンコックは話を切り上げようと「休憩時間は終わりにするか」そ

うつぶやくと、部屋を出ていった。

|||||

“小さな宝物”、その一員であるコンドウは丘の上に立って空を見上げていた。

どうやら誰かと待ち合わせをしているらしい。

というのも、しばらくするとそこに彼らの個人用移動浮遊装置が姿を見せ。彼の兄弟——キジマとよばれている人物が、いつものように少し怒っているような。肩を怒らせつつ、コンドウに近づいてきた。

「時間通りだ、キジマ」

「当然だ。それよりなぜこんなところへ呼び出したんだ？」

空を見ていたコンドウは視線を落とすと、今度は下に広がる林を顎で指す。

「——アレだ、下を見てみる。わかるか？」

「なめるな……コンテナ。周りに人が居る。多いな、23人といったところか」

「ほう、さすがだな。その通りだ」

「あれは例の取引か？」

「そうだ」

例の、とはなにかを2人は口にしなかったが。

確かに林の中に見えるオレンジ色の古いコンテナの周囲には人が集まっている。というより、対峙しているようにも見える。

片方はレイダーの格好を、そしてもう片方はミニッツメン。

だがおかしなことに両者とも手に武器を抱えてはいるが、別に戦う様子は見えない。というよりも、話し合っているように見える。

そういうえば巷では最近、レイダーと取引をするミニッツメン達がいるという噂が流れていたが……。

「クロダの仕掛けた。あれがどうした？」

「お前もサカモトと同じか。こういうのはな、一度でいいから自分の目で確認しておいた方がいい」

「そういうものか。俺にはワカラン」

「――ヌカ・ワールドの話だ。お前はそれで呼んだ」

唐突に話が変わった。

「ああ、それで？」

「アキラは本当に帰還すると思うか」

「ゲイジは戻って来て、ボスたちをそうやってなだめている」

「ミニッツメンに肩を入れている以上、無視はできないか」

ゲイジがいきなりアキラはミニッツメンにいたただの言うことはないだろう。

それは彼が手にした重要なカードである。それをきるなら最高の瞬間まで、ギャンブラーでなくたってそうする。

「そうだな。そのはずだ」

「ここだけの話にしてくれ。でなければ、オマエに用はない」

「いいだろう」

互いの言葉は調子よく飛び出してくるが。

どうやら悩むとか、戸惑うといったものは彼等には無縁であるらしい。

「キジマ、暗殺者を放つ。そう言ったらお前は乗るか？」

「驚いたぞ！」

「そうだろう」

「わかっていると思うが。アキラへは手出しは許さない、それが貴様とサカモトが俺達に望んでいたことじゃなかったか？」

「勿論、その通り。相手はアキラではない」

「ほう」

「サカモトとの約束は果たす。だが、アキラをこのまま連邦で放しておくこと。それを許すつもりはない」

「ふむ、ということは俺が暗殺者となれという意味ではないということだな」

「そうだ。お前が動けばアキラが気がつくかもしれん。藪蛇となつては時間も戦力も無駄になる。」

だから別の暗殺者たちに依頼する。だからお前の力が必要だった」

「確かに——俺ならばこの連邦の殺し屋達の情報をもっている。奴等と話もできるだろう。俺達の存在は間違ってもアキラに悟られずに」

キジマの脳裏にはすでにリストが作られ始めている。

キヤップとターゲットにしか興味はなく。依頼人の名前は決して口に出すことはないであろう奴等。

「やるか？」

「やろう、それで誰を狙う」

「お互いが受け持つ、そういうことにする」

「ということは、複数」

「2人だ」

「なるほど」

「ひとりは、グッドネイバー市長。ジョン・ハンコック」

「おおっ」

これは大物だった。

しかし——。

「それは困だな。違うか？」

「ふふふ、そうだな。ハンコックは他にも暗殺者に狙われても倒せなかった男だ。」

お前や観測者ならまだしも、今の連邦であの男を手にかけるような奴は多くはいないだろう」

「そうかもな。で、本命は？」

「キジマ。まず最初に言っておく。こちらは俺に譲ってもらう、これは俺の持ちかけた話だしな」

「ふむ、しようがないな。で、誰だ？」

今度はコンドウもすぐには口を開かなかった。

一瞬、間を置いて。その相手の名前を口にする。

「フランク・J・パターソン Jr. 現在のミニッツメンの将軍であり、B・O・S. ではナイトをやっている」

キジマの顔にはてなマークが浮かび上がる。

その名前はどこかで聞いたことがあった。確か、誰であったか？

「そして奴は同時に、自分はい最近。Vault111からやって

きた生存者であるといっているらしい」

|||||

その日もパワーアーマーを腐汁まみれにして戻ってきたマクレデイとケイト。

バーストウの抱えたデータから、このトンネルは巨大であるとは聞いてはいたものの。連日にパワーアーマーを着こんで出撃しても、いまだに最果ての場所には近づいていないのか。ちつとも終わりが見えてこない。

別にそんなつもりはなかったと言っていたが。あのマクレデイがアーマーに算出させた座標によると、すでに自分たちは地下にいながらにして北にあるボストンに迫っているらしい。

だが、それがケイトの闘争心に火をつけた。

持ち込んだ張本人がここでも用意したパワーアーマーステーションに戻って来ると、そこには珍しくキュリーが2人の帰りを迎えてくれた。

「お疲れさまでした。無事なようで、よかったです——ケイト!」

「あー、たっぷり驚いてもらえよ。俺、お先に」

「マクレデイ!?!これはっ、彼女はっ」

「なーにそんなに慌てちゃってるのよ、このカワイコちゃんわ」

驚愕するキュリーの横を疲れた顔のマクレデイが通り過ぎていき。そしてケイトはパワーアーマーから降りて、腰に手をやり仁王立ちである。

そんな彼女は、なぜかパワーアーマーから下着姿で出てきていた。

あのキュリーが驚くのも納得である。

「そんな姿で洞窟へ!?!危険ですっ」

「どうして?コイツ、分厚いからなんとかなってるよ」

「それでもっ。そんな恰好は……いけませんっ」

「ふふふ、ナニそれ。照れてるの?可愛いなア」

ケイトはそう言っつて、ほとんど裸である自分の皮膚に鼻を近づけて

匂いを嗅ぎ。嫌なものを感じ取ったのか顔をしかめ、珍しく上機嫌なまま浴室へとそのまま歩いて行ってしまった。

残されてしまったキュリーは頬を赤らめて慌ててその後を追っていく――。

作りかけの Vault 内で放送が入り、仲間たちは第2 医務室へと向かった。

「なんだ、マクレデイ。背中を丸めて元気がないな。どうした？ 疲れたか？」

「気にスルナ、市長」

「はははっ、こいつ。歯の治療させられるんじゃないって、ビビってんの」

「ちよっ!?! お前な、そういうの言うなよなっ」

「虫歯の治療ですか？ 嫌なのですか？」

「冗談じゃねえよ。あのボスが笑顔で、拳くらいあるドリルを俺の口の中に突っ込むって言うんだぞ？ それのどこが治療だ」

「男でも、なれば突っ込まれるのはそう悪いもんじゃないってじゃない？」

「えっ?」

「そういうのはチャンプ、相手によるってもんさ。まあ、お前ら若いから気が合うから、そういう関係ってこともあるか」

「やめろ、やめろっ」

Vault の長い廊下をそうやってにぎやかに歩いている。

完成しない計画  
当初の予定から比べると、あまりにも小さい Vault と呼ぶそれは。

ラウンジなど床があるだけで、壁の向こう側がまる見えであったとしても。すでに公用の施設――つまり食堂、警備室、水栽培施設、工  
作室、機関室、倉庫、バザールーム、トレーニングルーム、教室、浴室――は長い廊下と連結していて、人がいればすぐにでも動くことができる状態にあった。

その中でもなぜか警備室と医務室は2 つも用意され、なんでそんな

必要があるのか。

彼らはいまいちその理由が思いつかなかった……この時までには。

第2医務室では、部屋に据え付けられた2つの長椅子の間にアキラが立って仲間を待っていた。

彼は皆の姿を確認すると、まずはマクレディ達の報告を促した。

「今日もクソまみれになった。すげー不愉快だった」

「ストリップ馬鹿と一緒に穴倉を散歩して来たぜ。でも、まだ道は続いている。マジで嫌になるな」

「——そうか、わかった。ご苦労さま、もういいよ」

アキラは軽くねぎらうが、ケイトがそれに眉をひそめて声を上げる。

「はっ!?なにそれ、もうやらなくていいってこと?冗談じゃないわよ、こうなったら意地でも全部見て回ってやろうじゃないって決めてるのにさ」

「お前が、をつけてくれ。俺は違う、俺はもういいや」

「ちよっと!あんなフェラルの巢に女をひとりで行かせるっていうの?」

「そこまで!もう、いいんだ。時間切れってだけだ、ケイトも今回はあきらめてもらう」

ハンコックの口元に笑みが浮かぶ。

「てつきりここが完成するまでいるのかと思ったが。もう、いいのか?」

「必要なものは用意した。約束は果たしている、完ペキではないけど」  
「あのアホグール、自分の部屋の——ナントカいうのはまだかって。こっちの顔を見るたびに聞いてくるの、ムカつくんだけど」

「ああ、それは俺も言われたな。知らねって毎回答えてたけど」  
「監督室です。彼女の自室でもありませんね」

まぜっかえす他と違い、ハンコックは先を聞きたそうだった。

「そいつはお前がわざと後回しにしていたやつだったよな?彼女は俺達が立ち去ることに同意したのか?」



「さつき話をした。明日から取り掛かると言ったら喜んでた」

「本当は？」

「本当に取り掛かるさ。ただ、組み上げなんかはロボットに任せようと思う」

「——それが本当にいい考えだと思うのか？」

僕は顔を上げ、両手を開いてわからないとジェスチャーを見せた。「だけどさ。さすがにこれ以上は待たせておけないし。あの様子じゃ、出来たらさつそくなにかをやらかしそう。こつちが真面目に作業している横で大騒ぎなんてされてもね。そんなのにつきあいたくないし」

「だから立ち去る前に。檻には骨付きの肉を投げ入れてから、ということか」

バーストウは涙こそ流さなかったが、それを聞いただけですっかり心奪われてしまったらしい。

こちらの話など聞こえていないように上の空になってしまった。

「とりあえず資材を用意して、3日後にはここを出る」

それぞれが返事を帰してくる。

だが、僕は別にこんなことを知らせるためだけにわざわざここに彼らを呼んだわけではなかった。

「で、ここからが本題だ」

『?』

「実はここに来てもらったのは、皆に頼みがあったからだ」

なぜかここまで話すと、マクレデイがさつと腰を引いて「俺は嫌だからなっ！」と大声を上げた。

もちろんそれを無視して僕は自分の言葉を続ける。あいつ、話しも終わってないというのに何が一体嫌なんだ？

「ヌカ・ワールドに行く前に。今回やっておきたいことがあるんだ」

「なんですか、アキラ？」

「髪を、髪型を変えたい」

「なんだよ、そりゃ。適当に何とかしろよ——」

「ついでに顔も」

「っ!?!」「おおっと、これはこれは」「ええっ!?!」

そう、そうなのだ。

この第2医務室と言うのはつまりは床屋であり、整形外科でもある。

そして僕はこの場所の最初の利用者となるのだ――。

## プレストン・ガービー

コベナントよりアキラたちが Vault 88へと旅立ってから遅れること数日後まで話は戻る。

エイダはロボット達“ローグス”と共に、西へ西へと向かっていった。

とはいえ、自分たちのような集団は今の連邦ではメカニストのそれと勘違いされても文句は言えないという事情もあった。そのため移動にはいちいち斥候をかけての慎重に慎重を重ねたものとなっており、おかげで自然とその歩みは非常に遅いものとなっていた。

そこまで人目につかぬようにと心を配った彼らの繊細な進軍は、しかしヌカ・ワールドに近づく前に終わりを迎えてしまう。

眼前に広がる湖と旧駐車場ではそれはおこった——人造人間の部隊、インスタイチユートである。

「我々は優勢にあります」「インスタイチユートの命令により、このまま敵を排除する」「戦闘サブルーチンを開放、抹殺を」

意外に戦闘中でもおしやべりな人造人間の部隊の背後を、突如としてそこにあらわれたエイダとガクテンソクが放つ頭部レーザーオプティックブラストが左右から殴りつけるようにして照射され、一瞬だけ交差する。

いくつもの手足が切断され、3体ほどは真つ二つに引き裂かれては地上へと投げ出されていく——。

すでに手慣れたローグスからの不意打ち攻撃は。しかし感情のない人造人間達の間には動揺を生むことはなかったが、混乱を抑えることまでは出来なかった。

「警告、シャットダウン。状況の更新、判断せよ。有効、効率的な新たな攻撃を計算中」

「本当にひどい性能なのだ。それに口数も多い」

立て直しを図ろうとする人造人間達に、ロボットの側ローグスからは新たにそこにくつわったジュゼベルが人造人間達への感想を口にする。

結局はアキラの指摘に答えられず。だが、負けを認めて膝を屈する

ことのなかったこのロボットは。

ついに彼の要求をのみ、ローグスと言うロボット達の中でただ唯一。彼らに指示を与えるアキラへの不満を仲間にかせ続けるといふポジションを受け入れたようである。

秒単位で被害を増やす中、人造人間達は新たな敵への対処に残る戦力の半分を差し向けることにしたようだ。

「センサーに異常を感知、だがお前が生き残ることは不可能——」

そのセリフは新たな敵に最後まで続けることは許されなかった。

手に握ったレーザーの数発が当たっても気にする風ではなく、飛び込んできたエイダは乱暴に相手をそのまま強引に地面へと押し倒して固定してみせる。

大きな一つ目が不気味に赤く輝き、押さえつけていた手が離れるとそこには隠されたブレードが装着される。

「終わりです、インステイチュート」

エイダのこの言葉は死の宣告となった——。

敵が沈黙するのを確認すると、ローグスは人造人間達の残骸の上で集結した。

「奴らは全滅だ。こちらの損害は軽微、許容範囲内だったぞ」

「良い戦闘だったと思います」

ジュゼペルがなぜか偉そうに報告すると、エイダはそれに感想で答える。

だが、ガクテンソクはエイダのようにこの戦闘には不満を持っているようだった。

「ですがエイダ、この作戦は必要のないものだったのではないですか？ローグスの指揮官として、私はここに抗議します」

「そうだな。アイツは目立つことはすると言っていた。我々のこの戦闘は必要のないものだった」

ガクテンソクの言葉に、ジュゼペルはアツサリとエイダの敵となつて同調してみせる。

しかし非難を受けてもエイダは自分の判断の正しさを疑ってはい

なかった。

「それは認めます。ですが、今回の戦闘に関しては。私達のマスターは——アキラはきつと喜んでくださると私は確信しています。それを証明しましょう」

そういうと、前に進み出て広域用の拡声音で話し始めた。

「私の名前はエイダ、覚えていませんか？出てきてください、デューコン」

その声を聞くと湖のほとりで傷つき、痛みで歯を食いしばっていた男の顔が苦笑するそれへと変わった。

湖岸で隠れていたのは8人の男女で、デューコンは負傷して彼らに肩を借りてエイダの前に出てきた。

「参ったね。でもこんな再会なら歓迎だ、助かったよ」

「あなたのような熟練のレールロード・エージェントが、インスティチュートの部隊に包囲されるとは驚きです」

「俺もさ。こうなる予定ではちつともなかったんだが——少し話せるか？」

デューコンを知らないローグスはその言葉を聞いて機械であるからどういっていいかはわからないが——不安めいたものを覚えた。

|||||

連邦の情勢不安に対処するレールロードは、限界を越えつつあった。

作戦も、設備も。あちこちでエラーを吐き出し始め、完璧なことなどまったくのぞめない。

バンカーヒルと自慢のタイコンデロガの周囲にB・O・Sの目が入りこんできたことで、機能不全に陥ったことが原因だった。人造人間達を助ける——彼らの活動の根幹が崩されようとしている。

デューコンの受けた今回の作戦は、「見込みのある人造人間」達をこの連邦の外へと送り出すこと。

ボストンコモンから離れたところで用意が出来るのを待っていた全員を、そのままインステイチュートの手の届かないところまで逃がしてしまおうという、乱暴なものだった。

デューコンはまず7人。

これが動かせる最大だと考え、最初だから怯えていない若い人間を選んだ。考えたくはなかったが、もしも失敗してインステイチュートに回収されたとしても、従順な反応をする人造人間であればいきなり処分などしたりはしないだろう。

これはそこまで考えなくてはならないほど、あまりにもリスクの高い作戦だったのだ――。

そして不安は的中する。

この作戦に参加を要請された協力者であるツーリストが全員逃げ出した。人造人間達のための輸送ルートとバックアップの両方をデューコンは道の半ばで突然失い、連邦に放り出されてしまう形となってしまうた。

そして孤立して戸惑う彼らの存在にインステイチュートは気がつき。すぐに部隊は派遣され――。

「彼女――俺と一緒に彼らの面倒をここまで見ていた仲間は、待っていた旅商人のかわりに奴らに出会って挨拶を受けた。可愛そうに。」

俺にはこの連中を連れて逃げ出すことしかできなかった。それでも危ない所だった」

「レールロードの状況は厳しい、そういう話は聞いていました。ここまでひどいとは思いませんでしたが」

「……それで、な。その、あいつだ。あの野郎、元気にしてるのか？」  
デューコンは実のところ、アキラの帰還について細かい話は知らなかった。

エイダは簡単にあの後の話――グッドネイバーで事件を起こした後にいきなり戻って来て、コベナントを占拠し。ミニッツメンとして今は多くの問題を抱えている――を聞かせた。

デューコンは全てを聞くと、クツクツと笑いながらどうやらトラブル好きなのは自分だけではないようだと思いを口にする。

「そうか、ミニッツメンか。随分とまた涼しい顔をして悪いことをやっているようだ。それだけにまたあちこちから問題が出てきて悩んでいるのか」

「アキラはあなたに感謝していました。もちろん、私達もです」

「いいさ。俺はたいしたことはやってない。恩に感じてもらうようなことは、なにもな」

「コベナントに来て欲しいのです。キュリーや皆にもあつて欲しいと、彼ならそう思っているはずですよ」

「ああ……それなら、聞かなきゃならないことがあるんだ。アイツ、アキラの奴はレールロードに戻ってくる意志はあると思うか？」

「——レールロード、ですか」

「あいつを切った組織だ。俺はそのエージェント、つきあえばそういう話もでるだろう」

「彼はあの事件から自分の事を他人に話そうとしなくなりました。でするので、その答えはわかりません」

「そうか——」

あれは情報から他人の考えを読むような奴だった。

だから自分が危険であった時、レールロードが動かなかったことはわかっているだろうし。リーダーのデズデモーナが彼をどう考えのかもわかっているのかもしれない。

「デューコン、レールロードは。あなたはアキラの力を必要としているのですか？」

「まあ、な。だが、そんなこと——」

「具体的には何が必要ですか？」

「ん？」

「レールロードについてはわかりませんが、あなたなら。私のマスターでもある彼は、きつと助けようとするはずですよ。それについては確信しています」

デューコンの顔が、珍しく驚くそれを見せた。

どうやらエイダはこの苦境を救ってくれるつもりらしい。

ダイヤモンドシティの入り口が騒がしい。

いつもいるセキュリティはもちろんだが、それ以外にも普段なら顔を見せないようなものも。興味津々に、ゲートの一角に視線を送っては隣にいる自分の同類達となにやら小声で話してはクスクスと笑いあっている。

(なんだって、こんな面倒なところに)

シテイゲートの責任者でもあるダニーは仕事が増えたと思い。今日もまた一段と機嫌が悪い――。

それはこの連邦も同じらしく。もう春先だというのに、強風と禍々しくうねりながら流れていく雲は太陽を隠している。

――プレストン・ガービー

最近ではこのあたりでもちよくちよく目にするようになった有名人が。今日に限っては、仲間も連れずにただひとりで誰かをそこで待ち続けている。

彼が姿を現してからもうすぐ2時間。誰を待っているのだろうか？

有名人を見つめる人々の好奇心は尽きることはない。

これは悪天候の中でのフライトであった。

しかしランサーは文句を口にするのではなく。この難しい天候の中で見事にベルチバードを操ってみせ、私をダイヤモンドシティまで運んでくれた。

『ナイト、町には近づけません。ここでいいですか？』

「ありがとう！ B. O. S. の凄腕パイロットに感謝する。この悪天候、それが楽しいクルーズのようだった」

『当然です、またのご利用を――お気をつけて、ナイト』

「次はエルダーに内緒に、アルコールを用意するよ。あのシテイには、ちよつとした地酒が売っているんだ」

『そりや楽しみにしてますよ』



絶妙な角度でもって、ダイヤモンドシティセキュリティが視認できない。すぐそばの建物屋上に私が降り立つと、B・O・Sのベルチバードは素早くそこから立ち去っていく。離れていく機影に向け、慌てたかのようにどこかの建物の屋上からと思われる銃声がいくつも鳴り響くが。ベルチバードには届かなかったのだろう、そのままどこかへと飛び去って行ってしまった。

私は建物の屋上から非常梯子を使って地上へ。そこから角をひとつ曲がるだけでダイヤモンドシティの正面入り口に到着できた。

「来たぞ、将軍」

「ガービー!?!」

笑顔のガービーに同じく私の方からも微笑み返し、差し出された手をしっかりと握り返す。

ファー・ハーバーから戻ってすぐに友人たちに助けを呼びかけはしたものの、ミニッツメンに忙しいガービーが力を貸してくれるとは想像していなかった。

「嬉しいよ、本当に助かる」

「ん？俺はただ、旅行好きの将軍を部下として連れ戻しに来たかもしれないぜ?」

「おい、ガービー」

「ハハハ、冗談さ。あんたに助けが必要だと言うなら、もちろん俺が力を貸すよ。当然の事だ」

ガービーの待ち人が、彼にも負けない見事な体躯をしたトレンチコートの男だと知ると、ガツカリしたのだろうか。それまでゲートの内側で集まっていた人々は、途端に興味をなくしたようだった。ゲート前の2人に背を向け、マーケットへと足を向けていく。

「英雄の恋人の顔でも見たかったんじゃないか?」

「彼らの期待に、いつも答えるわけにもいかないさ」

私はそこで気になる人について口にする。

「——パイパーはいないみたいだ」

「彼女は今、外に出ている。今回は、ちよつと無理だろうな」

「そうか……彼女の力が必要だと、そう思ったんだが」

「それはいつもだろ?」

「いや、今回は特に。でも、しょうがないな」

200年前の大悪党が、今も生きていてそれを見つけ出す。

こんなことが簡単な訳がない。ニツクの調査でも確実な証拠はなかった。しかしパイパーなら、ニツクが見つけれなかった証拠を見つけることが出来るかもしれない。そう考えていたのだが。

「そういえば待たせただろう? 約束の時間を大幅に過ぎてしまった」

「なに、この天気だよ。噂だが、また数日中に嵐が来るって話だ。今年はどうも天候が荒れているみたいだな。来月くらいまでは、週ごとにひどい天気になるかもしれないと」

「ラッドストーム、あの1月のやつのように?」

「それはわからない。だが、そうじゃなければいいが」

「——運がよかった。私がこのまま来なかったらどうするつもりだったんだ?」

「明日も待つき」

「そうならなくてよかった」

「ああ、まっただくだな」

笑いあいながらシティの中へと入っていく。

私とガービーは次に、シティにあるミニツツメンの仮の詰め所——

もとい、アキラの住居(結局本人はここに一度としてこようとしないうし。そのまま使ってくれと言って、私を困らせている)へと移動する。

それと入れ違うようにして、泊まっていた数人の若いミニツツメン達は外へと出ていった。

「彼らがそうなのか?」

「ああ、アンタとアキラの指示通りにしてる。うちの整備班の助手たちだ」

ミニツツメンは、ダイヤモンドシティのマクドナウ市長に利用され。大きな犠牲を払う痛い目にあわされていた。

私は市長を黙らせたが。さらにもう一押し、それが必要だと感じていた。

アキラもまた、それは同じ思いを持っていたようだ。

ある日、コベナントを再訪した私が立ち去ろうとすると、3台のロボット達を連れてきて、彼らを使ってくれと申し出てくれた。

今、このダイアモンドシティのゲートと外周には。警備用のセントリーロボット、アサルトルン、プロテクトロンが配置されている。

私とガービーとで、アキラのロボット達をダイアモンドシティ・セキュリティへと援助として貸し出すことに成功した。

悪辣なやり方だとはわかってはいるが。いくら平和な町だからといって、あんな騒ぎをまたやられるわけにはいかない。あの整備班の若者たちはロボットの面倒を見るという口実で、セキュリティを通して町の動きを知るための情報収集をやってもらっている。

それがわかってはいるからだろうが、マクドナウ市長はあれから静かなものである。

少なくとも裏ではミニッツメンの悪口くらいはあるだろうが、つまらない計画など考えてはいないだろう。それはこちらの願いでもあり、そして彼に次のチャンスをくれてやるつもりは一切ない。

「しばらくは東部の件に集中できるか」

「スロッグやバンカーヒルのそばまで手を伸ばし、順調そのものだ――と言いたい」

「問題かい？」

「世直しを叫ぶ、狂ったロボットの襲撃や、B.O.S.だ。それがスーパーミュータントやフェラルと一緒にあって難しくしている」

「――B.O.S.はなにかしてくるのか？」

「逆だよ、将軍。腫物を触るように、こちらの様子をじつと観察しているらしい」

「手を打つ必要がある？」

「正直言うと、わからないんだ。トラブルはこつちもご免だ。それに今のところは敵対する理由もない」

「エルダー・マクソンの方針は一貫していて。部下にもそれが浸透しているようだね」

「だが緊張が生まれつつある。それがトラブルに化けるのは確実とわ

かるくらい、これは危険なものだ。そうだろう、將軍？」  
わかつている。

軍という装置の中で、冷酷な殺人機械となることを求める軍人とミ  
ニッツメンとは出来れば戦わせたくなかった。

「手は打つ。何か考えるよ、必ず」

レオが真顔で答えると、ガービーはハツとした顔をする。

つい、久しぶりに会えたと言頃の悩みをいきなり彼にぶつけてし  
まっていた自分の態度に気がついたからだ。そもそもレオを將軍の  
席へと座りなおさせるために来たのではない、それは自分自身が最初  
に口にしたことではなかったか。

「ありがとう、將軍。」

いや、もうこの話はいいだろう？今は別の問題がある、なにがあつ  
たんだ？話してくれ」

|| || || || || || || || || ||

200年前の大悪党を探し出す。

レオにそう聞かされると、ガービーもなぜ彼がパイパーを気にして  
いたのか理解できた。

これは調査でもあるが、どちらかと言うと謎解きでもあり。そして  
パイパーならまさにうってつけの人物といえる。

「私は当時は前線帰りの退役軍人ではあったが。ニュースでは度々、  
エディー・ウィンターの事件を報じていたのを覚えているよ」

「うーん」

「警察も検察も、まったく手が出せない。そうやって皮肉る声もあつ  
た。」

組織犯罪のちよつとした帝王だつて。もつとも、私が知っているの  
は裁判が残念な結果に終わったという一連の報道くらいだったか」

「その、そいつがグループとして生き延びたと本当に——信じているの  
か？」

「願望だど？」

「そうだ。生きている証拠はないんだろう?」

やはりガービーも、そこが引つかかるのだろう。

「わかるよ、確かにその通りだ。そいつが生きているというのも、ニツクがただ信じたいだけなのかもしれない」

「——ああ」

「だが、彼は探偵。そしてその能力は間違いないと証明されている。そんな彼の勘を、私は信じていいと思っっているよ」

「本気か?」

「自分も軍人だった時代、勘のおかげで命を失わずに済んだ経験がいくつもあった。なら、刑事の勘だって尊重するさ」

「なるほど、そういうことなら俺にも経験はあるさ。わかった、それでどこからやる?」

本当ならパイパーに意見を聞いて計画を立てたかったのだが——仕方がない、プランBだな。

「まずはポストン公共図書館だ。あそこで、旧時代の事件を調べなおす」

「それから?」

「次は——連邦中の警察署を回ってみるしかないだろうな。なにか情報はないかって」

「なるほどな。あんたがパイパーを恋しがった理由が分かったよ。そいつは大変そうだ」

ニツク自身の調査にケチをつけるわけではないが、私も素人探偵なりにこの事件を調査するつもりでいた。

「この調査は俺達だけか?」

「まさか! コズワースにカール、ストロングも一緒だ。彼等には先に向かえと指示を出しておいた」

「コズワースやカールはわかるが。ストロング——あのスーパーミュータントか」

「どうした? 苦手なのかい?」

「將軍——いや、レオ。」

これは忠告だが、普通の人間はスーパーミュータントなんてのは近

づけないものさ。知っていたかい？」

「彼なら大丈夫だよ。それに暴れようと思っても、今のコズワースとカールが相手じゃ彼も難しいだろうしね」

「なにかあるのか？」

驚くガービーに、私は苦笑で返した。

面白いことにあのカールはここにきてまたひと回り体が大きくなってきた。

それまでと変わらずに愛嬌もあって、忠実でいてくれるが。体をじかに触ってみると確かに分かる、皮膚の下にある躍動する筋肉の束が膨れ上がってはちきれそうになっているのだと。

だがそのせいだと思うが、人は本能でこの犬を恐ろしいと感じてしまうようだ。

コズワースにはそんなカールとストロングの面倒をしばらく見てもらっていた。

コズワースは変わった。

將軍としての日々を過ごす中、彼は自分を戦闘用に改造するようアキラに求めたが断られたのだと私に告げてきた。

何でもアキラは私の許可がなければ話は無駄だと切って捨てたという。その時の私も、コズワースの希望はとんでもないものだと考えていた。

コズワースは私にとっての最後の家族だ。

シヨーンが——息子がインステイチュートにいるとわかってても、そこに至る方法が分からない今のこの状況でなかったとしても、決して失いたくはない存在であった。

だが、それは私の事情でしかないのだ。

逆にコズワースはケロググとの対決になにも出来ないばかりか、知ることでもできなかった自分の立場に絶望したのだと言った。

そして今の私の希望が、未来におこるであろうB・O・S・とインステイチュートの間で怒る戦争に。息子を救出できるかもしれないという、儂い思いをもっているわけだが。

コズワースはそこでも同じ間違いはしたくないのだと滾々と訴え続けてきた。

私は家族として決断する。

アキラの元にコズワースを私が直接に送り届けた時の表情は、ちよつとしたものとなった。

どうやら彼は私がコズワースの希望を許すつもりはないと考えていたようで、引きつった顔のままパニックになっているように見えた。彼には言うことは出来ないが、慌てた彼はちよつと面白かったかな。

「執事ロボットはもういないよ。今はもう、おっかない重戦車みたいになつてる」

「そりや、とんでもないな――」。

だとすると、戦力には問題はなさそうだが。今回は色々トラブルは覚悟した方がいいのかな」

「――ミニッツメンはいいのかい？」

「やるべきこと、するべきことは残してある。それに、俺もたまには將軍を見習って息抜きをしないと」

「危険な旅が。息抜きだつて？」

「俺の心配はいいよ。それで、いつ始めるんだ。探偵さん」

私は黙って、椅子に背中をもたれさせる――。

耳を澄ますと外に出るときに使う扉が、強風でガタガタと音をたてているのがわかった。

「嵐が来るんだつたよな、ガービー？」

「数日以内にな。そういう噂だ」

「じゃ、今から始めよう」

「わかった」

お互いが確認しあうと、すぐに立ち上がりながらライフルに手を伸ばした。

|||||

ダイヤモンドシティから西に数十キロ、流れる川の支流の先から東に向かう複数の人影があった。

そんな彼らを表現するならば、異様。この一言に尽きるだろう。それぞれがマスク、バンダナ。そういったもので顔を隠そうとし。来ているのもマントというか、それともポンチョなのだろうか？とにかく風が強いというのに外套を全員がはおり、強風にされるがままにたなびかせて歩いている。

思うに彼らがそんな恰好をするのは。

他人が見れば恐れおののく凶相と、死人のような正気を欠片も感じられない目を見られないように。

体を隠すのは、肌に刻まれた無数の傷と。己が振るう獲物をそれと悟らせぬための手段としているのかもしれない。

そんな彼らはついに川を前に、崩れかけた橋とその向こう側にボストンの街並みを見た。

「やつと見えたな。ダイヤモンドシティは、あの中だ」

抑揚のない声が彼らの声が集団の中から上がると。それに反応する不満に満ちた声が次に上がってくる。

「遅れたぞつ、ターゲットは町を離れたかもしれない」

「ついていかなかったただけだ。見ての通り、天候が荒れたせいだ」

ダイヤモンドシティの空と違い。

彼らの頭上にある雲は、風と共に彼らに倣って東にむかって流れ。時折、ポツポツと頭上に雨と思われる水滴が落ちてくるのは。その雲の中に雨雲が混じっているからに違いない。

「嵐だ、町に留まるかもしれない」

「だがな、移動していたらっ——」

「落ち着け。ターゲットの情報はすぐに入る。橋を渡るのが先だ」

あの“小さな宝物”のコンドウがキジマに用意させた暗殺者。

彼らはその——レオの分に当てられた連中であつた。

どうやらレオを担当するコンドウはファー・ハーバーより戻ってきたレオをすでに捉え。情報を暗殺者たちに渡しているようである。



恐るべきは彼らの監視能力か。いったいどのようなようにしてそんなことがこの連邦で可能なのだろうかというのか。

崩れかけた橋は決して安全な道ではなかったし。さらに今は強風が横から何もかもを吹き飛ばさんと走り抜けていく。

普通ならば事故が起こるのを恐れて、足を止めてもおかしくない場所を。この暗殺者たちは静かに進み、約2時間ほどで対岸へと渡り切ってみせる。

「ダイヤモンドシティは夜になるな」

彼らの足の速さならば、ということか。

もしレオがそこに留まり続けていたとしたら、今夜はあの町も騒がしいものとなっただけでは済まずである。

ところが――。

町に向かって歩き出す集団の横手にある茂みの中から「やあ」などと声をかけ。近づいてくる人影があった。

「――!?」

(よせつ、落ち着いて対処しろ)

今回の依頼人からはターゲットは危険な相手であり、そのためにこれだけの人数を用意したと言われていた。

普通とは違う状況に誰もが少し殺気立っていて、だからこそ冷静さを必要としていた。

「やあ、旅人よ。いきなり声をかけて驚かせてしまっただろうか？」

「――別に」

「本当に？なんだかその――空気が重いね。いや、いきなり声をかけてしまった私のせいなんだろう。悪かったね」

そういうとハハハ、と相手は笑うが。暗殺者たちは微動だにしない。

ちつとも空気の重さが変わらないことを察したのか、相手は笑うのをやめると咳払いをしてから改めて口を開いた。

「驚かせて申し訳なかった。僕とは、はじめてお目にかかると思う。自己紹介をさせて欲しい」

「なんだ？」

「僕の名前はプレストン。プレストン・ガービーだ。」

あのミニッツメンのリーダーだよ。世間では僕を『<sup>ラスト・ミニッツメン</sup>最期のミニッツメン』や『<sup>ジェネラル</sup>將軍』とも言われているらしいが。とにかく、僕も君達もこの出会いはいいタイミングだったと思うんだ」

「……ガービーだと？」

「そうだ、プレストン・ガービー。」

栄光あるコモンウエルス・ミニッツメンの一員であり。この連邦で『民のために、悪い知らせを聞けばすぐに行動する』者達さ。まあ、そういうことだよ。わかるよね？」

「お前が、ミニッツメンのリーダー？」

暗殺者たちは相手の頭のとっぺんから足先までねめつけてやる。

確かにそいつが手にしているのはレーザーマスケット。帽子も服も、“旧ミニッツメン”のそれではある。

だが——どうしてプレストン・ガービーが“白人”なんだ？

「もう聞いているだろうが、僕たちミニッツメンは復活した。」

だが、知つての通り今の連邦はとても難しい情勢の中にあつて、ミニッツメンもすべての面倒を見てはもらえない。そこで、僕は率先して君達のような連邦の脅威におびえる人々から寄付を集めることにしている」

「ナニを集めるだ？」

「寄付だ、ミニッツメンのためのね。」

もちろんだが、その恩恵はちゃんと君達にもあると伝えておくよ。ミニッツメンを助けてくれるなら、君達が必要な時にミニッツメンはどこからでも駆け付けようじゃないか」

「……」

「寄付は気持ちが一番だ。しかし、その——相場というのを気にする人は多いということも知っている。」

だからこうしようじゃないか。まずは1000キャップ」

「ほう」

「もちろんだけど、もっと多くを寄付してくれた方がいい。」

さつきも言ったけど、多くの助けをしてくれるなら。それに見合ったものをミニッツメンでは用意するつもりだ。ハハ、これは別に。催促しているとは思えないで欲しい」

「ワイロではないということか？」

「そう！だから100キヤップ、それでも十分さ」

説明は必要ないだろう。完全な詐欺師であり、偽物である。

暗殺者たちにとっては有名な明日のターゲットになるかもしれない相手だ。プレストン・ガービーなら、少なくとも直接顔を確かめていないとしても。個人の情報はそれなりにしつかりと押さえてある。

(時間の無駄だな、クズに目を付けられるとは——)

皆がそれぞれ、このくだらない状況をどう終わらせようか考えていた。

いくら殺しが大好きな暗殺者といえど、大物を殺る前にこんな小物を手にかけて。本番でつまらない失敗はしたくない。

「な、なあ。頼むよ、見たところアンタらにとつちや負担になるような額じゃないだろう？」

「——オイ」

「あ、ああ。わかってくれたか、ありが——」

暗殺者の中でとびぬけて大きな体をしたひとりが声を掛けながら出てくると、ガービーを名乗るそいつは弱々しい笑みむけた。

次の瞬間、目にもとまらぬ剛腕が振りぬかれ。プレストン・ガービーを名乗った気弱な白人の頭部は、草むらの中へ。ポーンと勢いよく飛んで行ってしまった。

馬鹿者が退場しても、暗殺者たちの間に流れる空気は改善されることはなかった。

それどころか、こんな大仕事を前にしてくだらぬ相手を殺した仲間への不満が怒りへと昇華しかかっており。彼らは仲間割れを起こす寸前の状態にあった。

「死んだ。殺したな？」「どういうつもりだ」

「フフン」

「これは大仕事なんだぞ。それなのに——」

「俺が、やった」

「ああ、そうだよ！」

憎悪をむき出しにし始める仲間達に、しかし大男は揺るがぬ姿勢のまままで。

意外なことを言い出した。

「俺だけが、仕事をした！お前ら、全然大したことない。何もやらなかったからな」

「??？」

「俺が殺した。おれが、プレストン・ガービーを。ミニッツメンの『將軍』を殺したんだ、そうだよなあ？」

危険な空気はこの瞬間に霧散した。

殺伐とした彼らの中に、驚きと呆れに交じって憐れむものが生まれようとしていた。信じられないが、ターゲットを間違えていることに気がついてない。

「俺が仕事をした。お前達は何もしなかった。つまり、報酬は俺の物」

「——ああ、そうだな」

「わかったか？」

「ああ、わかったよ。そういうことならここで別れよう。お前の仕事」は終わった」

「いいのか？本当に、俺を認めるのか？」

「オマエがひとりでヤツたんだ。依頼人にも、お前が一人で報告するべきだろう？死体はもってかえれ、転がっていった頭もちゃんと揃えてな」

「おお、おおっ！」

大男は顔を皆と同じくマスクに隠してわからないが、喜んでいようで獣のように飛び跳ねてそれを表現している。

「じゃ、またな」

「おおっ。落ち込むなよ、お前ら。運がなかったな」

「そうだな。次は頑張るよ」

「またなっ」

暗殺者たちの輪から離れる大男は、それでもまだ味方が信用できないか。

油断なく目を仲間たちの背中に向け、白人のプレストン・ガービーの遺体を大事そうに自分の側に足でもって引き寄せようとしていた。だが、仲間たちはそんな姿を見ることなく、そのままダイヤモンドシティを指して歩きはじめる――。

しばらく無言であった暗殺者たちであったが、ついに我慢できなくなったか。誰かが口を開いてボソツと漏らした。

「アイツ、壊れたんだな――」

「言うなよ。放って置け」

「でもよ」

「兆候は見えていた。本人も覚悟してると言ってただろ、ああなったらオシマイさ」

「……」

「俺達はプロの暗殺をやる。生活やら悪名だの、色々あるかもしれないがそこが重要だ。なのに仕事で殺すべき相手の判別がつかないだ？ ターゲットをわからずに殺すのは、レイダーやガンナーだけさ」

「やっぱ、脳に埋め込んだ強化インプラントが？」

「原因か？ 当然だろう、あいつのあのクソ馬鹿力はそうやって手にしたんだから。だからやり過ぎるなって――」

なんとも不愉快な話であった。

大仕事を前にして、仲間が勝手にひとり脱落。本番でも何か、悪いことがさらに起きるかもしれない。

「あのうすら馬鹿、本当に死体を持っていくんだらうか？」

「いくだらうな。もうやめろ、あいつは忘れるんだ」

「――どうなると思っつ？」

「さあな」

「殺されるさ」

感情なく口にされた言葉で、彼らは再び沈黙に入る。

そう、殺されるだろう。あのキジマならそうするに違いない。

自分たちのプロの腕に自信を持つ彼等であっても、あのキジマからあふれ出る闘争本能というか。迫力には、一目置かずにはいられないでいる。

完成された完全なる殺人機械、それがあいつだ。

そしてだからこそ——壊れた暗殺者などというものを許しはしない。

「クソ仕事になりそうだな」

「——逃げたいか？」

「ハッ、それができりゃあな。連邦を出る前にあいつ——キジマに見つからない方法があるならそうする」

「おいつ、もうよせ」

その後、彼らの予定は滞ることなく。

夜半にダイヤモンドシティの正門ゲートをくぐることが出来た。

しかしそこで、彼らは自分たちが追うべきターゲットがすでにここを旅立ったことを知らされる。

暗殺者たちの顔に、再び不愉快なものが漂い始めた——。

強風は更に悪化しており、雨もぼつりぼつりと降り始めようとしていた。

嵐が来るのだ、ここに。そしてその間はこの町から、彼らは身動きが取れない。

## オーバーキルズ I (Akira)

女性であっても無法者として生きるハンナの中の限界は一気に突き破られてしばらくたつ。

ヌカ・ワールドを支配する一角であるパックスの一員にふさわしく。あふれる野心と闘争本能を持ったこの頑固な女は、他のヌカ・ワールドに存在する組織と違ってただひとりのアルファ——ボスをこそ中心とするシンプルな組織が好きだった。

だからまったく納得などしていなかった。

間抜けな総支配人にメイソンが従い続けるのも。その間抜けが、彼女がヌカ・ワールドを留守にしている間に前任者を勝手にブチ殺し。クソツタレのゲイジの号令であつさりとそいつが総支配人となったこと。

さらに彼女が戻ってくるその前に、なにもしないで消えてしまったこと——。

それがあのゲイジがしばらく姿を消したと思つたら、ノコノコ戻つて来て。「ボスはもうすぐ帰還する」などと吹聴した時は、ついにコイツの運も尽きたらうと前祝いに仲間たちとバカ騒ぎをして英気を養っていたというのに。

あろうことか、間抜けもまた。本当にここへと戻ってきてしまったらしい。

つまりレイダーは仲良く、こいつを立ててやっていくということになる。それがなんとも頭にくる。

「アタシはまた、イイトコロを見逃したって事なのかねい？」

「急ぎの仕事だったろ？でも、今度は間に合った」

「姿を、見てない」

「——噂じゃ、ちゃんと戻つたって。もう聞いてるだろ？」

狂暴な女の絡みつくような言葉に、仲間の男たちは辛抱強くつきあっている。

アキラと名乗った連邦人は、確かにヌカ・ワールドへと戻ってきた。あの日と同じく、交通センターからモノレールに乗り。駅のホーム

へと降り立った。その時の奴の第一声は「またゲームをさせられるのか?」、だったそうだ。

総支配人不在も終わると、安心するはずのレイダー達だったが。そうはならなかったのは皮肉な話だ。

混乱が生まれた――。

彼らの前に立つ男は、以前とは微妙にどこかが違っている。

恐ろしく身綺麗な青のスーツ姿で、バンダナで顔を隠さず。代わりにサングラスで視線をさえぎっている。

髪は肩までのばされたうえに、それはイエローグリーンを基本に青やらグリーンやらの色が混ぜられ。以前は東洋人に特徴のある、スベスベだった顎にわずかだが髭を残している。

さらに顔も変わっていた。

驚鼻を思わせた鼻は団子鼻に近づいて低くなり。

感じ悪かった目元などは、吊りあがって少しパツチリと開くようになる。以前とはまた別の意味で、好まれないであろう視線を左右に走らせていた。

「あれは本物か?」

動揺するレイダー達とは違い。

ゲイジと3人のボスたちは、涼しい顔でアキラを出迎え。早々に彼が総支配人であると判断を下し、部下にそれを伝えていた。

それがハンナには気に食わないのだ――。

「どいつもこいつも。ゲイジのクソの口にひっかかりやがって」

「おい! 気持ちわかるけど、そのくらいにしてくれよ。メイソンの耳にも入ったら、面倒だ」

「アタシが悪いつていうのかい!」

「よせよ……そうは言わないけど、さ。あんたが怒ってるのは、オーバーボスが戻って来たばかりじゃないんだろ?」

思わずハンナはカツとなり、手近なグラスを投げつけたが。

慣れたもので仲間たちはそれを予測し、パツと放物線を描くグラスの軌道から姿を消していた。

「チクショウ!! なんて避けるんだイ」



「ジョン・ハンコックはあきらめろ！……メイソンも言っていたら？ 奴は客なんだって」

「アタシら。いつからオペレーターズと並んで、客って奴等の落とすキヤップを数えるようになったんだい？ 知らなかったねえ！」

「奴はあのグッドネイバーの市長だ。そんなの、わかるだろ!？」

それはまるで、総支配人であるオーバーボスが戻るのを待っていたというように、これもまたいきなりであった。

ヌカ・ワールドのマーケットに、両手に美しい女の腰を抱いた洒落た男がやってきたのだ。

ジョン・ハンコック。

そうだ。悪徳の町、グッドネイバーを築き上げたグール。

連邦の伝説、悪党のビッグネームだ。そいつと商売ができるなら、それは凄い儲けを手にすることが出来る。このヌカ・ワールドで手にするものと比べてもいくらいにデカイ話だ。ゲイジはさっそく、彼への手出しを許さないように指令を発していた。

「殺つちまう、チャンスだろうがっ」

「あきらめろよ。理解しろって」

ハンナの考えは違った。

普通なら殺しても死なないグールだが、今のこのヌカ・ワールドでならきつちりと息の根を止めることが出来る。

なら、やらない理由はないだろう？

しかしパックスのリーダーは、いつものように無表情で彼女の問いかけを聞くと。

おもむろに「なぜ、パックスにいる？ 血を流すのがそんなに好きなら、デイサイプルズがいる場所はどこではない」と、あっさり一蹴してしまっただ。

それが、ムカついてしょうがない。

「パックスは、飼い犬なんかじゃないッ」

「なあ、やめろよ。これ以上やるならお前がアルファになるしかない。メイソンを、倒すっていうのか？」

「——そうじゃないよ」

メイソンは好きだ。

あれはアルファとしての役目を果たし、パックスはだから存在している。そこに自分があるのが好きだった。

「ゲイジの奴は支配人——オーバーボスとハンコックを会わせて組ませたがってるって話だしよ」

「フン」

「オーバーボスは近く、ヌカ・ワールドの分配を決めるっていうし。今は静かにした方がいいぜ」

「……」

ハンナは黙りこむ。

別に仲間の意見を尊重したからではない。

怒りとアルコールとに酔っている中で、忠告を受けていきなり冷静になることが出来た。つまり、薬を使わなくともこの頭がシャンと動いている。まっとうに。

メイソンは確かにハンコックの件は却下した。アタシの目を見て。だが、まだもうひとつは——。

|||||

宿に戻って仲間だけになると、さっそくマクレディは「ジョン・ハンコックの愉快な一味、ヌカ・ワールドにめでたく2日目を終了ってな」と面白くなさそうに口にする。

アキラと違うルートでヌカ・ワールドにあらわれたハンコックは。護衛にライフルを肩に担いだ傭兵だけを連れ、2人の美女と共に今日一日をマーケットの中を目的なく歩き回っていた。少なくともマクレディはそう考えていた。

「とりあえずは無事に過ごせそうだ。今日も一日、平和そのもの」  
ハンコックはそう言って同意するが、なぜそんなことをしているのかまでは説明しない。

日中は陽気に『バカンス中にわざわざやってきた市長』というストリーを口にし。余裕を見せつつも、しかし大物であるだけあって

隙のない様子に、ここにいるレイダー達はあまり近づこうとしてこなかった。

これはきつと、いい兆候なのだろうと思う。

「そんなことない！ここはクソツ、どれもこれも。頭クル！」

「そうなのですか？ですが、ケイト。昼は好きになれそうだと、そう言っていました」

「昼はね。夜はもうそうじゃない」

マーケットではハンコックの横でニコニコと情婦の演技(?)とやらを楽しんでいるようだったケイトだが。宿に來ると何か気が入らないらしく、さっそく不機嫌であるらしい。

「なにが、遊園地よっ！こんな安宿しかない癖にっ」

「寝泊まりするだけの場所です。なにか問題があるのですか？」

同性の友人の不満を理解しようと、しかしキュリーは的確な表現でケイトを追い詰める。

ここではあらゆることがマーケット内ですまされている。

安宿であつたとしても、そこするのは文字通り寝て起きるだけ。別にそれ以上のサービスが欲しいなら宿ではなく店に向かうべきなのだ。

「それでも気に入らない。あたし、消防署はホテルって言わないから」

「元、な。ココは今はホテルだつてよ」

「でも消防署。そうでしょ？」

「一人寝が寂しいなら、酒場で相手を見つけるなり。買うなりできるだろ」

「クソ傭兵は仲間の気持ちもわからないんだね。そういうことじゃない！」

マクレデイは両手をあげて降参を示す。

ケイトは鉄火場では背中に置きたい類の女ではあるが、そこではない場所で不満を口にする時はできだけ相手にしないようにしたい。

「おいおい、この俺のセクシーさじゃ足りないよ。悲しいことを言わないでくれよ？」

「市長、そういうことを言ってるんじゃないの」

「ならいい。好きにもつと言ってやれ。その分もキャップの内に入っているはずだ。この連中、いい値段を設定してる」

言いながらもハンコックは思考の中では別の事を考えていた。

(とりあえずは侵入成功、か)

アキラはオーバーボスとして、ハンコックは客となつて。

あれが顔だの髪だのをいじりたい、と口にしたときは。若干のこと不満に思っていたが。どうやらあれはいろいろと考えてのことらしい、ということがなんとなくわかつてきた。

Vaultからでる前日に話していた。

「自分から畏だとわかつているのに突っ込んでいく気分はどうだ？」

「——すべてがうまくいくといいな、それだけ」

「うん。だが、そうはならない。わかつてるだろうか？」

計画はある、最悪の状況も想定したものが。

だがそうならないようにする努力も、必要だった。

「僕をあそこに送り込んだ連中……なにか接触してくるはずだ」

「観察か。交渉、説得。だが、一番あるのは暗殺、襲撃。どれが確率が高いと思う？」

「襲撃、それだと僕らは行って早々にゲイジの死体と対面する羽目になるね」

「レイダー同士の争いも始まるだろう。ボストンコモンでの連中を見てれば、仲良くやりましようなんてのは奴らの流儀じゃないのはわかっている」

「ハア、なんでこんなことになったんだろう」

「——愚痴か」

「ゴメン。すっかりとしてなきやいけなかったよね」

「そんなことはないさ。弱音を吐くのも大事だ。いつもとは違う自分を確認できるしな」

「そうか——」

「だから事を始めたら、それはやるな。プロの仕事らしく、必要な事をしろ。お前がファーレンハイトにしたことのように、だ」

「……」

「ここにきて、お前の今の彼女——キュリーにあいつのことを聞かれたんだ。気になっていたんだろう、気持ちはわかる。」

だが、彼女がそんな風に不安になるのは、お前にも責任があると思ってる」

「えっと、僕？手を出すべきじゃなかったってこと？」

「そうじゃない。俺はお前が新しい彼女がいることは悪いことじゃないと思ってる。」

あんな経験をした後は、こじらせておかしくなる。誰でもな、傷と  
いうのはそういうものさ」

「……」

「やはり置いていかないのか？」

『「一緒なら、身を守ってやれる」なんて考えたことは一度もないよ。提案はそれこそ定期的に申し出てるけど、どれも気に入らないと考えるもくれないんだ。強情というか、頑固なんだか——」

「それが可愛いと？」

「そうも言ってもらえないよ。」

そもそも本人はフィールドワークに対して貪欲だ。関係を解消したとして、僕がいなくても、行動に迷いはきつとないだろうし」

「本人が本当に納得しているならいい。だが、それだとつらい思いをするだろう」

「——そうかもね」

「それでも、お前は迷うべきじゃない。プロとして行動しろ」

「なにか、おこると思ってる？」

「これまでのようにお互いが戦場で背中を預けるのとは違う。距離や時間、状況によっては助けてやれないこともある。特に、ひとりで馬鹿どもの前でふんぞり返らなくちゃならないお前のリスクは、自殺行為といってもいい」

「無謀な行為だと教えてくれてありがとう——やめたくなってきた」

「励ましてるのさ、坊主。悪党の先輩としてな」

「へえ、そっかい」

不安はあったが、どうやら次の段階には進むことができるようだ。

「市長？どうした」

「俺は寝る。お前らもそうしろ、安宿でいいならな」

「なによ、それ。せめて退屈しないようにって、ベットにも誘ってくれないわけ？」

「チャンプはその前にアルコールで気分を盛り上げたいというのだろう？悪いが、そこまで付き合う元気はないな」

「もう年寄りだっていうの？」

「今日は雑魚寝なんだよ。それとも、俺との行為を周囲に見せつけて楽しませてやりたいと？」

「グッドネイバーの市長が、個室じゃないの!？」

「今日はな、違う」

「サイアク。あたしも寝る。誰か潜り込んできたら、ぶっ殺してやるから」

「そんな命知らずがここにいるといいな」

「うっさい、バーカ」

それぞれがそうやってケイトのいう安宿のラウンジを離れ、寝床へと向かっていく。

僕は夜でも明かりが消えることのないマーケットを部屋から見下ろしていた。

建物の正しい構造として、そこにあるべきしきいがないせいで部屋は吹き曝しになっている。オーバーボスとやらは見事な寝床があっても、寒気と風には震えながら眠らなきゃならないものらしい。

レイダーたちはボスとハンコックが同時期に現れたことに対して、様子をうかがう姿勢を見せている。

ゲイジは本気かどうかはわからないが、両者を会わせてビジネスを。というが、どっちにしてもまずは仲間たちに危険はない。

反対に僕のほうは、そうでもないようだ。

「運よく前任者を排除して逃げたくせに、ノコノコと戻ってきやがって」

あの一連の惨劇をそう考える、愉快的連中が多いらしい。

ゲイジはさっそく「もしかしたら……」なんて、こつちを脅かそうと試みていたが。問題は無い。

そいつらがすぐにも暴発しやすいように、この2日は何もせずここに引きこもってやった。

明日はマーケットに向き。店先に立つ奴隷たちとこのヌカ・ワールドについてたためになる交流というのをしてやろうと思う。騒ぎが起これば血が流れ、そして素直にこつちの話を聞くようになるだろう。

——このままにもおこらなかつたら？あいつらが、僕を放つていたらどうする？

頭の片隅から、そんな声が聞こえてくる。

そう、間違いなく罫があると思っていたのに。今のところ奴らの——キンジョウや監視者、あの連中の気配が全く感じられない。

むしろこの僕にこの場所をまとめさせることを急がせたいのかというくらい、なにもなさそうに思えてくる。

(落ち着けよ。まだ、2日だぞ?)

ここに長くとどまるつもりはないが。

とはいえ、次に離れる前にはある程度ここでやっておいたほうがいいことも多い。

ミニッツメンの北部制圧の進行はガービーに任せて、エイダとメカニストの決着もつけねばならない。それにVault88もある。ポンコツロボットに作業の工程を指示しておいたから、時間はかかるし。最悪、ロボットが停止することだってあるだろうが。

それでもあのバーストウが僕らのいない間に、その非常識さでもつてつまらないトラブルを山のように積み上げやしないか、とか思わないわけがない。

嫌だ嫌だ、考え出したら自分がひどい怠け者のように思えてきた——

「ファー・ハーバーだったっけ。レオさんとニック、何をしているんだろう」

その時の僕には想像もできなかった。

探偵は島で、悪いジョークのようなロボットによるロボットの殺人事件の解決を引き受け。レオさんは連邦で、旧世界の犯罪王の隠れ家を探すために再びボストンをひっくりかえそうとしていた、なんてこと。

とはいっても、向こうもこっちの状況を知ったら目を白黒させるだろうけど。

|||||

事件は起こった。

希望や期待通りのものではまったくないものが、むこうからやってきた。

フィズトップ・マウンテンの頂上。オーバーボスの個室に集まったヌカ・ワールドの4人のボスたちとゲイジ――。

オペレーターズのマグスは困惑といら立ちの混ざり合った表情を浮かべ。デイサイプルのニシヤは、好奇心と呆れの間を行き来し。そして彼らに倣うかのように、僕もまた困っている。

それじゃ、話をもう一度まとめろが――いつものように鬱々とした声でゲイジが少しでも理性を取り戻そうと話の整理を試みた。

「これはパックスの問題……だが、あんたはそれの解決を俺達のオーバーボスにやってもらいたい。そういうことでもいいのか?」

「随分と悪い言われ方をしようとするが。それがお前たちにとって理解しやすいというなら、それでもかまわない」

トラブルを持ち込んでくれた元凶。なのに、なぜか飄々として他人事のようにしているパックスのメイソンは落ち着いてそう答える。

ありえない、こいつは何を言っているんだ?

太陽が地平線に顔を出すと。

いきなりメイソンが、たったひとりに戻ってから引きこもっていたオーバーボスとの面会をゲイジに求めた。

巷ではまだ、このボスの真偽を疑う声がある中での突然の行動に。



慌てて残る2つのレイダー達も遅れまいとボスとの謁見をゲイジに求めていく。

そこそこにまだ良識というものが残っている人間であれば想像できるだろう。彼らが集まれば自然と様々なことが話されるに違いない、と。

「ご機嫌うかがい、自分たちの価値のアピール、なにかしらの計画。それもいいだろう。」

進まぬ計画、ボスとしての自覚の欠如、本物か偽物か。これだつてありえないことじゃない。

そんな思惑を、メイソンは軽く吹き飛ばして見せた。

「よし、それならメイソン。俺たちがあんたの言い分を正しく理解できるように、もう一度だけ最初から説明を頼む」

「またか？こんなことがわからないと？」

「なあ、わかってほしいんだが。今はまだ太陽が昇ったばかり。」

普通の奴ならまだ、頭の中は寝ぼけまなこと一緒に寝床でひっくり返っている時間だ。そんな時にあんたはトラブルを持ってきた。そんなものを朝食の前に消化するのは、俺達にはそれなりの時間が必要なんだ」

「俺には無駄に思えるが——そうだな、わかった」

メイソンは珍しいことに、ゲイジの申し入れに同意を示した。

もしかしたら彼は彼なりに、この状況に思うところがあるのかもしれない——。

「俺のところには、ハンナという女がいる。」

「ここじゃ知らないやつはいない、そういう女だ。ボスが興味があるなら、誰かに聞けばいい。」

「タベ奴は俺のところに来て、納得がいけないと言った。」

「あんたがここにいる理由がわからない。自分は知らないからだ、と。」

「あいつの言葉には真実もある。実際のところ、総支配人。」

「あんたがここにきてやったことも。何もしないで消えたことも、あいつはあの時、ここにいなかったから何も見ていない。だからオー」

バーボスと考えることができないのだ」

「そこでストップ——どうだ、ボス？」

ゲイジが理解できたか？という表情でこちらを確認してくる。

僕は黙ったまま。それでも目で先に進めるように指示を送った。

「あいつはあんたを知れば納得するそうさ。だからボス、あいつを抱いてくれればいい」

僕は我慢できずに、顔を伏せると指を額へとやる。

何を言いたいのかわからない——。

かわりにニシヤとマグズから不安と嘲笑の声上がる。

「それが真実とやらに必要？パックスの主張は意味不明で、ただ総支配人に女をあてがいたいだけのようになしか見えない」

「ハンナだつて？ゴリラと寝るような、メスゴリラをわざわざ選ぶのも趣味が悪いじゃないか。笑えないわね。そういうのをお気の毒っていうのよ」

「……俺の考えは変わらない。あとはボスの返事を聞きたい」

ゲイジは「どうする、ボス？」というメッセージを目で訴えてきている。

とりあえず僕は時間稼ぎにニシヤとマグズに、その女レイダーについて知ってることを教えるように求めておいた。どうせ話の内容は決まっている、大した役には立たない情報しかないだろう。

(……これはもしかしたら、メイソンなりのアプローチじゃないだろうか?)

言葉にいちいち、メスゴリラよりマシンな女を自分たちは用意できることをまぜてくる女ボス達の言葉に耳を傾けるふりをしつつ。

僕はこのメイソンの求めが、彼にとっては悪くない計画のような気がしてきた。

オーバーボスとゲイジへの不満は、今後も直接のボスであるメイソン、ニシヤ、マグズが封じなくてはいけない問題となる。

しかし思考のぶっ飛び方がサイコパス級にも思えるパックスであるなら、普通ではない問題解決の方法を結論として出してもおかしくない。

ということ、総支配人である僕のいかなる答えも、少なくともメイソンにとっては今後の情報のひとつとして蓄積されるということになる。

なるほどな。利益と技術のオペレーターズ、恐怖と狂気のデイサイブルズとは違う。

パックスにもきちんと評価すべきものがあるということか。

「——メイソン、質問がある」

「またか。あんたもゲイジと同じことを言うつもりか？」

「これが最後だ……お前は俺の返事を聞きたいと言ったが」

「ああ」

「それが」どんなものであったとしても「いいということだよな？」

ボスたちの顔にはてなマークが浮かび上がる。

しかしメイソンに表情はない。

「あんたの言いたいことが、わからない」

「俺が『そんな女はお前が勝手にどうにかしろ』と『命じたら』、どうだ？」

「その通りにする」

「興味が出てきた。すぐに連れてこい、ここで抱いてやる』と言ったら？」

「その通りにする」

「わかった。そういうことならここで返事をする、待ってろ」

僕に向けられる視線——ひとつをのぞいてだが——は興味深いものとなっている。

長く考える時間はないし。ゲイジにのんびりと“レイダーの取り扱い”に必要な情報を求めている時間も許されない。

これはテストだと考えたほうがいい。

以前の“操り人形”だった自分と。イエローマンと比べようとする、それだ。

僕がどんな判断を下しても、本人が認めるように涼しい顔で戻ったらそれを実行するだろう——。

僕の意識の奥——たぶん腹の底に煮えたぎっている憤怒と呼ぶよ

うな激情がいきなり暴れだそうとするのを感じる。

この一件は結局のところ、ここにいるレイダーのボスたちにとっては僕を探るだけのひとつのサンプル以上のものではない。つまりは、総支配人とかいう椅子に座る奴にはなんの得もない。

(こういうの、ナメられてるって言うんだろうな)

吹き上げたマグマは急速に冷えると、僕に冷静さ——そして冷酷さをもたらしてくれた。

この厳しい世界にあつてクズ以上の価値のないこいつらに試されている自分、それが腹立たしく忌々しい。

奴らの存在するすべてを用いて、パックスよりも無慈悲に奪い。オペレーターズよりもあざとく利益をむさぼり、デイサイプルズよりもおぞましく、この愚かな消費者たちを搾取する世界を鮮血と腐肉臭にかぐわしい新たなヌカ・ワールドへと——。

ふと、僕の視線はニシャのところまで止まり。

冷静な部分から、とんでもない命令を下そうという提案を受け取る。

——ああ、これならいい具合だ。悪くない。

約束された暴力を夢見てか。怒りはぬめるようにして穏やかさを取り戻していき、その瞬間が来るのを早くも期待を込めて待ち始めている。

狂人たちによって「殺人鬼」といわれる僕の中のそれはクスクスと笑い声をこらえようとす。

「総支配人の帰還イベントを開いてもらおう。今夜、俺よりもうまくボスになれると信じている連中にチャンスをやろ。むかしながらのやりかただが、丁度いいだろう。

俺からもサプライズ、”下剋上”だよ。ガントレットに挑戦させてやる」

メイソンの求めに対し。総支配人——オーバーボスのアキラは狂気に満ちた命令を下した。

ゲイジは呆れつつもうろたえ、3人のボスたちは無言でその通りにしようと言っただけ言い残して立ち去った。

『よおおおーしっ！この放送もまたできることが喜びだっ、新たなオーバーボスのビッグサブライズにお前らは感謝しろ!!』

今宵限りの特別プログラムツ！俺たちのガントレットが一夜かぎりの復活をはたしてくれたぞっ』

ヌカタウンUSAに流れるそのラジオは、レイダー達の間流れる興奮をさらに高めることになった。

だがここにはそれを耳にして、困惑する一団もいる。

「——信じられない。アイツ、レイダーなんて言う馬鹿と阿呆に、自分を殺していいって許可証を与えるなんて」

「そうか？いかにもボスらしいと思うけどな。レイダー、八つ裂きにしてようやくスッキリしたって笑うやつだし」

「うわっ、キモイ。あんた達、デキてるんじゃないの？」

「おい、クソ女。それはない、ヤメロ」

非常識なマクレデイからの返答に不満のケイトは、続いてはキュリーを見て——。

苦笑いを浮かべて首を横に振る彼女に（この娘に自分の男の悪口は無理、しようがないか）と我慢、体を預けているハンコックへと視線を送る。

「なんだ、チャンプ？その視線、誘ってるのか？」

「そんなわけがないでしょ。ハンコックの考えは？あのバカの、このバカ騒ぎについて」

「不満はあるが、実のところ俺もマクレデイと似たようなことを考えていた」

「ホラな!?それ、みたことか!」

「嘘でしょう!?あんたたち正気っ?」

ケイトの最後の言葉は大きすぎる。

ハンコックは彼女の腰に回している手に力を入れて自分に引き寄せると、それで息が一瞬詰まってうっとケイトは声を上げた。騒がし

いマーケットでも、あまり他人には聞かれたくない会話だった。

「ごめん。ちよつと、馬鹿をやったみたい」

「納得できないのはわかるさ、チャンプ。だがここにきて予想されたことを含めて考えると、あいつの無謀に思えるこの計画も納得できないわけじゃない」

「あただけ？信じられない」

噂では、ここにいる3つのレイダー組織から何人もが声を上げ。

今はイベント開始時間に合わせて、スタート地点に数十人からがむかっているという話である。

「大勢を相手に、本気で勝負して勝てると思ってるの？馬鹿でしょう？」

「そうだな。普通に考えたらそうなる」

「？」

「ケイト。俺はマクレデイの奴に同意したが、不満もあると言っただろう？」

その理由の半分は俺が言ったことであり。残りの半分は、あいつが言ったこと」

「それが自分を殺したがっている連中を集めた理由だったの？」

「多分な。なにか火種のようなものが目に付いて……そいつで身近な森を大火事にでもしたくなっただらろう」

「イカレてる。馬鹿じゃないの？」

ついに我慢しきれなくなったか。ここでキュリーが「悪口は言わないでください」とケイトに噛みつく。

それでケイトも黙るしかなくなったが。内心ではまだ、呆れと怒りが収まらないでいた。

（あたしらが助けに行けるとでも思ってるの？こんないい娘をほかの男の情婦の振りなんかさせて。あいつ、死ぬつもり？）

当然だがハンコック組がやれることはなにもない。

せいぜいが勝利を祈り、最後の対決を閲覧できる来客用のチケットを人数分用意することぐらいだ。

そしてこのままなら、あいつは自分たちの前でレイダー達に八つ裂

きにされて死ぬことになる。このキュリーだって、本当はそんな現実を目にしたくなくて今だって不安で不安で仕方ないはずだ。

アキラはどうするつもりなのだろうか？

イベントの開始時間は刻一刻と近づいていた――。

交通センターには最終的に23人も野心的な生贄が集まり、開始の時を待っていた。

レイダーにルールを学ばせるのは無駄、ゲイジはスタートをがなり立てるラジオのDJにその時が来たと言わせるとだけ伝えていた。それよりも先に勝手にスタートをしようとする奴は、入り口のわきに立つデイサイプルのメンバーに殺すように命じておく。

時間が来て、ラジオから『そんなじゃ、スタートウ！お前ら馬鹿どもに運がありますようにっ』との声に反応して走り出したのは18人であった。待ち時間の間に、なぜだが5人が死体となって脱落してしまったからだ。

ニシヤはアキラの指示に従い、短い時間の中でかつてのガントレットを可能な限り復元した。

このくだらないイベントの復活にはいろいろと複雑なものがあり。自分より劣る部下だった奴が、下手をしたら明日のオーバーボスとなるかもしれないという予感を押し殺す苦行となっていた。

皮肉にもこの思いはオペレーターズのマグズにもあった。

パックスの立候補者たちに引きずられるように、抑えられない野心をむき出しに自分の下からも声が上がリ。駅のホームで輝く明日を夢見て興奮している馬鹿達を見ている。

なぜこんなことになったか、パックスに対する不満はどうしても大きくなる。

このゲームは開始前からそうであったように。スタートから順調に惨劇と喜劇の混ざり合うレースとなった。

何せ互いが唯一の存在であるボスにならんとしているのだ。最初のターレットによるキルゾーンから足の転ばしあいが始まり。

ガス室ではうっかり銃の引き金を引いたバカのせいで、遅れていた後続はそろって真っ黒なカリカリのフライにもなった。

『チョット、お前ら。少しはまじめにやろうと思わないか？このままじゃ、せつかくのイベントの決勝ステージに挑戦者がのぼらないなんて悲劇が待ってるぞ？』

最初はそれを下品に面白がっていたレイダー達も。

自滅していく挑戦者に呆れて、応援などを始める始末。

気が付くと最終ステージ前の控室にはハンナをふくんだポロポロになった5人だけしか残らなかった――。

そこではあの日のようにゲイジの冷徹な声で「そこで最後の支度をしろ。ボスと観衆を待たせて飽きさせるなよ」とだけ伝えられる。

傷ついた体にはステイムをうち、萎えた気力をよみがえらせようとサイコを血液に溶かす。

薬物を山ほど消費することで元気を取り戻した4人は出ていこうとしたが。一番傷の重いひとりだけは、もう少し休んでから行くと伝えてその場にとどまろうとする。

4人が部屋を出て、先にステージに立ったことを観客の反応から確信すると。

そのレイダーは途端にあわただしく、部屋の中の物色を始めた。

「どこだ？どこだ？どこにある？」

そいつがさががしていたのはヌカランチャーの弾。

そう、イエローマンとして前任の総支配人を倒したアキラが使った手。

こいつの必勝の策とは、アキラを真似て。即席のヌカ・グレネードでステージ上を吹き飛ばしてやるというものだったのだ。

――だが。

「皆が待ちくたびれている。そう言っていたのを聞いていなかったのですか？」

「!?」

「……」

「誰だ!?ここに誰がいるのか？」



背後から男の声がかけられたと思った。

しかし、振り向いても。見回しても自分以外にこの控室には誰もいない。気のせいだったのか？

「——へっ、サイコを使いすぎちゃったのかもな」

あわただしくロツカーを探っていくと、ついに目的のものを発見して手を伸ばした。

それをうやうやしく目の前に置き。隠しポケットの中に入れておいたメモを取り出しにかかる。そこには技術者によって、弾頭部分をとりだしてグレネードのように使えるようにする方法が記されているはずであった。

「運がむいてきたんだ。あいつらを全員ぶち殺して。明日から俺が、このオーバーボスだ」

「——いいえ、時間切れです」

再び声したが、今度は幻覚ではないとわからせるためか。背後から自分が何者かによって吊り上げられてしまう。

男は必死に手足をばたつかせることで抵抗しようとし、背後を確認しようとするが。これがまったくうまくいかない。

そして相手の姿が現れる。

アキラが作り出したロボットのチーム。そのリーダーとして、エイダの思考力をもとに作られた新たなアサルトロン。

ガクテンソクがステルス装置を解除したのである。

「処分します」

「いや、待てよっ……」

制止する声は聞き入れられず、空いた手に出現した刃は激しく男の体を貫き。野心の炎とともに命をも吹き消してしまう。

目的を果たすとガクテンソクは死体を放り出し。その手に握られていたメモをそつと回収してから、再びステルス装置を起動させた。

アキラとて馬鹿ではないのだ。

デイサイプルの忠誠心とガントレットとやらの完成度に自分の命をあつさりと預けるなんてことはしないし。最悪のこと何十人を相手にひとりでもかかできるわけがないことだってちゃんと理解

している。

だからこのレースが始まる前にガントレットにはステルス装置を搭載したガクテンソクを配置して、馬鹿共が互いに効率よく邪魔しあえるように手を貸しながら。時にはこのように直接に排除することで、その数を減らしてきていたのだ。

ステージから、放送するゲイジの声がする。

『よし、お前達。控室の奴はどうやらくたばったようだから、メインイベントを始めるぞ』

以前のボス、コルターはこんな時。自分を大きく見せようとして客席をおおって見せたものだが。

今のボスにはそんなつもりは毛の先ほどもない。

サングラスに隠された目によって表情は以前と同様に読むことはできないが、そこから醸し出す雰囲気は。たしかに危険を感じさせるヤバイものであることはもうわかっている。

『よし、試合開始だ！』

ゲイジの言葉に合わせるように、なぜかアキラは前かがみになっていき——それはまるで自らの前に立つ挑戦者たちへと礼を示しているようにも見えた。

|||||

夜中、ケイトは自分が安宿とけなした旧消防署の屋上へと、風にあたろうとしてやってきた。

見下ろす深夜のタウンは、数時間前まではあのアホなイベントの余韻が残っているのだろう。実に騒がしいものであったはずだったが――。

「なんだ、チャンプだったか」

「ハンコック？こんなところでどうしたの？」

「眠れないんだろ？俺もそうだ、今日は少し。刺激的なものを見せつけられてしまったからな」

自分の同類、そういうことらしい。

「あのさ——サイコ、ある？」

「ああ、俺のスペシャルレシピの奴でよければな。強烈ではないが、普通のよりも長くキク。上品な味わいを楽しんでくれ」

「ひとつでいい、もらえる？」

「ああ、いいぜ」

表向き、ケイトは自分が薬物中毒であることを仲間から隠そうとしている。

とはいえ、レオの時とは違ってここでの仲間と一緒にいる時間も長いから、それがうまくできているとは言い難い。

それだからこそ、この時。自分から要求することに激しい後ろめたさを彼女自身は感じるのだが。ハンコックはまったく気にしてはいなかった。

「その、眠れないからさ。ちよつと——」

「そういうのは俺にはいい。わかるよ、説明は必要ない」

「……ありがとう」

「——今夜は久しぶりに悪夢を見そうなんだな。俺はここで、朝を待つしかないさそうだ」

「恐れ知らずの市長が悪夢が怖いのか？」

「ああ……あいつのせいだよ。アキラだ、俺の今の相棒にして友人」

「アイツ？」

「アイツを——アキラをどうやって殺そうか。今夜の俺はそればかり考えてしまうのさ」

「っ!?!」

「驚くふりはいらさないさ、ケイト。あんたもだろ」

ハンコックからのとんでもない返しに、どうすればいいのかわからず。

ケイトはさっそく手渡された薬でハイになっているはずなのに、凍ったように固まってしまった。

「わかるさ。あんなヤツを見せられたらな」

「でも、あんたは今。あいつを殺す方法を考えていたって」

「当然さ。あいつと俺が組む理由は知っているだろう？あいつのせいで、俺は頼れる相棒を殺され。俺は俺の街にいられなくなった」

「……」

「結果的に俺はあいつと握手を交わしたが。それまでには当然、殺すことだって考えていたさ」

「それって、平気なの？」

「ああ。困ったことにな、世間から大悪党なんて呼ばれるような男になると、普通の感覚なんてわからなくなる。あいつは俺の敵で、元の相棒の仇でもあるわけだが。今のおれはそいつを相棒と呼んで、大好きな友人だと他人に紹介しているのさ」

「——つらくないの？」

「俺がジョン・ハンコックでいる限りは大丈夫さ。あんたはどうだ？」  
問いかげられると、ケイトの脳裏にはあのステージでおきた。あまりにもあつさりど決着がついた勝負を思い出した。

アキラは目の前の挑戦者たちに礼など尽くすつもりは当然なかったのだ——。

腰が曲がり、頭が下がると。

その背後からフワフワと弧を描いて飛びだしていくプラズマ・グレネードが一個。

この瞬間、客席に座っていたハンコックが小さく「野郎」とつぶやくのをケイトは隣で聞いていた。

彼にはあの若者が何をしようとしているのか。その時には理解していたに違いない。

挑戦者たちはオーバーボスの姿勢と、そこに突然現れた小さな物体に戸惑いを覚えた。

苦痛を抑え、自分を少しでも覚醒させようと薬物によって感覚を研ぎ澄ましていたせいで、それを感知してしまい。どうしようか判断に迷ってしまったのである。飛んでくるものを見て「あれはなんだ？」と考えるも、答えが出る前に。

次にプラズマピストルを構えて出鱈目に撃ち始めるアキラを見る。放たれた光弾の一発の進路上に落ちてくるグレネードが重なり、たったそれだけで勝負は決したも同然となった。

輝く球状のプラズマフィールドが衝撃とともに拡散していくと、それを真正面から受け止めてしまった2人は大地に立ち続ける両足を残して消滅し。

かろうじて横跳びを試みた男は、半身を焼かれた痛みには耐えられずに絶叫と共に陸に乗り上げた魚のように舞台の上でバタバタとたたうち回る。

その中でもやはりハンナは頭一つ抜け出る存在であったようだ。

左の手首から先を失い、続く上腕の半分も。皮と肉がプラズマによつてどろりとスライム化して地上に零れ落ち、その痛みとダメージにはしっかりと耐えつつ自分の敵を確認しようと頭を上げて見まわっていた。

サングラスをした青のスーツ——今はブルーマンか。

そのオーバーボスの手には焰を噴き出す刀が握られ、哀れにもものたうつことしかできなくなった男の体を踏みつけては、その心臓を一突きにして焼いていたところであった。

——次は自分の番だ。

わかっている。

そしてこれはハンナ自身が望んだことでもある。

メイソンに自分はオーバーボスを知らない。知りたいのだと訴えた時。

ボスとやらがメイソンに処分するように要求する可能性はあるとして、そうでなかった時の場合も考えていた。

自分を殺すというなら勝負を申し出てもいいし。自分を抱くというなら、どんなものなのか味わってやってもいい。退屈だと思ったのなら、明け方にも隙を見て絞め殺せばいいのだ。

どのみち殺すことは想定していたことだった。

ところがそのチャンスが目の前に来ると、気が付けば自分も雑魚共

と並べられてあっさりと相手に処分される寸前まで追い詰められていた。

生き残るにはここから逆転して勝利するしかない。

まずはステイムを一本、しかしこれだけではまったく痛みを抑えるにしても足りるものではない。

——アキラの体が、ハンナへとむけられる

次はジェットだ。それも普通のではない、グール用に作られたウルトラジェット。

それを容赦なく自分に打ち込んでいく。

アドレナリンは瞬時に吹き上げ、視界が焼けるようにぼやけていく。

湧き上がる尋常ではない量の活力をそのまま口から咆哮として吐き出す。

女でありながらも鍛え上げられ、ある種の美しさすら感じる残った右手を振り上げる。

このたくましい腕で屈強な男の首をへし折った記憶は一度や二度ではなかった。

あんな細い身体をした東洋人ならば、この腕の一振りだけでもって首をポロリともぐことだって可能だろう。

迎え撃つまで待つつもりはない。こちらから走り出すと、襲い掛かっていく。

降りぬく最初の一振り、かえす二振り。

どちらも大振りで、アキラは冷静にそれをかわしてみせた。そして静かに握ったシシケバブを己の背中へと担ぐように持っていく。

怒り、焦り、それらを混ぜ合わせた2度目の咆哮と共に振りぬかれた3振り目では。ハンナはついにバランスを崩してたたらをふんだ。今度もまたアキラはよけるが、今度はそれだけでは終わりとはならなかった。

踏みとどまろうと半身を見せるハンナにむかって、振りぬかれる一閃。

しかし、その手にはもう刀は握られてはいなかった――。  
アキラの手を離れた刃は回転を続け、軌道にあったハンナの頭部――  
約三分の一を削り落としても勢いは止まらず。  
観客席の前に広がる敷居を貫くことで、ようやくのこと威力を殺す  
ことに成功した。

衝撃の結末に空気は凍り、続いて崩れ落ちる烈女と共に大歓声が巻き起こる。

ハンコックは優しく問いかけてきた。

「アイツを本当におそろしいと思っただんな」

「地底人って、みんなあんなもののかな？あのレオとかいうクソ野郎もそうだった。

ひどくヤバイ状況なのに、まるで感情がないみたい。機械のように冷静で、平気で何でも破壊しておいて。なんでもないみたいにする」  
「……まアな」

「思っちゃったんだよ、あいつらのどちらでも。あたしの立つステージの反対側に立っていたら、どうなるんだろうって」

「勝てない、そう思ってるのか？」

「わからない――でもさ、スーパーミュータントを人の手で殴っている奴なんて知らないし。薬で獣になったジャンキーを相手に、平然とくびり殺して見せるやつも知らなかった」

「そういう意味じゃ、俺たちは運がいいといえるな」

ケイトは思い出すことをやめ、ハンコックを見る。

「グールはやめろ、というように首を横に振るだけだった。

「つまらない考えさ。明日には忘れなきゃならない、あんたもそうするべきなんだ」

「……」

お互いが同じように忘れようとしていたはずなのに、話していると悪いものを育ててしまったようだ。

ハンコックはこの話を切り上げたがっていると感じた。ケイト

だってそうしてもいい、だがそういうことなら――。

「眠れないんだ、ハンコック」

「……」

「今日は特に、ひとりでは」

自分の誘い方としては、割と理想的なものであったと思っている。

だが――。

「仲間ってのは時に家族になり、離れては他人となるものさ。だからそう、こういうことだってありうるんだろうな」

「……で？」

「悪いが断る。別にあんたに魅力がないわけじゃないし、女への興味が消えたわけでもない。ただ、ジョン・ハンコックという男はそういうものなんだ」

「どういうこと、意味が分からない」

「あんたみたいな若い娘のお遊びにつきあうほど、ジョン・ハンコックは安くはないのさ。お嬢さん」

「なにそれ。淫売には用がないってこと？」

「誰がそんなことを言ったア？　そういうことじゃないんだ。ただ――」

「？」

「お前がそれをなぜマクレディに言わない？　あいつなら、年齢も近いし問題はないだろう？」

「あたしになんか、興味ないってわかってるし」

「それが理由か？　本当の？」

「何が言いたいのさ!？」

なぜか泣きそうな顔になっているケイトに、ハンコックは横になってリラックスしたままで。

マーケットから見える、大きな山のとっぺんに指をさした。

「素直になりたいなら、お前の相手はあそこにいるんじゃないか？」

「なっ、なによいきなり!? あれは、あいつの相手はキュリーが――」

「お前さん、やっぱいい人間なんだな。そういう義理堅いところが、本当にいい」



「からかわないですよ！どうせ、馬鹿にしているんですよ？」

ハンコックの目はそれでも優しいままであった。

「そうじゃないのさ。今夜は俺たちにとっては寝苦しい夜になるっただけだ。それを誰かで別のものにすり替えようとすると、相手を傷つける結果を引き寄せてしまう。耐えるしかないんだよ、歯を食いしばってな……」

「わかったーそれじゃオヤスミ」

もうそこに居続けることはできないと思ったケイトは、背中を向けるとベットまで直行するが。

体をそこに横たえたくない、未だ感じている自分に苛立ちを覚えた。

——あそこにいるんじゃないか？

グッドネイバーほどの町の市長なら、女なんて飽きるほど抱いているだろうに。ハンコックはなんだって断る理由に、あんなことを口走ったのだろうか？

まったく理解できない。

ケイトは結局、自分の寢床に入るのをあきらめると。

キュリーのそれへと潜り込んでいく。そしてハンコックの忠告に従い、朝日が昇るまでの長い間を。息を殺しては、穏やかな寢息を立てているキュリーの寝顔をじっと見つめ続けた——。

## スマート・アレック

キジマは報告を最後まで聞く前に自分でも気づかず立ち上がった。  
「……」

そして――。

目の前に立ち。意味不明な言葉と、意味のない死体を放り出してきた無能の首を胴体から文字通り――無造作に己の腕だけでもぎ取ってやった。

真つ白になっていた自分の中に、目の前の新鮮な肉塊とそこから血があふれ出るのを見て。そこで自分が激怒しているのだと遅れて理解する。確かにシヨックではあった、こんなことになるとは。

「コンドウ、すまない」

「……失望したぞ、キジマ。」

「こんなはずではなかった。こんな――」

「こいつ。ターゲットは將軍、ガービー本人だと言った」

「暗殺者が狙うべきターゲットすら認識できない状態だったとは――」

思わなかった。そう言いそうになって慌てて飲み込む。

再び怒りを感じるが、すでに報いを受けるべき相手は殺してしまった。残骸に当たり散らしてもどうにもならないことだ。

“小さな宝物”の内部で、キンジョウ、観察者と違い。

コンドウ、キジマらが現在団結しているのは、たまたまそれぞれの都合があつて。妥協できるというそれだけのことにすぎない。

互いを家族、兄弟などと口にはしても。それは世間一般に使われる言葉とはやはり違うのだ。

「コンドウ?」

「――これまでだ、キジマ」

「コンドウ!」

「この話は忘れてもらおう。お前とは手を切る」

「貴様は……どうするつもりだ?」

「それこそ貴様には関係のない話だ」

そういうとコンドウもまた、顔を真っ青にして。しかしさすがに感情を制御しているのだろう部屋から出て行ってしまった。その背中にキジマは声をかけることは出来なかった。

——集まりで会おう

そう兄弟として声をかけても良かったのではと思うが、それができない。

——計画、計画はどうするか？

脳裏に一瞬だけ、暗殺者たちに至急手を引かせるようにメッセージを送るべきとの考えが浮かぶが。すぐにそれは消える。

彼等にはすでに高額のカヤップで仕事を引き受けさせている。それを返せ、とも言っても聞かないであろうし、そのまま噛みつかせた方がいいか。

自分の考えを固めると、出ていったコンドウのこれからが少し気になった。

暗殺者をキジマに頼ったことで、コンドウはこの計画から離れようと思えば簡単にできるし。素知らぬ顔で次に顔を合わせた時にでも、このキジマを兄弟の先頭に立って非難する側に立つことが出来る。

しかし、あの男の性質からしてそんな予防線を張ろうとしてのこのような計画を考えたとは思えない。

一体、何を考えている？

|||||

——ボストン公共図書館、地下鉄コプリー駅

ホームを走る私は“予定”通りのコースを走り抜けざま、地上に地雷をひとつ落としていく。

前方のもつとも奥まった柱の陰からはガービーの「將軍！」という声上がる。相変わらず心配性なことだ。

自分でも驚くほど活力に満ちた私を、背後から飛んでくるレーザーや銃弾はとらえることはできない。

私は床を滑って勢いよく柱の蔭へと入り込んだ。

「ストロング、もう少しだ」

「ウウウ」

「將軍。あんたどんな体をしているんだ？スーパーミュータントが必死で食らいついていたぞ」

呆れたガービーの声に、背後を見やるとミュータントドッグと並んだスーパーミュータントが「マテ、ニンゲン！」と叫んでまだ走っている最中であつた。

予定のポイントまで、あと2秒――。

「来るぞっ！」

私は声を出すと、柱に背中を預けるようにして再び隠れる。

次の瞬間。

スーパーミュータントらの足元にあつた地雷が反応し、ホームを横切るように設置して全てへと爆発が連鎖していく。

私とガービーの手によつて、地下駅を占拠していたミュータントはアツサリと掃討した。

まあ、私に言わせればそもそも数が少ないのだから当然の結果だと思つたが。まあ、それをわざわざ口に出して誇る話でもないだろう。

ガービーの話によると、いつからとはわからないが。トリニティ・タワーにいたスーパーミュータント達はダイアモンドシティへの足掛かりとして。ここに手をのばしていたらしい、とのことだつた。

しかし、それが事実だとすると。ここにあつた戦力ではあまりにも――。

「ストロング、どうした？」

「音、驚イタダケ。デモ ストロング、ナゼカ動ケナカッタ。ドウシテ!？」

「驚いたんじゃないかな」

「ストロング 恐レナイ。ソナコトハナイ」

真面目なのだろうが、ガービーがそんな会話に参加してくる。

「隠れておけ、そう言っただろう。体を乗り出すからだ」

「デモ 人間。オマエノ作戦 面倒。タダ タタキツブセバイイ」

「それであいつらは俺達にやられたんじゃないか。こっちの被害はナシ。見てなかったのか？」

「ソナナコト ワカッテル。オマエ キライ。ストロング 馬鹿ダト思ッテルンダロウ？」

「——意見を述べただけだ。馬鹿にはしていない」

どうやらストロングはガービーが真面目でお堅いことが気に入らないようだ。スーパーミュータントの流儀を素直に聞かないことに不満があるらしい。ガービーはそう思われる理由がわからずに困っているようだ。

凸凹すぎる会話はなんとも微笑ましいものがある。

「楽しい会話はそのくらいにして。ストロング、この駅に戦力が残っていないか確認してきてくれ。ガービーは私と一緒に、図書館の入り口を見に行こう」

「ワカッタ」「了解だ、將軍」

ニツクの話をつらいつつ、彼が生きていると考える旧世界の犯罪王を見つけ出すこと。

前者はニツク自身の調査記録があるので、それほど苦労はしないだろうが。後者は彼をしても届かなかった搜索を素人探偵でもできるのか、という問題があった。

「まずはニツク自身の調査を再確認。そこから情報を洗い出していく」

「探偵が分からなかったことを。兵士である俺やアンタがどうにかできると思うのか？」

「難しいかな？」

「——なあ、こんなことを言っちゃなんだが。アキラの協力は得られないのか？彼なら、そういうのを得意そうだろう」

「無理だよ。そう本人にも断られている」

嘘だった。

もし、私が協力を求めれば彼はそれに応じてはくれるだろうが。

私はここでニツクの調査をしながら、同時にアキラの——私の若い友人の情報も何かないか。それを調べようと企んでいる。

アキラが私の知らないところで大きなトラブルに見舞われたと知った時からずつと考えていたことがあった。

なぜ、200年後のこの時代に彼は狙われるようなことになったのか——それは同時に、私もかつての時代に隣人として彼の顔を見たことがないという事実にもつながっていく。

——アキラは本当に、私と同じく200年前からの生存者であるのだろうか？

このことをはつきりさせておきたかった。

地下鉄からの階段を上ると、そこには図書館への扉があつて閉じられていた。

ガービーはさつそく調べると、インターコムからこちらに声がかけられた。

『ポストン公共図書館へようこそ。当館は現在緊急閉館中となっております。残念ですが、またのお越しをお待ちしております』

「將軍、これは？」

「システムがまだ生きていたんだ。ロックダウンされているということは、中には普通には入れないってことでもある。なるほど、スーパーミニタータントが地下にいるわけだ」

「なにか方法はないのか？」

「鍵穴があるなら、ピッキングできるんだが……これは鍵のない電子錠だな」

「アナログでは太刀打ちできないか」

「……どうかな、試してみよう」

私は再びターミナルを操作すると、先ほどと同じく電子音が案内を入れてきた。

そこに私はマイクに顔を近づけて会話を試みる。

「ここはスタッフだ。中に入るにはどうしたらいい？」

『職員と予約のある方のみ入館可能となります。それ以外の方はロック解除後、通常営業時間内にお越しください』

「わかった、ID番号は何桁だ？ちよつと忘れてしまつてね」

『6桁となります。これでいいですか？』

「ああ——それじゃ、確認してもらおうか」

となりでガービーが「大丈夫か？」という仕草と顔で、こちらに問いかけてきている。

この手の民間システムは、軍用と違っていきなり警告なしに攻撃などはしてこないはずだが。本場の職員ではないから、必要なID番号なんて私が知っているはずがない。

だが——。

「ええと、そうだな……123456、これでどうだい？」

『——。』

「コンピューター？」

『図書館へようこそ、ヒルデンプランド市長。素敵な滞在を、ですが只今メンテナンス中につき、万全のサービスは期待できません。ご了承ください』

「ああ、わかってるよ。わざわざ、ありがとう」

ガチャリと錠が落ちる音がして、扉は綺麗に左右へと開いていた。

「成功だ、ガービー」

「あんたにはいつも驚かされるよ、將軍」

「うん？」

「これであんたは、かつては市長であつたと証明したわけか」

「やめてくれ。どうせ使わないからと、適当な番号にしているんじゃないかと。そう思っただけさ」

「悪いがね、將軍。事實は俺の目の前でおこつたことが全てさ」

ガービーはにやにやと笑っている。どうやらからかっているつもりらしい。

勝手に言ってくれ。私はその言葉には沈黙で返し、遅れて確認を終えたばかりのストロングにこつちだと声をかけた。

||||||

建物に入ると、ガービーは隣で息をのんだことを私は知った。

だが、私の口から洩れたのは、ため息だけ。

かつての世界では、ここはこの国最古の知の集積所として人々に愛され。そして誇るべき国の遺産であり、守るべき多くの価値あるものがあつたというのに。

妻と子と、いつかは訪れたいと思つたありし日のこの場所は。もつと輝いていたはずだが、もう瓦礫と変わらぬものになろうとしていた。

建物の壁際のくぼみには、不格好な廃材で作られた“新たな壁”が構築され。

目を向ければ階段のあらゆるところに、激しく争つた事実を知らせる弾痕のようなものが確認される。崩壊した世界の爪痕はここにもしっかりと残されているのだ。

ストロングは退屈そうに鼻を鳴らした。

「誰モイナイ 敵モイナイ。ストロング 退屈スル」

「——ああ、えつと。將軍、それでどうする？」

「ストロングはこの場所に本当に誰もいないのか、確認。ガービーは、現在の状況がどうなっているのか。警備システムを探して確認してくれ」

「わかつた。それで、あんたは調べ物をつてことだな？」

「そういうこと」

ありがたいことに図書館の電源はまだ生きていて、ターミナルもまだ多くが稼働できる状態でそこに残されていた。私はその一つを前に座ると、さつそくニツクの調べたデータの検証に入る。

エディー・ウィンター、大悪党なのは間違いない。

自身だけではなく、他のギャング団とも手を組んでの殺人事件の追及を逃れたのは見事な手際であつたようだ。検察も警察も、負けを認めてメディアの前で憎々し気な表情でたびたび彼の名前をだしている。

実際、彼のかかわる犯罪は雑なようであり、結果はいつも同じだつた。

検事は提示する証拠の中にエディーの影を嗅ぎ取っても、証人たち



は誰も彼の名前を法廷で口にするとはなく。勇気ある一握りの人々は、そこに立つまで生きていることが出来なかった――。

あの頃の私にとってはそれは、ただの新聞記事のひとつでしかない出来事であったが。こうしてニツクの目を通してこれらの一連の騒ぎを見直してみると。

当時の警察や検事局、そしてマスコミはどうにもできない相手を前に手をこまねいている状況に苛立ち。互いにそれを非難しあっているような、ひどい状況であったのだろうと推察された。

(犯罪のたびに、エディーは自身の口でその後起こる事件。その前に起きた事件に自分が関与していたような口ぶり、ホロテープとして残していた？変わった奴だな)

自己揭示欲がどうしようもなく大きな男、ということだろうか？

しかしその割に、警察や検察などを平然と煙に巻いている。これは――なにかおかしくはないだろうか？

軍事作戦において最も気にしなくてはいけないのは、自分たちの情報を敵に悟らせない、知られない、そういうことが大事だ。これは基本なのだ。

それを考えると、エディーのこの一連の大物として君臨する中での事件では。

彼の存在はあまりにも目立ちすぎていて、なのにまったくボロを出すことがないというのは確かにそれを目にする他人にしてみたら悪魔的にも感じるだろう。

しかし、私はそんなことを信じはしない。

チエスを知っているだろうか？

戦い方には戦略と戦術が必要だが。現実には当てはめるところにはさらに敵と駒の配置までが重要になってくる。

つまり、ゲームはいつも最初から始まるわけではないから。時には別の誰かが動かしていた駒をそのまま自分が引き継いで最後まで進めたり。ゲーム自体を始めようにも、自分の向かい側に座るはずの敵の姿がなくて、ゲームが進まない。

戦場とは、私の知る世界はそういうことばかりが起っていた。

ではこのエディーはどのようなのか？

私の目から見ると、エディーのこの派手なパフォーマンスはあまりにも出来過ぎているとしか言いようがない。

あらゆる状況であっても、オールラウンドに力を適切に発揮してみせ。戦えば常に1000戦を1000勝しているということになる。

そんなことは可能だと？ いいや、不可能だ。

「では、どうやってそれを証明する？」

調べられる過去のデータとニツクの調査だけでは、やはりこの大悪党のイメーヅは、私の中では今もぼやけたままなのだ。

これをはつきりとしたものとするためには――。

「それではミスター市長殿。あなたの出番ということだ」

思わぬ港運から、私は先ほどかつてのボストン市長のIDを知ることが出来た。

彼のような権力者には、本人が望めば手にすることが出来るちよつとした特典があることを私は軍で学んできた。それを生かすなら、まさに今のこの状況がふさわしいだろう――。

コンピューターは素直に私に200年前の市長のデータを呼び出してきてくれた。

ということは、今もあのマサチューセッツ州議事堂は生きていますということらしい。そこに行くことなく、私はなにか新しい情報がないか調べてみる。

（うん？ 特別捜査班の解散、 “冬の終わり作戦” は終了。冬――ウインター、か）

「司法省が中心となって、それぞれからスタッフを招集していた、だって？ これかな」

残念ながらこのチームの捜査資料の閲覧は、市長でも許されていないかった。

しかしそういうことなら、どうしたらいい？

作業をいったんは中止し、視線を周囲へと泳がせる。

ニツクの調査の裏はとれたが、必要なのはこの先の情報だ。アキラであれば、ここからさらに多くの情報をターミナルにしゃべらせることは出来ただろうが――。

(アキラ、か)

私は急に冷静になる。

ニツクや私に謎があるように、アキラ――あの若者にも大きな謎が存在する。

彼はあのVault111で私と共に同じく200年前から眠っていたのか？ならば、私の記憶の中にあるサンクチュアリにいた住人の中に彼を見た記憶がないのは何故なのか？

そして200年後のこの世界で、彼を誘拐しようとしたおかしな連中がいるらしい。そいつらはなぜ、アキラを狙う？彼のなにを知っている？

「検索、と。市民、イガラシ……アキラ。市民カード発行は、いつかな？」

過去の記憶のない彼でも、自分の名前と年齢だけはなぜか覚えていた。しかしこれで調べれば、彼のそれらの情報が正しかったと証明されるはず。

返信はピツという音声と共に画面に表示された。

私はそれを読み、体をこわばらせて息をのむ――画面には文字のみ。

——NO DATA

と、それだけが表示されていた。

|||||

巷ではその週もまた、連邦は荒れた天気になるだろうと噂されていたが。

ボストンは黒々とした雲が強風によって恐ろしげな模様を空に作りつつ、太陽を決してのぞかせはしなかったものの。それを見上げる地上には風が一切なく、昼間であっても夜の如く蒼暗さと静寂が。ま

るでポストンという町が沈黙しているかのようなであった。

国立図書館前の大通りの上で寝そべっていたカールの耳がひらひらと動いた後、すつくとおもむろに立ち上がる。

その顔と体はポストンコモンにむけられ、一点を集中して見つめているように見える。

犬の持つ超感覚——しかしカールはそれをさらに数倍の精度をほこるものが、確かに何かに反応を示していたのだ。

「お昼寝はもういいのですか？大丈夫ですよ、パピーちゃん。今頃はもう、皆さんはこの中で忙しくしているだけなのです」

「……」

レオの頼れる相棒、カールにそうやって話しかけるのは。かつては忠実なMr.ハンデイとよばれるロボットだったコズワース。

しかし今の彼は、その面影はどこにもない——。

セントリーロボットの三脚には似ても似つかぬ、巨大なカニの手を思わせる武骨な四脚。

かつてはそこに2つの目があった、アサルトロンの腕の先には重装備の火器がそなえつけられていたが。巧妙に背中に体に隠れるようにして偽装されたロボブレイン・アーム。つまり四つの手。

かろうじてかつての姿を残すのは、Mr.ハンデイのボディとひとつ目であるが。それとて戦闘のそれに変更され、以前の姿を知っていたとしても教えてもらわなくてはそれと気がつかないほど。変わり果てた姿となっていた。

なぜ、コズワースはこんな姿になってしまったのか？

コズワースがレオを伴い、再びコベナントへと来訪した時。

そこには彼のために残された物資はすでになく、アキラは困惑と焦りの表情で彼らを迎えていた。コベナントの資源は当然だが有限であり、その時点でアキラは多くのロボット達とベルチバードの計画が動いていたのだからむしろこれは当然の事だともいえる。

——あきらめなくていいのです

肩を落としたコズワースに助けを申し出たのは、驚いたことにエイ

ダであった。

メカニストとの対決を睨み、エイダの改造分の資源はすでに確保されていたのだが。エイダはこれのいくつかをコズワースにゆずることを申し出たのだ。

——彼の願いは、私自身もよく理解できるものでしたからそれが原因で、エイダの改造は延期となり（武装以外はアサルトロンのまま）。

コズワースは譲られたパーツと武器を装着して、このように生まれ変わってみせたのである……。

そのコズワースは、甲殻類を思わせる四脚の動きでカールの隣まで来ると

「ご主人様たちなら大丈夫です。確かに爆発音がして驚きはしましたがけれど。私のセンサーによれば、建物の中に入ったのは間違いありませんから。留守番の私達はただ、待っていればいいのですよ」

「……」

「——ええ、そうですね。こんなことになるなんて心外ではありませんが。」

ですが、この体は大きすぎるし。手にした火器が強力すぎると、崩れかけた建造物の中に入ることを止められてしまうなんて。これはまさに誤算というものです」

「……フンッ」

カールはこのロボットの嘆きをまったく相手にしていなかった。

だから「何を言っていやがる」とばかりに鼻を鳴らす。そして再び感覚を研ぎ澄ませます。

この強く、賢い犬はレオの思惑をちゃんと理解していたのだ。

レオ達が中で調べもモノをしている間、外でコズワースと一緒に周囲を警戒すること。

だが、今のカールにはわかる。

この場所に向かって急速に近づいて来ようとしている集団が複数あるということ。

カールは頭を下げて今度はその場でグルグルと回り始める。これ

は犬なりの悩みと、決断する前の迷いからくる行動であった。

この3つの集団を一頭と一機だけで迎撃するのは無茶であるし、中にいるレオ達に警告を出すにしても、図書館に籠城するか。もしくは決して悪天候ではないこの町の中で追撃を覚悟の退却戦を演じるか。

レオと共に修羅場を潜り抜けてきたカールの——犬の勘が、そのどれもが悪いものだ」と結論をだしてきている。

その時、この犬の脳裏に輝く「ひらめき」が雲の向こうから降りてきた！

|||||

ガービーはひとり、苦勞して警備室に入り込むとそこに残された過去ログからおおよその事情を察することが出来た。

どうやらこここの機能はそれほど深刻なダメージはなかったらしく。大破壊の後も長く、ここに務めていた人々は残っていたようだ。

しかしそれにも限界が来て、この場所を守るための警備システムとロボットを残して全滅してしまう。

「まさに聖櫃、というやつなのかもな」

そう口にするガービーの目の前に置かれた大容量記憶媒体の中には、ここに収められていた膨大な図書の内容をあますところなく記録したものが入っている。

最後の瞬間まで、使命と情熱に突き動かされて完成されたその価値をガービーは理解できないが。

これが彼らがどうしても残したかったのだという必死さは、理解できなかった。

「ここにそのまま置いてはおけない。だが、どうしたものか——なにか方法を考えないと、な」

言いながら、肩にかけてたバッグの中にそれを詰め込んでいく。

警備室を出た帰り、中庭では噴水の水で遊んでいたストロングを回

収すると、ガービーは顔色の悪いレオの元へと戻ってくる。

「どうだい、將軍？2時間くらいたったかな」

「——あ、ああ。そっちは？」

「問題ない。警備システムは生きているが、入口から行儀よく入ってきた我々のことはちゃんと認識しているみたいだった。このまま鍵をかけて立ち去れば、またしばらくここは静かになるはずさ」  
「そうか」

調査の方はうまくいっていないのだろうか？

どんな状況でも顔色一つ変えない男だと思っていたレオの様子がおかしい。こちらの質問に答えたくないみたいだった。

「それで、どうなってる？まだかかりそうなのかい？」

「えっ、なに？」

「ニツクの調査。將軍、大丈夫か？なんだか様子がおかしいが、まずいことでも？」

「調査？——ああ、ああ。調査は、大丈夫さ。ほとんど終わった」

「そうなのか？それで、この後はどうする？」

「——ひとつ、寄るところが出来たようだ。次は新聞社に行かないと」

「新聞だつて？」

「ザ・ポストレビューグル社だ。地図でも確認した」

差し出されたのは旧世界の地図であったが、レオによって印がつけられたその現在を、ガービーは脳裏で当てはめてみせる。

「ここも危険な場所だな。しかし、俺達ならきつと大丈夫だろう」

「本当なら、州議事堂跡やマサチューセッツ工科大にも行かないとダメかと思っていたんだが——さすがにすべてを回ってはいられない」  
「ああ、わかるよ」

口ではそう言いつつも。

レオの顔には、やはり悩みを払いきれないものがある。

「將軍、本当に大丈夫なのか？なんなら一旦、ダイアモンドシティからハングマンズ・アリーに戻った方がいいんじゃないか？」

「大丈夫だ」

「しかし將軍——」

ウウウウウー……！

しつこく食い下がろうとしたガービーだったが、館内に鋭いサイレン音が鳴り響いてはそれどころではなかった。

レオもハツとした表情になると、眼前のターミナルに何事かと警備システムを呼び出しにかかった。

「ウルサイ。コレ、ウルサイゾ！」

「將軍!？」

「……侵入者警報が作動した。地上と地下、すべての出入り口から警告が出ている」

「どういふことだ、將軍」

「そもそも最高レベルの警戒で封印されていたが、私達が入ったことで、そのレベルが自動的に引き下げられてしまったんだ。この侵入者たちはそれを知ってか、一気にここを制圧しようとしている」

「それは、誰だと思う?」

「スーパードクターだ、間違いない。駅で戦闘があつたことをしっていたんだ。うかつだった!」

会話している間にも、館内で静止していたターレットやロボット達が次々と復活し。あちこちで「警告、警告」と騒ぎながらも巡回を開始していた。

「入口はどれくらい持ちそうなんだ?」

「すぐに破られるさ。だから、ロボット達が騒ぎしている」

「ニンゲン、戦イガ ハジマルノカ?」

「まだだ、ストロング」

「將軍?」

「緊急状態のせいで、今の警備システムはゲストと侵入者の見分けがつかないようだ。ガービー、こいつを使って私達が職員であると無理矢理に認めさせることが出来るか?」

「俺が?知っているだろう、機械は得意じゃない」

「私もさ……よし、しばらくは隠れて移動しよう」

机の横に立てかけていたライフルを手にとると、私はようやく席を立てて中腰で移動を開始する。



まずは中庭へ。そこで様子を見て仕掛けることになるだろう。

同時に私は不安を覚える。

こういう事態を想定して、外にはコズワースとカールを置いておいたはず。

彼らからの警告はなかったし、スーパーミュータントが彼らを騒がないようにしてみせたとも考えたくはないが――。

「ガービー、ストロング。静かに、見つかるなよ」

「ストロング 戦イタイ」

「負けたくないなら指示に従うんだ。前後をはさまれて、なにも出来ないまま死にたくはないだろう」

地上の入り口からわずかに遅れて、なにやら破壊音のような音がする。

侵入者たちと防衛側の激しい交戦が始まるのを聞いた。

「將軍。これは間違いなくピンチだぞ」

「そうかもな。だが、これよりもっと悪い状況でも、私は生き残ることが出来たぞ」

それは励ましの言葉であったが。同時に事実でもある。

確かに、間違いなくこれは最悪の状況ではない。

私の手にはライフルがあり、そして共に戦う頼もしい仲間もまだいるのだから――。

## オーバーキルズ Ⅱ (Akira)

夜、戻ってきて——というか。

実際の話、出会ってから初めてだと思うが。上機嫌なゲイジの舌は止まることなく動き続けた。

隠せない笑みに顔を歪めているのも、どうやら今夜のガントレットでのシヨーが痛く感じ入ったからだと何度も口にしていた。

それでもまだ足りないと思っただか。ついには「俺はあのクソツタレのガントレットを始めて心の底から楽しめた」とまで褒めたたえてきた。

——そうかい

だからといってこちらの返事もそれに合わせて喜ぶ気分にもならなかった。

それがまた、なにやらクールだと。もうこうなると、バカらしくなってくるね。

『総支配人は凄い』、それはもう何度も聞いた。ゲイジ

「ああ、そうだな。何度も言った。そしてそれはあんたのことだ」

「そうだ。満足したか？」

「ああ……いや、まだだ。もつと言わせてくれ、この感動は忘れられない」

「もう黙れよ。こっちはさすがに疲れてるんだ」

正確に、それはもうゲイジにこの部屋から出て行けという意味だったが。まだ何か言い足りないらしい。動く気配すら見せない。

ここで僕が痲癩を爆発させれば簡単に従わせることは出来ただろうが。レイダーの流儀に慣れていると相手に思われるのも困るので、別の方法をとることにする。

「それぞれのボス達の反応はどうだった？」

「まったく問題はないさ、だってそうだろ？ あんたの実力を改めて知った。ただそれだけだ」

「こっちは直接は顔を見てないんだ。ちゃんと報告しろ、俺の役に立つのならな」

「ああ、そうだったな——メイソンに続いて自分達のところからも馬鹿が転がり出てきたとあって、ニシヤもマグズも顔色を変えていたんだが。あんたがあんまりにもあつさり見事に終わらせるから、すぐに会場を後にしていたよ。パックスは——」

「それはいい。メイソンも似たようなものだったんだろ」

「無口ではあったな。いや、それはいつものことか」

本来であれば自分たちが背負わされるはずだった面倒ごとを僕が解決したことで、連中は別の意味で今は焦りを感じているはずだ。

明日からは自分の存在価値をこちらにアピールしようと、色々別の考えを持っていることだろう。そこにキンジョウ達が関係するものがあれば、良いのだが。

「それとグッドネイバーのハンコック市長だ、ボス」

「ああ。彼はどうだった？」

「楽しんでるようだった……すまない、試合後に近づく機会がなかったんだ。だが十分なアピールはできたはずだ、あんたは自信を持ってくれ」

「そんなことは気にしちやいない。俺が気にするのは、彼にこちらを友人だと認めさせることだ。伝説の悪党が相手なんだぞ、このチャンスは逃せない」

「ああ、わかるよ。でも——」

それ以上ゲイジが言葉を吐き出させないよう。僕はにわかには殺気立ってにらみつけることで黙らせる。どうせ「このまま殺してしまってもいいだろ？」とでもいうつもりだったのだろう。

この場所にいるレイダー・ボスの手綱さばきを知るためにも、そばにいるゲイジからそんな考えは許さないことを徹底させねばならない。皆を危険にさらさせはしない。

「ここが俺の王国として、連邦に興味があつたとしても。今はグッドネイバーは必要ない、ゲイジ」

「——俺はただ、もっと柔軟な考え方もあるんじゃないか、と思ったんだ」

「ハンコックを殺ることが柔軟？ハッ！笑わせるな、こんな荒野で

グールの死体を作つてどうする。

グッドネイバーがそれで手元に転がり込んでくるわけじゃない。あの辺りでいつもハンコックにいいようにやられている連中が喜ぶだけだ。貧乏くじなんだよ！」

「まあ、そういう考え方もあるよな」

「あのグールは賢いし、話ができる。ならするさ」

「それがあんたの望みなら、ボス」

「ゲイジ、ゲイジ！それじゃ困る。お前も賢くやつてもらえないなら、俺がここに戻つて見回した時。不貞腐れた数日間の間違つてないつてことになつちまう」

どういう意味だ？ゲイジの顔にそう書かれていた。

「お前は俺の片腕になれると、そう考えているんだろうが。それならもつと“柔軟な思考”つてやつができないと困る。

例えば、そう。俺のそばにもうひとり有能な奴を加えるとか」

「なんだよ。いきなり俺をお払い箱にするつて話か？」

「そんなことは言わないさ。ただな、俺がお前以外の奴が便利だと考えたとき。その時、お前がそのことを理解できるのかつてのが正直わからない。

つまりな？お前は退屈な女みたいに、俺の女房面を始めて新しい関係がうまれることに邪魔を始めるんじゃないかつて不安だ」

「おいおい、まさか。俺の嫉妬を疑つてるのか？」

「もちろん疑う。だからハンコックのことは俺が決めた。お前にそれをやつてもらおう」

「そういうことなら、わかった。ちゃんとやるさ」

「まずは話をして、商売の糸口があるか探ってみろ。強引に契約を取らなくてもいい。それでどうだ？」

問いかけると、ゲイジはまたいつもの茫洋とした落ち着きを取り戻し、間を置かずに答える。

「そんなことでいいなら簡単だ。ふん、よし。

オペレーターズに、マグズにそれをやらせよう。それでいいか、ボス？」

「オペレーターズか——」

「ボスがグッドネイバーとのビジネスが望みなら、彼女に任せたほうがいい。きつと会話も弾むはず」

「ならそれでいい。あと、俺はこの件に関わるつもりはないからな」  
「なんだ。どうしてだ？」

力いっぱい悪い笑みつてやつをやりながら、僕はわざとゆっくりゲイジに答えを返す。

「お前がそれを俺に言うのか？あいつらに与えるヌカ・ワールドを解放しなくちゃならない。それが俺の仕事じゃないのか？こつちは忙しい」

そう言う「疲れた、もう寝る。出ていけ」と言ってゲイジを部屋から追い出す。

「ああ、ボス。最後に一言」

「なんだよ」

「最終ステージの控室、あれは見事だった。俺は感動したよ」

「……そうか、寝る。出てけ、邪魔だ」

「ああ、わかった。今日はゆっくり疲れをとってくれ、オヤスミ」

それでようやくひとりになることができた。

フィズトップマウンテンの頂上から、カウンターに入ってヌカ・コーラを手に取り。キャップをはずすとそのまま一気に飲み干してみせた。喉を滑り落ちていく液体の辛みが焼けつくような痛みをそのまま胃の中まで続くのも構わずに。

——クソがつ!!

思わずカツとなり、そのまま空の瓶を窓の外に向かって力一杯に放り投げ。新たなヌカ・コーラを2本カウンターのの上に置く。

「ガクテンソク、いるな？」

「ハイ」

ステルス装置を解除する音と部屋の隅にアサルトロンが出現する。

「申し訳ありません。あの男に始末しているのを気付かれてしまいました」

「——お前にミスはなかったはずだ。お前はエイダの戦闘データも思

考パターンも厳選して組み込んだ。違うさ、奴の方が上手だった」  
「このミスは私がやったことです。あなたを失望させてしまいました」

2本目を半分まで空にする頃には、ようやく怒りの塊も腹の底で徐々に分解していった。冷静に考えてみたら、このくらいで動揺することはなかったことに気が付いたのだ。完璧、とはいかないものさ。そういうことなんだ。

「お前に失望なんかしてない、ミスもないよ。お互いに切り替えよう、このことは忘れるんだ。次に進めるために」

「わかりました」

「他の連中はどうしてる?」

「皆さんは宿に帰られました」。

「この監視もついでですので、今夜は大丈夫だろうとのことです。ローグスは外で待機、指示があればいつでも突入し。レイダーを皆殺しに出来ます」

「エイダからは?」

「どうやらミニッツメンの力が必要とのこと、レオに会いに行くとメッセージが送られてきます。どうしますか?」

「あのハゲ、ミニッツメンに借りを作る気か? まあ、彼女がそうするときめたのなら放っておこう。返信はしなくていい」

「はい」

「それと実は、この周辺の地形はローグスに偵察を頼む」

「わかりました。どのようにしましょう?」

「危険は冒さなくていい、戦闘はなるべく回避するんだ。危険なエリアとの境界線を把握したいだけだからね。でも時間はないぞ、出来るか?」

「明朝まで、ということですね」

「そうだ」

「わかりました——部隊に指示を出しました。私も今から向かいます」

「ガクテンソク。ここで挨拶だ、おやすみ」

「——そうでした。これはミスです。おやすみなさい、マスター。明朝にお会いしましょう」

ステルス装置が作動し、何かの気配が自分から離れていくのを横目で見ると。僕は最後のヌカ・コーラをやっつけにかかる。

「待てよ。こんなに飲んで、眠れるものかね？」

口に出してしまうと、続いて先ほどのガクテンソクを真似して「これは自分のミスです」と言いそうになる。アキラは少年のようにフフンと笑うと、ちびりちびりと瓶の中の液体をなめるようにして楽しんだ。

|||||

オーバーボスによるガントレットの復活ショーの威力は十二分なものであったはずだった。

しかし翌日にはそんなもの。ヌカ・ワールドは早くもすっかり忘れて去る。

ひとつはゲイジがハンコックに対し、ビジネスを持ち掛けるための供役としてオペレーターズを指名したこと。

オーバーボスが朝方にひとり、ヌカ・ワールドのエリアに向けて歩いていくのをディスプレイズのレイダー達がたまたま見送ったことで、いよいよエリア分割の話が近いことを肌で感じる事ができたから。

——あの野郎

ニシヤ、マグズ、そしてメイソンは表立つては平然とした風を装ってはいたが。内心では少なからずアキラに対し、憎悪を感じていたことだろう。

オーバーボスが派手に動き続けたことで部下の心は沸き立っているのに、そこにきてゲイジを通してグッドネイバーとの商売をもちかけてみるという。それは言ってみれば、浮かれた部下がバカをしないように“今度はちゃんと自制させておけ”という各レイダーのボスたちに向けたメッセージに他ならない。

それはつまりニシヤとマグズには、メイソンのとぼつちりをまたまた被つたと考える話だった。

ゲイジはマグズに会いに来ると、最初の打ち合わせだと言った。

マグズの言葉は短く、簡潔なものだった。

「わかった。オーバーボスを満足させてあげる。オペレーターズに一切を任せてくれればね」

「ああ、そりゃボスも喜ぶだろうがね。彼は、俺にもそれを手伝うように言ったんだ、マグズ」

「それならばなおのこと、任せてもらいたいわね。こちらの仕事に横から口を出されるのは迷惑よ」

マグズはゲイジからも少くない距離を保とうと凶る。彼女は薄々、メイソンの（というより、彼がオーバーボスを試す形だったが）次にアキラはマグズを試されているのだと考えた。

すると会談と警備には完璧が必要だし、それまでにニシヤとメイソンが黙ってオペレーターズの準備を横目でニヤニヤするだけですませるなんて考えられない。

ここはゲイジに自分に張り付かれるより、他の連中が余計なことをしないように監視してもらったほうがよっぽど助かるというもの。

それでも準備には数日を必要とした。

難しいことではなかったはずなのだが、案の定。ほとんどすべてに関し、問題が発生したのだ。

予算として渡したキャップを持ち逃げしようとした馬鹿や。警備計画を盗み聞きし、会談当日に襲撃しようとした唐変木。こんな忙しい時にパックスの下っ端ともめて決闘騒ぎを起こそうとしたアホ。でもこのくらいなら可愛いものだった。

問題は、会談に必要と思われる物資を求めた部下の多くが消えたこと。

何が起きているのかは考えるまでもないが。そんなことになった原因の大半はディスプレイズやパックスが関係していたはずである。

少なくともマグズたちはそう信じていたが。ここは黙って、自慢の弟まで繰り出すことで同じ間違いから回避し。準備を一つずつ進め



た。

約束の日の昼頃、いつも連れ歩くマクレデイと名乗る傭兵とハンコックは店の中へと入ってきた。

相変わらず1週間近くここに居るのに、この市長はなにが楽しいのやら陽気に鼻歌を歌い、軽やかな足取りであった。

「店のオーナーが目を見張る美人というのは、良いものだ。食事の時間が楽しみでしようがなかった」

「ええ、そうかもね。今日は招待に応じてくれて感謝——」

「俺達は別にアンタのご機嫌うかがいをしているわけじゃないぞ、ハンコック市長」

マグズの全身に冷たい汗が吹き出し、思わず弟に対し「ウィル!？」と非難する声までみつともなくも上げてしまう。

「面白い冗談だな。楽しい時間を始める前から不愉快なものにしたがる奴がいるのか」

「俺は——」

「やめなつー……すまない、ハンコック市長。この弟はちよつと……あんたの伝説にナーバスになってるだけなの」

「ああ、わかるぜ。なんせこの俺でもそうなる時があるんだ。若いお前たちが今がそんな時だったことはちゃんと理解したさ。続けようか」

「ありがとう——それでは席に案内するわ」

オペレーターズのボス、マグスは。弟のウィリアム、そして友人のと共にダイヤモンドシティで育ち。グッドネイバーで名をあげた。

とはいっても当時の彼女たちはまだまだ小物もいいところで、市長にプレイヤーとして認められるほどの仕事はしていなかったが——。

「それじゃ飯を心の底から楽しむ前に——おい、マクレデイ。俺の可愛い子ちゃんたちはどうしてる?」

「……何度も言ったが、俺の任務はあんたの護衛なんだよ。市長、女のことなんかしつたこっちゃんない」

「おいおい!そりゃ困った。ここはグッドネイバーじゃなく、レイ

ダーの町なんだぞ？

俺と一緒にいないで、あれほどの上玉をこの連中が放っておくわけがないだろう？まったく、なんて頭の固い奴なんだ」

「繰り返すが、俺の仕事じゃないんだよ、市長」

「この野郎！——」

ハンコックがついに怒りの声を上げようとする辺りで、マグズは「ちよつと落ち着いて」といいながら会話に入る。

「ハンコック市長、心配はいらない。私たちのオーバーボスがあなたを客人と決めた。」

その女性達は客人の連れつてことでしょ、このヌカ・ワールドにオーバーボスに逆らつて馬鹿をやるうとする奴はいないわ。彼女たちならきつと無事よ」

「ああ、その通りだといんだがな。そうじゃない現実つてやつを俺はたつぷり味わつてきた。マヌケな部下のおかげでな」

「そんな不愉快なことにはならない。連邦を知る悪党なら、グツドネイバーの伝説に敬意を抱かない奴はいないわよ」

マグズはそう言つてにこやかに笑うことで安心させたが。視線が動く一瞬、ハンコックの背後に立つ警備のひとりを見つけた。

にらまれた相手は視線に気が付き。すぐに無表情のまま部屋の外へと出ていく。

うっかりしていたわけではないが、ハンコックにこちらに集中させるためにも。

連れの女たちに何かがあつた、などとやられるわけにはいかない。出ていった男は、すぐに部下を連れて女たちの護衛にむかうはず——。

「それじゃ、メニューの発表の前に言わせて。ハンコック、このオペレーターズはレイダーではあるけれど。ここをちゃんと店として機能させられるだけの腕を持つシェフたちも用意しているわ。だから、料理の腕に関してはきつと満足してもらえるはず」

「ほう、そりゃ楽しみだ」

「それじゃ、初めて——」

このマグズにしては珍しく、今日のこの席にいつも通りのアーマー姿で来たことを後悔していた。

女性の体のラインがしっかりと出る。真っ赤なドレスでも着てくればよかった、とまで考えてさえいた。

今日のこの席には、オーバーボスだけでなく。ゲイジの姿もない。マグズの言葉を“信用して”一切を任されている。

そのせいなのだろうが、ハンコツクの興味はイマイチここにいるマグズには感じていないようだし。それがこの会談を難しいものにしてようとしていることにここに来てようやく気が付いたのだ。

終わる前に何らかの条件に触れられなければ、失敗しましたではすまされない。

それにしても意外なスタートであった。

難航する準備にも駆り出され、いつもよりやや不機嫌な弟がまさかあんなことを口にするとは思わなかった。たいして重要とは考えていなかったが、どうも彼はガントレットの一件でオペレーターズに恥をかかせたのだと不満を持っていったようだ。

それについても解決しなくてはいけないが……とにかく今は、この会談でどこまで話を進められるのかに集中せねばならない。

——その頃。

ヌカ・ワールドのエリアのひとつ。サファリアドベンチャーの住人、シートーは日課の2回目の巡回の真っ最中。

このシートーはただの人間だが、共に暮らしている家族のゴリラたちがここ数日落ち着かない。そして彼らと同じ理由なのだろうか。このサファリアドベンチャーを我が物顔で徘徊するゲータークローという、デスクローに似た怪物たちも妙に殺気立っているようだった。

そのせいでシートーは家族の安全のため、こうして油断なく自分たちの家の周りに何者も近付けさせないよう目を光らせている。

するとおかしなもので、シートーの感覚も彼らに同調でもしたらしい。皮膚に感じる脅威の存在がどこにいるのか、なんとなく感じられ

るようになってしまったのだ。

それはドライロック・ガルチ。

このサファリアドベンチャーの隣のエリアからだった――。

安全を確認すると、シート―は家族の無事がしばらくの間は確かであると安堵しつつ。すぐに家族の待つ家に――檻に戻ることをためらった。今日も、だ。

時間が過ぎていく中で、この落ち着きのない重圧は本当にあのドライロック・ガルチからなのだろうかという疑問が彼の中で強い誘惑を持ち始めている。自分が感じる不安の正体を確かめたいという思いと、しかしその間に家族に危険がないとはいえないという現状認識がぶつかりあっているのだ。

彼の家族は決して非力ではないが。ゲータークローの恐ろしい爪と顎は、彼と彼の家族たちの血肉を容易にかみ砕くし、引き裂くことだってできる。

だからサファリアドベンチャーの門から外の世界を睨みつけるだけ――それだけでなんとか気持ちを落ち着けようとしていた。

それがこの日のように裏目に出ることもある。

シート―が運というものを信じているなら、きっとこの日は最悪なのだと言打ちしたことだろう。

正体不明の脅威から感じる重圧に苛立ちを隠せないサファリアドベンチャーの住人たちが、この瞬間にその場所であつたりとお互いの顔を見てしまったのだ。

デスクローと違い、ワニのような恐ろしい顎ももっているゲータークローが。ウェイストランドではバラモンと呼ばれる双頭の牛の姿はしているものの。ただひとつ、その頭に生えた角が、彼らの獰猛さと闘争心を感じ取ることができなければ、命はない。バラミラフという、亜種。

そしてサファリアドベンチャーで家族と平和に暮らすことだけを願うただひとりの人間、シート―。

日ごろから互いを敵と認識する彼らは、怒りの方向を上げると当然

のように対決が始まった。

ゲータークローはその体格と鋭い牙や口に相手の身体を捕らえんと容赦なく振り回し。バラミラフは距離を撮ろうとして近付けさせず、少しでも隙があると見るやチャージを仕掛け。己の角をねじ込んで皮膚をひねり裂いてやろうとたくらみ。

シート―はスーパー・スレッズを手に、どちらの攻撃も見逃すまいと攻撃のチャンスを待っている。

空気を切り裂く音は絶えることはなく。踏みしめる大地はその激しさを伝えて鳴動している。

怒り、苦痛、それらが混じる咆哮は。ヌカ・ワールドを取り巻いている荒野を吹く強風にも負けてはいない。

見るだけで恐怖を感じる人もいるであろう、その人外の対決だが。それでもいつかは決着がつくのだ。

この中の誰かが血を流し、膝をつき。弱った姿を見せた時がその合図となる。

それこそが自然の摂理、適者生存の原理。そしてこの瞬間までは、最初に誰が脱落するのかわかるはずもなかった。

――その姿はまさに影。

荒野から入ってくる強風に砂埃が舞い続け、ヌカ・ワールド園内を見渡すことを許さない。たとえ太陽が高くにあったとしても、だ。

それでも強風は勢いを失うのか静寂を生み、その中から聞こえる不快な音で接近を伝えている。

輝く眼光はレッドランプ、大地を歩むその動きは皆が違い。園内であつても荒野と変わらず、危険極まりないというのに誰も無言で、恐れることなく突き進む。

機械の駆動音を響かせる集団の先頭に立つのは――。

あの輝く太陽すら、その姿を明らかにすることを許さない男。

その名はシルバー・シユラウド。アキラが使い分ける仮面のひとつであつた。

|| || || || || || || || || ||

アキラが——即ちシユラウドと彼のローグスがサファリアドベンチャーの入り口に到着するなり、騒ぎの全てが終わってしまった。

ゲータークローとシートーの間に横から滑り込むように割って入るシユラウドは、手にした燃える一刀を振り抜き、硬い皮膚と分厚い肉で守られているはずの体を切り裂いて見せた。

ローグスは彼らに標的を変えてチャージしようとする突っ込むバラミラフに全力攻撃を仕掛け、闘争心の塊は走りながらバラバラにされ、地面の上に肉の塊として飛び散るように転がった。

シートーは集中を切らすことなくゲータークローを仕留めたものの、騒ぎが収まると自分の前に立つ集団に茫然としている自分によく気が付く。

「シートー。シートーは見た。お前達、シートーを助けてくれた」  
「……」

「違うのか？でもシートーはもう戦いたくない。お前に助けてもらったからだ、どうだ？」

「シートー、それが君の名前？なんだか話し方が変わってる。大丈夫なのかい？」

「すまない、シートー。あまり誰かと話したりはしない。家族がそうだから、得意じゃない」

「なるほどね、理解したよ。戦いたくないというのは、僕も同感だ。先ほど見せてもらったけど、君は強いんだね」

アキラは先ほどゲータークローを始めて見たばかりだが。それがデスクローよりも決して劣ったものではないことはすぐに理解した。

並の人間ならば、ミュータントやデスクローの前にハンマーがあるからとそれをしごいて立ち向かったりはしない。ましてやその巣窟の入り口で戦おうなんて。

だからこそ、シートーの強さを称賛したが。しかしそれ以上のものも言葉に込めたつもりでいた。

「君とは気が合いそうだ、シートー」

「そうか？そうだと嬉しい。友達は歓迎だ」

人の世界に、外の世界に触れていないことはここまで彼と話してきて。その朴訥とした人柄に触れたことで理解できたが。

シルバー・シユラウドとなつて目の前に立つ男にここまで普通に接してくるのは珍しい。まあ、シートー自身もまるでコミックの世界から飛び出してきたかのような恰好を——まるでグロググ・ザ・バリアンのような姿で堂々としているわけだが。

「シートー、家族とここに住んでいる。家族は危険、シートーがこうして守ってる」

「それは凄いな」

「友達、頼みがある。シートー、ここを変える方法を持っている。でもシートー、弱くてひとりではできない。手伝ってほしい」

「——それはまた急な話だね」

僕はなんだか楽しくなつてきていた。

これじゃコミックそのままじゃないか！アン・ストツパブル発動にはシルバー・シユラウドにバリアン、あとはミステリーの女王が必要か？

実をいえばドライロツク・ガルチの掃除でうんざりしていたのは事実。

どうせあそこはレイダー共に「一旦は」くれてやらなきゃならぬいし、アフターケアが万全でなくてもいいだろうとも思う。

それにこつちのほうが何やら面白いことになりそうだ。

「よし、相棒。それじゃ一緒にやろう。もう、僕らを止めることはできないさ」

「相棒？シートー、嬉しい。ありがとう、友達」

握手の文化を彼が知っているのかわからなかったが、僕が片手を差し出すと。シートーはそれを両手で包むようにして握り返してきてくれた。

いいだろう、今日はここからヒーローの時間だ。

このバリアンと共に太陽を嫌った影となり、このサファリアドベンチャーに平穏を取り戻そうじゃないか！

バラモンが引いている牛車の上から、商人は卑しい笑みを浮かべて護衛兼押しかけの客人たちに向けてたのしそくに言う。「見えてきましたよ」と。

すると一斉に5人の男女が、遠くに見えてきたヌカ・ワールドへと視線を向けた。

マスクやヘルメットなどで表情を見せないものもいるが、彼らはコンドウらが放った3流の暗殺者たちである。とはいっても、彼らへの評価を正確に聞かせたことはないから。彼らはこの依頼を自分のキャリアアップのチャンスだと考えていた。

伝説のグール、グッドネイバー市長。ハンコックの暗殺。

普通の暗殺者なら、そんなことは不可能だと鼻で笑うことで逃げようとするものだが。今のハンコックは彼の城ともいえるグッドネイバーを離れ、それぞれどこか遠く連邦の辺境に存在するレイダーたちの奇妙な遊園地を訪れていると聞かされると、気分もだいぶ変わってくるらしい。

完璧な仕事にする必要から、出し抜くことなく組むことを条件に出されているが。

彼らにしたら依頼人のそんな要求を聞くよりも、もつと重要なことがある。

(グッドネイバーにささえいなければ、あのハンコックだって)

自分達と同程度のレベルの先人たちは全て返り討ちにあったが、今回はチームを組んでの暗殺だ。少なくともハンコックの息の根を止めるまでは、仲間できてやっていいだろう。そう考えている。

悲しいことに、彼らはそう考えていたのである――。

ここでオーバーボスとやらを演じているアキラには近づけず。

ハンコックはレイダーのボスに招待されたと聞くと、キュリーとケイトはいきなり自分たちが放り出されてしまったのだと感じて困惑した。



市長の情婦という役回りを与えられてはいるが、あいつらとちがって常にそれを演じ続けることはケイト達には苦痛であった。

(ま、羽を伸ばしてもいいよね)

レイダーのマーケットなら時間つぶしくらいはできるだろう。

「外出、ですか」

「大丈夫よ。馬鹿はやらない、時間つぶしするだけ。どう、キュリー？」

「誘ってくれてありがとうございます。でも、今回はやめておきます。少し疲れてて——」

確かにキュリーの顔色は良くはなかった。

例のアキラのバカ騒ぎで、彼を信じていたとは言ったが。

あの瞬間はアキラを殺そうと舌なめずりするアホ共がさつさと死んでくれときつと願わずにはいらなかったのだろう。

その上、不安を抱いても近くとも会えない立場が。彼女の感情を激しく揺さぶり、それを制御するのに体調を崩すまいと苦労している様子だった。

ヌカ・タウンUSAにあるヌカ・タウン・マーケットは、レイダー達の手で運営されているというだけで。

そこにある品物や商人たちの活気だった様子は、バンカーヒルやダイアモンドシティで見かける光景とそれほど違いはない。少なくともケイトの目から見たら、そうだ。

とはいえ、そこはレイダー。明らかにヤバイ商品でも、堂々と店先に並べて値札をつけている。

だが時間が過ぎるにつれ、ケイトの不満は徐々に大きくなっていく。

これまではハンコックやキュリーがいたから楽しめたのだと、ひとりになってようやく理解してしまったからだ。

彼女は自分を知っている。それほど気さくで陽気な人柄ではないのだ、と。

それにひとりでいるのも我慢できなくなってくるのだ。

この世界、レイダーが支配するヌカ・ワールドとかいうクソが鼻に

つく。

ここには自己中心的な思考をもつ、キャップ好きや、サイコパスの見本市みたいなものだ。黙っていても、聞こえてくる会話は不愉快なだけ。

だんだんとこの外出がストレスをためようとしていることにケイトは気が付いた。

(あたしの馬鹿。いや、わかってたけどさ)

短い間ではあるが、レオ、ハンコック、アキラ、ガービーといった男たちと友人になることができた。

あいつらは自分が見てきた男たちは明らかに何かが違っていった。なにより、生き方からしてまったく別の生命体と表現してもいいくらい別物だった。

それがきっかけは偶然だったが。思えばあのトミーが配慮してくれたおかげで共に行動するようになり。今の自分がいる。

暗黒街のボスの情婦、そんな女に自分はなれないことはわかっている。馬鹿なのだ、それだけなのだ。ここに居るレイダー達と自分はそれほど変わらない。

不機嫌になってそんなことを考えるようになると、続いて気分が滅入って。あの眠れぬ夜の事なんかまで思い出してしまう。

ますます自己嫌悪に陥っていく。悪いループに入りかけてる、わかってるが。キュリーのところに戻る前にはなんとかしないと。

気が付くと、ケイトは自分がいつの間にかマーケットの外に飛び出していたことに気が付いた。

周囲を確認して自分がどこにいるのかと考えていると。背後をバラモンを引いたレイダーが通り過ぎたが、そいつのバラモンの後ろにはつながれている奴隷たちがゾロゾロト列をなして歩いており。ケイトはわざとそれから目をそらす。

(嫌なものを見た。やっぱり帰ろう、最悪)

そう思うと同時に、いきなり「ん？」と大きな疑問が湧き上がると好奇心を思いきり突き飛ばして見せた。

ケイトは背中越しに顔色を変えて振り向くと、そこにはバラモンに惹かれた奴隷たちの列が。彼らの背中が見えた。その中の何人かは、新しく“外の世界”から来たのだろう。ぼろではない服装をしていた。

「——っ!?!」

疑惑が確信に変わった。

ケイトの両目はカツと見開かれ、驚きのあまり思わず腰から力が抜けるかと思っただ。震えていたのだ。

続いて周囲に人がいないか確認したのは助けを求めようとしての事だったが。すぐに冷静さを取り戻すと、やる気もなくボウと掃き掃除をしている奴隷を見つけ。「ちよつとあんた!」とケイトの地声で呼び止めると、相手が怯えているのも構わずに「聞きたいことがある」と問い詰めていく。

「な、なにか?」

「今のあれ。奴隷達、あれはなに?」

「なに?……なにつて奴隷だよ。ここじゃ珍しくもない」

「そうじゃなくて!そうじゃ——このマーケットじゃ人は売ってなかったでしょ?」

「ああ、そういう意味かい。そりやそうだよ、あれはパックスのビジネスなのさ」

「パックス?ここのレイダーよね?」

「そ、そうだよ。おかしな格好をしている連中がいるだろ?あれがそうだ、あいつらは誘拐で身代金をとった後、奴隷として売るんだよ。そのために自分達も奴隷商をやっているのさ」

「そう!クソツタレねっ」

「えっ!?!」

「いいの!ありがと」

先ほどまでの鬱々とした思考は綺麗さっぱり吹き飛んでしまっている。

そのかわりにこの事態に自分がどう動きべきなのか、どうすれば一番良い結果になるのか必死で頭の中を動かそうとする。

馬鹿だから名案がなど浮かんでこないが。これが空っぽなら、カラカラとむなしい音でもするのだろうか？

(アキラの奴には近づけない。ハンコック？駄目、レイダーとまだ一緒のはず。キュリーは？あの娘を連れ出して、あたしはなにをやらせようってのよ)

何とかしなくちゃならないが。何とかするなら自分がやるしかないのだと、そう思えてくる。

レイダー達の前だが、自分の頭を掻きむしりたくもなる。なんでこうなった？いや、どうしてそんなことになる？

「何をやってんのよ、パイパー。敏腕記者だって、自分で言っていなかったっけ？」

そう、パイパー・ライトだ。

こんな時代にあっても、ダイヤモンドシティから正義の声を上げていくことを自らの使命と考える戦う報道記者。

その彼女は、先ほどケイトの背後を歩く奴隷たちの中に混ざり。

いつもは輝くその聡明さは抜け落ちたボロボロの姿で、言われるがままに歩いていたのであった。

## 図書館戦争 (LEO)

ダイアモンドシティの宿屋にある2階から屋根の上に出ていたロニー・ショウは頭を冷やす必要があった。

悩ましさから険しかったまなざしは、そこから見える人々の生活の息吹を感じることでいくぶんか和らいでいく。

(これだよ。これこそが平和な生活ってやつだよ。大切なことだよ。連邦にいる力なき人々は誰もがこのダイアモンドシティに住むことにあこがれる。

旧市街の中にあつて、その緑の壁が中にあるものを守ってくれている。本当の安心と安全が、ここにはあると信じている。

ロニーの考えるミニッツメンとは、この光景をすべての連邦に存在する居住地にもたらす存在であることだった。

背後の扉が開くと、若者が顔だけをのぞかせて「ロニー？」と聞いてくる。「頭を冷やしたいんだよ」そう返すと、彼はうなづきながら出てきてロニーの隣に立った。

「この町はいい。いつ来ても平和だよ、外で騒ぎがあつてもオタオタと怯える人はいない」

「はい」

「マクドナウ市長の手腕で奴だね。たいした男だよ」

「——でも評判は良くないですよ。人気はありますが」

若者はわざとロニーに逆らうようなことを言ったが。そんなことでは怒ったりはしない。

鼻で笑い、手を横に振って否定を入れながらロニーは口を開く。

「実行できる男だからさ。他人から完璧であることを要求されてるんだよ。」

「つらい事件が多くあつたが、彼はその時期に人々を団結させて率いてきた。今もそうしてる」

「グールの件はどうです？」

「あのシワシワの連中かい？ただのジャンキーだろ、ここを放り出されりゃ。薬を買うキャップ欲しさに簡単にレイダーになるような奴

らだ。

実際にいるじゃないか。同じく市長を名乗っている、シワシワの殺し屋がね」

「グッドネイバーのハンコックですか」

「そうさ。だいたいだね、たしかにこの市長は過激な方法ではあつたかもしれないが。不安に押しつぶされて平和だったこの場所をまとめるには最高の方法だったことは、今のここを見れば一目瞭然。説明なんて必要ないのさ。」

そりや確かに今でもあれを非難する奴らはいる。でも、彼が成し遂げたことこそ見るべきだ。

苦しい時に歯を食いしばって、自分たちの居場所を守り切った男がまだここに居る。この町はこれからだって平和に違いないんだ」

「俺は別に非難してないですよ」

「そうかい？」

ここで売られてる新聞をお前らは貪るように読んでるが。あそこは毎回、マクドナウ市長を突きまわしているじゃないのさ。あんなことを、なにが楽しいやら。

ハンコックは嫌い、マクドナウも嫌い。それじゃ自分は何が出来るって？

どうせ足を引つ張ることしかできない。口先だけの奴が書いているに違いないさね」

「ロニー、知らないんですか？あの新聞は美人記者が書いているんですよ。だから俺達も読んでるんです」

「なんだい、色気かよ。現金なものだね」

「別にいいでしょう。それよりロニー、知らせは送りましたよ。中に戻りませんか？」

若者の言葉に頷くものの、ロニーはまだ動く様子はなかった。

彼女と彼女が訓練した“本物のミニッツメン”である若者たちの耳には聞こえていた。ダイヤモンドシティの外、ボストンの中心辺りから感じる激しい戦闘の気配を。

ロニーの商隊のひとりに市長に知らせに走らせたが。これからマ

クドナウがどう動くのかは興味がある。

しかし中に戻らないのは別の理由だ。

「戻るなら整理しなきゃならないんだよ。どうにもわからなくつてね」

「ああ、なるほど」

「ガービーのミニッツメン……そうじゃないね。ガービーとその将軍とかいうのは、なにを考えているんだい！」

口にするごとに興奮が戻ってきて、最後はキツイ調子で血圧も上がっていく――。

ロニーはあれからダイヤモンドシティとバンカーヒルの間で商売を続けていた。

それはもちろん、ガービーのミニッツメンとやらが本物かどうかを見定めるためだ。若い奴を送り込み、今の彼らが何ができて。なにをしようとしているのかをずっと探っていたのだ。

聞えてくるのは驚きと感心、理解よりも先に訪れるのは不安と恐れであった。

ガービーのミニッツメンだが。入隊には複数のパターンからなるテストが用意されていた。

それを連日の事通うことで、すべて合格するとようやく入隊手続きに入る。しばらくはダイヤモンドシティのはずれにあるレッドロケットで寝泊まりさせられつつ。そこでも毎日テスト内容が繰り返し要求される。

そして人数がそろうと、チームに分けられ。本格的なミニッツメンとしての訓練に入る。

それはまるでガンナーを思わせる傭兵を求めているかのようだが。かつてと違いガービーらが最初に求めるのは正義と正しさを愛する心ではなく、まず戦士としての能力の有無であった。

だがこのくらいならロニーも眉を顰めるくらいですませてやれただろう。

問題はこのミニッツメンは居住地の経営までも手を伸ばしているということ。

一応は自治をさせているというが。彼らの生活にミニッツメンを食いこませ、支配とギリギリの線を綱渡りしているのだという。

さらにここで手に入れたキャップで武器とアーマーを用意し。今あるトップチームから武装と防具を強化させているらしい。賢いやり方だと認める一方で、強い力と保護に見せかけた支配を広げているようで、不快さしか覚えない。

そして彼女を最大にイラつかせるのは、ガービーと將軍とやらの今の目的だ。

まず信じられない話だが。複数のチームをガービーは誰にも見られず、気づかれることなく東に移動させて活動させているらしい。

これは彼自身も、スロッグとかいうグールの居住地などに短期間で顔を出したという話がある。この連邦でそんな方法があるとは思えないが、やったらしいことから何かを隠しているのは間違いない。

さらに送った部隊に下されている命令というのがまた意味不明なのだ。

海岸線に沿って北東部から調査をおこなっているらしい。そんなことをする理由がロニーたちにはさっぱり理解できない。

無人となりつつあるかつての町、かつては居住地であったが。なんらかの理由で放棄された跡地。そんなものを調べてどうするということなのか？

次に思い浮かぶのはボストン空港だ。

ウェイストランドを渡って連邦に侵入してきたエルダー・マクソン率いるB・O・S。

バンカーヒルでは彼らはインステイチュートの脅威とやらを口にしていたというが。あの連中がただそれだけのためにここにやってきたと信じるのは無理がある。ガンナーが脅威であるように、あいつらがいつ連邦の民に牙をむくのかわかったものじゃない。

その時のことを考えて——というなら、ガービーは大したものだと感心しただろう。

だがそこでもないという。

ガービーと將軍とやらは東に兵士は送っても、知りたいことは北部



にあると言っているらしい。

そこになにがあるか？

なにもない。めぼしい資源の噂もないし、なにかの兵器が隠されているという噂もない。なにがしたいのかさっぱりわからない。

「なんで北なんだい？・南だろ？・ボストン空港、キャツスル。ガンナーもいる。それら全部がどうでもいいってのかい」

「……」

「なにかわからないのかい？」

「俺達に聞いても無理ですよ。みんな頭をまだ抱えています、あんたがないと話が進まないんですよ」

「それはそれで困ったものだね。こんなことをいつまでも続けちゃいられないってのに」

「っ!?!……ガービーとの合流はナシですか」

「まだ決められないよ。でもここでの商売は難しいんだ、このままでと身動きが取れなくなっちゃう。その前に決めないとねえ」

ロニーにとって悩ましい時間はまだ続いていた。

同時にいろいろな理由から時間切れが迫ってきている。その間に正しい情報を集め、正しい決断を下さないといけない。

ブレストン・ガービーは大丈夫なのか？

新たな將軍、レオという男はどういう奴なんだ？まだその姿が、ロニーには見えてこない。

ハングマンズ・アリーに駆け込んできたダイヤモンドシティのセキュリティの知らせは、見事にミニッツメンたちを不快にすることに成功した。

マクドナウ市長はただ一言「騒がしいから見てきてくれ」これであらゆる言葉で着飾って、送り付けてきたのは明らかだった。それでも無視するわけにもいかない。

ボストンの市内は危険ではあるが、今は少ないが新人たちが形ばか

りの巡回をやっていた。その彼らに向け空に向かって信号弾を撃ち放つ――。

ポストン公立図書館はこの時からこの町一番の激戦区となった。トリニティタワーで次のリーダーを決めきれないでいるスーパームュータントたちが、コリブ―駅が攻撃されたのを知ると。恐ろしいことにこれは図書館への侵入者の仕業であるとなぜか断定してしまった。

その結果、新たな攻撃部隊が編成され。咆哮と共にタワーから出発する。

一方で実はすでにレオ達の背後には忍び寄る存在があった。

静かな図書館の中、建物の影、床に空いた穴の底、蜘蛛のように天井を這う人の姿。

コンドウらが放った暗殺者たちはすでにここで襲撃しようとする。館の中に潜り込んでいたのだ。

コンドウ自身が、今回の正しい目標はレオであるとしているだけあって。選ばれた暗殺者たちの使う技は怪人と呼んでも差しさわりのないレベルのものばかり。

また暗殺者の側も、依頼人が集めたメンバーの中にひとり壊れたのがいて。すでにマヌケ面を下げて戻っていったことから、必ずレオをここで仕留めることで一致。珍しく全員が互いの足を引っ張ることなく、息を殺してその瞬間を辛抱強く待ち続けている。

彼らが狙ったのは、ここからレオ達が立ち去ろうとする時だった。出入口に到達する前に次々と襲い掛かることで力と罨でもって確実に仕留めようという――。

レオにとって運がなかったのは、暗殺者にとって脅威となる忠実な戦闘ロボットとして生まれ変わったコズワースと、心強い人類の友人でもある犬のカールがここにいなかったことだろう。

彼らがこの建物の中に入ってくることができたなら、何者かが建物に侵入したと同時にセンサーやその鼻が異変を感知していただろう。もしやここまで強運で切り抜けてきたレオも、遂に終わる時が来て

しまったということか？

図書館に破壊と混乱が訪れたのは、スーパーミュータントたちの驚くべき俊足がなければなかったことだ。

——静寂はいきなりに破られる。

そろそろ調べることがなくなってきた感のあるレオの耳に、遠くで犬とロボットの警告音にも似たなにかをとらえた気がした。

自然と指は脇に置いてあったライフルに触れる。

次に図書館のすべての出入り口がスーパーミュータントたちによつて押し破られると、館内の警報がけたたましく鳴り響く。

それに思わず反応してしまったのは、あろうことかと気を待ち構えていた暗殺者達。それはほんのわずかな動きでしかないはずだったが、素早く冷静に立ち上がるレオの視界と勘はそれらの位置を特定してみせる。

レオのライフルは室内のひっくり返っていた木製の本棚に向けて火を噴くと、そこにしゃがむようにして隠れていた暗殺者のひとり半身を削り取られて肉塊となった。

続いて銃口はそのまま窓の外に見える向かいの建物の廊下へ。

同じく突入してきたスーパーミュータントに反応し、警備システムはターレットと警備ロボットの攻撃命令を下す。

こうして戦闘は始まったが、皮肉にもそれが3つ巴であるということとを正しく理解しているのはまだ、誰もいない。

——  
デューコンとエイダもまたひと足——いや、ここはふた足というべきか。

戦闘が続く図書館の前に、隠れてそれを見て居るミニッツメンに続いて到着した。

(うわあおーこりゃ、スゲーな)

いつもの如くこの男は無表情、そして感想は他人事ではあったが、少なくともそこに先に到着していたミニッツメンたちを押しつけて

飛び込んでいこうとまでは考えていなかった。

でもエイダはそのつもりだ。

「スーパーミュータントですね。これほどの数、なにかあるのでしようか」

「ああ、見りやわかるが。なにかあるっていうなら、そりやあるんだろうよ。だってあそこには俺達が会いに来た、ミニッツメンの將軍様がいるんだろう?」

「スーパーミュータントがミニッツメンを? 本当にそうでしょうか?」

「ああ、まあな。俺もそう思うが——」

しゃべっている間も、図書館前の大通りでは押し寄せてくるミュータントの部隊を。大型だが見たこともない犬とロボットが。一匹と一台だけで応戦している。

両手の重火器を降りまわしては撃ってくる相手にけん制しつつ。接近戦を仕掛けてくる緑の大男たちにはその不格好な4足を器用に動かして接近戦もこなす。

「突入の準備はよろしいですか?」

「準備がよろしいって何の話だ? まさかあそこに行こうって言わないよなっ。」

「レオは中にまだいます。戦闘中です、助けなくてはあなたも話はずきません」

「ああ、それは確かだが。どうもご主人様の悪い影響を受けてるようだから教えてやるが、あのロボットはどうするつもりなんだ? それを聞くまでは絶対に俺はここからは動かないからな」

「それは問題ではありません。彼はコズワースです、味方です」

「えっと、味方? コズワース? どこかで聞いた覚えがある」

「レオのロボットです。元はどこにでもいるMr・ハンディでしたが。今は違います」

(あれが!?)

よく見ると確かに胴体——それも前面から見る限り、ハンディの球体っぽさがあるように見えなくはない。

だがもう、まるで別物である。

今だって4本足を器用に使い、四股を踏むように体を大きく傾け、一本の足を振り上げて見せると。ガクン、と何か衝撃が走った後で勢いよく振り下ろされる。

足元にいたスーパーミュータントを地面にめり込ませようとでもいうように踏み倒し、無防備な腹を踏む足首から炎が噴き出す。

あまり聞いたことのないスーパーミュータントたちの悲鳴が複数あがるのをディー痕は聞く。あんな動きを見せるロボットなんて見たことがない。

「なあ、あの図体はどう見てもハンディって大ききじゃない。そのコズワースと、なぜわかるんだ？」

「それは簡単です。あの体のほとんどは私のために用意されたものでした。私がアキラに頼んで、それをコズワースに譲ったのです」

「ああ、なるほどな。」

お前さんが本当はああなっただってことでいいんだな？

なるほど、俺の親友は確かにこんな馬鹿みたいに悪夢じみた混乱を引き起こすのが得意だった。あいつがいないから、そんなことは起きないとすっかり油断していたようだな。ひどく俺は動揺してる」

「——数値はその影響は見られません」

本当に調べてるのか？の言葉がのどまでせりあがったが、ディーコンは耐えた。

「今のはもちろん嘘だ。ジョークだよ。それで、行くんだろ？」

「はい」

「よし——それではミニッツメンの諸君！悪いが道を開けてくれ、あれは招待状が必要なパーティーだね。こっちはそれに遅刻してしまつたらしい」

エイダの前に立つと、ディーコンはそう言つて隠れて怯えて居るミニッツメンの間を抜けて大通りへと飛び出していく。

すると戦闘状態となったエイダがディーコンを追い抜いて先頭に出て、輝くひとつ目がさつそく高威力のレーザーを発射した。

「なんてことだ、なんてことだ!?! しっかりしろ、しっかりしろよ。ガービー!」

頭を低くし、周囲を探りながら自分を鼓舞する。

残念ながらここまでガービーはいいところがある。將軍に頼まれ、図書館内の警備システムのチェックとやらをやっていたわけだが。ターミナルにアクセスすることができないせいで、やれたことと言えばせいぜい過去にここを知識の最後の砦だと信じて戦った人々の残した記録に目を通すくらいのものであった。

それが装置が突然動き出すと、あちこちで騒ぎが始まり。ターレット、ロボット、スーパーミュータントを横目に這いつくばって必死でレオの元に移動していた。

(落ち着け、こんなのピンチとは言わない。対処できるさ。)

ああ、そうだ。地下の駅を攻撃されたと知って、スーパーミュータントが援軍を出したんだろう。まさか日のあるうちに送り込んでくるとは思わなかった。失敗した。

それで——將軍は無事か? 彼を守って脱出しないと。それにしても……)

それにしてもさきほどからおかしなものを床の上に見る。

レイダーではないが、明らかに見た目がアウトローであることを主張する“新鮮な”人間の死体がいくつか転がっている。

ガービーが目を通した記録に間違いのないなら、この場所は100年以上封印されていたはずなので。つまり彼らが中に入ってきてから、同じように侵入してきた奴らがいたということになる。これをレオは気が付いていたのだろうか?

「……將軍?!」

廊下に出ると、その先の廊下の角に座り込むレオを見て、思わず声をかけた。

すると「死ネ、ニンゲン!」などの罵声と共に、レオの隠れる壁の向こう側が激しく攻撃が始まって削られるのを見た。

なのに本人は全く動揺するでもなく、ガービーに指でこっちに来る

ように指示を出している。

「すまない、交戦中だった。思わず声をかけて」

「しばらく会議室で地図を前に考え込むのに慣れて、現場を忘れてしまったんじゃないか？かなり面白いガービーを見せてもらった」

建物は囲まれ、襲撃者複数いるというのにこの男にまだ余裕が感じられるのが信じられない。

だがそのおかげでガービーも強がることができるのだ。

「それで酒場の淑女たちを口説いたらいいさ。きっと皆があんたから聞きたがる」

「そんなことがあるかな、ダイアモンドシティの密造酒は。正直なところあれは飲み物じゃなかった。君が代わりに飲んでもらえるか？」

「俺はお断りするよ。あんたの引き立て役はもう十分やってるはずなんでね」

それより、と軽口を切り上げガービーは未確認の侵入者について聞いた。

レオはうなずくと、ガラクタの下から大きな改造されたレーザーライフルを引っ張り出して見せてきた。

「そのひとりがコイツを持っていた。一見するとこれはただのレーザーライフルのように見せかけているが、いわゆる弾倉にあたる部分が特にいじられていて。大量の予備弾を用意できるようにされているようだ。」

このことから考えるに、信じられないがこれはライフルじゃなく高出力のレーザーを連射するものだと思われる。冷却システムが優れてないとできないはずなんだが」

「……おいおい、嘘だろ」

「わかるかい、ガービー？」

「今更目を背けることはできないさ。こいつは暗殺者の武器だ。」

なんてこった。俺達は暗殺者に狙われていたのか!？」

「フッフ。そのようだ、私もさつき驚いた」

「笑い事じゃないぞ、將軍！」

「いや、笑うべきだよ。ガービー、今は彼らのおかげで私達はだいぶ助

かってる」

「どうやら暗殺者たちは襲撃後、レオ達を裏口に誘導するつもりでそこで重点的に待ち構えていたようだ。」

「なのに正面と裏口の両方からスーパーミュータントが突入。正面はターレットとロボットが相手をしているが。裏口でも同じ戦闘が開始されると、暗殺者たちはそれに巻き込まれてレオとミュータントに前後を挟まれる形になってしまったのだ。」

「つまり2人と裏口の間には、一本の通路にスーパーミュータントとわずかに生き残った暗殺者がいるということになる。」

「だがそれは今だけだぞ、将軍。」

「スーパーミュータント達が押し込んできたら、結局は俺達は包囲されていくという現実が待っているだけだ」

「わかってる。それよりも聞えないか？外の音を」

「言われてガービーは耳をすませてみせたが、騒ぎがあるのでよくわからない。」

「だが、確かに近くで起きている騒ぎとは別のものがそこにはあるよ。うだと、感覚で理解することくらいはできた。レオが言わなければ、ガービーならきつと「気のせいだろう」で終わらせてしまうような引っ掛かりでしかないが。」

「なんだ？あれに心当たりがあるのか、将軍？」

「もちろん。コズワースだ、それもちよつと前から様子が変わった。外ではなにかあったのかも」

「だがあの巨体じゃ建物の中には入れない。それはわかるだろう？」

「なら正面を突破するかい？戻る以外に、ほかに道はないよ」

「それもまた無理な相談だな。あつちは俺達それぞれが着るパワーアーマーが必要だ、それもメンテナンスされた最高の状態の奴がな」  
「続いてガービーは「いつ（突撃を）はじめるんだ？」と聞こうとすると、レオの表情に変化が生まれた。」

「両目をカッと見開くレオは廊下に顔を出すと、奥の裏口に向かって「カール、カール!!」と声を上げる。」

「ガービーは慌ててレオの体を引き戻しつつ、声に反応して撃つてく」



るスーパーミュータントに向けてレーザーマスを発射する。

そのおかげで一瞬だが見ることができた。

スーパーミュータントの向こう側に見える出入口。その扉が押し開かれ、殺気を全身にみなぎらせる獣が飛び込んできた。

それは目の前の緑の大男の首を後ろから飛びかかつて引きずり倒そうとし。情けない声を上げる味方に、外から何かが飛び込んできたのだと察した仲間達が振り返った。

「將軍——」

「ガービー、突撃は今だ！」

2人は飛び出すと、廊下の途中で必死に命を長らえることだけに集中していた動けない暗殺者を片付けていく。

一方で、犬に続いて不気味に輝く瞳と共にガービー達にも見覚えのあるアサルトロンも図書館の中へと突入してきた——。

ハングマンズ・アリーにいるミニッツメンたちは仲間がまだ報告に戻ってこないことを心配していた。

あの凄まじい戦闘音は数時間前には聞こえなくなっていたが。市長の要請とはいえ、素直にに応じて新兵に見に行かせたことは間違っていたのではないかと不安になっていたのだ。

明日になれば、一応の搜索の名で死体を探しに行かないといけないかもしれない。

そう思い、裏でどのくらいの規模で搜索隊を出すか話し合っている。その報告者たちが戻ってきたという、喜ばしいニュースが飛び込んでくる。

彼らは戦闘には巻き込まれたなかったらしいが、全員が魂が抜き取られたかのような有様で戻ってきていた。

ミニッツメンたちは仲間に対し「大変だったろ」「無事でよかった」と言いながら、なにを見たのかと報告させようとした。

彼らの発言はやや不明瞭ではあったものの、しかしその内容には度肝を抜かされることになる。

というのも、騒ぎを見に行った彼らが見たものは。

なんと現在は休暇を取って姿を消している將軍とブレ斯顿・ガービーの2人が。以前からダイアモンドシティへの侵攻の足掛かりとして図書館近辺に姿を見せていたスーパーミュータントの部隊と激突。さらに押し寄せる援軍にもとせず「たった2人だけで」（この辺り、他に誰かいたという者もいたが。よくわからない、とする者が圧倒的に多かった）殲滅してしまったのだとか。

その修羅のごとき壮絶な戦いに飲まれてしまい、彼らは何もできなかったのだと。

最初は何を馬鹿な、とミニッツメンたちは信じなかったが。

ダイアモンドシティでも商人たちが町の中でおびただしい数のスーパーミュータント死体を見たとの情報が入ると、信じないわけにはいかなかった。

かくしてここに新たな伝説がまたひとつ誕生する。

ダイアモンドシティの酒場では、休暇中のガービーが町を狙って密かに部隊を送り込もうとするスーパーミュータントの軍勢に気が付き。新たな將軍を相棒に、たった2人だけでその進行を食い止めたのだという荒唐無稽な物語が数日後には作られ、完成する。

パブリック・オカレンシアは現在メインライターが別の事件に取材中につき、この件については知らないということにした。

マクドナウ市長は、運悪くガービーなんぞに秘密部隊を見つけられてしまったスーパーミュータントの知性を嘆き。ミニッツメンの英雄の蛮勇に震えるものがあつたが、わからないふりをする。

そしてロニー・ショーの悩みはまた一段と深くなってしまった。

いくらガービーや將軍とやらが凄腕だとしても、スーパーミュータントの軍勢をたった2人だけで薙ぎ払ったなんて馬鹿な話は信じはしない。だがそんなうわさ話でも、嬉々として語ってはミニッツメンを称える人々の姿に。自分の悩みなんて実はくだらないことではないか、などと考えてしまいそうになるのがたまらなかったのだ。

かぐわしいコーヒーの匂いで目を覚ます。

目の前にガービーがいて、空はうつすらと朱色になっていた。

「コーヒーだ、將軍。日が昇る前に準備したほうがいいだろうと思う」「わかった、ありがとう。今、起きれ——っ？」

る、というはずが別の言葉が勝手に飛び出した。

動いたとたんに、背中と関節が一斉に軋んだせいでうなり声に変わった。

ガービーはそんなこちらを見て軽く笑うと「アンタも人間だとわかってホツとしたよ。俺は結局ほとんど眠れなかったからな」と言う。

前日、図書館での騒ぎが終わると、エイダとデイーコンがこの旅に新たに加わることになった。

あんな戦闘の後で夜の街を歩き回る気になれず。

デイーコンの勧めで建物の屋上で一夜を過ごすことになった。

そこでエイダから、レールロードはインステイチュートから解放した人造人間たちをミニッツメンの居住地にも受け入れて貰えないかと提案を聞かされた。

だがそれはガービーがいい顔をしなかった。あの場所からの脱出で彼らが助けてくれなければ、きつとはつきりと「駄目だ」と口にしたかもしれない。

そこで私は妥協案として「アキラが直接管理している居住地で、彼が許可すればいいのではないか」ということにしておいた。

ガービーは表情では「賛成できないぞ、將軍」と訴えてきたが。

思うに今後、居住地での人造人間騒ぎは避けられないだろうし。レールロードに近しく、彼らを知っているアキラならどうすればいいのかわかっているだろうという期待があった。

事実、エイダはデイーコンがもてあました何人かの人造人間たちをすでにコベナントに送ってあるらしい。

デイーコンは饒舌な男ではあったが、レールロードの状況については巧みにかわす術を心得ていた。

なのでこちらにもミニッツメンの事ではなく。今回の調査の目的について話したのだが、これが面白い展開となる。

「連邦のすべての警察署のデータ？ふん、それならレールロードは役に立てるかもしれないな」

「レールロードが？どうしてだ？」

「レオ將軍閣下。アキラから聞いていると思うが、俺達レールロードの真の敵はインステイチュートなんだ」

「ああ」

「そのために俺達は常に広く情報を求めている――。その一環で、だいぶ昔の話になるが。警察署のデータをかき集めたことがあった」

「デューコンが言うにはレールロード本部には、全ての警察署からかき集めるようにコピーしてきたデータがまだ残っているかも、と言う話であった。」

「私はそれが事実であれば助かると答え、ガービーはなんでそんなことをしたんだと不思議がった。」

「デューコンの答えは明確だった。」

「いつものことだよ。そこに役に立つがらくたでもあるんじゃないかと思っただのさ。残された過去のデータにインステイチュートに関係するものがないか、とかな」

「でも見つかったのは、昔のインステイチュートの主任のひとりが。デートで酔っ払い、違反切符を切られた情報くらいしかなかったのさとジョークに変える。」

「もし彼の言っていることが本当であるならば、ニツクの悩める捜査はかなりの進捗を見せてくれるに違いなかった。」

「――デューコン、そうなると聞かなきやいけないだろうね。こちらにはなにをしたらそれをゆずってくれる？」

「ゆずる、だって？」

「いや、すまない。そうだね、ここは素直に売ってくれるのかと聞くべきだった」

「……かなり重要な情報のようだな」

「私と私の友人にとっては多分ね。それでも確認してみなければ、

はつきりしたことはわからない」

「ふむ、いいだろう。」

「どうやら個人的なものと言うのは本当らしいからな。ミニッツメ  
ンに高くは売れないようだし。それに、実物を確認してないから俺も  
値段を今すぐ口にはできない。そこでこういうのはどうだろう——」  
「？」

「あんた面白いことを言ってただろ。あの場所で、アキラの過去を調  
べていたと」

「手掛かりを求めてたんだ」

「実は俺もそれについては大いに興味を持っていてね。少しアンタの  
調査とやらに付き合わせてもらえないかな」

「それは構わないが——」

「これからの予定は？次はどこに行こうと思ったんだ？俺も旅には慣  
れてる、きつと便利だと思っぞ」

「……彼に迷惑がかかるようなことはしたくないんだが」

「それなら大丈夫だ。あの年若い小僧は、俺の一番の大親友だからな」

「参ったなあ」

結局、私は断り切れなかったのだ。

そして次の目的地は、同じくこの町の中にある。

ポストンビューグル社、戦前に存在したあの時代の新聞社。

それより数時間前、深夜。  
闇の中にあるポストン公共図書館から出てきたのはあのコンドウ  
であつた。

彼は戦鬪の跡から、騒ぎの最初から何があつたのかを脳裏に現実の  
ように組み立てて再現しにきたのである。

結果はわかっている。スーパーミニュータントは愚かすぎる決断と  
無謀な攻撃で、全滅という悲惨な最期を遂げたではどのようによ？。

得られた情報からわかつたことは彼が認めた脅威、レオの恐ろしさ

を改めて自分の目で確認したということか。

この男は明らかにオカシイ。

敵も味方も、すべてが滅茶苦茶で大混乱であったはずなのに。

恐怖や不安に飲み込まれるどころか、まったく感じていなかったかのように判断して動いていた。

(殺そう。やはり生かしておくのは危険に過ぎる)

コンドウは固く心に改めて誓う。

レオは鈍い男ではないはず、今回暗殺者が紛れ込んだことに気が付き。この先には用心して、簡単には近付けさせなくなるかもしれない。

(やるならば今すぐ。それも誰かの手にゆだねるのではなく、この手で！)

自分は焦っているのだろうか？コンドウは自問する。

だが答えは、いつも通りはつきりしていて迷うものはない。

B・O・Sの連邦への来訪は以前からあるだろうと予測はしていた。

だが、そこにミニッツメンは入っていないかった。

彼らは今、北部全域を手に入れようと動いている——これは間違いなくアキラが動いた結果だろう。

軟弱な正義感だけを振りかざす民兵集団。それが今、軍隊のように装備と質を高めてきている。

アキラとの決着がつけばいいが。

このままではB・O・Sとインステイチュートの間にミニッツメンが食い込んでくるかもしれない。そうなる前に手を打つ必要があるのだ。彼らのリーダーをとにかく暗殺する。

もしかしたらそれがアキラとの関係にまた新しい変化を生み出すのかもしれない。

### オーバーキルズ Ⅲ (Akira)

コベナントが新たな客人たちを迎え入れたのは、少し前の事であった。

その時、居住地の門の前に集まっている集団がいると聞いたドクターは、自分たちはここに来て待つように言われたのだと繰り返し述べる彼らの主張に戸惑いと違和感を覚えた。

というのも、一応の確認のためにと全員の健康状態をチェックしたが。彼ら全員は実に健康そのもの。持病だつてないと言う。

しかし、確かあの若いこの居住地の支配者は以前このドクターに「ここにはミニッツメンか、居住地では治療できない症状を見せる患者なんかを引き受ける。いつかは居住地としても整えるつもりだが、当分はそういうことだと考えてくれ」と言っていたのに。

その証拠に現在、ここに居るのは患者とその家族、そして自分とロボット。

彼らの主張が正しいと言うなら、あの青年は特別に認めたとということか？

だが到着の翌日には、彼らが存在しているというだけで問題だというところが次第に分かってくる。

ここではミニッツメンが訪れる以外には基本、患者たちの回復のための静かな時間が流れるだけだった。あとは看護の疲れが出ないよう、デIZERのレモネードで誰かがわずかな時間休憩をとるだけ。

これまではそれでまったく問題がなかったのだが――。

自称、客人たちは静かで何もすることのないここでの生活にさっそう飽きを感じているようだった。

ドクターや患者、その家族たちに会話を求めてくるくらいは別にかまわなかったが。そのうちにおしゃべりの内容が質問だけとなり。「どうしてここではだれも働かないでいられるのか?」「なぜ弱った人だけがここにいるのか?」「恐ろしい人たちはなぜここに来ないのか?」など、答えが難しい疑問をぶつけるようになる。

さらにそれは会話から態度へとエスカレートし始め、ドクターの仕

事の邪魔を仕掛けたり。いたずらで迷惑かけたり、検査結果やこれからの治療における考察や記録を勝手に患者に漏らしたり。

次第に居住地の中に険悪な空気が流れるが。彼らの態度はまったく改められる気配がない。ストレスだけが溜まっていく。

「誰か説明してください！なんですか、あの人たち。弱っている病人相手に話すように要求して。我が物顔で滅茶苦茶やる！」

「まったく、なんで静かにできないんだ！」

一つ救いがあるとするなら、それは客人としてやってきた彼らが実は全員レールロードから送り出されてきた自由にするための人造人間たちだと気づかれなかったこと。

だが、それも時間の問題かもしれない――。

ある日、コベナントの住人たちは何者かに自分たちの私物が荒らされていることに気が付いた……。

不思議そうな顔をしているシート―を脇において、アキラはこのサファリアドベンチャーに設置された声明の技術を知り。圧倒されていた。

かつてシート―の家族として迎えられたものの、何らかの理由で命を落としたと言う科学者の謎。ゲータークローなどのデスクローの亜種がここにだけ誕生した理由。終わってみれば、すべてを明らかにしてくれていた。

だが――。

「どうした人間？めずらしく悩んでいるようではないか」

「――困った。参った」

「いいぞ。お前の困った顔は小気味いいな。近くでもっと見せてもらおう」

「ああ、楽しんでくれジエゼベル。ついでにその理由もお前に教えてやるさ」

「なんだ？不気味だな、嫌な予感がする」



「お前のようなのが工場で作られた、とするなら。この場所は生命の誕生を可能にする工場だ。」

文学的な表現ってやつをすると機械で出来た醜い巨大な子宮って奴だよ。この意味が分かるか？」

「お前のような極悪人が喜ぶ機械オモチャを見つけたんだな」

「おいおい、自由と知能の信奉者がその程度の視野しかないのは失望だ。いや、ジエゼベルならそれも納得か」

「なんだと？」

アキラがログスに与えた指示に従わず。他のロボットたちがフロアの中の計器類のチェックを行っている中。珍しく上機嫌でこちらに話しかけてきたジエゼベルを軽くからかいつつ、しつづけてもやる。

その相手をしながらも、僕の脳はフル回転で「ここをどうしたら一番いい？」と考える。この生命創造のシステムは近くあのレイダーのどれかに引き渡す契約となっている。それは危険なことだし、いつそのこと“計画”を前倒しにするべきか？

「僕がここでお前たちを使って暴れていたのは、レイダーって子分面した馬鹿どもにここを譲ってやるためなんだ。」

だから当然、そのうち奴らの誰かが喜び勇んで居座ることになる」「それがどうした？」

「マーケットを見張らせていたのに、あそこにいる奴等の脅威度はチェックしなかったんだな。」

ここにきた奴がこのシステムの正しい使い方を理解したら、どうなると思う？」

「……レイダー無法律者が？ここを？最悪だ」

「随分控えめな感想だな。ネズミモグラ人間、なんて“商品”をつくらないと誰が断言できる？」

「ああ、お前はそうするということだな。」

だがなるほど、確かにお前ほど邪悪な人間がいるなら。似たようなことをやる奴がいてもおかしくはない。納得したぞ、愚かな人間」

「デスクローならぬ、ヒューマン・クローも作れるな——あんまり強そ

うじゃないけど」

「お前、実は楽しんでるな？つまらん……」

離れていくジエゼベルと入れ違いにシートーが近づいてきた。

「トモダチ、終わったのか？これで？」

「ああ——そうだね。君が教えてくれた家族の……ドクターの問題は解決した。もう、君の家族を襲おうとするあいつらは戻ってこないと思う」

凶暴で危険なゲータークローではあったが、どうやら個体数を増やすことにはそれほど熱心ではなかったようだ。

群れるより、園内をバラバラで徘徊してくれたおかげで。実際のところシートーとローグスだけで事は十分に足りていた。僕はほとんど指示と推理、見学だけのためにここに居たようなものだった。

「そうか！シートー、本当にうれしい」

「それでなんだけどシートー。友達として質問があるんだ」

「なんだ？何でも聞いて」

「実は僕がここに来たのは、僕の知り合いたちをここにうつらせようと考え。様子を見に来たのことだったんだ」

「ああ——そうだったのか」

「それでちよつと聞きたいんだけど、君は彼らが来ても仲良くできないかな？」

軽い感じで聞いてみたのだが、シートーは無表情になって返してくる。

「シートーは友達でなければ絶対に信用しない。そんなやつらと生活はできない」

「ああ、そうか。そうなんだ……」

まさかこうハッキリといきなり断られるとは考えてなかったが、シートーの考えはしつかりとしているとわかったことで。今回は自分がかつ過ぎたのだと舌打ちする。

だが、まだまだここからだ。

困った顔で頭を掻きつつ、片手でポケット薬剤のケースのなかをまさぐり。指の間にメンタスの1錠を挟んで自然に口元に持っていく。

フルーツの味が口内にひろがるの構わず急いでかみ砕いて飲み込むと、唸り声をあげることですらに時間を稼いだ。

あとは自然に口を動かせば、勝手に効果が出てきてくれるはず。

「うーん、そうなるのだね。シートー、君の友達として僕は。君が救えなかった家族、つまりドクター・マクダーモットの問題はまだ残っていると言わないといけなくなるんだよね」

「どういうことだ、友達？お前はさっき終わったとシートーに言った。あれは嘘だったのか？」

「まさか、そんなわけがないだろう？よし、それじゃ説明させてくれよ。それで意味は理解してもらえと思うんだ」

そう言うとは僕はシートーの太い腕をとり、フロアのヌカ発生再現装置の前に連れていく。

「この場所にある装置を使うには、このターミナルから指示を出すんだけど。こいつはG・E・C・Kと呼ばれている環境改善装置に似た、ものすごい力を秘めたものなんだよ」

「でも危険なものだ。友達、シートーはこれを壊すべきだと思う」

「シートー、僕はそれはいい考えだとは思えない」

「どうして？」

「君の家族だったドクターのそれが意志だからだよ。彼はこれを使って、このエリアを守ろうとしたんだ。まあ、残念ながら大失敗に終わったけど」

「……それはもうわかった」

「なら、シートー。もう一回だけ考えてほしい。」

博士はこの場所を守るためにあんな危険なゲータークローを生み出してしまった。それは間違いではあったけど、そんなことになるのは考えなかったし。なにより家族である君たちを守るためにしたことだ。

「ここの安全を保つには、外から来る脅威に数の差がどうかしない」と、とね」

「んんん、難しい話。シートー、困る」

「わかってる。だからこうして君に隠すことなく話しているんだ。彼

の考えの出発点は別に間違っではない。ゴールがひどいものだった、というだけでね。

だから僕は考えた。ドクターの意思を尊重し、君たち家族の安全に力になるならどうしたらいいって。それがさっき言ったこと、僕の知り合いたちを隣人に迎えて貰えないか、だったんだ」

「だけどそれも難しい。シートー、どうしたらいい？」

「これも僕が考えたんだけど、彼らも君の友人として付き合ってみないかい？僕も彼らに君を友達として尊重するように言っておくから。

どうしても無理なら、僕が何とかする。これは友達として約束する」

「シートー、友達が増えるということか？たくさん、たくさん！それはなんか、いいことのように思う」

「それとシートー、この装置の事もそれとは別にして頼みたいんだ。これは君と僕ら以外、誰にも触れさせないでほしい。破壊するのもダメ」

「なぜだ？なぜ壊したらいけない？」

「恐らくだけど、破壊してしまうとこのあたり一帯は生物が死んでしまうような毒が発生する可能性がある」

いや、これはまったく嘘ではない。

装置をそのように操作すれば、それくらいはできるという意味だ。飽くまでも危険性について触れているだけなのだ。騙してはいない。「わかった、シートーこのことは誰にも教えない。見張るのも任せろ、友達」

「提案を聞いてくれてありがとう、友達のシートー」。

僕らはもう少しここを調べるつもりだけど、君は家族にいい知らせを早く教えてあげたらいいと思う」

「うん、わかった。また会えるよな？」

「もちろんさー！またここに顔を出させてもらうよ、君に頼んだ装置の事もあるからね」

にっこり笑いかけ、今度はお互い普通に——だけど固い握手を交わして別れた。

沈黙がしばしフロアを支配した。

僕は首を左右に振り、若い体に肩の凝りを感じて眉を顰める。友達  
は騙してないし、本当のことも確かに言った。

でもやっぱり全てを話すことはしなかったし、友人に誠実だったと  
もいえない。

「確認しました、アキラ。この建物から生体反応はこの部屋だけです」  
「よし、とりあえず機械はドクターのデータを使用して再稼働させる  
が。その後で凍結するぞ」

「了解しました。凍結方法はどのように？」

「ここもどうせ Vault-Tec の技術が使われてる。 Vault  
88 で回収した、 監督官用の管理ツールが使えるはずだ」

スラスラと指示を出す僕にジェゼベルだけが不満そうだ。

「さすがは極悪人だ。ここにお前は友人や手下と呼ぶ奴らを」 閉じ込  
める」というわけだな」

「神のなさることは不可解、今回もお前の理解をこえてしまってますま  
ないな。ジェゼベル」

「お前は神ではない。恐ろしく傲慢で愚かなただの人間だ」

首をすくめて返す。

今日だけは、この狂ったロボットの言葉が妙にすがすがしいものに  
聞こえて新鮮だった。

「ついでだから確認しよう、ガクテンソク」

「はい」

「制圧したギャラクティックゾーンから、ロボットたちの武器の回収  
は終わってるな？」

「すでにひと通り。もう一度探してきますか？」

「そこまでしなくていい……それにしてもヌカ・コーラの生みの親、  
ジョン・ケイレブ・ブラッドバートンか。ヌカ・コーラ・クアンタム  
を使用した液体爆薬、コバルト計画。あんなとんでもないものが実用  
化していたとはね」

「おぞましい考えを持つ同類がいて悔しいのか？人間」

「いいや、ロボット。もつと計画の深い部分を知りたいと思ってるだ

けだ」

「今後のスケジュールはどうなりますか、アキラ？」

スケジュール、か。

ヌカ・ワールドは今日でちょうど半分が解放されたことになる。レイダーもいつまでもエサを前にぶら下げられては我慢できないだろうし。

だからといって、奴らのために全てを解放すると。今度はキンジョウらがここの価値がなくなったと判断して出てこなくなるかもしれない。

「とりあえず数日は様子を見ることになる。その後は——レイダーにエリアをくれてやらないと、ゲイジが不満だろうな」

「かなり難しいかじ取りが必要になりそうです」

「しくじったらお前は八つ裂きにされるだろうな」

「安心しろよ。何せ僕はお前の生き神様だ、7日後には戻ってきてやるさ」

皮肉を返しながらも、予定の変更は特にないことを告げた。

とはいえ、こうも動きがなさ過ぎてはハン<sup>仲</sup>コック<sup>間</sup>達をここに置いていい理由にはならない。僕が動くのに合わせて、彼らにもここを出るよう伝える必要があるだろう。

両者が知り合いだ、などと勘繰られることのないようにしないと——。

(なんにしても、ここからまた離れる時が来たか。ゲイジは嫌がるだろうが、ここでオーバーボスを楽しんでばかりはいられないしな)

頭を切り替えようとすると、改めて失望を感じている自分に気が付いた。これまでは自分をあれほどしつこく追ってきたキンジョウであれば、必ずここでも何かを仕掛けてくるだろうと思っていたのに。

隠し続けている復讐心を押さえつけ、危険を冒し。ハンコックにも来てもらったのに何も起こらなかったこんなことになるとは——。

まだ終わってはいないものの、アキラはヌカ・ワールドへの帰還に失望の思いを抱き始めていた。

無事にヌカ・ワールドへの侵入を果たしたコンドウらに2流と呼ばれた暗殺者たちだが。

マーケツトの中を散策していると、硬い表情のレイダーの一団が彼らにぶつかっても何も言わずに通り過ぎていくのを見やる。

別にプライドだとか、舐められた、屈辱だ、などと感じてそうしたわけじゃない。

彼らの表情からただならぬ気配を感じたのだ。そして仲間のひとりに目配せしてそれを追わせる――。

そんなレイダーの一団――つまりオペレーターズは本当に焦りを感じていた。

マグズが会見上、ハンコックに対して女たちの安全を保障してしまったために。彼らはこうして慌てて店を飛び出してきたわけだが。

キュリーは宿に残っていることを確認し、ケイトはマーケツトに向かったとの情報はすぐに手に入れることができた。

ところがそのマーケツトに肝心のケイトの姿がないのである。

彼女についてこの住人たち住人達隷は「さっきまでそこにいた」しか言わないので、苛立ちが募っていく。

マーケツトの側にあるパックスの領地からは、不快にもなにやら盛り上がる歓声が定期的に上がっており。それがあせる彼らの不愉快さを増していく。

「クソ、グールのお気に入りの女の尻ひとつ見つからないなんてっ」

「そんな言い方はやめろ。冗談じゃすまないぞ」

「もしかして外に出たというのは考えられないか？だがそうになると、すぐには見つけられないぜ」

「焦るな。荒野は危険しかないんだ、女がひとり。のんきに鼻歌交じりに散歩しようなんて考えないだろう」

「情婦だぜ？馬鹿じゃないって、どうして言えるんだ？」

「俺達のためにそう言ってるんだよ！スカタン!!」

戻ってマグズに「片方は見つけられませんでした。消えたんです」

なんて報告はできない。

そんなことを口にしたら、どんな制裁が待っているか――。パックスの領地からまたも歓声が上がリ、オペレーターズは次々に舌打ちしたが。

そこに顔を真つ青にした仲間が戻ってきた。

「お前はとうだった？ 見つけたか？」

「見つけたと思う、多分」

「なんだそりゃ？ それなら早く言えよ。俺達の命がかかってるんだから、な……」

せかす間にも、真つ青な男はゆっくりと自分の背後を指さしていた。

彼の指す方角を見て、徐々に仲間たちの顔色も蒼くなっていくのがわかった。

「見た奴がいた。ハンコツクの女、あのメイソンに会いたいって要求したって」

いつも理解不能で不愉快なパックス共が、なぜ騒いでいるのか理由が分かった。

それは最悪の展開が待っていた。

残念、ということもないが。

ケイトの頭には結局、天から名案は降っておりてくることはなかった――。

しかしその間にも、パイパーのいる奴隷の列は進み続け。パックスの扉の向こう側へと入って行ってしまふ。

「くそっ……そうだよね、女は度胸。ブッコロスくらいでいけば、なんとかなる！」

珍しく弱気になりかける自分をそうして叱咤すると、笑顔を貼り付け。できるだけ自然に振舞って門番に立つパックスたちに話しかけていった。

「ねえ、ちょっと聞きたいんだけどさ。あんたたちのボスとお話がし



「たいんだけど？」

「奴隷商をやるレイダーに詳しいわけじゃないが。」

レイダーというのは言ってみればボスの気分次第で話は難しくもなれば、簡単にもなるのはわかっている。コンバット・ゾーンの客はそういう奴ばかりだった

賢いやり方かどうかはわからないが。

パイパーの価値にパックスが気が付いていないことを祈りつつ、「頂戴」と言ってもらってきてしまおうという作戦だった。

いつものようにメイソンは自分の席に座り。パックスのすべてを見守っていた。

帰還から騒がしくしたことで、オーバーボスの機嫌を損ねたのを察してはいたが。同時に3人のボスとゲイジに先んじてアキラの本質に触れることができたと確信も持っていた。

（あれもまた獣なのだ）、と。

ハンコックがそうであるように、悪党としての魅力。理由のない強さを持っている男だと改めてわかった、今後はもつとうまく話し合えるようになるだろう。

「メイソン。マーケットの客が、あんたに話があると」

「ここに寄越せ、いつも通りでいい。なぜわざわざ聞いた？」

「——それが、あのハンコックのイロなんですが」

構わない、そうやって無言でいると部下は勝手に理解してケイトを門の外から連れてくる。

（いい女だな。男の視線をよく引き付けてる、だが——）

通り過ぎていく男達の横で、口冷えや低い吠え声を。力強い歩みと笑みだけでかわしていくケイトを一瞥しただけで、メイソンの鼻がひきつく。

そんな仕草の中にメイソンの野生は危険をかぎつけていた。

暴力の匂い、怒りを伴った血の匂い。あの女はそれを隠そうとして  
いる。

「ハンコックの女だな。なにかパックスに用か？」

「ええ、あるわ。あなたたち奴隷の商売をしているんでしょ？買った娘がいるの、売ってくれる？」

「それは正しくないが。確かに時々だがそれらしいことはやっていく。誰だ？」

「ついさつき、マーケット脇を運ばれていく中にいたわ。すごい美人」  
「それだと難しいかもな。まだ品定めが終わってないだろう、値段が付けれられていない。まだ商品ではない」

「そこは——ちよつと融通してもらえない？」

「それよりも、支払いはどうする？だれが払うんだ」

「値段を言つて。キャップが足りるならここで私が。足りないとなつたら、ハンコックに言わないといけなくなるけど」

「お前が本気で言っている、どうして思える？ただのハンコックの情婦に」

ケイトの顔に不愉快な影が走った。

「淫売相手には商売できないって言うの？面白いじゃないのさ」

「なら本当のことを話せ。なぜその女がいる？」

「……あのね、愉快的仲間を率いているボスさん？」

ハンコック市長の相手は、私が彼にかわって決めてるの。もちろん、彼が不満を感じないように彼のお相手は私が個別に仕込んでやる。

連れの娘も私が仕込んだわ。でも、市長はあれでなかなか強いよね。こっちも楽しみたいからそろそろ新しい娘を用意したいと思つてたの」

「それを俺が信じる理由はないな」

「と言われてもね、あんたが気のすむような答えを言ったら、今度はウソをついたとなるわね」

「そうか。それならこうしよう、値段を決めた。それをお前が払えるなら、好きに連れていけ」

「そうこなくつちや」

話がどうなるのか、いつになくメイソンが意外にもナーバスなところを見せるので。

パックス達は、息をのんで目を伏せ目がちにしながら遠巻きに見守っていた。

「女、その檻の中でパックスの5人を相手にしてみろ。終わってまだ生きていたら、女はお前が連れて行けばいい」

「乗ったー!」

ケイトの威勢の良い返事と、そこに出てきた物騒な笑みを見て。ようやくメイソンの心は落ち着こうとしていた。

この目の前の情婦がただ者ではないことが証明され、メイソンの勘はやはり当たっていたことがまたしても証明されたのだ。

コンバットゾーン王者だったケイトは、あそこでは100戦をこえる連勝をやっていた。

檻の中に入れば、ただそれだけで気迫が満ち。勝手に殺気立っていく。

3人の男たちがまず声を上げ、数分と持たずにケイトの前に倒れ伏し、血まみれになって外に出されていった。

4人目は女が声を上げたが、ケイトはこれもまた容赦なくぶちのめしてやった。

この頃になると門の外でオペレーターズの部下たちが中に入れてと押し問答を始めるのだが、メイソンたちはそれにまだ気が付いていない。

「それで?次は誰が?」

もはや隠すのも忘れ、コンバットゾーンのケイトは物騒な笑みを浮かべて次の挑戦者を煽る。

パックスは決して臆病とは無縁な連中だったが、ハンコックの情婦とはいえ。これほどの腕を持つということは、戦士であるということでもある。

ということとは、対峙すればこの女をからかうなんてのはできない。本気で相手をしなくちゃならない、それこそ殺すつもりで。

しかし、先日はハンナののような実力者たちがそろってオーバーボスのエサに飛びつき、全員が八つ裂きにされたばかりだ。

ここでハンコックの女を間違って殺してもしたら、今度こそパックスはオーバーボスの逆鱗にふれるのではないか？その考えが、安易な立候補を口にすることをためらわせる。

挑戦者ナシ、そうなればメイソンは仕方なく。ケイトに奴隷をくれてやらなくてはならない。

正直、パイパーの情報を知らなかった彼らはそれでもいいと心の中では半ば考え始めていた。

「どう？それとも終わり？」

「わかった。俺がやろう」

ところがここでパックスのリーダーが声を上げると同時に『メイソン！』と仲間が叫んだ。

さすがに自分たちのアルファの行く手を遮りはしなかったが、周囲に集まって何とか思いとどまらせようとした。

当然、メイソンの機嫌は悪くなるが。今回ばかりは彼の仲間たちも引き下がるわけにはいかない。

「ボス、俺たちはすでにハンナの件でオーバーボスを怒らせている。ここで間違ってもハンコックの女を壊しちまったなんてことになったら、おしまいだ」

「……」

「メイソン。あの女はマズいよウ。動きがプロだ、冗談じゃすまなくなるよウ」

「ここはアンタじゃなくても——」

「ちよつと待ちなよ！あたしはちゃんと聞いた。5人目は誰かってこの目と耳でね」

必死に説得しようとしてるのに。命拾いさせてやろうとしているケイト自身が、ここでなんと横やりを入れてきて。パックス達の怒りの目が彼女に集中するが、本人は涼しい顔を見せる。

「勝手に変えるとか決めてもらっちゃ困るね。こつちも対価を払って、お願いをしてるわけじゃないんだからね。好きに話を捻じ曲げ

るって言うなら、帰らせてもらうよ」

「ふざけんなっ、そんなことさせるかよっ」

調子に乗るな、黙ってるって声上がるが。

ケイトが戻ると言い出したことで、パックスはますます自分たちが追い詰められているような気分陥っていく。

それがまた、メイソンの機嫌を悪くさせる。

そしてこの啖呵を切ったことで、門の外にまでケイトの声が響いてしまい。

門で押し問答していたオペレーターズも顔色を変えて騒ぎ始める。このままなにもしなければ数分とたたずにゲイジに知らせが入り。オペレーターズと会談中のハンコックにも知らせが走ることになるだろう。

メイソンは決断を迫られていた。

「——この女が言う、奴隷は確認したか？」

「ああ、ボス。レインズが確認して、今取りに行ってるよ」

「ハンコックの女！」

「やるのかい？」

「いや、賭けはお前の勝ちでいい。商品を受け取ったら帰れ」

「——そ、残念」

ケイトはここでようやく余裕が生まれる。

背後にパックスのひとりに連れられ、言いなりになっているパイパーの姿を確認した。

ケイトは演技を続けようとして、自分を見てもまったく表情も感情も見せようとしない抜け殻のようなパイパーを……。

ゲイジが駆け付けけるのと入れ違いにケイトがパイパーを連れて立ち去るのを確認すると。

暗殺者のひとり顔は顔を隠したまま、その場から離れて仲間たちの元へと戻った。

「なにがあつた？」

「——もしかしたら罠なのかもしれないぞ。ハンコックの女のひとり、あれは普通じゃない」

そう言つて何があつたのかを話して聞かせる。

やはり護衛はたったひとりのライフルマンというのは見せかけなのだ。

これはハンコック以外の全員が奴の護衛だと考えたほうがいい。

「それで、どうする？」

「どうする、とは？」

「このままやるのか、ハンコックを」

「殺る、連邦じゃこんなチャンスはない。俺達が奴にここまで接近しても気が付かれないなんてのはな」

かつてボツビと呼んだグールも言ったが、連邦の人間の多くはグツドネイバー市長を愛している。

あそこで暗殺者たちが近づけないのも、彼の近くにある目のどれかに見られたら。たちまちのうちにその正体と存在が市長の耳に入ってしまうからだ。

だがここはヌカ・ワールド。

3つのレイダーが表面上は穏やかに付き合い、流れ者のオーバーボスを担ぎ上げることで何とか調和を保っている混沌の世界。

ハンコックの目と耳はふさげるが、だからといって彼らの安全もまた、全く保障されてもいない。

「侵入と脱出方法は1度だけど、用意されている。

つまり俺達は今夜襲撃し、仕事を終わらせることができなければ連邦にはもう戻れないということになる」

「その覚悟はしてる。チャンスだとわかつてるさ、皆」

依頼人はここまでは約束を守っている。

彼らは彼らで、約束を守らなければ明日の朝を誰一人として迎えることはないだろう。

「体を休めておけ——」

全ては深夜、寝静まった後に決着はつく——。

シルバー・シユラウドではなく。元のブルーのスーツ姿で、傷一つない顔でフィズトツプマウンテンへと戻ってきたアキラをポーター・ゲイジが迎える。

「今日の成果はどうだった、ボス？」「まあまあさ」

この2人の会話は連日のこと変わることはない。

ギャラクティックゾーンはもちろんだが、ゲイジはドライロック・ガルチとサフアリアドベンチャーにアキラが手を伸ばしていることは薄々理解している。しかし、アキラはとぼけてハッキリとは言わない。それはつまり「まだエサをやるつもりはない」という意思表示でもあった。

しかし、この日はそうはいかなかった。

ハンコックとマグズの会談は、難しいものとなりはしたが。

少しばかりのビジネスと、将来に向けた話題を交わすことができたということ。オーバーボスの要求にこたえたと、結果を出したことになる。

しかし一方で、ハンコックの連れの人とメイソンたちパックスが騒ぎがあったと聞くと。アキラの表情が自然と固くなる。

それを見て、ゲイジは慌ててメイソンのフォローに入った。

「ちよつとした食い違いがあったというだけさ、ボス。メイソンは馬鹿じゃない」

「ハンコックとの話をぶち壊すタイミングで、というところが問題だろうよ」

「落ち着けよ、ボス。あいつら、美人を見て少しからかいたくなっただけさ。別にハンコックからは苦情は来ていないし。マグズの結果は無駄にはならなかった」

「メイソンに優しいな、ゲイジ」

「そりや——当然だろう、あんたが戻ってくれて皆がやる気になってるんだ。ちよつとばかりはしゃぐ奴がいたからって、いちいち血を流す趣味はあんたにはないんだろう？」

「ニシヤなら違う答えだったか、ゲイジ？」

「俺はあんたに話しているのさ、ボス。それにメイソンはしくじったわけじゃない。奴隷をひとり、ハンコックに贈ったそうさ」

「それで揉めた？」

「おいおい、機嫌を直せって。あいつらの利用価値は、本当はあんたもちやんと誓っているはずだ」

不機嫌なオーバーボスを演じつつも、心の中で僕は考えていた。

メイソンに話をしたというのはケイトだ。彼女は別に馬鹿ではないから、騒ぎを起こしたというなら理由があるはず。

すぐに理由を知りたいが。丁度ここから離れるタイミングを、などと決めた直後だけに。危険を冒してまで接触を図るのはできれば避けたい。

（無効にはハンコックもマクレディもいるんだ。マズいことにはならないだろう）

まあ、そんなことはまったくなかったわけだが――。



## R E : P u b l i c

ザ・ボストン・ビュッグル社。

あの昔、私はその記者と何度か話をしたことがある。

退役軍人として、法律家として活躍する妻の夫として。そして軍が絡んだ——訳アリの裁判について。

彼らのことを覚えていたのは、あの時代にしては骨のある。政府や軍に恐れることなくモノを言う、そんな人たちという好印象を持ったことが残っていたからだと思う。

その社屋の位置はボストンコモンから少し北側によった——グッドネイバーの近くにあることはわかっていたが。実際に行ってみたわけではないし、そのあたりはグッドネイバーを狙うスーパーミュータントやレイダー達でひしめき合っている危険地帯。

ありがたいことにディーコンが案内を申し出てくれたおかげで、安全な睡眠時間だけでなく。建物までの数時間を安全にいられた。

この辺の騒がしさは以前に体験していたので、ここまで静かにすんなりと物事が進むとは驚きだった。

路地のどこかで銃撃戦らしい騒ぎが遠くで聞こえる中、唐突にディーコンの足が止まった。

「ディーコン？」

「ここがそうだ。おそらく今も居座っている奴はいないはずだ」

「——だが、この辺じゃさつきから銃声が鳴りっぱなしだぞ。危険な化け物の吠え声も聞いた」

落ち着きなく周囲をうかがうブレストーンはいくら警戒しても足りないのだろう。

「いい耳をしているな、ミニッツメン。あんたはその調子で自分の部下にもこの辺を歩かせようと考えないほうがいい。これは俺からの真摯な忠告だ」

「なにかおこっているのかい？」

「もちろんそうだ。いつもと同じ、グッドネイバー。あそこにいるハンコック市長が原因だよ」

「ハンコック？アキラと行動している？」

「ああ、あいつはまたとんでもない大悪党に気に入られたものさ」

「彼が何をしたんだ？」

「最後のミニッツメンは先ほどからこの周辺に興味がおありのよう  
だ。」

ああ、ハンコックのしたことだったな。それなら簡単さ。なんにも  
なにもしない。ただ、自分は無期限の休暇だと言ってあの町から消え  
ただけだ」

「それだけ!？」

「そうだ、それだけでここは大揺れさ。」

耳を澄ますだけでわかるだろう。ここは危険な火山地帯だなのさ。  
路地のどこからでもいつ噴火してもおかしくない場所だ。

今は爆発の合図を待って必死に抑えているだけだ。ハンコックの  
いないあの町に誰が最初に足を踏み入れるかってね。まだそのエン  
トリーは始まっていないようだ」

空白状態を演出しているということなのだろう。なるほど、確かに  
ハンコック市長は大悪党だ。

「彼はそうなることを見越して行動しているわけだね。それは怖い」  
「その通りだ、レオ。ハンコックを殺したいやつらは今、大喜びしなが  
らも実はまだ彼を内心では恐れてもいる。市長の命と町は欲しいが、  
うっかり手を突っ込んだら容赦なく殺しに来る。簡単には手を出せ  
ない。」

だがそれはいつまでも続かない、誰かがいつかやってくれる。そし  
てハンコックはそれをわかっている」

「——彼はそうだったら対処する方法があると思うかい？」

「ああ、もう手に入れてるだろ。アキラだ」

「……」

「レオ、本当はあんたわかってるんだろ？」

あの若造はレイダーを憎んでいる。憎むあまり、あいつらを根こそ  
ぎ殺せるとわかったら自分をレイダーにしてもかまわないとすら考  
える。感心できない小僧だ」

デューコンもまた、今のアキラに危うさを感じているような口ぶりだ。

私はそれに同意しない、わけではないが。この危険な時代に、彼の戦う力を押さえつけるようなことは言いたくはない。

Vaultから出たばかりの、あの不安そうで怯え切っていた少年のことを思い出すと——親でもないのに、一線を越えているだのなんだの論しているものだろうか？

私が彼にしてあげられることなど、それほど多くはないというのに……。

---

デューコンの言った通り、ビューグル社の中は無人だった。

そしておどろいたが、記者たちの集まるフロアの中央から4分の3の床が崩落しており。ほとんどが滅茶苦茶にひっくりかえされていた。

「こりゃ、ひどくやられているな」

「中をのぞいたことはなかったが。こんなだったとはね」

「——騒ぎでどうにかなった、という感じじゃないな」

あえてそれだけを口にしたが。 “恐らく”だが、これは何者かがフロアの中心に向けて爆発物を投げ込み。フロアにいた記者たちごとなにかを消し去ろうとしたのではないかと私は思ったからだ。

核攻撃で、建物の中の一部の床だけ激しくダメージを受けるといのはあまりにも不自然すぎる話だ。そして残って使い物にならなくなった一部はターミナルが溶けているのも、その部分だけ経年劣化とは考えにくい。

しかし、素人探偵にわかったのはそれだけ。2世紀前の事件を解きほぐすには時間も残された手掛かりも少なすぎる——。

「それで、ここではなにをするんだ。将軍？」

「私がひとりで調べて答えを探そうと思ってる、ガービー。見たところ瓦礫の山ではあるけど、掘り起こすほどのものではなさそうだし」

「それじゃ——俺達はもういらなくなってことかい？」

「まさか、デューコンとガービーにはグッドネイバーの様子を見てきてほしいと思ってる。まだ騒ぎになってないと聞かされたけど、ミニッツメンとして今のあの町の状況を見ておいた方がいいと思うんだ」

「それは構わないが……」

「そうだ！なんならコズワースやカールもつれて——」

「それは駄目だ、将軍。あんたをここにひとりでは残していけない」とすると私の隣にエイダがたつ。

「2人でグッドネイバーにいかれてはどうでしょう？ここには私たちが残りますから」

「そうですね。それがいいでしょう、旦那様は私たちがお守りしますよ。なに、心配はいりません。やり遂げて見せます、命に代えましても」

ロボットたちの言葉を聞いてもガービーはまだ不安そうではあったが、デューコンが彼の肩になれなれしく腕を回す。

「それじゃ、決まったな。ミニッツメンの大将、さっさとあんたの将軍を邪魔することはあきらめて。俺と一緒に背徳の町へと繰り出そうや」

「ハッ、全く面白くないぞ。デューコン」

「いやいや、あんたはいいボスの下についているんだ。」

考えてみる。ここからグッドネイバーはそう遠くない。俺達が行って、戻って。するとあら不思議、丁度遅めのランチタイムに合流ってわけだ」

「つまり？」

「つまり將軍様は、町からうまいメシと酒を俺達に運んで来いとそうご命じになられたんだよ。もちろん、そうとは気づかせぬように使いつつ走りの俺達を思っつてという体裁を整えてな」

「本当か？いや、彼はそんなことはしない」

「おいおい、本気か？こんなことはどこでも一緒さ。俺達のレールロードにだつてしよつちゆう理由をつけては——」

フロアに背を向け、2人の姿は消えていった。

そうか、遅めのランチ。それは悪く無いな。

「それでは私も移動します、ひとりの方があなたも集中できるでしょう？」

「エイダ、助かるよ」

答えながら私はまだなんとか動くターミナルを起動させながら近くの椅子を引っ張ってきて腰を下ろした。

さて、なにか新しい情報があればいいが。

画面に映し出されるリストには、用意されていた執筆中の原稿。ただ取材中の情報のまとめ。没にされてしまった過激な記事。

これらに目を通しながら、私は自分がここに少し期待しすぎていることに気が付いてしまった。

ニツクの教えてくれた事件のほとんどはすでに図書館で見ることができたし、彼の記憶によれば警察は全くだらしなかったということだったから。新しい展開があったわけでもない。

リストにあるのも、どうやら急展開で暗黒街の暴れん坊を取り逃がすことを“決定”した警察の動きを追及するというものしかなく。エディ・ウインターなる犯罪者の新情報はまったくなかった。

その代わりにあの時代ではわからなかった、アメリカの暗い側面を知ることになる。

食料配給に不満を持つ市民の暴動、治安維持の目的で国内のあちこちに配置した部隊がおこした暴力事件がもみ消される顛末。捕虜収容所から聞こえる劣悪な環境と虐待の噂。軍、警察、政治家たちの汚職。経営者たちは完全なる事業の機械化を実現しようと労働者たちから仕事を奪い、町に貧困が広がる様を。

そして政府、それも大統領近辺にまで影響を与えろという影の政府“エンクレイヴ”。最近では活発に動き出しているとする取材途中のメモ。

私の持つ愛国心の方角が、銃と戦争から。法律と言葉による戦いへと変わった瞬間がそこに全て残されていた。

そして――。

『本日、夕刻より開催されるポスト115で取材。スピーチはあのパートナー夫妻が出席する予定だ。以前に何度か紙面に登場してもらったが、絵になる家族とは彼らのことを言うのだろう。』

退役したばかりの元大佐はまだまだ若く、すでに軍では伝説の英雄だ。そしてその妻は敏腕の法律家として知られている。恐らくだが、こうした場所に彼らが熱心に顔を出すってことはあの2人には未来への計画があるように思う。出来ればほんの少しでもその中身を教えてもらいたいものだ』

そう記したのは記者のイゴール・バックマン。

彼のことは覚えている。ボストン・ビューグルで一番会った人物だ。身長が160センチちょっとしかなかったが代わり筋肉の塊をくっつけ、ふくれているようだった。

活発で陽気。誠実な取材をもとに記事を書く、間違いなく本物のプロの記者だった。

「――シヨーン」

唐突に私は失った妻と、まだ会えぬ息子のことを思いだしてしまい、心が沈む。

ケロググを倒していいこう、私はできるだけ過去に思いをはせないようにしていた――。

息子は、シヨーンはまだ生きている。ケロググは確かにそう言った。今ではあの言葉だけが頼りで、それを信じるしかなかったが。問題はそこじゃない。

彼と私との距離は相変わらず縮まる様子がないのが問題だった。

――インステイチユートの所在は不明、手掛かりとなるものはどこにも存在しない。

だから私はこの先でも息子の姿を見ることなく、抱きしめることもかなわず。

名前を呼ぶことも、言葉を交わすこともできない――。

こんな世界に。こんな連邦に私はまだ希望にすがりついて、しがみついて生きねばならないのか……。

建物の外、コズワースのそばで寝そべっていたカールが顔を持ち上げた。

この時、レオの200メートル内へと静かに接近する存在がいた。しかしそれは獣の嗅覚で持っても霞のようなはつきりとはさせない。

そいつの名はコンドウ。

アキラへの牽制として今回、レオの暗殺を計画した首謀者その本人であった。

——ミニッツメンの将軍、フランク・J・パターソン Jrは死なねばならぬ

この一念は深く、そして周囲が考えている以上に彼は本気であったのだ。

失敗したからただ諦める、それは許されない。殺すと決めた以上は必ずそうする。

彼の兄弟たち——“小さな宝物”はアキラという光に惑わされ。同じく危険な存在であるこの男の脅威を誰も認識していない。それはコンドウしかわかっていないのだ。

キンジョウがアキラを玩具にしている時から、実はこのコンドウはレオを気になって調べていた。

この男はアキラと並んでVault111から出てきたのだという。

2000年の未熟な冷凍睡眠から目覚めたというのに今も生き続け。その存在は徐々にこの連邦が無視できないものへと成長を続けているのは明らかであった。そしてあのアキラは、この男の影響力を利用してしようとしている気配がある。

サカモトやキンジョウなどは「そうであったとしても。彼の手ごまのひとつでしよう」で終わるかもしれないが。コンドウにはわかるのだ。

アキラをどうするにせよ、この男は倒さなくてはならない。

そうしなければ連邦は、小さな宝物は大きな障害が育つのをただ指

をくわえて見守っていた、などという未来が来るに違いない。

建物ものの外でカールと待っているコズワースは、いきなり落ち着かなく立ち上がって周囲の匂いを嗅ぎ。行ったり来たりを繰り返す犬の姿にまったく気にしていなかった。

困ったことに彼は体の大きくなってしまった自分の体のことを嘆きつつ、その場に何物も近づけまいと通りを左右に忙しく視線を動かすことしかしていなかった。

しかしそれは建物の中にいるエイダも同じ。

フロアからエレベーターへと続く廊下に立ちつくして何物も侵入を許さない、そんな風に考えていた。

だが賢いカールの本能だけが告げている。ここに近づいてくる彼らとは別の“異物”の存在を。だが、それがなにかわからず。どこにいるのかもわからない。

恐れていたことがついに現実となる――。

ターミナルを見つめ続けていたレオはその姿勢のまま、机のわきに立ってかけていたマシンガンへと手を伸ばしていく。

それは本能的なものだったが。その意味を理解しないままレオは疑問も持たずに動いていた。

すると背後から声を掛けられる――。

「……信じられないな。まさか接近に気が付いていたのか」

レオは顔色を変えずに自然にマシンガンを握ると椅子を回転させて声の主の方へと向き直す。

フロアには彼以外に人影はない。また、そもそもここまで入ってくるには建物の入り口に立つコズワースとカール。この階のフロア前で陣取っているエイダをかわして来なければならぬ。

しかしこの部屋にある扉はあれから開くことなく誰も部屋に入れたわけではなく。そもそもどこからどうやって進入を果たしたのか



がわからない。

だがレオは誰もいないフロアの一点を振り向いてからはじつと見つめ続けていた。

すると揺らぎが見え、ステルス・ボーイの効果が切れた時のように白い修道着めいた服を着た若者がそこから立ち上がった。

コンドウである――。

「偶然か？運が良かったのか？いや、それならこちらの位置までわかるはずもない。お前はそれでも“見ていた”な」

「……」

「どうした？言葉を忘れたか？」

「それを言うならそもそもどうやってここに入ってこれたんだい？」

「なに？」

「君は今、ステルスを解除して私に姿を見せた。余裕を見せたのかな？

だけど納得できないことがある。ロボットたちの目をだますことはできただろうが、君がここにいるということはあのカールにも気づかれずにここに来たということでもある。

それはただの遮蔽装置――ステルス・ボーイを使っただけでは不可能なことのはず」

「なにをいわせたいのかわからんね。ミニッツメンの將軍よ」

レオはステルス装置を使用した戦闘はアンカレッジの戦場で散々に体験していた。

中国軍は攻撃のほかに防衛部隊にも攻勢の特殊なメンバーをよく使っていた。いわゆるステルス装置と地形を使った部隊への襲撃のことだ。

レオと友人のハロルドはこの連中への対処が得意中の得意で、コツを教えてくれと会いに来る兵士はあとを絶たなかったものだ。

そんな彼の勤は200年以上氷漬けにされても、消えることはなかったらしい。

「不意打ちに失敗しても、姿を見せないまま攻撃すればよかっただろう。だが、君はそうしなかった。プライド？私は君に何かしていたの

かな?」

「……なるほど、運がいいだけではなく。面白い考え方もするんだな」  
「君の顔には“見覚えはない”が、ひとつ心当たりはある。昨日のことだ、騒ぎの中に不思議な人たちが混ざっていた。彼らとは結局話ができなかったし、レイダーか何かぐらいに考えていたが。どうやらあれは君が送り付けてくれたのかな?」

「なぜそう思う?」

「タイムングかな——彼らは運がなかったが。君はその襲撃が失敗に終わったことに気が付いて、すぐに私を殺すためにここに来た。するとそれだけ君が危険な存在なだと私は考えることができる……」

確信のない適当な理由を口にするので時間稼ぎを試みたはずであったが。話していくうちにロボットたちとカールがまだ動きを見せないことから、自分は案外正解を言い当ててしまったのかも考えが変化する。

もちろんそれは目の前に立つコンドウの表情が不自然なほど変わらなかったこともその理由にはなる。

「理由は教えてもらえるのかな?」

「いいだろう——アキラを知っているな」

「君は彼の関係者かい?彼に何かをされた?もしかして実はレイダー、っていうならご愁傷さまとだけ。彼はどうもこの世界に存在するレイダーと言う存在が本当に大嫌いなだけなんだ」

「レイダーに見えるのか?この姿で?」

「違う?——ふん、そうなるって奇妙な話だ。私が見る限り、君はアキラを憎んでいるね?」

「……」

「それとも恐怖を感じているのかい?彼が怖いのか?」

だから私を殺そうとしたのか。他人に任せて失敗しても諦められないほどに」

コンドウは——若者はレオの前でため息をつく。

「まったく信じられないな、自信を失いそうさ。偶然でもひとつたつ程度の正解なら笑っていられるだろうが。そう何もかも正解と

あつては、お前の脅威評価は甘かったということになる」

「私としてはあきらめて帰ってくれろと嬉しい。私は別に君と戦う理由はないからね。」

ひとつ望みがあるとするとするなら、私の若い友人の過去について何か知っているなら彼に教えてあげて欲しい」

それはまったく思いついたままに口にしたことであつたが、それまで無表情だった若者の顔にはひびが入り。衝撃と苦笑を浮かべながらも、その目には危険な光が見え始める。

——残念だ

私は心の中でつぶやいた。どうやらうっかり彼の地雷をわたしはことごとく踏んでしまったようだ。

戦いは避けられそうにない——。

レオがひとりこもっているはずのフロアから、レーザー音とマシンガンの発射音が始まると。

それを合図にしたかのように、戸惑っていたカールは狂ったように建物に向かって吠え始め。ロボットたちのセンサーはいきなり最大警報を鳴り響かせた。

「パピーちゃん？ 旦那様？ 旦那様っ！」

「これは……戦闘音!？」

エイダの戦闘用ロボットとしての判断の切り替えは決して遅いものではなかったが。この場合は出遅れた時点で何もかもが後の祭りであつたといふ言いがなかつた。

通路で回れ右をすると、フロアの中へと突撃していくエイダだが、扉にたどり着く前に、目の前の鉄扉に部屋の中から衝撃音がすると、アサルトロンの体は来た道を吹っ飛ばされて押し戻される。

「押し入れない?! 解析開始——」

直前に不自然に中から扉をドカンと音を立てて響かせたのはなにかでそれを封印されたとみるべきだろう。

しかしアサルトロンであるエイダの頭部には高出力のレーザー砲があるのだ。これがあれば、ただの鉄扉に何をしようとも簡単に――

「解析終了、2分ですって!？」

どうやら事態は最悪の奉公へと転がり始めたようだ。エイダの記憶に、古い友人たちの最後がよぎる――。

焦るエイダと違い、そこにいるコズワースはさらにひどい体たらくであった。

彼にできたことといえば、騒ぐカールをであろうことか考えもなく建物の中へと導き――それでも賢いカールは崩れて危険であろう階段へと飛び込んでいったが。

思考は混乱して、ただ「旦那様」と「大変です」を繰り返すことしかできない。

アキラがコズワースの改造を嫌った理由がここにある。

そもそもが戦闘用ではないうえに、シヨーンのパニーでもあったコズワースに戦闘時に冷静に判断するという切り替えは難しいのだ。

昨日には一台と一匹だけでスーパーミュータントの部隊を打ち負かして見せたとはいえ。

目の前に敵がいなければ、絶大な攻撃力を持っているといっても宝の持ち腐れでしかなかった。

「シヨーン坊ちゃん、旦那様が！ああ、私はどうしたら――緊急プロトコルの作動を確認。一時的に勘定プログラムをカット、サブ・ブレインとの接続を確認。問題、新たな救出計画を立案せよ」

それまで感情的だったコズワースの声が無機質のそれに代わると、彼の中には実現可能と思える新しい計画が次々と提案が始まった――。

しかしフロア内での戦闘は時が過ぎるだけ、激しいものとなっていく。

コンドウとレオの対決は、コンドウが服の袖口からなにかを入り口の扉に向けて投げはなつたのを合図に始まった。

それはただの緑色のゴムボールのように見えたが、フロアに通じている唯一の扉にたたきつけられたそれは液状となって飛び散り、すぐにも固まると扉を封じてしまう。

これで2人はここから逃げることは困難になった――。

コンドウは銃器の類はこの時になるまで一切持っていないように見えなかったが、レオは彼が動くのと同時に容赦なく銃口を向けて引き金を引く。

次々と放たれていく5・56ミリ弾のお返しにと青いレーザー光が放たれた。

この時点ではレオにまったく問題があるようには思えなかった。

確かに密室に2人で閉じ込められるというのは、痛い失敗ではあつたけれど。先制攻撃を回避し、その手に握る大口径の反動の強いマシンガンがあれば。中央のフロアがない分だけ、レオが敵を追い詰めるのは難しくはなかつたはずだ。

異変はコンドウが、涼しい顔でフロアを走り回ってレオの狙いから逃げていたが。

そのかれがひよいと―床に対して直角に立っている壁の上を重力を無視して走り始めたあたりで悪夢は始まった。

レオの顔に驚きが走り、両目が大きく見開かれた。

背中が毛がゾワリと逆立つのを感じるが、逃げ場もないのでここから離れるわけにもいかない。

そんな弱気にある一瞬をコンドウは逃がさなかった。

壁の上を走り回る彼の袖が再び閃くと、レオは握っていたマシンガンにおかしな振動を感じて慌てて確認する。

それは薄くて軽そうだが、投げナイフのようであった。

しかしそれはただの人の手から放たれただけだというのんい、大口径のマシンガンの表面をあつさり貫いて突き刺さっていた。

(これはマズイ！)

このまま引き金を引いては、誤作動を起こして暴発でもしかねない。

仕方なくレオはマシンガンを床へと放り出すが、コンドウは攻める手を緩めずに次の攻撃を投げ放つて見せた。

フワフワと放物線を描いて飛ぶ3つの塊——パルス・グレネードが投げ込まれてきてレオの足下に転がった。

素早くひとつは拾ってを投げ返したが、もうひとつは間に合わないと判断すると、近くのガラクタを乗せた机をひっくり返して上から覆いかぶせ。そこから距離をとろうと反対側に自分の身体を投げ出していった。

床の上へと滑り、痛みが走るがそれを押し殺してさらに匍匐前進。

一拍を置いてすぐにも背後から衝撃が広がり、横になる体制にあったレオの体は持ち上げられて床の上を滅茶苦茶に転がった。レオは息が詰まり、軽く目を回したが。まだ戦える状態にある、正直なところこれは奇跡と言つていい——。

コンドウは蜘蛛のように壁に垂直に立ってそんなレオの姿を見上げながら、ようやく立ち止まった。

感心させられる、本当にこの男は手強い——。

最初のレーザーにひるむことなく撃ち続け、続くナイフ攻撃にも生き延び。とどめとばかりにこの室内にあってこちらが範囲ギリギリでもおかまいなしにグレネードをくれてやったというのに。この男はまだ5体満足で生きている。

ただの人間であるなら素直に死んでおくべきだったろう。

だが武器を失ったのだ、これ以上は——終わってもいけないのにそんなことを考えたのはコンドウの傲慢であった。

床の上から痛みをこらえて立ち上がるレオの手には、レーザー銃——パラデイン・ダンスから譲られたレーザー・マシンガンが握られていた。

赤いレーザー光が壁の表面をたたくと、今度はコンドウが必死に

なつて壁から零れ落ち。受け身も取れずに悶絶しながらも床の上を転がりまわつて逃げ伸びる。

レオの粘りが——いや、異能力者同士の戦いはこうして数分間の戦闘でも。未だ決着は見えてこなかった。

エイダはフロアをふさぐ扉の前でもどかしい状況に立たされていた。

センサーはこの上階へと外から駆け上ってくるカールを感知していたが、とにかくレオの安全が今は脅かされていることが問題であった。

すでに解析結果が出てからずっと、頭部のレーザー砲を扉に向かつて連続で発射しているが。不愉快なことにたった一枚の鉄扉であるはずのそれを貫くことができないでいる。

こんなことをしている間にも、室内ではまるで腹をすかせたデスクローの檻に、エサ代わりに人間を放り込んだかのような騒ぎになっているようだ——一刻でも早く助けに入らなくてはならない。

なのに最初の解析で建てた予想を裏切り、この立ちふさがる邪魔者が排除されるのは2分、3分、4分と増え続けている！

——エイダ、それは数字が残酷だからさ

——数字は事実しか教えてくれない。

悩めるエイダにそう論したのは、最初の主であるジョンソンではなかったか。

なのに彼の言葉をかみしめながら、自分はまた再び無力感の中へと放り込まれようとしている気がする。

オカシイな表現だがロボットは弱気になりかけてはいるが、エイダは暗殺戦闘用のロボットだ。

感情と行動は切り分けて、迷いなく自壊の危険がたかまるレーザー砲の連続使用をやめようとはしない。

そんな時だ、いつもと違い妙に冷静になったコズワースの声が受信機の向こうから飛び込んでくる。

(突入計画?・ですよね?)

提案なのだろうが、送られてくる複数のそれはかなり乱暴だが。向こうの必死さが伝わるものばかりであった。エイダはその中で一番、マシと思えるものだけを選んでそのまま送り返してやる。

背後の非常階段につながる扉が吹き飛び、カールが廊下をこちらに向かって走ってくるのを感じながら。エイダはひとまず冷静になり、コズワースの合図を待つことにした。

部屋の中では死闘が続いていたが、均衡という天秤はついに傾きを見せた。

流れの中で再び投げナイフが放たれると、今度はレオの右手の甲をすりぬけただけでぎっくりと皮膚を裂き。痛みと共に血が流れだした。

コンドウは空気日の匂いが微妙に混ざって漂ってきたことを感じ、勝利を確信した笑みを浮かべる。

「ナイフが当たったな? お前の皮膚を裂き、血が流れてここまで匂ってきたぞ」

「——随分ヤバい趣味を持っているんだね」

「フン、好きに言えばいい。だが、この勝負はこちらの勝ちだ、あの刃には毒が塗ってある。人であれば耐えられない毒がすっかりとな」

「!?!」

「傷口からの痛みは鋭く、出血は妙にとどまることを忘れてはいるはずだ。それが毒が効いている何よりの証拠」

いきなりの若者からの勝利宣言程度では動揺はしなかった私だが、それに続いて放たれた言葉に顔色が変わる。

胸に抱えた右腕からは傷口から鋭い痛みが伝わり、血は流れ続け。そればかりか徐々に指先から感覚が失われて広がってきているようだった。

勝利宣言を口にしたコンドウの方はと言えば、レオの動きが完全に



停止したことを察してさらに自身の勝利を確信する。

それでもとどめをさそうと考え、右回りに回り込みながら机の影にもたれかかってうずくまるレオの姿を見つけた。あと数十秒である体からは力が抜けるはずだ。その時こと近づいて、きっちり終わらせる。

レオの体が傾いた――。

コンドウの顔にさらに笑みが広がる――。

だが崩れ落ちる、などと言うこともなくすぐに止まると。何かが体の影から床の上へと零れ落ちた。

「なっ、なんだそれはっ!」

「……」

レオは返事を返さなかったが、転がっていたのは多分だがレオの右腕である。

だが、腕の付け根の部分は真っ赤にはれ上がって充血し。それより先。つまり上腕から指先までは、ゴツゴツと骨ばった緑の皮膚――スーパーミュータントのようになっていた。

そしてそれはコンドウの予想を完全に裏切ってもいた。

「貴様！ 貴様は、ただの人間ではないのか!」

その意味するところが深くはわからないが、コンドウが予想もしていなかったことがレオの体に起きていたことは間違いないかった。

だとしてもレオにとって喜ばしいことは何一つとしてない――。

「クッ……このっ……っ!」

ついに私は、この痛みに耐えられずに武器から手を放してしまう。それがどんなに大変なことを招き、危険と後悔を招くか理解してはたはずだが。ついにやってしまった。

しかしそれではこの痛みは止まってもくれないし、感覚は指先からずっと広がってきていた。

(どうする? どうしたらいい?)

毒が回ろうとしていることは理解した。だが、それはむこうにとっても想像通りでないこともなんとなく空気を察してわかってしまっ

た気がする。

このまま痛みと変化が続けば、冷静に施行することも期待できなくなるかもしれない――。

私は「今こそ何かをしなければならぬ」という問いにすべてをゆだね、運を天に任せて私はもがくことをやめないでいようと決意する。

握りしめた左のこぶしが強く握られ、左腕をガードするコンバットアーマーの手甲部分から簡易のパワーフィストを展開させる。

「はあ、はあ、いくぞ……いくぞ！」

覚悟を決めると、私は左手を振り上げ。力の限りに変貌していく右手の上へと何度も振り下ろしていく。

それはまるで毘に足を取られ、それでも生き延びようと暴れることで何とかしようとする獣のような姿。その迫力にさしものコンドウも何も言えなくなってしまうた。

うわあああああああああああああ！

レオの悲鳴が、無人であるはずだった新聞社の中で悲しく響いていた。

## 立つ鳥跡を濁さず

様子が変だ、ハンコックがそのことに気が付いたのはオペレーターズの歓待を受けた後。別に疲れるようなことは何もなかったはずだったが、自分の後ろを妙に静かについてくるマクレディがさつさと戻ろうとだけ言ってからまったく口を開こうとしなくなったからだ。「本当にこのまま帰っていいのか？ どうせ男2人だけなんだ、少しくらいは羽目を外したって……」

「俺にはこの連中に払ってやるキャップはねえよ」

「——そうかい。それなら俺は別にいいけどな」

「ああ」

「……」

「なあ、ハンコック——市長」

様子を見られている視線や、聞き耳を立てている奴がそばにはいないとわかつてはいても。ここはレイダーの町だ。

不用心に仲間意識丸出しで会話などとしては、おかしなトラブルになりかねない。鋭い視線を送ると、すぐに市長がその後についてきたが。どうも集中力が保てていないようだ。

「なあ、ちよつといいか？」

「——ああ、どうした？ 財布でも落としたか？」

「俺が？ そんな間抜けじゃない」

「ならなんだ？」

「……俺達、なんでこんなところにいるんだろうな？ そんなことを考える俺は——」

「ああ、おかしいなー！」

返事を断言してやるが、すぐにため息が漏れて「こいつもか」と胸の内をつぶやく。

脳裏にはあの夜、屋上で互いにおかしくするものを打ち明けあった時のことが思い出されていた。

「そんなにあんたをイラつかせるとは思わなかった。ワリイ」

「いや、いいんだ。どうも俺達は似た者同士ってことだとわかって悲

しみの涙を流してるだけさ」

「あんたもか？って、俺達がそうなのか？」

(チャンプもそうだと言ったら、こいつどんな顔をするのかね)

当初、このヌカ・ワールドからやってきたゲイジと。この場所がアキラをさらった連中に関係あるに違いなく、その正体を明らかにするためという話で計画が立てられたわけだが。

こうしてしばらく立場を互いに偽って同じところに過ごしていると、あの若者には別に色々と考えを持って動いているらしい、それがなんとなくだが伝わってくるのである。

だまされた、とは思わない。

だが話してもらえないのはなぜ？と何かの拍子で考えると、集中力は簡単に奪い取られていってしまう。これは危険を呼び込むことになる。

「お前もあのショーが勘に触ったか？」

「ショー？ああ、あれか」

「違うのか？」

「……俺はあいつがあんなに黙ってここにいる連中の王様になつてるのが信じられないんだ」

「不安か？」

「どうかな、それはよくわからないが」

自分が役立たずに思えるのが嫌なんだ、と続いたのでハンコックは目を丸くした。

「……マクレデイ、お前たちはデキてるのか？」

「は？何を言い出すんだよ。怒らせたいのかよ」

「いや、でもな——」

吐き出すときの表情はやけに苦しそうだった、ちよつとさすがに驚いた。

「いいよ、からかうんだろ。聞かなかったことにしてくれ」

「待て待て。確かに妙な間働きがあったことは認めるが、違うならそれでいいんだ。つまりお前は、あいつに不満があるってことなんだろう？」

「まあ、たぶん」

「——なら安心しろよ。そろそろ市長のバカンスも潮時だ」

「っ!?ここを出るのか、出れるのか?本当に」

「レイダーの連中と小さいが取引の話をしちまったんだ。これ以上の長居すると、おかしな勘繰りをされちまうだろ」

「そうか、そうだよな。あいつはどうなる?」

「どうにかするだろうさ。そもそも俺達が気にしたってなにもできる事はない」

アキラだつて馬鹿じゃない。囃の2組のうち、片方が消えれば残った方の危険度が跳ね上がることは単純に理解できることだ。本心ではどう思っているのかわからないとはいえ、それを承知で無法者の王の時間を延長しようとはしないはず。

したとしても、その時は自分で何とかしてもらうしかない——。

「それならやっぱり、俺たちはいったいここで何をやっていたつて言うんだよ」

「バカンスさ。グッドネイバー市長の、バカンス。最初からそう言ってたろ。わかつたらそろそろ泣き言はやめて、気合を入れて傭兵らしくしておけよ」

「……だな、わかりました。市長」

(ジェットでもやりてえなあ)

マクレディのせいで自分も気持ち沈みそうになるのを感じ、その空気を慌てて取り払う。

しかしホテルの戻るなり、2人は驚きのあまり大口を開けて言葉を失う。

腕を組んで難しい顔をしているケイトの前で、真剣な顔をしたキュリーは目の前に座る相手がほとんど反応していないことを直接に触って確かめていた。

「おい、そいつはどうした?どこで拾った、なんでここにいる!」

「……さあ、わかんない」

「いや、さっぱり事情が分からねえ。どういふことなのかわかるように説明しろよ」

面白いことに自分たちは囿である、そう覚悟してここに来たはずなのに。ハンコックとマクレディは、いきなり姿を現したパイパーの見たこともない様子に取り乱してしまったのだ。

このパイパーはどうしてここに？

ハンコックらの疑問に対し、ケイトとキューリーの答えはまったく十分には程遠いものでしかなかった。

市場に奴隷として運び込まれたのでさらってきた。複数の重度の薬物による症状がみられ、脳の活動が押さえつけられ田結果、目を開けても眠っているのと変わらない。このままだと自分から動くことは出来ないだろう。助けがいる。

覇気、勇気、元気の塊のような女が、太陽の下でも幽霊のように呼吸以外は何もしていません、つという姿で静かに座っているのを見るのはひたすらに不気味というしかない。

それが助けまで必要だというなら、もう死ぬんじゃないだろうか？などと不吉な考えも頭をよぎる。

(緊急事態、か)

レイダーの町でなにも持ち帰れないだろうとあきらめかけてた矢先の事件に、ハンコックは自分らの首元めがけて刃が近づいていたようだ。このままではマズイ、ここにるのがマズイ。

「よし、わかった……なあ、治療はできるのか？彼女は元に戻ると思うか？」

「——多分大丈夫だと思います。でも、ここではやりたくありません。回復させる途中でどんな症状を見せるかわかりませんから、動かせなくなります」

「そりや確かに問題だな。これは例えば、つてことで答えてくれ。誰かの助けがあれば、彼女はしばらくは大丈夫か？」

「大丈夫、というのがわかりませんが。手を引いて歩けば、彼女はそれに従ってくれるはずです。この町から出るつもりなのですね」

「え、ちよつと!?!ハンコック、どういうことよ」

キユリーは察したようだったが、ケイトは驚いていた。

「よし、聞いてくれ。こいつはマズい状況になったかもしれない。パイパーにはなにがあつたのか知りたいが、それを今の彼女は答えられない。

のんきにここでバカンスを続けながらは彼女の治療は望めなくなるかもしれない」

「なによ、それ。まるで連れてきたあたしが悪かったみたい言い方じゃない」

「そうかもな、それならもつとやり方もあつたかもしれないしな」

ハンコックの軽口にケイトの顔から表情が消えた。これは良くないものだ。

「ワルの町の市長様には奴隷女がどんな扱いをされるのか、わからな  
いってわけ」

「そこまで言っていないだろうが。でもシリアスになったのだからそのまま  
ままでいてくれ、チャンプ。マクレデイ、ここにいろ。俺は今から  
ちよつと出てくる」

「ハンコック?」

「ここにはいられない。すぐに戻る」

ハンコックはふくれるケイトらを残し、部屋から足早に飛び出して  
いった。

雇い主に2軍と称された暗殺グループは、ハンコック一行がとまる  
ホテル——旧消防署をどうやって襲撃するかアイデアを出し合っ  
ていたが。日が落ちてくる頃、市場に新しい情報が流れてきた。

どうやらレイダー・ボスとの会見を終えたハンコックが「もう雑魚  
寝は飽きた」と言つて客分にふさわしい扱いをするように求めたとい  
うのだ。彼らの計画は再び白紙に戻されてしまう。

「クソ、ハンコックの野郎。あいかわらずいい勘をしてやがる」

「ちよつと待て、ということ俺たちのことを知っているってことか  
?それはマズいぞ」

「雇い主が俺達を裏切った？情報が漏れたのか？」

不安を感じる。

ハンコックが手ごわい相手であることはここにいる全員が理解しているが、ここまで問題がなかっただけに、これが自分たちの任務失敗につながるトラブルが起きているのではないかと考えないわけにはいかない。

「どう思う？逃げるか？」

「簡単に言うな。ここから出ると言っても簡単な話じゃないぞ。雇い主の計画が使えないというなら、この連中の追撃を振り払って出ていかなくちやならない。荒野でどこまで逃げられるか——」

「まあ、落ち着けよ。俺は思うんだがこれはトラブルじゃなく、チャンスじゃないかって思ってる」

「マジかよ」

「考えてみる。ハンコックはきつとここへ取引を持ち掛けにやってきたんだらう。雇い主はそれを知って俺たちを集めた」

「ああ」

「あのホテルは市長に近く、客が押し込まれているから襲撃しにくかったが。聞けば新たに用意された家は、ヌカ・ワールドの外苑に近い軒家だそうじゃないか。これはチャンスだ」

「だが警備は強化されるだろう？」

「それは——雇い主が動いてくれることに期待するしかない。警備が薄けりや、最高だしな。」

なあ、もう俺たちはこの計画にどっぷりを頭からハマっちゃまっている。そいつの言う通り、今から抜けるとしても全員は生きて帰れないだろう？なら、やるしかねえのさ」

「……だな」

「よし、それじゃ。警備のことは放っておいて。どう侵入するか決めないで時間がもうない」

今夜決行、彼らの切符はそれだけ変えられない。



コンドウ、キジマは選んだ彼らを2流の暗殺者と評したが、その基準は決して低いものではない。

なによりも彼らが選ばれた理由は、その人外の能力の有無。

レオの暗殺に失敗した連中は皮肉にもスーパーミュージタントとレオが交戦する中で何もさせてもらえないまますりつぶされるという喜劇のような悲劇に終わったが。彼らほどではないとしても、今回のハンコックであれば十分に勝機がある。

——そう、思っていた。

ハンコックの要求にこたえたオペレーターズは豪華——ではないが、一軒家を用意し。ハンコックらはすぐにそちらに移っていく。

あんたらのボスに感謝するって伝えてくれ、ハンコックが案内をそうやって家から追い出していると。マクレディはさっそく家の中を歩き回ってチエックを入れた。

「まあ、ここもたいしたもんじゃないが——今夜はゆつくりやすめるってことで」

そして夜がやってくる。

家の火は消され、どこからか数人の男女の寝息のようなものも聞こえていた。

どこからだろうか、なにかをひつかくような音が数回。

次にこぶし大の大きさしかない空調パイプから人の5本の指が生えだすと、そのまま音もたてずにそれを小さな侵入口として入ってこようとする。

床に蛇の抜け殻のようになった人——一糸まとわぬ裸の男は、ぶるぶると苦しいのか痛いのか。体を丸め、声を押し殺し、ゆつくりと骨格が戻って普通の姿を取り戻していった。

汗だくになったそいつは静かに立ち上がり、扉のドアのカギを内側から解除して仲間を次々と招き入れていく。

(奴らは寝室だ。そして——妙だな？男と女に分かれてる)

昼間のハンコックの様子から思えば、傭兵とではなく女と一緒にかと

思ったが。やはり命の危険には敏感であるということなのか。彼らは散会し、1分以内に息を合わせて全員を始末しようと動く。

運よくハンコックのベットが担当になった暗殺者は喜びに瞳を輝かせ。

肘を曲げると、そこから飛び出してくる仕事道具。肘から生えていく蜂のような鋭いとげをせり出させていった。

——これで終わり。

「……ウヒツ、ハンコック！」思わず言葉が漏れ、目の前の栄光に舌なめずりするが。

奥の部屋で誰かの——男の悲鳴と破壊音が2度続くと、男女の寝室をつなぐ扉が破壊され。なにかがハンコックらの寝室に投げ込まれてきた。

2人の男が唾然として固まる中。

女性の部屋に明かりがともり、何が起きたのかを理解する。

「待ってたわよ、ダーリン。とりあえず一丁上がりつてね」

手には噴射音を響かせる異形の鉄バットを下げ、下着姿で会っても全く恥ずかしがるそぶりも見せないケイトが暗殺者たちを見て不敵な笑みを浮かべて仁王立ちしていたのだ。

暗殺者たちの忍び足は完璧かと思われたが、部屋の入った瞬間からケイトは目覚め。

彼らがベットのそばに立とうとしたところでいきなり闇の中でも構わずに逆に襲撃して見せたようだ。

だが恐るべきはその正確性。

カーテンが閉じられた全く光のない闇の中、噴射音と共に降りぬかれたたった3度ですべてを終わらせてしまったのだ。

部屋に転がり込んできたガスマスクは文字通りバットによって顔を平らにされてしまい、それでも即死できたのは運がよかったと言えるだろう。運がない奴は窓側に倒れ込み、女のひとふりで吹き飛ばされた片腕と引きちぎれかけている片足の痛みとシヨックに声にならない悲鳴と恐怖にさらされ転がっていた。

——失敗した？襲撃を知っていた!?

急展開を前に残る暗殺者たちの思考と余裕はあっさりと奪われる。逃げる、という選択肢だけはここまで来ては考えられなかった。

そしてそれが彼らの最後となる。

ベットの裾からライフルのマズル部分が飛び出し、暗殺者の足をすくって転がすと。反動で起き上がったマクレデイは容赦なく転がった相手の口の中に銃口をたたき込んでから引き金を引く。

ハンコックや逆に片腕だけを伸ばし、その手に輝くナイフが相手の首筋を軽く往復しながら這いまわせると。それだけで簡単にパツクリと喉が裂かれたのか血と不気味な呼吸音が始まり、暗殺者は崩れ落ちていった。

「なんだ、もう終わり?」

「終わっていいだろ。こっちは殺されかけたんだぞ、馬鹿」

「だが終わった、それでいいだろ?」

ケイトとマクレデイが怒鳴り散らさぬようにハンコックは話をまとめたが。

部屋の奥からパイパーの手を引いたキュリーがどちらも下着姿で現れるとさすがに呆れた声を上げる。

「おいおい、チャンプはまだわかるが。女性陣はちよつと危機感てやつが足りないんじゃないのか?」

「どうして?目の保養になるじゃない」

ケイトは相変わらず堂々としたものだが。キュリーは言われて自分たちの姿を理解し、慌ててパイパーを連れて奥に戻っていった。

ハンコックは普段着で横になったので、マクレデイもそれに倣って毛布を頭にかぶって眠っていたのだ。

「市長、まさかあんたこれを予想してたのか?」

「出来るわけがないだろう?俺は人気者なんだ、いちいち寄ってくる奴の素性を心配はしてられない」

「よく言うぜ……」

「落ち込むのは明日にしろ、マクレデイ。外を確認しろ、淑女の皆様」

はさっさと服を着てもらおう」

「逃げるのか？今から？」

「レイダーの町で騒ぎを起こすってのはどれだけ嫌な事か。俺と言う市長の存在の有難さを学びたくはないだろう」

ハンコックの中ではすでにヌカ・ワールドから脱出する逃走経路がしっかと描かれていた。

---

ハンコック襲撃される！

この報告はすぐにはアキラの元には届かなかった。

フィズトップマウンテンと事件現場はあまりに遠く、この夜の強い風が階下の騒がしさを彼が眠る部屋にまで届けることを許さなかったからだ。

しかし明け方が近くなる頃、風が収まると。ついにアキラが目覚まし、階下へと降りていく。

どこからかもぐりこんだ暗殺者の一団がハンコック達を襲撃、彼らは反撃して即座にこのヌカ・ワールドを脱出した。

運悪く出てきた彼の目の前を走り抜けようとしたレイダーをいきなり横から蹴りつけ、状況を聞き出すとアキラは激怒した。それは自分への怒りだ。敵地でレイダーを演じることに夢中になり、気を抜いていたのだろうか？

キンジョウらの姿は結局現れることはなく、ゲイジもあれから役に立つ情報は持っていないという風に思わせようとぼけ続けている。

そして——見逃したのだ。目の前にいたのに、仲間にも迫る危険を！怒れるオーバーボスにしてしまい、涙ながらに逃げていく下つ端を放って。アキラは獣のように方向を上げそうになる自分を抑えようと慌てて口元を手で覆った。冷静に、冷静にならなくてはならない。（レイダーとしての人格に引きずられるな。染まれば、仮面は外せなくなる）

今は良い面を見るべきだろう。

とりあえずハンコック達はここにとどまらずに脱出してくれた。元々は、彼らに先に出ていくようにとのメッセージ代わりにオペレーターズに商談を持ち掛けるように命じたという一面があった。

ハンコックならそのメッセージにすぐに気が付くだろうし、マクレディもプロだから逃げる時はきつと役に立ってくれるはずだ。キュリーやケイトが足を引っ張っても、悪いことにはならないはず——。

そして彼らがここを離れたということは。

「僕も逃げださないと……さて、どうするか」

オーバーボスとしての仮面の下から、アキラが顔をのぞかせた。するとそれまで取り付いていた怒りはパツと霧散してしまう。そして何かを考えながら、どこかにいるであろうポーター・ゲイジの姿を探す。

ポーター・ゲイジにとって、この夜は久々の悪夢の夜としか言いようがなかった。

深夜に騒ぎを聞きつけ慌てて動いたものの、まっさおな顔のオペレーターズからの使者と共に状況は決していいものではないことを聞かされる。

客人に用意した家には暗殺者らしき死体の数々が残され。肝心のハンコックらの姿はそこにはない。

そりや当然だろう、自分がハンコックでも同じことを考える。

自分たちの安全を預けるに値しないレイダーなどクソの役にも立たないのは明らかだ。さっさと逃げて、自分で自分の安全を考えなくちやならない。

それどころかレイダーと言うのは救いようがないわけで——。

アキラと言うオーバーボスは時に妙に妙に人懐っこかったり、やさしさのようなものを平気で示す奴だが、それにはまったく期待はしていなかったが、あえてゲイジはアキラに報告するのを“遅らせる”ことにする。

——今夜の騒ぎについて話がしたい。

それぞれのレイダーのボスに向けてすぐに送り出されたメッセー  
ジに、最初の反応はなしだった。

ゲイジハため息をつき、続けて同様のものを再び送る。こうなるこ  
とを恐れていた、暴走だ、少なくともそうなるうとしているのかもし  
れない。

その後、時間と粘り強さが勝利し。真っ青な顔のマグスとその弟  
と、メイソンはやってきたが。デイサイプルズのニシャだけはそのま  
ま放置された。

ゲイジはあきらめずに新しい使いに用件を伝えていると、部下の顔  
が「ひっ」と悲鳴と共に真っ青になったのを見て自分の持ち時間が無  
くなったのだと理解した。

「おはよう、諸君」

オーバーボスの仮面をかぶりなおしたアキラは、皮肉の笑みと凍死  
させるかもしれないというほど苛烈な冷たい目を輝かせてそこに  
立っていた。

まずはギクシヤクしないように軽い挨拶から入り、なだめ称えなが  
らも慈悲を求めず理性を願う。何が問題であったのか、だけを改めて  
伝える。

ゲイジが語るのは昨夜の物語——それは不満に満ちたものではあ  
るが、あとはあなたが判断してくれればいい。

皮肉を全開にして上げ足を取るアキラからそこまで引き出すこと  
は簡単ではなかったが、ゲイジはやり遂げた。だがそのせいで、現状  
がより深刻な問題を発生させてしまうのだが——それはもうしよ  
うがないだろう。必要な犠牲ではあるし、なにより従わなかった奴が悪  
い。

アキラは静かに、だが激しい言葉でデイサイプルズに向け。何を  
やってるのか、こっちに來て説明してみるとオーバーボスの名前で命  
令を下した。今回はさすがにニシャは無視できなかった。

そしてそのおかげで、一番最後にやってきた彼女をマグスはだいぶ  
落ち着き、顔色をよくして迎えることができた。状況は変わったの

だ、アキラがそれを今から教えてくれるだろう。

「さて、俺はぐっすり寝ていたもので気が付かなかったんだが。目が覚めて驚いたよ。昨夜は大変だったそうだな？」

アキラから不機嫌の塊がまず投げつけられるが、レイダーのボスたちは黙っている。これは開幕のあいさつのようなものだ、本番はここから始まる。

「俺が客人と認めた。グッドネイバー市長のハンコック氏にどこからか暗殺者が送り込まれたそうだな。でも、別に驚くことではなかったらしい。俺はそれを知らされないままゆっくり寝ていた。お前はそれを感謝しろと、ゲイジ？」

「——それについてはさつきも言ったが。俺に説明させてほしい、ボス。」

あの時は俺達にもなにがなんだかわかってなかったんだ。状況が分かるまで時間がかかったし、騒ぎによる混乱もあった、大きなものではないとわかったがそれだけにあんたを呼ばなくてもなんとかできると思ってたんだ。

もちろん俺はベストを尽くしたとアンタに言えるが。それが不満だったと言われても仕方がないことだとわかってる」

「今日は可愛いじゃないか、俺がそれを信じないと言わないと思わないのか？」

「あんたが決めることだ。あんたはこのオーバーボスで、ここにいる皆がそれを理解してる」

「それならお前の言う皆に聞いてみようか。」

メイソン！パックスは昨夜の騒ぎに何をやった？」

メイソンに向けられる視線は冷たいものだったが、彼は動じることなくいつものように茫洋としながらもあっさりそれに簡潔に答える。

「なにも」

「なにも？」

「あんたと同じということだ。寝ていた、だがハンコックが消えたのは知っていた。俺はとくにどうするとも思わなかったし、あんたから指示もなかった。だから俺達は動かないと決めて寝た」

「フツ、アハハツ！こりや参ったな、パックスは俺が寝てたから自分もそうしたか」

「そうなるな」

「そうかい、それじゃ次だ。」

色々興味深い話を期待している、オペレーターズはどうしてた。マグズ？」

ゴクリ、とマグズは喉を鳴らす。昨日までは他に比べて頭一つ抜きんでて結果を出していたと思っていたのに。暗殺者共のせい、一つ間違えばボスの怒りはまだ自分に向いていると理解したのだ。

「客人の相手は私が行っていた。だが——問題は起こってしまった。」

守ることは出来なかったけれど、その後でもできると思ったことは全部やったわ」

「ほう」

「客人たちの確保、現場の保全、暗殺者たちの情報も集めてるし……」

「それはもちろん雇い主についても？」

「ええ。ええ！もちろん」

「そしてわかってないんだな？なににも？」

「まだよ——まだ、何も出ていない。でも見つけ出す、必ずに」

「それでもがっかりさせられたのは事実だ。それでは最後、デイサイプルズは昨夜はなにをした？寝てた？それとも賢明な捜査とやらですでに真実を明らかにしたか？」

アキラの態度に変化はなかったが、不思議と自信満々に笑顔のニシヤは自分たちのことを語りはじめた。

「オーバーボス、あんたがこいつらに失望するのも分からないわけじゃない。こういう時の悪党の流儀ってやつをこいつらは何もわかっちゃいないんだからね」

「ほう、するとデイサイプルズは他と違うのか」

「もちろんだよ、ボス。」

あたしらはレイダーさ。あんな茶番を見せられたくらいで動揺なんてしない。ゲイジも意外に肝っ玉が小さいんだね」

ゲイジはニシヤの言葉に不穏なものを感じながらも、今は沈黙を選



ぶ。

危険な笑みを浮かべ、アキラはニシヤをうながす。

「……続ける」

「ボス。アンタはきつと満足してくれる。」

うちも騒ぎの現場を見たのさ。なにが起こったのかは一目瞭然、  
デイサイプルズは当然。ハンコックを追跡して殺せと命じたよ」

「ナニ？」

「だって当然だろ？」

あれはどう見ても〃ハンコックの仕込んだ演技〃なんだからさ」

「演技？今、お前は演技と言ったのか？」

「ボス、落ち着けよ。な？」

高まるその場の熱に危険を感じ、ゲイジが止めに入るが、もう遅かった。間違いなく今のは核地雷級のヤバイものをニシヤは踏んでいた。

ゲイジになだめすかさね、フィズトップマウンテンの頂上に2人だけで場所を移した。

怒り狂ったアキラの顔はまさに修羅のそれとなっており。あの場にもうわずかでも置いていたら、ニシヤもろともデイサイプルズは死ねとでも叫びかねない剣幕になっている。

「なあ、わかってるからそろそろ落ち着いてくれよ。あんたがデイサイプルズを、ニシヤを、俺を含めたここにいるやつらに失望するのはわかる。だが、それがレイダーってもんだ。そうだろ？」

「だから俺もバカに並べと？先に見える御馳走を無駄にして、目の前の骨にかぶりつくのが正しいとでもいうか!？」

「俺はアンタに説教してるわけじゃない。」

信じてくれと言ってるだけだ。彼らはここに必要だし、そしてこれは本当に残念なことだが。あんたはまだ彼らの経緯に対してオーバーボスとして報いてはいないってことを」

「……続ける」

「俺たちは誰もこのトラブルを望んだわけじゃなかった。だって俺たちは何かを始めるために動き出したばかりで、まだなにもなしていないんだ。結果はこれからさ、ハンコックは耳ぎといという話だからその前に来たのかもかもしれない」

「今更は本人に聞いて確認できないよなあ」

「だが同時に奴の首には価値があるんだ。グッドネイバーの市長だぞ？ 奴に死んでほしい奴がこの連邦にどれだけいると思う。指の数だけじゃ全く足りないはずだ」

「ハンコックの話が、俺のこの怒りにどう関係があるって!？」

「そんな奴が背中を見せて逃げ出したら、レイダーなら思わず飛び出していつて当然とは思えないか？」

「ゲイジ先生のレイダー講義か？ クソの価値にも匹敵するようなそいつを教えてくれてありがとうございませすって」

「なあ、皮肉はやめて。もう一度だけ頭を冷やしてくれよ。」

先にあるヌカ・ワールドの栄光は次にあんたが連中の前で何を言うかにかかっているんだ。大きなことを成し遂げられるんだ、それをぶち壊したいわけじゃないんだろ？」

「そうか。ならまだ聞いてやるよ。俺につ、どうしろと?？」

——与えろ。

ゲイジの答えは短い、それを聞いてアキラは鼻で笑う。

「ミスしてよくやった、か。都合がよすぎて反吐が出るぞ、ゲイジ」

「ああ、まあ。そういうことも必要な時が来るかもしれないが。それは今回じゃない、ボス。」

今回の騒ぎは結局のところ、まだ俺達が正しい関係になってはいないと連中が考えているからだ。あんたが与えれば、彼らは敬意をどうせんのようにはらうようになるさ。それは間違いはない」

「目をつぶれ？ なかったことにしろ?？」

「そこまで俺はあんたに要求しちやいない。それに実際の話、そんなことをする理由もない。」

ただ。怒るならまずはあんたの力を示すことから始めてくれと頼

んでいるだけだ——」

アキラが睨みつけてきたが、もうその口は皮肉を見せもしなければ吐き出すこともなかった。

考えているんだ、ゲイジはそんな自分のボスが大好きだ。

「本当にそれが必要で、それをやるべきだというならしてもいい」

「ああ、アンタは最高のボスだ」

「だがこれ以上はないぞ」

「ああ、わかってる」

ゲイジはうまくいったと思った。

このボスは賢い、言っていることが実現できるかどうかをちゃんと見えている——馬鹿じゃないんだ。

アキラの寝起きするフィズトップマウンテンの私室に、この遊園地のどこかで使っているらしい玉座のような装飾された椅子が置かれていた。

今、彼はそこにだらしなくも崩れた格好で腰を掛け。手には半分まで飲み干された白く輝くヌカ・コーラ・クォーツが握られていた。

ゲイジに連れられて3人のボスが部屋に入ってくると、アキラは傲慢な態度で彼らを迎えた。

「さつきは失礼した。なにせ目覚めからこっち不愉快な事ばかりだね、ちよつとした八つ当たりみたいなものさ。お前たちもそう思わないか?」

「……」

「まあ、いいや。」

色々つまらないことがおきてしまい、俺としちやなにがどうなっ  
てこうなつたと知りたくてたまらないところだが。そこにいるゲイ  
ジ先生がもつと別のことに注意するべきだという。まったく、驚いた  
ろ?」

3人のボスがゲイジを見るが、そこには「なにを言いやがった?」と  
全員が言っていた。

「オーバーボス、そんないじめないでくれよ。あんたにそんなことさ

れた俺はもう、半ベソかいて縋り付くしかない」

「ブン……それじゃ話の続きからいこうか。ニシヤ、ハンコックはどうした？」

「……まだ捕らえてないよ、ボス」

「デイサイプルズが今の今まで追いかけてるのに、グッドネイバーの市長はまだ自由に逃げ回ってるということか」

「いや、少し違う。あんたがゲイジと消えた時に部下には手を引くように指示を出した。新しい報告は入ってきてないから、もしかしたら——そういうことだ」

「うーん、なんだか少し気分がよくなってきたようだ。」

これまでのデイサイプルズの働きは満足していた。そんなお前たちがボスの機嫌を損ねることしかできない間抜けだなんて、考えなくてもよくなったみたいだ」

「勇み足ってやつだったのかも。あんたが指示を出してくれりや、そんなことにはならなかったはず」

今のも暗に最後まで知らずにいたオーバーボスを皮肉る言葉にも聞こえるが、アキラはそこはあえて聞かなかったふりをするようだ。

「それならたくさん反省が必要になるだろう。ちようどいいものがある、それを役立ててくれ——ゲイジ！」

アキラがそういうとカウンターの下から布の束を取り出し、ゲイジはそれをニシヤに差し出した。

「オーバーボス、これは？」

「それをもってドライロック・ガルチへ行け。お前の場所だ」

3人のボスの顔に驚きと喜びが走る。

ここにきて唐突に論功行賞が始まるなんて考えてもいなかった。

「感謝するよ、あたしらのオーバーボス」

「これ以上は失望させてくれるなよ、ニシヤ。ドライロック・ガルチ、だ」

「あ、ああ」

「行けよ、楽しんで来い」

そういうときつきと追い出し、続いてオペレーターズのマグスに目

を向ける。

「オペレーターズには色々期待していたわけだが、あまり楽しい思いは出来なかったと思う。お前はどうか？」

「私たちは十分に働いたと自負してるわ。完璧ではなかったけれど」  
「んん——美人の強気は絵になるが、それを本気で言ってるとしたら困ったことだ。俺が客人だといったのに、お前はその客人を襲われた上に、逃げられてもしまっている」

マグスは黙っていたが、実際は彼女もハンコックらを追うように指示を出そうとしていた。

だがゲイジからメッセージを聞き、オーバーボスがまだこの騒ぎを知らないこと、ニシヤがここぞとばかりに出てきているせいで衝突が起りかねないことを考え、あえて引いていた。

それはここにいる弟にも申し渡していたから今はまだバレてないはずだが、不安を見せないようにここはあえて強気を見せていた。

「とはいえ、いいだろう。一枚持つていけ、ギャラクティック・ゾーンだ」

「正当な評価をもらって感謝するわ、オーバーボス」

「そのかわりにお前には今回の失態の尻ぬぐいもやってもらう。ハンコックの暗殺は誰が計画したのか、おくりこんだ奴を調べてもらうぞ」

「当然だと思う、必ず犯人を見つけるわ」

2人目が追い出され、その背中をゲイジは満足そうに眺める。ここまでは願い通りに進んでいる、このまま最後まで行けばいいが——。

「さて、メイソン。パックスなんだが、どうしよう？」

「おいおい、アキラ？」

「——あんたがオーバーボスだ。あんたが好きならすればいい」

メイソンは相も変わらず茫洋としていて、感情を見せない。こんな時でもこの男は群れのアルファということか。

「パックスに関しては思い出せることは少ない。お前はまず、自分の部下の処分を俺に求めた」

「それはあんたが好きならにした」

「その後も大した動きは見せてないな。やる気も見せないが、消極的ではないという」

「パックスはそうだ。それが俺達だ」

「その調子で俺から旗を一枚持って帰れるとでも？」

「——女を贈るつもりだった。あんたに」

「女？まだお前の部下か？」

「違う、ダイアモンドシティの女だそうだ。なにやら記者をやってるらしい、美しくもあつた」

(んん?)

なにやら特定の人物の顔が思い浮かぶ。正論が大好きな、しゃべりっぱなしの美人記者。

「それを俺にくれると？」

「興味あるんだな」

「お前が美人だというからな、そりゃ興味を持つさ」

「だがもう無理だ」

「なぜだ？」

「ハンコックの女にやった。あいつもその女が欲しいというからな」

なぜかキュリーではなく、ケイトの顔が思い浮かぶ。ま、彼女なら心配ないか——。

なにやらはつきりしないメイソンにゲイジは「おい、メイソン」と焦って声を上げるが、本人は相変わらずまったく気にしてはいないようだった。

「言葉を飾ることはしないんだな、パックス」

「その必要がないからな、当然だろう」

「ゲイジ、彼にも旗を——ただし、パックスにはひとつ聞いてもらおうことがある」

サファリアドベンチャー、あそこには友人となったシート——となかなか“楽しい”装置がある。オペレーターズやデイサイプルスには渡したくない場所だが、パックスならどうだろうか？

「サファリアドベンチャー、そこに行け。ただしすべては渡さない。」

あそこには共に戦った友人とその家族たちがいる。彼らに俺はそ

の礼として隣人となる権利を与えて報いたい。そこはお前が好きに使えばいいが、彼とその家族が主張することはできるだけお前にはかなえてもらう」

「俺がそれは嫌だと言ったらどうする？」

「帰れ、おまえにはなにもない」

「俺がその約束は関係ないと言ったら？」

「お前は死ぬ。俺が必ず殺してやる、オーバーボスが誰なのかわからない奴と同じ目に合わせてやる、約束は信じて」

「オーバーボス！」

ゲイジは声を上げるが、アキラは変わらない。

意外にもメイソンはすぐに「わかった、アンタの願いを聞く」と答えたので、レイダーの旗はメイソンの手に無事に渡され、パックスもサファリアドベンチャーを手に入れることとなった。

どうなるかと冷や汗が出たぜ、そう口にしてほころぶゲイジを僕は見つめた。こいつはもう終わったつもりらしい。

「まだ終わってないぞ、ゲイジ」

「あ？」

「まだお前が残っている。俺はお前の意見に耳を傾けた。しかしお前にも約束を守ってもらわないとな」

「何の話だ？」

「お前は俺にこのヌカ・ワールドのオーバーボスになれると言った。だが、お前は何も約束は守れなかった」

「お、おいっ」

「誰かが」俺の場所に殺し屋を送り込んだ。「誰かが」俺の客人たちを襲った。「誰かが」誰とはお前たちは信じられないほど間拔けな成果、まだわかってもない」

「……これは俺へのお仕置きというわけか？」

「はつきりさせたいのは、お前とは仲良しこよしでやってるわけでも。」

誰かの言うような信頼関係でも、ましてや利害が一致したものですらない。お前がその口で言ったように、互いの約束だけのつながりだが。それを軽く扱うような奴なら俺はそもそもここに来たのが間違いだっただってことになる」

「——そりゃさすがに傷つくな、ボス」

僕は鼻を鳴らす。

「被害者ゴツコをするつもりはない、やめておけ。お前はニシヤを守った、お前の退屈なレイダー講義にはまだ出てきてないが、今回の騒動で一番妖しいのはオーバーボスの意向を踏みにじって追っ手を嬉々として放ったあいつらだ」

「そのうえディサイプルスは残酷で知られてるからな。確かに弁護のしようもない」

「だがお前は冷静に対処しろと言った。してやったぞ、それでこの騒ぎについてはどう決着をつけるつもりだった？」

「互いのきずなの深さを確認して、明るい未来へつてのは。虫のいい話なんだろうなあ」

当然のことだ、反応なんてしてやらない。

「それと俺はここを出る」

「またかよ。今度は何が——」

「胡麻化しても無駄だ。お前は俺と約束した、ヌカ・ワールドのオーバーボスになれると。だが現実はどうだ？」

お前の言葉に誘われて戻ってみれば、自分のものだど欲しがらなくて俺の求めることはひとつも出来やしないクズばかり、これがレイダーの力なのか？俺はお前らの新しいパパか？」

「なあ、そんなイラつかないで……」

「お前は俺を訪ね、『準備は出来ている』と言った。『ヌカ・ワールドはオーバーボスが戻ればすぐに始められる』。これはお前が俺に言ったんだ、ゲイジ」

「ああ、まあ。そうだったかも」

「さらにお前は俺に奴らが出せる程度の敬意しか示せない奴らに仕置きをする前に評価に報いてやれとも言った。俺は罰することはせず



に報いたぞ、貴様の言葉を受け入れた。それがあるべき貴様のオーバーボスのやり方か？」

「その言い方——あんたようするに俺に対して怒っているのか？嘘をついたと？」

ゲイジの顔に厳しさが増し、奴は奴自身のあごに手を置いてそこをさすりだす。感情的になつてようだった。

「貴様が自分で言うほどに本当に有能であれば、この騒ぎは起こるはずがなかった。違うか？」

このヌカ・ワールドはもらつてやつてもいいさ、最悪なレイダーたち？まあ、悪くもないかもしれない。だがゲイジ、俺にここから出ていくなど要求するならお前はいらぬ。ポーターをやめてもらおう」「前にも似たようなことを言つてたつけ。俺を右腕にしたくないと」「いうほど頭が回らず、口先だけの詐欺師に俺のポーターはまかせるともりはないだけだ」

「オーバーボス、俺がアンタのポーターだ」

「なら証明しろよ、駄々をこねてもなにもないぞ」

しばらく沈黙していたが、ゲイジは絞り出すように「あんたに従うさ、オーバーボス」と答えた。

「……それでいつ出ていくと？」

「まだ決めてない」

「どこに行くつもりだ？」

「ん？ああ、またお前の押し売りをうけて肝を冷やされるのはごめんだ。今度は指定させてもらおう——そうだな、ダイアモンドシティの新聞だ。パブリック・オカレンシア、それに広告を依頼しろ。俺だけにわかるようなものをな」

「まるで謎解きじゃないか。それにパブリック、なんだつて？」

「オカレンシア、だ。メイソンの奴が言つてたろ、ダイアモンドシティの美人記者がどうか。〃その噂〃には聞き覚えがあるんでね」

「そりゃわかったが、つまりどこに戻るのかは言わないつもりなのか？」

「なんだ、俺に間抜けなパパを演じさせておいて。今度は俺のパパに

なりたいたのか。門限が気になるか、ゲイジ?」

「そういうんじゃないんだが……困ったな」

もったいぶっているのかわからないが、ゲイジが何か出し渋っている。

「連邦から新しい情報が来ている。あんたに知らせたかったが、この騒ぎで後回しにするしかなかったんだ」

僕はいい気味だという表情を浮かべ、手に持った瓶をあおって空にする。

正直、余裕が生まれ。ようやくレイダーから離れられると喜びもあつて、舐めていたと思う――。

――数時間後、アキラの姿はヌカ・ワールドから消えていた。

あまり知られていないようで、地味にいられていることだが。

ヌカ・ワールドを囲む荒野――正しくは遠く離れた南側にひとりの青年が住んでいた。

この辺りはヌカ・ワールドのレイダーたちが通りがかる商人を襲う狩場であったが。長い旅路に心を休める場所だけが必要とする商人たちは、ヌカ・ワールドではなく彼の家を訪れていた。

そして青年は彼らを「友人」として向かい入れ、ひとときの休息と蒸留された水をふるまって歓迎してくれた。

彼はこの 荒野の刺すように冷たく強い風を、照り付ける太陽で焼ける肌を。

雨は時にあの時連邦を襲ったラッドストームと呼ばれた異常気象の全てを愛していると公言していた。

その彼はこの日、蒸し暑い天気の中に異常気象の訪れを察してそのための準備をしていた。

自分が拾っているゴミで、新しく組み立てている2台目の浄水器のタンクに新しい水を詰めた。ラッドストームの後、これを使って浄水器と発電機を簡単に水洗いできるようにするためだ。

それを見た商人の中には「そんなことして意味があるのか」と笑うものもいたが、物を大切にしたい彼にはそれは必要なことで。大切にされた方もそれをオンに感じているのかわからないが、水と電気が機嫌悪くなるのは年に数回あるけれど。それで困るほどの事態になったことはないから、正しいのだと思える――。

「やあ、お元気ですか」

「……!? ああ、いらっしやい。ごめん、気が付かなかったよ」

「そのようですね。別に構いません、そのまま作業を続けてください。私は勝手にいつものようにくつろいでます」

「ああ、どうぞ――すぐに終わる、サカモト」

まるで新調したばかりの服は荒野を歩いたにしてはどこも汚れてないうえに、見たこともないデザインのローブとズボンには白と銀に輝いてこの太陽の照り付けを反射してヌカ・ワールドからでも気が付くんじやないかと思う。

数年ほど前からここを訪れる商人たちの中に、このサカモトと彼の“家族”――青年はそれを光の兄弟たちと秘かに名付けていたが。どうやってここまで来たのかわからない、浮世離れした者たちが訪れていた。

彼らは他の人たちと同じく自分も商人だと言っていたが。

面白いことに全員が武器も、荷物も持たず。そして今回のように突然訪れて、好きな時に立ち去っていく――。

悪いね、作業を終えてすでに椅子に腰を掛けて優雅に足を汲んで待っていたサカモトに青年は笑いかけた。

構いませんよ、まるで自分がこの場所の主でもないだろうにサカモトは偉そうにうなづく。

「君の――兄弟? キジマがちよつと前にここに寄ってくれたよ。なんか通りがかったとかなんとか言ってたけど」

「そうですか」

「彼は? 元気かな?」

「大丈夫でしょう。あれは口下手の上に自分のことは話したがるな

い。といつても……仲の良い兄弟と言うわけでもないですしね」

「家族は大切だよ。僕はそう思う、サカモト」

「ああ、それはもちろんそうですよ——エヴァン」

サカモトはそう言つて苦笑する。

“小さな宝物”……そこに所属する兄弟たちは不思議なことにはほとんど全員がこの場所と主のことを気に入って秘密にしていた。

連邦においては自分たちの存在をインステイチュートに匹敵するほど用心深く動く彼らだが、ここはなんといいっても連邦に近いだけの場所。エヴァンは人と交流すると言つても、自分が友人と呼ぶ人らの素性を明かすことはないことを知っていた。

「ちようど今からお湯を沸かすところだったんだ」

「それなら確かにちようどいいですね。実はお土産があるんです、あなたに」

「ええっ」

「なに、高価なものじゃありません。ただのお茶の葉です。水でもお湯でもどちらでも楽しめます」

そういつて袖の中から引つ張り出してきたものは薄い黄緑色をしたプラスチックケース。しかもこれもきれいに光り輝いている。

(彼らは何でも新品みたいなんだな)

エヴァンは助かる、嬉しいよと言いながらそんなことを思つて苦笑した。

「あなたにと作つてみたら良いものになりそうで、つい力が入つてしまいました」

「君が作ったの？いいのかい、商売に使うんじゃないの？」

「大丈夫ですよ、これは一部ですから」

「そう……それじゃ有難くもらうね。さつそく使おう」

お湯が沸くのを待つ間、2人は向かい合つて当たり障りのない世間話をした。

「そうだ、お茶のお礼に何か持つていくかい？知っていると思うけど、僕はここでガラクタ集めをやつてるからね。使つてないものも結構あるんだ」

「気にしないで、エヴァン。今日は本当に顔を出すだけのつもりで来たので」

「ああ、そう。最近は忙しいのかい？」

何も知らないエヴァンのその無邪気な問いは、今のサカモトには深い意味を与えかねなかった。

「ええ、そうですね。トラブルがありましたね、少し騒がしくなってます。私もその関係で今回、女性をひとり運ぶ仕事を終えた帰りで」

「ふーん、あまり話したくないみたいだ。楽しいものではなかったようだ」

「それは正解です。とはいえ必要だからやらねばならないこともあるわけで——そう、でも思わぬ愉快なものも見られて私は少し気分がいいのです」

「へえ、それは良かった」

「ええ、本当に見られて良かったですよ。兄弟達が失敗して顔を真っ青にするのは、ね」

「サカモト!？」

サカモトは驚いたことに大声で笑いながら、お湯が沸きそうですよと言った。

2時間後、遠くで不気味な雲が沸いている方角へと立ち去っていくサカモトをエヴァンはいつものように送り出した。結局サカモトは何を見たのか、失敗とは何かについては教えてくれなかったが。エヴァンは別に気にしていなかった。

話の内容よりも、誰かと過ごした時間に価値がある。

彼はそういう人なのである——。

## 交錯 I

若かりし頃、ミニッツメンではグッドネイバーはちよつとした禁断の町のように扱われていた。

自らをジョン・ハンコック本人だと名乗り。ただの殺し屋でしかないはずだったのに、彼は人々の手に武器を握らせ。彼らの先頭に立ち、レイダー共をそこから叩き出した。

人々は彼を称え、彼が宣言した新しい隣人たちを迎える場所。グッドネイバーへと参加していった。

その頃、ミニッツメンはゆつくりと崩壊し、なにもできることはなかったというのに。

彼はそれを平然とやってのけた――。

「どうしたい？ やっぱりの門はくぐりたくはないものかい」

「――まあな、感情の問題さ。わかってる、わらってもらっても仕方がない」

「そんなことはしないさ。あんたはこの連邦のヒーローだ。その名声を知っていれば、簡単じゃないことのひとつやふたつくらいはあるものだ」

「そういうことじゃ、ないんだがな」

ガービーは苦笑しながらそう言ってディーコンの脇を通り、門をくぐってグッドネイバーへと入る。

ここはやっぱり空気が合わない。

安全な場所だとは思う。明らかに小さな門の外と中では別物だということだ。

だがここは――やっぱり苦手だ。

無秩序こそ自由と豪語するハンコックの町だから。

グッドネイバーの住人たちは朝、この町を訪れたのがあのガービーだとすぐに気が付いていたが。人だかりは一緒にいたディーコンと自警団がすぐに散らしてくれた。

何軒か店先を覗くと、なぜかディーコンに連れられてサードレール

でビールを注文していた——まだ朝なのに！

「こりや墮落もいいところだ」

「だからこそそのグッドネイバーだ。あんたもここじゃ、その流儀に染まっておくべきだ」

「どうだろうな。気が付いたら路地裏で素っ裸で転がされるのかもしれない。間違ってるか？」

「いや！全く正しい。だが、それでもそうするべきさ」

「——そうかな」

「ああ」

彼はそれ以上、しつこく言及しなかった。

なんだか面白い距離をとる男だ。それによく考えればこうして酒場で並んでビールを飲むような間柄であったかどうかとも思い出せない。だが、それでもいい気がする。

そんな風に人に思わせてしまうのがこの男の魅力なのだろう。

なら、その助言に今はしたがった方がいいのだろう。

その日のガービーはいつもとは少し違っていた。

思えばミニッツメン崩壊からずっと「なんとかしなくては」「どうにかしなくては」と何事にも全力を傾けてやってきた。

連邦は新たな局面へと進んでいつてはいるが。ガービーには新しい將軍、そして新しいミニッツメンが揃っているのだ。何を恐れる理由があるだろう。

それでもやはりどこかで——不安は残っていたのだ。

ゆるむことなく張りつめていたものが、なにかがハマったかのように緩んでしまう。楽しんで飲む、そんな簡単なことを忘れかけていたのだと思いつつ。この瞬間を大いに楽しみ始めていた。

酒が入ったことで饒舌となり、同じ客の女性たちから武勇伝をせがまれると、これに大笑いしてから上機嫌で語り始めた。

崩壊していくミニッツメン、仲間が失われただひとりだけでもその凶事を胸に孤独に任務を果たそうとした。

連邦の果てにあるサンクチュアリで、将軍となるべき男との運命の出会いを果たし。彼に励まされ、新たにミニッツメンを創設。北部に住み着く最大のレイダー達との勝負へと乗り出していく……。

わざと、ではないのだろうか。そこにいたはずのアキラはすっぽりと抜け落ちてはいたけれど。

伝え聞く物語が当人の口で語られる様子に皆が耳を傾け。このバーの歌姫もそれを気にして席を立とうとはしなかった。

時が流れ、太陽は移動を続けていたが。ガービーは絶好調のままだった。

しかしそれは長いことではなかった――。

表面上、グッドネイバーは市長が留守となっても平和を守ってきてはいたが。この時ばかりはさすがに騒ぎとなった。

2台のロボットと犬が、“2人”の怪我人をメモリー・デンへと運び込んだからだ。

それまでは酒場でのんきをしていたガービーとディーコンも、知らせを聞くと酔いを吹き飛ばし。慌てて転がるようにしてメモリー・デンへとおっとり刀で駆けつけていく――。

そんな2人が知ることができたのは、置いてきたレオが片腕を失うほどの大けがをしているということだけ。

体の大きなコズワースは事情を聞き出すがとらにと、この町の警備に連れていかれてしまい。エイダはいえ、Dr. アマリについて奥で一緒に治療に参加しているとかで。何が起きたのか知っているのは、そばで平然と体を横たえてはいびきをかいて寝ているカールだけなのだ。

「俺は馬鹿だ！将軍が大変な目にあっている時に、なんてことを――」  
「ガービー、落ち着けよ。こんな騒ぎになるとはだれも思わなかった」  
「せめて部隊をかえさずにつれておくべきだったか。いや、そもそも昨日の騒ぎで将軍が言っていたじゃないか。騒ぎの中に別のものが



混じっていたって。あれは——きつとレイダーだったんだ！」

「そんなわけがないってあんたも見ただろ？死人が持っていた武器はやけにいいものばかりだったじゃないか。レイダーというよりもあれは傭兵だった」

「そうか……それじゃ、あいつらは暗殺者だ！そうに違いない。」

だとすれば犯人はレイダーだ。あいつら、ミニッツメンへの報復として將軍を狙った？」

「支離滅裂になりかけてるぞ、ガービー。落ち着けて。」

確かにレイダーならミニッツメンに恨みはあるだろうが。あの騒ぎからあいつらはまだ回復してないし。殺し屋を雇ったのならそういう噂はこの町でできないわけがない。俺は聞かなかったぞ、あんたはどうだ？」

「俺も……ないな」

「なら、違うんだろうな」

とにかく情報が欲しかったが、それが手に入ったのは目をこえてさらに8時間を過ぎてからの子である。

ようやくのことひと段落ついたらしいアマリとエイダが奥から出てきた。

D r. アマリの顔は徹夜明けというのもあるのだろうが。疲れ果て、めのしたにくまがでできるまでになっていた。そんな彼女に2人は恐る恐る問いかけてみた。

「とりあえずまずは聞かせてくれ。あの男は、レオは助かるのか？」

「ああ……そうね、租についてはもう心配はいらないわ。彼は無事よ」「彼は腕を怪我したと聞いたんだが——」

「怪我？ああ、確かにそうね。片腕はダメだったから、切り落としたわ。大丈夫よ」

「そんな……」

ガービーの世界が揺れる。

入間はそんな皆の様子を見て「お茶を用意するわ。少し休憩しましょうよ」といって席を立つ。

「まったく、とんでもない患者を運び込んでくれたわよ。まあ、こつち

にしても”まったく割の合わない”話ではなかったからいいけれど。それでもいきなりって——」

「ああ、すまないな」

「本当にそうよ、ディーコン……あら、あなたなんでここにいるの？今日は予約は言っていないでしょう？」

「おいおい、客のプライベートをさらつと口にしないでくれ。それと、レオは俺の友人のまた友人でな。だから俺も心配している風にしてここにいるのさ」

「あなたに友人っていたの？それは驚きね——」

遅れてエイダがあらわれると動揺しているガービーは跳ね上がるように立ち上がる。

思わず感情的な言葉が——口から飛び出そうとして慌ててそれを飲み込む。昨日は思えば自分らしからぬ浮かれた一日ではなかったか。こんな最悪な日を迎えたのは、本当に自分らしくいられなかったせいではないか。

そんな無意味な思いが、彼を不自然に理性的にふるまわせ、エイダを怒鳴りつけ、なじることなく。こんな状況におちいった説明だけを求めた。

「——前兆は何もありませんでした。数時間ほど、レオは部屋の中で作業を続け。私たちは邪魔がないように外で警戒を」

「なにがあった？」

「それは突然でした。中でレオが異変を感じたような兆候を感じました。

侵入方法は不明ですが、確かに彼と同じ部屋に何者かが存在していました」

「襲撃を受けたのか」

「その通りです。こちらも助けに入ろうとしましたが、侵入者は唯一の出入り口に細工をしていたようで手間取りました」

エイダは突入の際の記憶を思い返す——。

異常を示すレオの姿に、自分たちの組織の未来への不安と恐怖を抱いたコンドウだが。

いくら己の優秀さを知っているとはいえ、彼が恐るべきは目の前で苦しんでいるレオ以外に入ることを知ることが出来なかったことは彼の責任ではないだろう。

ヘーゲン砦でおきた事件——観測者によってレオとカールに行われた所業の結果。

それが巡り巡ってこのような状況になると、あの時の観測者が理解していたとは思えない。

そしてコンドウが今、恐れるべきはレオだけではないということも。

エイダだけでは苦勞した封印された扉も。

毛を逆立てて戦闘モードとなった危険な獣が加わると、それほど難しいものとはならなかったらしい。

最後の一撃でもろとも突き破って見せた生きた弾丸は室内に真っ先に突入すると、敵と守るべき人に向かって飛んでいく。

そこに頭部レーザーを照射しながらエイダが走り込めば、コンドウはたちまちにして窮地へと陥った。

コンドウは彼の勝利を前にして、最後に判断を誤ってしまったのだ。

世界は、連邦は、敗者に対しては容赦はしないものだ。

限定された空間、対人戦のエキスパート。1台と1匹。

いくら異能力者とはいえ、コンドウがこれから逃れる可能性は限りなくゼロに近く。そして実際、逃げようとする近藤を追い詰めただけで戦闘らしいものは一切なかった。

近くでまわりつくカールに、離れたところから空間を削ってくるエイダ。

コンドウはなんとか壁際まで寄ろうとしたが、その前に叩き伏せられ、エイダに拘束されてしまった。

「……状況を再度分析中」

「——うウ」

「レオに危険な症状を確認。あなたに聞きます、なにをしたのですか？」

「フン。ガラクタにやられるとはな。最悪だ」

うつ伏せになつたまま、コンドウはそう強がったが。直後に足首に違和感となれない激痛が走り、若者らしい悲鳴を上げた。

カールが足首に噛みついてこれをあつさり噛み砕き。エイダは情け容赦なく反対の足をレーザーで貫いて見せたのだ。

「もう一度だけチャンスを与えます。会話ができないとなればアナタは不要な存在です。すぐに処理することになるでしょう」

「……」

「レオに何をしたのです？もしくは何があつたのですか？これが最後です」

コンドウは咳き込み、唇の端から血の泡を吹きながら声を上げる。

「毒だ。毒を使った」

「——なるほど。彼を助ける方法がありますか？それをこちらに提供する意思があなたにありますか？」

「……難しい話になってきたな」

「判断は迅速に。時間には限りがありますよ」

「救う方法はある。助けてやってもいい」

「はい」

「だから——」

エイダの言葉に「それで？」とデイーコンは続きを促した。

なんとも訳が分からない話だった。

エイダたちの話が事実ならば、襲撃者はレイダーではないらしい。それどころか立場が危うくなるなりレオの生死にあまり興味すらないようにも思えた。それなのに、暗殺だ？

「襲撃者は治療後にレオとの個人での会談を条件に出してきました」

「それをかなえると、お前はそう約束したのか!？」

「仕方がありませんでした、ガービー。レオを助けるすべてはむこう

が握っているのですから」

「うう」

何やら必死に自分の中でしょうかしようとしてしているガービーだったが。ここでDr. アマリが口を出してきた。

「そこからは私が話した方がいいでしょう。専門家だし、なにより私の患者ってことになったのだから」

「で、患者達の治療はうまくいってるのかい先生？かなり長い時間、かかっていたようだが」

「ああ、それはね——」

自分から言い出したのにもかかわらず。いきなりアマリは答えずらそうに顔をしかめた。

暗闇の中から意識が引きあがるのを感じて目を覚ました。

私はまだ——生きているらしい。

最後の記憶がゴミの山の中で必死に自分の片腕を“潰す”という不快な作業であったはずだが。また、なにかがあったということなのだろうか？

横たえた体を動かそうとすると、ほぼ全身から重なるようにして嫌な信号をいくつも感じた。

腹の底にたまっているような泥のような不快感。筋肉の細胞にしみ込んだような倦怠感、流れる血とおなじく走り回るかゆみ。そして骨のきしむような痛み、当然だが包帯でこれでもかと厚くまかれた片腕——。

「かなりの重傷、ってわけでもないだろうか？」

自分にそう問いかけつつ、なんとかもがくようにして体を起こした。

手術台の上に一枚の下着姿でいる。見回す限り、包帯を覗けば他に新しい傷をうけてはいないらしい。

両足を床の上におろし、どんなもんかと試しに立ち上がる——すぐ

に腰を下ろした。

尻と腿の間がスカスカに感じて、立ち続けることができなかった。筋肉がなくなつたということではないから、これは歩くにしてもコツが必要だろう。

とはいえこつちも元は最前線で色々なケガを経験してきた身だ。これならふらつきながらも十数メートル程度は歩けるだろうと判断した。

ここはどこだろうか？

部屋の雰囲気から病院のようにも見えるが。そうでないようにも見える。

頭が動いてないみたいだ。体の倦怠感に負けない、鈍さに苛立ちを覚える。なにかの薬の影響なのだろうか。

(もう動けるのか？頑丈だな)

誰だ？

人の姿を求め、足元がおぼつかないが多少は無理をして歩き出す。通路に出て左右を確認する。

(そちらから来てくれるのか？それはいい、退屈していたところだ) 声が出したと思つた方向に部屋がある。

扉にもたれかかり、倒れないようにしながらゆっくりと開けていく。

(そうだこつちへ。もつとこつち。こちらからはどうにも近づけないのでね)

無様な話だが、部屋の中に入る際に足がもつれて倒れ込むように入っていく。

4つんばいになってしばし、体の悲鳴を聞き。それから顔を上げた。

「なんだ、これは？」

(もう忘れてしまったのか、フランク・J・パターソン Jr。そういうえば自己紹介はしてなかったな)

1メートルほどの大きさの透明な容器の中にはオレンジ色の液体が満たされており。そこに人間がひとり、入っていた。

それは小さく、小さくされ。もはや彼は外に出ることはかなわないのではないかと思った。

(私がお前の死を願う。自ら暗殺に出向いた張本人。はじめまして、私の名はコンドウ)

手足を付け根から切断され、目が潰された若者。

“白人”の彼は不思議な名前の方から自己紹介をしてきた。私と言えば、呆然としてはいられないのだと自分に言い聞かせ。せめてなにか気の利いたことを口にしようとして——「これは悪夢かな」などと口にしてしまう。

カプセルの中の若者が低く陰鬱な声で笑っていた。

## 空白の時間 (Akira)

レイダーの支配するヌカ・ワールド。

そこからの撤退はおしよせる凶悪なレイダー共の追跡を振り払う命がけのもの——なんてことは、まったくなかった。

襲撃からすぐさま逃走へと切り替えて連邦へと向かったが。

町を出たあたりでアキラのローグスががちりと脇を固め、レイダーの追撃はあの騒ぎを思うと全くなかったとは思えないが。不思議とハンコツクらの一行の背後に現れたりはしなかった。

——結局はこれかよ

マクレディとケイトはガツカリしたものだが、それは2人だけのこのようだ。

それまで怪しげな状態のパイパーから目が離せないと必死だったキュリーは、さっそく治療をしたいと考えていたし。ハンコツクはヌカ・ワールドを離れて連邦に入っても、口数は少なく何事かを考え続けているようであった。

彼ら一行を守り続けていたローグス達は連邦に入ったあたりから姿が見えなくなっていた。恐らくだが主人であるアキラのために戻っていったのだろう、キュリーはそう言っていた。

——サンシャイン・タイティングス

ミニッツメンによって開かれた居住地の中でもっとも安定して暮らしていられる場所といわれているそこは、アキラがヌカ・ワールドへと向かう際には必ず経由する連邦最後の拠点である。

とはいえ危険が全くないということではない。

ここに常駐するミニッツメン達はすでに近くに居を構えているレイダーの集団をいくつか発見しているし、危険なスーパームュータントにして規格外の巨人、ベヒモスの巣も確認されていた。

朝、農民たちは日が出ると同時に起き上がると。朝食の前に土をいじる。



彼らが戻ってくるころ、ようやく若きミニッツメン達が起きてきて朝食が始まる。そんな時、ケイトはひとりで皆とは距離をとって食事をとっていた——ヌカ・ワールドから連邦へと帰還してはやくも3日が過ぎようとしていた。

キュリーはパイパーの治療で家に籠りつ切り。ケイトは正直、あのまるで作り物のように意思を持たないパイパーの姿を見たくないの  
で病室には近づきたくない。

さらにハンコックは数日グレイガーデンに行つてくると言いだすとマクレディを連れてさっさと出て行ってしまった。

で、結局なにもすることがないケイトは。何かをやるうとした結果——農民達の手伝いつてことで、土をいじっていた。

あのアリーナではチャンプだったこのケイト様が、だ。

そんなことをしている自分をらしくないな、と笑いながら。しかし不思議と心が落ち着くのも感じていて、なかなか新鮮な体験って奴を味わっていた。

「ケイト、そっちはどうだい?」

「クソツタレのゴミクスは全部引っこ抜いておいたよ。チマチマ、ウンザリさせられるけど」

「ははは、まったく同感だよ。もうすぐ昼飯だ」

「ああ、そう」

「ほらあれだよ、ミニッツメンの連中がやってくれてるところさ」

顔を上げると、巡回から戻ってきたらしい若造たちが大騒ぎしてバラモンの解体をやっているようだ。

「リブ・ステーキかな。楽しみだ」

「———そういえば、ここではバラモンは飼育しないのかい?」

「ああ」

「普通はさ、乳が出るし肉にもなるってすぐ用意するものだって思ってたけど」

「ここは農業と林業しかやってないからね」

「林って?なんかやってた?」

「木材だよ。ロボット使ってるだろ」

「ああ、あれか」

「ボストンのダイアモンドシティからの注文が多いけど、バンカーヒルにも話をしてもらってる。

家畜は——今、ここには子供や動けないジジババがいないからな。当面はいらないんだよ」

「そういうものなの？」

「それにああいうのはレイダーの目に留まりやすいんだ。ここは今のところ静かだが、まわりにはやっかいなのがいるらしいって情報があるんだ。あんまり安全を過信しないで、自重するくらいでいいんだよ」

ミニッツメンの拓いた居住地に住む条件は誰かに守ってもらうことではなく。自分たちで自分たちの場所を守るという契約だと聞いている。だから傭兵など護衛を雇うことは許されていない。用意された武器、与えられた防具を着て自分が戦うのだ。

常駐しているとはいえ、騒ぎが起こればミニッツメンは戦うが。それは別にこの場所を守るためじゃない。獲物を襲うレイダー達を撃滅するために動く。この場所を守る居住者たちが逃げ出せば、彼らの家を守る者はいなくなるということになる。

「ねえ」

「ん？」

「ミニッツメンが居住地を守らない——そんな話があるけどさ。それを信じてるのかい？」

「けっ、ケイト!?!」

「なんだよ？」

「声を低くしろッ。そんな話、あいつらに聞かれたら——」

「あんたの方が声がでかいよ」

ケイトはカラカラと笑うと、農民は恐れた目で周囲を確認し。安心すると、その通りだと答えてきた。

「以前、スターライト・ドライブインの居住地が崩壊したんだ。あそこもミニッツメンが拓いた居住地だった」

「ああ」

「これは噂なんだが——あそこが崩壊したのは住人たちがまず逃げ出したからだって話があるんだよ」

「へえ」

「なんでもあそこは掃除と住む家、畑なんかが作られて。これからつてかんじだったらしいんだ。ところが今は何も無い、住居らしいものはすべてなくなっているし。畑だった場所にも何も残ってないとか」

「だれかがぶち壊して、掘り返していったって事？」

「そうかもしれないがな。これも噂だが、住人たちが逃げたのを見たミニッツメンの連中が、そこらにあつた旧世界のゴミを攻撃して爆破して回ったっていう——」

「それっていいじゃん！」

「噂だよ、噂っ！なんせ生き残りがいないんだからね、それでも。商人連中の話じゃ、あそこでとんでもない爆発があつたのは違いないだろうってね」

「フーン」

「昔のミニッツメンはそこは違つたが、ブレストーンさんは新しいやり方だっていうし。俺らも武器やらなにやら用意されてるんだ、逃げていいことはないしな」

弱い人々を守り、レイダーから人々を守る軍隊。

それがミニッツメンだとあのガビーは言っていたと思うが。だとすれば随分と彼らは——世間で言われているほど善人たちだとは思われてないということか？

——いいや、関係ないしな

「それよりあんた、そろそろ風呂入ったらどうだ？」

「は？」

「というより洗濯だな、今日は日が出てるから午後からでも十分に乾くからさ」

「……そんな口説き方初めて聞いた」

「え？違う、違う。本当に言ってるんだよ、あんた匂うんだよ。嫌な臭いさ。」

それにその服！土なんかいじつたらその——下着丸見えで、目のや

り場にも困ってるんだ。洗濯ついでに着替えたらどうだいってことさ」

ヌカ・ワールドに向かう時、ハンコックの女に見えるようにとへそ出しのドレス戦闘服のことらしい。

「なによ。4つんばいの背後は気に入っちゃったの?」

「やめろよ。俺は独身だけど、女は趣味じゃないんだ。そう言っただろ?」

「へっ、なんなら可能性を探してみたら?こつちも暇してるだけだし、ちよつとその納屋でオイタしたつて……」

「なあ?わかっているとと思うけどさ。」

「ここであんたに手伝ってもらいたいなんて言う家はうちくらいだ。それ、わかってるだろ?」

それはまあ、事実だ。

手にジェット噴射装置付きの鉄バット（誰かの血付き）を軽々と振り回してた女だ。ヤバいつて噂はとづくに広まっている。

「実際アンタには助けられてるんだよ。こんなことで揉めないでくれ」

「了解、お互いの利益のためって奴」

「そうだよ、それだよ」

「でも服ってこれしかないんだけど。まさか午後は裸でやれつての? うふ、それも面白そうだけど」

「ハナシ、聞いてわかっているって言っただろ?服は用意してある、それを着てくれるだけでいい」

「オーケー。今はあんたがアタシのボスだもの。どんな注文でも——」

「さっさと行って!石鹸を使うんだよ?匂うんだ、わかっているだろ?」

「だからわかっているつて。この体、ピカピカに——」

少しからからかいすぎたか。

農民はもう聞いていられないとばかりにケイトに背中を見せると、頭の上で両手をひらひらさせ、ケイトを見ないまま立ち去っていつてしまった。

とはいえ実際、彼には感謝すべきだろう。

周囲を見回すと、誰もケイトに視線を合わせようとしていない。(やっぱり苦手なんだよな) 退屈で、そしてなんだか物足りない。悪いものがある、刺激が必要なのだ。自分にここは合わない。

ケイトは言われた通り、寝に理に石鹸で全身を洗い。脱ぎ捨てた服は水桶に洗剤と一緒に放り込んだが。

農民は確かに服を用意してくれてはいた。

それは実に女性らしい、水色の水玉の入ったワンピース。今の戦闘ドレスですら不満だったケイトは、やはりそのワンピースを手にして表情はぐしやりと潰れた――。

随分到着に時間がかあったな、そういうマクレデイにハンコックは頷くが。帰りはどうするのだと聞くと、あいつを使わせてもらうのさとハンコックは崩れた高架橋を顎で示す。

あそこの上にはアキラが用意したベルチバード発着場がある。

「だけだよ――まるで別物じゃねーか」

グレイガーデンを見てマクレデイが漏らした感想がそれだった。

農作業を完全オートメーション化させたものの、それで完結してしまったせいで閉じられていたかつての農園はもうどこにもない。

ロボットよりも多いグールたちが、彼らと融和してここを立派な居住地へと変えていた。

「グールの町と言えばスロッグってのがあったが。アキラはここを第2のグールの町にしあげた」

「本当にやって見せたんだな、アイツ」

「それだけに色々とも使ってる。ルールが厳しめなのさ。」

まず自宅は許されてない。町が用意した共同住宅に入らなきゃならん。うまくやっていけない奴はそもそもこの町には送られないってわけだ」

「いい子ちゃんのグールが集められたわけか」

「ところがそれがそうでもない。グールと言えば薬物がついてまわるが、それに関してはフリーだ。銃でのトラブルさえ起こさないと製造、使用、販売、流通も許されてる」

「なんだよそれ。そんなことでいいのかよ」

「俺もそうは思うがこれが面白くてな。なんとかやってるらしく、最近じゃサイコを求めてわざわざダイアモンドシティから買い求めてくる変人もいるらしい」

そう言いながらハンコックは屋台の一つに肘をつく。

「おや、これはこれは——」

「モーロック、商売はどうだい？」

「悪くないですよ。ダイアモンドシティにもこの腕は伝わっているおかげで」

「俺はそんなお前と話がしたくてな」

「……悪いんですが、裏のバイトからは足を洗ってまして。勘弁してくださいよ、市長」

「馬鹿、そんなことは言っていないだろ」

「そうなんですかい？ てつきり、ダイアモンドシティでのジェットの販売行きが不安でここを潰すとかなんとか」

「それくらいでダイアモンドシティを潰すとか言わないさ。使えない売人を変えるだけで問題は解決だ」

「じゃっ？」

「俺の町に指示を送りたい。あと、最近の情報。最新のをな、すぐにかき集めてほしいんだよ」

「はア。そんなことが必要で？」

「しばらく連邦を離れてたんでな。半月くらいだ」

「——店番、代わりに頼めますかね？」

「おい、マクレデイ」

いきなりハンコックに呼ばれ、マクレデイは「あ？」などと間拔けな声を出してしまう。

「お前、店番を頼む。いいだろ、コイツで」

「すべすべのスムーズスキンですか」

「客だつて並んでる顔の中にスベスベなのがいたり目立つき。いい広告だ」

「おい、市長！おれはそんなことっ」

「まかせたぜ、傭兵」

農村で退屈にアキラを待つのはごめんだ。

そう思つてハンコックについてきたのに、とんだ見込み違いだったか――。

マクレデイにとっては嬉しくない展開であつた。

パイパーに見える症状はなかなか重症のものであつたが。長時間、そばで安全と誘導を行いながら治療法を考える時間があつたことは悪くなかつたと思う。

いざ、治療を始めると頭を切り替えると。キュリーは多くの選択肢を投げ捨て、短時間で決着がつくであろう方法を採用していた。

自我が茫洋とするほどの危険な状態からの覚醒にはいくつもの副作用や神経の負担が重厚にパイパーに襲い掛かってくるであろうことが予想されていたが。キュリーは再びパイパーを寝かせると、容赦なく尿管に管をぶち込み。生理食塩水を用意させると続いて治療薬となるものを次々とパイパーの体へとゆっくり流し込んでいく。

初日は何度か苦しうに悶えることがあつたが。

それが過ぎると小康状態を保つたまま、パイパーは昏々と眠り続けた。その間、キュリー隣の部屋でちよつとした診療所を開いて居住者の相談を聞いたりしていた。

ケイトはどうやら今のパイパーが苦手のようで、露骨に避けようとしてキュリーにまいったく会いに来る気配がなかつたのはちよつと寂しかったが。

かわりにキュリーはアキラのことを考えていた。

自分たちのことを心配してないだろうか？暗殺者たちに襲われ、その足で一気に飛び出してきたのだ。残された彼は不安で、なにがし

かの失敗などしてないか？

そして——そして思ったよりも強くこの連邦で再会することを楽しみにしている自分がいることに気が付く。

妙に攻撃的に思えるほど積極的で、強い渴望——早く2人だけになりたい。

そう思うと体の底でおかしな熱を感じ、なんとか抑えようと自分をしかりつける。

彼も——彼もこんな自分と同じ気持ちでいてくれるのだろうか？

夢を見ていた——それはすぐにわかった。

まだ、なにかもがあつて。あの子にもまだ輝く未来があると信じられるくらいには、幸せが自分にもあつた。

自分が知っていることなんて大したものはない。まだ自分に自覚が足りなかった頃は恥ずかしさもあつて、武勇伝とかなんとか言つて話を大きくして聞かせていたが。「本当にあの子が信じたらどうするの？」という彼女のもつともな意見を聞いてから、それもしなくなつた。

それでも。

それでもあの子は俺の話を聞きたがつてくれた。

だからできるだけ面白く思つてもらえるように頑張つた。

口下手だし、表現もおかしいことはたくさんあつたけど。色々な話をした。薄暗い部屋、ベットのの中のあの子。俺はそのわきで椅子に座つて今夜も必死になつてる。そしてきつとドアの外ではそんな親子の様子を彼女も笑みを浮かべて聞いてくれているはずだ。それがよかつた、それだけでよかつたのに——。

——もつと聞かせて。もつと聞かせてよ。

さすがにしやべりすぎた。このまま次の話を始めたら、終わるのは明日の朝になつてしまう。

——でも聞きたいよ。もつと聞きたいよ。

今日はここまでだ。また次、次に話してやるからさ。

——でも聞けないよ。もう聞けないよ、僕は。



何を言っているんだ。お前には未来があるさ……。

なんてむなし言葉だ。ベットの中の子はいつの間にかこれが人だったのかと信じられないほど肌が青黒く変色し、フェラルのように醜く顔が崩れ。真つ黒な穴となった眼と口はもう動くこともなく――。

屋台に寄りかかって寝ていたマクレデイは飛び起きると、脇に立ってかけていたライフルを掴み――そのままひっくり返った。

並んでる屋台からは一拍を置いて笑い声上がる。「寝ぼけたか？」「よく寝てたよ」グールたちの声が聞こえる。

早鐘のように音を立てている心音と恐怖に見開かれた目は左右を確認する。

危険はない。留守番をするように言われ、退屈だからと寝ていただけだ。ただ――そう、あれはただの夢だ。

握りしめたライフルから震える指をゆっくりと引きはがすように動かす。

無様だった。ただ無様、なんて姿だ。「チクシヨウ」思うように手が動かないことが腹立たしい。

するとそこにニュツとしわくちやのグールの顔があらわれた。

「おい、にいちゃん。大丈夫かい？」

「あ、ああ。ちよつと寝ぼけてた。それだけさ」

「……悪夢を見てたんだろ？ちよつとうなされてたみたいだからな。どれ、手を貸そう」

「――助かるよ、おっさん」

一度だけ強く握りしめて、まだ震えていることを悟らせたくなかったがどうだろうか？

グールは何も言わずに手を掴むと立ち上がれと引き上げてくれた。

「悪いな、本当に大丈夫だから」

「ああ――あんた、ひよつとしてデイジーが可愛がってた傭兵じゃないかい？」

「へっ、こんなところで彼女の名前を聞かされるなんてな。いや、一応

「ここはグールの町って事だから別に不思議じゃないのか」

「知らんよ。というより、彼女の勧めで俺はここに来たんだ」

「へえ、彼女が」

「肌がつつるつるだったころは大工をやってたんだ。でもこんな世界だからな、色々馬鹿をやつて。気が付いたらグッドネイバーでゴミ拾いさ」

「よく聞く話だな」

「ああ、そろそろ違う話ができるようにするべきって言うてくれてな」

「それも彼女らしいな」

「んん……茶でもどうだい？ヤバいのは入れてないよ」

「水があればそっちのほうか」

「構わんさ」

透明の液体の入ったボトルを渡される。

「しっかしまだ戻ってこねーのかよ」

「いや、戻ってきたぞ。ほれ……んん、どうやらあっちもよくないことがあつたようだ」

「えっ？」

「ま、頑張りな。兄ちゃん」

グレイガーデンの音質の方角から、屋台のオヤジと並んで歩いてくるハンコツクの姿が見えた。

遠くだとよくわからないが——グール同士だと遠目で表情でも見えるのだろうか？

パイパーの治療はキュリーが想定した以上に素晴らしい進展を見た。

翌日には目を覚ますとそこからは右肩上がりで調子を上げ。同時に閉じられていた彼女の口を止めるものも何もなくなった。

しかしこれが大変に困った事態を引き起こした。

体はまだ本調子では全くないであろうに。精神だけは爆発的に回

復をみせ、その勢いに任せて口から言葉がポンポンと飛び出してくる。だがこれがさっぱり何を言っているのかわからないのだ。

疑問を口にしたくても声を上げる隙はないし。ようやく落ち着いてきたかと思ったら、エネルギー切れを起こしたロボットのようにはったりと倒れて眠ってしまう。

おかげで彼女の身に何が起きたのか、なんだか話していたようにも思えるが。さっぱりわからないままだった。

これは誰かの助けが必要だ、ここにきてようやくキュリーはそのことに思い至った。

グレイガーデンからベルチバードに乗ったハンコックとマクレデイは無口のままだった。

数時間後には仲間と合流する——それで何かが始まるのだろうか？

畑仕事、飲んで騒いで、思えば平和な居住地での生活ってのはケイトが味わったのはいつ以来だろうか？

あの妙に煽情的で異様な性能を持つ戦闘ドレスは結局のところやめてワンピース姿で過ごしていると、それまで彼女を避けていた人々との距離が少し狭まってきたようだ。

だが——夢の時間はそろそろ終わらしい。

病室からはハイになったパイパーの声が聞こえてくるし。そして今はこちらを指さして歩いてくるミニッツメン達がいる。

「ね、ちよつとあんたに言っておきたいことがあるんだよね」

「ケイト? どうした」

「ありがとね。こんなあたしでも使ってくれてさ。結構あんたの畑、楽しかったよ」

「……そう。行くのかい」

「じゃあね、愛してる」

立ち上がって軽く手とくるぶしについた土を払うと、投げキッスを残して歩き出す。

青空の向こうから近づいてくるベルチバードの姿も見え始めていた――。

それは少しだけ過去の話。

コンコードでプレストン・ガービーの一行がレイダーと交戦し、レオを連れてサンクチュアリへと向かってしばらく。

連邦の北部に残された旧世界の道路に人影はほとんどなく。わずかな旅証人やスーパーミュータントの部隊くらいしかなかった頃。

Mr. ハンディを連れ Vault スーツを着たやたら目立つ旅人は不思議な場所を通りかかった。

そこは彼も知っていた。昔彼の自宅があったサンクチュアリにほど近い場所にあった巨大な採石場。

しかしどうしたのか、そこは今や見る影もなく。水で満たされ、すっかり水没して役に立たなくなっていたのだ。

「ご主人様？」

「――ちよつと寄ってみようか。気になるしね」

男はロボットにそう答えると、採石場の中へと入っていった。

驚いたことに底には先客がいた。

腰を下ろして背中を向け、引つ張り出してきた配線をぶつくさと言句を呟きながらいじっているようだ。

「……だろ……でよ。また――」

「やあ、ちよつといいかい？」

声をかけるとしかめっ面で振り向いてきた。

どうやら立ち位置的に太陽の逆境になってしまっているようだ。

「ここに人がいるとは思わなかった。なにをしているんだい？」

「……見てわからねえのか？修理だよ、この糞ポンコツのな。まったくちよつとも言う事を聞いちゃくれない」

「君ひとりだけ？」

「見りやわかるだろ？俺以外の奴はこんな場所、時間をかける意味もないってさっさと出ていったさ。諦めが悪かったのは俺だけ、だからここには俺しかいないんだ」

「ここはどうなってるんだい？」

「ああ、水の事か？地下水らしい。

ここにはそいつをくみ上げて排出するポンプもパイプもある。どちらも調子は最高つてわけじゃないが、電源だけは入っている。それでどうにかなれと頑張っているが、どうにもならなくて困ってるのさ」

「困ってる？まさか、ここを使うつもりなのかい？」

Vaultスーツを着た男が驚いた声を上げると、先客は不愉快そうに顔を歪めた。

「なんだよ、悪いか？それより思ったんだが、あんた暇そうだな。ひとつここでキャップを稼いでみないか？」

「稼ぐ？ここで？」

「今話した通り、電源は問題ない。恐らく水中にある連結部分のいくつかが破損しているんだと思う。ここにはダクトテープもあるから修理も出来る。それをあんた、どうだい？」

提示された額と作業の説明に、しかしVaultスーツの男は素直には聞くつもりはなかった。

「随分と安い仕事だが。その程度ならあんたが自分でやったらいいだろう。

それにまだ日が高いとは言っても、ここで水泳を楽しむ季節でもないだろう。それじゃやらないよ」

「まいったな——」

「さ、提示額を上げてくれ。それなら私もあそこでひと泳ぎして君の作業を手伝わせてもらうよ」

何度かのやり取りがあつて、交渉がまとまると先客は契約の証と挨拶を兼ねて手を差し出した。

「それじゃ交渉は成立だ。俺はサリー。サリー・マンティスだ」

「レオだ、それでいい」

そういつて2人は固い握手を交わした。

## 交錯 II

会議室に進行役があらわれると顔をわずかにしかめた。小さくないその部屋にはたばこの煙が充満していたからだ。

しかしそれも無理はない。

ここにいるのは陸、海、空。世界に誇る最強の3軍を指揮する将軍たちばかり。これから与えられた時間の中で、彼らの興味をひかせることが出来なければ——文字通り自分と自分たちの会社。ようするにプロジェクトは失敗ということになる。

「ええと、それでは……それでは始めさせてもらいます」

白い毛の混じったいくつかの頭が陰だけだが「許してやる」とばかりに大仰にうなずくの見逃さなかつた。

「使徒パウロのエフェソの信徒への手紙において、このような一節があります」

——最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。

——悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけなさい

「この言葉はまさに我々の国の現状に対しての至言と言えるでしょう。」

人間の世界はなお暗闇の世界にあり。自由を嫌う支配者たちは我々の前になお兵士を送りこむことをやめようとしなさい。

そう、だからこそ我々は強くあらねばならない。対抗するための武具が必要になります。

国を守るための武器！国民を守るための武器を！それはいくらあっても、足りるといふことはありません。

私どもは今日、皆さんにそんな武器となるものをご紹介したい。未だ研究段階、まだ完成には至っていませんが。その力が十分に発揮されたとき。わが軍の力がどれほど強いものとなるのか。それをこれから皆さんに納得させることができると、自信を持ってこの場に立つております」

並んだ椅子のどこからか、失笑のような含み笑いも混ざったものが漏れ聞こえてきたが。司会の男は聞こえないふりをした。

彼らにとつては金を出してもらうためのセールストークにしか聞こえていないのだろう。

「話は変わりますが、我が国の電化製品の歴史に核エネルギーは切つても切り離せない存在であることは皆さんの常識でしょう。今では一家に必要なのはゼネラル・アトミックスのロボット1台。ラジオと一体型のテレビ、そして最新の草刈り機だと言われています。

しかしそれでもなお、それぞれの家庭。すべての問題が解決されたということはありません」

遠隔操作のスイッチを押し、映写機に最初の映像を流させる。

そこには最新の医療技術を記録した映像がはじまる。そのほとんどが欠損したからだに義手をつける、というものだ。

「例えばこれは最新の義手に関する映像。

御覧の通り、最新のロボットに使われているのと変わらない義手は今も広く研究されていますが。どれひとつとして完成したものはありません。

機械の体に機械の腕を取り付けるのと違い、生身の体に機械の腕は——残念ながらあうことはありませんでした。いくつもの新しい方法が口にされましたが、それで変化は生まれなかった。

ですが技術は進歩します。きつといつか素晴らしい成果が示されることもあるのでしょうか」

少なくともその予定はないがな、心の中で悪態をつく。大体そんなことをされてはこちらが困る。

「とはいえそれを待ち続けるのは、戦場で傷ついた兵士にとつては酷な話です。彼らには今すぐ、失ったものの代わりとなるものが必要なのです。

そして私どもは機械に代わる新しい回答を見つけました。それを皆様に提案したい。まずは映像をご覧ください」

再び操作すると映像が切り替わる。

今度のは先ほどとは違って……かなりキツイ映像がうつしだされ

る。

悲鳴を上げる被験者の腹から延びていく新しい手。ゆっくりと崩れていく顔にできる新しい口腔。ギークを思わせるひよろひよろな若者の、しかし恐ろしく膨れ上がった右腕から繰り出される力を計測する場面……。

「これは現在、軍で開発中の超人兵士計画で示されたサンプル映像ですが。」

わが社はまさにこの映像に現れた奇妙な現象、症状にこそ注目していました。ここにいらっしゃる皆さんになら説明の必要はないでしょう。そう、FEV——強制進化ウイルスを使用することで、我々は医療に奇跡を起こそうと考えています」

映像を切り替える。

手足を失って試験に参加する前の患者は、次の瞬間には手足がなぜか生えていて涙を流して歓喜していた。

次に足首が皮一枚でつながっているだけの患者や映るが。次の瞬間、元気にその場でタップを始める。レーザー銃に撃たれても笑みを浮かべて棒立ちの青年……。

「ご紹介します、我々は今開発中のこの強制進化ウイルスを利用することで変異治療の開発もまた始まった、と——」

「もういい。やめたまえ、冗談じゃない」

どこからか不機嫌な声が静寂の中で鋭くあがると、すぐさま映像を止め。口も閉じる。

「FEVはまだ開発段階の技術。それに合わせて君らはそれを利用して新しい技術を開発すると言いたいわけだな？」

「はい、おっしゃる通りです」

手にペーパーを持ち。パラパラとそこに書かれているリストに初めて目が通される。

男は興奮を感じる。勝負に勝ったか？ いや、少なくともそこに向かいつつあるのは間違いない。興味を引けた！

「——君の会社には、どこかで見た記憶のある技術者の名前があるようだな」



「だが問題は本当にそんなものが可能なのか、ということだ。FEVによる因子の進化プロセスは未だ制御の方法にめどはたっていないと聞いているが」

「ならばこそ、より多く。より広く知恵を絞るべきなのかもしれないな。実際に失った兵士たちにそれを取り戻してやれるのなら、それは大きな力となるのは間違いない」

——結論は出たようだ

誰かがぼそりと口にする。

「やってみるといい。変異技術、それを使つての治療の新技术開発が果たして可能であるのかどうかもな」

感謝します、そう答える男の心の中で勝利のガッツポーズがとられていた。

狂気の種がまかれる。

無言の時間が過ぎた——。

止まることのない機械、そして小さな電子音はカプセルの中に収められた命の鼓動だ。

混乱に私は体が固まってしまっている。

あの時……状況はまるで正反対だったはずだ。

彼は私をどのようにも出来たし。私は苦痛の波の中に放り込まれ、そこから逃れようともがくことに必死だった。

そして結局は負けた。意識を失った、死んだのだ。

だが今はどうだろう？

私はひどい目にあつたと訴える体の痛みと、自らが破壊したはずの腕が治療され。なんとか歩くことも出来ている。

ところが彼は。

コンドウを名乗る襲撃者は、一転してカプセルの中に収められ。おそらくだが機械の力を借りねば生きられない——そんな状態になっている。

(混乱しているか)

「襲われた際、勝負は私の負けだった。そう記憶しているんだけど……どうということだ？」

（それはある意味で正しい。お前を殺すことができた。お前は動けなくなり、ふたりの勝負はついていた。）

だが——わかるだろう、兵士。お前の敵はしくじった)

「なにがあつた？」

（お前が連れていたロボットたちに捕まった。ハッ、あの犬にもしてやられたな）

「それで手足を失った？目も？」

（んん、それはまた別だな。アサルトロンは対人戦に特化した殺人ロボット。本性は冷酷で非情だが、それでも付け入る隙がないかとあがいた……この姿はその結果でしかない）

「ゴズワースやエイダが？君をそんな姿にしたつていうのかい？」

（アレラに容赦はなかった。お前を生かすためなら何でもすると言つた。そうして実際にやり遂げた。お前は——そう、またしても死から逃れ。私はわずかに希望を残し、ここに移されたのさ）

カプセルの中から漏れ出る苦い笑い声交じりの言葉には引つかかるものがあった。

「今、私のことを」またしても」といったな？」

（ああ）

「どういう意味だ？」

（インステイチュート・エージェント、ケログと戦ったな。お前は勝った、噂は聞いていたが。実際に追つてみるとお前が成し遂げたいくつかの中で、あれには一番驚かされた。お前に勝てる要素はほとんどなかったはずなのに）

「……」

（その不自然さを思った時、Vault111から出てきた孤独な放浪者よ。お前とアキラについて話がしたい、最初はそう考えた。結果的には真逆な行動をとらざるを得なかったが）

「——アキラ、か」

コンドウが入っているカプセルそれに近づき、私はその表面に無傷

の手のひらでふれた。わずかに生暖かい——そのあとに熱さを感じてすぐに手を放す。

専門家ではないからはっきりとはわからないが。なんとなく理解した。

彼はもうここから出てくることはないのだ、と。

「私の若い友人の話は、簡単には口にできないな。彼は先日、この連邦で何者かに捕らえられた。さらに意思を奪われ、望まないことを実行し、そして苦しんでいる——きつと今もね」

(そうか)

「一方で君はどうやら私だけではなく、彼についても色々な情報に通じているようだ。きつとアキラが知りたがっていることも含めてね。どうだい?」

(君は——君はその若い友人とやらのために。彼の情報を私に話せと、そういうつもりなのか?)

「そうだ、そう言っている。間違っていないよ」

(驚いたな。こんな間抜けが——いや失礼、この時代に善人が危険を払いのけてまだ生き続けていられるとは。弱者必滅の連邦とはどこにいつてしまったのやら)

「笑つても構わないさ。でも、私の考えは変わらない」

(いいや、ミニッツメンの將軍よ。変えるべきだ、君のためにね。そう、はつきり言った方が分かりやすいだろうな。

君が地上に出てから求め続けているものが何かは知っている。そしてこちらはそれについて、力になれると断言しよう)

「っ!」

私の家族……思わず、息をのんで動揺してしまった。

私の弱点、私が唯一すがりついている希望、まだ正気でいられるだけの理由。シヨーン——。

(インステイチユートの多くの謎。そして彼らへのアクセス方法。なんなら君の息子の情報すら……)

「嘘だ、嘘だ! そんなのは嘘だっ!!」

(この情報には価値があるぞ?すでに君自身がそう理解している)

「——っ!!」

ギリギリと歯ぎしりする自分に気が付いた。

唇か、口の中のどちらかを切ったのか。血と鉄の味が広がっていく。

怒りが吹き上げると、視界が真っ赤に染まり。続いてグルグルと回りだし、足元から力が抜けていく。

(続きは冷静になって今の結論が出てからでいいだろう。まだしばらくはここにはいられると思うのでね)

暗闇が下りてくる。

カプセルの若者は遠くから余裕の言葉をこちらに送ってきた。私は、もう何も考えられないまま崩れていった。

グッドネイバーは夕刻を迎えていた。

ガービーはこの男にしてはしよぼくれた顔でメモリー・デンから出てくると。

火をおこし、買い求めてきた青魚を鉄網を使って焼き始めた。

レオを運び込んでから3日が過ぎていた――。

結局、アマリは患者との面会謝絶を怒りを称えながら主張し。デイーコンは「やるいろいろ残ってる」などと言ってどこかに消えてしまった。

そしてイルマはなにかとガービーに口を出し。彼を伝説のミニッツメンから、青いハンチング帽をかぶったどこにでもいる男にして。彼の誇りでもある愛用のマスクेटも取り上げられ、パイプ銃を持たされた。

妙にうれしそうな彼女は「目立たないことが必要なのよ」といいながら、途方に暮れているガービーになにかとまとわりつき、彼を一層困惑させている。

町は夜を目前に、にわかには活気だっているようだ。

いや、そうではないのだろう。これが本来のこの町の顔。悪徳の町、グッドネイバーはハンコックの意思の元。秩序ある混乱と墮落を楽しむことを許されている。「——そして俺は、何者でもない」自虐が口から飛び出す。

ミニッツメンでは憧れの目に囲まれる中、望んでいた組織改革と失った力を急速に感じていられた。

だがその一方で、発生してくる問題——政治的なものを嫌い、自由でいたいと思う勝手な気持ちも生まれつつあった。

今回の誘いに嬉々として飛びついたのは自分のためだった。彼と危険なボストンを歩き、危険を切り裂いて突き進むあの力強い瞬間。それを再び味わえないかと思つてのことだ。

願いはかなつた。

ボストンは再び牙をむいてきた。レオは——将軍はやはりひるみもせず突き進み。

そして彼の背中を守るべき仲間たちが気を緩めたところで、ついに暗殺者が彼を叩き潰そうとした。なんてことだ、伝説のミニッツメンが聞いて呆れる。その時そいつは、良く知らない男とグッドネイバーの酒場で日の高いうちから飲んだくれていたんだぞ!?

「今夜も彼が料理担当、なんて聞かされたら心配になつてね」

「つ、しょう——!」

背後からかけられた声に思わず反射的に声を上げそうになり。肘を強い力で捕まれ、彼の意思を感じた。

「じゃないよな。レオ、起きていたのか」

「——ずっとベットに縛り付けられていたんだ、文字通りね」

「なんだつて? ドクターが?」

「まあ、しょうがない。なにせ患者は彼女の目を盗んで、勝手に歩き回つた先で倒れてたんだ。怒らせてしまったんだよ」

「それはわかる。こっちもなぜか怒られてばっかりさ。新人時代に戻されたみたいだ、相手は女性だけだな」

「へえ」

「笑い事じゃないぞ、しょ——レオ。」

ドクターはあんたの治療費と、殺し屋の装置の稼働にかかるキャップをまとめて請求するって顔を見るたびに言うのさ。どんな金額が請求されるのか、恐ろしくて聞けない」

「ああ、それは私はまだ聞いていない。確かに聞きたくない話だな」  
「つっかけにヨレヨレのパジャマを着たレオが隣に座りこんだ。」

「聞きたくない話と言えよ——あんたの腕のことだ」

レオには両腕があった。包帯はとれている。

まるでなにもなかったかのようにしているが、ガービーは確かに見たのだ。アルミ板の上に投げ出された汚物にまみれた人の残骸の一部を。レオの片腕だった、肩からバツサリ切り落とされたものを。あれは悪夢ではあったが、現実だった。

「都市伝説の奇跡を見たよ、Dr. アマリは言っていた」

「変異治療って奴らしい。戦前の軍でも研究がなされていたという噂を聞いたことはあったけど。まさかそれを自分が体験することになるとは思わなかった」

「ドクターはなにをしたのかは話してくれたが——俺も、いやデイーコンやその場にいた連中みんながさっぱり理解できなかったよ。ただ馬鹿げてる、としか」

「高い数値の放射能にさらされた状態で治療することで、欠損した部分を”新たに生やす”……確かに正気とは思えない。あまり覚えてはいないんだけどね」

運び込まれたレオを見るなり、アマリは即断して彼の傷ついた腕を肩口から切り落とした。

それだけでも大変だったというのに。エイダらはその間にも同じく連れ込んだ若者を——コンドウと名乗る暗殺者を文字通り“切り刻み”ながら治療法を聞き出し、アマリにその通りに実行するよう要求した。

奇跡が始まると、アマリはすぐに他の“些細な問題”について忘れることができた。

ロボットたちの蠢行も、そのせいで若者が悲鳴を上げて切り刻まれることも許せた。なぜならば目の前にいる患者の失った腕がみるみ

るうちに傷口の肉が隆起し、骨が成長し。薄皮が破れかける限界の中、その下でうごめく筋組織の活動!

彼女にとつてのそんな夢の時間はしばらくは続いてくれた——肘から上腕へと復元が始まる中、突然の異変が始まる前は。

活動する筋肉の中から指が、生えてきた。それも何本も、時には同じものがいくつも。

彼女の悪夢の始まりはそれだった。

捻じれた筋肉、変形した骨、そこにはないはずの爪、指。生命のほとばしる清流のような活動は、その時からすべてを洗い、飲み込んでは暴れ続ける濁流のようにおぞましいものを見せ始めた。

悲鳴を上げてアマリは再び鋸を、ペンチを、ハンマー、メスを手に苦しむ肉体の破壊活動に入らねばならなくなった。

人のあるべき腕、手首、手のひらに続いて伸びている5本の指が揃うまで……。

Dr. アマリはロボットに脅される形で訳の分からないくだらない作業を進め。

その先で医療の確信を行く奇跡を目にし。それがとんでもない悪夢を伴うものだと思い知らされたことになる。

「あのロボットたちが!?!」

「どう考えてもやりすぎだった。でもそのおかげで私は片腕にならずにすんだのだけれどね。怒れる立場ではないさ」

「なんてことだ。まるであのアキラみたいなものじゃないか」

「ガービー」

「治療法を聞き出すために拷問するなんて、それもロボットが人間を」

話題を変えたほうがよさそうだ——。

「この後の予定について話したいんだ、ガービー」

「あ、ああ。どうする?」

「あのデューコンを待つ。ここを出るのはそれからになる」

「彼は戻るのか?特に何も言わずに出ていったが」

「もちろん戻るよ。彼は面白い奴だけど、信頼できるよ」

「あんたがそういうならいいさ」

「それから——そう、まずはアキラと話さない」と

「アキラか」

「それと君もだ、ガービー」

「それは例の探偵をおいてきたっていう島の話か？」

「ファー・ハーバーだ。私は領いた。」

「あの島は短い間だったけど、おかしな場所で。そしてなにより状況はこの連邦よりもさらに深刻だった。」

島に残っている人々の多くは希望を失い、あそこで死ぬのを半ばあきらめているようにも見える。彼らは頑固で誰かに助けを求めつもりはないらしいが、彼らを助けるなら今しかないように思う」

「やれやれ、レオ。あんたはどこまで人助けをしたっていうんだ。それをミニッツメンが？」

「そこが……まだ決めかねているんだよ。だが何をするにしても、あそこにいる人々を奮い立たせられるのは私が知る限り君しかない、ガービー」

「褒められても俺にできることは多くないぞ——將軍」

出来る事は多くない、確かにそうだ。

私がひとりであるの島でできることなどそう多くはないだろう。ただ、一方でニツクと私はアカディアを、デイーマになにがしかの嘘くささを感じてもいる。

それを暴くというなら、全力で。私の友人たちの力を借りられればそれも可能なはずだ。

だがその前に、決断しなくてはいけないことがある——。

「そういえばイルマに聞いた。これが君の腕によりをかけた魚料理だった？火であぶってるだけじゃないか、ガービー」

「これはそういう料理なんだよ」

「味は？塩も使わないと、とても——」

「塩は食う前にやるさ。大丈夫、ちゃんと食えるから」

「はア」

「香草だって使うぞ、本格的だ」

「期待しないでおくよ、相棒」



2人のミニッツメンはようやく笑顔になった。  
夜の騒ぎが始まるこの時間、そんな2人を グッドネイバー 町 町はまったく気に  
していないかった。

それから2日が過ぎたが、デイーコンは現れなかった。かわりにその使いを称する女性から「もう数日かかりそうだ」との連絡を受けた。私はガービーを連れ、改めてメモリー・デンの主たちとの話し合いに臨んだ。

私はまず彼女たちに礼を改めて述べると、彼女たちが請求するキヤップはなんであれきちんと払う意思があることを伝えておいた。ガービーも続いてミニッツメンとしてくと礼を述べたことで、だいぶ彼女たちの緊張を取り除くことができたと思った。だが問題はここからだ――。

「それじゃ他の問題も片づけてしましましょうよ。まずはあのカプセルの少年よ」

「彼は――」

「そう、彼の生死をどうするのか。どうしたいの？」

一番答えにくい問題だった。

「アマリ、彼はもう外には出せない？」

「ええ、その通りよ。あの子は……あのアサルトロンが文字通り回復が見込めないように半殺しにしまったから。もうどうにもならない。カプセルを出ては生きてはいられないわ。何よりも本人がそれを望んでいない」

「望んでいない？ 本当か？」

「本人には確認してあるわ。あの子は不思議だけど、自分の生死にはもう興味がないみたい。ただ、終わる前に何か理由があつてあなた達。つまりミニッツメンの將軍様との面会を望んでいるわ。答えが欲しいそうよ」

「將軍、なんのことだ？」

私はガービーの問いを無視した。

「こちらが彼の死を望むと言ったら？」

「仕方ないわね。慈善事業ではないし、あのカプセルは他にも使う人が出るはず」

「今すぐ、といえば？」

「すぐに下に行ってさっさとやってくるけど、あなたのお見送りは期待しないで頂戴」

「わかった——申し訳ないが、もうしばらくは待つてほしい」

「それは構わないわ」

思わずため息が漏れる。

シヨーンか、アキラか。私は決断しなくてはいけないのだろう。迷いはわずかだ、私が自分の家族を。シヨーンを求める心は騙せない。今はただ感情的な嫌悪を収める時間が必要なだけ。やはり私とて人が言うほど完全な善人ではいられないのだ。

「ああ、そうだ！アマリ、どうせだからあの話もしてしまつたら」

「えっ」

「ほらっ、ニツクから頼まれていたヤツよ。あなたがもしかしたらつて、そう言つてた」

「??？」

アマリはイルマが何を言っているのか最初はわからなかつたようだが「ああ」とうなづく。

「あのね、実はちよつと別に個人的に相談したいことがあつたのよ」

「俺達に？」

「というより、將軍様の方ね。あなた、ニツクのお友達でしょ？助手もやってるって」

「助手、ということにしてもらつてるのが正しいかな。ははっ」

「実はニツクはうちのお客様でもあるんだけど、彼から以前。あなたのために協力したいと言つて持ち込まれたものがあるのよ。知ってる？」

「いや、何も聞いていない」

本当に初耳だった。

するとイルマはやはり、という顔で何度もうなづく。

「そうかもしれないと思ってた。アマリが希望は持てない、難しいって言ってたから。きつとニツクはがっかりさせたくないの結果が出るまで黙っていたんでしようね」

「何の話なんだ？」

「ケロッグ……覚えているでしょ？実はニツクが彼の遺体から回収してきたものをうちで解析してくれと依頼されていたのよ。アナタには内緒でってことだね」

ガービーはハツとし、私は——呆然とした。

一体なんのことだ？

「ニツクはそれをインステイチュートの装置だと。ほら、彼自身がそうだったから。勘だって」

「それで何が分かったんだ!？」

「まだ何も——でも、調べていくつかちよつとした方法を考えついたわ。見込みはある」

「それじゃ」

「確実に保証できるものはないけど。希望は出てきたわ、それは間違いないわね」

私は天井を見上げ、椅子の背にもたれかかって大きく息を吐き出した。

ガービーが隣で何かを言っているようだったが、耳に入ってこなかった。

B・O・Sはインステイチュートとの対決を望んでいる。

それは近い未来、確実に起こる。少なくともそう確信しなければ、あのアーサー・マクソンはあれほどの部隊を引き連れてはこの連邦には来なかったはずだ。だが——まだその予兆は感じられない。

私にある希望とはつまりその程度のものなのだ。

誰かがインステイチュートの謎を解くのが先か、それとも時間が切れて戦争が始まるのが先か——その不安がずっと私にとりついて離れない。

でもそんな弱い私を友人たちがこうして支えてくれる。私はまだ、希望を胸に戦うことができる。

私には私ができることをすればいい。

レールロードの本部では、デューコンは珍しいことに彼のために用意された机で作業をちようど終えたところであった。

不思議なことに今日はここにおいても何も面倒が飛び込んでこない。デズもキャリントンもいつものように忙しくしているが、いきなり見回してこちらに鋭い目を向ける、ことが今日はない。

何か成果があつたかのように吹聴しに来る何でも屋のトムも、今日にはなにやら作業に集中している。

つまりこのまま席を立てば、平和にここから出ていけるといいうわけだ。最高だな。

「デューコン」

「おおっと、P. A. M. じゃないか。どうした？」

データ分析、未来予測担当のロボットがデューコンに話しかけてくるのは本当に珍しい。

「エージェント・フィクサーを最近見ていません」

「彼は——今はちよっと留守にしているな。しばらくは戻らないかもしれない」

「数値に変動がみられ、不確定な要素が入り込んできている。誤差の修正にかかる時間は——」

「パム、俺はもう行くよ。それにフィクサーの奴には、君がヨロシクと言っていたと伝えておくさ」

「了解。計算を終了、次の問題へと移行します」

ロボットをいなし、さっさと本部を出る。すると途端に不安が襲い始める。

なぜいきなりパムはフィクサーを見ていないなどと言い出した？ それもこの自分に対して。デズやキャリントンが、俺が奴とまだつな

がりがある」と知っているということか？もしくは疑ってる？

グッドネイバーの門をくぐり、レオに合流する前に少しばかり景気づけにと一杯を求めてサードレベルへ。

そこで彼は不安の答えを手に入れ——苦いアルコールを喉に流し込むことになる。

力強い足音が近づいてくるのを察し、コンドウは意識を取り戻す。

自分に残された時間はさらに短くなっているのが分かる。自分が滅する前にこの不快な状況への答えの欠片を手に入れることができるだろうか？集中が必要だろう。

部屋の照明が付けられたようだ、もはや役に立たない視覚でもそれくらいはわかる。

男がひとり、ミニッツメンの将軍だ。どうやらようやく判断を下してくれたらしい。

（おはよう、今はいつかな？時間の感覚が——）

「インステイチュートの情報、それにアキラの情報も」

（ふん、これは予想された中で最もつまらない展開だ）

「腹の探り合いは必要ない。君の旅はもうすぐここで終わる、君から出る情報の真偽の判断は難しい。ここにエイダを連れてきて、拷問の続きをしてもらうことも考えたが——もういいだろう」

（暗殺者に対しても慈悲深くありたいと？正気か？）

「そんなんじゃない。だが状況が変わってね、すぐにここを離れる必要が出てきた」

（状況が、かわった？）

「ここを離れる前に君の電源は落とす。君は死ぬ、だからこれが最後だ、申し訳ないね」

（なるほど……では何が起きたのかは教えてほしい。それほど慌てている理由とは？）

「居住地だ。ミニッツメンがレイダーに攻撃された」

レオは間髪入れず、若者の問いに答える。

カプセルの中で浮かぶ若者の表情は変わらない。疑っているのか

どうかわからないが、自分に迫る死の瞬間から目をそらそうと答えにくい質問をしたかっただけなのかもしれない。

「こんどはこっちの番だ。インスティチュートの本拠地はどこだ？」  
(連邦だ。ここにある)

「――ふざけているのかな？冗談だとしても笑えないのだが」  
(不満があるのもわからないわけではないが。この質問の答えはこれしかないのだ)

「どうやったらそこにいける？」

(彼らの方から招き入れない限りは無理だ。そうして彼らは安全を  
図っている)

「どうやったら招かれる？」

(彼らをその気にさせるしかないだろうな)

よくわからない。思わず舌打ちする。

「チツチツ、煙に巻く言い方でごまかそうという事かい。会話に意味を見出せなくしたいのかな？」

(インスティチュート……彼らは旧世界ではC・I・Tと呼ばれる政府の研究機関の一部でしかなかった。しかし世界が壊れると、彼らは自分たちの活動の再定義を必要とし、組織へと作り変えた。

組織は存続のために見捨てた地上から広く智者を集めている。彼らには安全と安心、そして知識の貪欲な探求が可能であると約束している。ゆえに彼らの用いる警備は鉄壁だ、隙はない。

我らがひとつ皆と違いがあるとするなら、そんな彼らと多少なりともつながりがあるということだけだ)

「だけど潜入方法は不明？」

(フランク、何度問い返しても答えは変わらない)

脳みそを取り出して記憶をこね練り出すしかないということだろうか。

(今度はこちらの番だ。アキラとの関係は？出会いは？いつ、どこで？)

「友人だ。この世界で目を覚ました後、Vault111の中で知り合った」

どうやら質問したら答える交代方式がお望みらしい。別に応じなくてはいけない理由はなかったが——私もそれに乗っかることにする。

だが、コンドウには今の答えは意外なものだったらしい。眉間に明らかな皺がよった。

(Vaultの中？彼は何をしていた？)

「何って——私と似たような状況だった。お互い何もわからず、それで一緒に外に出た」

(お前は確かダイアモンドシティの新聞では、アキラの話はしていない？あの記事にはなかった)

「当然だ。彼には記憶がなかったし、あの取材は私に対してのものだった。」眠りにつく前の彼に出会った“わけでもないし”

(……)

「いいかな？それじゃ今度はなぜ君は私を殺そうとしたのか教えてもらおう」

(アキラだ。アキラが原因だ)

「それだけ？」

(彼にこのまま好きに行動を続けられては問題が大きくなることわかってる。その力を抑制するため。彼とのつながりがある中で、ハンコックとお前が特に危険だと判断した)

「まさか——ハンコック市長にも暗殺者を？」

(成功していればいいが、難しいだろう。奴は今、アキラと共に行動している。成功は薄い)

「なるほど。だから私には君が来たんだな。必ず殺すつもりで」

(その賢さもお前が危険である証拠のひとつだった)

そろそろこちらも核心に迫っていききたい。

「君は自分の仲間、組織について語りたがらないようだ。なぜだ？」(説明しにくいからだ。あえてそのようにされた。

仲間はいるが、家族でもあるといえる。組織ではあるが、名前はない)

「インステイチュートと君の組織の関係は？」

(2つは別物だ。お互い似ている部分はある。だがインスティチュートのように大きくはないし、彼らのように新しい人を求めたりはしない。だがどちらも自分の存在を秘密として誰かに知られることを嫌っている)

「君と仲間は自分の組織をなんて呼んでいるんだ？ なにかあるんだろう？」

(君が勝手に呼べばいい。別に気にしないし、組織はその呼び方を否定するだけだ)

「では君の組織とアキラの関係は!? なぜ、彼を敵視する?」

(“アキラ”だからだ。それだけだ)

「わからないな。さっぱりだ」

(これは言葉で説明できるものではない。無理に表現は出来る、だがそれは陳腐になるし正確でもない)

「それでもいいと言ったら?」

(アキラは可能性だった。家族に戻れず、失望と共に廃棄されようとして。再び消えた。そしてはつきりと脅威になった)

「彼を誘拐したことだな? 君はアキラの家族だと? 彼のなにに失望した? 廃棄とは?」

(君の疑問への答えはない。そのすべてがすでに正確ではないから、これ以上は意味をなさない)

「君たちはアキラをどうしたいんだ?」

(“今の彼”についてはまだ結論は出ていない。同僚の誰もが思惑を持っていろいろだ)

「君のアキラへの考えを聞かせてくれ」

(今回はしつこいな——いいだろう。)

この体はアキラを組織へ再度召還することを考えていた。その方法として彼の協力者のなかでやつかいなお前とハンコツクの排除を計画した。第一目標はもちろんお前だった)

「その後は?」

(アキラとミニッツメンを分断し、ハンコツクと接触して彼を取り込むつもりだった)



「ハンコック市長を？彼に暗殺者を送ったのに？」

（メツセージのようなものだ。ハンコックは暗殺者から逃げ伸びれば、誰かが自分とアキラが共に行動することに不快に思っている奴がいると考える。その後、彼にこちらから提供できるものを申し込めば手を汲めるはずだった）

「自信があるようだな」

（ハンコックはお前とは違う。彼は自分の町を守ることが重要だと考えている。）

インステイチュート、B・O・S。それにミニッツメン、レイダーに傭兵、スーパードミュータント。敵は多いが、安全と安心は彼の興味を引くのに十分だ。それを提供する、といえばいい）

「なるほど」

インステイチュートに関しては新しいものは期待できそうになかったが。どうもこの若者はアキラにとって重要な人物には違いないように思えた。このまま処分するくらいなら――。

「どうかな、私が君とアキラを対面させると申し出たら？」

（……）

「彼は記憶を取り戻したいと思っている。同時に怒りを抱えている、でもいまなら――」

カプセルの中の若者が笑い始めた。

私は黙る。彼が落ち着くのを待つことにする。

（アキラと会ったらどうなるか？考えるまでもない、文字通りアキラはこの体からまだ何が絞り出せるか限界までやるだろう。）

耐えられない苦痛を与えるついでにな）

「彼には君の知識と記憶が必要だと思うんだが？」

（彼に私を嬲り殺しにさせたいならそうすればいい。アキラは他のことなど気にしやしないさ）

「君たちを憎んでいる？怒りにとりつかれていると？」

（ロボットがこの体にしたことよりもさらにおぞましいことが始まるだろうな。お前もそれを眺めて共に楽しむか？）

私には彼に答えられない。

(今度はこちらだ——お前は誰が接触している?)  
「?」

(誰だ? 誰がお前を? そんなにしてしまったんだ)。それとも——)  
「ちよつと待て、私は君など知らないし。君の仲間など知らない」

(——あの毒を受け、お前の肉体は変異を示した。細胞は死ぬのではなく活性化することで生きようとした。

そしてこの口から伝わった治療でお前の腕は元に戻った。つまり——)

「私は君の組織の誰かに会っている?」

(それは誰か知りたい。それを知らなくては死ねない、裏切り者の名を——)

「……記憶にない」

(よく考えろ)

「本当だ。心当たりはない」

しばし沈黙する。

カプセルの中の若者はまだ疑っているようだが、こつちは答えようがない質問だ。これまでいろいろな人々に会ってきたが、名前のないインステイチュートのように秘密の組織なんて——。

部屋の外からガービーが顔をのぞかせ「將軍」と小声で呼びかけてきた。

どうやら長話をしてしまったようだ。

(——そういえば詳しく聞いてはいなかった。その襲われた居住地とこののはどこだ、ミニッツメンの將軍よ)

「コペナント」

(なに!?)

「再びあそこが攻撃を受けた。……今度はレイダーの攻撃だったけどね」

(これは、これは……)

カプセルの中の若者は笑い出した。

なにかわかったのだろうか? しかしそれを私は理解できない。結局は何も理解できないでいる——。

## 交錯 Ⅲ

サリーは自分の立てた木造建ての家で目が覚めた。

ドア代わりの布をくぐって外に出るとさっそく空を見上げる。そこには今の自分の全てがあつた。

「——絶景だよな、まったく笑いが止まらないっての」

シケット・エクスカーベーションズ——採石場最低部から見上げる空は限りなく遠く、そして小さい。

そして今のここは眠るつてことを知らない。多くの仲間たち——自分の下に集まってきた彼らが互いに忙しく声を掛け合つて何かをしていた。

だが人に言えば信じてもらえるだろうか？

ここはつい1年前までは水に満たされた退屈なだけの大きな水たまりであつたということ。

サリーはこの水さえどうにかできるなら最高に違いないと考えた、希望を持った——そしてそれを今、証明した。

ここは今では独立した巨大な居住地のコロニーであり、野心的なマリアラクの養殖業に着手した商売人の居住地であり。そして連邦の北では落ち目のレキシントンと違ってにわかにはその将来性期待されているライダーの新たな場所となりつつある。

レキシントンへの攻撃からのミニッツメンの復活劇は、連邦の北部に野心を持つライダー達を自覚のないまま叩きのめしていた。

新しい民兵は以前とは違い、自らが拓く居住地には利便性とながりを持たせつつ。その権益の一部をも手にすることで居住地を自分たちがゆるやかに支配するようになったのだ。

当初はその効果を大したことじゃないと笑っていたレキシントンのライダー達は今はもういない。徹底的に叩きのめされ、多くは無様に死んだからだ。

ガキと呼んでも差し支えない奴、キャップの扱いを知らなくて冷や飯を食つていた傭兵。

そんな連中をかき集めたはずなのに奴らの武装は以前とは全く違っていた。

——レキシントン包囲網

——彼らの居住地をレキシントンの周りに配置することでレイダーをそこに封じ込める

どうやらそんな寝言を伝説のミニッツメンは盛んに口にしていらしいが。レイダー達はその効果をじわじわと思い知らされ、居住地に狩りに行くたびに返り討ちにあって仲間の数を減らしていく。

今や北部の街道ではミニッツメンのパトロールを見ない日はない。そこに来てレキシントンには新たな災厄が襲い掛かってきた。

最近、南東から北上してくるスーパーミュータント部隊や、同じく山岳地帯からレキシントンへと降りてくるベヒモスと呼ばれるスーパームュータントの変異個体がレキシントンに対して繰り返しの襲撃を開始してきたのだ。

とりあえずだが被害は出てもまだ危機感を持つほどではない。

しかしミニッツメンの包囲網のせいでレキシントンのレイダー達の士気はなかなかあがらなくなってきていた。

結果、ついにサリー・マティスの名前が絶望するレイダー達の希望としてあげられるようになる——。

サリーはシケット・エクスカバーションズを手に入れ。以前の仲間を呼び集めると、いきなりレイダー家業を開始したりはしなかった。ここに以前から住み着いていたマイアラクの卵を使い、養殖からはじめ予告編うとしたのだ。

この決断が彼らの躍進につながるなど誰が想像しただろうか。

このマイアラクという大きなカニの姿をしたアポミネーションは大変に危険だ、と保証する。

体を覆う固い甲羅は弾丸をはじくし、レーザーですら貫通させることは難しい。そのうえ自分のテリトリーに侵入してきた人に対しては好戦的で、俊敏さと振り回される2本の太い腕は人の体を簡単に引

き裂くことができてしまう。

しかしだからこそ、その体に詰まった肉は大人気。バラモンの肉と人気を分けるくらいに市場では価値があった。

サリーはこいつの養殖を始めることで、自らひらいたこの場所は独立した居住地であり。養殖業を糧にしていると信じさせることに成功した。

それを商売のチャンスと判断して依ってくる商人たちを裏でレイダーとして襲い、全て奪い出したのである。

ミニッツメンは居住地がまるごと表と裏の家業をやっているとは思わず。笑えることに「レイダーが突然現れる」などと口にしてあつちこつちにと山に分け入っているはずのないレイダーの幻覚を追い続けている。

マイアラークの肉で高額取引をしながら、ここにビジネスチャンス信じて近寄ってくる商人たちを選別して襲う。もうキャップはうなるように入ってくるばかりだ。

そして今ではミニッツメンに揺さぶりをかけんとして、奴らの居住地にまで襲撃をするようになっていく——レキシントンからはすでに4つの集団が合流してきたし。今も自分達もここに加えてくれと頼む声が届いている。

レイダーの時代は間違いなく動いていた。

ポストンじゃない、レキシントンでもない。ここだ、このシケット・エクスカーパー・シヨンスこそが次のレイダーの王が誕生する場所になる、はず。

「そのうちもつと人を増やして、石も昔みたいに切り崩せるようになる。ダイアモンドシテイやグッドネイバーから注文が殺到するだろう。運送は問題だが——いや、ミニッツメンにやらせるってことも考えたほうがいいか。あいつら、大喜びで俺達の荷物を運んでくれるに違いないしな」

そのくらいになればここもいよいよ大所帯だ。

コルベガ工場でふんぞりかえっていたジャレドなんて目じやなく

なる。レキシントン？それはもはや過去の話になるってわけき、サリーはそう考えると鼻で笑った。

パイパー・ライトは復活した。

ダイヤモンドシティの正義と美の復活を、治療したキュリーは宣言もした。

だが、彼女を中心にできた人の輪。彼らには困惑に悩む姿があった。

さまよえるフェラルのようだった彼女は己の意思を取り戻すと同じ時に、その口からは言葉があふれ出てきた。

彼女は訴え始めた。自分は何をしていて、どんなトラブルに足を突っ込み、ひどい目にあわされてしまったのか……さらに自分の会社を、妹という最後の家族を、彼女の身の回りの事での心配を、ついでに自分の悩める男の性についても。

すべては融合し、口から飛び出していった。理解不能、混沌とした言葉だけが羅列される。

「まったくあつたわ。だって聞いて頂戴、私はだって悪くない。スクープを落としたの！もちろん特大のクソをね。」

それってしかも私は腕のいい選ばれし者ですから、当然タダなんてありえない。そういうのはいくつも潰しているわけ。

今回はミニッツメンの話を刺したの。彼らが最近笑っているっていう、神出鬼没の美女達について。

話を聞いた瞬間から私にはすぐにピンと来るものがあつたわけ。これは絶対、どこかで悪事を働いた結果に違いないって。

グッドネイバーに乗り込んだわ、これも当然よね。あの辺の下水がロボドッグに飲ませてるって言ったらあの町だけだもの、本当に分かりやすく助かるわ。ありがとう、グッドネイバー!!

で、話を戻すけど。

レオが独自にバンカーヒルの淫売ども仲良くしてるって噂が……」

もういい、やめてくれと最初に音を上げたのはだれであったか。

連邦で一番おしやべりな女が素直に黙ってくれると、次に重苦しい沈黙があたりを支配する。なぜかそれに慌てたキュリーが声を上げた。弁解しているような口ぶりだった。

「ひとつ、ひとつ言っておきますけど。治療は終わっています、彼女は  
その——健康です。いえ、違います。

健康に向かっていているんです。回復期なんで。あとは自然に戻るはず  
です。間違つてはいません」

「……それじゃ教えてくれ。パイパーの今のは何だったんだ？

俺には——俺のグッドネイバーを元々は下水と表現するような記者  
さんだつてのは理解するが。それでもそれを本人の前でパイパー・  
ライトが言うかね？」

かなり不機嫌なハンコックの言葉に周囲は追従する。

実際何を言っているのかさっぱりわからない。こっちはただ、彼女  
に対して「どうしてヌカ・ワールドに居たんだ？」と聞いただけなの  
に。

「繰り返しますが、治療は終わってます。終わってますが、ただ——」  
「副作用とか？」

「ええ、それもあるでしょうが。彼女の場合は心因性のもののような  
気がします。今のところ」

「心因性？」

「はい、体と精神が切り離された感覚でストレスをため込んだよう  
です」

「これまでは言いたいことが言えずに我慢してたから。今度は考えた  
ことをそのまま話すようになってるわけか」

「それって、ええと。このわめくことが得意な女にも心があつたつて  
事？そりゃ、驚きだわ。ニュースにしなきゃ」

最後にケイトが茶化すと、黙っているパイパーはジロリととげのあ  
る目で彼女をにらんだ。

それを見てマクレディがため息をつく。

「そんなバカなことがあるわけないと思いたいけど。どうやら言う通

りみたいだ。

今の彼女、ケイトのバカを黙らせてやるって感じだ」

「ああ、俺にもそう見えるな。だがそれだとどうする？ここに置いていくか？」

ハンコックがそう口にするるとパイパーは黙ったまま首を左右に振って否定した。ここにひとり置いていかれるのはごめんらしい。キュリーはそれに助け舟を出す。

「彼女は自分の状態をあるていど正しく認識しているようです。おそらくなんとかなるのだと思います」

「戦えるのか？」

「それはお勧めしませんが——自分を守るくらいなら出来るはずですよ」

「わかった、好きにすればいい。だがまだ誰かに手を握ってもらわないとダメだって事態はごめんだぜ……さて、話は変わるが大問題が発生していたことがわかった。

どうやら俺達の留守を狙ってコベナントが襲撃を受けたらしい。レイダーだそうだ」

グレーガーデンから持ち帰った新情報だったが、留守番していたケイトらの顔に驚きはない。

この輪の外でこちらを見守ってるミニッツメンの若者を顎で指す。

「それならこっちも聞いている。この坊やからね」

「えっと、ミニッツメンのジミーと言います」

「知ってるよ。レオと組んでなんかやつてる奴だろ？」

「はい——その、とにかくです。ダイアモンドシティのミニッツメンから情報がきました。バンカーヒルからコベナント襲撃の噂が飛び込んできたよ。自分は將軍を探そうとして、ここに」

「俺達はレオとは別行動だぞ？」

「將軍はポストンを歩き回ってるようで、危険すぎたあとは直接は追えません。ですから皆さんに」

「なるほど、そりゃ頼るよな。レオと連絡を取ってるのはアキラだ。今、レオは何をしているんだった？」



「最後に聞いたのはあたしらがあそこに向かう前だったんじゃないかな。探偵とどつかの島に行くつて。よく覚えてないよ、こつちもあれから色々あったし」

「ケイトの言う通り。俺達は最近あのクソツタレの遊園地で他人のふりをして遊んでたんだぜ？ なにか新しい情報があつても、あいつが必要と考えなきゃあそこでわざわざ俺達には話したりはしない」

マクレデイの言葉はハンコックも同感だった。頷くと、さてどうするかと顎に手をやった。

「でもさ、そんなに慌てる話？ レイダーが襲つてくるなんてどこにもある話だし。あたしらはあそこにいたから知ってるけど、あの壁を外から攻めてどうにかできる？ 偽情報じゃないの？」

「その質問は無意味だな。忘れたのか？」

あいつが……アキラはあそこを元の持ち主からどうやって奪つたのか」

壁の中の建物が燃え上がり、門の外にはこと切れた居住者たち。そして彼らを見下ろすあの若者――。

「大変です、あそこにはアキラの工房があります。クライオ兵器や Vault から持ち帰った知識も残されたままです」

「秘密のエリアだったな。あいつらはそこに気が付いたと思うか？」  
「わかりません。地下道を利用していますから普通は難しいでしょうが――」

やはりここにはなにもわからない、そういうことなのだろう。

「よし、皆聞いてくれ。」

2時間以内にここを出るぞ。近くにある無人の教会を確保したら、ベルチバードで一気にコベナントへ戻る」

「そうなると市長、夜になるかもしれないぜ？」

「それならそれで好都合だ。レイダーが残つてりゃ、近づけばそれでわかるしな。ここについても何もできない」

「戻ったら何かできるのかい？」

「キュリー、アキラがレオとどうやって連絡を取っているかわかるか？」

「それなら簡単です。工房にある彼の部屋から端末です」

——決まりだな

ハンコックがそう言い切るとケイトが慌てて

「それじゃ、あいつは？アキラはどうするんだよ。あたしらここで合流するんじゃないのかい？」

「メッセージを残しておくさ。それにだな——」

「それに？」

マクレディはケイトの問いには答えなかった。

彼女の疑問はここに戻る時に、ハンコックと話していた。当然の疑問だ。

——マクレディ、そういう話じゃなくなったかもしれないな

——アキラはここには戻ってこないんじゃないか。奴は、もうこの情報を知っているかもしれない

別に本当に気を抜いていたわけではなかった。

だが忘れていた。

ヌカ・ワールド。

あそこはレイダーの町であり、そこから戻ってきたタイミングでの騒ぎだ。あまりにも都合がよすぎる——。

奇妙な男だった。

霧に隠れた連邦の三叉路の中央にこぎれいな白いテーブルを運ぶと、壊れかけたパイプ椅子に座って運命の瞬間を待つ。

常人とはかけ離れた感覚を持つその男は、運命がこちらに近づいていることをはつきりと感じていた。

これは再会の演出。

向こうがどのような顔で現れるのか、どうしてもそのすべてを見ておきたかった。

(ああ、〃戻って〃きた)

白い霧の中に黒が生まれ落ちた。

シルバー・シユラウド。銀のサブマシンガンは持っていないが、顔にはそれを髑髏の布で隠している。

向こうは驚いたのだろう、足を止めた。さあ、ここからだ。

道の中央にそれは明らかに異質なものだつた。

男女4体のマネキンが設置され——まるでこちらがこの方角からくるのが分かっていたかのようだ。

近くにこれを飾った何者かが隠れているのだろうか？

周囲に視線を走らせるが、どうもよくわからない。

マネキンに近づくと、これが明らかに誰かに向けたメッセージであることが分かった。

マネキンは男が互いを向き合うようにして立ち、その間に女性が背中合わせで男の方へと体を向けている。だがその手首と首の先は切り落とされ、別のもので補われていた。

——ピッグマンか、これは

芸術に詳しいわけではないが。絵が本分かと思つたらこうした造形も彼はやるらしい。

マネキンから転げ落ちないように置かれている人体のパーツからは、流れ落ちた血が乾いていた。

小さな風が吹き抜けると、奥にこぎれいな白いテーブルとパイプ椅子があらわれた。どうやら机の上にはメッセージらしきものが見える。手に取ると「君ならどんなタイトルをつける、殺し屋」とだけ。

——レイダー達を使った芸術は今もなお彼の創作意欲を湧き立たせているのか

改めて彼の芸術品を見直すと、なるほど色々と苦心の跡が見えてきた気がした。

指の形は情緒を感じさせるくらいに理想的な角度、デスマスクに特有の虚無感ではなく。そこにはまだ生きていた時の感情がしっかりと表情に残されて凍っているかのようだ。

これを完成させるために彼はどれほどの“協力者”達を用意して試行錯誤してきたのか、想像すると興味深い——。

霧の中の影が立ち去っていくのを男は感じ、再び自分の作品へと戻った。

机のそばに立つと、そこで彼の友人——同族がどのように作品を味わったのかを残り香から感じようとし。しばし夢見心地の気分へと浸る。

「……心配していたが、どうやら変わりないようだ。友よ、心配したよ」

連邦のレイダーから聞かされたちよつとした噂話。

レイダーの危険な街に、支配者が立ち戻ったとかなんとか。

友人が変身したのではないかという失望と、チャンスに心震えたのは事実だが。どうやら杞憂であつたらしい。

残されていたメツセージカードには、彼からの返信が——「情愛」とだけが残されていた。

「そうか、それが君がつけたタイトルか」

随分陳腐だが……ま、悪くもないか。

このマネキンはひとりの女が妖婦をきどつて2人の男を振り回す姿を描いている。

女はひとりに慰めるように、もう一人には誘うように淫靡な手つきを見せ。男たちはそれに応じながら、互いに背中に凶器を握っている。

彼らは女の裏切りに気が付いているのか。それともその向こう側にいる相手をこそ狙っているのか——。

どうやらアキラはその姿に愛を見たらしい。

「友よ、今度は君の作品を見てみたいものだが——」  
それを口にするピッグマンの顔は笑っていた。

やられたな、マクレディは口の中で小さくつぶやく——。

夕暮れのコベナント、すでに入り口は大きく開放されており。離れ

ても聞こえるターレットらの駆動音がまったく聞こえてくる気配もない。

「ねえ、入り口。あれってもしかして」

眉にしわを寄せたケイトが言っているものが何か、皆もすぐに理解する。

「皆殺しか」ハンコックの苦い言葉の通り、そこには病院に入っていた医者と。ここに治療のために訪れていた患者、そしてわずかなその家族たちの遺体が並ぶようにさらされていた……。

これは間違いなかった。

根こそぎに奪っていくレイダーの典型的なやり口だった。

居住地の中に侵入すると、瞬く間に住人たちを確保し。目についたものを片っ端からさらうだけではなく。置き土産だというように降伏した連中を並べて死体にする。

これで奴らは誰も襲撃者の後を追ってはこないと安心し、復讐を考える奴への威嚇としているのだ。

ハンコックは無言のままかつて自分がここへと連れてきて医師にした男の死体のそばに腰を下ろした。

「あんたには感謝しかないよ、市長……か。本当にそうだとよかったんだがな」

「ハンコック？」

「チャンプ、このバカはな。」

グッドネイバーじゃ自分は墓守にしかなれないって勝手に自滅するような馬鹿でな。とつとと見切りをつけて外に出ていけばよかったのに、自分の師匠ヅラしたやつに借金で縛られてずっとその手下をやりつづけてた」

「あんたが気にすることじゃない。そうでしょ？」

「確かにな。でもな、俺はずっと思ってたんだ。」

俺がコイツと話しても、礼を言われるようなことは決してないんだらうって。そんなことをさせた自分がほんの少しだけ、好きだったのかな」

ケイトは戸惑う、こんな時はどうやってやればいいのだろうか？それ

が自分にはわからない。一通り居住区の中を覗いてきたキュリーやマクレデイ、パイパーからも報告があった。

「やっぱり金庫はやられてたぜ。備蓄されてた医療品だけじゃなく、食料も武器も取られてる」

「ロボットたちも破壊されてました。ここにいたレーザーはアキラも気に入っていたのに、可哀そうに」

「やっぱり襲ってきたやつらはすんなり中に入り込めたようだ。ターレットの残弾が全く消費されていなかったし、電源が落とされていった。奴らが入ってきた時は動いていなかったってことになる」

ハンコックは腰を上げる。

「まあ、そうだろうなとは思ったよ。」

死体に見慣れない顔がひとつもない。あるのはみんな見知った哀れな連中ばかりだ。

よし——キュリー。あんたはすぐにアキラの工房を見に行つてくれ。確かあそこにはヤバいものがいくつもあると言つてたろ?」

「私もそうすべきだと思つていました。すぐに向かいます」

「この娘だけで大丈夫なの?」

「価値が分かるレイダーなら、こつちをここまで徹底的に破壊したりはしないだろう。恐らくは大丈夫だろうが、念のため何かありそうならすぐに戻つてきな」

「わかつています」

「それじゃ、こつちはさっさと埋葬してやろう。」

新しい墓を作つてやることくらいしか、俺達にはできないけどな  
2手に分かれた。

ケイトはマクレデイと共に破壊されつくしたくらい診療所の中を改めて調べた。

日の当たる窓辺で患者を診察する医者がいて、よかったと涙ぐんで喜んでいた患者たちがいた。こんな連邦で、のん気なことをやっているなどイライラしてみてもいたはずだったのに。

それが今、激しく踏み荒らされただのゴミの山となつてしまったこ

とがキツイ。

「なあ、マクレデイ。これってあいつ——アキラは悲しむよね」

「あ？まあな」

「結構頑張ってるあそこまでしたのにさ。きっと悔しいよね」

「そうかもな」

「なんだよ、ちよつと冷たくないか？気にならないの？」

あつさりとした返事を繰り返すマクレデイにケイトが怒り出す

「あのな、ケイト。アキラがここを見てどう思う、なんてのは俺だっと思うさ。でも俺は今それよりもずっと大きなヤバい考えの方が気になってる」

「なんだよそれ。ヤバいって、なに？」

「わかんねえかな？……実はアキラがもうこの状況を知っていたとしたら」

「まさか。最新情報だよ？知ってるわけがない」

「ああ、実はここに来るまでは俺もそう考えてた。でも——ハンコックはそうじゃなかった」

「違うって？」

「アキラが、あいつがイカレてるのは馬鹿をやるからだ。」

ただのバカじゃない、トンでもないバカを平然とした顔でやらかしてみせる。そしてあいつはマジでレイダーは殺したいほど嫌ってる。笑顔で握手した後でさえ、そいつが自分のことをレイダーだと言えば終わりさ。平然と殺す。

「だけど考えてみるよ。そんなあいつは俺達と最近まで何をやってた？」

ムカついてブチ殺したがってるレイダーのボスをやってたんだぜ。あの新聞記者じゃないが。アキラの奴がとても冷静でいられました、と俺は思わない」

「気のせいじゃないの？」

「だいたいけどな。割とマジな話、あいつとの合流が遅いってのがどうにも不安なんだよ。だって俺達もいなくなって、ひとりで残ってたわけだしな」

マクレディはため息をつく。  
そうだ不安なだけだ。それだけなんだ。

全員が席を立つとパイパーは素早くキュリーの後ろにつく。

ここがチャンスだと彼女の勤が告げていたのだ。そして皆はそれを気にしていない。

(よし、パイパー姐さん完全復活。これこそが私だよ)

コベナントに起きた事件には心を痛めるが、一流の記者としてはこの機会に改めてアキラという若者が秘密にしていることをどうしても知っておきたい。

——不思議な少年。いや、青年だとは理解しているよ  
アキラについて、ガービーはそういつて言葉をよく濁す。

ミニッツメン復活に少なくない貢献を果たし、なのに若者らしくなく他人からの称賛や名声に一切の興味を持たず。むしろなにかから自分の存在を隠したがっているような態度にも見える。

最近は特にひどく荒れているという噂を聞いたが、それでもレオはこの若い友人への信頼を揺るがせてはいないらしい。正直言って、大した信頼関係だと感心するけど、よく聞くと別にVaultの中で知り合っていたというわけでもないというし。そんなに短い付き合いがあるだけなのに、そこまで信頼するということは。

まさかレオ自身にアキラとの友情とはそれほど重要な位置——自分の計画の邪魔にならないなら別に好きにしたらいい——的なものでしかないのではないか？

そうなるとレオ自身の感性にも疑問符が付くわけだが。それは考えたくない。

とにかくパイパーのレオへの様々な思いは別にして、そろそろあの若者の本性を深く知りたいと思っていた。

地下道に入ると地上とは違う緊張感に、パイパーの警戒心が久しぶ



りに反応する。

しかし前を歩くキュリーはそうではないようで様子に変化はない。すると次にパイプ管の間や壁のくぼみなどに巧妙に侵入者に仕掛けられたターレットや罠が目につくようになる。パイパーはキュリーの腕をつつき——残念ながらまだ口を開けると何を言うのかわからないので——それらを示す。

キュリーは「はい」とうなづく

「ここはどうやら知られてはいなかったようです。防衛機能は作動しています。攻撃された様子は見られません。ひとまずは安心してよさそうです」

「……（よかったじゃない）」

「でもちゃんと全てを確認してからでなければ、喜ぶにはまだ早いです」

「(そりゃ、そうだわ)」

しばらく進むと広い空間に出た。

「小型の核ジェネレーターは全て起動中、警備システムも作動した形跡はない……パイパー？」

キュリーはそのままアキラの工房へと進もうとしたが、その腕を緊張した顔のパイパーが銃を片手につかんでいた。

ここに来たのは初めてであったが、何か人がいた気配を感じたのだ。

今度は武器を構えたパイパーが先頭に立つと、見つけたものに近づいていく。階段の上に置かれていた机の上に、飲みかけの水のボトルとかじられた後があるマッドフルーツがひとつ。

「歯形をみるとこれは、人ですね」

（んなもの見りゃわかるわよ！そうじゃないでしょ）

「誰かいるのですね」

（——わかってりゃいいのよ）

それよりもどっちに行った？いや、逃げたと思う？

キュリーにジェスチャーでそれを伝えると、彼女はしばし周囲を見回してから「工房かもしれません」とだけ小さい声でつぶやいた。

キュリーにとつては何度も訪問した場所であつたが、パイパーは初めてそこに足を踏み入れた。

壁際にならぶ機材、棚に置かれた装置。各作業台のそばの壁には作りかけの武器がいくつも並べられている。

だが一番目を引いたのが——奥にある、個人用の牢屋？

パイパーの脳裏にアキラというあの若者が、どこからか攫ってきたいたいけな少女をここに閉じ込め。震えている姿をニヤニヤと下品な笑みを浮かべて眺めている絵が浮かんでしまう。その少女が次第に妹のナツトの姿に似てきたような——。

パイパーが牢屋の前で凍り付いたまま動かないのを見て、何を想像しているのかキュリーもわかつたようだ。

彼女は顔を真っ赤にする。

「えっ、あつ、そこはその。前の持ち主たちが使つてたもので」

「……」

「彼は別に片付けなかつたつてわけじゃなくて。そのつもりではあつたとおもうんですけど、えつと……」

「(なに？別に何も言つてないよ?)」

「あの、こういうのを彼と一緒に。勉強というか、使つてるので——すいません」

あつ、そういうことね。

パイパーはたちまち納得する。悪い少年の顔は霧散し、脳裏のナツトが目の中のキュリーに代わり若いカップルの刺激的な——いや、やっぱりどうなんだこれ？

人柄とか秘密に近づこうとして、パイパーはいきなり若い2人の情熱を別に知らなくてもよかつたのに覗き見てしまい、なんか気分が複雑になる。

——自分は未亡人とその娘で囲まされてんのに。どうやったらそんな簡単に関係を進められたんだろう。

それがうらやましい。自分に何が足りないのだろうか？

素直さ？それはあるかもしれない。自分は従順さが圧倒的に足り

ない。いきなり正解を自分で出してしまったか。

ヘタレてる？そんなことはない。ナットじゃないけどパイパー姐さんはダイアモンドシティじゃ”黙っていれば美人”と誰にだって言われてるし。

「パイパー、パイパー？」

「(やっぱ正面からいく？ハイ、レオ。思ったんだけどちよつと私達、体の方も合うと思うんだ……)」

「??？」

慌てて思考を切る。とんでもない方向に暴走するところだった。

そんな妄想、今は必要ない！

別に気を抜いていたわけではなかったが、静かな部屋の中でガチャリと何かを外れる音がして2人は武器をそちらに向けた。

計器類の並ぶ壁のあたり——だが、そこが今。隠し扉であったと自分から証明してきたのだ。

扉はそこで止まっていたが。パイパーは指で矢印を作ると、クルクルとそれを回す。キュリーはその意図を理解し警告を発し始めた。

「誰ですか？私達はここの主です。こちらは武器を持っています。出てこないなら攻撃しますよ」

「——た、助けてください」

「話をしましょう、出てきなさい」

「わかった。わかったよ、出るからさ。悪かったよ——」

そういうと手を握り合った若い男女がゆつくりと姿を現してきた。

工房の隠し部屋から出てきた若い男女は自分たちのことをコベナントにいた居住者だと主張したが。キュリーは逆にそれを否定し、彼らもキュリーは「自分たちが来たときはいなかった」ことを認めた。どうも話が見えてこない——。

キュリーはこの2人を連れてコベナントへとすぐに戻ることを主

張したが。

逆にパイパーはここは先に彼らから事情を聴くべきだとして反対した。実をいえばキュリーの言っていることは正しいことだが、パイパーの勤が。あそこにいる誰よりも先にここで怒った出来事を聴いておいた方がいいと告げていたからだ。

前回はこの勤に従ったせいでヤバイ罠にどつぷりと頭の先まではまっってしまったが。だからと言って人間、なかなかそれまで少なからず役に立った経験を捨てることは出来ない。

だが、自己紹介から始まった若い2人の話は。最初からぶっ飛んでいた。

気弱そうな青年は「えっと、あんまり人に行ってはいけなと言われているんだけど……」と言いながら隣の少女と目を合わせた後。いきなり自分たちは人造人間だと言い出したのだ。

これにはさすがにふたりは目を丸くする。

彼らによるとあのレールロードに保護された人造人間たちの中に自分達も加わると。彼らはこの連邦の外へと脱出する計画があったらしい。

ところがその計画は大失敗。攻撃を受けて全滅する恐怖を味わったが、その時自分たちを助けてくれたロボットによってこのコベナントへと導いてくれたらしい。

そこはとても安全な場所で、てっきり自分たちはそこでこれからは暮らしていけるのかと思っただがどうもそうではないと聞いて全員は落胆したそうだ。

そして医師とわずかな患者とその家族しかないそこで、自分たちはなにをしたらしいのか。

連れてこられた人造人間たちはさっそく戸惑い、混乱し、不満から次第に怒り始めてしまったという。

だがこのふたりはそんな仲間達と距離を取り、ここでの生活を満喫していた。

ロボットと一緒に彼の言う“レモネード”とやらを作り。ロボットの隣に屋台を作って同じものを販売したり。アキラの端末のプロ

テクトを解除しようと挑戦していたり。

気楽な彼らに触発されたのかどうかはわからないが、他の人造人間たちも次第に好き勝手に何かをやり始めるようになっていったらしい。

医師や患者達はここで自由にふるまいだした人造人間たちに対して冷たかった。それでもまだお互い、憎みあうような深刻な空気は全くなかったようだ。

しばらくするとこのふたりはなんとこの地下道への道を見つけ、コベナントではなくこちらに遊びに来るようになってしまったらしい。

その頃、不安と怒りにとりつかれた人造人間たちは最悪の計画を秘かに練って、そのまま実行してしまう。

彼らはいつの間にか外部のレイダーと連絡を取り、居住地の中へと引き入れてしまったのだ。

襲撃のあった夜。

ふたりは仲間だったはずのほかの人造人間たちに襲われた。外へ飛び出すように見せかけ、地下道へと潜り込んで逃げきったらしい。

仲間に秘密のエリアについて内緒にしていたことが、彼らを助けたのだ。

「ここに入りにしていたロボットが、持ち主は今留守にしているだけで。そろそろ戻ってくるはずだって。だからそれまではここに隠れてようって」

「——賢い選択だったと思います。ここには私とアキラの栽培室もありましたし、食料もあつたはずですよ」

「そう！ そうなんだよ。ここ、本当にすごいよね」

「でもひとつだけわからないことがあります。あんなところに隠し部屋があると、私も知りませんでした。どうしてあなた方はそれを知ったのですか？」

するとふたりの男女の顔がパツと明るくなる。

「端末のプロテクトを解いたんだよ。そしたらここに動力が多く回されてるってわかって。その使われ方を読んだんだ。僕ら、そういうの得意なんだ」

仲がよいのか、笑顔で話している最中も握りあう手を離そうとしな

い2人からパイパーは目をそらす。

キュリーは目を丸くして驚いていた。

「アキラのプロテクトはかなり難度の高いものだったはずです」

「うん。でも不可能ではなかった。時間はかかったけど、なんとかやれたんだ。本当だよ、なんなら今から見せようか？」

「いえ、それは後にしましょう」

得意げに身を乗り出して自分は出来たと主張している——これがハンコックらが相手なら、殺された医師や患者の件があるのでこの男女の口にすることを黙って聞いてやれたかどうか。

気が付くとパイパーは自分が隠し扉の前に立ち、扉に指をのぼさうしていた。自分が何でそんなことをしようとしたのか、考えもな

く。  
人造人間たちの言う通り、装置のスイッチを動かすことで扉は音を立てて開く。

キュリーは目の前の彼らの話を聞きながら、ふとげんな表情をパイパーの背中に向けた。彼女はいったい何をしているのか。

扉が開くと中の冷気が外に流れ出てきた。

とんでもなく寒い、零下何度だろう？ 部屋の中は薄暗いブラックライトで照らされ、はつきりと全てを見渡すことができな

い。もう少し奥の方を覗こうとしたが、冷気が開かれた眼球を刺激し、痛みを感じてって——あれ？

一瞬だが、奥に見えたものから感じた違和感に動きが止まった。次に顔色を変え一気に扉を最大にまで開いて見せた。キュリーはそんなパイパーに驚いて飛び上がる。

パイパーは今度こそ中に飛び込んでいくと、自分が見てしまったものの正体を確認してしまう。なかなか感じることはない、凄まじい吐き気を催す邪悪なものがそこに存在していた。

そして久しぶりに慌てて自分の口をふさごうとして、失敗する。

地下道に最初は雄々しく、それから女らしい悲鳴が響き渡った——

あの爽やかな目覚めはなんだったというのか？

この北部のレイダー、最後の砦と自負していたシケット・エクスカベーション最後の日は今日であったらしい。

破壊、炎、衝撃、死――。

いつも自分たちが振りまいているそれが、正面から堂々といきなり入ってきた。

地上にいた仲間たちはそいつをさっさと叩き出そうとした結果。あつというまに死者に変えられてしまったようだ。

複数回、続けて大地が揺れ。悲鳴と炎の後に、バラバラになったりなれなかったそいつらの残骸が地底へと落ちてきた。

臆病な奴はこのあたりで頭の片隅にさっそく「逃げよう」などと考えるのだろうか。圧倒的な破壊者はその選択肢をこちらに渡すつもりはないらしい。半狂乱になった無様な連中の言い争う声からサリーの耳にも入ってくる。

「馬鹿野郎！なんでこっちくるんだよっ」「逃げろ、逃げろ」「こっちは行き止まりだぞ！下に押し込まれたら――」

そうだ、このまま地底部にまで押し込まれては全滅は必至だ。

だから戦うにしろ逃げるにしろ、上に行くのが正解だ。正解のはずだった。

「エレベーターシャフト！あいつを使え、地上から戻って、挟み込めばいい」

「――いけー」

言い出した奴をサリーが信じたわけじゃない。

それでも運よく地上にたどり着けなければ。このままではマズイ。

だったらここは行かせて、この状況に変化が生まれるのかどうか見せてもらった方がいい。

シャフトが音を立ててゆっくりと浮かび上がっていく。

あそこにあるのは勇気か蛮勇か、それとも臆病か。7名ほどが乗り込んでいったようだが、思っていた通り。連中は地上にたどり着く前に上からゆっくりと降りてきている襲撃者の攻撃を受けた、それもたった一発。

ヒューン

やけにはつきりと響く弾頭の飛翔音の後。

衝撃が走り、動くシャフトを見守っていたレイダー達は地面の上を転がりまわった。彼らが顔を再び上げた時、不気味な形の爆炎を上げながら燃えるシャフトが重力に負けて地底へと戻ってくるどころだった。

同時に地上の巻き上げ機あたりからも、爆発音が聞こえてきた。あれでは修理には最低でも数十日はかかると思っているだろうか。

もう逃げられない——死神は一方通行の先から地底へと進みながら、死刑宣告を与えてきたのである。



## Distress (LEO)

遠くに見覚えのある——それよりもやや伸びた楚辺発つ堅固な壁が見えてくると、同道したバンカーヒルの商人マークスは私達に「あれだよ」と指をさして呟いた。

彼の上司によるとバンカーヒルにコベナントの変事を最初に伝えたのこの彼だったようだ。

「將軍、ここから見る限り襲撃の混乱は外壁には見えないな」

「どうだろう。それにしちや静かすぎる、大丈夫か？」

ガービーとディーコンはそれぞれの感想を口にするが。私は沈黙を守っている。

悩む理由はない、あそこではなにか悪い事があつたのだ。それを確かめなくては。

マークスの商団はこのまま一緒に行つてもいいと申し出てくれたが、やはりミニッツメンとしてそれはできない。

彼には近くのタフイントン・ボートハウスへ向かうことで彼自身の生活に戻ってもらつた方がいいだろう、ガービーと相談してそう結論を出した。

マークスは黙つてこちらの話を最後まで聞き終えると、うなづくことで理解を示し。それぞれと固い握手を交わすと傭兵たちと共に別の道へと去つていった。寡黙な男は短い付き合いであったが、本当によくしてくれた。これからの彼の商いが無事に終わることを祈つた。

ガービーはしつこく自身が斥候として前に立つことを主張して譲らなかつたが、そうこうしているとどこからともなく暗い顔のマクレデイがあらわれ「なにやつてる、さつさと来いよ」とだけ言い捨てる背中を向けてまた戻つていこうとする。

「どうやらこちらの様子はむこうは最初から確認していて焦れたらしい。」

「それで、大丈夫なのか？アキラ、それに皆は？」

「——ああ、俺達はな。ここを離れてた」

「何があった？被害は？どうしてこんなことに？」

「……」

「マクレディ？」

「ああ、そういうの全部。実際に自分たちの目で見てくれよ。とにかく……こつちは皆、すっかり参ってたんだ」

この若者は珍しいことに落ち込んでいるようだ。そしてそれはどうも彼だけではないらしい。

コベナントの門の前では、椅子を持ち出してまたぐように座っていたジョン・ハンコックが。これまた疲れ切ったように重そうに立ち上がると近づいてくる。

「また大勢でゾロゾロと、それでもよくきてくれた。ああ、それとあんたらが一番最後に到着した」

「すまない、ハンコック市長。あんたのバカンスも大変みたいだ」

「ああ、それは間違っちゃいない。そっちの若い奴の不景気なツラを見たる？ここにはもうトラブルだらけでまったくどうしようもなくなっちまった。お手上げだよ、アンタの助けがいる」

このグループも本当に珍しいことに大仰に両手を振り回して嘆いて見せたことに驚いた。

どうやらなこちらが思う以上に、大きな問題とやらがあるようだ。

---

コベナントの外、少し離れた場所に新しい墓が並んでいる。

無残にもレイダー共の私刑によって命を落とした医者や患者、その家族たちのものらしい。

「わざわざ殺したのか、全員を」

「ああ、おそらくだがミニッツメンに向けたメッセージのつもりだったんだろう。ここにあるものは頂いた、自分たちを追ってくるな、つてな」

「むづいことをする……」

「調べたが——襲撃自体はごく短時間で終わってる。略奪の方が長

かつたくらいだ。

おそらく壁の中からの手引きであつさりと侵入することができたんで、連中も気持ちが大きくなつてたのかもしれない。それにしても、やりすぎではあつた」

「そいつらに心当たりは、ハンコック市長？」

「……」

「市長？」

「ああ——そのことはもういいんだ」

「いい？ どういう意味だ？」

「部下に確認させているからまだ断言はできないが……」

さつそく襲撃からの説明を聞いていると、どこからともなく騒がしい女性たちの声が次第に大きくなってくる。

次に近くの家の扉が乱暴に蹴り開けられると、そこには2人の女性が互いに何やら言い争う姿があつた。

「パイパー？ ケイトか——」

私は相手を確認して思わず小さな声でつぶやいてしまったが、どうもそれがこの距離でも本人たちの耳に届いてしまったらしい。

最初に疑いの目がこちらに向けられ、次に驚きに代わると。なぜか2人は怒りの形相を浮かべて無言でこちらへ——私に向かって突き進み始めた。

——あ、ヤバイ

男たちの間に本能的な危険信号がともる。私とハンコックを除くすべてが、爆心地から退避しようとして一歩下がる。

マクレディは鼻で笑い、ハンコックはやれやれと呟くと。突進してくる女性たちの前に立ちふさがつた。

「よーし、そこまでだお嬢さん方。見りやわかるだろうが、お客人は到着したばかりなんだよ」

「そこをどきなさい、ハンコック！」 「そうよ、邪魔よ！」

「そうかい？ なら、もうちよつと落ち着けて。後ろにいる男どもを見てみる、全員が逃げ出しちまう」

「だから、そんなのどうでもいいのよ！ 今はそいつにあいつをあそこ

から引きずり出す——」

「はあ!? 何言ってるのよ、ダメよ。そんなこと許さない。彼はあそこに入れて——」

ハンコックに2人で食って掛かったかと思えば、今度はまた互いに「出す」だの「入れる」だので言い争いを始めて私は目を白黒させることしかできない。

代わりに背後でデューコンが呟くのが聞こえた。

「彼女たちが言うアイツってのは?」

「——アキラのことさ」

「ふん、女性にモテルんだな。それでその、出すだの入れるだのってのは?」

今度はマクレデイが答えるのに時間がかかった。

言いにくそうに何度か口を開くと。「牢屋だ、自分で入ってる」と答え、さすがに思ってもいない回答に私やガービーから驚いて後ろにいる彼の顔を確認してしまった。

「牢屋? なぜだ?」

「——知らねーよ。本人に聞けって」

「腐ってるのよ! ガキなんだから、ふざけやがって!」

「ちよつと!? そんなことでこっちはごまかされるわけじゃないんだからね!」

マクレデイの言葉に女性たちが反応する。

「よし、もういい……アキラは牢に入っているんだね?」

それはわかった。それじゃ、なんで彼はそんなことをしているんだ? その理由は?」

---

かつてコベナントはカルトが生み出したまやかしの場所だった。

アキラは彼らへの個人的な怒りから対決し、それを蹂躪してすべてを奪いつくした。今度のレイダーのように——。

その後、彼はカルトの秘密のエリアとして使っていた地下道を自分

が使うために改装し。彼が生み出したロボットや手にした知識などをそこに収めていたことは、私達も知らされていた。

だがそれだけではなかったのだ。

そこに迷い込んでいた人造人間は、アキラの端末をハッキング。誰にも明かしていなかった秘密の部屋を暴いてしまったのだ。

私達もそこへと案内される。そして同じようなショックを受けることになった。

小さくない部屋は暗かったが、大量の電力を使って零下で気温が設定されていた。

自然と吐く息は白く、だが体がわずかに震えるのは刺すようなこの凍えのせいなのだろうか？

駆動するその装置は、大型のウォーターサーバーを思わせ。そこに透明な小さなボトルが列をなして設置されている。

ボトルのそばには中の様子が確認できるように、小さな電球それぞれ用意され。顔を近づけなくとも中身の様子が確かめられるようになっていた。

「——これは？これは、なんだ？なんなんだ、ハンコック!？」

「落ち着けよ、ミニッツメン。見ての通りさ」

「見ての通りつて。それはつまり……」

人だ、ガービーの言葉に私が続ける。自然と声も低くなった。

ああ、これは見覚えがあるものだ。最近、傷ついて動けなかったグッドネイバーでも身近にあった。

“生体を死なせないための技術”だ、あの鮮やかな旧世界にも存在したものだ。

ボトルの中には剃り上げられた髪のない、生首がひとつひとつに収められていた。生前の最後の瞬間に残した感情はそこには残されていない。また、男性、女性。年齢はまばらだが、子供がいないことも多少だが救われた。

「そう、人だ。正確には人の残骸だな」

「……誰なんだ？」

「実はいくつも見覚えのある顔がある。以前のコベナントにいた住人

じゃないかと思ってる」

「なっ!？」

「ま、ちよつと怪しいとは思ってたさ。」

事件の後、あのあたりに転がってた死体はアキラのロボットが全部片づけてたが、別に墓を作つてやった様子はなかったからな。それでも、さすがにこれは、想像していなかったがね」

私は何も考えられない。パイパーが言っていたのはコレの事だろう。

デイーコンは真つ青な顔で沈黙していた。ガービーは嫌悪の表情を浮かべ、声を荒げた。

「あいつはなぜこんことをする!?何を考えている?」

「——答える前にまずはここを出ようか。なにせ寒いからな、震えちまう」

「ちよつと待て!これはどうする?このままにするのか!？」

「そりやどういう意味だ、ミスター・ガービー?」

「これは破壊するべきだろう!なんでなにもしようとしんない!？」

フン、ガービーの言葉にケイトが鼻で笑う。

ハンコックは仕方ない奴だという表情を——恐らくだが浮かんでいると思うが、優しくこのままなにもしないで外に出るようにガービーに再度伝えた。

アキラの工房へ戻る。ガービーは怒りに震え、デイーコンは青白いが無表情のまま。

そして私は——困惑している。とにかく何も考えられない。

彼の性格が一変した?そうは思わない。そうじゃないはずだが……。

そこにキュリーがあらわれ、「彼の全てを理解しているとは思えないが」としながらも。

あの装置についての説明をしてくれた。

「結論から言いますと、あれは人間の脳を部品として可能とした超規模の計算処理装置だと考えます。」

コベナントを掌握後、アキラはベルチバードの復活にすべてを賭けていました。ですが、そこには越えなくてはいけない技術的な問題も多くあったはずです。そのひとつがパイロットなのは誰の目にも明らかでした。

軍事組織であるB・O・S.と違い、アキラには最初から空を飛ぶ機械のパイロットを他人に頼むことを考えていたとはどうしても思えません。

ですがだからと言って単純にパイロットをロボットにすれば、この問題が解決されるというわけでもないのです。現在、2機のベルチバードは5台のアイボットタイプのパイロットで運用されていますよね。

彼らにはそれぞれ個性が与えられ、経験などの情報は共有化されていますが。実はそれ以外にも、飛んでいないときは膨大なシミュレーションを実行するよう要求されています。そのすべてを処理するのは、普通の電子回路では不可能でした」

「つまり彼は——あの若者は我々がここにいた時からすでにあの装置をくみ上げていた、そういうことか？」

はつきりと嫌悪の表情を浮かべて確認するガービーに対し、キュリーは少しムキになる。

「そうです。でもそれで彼を責めるのは間違っています。

彼はそうしたパイロットの処理を含めた計算はこの場所で行っていることをはつきりと私たちに告げていました。問題はそれが実際にどのようなして実現されたのか、誰も確認していなかった。ただそれだけのことです」

「悪いが——とても納得のいく説明とは言えないと思う。皆もそうだろう?」

ガービーはそう言って周囲を見回すが、同意をはつきりと示しているのはパイパーだけだった。

「おい!本気なのか!」

「……」

「彼は、アキラはあんな恐ろしい行為を平然とやっていたんだぞ。あ

んたたちはそれを気にもしていないっていうのか」

「——熱くなっているところをすまないけどな、有名人さんよ。そこはキュリーが言う通り、俺達はみんなが知らなかったのは間違っちゃいないだろ」

マクレデイがそういうと、ガービーやパイパーは「しかしっ」「だって!？」と抵抗しようとする。

「なら、あんたらはなんで聞かなかった？」

アキラに、直接本人にあんなに大量のロボットを作ってどうするつもりだ、とか。そいつをどうやって管理しているんだ、とか。壊れたらどうするのかな。

お望み通り説明してくれたと思うぜ、あいつはさ。俺達がよくわからない言葉をいろいろ並べてな、得意になるわけでもなく。普通に話しただろうし、あの不気味な装置だって見せたと本当に思わないのか？」

「……」

「だいたいあんたらミニッツメンがアキラをどうこう非難できる立場じゃないだろう？」

レオとあいつは共にミニッツメン立ち上げから協力してきた。ベルチバードだって、アンタらは普通に使っている。まるでそれが当然のようにな。本人が見返りを求めなかったにしたって凶々しすぎるってもんじゃないか。

そのおかげで北部じゃ、ミニッツメンはいまやレイダーを相手にも引けを取らないまでになってきていると思われ始めているよな。違うか？」

マクレデイに続きハンコックの言葉はガービーの耳には痛く、遂に彼の表情は険しいままだったが。もう口を開く元気はなくなっていた。ここで貴重な見方を失いつつあることにあせってパイパーが声を上げる。

「だからってあんなことが許されていいの？それが正しい事？」

ガービー！それがミニッツメンの誇りだとしても？レオもそういうの!？」



「……將軍」

全員の視線が私に向けられた。

私は答えを出さなくてはならないようだ。頭を切り替えようと、深呼吸する。

「——わかった、もう茶番は終わりにしよう。」

それでアキラはどこだい？ここにいるんだろう？」

「ああ」

「彼と話すよ」

「ああ、そうしてくれ」

私が相手にしないという態度を示すとそれに失望したのだろう。ガービーとパイパーはシヨックを受けた表情を浮かべて「レオ」「將軍」と食い下がってきたが、そんなことで私の考えは変わるはずもなかった。

逆に私から鋭い視線を2人に向ける。

「ガービー、彼らの話は聞いただろ？ミニッツメンは、我々はアキラを非難できる立場じゃない。」

それに君が心の底から彼が危険だと本当に考えていたなら。あの装置について知る機会はもつと前にあったはずだ」

「しかし將軍！」

「冷静になれ、ガービー。ミニッツメンを率いる君がそんな調子でどうする。」

それとも君はモラルの話がしたいのか？ならば「君のミニッツメン」にもそれを求めるべきじゃないのかい」

「何が言いたいんだ、將軍」

「モラル、だよ。ミニッツメンは敵——つまりレイダーとの交戦後に投降してきた捕虜の扱いについてはどうなっている？」

「……それは」

「ああ、そうだ。そんなものはない。」

元々ミニッツメンはレイダーに対抗するための存在だ。奪いに来た連中をわざわざ許す理由はない。形ばかりの即決裁判の後で私刑が執行される。その後の遺体の扱いについても同様だ」

ガービーの顔に歪み加わる。

「それとこれと、関係があるのか？」

「ガービー、それこそ私が君に聞きたい。ミニッツメンはすでに以前ここにいたカルトの事件への扱いは『知らぬ、存ぜぬ』と決定した。私と君とで相談して、そうしたんだ。」

それは同時にアキラの行いについても不問にするということだ。その約束を今になって反故にするつもりなのか？」

「——いや、そうじゃない」

十分だろう。ハンコックの言う通り、それがたとえ本人が望んだこととはいえ。彼によってミニッツメンにもたらされた恩恵は少なくないのだ。そしてわかっている——アキラがそれを受け取りたがらないのは、様々な理由があるが。そのひとつがミニッツメンの理想へ、共感するものがないからだということも理解しなければならぬのだ。

愉快な話ではないからと、これまでの態度を一転させるだけの理由はそこにはない。

次にパイパーに顔を向ける。

「パイパー」「レオ、あたしを言いくるめられると思ったたら大間違いだからね」

「その通りだ——」

私が彼女に同意すると、徹底抗戦の構えを見せていた彼女の表情が変わる。そこに私は踏み込んでいく。

「君は記者だ。必要だと思うなら、この一件の全てを記事にする権利が君にはある」

「そ、そうだよ」

「私が君に求めることは何もない。君は君で好きにしてくれていい。だがミニッツメンの將軍として、コメントは出すことはない。それだけは覚えておいてくれ」

それだけを言い残し、私は彼女に背を向けると私の若き友人の元へと向かった。

パイパーは地上へとひとり戻ってきた。

息苦しくて思わず青空が見たかったのだが、見上げてみると居住地を覆うそびえたつ壁が随分とあの空を小さく見せている気がした。だがあの壁に、中の住人たちは守られているとの安心感を覚えるのだろうか。

——君の好きにしてい

同じ反抗をただけなのに、レオはガービーと違い、自分にだけはそう言った。聞かれても答えないと、これ以上話すことはないとまで態度で示されてしまい。自分だけ投げ出されたような——おかしな話だが、彼は以前のあの時のように理解を求めてくることを自分は期待していたのかもしれない。

普段ではできないくらい2人の距離は近づいて、そしてきつと対等よりもわずかに有利な位置から話ができる。

すると大騒ぎしていた自分が、なんだか恥ずかしく思えてきた。なんで自分はこの装置を見て取り乱し、そのついでのようにアキラという少年をことさら危険だと主張していたのだろうか？

「ミス・パイパー。これはこれは。もう、お話はよろしいのですか？」

「ああ、コズワース……」

「はい私ですよ、どうしましたか？」

「——なんだろうね。多分、しくじったんじゃないかな。よくわかんないけど、そんな気がする」

「ふむ、落ち込んでいらっしやるようですね」

「そうですね。多分、そうかも」

初めのころとはまるで別物となって巨大化している今のコズワースを改めて眺めてみる。

「こうして改めてみると、やっぱり君は違うね。なんか別のロボットみたいだよ」

「もちろんですとも。それだけの力を手に入れたのですから」

「うん。でも、不満とかはない？」

「大きくなって身動きがとりにくくはなつてしまいましたが。それだけ私は変化したということです。できなくなった不満を並べるより

も、新しくご主人様の手伝いができるようになったことを喜びにしています」

「そっか——」

「それはそうと、あなたには元気が必要のように思われます。何か私にできることがありますでしょうか？」

「どうかな。とりあえずあたしのおしゃべりにつきあってくれたらいいかも」

「わかりました。それではさっそくチャレンジしてみましよう——で、どうされたんです。パイパー？」

「どうやら主人と同じく、このロボットもパイパーのトークに挑戦してくれるらしい。」

「ああ、そうだね。それが最近はとにかく運が悪くってね。」

「ちょっと前なんだけど、特ダネをおうつもりでさ。別に仲は良くなかったけど昔からの知り合いに——」

「まだ調子は戻ってきたように感じないが、とりあえず今日もパイパーのおしゃべりは健在であった。」

アキラの工房は私でも数回は訪れていたけれど、考えてみたらこの秘密のエリアとかいうものの全てを案内、紹介された記憶はないことに気が付いた。

「笑えない話だった。ガービーらに言うまでもなく、私自身。アキラのやていることに本当に気にしていたわけではなかったという証明だ。ひどい年上の友人だ。こんな私を、まだ彼は友人と認めてくれるだろうか？」

「そこは以前、コベナントを訪れたことで攫われた人々が囚われていたと聞いていた。」

「並べられた牢の前——そのひとつで私は足を止めた。」

——アキラ

彼は確かにそこに入っていた。

ケイトの言う通り、外の情報を遮断しようとしてもしているのか。パイパーの口から飛び出した弾劾が、彼をここまで打ちのめしたわけではないだろう。彼は、この若者はすでに多く傷ついていたに違いない。

「やあ、アキラ。来たよ、ついさつき到着した」

「……レオさん」

「なんてところにいるんだい」

今はそこまで幼くは見えないが、あの時は。そうだ、Vaultから出たばかりで。サンクチュアリに彼を置き去った時に、今と似た姿を私は見ていた。

「話したいことがたくさんあってね。それに、君の話にも興味があるんだ」

「……」

「中に入ってもいいかな?」

「……、牢屋ですよ。本気ですか?」

「ん、なんだ。鍵が壊れているんだね、それじゃ失礼して———そういえば話したことがなかったね。」

昔の話だけれど、軍をやめる時に上司らからかなり強引に引き留めをされたことがあった。あれは不愉快な経験だったけど、私には必要な事でもあったと……おかしな話だけれど、なぜか今はそう思えるよ」

扉を開いて中に滑り込み。扉を閉じると奥にいる彼と向き合えるように格子側に私は座り込む。

体を横にしていたアキラはようやく体を起こし、いつもは見せてくれていた明るさが消えた表情が見えてきた。

何を話せばいいのだろう。私はとにかく会話しようとして「大変だったね」とねぎらいの言葉をかけるところはから始めた。そんなものは彼は必要とはしていないのに———。

奇妙な、本当に奇妙な話だと思う。

私の記憶にある旧世界には見覚えのないこの少年は、目覚めてから

こつち。会うたびに自分を見ているような気がしてならない。こんな感情を持つことは勘違いであればいいのにと思っているはずなのに、今回も又だ。

まったくの赤の他人で、似たところなどないというのに。

私は息子を、家族を求めた。彼は記憶を、自分を求めた。

なのにお互いが歩く道は奇妙な捻じれを見せ、離れることも立場が変わることもなく。こうしてお互いまだ連邦という巨獣に翻弄され続けている。

私の言葉をさえぎるとアキラは口を開いた。もういいのだ、と。嫌になったのだ、と。

「レオさん、僕はずっと負け続けてるんです。あなたとこの地上に出て、連邦でなにかをなすとげてきたとか言われるけどそうじゃないんです。負けてから、ようやく何かを成し遂げようともがいていただけなんです」

「そんなことはないさ」

「いいえ、いいえ！」

Vaultierで自分の証拠を手に入れた時もそうだった。ひとりで行うとして、そこをレイダーに襲われた。本当に自分は死んだと思っただんです。

変な連中に攫われた時もそうでした。友人たちが近くにいるから何も起こらないと気を抜いて、そしたら攻撃された。抵抗なんてできなくて、その後はもう――」

「……」

「だから今回はそんなことにはしないぞって、間違いを正すんだって。

自分のことも、仲間のことも考えた。完璧だってそう思った、ようやくちゃんと勝負って奴ができるようになったって。負けなくてもちゃんとやれるって、だけどそれも……」

「危険な場所だと聞いているよ。でも君はちゃんと無事に危険な場所から全員を戻した」

「でもここをやられました！」

「襲撃されたことが、くやしかったのかい？」

「そうじゃない。そういうことじゃないんです」

アキラが口にすることはわかる。若い時には必ず経験するちよつとしたつまずきみたいなものだ。

だが、彼は多くを知り、感じ、考え、実行できることが余計につらく思えてしまっているのかもしれない。

「このコベナントは絶対に良くしようって、そう決めていたんです。でもそれだとわざわざ危険な場所にするようなものだってことは、ちゃんとわかってました。」

だからここに残りました。ベルチバードとかああいうのはホント、別にやらなくてもよかったです。ロボットだの、技術だの適当に倉庫みたいにここに放り込んでおけばよかったです」

「わかってるよ。君は優しい男さ、報いようとするミニッツメンからは何も受け取ろうとせず。それでもちゃんと働いてくれていた、ガビーだって理解しているさ」

「でもそのせいで、ここを襲ったレイダーを刺激してしまった。」

武器だの食料だの、奪われるだけなら耐えられた。あいつらに殺された人たち——あの人たちがあんな目に合わなくてもよかった。僕は彼らも守らなきゃならなかった。だって彼らをここに招いたのはこの僕が決めたことが原因なんです」

「アキラ——君だけの責任じゃないさ。誰もこうなるとは考えてなかったんだ」

「いいえ、僕はきつとわかってました。」

又カ・ワールド——あんな場所を気にしなければ何も起きていたはずがなかったんです。ミニッツメンの北部制圧に力を貸して、おかしなレイダーの対処だってケイトやマクレディに任せるつもりでした。でも……」

唇をかみしめて飲み込むのがわかる。

そうだ、彼は“自分”を優先した——失っている情報を手にいれられる可能性を追った。追わない理由がなかったのだ。

その結果が彼を苦しめている。

「どうせ僕は復讐者なんです。まともなことなんて、そんなものっ。」

パイパーの言っていることは正しい。僕は——呪われてるし、頭だつてオカシイ危険な奴なんです」

私は——彼よりも多く年を重ね、経験してきたはずの大人の私はこの瞬間、湧き上がる勘定から涙を流した。

どうしようもない。本当にどうしようもなかった。

この壊れ切った世界の中。彼も、私も、共にどこまでも希望にすがろうとして翻弄される哀れな放浪者でしかないことを連邦を思い知らせ続けていた。

若者は私だった。

私は、彼だった。

連邦の人々は私たちを見て善き人だの、悪いものを感じるだの勝手なことを口にしてているが。

結局のところ我々はともにわずかばかりの希望だけで必死に正気を保とうともがき続けている。「こんなことをいつまで続ければいいんだ？」そんな問いを自分に投げかけないように、必死で目をそらしながら——。

まさか目の前でレオが肩を震わせて鳴き声を殺すさまを見せられ、アキラはあつけにとられた。

そして理解する——。

自分がどれほど自暴自棄に、愚かなふるまいを見せているのかを。その滑稽さを。

その姿をさらしてせいで、彼の目にはいつだって強かったレオ自身が傷ついていたことを。自分たちは共にただ失っている物をあきらめられないだけの矮小な人間でしかないということ——。

すると自然、彼の目にも同じものが浮かんでくる。

それは長い時間ではなかったと思うが、同じ悲しみに沈み。そこから気が付くとともに乗り越えて落ち着きを取り戻すと、2人には重い虚脱感めいたものにとらわれる。

恐らくこの場所、牢屋の中というのがいけないのかもしれない。



「なんだろうかねえ。アキラ、不思議だけど今は何となく君の気持がわかる気がするよ。」

わかつてると言いながら。それでも続けてきたことだけけれど——  
やっぱり疲れたな」

「はい、僕も本当にイヤだし。動きたくないです」

「ママ・マーフィを思い出したよ。信じなければ——」

「別の可能性が生まれるはず、でしたっけ」

「ああ、どうだったかな。そんな感じだった気がする」

レオ、アキラ——2人は放浪者とならない道もあった。

信じれば道があると力強く歩き続けたことで、本当はどうでもいい事のはずなのに——連邦など関係ないのに。多くの人々を勘違いさせ、巻き込んでここまで来てしまっている。

お互いに希望は依然と変わらないままなのに、自分たちの存在だけがこの連邦の中で大きくなってしまった。

「アキラ、今からでも違うことは出来るぞ。ただ、信じなければいい」  
「——レオさんはそれが出来るんですか？」

「私は……私には無理だ。どうしても、どうしたって。シヨーンが、あの子はまだ生きてインステイチュートで暮らしている。」

それを知って、私たち家族を引き裂いた奴らの元で幸せだからなんて。そんなこと納得できないさ」

「僕も、僕も似たようなものです。」

自分の事だけを知りたかったのに。僕のことを好きだって言ってくれた人を——。他にも多く死なせてしまった。

なのに僕を知っている奴らは確かにこの連邦にはいるんです」

「懲りないんだな、我々は」

「上にいる人達、今なら全員を失望させることができますよ。きつと」  
はははは、と自然な笑い声上がる。

私もまた、復讐者だった。

ケロッグを討ち果たし、いつか開始するであろうB・O・Sとインステイチュートの戦争でシヨーンを取り戻せることだけにすべてを

賭けていた。そんなもの、賭けでもなんでもない。実現する現実性なんて全く無視している。

それでも、その程度でも希望は残されていた。

探偵のニックがケロックの遺体からインステイチュートの装置を見つけたし。私のためにそこになにか手掛かりがないか、調べてくれた。それがどんな結果になるにせよ、まだしばらくは私を慰め。正気であるための力となってくれるだろう。

そして私は私で役目がある。

アキラが知りたがっていること。あのグッドネイバーで話したコンドウを名乗る不思議な若者の情報。

私が伝えることからアキラは何かを探し出し。それがまた私のようにわずか慰めと、力になってくれるに違いない。

「アキラ、実はまずこれを見てほしいんだ」

私はそういうと上半身をはだけさせた。そう、本来であれば失われたはずの腕の部分。その付け根から見えるように。

だが彼は気が付かない。つまりそれだけ、あの近藤という若者が私に行った変異治療なるものは完璧に戻して見せたということなのだろう。

「どうかな、わかるかな？」

「??？」

「先日まで私はボストンで過去のニックの事件について調べていた。で、うっかりひとりになったところで暗殺者に襲われた」

「!？」

「片腕を……そうだ、この腕一本をまるまる失ったよ。恐ろしく手ごわい敵で、それに運がよかったんだ」

まだ輝きはだいぶ鈍いが、好奇心のあるそれを浮かべ。アキラが私の腕をとって調べ始める。

「ゴズワース達にグッドネイバーに運び込まれたんだ。メモリー・デンのドクター・アマリは使い物にならないと切り落とした」

「でも——これは生身の腕です。機械じゃない」

私はうなずく。

「ああ、そうだ。それには理由があるんだ。

失った腕を取り戻せたのは、その暗殺者のおかげだ」

「へ?」

「暗殺者は自分はコンドウだと、それだけ名乗った。

私に施したのはF E Vを用いた変異治療というものだとも」

「変異?」

「そして私を襲った理由も話したよ。アキラ、そいつは君から私を奪  
いたかったのだそうだ」

「え、えっ!?!」

彼の目が期待に揺れている。

これでまた彼は歩き出すことができるのだろう。

そしてまた我々は放浪者となるのだ、アキラ。

だけど我々は決して。そうだ、決して“孤独”ではない。

## 沈殿する静寂（Akira）

シケットエクスカーベーションは炎の中に沈んでいく。

北部の無法者<sup>レイダー</sup>たちはまたしても新たな希望の芽を失うこととなった。

彼らがおこなっていた採石場最低部にあったマイアラークの養殖場の中では。育てられたマイアラーク達が迫ってくる周囲の炎に耐えようと水たまりの中でじっと火の勢いが弱まる時を待っている。だがおそらく彼らの願いはかなうことはないだろう。このまま火に巻かれて最後の時を迎えることは避けられない。

そんな地底の底から、何かを引きずって炎の中をすすむ人の姿がある。

死神のふたつ名をもつ空想上のヒーロー、シルバーシユラウドに扮したアキラであった。

ヌカ・ワールドでポーター・ゲイジからコベナントの変事の噂を耳にするなり激怒した彼は。

その怒りを抑えないまま連邦へと戻り、直接事件を起こした張本人たちの元へと向かう。その怒りはいつになく激しく、そしてまたオーバーボスとしての彼の特権が。あのレイダーのひらくマーケットに置かれた最悪の武器——ヌカ・ランチャーとミニ・ニユークが差し出されてしまった。

偉大なる未来のリーダーとなるはずだったサリー・マティスの最後の日、最後の時は近づいている。

地底部から炎の中を力強く引きずられた結果。全身は火傷を負って助かる見込みはないのに。投薬されたステイムパックとRADアウェイの効果で、苦痛に震えても感覚は鈍くさせ。意識を断つことを許さない。

そしてすでに自分の命をどう終わらせるかを彼の考えで決められる立場ではなくなっていた。

あの地底部で死神が姿を現す前。あと少し、ほんの少しだけ早くに

諦めて。ただ楽に死ぬことだけに集中していれば——こんな目に合うこともなかったのに。

ヌカ・ランチャーを投げ捨てて降りてきたあの死神を殺せるなどどうして自分は考えてしまったのだろうか。

愛用のオートマチックショットガンなど放り出し。マイアラークのプールへと飛び込んでいけば、それだけでよかったのに。

「話がある。話をするぞ」

立って逃げるなどできなくなったサリーをコンクリートの上に放り出すと、シルバーシユラウドは一方的に宣言する。

この死にかけとお話がしたいだ？ふざけやがって。

「ふ、ふふ。しゅらうど、だってよ。まさか、おれのところに、くるなんてな」

グッドネイバーにいるおかしなグールが今も流している過去のラジオ番組で、現実にシユラウドと騒いだ事件は知っている。

「おまえ、みにつつめん。つながってたんだな、そうなんだろう？」

「……コベナントを襲ったそうだな。全部話せ」

「あはあ~~~~~！」

正解だった、その喜びで思わず絶頂してしまいそうなくらい快感を感じる。

だがそれは間違いだ。正しくはそれは苦痛と感情の爆発で神経がイカレかかっているだけだ。

「ていあん、されたただけだ。あそこにいま、しりあいがいて。てびきできるってな。」

ほんとうだった。あつさり、やれた。

ぶきもしょくりようもあつたが……だれもいなかったからな！」帽子と髑髏のバンダナの間に輝く目から、火を噴きだしそんな感情の激流を見た。

こいつ、怒ってやがる。そう思うと何やら愉快で本当にすべてを話してやりたくなった。

「だからうばったっ！いしや、びょうにん、クソみたいなやつら、全員なア！」

「殺したのか？」

「ああ殺したさ、みな、ごろしだ。ぐふっ、うふっ、あいつら。はやくしてくれって、あきらめてた」

「——それで？」

「おわりだ……ああ、ああ、そうだ。おれたち、ひきいれたやつら。あいつら、べつだ」

「なに？」

「くそ、ども、ぶち、ころしたらすつかり、びびっちゃまって。みにつつめん、こわいってよ。さそつたが、わかれたぜ」

「どこにいった？」

「しらねーよっ……しらねえ、どうでもいいだろ」

同じ無法者の側にいるくせに、妙な良心でも持っていたのか。死体ができるど怯え切ったアイツらの様子ではこの先、使い物になると思えなかった。

だがこの答えは意外なものだったようで、シユラウドにわずかな驚きと戸惑いのようなものを感じる。

——あつ

そこでサリーは気持ちよく意識が途切れそうになるが。シユラウドはそれを許さず、針を刺して容赦なく薬品をサリーの体内に流し込んでいく。

懇願しても無駄と知っているから「チクショウ」と叫ぶことしかできなかった。

「続けて質問だ。ヌカ・ワールド。ポーター・ゲイジ。聞いたことがあるな？」

「ああ、ああっ！」

「では答えろ——お前はそいつから“なにを聞かされていた”のかな？」

「……」

確かに知っていた。

あれはいつだったか。商人のふりをしてここを訪れ、サリーを知っていて自分の正体も明かしてきた。

ヌカ・ワールド。レイダーの天国。

「ゲイジは何を話した？お前は何を約束した？」

「……」

「サリー。サリー・マティス」

相変わらずの感情のない声だったが。怒りに燃える目が近づいてきた。

「お前にひとつだけ約束しよう。聞かれたことに答える。お前がホラ話をしていると思ったら何度でも聞く。」

だが——それが真実であれば」

「あ？」

「わかっているな？全身火傷、ここには医者も施設もない。お前は助からないが、無駄に苦しむ必要もない」

「うるせえ」

「ゲイジと何を話した。奴がコベナントを襲う手はずを整えたのか？」

「ちがう」

つい、思わず事実を教えてしまった。

シユラウドは——アキラは「なに？」と再び声を上げ、動きを止めた。痛みへのたうちながらもサリーの喉の奥から笑い声があがる。

「もんだい、あったか？くうそう、と、ちがうから、たいへんだな。シユラウド」

「……」

「おれたち、やった。そうだ、おれたちできめた。うそ、じゃない」

「かばうのか？」

「へへっ、それか。けつきよくは、そうだよな。おまえはヒーロー、じゃない。」

「だれもおもってるような、そういう、やつじゃない」

「……」

「てめえのつごうだ。それだ、それで、おれたち。カモにしてるだけ。わかってるぞ」

「ゲイジと何を話した」

「せけん、ばなしさ。おれたちがきめて、うばった。なんどきいてもいいが。ふひひ、かわりや、しねーぞ。ヒーロー!!」

アキラの手が動く。背中に担いでいたひと振りりの刀。愛用のシシケバブは握られると炎を吹き上げた。

「ここにも、かぞくがいた。おんなたち、女房やガキもいた。みへはんだよなっ！」

それをおまえ、ころしたんだぞ。いかれてやがふっ、正義ヅラして、みんなふつとばしやがって！」

死神は片手でそのまま刀を担ぐ。

サリーの最後の言葉を振り絞ってはきだしながら。ふと、なぜこの男はあの炎の中に自分と抜け出たのに火傷に苦しんでないのだろうと思った。

それが答えかどうかはわからないが——光をうまく見分けられなくなった視界の中の死神に。その体から模様のような緑光がみえて、いることが関係しているような気がした。

「おまえはモンスターだ。まがいもの、ヒーロー様だ。

それでおまえ、しようさんされるだど!? やってみろ、でてきてみよう。シルバーシユクラウドだと、正義だつて！」

地の底の岩場の間から、ついに迫ってきた火に耐えられぬマイアラーク達の断末魔が響く。

——皆に示してみろ。ヒーローだと。

繰り返し、そして最後の言葉を出す前に炎が一閃する。

冷たい床の上で燃える苦痛にのたうっていた体から首が消えた。

シケットエクスカベーションはこうして連邦から再び忘れ去られる場所となる——。

オーバーボスの再びの留守に、ポーター・ゲイジは表面上はなんでもないように今日もそれぞれのレイダー・ボスを巡り。彼らの不満のケアと状況の進具合を確認する。



「——オーバーボスには困ったものね」

そうつぶやくのはマグス。ちようど今は彼女の相手をしているところだった。

かなりあいまいに同意を示してやると。マグスはデイサイプルズへ不満の矛先を向けようとする。甘やかせるのはここまでだった。

「おっと、そこまでだ」

「何よゲイジ。デイサイプルズを、あのニシヤを守ってやるの?」

「そうじゃない。ただ公平に考えてやるべきだと、そう思うだけだ」

「なによそれ」

鼻で笑うマグスに対し、ゲイジは許さない。

「むしろ感謝するべきじゃないか?オーバーボスはニシヤに激怒したが、本来であればあの時の怒りの矛先は客人たちをもてなしたオペレーターズであつて不思議じゃなかった」

「……どうかしら」

「いやいや、そこを誤魔化してもな。あの時、実際に何もしていなかったばかりか。ボスの帰還から特に何も示してこなかったパックスに対してボスがお前たちを同列として扱ったこと。不満を口にする前にアンタもその理由は考えておいた方がいい」

「あいつらと私たちが、同じですって!?!」

「結果から見ればそうだ。皆がその手によくやく望むもののひとつを手にできた。ボスが与えてくれた」

「——私のやり方が空回りしていると言ってるのかしら?」

教えてやる必要も、答える理由もゲイジにはない。それもうはつきりと明らかな事なのだから。

「それよりも暗殺者の雇い主はどうだ?手掛かりは?」

「まだわからないわ。まだ、ね」

ゲイジは頷く——まあ、いまはそれでもいいだろう。留守の間、ボスの宿題を必死にやるのが今の彼らには必要だ。

だが「なにもわかりませんでした」と報告するわけにもいかないのだ、そのうち適当な話と犯人を用意する必要があるかもしれない。

マグスと別れると珍しくゲイジは主のいないフィズトツプマウンテンの最上階の部屋へと向かった。

そこにいる支配者はことのほかヌカ・コーラ狂いで。ゲイジも気を利かしてここで手に入るヌカ・コーラ社のラインナップを冷蔵庫に詰めていた。

彼は今は無人となって使われていないそこからヌカ・コーラ・ダークを一本取りだしてキャップを外す。

——ふう

一息つくくと、視線を左右に動かす。

おかしい話だがなにやら今朝は誰かの視線を感じて落ち着けない。

「——ポーターゲイジ、話がある」

「おお！……なんだやっぱりいたんだな。あんたか」

“小さな宝物”の観測者。そう呼ばれているガスマスク姿の小さな人影がいつの間にかゲイジの背後に立って話しかけていた。ゲイジは驚くも、すぐに平常心を取り戻す。この怪人とは以前にも面会していたのだ。

「特に緊急で話すようなことはなかったはずだが？」

「聞きたいことがある。答えろ」

「——なんなりと」

「シケット・エクスカベーションズで何を話した？」

「ああ、あそこか。ボスの名前は……サリー・マティスだったか」

「何を話した。重要なことだ」

ゲイジは考える。なぜこいつらはいきなりそんな話を？

ある程度想像はつく、オーバーボスだ。彼が何かを知ることの気にしているのか。

「特に大した話はしていない。実際、俺はちよつとした自己紹介をしにいっただけだしな」

「アキラはそこへむかった」

「だろうな。俺が教えた。きつと——いや、滅茶苦茶怒っていたから八つ裂きにされちまうだろうな」

「アキラは貴様にも疑問を持つはず。お前が連中をそそのかしたのだ

と」

苦笑いしてしまう。この連中、焦っているのか余裕がないのか。この俺も含めてやきもきさせてしまったようだ。

「なるほどあんたらが気にしているのはそこか。」

なら心配はいらない……あそこにいたサリーとかいう穴倉の王様が真実をいえば、そうなるさ」

「アキラも信じるか?」

「ああ、俺のオーバーボスならわかるだろう。」

それに実際の話。本当に俺はなにも襲撃をけしかけるようなことは言わなかった。その代わり——」

「なんだ?」

「ひとつだけだ。「今のミニッツメンは厄介だ。コベナントの奴らには手を出すな」とあいつらを心配してやった」

そう、確かにそう言ってやった。

サリーとかいう奴以外はニヤニヤ笑いを浮かべてたし。サリーとかいう奴も微妙な表情を浮かべていたもんだ。

「そそのかしたか」

「まあ、実際にそうだったな。俺はただ、真心を込めて連中に理由を飛ばして忠告しただけだったがね。レイダーつてのは欲深で本当に馬鹿が多い」

「アキラもそう考えると?」

「そう願うね——俺は正直言うけどアンタらに感謝しているよ。あんな良いボス、俺達みたいなのやつらの中にはなかなかいないんでね」

「……」

「冗談じゃないが。本当のところ今の関係がこのまま続くか自信がない。とても疑い深いんだ、いいことだがね。」

だから俺は必死になってもいるのさ。ボスに、アキラに賭けてる。あいつはいい悪党になる」

「好きにしろ。帰る」

一方的に会話を打ち切ろうとする観察者に、今度はゲイジから声を投げかけた。

「そりや構わないが、あんたこいつを欲しがっていたんじゃないのかい？」

そういうとゲイジはポケットから2本のアンプルを取り出す。観測者は目の端でそれを確認すると、次の瞬間にはゲイジの前に立ってアンプルをあつさり取り上げて見せた。

「手に入ったのか？本物か？」

「中身は知らないな、アンタが教えてくれないからな。」

だがあんたが言った連中が、バンカーヒルを経由して運び屋に運ばせていたのはそれに間違いはないぜ」

「どうやった？」

「それもあんたの指示通りに。そういう注文だったろ？」

「話せ」

やれやれ帰ると言ったかと思えば今度は話せ、か。勝手なものだ、ゲイジは鼻を鳴らす。

「あんたが言った運び屋はレイダーに襲わせた。後ろ盾が欲しいというからな」

「そいつらは？」

「死んださ。アンタの言う通り、例の一家。傭兵団を雇った。で、仕事を始める前に俺達もそいつらとお話をしたってわけだ」

「問題はないのだろうか？」

「言ったら、問題はないさ」

「傭兵は？始末したのか？」

そんなわけがないだろう。まさか、といってゲイジが否定すると観測者は明らかに不満そうだ。

「傭兵は無事にそいつを取り戻したがってる奴に報告させないと、また誰かを雇って探し出そうとされるのはごめんだ。だから連中に戻って品物らしいものは持つてなかつたと言う手はずになつてる。雇い主は素直にそいつについてはあきらめると思うね」

「そのどこが安心できる？」

「傭兵も雇い主から品物の中身については聞かされてなかつた。それに連中はバンカーヒルで商売する傭兵だ。」

自分たちが引き受けた仕事で2重契約で儲けた、なんて自慢をする  
と思うかね？あそこにいる傭兵は大抵は商人たちを嫌っちゃいるが、  
噂で信用できないなんて思われたら商売できなくなるくらいは知っ  
てる。そんなバカはやらないさ」

「だが——」

「もちろん、あんたが完璧を望むなら誰なのか名前を教える。気のす  
むようにしていいが、ただそれは全部アンタがやってくれ。俺はもう  
ごめんだ」

「断ることができると思うのか？」

脅す姿勢を見せるが、このくらいでゲイジはびびったりはしない。  
それに今は少し立場がこちらが有利だ。

「オーバーボスの命令で忙しいんだよ。色々やることがあつて、す  
まんね」

「——」

「そういえばオーバーボスと話していると、時々感じてたんだ。

あの人はどうもアンタらの話、それを俺の口から聞き出そうとして  
いるんじゃないかってな。おいおい、もちろん何も言つてはないさ。  
それがあんたらとの約束だし。それに——」

「なんだ？」

「匂うんだよ。とんでもなく強烈な、あれはヤバい匂いだ。俺の命に  
かかわるトラブルになる奴だ。

だから俺からのお漏らしについてあんたらに心配してもらう必要  
はないぜ」

「どうだかな」

「それよりアンタの方が心配だ。これが本物のトラブルで、この先  
でオーバーボスとの関係に深刻な影響を出すかもしれないと思つた  
りすると。なんだろうな——あんたらとの約束つて奴も検討が必要  
じゃないかって話になりそうだ。もちろんそうはなりたくはないが  
ね」

「賢くありたいならそうするべきだろう。我らの敵になればお前は終  
わる」

「そうかもな。だが、恐怖は同じようでも並べてみるとその大きさはだいぶ違うってことも理解するべきじゃないか？」

「我らの怒りを小さいというのか」

「いや、どうだろうね。ただ、とにかくそんなことがないといい。ただそうあんたに伝えたかっただけさ」

飲みかけのビンを持ったままゲイジは会話を打ち切って部屋を出ていく。

どうせ相手はすぐに消える。ならばそこに置いて行かれる前に自分から出ていくだけだ。

---

おかしな気分だった。

コベナントに向かって歩き出すと、一歩ごとに体が動かなくなっていく気がした。

体が何かからめとられていくようだ。次第にそれは意識にも手を伸ばすと、現実の中で夢の世界へと足を踏み入れた。

無人の宵時のグッドネイバー。

そのなかにここでもシユラウドとなつてアキラは、酔ってるわけでもないのにフラフラと千鳥足になっている。

——酔うならサードレールにいかないよ

そんなことを思うが。もちろん考えるだけで、そうやって自分を喰うことが今は不思議に心地よい。

イエローマンだったか。おかしな自分を兄弟と呼ぶ奴には会いたくなかった。この夢の町に来て会いたいと言ったら——。

「無様な姿ね」

「フアーレンハイト、また会えた」

いつもの彼女が。記憶の中で覚えている彼女がそのまま目の前に立っていた。

僕は彼女からやさしさをもらいたかったが、今の彼女の目にそんなものはなかった。

「甘えたいのね」「辛いんだ、キツイよ」

「それを私が与える?」「それくらい、いいだろ?」

「誰に言ってるの?」「これは夢なんだろう?ならちよつとくらい」

「厳しい彼女の目が輝く。怒りだ、わずかな期間。でもぶつけ合った感情はいつも激しかった記憶しかない。」

「ならそうしたら?ほら、夢は自分の好きに変えられる」

いきなり街の雰囲気が一変する。

薄暗かった空は太陽の輝きを取り戻し。通りには紙吹雪が舞って、『おめでとう!』などの称賛がノボリとなつて建物に据え付けられていた。

「派手な方がいいでしょ?音楽は必要ね」

どこからか素つ頓狂な調子のピアノが聞こえてくると、複数の弦の音色がそこに合わせられた。

明るく、楽しいが、それがとても不愉快にも感じる。逆になぜか心休まる気もする。

「女がいる?なら、用意してあげるわ」

幻影の彼女が地面を払いのけるように腕を振るうと、地下のサードレベルで歌姫から顔も名も知らない女たちを侍らせ。意味不明に下品な大笑いをする自分の姿が映った。

「違う。そこまで頼んでないよ」

「あら違った?なら、この“私”を変えれば満足だったの?」

止める暇もなかった――。

フアーレンハイトは目の前で己の顔をその両手で覆つてみせ。体に沿つて手を下へとおろしていく。

その下から現れたのは別の……僕の知らない彼女がいた。

特に特徴のない短い髪、火傷はなく、表情には見たこともない、普通の女性が愛する相手に見せるはにかむような笑顔。

薄い朱色のワンピースは彼女は決して着なかったし。その下にある体には、あんなに誇っていた刺し傷も銃創もきつと消えているのだろう。

実際に肩からあらわにする腕には傷どころかタトゥーもない。綺

麗で日に焼けてもいない。服に良く似合う可愛らしい同じ色の帽子を握っている。

「この私なら満足？この女をどうしたいの？」

「違う。そんなこと。望んじやいない」

「でもね。ここにいる私は本来こういう女なのよ。元の姿を残す気がないなら、いつでも望み通りにふるまってあげられるわ。望むように優しくもしてあげる」

「やめろ。やめろ……」

世界は再び変わる。元の町が、記憶通りのあの情景が戻ってきた。彼女の姿にも。

「それでいいの。負け犬は簡単なのよ。望むだけで一緒にあなたを私は笑ってあげられるから」

「……違う」

「やせ我慢は体に悪いわね」

「違うんだよ、ファーレンハイト」

出ていきなさい。冷たい声が町の中に響く。

僕はうなだれてそれを聞くしかない。間違いたくなかった、誤魔化したくなかった。

だけどそのせいで僕は自分の中に逃げ込むことすらできなくなってしまう――。

コベナントのそばにできた新しい墓の前に立つ。

これが何かはすぐに理解できた。そして何も考えられない。

これが僕がしたかったことなのか？

病院と呼べるものを用意し、キュリーが手にする研究結果をいちやく人々へと還元する場所に。人造人間となった彼女の帰れる場所になるように。

連邦にある病院の町――そう呼ばれる日が来れば僕の目的は果たされる。そう考え、信じて実行した。

だがそれは始まって、まだよちよち歩きをしたところで終わってしまった。



心を砕いて注意を払っていたのに、ミニッツメンの失敗リストにこも加えられてしまった。これではもう医術に心得のある人々を一か所に集めるなんてことは出来なくなった。

キュリーになんと言えればいい？喜んでくれた彼女にあわせる顔は？

ヌカ・ワールドでは近づいても互いを他人のように振る舞う必要があるため、嫌だったろうに。僕はただレイダーのボスを演じただけ。その間に連邦ではこんな無残なことが起きてしまった。

——でも復讐はしたろ？

怒りに燃えていた自分が、満足して引っ込んでいた奴ができそれを口にする。

その通りだ、感情のまま。すべてを破壊しつくしてやった。

ゲイジから聞き出したシケット・エクスカベーションの場所と情報。奴らがおかを始める前に終わらせるに十分な重火器も手に入れた。

レイダーの情報は正しく。そして僕はシユラウドでは——ヒーローでは決してなかった。

あそこには確かにレイダーはいた。飼育場をやっていて、そこにはそいつらの家族もいた。

僕が構えたヌカ・ランチャーの先がそこだった。抱えていったザック一杯の弾頭は全て使い果たしていた。惨劇を、地獄を作ってしまった。

——お前の都合のいい正義だ

どうだろう？僕にはそれが分からない。

思えばそもそも、僕に正義なんてわかるのだろうか？理解しているのか？

コバナントの方角から声が聞こえた。

振り向くと、こちらに気がついて走ってくる友人たちを見た。

僕は歩き出す。彼らはとにかくヌカ・ワールドでは無事だった。連邦にだれ一人かけることなく帰ってこれた、それで良しとするべきで

は？

理性的に考えれば、そう考えることが前向きなことだと思う。まったく足りないが、それでも――。

先頭にパイパー、続いてケイトにマクレデイ、キュリーもいる。

なんかおかしな話だが、みんな顔が必死だ。僕は髑髏のマスクを外し、帽子をとった。

「アキラ！」

僕の名を繰り返して叫びながら一番に到着したパイパーは、その勢いのまま僕を殴った。

大した抵抗もせずに吹っ飛ばされた。

地面に倒されると、さらに飛び乗ってきて殴られ続けた。

「おい、ふざけんなこのバカ女！」「冷静になりなさいよ、ヒステリー!?!」「アキラ、アキラッ」

数発殴られただけだったが、火花が散った。

自分が何で空を見上げているのか、後から来た皆が自分の上から何がどこかされた後で思い出した。

「あんたっ、あんたねえ！ふざけるんじゃないよ！」

「おい、やめろって」

「レオが、あの人が知ったらどんなに悲しむか！このクソガキの化け物。とんだモンスターじゃないのさっ」

「落ち着きなあって。何熱くなってるんだよ」

何かが壊れた。いや、壊した気になりたかった。

――やめたら？なんでこうなると思うんだ？

ああ、その通りだ。

利口なふりをしたって無駄なんだ。僕は完璧じゃない、出来ないくせに何を考えてやってることにしてたんだ？

「アキラ、怪我はありませんか?!教えてください」

「……」

「意識は？大丈夫ですか？お願いします、教えてください」

「大丈夫だ、キュリー」

言葉では問題ないというが、何かが違うのは明らかだった。押しつけるキュリーの腕は、はつきりと拒絶の意志が込められていた。それを感じてしまい、シヨックのあまりキュリーの補油場が凍って動けなくなつたが、気にもしなかつた。立ち上がるとしつかりとした足取りで歩きだし。シユラウドの衣装を構わずにそこらに脱ぎ散らかしていく。

その間にも背後からパイパーは口汚くののしる声を上げていたが。ようやくこのころにはアキラの様子が変わると周りも気が付き始めるも——もう手遅れだった。

このお出迎えの騒ぎを結局は門の前から見ただけで動かなかつたハンコックは驚きに両眼を見開く。

彼の希望が、相棒が戻ってくるまでのたつた数十歩。その間にシユラウドの姿と同じように負け犬へと変貌していく無残な悪党の様を見ていた。

なんて声をかけたらいいというのか。グッドネイバーの市長であつてもまつたく思いつくことができない。

「おい、おい、坊主……」

「終わりだ。僕に期待なんかされたって——」

それだけを言い残すと若者は横を通つてコベナントへ入つていった。

まだ興奮するパイパーは除いて全員があっけにとられていた。

なにがどうしたら、こんなことになる？ それにあの言葉の意味は？

しばらくしてアキラが秘密のエリアへと。そこにあるもう使われていない牢の中へと入つたことを知つた。

いつものようにキャプテン・ケルズの進行でB・O・Sの会議が続いている。

「……というように、北部の調査においては存外はその進捗は予定から後れを生んではいるもの……」

正直に言えばあまり愉快な話はその中にはない。

キャピタル・ウエイストランドから意気揚々とやってきたはいいものの。マクソンが繰り返し「簡単な事ではない」と口にしていたとはいえ、誰の目にもその調査の進行状況が喜べないことは明らかであった。改善に次ぐ改善を重ね、状況をよくするための努力を重ねているというのに、だ。

救いがあるとするならば。任務から帰還すれば、その過酷さから仲間内で愚痴めいたことを口にすることもあるが。それで任務を放棄したりなど考えることは、まだいない。

「続いて。新たな被害報告が確認された——」

パラディンたちの顔色がさらに曇りを増す。

部隊の機材、ベルチバード、パワーアーマーの状況。兵士の怪我、病気、死亡などによる人員配置の変更。そのあたりになるといくら厳格で知られるこの武装組織と言えども「仕事が増えた」という思いから舌打ちなどする不埒な奴がでるものだ。

さすがにここにいるマクソンの目の前でそれを実行するパラディンはいないらしいが。

会議の終盤、ケルズはかつてキャピタル・ウエイストランドの混乱を思い出せ。そこでエンクレイヴとの戦いに勝利し、一転してすべてのB・O・S.の中でもひとときわ栄光に輝く地位へと昇りつめたのは過去の事だけではない。

今、自分たちはこの連邦の新たな伝説を作り上げるのだと檄を飛ばす。

一旦全員が退出し、ケルズは会議室へ戻るとまだマクソンはそこに立って。自身の背後の壁に掲げられたB・O・S.の旗をじつと見つめていた。良くないものを感じる。

「エルダー、まだこちらに——」

「……」

「大丈夫ですか？」

「ああ」

「どうやらこれはなにかありそうだ。」

「出ましようか?」

「いや、いい。それより——」

「わかりました。聞きましよう、アーサー」

ケルズは帽子を脱ぐと、近くの席に腰を下ろした。

キャピタルでは若くして数々の偉業を成し遂げたとはいえ、やはりエルダー・マクソンは若者なのだ。

自分の役目を知り、自分の運命すら動かそうとする野心家でもある彼だが。その大望がすでに彼を恐ろしく孤独な存在へと押し上げていってしまった。

今や彼がリオンズからその役目を譲られる前日、ひとりになって涙を流していたあの幼い姿を今の彼に見ることは難しい。

この組織に長くいる者であっても、彼を前にするだけでも緊張する今。もはや彼に友人と呼べる存在は本当に少なくなってしまった。彼が任命し、信用するパラダインたちであっても、彼と対等に話せるのは何人もいない。

孤独は人に悪いものを近づけさせる。

そのことを人生の先輩として知っているからこそ、ケルズは心配している。

このマクソンはあまりにもB・O・S設立の立役者、初代ロジャーの気概をあまりにも強くその身に宿していた。

それが彼を嗜好品から遠ざけ、それは大変良い事ではあるのだが。息抜きも出来ず、人を寄せ付けないのはさすがにマズイ。

「皆疲れている、それが私にはわかるんだ」

「問題ではありません、全て想定内です。そもそもこの計画は数年どころか10年、20年がかりの大仕事なのですから」

「それじゃダメなんだ! そんなに時間はかけられない!」

「——焦ってはいけません、アーサー。話してください、抱え込まないで」

マクソンはようやく視線を逸らすと、再び自身の席へと戻って腰を下ろす。

机の上に手を組み、それでもすぐに話すことはなく。しばらくしてようやく重い口を開いた。

「B・O・Sは今、危機に瀕している。ロジャー・マクソンの意思を理解しない者たちが総本部で舵を取り。そのせいで支部はそれぞれに断絶の苦しみにもがいている」

「本部と言えども物資の援助は無限ではありません。わかっているでしょう?」

「だがこのままではいけない。頼るべき味方が、自分のあげた救援の声を無視するようになっては繋がりを失う。ロジャーの意思もまたなかったことにできてしまう」

「それはそうですが——」

「NCRとの決戦に敗れ、そこから本部は一向に変わっていない。手にしているはずの力は、技術は零れ落ちていくように。年々その勢いは悪くなる一方だ」

「ですがNCRとて最近ではその勢いを弱めていると聞きます」

「だから安心しろというのか?戦うべき相手の弱みを見て自らの弱さを心配しすぎだと?本当にそうなのか?」

「……」

かつてはアメリカと呼ばれた国の西海岸は、NCRによってほぼ掌握されてしまっている。

彼らの動きは確かに緩慢なものになっているかもしれないが。それが同じ西海岸で姿を隠し、声を小さくしてやっと活動している小さな支部の仲間達の絶望は変わらない。

それなのに本部は彼らにわずかばかりの繋がりと、途方もない要求だけを送りつけている。もちろん彼らの全滅など、論外だとしながらだ。

「私はマクソンだ。この名前がある限り、私はこのB・O・Sとともに歩く宿命にある。だがそれは別にこのまま息絶える日を待ち続けるということではない」

「もちろんです」

「だが——」

押し殺しても隠せないほどの感情のこもった言葉だが、ケルズはそれを受け止めてやろうとする。

若者がこれほどの強い失望、そして絶望を抱えることがないように。

「だが希望は我々にもある。」

そう、キャピタルだ。オーウエン・リオンズがそれを示してくれた」

「——はい」

「わかっている、ケルズ。善人のリオンズを、私の部下たちも快くは思っていないかったことは。私も理解する。」

だが彼も、彼の娘のサラも。間違いなく戦士だった。自ら傷つき、血を流すことを恐れない勇気を持っていたことを見ていたはずだ。

だが、その彼がいたからこそキャピタルは我々によつて存在し。人々はB・O・Sの威光を信じるようになった」

ケルズは彼の言葉を黙って聞いている。

本人としては前任者の評価はかなり厳しくしたい上司であったが。驚いたことにこのマクソンはそのリオンズとその娘を強く尊敬し、評価している。

「しかし時代は変わりました。今はあなたの時代です、あなたはついに彼をこえるのです」

「そうだ。それが必要だ——」。

連邦は長く不可侵のエリアだと考えられていた。インスティチュートの脅威は凄まじく、ここでは我々は常に後手を踏むことになって戦うことが出来ない」と

「実際に誰も出来ないことでした。本部の考えは間違つてはない」

「だが変化の時が来たのだ！」

キャピタルは長く平和と安定の時を手に入れ。我らはどの支部よりも有利な立場に立った。それに満足するつもりはない。

我々は——私をもっと高くを求めなくてはならない」

「そうです。あなたはマクソンだ」

「そうだ！私はマクソンだ。」

弛緩した本部の奴らに正しいB・O・Sの未来へと私が導いて

やる。それが可能なのはもう私しかない。私はそれを証明せねばならない」

「できます。あなたなら——我々はその未来を信じています」

隠そうという気持ちと、押し殺せない興奮を同居させていたエルダーだったが。そこまで口にするのと目を閉じ、ゆっくりと落ち着きへと転換する。そうして冷静になると短く「ありがとう、ケルズ」と友人に礼を言った。ひとまずは収まったようだ。

「そのためにまずはこの連邦をあなたの手には」

「ああ、そうだ……予定は遅れているが。北部の方は順調のようにも見える」

「はい」

「例の民兵。なんだったかな？」

「ミニッツメンです。彼らとは互いに距離をとってますが——」

「装備は自作のレーザー・マスケット。わずかにパワーアーマーはT—45を使っているらしいが、我々と敵対はするつもりはないようだ」

「恐らくダンスが連れてきた。あのレオとやらが自制させているのかもしれない。やはり彼を呼びだして話をしますか？」

「彼と何を話す？」

「所持するテクノロジーなどを渡して我々に協力せよと。後々、連邦が平和となれば部隊に加えてやってもよいと。こんなところでしようか」

「兵士の補充の問題が解決するな」

そう言うが、すぐにエルダーは首を左右に振った。

「いや、よそう。彼らがこちらに近づかないなら、我々からも手を出させるな」

「任務の支障となる場合がありますか？」

「それも回避させよう」

「それでは弱腰とみられるのではありませんか？そもそも彼らは我々の相手ではありません」

「だが問題は増やさない方がいいだろう。巷では今、彼らの人気は再



び高まりを見せていると聞く。反対に我々のことを未だに疑っているとも。騒ぎを起こして我々が悪者だと思われてはここに来た意味も大儀も失う。民衆に笑顔を見せるキャンペーンはしたくはないだろう？ 私もそうだ、徹底させろ」

「わかりました」

「——先日のウイスキーの部隊壊滅の問題も終わらせたいな。あれは南部に送ったのだったな」

「アンドリュー駅周辺でした」

ベルチバード、パワーアーマー、兵士たちの装備一式。情報を整理すると着陸しようとしたベルチバードと部隊に対し、いきなりアポミネーションやレイダー、傭兵たちがあらわれて大混乱に陥った。

結果すべてを奪われた。B. O. S. ではそうした装備、機材の流出を許す理由はない。

「場所はまだ追えているんだな？」

「もちろん」

「なら回収には2部隊を出す。」

「はい——誰をいかせますか？それに、どちらに指揮権を与えます？」

「考えていた。ダンスにやらせる。部隊も彼に選ばせようと思う」

「パラデイン・ダンスですか」

まだどことなく不安を覚えさせる。

ここでパラデイン・ブランデイスといわなくて安心ではあったが、それでもダンス？

「今回は確実に。そして被害を出さずに帰ってもらう必要がある」

「それはわかりますが——」

「ケルズ、彼に任せたい。私に考えがあるんだ」

「わかりました、エルダー・マクソン」

話は終わりだろう。

さっそく立ち上がって帽子をかぶりなおすと、このままダンスを呼んでまいりますと言って会議室を出た。

(考えがあると言ってたな。さて、アーサーはダンスに何をさせるつもりだろう)

B. O. S. はその目的のために難しい悪路を歩んでいるが。しかしまだしつかりとその目は道の先を見て進んでいた。

海に囲まれたロングフェローの小屋の外で、もう日課となった目覚めの一服をニツクは楽しんでいた。

「お、なんだ起きてたのか」

「やア、おはよう」

「同じ爺イでもあんたは毎日朝が早いな」

「そういうなら、あんたは毎日夜通し飲んで頑丈だな。これから寝るんだろ？」

「ああ、それが俺の予定だ。あんたは？」

小屋の主の問いにニツクはふむ、という煙をくゆらせる。

「あっちこっちは手詰まりになってきたが。そろそろこの海の間から友人が戻ってくる気がする」

「ほう、あの若いの。戻ってくるかい」

「おそらくね……そうになると、やっぱり色々やっておかなきゃならないことがあるようだ。ひとりにした老人は怠けていたと笑われるわけにはいかないんでね」

「ははは、頑張ってくれ」

「ああ——おやすみ」

小屋に入っていくながらのお休みの声がする。

ニツクは煙草に集中し、改めてもう少しここでの状況をよくせねばと色々と考えてみる。

小さな島だというのがこのファーハーバーは本当に理解に苦しむ場所だ。その行きつくところは夜になると全てを覆い隠すあの霧ということになる。

人々の悩みを聞き、話を聞くとそれが一層強く思えてくる。

自然に発生する霧にただの人が、何かできることがあるだろうか？あるわけではない。

だが――。

彼らと一緒になら違うかもしれない。

あの連邦で久しく聞いたことのない騒ぎを起こしているあの若者達なら。

彼らは恐ろしいあの連邦で地震をおこし、川をせき止め、空を引き裂くようなことを平然とやってのけている。

時代が、本当に変化の時が彼らが中心に巻き起こしていることなら。

このファーハーバーはもうすぐ恐ろしく激しい嵐によってすべてをひっくり返されることになるだろう。その期待感に、機械の体が不思議とムズムズすることに。

ニツクは苦笑した。

## Here, s t o y o u

新しくできた墓の前へ、再びハンコックは新しいウイスキーのビンを持って訪れたが。今回は後ろに3人のトリガンたちがそれに付き従っていた。

彼らはハンコックの目となり耳となるだけではなく、声にもなって動く古参の部下達である。

かつては彼らの上に彼らよりもずっと若い娘だったファアレンハイトがNo. 2として立っていたが。彼女を失ってからハンコックはそれに代わる誰かを任命することはなかった。

「ここですか——」

「ああ、まあ、なんだ。ついで何でお前らも挨拶していつてやれ。どうせ俺も来るのは今日までだ——そういうことなんぞでな。俺から差し入れだ、好きなだけやってくれ」

ハンコックはそういうと、死者となったかつての自分の町の住人の墓に、ウイスキーを丸々ふりかけた。

「それでどうなってる？町の方は」

「動かないですねえ。動きがないわけじゃないんですが——」

「自分の事だが。ジョン・ハンコックはいなくとも恐れる存在であり続けている、わけか。嬉しいが、同時に少し困ったことになるな。」

レイダーの連中、なにやってるんだ？」

ハンコックが町を出た最大の理由は、連邦におこるであろう戦争が始まったとき。グッドネイバーに生き残れるだけのものを手にするためだが。

しかしNo. 2のいない今の彼が外に出れば、必ずどこかのレイダーがしびれを切らしてグッドネイバーに手を出すと思つてトリガンたちと罠を張っているのだ。

問題はその罠に近づく獲物がちつともいないということ——。

「そうですねえ。恐らくですが、ミニッツメンの攻勢と、B. O. S. の動きに過敏になつてるのかもしれない」

「それは北の話だな。どうということだ？」

「いえ、バンカーヒルでの噂なんですけどね。」

最近あそこの傭兵たちがそろそろ自分たちも商売替えの時じゃないかと、そう不安がっているらしいんですよ」

「傭兵が？なにをやるっていうんだ」

「さあ……南に行くか、連邦を出るか。もしくはレイダーになるつてもありですかね」

「よくわからんな。何に追い詰められてるんだ？」

「やっぱりミニッツメンでしょうか——連中が居住地の護衛なんかも見erようになって。自分たちの仕事やりづらくなってるんですよ」

「ふん」

「それと、連中が外から来たB・O・Sと手を組むかもと」

「なんだと？」

「なんだか面白い話が飛び出してきた。」

「説明してくれ」

「B・O・Sの奴ら、空を使ってあちこちに兵士を送ってるんですが。まあ、大抵はトラブルになってるんです」

「ああ、らしいな」

「ところがミニッツメンとはあまり騒ぎになってないってのが、どうもこの噂の根拠だと」

「なるほどな。裏でつながってるから、仲良しではないが。問題も起こらない、か」

「恐らくだがレオの指示をガービーあたりが必死に守らせた結果がそうなっているのだろうが。なるほど、そう考えると北部は事実上。ミニッツメンとB・O・Sによってほぼ掌握されていると他人は考えるようになるわけだ。」

「そうだ。シケット・エクスカベーションに人はやったんだろ？どうなった」

「行かせたスカベンジャーから報告がありました。あなたの思った通り、ひどいことになってたそうです」

「そうか——報告を俺も聞きたい。そいつと話せるか？」

レオが今、アキラの説得に向かっているが。彼が何をしてきたのかは詳しくは知らなかった。

それでなんとなくそんなことを口にしたのだが、部下たちの顔色が一斉に曇る。

「すいません、ハンコック。それは無理じゃないかと」

「なんだ？死んだのか？」

「いえ——ただとにかくビビってまして。話すのが偉く面倒で」

「どうしてだ？」

「それがよくわからないところなんです。どうもあそこでそいつ、あのビッグマンに出会ったようなんで」

「なにイ？」

半ば冗談、半ば殺す気でビッグマンの画廊に様子に行かせたアキラが戻ってきた時のことが頭をよぎる。

「とにかく『あそこじゃみんな死んでた。ひでえことになってた！』こればかりで」

「あのスカベンジャー、元はレイダーやってたやつらしくて。それで自分も目をつけられたとかなんとか……」

「そうか。残念だな」

ということとは報告して報酬のキャップを受け取ると、スカベンジャーはすぐに走り出したのだろうと予想できる。きつと気のすむまで地の果て目指し、疲れたとしても動く限り足を止めることはないだろう、探すのは面倒になりそうだ。

「他には？」

「ガンナーですかねえ。クインシー以来、抑え目だった連中。とにかく人が集まってるるとすぐに襲っているようですね。ボストンの連中もそれに刺激を受けたのか、グッドネイバーに目がいかないみたいで」

「なにかあったのか？」

「わかりません——ガンナーズは元々はつきりとした方針を打ち出したりはしませんから。ボスから部隊に……」

「直接命令するんだったな。わかってる——それじゃ、しょうがない

か」

「アンテナは張ってますんで、何かわかれば報告します」

「頼むぜ」

「こんなところだろうか——空き瓶を墓の隣に並ぶようにしておく  
とハンコックは立ち上がった。

「そういえば南と言えはもうひとつ」

「うん」

「ちよつとしたオカルトっぽい噂がありますね。なんでも毎日、ごく  
短時間の間だけ。安全な場所があるので、ここに来たらいいって放送  
が流れてるらしいですよ」

「それを言うのかよ！どつかのレイダーの罠だって話で決着ついただ  
ろ!？」

「おい、死者の前だぞ。仲良くケンカはしなくていいさ——それで？  
どこの愉快な奴がそんなミエミエの手を使ってるんだ？」

「オカルトですよ。だから確認はしてません」

「でもちよつと不気味なんですよね。それ、大昔に作られた地下の施  
設があるって話で——」

「地下の施設？安全な場所？」

「2つの言葉が、ハンコックのなにかに危険信号を発した。」

「ちよつと待て！それはまさかV a u l t シェルターの事を言ってる  
のか？」

「さあ？でも確かにモグラ人間たちの巢のことを言っているようにも  
聞こえますよね」

「今回は部下への確認に否定が返ってきて欲しかった。まさかこん  
な時に——まさか勝手なことを!？」

——バレリア・バーストウ

存在しないシェルターの監督官として派遣され、200年以上も地  
下で生き続けたグルー。

自分の都合ばかりで、こっちの話をちつとも聞こうとはしない女  
だった。アキラはわざとポンコツロボットを建築員として残し、施設  
は未完成のまま放り出してきた。わざと何もできないように！

それを……なんてことだ！

「アキラ——こりや、お前の力がないと」

「えっ、ハンコック？」

「なんでもない……そのオカルト話だがな、俺に心当たりがある。信じたくはないが。どんな放送が流れているのか、すぐに調べてくれ」  
ジョン・ハンコックには生き方がある。

死者に生きていてくれたらなどと嘆いたりはしないし。それでこうして困ったときにも、ため息と弱音をセットで吐き出したりはしない。それがジョンだ。

だがそれでも、だ。

この忙しい時になんて忌々しいんだ！

心穏やかに——そんな日々は自分にはもう残されていないのだろう。

Dr. アヨの“経過報告”という名の皮肉と批判、それにわずかばかりの助力がこもったそれを聞きながら男は考える。

「もうわかった。報告は聞かせてもらった」

「ですが——」

「ありがとう、君の仕事ぶりについては信頼もしているし。満足もしている」

こうして褒めたたえないとこの口は止まらないのだ。

「では引き続きということでは？」

「ああ、そうだな——それと例のエージェントは戻ってきたそうだ。報告を受け取ったら君のところに戻すつもりだ」

「わかりました」

「それじゃ、また」

とにかく離れたかった。

だから手を振り、もう話すことはないと伝える。向こうも自分の職責と、評価は手に入れたと満足したのだろう。思った通り継り付いた



りはしてこなかった。

地上の脅威について一時期ここにいる多くが不安から神経質になり。色々とみつともない姿をさらしてウンザリさせられたが、最近は元の穏やかさが戻ってきたような気がする。

現在はプロジェクトを無理に推進させることで、全員の目標と気持ちをひとつにし。同時に余計な野心を刺激しないようにまた気を遣わねばならない。

今こそ強さが自分に必要だった。

弱気なリーダーに彼らはすぐに敏感に察知する。そして不安になり、余計な考えをめぐらしだす。それを許してはならない。

それにDr. デイーン・ボルカートがまだいくつか考えがあると  
言っていた。

どこまで期待しているのか疑問はあるが——まだ、運命が近づいてくるのに時間が必要のようだ。

今はこの誰も使っていない部屋に入る。

すると待っていた人——人造人間は、こちらを確認して表情もかえずに立ち上がって迎える。

コーサー。

ケロググをはじめとした特別なエージェントを、やはり地上から手に入れるには大変な時間と労力が必要であり。人造人間がそれになり替わるようにと研究を重ねた結果。

困難な地上での任務達成のため。特に常識を超えた戦闘能力を備えた戦闘機械が誕生した。

今ではケロググのような純粋な人間のエージェントは消耗して数を減らしており。新たなコーサー達がその代わりを務めるようになってる。

(ケロググか——そういえば言っていたな。『あんなら、ついに俺達をも過去のガラクタにしちまおうっていうんだな』だったか)

男は前に立つと、コーサーを見下しながら命令する。

「報告を。その前に——終わったら今回の任務内容については一切の口外を許さない。秘匿案件だ」

「了解」

「よし、そしてお前はD r. ボルカートのところまでメンテナンスを受け。元の任務へ復帰する。私の任務、それはこの報告で終わりだ、わかったな?」

「了解しました。報告を聞きますか?」

「聞かせてくれ」

そう言うと、自分が緊張しているのが分かる——。

あの“小さな宝物”——特に問題ではないからと放っていたわけだが。

まさかいきなり巷で話題のワンダラーに暗殺者を送り付けていたとは驚くしかなかった。

本来であれば自分はその状況について知りたいなら部下に報告させなくてはいけないのだが。立场上、地上の一部の個人に執着していることを知られるのは危険だった。

「任務、フランク・J・パターソン Jrの安否」

「まあ、間違つてはいない。続ける」

「はい——フランク・J・パターソン Jrは先日、ミニッツメンの作戦中。何者かからの暗殺者に襲われていました」

「彼は無事か?」

「はい」

「そうか」

「この襲撃は2度……」

「2回? 何度も襲われたということか。なにがあった?」

「最初の襲撃は複数の雇われた暗殺者からのものでした」

「2回目?」

「所属不明、ですが自らをコンドウと……」

「エージェント自らが動いたか?」

唇を無意識に噛んでいた。

あのケロッグでさえ止められなかったと聞いた時。不思議な感覚に包まれ、困惑したものだ。

今回は、はつきりと怒りがわいてくる――。

あの“小さな宝物”、彼は確か地元の民兵を率いる立場にいるはずなので、なんらかの障害になると排除する動きに出たのかもしれない。彼らに見て見ぬふりをするよう、依頼するべきだったか。

「どうなった?」

「深い傷を負ったという話がありましたが、詳細はわかりませんでした。片腕を失って戦えなくなつたとも聞きます」

「怪我をしたのか……それで今はどこに?」

「グッドネイバー。しかし町からは消えました。この続きは任務の継続が必要です」

「――そうか」

これは単に見逃したという事だろう。

任務の継続など問題外だ――周りに自分が気にしていることを怪しまれ、探られてはやつかいなことになる。

だが怪我をして、それも重症だというなら。こちらからの助けが必要か?

いや、手を伸ばすにしても何をどの程度、そこを見極めなければ。自分の職責を裏切る結果を招くかもしれない。

「最後に聞こう……君は。」

お前はフランク・J・パターソン Jrは大丈夫だと思うか?」

「?」

「感じたことでもいい。私に教えてくれ」

「すいません。私が任務対象になにかを感じることは何もありませんでした」

「そうか――よし、戻っていい」

「了解。失礼します」

コーサーは背中を向けて出ていくと、今度こそ大きなため息を吐き出した。

実直に任務をこなせそうな奴を選んだつもりであつたが。期待以

上の働きを求める相手を選べなかったか。

目立たず、興味をひかせないことが重要だったのでこんな結果になってしまったが——心配だ。

気が付くと心臓が早鐘の如く打って、息苦しさを感じていた。

胸に手をやり、それを抑えようとして落ち着こうとする——冷静さが、必要だった。

「運命だ。そう、すべては運命に従う事。それがそもそもの始まりじゃなかったか」

希望はまだある。あの人ならばきつと、無事だったはずだ。

運命はすでに大きく動き出しており。奇跡は徐々にその姿を現そうとしている。

だが変わらないことはただひとつ。

自分はここにいて、待ち続けるしかない——。

キュリーはそれでも考えた。

レオが来てくれたから、アキラはきつと大丈夫だ。でもなにか自分も力になりたい。

それならやっぱり——。

「なんだと？狩りだあ？」

すっかりやる気をなくしているマクレデイやケイトに相談すると、どうにも受けがよろしくない。

これは自分の考えを理解してもらえていないからだと結論付けた。「そうです！彼はもうすぐ牢から出てきます。そしたらきつとお腹が

すいているはずですから——」

「手料理を食べさせたい？そりゃ、気持ちにはわかるけどさあ」  
ケイトの顔が曇る。

コベナントは生憎のこと、武器も食料もスツカラカンの状態だ。

自分たちの分はここまで来るまでに手に入れた肉と、携帯食料だけ。料理をしてみると言っても、肉に火を通し、缶詰の中身を熱して混ぜたら終わり。それではこのキュリーが満足するとも思えない。

「悪いが、狩りつてのは必ず成果を手にするってわけじゃないからな。意気込んでも空回りするだけだ。やめとけよ」

「キュリー。この傭兵の言う通りだよ。いきなりそんな思い付きを——」

「いいえ！思い付きではないんです。心当たりがあります」

「へん、なんだ？一応聞いてやるよ」

ありがたいことに一番難しいと思われたマクレデイがやる気になっていくようだ。話も聞かずに、ごろりと横になって背中を向けられるまで覚悟していただけに、キュリーにとってこれは嬉しい誤算だった。

「はい、あのですね。覚えてますか？」

以前ここでの食事情でアキラが文句を言ったことがありましたよね」

「ああ——あれか。俺達をほったらかしにして、仕方なく退屈のぎに狩りをやってたら。その日はなんにもなかったと、やけに絡みやがったんだよな」

「そのあとどうなりましたか？」

「どうになりましたかって、あのバカ。いい方法が——って、おい。お前、まさか!？」

思わず周囲を見回すが。なんてことだ、こんな時に限って自分たち以外の誰もここにはいない。

コベナントから道沿いに北に行くと、そこに東と西へ伸びる大きな街道へと突き当たる。

そこから少し道から離れた茂みの前に3人は並んでいた。その表情は色々混ざっていて、複雑である。

「マジかよ——」「これは冗談じゃなかったんだ。呆れた」マクレデイとケイトはそこに並ぶコンテナ状の装置を見て眩く。

このコンテナの正体はアポミネーション専用の檻であり。ここにアキラは以前、テストを兼ねて罫として仕掛けていたのであるが——並んでいるコンテナのうち、2つは破壊され、中に閉じ込められていたと思われるバラモンやヤオ・グアイがその入り口のあたりで引き裂かれて腐りかけていた。

「この事件に探偵はいらないぜ。これなら俺でもわかる——まずバラモンとクマが間抜けにも罫に引っかけた。そのあとでさらに間抜けな奴がやってきて、自分の隣に入ってたこいつらを引きずり出して食っちまった」

「食いしん坊なのは間違いのないようだね。それでも足りなかったのか、自分用の檻にも入っていつちまったみたい」

「それでは2人とも、準備はよろしいですか？」

「は？準備はよろしいかって？まったくよろしかねえよ、キュリー」  
「え？」

「あのさこの中身って、ようするにデスクローだよな？本気でやるつもり？」

残る最後のコンテナは一番大きくしつかりと作られている。暴れでも出られないようにしているということだ。

長く閉じ込められた上、腹などもすかしてさらに凶暴になっているであろう中の奴と殺し合いなどしたくはない。

「ダメなのですか？でも、アキラはひとりで回収すると、そういつてましたからおふたりならと思つて声をかけたのですが」

——ああん!?

2人の表情が険しくなる。

わかっている、キュリーは言い方がよくないだけだ。しかし問題は確実に存在している。

アキラがひとりでできることを、なんでキュリーはそいつに雇われた2人の傭兵に頼んだのだ？これでは傭兵として、護衛としての立場がなくなる。

「キュリー、ちょっと、それは——あんたねえ」  
「？」

「へっ、へへへ。別にいいぜ。そうか、アキラはひとりでやれるって言ったか。なら俺達なら瞬殺だよな」

「??」

プライドを傷つけられ。今、3人は夕食の材料をその檻から解き放とうとしていた。

---

オカルトじみた通信の正体。

それは短い座標を告げるものでしかなかった。

もちろんそれは強大なガンナーズの耳にも入っていたが。地図を開いて場所を確認すると、鼻で笑ってすぐに興味を失った。

そこは彼らの領地。

放射能の被害が強いため、グールどもに任せていた場所だった。ならそれはつまり、間抜けな連中に向けた「こっちに出てこい」というメッセージに違いない。

ならばそれを助ける意味を込めて。「安全な場所に違いない」って噂を広めておけばいい。あとは勝手にやってくれる。

ずっとそれが始まることを待っていた。

気が付けばとつくに数百年を過ぎてしまったと言われたけれど、今からでも遅いなんてことはない。

壊れた世界でも、アメリカは立ち上がる。

強く、より強くそれは成し遂げられる。Vault—Tecの計画はそのためにあったのだから未来に間違いはない。

不安になる動きと、緩慢な動作で遅々と進む建築現場は、想像以上に小さいシエルターだった。

あの若者が見せてくれた設計図の通り。それは完璧な新しいVaultとなるのは間違いがない。ただ問題は、あの協力者たちに熱意が足りないということだろう。

——建築完了までの間は、彼らに任せればいい

そう言っただけでどっかに行ってしまった。

彼らも地上での生活があつたのだろうから、きつとやるがあつたのだと思う。だがすでに計画発動まで長い時間を無駄にしてきてしまったのだ。

ならば少しでも結果を出さないといけないだろう。

そう考えたら決断はすぐに下つたも同然だった。

バーストウは新たなVault居住者を現在の地上から集める計画を考え。問題点のいくつかについて検討を終えるところに実行に移した。

彼女は自分のターミナルで新たに用意したプログラムを用い。仕事を休むことなく、しかしゆっくと進めているロボットたちにアクセスし、今の作業を中止してすぐに放送システムの普及するものに変更した。

協力者たちには無断で進めることになるが——なに、この計画に賛成してくれた彼らである。別に特に問題がないのだから、きつと喜んでくれるだろう。

ロビーにバーストウは立つと、皆が「グールか?」「大丈夫か?」とささやいて不安を見せた。

やはりこの用紙を見て不安になったか。バーストウは彼女自身が、普段見せないような笑顔(本人なりの)を見せ。不安にならないようにと語りかける。

「皆さん、ようこそVaultへ。私は監督官のバレリア・バーストウです」

「あんたが、監督官さん?」

「そうですよ。これから皆さんにそれぞれひとりずつ面談を。質問もします」

「俺たちは全員そいつの住人になれるってことか?」

「あせらないで。まずここでは皆での共同生活が待っているということ。それにあなたたちが耐えられるかどうかを、私にこれから判断さ



せてください」

「それはあんたに気にいられなきや、帰れって意味か？」

優しく、わかりやすく伝えたはずなのに。

どうもこの地上人たちの知性は想像以上に期待外れのもののような気がする。しかめっ面をしないよう、声の調子を変えないように気を遣う。

「違うわ。何を聞いているの？」

あとでVaultの生活は耐えられない、などと口にしない人は選ばないと云ってるの」

「それなら問題はないと思うぜ。」

地上は、連邦はもう地獄さ。そのVaultとやらで安心して食って、寝られるなら。俺は、俺達はみんな大歓迎だと思っぜ」

「そう。それはよかった」

とにかくここから始めるしかないのだ。

感情に乱されず、的確に計画を進めるため——新たなVaultで試される実験体を彼らの中から見つけ出さなければならぬ。

「では、さっそく始めましょう。最初のひと、前へ」

「ここが、つまり新しい」あんた”のVaultってわけ？」

視線はおどおどと落ち着きなく左右に動いていたが、若くない女性は疑う様子を見せながら背中を丸めている。

「そのとおり。そしてあなたは幸運をつかむ最初の新しい居住者候補、ということになるわね」

(女性だが、妙齢もいところ。若くないから子供を期待できるのかわからないし、なによりもすでにこちらを疑っているから実験には非協力的でしょうね)

いきなりだが強い失望を感じる。

だが、まだ終わりじゃない。

彼女のような相手が今の地上の住人たちの兵器であるとするならば、これを制御できなければVaultに必要な人間を増やしていくことが出来なくなってしまう。

「質問を言いかしら？」

いくつかの質問にいくつかの答えが返り。

バーストウの失望はさらに強く、そしてより困難な状況であることを思い知らされる。

「それで、まだ質問があるの？」

「どうかしら——ええ、もういいでしょう。あなたはあまり協力的ではないし、疑り部会問題を持っているけれど。ようこそ、幸運の居住者第1号さん」

そういうと足元に置いてあったトランクから新しいVaultスーツを一枚取り出して、彼女に渡した。

「着替えたら奥へ。そこでまた説明をするけれど、それまでは自由に見てもらっていいわ」

やった！の声と共にバーストウの手からスーツを奪うと女性は足取り軽く奥へと進んだ。

この監督官への敬意の欠片もないとは——あれを使い物になるように成長させなくてはならないとは頭が痛い。

「次は俺だよな。俺だろ？」

「ええ、皆に聞くから心配はいらないわ」

「それじゃ俺だな。さ、何でも聞いてくれ。俺が男で最初の幸運な男だ」

これまた知性の欠片もない奴か。

どうやらVault居住者として選ばれるという栄誉から理解させなくてはならないらしい。

それでも——。

少しずつだが喜びもある。

彼らが入るごとに必要とする人材のレベルを徐々に上げていけばいいだけのことだ。劣って使い物にならなくなった材料は破棄し、次はもつと優れた結果を出すために協力的な実験体を招いていく。

協力者たちが戻ってきたころには少しだけでも実験の成果を彼らにも確認できるようにしておきたい。

「そうだな……俺が信頼できる相手であるなら、俺は指示に従ってもいい。これは本当だ」

「そう。わかったわ」

「で、結果は？当然俺も合格だろ？」

消えろ、カス！

そう口に出したかったが、バーストウは苦笑いを浮かべると

「難しいところだけれど。あなたは素直であることは理解したわ。そうね、今はあなたはここにいてもいいと思うわ。でも、求めている人物ではないから気を付けて」

「ああ、感謝するよ！」

多分、自分が口にした警告の意味は全く理解していないのだろう。

今回も又、男はバーストウの手からスーツを奪うと癪に障るへたくソな鼻歌と共に奥へと進んだ。

「ええ、では次」

次回の募集する放送からはランクを上げるが。

最初の放送で集まってきたこの者たちは全員合格にすることをこの時点でバーストウは決めていた。腹をくくる必要があることが分かってきた。いまはそれで、十分と考えるべきなのだ。

久しぶりにレオに会えた。話も出来た。だが、まったく喜びはない。

それどころか今の自分はこのコベナントに履いてはいけないような存在のような気もする。

そんな居心地の悪さを感じていながらも、それでもなお歯を食いしめるようにコベナントから離れないのはパイパーの中の“なにか”が。今はここにいないと大ネタを逃す——そしてなによりも大切な友情にヒビが入るような気がする。

アキラのことは——あの若者についてはまだ整理がつかないでいる。

彼が見せた残虐性は背筋を凍らせるに十分な吐き気を催す類のものだが。一方では彼はその狂気を誰に向けても発しているというわ

けでもなく。つまりはそこになんらかの補正を与えてもよいのでは……まあ、理屈はわかった。

レオのこの考えは正しいと思う。

だいたい実際に前回も同じ結論に至ったから、自分もコベナントへの誘拐犯について沈黙していたのだ。今回だってそれは出来るはずである——将来的には。

しかし大きくない襲撃後の居住地の中で人を避けようとする、これもまた難しいことがわかる。

気が付くと言えや納屋の裏側にある細道で所在なきげにしてしまい。慌てて自分は堂々とするべきだと中央へと進み出るも、そうなるに誰かの視線が気になりだす。

——あたしは大人だよ？小娘みたいなことやってどうする!?

先日の失敗からプライドが傷つけられて思った以上に自分がガタガタになっていることを思い知り、さらに自分に失望してしまっただ。

そんな負の連鎖の中で悩むだけだった彼女を観察する目があった。

「あんだ、なにやってんだ？」

「ひゃっ!？」

声をかけてきたのは、いつの間にか小汚い白と黒のストライプの入ったスーツ姿でヌカ・コーラを持つデューコンである。

「ちよ、ちよつとね。なんてーの、調査かな。うん」

「なるほどね。さすが記者さん、記事には綿密な取材が必要って事かい」

「そーだね。うん、その通り」

「——いいさ、それで。あんだも大変だな、気持ちはわかるぜ」

そういうとききれいな水の入ったボトルを差し出してきた。礼を述べながらそれを受け取り、少し飲む。

とりあえず誰かと話せて、冷静になることができた。助かった、と思っただ。

「ちよつと今ね。悪いサイクルに入ってるみたい。ツキに見放されて

るみたい」

「それならちようどいいかもな」

「え？」

「実は今、面白そうな3人組が出ていったばかりでね。ちよつと興味がないか？」

「3人？誰？」

「マクレデイ、ケイト、それにキュリーだったな」

「どっ!？」

パイパーはやはりまだ本調子ではなかったのだろう。

ここで3人に興味を持つのは良いが。なによりも重要なのは、なぜこのディーコンがそれを彼女に教え。自分も一緒に底についているか、であつただろう。

道沿いに北に向かつた3人を追つたが、大通りにぶつかるT字路のあたりで見失つてしまつた。

「これは見失つたな。距離を取りすぎたようだ」

「まだ近くにゐるはずだよ。別に遠出するような様子は見えなかつたから」

彼らが動いたということは、つまり彼らを動くように指示した奴がゐるに違ひない——きつと！

だが結論から言えば彼女のこの考えは間違つてゐる。

そしてそれはすぐに証明された。かなり近いところから、キュリーらの悲鳴と騒ぎが始まつたからだ！

夕食の材料探し、あくまでもこの意識でやってきた3人には思いもよらない展開があつた。

一番大きく“封印されたまま”のコンテナへの電源供給を止める。と。ゆつくりとふたが開いていく。

最初それが何なのかよくわからなかつたが。入り口が大きくなる。とゴロリと音を立てて外に転がり出たことでわかつた。

なんてことだ、一匹用の罨に2匹が入つていたのだ。

転がり出てきた方はよく見るデスクローの——しかし少しだけ体格が小さかった——それであつたが。自分が解放されたことがまだわかつてなかつたのか、地面の上でバタバタともがいた後で機敏に立ち上がり、周囲を睨みつける。

だが問題は後か出てきた方だ。

壁に賭けた腕は大きく、恐ろしい爪もまた大きく、そしていつも以上鋭い。

転がり出たのはとは違い、皮膚の表面が赤色かと思えば。位置によつては青にも黄色にも緑色にも見えなくもない。

人の技術が生み出したアポミネーションの最高峰。元はジャクソンカメレオンの遺伝子を生物兵器化したものだが、この個体は先祖返りでもしたのである。

——カメレオン・デスクロー

そう呼ばれる個体はまさにデスクローと呼ばれる種の中でも伝説に伝えられるレベルの希少種であり、最大級の危険物でもあつた。

ケイトもマクレディもこの個体についての正確な知識こそなかつたが。その大きさ、離れていても感じる凶暴性、さらにそれが仲間を連れて目の前に出現したということで一氣に戦闘モードになる。

——だけど無理だ。これじゃ、死ぬ

アキラは言つていた。こいつは確か兵器だ、獲物の恐怖を感じるとしつこく殺しに来る。

一匹ならば自分がひきつけなければいいだろうが。2匹いて、片方がやっかいそうと最悪な状況にある。

「これはっ、これは、想定していませんでした！」

「わかつてる、キュリー！目を離しちゃだめだよ、絶対！」

「なあ、そりゃ名案とは思えないぜ。こりゃ俺達だけじゃ——」

「やるしかないんだよ！」

ジャステイス——ショットガンを片手にし、反対側に背中改造バットを握る。

マクレディは大丈夫、自分の戦い方を知っている。問題はキュリーだ、彼女は戦闘は得意じゃない。それにそもそもセンスもあまり感じ

ない。

アキラはヘタクソでも、暴れだすと手が付けられないが。キュリーにそれと同じことを望むことは出来ない。

「集中しな。さすがにあんたを守れるか自信はないからね」

「はい、はいっ。努力します」

いい答えだ、そう返そうとしたとき。ついに態勢を整えてこちらを値踏みしていたデスクロー達が咆哮を上げる。

獣の声が出た、そう思った瞬間に動いたのはディーコンだった。

彼は的確に場所を特定すると駆けつけた。タイミングはベストではなかったが、状況の最悪さに苦笑を浮かべながらも2匹のデスクローの分断にかかる。

「面白そうなパーティーだな、小さい方はまかせてくれ」

「ちよつとー！こんなか弱い女にあんなデカくて変なのをやらせるってうちの!？」

言いながらもケイトの顔に余裕が戻ってきている――。

デスクローらはいざ襲う段階でいきなり相手が増えたことにわずかに戸惑いの色を見せていた。その間にもパイパーも到着し、「なにやってんのよ!？」と抗議の声を上げながらも、彼女も戦闘態勢に入った。

ディーコンはレールロードでもトップクラスの戦闘経験を積むエージェントである。

組織はしばしばエージェントに困難な任務を与えるが、彼はそれを表情を変えずにやってのける男なのだ。

体格が小さいとはいえデスクローは一匹ならばこの広い世界を使つて対処する方法がある。残るはカメレオン・デスクローだが。こればかりはケイト達で何とかするしかない。

「ひよつとしてこれ、ヤバい奴なんじゃない?」

「なによ、見ればそんなの分からないのパイパー?それじゃどつちがヤバい女か、勝負だね」

「は？頭おかしいんじゃないの。だいたいこいつ、メスなの!？」

パイパーのツツコミはこんな時でも的確で、どうやら調子はだいぶ良くなってきているようだ。

腹は決まった！ケイトはショットガンを背中に回すと、バットを両手で強く握りしめた。

なんて女だ、マクレディは内心では秘かに舌を巻いていた。

ケイトの事だ。粗暴な女、レオやアキラに拾われなければどこかでレイダーのボスかなにかをやったような奴。

傭兵、殺し屋としてプロを自任する彼はこれまで彼女の評価は決して高いものではなかった。ガンナーズのような傭兵の皮をかぶったレイダーのようなやつらのなかでは、彼女のような女はゴロゴロしている。そいつらは欲深で傲慢、そしてうぬぼれて居て男と等しく誰も救いようのないバカ――。

そんな女にレオやアキラは妙に肩入れして、顔だちも美人だし。「助けてやるか」みたいな考えで傭兵扱いしていると、割と本気でそう考えていた。傭兵としての考え方や振る舞いも、新人つてことで少しばかり仕込んでやらなきゃと、面倒くさいものとしてとらえていた。だが、どうやらまたしても自分を見るべきものをこれまでちゃんと見ていなかったらしい。

巨大な殺意の塊の前に立ちふさがって接近戦を見事に演じてみせていた。「彼女には才能がある」だったか、レオがそう言ったと聞いて内心では「どんな才能だよ」と笑っていたが。これがそうなのだろうか。

正直、デスクローを相手に接近戦をやろうとするのは最近、剣を使うようになったちよつとどころじやなくおかしいアキラくらいだと思っていたのだが――。

空間を切り裂こうとするように、左右に振りぬかれる鋭い爪は何度も空を切り。2回ほど珍妙なバットに触れるも破壊することは出来ず。



ケイトは強気を見せたまま、逆に噴射音を何度か響かせて気色悪いトカゲのような皮膚とその下の分厚い筋肉を打つ。

「パイパー、お前らは背後に回って攻撃しろ！味方にあてるんじやねーぞ、良く狙え。ケイト！いい調子だ、カッコよすぎるぜお前！」  
「ハハッ、まだまだこれからだつて。見てなさいよ！」

ケイトの声にはまだまだ余裕を感じられる。

だがマクレデイ自身は少し焦りを感じ始めていた。

——パワーが足りねえよ

彼が使うライフルは基本的に308口径弾を使用している。ラッド・スタッグやバラモンのような獣はもちろん、人、ロボットを相手にしても十分に効果があると感じて信用して使っている。

しかしこのデスクローを相手にすると、頼もしいはずの一発の効果が軽いものを感じられた。全弾命中しているにもかかわらず、皮膚に着弾したそれは分厚い筋肉にめり込んでもそれを破壊して引き裂くまできつと至っていないのだ。

(俺も腕の見せ所つてか)

こうなったら仕方がない。

動きに予想のつかない獣を相手に、急所である目を狙っていくしか

。戦闘開始から15分を経過……状況に大きな変化は生まれていなかった。

デイーコンは余裕を見せながらも小さい方をレーザー銃だけで引きずり回し。“伝説の”カメレオン・デスクローは残りの全員で対処している。

だがようやく均衡が崩れる。

マクレデイの一発がようやく片目を潰すと、その動きはようやく鈍さと疲れが見え始め。そこに裂ぱくの気合と噴射音と共にうなりを上げるケイトのバットが、カメレオン・デスクローの右ひざに叩き込まれ——武器と一緒にその太い膝を水の詰まった袋のように粉々に粉碎して見せたのだ。

立っていることもままならず、崩れ落ちたデスクローは這いつくばると初めてゼーゼーと苦しそうな表情を見せる。

一方、ケイトは信じられないという表情で相手の膝と共に破壊されてしまったバットの残骸を見て——なぜか次に激怒した。

「こつ、壊れちまっただろうが!?! どうしてくれるっ」

「ちよ、ちよつとケイト!?!」 「なにやってんだ、お前!?!」

パイパーもマクレディも焦っていた。

ようやくここからは距離をとって息の根が止まるまで攻撃すればいいだけだと、そう思っていたのに。ケイトは背中に残っていたコンバットショットガンのことなどすっかり頭にないらしく。両腕のこぶしを強く握りしめると、過去に屈強な男たちをぶちのめし。時には殴り殺しもしたそれを自分の体の何倍も大きなデスクローの顔にもめり込ませた……。

ああ、あつたぞ。

私は牢を出て、アキラの工房に。棚に揃っておかれていたボードゲームのいくつかを手にすると再び牢へ戻る。

「本当に持ってきたんですか?」

「ああ、そうさ。やるって答えただろ?」

「そうですが——ここでボードゲーム? 牢の中で?」

「なかなか経験出来る事じゃないからね」

お互いまだ顔色がよくないが、雰囲気はだいぶ良くなってきていた。

「何を持ってきたんですか?」

「キャッチ・ザ・コミーとアンストツパブルだな」

「僕はどっちでもいいですけど——」

「ならキャッチ・ザ・コミーだ」

「……アンストツパブルじゃないんですか? 一応聞いておきますけど」

私はにやりと笑う。

「私がシユラウドをやっているならね。でも、君も諦めるつもりはないだろうか?」

「まあ、そうですね」

「ひとつ言っておくが、シユラウドは大柄の男って設定があるんだ。悪いけど君、そういう意味でシルバー・シユラウドらしくないと思うんだよね」

「——それは聞き捨てなりませんね。だいたいそれはラジオの脚本家が、暗がりですら相手からはそう見えた」ってやつただけですから、本当に背が高かったかどうかは不明ともいえるでしょ」

「せめて私くらいの身長があればね、アキラ」

「納得はしませんよ。でも、そうですね。」

僕が人造人間になろうって血迷ったときは、レオさんぐらいの大柄の男をホストに選びますよ」

「ほら、もめた。ゲームをしたいだけなんだから。今回はキャッチ・ザ・コミーだ」

「了解しましたよ、シヨウグン」

考えることが、未来に備えることがお互いにあまりに多すぎる。

不安はある。負けるかもしれない、間に合わないかもしれない。なにより戦えないかもしれない、と。

「それじゃさっそく、ルーレットを——おやおや、6だ」

「いきなりですね。それじゃ次は僕が……」

「1だね」

「なんで——」

「そして、1回休み」だって。悪いね、若者よ。先頭は私が行くよ」

「ええ、老人ですからね。別にいいですよ、すぐに追い抜きますから——ここで1回休み。」

今はそれでいいのだと思う。

私はそれを学んできた——次の戦争の前に、次の次の戦争の前に。私達の、僕たちの戦争はまだ続くのだから。

f a r a w a y

つながり

日暮れ時、僕は暗い牢獄の片隅から久しぶりに外に出てきた。

空には雲が広がっているが、遠くももうすぐ地平線へと落ちようとする太陽のあたりだけはパツクリとひらけて不思議な美しさを見せている。

レオさんのおかげで僕はまたここに立った。

いや、もしかしたら僕もレオさんも。再び「首の皮一枚」ってやつでなんとかなったのかもしれない――。

ケロググを倒し、インステイチユートへの手掛かりのないあのひと。

僕の知らない過去を知る。僕に執着してきた恐ろしく、おぞましい。連邦でも誰もその名を知らない組織。

それ以上何もわからず、何もできない日々を歯を食いしばって生き残るしかなかった――それがなにかを見つけられると信じて。そんな都合のいいことが、あるわけがないなどと考えないようにするために。

ママ・マーフィーはそれでも僕らが歩き続ければ道は出てくると教えてくれた。それが僕らが望む未来につながってはいないかもしれないが、と。この呪いは僕らをさらに強くしてくれる――だが、そのせいでそろそろ僕とレオさんの存在を連邦から隠れることが難しくなってきたもいる。

あそこに見える太陽のように。

身を守ろうとどんなに雲を厚くしようとも、隠れることが出来なくなる時が来るかもしれない。

あの優秀な兵士であるレオさんであっても「今回はさすがに腕を失ったかと思った」と襲撃を生き延びて苦笑いするしかなかった。あ

れは僕にも言えることだ——僕にその順番が来た時、生き延びなくてはならない。

そんな様々な未来への不安を考えていると、背後から人が近づいてきた。

「よう、若いの。お前とはきつと、真つ先に話し合わなきやならんだろうと腹を決めてた」

「……デイーコン」

「お互い、色々と難しいものが出てきちまつてる。俺は——まだ、これが終わりでなければいいと思ってる」

「フンツ——助けてやるからって、僕の留守に荷物を置いて。それが僕の留守宅をレイダーと一緒にひっくり返し。けじめを取らせてやろうと思つたら、見事にさつさとどつかに逃げ去っていったつてのにな？」

僕たちの友情にヒビひとつないって？」

「そうだな……確かに虫のよすぎる話に聞こえるかもな。だがな、アキラ。お前はレールロードのエージェントだ」

「自分の罪悪感を僕にも求めるんじゃないやねえよ、このクソハゲ！」

思わずかっとなつて怒鳴りつけたが。僕はすぐに目を閉じ、拳を振り上げることで怒りを飲み込んだ——。

冷静になる必要がある。

大丈夫だ。レールロードは以前も僕を助けることを早々に諦めたクソだったし。デイーコンには助けが必要だった。かれもこんな結果が待っているとは、助けを求めた時には思つてなかった。彼が悪いわけじゃないのだ。

「ハナシはこれまで——」

「見てわかるだろ？怒らないように頑張ってるんだよ、冷静になって、余計な事。言うなっ」

「わかった」

「……まず聞きたい。レールロードは何をやってるんだよ？なにを考えてる？B・O・S. が来てあちこちに兵士を送り出していることは誰でも知ってるのに。そんな連邦に人造人間の集団を動かす？」

彼らはインスティチュート。彼らが生み出した人造人間の殲滅を

口にしてるんだよ。危険がないって判断した!？」

「いいや。お前と同じかそれ以上だ。」

デズやキャリントンは手元に人造人間たちを集めていたことを後悔している。これまでは慎重にひとりずつ動かしたが、その余裕がもうないんだ」

「――へえ」

「強引なのはわかってる。彼らもな。」

すでに何人も『自殺はごめんだ』と言って出てった奴も、姿を消したのもいる。これからもそんなのが増えるかもな。エージェントもフル稼働さ」

「どうせ時間稼ぎに連邦に反B・O・S.のキャンペーンもやってるんだろ」

「当然だ。俺達の得意な分野だからな」

ディーコンの顔に悪い笑みが広がる。弟子が自分たちを理解していることがうれしいのだろう。僕は首を振る。

「馬鹿な、B・O・S.は攻性組織だ。すでに自分たちも連邦に来た大義を口にしてるのに、それがなぜ理解されないのかは分析に入っているはずだよ。原因のリストの最上段にレールロードが来ないとしても信じているのか？」

「――それでも、さ。デズは。嫌、俺達はやらなきゃならん」

「どうせそれも次の計画のためとかなんとかあるんだろ。そろそろ説明しろよ、オッサン」

「……B・O・S.とインステイチュートは激突する。つまり戦争が始まる、まだ少し先になるが」

「うん」

「デズは秘密を明らかにしていない。だが、彼女の考えはわかるさ。俺はエージェントだからな。お前はどうか？」

僕を試すのか。別にいいけど。

「……インステイチュートにいる人造人間を連れ出す方法を考える。もしくはその方法を用意しているのか」

「さすがだな、相棒」

「褒められてもうれしくないよ」

笑えない話だった。

レールロードは、あのレオさんと同じように。ハイテク武器を用いた戦場で秘密裏に裏から大きな救出作戦とやらをやらかそうと思っ  
ているのだ。個人ではなく、組織がそう考えているなんて正気を疑  
う。

「戻ってくれ、アキラ。俺達には力が必要なんだ」

「……」

「デューコン、まだやるっていうのか？ デズデモーナがやろうとして  
ることは組織丸ごとの資産をつぎこんでの総力戦をやるつもりだ。  
戦争が終わったとき、跡形もなくすべてが吹っ飛ぶ賭けを始めてる」  
「いつもそうだった。俺達はそういうおかしな連中なのさ」

何と答える？ 「お付き合いはここまでです、さようなら変人」 っ  
て？

いや、あのレールロードには「まだ」役に立ってもらわなくちゃな  
らない。

「戻ってもいい。力を貸すことも考えても」

「助かる」

「でも！——以前とは同じじゃない。僕が苦しい立場にあった時、仲  
間と組織を動かすことをデズデモーナは許さなかった。責めたりは  
しないが、“彼女の組織”に忠誠はない。理想を同じくするだけだ」  
「ああ、わかった」

「他にも色々あるけど今はやめよう。僕も自分が戻るなんて言ったこ  
とを後悔したくない」

「嬉しいね」

次に、と声を上げる。

「ここからが問題だ。」

「コベナントの襲撃者は許さない。デューコン、これは絶対だ」

「おい……」

「やめろ、そうじゃなきゃダメだ。何も言うな。」

レイダーのほとんどはすでに殺した。だがそれで全員じゃない、

逃げたレイダー」がいる」

「気持ちにはわかる、本当だ。苦しいよな？」

「だがな、この連邦でお前の手では届かないものもある」

「——レイダーを引き込んだ奴らを許せて？忘れろって？」

「どちらも近いが、少し違うな。この世界じゃ、いつもどこかでひどいことが起きてる。ここが襲われてから何日が過ぎた？」

「生き延びた奴がこのことをわざわざ覚え続けていると？そんなわけがない、すぐに忘れていく」

「だから諦めるしかない——か。」

「さすがだね、ディーコン。ここでレールロードのエージェントだから馬鹿をやった人造人間は許せとは言わないんだ」

「そんなひどいことは言わないさ。お前の怒りは俺にもわかる。その後悔も」

「人も死んでる。戦うことも出来ない病人たちだった、医者だった。彼らには殺される理由なんてなかった」

「わかってる。理不尽で、気の毒に思う」

「でも殺すな、と？」

「ハア……そうだ、俺もお前に理不尽を押し付けようとしている。だが、それは必要だからだ」

「なんだって？」

「いいか、アキラ。レールロードは人造人間を助ける。お前は自分が“個別”に感情を処理できると思っているが。俺達は、レールロードはそれを信じない。経験上不可能だとわかっているからだ。」

「人造人間への怒りはいつか表に出る。その時、救うべき彼らをお前が見捨てるかもしれない。お前を見て、俺達がそう思うようなことは問題になる」

「人間は感情の処理のできない半端なものということか。なるほどね……。」

「つまり僕が『理不尽で不愉快な人造人間がいたけれど、許します』と言わなきゃ、戻ってくるなって事か」

「……すまない」



「ちよつとまって——考える」

許す？無理だ、そんなことはごめんだ。可能ならば今すぐにもプラズマで分解し、元の姿がナニモノであったのかわからなくしてやる。だが……レールロードは必要だ。

「わかった。理解する」

「本当か？」

「いいや、無理だ！でも、今はね。だからすぐには戻れないよ、頭を冷やさないと——」

片手で顔をぬぐう動作をする。拭った皮膚の下から汗が噴き出るのを感じる。

自分の判断を、自分が怒鳴りつけてやりたい。そんなことはしないけれど、衝動がある。

「それじゃ、ここで握手か？」

「あんたの好きなハグでもいいよ」

「いいや、それは——握手でも十分、俺も頑張ったんだぜ」

「わかってるよ。だから今だけは力いっぱいハグしてやりたいのさ、相棒」

結局、僕はデイクンと握手もハグもしなかった。

2人で並んで趣深い日暮れを眺めるなんてロマンチックなこともせず。友に背中を向けると、かつてのように軽口を叩きあいながら皆のところへと戻っていった。

「ところでさ、ハゲ」

「なんだ、クソ生意気な小僧」

「改めて捕獲した人造人間の2人。男と女の」

「ああ、彼らか」

「あれは引き受けるよ。っていうか、僕がもらう。悪い友達に迷惑かけられたんだから、問題ないね」

「ふぎけるな。自分がマッドサイエンティストだって自覚が本当にないんだな。お前のおもちゃにしているいわげがない」

「なんで？贖罪の道だよ、友よ。人造人間だってそれは必要さ」

「なんでココには鏡がない？涎をたらしてニヤニヤ笑ってる自分の顔

が見えないってのは最悪だな」

夜、僕は自分の工房でひとり静かに思考をめぐらせていた。

ターミナルの前に座り、ヌカ・ワールドとその前、さらにその後に残してきたことをまとめてリストにする。一息ついて、改めてリストを眺めると——ため息が漏れた。

ひどいものだった。

ゲイジの出現からペースを乱され、万全と野心を持ってヌカ・ワールドを生き抜くことが出来たが、その間にコベナントを失ったことで、全体としてはかえって問題が山となって僕の前にそびえたっている状況であるらしい。

にもかかわらず、僕の視線はレオさんのいう連邦から離れた島。ファー・ハーバーへと飛び立つ準備にうずいている。

さらに僕は考えなくてはならない、だが簡単には答えの出ない問題もある。

まず挙げられるのはキュリーの事だろう。

聞けばその島は特徴ある霧と、それによって激変した自然環境が広がっているという。さらに人と共存を可能にしている人造人間の居住地、どちらも間違いなく彼女の興味を引くものであるはずだ。

だがそれゆえにかなり連邦とは違う意味で危険であり、なんとか最低限身を守る程度の戦闘力しか持たない彼女を僕はいかせたくない。止めてはみるが——おそらく僕の願いを彼女は聞くつもりはないだろう。ああ、悩ましい。

悩ましいと言えばロボットたちのことも——エイダやコスワースのこともそうだ。

彼らには新たに第2の脳とそれを即座に使いこなす思考モジュールを組み込んでみたのだが。それは彼らに疑似的な感情のようなものをもたせてしまったようだ。

エイダはディーコンの置かれた状況を見て「助けよう」と判断し。コズワースと一緒にいる時は、レオさんの機器に「なにがなんでもなんとかしよう」と考え、あろうことか人間の意思なく。彼らの判断で拷問を行っていたことが分かった。

これは僕にとつて大成功ではあるが。それ以上に大失敗かもしれないという不安が生まれる。

思考の拡張を目的とした装置が働いたことで、彼らに感情が芽生えたという結論はロマンチックなものではあるが。

ごく短い間で、これだけ気になる判断を下した彼らの態度を良しと考えるのは、なかなか難しいものがある。取り上げてしまうというのは乱暴だし。悪い事もあったが、良いこともあった。どうしたらいいものか。

そしてコベナントの今後のことがある――。

レキシントンの隣接する3つの居住地にたいして権利を手に入れたもの。ひとつは失敗、ひとつはとりあえず順調、ひとつはまだ手も付けていないときている。

ミニッツメンは焦っていないだろうが。ゲイジの件がある――僕はこれ以上、この工房に足を止めていることは良い事ではない気がする。それがファー・ハーバーへと向かいたい気持ちにもつながっている。

これだけでも頭が痛いところなのに。

さつき「まだ確認は取れてないんだがな」とハンコックが恐ろしい話を僕の耳にささやいてくれた。

Vault 88、あのバーストウが暴走を始めていて。まだ建設中（と思われる）シエルターに人を集めているらしい。

あそこで手に入れたVaultの技術にばかり目がいつてしまったが。少し目を通し、記憶に残っている彼女の監督官としての目的のひとつが――たしか人体実験めいたものだったはず。

今から乗り込んでいってあのグールの頭を吹き飛ばしたとしても、本当に人を入れているとするならばそれでおしまいはできないかもしれない。

「なんでこんなに山のように増えてるんだよ……」

これはどう考えてもすぐにファー・ハーバーへと行きましようとならない。いや、なれない。

ターミナルのキーボードをリズムミカルにたたきながら、もう一度大きくため息を吐く。すると画面に先ほど加えたばかりの音声データ名が表示され、僕の指は迷いを見せてからそれを再生させた。

そうだった、そうだった。

以前からの課題にばかり頭がいつていたが、そういえば新しい問題にはもうひとつ加えたばかりのものがあつた。

—— 音声を再生します

それはいつものグッドネイバーでは当たり前の光景だった。

犯罪者が裏通り、獲物をあさる。そして立ち去った後にも次々と噂を聞きつけた誰かがそこへと集まってくる。わかってる、それがこの日常なのだ。

男がすごみ、女は怯えている。

だけど目の前でそれが行われ、自分はその近くで見られないようにとじつと息を殺すことになるとは思わなかった。

バン！銃声で話はあっさり終わった。

女は倒れ、男は冷たくなっていくその体にかがんで乱暴に調べていく。

あれが終わって男が立ち去れば、今日の自分は最高についているスカベンジャーになれるが、現場を見ていたと知られたらきつとあの隣に仲良く並べられてしまうに違いない。こっちも必死だった。

存在を知られてはいけない。この恐怖をかぎつけられてはいけない。

今こそ勇気が必要だった。

だから思い出す。昨日のラジオを。

ギャラクシー・ニュース・ラジオ、シルバー・シユラウド。シユラウドの話は好きだった、彼の悪党に対する強さに。恐ろしさにあこが

れる。なんと云っただろう、あれは確か――。

「おい、さっさとどっか行けよ。干渉する気か？ そのおかしな服もななんだ？ こりや、新しい俺のお友達が見つかったって事かもな。そうなりたいのか？」

「……確かに新しい友人には違いない」

「は？」

「後悔もなく人を殺しているな？ 罰を下し、正義は執行されねばならない」

両手で必死に口元を隠してはいたけれども、両目はしっかりと大きく見開いていた。

驚いていた。感動していた。あれは本当にシユラウドだった。シルバー・シユラウドはついに連邦に――ボストンに帰ってきてくれた！

部屋には2人、机とパイプ椅子に座って向かい合っている。

コベナントで保護された。というか残っていた2人の人造人間。その取り調べをアキラは個人面談で簡単におこなった。

恐ろしく無口な女の方はK6―18といい、男の方は――目の前の彼は自分をF5―4V。彼はレールロードの保護される直前、グッドネイバーでスカベンジャーをやっていたと言い、その話を聞かされた。本当はもつと違う話が聞けると思ってた。

だが、それを待つてましたとばかりに勢いよく話し出した彼の話のアキラは次第に恥ずかしさを感じる。

そこまで聞いたらもうわかる。それは自分だ、あれはケントから最初の依頼だった。ナントカいう悪党の手下を殺してほしいとかなんとか。

ケントの要望を受けてラジオの作られたヒーローのセリフの傾向を掴み。即興で演じた最初のソレ。

人造人間は興奮気味に話を続ける。

「光栄です。あなたはまさに僕のヒーローだ」

「ああ、うん。ありがとう」

「あれで僕の運命は一変したんです。H6とも知り合えたし、僕たちはあなたへとこうして導かれた」

「そうか。ところで話は変わるけど、なんでここにずっといたんだ？食料があつたからか？」

「ですね。でも一番はあなたに会えると思ったからですよ！こんなチャンス、逃がしたら僕の一生は何だったって話です！」

「――勘弁して」

やっぱりアキラは頭を抱える。

その後も取り調べは続き、アキラはファイルに2人の証言とその総括を短く記載して。ホロテープにさっさとまとめた。

『男のコールナンバーはF5-4V。名前は。脅威ナシ、ただしハッキング能力は評価に値する。』

感情豊かなおしゃべりで、とにかくウザい。レールロードへ戻ることは希望しない』

『女のコールナンバーはH6-18。名前は。脅威ナシ。ただしハッキング能力は評価に値する。』

恐ろしく無口で会話が困難。コミュニケーションに通訳（男の方）が必要だった。レールロードへ戻ることは希望しない』

僕が手に入れたものはそう、いつもなにかしらやっかいなものをおまけについでくる。

さて、僕はいつたいたいどうしたらいい？これを皆放り出して――逃げ出してしまおうか。

それぞれが食後の時間をリビングで過ごす中、気が付くと私とガービーの周りにディーコン。そしてハンコックがちょうどこちらに向かつてくるところだった。

ガービーはこのグッドネイバーの市長が苦手なようで、視線で「ど

うする？」と問うてきたが。私は笑みを浮かべることで、構わないということを伝えた。

「——じゃ、將軍。またあとで」

「ああ、ガービー」

立ち去っていく彼と入れ違うように派手なグールは私の隣に座った。

「あんたに全部任せておいてなんだが。あの若いの、ひとりで地下に戻っていったが。本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、市長。こつちに顔を出したし、食事も一緒にしただろう？ 気分を切り替えて、集中したいのさ」

「どうもあいつのことはあんたにはすべてわかっていているって様子だな」

「そんなこと——」

「それじゃいい機会だからついでに言わせてくれ。これからあいつをどこかに連れて行こうと考えているらしいが、迷惑だ。」

俺としちゃ、あいつにはこの連邦のことでしたっかりとやってもらわなきゃならないことが山ほどある」

「なるほど」

「そのことか——。」

「ファーハーバーだね。明日、時間を作ってもらって皆にも聞いてもらうつもりだった」

「その小島の噂は聞いたことがある。化け物の巣になっていて、人間は餌代わりになんとか隅っこでへばりついているって話だった。そんな地獄でアイツに何をさせるつもりだ？」

「僕はただ、手伝ってもらいたいただけだ。何が目的なのかは、アキラ本人に聞いてほしい」

「なるほどな。優秀な兵士だけではなく、あんたは政治家でもあるって事か」

「経歴としては、私は元軍人だよ。政治家の経歴はない」

「俺を相手に誤魔化さなくてもいいぜ。」

悪者、殺し屋、殺人鬼、そしてグッドネイバー市長を相手に話して

るんだ」

「……ハンコック」

「レオ、アンタは大した奴だと思ってる。だがあんたに犬みたいになつているアキラを見てみると、腹が立つこともある。丁度、今のような瞬間の話だ」

「ああ、わかるよ」

「本当に分かっているのか？」

あいつは色々やらかしているから元気に見えるかもしれんが。実際の話、ボロボロだ。

抱えている問題も、あんたとのミニッツメンや。そこにいるレールロードのアホ共のしくじりが大半で、あいつ自身はひとりしかいないんだぜ。壊れるまで鞭をくれてやるつもりか？」

「——アキラに強制したことはない」

「だがアイツはあんたの期待に応えようとはする。それをあんたは利用してる。気分がいい話じゃないんだよ」

私はしばし沈黙する。

これは私とアキラの関係は、外から見るとどう見えているかという話だ。彼と私との奇妙な友情の在り方について説明しなければ、彼も納得できないのだろう。

ハンコックを身を乗り出して声を小さくした。

「俺の耳には聞こえているんだ、レオ。」

あのガービーは何かあるたびにアキラを危険視する発言をして、あんたはそれを聞かず。アキラの奴を信じているのだと、そう言っているってな」

「よい耳をお持ちのようだ、市長」

「俺もアキラに言ってるのさ。本物の悪党として、俺の相棒となって自分の町を手に入れなかったな。」

あいつは俺にとんでもないものを見せてくれたんだぜ。ヌカ・ワールドだ。ボストンやレキシントンと比べられるほどの場所で、あいつはレイダーのボスを軽く演じて見せたよ。

あんたが消えて、あいつは俺と組めば連邦だって手に入れることが



出来る」

「壮大な野心だね」

「ああ、ひどい妄想だろ？」

そういうとハンコックは己を鼻で笑う。

「ミニッツメンも随分とイメージが良くなってる。そりやそうだ。

レキシントンを囲む、グレイガーデン、スターライト・ドライブイン、そしてこのコベナント。

この3つの居住地を安定させるだなんて、普通に考えたら簡単な事じゃない。あいつはよくやってる、あんまりにもけなげなんで涙が出そうなくらいにな。グレイガーデンはめどが立ちそうだ。ここも攻撃は受けたが、失うまではなかった」

「……」

「そこで知らぬ顔で聞き耳を立てているお前もだ、ディーコン。どうせアキラにレールロードに戻ってくれとでもいったんだろう？」

「——俺かい？いきなり話に混ぜてほしくないな」

「いやいや、遠慮はいらんぜ。お前らは何を焦っているのか知らないが、偉く不景気だつて聞いている。ああいうトンデモない奴を戻せば何か風向きが変わるとでも思っているのだろうか。それが自分たちの都合の良い方向からのものとは限らないつてことを忘れていないんじゃないか？」

ディーコンは肩をすくめただけで、手元にある雑誌に視線を戻す。

どうやら自分からは参加したくないようだ。

「ハンコック。今度は私の話を聞いてほしい」

「ああ、いいぜ」

「確かに私とアキラは奇妙な——本当に奇妙な友情でつながっている。

でもだからといって本当にそれが無償の信頼の上で成り立っているというなら……それは違うと私は思っている」

目を伏せ、すぐに戻すがその一瞬でも振り返れば湧き上がる黒い感情。後悔だ。

「——Vaultを出て、アキラと一緒に私はかつての家があったサ

ンクチュアリへと戻った。

そこで思い出される最後に記憶にあるのは、世界が壊れるという恐怖だ。隣人たちは大騒ぎで家を飛び出し、冷静な人は誰もいなかった。私もそうだ。

聞かされていた Vault へ——でもそれは誰でも入れられるようなものではなかった。

軍は兵士を展開し、選ばれた住人達だけをそこから中へと入れていた。私は安堵したよ『これで私の家族は無事だ』ってね。他人の事なんて何も考えられなかった。わかるかい？」

「ああ、そういうものさ。それが普通さ」

「私は自分への罰なのではないかと、そう思ったんだ。だってそうだろう？」

Vault は私の信用を裏切った。そこには安全な生活などそもそも用意されてなかったし。眠っている私たちの面倒を見るはずのスタッフは住人たちを見捨てて立ち去ってしまったそうさ。

そして私は——家族だけを失った。

それだけは守ろうと思ってたのに。そのためだけにあの戦場での地獄から戻ってきたはずなのに、な」

ケロツグの声が、抵抗する妻の音が、銃声が。

眠っていて何もできなかったはずの私の目の前で起きてそのすべてが記憶に残っている。私は見ていたのだ、無力のまま。そのすべてが終わるのを。

「それであんたは旅に出た……そういう話だったろ？」

ハンコックの問いに無言で頷く。だが、そこにたどり着く前に私の下した決断がここでは重要なのだ。

「聞きたいんだろ？次に『そこでアキラと静かに暮らすって選択肢はなかったのか』って」

「ああ、そうなるな」

「私も……一度は考えたさ。あの頃のアキラは、彼はずっと怯えていた少年だった。

信じられない話だが。彼の父親としてこの時代から出発するのも

いいんじゃないかって」

「そうだな」

「出来なかった！私の息子、シヨーンのあの小さな手を思い出すんだ。あの手が大きくなっていくのを見るはずだったのに。いつか大人のそれになつて、老人となつた私の手を引く日だつてあつたに違いないって。」

あの怒り——とにかく自分の置かれた状況を見て、新しい生活を始める勇気も強さも私にはなかったんだ。

結果的にはガービーを連れてすぐに戻つたが。あの夜、彼をおいて世界を見てくると伝えた時の彼の目は忘れない。私は頼られるのが嫌で、彼を捨てようとしたんだ。それが私で、許してくれたのが彼だつたというだけだ」

「なるほどな……レオ、あんたは実のところアキラに恨まれたり、怒りをぶつけられても仕方がないとそう考えているんだな。」

奴にそう思われても自分は仕方がないと」

「そうだね。きつとそうだ」

「となるとアキラの奴はなんであんたになつているのか、興味が出てくるな」

「それは彼本人に聞いてくれ」

「ところで話をまた戻すんだが——その小島の事なんて忘れちまへつて言つたら、アンタどうこたえる？」

「ハナシが出来てよかつたよ、ハンコック市長。今日はこの辺でやめておこう」

私はそこでこの会話を打ち切つた。

アキラはこの友情をどう考えているのだろう。

深く考えたことはないし、考えることもないだろうが。私にはなんとなく理解できている気がする。

それはとても光栄で、喜ぶべきことだが——それを彼と話す権利は私にはない気がするのだ。

ガービーが食堂に入ると、そこにはまだ仏頂面のケイト。彼女の傷口を塗っているキュリー、そして呆れ顔のマクレデイやパイパーらが揃っていた。

「なんだか、不機嫌だな。ケイト」

「うっさい——」

まあ、針と糸で縫われて上機嫌というのもおかしいか。

「呆れたよ。まさかあんなモンスター相手に殴りかかる女がいるなんてね」

「へへっ、遂に人間どころかデスクローを殴り殺しやがった。スーパーミュータントの順番を飛ばしちまいやがって」

パイパーやマクレデイがそれに続くが、ケイトは別に反応しない。夕刻、「死ぬかと思った」と言いながら大物のデスクローなどを次々と持ち込んできてガービーらもその解体に大忙しとなったわけだが。おかげで当分は困ることはないらしい、空だった食糧庫も3分の1ほど「肉だけ」が山と積まれている。

「大物だったな。だが、彼女は不満そうだぞ」

「そりゃ、なあ」

「——はあ」

「なんだ？どうした？」

「スワッターだっけ。あの使ってた不気味な奴。あれが壊れちゃったったのよ」

「ああ、なるほど」

武器を失ったという事か——それなら確かに不機嫌にもなるだろう。

「またアキラに頼めばいいじゃないか。彼女のソレ、前も彼が用意したものなんだろう？」

「へへへ、だよな」

「？」

「この娘、アキラに頼むのが嫌なんだって」

「なんだよ、それは」

まったく意味不明だった。

「はい、終わりました。傷跡は残りますけど」

「うん」

「大丈夫ですか？なんでしたら私からケイトの武器、アキラに頼んでみますが」

「ダメ。それだけはダメ」

ついに人でありながら生物兵器とのステゴロで勝利した女は、ただひたすらかたくなで不機嫌だった。ここで一番頭にきて、ムカつく理由が——困ったことにこの本人が理解できないことがより深い悩みになってる。

そう、このケイト様は悩んでいるのだ。

言いたいことを言っつて、聞くだけ聞くとハンコックは立ち去り。それにくるようにディーコンも立ち上がる。

「そうだ——俺からもちよつといいかい？」

「もちろんだよ」

私は笑顔で応じる。

「明日か、もしくは数日中にあんたから説明があるっていつてたよな」

「そう考えてるよ。ファー・ハーバーには皆の力が必要だ」

「アキラと話した時。奴が俺もそこに出席するようにと、偉そうに言われた。アンタも知っているのか？」

「いや。でも彼が言ったのなら、そうして欲しいかな」

「そうか——それと言い忘れていたよ。ずっと大騒ぎだったからな」  
「？」

「あんたが欲しがってた警察署のデータ。全部ではないが用意できる。どうする？」

「うん」

「返事はまた別の時にでも——」

「いや、それでいいよ。あとはミニッツメンがどう応じるのか、結論を出す」

「わかった。それじゃ」

フアー・ハーバーへ向かう前にやるべきことが私も、そしてアキラにも山積している――。

連邦を離れるのだ。向こうに行けばしばらくは戻ってこられない。アキラも今頃、ひとりで頭をひねって名案がないか悩ましているのだろう。本当に、本当に私たちは――苦笑するしかなかった。

## スピーチ

翌日、私はさつそくファー・ハーバーへの渡航について皆に説明する場に立っていた。

なかなか壮観な絵になる——そろっている人物はバラエティに富んでいる。

生きながらにして、若くして伝説となったミニッツメン。インステイチュートの創作物、人造人間のために戦うレールロードのエージェント。悪徳の町、その市長にして創始者。ひどい世界で安全な町にいても正義を信じて戦う記者。

殺し屋、傭兵。ロボットは人造人間に。そしてここにはいないが、人造人間の探偵——。

私を見る彼らの視線を返しながら、私は自分の中にある確信を強くする。

(彼らとならきつとできるはず)

それは簡単な事じゃない。だがやるなら今しかない。

「説明の場をくれたことにまず、皆に感謝したい。これから私が話すことはかなり……いや、相当にとんでもないことだということはずに私もわかつてはいるんだ。

だけどみんな、今の自分の周りに誰がいるのか。それを見てほしい。

この計画はまだ完璧ではないが——きつとやることに意義があるにちがいないんだ」

そして私は探偵と助手の話をする。

ニツクの古い知り合いの娘が消え、ファー・ハーバーへと向かい。そこで見る異様な光景、絶望的な人の暮らし。奇妙にも自分たちの居場所を作り上げていた人造人間たち。そしてアトム教団——。

カスミの依頼を受けたところで私は話を強引に終わらせる。この先はこれから作らないとないからだが、それだけではない。

「さて、依頼を受けた経緯はこれで以上だ。

ここでまずみんなに謝りたい——この話を綺麗に忘れてほしい」

いくつかの眉が動き、アキラは口元に悪い笑みを浮かべる。どうやら利口な若者はこの流れを予想していたようだ。

「ニツクの依頼はこのまま私は手伝うつもりだが。皆に頼みたいのはこのことじゃない。」

ファー・ハーバーの状況については多少なりとも私の話から想像が出来ると思う。正直あのままでは数年ともたない。

過酷な生存競争で一番に脱落するのが彼らだからだ。だからこそ、今ならまだ何とか間に合うと思ってる」

パイパーは乗ってきたようだ。真剣な顔でメモを取り出している。ケイトはその真逆、呆れた表情を見せて鼻を鳴らす。でもそのほかは今が重要だ。

ガービーが皆を代表したように質問してきた。

「そりやそうかもしれないが。將軍、実際に俺達に何をさせたいんだ？どうすると？」

「何をさせたいのか？それはあの島に住む住人達の未来を少しだけ明るくものにしたい。生存競争の最下位から少しばかり押し上げてやりたい。」

どうするのか？これが問題でね。私の頭では全ての地図を埋めることが出来ない。「誰か」の力が必要だ」

別に個人をあてにしたわけではなかったが、なぜか皆の注目がアキラに寄った気がする。これはマズイ。

「その誰かってのが、ここに居る皆だ。」

ガービー、ミニツツメンの精神は『人々が安全に平和に暮らせるように』力を貸すことだったはず。それは今の彼らにとっても必要なものだ。

ハンコック市長。あなたは連邦では誰もが知っているグッドネイバーを発ちあげた英雄だ。彼らにあるべき“市長の姿”を示して導いてほしい。

マクレディ、ケイト。君たち傭兵はまさに即戦力。あそこには君たちの力なしではなにもできないよ。

キュリー、君は生物学に興味を持っているとアキラに聞いている。



ファー・ハーバーの生態系はじつに個性的なものだった。きっと君も興味を引くものがあると思う。

パイパー、見捨てられた島のことをこの連邦の人々に伝えてほしい。そして出来る事なら未来にわずかに明るいものとなる様子も頼みたいと思っている」

「——アキラは良いのかい？」

ケイトが聞くと、アキラは声を上げた。

「僕の答えはもう出てる。行くよ、皆が来ないと言っても僕はそうする」

何人かが居心地悪そうに体を動かす——。

「ふむ、とりあえず決まってることは何か。そこまで聞かせてもらわないとな、レオ」

「もちろんだ——ファー・ハーバーに活力を呼び込むには単純に人の活動拠点を増やしていくしかない。これが実に難しいことだが……すでに言ったが、ここにいるプロフェッショナルたちとなら可能だと思ってる。」

方針としてはシンプルだ。

ファー・ハーバーは大きな島ではない。

しかも島の中央部は危険地帯も多く、手を出すべきじゃない。そうになると自然、島の外周部。つまり海岸線を使うしかないと思ってる」  
島から持ち帰った古い地図を壁に貼り付けながら私は簡単な説明をする。

「それなら確かに現実的かもな。だが、それだけで足りるのか？」

「正直に言うけど、これ以上の詳しい説明は参加者によって変わってしまう。皆もどうするか決めてもいないのに、参加する前提で話を聞かされて愉快には思わないだろう？」

「そりゃそうだが、それだけじゃちよつとやる気にはならないね」

デーコンは飄々と言い、私は苦笑するしかない。

「言えることは準備をするって事だ。この連邦で、十二分にね。」

それでもきつと足りないだろうと思う。でも——初めに言った通り、今しかない。ここから上古湯は好転しないわけだから、いつ一気

に転がり落ちてもおかしくなくなってしまう。あとは現地でなんとかしていくしかないだろう」

「最前線で戦う、か」

「困ったことに私はそこでの経験は軍人時代のスタートから味わってきたんでね。楽観はしてないが、希望はあると思ってる。もちろん君たち全員が賛成してくれるなら、その確率はさらに高いものにできると思う」

何もかも足りないが、熱意だけは前面に押し出して伝えた。

自分でも久しぶりに集中したので疲れも感じるが、それだけに手ごたえはあった。あとは——離れないようにするしかない。

だがそれは“私にできる仕事”ではなかった——。

「将軍が提案し。それがミニッツメンの精神と合致するというなら俺が反対する理由はない。ああ、将軍。ミニッツメンは全力でその計画にサポートするよ」

「ありがとう。ガービー」

「礼はいいさ」

「——ミニッツメンの勇氣と希望がこの連邦を早くも飛び出していくって？そんな特ダネ、逃すわけにはいかないわ。私も参加する！」

「パブリックオカレンシアの報道に期待しているよ、パイパー」

「俺の仕事は傭兵だ。そして俺の雇い主はそこに座ってる。そいつがすでに行くを決めたっていうなら、俺の考えはないってことも同じだよな。俺も参加で」

「マジ——!?!」

「感謝する、マクレデイ。ケイト」

「あ、あのっ。連邦では見ることもない変異のある自然というものに興味があります。私も」

「ありがとう、キュリー」

ハンコックとディーコンは沈黙し、無表情のまま。

「とりあえず今日、いや数日かけても真面目に考えてほしい。」

呼びかけた以上、決してみんなが“損をする”ことはないはずだ。それじゃ、今日はありがとう」

ある程度の賛同者燃えることが出来たのだ。引き際は綺麗に、私の演説は終わった。

さて始まるぞ！

レオさんの話が終わると僕はすぐに自分の工房へと一直線で戻っていく。

ファー・ハーバーに向かう前にやらなくちゃならないことが山積みだ。これをこなすには殺人的スケジュールってやつを覚悟しなくちゃならないだろうが——なに、僕にはサイコもジェットもたっぷりある。

そう思っていたのだが……。

なんなんでしょうねえ!?これはっ。

「おいっ、なんでみんなここに来るんだよ!」

「……」

「なんだよ?邪魔だつて言われなきやわからないのか?」

動向を宣言したマクレデイ、ケイト、キュリーに続き。無言を通したハンコックまでもが入ってきて、幽霊のように部屋のあちこちからこつちに無言の圧力をかけてきた。

「——なあ、おっとこれは。お邪魔だったかな?」

「デューコンもか」

「あー、俺はそれじゃ後で」

「行くな、ハゲ!もうそのまま入ってきなよ、なんか話があるんだろ?」

これが嫌だったから。こうならないようにと真っ先に工房に来たのに、まさか彼らが平然とそこに入ってくるとは思わなかった。どうやらこれまでは“気を使って”ここを避けてくれたが今日だけは特別、ということか。

「よし、話せ」

「なにを?」

はあとケイトはため息をつく。

「あのね、あのレオは言ってるんだよ。『連邦から離れた小島にいる気の毒な連中を、俺達で助けてやろうぜ』ってね。あんたはそれに同行するって、もう決めた。あたしたちになんの相談もなくね」

「ああ」

「なんでよ!?!」

「悪いか?」

「あのな坊主、俺達のいる連邦でかなりのトラブルを抱えている。だいたいお前が言ったんだぞ『戦争が起こる』ってな。

俺もそう思う、だからここにいる。なのになんでここよりも状況の厳しいよその面倒をみられるというんだ?」

ふむ、なんとなくだがこの状況はレオさんにハメられた気もする。

詳細な計画は言えない、なんてやってたのは。こうして代わりに僕に話させ、やる気になれない連中をその気にさせてくれということか——期待にこたえられるかわからないが、役割をもらったからにはやってみようか。

「確かに今、状況は良くない。

自分も落ち込んだところから立ち上がったばかりだしね。今回はきつかったよ……とにかく色々と問題を解決しようとして、新しいもん弾が転がり出てきてしまった。ここで新しい問題に手を伸ばすのは馬鹿だってね、わかるよ。

実は信じてもらえないかもしれないけれど、レオさんから話を直接聞いた時はどう断ろうか少しだけ考えた」

「少しだけ?」

「あの人、僕と違って話がウマいんだよ。まず最初に派手なネオン色の看板見せて、裏にある荒れ地をどうやって“爆破”するのかの説明に入る……まあ、いいや。

要するに僕はあの人に早々に口説かれちゃったんだよ、みんなの言う通りにね」

「へえ、そんなに熱い口説き文句。あたしも耳元で囁いてほしいわ」

「美人の法律家を妻にした有能な軍人のなせる業だよ。僕みたいに自

分の事すらわからない、ガキに期待するな。

さっきのレオさんの話もその点ではよく考えられていた。

ニツクの依頼はカスミが見たという人造人間に寄る恐ろしい計画の真偽について。でもこれは言うほど簡単な事じゃない。

聞けばそこでは人造人間たちはかなり有利な立場にあるからだ。追い詰められた人間に手を差し伸べ、島の異変について解決を模索しているとか。

そんな連中に『君達、最悪のことしたいの?』とは聞けないだろう?」  
皆の顔を見ると「まあね」といった賛成の色が見える。

「ここで恐ろしいことにあの人——レオさんは考えたのさ。小さな島の状況を変えることで、ニツクの仕事を簡単にしたいってね。だから言つてたろ?この計画は別のものだった。

救済を目的とした計画ではあるけど、ミニッツメンとも切り離して。悪そうな人たちも含めて”過激な方法”でやってみようってね」  
「過激な方法、とは?」

「島の外から僕らがズカズカト入って行って、そこにあるダイスに手を伸ばし。僕らがふって放り投げる。あとは出てきた目が僕らにとっていいことが重要で、島の人たちに良いものであることは実は重要じゃない」

何人かはすぐには理解できなかったようだが、理解できたのもいた。

「——つまりこういうことか。俺達が関わったことで島の連中が全滅することになっても、構わないと?」

「逆に言えばレオさんの目から見て、その島に人が住むには一発逆転が必要なほど追い詰められている」

「俺達は重篤の患者を相手にメスを手に切り刻めってわけか。殺してもいいと?」

「そういうことだね。」

なんなら手を汚したくないからとジェットをしこたまぶち込んで息絶えるのをじっと見守ってもいいよ。安楽死もまた一つの解決策さ、善悪は関係ない」

うまく伝えられたかどうかはわからないが。レオさんの意思は僕というフィルターを通してここにいる仲間に伝わったことは間違いない——なんだかなあ。

「わかった。つまりレオは自分が言った通りのことを俺達に求めているってことは理解した——。」

それじゃ話してくれ。お前は、この話のどこにひかれたのか」

「……難しいんだけど？」

「説明がか？ 頑張れよ、若いの」

グッドネイバー市長にそう言われても、この場合は「わかった」とは言いかねる。

デイーコンは友人で、今でも相棒と呼べる存在だが。あれは根っこからレールロードのエージェントなのだ。ここでついいうっかり口を滑らせたなら、新しいトラブルがそこから大挙して転がり出てきてもおかしくはない。

「色々あるんだよ、色々あってね——うん。」

デイーコン！ 今から聞くことに関してレールロードとしてのコメントを聞かせてほしいんだ。

連邦の離れにある小島では人と人造人間が争わずに共存している。これについてどう思う？」

「——大変興味深い話ではあるな。」

だが、それだけだ。今の俺達にそこを気にする余裕はないんでね。インステイチュートにはやられっぱなし、今はB・O・S。もいて人造人間を根絶やしにすると叫んでいるんだ。しょうがないだろう。

これからも幸運を、と祈ってやるくらいだな」

「なに、それ!？」

ケイトは素っ頓狂な声を上げたが、僕の思った通りの答えが返ってきた。

「色々の中のひとつがそれだよ。僕は向こうの仲間からは見捨てられちゃったけどレールロードの顔がある。」

連邦とは違う人造人間たちのそのコミュニティとやらが本当にインステイチュートから離れたものなのかどうか。それに本当にそん

なことが出来るのかどうか、この目で確かめておきたい」

「それを素直に信じろって言うのか、相棒？」

「デイーコン、先輩であるあんたをみならって僕の真心を聞かせたんだ。そこから別のものを探そうとはしないでくれ」

「なら、聞かない方がいいんだろうな。お前を裏切り者とは呼びたくない」

「そうして」

過激な方法を考えるには情報が必要だ。そしてアカディアと呼ばれるところでは人造人間たちが最新の情報を持っていると聞いている。当然だがそれを手に入れないと、計画は先には進めないだろう。

「色々たっていったけどな。お前のミニッツメンとしてはなにがあるんだ？」

「……単純、リーダーである将軍をお助けしたい」

「ワオ、あいつの飼っている犬みたいだね。あたし泣けてくるわ、この雑巾ってね」

「同感だな。じゃ、お前のよく見せる悪党ではどうだ？」

マクレディら傭兵たちにコミカルに肩をすくめて答えてやる。

「こんだけ大きな計画だ。なにか新しい儲け話があるのかも、間違いないかね」

「例えば？」

「そこにいる市長に聞けばわかることだけど、この時代に安全な場所を生み出すつてのは大変だけど。同時に凄く儲かることでもあるんだよ。それを小さな島でいくつか増やすんだ、単純にキャップは百単位で毎月転がり込んでくる」

「おいおい。俺の偉業になんて言い草だ」

空気が変わっていた。よかつたこのまま終わってくれれば――。

「私からもいいですか、アキラ？」

「なに？」

「あなたには智者としての顔もあるはずです。私自身、そう思っています。」

私もあなたと同じくその島に興味をひかれています。あなたは  
どう考えているのか、聞かせてください」

「……うん」

「はい」

「——島では毎夜、霧が出てそれにまかれると人々は正気を失い。人  
造人間たちはそこに百年以上いるのにその原因を不明と考えている  
らしい」

「不思議な話ですね」

「ああ、本当に不思議だよ。なにがあるのか、知りたくなる」

V a u l t から持ち帰ったデータの中に面白い装置がいくつか  
あったが、使い勝手が難しいものがひとつ。

地上から直情に打ち上げること、周辺の天気を一変させるという  
ものだ。連邦では輝きの海と呼ばれるそこにたびたび襲うラッドス  
トームが有名だが。あれは南側の話、北で精一杯のミニッツメンでは  
これを使う理由はそれほどないのだ。

話はそれで終わり、あとはそれぞれで考えて。

そういうと傭兵たちは「雇い主があれじゃ、俺達の運命は決まりだ  
な」「嘘でしょ」と変わらぬ会話を交わしながら出ていった。キュリー  
は「今日はちゃんと寝てくださいね」とだけ言って、僕をベットに連  
れて行ったそうだったが。背中を向けた。

デーコンはそんな僕らをなにやら味わい部下そうに眺め。「誓い  
を忘れるな、相棒」とどういう意味かを問う前にさっさと来た時と同  
じく立ち去ってしまった。なんだよ、あいつ。

「で、なんでグッドネイバー市長はまだここに？」

「……」

「僕にはもう何も無いよ。あとはレオさんと——」

「お前、本当にもう大丈夫なのか？」

「!？」

「今回のことは本当にこたえているんだろ？調子だつて万全には程遠  
いはずだ、無理に元気にみせているけどな。頑張ってると思う」



「なにを——」

「ファーレンハイトが死んでから、お前はいろんなことに手を出してたろ。」

近くで見ていると雑なやり方だなとヒヤヒヤしてみているが、うまく結果を出していた。お前は傷ついている。俺が考える以上の怒りを抱えているのは知っている。

それを仕事と、あのキュリーってのが抑えているだけだったな」

「僕は失敗したんだ」

「ああ、ちよつとしたミスだった。ひどい結果になっちまったがな」

違う、イライラしながら僕は我慢できずに席を立った。犬のようにぐるぐると工房の中を回りだす。

「ちよつとどころじやないよ、致命的な判断ミスだった。結果は最悪ではなかったというだけ。」

人は失ったけど、ここは残った。この役立たずの壁はそのままに！」「ああ」

「ゲイジ！あのヌカ・ワールドのせいだつ。でもそれは言い訳だ。」

自分の警備システムを過信していた。ガービーに、ミニッツメンに兵士を送ってくれるように要請すればよかっただけだ。近くの居住地に声をかけたりして、打てる手はいくらでもあった。

なのに、へっ……僕は何もしなかった。

戦闘できないロボットに医者。無力な患者とそのわずかな家族。それを残して意気揚々とヌカ・ワールドへ！」

「その必要があったんだ。それにそこじや俺達はうまくやれた。誰もかけることなく戻ってこれただろう」

「代償はここで起こっていた——ここで奪えるものはすべて奪って、役立たずの壁だけ傷ひとつつけずに残していった。あのクソ野郎、サリーとかいう奴は大したクズだったさ。僕に屈辱を与えるにしても最高の形をやってくれたんだからね！」

感情が噴き出してくる。熱い、憎い！

「レオさんもガービーも責めてこないんだよ！」

僕は約束してたんだ。ここも、グレーガーデンも、スターライト・

ドライブインも。レキシントンに面した重要な場所だから、僕がちやんと機能するように何とかしてあげますよってね。なのにそのひとつを、僕はダメにした!」

「やめろ。見苦しい真似に意味はない。冷静になれ」「僕っ、僕はツ——」

かなり苦しきを感じながら口を閉じる。頭に両手をやり、髪をかきむしる——レイダーらしく伸ばし放題だった。色も変えていたし、戻すべきだ。キュリーに切ってもらおう——。

「ケジメはひとりでつけたんだろ。シケット・エクスカバーション、確認してる」

「最悪さ。そう思っただろ?」

「お前がレイダーってことで何もかもを焼いたことか?別に責めないさ、武器をもってそんなことをやってりや。そのうちどこからか真実って奴が零れ落ちて、同じくらいにひどいことが起こっただろうからな。」

おそらくそれがミニッツメンから、お前というミニッツメンに変わっただけだ。俺にお前を責める理由はない」「うん」

「だいたい俺はグッドネイバー市長だぞ?」

汚い仕事なら俺はお前以上のプロなんだ。むしろお前をこうして心配するくらいにな」

「ありがと、ハンコック」

そう答えながら、冷静になった僕の中ではなぜこの市長はなにかを聞き出そうとしているのか。その真意を測れないでいる。

「それとこれは伝えるべきかどうかかわらんが——」「なに?」「その、そこにな。ピッグマンの奴がいたらしい。偉い上機嫌だったそうで、見に行かせた奴がビビッてさっさと雲隠れしちゃった」

ピッグマンが——なるほど、あの変態野郎か。

採石場を丸ごと炎の鍋に変えた僕のやりようを見て、あいつはなんと名付けたのだろうか?いつか聞かされる日が来るのかもしれない。

「まずかったか?」「いや、大丈夫だよ」

「ならこの機会だ。俺には聞かせろよ」

「？」

「ヌカ・ワールドだ。お前、本当はあそこで何を見て、何を聞いたんだ？」

グッドネイバー市長、やっぱり油断のならないグールだ。

「報告は——」「聞いた差。そこには入ってなかった話を聞かせろよ、と言ってるんだ」

「まあ、いいけどね」

ハンコックは大悪党だ。個人の感情だけでは動くことはないが、取り扱いを間違えるといつ敵になるかわからない火薬庫みたいな存在だ。それに恐らく——この話はハンコックのような人にこそ知っておいてもらった方がいいかもしれない。

判断はしたが、実を言えばここからが難しかった。

話し出すのに僕は大きなため息が必要だった。

「なんだ。大きさにやってるが、悪い話なのか？」

「良くはない。良くはないけど——悪いかっていうのもちよつと違う」

「ますます面白そうだ」

「どうかな……まずあそこで馬鹿どもの王様やってたら、自分でも信じられないけれどあそこでどうして僕が王様をやれるようになったのか。思い出すことが出来たようなんだ」

「ほう、よかったじゃないか」

「どうかな。肝心の昔の記憶はちつとも戻らないのに、頭をいじられていた間だけ思い出すなんてね。腹が立つ」

「でもそれは悪い話じゃないだろ。本題に入れよ」

「——いくつかの施設を解放した結果。なんかあそこはとんでもない場所だつてことが薄々わかってきたんだ」

「それは？」

僕はハンコックの目を正面から見つめる。

「ジョン・ケイレブ・ブラッドバートンだ」

「そいつは誰だ？」

「旧時代の経営者、ヌカ・コーラの開発者でもある。あのヌカ・ワールド

ドを作った元凶」

「それがどうした？」

「まだ予測だけで実際に自分の目で見たわけじゃないから断言はできないけど——あそこには恐らく戦前。最新式の、それも協力的な原子炉があるようなんだ」

「それが、どうまずいんだ？」

あ、そこはわからないのか。

僕はちよつと安心したが——ま、だからって喜んでもしようがない話だ。

「強力な電力を長時間にわたって供給することが出来るシステム。これならどう？」

「んん、それならだいぶわかりやすくなった。ふむ——あそこにいるのはハイテクレイダーだったな。連中に任せていいのか？」

「良くはない。良くはないけれど、正直に言えばあいつらにとっては持て余すものだ。むしろこれが問題なのはインスティチュートやB・O・S。なんかがヤバイ。」

技術開発部門を持っていて、それを活用するだけの知識も技術もある。このことがどちらかに漏れたら、すぐにでもあそこに兵が送り込まれるだろうね。最悪だよ」

レイダーの天国に乗り込むのがパワーアーマーか人造人間の兵士達か。

エルダー・マクソンという男は若いが大した人物だったとレオさんが言っていた。知れば間違いなく連邦を放り出す決断を下すかもしれない。

何よりの問題はこのどちらかにあそこが占拠されれば、僕が付け入る隙間などなくなってしまふという事。

そして間違いなくもたらされる膨大なエネルギーは、どちらにとつても新しい扉をたたき破るチャンスを与えてしまふ。

「なるほどな……」

「想像するだけでも寒気が走るよ。恐らくインスティチュートは人造人間の兵士の量産がさらに進むだろうし。B・O・S. にとつても

安定した高出力のエネルギーを利用したこれまでは実現不可能だった技術を用いた物騒な研究がいくつも始められる。

そして最重要施設になったヌカ・ワールドには誰も入り込めない警備が入る——」

「お前は以前、ミニッツメンをあそこに送ろうと考えていたようだが？」

「無理だよ。B・O・Sとは戦えないし、インスティチュートを相手にしてもあそこでミニッツメンは戦えない。

来るなら本気で全力で攻めてくるんだよ？ようやく武装が整いだした状態のミニッツメンが全滅しない理由はない。

レイダーを排除してあそこにいた人々を解放したとしても、結局はまた強力な武器を持った兵士があらわれたら降伏するだけだ。役に立たない。皮肉だけどレイダーの方がまだマシ」

なのにミニッツメンは連邦ではまだまだ不安定で、B・O・Sがいつインスティチュートへと近づくかドキドキしてる。

そして僕自身、身軽にならなきゃならないのにコベナントを失って後退している。巻き返す、言葉にすれば簡単だが、どうしろというのか。

「まだ考え中か？」

「考えてまだ1日。名案はまだどこにもないみたいだ」

「ふむ——そうなるともうひとつばかり解決しなきゃならない問題が出てきたんじゃないか？」

「なに？見落としてた？これ以上は厳しんだけど」

「あの人造人間の2人のことだ」

あの男女か。

「お前、アレをどうするつもりだ？」

「どうするって——レオさんはディーコンと。レールロードと取引する、僕も勧めたさ。彼らはミニッツメンが最初に引き受ける人造人間ってことになるだろうね。もちろん正体は秘密にして」

「そういう意味じゃない。あいつらがやったこと、わかっているんだろ？」

「まあね——」

口の中に苦いものを詰め込まれ、それを飲み干す感覚に眉をひそめた。

そう、僕はわかっていた。このコベナントの警備システム。レイダーが近づいてきた時、それがまったく反応しなかったのは“誰かが装置の電源を切った”からだ。そしてそれを可能とするには、僕のプロテクトを解除できるだけの高いハッキングスキルがなければ不可能。

どんな心変わりがあったかは知らないし興味もないが。

少なくとも実行する直前まで、あの2人は仲間と一緒に行動してははずだった。

「レイダーは殺す、そうだったな？」

「それ僕の口癖になってる？なら気を付けないとな——」

「笑い話じゃないぞ。お前、構わないのか？」

僕は無言のまま肩をすくめた。

構わないわけじゃないが……。不思議なことに僕はあの2人にはそれほど怒りを抱いてはいないようなのだ。恐らく、実行時にレイダーの側から飛び出したことを評価しているのだと信じたいが。

ほかの逃げた人造人間たちに抱く憎悪を悪意に変えて彼らにぶつけてやろうという気はまったくくない。

だが、彼らは仲間と一緒に逃げたほうが良かったのかもしれないな。

「話をするよ、後で問題にならないように」

「大人になったな」

「からかわないでよ。自分でこっちの手元に残ったんだから、少しくらいはね」

ククク、と笑いながらハンコックは立ち上がる。

「それじゃそろそろ名案を考える続きに戻ってもらおうか」

「もう聞きたいことはない？」

「今はな。またなにかあったら戻ってくるさ」

「たまには市長も一緒にそれを考えてみない？」

「俺には俺の流儀があるさ。とりあらず今はおしやべりに喉が渴いた、酒が必要だ」

ヒラヒラと手を振りながら、ハンコックはさっそうと立ち去っていく。

やっと僕はひとり。これでやっと静かになったわけだが——なんかあんまりやる気が出なくなっていた。

数日後、私は話した全ての友人たちから参加の意思を聞くことのできた。

その間私はアキラに頼まれ、人造人間たちのトレーニングを見ていた。これから3週間、教えたメニューをこなすことが出来ればとりあえず兵士として最低限の体力を手に入れることが出来る。

ファー・ハーバーへと向こう事は決定したが。しかしそれはすぐではない。

とにかくこれは短期決戦でやる——この連邦を離れるにしても長くは無理だ。気が付いたら連邦で戦争が終わっていたではシャレにならない。それではショーンの救出の唯一のチャンスを失う。それは困る。

ということは何も無い島に居住地を作り。それを線で結ぶまでを可能な限り短時間で行う必要がある。

人、資材。色々とこちらで準備していく必要がある。

さらにミニッツメンとしての仕事もある。

進めていた北東部の調査はそろそろ終盤だ。そろそろ新しい居住地のための住人の募集を始め、居住地を結ぶメールマンの用意もしいといけない。

それも終わったとして、ミニッツメンには次の目標が必要となってくる——調査で自らを精兵であると証明した兵士たちを再編成。少しでも戦える部隊を増やさなければならぬ。

今もミニッツメンはB・O・S.を相手に勝てる要素はほとんど皆無と言っているが。連邦の南部——あのマクレディがかつて所屬していたガンナーズとよばれる傭兵相手に戦えるようにしなければ、ミニッツメンはこれ以上の成長はありえない。

「そうなるもまたレオさんとはしばらく分かれて行動することになりますね」

「アキラ、君に手伝ってもらえるなら私はもつと楽が出来そうだ」

「將軍らしく部下をこき使うやり方を選ぶんですか？給料を上げてくれないなら嫌です」

「君が要求すれば、ガービーも聞くんじやないかな——まあ、それは冗談として、君も時間が必要だろう」

「そうですね。レキシントン周りの居住地はコベナントを攻撃されたことでかなり後退した。遅れは取り戻さないと」

「——手段を択ばずに、ということかな」

「ガービーには内緒にしてください。そのためにあんな約束を文書にしたんですから」

「わかった。君に任せただ、私も口は出さないよ。どうせファー・ハーバーではそれが必要になるだろうしね」

「あの人、怒るでしょうね」

「んん、そうだね」

短い会話を交わした後、レオさんはデイーコン、ガービー、パイパーを連れてここを出ていった。

ファー・ハーバーとやらに行くための準備を僕はしなくてよくなったが、それで楽になることはあまりない。

仕事は山積みだ。

——その若者は自分をコンドウと名乗った

——君を知っているようだった

——彼らの組織には名前がないらしい

僕の友人たちに暗殺者が放たれた。



僕を追い、僕を知っているという奴らがそうした。

そのことを考えると頭がおかしくなりそうだ。抱える怒りが、さらに大きなものとなる。いつしか正気を保てなくなる日もあるだろうが、しかし僕は奴らを追い続ける。

互いに互いの背中を追い続けるというわけだ。

それは円を小さく描く動きとなり、いつしかどちらかの手が先に背中に触れることになるのだろう。

奴らにその機会を再び与えるつもりは僕にはない――。

## Women

かつては人影もなかったオバーランド駅だが、今ではミニッツメンの仮の活動拠点として、また川をまたいだ先にあるグレーガーデンの活気も分けてもらい。ミニッツメンを中心に大した賑わいを見せている。

若きミニッツメンは人の中をかき分けながらこれからする任務についての注意点を頭の中で繰り返す。

ひとつ、任務は着実に。あと高圧的にならないように、相手を尊重して言葉に気を付ける。

ひとつ、ミニッツメンの評判を落とさないようにしつつも。断固としてそれをやり通す。

訓練上がりの彼にとって最初の任務だが。だからこそ失敗はより大きく自分の評価を落とすぞと、教官にしっかりと脅されてここにいる。

「——さん？それと娘さん？」

この時間、本当なら割り振られた仕事をこなしているはずの母子を噂に聞いたようにまったく関係ないところで出会う。自分の幸運に感謝する。

「ミニッツメンからの連絡としてきました。聞いてください——『ジモンヤ前哨基地に受け入れの態勢が整いました。直ちに帰宅し、明日の正午。ミニッツメンの指示に従って護送団に加わってください』」

母親は顔を真っ青にすると「ちよつと待って！」と声を上げ仕方なくそこで一旦連絡事項の読み上げを止める。

楽しそうだった母子は今是不安な表情を浮かべて互いに寄り添い。なにやらグチャグチャと言い始める。

「すいません、ようするにどういうことでしょう。マダム？」

「あの人。あの人があることを許すはずがないわ！あの人に聞いて。いえ、合わせて頂戴」

「……失礼ですがマダム。これはミニッツメンからの要請ではありませんが。個人の関係をここで持ち出して、なにか状況を変えることが出

来ると思うなら大間違いですよ」

「あの人が！ミニッツメンの將軍でもある彼が私たち親子を自分から遠くに追いやるはずがないのよ！」

唇を固く閉じ、わずかに天を仰ぐ。

まったくこの——淫売共が。

噂を、それも自分達からそれを流していると知ってはいたが。こうして礼儀をつくしてやってるのに、それか。

「マダム、冷静に。それと理解していないようなのでもう一度だけ確認します。」

あなた方親子はミニッツメンと契約し。後に暮らす居住地が確定するまではここにある仮の居住地で共同生活をする。そういうものだところに来た時に説明があつたはずですよ。

あなたたちにお家は以前は別の家族が住んでましたし。明後日以降は別の家族が移り住む予定になっています」

「そういうことじゃないわよ！この子の父親となる人はあなたたちミニッツメンの將軍で——」

「將軍は！確かに、あなたたちの力になりましたよ。」

ここになんでいられると思ってるんです？あなた方の生活態度や噂はいいものじゃない。それでもいられたのはなぜだったのか、考えたことは？」

若者も瞬く間に限界に達し、隠していた嘲笑の顔を見せながらも諭していく。

親子は自分たちの未来が急に別のものに変つたことを理解し始め、体を震わせる。

「今日の作業も誰かに押し付けたんでしょ。別に構いませんからこのまま帰宅して準備に入つて。伝えたように明日、アナタたちはここを発つのでね」

「將軍に合わせて頂戴。彼に会うまでは動かないわ」

「聞いてないのか？將軍は私用で休暇中。いつ復帰されるかはガビー以外誰も知らない。」

それと忠告するが、指示に従わないというなら好きにしてい。た

だしそれは我々との契約を踏みにじったということで破棄し、今後我々の居住地に入れるチャンスは難しくなつたと理解しないとな」

「……女を脅すの!？」

「なあ、いい加減現実を知つたらどうだ？ わからないのか？」

あんたみたいなのがきのいる女を將軍が本当に大切に思つてるなら、ここに放り出して休暇になんか行かないさ。つまりはそういうことなんだよ」

「侮辱よ！あなたの顔、絶対に忘れないから！」

「好きにしな。ただ警告はしたからな。」

俺は戻つて本部にあんたらの態度が問題になるかもしれないと報告するつもりだ。明日、それが事実だとなつたらトラブルは速やかに排除する。俺達は連邦の人々を救うためにいるんだ。

將軍が遊んだ女を気持ちよくさせるためにいるんじゃない。それが理解出来るなら、この幸運に感謝して、さっさと出て行つてもらおう。將軍に期待はするな。これはガービーも許可している案件だ」

「チクシヨウ、馬鹿にしやがつて……！」

小娘のように大粒の涙をぽろぽろとこぼし、娘は「ママ」と慰める中。若きミニッツメンはとりあえずもういいだろうと、鼻で笑つてから親子に背中を向ける――。

まったく胸がすつとしたが、徐々に胸糞悪さが募ってくる。

あの母娘にはずつと頭を悩ませていた。仕事はさぼるし、自分勝手な主張をして、なにかにつけて將軍との関係を宣伝するかのようにしやべつて周囲の反感を買っていた。

だが將軍も面白い趣味している。確かにあの母親はいいモノをもっていたし。娘はまだガキだが数年もすればキャップを稼げるくらいに将来性が――ここで若者は考えを止めて切り替えようとする。

生まれの卑しさが自分の魂にこびりついていることを自覚している。若くしてポン引きの仕事を仕込まれたせいで、ミニッツメンとなつてもまだ思考の切り替えがうまくない。

そして思うのだ。

伝説のガービーと違い、將軍とやらは自分と変わらず随分と俗っぱ

い人物らしい。

遊んだ相手を捨てるのに、冷酷に自分のような新入りを使うなんてね……。

翌日、憔悴した親子はミニッツメンに従って北の果て。ジモンヤ前哨基地へと発った。

彼女たちのその後については、特に噂は聞こえては来ない。

男どもが眠ったのを確かめると、パイパーはゴソゴソと起き上がる。

デイーコン、コズワース、カール、ガービー、レオにパイパーらボストンに向かう一行はコベナントを出て最初の夜を野宿で迎えていた。

「……パイパー、眠れないのか？」

「う、うん、まあね。ちよつとおしゃべりにつきあつてよ、落ち着くかも」

レオの隣に座ると、それまで彼に体を寄せて寝ていたカールが「しようがねえな」というように立ち上がると、どこか静かな場所を探して立ち去っていく。なんて賢い犬なんだ！ありがとう！

「そういえば久しぶりだね。しばらく会わなかった」

「だね！——そうだったね。まあ、ほら。こつちも仕事があつたし、なかなかね」

テンションが跳ねるのを抑える。

ここ最近やること全てが最悪だったパイパーにとって、このチャンスをモノにすることで全てをチャラにしてしまうような。例えるならばそれは津波のようにすべてを押し流していつてくれるのではないかと、期待させるものがあった。

「聞いたんだけど、ヌカ・ワールドつてところで奴隷にされてたって」「ああ、うん。まあね」

いきなりこれはダメだ。

「そつちはなんか戦ってばかりだつて聞いたけど」

「取材かい？でも今回は断ろうかな。この片腕、信じてもらえないだろうけどまだピカピカの新品なんだ」

「——それ、本当？」

「ここにいる君以外の全員が知ってるよ。君が悪いから、なかったことにしようって勝手に決められてしまったし」

「そ、そう」

「だから君の話聞かせてくれ。で、なにがあつたんだい？」

これは降参するしかないようだ。

全てはガービーから聞かされていた北で神出鬼没のレイダーについてその謎を解明してやろうと——レオのショッキングな女性の噂から逃げて——ダイアモンドシティを後にした。

まずはミニッツメンの勘違いではないと確認したくて、バンカーヒルの商人たちに噂を聞こうとパイパーは考えた。

そこにそいつは現れた。

以前に比べて恐ろしく顔色が悪くなった。腐れ縁の同業者、ソニーがいきなりパイパーの前に現れたのだ。

最近、グッドネイバーから姿を消して何をやっていたのかと思つたが。相手は昔と変わらぬ調子で声をかけてきて、互いの近況に触れ。ソニーはそのレイダーなら心当たりがあると言い出した。

知り合いだからと気を許したということはないはずだったが、とにかくパイパーはその話に飛びついた。

そしてそれは——罨だったのだ。

ソニーに連れられて、たまたま通りがかつた民家の角を曲がつたところで意識を失つた。思うに自分の視界の外側から襲われて一発でのされてしまったのだと思う。

そこからの記憶はもう、あいまいになる。

写真を思い出すように、絵のようなヌカ・ワールドという奇妙な場所のイメージはある。そこにハンコックらがいた時も。ケイトが素っ裸で武器を振り回し、なにか——誰かの返り血を浴びているとこ

ろとか。

次にはつきりと思い出せるのはベットの中央だ。

とにかく最悪な状態だった。気持ちは沈みきっていて、体は重くて動かすことを考えるの嫌だった。太陽のまぶしさが目に居たくて開けることも出来ず、唇は鉛となって動く気がしない。そして思考は——グチャグチャでどうしようもなかった。

「キュリーがまだ治療に時間がかかるって言ったけど、それも理解できてたかどうか——」

「随分とひどい経験をしたんだね」

「奴隷？まあね、あたしの伝説にまた新たな1ページが追加された。でもナットに話せないよね」

「黙っておくのかい？」

「それも無理そう。『こんなに留守にして。お姉ちゃん、自分にこんなかわいい妹がひとりで町の中に残されているって忘れてたの？薄情者っ！』って言われるよね。覚悟しなきゃ」

数日中に妹に会える——ホツとするものがあるが、だが今はこの瞬間に集中せねば！

「パイパー？」

「レオ。あたしさ、どうもツキに見放されちゃってるみたいなんだよね。自慢の勘もさっぱり役に立たないし、ケイト——いいえ、アキラたちに危ないところを救ってもらってるくらいなもの。なにをやってるんだろ」

「そのようだね。ふふふ、君がしゃべらなかつたっていうのも信じがたい」

「それ！それもある。本当に苦労したんだよ。自分じゃ普通にしゃべっているだけなのに、周りは『大丈夫？何言ってるんだ？』って皆揃って言うんだもの。最初は冗談かって思ってたけど、さすがにね」

「……」  
「本当に最悪——ああ、あの子。あたしアキラにもひどいことしちゃったんだよ。」

調子よくないのに、感情的になっていきなり殴ったり。罵ったりし

たけど、謝れなかったな」

「それは良くないな」

「ね、彼。次に会ったときに謝ったら許してくれると思う？それともあたし、もう絶交されたかな？」

「大丈夫さ。彼は許してくれるさ。でも恨まれてはいるだろうから、この先付き合うつもりなら嫌味くらいは覚悟した方がいいんじゃないか」

「ああ、やっぱ最悪」

ダメだ、本当に落ち込んできた。

弱い女を装って距離を縮めようと思っていたが、この作戦は今やるにはあまりにも自分が傷ついてしまった。

「その、話題変えよ。ファー・ハーバーだっけ、いつくらいになりそう？」

レオの顔が引き締まった。日に照らされる彼の顔、なんかセクシーだ。

「すぐは無理だよ。準備が必要だし、ここにすぐに戻ってこれないからいろいろとやっておくこともある」

「そっか」

「とにかくしばらくはミニッツメンにかかりきりになる。東部の入植をはじめながら、サンクチュアリに行つて新しいメールマンを用意しないといけない。」

部隊も今のうちに再編成して、新人も少しでも使えるように鍛えておかないと」

「そうだね——サンクチュアリに行くんだ」

「ああ、そうする必要はある」

「あのさ、一緒に行つてもいいかな？その——」

言うんだ！あなたと一緒にいたいからって。このまま目を見て、ちよつと濡らしたりすれば！確実っ。

「ひよつとしてパイパー、メールマンに興味が？」

「へ？」

「ボクの始めた事業だよ。メールマン、居住地を結ぶ配達人たちさ」



「ああ、うん。そうだね、きつとそう」

「なら一緒に行くかい？私が直接彼らの仕事を含めて、案内するよ」

「ほ、本当？やった、嬉しいな。ははは」

夢は碎けた。思った以上に長く話していたようだ、ガービーが寝ているあたりから動きを感じる。交代の時間が来たのだ。

パイパーの脳裏にはナツトの姿があった。

その妹はあの日と同じく、美人の姉の情けなさに憐れむ目をして「敗北者め」とはつきりと口にはしている。

違うのだ、妹よ。

これは決して敗北ではない。姉は今日、負けたかもしれないが。完全な敗北ではありえない。

これは未来への切符だ。完全勝利、それを手にするための輝かしいルート。そこに今、自分はいるに違いないのだから。

—————

隣に眠る男に揺り動かされ、マクナマラは自分の腕のピップボーイがBeep音を響かせていることにやっと気が付いた。どうやら久しぶりにぐっすりと深い眠りについてしまったようだ。

「ごめんなさい」

「……」

ベットから体を起こし、備え付けの通信機のスイッチを入れる。

「マクナマラよ。今何時だと思ってるの」

「夜中にすまない、監督官。だが例のパイプラインの腐食箇所が特定できたんだ。だが、どうもあんたの意見が必要なようだ」

「そう、わかった」

「すぐに来てくれるか？」

「もちろん……シャワーで頭をシャッキリさせるから、しばらくは休憩していて」

「ごゆっくり——」

ブルーライトに満たされた部屋の中を、素肌をさらしたままマクナ

マラはそのままシャワールームへと向かった。

熱いシャワーですつかり目を覚ますと濡れた髪のまま——まだ横になっている男に。久しぶりに戻ってきた英雄。レオの頬にキスをして「寝てて。仕事だから」とつぶやくと部屋から飛び出していく。

2人の人には言えない関係はもうずいぶん長い事続いているが。いつ終わるのかは——まだどちらもわかっていない。

監督官の仕事で思い出すのは、15の時。小娘をひとり、善人の監督官は自分の部屋に呼ぶと私の顔を正面から見て賛辞と共に私が次の監督官だと告げてきたことだろうか。

驚いて、喜んで。そしてそれを知られまいと必死に落ち着くふりをしようとしていた自分。

そのすべてを見抜いていたのであろう前任者は「君にこの席を譲る日が来ることを楽しみにしているよ。ようやく、私もこの重大な責任から解放されるんだからね」と言っていた。

私はそれを大人として子供をあやすような、嫌味の混じったものだと思っていたが。実際に監督官となると彼の言葉はまさしく真実であつたのだと思ひ知らされた。

他のVaultでは知らないが、このVault 81では監督官は死ぬまで続けることはほとんどなかったらしい。それが伝統のように監督官は自分の後継者を見つけると、その子供が十分な大人になったと判断した時点で責任と監督官の座を譲ってきた。

もちろんそれは全員ではないけれど、200年で多くはそうやることに正しいと考えられていた。

私の後継者が生まれるのはまだ先の話で、その決断を下すのもさらに先のことだ。

今いる子供たちの中で監督官となれる素養のある者がいれば、早ければ7・8年で引退することが出来るが。そこで誰もいないとなれば次の20年後まで待たなくてはいけない。

パイプラインの修理で問題というのは、一部が下水管に近すぎてそ

ちらにも影響があるかもしれないということだった。

さらに調査が必要で、出来るだけ短時間で確実な結果を得られないかと皆で知恵を絞るということで解散する――。

時間を見るともう午前3時を回っていた。  
できればベットに戻って彼ともう一度楽しもうかと思っただが。諦めることにした。

ここでは全ての住人がV a u i tが正しくあるために努力しなくてひけない場所だ。すでに自分の職権を利用して昨夜は楽しい時間を過ごすことが出来た以上。監督官室に行つて、朝が来るまで山積みの仕事を相手に戦つた方がいいだろう。

大きく息を吸い込んだが。ため息はつけない。  
自分に気合を入れて歩き出した。

私が監督官の椅子に座つた日。

前任者は「これで君は監督官だ。V a u i t 81を、我々を予期未来へと導いてくれ」。そういうと肩を落とし、背中を丸めて静かに部屋から出ていった。それから数日かけて、まるで時が攻めてきたかのように彼を老いさせるのを私は見た。

重大な責任から解放された彼は、ようやく再びただのV a u i t居住者となれて喜んでいた。

数年後、汚水管の修理で事故にあい。感染症を併発して帰らぬ人となったが、ずっと幸せそうだった。

未熟な監督官にV a u k tは容赦しなかった。

私はたちまちのうちに厳しい決断を何度も下し。結果が良くても悪くても、人のいない部屋の中で声を殺して泣きながらかみしめる日々。前任者は監督官であることをやめると、その経験を新人のために生かすことを完全に拒否した。

彼の言葉は「君に指導者はいらぬ」だけ。確かにそうだろうと思う、いくつかの成功が私にその力があることを示し。そして失敗が私が未熟であることを攻め立てたのだから。

つらい決断を下す中で、私も又自分を知らずに追い詰めようとしていた。

特に傷つけられた最初の山は、私たち若者がついに大人としてつがいとなり。次の世代の子供を作る時だった。

私は自分の体の持つ魅力を十分に理解していたものの。同世代の男たちは私が監督官となると途端に興味を失ったように振る舞っていた。さすがにこの時は危険なものを察したか、奇跡的に前任者はかつての自分の仕事場に来て私に短い警告をくれた。

「いいかい、監督官。このV a u l tでは人口は正しい計算の上で増やすことになっている」

「ええ、わかっています」

「そんな物分かりのいい返事はいらぬ。今は聞くんぬ——いいか、人口は勝手には増やせない。すべて君が決めなくちや始まらないことなんだ」

「はい」

「そこには当然だが君という女性も入ってくる。今回だけだ、今回だけまずは聞かせてくれ。君はどうするつもりだ？」

「もちろん……誰かを選ぼうと思つてます。子供は好きだし」

「よかつた」

「でもそれにはまず全部の選択肢を揃えてから決める事です。それが監督官として、正しい事でしよう？」

前任者はすぐには答えなかつたが、なにかを決断すると口を開いた。

「いいか、マクナマラ？もし君が誰か選んでもいいという男性がいるなら、まずリストの一番最初にそいつと君自身の名前を入れるんだぞ。間違つても、いいか？間違つても最後に加えようとは考えるな。君の考え間違つてる」

「なんてことを！それはまるで——」

「だが必要な事だ！いいかい、マクナマラ。たった一度だけ、この一度だけだ。君に忠告しよう。」

次の世代の子供たちを生む母親は、まずは自分であると決定してし

まうんだ。いいな？わかったな!？」

私は監督官として判断した。私のやりたいようにやるのだと。

リストの最初に、友人と彼女を愛してくれるであろう穏やかな男の名前を書いた……。そして完成したリストには、私の名前はどこにも残っていないかった。

別に遠慮したわけじゃない——私は私自身の体の魅力を理解していたが。男たちの心までは理解していなかった。

一緒に育って長なじみたちは、私が監督官となると私の女としての評価をないものとして処理してしまつたらしい。残された男たちは私に興味は全くないのだといい、他の組み合わせに入れた男たちは自分達も同じだと言い放つたからだ。

前任者の忠告の真意はここにあつたのだ。愛のある家庭は作りたいが、その相手がこのV a u r t の面倒を見ている監督官なんて御免だというわけだ。そして私自身、意地のようなものもあつたのかもしれない。

相手がいないのだからと深くも考えずにリストを完成させ、実行させた……。

マクナマラの名を持つ一族は、かつてはアメリカの上流階級として。政府の要職のあちこちで携わり、力を発揮していたと両親からは聞かされていた。

その教えは、両親がこのV a u r t 81ではただの技術者のひとりで終わってしまい。自分達こそが監督官になれなかったことへの不満があつたからだろうと思う。子供の頃は世襲制ではないのだから仕方がないと思つたが、大人になるとそう簡単な話でもないのだと理解した。でも完全には理解はしていなかった。

それを知つたのは、両親が私が家族を持たないのだと決断したと知つたとき。

マクナマラの血を絶やすのかと半狂乱になつた。監督官として居住者である両親に仕事の内容を離さなかつたことも、激しく責められた。悔し涙を流しながら憎悪の言葉を娘にぶつけるアノ父の姿は忘

れられない。

——お前は優れた監督官をやっているつもりなんだろう。

——だがそれは勘違いだ。

——Vault 81に入ってからこの200年。マクナマラは常に勝者ではなかった。監督官であり続けることはなかった。

——だが希望はあった。お前こそその希望だと私たちは喜んでいたので。

——お前は自らその体に流れるマクナマラの血を断つと決断した！

——Vaultでは住人は計算されて子供を産むことになっているとわかっていて！なのにそれでいいと決めてしまった！

——もうここに希望はない。

——マクナマラの栄光も消える。このVaultはただの墓だ。我々は生きながら死者をやる羽目になってしまった。

——どうしてこうなったんだ？

それからしばらくして両親はVaultを出ていった。

娘である私をひとり残し、べつのVaultで生き延びているはずの親戚を探しに行くのだと言って。連邦から離れていった。

もう生きて会えることはないだろうと理解しているが、後悔だけが強く残された。

仕事をしていると食堂から連絡が来て「こっちで食べてほしい、監督官」と言われてようやく数時間が過ぎていたことを知った。作業を切り上げて食堂へと向かうと、丁度食事を終えたレオと廊下ですれ違う。

「あら」

「ああ、おはよう」

「おはよう——もう行くの?」

「部屋に戻って支度したらね。君も今までずっと仕事?」

「あん、違う。もう寝る気にならなかったから他の仕事をやってたわ」

「そうか。ご苦労様、監督官」

浮かべる笑顔がまぶしくて、思わず下腹部に火がともるような熱を感じる。

彼は私の知らない男だった——強く、優しく、そして監督官である私の体を愛せる。見ず知らずのこのV a u l t 81で英雄的な行為を果たしてくれた彼のために部屋を与えたのはこうなることを考えていたから……否定はしない。実際にそうだった。

それでもこれはお互いにとっての都合のいい関係。

レオに近づくだけで湧き水のように枯れることなく欲望はあふれ出るが、私はもう子供を作る権利はない。家族もない。

でも周期的に襲ってくる生理現象が、まだ私が女でも。その残り時間はほとんどないと同じだと囁いて惑わせてくる。

体を入れ替える一瞬。

無意識に指を伸ばして服にからめ、自分の口元を彼の耳のそばに近づけていた。

「待ちきれないわ、すぐに戻ってきてくれる？」

「——とりあえず今日はここに帰ってくるよ」

「それは楽しみ」

すぐに体を離すと、ごめんなさいと笑顔で謝り。なにもなかったように歩いて廊下を曲がった。

だがそこでついに足を止める。

彼が欲しい——熱を帯びた向こうから自分の声が聞こえる。いつそ閉じ込めてしまったとはと、正気ではない考えも頭によぎったりする。だが私はそのすべてを拒否しなくてはならない。

レオはこの連邦にまだ生きていると信じている昔の家族を求めている。

私が彼をこのV a u l t 81につなぎとめようとしても、私は彼に部屋以上のものを与えることは出来ない。だから私はこの孤独の中で、この収まらない愛の記憶と共に苦しみながら生き続けなくてはならないのだ。

## アンストツパブル

工房でミニッツメンからメールマンへと出向中のジミーに来てもらい、僕はミニッツメンが持っている最新の連邦の状況を理解しようとしていた。

「……だいたい、こんなところですか」

「うん——うん」

「なにかありますか？聞きたいこととか」

「聞きたいことってのはないけれど。なんだね、ミニッツメンは順調。そういうことだ」

「ええ、そういうことです」

おかしな話だけれど、レオさんやガービーがボストンで襲撃を受けて大騒ぎしている間も。命令を受けたミニッツメン達は粛々と任務をこなし続け、結果を出していた。

喜ばしい事だが。となるとレオさんも簡単にはファー・ハーバーとやらに向かう準備には取り掛かれないのかも。

「ところでメールマンは？そっちはどう？」

「まあ、良くも悪くもって」

「順調ではないんだ」

「信用出来て、腕にも自信がある奴ってのもなかなか大変です」

「けが人は？」

「多いです。でもまだ死人はひとりだけ」

「ふん」

落ち着いている連邦北西部とはいえ、思ったよりうまくやれているみたいだ。

「スーパーミュータントの一团に出くわして、運がなかった。手傷を追って必死に逃げたようですが。居住地まで引つ張ってきちやっただもんで」

「うわあ」

「そこにはミニッツメンが居たんで対処は出来たんですが。助からなかった」



「そうか——残念だったね」

確かに優秀だな。僕は心の中でそうつぶやく。

元はミニッツメンに全部おつかぶせたかったが、ガービーが嫌がり。また生まれたばかりの組織に多様な部門を作る余裕はないというところでレオさんと僕の共同で設立した支援団体というか、会社みたいなものがメールマンの誕生経緯である。

将来的にはミニッツメンと合流させる、くらいの考えで野心的に始めたことだったが。こんなに上手くやれてるならそのまま続けさせたほうがよさそうだ。

そうなると問題は……。

「人足りてるの？」

「予備戦力が足りませんね。でも、こればかりは——」

「だよね」

当初は元ミニッツメン、もしくは候補生から選んでいたが。

今はバンカーヒルの大商人、ストックトンから信用できる傭兵を紹介してもらった形へとかわってきている。やはりミニッツメンとは仕事がるで違うので、数人を覗くとミニッツメン関係者は傭兵よりも劣って見えるらしい。

人数に関してはまた何か考えないといけないだろうが。現状維持で、しばらくは様子を見るか。なにかあればレオさんの方でもなにかやるだろうし。

「B. O. S. は。奴らはミニッツメンとどうなった？」

「そつちも別に何も。出くわすことは多いですけど、特にめめ事はないです」

(今のところは、か)

おそらくだがB. O. S. は目的であるインスティチュートとの決戦に集中したいだろうから。自分たちの地元ミニッツメンが足を伸ばしても最初は見て見ぬふりをしてくれるかもしれない。

だが、それも程度による。

順調に動いている物を邪魔するのは良い事とは思えないが。だからといってうっかり相手の我慢の線を読み間違えて踏み越えてしま

うのはなんとかしたい。

(……レオさんとガービー、頑張つて)

結局分かったことと言えば、今のミニッツメンに僕が口出しする必要はなさそうだし。つまりは自分の仕事をさっさと終わらせることがなによりも重要ということが改めてわかった。

「ああ、そういえばレオさんにメールマンからひとり空港に見張りを張り付けてみては？」って提案してただけど」

「聞いてますよ」

「どう？出来そう？」

「やれそうなのはいますけど、余裕が——」

「わかった。ありがとう」

「いえ……すいません」

なぜ謝るんだ。

「謝らなくていいよ。できればいいなって思ったただけだからさ。それにレオさんと違って僕は君と年齢の近い若造って呼ばれる奴さ。それも利口そうで、ムカつくタイプのね……肩の力を抜いてよ」

「はい」

答えながらジミーは興味深そうに改めてアキラを見つめている。

レオから——将軍から何度も聞かされている。

自分と年の離れていないこの若者は、巷に流れる将軍のおこしたとされる多くの騒ぎに関係していたり。もしくは同じ出身であることで将軍と勘違いされて、彼がやっていたことだったりするらしい。

その証拠にミニッツメンの立ち上げにも尽力し。

あのガービーに請われて一応はミニッツメンに籍を置いている。実際にミニッツメンから追い出されかかっている今の自分とはまるで違う、居住地をまかされた幹部扱いだ。

「うーん、ミニッツメンは良いけど。メールマンはそれだと装備がもっと必要だよね」

「そうですね、東部が開かれたら新人も多く入りますから」

「むう」

メールマンの装備には僕がDIAから持ち帰ったバリステイック・

ウェアブ仕様のスーツを与えている。それは先日までこのコベナントの僕の工房に置かれた製造機で生産していた。

ところが襲撃でコベナントの倉庫は空っぽ。なにか作るとか、とんでもない話だ。

「ストックトンには会う必要があるなあ。大量のゴミが必要になる——人もね」

商人の当てはあるが支払いに関してはこちらが用意しなくちゃならない。

ところが僕のキャップはほとんど奪われてしまい。奪還することなく炎の中に沈めてしまっている。

クソ、なんであんな馬鹿なことやってしまったんだか。

「キャップですか?」

「うん。ここの立て直しにも必要だし、どこかからまとまったキャップを用意できないとなあ」

「そうですね」

「実はいくつかないことはない!」

「おお」

「まず一番最悪だけど、すぐにできるヤツ。」

レキシントンに入って、出会ったレイダーを片端からブチ殺し。身ぐるみをはぐ

「え?」

「20時間ぐらい頑張れば、結構な量になるはず。どう思う?」

「——それ、思いつく最悪なんですよね?俺もそう思います」

「そうか。まあ、確かにレイダーどころか誰にも出会いませんでした。空振りですってなっても困るし。いや、むしろ待ち構えられて襲われたら、そっちの方がヤバいか」

ジミーは背中にくすら寒いものを感じた。

確かに目の前の若者は自分とはまるで違うと、話してわかる違和感で理解する。

いくらレイダー憎しのミニッツメンが居たとしても、あのレキシントンにキャップが欲しいからレイダーの身ぐるみをはぐ、行かないか

い？こんなことを真面目に提案する奴はどうかしてる。

レイダーに負けて殺される、その恐怖心は絶対にあるからだ。だがこの目の前の若者からはそれが全く感じられない。

「本気じゃ、ないですよ、ね？」

「え？もちろんだよ。最悪って言ったでしょ」

「ああ、良かった——」

（それじゃ、最善の方法はつていうと。これはこれでなあ）

そっちは簡単だ、ヌカ・ワールドだ。

あそこでレイダー・ボスたちにさっそく上納金を出せと要求すればいい。

ただそれだけでまとまったキャップを手に入れることが出来るだろうが。問題があるとすればこの後だ。ゲイジは当然だが僕がまた連邦に戻ることにいい顔をしないだろう。

またあいつらから逃げてくる新しい理由を探さなくてはならない——これはかなり難しい。

いや、しかしそう思うとあの時。ハンコックらが襲われたことは僕にとつては最高のタイミングであったという一面が見えてくる。あそこで痼癢をおこしたふりをして飛び出さなければ、おそらく僕はまだあそこでクソ共の王様をやっていただろう。

いや、そんなことはない。今は集中することがありすぎる。

「その、ここの復興。どうなってるんです？」

「なにもないよ。防衛システムは電源とスイッチで戻せたけど、人も武器もガラクタもキャップも根こそぎやられちゃったから……とりあえずガービーとグレイガーデンのグループ代表に相談して両方から借金するか」

ダイアモンドシティのマーケットにも預けてあるが。雇用主としてケイトやマクレディに支払いを安心するように伝えている手前、そっちは手を付けたくなかった。

「それで足りみますか？」

「足りない。でもないよりはましだし、そうしないと動けないよ」

「——だったらうちからならどうです？」

「??？」

「メールマンです。俺、よく飛び回ってるんで、もしものためにと自由に使っていいキャップを持たされてるんです。それでどうです?」

「——いいの?返済のあてはないよ、今はまだ」

「將軍の友人である、あなたなら。多分、いいですよ」

「ありがとう」

「すぐさま礼を述べることでこの話を決まったものとして終わらせる。」

助かった。

内心ではホツとしていた。

「じゃ、どうします?」

「そうだね——数日中に考えをまとめて皆にも色々手伝ってもらおうつもり。その時、僕と一緒に商人のところに付き合っしてほしい」

「財布つてことですね」

「そうなるね。いいかな?」

「こつちも予定あるんで。あんまり引きずり回されるわけにも——」

「ああ、そりゃもちろん。バンカーヒルだけでいいよ。その後はベルチバードで送ってもいいから」

「了解」

よし、これでなんとかかなりそうだ。

僕は椅子に寄りかかって大きく伸びをする。

「ファー・ハーバーへ向かうにはいくつかの任務を同時並行で進めるしかない。そうなるも最も新しく不確実な要素の多い計画はもつと詰めないといけないだろう。」

ミニッツメン復活から、メールマンに続く面白そうな計画。

——プロジェクト・アンストツパブル

実現すれば、それはきつと愉快な騒ぎを起こせるはず。

数日後、コベナントの発着場にはジミーを含めた全員の姿があった。

最近はスロッグでじっと待機していたベルチバードは、あと20分ほどでここにやってくる。

「それじゃ、全員に出発前の最後の確認をする。ここを出たらしばらくは別行動だからね」

「そりゃ構わないけどよ、アキラ——ここに誰も残らなくていいのかわ？」

「留守番はあの人造人間たちがいるし。今回はエイダもいる。大丈夫だよ」

「エイダを信用しないわけではありませんが。せめてミニッツメンから誰か来てもらう方が安心できませんか？」

「どうせ僕は2日のうちに戻ってくる予定だ。大丈夫だよ」

パイパーやガービーを信用しないわけじゃないが、今はコベナントに気の置けないものは出来るだけ近づいてほしくない。

うっかり好奇心が強くて有能なミニッツメンが、僕の工房にある冷蔵庫の中を覗いて大騒ぎしない可能性がゼロであることが、僕には重要だった。

今回は警備システムも自分が戻って解除しない限りは電源は落とせなくしている。

いや、そもそも今のコベナントの倉庫は空っぽのまままだ。壁があってもここに入るなら、それなりの物と人を一緒にいれなくちゃならない。

そうしてくれるのなら、喜んで何度でも取り返してやるのだが。

「それより集中してよ。今回ばかりは皆に協力してもらわないと困るんだ」

「アンタが、つてことだよな」

「まあ、そうだなケイト。つまり雇用主が困ると役に立たなかった君ら傭兵への支払いも、困ったことになる」

「うへえ」

「必死にやって来いって事だよな。わかったよ、ボス」

苦笑いを浮かべるマクレディに僕はうなづく。

「それじゃ確認する。」

3つのチームを作った。それぞれに目的を与えてあるから、それをやってきてほしい。

どれも簡単な事ではないから。ここに戻れるかは任務の状況次第って事になる」

解決すべき問題のリストが出来ると僕はその中で最重要なものを選び出し、3つのチームを作った。

ハンコックとキュリーにはV a u l t 8 8の様子を見てきてもらう。

マクレディとケイトにはこれから必要になる重要なひとりの人物を探して連れてきてもらう。

僕はバンカーヒルでストックトンとの会談。これでどこまでやれるかで、当面の資金や資産。さらにまだ残っているスターライト・ドライブインを片付けられるかが見えてくるはず。

「お前が俺達にV a u l t 8 8を見てこいつていうなら構わないがな——あの監督官、殺すのはナシで本当にいいのか？」

「ハンコック……」

「暴走してるんだらう。想像したくないがな。ああいうのは、どうしようもないぞ」

「私は——その結論には賛成できません。市長の結論は短絡すぎます」

「お嬢さんの手をわずらわしたりはしないさ。当然、俺が終わらせるさ」

ハンコックは期待半分なのだろうが、やっぱりまだそんなことを口にした。

僕としても複雑なものがあるが。今はその考えには賛成できない。「あのV a u l t に人を入れたということは当然だけどなにかを始めている。恐らくは人体実験をね。」

そのデータもとりあえず回収したいけど。監督官はどこまでやるつもりなのか、それを確認しないことにはどうにも、ね」

「あれは2000年を地下で閉じ込められていたグルだ。マトモなわけがない。」

お嬢さんやお前はあれに期待して、ある日突然に目覚めて『あら、私ちよつとイカレてたわ』なんてことはないぞ」

「恐らくはね——」

「なア、あの正義が大好きな記者に張り倒されて。マツドサイエンティスト扱いされたからって、本当にそんなことをやることはないんだ。Vaultやらの実験何て、捨ててしまえ。お前には必要ないさ」

「ハンコック……」

「それじゃ、いいな？」

「ダメ。今回はそこは引かない」

「可愛げないな。まあ、いいさ。聞いてもガツカリするか、失望するか。不愉快な報告を楽しみに待っているよ」

「キュリー、頼むよ」

「はい。出来るだけ話を合わせつつ、バース・トウ監督官の真意を探ってきます。アキラ」

Vault88では何が起きているのか、正確なことが知りたかった。

あそこはあまりにも広大な地下トンネルが広がっているせいで、そのすべての調査も終わっていないのだ。

そして僕はバース・トウのことは——迷いがあった。憐れみとは少し違うのだが、言葉にしにくい。

「マクレディ、ケイト。君らは人探しだよ」

「——どうしてさ」

「おい、ボスには『わかりました』だろ？」

マクレディが訂正させようとするが、聞くつもりはない。

ケイトは任務にあまり乗り気ではないようだ。

「問題？」

「こっちはアンタが何を考えてるのかわからないのが気に入らないの



さ」

「話があるんだよ。それだけだ」

「で？話してもアンタの思い通りにいかなかったらどうするの？」

「別に——それじゃ、幸運を。それからサヨナラ。本当だ、嘘じゃない」

答えながら空を見上げた。

急速にこちらに向かってくるベルチバードの姿を確認した。

ケイトは僕の答えにまだ完全には納得していないようだが、マクレデイが背囊を突き出すとそれを渋々受け取った。

「ケイト、マクレデイはジミーと僕とバンカーヒルまで一緒だ。キュリー達はそのままVault88へ。」

帰りは歩きになると思う。気を付けてくれ」

レオさんを襲ったコンドウという暗殺者のことが頭をよぎる。

本当は何かしらの対策を講じたいところだが、今回は何も用意がない。不安があるとすればそこにつきるが、この連中ならおめおめとやられたりはしないだろうとも信用している。

ベルチバードはコベナントへ、ゆっくりと着陸態勢に入った。

ガンナープラザでは、ここ数日ボスのキャプテン・ウエスの機嫌が悪い。

数時間おきに思い出すのか、激発すると机の上の武器に手をのぼすか。薬物で鎮めようと——まあ、ほとんど逆にもっと怒ってしまうことの方が多かったが——している。

どちらにしても迷惑な話だ。

「ボス——いい加減にしてくれ」

間拔けな上に運さえなかった部下のひとりだ。ついにボスの痼癩で発射された流れ弾で死体が作られると、仕方なく部下達はこのボスをたしなめることにした。

「あいつら、あいつらっ！」

「どいつらです?」

「グールだ。あの役立たず共っ!」

「ギブスっすね」

「そうだ!そのクソ野郎だ!」

あのB・O・S。が使ってるベルチバードをガンナーズでも使えるようにしてやる——そう約束したグールのギブスたちは先日。ついに約束した第1号機を完成させていた。

キャプテン・ウエスは大変機嫌よく。さっそくそれを使い、かつて軍がおこなっていたというヘリボーンの基本演習を行うように指示を出した。

ギブスらはいきなりの演習嫌がったが、キャプテンはそれを許さなかった。

これがまずかった。

機体を運用するパイロットと兵士たちはキャプテンの命令でガンナーズの中から選びだされた。

新人パイロットはマニュアル通り。見事に離陸はしたものの、演習が始まるといきなり兵士たちを乗せたまま地上に墜落し——ひどいことになった。

「あいつらのせいだ!ちよつと地面から浮かんただけで15人も死んだぞ!失敗だ!」

「……」

「これまで好き勝手要求しやがったくせに、まともなものも用意できないクソ。クソがっ」

ギブスらの果たした仕事は間違いなさそうなので部下が気をきかせ。すでにくず鉄となったベルチバードを修理しろと言いつつ、このキャプテンの目の届かないようにプラザからは退去させていた。

だがそれがかえってウエスの機嫌を損ねてしまったらしい。

修理はどうなってる?2機目はいつ完成する?」

ちなみに修理はまだ始まったばかりで最短でも1カ月はかかるだろうというし、2機目はこのせいで大幅に遅れが出ているという報告が来ている。

これをそのままウエスに伝えることは難しい。

「調子に乗りやがって。俺をナメてるな……」

正直言うと相手をしたくはないが。このまま放っておくといつ「あのグルルをぶち殺してこい」などと誰かに命じてしまう。そうなたら誰にも止められなくなるわけで、今回ばかりは部下たちが並んでキャプテンの気を紛らわせてやらねばならない。

「キャプテン。ギブスのオモチャも重要でしょうが。そろそろ俺達も考えないといけませんぜ?」

「ああん?」

「ミニッツメンですよ! あいつら、うまい具合にB・O・S.の連中とやっついて。連邦の北半分を収めようって勢いです」

ガンナーズはやはりB・O・S.との対決を想定して計画をたてていた。

彼らの予定では、北ではミニッツメンとB・O・S.が激突し。その間にガンナーズは南部の大小レイダーをたくさん吸収して、のちに北で生き残った奴を相手に連邦の王の座を巡って決戦へ。

これがキャプテン・ウエスの考えであったのだが——ところが現実では2つの組織は激突などせず。

ミニッツメンは順調に北部でその影響力を強めていき。B・O・S.は独自に東海岸沿いにしっかりと根を張って簡単には崩せそうにはなくなりつつあった。

「南はちよいちよいやってますが。北の方は深刻です。今じゃ俺らガンナーズはレキシントンとメッドフォードにわずかに話せる奴がいるってくらいで。今からどうやってあそこに戻るつもりです?」

「そりやお前——」

そこまで言いかけるが、肝心の内容が口から出てこない。

するとウエスは周囲を見回し、机の上にある薬物に飛びついていく。これでひとつ、ひらめきを得ようともいうのだろう。

「ポストン……そう、ポストンと。それに辺境、そこに兵を送り込むんだ」

「またですか? 以前もそれはやりましたよ」

良い成果はでていなかったはず。

「足場だよ！足がかりつてやつのためにな、ボストンだ。それにB・O・S。」

「は？」

「誰か使える奴はいないか？話が出来る奴だ、どうだ？」

「——話ですか。それならジュデイス姉妹つてのがいますよ。傭兵団をやってるんですがね」

「できるか？」

「なにをさせるのかによります」

「あつちのボスと話をするんだ。手を組めないかってな」

キャプテン・ウエスがエルダーとかいう奴と会談だって？！

「本気ですか!？」

「なにもしないわけにはいかないだろ、あん？」

「わかりました。すぐにやります」

「おお！急げよっ」

ハイになつているキャプテン・ウエスを置いて部下たちはとりあえず部屋を出る。

廊下を歩きながら、誰からともなくつぶやき声が出た。

「ありや、なんだ？」

「薬か？あの人、もうサイコやジェットじゃ物足りなくなつてチャンポンしたやつを使つてるのさ」

「マジかよ——まだ使えるのか？」

「ま、大丈夫だろ。時々混乱することもあるが、まだイカレちやいな  
い」

複数の含み笑いが廊下に響く——。

「とりあえず例のマスク、いつでも使えるようにしておくか？」

「まだ大丈夫だろ。それに今は情勢が見えない。未来のボスは急ぐことではないさ」

彼らがこれまで襲つてきた被害者たちの中には当然だがグールもいた。

そのひとりに、明らかに大きな頭をした奴がいて……それを確認し

て悪い事を考える奴はガンナーズではいくらでもいた。

——お前、面白い頭してるな

あとはもう、楽しい話はあまりない。

様々な方法で楽しんだ後、最後にこのグールは頭部の皮膚を丸ごと引きはがされた。そうして加工もされ、恐ろしく醜いグールマスクがひとつ完成する。

「アレを使うのはまだ先になるか」

「ああ、楽しみだよな」

「そうだな——『おい、見ろ。ボスがクソツタレのグールになっちまった』」

「次はこうか？ 『俺達はカリカリ頭をボスにする気はないぜ』」

「なア、ちゃんと俺がいる時にやってくれよな。仲間外れは恨むぜ」

「そうだな。お前に恨まれたら、俺がボスになった後。ケツを見せるのが怖くなる」

ゲラゲラと笑い声上がる。

ガンナーズに必要なのは力であり勝利だ。

力があり、勝利がある限り仲間は大切だ。ボスだって、大切だ。

観測者は室内に入ると改めて、中の住人——老人の様子を探ろうとする。

“小さな宝物”その創設者。その名は恐ろしくて思い出すこともかなわない。

そんな在りし日の彼は老人ではあっても背中はやんとし、足腰もしつかりして、なによりも身綺麗にスーツに白衣をまとって自信を持った笑みを浮かべていたというのに。

ここ何年も調子は良くはなかったー。

体に異常はなかったが精神が——人格を、すべてをボロボロにさせていた。

なんとか症状を改善しようとキンジョウらが知恵を絞って色々

試したが、全部が無駄に終わった。

張りのあつた皮膚が失われると肉が落ち、骨が浮き出し。かなり低いレベルの健康体をなんとか今は維持している。これでもまだ本人がしっかりしていれば。武器を持って敵を前にしても戦う力は残してはいるはずなのだが。

しかしそんなことは無理だろう。期待は出来ない。

アキラの最悪の帰還後。老人は自身の過去からの記憶と幻覚によつて正気でいられることはほとんどなくなっている。

その証拠によりにもよつて戻つたばかりの彼の廃棄とキンジョウにその後を継ぐようにとの言葉を残してしまった。それが組織に不協和音を生み出す。

この連邦では完璧だった“小さな宝物”は、急速に厳しい時を近くしている――。

盛り上がったベットから出てくる気配がないとわかると、観測者はすぐにテーブルの元に駆け寄り引き出しを開ける。

そしてケロツグから持つてくるのが遅れたアンプルのケースをそこに滑り込ませた――。

隣にある鏡に己の姿が――ガスマスク姿の自分を見る。

老人にかつての姿がないように、自分も同じくこのような姿になつてしまったと今更だが改めて思い知る。

無意識に指がマスクに触れ、それを脱ぎ捨てたいという衝動に駆られるが。急速に理性が波のように襲つて衝動を上から洗い流していくと、指は震えたただけですぐにそれも収まった。

――何を考へてる

自分への問いかけ？

次に心臓が飛び跳ねた。声は衝動に戸惑う自分に向けた自らの言葉だと思つたが。実はいつのまにか隣に立つ、正気を失つた目をした老人の口から放たれた言葉であつた。

観測者の体は凍り付く――。

「アンプル。アンプルの確認を、数が……気になつて」

「なにを、考えてる」

「あ、あの……」

「あの子は、アキラは何を考えているんだ！どうしてっ」

老人は叫ぶようにさういうと、思った以上に強い力で観測者の両肩を掴んできた。

「なぜあの子は、あんなっ……!?!」

「——わかりません」

観測者は目の前にいる老人の顔を見返すことが出来ない。

顔を背け、なんとか小さな声で問いに答えるだけで必死だった。怪人のひとりであるくせに老人を恐怖しているのだ、心の底から。

「あの子を失ってしまったのか？我々は失った？希望を？」

ガクガクと体を揺さぶられるとそれだけで頭がくらくらして視点がぼやけた。

老人の態度を観測者はただひたすら受け身になるだけで何も言えなかったが。それで飽きたのか、彼は観測者から離れると再び自分の世界へ。幻覚の世界へ戻ったか。黙りこくると、ふらふらと寢床へ戻っていつてしまった。

なにもなかったかのよう——。

「会議があります——」

恐怖に満ちた声でそれだけ口にする観測者も老人の部屋から退出する。

早鐘のように打ち続ける心音に静まれと何度も念じながら、無菌室のような美しく伸びる廊下を早足で歩く。

——失ったか、希望を

老人の言葉に観測者は傷ついている。

完璧であったはずの我ら“小さな宝物”に希望が無くなったとするなら。これから先の未来は、どこまでも暗いまま——。

## 対立 I

オバーランド駅へと先に帰還したガービーは、さっそく以前の生活へと戻っていた。

早朝には目を覚まし、新兵と共にどやしながらのランニング。河原で女たちが水仕事をしているかたわらでライフルの講習を簡単に行う。

食事を終えるとこの日は早朝にスロッグから深夜に移動してきた調査部隊が帰還するので、それを迎えないといけない。

本来であれば將軍でもあるレオに出席願いたいところではあるが。彼はある親子との関係もあったのだろう。ここではなく Vault 81からの通いを願っており、残念ながら時間には間に合わないだろうと思われた。

午前9時半、居住者たちを新兵が整理し。彼らが向かい合うように並ぶとその時を迎えた。

誇りと泥にまみれた若き精兵たちは、新兵の万雷の拍手の中を行進し。ガービーの前で部隊長が進み出て敬礼を交わす。

「任務、ご苦労だった」

「ありがとうございます」

「將軍も大変喜ばれている。今日には間に合わなかったが、後で必ず。直接のお褒めの言葉をもらえるとと思う。とにかくよくやってくれた。よく帰ってきてくれた！」

「はいっ」

あの日、サンクチュアリでガービーが自らが鍛え上げた若者たちは。この短期間でも厳しい戦闘を生き延びてこの栄光の日を迎えていた。

今は多くの仲間がここにはいるが。しかし彼らとガービーの間には特別の感情があったことは間違いないだろう――。

レオとガービーが危惧していた北東部の調査はついに7割を越えた。



今日ここに持ち帰られた報告書で、本部に置かれた地図も最新のものへと置き換えられる。

これを元に東部の居住地の解放、またはその周辺にあるであろう脅威の排除。どちらもこれから考えなくてはならない。

当然だが、そこだとこれまでと違い。B. O. S. の反応も気にしなくてはいけないし、なにより今まで頑張つて調査を行つてきてくれた精鋭部隊は使わず。別の部隊でおこなわなくてはならない、という条件が付くことになるだろう。

それでもこの作戦がすべて成功すれば、事実上ミニッツメンは連邦の北部を掌握したと見ることが出来る。

(ガービー、南部へ。つまりガンナーズの支配する地域に踏み込むには。クインシーの虐殺から立ちなおった今のミニッツメンが前とは違うと決定的に皆に知つてもらふ必要がある。

ガンナーズのやり方はまさしくレイダーのそれと一緒だ。だからこそ今のミニッツメンのやり方は真逆をいつてこそ人々によく見られる)

——ああ、そうだな將軍

(だがこの方法だと逆に身動きも取りにくくもなるんだ。

居住地という土に根つこを張るわけだからね。君が知る以前のミニッツメンのような身軽さは無理だ。

これはどっちがすぐれているという話じゃない。ミニッツメンの名誉を取り戻すにはこの方法しかないんだ。だからそれに合わせて、以前にはできて今は出来ないことを理解し。そういう状況に対して別の方法で出来る事を増やしていくしかない)

回り道とは考えず、選択肢を増やしていこう——だったか。

彼の戦術での指揮にも学ぶことは多いが、こうして説得してくる戦略眼もたいしたものだ。だからこそわかる。彼が率いる限り、ミニッツメンのこの勢いが殺されることはない、と。

その將軍がここに到着したらすぐにも報告会を開き、最新情報を計画と合わせてみなおさなければならぬだろう。

兵士達にはそれまではこの近くで休むように伝え、自身は本部の自

室に戻って会議の準備を始める。

口元に自然と笑みが浮かぶ。

本当に順調だ。このまま東部への入植が開始されれば、当然だが南部に拠点を置くガンナーズとの戦いも始まるだろう。

あぶれた傭兵、危険なレイダー。そういった連中を吸い込んで巨大化していったガンナーズには旧ミニッツメンは大いに悩まされ、苦しんだ。

だがその相手にも新生ミニッツメンは互角に近い状態で対峙するまでに力をつけようとしている。

その事実に興奮し、身震いしないとさえ言えようそになる。

数年前には想像でしかありえなかった。強大なガンナーズを、ミニッツメンが堂々と正面から戦場で迎え撃つ瞬間があるかもしれないなんて――。

遠くで何か言い争う声が聞こえた。

銃声などではないから問題はないと思われたが、ガービーの体は自然とかたわらに置いたレーザーマスケットに腕を伸ばす。

「――いいからさー！知らない仲じゃないんだよー！」

「困りますよ。困ります」

「なんだ？どうした？」

声を上げると、扉が蹴り開けられたのでガービーはライフルを構えた。だが、様子も見たかったので銃爪には指はかけていない。

「よオ、ガービーの坊や。ひさしぶりだね」

「!?」

「すみません！止めたんですが――」

いいよ、彼女は知りあいだ。

そう言いながらガービーは懐かしさに目を細めて喜んだ。

「ロニー・ショー。サー・ロニーじゃないですか！」

「なんだい、とつくにババアはどこかでのたれ死んだとも思ってたかい。残念そうな顔だね」

「昔の知り合いに会えて喜んでるんですよ。わかってるでしょう？」

「ハッ、どうだかね——聞けばアンタ、巷じゃ伝説のミニッツメンと呼ばれて。たいそうな人気者になってるそうじゃないのさ」

「そういうあなたも元気そうだ。嬉しいですよ」

「見りやわかるだろ、そんなこと。それより新しいミニッツメンであんなが大暴れしてるって聞いたら。さすがにあたしも無視はできないさ」

この覇気に満ちた老婆ならそうだろうと、ガービーは大きな笑い声をあげた。

「ということは参加してくれるんですか？そんなんですね？」

「どうしようかねえ。悩んでるよ」

「もちろん、力を貸してくれるだけでもいいのです。俺も將軍も、前のミニッツメンの力を必要としてます。今いる仲間の中にはそういった昔の連中もいるんです」

「そのようだね。さつき下で見知った顔があった、覚えてるよりも老けてたし。体型も顔つきもだらしなくなってたけどね」

自分はそうじゃない。

年をとつてもあの頃のように肩で風を切っていく。

「さ、とにかく席へ。話をしましょう」

「ああ、いいさ。あんたそればかりだね」

なんてことだ！今日は最高の日になるぞ。

早朝にVault 81を出ると、外で待つていたコズワースとカールと合流して散歩気分でおバーランド駅へ歩きだす。

このあたりもボストンの範疇に入れてもいいくらいに危険なエリアではあったが。

私についてくれているこの1匹と1台がいれば、まず恐れる理由は私には思いつかない。

だがそれとは別に私には問題があった。

あのコンドウという暗殺者の襲撃でまたもや武器を失ってしまっ

たことだ。

——武器は消耗品。使い捨て。命を懸けて守るようなものじゃない

この考えは軍隊の時代から叩き込まれたことのひとつだったが。それでも実際に手にあるのがレーザーライフル1丁だと——もうこの愚痴は何度目だろうか？

Vault 81でも武器は買ったのだが、マクナマラとの関係があつて。そこに高額なキャップを払うというのは、なにかとマズい気がしてできなかった。

普通にダイヤモンドシティのマーケットに行くべき、なのだろうが。あそこに行くくと一日がかりの大仕事になってしまい。さらに必ず手に入るかと言えば——断言はできない。

そうなる選択肢は残り少ない。

私は本部の外にあるミニッツメンの武器倉庫を訪れた。

「実弾……ですか。将軍、ご存知かと思いますがうちも基本。レーザーを主体とした装備なんです」

「ああ、わかつてる。だが全部じゃないだろう？ なにかないかな」

倉庫番は首をひねりながらも、私の要求にかなうものを棚の中をあさって探してくれた。

「——最近、プラズマライフルをよこせて生意気な奴が多いんですよ」

「そりゃ、贅沢だな」

「ええ、レーザーマスケットも満足に使えないのが。ナマ言いやがってって、俺も思うんですがね」

「実弾系は人気ないか」

「というよりですね、うちだとパワーアーマー用の支援としてアサルトライフルですね。コンバットライフルは良いものもあるんですけど、武器の知識がないとすぐに壊れるんでもう取引してません」

「どのくらいの量が取引されてるんだ？」

「まあ、ぐくぐくたまに数丁ってかんじですかね。使ってるのも今は東に言ってる連中が中心ですし」

「——なるほど」

ということにはわかに活気だっているスロッグでなら、期待は出来たのに。そういうことか。

「将軍、やっぱりないみたいですね」

「それは困ったな」

「あ、いや。これはどうかな——奥にひとつ見つけましたけど、見ます？」

頼む、そういうと彼が持つて来ても奈緒は10ミリ弾を使用するサブマシンガンだった。

「ピストルタイプだね」

「そうですね。思い出しましたよ、だいぶ前の取引のうちとの取引でまとめ買いに商人が気をよくしてサービスでおいでいったものでした。

私は手に取ると素早く構えたり、振り回し、薬室をのぞかせたりしてみました。

「どうです、将軍？」

「……悪くはないが、これだと命中率が悪い。銃口を伸ばせば多少はマシンになるかな」

「ですねえ。スコープはどうします？」

「いらないな。これだとそもそも飛距離が足りないし、当たっても貫通力も破壊力も期待できない」

「工作室がすぐそこにありますから、作業するなら俺が手伝いますよ」

「ありがとうございます——ほかにないかな？」

「うーん、そうですねえ。銃身のばすっていうなら、パイプ銃でもつかうドラムマガジンはどうですかね？」

「ああ、なるほど」

「重量は増えますが、思う存分。弾丸をばら撒けますよ」

「そうだな。それでやってみるか」

「じゃ、こちらへ」

私は銀に輝くそれを手に、工作室へと案内されていく。

「どれくらい時間がかかるかな？」

「2・3時間もあれば多分。昼までには終わらせたいですねえ」  
「そうだね」

「将軍はあれでしょ。休暇中だとか」

「ああ、長期休暇さ」

「でも大けがしたって話も聞きましたよ？」

「ああ、それも本当だ。見ればわかるだろ？」

そう言って茶目っ気たっぷり両手を開いて見せる。

見ての通り、服の下には新しい片腕をはやしている——ま、わからないだろうが。

「凄いですね。強いんだ、将軍さんはあ」

その声にたまらず私は噴き出してしまった。

場は白けていた……始める前からこれだ、どうしようもない。

ほとんど崩れ落ちたビルの廃墟は、ボストン・レイダーズが集会の場所を選んだそれだった。

この集まりは以前からそれほど熱心におこなわれるものではなかった。それは認める。

年に1回、もしくは4回。それくらいでやっていた。

目的は情報交換というより、その後のそれぞれの計画のためによる動向を探るための“賢い”レイダーたちのどうでもいい雑談を提供する集まりだった。

だから幾度も「これで消滅か？」という時があったが。

そういう時は決まって次に勢いのあるレイダーが音頭をとること  
で、この場は終わることなく続けられてはいた。

「——どうする、始めるか？」

「まだ待て。時間前だ」

「来ると思うのか？」

「勝手に始めやがってと騒がれるのは御免だ。ケツの取り合いはないんだ、もう少しだけ我慢しろよ」

そんな生き馬の目を抜くボストンのレイダー達は、少し前に驚くことに全員一致で手を取り合ったことがあった。それは言ってみれば過去最大の珍事件でもあった。

遠く北の果てで追い詰められていたはずのミニッツメンを名乗る奴らが。

レキシントンでちよつとばかり大物をひとり食った勢いだけでボストンの隅っこにやってきたのが始まりだ。

ボストン・レイダーズの知るミニッツメンは行き場のない惨めな放浪者、夢と希望とやらのお花畑な頭を持ちながら結局はガンナーズに這いつくばった敗北者でしかなかったが。

巷ではまだ大昔の奴らの築いた栄光とやらを忘れていない少数がいるのが気に入らなかった。

新兵を集めているなら丁度良いと、連合を組んで一気呵成に踏みつぶさんとした。

が、なぜか。今、思い返しても信じられないが  
攻撃は失敗した——自分たちが負けたのだ。

そこからレイダー達は大混乱に陥る。

連合を組んでいた大ボスたちの何人かは誰かに殺され。大きな組織のほとんどは分裂し、かつての味方を取り込もうと互いを攻撃しだしたのだ。

そしていつもの通りのことが起きる。

自分こそ新しいワルドだと考えるチンピラが、また新しい集団を作り。自分たちの土地を求めて混乱に参入する。

最近、連日の騒ぎもようやく落ち着きを見せるようになった。

どうなっているのかとボスたちが集まってみれば以前の半分以上は別人で、さらにその半分はいわゆる新人といふべきクソ生意気で舐め切った態度のアホ達がいた。

時間が来ると、革ジャンのいい年をした白髪の男が立ち上がり「よし、集会をはじめませ！」と大声で吠えると、その場に集まっていたボスたちもその周りに立って。その場で足を数回踏み鳴らす。

会はずまず集めた奴があいさつを兼ねて進行を務め、それを受け入れる儀式としてこれがおこなわれているが。新人のうち、間抜けな奴らはこれを知らなかったようで慌ててまねたり。なにもしなかつたりと無様をさらしている。

「まずは聞いてくれ。俺が今回の集会を提案したウィザーズのロン・グレン。ここにまだ残ってる古株なら知ってるし、そうじゃない奴もまだ生きていたのかと。まあ、わかるよな？」

低い笑い声が聞こえてくる。

「今日は——」

「うるせえよ、爺イ！ペチャペチャとよオ。腐った女みてえな声、出すんじゃないよ。ボケてんのかっ」

進行を遮る無礼な若い声には鎮まる。

どうやら儀式も知らず、この会の意義もわからず。なにやら勘違いして潜り込んでしまった大馬鹿者がしゃしゃりでて来たようだ。

グレンと名乗ったレイダーボスは、なぜかやたらと自信ありげに胸を張り。“老人”として見下す若者の前に進むと静かに語りかけた。

「おい、坊主。今何かわめいたのは、まさかお前か？」

「——へっ、耄碌してると心配しちまうぜ、爺さん。この俺、がっ……!？」

最後まで言う前に、新人の顔が脇に感じた痛みで声を詰まらせる。

視覚の外にいたボスのひとりだけが刃物でいきなり警告もなく刺してきたのだ。何をしやがる、そう口にする前に四方八方からボスたちが迫って同じことをしてきた。

わずか十数秒だったが、さっとボスたちが再び離れるとグレンが崩れ落ちようとする無礼な新人の腕をとって座ることを許さない。

「いいか、坊主。ここは頭のある、賢く礼儀を知っている大人の社交場なんだ。わからなかったんだよな、わかるよ。

お前のろくでもないオヤジと、どんな野郎でも啞えたがる淫売だったオフクロじゃ。当たり前前の事すら教えてもらえなかったんだらう？いいさ、いいさ。

今日は見学していくといい。お前の人生じゃ理解できないものを、



今日は学んで帰ってくれ」

進行役として会を尊重しないクズにグレンは優しくそう諭した。  
出血の激しい相手はそれにこたえる力は残ってない。

本日の“見学者”が静かになり。呼吸を止めると会は再び仕切りなおされた。

「さて、最近は何。忙しかったということはどこにいる奴なら全員が知ってる。

楽しい話は少ないだろうから、こいつは後回しにして本題に入りたい——そう、ミニッツメンだ」

周りから悩ましいため息が漏れた。

「不愉快だが思い出さないとはいかない。この会で以前、俺達は互いに手を組んで奴らを。北から調子に乗ってやってきた連中を追い出してやろうとし——失敗した。

負けたことで俺達はツケを支払う羽目になったが、問題は俺達に勝つたとさらに調子に乗ったミニッツメン。奴らの事だ！

奴らはあの後、ダイアモンドシティに警備用の重武装したロボットをさらに何台も提供した。おかげで今は3ブロック先から町に近づくことが出来なくなっている。

おいしいエモノだったバンカーヒルの商人たちも、大物は北上してレキシントンを迂回し。そこから南下してダイアモンドシティの西から……ミニッツメンの活動領域から出ないようになった」

さらにあえてグレンは口にしなかったが。グッドネイバー市長を名乗るあのジョン・ハンコック。

あいつはあろうことか「長期休暇」などと称して闇取引の一切を引き上げてしまい。彼が闇ビジネスから手を引いたせいで市場の価格が乱交下している。

問題はグッドネイバーには依然と変わらず品物は揃っているという事だ。

これはつまりハンコックはどこかの誰か、とんでもない奴と組んで自分の町には変わらず供給しているということになる。

レイダー達の儲けは次第に目減りしていつているというのに——。  
「正直に俺自身の考えをここで言わせてもらおうが……これは良くない。」

ミニッツメンの勢いは止められない。今や北はレキシントンとメッドフォードを奴らは取り囲もうとしている」

「グレン、ミニッツメンの奴らはあの町を両方手に入れると？」

「いや、そうはならないだろう。奴らは恐らく、このボストンから分断し。孤立させようとしているに違いない。」

その準備は着々と進んでいる。間違いはない」

「それくらい俺達だつてわかつてる。だが何が問題だ？このボストンには俺達がいる。奴らは俺達に手を出せない」

「ああ、それは俺も同感だ。だがな、同じことをレキシントンやメッドフォードにいる奴らも以前はこんな感じで集まっちゃほざいていたに違いないんだよ。」

わからないか？

奴らが干上がつて、泣きわめきだすころには。ミニッツメンは次にこのボストンにも同じく包围を敷くかもしれないって話だ」

シン、と一気に静まり返った。

恐れるべき未来、だがそれはこのままなら避けられないのかもしれない。  
ない。

そしてこちら側に近いと、何の根拠も考えてなかったハンコックの不可解な動きを見ると。ミニッツメンと秘かになんらかの約束をしていないとは断言できない。

「情報がある。あらゆる情報だ。」

奴らの弱み、次の動き。それで揺さぶり、可能なら突き崩さにやならない。どうだ？」

グレンの問いに答えはなく。静寂が続いていた。

本人はそれを予想していたのだろう。流れる空気を感じ、顔をうつむかせ頭を切り替えようとした。

「わかった——この後は好きに話してくれていい。」

いつものように酒は用意してある。だが女はナシだ。そうそう、

隅っこでお休みの坊やは俺が責任をもって家に帰してやるが。一緒に行きたいって奴は俺のところに来てくれ。ちよつとした親睦を深める2次会になるはず、皆で楽しもう」

笑い声上がる。

もはや息もせず、黒ひげ危機一髪のように腹部に多くの穴をあけられても、そこからあふれ出る血がなくなっている死体は無表情のまま。

きつとこの後、自分がやつとの思いで手にした罫ねぐらをレイダー達によつて蹂躪されてもこのままだ。

弱肉強食——暴力に生きる彼らのルールだ。

一気に場が碎けると、終始無言だったボスのひとり——シンジンはワインをひと瓶だけ手に取って帰路についた。とてつもなく不機嫌な様子のまま。

「まったくクソツタレな集まりだったぜ」

「……」

「もうあそこも終わりかもなあ。なあにが、ミニッツメンは止まらねえだ！くだらねえことをいいやがってよう」

意外に悪くない酒のようで、早くも酔いから言葉尻が跳ね上がってく。

あの古株のグレンがわざわざ声をかけてきたのだから、きつとグツドネイバーのことに違いない。

このシンジンはそれを信じての参加だったが、結果はこの通り。まるで期待外れであった。

「おい、知ってたか？アンジーのメス豚、くたばってやがった」

「本当ですか、ボス!？」

「ああ、間違いない。アタシが先にグツドネイバーをいただく、なんて言ってたが。どこの馬の骨とも知らねえガキにやられたってよ。

全く信じられねえ、メス豚だった」

言いながらもそこには若干の失望が見えた。

あのハンコックが堂々と「自分は連邦に飛び出して、ここにはいな

い」と宣言したというのに。誰も、まったくあの町に手を出せないでいるのが腹立たしかった。

それだけじゃない。

市長がいらないのにあの町は全く変わらない。こちらが品物を提供しようとして出ても、そんな劣悪なものはいらないとこれ見よがしに同じものを取り出して見せてくるのだ。

なんとかこちらの味方をあそこで作ろうとしても、ある日突然そいつは消え。墓守が新しい墓と葬式の準備をしている。

信じられないがまったく付け入る隙が無いのだ。

こうなるとあの町に執心しているレイダーボスは、あの時の連合を再び作り上げ。力でもって強引に攻め落とすしかない。

だが期待は裏切られた——ミニッツメンだ？それよりボストンの、目の前の問題はどうした!?

「それで、どうします。ボス?」

「……考えるさ。なんとかする、なんとかしないとな」

グッドネイバーをあきらめるわけにはいかない。

あの町を手に入れば、それはすなわちボストンを手にするのと一緒に。裏世界の情報はほとんどすべてが手に入るし、当然だが目と鼻の先にあるバンカーヒルやダイヤモンドシティにも手を伸ばせる。

ミニッツメンなど、それからでも十分に対処できるんだ。

だがアイデアがない。何にもない——力が無い、我慢するしかない、まだ今は。

「俺が——どこまで我慢できるか、結局それだけなのかもな」

「ボス? なにか?」

「なんでもねえ! 戻るぞ!」

シンジンは怒鳴り声をあげると歩く速度を変えないままワインを煽った。

汚染された海につきり、信者たちは声を上げる。

「アトムは信仰深きものを浄化する！」

『アトムは信仰深きものを浄化する！』

「かの輝きの炎で我らの不幸は燃え尽きる！」

『かの輝きの炎で我らの不幸は燃え尽きる！』

「アトムは悪しき者を焼き尽くす！」

『アトムは悪しき者を焼き尽くす！』

朝の祈りの後は、朝の言葉の時間だ。それがこのコミュニティのやり方。

だが今日はおかしな緊張をはらんでいた。

「それでは伝道師様、今日のアトムのお言葉を。我らにお伝えください」

「……友人達、アトムの声を私は聞いた。彼の声を確かに私は聞いた！」

どこか正気を失ったような、危険な響きのある言葉に信者たちは早くも不安そうに一斉に体を揺らし始める。

「アトムのお言葉はまさしく我らの未来への警告であった。私はそれを確信する」

「なんですか？警告とは、なんのことですか？」

「恐ろしい破壊者が、西より軍団を率い。我らの住む場所を奪い、アトムの輝きを否定する。」

我らはなすすべもなく倒れ、この連邦からアトムの教えを滅ぼさんと勝利の歌を我らの死骸の上で高らかに歌いながら、勝利の踊りと共に笑うつもりなのだ」

西から恐るべき軍団だって？なんのことだ？

「アトムを信じよ、アトムの声を聞け！」

アトムは深淵の奥地から我らを気遣い、訪れる破壊に憂慮しておられる。彼の手が我らの助けとなることをあの方は望んでいる。

我らはこのことをまず正しく理解せねばならない」

「アトムの教えを。アトムの教えを」

「アトムの言葉を奴らは聞かない。アトムの教えを奴らは嘲笑する。奴らは我らを獣として狩る。」

我らは信徒。

だが奴らは異教徒なのだ！

アトムは我らに決断を求めている。我らはアトムに、我らの忠誠を示さねばならない！」

「……」

「我らはこれから聖戦に入らねばならない。我らを守るアトムの加護の元、我らを襲う闇を、我らの力と剣で。切り払うのだ」

ワツと歓声上がる。

涙を流すものも、「必ずそいつを八つ裂きにします」と声を張り上げる者もいる。

そんな信者たちの様子に満足したのか、伝道師は笑顔で頷く。

「伝道師様、お教えください。アトムの言葉を。我らの敵の名を」

「友よ、ガンマ弾をとり、銃に込めろ！我らの平和を乱す敵に、アトムの輝きの偉大さを知らしめよ。」

敵は強大で、自らを解放者を自認する悪魔なり。

奴は凍り付いた地の底から蘇ると、ミニッツメンと呼ばれた虐殺者の生き残りに力を与え。自らを彼らの將軍と呼ばせている。

アトムの力を知らしめよ。

フランク・J・パターソンを緑の輝きの炎で浄化するのだ！」

伝道師の叫びにまるで合わせたかのように、近くのキングスポート灯台に奇怪な緑の光が灯り。灯台周辺にその輝きを知らしめた。

## 暗喩 (Akira)

ストックトンは娘の「ドレス、あってる？」の問いに笑顔で良く似合っていると答える。

今日は客人を迎えての夕食を特別な場所で予定していた。このよ  
うな席は——親子でもてなすのは本当に久しぶりだ。それに新しく  
用意させたドレスにアメリカも喜んでくれている。

柄にもなく今日のストックトンは緊張していた。

アキラが自分の前にやってくることは、コベナントへの襲撃からあ  
る程度予想はしていた。

てつきり自分に資金の提供を求めてくるかもしれないと——それ  
をどう断ろうかを考えていたが。彼にはそんな必要はなかった。

若いミニッツメンを連れ、彼が財布の代わりになったからだと言っ  
たのだ。

そうなるとストックトンが出来る事はいつもと変わらなくなつて  
しまう。

だが大商人たるもの、こういう時こそ強く頼られることで弱みを握  
り——状況を自分に少しでも有利にしたいと思うものだ。挽回が必  
要だった。

その頃——。

マクレディはようやくのこと自分たちがバンカーヒルの入り口に  
到着したとわかると、後ろに目を向ける。ついてくるのはブツブツと  
まだ不満を口にしてノロノロやっているケイト。立場的には同業者  
で、同僚で、だがまだ相棒とはとても呼べない。とりあえず友人には  
しておいてやってもいいとは思う女だ。

「おい、なにやってる？早くこっち来いよ」

「……ケツ」

「まだ何か文句言ってるな。お前がそんな調子だから、降りるとすぐ  
にアキラの奴は俺達を置いて先に行っちゃったんだぞ」

「あたしのせいだっというの？」

「他に何があるんだよ」

両手を広げて呆れて見せる。

なんて面倒な女なんだ——ハンコックならこんなでも問題ないのだろうが。自分は違う。

こういう女は嫌というほど知っている。暴力の匂いをまとい、殺し屋であるくせに。まるで自分を普通の弱い女のように扱わないとあらゆることに不満を持って男に縋ってくる。

詐欺だ。

嘘の匂いだ、到底好きにはなれない。

「ここ？バンカーヒル？」

「ああ。その先の門の中がそうだ。なんだ知らないのか」

「聞いたことがあるってだけ。そう、これがバンカーヒル。ここじゃ何でももらえるらしい。まずはなにかうまいモノでも探そうよ」

「……ダメだ、お前は。俺達は人を探して、そいつを連れ帰るんだ。アキラが、俺達のボスがそう言った。そいつをまず探す、飯はその後だ」

「クソ、真面目かよ」

「聞こえてるぞ！小さな声でやれー」

まったくこつちを苛立たせる奴だ。

だいたい護衛が雇い主に嫌がられて先行されるなんて、笑い話もいところなのに。こいつはそれすら理解していないように見える。願わくば、せめて自分にまかされた任務の内容くらいは理解しておいてもらわないと。さすがにこつちも限界がすぐにも来てしまいそうだ。

店の奥から店主が戻ってきた。

もったいぶっているのが丸わかりだが、気にしない。

「——ふん、リストは確認したよ。やっぱりいくつか足りないみたいだ。これは少し時間が必要になると思うね」



「どのくらい?」

「せいぜい数日だけど。急ぎつて場合があるだろう?」

数日なら問題はないか。

「わかった、それでいい。全部揃えてもらいたい。それで支払いだけど——」

「ああ、なんか言ってたね」

「最初に言った通りだよ。」

ストックトンの行商を介しての取引で頼みたい。商品は揃ったら彼のキャラバンで目的地まで運んでもらう。支払いはそこで一括で払う」

「そういうの、あんまりやる気にやらないんだよね」

まあ、そう言うよな。

「わかるよ? だけどこれは両方に必要なリスクで、十分なフォローを約束できるものだ。」

僕はキャラバンでたくさんの商品を待たずに全部を無事に手に入りたいし。あなたは僕から払われるキャップをすぐにでも自分のポケットに放り込みたい。

だからこうしよう。キャラバンは運んだら真つすぐここに戻ってきて、ついでに腕利きのミニッツメンを帰り道につけるよ。これでどう?」

「うーん……」

こんなことを言ったけど。ほとんど嘘、出まかせだ。

本部に部隊なんて頼んだら、予定通りに来ればいいけど。来なかったり遅れたら、僕が嘘をついたことになるので困る。

だが今はジミーがいる。この取引を成立させたら、彼に頼んでメルマンの訓練生をつれてきてもらい、ちよつとした実地訓練をやってもらえば——まあ、約束は果たしたも同然だろう。こういうカラクリだ。

「なんだか、あんた。えらく強気だね? そりやどうしてなのか、このデブさんに話してみる気はないかい? それを聞いたらもつと素直になれるかもしれないよ」

「そんなカワイイ頼まれかたをしたら、そりやもちろん全部話さないわけにはいかないよ」

「あら、本当かい？嬉しいね」

狡猾な中年女性は意外そうな顔をする。

「いやいや、デブ。実は君が聞いてくれたからこそ僕のたくらみは素直に話せるんだ。」

「もちろんさーそれはつまり、こういうこと。」

僕はここにストックトンの紹介で来ていて、彼のキャラバンを一枚噛ませるのもそういう話になっているからだ。

ところがここで君がこの取引を嫌がる。

当然だが、お別れだ。でもここからが本番さ。

僕は戻ってストックトンに報告する。

デブはあんたのキャラバンが間抜けばかり揃えているから道中を信用できないと言ってるよね。さらに僕は品をあきらめるわけじゃないから、ストックトン本人にリストを渡してすぐにでも君の店からそれを全部買ってきてくれと言う」

「なんだい、そりや。そんなこと——」

「ストックトンはここに来て激怒するはずだ。顔を潰してくれたな、と。」

彼はここでは大商人で、その彼をあんたが怒らせた。なんて噂も広まったらアンタの商売はやりにくくなるんじゃないか？

あんたのお抱えのスカベンジャーたちに新しい誘惑が近づいてきたり、するかもね。店に並ぶ品物が少なくなってしまう、かも」

「……もういいよ、この悪党め。それは聞かせるためにわざと話したんだね」

僕はニツコリと笑顔を浮かべる。

今、口にしたことは彼女に断られた後にする予定のいくつかの結果に触れただけだ。別に恨みはないが、手伝えないというなら商品と僕の間で立ってないようにしてやるだけ。

「大丈夫さ、きつと良い取引になるよ。そうだ、デブ姐さんのおススメがあつたら一緒にキャラバンに持たせてくれたっていい。リストに

なくてもそれが本当に良いモノだったら、よぶんに買い上げるよ。その時は別に値段表も用意して。ちゃんと値切ることなくキャップを支払うから」

「やれやれ、おっかないね」

「そんなことを言わないでさ。あんたがそうであるように、僕だってストックトンのメンツを潰したくはない。彼との関係は良い方がいいからね。つまり——」

「わかったよ、悪賢い坊主。あんたのお望み通りにするよ」

こうして僕はバンカーヒルでは御法度の“後払い”で3つの契約を成功させた。

ジミーにしてみるとそれはちよつとした詐欺もいいところだった。

彼に頼まれ、財布としてここにやってきたはずなのに。結局、彼は待ち時間に2人で食べたジュースとマイアラークケーキ代以外、財布を開かせることはなかったのだ。

「凄いですね……」

「ん？」

「俺もキャラバン引いてましたから、なにをやってるのかはわかりますよ。本当に凄いや」

「上手く行き過ぎだ。でも、おかげで君に凄いと思ってもらえた。気分はいいよ♪」

今日の彼は青の帽子とビジネススーツに身を包んでいた。

それは実になじんでいるように見えた。このビジネスマンの中身が兵士だと——誰が想像するだろう。

「ミスター・ストックトンが知り合いついていうのは本当だったんですね」

「ああ……彼の可愛い娘さんを助けたんだ、偶然ね」

「はあ」

「人助けをしていれば、時にはこういう偶然がある……毎回ではないけど」

ジミーは感心したかのようにうなづいていたが。実際に囚われた

娘がいた場所で、このアキラが何をやらかしていたか。彼にそのすべてを正しく教えたなら、嫌悪のあまりこんな顔はしてくれないだろう。

僕の本質はミニッツメンからはあまりにも遠すぎる——。  
デブの店を離れる。

彼女は結局、納得してはいないという顔だったが。アキラの望むようにするとは約束してくれたのだ。

「それで次は？」

「いや、もう終わったよ。ジミー、君には感謝しかない。

君がいてくれなかったら、こんなに強気のまままで大きな取引話をまとめ切ることは出来なかったと思う」

「いや、俺なんて——」

「事実だ。謙遜しなくていい。それに君と僕は年が近いんだから、もっと砕けてくれていいよ」

「は、ははは」

ジミーの笑い声に力がない。

「そうだ。この後だけドストツクトンに夕食に招待されてるんだ。君も一緒に来てくれるだろう？」

「え？いいんですか？」

「レオさんに聞いた通りだ。君はやっぱり、すぐにでもサンクチュアリへ戻るつもりだったんだね。

でも待つてほしい。先方は豪勢にしてくれるらしいから、僕と一緒に来て彼を困らせてほしいんだよ」

「それじゃ……ごちそうになります」

「ああ、それはストツクトンに言ってくれ」

てつきり自分はもう用はないと、サンクチュアリに戻るようと言われると思ったが。宴席に一緒に来てくれと誘われると、やはりうれしい。ミニッツメンでは期待できない申し出だ。仲間に白い目で見られる悪夢は、今でもたまに見る時がある。

「食後に君をベルチバードでサンクチュアリまで送るよ。僕は明日の朝、ここを出るつもりだ」

「わかりました。一緒に乗って、コベナントには戻らないのですか？」

「今夜、遅くに武器屋のキャラバンがここに戻ってくるそうだ。大量の武器をどれくらいで用意できるのか知っておきたいんだよ」

言いながらバンカーヒルを囲む塀に取り付けられたドアをくぐる。ストックトンの招待してくれた席は、バンカーヒルの外。旧世界のパーラーをわずかな時間だけ、僕たちとの夕食の席に変えて待っているらしい。

パラディン・ブランデイスは言った。「この隙のない計画ならきつと大成功で終わるだろう」と。

そして実際にそうなった。

アンドリユー駅を占拠するレイダーに回収されていたB・O・Sの装備は全てを回収し、死者を出すことなくベルチバードも作戦に参加した兵士たちを無傷で回収し、戦場を離れていった。

まあ、それでも軽傷、中傷が何人かはいた。

だがパラディン・ダンスは心配はしていない。今回の作戦で自分の味方になってくれた以前の部下——友人であるリースとハイレンがちゃんと面倒を見ていてくれたはずだから。

「B・O・Sの旦那あ！そろそろ出られる？」

「——もちろんだ。3分で支度する」

昨夜は連邦で野宿をした。

焚火を踏み消す女性にダンスは歯切れよくそう答えると、彼女のバラモンがなぜか声を上げた。地面から起き上がってB・O・S・ナイト・スーツに異常がないのを確認し。新たなパワーセルを取り出すと、愛用のパワーアーマーに取り付け装着する。

今回の作戦、予想もつかないトラブルは帰りのへりに自分の席がなかったことだ。

画竜点睛を欠く、だったか。まったくしまらない話だった。

それが分かったとき、リースとハイレンは慌てて自分達も残ると主

張してくれたけれど、隊長としてそれは許さなかった。彼らは怪我人たちと共にベルチバードに乗って去った。

見送ったときに感じたのは、不安よりもむしろ好奇心だった。

ひとりでこの連邦の中を歩き回るなんてとんでもない、以前ならそう思っていたはずだ。

部隊を引き連れてここに調査にやってきた時は、すべてが危険で単独行動などありえないと思っていた。

だが今はそうではない。レオとともに歩いた連邦は新鮮そのもので、私も彼のようにしてみたいと心の底で願っていたらしい。

とはいえ根拠のない自信は良くないことも経験から知っている。

だからひとりで歩き始めてすぐにバラモンを連れた商人と出会えた自分は本当に運がいいのだろう。

ダンスはさっそく軍隊式とは違う。ややぎこちないが、不器用なりに自分を護衛として雇ってみないか？と商人に交渉——というか申し出を試みた。相手は疑う目を向けてきたが、なぜかすんなりと了承してくれた。

それからは彼女のキャラバンと共に行動し、海岸線が無事に北上を続けている。

ボストンの外延部とはいえ、早朝のこの時間は恐ろしく静かだ。

だが襲撃者はこの周辺の建物の陰に潜み、目の前を通り過ぎようとする獲物を待ち構えている——はずなのだが、まったくその気配がない。

「昨日から危険なエリアに入ったことは知っていた。しかし——なにもないな」

「ん？」

「いや、私の知る連邦とは騒がしいばかりだった。銃声、悲鳴、助けを求め、それをあざ笑う。さらにアポミネーションの不気味な声……そうしたものだ」

「ああ、わかる」

「都市部はそれが特にひどい——そのはずなのに、今は静かだ」

小さな声でそう感想を述べると彼女——商人のライリーはにやりと笑う。これには仕掛けがあるのだと教えてくれた。

「この辺はスーパーミュータントもいるけど、ほとんどがレイダーの支配域なんだ」

「そうか」

「で、バンカーヒルは奴らに一定の通行料を支払う約束をしている。

具体的には時間帯だね。大抵は朝、太陽が昇って落ちる前まで。奴らは特定の日時だけは仕事をしないから、こっちはその時にこっそり通り抜けることが出来るってわけ」

「なるほどな——だが、それでは奴らは暴れたりないなどと言い出すのではないか？信用するのか？」

「ああ、そうだよ。だからバンカーヒルで手に入るこの情報は売り物になってる。かなりの値段が付けられるから、うちのような小さなキャラバンは別に護衛は雇えなくなるんだ。

でもある程度の安全は、キャップで保証はされている」

そう言いながらパイプライフルを持つライリーは首をすくめる。

ひとりの女性と一匹のバラモンだけの旅——恐ろしくはないのだろうか？

「別に——ほら、だってこの姿を見ればわからない？」

「？」

「Vaultスーツだよ。わたしは元は地底人なんだ、Vault 8 1つてところのね。」

そこじや200年以上も閉じこもってるつてのが自慢のウンザリする場所だね。子供の頃にいじめてきたクソ野郎に抱かれて子供をこさえる、なんて言われて限界突破。それで外に飛び出してきたのがこのわたしなんだよ」

「Vaultというのとは外に出たら戻れないという噂を聞いたことがある。そこは故郷なんだろう？寂しくはないのか？家族は？」

ライリーはケラケラと笑い声をあげた。

あまりにそれが無防備でダンスの方がとつさに周囲を確認しながらビクビクしてしまった。

「そういった全部を捨てたんだよ、旦那。」

男好きする女に『お前にこの男をやる』なんて命令されるのもムカついたし、十月十日も自分の腹で育ててから生み出すクソ野郎とのガキなんて見たくもなかった。育てるのも御免さ。

それならこの広い世界で間違いないクソ野郎にレイプされてくたばるのと変わりはないって思ったんだよ」

「それが比較になるのか？ 厳しいな」

「かもね。でも、わたしのキャラバンは連邦の空の下でまだ自由に好き勝手をやっている。いい男はたまには会えるし、楽しめるし。だれかと絶対に子供を作れとも命令されない。

今は自分の小さな店を持ちたくて頑張ってる。夢、自由、あそこに残りたかったなんて全く考えたこともないさ」

そう言つて再びライリーは笑った。

彼女とは次第に打ち解けていった。

ひとり、B. O. S. のパワーアーマーを着て歩いていた怪しい自分に同行を許したのかも、教えてくれた。しらなかつたが今では彼女のように連邦を歩く元B. O. S. の商人というのはかなりいるぞうだ。

そういえばキャピタルからこっちに来て消えた奴がいるという噂は聞いたことがある——噂は本当だったようだ。

すると自然、パラディン・ブランデイスをレオと共に救出した時を思い出す。

彼もそうだった。仲間を失い、孤独に怯え、理想に生きる自分の姿を忘れてしまった——。

今なら私も理解できる。この私とて組織を離ればこの胸に宿る熱い想いや理想も、瞬く間に冷たく凍り付き。荒涼とした野原にすてられるゴミに等しくなるに違いない、と。

「そういうえばライリーは店を持ちたいと言っていたが、グッドネイバーで店を持つつもりなのか？」

「え、どうしたの。いきなり？」

「いや、君はさつきこの辺りはバンカーヒルと約束があると言ってい



た。つまりそれはグッドネイバーとの——」

「いや、ちよつと待って旦那。あんた大きな勘違いをしてるようだね」  
そういうとライリーは眉をひそめる。

「確かにグッドネイバーは悪党の町っていわれちゃいるけど。レイダーとは別になんのつながりもないんだよ、知らなかったのかい？」  
「知らなかった。てつきり……」

「ああ、言いたいことはわかるよ。でもね、あそこはまさに伝説で特別な町なのさ。」

ジョン・ハンコックっていうルールを怒らせなきや別に何も言われないけれど、レイダーは好きにふるまっていわけじゃない。だから連中はハンコックが死んでくれればいいと思ってる」

「ややこしいんだな」

「そりや旦那達が単純なだけなのさ。連邦じゃこれは常識中の常識。もう少し利口になった方がいいよね」

「ふうむ」

いつも周りから自分を指して「お前はいい奴だな」と言われ続けていたが、ライリーの口調を考えるとそれは決して褒められたものではなかった、ということらしい——。

ミステイック川——湖から流れ出て、タフイントン・ボートハウスのそばに流れるモールデン川に合流し、さらにバンカーヒルそばを通ってチエルシー川に合流。そうしてようやく海へ……ボストン湾へと流れつく、それ。

なにかと町の喧騒と強い風でにぎやかにするチャールズ川とは違い。こちらは静かすぎるほどに静かで、川岸にある旧フードコートでは物々しい武装の傭兵団が見張る中。コックによる調理音とひとつの席から聞こえてくる笑い声が川の流れる音にまぎれる。

ストックトンのもてなしは徹底していた。この時代にまだ残って

いたコース料理を用意してきたのだ。

メニューは以下の通り。

リスの角切りに始まり、コーンスープ、ソフトシエルの肉と海草のサラダ、デスクローオムレツと分厚いリブアイ・ステーキ。マイアラークの卵とスイカのシャーベツト。

まさに怒濤のラインナップであった。

親子はそれらを少量ずついただいていたが、ジミーの前に用意されたのはアキラと同じビッグサイズのそれらである。愕然としたが、今更「自分も少なめで」とも言えず——同じく兵士として、戦士として。せめてこれくらいは彼に負けまいと戦う覚悟を決めた。

だが戦いは激しさを極めた。

ステーキを平らげたところでストックトンの娘が気をきかせてくれたのだろう。真っ青になっているジミーを連れて少し散歩してくると言い残し、席を立つ。

街灯の下を2人が寄り添い背中を見せて離れていくのを目を細めて見送っていたストックトンが、唐突に口を開く。

「大きな契約がまとまったようですね」

「なんとか。こちらの希望通りに」

「さすがです。バンカーヒルの商人に後払いを認めさせるなんて。これは伝説になりますな」

「こっちは町ひとつ、スツカラカン。なにもできないんじゃない、ただ必死なんです」

「確かに。うちもこういった話で空のキャラバンを貸し出すのも久しぶりだ」

本当に静かな川だった。

でも僕にはわかる。少し離れているが、向かい岸の崩れた家屋からきこえるアポミネーションの気配があることを。

それでもあえてここに席を用意したのはバンカーヒルには聞かれたくない話をストックトンはしたいのではないか、僕はそう思っていた。

「娘がね——最近私に怒っていて、許してくれないのです」

「？」

「キャラバンですよ。あの娘のキャラバン、私はまだ外に出るのは早いと嫌がつてましてね。あんなことがあったんですから、怖くて彼女を手放せない」

「ところが本人は今度は失敗しない、とか考えていて。すぐにも外に飛び出していきたがっている？」

「そう、まさにそれです」

言いながらも、ストックトンの目には憂いが見えた。

「あなたは才能ある若者です。それはわかっている——知り合ってから時間は短い、私のビジネスでああなたに關係するものは次第に大きくなってきています。もう、私はあなたを無視はできないでしょう」

「……」

「今回、わたしにあなたは金を借りたいと申し出るだろうと思っていた。もちろん出してもよかったが、断ろうとも考えていた。あなたとの關係を少しでも私に有利にさせたくて——」

「そう」

「ふふふ、わかっていたんでしよう？」

実際はあなたはそんなことは一言も口にしなかった。それどころかいつものように私を利用しつくすだけで、大きな取引をまとめてみせた。お若いのに本当に感心させられます」

僕はそれに苦笑いで返すことしかできない。

まとめたといっても、ストックトンだけではなくガービーとミニッツメン。ハンコックとグッドネイバーの名前も出した。それにまとめた、というより軽く脅していたという方が正しい。

僕がストックトンのような大商人に褒められるところなんてないのだ。

「ひとつ、聞いてほしいことがあるのです。いいですか？」

ストックトンの相談、それは人造人間である彼の娘の事だった。

「娘は努力しています。私から学び、いつか私の後を継げるように準備したいのだと言ってくれる。」

嬉しい事です。でも——」

「そんな日は来ない」

僕は容赦なく事実を口にした。

人造人間は人とは違う。見た目に違いは判らないが、共に暮らし、長く一緒にいれば次第にボロが出てしまう。

コベナントの研究者達はそれを集団にまぎれても個人の孤独感がプログラムにバグを生み出し、故障を引き起こさせているに違いないと断言していたが——それは少し暴論の気がする。でもだからといって僕に確実なことが言えるものはない。

とにかくそれゆえに連邦の人々は人造人間を憎悪する。知り合う前からそうだったのか、いつのまにかすり替わったのか。破壊され、物言わぬ死体の前で“遅れて真実を知ってしまった”恐怖に身震いする。生まれてしまった恐怖は伝播していく——。

「ええ、そうです。そうはならないでしょう。」

私が倒れたら、バンカーヒルのハイエナ共は私の座っている大商人の席を奪いに来ます」

「だろうね」

「あの娘がそれに立ち向かえない、とは思っていません。私がそうなるのはまだ少し先のことになるでしょうし。彼女は成長している」

「でもそれは慰めにもならない。後を継げたとしても時がたてば誰かが疑問を持つ。あんたの娘は、あれは人造人間ではないか、とね。」

親であるあんたを失った時点であの娘は後ろ盾を失い、それは致命傷だ。だから外に安全を求めるしかない」

「娘をどう思います?」

ストックトンの次の問いかけは、あまりにも唐突だった。

「は?——まさかあんた。僕に娘と婚約してくれ、なんて言わないよな?」

「おや、それは斬新なアイデアです。で、どうです? 悪くない話ではありませんか? わたしの後継者と義理の息子になれますよ」

「バンカーヒルで知られる大商人のストックトンが、愛娘をこんな目つきの悪い凶相の若い元 Vault 居住者にとられた、なんて可哀そうだろうか? あんたの名前にも傷がつくよ」

「それくらいならいいです。私も世間じゃ好々爺というにはほど遠い」

「冗談はやめてくれ……悪い冗談だよね？」

「ふうむ、何か問題がありますか？」

私の義理の息子というのは、そう悪いものではないはずですが「勝手に僕を野心家にしないでくれ。」

「……他に誰かいないのか？あんたの息子になれるならって奴はここなら大勢いるだろ？」

「あの娘を守って、愛してくれる人が必要なのです。私が居なくてもね」

「——自分が多くを望みすぎてるとは思わない？そんなヒーロー、この世界にいるかどうか」

「多くを手にしてきましたから。わずかなものではこの老人は満足できません」

シルバー・シユラウドのことではないよな？

からかわれているわけではないようだ——僕にできることはとりあえず何も思い浮かばない。

「随分と気弱だ、体を病んでる？」

「いいえ、健康そのものですよ。足腰もしっかりしたもので、走ることだって出来ます」

「へえ」

「それでも確かに長く生きてきましたから——恐らく近く戦争があるからでしょう」

「……」

「グッドネイバーが狙われているそうですよ。ええ、B・O・Sの連中がここにやってきて口にしていますから」

「そう——」

「どうおもいます？」

答えにくい質問をサラツとして、答えるように要求するとは。このクソ爺イめ。

「……空港からグッドネイバーを見ているなら。当然、バンカーヒル

も目の端にあるだろうね」

「そうですね」

「本人たちがわざわざ未来の予定を吹聴しにここに来ていいるというなら。それはきつと“将来的に兵士がそばに来る”と予告してるんだろう」

「バンカーヒルは安全ではない、と？」

「B・O・S。ってのは武装組織だ、純粋なね。ああいうのはシンブルなもの好む。」

自分たちの考えを口にしながら。自分たちの力を見せつけて従わせる。事前の交渉はそれほど重視しない、自分たちの都合だけだ」

「キャピタルでも彼らはそうだったようですね。ここでもそれは繰り返される？」

「ケスラーがどれほどいい条件を出したとしても彼らは納得しないさ。特に商人たちだけの自治権、なんてね」

静かでも、決して安全ではない川のそばが。僕に暗い未来を予言させていた。

「娘が——」「ミスター・ストックトン」

僕は彼が次に口を開くのを許さなかった。

「あなたが娘の無事を願うなら、すぐにキャラバンとして外に出すのがいい。確実な安全は約束できないが。あのB・O・S。は人造人間を兵器と呼んでいる。」

それに彼女に関して、アンタはレールロードに助けは求められない。彼女の安全だけを求めてあいつらにもし引き渡せば。レールロードはあなたの娘の記憶を全て抹消し、新しい顔と名前を与えて新しい人生を始めさせるだろう」

「……そうですね」

答える彼の姿は、愛する娘を持つ父親の苦悩であり。声には血を吐くような苦しい響きがあった。

それが——それが僕をにわかに着かなくさせていく。

とにかく席を立ててここから離れたいと思った。

彼ら親子の話はもう聞きたくはなかった——なにかこれまで気が

付いていなかった辛いものを自分の中に見つけようとしていたのかもしれない。

「はあ」

「……」

「わかった、ストックトン——あんたの娘、アメリカを僕に預けてみる？」

「おお！」

「違う！おかしな期待はしないでくれ。」

ただ、計画がある。大きな計画、彼女がアンタの言う通りの商人なら手伝ってもらえるはず。それがとても助かるんだ」

「つまり娘をここから連れ出してくれるのですね」

「ああ——なんか違うけど、ようするにそういうことだよ。バンカーヒルから離れさせる。任せられる大きな仕事もある。約束できるのはそれだけなんだけど……」

「もう少し、いい話になりませんか？」

「あのねえ……あんたから娘のキャラバンを丸ごと引き受けるつてのがどれだけ目立つことか。ぼくにとってどれだけ面倒なのか知らないわけじゃないだろう？」

「そうですか。それは残念。老人の泣き落としては足りませんでしたか」

「そういうのはもういいから——とりあえず考えておいてよ。」

そのつもりがあるなら、後日アンタのキャラバンに指示を伝えるから」

「それではそのように、後は娘のアメリカとよく相談してみましょう」  
老人の顔は明るくなったが、僕の方はそうじゃない。

ジミーはあの娘とどこまで散歩に行ったんだ？もう、この席もいい加減お開きにしたい。

「ああ、それはそうともうひとつ」

「まだなにかあるの!？」

「ミニッツメンは、ガンナーズを相手に勝てましようか？」

「無理だよ——あつ！」

一瞬、僕は思わず大商人の狡猾な罠に引つかかり。まだ誰にも言っていない事を口にしてしまった。

ミニッツメンはこの先、ガンナーズとの対決に向けて南に注力していくことになる。

だが恐らく——ミニッツメンは勝てない。これはまだ、レオさんにも言っていないことだった。

エルダー・マクソンは呼び寄せたヘイレンとリースからの報告を聞き終わると「ありがとう、あとはダンス本人が帰還したら、彼から聞かせてもらおう」と言った。

彼らがキャプテン・ケルズと共に退出すると、席を立ってブリドウエンの窓から空港をながめる。

(素晴らしい結果だ。やってくれたな、ダンス)

今後はこの成果が他の部隊の回収作戦のお手本となるだろう。

まあそれも——肝心の指揮官が無事にここまで戻ってこれなければ、本末転倒だが。

「ナイト・リース。スクライブ・ヘイレンは無事に送り出しました。エルダー」

「彼らには面倒をかけてしまったが。しょうがないな、任務は終わったのにダンスがいらない」

「困ったものです。彼は生真面目な男だと、そう思っていたのですが。こんな無責任なふるまいをするなんて……」

ケルズは不満そうだ。

ダンスがひとり、この連邦を徒歩で空港まで戻ってくるとしたことが許せないのだ。

彼の考えを言えば作戦は無事に終了。けが人は出たが。すでに目標からは距離をとっていたことだし、ベルチバードを直ちに往復させればそれで済む話だったと考えているのだ。

「そこまで彼を責めることはないだろう。彼は連邦を我々よりも理解



している。回収ポイントで長くとどまることが危険だと、そう考えたのではないか」

「はあ」

「とにかく彼が戻れば——今回は大成功だと言えるだろう。」

私は満足している。これで彼に新しい任務を与えることが出来る」

「はい、エルダー」

「反対か？」

ケルズはいいえ、とすぐに答えたが。続けて

「気にしているのは、あなたが民兵などに気を遣う理由がわからないだけです」

「ダンスをミニッツメンに。あのレオという男に送り込む、彼の動機は我々の目的とも一致する。」

そろそろ未来を考えて本当に協力できるか、探ってみるべきだろう」

B・O・Sのスクライブから泣きが入ったのだ。

自分たちの情報操作が連邦の民にあまりうまく浸透していない、と。

その原因として挙げられたのがミニッツメン。

かつて虐殺者の手先となった恥ずべき集団は、新たな芽を出す瞬間にその勢力を広げている。地に落ちたはずの彼らの名声は2度と復活しない死者のはずだったが。なぜか外から来た我々よりも、彼らを連邦の人々は期待しているらしい。

“そこまで”出来る”というなら、調べておくのも悪くない。

インステイチュートの謎を彼らが解いたとはまったく思っていないが、協力を求めるほどの相手かどうか。脅威となるのかどうか。

「ダンスは生真面目な男です——それが心配です」

「大丈夫だ。任務に忠実な彼だからこそ、今回も任せられる」

ダンス、早く戻ってこい。

帰りを待たれている本人は、ライリーと別れ、ひとりになっていた。とりあえずバンカーヒルに向かうというライリーはこれまで南部の

難民たちを相手に商売をしていたが、その相手が……消えたそうだ。ガンナーズの猛威は、弱い者を——難民、放浪者、そして無法者。味方以外の存在を彼らは許さない。

だから弱い者たちはさらに辺境の危険地帯に逃げていくか、戦うしかない。

——南部はもうすべてが戦場よ。このままじゃ弱い商人も、ね

潮時なのだそうだ。

それでもひとつダンスは疑問をぶつけた。

なぜ北にもっと早く来なかつたんだ、と。ミニッツメンは安全な居住地を用意しているのに、そこなら君たち商人も仕事をしやすいのではないかと。

——ミニッツメンはうまくやったわよね。知ってる。

——でも今の彼らは居住地の利権にがつり絡んでいるわ。うちのような新規の商人では出入りはゆるさされていないそうよ。

——でも彼らの売りである“平和”は誰でも欲しがらる。強力な商売敵よね、これからが大変。

再び変化が始まっている、この連邦に。

これは以前には感じる事が出来なかつた。もしかしたらレオが感じていることなのかもしれない。

時がたつにつれ、今まで見えなかつたモノや感じられなかつたことを知るたびにその影響の強さを思い出す。

ダンスは力強く歩んでゆく。

遠くの空に浮かぶブリドウエンはまだ小さいが、彼の視線はそこからまったくぶれることはない。

## 救いのシ者

わずか数日、それでも家に……妹のいるここに戻ってこれた。

パイパーにとつて妹への安心は常に必要なことだ。今回のように取材に失敗し、危うくどうにかなっていたかもしれない状況から帰ってこれたときは特に。

とはいえこれは心の奥底に隠している部分での事。

ナツトは事情を知らないまま、うその報告を信じてダメな姉に怒りを向けてくる。

あろうことか取材に失敗してしまい手ぶらで戻ってきた姉。

あろうことか次の新聞の発売延期を強引に決めた編集長である姉。

あろうことか、だから今度こそちゃんとした記事をかけるだけの取材にすぐに出ていくという姉。

だが一番情けなくて、妹として心配するのは――。

あろうことかまたしてもミスターとの関係がまつたく進んでいない“らしい”姉のがっかりぶり。美人の価値が疑われるっ。

――情けない！

――ちよつと！それが姉に言う言葉？罰として2週間の外出禁止！

なんともこの姉妹らしい再会だったが、おかげでパイパーも“普通”をふるまうことが出来る。

正直に言えば今回はさすがに危なかった。

取材方法を知っている同業者にハメられ、どういう経緯だかわからないがレイダーの集まるテーマパークとやらに奴隷として売られてしまったのだ。

アキラを始め、ハンコックやケイトには言いにくい事だがお礼のしようもなかった。下手をすれば自分は今も、訳の分からない状態のまま夢見心地の中で最悪の奴隷としての人生を続けていたかもしれない。

一流記者としてのプライドは傷つけられ、考えればすぐに恐怖とショックが襲ってくる。ピンチだった。

今は冷静になることは出来るが、それだってキュリーがコベナントを発つときに「自宅に戻れたあたりで回復しているはずです」との診断をもらったからできることだ。

薬物からの回復からくる反動で言動も行動も不安定ではなかったかと、今なら少し前までの自分の異常を自覚することが出来る。本当にまったくないところのない、最悪の経験だった――。

でもだからこそ、すぐにも仕事をしなくてはならない。

ありがたいことにレオにはサンクチュアリと彼の作った新しい組織、メールマンの実態を紹介してくれると言ってくれている。

幸運だけでなんとか助かった最悪の経験をすぐにも過去のものにするために、力強く前に進めることを自分で証明しなくてはならない。

弱くてはいけないのだ。自分はこの妹のためにも――。

マーケットのセールでまとめ買いしていた10ミリ弾の箱を棚からいくつか取り出しているところに、まだ不機嫌なナットがやってくる。

もうすぐ寝る時間だ。

「銃？」

「ええ、そう。明日の朝、出るからね」

続いてナットは机の上に置かれているパイパーの昔から使っている銃を見る。

「これ、パイパーのだよね？昔から使ってる」

「そうだよ。まあ、一応」

「まだこれを使ってるの？アキラのくれたのじゃダメなの？」

「これ、とか言うな！失礼な」

元は中古で、とりあえず弾を撃つことが出来る程度だったはずのそれは。

アキラのせいで今はちよつとしたサブマシンガンにされて弾丸の消費が激しくなっちゃった。形だってゴテゴテつけられて――便利ではあるけども――大きくなっている。

「シーデビル？あれ45口径弾、やっぱあれ高い」

「セール品だし、別に——」

「それでも高いよ。10ミリ弾なら1キヤップで箱買いできるけど、中古でも45口径弾だと1発につき4キヤップとられる。比べられないよ」

それに銃声や反動、あつちは殺傷力も強すぎる気がする。

戦士ではなく自分はジャーナリストなのだ。殺す必要は必ずしもない、との思いがある。

「あのさ、パイパー。今回は私もついていっていい？」

「ダメー！これは議論の余地なしだからね。学校があるし、だいたいこの家の留守番を——」

振り返ってセリフが止まったのは、そこに自分を見上げてくる妹の目が真剣に心配しているそれだったからだ。

もしかしたら黙っていてもわかってしまうのかもしれない。心配をかけているのかも、このみつともなくもピンチになっている姉を見て。

だからこそ安心させたいと思った。

「……今回は失敗しちゃってごめん。次号はなんとかするから、お姉ちゃんは大丈夫だよ」

「本当に？なんかあったんじゃないの？」

「大丈夫だって」

「じゃ、なんで話してくれないの？なにも」

ドキリとする。

不安が、恐怖は振り払えないものがあつた。

自分が意識を茫洋とさせている間、なにがあつたのか。それがわからない。

でもキュリーやケイトに頼んで調べてもらった。体には別にこれといった異変はないし、傷もないと。わかってる、わかっただけや。はり怖い——。

「ツイてなかったって、ただそれだけのことよ。何も面白い話はないし。それだけ」

「ふーん」

「次は手堅いし、皆も興味を持ってもらえるはずだから売れ行きもいはずだよ」

「うん、それもミスターのおかげだよね。お礼したら」

「なによ」

「もうなにかの拍子に飛びついちゃってさ。キスしちやえばいいんだよ」

「はあ？」

「こんなの子供でも考えつくよっ」

「ふふん、ナットさんが教えてあげるって？もう、キスも知らないくせによくも——」

すると妹は「ん？」と首をひねった。

「あ、そうか。話してなかったよね、アレ」

「なによ？」

「聞いてよパイパー、実はちよつと前なんだけどさあ」

それはちよつとした妹の武勇伝であり。彼女の衝撃の初キスの告白でもあった。

学校の帰り道、からかってきた男の子にいきなりキスをされ、泣き叫んで謝るまで許さずになぐってやったというのだ。

——ガキ、殺す。

姉は心の中で少年の顔を思い出し、明日の朝。ダイヤモンドシティを出る前に会いに行つてその尻を蹴り上げることを決意する。

そして立派な姉として、おてんばに過ぎる妹に告げなくてはいけないことがあった。

「ナット。2週間の外出禁止、これは追加ね」

「ちよつとひどいよ！こっちは被害者なのに！それに前のも併せて1カ月以上も閉じめるとか、虐待だからね！」

「うるさい！これは決定事項」

「横暴だ！横暴だ！」

ライト姉妹は久しぶりに騒がしい夜を過ごしていた。

ガービーはレオが本部にやってきても、いきなりロニーと対面させはしなかった。

とりあえず帰還兵への慰労、報告書の山。後続の派遣部隊を決め、新たに必要とされる装備の予算を確認する。

問題は海岸線にそってまだ解放されていない、いくつかの居住地候補地と、東部に送り込む居住者たちの選定にどうやって、いつ入るのかという事。

遠征軍が必要になるし、そこには出来るだけ新兵と古参兵を混ぜながら。死者を出さず、勝利もしなくてはならない。

そしてこれに成功すればいよいよミニッツメンによる北部掌握は時間の問題となる——だが全てが終わるまでは、気を抜けない。

特に今は沈黙しているB・O・S。が、これから黙ったままでいるかどうか。

エルダー・マクソンがどう考えているのか——レオもガービーもそれを気にしているが、簡単には触れることはない。

だが良いこともある。

ロニーが来てくれた。これは良い材料だ。

彼女は以前のミニッツメンでもしっかりとした人で知られていたし、ふがいなくまとまり切れない幹部たちを罵り。立ち去る彼女を見習って離れていったミニッツメン達の情報を持っているらしい。

新しいものと古いものの融合、それはミニッツメンを再び立ち上げる時に将軍やアキラとも合意したことだ。

連邦の半分を手にしての人員不足の心配は、彼女のおかげで一気に解決される。将軍も喜んでくれるはずだと思った。

「……ところで将軍、ちよつといいかな?」「ん?」

「会ってもらいたい人がいる。今朝、ここにいきなり現れたんだけど

——」「へえ」

「恐らく我々に。ミニッツメンにとっていい事だと思う。是非」「わ

かった、会うよ」「よかった、本当に良かった」

静かな笑みを浮かべての面会は、時間がたつごとに徐々に危険な沈黙へと変化していく。

熱くなるはずの血は、氷点下にまで下がって凍り付きそうだ。

始まりはロニーによる柔らかな現状のミニッツメンへの批判から始まった。

彼女なりの、ちよつとしたエールのようなものだった。ガービー自身はそう解釈している。「今のやり方は好きじゃない」ロニーは言った、確かに以前とは大きく違ふところだし、昔のやり方を知っていると違和感があるかもしれない。

だがレオはそれを聞きなり顔色を変えた。

微妙な違いであつたが、ガービーにはわかつた。

レオは——将軍は容赦しなかつた。

ロニーが口にする古き時代の思い出を、ただの思い込みと断じ。彼女が知っているかつて仲間たちを「仲間を見捨てた日和見たち」と侮辱し、「ここに来て新兵に交じってやれるかどうか、理解できるというが」と笑つた。

互いの苛立ちをガービーはどうすることも出来ない。

「……どうやら将軍様だなんだとちやほやされて、勘違いしているようだね」

「勘違いはあなたの方だ。私は支持され、請われて将軍となつた。ガービーに聞いたらしい」

「あたしは認めちやいないよ。付け加えると、認める気にもなつてない」

「別に構わない。あなたの支持は必要ない。そもそもまだ、アナタは私のミニッツメンではないのだから」

「——その言葉の重み、わかつて言つてるんだらうね?!」

「自称ミニッツメンはあちこちで出沒しているらしいと聞いてる。そうだ、ガービー。我々も先日、そういうのに会つたな」

このままではいけない、その思いでガービーはなんとか仲裁に入る



うとする。

「頼む、將軍、ロニー。お互いに冷静になつてほしい。」

そもそもこの新しいミニッツメンは、かつてのやりかたも受け継ぐということになつてたはずだ。過去には恥ずべき事件もあったが、人々に称賛された栄光だつてあつた。

將軍、彼女こそ。ロニー・ショーこそかつてのミニッツメンの良い部分の象徴だ。彼女なら俺は安心できる、彼女が連れてくる人なら信用できる。ミニッツメンに迎えられる。

ロニー、將軍こそ我々の失つたものだ。彼の勇氣、人柄、能力。どれも抜きんでた人物だ。

彼が居なければこのミニッツメンはここまでなかつた。彼の力は必要だつた。それはこれからも変わらない——」

祈るような気持ちだつた。

「——別にケチをつけたくてこつちも出てきたわけじゃないさ。」

それでも、どうしても我慢できないことがあるのも事実だよ。だからまず、そこから話し合わないかい？」

「わかつた」

「よし……頭じゃわかつちやいるんだよ、前のバカな連中のやつてたのに比べたら。ここは間違いなくミニッツメンだつてことはね。」

でもひとつだけ、どうしても我慢できないことがあるんだ。それをやってくれるなら——なにも文句はない」

「なんです、ロニー」

「キヤッスルさ。ミニッツメンならあそこに帰らなきゃならない」

「——!？」

「キヤッスルの奪還作戦。力を貸す代わりに、これだけは確実に約束してもらおう」

「キヤッスル——ミニッツメンの象徴」

「今はちやうど、一仕事やつて、仕上げてるところだろ？ わかつてるよ、慌てちやいない。」

でもやつてもらわなきゃならない。だつてそれがミニッツメンの——」

爆弾が落ちてきた。

「約束はない。残念だ、ミズ・ロニー」

將軍は——レオは無常にも再び装甲を身にまとった。

再び激怒するロニーによる罵声の嵐が始まり、本部にいたミニッツメンは何事かと耳をすませた——。

夢にまで見た栄光の未来に、暗い影が落ちる。

ガービーは呆然とするしかなかった。

用意された空つぽの2人分のカップを前に、何もできなかった無力をかみしめなくてはならなかった。

大失敗だった。

これまでがほとんど全て、成功が続いたから忘れていたのかもしれない。悪い事はいつでも最悪の形でやってくる。礼儀を知らず、こちらの都合も考えず。

現在、カウンティー・クロッシングにミニッツメンの精鋭部隊は留まっている。

以前はスロッグとよばれるグールの町にいたが、やはりグールとの共同生活は色々と難しいものがあつた。

その点、ここならば敷地は広いが人はわずか。そのうえバンカーヒルにB・O・S. が留まる空港も近いとあつて、平和だ。送り込まれた兵士達もこつちにうつつてきて喜んでいる。

まあ、本部はあまり良い事には考えていないようだが——。

本日の予定は海岸線にある下水道を2つの部隊が調査。ひとつはこの警備を担当し、ひとつはパトロールに参加。最後にのこつた部隊は休日ということになっている。

ボブは隊長としてこの警備を担当することになっていたが、部下に命じて自分はテントの中で新しい報告書の追加分を用意していた。すると昼間からビールを片手にした休暇組の隊長がテントの中に

やってきた。

「お、どこで警備班の隊長の姿がなくてさぼっているなど思ったら、ここに隠れてたか」

「——俺はせっせと鉛筆を手に楽しんでるところだ。邪魔はするな、出てけー」

「変わったアイテムで遊んでるな……報告書か？皆でまとめたのは帰還した連中が持っていたら？」

「こいつは補足分。本部の連中にごこらを歩くなら大勢連れてこいて教えてやらないとな」

「まあな。でもその大掃除には俺達は参加しなくていいってのは、ガツカリもするが。喜ぶべきなんだろうな」

調査には危険を避け、人命を尊重し、被害を抑えろなどのガービーからの無茶な注文だったが、それなりにうまくやってきたと思う。

物資の不足は多少の事ならどうかやりくりできるが。失った人間の変わりはなかなか難しいのだ。

噂では新兵希望者たちは今も受付に続々と集まっているのは変わらないが。試験を経て、訓練生になっても。たった数週間の団体生活と行動ができずに脱落するものが後を絶たないのは変わらないらしい。欲しい人は少なく、来たとしても使えるまでに数週間。こちらに送るならさらに戦闘経験も複数回はこなしておかなくては使い物にはならない。

ガービーやレオが頭を悩ませているわけである。

「遠征軍を用意するつもりなのか、ガービーは？」

「そりやそうだ。俺たち自身もそれを提案したしな」

「数は？」

「うちは結成時から小隊が基本だったが、こっちはそうはいかないだろ。100人以上は欲しい」

「そうなると空港の連中もどう反応するか——あとは本部次第か」

「まあな」

「——俺達の帰還はいつになると思う？」

「来週の頭くらいまでに、後続部隊がここにやってくることになって

る。恐らく任務の正式な終了と帰還命令はそいつらが持つてくる」

「だからいつだよ」

「週末かもな。それで休暇だ、満足したか？」

「戦闘を避け、命がけの調査はしなかったが苦勞ばかりだった。それも終わるのか、悪くないよな？」

「まだ終わってない。俺達がそれまで生きていられたらな」

「なんだよ、やけに悲觀的だな。家でおまえを待つてくれる奴がいなののか？」

「弟と妹の家族たちがいる。お前と違ってな」

「うわ、ひでえ」

「そうだな。お前が今度の休み、薬に酒、女で失敗しても俺を様子を見に行ったりはしないぞ。あいつらのガキどもに釣りを教えてやる約束をしてるんだ」

テントの壁際には、調査の最中に回収した釣り竿が何振りかまとまって壁にかけられている。

なるほどあれはそういうことか。

「あれは土産だったのか。俺はてつきりバンカーヒルのゴミ拾いに売り飛ばすのかと思ってた」

「遊んでやれないオジサンと思われたくないんだよ。あれに触った奴は、即決裁判で銃殺にするって警告してる。お前も、お前のところの奴も触るなよ」

「怖いね……」

ぐびり、と喉を鳴らしてビールを飲むとさすがに仕事している方は険しい視線で睨みつけた。

「お前、もうどこかにいけよ。今日は休暇だろ？」

「そうなんだけどな。今日だけだから、バンカーヒルには行けないし。このあたりじゃ遊べる場所もない。」

だから俺も部下たちに、今日という日を頑張ってお仕事しているヒーローたちの隣でビールを飲んでやれと命令した。お前の部下もみんな、今頃イラついてるはずさ」

「チツチツ、なんて奴だ。お前は悪魔だな、士気が下がったらどうす

る」

「へへ、帰還まで休日のない唯一の部隊さん達。ご愁傷さまでえすう」

まあ、これは半分は事実で。半分は冗談だ。

実際の話、今のミニッツメンはメッドフォードの町から東には十分に目を光らせることは出来ないでいる。

以前、ガービーがここに電撃的に訪れたことがあったが。思うに彼や将軍があと何回かこちらに足を運んでくれない事には、落ち着いたとは言えないだろう。西に比べるとレイダーやスーパーミュータントなどの危険度は倍は違うことを実感する。

その後も2人の隊長はグダグダとおしゃべりしながら、それぞれが好きにやっていたが。

両者の口がある瞬間からいきなり閉じられた。

静寂——でもそのなかには小さな雑多な音が響いていて、それを聞き分けようとする。

悲鳴や騒ぎはなかったが。直前に一発。レーザーマスケットからの発射音が聞こえた気がした。

お互い、耳に全力で集中し。行動もぴたりと止まっている。

次に何か聞こえたらここから飛び出していくつもりなのだ。

「……警告か？もしくは馬鹿が遊びか？」

「シッ！——撃つたのになんの騒ぎもない、どうしてだ？」

たがいに疑問を口にする、それを待っていたかのように遠くで確かに誰かが叫ぶのを今度ははつきりと聞いた。

——襲撃だ！

敵だ！ミニッツメンは帽子とマスケットに手を伸ばす。

テントから飛び出す2人の隊長の目に飛び込んできた敵の姿は—

—チャイルド・オブ・アトム。

「異教徒たちよ！我らの手でその血を流せ！」

「アトムの輝きに満たされよ！」

2人は瞬時に叫ぶ。

「ミニッツメン！反撃せよ」と。

アトム信者たちによる攻撃は計画されたものだった。

同時刻、チャールズ川沿いの地下道を探っていた2つの部隊もまた交戦状態にあったが。こちらは居住地とは違った展開を見せていた。

排水口を覗きながら広がる川を背にしていると。

隊員の一人が唐突に視線があるのを気にしだし、なんの根拠もなく水の流れの中に目をやって——違和感を確実にした。

すぐにマスキットのスコープで確認すると。なんとこちらにむかって泳いでくる集団がいたのだ。

すぐさま迎撃態勢と襲撃を知らせるフレアが上空に向けて発射され。

これによって同じようなことをしていた近くの部隊も水の中から迫ってくる存在に気が付くことが出来た。

カウンティ―・クロッシングの見張り台からもこの信号には気が付いてはいた。だがその正体が、まさか海から川へとさかのぼって泳いできているとは思わず。また部隊とは距離が離れているとの思いが指揮官への連絡を遅らせ——敵の不意打ちを許してしまったのだ。

戦場と化した居住地はあつというまに叫び声に悲鳴、レーザーとガンマ弾が飛び交う地獄と化した。

「住人は逃げろ！逃がしてやれ！ミニッツメン、反撃だ！」

レイダー、ガンナー、アポミネーションへの恐怖にはもう慣れた、そんな軽口をたたくここにいるミニッツメン達も。

相手がアトム教の信者となると、背筋に冷たいものが流れる。壊れた世界の中で誕生したアトム教は信者以外を全て異教徒と呼び、その狂信的な信者たちは容赦をしないことで知られている。

仮にも宗教なので信者には集団へ帰依することを求められ、共に教義に従って平和に暮らすこともあったが。

その理論は全部に統一されているわけではなく。何かのひょうしに攻撃的な集団となると、狂信的十字軍と変貌し、あらゆる敵に向

かつて攻撃を続ける。

その時彼らはガンマ銃、で知られる奇妙な武器を手にして戦うが。そもそもガンマ銃なるものは本当に武器なのか？と問えば、銃マニアのあいだでは議論が巻き起こるくらいトンでもない代物だった。

トリガーを引くとそれは強力なガンマ線を含んだ怪光線を発射するのだが。これは命中率は良くないし、そもそも攻撃することに外に処理しきれなかったガンマ線が漏れ出してしまつて使用者自身も被爆してしまう欠陥がある。

だがそもそもアトム信者は放射能を崇めている。

つまりガンマ銃で被ばくすることは、彼らにとっては喜びというこゝとで解釈されるらしい。

襲撃が始まると、畑のそばにあつた見張り台からミニッツメン達が「逃げろ、逃げろー」と叫びながら反撃を始め。

親子で畑仕事をしていた母親は、そこでようやく子供を抱きかかえて一目散に走りだす。

だがすでに心の中は絶望が襲つていた。

何人かの男たちは農具を手に畑の中にしゃがみこんで戦う様子を見せているが。

後ろから聞こえるアトムを賛美する言葉の数々が、彼らが生き残るチャンスはほとんどないことを伝えている。

さらに親子が立っていた位置は、襲撃者側に近かつた。

すでに命中精度の悪いガンマ弾の怪光線が走っている親子のそばを通り過ぎているのは、この背中が狙われている証拠である。

抱きかかえている息子は大泣きだ。自分は必死に走りながら「黙つて、静かにして。大丈夫」と声をかけるしかできない。

どこかで「ダメだ！」という男の悲鳴が上がると、母親は自分の背中に違和感を感じながら――わずかに宙を飛んでそのまま前のめりに倒れ込んだ。

やはり逃れきれなかったのだ。

複数の信者から放たれたガンマ弾は、重なるようにして母親の背中

に着弾してしまった。

抱かれていた子供は突然、母が飛び上がるとそのままの勢いで倒れ込んできて——石が転がる砂利の上に母親の体重ごとたたきつけられ、擦りむき、出血して目を白黒させ。なんとか魚のように口をパクパクさせたのは呼吸が出きなかったからだ。それが終わると再び、今度は恐怖だけではなく、苦痛によつて鳴き声を一層張り上げた。

「ご、ごめんね。今……」

複数のガンマ弾が直撃したことです。すでに生命の危険にさらされるほど被ばくしてしまった母親は意識を飛ばしかけていたが。

子供の苦痛に反応して立ち上がろうと——慌てて息子の上からどうこうと無意識のうちに地面に両手をついて立ち上がろうとしてしまう。

——アトムの輝きに焼かれるがいい！

異教徒に向ける狂信者の祝福の音が、親子の繋がりを引きちぎる。弱っている母親の背にさらに新しい怪光線が炸裂すると、母親の意思は関係なく彼女は体を不自然なほど跳ね上がらせてからまたもや息子を自分の体で押しつぶしてしまった。

母親は絶命した。

「ひとりやった。ひとりやったぞ」

目は血走り、狂信者にふさわしい歓喜の声を繰り返しながら銃に新しいガンマ弾を補充する。

まだ異教徒は残ってる。死んだ女の下に、すぐそこに！

だが彼の喜びはそこまでだった——「このクズ野郎！」の叫びと共に横から走り込んできたミニツツメンの女兵士は。レーザーマスケットのストックでもって教信者の横面から殴り倒し。そのまま両目を狙って数回を振り下ろした。

「目が、俺の目えー！」

兵士は足元でのたうつくズは踏みつけるだけで放置し。マスケットに充電されたエネルギーを続いて近づいてくる次の信者に撃ち放つ。

レーザーと怪光線が交じり合う。



兵士は膝をついた。直撃だった。

RAD値が跳ね上がったが、それだけだ。

だが信者はそうはいかない。相手は走りながら、最後の祈りの言葉を口にする事なく肉体が崩壊して灰となっていた。

ガンマ銃を武器と呼びたくない連中の理由として一番にあげられる欠点がこれだ。被爆させるためだけの武器は、放射能に強いアポミネーションにはまるで効果がない上。さらに命中率が悪い事が分かっているのに、敵には必ず数発当てなくて殺せないのだ。

女兵士は力強く、すぐに立ち上がると。もう動くことはない死体の下から子供を強引に引きずり出し、うめき声をあげるその子を抱えて自分も走り出した。

ガービーは言った。すべてを助けることは出来ない、だがミニッツメンならその時迷う事だけはするな。

兵士はそのまま後退していく。母親がきつとそうしたかったように。

だがその耳元ではその場に置いて、離れていく母の体を求めて泣き続ける子供の声。もう忘れることのできない記憶として、彼女の心に刻み込まれるのだろう。

警備班の隊長はひとり、突出しようとしている。

別れた休暇班は後方で装備を整え、再出撃する手はずになっていた。

自分はこのまま部下たちと合流しつつ、襲撃者の足止めをするつもりだった——だが、その考えは甘すぎた。

狂信者たちはすでに居住地の半分にまで侵入しようとしていた。

つまり畑に残っていた男たちや見張り台にいた部下はダメだった、そういうことになる。

中に人の気配のある家に飛び込むと、逃げ遅れたらしい家族と一緒に2人の部下がいた。エネルギーを充填させたマスクットを向けられたが、撃たれなかったのは幸いだった。

「お前たち!?他には?」

「もう俺達だけです。見張り台のあいっら——やられるのを見ました。残ってるのもこの家族だけです」

今日に限って体調が良くなって両親が家で横になっていて、子供がひとりで面倒見ていたらしい。

「よし、一旦後退するぞ」

「ここをあいっらに渡すんですか!？」

「渡すわけがないだろう!!……渡さない、後ろで反撃の準備をしてる。俺達でその人たちを逃がして、そこから反撃だ」

『了解』

——アトムに光にひれ伏せ。アトムの輝きにこの身を焼け。

クソが家の周りで合唱を始めている。

グズグズはしてられない。

「狂人共がっ」

残念だが警備班はすでに半壊してしまった。

それでも諦めるわけにはいかない。この3人で一家と共に脱出する。

誰ひとりとして欠けることなく、そこまで行けば——反撃のチャンスだっただろう。

「よし、切り開くぞ。準備はいいな?」

一家を中央に3人で囲み、自分は先頭に立つ。

ミニッツメンは力なき弱い者を守るためにいる——この戦いこそ我らの栄光。

「突撃!」

決意の塊となって扉を押し開けると、そこには怪光線の波が襲ってきて——。

パラディンは部隊と共に建物の屋上に上がり、カウンティ・クロッシングの混乱を双眼鏡から見つめていた。

スクライブが近づいてくる。

「パラディン、連絡できます」

「よし——こちらゲイマン。バンカーヒルへ向かう途中、居住地が襲

撃されるのを確認」

『座標を送れ。それで、なんだ?』

「同行する工作官から、キャンペーンの一環として救助の要請を受けましたので。判断を願います」

『……すでに攻撃は始まっているんだろ?』

「はい、現在は地元の民兵が対処にあたっています。あまり、うまくは行ってないようですが」

双眼鏡を左にずらすと、逃げてきた住人達と共に。ミニッツメンのデザインが施された2台のT-45パワーアーマーを起動させているもうひとつの民兵の集団を確認する。

恐らくこれからあれを使って襲撃者たちを押し戻すつもりなのだろう。

『民兵?例の連中のことだな』

「はい、どうしますか?」

『お前たちはその場で待機。そのまま全てを“観察”しろ』

「観察、ですか。救助はナシ?」

『そうだ。今から代わりに部隊をそちらに送る、交代したらお前たちは元の任務に戻れ』

「了解——あの、キャプテン・ケルズ。なぜ救助ではなく観察なのでしょう?」

『なんだ、不服か?』

「いえ、観察の意図するところが不明でしたので——」

命令に異存はない。

ミニッツメンとかいう民兵にはこれまでも随分と気を使ってやっているのだから、あいつらの仕事を手伝わくてもいいということは良い事だと思う。

だが、なぜ観察?

『エルダーは地元の武装組織に興味を持っておられる。彼の判断材料として、貴様たちが見ているものがサンプルのひとつとなるだろう。そういうことだ』

「了解。これより事態の推移を観察します」

『交代まで頼むぞ、アド・ヴィクトリアム。パラディン』

通話機をスクライブに渡すと部下に正式に命令を下す。

「よしお前たち、ここで休憩だ。ただし目と耳は騒ぎの方に向けておけ。戻った時に報告書に必要なものだ」

「やれやれ、ここで休憩かよ。まだプリドウエンから出てきたばかりだぜ」「本気ですかパラディン。あつちの様子を見ると俺達プロの出番じゃないんですか?」

「それはない。判断は下された。俺達は今からショーの観客だ。つまりはそういうことだ」

戦いがないとわかると部隊の中に弛緩した空気が流れた。

悪い奴がいて、覚えていられるようにあいつらの勝敗で賭けをやるうなどと不謹慎な事を言いだしてる。

「パラディン——」

「スクライブ、お前も館長の言葉は聞こえたはずだ。我々は見るだけだ、介入はしない」

「ですが」

「言いたいことはわかるが、命令は下された。君も納得するべきだ」  
「……」

B. O. S. にはルールがある。

厳格で、時に非情な命令が下される。だが、それは必要だと判断されたからに過ぎない。

目の前の悲劇だけで未来を見る目を曇らせてはいけない。なぜなら自分たちが強くあるのは、そこに新世界を築く守護者である必要があるから。

それでも——人間の心は弱い。そして脆すぎる。

自分たちの力があればなにかを助けられると思ってしまうと、欲が出る。

だからこそパラディンはスクライブに背中を向ける。バカ騒ぎにあえて加わることで、弱い心を捨ててしまえと思ひ知らせる。

「……お前たち、賭けはどうなってる? おれはアトム教にひとくちいれようか」

「ビュー、パラデイン。そりや最悪だ」「B・O・S・に許されないことでしょうよ」

「ほら、さっさと締めきれよ。お前たちが私をひとり勝ちさせてくれるのだろう、とても楽しみだ」

言いながらパラデインは目の端に固まって逃げていた一家が次々と倒れていくのを見ていた。

「お、オンボロのパワーアーマーが出てくるぞ。いいぞ、やってやれ！」

（これが最後だな――）

恐らく戦闘はもうすぐ決着がつくだろう。それでもケルズが交代をよこしたということは、彼らがどのように復興しようとするのかも見ておきたいという事だろう。

——民兵と戦うこともあるかもしれない、そういうことか。パラデインはそんな風に考えていた。

## 対立 II

バンカーヒルでアキラたちと別れ、ハンコックとキュリーはそのまま連邦を南下していく。

「なあー！」

「はい」

「ちよつと予定を変えたい」

ハンコックはそういうと——Vault 88のある採石場ではなく、アトムキャッツのガレージへと着地点を変更するよう。アイボット・パイロットに告げる。

予定ではVaultを訪れて戻る前に寄ってくれ、とアキラに言われていたのだが。ハンコックは虫の知らせから、先にそちらに向かうべきだと考えたのである。そして——。

「——戦ってる。何が起こってる?」

「見てください!兵士たちがっ」

ハンコックはベルチバードの横原から共に顔をのぞかせているキュリーの指さすものを見てつぶやく。

ああ、あれはガンナーズだ、と。

自分を連邦で一番のクールな男であると自認しているジークは、どんな状況にあってもその評判を守ることだけを忘れない。

恐ろしいガンナーズがやってきたからって、クールなふるまいは変わらない。俺達には用はない。うるさいから、帰れ!それだけだ。

「行くぞ、キャッツ!いつものように噛みつけ!」

複数のT-60パワーアーマーの駆動音を響かて飛び出しながら、ガレージの中からの援護射撃だけでガンナーズの足はあっさり止まってしまう。アトムキャッツはクールな奴らばかり、相手が連邦の最低最強であつてもこうなるのは当然。

「おいおい、ジーク。あいつらまたロボットを連れてきてるぞ!」

「ははは、ブリキ缶をまた持つてきてくれたのか。よし、ラウディちゃんが使いやすいように綺麗にたたいてやるさ!」

ガンナーズは前面に7台からなる警備用プロテクトロン——ただしパーツも武器もばらばらで。足がキヤタピラだったりノーマルの2足だったり。笑わせに来ているわけではないのだろうが、細かいアサルトロンのものを使っていた。それだけの数の戦闘ロボットを用意できるのは凄い事ではあるが。

こんなの、彼らには何の問題もない。

雄たけびや奇声と共に、アトムキヤッツ仕様のパワーアーマーが一列のままロボットたちと交錯する。

彼らが手に持っているハンマーがうなりを上げ、ロボットの形を強引に変形させていく。

「くそっ、出る。突出しろー！」

ガンナーズにしたらとんでもないことだった。

パワーアーマーの相手をさせようと用意したロボットは、あっさり距離を潰されてリアルタイムでスクラップにされかかっている。

それでもわずかに抵抗は見せてはいるようだが、T-60の装甲を貫くほどのダメージは難しそうだった。これなら全てスクラップになるとあきらめて自爆装置でも持たせておくべきだったがもう遅い。

——こうなったら数で押しつぶしていくしかない。

連邦最強の戦力を吹聴するガンナーズだからこそわかる。アトムキヤッツは所詮は小規模の集団に過ぎない。

ここに大勢が大挙すれば簡単につぶすことが出来る。それは間違いない。

ただ——ガンナーズの内部にある政治がそれを許さない。こんなガレージにいるおかしな連中を、自分たちが本気になって攻撃しなくてはいけないなどと口にするのが出来ない。ビビってる、恐れている、怯えているなどと言われるのはマズイ。

逆に言えばそれを自分じゃない誰かが言ってくれるならば——多くの現実を知っている奴らが手を上げるはずだ。それは本体が次回に期待したいことだ、今じゃない。

「押しつぶせー！どうせあいつら、数は少ない！」

「おい！——ありや、なんだ」

士気を高めつつ突撃を命令した直後の声に、指揮官は舌打ちする。だがそいつの指さす方へ——空を見上げると、ぽかんと口を開けてしまった。

——ベルチバード、B. O. S. が？なんでここに。

地上に近づいてくるそれは地上を強力なライトで地上を照らしつつ、腹のあたりから不安を覚える機械音が聞こえてきた。このライトがなければ彼らは確認することが出来ただろう。銃座についているのが、B. O. S. には決して所属できないグールであるということ

を。  
ハンコックはガトリングの発射ボタンを押しながら誰に聞かせるわけでもなく呟いた。

「オマエラ、本当にツイてなかったな」

この日、ガンナーズは珍しくアトムキャッツへと送り出した部隊が全滅したことを知った。

だが彼らがどのようなにして全滅したかまでは——まったく気にしていなかったの。知ることにはなかった。

ベルチバードを帰し、ハンコックとキュリーはガレージに近づいていくときさっそくりーダーをはじめとしたキャッツの面々からの歓迎を受けた。

恐ろしく陽気な彼らにハンコックはゲンナリしていたが、話を聞いていたキュリーは驚くばかり。この世界の人々が当然のように持っていた絶望や悲しみ、苦しきなどを一切感じさせない彼らのハッピーさが新鮮で衝撃だったのだ。

「——よし、ちよつといいだろ。こつちの話聞いてくれ」

「ああ、もちろんさ。ハンコック市長」

「そうだ、紹介しよう。この彼女は——」

「市長の新しい彼女？まさか愛の逃避行!？」

キャッツの女性陣から黄色い声上がるが、ハンコックは無視しよ



うと努める。

「お前達の新しい友人、アキラの彼女。キュリーだ」

「!?ハ、ハンコックしちよー」

「その証拠がホラ、お前たちがアイツに送ったジャケットを彼女が着てるだろ」

「おお！確かに！」

出発前、ハンコックがアキラに何事か耳打ちし。彼が着替えてほしいと言って自分にジーンズとキャッツのデザインが入ったジャケットを貸してくれた理由はこういうことだったか。他人に注目されることに慣れてないキュリーは頭がクラクラしている。

この後、自分はどうなるんだか。

「それは俺達キャッツの新しい友人。ア・キ・ラに送ったものだ！そうか、あんたがあいつの愛しい彼女か！」

「は、はい」

「よし、それでだな。俺達は今日、近くに用事があって。ここに寄った」

「へえ」

「この辺のガンナーズの最近の様子とか……」

「奴らはいさつき、ちよつとだけ全滅した」

「ああ、ああ。俺達でやったな——それ以外の話を聞かせてもらいたいって意味だ」

「なんだ！世間話がしたいのか！」

こいつら、クールだか何だか知らないが。会話のテンポが全員早い。落ち着きつてもものがないから、すぐに話を続けないと勝手に次々と割って入ってきて。話の方向性がきりもみさせてしまう。

「そうだ。いや、そうじゃない。それだけじゃないって意味だ」

「そうか」

「もうひとつ、お前たちにお願いとつか。奴からの提案もある」

「ひとつ？ふたつじゃないか」

「そうだ。確かにそうだが、アキラからお前たちに提案とお願いがあるってこつちは言いたいんだ。わかるよな？」

「ああ、それならわかる。なんだい、ハンコック市長」

ふう、一息つく。

マシンガントークで最後まで通すのがツライ。

「アキラの願いは船が欲しいってのと、前にアイツが来た時にお前らとなんだか楽しそうにやってた——」

「ああ、アイデア！」

「そうだ、それだろうな。パワーアーマーで共同開発してみないかって……」

「そりやどういう事だ？」

てつきりこれまで同様、「わかった」と勝手に納得してくれると思っただが。ジークらの顔に困惑がある。

説明が必要だ。だがそれを自分がやるのか？無理だ。

ハンコックはキュリーに目で合図を出す。

「えっ？」

(説明。説明してくれコイツらに)

「あつ……あのですね、こういうことです。アキラは新しいパワーアーマーのモジュールのアイデア——」

「おおっ！それを俺達と一緒に作ろうっていう事だな!?そりや、クルだ！」

「——そういうことです」

小さな声で同意しつつ、キュリーは手に持ったフォルダの中から図面やリスト、計算式の書かれたそれらをジークに手渡した。

ジークはそれを手近な机の上に次々と並べると、キャッツの全員がそれを取り囲んで覗き見た。

「どうだ？これをどう思う、キャッツ達」

「——この形には見覚えがあるぞ。確かB・O・S。でも使われているジェットパック・モジュールに似てる」

「でも出力は低いみたいだよ？これじゃパワーアーマーは飛び跳ねるだけ」

「ラウデイちゃんはどうか？」

「そうだね。デュークが半分当たってる気がする。これはジェット

バックを改良して、パワーアーマーを水中用にする可能性を探ってるみたい」

ハンコックに肘でつつかれ、キュリーがすかさず声を上げる。

「正解です——アキラは水中、もしくは長時間の潜水可能なパワーアーマーを考えてます。でも、現在の環境では難しくて——」

「なるほどな。海ならここの裏に回ればすぐそこにある」

「よーし、わかったな？それで返事は？」

ハンコックが問うとジークは皆を見て、皆もジークを見た。だが結論がでるまでに長くはかからない。

まずデュークが口を開く。

「船が問題だ。俺達は船を作れない、奴は何でそれを俺達に言うんだ？」

「えっと、それはこういうことです。アキラは船が欲しいけど、アトムキャッツならそれに……クールなことができるんじゃないかって」

「船をクールに？そりゃ確かに俺達にしかできないなっ」

「落ち着けよリーダー、それでも船は無理だ」

そこでよし、わかったとハンコックが言う

「なら船はこっちで何とかする。それでお前らのところに何とか持つてきたら——」

「わかった。それならいい。俺達でクールにしてやれる」

「提案の方は問題はないと思う。それでどうやってやるんだ？」

「はい——アキラはロボットを持ってます。それで連絡すること——」

「それはあれだな。俺達とやる文通ってやつだな！」

「ぶん？……そう、ですね。それに近い、かもしれません」

「それでいつから？」

「あ——えっと、わたしたちが返事を持って帰ってからになります」

「それはいつ？」

「彼女に最後まで話させてやれ。恐らく——2週間以内だ」

わかった、ジークがそう答えるとハンコックもキュリーもため息をつきたくなる。

だが、まだこれで終わりではないのだ。

「それじゃ——おしゃべりでもするか？イケてない連中について、話をしたいんだろ？」

「ああ……頼む」

お茶にしよう、ジークが声を上げるとキャッツは一斉に動き出した。

ふたり並んで椅子に腰をかけながら、キュリーはハンコックがなぜここを最初に選んだのか——わかってしまった気がした。

深夜、人の気配のないコベナントの扉の前に人影が近づくのをエイダは察知した。

門側の壁の上を目指し、アサルトロンにしてもさらに力強い走りを見せる中。門の警備システムが一斉に作動し、壁の上からライトが門の前を照らし、ターレットが動いて攻撃目標を探して動き出した。

「警告します！ここは現在——」

「ただいま、エイダ」

最後まで言い終わる前に、下からライトをまぶしそうに手で遮って、こちらを見上げているアキラを確認した。

出ていった時と同じように青のビジネススーツ姿で——。

「本当に早く戻ってきましたね」

門を開けてここの主人を迎えると、アキラはネクタイを緩めながら笑みを浮かべ。

「彼のおかげだよ。ジミー、おかげで大きな契約をとりつけられた。運が良かったな」

「そうですか」

「ストックトンの爺さん——今回はなんか面倒だったり、色々あるけど。こっちも身の危険を感じて距離を取るべきかな」

「それでも口ぶりが明るいです。どうやらいいことがあったようですね」

僕はそこでエイダに答えず、いきなり立ち止まってついてくるエイダに振り替えるとじつと「彼女」を見つめた。

「アキラ？」

「エイダ、調子はどうだい？」

「問題はありません」

「新しい体だ——このまま問題がないならいいけど」

僕はエイダとの間に約束がある。連邦をロボットを使って恐怖に陥れているメカニストとの決着。

だがそのためにエイダが望むのは自身の戦闘力の強化。

僕が最初に用意しようとしたのはセントリーボットを越えるセントリー。

コンバット・セントリーと定義しての、甲殻類を思わせる多機能にして万能の破壊力を持つ4脚と、ミサイルにレーザーガトリングを備え。ヌカ・ランチャーを搭載した戦車じみた分厚い装甲だった。

だがこれはエイダ本人の願いもあってコズワースへと譲られ、装備の問題点が浮き彫りとなった。

軍隊を相手にしても負けない高火力にして高機動を実現させることは出来たが、大きな多脚と太い腕をもつ体が大きくなりすぎたせいで建物内の移動が不可能になってしまった。

可哀そうだがこのせいでコズワースはレオさんと一緒にいようとしても、広い空間がないと邪魔になり。搭載された武器があまりに協力を過ぎてやはり近くには置けないというジレンマに陥っている。

そこで僕はエイダやジェゼベルから掘り出したロボコの知識を集め、アサルトロンとしての究極系を目指すことにした。

それが今、目の前にいるエイダだ。

正式名称はアサルトロン・カスタム・リザードマン。

比較対象としてアサルトロンの完成形とされるドミネーターとの違いを見てほしい。

まずは外観。

リザードマンとあるように、女性を思わせるアサルトロンの独特の

女性を思わせる優雅な線を帯びたボディはそこにはない。

力強い成人男性を思わせるそれは、パワーアーマーにも使われているテスラコイルを用いた攻性のフルボディアーマー。どこも通常のアサルトルンより分厚いが、駆動音は静かに、動きはさらに良くなっている。

次に特徴として人型にしてはかなり前傾姿勢になっているのは、臀部にふくらみがあるからであり。アキラが使うロボットの第3の腕が尻尾のようにそこに収納され。その先端には電気が流れるブレードが付いている。

射撃が主体となるエイダは両手にプラズマオートマチックとテスラライフルを搭載させた。

レーザーより取り扱いが難しいが、プラズマ弾の乱れ撃ちは。レーザーガトリングとは違う脅威がある。

テスラライフルは、少し特殊な武器だ。アーク放電によって攻撃するエネルギー武器は攻撃対象の周辺にも影響のある範囲攻撃となっていて、不用意な仕様は許されない。状況によっては使えなくなる可能性もある難しい武器だ。だがその効果は——確かなものだ。

しかしこれについてはコズワースにも搭載されいてる第2の脳。

背中にトランクのようにして背負っているそこにある拡張脳を使うことで、うまく使えるだろうと楽観している。

最後のカスタム・リザードマンとなって最大の違いが戦闘方法。

アサルトルン・ドミネイターを優雅な暗殺者と例えるなら。カスタム・リザードマンは怒れる俊敏な猛獣である。

ドミネイターの特徴であるステルス装置を排除したことで絶対の隠密性は失ってしまったが、射撃に近接戦闘に隙のない戦士になった。通常は人型としてこれまでと同様に活動するが、戦闘に入ると前傾姿勢となるリザードマンとなる。

戦闘型アサルトルンの代名詞でもある赤く輝くモノアイは、日本の妖怪でいられている鬼。

額にはやした角を人骨のマスクで隠した。

これが僕の独自の技術を多分に投入したカスタム・アサルトルン。約束したエイダの最終形態。

まだ実戦に出ていないので、やはり不安はあるが。エイダは喜んでるようだ。

このバージョンアップの次にあるのは、僕とエイダとの間に交わされた約束が成就する日が近いことを意味するから――。

「人造人間たちはどうしてる？ちゃんと言われたことをやってた？」

「はい」

「彼らの訓練ルームは？どこまで完成した？」

「すでに終わっています――タフィントン・ボートハウスからの援助が得られましたので難しくはありませんでした」

「それはよかった。朝になったら食料をせびるついでに、お礼を言いに行こう」

「はい」

ただのアサルトルン・カスタム・リザードマンとなって以前よりも体格が良くなった今のエイダは。

僕を後ろについて、見下ろしながら返事をした。

取り調べた時、穏やかに話したが。どちらも独特の結果に終わった。

片方は自分はいかに運命に出会えたのだと、僕を崇めるような熱のこもった眼で見てきた。

片方は自分はあなたに出会いたいと願っていたのだと、自分が偶像を通じた僕をどれだけ尊敬してるかを訴えていた。

僕は結局、頭を抱えるだけ。

コベナントの地下にある秘密のエリアは、以前こそ科学者たちの秘密の研究所であったが。

今は僕とキュリーの使う部屋（工房と研究室）、ここと地上に使う発

電室以外は場違いな風呂場と装備用の工作室があるだけ。

風呂は客人か僕とキュリーくらいしか使わないし、工作室は資材がないからメールマンへの装備が遅れないと。つまり基本的に今はどっちも停止中というわけだ。

この地下にある空室というのは意外なことにまったくいいことがない。

入り込んできた生物の巣を作られたり、環境がマズいものを発生させてしまったり。そんなことにならないようにと、新しく訓練室を作ること考えていた。

現在、ミニッツメンで教えているレオさんの訓練メニューはあくまでも新兵製造を目的としたもの。

集団での行動や生活。命令系統の徹底、戦い方やサバイバル知識、情報収集の仕方などに重点を置いている。

レオさんが言うには、ただのレイダーが相手ならこれで十分。

しかしガンナーズのような、傭兵モドキが相手となるとこれだけではまったく足りないというのが正直な感想だそうだ。

そこでレオさんには持っている知識で新たに3段階のトレーニングレベルを用意してもらい。

これをこなせるような高いレベルの兵士を誕生させようとしていた。

だが状況がここに来て少し変わってきている。

人気爆発とはいえ、ミニッツメンの新兵募集で無事に兵士と認められるのは実際かなり少ないというのが実情だ。

そのためガービーなどは旧ミニッツメンの再集結を強く望んでいるようだが、未来の平和のために戦う若い傭兵より老兵を求めるというのは希望がなさすぎるし。新旧を集めた結果、おかしなパワーバランスが生まれる危険も望むものではない。

そこでメールマンにこの新しいトレーニングを試そうと考えたが。

冷静になって考えると彼らの役目上、戦士であることは求められているわけではないため。すべては必要ないと半分以下のスリムバー



ジョン（？）のトレーニングメニューが導入されたが。

こちらは十二分な結果が出ているといえるため、これ以上を求める必要がなかった。

ということでレオさんの知識やトレーニング部屋、レベルは少し前に不要なものとなる可能性が高かったのだ。

が、遂に僕がそれを必要とするものを手にする。

それこそ——プロジェクト・アンストツパブルだ。

その礎となる人造人間の男女は、それぞれトレーニングルームの中。汗だくになって今は走ることに使われることのないタイヤを必死にカートに重ねて押ししたり、ロープに結んで引っ張ったりしている。

「今はどこまで来た？」

「彼らのレベルに変化はありません。ですが、恐らくテストをすればミニッツメンとしての活動は可能でしょう」

「新兵は卒業したか。想像以上に早く成長してる」

「レオに教えられたことで理解が深まったようです。動きが変わりました」

レオさんがここを発つ前、目的は告げずに兵士としての訓練するようをお願いして正解だったという事か。

「あなたにこんなことを言っていていいかわかりませんが。意外でした」

「エイダ？」

「あの襲撃が成功したのは、用意されていたあなたの防衛システムが切られていたからです。それを可能とするには、システムにアクセスしなくては不可能でした」

「ああ」

「彼らは間違いなく襲撃に加担していました——その事実からあなたが彼らを許す理由はないと、私は思っていました」

そのことか……。

「——人間は、自分が生み出したロボットに名前を与える。人間の子供ではないからと、製造番号を名前代わりにする」

「はっ」

「インステイチュートは人間に近い人造人間を作ったのにもかかわらず。その本質をロボットと変わらないと考えて、彼らには製造番号をまず与える。彼らが人間になれるのは、何かの理由で地上に放り出されるときだけだ」

「？」

「僕は一時期、自分自身を人造人間だと思ってた。そのおかげでレールロードを知り、彼らを通してインステイチュートを知った。

結局違っただけだけど、知ったことで僕は人造人間に特別な感情を持つようになった——キュリーの事だ」

「はい」

「許せるのかって言ったら……難しいよ。だって僕は心が広いわけじゃない」

「レールロードが問題ですか？」

「人造人間を許す理由？ないよ、今の僕は彼らの味方かもしれないが、エージェントじゃないんだ。

でもね、理由を持つてもいい事案じゃないかって思ったんだ。根拠はない——いや、あるかな。それは彼らとは関係ない事だけど」

「それはなんですか？」

僕は黙って近くの机まで行き、椅子に座るなり引き出しのひとつを開けた。中には30本近いスティムパックが入って音を立てる。

次に僕は鋭い刃をもつナイフを手にすると、エイダにもわかるように掲げて見せた。

「アキラ？」

「人造人間が持つ人への恐怖を僕は理解できる。なぜなら僕自身、彼らと同じ秘密を抱えているからさ。それは誰にも言えない。

でもそれが僕が怪物である証拠でも、そこから発生するあらゆる謎の答えは得られない」

「なにをするつもりですか？」

「エイダ。皆も思ってたはずさ。僕が何でこんな大量のスティムを抱えているんだろうって。でも疑問の答えは簡単なんだ」

言うど僕はいきなりナイフを逆手に握り、机の上に置いていた反対

側の上腕を——左腕を貫かんと突き立てた！

「!?」

「エイダ。僕はね、血が流せない。痛みにも弱いんだ」

「そんなつ、やめてください!」

首を左右に振って拒否の意思を示しつつ、ちゃんと見ていてくれと続ける。

僕の全力で振り下ろした一撃は、それでも腕を貫けないでなにかに止められていた——。

「このナイフならレイダーの首だつてバターのように半分まで切り落とせるよ。でも、御覧の通り僕の腕を貫くことは出来ない」

「??」

「原因は骨だよ。ふふふ、笑えるけど。僕の骨は全部アダマンチウムで覆われてるらしいよ」

あれは忘れられない、宇宙船で見せられた僕の身体の“断面図”からわかったこと。

純粹な人間とは呼べないものの中のひとつが、これだ。

「いけませんっ」

「いいや、まだだ。まだあるんだ」

机に流れ落ち達は池を作つて、床にも零れ落ち始めている。

体内に入った刃への不快感と苦痛は耐えがたいものだが、悲鳴を上げる元氣すら萎えさせてしまう。それでも終わりではない。

僕は集中するとナイフを動かし、踊りだす刃物の先端が鉋物らしいカチカチという音を響かせるのを“感じる”。

傷口から抜くとあふれ出てくる血を無視して、手首のそばに刃を当て。そこから力を込めて一回り……。

「アキラ!!」

「ああ、ひどいね。こりゃ、最悪だ——」

言いながらも僕はゆっくりと“それ”が始まっているのを感じた。変化はすぐに皮膚に現れた。傷つける左腕に緑の斑紋が浮かびだす。

「っ!?室内の放射能が上昇しています」

「ああ、だろうね」

「これはどういうっ？」

エイダの問いに答えることは出来ない。

血で汚れた左腕だが、その下に広がっている緑の光の斑紋は徐々に腕にまで登ろうとしている。もういいだろう。

僕は飛び散った僕の血で汚れたスティムの山に手を突っ込むと急いで左腕に打ち込んだ。

はあああ

さらされた苦痛はいきなり消え去ると、僕は思わず安堵と共に色々なものを吐き出す。

こうやって自分で自分を傷つければこのくらいの我慢は出来るが、戦闘で血を流すとこんな冷静にはいられない。苦痛の大波が理性を押し流してしまう勢いを見せ、それに攫われまいとスティムに飛びつくしかない。

「今のは？」

「今のもそうだけど、コレもそうなんだ」

言いながら僕はエイダにわかるように、棚からタオルを取り出すとそれで傷口の血をぬぐってみせる。

わかるかい、そういいながらエイダに腕を掲げて見せる。

「——傷口がふさがっています。早いです」

「ああ、とても早いよ。皮膚はもう癒着している。傷口はもうちよつとかかるけど、いつもきれいに消えてしまう」

僕は薬物の効き目がいいらしい、ということにはわかっていた。

最初——ファールレンハイトと一緒にいた後。あれほどの薬物を数日間に使ったことでつきり中毒になっていると思っただが——そんなことはなかった。

その後、僕は薬物を使うようになるが。そのうちひとつの可能性に至った。

僕は薬物の効き目が良いだけでなく、覚めるのも早いという事。

ジェットで約1時間楽しめるようなとき、僕は半分以下で覚めてしまう。そして中毒にはかかったことがない。

何回か、本当か確かめようかとサイコとジェットを100回分用意して——ギリギリでやめた。

直前まではそれは名案のように思えたのに、なぜか気が変わったのだ。だから、本当のところはまだ不明のままだ。

「見ただろ、エイダ。僕は怪物だ。」

人造人間じゃないが、人間ってわけでもない」

「——なぜわたしにそれを話したのですか、アキラ？」

「そろそろ僕も進まなきゃならないんだ。僕だけじゃわからない、この体は誰かの助けを借りないと答えは出ない」

「キュリーです。彼女に話すのですね？」

「ああ——でも怖いんだよ。彼女にどうやって話して、理解してもらえるか。僕をまだ受け入れてもらえるか……」

「私がロボットだから話したのですか？」

「ええと、それもあるよ」

「ああ、わかりました。こうやって私に話している映像と記録を、彼女に理解させるために。提出するためにやったんですね」

僕は席に座りなおす。自分の流し達の匂いが不快で、この後これを清掃するのも気分が乗らない。

だが腕の傷はすっかりふさがり。恐らく仲間たちが戻ってくるころには消えている。

「私たちは人造人間たちについて話していたのです。まったく理解に苦しみます」

「ああ、そういえばそうだったね——つまり、つまりは……そういうことだ。」

僕は別に彼らを許したわけじゃない。彼らに与えられた“人間としての名前”を奪わせてもらった」

「なるほど。だから彼らはお互いの会話をやりにくそうにしているのですね」

そう、それが僕のこと。

人の名前を奪うことで、人造人間に戻した。彼らは今、自分と他人をどう表現しているのかからやり直している。

「アキラ」

「なに？」

「なぜこんな話になったんでしょか」

「あれ？」

「あなたの悩みはわかりましたが——私が知りたかったことは答えてもらっていません」

「えーと、そうだったね」

「——話したくないのなら。そういえばよかったですよ」

そういうとエイダは珍しく沈黙してしまった。

なんか——怒らせてしまった気がするが、まさかロボットがね。

とはいえ確かに指摘は痛いものがあつた。

「僕は秘密が多すぎるんだな」

ぼそりと呟くが——もう誰も聞いてくれない。

前を歩くハンコックが停止しろ、と合図を送ってきたのをみてキュリーは黙って足を止める。

彼が指をさす方向を見ると、汚い服装の上にコンバットアーマーを着て歩いている男たちがいた。

——ガンナーズだ

かつてクインシーと呼ばれた町に今も居座っている部隊らしい。

あれから色々と周辺のレイダーや傭兵を吸収し、さらに人を増やしてきているそうだ。

アトムキャッツは早々に誘いをクールに——彼らの表現で言えば——断つたこともあって、たびたび彼らのガレージに兵士を差し向けていた。

(Vault88は無事でしょか?)

(恐ろくな。あそこは周辺を高い放射能で汚染されてる。なによりガンナーズが自分達では面倒見ないことにした場所だ。)

別人の手に渡ったからって、本部のアホ共に知られない限り安心

だ)

キヨリーにはよくわからない話だったが、このハンコック市長がそういうなら大丈夫なのだろう。

それにアキラはここに自分を送り出す前に心配していたのは、Vault内で今起こっていることについてだった。ガンナーズではない。

クインシー採石所までこのようなガンナーズを何度か見かけたが、ハンコックの言う通り全く警戒してないらしく。

2人が隙を見て通り抜けても全く気付かれることはなかった。

採石場が見えてくると、確認のために放射線測定器のスイッチを入れ、すぐさま切った。いきなりわめきだしただけで十分だ。

「さて、それじゃ手順を確認しようか。どうすればいい？」

「まずは情報です。現在のVault88の状態を把握しないことはなにもできません」

「俺はどうしたらいい？」

「バーストウ監督官に面会してください。彼女に私たちが立ち去って以降、なにがあったのかを説明させるのです」

「彼女が嘘をついたら？」

「ハンコック市長であればそれも可能なかもしれませんが。彼女の説明に特に不備がない限りは、気にしないふりをしてください」

「それは構わないが——いいのか？」

「はい。私はその間にVaultを管理するシステムのメインフレームから直接、記録を取り出しますのです。

彼女が嘘をついても、機械に残された記録と照らし合わせれば無駄です」

「彼女が記録を改ざんしているってこともあるんじゃないか？」

「それはあります——ですがアキラが言うには200年以上も地下に閉じ込められていた彼女にそれが出来るとは思えないし。記録を調べればその形跡を見つけることが出来ると思う。とのことですよ」

以前、ハンコックは監督官の排除が問題の最もシンプルな答えでは

ないかとアキラに提案したことがあったが。

ここに来てしまうと、さすがに考えも変わる。

アイツが2人しか送り出さなかったのも、狂った監督官を刺激させないためだ。

開かれた扉をくぐった先にはすでに住人達が入っている。監督官である以上、彼らを含めた責任は監督官に負ってもらうしかないのだ。

「それじゃ俺は監督官に張り付くが、お嬢さんはどうする？ひとりで大丈夫か？」

「入り口に警備室となる部屋がありますが、アキラがそこにメインフレームなどにつながる端末を用意していました。そこからログを取り出そうと思います」

「よし、もし俺にマズいことが起こったら。その時はひとりでアキラに助けを求めろ。助けようとか、考えなくていい」

「——はい」

石の階段を降りていくと、崩れた壁の向こうに洞穴を見る。

Vault 88はこの先だ。

スロツグは今日も平和だった。

ミニツツメンに参加したことで、ここでの生活は大きく変わった。

タールベリーを育てるプールの脇には屋台が並べられ。ここにパトロールで来て、小休止する兵士達やバンカーヒルから取引を求め商人の姿が見られるようになった。

彼らはつるつる肌の人間たちだが、表面上はこちらに礼儀をもって付き合ってくれるのでトラブルはない。

もうこれだけで、代表のワイズマンなど感動して涙ぐみたくなる——こんな日が来るのはどれだけ未来の事なのか。小さな希望でしかなかった情景がそのまま毎日、続いているのだ。

さらに畑も3倍近く広げる計画だ。

スロツグの人口はもうすぐ2倍を越える。全員グールだが、皆がミニツツメンのチェックを受けて。信頼できる人たちばかりだ。



彼らにも仕事が必要で、ここには以前と違って他の居住地から元気な作物を回してもらえない。

ようやくみつけた弱々しい作物を必死に畑で面倒見なくともいいのだ。

ただ良い事ばかり、とはいかないのも事実だ。

ミニツツメンは居住地の利用を初期にはグールも人も関係なく、としていたが。今はそれはなかったことにされている。

おかげで受け入れてもいいグールたちはグレーガーデンとスロットグに回され。どちらも異常なスピードで住人を増やしており、ここも現状。収容できる数は限界に近い――。

ワイズマンは“あの人”の助言を受け入れ、たびたびミニツツメンやガービーに対して新しいグールの居住地を用意するように意見を出している。恐らくだが“あの人”はグレーガーデンにも同じことを伝えるようで、あちらの代表も同じことを訴えているらしい。

だがまだミニツツメンはまだそれに答えを帰さない……。

(全てがうまくはいかないものだ)

それでもワイズマンは樂觀的だった。

そうだ、とんでもない騒ぎが起きる前までは――。

スロットグの一角で鋭い女性の悲鳴が上がり、騒がしくなるとワイズマンは慌ててそこに駆けつける。

警備していたミニツツメンと、休憩していたミニツツメンの両方がぐったりとして動かない同僚を抱えて医者を呼べと叫んでいる。

ワイズマンはとっさに近くの川沿いからまたブラッドバグが侵入してきたのかと思ったが、どうやらそうではなかったようだ。

この日、運がいいことに巡回しているロボットドクターがいてくれた。

倒れたミニツツメンは出血しているわけでもなく、ただぐったりとしているだけなので拾うか何かと思ったが。ロボットの下した診断を聞くと周囲は絶句する。

RAD値950をこえる放射能に被爆していた。

ここまで危険な状態のまま放っておくなどミニッツメンではありえないことだ。

被害者はしばらくすると自分が人々に囲まれていることを知り、何かを必死に訴えだした。

その内容が明らかになるとミニッツメン達の顔色が変わる——カウンティー・クロツシングにアトム教の攻撃。

兵士はあろうことかガービーが認めた古参兵であったのだ。

執念深く走り続ける彼の後ろを狂信者はぴったりと張り付き続けた。

最初はメツドフォードのある北西を目指していたが、振り切れないとわかって仕方なく北東に進路を変え。なんとかスロツグにまで転がり込んできたのであった。彼は丸一日の間、この人とグールの境界線で必死に走り続けてきたのだ。

ワイズマンはこの問題が非常に危険なものだとすぐに判断した。

事実、目の前のミニッツメン達は救助に向かうかどうか。隊長同士で意見が分かれつつある。

——助けが、必要だ。

この時ばかりはワイズマンも自分がグールであることを感謝しただろう。

恐怖に真つ青になったグールなんて、普通の人間では見分けはつかない。

ワイズマンはまずアーレンとディアドラに頼んで住人達を仕事に戻し、落ち着かせるように頼み。

続いてジョーンズを呼んで隊長たちのところへ行つて、自分のふりをして会話に参加してくれと頼んだ。当然だがジョーンズは驚く。

「な、なんで？」

「私のふりをしてくれればいいんだよ。こう言え、スロツグの安全を考えてくれ。ガービーに支持を求めなきゃだつてな」

「それは構わないが——あんたじゃなくていいのか？」

「彼らはスベスベ肌だぞ？グールの顔なんてわかりやしないさ。それにこんな時だしな、時間を稼いでくれ」

「そ、そうかな」

「あんたは俺と同じ服を着てるから大丈夫。あとは私になったつもりで、彼らに冷静になれと訴えればいい」

指示を出す——ミニッツメンのパトロールはやはり全体的に若い人が多い。

訓練されているとは言っても、血気盛んで黙っていれば飛び出していつてしまっただろう。でもそれではいけない。

だいたいカウンティー・クロッシングと違い。スロッグとグリーントップはつい最近までアポミネーションの襲撃が繰り返されていた。ミニッツメンが増援を送るのに、この両方を空っぽにさせてはいけないんだ。

ワイズマンはひとり抜け出すと自分のベットのそば——日がなそこから動かずにふわふわと浮いているだけのアイボットの前に立つ。

「ロボット君。起きているね？君の力が必要なんだ」

「——Pii！」

「よかった……彼に、“あの人”に伝えてくれ。ミニッツメンが大変だ。」

カウンティー・クロッシング。そこにアトム信者が攻撃を続けているらしい。これは、とんでもない異常事態だ」

話しながら、自分の心臓が早鐘を打っていたことに気が付いた。

こんな興奮と恐怖、本当に久しぶりだ——だが冷静にならないと連邦で農民は生き残れない。

息を吐いて、大きく吸った。

「助けてほしいんだ。本当に困ってる」

「……受領」

アイボットはその姿に似合わない、男性の低い声でいきなり返答すると。やはりふわふわと、部屋の外へと飛び出していつてしまった。ワイズマンは後を追って飛び出すが、周囲にロボットの影も形も消えている。願いは届くのか、あとは祈るだけだ。

「——すでに世界は壊れてしまっている。それでも、それでも彼なら。“あの人”なら絶対に妥協はしないはずさ」

ずっと空想のものだと思われていた。

でもこの世界には今、シユラウドがいる。彼はラジオと違って仮面をかぶるが——その行いはまさしくヒーロー！。

## 約束―過去（LEO）

数日ぶりだったが、グレイガーデンの屋台にパイパーはいた。

ここでレオ一行と合流し、サンクチュアリへと向かう約束になっている。

でも待つだけの時間は不安だ。

レオに約束をすっぽかされるかもしれない――冷静に考えれば、お互いそうなってもおかしくない立場になっていた。

今の彼は英雄と呼ばれているガービーの上司。ミニッツメンの將軍様。

そして自分とは言えば、正義を口にしては煙たがれ。口を開けば黙れと言われ。そのうちに避けられ、誰もいなくなってしまう。でも消えないでくれ、君のやっていることは必要な事だとほめてくれる。

それだけの女だ。

私の筆が彼にとつて都合が悪いものを書けば――彼だつてきつと頭を振つて違うことを考える。

グレイガーデン。

ロボットの農園とグールと彼らの店が立ち並ぶ居住地。

あのアキラが作り上げた町。グールたちが入ってきてまだ数カ月だが、活気があつて人も多い。

「どうしたんだい、お姉さん。美人なのに浮かない顔だね」

「まあね。約束なんだ」

「おや、デートかい？」

「ははは……まあ、そんなところ」

屋台の店主にこたえつつ、彼が差し出すフルーツジュースを受け取ってストローでズズツと吸い上げる。

とても甘い。ちよつと嬉しい。

「安心しなよ、約束をほつたらかしたりしないさ。あなた美人だからね、男ならそんなバカはしない」

「はは、アリガト」

「お世辞じゃないよ。自信を持ちなつて」

「うん——あのさ、それなら気分転換にちよつとサービス頼める？」

「何かな？」

「ちよつとこのジュースにさ……わかるでしょ？」

いけないなあ、とは思ってはいた。でも心の奥底には確かにあつて、チャンスかもと感じたら勝手にこの口が動いて、行動していた。

ダイアモンドシティやグッドネイバーでこれをやると。まず間違はなく薬物の話をしたいというサインと思われる。

コベナントでアキラをいきなり殴り飛ばしたのは確かにやりすぎではあつたと反省している。

だが——だからと言ってパイパーが彼を完全に信じられるかという、実はそうでもない。

大つぴらには明かされていないが、ミニッツメンはあの青年と約束を交わしたことをパイパーは知っていた。

でもそれを発表するつもりはない。これは危険な情報だ。

連邦に知らせれば、あつという間に無人の広場になつていた3か所の居住地候補地はレイダーが殺到して争奪戦が始まったはず。

それに人を入れたとしても町として本当に機能できるかという問題もある。

ひとつの町をゼロから作り上げればそれは伝説となるほど凄い事だ。

それを3つもやるというのは、不可能を無責任に笑って引き受けていると言われてもしょうがないただの若者には大きすぎる仕事。

だが——彼はこのグレーガーデンをすでに完成させつつあるように見える。となれば、自然と怪しみたくなるのがマスメディアに携わる者の宿命だ。

パイパーの誘いに対する反応は意外なものだった。

店主はおそらく顔をしかめると(グールの表情はわかりにくい)、声を小さくして。

「美人さん、むしゃくしゃして言ってしまったんだろうが。うちでそういうのはマズいよ」

「そうなの？」

「ああ。あのミニッツメンの世話する居住地だ。ここに入るのに色々ルールを守るように約束を求められている。違反すれば容赦はされない」

「厳しいんだ」

「ああ——はつきりと明言はされてないけど。ここもすでに10人以上が追い出された。本人が抵抗するから、追い出す方もむごいやり方になってしまってるね」

「どうなったの？」

「殺したりはしない。だが来た時と同じ姿で放り出される。ここで手にしたものの全ては取り上げられて。もうここには2度と入れない」

「ワーオ」

「ああ、でも当然だよ。連邦じゃグールはどこにいても厄介者だ。それを引き受けてくれる町があつて、そこじゃ皆で平和に暮らせる。ありがたいことだよ。これで不満を言うんじや、好き勝手に無法者になつてくたばればいいのさ」

「あなた、いい子ちゃんのグールなんだ」

「ああ、おかげで楽しくやってるよ。彼女も出来た、グールでもね。幸せにやってる。こうなれるとは、以前は思えなかったさ」

「——そっか」

目を合わせなくなった店主との話は自然とそこで終わった。

これ以上は面倒な客と思われたのだろう。しようがない、だって自分からそう思われても仕方のない聞き方をしたんだから——。

レオは来た。

いつものように。巨体を揺らすコズワースとカールを連れて。

彼は笑って言うてくれる「さあ、出発しよう」と。私はそれが嬉しい。

だからこの繋がりをもう少しだけ続けるため、守るため——変化は求めることは出来ない。

コズワースとカールを連れ、パイパーと合流すると私たちはそのまま北へ。ひさしぶりのサンクチュアリへと向かった。

あの会談からガービーとはロニー・シヨールのもので、結局話をすることなくそのまま本部から出てきてしまった。

良い事ではないとわかつてはいるが、今はどちらと話しても私の言葉に理解を示さないのもわかっている。

彼らが冷静になってくれればいいのだが――。

ガービーは彼女を高く評価しているようだが、私の見るところかつてのミニッツメンを高く置いてこちらを見下している気配が透けて見える。

とはいえ、ガービーにはかつてのミニッツメンも加えるという約束をしている以上、いつかはこのような人物も来るだろうとは覚悟していたが。実際に来たのは実に扱いにくい人物のようで、とても友好的には接することは出来なかった。

ミニッツメンとキャツスルの関係はガービーから聞いていた。

キャツスル――つまりインディペンデンス砦は、合衆国独立以前から存在する古い要塞だ。

そう聞くとなにやら重要な拠点に思えるだろうがそんなことはない。あそこは言ってみれば死んだ土地だ。

周囲も海水など水辺に囲まれ、空と海になんらかの装備をもっていないければ簡単に閉じ込められてしまう危険な場所なのだ。

それにボストンの南東に位置するため。北部との間に危険なボストンを挟むことになるのも最悪だ。

これをなんとか生かそうと考えるなら、バンカーヒルやグッドネイバーを強引にでもミニッツメンで押さえるしかない。

そこまで苦勞して手にしたとしても、実際に手に入るものと言えば旧ミニッツメン達の望郷の念を満足させるということだけ。

だいたいにしてバンカーヒルもグッドネイバーも。今のミニッツメンが手を出せるような居住地ではない。前者はすでにかつてのミニッツメンに裏切られたという思いがあつて、独自に生きる道を見つ



けて今があるし。グッドネイバーはあのハンコック市長の町だ——。くだらない感情のままに動けば。

クインシーの虐殺に続く最悪の悪名をミニッツメンは間違いなく新しく連邦からいただくことになるだろう。

しかし本当に困るのは、恐らくこれを説明してもガービーら旧ミニッツメンは決して納得しないだろうという確信があることだ。

あの有能なガービーですら。心の奥底では「かつての失敗は繰り返さない」という想いが強いだけで、新しいミニッツメンの全てを歓迎しているわけではないのだと思う瞬間がある。

ロニーが口に出して要求してきたキャツスル攻略はその究極だ。

彼女の言いたいこともわかる。どうせ今なら兵を送れば取り戻せる、その理由を。情報を何か持っているんだろう。

だがそんな言葉に惑わされてはミニッツメンはこの大事な時期を無駄にし。身動きが取れなくなってしまう。連邦を統一に導くため、南部のガンナーズとの対決になど夢物語になってしまう。

ミニッツメンのためにも私は将軍として幻想を忘れさせねばならない。

正しく対処するには、本部にとどまって将軍として。旧ミニッツメン達に夢を見ないよう、組織内の政治に集中しなくてはならない。だがそれは当然、ガービーとの対決を引き寄せてしまうことになる。

だからこそロニーやキャツスルについてガービーと話し合うことに、今はとにかく避けなくてはならない——。

そんな私の思考は行動にも表れたようだ。

あのパイパーですら寡黙にさせ、時間は飛ぶように過ぎていく。

北上するのは以前と同じく、知り合いのいない山道を通ってサンクチュアリを目指す。

すると草が茂る斜面の向こうに赤いロケットの建物を見えると、今度は別の感情がわいてくる。

私はまたここに戻ってくるのが出来たのだ、と。

昼過ぎにレッドロケットのメールマンたちに軽い挨拶を済ませると、そのままサンクチュアリへと入っていく。

橋を渡りながら見えてくる町からは、賑やかな人の声が聞こえてくる。当然だ、ミニッツメンはここに40人以上の居住者を送り込み、それを許可したのが私なのだ。

大人や子供の声が、失われたあの穏やかな日々を瞼の下によみがえらせてくる――。

だが訪れた人間が感傷的になっても、来たものを迎える側の反応は怯え、であった。

今のゴズワースはセントリーボットよりも危険だし、カールは危険な捕食者に見えるだろう。

「これがサンクチュアリ」

「ああ」

「――なんか。その、他とは違うんだね」

パイパーの感想に私は苦笑いで返すしかない。

かつてなぎ倒されて瓦礫の山となっていた個所は綺麗に片づけられ、そこにお手製とわかる、雑な新しい住居が配置されていた。

確かに今のミニッツメンではこのような建造物は珍しいだろう――。

それはここに住人達とアキラの問題のせいだ。

彼は宣言通り、やると言ったこと以上の事の全てを拒否した。彼の感情を苛立たせるんのはすでに住人達だけでなく、町そのものへと向けられているらしく。この話題は一切出たことがない。

「アキラでしょ、まだ怒ってるの？」

「簡単な話じゃないんだよ、パイパー。許してやれ、怒りはもういいだろう、なんて言ってもアキラは聞かない。

彼はここをないものと見てる。助けないし、彼からサンクチュアリに助けを求めない。そういうことで決着ついてるらしい」

「なにそれ」

「解きほぐせないほどこじれてしまったんだ。彼だけの問題じゃない、ここに住人達はアキラを悪党だと信じてる。彼の善意に感謝しな

いいし、それは当然だと思ってる。アキラだけが悪いわけじゃないんだ」

「仲裁はあきらめた？」

「ああ、諦めたよ——時間の無駄だからね。他の仕事をやった方がいい」

パイパーは私の違う面を見ている気がするが、私の目的はずっと変わっていない。

自分が正しいと思う事、シヨーンを取り戻すことをやっている。

「嘘だろ、レオじゃないか！」

「——ああ、スタージエス？」

「ハハハ、そうだよ。あんた、どうしてここに？戻ってきたのかい？」

ようやく知り合いに会えた。

アキラの残した工場を丁度止めてきた帰りだというスタージエスに見つけてもらえてホツとした。

スタージエスと並んで通りを歩くと、ようやく住人達からの警戒の目が消えていくのを肌で感じた。

「このガレージに用があつてね。近くまで来たから、久しぶりに自宅の様子を見に来たんだ」

「ああ、なるほど。それなら安心してくれ。」

約束した通り、あんたの家はちゃんと今も空き家だよ」

「そうか、ありがとう」

「礼はいらないよ。ガービーと共にミニッツメンを復活させてくれたんだ、あんたはここじゃもう英雄さ」

「ガービーに悪いかな」

「彼はそんなことで気にしたりしないさ。そうそう掃除はちゃんとしてる。ベットもあるし、生活用品もそろえてある。使えるよ」

「そこまでしてくれてたのかい？わるいなあ」

「いや、それが——その、後で今のここの代表から話があると思うけど。たまに客人が来たら使ってもらっているんだ。」

空き家は活用した方がいいって言い張るもんで——」

「……」

「気になるかい？」

「大丈夫、空き家の時に活用したいというなら別に構わない」

「できるだけ自然な笑みが浮かぶように努力が必要だった。」

「それとついでだから忠告しておくよ。代表はここに空き家があることを気にしてるみたいなんだ。」

もしかしたらあんたに家を使わないなら放棄するよう求めてくるかもしれない」

「あそこは私の家だ。ショーンに戻る家、家族の家だ。出る気はないよ」

「ああ、わかってるさ。代表にはそう言って断ればいい。だけど、その——気を悪くしないでほしいんだ。ほら、アキラの時のことがあるからあんだとはそういうのはさげたいんだ」

「——わかったよ。情報をありがとう」

スタージエスとは握手を交わして別れた。

ついてきていたと思ったパイパーは、私がスタージエスと話し始めるとどこかに立ち去っていったらしい。

恐らく取材とやらをやっているのだろうから放っておいていいだろう。

「家だ。私たちの家、ようやく戻ってこれた。コズワース」

「はい、旦那様。ですがその——少し問題が「？」

「今のこの体です。以前と違い、入り口でつかえてしまい、入れません。どういたしましょう」

「……じゃ、外にいるしかない。カールの小屋も一応外にあるし」

「ワンちゃんはロボットのようには掃除は致しません。床を汚すだけです！」

わかったよ、そういいながらもドアのなくなった我が家に入っていった。

掃除をしてきているというのは本当らしい。壁に空いた穴はそのままだったが、落ち葉やごみはすっかり片付けられている。

あの日、コズワースが淹れてくれた熱いコーヒーがあった場所に

は。食器類が綺麗にされて籠の中に納まっていた。

——あの日、か。

今もあの騒ぎは鮮明に記憶しているが。時がたったせいだろうか、まだケロツグが生きていた以前よりも冷静に思い返すことが出来る。復讐だけが果たされ、それでも何も取り戻せないというむなしさが私をゆつくりと狂わせているようだ——。

今夜はここに、おそらくパイパーも泊まることになる。

気軽に友人をわが家に200年ぶりに泊めるんだな、などと冗談を言っていたはずだったが。ここに立つと、それがとても苦しいことに気づかされた。

わずかな希望があっても、私はまだ家族を失ったまま。もうずっとそうなるかもしれないという恐怖。それに上がらうことのできない、自分の無力さ。

庭の方からコズワースの呼ぶ声がした——。

「旦那様、よろしいでしょうか？」「なんだいコズワース？」

「あなたと再会したばかりの私は、ひどい状態にありました。毎日をどうして過ごしているかわからず——」

私は言葉を最後まで聞かず、用件だけ言えと催促する。

今はコズワースの誠実さ。ロボットとしての忠実さが煩わしかったのだ。

「このホロテープを見つけました。戻ってきて思い出したのです、これは奥様が旦那様へのプレゼントにしたいと、サプライズにするのだと。」

旦那様が恐ろしい戦場に戻っても、きつと帰ってくるのだからこれは必要なのだと。それなのにあんな事になってしまつて……」

初耳だった。

これはどこにあつた？

そう問う声はガラガラで、顔から血の気が引いていく。庭に用意していった息子への遊具の中だとコズワースは答えた。

テープをピップボーイに入れて再生する。

流れてきたのは生まれて間もない息子とその母親の声。

私がまだ愛国者の証として、戦場にすべてをささげていた時だ。彼女は病院から幼い息子を連れ帰り。まだ私の無事を祈っていた。あの子の声を聞くだけでそれがわかった。

『このメッセージをあなたに残しておきたかったのよ、ハニー』  
彼女は私に——200年後の未来に生きる私に語りかけてくれた。  
いた。

『あなたがどんなにすばらしい父親かっということは、言うまでもないと思うけど……』

彼女の優しい言葉とは裏腹に、私の手は震えた。足から力が抜けていく。

家族を守れなかった男だ。無力な男だ。

戦場で国を守った英雄と呼ばれたはずなのに、家族のためには何もできなかった——。

彼女の言葉は続いている。

『——あなたは仕事に戻って、私は法律の学位をもう一度生かす。それがどんなに大変なことだとしても、シヨンとハニー、それに私。この家族に必要な事だから……色々な変化にも順応できるはず』

最後に彼女は笑いながら息子と未来に生きる私に別れを口にする。テープにはマジックで、「愛する人へ」と書いてあった。

虚ろな心は震え、私はようやく——ようやく涙を流すことが出来た。

妹にどんなに憐れまれたとしても、パイパー・ライトだって女である。

男女関係の勝負の決め所がいつか。ちゃんとわかっているのだ。

グレーガーデンからの2人旅（ロボット+犬つき）は夢のような時間だった。ぜんぜんおしゃべりできなかったけど、お互い一体感があった。これは間違いない！

そして今夜は彼の家に招かれている。ひとつ屋根の下でこれから数日暮らす、つまりそういうことだ。

なのにビビっているわけじゃないのだろうか、レオが町の住人と仲

良く話し始めると落ち着かなくなつた。で、仕事を先に済ませることにした。復活したミニッツメン。その將軍の自宅のあるサンクチュアリの人々の話。

——ああ、あそこの人の事かい

でもあまりいい話が聞けないので、取材は早めに切り上げることにした。

この町の人々はなぜかガービーへの好意は喜んで口にするが。元 Vault 居住者達には厳しい目を向けているようだ。

レオの自宅を見て、勇気を出して中に入ると人の気配がない。

すると裏の方でなにか音がした気が——覗いてみると、パイパーはそこでマズいものを見てしまったと思つた。

そこにいたのはいつも自分が見ている男の姿はなかつた。

なにかに壊されかけた、無残に鳴き声をあげている彼と彼の家族たちが出た。そして理解する——あれが彼の本当の姿なのだ、と。

もうこれ以上のトラブルは御免だ、はまさしく今の僕の心境そのものであつたが。

残念ながら現実はいつだつて厳しい。

ミニッツメンが窮地に陥っている。

調査部隊が駐留していた居住地をまるで狙いすましていたかのよう、アトム教が攻撃してきた。

確か連邦のアトム教はほとんどが辺境に存在しているという話は、以前に聞いていたからこの攻撃がまさしく明確な計画性のあるものだということは明らかだ。

だけどそれだけならば、僕は特に興味を持つことなく見逃していただろう。

訓練室から直接来た男女の人造人間たちは、息を乱して汗だくのま

ま。沈黙し、以前と違って輝きのましてきている目を僕に向けている。

これが兵士の目だ。任務を理解しようとして集中し、自分が戦場に立つて戦いが始まるのを期待している目。

だが、彼らはまだ戦士ではない。

——プロジェクト・アンストツパブルの概要について話そう。

僕の言葉に、彼らの視線に普通ではない異様な熱を帯び始めている。

はつきりと断言できるが。今もなおミニッツメンはぜい弱なままだった。

それは恐らくレオさん自身も気が付いている。この問題は解決できるとあの人はまだ希望を持っているかもしれないが——僕は違う。

ミニッツメンは今が限界なのだ。

このまま勢力を拡大し続けることは出来るかもしれないが。

それを成し遂げるために必要な力を彼らは自ら手にすることを認めないだろう。

なぜならそれを手にすればミニッツメンは根底から変化してしまう。彼らの過去から守り続けて来たとかいう理想は形骸化し、それを指摘する糾弾の声には無言の圧力と手にする暴力で封じ込めなくてはいけなくなるから。

そう、彼らは再び悪名にさらされることを恐れている——。

これまで僕はレオさんと手を組んで。崩壊したミニッツメンをガービーの手に戻し。それだけではまだ足りないものをメールマンを作ることで、その土台を強化した。

だが、今度は違う。今回ばかりは違う。

これは新たなミニッツメン。もうひとつのミニッツメン。そして僕だけのチームアップ。

それこそがアンストツパブル。

グールのケントが流す、あのラジオで誰もが一度は聞いたことがあるはずだ。



『——影の中に身をひそめる。無実なるものを守り、罪人を裁く守護者たち』

それは狂気だ。正気はどこにもない。

僕はこの世界のどこかでメカニストと自称する何者かががそうしたように。インステイチュートが生み出し、連邦の人々が恐れるこの人造人間たちを別のもの——まさしく新しい怪物に育て上げようとしている。

そのために必要なものは最低限揃っている。

レールロード、コベナントで散った狂った科学者たちの知識だ。

ここにいる人造人間達は狂人で、怪物で、そしてヒーローだ。

人々はその働きに称賛と感謝を送るだけではなく、常に不気味さと恐怖も口にできないまま抱えてもらわねばならない。人々は自分たちの守護者たちの影しか追うことが出来ず、ヒーローたちの姿は彼らが想像することではしかできない。

僕は兵士たちの目を見ながら話を続ける。

——カウンティー・クロツシングが危険だ。

——理由はわからないが、アトム教の狂信者達が略奪ではなく攻撃を開始してきた。

次に彼らがこれから向かうべき戦場の説明に入る。

狂信者達は居住地に東側——水際を背に陣取り。

ミニッツメンは居住地と、調査に出たまま戻れないでいる部隊が北側にいて。お互いが合流しようとする隙を伺っている。

場所柄、カウンティー・クロツシングはバンカーヒルと空港の間にあるという特殊性からあまり襲撃されない場所であったせいで、この突然の攻撃への対応はまったく想定されてはいなかった。

そして恐らくまだこの情報はミニッツメン本部にまで伝わっていないだろう。

ジミーの話では東部の調査隊は引上げさせる準備中であつたというし。

レオさんやガービーは恐らくこの知らせを聞いたら、自分達も含め

てすぐにも増援を出したいと考えるだろう。が、それこそが容易ではない。

ミニッツメンの兵士たちが列をなしてバンカーヒルの周辺を行進する事態となれば、さすがにあのB・O・S. が黙っているかどうか。

だからこそ、だ。

なにか別のものが必要だ。例えば異形の正義が。

連邦に出現したシルバーシユラウド。つまりこの僕が、これからの“僕たち”の出番というわけだ。

「作戦は3時間を予定。

ロメオIに搭乗し、我々全員で現地に向かう。訓練で学んだことをすればいい。君たちは伏兵だ——作戦が開始されるまで可能な限り相手に接近して待機しろ」

「……」

「僕とエイダが居住地に降下したら、それが行動開始の合図となる。

ミニッツメンと協力して僕たちで派手に前線を押し上げるから君たちはじっくりと敵の数を減らすことにだけ集中してくれ」

「全員、ですか」

「そうだ……全滅させるぞ」

今日は彼らがヒーローだ。

影となり、役目を果たせることを証明してもらわねばならない。完璧に。

デリバラーとハンティングライフルを彼らに渡す。

彼らの役目とは目の前を動く獲物を狩ることだけ。兵士の役目は戦う事じゃない、捕食者となって獲物をどれだけ仕留めるかだけを証明すればいいのだ。そして今ならばこれができるくらいには成長しているはずだ。

「今日の君たちは戦う必要はない。君たちはまだ戦士ではないから。

ただ居ること悟られずに殺すだけ——それ以外は絶対にしてはならない。僕をいきなり失望させないでくれ。

この任務に君たちが不満があるのはわかってる。だがやる気を失

われないような贈り物も用意した。きつと気に入るだろう」

机の下に隠していたトランクを取り出して中を開く。

ぎらつく目の彼らの顔に危険な笑みが自然と浮かぶ。

「今夜、君たちが任務を果たすことはこのスーツが求めることだ。受け取れ、そしてすぐに着替えて来い。」

明日の朝には、ミニッツメンを襲う悪夢は終わる——」

彼らはトランクからスーツを取り出す。それぞれの、男女のシルバースユラウド。

今夜、死の風がカウンティー・クロッシングを吹き抜け。アトム教の信者たちは沈黙する。奴らは自分たちが誰に倒されたのか、気が付くことはないだろう。

B・O・Sの監視班は交代後もずっとこの騒ぎの見物が続けていた。

プロであるという自負を持つ彼らに言わせると、民兵もアトム教も。どちらも失笑物のコメディそのものだ。

連邦の市民たちに人気があるという民兵だが、装備も連携も未熟すぎる。

この数日、なんども外にはじき出されていた部隊が居住地で踏ん張っている味方と合流しようとしていたのだが。そのたびにアトム教に動きを見透かされて、突出しては後退を繰り返していた。

「あそこで何やってんですかね、連中」

「おい、笑ってやるな。あれでも彼らなりに戦争のつもりで頑張っているんだらうよ」

「へへへっ、うちのような口クな指揮官がいないんですかね?」

「そうかもしれないな。どうだ、お前が行って率いてやったら? あつという間にあいつらの將軍とやらになれるかもしれないぞ。俺はそれで構わん」

「あんな弱つちい奴らですよ? キャップを積んで、スカウトされても

御免ですって」

キャプテン・ケルズの命令は「戦闘後の居住地の様子」まで見てくることだったが——そもそもそれ以前に戦闘が終わりそうにない。

このままではこちらの士気にもかかわるので、どこかで何かしらエルダーに進言するべきかもしれない。

「とにかくあと2日は頑張ろう」

「マジか——」

「これが命令だ、兵士よ」

「了解です。まだ屋上で見飽きた顔の雑魚寝を頑張つてやります」

「……今夜の見張りの交代を確認しろ。だらけて向こうに気づかれました、なんてエルダーに報告したくはないからな」

部隊の隊員たちはため息をつく。

パラディンの言葉は正しい。これは任務、やりとげなくてはならないことだ。それがどんなに退屈で馬鹿らしいことであつたとしても。

だから彼らは思わなかつた。

今の連邦には、彼らが思いもよらない悪夢というものが現実に存在しているということに。

地平線に朝日が見えると、僕は草むらに座り込んで動けなくなっているエモノをようやくに見つけ。黙つたまま駆動音を響かせ、刃を振り上げる。怯えた目のエモノに何の感情もわからない。「止める」と相手あ口を開く前に腕を振り下ろす。

断末魔と血を浴びると、僕はようやく戦うのをやめた。

リザードマン・モードのエイダがのしと足音を立てて近づいてきて僕に報告する。

「——全滅を確認しました。戦闘を終了しますか？」

「信者の全滅は間違いないか？」

「はい」

「良かった」

短く答える中。周囲に倒れている死体を見回す。僕とエイダによつて八つ裂きにされている死体以外にも、的確に急所を破壊されて倒れている死体があることが確認できて満足を覚える。

良い滑り出しだ。

昨夜、シユラウドはここを訪れた。姿も形もだれにも確認されることはなく――。

その逆にB・O・S. にとつてこの夜はまさしく悪夢そのものだった。

朝焼けの中、いつの間にか藁のように倒れていった狂信者達がどうして負けたのか。その不可解さにまったく納得できていない。

最初は夜中、見張りが慌てて全員をおこしたが。状況には変化がなく、なにごとだとそれぞれが小さな声で不満を口にする。

だがその見張りは不安そうに言う――急に周りが静かになったのだ、と。

言われてみればそんな気もするが。寝起きのせいか、まだピンとくるものが誰の頭の中にもなかった。

その時だ。

突如、居住地の上空からパワーアーマーとロボットが。文字通りいきなりに“降ってきた”のである。

地上に着地すれば轟音が一帯に鳴り響き。離れていてもわかるくらい地面を揺らした。

場所を無視した、冬地用の真っ白な塗装が施された紫のライトをつけているT-51パワーアーマー。

そいつは縮こまっていたミニッツメン達に檄を飛ばし。ロボットを従えて勇猛果敢に敵に向かって突っ込んでいってしまう。

乱暴だが、間違つた答えではない。

アトム教が使うガンマ弾は常人の生身に受ければすぐにも致命傷に至る武器だが。パワーアーマーを装着していれば、怪光線に含まれる放射能を簡単には装甲の下まで通すことはない。

だがプロの兵士から見て、そのパワーアーマーの戦い方は明らかに素人のもののように見えた。

訓練を受けた兵士や殺し屋のものでは絶対になかった。

不格好で、洗練されたものもなく。時に意味があるとは思えないモーションが入って、雑な動きばかり。

だが——なぜかそれでも、そこでは“強かった”のだ。

プラズマピストルと燃える刀を振り回したパワーアーマーは恐ろしく、冷酷に、躊躇することなく。神を称え、異教徒を滅ぼさんとする信者たちの惨殺を繰り返した。

見たことのない不気味なロボットもそれに続く。

気が付けば、背中を見せて逃げ出していた奴らも全員が倒れていた。

「隊長……どうも、アトム教。全滅したみたいです」

「——そうか」

「パラディン。俺達、俺達はエルダーになんて報告したらいいんでしょうか？」

「見たままを報告する。それだけだ」

「……」「いや、違うな。まだ任務は終わりじゃない。全員、気を引き締めて観察を続けろ」

部下からは葬式のような返事が戻ってくる。

わからない——あれはどうやってここにやってきたんだ？あの時、たぶん自分たちはちゃんと目を見開いてそれを確認していた。

“ なにもない ” 空中に、いきなり奴らは現れ、地上へと降ってきた。そんな方法があるなんて信じられない——B・O・S. にはわからない技術をあの民兵たちはもっているというのか!?

カウンティー・クロッシングへと戻ると。ミニッツメン達はすでに合流を果たし、こちらを不安そうに見ている。

その中からT-45を複数台従えたりリーダーたちがアキラに近づいてきた。

「なあ、アンタらは——」

僕はそこまでだ、というように手のひらで質問をやめるように伝え  
ると逆にこちらから問いかけた。

「この住人達は？」

「えっ、バンカーヒルだよ。戦闘が始まってすぐに逃がしたんだ、しば  
らくは安全だからって」

「ならすぐに人を送って彼らをここに戻せ」

「でもっ！まだ安全かどうかからないんだぞっ」

「だが放っておけば離散してしまうぞ。ミニッツメンはまた居住者た  
ちを見捨てたと言われたいか？ガービーが悲しむ」

言うとすぐにひとり仲間たちの元へと戻っていく。

僕の忠告に従って何人かを早速迎えに出すつもりなのだろう。

「それとあと2人。ここで起こったことの報告にミニッツメンの本部  
に送れ。今日中に出ればガービーも無駄足を踏まずに済む」

「わかった。それよりもその、アンタたちには感謝しかないよ」

「周辺の居住地へも——」

「わかっている。すぐに事情を説明させにいかせるよ。アンタの手をこ  
れ以上煩わせたくはない」

さすがレオさんやガービーに選ばれた調査部隊だ。自分たちがす  
べきことは指示されなくてもちゃんと理解している。

あとは——。

「このロボットを置いていってもいい。しばらく貸すだけだが——ど  
うする？」

「それはありがたいが。いいのかい？」

「警備に加わるように命令しておく。あまりこき使ったりはしないで  
くれ」

「わかった」

では、そう言つて僕とエイダは彼らから離れていく。

パワーアーマーを着ての戦闘は久しぶりであったが、相変わらずT  
—51は僕の身体によくなじんだ。

「アキラ、私はここに残るのですね？」

「数日だと思うけど頼むよ。建築部隊の予定も組みなおさないと、こ

こはもう安全ってわけじゃなさそうだ」

「はい……それよりもアキラ。〝彼ら〞はどうしますか?」

ふむ、とつぶやくが〝そのことについて〞はまだ考えがまとまらな  
いでいた。

襲撃前、上空をロメオIから確認していると、工場の屋上からカウ  
ンティ―・クロツシングを監視している一味がいることにエイダが気  
が付いたのだ。

パワーアーマーが近くに控えていたことからおそらくB. O. S.  
だろうと思われたが——どうしたものか。

「シユクラウドたちを連れてもう少しだけ近づいて見てみよう。

恐らくこつちに介入はしてこないはずだ。チャンスはあつただろ  
うけど、何もしていないしね」

「はい——アナタも彼らを連れて危険なことは避けてくださいね」

「B. O. S. を相手に?しないよ、大丈夫だ」

言いながら懐からステルスボーイを取り出した。

「とにかくエイダ、数日だと思っけどここを頼むよ」「はい」

そこでヘルメット内の外部音声を切り、通信機に囁く。

「シユクラウド、今どこだ?」

『……建物に接近中。数分で到着します』

「僕も今から向かうので合流しよう。そつちが見つけてくれ」

『了解』

通信を切って音声を戻すと、一転して明るい声でエイダに別れを告  
げた。

「それじゃ行くよ。何かあつたら連絡を」

「はい、それではお待ちしております」

僕はステルスボーイのスイッチを押した——。

---

メカニストの隠れ家、その司令部——。

メカニストがいつになく苛立ち「チクショウ!」と吠えると、ター



ミナルから離れられない機械たちは不安がってざわめく。

それがまたメカニストの癪に障るわけで――。

ここ数日、メカニストは安心という言葉の意味を忘れかけている。メカニストの壮大なる連邦での計画は現在のところ大きな乱れが生じている。

自分が解き放ったロボットたちは連邦の中で次々に破壊され、狂わされ。あきらかになんらかの余計な混乱を引き起こす原因になってしまっている。

問題はこれがどうやら自分という存在を感知しての“誰かから”の攻撃ではないかと思ってしまうことだ。

ロボットを的確に攻撃していた存在は明らかに西から東へと移動したはずで、ここしばらくはそれもぱったりと止まっている。

メカニストはそれが相手が勝手にくれたばつてくれた、と思えたらいいのだが。「本当は違うかも」と思ってしまうと、恐怖で何も手につかなくなっている――。

そこに来て、この騒ぎだ。

数日前に近くにあったらしい居住地で争いが始まると。なぜかこの隠れ家のある建物の屋上に、あのB・O・S.などと名乗る危険な武装集団の部隊がゴロゴロ寝てなにかをまっているらしいのだ。

それがまた――怖い。

「おいっ」

「……!?!」

「私はっ、私はとにかく。そう、とにかく一旦部屋に戻るからな。いいなっ!?!」

「……」

「なにか変化があったらすぐに知らせろ」

とにかくこのマスクが息苦しかった。

自室に駆け足で中へ飛び込むと、一気にメカニストのヘルメットを脱いで。ヘルメットを感情に任せて壁に投げつけてしまう。

――カラカラ

乾いた音を聞きながらベットに腰を下ろして横になる。自分の手で素顔を覆っていると、ようやくなにかから逃げられた気がして落ちて着いてきた。

大丈夫だ。まだ大丈夫。私はメカニスト、連邦の守護者となる存在だ。

そうしてメカニストは——いや、イザベル・クルスは再び仮面をかぶろうと立ち上がるのである。

エルダー、彼が戻りました。

マクソンが領くと部屋にキャプテン・ケルズに案内されダンスが姿を現す――。

「パラディン・ダンス。任務より――」

「キャプテンここはもういい。2人で話させてくれ」

この言葉でダンスはいきなりすることに緊張し、居心地の悪さからわずかに身もだえる。経験から良い予兆ではないと察したのだ。

2人になると、マクソンはカラカラとそんな緊張を見せるダンスを笑う。

「どうやら帰還早々、キャプテン・ケルズに嫌味を聞かされたようだ」

「はあ――『任務は機敏に実行し。指揮官が帰つてこなくては良い報告があつても意味がない』と、助言をいただきました」

「ハイキングでもしてるんじゃないか、そうも言われたか?」「それはご想像にお任せします」

にこやかに言葉は交わされているが、ダンスはまだ身構えた心を完全には解いてない。

ケルズからは嫌味と説教の他にも色々言われたが、その中に「貴様が多く戻つてくれば」という調子が多かったのが気になっていた。

そして報告書は後でいいからマクソンに会えと言われてこの場がある――なにかあると考えない方がどうかしている。

「今回の作戦は見事だったぞ、ダンス。君が成し遂げたことが、今後の連邦での我々の指針になる。期待通りだ」

「は、ありがとうございます。詳しいことは報告書で――」

「ダンス、それについて話がある」

来たぞ、「はっ」とダンスは短い返事をかえす。

「私はこの時に備えるために君やブランデイスに偵察任務を与え。我々が到着してからも君達2人のパラディンの言葉を決してむげには扱つてこなかった」

「はい、我々の助言を重視してくださったことは。いつも感じており

ました」

「だがその結果、兵士達は苛立ちを感じている——インスティチュートへの調査が思うように進まないことが原因だと思う」

「はあ」

「私は決断しなくてはいけない、ダンス。わかるだろうか？部下が任務に対して空回りしている。彼らに冷静になれと声をかけたとしても、苛立つ彼らではそれで問題は解決しない。もっと根本的な解決策、それが必要だ。わかるな？」

「もちろんです」

「焦れているのは何も部下たちばかりではない。

この私自身、進まぬ調査報告に抑えられない気持ちがあることを認めなくてはならないだろう。事実、先日それをキャプテン・ケルズに指摘された。

この計画は簡単な道ではない。何年とかかっても、腰を据えて成功させるべきものなのだ。

だが私はこの連邦を相手にするのに10年、20年を戦う気持ちはもちろんあるが。決断を下せないことで無為な時間を過ごし、目指す目的を実現させるまで仲間を苦しめるような。そんな無能なエルダーではありたくない」

「そんなアーサー！あなたはそのような人物では決してありません」

「だが——いや、ありがとう。」

しかし事実はずぐに現実となつて目の前に突きつけられている。

我々はこの連邦へと達することが出来た。だがそこからは今日まで時間を無駄にしている。調査はまるで進んでいない。連邦の人々が我々を見る冷たい視線もそのままだ。

君やブランデイス以上の結果を、それ以上の部隊が結果を出せていない」

「お言葉ですがアーサー。私はそうは思いません。

今も忙しくする、下にいるスクライブたちをご覧になりましたか？彼らは不眠不休で作業を続けております。毎日、調査から戻ってくる部隊がもたらす連邦の情報量の膨大さに目を白黒させているのです。

おかげで作業量が追いつかなくて満足に寝てないとぼやいているくらいです。それだけ見ても——」

ダンス、マクソンは力強く名前を呼ぶ。

ただそれだけでダンスは話すことが出来なくなってしまう。圧倒的な存在感、そして——エルダーの苦しみを感じた。

「ダンス、私はインステイチュートを見つけたのだ。彼らがこの世界に生み出した人造人間という脅威を取り除くために」

「……」

「連邦はかつてないほどの強敵だ。私はどうしたらいい？ B. O. S. はどうすべきだ？ 君に考えがあるなら、聞かせてくれ」

エルダーに私が？

恐れ多い事だが、しかしこうはつきりと自分に助けを求められてしまふとその期待に応えないわけにはいかない。

連邦では無様に与えられた部隊を半壊させてしまう程度の指揮官が、司令に教えられることがあるのだろうか。というそもその前提が間違っている気がぬぐえない。

それでも——。

「アーサー、私自身の考えを述べるというなら——今は難しい時期です」

「ああ」

「いいえ、我々の話ではありません。この連邦自体が変化の時期に入っているのだと私は最近、感じるようになりました」

「……」

「人造人間の脅威は変わらないものの、ここで暮らす人々の認識に大きな変化が生まれているのでしよう。」

今回の任務から戻る中。私は改めてこの連邦を歩き。景色を見て、そう思いました。

人々が恐怖することだけではいいのです。希望を感じることもある。変化してるのです」

「それは例えば、ミニッツメンという民兵の事か？」

「彼らもそうです。この変化の中にいます、変化の影響するとても近

い場所に。

希望を彼らは示してる。ですが反対のものもあります」

「教えてくれ、それはなんだ？」

「ガンナーズ。自らを傭兵と自称してますが、その本性は無法律者レイダーです。ご存知でしょうか、連邦の南部は今や彼らによってひどい状況にあるということを」

「それは初耳だ。彼らはどのような連中だ？」

「言った通りですよ。暴力を称賛し、だから傭兵を自称していますが、ただの理想なき無法者です。」

兵力とテクノロジーを重視しているそうで、自分よりも小さな傭兵やレイダーを取り込んで組織を大きくしてきました」

「問題になるか？」

「我々が今以上の活動を活発にするならば、すぐにも。」

「これもまだ噂に過ぎませんが、彼らは我々を早くも敵と認定して動き始めていると。障害となる可能性は低くはありません」

段々とこの会話のいきつく先が見えてきた気がする。

「ならば我々はどうすればいい？君なら？」

ダンスを息をのむ。

ここで本心を偽れば、マクソンは彼の言葉を聞かなかったことのように忘れるはずだ。組織の中での政治を嫌い、賢い兵士になりたいならそうするべきだ。だがダンスは、尊敬するその人から「友人として」と前置きをされてしまった。

そんな彼に選択肢などあるわけもなく――。

こうして新たな任務がパラディン・ダンスに下される。

ミニッツメンに近づき、彼らの戦力と将軍と呼ばれている男の人となり確かめてこい。

そうだ、あえて明言されなかったが。はつきりとした名前はそこでは出されなかった。

ミニッツメンの将軍。すなわちフランク・J・パターソン Jr。  
ダンスは自らこの組織へと推薦したレオを、再び冷静な目で調査し

なくてはいけなくなってしまう。どう始めたらいいものか、部屋から退出していく彼の足はいつになく重い足取りで――。

私は監督官――バレリー。

そう、バレリー・バーストウ。

核戦争後の地上でグールと呼ばれるものに変異し。それで2000年以上を地下で生き続けることが出来た。

自分がどこか変だ、という自覚はもちろんずっとあった。

でも人の姿を――張りのある肌を失ったことに対して特に悲しむ感情はない。思えば私は自身の能力の価値と、所属する共同体へ全力の奉仕をすることに喜びを見出してきた女だ。

自分の人間としての若さ。女性としての魅力――それはどうでもよいことだった。

ふと、自分の幼いころのことを思い出す。

覚えているのは祖父の部屋。幼い私は、家族に嫌われていた祖父につき。物覚えの悪くなっていく祖父のために、彼が手紙を書き続ける隣に座り。それぞれの送り主への住所、切手、そして郵便局へもつていくことを訳もわからず手伝わされた記憶がある。

祖父は孫である私の仕事を悪くはない、といって仕事の対価に硬貨を数日おきに握らせてきた。彼は家族が嫌悪を抱くほどドル札に対して執着していたが、反対に硬貨にはまったく興味を持っていなかったのだと思う。

そんなソフトの関係が、思えば私が人生で最初の資本主義の社会に触れた瞬間だったと思うのだ。結局、祖父は私を含めた家族に対して褒めることも礼を言うこともなく。ある朝、ぱったりと倒れると私の仕事と共に彼の存在は翌日には家の中から消えていた――。

労働と報酬の関係が失われたことは幼い私の心に深い傷を残して

いた。さらに物心がついてくるころになると、もう私は自分の価値について深刻に考える少女となっていた。称賛を始めとした誉め言葉は何の価値もなく、ただそこで得られる物質だけが私の価値を証明するのだと理解していた。

学校に通うようになると私のことを気味が悪い、気持ち悪いなどと貶める煩わしい同年代と顔を突き合わせなくてはならなかったが。逆にこの体験が、それ以降の劣った人々との付き合い方を学ぶ良い経験となったことは認めなくてはいけないだろう。私を言葉で傷つけよう、態度で孤立を産もうと動く彼らのささやかな劣等感は、私にはどうでもよいものでしかなかった。

同時にその頃から私はこの世界には自分よりもさらに高い能力を持つ人々がいることをはつきりと認識した。

天才と、凡才。そういうことだ。

私はまず同年代からのレースに勝利しなくてはならなかったが。それすらも、自身の前に広がる未来では価値のない事だという事もすぐに理解した。

私は焦りを感じたが、残念なことに私を生んだ大人たちは私への興味を祖父が消えて以降。急速に距離を置かれてしまい、私の能力の開発に協力も援助もする気がなかった。恐らくこれが自分の人生最初の挫折であつたのだと、今では思う――。

ティーンエイジ、と呼ばれる世代に入ると、ルールはよりシンプルなものへと変わっていく。

それまでは優秀だった者たちは――本当に優れたものはすでに私を置いてもう背中が見えなくなってしまうほど遠くに行ってしまったが。そうでない者たちの中で私を邪魔するものはまだまだ多く残ってた。上に行けば人は減り、下に行けば人が増える。簡単な理屈だ。

でも私にはもう焦りはなかった。自分が天才と呼ばれる人ではないと理解したからだろう。

同時に同じレベルでもわたしに近い彼らが徐々に遅れていくのが



分かってきたからというのもある。

成長期特有の感情を制御できず、異性との恋愛。もしくは薬や酒での快楽を貪るようになっていくものが次々と現れた。

せつかく自分にあるわずかばかりの才能を無駄にしていく。そんな彼らの劣化が、かつて私が焦り、絶望していたものと同種のものだと思ひ当たると。それが私の力となって、私はついにレースで常に女王の座から動かぬ存在となる。

その頃、私の興味はアメリカという国の未来に自分はどこで活躍できるのだろうかという事。

天才ではなかったが、私には未来に備え、正しく対処できる能力があること。そのための準備が整いつつあることはすでに分かっていた。あとは私のその仕事を与える人々から声がかかるのを待つだけでいい——それがV a u l t — T E Cであった。

V a u l t — T E Cにはアメリカの、人類の未来があり。

それはつまり私の未来がそこにはあるという事だ。

選挙権を手に入れて数年後、私は家族以外の大人たちの力を借りてV a u l t — T E Cへと入り込んだ。

まだ若かったが、私の能力はすぐに十二分に発揮された。

部署にいる、ここに出来る程度程度の能力しかない同僚たちに正しく行動するよう私は助言を与えながら。私もまたベストを尽くすことを心掛けた。自分の仕事でつまらない結果などのぞまなかつたのだ、常に。

私の所属するチームは徐々に成績を上げていき、上司は私の意見を無視できなくなっていた。

その頃になると私の野心——キャリアアップへの欲望とV a u l t — T E Cへの忠誠は、誰もが認めるものとなっていた。

同時に私はチーム内で、同僚たちの中で突出する存在として陰口をたたかれるようになっていたが。上層部に私の名前が伝わるようになっていたという事のほうが遥かに重要な事だった私が気にすることはなかった。

ある時、それまでの生活の全てが一変した。

私は上司、同僚らの推薦を受けて当時募集がされていたVault—Sheliterの監督官に、私の名前が横滑りに登録されたのだ。

Vault監督官はこの国の未来へと橋渡しするという重要な職である。選ばれるには厳しい審査が設けられ、この国の優秀な若者や優れた能力を持っている人物が選ばれるものだ。

これはついにVault—TECが私の能力を認め、この社会——自由と資本主義を世界の未来に再生させるのに必要な人材だと認めたことだと私は確信した。

——推薦してやったんだ。せめて感謝の言葉くらいあってもいいんじゃないかね？

——いいえ。必要ありません。それは当然、あなたがすべきことだったというだけです。ではごきげんよう。

私は羨望と好奇、そして憎悪の視線を受ける中。チームを離れ、栄光の道へとひとり進む。

社会において真に必要なとされる能力を持つものは孤独になっていく。

その頃、Vaultに所属する天才たちは世界の全てを理解していた。

すでに共産主義者との戦争で疲弊していたアメリカは、恐るべき最悪の未来。つまり核による破滅の後に、再び立ち上がる人類の未来を真剣に考えていたのだ。

愚かな人間の歴史の否定。我々が手にした資本主義と自由が誕生する以前に存在した愚かなもの。再び荒廃した世界となっても、独裁者や共産主義者が力をつけることを許さず。価値あるアメリカの持つ自由、そして資本主義を理解した。優れた社会を持つ強力な国家をそこに誕生させなくてはならない。

それは拡大を続け、地球全体へと広がっていくべきものであればなおいいではないか。

Vault-Shellterはそのために未来に優れた人的資産を残しつつ、雌伏の時を無駄にすることなく驚くべき実験とその成果でそんな未来をさらに確実なものにする場所なのだ。

監督官とは輝ける未来のためになる全てをそこで実行し、手にした成果を国と共に再生するVault-TECへ持ち帰らなくてはならない。

だからこそ、監督官に選ばれた優秀な人々は持てはやされた。

大統領は彼らを集めてこの国の中枢で活躍する未来のヒーローと呼んでパーティに招いたし、州知事は自らの州で稼働するVaultのリーダーたちを並べて公の場でにこやかに握手や肩をならべることを強く望んだ。

そういえば私はそうした場所に呼ばれることは一度としてなかった。当時は気にしていなかったが、それは喜ぶべきなのだろう。

計画の遅延が続くVault88では祝典の場に出ている場合ではないだろうと、監督官自ら現場に派遣されていた私はかつて所属していた会社から叱責され続け——なぜ私が責められるのか、その理由はわからなかったが。

とにかく私はその時からここにいた。

毎日を入れ替わる怠惰な快樂主義者の多いブルーカラーへ、守られることのない適切な指示を出し続け。時に取引先の変更とやらで同じような説明を何度もやり直す。そんな生活は世界が終わる日まで続いたのだった——。

こんな昔のことを思い出すなんていつ以来の事だろうか？

どうやら私は喜びという感情に浮かれてしまっているようだ。過去を振り返る、こんな無意味なことをするなんて！

それもこれも、こうして今日を迎えることが出来たからだろう。

私は今日、200年以上を過ぎてようやく地上の人々と再会することが出来たのだ。彼らは地上から降りてきてここに驚いていた。

そして私はこれまで不明だったことの多くが解決した。

とにかくこれでまた仕事が始められる。私はこの Vault 88 の監督官。

Vault—TECの描く未来のため、大きく後れを取りはしたが、すぐにも計画を進めなくては——。

キュリーはそこまで読むと画面から顔を上げ、一息ついた。

Vault 88のメインフレームに直結された端末を操作し、さつそくここで何が行われていたのかを調べていた。

アキラは監督官による実験のデータがあるはずだと言っていたが、記録にはそれらしいものがなくてキュリーは最初慌ててしまったが。

どうやら監督官は日誌と研究記録を一緒にしているらしいとわかって安心する。機械の体だった時と違い、今のキュリーではプログラムに強いわけではないので監督官がどこかにデータを隠していれば見つけることは出来なかつただろう。

再び端末を操作しつつ、キュリーは次のリストを選択する。

今、友にここまで来たハンコックはキュリーをここに置いてひとりで奥にいるであろう監督官に会いに行っている。彼ほどの人物であれば、無事に帰ってこれると思うが——あそこで何も無いことを祈るしかないだろう。

——なんてこつた。

ハンコックの最初の感想がまずそれであった。

Vault 88の内部へと進むと、誰でも気軽に入ってこれた入り口の無防備ぶりが説明されたようなものだった。

そこには5人ほどの男女の Vault 居住者たちがいて、ぽつかりと開いている建物の壁の向こうで。洞窟の中で作物のための土いじりをしたり。確かアキラによってポンコツに“わざと調整”されていたロボットは、見違えるほど良い動きを見せる中、その隣には建設を手伝っているものもいる。

——俺達はあの監督官を少し甘く評価しすぎていたかもしれない。

Vault 88の建設は明らかに大きく進んでいた。

建物のホールの壁は未だ大きく開かれてはいたが。その先にある食堂をはじめとした、3階までの階段と以前はなかったいくつもの部屋がある。

(半分? いや、7割。完成にかなり進んでいるな)

実験が進んでいるかも——そんなことを恐れてやってきたが、これを見たらもう疑問の余地はないだろう。

間違いなく何かをやっているはずだが。とりあえず今はなによりもバーストウに会うのが先決だ。

「——あら、戻ってきたの?」

「これはこれは、お美しい監督官。地上に戻ってからもずっとこのことは気になっていてね、俺達——ああ、今日はもうひとり来てるんだが。ここの様子を見て驚いて目を丸くしているところだけ」

「そうでしょうね。確かに大きく進歩したわ。でも、これも全部あなたたちが協力してくれたおかげなのよ。喜んでほしい」

「嬉しいね。泣けるよ」

この監督官の殺害はアリ、そう思っていたハンコックも。すでにその気持ちは失っていた。

Vaultの建設が進み、実験は行われ、人が入ってしまったとしても。監督官の排除を重視するより、彼女の目的を探る方が重要になる。

「見違えたね。ここに人がいて、あんたは監督官を正しくやっている。凄い事だ」

「ありがとう——あの、ごめんなさい。あなたの名前はなんだったかしら?」

「ジョン、ジョン・ハンコックだ。俺もグールだからな、わかるよ。時々この体は、不調を訴える時もある。とくにあんたは地下暮らしで脳がくさっていたのかも……」

「あなたの名前——どこかで聞いたことがあるわ。なんでかしら?」

「珍しい名前じゃないのかもな。そんなことよりも監督官! あんたの

自慢の Vault を俺に案内してくれないか？あの図面が、どんなことになったのか、ちゃんとこの目で確認しておきたいんだ」

「ええ。ええ、そうね。わかったわ」

少し揶揄ったのだが、鈍い本人はそれに気が付かない。

バーストウがこちらへ、と示すとハンコックはそれに素直に従う。

次のリストは自分たちが立ち去った後に書かれたものようだ。

『やはりジュリアンと同じように、あのいけ好かないアンデルセン警備主任も彼らに殺されていた……』

そんな風には見えなかったが、どうやらあの監督官はアキラや私たちを前にフワフワと浮かれていたらしい。私たちが立ち去ると、冷静さを取り戻し。一度だけ入り口の外を確認して自分以外は全部フェラル・グールとなったことを確認して、不満を覚えたようだ。

その後、数日の間は悪口がひどくなっていき。訪れた私たちを話が出来る程度に知的ではあるようだ、とか。

明らかに劣っている人も中にはいたが、と悪態をつけてケイトをけなし。ハンコックを調子のよい、嫌いなタイプだと書いてる。

それでもアキラやキュリーには、見どころがあるようだと期待しているとしているのは——複雑な気持ちだ。

「実験、実験の開始は……」

リストに戻って少し下のものを次に選ぶ。「あつた」、キュリーは呟く。

「——運動とは、本質的に利己的な活動である。」

居住者個人の身体能力を上げることが、共同体へ与える脅威も少ないわ。Vault では与えられた時間の全ては目標の完遂に向けて尽くすことにある。

だからスタニスラウス・ブラウン博士率いるチームはその解決策として発電自転車をはじめとした機械によって、運動中に発電エネルギーを発生させるだけではなく、それを Vault に還元するという方法をも生み出した」

「医療の世界における革新を進めようとするなら、医者たちが最初の

学ぶあの言葉。ヒポクラテスの誓い、患者をむやみに傷つけないとするあれは意味のないものだとして正しく理解できる。知性あるものならそうなのだ。

「V a u l t では当然、正しい道を最短距離で向かう。」

すなわち医師は患者個人のため、などという小さなことにこだわらず。患者の治療を通して社会全体にどう利益となるかを考えるべきなのだ。困難な時にこそ手段を選ばない、それこそアメリカの流儀。

そこでブラウン博士率いるチームは検眼士が扱う視力マシンの注目した。これは通常、患者の視力を上昇させる特別な道具だけれど。この治療の過程を検討した結果、それ以上を期待できることがわかった。

脳内の情報を眼球を通してやりとりできるはず。何が出来るのか試してみよう」

「学業や企業においてもそうだったように、給水休憩なる考え方は過ちだ。

だが彼らはそれが自身の体を休めるだけでなく、互いのコミュニケーションにつながっていると主張して譲らない。

ブラウン博士率いる科学者チームはこの非効率な行いを正すため、様々な実験を積み重ねることで問題を解決できないかを考えてきた。

最終的には彼らがそれほど時間を浪費したいなら、科学を用いることで社会全体の利益につながればよい。

ここで使われる薬品は特別なものでなければならぬ。それだけに問題がある。

このV a u l t に置いてある薬の量では十分ではないという事だ。薬品の増産を委託していた外部会社に補充を求めたいが、今の地上では届けてくれと連絡を取ろうにもつながらないのだろう。最終的にはあの彼らに持つてきてもらおうしかない。だが短期の実験ならば足りるはず」

日付は前後するが、そこに記されていることは間違いなく実験計画の概要だった――。

最後の部屋は3階の奥部屋となった。

「これが最後の部屋ね。当面は倉庫として使われることになるのでしようけど、ここも十分にスペースを取って。後々のために、居住者達のベットを運び込むだけで使えるように仕上がるはずよ」

「ああ……」

ハンコックは素早く部屋の中を確認する。

床はまだ予定の半分、壁は一切ないが。なぜか天井だけはしっかりと作られている。

「それでどう？このVault 88の感想は」

「——うまく言えないが。人を入れるのはまだ少し早かったんじゃないかい？部屋に区切られてると言っても、ほとんど穴だらけだったぞ」

「そうかもしれない。でも、人を入れたおかげでここは大きく進歩できたことはすでにあなたの目で確認してきたはずよ」

「そうだな。だが物資はどうなってる？水はいいが、食料は？栽培室はつかわれてなかったようだが」

「それなら安心して。地上にあったものはかき集めてここに持ってきている。当分は大丈夫なはずよ」

レイダーの小屋を綺麗にあさってきたという事か。

「それと、入り口の警備がやけに手薄だったのも気になったんだが——」

「ああ、あれね」

「最低限の電源と真つ暗なホールだけじゃ、侵入者はあきらめてあそこで帰ってくれるとは思えないんだが？」

「でしょうね。だからこそ警備には人の手が必要だと考えたの。

あなた達はターレットを置いて機械に任せようとしたのは知ってる。でも、これは大切な事なのよ。スイッチひとつ押すだけで自分の安全が手に入るという考え方は、むしろ危険よ」

「——そういう考え方もあるな」

はぐらかしてきた———と思いたかったが、恐らく違うだろう。

この女はいきなりスロットルをマックスに入れたまま、それを落と



せなくなっているだけなのだ。

人の手が云々、口にはしているが。ここは地上のミニッツメンの居住地とは違う。

武器も弾薬も必要だが、人の手に渡せるだけの量もキャップも。なにより手助けしてくれる商人すらいないから。それを機械で用意するしか方法がないというだけなのだ。

「それなら心配はいらないな……それじゃ忙しい監督官どのをいつまでも俺が独占するわけにもいかないだろう。

勝手に見て回ってもいいのかな？ここに入ってきた連中の話も聞いておきたい」

「ええ、構わないわ……他にも伝えたいことがあるけれど、とにかくまずは全てを納得いくまで見て頂戴。きつと、この決断は間違つてなかつたと思つてもらえるはずよ」「わかつた。そうするよ」

バーストウ監督官と別れると、ハンコックは3階の渡り廊下から下で働いている新たなVaunt居住者たちを見下ろした。

「やつかいなことになつたな」

動いてしまった以上、いまさら止めたとしても。その先にいいことがあるとは思えなかつた。

監督官がいなくなつたからお前たちはここから出ていけ、そういつてあの居住者たちを外に追い出すことは出来る。だがそうなればうわさが広がる。ガンナーズがまだ知らないこの場所に奴らが殺到してくるのは間違いない。

となると、監督官の排除とセットで。彼らも問答無用で処分するつて手がある。

これはダメだ。乱暴だし、なによりレイダーならだれでも考えつく方法だ、ジョン・ハンコックにはふさわしくない。

名案はない。

とりあえずキュリーのお嬢さんと合流して、これからどうするのか決めなくてはならないだろう。

(正気を失つた監督官に5人のVaunt居住者達か——5人？思つたよりも少ないんだな)

あのガービーがこれほど忙しく顔色を赤、青、黄色、と次々かえてしまふようなことはこれまで見たことがなかった。

「本当か？ 本当なのかつ？ 本当に騒ぎは終わった、と?!」

「——はい」

「っ、くっ……そ、そうか。 そうなのか。 それなら——それならよかつた。 本当に、良かつた」

言いながらガービーの身体はデスクの向こう側へと静かに沈んでいく。

デスクのこちら側に立つて報告に来た、調査団の古参兵たちは不安そうに互いの顔を見合していた。

アトム教徒による攻撃は、ガービーからあつさりど冷静さを奪い取った。

東部から調査隊を徐々に撤収させ。 反対に入植させる人々と共に新たな攻略部隊を送りこもうという大切な時期だった。

何よりも問題は不足しているミニッツメンの数と、こういう時にこそ頼りになる将軍がサンクチュアリへの旅の空にあるということだ。 とりあえず増援となる部隊に人を集めようとするが、これが簡単なことではなくて数日かかるとわかるに至り。

自分が部隊を率いてここを普通に出発すると、到着するのは翌週の中頃以降ということになり。 その間に前線には頑張つてもらいたい、などと無慈悲なメッセージを送らねばならないとわかつて白目をむいた。

そうなるとベルチバードで直接兵士たちを戦場の最前線まで送り届けるという方法が思い浮かぶが。

あのアキラからはそうした使われ方はしないでほしいと念を押されている。 これを無理やりにおこなったとして、万が一ベルチバードを失うようなことになれば彼の怒りは間違いないし。

何もなかったとしても、兵士たちを乗せて戦場におろしたと知ればそれだけで激怒するのは想像できる。

(心の狭い奴だからなあ)

とはいえアキラのベルチバードはミニッツメンに広く開けられた情報では全くない。

実際に搭乗することが許された調査部隊と、將軍をはじめとした彼の友人が使っているだけの状態で。

ミニッツメンのパトロールの一部に、グレーガーデン、コベナント、スロッグにある発着場を見て(これはなにかにつかうものなのか)と勘繰っている程度の認識なのだ。

真つ青一色だったガービーの顔色を極彩色の豊かなものとする知らせが届いたのは、それからおよそ1日が立ってから的事。

深夜、怪しげなロボットとパワーアーマーが突然に表れ。明け方までに敵を全滅させてしまったと知らせが入ると、何度も確認したガービーから一気に力が抜け落ちてしまったのだ。

(助かったんだな、本当に良かった)

パワーアーマーの相手は名前を口にする事もなく立ち去ってしまったというが。ロボットが残っているというのだから、それはきつとエイダに違いない。それともなにが引き金になったのかわからないが。あの若者は見事にミニッツメンに降りかかる苦境を取り除いてくれたのだ。

(これはチャンスだぞ、ガービー！今のうちに入れ替えを進め、東部への増派を――)

だがそれにはまず、ロニーと將軍。共に手を携えてひとつになってもらわなければならぬ。

部隊に若い兵士だけで戦わせては今回のような事態を招きかねない。調査を命じたとはいえ、アトム教の攻撃に浮足立ってしまうなんて――。

「なんだか下であんたの部下からおかしな噂を聞いたよ、ガービー」

「ロニー。今は忙しいと――」

ロニー・ショーはあれからずっとこの本部の客室にとどまってもらっている。

彼女についていた若い兵士達には、ロニーの望みという事で近くを巡回する部隊に分けて配置して活動してもらっている。ミニッツメンとして恥ずかしくないように鍛えたと彼女が言うだけあって、今のところ実力の問題があるという話は聞こえてこない。

そんな彼女はこの騒ぎを聞きつけると、自分の若者たちを東に送ってくれ。なんならあんたが指揮してくれと毎日会いに来ていた――。

「ガービー、あんたはあの噂をどう思ってるんだい？」

「何の話かな、ロニー。今は忙しいと――」

「アトム馬鹿共はなんだか勝手にくたばってくれたらしいじゃないか。噂じゃそう言ってたよ」

「それは……それは恐らく」

「恐らく、なんだい!? 納得のいく答えじゃないよね。ミニッツメンは奴らに攻撃を受け、身動きが取れないって話だった。

それがどうしてか、いきなり消えたって事にされた。兵士達が戦ったからじゃない。”誰かが”代わりにそうして見せたんだ」

「ロニー……」

「その正体にアンタは全く興味はないっていうんだね。それもおかしい話さ。」

このあたしはそうじゃないんだ。興味はあるよ、このミニッツメンの鼻先でふざけたことをやらかした奴の正体って奴にね」

頭の片隅で、この際ロニーにアキラのことを伝えたらどうだろう。そうかすめたが。

あの青年が時折見せる常軌を逸した激しきについても説明せねばならなくなるので、やめた方がいいと誘惑され――それに乗る。

「ロニー！ 確かに謎はある、だが今必要なのは謎解きじゃない。ミニッツメンを襲ったトラブルは無事に解決している。そこが重要なんだ。俺達がまずすべきは、次に備えてすぐにも――なんです？」

「ガービー。相変わらずアンタは嘘が下手だね。何を隠してるんだい？」

「なにを——」

「このお助け野郎が誰なのか、アンタ知ってるんだね？そういうことなんだろう？」

ため息をつく……勘が鋭い老人だ。

「やめてください、ロニー」

「なんのことだい」

「とぼけないで。先日、あなたにはチャンスを与えました。せっかく將軍と面会させたのに、あなたはそれをご破算にしてくれた！」

「ハッ！あれはアタシが悪いつていうのかい。それはそれは申し訳ないことをしたねえ」

「——ロニー。自分の立場を間違えないでほしい。あなたは俺の友人だが、まだこのミニッツメンではないんだ。仲間じゃない、まだ」

「感心したよ、慎重なものだね。立派になったもんだ」

「嫌味はやめて欲しい。俺をいくらでも馬鹿にして構わないが、それでもあなたの事実が変わることはないんだ！」

「へえ、あたしら昔のミニッツメンの力は。あなたの友人だった連中の力は必要ないってわけかい」

昔のガービーならば、この辺でロニーの責めに耐えきれずに白旗を上げただろうが。今の彼はそうではない。

「ロニー、あなたやあなたの若い兵士達。このミニッツメン委は昔の友人たちの力が必要だ。それは本当だ」

「フン」

「だがそれにはまず仲間に加わるのにふさわしいことを証明してもらわないと。わかるでしょう？」

「どういう意味だい!？」

「ロニー、我々の知るミニッツメンはもうないんだ。あれはもう終わった、クインシーですよ！あれで全部が終わってしまった。我々が愛したミニッツメンは死んだ。もう戻ってくることはない」

「……死んだ、だって？それじゃあんたここで何をやってるんだい。誰だって名乗ってる？」

「ここにあるミニッツメンは目的と名前が同じでも、まったく違う」

「まるであたしらに用がないと言ってるように聞こえるね」

「ガービーの目の色が変化した。敬う態度が消え、冷静さというよりも冷酷さが見えてくる。」

「とぼけなくてもいい、ロニー。本当はずっと怪しんでいたんでしよう？ここにいるプレストン・ガービーが本物の英雄で、あのミニッツメンを復活させようとしているのかつてね。だからずっと連絡を取ろうとしなかったんだ」

「言うようになったじゃないのさ」

「俺はもう前に進んでるんだ。ロニー、過去を懐かしむためにここに来たというなら。あの若者たちを連れて出ていったほうがいい。もちろんあんたが持っているというかつての友人たちのリストも置いて行けとも言うつもりはない」

「……」

「でもここにいてもつもりなら、覚悟を決めるんだ。あのミニッツメンでも俺達は誓った、なにをするのか。それを終わらせないために、ここで新しくミニッツメンを始めるんだって」

「具体的にどうしろっていうのさ」

「将軍と話をしてくれ。彼と話して、仲間になってくれ。ミニッツメンでやろうとしたことを、この先の未来の連邦でも続けるために」

「ガービーはそれだけ言う仕事に戻ってしまう。」

「もう相手にされないとわかってロニー・ショーは部屋を出るが。しかし彼女の目的が変わったわけではなかった——。」

「おい、若いの！」

彼女が居住地の中を探し回って見つけた相手に声をかけたのは、調査隊から事態が収束したと知らせに来た兵士であった。

「聞いたよ。危険は去ったんだってね」

「あ、ああ」

「そいつはよかったさ。ところで——噂のヒーローの正体について、ガービーはなにか言ってたのかい？」

「いや——それよりあんたは？」

「ロニー。ロニー・ショーだよ。見ての通りの婆さんだが、あんたらの後輩だよ」

「そ、そうか」

「ところで今回の騒ぎのヒーローについて、ガービーが詳しい話をしてくれないんだよ。なんか、まずいのかい？」

「えっ」

「調査も捜査もしないらしいしね。名前とか——本当に知らないかい？」

「知らないよ。だって“彼”は俺達になにも名乗らなかったし」

「へえ。でもあんたらの様子を見たら、誰なのかはわかっているような気がするんだよ。これは気のせいじゃないと思うね」

聞かれた方はまだ迷っているようだ。

新生ミニッツメン立ち上げからいたのだ。あの名乗らずに消えたパワーアーマーの中に誰が入っているのか、少しは想像はつく。だがそれをこの老女に話していいものかどうか——。

「ものを知らないってのは年を取ると辛いんだよ。頼むから新入りのこの婆さんに事情って奴を教えてくださいたくないかな？」

ロニーは全く諦めることを知らない。

---

—— Day 1

表示がされ、映像に時間が記されている。これは恐らく一番古い実験の様子だ。

作られた部屋の隅から、“10台”のフィットネスバイクが並べられ。部屋に入ってきた居住者たちはのそのそとそれにまたがっていくと。最後に監督官の掛け声で運動が開始される。

—— Day 3

映像ではすでに運動が開始されている様子が映る。

と、マシンに光が走り。被験者のひとりがまたがった状態のまま天井にたたきつけられるまでに跳ね上げられ。床に滑稽な姿勢で落ち

た。

仲間たちが慌てて近寄るが、誰かが何かを言ったのだろう。全員が笑いだし、監督官は再度運動をするよう命令する。

この映像には備考欄がついていて、当時の状況をそれなりに説明していた。それが以下の通り。

『3日目、被験者たちの態度に一向に変化が見られない。

彼らはこの重大な実験の意味を説明したにもかかわらず、どうやら作業時間を減らされたわけではないのだと、そう考えているようだ。

私は失望する。もう彼らがこの崇高な実験の本質を理解はできないであろうことも悟った。

この日、ひとつ面白い事件があった。

被験者Cの装置の電気回路が逆流し、漏電した。

被験者に怪我はなかったが、彼らはそれを笑い事として認識していた。そろそろいい頃合いだろうと思う』

—— Day 4

映像はいつもの通り。だが背後に新しく給水装置が設置されているのが見える。

カメラの位置を変えたのだ。

彼らは給水を終わると、またマシンにまたがって漕ぎ始めた。いきなり早送りが始まる。今回の映像は時間が長いのだとわかった、先に備考欄を確認した。

『4日目、ついに第1段階の実験を開始。同時にこれは第2段階も並行して進めることにした。

Med—Xとバファウトを配合し、それを実験前に彼らに飲ませる。これで彼らは肉体的にも精神的にも薬物の力で一時、強靱なものとなったはずだ。だが副作用として高まった集中力のせいで異常反応がでることは避けられない。

そこで実験室の時計の針の進行を遅くし、彼らに12時間の運動を求めることにした。

だがここで問題が——」

映像の早送りが終わり、昨日とは違うマシンがまた光を放つと。同



じように漏電し、搭乗者を天井まで飛び跳ねさせた。

どうやら9時間ほど過ぎたあたりで再びマシンの不調があったようだ。

だが今度は前日とは全く違う展開を見せる。

最初、周囲は頭だけを床にたたきつけられてうめいている被験者に向けているだけでマシンを動かすことをやめなかった。

するとうめいていた被験者——これが被験者Fらしい——が跳ね起き、一部始終を冷静に見ていた監督官にむかって激しく食って掛かっていったのだ。

周囲の反応と薬物から、感情が爆発してしまったようだ。

バーストウの言葉など聞くつもりはないらしく、ひたすら何事かを叫んで非難しているようだった。最終的に被験者Fは怒りが収まらないまま部屋を飛び出していく。その頃には周囲の仲間達もマシンを降りて、それでもボーっとその隣で事態の進行を眺めていた居住者たちに監督官は本日の実験の終了を宣言した。

『被験者Fは感情的で理性的な反応は全く見られなかった。怒りにかけられ感情に支配されていた。投与された薬の成分が強すぎたのだろうか、そうは思えない。』

やはり最低限の知的レベルと同じ目的を持った仲間という意識が彼らの中にないことが問題のようだ。

これは他の被験者たちにも言える。

今回の実験で彼らはひとりの脱落者が出ることで、自分に与えられた役目を勝手に降りてしまった。そうした怠惰な者たちに引きずられて、結局は全員がそれにならった。私はさらに失望は隠せない。

だがこうして知的レベルに不十分であったとしても、素質のある者は確実にいる。未来を悲観し、絶望するにはまだまだ早い。

Vault—TECの考える未来のために自分たちが何ができるのか、この意識を彼らの中にどう埋め込むのか。監督官の仕事として、私はそれをすぐにでもとりかからなくてはならない』

——Day 6

フィットネスマシンが全て稼働している。だが今回の映像は逆に

短い――。

と、いきなり画面が真っ白になり。録画はそこで終わってしまう。状況の説明は記録でのみ残されていた――。

『6日目、前日彼らは最後まで集中することなく実験を無意味なものにしてくれた。』

監督官として、このような状況の改善のために必要なことはすべてやると誓った以上。私の決定もまた厳しいものとなった。

同時に当然だが実験も新しい段階へと入っていく。

今回は発電エネルギーを常に一定以上を絞り出させるため。逆流を利用する実験を採用した。

開始から52分後、被験者C、E、F、Iのマシンに同時に不具合が発生。軽傷1名、重症2名、死者1名。被験者Fは受け身が取れず神経を壊してしまい植物人間の状態となったため、結局破棄した。2名が脱落したことになる。

初めて失った仲間たちの葬儀を行ったところ、フィットネスマシンの実験と監督官への不満が出て来たので、これは終了させなくてはいけなくなった。だが、ある程度の実験は行い。データは取れたと思う。だから安心してほしい』

―― Day 7

監督官室のターミナル前に座るバーストウが何かを話しているようだ。

どうも被験者たちとの関係に苛立ちを感じ、それを彼らの知的レベルの低さとVaultの意義を理解しないからだと言っているようだ。

てつきり彼女の愚痴で終わる回なのかと思ったが、記録によるとそうではないことが分かった。

『新しい実験に入る前に、彼らのスケジュールを変更した。』

彼らは不満そうだったが、近く新たな仲間を追加すると伝えると安心したようだ――。

人が減ったことを理由に彼らの作業時間を3時間増加させた。また水の使用制限を与える一方、ソーダマシンはそれとは別に無制限で

使えるとした。

これでソーダマシンには新たな薬物を混ぜる状況は整った。これから時間をかけて彼らの体調を最低レベルにしつつ。思考力を低下、鈍くさせることにする』

—— Day 14

どうやら医療室らしいそこにある検査装置に居住者たちが集まって円を作っていた。

だが映像が乱れるたびに状況が一変。椅子に座ったまま悲鳴を上げる女性。泣き叫ぶ男は装置が外れるなり顔を覆って椅子から転げ落ちる。口から泡を吹き、痙攣しか反応を見せなくなっているのに目の前のそれに気が付かないように——フィットネスマシンでは全員が気にしていたのにそれがすつかりなくなってしまった。

記録では壮絶な結果が残されていた。

『住人達の反応がよくわからなかったせいで、ここまで時間をかけてしまったが。ようやく全員が体調の不調を口にした。

そこで次の実験を開始する。

この新たなVault—TECの視力マシンは、同時に眼球から脳に影響を与え。最終的には能力の拡張を含めた様々な試みが可能となるというシステムだ。

組み立ててみるといかにもこの病院でも見たことのあるようなユニットであったが、性能はまるで別物だと今回の実験だけで十分以上に証明出来た。

ただ監督官である私はVaultの力を過小評価しすぎてしまった。これが失敗だった。

住人達の態度から、彼らを導くこの監督官へのただならぬ疑念の答えとして。

私はこの最初の治療に彼らの思考の解読と、彼らのVaultへの忠誠心。つまり監督官への従順さを求めようとした。だがこらは彼らの頭には詰め込みすぎであったらしい。

全員がマシンによる苦痛を訴え。ひとりには残念ながら命を落とす

た。

また、被験者Bは片目を、被験者Dは両目を失った。だが彼らは結果に激怒し、懲りずに監督官を侮辱し続けたため。私は仕方なく彼らにここから出ていくよう命じるしかなかった。

彼らは素直にそれに従ったものの、残るといふ5人に対してしつこく自分たちと共に出ていくように訴えた。彼らは予想通り、脱落者たちの言葉には従わなかった。実験にハプニングはあったが、結果は悪くなかったと思う』

——Day 16

この日も監督官室で、監督官の独白でおわっているものだったが。内容はそれまでになく不穏なものとなっていた。

曰く、しばらくは従順さを求めるために彼らを薬漬けにするが。どこかのタイミングで今度は更なる大人数を地上から招きたい。

その際は、薬物が足りなくなる可能性もあるので。最悪地上との接点を閉鎖して閉じ込めることも考えなくては——と言っている。

『……最後に、監督官となってまだ日は浅いものの。今はとても充実した日々を送っていると感じている。

だが一方でぬぐい切れない失望と不満もあることを認めないわけにはいかない。

地上がどれほど悲惨な状況であったとしても、しかしそこには遠くない日にVault—TECの意思と共に強靱な新しい自由と資本主義のアメリカが復活するわけだが。彼らがその市民となるのは到底、納得できるものではない。

現在、Vault—TECがどのような計画で動いているのかは不明ではあるが。このVault88ではどこかで——恐らくは実験の一応のデータがとり終わった時点で、地上の世界と切り離れた知的レベルの向上を目指す教育施設として生まれ変わらせる必要があるように感じる。

だがそうなるとその私の能力は新たな国の建設に生かせないことになってしまう。

この私の優秀さはVault—TECと共にあって初めて役に立

てるものだ。今も信じている。だからこそ監督官として、その時が来たらきちんとして対処できるように準備をしておかないと——』

キュリーは映像をそこで切った。

そして頭を抱える……これでまだ半分、なのに犠牲者は何名もの……。

恐れていた通り、Vault 88は最悪な場所となつてすでに助走を終えて走り出していた。

## 放浪者、一時の帰宅（LEO）

——全滅した？

深夜、まだ寝ぼけていたかもしれないが。自分の出した声なのに別人のような気がする。

アトム教にもたらされた思いもしない報告は、彼らがまったく想像もしていなかったものだった。

「だが……だが前の報告では、もうすぐ押しつぶせる。最初のよい報告が出来る日も近い、そう言ってたはずでは？」

「はっ——ですがその、運が……お味方の運が悪かったらしく」

いつもは動じることのない指導者が、はつきりと動揺していることを察し。言い訳をする部下も表現がさつそく怪しくなっている。

指導者は不快感を隠さずに部下を下がらせると、その場から離れ。海岸沿いに出ると岬に立ち、遠くで輝く灯台の光を見る。

まだ善人を演じる卑怯者の集団、ミニッツメンが。信じられない速さで立ち直ると、平然と救世主に転じて貪欲にこの場所で穏やかに暮らすアトム教徒に迫ってきたことではつきりと脅威となったことを理解した。

今は奴らと同じくらい強欲な、キャピタルから来たB・O・S。もいる。状況はにわかには緊迫し、選べる選択肢は恐ろしい速さで少なくなっていくってしまった——。

「畜生っ！あの役立たず共がっ！」

ついに感情が処理できず悪態をついてしまう。指導者としては誰にも見せたくない姿だ。

だがこれはまだ始まりに過ぎない。こっちはまだ先手を取っているのだ。これで終わりでは、ない——。

対面の時間が迫っていた。

当初からこの任務にやる気を見せなかったケイトは、ますますもつてその態度をおかしくしているらしい。不満を言わなくなると沈黙し、ほとんどロボットを連れ歩いている感覚だ。

マクレデイとケイトの人探しは決して楽な道ではなかった。

バンカーヒル、グッドネイバーではちらほら情報があるだk rで確たるものはなかったが。ガンナーから逃げ出した男の話から、マクレデイは山に隠れ住んでいたそいつを見つけ出し。腕づくで聞き出したのだ。

グリーントップ菜園——そこに彼が、グールのトミーがいる。

「よし、もういい。もういいからちよつと待て！」

「なに？」

「なに、じゃないだろ。その顔で会うつもりなのか？お前の知り合いなんだろう、そのなんとかって——」

「トミー。トミーだよ」

「そう、そのグール。会ったら俺達のボスがあるから来てくれて言うって、そいつはアキラと話をする。俺達の仕事は終わり、他に何が心配なんだ？」

色々と合わない女ではあるが、ゴール目前でこうもふさがれちゃ。そのグールとやらと話すのはこっちの役目になってしまう。

「——トミーは大切な人なんだよ」

「ああ、そうかい」

「わからない？」

「はつきりいつてくれないとな。俺はお前の心を読めないんだよ」

お互い苛立ち始めているのが分かる。

「アキラの奴。まさかトミーに何かをさせようっていうんじゃ？」

「知らねー。それが何か問題か？」

「それは——」

脳裏にはつきりと浮かぶ。ヌカ・ワールド、金網の中でレイダーに囲まれても怯えることなく、そんな相手をあざ笑いながら殺すアキラの姿。背中に寒気が走った一瞬だ。

戻ってきてまだ日がたっていないせいだろうか。今のアキラも、あそこにいる横暴にふるまうレイダーの王だったアキラとダブってまだ見えてしまう。トミーになにかしないという自信がない——。

「なんだ、そんなことか」

「はあ!? なによそれ!」

「いいから……とりあえずよ、まずは話してみようぜ。お前が気にしているようなことなんてのは起こらないさ」

「あんたにわかるっていうの?」

「——いいや。でもな、アキラは。俺達のボスは悪くない奴さ。アレよりまともな奴はどこにでも大勢いるのは知ってるが、そいつらはあいつと比べても最低な奴ってことが多いんだよ」

ケイトはまだ納得していないようだが。少しは考えが変わったのだろうか、先ほどよりも様子が変わったように感じた。

コンバットゾーンからの再会はあっさりとやってきた。

菜園の中を姿を探して歩いてみると、土いじりをする人間たちの中でただひとりのグールが。汚く汚れた農民がいた。

「嘘でしょ、トミー」

「……ケイトか」

まだ仕事があるから、終わるまであつちにある焚火のところで待っていてくれ。そういわれたら素直に従うしかなかった。

コンバットゾーンでは嫌味を混ぜていつも誰かを叱っていた。忠告してくれた。

自分だってグールのくせに、こじやれた格好をしていた。その彼が――。

「待たせたな、ケイト」

「そ、そんなことないよっ」

「汗をかいたんでな。流したいから水道を手伝ってくれ」

「わかったよ」

古びた手押しポンプを手伝う、トミーがこれほどあからさまにグールの身体を他人に見せるとは思いもしなかった。

「なんだ。グールの身体は嫌いか?」

「そうじゃないよ。ただ——昔、コンバットゾーンでさ。アンタのことでみんなと話してたんだ。トミーはあんなに身綺麗なふりをするけど、どこでシャワー浴びてるんだって。行水するにしたって――



」

「ああ……」

「あんた、そういうのあんまり、さ。見せなかつただろ。あたしらに」  
「お前らみたいなのを相手にしてる時はな。こっちがちゃんとしないと、色々言つても聞かないから。苦勞してたのさ」

「うん——」

ケイトはすっかりしぼんでしまっている。

マクレディは天を仰ぐように視線を上にとやると、仕方なくわきから会話に入っていく。

「ああ、いいか？あんたがこのケイトのいたコンバットゾーンをやつてたグールの——」

「元オナーナキ。今は——御覽の通り、ただのどこにでもいる商人だ」  
「え、商人？」

「ああ——お前には連絡しなかつたけどな。あのレオつて人のおかげでミニッツメンの居住地を出入りする許可がもらえたんだ。

コンバットゾーンを失つてから、ゼロからの再出発になると覚悟してたんだが。これでもだいぶましなのさ」

「そ、そうなんだ」

よかつた、そうつぶやくケイト。

「実はレオ達はアンタを探しにここまで来たんだよ」  
「？」

「俺とコイツ——ケイトの今のボスが、アンタと話がしたいんだとき。招待したい、だったか。そう言ってるんだ」

「今のボス？ケイト？」

「ああ——えつとね、トミー。ちょっとあれから色々あつたんだ。それであいつ——レオの友人つて奴の護衛をやってるんだよ」

「そうか。お前もうまくやっているようだ」

トミーは安心したようにそう言ったが。2人は何とも言えない微妙な表情しかできない。

「それで来てくれるよな？出来たらあんたには素直にうんと、そう言ってもらいたいんだ」

「なんだ。断れない話なのか、ケイト？」

「そんなことないよ！あんたを力づくでどうこうするって事はしないよ。約束する」

「ああ、その通りだぜ。でもこっちもガキの使いじゃないんだ。できればアンタをすんなり連れて戻って、ボスからのボーナスを期待したいところなんだ」

「ふむ、いいだろう」

「えっ？」

「いいと言ったんだ。お前のボスなんだろ？それなら会っても大丈夫だろう」

「どうやら運が向いてきたようだ。」

サンクチュアリでの翌朝、昨夜も何もなかった——などと敗北感に打ちのめされることなく。レオに「ついてきてほしい」とだけ言われ、パイパーは少し浮かれて後続く。なぜかコズワースもカールも、ついてはこなかった。

太陽はまだまだ出たばかりであるが、気温は少し冷気を含んでいい塩梅。そんな中、2人は丘を登っていくと——さすがにパイパーも気が付くことがあった。

その途中に転がる人骨——向かう先には丘の上——地下へのエレベーター。

レオはVault111に向かっていたのだ。

地下に到着すると、すでに墓場特有の冷たさとまだかろうじて動いているクライオジェネレーターが発するそれで身震いしてしまう。

「ああ——えっと、寒いんだね。やっぱり」

「長くはいない。ちよっとだけだ」

「うん、わかってる」

Vaultの中に入って通路を歩くと気が付いたことがある。妙

に床が埃だけではないものがつもっていることだ。

「——灰だ。ラッドローチやモールラッドだと思う。ここに侵入してきてるんだ」

「えっ、そうなの!？」

「アキラだよ。今は彼が、ここに墓守をしてくれるロボットを派遣してくれてるらしい。聞いてたけど、本当だったんだな」

「……そうなんだ」

記事には書かなかったが。レオからはあの青年とここでどのようにして会ったのかは聞いていた。

今は問題児にしか思えなくなりつつある彼だが、200年以上も未来に放り出された苦しんだのだろうか？そういえば自分は彼から何も聞いていないことに今更にして気が付いた。

レオは自然と部屋に入り、一番奥にあるポッドの前に立つと「ここだ」と言った。

パイパーがどうしていいのかわからないでいると、彼はポッドのスイッチを押し——そこにはもう目覚めることのない彼が愛した女性がいいた。美しい髪——女性だと思った。

だがその表情は、最後のそれは……。

「そのえっと、なんて言葉をかけたらいいのかわからないよ。でも——」

「いいよ、パイパー。ここに一緒に来てくれただけで感謝してる。自分ひとりだけでは戻れなかったから」

「う、うん」

「……すまない、遅くなってしまった。それにションもまだ連れてこれない。でも、喜んでほしいんだ。あの子は生きてる、まだインステイチュートの奴ら——彼らも僕たちの息子だけは大切にしてくれているらしい。今わかつていることはこれだけなんだ」

レオの顔から表情が消え、視線は徐々に下がっていくが。その指先はポッドの中に納まっている女性の手にわずかに触れ——すぐにポッドを閉じてしまう。

以前ほどではない冷凍装置の出力だけが、ポッドの中にいる女性の

身体を時をとどめて形作っているせいだ。わずかでも生者のぬくもりを与えるほどのような結果を招くのかは明らかだ。

レオとその妻は生死によつて徐々に、お互いの距離を離されていく宿命にある――。

結局、パイパーはなににも言えなかった。

その夜、サンクチュアリに作られた掘立小屋のような酒場は賑やかだった。

パイパー・ライトは大荒れに荒れていたからだ。

レオには何も言わず。顔も名前も知らない男たちの中でガハハハと妹が見たら顔をしかめるような大口を開けて笑いつつ、店に出されるアルコールを片っ端から飲み干していった。

サンクチュアリの助平心を刺激されてた男たちも、その豪快な飲みっぷりをみて。この美人はあとどれくらいでつぶれるか、など裏でこつそり賭けなどをしながらも楽しく飲んだ。

その様子から“朝までコース”という、かつて経験したことのない次元に突入するかに思われたが。パイパー・ライトは残念ながらパイパー・ライトであつたらしい。深夜0時を過ぎると自然、酒と男どもより寢床が恋しく――で、帰る。

レオの家へ。

外で寝て(?)いたコズワースは千鳥足で帰ってきたこの女に何か言っていたようだが、気にせずには与えられた客室に入った。

扉があつて、そこには個人用のベットが2つ――でも自分が使うのは片方だけ。この部屋を使うのも自分だけ。

ここはかつて彼が探している息子のための部屋だったとかなんとか。

帽子は脱がなかったが、コートやら下着はポンポンと脱いでは放り出していく。

酒と男どもの声が消えると、パイパーの耳には幻聴だとわかるがナツトの嘆く声が聞こえるようになっていた。

——ああ、そうでしゅよ。わかってましゅよ。

——ナツトさんのお姉さんは残念な奴でしゅよ。

——男ひとり、なーんにもできないし。

——こんな時でも慰めの言葉すらかけられない、ダメな女でしゅ。ゴメンナサイ。

惨めな気分だった。

このままベットに倒れて睡魔に身を任せたかったが。なぜか幻聴に聞くナツトの罵声がひととき大きくなった気がする。腹の底にズンと、せりあがってくる熱い感情があった。拳が握られ、垂れてきた鼻水をすすって引つ込める。

パイパー・ライトは出来る女なのだ。勝負の時を知っている。

男だつて押しして押しして、押し倒して見せる！

酒の力を借りるのはちと情けないが——なに、それもこれも勝ちにつながるならなんだつていいのだ！

軍からは何も持ち帰ることはなかった——自分はずつとそうだまし続けてたことを私はこの時代に來て悟った。

家族が近くに感じないこの世界だと、あの戦場での日常が自然と戻ってきて、眠りは自然と浅くなっていることに気が付いたからだ。

あの時、戦場の恐怖と興奮から抜け出せない部下たちに対して「自分はどうやら想像以上にまくやっている」というのは幻想だったという事だ。200年以上たつてそれに気が付く、皮肉だ。

今日、ようやくVault 111に戻る事が出来た。

息子の事、ケロツグの事、あそこで眠っている妻にはずつと話したかったがその度胸がなかった。なによりアキラにそれを知られたくなかった。

私が連邦に飛び出すしか選択肢がなかった時、彼はあえてあそこに向かい。自分に必要な情報を手に戻ってきて、必要なことも考えてくれた。

彼が居なければ今日の対面も、あの冷凍ポッドの中には無残に食い荒らされた妻の遺体と対面する可能性があった——感謝してるし、悔しさもある。私にはない強さを彼が持つてくれていることが嬉しい反面、私は……。

——やめよう。やめるんだ、

瞼がひらいたのは部屋に何物かが侵入したと感じたからだ。

武器に手を伸ばさなかったのは、侵入者の足取りがおかしいうえに妙に息が荒いことが気になったから。フンッ、フンッと音を出すそれは、まるで興奮した馬だ。

「パイパー？」

「——うん」

「どうしたんだ？ なにか、飲んできたようだが」

「うん、そう」

手元とP i p b o yのライトをつけ、上半身だけ起こすとなぜか彼女はガクリと腰が抜けたようにその場で床の上に座り込んだ。

なぜか彼女は、裸だった。

「パイパー!？」

「ブルー、あのね。その、色々あったじゃん？ あたしらもさ？」

「??？」

「言葉じゃないんだよ。わかるか？ 時にはさ、男女はお互い触れ合つて——」

照らされて浮かび上がる彼女の美しい裸体だが、座り込んだ彼女の上半身は大きく前後に振られることで頭に乗っかっている帽子がずれ落ちそうになってる。

なんだかわからないが、何もかもが危なっかしい女性だ。

真つ赤な顔で何かをブツブツと繰り返す彼女がウツと詰まると、赤みがさらに増したように見えた。

サンクチュアリにこの日、新たな伝説が生まれた。

深夜に居住地に響き渡る吐しゃ音はかつて誰も聞いたことのない迫力で、翌朝の町人たちの最初の話題となった。

その原因が、あのダイアモンドシテイに名をとどろかせる、美人記

者であるという事がそれを大きなものとして広めることになる。

最終的にこの伝説は連邦全土に伝わっていくことになるのだが——美人記者の賢い妹の耳に入るのは、まだまだ数カ月の猶予がある。

死にたいと思わされるようなひどい目にあつたことはこれまでもあつたけれど、自分からそれに流されたいと思つたのはこれがきつと最初で最後のような気がする——パイパーの目覚めは地獄であつた。

どこの町でも女たちはエゲツナイものだ。

男達は離れで「昨日のあの美人さんがさ——」と話題で盛り上がつてくれるのは我慢できるが。彼女たちはわざわざ家のそばを通り抜けてつつ、小さなヒソヒソ声で「あそこにいる客人の——」とやってくる。ダイアモンドシティで有名な美人記者の失態は、最高の愉悅というわけだ。

さらにレオのやさしさがまた骨身に染みるのだ。

深夜にいきなりにして彼の自室を訪れ。彼と、彼の妻が眠っていたベットのそばでやらかした。多くのことを！

なのに彼はゲロ製造機となつた女を親身に介抱し、汚れた体をわざわざぬるいお湯をつくつて拭つてくれた。

今もベットの中で素っ裸のまま毛布にくるまっているが——申し訳なくつて、なんでもいいからさっさとこれを機会と考えてヤツちまつてくれないだろうか？色々有難くつて、サービスしちゃうよ？そんなバカなことを考えている。

眠っていた時に見た夢もこれまた最悪だつた。

ナツトが、あの妹の結婚式の夢を見たのだ。大人たちになつた、美しい妹。彼女が身に着けるドレスはチマチマと貯金していたもので用意してあげた。

妹が誰を選ぼうがどうでもよかつたから、姉はずっと花束を胸に抱いて笑顔を振りまく妹だけを眺めていた。でも幸せだつたのは彼女

が誓いのキスをして、教会を出てきたところまで――。

おめでどう、を口にする姉に近づいてきた妹の目は恐ろしく冷めていた。

そして花束をこちらに押し付け、祝いに集まっていた大衆の前で妹は姉に説教を始めた。凄まじい屈辱だった！

――なにがおめでどう、よ。お姉ちゃん、この町一番の“元”美人記者がさ。

――妹の事より、自分を見てみなさいよ。ダメダメじゃない。

――あんなにカッコよくて美人だったお姉ちゃんはどこにいったの？

気が付くと花束を握る手に皸と汚れがあった。

自分が――老婆になっっていることに気が付いた。思わず救いを求めようと大集の中に人を探し、そこにいたレオを見つけた。

彼は私ではない女性達の腰に両方の手をまわして笑顔を浮かべていた。

ひとりはあの――男好きする女の、もつと若い時の。そしてもうひとりはあのケイトだった。

悲鳴こそ上げなかったが飛び起きた。

そして自分の醜態を全てを理解して――おめでどう、パイパー・ライト。私は今なら永遠に黙っていられる気分になった。

夕方まで横になつてると、頭痛も収まり。さすがに毛布にくるまつて隠れ続けるのも飽きてきた。

どうやらコズワースとカールは庭にいるようだ。「パピーちゃん、いけません。だめ、じやまいしない。パピーちゃん？」と繰り返しているところを聞くと、どうやらあのロボットは必死に庭掃除をしようとして犬に邪魔されているらしい。

ブルーの姿がない――パイパーは深呼吸をしてから、外に出る覚悟を決める。



パイパーが酒で寝込んでしまうとは思わなかったが、おかげで助かったというのが本音だ。

ガレージでのメールマンの会議は長引いて、ほとんど一日がかりとなったからだ。

近く東部に道が開かれるが、どれだけ投入できる戦力が揃えられるか。また新人登用法の見直し、コベナント襲撃によるメールマン用の装備の遅延。他にも色々……。

とりあえずパイパーにはこのガレージと新人訓練の様子などは昨日のうちに見せてあげたので、私は今日は集中することが出来た。

それでも会議を終えると予算担当が將軍、といって追ってくる。

「いいですか?」「なんだい?」

「先ほど、ミニッツメンへの取り分を現物支給に移すように努力しろと——」

「ああ、言ったね」

「それで本当にいいのですか?彼らは問題にしない、と?」

これまではミニッツメンに対し、武器、防具、食料などのそれぞれに値を出し。キャップを中心に渡してきていた。

それを私は今後は現物支給に切り替えるように提案した。当然、ミニッツメンの方からは不満が出るだろうから、彼もそれが知りたいのだろう。

「騒がれはするだろうけど、モノを送れば変わらないんだ。そうだろう?」

「ええ、まあ」

「——メールマンはそれ自体で独立した組織だ。武装する運送会社。そうしてミニッツメンを援助する役目を果たせればいいんだ」

「ミニッツメンのキャップの使い方に疑問がある?」

「確かにそれも頭にはある。だがそもそもメールマンが出すキャップは主に居住地に送り込むものが中心という約束になってる。

それならこっちで商人たちと交渉して、用意できたものはメールマ

ンたちに直接運ばせるのがわかりやすいだろう?」

「ええ、確かに」

「それと……フッフ、知ってるか?」

ここを一緒に作ったアキラ。彼はあのハンコック市長とたびたびキャップを抱えたメールマンからどうやって奪えるか相談しているらしい」

「はあっ!?!」

「本気ではないだろうし、悪いジョークだろう。でもそれをレイダーが始めたら、困ったことだよな」

「——わかりました。納得です」

会計係は笑顔で離れていく——彼には一番に重要なことは言わなかった。

ミニッツメンはガービーが目を光らせている。それはわかっている、彼は情熱があつて優秀な指揮官だ。

だがそれゆえに目が曇ってしまう部分が見えるのだ。その例がロニーだ。恐らく新兵の確保に苦しんでることから、旧ミニッツメンを多く呼び戻したいと考えているのだろう。

不安が生まれた。

将軍と呼ばれている自分もそうだが、彼もまた兵士たちすべてに目が向けられているわけではない。

急成長するこの組織には当たり前だが腐敗の匂いが徐々に強くなっていくに違いないのだ。組織をまとめる者たちはその時に備えることも考えないといけないのだが。どうやらガービーにはそれが抜けてしまっている。

できればアキラと相談したいが、恐らく彼は私よりもっと冷酷だ。

自分の目的に邪魔になると感じたら容赦なくミニッツメンを切り捨て、ガービーに背負わせてしまおうだろう。

その後は——いくつかあまり考えたくはない未来ばかりだ。

だからこそガービーとアキラをつなぐ私の役割は決まっている——

サンクチュアリへと続く道すがら、レオはひとりで考える。

どうやらあと数日待てばジミーが戻ってくるらしい。彼はアキラの頼みで、バンカーヒルまで新人研修をやっているそうだ。彼の意見も聞きたい。

それまでの数日、休暇がてら元気になったパイパーを連れて近くを回ってみるのもいいかもしれない。

それが終わったらいいよミニッツメンによる東部出征だ。

ガービーは兵士をどうやって用意するか悩んでいるようだが、私もさらにいくつかアイデアをだしたほうがいいだろう。大丈夫だとは思うが、強引にあのロニーと彼女の連れてくる旧ミニッツメン達にまかせたいなどと言われては困る。

灯台を含めた確認された居住地候補地を掃除すれば、仕事は完了。

それまでにファーハーバーへと戻る算段はつくだろう。アキラたちもそれに間に合えばいいが――。

微笑を浮かべるサンクチュアリの住人達との会話という苦痛を乗り越え、パイパーはレオがメールマンたちが使うレッドロケットのガレージにいることを知った。

足はサンクチュアリと連邦を結ぶ、入り口の橋へと向かう。

すると夕暮れ時であっても、遠目にこちらに戻ってこようとするレオが見えた。声を上げようとして、ふと違和感を覚えた。

2人の間にはここの住人達がいたが。その中に居住地を出ていこうとするキャラバンがあった。

みすばらしい姿で、バラモンを連れたそれは間違いなく商人であるはずだが――たしか説明されたのではなかったか？

今のミニッツメンの居住地では、商人の商売には厳しい注文を付けている、と。

こんな時間に外に出るといふ事はよほどのことだ。するとあれはこの連邦の辺境地にまでやってきた――新米商人という事になる。

ここに疑問があるのか？ いや、ないけれどやっぱり何か違う気がし

た。

パイパーの足が自然と早くなり、わずかな緊張と興奮が伴って懐の銃に手がのびていく。このまますすめば橋のたもとで両者すれ違はずだ——なぜか商人の足が速くなった気がする。

「——ブルーっ！ 気を付けてっ!!」

パイパーの直感がいきなりさく裂して警告を叫び。続いて足を止めると銃を構え、商人に足を止めるよう——。そんなパイパーの様子に驚き、居住者たちが悲鳴を上げて通りから逃げようとする。

何もかもがスローモーションに感じた。

一瞬背後のパイパーを見る商人の表情は引きつっており、バラモンを引く手綱を放り出すと走り出しながら何かを発射した。

レオの動きは一瞬だが遅かった。

不快な音とともに放たれた怪光線は彼を襲うと、レオの身体は手すりを越えて川へと落ちていく。

住人達の別の悲鳴が上がる中で、パイパーは激怒し。引き金を引く。

襲撃した本人は恐らく振り返って反撃しようとしたのだろうが。パイパーの放った弾丸の雨はどれもが彼に命中し、暗殺者はくるくると踊るように回転しながら橋の上に崩れていった。

「レオ！ レオっ!?!」

恐怖を感じながら慌てて川岸へと走っていくと、なんと撃たれたはずの本人は平然とザブザブと川を横切ってくるどころであった。

「嘘でしょ？ 撃たれたのに!」

「大丈夫だ、パイパー。気分は最悪だけど」

「でも——っ」

「ガンマ銃って呼ばれてる奴だったんだ。ダイヤモンドシティでアルトゥーロに見せてもらったことがある。おかげで助かったよ、放射能をいきなり浴びせられたけど致死量じゃなかった」

パイパーの頭にアトム教が頭に浮かぶが、それよりも腹立たしくも冷静に岸へとあがってきた男にパイパーは飛びついて——なぜか知らないが、本当に久しぶりに大きな声で泣いてしまった。

レオは驚いた様子だったが、「もう大丈夫さ」といって彼女のその背中を優しくさすってやった。

それはただの突発的なアトム教か、もしくはそれに化けようとした暗殺者でしかないと思っていたが。

新人を連れたジミーが大慌てで帰還したことで、事情が変わった。連邦にアトム教のひとつが、ミニッツメンを敵として攻撃してきたのだ。

居住地のひとつが包囲されているらしい。

すぐに犯人は思いついた。

たしか調査ではキングスポート灯台のそばにはアトム教がいるという話ではなかったか。

彼らは狂信者であるかどうか、当時も危険があったので接触はしてないという事だが。どうやらその正体はむこうから知らせてくれたようだ。

「ジミー、疲れているだろうが。一緒に来てもらえるか？」

「もちろんです、將軍。俺はここでもミニッツメンですから」

「よし。あとこの新人から兵士に使えるそうなのはいるか？」

ミニッツメンと違い、メールマンにはそれより上の訓練と結果を求めている。

ここで私が口にする兵士とはメールマンの事ではない。ジミーはそれを理解しているので、すぐに私が知りたいことに答えてくれる。

「兵士——それなら6、7人はいますよ。3時間ください、すぐに準備させます」

「5人でいい。選べ」

「わかりました！將軍」

戻って疲れているであろうジミーは新人たちの宿舎に走ると、どうやらそれについていくつもりらしい同じく戻った新人たちも走ってついていく。

私はガレージのスタッフに次の指示を出す。

「これから本部に、ガビーに指示を送りたい。急ぎだ、誰かに頼めな  
いかな」

職員が私の問いに答える前に「俺ならどうです」と声をあげたのは、  
奥のカウンターに寄りかかっていた男だった。

彼はグレーのスーツを着こなす。ここでメールマンとして契約し  
ているひとりだった。名前——誰だっけ？

「今のお話じゃ、俺のような正規のメールマンは連れて行ってもらえ  
ないようだ。なら、べつのごとで部下は社長の役に立ちますよ。将  
軍」

「いいのか？」

「この仕事が生にあつて居るらしくて、休めと言われてもどうにも退屈  
で。望むところですよ」

「では頼む、ガビーに会ったら新人で2部隊用意しろと。東部の調  
査隊呼び戻しも前倒しにしろと伝えてくれ」

私はうなづくと空のホロテープと端末機を探してガレージの中を  
歩き出す。

ふと、後ろについてくるパイパーに気が付いた。そうだ、彼女を忘  
れていた。

「すまない、パイパー」

「ん？なにが？」

「悪いが私はこのあとすぐ、東部に向かう。君は——」

「もちろんついてくよ！なんていっても、ミニッツメンの大活躍を前  
線で見られるんだもんね」

「——あ、そう」

思わず苦笑いしてしまう。

勇ましく戦ったと思ったら泣いて、今はすっかり有能な美人記者に  
戻ってる。本当に飽きない女性だ——。

こうして私は部隊を率いての強行軍が開始された。

目指すはスロッグだったが、その道中。襲われたミニッツメンの包  
囲は無事に切り抜けたことを知らされた。

誰が、なにをしてくれたのかはすぐにわかったが。私は心の中で若  
き友人に感謝を述べるだけで、あえてコベナントには近づかず、その  
まま通り過ぎていった。

## 未来の代償

グッドネイバーの街角では、新たなプレイヤーとなろうと白と黒のストライプが入ったビジネスマンが今、まさに交渉の最後の段階に入っていた。

「——だがな、手堅いとはいえそのキャップじゃ……」

「そうー手堅いってのが重要だ。つまり……」

市長がいなくても、この町は以前と変わらず動いている。

だから連邦で悪党として名を上げようとここに人が集まってくる。

ビル・ロックリー。

この男もそんなひとりである。

彼の経歴は、近年まで面白いものでは全くなかった。落ち着くことのない放浪の旅。生きるために盗み、憐れみを乞い、誰かを騙し、なんでも奪った。だから力が、誰かを踏みにじる暴力装置が欲しかった——誰かの足下で這いつくばる人生で終わるのは惨めすぎる、と。

人生が一変したのは、ミニッツメンと出会ってからだ。

静かに、平和の時であっても誰も信じず。自分の本音を口にしないために寡黙であることを良い事だとほめられた。

自分の卑屈さを見せず、ただ大きな体だけを示したことで才能があるとされた。それが都合よかった。

ミニッツメンの掲げる大儀などに欠片も興味はなく。ただ以前にクインシーで見せた蛮行が大きく自分に利益を与えらると思つて参加を望んだ。そう、彼はガービーの元ミニッツメンである。

彼は堕ちたわけじゃない。ついにチャンスに巡り合うことが出来ただけ——。

「っー」「どうした?」「いや、なんでもないぜ。それより安定して取引できるってのは本当だろうな?」「ああ、もちろん!」わずかに興奮を感じる。

「実を言えば今のグッドネイバーは全て市長が品物を管理してる。彼の品質は良いが、数は設定されてこっちの利益をコントロールされちまつてる。だから……あんたみたいな新入りは大歓迎さ!」



「よかった」

「ああ、お互いな。こー？こりエキヤあは……っ!？」

いきなりロックリーの相手は行動が怪しくなる。舌が、呂律が回ってない。力が抜けるのかこちらに寄りかかるとも出来ず、足元から崩れるようにして路地に倒れてしまった。

(敵だ！)

ロックリーでもそのくらいはわかる。倒れた男から一步後ずさり、慌てて周囲を確認する。

ここは街灯の明かりだけが頼りの一本道の路地裏。誰の目にも止まらないだけじゃなく、隠れられるような場所などない、はずなのに。「どういうつもりかはわからないが、話があるんだろ？隠れてないで出てきたらどうだ！」

ハツタリだったが、それほどはずれでもない気がしてきた。

そして当然だがどこからか姿があらわれれば、すぐに決着をつけるつもりであった。

驚いたことに返事はなかったが、変化はすぐに訪れた。

光の外側にある、小さくとも濃い影がぬらりと動きだし。それは人の立ち姿へ——人間の持つ恐怖が悲鳴を上げると騒ぎ出すが、あえてロックリーは深呼吸するように大きく息を吸い上げ、頭の中に冷静な部分を残そうとする。元ミニッツメンとして感情をコントロールしろと学んだ。

しかしこれはどういうことだ。

——シルバー・シユラウド

かのラジオで騒いでいるこの町に現れた奇人。

それは170センチ歩かないかではあったが、身にまとう衣装。そして——女？。

「闇の中にも正義はある。このグッドネイバーの中でさえ、それは変わらない」

声は厳かで、誰を演じているか。もはや疑う余地はない。

「シルバー・シユラウド。まさかここに戻ってきたのかよ」

「ビル・ロックリー!! 貴様は正義を凌辱した。それを見逃すわけには

「いかない」

「へ、へへっ。俺が？俺が何をした？だいたい正義に俺はなにもしていないぞ」

「——ミニッツメン」

「もうやめた！伝説のプレストン・ガービーに幻滅したのさ。奴の言ってるやり方は自分にはあわないってね。どちらにとっても正しい決断だったと思うぜ？」

「だがお前は選ばれた。求めにも応じた、メールマンに」

ドキリ、心臓が今度こそ飛び跳ねた。

自分の心の外側で好きに騒がせていた恐怖が再び中に入り込もうとしてきて、驚きで両目が大きく開いた。

メールマン。

くだらないミニッツメンの下部組織みたいなもの。奴らの築き上げたもののために血と汗を流す、くだらない。甘ちゃんのガービーには心の中では呆れかえっていたので、ミニッツメンから出ないかと將軍とやらが声をかけてきた時は最初、助かったと思った。

だがこれがとんだ大間違いだった。

ミニッツメンよりもさらに過酷な訓練の日々。居住地間で交わされる物資、情報、武器。それらすべてを“正しく”体の中に流れる血液のように流通させるという使命。なのにそこで手に入れた全ては自分のもの出来ないという。冗談じゃない。

ビル・ロックリーは不満を募らせ——同じ思いの仲間を候補生の中で集めると、ついに脱走を果たす。もちろんそれまでの駄賃の代わりにと、自分達のために用意されているという装備類を頂いた上で。

奴らから学んだ技術は大いに役立った。それでも訓練の効果と奪った装備の高性能ぶりを理解するのに少し時間がかかったが。今は彼らは“ライトシフト”とチーム名を名乗って動いている。

未来のビジョンもしっかりある。平和になったと信じられている連邦の北部で危険な連中を集め、我が物顔で歩き回っているメールマン達を襲撃するのが目標だ。その準備として今はグッドネイバーで名前を売ろうとしているところである。

「な、なんのこゝろだ？」

「とぼけるな。お前が身に着けているそれは、正義の証。小賢しい負け犬の脱落者がまとつていいものではない」

「てめえ、シユラウド。てめえは……將軍野郎の手先かつ!？」

パリステイツク・ウィーブ加工のスーツの秘密を知っているのは、まさしく“奴ら”である証拠だ。

ロツクリーはまた一歩下がり、恐怖から少しまごつきながら武器を取り出す。シユラウドではないが、彼が使うのと同じ。バレルを極限まで切り詰め、ストックを折りたたみ式に変えたオリジナルのそれを相手に向ける。

シユラウドはそれを立ったまま見つめていた。武器を取り出す様子は、好きにさせている。

ロツクリーは銃口を影に半分隠れるシユラウドにむけるとためらうことなく引き金を引いた――。

立て続けに響く銃声。弾倉に入っていた35発は全て発射。

そのすべてをはずした。

シユラウドは寸前で地面を蹴る。その次は左右にそびえる壁を交互に蹴り続け――ただそれだけで、体をこちらに向けた姿勢のままシユラウドは建物の屋上に悪夢そのままに昇っていく。

それを追ったロツクリーの銃口は正面から直上へ動いた。フハア、撃ち終わると思わず肺の中からすべての空気を吐き出す。

シユラウドは表情を変えなかった。地上から屋上にまでつながっている雨どいの途中に捕まってロツクリーを見下ろしていた。

あり得ないことが起きていた。マズい状況にかわっていた。

「チツ、チツクシヨツ」

慌ててリロードの動作に入る。だが、簡単ではない。

感情のせいで震えだした手の動作に機敏さと正確さなどない。ドラムマガジンであったことも原因のひとつにあげられるだろう。

「そこで待ってろっ。すぐに、すぐにぶち殺して――」

いいや、終わりだ。

なぜか男の声が自分の耳元そばで聞こえたと思った。次の瞬間、ビ

ル・ロックリーは衝撃を感じ。自分の存在が分からなくなってしまうた。

ただ頭部の片側に冷たい感触が広がっていることから自分が路地裏に倒されたことを——叩きふされたことを理解した。

雨どいからぶら下がっていた女のシユラウドはつかまつていた手を離すと地上に優雅に着地する。漆黒のコートのはためき、現実とは思えぬ優雅さがそこにはあった。

「パーフェクトだった。シユラウド」

声をかけたのは背後にいた男のシユラウド。その手にはロックリーを昏倒させた電磁警棒が握られていた。

「当然だ。シユラウド」

女が返しながら近づいてくる。男は女にうなずき。再度警棒を振り上げた。

続く2度目の衝撃は、今度こそビル・ロックリーの意識を木っ端みじんに粉碎してみせた。



Vault88の中でハンコックは徐々にストレスをためていた。

キュリーと共にバーストウ監督官の狂気を薄める役割をにない、なんとか人体実験の遅延に努めているが。時間稼ぎにもなっていない。

半病人状態にある住人達をキュリーは何とか回復させようと試みたいが。目覚ましい回復を与えてはバーストウの暴走を招いてしまいかもしれない。その考えがキュリーを苦しめ、ハンコックを苛立たせる。

——殺すのはナシで

アキラとのあの約束がなければ、ハンコックは即座にバーストウを排除しただろうに。

BEEーPO！ BEEーPO！

その日。Vaultに、坑道にサイレン音が唐突に鳴り響く。

ハンコックはリボルバー銃を手に建設途中のVault88の中

を走り抜けた。サイレン音を聞いてもそれを意味するところを理解できない、立ち止まっている居住者を横目にここに入り込もうとする侵入者の姿がないことを確認したのだ。

（入り口？マズいな、ガンナーの奴らが戻ってきたか）

建設途中の Vault 88では、地上と繋がる出入り口の警備はまだまだ期待できるものではない。角を曲がると、前方にレーザー銃を握りしめたキュリーが走っているのが見えた。

「お嬢さん！俺の後ろにつけ、あんたが前に出るのはやめろ」

「あ、はいっ」

（いい娘だ）

共に仲間として行動していたので勇気のある学者だとはわかってるが。だからって殺し屋の自分の前に置いておきたい戦士ではない。

守ってやらねばならないのだろうか、賢い彼女となら心配ない。むしろあの Vault 居住者達に武器を持たせて率いる方が不安だ。

——Beeeeeeeeeeeeeeeeeeeeep!

Vaultの出入り口は異様に暗かった。

電源は通つてはいるのだが、奥で工事をしているせいもあつてここに万全のセキュリティを用意するのは後回しになっている。そこでは奥で鳴り響いていたサイレン音に加え、侵入者を感知するビーブ音も鳴っていた。

（様子を見る。相手を確認するぞ）

ジェスチャーでキュリーに指示を与え、ハンコックを先頭に2人は武器を構えて静かに前進していく。

ビーブ音が侵入者の足音を消してしまい。気配と姿を探すが、誰もいない。

足を止めた。

いきなりビーブ音が止まったからだ。

システムをいきなり抑えられたか。今度は急いで制御室へと向かう。今度はアタリだった、部屋の中で歩き回る人の足音が聞こえた。

どうも侵入者はひとりらしい——ん？ひとりだと？

「……おい、嘘だろ？」

「あ、やあ」

「ふざけるんじゃないぞ。俺達がどれだけ——」

「外からは警報スイツチを切れないんだからしようがなかったんだよ。騒がしくして、ゴメン」

それまでの忍び足をいきなりやめて制御室の中へ入っていかうとするハンコックに慌ててついていくしかなかったキュリーは、目の前に立っている人間を見て驚きで目を丸くする。

「アキラ!？」

「キュリー、やつれてるね。眠ってないのかい、ダメだよ」

それはいつものようにイエローのスーツを着込んだアキラ本人であった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

白い錠剤をいくつか、いつものようにまとめて口の中へ放り込む。飲み込む前にあえて噛み砕く。これで効きはもつと“良くなる”はずだ。すぐにこいつの力が必要になる。

「あら、あなたも来たの？久しぶりね、こんにちは」  
「……」

Vault88の監督室にアキラはただひとり。挨拶もなくズカと入っていくと、バーストウ監督官などいないというように長椅子にいきなりどつかと座り込む。無礼な態度であらわれた共同経営者にバーストウは動揺を見せない。

「——どうやら今日は不機嫌なようね。何か飲む？」

「ヌカ・コーラ・ダーク！なければワインかシャンパンで」

「ある。わかったわ」

Vault88の最上層に監督官室は作られた。

管理者を住人よりも高い位置に置くのは正しいことだが、アキラはわざと住人達の生活エリアの外側に孤立させるデザインでここに配

置した。

そこは窓もなく、部屋から見下ろしてみる住人達の姿が確認できないようになっていて。バーストウに余計な考えをもたせないようにという配慮であったのだが。

アキラの気づかいの結果は期待と正反対のものになってしまったようだ。

彼女は、バーストウ監督官はひとりになると簡単に暴走した。

ハンコックやキュリーから見せられた映像や治療の記録がそれを証明した。「どうした地下で200年以上閉じ込められていた狂ったグールの好きにさせていた」、そう責められても仕方ない——僕はこのVault88に関しては“身を入れて”こなかったのは事実だ。

監督官が液体の入ったグラスをもって僕の前に腰を下ろす。それを見てすぐに僕は声を張り上げて抗議をはじめた。

「監督官、私はあなたに失望していると伝えねばならない。実際、あなたは不愉快な結果を出している」「あら、なんのこと？」本当に分からない、というようにバーストウは小首などをかしている。

「あなたは外からやってきた私を、仲間を含めた我々を。このVault88の再起動から参加してほしいと言ってくれました。我々はそれに報いるために力を貸した。影も形もなかったこのVaultを用意した、あなたのために。Vault—TECのために！」

「ええ。でも完成はしていないわ」

「認識が違うってハナシじゃないんだ。形を与え、実際に構築するまでに事を進めた！——我々の協力があつて出来たことだ。これをあなたは否定すると？」

「それは認める。でも聞いて、リズムというのかしら。お互い計画について、きつとテンポが違ったのよ。もつと速さが必要だった、遅れた分を取り戻すという意味で」

不愉快な表情を浮かべ、両手を暴れさせ、僕はさらに声を張り上げる。

「そのようだ……ここにはなぜかあなたの住人達がいる。建築計画は前倒しに前倒しを重ね、工事現場は増員。技術者も用意できたようで口

ポットの調子もよくなってる。なるほど、あなたの口にした“我々の計画”というのは結局、ひとりだけの監督官の都合というわけか」

「誤解があるみたい。どうしてそんなことを言うの？」

「どうして!? それこそこちらからあなたに投げつける言葉だ、監督官。我々は少なくともあなたへの敬意をもつてつきあつてきたつもりだ。2000年、地下に閉じ込められ、なにもできなかったあなたの願いをかなえるために努力をしたことがそうだった!そして完成するVault88は力強くスタートを切るはずだった。」

ところがあなたは、その上に無理矢理に積み上げたご自身の結果に満足らしい。なるほど、監督官であるというだけで全てはあなたのためにあると。我々の働きを盗人のようにかすめ取る、満足か。信用を踏みにじり、さぞ誇らしいのでしようなっ」

言いながら机の脚を僕は軽く蹴り上げた。パフォーマンスにまみれた怒りの言葉では足りないと思い、演出を加えてやったのだ。

これはさすがに効いたようだ。動揺を瞬きを多くすることで押さえたバーストウは、平静さを見せたまま会話を続ける。

「なるほど、私に怒っているのね?確かに——確かに私はあなたやあなたの仲間達に失礼を働いたのかもしれない。でもそれもすべてはブラウン博士の……」

「それです!なぜここでブラウンなにがしとやらの話が出るのですか?」

私はこのVault88の話をしている。ところがあなたときたらその博士とやらの研究しか話さない」

「だってそれは——」

「ええ、初めからあなたはそうだった。Vault—TECが定める監督官の職責よりも、研究が大事」

「そうよ。それも監督官の役目」

「ハッ!よく言う、アナタの役目でしょう。私の見るところアナタの仕事は投げやりなうえに乱暴で雑」

「まるでここにずっと居たようなことを言うのね」

可能な限り軽蔑の色を濃くした視線をグールに向ける。



「結果ですよ、バーストウ監督官。私の歪んだ目が言わせているんじゃない。あなたの成し遂げたことへの正確な評価を口に出しているだけだ。」

あなたはV a u l t が完成もしていないのに住人を募った。そのうえ次の瞬間から彼らはばたばたと死んでいった」

「それは——」

「研究？そうでしょうとも！監督官とはV a u l t 付きの科学者を言うんじゃない。そこに住む人々を統括し、守るべき秩序を理解させ。V a u l t を研究に従って続けさせることです」

ここでマクナマラのV a u l t 81で知った情報が役に立つてくれた。

「ええ、わかってるわ。当然よ」

「これが？この惨状が？失礼ながら、実際のハナシ。あなたがV a u l t から派遣された監督官であるという事すら、疑問ですね」

「それは——どういう意味かしら？まさか私が監督官であると嘘をついているとでも？」

「そうであってほしいと思つてますよ、正直ね。自らを監督官だと言いつける無能者のゲームに付き合わされたくはありません」

バーストウはもうやめろと言うように両手で押し戻すかのように姿勢を作り、僕からの責めを何かをで止めようとす。

「あなたが怒りを感じているのだという事は理解したわ。そして私の行動に疑問を持っている、と」

「研究プロジェクトの管理者レベルの理解力をお持ちのようで安心しましたよ」

「嫌味はやめて！……わかったわ、どうしたらいいの？どうしたら、許してもらえるのかしら？」

僕の望む方向に流れている。

「我々の共同プロジェクトであるこのV a u l t 88は危機にさらされています。冷静に、正確に今の状況を見たところ、あなたに監督官としての素養はまったく感じません。」

V a u l t は未だ建設途中であるのに。住人はいて、しかし半分は

もう死んだ。残りもこの Vault と監督官への忠誠を抱くことなく。半病人の状態で健康とは程遠い。これがあなたの統括だと？本気ですか？いや、正気ですか？」

「……」

「この最悪の状況を続けることはできません。 Vault-TEC の偉大な計画を破綻で終わらせてはいけないではありませんか!？」

Vault-TEC の名を出すと彼女は途端に従順になる。

彼女は無表情のままだが、雰囲気には迷いの色が強く出始めていた。

「そう、かもしれない」

「彼らは世界が終わる時、この場所には Vault 88 があって欲しかったはずだ。そして 200 年、それはここにやっと誕生しようとしている——ただそこにいるべき監督官がない。大きな問題です」

「——私を監督官の座から引きずり降ろそうというのね」

「あなたが Vault-TEC の掲げる理想、そしてその優秀な社員であれば。冷静に自身の監督官としての仕事ぶりを見返すことが出来るでしょう。そして何かを感じるはずだ。懸命な人であるなら可能な事です」

「……確かに。でも監督官にわたしを選んだのは彼らよ。私は嘘はついていない」

「ですね、つまりそれはこういうことです。 Vault-TEC は最初 200 年前の“アナタ”を選んだ。しかし残念ながら今のあなたにはその能力は——不足していらっしやる」

「私が衰えたとあなたは言うのね？」

「200 年ですよ、バーストウ。人間が生きるには長すぎる時間です、穴倉の中で死人のように沈黙していた。鉄だつて錆びる、しようがないことですよ」

お前はグールだけだな。もちろん黙ってる、心の中でだけだ。

「しわがあなたの持つ美しさを失わせたが。それでも背中も曲がらず、病気ひとつせずに今も元気に歩き回れるてる」

「ええ、そうね。私はまだまだ働けるわ」

「それはもちろん！ですが監督官ではありません、そこは考える必要

があります」

「……いいわ。でもそれなら私の後釜はどうなるの？まさか選挙でもするというわけ？それは納得できない、愚か者の考えよ」

「まさか！私が代理として引き受けますよ、当面はね」

「あなたが？」

怪訝そうな表情を見せてくるが。僕はとびっきりの笑顔を作り、声も弾ませる。

やる気のなさなどない、完璧さで押していく。

「候補は他にもいますから、いつかは誰かに正式に決まるでしょう。ですがまず、あなたがその席から立ち上がってもらうことが必要です」

バーストウは沈黙してしまった。

僕は上目遣いのまま彼女が返事をするのをじつと待ち続ける。

「——私に新しい役職が必要ね。そうでしょう？」

「監督官ではなかったとしてもあなたはV a u r t e e T E Cが認めた優秀な女性だ。自分にふさわしい場所いくらでもあります。見つけられるはず」

彼女の欲望、自尊心を刺激してやる。

彼女の頭の中で妄想はすぐにも成長させられ、姿を見せてくる。

「私にふさわしい、場所」

「一緒に考えましょう。あなたにふさわしい次を。あなたの輝かしい未来について」

この世界でも希望の光は存在する——ただ、その後ろ。

光の陰に立っているのは神では決してないのだ。この場合、僕がいる。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

で、どうなるんだ？ハンコックはアキラに問う。

僕は簡潔に答える。

「バーストウ、前監督官はココから出ていくってさ」

「は!?!」

「あー……この時代でも、それを予測していたVault—TECはこの世界に存在している、はず。そこに彼女は戻るって。戻って自分の優秀さをまた発揮し。次の未来の役に立てたい、とかなんとか」

「——狂気だな。ええ?」

僕はそれには答えず。ただ両腕を広げて「好きにしてくれ」とやっしておく。

正直、僕でもこんなことになるとは思ってもいなかったんだ——。

「ですが問題があります——」

キュリーの顔は青白く、そして表情も暗いままだった。

「バーストウ監督官の実験によって、今いる住人のほとんどが肉体にダメージをおいました。治療で回復を試みましたが——」

「ああ」

「数値が上がリません。考えられる方法は全て試しましたが」

無理です。助けられませんでした。

彼らは時間と共に徐々に体が弱っていき、ここで命を落とすだろう。

「最悪だな、え?」

「脳を高純度の放射能にさらしたり。体細胞の構造が攻撃を受けました。フェラル化の予兆もありませんから、グールにもならないでしょう」

「残された道は衰弱死、だね」

「はい……」

「死刑と変わらないってわけだ。胸糞悪いぜ」

3人は自然と険しい顔になる。覚悟はしていたことだが——バーストウを好きにさせてしまった僕の責任はやはり重い。

「そうなるよ、全滅か?」

ハンコックの問いにキュリーは首を横に振った。

「いえ、クリムという若者だけは大丈夫でしょう。不思議なことに彼だけは実験による変化は見られません。むしろ逆に誰よりも元気になっただけです、信じられない事ですが」

「そう不思議なこともないさ。俺のような不死の命を手に入れちゃう奴だっているのがこの世界だしな」

「そ、そうですね」

市長の笑いは今日はキレが良くないようだ。

「とにかく全滅は免れたが——そうなるとこのVaultを閉鎖してわけにもいかないかもな」

「ああ。ここに招かれたから来たのに追い出すのか。そう責められて騒ぎになる」

何度同じことを繰り返すというのか。

ガービーにまかせてスターライト・ドライブインを。

自分で手に入れてもコベナントを。

誰かに任せても、自分でなんとかしようとしても。良い結果にはならなかった経験を味わったというのに。

このVault88でもバーストウに任せ。まただ——”また”、失敗を繰り返してしまっている。

「アキラ、どうした?」「アキラ?」

「——大丈夫だよ。いや、そうでもないけど。落ち込んでるわけじゃない」

強がりもいいところだった。

「閉鎖は出来ない——じゃない、しない。でも仕切りなおさない」と

新しい未来の設計図は大小様々、いくつも必要。だから僕は作らないといけない。

Vault88という新しい設計図を——。

バーストウ監督官が突如、職を辞してこのVaultを去ると発表したが。住人達からの反応は皆無だった。

理由としてひとつは代理ではなく、正式な次の監督官としてアキラの就任も同時に発表されたことも関係があったかもしれないが。恐らくはすでに思考が濁り始め、悪化を続ける体調に苦しんで現実など、どうでもよくなっていたのかもしれない。

「私が皆さんをこのVault88に迎え。まだわずかな期間しか過

「ごしていませんが、それはとても濃密で豊かな結果を確かに残すことが出来ました。」

「それこそ人類のこれからの未来に必要なものであり。皆さんのこれからの生活で時々でも思い出してほしい事なのです。素晴らしい、誇るべき栄誉は間違いなく自分にあるのだ、と。このVaultは誕生からわずかの間で築いて見せたのだ、と」

「バーストウ監督官は自分の最後の仕事として館内放送で皆にメッセージを残したのだそうだ。」

スピーチの締めとして彼女は新たな監督官に挨拶してもらおうと言って締めくくる。前任者からの贈り物として彼女が用意した監督官用の、Vault 88の特別なスーツを僕に直接手渡ししながら。

「気持ち悪かったけど、それをひきつった笑顔でいやいや受け取る。最後の花道の演出だ、これくらいなら乗り越えるのも簡単だ。」

「そんなアキラの背後でハンコックとキュリーは必死に笑いをこらえていた。」

「採石場まで上がってくる。」

「いよいよお別れの時間がきた。バーストウは監督官を辞めて今、ここから旅立とうとしている。見送るのは後を継ぐアキラとハンコック。」

「太陽は輝き、採石場はいつものように静かだった。」

「バーストウにとって200年ぶりの太陽であったはずだったが、彼女はまぶしそうにそれを一度だけ。ただ仰いだけで特に何か思うことはないようだ。きっとこれからの自分の未来の物語に集中しているのだろう。」

「それじゃ、見送りはここまででいいわ」

「……バーストウ。あえて聞くけど」

「なに？」

「もしかしたらVault—TECはもうないのかもしれない。この世界は見てわかる通り破壊されつくしてしまっている。だから——」  
「ふふふ、大丈夫よ。あなたたちには考えられないことかもしれないけれど、Vault—TECはそれほど悪いものではないの。心配

は無用よ」

「そうかい——これからどこにいくんだ？」

「いくつか当てはあるわ。そこに次の人類の未来が待ってる、私はそこに戻るのよ」

「そう。それじゃ気を付けて」

ええ、バーストウは返事をかえすとアキラたちに向かって片手を差し出す。

アキラはそれを見てすこしはにかむような表情を見せると、手のひらの汚れをぬぐい取るようにズボンで拭う——ついでにそこに吊るしてあったハンドガンに見えるまで切り詰めたダブルバレル・シヨツトガンを抜く。

B A N B A N G !!

銃口が火を噴き、轟音が静かだった採石場に鳴り響く。

グールとはいえ女性の、バーストウのきやしやな体は2発の散弾による直撃に耐えられるはずもなかった。

手が、足が。

引き裂いて内臓をはみ出す体、ぎこちない別れの笑顔を浮かべたままの頭。

飛び散るようにして採石場にある放射能に汚染された貯め水の中へボトボトと落ちていった。

さらに沈んでいく水の底では、採石場を以前は占拠していたグールのレイダー達が。

腐れることのないこの新しい仲間を快く迎えてくれるだろう。

「おい、アキラ。殺しはナシ、そう俺には言ってたろ？」

「うん」

「俺が殺しちやだめだなんて——」

「だってハンコック市長？一応は休暇中なんだし、僕の代わりに仕事しろって。ねえ」

「どうしてだ？かまわないだろ？それよりなぜお前は撃った？」

「ん？まずかったかな」

「そうじゃない。俺がやってもよかっただろ!？」

「——そうかもね」

そういうと僕は空になった小さなショットガンをハンコックの手に握らせた。

「こいつでどうしろっていうんだ。おい！弾は!？」

不満そうなハンコックの声を背中に受けながら僕は地下へ——  
a u l t 8 8 へと戻っていく。

新監督官としてやるべきことは多くあった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

ビル・ロックリーは目を覚ました。

すぐに周囲を確認しようとする。体は——拘束されている。地面に横になって手足の自由は奪われた。

場所はどこにいる？どこかの倉庫？さびついた鋼鉄の壁、それしかわからない。

耳をすます。周囲に人の気配はない——と思ったら、いきなり誰かに蹴られた。捕まえた奴らに目が覚めていたことを気付かれていたのだ。

苦痛にあえぎつつ、仰向けに転がされる。

恐ろしいことにあそこで出会った男女のシユラウドが自分を見下ろしていた。

「な、なあ。あんたら、少し話をしないか？」

「いいだろう」

「キヤップを払うよ。助けてくれるなら言い値で払うよ、本当だ」

「間違えるなビル・ロックリー。お前が話すのはそれじゃない」

「なに？」

「マーク・スペクター、オーリア・サタケ。お前と共にメールマンから逃走した仲間の居場所」

「——いきなり仲間を売って？最高だな」

軽いジョークを飛ばすとそれだけで黒装飾の手に3段特殊警棒が握られ、低い電気のはぜさせるのを見せた。



2発で意識を刈り取られた恐怖が思い起こされ。ビルの体が痛みを思い出し、恐怖に震えた。

「なんでこんなことを？」

「……」

「いや、わかってる。本当はわかっているんだ。將軍だろ？ああ、あの人には悪い事をしたと思ってる。俺は、俺達は逃げた。俺達みんなが負け犬だったんだ、きつとあの人は失望したはずさ」

「お前が捨てた恩恵は誰にでも与えられるものではなかった。お前たちが盗み、身にまとっている衣は正義を背負うものにだけ許されたものだ。」

それを汚したお前たちの罪は大きい。逃がすわけにはいかない」

「ああ、ああ！わかってるよ。わかったって」

「仲間はどこにいる？」

ビルは必死に頭を動かした。

こいつらに買収は無理だ。このまま仲間を守ろうとしても殺される。

なら、なら——選択肢はわずかだ。

みつともなくもシクシクとビルはもがきながらロツクリーは泣き始めた。

哀れを誘うその姿を冷たく見おろすシユラウドたちに、慈悲を乞うように自分の未来を彼らに聞く。

「俺、俺はどうなるんだ？」

「正義に背を向けた貴様らに、再び正義と向き合うチャンスを与える」

「ど、どうということだ？」

「正義を汚した貴様の罪を“天秤”が計る」

「て、“天秤”って？」

もつと詳しく情報を。

ビルはそう望んだが、それは許されなかった。

電流を帯びた警棒はまたも何度も振り上げられ、そのたびに仲間の事を繰り返し聞かれた。

苦痛に耐えられず。ビルは意識を失う前に彼らの望むすべてを吐

き出した。

## ガラム I

——なんてことだ!?

それは悲鳴、絶望、失望も混ざっている。

ガービーはひとり部屋の中で唸り声をあげるが、それも大きなものとなって外にいる人々に聞かれないように。必死に押し殺そうとして——それがかなわない感情があふれ出てしまっている。

レオが——將軍から指定された合流日は一昨日の夕暮れであった。しかしガービーは動いていない。オーバーランド駅の居住地から一歩も外に出ていない。

いや、それどころか。彼が率いて將軍の元に駆けつける予定の兵士たちすらそこにはいない。

——最悪だ。なんてことだ!

反芻される言葉は同じであっても、嘆く題材は違っている。これがさらに悲惨さを浮き彫りにしているのだ。

そもそも調査に送り出した精兵達と入れ替わりに、旧ミニッツメンと新兵の混合部隊を東部に派遣することはずっと以前から決まっていたことだった。そのための準備は進めていたし、多少は遅れている部分もあったが。スケジュールに変更が必要なほどのことはなにもなかった。

ところが、である。

突然のことアトム教の信徒たちの攻撃にさらされると、すべての予定が信じられないことに止まってしまったのだ。

將軍は的確に動いているのは理解している。

レオは暗殺者、そして襲撃者たちに対処すべく直ちに一軍を差し向けることを決定した。そこには当然、彼も加わってくれる。

万が一の場合を考え、メールマンの訓練生からも数名連れていくというし。あとはミニッツメンが動けば戦いを始められる。

なのに兵士が集まらない。

この騒ぎを聞いたのか、いきなり連絡を絶つてしまう旧ミニッツメン。事態の変化に対応するためには、今の任務から離れられないと主

張を始める新兵たち。

民兵であるが故、軍に必要な鉄壁の軍律と志願制が発揮されてしま  
い。予定を前倒しにしたいのにそれをさせてくれなくしているのだ。  
それでもガービーは約束の日までは、最悪の場合は自分の体ひとつ  
でも將軍の元に駆けつけようか。そう悩んではいた。

しかしそれはあのロニーが……老練の兵士に「まさか自分ひとりだ  
けでも、とか考えてるんじゃないだろうね？」と見抜かれてしまい。  
尻の青い若造のように「組織のメンツ」について説教されてしまつて  
は、それを無視することも出来なくなってしまった。

仮に自分がここからひとりで飛び出してしまうと、残された兵士達  
は何事かと驚き。そこにロニーがなにか余計なことをするのは明ら  
かだ。

仮にアトム教との戦いが終わったとしても。將軍と共にここへ  
戻ってきてても、兵士達が私を見る目は変わっていないという保証はな  
いし。「指揮官としてお前は手綱を緩めた」と指摘されても反論は出  
来ない。

伝説の男は今は組織を運営する立場にあるのだ。

やるべきことを当然のようには出来ない、そう自ら諦めてはいけな  
いのだ。

ガービーは廊下を素通りしようとする若い兵士の気配を察知する。  
すると平常心を瞬時に着飾り、声をかける。どこからも新しい情報も  
報告もない、それを確認すると立ち去ることを許可する。

兵士が立ち去ると、ガービーは感情的な面を取り戻し。腰抜けの上  
に風見鶏なかつての仲間たちと、経験もなくせに頭でつかちなだけ  
の勘違いした新兵への怒りに必死に耐えなくてはならなかった。

やるべきことが今は別にあるのだ。それも至急に！

なのに彼らはそれを理解してくれない。今、將軍や自分に兵士達が  
必要なのだ。ミニッツメンという兵士が！

ためいきをつくことで一旦は冷静になろうとすると、ひとりの若者  
の顔が思い浮かんだ。

——アキラ

あの若者は新しいミニッツメンには古い血は必要ないと冷徹に断言していた。

自らの存在意義すら忘れて滅び去ったものなのだと、彼は平然と私に言い放つて見せた。その言葉に冷静ではいられなくなりそうだった俺をレオはなだめ、こちらの言い分を指示してくれた。あれは本当に感謝している。

それなのに!!

恐らくこのままだと將軍はスロッグで足止めされているはずだ。さらに数日無駄に過ぎれば、將軍として新しいなにかの指示が送られてくるだろう。そうなったらもう、隠すことは出来ない。

こつちが率いる兵士が集まらないと知ればレオは恐らくひとりでもアトム教に対処しようとしてしまうはず。そうなれば――。

再びうめき声をあげ、己の無力さに絶望するガービー。

すると都合のいいことにあの若者の事を再び思い出す――そう、アキラだ。

彼はずっと自分もそうだが、なによりレオを仲間として助けようと動いていたはずだ。今回も居住地の崩壊を防いで動いてくれたというし。その後の彼が何をやっているのか自分は知らないが、ミニッツメンを。レオを助けてはくれるのではないだろうか？

「都合がいい事だな、まったく俺って奴は」

物憂げなガービーは己に皮肉な笑みを向ける。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

そこはボストンの中心から北に数十キロ。町の名前はリンと呼ばれていた。

独立戦争の時分は皮革産業でおおいに栄えた伝統ある町であったが。いつしか工業地帯ゆえの治安の悪さから『罪の街』というありがたくない名前を頂戴し。

世界が壊れた後はレイダー、傭兵、スーパーミュージタント、そしてアポミネーション。どこでもそうであったように、ここでも長く激し

い戦いが続いた。立ち並ぶ建物は焼かれ、工場も崩され——気が付くと全てを跡形もなく消し去ってしまった。

連邦をつらぬく大通りだけは何とか残り、残骸はわずかで、地面をゴミが埋め尽くす丘だけが残されている。

きつとかつて栄えた町の名前が記憶から消えるのもそう遠くない事なのかもしれない。

崩れかかった道路の脇に残された標識が、過去の記憶を未来に伝えようとなんとか今は主張している——。

そんな廃墟ですらなくなったゴミの丘の上に、怪人たちが集結しようとしていた。

“小さな宝物”、そう呼ばれる組織の危険なエージェントたち。

観測者、サカモト、キジマ——そして大男のクロダ。

あのキンジョウをのぞく全員が、頂上で円を描くように立ち向かい合う。

「この集まりは俺が呼んだ。お前たちは呼びかけに答えた、まずそれを感謝しよう」

クロダ——。

彼ら“家族”の中ではもつとも体格に優れ。カaramel色の肌と堀の深い顔立ちは、彼が兼と斧の時代であれば英雄と呼ばれる戦士であつただろうと感じさせる恐怖を抱かせる。

キジマと同じく自ら手を下すことを好む彼だが、決してただの殺し屋で終わる人物ではない。彼もやはり“家族”の、“兄弟”たちと同じ化け物の類なのだ。

しかし常に無口を好むこの男は、今日に限っては雄弁に語っていた。

「あの部屋では全く話が進まない。時間は無駄にされすぎている。これ以上、あの茶番は続けられない」

「……」

「だからここにお前たちを集めた」

「いいでしょう、クロダ。あなたのいうようにそろそろヒステリーで

話が進まない会議というものにウンザリしていた。たまには普通もやっておくべきでしょう」

キジマも観測者も無言であったが、サカモトがそう口にするるとそれは合意されたという事になるらしい。

「まず——コンドウは死んだ」

「ええ」「ああ」

「俺達は気にしなくてはならない。俺達は弱くなっている。組織は、破滅に向かおうとしている。このままではダメだ」

「強引な意見だ。しかし、同意してもいい」

無機質な観測者の同意には感情を読ませてくれない。だがクロダは構わず話を進める。

「俺は考えた。お前たちも考えている。答えるにはもう十分な時間もあつただろう」

「……」

「俺の答えを聞け。俺は——アキラを殺す」

『なっ!?!』

それは驚きというより、出された名前の含む問題から飛び出した全員の声だった。

しかしクロダはそれを気にしないようだった。

「奴は敵だ。ミニッツメンの将軍、奴は“アキラの資産”だ。コンドウは倒された、奴からの攻撃といていい。次は俺が奴らを処分する」

衝撃はまだ収まっていないが、クロダはそこまで一気に宣言する。

——ダメです

否定の声が聞こえた。

「なに？誰だ？」

眉を不愉快な感情を示す位置に動かしながらクロダは問う。彼の意見を否定し、前に立ちふさがったのは——。

「駄目です。それだけはいけません」

「なぜだ？奴は敵だぞ、サカモト」

「その考え方はいけない。アキラを敵にしてはいけない」

「納得できない。お前は何を言っている?」

背中を曲げ、両手を背後で組むサカモトの表情は苦悶に満ちていた。

「納得しないという事は、考えを変えるつもりはないということですね?」

「当然だ。俺はすべきことを理解している。先程の言葉は宣言でもある。俺は行動する、オカシイのは貴様だ」

「いえ、間違っているはあなたのほうです。ですが——説明しないとダメなんでしょうね?」

「繰り返すが、皆をここに集めたのは俺だが。その終わりが意見の一致でなかったとしても俺はまったく構わない」

サカモトは首を振る。

「わかりました——ではあまりやったことはありませんが。ここは全員、意見の一致となるように情報を共有しましょうか」

「必要な事か?」

「恐らく」

「俺の考えは変わらないだろうし、約束できることはない。だがまだ話し合いは終わっていないというなら続けてもいい」

やってみたらいい、無駄だろうが。クロダはそう言っていた。

サカモトはため息をつく。

「わかりました。それでは……やってみますかね」

この男なら互いに出した真逆の答えを統一することが出来るというのか?



「スロッグか……いいところじゃないか」

ひとり、スロッグを見下ろせる旧道まで来た私の感想。

サンクチュアリを出発してから3日。予定の半分というを時間とスピードでここまでやってこることが出来た。

だが——私はここから先にはいけない。



ガービーに知らせた合流日からすでに3日が過ぎていた。

嫌な予感はしていたのだ。

連邦の頭部にいるというアトム教が、いきなり襲撃だの暗殺だの騒ぎを起こし。こちらはそれを見逃すことは出来なくなってしまうた。

すぐになんらかの報復攻撃をしなくてはならないが——ガービーはまだ前線に出てきていない。

町を出てスロッグまでの強行軍をやっているうちは気分もしつかりとして、目的もゆるぎないものであったはずだが。

こうして身動きも取れず。不信、不安、恐怖にとりつかれるようになる——改めて自分の不安定さを自覚してしまうのだ。

原因は——わかつてる。自分のまいた種なのだ。

ミニッツメンを復活させた時、アキラは可能な限り組織から距離をとろうと言ってきたが。私は自分の経験とガービーの熱い想いに感じるものがあり、彼に力を貸そうと決めた。

それが私を痛めつけ、正気をギリギリのところまで保たせてしまっている。

ミニッツメンの將軍など引き受けていなければ、自分は今頃B・O・S・のマクソンの下に自分を預けていたと考えてもおかしくない。

あそこはかつて自分が所属した組織の匂いが強く残っている場所だ。国への失望だけでは、もしかしたら自分は軍に背中を向けたりはしなかった。家族がいて、彼らのために良い未来が必要だと考えたから出ていくしかなかった。

その妻も息子も、今はいない——。

アキラと同じ、何の考えもなくこの連邦に投げ出され。若者と違って自分は軍での楽しくない戦闘経験と知識のおかげでなんとなくここまでやってこれたものの。それら行為の結果として、負債を抱え込むように危険が周りに迫ってきていた。

連日のポストンでの暗殺騒ぎが始まりだ。

命を狙われる立場となり、死がより身近に感じられてきた。それで

も弱さは見せられない。不安に揺れない。恐れを見せない。無理をしないように緊張する。

戦場に送り込まれたばかりの方かに怯える新兵のような気持ちだ。

居住地のグールたちはタールベリーや作物の成長に気を配り。お手製の屋台を出して、平和な日常を一生懸命やっているのがわかる。その近くではコズワースがカールと戯れて——恐らくそうだと思う——なにやら騒がしい。

かつては市民プールだったのか。建物の脇に、子供用の玩具がまだいくつか残っていた。グールたちに子供を育てる余裕も予定もないはずだが、聞くところによるとアキラがここを大改革しようとした際。全てを撤去することだけはしないでくれ、そうせがまれたらしい。

アキラは不服そうではあったが、私には少しわかる気がした。

もはや国は遠い過去のものとなっていく。なのに自分達はまだここにいて、人と呼べるものかどうかわからない。

新しい未来も必要かもしれないが、それ以上につながる過去も失うわけにはいかないのだろう——。

「ん？」

ふと、こちらに近づいてくる人影を見つけた。

パイパーだ。彼女は「ブルー、見つけた」と言いながらこちらに登つてこようとしている。どうやら彼女、この遠征の一部始終を記事にするという決意は変わらないらしい。

まるでこつちが逃げ出さないように見張っているつもりか、こうして静かにひとりで考える時間を許してくれない。

「記者さんは仕事熱心だね。でも、退屈だろう。ここで待っているだけだし」

「え？ああ……そんなのは今だけ、でしょ？」

「どうか——」

「ふう。だって、あー。ほら、スロッグだっけ？見てみなよ、ここに到着した時に比べたら落ち着いてるじゃない」

彼女のポジティブさには救われる。「ああ。まあ、それはそうだね」  
とうなづきつつ、到着直後のスロッグの事を思い出した。

カウンティー・クロッシングの襲撃の報を聞きつけ、近くのパト  
ロール。調査隊の残り。そういったミニッツメン達はこのスロッグ  
に集結したまま、何をしていいのかわからなくなってしまうていた。

そこに私が——将軍が到着。

怒りに燃えた彼らはさっそく私のところに来ると「すぐに出撃でき  
ます」と口々にやる気をアピールしてくる。

どうやら彼らの中ではいかれる将軍が現地で兵士達を徴発し、軍を  
率いてアトム教へ報復するものだと言われ、勝手に解釈したらしい。

私はガービーとの合流があることを伝え。彼らには元の任務へと  
戻るよう、またはさっさと帰還してしまえとここから立ち去らせた。

このスロッグは知つての通り、グールたちだけが住む居住地だ。

ミニッツメンの活動を指示してくれた彼らに報いるため。彼らが  
不愉快にならぬよう、ミニッツメンの中でグールと付き合えそうな兵  
士を選んでパトロールは組まれているし。調査隊にしてもここに長  
いなどして、うっかり住人とトラブルにならぬようガービーは気を付  
けているのだ。

それに探索部隊には出来る限り良い装備を持たせて送り出したと  
あって、被害こそ少なかったものの。

使用された装備のメンテナンスと、それを扱う事の出来る経験者は  
大切にしなければいけない。その意味で、私が彼らの意を汲んで——  
喜ばせて、軍に組み込むことをしなかったのは懸命だったと言える。

「遅れてるよね、ガービー」

「——ああ」

彼女も恐らくわかっている。

焦れている——このままでは、いけない。

この瞬間、スロッグで戯れていたコズワースとカールは互いになに  
がしかの変事を察し。同時に動きを止めて空を仰いでいた。

犬のカールは察していた、このスロッグを見下ろしている“相棒”

がいつになく感情的になって……それを必死に隠そうとしていることを。

犬に人の理ことわりの全ては理解できないが、抱えている感情については正確に知ることが出来る。

“相棒”は今。何かに焦り、怒り、屈辱を受け——様々な感情が入り混じるが。2つ、はつきりしている。悲しみと恐れ、それがさらに大きく強いモノへと育っていく。

どんな“殺し合い”にもそれほど感情を乱すことのない“相棒”だが。その悩みは一向に晴れる気配がない。それがカールには気になっている。

一方、機械のコズワースも回路を走る電気信号にノイズが混ざるのを感じていた。

アキラの手によって変化することを望んだ彼であったが。アキラの手で自らを新しくしていったことで、時折ではあるがこうして不思議なノイズを感知することが増えてきた。

今回のそれは例えるなら人間が口にする“不安”という感情に似たものだとコズワースは理解した。

たったひとつになった目を動かして自分の周りを。スロッグの様子を。なにより大切な主人の無事をまず確認する——不安はそのままだが危険を感じる兆候は、ないようだ。

(ああ、そうか。なるほど)

唐突にコズワースはノイズの正体を理解できてしまった。それはまさに天から答えが降ってきた、というやつだ。

どうしてかはわからないが、身近に同型のノイズの発生させる存在が近づいてきている。そうに違いはないと思った。

この連邦でこのノイズを持つ、自分と同型には心当たりがある。

コズワースの今の巨大な体。凶暴で、力強い4脚の本当の持ち主。自分がレオという偉大な主人の家族と愛されるように。奇妙な若者に愛されているロボット。あのエイダがなぜだかこのスロッグに近づいてきているらしい。

ロボットと犬はまるなにか意思を交わすことはなかったはずなのに、無言のまま自然にまつすぐレオとパイパーの元へと向かう。

それからしばらくして、スロッグに新しい奇妙な訪問者が姿を現した。

片方はコズワースが知っていたエイダ。

しかしもう片方の訪問者は——B. O. S. のパラディン。いつものように最新式のT-60パワーアーマーを着たダンスであった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

残骸の町の上で、晴天の下。本当ならば恐れられて当然の怪人たちによる曇った会議はサカモトによってまだ続けられていた。

彼は仲間たちに理解を求めるために。彼らにはふさわしくない、過去について語ろうとしていた——。

「我々には本来、こうした必要性は感じてはならないものです。特にこうして皆で、かつての出来事を振り返る。そんなこと」

——苦痛ですらある

もちろん声に出したりはしない。だが、それは全員がわかっている。

「情報を共有する前に、我々は全ての始まりから確認していくこと必要を提言します。これは大変な苦痛をもたらせることになりましたが——」

「昔話をするというのか？それが本当に必要か？」

「クロダ、断言します。その必要はありません。」

そもそも今、ここにいる中であなたと同じ意見を持つのはキジマとアナタだけです」

2人の男の視線が、防疫マスクを外すことのない観測者に鋭く向けられる。

そこにはねっとりとした不快さと怒りがあつたはずだが。表情も感情もみせないこの怪人はなお無言を貫いている。

「観測者は——いえ、正確に言いなおしましょう。」

コンドウも、私も、観測者も同じ結論に達していました。ある時点でそれを互いに確認もしています」

「俺達は仲間外れか？」

「その時はあなたたちにアキラを敵として対処する危険性はなかったから必要ないと判断した。実際にこれまで手は出そうなどと考えもしなかったでしょう？」

しかしコンドウが倒れたことで、巻き込まれたキジマ。結果から脅威の見直しをしてしまったクロダ。君たちはアキラとの対決に動くでしょうから、こうしてそれを正そうとしているわけです」

フン、という不快な鼻息も。場に漂う雰囲気にも気まずいものはいつてくるが。サカモトらはそれをどうでもいいことと気にするそぶりではなかった。

「これは物語なのです。そうなるのだという、理解するために必要な物語」

——それは我等小さな宝物の物語。



世界が壊れても、なお脅威の場所となりえた連邦にあつて。“小さな宝物”という異常は、しかし許される存在であり続けていた。

その誕生については——いや、そこまで戻ることはない。

今は必要のため、アキラという存在について理解するためだけの情報があればいい。

連邦には人々にとって災厄、脅威と呼べる存在がいくつか存在していた。

そのもつともすぐれたものがインステイチュート。かつての世界でも誇っていた知識の巨大な城は、揺るぐことなく存在し続ける知的な絶対的強者であり続けた。

インステイチュートは確かに特別だった。あのエンクレイヴと呼ばれていた強権的な純血主義者とは全く違う。

彼らの持つ好奇心は退廃を止められない人類の中にあつて素直に称賛と愛すべきものであつたし。

時に理解しがたい奇妙な執着を伴つた思考実験を、強引に進めるところも彼らの別の価値をしめすものとして評価に値した。

完璧ではありえなかつた“小さな宝物”は、このインスティチュートの共生を望むことにした。

とはいえ、互いに秘密を最上とする基本戦略をとっているせいで、お互いに同じ評価を与えるまでに関係を強めるには、多少どころではない努力と資産、時間も必要だつた。簡単な事ではなかつたが……ついに成し遂げた。

すると再び自分達の不完全さに身もだえつつも、以前よりもさらに落ち着いた時間が過ぎていく――。

ある日、巷に噂が流れた。

世界が壊れる時に封印された Vault。そこから世界へと歩き出した元 Vault 居住者の話。彼のやったこと、やろうとしていること。

愚か者達の住む町で配られていたその記事。

最初は大したことのない与太話と思つていたが、そうではないと気付かされる。彼は噂の中で、いつの間にか“彼ら”にかわつていたから。

ひとりではなくふたり。

しかしひとりと違い、もうひとりは陽炎のように。輝く片方の影のように動き、姿を見せることが滅多にない。

この時、すでに予感があつたと思う。

ただしそれはいつものように、正体を知ると感じる。虚しさと失望を伴つた期待としてであつたのだが――。

「彼はそこにいた。名前はアキラ。最後に戻らなかつた、我らの欠片」揺れるはずのない“小さな宝物”は困惑し、動揺から混乱して震える。

彼らはアキラを理解できなかつたからだ。なぜ Vault に？ど

うして我らのいるべき家に戻らない？

「そして——そう、我々は決定した。彼が自分で戻らないならば、こちらから迎えに行こうと。その頃にはもう準備はできていた。

我々の資産のひとつから網は作られた。

危険なボストンコモンの中で、奇妙なグールがボスのいるグッドネイバー。

その支配者のそばで。その支配者へ許すことのない憎悪を抱えてかしく女、ファールレンハイトによって」

善悪定かではないあの町の事実上、ナンバー2だったファールレンハイトもまた。この“小さな宝物”らの資産のひとつであったのだ。女の情報から“小さな宝物”はアキラを確認し、観察が始まる。

ファールレンハイトも“その時”がくれば彼らに手を貸す予定にはなっていた。その時は、まだ。

ここまでのサカモトの言葉はしかし仲間たちの興味的一切を引くものではなかった。それは過去を振り返る、ただの思い出話にすぎない。サカモトが先程仲間に約束をしたのは、自分達と「アキラについて情報を共有する」こと。

それはまだなされていない。

だから彼らはただ沈黙し、その時を待つことにする。まだ沈黙することに耐えることが出来る。

「さて、ここからがいよいよ……ですが、準備は？」

「聞くな。早く進めろ」

「ふむ——ここで登場するのは、我らの偉大なる観測者です。ええ、残念ながらコンドウではありません。私でも、ない」

クロダのキジマが再び鋭い目をやる。

サカモトの口にした物語は、時間軸なら数カ月前ということになる。つまりそこから2人には知りえない情報の格差が既に存在していたという事になるわけで——。

「アキラがファールレンハイトと対決し、暴走を始めました。

残念ながら当時、そのことを特に重要視していたのはキンジョウと観測者だけ。そして残念ですがそのことが——最後の好機を見逃し



ていたのだと理解しなくてはならないのです」

「順をおって説明しろ、サカモト。いきなり話が滅茶苦茶だ」

「そう、まさにその通りなのです！あれはすべて滅茶苦茶だった、なのに我々は軽く考えすぎていたのです。」

キンジョウと違い観測者は実務での実績のある追跡者です。それがあの傷ついたアキラに逃げられる——手負いの彼を包囲しておいて、なおおくれを取るといふ結果がありえなかった」

まだ支配の抜けきらぬ中、混乱とボツビへの怒りに支配され突き動かされていたアキラは捕食者の思考のまま動いていた。

それゆえ、ハンターとして追跡者は容易にキンジョウを連れて彼を取り囲むところまで追い詰めることが出来た——。

クロダは「だが」とまだ横目で観測者をにらみつつ「結果は失敗した。アキラの捕獲はできなかった」と続ける。

報告では空の彼方から「なにか」が獲物を連れ去ってしまったというものだった。それだつてどうでもいいことだと考えられていた。

サカモトはクロダの指摘した答えに深いため息をつく。

「ふうー……そう。確保に失敗した。当時の我々は2人がひどいミスをしたのだと思っていた。ですが——逆なのです、我々全員がミスをした。程度で言えば2人以外はさらにひどいミスをしているという」

「そんな予兆はどこにもなかった。情報もない。勘違いだら？」

「ですが危険は残っていた。我々が何かの間違いだと思つて観察を続けていたあのアキラが。もしかしたら——もしかしたら“本物のアキラ”ではなかったかという可能性。それを気にしなかった」

「まあ、な。キンジョウのオモチャだったんだ。逃げたからどうだというんだ——だがそれが俺たち全員のミス？」

「ええ、そうです。あのアキラはおそらくは本物です。我々が迎える最後の家族になるはずだった本人。」

我らの組織を完璧にさらに近づけ、輝ける未来への道を共に切り開く役目を持つ約束の人。我々は彼を失つていたので

このサカモトの言葉は思いがけない効果があった。

その場の空気が一気に氷点下まで低下し、凍らせる。クロダとキジ

マは顔を真っ青にさせ、すぐに顔を紅潮させ。見てわかるくらいに体が震えだす。彼らにしては珍しい恐怖という感情が、彼らの中に嵐をおこす。

サカモトも観測者もそれを見て見ぬふりをし、話を進めていく。

「致命的なミスでした——あれさえなければ、あのコンドウも”焦り”からさらにミスを重ね。あろうことかただの人間を相手に命を落とすなどという最悪な状況にはならなかったはず」

「サカモト、ちよつと待て。お前はコンドウは焦っていたというのが。どういう意味だ？」

まだ激しく動揺しているのにもかかわらず。自分もかかわった一件から声を上げるキジマに、サカモトは初めて憐憫の情を称えた目をこの兄弟に向ける。

「ああ、君はやはりわからなかったんだね。なぜ、コンドウが君と組んでミニッツメンの將軍を暗殺しようとしたのかを」

「なんだと!？」

「話に戻りましょう——それからしばらくしてからになります。」

そこにいる観測者、そして私とコンドウはひとつの情報を手に入れます。すでに脱出を果たしたアキラは連邦に戻っていて、それはもはや特に重要な意味を持つとは思えなかった……だが最終的には無視もできなかつた」

「今度はなんだ？」

「ただの予感です、私はね。おそらくコンドウは不安から——そしてそこにいる観測者は確信が。」

その情報を自分の目で直接確認しに行くことになります」

そこはダイヤモンドシティ、そしてガンナーの一味が仕事場にしていたハードウェアタウン。

不自然に上階までのルートが補修された建物の荒れ果てたロビーで。コンドウとサカモト、観測者は偶然ではない出会いを演じた。

「直接来たか」

「あなたも、コンドウ。そして観測者よ」

「……」

すでにわかっていたことなのでそれ以上のセリフは必要なく。3人は並んで上階にある名札のない扉の前に立つ。

ガチャガチャとドアノブをひねり、鍵のかかっているのを確認する。

「観測者、頼むぞ」

「すぐに終わる」

短い返答のあと、ドアの前にマスク姿の観測者が立つ。

昼間でも真つ暗な廊下ではただ数十秒ほどたっているだけであったが、観測者は口を開く。

「……中に入り口に向けて仕掛けがある、ドアの裏。レーザーが発射されるようになってる」

「ふん」

「いいぞ。もう大丈夫だ」

そう答えると素早くコンドウが前に入り、扉の鍵をあつさりと解除した。

「レーザーショットガンですか——おやおや、フルオートですよ！過激だ」

「狙いをつけずにこちらを一気に殺そうとしたのだろうよ」

これの存在を知らなければ、鍵を開くと同時に扉を破壊してくるレーザーの嵐に3人はさらされたはず。動きの取りにくい窮屈な廊下では、完全によけきえることは困難であったに違いない。

サカモトは自分達に向けられていたレーザーガンを罫から手に取ると、あつさりとフュージョンパックをそこから抜きとる。

——さて、と。

部屋の中へと入っていく3人だったが、そこで目にしたものを理解するのに1秒。すぐに全員が真つ青になり、空気が変わった。

壁に連邦の地図が張られ、そこには何かがびっしり書き込まれているし。写真やレポートなどもクリップされていた。そしてその目的とするものは——。

「アキラの誘拐ルート、だと?」

コンドウは呻くように声を上げる。

その部屋はあのファーレンハイトが用意したセーフハウスのひとつ……もともとはただそれだけの情報でしかなかった。

だが、本人が死亡した後。ファーレンハイトの自室などからアキラへの執着心を感じさせる資料が残されていたという情報が彼らの耳に届いたことが、この日の集合を実現させていた。

「——間違いない」

「観測者？」

「これは我らがアキラを捕獲し。我々の元へと輸送したルート」

そう言いながらマスクの怪人は地図の一点を指す、コベナントだ。

アキラが逃走後、いきなりレイダーのように容赦なく焼き払った居住地。

ボツビと同じように、ファーレンハイトもまた死亡すると“小さな宝物”は資産として価値のなくなった彼女から自分達の情報を守った。

実はハンコックが片付けさせた故人の私物は、前もってサカモトらが動いて情報を改ざんしたものとすり替えておいたものだった。記載された文面は書き換えられ、惹かれた線は歪めて違うルートに入っていく。完全な偽情報。

とはいえ誘拐された若者を追いつつ、理解できない理由から対決を選んだ女。どういふつもりでこんなものを残しているのか理解できない、てつきり終わったことだとばかり考えていたというのに。

「なるほど。あの情報は正しかったか」

「——ええ」

「ハンコックは相棒の残した——俺達の偽情報をアキラには伝えていない。信じられなかったが、それは事実だった」

「ですね。これは最悪」

追手から逃れて以降、アキラの行動には迷いがなく。かつ暴力性を増し、自分の行動や考えを読まれることを嫌うようなそぶりが多くなった。

それをたんに誘拐されたという経験からくるトラウマだと。“小

「小さな宝物」の面々は勝手にそう考えていた。

「だからこそ不気味だった。」

「なぜコベナントを!？」

支配から逃れたとはいえ、彼の記憶はキンジョウが手を入れたことで混乱はひどくなり、むしろ新たな生み出された妄想に苦しんだとしてもおかしくなかったはずだ。それがなぜ、はつきりと「小さな宝物」の存在を確信し、敵対しようとしてくる？

「答えはひとつ。」

「ファールンハイト。あの女、なんてことをしてくれたんだ。この情報をアキラが見たとすれば全てが一目瞭然です」

「アキラは俺達を敵と認識しないわけがないな。なるほど、坑道に迷いが無いわけだ」

「……」

「だが彼がこれを見たという確証はない」

言いながらコンドウは苛立たし気に壁に貼られたそれに手をかけ、破り捨てようとしたがサカモトが声をかけて制止する。

「ちよつと待って!」

「——なんだっ!？」

「それはそのままにしてください」

「冗談だろ?」

「本気です。理由は扉の前にあった罠です」

「なに?」

「オートマチックのレーザーショットガン。仕掛けはセルを撃ち尽くすまでトリガーを抑えることができた」

「?」

「ファールンハイトは確かに危険な女ではありません。ですが彼女はこの部屋を訪れる誰かに——これほど凶悪な装置を用意する理由があるでしょうかね?」

「——殺意が高すぎる」

コンドウは2人の言わんとすることを理解し、ハツとした顔に代わる。

部屋も罾もファーレンハイトが用意したもの。しかしあのレーザーガンは――。

「アキラはすでにここに来たことがある、と?」

「キンジョウが半狂乱になる理由もこれで説明が付きます。彼の“実験”を受けて不安定になるはずなのに、そんな様子を今のアキラは全く見せない。キンジョウにしてみれば、自分の技術が半端なものだと言われているようで気が狂いそうになってる」

「奴のプライドなど構うものか!これはそんな――」

観測者が割って入ってくる。

「そうだ、最悪だ。アキラは敵対した。我々は分断され、組織が2つに別れたことになる」

彼らの未来が急激に暗いものとなっていくのを感じる。

「すでに彼の手は大きくのばされ。連邦の北部に広がっていこうとしています」

「ミニッツメンを利用し。ダイヤモンドシティにロボットたちを配置した。グッドネイバーのハンコックも味方になっている。ボストンのレイダーもスーパームィュータントも。彼の資産――と思われるミニッツメンの将軍となった男に倒されていたな」

「その男、B. O. Sに接触してナイトの称号を与えられたとの情報もありましたよ」

「俺達ではない俺達が――俺達の未来に敵として襲ってくるというのか」

「……」

これまで新しいミニッツメンへの評価は決して高いものではなかった。

あのアキラが立ち上げに加わったという噂があっても、彼らのような夢想と理想を都合よく使い分ける武装組織などたかが知れている。だがそれからずっと狂ったように成長を辞めない理由は――これで説明はつく。

あの“アキラ”は攻撃の機会を狙って牙を研ぎ続けているに違いないのだ。

廃墟の丘に流れる空気は重苦しく、暗いものとなっていたが。クロダとキジマはようやく落ち着きを取り戻してきていた。

「お前達はアキラが敵となったことを理解していた。それはわかった」

「はい」

「だがなぜそれを黙っていた？お前だけじゃない、観測者も。コンドウもそうだ。情報の秘匿は組織の方針を混乱させた、裏切りも同然だ」

「——我々が黙っていたことにも理由はありません。

今あなたはアキラを敵と言った。恐らくキジマも同じことを考えているのでしよう。それは理解します」

「だからなんだ？」

「いいですか？もう一度だけでも考えてください。

我々全員がアキラを必要としています、これは大前提なのです。彼がいれば、この先に我々の未来は安泰であつたはずなのです。

彼も我々が必要なはずです。しかしご存知のように彼は記憶がない。彼は自分が何を必要としているのかを忘れてしまっている。それが彼を混乱させ、おかしなことになっている」

「だからこそ次の目標が必要だ。間違いを正すためにな」

「それも正しい。

しかしその方法は？アキラを敵にする？彼と戦う？

それで我らに何が手に入ります？なにもない、ゼロです。未来もなくなる、我々はずっと不完全のまま。かつてのこの世界と同じように、崩壊の訪れを恐れるだけの日々だけが始まるのです」

「……ではどうしろと？」

「アキラを、彼を取り戻すのです。再び彼を迎えなくてはならない」  
「ハッ、馬鹿げてる！」

キジマは両手を広げて馬鹿にする。だがサカモトは辛抱強く説明を続けた。

「我々の判断ミスが、より任務を困難なものとしています。それはわ

かっている。

だからこそ——君たちにこれ以上難しいものにされては困るので  
す。ここで情報を共有を申し出たのはそのためです」

「あの廃棄物は俺達を怒っているんだぞ？憎んでもいる、戻ってくる  
わけがない」

「いいえ」

「自信があるようだな」

「もちろんです。我々3人は方針を決めた後、答えを出しました。ア  
キラを帰還させる方法を」

「そんな都合の良いものがあるといいがな」

「正直に言いますとすでに答えは君達もわかっています。今は——理  
解したくないだけで」

2人は困惑の表情を見せ、サカモトは答えを伝えた。

「鍵はフランク・J・パターソン Jr、あのミニッツメンの將軍。彼  
を排除するだけでいい」

「わからないな。たったそれだけのことか？」

「そうです。たったそれだけのことが出来ず、コンドウは死んだので  
す」

「……!？」

「だからクロダ。君の計画は今すぐ停止してください」

「——なんのことだ？」

「とぼけては困ります。例のアトム教によるミニッツメン襲撃事件。  
あれは君が計っていることですね？」

クロダは表情を変えなかった。

それでもしばらくは沈黙し、それから小さく「そうだ」とだけ答え  
て見せた。

~~~~~

バンカーヒルのケスラーはそばに人の気配を感じ、食後の昼寝を中
断する。

最近は連邦がまた騒がしくなったせいで、平和であつてほしいバンカーヒルも気の抜けない毎日を過ごす羽目になっている。

(またトラブル?)

バンカーヒルが今の平和があるのはこのケスラーがトラブルに对処しているからだが、そのおかげで彼女は自分のキャップを——商売をあきらめなくてはならなかった。

ここにかつてあつたバンカーヒルの商いは未来に残さなくてはならない。

使命感は強く、だからこそ時に破滅的な交渉に思えても飛び込んでいける。それが正解などと考えたくないが、それで今がある。皆もケスラーのやり方を信じる理由がそれだ。

「——かわいい寝顔だ、ケスラー」

「ああ、嘘でしょ。これは悪夢よね? ジョーの店で作らせたテイトサラダ、腐つてた?」

「ジョー・サボデイ? ならどうだろうな、奴にも言い分があるんじゃないか?」

「それでもこれは最悪だよ。ジョン・ハンコック」

ケスラーの寝言のそばにある椅子に、あろうことかあのグッドネイバーの市長本人がどうやってか座つて横になるケスラーをもらしている。

見上げてでもグールの顔に面白味は感じないが。あの目は間違いなくこれが本人だとわからせてくる。

「なんだ、ここはいつから客を選ぶようになったんだ?」

「ええ、そうよ。バンカーヒルに入ってくるジャンキーはトラブルの元。入り込んだとわかったら、ぶっ飛ぶ前に追い出してやるの」

「そうか」

上体をおこし、もう一度だけ確認する。やっぱり本人、悪夢じゃない悪夢。

「どこから入った? 誰もアンタが来たとは知らせてこなかったんだけど」

「俺は慎重深い男なんだぞ? そんな大っぴらに正門をくぐったらお前

の迷惑になると思ったから静かに入ってきたんだ」

「秘密の入り口から入った？どこか聞かせてくれるわよね？潰さない」と

グッドネイバーの話は聞いている。

ナンバー2が倒れ、市長はなにをトチ狂ったのか休暇とかなんとか言って消えた。

つまり今のグッドネイバーは隙だらけのはずだが——レイダーも、スーパーミュータントも手を出していない。そんな異常事態。

そこでこのグールがバンカーヒルに現れた、などと噂になればどうなる？

考えられるトラブルの数は想像力の翼をはためかせると、どこまでも増殖していきそうだ。

「そいつは俺がここから立ち去った後にしてもらおうか」

「ハンコック！なんでここにいるんだよ」

「それはもちろんケスラー。お前とちよつとした世間話があったくな」

世間話？そりやいや。

コーヒーを沸かし、匂いを楽しみ。甘いケーキを用意して優雅にお茶の時間にしようってわけだ。

できるわけがない！

「何を馬鹿なこと。ここで聞ける情報なんてグッドネイバーでも仕入れるでしょ。なんで——」

「そうか。ならちよつと酒場で俺のジェットの楽しさを宣伝しながら酒を楽しむ人々の声に耳を澄ませに行こうかな」

「おいっ！」

「お前が相手してくれたなら、すぐに出ていくさ。俺も暇じゃない」

「へえ、休暇中なの？」

「そうだ。一生懸命休暇を満喫してる」

まともな会話をした方がいい気がする。この男はよくわからないというのが本音だ。

「なに？なんでも聞いて」

「世間話。情報を買いに来たわけじゃない」

「似たような——いいわ、それじゃ好きにやってよ」

相手の調子に合わせないと、このままでは終わりそうにない。

「で、休暇ってどこでなにしてんのさ？」

「うん——とりあえずヌカ・ワールドを見て来たな」

「は？」

「レイダー共が楽しそうにいがみ合ってた。まさに奴らの天国だったぞ」

「それって——例の噂だった奴だろ！本当にあったってあんたはいうのかい!？」

「面白いだろ？」

「やっぱあんたは疫病神だよね！そんな大変なことを——」

そこまで言ってケスラーは黙る。

そして「畜生」と呟いた。

「わざと聞かせたね？どういうつもり？」

「俺は別に。何も」

「嘘だよ……警告しようとしたんじゃない。だよね？」

連邦の外と行き来している商人に黙ってろってこと。そのレイダー連中に気づかせないために」

「俺は何も言っていない、ケスラー」

「ああ。ええ、でしょうよ。クソみたいな話を持ってきてくれたんだね。感謝する」

バンカーヒルを守るため、ケスラーは話が出る相手にはキャップと物資と引き換えにしている。

彼女の基準で言えば、連邦の外と中で商売する同業者は——他人だ。それがこのバンカーヒルでも取引していたとしても、だ。

それでもハンコックの口から聞かなければ。この情報を彼らの耳に囁くこともあったかもしれない。

だがもうそんな可能性は消えた。

「レイダーの味方をする？主義を変えたの、市長さん」

「——しばらくの間だけだ。我慢できるだろ？」

「なるほど、その期間の間だけは、あんたは私にも哀れな連中に罪悪感を感じていろつてわけね。嬉しくないお裾分け、感謝するよ」

直接自分の目で見て来たという事は、ハンコックはそのヌカ・ワールドで何かが起こると見ているのだろう。

ケスラーに知らせたのは連中が獲物と見ている商人たちにそれを知らされたくはないらしい。

「バンカーヒル名物の傭兵。数が減ったみたいだな」

「……そりや、まあ。ミニッツメンの勢いが止まらないのが原因さ。連中、居住地を開いてそこに居座ってるだろ」

「それが悪い事かね？」

「どうだろうね。ガービーは英雄だつてみんな口にするけどさ。連中はうちの商人たちを近づけたがらない。それに知ってるかい？最近はそのそれぞれの居住地の中に屋台を並べだしたつて」

「競争相手が増えたな」

「そんな優しい話じゃないよ。レーザーマスケットに守られた新入りが増えて。うちの知らないところで市場を作り始めてるんだ。クソツタレさ」

「泣き言か？珍しいな」

「どうやらケスラーの苛立ちをハンコックはまだ理解できないらしい。」

「あのね。北じゃミニッツメンが暴れてるけど、連邦の南じゃガンナーが同じことやってる。」

平和になってきたつて話を信じたそっちにいた商人たちがこつちに戻つてきちまつてね。なにもかも、風向きが変わつてきてるんだよ」

「そうか」

「北の市場が大きくなってに違いないつて考える奴は多いけど、わかってないのさ。その多くはミニッツメンが押さえてる。」

あれとコネが出来たストックトンの爺さんのところか。一部の商人以外は望んだ商売が期待できないのがまだわかってないんだ」

「そうだろうな」

「今はミニッツメンもガービーも人気者。悪口はご法度だよ、非難されるし正気を疑われる。」

あいつらの悪事を伝えようにも。英雄ガービーの噂は真実をかき消してしまうのさ」

「大変だな」

「ハッ！だからって負けたわけじゃないよ。キャップある奴はダイアモンドシティに向かうし。ない奴はレイダーかあの怪しげな——」

しまった。

つい勢いがついてしまった。ケスラーは固有名を慌てて飲み込むが、手遅れであった。

「B・O・Sか？」

「……そうだよ。そいつらに近づいてる」

「それが傭兵とどう関係する？」

「だから……傭兵連中も以前ほど安定した契約がとれなくなってきているのさ。それに少し前から有名どころの傭兵団がいくつか姿を消しているのも影響したんだろうね。」

噂じやついに廃業してレイダーになったとか。南に下ってガンナーに加わろうとしてるとか」

「フン、廃業か」

「あいつらもそれが頭をちらついているって事さ。その原因は、ほら——」

「？」

「あんただよ。グッドネイバー、留守なんてするから」

「平和だよな。俺もそれが不思議なんだ」

どこかの馬鹿があっさりと手を出すと思っていたが。グッドネイバーは平和そのものだ。今じゃこのまま何も起きないんじゃないかと心配してそうになってる。

暴力で血が流れることを強く望んでいるわけではないが。その時のために用意をしたハンコックは少し物足りない気持ちになっていた。

「……とぼけているようには見えないね」

「なんのことだ？」

「あのさ、噂になってヤツ。あんたのところで暴れてたシユラウドだよ——しばらく留守にしていると思ったらボストンコモンに戻ってき
たみたいだね。レイダーが怯えてる」

「そうなのか？」

「あんたの仕業じゃないのかい？」

「それはおれがヒーローを用意したって意味か？」

「とぼけるならいいよ。こっちには関係ないしね」

シユラウドがボストンコモンにまた現れてる？

おそらくアキラ本人ではないだろう。それはわかる。

メモリーデンにいるケントがラジオで盛んにシユラウドの正義だ
なんだとまだ騒いでいるので、それを利用しようとしてるのだろうか
？

「傭兵連中が廃業したら、お前も困るだろう。ケスラー」

「……あいつらはあたしらの商売とは切れない連中だからね。気にし
ちやいないよ」

だがハンコックは知っている。

このバンカーヒルも、本音では自分が使える暴力装置をこそ一番望
んでいるという事を。

本当はキャップを集めて兵士を集めたいだろうが。商人たちに彼
らを運用する技術もなく、使い潰すようなやり方を長くやっていたせ
いで信用関係はもはや構築できない。実力ある傭兵団がよりついで
いるうちにはいいが、姿を消したとなれば焦らないはずがない。

つまりは結局は商人たちのエゴが招いた自業自得——だがそれ
も欲しいものは欲しいのだ。

「なあ、試しにミニッツメンを頼ったらどうだ？」

「冗談っ」

「だよな、一応言ってみたただけだ。だが連中の今の將軍は良い奴だ、お
前の苦労だけをあっさり引き受けてくれるかもしれないぞ」

「考えてみるよ。それにあいつらも余裕なんてないんじゃない？」
「ん？」

「アトム教の連中に攻撃されて頭に血を昇らせてるって言ってもさ。連中、本当にできるのかい？」

「レイダーやスーパームュータントどもを相手にしてきただろ。今回はなんでそう思う」

「別に……ただ難しいんじゃないかってね。思っただけ」

ケスラーの言いたいことはわかる。

部下の情報ではレオは今、スロッグまで来て足止めされているらしい。

恐らくガービーの後続と合流しようとしていると思うのだが、その肝心のガービーに動く気配がない。

ケスラーたち商人はそのことをすでに知っているのだろう。今回のミニッツメンの動きを見て、アトム教への攻撃はできないと感じているのかもしれない。

(そういえばアキラの奴。レオのそばに行こうとしないな)

この後でファー・ハーバーとやらに向かう約束がある以上。

レオもこの問題を放り出しては島に向かうことは出来ないだろう。

なのにあの若者は――。

「フム、いろいろあるんだな」

「なんだいそりゃ？」

「別に――今日は話せて楽しかった、ケスラー」

「はいはい、休暇を楽しんで頂戴よ」

ケスラーは再び横になって目を閉じる。昼寝を続行しようというのだが――気が付いて慌てて体を起こした。

ジョン・ハンコックがバンカーヒルに忍び込んだ侵入経路。それを聞き出すつもりだったのに失敗した。

もうそこにグールの姿はない。

〈〈〈〈〈〈〈〈

スロッグ到着から7日目。

ミニッツメンがついに――いや、彼らのリーダーである将軍がス

ログで動いた。

その日、グールの居住者達。バンカーヒルからきた商人たち。通りがかった放浪者。彼らの前にレオは立ち、その前に兵士達は整然と並んだ。

その顔触れは少しばかり変わっていたのは間違いない。

未来のメールマンとなるスーツ姿で不敵な笑みを浮かべている訓練生たち。セントリーロボットとは違うが、凶暴な外見のロボットと犬。なぜかB・O・S.のマークが入ったパワーアーマーを着た兵士。居住地から立候補してくれた数名のグール。その彼らの前に立つのはひとりだけミニッツメンの証であるレーザーマスケットに帽子をかぶったジミー。

ミニッツメンの將軍レオ——フランク・J・パターソン Jrは改めて最近のアトム教徒による事件について非難する。

そして居住地への脅威となったことに対する報復として、これより討伐軍の出発を宣言する。

——やっぱりこうなったか

そう思いながらも、彼らはこのミニッツメンに頼もしさを改めて感じている。

不甲斐なくも崩壊したかつての彼らと違い。今のミニッツメンは居住地を開くばかりか、変わらずそこに住む人々のために戦うことをいとわない勇者たちなのだ。と改めて知ることが出来た。

人々は彼らの勝利を願う。

だから気にはならなかったのかもしれない。彼らの先頭に立つ將軍のそばに、伝説のミニッツメンであるはずのガービーの姿がないことを。

ガラム II

ミニッツメン、立つ！

ここまで連邦の勢力の中で一番新しいという理由もあるだろうが、一貫した態度をとり続けてきたミニッツメン。しかしこの戦いにおいてにはひとつ面白い逸話が残っている。

ガービーら後続の遅延に苛立っていたレオ将軍がなぜここで本隊との合流をあきらめたのか？

ひとつわかつていることは。彼とつながりの深い女性記者、ロボット、犬。B・O・S.のパラディン、若い友人のロボット。

これらがスロッグに集まっていた。彼らの中で何か話し合われ、なんらかの結論に至った——そう思えて仕方がないのだ。

女性記者——パイパー・ライトは後に自分の記事に3回に分けて将軍暗殺事件と襲撃からはじまるこの騒ぎについて密着取材の成果を公開してはいる。

しかし、スロッグでの不愉快な待ち時間については短く「ガービーとの連携がうまくいかなかった」とのみ記されているだけ。そして次にはあの出立の儀式にふれ、勇壮なる進軍へと続いていく。

つまり真実はわからない。

だが、これは間違いなくレオとミニッツメンの間に微妙な亀裂が入る最初の事件ではないだろうか？そしてこうなることをすでに予想していたかもしれない男は今、遠く連邦南部にある穴の底にいる——



Vault 88の監督室で僕はひたすら計画書の更新を続けていた。

前任者の指示は、僕の言葉で塗り替えられていく。その意味もまた、別のものに変えていく。

前任のバーストウ監督官が地位を離れ、旅立った後。その地位を任

されたからにはちゃんと仕事はしなければならぬ。だがそれはもう、ほとんど彼女の残していった事の尻ぬぐいだ。

僕にはただただ不快で、不愉快で、楽しさとは無縁の作業。とはいえず予定では数日後に僕はキュリーと共にここを出ていくことにしている。だからこの苦行もそれまでの我慢というわけだ。

そしてファー・ハーバー。

レオさんとニツクが見つけてきた興味深い島。

そこに向かう準備は今。バンカーヒルの大商人、ストックトンの爺さんやグレーガーデンのグール達にまかせている。

あとは僕が動けば、すぐにでもファー・ハーバーへの道へ進むことが出来る。

そんな僕は監督官室に閉じこもって60時間が経過中――。

目は充血し、落ち着かなくストレスからか足は貧乏ゆすり。空腹を知らせて腹は鳴るが気が付かないふりをする。

そんなヌカ・コーラの空き瓶を増やして監督官専用端末を離れられない僕を訪ね、キュリーが無言で部屋に入ってきた。

キーボードをたたく指はそのままに僕は彼女を確認すると素早く画面に現在の時刻を表示させる。最後に会話したのが約42時間前、悪化を続ける患者達につきっきりの彼女は僕と同じようにV a u l t 88の医務室に縛られていたはずだ。

彼女が疲れているのは見ればすぐにわかった。

いつもはどこか太陽の下で咲く白い花を思わせる笑顔を僕に見せてくれるのに。睡眠不足と希望を失った目の周りは暗く、動きはここに作られている大トンネルの中を徘徊するフェラル・グールのように手足を重くしているようだ。ストレスについては口にするまでもないだろう、最悪だ。

前任者の趣味らしい、無駄に瀟洒な革張りの長椅子に顔面から彼女は無言で倒れ込んでいく。

さすがに声をかけないのはマズイと思った。

「ああ……キュリー？生きてる？」

うめき声上がる。なんだかこちらを呪っているような響きを聞いた気がした。

「顔色が悪いみたいだ。でも寝るなら——ベットのほうがいいと思う。医務室のね。ここの長椅子だと眠っても、疲れは取れない」

「……冷たいんですね」

「ひやいつ？」

不満そうな彼女の声に思わず声を上げてしまう。

「どうやら疲労の蓄積が限界に来たところで、恋人であるはずの僕が器用に作業をやめずに手を動かしながら自分の相手をするのが許せないようだ。ならば決断せねば、僕は降参をするようにキーボードから手を離し——これも何時間ぶりだ？・10、20？まあ、いいか。その代わり席を立たずに「話を聞こうか？」と彼女に体を向ける。それがまた彼女には不満らしい。

「こつちに来て隣に座ってはくれないのですか？」

「ああ、それでもいいけどさ——なんか話をしたいって感じだし。この距離は悪くないと思うから」

「本気なんですね。本気でそう言ってる。別にいいですけど」

この部屋に来て僕がやったのが模様替え。

正確には家具を撤去し。残したのは長椅子、机。かわりに新しく入れたのがヌカ・コーラを大量に備蓄する冷凍庫、以上。

ベットは寝るつもりないから必要ないんだよね——と思っていたが、こうなると手抜きがあったと認めないといけないようだ。ここで寝るなどという事は医務室に帰れということになる。そりゃ、彼女でも怒るよなあ。

「君の作業スケジュールだけはここから確認してた。本当だよ？」

「——ならなんで医務室に来てくれないのですか？」

「え？」

「ここにあなたが来てくれてからもう100時間以上、なのに接触がありません。もう数えるのが馬鹿らしくて止めました」

「う、うん。なんかゴメン」

「謝って誤魔化してもダメです。可愛らしい美人とお知り合いにでも

なったのですか？なら、ぜひ私にも紹介してください」

「そ、そうだったらいいよね。でも仕事ばかり、監督官の仕事」

「医務室にはベットがあります。私もいます。なのにそこに来れない理由があるというのですか、アキラ？」

「……あ、うーん」

確かにおっしやる通りんだけど、それってVaultの患者さんが寝る隣のベットで——って意味ですよ、キュリーさん？

新任の監督官が作業の合間に足しげく医務室に、そこにいる女医さん目当てに通うつてのもどうかと思うわけです。

もちろん以上の言葉は飲み込む。絶対に口に出してはいけない、わかってる。

ファールレンハイトという偉大な核弾頭との短い付き合いはそういう女性の機微を理解させてくれる経験となって僕の役に立っていた。

「冷酷です。癒しが欲しい」

「……わかったよ」

ここは僕が負けるべきだろう。

事実、彼女にはかなりキツイことを頼んでしまっている。

そもそもはハンコックにこのVault88の様子を確認し、それに最悪の事態を想定してキュリーにここに行ってもらったのだ。

それが来てみたらやりたい放題の人体実験が行われ、数人とはいえ住人達のほとんどがひどい状態にされていたのだ。

今の彼女にできることと言えば彼らの苦痛を出来るだけ感じないようにしながら、最後の時をどう過ごしてもらおうのかというものだけ。人造人間となって感情を手にしたばかりの女性には難しい仕事だろうと思う——こう考えると僕は彼女にもっと気を使うべきだったのでは？うーん。

長椅子に座る彼女の隣にうつると、小さな頭が僕の肩に寄りかかってくる。

「感情のジェットコースターの中で難しい仕事を任せてしまったと思ってる。でも感謝してる、本当にありがとう」

「……」

「なんなら僕が君の分も引き継いでもいいよ。医療的なアドバイスは必要だけど、それで君は先にコベナントに戻るって方法も——」
「いえー！——いえ、それはしません。今はあなたから離れるつもりはないです」

あ、ちよつと嬉しい。

「酷い顔だよ、キュリー。忙しいだろうけど、少しは寝たほうがいいと思う」

「それはこっちのセリフです。あなたも寝ていません、よくないです」
なるほど確かに僕は忠告できる立場じゃないな。

「それでもあと数日。僕たちが立ち去った後、しばらくここは仮の閉鎖ってことになる」

「Vaultは終わり、ですか？」

「しばらくの間だけ。弱ってる住人達を看取ってから、また再開って事になると思う。今度はバーストウのような馬鹿をやらせない、北でやってる居住地のようにここを使わせたいんだ。恐らくそれが一番いい事だと思う」

「ちやんと考えているんですね、それも冷酷に」

「——冷静に、だよ。」

でも、それも正しいのかも。ここに君を送る前に最悪のファイルに放り込んでいた設計図のひとつだ。自分で自分をどうかと思うよ」

指が絡んできた。あ、これはマズいな。よくない、悪くないけどよくない。

「聞いておきたいのです、アキラ。ここを私たちが離れたら——次は何を？」

「ファー・ハーバー。そこに行くために最後の仕事を終わらせないとね」

「それは？」

「例の居住地、スターライト・ドライブインだよ。今度はガービーの尻ぬぐい、ケイト達に頼んだ仕事だ。」

これが終わればミニッツメンはついにグレーガーデン、コベナントと合わせてレキシントンの包囲網が完成する。フェラルやレイダー

の脅威を抑え込めるようになる。これで連邦の北西部でやれることはほぼ終わるよ」

答えると、彼女は姿勢はそのまま無理矢理にコチラを見上げてきた。

「アキラ、自分の言っていることが本当にわかっていますか？それですごくいい事なんですよね」

「——かもね」

そうだ。でも僕がミニッツメンにできることはそれで終わる。東部についてはまだまだ時間が必要だし、あそこにはB・O・S.のこともある。

正しい戦略を考えるなら、連邦の派遣を巡り。ついには南部のガンナーとの対決を考えなくてはいけない。

だがもう、そろそろいいんじゃないだろうか？

僕はミニッツメンにそう考え始めている。

肩に置かれた頭が動き、そばにあるはずなのになぜか不安そうな目が僕を見上げていた。

「では友人を助けには行かないのですね」

「……レオさん？」

「ハンコック市長は様子を見にいくと言っていました。彼はスロッグで動けなくなっていると聞いてます」

「らしいね」

「でもあなたはここにいます。彼は戦うのに、あなたはそれをしないという。どうしてですか？私、それがわからないのです」

キユリーはヌカ・ワールドで狂人の王となつて振る舞うアキラを見てきた。

あれは別なんだと、違うのだと思いたいが。そうではないことを学び、危険な違和感をここまでずつと感じても黙っていた。

だから不安が——アキラもまた連邦によつて“変化”しているのではないだろうかという問いに対する答えを知りたい。ここに住む善い人々が口にするように、この才能あるひとりの若者は悪い方へと転がり落ちているのではあるまいか？

「キュリー……レオさんはね、冷静になる必要があるんだ。でもそれは僕がそばに居ちやだめだと思ってる」

「？」

「あのね、そもそもファー・ハーバーとやらに向かう理由。僕とレオさんでは全く理由が違うんだよ」

「そう、なのですか？」

そうなのだ。

僕の目的はひとつ。

アカディアとかいう人造人間たちの避難所^{ヘイブン}

ニックとレオさんの話が本当なら、インステイチュートから出て100年以上。

小さな島で暮らした人造人間が培った膨大な情報がそこにはあるはずだ。僕はそれが欲しい。

僕を狙う怪しげな連中がいる。そいつらは——レオさんが追っているインステイチュートのような組織であるようだ。僕はそいつらに攻撃したいが相手は恐らくは強大で、その機会もまったくくない。それを早く実現するための材料がきつとそこにはあると、僕は期待している。

だけどレオさんは違う——。

探偵ニックの知り合いがいたとはいえ、アカディアには恐らくインステイチュートの情報はないだろうと思われる。

戦後から彼らはこの世界から常に姿を隠してきたと聞いている。それが自分の手元から逃げ出す機械に最重要な情報の断片を残しておくはずがないし。それならそもそもニックだつてなにかしら彼らの情報を覚えていたはずである。

僕とレオさんは似ているようでいて立場が微妙に違う。

共に同じ性質を持つと思われる敵がいるが、僕の相手は僕に興味を持って黙っていても近づいてくるかもしれないが。

レオさんの敵は、レオさん自身に近づく理由がおそらくはない。

本人もそれを自覚しているからこそ、かのB. O. S. で歓待されても期待は出来ないと判断して背中を向けて連邦にも戻ってきた。

ミニッツメンでは將軍なんてものを引き受け、力を手に入れている――

「レオさんは次第に正気でいられなくなってきている。インスタイチュートへの道――なにをやっても探しているつもりになってるだけで、実際に何もできてはいない。そのことを理解したくなくて、考えたくなくて。あの人は色々な自分を演じて誤魔化し始めた」

「興味深い意見とは思いますが、ちょっと信じられません」
「そうかな？」

キユリー、僕が人を見て判断するには博士号がないのが問題かい？
考えてみてよ。いくらガービーとの友情があるからって、あそこまでミニッツメンの將軍として振る舞う必要はない。家族を取り戻したいならなおさら戦場で先頭に立つなんて避けるべきだ。

ガービーが選ぶ兵士はそれほど優秀とは言えない弱兵だ、それを率いて鉄火場に立つ。あまりにもリスクが高すぎるよ。

さらに厳しいことを言えば、そもそも今のミニッツメンに参加しようって奴らはガービーしか興味がない。レオさんは結局、元Vault住人でただの協力者だと思われたまま。

脆弱な兵士を率いてあれほど見事な指揮をしているのに、率いられた兵士達の認識は変わってない。ミニッツメンが成し遂げたことは全部ガービーの人気になってしまってる。あいつらは本当の恩人に報いるつもりはなく、居場所すら与えないどうしようもない連中さ。

正直に言けど、僕はあのガービーの心棒者達にウンザリしてるんだ」

「あら」

「次にレオさんはニツクの助手なんて始めただろ？そこでもファー・ハーバーなんて滅び去る島なんて放っておけばいいのに。」

ミニッツメンの資源を分け与えたいとか言い出すのはさすがにやりすぎ。あれはもう、善人というよりも救世主のそれだよ。空回りしすぎて逆に妙な説得力を生み出してしまってる。僕はレオさんが心配してる、本当にね」

Vaultから地上に出てきた直後、おそらくレオさんの中にあつ

た葛藤——僕を家族として、息子として扱うかどうか。

僕にしてみたら余計なお世話なそんな考えに囚われていたようだけれども。最近の僕は逆にレオさんに似たような感情を持ち始めている。

あの時——。

自分のことなど放って、ケログとかいう殺し屋の元に共に向かっていたら。もしかしたらその後の展開に少しはなにか良いものがあつたのではないのか、と。

僕は誘拐されず、ヌカ・ワールドを知らないまま。グッドネイバーの事件など含め、ひどい事はおこらなかったのではないか？それは同時にハンコックの相棒が死ぬことはなかったし、僕も恐怖にとりつかれて見えない敵に憎悪をたぎらせることはなかったのではないか。

無駄なもしも、の話でしかないのは分かっている。

だがそんな風に思ってしまうほど、連邦で僕もまたひどいことをずっとここまで続けてきているのだ。そしてもう、引き返すことも出来ない。

ならせめて尊敬する人が、愛する人がボロボロにならない未来が訪れて——。

ダメだな。僕自身、これが傲慢でふざけた考えだとわかっているが。それを望みたくなる。

だからいつものように僕はため息をつく。後悔する余裕はもう、僕らにはない。

「ファー・ハーバー。つまりあなたは自分の利益のためだけに。友人の間違いに手を貸すという事なのですか？」

「その容赦ない言い方が君の魅力だね。」

でもどうかな、考えてみてよ。このままでは恐らくレオさんはひとりでも島に行ってしまうだろうし、自分のやりたいことを進めるだけだ。ならそれが良い結果になるように僕は手を貸しつつ、こっそり堂々と悪事もやる」「確かにいつものあなたというわけですね。良い事と悪い事、ひとつずつ」

「そうなの？ふん、冷静に自己分析する際には、今のドクター・キユ

リー研究員の意見は重要視しよう。そうノートにも書き足しておきなきゃ」

話題が目の前の Vault 88 からそれてきたせいとか2人の会話に勢いが生まれていた。

これで元気にキュリーが仕事に戻ってくればよかつたのだが――並んで座ってた2人の位置が変化し、彼女は僕の上をまたいでしま

う。

「あ、キュリー?」

「……」「ちよつと待った、盛り上がるのはここではマズイって」
時に状況をパズルのようにピタリを合わせることの快感を知る僕だが。身近にいる女性の期待を別のものにすり替えることの難しさを理解している。

この時だつてそうだ。天秤は傾く、容赦なく。欲望は大波となつて押し寄せてくる、とどめる努力はしたが押し流されないでいる理由はない気がするのも正直なところ。ああ、微妙なんだよ。

EEEEEEEEEEEE!

監督室内にブザー音が鳴り響く。Vault 88 内で監督室へと向かう2階分の階段を誰かが昇り始めたという知らせである。つまりここに新たな訪問者が来ている。なんでこんな時に来てしまうかね? いや、違う。よくぞ来てくれた、が正しいのか。

「誰か来るみたいだ」

「――残念です」

「ああ、まったくだよ。僕も君と同じ気持ちだ」

「よく言いますよね、ホント憎らしい」

僕の上からどいてほしいのに、なにやら思いきれないのかキュリーは珍しくゆるゆると動いている。

「監督官? あの、新任の監督様――」

居住者が恐る恐るドアのない入り口から顔だけのぞかせてこちらに呼びかける。

どうやら監督官というものを猛獣かなにかと勘違いしているようだ。

やってきたのは、クレム——Vault88が開かれた直後から入り。あのバーストウの実験を経験してどうしてか唯一まったくと喋っていいほど影響がないまま、健康体を維持し続けた青年。

「あ、ああードクター、ありがとうもういいよ」

「はい」

長椅子の上——ずり落ちそうになっている僕の上からようやくキュリーが離れてくれたが、クレムはコチラをじっと見つめて固まっている。

これじゃどう誤魔化しても無駄ってやつだ。怪しい行為をしていたわけじゃない、直前まで行きかけたが。ここではなにもなかったのだ。それが真実。

「仕事に戻ってくれていいよ。ホント、ありがとうキュリー。とても楽になった」

「——わかりました」

なぜか上機嫌な笑顔を浮かべてキュリーは部屋から出ていき。僕は代わりにまだ入り口にへばりついているクレムに話しかける。

「なにかな?」

「あ、はい。頼まれていた作業が——終わりましたので、報告を」

「ああ、それね!よかった、待ってたよ……ずっと」

言いながら僕は席を立ち、クレムと共に監督官室を出る——。

僕は今朝。彼が目覚めて、朝食をとる前にある命令を与えていた。元ゴミ拾いをやっていたという君だから、ここにある資源の中からこれから言うものを取り出して別室に運んでおいてくれ——と。

本来ならば昼過ぎ辺りで何やってる!?!と怒鳴りつけてやらねばならなかったのだが。僕はご存知の通り監督官室で作業中——ああ、そういうことだ。僕もまさかこんなに時間がかかると思わなくて、彼に早朝に頼んでいた仕事のことを今までうっかり忘れてしまっていたのだ。

「あの、僕が見たものは——」

「ん?ドクター・キュリーだよ。彼女は知ってるだろ?」

「ええ、ええ。でもなんていうかその、なんかしてみたかったの

で」

「健康診断だ。ここを出る前に、と彼女と約束してたんだよ。まあ、夜更かししすぎて数値が取れないと怒られてね」

「彼女、怒ってるようには——」

「そうかい？ 僕が座ってばかりいるのは良くないとマッサージをしてくれたんだ。いい腕だったよ、体がすっかりほぐれた。つまりはそういうことだ」

「なるほど、はい。わかりました」

「ん。別にわからなくてもいいけど」

「え？」

「それでクレム——君だったよな」

「はい、新しい監督官、さん」

「説明してくれ」

単純な作業にこんなにも時間をかけたことこの理由を。ムカムカしてきたが笑みを浮かべ、軽い感じで問いかける。

不思議に思っただけはいたのだ。子供でも2時間もあればできそうなことを、この男は半日以上かけた言い訳——ではなくて作業の進め方について聞いておきたい。今後の参考のために。

驚いたことになぜか彼は嬉しそうに話し始めた。それも——どうやら僕に褒められると信じてやっているみたいだ。

「はい、新しい監督官。僕はこのVaultの役に立つために——」

「そこは飛ばして。ゴミの山から部品を取り出し、それを別の部屋にまで運ぶ。これをどうやったのかな？」

「本当に困難な任務でした。が、僕はあなたの期待にこたえてやり切ってみせました！ 聞いてください、まず〴〵ねじ〴〵ですが——」

ロボット作業台の置かれている部屋に向かいながら彼の熱い作業過程を我慢して聞かされる。

彼によるとゴミの山から取り出しただけではいけない、という理屈らしい。部品にある汚れや傷がないのも確かめ。丁寧に種類をより分け——ながら、なぜかノソノソと自分達の作業をしている仲間にちよつかいをかけにいき。彼らの仕事や生活——つまり農業や食事、

休憩にシャワーの面倒まで見てきたらしい。なるほどそれは確かに時間がかかるな。

僕は間違っていた。笑顔で聞いちゃいけない事だった。

直前でキュリーとのあんな状況を見られたこともあって、失敗したと引くべきではなかったのだ。でもこうなったらもうしようがない。

適当に相槌をうつだけで流そうとしたところ、相手はそれが不満だったようで部屋の直前で改めて呼び止められる。

「——あの、新しい監督官様」

「ん？」（なんでいちいち呼び方が変わるんだよ）

「前のおばさんが出て行ってから数日が過ぎてましたけど、僕の仕事ぶりには満足してもらっているって思ってます」

「ああ」（そういえば元気に返事をするから、全員に伝える時はコイツに向かって話してたなあ）

「だからちゃんとアピールしておこうかと思ったんです!」

「あと数日で、また新しい監督官は外に戻っていつちやうですよね? 僕らをここに置き去りにして」

「表現が過激だが。確かに間違っではないね」（置き去りって、ハッキリ非難しやがったぞ。コイツ）

「やることが多くてお忙しいんだと思います。だからそれは尊重しますが——このVaultの状況は、決して良くないと僕は思うんです。それはわかってますよね?」

「ああ」

「ええ、きつと理解しておられるんでしょうけども! あえて、あえてここでお伝えしておきます。僕の準備は、完璧です。はいっ!」

「準備? なんのことだ?」

「え、あれ? 違うの? まさかっ」

「ああー、クレム。落ち着いて、君が何を言いたいのかさっぱりわからない。準備、とは何の話?」

「それはっ、僕をあなたの後任に選ぶことに決まってるじゃないです

か!?!」

「……なるほど」

新監督官代理になりたい、と。

そうかそうか。

「だってそうでしょ? 僕を見てください、とつても元気です。ドクターにも健康だと断言してもらえました!」

「知ってる」

「でも皆は? メチャメチャ調子が悪い、でしょ? まるで、まるで……あれですよ! グールだ!」

「フェラル・グールな」

「それです! わかってました、僕は。とにかく彼らは最悪ですけど、僕は平気。でしょ?」

「平気というか、無駄に元気だね。確かに」

「つまり監督官を出来るのは僕だけって事です。ですよねっ!」

W A H H H H H H H H H H H H H H H H A !

こんなに勘定の底をぶち抜くような怒りと呆れを混ぜた結果、ありえないほど愉快になって大爆笑したのはちよつと僕の短い記憶になり経験だった。そこから実に数分にわたってこの愚か者の前で僕は腹を抑えて笑いこらげてまわり。この愚か者を親しい友人のように何度も相手の肩に触れた。

監督官? 代理ですらなくて? マジかよ!?

たったこれだけのことが最高に笑えてしまった。

空虚な V a u l t 8 8 内と坑道に僕の笑い声が響いていく――。

最初は僕に追従して笑っていたクレムも、一向にボルテージを下げないまま笑い続ける僕が怖くなってきたのだろう。沈黙すると背中を丸めて媚びるような視線へと変わっていった。

僕はと言えば(さすがにそろそろ落ち着け)と冷静にもなっており、^{衝撃}笑撃に翻弄され続ける口元を両手で押さえる。そのしぐさがまた狂気じみて見えたか、クレムは明らかにおびえだしていた。

落ち着くにはさらに時間が必要であったが。

その頃になると僕の中にはもう色々あつた感情が吹き飛ばされて

空っぽにまでなっていた。怒りはない、呆れもない、笑いも消え、なんとも思わない。

「——ああ、クレム。今のは面白かった、最高だ」

「え、そうですか。どこがおもしろかったのかわからないけれど……」
「いいんだよ！君はそれでいい、君の言いたいこともわかった。なるほど、監督官代理になりたいのか」

「えっと。まあ、そういうことですね。あなたのお留守を守ります、今日のように完璧な仕事で」

「わかったよ。君の熱意は確かに聞かせてもらった。それに仕事ぶりもね！確かに全部揃っているみたいだ」

「はい。はいっ！」

「それじゃ任務完了だ。クレム、部屋に戻ってくれていい」

「それで——僕の監督官はどうなりました？」

「ああ、うん。もちろん前向きに考えるさ。だってそうだろ？皆の中で元気なのは？」

「僕です！僕だけ」

「なら監督官代理を任せるのは他に候補がいないうちは——つまりそういうこと」

「なるほど！ありがとうございます。新しい、監督官、様っ」

「それじゃおやすみ。また明日」

新しくイラついてきたのでバンバンと強めに細い彼の背中を思いつき叩いて部屋から追い出した。

バーストウが残した記録の中でこの青年の評価が割とひどいものだったことを思い出し。それが間違いなく的確な表現であったと納得もする。

「後任の監督官？監督官代理、ねえ」

ひひひ、また笑ってしまいそうだ。

ロボット作業台の前に立ち、自分のピップボーイとつなげて装置を起動させた。

少し前、コベナントでロボットを作りまくったときに。戦闘用アサルトローンのくせに戦うのが嫌いだとはつきり主張するおかしな口

ボットを作ったことがあった。ジャックと名付けたそれは、助手兼管理人？コンシエルジュ？とにかくそういうMr. ハンデイが得意そうなことをやらせた。

残念ながらジャックはその後、襲撃によって破壊されてしまったが。

ジャックというロボットの精神構造パターンを僕はあのおぞましい冷蔵庫の中にある生体HDの中で復元させていた。

「私は戦闘用アサルトロンです、任務をどうぞ」

「そうだな、まず君の名前——ニユー・ジャック？いや、ただのジャックでいいか。2代目だけど。それじゃ、ジャック2世でどう？」

「それが私の名前なのですか？ジャックII世、登録しますか？」

「君は今、自分を戦闘用と言ってたけど。これは答えてくれ、戦うことが好き？なにか思うことはある？」

「……答えはありません。興味もありません」

ほぼ期待通りだ。普通のアサルトロンなら迷わず戦闘についてなにがしかを語りだす。ローグスのGAKKUTENSOKUもそんな感じだった。

きつとあのエイダも交戦的なフレーズで答えてくれたはず。だからこそ、この答えは期待通りと言える。

「いや、それでいい。続いて話を聞きながら、内部チェックを進めろ」「了解しました」

「これから数日以内。つまり100時間以内に君には僕の代理としてこのVault88の監督官代理をやってもらうことになる。申し訳ないがこのVaultは2つの問題を抱えていて君はその処理をおこなうことが当面の目標となるだろう」

「……」

「ひとつはVault88自体、まだ未完成であるということだ。建築用のロボットが今も作業を続けているが、完成にはまだ時間が必要だ。とはいえ、すでに居住者の生活、生命維持に関するものはある程度完成している」

「Vault管理者としての任務、状況を理解しました。さらに情報

を求めます」

「もうひとつ。こっちはかなりマズイ。前任の監督官が後先考えずに馬鹿をやらかしたおかげで、現在の居住者のひとりのをぞいた全員が死にかけている。ドクター・キュリーが彼らの体調の改善を試みたが、結果は出てない。」

彼女は僕と一緒にここを出るので制限時間を設けているが。その間に解決できなければ、彼らはここで看取ることになる。死者の数は生者を圧倒している。君はVault内での士気を保ちつつ、彼らに穏やかな最期を迎えさせてやってほしい。難しい任務だ」

「……」

「監督官に必要な思考とデータはすでに君の中に存在しているが。もしもの状況を想定して、ローグスという僕の戦闘チームの指揮権を与える。彼らは僕の出立後にここへ到着する予定だ。」

内外に手に余る脅威が迫ると君が判断したら、このローグスに協力を要請すればいい。彼らは君の決断が戦略的に有効と判断すれば指示に従うだろう」

「つまり彼らには私の命令に対する拒否権があるということですか？」

「そうだ。理由は君を評価する時間が足りないこと。このせいで僕は君を完全には信用することができない事実がある」

戦闘用ロボットのいいところは容赦のない攻撃的な物言いを好むところだ。

「確かにその通りです。この状況におけるあなたの意見に同意します」

「とにかくローグスはこことは別の独立した戦闘チームということだけ認識してくれ。彼らにはここでの別の任務を与えているし、僕の意思に従って行動や判断を下すからね。君は彼らと問題解決の過程で利益相反とならないように気を付けろ」

「つまり最悪の場合。私は戦闘チームに排除される可能性があるか？」

「当然だろう。君にはVaultとVault居住者たちの命を預け

るんだ。任務に耐えられない性能なら、僕の期待には答えられないという事になる。 로그ス・リーダーは監督官となる君の観察者だ。だからといって君の権利は簡単に侵されるものでもない」

「その通りです。私の任務はV a u r t 8 8の監督官として居住者の生活を守り、続ける存在であり続ける事」

僕はうなずく。

「よし、内部チェックの結果は？」

「3度目を実行中ですが。問題はないと出ています」

「そのまま続けて、ここで待機だ。僕は監督官室に戻る。出番が来るまでは時間を潰してもらおうことになる」

「了解、セーフモードへ移行します」

ここでの仕事も終わりが見えてきた。生まれたばかりの装置の中で動きを止めるロボットを見てそう思った。

居住地V a u r t 8 8の再開は、同時に僕の監督官としての最後の使命としたい。だがそれには準備も、時間も必要。だから僕は再び監督官室へと戻っていく。

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

リン——廃墟の丘の上にサカモトの言葉は続いていた。

「クレーターハウスのアトム教。何度か我らの再査定に挙げられましたが、その多くの調査はクロダ。あなたがやっていた」

「……だからなんだ？ 否定はしない、今回はあいつらを利用しただけだ。組織の資産ではないのだからどう使おうが別に問題はない。非難されるいわれもない」

相も変わらず大男は表情も変えず、秘密を暴かれてもひるむ素振りすら見せない。

「でしょうね。あなたの目的はわかっていますから。

討伐に動くミニッツメンへ。コンドウの敵討ちに加え、戦場にアキラを引きずり出して対決するつもりだったのでしよう」

「そうだ。ただ敵討ちとは違う。コンドウを倒した男、そいつには死んでもらう。またそれだけ価値のある男ならば、アキラならきつとそばについているはずだ。過去の事件ではそうだった。我々を困らせたトラブルはこれで排除される」

「つまりアキラと直接対決する——全て終わらせるため」

「……」

「わかっているはずです。その目論見はすでに失敗しています。アキラは動かない。隠れたままミニッツメンの將軍とは合流していませんよ」

「まだわからないだろ」

「いいえ、もう答えは出ています。」

すでにミニッツメンはスロッグまで出てきている。必要なものが揃えばすぐに攻撃に移ります。

このままだとあなたの望む通りの戦場が作られるでしょうが——あなたが戦うのはコンドウを倒した男だけです。結果、今度は君が倒れないという保証はありません。そのリスクを真剣に考えるべきです」

「ずいぶんと弱気だな、サカモト？」

「あなたやキジマのやる気は認めますが不用心すぎると指摘しているのです、クロダ。」

あのコンドウを倒すような実力を持っている相手なら、自分も倒すことが出来るという事実こそ重視するべきです。自分の抑えきれない闘争心に振り回されて冷静になりきれではないのです。

さらにここに方針を変更してアキラとも決着をつける？アキラとコンドウを倒した男が揃っているところに向かうのに、自分たちが負けないという根拠をあなたは示せていません。わかっていますか？」
クロダの表情は態度と違って先ほどからずっと不愉快そうにしてみただ。

「つまるところサカモトよ。お前はとうしろというのだ？」

アキラを敵にするな。コンドウを倒した男と戦うな。ただ放っておくと、そういうことか？」

「それがどれほど納得できないものなのか。私はちゃんと理解していますよ。だからこそあなたにも聞き入れて欲しいのです。これは私からのお願ひと思ってもらっても構いません」

「駄目だ」

クロダの答えは簡潔だった。

「駄目だ。それではまた同じことが始まる。叫ぶだけのキンジヨウと変わらない。」

我々は次をどうするのか決定しなくてはならない。報復を果たさねばならない。敵の動きを封じ、これを殲滅せねばならない」

「説明はしました。アキラは我々の敵として動いています。彼との対決姿勢は我々自身を生み出して共食いするようなものになります。これは必ずそうなります、彼がそう仕向けているからです。」

彼との敵対は避けなくてはなりません。いや、彼を再び取り戻さなくてはならない。確かに、確かにその方法は私にはまだありません。しかし敵対すれば——アキラは我々がそれに飛びつくかどうかを待っている。彼の挑発に乗ってはならないのです」

連邦でアキラの作る勢力と自分達が敵対する未来。全く想像もしなかった悪夢、それが現実のものとなろうとしている。

復讐心、というよりも滾る闘争心に突き動かされようとする仲間をサカモトは驚いたことに本気になって止めようとしていた。

「話にならないな、サカモト」

「ではこうしませんか？……情報では近く、アキラたちはファー・ハーバーという島に向かうと聞いています。その間に私が必ず、アキラとの接触の機会を見つけみせます。実現してみせます」

「足りない。コンドウの件、報復は果たされていないぞ」

「ミニッツメンの将軍は——いえ、フランク・J・パターソン Jrはそれまでに確実に殺します。その方法についてなら、合意できるでしょう」

「そうだな。確かに」

「観測者、あなたはどうです!？」

マスクの怪人はただ、サカモトの問いに頷いただけであった。

「では結論が出ましたね？アキラには引き続き手を出さない。アトム教からは手を引いてください。」

その代わり我々はフランク・J・パターソン Jr 抹殺について計画をたてましょう。それでいいですね？」

「——ふう、いいだろう。お前の顔を立てよう」

サカモトはようやく肩を下ろして一息ついた。

滅びた町の丘で、会議はこうして終了した。

サカモトは背を向け放れていく中、それでもついに自分が全てを明らかにしなかったことは失敗ではなかったと不安を押し殺していた。

あの日、確かに3人は同じ情報から同じものを確認しに集まりはしたが。そこから出した結論は——まったく違うものとなったことをクロダやキジマには黙ったままで終わらせていた。

観測者は全てを忘れたかのようにだった。

これはまったく理解に苦しむことだが、とにかくアキラについて執着が強かったはずなのに。一転して無関心をふるまうようになった。なにもせず、何も考えていない。そのフリをしているのか、よくわからない。

サカモトとコンドウはその後もしばらくは意見の一致が続いた。

失ったアキラを取り戻す。彼を再び組織に迎え入れる。地位も権威も与え、判断を間違った者達から謝罪を受ける。

それで恐らくだが組織は新たな息吹を始め、欠けていたと思われたものが補われて連邦の未来へと自分達を導いてくれる。

そのために絶対に必要な事。

それが彼の資産である友人達。なかでも最重要人物として話題に駆け上っていったのがフランク・J・パターソン Jr だった。

彼、そしてさらに数人の資産友人を抹殺することでアキラの支配網をバラバラに寸断していく。その中で接触を試み、組織へ帰還する話し合いをしつかりと進めていく。

だがここでついに2人の意見が割れた。

サカモトはコンドウと違い、怪しんでいた。

インステイチュートの古参のエージェント、ケロッグをフランク・

J・パターソン Jrはひとりで倒したという事実。

元は優秀な軍人であったというが、Vault—TECの未熟な冷凍保存技術による延命からの蘇生は、いくら成功したとはいえ細胞レベルからダメージが残ってないわけがなく。とても全盛を続けている殺し屋として長く現役を続けているケロッグに打ち勝てるような力を持っていたとは思えない。

——誰かが、何かがあそこであったのだ。

ケロッグは最後の任務となる砦に人造人間の部隊まで率いていたと聞く。

ということは元軍人で弱った男が、戦闘部隊ごとケロッグを殲滅した？そんな悪夢のような奇跡をやったのけた？

だが奇跡でないとするならば、それは誰かが。何かをそれを成し遂げさせたという事になる——それがまったくわからないのだ。

サカモトのこの躊躇をコンドウは軟弱だと判断した。

そして結果——彼はフランク・J・パターソン Jr暗殺に挑み、ことごとくで敗北した。あろうことか最後の機会を見逃すことが出来ず、水から飛び出していつて敗れた。相手に囚われた後は体をバラバラに切り刻まれて生命活動を停止させられたと知ったが、苦痛の中でコンドウはサカモトの恐れたことが事実であったと噛みしめたことだろう。

だからこそサカモトは恐れ、仲間であったとしても簡単にはこのことを口に出せないでいる。

この連邦には自分達とアキラを敵対させたいと願う存在がいる？それは彼にフランク・J・パターソン Jrを与え、力を貸した？ならその正体は誰なのだ？

観測者はこのことについてなにか知っているのだろうか？

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

ミニッツメンにとって最悪の日。

いや、ガービーにとって最悪の日は、やはりオーバーランド駅の居住

地で迎えることになった。

午前、ふらりとサンクチュアリからやってきたメールマンがガービーに面会を申し込んだ。

自分の任務開始が迫っているのでサンクチュアリに戻る挨拶だという。

「その、とにかく本当にご苦労だった」

「いえいえ、別にいいんですが——」

ガービーの心臓がドキリと大きく脈打った。彼の報告を聞いて、なおこの場から動かない真意を聞かれはしないかと恐れたのだ。

「実はうちで使うバラモンもついでに引き取っていきたいと思いましたが。勝手に手続きしました、これも許可してもらえると助かるんですが」

「ああ、そんなことか。もちろんいいとも」

メールマンは居住地間の移動に荷物運びとしてバラモンを最低でも一頭はつれていくことになっていた。

だが、以前に比べれば平和になったとはいえ。襲撃がなくなったわけではない。

メールマンたちは任務で怪我するくらいに、バラモンの被害も決して少なくはなかったのだ。

最初はダイアモンドシティで買い求めているものの、費用が馬鹿にならないという事もあり。

レオがこのオバーランド駅をミニッツメンが求める居住者かテストする環境を整えた際、数頭からバラモンの飼育をも始めたのだ。

バラモンの肉と乳は食料となり。糞尿はアキラの技術によって肥料に変わり。この地を集められる放浪者たちは居住者としてきちんとやっていけるかどうかを、バラモンの飼育から観察していく。もはやここになくはならない存在になっていた。

「3頭だったか。ひとりで大丈夫か？だれかつけたほうがいいかい？」

「大丈夫でしょう。でも手伝いは歓迎しますよ」

「わかった——パトロールと同行させよう。ちよつと待つてくれ」

「はい」

「このくらいなら簡単だ。北に向かうパトロール部隊に出発を数時間前倒しにするだけでいい。」

「ここからバラモンを運ぶのも、あと何回くらいになりますかねえ」

「そうなのか？なにか別に手に入れる方法でも見つけたか」

「いえ——スターライト・ドライブイン・シアター。あそこがもうすぐ動きそうだってハナシで」

「っ!？」

「あれ、知りませんでしたか?」

「聞いていない。初耳だ」

アキラからは何も聞いていない——。

だが將軍の強い勧めもあって、コベナント、グレーガーデン、スターライト・ドライブイン・シアターについては彼に好きにやってもらおう約束になっているわけだから小さなことで不満をぶつけるわけにもいかない。

実際、グレーガーデンの時も気が付いたらグール達が入り込んでいたっけ。

「あそこは今、どうなってる?」

「なんていったらいいか、そうですねえ。愉快的な緑の巨人と優しい奴らって感じになってますよ」

「……ああ、なるほど」

緑の巨人、で頭が止まってしまった。

將軍がボストンコモンから連れてきた、おかしなスーパーミュータント。ストロングの事だと思いつ出したのだ。

スターライト・ドライブイン・シアターをレイダーやアポミネーションに占拠されないように、そいつを解き放ったのだったか。

「優しい奴ら、つてのは?」

「放浪者ですよ。数人ですがね、もう居ついているようです」

「——アキラはどうするつもりなんだ?」

「うちの社長?どうでしょうね、なんかいろいろ仕込んでるみたいですよ。誰か探しているって噂が」

「誰だ？」

「さあ、どうも人間じゃないってハナシですが」

「なに？」

「ま、すでにスーパーミュータントがいるんですから。似たようなのを探してるのかもしれない」

「ううむ」

「で、そこでもバラモンの飼育を始めるって話が出てまして。恐らくですが、正式に動き出したらうちはそのついでやっかいになることになるだろうって」

「そうか」

確かにあそこは守りにくい平地が広がっている場所だ。

逆に言えばバラモンの飼育には適している。数だつて人が増やせれば多く増やせるだろう。そう、確かに未来ではそうなくてもおかしくはない。

「だがまだ先の話だろうか？」

「どうでしょうね。それじゃ、失礼します」

「パトロール部隊とは河を渡った先のグレーガーデンで合流してくれ」

メールマンは笑顔のまま、するりと身をひるがえすと出て行ってしまった。

なんだか最後は逃げるように出ていった気がしたが——気のせい
か？

深い苦悩に満ちたため息をついた。

——被害妄想だな

——後続を送りたいのに人がいない

——將軍は俺を待っているのに、なんで俺はここにいるんだ

ガービーは本当ならばもっと前にアキラに助けを求めることも出来たはずであった。

そうすれば彼の悩みなど、どれほど小さいものなのか。理解することも出来ただろう。アキラだつて、ガービーが迷って教えるを乞えば、あつさり正解を教えていたはずだ。

(將軍への援軍？ならオーバーランド駅の居住地で暇そうにしているミニッツメンを捕まえろ。一丁前に帽子かぶって、レーザーマスクेटぶら下げている奴だったら誰でもいい。)

そいつらを数人用意したら、あんたが食料担いで先頭に立ってスロッグに行け。それで話は終わりだ)

この程度のことを彼は理解できないでいた。

恐らくそれは旧ミニッツメンで、ガービーが指揮する側の視野や勝利への経験不足。ついでに言えば、残念ながら彼自身にセンスもないことも一因であつたのだろう。

その理由として問題はこの時期のミニッツメンへの採用率から推し量ることが出来ると思われる。

人事に関してはガービーはほぼ全てを常に握っていた。

その彼の元を集まるのは、放浪者、どこかの町の居住者、元レイダー、元傭兵に旧ミニッツメンたちである。

この中で元傭兵にはメールマンへの道が生まれ。元レイダーと放浪者には厳しい監視を含めた目がむけられている。居住者ならば、熱意と決意が本物なら、旧ミニッツメンと同じように問題なく新しいミニッツメンに加わる可能性が高い。

最初はレオがそう定めた基準は、いつしかガービーの手でゆっくりと変えられた。

旧ミニッツメンの扱いのことだ。

以前であれば一般人と並んでかつてと同じように熱意と決意をみせることで新しいミニッツメンとなれたのに。これが旧ミニッツメンであることは即、ミニッツメンへの復帰という形に徐々に変更されていったのだ。

ガービーのこうしたひいきは、明らかにロニー・ショーの帰還と無関係ではなかった。

強くなつていく組織の中で自制が聞かなくなり始めた彼は、以前の仲間たちをひとりでも多くミニッツメンへ取り戻したいと考えるようになったってしまったのだ。そして皮肉にもそれをロニーのような老獪な元ミニッツメンは察知して次々と帰還を果たしてきている。

その結果、しわよせはそれ以外の新人希望者の枠に当然ながら影響を及ぼしてしまったのだ。

ミニッツメンとなる基準は自然に高くなって、不合格者が増加し始めた。そしてそのことをガービーも誰も指摘しなかった。

彼が今苦悩する“送り出す兵士がいらない”理由はまさにこれが原因と言える。

訓練生には無駄に高いレベルを求めて半人前と戦力とみなさず。過去の実績を重視してかつての仲間を優先して集めようとする。だがそんな元、仲間たちが求めるのはガービーと同じ正義や平和であるとは限らない……。

そしてそんなことをやっていれば、ガービーの周りに存在する兵士の数はおのずと限られてしまってもしょうがないのだ。

そしてついに本当の悪夢がガービーの前に到着する。

午後、メールマンが出立したとの報告を受けてしばらく後。ご機嫌なロニーが、またまたガービーのところへとやってくる形で。

「今日はなんです、ロニー？」

「いやね、ガービー。あんたなんでここでのんびりしてるのか、あたしにさっぱりわからなくてさ」

「どういうことですか？」

「——どうやら本当に知らないようだね」

一転してロニーの視線が厳しいものに変わった。

ただそれだけでガービーは自分がまだ新兵だった頃の若者の気分になってしまいそうになる。

「あんたの将軍。スロッグから動いたってさ」

「え？ 将軍が、なんですって？」

「だから動いたんだよ。外じゃ、ダイヤモンドシティでも騒ぎになってるよ。ミニッツメンがアトム教と決着付けるってさ」

レオやアキラと知り合ってから長く忘れていた感覚——血が凍り付くというものをガービーは久しぶりに思い出してしまふ。

視線は泳ぎ、聴覚は狂って遠くなる。手は震えても、まだ足腰に力

は入ってくれていた。おかげでうろたえても、みつともない姿をさらさずに済んだ。

「こ、こんなことつ。急いで追わないと!」

「なに馬鹿を言ってるんだい。間に合うわけがないだろう、いつの話だと思ってる」

「いつですか?」

「一昨日、夕刻だそうだ。あそこのグールやその場にいた商人達の前で派手に演説をかまして出立したってさ」

「演説——」

それくらいならガービーでもわかった。

レオは裏でバンカーヒルの商人たちが集まるのを待っていたのだろう。そして彼らに情報を与えるため、派手なパフォーマンスをしてみせた。それはつまり、ガービーがこのままいくつもりがないと、判断したから。

「お、俺は。なんてことをつ」

「自分を慰めたいならあたしが出ていったあとで勝手にやってくれ」

「ロニー……」

「ガービー、しっかりするんだ。あなたはミニッツメンの最後の希望、伝説の男なんだよ」

「しかしどうしたら——俺は將軍を」

「まだ大丈夫さ!」

ガービーの目も耳も、もはやロニーにしか向いていなかった。

そもそもは彼女、まだミニッツメンには加わってはいないはずなのに、である。なのに自分をミニッツメンのように語る彼女にガービーは何も言えないでいる。

「あんたはちよいとしくじってる。だがまだまだ挽回できないわけじゃないだろ」

「そんな方法、あるとでも?」

「あるさ!あたしに任せな。あたしのバラモンと若いのを数人つけとくれ、もちろん背囊には今ある銃や弾丸。食料を詰めてね」

「どういうことですか?」

「今からじゃどうあがいても戦闘には間に合わないよ。でもね、一日とちよつとくらいならまだ手遅れじゃない。」

あたしをあなたの名代つてことにするんだ。それで將軍とやらのところに送り出す」

「でも、戦闘は終わってしまうはず」

「そうかもね。でも違うかもしれない。とにかく重要なのは、あなたが將軍を支えたっていう事実さ。」

あたしがそれをやってやるよ。長期戦をにらんで、十分な物資を運び込むってわけさ。それであんたのしくじりも、そんなにひどいものにはならないはずだよ」

「そんなことか？」

「そうさー。あんたはちよつと考え違いをしてただけさ。アトム教のクソどもと長期戦になるかもっていうね。」

だから兵士が必要だったし、物資は用意していた。ちよつとした誤算を認めて、味方のために補給部隊を先行させた」

それでこの問題は解決だよ。

ロニーのこの言葉は何よりも正しいものにガービーの耳には聞こえた。

Complete and total Victory (完全なる勝利)

連邦がミニッツメンとアトム教との対立で湧いている中。

ケイトとマクレディ、そしてグールのトミーは平和で退屈な旅を続けていている。

当初、トミーを連れて真つすぐ西へ。コベナントでアキラと合流。話し合いの結果、スターライト・ドライブ・インへと向かう手はずになつていたが。トミーの要望もあり、そうはならなかった。

時間的にこの時、彼らが真つすぐ西に向かつていれば。強行軍でスロッグに向かうレオと出会う可能性が高い。またそうなれば——少しはその後の展開にも影響はあつたかもしれない。

しかし、とにかく彼らの旅は続き。そしてついに目的地へ到着する日が来た。

「あれは、町か。ケイト」

「そう、みたいだね」

「……」

——スターライト・ドライブイン・シアター

彼らから見て北に位置するそれは、記憶の中では荒野に残る残骸。ところがしばらく見ない間に大きく様変わりしていた。

荒地地にはいつのまにか鉄製の建物が並び、そこには人影も見えない。

「ガービーがしくじってから廃墟のままじゃ、ない。マクレディ？」

「俺が知るかよ、クソツ」

ケイトにそう返事をしながらマクレディは——俺は、油断なく周囲を確認する。

まったく理解を越えた現実が目の前にあつた。

この連邦で。いや、この世界で居住地をゼロから立ち上げるといふのは簡単な事ではないはずだった。少なくとも、キャピタルでもそのルールは有効だった。「誰かがどこかに居住地を作ろうとしている」

と聞けば、しばらくすると決まって「ああ、あれはダメになったよ」といわれるものだ。

なのにアイツは。俺のボスは俺達の前に居ながらちよいと自分の手を伸ばし、声をかけただけで。こんなにも簡単にあのガービーですら失敗したことをやってしまうものなのか。

正直言つて、背筋に冷たいものを感じる。

「な、なあ。その人は——俺なんかここに呼び出してどうしたいんだ？」

「……マクレデイ？」

「いちいち俺に聞くな！俺だつて知らねーよ。お前もそうだろう？」

「それじゃ——その人を。アキラだつたよな、俺はいつまで待たされるんだ？」

これまでになく不安そうなトミーに何も答えられない2人は、とりあえず目的地に近づくことだけ決める。

近づいてみると、居住地内では走り回る幼い子供たち。その隣で木材に金づちを振るうまだ若い彼らの父親らしい若者を見つける。

相手はケイト達を見て、グールのトミーがいるのを確認したのか。顔をしかめつつ、立ち上がった。

無理もない話だが、こっちは相手を。相手はこっちを怪しむ。

そして手探りで互いの素性を探りあう会話を続けていると……居住地の中からドシドシと足音を立てて近づいてくる存在がいた。

「ニンゲン、敵ハドコダ？ストロング、トテモ戦イタイ！——ケイト？」

「誰かと思つたら緑の巨人じゃないのさア！ひさしぶり、あんた元気にしてた？」

人間のやさしさのミルク。

それを求めて仲間たちと決別し、レオ達と共にボストンコモンを歩いたあのスーパーミュータントがそこにいた。

ボストンコモンを歩いた後、レオはしばらくストロングを連れてミッツメンを率いた時期が短い間あるにはあった。

だが、結論から言うとこれがあまりうまくはいかなかったのだ。ただでさえスーパーミュータントという危険な存在である上、ストロングの言動はいちいちどこか不穏な響きがある上、強い闘争心があっけらかんと見せびらかすせいで彼に怯える人々がいつこうに減ることはなかった。

そこで仕方なく——本当に仕方なく、ミニッツメンは番犬ならぬ。番人としてこの廃墟となっていた土地にストロングを送り込むことに決めたのだ。

それまでは申し訳程度にパトロール中のミニッツメンやメールマンが入るようにして。ここにいるストロングを訪れる人たちが短い時間、相手をするだけで平和が保たれていた。そう聞いていた。

つまりここには彼しかいないはず、マクレディたちはずっとそう考えていたのだ。

「ありやなんだい。驚いたな」

「まあな。でもあんたが本当に驚くのはこの後かもしれないぜ」

ケイトと明らかにガツカリしているスーパーミュータントが親しげに話しているのをトミーは見て驚いていたが。おそらくこのグループが次に会う奴と話せば、さらに驚かされるに違いない。

まあ——これについては詳しく説明しなくてもいい事だよな。



キングスポート灯台から500メートル。

私はジミーから受け取った彼のマスクットについているリコンスコープを覗き見る。

「……灯台までは一本の坂道。電磁式のゲート、ターレットは7台」
「なかなかの防衛体制だな」

パラディン・ダンスの感想はいつものように面白くない。
「將軍、でしたら砂浜から近づきますか？」

「ダメだ。海岸で接近を気付かれたらそこで動けなくなる。上からたたかれ、全滅だ」

「だそうだ、少年。やはりここは——」

——正面突破しかない

結論は出た。足元のカールは後ろ足で耳を搔く。

敵に気づかれることなく索敵は出来た。私はジミーにマスケツトを返すと、ダンスらと共に仲間の元へ戻っていく。

ミニッツメンの調査によって東海岸、クレーターハウスを中心に活動するアトム教の存在はわかっていた。

アトム教、なるものは聞いたことがなかったが。どうやら全員が平和と平穏を愛する人々ではなく。武器を手に略奪、襲撃、誘拐を繰り返し。北に位置するセイラムを狙ってるのか、その周辺に手を伸ばしているという話だった。

キングスポート灯台はそんな彼らの前線基地といえる。

こことスロッグとフィンチ家の農園の間にある空白地帯にはレイダー、ガンナー、スーパーミュータントらアポミネーションがしよつちゆう騒ぎを起こし。

ミニッツメンが東部の居住地を開いていくことになれば、ここは間違いなく最も頭を悩ませる場所になると考えられていた。

そんな場所で戦争しようというのだ。

攻める側としては、余計な横やりが入らないよう。短時間で決着をつけねばならない。兵力に余裕がないことを考えると、簡単な作戦ではないが——私には頼れる友人たちがいる。

あの“小さな宝物”の小さな会議が終わってから数時間後。

クロダはセイラムの入り口を見下ろす建物の屋上にいた。最新情報によればすでにこの時、ミニッツメンは灯台に迫っているという。

あとはいつ、どうやって戦闘が始まるか——。

背後に気配を感じ、クロダは一瞥する。そこには困惑した表情のキジマがいた。

「……でなにをしてる」

「キジマ……」

「お前は俺達に誓った。なのにまだここにいる——まさか何かするつもりなのか？」

「当然だ」

クロダは平然と問いかけに首肯する。

だがそれこそこの男の本質なのだ。やると言えば絶対にやる、だからこそサカモトはあの会議で、こいつに「やらない」と言わせることにこだわったのだ。

「嘘をつくのか？お前が？」

「違う。何を言い出す」

「ならっ!？」

「——俺は確かに約束した。今回は、あきらめる。アキラは、殺さない。暗殺も中止だ。しかしこの機会を利用しないとは言わなかった」

「クロダ。それは屁理屈だ」

「どうだろうな」

「俺がここにいるということは、サカモトや観測者も恐らくお前がどこにいるのか。何をしようとしているのか見ているぞ」

「そうだろうな。わかってる」

「——おれはここで見ているぞ。お前が何をするか」

「好きにしろ。俺は構わない」

クロダは再び正面を向く。

彼の視線の先にあるのは、キングスポート灯台か。それとも別の場所か。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

集まってもらった全員の顔を今一度確かめる。

メールマンの訓練生たち、パイパー、スロッグの住人であるグール、コズワース、エイダ、カール。そしてジミーとパラディン・ダンス。

これはミニッツメンの正規軍だったはずなのに、随分と個性的な顔が揃ってしまった。だが、それだけに彼らを全員。無事に帰してやりたい——それが可能かどうかは、もうすぐわかる。

「それでは作戦を説明する。まず、相手の装備について」

そういうと私はパラディン・ダンスに視線で合図を出す。

「皆、こちらを見てくれ。アトム教徒といえはこのガンマ線銃だが、あそこでは数名。レーザー銃を装備しているのを確認した。」

恐らくそういうのは元レイダー、もしくは傭兵か何かだったのだろう。戦闘が始まれば、指揮官の役割も持つているはずだ。周囲の確認もいいが、うかつに頭を出さないように注意しろ。戦い馴れた連中はそういうのをカモにする」

全員、緊張しているのが分かる。

私は努めて明るい声で、続けて作戦の段取りを説明する。

難しいことを頼むつもりはないが、それでもこれから話す約束事は守ってもらわねばならない。それがひいては生き残ること、勝利することを難しくする。

「灯台には一本道。これだと正面突破で行くしかない。」

だから作戦を用意した。勝利を手にするにはあの灯台の前にあるゲートを突破すること。勝つ方法はこちらで考えたから、あとはみんなで勇気をもって私の指示に従ってほしい。それでは説明する——」

——午後13時42分、晴天。

海は穏やかで、灯台のアトム教徒たちは静かな午後を迎えていた。

が、いきなりゲートわきから爆発音が連続する！

「私が第1狙撃ポイントから壁沿いのターレットの攻撃を開始する。これを合図に、灯台に向かう一本道に向かって歩兵チームがジミーを先頭に大声で騒ぎながら進んでくれ。敵は彼を見ればミニッツメンだとすぐに判断するはず——警報が鳴り響くだろう」

灯台から500メートルほどの手前の草むらからジミーを先頭にパイパー、訓練生、グール達が果敢に飛び出していく。押し寄せてこようとする敵の存在を感知したのだろう、灯台は不気味なサイレン音を響かせた。

「この距離なら、相手の武器をそれほど恐れる必要はないが。かといつて当たればやはり怪我をするだろう。それでも頭を低くして、狙い撃ちされないように注意だけはしてほしい。大丈夫、それほど長くはかからない。すぐに突入部隊が登場する」

灯台がサイレンを鳴り響かせると、確認したパラディン・ダンスは行動開始と草むらから立ち上がる。

続いて文字通りトカゲのように地面に張いつくばっていたエイダが。距離を取ってコズワースも準備を開始する。

「よし、行くぞ。諸君」

「了解です」「了解」

最新のT-60パワーアーマーに続き、凶暴な4脚を備えたコズワース。

電子音を響かせ、エイダはステルスフィールドを展開する。

「ダンスたち突入部隊は別方向から一気にゲートの攻略にいつてもらう。歩兵チームは最初のポイントである灯台手前、100メートルほどで一旦停止。次の指示が出るまではそこで身を隠して頑張つてもらう。ただし、ジミーはダンスらが突入するのを確認したら、第2狙撃ポイントへ。私は交代で前線に突出する」

ゲートに向かう一本道に足音高くコズワースとダンスが駆け上り始めると、崖の上からは狂ったようにガンマ弾やレーザーが彼らに降り注がれていく。しかし重装甲に身を包む彼らの足を止めることはできない

「それどころか――」。

「ダンス、実はエイダから面白いものを提供されたんだ。君に使って欲しい」

「これはこれは。民兵は面白いものを持っている」

答えるダンスの口元は緩むが、反対に目は輝いていた。

エイダが差し出してきたのはガトリングガン。かの発明家リチャード・ジョーダン・ガトリングが量産した最初期の機関銃である。なぜエイダがこれを持っているのかというと、少し説明が必要となるだろう。

ミニッツメンがT-45パワーアーマーの回収にひと段落つくと、これらに持たせる武器について、問題となった。すぐに思いつくのはB・O・Sのナイトたちを真似してミニガンを集めることだったが。ひとつ市場から手に入れるにしても値段は高いし、なにより数を揃えにくいという問題もあった。

そこでアキラという私の危なっかしい若い友人が登場する。

ジョン・ハンコック市長の有名な誕生秘話を本人から自慢話として何度も繰り返し聞きかされていた彼は、バンカーヒルの傭兵団を雇い、州議事堂からこれを回収させてきた。別に本人はあるとわかったわけではないらしいが、傭兵団は「つかえるもの」としてそれを回収した。アキラはそれをミニガンでも使用する5mm弾を発射できるように手を加える。

「連射速度はミニガンと比べると——」

「ああ、わかっている」

「骨董品かもしれないが。うまく使ってほしい」

ダンスの指がガトリングの表面をなぞる。新しいのに古い、浮かべる笑みは夢心地のそれだった。

パラディン・ダンスは崖の上から身を乗り出すようにして攻撃してくる相手に対し、引き金の代わりであるハンドルを握りしめると。それを回してゆつくりと砲身を回転させていく。

ドカツ、ドカツ、ドカツ、ドカツ！

一発一発が重々しく、腹の底に響く衝撃。

そこから発射された弾丸は簡単に頭上の岩と肉を砕き、さらに飛び散る破片が信徒たちの皮膚を裂く。悲鳴、痛み、苦しむ声。思わぬ侵入者からの反撃に、先程まで激しかった攻撃の手がわずかに緩む。

「崖の上から攻撃してくる相手はダンスが引き受ける。ゲートはコズワース、エイダ。君たちにやってもらおう」

自作とはいえ鋼鉄の門は電磁錠式に改造してあった——だからこそアトム教徒らも頼りにしている。

これまで多くの襲撃者たちはこの門にとりつくことはあっても、破ることは出来なかった。門の前でレイダーはガンマ弾の放射線によつて崩れ落ち、死の恐怖に駆られて背中を見せて逃げ出し。スーパーミュータントは門を殴りつけはしたものの、門の中に入ることは出来なかった。

しかし今回は違った。ステルスフィールドを展開し、一足先に門に体当たりしていくエイダの一撃は、あっさりと扉を変形させ。頑強な壁に初めて大きなへこみを作ってしまう。

さらにそこにコズワースが入ってきて——。

最後にスコープ越しに計画が予定通りに進んでいることを確認すると、私は狙撃銃をその場に放つて走り出した。

続いて飛び出してきたカールは、私を抜くと一步前を走る。

最初の難関に成功した。計画は想定通り、次の段階へ進む。

「ジミー、君が第2狙撃ポイントに到着することはゲート攻略に必要な事だ。可能な限り素早く位置にたどり着き、素早くゲートの敵を排除してもらわないといけない。早ければ早いほどいいし、遅くなればそれだけこちらの有利さは失われてしまう」

兵士達からひとり離れた後、崖に飛びつくと狙撃ポイントの位置まで途中何度か滑り落ちかけた。それでもなんとか怪我をすることなくたどり着くことが出来たのは上出来だ。灯台が良く見えるようにと体を地面へと放り出し、リコンスコープを早速ゲートに向ける。

手にするのは自慢のレーザーマスケット、ミニッツメンの証。

スウウ……。

息を止め、狙いを定め——が、発射されない。

(俺の馬鹿！エネルギーを充填させてないぞ)

この若きミニッツメンは焦りすぎていた。レーザーマスケットは撃つ前に必ずハンドルを回してエネルギーを充填させなくてはいけなかった。こんな基本を忘れてしまっうなんて！

自分への怒りと悔しさをかみしめながら、しかしジミーはそれでも自分の役目を果たそうとする。

崖の上から赤いレーザーが灯台めがけて飛んでいく。

「正面突破は門を抑えることがとにかく重要になる。コズワース、パラディン・ダンス、エイダ。君たちにやってもらえなければ、完全な勝利はない。進むんだ、もし足が止まって撤退するにしてもその時は——」

「私は兵士。戦場で何が起きるのかは知っている」

「ダンス……」

「大丈夫だ、レオ。いや、將軍閣下。私は君を信じている。君が勝利すると、だからここにいる」

エルダーにはとても聞かせられない言葉だが、それがダンスの嘘偽りのない本心だった——。

キングポート灯台に作られたゲートの攻防はすでに佳境に入りつつあった。

おそらくだが、電磁錠でなければ。最初のエイダの体当たりであっさり勝負はついていただろう。

しかし攻撃はそれでは終わらない。

エイダは頭部と腕から発射されるレーザーでゲート上部から攻撃してくるアトム教徒たちをけん制しつつ。彼女の危険な尻尾にみえる凶暴な腕を扉に叩きつけ、掴んでは引き裂こうとしている。

そこにコズワースが到着、その凶暴な4脚を振り上げてから一気に振り下ろす。扉は変形を始め、小さくない穴が出来る。吸着して離れまいとする左右の鋼鉄の壁は悲鳴を上げ続けている。亀裂はもう隠

せない。

だが当然なのだ。

そもそも最強の力を望むエイダのためにアキラが用意した危険な体がここには揃っている。

セントリーロボットに負けない高火力、セントリーロボットに負けない体格、セントリーロボットに負けない作戦能力を有する存在。上半身、下半身と今は別れてしまっただけはいるが。それは間違いなくここにあって、2台は自分達の力を振り絞っている。

それを押し止めるのに電磁錠でも普通の門では役不足だ。

さらにさらに「手伝おう」と声が欠けられ、T-60パワーアーマーが門にとりつく。

運命の時が訪れようとしていた。鋼鉄の悲鳴は絶叫へとボルテージを上げていく――。

紙を破くようにだらりとだらしなく引き裂かれた傷口に、コズワースは容赦なく足を突き入れて広げる。

それが消えると。慌てて穴をふさがんと集まろうとした信徒たちの前に、穴から首を突っ込んできたエイダのアイ・レーザーが出迎えた。

信仰に支えられるアトム教徒たちの士気こそ変わらなかったが、彼らの持っていた強みはこの瞬間に消えた。

ダンスはゲート内に入り込むと、ガトリングを四方に向けて発射して牽制を始める。

その間にロボットたちは信じられない俊敏さを見せ、門の両側にある空間を埋めるために積み上げられたガラクタをよじ登って越えてくる。

「あれだーアレを出せー急げえっ」

アトム教の中から悲鳴に似た指示が飛ぶ。

そしてちょうど門の上に立ったエイダは存在を確認する。起動音を響かせて進む巨体のロボット。

「――!?!」

「おい、なんだ!?!」

「セントリー・ボットです。私にお任せを」

答えながらエイダのステルスフィールドが再び展開する。

しかし——おかしな話ではあるが——このロボットの声には歓喜が、隠しきれぬ闘争心があらわになっていたのではないだろうか。ステルス装置は巨体を隠しても、ひとつ目のまがまがしい赤い輝きは隠せていない。

「ロボットにはロボットだ！パワーアーマーの相手もさせろ！」

建物の陰から必死にガンマ弾を発射する教徒たちの横をゆっくりと黒のボディは追い抜いていく——かに思えた。

「ホアン ト、ハウシ 二、ツトギャ……マッ」

今度は誰の目にもわかった。ステルス装置を作動し、エイダは門から飛び降りると足音を隠すことなく再び先ほどのようにガルパーを思わせる突進からの一撃をセントリー・ボットにくらわせていく。

さらに敵を破壊する喜びの声を上げ、相手の巨体に絡みつくようにしてよじ登ると。両腕にステルスブレードを装着して振りかざす。

その迫力、その恐怖！

自分達の隣にいきなりデスクローか、ベヒモスでも現れたのではないかとというスパーファイトが開始され。さすがの信徒たちもシヨックから一瞬だけ身動きができなくなる。

そこにきて、セントリーボットは早々にこの襲ってくる凶悪な敵を抑え込めないと判断したか。自爆を構わずに全力攻撃（フルオープンアタック）を開始しようとしていた。

パイパー・ライトは自分が決して運のいい女ではないことを知っていたが。さすがに今回は失敗だったかも、などと訓練生のひとりと隠れる大木の陰でギヤーギヤーさげびながらちよっぴり思っていた。

戦いが始まる前、ブルーに何度も確認されたのだ「本当に参加するのかい」と。

自分にだけそう言ってくれる彼と、彼にいい顔がしたくて思わず——もちろん、とあまり役に立っていない胸板を強めに叩いてしまった。

前線に付き合えばきつとなにか違う発見があるかも、と良い面だけを思ったが。正直、アドレナリンが噴出するのをやめてくれない。何も考えられない。これが戦争なのか、思い知っている。

そこにきてあのゲート前での大騒ぎ！

恐怖、不安、それを吹き飛ばそうと繰り返し叫ぶ。なんかもうよくわからなくさせている。

いきなり耳元で獣特有の荒い息遣いが聞こえた。

思わず体の向きを正反対にひっくり返ししながら、銃口を向けるが――そこには見慣れた犬が「なにビビってんだ」と余裕を見せたいのか、くるくると円を描いて小走りしていた。

「ゴ、ゴメン」

なんてことだ。パイパーは自分が思わず犬に謝ってしまったことにショックを受けている。

でも続いて天国のような瞬間が来る。全力疾走で追いついてきたブルーがパイパーのそばまでできてくれた。

周りは戦場。男は鋭い目、荒い息を吐き、自分のすぐそばにいる。そしてこっちは鼓動が無駄に早鐘を打ち、興奮もしてるのかも。こんな状況にあるのに妙な妄想が刺激されているのはつきりと感じる。ああそうだ、馬鹿を言うな。場所をわきまえろ、パイパー・ライト

！

「パイパー」

「ブ、ブルー」

「ダンス達が門を破った。終わらせよう」

そうだ、終わらせよう！

なにを？

追いついた。皆の横を抜き去りながら声をかけて通り過ぎると、私は一番心配だったパイパーの元へたどり着く。

やはりこうした戦場の空気はなれていないのだろう。少し混乱しているように見えたが、彼女の持つ強さはまだまだいけるようにも見えただので、とりあえず安心した。

(やるぞ、ハッ!)からだ!)

コートとポケットから私は薬剤を取り出した。
バファウトとサイコと呼ばれる混ぜ物、サイコバフ。

残念ながら戦場に立つまでもなく自分の力についてはすでに把握している。Vaultの冷凍技術から瞬発力こそ取り戻せているが、スタミナや馬力に関しては今でも見る影もなくなっている。だからこそ、こういうものが必要になる。

それを心臓に近い場所——左の脇の下に針を突き立てる。

地獄のような戦場で学んだ技術のひとつだ。ヤバイ薬を効果的に使うなら心臓に近いところにヤレ。しかし今の私の体ではそれには耐えられないだろうから——こうやるしかない。

私のやることかと思いきもないものだったようで、パイパーの目が丸くなつて言葉を失っていた。

珍しい事だ。

私は立ち上がると声を上げる。

「門は破った!仕上げの時間だ!声を上げろ、奴らに押し寄せるぞ! 続けええ!!」

走り出せばもう何も考えない。

敵を見つけ、素早く処理する。それだけ。たったそれだけだ。

ジミーは何を言っているかまではわからなかったが、その声を聞けば理解できた。

彼がミニッツメンになってから連れまわされた戦いで何度も見た光景。将軍が最後の攻撃を開始する時間だ。つまり正念場、勝利は目前にあるということ。

それまで3発撃つては一発当てる、をなんとか目指していたジミーの体に熱いものが湧き上がった。

さらに集中しろ。さらに多くの敵を倒せ。

見たわけではないが、ライフルを構えた視覚のの外側で兵士達が門に殺到していくのを感じた気がした。

抵抗を続けるアトム教徒たちの中から獲物を探していると、ジミー

の意識の隅に不快感のような雑音が入ってくる。

——なんだろう？

本当ならばリズムよく当たろうが当たるまいが、発射しなくてはいけなかったが。その時間をあえて雑音の正体を探ることに集中する。

「っ!？」

長距離リコンスコープとはいえ、遠景にあるすべてを詳細に映すわけではないが。かつて商人だったジミーにはわかった。

海岸から駆け上ってくる顔色の悪い女——よたよたして頼りないが。だが目には負けるものかというはつきりとした決意を見る。その手に握られていたものは——ヌカ・ランチャー。

小型核弾頭をカタパルトでもって射出する最悪の兵器。

あんなものをつかわれたらどうなるか？

奴らはきつと全滅するだろう。しかしこちらもきつと——。

チクショウ！知らずに声を上げ緊張が走る。同時にジミーは問答無用で銃爪を引いた。

赤い線は女の右足の内側に入っていたかに見えたが、致命傷ではなかったようだ。まだ足を引きずっている、動いている。

「畜生、畜生、畜生っ」

声を上げながら自分を落ち着かせつつ、マスキットに次々とフュージョンセルを放り込んでレバーを回す。その回数、実に6回。レーザーマスキットで可能な最大チャージ。

それを構えながら大きく息を吸い、吐き出す。

將軍はミニッツメンに勝利をもたらしてくれる。だから兵士は戦う。

スコープの中の女が壮絶な笑みを浮かべつつ、立ち止まるとランチャーをフラフラしながら構えるのを見る。

——まだだ。

狙いでもつけているのだろうか。そんな武器では必要ないというのに。

この間もジミーは我慢を続け。集中力を高めていく——。時を刻む針が、急に遅くなっていくのを感じる。このままなら全て

が停止してくれるんじゃないだろうか、そんな気さえしてくる。

だがジミーはじつとスコープを覗き続けていた。狙っている女の姿を捕らえていた。

女の表情が変わった、と思った。

口を開ける。最後の捨て台詞だろうか？ジミーは彼女がこちらを「クソ野郎」と叫ぼうとしているんだと思った。

するとごく自然に指が動いてくれた。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

—— 負けた

夜の訪れたセイラムの屋上で、クロダはついうつむくとため息をついた。

南の方角にあった戦闘の気配が完全に消滅したと感じていた。一晩も持たずに決着、あまりにも短時間で戦いは終わった。どちらが勝ったのか、ここからでは予想するしかないがなぜだろう。アトム教徒の守備側が勝ったとはどうしても思えない。

「やはり勝てなかったようだ、クロダ」

「……」

「ヤツ——フランク・J・パターソン Jrは記録によると元は優秀な軍人だったそうだ。こうなることもわかっていただろう」

「キジマ、そんなことは言われなくてもよくわかっている」

ここにきて強がり？と思ったが、どうやら違うらしい。虚勢というもの、この男には似合わない言葉だからだ。

「あの会議でサカモトが止め、俺は約束を守ると誓ってなかったとしても。この結末に大きな変更はなかっただろう」

「謙虚だな」

「アトム教は負ける、それはほとんど決定していたといっている。だがそれでも——」

なんとかなるのではないか？そんな期待はあったのだ。ミニッツメンにも弱点はあった、かき集められた寡兵ばかり。ミニッツメンで

は唯一忠実である右腕への失望。状況の変化に対応しきれぬ組織の硬直。あげれば今ならいくつもまだ出せるだろう。

だが無意味だ。

何という実力、なんとという強運。フランク・J・パターソン Jr。
アキラは規格外の相棒を見つけ出してきたというわけだ。

「変更はなかった？本当にそうか？」

「ああ……ただひとつ。アキラがここに来ていれば、直接俺が会いに行く。変更はそれだけだった」

「——そうか」

とはいえもはや戦いは終わった。終わってしまったのだ。

アトム教徒など、どうとなっても知ったことではないが。コンドウを倒した男は、またしてもこちらの思惑を超えて見せたという事実だけ変わらずに残った。きつと奴は今夜は勝利の美酒を交わし、美女の腰にでも手を回しているのだろうか。

(そして我々は何もできないまま、去っていかねばならないのか?)

負けたわけではない。決して負けたわけではないが、この湧き上がる悔しさをどうしたらいい? キジマは苦しそうに顔を歪めた。

キングスポート灯台、陥落。

この最悪のニュースは本拠地であるクレーターハウスからみた灯台の方角からサイレン音が消え、不吉な黒煙が上り続けているというのに誰ひとりとしてここに経過報告にこないことからでた結論であった。

——負けたんだ。

わずか3時間。それが彼らにとっては砦であったはずの灯台が、決着まで要した時間だった。

クレーターハウスに残っていたのは導師の信頼を得たか、お気に入り弟子たちばかりであったせいだろうか。彼らは全員、本能的のそのことを理解してしまった。

このクレーターハウスはアトム信者にとっては聖地だが、一般人から見たらただの放射能に汚染された入り江でしかない。

これまでならば例え灯台で敗れたとしても、こんな汚染地域にやってきてまでアトム信者たちを根絶やしにするなんて考える気違いは誰もいなかった。しかし今回は少しだけ違う。

事件は全て信者たちの側から起こされ、暗殺者まで送り込まれた將軍とやらが自ら率いてここまでやってきたのだ。

その將軍とやらが憎しみをたぎらせてここまで来ないと誰が保証してくれる？

「導師様——」

「安心するのだ、弟子よ。我らはこの聖地で、いまなおアトムの輝きの中で守られている。それを忘れてはいけない」

「はい」

「灯台までは届かなかったかもしれないが。ここは違う——ミニッツメン、フン！」

どうせ奴ら、あの灯台を手に入れたことで満足し。ここまで来ることを恐れて引き返すことも考えられる」

「そう、なのででしょうか？」

「見ているといい。明日には斥候を出そう。奴らの浮かれた様子を探らせる、我らのアトムの輝きをあの灯台に取り戻すために」

「アトムの輝きは偉大なり……」

不安を必死に払いのけようとする弟子の肩を、うんうんと自信たっぷりにうなずきつつ導師は口にする。「今夜の警備はしっかりとやるのだぞ」と。まだまだ序盤、本当の戦いはまだ終わってはいないので。それを知っているのは、ここにいる自分達だけ。



——戦いはまだ終わってはいなかった。

深夜、クレーターハウスの周りを犬のようにグルグルと見回っている信徒の姿を小さなスクリーンで確認していた。

リコンスコープは暗視装置のようにはつきりと闇の中に何があるのかを映し出してくれるわけではないが。カメラを通して動くもの

を捉えるということに優れたこのシステムは、視認するよりもはるかにハッキリと闇の中に動く存在を見つけ出してくれた。

速足で周囲に目をやり、ボロボロの衣服に似合わぬ。手にしていたのはヌカ・ランチャー。

あまりにも危険なその装備を彼ひとりだけがもっているわけではない。

さきほどから何人もの見張りが、同じ装備で目の前を通り過ぎていったのを確認していた。

何かがクレーターハウスに近づいた、なにか見たと思ったたら迷わずそれを撃つことに彼らにためらいはないだろう。それは同時に、彼らはまだこの戦いに負けたとは考えていないという事がはつきりと読めた。

「――随分と物騒な夜回りだな」

「……」

「あれでは子ネズミが横切るだけで、この辺りの地形を変えてしまえばいいぞうだ」

「それが冗談ではなく真実だ、ってところが問題だ。ダンス」

パワーアーマーで私が確認していた映像を受け取って見ていたダンスに暗い声で私は返す。

ジミーから借りてきた彼のレーザーマスキットを構えるのをやめた。しばらくすれば次の誰かがまた目の前を横切っていくのだろう。

キングスポート灯台を手に入れた。

ミニッツメンは勝利し、大きな犠牲も出さずに戦闘を終わらせることが出来た。しかし反対に、あそこを守っていたアトム教徒は全滅した。

彼らは最後まで抵抗をやめないばかりか、撤退することすら拒否した。相手の指揮官は最後の最後で、自分たち全員を殉教者にすることに決めたのだろう。

「お前がここに2人だけで、と言った時はなぜ、と思ったが。正解だったな」

「彼らの聖地に兵士が近づいてきたとわかったら――」

「使うだろうな。あの兵器を」

私はうなづく。

「アトム教はすでに抵抗する力はない。そう、思っていたんだが」
違う、本当はそう思いたかったのだ。

彼らは戦えないなら、これ以上は必要ない。そう考えておきたかった。

だが期待は碎かれた——戦場にある冷徹な倫理がそれを知らせている。

「悩んでいるのか？お前らしくもない」

「——ダンス」

「民兵と言っても、今のお前は司令官だ。その判断の難しさに悩むのは当然だろうとは思う。同情も出来る」

「この戦いはまだ終われない。終わらなかつた」

ジミーの証言が、こうなってしまう可能性を生み出した。

放射能に特に思い入れのある集団である。ひとりがそんなものを持ち出したとあれば、他にもあるかもしれない。それはつまり、彼らの鋭い爪も歯も、まだ残っていることを証明する。

私はよほど深刻な表情をしていたのか、気を使ってくれるダンスは「それで、どうする？」と聞いてくる。

私は懐からフレアガンを取り出して弾丸を込めていく——。

「ゴズワース、エイダ。頼むぞ」

夜空にひゆるひゆると音が響き、炸裂音と共にパツと花火が散つた。

クレーターハウスの人々はこの音にびっくりして空を仰ぐが、そこにはもうきらきらと散つて消えていく光があるだけだった。

花が咲くように輝き、飛び散った火は燻ることなく消えていく。花火とはそういうものだ。

それから数十秒後、いきなり大地を轟音が鳴り響く。

クレーターハウスの方角に、不気味なキノコ雲がいくつもいくつも立ち昇って——。

最後の作戦に必要なだったものはたった一発のフレア弾。

キングスポート灯台で接收したヌカ・ランチャーはそのままレオとコズワースに回収され。クレーターハウスへの最適な爆撃ポイントへと送り込まれていた。

本当であればミニッツメンに向けられるはずだったその弾頭は、彼らの聖地のど真ん中へと落下。結果はこの通り。深夜の連邦を生み出された衝撃音が地表を走る。

夜の闇の中、迫りくる敵に怯えていたアトム教は消える。

同時にこの惨劇をもって、ようやく戦争は終わりを告げたのである。



ロニー・ショーと彼女の若い兵士達がバラモンに積んだ荷物と共にキングスポート灯台に到着したのは、戦闘終結から数日後の事であった。

「勝ったのかい。やるじゃないか、あの將軍」

この時、ロニーはまだどのような形で戦闘が終わったのかわかっていなかった。

それでもすでに金錠で釘をうつ、再建の雰囲気ただよう居住地が自分達を待っているとはあまり考えていなかった。

「きつと大勝利にご機嫌なんだろうね。やれやれ、帰りたくなってきたよ」

少し冗談めかす。

老婆がここまで来るのにも簡単ではなかったのだ。

すでに將軍は兵士を連れてスロッグを発った、という情報は入ってはいたが。

その後、なにかないかとここに来る前にわざわざスロッグへ立ち寄っていた。なのにそこでは何もないと言われ。グール共はなぜかロニーたちに「今頃何しに来たんだ？」という目を向けてきて、楽しくない交流を味わってしまった。

そこから灯台に向かいつつ、アンテナを張ってはみたものの。まっ

たくなにもないときた。

それでも用心深く斥候を出しながら進んだ結果、すでに平穩を取り戻した灯台を立った今。確認したところだ。

自分達をミニッツメンだと告げながら近づくと、灯台のそばの壊れかけの住宅から若いミニッツメンがひとり飛び出してくる。

てつきりレオが不満そうな顔で出てくると思ってたせいでロニーは若者に「あんたは？」と聞いてしまった。

相手は——ジミーはそれを聞いてむっとした顔で逆にロニーに聞いてくる。

「あなたこそ誰ですか？」

「ミニッツメンさ。みりゃわかるだろ、後詰できたんだ」

「……随分とのんびりとした到着ですね。戦闘はもう何日も前に終わりましたよ」

「そのようだね。つまり勝ったわけだろ？よかったさ」

言いながらロニーは周囲を窺うが、なにかおかしいと気が付き始めた。

この灯台にいるのはこのジミーと3人のグールしかいないように見える——將軍はどこだ？

「それより將軍はどこだい？勝利のお祝いを述べたいんだよ」

「將軍は、いません」

「はあっ!？」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまう。

「なんだい、そりゃ」

「いえ、むしろあなたが何を言ってるんです？將軍はすでに次の任務に就かれました」

同時にここでするべきことをジミーに指示し。必要なことは訓練生たちを使ってすでにオーバーランド駅のガービーへ知らせを向かわせていた。

「それじゃ、ここに居るのはあんたらだけかい？」

「そうです」

「まあ、いいや……ここは悪くないよね。皆、喜ぶさ」

ロニーにしてみればジミーを褒めたつもりだったのだが。この言葉でジミーは完璧にこの老婆を嫌うことを決めたようだった。

「お言葉ですが。この居住地の使い方については將軍はすでに決定されました」

「へえ」

「ここはこちらのグールの方々が中心になって運営するように、と」「なんだって？」

これにロニーの機嫌が悪くなる。

別にグールを差別したりはしないつもりだが。連中は平和な居住地にとって犯罪の温床となる肥料みたいな存在だ。

そこにいるってだけで、問題が増えていく。

ガービーはそんなのにグレーガーデンだのスロッグだのを用意してやっているというのに。今度は手に入れたばかりのここをグールにくれてやると？

この——ついに海にまで到達した最初の居住地を!?

「そいつは冗談だよね？笑えないよ！」

「いえ、そう指示を受けてます。命令は実行されます」

「冗談じゃないだろ！あたしら血を流して手に入れたここをなんでよりに——つ!？」

そこまで感情的な言葉を口にしてロニーは慌てて閉じる。だが、もう遅かった。

「誰が、血を流したのか。それは彼らです、サー」

ジミーそう言いながら後ろで困り顔のグール達を示す。

続いて——。

「そして戦ったのは將軍と我々です、サー」

ミニッツメンは戦って勝利した。

だがそこには「ガービーのミニッツメン」はいなかった。

まるでそう言っているような言い方だった。

「ああ、そうだったね。そうだった」

ロニーは視線を外すと、自分達はバラモンに物資を詰め込んできた

と改めて告げる。そして好きに使ってくれていい、とも。
新しい兵士と古い兵士の話し合いはそれで終わってしまった。

シルバー・シユラウド vs メカニスト

クレーターハウスを太陽が照らしていた。

あれほどの爆発があつたにもかかわらず、そこにあつた光景も、放射能も、大きく変わりはしなかつたようだ。

土くれがモゾモゾと動いた気がした。

ボコリ——音を立てる、意識を取り戻したらしい誰かの苦しそうな呼吸が聞こえた。

汚れているうえに、ボロボロどころかボロ雑巾としか表現できないような。布が垂れ下がるだけの隠しきれしていない半裸姿。

髪のない頭、小さな声でアトムへの感謝の祈りを呟き。ほとんど全身が土に埋まつていた自らを、這いずって救い出そうとする。

「みんな——導師様。導師様は？」

時間の感覚が分からない。

太陽は地平線近くにあるが、今が朝なのか。それとも夕刻か。

——生きていた

なぜかまず、そう思った。理由はわからないが安心した。

そして最後の記憶を思い出し、何が起きたのかを把握しようとする。

（夜、だった。灯台が奪われて、皆不安だったけどまだ戦えるって、絶望はしていなかった）

歩き出すと、それまで申し訳程度にまどつていたボロ布は隠す努力をやめてしまったか。

体から剥がれ落ちてしまい、ついに女は全裸となる。だがそんなこと、気にしていられない。

急に不安と恐怖に襲われたのか、体が震えだして嗚咽が始まった。仲間や家族、導師の姿を求めるも殺風景へとかつての姿に戻つてしまつたクレーターハウスからは、以前より強めの放射能を感じるくらいしか変化を感じることが出来ない。

あそこには何があつただろう。あの時、そこには誰かがいたはず。

心の奥底から愛した聖地はそんな彼女の不安を慰めるどころか、突

き放すように記憶を否定する荒地地をさらし、沈黙を続けている。

——まさか、まさかっ。アトムは私だけを救ったなんて

この聖地に自分ひとり。孤独であることが恐ろしいと感じていた。

あの穏やかで激しさもあった共同体が、すでにこの地上から消されてしまったとは考えたくなかった。

「あつ……ああつーど、導師様っ」

岩場に激しく投げつけられたかのような、無残な姿をさらす遺体を見て彼女はそれが誰かを瞬時に悟った。

ひどい状態であることをのぞけばこの身長、この感じ。それはあの方に違いないと、いきなり確信した。しかしこれもアトムの導きだろうか、不思議と顔だけははつきりと彼女にだけは見分けることが出来た。

女は遺体を抱き上げると狂ったように泣き叫び始める——それになにが変わるわけもないのに。

「どうして、どうしてっ——こんなこと。ああ、神よ。アトムよっ!!」

昨日まで自分を導いてくれた指導者を、仲間をようやく見つけ。

激しく嘆くと……女の心の中に次第に冷静な思考がよみがえってくるのを感じる。

——自分だけが救われたのだ。受け入れよう、この現実を

そして考えるのだ。

この敬虔な僕の私に、アトムは何かを伝えようとしている。

孤独という試練を与え、新たな道を指し示そうとしてくれている。

——それは、なに？アトムの声は、なんといつてる？

使命を感じている。

とてもつよい運命の導きを。

この試練を越えて、自分に何かを成し遂げるのだと語り掛けてくる。

この時、崖の上から下で自分の未来を思う女を見下ろす冷たい目が見つめていた。

“小さな宝物”のエージェント。クロダとキジマである。

「あれがそうだ」

「あれ——あれとはあの女の事か？」

「そうだ、とクロダはうなづく。」

キジマは改めて奇妙な女を——黒焦げになってかろうじて形を保っている遺体を胸に抱いて嘆く。それを「それ」を見直した。

「どういうことだ？」

「あれは人造人間。少し前に奴らに引き合わせた、好きにして構わないが大切にしろと言ってな」

「正体は教えなかったのだから？」

「当然だ、あいつらは人造人間を嫌う。自分が慰み者になっている相手が何者なのか、知っていたら触れることも話すこともできないだろう」
遠目であるが、髪がなくとも目鼻が整っているのはなんとなくわかる。

性欲などというものに意味を感じない身の上ゆえ、あれを与えられた愚かな男たちがまず何を望むのか。美女を贈り物と考えるのは男——いや、人間という種族の知性がそう勘違いをさせ、理解させるところだ。

「——あれでどうする？」

「フランク・J・パターソン Jr——奴の事は俺も調べた」

そして向かったのだ、とクロダは続ける。

「？」

「わからないか、キジマ。俺が向かったのはVault111だ」

「ああつ」

「少し奇妙な場所だったが——そこにはたしかにいた。俺が見たかったものが」

クロダが探していたもの。

それはミズ・パターソン。レオの妻であった女性。

「——まさかあれがそうなのか？」

「外見を若くして与えた。色々と記憶も仕込んである、すべて偽物だが。別に問題はない」

「色々？」

クロダはそれには答えなかった。

「コンドウを倒したフランク・J・パターソン Jrには必ず死んでもらわねばならない」

「それはそうだが」

「だが奴は恐らくはアキラの囚、直接対決をのぞめばアキラは出てくるだろう。それはできない……。」

そうなるかと殺す方法はおのずと限られてくる。なら、もつとも確実と思われる方法を俺は最初を選ぶ」

確実に殺す、そもそも卑怯だの卑劣だのといった小さな感情はもちあわせてはいないのだ。

最も効果的で確実な方法ならそれをやる。

「お前がこんな手を選ぶのは意外だ」

「キジマ、お前はそこがダメだ。策を用いるのに好きだの嫌いだのはどうでもいい。」

状況が必要であれば、俺とてこんな方法を選ぶこともある」

もうすぐあの女は自分のするべきことを”思い出す”だろう。人造人間に与えられた”機能”がそれを可能にする。

失った家族をまだ取り戻せると信じているらしいあの男。どれほど運が強かろうと、どれほど優れた殺人技術を持っていたとしても、どれほどそばに恐るべき”守護者”を置いていたとしても。

家族という幻影と愛をまだ信じているというなら、あの女に冷たい刃を向けられるだろうか？

クロダは確信している。

フランク・J・パターソン Jrは愛ゆえに死ぬ定めにあるのだと。

〈〈〈〈〈〈〈〈

エイダは廃墟であるはずのロボコ・セールス&サービスセンターもとい、メカニストの隠れ家にある玄関前で中の様子を窺っていた。

——ここにメカニストがいる

そう考えるだけで回路を走る熱がひとときわ激しいものになりそう

な気がする。

ヌカ・ランチャーによるクレーターハウス爆撃によってミニッツメ
ンの小さな戦争は終結した。

アトム教はおそらくは全滅したと思われるが。そうでなかったと
しても、もうミニッツメンの脅威ではないだろう。またあの勢いを取
り戻す未来はあるかもしれないが、それには時間も運だって必要だ。

キングSPORT灯台で後始末をジミーに任せ、レオ達がそこを離れ
るのに合わせ。エイダもその場から離脱した。

エイダは経験的に今回の行動は今の主人に喜ばれるものかどうか、
いまひとつ確信が持てない部分もあったが。戦闘終結後にすぐに報
告を入れると、返信として座標が送られてきたことで自分の行動は間
違いではなかったのだと安心することが出来た。

だが送られてきた座標を地図と突き合わせると、新しい任務につい
て想像がついてしまう。

ロボコ・セールス&サービスセンター。そこはメカニストの隠れ家
として、ローグスとアキラと共にかき集めた断片から出てきた予想ポ
イントのひとつ。すぐにここにこれなかったのは、近くにレイダーは
もちろん。空港にいるB・O・S.の動向を無視することが出来な
かったからだ。

だがそこへアキラは自分に来いと言っている。

ついに倒すべき相手の元へ、自分を連れて行ってくれるというの
だ。

「——エイダ、待たせた」

「いいえ」

「ここに来て着替えとかね、でも今回だけは必要だと思うんだ」

「私はあなたがあの時の約束を守ってくれただけでも十分に満足して
います。引き続き、目的を果たすために力を振り絞るつもりです」

「うん、頼りにしてるよ」

姿を現したのは慣れ親しみさえ覚えるアキラ——いや、シルバー
シユラウド。

続いてこれまで見たことのない、サーカスのリングマスターを思わせる派手なコスチュームを着たキュリーが続く。アキラの視線にキュリーは照れるのを隠せない。

「に、似合ってますか？あんまり、自信がないのです。恥ずかしい……」

「君が、僕にどうしてもついてくるっていうから。でも、いいと思うよ。素晴らしい、ザ・インスペクター」

「からかってますよね？別に構いませんっ」

怒り出すキュリーにアキラは肩をすくめて見せる。

ザ・インスペクターはハプリスコミツクのキャラクターでアンストップパブルのメンバーのひとりだ。

シユラウド、ミステリーの女王、マンタマンに続いて現在、アンストップパブル計画に必要な装備として用意され。将来的にはインスペクター用の小物として虫メガネ型のレーザーソードや散布式の特殊グレネードなど。案は出ているが、今回はまだそこまでは用意できていなかった。

「エイダ、自己診断チェックの結果は？」

「大丈夫です。ログを確認してください」

「——それでも気になる。やっぱりもう一度見てみよう」

僕はそう言ってエイダの両腕に近づくと、キュリーに虫メガネ型のライトで手元を照らしてもらう。

戦争に参加した直後だからか。全体的に装甲が傷ついているが、なかでも両腕の損傷が気になっていた。

「念願のセンチリーボットと正面からぶつかったって？」

「はい、冷静さを失っていました。あれは私のミスです」

「これなら正面から戦える、とは僕も保証したけど。実際にやってほしくはなかったなあ」

「すみません」

「アトム教はどうだった？」

「375-bの予測パターンに近かったことで、ミニッツメンの勝利で終わることが出来ました」

「後でログを確認しておくよ。レオさんはどうするって?」

「キングスポート灯台はこのまま居住地として使えるよう。スロツグから人を送り、最終的にはダイアモンドシティに行くよ」

「ふん、ファー・ハーバーへ向かう準備に入るって事か」

「あと別れる前に、かなり高い確率であなたから呼び出されるだろうということをおから伝えました」

「そう……」

今の主人の口調に、エイダはなにかを感じた。

「アキラ、私はよけいな忠告をしたのでしょうか?」

「いいや——そんなことよりもやっぱりレーザーは使わないでもらった方がよさそうだ。エイダ、装甲からはがして念入りに確かめないと僕は不安だ。攻撃しながら、自分の腕を吹き飛ばしたくはないだろう?」

「必要ならできます」

「駄目だ。エネルギーはカットしろ。やっぱり片方はレールガンでもよかったかもなあ」

「ブレードはどうですか?」

「そっちは使っていいよ。接近戦——というより、キュリーに誰も近づかせないように。彼女を守ってくれ」

「了解です」

セントリーロボットとぶつかってこの損傷という事は、おそらく両者が至近でもって全力攻撃をぶつけあった結果というあたりか。

もっと上手い戦い方もあっただろうに、冷静なはずのアサルトロンのエイダがそんなことをしたのは恐らく自分が与えたもうひとつの“脳”の副作用に違いない。長所が生まれれば、短所も出てくるわけか。

「さて、それでは改めて——エイダ」

「アキラ」

「僕は君を引き受ける時、ひとつ約束をした。君の仲間達、ジャクソンの無念を晴らし。メカニストの横暴を阻止するって」

「はい、それが私の願いでした」

「待たせたね。今日がその日だ。これからメカニストに会いに行こう、エイダ」

「あなたに多くのものを与えてくれた事、無駄だったと言われないう。自分の役目を果たします」

先日、2人のシユラウドを連れて僕自身がここを探った。

あれほどの数のロボットのメカニストやらは連邦中にばらまいて見せたのだから、稼働している工場があるはずだと思っていた。が、僕が目にしたのは沈黙する申し訳程度の工具と倉庫だけ。だがかなり強力な自家発電装置が動いていることは確認した。

それでメカニストの隠れ家が文字通り工場ごと隠されているのだと、これであたりはついた。

エイダを呼び出し、断片から出てきたルートを歩き。そこでエイダに機械の言葉で「開けゴマ」とやらせてみる。

閉じられた扉がゆっくりと音を立てて開く。連邦に隠れ、自分の正義とやらを振りまいているメカニストはついに僕によって白日の下へさらされる――。



――連邦の未来は金属であるべき、か

呟くと彼女は脂臭い両手で顔を覆ってうめき、続いて自分の顔が汚れたことを思っでさらにうめいた。

最近の仕事に身が入らない。その上、今朝は頭痛もあってかなりツライ。体調が安定しない。

さらに彼女の悩みが恐怖と繋がっているのも良くない。

悩みのひとつは、彼女の計画から送り出していたまだ生存しているはずのチームから徐々に任務報告というか、連絡が入って来なくなっていることだ。

破壊されたか、もしくは不具合から狂ってしまったかとも思ったが。だからといって全部がそうであるとは確率的にあり得ない。つまりなにかマズいことがおこっていて、自分のそもそもの計画は失敗

している可能性もあるかもしれない、ということ。

もうひとつはさらに深刻で直接自分の命がかかっている。

しばらく前から、チームを“わざと狙って”攻撃してくる不埒な輩がいることは確認されていた。

正体を確かめようとも調査もしたし、相手には警告も何度か送りもした。返事はなかったが、飽きたのだろうか。最近、ぱったりと攻撃が止まっている。

己の所業を恥じて観念してくれたならいいのだが——この世界の住人でいると、なにか違うことが原因でこうなっている気もする。

と、いきなり複数のアイボットが部屋の中に飛び込んできて騒ぎ出す。

メカニストは立ち上がってヘルメットをかぶり、悠然とした態度でロボットたちを怒鳴りつけた。

「なんだ騒々しいぞ！ここには緊急でもないなら入ってくるなと——えっ？」

侵入者！侵入者！

ロボットたちは口々にそう繰り返している。

メカニストは慌てて管理ルームへと向かうと、そこでは一斉に赤ランプを点滅させ。秘密の工場の中で破壊活動を行っている侵入者たちをカメラがとらえていた。

「なんだってえっ!？」

それは驚きの声というよりも、恐怖から飛び出したものだった。

工場に置かれていたベルトコンベアーの間を、見たこともないロボットを連れたシルバーシユラウドとザ・インスペクターが。遮るものを破壊しながら突き進んでいたからだ。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

青いレーザーが次々とMr.ハンデイへと叩き込まれていく。

相手はフラフラとバランスをとるだけで、火花を散らすと、地面に崩れ落ちていった。

(次、そう次よ)

一息つく間もなくキュリーはレーザーライフルを構えたまま周囲を確認する。

エイダは自分のそばにいてくれ、フェイスレーザーをひっきりなしに発射している。

そしてアキラ――。

「ああ……また」

思わず不安の声が出てしまう。

突出するシルバーシユラウドにロボットたちが殺到してきていた。もう何度目だろうか。

しかしアキラはいつもの通り。彼自身は恐怖など感じないのだろうか、シシケバブ――獅子樺武はいつもの赤と違って青白い炎を噴き上げ。斬り、突き、時に蹴り上げ。空いている手にはソード・オフ・ショットガンを握っていた。

PIGGY Y Y Y Y Y Y Y!

回転するパスソーを音高く響かせながら接近してきたMr. ハンデイに一闪。感情のないはずのロボットは全ての足を下腹部にあつたスタビライザーごと斬り飛ばされる。ただそれだけで体をバラバラにされてしまったロボットは悲鳴と共に床に転がるが、それは同時にすでに同じ目にあわされた先輩たちに追いついたという事。

他にもプロテクトロン達が包囲しつつ、接近しながらレーザーを発射してるが。彼は全く気にしていないようだ。

――そういえば

キュリーはふと、アキラは敵が実弾を使う時を嫌うが。反対にレーザーには無頓着であったことが多かったことを思い出す。

負傷したと言って自分に治療を頼んだ時だって、打ち身や打撲。あとは皮膚の火傷くらいだった。装備がいいから、と笑っていたが。今日だってすでに先程から何度も包囲されてレーザーを撃たれまくっているはず。いや、ひよつとしてロボットの攻撃は当たってないというのか？

「……っ!?!」

「エイダ？」

「スキヤナーに反応アリ。アキラ、気を付けてください！」

エイダの警告でキュリーも慌てて周囲を見回す。

相変わらずそこかしこからウインウイン音を立てて、工場が動いていることを主張し。駆動音がすると、ハッチからロボットたちが出てきてこちらを迎撃しようと警告を繰り返して寄ってくる。

パラパラと小さな音と、埃のようなものが視界を横切ったと思った――。

「あつ、あそこ」

「どこです？」

「壁、じゃない。天井！」

キュリーの指のさす先。エイダは天井をむくと、確認した異物めがけてアイレーザーを発射する。

「動いた、3体！」

「アサルترون・インベーターです、アキラ！」

「……」

キュリーとエイダのレーザーが天井から撃ち落とそうとするが、アサルترون達は重力を感じさせない身軽さを見せ、地上へ飛び降りてくる。

「下がって」

エイダはキュリーにそう言い捨てるとステルス・ブレードを展開。

アイレーザーの充電音を響かせながら敵に飛び掛かっていく。

ーダメツ！

まだステルスフィールドを解除しない2体にキュリーは必死にレーザーで攻撃しようとするが、狙いがずれてしまう。2体は仲間がエイダと交戦に入ったのを確認すると、アキラめがけて走り出していた。2人よりもひとりを先に排除しようというのだろう。

キュリーの血が1秒ごとに凍り付いていくのを感じる――。

銃爪はちゃんと引いてるし、レーザーは銃口の前から飛び出しているのに。アサルترون達はその攻撃をかくぐつてアキラの背中へと殺到していく。

Z A A A A M ! Z A A A M !

ギリギリで発射されたエイダのアイレーザーが一体の背中を襲つてようやく動きを止めてくれたのに。その影にいたもう一体。アキラの背中に電気を帯びた回転する爪を素早く叩き込んでいく。

なにかが焦げる不快な匂い、コートにしつかりと斜めに切られた跡。

「アキラッー」

「……大丈夫」

本人はそうは言うものの、背後の敵には構えず。まだまとわりつくロボットたちの処理を続け。握っているショットガンは空。

キュリーは何とかせねばと思うものの。自分の位置からでは射線上にアキラがいることが彼女をためらわせた。

——彼が殺される

直後、ポーンと何かが勢いよく直上へと放られたのを見た。本能的に視線がそれを追っていた、それは彼が握っていたショットガン。天井は高く、彼が力一ポイ放り投げたのだと漠然と思ひ、なぜとの疑問を感じる。

続いてパンパンと小気味のよい銃声が。

手数でアサルترون・インベーターを圧倒したエイダはそのまま押し倒して馬乗りになると、相手の胸板を何度も貫いた。

さらにトドメとアイレーザーを至近距離から発射する。

キュリーは見ていることしかできなかった。

姿を現したアキラの手にはいつの間にかリボルバーピストルが握られており。それを素早くホルスターに収めると、落ちて戻ってきたショットガンをそちらの手で拾う。まさに曲芸そのものだが、それを簡単そうにあっさりやってのけてしまう。

背中を襲っていたアサルترونはよろめき、頭部の赤い目は光を失って砕け散った——。

アサルترون・インベーターは3体も揃っていないながら、時間を稼ぐ以上のことを期待できそうになかった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

「今のはヤバかったかな」

「大丈夫ですか!？」

「ああ」

言いながらシルバーシユラウドはポケットからスティムを取り出してさっそくそれを空にしてしまう。

エイダは自身のカーゴから新しいスティムの束を取り出すと、それをアキラに手渡した。

「足を引つ張っている自分が言う事ではないかもしれませんが——
もつとスティムパックは大事に使ってください、アキラ」

「——そうだね。キャップ持ちは贅沢でいけない」

「そういうことでは……」

「ないので、と続けられない。」

ここに来る前にメカニストの恐ろしさを聞かされてはいたが、自分の認識が甘かったのだとキュリーは感じていた。ここはロボットがあまりにも多すぎる。それも武装したロボットばかりだ。

「心配はいらないさ。切らさないようにエイダが管理してくれているし。それにここに来たのも理由がある」

「？」

「キュリー、彼が言っているのは先ほどから私たちは正規のルートから外れている、と言っているのです」

「さすがだね、エイダ」

「そうだったのか？」

進むたびに波のようにロボットが湧いて出てくるだけかと思っていた。

「ですが私も疑問ではありません。なぜ、この方角を？メカニストは先ほど見つけた階段の先にいるはずですよ」

「いるはず？」

「キュリー、エイダもわかってるんだ。だから予測が出来る。君はどうだい？」

「私——私はっ……すいません、良くわからないのです。何を言っているのです?。」

感情が制御できなくなっている。

涙腺が刺激され、鼻にもツンと迫ってくる。泣いてはダメだ、彼の邪魔をしてはいけない。

笑顔だったアキラの顔が心配なものへと変わった。

「君こそ大丈夫かい、キュリー」

「えっ、あつ、はい」

「Vaultにいたからわからるんじゃないかな、と思ったんだ。この場所はあそことは違う」

「えっ、違う?。」

「そうだよ。ここは文字通りの“隠された工場”なんだ。地下に空間を作ってそこにポンと普通に工場を建設した」

「ああ、そういう意味なのですね」

「つまりここは普通にある地上の工場と同じ間取りで物が作られている。僕らが向かっているのはコントロールルーム、だからエイダはここが間違ったルートだとわかったんだ」

「はい、ですがそれでもあなたがここを選んだ理由がわかりません」

アキラはスカルマスクをずらすと、ニツといつもの笑みを浮かべた。

「メカニストは信じられないほど多くのロボットを地上に送り込んだが、さつきから僕らの相手にしているロボットはどうだろう? アサルトルンが出てくるまでは——」

「はい、ほとんどが戦闘用ではありませんでした。それに警備ロボットとしても、彼らに適したパーツが使われてもいませんでした」

「ということは、だ。メカニストもまたそうせざるを得ない事情があったと考えられる。それは——」

通路に出て角を曲がった。

そこから見える部屋の中に、見覚えのあるあのロボット作業台が設置されている。

「まさかこれがここにあると思ったのですか?。」

「あてずっぽうだったさ。でも可能性はあるかもって。ラインでロボットを作っただけじゃ、ローグスと対峙したロボットたちは作れるものじゃない。必ずこれがどこかにある、それだけは確信していた」
「驚きました。あなたにはいつも驚かされます」「……」
「それじゃエイダ。メカニストと対面する前に、腕を修理していこう。恐ろくだが、この後は強烈な対面が待っているからね」
作業台にエイダが上る間に、アキラはスカルマスクを元の位置に戻す。

その目は再び冷たいものに変わり、シルバーシユラウドは戻ってきた――。



コントロールルームではメカニストは迫る絶望と恐怖に震えていた。本人にその自覚はないまま。

「あんなのが、なんでっ!」

映像で見たが、インスペクターは大したことはない。

だがあのトカゲのようなフォルムのロボット。そしてシルバーシユラウド!

ついに防衛の最初の要であったはずのアサルトロンは、大した傷を負わせることもできずに無力化されてしまった――。

(ロボットたちをあんなにも簡単に処理してしまうなんて)

情報で知りえたロボットチームを連れて来てはいないようだが、それにしたってこれほど見事にこちらの波状攻撃に耐えてしまうなんて。

「……?」

「お前達、システムを起動しろ。あの――処分予定だった失敗作を全部ここに集める、それと――」

アレを使うか。それしかないか。

「奴らはすぐにここへ来るぞ、出迎えてやる」

メカニストは――仮面の下のイザベル・クルースは舌で乾いた唇を

なめあげる。

それが彼女の今できる精一杯の虚勢であった。

工場が闇で満たされた——電源が落ちたらしい。だが不思議と駆動音と複数の足音だけは、リズムも変わらない。

一步一步進むその道は一本道。その最後にはこれまでにない激闘の予感が待ち構えている。

——今だっ

スポットライトが3つの影を作り出した。

コントロールルームを守るブラストドアを解除し、メカニストはマイクを手に取った。

「待ちかねたぞ、シルバー・シユラウド！」

「……」

「私はメカニスト。ここにお前の罪を私が断罪する！」

「メカニスト、お前が？」

変声機が仮面の下の素顔を隠してくれている。

頑張って動かす舌は、震える声をも隠してくれる。沈黙は敗北への近道だ。対面するだけで怯えていると悟られては、勝負は出来ない。

「シルバー・シユラウドとは尊敬されるべき高潔な人物であるべきなのに……ここに乗り込んできてまでロボットを破壊するなんて！お前、頭がおかしいのか!？」

「——よく聞く意見だ」

「お前の闇も、恐怖による支配も。ここで終わらせる！」
もういいか。

「俺の名はシルバー・シユラウド！シユラウドは常に正義の道を歩く」
「嘘をつくな！お前のせいで連邦は苦しめられた」

「ならば俺の話の聞け！俺の正義が、お前の闇を罪と共に照らし出すだろう」

「黙れ、黙れ、黙れえっ！」

感情のままに湧き上がる怒りに翻弄され、メカニストは叫んだ。

「全力だ、メカニストの全力。正義のロボット達でお前の狂気を止め

てやる！」

決裂は思った通り、はやかった。

エイダは目を赤く光らせてスタンスを取り、キュリーはその横で帽子を目深にする。

そしてシユラウドは——目をらんらんと輝かせ。火をまとった刀を一振り。スカルマスクが隠すその表情は如何に!?

闇が、巨大な闇の炎が目の前に姿を現していた。

ハンガーの中であふれ出していくロボットたちを、シユラウドの一行という嵐が破壊を巻き起こしている。

関節部のきしみ、ショートする回路に音声が狂い。ロボットたちの絶命が途切れることなく目の前で続いている。

地獄、これは地獄だ。

そして悪、打ち倒せるはずのない強大な悪がメカニストの目前にいる。存在を世界が許している！

「そんな、そんな——スパークス、数が足りないぞ！もつと、もつとだ。コード0—0—1を発動しろっ！」

サポートのアイボットを怒鳴りつける。だが、なんてことだ。

シユラウドは悪だ、なのに強い。あんなに強い。強いどころか、奴はそもそもここに力の全てを持ってきてはいないのだ。

なのに自分はどうだ？

ここで指示をだすだけだ。

武器を持って飛び出して何になる、何もできない。今も強化ガラス越しにこうして震えて見ていることしかできない。

「なんであんな奴がっ。あいつはロボットたちを破壊した。今も破壊してる」

失敗作が次々と壊されている。

工場に配置した警備ロボットをそうしたように、ここに集めたのはシユラウドとそのロボットたちに太刀打ちできるようにと改造して

——失敗し、あとはゴミとなって再利用できるよう。プレスされるのをまっただけのロボット達。

強さを求めただけなのに、醜い彫像ばかりが生まれていた。

それが燃える刀身によつてバターののように、あれだけ厚くした装甲を傷つけている。

レーザーガトリングかと思間違ふほどの連射を見せるロボットのレーザーが、構造から破壊して機械の体を砂に変えていく。

容赦がない。自分だけではなく、自分が強いと信じて作り上げた夢のロボットたちが壊されていく――。

「数、数が足りない。スパークス！」

「……」

「えっ、なに？もうすぐ打ち止め？なら電力を使って送り出しなさい！数でぶつけないと、負けるつもり!?」

「……っ!?!」

「予備電源も回せ！あれを、あいつらを倒すんだ！」

最近はず調子が出なくて、失敗作をプレスにかけることが減っていたからまだまだあると思っていたが。

システムアラートを鳴り響かせるコンベアーに残された廃棄予定のロボットの数は間違いなくゼロに向かって減っていく。

「シルバーシユラウド。お前、こうなったのはお前が悪いんだからなっ！」

アレを使うしかない。ここにあつた最後の秘密兵器。

そして自分がいつか超えるべき、最高の個体。

「スパークス、封印を解除しろ。バンカーにアレを誘導するんだ」

できれば隠しておきたかつた最後の一体。

あれならたとえシルバーシユラウドであつても無事ではいられない――はずっ。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

不思議な話だが、バンカー内に閉じ込められ。あふれ出てくるロボットたちを前にしてもキュリーやエイダに焦りのようなものはない。かっつ。

ここに来るまでにアキラが指摘していたように。自分達を押しつぶさんと襲い掛かってくるどのロボットも、どこかしら醜悪さが強調されていた。地上で見るとような危険なロボットとはまったく違った。遠くで出現すればレーザーが、近くまで迫って来ればブレードで機能を回復したエイダはそれこそ八面六臂の活躍をし、相手の包囲して押し潰さんとする圧力を大きく弱め。キュリーは足を引つ張らないようにとそんなエイダの影から自分の身を守ることだけに集中する。

それでも近づいてくるロボットたちはアキラが対処する。

両手に握られるのは、プラズマだったり、ショットガンだったり、ハンドガン、シシケバブと。もはや曲芸じみた切り替えとまるで終わることのないV・A・T・Sの発動音とその存在をより不気味に浮かび上がらせている――。

「止まれ、悪党！」

「いい加減に諦めたらどうだ、メカニスト？そろそろこちらは足の踏み場がなくなりつつあるぞ」

「うるさいっ、黙れ！」

「こんなことを続けても無意味だ」

「私のサンクタムに侵入し、ロボットたちを破壊したお前たちに負けるものかよ」

——ぐおん

コントロールルームの正面、侵入者の背後。

これまで閉じられていたバンカーの巨大な扉が不思議な音を立ててゆっくりと開いていく。

「使いたくはなかったが、こうなったのは全部お前たちのせいだ。私を怒らせたこと、後悔させてやる！」

「センサーに反応！」

——ご機嫌よう、センサーに反応を確認。武器を下ろし、降伏しない

エイダと同じ。それよりも無感情で不気味な電子音声による警告。

ここに来るまでも散々に聞かされていたが、今回は今までと違うこ

とがひとつあった。アキラたちは相手の存在を感知できないのだ、声はかなり近くから発せられたはずなのに――。

「エイダ？」

「推定脅威分析、赤！アキラ、注意してください」

「何も見えません。何もツ――ひっ」

キュリーの悲鳴は飛び出す前に飲み込まれる。彼女自身が驚きすぎて裏返ってしまった結果だ。

そして敵は僕の真正面に立っていた。

何もない空間にいきなり真つ赤なレッドサイン。

――アサルトロン!?接近されたっ

そう思った瞬間に、とっさに持っていたショットガンを投げ捨てて両手で握った刀を前に出す。全くの偶然で本能に従った結果の行動であったが、おかげで命が助かった。

僕の正面に立ち、腕を交差させたブレードで挟み込むようにしていきなり首を落としに来た相手の攻撃を受け止めることが出来た。

助かった、冷や汗を吹きだしてそう思ったのは余裕を見せすぎだ。

次の瞬間には下腹部に複数の違和感を感じると、僕の身体はゴムボールのように壁に向かって吹き飛ばされていた。

「アキラッ!」

「目標を確認、殲滅します!」

床の埃をすべることで拭き取られた僕の体は、ロボット同士の激突を感じて急いで立ち上がろうとした。

不愉快な違和感を感じたら、すぐだった。

立ち膝をついた状態で僕は上体が崩れ、激痛と共に熱い血の塊を床に吐き出していた。

――重傷だ、即死ではなかったが

息苦しさと胃液臭い血の匂いにたまらず口元の汚れたスカルバングダナをずらす。

あの悪い感覚がはるか遠くから僕の中へと迫ってくるのを感じる。正気を失うのではという恐怖、それでも冷静になろうと震える指でスティムパックを取り出し、膝に一本から打ち込んでいく。

喉に渴きが始まる。理性を圧倒する飢えるような。恐ろしくも嬉しい、そんな荒れた感情が広がって満たされようとしている。

誰にも助けに来てほしくなかったし、今の自分を見てもらいたくなかった。「こっちはいいい」とだけ——キュリーにそう怒鳴りつける。2本目のステイムを痛みで騒がしい右肩に突き立てる。

震える指を見れば、そこかしこからあの斑点状の緑の光がすでに弱々しくてもしつかりと浮き出てこようとしている。

——コントロールド！戦える、まだ戦えるはずだぞ

視線を持ち上げ、状況の把握に努めるが……目の前で繰り広げられていたのは悪夢だった。

セントリーボットを相手にカマしてやりました、と得意顔であったエイダを。ただの一体の「普通のアサルトルン」が互角以上の戦いを演じていた。パワーとスピードを維持しつつ、分厚い装甲も完備してきたと自画自賛していた僕のアサルトルンが動きからキリキリ舞いさせられている。

「アサルトルン・ドミネーターか」

3本目は首筋にうつ。

感覚が再び遠方へと引きずり戻されていくと同時に、冷静さが戻ってきた。

だがそいつはパニックと仲良くスキップを踏んでいる。

ロボコ社が開発した対人、人型戦闘ロボットのアサルトルンの最上位種。

スペックは公開されたものは記憶しているが。目の前で動いている奴の性能はそれ以上に見える。

(ブレードを止められた時点で3ヶ所を蹴られたのか。マジか)

キュリーは距離をとって、エイダは頑張っている。

どちらも同じアサルトルン。なのに装甲は傷つけられて腕の振りも明らかに半手近く遅れが見て取れる。

パワーアーマーが必要だった。

僕が出した結論は簡単だ。火力が足りない、装甲が足りない。だが今はどちらもない——。

唐突に地球を肴にトシと語り合ったことを思い出す。

——死狂イテ戯レヨ

戦場ではそれが出来て楽しいのだと。彼はそれを教えてくれた、お前は狂気の何ほどを知ることが出来る？

足りない、まったく全てが足りていないのだ。

僕は自分の指を見た。もう震えていない、あの発光も感じない。

「正気はいらない。もうなんて死んでいる？フンツ」

スカルバンダナを元の位置に戻す——覚悟はどうに出来ていた。

続いて僕はまだ熱の冷めきらぬ刃を素手で掴むと、己の腹に向かつてそれを突き立てる。熱は皮膚を焼くがその程度、なんでもない。だが弾丸もレーザーも防ぎうる繊維でも、その一撃にはどうすることもできず。僕は自分の刀で自分の体を貫いた。

どこからともなく野獣のような咆哮が放たれた。

先程までと一転した雰囲気をもとったシルバーシユラウドは勢いよく立ち上がり。黒い閃光となってアサルトロン達に接敵する。

エイダばかりかドミネーターのブレードすらかいくぐって背後に回るや。青白い炎を吹きあがらせた刀身でこれまで見たことのない異常な連撃まで披露する。

「押せえええっ！削り落としてしまええ！」

アキラのその言葉は気合を見せたのではない。聞いたキュリーの背中の毛が一斉に総毛だつた。

それは正気を失った狂人の嬌声だつた。

そして強かった。

いつも理解不能に不思議と強いアキラは、今はモンスターたちに交じって彼らに負けずにモンスターとなっていた。

情勢は徐々に傾いていく。

化け物に前後を挟まれたアサルトロン・ドミネーターは首を360度回転させ。手足をあり得ぬ稼働で対処しようとしていたが。エイダで足りなかった以上の手数を振るうアキラの存在で、無傷のドミ

ネーターの前後の装甲から火花が飛び散り始める。

だがそれはアキラとて変わらない。

エイダの体が傷つくのと同じように、シユラウドの体にはアサルトロンの蹴り、膝、肘、ブレードによる攻撃で数秒ごとに血が噴き出し、傷口が増えていく。

「……ッ!？」

シユラウドの頭から帽子がはじけ飛んだ。

その一瞬、キュリーはアキラの頭蓋から切断されて中のものが見えてしまったような気がした。

しかし見間違いであったようだ。額から血がしぶいただけで、ずりとアキラの頭部の欠片が地面に零れ落ちることはなかった。

キュリーはもう悲鳴も上げられずにいる。

敵の返り血に汚れたシルバーシユラウドの姿すら見た記憶のない彼女にとって、狂気と歓喜でもって暴れる彼が。自分を顧みずに攻撃を続け、血を流し続ける異様な姿は衝撃的だった。

——あれほど怪我をすること、血を流すことを厭っていたはずなのに

冷静であるはずの医療技術者としての機能もこの通りすっかりおかされている。

「馬鹿な、馬鹿なっ!」

マイクを握りしめたままのメカニストの絶望の悲鳴は、そのままバンカー内に流れていた。

ドミネーターの最後は近づいていたのだ。

なんども切られた両腕が潰されると、エイダはアイレーザーを至近から発射。これが見事にドミネーターの両足を吹き飛ばした。

それでもまだ抵抗はやまず、地面に転がった体でも首だけ動かすが。エイダとシユラウドは容赦なくその上に殺到する。殺しつくす、まさにそれ以外何物でもない残酷な光景は、この死闘が終わったことも告げていた。



キュリーはすぐにもアキラの様子を知りたいと思ったが。

獲物が息絶えたと素早く判断したアキラはキュリーに「帽子を取ってくれ」とぶつきらぼうに言ってきた。

あまりされたことのない言い方であったが、先ほどまでの狂気がなくなっていたことの方が彼女にとって何倍も重要な事だった。

あたふたと地面に落ちていた帽子を拾っていると、アキラは自分の心臓めがけて何本もスティムを矢継ぎ早に打ち込んでいるのを見ってしまう。

「あつ、アキラッ!?なにしているのです、そんな——」

「血を流しすぎたんだ。でも大丈夫」

まだ視線を合わそうとしてくれないが、キュリーの手から帽子をひったくると頭に戻す。

バンカー内に再び闇が落ちる——。

「メカニスト！」

「うるさい疫病神！私が連邦を守る、私は決して止まらない」

「今ので電源を失ったんだろ。降伏しろ、しないというなら——」

刃の先をコントロールのメカニストに向け、僕はシルバーシユラウドとして冷酷に言い放つ。

「そこに押し入り、こじこくをわうさつ悉くを塵殺する」

「——わかった。話し合おう」

メカニストはアイボットを連れ、バンカーに降りてきた。

アキラの前に立ち、もはや抵抗する力はないはずなのにまだどこか偉そうだった。

「シルバー・シユラウドはただの犯罪者ではなかったはず——話し合おう、今から、友好的に」

「俺はただ審判を下すだけだ。まずはマスクをとれ、素顔を明らかにしろ」

「よ、よし……いいだろう」

メカニストのヘルメットが脱がされ、その下にあるおどおどした態度の女性があらわになる。

視線は下に向けられアキラを見れていない。ずっとそうだったように思える。

「これで満足？お互い相手のことがわかったでしょ」

「名前を聞こう」

「イザベラ・クルーズ」

「イザベラ・クルス？」

「違う、クルーズ！」

「？」

「もうっ——好きに呼んでいいわよ」

僕は大きく息を吐き出した。意識の片隅にあつてまだ暴れたりないとわめきつづけるそれは、目の前の彼女に襲い掛かって蹂躪しろとそそのかし続けている。だが、僕はそんなことはしない。

隙を見て頬袋にとどめおいていた薬剤をこの瞬間のためにしっかりと噛み砕く。

「メカニスト、お前には失望した。危険なロボットを連邦に解き放ち、大勢の人々を苦しめてきた」

「ちよつと！確かにあんたには負けたかもしれないけど。だからって貶められるつもりはない」

「お前は自分の言葉ばかりだな。なぜ他人の話を聞こうとしない？」

「わ、私は理性的だし、ちゃんと他人と話も出来る！」

「そうか？」

「そうよ！」

「では俺達がここに来た理由はなんだ？」

「んんっ!？」

「知らないだろう？お前は最初から話を聞くつもりはなかった」

イザベラの顔が赤から青へと忙しく変わる。

どうやら本人が言う通り、決して馬鹿ではないらしい。

「まずは聞いてもらおうか——エイダ」

「はい」

「お前と俺が会った日の話を。それから連邦で見してきたメカニストの傷を話せ」

そしてエイダは語り始める。

旅する家族たちの死。守るべき主人を失った日のことを。

そして連邦で罪のない人々が血を流し続けた日々があったことを。

イザベラはなんとか反論をしようと試みていたが、シユラウドが一本のホロテープを差し出すとそれを受け取って「なに？」と聞く。

「それを後で確認するといい。お前のロボットたちの自供、そしてシミュレーションの記録」

「ロボットが自供って——」

「お前は膨大なタスク処理を可能にするため、ロボブレインを使った。理屈はわかるが、それを生み出した世界であればなぜ大量生産されなかったと思ってる？」

「それは——」

「自供というのは彼らの主張だ。その思考プロセスのシミュレーションの結果、究極的な白黒問題として。彼らは全員、黒を選ぶ」

「黒を選ぶ……でも報告では敵対者は殺したって——ああ、そういうことなのか」

「あいつらは君の優先命令を結果として守るため。一時的に君が救うべきだと考える人々を敵とすることにした。それが誰にとっても効率的だから、とね」

「なんてこと。これは……私、取り返しのつかないことをしてしまったのね」

弱々しい目で、ようやくイザベラはアキラに顔を向ける。

「わかったわ。よくわかった、あなたの断罪を受け入れる」

「……」

「殺す？それも仕方ないわよね」

「嫌、殺さない」

おかしい話だけれど、ちよつとした爽快感のようなものを僕はこの時に感じていた。

スカルバンダナのマスクを下ろし、帽子もとる。僕のシルバークラウドも、エイダとの約束を守り、正義を貫くことが出来た。

「お前の善意は、不幸にも多くの罪を犯す結果に終わった。起きたこ

とは凶悪な犯罪ではあったものの、こんな時代では罪人であることが裁かれる理由ではないと僕は思ってる。

責任を取るんだ。誰が聞いても許しはしないと口にするだろうが、それでも君にはまだ贖罪の道が残っているはず。簡単ではない道だ」
「……そうね。その通りよ」

「俺は——いや、僕は連邦の人々のためにも動いている。君が協力してくれるのなら、君の歩く道は少なくとも孤独ではないと思う」

「わかった。あなたには感謝してる。私を救ったことも含めて、後悔はさせない」

「——ああ」

「連邦の誰にも後悔はさせない。これは約束よ」

そうしてシルバーシユラウドとメカニストの対決は、連邦の誰とも知れないまま終わりを告げることになる——。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

メカニストのロボット作業所に再びエイダを入れながら、僕は彼女とようやく話し合うことが出来た。

「メカニストを——イザベラを殺さなかったことに不満はある？」

「どうでしょう？感情とは違いますが、確かに相反するものがふたつ。自分の中にまだあることは認めます」

「だろうね」

「ですが、私の任務目標はメカニストの横暴を止める事でした。望んだ結果は得られています。つまりこの状況に問題はないという事です」

「——かなりガバガバな思考改変がされてる気がするよ。君にロボブレインほどの柔軟さはないと信じていいよね？」

「それにはさらなる挑戦が必要かもしれません。私はずっと挑戦的なアサルترونでした。用意ならありますよ」

「笑えないなあ」

軽口をたたくが、話を元に戻す。

「彼女は善意のまま動いて、最悪の結果を想像できなかつた。だがそれが真実で、彼女はその間違いを受け入れてくれた。それは簡単な事ではなかつたと思う」

「彼女は恐らく優秀な人間です。あなたが導けば、連邦にこれからはきつと良いことが出来るはずですよ」

「それはどうだろうね。僕は彼女のような善人じゃないからなあ」

「期待しています。これからあなたが必要と思う限り、私はお仕えます」

僕はただ、それじゃ黙って修理しようとしてだけ答える。

エイダが沈黙すると、今度はなぜかキュリーがそばに立っていた。彼女はてつきりイザベラについていると思っていたが。

「終わったんですね？」

「ああ、見ての通りだよ。今回はさすがに肝を冷やしたね」

「——彼女、許したんですね。どうしてですか？」

ああ、それが気になっていたのか。

「アキラ、アナタをずっと見ていたから私にはわかります。あなたにも欠点があります。寛容さ、それが無いと思います」

「ああ、完璧じゃない。わかつてる」

「パイパーが言っていました。もっと厳しい言い方でしたが、あなたの一面に対して、実に的確だつたと思います」

「コベナントの時か。僕も覚えてるよ」

ダイアモンドシティの美人記者は「正義はない」と思いつきり非難してたつて。

「イザベラ・クルーズの罪は最悪です。それなのに許すと？」

「偽善的だつて思ってる？」

「そうは言つてません。でもどうしてあなたがそう考えたのか、それを私は知りたいのです」

僕は作業の手を止めた。

「キュリー、結局ね。許すのは僕やエイダじゃない、彼女自身でやるしかないんだ」

「？」

「僕らがしたことは彼女の罪を明らかにしただけだ。許すかどうかは、僕らの役目じゃない」

「違うのですか?」

「ああ、違う。彼女は自分の責任を認め、罪を自覚した。なら、僕がそれ以上責める理由は? そんなものはない」

「……」

「ボクの原因なんてせいぜいエイダとの約束をまもることくらい。シユラウドの姿を借りたのは、その方が彼女と話がしやすいだろうと思っただけ。ただそれだけ」

「あなたは彼女の罪を暴くことが目的だったと?」

「多くの人は武器に手を伸ばす。誰かに奪われたくないからだと言って、でもそれは自分が奪う側に立たないから言えることだ。僕が憎むのは自分の立場をごちゃごちゃにして、理解しないふりを平然とする奴らさ。彼らは愚か者で、生きている限り愚かなままで居続けようとしてる。」

そりやハゲ——ディーコンみたいな変人もそんなバカの中から出てくるかもしれないが。そいつらにも機会を与えるという言い訳で、善人をやるつもりは僕にはない」

レイダーが嫌いだ。いや、存在することが許せない。

力を持つことが正しいと信じている奴らが嫌いだ。暴力を愛するとか、最悪だ。

だから奴らをからかいつくし、凌辱し、弔り殺しにしたくなる。それが自分を墮とすことになるとしても、そんな奴らに僕がしてやれることはそれだけしかない。

奴らに屈辱、僕に満足。善人でも正義の人でも、それは好きに考えてくれりゃいい。

「自分を裁く日が、僕にもいつか来るんだろうね」

「どうでしょう? いいえ、今日だけは私が裁いてみせます」

「キュリー?」

彼女の顔がいたずらっぽい顔になっている。

「イザベラは美人でしたか?」

「ん？ああ、仮面の下は魅力的な女性だったよね。驚いた」

「それは嘘ですね」

「は？」

「私は知っているんです。メカニストが素顔を見せた時、アナタは別に驚いてませんでした」

「そうだったかな？」

「ジエゼペルでしょ」

「……」

「ほら、当たった！」

僕は苦笑いするだけで何も言えない。

「あのロボットをあなたはやけに念入りにいじっていたでしょ？」

「そうだったかな」

「ええ、そうですよ。私はちゃんと見てるんですから——あのロボットはあなたにとって特別だったのです」

「まさか」

「お忘れですか？私だって元はコズワースと同じ、世界がまだ平和だった時代を知っている。これでも200年以上の記憶を持つ、もとは研究助手ロボットだったのですよ？」

「年上の女性の魅力については良く知っているつもりだけどね」

「あなたがジエゼペルと話した時に気が付きました。異端の神に心酔する女王の話。だから私も調べました、彼女の名前」

「ふむ」

「古代女王の名前は英語だとイザベラというそうです」

「……」

僕は答えない。

確かにその可能性について考えていた——まるで暴走しているとしか思えない大量のロボットを連邦に放ち。こちらへの警告もまた一方的。

その行為自体、短気で好奇心旺盛な女性のようなだな、と思ったことは事実だ。

「彼女と直接対面して、気に入りましたか？」

「聞く相手が違う。異性の好みならむこうに聞いてくれ」

「よいことはひとつ。わるいこともひとつ」

そういうと彼女は僕の横に立ち、耳元で「浮気は許しません」といつて腰のあたりをつねってきた。

なかなか感じたことのない痛みがだった。

連邦でようやくひとつの区切りがつこうとしていた。

動きこそまだ緩慢ではあったけれど、それは一言。悪化している、ということ。

連邦では決して変わらないと信じられていた天秤が徐々にそのフり幅を大きくしようとしている。その行きつく先にあるのは——崩壊だ。

時間は絶えず減り続けているが、まだその時は近くはない。

そして僕たちは……僕は連邦から離れた小島を見ることになる。

ファー・ハーバー。

アポミネーションに蹂躪され、人の住まう場所が消えていこうとしている滅びの歌がながれる島へ。そこに糸のように細い未来が続いていると信じて。

Shutter Island
狂気纏う正義 (Akira)

遠くで雷が鳴っている――。

そう理解すると同時に映像が見えてきた。

暗い海の上に浮かぶ島。空もまた黒い雲に覆われ、中に光があちこちに走っているのが見える。

なぜか風を感じないせいだろうか。まるで島の中からあふれ出てきてるような霧が、地上の全てを隠そうともしている。

(どこだろうか?)

ついそう考えてしまう。

仕方のない事ではあるが、こんなことをすればいつものように当然の答えが返ってくる。

見知らぬ様々な人々の口から「ファーハーバー」と唱和が始まり。次第にその声は怒号へ。

こういう時は耳を塞いではダメだ。

経験からそれを知っているのです、やはりいつものように視線を新しいモノへ移そうとする。

振り向いた先には2つの映像が――未来が待ち構えていた。

最初の未来は緑の霧に覆われた同じ島だった。

次の瞬間には地面に立ち、目の前には廃墟が。聞こえてくる潮騒の音で元は港町だったと思った。

気が付くと勝手に足が動き、町の中に入っていく――そこで気が付き、ギョツとしてわずかに躊躇した。

町の中からは死臭が漂っていた。それもまだまだ新しいモノ。

炎の燻り、肉の生焼け。塩の匂いに交じるのは泥のまじった草木の腐ったモノ。

そしてそのやり口から何が起きたのかはすぐにわかる。この港町はついに飲み込まれてしまったのだ――。

町には新たな住人となった大勢のマイアラークがいた。あちこちでそれが固まっているのは、そこにおそらく人であったものがいたからだろうと思われた。彼らの体や腕の隙間から時折のぞけるのは、骨とそれにこびりつく肉片――。

アポミネーションの持つどう猛さが発揮され、蹂躪された人々のなれの果てであった。

町は殺されたのだ。

マイアラーク達のそばを通り抜けつつ、哀れな島民と思われる人々の残骸が犯されているのを目をそらすことも出来ないまま通り過ぎ――。

するとこの先に人の気配を始めて感じた。

「え？」と思う話だが、なぜかそれはわかった。

海に延びる橋げたの先端では、マイアラークの女王と、見たことのない化け物たちがやはり大勢いて。信じられないがそこに立っているひとりの人間に服従を示すように集まっていた。

―― H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A !

男は――いや、若者は笑っていた。

おかしな触角をはやし、顔を隠すようなヘルメットをかぶっていたが。声を聞けばすぐに分かった。

(アキラ?)

思わず問いかけてしまった。

サンクチュアリでは若さに似合わぬ知識と、他者に支配されることを嫌う独特の反発力をみせたあの若者。

自信なさそうに自分を東洋人、日本人で、五十嵐 晃と書くのだと教えてくれた。

こちらの問いかけが聞こえた――とは思えなかったのに、彼は笑うのをやめると身動き一つ取らないで付き従うアポミネーション達に対し、王のように振る舞い始める。

――我が同胞たちよ！腹は一杯か？いや、そんなはずはない。

――次の餌だ。次の戦いだ！すぐにくるぞ。すぐに始まるぞ！

町をひとつ、そこに暮らす人々すべてを飲み込んだばかりだといふのに。

彼は次の戦いの到来を告げている。

そしてその言葉は正しいようだ。

殺されたばかりの港町に進軍を開始する、島の中を進撃するスーパーミュータント達を見た。

——戦争だ!!

再び狂ったような、おぞけの走る若者の笑い声が始まった。

あまりに凄惨な情景の洪水にさすがにこれ以上は耐えられず、この未来を突き放すとまた別の未来が飛び掛かってきた。

そこはやはりまた同じ島の頂上付近なのだろうか？

森に囲まれた建物——そこに飛来するベルチバードが複数。船体に描かれた模様からそれがB・O・S.だとわかった。

——戦士たちよ、敵を殲滅せよ！

指揮官の言葉を合図に、地上に装甲をまとった兵士達が次々と降下を開始する。

ここもまた戦場のようだ。

地上ではよく知っている光景が始まるものの。戦況は片方が圧倒していたのは明らかだった。

パワーアーマーは全てをなぎ倒し、人々が悲鳴を上げて倒れていくのを当然としているようだ。何人かは降伏を申し入れようとしたが、彼らの期待する返事の代わりにレーザーがぶち込まれる。

ここでもやはり、虐殺が始まってしまった。

——殲滅だ。降伏を許さず、逃がしてもダメだ。全て殲滅しろ！

B・O・S.の兵士達は命令には忠実だった。

彼らは建物内をくまなく歩きまわり。見つければそれが女でも男でも、武器を持たない老人であったとしても構わずに相手を殺していた。

今回もまたやはりそんな彼らの中を通り抜け、いつしか指揮官のそばへと移動していく。

指揮官はパワーアーマーを着る2人と何事か話しているようだ。

——アカディアへようこそ、ナイト・ラーセン

——パラデイン。自分は今回の作戦の指揮官を務めている、2人ともご苦勞だった

——すぐに動いてくれて助かったよ

——聞いてはいたがここは最悪だな。ここにいる人造人間どもは自分達で組織を作り、仲間を集めていた

——中には訓練された兵士もいた。彼らがさらに仲間を増やし。軍を作る前に叩き潰せて本当によかった

——どうやら殺された人々は人造人間だったようだ、とここで理解する。

島には逃げてきた人造人間たちのコミュニティがあつて、そこをB・O・S. が襲撃したようだ。

なのに勝利にわく兵士達の横を、コートを羽織った人造人間が無言でとおりすぎ。興味がわいて彼を追うと、ある場所で足を止め（なんてことだ）とつぶやいた。

その視線は積み上げられた人——人造人間の山に混ざった。若い東洋人の女性に向けられたもののような気がした。

（助けられなかったんだ）

機械のくせに老人のように、その独特の苦いものを無理やりに飲み込むような言葉は誰に向かって放たれたのだろう。

しかしコート姿の人造人間は無言で立ち尽くし。周囲の騒ぎに加わることはなかった。

——とにかく作戦は完了した

——ああ

——これで奴らのテクノロジ―と情報を回収すれば、連邦に巣くうインステイチユートの壊滅も近いだろう

——ああ、私もそう願っている

指揮官にそう答えたひとりだけがパワーアーマーのヘルメットをとる。

（ああ……）

現実ではないが、思わず呻きたくなる。

フランク・J・パターソン Jr. あのレオだ。

ミニッツメンの将軍であつたはずの彼は、なぜかそこではB・O・S.のパワーアーマーを着て。彼らの仲間のように振る舞つていた。

——これでインステイチュートの化けの皮をはがせるはずだ

——それだけではない。もつと重要なことがある

——わかつてる、パラディン・ダンス。次はアンタゴナイザー、奴の脅威も必ずここで終わらせてみせる

レオの声は喜びで弾み……なぜか蹂躪された人造人間たちの残骸を冷たい目で見降ろしていた。

アンタゴナイザー？それが誰かはわからないが。

あの港町でアポミネーションと共に勝利を祝つていたあの若者の哄笑が再び耳にこだました。これは悪夢の未来、最悪の世界なのだと震えながら理解する。

〈〈〈〈〈〈〈〈

それは突然の覚醒だった。

自分の体が揺り動かされ、眠りの中で突如として始まつた“サイト”は終わりを迎えた。

「……なんだい？」

「ママ・マーフィ。大丈夫？」

覗き込む相手に老婆は微笑みを浮かべる。

悪夢であつたとしても、それは“サイト”である限り忘れることは出来ない。心には恐怖がこびりつき、気を付けないと体は震えだすことを求めてくる。

「ああ、ああ。大丈夫さ、ありがとうマーシー……ダメだね、うっかり寝てしまつていたよ」

「ふふふ、いいのよ。楽しんでいて」

癩癩を起すことなく笑い返したマーシーは、それだけ言い残すと畑へと戻つていく。

どうやらこの老婆を心配して作業を中断してわざわざ様子を見るに

来てくれたようだった。

悪夢は終わったのだ。気持ち切り替えなくては。

ママ・マーフィはうーん、と椅子の上で体を静かに思いつきり伸ばす――。

ここしばらくのサンクチュアリは平和が続いていた。

帰ってきたレオの暗殺未遂事件が起きた時はどうなるんだと大騒ぎだったはずなのに。あれから何も事件がない。

誰もが欲しがっていた平和な日常。それが毎日続き、このまま永遠に続けばいいのにと皆が思っている。

しかしママ・マーフィは体が弱くなった。

以前は皆と一緒にどんな悪路だって自分の足で一日中歩けたというのに。今は仕事をする息が切れ、何度も転びそうになつて。「仕事をしなくていい」とまで言われそうになつたが、それだと寝たきりになるぞと脅し返して断ることは出来た。そのかわりだといってスタージェスがそれはそれは見事な椅子を贈つてよこしてきた。

老人扱いされるのは不愉快だが――正直、椅子は気に入った。

以来、ママ・マーフィは休憩時間は決まってここに座つて大空の舌で過ごすようにしていたが。まだ誰も気が付いていないが、仕事以外でも。彼女はこの椅子に腰かけていることが増えている……。

それよりも、だ。

今は見たばかりの“サイト”について考えるべきだろう。レオとアキラ、彼らの困難な旅はさらに厳しさを強めているらしい。

(彼らは島へ行く?なぜ?どうして?)

わからない。

だが……自分は一足先にその結末は見る事が出来たのではないだろうか?

あの2人は互いにこの連邦で自分が望む未来を手にしようと思死にもがいている。そしてだからこそ彼らは互いを必要としているはずなのに、あの悪いものを持っている島の力は。ついに彼らを仲たがいさせることに成功してしまうという事なのか?

(彼らに忠告を――)

するべきではない、とママ・マーフィは思った。

彼らの旅の始まりに自分はすでに大きくかわってしまった。ここでどんな形であれ自分の“サイト”が再び彼らの視線を動かしてしまふような危険な情報を与えるのは、良い結果になるとは全く思わないからだ。

つまりはなるようになれ——乱暴で、無責任かもしれないが。それが恐らくは良いのだと無理にでも納得する。

(それに——)

ママ・マーフィの“サイト”は絶対の未来の予言ではない、はずなのだ。

いつか彼らと再会する日が来た時、あの小島では自分が見た未来とどれほど違う結果に終わったのか。彼らと笑って話せる日があるかもしれない。

椅子に座りなおし、目をこすつても重たい瞼の下で。

ママ・マーフィはサンクチュアリで平和に暮らす皆の姿を穏やかな気持ちで見つめていた。

↓↓↓↓↓↓↓↓

連邦東海外の騒ぎがまだ終わらない頃——。

バンカーヒルに久しぶりに名のある傭兵団が帰還した。

「おい、品物はデブのところまでチェックを受けてこい」

「了解」

ノーマン・ドナルド・ランボーは返事をして荷物をもっていく息子の背中を見送る。

「あたしらは、パパ？」

「どこか適当に——いや、男はダメだ。酒にしておけ、その代わり俺達を待たずに勝手に始めてていいぞ」

「——やった」

「俺はストックトンの爺さんと話してくる」

亡くなつた妻と同様に美しいはずの娘たちはやりと笑うと自分

に背中を向けて大喜びしながら去っていく。あれじゃ、いい男を捕まえろとは言えない。もう何度も繰り返し思っていることを認めつつ、ため息をつく。

ランボー傭兵団はここ数年、この連邦ではトップレベルの傭兵団のひとつだと言われている。

そうなるようにノーマンは努力してきたし。チームも苦勞してきた。彼らの持つ装備はかのB・O・Sの部隊を相手にできるが、そのせいで消費される弾や雑貨の単価が高くなってしまふ。

だから彼はいつだって高額の契約料を求めている。

目当てのストックトンにはいなかったが、ちょうど散歩から戻ってきたところだった。

ノーマンが「よう」と声をかけると「戻ったか」などと当たり前のこととは言わず。「こっちで話を聞こうと」だけ言った。バンカーヒルの商人つてのはそういうものだ。

雇用主であるために、傭兵とは報告とキャップの話しかしたがらない。仲間を失ったとこちらが嘆けば、帰ってくるのはお悔やみの言葉ではなくキャップ、キャップ、キャップ。そして契約書である。

「予定通りだったようだな」

「予定だって？ああ、期日には間に合ったがね。今回も冷や汗はたっぷり。ひどい目にあわされたさ」

机につくなり、軽く嫌味をきかせてみる。

効果はない。

「誰か死んだか？」

「——いや、怪我人だけ。白状するよ、実際のところ大したことはなかったよ」

「伝えた情報はちゃんと生かされたというわけだな」

老人の言う通りで、返す言葉がなにもない。いつものように微笑みだけ、むけられている。

「では——」

「いや、終わりだ」

「ん？」

「爺さん、あんたの依頼……苦勞させられたが悪かったわけじゃない。でもな、だからつてこうも立て続けにとんでもないところに行つて来いと言われちゃこつちだつてたまらねえよ」

「ふむ、泣き言か」

さすがに腹が立つてきた。

「あのな！図書館に始まつて、議事堂だの、なんちやらいう兵器会社だの。俺達をどんな奴らのところに送り込んできたと思つてる！」

「危険な場所。危険な連中じゃ」

「そうだよ！図書館じゃスーパーミュータント。議事堂とやらはマイアラークの巢で、兵器会社じゃ狂ったガンナーズがいやがった」

「だがキャップにとどまらず十分に手当てはあつたはず。お前たちは苦勞はしただろうがそれが傭兵だ。むしろこれだけ難しい任務をこなしても死人が出てないことを感謝するべきだ」

「ああ！だがこれもビジネスなんだよ。俺達だつてこう毎回死にかけの目にあつたなら、キャップの山を見せられたとしても次はもうお断りだ！」

「報酬を上げろと？これだけ十分なキャップを手にしてもまだ足りないとは」

「これはキャップの話じゃねえ。俺のチーム全員の命の問題なんだよ」

今回こそきつぱりと断ろう。そう決めていた。

自分達には休暇が必要な上、連邦の状況にキナ臭さを感じ始めているのも理由だった。

すでに十分な評価とキャップは手に入れているのだから、わざわざこんな時期に鉄火場に立つて目立つ必要はない。しばらくはダイアモンドシテイかグッドネイバーで静かにしていきたい。出来る限り、だ。

老商人に口説かれないうちにこの場を立ち去ろうと腰を浮かしたところで、ストックトンは意外な言葉を口にする。

「まあ、落ち着け。茶でもどうだ？」

「——あんた今、おれに茶がどうかいったのか？」

「そうだ。飲むな？いや、飲んでいけ。少し話をしよう」

店先に合図を送ると、まるで待ち構えていたようにお湯とポット、カップが運ばれてくる。

(やられた。思わず聞き返しちまった、俺のバカ！)

傭兵はもう立ち去ることはできない。

ノーマンは仕方なく腰を下ろし、用心深く老人の手つきを見守っている。

「お前とは子供について話すことはなかっただろう」

「フン、傭兵のガキに興味があるのか？娘が欲しいとか言ったらぶつとばすぞ」

「——ワシにも娘はある。かわいいものだ、この世界だからな。あの子の未来を憂いない日はない」

お前もそうだろう？老人の目がそう訴えていた。

「まあな」

「だが傭兵団である以上、危険と犠牲を増やさないためにあえて難しい依頼をこなさなくてはならなくなる。たとえどんな犠牲を払っても」

「——傭兵のことをよく知っているようだ」

「当然だ、知らねば使えん。お前たちが仕事で銃を構える時は、ワシがそうしろと命じたということだ」

「そういう考え方が出来る奴ばかりなら、こつちも有難いんだがな」
お茶に香りがつくまで待てという。

「どうだ、少し次の依頼の話を聞いてみないか？ノーマン」

「やっぱりな。それが狙いだっただろう？」

「そういうことではない。お前の子供たちの事、それが次の話と関係があると伝えたいだけだ」

「へえ。いいぜ、なら聞くよ」

老人の手が伸びてきてノーマンの前にカップを置いていく。

「——お前は気にしなかったんだろうがな。今までの依頼は全て、私の名前を貸してのことだった」

「つまり依頼人は別にいる？そうか、だがこつちは別に気にしないぜ」

「だろうな」

ストックトンはあいまいな笑みを浮かべる。

ノーマンがその笑みの意味を知るのは、未来の話になる――。

「レキシントンのそばにスターライト・ドライブインというのがあるのを知ってるか？」

「どうかな。覚えてない」

「ミニッツメンのプレストン・ガービーが……」

「ああ！今年の初めに崩壊した。それならわかる」

「そこが再び動こうとしているんじゃない？」

「……ちよつと待て、もしかして次の仕事ってのは？」

「お前の傭兵団を居住地に招きたいそうじゃ。契約を結びたいとな」

「俺達に守ってくれてわげか？」「……」「いや！そんなわけがないな、再開するって事はそこはミニッツメンの居住地だ。なら、奴らはそこを自分たちで守るはず。俺らのような傭兵団を近づけねえ」
「そうだな」

「爺さん、おれをからかつてんのか？」

ストックトンはノーマンを見やる。そろそろいい加減だろう。

「ある人物にワシは力を少し貸している。この話にもな」

「なるほど。そういえばあんたのところは不思議とミニッツメンはなにも言わないって話だったな。ここにいる木っ端商人どもがくやしがつてた」

「ある人物はそこに傭兵団が欲しいと考えていてな。ワシはお前ならどうだと言っておいた。お前達の力を彼も知っているからな」

「――クソっ」

「いい話だぞ。上手くいけばそこは連邦西部に大きなキャップの河を生み出す可能性に満ちている」

ノーマンはなぜかまた小さく悪態をついて、まだ暖かいであろうカップの中の液体を飲み干して見せる。

「お前の傭兵団。部下や子供たちは落ち着いて平和に暮らせる。居住地警備は傭兵団の夢だろう？」

「……俺をなめるなよ、爺さん」

ノーマンの顔が苦虫をかみつぶすような顔になっている。

「俺達に散々危険な場所に送り込むような奴が、ただの町の警備を任せる？ そんなわけがあるかい」

「ほう」

「俺達に選んだ？ 最初に持つてきた？ ってことは、この話。断れない奴じゃねーか！」

「そんなことはないぞ。お前も言っただろ、これはビジネスじゃ」

「俺が断ったらどうなる？ 次にこの話を持っていった先で、そいつらに俺達を潰してこいと条件が付くんだろうがっ」

「それは依頼人の考え次第だな。ワシにはわからん」

「クソ爺ィ——」

怒り出すノーマンを見て、ストックトンは調子を変えて語り掛ける。

「思うに、お前はただ引き受ければいい」

「俺のチームに飼い犬になれって？」

「どんな飼い主なのか、それを考える前に見るべきだと言ってる。どのみち悪い話ではないのだ」

「どうだか！」

「野良犬生活に未練があるわけでもないだろう？ それにお前の娘たちはどうだ？ お前や傭兵団がなくなれば、どうなる？」

不安をつつかれてしまった。

暴力にまみれた安定しない生活しか自分は家族に与えてやれなかった。

「——あいつらは。娘達はダメだろうな、レイダーになっちまう。うちは代々兵士の家系なのにな。ついに馬鹿を誕生させるかもしれないねえ」

「息子はどうか？」

「あいつは俺と違って……メカニックで食っていけるくらいの腕はある。だが、家族を愛してる——」

銃など握らない生活も出来たかもしれない。

だがそれには自分の手から離すしかなく。ノーマンはその決断が

出来なかった。

わずかな空白の時間が流れた。

「まだ俺が母親の腹に入って頃の話さ——親父たちは仕事でしくじつてな。長い旅路のなか、仲間を失いながら逃げていたらしい。」

ある時、たまたま近寄った小さな村がレイダーに襲われててな。親父たちは結果的にそいつらを守ってやったんだそうだ。おかげでえらく感謝されて、そこに残ってくれって」

「いい話ではないか」

「ところがそうじゃなかったらしい。報酬が話にならないと親父は断ろうとしていたが——母親が一生に一度の願いだって言って。それを引き受けさせたんだ。おかげで、俺達の世代は無事に生まれることができたと聞かされている」

「ほう」

「いい7年だったよ。いまもあの時の記憶は残ってる。最後は悲惨だったけどな、多くを失って。わずかに新しい仲間を加えた。状況がまた難しくなったただけだって、子供でもそれくらいはわかってた——」

自分も子供たちにそれを与えてやりたかった。だが現実は？

彼らは愛する家族、母親を失い。父親は厳格なリーダーでしかなく、力にとりつかれてしまっている。

ノーマンはため息をつく。

「わかった。どうしたらいい？」

「——それほど心配はいらんよ。デブが大丈夫と言ったら、それを持ってお前たちはすぐにドライブ・イン・シアターにむかったらいい。彼は今、そこにいるからな。これは彼に直接会える数少ないチャンスだ」

「気に入られなかったら？運が尽きてるのかも」

「大丈夫だ。ワシはお前が好きだからひとつだけ忠告してやる。それは絶対に忘れるな」

「？」

「お前には彼が甘い夢を見ているだけの若者に見えるかもしれないが

——馬鹿なことはやめておけ。バラモン革を使ったなめらかな肌触りのするソファ―に横になっても、お前の背後には常に彼の目があると考えろ」

「裏切りは許さないタイプか」

「子供達にもきつく言い含めておくといい。ワシの知る限り、あの若者を敵と呼んで生き延びた奴は驚くほど少ないからな」

ストックトンは落ち込んでいるノーマンから視線を外す――。

彼の姿は間違いなくかつての自分の姿と重なる。グッドネイバーに登場と同時に殺戮をやったのけた話題の新人。それがあろうことが娘の命を救ったとわかったあの日。

それからは色々と融通もしたが、不愉快なことは何も起こってはいない。

バンカーヒルは今日も平和だ。

だが明日はどうなるかはわからない。



キングスポ―ト灯台の解放、それは將軍からの命令であり。プレストン・ガービーはすぐにもダイヤモンドシティの兵士達にこれを公式発表するように手を打った。

ロニーの話では將軍はこちらに戻ってくるつもりらしいとの話であったが。残念ながらまだ戻っていない。

いや、もしかして顔を出してないだけというのでは――。

それを確かめたくとも、ガービーは身動きが取れない。

ああ、なんて皮肉な話なんだろうか！

兵士がいらないから救援にはむかうことが出来ないと嘆いていたはずなのに。戦いは終わって勝利した結果、やっぱりまだ動けないでいる。

灯台に送る新しい住人達のリストをスロッグとグレーガーデンの代表から知らされ。彼らが無事にたどり着けるように新しいミニッツメン達をそちらに送る。さらにこれによって巡回ルートも新しく

見直さなくてはならない――。

仕事はどんどん増えていくばかり。

さらにガービーを失望させた新兵共は雁首揃えて訓練生に差し戻し。今更ながら手入れのいきとどいたレーザーマスケットを担ぎ、ちゃんと洗濯された身綺麗なダスター姿の旧ミニッツメン達との面会を適切に処理していかねばならない。

自分が犯した間違いを知り、正しいものへ戻したいと思うのだが、次々と押し寄せてくる雑事がそれを許してくれそうにない。

(ツケを払えってわけだな。俺はなんて馬鹿なことを――)
後悔してもしようがない。

緩やかに変えてきたことをいきなり戻せと命令すれば反発が出る。使える新兵はすぐにも、ひとりでも多く必要な現状で。彼らを訓練する教官たちを混乱させては――。

(過ちは繰り返さない。それが、それがこの新ミニッツメンであったはずなのに！)

足りない兵士のかわりは――元傭兵や旧ミニッツメンを頼る。いや、今は頼るしかない。

これはガービーが自ら望んだこと。新しいミニッツメンにと望んだことだった。

自縄自縛、滑稽に過ぎて己を笑うしかない。

睡眠不足、肌が黒いと言ってもそろそろ人相も変わってしまいそうな状態。

そんな時ひとりのメールマンが、ガービーに面会を求めてきた。

「なんだ？急ぎなのか」

「そんな感じはありませんでしたけど、本人にだけ伝えるところです」

「そうか」

会ってみると先日とは別のメールマン。そして渡されたのは一枚の封筒――。

「これは？」

「招待状、お迎えに上がります、だそうで」

「そ、そうか——アキラ？」

「じゃ、自分は帰ります。では」

メールマンとは総じて留まらない連中らしい。要件を済ませると本当にさつさとオーバーランド駅から姿を消してしまふ。

昼過ぎ、予告された時刻通りにベルチバードが着陸する。私は乗り込む以外の選択肢はなかった。

衣装室ではトミーの準備が進んでいる。

ケイトはその後ろ姿を黙って見ている——今日はこの友人の晴れ舞台となる、はず。

「ふむ、どうだろうな」

「……」「なんだ、ケイト？」「やっぱりあんたはスーツが一番だよ」

アキラはトミーに契約の証として黒のスーツを贈っていた。

以前と違って今日は洗濯された綺麗なそれ。同じグールでもコンバットゾーンの頃とはまるで別人のようだ。

「今後は似合うようにしないと」

「あたしは安心して見てるからね。自分があんたのショーを見る側になるって、想像したことがなかった」

「ああ……俺だつてまたステージに上げれる日がこんなに早く来るとは思わなかった」

「しっかりね、見てるよ。トミー！」

「おう」

笑顔を残し、ケイトは楽屋を後にする——。

スターライト・ドライブ・イン。

あの日の残骸はなんだつたんだろうか？

ベルチバードから降りたガービーは目の前にあるものが信じられなくて夢を見ているようだ。

明滅するライトに飾られて並んでいる屋台。

旧世界では売店だった場所は屋外レストランへと改装され、酒や飲

み物はそばの屋台で売っている。

かろうじてかき集めた木材で風をよけるだけだった住居とも呼べなかつたものはすっかり片づけられ、鉄製の壁と屋根で弾丸や雨から守ってくれる家が並んでいる。

まるで別の場所。別の町がそこにあった。

「おやおや、おノボリさんがいると思つたら有名人じゃねーか」

「——マクレデイ?」

「まあ、そんな顔にもなるよな。俺もここに来た時はそんな顔だつたぜ」

自然と握手を交わすと「アキラは?」と聞くが、マクレデイは肩をすくめただけだった。

「招待状、受け取つたんだろ?」

「ああ、いきなり呼び出しだ」

「まあな。俺はあんたが迷子にならないように迎えに来たんだよ。あいつによるとアンタは今日のゲストのひとりだつて言うし」

「ひとり? 他にもいるのか?」

「来ればわかる。それと、まあ驚くなよ」

住居を抜けると、目の前を横切つていったものを見て思わず凍り付いた。

デスクロー!?

「お、おいっ」

「ビビるなって、気持ちはわかるけどよ。マスケット構えるのやめろ」
土色の肌と鋭い爪をもつ凶暴なトカゲはガビーやマクレデイを一瞥すると、のしのしと足音を立てて離れていく——。

ここは人の住む町。そこに人を襲い、喰らうデスクローが歩く!?

「あつ、あれはなんだ」

「デスクローだよ。見たことあるだろ?」

「そんなものが何で町の中を歩いてるっ!」

「——なにをいってるんだよ。お前らだつてここにスーパーミュータントを番犬代わりに置いていただろうが」

「それとこれとはっ」

「はいはい、そのままめいっぱい驚いておけて。どうせこの後もとびつきの奴を目にすることになるんだから」

「なんだ!? まだなにかあるっていうのかっ」

目の前を子供達や大人たちが列をなして通り過ぎるのが見えないのか。悠然と歩きつづけるデスクローからガービーは目を離せないが、マクレデイが「いくぞ」と何度も促し。最終的には腕を無理矢理引っ張って連れて行かれた。

祭りのように賑わっている居住地をノーマンもまたボーつと見つめていた。

今日の彼はアーマーを身に着けてはおらず、シャツとズボンだけで、腰にあるホルスターに10ミリピストルをぶら下げているだけ。

ストックトンが言った「そう悪い事にはならない」というのは本当だったらしい。

ここに来て確かに居住地との契約は結ばれたが——それは彼が思っていたようなものでは全くなかった。

そのおかげでこういう時でも、自分達のチームは武装したまま居住地の中をあちこちでいかめしい顔で立たなくてもいい。確かに悪くはないと思うが不思議な感じがする——。

「パパ、ここにいた」

「おう」

「もうすぐショーだつてさ」

「ふん——俺達の獲物も出るんだよな?」

「もちろん。見るだろ?」

ノーマンはぶら下げていたビールのケースを息子に掲げて見せた。

「当然だ。わざわざこうして買って来たんだからな」

「やった!」

ここに何年居られるのか。それはわからないが——遅くなってしまったが、自分が幼いころ味わったあの時間を。ようやく自分の子供達にも与えることが出来たことは最高だった。

あとはそれがこの家族に少しでも長く続けばいいのだが——。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

マクレデイに連れていかれたそこには、これまで見たことのない異様な大きさの壁の前にやけに大勢の人が集まっていると思っていた。だが近づくと、それは角丸四角形の立方体に観客席が作られていたことがわかった。

球場

野球という球技の失われた世界で、もはやそれに気が付く人はいない。

「ダイヤモンドシティ……?」

「ああ、そう思うよな。俺のいたキャピタルでも、こんな感じのが残ってた」

「何をする場所だ?」

「——なア、ダイヤモンドシティでスワッターとかいう昔のゲームの話をするクソヤローがいるのを知ってるか?」

「??」

「アキラの言うには、スワッターって奴もこういうところで昔はやって。大勢の観客を集めていたらしいぜ」

「な、何の話だ?」

混乱するガービーに答えず。マクレデイは「こっちだ」といって先を歩く。

「招待客のお前は特等席だつてよ、やったな有名人」

「そうか——それつてすごい事なのか?」

「しらねえ。でも隣の席にいるのは我慢しろ」

「?」

疑問ばかりがわいてくるが、案内された先の席の隣にいたのは。知り合いだが確かに驚いた。

「あら、ガービーじゃない!」 「パイパー?パイパー・ライトか!」

他に誰だと思ったの、椅子に座って見上げてくる女記者に、思わずガービーは席に着くなり前かがみになって問いただしてしまう。

「い、いつ戻ってきたんだ？」

「え？ああ、違う違う。ブルーとダイヤモンドシティに戻ったんだけど、呼び出されたのよ。このバカ騒ぎにね」

「アキラにか？」

「そうだよ。なんかやるから、よかつたら記事にしてくれないかって」
どうやらリラックスしているようでパイパーは肩などすくめてみせるが。ガービーはとにかく將軍の事が気になっている。

「將軍と一緒に戻ったと言ったよな？いつだ？」

「え？ちよつと前だよ」

「將軍はどうした!？」

「別れたよ？ちよつと寄っていかない？って誘っただけだね。やりた
いことを残してるとって」

「それはいつだ!？」

「……ちよつと待って。まさか会ってないの？ガービーのところに顔
を出すって言ってたんだけどなあ」

顔から血の気が引いていくのをはつきりと感じる――。

「おい、ビールはどうだ？顔色が悪いぞ」

「あ、ああ」

マクレデイが気を利かせたのかどうか知らないが。冷たいビール
を差し出してくるとガービーは思わずそれを受け取ってしまう。

「將軍はここには来てないのか？」

「レオか？どうだろうな、特に呼んだって話は聞いてないぜ」

謝罪、反省。とにかく多くのものが必要だろうが、あのアキラが自
分やパイパーを呼んでおいて將軍は呼ばなかった。そんなことさえ
信じられない気持ちでいる。

「パイパー、ここはなんだ？何が始まる？」

「わかんない。でもさ、この形。なーんか嫌な予感しかしないんだよ
ねえ」

顔を近づけて、しかめっ面になる彼女の言葉で改めてガービーは周
囲を見回した。

たしかになんだか見覚えのある形だ。何かが始まるのを座って

待っている人々をあのレイダーのクソどもに変えると、それが明確に示される。

「おい、おいつ。まさかこれ——」

「ちよつと、座りなつて。始まるよ」

ちよつとやつてきたケイトに言われ、しぶしぶガービーは浮かしかけた腰を再び席に戻すしかない。

棘のついたステツキを持ち。

黒で統一されたトップハットにスーツ姿のグールが進み出てくる。

「このショーの第一回を。ここにいる皆様に楽しんでいただけると、光栄であります……飲み物はよろしいかな？お腹は十分に満たされていますか？まだなら急いで屋台へどうぞ。

キャップを使つていただくだけで、皆様に足りなかつたものはずぐにも満たされるはず！

でも気を付けて！

今から行くというなら急がないと。これから始まるショーを見逃してしまいますからね」

観客席から笑い声、早く始めろとヤジが飛ぶ。

グールは——トミーは静粛に、と手でジェスチャーを示すだけでそれをやってのけると。再び口を開いた。

「ショーを始める前に、皆様により楽しんでもらうために説明をさせていただきます。

いえ、長々とはいたしません。本当です、お約束します……これより始まるのは、裁判！」

ガービーは瞬きを忘れた。目が飛び出しそうな勢いだ。

「この後、容疑者が現れます。罪の糾弾が始まり、即座に刑は執行される。

ああ、ですが最初に言っておきますが。この裁判、残念ですが死刑だけはないのです。ええ、残念なことにな

観客席からブーイングが上がり、パイパーの唇がモニョる。

死刑はやらないだつて？ならなんでわざわざそんなことを言った

?

「本日用意しましたのは5人の罪人！彼らが自らの犯した罪と対面し、それに勝利した暁には無罪を勝ち取ることが出来るでしょう。」

それでは説明はここまで……さア！第一回公開裁判ショー、始まります!!」

面白くもなさそうな顔の2人の傭兵、逆に顔を引きつらせている2人の客人。

だがグールの宣言に反応したのだろうか。観客席からは歓声があがった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

真つ暗だった部屋の扉がようやく開くとビル・ロックリーは倒れるようにして外に転がり出た。

ふたりのシユラウドに拘束された彼の記憶は、そこから真つ暗な闇の中で目が覚めたところにながつかっていない。そしてあれだけ望んでいた外に出てみれば——自分を見つめる観衆の目にさらされていたことに驚き、パニックに陥る。

「あ……ああっ……あううう」

(なんだよ、これはなんだっ!?)

カオスだ。

自分に何があったのか。これから何が始まるのかがわからない。

『この男はビル・ロックリー。あのプレストン・ガービーのミニッツメンに参加すると口にしていながら、実際にはそこから金目のものをくすねていったコソ泥です!』

しかし、皆さま。これを許していいモノでしょうか？盗みならだれでもやっている?』

スーツ姿のグールが煽るまでもなく観客席からは「そいつを殺せ」の合唱が始まりかけている。

ビルの正気もそれまでだった。

恐怖に駆られて走り出すが、観客席との間にはしっかりと侵入でき

ないように封印がなされており。ゲートと思しきところは、しっかりと鋼鉄の扉でもって閉じ込められていることを思い知らされたけだった。逃げ場はなかった。

『殺す？本当に？』

ただのコソ泥に死を与える？それはさすがにやりすぎでしょう。さア、皆さん。

これから彼が自らの罪と対面します。彼がそれをどう乗り越えるのか、見てみようではありませんか！』

微塵も伝えない壁を叩きながらビルの脳裏ではあの暗い路地に立つ2人のシユラウドがフラッシュバックしていた。

背後で不気味な音がしても、彼はそれに背を向けたまま泣き叫んで「ココを出してくれ」と壁を叩き続けていた。

それでも近づいて来れば嫌でもわかってしまう。

アポミネーションが放つ独特の音、羽の音——ブラッドバグ。

地上で群れをなして生き血をすすするブラッドバグは、結局最後の瞬間まで背を向けたビルの背中にとりつく。腹をパンパンに膨らませるまで血を吸い上げた……。

「なんだ。これはなんなんだよっ」

口元を覆って絶句するパイパーの隣で、ガービーは怒りに震えていた。

「まあ、見たとおりだな」

「ふざけるなよ、マクレディ。あいつ、あの小僧。あいつはこんな処刑シヨをやるのをお前は許したって言うのか？」

「処刑はしてないぜ？言ってただろ、ただ運がなかったみたいだな」

「ふざけるな。あんなアポミネーションを相手にして——」

相手にする？どうやって？

口には出さないがマクレディとケイトの目がガービーに向けられ、彼もまた最後まで何も言えなくなる。

わけがわからなかった。

恐らくはあのデスクローが答えだ。人の中にいても、人を襲うことではないアポミネーション。それをアキラはどうにかして実現させた。

そしてこんな裁判などと言っておきながら、私刑ショーをおこなっている。

「ま、お前が怒りたくもなる気持ちはわかるけどよ。最後まで見てからにきな」

マクレディはまだ何かを隠しているようであったが。ガービーは怒りをこらえ、とりあえず最後まで見てからやってやる——何をやるのか知らないが、そう結論を出した。

ステージ上では失血死したビルが片付けられる中、次の容疑者の名が呼ばれていた。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

「裁判ショーだって？あんな正気かよ」

「——どうだろうね」

その日、トミーはベルチバードから女性を伴って降りてきた若者と2人きりになると。説明されたことを短く簡単にして、相手に確認を求めた。

それまでは目つきが悪く。どこか油断できそうにない雰囲気だった若者の様子は一変する。

目元には親しみを感じずにはいられないやさしさがあふれ、言葉の持つ揺るがぬ力強さには確かな説得力がある。なのに、それでも感じる狂気の強さよ。

「この世界の奴らは裁判なんて求めちゃいない。すべては銃で解決する、そんなことは子供でも分かっていることだぞ」

「確かに——あのガービーのミニッツメンですらレイダーからは降参を許さない。すべては現場の判断にゆだねる。つまりは私刑は許される」

「ああ、それがこの世界だ。」

そうされても仕方ない奴らが銃を手にするんだ。誰かを殺したから、いつか自分の番が来る。そういうものだろ」

「だけど僕はね、これで壊れる前の世界にあつた法のシステムを復活させたといってわけじゃないんだ」

「そう願うね」

無駄足を運んだのか、わずかにだが失望を感じていた。

それがトミーにいつもの皮肉めいた口調に戻す。

「目的は別にあるんだよ。あなたは——いや、トミーと呼んでも？」

「ああ、いいぜ」

「トミー、最近のバンカーヒルの情勢は？」

「大抵のことは耳にしていると思うがね。なにかあつたのかい？」

「傭兵たちが職を失いそうだと嘆いてる。実際、ミニッツメンが活躍しすぎていて彼らの出番はさらに減っている」

「——そうかもしれないな」

「いや、そうなんだよ。でもそれでは困る。」

自分達だけで小さくレイダーでもやってくれりゃ、いつかはミニッツメンがどうにかしてくれるだろうけどね。彼らが廃業よりもガンナースを選ぶなんてことになっては困るんだ」

「……そりゃそうだな」

なんだかいきなり、とんでもなく危険な会話が始まりかけている気がした。

「ミニッツメンはいるから傭兵はいらないって話じゃない。ミニッツメンが消えた時、傭兵もまた消えてましたでは困るってこと」

「——そんなことがあるかね？」

「なりそう、なつた。では手遅れなんだ、その前に手を打ちたい。彼らの技術を残すため、彼らに仕事を与えたいんだ」

「とんでもなく上から目線だが。あんたの狙いは理解できたぜ——そんなことが実現できるとは、全く思えんがね。どうして俺を呼んだ？」

誠実だったアキラの目に怪しい妖気が漂いだした。

「レオさんからコンバットゾーンの話聞いてる。それでトミー、僕はあんたに興味を持ったんだ」

「そりゃ光栄だな」

「こんな世界であつたとしてもショービジネスに人はキャップを出す——あなたの考えには同意するしかない。僕もアンタの理想に同意するひとりなんだ。あんたを尊敬するよ」

「照れるね」

間違いなく褒められていると感じる。相手が若者と言つても悪い気はしない。

「だがあんたのコンバットゾーンは運がなかった。レイダーが客になつたことで、ショーの意義から奴らに貶められてしまった。あのクズどもはあんたのショーを理解することを拒否して、嘲笑うためだけに見るようになった。それがあんたの敗因」

「……そうかもな」

「僕はあるの後から走ってきた子供さ。僕はここであんたに負けないういショービジネスを始めたいと思つてる。だけど問題は大きい。特に困るのは、そもそものショービジネスが成り立つところからさうだ。」

トミー、アンタは失敗した。

そして僕も、このままひとりで始めれば失敗する。僕たちの掲げるショービジネスの夢は、幻でしかないって誰もが思うようになる。そんなことには絶対にしたくないんだ」

「その気持ちはわかるぜ。だがよ、あんたは俺に何をさせたんだ？」

若くても侮れない相手であるという思いと、情熱を感じる言葉にいつしかトミーは当然のようにそれをアキラに聞いてしまった。

アキラの言葉に一層の熱が入ってくる。

「僕のショービジネスを、あんたに仕切ってもらいたいんだ。」

トミー、あんたには僕には絶対的でない経験がある。ショーをどうやって正しく運営していくのか、それがわかつてる。僕とあんたが考える未来が本当にあるというなら、2人が手を組むことが間違いないものだと言信できるはずだ」

「むむむ」

「それにトミー、ケイトに聞いたんだけど。あんたはコンバットゾーンを、あのグッドネイバーのハンコック市長の偉業に負けないものだ」

と証明したかったのだと口癖のように言っていたって」

「ああ、まあな。とんだお笑い話になっちまったが……」

「そんなことはないさ。でも——いいかい？」

「ここで、僕と組んでくれるっていうなら。そのジョン・ハンコックにまさしく正面から勝負できるチャンスをとにしてみないかい？」

「ど、どうということだい？」

それまで前のめりだったアキラは急に頭を上げて距離をとると。妖気が霧散し、またあの善き人のような笑顔に戻る。

「あんたが力を貸してくれるというなら、トミー。あんたには個々の商人たちをまとめる代表のひとりになって欲しいと思ってる」

「——ああ、悪いがここの代表っていうのは。あの若い奴じゃないのか？」

「彼はここにすむ居住者たちのまとめ役つてだけ。トミー、周りを見て欲しい。この場所にある、屋台の数を見て」

そういうとアキラは腕を振り回す。

その先にはまだ無人の屋台が並んでいる——。

「もうすぐあの一軒一軒に商人たちが入ってくる。彼らはこれまで連邦の空の下を旅をしながら商売してきた、くせ者たちばかりだ。それがようやくどつしりと腰をすえて商売を始めようとする。」

仲良くやれといつても、うまくはいかないものさ。だから彼らと話せる商売人が必要になる。僕はそれもアンタだと考えてる、トミー」

「そりゃ……買いかぶりすぎってもんだ」

大きな責任が任されると聞いてトミーもさすがに腰が引けだした。「そうでもない。トミー、あんたは今。ミニッツメンに許可された数少ない商人で、ミニッツメンの居住地で商売をやってる。うわさは聞いているよ、良い商売をやってるってね」

「う、うう」

「ここにはミニッツメンも来る——ほらね？僕が必死に口説いている理由がわかるだろ？」

「だがな。だが——俺を見てくれ。俺はあんたのようなスベスベの肌はしてないんだぞ？」

「トミー、ここでのマーケットの成功は。ただ僕らのショービジネス以上に重要な意味を持つことになるはずだ」

「——と、いうと？」

「考えてみて欲しい。バンカーヒル、ダイヤモンドシティ、グッドネイバー……連邦で商売を支えるマーケットはこの3つが手にしている。でもここがビジネスとして安定した場所であると証明できれば。連邦で4番目に誕生する巨大なマーケットとして信じられないキャップの河を作り出してくれるはずだ」

「キャップの——」

「広大な平地は、守るには難しいが。そこさえ目をつぶればチャンスが待ってる」

「確かに、確かにそうだな」

自然に漏れ出たトミーの言葉に、アキラは笑顔を浮かべる。

契約の締結となる握手を交わすのにも、それほど時間は必要なかった。



ショーはさらに続く。死刑はないと聞かされてはいても、実際に卑劣なクソ野郎たちはアポミネーションとの対決に敗れて無残に死ぬことから観客は熱狂する。

その後もレイダー、ガンナー、居住地内で強姦殺人をやった犯人と続く。

彼らは罪を読み上げられ、武器を選んだ後にアポミネーションとバトルフィールドで対決した。

初戦のような一方的な展開こそなかったが、それでも勝利して無罪を勝ち取れた奴はひとりも出なかった——。

(なんてことだ。ミニッツメンの収める居住地の中で、こんなレイダーのお遊びのようなことを始めるとは)

ガービーの怒りが湧きたっていた。

黙ってはいたが、あまりに怒りすぎたせいで。今、目の前で起きて

いる現実を意識的に見ないようにしてしまおうくらい、頭に来ていた。ここでアキラが観客席にひよいと姿を見せたりすれば。いつかのように無言で殴りつけるでなく。いきなりマスクETTを構えて発射するまでであったかもしれない――。

最後の試合は終わった。

レイダーは最後の最後で槍を放り出し、逃げ回ろうとしたけれど。マイアラークはそれを許さず。急停止から逆に回り込んで、その固い爪でもって腹を貫いた。

片付けが始まる中、トミーが出てきたが。ショーの最後のあいさつでもするのだろう。

パイパーとガービーは動かない、沈黙している。周囲の熱気と違い、そこだけ空気が重かった。

「色々だよ、言いたいこともあるんだろうけど――」
「ないわけがないだろう」

ガービーの声は小さく、そして低かったが。マクレデイは構わず話を続ける。

「でもよ、ちゃんと見てやってくれよな。俺はあいつに馬鹿野郎って言ったんだぜ」

「なんのことだ？何を言ってる？」

「ケイト？」

「……あたしも同じだよ。ありや、頭がイカレテルわ」

2人の疑問に答えず。2人のアキラの傭兵たちはなぜかそろって特等席に深く体をうずめていく。

まるでそうしないといけないというように――。

『本日のショー、これにて……というべきところですがア。』

この大盛況、この熱気。楽しんでいただけただけ皆さまに感謝をささげます！』

歓声が上がリ、また見に来るぞの声も聞こえる。

『しかし今日は特別な日。だからこそ皆様にだけ楽しんでいただけ、スペシャルマッチをご用意しております!!』

歓声がまたまた上がる。次はどのクソ野郎が出る？どのクソ野郎が死ぬ？

『しかしこれはスペシャルマッチ——それにふさわしいものでなければならぬでしょう』

トミーの言葉に合わせるように、これまでとは逆のアポミネーションが出てくるゲートがゆっくりと開いていく。

ノシノシと、明らかに重量級の生物の気配……。

『殺人は罪だと誰もが言うでしょう。しかし今日ここに出た殺人者たちの罪は、それぞれに違いがありました。これから明かされる罪もまた、殺人であってもなお重いものであることをここにお約束します』

トミーはスーツの内側からいきなりたたまれた新聞を取り上げる。

『ダイアモンドシティにはパブリック・オカレンシア——真実の報道を続ける新聞がございます。これが先日伝えました、ミニッツメンの庇護の下にあっても。哀れにも襲撃を受けたコベナントという居住地を！』

パイパーの体が震え、背中がのびる。

『しかしこれより口にする罪は、これではありません。この前にも、やはりコベナントは襲撃を受けておりました。』

その姿は巷の噂に残っております。小さいけれど、塀に囲まれ、安全な町。その住人達は笑顔を忘れず、訪れるどんな客をも迎え入れて交流を望んだとか。

しかしその町もやはり炎に包まれたのです。平和を愛した人々は殺されました、ひとり残らず……ミニッツメンはただ、悲惨な事件があったことだけを伝えていきます』

ガービーの目が丸くなる。

『しかし今日、真実の一旦はこの場で明らかになります。皆さんの目で確かめようではありませんか！』

無慈悲に住人達を虐殺した真犯人の名を——それでは登場願いましょう。闇に輝く銀の輝き……シルバー・シユラウド!!』

罪人のゲートがゆっくりとあがっていく。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

足音は確かに聞こえていた。

姿が見えてくればもはや一目瞭然だった。

シルバー・シユラウド。

影に身をひそめ、悪が栄える時。無実の人を守って罪人を裁く。正義の守護者。

それが現実に。しかも罪人との弾劾を受け、ここに姿をさらしている。

戸惑いと混乱に観客席はざわめきだす。どう考えればいいのか、どう受け止めたらいいのか？

それでも興奮を覚える者の中には、あのグッドネイバーから流れてくるシルバー・シユラウド・ラジオのことを思い出す。

『シユラウドは言います。正義は常に果たされるが、あのコベナントですら。あの善き人々であったと伝えられた人々しかいない町であつても、それは変わらなかったのだと。シユラウドの銃が火を噴く時、その弾丸は彼らに向かって飛んでいったのです』

我慢できず、ガービーは隣のマクレデイの襟首をひつつかむと顔に近づけ。押し殺すようにしてなんとか言葉をはねり出す。

「アキラは何を考えてるっ。あの事件については秘密を守ると約束されてただろっ」

「落ち着けよ。何も説明してないだろ？」

「だいたいあの姿はなんだっ。これはなんの茶番だ!？」

「静かにしろよ。周りの奴らに変な目で見てるぜ？」

「マクレデイー！」

「——黙って最後まで見てろ。俺だつてなア」

マクレデイはいらだつ顔を見せると、細い指には似つかわしくない強い力で襟首をつかむガービーの指を掴む。

「あのバカのそばじゃなくてここにいななくちやいけなくて、頭キテンだよ。黙らねえといい加減、ぶっ殺すぞ」

殺気立ちながら離れる男たちをケイトはあきれ顔で見守っていた。『それでは本日のメインイベント。スペシャルイベントを始めます！シルバーシュラウドの正義は罪であるのか、そうでないのか!?』トミーの姿がフィールドから消える。

デスクローは低いうなり声、涎が口の脇から垂れ下がるが。まだ“始める”ことはない。

シュラウド——アキラは、壁際に並べられた武器の中から洋剣を選んで手に取った。

いつも彼が使っているシシケバブと違う。ロングソードと呼ばれるものだが、そんな一本だけで危険な爪を持つデスクローを殺せるとは到底思えない。

いつの間にか、観客の中にあつた戸惑いは消えていた。

剣を手にした途端。一変したシルバー・シュラウドの気迫はあつという間に観客たちの心をつかむと飲み込んで見せたのだ。

誰もが知る黒の帽子、黒のコート。

だがこのシュラウドは現実で、口元を隠すスカルバンダナで表情は読み取ることが出来ない。



混乱から始まった最後の試合は、驚愕と脅威の連続を繰り返す。ついにようやく最後の時を迎えようとしていた。

しかしである。

これは地獄。

なんとという地獄絵図であろう！

この日が最初であつたはずなのに、バトルフィールドはすでに血の海と化している。

全身を血に汚れるシルバー・シュラウドの姿はあまりに壮絶で鬼気迫るなんて表現すら甘く。

弱い者達のなかではすでに息が乱れて呼吸をするのも難しく感じ

始めている者が続出していった。

ロングソードは未だ彼の右手に握られはしていたものの。

左腕は根元では骨を外され、上腕は鋭い爪で縦に引き裂かれたせいで大出血。

これまでどれほど激しい戦闘であつても耐え抜いていたはずの衣服は乱れに乱れ、しかし表情だけだはまだスカルバンダナがしっかりと隠してくれている。

デスクローもまたひどいものだった。

右腕は半分からたたき切られてしまい。落とされたときは、手が地面で跳ねると観客席前の壁に叩きつけられ。熱い血潮を観客たちにもかかってまき散らした。

お互いの機動力を潰しあつたことでデスクローは先ほどまでは片足を引きずっていたものの、今はついに倒れ込むと立ち上がることが出来ないでいる。残っている腕だけで半身を支え、まだ死ぬものかよと威嚇だけは辞めようとしめない。

それまでクズ野郎を処刑するだけのショーだと信じていた観客たちは席を立つことも目をそらすことも出来ないでいた。

ただ終わって欲しい。早く終わって欲しい。

それが今すぐかなうなら、この場に残ってるキャップをすべて吐き出しても構わない。そう思うものもいたが、願いはかなうことはない。

——はあああああつ！

それはシユラウドが大きく息をした。

ただそれだけであつたはずだが、魔獣が舌なめずりする恐ろしいものに聞こえる。

勝負の時は迫っていた。

獲物にどう止めを刺すか。距離を取っていたシユラウドが、ついに咆哮を上げて突撃する。

突き出されたロングソードの切っ先は、みるみるうちにデスクロー

に向かって吸い寄せられ……。

外で何がおきたのか、見ることも許されなかったキュリーは待合室でただひとり。

最後は空気が震えるような悲鳴のような声が聞こえたが。あのトミーらしき最後の挨拶が始まるのを聞いて、ようやく終わったのかと安堵した。

アキラが自分を試合に出すと言い出した時。仲間全員でやめろと説得した。

だが彼は頑として譲らず、キュリーも折れてなるものかと必死の思いで抵抗したが。あのアキラがついに冷酷に「コベナントに戻ってくれている」と言うに至り——負けるしかなかった。

暗い通路を通って戻ってくる足音が聞こえた。

ヒタヒタと心もとないのは、恐らく疲れ切っているからかもしれない。当然だろう、こんなバカなことをすればそうなる。

いつものように馬鹿はやつても無茶やらない——そう言うアキラが戻ってくると期待したキュリーの希望は無残にも打ち砕かれた。

あのわずかな出血すら嫌ったアキラが。

先日のメカニスト戦にも負けないようなひどい有様で目の前に立っていた。

あまりのことにショックで立ち尽くしてしまっただが。

2秒もすると体を震わせ、現実に戻ってくる。

さつきまでは「こんなには必要ないのに」と八つ当たりしていたスチームパックを詰め込んだケースに腕を突っ込むと。いつもなら手がめぐる、アキラの腕や首筋に数本を空になるまで連続して衣服の上から注入する。

(なんでこんなっ)

感情が乱され、泣きたくなるが。

同じく乱れているアキラの服に指をかけて、今度こそ心臓が止まりかけるほどに凍った。

「こ、これっ。ただの布じゃないですか。アキラ、これじゃ——」

「……」

責めたかったわけではなく。確かめたかったのだ、本当に正気なのか？と。

てつきり戦闘用のシユラウド衣装だと思い込んでいた。わざとやったのか？おそらくはそうだ。しかし彼がここまでやらかすと見抜けなかったのは自分だ！

キュリーは診療台に飛びつくと、はさみをにぎりしめ。上半身の服を無慈悲に切断して取り払っていく。

ようやく治りかけていたはずのメカニスト戦でおった傷跡の上に、新しい傷が多くできていたのが分かった。

アキラは座ったまま無言だった。

これにかまわずズボンもすべて切断すると、バケツに水を張った水に両足をつつませる。氷は凄く速さで溶け始め、だが透明なはずのそこに赤い色が混ざって広がっていく。

「死んでしまいます。死んでしまいますよ、アキラ」

いつの間にか自分が嗚咽していることに気が付いたが。何とかそれだけをキュリーは伝えようとした。

アキラはずっと沈黙し、動きを見せなかったけれど。

なんとかまだ動ける右腕が、頭を抱きしめてくるキュリーの腕に触れた。

——ゴメン

それは小さな声ではあったけれど、その謝罪は確かにキュリーの耳に届いていた。

憂悶 (LEO)

——手を伸ばしていた。

自分の体。その全てが震えていた。恐れていた。

気が付かないうちに「どうしてこうなった？」とも口にしていった。

そこではいつものように何の変化もない退屈でくそつたれな”日常”
”ってやつがなきやいけなかつたのに。

今、この瞬間にはそれが無い。

ダイアモンドシティ。

危険な連邦の中にある、唯一のもの。

安全があり、安心があり、だからこそ誰でもタダでは居られない場所。
CAPナシ

だが今はどうだ？

怒号が、憎悪が、恐怖が。

あらゆる負の感情がここに煮詰められ、純度の高い悪意が生成されあふれ出している。

そこに高純度の暴力が触媒となって加わり。不信感をむき出しにした人々は、興奮し、パニックをおこしてく。

血を流し。命の火が消えている。

無残に、不条理に。

いつもなら笑っているだけのあいつら、隣人同士で憎悪をぶつけあっている。

口論、非難する奴はもういない。皆が武器を持って振り回している。もしくは周囲に叫ぶことで自分の味方を増やしてから事をおこそうとたくらんでる。

今、町の中を走り回る子供たちは笑顔で楽しく遊び回ってるわけじゃない。

握っている武器で目につく大人たちを無差別に攻撃し、殺されまいと必死に逃げているのだ。

老人も老婆もそれはかわらない。

罵りながら目の前の誰かの腕を掴んで自分に引き寄せると、手に

持った武器で打擲《ちようちやく》しようとして振り上げる。

若い奴らもそのどちらかに加わるか、もしくは物陰に獲物を追い込んでひそかな暴力性を満たす享樂にふけっている。

ただ正気だけがない。

隣人が消え、獲物と敵だけしかいない町。

そして自分は――。

（――。どうだ凄いだろう）

伸ばした手の先からふぎけたひびきを持つ、いつものあいつがいた。

何が凄いつて？俺にはそれがなんなのかわからない。

だからアイツについなにが？と聞き返してしまった。わずかにもそいつがまだ自分が知っている奴だと思ってしまうたから。

（私はずっとこれを見たかったんだ）

この惨劇に満足していると答えた。怪物だった。

自分もこの町は好きじゃなかった。どちらかと言えば嫌いだった。でも、だからって……。自分を怪物にするほどゆるぎのない憎悪、

そんなおぞましいものは心の中に飼ってはいなかった。

後悔が、絶望が自分を窒息させてくる。罪の重さが恐怖を波のように不規則に襲ってくる。

もう俺は生きてはいられない。もうこんな世界じゃ、嫌だ。

自分が壊れた。

すると情景が変わる。

――手を差し伸べた

建物の中のホール。

緊張感が漂う中で、女は……。少女は憎しみを隠さずに俺と自分に対して悔しがっていた。

（どうしてっ!?!）

笑いがこみ上げそうになる。

ああ、わかるよ。続きは「こうなるんだ」だろ？その気持ちは俺に

もわかる。

グールであることの皴皴の肌はこういう時は役に立つ。

わずかな筋肉の動きは許してくれないのだ。おかげで緊張感を壊すことなく無表情を気取っていられる。

今は重要な交渉の時。おかしい誤解が生まれれば、どちらかが血を流すしかない。

そう、これは交渉だ。

部下たちの銃口が相手をねらってはいても、お互いアウトローだからまだおしゃべりの段階だ。終わりじゃない。

「おかしい話だと思いかもしれないが——俺はそう思っていない。これは悪い話じゃない、お前はちゃんと考えて……」

(冗談っ)

「深くだ。感情に頼るな、深く考えろ。今がその時だ」

まだ納得しないか。ならば——。

「この手を握れ、それだけでいい。お前は納得できるさ」

(本気？握手で全てなかったことにできるって？)

「いいや。お前の“本当の敵”はもうとつくに死んでいるってことがわかるのさ」

(……)

「それにはまず俺と“友達”になろう。俺の仲間に、相棒になれ。俺のグッドネイバーであればそれが出来る。なにせあそこでやれることは全てこの俺が許可しているんだからな」

微妙な気持ちはあった。

この申し出に迷いはなかったが——これが自分にとってのひとつのチャンスであることもわかっていた。

わずらわしい記憶と共に、それも全部自分の過去にしてしまえるという黒い誘惑。暴力は、銃は全てを解決してくれる。それがどうであれ結末をもたらしてくれる。

だがそんな誘惑に俺は惑わされれない。目の前の女も同じだった。

グールになっても、握り返してくるあいつの手の冷たさを忘れられない。

再び友として繋がってそれは、そのうち互いに別の苦しみを与えることもわかつている。

俺はそれを平然と飲み込み続け。この女は別の男——俺の代価品となるものはないかと彷徨いだす。

哀れな……。

だが俺は。

俺はジョン・ハンコック。

俺の名前は、ジョン……。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

目を覚ました。

部屋の中で充満する死を感じ取り、全てを思い出す——。

ああ、そうだったな。

スターライト・ドライブ・イン・シアター開設から2日が過ぎていた。

あの日、ハンコックはただのグールとしてあの場所に紛れ込んでいた。そこでグッドネイバー市長は色々なものを目にした。

用意された住人達の住処。以前のガービーがやったときのような木材の切れ端を組んだものではない。銃弾くらいならはじいてくれると期待できるような。並んでいる鉄製の箱。

続いて彼ら住人達の腹を満たす、畑。

無駄に広がっている平地にはバラモンが数頭。餌を与えられ、飼育されているのが見て取れた。

並んでいる屋台には十分な商品が並べられ。料理のほかに酒も販売。だが薬物はダメらしい。

商人たちの顔は明るく、客を呼び込んで見事に商売を切り盛りしていた。

他にも居住地を守ってくれるのは若いミニッツメン達だけではなく。契約を交わした傭兵団までいるという。

そしてあのショー。
法廷ショーだったか。馬鹿で、愚かで、くだらないモノ。

祭りが終わり。全てを確認すると、彼はハンコックに戻るべくここへ戻ってきた。

メッドフォードのスローカムズ・ジョー。

われた鏡に映るその姿はグリーサー服のグール。そしてこれはジョン・ハンコックじゃない。

自分の姿を捨てて“他人を演じる”のは長くはやりたくないものだ。早く元の姿に戻った方がいい。

そう思っただけで着替えていたら——どうやら別人だったことで能力も失ってしまったらしい。

ドアの外からにわかには人の気配が集まりだし。そこで自分がここに来て何者かにつけられていたのだとようやく気が付くことが出来た。

ジョン・ハンコックならば別に問題はない。

彼は危険な男であり、殺し屋なのだ。

扉を開いてから挨拶の時間は短く、こちらからは「よオ、何か？」とだけ。

相手はそれに答えず「ハンコック!? グッドネイバー!」とだけ。

あとはまあ、いつもの通りのことが起きた。

銃が火を噴き、刃が輝いて血が流れた。

自分が獲物としてつけられているのも気づかぬ間抜けなグールは、実は殺し屋のジョン・ハンコックだと知らず——レイダー達は自分達が間抜けであったと学びながら次々と死んでいった。手加減はしなかったこともあって誰も生きては逃がさなかった。

終わると、なぜかとても疲れている自分に気が付いた。

そして——その場で椅子に座ってもたれかかると。のんきに眠り込んでしまったらしい。

ドーナツ屋をでると、フンつと鼻を鳴らして周囲を見回す。

レキシントンほどではないが。ここもまだ連邦北部では騒がしい町だ。騒いでるのは狂人に食人鬼、それにアポミネーションばかり。するとなにかが天から降りてきたような気がした。どういえばいいのかわからないが、それはもしかしたら天啓と呼ぶものだったのかもしれない。

あの新しい居住地の役割が何であるのか、わかったと感じた。再びあの日の、アキラを思い出す。

客を集めてから始まったあのショーの間はとにかく呆れかえっていた。

だがその最後には——驚きがあった。

見ているうちに司会者が妙に場慣れしていることに気が付いて思いつ出した。トミー？あれは確かケイトがいたコンバットゾーンのオーナーだった奴だ。

それでもそれぐらいなら、夢破れた男に再就職先でも見つけてやったのだろうと思えたのに。

最後のカードにシルバー・シユラウドときた。

奴はなんてことだ。あのヌカ・ワールドでやってみせたバカ騒ぎをこの連邦でもまた、自分も演出に加えることで再現して見せやがったのだ。

だがあそこでやったこととは違う結果がここではおこるだろう。

あのまごうことなきう本物のダークヒーローが見せた血みどろの一戦はこの先では伝説となる。

そしてそれがあのくだらない私刑ショーの未来を、ありもしないルールにのっとった法廷ショーであると証明するケースとして人々の間であげられるのだ。ショーの開催が決定するたびに、罪人の生死が賭けの対象にされるだろう。

そこでは正義を愛するミニッツメンも、生きるためなら何でもする悪党も。変わらずキャップを差し出し、ショーの結果を楽しむ。

そうやって彼らはいっしか利用する側としてショーを支えていくシステムに取り込まれる。

グッドネイバーでもそれを扱う必要も出てくるかもしれない。

——お前はなんて奴だ、アキラ

背中に冷たい汗が噴き出るのを止められない。

若きプレイヤーは相棒と寝て。なのに殺して。恐るべき敵となりそうになったところで——俺の差し出した手を握ってきた。友になった。グッドネイバーの市長、ジョン・ハンコックと言えちよつとした大悪党であつたはずだ。そいつに仲間と認められた。

だがそれでもまだ足りないものがあるというのか!?

あの若者の名はこの先にも連邦の誰の耳にも残らない。あの奇妙に身綺麗に薄汚れたスターライトの始まりはミニッツメンだとされるのだろう。

それは今までもそうであつたように、これからも変わらない。

ガービーにしたらいきなり不愉快でも便利なモノを押し付けられた形になるだろう。

コベナントでも、グレーガーデンでもそうだったように。

もしやあいつはこの恐るべき連邦に噛みつくだけでは足らず。喰らい続け、腹の中に収め、養分として消化までしてやろうと思つてはいないだろうか？

だとすれば——このままあいつと組み続けることはグッドネイバーにとつてどうなる？

あの日、ダイアモンドシティを飲み込んだ化け物。それと同じ——いや、それを越えて連邦を飲み込もうとするアキラもまた自分を怪物として作り変えようとしているかもしれない。

俺はまた間違つた選択しているのか？

「へっ、結局はまたこれだ。ファーレンハイト。

お前がいなくなつても俺は俺。新しい相棒の事で悩みは尽きないぜ」

ファー・ハーバーへと向かう期日が迫っている。先は暗いがなぜだろう。

コベナントへ向かう道をジョン・ハンコックは妙に晴れ晴れとした気持ちで歩いていった。



デズデモーナは戻ってきたキャリントンに対し「デューコンは!？」と荒々しく聞いたが。帰ってきたのが肩をすくめて左右に手を広げ、いなかったと伝える彼にチツ、チツ、チツと舌打ちを繰り返した。

デューコンはやらかしてくれたのだ。

そして理由も説明せず、弁明もしないまま姿も消した。

デズデモーナは怒ってる。

なのにこのキャリントンは落ち着けと言うのだ。

「なあ、デズ。用が済めばデューコンはここに戻ってくるさ」

「わかってるーでもそれがいつなのか、それがわからないじゃないの!」

「それはそうなんだが――」

デズデモーナのストレスは悪化する一方だ。

レイルロードの立場はさらに悪い方向へと転がり続けている。

デズはそれを止めようと色々と手を打っているが。ここにきて新たなスカウトをおこなったこともそのひとつだ。

選ばれたのは長年、レールロードのサポーターとして活動を続け。パートナーと共に確かな実績を作っていたダニー・ジョンソン・ストーン。

そんな彼女は最近パートナーを失い、落ち込んでいたのだが。デズは彼女を組織へと引き留め、さらにレベルアップを期待してエージェントへの昇格を持ち掛けた。話はまとまったと思っていたのだが――

なんとデューコンが横から彼女の任務を奪いとる。

さらになにかを本人と話したらしく、ダニーはレールロードから姿を消した。その理由をだれにも、デズデモーナにも語ることなく、だ。問題はどうかやらデューコンはそれを隠すつもりは全くなかったよ。うで、デズが「おかしい」と思って調べると。これが全てあっさりとも明らかになったことにある。

「何でも屋のトムの話だとデューコンはしばらく戻らないと話してた

らしい」

「あいつっ！」

「わかっていると思うけど彼を追う余裕は今の僕らにはない」

「ええ——そんなことはわかっているわ」

デズは忌々しそうにタバコを握りつぶすようにして投げ捨てると、新しい一本を取り出した。

（怒ってるな。冷静になってくれるといいんだが）

キャリントンは内心で、表向きはデズを理解しているとしながらも。彼女が今回の決断の間違いに気が付いてくれればなどと都合のいい期待をしている。

「ディーコンをどうしても、というなら方法はあるよ」

「どうするの？」

「タイコンデロガにディーコンとの取引を禁止するようにと伝えるだけだ。それで終わる。仕事が出来ないとわかったら、彼ならここに戻ってくる」

「そうね……」

まだ足りないか——。

「ところで、デズ。これに見覚えはある？」

「なに？ 任務許可？ ディーコンの？」

「ああ……以前、もう人造人間を引き連れて連邦の外に連れ出すのは御免だと断った彼の、新しい任務についてのものだ」

「えっ、人造人間たちを連邦の外に連れ出す!? これって!？」

「いつもの彼のやり口だね。姿を消して、少しすると巡り巡ってなぜか僕らが見たことがない。なのに僕らが許可したらしい重要任務を指示したものが飛び出してくる」

「なるほど。今回も？」

「——君が怒っていると聞いたからすぐに調べたんだよ。そしたら思った通り」

タイコンデロガから人造人間を10人連れ、連邦の外へ逃がす。とても危険な任務だ。

ディーコンは以前、いちどだけ同じ任務を引き受けたことがあった

が。戻ってくるなり、こんな任務ならもうお断りだと宣言していたのに。

彼もまた消えたダニーのように誰にも伝えず、考えを変えたらしい。

問題はここに、ダニーから取り上げた任務。

人造人間5人を連れて連邦の外に逃がす、というのも加わっているという事だ。つまりデューコンはレールロードのサポートもなく、15人も人造人間の脱出を引き受けると言っている。

彼に可能だろうか？どう考えても不可能だ。

「ダニーの事は仕方がない」

「キャリントン？」

「彼女は長年組んでいたパートナーを失ったばかりだ」

「ええ、でもだからこそ——」

「あのままやらせてもいい結果になるかどうかはわからない。色々意見の分かれる話ではあった」

「でも彼女は私たちの前から消えたのよ!？」

「それもまた彼女の考えだ。デューコンは他人の任務を横取りするような奴じゃない。」

やはり彼と話して、ダニーは考えを改めたとみるべきなんだ。それなら姿を消した理由も想像がつく」

愛する人を失った自分を見つめなおせ、デューコンはあれでもロマンチストな部分を持つ男だ。

ダニーの姿になにかしらの痛々しさのようなものを見抜いていたのかもしれない。キャリントンはそう言ってデューコンの弁護に重い腰を上げた。

「人造人間たちを15人。彼が正気とはとても思えない話よ」

「どうする、デズ？」

キャリントンはあえて聞くが。彼女の答えはすでにわかっている。

「……いいわ。彼に全て任せてみましょう」

「わかった」

不信はあるが、もし本当にタイコンデロガに置いている人造人間達

を減らしてくれるというならば文句はない。ふざけた話ではあるが、今のレールロードの状況を悪くしている原因の一つがあそこにあつた。

再始動から難しい時期を何とか乗り越えつつあつたレールロードに連邦が襲い掛かつてきたのだ。

なぜか理由はわからない。わからないが——インステイチュートから逃げ出す人造人間の数が増加し。今では連邦を平然と歩き回っているらしいとわかつた。

目撃、接触、引き渡し。これらの情報は毎日、忙しく更新されている。

「今はどうなの？」

「先週にグロリーがまた逃がしてくれた。彼女は次もやっていいと言つてる。それで余裕ができるよ。でも最悪、何人も続けて運び込まれでもしたら……」

「それでもやらないといけない。それが私達、レールロードよ」

デズデモーナは折れたりはいはしない。

それだけにこんな時でも戦う意味を失つたりはしないが、それで状況が良くなるわけではない。

「デイーコンの事だが——」「なによ」

「もしかしてだけど、フィクサーに会いに行つたんじゃないかな？」

デズデモーナの顔に変化はない。

フィクサーは……アキラが何者かの手で誘拐されたとき。相手の情報が足りないとの理由から、インステイチュートの可能性が排除できないとしてデズデモーナは彼を見捨てた。

新たなエージェントして立派に期待以上の働きをしてくれた若者であつたが。彼のために組織レールロードを危険にはさせないとあの時は難しい決断を下したのだ。

しかし、だ。

若者は有能さだけでなく、幸運をも持っていたらしい。

どうやったかは不明だが連邦に戻ってきて、今はミニッツメンに隠れていることがわかつてる。

デーコンがそれを調べたのだ。

そしてデズに一度だけフィクサーに戻るよう説得したいと伝えたが。彼女はそれを許さなかった。

「まだあきらめてなかったの。彼はもうダメよ」

「デズ。デーコンの調査が本当なら、フィクサーの立場は僕らにとってはお助けになる。今のミニッツメンは連邦の北部をほぼ手中にしているんだよ?ということは、タイコンデロガの人間たちをそこから外へ安全に運び出すことが出来るようになるかも」

「ええ——でもそれもフィクサーがここに戻れば、でしょ?」

「そうなんだが」

「彼は無理よ。私にはわかってる」

デズデモーナはフィクサーについて、アキラについてひとつだけ確信していることがあった。

あの若者は自分が下した判断をおそらくは正確に理解している。だがそれだけだ、理屈だけでは納得しない。

フィクサーは彼を助けない、と決めた自分を。デズデモーナを、レールロードを決して許すことはないだろう。

だが、彼は若い。

その若さが、あのデーコンだけなら助けてもよいと。そう考えるかもしれない。ならそれはレールロードの利益になる。

フィクサーの力は欲しい。その彼が自分からデーコンの申し出に勝手に協力してくれるというなら喜んで利用しようではないか。

今はレールロードにそれが必要だった。



ボルトを締め上げると、工具を持ち替えて鉄パイプをねじで止める。

何も考えずに自然と体が動かせる。

「——ああ、レオさん。交代の時間だよ」

「ああ、はい」

手早くドライバーでこれもしつかりと。

立ち上がって自分の道具を工具箱に片付けながら、引継ぎを始める。

「A―3までの点検と交換は終わらせた」

「おお、さすがだねえ」

「ただ……あの先のエリアのパイプは最悪。全部取り換えが必要になるかも。少し触ってみただけど、まったく圧が上がらない。腐食が広がっているのかも」

「――それだと大仕事になるなあ。やつかいだ」

「うん。地上からかなりのアルミを購入しないと」

片付けが終わると工具箱をもって立ち上がる。

「いやあ。アンタが来てくれて助かってるよ。俺達の修理なんて終わりが見えないし、人員の増員もないからね。なかなか士気が上がらなくて困ってた」

「ここにいる時は、私もVault居住者のひとりだからね。それじゃ」

「ああ！ゆつくり休んでくれ」

キングスポーツ灯台の後――私はダイヤモンドシティに寄り道をしながら戻ってきていた。

コズワースとカールを連れてオバーランド駅へ。ミニッツメンの將軍として行くべきと思ったが、気が付くとまたこのVault81に来て。彼ら地底人の生活を。自分が家族と味わえなかったVaultでの日常を味わっている。

あてがわれた部屋に戻り、片付けていると背後に人の気配――。

「監督官――」

「どうも、私たちの英雄さん。今日もお仕事は上手くいったと聞いたわ」

「君のVault81はもつと自分に手をかけてくれと主張が激しいから結果を出さないとね。修理ひとつに気にする監督官も大変だ」

「そうね。ところでそのVaultスーツ、良く似合ってるわ」

「これでも200年着こなしているからね」

外見はさえない探偵姿のままではここにはいられない。マクナマラの気づかいで、81のナンバーが入ったスーツを私のために用意してくれていた。

彼女はクンクンと鼻を鳴らすとお仕事の匂いね、と笑う。

「この部屋は特別にシャワールームが付いているの。信じて、そのかわりにこの監督官自ら案内するから」

「それ、ここに戻るたびに聞いている気がするよ」

「なら確かめて見ましょう、ほら」

彼女に手を引かれながら、奥へと一緒に入っていく。

夜中に急に目が覚める。

体に密着する女の肌、腕の中に感じる彼女は肉付きが良く。あきらかに自分が愛した妻のそれとは違ってしているとわかる。

体を起こし、腕の中の彼女から離れようとするときとありがたいことにこちらに背を向けてくれた。

罪悪感——ではないと思う。

目を覚ましてから女性とは何度かベットを共にしたが。毎回こんな感覚に苦しむわけじゃない。

これは……そうだ、アキラとサンクチュアリにたどり着いた時に似ている。

全ては壊され、残されるはずだったもの全てがまた奪われたと思いついた、あの時。

それを許した自分への怒りもそうだが。なにより何もできないまま殺された妻、連れ去られた息子を強く思ってしまう。

再出発、新しい生活。とてもできない。

アキラはそれを許してくれた。

そして今は隣にいるマクナマラ監督官も——許してくれている。お互いに今は楽しんでるだけだ。

そして私はなにもできない。インスティテュートの力は圧倒的だ、200年以上も連邦の影から支配者の振る舞いを続けている連中を、ただの衰えた元軍人ひとりだけでなんとかするのだろうか？なるわ

けがない、なるわけがないとわかるべきなんだ！

英雄の真似事をしてもこの関係は長くは続かない。

称賛と無関心。ここにいとむけられる2つの目が、自分を傷つけてくる。

再びあるべき Vault 居住者としての生活を取り戻せ？全てを忘れて？

いや、それは出来ない。

まだ失ってはいない、早く走り出せと叫ぶ強迫観念から逃げられない。マクナマラ、いくら彼女がすぐれた監督官だと言つても。次代の遺伝子を選別するこの Vault で、外からたまにふらりとやってきて。子を持つ資格のない女性と逢瀬を重ねる男が——良く思われるはずもない。

だが私には他に行く場所がない——。

サンクチュアリにも、ミニッツメンにも、そして B. O. S. だって。

背中に手が置かれたことに気が付き、マクナマラをおこしてしまつたことにも気が付いた。

謝ろうとしたが。その前に彼女の顔が近づいてきて「何も考えないで」と言うと、私を再びベットに引きずり込む——。

満たされることのない甘い夢。

苦しさがあまりにも強く。それだけに悲しさが、行為に熱を。より激しく燃え上がらせる。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈

パラディン・ダンスは部隊を離れた理由はただひとつ。エルダー・マクソンの命令でレオの再調査をおこなうこと。

そのはずであったが、彼は今はバラモンを引く女性と共に連邦の空の下を歩き続けていた——。

「またあそこに戻るのか？往復するような——」

「もうっ！数時間おきに言わないと我慢できないんですか？ B. O.

S. の人ってみんなそうなの!？」

ダンスの愚痴というか嘆きは、女性の——アメリカ・ストックトンを苛立たせている。

「だがな、あれはどうかしてるぞ。ミニッツメンというのは何を考え
ている? 沿岸のコテージだって? 地面も陥没して、ただの災害現場。
廃墟なんだぞ」

「それでも彼らはあそこを居住地として利用したいって考えているん
です。贅沢は言えないんですよ!」

「——攻められても守るのも難しい。どう考えても無謀だ」

ダイアモンドシティへと戻ってくると、マーケットの中から走って
きてレオに話しかけたのがこのアメリカだった。

アメリカはバンカーヒルの大商人の娘で、彼女自身もバラモンを引
いて商隊を率いていたこともあった。

ところが事件に巻き込まれ、コベナントに監禁されて以降。娘に甘
い父親は、バンカーヒルに自分が閉じ込めてしまう。

だがこの娘だって素直に従うだけではない。

最近、父が懇意にしているアキラという危険な若者に自分の存在を
アピール。ついに父に「彼の手伝いをしてやって欲しい」と言わせる
ことに成功した。

世間じゃちつとも噂に登らないものの、雰囲気と伝え聞いた交友関
係から大悪党となりそうなアキラの存在はアメリカにとってもチャ
ンス。

手にするキャップに善悪は関係ない、とは父の教えだ。

噂に聞くグッドネイバーの歌姫のような妖艶さはないが。父から
学んだ商才と父とのコネがもたらす利益に興味を示さな男がいるだ
ろうか?

そんな彼女のたくらみは残念なことうまくはいってない。

与えられた5・000キャップでゴミをかき集めつつ。商売で
もって利ザヤを稼いで大きく増やすのは余裕であったが。

肝心の危険な若者は彼女とは距離を取り。

いつも見知らぬ誰かを通じて指示が与えられていた。

そんな彼女はこの時、最悪のミスをしでかした。

自分とバラモン、つまり荷物を守る護衛と口論になり。クビを——というよりも「やめてやる!!」と宣言され、立ち去る背中にこつちも言つてやったというだけの事だが。おかげで身動きが取れなくなつてしまつていた。

以前ではありえなかつたが。今の連邦北部で活動する傭兵たちが如何に商人たちのやりように怒りを抱いているのか——レイダーへと舵を切ろうとしているのかという危険な兆候の一例なのだが。アメリカのブランクはそれをまだ理解できていない。

とにかく窮地に陥つた彼女は、マーケットでレオの姿を確認し。深い考えもなく「ちよつとミニッツメンでもつけてくれませんか」と頼むための声をかけたが——あたえられたのはなぜかB・O・Sの堅物パラディンただひとり。

小心でもポジティブでありたいアメリカに、理屈臭いダンスは実に扱ポテターガードいにくい肉盾盾に思える。

B・O・Sの人つて、もつと寡黙な人だと思つてたのに」

「それほどうるさいか?ただ、当たり前のことと言つてるだけなのだが」

「——っ!あなただけですウ。連邦で見る元B・O・Sの——」

「待て、元だつて!」

「ええ」

「元B・O・S. はそんなにいるのか!」

アメリカは知らないが、ダンスの脳裏にはブランデイスのあの痛々しい姿が思い出されていた。しかし——。

「キャピタルのB・O・S. でしょ?ええ、大勢います。私みたいに商人やつたり。傭兵やつたり。傭兵団を指揮している人だつています」

「それは——」

「うわさで聞いてますよ。今のあなた達のボス、お堅いんですつて?」

面倒くさいお仲間を連れ戻したり、色々やって」

「それは、それは違うぞ！アーサーは素晴らしい人だ！」

「そうなんですか？ならそれでもいいです。私、B・O・Sには興味ないですから。でもお仕事はやってください。ファー・ハーバーの話を私が潰すわけにはいかないんですから」

「ん？」

脳裏にはブランデイスの弱弱しい声で「戻らない」とリフレインしていたが。

ダンスは自分が何か大事なことを聞き逃した気がして急いで頭から映像を振り払った。

「いま、なんと？」

「なんでもいいです。お仕事！将軍はあなたなら出来るって言ったんですよ！」

ファー・ハーバーの計画を聞く前に。ダンスはアメリカを遂に怒らせてしまったらしい。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

Vault 81の食堂では居住者たちが朝の忙しい時間を過ごしている。

ここの食堂を担当する老夫妻は、しかし慣れたもの。食堂に列など作らせず、余裕のまますでに半ば休憩に入ろうとしていた。

「あら、どうしました？」

「——あの男だよ。また監督官と別に食事をしてた」

「レオさん？そうだったわね、お似合いよね。仲がいいし」

笑顔の老婆と違い、老人は鼻を鳴らす。

レオに対し。色男を気取りやがって、2人が寝ていることは知っているのに、と。

「あらあらあら、これはこれはこれは」

「な、なんだっ？」

「あなたがそんなことをいうなんてね——若い人が羨ましいって？」

まあ、いやらしい」

「そういうこと言ってるんじゃない！わかるだろう？」

Vaultの秩序を守るはずの監督官の公然の秘密。ルール違反にも感じる関係。

あの賢い娘がそんなふしだらな真似をするとは信じられなかったが——それは事実なのだ。長年培ってきた監督官への信頼とか、これからの自分達のVaultの先行きに不安を抱かないわけがないだろう。

だが彼の妻はそんな亭主の心配を鼻で笑ってみせる。

「あらあら、そんな心にもないことを言っちゃって」

「ワシは本気だぞ！これを笑うお前の方がおかしいというのに」

「正しいのいつも私だったでしょ？だからこれもそう」

「——考えすぎだというのか？ふたりが平然とこのVaultであるなことをしているのを見て見ぬふりをしろと？」

「そうですよ。別に問題はないでしょ」

奥方はケラケラと笑うと夫を洗い物をするように背中を押す。

本当はわかっている。そして憐れんでもいる。

あの美しさも、知性も。ここには彼女の持つそれを受け継いでくれる遺伝子はない。若い彼女はルールを捻じ曲げてもそれを選ばなかったし、年を取るたびに変化をもたらす気持ちがある。その決断を後悔させようと誘惑しても——それを人前では決して明かしたりはしなかった。

マクナマラは優秀な監督官だ。

Vault 81にいれば皆が彼女をそう思っている。魅力的な女性だが、やはり監督官だと恐れてしまう。

ここから外に飛び出して行けた人々はここを牢獄と呼び、彼女を看守だと罵倒しているという。彼女はただここを次の監督官へと譲り渡す、ただそれだけの任務をささえにして。孤独に耐えているというのに。

だから少しだけ嬉しいのだ。

マクナマラはレオとの恋に淫している。

正しいことをして、孤独に耐えるだけの無限の時間。今もそれは変わりはないが、少しだけ違うことをやっているだけだ。彼女は情欲に溺れても、それに流されることは出来ないし。正しいことを続けるしかないのだ。

だから恐らくその関係が長く続くと思えない。

長く生きた老婆の勘がそれを伝えてくる。つぼみが花開き、そして枯れるように。彼女は今、失った時間と可能性を探求するが。正しさだけは変えられないからその探索も終わりを見届けることは出来ない。

それをここにいる全ての女性がそれを理解している。完璧であってもやはり彼女もまた哀れな女性のひとりではないのだ、と。

だから監督官が好きでも、嫌いでも。それについては決して触れてはやらない。触れることを許さない。

男たちが不満を口にすれば封じてやる。自分達が監督官にしてやることなんて、もうそれ以上は何もないのだから――。

その日も私 Vault の修理に手伝いに入ったが。

いつもと違ったのは仕事が終わると道具を貸してくれた相手にそれを返しにいったことか。

「なんだ、ずっと持っていてくれよ。アンタはここにいる時だけでも、うちの班じゃ大歓迎だからさ」

「ありがとう……でもやっぱり返すよ。もらえるほどの仕事をしたとはいえないからね」

やんわりと断り、握手を交わす。再会の約束、でもこれが別れになるかもしれない。

部屋に戻ると今日も彼女が待っていて、それでいつも通り私の Vault での夜が始まった。

翌朝の目覚めは、いつもと違っていた。

「次に戻ってきた時は、凄い計画を話せるかもしれないわね」

「なに？」

「あなたとあの若い子が見つ付けてくれた秘密のエリア。あそこに手を入れて、このVaultを拡張させられないかなって考えているの」
「——それは凄いな」

「そうでしょ？」

マクナマラはあえてそれ以上は言わなかった。

計画はまだ自分の中で温めている段階だ。だがもしこれが実現できるなら——今、Vaultでおこなわれている子供の出産計画に革命がおこせるだろう。居住区は拡張され、仕事も増え。そして問題だってさらに今よりもっと増えるはず。簡単な事ではない。

彼女は監督官として珍しく、この時は私の旅立ちに立ち会ってくれた。贈り物まで用意して。

「これは？」

「やっぱりこっちがあなたにはいいと思うの。気に入ってもらえるかしら」

111のナンバーが入った新しいVaultスーツだった。

どうやら探偵服は自分には似合わないと彼女は思っていたらしい。

「ありがとう——大事に着させてもらおうよ」

「ん、それじゃ気を付けて」

気が付くと周囲にいた整備や警備員の姿が消えていた。ふたりだけで別れを惜しんでいた。

皆、どうも監督官が邪魔で食事に行ったようね、と彼女は笑った。
あの聞きなれた気もするVaultの門が開きだすと、私は思わず彼女を——マクナマラを抱き寄せてキスをしていた。

この瞬間にわずかに感じる後ろ髪引かれるこの思いはあの扉から一歩踏み出すだけで自分の中から霧散してしまうことを知っている。でもそれが——。

Vaultの扉は開くと同時にすぐに閉じられていく。

入り口には居住者たちから監督官と恐れられる女の姿なかった。

そしてまだ自分を父親だと思っている男の姿も消えていた。
Vault 81のロビーは無人だった。



わずかな違和感の後、目を開けると——そこは見たことのない場所。

ではなかった。

「なんだ？なんでこうなるっ」

Z2-47は自分がトイレの個室の中で、便座に思わず腰かけている自分の姿に困惑し。悪態をつくことも忘れていた。

インステイチュート・コーサーと呼ばれる人造人間たちがいる。彼らは人間と変わらぬ高度な判断力を持って柔軟に状況に対処できる存在として連邦で活動していた。

今回、コーサーに与えられた任務は状況に変化を与えるため、展開中の部隊を直接に指揮するため、と聞かされていた。

「排便所とは、最悪だ。まったく」

扉は錆びているようで素直に彼を外に出そうとはしない。

仕方なく蹴破ることにする。まったく、彼はいつだつてついていない。だが任務は果たす、それだけは絶対だ。

トイレから出るとそこが地下鉄駅だと理解した。

よく聞けば階下で交戦もしているらしい音も聞こえている。どうやら組織は気を聞かせて部隊から少し離れた場所に送った結果が——まあ、いいだろう。

とにかく部隊と合流しないとイケない。

グローリーの計画はすでに崩壊している。

何度も蹴散らしたはずなのに。追いつがってくるインステイチュートの人造人間による部隊はもういくつめだろうか？

「も、もうつきあつてらんねえよ。勝手にしろ」

「おいつ」

「何がエージエントだ、狂人め!!俺は御免だ。もうこんなことつきあうもんか。死にたくねえ!」

撃ち尽くしたらしいパイプ銃を放り出すと、ガイドとなるはずのそいつは暗闇の中に向かってひとりで駆け出して行ってしまった。

どうやら今のがレールロードとの決別の挨拶だったらしい。逃げて言ったはいいが、丸腰で生きていられるかどうか。まあ、気にする必要はないだろう。

不安そうにグロリーを見上げてくる人造人間たちの8つの目をあえて見ないふりをする。

代わりにリロードを終わらせ「さあ、消えちまいな!」と叫んで飛び出すと、手に持ったミニガンも回転音を響かせた!

Z2-47が部隊に近づくと、2体が彼の接近に気づいて近づいてきた。

「報告を」

「逃亡中の人造人間を確認。現在も追跡を続行中」

「トラブルだと聞いた。なにがあった?」

「複数の人造人間を新たに確認しています」

「は?追っているのはひとりだろ?集団がいるという事か?」

答えが返ってくる前に、暗闇の向こうから火を噴くミニガンによる反撃が開始された。

Z2-47のそばにも火箭がかすめ、慌てて姿勢を低くする。なるほど、そういうことか。

「どうやらレールロードとやらがいるんだな」

「可能性はあります」

「可能性だつて!?!」

「捕獲対象の一味から抵抗が激しいため、あなたの協力を求めます」

「――部隊の被害の規模はどうなってる?」

「これまでで4割」

思わず舌打ちをしてしまう。

まったくいつものことながら自分はツいてない。こんな状況だと正確に知らされていたら、損耗している部隊ではなく。新しい部隊と一緒にやってきたのに。

「捕獲対象がレールロードの奴らと一緒にだというなら、激しく抵抗するさ。なぜそれを報告しなかった？」

「……」

「まあ、いい。やり方を変えればすぐに解決する」

Z2-47は任務をしくじることだけはしない。それは絶対に運は関係ないからだ、そう考えていた。

グローリーは追撃してくる部隊の足が止まったことを確認すると4人の人造人間に走って逃げるぞ、と言おうとした。だがいきなりその中のひとりが「あつ」と声を上げると、がくと首をうなだれて動かなくなってしまう。

そいつの周りにいた人造人間たちはなにがおこったのかわからなかったが、グローリーだけは違った。

反響してよくわからない向こうからの呼びかけあれが原因だ！

——リコールコード！コーサーが来ているわけか
もうこいつは助けられない。

思考がリセットされ、次の指示を与えられるまで動かなくなる。人に近いと言っても所詮は作り物なのだ。機械と同じ、プログラムとして与えられたコマンドは絶対に無視できない。

「いくよ、私らだけで！」

「えっ、でもこの人は——」

「時間を稼いでくれる。わかったら走りな、さあ！」

グローリーの顔も歪んでいる。こんな不快な経験はしたことがなかった。

助けるはずの人造人間をあえて、時間稼ぎとして置き去りにし。奴らに返すような真似をするなんて！

だが今はそれが必要なのだ。

棒立ちの無表情となった人造人間をその場に残し。グローリーに

どやされ、一団は闇の中へと消えていく。

代わりに来た道からライトが照らされた。

「よし、止まってるな。誰かを選んでこのまま進ませろ」

「了解。次の指示は？」

「回収後に再び追跡——どうやら連れ帰る人造人間はひとりだけではない。なくなった」

Z2-47の言葉に人造人間たちは短く了解とだけ返す。

グローリーはその後も厳しい追撃を受けたが、気が付くといつのまにかあんなにしつこかった追手が消えていることに気が付いた。

そして——自分もまたひとりになっていることにも。

彼女は初めて、レールロードへ「おそらく失敗した」と報告した。

インステイチュートが最後に自分が連れていた人造人間全員を回収したとは思わないが、だからといって消えた人造人間たちが再びレールロードに保護されるとも思えなかったから。

新しい道へ (LEO)

オールドマン・ロングフェローの鼻がひりつき、「ちよつと待て」と同行する探偵に停止するよう指示を出す。

周囲に人の気配はない——と思うが、なにかが違う気もする。

レバーガンを構え、スコープを覗き込むロングフェローの隣でニツクも周囲の様子をうかがう。

こういう時、たとえ精神的にも世代的にもポンコツと呼んでしかるべき人造人間でも、壊れてないのなら、性能はそれほど悪いって事はない。

すぐに20数メートル先の草むらで息を殺している一団を発見することが出来た。

どう伝えようかと思つたが、どうやらロングフェローも見つけたらしい。

(ここは迂回しよう)

ロングフェローのガイドは無料って事がないのが厳しいが。とにかく安全であることが助かる。

しかしここで森林を大きく迂回を選択してしまったことで日暮れまでにファー・ハーバーに到着することが出来なくなつてしまった。この島の中で一晚を野宿するというのは危険すぎる。

だがロングフェローには考えがあつた。

ホライゾン航空1207便……世界が終わりを迎えた日。

地上にばらまかれた核の影響を受け、飛行中だった民間航空機の運命はたったひとつだけだった。

その夜の墜落現場にロングフェローとニツクの2人は近づいていく。

「おーい、おーい！いるかな」

「——人間か。ああ、面倒は御免なんだ。さつさとここから立ち去れ」返事が返つてくると、なんと廃墟の中から大柄なスーパーミュータントが姿を現した。

「ああ、この顔を見忘れたかな。それだと確かに面倒なことになる」
「ロングフェロー!? あんた、本当に久しぶりじゃないか。また来てくれるなんて」

「こっちは武器は持つとるがあんたに使うつもりはないよ」

「ああ、わかってるよ。アンタみたいな爺さんじゃないんだ、もうろくはしていない」

「今夜だけでも泊めてもらえないかな? もうひとり連れもいるんだが」

「——これはまた変わったのを連れて歩いているんだな」

あんたにそんなこといわれたくないがね、と皮肉は言わず。ニツクはとりあえず礼儀正しく帽子のつばに手をやってあいさつを交わす。

「見ての通りの人造人間だ。ニツクと呼んでくれ。探偵をしている」

「おお、そうなのか。私はエリクソン。まあ、こちらも見ての通りさ」
「そのようだ。誰かを見てすぐに襲ってこないスーパーミュータントは珍しい」

「ああ——この島にいる他の連中とはもうだいぶ前に縁を切ってるんだ。とにかくあいっらとはなにもかもが合わなくてね、我慢できなくなつたんだ。後悔はないな、賢い選択をしたと思ってる」

「ああ、そのようだ」

「あんた……あの」

「いや、俺はデューマのアカディアとは関係ない。連邦からこの島には仕事でやってきたんだ。人探しでね」

「そうか——」

スーパーミュータントのエリクソンはそこで「こっちにこい」と手招きし、2人は航空機の残骸の中へと入っていく。

「ロングフェロー、そういえばあんた。まだあいっを探してるのかい?」

「ああ、まあな。だが今日はそのことじゃない——」

「それなら構わないがな……季節が変わってからあいっがまた島の中にまで姿を見せるようになったんだ」

「……そうだったか」

「遠目で見ただけだが。もしかしたら——」

「その話はまた今度にしよう」

ロングフェローは何か隠していることがあるらしい。

ニツクはわざと触れないことにした。

体を横にすると、ロングフェローが戻ってきたニツクのそばに座った。

「今回は島の反対側を見に行つたな。どうだった？」

「ああ、だいぶ色々を見て回れた。すべてあんたのおかげさ」

「別にいいさ」

探偵はポケットから紙を取り出し、今日見てきたものを確認する。

「ロックポイント・キャップ。尾根のキャンプ、エコーレイク製材所にフライニートの釣具店か」

「んん、その地図を見ると。空白のところは全部危険地帯だ」

「トラップパーにスーパームュータント。他にも色々いるみたいだな」

「ああ、そうだ」

となると、そろそろこの島で自分がひとりで出来る事は尽きてきたように思える。

ロングフェローも懐から小瓶を取り出し、中に入っているウィスキーの匂いを嗅いで満足そうだ。

ニツクは紙をたたんで懐にしまった。

カスミ・ナカノとはあれからも目をあけずに会いに行き、交友関係を保っている。

そこそこに話してもらえただけの親密さが出てきているが、やはりまだ両親の元に戻るといふ気持ちにはなれないらしい。

本音を言えばカスミにはとにかく家に戻って両親と冷静に話し合ってもらいたいと思っている。

今の彼女の様子だとすぐに結論が出るとも思えないが、そうしてくれば探偵としては一応は仕事を終わらせることが出来る。

だが感情的なしこりがそれを許さないようだ。

感情的——なるほど、それは確かに難しい事なのかもしれない。

探偵にも今、それがある。

ディー
M A という突然に表れたとしか思えない、自分の過去を知る存在。彼は自分を家族だと認識していた。

そして自分が探偵として過ごしてきた時間を。あいつはアカディアという人造人間たちのための避難所を作ることにすべてをささげたと言っている。

ニツクは信じられなかったし、認めたくはなかった。しかしそれは恐らくは本当なのだろう。

アカディアは見たところ、数十年という時間が必要な場所だとかつてきた。つまり奴の言葉はすべて真実であると考えるべきなのだろう。

だが信じたくないという気持ちはまだ自分の中に残っている。もう変わることはないだろうというあきらめもあつた自分の過去の情報に、ついに新たな証言が加わろうとしているこの恐怖。

アカディアとはなんであれ決着をつけなければならぬ。

ポンコツのニツク・バレンタインの物語が一変するかもしれない恐怖、それを乗り越えなければならぬ。

気が付くとロングフェローの鼻歌が聞こえなくなり、代わりに寝息が聞こえる。

ニツクは横になると霧の向こうに見える、星の輝きがまったくない真っ黒な空を見上げた。

ケンドリック・K・ヴォーンは霧の中で動かない獲物の姿を確かにとらえていた。

ケンド——ケニーは背中から矢の一本を慎重に取り出し、距離を測っていく。

本日の狩りはウサギにニワトリ、どちらも1羽ずつ。

悪くはないが、できればもうひとつ欲しいところだ。それでも今夜だけは、みんな腹を鳴らして眠らなくて済むはず。

夕刻のフアーハーバー、当然だが門には独特の緊張感が漂っている。

太陽が地平線から消えれば即刻門は閉じられ。翌朝、再び太陽が姿を見せるのと同時に開かれるためだ。

今日のケニーはツイていたようだ。刻限まではまだ数時間、おかげでそこにいた大人たちの機嫌もそう悪いものではなかった。

これがギリギリだったりすると、大人は彼を怒鳴りつけるし。小突き回したりもするので大変なのだ。でも今日は大丈夫。

ケニーが視線を避け、彼らの横を素通りしてもだれも彼を睨みつけてこなかった。というか、存在を気が付いてないみたいだった。

だが町に入るとそうはいかないらしい。

武器屋の店主、アレン・リーがケニーを見つけると「ちよつと待て！」と声をかけてきて店先に出てきてしまった。

「お前、ケニーとかいったよな。また町の外に出てたのか!？」

「う、うん。ちよつと狩りを——」

「お前、馬鹿か?そんな手製の弓と矢だけで危険な森の中に入るなんて。何を考えている!」

「——い、いや。僕はそんな」

「なんだって!？」

最初から視線は下に向けられている。ここでは子供が大人を見返して意見を口にするなど、考えたくない。小突かれ、殴られ、罵られながらつばを吐かれる。

あのいつもやけつぱちに大人たちが騒いでいるラスト・プラングという酒場の裏で生きていくしかない子供達ならみんな経験していることだ。

ただ今日の獲物だけは奪われたくない。

その思いがケニーの口をさらに重くし、アレンの怒りに燃料を与えてしまっていた。

小さなバーサは海の向こうで静かに消えていこうとする太陽を見て、不安になっていた。

今日はケニーが狩りに出ると言っていたが、まだ戻ってこない。彼は要領がいいから門が閉じるのに間に合わない、なんてことにはならないだろうが。

ギリギリで滑り込んだりでもしたら、また大人たちの怒りを買ってしまいかもしれない。

ファー・ハーバーでは親のいない子供たちはこの酒場の裏に集まってなんとか生きている。

もつと正確に言う——ここにいる大人たちに飼われることではないとかやっている。

彼らに愛嬌を振りまき、そこに集まっていることで。この港にいる大人たちはどうか島の未来が絶望的であることを少しだけ忘れることが出来ていることを子供たちは見抜いている。

とはいえ大人たちは気まぐれだ。

可愛がったかと思えば、次の瞬間には罵倒し。なのに翌日には食べ物にしてやろうと笑顔で近寄ってきたりもする。この場所と大人たちからは切り離されるわけにはいかないが、一定以上の距離は必要だ。そうでなければいつ子供たちに魔の手が伸びてきて、いきなり姿を消したとしても。それを訴えたところで大人たちは誰も気にしたりはしない。

だからバーサが目を光らせ、脅威から子供を守る親鳥の役目を果たさねばならない。

「バーサ、大変だよ。ケニーが」

「どっ!?!」

「アレンさんに捕まってるんだ」

念のためにといつものように門のそばに送り込んだ少年たちが飛び込んできて、バーサは立ち上がった。ケニーはここにいる大人と比べても弱くはないが、狩りから戻ったのなら獲物を奪われまいと黙ってしまおうとわかった。彼を助けに行かないといけない。

夜中、バーサは浅い眠りから目が覚めた。

うっかり自分が眠ってしまったのだと気が付き、慌てて周りを見回

してみる。今夜はお腹もふくれて皆素直に眠っているようだ。
バーサは少し安堵する。

フアー・ハーバーで飼われる子供たちにとって大人と空腹は最大の
問題なのだ。

解決するに毎日、十分な食べ物とキャップが必要。だがこれが難し
い。

今はケニーのおかげで何とかやれてはいる。

彼が食べ物をとってきてくれるから、バーサ達はキャップの事だけ
を考えるだけでいいからだ。

だが彼のような存在——同じ境遇の子供たちを、仲間たちを助けよ
うと行動した子供たちは以前には他にもいたことがあった。

バーサはそんな彼らの名前を忘れたりほしくない。

フィオナ、エリック、ヘクター……他にもまだ数名。

フィオナはおじいさんが残したライフルを持っていた。

エリックは口が達者で、港に訪れる商人たちを相手にゴミを売りさ
ばいてまとまったキャップを稼いでいた。

ヘクターは泳ぎが達者で、港の海に飛び込むと。数時間後にたくさ
んの貝殻をもって戻ってきてくれた。

彼らはもうここにはいない。皆消えてしまった。

フィオナはケニーのように霧の中に入っただけで、ある日ついに
戻っては来なかった。

エリックは「大きく稼いでくる」とだけ言い残して消えた。噂では、
悪い大人の口車に乗せられ、スーパーミュータントに食べられてし
まったらしい。

ヘクターも海に潜って、戻っては来なかった。彼は海中のことをよ
く知ってはいたが、海の中で彼を待ち構えていたマイアラークの存在
には気が付かなかった。

そしてケニーだ。

彼が戻ってこない日も、いつかは来てしまうのかもしれない。

小さなバーサはそんな考えを頭を振ることからたたき出そ
うとする。

彼は今日もこの場所に戻ってこれた。アレンはケニーの体を心配したあの言っていたが、彼が言いたいことは要するに「俺の店の武器を買え」という事に尽きる。

アレンは悪人ではないと思うけど、言っていることがいちいち暴力的だし。頼んでもいないことでしゃしゃり出てくる人だ。でもバーサならケニーを取り返してくることも簡単だった。

「——ふう」

「眠れない？」

「ひっ」

思わず悲鳴を上げそうになった。

いきなりむくりと体を起こし、ケニーが声をかけてきたのだ。

「驚いた。ケニー」

「ごめんね。でもなんかため息ついてたから」

そういうケニーの手に矢が握られているのを見て、バーサは眉をひそめた。

「——？ああ、違うよ。ちよつと横になりながら新しい矢を作ってたんだ」

「暗いのに」

「今日は月が出てるし、星も輝いてるから大丈夫さ」

「でも——」

「皆が鳥の羽を4枚見つけてくれてたんだ。矢も5本しかないから、新しく作っておかないと」

フィオナはケニーは追跡が得意だから、そのうち自分と一緒に出掛けることになるだろうと言っていたことを思い出す。

だがケニーにはフィオナのおじいさんが残したライフルはない。彼は自分の手で作った弓と矢で狩りをしている、まるで大昔の狩人のように。

だがこの呪われた島にいるのは危険な怪物ばかりなのだ。

銃を持っていない彼がこの先も生き残っていける保証など——。

「明日、太陽が出てからでもいいよ」

「うん」

「疲れてるはずだよ。ちゃんと寝て、私もそうするから」

「わかった——バーサ」

彼に背中を見せて横になると、急に胸が苦しくなってくるのに耐えなくてはいけなかった。

ケニーは明日も狩りに出るつもりなのだ。だからこの夜のうちに新しい矢が必要だと作ってた。そして——バーサも止めなくちゃいけないけど、それを止めることは出来ない。

ケニーはあと何回、無事に帰ってくる事が出来るのだろうか？

このままではいけない、そう思う。

だがどうすればいい？自分達は子供なのだ、そして大人たちは島の現状に嘆いていることしかできないでいる。人間という存在でいること自体が非力だと思い知らされている。

目をあけると、地平線がうつすらと太陽が顔をのぞかせていた。

そしてケニーの姿は予想通り、消えていた。

——まだ間に合うかも。門を出てないかもしれない

バーサが止めるチャンスがあるとすればそこだ。

まだ寝ている皆をおこさないように立ち上がると、門に向かって走り出した。

門は既に開いていた。ケニーの姿はどこにもいなかった。

今日は霧が濃いせいで、白い世界が外側を全て覆い隠してしまっている。

バーサにはもう何もできない。

そう思うと、なぜかお腹がグウとなった。

なぜか悔しくて、悲しくて泣きたくなる——そこでいきなり霧が語りかけてくる。

「おや、お嬢ちゃんは空腹かな」

「えっ!？」

「おいおい、驚かせちゃっただろ」

小さなバーサに話しかけてきたのは霧ではなく、そこから姿を見せたおかしな大人たちだった。

港で最近よく見る人造人間と、酔っ払いのロングフェローさんだ。「おはよう、お嬢ちゃん。そうだ、これをやろう」

人造人間はそういうと来ていたコートのポケットから乾燥ポテトの入った箱を差し出してきた。

「あ、ありがとう。人造人間」

「ニックだ。ニック・バレンタイン、探偵だよ。確かに見た通りではあるがね」

「ごめんなさい」

「いいさ。だが良かったら名前は覚えておいてくれ」

そういうとおかしなふたりは港の門の中へと入って行ってしまった。

自分はここにいても、もうどうしようもない。そう気が付くと、小さなバーサも門の中へと戻っていかうとした。

だが今日は変わった一日であるようだ。

今度は違う大人が小さなバーサに話しかけてくる。

「お嬢さん、少し話を良いかな?」

「?」

見たことのない若い大人に丁寧に話しかけられていた。

彼はあのエリックのように話がうまかったが、自分にこの港の事を教えてほしいのだというのでおそらくは外からきた余所者なのだと思うった。

牧師様のような、それでいて滑らかな質感をもった白いローブのよくな変わった服をきている。

とても魅力的な笑みをこちらに向けているが、なぜだろう。顔の輪郭をなぜだかはつきりと認識できないでいる自分を感じていた。

「ではこうしましょう。ここにまず20キヤップ」

「!？」

「これは前金。あなたの情報に満足出来たら、さらにもう20キヤップ出しますよ」

小さなバーサに40キヤップは大金だ。

断る理由?そんなものがあるだろうか?

「バーサよ。あなた、名前は？」

「それ、必要ですか？」

「自己紹介も出来ない人なの？」

「ああ、そういうことですか。ならいいでしょう、私は——サカモト、といいます」

小さなバーサの忙しい一日は始まった。

そして昼を迎える頃、今朝がた港で声をかけてきた怪しい人のことなどすっかり記憶から消し去ってしまった。

〈〈〈〈〈〈〈〈〈〈

ナカノ邸はその日も、暗いまま朝を迎えるはずだった——その日常が破壊される。

夫婦は家の中で久しぶりに体を寄せ合い、夫は震える手にライフルを握る。

家の外では見知らぬ男女に加え、バラモン、パワーアーマー。そして信じられないがスーパーミュータントまでが混ざって和気あいあいと何事かを楽しそうに話している。

観光？そんなバカな、ここは連邦の辺境。見る物なんて何もありません。

襲撃？ここに居るのは夫婦だけだ。なにか貴重なものがあるわけじゃない。

それならば……。

待ち合わせ場所で到着を待っていた友人たちは、マクレデイの「お、やっと来たぞ」の声に遠く沿岸に沿って視線を動かす。

確かにそこに彼らはいた。

2人が並んで、こちらにむかっただのん気に会話しながら歩いている。

今回のレオは、あのニックに贈られた探偵姿ではなく。あの懐かしい1111のロゴの入ったV a u l t スーツに戻って、背後にカールと

コズワースがついてきている。

隣にいるアキラは少しデザインが違うが、88のロゴの入っている Vault スーツ。さらにその上にアトムキャッツのジャケットを着ていた。

レオは友人たちの前に立つと声をかけた。

——集まってくれたね。今回は無理を言ってるのに、来てくれたことを本当に感謝する

レオは自分を待つてくれた友人たちの中にプレストン・ガービーがいないことを確認したが、それについては何も言わなかった。

窓から外を覗きながら震えていたナカノ夫婦は、集団の中に先日とは違う姿の探偵助手を確認し。彼が誰かを連れて家に近づいてきたのを見て、入り口へと移動する。このあと何が起るといえるのか。全く想像がつかないでいた。

コンコン

だからこそ驚いたものだ。

なんとあの男は客人の礼儀として、入り口のドアをノックしてきたからだ——。

夫妻が入ってきたレオを見て息をのんだのは、彼に続いて入ってきた人物の髪が黒だったことが原因だろう。だがそれは彼らが望んだ黒髪の娘ではなかった。

凶相と表現した方がいい、嫌な目つきと匂いのする若い男だとわかって。より強い失望を感じていた。

「あ、あんた——」

「ナカノさん、婦人。お待ちせした、時間はかかりましたが準備があったので」

「あ、ああ。それより彼らはなんだ？あんたはなにをするつもりなんだ？」

「彼らは私の友人です。彼らに協力してもらって、カスミを説得するつもりです」

誘拐でもするつもりか？

喉までせりあがってくるその言葉を何とか飲み込むナカノ夫妻は、なにをいったらいいのかがわからなくなっている。

「どうするつもりなんだ？」

「あー……色々やります。ここでは全部説明しませんが」

「いいや、ぜひ説明してほしい。その、本当に娘は大丈夫なのか？」

それまで横で聞いていたアキラがここではじめて口を開いた。

「娘の無事がそんなに気になるのなら、放っておいたらどうです？」

「なんだって!？」

「あなた達の要求は事態を好転させることはありません。娘の安全がいいなら、今の状態でいいじゃないですか。あなたがたの娘は安全だし、心穏やかに暮らしていられるとか。」

問題があるとすれば家族だと主張しているあなた方が娘を手元に置いて好きにできないというだけです」

「アキラ！」

「すいません。はつきりと邪魔しないで大人しくここで引っ込んでいろと言った方が良かったですね」

レオに止められてもなお無礼を続ける若者にナカノ夫妻を目を白黒させる。

だがこのスキをレオは生かす。

「では行ってまいります。結果を楽しみにしてください」

「あ、ああ。気を付けてくれ」

家を出るとレオはため息をつきながら「アキラ」と声をかけようとした。

「助かったが、あんな言い方をしなくてもよかったんじゃないか？」

「あんなのにつきあってもいいことはありません。僕も何度も顔を合わせないでしょうし、あれでいいんですよ」

「だからって君が悪く思われることないだろう？」

「ははは、構いませんよ。それに実際の話、僕があなたを手伝う理由は彼らの娘を連れ帰ることじゃないんですから」

「——やれやれ」

私は苦笑いを浮かべる。

ミニッツメンでの仕事はついにひと段落ついた。ファー・ハーバーでなにができるのか、それは実のところまだ漠然としたものしかないが。わたしには強力な友人たちが来てくれている。

「船に全員を乗せていけると思うかい？」

「どうぞでしょう」

「往復はしたくない」

「そうになるとダンス、でしたっけ。パワーアーマーはあきらめてもらって、あとはコズワース」

「ああ」

「少しだけ時間をください。僕が付けた腕と足を削れはいけるでしょう。ただ、そうになると浮かんでいる球体になってしまうので本人は不満かも」

「——どちらも説得が必要になるな」

声が自然と弾んでいく。

こうして私は再びあの霧の島へと出発するのであった。

新しい道へ Ⅱ (Akira)

フアー・ハーバーで唯一の酒屋。ラスト・プランクの裏口から店主のミッチは不機嫌な顔で戻ってくるなり、己の定位置と定める場所で仁王立ち。やおら振り上げた拳で力いっぱいカウンターをたたく。

ドカン！と当然のように爆音が店内の空気を震わせ、いつものように酔っている客たちは談笑を止め、彼に注意を向けた。わずかな沈黙、ミッチは口を開く。

「俺は、今。頭に來ている——」

「おい！ミッチ、シけた話なら……」

「黙れっ、俺は頭に來てるって言ってる!!……頭に來てるんだ、皆。聞いてくれ」

(……)

「いつもは飲んだくれてるお前らでも、昨日の大風はまだ記憶に残っているだろう。アレは突然で、本当に参った。お前らもあわてて汚ねえ我が家に飛んで行つたし。俺も店じまいする羽目になった」

ああ、と思い出した男たちのため息じみた声が合唱される。

フアー・ハーバーを襲う高濃度の放射能を含んだ霧と季節を無視した嵐のような激しい風。どちらも切り離せない、忘れることを許さぬと不定期不規則にやってくる現実。

「だがそのせいで気が付かなかつたんだ。お前らが珍しく釣ってきた魚。そいつを干していたことを、俺はここにしながら忘れちまっていた！——そしてその結果を俺は見た。食えそうなのは半分も残っていない。そうだ、俺は仕入れた魚を間抜けにも半分ゴミにしちまったんだっ」

(そりや気の毒に——)

握りこぶしだけでなく悔し涙もみせる気配まで漂わす店主に客たちは適当に同情心を示す。

「ゴミはどうしたかって？海に捨てたさ。ああ、そうだ。マイアラークどもの餌にしてやったんだ。」

俺の店の酒のつまみは、奴らのごちそうになったってわけだ。これ

に怒らない理由があるか？いや、ない！」

「ここでいきなり会話の方向が迷子になる。」

「だから言わせてくれ、この店はもう終わりだ。終わるってことは、この酒蔵は空っぽになるって意味だ。つまり、今日はお前らに一本ビールをおごらせてくれ！そいつでこの店の葬式をやってくれ。明日には消えるんだ。」

「わかったら、さあ！飲め!!!」

店員たちはまたか、と苦笑いし。店内は笑い声が爆発する。

ビールのケースが次々とあらわれると、店主も自らそれに手を伸ばし。献杯の音頭までとっている――。

店の隅でそれを黙って見つめていた2人の老人はそんな茶番の一部始終を見つめ。色々と感じいつていた。

ロングフェローとニツク・バレンタイン。片方はこの店にいて、自分が珍しい顔だった。

「探偵さんよ。あいつらに心配はいらんよ」

「うん？」

「ミツチのあれは病気みたいなものだ。定期的に理由をつけちゃ、あやつて店の葬式だの。めでたい話だの理由をつけて酒蔵を空っぽにしてる」

「――それだとさつき言った通り、店はつぶれるんじゃないのか？」

「つぶれやしないさ。ここにいてる負け犬たちがそうはさせない。」

ひとしきりあやつてみんなで騒いだ後、漁に出る。魚を持って帰ってくれば、それを仕入れたミツチが酒をまた酒蔵いっぱいになるまで作っちゃう。

今夜は静かでも、明日の昼にはいつもの通り。

「この連中は最後の時を待たために酒を飲んで、くだを巻き続けるのさ」

「そうかい、ニツクは返事をするが。彼は別のことを考えていた。」

「ここの人々には希望がない。未来がない。」

そしてそのことを彼ら自身も理解している。なにをしてもしょう

がない。それでも、そうだとしても——ここ以外で死ぬのだけは嫌だ。その意地だけで日々を過ごしている。

そしてそんな人々をニツクは多く目にしてきたし、相手にしてきた。

自分ではない昔の誰かの記憶。幸せではなかったかもしれないが、彼らには希望があった。それが、少し悲しいという感情を抱かせる——人造人間のくせに、だ。

「店が続くなら結構な話だ。あんたも安心している理由にも納得だ」

「ふふん……そういえばそろそろじゃないか？」

レオの事か。

いつもは家にニツクがいても勝手にひとり酒場に向かうロングフェローが、珍しく強引に探偵をここまで引つ張り出してきたの理由は、ようするに島を出た男について気になって仕方がないのだろう。

「ああ、そろそろだろうな」

「——やけに大げさなことを口にして帰っていったからな。気になつとる」

「ああ、わかるよ」

カスミという少女の要求する途方もない依頼についていろいろとニツクも考えたが。レオに任せたほうがいいのではないかと考えている。

というよりニツクに、老いた探偵があの一家にしてやれることはないと思ってる。

せいぜいナカノ夫妻をここにつれてきて、親子で直接対決させるしかないが。あの夫婦が半狂乱になって感情的に動くのは間違いなく、その時に人造人間たちがどう動くのかも想像できてしまう。

家族崩壊、何とも嫌な話である。

ニツクが心を砕いて物事をどう進めようとも、あのカスミという少女は孤独な“人造人間”となってしまう。

「俺の——探偵の仕事っていうのはな」

「あん？」

「ダイヤモンドシティで、探偵の仕事っていうのは。誘拐事件もやる

が、他にも借金に関することも多かつたんだ」

「金、キャップか」

「そうだ。借金の取り立て、仲裁、返済期限の延長。

誰にとつても印象的なこの顔のおかげで、知り合いは多い。だからおつかない相手だったとしても取引なんかもできる。だから——」

「なるほど」

「ところが、最近はこういう話が少ない。おかげで人探しの依頼が多くなつてきた」

「ふむ、なんか理由があるのか？」

「理由ねえ……連邦は今、少しばかり騒がしくなつてるのは間違いない」

「あー、B・O。なんたらいうのもいるんだつたな？」

「それもあるな。だがどちらかというと——」

2人の顔を思い浮かべる。

V a u l t からやつてきた、過去の時代の影を待つ2人。

この時代を生きる宿命として背負う絶望をどちらも抱えてはいるが、彼らはまだ希望を失つてはいない。

「？」

「フッフ、俺も口達者なわけじゃないから思わせぶりなことは言いたくはない。だが、あんたの勘は間違つてはいないと保証したいね。レオは面白い、そして彼が連れてくるもうひとりもな」

「ほう、誰だ」

「彼よりもさらに若い。ひどく不愉快だったり、恐ろしかったり。よくわからないのがいる」

「悪党、つてことか？」

「善人とは言えないが——悪人とも違う気がするな。ハッ、よくわからないだろう？」

「ああ、さっぱりだ」

「そうだな」

連邦の持つ闇に向かって息子のために戦い続ける父親。

そんな連邦の闇の中で戦うことを好む記憶を失った若者。

彼らの存在が連邦を大きく変え始めている。

地に墜ちたミニッツメンは驚くほど力強く再び飛翔した。誰しも恐れていたガンナーズの脅威は止められている。

B・O・S・にスーパーミュータント。インステイチユートなどはまだ大きな混乱に巻き込まれてはいないが、噂通りであるならその距離は縮まっており。遠くない未来で衝突するのもわかってきている。

そしてそのすべてにあの2人は少なからずかかわっているわけ

。「ロングフェロー。俺もあんたも面白い時代にいるのかもかもしれない」

「どうした。酔っているのか？ なのにも飲み食いしてないだろうに」

「だがここは酒場だ。あんたも俺と話したくて連れてきたんだろう、ならこの人造人間も酔ってしまっても不思議はないさ」

「なるほどな。よくわからんが、それでもいいさ」

レオは友人たちに助けを求めると言ったが、ようするにそれはあの若者のことを言っているのだ。

そしておそらくだが——アキラは彼の要望に従うだろう。

あの若者はこの島に来て見る風景はどんなものなのか。そしてなにをしてくれそうとするのか、それが気になるし。わずかな不安でもある。

「つまりこんなつまらん島でも楽しみができるわけか」

「驚くのは間違いないだろうな。だが、楽しいかどうかまでは約束できない」

この場合、驚きに良いも悪いもないだろう。

それはなにかに、それは誰かにとって都合がいいか悪いのかというだけ。ああ、そうなるややはり希望を失った島民にはキツイことかもしれないかなあ？

目が覚め、ベッドの上でひとり体を左右にゆすると奥のほうに感じ

る痛み以外が消えたことを知る。そうしてやっと僕は起き上った。

ナイトスタンドの上に放り出していたリボルバー銃と弾丸の入ったケースをつかんで家の外に出ると。人のいない場所に移動して空き缶を並べ、それにむかつて試し撃ちを始める。

一発一発の反動にあわせて走る痛みになれようとしつつ、これならそろそろ動けるなど自分を説得してみる――。

痛みに合わせて、目の裏に緑の光が走っている。苦痛を感じてもそれに飲み込まれないようにしなくては。

スターライト・ドライブインでのバカ騒ぎから数日。

キュリーやマクレディらの完全監視のもとで治療に専念していた僕は、レオさんと共にファーハーバーなる島に渡る日が近いことを確信していた。

「相変わらずおかしな撃ち方なくせに、よく当たるんだね」

「……パイパー？パイパー・ライト」

「おはよう、カツコつけガンマン。まあ、あんな馬鹿なことしても元気でよかったよ」

「あれ、まだ寝ほけてる？それでもありがと」

「君の愉快じゃない町で、コーヒーおごってあげよう。ついでに朝食も一緒にね」

「嘘だろ――これは悪夢なんだね。パイパーが僕におごるとか、世界の終わりだ」

いくら美人とはいえおしやべりで、正義のメデイアを自認する記者と朝食とか、誰が喜べる？

そんな病人と違い、町はすでに勝手に動いている。

畑やバラモンの世話をする住人達。並ぶ屋台には傭兵やミニッツメン、行商人らの姿があった。

僕とパイパーは彼らの横を通り抜け、青空レストランの空席で向かい合って座る。注文を終えるときさっそくパイパーの口が開いた。詳しい話は朝食後に、なんて期待できなかつたか。

「じゃ、さっそくだけどインタビューね」

「は？インタビュー？僕のか？」

「そうだよ」

「ダメダメ。断るよ、僕はレオさんじゃない。インタビューとか御免だ」

「なんだ。君が私を招待したんじゃない！問題ないでしょ」

「違うっ、この町のお祭り取材してほしくて招待したんだ。僕のインタビューは必要ない」

「じゃ、ついであってことで」「嫌だ」

ベットからようやく解放された朝に、火炎放射器を構えた怖い新聞記者に焼かれるとか最悪だ。

「強情だねえ。わかった、取引だね？なにをしたらインタビューしていい？」

「パイパー、僕は、断った」

「わかったわかった。それじゃ記事には関係者の証言って感じでボカすからっ」

「ダメだよ。ただあの日の町を見て思ったこと書けばいいんだから。僕はいらぬ」

さすがプロ。

仕事だと割り切ってこちらに近づこうとするだけでなく。吸いついて離れないしつこさが怖い。

「だいたいなんでここに戻ってるのさ。ガービーと一緒にベルチバードで帰ったはずだ」

「……そうだね。送ってはもらった。」

でも気がついたらダイヤモンドシテイじゃなくて、歩いてここまで戻ってきたんだ」

「僕に文句を言うために？」

「ああ——それは否定しないかな。最初は滅茶苦茶怒ってたからさ。」

ガービーと違って、このわたしがボコボコにしてやるって思ったら。こっちに歩きだしていた」

「これでも病み上がりなんですけど」

「それは聞いている。一晩で戻ってきたら、ケイトとかマクレディに凄い嫌な顔されたし」

「それならボコボコにするのは目を改めてほしいかな。今は銃を持つてるし、正直な話。ここからも逃げ出したい」

「いったじゃん、最初だけってさ。今は——君の話が聞きたいんだよ、アキラ」

体の芯からズキズキとした痛みを感じるが——出血とかはないよ。うだ。

パイパーは逃がすつもりはないらしいし、僕も逃げきることはできそうにない。そもそも凄いマジな顔で名前を呼ぶせいでこっちまで緊張してきた。

インタビュージャやないからね、再び念を押しつつ——僕はあっさりと白旗をあげることにした。

水の入ったボトルの隣に並べられたマイアラークケーキをつつきつつ、パイパーは話し始めた。

「一晩かけて怒りながら戻ってきたらさ、いろいろ考えたんだよね」

「夜に移動するとか、危ないことをよくやるよ」

「本当にブルーは呼ばなかったんだね。わたしとガービーだけ呼んだ」

「そうだよ」

「あんな最悪なもの見せられて頭来たし。嫌がらせかって思ったけど、違ったのかなって思ったりもして」

「……」

「だから君としつかりと話したいと思ったの」

正直に言えば、僕は絶交されてもいくらいの気持ちがあったのは間違いない。

彼らへの招待状は、言ってみれば僕から2人への解答みたいなものだった。

僕とレオさんはミニッツメンを再び立ち上げる手助けをした。彼らに今度こそ連邦を助ける存在となってほしいという願いを込めて。だが皮肉にもガービーの手で運営されたミニッツメンはすでに限界に近づいている。希望は打ち砕かれた。

キャピタルから来たB・O・S.という異分子の登場も確かにあつたが。

当初の予定では急速に居住地を拡張しつつ、キャップをつかつた経済から勢いを借り。北をミニッツメン、南をガンナーズと切り分け。こちらで戦争を開始。

同時にインステイチュートを引きずり出してこれに巻き込むことでB・O・S.の発言力を大きく削る”。戦争後に彼らにはもう用がないだろうと連邦からキャピタルへ帰ってもらおうという計画はおそらくすでに失敗している。

ガービーは自分が何とかしていると考えているようだが。

かつてのミニッツメンを多く戻しすぎたせいで、新旧のミニッツメンの間にすでにしこりが発生していた。

レオさんは知らないが、僕が望んだ新しいミニッツメンは袋は古くても中身は新しい酒、というやつだ。

自分の味方になってくれる旧ミニッツメンは数人いればいいだけで、“使える兵士”が必要なら傭兵で構わないと思っていた。

ところがガービーは理想を重視した。

彼の求める理想でつながる絆は組織の中では政治の道具にしかない代物だ。だからこそ肥大化したものを抱えている連中になど戻ってもらいたくはなかったが。帰ってきてしまっている。

「レキシントンのレイダー」

「うん」

「僕とレオさんはジャレドっていうあそこにした大物を倒すことでミニッツメンを復活させた。ところであの町は今、どうなってると思う？」

「——いろいろと噂だけなら聞いている」

「確実なのはひとつ。ジャレドがいた工場にいる、ジャイアント・デイクソンってのがレイダーのトップ」

「……」

「北西部は落ち着いてきてる、とか巷じゃ言われてるらしいけど。

現実にはレキシントンのレイダーの脅威はほとんど変わってない。

依然と同じく誰が次のトップになるか小競り合いしながら化け物ともサバイバルしている。

だから皆はミニッツメンが彼らを抑え込めると信じたがっても——僕はそうは思わない」

だからこのスターライトの居住地だけは強大なものを用意した。

ほかならひとりですむ代表者も、ここでは複数体制になっている。数年の時間が必要だろうが、将来的にはさらに多くの人々を呼び込み。町をさらに大きくしながら、同時にバンカーヒルとグッドネイバーに張り付いている傭兵たちをこちらにひっぱってくるつもりだ。そのためにあんな処刑まがいのショーも始めた。

銃の力が、暴力が問題を解決するこんな時代に法律もクソもあつたものではないが。傭兵たちをこちらに呼び集めるためのわかりやすい道具として役に立てるつもりだ。

「それがあの——裁判ショーとやらをやる理由？」

「じきにミニッツメンは動けなくなると思ってる。ガービーはそれに対処しようとするだろうけど、何年か時間が必要になるはず。だけどその間、レイダーの脅威は減るわけじゃない。

「ここが“普通の居住地”では守れないんだよ、パイパー」

「特別に傭兵を雇っているって聞いたのはそれが理由ってこと？ミニッツメンもいるのに」

僕は首を横に振る。

「良くする方法は確かにあるよ。僕か、もしくはレオさんが今のミニッツメンを本気で面倒見ればいい。ガービーは不満もあるだろうけど、元の気楽な兵士に戻れたと喜ぶかもしれない。

「だけどパイパー、僕もレオさんもミニッツメンにすべてをささげているわけじゃない。ガービーの友人として手伝っているというだけさ。だからガービーの希望に従い、レオさんは将軍に。僕もミニッツメンとしての席を残してる」

「助けるつもりはないって言いたいのか？」

「すでに助けてる、ほくらなりに。レオさんはガービーの求めに従って将軍としてふるまってる。でも命令はしてないはずだよ。それは

僕も同じ。

僕がグレーガーデン、コベナント、そしてこのスターライトの居住地からミニッツメンを取り上げるような真似をしたのは彼のため。ガービーの力になりたかったからさ」

「ガービーはそうは思っていないみたいだけど」

「彼の考えは関係ない。変えるつもりもないよ。僕もレオさんもできることがないだけ、これ以上。それでもやるとなると僕らの事情には不都合が発生するし。なによりガービーの立場をどうしても悪くしてしまう。」

だって彼のやり方は間違っていて、よくはないと言わねばならないし。今の立場からはどいてもらおうわけだから。

でも駄目だ、新生ミニッツメンにはガービーは必要な人だ。だから彼が自分の力でなんとかしてもらおうしかない」

「オーケー、教授。腹を割って話してくれるみたいだから聞いちゃうけど——ブルーのことはわかった。では君はガービーのために、ミニッツメンのために何をしてくれたのかい？」

「……僕がガービーのためにしたことね。それはミニッツメンではなく連邦の人々のためにレイダーの町を作ったってことさ」

僕の言葉にパイパーの目が大きく見開かれた。

「今、レイダーの町って言ったの？」

「少し違うけど、似たようなものだから——僕が手掛けたコベナント、グレーガーデン、スターライトの3か所は。グッドネイバーとバンカーヒルを参考にして作り上げたんだ」

「ああ、悪党の町ってこと？」

「この3か所は近くにレイダーがいるから必ず狙われる場所だ。だから強いものにしないといけない。」

コベナントはグッドネイバーに近いかな。壁は高く、中では独特のルールがしかれている。といっても、今はまたやり直す羽目になってるけどね」

「そうになると、グレーガーデンに似ているのは……まさかバンカーヒルっ!？」

「良質で手をかけられた農作物が手に入る農園。それを隣にいる居住地に卸してもらい、材料として薬品を作る。ただグールしかないこともあって、サイコとかジェットも生産してるけど。それはしようがないかなって」

彼女の顔から驚きが消え、下には呆れたと伝えるものがあらわれてきた。

まあ、パイパーならそうなるだろう。

「そ、それじゃここ。この町は——」

「両方のより本質的な部分の合体って感じかな。それを証明することもできるよ」

「はい？証明って」

「あの日、実はここに招待したのはパイパーとガービーだけじゃなかったんだ。正確には人じゃないけど」

「えっ、えっ」

「ショーが始まるころに来てもらった。ロボットだよ。」

聞いたことがあるんじゃないかな。ミニッツメンの居住地を回る医者ロボットがいるって」

「ああ、ああ！それは聞いてる」

「あれは定期的にコベナントに戻って見聞きしたいいろいろな情報を集めているんだけど、そのひとつに現役のミニッツメンたちの“顔”も集めてもらった」

「？」

「あの日。あそこに行ったミニッツメンたちは何人いたと思う？」

「嘘でしょ」

パイパーの顔が暗くなる。

別に入場制限したわけでないから誰がいても問題があるわけじゃない。

しかしガービーがいて、彼が嫌悪するショーを楽しんだ部下たちもそこにいたという事実は少なからずショックがあるだろうと思われる。そしておそらくだがレキシントンのレイダーだってあそこにははずなのだ。

「ミニッツメンだけを頼りにはしない。いや、できないと考えたから作っただ」

「よし、なるほど。つまり自立した町ってわけね」

「——まあ、そうともいうかな」

「そっか、なんかわかつたって思えたかな。それじゃ、インタビューはここまで。なんかこのまま続けると、やっぱりぶん殴りたくなりそうだし」

「インタビューじゃない！ちよつとした質問に答えただけだよ」

「はいはい、どのだれともわからない情報提供者さん。ありがとう」

席を立とうとするパイパーに僕は声をかける。

「またベルチバードで送ろうか？」

「え、いいよ。ダイヤモンドシティには戻らない。またすぐに会えるでしょ」

「——そうなりそうだね」

フアーハーバーに彼女もこれから向かうって意味だろうと思った。

「君はさ、本当に頭にくることをするんだけど——どうにも憎み切れないって部分があるせいで、本当に困った子だね。少しくらい反省しろ」

僕は肩をすくめる。

善人でいられた僕は Vault を出てすぐに死んでしまった。でもだからって普通の悪党を楽しむつもりもない。

「これは言いたくなかったんだけど。本当に言いたくないんだけど、ナットがさ」

「うん」

「君が見てくれた印刷機の様子を見てほしいとかなんとか——ああっ、なんでこんなこと言っちゃうんだろ」

「別にいいよ。ダイヤモンドシティに行ったら顔を出すようにする」
「伝えとく、でもね！手を出すのはダメだからね。妹に近づくのはダメ、君は彼女がいるわけだし。本当にダメなんだからね」

「どうやらお姉さんは妹がこの悪い虫に近づこうとしていると考えているようだ。」

ちよつとだけ、若者の自由恋愛についてどうかんがえているのか。そう自分から問うてみようかとも思ったが——朝っぱらから騒ぎの種をばらまくのはやめたほうがいいし、今度こそ彼女は怒ってしまうだろう。

ひとり残され、バラモンのミルクを飲み干す。朝食の、前菜の時間は終わりだ。

店主に改めて追加の——パンプキンパイとステイングウイングのヒレ肉を病室に届けてくれと頼んでおいた。

2人が穏やかに話し合い、パイパーが席を立つのを確認するとキュリーはようやくホツとして離れからの観察をやめることができた。アキラのもとにパイパーを送り込んだのはキュリーの手引きによるものだった。

あの騒ぎの翌日、いきなり戻ってきてアキラに会わせろと要求するパイパーにマクレデイとケイトはまったく相手にしなかったし。眠っているアキラにも近づけなかった。

だがキュリーはパイパーと話をし、会わせることを決めた。パイパーはまだ怒ってはいたが、それでもちゃんと理解してやろうという意識を感じることができたからそうするべきだと考えたのだ。

どうやら彼女の願いは通じたらしい。

どんな会話が交わされたのか、あとでアキラに聞いたら自分にも教えてくれるだろうか？

少しだけキュリーの顔に暗い影が差す——。

あのショーの後、傷ついたアキラを治療しようと服を脱がし。騒がしい感情を殺し、必死に自分を叱りつけながら。

パツクリと上腕を縦に切り裂いた傷口を針と糸で必死になって縫い付ける中。彼女はそれを目撃してしまった。

皮膚の下、徐々に緑に輝くそれは神経網にも見え。

同時に裂かれて見えていた皮膚と筋肉が不気味に脈動しながらも、勝手に補修しようと動き始める。

——これまでどうしても言い出す勇気がなかったんだ、キュリー——
——僕の体は普通の人間とは違う

——だから君の手で、僕の体の秘密を探ってほしい
針を持つ手がいつのまにか震えていたことに気が付かなかった。
すでに感情はいっぱいいっぱいだったのに、さらに動揺してしま
い。ついうっかり、医者として患者に見せてはいけない表情が——嫌
悪のそれが出てしまった。

あれ以来、己への嫌悪と怒りにキュリーは苦しんでいた。

人が持つ感情の激しさ、恐ろしさを彼女はあらためて思い知らされ
てしまったのだ。

敬意、愛情、欲望。

そうしたものの良い部分を手に出来たことへの喜びは、たったひと
つの間違いだけですべてが無意味で台無しにされたように思えてし
まう。

それだけではない。

本人からの申し出とはいえ、あの変異。

そのなぞの解明にキュリーの中にいる医療研究者としての自分が、
冷酷な方法をいくつも平然と考え付いてしまうことも許せなくなっ
てきている。つまりは、ストレスだ。

キュリーはアキラを愛している。

愛しているはずだ。

なのにその体を斬り刻み、細胞を削り取ってサンプルと呼び。反応
を確かめるために薬品と混ぜていく？

正気ではない。正気とは思えない、思いたくない。

だが、だが——正しいこと、間違っていること。その境目がどうに
も見たいのに見えてこない。

2000年以上も活動した経験と大人の体、それを使う権利をもって

いるとはいえ。

やはり“人造人間”として活動した期間が圧倒的に少ないキョリーにとつて感情のコントロールはなによりも難しいものだった。思考が走り出すたびに感情が左に右に、上に下に。不安定さを彼女に与え続け。不安は彼女に迷いと恐怖を与えていく、降り積もる雪のよう。

そしてこの問題の難しさを知るのは、他人に本心を知られたくないという理由から皮肉にもこの広い世界で本人ただひとりしかなく。

彼女がそれを乗り越えるには人間としての経験が圧倒的に足りなかった。

今日も店に来るのかどうかわからない店先で、知らせを聞いたアレンは立ち上がるなり自分の商品でもある武器を手にする。弾倉に詰められた弾丸を確認すると銃に装填する。

「あいつ、また戻ってきたって!？」

「ああ、なんか大勢を連れて来たって」

「クソツ。余所者が、何が面白くてこんな島に」

苛立ちに唇をかむ。ここは観光地じゃないんだぞ。

またもキャプテン・アヴェリーがなんやかやと口出ししてくるのだろう。その前にこの島の住人として、邪魔なよそ者はさっさと消えろと今度こそ力で教えてやる。

港に近づくと複数人の声が聞こえてきて。さらにアレンを怒らせる。

「かぁー、やっと地上だよ」

「おいおい、これくらいなんともないだろ?」

「ヘンっ、『ちよつと近づくな、俺は大丈夫だ』とか言つて。ゲロするのを誤魔化してたのはどこのマクレディさんだった?」

「そういう話じゃないんだよ。もう上陸したんだから俺達は——」

港へと続く階段から男女が姿を現す。女は美人だったが、船旅にな

れてないようで体などを伸ばして自由を満喫している。それに細つこいのに物騒なライフルを担ぐ鋭い目の男か。そいつの女ではなさそうだ。

とはいえ相手が美人だろうが何だろうが考えは変わらない。

さっそくアレンは噛みついていく。

「おい、あんたら！ここになににしに来た!？」

「誰？お前」

「俺達はこの島に住む。あんたらみたいな厄介者が来ることをよく思わない気のいい奴らさ。見てわからないか？」

男女の顔が曇る。とりあえず最初の一撃はかましてやれた。

すると不機嫌顔の女が、ずいと一歩前に進み出てきた——アレンはそれを見下ろす。可愛い顔で気も強いようだが、アレンは別に優しくなんてしてやるつもりは欠片もない。

なに、グチャグチャまだ騒ぐならピンタの一発でもくれてやれば黙るだろう。女だから。

だが次の瞬間には思いも知らないことが起こった。

アレンの腹部がいきなり爆発した……少なくとも本人はそう思った。

左の肋骨下に爆発音がさく裂し、そこにあるべき臓器の感覚がごっそりと消えた。なにが起こったのかわからないが、アレンは恐怖を感じ。思わず腹の中から内臓が外に飛び出してないよな、と。手を腹に持っていく。

——あ？

驚いたことにそこには変わらず自分の腹は存在していた。

だがやはり感覚がない。そういえば声も出ないし、息もできないかも。

この異常事態に後ろに控えている仲間に助けを求めようと顔を上げると、そこにはまだあの女がいた。

恐ろしく冷たい目は獲物をしとめる猛禽類を思わせた。

そしてアレンは顔面に異常を感じる。

顎先に2回の爆発。次は右の側頭部だ。

耐える、なんてことはまったくできなかった。

アレン・リーは意識を失った。自分に何が起こったのかわからないまま、終わってしまったのだ。

最初こそアレンを先頭に強気な顔でついてきた島の若者たちも。

女がたったひとりで銃を持つアレンの前に立ち。鋭いボディブローで簡単に膝をつかせ。続いて打ち下ろし気味に放つコンビンエーションで完璧にのしてしまうのを見ると「おおー」と周囲に驚きと興奮の混ざったざわめきが走った。

そしてマクレディは軽い頭痛を感じて眉間を抑える。

護衛が主人より先に目的地でトラブルおこしてどうするつもりだ――。

だがケイトはそんなこと気にしたりはしない。

そして自分に向けられている視線の中に尊敬が混じっていることを察すると、一変して笑顔を浮かべて元気よく言い放つ。

「ねえ、ちよつと！この島はこんな芋臭い奴しかいないの？」

「――あんた凄いな。アレンを簡単にノシちまうなんてさ」

「こいつ大した奴だった？まあ、いいけど――それより酒場はどこよ？それくらいはここにもあるよね？」

「あ、ああ。案内するよ」

島民の結束とやらは美人の彼女のパンチだけで破壊されてしまったらしい。

地面で眠るアレンを放ったまま、男たちはすっかりケイトの勇姿に惹かれてしまい。彼女を連れるように酒場へと歩いて行ってしまふ。

――あれは耐えられないよなあ。ケイトなら特に

レオさんから島民の態度は聞いていたので、わざと2人を先に行かせたが正解だった。

僕は男たちを引き連れて離れていくケイトの後ろ姿を見て笑っていたが、隣に立つキュリーの心配そうな視線を感じて彼女を安心させることにする。

「ケイトはいい仕事をしてくれた。面白かっただろ、キュリー」

「——もう。あの人、様子を見てきますね」

あきらめたように首を振りながらキュリーは倒れて動かない島民のところへ行った。

おそらくは数日くらいは痛みは残るだろうが、それだけだろう。

ケイトはあれで荒くれ者の扱いに慣れているし。いきなり殴り殺すようなバカはやらない。どちらかといえばそういうのは僕がやってしまうことで——いや、なんでもない。

「さて、ケイトとマクレディは酒場。レオさん達もニックを探すというし。パイパーは取材だな。ぼくらはさつさと居住地へ行って仕事を始めないと」

僕が予定を口にするのとアメリカ・ストックトンが船の奥から自分のバラモンを引きながら笑顔で元気よく答える。

「では私は、この港にいるというドクターと話してきます。この土地の特徴や、あつかってる薬品についての情報など知りたいので」

「わかった。情報収集もわかるけど、数日は動けないから早めに来て手伝ってほしい」

「はい」

「明日にはアメリカ商会の立ち上げだ。あせらずにやろう」
「任せてくださいっ」

連邦とニューハーバーをつなぐルートは当面、アメリカが独占する。

かなり厳しい状況ではあるが。連邦から流れてくるキャップで支えつつ、強い流れにしていかななくては。

僕は船に積んできた荷物をまとめて移動の準備を始めるが。

一瞬、手を止めると島の中央部。山頂にあるという、霧に隠れたアカディアなる人造人間たちの住処を見つめた。

——レイルロード関係なく。インステイチュートから逃げ、自分たちだけの場所を作った。どんな奴だろう？

自然と笑みが口元に宿る。強い、とても強い興味がある。

デーママといったか。さて、どんな奴なんだろう？

3日後 (Akira)

メタルアーマーを装備した男が周囲に気を配りつつタイコンデロガに戻ってくると、レールロードの仲間たちはそれを囲んで迎えた。全員の顔色は悪い。

「それで、なんだった？」

「——思った通り、レイダーだよ。抗争が激しくなってるみたいだ」
建物と地面を揺らす騒ぎは、ボストンコモンが中心地だったのだ。とりあえず人造人間たちには「心配ない」とこれで説明はできる。

最近、ミニッツメンへの手だしが難しくなったとようやく理解したらしいレイダーたちだが。そこにあのB・O・S.の部隊が近づいてきて小競り合いを起こしている。

風の噂だが、なにやらあのB・O・S.は調査をしているという。何の調査をしに来ているのやら——。

「——ディーコンの奴、大丈夫だろうか？」

「ま、北に行くと言っていたからな。騒ぎがあつた南側のボストンじゃ、反対方向だ。心配はないさ」

「そうか。そうだといいけれど」

いまや2人しかないレールロードのエージェント。そのひとりであるディーコンがここにいつものように前触れなくふらりと姿を現したのが早朝だった。

本部からの指示だと言って、驚いたことに15人もの人造人間を逃がすという。いきなりのことにタイコンデロガが少しばかり騒がしくなったのは無理もない。

そんな大きな計画があることなんて知らされてなかったし。それをディーコンが引き受けたというのも驚きだ。

ディーコンはすぐにも動くというが。

こんな聞いたこともない話なら、本部に問い合わせたほうがいいという意見も多かった。

だが結局、完全な納得はできないものの「急いでいる」と繰り返すディーコンと、現在のレールロードの難しい状況を考え、本部の指示

を信じて早急に送り出せる15人を数時間で選び出し、送り出したばかりだった。

列の先頭にデイーコンが立ち、その後ろを実に不安そうな集団が付いていく姿は。見送ったほうとしては実に不安で、あんなのをライダーに見られたらオシマイだと後悔し始めた矢先の騒ぎに動揺してしまったのだ。

「とにかく。とにかく、だ。デイーコンは恐らく無事だ、人造人間たちも。」

俺たちは頭を切り替えないと。また新しい受け取りがあるってハナシだっただろ?」

「ああ。バンカーヒルから新しく2人」

「インステイチュート、レイダー、スーパーミュータント。それにB.O.S. もいる。デイーコンの心配ばかりしているわけにはいかないぞ」

レールロードの本部は要求ばかりしてくるが。こちらがのぞむ増員を求める声にまったく反応はない。それどころかレールロードから離脱するメンバーが出てきている噂が巷で広まっている。信じたくない話だ。

それでも——それでも人造人間を助けることは間違っていないという信念は曲げられない。

デイーコンが率いる集団は、この時。なぜか町を出たところにある橋の上で立ち止まっていた。

ここまでは予定通り。あらかじめ掃除”していたこともあって、この集団に近づいてくる存在はない。そしてありがたいことにタイコンデロガが出てからついてくる”レールロード”のメンバーもいなかった。このデイーコンはそれを一番心配していたのだが、無事に任務の難しい部分をやり通せたようだ。

彼はいきなり腕を天に向かって突き上げ。指先をくるくるとまわして合図を出す。

すると橋の反対側の草むらから何かが出てくる。

草木をへし折り、ステルス装置を解除するのはあのエイダとローグスと名付けられたアキラのロボット部隊。そしてもうひとり、シルバーシユラウドの姿で顔を隠す女性がひとり。

「追跡はない。任務を仕上げよう。コペナントへ」

「了解、コペナントへ」

デイーコンの言葉に女シユラウドは答え。するとロボットたちは再びステルス装置を発動して姿を消していき、デイーコンは再び先頭に立つと集団を導いていく。

そう、あのコペナントへ。

レオの暗殺、それを目的として動く“小さな宝物”のクロダとキジマの元に。

あのサカモトから短いメッセージが届いた。ただ一言「ファーハーバーに上陸した」とだけ。

他に何も無い。

それが気になって2人は顔を見合わせる。

3日前、レオとアキラが仲間を引き連れて島に来ていることはすでに2人にはわかっていた。

だがそれをあのサカモトがわざわざ遅れてしらせてくるのは、何か理由があるからではないのか？

そう思い至ったことで、この島で唯一。人が住める場所となったファー・ハーバーの港へ向かうことになった。

が、近づいて遠くにファー・ハーバーの港が見え始めると2人の足が止まり、進めなくなってしまう――。

それは港の隣にある、小さな小屋がひとつあるだけの小さな島だったと記憶する場所だった。

だがそれはもうここからは見えない。

そのかわりに砦が港の隣にあるではないか――。

恐怖というものをあまり感じない2人の背中に冷たい汗が流れ、呼吸まで荒く乱れた。

ありえないことがおこってしまった。とりかえしのつかない事が、同じ速さで動いていると思っていたのに。すでに大きな差がうまれてしまっているという現実。

「恐ろしいものでしょう？アキラは」

「……サカモト」

「お前、来ていたのか」

2人の言葉に反応せず。木々の間からいきなり現れたサカモトは、いつものように笑顔を浮かべ。同時に呆れたように遠くに見える砦を顎で指さした。

「無理に近づこうと考えないほうがいい。我々はもう、あそこには近づけませんよ。港もです」

「なぜだ？」

「アキラがあそこにいるからですよ。今の彼は、以前に捕らえた時とは別人ですよ。我々が近づけば恐らく“匂い”で嗅ぎ分けられてしまいますよ」

サカモトの言い方が気に入らず。馬鹿にされていると思った2人は鼻を鳴らす。

「つまらん冗談だな」

「どうでしょう」

クロダはサカモトのほうへ体を向ける。

「俺が。いや、俺たちがあきらめていないことを知っていたか。だが止まるつもりはないぞ」

「ミニッツメンの将軍暗殺。それが叶うなら、コンドウも浮かべられるでしょう。が、彼のそばに今。アキラがいることを忘れないでもらいたいですよ」

「つまり、アレにはまだ手を出すということか」

「キングジョウを喜ばせたいならまとめて始末してみればいいと思いますがね。ただ思うんですが、簡単ではない仕事を、自分でさらに面倒

にして失敗してはあなた方の名前が泣きますよ」

『……っ!?!』

彼の言葉はすでに2人が失敗するのを見越したもののよう思えた。

2種類の冷たい視線が交わされる。が、すぐに穏やかな空気が戻ってくる。

「お前は何でここにいる、サカモト」

「仕事があるからいるのです。あなた方と同じです、忙しくなる前に顔合わせをしようと思っましてね。」

「これからは簡単には会えないでしょうし。助けてもあげられない」
「そうだな。全てが終わればそういうことになるだろう」

「ちよつと待て！結論を出すのは早いだろう。もしかしたらともに協力ができるかもしれない」

「キジマ——それは虫が良いというものです。」

私はね、あのキンジョウをアキラと呼んで拝み奉るような未来には絶対進みたくありません。その危険性を冒してここにいる君らと仕事はできない。

もう止めはしませんが、お互いが邪魔をしないようにはできません。しょう。そこだけ約束しませんか」

「キジマ。結論は出ている。俺の計画は変わらないし、俺ともやれないならお前とはここで別れる。ただそれだけだ」

顔をゆがめて沈黙するしかなくなったキジマにサカモトは苦笑し。

「ほらね」というように両手だけ広げ。背中を向けると別れの言葉も口にせずに霧の中へと消えていった。

「たった3日」

クロダもキジマもいつまでもその背を見つめはしなかった。

かわりに遠くに見える、あの海に浮かぶ砦を見てつぶやく。彼らの予想をこえ、足を速くせねば追い付くこともできないままこの島でやれることは何もなくなってしまうかもしれない。そう、初めて感じた。

かつてロングフェロー氏の自宅があっただけの小島は、数日でちよつとした砦に生まれ変わらせることができた。

今では島を囲む壁と、新しく3つの建物が加わっている。

ひとつは宿舎。

今は僕らの寝起きする場所となっているが、将来的には別のものになるはず。新しい住人のための共同宿舎だったり、ホテルつてのも悪くないかも。誰が客に来るかはわからないが……。

ひとつはアメリカ商会。

ストックトンの娘、アメリカが作るこの島と連邦をつなぐルートを開発する店として用意した。

バラモンを世話する小屋に小さな事務所、本人の部屋に社員のための宿泊施設。彼女は今、こことハーバーを商売しながら繋ぎつつ。そこに新たな社員にならないかと探している。

最後が砦の防衛施設。

敵の接近に反応するサイレン、反撃システムはここで管理される。

そして今日はそのテストをおこなう。

これが成功すれば、僕のこの島に来て最初の大仕事は終わる。

端末機にへばりつき、システムチェックで苦戦する僕の隣に立つレオさんは改めて島を囲む壁を見回し、苦笑いを浮かべた。

「それにしてもたった3日だぞ、アキラ。それでこれは驚くしかないな」

「そうですか？ 話は聞いてましたからあらかじめ用意してたし、ニツクの地図も役に立った。資材も用意してあったから組み立てるだけ、問題ありません」

「本気で言ってるのかい？」

「……大昔の日本では、たった一晩で砦を作り上げ。国を攻め落とし英雄がいましたよ。それに比べりゃ、このこうらい。たいしたことはないです」

「一晩!?それもまたすごいな」

とはいえ、この小島を砦と呼ぶには少し大げさだと自分では思っている。

確かにファー・ハーバーの港側には壁を隙間なく並べはしたが。その反対側は適度に間をあけて壁を配置してある。この場所へ近づく敵を引き込むためにそうしたのだ。

援軍も補給も心もとないここでは、コベナントのように壁で囲ってもしようがないという事情もある。

「それじゃ、テストを開始します」

「ああ。楽しみだ」

手動で警告を出すよう命令を下すと、建物の外でサイレンが鳴り始めた。

島の沿岸部、岩場に身を隠していたマクレディたちは後方からの警告音を聞き、これが時間が来たという知らせだと理解した。

これから一発、それで大騒ぎというわけだ。

ライフルの調子を確かめていると、隣に立つ——ディーコンが皮肉めいた笑みを浮かべて愚痴をこぼす。

「まったく、まさかこんな島に来て頼まれた最初の仕事が餌になれ、とはな」

「傭兵ならいつもの話さ。盾になれってね、ついでにそういう時はたいていが使い捨てだ」

「お互いにつらい立場ってわけか。よろしくな、相棒」

「そうあんたを呼ぶにはまだ少しばかり早い気もするが——」

言いながらマクレディはライフルを——新たに渡されたガウスライフルのリコンスコープをのぞきつつ、エネルギーチャージを開始した。

「お友達ってところから始めようぜ」

「わかった。なにごとも最初があるさ」

いつもの使い慣れた308口径弾とは明らかに違う衝撃が全身を走り、スコープの中のマイアークが一発で粉々になって砕けた。

——なるほど、50口径にも負けないわけだ

それから数発、2人は沿岸にあつたマイアラークの巢に向かつて発砲すると。背中を向けて脱兎のごとく逃げ出す。これも計画通り、あとはあの島まで行けばいいだけだが——その前に追い付かれたらヤバイことになる。

遠くでサイレン音が聞こえると山の中にいるパラディン・ダンスは思わずライフルを構えてしまう。

かつて連邦で味わったいくつもの苦い記憶がさせる行動だが、今の同行者たちにはそれがないらしい。

ケイトとかいう女傭兵は、さきほどから石を拾い上げると鎖を巻き付けた鋼鉄バットを振り回すことではじいて遊んでいる。あの音が聞こえないのだろうか？という頭をしているのだろうか？

「おっ、今のを見た？あたしの“ベースボール”、大したものだと思わない？」

「ひとつ聞かせてほしい。あの音は聞こえているだろうか？何を考えている」

「あれね、ちゃんと聞こえてる。どうせアキラたちがおっっぱじめたっただけのことじゃん。あんたも説明、聞かされてたと思うけど？」

「むろんだ。作戦のチェックは極めた重要だ。作戦中に間違えば、それは笑い話ですむことではない」

「それはわかる。なら余計に心配はいらないんだよ。」

どうせ大変なことになるのはこの後なんだから。防衛システムとやらのテストって言ってたじゃん」

「君は自分の上司を信頼している、ということか？」

「どうかな。どっちかというと、この後に待っているパーティにストロングを残してあたしをはずしたつてのが気に食わないだけかも」

「ストロング——あのスーパーミュータントのことか」

「まだそれ、言ってるの？別に間違いじゃないけどさ、ストロングが怒ってあんたを八つ裂きにしようとしても。あたしは別に助けてやらないからね」

「——私よりも、君はあのスーパーミュータントを信用するというのか」

「初顔合わせのあんたと違って、あつちは一緒に戦って寝泊まりもした仲だしね。当然でしょ」

「ううむ」

ダンスは自分の頭部に軽いめまいと痛みを感じる。

この旅はいささか刺激の強いことばかりが待っているようだ。

この3日間、小さな島が砦へと変貌する間。

パラディン・ダンスはレオとアキラの頼みでDr. キュリー、このケイト、そして犬と共にこの島の生態調査につきあわされている。

連邦に負けず、ここが危険な島であることは間違いない。

これまで3度マイアラークの群れに出会ったし、見たことのない巨大な生物——ケイトによると地元ではガルパーとよばれているらしい——とも戦った。

だが一番に問題だったのは、トラッパー呼ばれている地元のレイダーもどきだろう。

今までの戦場ではそれほど見ることはない。殺されるために殺しに来る、そんなノリの奴らが群れで襲ってくる光景は最初こそ体を震わせたものだったが。

市民であるはずのケイトと犬は喜んでこれを迎え撃ち、死体に変えていく様には困惑させられたものだ。

というより、レオが紹介したアキラとやらの連れは変な奴らが多すぎる気がする。

まずこのケイトという女性は傭兵とのことだが。仕事ぶりが雑すぎて、兵士というより。騒ぎが始まるのを待って、ただ暴れてるだけにしか見えない。

さらに興味を引くのはもうひとりの女性だ。

「あー、それでDr. キュリー。調査のほうはどうだろうか？」

土地の生態系を観察し、採取を繰り返しているキュリーは集中しているのか。野山に入ると、途端に無口になるので怯えないようにダン

スなりに気を使い、こうしてたまに話しかけるようにしている。

同じ部隊として行動したスクライブ・ヘイレンとの関係から学んだことだったが。こちらも少し変わっているようで、あの警告音に気が付かず。怯えた様子などかけらもなく。むしろ興奮気味に何かを語り始めた。

「はい、やはり地元の人たちが言うように。この霧には放射能以外にも人体に影響ある別のものがいろいろと混ざっていることは間違いないようですね。それらの影響を受けた植物、動物から何かかわらないかとでも——え?」

「いや、すまない。仕事の邪魔をしただけのようだ、続けてくれ」

「すいません。色々と驚きが重なってつい……気をつかってくれたんですね」

「君には余計な気づかいだと学んだよ。正直に言うと、君ならスクライブとしての資格は十分以上にあると思っっているんだが。B. O. S. の活動には興味はないかな?」

おそらくダンスはただキュリーの熱意や勇氣、好奇心を誉めたかっただけなのだろうが。なぜか最後に勧誘してしまい、お互いの間の空気が妙なものになってしまう。

ダンスは自分の話術の拙さを理解し、あわててとりつくろうように「いや、その、困らせてすまない。ただ、君に敬意を示したかっただけなんだ。おかしなことを口にして困らせてしまったかもしれない」

「はい」

「だが——とりあえず口にした以上、聞いておきたい。どうだろうか?」

「私が、B. O. S. の活動に参加するって話しですか?」

「ああ」

レオという人材のスカウトに自信がついたのか。ダンスは珍しく積極的な姿勢を見せていた。

だがキュリーは悩むことなくダンスにこたえる。

「お誘いは嬉しいのですが、できません。」

私には医療学者としての使命があります。それは特定の集団に対して恩恵を与えるわけではなく、より多くの人々に与える利益である

ことが重要なのです」

「こんな世界であつたとしても、か？」

「だからこそ多くの人を助けたいと思つています。それが難しいことはわかっていますが、不可能ではないことを私に教えてくれた人のためにも。考えは変わらないと思います」

「わかつた。私も君の強い意思を尊重しよう。そして君の安全を私が保証しよう」

「ふふつ、心配はしていませんよ。ケイトもいますし、カールもいます。あなたまでいるんだから、私は安全です」

「う、うむ」

横目で自分の同僚を見やる。

近くの木の幹に小便をして、座つて大あくびする犬。

小石を拾つては黙々とベールすぼる、とやらをやっているケイト。どうもDr. キュリーからも自分はあれよりも頼りにされてないような気がして、不安を覚える。

遠くから聞こえるサイレン音に交じり、爆発音も聞こえてきた――

逃げているマクレデイとデイーコンの背後に怒っているマイアラークたちが迫っていた。

いくら距離をとっていたとはいえ、人の泳ぐスピードでは海中を進むマイアラークを振り切ることは難しい。

へとへとになつて砂浜を走りだすころには、マイアラークの体は海中から半分姿を見せていた。

彼らの前方にあるのは視線を遮るように配置されたコンクリートの壁――その隙間を必死になつて駆け抜けていくと、逃がさないとばかりに爪を振り上げたマイアラークも追つて角を曲がろうとした。

その瞬間。複数のターレットの起動音。複数の光線がマイアラークたちを襲う。

前方を走るマクレデイらの頭上を、いくつもの強力なレーザーが集中して放たれていた。

吹っ飛びながら別の壁に叩きつけられ、粉々になっていくマイアラーク達。

それは情け容赦なく、徹底的に破壊しつくしていた。地面には砕かれた脚。顔や殻がばらばらにされ飛び散る。

「おーい、こつちまで頑張つてこいよ。そうすりや仕上げを一緒に見れる」

レオ、ストロング、ニックと並び。レーザーに間違つても撃たれたくないと這いつくばって進んでいる2人にのんきにアキラが声をかけた。

「アキラ。あの糞野郎」

「マジでムカつく」

歯を食いしばりつつ、無視して這って行くとアキラが手助けしようとして手を差し伸べてきた。2人はそれを思いつき握りつぶすつもりでつかんだのだが――若者は顔色一つ変えやしない。こういうところが本当にかわいくない。

「お疲れ、テストは成功で終わりそうだよ」

背後ではおびき出されたマイアラークの刈り取りが始まっていた。壁から出たらレーザーでハチの巣にされる、そう学んだマイアラークは壁の裏でじっとしていたのだが。そこに強烈な炎がふりまかれた。

「火炎放射器ターレット、3門用意してる。火力が強すぎて20秒ほどしかつづかないけど、数分で自動給油するから使えはずだ」

高温であぶられて動かなく仲間から、火から逃れようと砂浜を走って再び海を目指したマイアラークたちだが。

火が消えるともたもや壁に戻ろうとする。

「やはり戻るか。なら逃がさないよ」

「――マジか」

背後から不穏な機械音に続き、アキラの言葉にディーコンがうめく。

「改造したミサイルターレットにグレネード?どこから用意したんだ」

「ベヒモスをつれたスーパーミュータントを想定したんだ。こんなもんでしょ」

「そんなわけあるか」

壁の向こう側から聞こえる爆発音の数々は、哀れなマイアークたちへの派手な鎮魂歌だった。

「さて、確かめに行かないとね——ストロング、一緒にどうだい？」

「……タイクツ ハ オワリカ？」

「もちろん。残ってたら全部、君にあげるよ」

「ワカツタ、行ツテヤル」

マクレデイらは付き合いきれるかとその場で寝ころび、アキラたちは砂浜へ。

残されたニツクは「やれやれ」と口にしながら煙草をくわえる。

「レオ。あとでいいんだが、酒場に行つて小屋の住人と話してやつてくれないか」

「ロングフェローのことか？」

「ああ、奴さん。こんなひどいことになるかわかつてりや、俺たちがここで寝泊まりすることを許可しなかったと嘆いて昨日から戻ってきてない。今のデモンストレーションを見せられたら、今度こそ出て行つて。俺たちがこの島を盗んだつてことにされちまいそうだ」

「それはまづいいね」

レオは苦笑いする。

だがニツクは笑えなかった。

たった3日だ。

この島で不可能とされることのひとつを、この2人はさつそく実現させて見せたのだ。

「では最後に——連邦の人々になにか訴えたいことなんかはありますか？」

「は？んなもんねーよ。」

俺の姿を見えねえのかよ。昼間つから漁にも出ないで酒飲んで。それをとがめる馬鹿がどこにいる？どこにもいないさ、あんたぐらいのもんだ」

「別にそんなつもりは——」

「なら、酒場に来てちゃんと酒を飲んで。酔っぱらうんだな、姉ちゃん。素面の言葉はシラけるだけだぜ」

「ありがとうございます」

「ファー・ハーバーでのパイパーの取材はこんな感じばかりだった。」

「なにか困ったことはないか、と問えば。お前が邪魔だと言われ。」

「何が必要なのか、と問えば。キャップと酒場で十分だと言われる。」

「ベツトの相手をしろ、などとふざけた答えが返ってこないことが唯一の救いだが、おそらくそれは初日のケイトのKO劇が関係しているのかもしれない。」

「この島での自分たちの存在があまりに異質すぎて、誰も近づいてくれないと言われているみたいだ。」

「こんな経験は久しぶりだ——。」

「ああ、ミス・ライトではありませんか」

「ゴズワース？こんなところでなにしているのさ」

「港に“元の”姿に戻ったゴズワースとぼったり出会ってしまった。」

「ミス・アメリカと合流するためです。彼女との約束が、荷物を持ち帰るといふ——ああっ」

「なっ、なにになに？」

「お願いです。助けてほしいのです」

「どこか壊れてるってこと？私なおせないよ？機械、得意じゃないし」
「違うんです。私、私は悲しいのです。苦しいのです。話を聞いてほしいだけです」

「ハナシ、だけ？」

「はい。それだけ、お願いします」

「聞き耳とおしゃべりのパイパーに聞き役を頼むなんてさすが口

ポットだ。人間なら絶対にしてくれない。

だからこそコズワースの願いはかなえてやることにした。

「いいよ。なんだい？」

「今の私を見て、どう思いますか？」

「どうって……元に戻ったね。小さくはなった」

「そうなんです！元に戻されてしまいました！ガッツイー軍曹ではない私。元の私！」

「それが——それが悲しいってこと？」

「それです！まさにそれなのです！」

島に来る際、大勢が船に乗るとあってアキラは早々に自分のロボットであるエイダを連邦に置いていくと言っていたが。コズワースはかたくなに主人と離れることを拒否した。

意外だったのは2人は早々に説得をやめたこと。その代わりに彼に与えた2本の太い腕と、大きな4脚が奪われ。箱詰めにされてこの島にやってきた。

彼が目を覚ました時、あつたのはひとつしかない目と元の3つのアームだけの姿に。

さらにレオからは前線ではなく後方に下がってくれとー。

今のコズワースはゴミ拾い、お手伝い、荷物持ち。

あまりといえばあんまりなこの仕打ち。あの巨大な太い腕が、あの足があれば自分もアサルトロンのエイダのように戦える。それととりあげるなんて——。

「うーん、でもブルーは何て言ってるの？」

「——今は助けてくれる人が多いので、支える側に回ってほしいのだと」

「それは間違っていないんじゃない？実際、大勢でこの島に押し掛けてるからねえ」

というより、かつてない大所帯ぶりは肩書を並べると驚くばかりで。おそらくは本人たちはまだ知らないこともあるだろうが、B・O・S・だのレールロードだの、人造人間にスーパーミュータントがいるのだ。

この島ではなく、自分たち自身がいつ大きな騒ぎの元凶となってもおかしくない顔ぶれが一カ所に集まっている。

「ブルーの言っていることは間違っていないと思う。それにあなた、もうすでに小さな島をとんでもないものにして見せたじゃないの。きつとそれをみてブルーは安心できたんだよ」

「そう、なのでしようか？」

小さな砦は、コズワースらロボットの手で完成されたものでもあった。

「どうしてもというなら、アキラに相談するしかないね。なにかうまい方法、考えてくれるかもよ」

「わかりました。ご主人様の期待に応えられるよう、今はできることをしたいと思います」

素直に返事を返すコズワースに、パイパーは思わず力のない苦笑いをする。

「どうしましたか？ なにか、可笑しいことでもありましたか？」

「いいや、違うんだ——人も君のようなロボットくらいに素直であつたらなつて思つてさ」

パイパーはそう答えると、ファー・ハーバーの港の中を見回しそこに住む人々を見回す。

「ブルーの言う通り、ここににいる人たちに助けは必要なんだ。でも、彼ら自身はそうは思つてない。

希望を失つてしまつているんだ。自分の気に入らないことは聞きたくないと思つていて、触れられたくない。ここに住んでいるみんながそうなんだ」

「希望がないのはわかります。ひどい場所ですからね」

「そうだね——こういうことはダイアモンドシティでも見る光景だよ。

でもね、ここは本当に悪いんだ。すぐに何とかしなくちゃならないはずなのに」

誰も何もせず。助けを口にすることもなくなつてしまつている。

「どうしましたか？」

「ゴズワース、ブルーは私たちが考えている以上に難しいことをやろうとしているのかもしれない。ここに来たらそれを強く感じたよ。でも……それならどうしたらいいのか。私には全く思いもつかないんだよ」

希望はない、生きることすら放棄しかけている人々に勇気を与えて奮い立たせる。

おそらくそうするしかないだろうが。言葉だけで彼らを動かすのは難しい。

「どうやら私はつまらないことを悩んでいたのかもしれないね。考えを切り替えようと思います」

「何ができるかわからないけど。ブルーのために、お互い頑張ろう」

晴れることのない曇り空が、そんな未来への不安をみせるように厚く天を覆っていた。

テストは終わったが、僕はまだ防衛システム——防御壁とターレットの再チェックをしていると。

珍しいことにあのデイーコンがヌカ・コーラを手にとってきた。瓶は渡してくれたが、最後の言葉からどうも仕事をねぎらいに来たわけではないらしいとわかる。

「やれやれ、いきなり親友からはつきりと餌をやれと要求され。殺されかけるとは思わなかったんだがな」

「撃つて、泳いで、走るだけのお仕事だっただろ？危険はなかった」「マイアラークの巣にむかってぶっ放つことが危険でないとは初耳だ」

「文句は聞いた。それで本当は何？」

短い間でも友人とお互いが口にできるくらいには信頼関係を築いた者同士。

デイーコンがなにやら話したいことがあるというのを僕はなんとなく察知していた。

「この調子で俺がうつかりこの島でくたばった場合。約束は反故にされるんじゃないかと不安でね」

なるほど、ミニッツメンで引き受ける人造人間たちのことが気になってるわけか。

「それについてはもう解決した。終わった」

「終わった？」

「怒らないと約束してくれるなら話してもいいよ。ダメなら黙って、あと死ななければわかるよ」

「それでも教えろといったらどうする？」

「答えない。その時が来るまではずっと、黙ってる」

「……殴りたくなるような返事だな。わかった、どういうことだ？俺が驚かない程度に話してくれ」

約束したってことだよな？なら、構わないか。

「ミニッツメンが引き受ける人造人間たちはもう、タイコンデロガから移動したから問題ないと言ってるんだよ」

「？」

「ナカノ邸でお前と合流したとき、デズデモーナからの指示書を渡してもらったろ？」

実はあれは連邦に置いてきた。計画通りに進めば、アレを持った仲間がタイコンデロガで人造人間たちを引き取っているはず」

「お前の仲間だと？」

おい、あそこは誰でも遊びに行ってもらいたくはない場所なんぞぞ」

「そんなことはわかってる。それに問題はないよ。だってあそこに向かったのは誰でもない、お前。ディーコン本人が向かってやったことだからね」

「俺だつて？意味が分からないんだが」

「——だからさ、言葉の通りだよ。」

以前、保護した人造人間がいたろ？その片方の顔と体を変えて、別のディーコンになってもらった」

「なんだと!？」

「一緒に行動したからお前を知ってる。ぼろが出ないように長くは滞在しないはずだから、対応したレールロードのメンバーにはバレなかったはずさ」

「以前の奴らも保護してくれといったはずだがな。おもちゃにしてくれという意味じゃなかったんだがな」

「協力してもらったただけだ。危険はないし、ディーコンのためにもそうすべきだった」

「……」

「15人もの人造人間を連れ出すなんて知ったら、デズデモーナもキャリントンも許さないかもしれない。そう考えなかったわけじゃないだろ？」

「俺を守ってやったと言ってるのか？」

不愉快そうなディーコンの声に苛立ち、僕は端末のおかれたテーブルに強めに瓶を叩きつけて抗議の意を示す。

「レールロードのエージェントが馬鹿を始めたと思ったら、どんな反応があるかわかったもんじゃない」

「仲間に裏切られる？この俺が？」

「お前を捕まえたデズデモーナが、優しく質問だけすると思ったらこんな段取りは用意しなかったさ」

わずかな緊張の沈黙は、ディーコンのため息で終わりを告げる。

「まだ俺^{レールロード}達への不信感があるみたいだな」

「レールロードのためにしてやることで、つまらない疑心暗鬼で足を引っ張られるのは嫌なんだ」

「もしもキャリントンらが俺の偽物を逮捕したらどうするつもりなんだ？」

「そうはならないことを祈ってる。真面目に答えると、その時は人造人間であることと僕の名前を出すように言ってる。『信用ならないレールロードへの保険だ』とも加えてね。その言葉も信じないなら、レールロードは人造人間を助けられる組織じゃなくなったってことさ」

「わかった——それなら渡されたという人造人間たちはどうなる？」

「コベナントに回収して、集団の中でちゃんとやっていけるかどうかで3つのチームに分けることになってる。そのあと居住地にわけて送り出す」

「悪くはなさそうだ」

「——あとでゴチャゴチャ言われたくないから話すけど、チームのひとはグールの居住地になる。レオさんがアトム教がいた灯台を手に入れたんだ」

「つまりそこに入るのは、グールにさせられるってことか」

「正確にはグールとして生活してもらう、ただそれだけの話だよ」
「……」

「ミニッツメンはレイダー、スーパーミュータントに並んで人造人間も嫌ってる。居住地の中に人造人間が混じっていたなんて騒ぎは最悪だ。引き受ける以上、危険は避けさせてもらうよ」

「わかってる。ぜいたくを言ってお前やレオを困らせたりはしないさ」

「彼らは守るよ。約束だ」

ヌカ・コーラを口に含む。慣れた刺激が啞内を刺激し、体の中へと流れ落ちていく感覚を楽しむ。

「お前が約束？ふむ」

「なに？」

「おかしなことを聞くんだが——レオはまずい立場にあるのか？ミニッツメンで」

うわつと、嫌なところをつついてきた。

「別に。なんでそんなことを？」

「ただの好奇心だ。そうだ、好奇心と言えばもうひとつ。本当のところ、お前もどうなんだ？」

「だからなに？」

「レールロードに戻るつもりはないんだろう？だからそんな言葉で俺を喜ばせようとしている」

「——エージェントは勘も鋭くさせる必要があるんだっけ？先生からの嫌な教えだったな」

「ああ、だがそのおかげですんなりと話を進めることもできる」

自分は少し気が抜けているのだろうか？ 仲間の事、キュリーの事、それが僕を弱くしてる？

いや、そうではないか。

このデーコンはそもそも他人を信用してない。だからこそ、気になる部分をつついて大きなものまで嗅ぎつけてくるだけのこと。全てを隠し通せるわけじゃないってことか。

「最初の質問。レオさんは問題ない。でも、レオさん以外のことでの先トラブルはある、かもね」

「ほう」

「理由のひとつはわかるだろう？

ここにはあの伝説のガービーがいない。それにレオさんがこの島でやろうとしていることが成功すれば、間違いなくミニッツメンから気を悪くする奴が出てくる。『まだ連邦はひどい状況なのに、滅びかけた島なんか放っておけばいい』ってね」

「ふむ、正義の味方も非情な意見をもっているということか。お前はどうかなんだ？」

「どうだろうね。立場は悪くなってるかもしれないけれど。僕は今、ミニッツメンをまだ支持してるし。まだガービーも僕を逮捕するか噂は流れてないみたいだね」

「だがお前はここに来る前に大物2人を怒らせたな。ここにいないのはガービーだけじゃないだろう。ジョン・ハンコックもここにはいない」

「そうなるように仕向けたのは否定しない。でも、偶然だよ」

これは嘘だ。

ガービーにはミニッツメンの仕事を放り出されては困るし。ハンコックは興味があるってだけでこの島に来られても、この島の連中を見たらレオさんがやろうとしていることが気に食わないと言いつい出しかねない。

なによりグッドネイバーの市長に死なれたら、あの町はどうなると思う？

「それと僕とレールロードの件」

「そいつは特に聞きたいことだった」

「……戻れないかもしれない。レールロードには問題が多すぎる」
視線をあげてまっすぐにディーコンを見ていった。

「例の、お前を怒らせた人造人間達のことか？それともお前を見捨てたボスたちが許せないか？」

「うーん、そういう話でもなくてさ——」

不確定の状況、推測だけを並べたくはない。

とはいえ抜けている穴は、塞げないし見えるくらいには大きい。それをどう納得してもらおうか。

「ディーコン、今の僕はミニッツメンが主軸になってる」

「ふむ、確かにな」

「どち^{ミニッツメンとレールロード}らの役にも立てると思つてやってきたけど——どうも先行きが明るくないんだよ、実際のところ」

「大物2人を怒らせた本人の言うセリフがそれか？」

「そうじゃないんだって……僕とレオさんはここから連邦に戻ると、おそらく大きな問題が発生するはず」

「何がある？」

「確実なこととは言えない。僕はP・A・Mじゃないんだから」

「じゃ、わかることだけでいいさ」

「ミニッツメンと距離をとる。最悪、離脱するかも」

「そりゃ——マズいだろ。マズくないのか？」

「別に。それを理由にレールロードに戻っても良かったんだけどさ」
「できないのか？」

「……例の人造人間たち」「ああ」

「あれの本当の問題は。僕のコベナントを襲撃した後。レイダーとつながりのあるやつらと一緒に姿を消したってことだ。おそらくすでにレイダーとなって連邦で活動してるはず」

「そうかもな」

「そうなんだよ。ところが、だ。あの連中がスーパーミュータントにでも食われてくれたらいいが。最悪なことにB・O・S・かインス

テイチュートの手に落ちるかもしれない可能性がある」

「おいおい」

「特に情報が盗まれた形跡はなかったけれど、調べなかったとは言い切れない。僕はここにいなかったんだからね。」

レールロード本部の情報は残してなかったけれど。ミニッツメンがレールロードとつながっているとかわれられても困るんだ」

だがそんな僕の訴えをデズデモーナが気にかけてはしないだろう。

せいぜい、レールロードによい盾ができたと喜んでもおかしくはない。

それでもしつこく追跡を続ければ、それはレールロードの考えに逆らっていると糾弾されてしまう。

なんであれ自分たちがインステイチュートから解放した人造人間を追うことで、逆にインステイチュートに彼らの情報を与えるつもりか。などと言いつつ奴らを殴り殺さない自信が自分にはない。

「ミニッツメンに迷惑はかけたくない、板挟みか。確かにそれは正しい状況ではあるな。で、本当のところは何だ？」

「……説明しただろ」

「ああ、ひとつだけな。だが他にもあるんだろ？隠さないで話してみろよ」

ああ、このハゲ！

髪の毛を植毛した後で頭皮ごと引っぺがしてやりたくなる！

「確かにある。でも話したくない」

「怖がるなって。俺は優しいだろ？」

「気持ち悪い——わかった。イイよ話す」

聞いてお前も真っ青になっちまえ。

「デズデモーナが話さないからだ」

「なんのことにについて？」

「レールロードによるインステイチュート壊滅作戦のことだよ」

期待していた無表情はそのまま、アイコンの顔色も変わらなかった。

そのかわりに空気が重くなり、饒舌だった男は沈黙した。だがもう

遅いぞ、お前が知りたがったんだからな。

「レールロードは——デズデモーナは間違いなくインステイチュート壊滅の算段を進めているはず」

「なんでそれがお前にわかる？」

「デイーコン、薄々は気づいているんだろ？」

僕は裏の世界に情報網をもっている。ダイヤモンドシティ、グッドネイバー、バンカーヒル」

「そしてミニッツメンにもな。俺が言うセリフじゃないが、フィクサーとは良く名乗ったもんだ」

「最近レールロードは悪化する一方だ。

状況が悪いつてもあるけど、理想を捨てずに人造人間の安全を何よりも優先しているから。おかげで末端からは求心力を失い、崩壊するのも時間の問題になり始めている」

「厳しい評価だな——だがそれと秘密の計画はどうつながる？」

だから言いたくなかったんだよ。

「それはB. O. S. がいるからさ。彼らは人造人間を否定している。」

レールロードは人造人間の存在する社会を理想とする集団で、彼らの考えの真逆そのものだ。人造人間の根絶を願う連中がこのままレールロードを見逃すと思うかい？」

「どうだろうか」

「B. O. S. の調査がポストンにまで及べば、遠からずレールロードの本部もバレる。そして体力のない、今のレールロードは本部を含めて動くこともできない。」

しばらくは見て見ぬ振りもしてくれるかもしれないが。インステイチュートとの決戦が近づけば、露払いに襲ってくる可能性が高い。そのためにデズデモーナに何ができるのか？

何もない。

だが、その戦争にはつけない隙が作れるかもしれない

「それがインステイチュート壊滅、か」

僕はうなづいた。

「どうせB・O・Sはインステイチュートと一戦企んでる武装組織だ。」

そこにレールロードを巻き込んでくるというなら、逆に彼らも利用してインステイチュートを叩くほうがいい。レールロードのある部分で目的もあっている」

「そんな都合のいい方法があるのか？」

「正解はわからないよ。でも聞いても答ええないし、今の話を聞いただけで僕を脅威と判断して消してくるかもしれない。そんな場所に戻るれるかって」

「……そんな危険な話を、俺にも聞かせたわけか」

「友達だからね。お前がそう言ったんだろ」

「ふん、なるほど。お前も俺が気が付いているかどうか確かめたかったんだな？ 反応を見たわけか」

「薄々はわかってたみたいだね。だけどやっぱり全容はわかってない。ボスたちは自分たち以外に話すつもりはないんだな。予想通りだ」

「賢い弟子は師匠をこえていくというわけか。泣けてくるな、息子。ハグでもするか？」

冗談、僕は鼻で笑い飛ばす。

「そうなると新しい疑問がわいてくるな」

「なんだよ」

「お前は今、あのダンスとかいう奴を自分の女につけているな？ 人造人間をB・O・Sに守らせるのはさすがに問題だろう。それとも皮肉のつもりか？」

「……」

「ケイトとかいうのもつけているが、どうやらお前は彼女にも殺せとは命じてないだろう。いや、そのつもりならお前が自分の手で処理するか。となるとそのつもりはない？ どういうわけだ？」

少し話しすぎたみたいだ。

「さ！ 話は終わり、休憩時間は終了したよ」

「おい、それはないだろう？」

「ヌカ・コーラはここじゃ貴重でも。一本だけでどれだけ高く売りつけるつもりだ。邪魔しないでとつと次の餌役の出番が来るまで、いつものように怪しい男ですって顔をみんなに見せていろよ」

「ここが潮時かな、しようがない」

空き瓶を持たせてディーコンを追い出す。

端末に向かいながら、僕は別のことを考えていた。

この島で何であれ結果が出て連邦に戻れば、僕もレオさんも恐らくだが難しい決断を迫られるかもしれない。

ここに来る前、グッドネイバーのメモリー・デンから「もしかしたら解決の糸口が見つかったかもしれない」そうニツクに伝えてほしいとの連絡を受けた。

もし、そこでインスタイチユートに向かう手掛かりが手に入ればレオさんは迷うことなくすべてを捨ててインスタイチユートへ向かうだろう。

だが僕は——恐らく一緒には行動できない。彼を助けることはできない。

いや、もしかしたらここでやる事が僕らの最後の協力ということになるのではないだろうか？

そんな不安が心に浮かんだ。

見上げる壁

深夜、それは突然に始まった。

ロングフェローの小屋——今は砦と化した壁からライトが暗闇を照らして何かを探し始めると同時に警告を伝えるサイレンが始まる。八方を照らすライトがひとつずつ消え、2つだけ残るころ。

砦の中央では戦闘準備を終えた戦士たちが集まり、これからの段取りを決めていた。

「まず——戦えないものは家の中へ。だが全員武器をもって、冷静に対処しよう。」

ここは作られたばかりの砦だが、アキラが作った傑作だ。簡単には突破させないし、我々が冷静に立ち回れば問題ないはずだ」

そう言うレオは商人のアメリア、ニック、キュリー、パイパーらをさっさと建物に入らせる。

続いてアキラがこの騒ぎの元凶について語り始めた。

「相手は海岸線に集まってる、レイダーもどき。ここではトラップと呼ばれる霧で狂った連中らしい。」

「どうやらいつものように港を襲おうとして、こっちを見て気が変わったみたいだね」

彼が口にする、可笑しいことにマクレディやディーコンは呆れ、ケイトは悪い笑みを浮かべている。

「やれやれ、なんでこっちに来るのかねえ」

「まったく。自分から棺桶に飛び込むような真似はするなと忠告してやりたいね」

「なんでそんなことをするのか、軟弱者！今夜はたっぷり楽しませてもらおうじゃない。ね、ストロング」

(フフン！)

私の経験上、決して気を抜ける相手ではないが。皆の士気は高く、鼻息も荒い。

「それじゃ早く終わらせよう。2つに分かれる。パラディン・ダンス、アキラとケイトは壁から相手を引き付けてくれ。残りは私と深夜の

スイミングスクールだ。脇に回って一気に仕留める」

「――では若側は私の指示で……」

ダンスは緊張したようにそう言いかけるが、間髪入れずに始まったマシンガンターレットの発射音にアキラは表情を一変させると、ついてこいともいわずに持ち場へと走りだす。

それをケイトが追い、ダンスもあわてて続く。

「あの兵士、アキラの奴を率いようっていうのか。大変だな」

「あいつは意外と話は聞く。面倒くさいと思うその時までではな。どうやら今回は持ち時間がなかったようだ」

私はカールの頭をなでると、緊張とは無縁そうな2人に声をかけた。

「ではダンスが怒り出す前に終わらせてしまおう。彼なら明け方まで説教できるし、やりかねない」

言いながら10ミリのサブマシンガンとパイプレンチを握りしめる。

ファー・ハーバーの港はその夜。ひさしぶりに静寂に包まれ、人々は深い眠りのまま朝を迎える。

夜中に港の近くで銃声だの死体だのころがったりはしても気にはならなかった。いつものように港の門の方角が騒がしくなり。悲鳴、けが人、死者が運び込まれ。怒号と銃声が鳴りやまない夜がはじめて彼らに近づかなかったのだ。そのことだけを喜び、夢中で睡眠をむさぼったのだ。

それこそが彼らに始まった奇跡の最初の証であったのだが。まだその恩恵に気が付く人は少ない。

翌朝、アメリカ商会の一室に据えられたいくつもの大型テーブルの上に武器を並べ。アキラは作業台の隣で腕を組んでそれぞれを確認していた。

すると部屋の外からマクレディとケイトが戻ってきて「ダンスとデューコンはいらぬ世話だつてさ」と僕に伝え、この申し出は無駄骨だったとグチグチと文句をこぼす。

「フアーハーバーでの戦いは連邦やヌカ・ワールドと違い。」

アポミネーション化したあらゆる敵性勢力しかいないところが問題がある。とにかく長時間の活動に適し、火力が高いことが重要と考えた僕は、バンカーヒル等の力を借りてこの時のための準備をした。

「自分の武器は自分で面倒みれるというならそれでいいよ」

「なんだよそれ、嫌味か」「あたし、あんたに自分のおもちやを見てくれて”お願い”したつもりはないけどね」

僕は彼らの文句を聞き流し、武器の列の中から彼らのものを取り出すとさっさと渡していく。

「マクレディ、お前の愛用するライフルは置いていけ。ここではとにかく火力がいる。ガウスライフル、それとこれは貸してやる」

「レーザー？フルオートか？俺、好きじゃないんだけど」

「違う。こいつはデューコンの土産でもらったものだ。”プロトタイプUP77”って名前もついている」

「へっ、武器に名前ね」

「特徴を説明する。」

「いいか？こいつは普通のレーザーライフルとは違ってフュージョセンサーを使わない。かわりに――」

「そう言うとレーザー銃に増設された、僕が取り付けたパイプ銃に使うドラムマガジンに似た手製のユニットにフュージョンコアを叩き込んで見せた。」

「――なんだよ、それ」

「こいつはエネルギーの制御が非常に優れているおかげでこんな無茶が可能なんだ。装填数は1,000発以上。」

「だが放り込みっぱなしにはするなよ？」

「装填するなら使うか出動の前、戻ってきたら取り外せ」

「使わないときはカラにしろってことか」

「そうだ。名前の通り実験で生み出された唯一のオリジナルだから2つとない。それだけに気を使わないと馬鹿をやる事になる。レーザーガトリングで実現できることをこんな小さなボディでやるんだからな。手足を失うだけじゃすまないだろうな」

「最悪じゃねーか——」

「素人傭兵なんて言われたくないなら安全装置にも注意しろ。コアのエネルギー量は凄いから、自分を傷つけても不思議じゃないぞ」

黒いレーザーライフルにはアトムキャッツをイメージしたフレイルムパターンが入っている。

マクレディはポケットから308口径弾を数発取り出して机の上に置きながら、ため息をつきつつ両方をしびしび僕の手から受け取った。

「ケイト、お前のショットガン——ジャステイスはどうだ？」

「え、別に。変わりはないよ」

「ならそれでいい——新しいバットは？」

聞くとニヤリと不敵な笑みを浮かべ

「あたしのベアすぼーる、また一段と鋭くなっただって気がする。いい感じ」

「それは良かった」

彼女に渡した新しいそれは2076年製のワールドシリーズ・バットの一本だ。

バンカーヒルとグッドネイバーの流通網から手に入れたお宝であるが、彼女はどうせそんなこと知りたくもないだろうなあ。

「でもこいつ、あのジェット推進をつけてくれないかな。あれをやるともっとすごいと思うんだよね」

「……お前がそう言うと思ったから用意はしてある。使いこなせてると思ったなら付け替えてやる」

「ちえっ、しょうがないか」

とりあえずこの2人はこれでオーケーだ。

僕はすぐに彼らの次の任務について説明を始める。

「さて、早速だがお前達はすぐにここから出発してもらおう」

「なんだって?」

「他のメンバーは外でレオさんが集めてある。ニック、ディーコンにコズワースだ」

「随分、多くないか?」

「昨夜のような襲撃は数日はないだろうし、あつても問題はない——」
チームにやってもらうのはニックが調査中に確認したT-51パワーアーマー2台の回収と、ある場所への偵察。

ただし昨夜の襲撃のせいで午前中はゆったり過ぎたため。すでに昼過ぎであることを考えると、任務は一晩かけて明日の昼ぐらいまではかかることになる。

「パワーアーマーねえ。2台も誰が使うんだよ」

「ひとつはキュリーのために必要なんだ。彼女は戦闘が得意じゃないが、外での調査をしたがつてる。それにお前達にはコベナントで暇つぶしにパワーアーマーの操作法を学ばせただろう? 試験でもあるのかな、ちゃんと使えるようになったと証明してくれ」

キュリーには一人で外を出歩かないように言い聞かせてはいる。

それでも外に出るときには護衛もつけるようにしているが、それで安全だとは言い切れない。そもそも護衛がいないうちに危険が彼女に近寄らないとはいえない。

本当は連邦からパワーアーマーを持ち込みたかったが——船だとそれも簡単ではない。

ならば現地調達。貴重な戦力は早めに揃えたい。

「必要な装備も外に用意してある。質問があればアメリカ・ストックトンとキュリーが答える」

「あたしさらに危険な島の夜を、外ですごせっていうわけ?」

「びびったのか? 準備はしてやった、怖いなら参加しなくていい。だけどお前らは傭兵。僕が雇用しているわけだから役には立たないなら連邦に送り返すまでやってやる。どうする、帰りの船のチケットは何枚必要だ?」

はつきりと冷たくそう言い切ると、2人は鼻を鳴らして無言となって部屋を出ていこうとした。

入れ替わるようにレオさんが部屋に入ってくる。僕らの間の空気を察したか、心配そうな顔を向けてきた。

「アキラ、彼らになんだか厳しいことをいったみだいだが。いいの？」

「昨夜の襲撃の後。昼まで寝こけてたんで、気合いを入れただけです。危険でも任せられる、信じられる奴らに頼むんですから。ちゃんと結果を出してもらわないと」

「つまり無事に戻って来いという君なりのやさしさというわけか。そつちをちゃんと伝えたほうがいい」

（僕はあなたのようにはできませんよ）

それには答えず苦笑いをうかべ、レオさんと共にひとつの机の前に移動した。

「ミニッツメンから武器を受け取れなくて、また君の力を借りることになってしまった。すまない、アキラ」

「いいんですよ。どうせ僕も今回はいろいろかき集めてたんで、ちようどよかった」

言いながら僕は布に巻かれたライフルを手にし、ほどこいていく。

アメリカには連邦から資材以外にも武器を持ってこさせていた。

布に隠されていた本体が姿を見せると、珍しくレオさんの顔がほころぶ。

「懐かしいな……前線にいた時は手放せなかったな」

「B. O. S. と一緒に最近、キャピタル・ウエイストランドから品物が流れてきてるそうです。R91ライフル、世界が壊れる前のアメリカ軍主力ライフルです」

戦前の民間企業。ステント・セキュリティ・ソリューションズが開発したこのライフルは、プロの軍人達が認める頑丈さと手軽さが高く評価されたライフルだったらしい。そのおかげで製造元も軍、民間とさまざまなバージョンで発売されていたことは、今も町の中に残っている宣伝ポスターなどから知ることができる。

また、キャピタルでは特に政治的混乱から州兵が集められていたせいでだろうか。バージョンの違うこの銃が多く市場で取引されている

らしい。

僕がレオさんのために手に入れたものは、特殊部隊仕様と聞いている。

本体は合成金属と強化プラスチック。これは珍しい。出回っている多くのR91には木が使われているからだ。さらに緑、藍、黒が混ざった迷彩まで施されている。

銃身は長めで、下部にはハンドストップを装着。銃口部分にマズルブレーキ。

照準器はグリーン的小型ドットサイトで2点バースト仕様だ。

「もともと優れていたとされるR91のリロード性能ですが、これはさらに上を狙える使いやすさになっています。

一般では中華ライフル……僕がヌカ・ワールドから持ち帰ったハンドメイド・ライフルですね。そちらよりも威力が劣ると言われていますが、この銃の性能は引けを取りません」

レオさんの手にそれを握らせる。

「少し重いな」

「大きいので取り回しは不便ですが。そのかわりに素晴らしい精密射撃が可能です。バーストですが射撃時の反動もそれほど強くは感じません。

ドットサイトにしてありますが、要望があればこれをスコープに変えて狙撃銃としても十分に使えます」

答えながら素早く机の上にあった空のマガジンを差しだす。

「装弾数は45発、大型のマガジンが使えます。連射力は平均的ですが、リロードのスムーズさを含めれば撃ち負けるなんてことはありません」

「いい銃だ、これは安物ではないだろう。本当に私が使っているのかい?」

「もちろん」

僕は力強くうなずいた。

「キャピタル・ウエイストランドから流れてきたと先ほども言いましたが、あまり良い経歴ではないのです。

レイダーの糞野郎がそのライフルを手に虐殺しまくったとか。〃
キャップ・ドロウ……このライフルを撃てば死体から勝手にキャップがこぼれ出ると嘯いてそう名付けていたと聞いています」

「——確かに楽しくない話だ」

「数年、こいつを手に暴れていたそうですが。ある日キャピタル・ウエイストランドの有名人とやらに目をつけられて一味ごと叩き潰されました。市場に流れたのはそれが理由らしいです」

「有名人？誰？」

「名前は教えてくれませんでした。そうとうの凄腕なのか、たったひとりでやったそうですよ」

「それは凄い」

とはいえそんな過去と悪党を屠った有名人のおかげで回収されたこの銃に人気がなく。呪われているんじゃないかと売り手も嫌になり。

こうして連邦にまで流れて、買ったたかかれてしまったというのは皮肉な話だ。

「狙撃までこなせると、隙がないってことになるな」

「近距離から長距離まで対応できますからまさしくその通りです」

次にあのダンスとかいうB・O・Sのパラディンからもらったというレーザー・オートピストルを渡す。

握る部分がグリップ&ストックとなっていて、ライフルでもいいしピストルとしても使えるようにしてある。

「そうそう、これも渡しておきます」

僕は新たに机の下に置いていた工具箱を出すと、その中から不格好なそれを——ガントレットと呼ばれていた工具を取り出した。

「それは？」

これまでレオさんのパンチを生かすためにパワーフィストを使ってきたが。

拳から衝撃力を改めて発生させるこの装置ではかえって腕を痛める可能性があるとかキュリーからの助言で、僕が新たに見つけ出した代物である。

「ガントレットといいいます。知っていますよね？」

「サンクチュアリのガレージに古いのを置いていたよ。懐かしいな」

ピップボーイの反対の腕に装着。使用の際は電源を入れると、拳に覆われていた回転するパズソーを引き出すことができるようになってる。

工具としてなら、このまま木や鋳物などに拳を押し当てパズソーで削っていくことになるのだが。拳を守るフィンガーグローブを張り付けることで、パワーフィストのように腕を振り回し。相手の皮膚から切り裂きながらぶん殴ることができるようにした。

「こちらの方がはるかに軽いな」

「気に入らないならパワーフィストを探して——」

「いや、これを使うよ。ありがとう」

笑顔のままライフルを背中に担ぎ。腰のホルスターにレーザーガンを入れ、ガントレットを右手に装着する。

新しいV a u i t s ツに茶色のロングコート。かわりにかぶっていたミニツツメンの帽子を脱いで机に置き、黒縁眼鏡をてにした。

「ここでは將軍じゃない。ただの探偵助手。似合うかな？」

「目立たなく放ってますよ。感想は女性陣にきいたらいいです」

「それは覚悟が必要になりそうだ」

するとなにげなくレオさんの視線が動く。

「——アキラ、こっちは君の道具？」

「え？はい」

「実はちよつと興味があるんだ。教えてくれないかな？」

「構いませんけど——」

机の半分に置かれたそれらは、あまり武器屋で目にするものないものばかりで興味を持ったらしい。

「それじゃ始めますけど。これはガウスピストル」

「……」

「レオさん？」

「ああ、すまない。でもアキラ、それは偽物だろう？私も実験用のものだったけれどガウスピストルの試射はやったことがある——だがこ

それは、それとはまるで別物だ」

レオさんは素晴らしいながら不思議そうに机の上の物体を見つめた。なるほど“本物”に触ったことがあるなら、これは偽物に見えて当然か。

「おつしやる通り、これは普通のガウスピストルじゃありません。いや、ガウスピストルではあるんですけど——」

「？」

「ええと、ええと。参ったなあ」

説明するのが少しばかり面倒だ。

僕らの視線の先にあるのは全長が小さなサブマシンガン——いや、短く切り詰めたショットガンか。手を加えすぎて触られるのも怖がられてしまいそうだ。

そもそもガウスピストルは、ガウスライフルよりも小型でも高威力を保てるハイテクピストルという理想が発点となっている。しかし残念ながらそんないいことずくめの塊が、傑作銃として生まれることは、ほとんどない。

発射システムの小型化には成功したものの、やはり発射時の反動は強烈で。またガウスライフルと同じくチャージ式とあってより使いにくくなったと好意的な反応はあまりかえってこなかったようだ。

それでも火力を必要だと求め続けた僕は。

愛用していたプラズマピストルを解体。10ミリピストルのパーツと合せて自製のガウスピストルを完成させた。

そんなわけで色々とすでおかしな部分が出てしまっている。

どう頑張っても片手では反動を殺せないからつけざるを得なかったショットストック。

確実な給弾と冷却を可能にしようとした結果。採用したスライドアクション——つまりポンプアクション。もうわかるだろう、気が付くとピストルは小型のショットガンとなってしまうていた。

だが問題ない。

これはピストルなのだ。ショットガンのように使える、そういうピストルだ。自分に言い聞かせてここまで持ってきた、きつと失望はさ

せないはず。

「——ガウスショットガンじゃダメなのかい？それでも凄いことだと思っただが」

「いや、でもそれだと。ピストルとして開発した、動機から否定しちゃうんで」

「なるほど。うーん」

自分の中ではすでに決着はついているが。どうやら他人からすると、どうにも納得しかねるモノに思えるらしい。

「次に行きましょう！つぎは、リボルバーです」

「シングルアクションのやつだね。前から使ってたやつだ」

ヌカ・ワールドで好き勝手に使われている最中にてにいったそれは、いつの間にかお気に入りとしてずっとあれから使い続けていた。博物館に設置される19世紀の銃を思い出させるシンプルと武骨さが結婚するところなるのかも。

いつの時代に作られたのかはわからないが、飾り立てるものはなく。作り手の魂を感じる破壊力を秘めた不思議な銃だ。

素晴らしい性能を持つてはいるが、特に逸話もなく。名前もなかった。

そう、“名無し”——この僕と同じだ。ヌカ・ワールドから持ち帰ってからもずっと気に入っている。

「もうひとつあるようだ——」

「ああ、これはですね。ようやく完成したんです」

それはようやく形になった一丁。

クライオレーター・ピストルである。

サンクチュアリーを離れてからずっとクライオレーターに使われる冷凍装置の活用を迫っていたが。

一番単純な方法としてこれが実現できるかどうか、それをずっと考えてきた。

もともとは冷凍ガスを発生させるための装置が元であり、それは武器として開発されたわけではなかった。ただ、非殺傷武器のひとつとして戦前でも研究だけはされてはいた。

人間相手の武器としてはいささか魅力に欠けた冷凍武器だが、皮肉なことこのアポミネーションが跋扈する世界においては。その有用性は無視できないものになりそうだ。

僕はかなり強引にクライオセルではない別の強力なエネルギーから極低温カプセルと呼ばれる氷の弾頭を生み出すことだけ注目し、クライオレシーバーとしてこれを完成させることができた。

わかりやすく言えば、冷凍ガンというよりもエネルギーに汚染された水を発射する水鉄砲だ。

体温をただ奪うだけではなく、熱とエネルギーまで奪うことができる、はず。

「僕のオリジナルといっても、それほど大したものではないんです。

200年前の、大戦のころにも変わった連中はかなりいて。あのクライオ・モジュールを使ったオリジナル・ハイテクピストルはいくつかあったことはわかってますから」

「ということは、200年ぶりの最新作がアキラの手によってここに誕生したわけか。凄いじゃないか！」

「どこまで役に立つかは使ってみないと、なんとも言えませんよ」

謙遜して見せたが、とはいえ自信がないわけでは決してない。

「これで全部かい？」

「ええ、手軽な奴は」

「？」

「残りは倉庫にまだ入ってます。すぐには使わないかなって」

「適当すぎるごまかし方だが、しょうがないのだ。」

あそこには火炎放射器にミサイルランチャーと、いろいろ物騒なもの転がっている。だがエイダがないこの島では、そんなものすべてを持ち歩くこともできないわけで……。

この問題は、マクレディたちがパワーアーマーを持ち帰ってくれたら少しは解消されるはず。

「大きいのは大変なんで、しまったままです」

「あんまり派手なのは勘弁してくれ。戦争するために来ているわけじゃないんだから」

レオさんは冗談のように笑っていたが、僕はそうはいかなかった。アレをみたらさすがにこんな風には笑ってくれないかもしれないから。

最初のパワーアーマーはあっさりと見つかり、ケイトらは複雑な表情を浮かべて——少し困惑していた。

かなり大勢をまとめて出してきたので、てっきり危険度の高い任務だと思っただが。今日の島は静かなもので、何もトラブルに出会うこともなく。このまま散歩していたら終わりそうな気配すらあった。

「よし、こいつが最初だ。ハンガーから丁寧に持ち出してくれよ、おそらく200年ほどは動いていないだろうからな」

「……それにしたってなにもないんだけど」

「おい、ケイト。気を抜くなよ。傭兵つてのはなにもないからって不満を口にするべきじゃない」

ニツクの指示に不満そうなケイト。

それをたしなめるマクレデイだが、それを口にしてている本人もまた少し納得がいていないようだ。

自分のボスが与える仕事が楽だっというのはどうにも信じられないのだ。そんな彼らの勘を肯定するように、怪しげな男。ディーコンはあのニヤニヤ顔で何かを知っているような調子で口を開いた。

「リラックスしろって……別に気にすることじゃない。あいつが考えもなく俺たちを送り出したわけじゃないのは確かだろうがな」

「——なんだよ。あんたにはその理由がわかるっていうのか?」

「まあな。嫉妬するなよ。お熱い恋人たちも付き合った長さは別に重要じゃないというだろ」

「なにになに?面白そうな話じゃん」

ディーコンとマクレデイの会話にケイトが混ざろうと近づくが。おそらく何の話か分かったら途端に興味を失うだろう。

「教えてくれないか?」

「そうだな……残っている奴と、ここにいる連中の顔を見ればお前で

も想像はつくさ。おそろくな」

「デューコンは明快な答えを口にはしなかった。」

ケイトは自分が理解する前に会話が終わったことにいつものように怒り、マクレディは珍しくデューコンのアドバイスを受け入れ。自分を含めた仲間たちと、ここにはいない仲間達の共通点を探ろうとしていた。

一方、ニックとコズワースはパワーアーマーの起動準備をちようど終わらせたばかりだ。

「よし、あとはフュージョン・コアをいれれば持ち出せる」

「それではあの、次はどうしますか?」

「まだ太陽は高いが、今夜の寝床を確保する。回収するもう片方は明日だな」

「もうですか?」

「この島は夜だと闇の中は危険でいっぱいだ。ちよつと前に無理をしたが、ロングフェローの爺さんがいなけりや。危うく俺はフェラルの更新パレードに突っ込むところだったよ」

「それは大変ですね」

「まあ、まだやる事は半分以上残ってるんだ。今夜の準備を先にしておいた方が、一晩中大騒ぎで逃げ回るのに比べりゃマシだろう」

「そうですね——ところで、このパワーアーマーは誰が動かすんです?」

周囲が沈黙する。

だがケイトとマクレディ、この2人に視線が集中する。

この任務の依頼はアキラ。そして2人は彼にやとわれた傭兵、つまりこの場合——。

「ケイト、お前だ」

「はあ!? あんた、あたしを使いつぱしりにするってわけ? いい根性してるじゃないのさ」

「そうじゃない。お前はなにがあっても文句を言うから、最初にあれに放り込むんだ」

「——殺されたいわけ?」

「それにな。騒ぎが起きたらお前、どうせ突っ込むんだろ？なら着ても問題ないじゃねーか」

「ああ、それはそうかも」

意外とすんない納得したケイトは、コズワースからフュージョン・コアを受け取る。

砦ではパラディン・ダンスが自発的なパトロールをしていたが。足を止めると島を守る壁をまぶしそうに見上げる。

信じたくないが。コレがわずか数日で出現したものだとは信じられない。

これほど見事な速さで構築された砦は、今のアーサーのB・O・S。でも恐らく再現はできないだろう。

本人は準備してただのと謙遜していたが。ロボットを2台ほど生み出し、それほど特別なことをしたそぶりもなかったはずだが。あきらかに構築されていくスピードは異常で素直に驚いた。

「パラディン・ダンス？」

「パイパー、だったな。私になにかな？」

「ブルーがこれからミーティングするんだって。あんたにも出てほしいみたい、誘いに来たんだよ」

「あい、わかった」

「それとミーティングに出るつもりなら——」

「そのパワーアーマーは脱いできて頂戴。正直、うっとうしいのよね。でかいのは」

思わず真面目に自分の鋼のボディ——パラディンとしての誇りでもあるT—60を見てしまう。

B・O・S。では市民に対する責任として、この雄姿を見せて戦うことに誇りを持ってと言われてきた。だが連邦に来てから感じるのは彼らからの恐れやいまいmiss。まるで正反対のことばかりだ。

それでもB・O・S。への忠誠は揺れているわけではない。エルダーから連邦への進出の意思を明かされ、偵察部隊を率いると聞いた

時の喜びはまだ今でも思い返すことができる。その後の辛く厳しい調査を乗り越えられた理由でもある。

だが、レオと知り合い。彼の友人たちの顔ぶれを見ると、自分の組織——アーサーの言葉に間違いがあるのではないかと、そう思ってしまう瞬間が増えてきている気がした。

「パイパー……いや、ミス・パイパー」

「なによ？ 気持ち悪い呼び方だな」

「すまない。君を不快にさせるつもりはなかった。ただ、ちょっといいか？」

「だからなに？」

「もしかしたら私は君たちに——レオの友人たちからは嫌われているのだろうか？」

「——それ、本気で聞いているの？」

「なにかおかしなところがあつたかな。それを教えてほしい」

ダンスの勇気と誠実さをもった言い方に問題はなかったはずだが、聞かれたパイパーの顔は困惑する女性のそのままだった。

「あのね、これは私の意見だけでも」

「ああ」

「ブルーはあんたをここまで連れてきた。なら、あんたは信頼はできる人つてことらしい。ここまではいい？」

「それは、ありがとう。ちゃんと聞いている」

「問題はね。あんたのその着ているパワーアーマー。ううん、そこに刻まれた組織のシンボルが問題なのよ」

「……よくわからないのだが」

「だ・か・らっ、連邦にのこのこ出てきて。私たちの支配者を気取ろうって連中に好意なんか持てるわけがないって、そういうことよ」

「随分とはつきりと物を言うのだな」

「真実と正義の報道記者を目指しているの。暴力で口を閉じさせようとする奴らなんか黙ってやるつもりはないよ」

「まず言わせてほしい——君のその考え方は、間違っている。いや、訂正させてほしい。」

B. O. S. の目的は人造人間の脅威、つまりそれを生み出したインステイチュートへの——」

「ええ、ええ。それは知ってる。バンカーヒルの商人たちに聞かせているやつだよ。」

でも、それは建前。みんながみんな、だまされるわけじゃない」

「興味深い——意見を持っているようだ。」

どうせ私から聞いたことなので、よかつたら全部聞かせてほしい」これはダンスなりの成長から出た言葉であった。

かつての彼であれば、己の所属する組織への避難など耳を傾けようとは考えなかったはず。パイパーはそのことを知らなかったはずだが、それを引き出す機会を与えたのは彼女のおかげでもあるだろう。「じゃ、言うけど。あのね、ここに集まっているのはブルーの仲間達、友人たちばかりなの。」

でもここにはこれなかった連中はまだ連邦に残ってる。でもそんなこと、あんたたちだって知ってるんでしょ？」

「彼が率いている民兵隊の事なら知っている。ミニッツメンだったな。」

他にも愉快的な友人たちがいるというのは本人から聞いてはいるが——あのスーパーミュータントや探偵などと自称する人造人間以上に変わったのがまだいるということか」

「フン、あんなのは序の口だよ。」

レールロードに出入りしてるのとか、最近出てきたコスプレヒーロー。バンカーヒルの悪徳商人に、悪党の町の市長だっている。そう、凶悪なレイダーを従える危険な大ボスなんかもあるわね」

「——私の彼を見る目の方が変わりそうな話題だったようだ」

「それは違うね。ブルーは大切な人。今の連邦には絶対に必要な人。」

あんたらB. O. S. は彼を過小評価してる。どうせただの兵士としてしか見てないんでしょう。でもそれこそ間違ってる。彼はそんなただの兵士というだけじゃない。それ以上の存在なの」

「まるで信仰しているような言い方だ。失礼、侮辱したわけではない。こちらの率直な意見として言わせてもらっただけだ」

「それは否定しないよ。自分でもちよつと——おかしくなってるってのはわかってる。同意も求めない。」

でもね、それなら考えてほしい。」

ブルーはなぜ、B. O. S. が連邦に来る前に出会ったあなたを助けたのか。彼を慕う人の中に、悪党って呼ばれてもしようがないのもいて。でもそんな連中でも彼は友人と呼んで信じているのかを」

「ただの善人ではないということか？」

「そうじゃない。彼にこのどうしようもない連邦でも未来があるかもって信じられる人が少なくないっていうこと。それは善人でも、悪党でも関係ない。だから考え方が違ってても、みんながここにいて。ブルーに力を貸そうとしてる。」

でもあんたはそう思っていないのなら。ここに残るのは賢い選択ではないかも」

「出て行けというわけか？」

「そこまでは言わないよ。居心地が悪いつていうことは、あんたはブルーを信じられないのよ。」

ココは危険な島だつてもうわかるでしょ？でもブルーはここで何かをしようとしていて、彼ならきつと少しだけでも何かをやってくれると信じられるから私は付き合ってる。おそらく皆もね」

ミニッツメンだけの、兵士だけではない人物。

そんな考え方をダンスはしたことがなかった。組織への忠誠心は、兄弟たちへの強い絆であり。献身と奉仕は、確固たる目的を手にするための勝利へとつながるものだど習い。訓練を通じて叩き込まれたそれこそこの危険に満ちた世界に秩序を取り戻す力になると信じられた。

だが、レオは違う方法で人々を引き付けているというのか？

まさか自分もその影響を受けている？

「さつきも言ったけど、ここにいるのは皆ブルーの友人たち。でも、それぞれが違う考えを持っている。」

でもあんたがここにいる理由には興味はないけど、残るつもりなら気をつけなさい」

「？」

「ブルーにB. O. S. が何をさせようと考えてるか知らないけどね。彼の足を引っ張ったり、邪魔をするっていうなら。私たちは友人ではいられなくなる」

「忠告に感謝する。少し考えさせてほしい。さて、それではミーティングとやらにいいこうじゃないか」

エルダー・マクソンはどこまで考えて、自分にこの任務を与えたのだろうか？

確かに自分はレオへの評価を更新していなかったことに気が付いていたはずだ。地元の記者に傭兵を連れた若者、Dr. キュリーや商人などもいたのだ。

この任務は想像をこえて難しいものになっていた。

アメリカ商会と呼ばれる邸宅の2階。パイパーと共にドアを開けて中に入ると、パワーアーマーを脱いできたダンスの体に再び緊張が走る。

そこにはストロングをぬいた全員が自分を待っていたようだ。同時にこのやり方に、少なからぬ自分に向けられる敵意のようなものを感じた。直前にパイパーと話していなければ、きつとうろたえてしまったかもしれない。

「――私が最後だったようだな。ミーティングとやらがあると聞いてきた」

「そうなんだ。適当なところに座ってくれ、パラデイン・ダンス」

ダンスが席に着くと自然にそれは始まった。

まず最初にレオが挨拶と共に昨夜の襲撃だけが人が出なかったことを喜びつつ、皆の対応を賞賛した。

「――それで、パイパー。港では昨夜の話はどう話されていたのかな？」

「どうだろう、よくないかも。『そうかい、そんな騒ぎがあったのかい。ところで昨夜は久しぶりによく眠れたよ』だいたいがこんな答えばかりだったかな」

「あ、私もそうです。アレン店主も触れてほしくない、そんな態度で話をさせてもらえませんでした」

パイパーとアメリカの報告は嬉しくないものであったはずだったが、レオはうなずくだけで話を進める。

「報告をありがとう。確かに良くない状況だが、それでも現状を知っておきたかったんだ――」。

さて、ここには新たにパラディン・ダンスも参加してもらっている。彼はあのB・O・Sの兵士ではあるが、私に力を貸してくれるところまで来てくれた友人だ。

彼への説明を兼ね、今一度このプロジェクトについて説明させてほしい」

そう言うとレオはコンクリートの壁に掛けられていた黒板の前に立ち、チョークを手を取った。

ファーハーバー島の住人達は今、ギリギリの状態でなんとか踏みとどまっている。

人が住むには過酷な環境で、特に島を覆う霧は人々を怯えさせるだけでなく正気も奪うと噂されている。

レオは現在、ここに2つの目的を掲げている。

ひとつはきっかけでもある。アカディアと呼ばれる人造人間のコミュニティに逃げ込んだ家出娘の帰宅。そしてもうひとつは島に住む住人たちの居住地の拡充――。

ダンスの口が開く。

「その、いきなりですまない。

その両方だが、それほど難しいことなのだろうか？ 私にはそれほど(難しいとは) 思えないのだが」

「なら教えてほしい。家出娘はどうする？」

レオのそばの席に座っていたアキラという目つきの悪い青年がいきなり噛みついてきた。

なるほど、パイパーの言う“多様性”ある友人たちということは彼のようなものか。

「説得し、納得してもらおうのが一番いいと思う」

「——どうだろう。そんなに簡単な話とは私も思えない。家族の諍いってというのは複雑だよ?」

今度はパイパーだ。

「それならあまり感心するやり方ではないと思うが。力づくで、というのもあるだろう。子供のわがままなど付き合っていられない」

「——そうになると人造人間たちがコミュニティへの攻撃だと騒ぎだす」

「ああ、君は確かアキラ——だったよな。それに何か問題があるのか? 人造人間は機械だ、トースターが騒ぎ出すならスイッチを切って電源を落としても構わないとは考えられないか?」

「ようするにそれは人間の側から人造人間へ攻撃するということだ。彼らは自分たちを守るためだと、人を攻撃し始めるよね。港は当然目標にされる。つまり島で戦争が始まる。誰が喜ぶと思う?」

「人では勝てない……そう言いたいのか?」

「正しくは”人だけ”が負けると思うね。騒ぎが始まれば島のアポミネーションがこのパーティに参加しようと近づいてくる。そこでは人と人造人間が戦っていて、彼らは当然のように横から殴りつけていく。

被害は広がり、戦場も広がる。

今の島民たちじゃそんなサバイバルには耐えられない。あつという間に削られて餌にされてしまうよ」

「——ではB. O. S. の保護を求めるのはどうだろうか? 我々は人造人間を……」

若者の目が輝き、口元に皮肉の笑みが浮かび上がる。

本性を現したなど、まるでダンスに突きつけてきているようだ。

「つまり”その戦争”をB. O. S. が”買ってくれる”というわけだ。

人々は兵士に守られて安全を得る代わりに、何を代価として支払われるのかね?」

「この危険な島で、安全は貴重なものだ」と住人達も理解するはずだ」

「で？本当にB・O・S. はここを助けてやるって？あんたの言葉はどこまで信じたらいい？」

熱を帯びる言葉を、レオが割り込んで唐突に終わらせる。

「アキラ、やめてくれ。私はB・O・S. には助けを求めるつもりはない。」

彼らは——人質の救出任務はしない。彼らが来ればカスミは助けられなくなる」

ダンスは何も言わない。

レオが言ったことは事実であり、それを教えたのはほかならぬ自分なのだから。

かつてダンスにも友人がいた。

友人が任務中、スーパーミュータントにさらわれた時。キャプテン・ケルズは——いや、B・O・S. は当然のように人質の救出任務を許可しなかった。この話にはまだ続きはあるが、とにかく重要なことはレオの言う通り。

カスミという少女がいたとして、彼女のためだけにB・O・S. は血を流すことはない。

だが逆に彼女という存在を利用するためならば——救出任務という名の殲滅作戦はあるかもしれない。

「カスミ、つまり家出少女の問題は私とニックの問題でしかない。」

おそらくだが、皆に助けを求めることは少ないと思う。ただ、もうひとつ。島民については私やニックの力だけではどうしようもないんだ。だから、皆の力を借りたい」

「重ねて言うが、それも理解しがたい話だ。」

島の人間たちは望んでないようだ。君が何かをしようと言っても、彼らは君に協力するつもりはないんだぞ？」

「そうは思わないようにしてやればいいさ」

「それはアキラ。レイダー共のように銃を使うということか？」

「B・O・S. のやり方がそうなの？ならレイダーとは違うやり方もあると知るチャンスになるかもね」

レオは手をあげることので2人の熱を帯びていく議論を再び止め、た

め息を吐いた。

「頼むから2人とも、仲良くやつてくれよ」

そう口にするると、黒板に描いた島の絵図に2か所。チエックを入れた。

「国立公園案内所、ダルトン・ファーム。コレが当面の目標となる。」

ここに新しい居住地を用意して、港の人々を前向きにさせたい」

「どちらも簡単ではありませんが。ファームの方はダルトン家の生き残りが港にまだ残っているそうです。権利の譲渡について合意を得ないと、揉める原因になるかもしれません」

「さっそくアヴェリーにも相談して会いに行く。アメリカとパイパーには引き続き港のことを頼むことになるし、アキラには話が終わった後で頑張ってもらうことになる。それじゃ、さっそく仕事にかかろう」

次の目標が示された。

全員が立ち去った会議室にアキラが戻ってくると、私は苦笑して彼を迎える。

「ダンス相手に少し厳しすぎたんじゃないか、アキラ」

「あれくらい軽いもんですよ」

「それで、信用はできるかい？」

「彼、エルダー・マクソンからの命令については話しませんでした」

「でも君なら想像はついているんじゃないかな？」

「——ま、レオさんの邪魔をしないなら。僕は“何もしません”よ」

「それならよかった」

アキラと2人で黒板消しを手に、そこに書かれたものを消していく。

「僕の“計画”については聞かないんですか？」

「私に力を貸してくれると君が言うなら、私は別に気にしないさ。信じてるよ」

「——あなたと違って、悪いことを計画しているのかも」

「でもだからと言って邪魔はしない、そうだろう？」

私はパイパーが言うような善人じゃない。手も汚さずにできることをやろうとしているとは思ってないさ。私だって十分に悪い奴だよ。君と同じだ」

「……失望はさせません。必ずやり遂げますよ」

若い友人のその言葉だけでも、私は十分に勇気づけられる。

私は——連邦から逃げたかったのだ。

戦争の気配が近づいている。私自身のやったことで、誰かに憎まれ暗殺者も送り込まれた。

しかしショーンの、インステイチュートへの手掛かりは全くない。

B・O・Sも、レールロードも、アキラも。誰もその手掛かりを持っていないらしい。

焦燥感ばかりを積み重ね。

善意というわかりやすさでトラブルに突っ込んでいく。すると人々は——パイパーなどは私を賞賛するが。誰かが私をさらに憎むようになる——。

救世主妄想
キリストコンプレックス。

正気をたもちたくて戦う理由を求め。戦場に飛び込んで興奮に身をゆだね、終わった後に与えられる賞賛に感じるものはないばかりか。後からじわじわと毒のように焦りで私を狂わせようとする。

おそらく私はこの島に長くは住めない。

連邦は離れても、ショーンへの思いは。息子を求める私は、またあそこに戻らなくてはならぬと考えるようにきつとなる。

だがその前にせめて。

せめてこの島の人々のためにも、またカスミという少女を傷つけずにすむ奇跡を起こしてみせたいと思う。

アカデミア再訪

夕刻、太陽の存在を感じさせないまま再び闇に沈んでいく島を僕は建物の屋上から眺めていた。

過ぎていく日々がこれほど陰鬱で終わりのないもののように感じている。確かに正気を保つことは難しいだろう。

聞いた話以上に、ここにきて数日。劣悪な異常気象の原因は何かと考えると、それはそれで楽しそうなのだが。

しかしだからといって謎の解明に心を捕らわれるほど魅力のある場所ではない――。

「……………」

気が付くと、いつの間にかキュリーがいた。

「ごめん、気が付かなかった」

「いえ、なんだか考えているみたいでしたから。声をかけにくくて」

「――連邦も楽しい場所ってわけじゃなかったけれど、太陽を見ない日ばかりというのがさ。そういえば僕の記憶にはあまりなかった、と思ってる」

なに感傷的になってるんだ。ケイトに聞かれたらしばらくはからかわれてしまうくらいに、恥ずかしいことを口にした。

そういえば彼女はなにか話があるのではないだろうか。僕から「なに？」と聞く前に彼女の方から口を開いた。

「アキラ。あの、あなたの体を見てほしいと……………」

「答えが出たんだね？」

彼女の顔もまた曇って、僕は彼女の悩みの深さを感じた。

「医療研究者として、興味がないわけではないのです。あなたの力にもなりたいし。でも……………その、どうしても無理なんです」

「ごめん。無理を言ってるかもとは思ってはいたんだけど」

「方法はちゃんと考えることはできるんです。本当です、ちゃんとわかってます。でも――」

このままだと泣き出してしまいそうだった。両腕で自分を抱きしめるように、小さくなっていく。

なんだか話をしているだけで僕が彼女を苦しめているみたいで、それがまた今はちよつと、キツイ。彼女の腕に触れ、もういいのだと止めさせる。

「ちやんと考えてくれたなら、それでいいんだ。」

これは誰にでも話せることじゃなかった。だけど自分だけじゃ解決できそうになくてやつと君にだけ相談した。話せただけで十分だったよ」

「ごめんなさい、アキラ」

「謝らなくていいんだ。とんでもない悩みに君を巻き込もうとしてしまっただけなんだ。」

君はもうロボットじゃない。命令をただ実行しなくちやいけないわけじゃない。それはわかるだろう？」

だが彼女の顔は悲しそうなままだ。

「ですが、アキラ。私は自分に失望したことは間違いないのです。」

以前の自分であれば冷静に対処できたことなのに、今はできないなんてこと。その理由がまったく納得できないんです。これでは私——

「そこまで深刻に悩んでいたの？」

「笑わせようとしても駄目です。これはさらに深刻な問題だったので。あなたを傷つけるから怖い、こんな意味の分からないことで私の技術は意味を失おうとしています。あなたを助けられる、私の分野フィールドであるはずなのに」

まずいことになった。

冷静な研究者として協力を求めたはずなのに、なぜか彼女は自己分析を始めてしまったらしい。思わぬ展開に僕は動揺してなぜだか誰かに助けを求めるように周囲を見回してしまうが、こまったことに誰もいなかった。僕以外にはいないのだ。

夜が深まってきて、いつそう陰鬱な気配が強まっていた。よし、まずは空気をかえないと。

「参ったな——そこまで深刻に受け止められるとは思わなかった」

「ごめんなさい」

「だから謝らなくていいんだよ。たださ、思わぬ展開になって、びつくりしてて」

うまく言い出せないから、事のついでに勢いと継る気持ちで助けを求めはしたが。

絶対に協力が必要だとか、こんな風に自分への自信が揺らぐほど動揺させてしまうつもりはなかった。おかしな話だけれど、ちよつとだけ恋人らしく。少し弱気な部分を吐き出すのを知ってもらいたかっただけなんだが。

女性の扱いは難しい、そういうことなんだろうか。

奥さんや子供がいるレオさんならもつと上手に話をまとめられたのだろうか。

振り返れば記憶の中では最初の女性はわけのわからないとんでもない女性だった。

きっかけも、手続きも全部吹っ飛ばし。深いつながりができても、結果的には片方を破滅させてしまった。

いや、自分まで負の感情に悩んじゃいけない。

穏やかな人生を、楽しく優しい恋愛をしたかった。そんな自己愛にひたつてどうする。僕だって助けは必要だが、人造人間として生まれ変わったキュリーにはそれ以上に助けが必要なのだ。それを忘れてはいけない。

「信じてほしい、キュリー。君は考えすぎているんだ。」

確かにあの騒ぎの直後にいきなり告白して、とんでもないことを頼んだのは最悪だったよ。でも、それくらい馬鹿をやった後じゃないと僕は君に話せなかった秘密だった」

「そうです。それは間違いありません」

「君は考え、答えを出した。返事も僕に伝えてくれた、十分だよ。」

確かに僕には厳しいものではあったけれど、それは仕方がないんだ。君を苦しめたいわけじゃない。巻き込みたかったわけでもない。

そこまで深刻な話じゃない。別のアイデアならきつとあるはずだし自分でどうにかするさ」

笑顔で伝えることができた。

だがすまない、確かに別に道はあるが。それが“正気”とは思えないことまではもう君には言えない。

「私の決断は、間違つてないと言うのですか？」

「ま、相手との関係次第でこういうことはトラブルになることもあるけど。僕らはその——恋人つてやつだろ？」

「はいー」

「う、うん。その、つまりだね。互いに尊重し、これからもこれまで通りに仲よくしようつてことで」

ああつ、薬を飲みたい！

他人の顔をかぶつて、饒舌に詐欺師のように彼女を安心させて終わらせない。そんな話になっている。

本屋から回収した焼け焦げたロマンス小説にあつたような、恋人同士の甘いセリフとやらでなんとかできるのか!?

今の自分だとそんな宙返りじみた行動力も、台詞も思い浮かばないぞ！

率直に言えば考えすぎるな、馬鹿になれ。リラックスすることを学べ、で終わる話なのだが。賢い彼女に侮辱されたと思われずにどう納得させたらいいのか。

キュリーとの関係は、僕の隠したいポンコツぶりがさらされているように妙に気恥しくさせられてしまう。

「ごめん、何話してるのか自分でもわからなくなってきた。整理させてほしい……」

「はい」

「よし、わかつたぞ。

始まりは僕の秘密を君に知ってもらいたくて、ついでに解明に力も借りれないかを話しておきたかつた。それは達成。

次に君は僕の頼み事を真剣に考えてくれた。命令とは処理せず、自分にできるかを問いかけ。できないと結論が出た。でもそれは悪いことじゃない。

君は僕の申し出を命令とは受け取らなかつたし、理解もしていた。だから自分で考えて答えを出した。それこそ人造人間——というか

人としての正しいやり方だったと思う。それができた君が誇らしいよ、キュリー。つまりこれも達成している」

「なんだかあなたの方がロボットみたいない方ですよ?」

「茶化さないで……とにかく僕らは、なにかを乗り越えられたんだと思っただよ。」

それは最高ではなかったかもしれないけれど、悪いものではない。僕と君になにも問題がないとなったら、次に来るだろう”なにか”にむかって前進できる。こういうのでどうだろうか?」

「それは例えば、私のこの腕や指を失うと。ロボットのよう簡単に修理はできない、ということですか?」

「——どうだろう、正しいかな? いや、きっと君の言う通りな気がする。うんうん」

正しかったのか?! いや、間違っではないはず。

お互い、なぜだが急に気恥ずかしくなってきたのではなからうか。叫んでその場から逃げ出したいのにそれもしたくない、そんなわけのわからない感情!

なのに自分にあるのは先の小説の中の完全無欠な男達の女を喜ばせる台詞と、出会って無言の3秒後に襟首つかまれてベットに引きずり込まれる過去の女との経験しかない。最悪だっ。

「君は今も優秀な医療学者のままだ。自信を持ってほしい、とにかく——もうこの話は終わっていいかな?」

「そうしたいのですか?」

「君はそうじゃないの、続けたいわけ?」

「アキラがそうしたいというなら、キュリーは命令に従います」
なんだ、この扱われてます感は。

と、いきなり彼女にキスされた。

「え、なに?」

「あなたから評価をもらって、思ったことを私も行動してみました。確かに悪くはなさそうですね」

そう言うと彼女は別人膿瘍に明るい表情でにっこりと笑う。

あれ?もしかして彼女にからかわれたか。

翌日早朝、ニツクはマクレデイ、ディーコンを連れてある場所への偵察に向かった。

ダルトン・ファームである。

「偵察、ねえ。農場なんか何が楽しくて見に行くんだか」

「朝から若者がぼやくな。なにもないならすぐに戻る」

「俺たちはもうひとつパワーアーマーの回収が残ってる、後回しか？」
「片方はなにもなく手に入ったんだ。もうひとつも楽にいくかもしれない。この偵察で何もなければ、な」

ニツクはレオと再会したとき、彼がやはり本気なのだを知り。

ため息と同時に機械の体なのに——武者震いのようなものが走るのを感じた。とんでもないことがこの島で始まろうとしている。

すると当然だが、問題点もさっそく浮かんでくる。リストの先頭に
しるされているのがダルトン・ファーム。

あのロングフェローが感情を隠した濁った眼と鼻で笑った後、その名前を口にして教えてくれた。

ダルトン・ファームは——元農場は海岸沿いにある広い敷地だ。

ニツク達はそこから離れた場所にある丘の上から覗き込むようにして観察を開始する。先ほどまで嫌そうだった2人だが、見下ろす光景に息をのむと黙ってなにか手掛かりを得ようと探っていく。

「凄いな、あれは始めて見たぞ」

「冗談だろ。2体もいる」

「ああ、そうだ。かなり刺激的な場所さ」

皮肉に答えつつ、ニツクも再びそれを見やる——。

土台から崩されているかつての家屋。

かつては農夫たちに耕された土の上には作物が必死に太陽の光を求めて並んでいたはずだが、それはもうない。

かわりにそこには嫌悪するほど集まって立っているマイアラーク達と、その中心で子をいつくしむ親のようにそびえている2体のモン

スター。

地元の人間はフォグクロウラーと呼ぶ危険なやつらしい。あれはマイアラークと同じく普段こそほとんど動くことはないが、攻撃するとなるとその体を信じられない速さで動かして追ってくるのだそう。あの全身を覆う固い鎧と巨体を生かしたパワーの塊を相手にするには、たしかにパワーアーマーがなければやりたくはないだろう。「まさか俺のボスとレオはあれを掃除するって言ってるのかよ?」
「今日ではないがな」

「なるほど、あの2人らしい話だな。相変わらずどちらもイカレてる」
ぼやきは出るがさつそく攻略も考え始めていた。

「殻が固そうだ。俺のライフルじゃ抜ける気がしねえ」

「次は餌役はやりたくはないな。アレに追いつかれたら、バラバラにされそうだ」

「老いぼれ探偵にその役が回ってこないことを祈っておくかね」

彼らの言葉を聞きながら、ニツクは改めてあの2人——Vaultからきた異邦人たちがやろうとしていることの困難さに心を痛める。

それが可能か、不可能かが問題ではないのだから。

彼らを自分たちが止める言葉がないことが、一番の不幸であり問題なのかもしれない。

(こんなことを始めればすぐにどうなるかわからなくなる。お前さんたちにだってそれはわかってるんだらう?)

達成不可能な任務、今のあの2人にはこの言葉の意味を理解することができないのかもしれない。

レオはさつそくアヴェエリーに協力を求めようと、パイパー、キユリー、アメリカらを連れて港を訪れる。

だが今日の港はいつもの“騒がしさ”を取り戻していた。

それはいつものように港の門でおこっている。

不信と怒り、憎悪の中心にキャプテン・アヴェエリーとアレンが。拘

束されたアトム教徒を前に対峙していた。

緊迫した空気が、これからよくないことが起こりそうだとほつきりと告げている。

私はパイパーに目で合図を出し、ほかの2人を港に入れると。近くの住人のそばに立ってその耳元で何があったのかと聞いてみる。相手はこちらの顔を確認せずに、小さな声で事情を話してくれた。

今朝、いつものように水を汲みに行った町の住人たちは。浄化ポンプのそばに立つアトム教徒を見つけて捕らえたのが事件の発端となった。

最初は「なにをしていた？なにをするつもりだったのか？」を問いただしたかっただけなおに。いつしか尋問は感情的になって怒鳴りあいとなり、アトム教徒が以前より不調を起こしていた浄化ポンプに、実は細工をして港から人々を“解放”しようとしていた、という思わせぶりの言葉を吐き出したことで一気に悪化したらしい。

なんてことだ、心の中で呟くが。私の目はもう一度周囲の様子をうかがった。

(仲裁は無理か――)

ショットガンを握るアレンを止めるアヴェリーだけが最後の理性となつているのは明らかで、それも限界が近い。

周囲の人々の目にはすではつきりと恐怖が浮かび、アレンの暴発が彼らの希望であることは明らかだった。

「落ち着きなさい、アレン。彼はまだ犯人だと決まったわけじゃない。あなたの言葉に反応して挑発した可能性だつてあるんだ！」

「だからなんだつていうんだ!?こいつは俺たちを殺そうとしたんだぞ、アヴェリー。本当はあの狂ったアトム教全員が関係していたかもしれないんだつ。これは計画的な攻撃つてことになる」

「本気で言つてるの？戦争でも始めるわけ？」

「俺を狂人みたいに言うな！俺はただ、俺たちを殺そうとしたと言つた奴に報いを受けさせるだけでいい。今はな！」

「アレン！」

「そう、こんな風に！」

銃が火を噴き、笑みを浮かべたままその時を待っていた肉と骨が砕けて飛び散った。

同時に周囲の人々から安堵する空気が匂い、その嫌悪に表情をゆがめないようにすることに私は集中した。

私刑が終わると興味を失ったらしい住人たちは静かに立ち去り始め。アレンは捨て台詞と死体につばを吐き、残されたアヴェリーはため息をついて他の住人達に死体の処理を頼む。

港の人間が殺したとわからないよう、あのガルパーやマイアラークの巢に近いところに死体を捨てさせるのだろう。

私はそのすべてを見続けていた。

なにも感じはしなかった。ただ、心の底で自分でも驚くほど黒い笑いがおさまらない。

この島は人を確かに狂わせる。救いようがなく、不愉快な奴らばかりだ。ああ、なぜか急に。とても、とてもいまましいものに見える——。

港の中で合流した後、再び分かれて私はパイパーだけを連れてキャプテン・アヴェリーを訪れた。

先ほどの騒ぎなど知らぬように、挨拶をするとさっそく彼女に協力を求める。

とはいえ、これは簡単なことではなかった。

まず私の計画はまだまだ絵図面とも呼べないしろものであると思わせなくてはいけない。

なぜならばロングフェローをはじめとした港の人間たちは皆、希望を失っている。

そこにいきなり復活の号令とともに動け、協力しろと叫んでも嘲笑されるだけで相手にもしてくれない。だから気付かせないように無意識に巻き込んでいくしかない。詐欺師のようにだますのだ。

「——たしかにこの港には人が多い。ギユウギユウに詰まってる。でも、ほかにどこに行けっというのさ。どこにもいけないんだ」

「わかってる。だからこうして相談に来たんだ。聞いてほしい」

「アレンの言った通り、トラブルじゃないといいんだけど」

「私の友人——アメリカ・ストックトン嬢から、ひとつ居住地を広げたいと申し出があったんだ」

「あの、外から来た商人の娘がかい？」

「彼女は若いし、野心的なんだ。ここでの商売の成功を求めて援助を考えた」

「フン、正気じゃないようだね。霧を胸いっぱい吸い込みすぎたんじゃないのかい」

「キャプテン・アヴェリー。私の友人のこの申し出を受け、協力してほしい」

「どうしてだい？ここから出たら殺される、誰でも知ってることだよ」

「笑わずに考えてほしい。これは港にとっての最高のチャンスだよ、わからないか？」

「聞いてるよ、まだね」

さて、私にアキラのような演技ができるだろうか？

「ここでは人が霧の中に消えるというが、実際は戻ってくる連中もいることは知ってる。だが港にはこれ以上、人は入れられない。だから追いつくしかない、あんたが説得して」

「……どうしてそれを」

「別に何かを新しくやってほしいとは言わない。ただ、そのような相手をあんたが説得する方法を変えてほしい。ただ受け入れられる場所がある、と」

「いきなりおつかない事を言い出したね。確かにそれならあたしにもできるし、港の連中も文句は言わない。で、あんたはなにを手にするんだい」

「アヴェリー、この話をあんたへの貸しということにして。私をダルトン家の生き残りに紹介してほしいんだ」

「キャシー・ダルトン？あの未亡人かい」

「そうだ」

「確かに彼女はダルトン家の最後の生き残りではあるけど——」

「彼女とも取引をしたい。だが、そのためには対等の関係になる必要

がある。キャプテン・アヴェリーの紹介があれば、彼女も話をまじめに聞いてくれるはずだと思ってる」

「そういうことか」

霧から戻ってくる人々とは、絶望して港を出たが。死なず、狂わず、死にきれずに戻ってきてしまった人々のことをさしている。

当然だが港の住人たちはそんな帰還者を歓迎したりはしない。ただでさえ港は人であふれかえっているのだ。

出ていったのなら死んでも同じ。だから仕方なくアヴェリーが戻れないのだと説得し、森へと送り返している。

時には怒り狂って無理やりに港に入ろうとする人もいるが、あのアトム教徒のように。

アレンたちのような人々が銃をもって邪魔をする。そこで引き返さねば、当然のように銃口は火を噴くだけ。

彼女はその役割を喜んではいけないだろうが、彼女がやらねば。別に誰かがやらねばならぬし、そいつはアレンのような排他主義者なら、説得は省略して銃を持つところから始めてもおかしくはない。

「わかった、ダルトンへの紹介はやってやるよ」

「ありがとう。キャプテン」

「それじゃ話は終わりだ。外で待ってな、準備を終わらせたらさっさと済ませてしまおう——まったく、今日はなんて日だよ」

そういつてアヴェリーは部屋から私とパイパーを追い出した。どうやらうまくいきそうだ。

外に出て、会見がうまく終わりそうなことに喜びつつ。パイパーに話しかける。

「ありがとう、よく耐えてくれた。もういいよ、パイパー」

「……ああの婆さん！ブルー、あんなこと言わせてっ」

「そこまでだ」

「でもっ」

パイパーには話している最中、絶対に口を開くなど頼んでいたのだ。機嫌を悪くしたアヴェリーに腹を立て、いつものように正義と現実を訴えだされては失敗してしまうからだ。どうやら約束を守り、堂

に耐えてくれていたようだ。

「彼らは現実はやんとわかってる。でもそのせいで希望がないんだ。」

動け、手伝えと要求しては笑ってばかりでこちらの相手をしてくれないものさ」

「だけどブルー、それでいいのっ!？」

「時間がないんだ、パイパー」

島の人間はそもそも排他的で、外から来た人の言葉に耳を傾けたがらない。

彼らを説得しようにも時間はなく。手遅れになれば、アポミネーションが押し寄せ港は崩壊するだろう。

急がねばならない。

彼らを奮い立たせる時間はない。だが、立たせてしまえば。あとはしりをけり上げるだけで前に進ませることはできるのだから。

霧の中、嫌な音を立てて何かが降りぬいたとマクレディは感じた。

次に彼はその場から背を向けると走り出す。建物の壁が見えるとその陰に回って肩を押し付けるようにする。

「ケイトー！ さっさとこっちへ来い。囲まれちまうぞ！」

「だけどこいつらっ、本当にしつこい！」

ケイトの抗議を無視してマクレディはガウスライフルから空になったエネパックを入れ替えると壁の向こう側を覗き込むように構えて見せた。

使い慣れたいつものライフルとの感覚の違いに腹立たしさを感じるが、どうじにそうするように指示をしたアキラにも感謝している。

ガウスライフルのリコンスコープは、霧の中で姿が見えない敵の位置を正確に教えてくれるからだ。

だが正確であることはいつも喜ばしいことではない。スコープの中に表示される赤井点は減ったはずなのに。再びひとつ、ふたつとそ

の数を増やし始めていた。

そう、彼らは今。追撃を受けているのだ――。

マクレディがスコープの中の赤い点にむかって発射を繰り返していると、霧の中からコズワースと続いてパワーアーマーを着てオートショットガンを持つているケイトが走ってくる。

「あいつらー！どんどん増えてる」

「わかってる。おい、ポンコツ！」

「――あの、それは私のことを言っているのですか？マクレディ様」

「荷物の中に地雷があったよな!?!」

「え？はい、ありましたね」

「そいつをこの先の道をふさぐようにばらまいておけ。やりすぎるなよ、俺たちが踏まないように考えてばらまけ」

「わかりました」

「本当にわかってんのかよ。全部ばら撒いてたらぶっこわしてやる」

生き残れたらな、の言葉は飲み込む。

最悪だ。本当に最悪だ！

「あたしらはどうする?」

「あいつが仕事を終わらせるまでここで止める」

言葉を切り、ちらとパワーアーマーの状態を見る。

「まだ出来るか?」

「まだ動けるよ。でも――」

長くはもたないかもね。

おそらくは200年ぶりに動かしたのだ、どこかに不調があってもおかしくない。

偵察とパワーアーマーの回収は驚くほどなにもなく。このまま静かに帰還できるものと安心していた。

ところが“運が悪く”、港に近づく頃。霧に覆われてしまい、道を見失ってうっかりそばの廃墟となった町の中に入り込んでしまったのだ。さらにそこでなぜか多くのマイアークがいて、出会ってしまった。

混乱から回収班は2つにチームは割れてしまう。

やりましたよ！コズワースの声にマクレデイ達は再び背を向けて駆け足で移動を開始する。

霧で姿は見えないが。あいついらの手足が動くたびに聞こえる不快な固いものがこすれる音がやっぱりまた近づいてくる。

2人がコズワースが敷いた地雷の上を飛び越えて少し。複数の炸裂音が木霊した。

ニツクは明るい霧を見上げつつ、聞こえたばかりの複数の破裂音にまずいなとつぶやいた。

彼とパワーアーマーを着たデイーコンはマクレデイらとはぐれ、迷子になりかけていたが。皮肉にもマイアラクからの追跡から逃れることができていた。

「あつちは追われているみたいだな」

「こんな時、かつこよく助けに行こうと言いたい場面だが――」

ニツクの口ぶりには苦いものがあった。

「困ったことに俺たちは迷子になりかけている。家の方角は何とかわかるが、合流しよとなると。騒がしい方向に向かって手探りで進むことになる」

「お断りだな。俺たちは自分の面倒を見ることに集中した方がいい」

「ああ、わかっている。わかっているんだがね」

騒ぎはどうやら海岸線を移動しているようだ。

おそらくは港か、砦に直接逃げ込むつもりなのだろう。

「あいつらは港にはいかない」

「どうしてだ？」

「俺たちがこの島の連中じゃないからさ。あの入り口で門を閉じられたら、殺されても不思議はない」

デイーコンが断言すると、その後は2人とも無言となり。霧の町を歩き続けた――。

海岸線でついにマイアラークの群れにケイトが囲まれた。

さすがのマクレディでも、まだ使い慣れてないガウスライフルではケイトを囲むマイアラークを狙い撃ちするのも難しい。狙撃は瞬間での繊細な作業、わずかでもはずせばそれは味方の背に――。

スコープをのぞき、銃爪に置かれた指が迷いから震えて力が入らない……。

風を切っていた。

誰がしたがっているかも知らず、自然と腕をあげ。己の横を指し示す。

だが自分は変わらない。このまま進む。この先にそれはある――。

「兵士よ、よくやった！あと少しだぞ」

突然誰かの野太い声をかけられ、思わずマクレディは指に力を込めていた。

光が走り、ケイトを囲む一帯のマイアラークの顔面がその場でぼろりと地面におちる。

パワーアーマーで走る地響きを聞き、レーザー藻放たれた。

「お前っ」

「よく耐えた！家はすぐそこだ、一気にここでたたき！」

パラデイン・ダンス。

キャピタルで我が物顔だったB・O・Sの野郎だ。マクレディにはそれで十分で、話しかけることはないと思つてた。それがまさか、同じ戦場に立つことになるとは。

「バカ言うな！あんな数、やれるものかよ」

「私もそう思う」

「はっ」

「だが、彼はそれができると言っていたぞ」

逆切れするマクレディに、そういうとなぜかダンスは前方を顎で見ると合図する。

囲まれているケイトの後方からは。今もひとつ、ひとつ奴らが走ってきているようだ。一体あれのどこをみると。

ドカアツ！ドガアツ！

なぜか入り口を封鎖されている家屋の扉。そこが内側から何度も衝撃を受け、補強された板が飛び散った。

「ストロング ツヨイ！」

いつもの半裸と違い、鎧兜で鉢山跡でしか見ないような凶悪なハンマーを振り上げスーパーミュータントがマイアラークの後列に横から突撃する。

そしてもうひとつ。あの刃から炎を吹き出す音が、霧の中で燃えあがる。

「マジかよー畜生ー！」

それはもう見慣れている。己の命を投げ捨てるかわかって、それでもやってしまうあいつだ。

ストロングと共に2つの竜巻となり、追跡のせいで伸び切っていたマイアラークの集団を断ち切り。逆に反撃に出ようとしている。

マクレデイの背筋が凍る。

なんで守らなきゃいけない相手が俺より前線に立って死に行ってるんだ!?!

「あれじゃ摺りつぶされちゃうぞ。ケイト！そいつらさっさとブチ殺せ！」

本当は傭兵らしくこのまま「クビになっちまう」と続けるべきであつたが、どうせあの女はそんなことも考えちゃいないのだ。

「アキラの野郎、お前を助けようとしてるぞ！」

「はあ!?!ぶざけんじやないよ、こいつを着てあいつに助けられるとか。冗談じゃない!!」

ケイトはやはりこっちの方がよくキク。

結局これが勝負を決したらしい。霧の中から走ってくるマイアラークはいきなり消え、あの不愉快な甲羅をこすりつける足音はもう聞こえない。

そして霧は晴れることはなかった。

戻ってきたばかりのディーコン、マクレデイ、ケイトらの尻を蹴り。ロングフェローの案内で僕はついに噂のアカディア——ディーマとやらに会いに行く。

ここまで上陸から理想的なスケジュールで計画を進めてこれて実に満足している。

とはいえ、それは当然ハードワークをまねき。自分は我慢できても、周囲はそうでもないらしい。

特に“助けた”マクレデイとケイトの期限は大変に悪く。

自分たちが戻った後、霧の中からのんびりとニツクと並んで歩いてきたディーコンにさらに機嫌を悪くしたようだ。

こんな時だけ息が合うようで、「助けてやったと恩を着せられた」「自分たちと違って鼻歌謡って戻ってきやがった」とブツブツ文句ばかりくりかえしている。傭兵のプライドが傷ついたらしい。

ディーコンはそんな2人にひっそりとからかうように「俺たちは迷子だった」「恐ろしくて震えていたさ」などと口にして楽しんでいるようだ。

今回、ここまで急いで動いたのは理由がある。

おそらくだがキュリーもアカディアに興味を持っていただろうし、チャンスがあるなら喜んで僕と一緒に訪れたいと口にしただろう。

だが僕はそうはしたくなかった——だからこそレオさんに港についていかせ、この隙に終わらせるしかなかった。

「やれやれ、落ち着かない連中だ。少しは静かに歩けんのかね」

「なんだよ爺さん、俺ら。話してるだけだろうが」

「お前さんはわめき散らしてるだけだ。そんなのを聞かされてこっちはうんざりしとる」

「こっちはあんたにキャップを払ってるんだぞ」

「それは間違いないがな。お前さんからもらったわけじゃない」

僕は山道に入ってからずっと無言だった。

アカディア、人造人間たちの避難所。とても興味もある……。

「さて、ピクニックも終わりそうだ。見えてきたぞ、あれがアカディアだ」

「アカディア——ね」

ふと、嫌な視線を感じ。周りを見ると3人の友人たちが変な顔をして僕を見ていた。

「なに？」

「ああ、もつと早く気が付くべきだったかもな。お前、ここに来るタイミングを計っていたな」

「俺たちをこき使うにしては、なんだか焦ってるみたいだったよな。そういうことか」

「キュリーをのけものにするんだ。最悪、最低」

「まだなにも答えてない！勝手に決めつけるなよっ」

顔になにかでてたのかな？

とりあえず抗議するが、聞く気がないようにこちらから顔をそらしてくる。

アカディア——かつては天文観測所であったそこは、外観こそ昔のままのように見えた。

ロングフェローは自分は外で待っていると言い。僕らを迎えに現れたおどおどした人造人間の案内を受け、建物の中へと入っていく。レオさんが言った通り、彼らはここに近づく存在を察知しているのは間違いない。

そして近づいてきたのが見たことのない顔だと、必ずデーマと名乗る最初の人造人間と会うことになっていた。

「ようこそ、ようこそ。今日は良い日だ、また新しい方々が私たちの場所を訪れた。」

私たちはあなた方を歓迎します。あなた方が正しく私たちを理解しようとしてくれる限りにおいては、です」

「……どうも」

「ではまず、物事を進めるためにここになぜ来たのか理由を教えてください」

ださい。助けられることがあれば、手を貸してあげましょう」

「商売だ」

「なるほど、商人の方でしたか」

おっと、これはいけない。ちゃんど”それらしく”ふるまわないと。

「正確には、連邦から渡ってきた商人と組んでいるんだ。こここのことは港にいる連中から話を聞いた。

なんでもインスタイチュートとちがってここにいる人造人間はえらく人付き合いができる。話せる連中だ」と

「——あまりうれしくない表現ですが、あなたを理解します。

そうです。私たちは人造人間ではありませんが、彼らに作られたことも間違いありませんが。しかしインスタイチュートとは一切関係はありません。これは本当の事です」

「それを信じたいと思いかけてるよ」

「是非、信じてほしいのです。我々は人間に危害を加える理由は持っていないのです。穏やかに話し合うことで、共にできることもあるでしょう」

「その意見は大好きさ」

「ではさらに信頼を深めるという意味で、少し話をしましょう——」。

見たところあなたはV a u l t e e T E Cのスーツをきているのですね」

「V a u l t 88のね。それがなにか？」

「ということはあなたは地下で生まれ、育ってきたということではないのでしょうか？ぶしつけな質問だと思いますが、なぜ地上へ出ようと思ったのです？それも教えてください」

ぶしつけだな。

「人の過去に興味があるのか？人造人間は興味優先で失礼とは思わないか」

「ああ、誤解をさせてしまいましたね。そうではないのです。

私はただ、あなたに問いかけたからです。自分の未来を考えた時、過去のあなたが地下での安全な生活を捨てた本当の理由を考えた

「……はう」

外よりも低い気温がさらに一段と冷たさを増した。

マクレデイやケイトは顔をしかめ、身じろぎしながらアキラから一歩離れる。表情を変えないディーコンですらそうした。

——過去の記憶

デーマにはただの言葉でも、アキラにとってそれは核地雷を扱うくらい危険な言葉。

バンカーヒルの商人たちに見せてきたその表情の陰に、一瞬だけ危険なものが表れ。すぐに消えた。

悪いことがおきるかもしれない。

「この質問には理由があります。」

人は利益と成功を手にするため、時に手段を選ばないといいますが、実際の話、感情を殺して我々のような人造人間を取引の相手にしようとは考えないものです。これまでがそうでした、だからこそその疑問です」

「つまりその疑問とやらの根っこから掘り出してきたのが、僕が人造人間かもしれないってわけかい」

「否定はしません。これは可能性の話ですから。」

そしてこのアカディアではあなたがどのような答えをだしても、それを受け入れます。あなたを尊重するからそうするのです」

アキラの顔にかかる影が濃くなるうとしていた。

「ここでいきなりディーコンが陽気に大きな声に大げさな身振りもまじえて話し始める。」

「そりゃよかったーいや、正直悪いことになるんじゃないかとここにくるまではビビってたんだよ。」

あんたらときたらプラスチックの皮膚のせいで。ほら、表情つてのが乏しいだろ？何を考えているのかわからない。狂った奴だったらって不安に思ってたんだ」

「ああ、それはわかります。ですがどうか私のこの体については気にしないでほしいのです」

「そうしたほうが話はしやすいみたいだな。楽しい議論もいいが、実はこの見学もお願いできないか？ なんだかいろいろありそうだなあ、これは失礼だったかな？」

「問題はありませんよ、誰か案内もつけましょう」

「よかった。それなら日のあるうちに帰れそうだなあ、皆」

「ではだれかをさっそく呼びましょう」

アキラは沈黙したままだったが、マクレディはとりあえず小さく息を吐き出した。

デイーコンがいてくれて助かった。うさん臭い奴だが——ちゃんとして役に立つこともあるわけだ。こうしてレールロードのエンジニアたちは自分たちの正体を明かさぬまま。危険な最初の近宅を終わらせた。

正直に言っただけで、冷静ではなくなりかけていたということは認めないといけないだろう。

デイーマが呼び出した女性に案内されながら、ゆつくりと冷えていく体に合わせ。落ち着きを取り戻していく。

レオさんやニツクの話から、あんなくだらない記憶をされるかとも思っている。いかにいかにバンカーヒルの商人のような態度を見せれば大丈夫だろうと思っただけ——大甘だった。

あれが訪問者への儀式か何かだったようだな。まさか納得しても問いかけることをやめず、僕はそれに少しだけ驚いただけで——過剰に反応しそうになってしまった。

過去、記憶。

レオさんの心配なんてしている場合ではないのだろう。

僕にも敵がいる。正体不明で、僕の失ったものを恐らく知り。そしてそれを無価値だとして弄んだ糞野郎共。

そいつらはあることかレオさんを狙い、もしかすれば僕の友人たちやキュリーにも手を伸ばすかもしれない。

恐ろしい。

だがそれ以上に許せない。憎い——。

肩をいきなりつつかれ、ハツとする。

隣にディーコンがいつものようにすまし顔で歩いていたが、気が付かなかった。

「深刻な顔はやめておけつて。もうおつかない面会は終わったんだぞ」

「——そんなことはわかってるよ。そんなに悪い顔してた？」

「鏡を見たことがないのか？お前の嫌いなレイダーの横に並べてもおかしくないのがそこにいるぞ」

「はっ、笑える」

そうだ、僕はこのディーコンに助けられたのだ。それを認めて頭を切り替えなくてはいけない。

今日はここを知るために来たのだ。怒りを暴発させて八つ当たりをしに来たわけじゃない。

「お前、俺に何か聞きたいことがあるんじゃないか？アキラ」

「ん？」

「この場所を知って気が変わったんじゃないか、とかさ」

「変わったの？」

「まさかっ——いつもならここで小粋なジョークも聞かせてやるどころだが。お前はセンスがないから、ナシだ」

「面白くないから笑えないだけだ」

「なら試してやろう。実はお前の次に選ぶ奴に、俺が大統領だと信じさせようと思ってる」

「それなら笑える。名前はディーコンじゃなくてエデンつて名乗れば間違いないよ」

「ふむ、それはいいアドバイスだ」

くだらないと首を左右に振るが、おかげで腹の底の怒りはすっかり静かになっていた。

「ところで気が付いたか？俺たちを案内しているあの女」

「……美人ではないね」

珍しいことにあのケイトが話をしていた。

彼女にしたら珍しい姿だが、どうもキュリーをネタにしているよう

だった。

「アスターというらしい。どうやらなにか研究をしていると、話した。聞いていたか？」

「嫌、ムカムカしてた」

「そうだったな。何を厚くなってるんだか知らないが、注意不足は命取りだぞ。坊主」

「チツ」

「なぜあのデューマとやらは彼女を俺たちの案内人に選んだと思う？」

「……」

「お前の演技、見破られたのかもしれないな。どうだよく冷えてくるんじゃないか？」

「ああ、その通りだ」

「そうだ。僕は何を馬鹿なことをやってるんだ。」

取り乱して、集中を切らすなんて最悪じゃないか。それで前回はどんな目にあつたか忘れたか？」

「この後はどうする？」

「そうだな……とりあえずなんとかいう取り引き相手する相手に挨拶。カスミってのも顔を見たい」

「そのくらいはしておかないとな」

「そうだね。でもそれ以上があればもつといいかな」

それだけ答えると、足を速くしてデューコンから離れる。

ポケットから錠剤を一粒とりだし、自然と口の中に放り込んで噛み砕く。アカディアの立派さに浮かれていたのはもう終わりだ。

ケイトの下ネタに顔を引きつらせて笑おうとしているアスターに追い付いた。

隠せないもの (Akira)

目覚めるとダンスはベットで体を起こす。

隣のベットは空。あのディーコンという男がいつもと違ってそこにはいなかった。今日はそういう一日なのかもしれない。

B・O・S・で配られた戦闘スーツ姿で島の中を歩く。

この小さな砦にはまだ慣れてないが、襲撃に耐えると不思議と頼れると安心できるものらしい。パワーアーマーを脱いで生活するということを実践できるようになった。

パワーアーマー・ハンガーがあるのは隅に作られた倉庫の中だが最初からなぜか3つ用意されていた。

利用するのは自分だけなのになぜだと思ったが、今ならその理由もわかる。この島の中で見つけたらしい古いT-51が2台運び込まれたのはつい昨日の話だ。

「あ、おはようございます。ダンス様」

「ああ、おはよう」

倉庫の中にプロテクトロンとMr.ハンディがいた。その片方から挨拶され、おもわずダンスは返事をしてしまう。

「ゴズワース——だったよな?」

「ええ、その通りです」

「朝から忙しそうだが、なにをやってる?」

「ゴミの分配です。私共は昼に夜に、忙しくこのあたりからゴミを拾っています。ここでは消費が激しいのでこうして補充が欠かせません」

「そ、そうか」

作業の邪魔にならぬよう脇を通り、愛用のT-60パワーアーマーの設置されたハンガーの前に移動しようとする。

——!?

視界に入ったものを見て、それを理解すると同時に緊張が走った。すぐに自分のパワーアーマーのところまでいくと、自分がまだないかもわからなかった時代に学んだ小さな警報装置が作動していない

かチエックした。

(なにも……なにもされてない？興味がないということか)

安心はできたが、そうなる余計に気になってくるのが2台のT—51パワーアーマーの方だ。

彼の記憶では長らく放置され、回収されたばかりだったはずのそれらは。わずか一晩で別物になっている。

片方は装甲が経年劣化し、もう片方は見たこともない塗装が施されていたが崩れていたはず。

ところが今はどちらも奇麗に表面から磨き上げられ、元の銀に輝く新品のパワーアーマーになって並んでいる。

「なあ、ロボット——じゃない、コズワース」

「はい？」

「とても気になったのだが。このパワーアーマーは昨日からこうだったか？」

「どうでしょう」

気にはしていないのか。

しかしそれならなおさら何かが狂ってる。回収されたのは昨日の昼頃。

プリドウエンでは常に騒がしく、責任者のイングラムの怒鳴り声が聞こえるパワーアーマーの整備が。特に注意を引くことなくいつの間にか終わっている。それを実行した誰かがここにいるということだ。

「たった一晩でこんな——」

「それでしたらアキラですね。彼のことはご存じでしょうが、このようないことがとても得意なのです。私も以前、Mr. ガッツイーに負けない戦闘力を……」

「アキラ、彼はひとりでこれを？」

「ええ。彼はロボット、建築だけではなく武器や化学にも通じていますね。本当にすごいと旦那様も良く褒めております」

「レオは手伝ってはいないのか？彼がひとりで？」

「そうですね。私がここに来た時、まだいましたから。おそらくです

が昨夜も眠らずに作業していたのでしよう。とても楽しみにしていたそうですから」

「しかし彼は確か、昨日はアカディアとかいう人造人間の住処に行つて戻ってきたのではないか？」

「ですね。戻られたばかりのご友人方は不満そうでした」

「そのあとでこのようなことをやった？ 疲れを知らないようだな——」

アキラ、確か私のことをにらみつけ。問い詰めてきた若者だったな。

おそらくレオに私がついてきたことで、B・O・Sからの刺客か何かだとも思われているのかもしれない。疑われても仕方がないと思っていたが——若いといってもその作業量の膨大さとそれを処理する能力の高さには驚くばかりだ。

ダンスは好奇心が抑えきれず、整備されたT-51に近づき。何が違っているのかを確かめてしまう。

調査としてここにきている身としてはやってはいけない行動だとはわかっていたが、我慢できなかったのだ。

特徴である関節部分を集中して素早く確認する。自分はメカニックスと呼べるほど詳しいわけではないが。明らかに装甲の薄い部分が補強され、さらなる改造を考えているのか遊びのような空間が作られているようだ。

「まだ改造の余地があるというのか」

「そうかもしれないね。まだ部品が足りないと、ずっと愚痴ってましたから。彼の要求はとどまることをしりません、ハハハ」

「——彼は、アキラとやらもミニッツメンのメンバーなのか？」

「そうですね。不思議ではないでしょう、そもそもプレストン・ガビーを助けたのはわたくしのご主人様とアキラですから」

「……それは初耳だ。だが、聞いた話ではミニッツメンの将軍とやらになったのはレオだけだった」

「ホホホ、それはもちろんご主人様が特に活躍されたということになります。アキラはあまりミニッツメンの活動に興味を持ってな

かったのかもしれない」

「なるほど」

しかしそうになると、わずかな時間で信頼を地に落としたミニッツメ
ンとやらが急速に復活した理由も納得いく。

おそろくだがあのアキラとやらが技術面でミニッツメンを助けて
いるのだろう。マクソンへの報告と、可能であれば彼をなんとかB・
O・S・に引き込めないか？

最悪、レオとミニッツメンを懐柔できなかったとしても。彼のよう
な才能がマクソンのもとに来てくれれば――。

だがそれを実現するには私により思いを持っていなさそうな彼と
の関係を改善できる余地があるだろうか？

慣れ親しんだT―60を着ていると、マクレデイという傭兵が新た
にやってきた。

どうやら雇用主であるアキラの姿が見えなくて困っているのだと
いう。コズワースはだいぶ前にここを出ていったと答えたが、私は何
も見えないとしか答えられなかった。

「くそつ、まさかこんな場所をひとりで歩き回ったりしてないだろう
な。あの野郎」

「……」

「とにかく見かけたら俺が探していたと言ってくれ。頼むぞ」

「ああ、了解した」「わかりました」

「最悪だつ。本当に最悪だ」

傭兵はののしりながら離れていく。そして私の準備は完了した。

「さて、今日も警備をしなくてはな」

ここがいくら頑丈だとしても、敵に接近を許しては壁の意味がな
い。

誰かが監視し、脅威を排除するべく立ち回るのは。やはり私のよう
な兵士が適任なのだ。

——いい空だわ

パイパーには珍しく、曇り空の下。木造小屋の2階に作られたテラスにある椅子に腰かけ。天を見上げて彼女にしては切れ味の悪い嫌味を口にする。

バタバタとあわただしくこの島に来て。まったく落ち着く気配も見せずに連日の事なんだかんだと騒がしくにぎやかにやっている。落ち着きのない自分にはそれほど苦に感じない環境ではあるが、大人としてこれがまだ続くのかと呆れてないわけではない。

ま、友人たち全員がシけた島に退屈せず、元気があつてよろしいってことでいいのかも。

「お待たせしました」

「はーい、待ってましたー」

ティーセットをもつて階下から登ってくるキュリー。

席に着くとあまり嗅いだことのない匂いが広がるが、そう悪いものではない。

「この島でしか見ない葉をつかったお茶なんです。多分、大丈夫なはずですよ」

「いいよいいよ。心配しないで、なんとってこっちは毒だつて飲まされた経験があるんだもの」

「さすがにそこまでひどいものではないです」

「ごめんごめん。とにかく味わって——おや？」

この高さだと壁の向こう側は見えないのだが、そこを通つて戻ってくる人の姿を目ざとく見つけことはできる。パイパーは席から腰を上げると、囲いの上から見下ろしながら声をかけた。

「ごらー、不良娘。朝帰りかよっ」

「ああん？」

「上がってきなつて。お茶に付き合いな」

何やら向こうは文句言いたそうな顔をしていたが。無視してきつと椅子に座りなおす。

「不良娘とは。ケイトですか？」

「そ、いいタイミングで戻ってきた」

そうやって話していると、不満そうなケイトが姿を現す。

「なにやっつてんだよ、朝っぱらから」

「見ればわかるでしょ。お茶の試飲会、あんたもつきあいな」

「なんで？こっちは一晩かけて酒飲んできて。クタクタなんだけど？」

「だからよ。便秘にもきくよ」

「ハンツ、誰のこと言ってるわけさ」

表情は変わらなかつたが、つきあう気はあるようだ。

ケイトはそれ以上は文句も口にせず空いている椅子を持つてくる。

「おそらく元はシダの一種だと——」

「そういうのいいから。どうせあたしにはわからないし」

湯気の出る紫色の液体がカップに分けられた。不気味だし不安がないわけではない。だが匂いは問題なさそう。

それぞれが口に運び、わずかだが沈黙が流れる——。

「まずくはない、よね。悪くないかも」

「あー、酒と違ってあたしにはよくわからない」

「ではこれは大丈夫、ということでもいいですよ」

それぞれが感想を口にして、顔を見合わせると笑いだした。

「じゃ、そういうことで——」

「は？ちよつと待ちなよ、ケイト」

用は済んだと立ち上がりかけたケイトの腕をとり、パイパーが珍しく絡んでいく。

「なんだよ？」

「つきあえっていったでしょ？話をしよ」

「はあ？何言つてんだよ」

「つていうか、こっちは話を聞きたいんだつて言ってるの。」

ブルーについて昨日は港で婆さん連中を説得して回る羽目になったのに。戻ったらあんたは戻ってすぐにアカディアとやらに行っちゃつたつて言うじゃないのさ。

本当は昨日のうちに話をしたかったけど。あんたは戻ってくるな

り今度は爺さんと一緒に酒場に行ったっていうし……」

「なんでそれをあんたに」報告」しなくちゃならないんだよっ」

「それは簡単。こっちは記者で記事にしたい。それにキュリーは？彼女だって人造人間の秘密基地には興味があるはず」

「えっ、私は——」

「あ、ああ。そういうことかい」

ケイトは席に座りなおす。

だがそのせいで脳裏にあれを思い出してしまう。

——お互いに助けあえる

——それを証明しよう

酒場で負け犬共相手にバカ騒ぎして忘れたはずなのに。

「といつてもね。面白い事なんてなかったよ。」

こっちは危険な島で一晩がかりのハイキングさせられて戻ったばかりだったのにさ。探偵とロボット以外はついてこいって、アキラの馬鹿が言いやがったからさ」

「でも意外だったよね。てつきり彼ならキュリーもつれていくかと思っただけど」

「……」

「アイツ、前からおかしかったけど。最近は異常だよ。」

ゲテモノ料理ばかり大食いするし、休むってことをしないで動き続けてる」

「ああーそういういえば戻ってきてからは食事のあと、倉庫に閉じこもってたね。ちゃんと寝てるの、彼？」

2人の視線がキュリーに向けられるが、彼女は困った笑みを浮かべるしかない。

「アキラは……最近、また眠れないらしくて」

「ありや」

「このお茶も精神を抑える効果を期待して作ったものなんです——」

「そういうことできる女。いいよねえ」

ケイトは居心地の悪さを感じた。

アイツの声が戻ってくる。軽薄だけど、自信と弱みをついていく態度。あいつのみせる仮面の上の表情。

——君らを手伝いたいだけさ

——悪意はないんだよ

そうだ、認めないわけじゃない。

キュリーはいい娘だ。アキラが機嫌よく話し始めると、ケイトは何を言っているのかわからなくなる時が多いが。キュリーにはそんなことはない。

デスクローだの虫だの、糞みたいな化け物の肉を「おいしい」ものだと言って食っても文句は言わない。アイツが眠れるようにとこんな健気な気づかいだってできる。自分では無理なことだ。

「そんなの。別にお茶じゃなくても解決できるんじゃない?」
「?」

「ほら、教えてだろ。あんたがあいつから「絞りだし」ちまえば、男なんて疲れてさっさと勝手に——」

「ちよつとケイト!?!」

「なんだったら。あたしも参加して手伝ってやろうか?それなら間違いないく……」

キュリーは無言で立ち上がると、何も言わずに下に降りて行ってしまった。

ケイトはポカンと口をあけてそれを見送るしかなかったが。隣でパイパーがため息をつくのを聞いてようやく自分が大失敗をしたのだと気が付く。

「あんたさ……今のはマズいでしょ。キュリーはわたしじゃないんだからさ、それはキツイって」

「——しくじったってことね」

「ふむ、というよりもあんたさ。ひよつとしてアカディアでなにかあったの?それをキュリーに聞かせたくなくてあんな言い方をした?」

「だから別に何もなかったって——」

「じゃ、話してよ」

あいつは戻ってすぐにマクレディやディーコンと連れ出し、用意していたらしいロングフェローと合流。

アカディアではおかしな人造人間のボスとその子分たち。キュリーと話の合いそうな人造人間にも会って、あのレオやニックを困らせているというおかしな小娘との面談。

「まあ、このくらいかな」

「いやいやいや。このくらい、なんてもんじゃないじゃないのさ。」

戻ったあんたらを連れてったのは明らかにキュリーを連れてく気がなかったってことだし。ディーマ？人造人間のボスとの会話とかヤバイでしょ。そんなこともわからない？」

馬鹿にされた気がしてケイトもむっとした顔をする。

「なんでもかんでも事件、事件と騒ぐ覗き魔のあんたにはそう見えるってだけだろ」

「ふう、その様子じゃ。見逃したことも多そうだね」

「は？そんなわけがないだろ——」

「どうだろ」

そして思わず口にしてしまう。

「ただちよっと、黙ってろって言われたから」

「誰に？」

「え？」

自分が口を滑らせたことに気が付いたときには手遅れだった。

ケイトの目を覗き込むように、あのパイパーが体を乗り出して迫ってくる。

「やっぱり隠してたね。あんたが戻って文句言う前に酒場に直行してバカ騒ぎするなんてとは思ってたのよ」

「……」

「黙ってろって言われたんだよね？誰に？まさかアキラ？」

「違う」

「じゃ、誰？」

ケイトはため息をつく。

「あのハゲだよ、ディーコン」

言いながら、ケイトは昨日のあのシーンを再び思い出し。語りなおさなくてはいけなくなってしまうた。

ケイトにとっては面白くもなんともないアカデミア訪問だった。

トイレを借りて皆と離れた時にそれは起こった。

そろそろここにも退屈してきた、そんなことを考えながらトイレから出てきたケイトの耳に声が聞こえた。

アキラの声だ――。

階段の上のフロアで誰かと話しているようだが、小さい声なせいで耳を澄ませないとよく聞こえない。

(さっきまでおかしな連中と広場で話してたと思ったのに。なんでこんなところぞ)

普段のケイトならそれほど気にすることなくその場を立ち去ったと思う。そうしなかったのはアキラの相手が……明らかに女性の声だったから。

――お互いを知りあうということは距離感を狭めるということだ。

――それには当然だが努力も必要だ。

アキラの声は明らかに怪しい詐欺師を思わせる話し方。

思わずキュリーの顔が浮かぶが。妙な正義感――わずかな背徳感から探ってやろうと忍び足で近づいていく。

――楽しい時間というものは長ければ長いほどいい、こんな時代なら特にな

――こちらの問題は解決しそうだ。なら、君らの問題に俺が興味を持つたとしても不思議じゃないだろう？

階段下の隙間からわずかにのぞくと、アキラと話している相手がデーマとかいうキモイのと会った時に部屋の隅にいたヘンな女だったとわかる。名前は……。

――チエイズ？悪くない名前だ

――ということは君に追われたら俺もどこにも逃げられないってわけだ。いいことを聞いた。

だんだんとムカついてくる。

なにをやつてんだ、あのクソガキは。思わず飛び出して行ってぶん殴ろうか、そう思っているといきなり後ろから誰かに手をつかまれた。

(!?)

(シイツ)

少し周囲は暗かったが、白いシャツとジーンズ。そしてかたくなに外そうとしないサングラスの光の反射からデイーコンだとわかる――。

そこまで話すとケイトはパイパーの様子を見る。

額に皺を寄せる表情はそのままだが、なんだかもっと深刻な空気を醸し始めている。

「そのあとだよ。あのハゲにこのことは黙っておいた方がいいって」
「そう」

「――なんでもなかっただろ？ちよつとあのバカが色気を出してたのを見ただけ」

「いやいやいや。それまさか本気じゃないよね？」

「え？」

「ケイト、あんた……」

またもや気の毒そうな複雑な表情をされ、腹が立ってきた。

「どこをどう聞いて、見たら。そんな馬鹿な感想が出てくるのよ」
「なんだよっ」

「キュリー、彼女を連れて行かなかった時点ですでになにかありそうってのに。デーマ？それとの対面は最悪もいところ、なのに一転してのんきに人造人間の中から女を漁ってたって？まさか本気でそう考えているの？」

「……考えすぎッてことも」

「どう考えても何かを狙って行っただけ。だからあんたやマクレディたちが選ばれた。」

ああ、もう！大スクープにつながるヒントっぽいけども。なんかこれじゃおしやべりな自分が知ってちゃいけないことだったかもしれない

ないじゃない！」

「はあ!?なんでキレてだよ。こつちから聞き出したのはそつちだろ！」

「あんたが余計なこいうから、どうなったと思ってるのっ！」

結局、なぜだかパイパーとはケンカみたいになってお茶会は終わってしまった。

マクレデイが探し続け、ケイトが腹を立てたままベットに横になるころ。

アキラはなにをしていたかといえば——なんとひとり、霧に包まれた沿岸沿いの道を歩いていた。

こうなる理由を説明するには昨日、アカディアを訪れたところまではなしを戻さなくてはならない。

アカディアを訪れる際、彼は連れていく人間の中にディーコンをいれた。

すでにレールロードはアカディアに興味がないと意見表明はされてはいたが。それが事実かどうか。反応を確かめたかったというのがある。

残念ながらディーコンもそれがわかっていたようで、彼はアカディアへの訪問からほとんど口も開かず。態度もはつきりとしたものを見せることはなかった。やはりレールロードはアカディアに興味がないのは間違いないようだ。

しかし収穫がなにもなかったわけではない。

ただひとつ、ディーマとの面会の際。ディーコンはなにかに“気にしている”風な態度をみせたのだ。

信じられなかったが、それはあの広い展望室の片隅から静かなくせに変な視線で見つめてくる女性。動きやすそうなスーツ姿の彼女に対して、警戒しているようにアキラは見えた。

答え合わせをするにはやはり直接、その女性と接触するしかない

「ちよつといいですか!？」

「……。」

「ああ、やっぱり間違いない。さつき展望室にいましたよね？怖い目で見られていたから、前に会った知った顔かとずっと気になってた」アカディアの中を一通り案内してもらい。

ケイトがトイレ、と口に出したすきを狙ってアキラはすかさず“展望室の下の階から。階段で登っていこうとしていた彼女の背中に追いついて、声をかける。

彼女は自分のことをチエイイスと呼べと言った。

どうやらその名前は自分でつけたものらしい——それでなんとなく、想像がついてしまった。なぜディーコンが彼女の存在を気にしていたのか。

「チエイイス、か。覚えておくよ。

それにしても自分でつけたというのに、それを選んだのはなにか響きが気に入っているから？」

「そうじゃない……よくいわれているから。ここでの仕事のせいだね」

コーサーだ。

レールロードで話だけ聞いていたインステイチュートが使っているという戦闘用に特化した人造人間。

これがそうなのか、はじめて見た。

だが不思議な話ではないかもしれない。

小さな島だとしても、連邦のそばで姿を消して圧倒的な存在感を示すことができるインステイチュートと敵対しながら。同じ存在であるレールロードに対しても距離をとってきたアカディア。

チエイイスのような能力を持つ仲間がいなければ、インステイチュートの目を盗んで仲間を増やしたりはできなかつたはずだ。

(これはこれは)

すぐにチエイイスに力になろうと申し出たのは勘だった。

ディーマがコーサーを仲間に行っているならば、しかしその数がおそらく多くはないはずだと思ったし。ならばアカディアの——難しい

問題は彼女自身が「自分の仕事」と口にしたので何かあるだろうと思っただのだ。

彼女は最初乗り気ではなかったが。

薬でハイになった別人のような僕の笑顔につい口を滑らせてしま
う。

「実は今——ひとつ問題があるのよ」

「おお、それを聞かせてほしい。力になれるかも」

「先週よ。新しい仲間をここへ迎える準備をしていたんだけど、トラ
ブルがあつて」

「へえ、どんなトラブル？」

「港の入り口で引き渡される手はずになつてた。いつもは難しいこと
ではないの。こつちから迎えに行つて、あとはここまで連れ帰るだけ
だから」

「なにがあつた？」

「よくわからない。わかつているのは——新しい仲間が迎えに行つた
こつちを見て逃げ出したつてこと」

「はっ」

よくわからなかった。

アカディアに合流したいとこの島まで何とかやつてきたというの
に、最後の最後。迎えが来たら——逃げた？

「ええと——それはつまりこの危険な島の中でひとりで生きていき
たという……」

「違う違う。訳がワカラナイよね」

チエイスは初めて苦笑いを浮かべてくれた。少し気を許してきた
ようだ。

「正直、どうしてあんなことになつたのかはわからない。

引き渡し人の話だと、なんか島に来る前からずつと怯えていてずつ
と静かだつたつて。だからきつと声に驚いて、いきなり叫び声をあげ
て霧の中に駆け込んで——こつちも反応できなかつた」

「それは——驚くよね」

おかしなところでいきなり恐怖を爆発させてしまったということ

らしい。

護身用のパイプ銃はもっていたというが、それ以外に装備を持っていなかったそうで。つまり長くは逃げられないというわけか。

「本当はすぐにも追って助けてあげたかったんだけど——デーマからここの警備の強化を求められていて。外に出ることを禁じられてしまったんだ」

「わかったよ。それじゃその問題、俺が解決してみてもいいかな？」

「……本気で言ってるの？」

「ああ！アカディアとの友好——というより、ここで出会った君のような強くて魅力的な女性を手助けすることは。お互いの信頼を深まった証明になると思ってる。ここに来てからずっと繰り返しているけどね」

「はあ、そのようね。正直に言っただけ、知り合っただけのの人に任せたいことじゃないけれど。時間は無駄にできないし、それじゃ解決することもなさそう」

僕は満面の笑みを浮かべて見せる。

「そう来なくっちゃ！君は困った新入り君をどう説教してやるか考えておいてくれ。間違いなく彼を探し出せるよう全力を出すよ——生きていれば、ね」

本当に憶病で運も持っていれば、まだどこかの穴蔵の底に隠れて息を殺していてくれるかもしれない。

「それじゃそのためにまずは手掛かりを教えてください。そうだな、君たちがファー・ハーバーの港に送り込んだお仲間是谁なのかな？」

手掛かりは重要だ。本当に重要だ。

少しカッ飛ばし過ぎていたかもしれない。別れ際のチエイスのあの失敗したという後悔する表情を思い出すと、刺激的な言葉を投げってしまったと反省する。

とはいえチエイスは悪くない。

悪いのは——デーマだ。

彼は間違いなく説明しなかったのだ。チエイスになぜアカディア

の警備の強化を求めたのか、そこから出ていくことを禁じたのか、を。だから彼女は気がつかずに僕に話してしまったのだ。彼女のミスではない。

ではデイーマは何を気にしていたのか？

それは簡単だ、僕らだ。というかレオさんが僕らを連れてこの島に入ってきたことが知らされたから警戒しているのだ。そして僕らは数日で港のそばにおかしな砦を作り上げもした。そこで襲ってきたトラップとも戦った。

今日、僕がマクレディやケイトらを連れてきたことでデイーマはひとつの情報を手に入れたと思ってる。

あとはそれが事実かどうか、時間をかけてさらに情報を集めて確かめたいと考えているだろう。つまりチエイイスは当然、アカディアから解放されることはないということになる。

だが情報を手に入れたのは僕も同じだ。

デイーマのうさんくさい話術をのぞけば、アカディアは明らかにレールロードのような反インスティチュートを掲げている組織であると感じた。

すると当然だが、デイーマが人間との関係を重視していることもわかってくる。なら、その動きや噂には興味がないわけがない。当然だがアカディアの協力者——それはあの港の中に入り込んでいるという結論が出る。

徹夜で2台のパワーアーマーの整備をした後。

早朝の隙を狙って僕はひとりで港へと向かった。夜が去り、新しい朝が来たのだと皆が気分を新たにしている瞬間を狙った訪問だった。

チエイイスは僕の要求に素直に従ってくれた。

アカディアの住人の中に仲間を入れ、そいつに外からくる人造人間の受け取りと引き渡しを担当させていたことを全部話してくれた。

彼女が協力的であってくれて助かった。これでいきなり態度を翻させられたら、僕も何をしていたかわからない。

最悪、港に直行して人造人間のスパイがここに入り込んでいると騒

いでやり。

もつともそれらしい”当たりくじ”を選んで、そいつをつるし上げ。死にたくないなら協力しろと、棺桶に押し込みながら脅迫してはどうだろうか？などとチラと考えていた。

しかし現実はそのほど都合よくはいかないらしい。

こっちはさっさと最新情報と当時の証言を聞かせてほしいだけだったのにスパイの方は難癖付けるなど、とぼける気満々だったのだ。おかげで周囲の寝ぼけ顔の漁師たちに聞かれないように注意しながらスパイを説得しなくてはならなかった。

ま、それも考えてみればおかしなことじゃない。

いきなり外から来たひとり自分の前で「お前はアカディアのスパイだな。例のトラブルは知ってる。情報をくれ」などと言われて相手をするはずがない。

面倒だったので半ば脅すようにして手早く降参させる。朝飯前の薬物はあまりいいものではないのだがしょうがない。

どうやらスパイ君もチェイスとアカディアの状況は知っているようで、逃げてしまった新入りの無事をずっと気にしていたようだ。

あれから目立たないように情報を集めた結果。逃げていった方角から考えて、港の南に下っていく道沿いに。やがて見えてくるバンガローやロッジが並んでいる場所があるらしい。そこにいるかもしれないと言った。

そこから先にはスーパーミュータントが歩き回って危険だから、と。

今回、僕はマクレディやケイト。キュリーやディーコンを連れてこなかった。

振り回し過ぎたかもな、と思ったのも確かだが——できるだけ集団でいることで自分を守るということに、飽き始めている自分がいた。思い出してしまうのだ。

レオさんと別れ、サンクチュアリを後にして連邦をさまよった頃の自分の姿を。

たったひとりでフラフラしている僕を獲物だと思い、奪ってやろうと笑いながらあらわれてくるレイダー共。そいつらの運命。

わずかな傷からでも出血するだけで恐怖し、狂った化け物となって誰も逃がさなかった。

すべてが息絶えれば傷を癒すために必要だと納得し、好みではない奴らの内臓をぶちまけ。肉を切りだしていただく毎日。いまだからわかる、あんなことを続けていたらきつと人の姿でいる理由を見失ってしまっただろう。

スパイ君の言う通り、早朝の霧の道を進むと前方に海辺につながる建物が並んでいる場所が見えてきた。

なるほど、廃棄された町に入り込むマイアラークたちは港の人間を狙いつつ。海へと流れる川辺で繁殖していることがわかってきた。さらにこの先にはスーパーミュータントがいるとなると、この辺りはちよつとした空白地帯となっているのかもしれない。

港の人間は外には興味なし。マイアラークは港の人間たちしか見ないし、スーパーミュータントにもなにか事情があるのだろう。そう考えるとチェイスには良い知らせと共に運が悪くも良くもあつた新入りを届けることができるかもしれない――。

少し楽観過ぎたかもしれない。

夢を見るには状況はかなり悪かったようだ――。

懐かしい匂いに導かれたそこは3人のトラッパーと建物の1階を丸ごと血まみれにする凄惨な殺人現場。

哀れな人造人間がどうなったか。口の周りを真っ赤に染め、血走つた眼をこちらに向けて卑しい笑いを浮かべる連中を見れば何となくでも想像はつく。

「食ったのか、人を」

「うまかったぜ？お前もそれなりに食えそうな部分があるみたいだよな」

「ハッ！これは驚いた、トラッパーは狂ってるから会話はできないと

思ってたが。人の言葉——」

バンッ!

ホルスターのリボルバー銃に触れかけた右腕に痛みが走り。とつさにドアの入り口の脇に移動する。

「新しいメシだぜっ」

「逃がさないからよオツ！」

家の中でバタバタと騒がしい音が鳴る。

逃げないように裏から回って取り囲もうとか考えているのだろうか？

それにしても腕が痛い。スーツは防弾性とあつて穴は開いてないが、あの出血時に感じる不愉快さがもうやってきている。呼吸が荒くなる、やはり怖い——そしてこの時を待っていた！

天井を見上げる。

歯がワシワシしている。そういえば朝は何も食べてなかったことに今更気が付いた。なぜだろう、まるでここで食事をするこゝろがわかってたみたいだ。まさにグッドタイミングということか。

変化はきつと始まっている。

鏡がないからわからないが、きつと皮膚にあの緑の輝きが——。

部屋に2人残ったトラッパー達はアキラが立っていた入り口に向けて滅茶苦茶にパイプピストルを発砲し続けた。

残る一人はマチェットを握り、裏から飛び出して入り口に回っている。

「逃げてないよなっ。逃げてない、逃げなかったか。バーカッ」

外に出た奴の声を聞いて2人は笑顔を浮かべる。

もうすぐ仲間に襲われ、逃げ遅れたあのバカな若いのがここへ転がり込んでくる。

実は彼らは先日、砦を襲撃し。追い散らされたトラッパー達の仲間だった。

傷ついて動きが取れず。ここで時間を稼いでいたら、同じように隠れ住む馬鹿な獲物を見つけて——おいしくいただいたという話だ。

霧に沈み、マイアラクに荒らされる放棄された町なんていてもしょうがないと思っただが。こうも獲物が入れ食いするとかつてくると、意外と穴場を見つけたのかもしれないと考え直す。

なんせこの近くには港があるのだ。あそこには“食べる”人間がまだまだいる。

そんなことを考えていたが、なぜか入り口から誰も入ってこないことに気が付いた。

追い込みをかけたにいった仲間の声も、そういえば聞こえない？

「おいっ！そっちはどうなってる」

「……」

「まさかヤられた？逃げられたのか？」

「嘘だろ」

入口に影が走る。

とつさに2人は発砲したが、弾丸が命中しても無言で影は家の中へと倒れこむ。

飛び出していったはずの男は首を失って倒れていた。

なにがおこって、どんな状況の中に自分方がいるのか2人の頭は全く追いつかない。思考が止まり、動きも止まってしまう。

彼らの背後、裏口に立つ人影があった。

両手にはリボルバー銃、笑顔でむき出しとなった歯は白く輝き。歯茎は真っ赤に潤っている。

そして太陽の下でも間違いない、皮膚の表面に緑の模様が——かつてと違い。入れ墨に似た模様のように浮かび上がっていた。

わずかな空白の時間。

誰かの息をのむ声の後、激しい銃静音が交わされ。すぐに静かになる。

家から出てくる人の姿はなかった。そして何も聞こえないように、寄せては返す波音は秘密を隠す役割を果たす。

昼が過ぎたころ、それまで姿を隠していたアキラが砦に戻ってき

た。

マクレディとケイトは怒って抗議し、キュリーは心配そうな顔をしていた。アキラはただ、気晴らしに近くを散歩してきただけだよとかわし。心配はいらなかったと上機嫌に答えた。

だから気が付くことはなかった。

普段はゲテモノ料理でも大食漢なアキラが、この日は何も食べなかったことに。

気分転換ができたと笑い、機嫌も良かった。でもその理由は誰にもわからないのだ。

新しい道Ⅲ

国立公園案内所の本格的な改築が始まった。

コズワースらロボットに集めさせたガラクタと、アメリカが用意してくれた物資を一気に運び込み。今度は僕ではなく。皆に設計図と作業の手順を伝え、彼らの手で整えてもらう。

当然だが雑な仕事になるだろうし、なによりスピードも遅々として進まず。周囲からは目立つほどに騒がしいものになるだろうが——それが狙いなのだ。

島が変わっていった時期だった。何もかもが悪い方向へと堕ちていった。

隣人たちが、皆が港へと立ち去る中、危険と分かってもこの場所から死んでも動かないと決めた男。ケンにとって信じられない日が来てしまったらしい。

ある朝、いきなり列をなした男に女、バラモンにロボット。犬になんとスーパーミュータントまで一緒になって入ってきたのだ。

そいつらは啞然とするケンなど幽霊か何かみたいに扱い。勝手に荷ほどきをして、勝手に何かを始めようとしているが——トラップじゃないから自分には危害を加えるつもりはないらしい。それがなんだっていうんだ!?

Bannon!

ケンは手にしたレバー式ショットガンで警告に空に向けて発砲する。

続いて「俺の場所で何しようとしやがる!」と叫ぶ。望んだとおり緊張はやってきた。

こつちだつてもめたいわけじゃないが。いきなりやってきた知らない連中に舐められるわけにはいかないからやったのだ。

「ああ、失礼。あんたが持つてるそいつは銃といってな。振り回せば悪いことが起きるかもしれないんだ」

「俺が餓鬼に見えるのか? そんなこと——」

「挨拶が遅れた。俺はディーコン。あんたがケンだよな？」

「あ、ああ」

「港で酒場をやっている甥っ子さんがいるよな？彼には世話になってる。ずっとあんたのことを心配してた」

「知ってるさ。前におかしな探偵を名乗る奴を俺のところによこし……」

「ところでここはあんたの場所だってハナシだったか？」

「そうだっ」

「信じてもらわないと困るんだが。俺たちはあんたをここから追い出そうとか、ここをかすめ取ろうとかしに来たわけじゃない」

「じゃ、何をしに来た!?ここにはなにもないんだぞ」

「今は」そうみたいだな。だが、俺たちがやる事を黙ってくれりや面白い魔法を見ることができさ。文句はそいつが始まった後で、担当が来ますのでそちらに聞かせて」

サングラスをかけた男はそういうとニツコリ笑うと立ち去っていく。

せつかく銃声で動きを止めた奴らも、それを合図と見たのか作業をまた続けてしまう。

(もう一発撃つべきだろうか?)

ケンは考えたが——なんだかバカバカしくなってやめた。

何をしたいのかわからないが、ここで何かをするというなら勝手にすればいいんだ。どうせ俺はここを動かない、俺が死ぬのはこの島で。この場所なんだから。

だがあいつらはそうじゃない。

何をするのか知らないが、すぐに来たことを後悔してまたすごすとあのみじめな港へ戻っていくに決まってるんだ。俺はそいつを送り出すだけでいい。

案内所はこれまでになくにぎやかになった。

森の中に最近では聞かれない、男女の声に交じって木の板を叩く音が響く。

そうすると当たり前だが森に人が戻ってきたのだと、そこに住む全てが理解する。

だれよりもその“味”をひとり占めしたくなって、かなり大胆に案内所へと近づいていく。

——あ、あのっ

聞いたことのない声を耳にした気がして、作業を止めてパイパーは顔をあげた。

そこには薄汚れた姿の人が立っている。

「なあに?！」

「あ、そうだな。挨拶がまだだったよな——その、ファー!・ハーバーの港に行ったらここに言われてき。それで俺、今度こそやれると思っただんだ」

奥から釘を咥え、ハンマーを手にしたケイトが出てくる。

「張り合いのない声だな。お前、何ができる?！」

「俺? いや、そうだな。なんでもやるよ」

「それじゃこつちにきて。崩れた壁を修理してみせな」

「ああっ、それは、いいんだけどさあ」

「あ?！」

かなり大きな空腹を知らせる音がした。

情けない男の顔に困った風の笑みが浮かぶ。

「なにか、食べるものがもらえないか? その、数日何も口にしてない……」

「はあ?! いきなりなにか食わせろっての?！」

「ご、ごめんなさいっ」

「やかましい! それじゃお前には絶対料理はさせない。食い逃げでもされたらぶっ殺さなきゃならない」

「そ、そんなことはしない」

「なら働きな! 飯は食わせてやるけど、まずはその臭くて小汚い格好をしなくてすむよう。壁と屋根と、自分の寝床を作るんだよっ」

ケイトがまくしたてただけで、めずらしくおしゃべりなパイパーは何も言わずに終わってしまったらしい。

彼女は男のしりをけり上げながら、奥の崩れた壁まで連れていく。彼は自分をチャーリー・ランキンとケイトに名乗ったが。そんなこた別の奴に言え、と吐き捨てられてしまう。

次に近づいてくるのはキャンプ場に居座っている狼たちだった。ピツと電子音と共にレッドランプがつくのを確認したコスワースが動く。

「警告が来ましたね。接近してきているのはひとつではありません」「じゃ、ここからは俺らがやる」

マクレディが立ち上がり。その隣に立つストロングは鼻を鳴らす。尻尾を立ててしきりに空の匂いを嗅いでいたカールがうなった。

同日、半日ほど遅れ。

港近くの浮島の砦から3体のパワーアーマーが出動し、海岸沿いに北上を開始した。

B・O・S製のT-60bパワーアーマーを装着するのはパラ Dein・ダンス。

そして回収され、生まれ変わった2台のT-51cパワーアーマーを駆るのはアキラとレオである。彼らが目指すのは国立公園案内所よりもさらに北に位置するダルトン・ファーム。

連邦では一度も行われることのなかった。

2つの居住地を同時に制圧、拠点構築する作戦が唐突に始まったのだ。

そもそもの話。これまで島の中で、島の住人たちだけでなにかをなそうというならひとつのところに集中しなくてはならず。それは同時に全ての脅威に対しても何かが始まったのだと知らせてしまう。

だからこそ港の住人たちは繰り返し返す失敗に諦めてしまった。

ロングフェローの小屋のある浮島を砦にした時だってトラッパー

に襲われた。

今のこの島で新しい場所に人が手をのばせばなにかがやってくることはわかっている。ならばこちらの都合がよくなるよう。効率的に、圧倒的な勢いを見せ。突き進むしかない、暴走するくらいが丁度いい。

パワーアーマーの一団は国立公園案内所の脇を見向きもせずに通り過ぎていく。

最終目的地ダルトン・ファームから離れて270メートルほどの地点で一旦停止。時刻は午後4時を回ったところだが、太陽は雲に隠れて見えないが。まだまだ明るい時間だった。

アキラはアーマーを脱ぐと、レオとダンスが抱えてきたミニガンを手早く点検をはじめ。

「よし。持ち上げて回転させて。発射しないように」

アキラの指示に従い、2つの歯車が勢いよく回転を始める音がして、すぐに消えた。

「アキラ」

「大丈夫そうです。自分のを見ます」

「わかった」

2人の声を聞きながら、ダンスは遠くに見えるファームの現状を見て思わずヘルメットを脱ぎ。大きく息を吸って、吐き出す――。

岩にこびりつくフジツボのように。

遠目でもはつきりとわかるくらい、大量のマイアークが対面して立つ2匹のフォグクロウラーのあしもとで蠢いていた。今からこの3人でアレをなんとかするとかするというのか。

「これは悪夢だな――生きて帰れる気がしない」

「弱気じゃないか、ダンス」

「レオ……私の経験から言わせてもらえば、連邦でこのような状況に自分から近づくのは自殺することと変わらない。どうかしてる」

「なら港に戻ってくれていい。これは私とアキラでなんとかするか
ら」

「——本気でやるんだな。たった3人なんだぞ。可能だと思ってるのか?」

「何が無理なのかはわかっている」

そう言うのとレオは作業を続けるアキラの背中を見る。

兄弟というにはあまりにも違い過ぎる2人だが。ともに立つ戦場では、かつての最悪の状況を共に戦った兵士達と比べても変わらな。だから相手がなんであつても不安を感じるところがない。

「私たちは任務を終えて帰るよ。約束できる」

「だといいいんだが」

「アキラ?」

「用意できました。スピーチを始めてください」

彼は冷静だ——。

「見れば誰でもわかるだろう。これから始めることはあそこにいる化け物どもを間違いなく怒らせる。でもそれをやめるつもりはない。あの場所は以前、ダルトン・ファームの名前で呼ばれていた。

今はその名前を失いつつあるが。それは今までの話だ。あの場所は返してもらおう。奪われたものを奪い返す」

「それにしても少し人が少なすぎると思うのだが——」

「戦いにおいて数は確かに力だ。しかし足りない分を補う力は他にもある、大丈夫だ」

レオの言葉はいつものように自信に満ち溢れている。

アキラは背負ってきたパワーアーマー用の背囊から自分の武器と弾丸を取り出し、道路に並べはじめた。

「ちよつとまで!それは——」

「B. O. S. でも使ってるだろ、ヌカ・ランチャー。それに使う弾頭」

「いや、しかしそれにしても……」

並べられていく小型核弾頭の数にシャレにならない。

ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ……。

「連邦のアトム教徒がいた居住地に武器庫があつて、そこにかんりの弾頭が残されていた。ミニッツメンには必要ないとは言わないが、大

量に必要というものでもない」

「だからこの島まで持ってきたというのか。しかしこれを使うということは、あの土地はしばらく核によって汚染されてしまうぞ?」

「必要なことだからやる。用意できるものは限られているんだ、贅沢は言わない」

レオの声は変わらなかったが、その目に迷いはない。

勝つために必要だ、確かに兵士とはそういうものだ。任務の成功に違いはなく、手段など問題ではない。

15分後——戦闘開始。

ヌカ・ランチャーを抱えるアキラが一步前に出る。

「センサーアレイを起動、投薬の準備開始」

頭部のモジュールが動き出し、ヘルメット内の視界がさらにはつきり并表示される。同時に投薬ポンプに仕込んだ大量のサイコタスの注入も開始された。

サイコやジェットの時とはまた違う、感覚が別次元に飛んでいくような飛翔感にアキラは満たされていく。

冷静さ? そんなものは瞬時にどこかへ吹っ飛んだ。

「いくぞ——」

明らかにをテンションの狂った声を張り上げ、アキラはいきなり足元に並べた弾頭を“2つ”つかむとすでにカタパルトに並べてしまふ。

レオは黙っていたが、ダンスはいきなりのこと動けなかった。声も出なかった。

気がついたときにはもう2発の弾頭は発射され空中を飛んでいた。

「おいっ、ふざけるな。それは——!」

「ダンス!!位置につけ、アキラは大丈夫だ」

どこがだ!?

抗議する声もあげられない。

ひゆるひゆると風切り音がするのにな、この狂人は次の分とまた適当に弾頭を拾い上げてセットしている。

それを飛び掛かっていつて取り押さえないという衝動に駆られるダンスだが、レオは平然とミニガンを構え。彼の後ろに立って次の行動のために待機をやめようとしなさい。これが作戦だというのか!?

いや、冷静になれ。すでに賽は投げられたのだ。

このまま攻撃を続けければ、当然だが向こうもこちらを見つけてやってくる。近づかせないためには準備しておかねばならないが——この狂人となった若者を放っておいていいのだろうか。

「戦えないなら君は下がれ。アキラの邪魔もしないでくれ」

「正気かっ」

「彼は自分の仕事をしている。君は任務を果たすために戦うか、そうしないならさっさと逃げろ。足を引っ張ってはもらいたくない」

「っ！」

会話している間にも2発目——いや、そうじゃない。3。4発が続けて発射されてしまう。

——やるしかないわけかっ

こうなったらダンスも腹をくくるしかなかった。

「こんな作戦だったとは聞いてなかった！」

「ダンス。私はやると言ったし、君は納得して参加したぞ！」

ああ、確かに作戦は事前に説明はされてはいた。

しかしその時はこの若者がラリッてヌカランチャーを使うとは言わなかった！

ダルトン・ファームに赤い炎と砂の混じったキノコ雲があらわれ。消えながら再び新しい砂を胞子のように吹きあげ、傘が開いていく。死を振りまく容赦のない攻撃にマイアークたちは巻き込まれる。

6割以上が瞬時に絶命し。残ったのは海に、浜に、岩場に吹き飛ばされ。叩きつけられ、なんとかやつと生き延びれた。

いつもと同じ反応として攻撃されたと理解して敵の姿を探す——までは一緒だったが、残った全員が同じ行動をとることはなかった。例えばなぜかその場で動かないまま食糧を食べることを続けようしたり、恐怖に取りつかれたか逃げだす。

マイアラークの脅威は大きく削ることには成功したが。まだフオグ・クロウラーが残っている。

信じられない話だが、6発もの核攻撃はこの2匹の体を包む装甲を砕くことはできなかった。

戦意は高く、体を大きく伸ばして周囲を見回すと、あつさりと海岸のそばにある路線沿いに立っているパワーアーマーの存在を感知したようだ。

咆哮と共に動き始めたマイアラークとフオグクロウラーの一団がファームの外に向かってゆっくりと移動を開始すると、パワーアーマーが持つミニガンから歯車が高回転を始める音が鳴り始める。

作戦時間はわずか45分。

しかし戦いは終始ほぼ一方的で、容赦しなかった。

ファームと、ファームから延びる道路には血を焦がし、肉から煙を吹く放射能に汚染されたマイアラークの死体が並ぶ。ここから逃げ出した奴らの姿も残ってはいない。

3体のパワーアーマーは並び立つ。

ようやく赤くなり始める曇り空の下、彼らの任務はダルトン・ファーム制圧という最高の形で終了した。

霧の中、隠れる場所もない状態でトラッパー達は怯えていた。

元気に騒いでいた連中から切られ、血を噴き、倒れてると死者となつて動かなくなつてしまった。

逃げ出したいのに逃げ出せないのだ。恐怖が体を凍らせ、死はどこからかやってきて。再び霧の中へ消えて隠れてしまう。

「アアッー!?!」

また音もなく誰かがやられた。

発射音も、風を切る飛んでくる弾の音も、なにもない。ただいきなり誰かが選ばれ、死んでいる。

夜の終わりと朝の始まりの時間での移動だったが。こんな経験は今までいちどもなかった。

(……キジマ、早くしてください)

(せっかく入り込んできたオモチャだ。少しくらいはイイだろ)

「そういうのはひとりでも楽しんでもらいたいですね」

いきなり自分たちのそばから声が聞こえた。

サカモトはいつの間にか両手にナイフをもって彼らのそばに立っていたのだ。いつ近づいてきたのか、そもそもそこにずっと立っていたのか。トラップパー達にはわからない。

だがその男が両手にナイフを握っているのがわかると、ようやく萎えていた闘争心が戻ってくる。見えない相手からの攻撃にはどうすることもできないが、見えるなら恐れる理由はないというわけだ。

銃口が一齐に向けられたが、火を噴くことはやはりなかった。

サカモトはその場から動かさず立ったままだったのに。手にするナイフにはいつのまにか血がこびりつき、トラップパーは崩れ落ちるとわずかに悶えながら死んでいった。

「キジマ、さっさと出てきなさい」

「……やりたい放題なのはどっちだか。まあ、いいか」

「元気そうですね。そちらは調子がよさそうだ」

「何を言っている？数日前にあつたばかりだろうが」

キジマはいぶかしがる。

サカモトは不調なのだろうか。口元に浮かぶ皮肉な笑みには疲れがまぎって見えたからだ。

「定期の連絡はすると約束はしたが。これほど会う理由がある——」

「キジマ」

「？」

「アキラが新しい拠点を手に入れましたよ。すでに人も集まり始めてる」

「それは——それは連邦の、ミニッツメンの事か？」

「ミニッツメン？ああ、あれですか。あちらもどうやら順調のようです。しばらくすれば彼らが連邦北部を掌握するのは間違いないで

しよう。ですが私はこの島の話をしているのです」

「……嘘だ」

キジマはこの男にしては珍しく動揺する声を出していた。

「冗談でこんなことは言いません。本当は私だって会うつもりはなかったのです。」

しかしこれを伝えれば。そちらから呼び出しがあるのはわかってましたからね、わざわざこうして手間を省いたわけです」

「なにがあつた？」

「別になにも。ただ北上を開始しただけです。」

一昨日の夕刻。地震のようなものがあつたことは気が付きませんでしたか？」

「……」

「元農園でしたか。放射能まみれにしましたが、強引に手に入れました。裏をかかれましたね」

「あの砦から出ていないはずぞつ。俺達も監視は続けていた」

「でしょうね。しかし、向こうは我々のように見られていることを想定していたでしょう。あそこに“人”はほとんど残ってません、今はね」

「——だまされた、ということか」

「シヨックでしょうね。こちらも被害甚大という奴ですよ」

「……信じられない」

「なら自分で確かめればいい」

吐き捨てるように言ったわけではないが。不愉快さを刺激され、キジマはサカモトをにらみつける。

「誰に言っている」

「キジマ、クロダ。あなたたち2人に言ってます——さて、話すことは以上です。何かほかにありますか？」

「ない」

「ではお互いに気をつけましょう」

霧の中の会合はこうして雑に終了した。

サカモトはさっさと姿を消して立ち去って行ってしまったが。キ

ジマは動かなかつた。

——チツ

舌打ちと共に片腕が振られると転がっている死体の腕が派手にちぎれて宙を舞った。

怒りが抑えられてくると、自分たちも計画の修正が必要になったのだと考えられるようになった。だがその前にこの情報が正しいか確認する必要があるのか。

チツチツと2度の舌打ちの後、キジマもその場から立ち去っていく。

霧は翌朝まで晴れることはなかったが。風に混ざる血と死臭にさそわれたか。転がる死体はその時にはもう奇麗に消えてなくなっていた。

ダルトン・ファーム陥落から数日後、国立公園案内所にニツクとロングフェローが姿を見せる。

両者ともレオの島へのお節介については協力的な姿勢ではいたものの、パイパーのように大喜びで賛成とは言っていなかった。

だが——信じられないことが始まったのだ。

静かで活気のない港と違い、ここでは人が忙しく動き回り。

あちこちからあれがない、これを持ってきてくれ。探してこいなど怒鳴り声が聞こえてにぎわっている。

「実際に見ているのに、まだ信じられん。まったくどうなってるんだか」

「ああ」

「島でこんなことが起きるのをみれるとは思っていなかった」
「そうかい」

目を細めて感傷に浸るロングフェローに。ニツクはあえて突き放すようにして気が付かないふりをした。

機械の目は、彼の探偵助手の姿を探していた。

驚いたことにレオは武器は持っていたものの、防具を脱ぎ。安全帽をかぶってアキラの設計図を手に建築の指揮をとっていた。訪問者たちに気が付くと笑顔で迎え、握手を交わす。

「ダルトン・ファームを手に入れたと知らせがあつてから、てつきり戻ってくるかと思つたらそうじゃなかったんでね。心配になつて様子を見に来たわけさ」

「ああ、そういう——御覧のとおり、アキラに任せていた居住地の改装の手伝いをやってる」

「思つていたよりも似合つてないな。どうしてそうなつた？」

「作戦を終えてここに戻つた時だ。作業していたケイト達が自分たちの作業はどうだつてアキラに感想を聞きたがつたのが問題の始まりでね。」

アキラはあまり良い返答しなかつたせいで、彼女らを怒らせてしまったんだ。『完成すればちゃんとしたものにできている』つて言つてね」

「そりやまたとんでもない間違いを犯したな」

そうだね、笑いながらニツクにこたえるレオにロングフェローも疑問をぶつけていく。

「ここ、あんたのお仲間以外の顔もいるみたいだが——」

「キャプテン・アヴェリーに頼んで、港に入れない人にはここに来るように伝えてもらつていた。」

ここでにぎやかにやってるせいで様子を見に来たのが何人かもういるんで、さつそく手伝つてもらつてる。これからは実際に自分たちが住む場所になるわけだからね」

「こんな大騒ぎでのんびりやって大丈夫なのか？」

「用心はしてるし、今のところは大丈夫だ。とはいえ少し困つてるかな。」

本当はアキラが残りをやってくれると言つてくれたんだが。パイパーたちが譲らなくてね。彼女たちも頑張つてくれている」

「そのアキラはどうしてる？姿が見えないな」

「彼はダルトン・ファームに行ってる。ここにいるのは落ち着かないだろうし。あつちはここと違ってほとんどゼロから始めないといけないからね。少しでも進めてもらわないといけない」
「そうか……」

今日も島は雲に覆われている。

いつもとちがい太陽の光を遮る雲がうすいおかげで、森に光がよく入ってくる。それがこの感動的な——少なくとも絶望しかなかった島の人間の目から見たら——情景をより感動的なものに仕上げてくれている。

さてそれはそれとして、だ。

ニツクは気持ち切り替え切り出してきた。

「お前さんたちはさっそくこの島でも大いなる一歩つてやつを踏み出したわけだが——つぎはどうするつもりなんだ。何か考えがあるのか？」

「なんだいニツク。そんなことが知りたかったのかい？」

「興味はあった。あんたのおせっかいな計画つてやつも別に反対はしてない。ただこの老いぼれ探偵の俺に打つ手がないんで暇でしようがなくてな。そうするとにぎやかにやつてる連中が気になつてしまう。

だが正直に言えば、あんたも打つ手がなくなつちやいないのかつて思つてな」

「ロングフェローも？」

「俺は最初からうまくいくとは思つちやいなかった。ただ、あんたを気に入ったというだけの老いぼれだ。こんなものを目の前にしても、まだ信じられない」

「素直じゃないな、ご老人方」

「いや、レオ。本音を言うところの老いぼれ探偵はお前さんたちが恐ろしく思えてしょうがないのさ。」

あんたもアキラも、とんでもないことを平然とやる。ここを見ただけでも、この隣にいる爺さんも泣きそうなほど感激していた」

「フン、それは言い過ぎだ」

「だからこそ、この次にあんたたちが何を考えているのかが心配になる。」

「何をやる？どこまでやる？」

「うん」

「ここには人が集まりだしたというが。全然足りてないだろう？」

「ダルトン・ファームまで手をのばしたが、あそこに空き地になっただけ。人はどうするつもりなんだ」

「レオは設計図を近くの台の上に置く。」

「足元で眠るカールは、耳を忙しく動かすが別に起きるそぶりも見せない。」

「確かにニツクのが指摘した通り。私たちの行動は限界に達しようとしている。」

「港の住人たちを巻き込めず。せつかく場所を手に入れてもそこに送り込む人がいない。」

「だがこれで終わるつもりはない。」

「説明する前にロングフェローに質問があるんだ」

「ああ」

「この島には伝統について」

「おい、お前さん——」

「キャプテンズ・ダンス。聞いたのはそれだ。説明してくれるかい？」

「ロングフェローは呆れた顔でため息をつく。静かにレオの求めに応じて説明をはじめた。」

「——キャプテンズ・ダンス。それは確かにこの島に言い伝えとして存在する」

「——ある場所にこの島で一番イカレてて、卑劣で、残忍だが有望な誰かが立ち」

「——この島で一番最悪の生物を海から呼び寄せるため。一晚を過ごすというもの」

「——だがこれは本当にやる事ではない、現実味のない荒唐無稽な妄」

想だ

——なぜならばその伝説を信じて実行し。やり切ったものが誰もいない

ニツクはそれを聞いてかぶりを振る。

いよいよ正気とは思えぬ話が飛び出してきたぞ、と。

「だがキャプテンズ・ダンスは島の皆の尊敬も集めると聞いた」

「ああ、それは間違いないだろうな。お前さんの場合はやりきれば、という条件が付くがね」

「どういうことだ？」

「前回の挑戦者は30年ほど前。奴のダンスは最後まで続かず。未届け人の目の前で力尽き、マイアラークどもの餌になった。それでも皆がその愚かさと勇気をたたえ、奴の墓にキャプテンの名をつけてやった」

「死んで褒められるとはな。まったく——」

「まあ、お前さんたち外から来た連中にしてみたらそう思えるだろうがな。

おそらくが大昔、こんなにくぎつけた世界ではなかった頃は度胸試しくらいの安全な奴だったのだから」

「そうなのか？」

「確かなことは言えないがね。そうじゃなけりや、そもそもこの島の人間すべてが昔から頭のおかしな奴らだったってことになる。それはさすがに考えたくはない」

レオにはそうしたことはどうでもいい話だった。

「ロングフェロー、具体的にキャプテンズ・ダンスのやり方は？」

「難しい話じゃない。この世からオサラバできると思ったら港に行つてアヴェエリーにやるとただ言えればいい。

見届け人が2名つけられ、案内される。

夜が来たら現地で開始だ。肉をひとつかみ、そいつを自分の周りにばらまく。

わかるだろう？

自分を餌の中に置いておく形になるわけだ。それを狙って近づい

てくる奴らを殺したらさらにそいつらの血肉をぶちまける。この作業を繰り返すことで色々な奴らが向こうから集まってくるというわけよ」

「それで？」「悪夢だな」

「最終的には見届け人が挑戦者が決めることになるが。大物を引き寄せて倒せたらそこで終わりになる。」

合図を出せば見届け人たちが仕留めた大物を解体して血と肉を持ち帰り。それを皆にふるまうついでに彼らに目にしたものを語って聞かせる。

実際に食って、話を聞いて信じる奴がいれば新しいキャプテンの誕生さ。海の男たちは荒々しいが、音は素朴な奴らばかりだ。聞いたことと、口にしたものが本物だと納得すれば仲間として迎えられる」
「それで彼らにやる気を出させるというのか。正直に言うが、どうかしているぞ。レオ」

ニックは否定的だが、今度はロングフェローが味方してきた。
「このキャプテンというのは名誉だけの呼び名じゃない。」

危険で過酷な海に乗り出しても、漁師たちがその胆力と決断力を信じて命を預けられるほどの勇者だと認めるから与えられる名前だ。

あんたが本当にやり切ることができたなら——確かに腑抜けた連中の横つ面を張り飛ばすような確実な効果がでてくるかもしれないな」

「そうなんてもらいたいな」

「だが失敗すればそれで終わりだ。この失敗つてのはだな。」

大物が出てこなけりや失敗。

途中で逃げだしても失敗。未届け人は助けはしないし、生きて戻れたとしても地獄だろうな。

アヴェエリーに訴えた後で踏みとどまろうとしたり、躊躇うようなところを見せても失敗だ。あんたは島の外から来てる。成功しても弱気だったと思われれば誰かが『あいつはそれでも怯えていた』と文句をいう奴がいる。それに同調する奴も出てくるだろうな」

ニックには信じられなかった。彼らが考えていることはどう考え

てもおかしい。これまでは順調にやってきているように見えてはいるが、冷静に見ればこの2人はこの島に来てから明らかにお互いを暴走させている。

彼の気分転換になるならと、軽い気持ちでこの島まで連れてきてしまった手前。機械の体でもニツクの心は複雑で、困惑していた。もしかして全てが手遅れで、もう止めることはできないのかもしれない。だが、友人として放っておくこともできない。

「レオ、少し2人で話せないか」

「もちろん」

ロングフェローは近くを見て回つてくると言い残して去つていくてくれた。

「レオ、そのなんたらダンスとやらはどう考えても危険だ。本当にわかってるのか？」

「リスクは理解しているつもりだ」

「はあ……とてもそうは思えないのだがね。あんたはカスミのためと言いながら、この島の諦めている連中に希望を与えろと言う。何の関係もないこの島のために命を捨てると言ってる。わかってるのか？」

「まずいかな？」

「レオ、シヨーンのことはどうする。君は自分の息子を探すんじゃないのか？」

「……何も変わってない、ニツク。私はインステイチュートに近づけるなら、なんでもする」

「ならどうしてこんな自殺まがいのことを——そういうことか。デイーマなんだな」

「ああ」

「なるほど」

レオは自分が連邦でこれ以上、新しいインステイチュートの情報を手に入れることは難しいと考えているわけか。

確かにミニッツメン、レールロード、B・O・Sにグッドネイバーまで関係を持つ今のレオでもインステイチュートの新しい情報は何も入ってこない。

だがこの島に来て少しだけ事情が変わった。ニツクの覚えていない過去を知ると自称する、デイーマとアカディアを知ったから。彼らならもしかして……なるほど、アキラあたりは喜んで力を貸すか。

だからといってこんな方法を選ぶなんて正しいとは思えない。

「——実はあんたにはずっと黙っていたことがある、レオ。インスティチュートのことについて」

「ニツク？」

「ケロググという男とあんたが対決した後のことだ。俺はあんたを探してあとを追ったことがあった」

「……私がB・O・S.と接触していた時か」

「1週間ほどだろうか。すでにケロググの遺体はなく、骨だけが残されていた。俺はその中から奇妙な装置を回収してきたんだ」

「装置とは？」

「それがわからない。知り合いの当てになりそうな人に調べてもらっているが、おそらく外部記憶装置か何かじゃないかと言ってる。つまり希望はあるんだ、やけになってはダメだ」

「そんな大切なことをなんで今まで黙っていたんだ、ニツク！」

「まだ答えが出てないからだ。デイーマの話を聞いたからわかるだろう？ インスティチュートは情報を漏らさないように常に安全装置を用意している。それを回避する方法はまだ見つかってないから黙ってた」

レオはわずかに動揺したが、すぐにいつもの冷静な彼に戻った。

「今でも夢に見るんだ、ニツク。」

シヨーンが奪われた時、妻が殺された時。私は何もできなかった。

私は2人の目の前にいて、装置の中で暴れても無駄だった。なのにシヨーンは自分の母親を殺すような奴らに育てられて安全だとケロググには言われた。

許せなかったよ、自分が。こんな世界にひとり残されてしまった息子が、彼をそんな風にした奴らのおかげで安全だって言われて安心してかけたからだ」

「レオ——」

「ニツク、アキラはアカディアがインステイチュートの情報をまだ隠し持っている可能性を見つけてくれた。

彼らも結局、インステイチュートの真似をして仲間の人造人間を人の中に送り出していた。彼らはインステイチュートと距離をとっているが、彼らに何の用意もないとは思えない」

「それがインステイチュートの情報だとなぜわかる」

「違う、〃これしか〃私が追える情報はないんだ、ニツク」

そうだったな、ニツクは答える。

彼は希望を追っている。最初からそれを求め続け、だから止められはしないのだ。

B A D C I R C L E

ファームでひと仕事を終えて戻ってきた僕は、夕刻の居住地からまだ元気な木槌の音や怒鳴り声が聞こえてくるのを見て目を細める。

——また人が増えてる

あまり深く考えずに“拙い作業”などとクサしてしまい、激怒されてしまったが。考えてみればこういう風に仕上げられてこそ、感じる希望ってやつもあるのかもしれない。

にぎやかさにさそわれて近づいてきた人々は、この先ではきつこの場所を愛してくれるはずだ。

「お、戻ってきたんじゃん」

「ケイト。お疲れ」

「ひどい放射能だつて聞いてたけど。見たところあんたに新しい腕は生えてないみたい」

「そのかわりに持つて行った水とRADアウェイは空っぽだよ」

ダルトン・ファーム——今後もそう呼ばれるであろう居住地は手に入れたものの。

ヌカ・ランチャーが自壊しかけるほど激しい攻撃は、放射能が土地をさらに汚してしまった。

そこで僕は今日。居住地の中央にテントを張り、周りを五角形に足場を組んで簡易的な壁を築き。ターレットを配置してなにもものも侵入できないようにしてきた。

当面はこれで時間を稼ぎ。アメリカやコズワースらに材料を集めてもらう。連邦から持ち込んだなにもかもはすでに吐き出してしまいい、人も資材も足りてない。

「つまりいつもの冷えたヤツに飢えてるってわけね。いいよ、つきあってあげる」

「珍しい」

増築された3階に作られたテラスから見下ろすと、レオさんやパイパーらがのんびりと後片付けを始めている。

ケイトがやってきて、冷えたヌカ・コーラをくれた。

「……あんたは——いや、ボスはまたやったんだね」
「なに？」

「人助けってやつ。馬鹿なことをしてるってずっと思ってたけどさ」
「馬鹿馬鹿しくて逆に呆れたって言いたいのか？」

「そう、それ！」

お互い苦笑するしかない。

「僕がひとりでやったわけじゃない」

「どうだろうね。あのレオとボスだけが、本気でこんなことをやった。あんたたちがいなかったら、こんな陰気な島なんかにはいなかった」
「そうかもね」

「なのはまだ馬鹿をやるうって思ってる。そうなんですよ？」

「——聞いたか」

「ニツクが来てレオと話したんだ。で、パイパーもマクレディもキレた」

「戻るのは明日にするべきだったかなあ」

「つまらない冗談。それより本気？キャプテンなんちやらしいの」

彼女は珍しく茶化もしない、シリアスな表情で聞いてきた。

なんとなくホルスターから銃を抜き、クルクルと手の中で遊ばせてから戻そうとして——失敗しかけた。手の中から滑り落ちそうなところを、慌てて拾い上げる。

「失敗した」

「ダサッ」

「指先が器用な奴に言われて傷つく言葉」

「何でも知ってて、なんでもできるくせに。ピッキングは本当にさっぱりだよね」

「僕は完璧じゃないって証明だよ……人間らしい」

つい、余計なことを口走ってしまう。

だがケイトはそれを別の意味にとらえてくれたみたいだ。

「キュリーは何も言わない。話そうともしないんだ」

「そりやそうだろう。キャプテン・ダンスの情報はキュリーから教えてもらったんだから」

「はあ!？」

「ここに上陸した日に、港の医者の所に行った。彼が抱えている患者の病状なんかでかなり盛り上がった。患者との距離について嘆いて、悩んでるって話になったらしい」

「なんだよ、それ」

「どうやらかなり深刻な悩みだったらしいよ。医者信用しない患者が多くて困ってるって。」

で、なにか可決できる方法はないかとなって——」

「最悪の自殺方法を見つけたわけか」

「キュリーもそれはわかってた。でもお前はここにきて酒場で連日パーティだし、僕が調べだすのも時間の問題だからって、話してくれた。少し時間が必要だったみたいけど」

雲に隠れた太陽はいよいよ地平線へ隠れようとしているみたいだ。

森の中に闇が忍び寄ってきていた。

「ねえ、ボス。ここが潮時だって思わない?」

「……」

「あんたはミニッツメンだし。レールロードとか、ハンコックの相棒にもなれる。気に入らないだろうけど、あのヌカ・ワールドの連中のボスになるのも悪くないじゃないか」

「僕がレイダー? 笑える」

「力があつて、キャップがあればどうにかなる。あんたならどうにかできる、違う?」

「——ケイト。それは妄想だよ。どんな時代であつても、人が作り出す社会ってやつにはそれがある。」

大金で美味しい酒、飢えることのない食事。男女を問わない肉欲と薬におぼれ。わずかな不愉快も許さずに暴力をふるって他者を支配する。人はもうあるんだから問題はおこらないって思ったがった。でもそんなわけがない。僕にその仲間になれって?」

「自殺するよりはイイじゃん」

「考えたこともない……これはカツコつけすぎだね。事実じゃない。ああ、考えないことはない。でもそれは一瞬だけ」

「一瞬だけ？それともあたしが言ってることも馬鹿だから気に入らないって？」

「そうじゃないんだ。ケイト、僕にはできないんだ」「どうして？」

「僕は自分の過去がわからない。覚えてないみたいだ」

ケイトは息をのんだ。でもすぐに食いついてくる。

「だから？糞みたいな過去がわからなくなたって、別にいいじゃん」

「その過去のせいで誰かに追われてる。そして奪われた、僕の意味。僕の自由を」

「それは——」

「だからハンコックの相棒を殺した。苦境に追い詰めてしまった」

Vaultからレオさんと共に這い出してきたあの日からの一日は強烈で。

だからこそ傷口は癒えることなく、怒りを原動力にして進みながらも、その毒に僕はやられてここにいます。よいことはしていても、僕は絶対に善人にはなれない。

「正直な話をするとき。もうどうしていいのかわからない」

「え？」

「そう、僕は器用なんかじゃない。でも間違いは繰り返さない。

そう思っつて、人知れずに動くことに注意したし、ひとりにもならないようにした。けれどそれでもレオさんは僕のせいで襲われた。そして僕はそこにはいなかった」

「あたしらを気にしてるってこと？」

「馬鹿をやるおかしな僕にある確かなことはただひとつ。仲間で、友人たちがいるってことだけなのさ。ひどく哀れな話だよ。

君らがいなければ僕の世界はどこまでも小さくて、救いようがない状況に震えることしかできなくなる」

「……」

「だから記憶を追う。結果、僕を追う奴らの背中を追い続ける。

相手も僕の背中を追ってる。追いついてまた僕を奪おうとしている。犬が自分のしっぽを追うようにぐるぐると円を描いて走り続け

てる。でも、どちらかの手が先に相手の肩に触れたらそれは終わる。この恐怖も終わる」

ケイトもテラスから地上を見下ろしてみた。

森の中からやってきた女が腕をひねったとかなんとか、キュリーに訴えている。ケイトなら腕が折れてないか確かめたら、サボるつもりかと怒鳴りつけて尻をけり上げるだろうが。キュリーは真面目に訴えに耳を傾けつつ、診断を続けていた。彼女はうらやましいくらいかわいらしく、誠実だ。

——仲間、か

「過去がないって、ずっとうらやましいと思ってたよ」

「連邦じゃ問題にしかないよ。ここでは記憶がない、と聞いてまづ考えるのは人造人間かどうか。気軽に笑いのネタにもできない」「じゃ、ちよつと試そうかな。ひどい過去を持つ女の話ってやつ」

「——誰？」

「あたしの話。正直に言うけど楽しい話じゃない。あんたがあたしに何を言うのかも想像できないくらい」

「本気？」

「そっちが自分を馬鹿だ馬鹿だって繰り返すもんだからさ。まるで自分が馬鹿じゃないみたいにな気になって。ちよつとおかしくなってるのかも。それで？聞くの？やめる？」

どうやら感傷的な気分は伝染率が高いようだ。

もちろんだが面白いことを言い出したケイトに続きを聞かせてもらう。

「両親っていうクズはいたけど、兄弟はいなかった。不満に思ったことはないし、いなくて本当に良かったと今でも思う。子供だったけど、あいつらがクズだとわかってもなんとかやっていくことはできるって思ってた」

「かなり厳しいスタートだな」

「本番はまだまだ先だよ。だから言った、後悔するってさ——そんなクズでも愛そうとしていた自分が間違っていたってちゃんと理解したのは18の誕生日。」

そこまで我慢して追い出さなかったことを感謝しろって感じでき、奴隷商人を呼んでた。そして拘束したあたしのことを売りやがったんだ。あいつらはポケットの中のキャップの重さに満足だけして、売られていく自分たちの娘の事なんかなんとも思っちゃいなかった」

「それは。さすがに。なんと言えはいいのやら」

「わかってる、だから最後まで言わせて——それからの日々は思い出したくもない。不愉快なだけで、ムカつくことばかりだったのは確か。それでも何とかしようと思ったら、自由がなくても自分で何とかするしかなかった」

「奴隷商人なら商品は逃がさない。自由になるなら、自分で自分を買った？ いや、まさかね」

「やっぱりお利口さんは違うね。でも、そう。まさしくそれをやったんだ。」

寝ている男たちのポケットから少しづつキャップを集めた。5年かかったけど、ようやくキャップを奴らに叩きつけてやった。あいつら、顔色も変えないでお前は自由だって言って荒野に放り出してくれた」

「まだなにかありそうだ」

「当然。追手がすぐに差し向けられたんだ。」

商品が自分で客からキャップをくすねて自由を買った、なんて言いふらされたらたまらないってね。こっちもそうなることは予想していた。だからわざわざ危険だって言われてた場所に逃げ込んで追手を誘い込んだんだ」

「計画を立ててたんだな、賢い」

「少数のスーパードミュータントがいた。そいつらは武器も持たずに逃げる女じゃなく、武器を持った奴らに襲い掛かっていった。少しだけ隠れてから、戻って生き残った奴らをこの手で殺したんだ。これでも追われないと安心したよ」

「そして自由を手にした？」

「違う。終わりじゃなかった。そう思ってしまった。」

大声をあげて泣いているつもりだったけど、実際は逆で怒りまくってた。武器を手にしたら、残る仕事も片づけなきゃいけないって思った」

まだ地上に残されたわずかな光が、暗い目のケイトを浮き彫りにする。

「家に帰ったんだ。あいつらはまだそこにいた。」

信じられないだろうけど。鍵のかかった扉を思いっきり何度も蹴って、罵声も浴びせてた。だからもう中にいる2人は逃げててもおかしくなかったのに——」

「そうじゃなかった？」

「そんな時だけ神様は願いをかなえてくれたんだ。ショットガンを手にした怒れる娘が扉を蹴破って入ったまさしくそこに！あいつらは震えていた」

「……」

「撃ったよ。弾をはずしたりなんかしない、2発で終わらせた。で、わかったんだ。」

これで本当に自分は終わったんだって。なにもなかった18年、奴隷としての悪夢の5年。それが私の人生の全部だった。ただそれだけ」

「終わったというなら、なぜまだ苦しんでいる、ケイト？」

「だよね。親を殺した自分がどんな顔をしてたかなんて、もう思い出せない。わからないよ。」

こっちはただ、ケジメをつけたかった。そしてわたしはやりきった、満足はしてる。でも思い返すと不安になるんだよ。自分もつと別のやり方があったんじゃないかって。怒りを言い訳にして、簡単で最悪のことをやってしまったのかもって。それが自分を、より哀れにってしまったんじゃないかって考えちゃう」

「それはわからない」

「本当に!？」

「方法は確かにあったかもしれないが。ケイトに選べる選択肢は多くはなかったと思う。」

自分に必要なことをしたことは間違いじゃない、よくやれたと褒められることだ。でも誰もがケイトと同じ選択をするとは言いきれない。そして違う選択がお前を安心させることはなかったと思う。苦々しい結果しか残らなかったのは残念だ……」

「自分をほめるだつて？そんな風にいわれるなんて思わなかった」

「本気で言ってる。ケイトには才能もあるし、勇気もある。だから信頼してる。つらいことでもこうやって話してくれたことも嬉しい」

「記憶がないくせに女を喜ばせる方法は知ってるみたいだね。なんか想像してたよりも悪くない感じがするよ」

わずかな笑顔、なかなか見せないからかわいいと思うが。すぐにそれも別のものになる。

「ボスも止められないんだね」

もう隠しきれていない憎悪をみられて眩かれてしまう。

わかってる。でも僕にも選択する余地はないのだ。真つ白な記憶は奪われたのなら取り戻したい。さらに奪いに来ると言うなら、許したりは絶対にしない。

「止まる理由がわからない。知りたいとも思ってる」

「ならもう少しだけつきあってあげる。やってることは馬鹿げてるけど、あんたはキャップを持ってて払いも悪くないからね」

すっかり夜になった森は陰鬱さを増す。だが、ここにある光でそれを恐れることはない。

デーマは自分が集中しすぎて聞き間違えたのかと思い、もう一度目の前に立つ友人のひとり——不安そうなフアラデーに「すみません、もう一度お願いします」と言わなければならなかった。「だから、商人が来たんだ。例の外から来た、大量に買い付けていったらしい」

「——ああ、それはよかったですではないですか」

「なにがいいんだ、デーマ」

「あなたが不愉快に思う理由がわかりません。私も商売には疎い方ですが、我々との間で正しい取引がされたということは決して悪いことではないはずです」

「違う、君は全く勘違いをしているよ」

「彼らとは話をしました。目的はわかっています、カスミのことでは彼らと結論を同じにしました」

「なんだって!?!いや、だから違うんだよ。そっちじゃない、そのあとに来た怪しい連中の事さ」

ファラデーは自分の不安が伝わらないことに焦れているようだ。

デーマの頭にはレオの姿が思い起こされたが、どうやらファラデーはアキラのことを言っていたらしい。

「確かにブルックスは満足してた。でも彼が取り引きした内容をチェックしてみたら、不穏なものを感じた」

「彼は危険なものは商品にはしません、そういう約束ですから」

「アルミ、銅、電子装置、ゴム。どれも普通の人間なら欲しがらないものばかりだった」

「彼らは武器を使いますし、生活に新しい動力源を得ようと思っただらそういうものが必要でしょう。あなたは心配し過ぎです」

「やっぱりあの島の外から来た連中は危険かもしれない。港のそばにおかしなものを作ったのも、彼らだった」

ファラデーは優秀な人造人間の技術者ではあるが、デーマへの——いや、アカディアへの忠誠心の高さが時にこのようなわずかな変化に動揺してしまうことがあった。

自信をもつて大丈夫だと繰り返し伝えれば、彼の不安などすぐに消えてくれるだろう。

「取引したいと申し出てきた人間との最初の取引がうまくいったから、彼らは危険?まったく話になりません。

落ち着いて、冷静になって。よく考えればおかしなところはどこにもないとあなたにもわかるはずです」

「いや、でも——」

話しているところにいつものごとくむっつり顔のチェイスもやつ

てきた。

「話がある」

「チェイス！見てわからないのか!? デイーマと僕はまだ話している最中なんだがっ」

「緊急の、報告がある。すぐに終わる」

「わかりました、チェイス。報告を聞きましょう」

「――例の、受け取りに失敗した人造人間の彼はダメだったと知らせが来た」

「そうでしたか。残念です……しかしチェイス、あなたの失敗ではありません。気を落とさないでください」

アカディアを指してたどり着けない人造人間の運命は過酷だ。

だからこそ必死に腕を伸ばしてくる彼らを、こちらからも腕を差し出すことで守ってやる。だが時に手が滑ったりなどすれば、次のチャンスはないことが多い。

「ん？ちよつとまで、チェイス。それはなぜわかった？」

「だから今言った。知らせが入ったんだ」

「誰がそれを調べたのか、と聞いてるんだ。お前はここの警備ですつといた。まさか港の潜入者に調べさせたんじゃないだろうな!」

新しい不安をアラデーは見つけてしまったようだ。

「そんなことはしない」

「ならどうしてわかったんだ!」

「先日ここにやってきた、人間のひとりが知らせてくれた」

「なんだって!？」

「アラデー、静かに。チェイス、どういうことですか？」

少し話に興味が出てきた。

「男に話しかけられたんだ。色々あって、たまたま話題になった」

「あいつらはここに来たばかりだったんだぞ！君は警備担当としてっ」

「アラデー！チェイス、続けて」

「探しに行けなくて困っていると言うと助けしてくれると言われた。結果を出して失望させないなどとやたら自信ありそうだったから、期待

せずに頼むとだけ言った」

「彼は期待通りの結果を出したというわけですね」

「デーマ、そうじゃない！チェイスはたったそれだけで人間を信じただけが問題なんだ」

「私はチェイスは間違っていないと思います。それに結果は出たのでしょう？」

ところで報告とはどのようなものだったのか。私にも聞かせてください」

「調査結果、だと言っていた。

港から逃げ出した後、あの廃墟の中でずっと隠れていたらしい。ところが長くいたせいで運悪くトラップパーに見つかつた。残されたものから特徴と人造人間の装置を発見したから間違いないだろうということだ」

「そういうことでしたか。繰り返しますが、とても残念です。ありがとうございます、チェイス」

会話を切り上げ、まだ不満そうなフアラデーと自分の仕事に戻るチェイスをみるでもなく、デーマもまた自分の作業へ戻る。

集中力を取り戻すデーマにはもう、フアラデーの不安も、チェイスが救えなかつた仲間になれなかつた人造人間のことも残ってはいなかつた。

騒がしい港からこつそり抜け出したスモール・バーサの表情は厳しいものだった。

先日より、港の子供たち——孤児たちに接触を繰り返す存在とこれから対面しなくてはいけない。ポケットの中の折り畳みナイフを握ることで何度も確認する。

互いを守りあうしかない港の子供たちは、大人たちの前では沈黙して従うことを強要される。

だがバーサはそれをしない。自分を主張し、相手を引かせるためな

らナイフを振り回し、自分たちは放っておいてくれ。近づいてくるなと警告もする。

その姿に恐れた大人たちは影でバーサを狂っていると噂しているが——それで子供たちが守られるなら別に構わないし最悪の事態になってもしようがないと覚悟はしている。

そんな彼女でも、気分屋の港の大人たちから離れられない。

いつものように店先で面白くもなさそうな顔で客を待っているブルックスの前を通り過ぎようとすると、いきなり呼び止められた。「最近、お前のところで見える子供たちが外に出ているのはなにかやってるのか？」と言われた。

めったにないことがおきると人は信じてしまいうらしいと言うが。

バーサには少し心当たりがあった。

廃墟の町の中をすすむのは嫌だった。

そこを満たす霧からは死の匂いを感じ取れそう。するとあの港はただ死を前にその時が来るのを待つ老人たちを連想し、まだ子供と言われる自分も生きることができないのだと思ひ知らされてしまうから。

噂では最近、ここに隠れていたトラッパーに誰かが襲われ食べられらしい。

だからバーサは皆に外に出ないよう注意もしたのに、彼らはバーサに隠れてこんなところをさまよっている。

——霧が狂わせているのさ

埒もない考えが頭をよぎってしまった。

狂っていくのは大人たちだけだ。自分たちは違う、子供はひとりでは生きてはいけない。

覚悟を決めた。

次に家の中に飛び込むと怒鳴りつける。

——何してるの！

——それを置いて、家に帰れっ

目に飛び込んできたものが想像とは違い。子供たちは床に寝そべり、与えられたコミックを読み散らかしながらニコニコと楽しげだったことに安堵した。でもバーサの厳しい声と表情に変わりはなかった。

急いでここから帰さないといけない。

すぐに「やべ」「バーサだ」「ごめんさい」と本を放り出してバーサの前を抜けて家を飛び出していく少年たち。だが、全員ではなかった。

「ね、もうちよつとだけ。もうちよつとだけいいでしょ？」

「帰れ。港の外に出てはダメだって、教えたでしょ」

「マンタマンの12号なんだよ。悪い叔父さんに騙されて大変なこと——」

「それを置いて。帰るの！」

少年は未練たらたらで聞くつもりはないようだが。バーサも入口の脇に立ったままそこから動けない。

ここが唯一の脱出口なのだ。

一歩でも中に入り、少年の手をつかんで本を手放させ。言うことを聞けと空いた手で張り飛ばしたい衝動は耐えなくてはいけない。ここに来たバーサはひとりなのだ。

家の中に深く入れれば、それがネズミモグラの罠となつて自分達の退路を失うかもしれない。

悲しそうな顔で哀れを誘おうとする子供にバーサは心の中では「はやくここから逃げてくれ」と繰り返し返すが、願いはかないそうにはなかった。

フツツ。

乾いた笑い声がして、それまで黙って動かないでいた。汚れのない恐ろしく真っ白なスーツ姿の男が口を開く。

「まあまあ、そう怒らないで。彼らはここでただ私のコレクションを楽しんでいただけなんですから」

「でも終わり。もう帰るから」

「バーサ！」

「彼の気持ちも考えてあげましょう。ああ、そうだ——」

スーツと同じくらい真っ白な帽子の下から危険な誘惑の言葉が紡がれていく。

「マンタマンの12号ですか。『悪は我が前に倒れ行く！』それがマンタマンだ。お魚と話せるだけと嫌う人も多いが、君はなかなかのツウのようですね。将来は立派な海の男になれそうだ」

「そんなのはどうでもいい。さ、帰るの！」

「そんなに怒鳴られたら彼もつらいでしょう。ああ、そうだ。そのコミックが気に入ったというなら君に“譲ってもいい”、かな」

止めることはできなかった。

男の言葉に少年の顔こそ悲しげなままだったが、内心では喜んでいたのは明らかだった。

そして彼は素直に喜びを爆発させる。「ありがとう」の礼もなく、1冊のコミックをしっかりと胸に抱きしめたまま、脱兎の如くバーサの前を駆け抜け出ていってしまう。一瞬のことでバーサは動くことができなかったのだ。

廃墟の家の中に無言だが、緊張の空気はそのまま残っていた。

バーサは動けない。いや、もうここから出ていけないかもしれない。心臓がドクドクと早鐘をうつ。この沈黙は永遠に続いてほしいが、そうはならない。

白いスーツの男——サカモトは柔らかな笑みを変えないままバーサに話しかけてきた。

「おやおや、彼は帰ってしまいました。あなたの希望通りだ」

「……私も帰るわ」

「ではご一緒しましょう」

「なんであんたなんかと一緒に！」

「それはあなたに証人になってもらうためです。あの少年が、私のコレクションでもある商品を盗んだ、その目撃者として」

「なんで私がそんなことっ」

「やりたくない？」

「当然でしょ」

「なら、港の代表者の前でそう証言してみればいい」

「島の外の奴らの話なんて、この島じゃ誰も信じたりはしないよ。あきらめな」

「どうでしょうね。なかなか難しい問題だ。嫌いな島の外から来た商人と、手癖が悪くなった親のいない子供の言葉。港の大人たちはどちらを信じると思います?」

負けだ——考えるまでもない。

このまま強気を通して「間抜けなあんたは笑われるだけよ」と挑発することもできる。だけどそれでもこいつがあきらめなかったら?

祈るしかない、奇跡が起こることを信じないといけない。

港の大人たちが味方をしてくれなければ、待っているのは最悪の展開だ。相手が子供でもそれが盗人なら島の大人たちには容赦しない。仕置きだといって動けなくなるまで殴られて、つばを吐きかけられ、動けなくなったところで港から放り出される。なんなら海に放り込むかも。

そしてバーサまでもが証言を——あの少年をかばおうとしたと見られたら。

弟を含めた全員に連帯責任があると言われたら。

これが目障りな港の子供らを排除するチャンスだと大人たちが考えていたら!

「あのコミックを買う」

「本気ですか?」

「買うわ」

「150キヤップ」

息をのむ、殴りつけられたかのような衝撃にめまいを感じた。

バーサの全財産の10倍以上の値だった。

「ふっかけるつもり?」

「ご存じないのでしようがね。正当な値段です」

「嘘だっ」

「マンタマンはボストンでは人気がなく、リーフはあまり出回っていないかった。普通はそれで高い値が付けられるものですが。繰り返し返

しますがお魚と話せるだけのマンタマンは人気がないのでこの値段ですむのです」

もつともらしい話だが、バーサにそれを崩せるような材料は何もない。

だがここで決着をつけなければダメだ。

「哀れなものですよね。自分を一番愛してくれる親がいなくなった時点で、そんなものはもうこの世界のどこにもないと理解しなくてはいけないのに。」

勝手に自分の都合のいいことが起きる。そんな未来が自分にはまだあると考える。卑怯と愚かさに年齢は関係ありません」

「なにがしたいの？」

「あなたに助言しているんです。あの少年はさつき自分の未来を決定したのだ、とね。」

人は変われない。あの少年もあなたが嫌う大人たちの仲間に入れない愚か者です。こちらが少年に好意を見せる理由は？それがわからない。賢い君が、そんなものにつきあってもしょうがない」

「見捨てろって？」

「先日、港で君らと話した時。君には強さ、賢さ、優しさを持っている女性だと思いました。」

あそこには負け犬しかいませんが、その中で君には見どころがあると思いました。だから今回も賢く振舞うことで自分と助けた子供たちを守ればいい。そうでしょ？」

サカモトが——男が何を言っているのかわからなかった。

でも気持ち悪い、それはわかった。こちらの味方をしているようにいて、実際は苦しみを伴う判断を下すバーサを騙って蜜のように舐めあげて楽しんでる。そう思った。

「ああ、そうでしたね。弟さんのこと、覚えてますよ。守るのは同じ親のいない子供ばかりじゃない。」

あなただけの本当の家族が港にはいる。彼を苦しめたり、捨てたりはしたくないはず」

バーサの心が痛む。

彼女の弟は——普通とは少し違った。昔、医者が何かつぶやいてたのを聞いた気もするが忘れてしまった。

なんとかしたい、してあげたいとは思うが。キャップがないので医者に診てもらうこともできず、薬もない。自分が世話する以上のことは何もできていない。

「なにかがおこって港に彼がひとり残されたらどうなるでしょうね？今の君のように、子供たちを集めてなんとかやっていける？」

「やめて！」

「……」

「わかった。わかったから」

どうするかはもう心の中で決まっていた。

それは嫌だけれど、本当に嫌だけれども。他に方法がない、覚悟しなくちやいけない。

「キャップは出せない。でもあの子は許してあげて」

「泣き寝入りをしろ？本気ですか」

つばを飲み込む。

これから自分が口にするこの嫌悪感から体が震える。だが同時に、ポケットの中で握りしめていたナイフから力を抜いていく——。

「私を好きにしている。何でも言うことを聞くわ」

「おやおや」

「でも！奴隷として売られるわけにはいかない。弟を置いてはいけないから……ここで終わらせて」

「注文を付けるわけですか。強気なのはいいですが、今の自分の価値で150キャップが相殺されると考えるのはうぬぼれが過ぎると思わないあたりが傲慢だ」

何も言えない。

でも全部は奪わせない。だからポケットの中にまだ手は残してある。

「ダメだと言っただら？」

「150キャップはない」

「……ま、確かにキャップはないでしょうね。他の方法をで妥協点を

さぐるのがいいかもしれない。ところで、少し世間話でもしましょうか」

「え?」

バーサは混乱する。世間話?今するの?

「今日の港はどうですか?」

「どう、って?」

「力を抜いて、なんでもない話です。ここに来る前、なんかざわついていたのを見たのでね。それがトラブルでなければいいな。そんなことです」

「よくわからないけれど。そうね、ちよつと騒がしかったかな」

「ああ、やっぱり」

「あなたと同じ外から来た人——」

「誰のことを言っているのか知りませんが。別に知り合いじゃない」

「とにかくその人達が来て、キャプテン・アヴェリーに『キャプテンズ・ダンス』をするとかなんとか」

「キャプ?——それはなんですか?」

「よくわからないけど。言い伝えみたいなやつ。武器をもって危険な場所で夜中から朝まで生き残れっていう」

「なるほど、なるほど」

サカモトはただ重複して首を縦に振っていただけだったが。

バーサにはそれが動揺を隠そうとしているようなしぐさに感じた。いや、気のせいかもしれない。

「彼らは——その人達はこれからどうなるんです?」

「さあ?よくわからない。キャプテンが誰かを何人かつけて今晚にでもやるんじゃないかな」

「おかしなことをしたがる人もいるものですね」

言いながらサカモトは立ち上がる。

入口そばの壁の前に立つバーサの退路を塞ぐ——。

「覚悟はできているようですが。あなたも私にはわからない決断を下しました」

「考えは変わらない。仲間は、子供たちは守るの。お互いに」

「あの愚かな子がこの先の未来であなたを救ってくれるといいですね。でも私はそんなことはない」と忠告しておきましょう」

サカモトの腕が肩に置かれ、指がバーサの顎を持ち上げた。

夜、めずらしく国立公園案内所の入り口にパイパーとディーコンが並んで立って居住地の中を眺める。

数日という時間がすぎて陰気なだけの廃屋には明かりがともった。見張り台や足場が追加され。防衛用のターレットや街灯も動いている。もうまったく別物となっていた。

「いい味がでてきてるんじゃないか？ここも」

「まあ、悪くはないよね。というか、自分がこれをやったのけたっていうのが少し驚きかも」

ディーコンの誉め言葉に指先を傷だらけにしたパイパーはまんざらでもなさそうだ。

不思議な満足感を持っていた。これまでは記者として人々に訴えてきたが。今回は何も考えずにただ行動した。

いい経験ができたと思うし、もしかしたらあのアキラは自分にも学ぶチャンスを与えてくれたのかもしれないとすら思う。居住地を立ち上げるといふものはやってみると大変で、あの若者が連邦でこんなことをいくつも同時にやってのけたなんて驚くしかない。

同時に、決して高くない自己評価の空白欄に悲しいランクが書き込まれてしまった。あのケイトよりもさらに自分が不器用な女だとわかってしまったのだ。

乱暴に誰かをぶち殺せる女は、金づちの振るい方も資材の扱い方も上手かった。信じたくなかったがそれが現実だった。

「作業は今日まで、なんだって?」

「うん。なんだかんだで人が4人くらい来ちゃったし。ブルーも新しい入居者へのメッセージを発信しはじめた。これからもっと人が増えるだろうって。なら、このことは彼らに早くまかせたほうがいい

い

ブルーとアキラ、2人はさきほど港から共に来た見届け人たちに囲まれて通り過ぎて行ってしまった。

彼らが望んだこととはいえ。今夜、彼らは化け物の巢に踏み入って地獄を覗き込むことになっている。なのに彼らを助けるためにここに来た友人たちは誰もついていくことを許されない。ただ無事に戻ってくることを信じて待つだけの夜。

ダルトン・ファームにはストロングが犬のカールと共に番をすることとで退屈な時間を、少しでも襲撃者と戦えるチャンスを得ようとし。パラディン・ダンスは浮島の砦へとアメリカ・ストックトンと共に戻った。

ロングフェローは今夜も通いなれた港の酒場で過ごすのだろう。心配で港までついていったケイトとキュリーもおそらくはそこにいるはず——今夜は誰にとっても眠れない夜になりそう。

駐車場の入り口に並ぶ街灯の下には、屋台といくつかの円テーブルと椅子がおかれ。

そのひとつの席にマクレデイがバーボンを抱えてうなり声をあげていた。彼にしては珍しいことに今日は昼間からずつとこんな調子なのだ。

そんな傭兵を半ば呆れながら見守る老探偵は、新たに設置された屋台……アメリカ商会最初の1号店をまかされた空腹のチャーリー・ランキンと話している。

彼はデューコンらが注文したりスの串焼きを器用な手つきで焼いていた。

「——おいしそうだ、手際がいいんだな」

「死んだ親父は漁師でしたから。食うものはお前が作れるようにしろと、教え込まれた」

「ほう、あんた漁師だったのかい」

「それが違うんですよ。ランキン家は6代前の爺様がこの国に来て、その息子の代にこの島に来たと聞いてます。それから漁師をやって

いたのは親父の代まで」

「なにかあつたのか？」

「ある日、爺さんが親父を港においてひとりで船を出して戻らなかつたんです。」

このあたりの海にはレッドアイって伝説の化け物があるってハナシなんです。そいつがいるって場所の近くで船の残骸が残されたのが発見されました」

「そりや気の毒だったな」

「俺は別に……本当に気の毒だったのは親父です。同じころに母を亡くして、爺さんが船を道連れにくたばつちまつて。もう俺を漁師に出来ないって落ち込んで酒浸りに」

「そうか」

「悪いことは続くもんで。親父もあつという間に体を壊して、霧の中に消えちまつた。俺も追いかけるように港を出て霧の中へ——でも、へへへ。不思議な話でまだこの通り死んでない」

「漁師になりたかつたのかい？」

「どうでしょうね。実は爺さんたちが漁師をしてたのは本当なんです。別の商売もしていたって聞かされて」

「ほう」

「今のこの島じゃ考えられないですが。ここに来た観光客？そういう奴らに釣り具を貸し出したり案内していたりしてたそうなんですよ」

「それはツアーガイドってやつじゃないか？」

「ああ、そんな感じのこととも言ってたかな。でもなにもかもがおかしくなつた後じゃそんな商売はやれなくなつちまつた」

「つぶれたのか？」

「それがここからが面白いことに商才のあるご先祖が“釣り学校”って名前を変えて続けようとしたそうなんですよ」

「なんだい、そりや？」

「海も川も、山さえも危険になつちまつて。漁師は親から子へ技術を教えるって伝統があつたんですが、それが難しくなつたんですよ。漁に連れ出した子供を失つたって親が多かつたとか。」

そこでそのガイドってやつをやめて、漁師にさせたいって子供らを集めて授業をやったんだとか」

「なるほど。そりやおもしろいな」

「ただそれも爺さんが潰しちまったんだそうです。あんまり覚えてないんですが、どうやら爺さんは家族以外の付き合いが好きじゃなかったらしい。覚えが悪いと殴る蹴るを繰り返し、喧嘩が絶えなかった。」

自分の親がやってた学校が嫌いだったんでしようね。ひい爺さんが死んだら家族には何も伝えずにいきなり『やめる』といって店を畳んだ。船があれば漁師ができるって言ってね」

「随分と乱暴なんだな」

「親父はだいぶ恨んでましたね。結局、その船も爺さんが沈めて漁師もできなくなつた。爺さんが嫌われていたんで、誰も助けてもくれなかったんですよ」

チャーリー・ランキンの苦い過去を聞きながら、ニックは串焼きがいい色に変わっていくのを見つめていた。

「今日はなんていうか。自分の人生で一番いい日になりました。」

親父も生きてりやこの俺を見て喜んでくれたんじゃないかなあ。船のない俺は漁師にはなれないが、この島で店をやれるチャンスをもらえた」

「うん、いいアイデアがある。」

明日アキラが帰ってきたら、今の話を聞かせるんだ。きっとこの屋台に看板をつけてくれるんじゃないかな。

『ランキン・レストラン』？それとも『ランキン・グリル』とかもいいだろう」

「ああ、そうなると嬉しいですねえ」

店主のほっこりした笑顔を見ながらニックは思う。

この島でもこうやって奇跡は起こり始めた。だからこそあの2人は生きてもらわなくちゃいけない。今夜、彼らがやろうとしていることなんて本当はやるべきじゃなかったんだ。

（止められなかった自分が腹立たしいぞ。でも、生きて帰ってくれよ。

お前達ならそれができるはずだ)

「デーコンとパイパーが戻ってきた。」

「なんだ。まだ傭兵はうめいているみたいだな」

「あああああああー」

「今夜は仕事がなくて酔いたいらしい。放つて……」

ニツクの言葉が終わる前にマクレデイは抱えていたバーボンの瓶を机に軽く叩きつけた。それは怒りがこもって重く音を響かせた。

「あの糞つたれの俺のボスは、今夜くたばる。クソ化け物に食われてクソになるんだ。俺のおいしい仕事は今夜、俺の知らないところで終わっちゃう。ふぎけやがってあの野郎。俺がぶっ殺してやる」

「なんだそりや。まるで古女房のセリフだぞ」

「ケツ」

連邦では雇用者と傭兵の関係で友情なんてものは育つことはない。

現実的に雇う側にとって傭兵は壁であり、捨て石でしかなく。傭兵は立ちふさがるトラブルを力で排除できなければ死ぬか、無能者として価値がないと次から雇ってもらえなくなる。

だがアキラも、レオもそうじゃなかった。

おかしな話だが友人になれた。雇用主のいうことだから従ったことだが、大きなことができたし。誇らしく思ってきた。だからこそ今、マクレデイはやるせなくて怒っているのだ。

「一緒に見送りに来ればよかったのに。声はかけられなかったけど……」

「これは。パイパーとは思えない驚く発言だ」

「自称美人記者は、ちゃんと女性だったらしい」

「黙ってる、役立たずども。ねえ、マクレデイ。そろそろ飲むのはやめな、ケイトじゃないんだから。明日は地獄だよ?」

マクレデイは瓶を煽る。

「俺は——傭兵だ。あいつみたいなのとはできない。」

でもよ、あいつがこんなクソみたいな島に来てやるっていうなら、俺はその隣でやるさ」

「なにそれ? あんたもしかして、ブルーに居場所をとられたって思っ

てるの?」

「そんなことは言ってるねえ、ブス!」

「ブスツ!」

「俺はマジで怒ってるんだっ。あの、あの大馬鹿野郎。」

アイツは俺の気も知らないで。あのキャピタルから来たクソB.

O. S. のナイトも殺せて言いやがらなかった!」

まさかの不満、まさかの告白だった。

マクレディは何とダンスを殺すつもりだったらしい。危険な告白にパイパーは大口を開けて驚き、ディーコンらは口の中で「おおつ」とつぶやく。そして不幸なラーキンはなにも聞いてないと黙って焼けている串をまだ焼き続ける。

「あんたそんなこと考えてたのっ!」

「黙れっ。あのクソ・パワー・アーマー着てるだけで理由は十分だ。なのにアキラの奴、俺じゃなくてケイトの馬鹿やキュリーに任せやがった!」

「なるほど、そういうわけか」

ディーコンの最後のつぶやきは小さなものだったが。そこにいた友人たちには気に入らない響きを持っていた。

「あいつがのんきに自分をB. O. S. のナイトだと名乗るダンスにお前を近づけなかったのは。お前からアイツを守らせるためだったのか」

「そんなのわからないじゃない」

「いや!俺にはわかったぜ、あのクソ・アキラはな。俺を連れてあのアホを森の中で終わらせるべきだったんだ。なのにキュリーの調査から俺を外して奴を使った」

「ちよつと落ち着きなよ」「そうだ、落ち着け」

「あいつはレオが好きだ。みんなそれを知ってる。」

だから俺もわかった。あいつはレオが認めたあのクソ・ナイトをいい奴だって思ってるってな。この俺が、キャピタルにいられなくしたクソのB. O. S. であつてもってなあ!」

ディーコンは思った。マクレディはただダンスに八つ当たりがし

たかっただけだ。

だが確かに真実をついているようにも思える。てつきりパラディン・ダンスとやらの品定めに周りの友人たちを使って見定めていると思っただが、そうではなかったわけか。

「ハンツ、わからなかった答えがわかってうれしいか。このクソハゲ」「なんだなんだ！今度は俺に絡むのか？」

「すました顔で自分は別、ってフリをしているてめえの気持ち悪さをこっちも我慢してるって。そろそろわかれて言ってるんだよっ」

「ちよつとマクレディー？」

いきなりの飛び火にパイパーは焦るが、男たちは気にしないらしい。

「俺がなんだ？」

「アキラのクソは言わないが、俺はわかってる。お前が友達ヅラでここにいる理由なんてな」

「俺は仲間じゃないって言いたいのか？」

「そうは言っただろうが。お前もあのクソB・O・S.と同じで腹になにかを隠しているのが気に食わねえ」

さすがに限界だな、ニツクは不幸なラーキンを救ってやることにした。

「店主、その料理は焼き過ぎだ。もう焦げてる」

「すいません。やり直します、ちよつと失礼」

皿の上に焦げた串を並べると、ラーキンは建物の中へ飛ぶように去っていった。

「これでいいだろう。だが、ぶちまけるなら大きな声はやめたほうがいい。全員、冷静にな」

「フンツ」

なんせここに居るのは人造人間、レールロードのエージェント、危険な傭兵に正義の新聞記者だ。うっかりおかしなことを口走るので聞かれて怖がられては、ここにいないレオ達に迷惑をかけることになる。

「マクレディー、それでディーコンがなんだっていうのよ？」

「パイパー。俺の言った通りつてだけだ。アイツらが凄いことやつてるそばで、ムカつく顔が並んでる。それがB・O・S・で、そいつがこの負け犬だ」
レベルロード

どうにも埒が明かないな。ニツクは考える。

緊張感が無駄に高まつていて、このままだと笑えないことが起こつてしまいそうだった。

「じゃ、ディーコンが教えてくれ。マクレデイが騒いでいる理由がお前にはわかるか？」

「あのパラディンが上からの命令でここにいるのと同じで。俺もレベルロードの命令でここにいると言いたいのだろう」

「そうなのか？」

「——否定はしない。お前達も俺には友人だ、アキラを通してな。」

だから普段なら否定するが。わかってもらいたい、俺にも事情がある。アキラにもそれがあるようにな」

「それだとぼけたつもりか？」

アイツはお前ら負け犬の味方だった。レベルロード 何度も力を貸した、だがお前は何をやった!？」

「……」

「お前らはあいつを助けなかった。それどころかコベナントを奪った。」

しょうもないお前らとは別の負け犬のいたコベナントじゃない。アイツが作ろうとしたコベナントのことだ。あいつはハンコツクに頭を下げて医者をまわしてもらい、あそこを病院つてやつにしたいと言つてた。病気に苦しむ奴らを助けてやれる奴らを集めるつてな。そこならあのキュリーも喜ぶはずだつて。

それは間違いなくありえたことだった。

だがどうなつた？言つてみるよクソハゲ野郎」

人造人間たちはレイダーをそこに導いた。そして逃げていった。

「——不幸な出来事だつたと思つてる」

「お前らがよこしたゴミくずが。人造人間 なにもわからないくせに恩を仇で返しやがつた！」

医者は死んだ。助けてやろうとした病人とその家族も死んだ。そこにいる正義面したクソ記者と、あのミニッツメンのクソ・ガービーはアキラにざまあみろと言いやがった！あいつの気持ちも考えないでなっ」

「……マクレデイ」

「俺たちは知ってる。そうだ、連邦はそうだった。このクソつたれの世界はいつもそうやってひどいことしかしねえんだよ。アキラはそれを学べば楽になるんだ。なのにそれをしねえ。だからここにいて、俺はあいつが好きだ。死なせたくななかねえ」

いつものクレバーな傭兵の顔はそこにはなかった。

悔し涙を流す若い男がくやしがつっていた、自分の尊敬する友人を思ってる。

「お前ら負け犬レールロードはあのアカディアってやつが心配なんだろ？アキラがコベナントの件で立場を変えたんじゃないかってお前らは思ってるんだろ？」

「レオとアキラがどうするかわかるっていうのか？」

「レオは知らねえ。多分まだ決めてないんじゃないか。でもアキラは——潰すかもな」

「おいおい、穏やかじゃないぞ」

「カツコつけるんじゃないぞ、クソ探偵。すでにあそこにいるあんたの同類が島をぶっ壊そうって計画をしてるっていうじゃねーか。それが事実ならあの2人がそれを見逃すわけがない簡単な話じゃねーか」

意外に鋭い酔っぱらった傭兵の指摘に、ニツクも黙らざるを得なくなる。

たしかにまだデイーマたちの思惑は明らかにされていない。可能性だけで言えばマクレデイは間違っていないかもしれない。

デイーコンはいつもとは違う、重い響きのある言葉を口にし始める。

「確かに——俺や俺の組織は疑ってる。徐々にアキラやレオとは違う部分も多くなってる。

ここに来てアキラからはレールロードには戻れないかもしれないと言われた。それは今の俺たちにとってそれは、あまりうれしくない返事だったことは否定しない」

「そうだろうよ」

「マクレディ、お前がさつき言ったことは間違っているが。正しい部分もあった。」

俺たちは知りたい。アキラはあのコベナントで変わったのか？」

「変わるか、ハゲ。アキラはレイダーが嫌いだ」

「？」

「あいつは力で奪う奴を嫌うが。そういう奴らを逆にデスクローみたいに八つ裂きしたがるクソ野郎だ。」

レイダーならそいつの運命は決まってる。人造人間かどうかは関係ねえ」

「そうなるのか」

「俺の仕事はたいていがレイダーの頭を吹っ飛ばすことだ。そしてあいつはレイダーを殺すのが大好きだ。何か問題があるって言うなら教えてもらいたいね」

さすがにこれ以上はまずい、と思った。

「さあ、そのへんでもうやめろ。今夜は楽しい夜にはならないんだ。だからってそれを理由にお互いで吐き出しあっても楽しいことにはならないぞ」

「そうだよオ。B. O. S. だのレールロードだの、人造人間とかインステイチュートとか言ってるぞ。おかしなうわさが流れてブルーたちが困るかもしれないじゃない」

「まだ足りねえ——」

「なら、明日2人が戻ってきた後で。冷静になってからやれ」

「あいつらの葬式でって？」

「コラっ!!」

「俺たちの友人はそうはならないと信じてるんじゃないのか？」

「飲みたいなら朝まで付き合ってる。どうせ今夜は祈って眠れやしないだろうしな。お前が酔いつぶれるだけの酒もたっぷりある」

燃え上がった感情の炎は勢いを失い、小さくなっていく。机に置いた酒瓶によっかかると立ち上がりかけていたマクレデイはノロノロと座りなおした。

「それもあのクソ・アキラの野郎が悪い。」

俺がアル中に一晩でなれるようにしてやるとかなんとか。バーボンにウィースキー、ビールをしこたま用意していきやがった。アイツは殺す」

「ふむ、急にお前と気が合う気がしてきた。アイツは殺す、俺もまったく同感だ」

「ちよつとちよつと、アキラは別にいいけれど。ブルーはそこに入れないでよね」

パイパーはそう言っただけで焦げた串に手をはすと口に持っていき――確かにこれは酒がないと食べられそうにない味がした。

「暴走してった2人の馬鹿に乾杯」

ニツクの言葉に4つのコップが音を奏でる。

串の味は最悪だったが、酒の方はできたばかりなのに悪くない出来だった。

キャプテンズ・ダンス

夜に入ると少しの間だけ雨が降り、気温も下がり、霧が深くなる。男たちはその前に休憩地点にたどり着くと、木々の間に体を寄せ合って焚火の代わりに草や土を集めてそれを燻すことで暖をとる。

「時間まではここで待つ。今、ひとり下見に行つて様子を見てくる」「わかった」

朝、港に来た2人がキャプテンズ・ダンスに挑戦すると高らかに宣言した。

キャプテン・アヴェリーは困った顔で「あんたたち、本気なのかい？」と繰り返し尋ねることであきらめさせようとしたが。騒ぎを聞きつけて集まってきた港の若者、特に武器屋のアレンなどは面白がつてやってみるがいと騒ぎだしてしまい。アヴェリーもついにあきらめた。

かわりにアヴェリーは信用できる男を3人指名し、必ず儀式にのつとつて正確に努めるように言い含める。

これは神聖な儀式であり。だからこそ命がけで、誠実さが必要なのだ。何かの間違いで島の者達が勇者を喰わらおうおうとしたとなれば、その恥はこれから永遠に未来に語り継がなくてはいけなくなる。

港の男たちもそれは十分に承知していた。

しかし同時に、島の外から来ておかしなことを言い出したこの2人——レオとアキラの様子をじつと観察し。いつ逃げ出そうとするのかを期待もしている。

なのに2人は冷静で、ロボットはただ浮かんでいるばかり。アヴェリーではないが、本当にこれから何をするのかわかっているのだろうか？

不気味な奴らだ——間違いなく明日の朝日を見ることなく死ぬしかないのだが。

こいつらはまだ本気で自分達ならやり切れると思っっているらしいことがもう、信じられない。

「——あんたらはわかっていると自分では思ってるだろうが。この儀

式について改めて説明させてもらう」

「……」「続けてくれ」

「深夜を過ぎたら移動する。俺たちはそれぞれポイントにわかれてあんたらを見守る。この儀式には制限時間があり、それは明日の朝日が地平線からひよつこり顔を出すまでだ。ここまではいいか？」

「ああ」

「途中でヤバくなれば……間違いなくそうなるだろうが、あんたらには棄権する権利はある。その時は俺たちは物見ポイントからそれぞれ援護してやるが、それしかできない。入り江に入つてまであんたらを助けたりはしない。悪いがこつちも巻き込まれて死にたくはないのでね」

「それで構わない」

「そうか、それじゃ続けるが——」

時間は20数時間ほど巻き戻る。

前日の朝、散歩と見回りを兼ねてロボットたちを連れたコズワースがゴミ拾いから戻ると。パイパーが彼の主人が自分を探していたと聞かされて慌てて会いにいった。

そこは壁で密封された部屋で、中央の机の上にはランプと地図。

アキラとレオは無言でコズワースを待っていた。

「すいません、外に出ておりました。何か話があるとか、お待たせしてしまいましたか？」

「いや、忙しくしていたのにすまないコズワース。来てくれて助かった」

「これが私の役目です、旦那様」

アキラが口を開く。

「予定では明日の朝3時に起床、港で宣言して夜にはキャプテンズ・ダンスに僕達は挑戦する」

「それでコズワース。君も今回だけは参加してもらえないかと思ってここに呼んだんだ」

「ああっ！ご主人様っ」

コズワースは歓喜の声をあげる。

「わたくしつ、再びこのような日が来ることを望んでおりました。大きな脚も、強力な武器も奪われてこの体に戻されてしまいました。ええ、ええ！こうなることをずっと信じておりましたっ」

「ああ、うん。それはよかった、コズワース」

「必ずや皆様をお守りしますっ。それで、今度はどのような装備をいただけるのでしょうか？」

「いえいえ、ないのならそれでも構いません！この非力な体でも立派に勤めてみせますともっ」

ロボットに感情がないだけでなく、ストレスもないはずなのだが。

コズワースはゴミ拾いに不満を持っていたらしく、妙に浮かれているようだ。仕方ない、アキラが困った顔で間違いを正しに行く。

「悪いけどコズワース。君の期待していることはおこらないよ」

「どういうことですか？」

「結論から言うよ。君にも来てほしい。ただし3本の腕はもちろん、両脇の2つの目はずす。あと言語機能も停止させてもらうつもりだ」

「なっ、なんですって!?!アキラ、本気なのですか」

「前にも言ったけれど君はもう触れない。新しい機能を増やすと回路に負担がかかる。長くメンテナンスをしないから、どこで不調をきたすのかわからない。君は人間に例えたら老人なんだ。こうして動いて、正常を保っていることすら驚くべき状態なんだよ」

「だからさらに奪うというのですかっ。ひどすぎるっ」

「今回限りだよ。でも理由はある、話してもいいけど。納得できないなら出て行ったほうがいいと思う」

「そんなっ、残酷すぎます」

冷静にさせたいのだろうがアキラの言い方は冷たすぎた。コズワースは混乱していた。

「コズワース、今回は危険な任務なんだ。それでも誰か連れていけないかと考えると、君しかいなかった」

「旦那様っ！」

「今の状態に不満をもっていることは知ってる。でも君を苦しめたいわけじゃない。必要なことを頼んでいただけなんだ。」

「今回もそうだ。私はアキラと行く——だが正直に言えば友人たち、家族の助けも欲しいくらい危険な任務だ。だから私は君に来てほしい。でもそれには君の協力が必要で、それができないなら、ただ断つてくれたらいいんだ」

「わたくしが間違っておりまして、旦那様。」

「そこがどれほど危険な場所であったとしても、私に出来ることがあると言つてくださるならこのコズワース。力を尽くさせていただきます」

「ありがとうございます。いつも言っていることだけど、本当にありがとうございます」

「やめてください、オホホホ。では早速計画を聞かせてください」

「こうしてキャプテンズ・ダンスに挑戦するのは2人と1台のロボット。」

レオ、アキラ、コズワースに決定した。

地図を囲んで作戦会議は始まった。

「どうやら実際につれていかれるのはこのレイバーンポイントの近くにある入り江というか、湿地帯らしい」

「レイバーンポイント？」

「元は小さな町で廃墟だ。今はトラッパーが住んでいて誰も近づかない。」

「おそらく騒げばここまで聞こえるだろうが、ここの連中は出てこないだろうとロングフェローは言っていた」

「この島には危険な場所しかないのでしょうかねエ」
コズワースは呆れている。

「朝に港で宣言すれば、午後には案内されて入り江に向かうことになると思う。ロングフェローの話じゃ入り江への安全なルートは2つ。島の外周に残っている旧道で北回りにむかうか。島の中央にあるアカディアから山林を抜けて反対側へ降りていくか」

「どちらも危険そうです。あんまり変わらない気がしますけど」

「私もそう思う。だがロングフェローのような島の人間にはそうでは

ないようだ。今の時期だとおそらく北回りにいく旧道だろうと言っていた。夜に来る霧の濃さから、山道だと動けなくなるそうだ」

「ということはここを朝出ても、また戻ってきて前を通り過ぎるわけですか」

「パイパーたちは怒っていたからそんな私たちを見送ってはくれないだろうな」

結局、強引に進める形になってしまったがしよすがなかった。いくつかの可能性を探ったが、最終的にアキラが「港の奴らを排除して、連邦から人を連れてくるでもいいですかね？」などと怖い目で言い始めたのであきらめた。

私がここでやりたかったことは、カスミやニックを失望させたくてやっていることではないのだから。

「時間まで近くで待機した後、深夜に入り江に入ると言っていた。

そこが今回の戦場となるんだが問題がたくさんある。まず、隠れる場所がなにもないらしい。アポミネーションはどこからやってくるのか霧が深くてよくわからず。中に入った後で逃げようとしてもぬかるみに足がとらわれて逃げ切れない」

「棄権しても戻ってこれない理由がそれでしようね。」

マイアラークは獲物を見つけると追跡モードに入る。そんな奴らに背中を見せたら、確かにマズい」

「それだけじゃない。持っていける武器も多くてはいけないことになる。

持っていけるならミニガンでもヌカ・ランチャーでも欲しいところだが、それだと身動きが取れないし取り回しが悪すぎる。入り江では使い物になるとは思えない。だが武器を厳選するということは——私たちが戦える時間は短い」

「なんだか聞いていると不安になる事ばかり。おふたりとも、本当にこれでもやるのですか?」

——やる

答えは変わらない。

「だから君に力を貸してほしいんだ、コスワース」

「それはかまわないのですが。わたくしはしやべることもできず、装備も許されてないのでしょう?」

「その代わりに偽装を施して君を改造したEDユニットに見えるようにする」

「ロボコ社製アイボットですね……」

「あくまでも偽装だから音声装置を封印する。無口で無感情なアイボットを演じてもらいたいんだ」

「それだけなのですか?」

「まさか!君は僕らのワイルドカード切札さ」

一瞬だがアキラの口にしたワイルドカードの言葉にうっとりする。

お手伝いロボットではなかなか感じることはない野蛮な響きと誇りのある言葉だった。

サカモトは港から戻ると自身の隠れ家にあるハンモックに横になっっていた。

今、この島の中で動き始める大きなうねりを彼は俯瞰するように心がけながら観察を続けている。

キャプテンス・ダンス。

なるほどアキラは面白いものを見つけてきたようだ。頑固で融通の利かない石頭たちを従えるには彼らのレベルで理解できることを証明してやればいい。それは簡単ではないが、効果的にやり切ることで最大の利益となって手元に戻ってくる。

まさに自分たち“小さな宝物”が選ぶやり方ではないか。

我ら無敵集団もおかしなことになってしまった。互いへの疑心、嫉妬、信用のなさを理由に貶めたりしなければこんなやつかいな事態にはならなかったのに。

そのミスは今も続いていて、盤石なはずの組織を壊しかねない危機を近づけようとしている。

「アキラの人的資産、フランク・J・パターソン J rは探偵助手とし

てダイヤモンドシティのニック・バレンタインと組み。アカディアのカスミ・ナカノの奪還の任務に行き詰った。

その打開策として……んふふっふふっ。島の環境から変化させる計画を立て。アキラはそれを承認した。なんですかこれは、まるで狂ってる」

そうだ、狂ってる——。

アキラは怒り狂っている、自分たちに対し憎悪をはつきりと向けてきている。

確かに組織は間違った決断を下した。

アキラの名を持つものとは思えず、キンジョウのおもちゃとして様子見といいながら廃棄しようとした。

邪魔なハンコックの右腕は彼とは親しい間だったが、彼の手で殺させた。

コンドウはアキラの人的資産であり彼は自分の友人とと思っている
フランク・J・パターソン Jrを襲撃し、失敗したが。間接的にこのことがアキラの怒りをさらに煽ったはずだ。

もはや両者に和解の道はなく、対決するしかないと思う。

だがそれをするにはできないだろう。この道を進めば、間違いなくこちらがアキラに“倒されてしまう”から。

今のアキラとフランク・J・パターソン Jrの連邦での存在感は、巨大な怪物のそれに近い。

おそらくだがケロググのことからあのインステイチュートも注目し始めているだろう。アキラの周りにはまだ彼らの影が見えてはいないが、インステイチュートが彼に興味を持って接触など始めればどうなるかわかったものではない。

「なのにごちらときたらひどいものです」

クロダ、キジマはコンドウの敵討ち、報復、メンツを保つと言いな

がら。
しかし彼らの願いはあのアキラが本物なら手合わせしたいという願望から来ていることをすでに隠せていない。気質的に仕方がないこととはいえ、彼らは彼らで理知的と思われたコンドウに出し抜かれ

たと感じていて。自分たちの感情を制御しきれてないことを気にしていない。

そしてもうひとり——観測者だ。

あの表情わからぬ性別不明のマスクマン。

だがその行動は怪しすぎて全く信用ができなくなっている。

アキラの回収には特に興味を見せず、その扱いにも口出しはしなかったのに。

彼が自我を取り戻して離脱を試みると最後はキンジョウと組んで追いかける執念を見せたが、逃した後はまたもや興味を失ったようになにもしようとはしない。

だが実際には搜索は密かに続けていて、アキラが自分たちにとって危険な存在へと変わろうとしていることをちやんと理解していた。

その観測者はこの島にはいない。

アレはまたもや興味を失ったようにふるまい。連邦で“組織のため”の仕事をひとり黙々と続けている。

自分のようにクロダやキジマを止めることにも積極的ではなかった。あれは最低限の仕事として自分につきあつたにすぎなかった。

やはりまた興味を失ったというわけか？

それとも偏執病パラノイアだったとでも？

それは違う、サカモトはそう考えている。

観測者は“小さな宝物”のバランスを見守る役目を担っている。

アキラがいない時代は、誰かが頭一つ抜きんでることで優れていると示し。アキラという空席と名前を奪って座ろうと野心を持つことを許さなかった。誰よりも早くそれを知り、手段を択ばずに邪魔をして誰よりも叩き潰して回った。

結局その野心を捨てられずに観測者を敵とした愚か者は過去にはいたが。

当然のように思惑のすべてを破壊され、劣った存在だったと言い訳もできずに名前と力、姿さえも奪われ。侮辱として与えられた黄色のコートと帽子で隠れるようにして連邦から去らねばならなくなった。「……そういえばその愚か者は戻ってきましたね。なぜかアキラを外

に出そうとした、そんなことが出来るはずもないのに”あれは成功するかもしれない”とどこまでやれていた」

連邦のことを気にしすぎていて、アキラのことを半ば放任していた過去の自分をしっかりつけてやりたい。

あの一件もあまりにも突飛なことだったので深く考えずに処理してしまっただが、フランク・J・パターソン Jrによるケログ殺害も含めて違和感の残る事件ではなかったのか？

——捜査をする？

それは無理だ、残り時間があまりにも少なく。リソースが足りていない。

「サカモトの仲間はいまや”小さな宝物”ではなく、彼ひとりだけ。コンドウを失い、観測者から無視され、クロダらに期待しても無駄だ。今日はもう、夢を見ずに眠りたい。」

どうせ明日の朝が来た時、あのアキラが死んでくれればトイレに詰まった糞尿を大量の水で押し流すようにすつきりした気分で連邦に帰れるのだが。

作戦会議で想像した通り、見届け人の男たちは入り江の端に位置する高台や草むらにひとりで隠れ。アキラとレオ、無言のコズワースには入り江の中央目指して進むように指示して去った。いよいよ戦闘開始の時刻が迫ってきている——。

「霧は思った以上に濃い、ここで暴れても彼らには見えないんじゃないか?。」

「実際の僕らの戦闘を見る必要はないのでしよう。騒ぎが終わって戻った後で、彼らが証言するものは霧の中に見えた幻影ってことです。でもそのほうがいい、話を勝手に盛ってくれるでしようしね」

「我々の目的と一致するというわけか、なるほど」

「それじゃ、そろそろコズワースに働いてもらいましょうか」

私たちは歩くのをやめるとその場にしゃがみ込み。アキラはピツ

プボーイになにがしかのコマンドを入力する。

するとこれまで無言のままついてきたコズワースがフラフラと近くを行ったり来たりを始めた。

「コズワースには外装と一緒に拡張センサーをつけました。これで半径50メートル内の地形を把握できます。その外側にいる見届け人からもこちらが視認されているかどうか（わかります）」

「どれくらいかかる?」

「数分で終わります」

「ではその間に準備をしておこう」

「ですね」

私は当然のようにまずR-91アサルトライフルからチェックする。

アキラから受け取ったそのままではあるが、使う弾倉だけは大きなものに変えて増やした。

つづいてM79グレネードランチャー。

40ミリグレネードを発射でき、複数の目標にダメージを与えることはできるだろうが。今夜相手にするマイアークは甲羅が固く、やわらかい部分に当てないと効果は薄いし。爆発の威力がありすぎるので距離が離れてないと使いにくい、派手さがあるので騒げるという利点がある。

予備として切り詰めたショットガン。

だが2発しか装填できない。あくまでサブウエポン。接近戦用のガントレットもあるので多用することはないだろう。

アーマーは身動きがとりやすくなるようスターデイ・コンバットアーマーを中心に揃えたがヘルメットはない。

軽装ではないが、マイアークの巢の中心で騒ぐには少し心もとないう防御力なのは認める。だが、兵士時代の経験から動けないまま死ぬ兵士を見てきたせいで、重装備にはあまり魅力を感じないのだ。

アキラは今回、腰の後ろにあるホルスターにクライオピストル。刀というか、シシケバブと呼ばれるものも腰に下げていた。

驚くのは次のコンパウンドボウと1本の専用の矢。使えるのか

と聞いたら、本人は飛ばすだけでいい矢なんですとだけ答えたので何か仕掛けがあるのだろう。

ポンプアクションのショットガンもそういう意味では珍しいだろう。

アキラはずっとハイテクや重武器を好んでいると思っていた。

だが最後の取り出したものはテスラライフル。

これについては私は顔を曇らせざるを得ない。

「フム」

「やつぱり、これを使うのはダメですか？」

「難しいところさ。有用性は認めるけどね、そいつは範囲攻撃用の武器で、私が君と背中合わせにでもなっていないと攻撃されてしまう」

「ええ、ですから——」

「帯電仕様の装備にしてある、わかってるよ。」

ただやつぱり、完全には威力は殺せないということもわかっているだろう？ 君に撃たれるのは想像したくないし気分も良くない」

「わかってます。考えて使うようにします、むやみには使いません。約束します」

戦闘中の混乱と興奮の中でその約束を守り続けることがどれほど困難なことか——嫌、彼はもう誰かに守られる子供ではないし。私もりもずつと賢い若者なのだ。信じなくては。

2人のピップボーイからピピッと電子音でコールが入る。

周囲をふらついていたコズワースも戻ってきた。

「周囲の環境情報の収集が終了しました。ピップボーイの地図から確認できるはずですよ」

「色で表示されるんだね……これによると今夜は気温は低め、土の状態は悪くなさそうだ。でも水たまりは多いし、走り回るのはつらいな」

「地形情報はV・A・T・Sの起動からも確認できます。こまめに発動させてください」

「了解だ」

アキラはコズワースに近づき、彼の“中”から大量のステイムパツ

クやグレネードなどを取り出した。

「持つてきてくれてありがと。これは僕が使わせてもらおう。」

ああ、レオさんは地雷から地雷設置場所を決めてください。コズワースは情報を受け取ったらすぐにその場所に向かって残っている地雷をばらまいて。マクレデイに指示された時みたいにやればいいだけだから。

改めて言うておくけれど、始まったらレオさんのそばにいるように。情報を更新してピップボーイに送るのが君の仕事だよ。

目はひとつしかないから視野が狭くなってる。センサーの情報を利用するんだ。戦いが終わる合図となるフレアは指示を受けたら使えうんだ。どうなるかわからないから、ちゃんと逃げ回って」

コズワースに返事することはできなかったが、わかっておりますというように一瞬だけ動きを止めると。

再び2人から距離をとって離れていく。

「さて、それじゃ最後の準備だ」

「狼の肉があつたのでこれを餌に誘い出します。誘い出しはしますが――」

「なにかある?」

「もちろんですよ。僕らの装備では朝まで持ちません。夜明けには死にます。でもルールにある通り、僕らは大物を釣り上げて倒せればそこでやめてもいい」

「短期決戦――戦場でこのセリフが出ると、大抵はひどい目にあわされるが多かつたな」

「キュリーがマイアラクの感覚を狂わせて共食いを促進させる方法を見つけてくれました。餌を食べさせると興奮状態にさせますが、倒すと体内から別の匂いを放つ仕掛けです。これで効率よく大型のアポミネーションを呼び出します。ですが2つ問題が」

「たつたそれだけかい?もつとあつてもおかしくない酷いミツションなんだけどね」

「餌の匂いにかなりの数のマイアラクがやってくるはずですよ。でも、すぐには攻撃しないで。用意した餌を食べ終わってから倒さない

と意味がありませんし。こちらに気づかれると餌に興味を失うかもしれない」

「それは確かにマズいな。気を付けるよ」

「もうひとつは——釣り上げる大物が問題です。」

何が釣れるのかは僕たちの運によります。最悪、先日戦ったフォグ・クロウラーってこともあるかもしれない」

「地雷を用意するのはそのためだ。とはいえ、確かにあれがここに姿を見せないことを祈っておいた方がよさそうだ」

私は終始軽口で応じ、アキラは不敵な笑みを浮かべてる。どちらも失敗するとは考えてない。強がってるだけかもしれないがそれでいい。

「大物を仕留めたらコズワースに合図を。彼がフレアを発射して見届け人たちを呼び寄せます」

「そして彼らが解体し、ここから退却する——では開始だ」

アキラは背負っていたバックの中から大きめの袋を取り出した。中身は見えないが嚴重に口をとじられているところから餌につかう狼の肉だとわかる。

「前方に少し行つたところにばらまいてきてください。匂いも強烈なんで、服に匂いがつかないようにお願いします」

「わかった」

ライフルを地面立てたまま、レオは袋をもって駆け足で離れていく。

代わりにアキラはテスライフルをもってそれを起動させた。レオが指示通りに出来なければ、おそらくいつぞやよりも多くのマイアラークたちが列をなしてここに姿を見せることになるはず。

そうなつたらさっそくレオさんには悪いがこいつを使うことになる。

港から来た見届け人たちはそれぞれ別れた場所から入り江の様子

を探って待っていた。

(さっさと始めちまえよ。どうせ死ぬんだからさア)

霧の中で安全に隠れているとはいえやはり不安なのだ。しかも最悪、明日の朝まで隠れ続けなくてはいけない。

さっさと始めてさっさと死んでもらう。それこそが一番の――。

スンッ

霧に変化はなかったが、空気がきしむような違和感ある音がした気がして何かが変わった。

そして静かでも聞こえてきたのだ。あの固い物が激しくこすりあうとともに貪られる血肉が貪られている音、離れているはずなのにこの音が聞こえるなんて。あの入り江にはどれだけいるというのか。

いや、まさかっ!?

もう殺されてしまったのか。

そんなことはないだろう。だって一発も撃ってない、何の抵抗もしなかった。ふたりで仲良く自殺したというわけか？

困惑する彼らの視線の先に青白い光が――生まれたての新星の輝きが見え始めたのはそんな時だった。

なにかが上昇していく駆動音。輝きもさらに強くなっていく。

次に霧の中で輝く星から青いエネルギーの奔流が迸ると、その前方で蛇のように一帯に広がり、のたうち回る。その動きにあわせるようにしてマイアラークと思われる悲鳴のような、ギリギリ、キーキーという音が複数聞こえてきた。

――始まったんだ

続いてタタン、タタンと断続的な射撃音が続く。

入り江にマイアラークを誘う匂い、彼らのあげる悲鳴、彼らを苦しめる武器の音。

静かな闇の中で静かに活動するアポミネーション達の興味を引いた。

潜っていた地面から姿を現すのはエビの姿をしたマイアラークハ

ンター。

舗装された道路から投げ出されてきたような、半分を引きちぎられたような大きな車体の中から、よろりと出てくる爪や足。ヤドカリを思わせる巨大なハーミット・クラブ。

そして入り江よりもさらに深い水の底で動き始める巨大な影――。

だがそれらは全て、2人の計算の中にあつたもの。

でも時に戦場は気まぐれに計画を狂わせ、ピンチを招く。

――ミロ！人間ダツタゾ

地元に住むロングフェローは近くにいるトラッパーは近づきやしないだろうと太鼓判を押していた。

だが、恐れを知らぬスーパーミュータントまでがここにくるとは想像もしていなかった。

最初のマイアークが餌を食し、変化する匂いに気が付いたスーパーミュータントは。そんな“おかしなこと”をするのは弱い人間たちだろうと予想してここまで様子を見に来てしまったのだ。

ひとつの餌が多く、獲物を一カ所に集め、入り江を舞台に生死をかけたサバイバルトーナメントが始まった。

スーパーミュータントたちにとつてもこの遭遇には期待していなかったのだろう。

地形を利用して地面に半身を隠すだけで、奴らが撃つ弾はまったくかすりもしない。しかしだからといって安心して反撃することもできない。援護する今も互いの距離を潰し、相手は接近戦に持ち込もうとしてくるからだ。

とりあえず近づく奴から片付けなくてはならないが、全員は無理だろう――と考えていると、アキラが止める暇なく飛び出してしまった。

同時に、ピップボーイにコズワースから送られてきた警告音が鳴り。私はすぐにV・A・T・Sを起動する。

――なるほど、餌の効果は抜群だったわけか

こちらとスーパーミュータントらを半包囲するように近づいてく

る存在が複数感知した。

私たち2人だけでこのすべてと戦うことはできない。なのでこの状況を利用し、効率よく立ち回って生き残らなくてはならないわけだ。

こちらはたった2人と1台。そして武器は少なく、どちらも倒れては意味がない。

そんなことが可能か？できるわけがない。そんな寝言は戦場を知らない元気な子供の妄想だ。戦場には暴力しかなく、血は必ず流れる。

——ブルー、今度こそ死んじやうよ？

——お前さんを止められないんだな。死ねば止まれると、そう考えてはいないかね？

——どっちにせよ、だ。あんたのやってることは俺にはわからんよ、若いの。

パイパー、ニツク、ロングフェロー。

彼らの言葉がこの土壇場でより苦みを増して味をかみしめる。

後悔はしていない。だが進むなら、この道しか私にはない。

いや、“私たち”にはないのだ。

走り出すとアキラの脳裏にあるのはただ「殺す」という2文字だけ。

その前に考えたことはもう消えていた。ただ殺し、ただ守り、ただ生き残るだけ。

向かいあう形となったことで両者の距離はすぐに狭まり、スーパーミュータントらは持ち替えた殴り殺すための木材や危険なハンマーを振り上げ歓喜の声をあげる。どうでもいい。

ショットガン最初の2発で、片方の頭は吹き飛び。もう片方は上半身を真っ赤に染めると「ガア」とうめきながら足が止まった。構わずその後ろから出てくる相手の足を次に狙っていく。とはいえ頭では狙うと考えていても射線の角度もあってただの勘撃ちになってしまうが。こういう時こそV・A・T・Sが生きてくる。

大木の幹のようだった片足が3発の銃声が鳴り響くたびに皮膚が

吹き飛び、肉がそげ、骨が砕かれてついにはちぎれて水たまりにぼちやりと落ちる。何をされたか一瞬理解できなかったか、倒れてからイタイ、イタイと泣きわめき始めた。

もちろんそんなこと知ったこっちゃない。

すれ違いざま、そいつにもう変に動いてほしくないのの後頭部に銃口を向け一発。これでやかましいのは静かになった。

とりあえず先発組で残ったのは最初に仕留めそこなった上半身を真っ赤に染めた奴だけ。

狙いがうまくいかずに下にそれていた。片目は潰したが、口元、首、胸元と散らばって傷をつけることしかできなかった。

残弾はまだ2発残ってはいしたが、僕はショットガンのストックで数回殴りつけることで相手の戦意をくじかせ、武器をその手から落とさせた。

さらに相手の前に立ち、その頭を乱暴につかむ。

手に持ったショットガンをくるりと反転させ、呆然として半開きになった相手の口の中に銃口を突っ込んだ。

——ガガアツ!?

痛かっただろうし驚いたろ？でもそれが目的じゃないんだよ。

ジャケツトに手を突っ込み、新しいシエルを5本の指の間に挟んで取り出すと。上向きに露出したチューブマガジンに装填していく。

その姿があまりに情けなく映ったのだろうか。背後から撃つていたスーパードミュータントらが怒りの声をあげ、殺せと叫んでこっちに撃つてきた。

だがそのほとんどすべては、僕の前に立つ哀れな肉盾の背中をえぐるだけで僕は無傷だ。

最後の一発を装填し終わると、口から引っこ抜いてやるためにムカつくそいつに札がわりに思いつきり前蹴りを食らわせてやる。

よろよろと後ずさりした後、まだいいマトだと思われているのか背中を撃たれ続けているそいつはうなだれ、膝をついてから倒れ伏した。

僕は少しだけ後退しながら、クライオ銃に持ち替えてその時を待つ

た。

DI Aの技術で防御に問題はないとはいえ、レーザーもライフル弾も当たればダメージがある。耳元をかすめる弾も多いが、数発は腕や足に当たって少しだけよろける。

変化した餌の匂い、死肉、そして新しい戦いと流れる血。

自分たちの支配地でそんなことを勝手にやられて怒らない奴がどこにいる？

霧の向こうから第2波が到着したのはまさにこの瞬間だった。

さらに多くのマイアラークとマイアラークハンターの混合軍。

そして怒り狂ったスーパーミュータントはたいして考えずに新しい敵にも攻撃を仕掛けてくれる。

群れは大きな群れと小さな群れに分かれた。

片方はアポミネーション同士でやりあってくれるが、僕らが高みの見物することはない。

こういう時、M76グレネードランチャーが単発式であることが恨めしく思えてしまうがそれは贅沢というものだ。

私は別れてこちらにむかってくる小さな群れの、一番密集していると思われる場所に向けてグレネードを放っていく。

——命中率：62%

2分の1は悪くない数値のはずだが、今はもっと高くあってほしい。

何体かは粉々にして宙に吹き飛ばしてくれたが、全部の足を止められはしなかった。

離れていたアキラはさっそく複数のマイアラークに囲まれている。

そして私は霧の向こうから何かが飛んできて近くの地面にばらまかれたことを確認した。

——マイアラークハンターはな、少し厄介だ

——あいつらはカニどもと違って目がいいらしい。こっちが遠くでも見つけてくる

——そして攻撃してくるのさ。体内から液体を吐き出す

——そいつを浴びようなんて考えるな、お若いの。楽しいことにはならん

これがそうなのか。

なら、アキラを守るためにもハンターたちの視線を私に向けさせなければ。彼がひとりですら攻撃にさらされてしまう。

見届け人全員の体が震えていた。

恐怖もあるが、興奮もしていたのだ。

ただの伝統、無謀な度胸試しのはずのそれは。

入り江のちよつとした大戦争として彼らの目の前で、彼らの存在を知らずに続いていた。覇気を失い、絶望を冷笑しながら楽しむ墮落した日々しか知らない海の男たちには、それは戦争ではなく。サバイバルトーナメントでもなく、2人の人間が命を燃やして勝利をつかもうとあがいている姿として映っていた。

感動していた、歓喜していた。

思わず声をあげて応援したくなって、必死に自分の口を両手で塞がなくてはならなかった。

彼らは島の外から来た、面倒な奴らなんかではなかったのだ。人が人に想う、優しく、決断力があり、希望を持ち、そしてなにより強かったのだ。

そうじゃない、まだ証明は終わっていない。だから今度は彼らには強くあつてほしいと願い始めた。

彼らこそがキャプテンにふさわしい。外の人間？そんなものはどうでも良いじゃないか。

自分たちはここで見ていることしかできないが、彼らには勝ってほしい。

彼らの勝利は、もしかしたらこの島に大きな変革が訪れたという知らせであるかもしれないと、そう信じることもできるかもしれないのだから。

絶望したくなかった。

海の男らしく、堂々と生きていたかった。

だがそれをとりもどすのにはもう、自分たちの力だけではもう無理だ。

レオもアキラも戦場に混沌を呼び込むことで生存率を高めようとしている。彼らは連邦という恐怖のルールの中でもそれで生き延びてきたが。

だからといって混沌は常に彼らの味方をするとは限らない――。

ショットガンは投げ捨てた。振りぬいてくる固い拳骨の嵐でふたつにおられたら使い物にならない。

囲まれてタコ殴りにされたせいで、肋骨は何本かいったし。内臓はひっくりかえってダメージを伝えてきてる。

でもこの程度で終わって驚きだ。手足は引きちぎられず、骨にヒビすらはいることなくそこに残っている。そしてまだ動かせるのだから！

腰の獅子樺武シシケバブを抜きざま一撃、片足を引いて上段から一撃。

マイアラークはそれを受け止めようとしたわけではないだろうが、爪の間に刃を挟みこむ。そのまま握りつぶそうとでもいうのだろうか、そうはいくものか。

火を噴かせ、力を加えるとメキメキと音を立てて刃が爪の間へわけいっていく。

感じているであろう激痛に口から泡を吹き、残る片手で狂ったように打ってきたし。周りもそれを助けようと殴ってくるが関係ない。

邪魔だあ！

その叫びと共に相手の右腕を文字通り半分にスライス。

怒りに任せ、返す刀で左の奴の顔に突き刺し。手を放してピストルを抜くと反対側の奴の眼前から撃ちまくってやった。

ハアと息を吸おうとしたが、代わりにこらえていた喉の奥から血があふれ出て口から塊を噴き出し。せき込んだ。

この時、自分が今感じている怒りが普通のものではないことを理解

した。あの感覚が——怒りに震える手の中から変化を促すなにかが動き出している気がした。

慌ててステイムパックを投与する。

とりあえず感情を押さえつけ、出血に気を付ければ大丈夫なはずなのだ。

もしも万が一、正気を失って自分が化け物になったとしても。コスワースやレオさんにはあの秘密兵器のことを伝えてある。あれなら例え自分が制御できなくなったとしても——。

動きが見るからに遅くなつたマイアラークの腕を払いのけ。

反対側で顔に刺したままだった刃を引き抜くと、またも同じ顔に突っ込んでから乱暴にひねるようになって引っこ抜く。マイアラークはぶるぶる震え続け、2つに割られた顔がポロリと地面に落ちると中身を眼前にさらけ出した。

再び燃料が投下されたエンジンのように僕の体が熱くなり、咆哮をあげると空いた方の手を顔のないマイアラークの中へと突っ込み。やわらかいものをつかんでから引きずり出して、確認もせずになんかぶりついた。

歯の間にあふれる苦味、汁、マイアラークの血の味。どれもマズいが、心は少し穏やかになる。のまれるな、まだまだ戦える。

状況は終息へと向かいつつあるように思えた。

マイアラークとハンターの群れは人とスーパーミュータントによつてあらかた狩りつくされようとしている。ハーミット・クラブは傷つくことを嫌つてその場で車体の中に戻ってしまった。残るのは人間とスーパーミュータントだけ？

ところがいきなりスーパーミュータントたちは悲鳴を上げると粉々に砕け散つて全滅してしまう。

霧の中から現れた巨大な2つの影、マイアラークのクイーン達。ハンターよりも凶悪な毒が大量にふりまかれ、弱っていたスーパーミュータントらにとどめを刺したのだ。続いて最後のマイアラークを倒したレオとアキラもそれに気が付く。

このまま両者が正面からぶつかり合えば、先ほどの光景が繰り返すことになるだろう。

「アキラ!!」

「レオさん、アレを使ってください。片方ずつやるしかない」
最悪の敵だが、これをこそ待っていたとも言える。

夜明けが迫る入り江に太陽が2つも生まれ、闇に消えていった。

見届け人たちは確かにそれを見た。地上より立ち上る赤い炎に彩られたキノコ雲。そして苦しむ巨大なモンスターたちの影を。

真つ赤に輝くフレアが霧の中で燃え、夜空から地上を照らす。

挑戦者たちから終了を意味する合図のはずだったが、まだそこには戦いは残っていた。島の男たちにとつての夢のような光景は一転して悪夢へと転じたのか。

武者震いは恐怖のそれにかわり、すぐには誰も動くことはできなかった。

朝、太陽はいつものように地平線から顔をのぞかせたはずだが。この島は今日も雲がそれを隠している。

だが港には早朝から落ち着かない空気が流れていた。

キャプテンス・ダンス

その成功の可否について、誰もが知りたがっていたが。誰もそれを口にすることはなかった。

ニツクとロングフェローはそんな空気の中、パラソル付きのテーブルに向かい合い。沈黙を続けている。キュリーとケイトは昨夜、あの若い友人が気になつてるのだろう。この港で騒ぐことなく小島の砦で体を休め、すぐに北の新しい居住地へ戻ると言っていた。

「……おかしな話なんだがな」

「ん?」

「俺はあのおかしなふたりはもうとつくに死んじまったと信じている。これまでもみんながそうだったんだ、あのふたりだけは特別なんてことはない。だから今頃はもう、クソつたれの腹の中で消化されち

まったことを悼まなくちゃならん」

「その通りだ。彼らは間違った決断をした。あんたは正しいと思う」
「ふん、本気でそう思ってるのか？気が付いたんだが、お前さんはプラスチックの顔でもよく表情を変える。」

実は俺はそれとはまったく別に、あのふたりならもしかしたらと考えて困っているのもわかってるんだろ？」

「——ああ、その通りだ。それもあんたが正しい。」

俺の新しい友人たちはああいうことを平然とやる。そしてやりきってしまう。でもそれだけじゃ足りない。次のことを探し始める。どちらもまるで兄弟みたい。口をそろえてな。その繰り返しだ、まさに今回はその最たるものでただの狂気だよ」

「だが？」

「そう、だが今回も彼らは帰ってくる気がする。素直に死んでくれるような奴らじゃない」

「嬉しくはないのか？」

「嬉しいよ。だが、あんたにはご愁傷様ですと言わなくちゃならん」
「なぜだ？」

「あんた達が本土とよぶ連邦は、もう去年の連邦とは全く違うからだ。別世界だ。そうなった原因の多くは、俺はあのふたりだとずっと考えてきた。おそらくこの連中はそうはおもわないかもしれない。俺の見るところ、あんたもそう考えるようになりつつあるように見える」

「それはどうかな」

「ビビることはないさ。あんたも俺と同じようにレオを気に入っているんだろ？彼もそう思ってる、そういう魅力が彼にはあるんだ。彼が理由をつけて始めたあんたが呆れていることだって。おそらくはあんたのためにやってる」

「この死にかけの爺イのためだって？そりやおかしな話だ」

「そうでもない。だが別に俺の考えを押し付けたいわけじゃない。あんたの好きに考えたらいい」

「ふんっ」

ふたりはそうやって再び無言となるが。港の門の方角が騒がしくなってきた。

しかし老人たちは動こうとしない。彼らにとってはその必要はないとわかつていたから。

見届け人たちは全員が真っ青の顔で帰ってきた。

ただし彼らは持ち切れないほどの肉を抱えて。

「キャプテン・アヴェエリー。信じられない話だけだな、これでも全部は持ち帰れなかったんだ」

「まさか、嘘でしょ？」

「自分も見えてきておいてなんだけど、信じられない。そうだ、あいつらやりやがったんだ」

——新たなキャプテンたちの誕生だ！

歓喜の笑い声に雄たけびが、曇り空でも港は激しく揺れていた。

鳴動する連邦

連邦——。

パラデイン・レーンと81のナンバーが入ったV a u l t スーツを身に着けた商人、ライリーを先頭にした部隊は目的としたルカウスキーズの缶詰工場が見えてきたあたりで一旦足を止める。

「アレか？」

「そう。あそこにいけば、まだクソつたれのセオドア・コリンズがいる。逃げて無けりやね」

「案内に感謝する——これ以上の案内は必要ない」

「でしようね、もう帰るわ。ああ、セオドアのクソ野郎に『あの世にキャップはもつていけない、そうおばあちゃんから習わなかったのかい』と言っておいて」

ライリーの言葉に、レーンは困惑の表情を浮かべる。

「それが案内した理由？必要なこと？」

「あいつのせいで商売を台無しにして、信用も失った。払い戻しにも応じなかった。銃の腕に自信があれば自分でカタをつけたいけど、もうそんな余裕もない。でも今回はあんたたちがやってくれそうだったから」

「商売はできなくなるのか？」

「ギリギリよね——やっかいな時期に大きなトラブル。自分の力で何とか出来ると思ってV a u l t から地上に出たけど間違っていたみたいね」

「……確実に約束できる話ではないが。君も知っている私の友人は、ミニッツメンの將軍と親しい間柄だそうだ。レオと呼ばれていた、彼を頼ってみてはどうだろう？」

「ミニッツメンね、確かに最近は勢いがあると聞くけど。名前を出しただけでなんとかなるかな？」

「その友人——パラデイン・ダンスの話によると彼は善人で、頼れる友人たちも多いと聞いている。私も会ったことがあるが、その通りかもしれないと思った。なんなら私の名前を出してくれてもいい、役に立

てるといいのだけれど」

「ありがとう、美人のナイトさん。それじゃそつちも気を付けて」

笑顔と共に吹っ切るようにして背中を向けるライリーに「我々と契約するという手もある」と声をかけたかったが、レーンはその衝動を飲み込んだ。そんな権限をレーンは持っていないし、果たせない約束を口にするのはパラディンとしてやってはならないこと。

何よりこちらも彼女と同じ。今回のことで大きなトラブルに見舞われているのだ。

「よし、2人は私と共に中へ。残りの4人は、外から工場の周りを見ろ。」

エルダーより容疑者、セオドア・コリンズはできるだけ生かして捕らえろとは言われている。だが抵抗するなら容赦はするな」

「了解」

レーンだけではなく兵士たちはにわかに殺気立ち始めた。

ライリーの言葉は決して他人事じゃない。この時期に大きなトラブル、ダンスは任務で留守で、おかげでレーンがこの任務をやらされる羽目になってしまった。

数日後。

プリドウエンでは2週間ぶりにパラディンに会議に集まるよう指令が下った。

パラディンたちは部屋に入ってくるが、その数は以前よりもずっと少なく。椅子は半分近くが空席だ。

「……となり、ルカウスキーの缶詰工場オーナーのセオドア・コリンズは死亡。後はスクライブ・ネライアとスクライブ・フォスターの調査から全容が明らかにされました。」

セオドア・コリンズ——容疑者は、以前は自分の育てたモールラッド。またはローチ牧場、マイアラーク牧場などと表現する相手と取引をして缶詰を売っていたようです」

ウエツ、誰かはわからないが小さくない声上がる。

「ところが最近、ミニッツメンの活動が活発となり。これらの業者と

の取引が消えました」

「なら！なぜそいつは多くの缶詰を売って、用意もできたんだ」

「はつきりとした証拠はありませんが。代用品でまかなおうとした結果、工程にトラブルが発生し。なぜか大量の缶詰が作れるようになった、とだけ記録されていました」

険しいマクソンの顔がさらに厳しいものとなる。

「セオドアは原因を究明しなかったのか？」

「そうです。しかし、何が原因だったのかはわかっていたかもしれない。なぜなら彼はすぐにバンカーヒルの商人たちに取り引できる缶詰が大量にあると知らせ、手元にほとんど残さなかったようなので」

「結論を聞こう。セオドアとやらは何をしたと思う？」

「――パラデイン・レーンとの捜査の途中、工場内で“ひどい状態”のフェラル・グールと遭遇しました。」

人の形は残してはいましたが、あのキャピタルのケンタウロスに似た症状を発現させたフェラル・グールです。サンプルは回収、スクライブ・ネライアが培養を開始して、解析結果が出るにはまだ時間が必要です」

「缶詰の中身はグールだっていうのか!？」

「パラデイン・レーンと相談の上、危険であると判断して調査はそこで切り上げました。」

推測ですが、容疑者が無理に作業を続けたために。工場内のどこかが破損、地下をまだ徘徊し続けているフェラルがそこから地上を目指そう入り込んだことで。大量の缶詰を吐き出すことになったと思われます」

事件は1カ月ほど前にさかのぼる。

ブリドウエン内で突如として兵士たちが倒れ始めた。

彼らはひどい嘔吐と下痢に苦しみ。中には頭痛、腹痛、幻覚を見るまでに悪化。

防疫の観点からすぐにナイトキャプテン・ケイドの指示で調査が開始された。

元がアメリカ正規軍から派生したB・O・Sでは、当然だが飢え

や渇きに対処する知識と実践が訓練にはある。

タフな肉体と精神を維持するために、強い胃もまた必要とされるものなのだ。そんな兵士たちがバタバタと並んで倒れたのだから、敵からの攻撃ではないかと疑う必要があった。

情報が集められると、事態はより深刻なものであることがわかってきた。

「どうやら任務中に回収された“地元の味”を兵士たちが艦内の裏市場に流し。個人的な楽しみとして口にしていた。その中に最近、地元の人から売りつけられた大量の肉の缶詰が人気となり。定期的にそれが原因だとわかったことでマクソンはパラディン・レーンに命じて外部からの調査を開始させた。

軍隊などでのこうした裏市場は兵士たちにとっての取引材料にもなる必要悪として認知されていたが。

こうした騒ぎが起こると厳しい取り締まりが始まってしまう。兵士たちの不満は高まり、殺気立ってしまう。捜査は迅速に、正確な内容の解明が必要とされていた。

レーンはさっそくバンカーヒルに向かい、調査の協力を求めるが断られてしまう。

代表のケスラーは噂から缶詰の危険性はあったのだらうと認めつつも、冷酷にそれを買う貧乏くじを引くのもまた商売だと言い切ってみせたからだ。

だが、以前に旅をしたとダンスから聞いていた元Vaunt居住者のライリーに会うことができた。

彼女もこの缶詰で大損させられていてセオドアを深く恨んでいたことで大きな進歩を見せることになる。

逆転からのスピード解決は喜ぶに十分値する結果ではあったが。事件の傷跡は深く残されてしまった。

「事件発生前、部隊の損耗は2割。大半が怪我人でした。

程度にもよりますがほとんどが長くかからずに部隊に復帰できる状態だったと言うことです」

ケイドはそう口にする、次の行を読み上げる。

「ですが現在、状況はより深刻なものとなっています。

症状に苦しむ患者数は全体の4割をこえており。それぞれの部署での作業効率は悪化、連邦への調査も難しくなってきました。当然ですが士気の低下も」

「状況が状況ですが、エルダー。ここには出席していないパラディンたちの処分を——」

「待つてください、艦長！」

調べによれば缶詰を口にしたパラディンはいません。彼らは感染して倒れてしまったのです。それで処分は厳しすぎます」

「ああ、例のトイレの話か」

「プリドウエンと空港には共同のトイレがある。」

医務室に駆け込む前、症状に苦しむ患者たちは当然そこを利用して。今は患者用の簡易トイレを別に用意させて使わせている。

ケイドに止められてもキャプテンの考えは変わらなかったようだ。

「そうは言っても、この件だけで我々の活動は半分まで後退してしまっている。なんらかの綱紀粛正は必要ではないだろうか」

「プロクター・クインランの意見は？」

「はい、エルダー。スクライブをまとめる側からの意見としては、その必要を感じません。」

それどころか本音を言えば大助かりですよ。調査のたびに山のよいうな資料が入ってくるのに、スクライブはその数を減らしている。る。

大騒ぎになったとはいえ、食いしん坊へのおしおきより。資料の整理と人員の補充の方が遥かに重要です」

「プロクター・ティーガンはどうだ？」

「みつともない話ですなあ！」

地元の姑息な業者にしてやられるとはね。そういうのはプロの仕事ですよ、小遣いのキャップを握りしめた間抜けなカモがやることじゃない」

ティーガンの言葉にパラディンたちの怒りが集中して向けられるが。本人はどこ吹く風だ。

むしろこの場で憎まれることを楽しんでる風にも見える。

「私に言わせりゃね。その、一匹狼な商人。」

彼女を生贄にすることでこちらの本気を連邦の奴らに教えてやっ
たらいい」

「ちよつと待つてくださいい！」

ティーガンの言葉にレーンは怒りの声をあげた。

彼はあろうことかケスラーを詐欺のひとりとして裁いてしまおう
と言いだしたのだ。

「彼女は協力者であつて、我々に缶詰を売りつけた業者ではありません
ん！」

「そうだ。ケスラーだったかな。捜査の協力ついでに自分の恨みも果
たせたそうだから、そのままこちらの役にも立つてもらおうじやあり
ませんか。手元に転がり込んできた駒に新しい活躍の場を与えてや
るってわけです」

「そ、それはあまりに暴論だと思う。プロクター・ティーガン」

レーンに続き、パラディン・ブランデイスも反対の声をあげる。

「我々は連邦へ来た意義を思い出してほしい。我々は暴虐な支配者で
は——」

「そんな寝言はいつてられんですよ、パラディン！」

我々が地元の業者にだまされた、なんて噂はすでに巷に流れてる。
いや、必ずそうなるんです。ここで重要なことは、こうした“攻撃に
対して我々が何をしたのか”それだけなんですよ。

我々をコケにしたクソ野郎をぶち殺す必要があるんです。徹底的
にね。

ナントカいうのは死んだそうだが、それだけじゃ足りない。死体袋
がもういくつか必要なんです」

「滅茶苦茶だ！」

「カモにされたなんていわれたら、それこそ滅茶苦茶にされるのは
こつちなんだよっ」

「そこまでだ、ティーガン」

マクソンまでもが不機嫌になりかけていることを察知し、キャプテ

ン・ケルズは強引に議論を打ち切った。

その後、会議では建設的な意見だけを交わし。続きは後日ということとで解散する。

パラデインたちは退出したが、マクソン、ケルズ、ディーガンが残っていた。

——率直に聞こう

マクソンはケルズに問う。先ほどの会議では明かされなかった情報について。

ケルズの顔表情は変わらなかったが、口から出てきたのは驚くべきものだった。これまでの問題は消耗する武器とスクライブが問題であったが。防疫に失敗し、大勢が倒れたこと。闇市場を閉鎖するような措置を行ったことで兵士たちの間に不満が高まっている。

そのせいで短期間の間にこの組織の力は半減、どこかで決着をつけないとこのまま低下を続けるかもしれない。

続いてマクソンはディーガンを睨みつける。

この男はまさに先ほど野蛮な解決法のひとつを口にしながら、その問題の重要性を暗に見せびらかさうとしたことに怒りつつ。しかしそれこそがこの男の価値であると認めなくてはいけない、腹立たしさを堪えなくてはならなかった。

「エルダーは先ほどの計画はお気に召しませんでしたか」

「好きではないし、不愉快に感じたな」

「でしょうなあ。だからわたくしめに”言わせた”のでしょう」

「……だが別の代案があるのだろ。今度はそちらを聞こう」

ディーガンの口元に笑みが浮かぶ。

「待ってましたよ、その言葉」「さっさとしろ」

「ええ、ええ。先に断っておきますがね。私だって優しくしてくれた若い商人の娘を血祭りにしろー、なんて本気では言いません。それは発表します、あの計画をさっさと実行してほしいですよ」

感情は見せなかったが、マクソンもケルズのように表情が消えた。

「居住地への略奪か」

「最後の手段、最悪ではありませんが必要なことですよ。我々は軍隊であって、それ以外ではないのですから」

「いきなり始めるといふのか」

「まだこちらにも余裕がありますからね。申し出るところからやりましょうか。『お前の土地を守ってやるからお互い協力しよう』とね。我々の力を認めさせるだけでいい。それで連邦の奴らもこちらがカモではないと馬鹿でも理解する」

「そんな簡単な話ではないぞ」

キャプテン・ケルズは不愉快さをあらわにして声をあげる。

「インステイチユートへの調査は大きな遅れが発生している。プロクター・クインランの言うように人を失い、多くの情報の山で作業が進まないのだ。ここに来てからずっと彼らはほとんど眠らない毎日をおぼしている。」

つまり人的ミスがいつ起こるかわからない状態だ。なのにさらに作業を増やせと?」

「ですがケイドも言っていたでしょ。病人は山のようにいて、治療にはキヤップも薬も必要。」

まだ在庫はありますがね。ヤバくなるまでなにもしないなら我々はレイダー共と一緒になって略奪ってやつに励まないといけなくなる」

「兵士の士気の問題もある。今の彼らでは——居住地の住人達とトラブルになるかもしれない」

「小さなことを気にしてどうするんです。せつかくパラディン・ダンスを外に出したのに、このチャンスが無駄にしたいんですか」

ティーガンはイスに深く沈み込みながら両手を振り回して言葉を続ける。

「我々は機嫌伺いをしにここにしているわけじゃない。」

ミニッツメンでしたっけ? あんなのもアトム教のイカレタ連中や寝言を口にする傭兵と変わらない。

ガンナー？ただのレイダーでしょ、我々が面倒を見てやるんだからどちらもインステイチュートと同じ。必要のないものです、さつさと全部片づけてしまいましょようよ」

「口が過ぎるぞティーガン！もういい、出ていけ」

「はいはい。嫌われ者は動物園の檻わりに戻りますよつと」

足取り軽く部屋からティーガンが退出するまで、ふたりは沈黙していた。

「エルダー……」

「ティーガンは間違つてはいない。同じ問題をアレは本人なりに解決しようと考えている。それはわかっている」

物資、人員の補充。

これは軍隊について回る問題なのだ。彼らの力——暴力を支えてくれる“市民”が絶対に必要になる。

だが、マクソンはこの連邦に来てからまだその答えを出してはいない。

「空輸計画はどうなってる？」

「——キャピタルから特に何の知らせもありません」

キャピタルを発つとき、残してきた仲間には今後の計画としてキャピタルと連邦を繋げられる大規模な輸送機の開発を命じてきていた。1年以内に数回のテスト飛行を行う予定だと自信満々に聞かされていたが、キャピタルからの良い知らせは全く聞こえてこない。

「プリドウエンよりも小型でスピードがある輸送手段は今後の運用には欠かせないもので、実現にはかなり期待できるという話であったが」

「そういうこともあります、エルダー。我々のキャピタルからの道程があまりに順調だったのでそう思えるだけなのでしょう」

「確かに今ならダンスはいない。ブランデイスは反対するだろうが、それは大した問題ではない」

「ではその前にミニッツメンとの会談を終わらせなくては、それとも無視しますか」

皆には知らせてないがミニッツメンを吸収するという選択計画はまだ

残しておきたかった。

伝説のガービーとやらの会談については裏で話し合いを続けているが、まだ日時の決定はされていない。それを察したのか最近ではガンナーからもそれらしい話が来ているが、あつちは信用ができない。「彼らとの約束は守ろう。チャンスを与えなくては、これまでの努力が無駄になってしまう」

「わかりました」

エルダー・マクソンは目を閉じる。

そうだ、ずっと自分は決断を先延ばしにしてきてしまっていた。大きなことを成し遂げてもリオonzはそれを後悔し、その弱さが兵士達の失望となっていた。

——サラ、あなたたちの成し遂げた偉業は本物であったと私のB.

O. S. でも証明する

マクソンの心にも怒りがある。

リオonzの偉業の多くはサラの死と共に貶められてしまった。

その原因となったのが市井の英雄“V a u l t 1 0 1 のアイツ”とスリー・ドッグが軽快に叫ぶ女。

あの女は多くをキャピタルB. O. S. にもたらせはしたが、リオonzとリオonzのB. O. S. の友人ではあっても仲間にはならなかった。

リオonzはその友誼を大切におもっていたがそれではまったく足りなかったというのに。

マクソンがリオonzの後を継いで、あの女はさらにこちらから距離をとるようになった。支持もしなかった。

サラの死とリオonzの凋落に何もしなかった。

許せないと言わない。

だが表には出せない不快感と怒りは確実にまだこの体に残されている。

ミニッツメンに残ったガービーの毎日は、よりストレスに満ちたものになってしまった。

例の一件以降、彼の方針転換は復帰してきた旧ミニッツメンたちを刺激した。

ロニーは毎日の事やってきてはガービーにあの手この手で懐柔を試みている。褒め、嘆き、皮肉、笑うなどしながら『昔のやり方なのに不満だ』が叩きつけられてくる。

——正しいミニッツメンであり続けるためだ

そのたびにガービーはそう答える。禅問答のようだが、それが真実だ。

そして思い出される。ミニッツメン復活後に自分がかつての仲間達も呼び戻したいといった時に見せたあのアキラの馬鹿にした顔を。今なら彼の考えがガービーにもわかる。

結局、ロニーたちは理由をつけてミニッツメンを捨てた人々ではないのだと。

彼らは口では志は同じだと言うが。野心や嘘、怒りから「このミニッツメンでは正義は不可能だ」と吐き捨てて出ていったのも彼らだった。

レオもアキラもそれを理解していた。

旧ミニッツメンの肩書をつけて戻ってきてても、彼らは新しい変化を受け入れることはほとんどないのだということ。彼らはかつてのミニッツメンでやっていたこと、主張していたことを少しだけアレンジして同じようなことをやっている。そう、自分の言うことが正しいやり方なのだ、と。

——ミスター・レジェンド。いいですか？

誰かに呼ばれたことに気が付いて机から顔をあげる。

入口にオバーランド駅の代表である彼女たち——夫婦が心配そうにして立っていた。

「もちろん。なにか？」

「あつ、約束の時間だったので来たんですが……」

驚いて壁にかかった時計を確認してしまう。

確かに時間だ。というか、少し過ぎていたことに気が付かなかった。

「すいません。いろいろやっていて気が付かなかった。さ、入ってください」

「はい」

ミニッツメンの居住地に入れる人々はまずここで共に生活をし、準備ができたと判断されるところを立ち去り、また新しい人々が入ってくるシステムになっていた。

そのためガービーはおりをみて代表者の夫婦と定期的にこうやって話し合いの場をもうけ。近々予定されている行動についてなどを中心に意見交換をしてきた。

「話していた通り、最後の班は数日中に部隊をつけて送り出すことになっていきます。彼らにはすぐに動けるように言っておりますから問題は無いでしょう。」

ですがひとつ問題がおこってまして、対岸にあるグレイガーデンに次に入るはずの居住者候補たちが集まってきてしまっているのです」

「はい、噂で耳にしました」

「そうですね。実は今回は応募者が殺到していたようで、選考のペーすがいつもよりもはやくなくなってしまっただけなのです。」

本当なら間を開けてから受け入れたかったのですが。出来ることならば明日から始められないかと考えているのです」

「……急な話ですね」

「わかります。ですが将来に居住者となることを約束しておきながら、不安定な客人の立場に長く置いておくのはいいことにはなりません。全員を呼ぶわけではなく、スタートを前倒しにして進めるだけです。どうでしょう?」

2人は不安そうに顔を見合わせる。

「ミスター・レジエンド。あなたたちの活動を支持すると誓った以上、拒否はしません」

「感謝します」

「ですが———こういう大勢の住人が定期的に入れ替わるという環境に

負担を感じているということをおわかってほしいと思います」

「お互いに、それを学んできました。わかっているつもりではいますが、なにかあるのなら言ってください」

「とにかくその人達を受け入れることには同意します。全員が来るのでないのなら」

「約束します。スタートを前倒しにするだけ。これまで通り少しずつ入れていきます。困らせるようなことにはしません」

「これも噂ですが。彼らはグールたちの前で殺気立っていると聞きました」

「明日、自分が直接彼らに会って説明します。必ず理解してもらいますので、おふたりにはいつも通りにやっていってもらえたらと期待しています」

「そういうことなら——」

「よかった」

ガービーは肩をなでおろした。久しぶりのいいニュースだ。

だが喜んでばかりはいられなかったようだ。

「それとは別に、今日は私たちからお話があります」

「なんででしょうか？」

「これも噂なんです。ミニッツメンは連邦の北部を掌握したというのは本当なんでしょうか？」

「……巷で流れている噂ですね。それは正確ではありません」。

我々が進めていたのは連邦北東部でまだ使えそうな居住地の調査を行ってきました。実際、東部に残されていた居住地との取引などはまだはじまって数カ月しかたっていません。まだまだこれからです」
これでもガービーも経験は積んでいる。

微妙に話題をそらそうと試みつつ、相手の意図を探ろうとしていく。

「私たち夫婦の今の生活はあなたからの説明があって受け入れたものです。話を聞くと、この先もこのオバーランド駅はこの生活が続くということなのでしょうか？」

「んん、確かにこれはいつもよりも未来の話になりそう。なにか、気

になることがあるのならはつきりとお願ひします」

ガービーの問いかけにこれまで黙っていた方が口を開いた。

「最初の約束だと、この生活は東部に人をいれるまでつてハナシだつただろ。」

でも噂を聞く限りじゃ。ミニッツメンは南に行つてガンナーどもと戦争するつてハナシがある。戦争があるつてことは人が死ぬし、居住地とやらも攻撃を受けるだろ。レイダーとか、スーパームュータント。それにB・O・S・！」

「私たちは不安なんです。ここでの生活はこの先もずっとこんなことが続くんじゃないかって」

ガービーの顔は真つ蒼になり、表情がかたまつた。

痛いところを突かれてしまった。そう思つてしまったのだ。

ガンナーとの対決については、将軍やアキラとはつきりと口に出して計画を相談したことはない。

あくまでも北部に人々が安全に暮らしていける場所を作る。それが今の目標であつて、連邦全土をミニッツメンが制覇し。平和を維持するなんて考えはまだまだ現実味がないというか、妄想に近い。

とはいえ、ガービーには密かな野心。いや、報復心がある。

連邦の南部にはミニッツメンの名を地におとしてみせたあのクインシーがある。あの町を人々の手に取り戻し、自分や仲間達。ホリス大佐を裏切つた、あの裏切り者たちの首を吹っ飛ばしてやりたいと願っている――。

だがこれだつて現実的な話じゃない。

「参つたな。その、調査についてはほとんど終了している。」

調査に携わつた部隊は戻つてきていますが。そこに人が入るのはこれからの話だ」

「……」

「戦争、でしたか。巷では勝手にそう噂されているのでしようが、事実じゃない」

「ミスター・レジエントはミニッツメンの裏切り者クリントを街灯がいでんにつるして――」

ガービーは答える気力もなくして首を横に振るしかない。

この会話を続ける自信がなくなってきたそう。

「その疑問には答えたと思う。これで納得してもらえただろうか？」

「できないね。正直に言うけどさ、あたしたちはここを出ていこうかって考えてるんだよ」

「えっ!？」

「人の出入りが激しくてつらいってのもあるけどさ。あんたはここを本当はミニッツメンの砦にしたいんじゃないのかい？」

「まさか。なんでそうなる」

「だってさ、あんた達はダイヤモンドシティの近くにある居住地を自分たちの施設として使っているじゃないか」

「確かに機能を分けて配置してはいる。だが、それだけだ」

「でもダイヤモンドシティを占拠するつもりはないんだろ？」

「当たり前だ!」

この話し合いで、初めて声を荒げて叫んでしまった。

そのことにショックを受けるが、同時に自分たちがレイダーたちのようにダイヤモンドシティを狙っていると考えられていたことにも驚いた。

「ミスター・レジエンド。私たちはあなたたちに嘘をつかれているのではないかと思ってるんです」

「待ってほしい。なんでそうなる。」

確かにすべての情報を明らかににはしていないが。今だって調査については情報を伝えたばかりじゃないか。それが俺たちをレイダーのように言うなんて、ひどすぎる。

「だいたいなぜここを出ていくとか、占拠するなんて考えるんだ」

「そりゃね、あんたの話が」できすぎている」からに決まってる。

人が入れば北部はあんた達が掌握するってことだろ? なら、ここはどうなるんだい。あんたたちは」どこに行く」んだい?」

「どこに、行くだって?」

なにかヤバイものが飛び出してきそう。

「だってそうだろ?」

あんたらはミニッツメンだ。昔はあちこち移動してたけど、今はそうじゃない。なのにダイアモンドシティはいらないし、ここだっていないっていう。まさか解散する?」

「馬鹿な!」

「最近、傭兵共がバンカーヒルからこっちに流れてきてるってハナシさ。ダイアモンドシティじゃ、マクドナウ市長がグリーンウォールの金持ち共相手にミニッツメン対策に秘密の部隊を作らないかって相談してるそうだよ」

「信じられない話だ」

「じゃ、答えておくれよ。あんただけは本当のところをさあ」

目を閉じながら宙を仰ぎ、冷静さを取り戻そうとする。

噂話だと鼻で笑うことができなかった。自分はまだまだ未熟なのだ。だからこの“嘘”はつきとおさなくてはならない。

「まず——信じてもらいたい。約束はまだ残っている。」

まだ先の話になるが。東部に人を送り出すまでは、この駅では今の役目を続けてほしい。代表者を追い出すような真似はしない」

「それはいつまでだい?」

「長くても今年中、予定ではそうなっている。今はこれしか言えない」
「どうだか」

「ミニッツメンの——我々のこれからの活動についてはレオ將軍の考えもある」

好きなやり方ではなかったが、ここにいないレオを利用させてもらうならこの時だろう。

「それはまだ未来の話で、準備すら始まっていないことだから何も話せないが。あなたたちの不安については將軍に伝えるし、考えがまとまれば改めて情報を伝えよう」

「……」

「これは新しい約束だ。それで納得してほしい」

話はそこで終わり、数日後に再び集まることを確認してから解散した。

去っていく夫婦の背中からは不安は完全には取り去ることはでき

なかったが。なんとか出ていくことはとどまってくれそうだと
なるとなく感じることができた。

——これからのミニッツメンの活動、か

確かにこれは先送りにしてきた問題だ。

しかしグレイガーデンやコベナントなどを奇抜な形で短期間に作
り上げたアキラは、オーバーランド駅の役目は東部で終了と言ったし。
將軍もそれに同意していた。ガービーもそれは変わらない。この
場所は人々のためにある場所だ。

だがミニッツメンの活動については——3人の考えは恐らくバラ
バラではないかと思ってる。

將軍はミニッツメンの機能をダイヤモンドシティと周辺の居住地
に分散することで配置した。彼の考えではこの先にそれらを捨てる
という選択肢は恐らくないだろう。ではどうするのか。それはわか
らない。

ガービー自身には名案は最初からない。必要だというなら昔のよ
うに旅をしながら続けていくのもいいと思っている。

問題はアキラだろう。

彼には多くを助けられてきたが。同時に何を考えているのかわか
らない不気味さがあった。それが無視できないレベルに成長してき
てしまっている。

彼がああ夫婦の言う通り。いきなり「ダイヤモンドシティを占拠す
る」などと口にしたなら、自分はそれを止められるだろうか？その時、レ
オにアキラの意見を採用させないようにする方法があるとすれば。そ
れは今、自分が押さえつけている旧ミニッツメンたちを焚きつけて反
対の声をあげるしかないのではないか。

——なんてこった。こんなバカな考えを俺がするなんてな
最悪だった。

かつて將軍を失ってから派閥同士の争いから自滅していったミ
ニッツメンを、今度は自分がやろうとしているんじゃないだろうか。わ
かかっていてもそれしかない、まさしく自分は愚か者だ。

だが自分はミニッツメン。

ずっとそうだったし、これからもそうありたい。

野心を抑え、嘘をつかず、信念に沿って正義を成し遂げる。あの日に誓った約束はまだ破られてはいない。それが一番重要なことなのだ。

ヌカ・ワールドに砂嵐が来ている。

これでもう10日間だ、身動きが取れず。ライダーたちはそれぞれの裏ではこっそり死体を隠しているはずだ。

ポーター・ゲイジはフィズトップ・マウンテンの頂上から砂に覆われた世界を見ている。

“オーバーボスが” 2度目の家出” から彼は動くのを控えてきている。

以前ならあの若者を戻すために必要だからと自らが赴くことで信用を得ようと思ったが。後から振り返るとそれは彼の怒りを大きく買っただけのこと、彼の連邦でのビジネスを難しくしたと恨まれているかもしれないと考えているからだ。

信じる、なんて陳腐で臭いセリフはどうかと思うが。

今はそれでなんとか時間を稼いでいくしかないだろう。あの死んだボス死んだボスと比べても、今のボスはさらに邪悪で悪魔のような存在なのは間違いない。その証拠にデイサイプルスやオペレーターズからは不満を感じるが、一番扱いずらかったパックスはしつけられた犬のように従順になっている。

もちろん本当になんでも大人しくなっているわけではないし。好き勝手なことをして好き勝手なことを言うが、ボスを怒らせないというところで自制を見せてくれている。これは想像以上に面白い現象だと思ってる。

それでもボスの不在は組織に不安定さを招く。

ライダーたちの不満の根源はそこにあるが。だからといってゲイ

ジはもう焦る必要を感じないということのアピールしないといけない。

なぜならばオーバーボス……アキラはもう、こちらの価値を知り、様子を探っているに違いないのだから。

答え合わせはその瞬間が来ればわかるだろう——だがその瞬間はまだ来そうにないが。

オペレーターズはハンコックに接触しようと努力しているが、いまだに結果は出ていない。

相手はオペレーターズの言葉が届く前に逃げ回っているそうだが、グスは度々ヒステリーをおこしている。最近はや得意の商売を利用することでなんとか舞台を整えようとしているらしい。

パックスはいつものパックスだ。

群れのアルファであるメイソンの下で今日も愉快に楽しくやっている。ゲイジのいるところ安定しているのはここだろう。だがデイスaipルズは——。

ゲイジ！

いつもながらニシヤの怒鳴り声は砂塵の舞う風にも負けていない。またか、なだめてやらないといけない。

閉じ込められるとストレスになるというのは本当らしい。

身動きが取れないことにニシヤは腹を立て、八つ当たり気味にオーバーボスへの不満にすりかえてやってきたように見えた。

「ニシヤ、冷静になれよ。カツカしてもオーバーボスは戻ってこない」「なんだいそりゃ？それじゃ、あんたの約束とやらはもう無意味なことかい」

「言っていることが滅茶苦茶だぞ。」

ボスは戻る条件を出していただろ。俺たちはまだ準備を終えていない」

「犯人役なんて誰だっけいいだろうがっ」

「ハンコックはまだだ。マグズは苦しんでいるようだが、手は打っている」

「あのクソ○売女っ、○×○×○×——」

「おいやめろ。冗談でもそんなことを言ったと噂になったら騒ぎになるぞ」

「そんな度胸がオペレーターズにあるっていうのかい？そりや楽しくなるじやないのさ」

さすがにこれは良くない。

不安定になっているのかもしれないにしても、身内で争いを始められては意味がない。

「トラブルは良い結果になるとは思えない、ニシヤ」

「なんだって？」

「トラブルだ——オーバーボスがいないことが不満なんだろう。そりやわかるけどな、今は自分ごとすべての手綱を引き締める時だ。それがわからないのか？」

「あたしはもう十分に待った！」

「ああ、それで手に入れただろ。望みの土地を」

「全部はまだだ！」

「だがコルターの時とは違う。それを思い出せ！」

低いテンションのゲイジが怒鳴るのは本当に珍しい。

ニシヤも仮面の下から睨むのはやめてないだろうが声をあげるのは止めた。

「まず落ち着くんだ、ニシヤ」

「……」

「あんたは恐れられているデイサイプルのボスじやないか。それがビビっているように見られる」

隠されていた感情を見せるように、近づくニシヤの片手をとって握りしめてやる。

ゲイジはマグスと違い、ニシヤとは個人的に深い関係を持っているた。

別に愛なんてなかったし、お互いに利用しあえる相手だとわかって都合のいい関係からでた行為だった。人肉に欲望を持つ狂気の集団デイサイプルスではニシヤは暴力以外の欲望を満たす相手は得ら

れなかった。

ゲイジは頭は切れるし口もたつ、要領だつていいし外見も悪くない。

このデイサイプルズのニシャと対等に話すことを許す立場を与えてやる恩恵に見合うものがそれだったのだ。

だがそれはお互いがパートナーであるという状態でなければ意味がない。

ニシャもそれはわかっている。だからずっと不満があってもゲイジの言葉に従っていた時期があつたのだ。

「新しいボスはコルターとは比べ物にならないほどよくわかつてる。正直に言えばもう少し馬鹿でいてほしくらいに頭は回る。」

彼はここの様子がわかつているはずだ。マグズがハンコックと話ができるようになれば解決する」

「やつと商売が回るかと思つたのに、この嵐だよ。」

パックスの獣どもや泣き虫のオペレーターズとちがつてうちの奴らは商売はうまくないんだ」

「動きたいのはわかるが、今は我慢することが得策だ」

「ああ、それはわかつてるさ」

目に見えて落ち着いてきたのはわかるが、これで返したら元の木阿弥だろう。

ニシャのような女の扱い方はゲイジは知っている。

すぐそばに見えるオーバーボスの寝床に目を走らせるところを彼女に見させながら

「少し話していくといい。砂嵐もそう悪くないとわかるだろうしな」

「へエ。怒鳴つても誰にも聞こえないって?」

「それに近いかな。いつもとは違うやり方で楽しむなら、今がその時だつて感じだ」

デイサイプルズ特有の頑丈で重いアーマーの一部分を片手できつと触れるだけで簡単に脱がして見せた。いつもならやらない手だ。そもそも服は脱がないままでするのだから必要ない。

だが、学んでおくことも悪くない。

その技術からニシヤは想像を刺激され、早くもノってくる気まんまんだ。彼女が裸にひん剥かれてやられるつてのはいつ以来なのだろう。そのところだけは興味がある。

「ゲイジ、あの若いボスは本当にあたしらの計画に最後まで付き合うと思ってるのかい」

「大丈夫だ。ヌカ・ワールドはいい場所だが、誰にだって我が家は大きい方がいいものさ」

「ああ」

「ここが始まりだとするなら、連邦への帰還は次のステップにはちようどいい。なにせ、今はあのキャピタルのB・O・S。まで出張ってきているらしいからな。ミニッツメン、ガンナーに続いて叩き潰せば。キャピタルが向こうから俺たちのところにやってくることもなるさ」

数時間後にはまた不満そうな顔をしてニシヤは戻っていくだろう。だが次に相手にするのは恐らくしばらく先のことになるはずだ。こんな女でも可愛いところがあるつてのは、人間の面白いところなのかもしれない。

確かにニシヤは不機嫌顔で仲間の元へ戻ってきた。

だが、出てきた言葉はゲイジの考えていたものとはまるで違ったものだった。

「クソツ、あいつ。オーバーボスの居場所を言わなかった」

「まさかゲイジの奴も知らないつて意味か、ボス？」

「そうじゃないだろうね。前回はいつが戻ってきてからすぐにオーバーボスも帰ってきた。お互いに連絡を取り合っているつて可能性は捨てきれない」

ゲイジの言い分もそれなりに筋は通って入る。

今、オーバーボスに戻られてもマグズは結果を出せていない。それはオペレーターズが口で言うほど商売がうまくできていないという気味の良い話ではあるが。まだできていないのかと怒りのとばっちりを受けることになっては困るといえば困る。

だが、わずかなエリアを与えられただけで我慢をしろと言われるのはもうご免なのだ。

「マグズの○売が。いつになったらハンコックと渡りをつけるんだい」

「さあ？ だけどボス。自分を殺そうとした相手とは会いたいとは思わないでしょうよ」

「確かにね。ナイフと火薬を用意する必要はある。なるほど」

「邪魔しますか？ 俺達でハンコックを追って、首を……」

舌でカツと鳴らし、首を掻き切るポーズを部下が見せる。馬鹿が、そういう意味じゃない。

「それができるならもう誰かがとつくにあのグールの首を旗と並べて掲げているさ……オーバーボスを追える？ 今どこにいるか」

デイキシールとサヴオイ。ニシャはデイサイプルの幹部である2人の考えを聞いてみる。

「……方法はある。難しくはない」

「でも簡単じゃない。グッドネイバーやダイヤモンドシティ、バンカーヒルなんかにはハンコックの手が回ってるはず。つてことはオペレーターズもいるわけで、気づかれる」

「ゲイジにもわかるか」

「オーバーボスの腕を見る限り、怪しいのはミニッツメンかガンナーズだろう。」

だがあれほどの凄腕ならガンナーズなら名が知られていないのはおかしい。だがミニッツメンなら手を出してもごまかせるし、情報が出てくるかも」

「どっちにしても連邦。どっちにしてもゲイジの計画の先とぶつかり合うってわけだね——」

パックスのメイソンはどう考えているのかわからないが。オペレーターズのマグズはハンコック相手に苦戦をしながらも、どさくさに紛れて連邦の下調べを同時に進めてもいるはずだ。

なら、自分達だって——。

「獲物をミニッツメンに広げるとして、何ができる？」

「襲撃、誘拐、略奪ぐらいだろう」

「お楽しみわー？それだけだとつまらない」

デイジーがキャツキャツとにぎやかすが、無表情でサヴオイがいさめる。

「今のミニッツメンはガンナーズほどではないが油断はできない。

殺していくなら人も武器も多くいることになる。襲撃に略奪からの誘拐、解放の取引をするのが一番いい。死体や血を出し過ぎると目立ってしまうからな」

「デイキシーの言う通りつまらないやり方だけど、それなら確かに言い訳もできるし。捕まえた奴からも情報を聞き出せるね」

「それじゃ、それで決まりねっ」

あえて誰も口にしていないが、このヌカ・ワールドにいるすべてのレイダーが不安に思っていることがひとつあった。それがマグズをいら立たせ、ニシャを落ち着かなくさせている。

あのハンコックだ。

最初はグッドネイバーを離れたハンコックはこのヌカ・ワールドの偵察に来たのだとばかり思っていたが。考え方を変えると、ハンコックが来るのに「あわせたように」して戻ってきたのがオーバーボスではなかったか。

あのオーバーボスはすでにハンコックとつながり、ゲイジを取り込んで自分たちを操ろうと考えているのではないだろうか？

コルターで散々に懲りたはずのあのゲイジは、新しいボスを評価するどころか行為を抱いているかのような余裕を見せ始め。本気で信頼している風であることも不安を助長させてくる。

出し抜かれてはいけない。負け犬にはならない。

ここは無法と狂気で支配するユートピアなのだ。

第3回を終えると法廷ショーは賭けで生み出される利益は大きな

もので、もつと成長の見込みがあることがわかってきた。

シヨーマンの美学としてはこういった賭けの胴元をやるのは好きではなかったのだが。新しい挑戦のもたらす恩恵を素直に受け入れてやっていくしかない。

とはいえ、すでに手ごたえは十分感じている。

最初の興行のスペシャルマッチ。あの本物か偽物かわからぬシルバーシユラウドとデスクローの決闘。

どちらも接近戦で、お互いを切り裂く作業で勝負し。人であるシユラウドにデスクローは倒された。あの試合はちよつとした伝説となつてこのシヨーマンに箔をつけてくれたし。次のシヨーマンの開催を待ち望む声はあんな戦いが再び目に出れると信じての事だった。

だがそれには準備が必要だ。

シヨーマンには必要な悪党がいる。なのにその数は早くも足りなくなつていた……。

悪人が消えたという話じゃない。キャップの匂いにつられてやってくる奴らがろくな奴を連れてきてくれないのだけだ。

今日の最初の持ち込み相手は、グッドネイバーのトリガーマンのようにおそろいの帽子をかぶり。手にはバットやスパナを持った普段着姿の男達。彼らの中心では縛られ、ボコボコにされて虫の息となつたレイダーらしき若者が寝かされていた。

対面した暗い納屋の中でトミーはすぐにピンときた。こりや最悪の相手だ、と。

「トミー、彼らの持ち込みだそうで。居住地近くにいたのをとらえたんだそうですよ」

傭兵の言葉に返事をせず。トミーはしやがむと虫の息となつているレイダーに話しかけた。

「おい、おいつ。声が聞こえるか？名前は言えるか？」

「……ガツ……ああつ」

「言えないとな。お前、死ぬことになるけどいいか？」

「じ、ジョン。泥船のジョンつてすつ——」

(元はスカベンジャーか)

本名ではなく、2つ名をいつてきたところでそう考えた。

なるほど間違いはないだろう。この素人からは薬に酒、暴力と血に飢えたクソつたれのレイダー共の気配が匂ってこない。

「話すのももういいだろ、こいつをやる。俺たちの希望は1000キヤップだ」

(冗談だろ。間抜けが)

無言で立ち上がるが、皮肉は口に出さない。

こんな奴らでも大切なお客様ではあるのだから、丁寧に対応しないとけない。

「選択肢は2つ。こいつをここに置いて10キヤップを受け取って帰るか」

「おいっ。安すぎるだろ」

「でしたらこいつをもつて帰りな。わるいがこいつは見たまま最悪の状態で、シヨーには出せない。それにだいたいこいつはどんな悪名があるんだ？」

「レイダーだ。それで十分じゃないのか」

「うちの客が喜ぶのは悪党。殺し屋なんかなんですよ。レイダーの格好をした死にかけの小僧じゃない。そんなのが出てきても客は盛り上がらないでしょうよ」

答えながらトミーの脳内では彼らがなぜここにいるのか想像していた。

“ たまたま” 手に入ったレイダーの雑魚をボコボコにして、死刑の仕上げをしようとしたところで誰かが思い出したようにこいつをキヤップに変えようと言いだしたか。

「俺たちがこんな奴を連れ帰ってどうするんだよ」

「さあ？こいつにしっかりと何をやったのかを吐かせて、それが間違いなさそうだって証拠でもあれば。また改めて話し合いますがね。邪魔ならそのへんで殺せばいいんじゃないですか」

「……くそっ」

よしよし、そろそろいいだろうか。

「まあ、わかりました。皆さんとは初めてですから。今日は特別に1

「5キャップだします、それでどうです?」

「最悪だっ」

「でもゼロではない。それとこれは忠告なんですがね。次は代理人を用意するか、皆さんの正装でお願いしたいですね」

「?」

「皆さんミニッツメン、でしょ?」

ああ、顔は誰も見たことはありませんがね。こういうのは雰囲気に分かる。変装なんてするから、かえって怪しく思うんですよ」

「……そうか」

「持ち帰りますか?」

「いや、おいていくよ。値段もそれでいい」

「では外でお待ちを」

この町のショーにあの伝説のガビーは激怒していたとは有名な話だ。

そのせいだろうか。持ち込みに来るミニッツメンの大半が、ああやって下手な変装で誤魔化そうとするか。家族や知り合いを代理人としてやってくる。そのたびにトミーはこうやって論じてやっていった。

「おい、泥船のジョン。お前な、今から病院で傷を見てもらえ。そのあとで飯も食わしてやる」

「あっ、あっ」

「その代わりにな。お前とまた話すまでは首に奴隷用の爆弾首輪をつけるから。間違ってもはずそうとするなよ、自殺したくてもはずすな。その時は相談に乗ってやるからな」

近くに立つ傭兵たちにこいつを病院に放り込んできてくれと頼み。支払いは自分がすることも伝える。

彼らが立ち去る中、今度は入れ替わるようにメーلمانのひとりが入ってきた。

「ひどいやられ方してましたね。ショーに使えるんですか?」

「あれは違う。ところであんたは確かグッドネイバーで傭兵やってただろ。泥船って名前のスカベンジャーに心当たりはないか?」

「ああ、あります。泥船兄弟。でも名前を聞くのはブタ鼻って兄貴の方の奴です。本当の兄弟でもなかったはず」

「ブタ鼻？たしかそれって顔が崩れてるって奴じゃないか？よくトラブルを起こしたと聞いたことがある」

「それですね。数年前にその兄貴のトラブルで兄弟一緒にグッドネイバーから叩き出された。バンカーヒルで一旗揚げると騒いでたらしいですが、あそこの商人はグッドネイバーの悪党に負けない悪魔たちだ。名前はそれから聞いたことがない」

「レイダーに職を変えたようだな」

「不思議じゃないですね。ブタ鼻のオヤジはガンナーでしたし」

「不細工な傭兵か」

「いえ、逆ですよ。女殺しの傭兵って奴で。あちこちに女を作ってましたが、嫁と子供は大事にしてたみたいですよ。ある時期まではね」
「ある時期？」

「ピッグマンってヤバイのが、そいつの女と仲間を斬り刻んでから頭がおかしくなつたんですよ。」

ブタ顔も元はいい顔だったらしいですけど。親父が酔っ払って母親を殺した際、息子の顔を薬で焼いたとか」

「ひでエな」

「ま、そんな話ばかりですよ」

そんな事情があるとは知らなかったが、トミーはトラブルメイカーの弟らしい若者を助けたことを後悔はしていなかった。

自分が解放したりトルバードトルバードが小さくないチャンスを運んできてくれて今の自分があるように、あの不幸な小僧にもそれがあつてもいいような気がしたのだ。そう、ただの気まぐれってやつだ。

「ジャンク屋に新しいスカベンジャーを紹介することになるかもな」

「優しいんですね」

「そうでもない。あいつとあいつにかかったキャップは全部借金に回す。自由は当面アイツにはない」

そう答えながらなんとなくトミーはリトルバードことケイトのことを思った。

アイツはちやんと今もやっつけていけているんだろうか。

青空の下、ジョン・ハンコックは不運なメールマンを助け。

彼の相棒であった犬とバラモンの葬儀に参加していた。

木々の間に作られた細い道を器用に駆け抜けてきたデス・クローは、ついにその爪をメールマンへと振りかざした時。ハンコックはちやうど岩場から見下ろす形で枯れ木の森の中の衝撃的なシーンを冷静に見つめたあと。旧式の長大なライフルを構えて火を噴かせた。

不運なメールマンを救ったのはハンコックと彼の秘蔵のライフルだったが。

ハンコックにそんな気を起こさせたのは、凶悪なデス・クローに倒されたメールマンの相棒である犬とバラモンの悲痛な声だった。

——急ぎの仕事で、どうしてもって言われて引き受けたんですよ。苦しませないよう。ハンコックから受け取ったナイフを手に、相棒たちの頭を膝に乗せたメールマンは。静かになっていく彼らを見送りながら、悔しさをにじませそう口にした。

連邦最北端に位置するジモンヤ前哨基地跡、そこにある居住地がレイダーに包囲され。

至急武器と食料、医薬品を贈ってほしいとの連絡がグレーガーデンに届けられたのが始まりらしい。兵士が足りないならミニッツメンに救援をもとめるべきだし、食料ならジモンヤなら近くにテンパイの農場に頼めばいい。

だが武器と医薬品も、ということならなるほど。

グレーガーデンは黒い取引もしているから揃えるのに苦労はない。あとは誰が届けるのかだけだった。

「自分はアパナシーの農園とグレーガーデンの間を歩いてきましたが、ちやうど配置替えもかねて戻るようにと指示を受けたばかりだったんです」

「貧乏くじかもしれないとわかって、引き受けたわけか」

「メールマンは兵士じゃない。死ぬことを許さない、サバイバーとなることだ、うちのボスと將軍の言葉です。怪しげな話だから断つてたら仕事にならない」

「相棒たちは残念だったな」

「彼らのおかげで生き延びることができた……感謝しかないです」

ジモンヤ前哨基地跡の居住地が包囲したレイダーとは会わなかったが、デスクローが腹を空かせてメールマン一行を待ち構えていた。

ハンコックとメールマンが道に戻ると、死にかけた犬とバラモンのそばには大勢の人の足跡が残され。運んできた武器、食料、薬物は消えていた。

どうやらメールマンとデスクローが姿を消したのを確認してから盗んでいった奴らがいたようだ。追っかけることもできるだろうが――。

「追うかい？」

「いいえ。最悪ですけど、預かっている手紙がまだ残ってますし。こいつらの肉も食料として使ってもらわないと無駄死になっちゃいます」

「――それも『お前たちを獲物と考える奴らにとって狡猾でタフなサバイバーであれ』ってやつか」

「よく知ってますね、ハンコック。うちのおっかないボスの口癖です。生きて荷物を届けろ、なにより自分の体も含めてって。滅茶苦茶ですけどね」

「いや、悪くないと思うぜ」

レオとアキラの顔が思い出される。

彼らが時折見せる常軌を逸した行動、表情はまさにその言葉を実践する人間たちだった。ただメールマンたちと彼らの違いは正気を失いかけていて、ブレイキを踏むことができないというだけだ。そのせいで多くを殺す。けどももう引き下がれない。

バラモンと犬の肉をそれぞれ古布に包んでバックにつめるとメールマンは再び立ち上がった。

「墓は立てないのか？」

「安らかに眠るように逝ったし、肉はもらいましたから。それにどうせ俺が死んでもこいつらと同じように墓には入らないでしょう」

「その考え方は気にいらぬな。」

そこは意地を張って無理やりにも老衰でくたばって墓で眠ってやると言った方がいい」

「そうですかね？」

「ああ、ひねくれてるくらいじゃないとすぐに死ぬもんだ」

並んで歩きだす2人。

メールマンはようやくハンコックが担いでいる異形のライフルの存在に気が付いた。

「自分は詳しくないですけど。面白いライフルを使ってるんですね」「ん？」

「長い銃身が4つも合わさっていて、一回ですべての弾丸を発射させる」

「発射音が独特だっただろ？」

「ええ、またおかしな化け物が餌にされかけてるこっちを見て喜んで叫んでるのかと思いましたよ」

「伝説の化け物の声だと言われてたらしい。南から流れてきた一品だったんだが、威力は凄いがでたらめな銃だつてことと飾つてた銃だ」

「デスクロー狩りでも始めたんですか？」

「いや……若い相棒に老人扱いされたのがショックでね。舐めるなつてつもりでこいつを思い出して持ち出してきた。本当に使えるとわかったのはさっきが初めてだったけどな」

ハンコックは面白そうに肩をすくめていうが、メールマンの顔はひきつっていた。

つまり彼がハンコックに助けてもらったのは皮肉なことに彼の運がよかったから、というわけらしい。

グッドネイバーの市長は時間がたつにつれ、自分は島に行かないという選択肢が。実はアキラの望んだことではという可能性に触れて

しまい。少し落ち込んでいた。

危険なファーハーバー島でこのジョン・ハンコックは若造に死ぬと思われてしまったわけだ。ヌカ・ワールドではそうは思わなかったのに、今度は違った。何が違うっていうのか。

「――畜生」

「あ?」

「ジョン・ハンコック。どうもあなたには忘れられてみたいだから言いますけど。俺、あなたをしってるんですよ。元はグッドネイバーにいた餓鬼だったんで」

「そうか」

「覚えて、ませんよね?」

「名前はな。顔は知ってる、それで十分だ」

「本当ですか?」

「――無謀にも俺に自分で使わなかったジェットを持ってきて売りつけようとしたのは、とんでもない馬鹿か頭のすっからかんのアホ、そして餓鬼だったお前だ」

「げっ、覚えてる」

「俺のような立派なグールになれるように、その場で楽しみ方を教えてやった。どうやらまだ肌はすべすべのようだな。薬はやつてるか?」

「教えてもらった通り薬は今も使ってますが、羽目ははずしてません」

「つまらんな」

「これもあなたが言ったんですよ。『せつかくの商品を誰に売りつけたいのかわからないなんて、お前は商売には向いてない』って」

「それは覚えてないな」

「それからは傭兵を目指しました。17で独り立ちして、あちこちの傭兵団に」

「ほう、珍しい。傭兵団を移るのは簡単じゃないだろ」

「ええ、まあ。殺しには熱心じゃなかったから、厄介払いされてたんでしよう」

それだけではないだろう。

こいつなら敵に回っても自分たちを殺しに誰かを連れて戻って来たりはしないと信じさせることができたのだろう。

傭兵家業はレイダー業と紙一重だ。なのにうまくやってきた、それは才能だろう。

「で、傭兵からメールマン？」

「いえ、ミニッツメンを経てます。知り合いの何人かが同じように誘われてて、こっちの方が楽しいからって」

「そうか」

「ついでに聞いていいですかね？グッドネイバーにはまだ戻らないんですか？」

「戻るさ。ただ、なかなか休暇をやめる理由もなくてな」

「帰れずに困ってる？」

「そんなところだな」

「勘なんですけどいいですかね？」

「おう」

「シンジンってレイダーは知ってますよね？なかなかの大物ですか」

「んん、それがなんだ？」

「レイダー同士の小突きあいにカリカリして、そろそろ限界じゃないかって噂が流れてますよ」

「そういうのはもう、散々聞かされたがな。まだアイツはピクリとも動いてない」

「それがちよつと違うんですよ——シユラウド騒ぎのことは知ってますか？」

「おや？」

「闇のヒーローの襲撃か？」

「ええ、あれで倒された連中の多くがシンジンの手下だったんですが。そのシユラウドがシンジンの首を狙ってるって噂が流れてまして」

それは聞いたことがなかった。

だが、本当とは思えない。シユラウドを演じるあのアキラにとって

はシンジンはレイダーというだけで殺す理由はあっても、自分から奴の首を取りに行く理由はない。

「シンジンをシユラウドが、ね」

「どうも面白くなかったみたいですね、スイマセン」

遠くに前哨基地のある通信塔が見えてきた。

「レイダーに包囲はされてないみたいだ」

「だまされたな。いや、誰がだましたのやら」

「どうでもいいですよ。ボスには報告しますし、相棒たちの敵討ちはできないからクソ共には仲間割れでもしてくたばってくれって今夜から祈ります」

「——ああ、それは安心していいと思うぞ」

「え？」

「そういうくだらないことをする奴は俺も嫌いだが、俺達以上にそういう奴らを嫌う奴がこの連邦にはいるからな」

「それは嬉しいですね」

「俺のように不運な今日のお前を救うような奴が、そいつらにもいればいいが。でないとデスクローに追われるよりも怖い目にあうだろうよ、確実に」

自分がグッドネイバーから離れているように。

レオもアキラも今は連邦から離れているが、帰ってこないわけじゃない。その時は必ずやってくる。

このくだらない騒ぎで自分たちはミニッツメンや居住地からひと財産奪ったと喜んでいる馬鹿共よ。その計画がちゃんと逃げるところまでしっかりとっているか確かめるべきだったな。

今夜はいい夢が見れるだろう。

しばらくは天国のような生活を過ごせるかもしれない。だが恐れたほうがいい奴らは必ず自分の住処に戻ってくるものだ。

その時までにはハンコックは大人しくしていればいい。

レオもアキラも、好きにどこかの小島でなにか好きなことをやっておけばいいのだ。

B E D

キャプテンズ・ダンス成功!

その知らせに島の人々は喝さいをあげたが港にその肝心のふたりの姿はなかった。

彼らはどこに?

時間はキャプテンズ・ダンスが終わった朝まで戻る――。

国立公園案内所まで薄暗い朝の中、ケイトはまっすぐな目のまま荒い息を吐くキュリーについて戻ってきていた。昨夜はなにか落ち着かなくて眠れたもんじゃなかったが、早朝には戻りたいというキュリーの言葉にケイトは逆らわずにつきあつたのだ。

――アキラの奴を気にしてるんだろうな

可愛らしく、いじらしいとも思う一方。そんな純粹な恋をしている彼女に嫉妬のようなものも感じている。

面白くも不愉快だったのは、そこにいる連中にも男女を問わず同じ気持ちだった奴らがいたらいいことだろうか。クソハゲのデーコンは大いびきをかいて寝ていたが、マクレデイとパイパーは顔をそろえて迎えてくれた。

「なんだ戻ってきたのか。葬式はどうせ今夜になるぞ」

「っ!」「ちよつとマクレデイ!」

不愉快な傭兵の先輩を自称する奴を囲む友人たちから非難の声があがるが、ケイトは鼻で笑ってやる。

「なにそれ。まだ拗ねてんの?」

「フンツ」

「くたばってたらあたしすらも仕事なくなるね。お互いの不幸を祝うパーティも企画してくんない?」

「ビールは飲みほしたが、酒はまだある。好きならだけ舐めて来いよ」

それだけ言うとかクレデイは自分の世界にこもってしまう。

意外なことだが、孤高を気取りたいこの男はアキラやレオの無事に女たちのようにしめだされている今の自分の姿を受け入れられない

ように見えた。

「じゃ、酒は後にとっておこ。それよりヌカ・コーラは何本残ってる？アレを全部飲み干したら、あのボスがどんなに悲しい顔をするのか想像したらゾクゾクしてくる」

「それ！いいな、乗った」

「ケイト、マクレディ。それはやめてあげてください。アキラが——」
「キュリー？」

話している最中に体をこわばらせて話せなくなる彼女に気が付き、ケイトは視線の先を追う。

案内所の中に犬が駆け込んできていた——見覚えのある元気な“ぞうきん”だ。

そしてその後ろにはストロング。両肩にだれかを抱えて立っているが、こちらが自分を見ていると気が付いたのか。乱暴にそれをコンクリートの上に放り出してしまう。

「ストロング 弱イ奴ラ 運ンデヤツタ」

「大変！ブルー」「クソツ、どっちも死んでないだろうなっ」

案内所はもう、大騒ぎである。

コズワースをあの新し家て受け取った日を覚えている。

私はショーンを胸に抱き、妻は珍しく配達人の差し出す書類に受け取りのサインをした。

ロボコ社と並ぶゼネラル・アトミックス社製のロボットは決して安い買い物ではないが。

ノーラ妻によるとこの家族私の未来の計画には欠かせないものだという。彼女の説得は私の首を縦に振らせる力が十分にあった。

朝の時間を丸々使って私の助けを拒否した彼女は、箱から出したコズワースを起動するのに悪戦苦闘しているのを私はショーンと楽しく見学させてもらった。

ミルクとお昼寝の時間が迫ってくるのを焦る彼女のそばで、私は間

違いなくシヨーンの父親をやっていた。短くても間違ひなく喜びに満ちた時間だった。

「ロボット君の目は3つあるからね、ノーラ」

「わかってる、わかってるってば」

「そうだと願うばかりだよ。この子が歩くようになって迷子になった理由に、ナニーロボットが自分の目がひとつしかなかったから。なんて聞かされてパニックにはなりたくない」

「説明書、ここに全部あるんだから。ちゃんと完成できる、はず」

「法廷では無敵の弁護士さんのママの言葉には説得力があるよね。それじゃシヨーンはパパとミルクの準備に入ろうか」

「ああ、もう！なんで左目と右目の違いが書かれてないんだよッ」

軍とそこにあつた血のつながらない兄弟たちへの忠誠心はアンカレッジの戦場に置いてきた。

でもまだ私の中には国への愛はある。この自分の素敵な家族の未来にも関係する国をこれからどうよくしていけばいいのか、それを考えようとしていた。

なのに手遅れだった？私にはなにかミスをしてしまったのだろうか？

未来は2000年を足早に駆け抜けていってしまい、私はを失おうとしている。

ケロググ、インステイチユート、そして連邦。

これが息子に与えたかった未来では決してなかったのに。なんと無残な世界となつてしまったか。

絶望からのショックを伴う覚醒は楽しい経験では決してない。

息を吸うだけで体中に痛みが駆け抜けるという現実には気が付き、驚きながら激しくせき込み。自分が眠って夢を見ていたのだとわかった。

部屋は暗く、ベッドに寝かされているが。片手に置かれている女性の手に気が付き、恋しくて思わず握り返す。

「ノーラ、ひどい夢を見たんだ。本当に最悪だった……」

「——ブルー、よかった。大丈夫？」

「ああ、パイパー。そうか、君だったか」

再び咳き込む。

苦くて希望のない、怒りに満ちた現実が戻ってくる。ノーラは死んだ、シヨーンはまだ戻らない。国は？もうどうでもいい。

私はまだあの頃のように父親には戻れていない。家には帰れない。痛みにはすぐに慣れた。苦痛は癒えることはないが、慣れたふりをすることはできるのだ。

抱える不満や怒りは、別の形にして吐き出せばなんとか帳尻はつく。でもそこにひどくけだるさが。だからやっぱり笑顔ではいられない。

「どうなってる？何日眠ってた？」

「2日だよ、運び込まれてからね。犬とストロングがダルトン・ファーム？そこからあんたたちをここまで運んでくれてくれたんだ」

「ああ、そうか」

「ストロングがいつもの調子でさ。『助けテヤツタ』とか言ってる。キュリーが戻ってきてくれて助かったよ。どっちも本当にヤバイ状態だったんだから」

「そうか——」「見届け人だっけ？一緒に行った連中とは別行動だったの？」

「ああ。彼らはそこら中にある獲物を持って帰ると言い合ったんだ。これが戦い抜いた証拠になるからって。」

「だけどアキラが——私たちのピップボーイが悪い状態になっていると知らせているのに気が付いて。現地解散ってことで彼らとは別れた」

「正解だったね。マクレデイが怒ってたよ。自分がついていくべきだったって」

「どうだろう。とにかくふたりで肩を貸しあって、最短のコースでダルトン・ファームに向かった。途中でレイダーの姿を見たりもしたけど、運よくやり過ぎすことができたみたいだな」

「運が強かったのも良かったんだよ」

「でもどちらか状態が悪くなっていって死ぬかもしれないってなつてね。ダルトン・ファームにつく前にアキラが意識を失った。私もすぐにそうなるかわかっていた。ああ、確かに運は良かったみたいだ」
ゆっくりと思いい出してきた。

最後に覚えているのはテントとそれを囲むターレットと砂浜。ピップボーイからは放射能を感知するガイガーカウンターの警告が発せられ、物言えぬコズワースがテントに向かい。向こうからはまだ姿は見えなかったがこちらに気づいたらしいカールが吠えていた。

「アキラはどうしてる？外はどうなった？」

「ブルー、そんなことよりも自分を心配した方がいい。ふたりとも怪我は軽くないし、とんでもない量の感染症にかかって死にかけたんだ」

「アキラは？無事か？」

「生きてる、と思うよ。実はブルーよりも状態がよくないらしくて。昨日、あのケイトがおぶってキュリーとマクレディと一緒に砦に戻ったんだ。

あそこには——なんかアキラが用意していた、なんだっけか。し、シン、シンプなんちゃらという装置があるらしくてそれが必要だって」「そうか」

「でも、きっと大丈夫だよ。ブルーだってこうして目が覚めたし。それにあの子、簡単には死にそうにないタマだしね」

「……」

「外の様子は。っていうか、島の連中は凄い大騒ぎになってる、こんなことになるなんて正直思っていなかった」

港や森の中から人がここにやってきているらしい。

とりあえずアキラは治療のために、レオは精魂尽き果てて寝ていると説明して部屋に近づけないようにしてる。あの冷笑的で、陰気だった連中は別人のように目を輝かせて集まってきてレオ達が姿を見せるのを待っているようだ。確かに真逆の態度だ、こっちも心の準備が必要になるかも。

「港でキャプテンとやらの就任式を大々的にやりたいからいつ来てくれるのかってさ。なんだかブルーたちを救世主か何かだとも思ってるみたいで。かなり不気味」「そうか」

「それをのぞけば他はいつもの通りかな。」

デューコンの奴なんかは特にそう。俺は金づちも器用に使えるとわかった。新しいビジネスチャンスを手に入れたぞ、とか言ってる。ここに残って作業を続けてる。

ニツクなんかは港にいたい。

もしかしたらあそこから動けないのかも。ケイト達も大変だろうけど、港が近い分ここよりもっと困っているのかもね」

体を起こそうとするとうまくいかない。パイパーの助けで何とかできた。

「私も港に行かないと」

「本気なの？無理、そんな状態なのに」

「いや、明日にはなんとかして砦に向かわないといけない」

「ブルー！どうかしてるよ」

「パイパー、信じてくれ。この痛み方には——覚えがある。私には睡眠よりも薬と医者が必要だ」

「え？」

「軍にいた時に予想外の感染症に苦しめられたことがあったんだ。時間がない気がする。急がないとまた悪化してしまい、動けなくなる」

「冗談だよな？」

「本気だ。この島にいる医者は2人だけ、キュリーと港にしかいない」
「強情なんだからっ、死んじゃうよ？」

「まだ大丈夫だ、でもここにはいられない。パイパー、力を貸してほしいんだ」

軽口で余裕が出てきたのか、私は部屋の隅で浮かんでいるコズワースにこの時ようやく気が付いた。

「コズワースか。まだ、あのまま？」

「だから大騒ぎだったんだって。ロボット装置だっけ、アレの使い方よくわからないし。それに戻してもおしゃべりがうるさいだけだか

ら、ちようどいいと思つて」

「おしやべりなパイパーがそれをいうとは」

「まあね。自分はイイんだ。こういう時だけは」

ここを出る前に彼も元の姿に戻してやろう。

アキラからあの装置の使い方は教えてもらっている。きっとパイパー以上に文句を聞かされるだろうが、今は彼の声が聴きたい気分だ。

「もう少し待つてくれ、コズワース。後で私が元に戻すよ。それぐらいならやれるさ」

「ちよつと、キュリーのところに行くんしよ。別にそんなことしなくてもいいと思うけど?」

「彼も大変な任務を終えたんだ。ちゃんと戻してあげないと。それよりにか食べるものはないかな?」

「わかった、探してくる」

部屋を飛び出していくパイパーを見送ると、私は自分の手を目の前に持つてきた。

本当に“久しぶり”の最悪の戦場から戻つて生き残ることができた。アンカレッツジでも感じた通り、生き延びたという安心も喜びも特になく。むしろ死からまた距離が離れたことにおかしな感傷にひたつて緩んでいる。

あの場所で自分の血を流してはステイムパックで傷口をふさぎ。なにかの血を浴びては、怒りと死をばらまいてすべてを出し切つてきた。

おかげで今の自分は空っぽで、痛みだけが残っている。そして私はまだ父親には戻れていない――。

砂漠の世界に立っていた、と思う。

太陽は砂嵐に隠れ、次の瞬間には荒らしは消えて雲一つない青空に輝く太陽がやけに大きく浮かんでいる。それが交互に繰り返し、夜は

来ないが雨も降らない。時間の感覚だけが何かおかしいのだろうか。そのうちそこにひとりの女性があらわれはじめた。

彼女の髪は白く、肌も白く。もしかしたらただ発光しているようにも見える。

そしてやはり時間がおかしいのだろうか。世界と同じように。裸であったり、ドレスであったり、服だったり。やっぱり同じ白のそれが変わっていくのだが。

彼女の姿と肌は変わりなく。

年を取ることを拒否しているみたいで、なにか神々しさすら感じる。

——アキラ、私たちは希望なのよ

世界と彼女の服が変わるのに、語り掛けてくる彼女の言葉は穏やかで優しかった。

希望か、なんだかい言葉だが。不安にも思える。

——いいえ

別の誰かが、それにこたえていた。

——絶望しかない。だって“ニンゲン”なんだからそれしか残せない

悲しい言葉を、悲しい声で答える。

これはなんだ？まさかこれが記憶？こんなわけのわからない、ファンタジーみたいなものが“オレ”の!?

すべてを破壊したい衝動を怒りと共に感じた。

なにかが包むように、触れるようにして縛るように覆いかぶさってくる誰かの冷たい手が腹立たしくて抵抗していた。それは理由がなく、理性もなかった。

焼き尽くせ、破壊しろ！

それは穏やかでも止まることのない暴走。

終わりなんて知らない。終わりなんてどうでもいい。だが、これはやめるつもりはまったくない。

現実に戻れたのは、おそらくこの時だと思う。

自分にはまだ体があつて。その腹から吐き出せるものがないのになかみをぶちまけようと体をくの字に曲げて胃液とよだれをまき散らしながら、地面の上で四つん這いとなっていた。

「やったーやりました、戻ってきた」「畜生！マジかよ、本当に生き返りやがった」

「——ま、こうなると思つてたよ。あたしはマジでそう言つたでしょ」武器がない。装備を失つた？違う、そもそもなんで自分は裸だ。

周りを見るとぼんやりとしていたが、マクレディやキュリー。ケイトがいるのを確認した。仲間たちがいる、治療を受けていたのか？だがどうも少し驚き、怯えた表情をしていたらしい。

向こうは少し驚き、怯えた表情をしていた。僕は片手を目にやってゴシゴシとふくと、視界と同じように五

ケイト達に呆れられる中、徐々に落ち着きを取り戻していく。

どうやらここは老人の小島で、自分が用意したシンプトマティックを使って治療されていたことまで状況を把握できた。

自分はキャプテンス・ダンスの準備には多くのものを用意していた。

武器、戦闘計画は当然だが。任務後のことにも注意していた。

危険な入り江での乱戦、混戦なのだ。

帰還後に注意するのは当然、感染症である。戦場でも兵士がそこから細菌を持ち帰らぬよう防疫に心を配るのは当然のものとして考えるものだが。この世界ではそれが一番難しい。

特にこの島は環境が最悪で、放射能に対処すべく汚染シャワーを用意したが。

あれだけでは重症に対応する治療はできないとわかっているのに、その対策を探り続けていた。ありがたいことにそれはアカディアの存在と、商売ができたことで解決した。

アメリカ商社（仮）に作つた治療室にようやくシンプトマティックをひとつ用意できたのだ。

それがさつそく僕自身の役に立ってくれたらしい。

「死にかけたって？」

「そうだよ。ここに運ぶまでに一回心臓が止まりやがって。さつきもいきなり止まったところだ、馬鹿野郎」

「キュリーがあんたが作ったこの変なタンクで何とかするって言うて。本当に何とかしたんだよ」

自分の体を確認すると胸部の左右にふさがりかけている大きめの丸い穴があった。

「心臓に刺激を続け、肺の活動を補助したんです。他にも薬物をいくつか投与しましたが、いきなりの心停止だったのでダメかと思いましたが。本当に良かった」

なるほど、確かに僕は死にそこなったらしい。

裸のまま尻をつけて息を吐くと、ケイトがタオルを投げてよこしてきた。

「とりあえずお帰り、ボス。あたしらも職を失わずにすんだよ」

「ああ、どうも」

珍しくこの時の彼女の皮肉は心地よい響きに持っている気がした。

ところでさつきまで怒っていたのはなぜだったのだろうか？

なにか悪い夢を見たせいだとは思うが——それがもう思い出せない。

Dr. キュリー個人記録。

昨日、2度目の呼吸停止で私の心を引き裂くほどに驚かせ、慌てさせた患者は——恐ろしい回復を見せ。もうすでに海岸をひとりで散歩できるまでに回復してきている。

また、案内所に置いてきてしまったもうひとりの方も。友人についてもらってここまで移動してくれたことで治療は最終段階に。彼もまた感染症が重症化することなく、こちらも回復した。

とりあえず医師として、ひと安心と言っていると思う。

ただしそれはあくまでも「結果が良かった」からでしかない。

私は今回の事態に陥るまで、ずっと愚かな考えを捨てきれず。医療

研究者として無様な失態を演じてしまった事をここに自戒を込めて告白しなくてはならないだろう。

彼ら、患者たちは私がいて助かったと言ってくれたが——それは事実ではない。

彼らの命を救ったのは彼。そう、患者のひとりであるアキラ自身がやったことだった。彼は用意周到で、こうなる事態を考えて行動し。最悪の展開にならないよう、私に選択肢を作っておいてくれたのだ。だからアキラが2度も死にかけたのは私が原因なのだ。

彼の身体を前に私ができたことは混乱と虚勢を張ることだけだった。彼の中には常人にはあるはずのないものがあつたり、常人ではありえないものもあつたことに驚き。何もできないかもしれないと恐怖するばかりだった。

結局最後に力になってくれたのは医療装置のおかげ。

つまりアキラ自身が彼の命と彼の友人を助けた。私にはその力は全くなかった。

新しい自分が目指した「多くの人々を助ける医療技術を極めたい」という私のあの願いはなんだったのか。

私は、私が愛した人に無力であつたこの数日のことを恥じなくてはならない。

私はこの島に彼を助け、自分が目指す未来のために必要なものがないかを調べに来たと言うのに。私はずっと彼の足を引っ張り続けてしまっている。ここに来てから彼に何をしてやれたというのか？

今更ではあるが、私は彼らのデータを集め。そこから何かを見つけようとしている。なにがあるのかはわからないが。今度こそ——。

薄く目を開く、また自分はベットに横になつているが——あのベットではない。

そして部屋の中にはベットの脇にある椅子に座るニックがいた。再会できた喜びから思わず口が動いていた。

「ニツクか……」

「パイパーには休むように言っただけで追い出しておいだぞ。彼女をあんなに心配させて、あんたも罪な男だ」

「そうか、彼女には迷惑をかけたっぱなしだ」

「それだけか？ふむ、まあ。男と女のことだ、この老人がどうこういうことでもないな」

へっへっへっ、とニツクは笑った。

「キャプテンズ・ダンスを成功させたよ」

「ああ、知ってる。港じゃあんた達をご馳走を用意して待ってるよ。俺もロングフェローの爺さんも、いつ来るんだってしつこく聞かれてここ数日は困ってるどころさ」

「キユリーには治療は終わったと聞いている。あとは寝てれば元気になるそうだ」

「そりゃ、よかった」

ベットの上面でもう少しだけ体を起こした。

けだるさがあるが、前のような痛みはなくなっていた。

「計画は無事に終わりそうだよ。この島の人に私ができることはもうないと思ってる」

「ああ、もう十分だ」

「そうなるか最初の問題に戻ることになる。アカディア、ダイヤモンドだよ。ニツク」

「……ああ」

「新しいアイデアはあったかい？」

「ないな。悲しいことに、プラスチックの頭の中にはなにも浮かばなかった」

「じゃ、私の計画に乗るってことでいいんだね？」

「あんたとアキラが命がけでやってくれたんだ。ここで俺がひとりで駄々をこねてもしょうがない。それにナカノ夫妻には悲しい顔をさせたくはない」

「そうなるか僕たちは今度こそダイヤモンドと対決することになる」

「それは直接、ということか？」

「おそらく」

「――避けてばかりはいられないか。アカディアへはいつ？」

「なにごともしなければ明日、私とアキラは港に行つてアヴェリーに会うつもりだ。その後、つまり数日中」

「わかつた」

以前と違い、今回は前回ほど好き勝手に相手にペースを握られることにはさせないつもりだが。ニックにとつてデイーマが口にした過去の証言は簡単には受け入れがたい内容だったことは確かだ。

冷静でいられるだろうか？

「それじゃ、明日は大騒ぎになる。あんたは体を休ませておいた方がいい」

「待つてくれ、ニック」

用事は済んだと立ち上がりかけたニックを私は呼び止めた。

本当はカスミの説得が終わるまでは黙っていたいようと思っていたが。もしかしたら今がチャンスなのかもしれないと、私は考えを変えることにしたのだ。

「ん？」

「もう少しだけいいか？もう少しだけ」

「なんだ。よく眠れるように子守唄でもつて話か？それは俺には無理な話だぞ」

「違う……あんたに以前、話してもらったことがあつただろう。大昔の話、もうひとりのニックの話。エディー・ウインターという犯罪王のこと」

「やめろ！そんな話をここではしたくない」

「いや、最後まで聞いてもらう。本当はデイーマの後で伝えようと思っていたんだけど、今のうちにした方がいい気がしたんだ」

そういうと私は、部屋にある机の引き出しの中から箱を取り出してくれと伝えた。

一転して不機嫌になったニックだが、求めた通り。引き出しの前に立つてそれを見つけると、中身がなんなのか想像がついたようだ。

「おい、これって……」

「ひとりで連邦に戻った理由のひとつ。エディ・ウィンターの犯罪の証拠となるホロテープ、全部揃ってる。」

実は悪いと思ったが、間違いがないようにアキラにも確認してもらってる。だが結果は自分で調べないと納得しないだろう？」

「ああ、クソつたれ。言いたくはないが、お前さんは時々ひどく腹の立つやつじゃないだろうか？ 思う時があるのを知ってるか？ この哀れな老いぼれ人造人間よりも賢いとも思わせたいのか？」

「怒らないでくれ、ニック。」

あんたにとつてはとても重要なものだってわかっているから、ここまで慎重に黙ってた。エディーのことを知ってあんたがこの島から連邦へ戻ってしまうんじゃないかとか。そう考えたら気軽には渡せない」

「——わかったよ、頭には来ているがね。とりあえず今は探偵の仕事をしよう。」

この古びたホロテープはどれも本物のようだ。あの糞野郎らしい、いやらしい指紋がべったりとこびりついているのがわかる」

「それはアキラでもわからなかった。でも、あんたの読み通り確かに隠されたコードはあったと言ってた」

「古いプロセッサを使うだけで——よし！ 出てきたぞ、たしかに10桁揃ってる。」

あの悪党はアンドリユー駅にシエルターを持っていたのか。なら、今もそこにいるな」

ニックの背後には彼が今、どのような表情をしているのかはわからない。

「大丈夫か、ニック？」

「ああ、うん。だいぶ気分が落ち着いてきたようだ、あんたにはまだ腹を立ててはいるが。そうだな、俺は感謝もしているみたいだぞ」

「それならよかった」

「うん、それに心配もしなくてもいい。奴の居場所はわかった。今はそれで十分だ。」

若造みたいに頭に血をのぼらせて感情的な行動はしない。そもそもそ

も俺は、人造人間だからクールに振舞える」

そう言うとニツクは半身をこちらに向けた。

復讐心を押し殺したいいつもの探偵がそこにいてくれた。

「ああ、でもそうだな。感謝するお前には少しばかりやり返してはどうか。彼女のためにも」

「ニツク？」

「レオ、最近は騒がしいお前さんはそろそろ真剣に考える時期が来たとは思わないかな？」

「？」

「パイパー・ライト嬢のことだよ。」

お前さんがインステイチュートにさらわれた息子のことで気も狂わんばかりに焦っているのはわかつてる。だがな、そうだとしても。そろそろ自分に向けられた女性からの情熱的な視線つてやつに気が付いてやるくらいの余裕を持つておくべきだ」

「パイパーだつて!？」

いきなり、なんだつていうんだ。

「ふふ、いい表情だ……いや、真面目な話だから続けようか。俺が言うことじゃないが。彼女は信念を持った賢くいい人で、そして困ったことにあんたのことを気にしているようだ。」

ミニツツメンに対する彼女の好感度が高いのは、俺の見るところあんたつて存在が大きく関係していると思う」

「……」

「あんたが女性を利用する鼻持ちならない奴だというなら、今のよう気が付かないふりを続けるのも構わないとは思うがね。」

なあ、若いの。この老人の心配をしてくれるのは嬉しいが。それなら今度は自分も冷静になるべきだつてことを理解するべきじゃないかな。

息子のために悪戦苦闘しているあんたを助けている彼女に。そろそろ向き合つてやるべきじゃないのか」

言葉が出なかった。

妻を失った後でも自分が女性への興味を失ったわけではないこと

は理解していたが。それはなんとというか——互いの未来を考えたものではないからだった。

だが、パイパーは大切な友人だ。

そして美しい女性でもある。もしニツクの言う通り、私と彼女の未来になにかあるというならそれは——真剣なものということになる。私が、息子を取り戻すだけではなく、新しい家族を手に入れるだって？

「ふふふ、いい顔だ。だが悩める色男よ、今は寝ておけ。明日はパイパーなんだから」

「最悪の励ましをありがとう、ニツク」

「どういたしましてさ、相棒」

ベッドに横になるとV a u l tから這い出てからのこれまでの日々を思い返す。

そうだった、確かにパイパーには色々と助けてもらってきた。そして私はずっとその好意を気にしないようにしてきた。V a u l t 81のマクナマラ監督官と同じような関係を彼女にも望むのは間違っている。

最悪な気分だ。

だがこの気分のまま、おそらくそのうち姿を見せてくれるであろうパイパーに私はどんな顔をすればいい？

翌日、昼。

港の門にV a u l tスーツを着た2人の客人が姿を見せると、人々はこれを歓声で迎えた。

英雄の帰還だ。

もはや誰にも不可能と思われた儀式を完了させ、彼らはここへ戻ってきてくれた。

その勝利の証として新たなキャプテンが2人、この日から誕生することになる。これほどめでたい話はない。

飾りの下に並べられた机の上にはマイアラークらの肉料理が並べられ。酒場の主人はいつも以上に大量の酒を用意すると、すべてを飲み干してくれと派手に女たちの手で港の皆に配らせた。

誰もが酔い、誰もが喜んでいた。

いつもの暗雲立ち込めた希望なき人々の姿はそこにはなかった。

「ハーバーマンを代表してっ、このアレン・リーが。新しいキャプテンたちを“特別”に祝福させてもらいたいっ！」

「それは——ありがとう」

「では受け取ってくれ！これがうちの秘蔵品だ」

彼の紹介で店の奥からカーゴに乗せられたマネキンが出てきた。問題はそのマネキンが来ていた装備だ。レオの目が驚きに丸くなる。ヘルメットまでついたアメリカ軍が使用していた完全なマリーンアーマーのセットだった。

これまでは会えばよそ者と皮肉を叩き、値段を釣り上げていた男とは思えぬ大サービスだが。もしかしたら今回の事での敬意と、これまでの態度への詫びを込めた彼なりの考えがあつてのことなのかもしれない。

「新しいキャプテン達に乾杯！ハーバーマンの新しい伝説に乾杯！」

アレンの声に漁師たちの歓声が再び盛り上がる。

アキラは人ごみの中からキュリーと共に脱出すると、港にならぶパラソルの下にある椅子に腰を下ろした。

数日前には死にかけていた自分であつたが。すでに食欲は戻っているし、痛みも和らいできています。あと数日もあればいつものように動けるだろうと自分では思っているが。それをキュリーの前で言うに關しそうな顔をされてしまうだろうから黙っていた。

とはいえ、陽気に騒ぐ海の男達に大勢囲まれるときさすがにキツイ。「フウー」

「ため息ですか？つらくありませんか？」

「大丈夫。でも、この大騒ぎには最後まで付き合いたくはないかな」

「今朝は今日の主役は自分達だつて、言ってますませんでしたか？」

「そうだね。でもやつぱり目立つのは得意じゃないみたいだ——」
笑おうとするとわき腹が痛む。

イテテ、と言おうとしてこちらに歩いてくる子供たちの姿に気が付いた。

「キャ、キャプテン。おめでとうございます」

「ありがとうございます。君は——」

「バーサ。ここの人たちからはスモール・バーサって」

僕の耳は彼女の声を聞いていたが、僕の目は彼女の後ろに立つ少年に向けられ釘付けにされていた。

おそらくだがこの2人は姉弟だ。港に出入りする際に何度かみかけたことがあったはず。

だが、そのときの記憶と今の少年の姿に違和感を感じた。

以前は自分の殻に閉じこもっているような印象を受けたが、それがない。落ち着いて姉の後ろをついてきていて、行動から様々な感情を感じない。まるでロボットみたいに静かだ。

そして表情を読ませないヘルメットをかぶっている。

以前はそんなものはつけていなかったし、そのヘルメットは明らかに——ハブリス・コミックのキャラクター。アンタゴナイザーのそれだ。なんだ、これは？

「それで——」

「はい、それであなたを雇いたいんです」

「雇う？」

「はい、いいですか？」

「いやだ」

「え？」「アキラ!」

「僕を雇うっていうなら仕事の内容とギャラは重要——」

「私たちの家を。エコーレイク製材所を取り戻してほしいの」

僕の中で危険信号がいきなり鳴り始める。

そこは居住地として使える場所だとわかっていたが——あそこまで僕らが手を広げる理由はない。そもそもダルトン・ファームにすら人が入っていないのだ。さらに新しい場所をこの島に求めてどうす

るというのか。

この僕の意見にはレオさんも同意してくれたし、だからこそ計画からはじかれていた。その計画はすでに完了寸前で、いまさらこの港で見かける程度の少女の求めに応じてさらなるリスクを負う必要はない。

それにどうして僕のところに来た？それが引き受けて当然だともいうように。

「わかった。私の全財産を出す、それでどう？」

「——全財産ね。いくらある？」「アキラ、そんな言い方をしては——」

「10キヤップ……違う、15キヤップある」

ハッ！

アレンの店なら古びた缶詰ひとつくらいはそれで買えるかもしれない。

ところがこの愚かな少女は居住地ひとつをその値段で売ってくれというわけかい。相手が子供たちであってもその不愉快さを表情で隠すことはできなかった。

機嫌を悪くしたと悟っても、相手を思っただろう。キュリーが強めにこちらの腕をつついてもうやめるようにと伝えてくる。

「いいかい、お嬢ちゃん」

「バーサ。私の名前はバーサよ」

「いや、お嬢ちゃんです。甘い夢を見るのは自由だが、それを押し付けてくるその傲慢さが不愉快だよ。

君たちの家だって？なら自分の手でとりもどしてくればいい。なぜ僕に言う？」

「それは——あなたたちキャプテンなら、それができるから」

「それだけだと命を懸ける理由には足りないな。本当のことをそろそろ言ったらどうだい」

「え？」

僕は強くバーサの腕をつかむと頭を突き出してその耳元で囁いてやる。

「君たち子どもはこの港の野良猫だ。いつ泥棒するかわからないが、

気分によつては相手をしてやつてもいい。そういう愛玩動物だよ。この大人たちはそうやつて君たちを扱ってきたんだろ？

君たちには何も無い。だが、体が大きくなれば彼らの仲間に入ることはできるかもしれない。ただそれは——これまでの家族だった野良猫から人間の側に立つて。新しい仲間と同じ目線になることが条件になる」

「……はなせっ」

「君の体はもうすぐ大人になる。そうになると君は子供たちから離れないといけない。」

その時は近いが、君たちにもてるものなんか何も無い。すると疑問が出てくる。なぜそんな君らが僕を雇うなんて考えた？ いや、誰が、そうしろと君に囁いた？」

「っ!？」

「小さなバーサ、君の名前は知ってるさ。賢く振舞おうとしても君の世界は小さい。」

僕たちを見る君の目は、港の大人たちとそれほど大きくは変わらないうことは知ってる。数日前までは君は僕らを外の人間ではなく、“外から来た大人たち”と見ていた。

それがなぜ考えを変えた？ 僕に助けを求めた？ 答えてみる」

不愉快な相手なら性別も年齢も僕には関係ない。怒りという立ちに満ちた言葉を少女にぶつけた。

そんな僕の態度にキュリーは言葉を失い、少女は必至で涙をこらえている——だが怯える姉の後ろに立つ彼女の弟は微動だにしない。姉の身に危険が迫つてるとか、怖がっているとは考えていないみたいだ。

この殺人者が半ば本気で姉を目の前で脅かしているのに動じていないとはね。面白い、この少年のヘルメットはただの飾りではなかったわけか。

実験は終わりだ。結果は出た。

僕はバーサの手を離すと元の位置に戻り。先ほどの殺気立った様子を引っ込め、答えを待つ。

「そいつの名前。言わないならもう消えろ」

「……わかっ……た、言うよ。たしかにそいつからあんたにそう言えって」

「わかってる。さっさとしろ」

「そいつは自分をサカモトって」

——サカモト？

聞いたことのある名前かな？どうだろう。

だがなんだか面白い、楽しい気分になってきたぞ。霧のかかったあの不愉快な記憶の箱を乱暴に漁りながら、僕は大きな声でこの喧騒に満ちた港の中で馬鹿笑いをしたくなる。待っていたのはこれか？あいつらはやっぱり手を出してきたのか？

バーサだけでなく、キュリーからも恐れ of 感情を察知し。僕は途端に感情を再び、今度は必死に隠そうとする。

悪い顔でもしてしまったのだろうか、女性たちは明らかにおびえている。でも、もう大丈夫。表情筋からは力が抜けて感情を失わせている。

「すまない。そのサカモトという“男”には聞き覚えはないみたいだ」

——ないのか。嘘くさいな。

「そんなことはないよ。ところでその人物は正確には何と言った？」

「新しいキャプテンと、若い方と個人的に話したい……」

「へエ、そう。“個人的”とききたか」

——今度はなにか気持ち悪いな

「それは同感。でもそれって……ん？」

ここで違和感をようやく感じる事ができた。

目の前にいる女性たちの表情は恐怖は消えたが困惑している。そして視線は座っている僕ではなく斜め上の方向に同じく向けられていた。

——そいつが男かどうか問題だな。問題だろ？まさかそうではないというのか？

「なっ!?!」

小汚い港の中に突然現れた違和感。港で暮らす容姿では全くない。明らかに不自然に白い肌、見上げてしまう長身。金髪の髪はそれ自体が発光しているかのように曇り空の下でも輝いている。言動と思考、態度までもが人間を超越している怪人にして、自らを宇宙人と自認する存在。

Guardian alliance of the earth
地球の守護者同盟と名乗る奇妙な宇宙船に住む集団のひとり、Q。

彼がなぜか僕の隣に立って、会話に参加して茶々をいれていた。

「何を驚く?自分の性癖に今更にして気が付いたのか。それは喜ばしい発見だったろう、探検への好奇心は実に貴重なはじまりともいえる」

「どうしてここにっ!」

「うるさいな。なぜ騒ぐ。こちらはこうして自然に周囲のこの小汚い奴らに混ざろうと必死で努力してやっているというのに。そんな声をあげられては台無しじゃないかっ」

お、落ち着け。

何かはわからないが、よくないトラブルがまたまた近づいてきたからコレが隣に立っている。そうに違いない。

たとえそれが違っていたとしても。すでに僕はそう思い始めているのだからそうに違いないっ!

「話を戻そうではないか。お前の新しい性的嗜好について、共に考えてみよう」

大きく息を吸い、吐き出した。なんだ、呼吸の仕方を忘れてしまったのか?という怪人を無視すると、僕はバーサという少女に取り繕った笑顔を向けた。

「隣の人は無視してくれていい。それよりもさっさと話しを終わらせよう——キャップはいらないが。いくつかの条件を君が飲むというなら。僕が君の望みが叶うようにしてあげる」

「わかった」

「返事は聞いてからにするんだ。ひとつは君を助けたその男に僕が

『すぐに会いたい』と返事を伝えるんだ。それともうひとつ。

君の弟は面白いヘルメットをしているね？僕はコミックマニアだからわかる。アンタゴナイザーのヘルメットだね。作りがいい、とても気に入ったよ」

バーサの表情は変わらなかったが。喉がごくりとつばを飲み込むのを確認した。

緊張しているな。どうしてだ？僕がああ奇妙なヘルメットに興味を持ったことが気になったのか？

「それを譲ってほしい。そのかわりに製材所は望みどおりに君にあげる。これは好意による取引だから悩むのはなし、返事は今聞かせて」「イエスだよ」

よし、片付いた。

「ならこれからすぐに僕の言う通りに動くんだ。

君はまず、ひとりでこのままもうひとりのキャプテンがアヴェエリーと話すタイミングで僕に言ったこととおんなじ言葉を彼に申し出るだけでいい。それが自分の考えだというようにね。なんならそのキャップも出すんだ。

真剣に、全力をかけて説得してこい。

居住地は子供の遊園地じゃない。彼ら大人を君が説得できないなら、君には望むものを手に入れる資格はない。

でも彼らの興味を引くことができれば、あとは僕が力を貸すから心配はいらない。文字通り君はその15キャップで家を買戻すことができるだろう」

「……」

「だけどひとつだけ。僕とは取引以外に約束をしてほしいんだ、お嬢さん」

「こんどはなに？」

「僕は必ず——そう、必ず君をその代表にするよ。」

君の夢はかなうだろうが、君は今のようには子供たちだけの味方ではいられなくなる。

そこから先は君がしくじれば、家を失い。隣人を失い、友人も失う。

誰も君に興味を持つこともなくなって、霧の中に入っていきたくなるかもしれない。もちろんしくじった時点で生き残ることができれば、ね」

「わかってる」

「それじゃ行つてこい。タイミングを間違えないように、チャンスは自分で掴むんだ」

僕はそう言つて少女を立たせるところから離れるようにすすめた。「なるほど、慈悲の心というのを見せたつもりなのか？だがお前はチャンスだけを与えた。」

そうかお前はあの娘が失敗することを期待しているんだな？それでこの後はどうする？あの娘を自分の好きなようにするために、落ち込む彼女の手を取つて慰めてやるわけか？」「……」

沈黙しているがキュリーの眉間にしわが寄っている。

おいおい、彼の感想で事実じゃないから。誤解だよ。

「それで——珍しいどころじゃない人が僕の横に立ってましたけど。僕の前にいるということは何か用事が？」

「ふむ。実は休暇を兼ねてバカンスに来たと答えたらどうするね。お前にその案内と世話を頼みに来たと言ったら？どうだとても光栄に思うだろう？」

僕はそれに答えず。空いたばかりの席を指して

「では座つて話を聞きます。と言ったら、そうしてくれませんか？」

「座る？ならば文明的に、椅子というものをちゃんと用意してもらいたい。もちろん君や可愛らしいこの人の姿をした彼女が腰かけている汚らしい残骸ではないものかを言っている。そうだ、ちゃんとした、椅子があれば。もちろん座つてやってもいい」

「では歩きましょう。できるだけ人のいない場所に向かつて」

一緒についていこうと立ち上がるキュリーには、出来るだけ僕達から距離をとってほしいとジェスチャーで伝える。素早く周囲を確認するが、浮かれ騒ぐ人々の中にあの宇宙船で出会った顔はどこにもないようだ。

僕は怪人と並び、キュリーがその後ろについて歩き出しても。騒い

でいる周囲の人々はこちらに注意を向けてくることはなかった。彼らの前で座っていた新しいキャプテンのことなど見えていないみたいだ。

「そう。誰も我々の姿を見つめたりはしない。もちろん限界はあるがね」

「でしようね。そう思ってたところですよ」

「ところでこの……不潔で、下品で、希望もない島には何かがあるんだ？ いや、興味があつてね。これから世話をしてくれる君が、世話をする相手に何を見せてくれるのかつてことに興味がある」

「海産物を使ったアルコールしかないですよ。ここはなにもない場所です。だから新しく作ってる」

「ほう、君は荒野を進む改革者ということか」

「どつちかというところ、ここではあなたほどではない腹黒い厄介者ですね。それで、そろそろ話す気は？」

歩く進路を人の少ない埠頭を選んだ。

「いきなり核心を突きたいわけだな。自分を賢いと誰かに思わせたいのか？」

「おもちゃにされたくないし。あなたが本当にキャプテンやコスモスが言つてた通りの存在なら、ここに僕と並んで歩いている異常事態が偶然ではないと理解したいというだけです」

「疑り深いんだな。礼儀正しいふりをして、それは前も変わらなかった」

「地球ではそれを相手を信用してないから、とも言うんですよ……で、本当に人間でも体を悪くする飲み物が自分にどう効果が出るか時間をかけて確かめたいんですか？」

「それはもちろんお断りだ——では本題に入ろう」

足を止めるとお互いが向かい合う。

身長差は大人と子供だ。こっちは見上げてやらないといけけない。

「声を下げてください。キュリーに——この会話を彼女に聞かれない」

「くだらないことを気にするな。ところで我々に恩があるのは忘れて

ないな？すぐに返せ。一緒にあの宇宙船にまで来てもらいたい」

「……どんな問題です？僕で何とかありませんか？」

「これまでは多少なりとも見どころのあった連中だったが。今回はあいつらはかなり評価を落としている。警告を笑い飛ばすんだよ、そんな場合ではないと重ねて言っているのに。まったく深刻には受け止めない！」

おおっと？

「なんか、切実そうだ」

「追い詰められていると理解してくれてもいい。

ああ、そうだな。困ってるのだ。君のような腹黒い若造でも助けが必要と思ひ余ってしまうくらいには。

せつかく使い物になるまでに育ててやったというのに。くだらないことで彼らを失ってしまうかもしれない」

「おうおう」

「なんだ!?!お前も馬鹿にするのかっ」

「いいえ、あなたでも彼らを大切な仲間だと思ってるんだなつて」

「……そういうくだらない感情に括り付けても、鳴り響く警告音と危険ランプは消えんのだ。くだらない会話でいら立たせ、怒らせたいのかつ、この原生生物モドキよ！」

「怒らせるつもりじゃなかったんです。それで僕に何ができるんですか？」

「一緒に来ればいい」

「それだけ？」

「ああ、このっ。今度は馬鹿な若造のフリか。

うちゅうせん

船に乗る馬鹿どもを助けることで借りを返すんだ。お前は腹黒い厄介者なんだろう？賢く振舞ったり、誘惑して思考を失わせ支配したつていい。なんだつていいんだ、彼らを助ける」

「……まさか、これから？今からっ!?!」

「当然だろう、なぜここまで来たと思うんだ。ここに立っているというだけでも重大なリスクを負っているのだ。例えばそれは君の言う、厄介者としての運命がもうすぐ来てしまう前に滑り込む、みたいな――

」
最後の例えはよくわからなかったが。今すぐというのはさすがに困る。

「いえ、今はダメです。すぐは無理」

「なんだとっ」

「5日、いや3日ください。72時間、そのあとちよつと寄り道してもらうかもしれないけど。それでいいなら喜んで借りを返させてもらいますよ」

「小賢しいお前はそれでなにかが得られるとでも考えているのだろうか。それは大きな間違いだぞ」

「連邦を離れてこの島に来ているのは理由があるんです。ちよつとひとと段落着いたばかりだから確かに都合はつきますけど、もういくつか仕事を終わらせておきたい。」

それにちよつとした土産になるものも用意してあるんで、それも持っていきたいんですよ。あれにまた招いてもらえるとは思わなかったけど。念のために用意していたんで」

僕の言葉に大きな体の自称、宇宙人は諦めたように大空を見上げ。汚い空だな、匂いも最悪だと呟くと僕にいいだろうと答えてくれた。

「よかった。ありがとう」

「そういう感謝の言葉は必要ない。お前は本当の意味での好意をつまらない理由で無にしてしまったのだからな！」

お望みの72時間とやらでそれについて頭を悩ませ、たっぷり思い知るといい」

「そんなに怒らなくても」

「違う。あれだ、彼を見ろ」

そういうとQは港の一点を指さす。

僕はその指の先を追うとひとりで寂しく海を見つめるように立っている男が見えた。

漁師ではない。身なりですぐにそれはわかった。

背中にライフルを担ぎ、ズボンにコート、汚れた茶色のハンチング。船に目もくれず、海の果てをじつと見つめている。まるでそこから恋

人の乗った船でもやってくるのではないかと期待しているみたいに。
「彼……う？」

「来るべき運命は決して変わることはないのだとお前は今日学ぶだろう。では友よ、72時間後に」

声の後に振り向いたが、大男の姿は消えていた。

キュリーは驚いて口を開けたまま。何が目の前で起こったのかまだ整理がつかないらしく「えっと」を口の中で繰り返している。

「キュリー？」

「すいません、でも。あ、なんかいきなり消えたんです。本当に、いきなりパって」

携帯型光学迷彩発生装置が使われたわけじゃない。

あれは作動するのに強いエネルギーを必要としていて、動かすと独特の発生音が鳴る。だがあの怪人はいきなり、それも文字通り僕たちの目の前から消えて見せたのだ。

深く考えてもしようがないだろう。

それよりも最後に残したQのメッセージが気になった。変えられない運命だって？

僕はもう一度だけコート姿の男を観察する――。

「キュリー、あそこに人が立っているよね？」

「あ、はい」

「顔に見覚えがあるかい？」

「少し前にここに来た時は見ませんでした。誰でしょう？」

彼女の言葉に僕の心はざわめいた。

ミゲル・オチョアは鬱々とした島とそこに見える後ろに消えていく廃墟にわずかに興奮を覚えていた。おかげで弱々しい船のエンジン音も気にならない。

汚れた短パンにロングコート。そして何よりも目立たせたいのか、しっかりと折り目のついた帽子。

それは連邦で広がりつつある希望の証。

ミニッツメンなら当然のことかぶつてなくてはいけないもの。

運転席から感情のない目をした漁師が顔を出し。

彼の船に乗り込んでいる死にそうな顔で座り込んでいる乗客たちに向かつて声をかける。

「あんたらのご希望の港まではあと少しだ」

「ど、どれくらいだ？」

「すぐに見えてくる。そうだな、5分くらいか。」

わかっていると思うが、もう船の中にゲロを吐かないでくれよな。こっちはあんたらを降ろしたらすぐにも家に戻りたいんだ。掃除する時間も惜しい」

「もう吐くものなんて胃の中に残っちゃないさ」

「若いくせに情けないことしか言わないんだな。お前さんたちのボス はあんなに元気だったのに」

船長の言う通り、ただひとりだけ陸地を見て目を輝かせ仁王立ちしているミゲルはいる。

ミニッツメンの方針で立場を変えたガービーは元ミニッツメンたちとの間にしこりを生み出していた。

ミゲルはそんなひとりと呼べるだろうが、立ち位置としてはだいぶ怪しい部類に入ると言わざるを得ない。

かつてあのロニー・ショーのように、考えの違いからミニッツメンから離脱したものの。その精神は自らが持ち続けて実現すると考えた兵士たちがいた。

ミゲルはそんな男たちに近づいたが、連邦の平和をねがってはいてもそこには己の栄達もセットになっているような野心だけは大きな若者であった。

だが連邦はそんな兵士たちを痛めつけ、ミゲルたちを自分の同志としようとした元ミニッツメンたちは死んだ。

残されたミゲルたち若者の元に送られてきたメッセージの主があ のガービーだった。

彼らはしばらく様子を見てからガービーの誘いに乗ろうとしたが、

それは賢いふるまいではなかったと言える。

ガービーが顔も名前も知らない。ただ自分たちはミニッツメンの精神を受け継いだのだと主張するだけの集団を信ずることもできず。また、ガービー自身の考えを改めたことで旧ミニッツメンへの復帰が厳しくなったことで、彼らの扱いはさらに悪いものとなった。

そして彼らはガービーを捨てたが。

まだミニッツメンを利用することだけは諦めなかった。

「ミゲル、船長がこの船はもうすぐ——」

「ああ、聞いていた！ファアハーバーに到着だ、友よ。見ろ、この毒々しい世界を」

「それどころじゃないんだよ」

「わかっているさ！だからこそ我らミニッツメンが慈愛の手を差し伸べてやるんだ。連邦だけにとどまらないその勇気と決断力を、我らの將軍はひとりで発揮なされている。急いでお助けしないと！」

そういうとミゲルは部下たちの方へと体を向ける。

「もうすぐ上陸なんだぞ！いつまでも死にそうな顔をするな、シヤキツとしろ。」

希望なき島で震えて暮らす負け犬共の前で。我々は列をなし、將軍の前に立って『我らミニッツメンに忠誠を誓う者なれば、お助けに参りました』と告げなくちゃならん」

「本当に、あんな島に將軍が？」

「情報を確認したと報告も来てるんだ、心配はいらない。」

我々はあの島で將軍と共に新たな伝説を生み、再び將軍と共に連邦に帰還するのだ。伝説のミニッツメンなどとおだてられ。ガンナー族どころかB・O・S.にも何もできないガービーなど、所詮はあんなもの。

だからこそ我々の未来は將軍と共にある！

この認識に正さねばならないっ。

間違っているものを正さなくちゃならない。

大きな仕事だ、困難な任務ではあるが、なにもできないでいる無能なガービーにただ悩まされるばかりの連邦の同胞たちに教えてやる

のだ。

目を覚ませ、と。我々が従うべきは將軍であり、伝説とやらで大きな顔をする腐り落ちたミニッツメンの生き残りなどではないとな！」
帰還する將軍の隣に自分が兵士たちを従え。

それを呆然と迎える同胞とガービーの姿を思い描くだけでミゲルの心は高揚感に包まれる。

宇宙と連邦からファーハーバーに新しいトラブルがやってこようとしていた。

Need to Know (LEO)

時間はちょうど昼を過ぎたことを知らせているが。

周囲は霧に包まれ、真っ白な夜といってもいいくらい視界は不調。最近はその島の西側はたいていこんな調子だから珍しくもない。

森の中をまるで霧があっても関係ないというように進み続ける誰かの足音がする。アトム信者のローブに、頭を隠すようにぼろ布をまとうその姿は。隠しきれないほど大きな体格をしていることでどこか滑稽にもみえる。

珍しく一羽の鳥の鳴き声のあとにはばたく音に反応し、足を止め顔をあげた。

肌は浅黒く、掘りが深いその表情は見たことのない男であったが。

しかしその仕草や動き、怪しさまで含めると別の誰かの名前が思い浮かぶはず。そう、クロダだ。

これはあのクロダである。キジマと組んでレオの暗殺をたくらみ。今回は必勝を期してレオの亡き妻、ノーラの似姿を与えた暗殺用の人造人間を島に送り込ませていた、あのクロダ。いつからかわからないが顔を変え、同じアトム教へと潜入し。無口で別人の男を演じていたのだ。

(キジマの指定した五叉路^{わかれみち}まであと少しか)

鳥の声に反応する気配がないことを確認すると、再び顔を隠すようにして背中を丸めて前かがみに歩き出す。

あの人造人間——死者と同じノーラの名前を与えた女は、計画通り島のアトム教団へと侵入させた。ところがあのアキラたちがとんでもないスピードで活動を活発化しているのを知ったことで、計画に変更を加えた。ノーラをサポートしてアトム教自体を罠に仕上げる。

前回はキジマには無事に潜入したこと。ノーラのそばに近づけたことなどを報告して別れていたが。

時間がそれほどすぎないにもかかわらず。キジマから呼び出しを受け、クロダは少し機嫌は良くない。

(新しい動きでもあったか?にしてもなにをそう弱気になるか)

コンドウと組んで失敗し、今もどこか失敗を恐れているように見えるキジマの落ち着きのなさには良い感情を持っていない。キジマを信じ切れていないのだ。

森の中を抜け、土から公道へと侵入すると。

霧のせいで分かれ道かどうかもわからぬそこに亡者のように存在感なく待っていたキジマと合流できた。かぶっていたぼろ布を脱ぎながら顔を見せ、近づきながら元の姿に戻るように胸を張るが、しかし小さな声で呼びかけた。

「来たぞ、キジマ」

「クロダ……」

困ったことに、再会したことで両者は不思議な戸惑いを感じていた。お互いのまとう雰囲気の違いに戸惑ってしまったのだ。キジマはクロダに何から言えばいいのか思いつかず、クロダはキジマからあの落ち着きなさがきれいに払しよくされていたことに気が付いた。

だが男達が霧の中でいつまでも無言で顔を見合わせていても意味がない。

クロダが先に口を開く。

「こちらは潜入から上手く進んでいる。それ自体には問題はない」

「——そうか」

「女の方も悪くないが……アトム教団の方は問題だらけだった。予測したよりさらによくなかった」

無表情だったクロダの顔が不快感から歪む。

ニュークリアスのチャイルド・オブ・アトムは想像以上に混乱の中にあっただのだ。

若いころから過激な言動と行動を繰り返してきたテクタス贖罪司祭によって率いられていたこの組織は、^{テクタス}彼が島民への攻撃を口にしつつ、実際には信仰心の足らないと思われる教団の信者をどう排除するかを気にしていたのだ。

アキラなどがこの状況を知れば間違いなくテクタスの保身と恐怖心をついてくるのは火を見るより明らか。だからこそノーラには

もつと多くのチャンスが必要なのだが。まだその突破口を見つけれ
れていない。

そのことをキジマに伝えようとしたが、彼は話が終わる前に顔をゆ
がめると「ちよつと待ってくれ、もういい」などと言い出しクロダを
さらに困惑させた。

「どういう意味だ？もういいとはなんだ？」

「……」

「キジマ！貴様、まさか怖気づいて——」

「終わったんだ」

「なにが？」

「だから終わったんだ、俺たちは。負けた、完敗だ」

「意味が分からないぞ」

「クロダ……フランク・J・パターソン Jrが、アキラが島民の居住
地を拡張させた。もう終わりだ」

「なん、だと？」

「サカモトから情報があつた。冗談かと疑つたが、本当だつた。

旧ダルトン・ファームと国立公園跡地だ。どちらも人がもう入つて
いる。港からも人が動くのは間違いない」

「馬鹿なっ!!」

受け入れられず思わずクロダは声を荒げた。

この島での計画は約1年にかかる当初は見ていた。だがその計
画では合わなくなつたからと変更を加えた。それでも最短でもまだ
5カ月くらいは猶予があつたはずだと見込んでいた。だからこうし
て姿を変えてフォローしようとして潜入までしたのに。

「何かの間違いなのだろう」

「行動予測プログラムはニュークリアスに接近する確率を2週間以内
だとはじき出した——」

「!？」

「これはなんの不思議もない。港の島民たちは今やアキラとアキラの
資産たちを英雄と呼んであがめてる。もう間に合わないんだ」

「馬鹿なっ!」

それが事実なら。それが本当だというなら。

クロダとキジマは——ノーラという人造人間を使った暗殺のチャンスですでになくしているということになる。

それでも無理になんとかしようとするなら。そこにはアキラが立ちふさがる。それは“小さな宝物”での約束を破ることになり、当然ながらサカモトも今まで通り黙って見過ごしはしないだろう。

「知らないフリはできるかもしれない。サカモトはまだ観測者をここに呼び寄せてない」

「そんなバカな言い訳を口にするな。そもそも島に来た時点で退路はない」

「そうなると最初に戻る。俺たちは負けた。チャンスはない、おそろく“小さな宝物”にも戻れない。戻れば必ず弾劾を受ける。俺たちは能無しと呼ばれ、キンジョウの手で廃棄物に落とされる」

「……」

「逃げる、というのはどうだ？」

「何を言ってる？」

「連邦の外に出ればいい。新しい場所を探すことはできる。全てを捨てるが、出直すという選択はある」

クロダの顔にうつろな笑みが浮かぶ。

「希望なき世界を放浪するだけの未来にすがれというのか。そもそもサカモトは甘くないと言ったのはお前だぞ。」

そんなそぶりがあるとわかれば観測者に知らせる。知らればすぐに我々は見つけ出されてしまうだろう」

「だが、戦って逃げるチャンスはある」

「それもない。サカモトらはすぐにコンドウと我々の抜けた穴を補うべきといい。後釜が用意される。そいつらの最初の任務は与えられた力を発揮できると証明すること。猟犬となって追ってくる。殺すか、壊れるかするまでそれは続く。逃げられるわけがない」

「だからキンジョウに廃棄物にされればいいと？正気かよっ」

ゴミのように扱われ。見る影もなくなつた自分には新しく黄色のスーツが与えられ、行き先もわからずに連邦に背を向けて消えていく

姿が自分の未来。確かに耐えられるものではない。

「クロダ！」

「キジマ、俺は考える」

「考える？何を？」

「お前も考えろ」

それだけを口にする、クロダは霧で見えないニユークリアスへと戻っていく。

報復計画は失敗した。選べるカードは少なく、そのほとんどの選択の未来に死が待っている。受け入れられないことだが、それを選ばないという選択肢もまたないのだ。

ニユークリアスに戻ると、まっすぐに食堂へと向かう。

この時間、あの女がどこで何をしているのかはわかっていた。案の定、ほかの奴らにいい顔をして仕事を押し付けられ。ひとり作業をしているノーラの背後に立った。

「あつ、驚いた——えっ？」

クロダは無言で己の服をいきなりはだけさせた。

続いて驚くノーラに暴力的と表現するしかない盛り上がった筋肉の塊である己を近づけさせると、片手だけで簡単にその両手をつるし上げる。

怒りがあつた。憎悪があつた。

自分が倒れる時は、自分よりも運がいい奴か。それともさらに優れた敵の手で終わるのだろうかと考えてた。それがこのような屈辱的な完敗で、自殺方法を自ら選ぶしかない状況に、監獄のように押し込められるとは思わなかった。

ノーラ、この人造人間も用はなくなってしまった。無意味なものとなった。

なのにこいつは自分たちが仕込んだプログラムに従い、おそらくは来ないであろう目的のために行動をし。任務が達成する直前まで自分が暗殺のために用意された人造人間だと知ることはない。

部屋のすみの暗がりには引きずり込むと、震えている女のローブを乱暴に引きはがす。

唇が肌を這い、相手の唇をふさいで犯す。

ニユークリアスはいつものように静寂なまま。

男女の息遣いは響くことはなく、虚空へと消え。だれに知られるでもなく沈黙は続く。

港での大騒ぎの翌日早朝。死にかけていた数日前のことなど嘘のように、体調はすこぶる良いものとなっていた。

そして今、アカディアを前に私はニツク、パイパーを連れて立っている。

「今日は良い天気だとても言つて気を晴らしたいのに。肝心の天気はいつもの調子か」

「ニツク、そんなんで調子で大丈夫？」

「これから始まることは楽しい時間ではないからな。それでも、ああ。おそらく大丈夫だろうよ」

ニツクがパイパーと話しているところに私も入っていく。

「ディーマとの直接対決だ。わかってると思うが、厳しいものになるかもしれない」

「とても個人的つてことを抜きにすれば、探偵の仕事はいつもそんなもんさ。さあ、とつとと始めよう」

「わかった」

港の人々の心をつかんだことにより。ようやくだがアカディアの問題に正面から挑める状況になった。

本当ならもっと別のやり方もあるかもしれないが。ニツクはそれを見つけることはできなかつたし、アキラはディーマと言葉を交わしたことで私と同じ考えに至つたと言つてくれた。

これまでの彼から出た言葉が本心から出てきたものなら、特に大きな問題はないはず。

だがそうじゃなければ——島民たちの不安をあおる、もしくはダンスを通じてB・O・Sを招き寄せると言つた脅しも必要になるだ

ろうし、用意もできている。まあ、自分が争いのトリガーを引くような真似はできれば使いたくはないが。

私たちの姿を見た時、デイーマは椅子に座っていたが。私たちではなく、そこにニックと一緒にいることに喜んで立ち上がって迎えてくれた。

「ニック。良かった、あなたとまた話すことができるなんて」

「やあ、デイーマ」

「私のこの喜びをぜひ知ってほしいのです。前は、両者にとって驚く再会で——」

「いや、そこまでだ。デイーマ」

「ニック？」

「お互い、いろいろと言いたいことはあるのはわかってる。どこまで受け入れるかっていうのも、難しい話だ。

だから今日は大昔の話ではなく、現在の問題についてあんたと話し合いに来た」

「どういうことでしょうか？」

ニックがこちらに合図を送ってきた。私は口を開く。

「今日は探偵のニック、その助手の私。そしてここにいるパブリックオカレンシアの編集長にして記者のパイパー・ライトがいる。彼女は私たちの側の証人となってくれる。」

デイーマ、カスミとは話し合った。彼女とはいくつかの点で合意し、家族の元に戻る意思があることを確認している」

「——彼女から直接その報告はもらってはいませんが。あなた方の言葉が嘘だと決めつける理由もないことは認めてもいいでしょう」

いやな話し方をする。

ニックがここで交代してくれた。

「デイーマ、俺たちの問題は今。あんたとあんたの作ったこのアカディアだ」

「どういうことでしょうか？」

「あの娘はここで興味本位にあんたの記憶をのぞいたと主張している。そこにはアカディアがファー・ハーバーの港やアトム教など。島

の未来に多くの死が待っているとあったと」

「――残念なことがおこっていたようです。」

カスミが気にすることは、自分自身や新しい生活について順応することであつて。アカディアを取り巻く外の世界の問題について悩むことではありません」

「彼女はそこにこのアカディアの被害については記載されていないかつたとも主張している。かなりマズい展開だと思わないか?」

「この問題は私と私の仲間たちに任せてほしいと思つています。決して、私たちが島を滅ぼす計画など立てていないことをお約束しますし、断言もできます」

人造人間の言葉に感情がどうこう言うのはおかしな話にも思えるが。

先ほどまでニツクにかけられていた言葉の暖かさがそこにはなかったことは確かだ。

空気は悪くなり、お互いが黙りこむ。

次にどう出ればいいだろう。私は本心をさらけ出して再びぶつかつていくことを選ぶ。

「厳格で尊敬されるべき指導者を演じ続けるのは結構だが、それで引き下がる話じゃなくなつていふことを理解すべきだ、デイーマ。」

これは家出少女を引き渡せ、という話じゃない。彼女がここで知つた。恐ろしい計画がなんなのか説明を求めている。なのにその答えが自分たちの中立性だけを信じる、では都合がよすぎるだろう」

「あれについていえることは、このまま何も私たちが行動しなかつた時に訪れるであろう未来の被害について予想を数値化したもの。それだけです」

「それが本当に真実だというなら、ここでもっと詳しく説明してくれてもいいはず。」

私とニツクは、君が人間との共存を求めているという言葉を信じ。カスミとは冷静に意見を交換しながら話し合つてきた。

なのに都合が悪くなつたからカスミを引き渡すから出て行けとでも今度はいうつもりか?それで人造人間の真意とやらがまだ人との

共存だと言いき張るのか？」

デーマは視線を私からニックに向け。それから私に戻すと静かに答えた。

「いいでしょう。これまではあらぬ誤解を受けないように、慎重に言葉を選んでいただけなのです。」

「ですがあなたの言う通り、真実こそが新しい誤解を避けるためにも今は必要なのだと判断しました」

「よかった。とりあえず用意していた強引な手段は必要なくなったかな。」

「簡単に説明しますと。私がアカディアをきずいた直後から、この島の島民たちとアトム教の間に深刻な憎悪が存在していたのです。長い時間が過ぎ去りましたが、変化することはありませんでした」

アカディアへの疑いは急速に晴れていく一方。なにやら嫌な方向へと話が転がり始めた気がした。

「彼らはどちらも紛争が始まることを期待しているのです。そのため少しでも有利ならうと、アカディアに手を貸すように求め続けていました」

「そりゃ、マズいな」

「ええ、ニック。大変よくない事態です。」

理解はしていましたが、それでも何とか中立を保とうと努力を続けました。しかし――」

「そのせいで裏目に出た？」

「そのようです。島の環境がさらに悪化して、ファー・ハーバーは滅亡の危機に追い込まれました。私はアカディアの理念を守るという観点から、彼らに霧コンデンサーを作って渡したのです。この一件がニュークリアスのチルドレン・オブ・アトムとの関係に亀裂を生みましました。彼らはアカディアの支援は裏切りだと非難し、理解しようとしてもしてくれませんでした」

ここまで聞き出しておいてなんだったが、私は改めてこのもめ事に顔を突っ込んだことは間違いだっただかもしれないと考え始めていた。

いつの間にかフアラデーとチエイイスがそばにいて、この話に加わっ

てきた。

「アトム教とは、デイーマが前指導者、マーティン司祭との友好関係から続いている。潜水艦基地だったが、それは今、彼らがニュークリアスと呼んでいる本部のことだ」

脳裏にアレンから送られたマリーンアーマーが浮かび、私は必死になつて飛び出しかけたうめき声をこらえた。

「マーティンの死後、新しい司祭となつたデクタスは傲慢な男だった。そうなるとは考えていなかった」

「そいつに追い出されてアカディアをここに移したわけか」

「そう簡単な話でもない。さらに深刻で、彼らからは協力を求める声が脅迫にかわつた。デクタスは自分の力でこの島の問題すべてに決着をつけたいらしい」

パイパーが声をあげる。

「あー、なんか聞いているだけで頭が痛くなりそうなのに。なんか余裕なんだね」

「それについては、さらに説明が必要になりますね。」

ニュークリアスには、実は私の古い記憶と共に残されていた基地の情報まとめて封印されているのです」

デイーマの古い記憶にはニックも興味は示さなかったが、基地の情報となるとそうはいかない。

チエイイスがそれに続く。

「前任の指導者は、ニュークリアスを譲つたデイーマとの友情から。それらの情報を明かすことなく秘密を守ることが約束してくれていたわ。でもデクタスは違う。」

彼は残されたデイーマの1世紀以上もの記憶と基地に残されていた情報を欲しがっている。この島を支配する力がそこにあると信じて狙っているの」

「そんなものが本当にあるの?」

「正直に言うかわからない。サーバーは巨大で、デイーマは基地のセキュリティまで飲み込んで全てを封印していた。」

簡単には開く方法はないけれど、デクタスは諦めない。また情報が

例え安全なものしかなかったとしても、彼には中にある情報を知られたくはない」

「初期の記憶ということは何が重要なんだ？」

「これは私に限らずニツク、あなたもそうですが。プロトタイプの人造人間のデータ容量は限られています。そこで私は基地に残されていたサーバーを利用し、定期的に記憶をデータ化して記録してきたのです。」

ニュークリアスを彼らに譲った時、この初期の記憶を残さなくてはいけないとわかりました。データ総量が大きすぎて、システムからは簡単に切り離せなくなっていたのが原因です。そして同時に、私はアトム教が危険な存在になるとは考えていなかったのです」

「放射能を神だという連中を信じたのか？」

「ニツク、何を信じようとそれは彼らの自由です。島民は彼らの信仰を笑い、馬鹿にして港からマーティン達を追い出しました。彼らは少し変わっていましたが、マーティン司祭はあの場所を任せられると思える良い人でした。だからあの場所ごと彼らに譲ったのです、彼らの家になるように」

「なのにあんたは、その後で気に食わない奴らを乱暴に追い出した港の安全を守ろうとしたのか」

「はい。ですがこれも簡単なことではありませんでした。」

彼らは自立心は高くても希望を失ったままでしたから。ただ技術を提供すると言っても信じてくれなかったので、取引という形をとる必要がありました。ありがたいことにそれは我々の目的にも合致することだったのです」

「ディーマが言っているのは、私たちの外の世界との窓口になってもらうということだ。安全な港や物資の売買する相手ということ」

それは確かに賢い。

だがこれは——どうしたらいい？

「こちらとしてはアカディアの秘密を聞かせてもらって、それであるつと解決といきたかったわけだが。どうも聞いているととんでもなく非常事態といっているようにしか聞こえない。どこまで信じた

「らしい？」

「すべて真実です。我々も努力はしていますが、これを解決する簡単な方法はないのです」

努力？つまり解決方法がある？

「その言い方だと解決はできるが、なにか問題があるということ？」

「はい。まずチルドレン・オブ・アトムに『誰かに攻撃された』と思われなことが重要なのです。アカディアですら彼らとの関係は最悪で、騒ぎを起こす口実を与えるわけにはいきません。

そのうえでニュークリアスが必要なのです。あそこにある私の記憶、データが」

「持ち出してくれればいいということか？」

「簡単に言えばその通りです。データの持ち出し方法は我々なら用意できます。ですがそうするにはニュークリアスに潜入せねばなりません」

「なるほど、信者たちの中に混ざらないといけないわけか」

「人造人間なら簡単だろうと思われるかもしれませんが。デクタスを相手に失敗ができないのです」

私は額に手をやり、大きく息を吐いた。

口に出さなかったがデイーマたちから聞いた情報から自分の予想にめまいを覚える。

そこに潜水艦基地があつて、アトム教徒が執着しているということは答えは一つしかない。

——核ミサイルだ

そんなものをこの島で使えばどうなるか。

少女の悩みはついに終わるかと思つたが……どうやらさらに難しいことになりそうだった。

デイーマとの会談の様子を話し終えたが。だれからも特にこれといった反応はなかった。

途中、「アトム教」「テグタス」という名が出るとロングフェローが顔をしかめて部屋から出て行ってしまったが、それだけだ。

ま、なんだな。とニックが仕方ないというように口を開いた。

「最後に待っているのは子供の勘違い——そんなものだろうと思ったんだがな。俺たちはどうもこの島をひっくり返す騒ぎに知らずに巻き込まれてしまっていたらしい」

「そんな可愛らしい話じゃないよ、ニック。ブルー達が連邦でもやった奇跡をここでもやったことで、殺し合いが始まるんだ。最悪死人の山だよ。港で聞いた話は誇張されてるって思ったかったけど、あの人造人間たちの口ぶりを聞いたらマジでヤバイ奴らじゃないのさ」

パイパーの口が開くと、思った通りダンスは気にして弁護の側に立つとうとする。

「私の意見を言わせてもらおうなら——」

「あんたはおしゃべり禁止！どうせB・O・S. ならなんとかなる、みたいな話でしょ。」

でもそれって結局はこっちに兵士を呼び込んで殺すつてだけの話じゃない。あんたは悪い奴じゃないみたいだけど、虐殺の片棒を担ぐのはごめんよ」

パイパーが口火を切れば、挑発するようにケイトが。マクレディも参戦する。

彼らのそれは少しばかり過激なものになる。

「なんでさうどうせ連邦にいても同じことする奴らじゃないのさ。ここで少しばかり死んでもらった方が、後で殺すときに楽になるじゃん」

「おい、馬鹿がテキトーに口をはさむなよ。」

キャピタルでアイツらのやりようを俺は知ってる。呼び込んだらマジでこの島の連中から皆殺しにしかねないんだぞ」

「はあ、どうも皆には理解してもらえてないようだが。我々B・O・S. をそこらのレイダー連中と同じにされては……」

騒ぎは関係のない盛り上がりを見せる中、レオとアキラだけは沈黙を続けている。

何かを考え続け、ふと両者の視線が合うとレオから（意見はないか？）と問うてくる。

僕はひげの生えていない顎をなでる。

「アトム教は本当に港の人々を殺したいのかな？」

『はあ!?!』

僕の疑問の声に、お前は馬鹿なのかといういくつもの顔が向けられた。

「アトム教。本気でこの島は霧で包まれると思っっている?」

「何をいまさら——」

「確かにこの島には憎悪がある。ファー・ハーバーの港、アカディア、アトム教。

彼らは互いを憎んで、蔑んでもいる。いつ爆発するかもわからない。今は危険な状態、だよな?」

「そうだよ」

「でもさ。それは港が滅びかけてた時からそうだったはずだ。

レオさんの計画で港に勢いが戻ったから危険が高まったって訳じゃない。彼らの話じゃ元から危険で、今もそう。そしておそらく未来も変わらなければ同じことがずっと続いていると説明されただけ。とは考えられない?」

「……」

レオさんの目が輝いた。

どうやら似たようなことは考えていたのかもしれない。

「あー、そりやどういう意味なんだ? つまり——」「賢い僕ちゃん」「それだ、馬鹿にしている俺達にはわからない屁理屈でからかっているってこといいか?」

パイパー、マクレディ、ケイトは理解を早々に放棄したようだ。

「さつきあげた3つの勢力はそれぞれが正しく相手を理解してないってことさ。だから自分の立ち位置もわかっていない、わからない。彼らは憎悪と紛争を口にするけど、それは実際には小競り合いで終わってる」

「——お前がクソレイダー共の王様やってたことを忘れてたぜ」

「おそらく本当に危険なのは港に住む連中だけだ。彼らは今、希望を取り戻せるかもしれないと考えていて。同時に何かが変わると信じなくなっている。勢いが変わってる」

「あんたとレオがそうしたんだけど」「それな」

今日はケイトとマクレデイが妙に仲がいい、ムカつく言い方だ。でもそれは無視する。

「アカディアは自分たちは中立だと主張するけど。実際は人間の争いに巻き込まれたくない。自分たちの過去の間違いで失ったものを取り戻したいと調子いい事だけを考えてる。」

アトム教は？

彼らがこの島を霧で完璧に満たされたいとは思ってる。でも港を攻撃するとは考えてない。せいぜい、コンデンサーを壊すとか、給水タンクを壊すとかするだけだ。船は焼いてないし、港にも直接攻撃はしていない」

「——まあ、そんな感じはあるかも」

「巻きこみたいのはアカディア。ファー・ハーバーの港もアトム教も関係ない」

結論を出したが、それで何かが変わるわけじゃない。

そう、問題が減ったりはしないのだ——。

砂浜にあるパラソルの下の椅子に座り、僕は待っていた。

それほど時間が立たずにディーコンばやってくる。

「俺に話があるって、相棒？」

「……うまく伝わるというけど。結論からいうよ」

「ああ」

「今、連邦に戻る船を用意してる。レオさんがマリナーと取引をしたんだ」

「つまりは俺に出て行けって？クビってことか？なにか気を悪くしたならあやまるが」

「違う——はあ、薄々わかってるんだろ？多分だけであっちで何かが起こってる」

「あのミニッツメンとか自称している奴らの事か？お前、レオに会わせないように色々邪魔をしているみたいだったか」

「あいつら、ガービーから命令を受けたとか言ってるけど嘘だ。」

「そもそもレオさんがここに知っているミニッツメンではガービーのほかには何人もいない。暗殺騒ぎがあつたからね。ガービーもわかってる、派手に兵士を送り付けたりなんかはしない。メッセージもなくね」

「それで俺に帰れ？」

「そうじゃない。アイツらがどうしてここにこれたのかはこれから調べる。でもお前に戻ってというのは別の理由がたくさんあるからだ」
「俺には思い当たることはないが」

「理由は僕にある。数日中にここから少し姿を隠そうと思ってる。誰にも言わないでくれよ」

「おおっと」

「そうなるとダンスとお前をここに放り出していくことになる。今はなんとなく怪しい、器用なハゲってだませてるだろうけれど。あの兵士は優秀だ、そろそろ疑いを持っていても不思議じゃない」

「それだけじゃないんだろ？どんな未来を見てきたんだ、俺に少しヒントをくれよ」

「やっぱりレールロードのエージェントは友情だけじゃ動いてくれないか。」

「アカディアはすでにアトム教への対処方法を知ってた。計画があつたんだ」

「それはつまり、人間の俺達の協力のことだな」

「僕らはすでにこの島の第4の勢力になりかけてる。そうなるように動いてきたとはいえ、ここから先はテンポが変わる。劇的な変化がやってくる。」

「おそらくレオさんはアトム教へ潜入することになる。その手はずはアカディアが用意してあるはず。」

「困ったことにそれは僕らにとっても利点になる。あのミニッツメンとレオさんは会わせたくない。会えば必ずミニッツメンの名を叫

びです。それは同時にアイツらの手柄になる、邪魔しにきただけの連中さ」

「ならあの連中は殺せばいい。それはもうあきらめているのか？」

「最初からそんなことは考えてない。でも、役には立って死んでもらいたいとは思ってるよ」

「ふふん、絶好調だな」

「港で新しい居住地の情報をもらってる。あの連中にはダンスとケイトをつけて、望み通り僕らを手伝わせてやる」

「半分くらいまで減ってもらいたいって顔をしてるな」

「失敗しないならなんでもいいよ」

「——ならそろそろ俺をここに置いときたくない理由を言えよ」

まったく、嘘の得意な僕の師匠はしつこくて可愛げがないな。

この辺で納得してくれたらいいのに。

「アカディアは救えないかもしれない」

「——そうか」

「あそこは自分たちを中立だというけど、実際は混乱を振りまいてるだけだ。旧世界では戦場の前線でもなんでもなかったこの島に、最新の装備や潜水艦基地がある異常さからよくないものがニュークリアスに残されていたはずなんだ。でもあいつらは争うことをさけた。目先の利益に飛びついたんだろう」

「人造人間たちはどうなる？」

「……わからない」

それは事実だった。

ニュークリアスに眠る情報を本当にアカディアが知らないというなら、何が飛び出してくるのか予想できない。なのに僕もレオさんも時間がなくなっていく。

連邦はもうすでに僕たちのことを見つけている。それは戻って来いと言っているのか、見ているぞと警告を発しているのかはわからないが。このまま長くいれば当然だがB・O・Sもアカディアのことを知る。

僕はそれをこそ恐れているのかもしれない。

マクレデイが教えてくれた。キャピタル・ウエイストランドにはピットと呼ばれる危険な無法地帯がかつてはあった。キャピタルのB・O・Sはそこを手に入れようと何度も攻撃を加え、ついに手に入れると厳しい彼らの方法で支配を続けているそうだ。

この島の争いの先には彼らにとって連邦でのピットになる未来もあるかもしれない。

「お前は人造人間を救うつもりはないのか？」

「聞いただろ、約束はできない」

「なら彼らを見捨てないでくれ。それだけでいい」

「……」

「船の準備ができたなら教えてくれ。お前の言う通り、連邦に帰るさ。デズもそろそろ怒ってないだろうしな」

「うん」

「お前にはあつちの情報も必要だろう。なにかわかれば知らせる。どこに送ればいい？」

「コベナント」

「わかった」

デイーコンはそう言うのと立ち去っていく。

僕にはこれ以上、彼にかけてやれる言葉はなかった。宇宙からの呼び声宇宙人が迫っている。そして、僕を付け回してついに近づいてきた名もなき男との面会の時間もまた。

彼の小屋に近づくjと、本人がテラスで立って古いラジオを手にしているのを見つけた。

「ロングフェロー」

「……なんだ、どうした？」

「いや——席を立っただろう？ なにか、気になって様子を見に来たん
だ」

機嫌が悪いわけではないだろうが、ロングフェローが少し緊張をし

ているのを感じた。

ラジオからは雑音が漏れているのにそれを気にしてもいないようだった。

「大丈夫か、ロングフェロー？」

「ああ、キャプテン。ただ、まあな。色々と思い出してしまいうことがあつてな」

「話を聞こうか？」

「嫌……嫌、助かるよ」

ロングフェローはそう言うと言つてラジオを机の上に置き——だが電源はきらないままだった——近くの長椅子に腰を掛ける。私はテラスに体を預け、彼が話し始めるのを待った。

「……あんたには人を見る目があるのはわかつてる。だから、わかるだろう？俺はかなりの頑固者なんだ。

そうなるよこんな歳じゃ、新しい友人を作る機会つてのは期待できなくなる。ひどいものさ。

だが、今はその機会があることに感謝してる」

「どういたしまして、かな。実際の話、あんたがこの島にいなかったら。私はまだ何も成し遂げることはできなかつたと思つてるよ」

「だがいつかは成し遂げるさ。俺はわかかつてる」

私はパーティーでは口にするのができなかつたかわりに頂戴していたウイスキーをここで取り出した。

封を切つて、お互いそれに軽く口をつける。

「少し変な話になる。俺にも若いころはあつたんだ。恋人もいた、結婚して、子供も欲しいと思つてた」

希望を期待しない寡黙な老人が初めて語る、自分の過去。

「港の中じゃ、海じゃなく山に入る俺は少し浮いていてな。彼女と2人で会うつてのは難しかった。

だからいつも港の外で会つていた。そこなら誰にも邪魔はされな
いと思つていたが、甘かつたんだよ。ある日、チャイルド・オブ・ア
トムの連中に襲われた」

「!？」

「そう、あいつらに半殺しにされた。彼女はさらわれ、俺は必至で自分の家に戻ることにしかできなかった。港の連中に知らせたのは数日後。あいつらは何もできることはないといったただけだった。そして俺は、まだ傷ついていて満足に動くことはできなかった」

「ひどいな」

「結局、無理をしたせいで治るまで2カ月かかってしまった。最悪だったのはその間に彼女は心を捻じ曲げられ、あいつらの仲間になっていたことだ」

「説得できなかったのか……」

「自分が口下手だったから、と思いたいがどうだろうな。アトムとやらを受け入れちまった彼女はもう別人になっていた。そして彼女のお腹にいた俺の子は——さっきの話の中で名前が出ていただろう」

「えつと——」

デーマが言っていた、今のニュークリアスのアトム教の司祭のことだろうか。

「テクタス上級聴罪司祭だよ。当時はジューロツト狂信者のひとりだったがな。俺とハンナを襲った連中は奴が指揮を執っていたらしい」

「……彼を憎んだ？」

「ハンナの、彼女の態度がそれを許さなかった。彼女は俺の目を見て奴を崇拜すると言い切ったからだ。そしてアトムとやらのおぼしめしか、彼女は数年後にトラッパーに殺されたそうだ。詳しくはわからないが、あいつらの話ではそういうことらしい」

言葉がなかった。

自分にはケロツグがいた。そして奴は、シヨンがまだ生きていてインスティチュートにすることを知らせてきた。「もうあきらめろ」と奴は言ったアレをこれまでは忌々しく思うだけで、感謝したことはない。

でもロングフェローにはそれは許されなかった。

「なんといえればいいのかわからないよ、ロングフェロー」

「気にしなくていい。わかってる、そういう運命を彼女は選んだ。俺と共に暮らし、子供を産んで、育てることではない未来をな。それは

仕方がないが納得できた」

「……」

「だがな、自分が子供の父親にはなれなかったことは今でも悔しいんだ。

このまま自分が学んできたことを伝えられる相手がいまま死んでいく。そう思うと、やりきれなくなる」

「話してくれたことは嬉しいが。それにしてもいきなり凄い個人情報 を教えてくれたな」

「自分のことを知ってもらいたかった。それにあなたのことはおかしな探偵や新聞記者から聞いていたからな、こうしたかった」

「あなたは凄いな、ロングフェロー。私も……まだあきらめられない。あきらめたくない。

奪われた息子を、シヨーンを取り戻す。この島にいることは大きな回り道だと言われたりもするけど、この先に何かあると信じて動くしかないと思ってる。それしかできない」

「キャプテンはいい父親だから当然さ。もし俺にも子供がいたら同じことをしたと思う。あなたは間違ってる」

ラジオの雑音が少し小さくなってきた気がした。

「そのラジオ、壊れたのかい？」

「そうじゃないんだ。これが、俺に残されたハンターとしての最後の
大仕事」

「？」

「シップブレイカーという。獰猛で、危険な奴だ。数年前から港の船を襲っていてな、もはや伝説と言われてる大物になってしまった」

「ラジオとどう関係が？」

「奴はなぜか電波を発していて、近づくとこうしてラジオが混線すること
で位置がわかるんだ。それでも俺はまだ姿を見たことはないが
ね、気にしている。

ちよっと前までは島の北側に上陸を繰り返していたらしいが。今日、
はじめてこいつを聞くことができた。もしかしたら島の南に下りて
きているのかもしれない」

ロングフェローの言う通り、ラジオの雑音はさらに小さくなり。そして消えていった。

彼の家にウイスキーを置いて私は出た。

砦の中を歩きながら、次にどうするのか自分なりに考えをまとめていた。

勝手にミニッツメンを自称する奴らは、アキラたちが言う通り会わない方がいいように思う。彼らの本当の目的は不明で、そもそも“將軍と会うこと”が目的である可能性は捨てきれない。何か適当な任務を与えることで時間を稼ぐとしよう。

それよりアカディアの提案についてはどうするか？

核ミサイルとニュークリアスの事がある以上、デーマの記憶を無視することはできない。しかしそうなると、ニュークリアス手を貸す形でこちらがアトム教徒となって潜入することになる——とてつもなく危険な任務だ。

(テクタス上級聴罪司祭か。どんな奴なんだろう?)

What's wrong (Akira)

サカモトは端末に向かって作業をしている。

薄暗い部屋の四方の低い場所にあるライトが照らされ。ここには彼しかないようだ。

Beep音が鳴ると「点灯」と口にし。部屋は一転して光に満たされていく。端末に椅子、トイレに洗面所。直立型睡眠ベットがあるが、部屋の外を見せる窓がない。ここには者がそもそもなくて生活の匂いがない。

「失礼します。お仕事は順調に進んでいますか？」

「んん、キジマ達に渡すものはもうすぐ終わるところだ」

入ってきたのは女性。ショートのプラチナブロンドが輝き、落ち着いた印象だ。

サカモトが見つめる端末の画面には、あの日アカディアに向かうレオ、ニック、パイパーらが山道を歩いている姿の隠し撮り。さらに「アキラの資産、アカディアと接触」と続き。自分にはどうでもいいが、彼らの計画には致命傷となる情報がしこたま詰め込んであった。

「情報を更新しました。確認をお願いします」

「——そうか」

作業を止め、ホロテープに今しがた手を加えていたデータを書き込みつつ。更新された情報呼び出す。

「連邦は動きがないのか。B. O. S. のエルダーも用心深い」

「……」

「それはこっちも同じか。クロダやキジマのために——どうせ役には立たないだろうが。それにしてもあの“ゴロツキ”共、アキラに阻止されたか。これはもう役には立たないのでは？」

「——それはあのミニッツメン達のことですか？」

女は疑問を口にするがサカモトは相手にしない。自分の考えを口にし続けるだけのようだ。

「不意打ちで送りこめば必ず会える、問題を起こすと思ったんだがな。運がいい。いや、悪いのか。」

だがまだ何かに使えるだろう。目を離さないように」

「……」

「聞いているのか？あいつらから目を離すな」

「——わかりました。引き続き監視を続けます」

「睡眠をとる。その後はまた“地上”へ。今はどこにいる？」

「指示通り、島から3キロの地点に」

「例のキジマ達にこれを送れ。それとこの潜水艇、つまりコンガは引き続きお前に任せておく。浮上の準備を、あとは“足”を使う」

「わかりました。おやすみなさい」

出来上がったばかりのホロテープを渡すと追い出すように部屋を出ると仕草で示す。

出ていったのを確認するとシャワーを浴びるために立ち上がる。

水中を“泳ぐ”巨大な蛇を思わせるそれこそサカモトの島での本当の拠点、潜水艇「コンガ」である。

操縦席のある頭部と尻尾のユニットで進路を取り。2つのユニットの間にリーダー哨戒、居住空間、補給物資が同じくユニットとしてつながれ、列車のように着脱可能となっている。ただし戦闘用のユニットは今回持ってきていないので魚雷やミサイルと言った攻撃手段は持っていない。

おかげで島の海岸は危険で近づくことが難しいが、水中からロボットたちに指示を出すことで島のどんな場所も監視、移動することができた。

先ほどの女はこの潜水艇の操縦者でありサカモトの今のサポート役。“小さな宝物”が生み出した人造人間で名前は——つけていなかったか？製造番号はあるだろうが、それで呼んだ記憶もない。

港の少女から知らせが来た。

キャプテンと呼ばれるようになったアキラは自分と面会することに同意したようだ。数日中にそれは実現するが、どう終るかにはサカモトにもわからない。

キジマ達は終わったが、サカモトはここから勝負なのだ。

自分はこの勝負。負けるつもりは、ない。

港で新しいキャプテン誕生のパーティーからさらに数日が過ぎた。

アカディアで明かされた真実。連邦を飛び出してきたミニッツメン。港から要請された新しい居住地。突然やってきた宇宙人。さらに多くの出来事があつて、今日は港にマクレディとディーコンが立っていた。

マリナーは久しぶりに動かす自身の船の点検に余念がなく。その時間が2人の男にきまらずい別れの時間を与えていた。

「――気を使わなくてよかつたんだぜ、マクレディ。お互いハグして別れを惜しむって柄じゃないんだ」

「また消えたあのバカの代わりに来てるだけだ。お前を愛してるって意味じゃないから、ハグはしないぜ」

今朝、レオはアトム教へ旅立っていった。

そしてアキラも姿を消していた。今回は誰も、どこにいったのかわからないらしい。なのにアイツらしいのは、そういえば自分やレオがいなくても暇にならないようにと頼み事という名の指示という面倒ごとをたつぷりと置いていつてくれた。

それが友人に丸投げして逃げだしたのなら、罵ったり友情とやらに疑問を持つこともできたが。

レオとアキラは似た者同士。おそらくは“彼らにとつては”楽な仕事を置いて言ったつもりでいるのだろうと考えられた。するとこっちだつてせめて頼まれていたことくらいはやってやろう、そう納得してやるしかない。

そんな中でディーコンは連邦に戻る。

ダンスやストロングは知らないが、薄々そう言いだす理由を知ってる皆はそうかと言い。別れは簡単にすまされるものになるはずだつた。

「戻るって言ったのはお前だが。納得してるのか？」

「そうだな——とりあえず手伝いはひと段落着いたところだし。アカディアなんて面白いものも見れた。まだまだ楽しいことは残っているみたいだが、俺とあのB・O・Sの兄ちゃんが一緒にいるのは安心できないだろ」

「正直、お前はあのダンスってやつをどう思ってるんだ?」

「悪い奴じゃない。それに役立たずでもない。」

アキラの奴に何を言われたのか知らないが、ご自慢のB・O・S印のパワーアーマーを隠して。別のに乗ってあのミニッツメンとやらを引き受けた。話は通されてるんだろうが、お前もアイツを助けてやったらいい」

「アイツはB・O・Sで。自分を優秀な兵士とか思ってる奴だろ? そんな必要、あるか?」

「雇い主の頼みを聞くのが傭兵だ。答えは出てる」

「まあ、確かにな」

アキラは異様にあのミニッツメンたちを嫌っていたが。マクレデイたちから見てもあの連中は怪しい。突然来たくせに港に閉じ込められていると非難し、将軍はどこだ。将軍に会いたいと、顔を見れば必ず繰り返す。

だが連邦ではミニッツメンを口にする奴は普通は大抵がガービーを称え、ヒーローと呼ぶが。将軍であるレオを尊敬する声はまったく聞いたためしがない。

「最後に残されたお楽しみをよく諦められたな」

「後ろ髪が引かれる——いや、俺には髪がなかった」

「つまんねエ」

「そうか。ところであんなおかしな連中がノコノコやってきて忠誠心のアピールするってことは、連邦でよくないことが始まったってことかもしれない」

「……アキラが言ったのか?」

「この島にはミニッツメンを近づかせたくなかったはずだが、ご破算にされた。ぶち壊した奴らがいる」

「俺のボスを付け回してる変態共?」

「ガービー、ハンコック、インステイチユート。忘れたわけじゃないだろ、連邦の問題だつて放り出したままなんだ。なんでもありえるさ」「ブン」

マリナーが船上から「準備できたよ」と声をかけてきた。時間だ。マクレデイはにやりと笑う。腰に下げている鉄の容器を差し出した。

「これは？」

「土産だよ。ガルパーとかいう変なのがいたろ？あれの“よだれスーブ” たっぷりあるぜ、持ってけ」

「マジか」

「数日は持つからな。連邦に戻つてもしばらくはこの島のことを忘れられないぜ」

「嬉しくないって言われないとわからないものかね」

「礼はいいぜ、それと元気だな。またよろしくっ」

船が出て、地平線に姿を消してもマクレデイはそこを動かさなかった。

久しぶりにタバコを啜えて火をつけると、それが消えるまではじつとしていた。天気は今日も曇りだが、霧はいつもよりも少なかった。

山道から外れるとすぐに霧が濃くなってきたのがわかる。

森の中では景色は大きくは変わらないが、それはここで生きる生物にとつても危険なものだということだんだんと分かってきた気がする。見上げるとまだ日は高いように思えるが、無理をしてニューヨークリアスに到着することもない。

「……ここで今日は休むか」

「なんだつて？」

ついてきていたパイパーが声をかけてくる。

「今日はここで休もう。想像以上に霧が濃くなってきた。道なき道だからね、用心深くしよう」

「りよーかい」

私は——私たちはアカディアと組むことにしたのだ。

ニュークリアスについての現状と、彼らアトム教の情報も必要だったし。本人たちですら“今はわからないが安全”だというダイヤモンドの記憶は無視できない。

危険な潜入任務になる。それが分かった時点で私だけが向かうことを決めていたはずなのに。

なぜか犬のカールとパイパーがついてきてしまっている。ストロングとの付き合いに飽きてしまったらしい。パイパーは以前にも聞かされていたが、アトム教のアコライトだから大丈夫という理屈らしい。

カールは霧の中で座り込むとあくびをして眠りはじめ。

パイパーは近くの枝を集める間に、私は木の枝を組んで草をかぶせ。小さなテントを用意する——。

太陽が沈む前に天候が変わり、小雨が降った。

私とパイパーは無言で体を寄せ合ってテントの中で時が過ぎるのを待ち続けた。夜が来ると雨はやんだが、濡れた土のせいで手足も冷えてしまった。火の勢いを強くはできなかったから、これは我慢するしかなかった。

「——なんか、変だな」

「なにが？」

「あたしたちずっと黙ったまま。明日からは何を考えてるのかわからないアトム教に乗り込もうっていうのにさ。ブルー、怖くはないの？」

「怖い、か……」

答えにくい質問だった。

自分がどういう状態にあるのか、答えられる自信はなかった。

おそらくだが私は良い状態では決まてないとは理解している。パイパーやガービーは私が口にする“善意の行動”について言葉の通り受け取っているのかもしれないが。アキラやディーコンなどは、私がかただ“進み続ける”ための理由として無謀でも構わずに飛び込ん

でいっているとみているに違いないのだ。

半分の友人たちは私を信用し、敬うが。

半分の友人たちは私を心配し、気にかけているだけ。

それは今回も同じ。私は危険に飛び込むことできつとなにかが——
—シヨンとつながる情報があると信じたがっている。

「それは私に聞くより。ナットという妹がいる君が答えるべきだと思うよ。」

「——ここについてきたことは無責任なことだと思う?」

「非難はしていないよ。ただ——君は彼女との関係に悩んでいたら? 結論は出たのかい?」

「よく、わからないんだ。自分だと答えがでてこない。これっておかしいかな?」

それでもないさ。

私もわかってる。自分では答えがない質問でも答えなくてはいけない時どうするかを。

「それが……答えなのかもとは考えないのかい? 君は、亡くなられた父のように正しいと信じて行動している。人々はその声に耳を傾ける一方で、そんな勇気を持つ君を恐れて近づきたがらなくなった。

でも君の妹。ナットはどうだった?」

「あの子は。あの子のままだったよ」

「そうだ。君はナットの姉。彼女もまた君と同じように父を見ていたし。君も見えてきてる。」

君が彼女の未来に不安や恐れを感じたとしても。彼女はきつと変わらないし、ずっと君の妹で——家族でい続けてくれるはず」

「見ているしかないんだね。あの娘の、考えは変えられないって」

「それを望んでも結果は変わらない。きつとね」

「……」

「でも君たちは姉妹、家族だ。なにかあっても話し合えばわかりあえる。抱きしめればそこに愛はあるよ」

「妹を理解したくない強情な姉でいることはあきらめろって? ブルー」

「ナットの生き方までは君は決められない。だってそうだろ？ ナットの家族にはパイパーがいるんだから」

「ああ、あなたが言うのと嫌でもわからされちゃうんだよね」

「家族だから見守ることはできる。助けることだってできる。でも、それにはまず近くにいないといけない」

「そうだよ。それはもう十分にわかっていたことのはずだったのに。家族はとても大切。」

父もそう思っていたはずだし。だから私たちから離れなくちゃならなくなつて……自分がいないとどうなつてしまおうだろうって心配してたはずなもの」

私はすぐ隣にあるパイパーの顔を見つめていた。

「人生には家族と新聞しかない、そう思つてやってきた。でも、あなたのような人とも出会えた。」

ありがたいことに。まだこの詮索好きのリポーターと仲良くしてもらつてる」

「パイパー、つまり君には新しいもうひとりが加わつたつてことだね」「ありがとう、ブルー。もしかしたらあなたのような人をずっと待っていたのかもしれない。本当に出会えると思つてなかった」

「大切な友達かい？」

「そうだね。大切な友達」

それでも十分じゃないか？

そうじゃない。私もまた、彼女に見習つて認めて前に進まなくてはいけない。」

「それ以上はダメなのかい、パイパー」

おかしいくらいに彼女は私の言葉で取り乱し始める。

そんな未来の可能性を望みはしたと認めながら、それでも自分が私にふさわしいとかなんとか。

ノーラ……。

「最初の質問の答えになる——恐怖はないよ。危険な任務だけどね。」

だって最高の相手がついてきてきているのだから不安も感じてない。そうだろ、パイパー？」

「ええつと、その。そうだね、最高」

「君とこうして話していたら伝えないといけないと思ったんだ。きつと大丈夫さ、私はそばで見ている」

並んで座っていた私たちの距離が、パイパーから近づいてきた。私は彼女の肩に手を回す。

夜は静かに過ぎ去っていく。朝はいつかやってくる。

息子のシヨーンを求める父親だった私はそのままです。

この世界で生きねばならない私の一步はここから始まるのかもしれない。

与えられていた72時間過ぎると、僕は約束通り地上には立っていませんでした。

トシロー・カゴの部屋の前に立った時。

彼がまだ僕を覚えていて。彼が言う鬼として戻ってこれただろうか、不安を感じ少し動くことに躊躇した。

『また来ましたよ、トシロー』

『——お前か。土産はあるんだろうな？』

『はは、ありますよ。もちろん』

片手にはビールのパックセットがあったが。侍はなんだ、と少しがっかりしているようだった。

『これじゃ満足できませんか』

『酒は酒よ。飲み干した後のあの感覚はな——もう長い事な』

『味を忘れてたり』

『拳骨でも欲しいか。アレを忘れられはせんわ』

『瓶はビールのもものを使ってますけど中身はビールじゃないです』

『ならなんだ？』

『どぶろくです。1升ほど持ってきました』

『早く言え。そこは早く』

別れた時もそうだったように。床の上に座って入口に立ち僕に背

中を向けたままだったトシローは少年のように飛び上がるようにして立ち上がるとパックセットに飛びついてくる。

慣れた手つきで瓶の封ははずすと匂いを嗅ぐ。口をつけて舐めるように口に含み、ゆっくりの飲み干していく。

『どうです?』

『……美味くはないな。そこそこだ』

『初挑戦でした。そして最後の挑戦です』

『これしかないのか』

『はい』

コベナントでキュリーと共に研究を始めたひとつに僕はコメの復活と新種がつかれないか考えた。

似たようなものはできたが——米を量産するという安易な発想はすぐにとん挫した。可能性はゼロというわけではないと思う。だが、汚れた土に負けず。大量の水が必要という宿命から解き放つことは存在を否定することに似ているようだ。

無理に成長させることで完成させた1キロのコメの運命はこのどぶろくへと姿を変えた。

『“まともな酒”はどうした?』

『時間がかかります。それに僕は素人なんですよ。最初で最後のコメで泥水つくった、なんて嫌だ』

『ふむ、それもそうか』

彼は半分を小さな冷凍庫に入れ。大切そうに胸に抱えて戻ってくる。

口ではいろいろ言っても嬉しいのだろう。こちらも別にとつたりはしないつもりだったからその必死さに苦笑いしてしまう。

『聞きましたよ。相変わらずこの部屋に閉じこもっているって』

『貴様が消えてからは静かなものでな。あの大男がわめき散らす以外、やることはない』

『——僕がここに戻ってきたのはその大男に来いと言われたからなんです』

『左様か』

争いがあればいいとは言うが、自分からそれを作りに行くつもりもないらしい。

『地上には戻るつもりは?』

『ない』

『——まったく?』

『くどい!』

『連邦はどうです? 僕がいますよ?』

『迷惑ん話よ。余計な真似はするな』

別に気分を害したつもりはなかったが。トシローは瓶を傾けた後で僕の顔を見ると、理由を話してくれた。

『今更戻ってどうするよ。殿はいない、家も消えた。嫁も子も、友もないのだ』

『新しく、という選択肢があります』

『お前の若さならそう言えるかもしれない。だがどうやる? 俺は武士だ、殺すことしか知らん。医者ではないし、お前のように酒も造れん。聞けば同じような山賊、野盗の類はごまんとおると聞く』

『はい』

『どうせ貴様は俺にそいつらの棟梁にでもなればいいと言っただろう? わかっているぞ』

『怒らせたくないから言いませんよ』

『なめた小僧よ。だがその通りだ、俺は鬼と呼ばれるならいいが。盗人、ケダモノの中のクソ野郎と蔑まれたくはない——ここにいれば食うには困らん。戦だつてある、人を斬ることは少ないが。戦であれば我慢はできる』

『……』

『だが鬼でい続けるためといいながら。その実、この俺はすでに死体』

『だが事実よ。時代が、変わってしまったのだらう。全てが変わってしまった。酒も、戦も変わった。』

『なのに貴様は俺に女を抱き、新しい子を作れと言っただらうか? 俺にも好みはある』

『人はいますよ。探せばだれかいるかも』

トシローは苦笑いをしながら首を横に振った。

『俺も変わったのよ。人斬りでありたい、鬼でありたい。武士の誉れを求め、一族の名を高め、家を盛り上げるために死力を尽くし。命を尽くしたい。』

だがそれはもうない。皆死んだ、消えた、この苦しみがわかるか、小僧?』

『弱気なんですね。驚いた』

『逆よ、逆。幾便と回転をして己の気が狂おうたのかもしれない。何も感じなくなつた、虚しさもないが。喜ぶことも少なくなつた。己の生き方を否定したくない、変えられない負け犬となつたのかもしれない』

『死のうとは考えなかつたのですか?』
『やつたさ。なぜ俺がここで生きていると思う?ここにある戦で何度も腹は裂けたし、腕も吹っ飛ばされた。だが生きてる。傷跡は増えたが腹は閉じとる。腕も足もこの通りよ。つまりここはすでに俺が生きるにふさわしい地獄であつたらしい。ならば死に急ぐ理由はないさ』

侍の機嫌がいいようだ。

以前よりも饒舌に胸の内について話してくれているようだった。

『貴様は随分といい顔つきをするようになったな』

『そうですか?』

『よく斬ってきたようだな。何人喰らつた?』

『骨まで残さないので覚えてませんよ』

『言いよるわ、こいつ』

『でも僕、あなたの嫌いな野盗の親分になつてしまいましたよ』

『そうなのか?気分はいいか?』

『……』

『ふむ、土産話が愉しみになつてきたぞ』

『そうですか?』

『くくく、わかるぞ。聞かせろ、酒の肴になれるか試してやろう』

覚悟はしていたが、ヌカ・ワールドは確かに笑い話にはなつてくれ

るみたいだ。

あいつらも多少は役に立つということか——今頃は動けずに歯ぎしりしているだろうが。

トシローは言うほど興味を失っているわけではなかった。

ヌカ・ワールドのレイダーたちについて知りたがり。納得するとうなずきながら、顔をしかめていた。

ちなみに彼が楽しそうだったのは僕がガントレットで2度大暴れをしたことだったそうだ。

卑怯、卑劣で大いに結構なんだそうだ。正直、褒められたかどうかはわからない。

トシローとの夢のような数時間は終わり、僕は部屋を出る。

彼はなんだかんだと文句を言いながらも楽しそうに飲んで、眠ってしまったのだ。床に転がる瓶を集めながら見る彼は、穏やかだが同時にひどく疲れた。髪も髭にも白いものが目立つ、老いた姿があった。時代に取り残され、死を尊ぶ考え方を理解されないことから死ぬことも難しく。

かといって新たに始めるにはあまりにも多くのものを失ってどうしようもなくなってしまった鬼は、絶望と悲しさに打ちのめされているのだろうか。

部屋を出てコントロール・ルームに戻ると宇宙人と共に来た僕を最初に迎えたドクターは、やっぱり同じように僕を見てから口を開いた。

「トシローとは話が弾んだようだね。彼はあまり僕らとは話そうとしない——これは前にも言ったかな？」

僕は苦笑を浮かべながら彼に近づいていく。

「そういえば僕を連れてきた怪しい宇宙人はいないんですか？まだここに連れてこられた説明、してもらってない」

「ああ、ここにはね。どこかにいるんだろ。いつも何となく目につい

て。こつちを見るとわからぬことを叫び続けている。ここは静かだ
けどいいとはいえない切れない」

「僕はそいつにここまで連れてこられたんですけど」

「だね。どうしてここへ？」

「助けが欲しいとか。なにか僕が助けられることがあるんですか？」

「……そうなるにあの事なのかな」

ドクターは立ち上がって天井につるされていた可動式のインター
フェイスを引き寄せる。

「2週間前か、この艦を制圧しようとして透明化した宇宙艇に接近された」

「大丈夫だったんですか？」

「全く問題ないよ。むしろよくやってきてくれたってもんで。トシ

ローとコスモスの2人でなんとかしてしまった」

「——なるほど。相手は誰でした？」

「いつも通りの連中さ。ああ、あと死体はないよ。さっさと処分して
しまったからね」

「船は？」

「それもない。コスモスが暇つぶしだと言って宇宙に放り出して一
発。ひさしぶりだったけどいつもどおり良い狙いだったよ。粉々さ」

過激なことだが、なんだか自分がここに来た理由はないと言われて
いるような気もする。

「あの宇宙人はなにか深刻なことがここでおこってるみたいなの口ぶり
だったんだけど……」

「それは君が地上へ帰ったあたりから彼が騒ぎ続けていることだろう。
月の裏側に敵の船が来ているとかなんとか」

「信じてないんですね」

「どうしてそう思う？」

「あなたを含めて退屈そうだ。姿をまだ見せてくれない人もいる
し」

「キャプテンかい？」

彼女は地上に戻ってる……そう、キャピタル・ウェイストランドに
ね」

「じゃ、ここには来ない？」

「彼女の気分次第じゃないかな。長い付き合いだけれど他人に自分の心を読まれるのを嫌う人だ。Qが大騒ぎしたとしても彼女自身が納得しないなら、沈黙を続ける」

なんだろう。

自分はただ地上からここへ、ただ土産物を手渡しに来た間抜けな人でしかないような気がしてきた。

「困った」

「そうみたいだね。ここでさらに残念なニュースだ、Qの姿がない」「え」

「今は船に乗ってない。彼は神出鬼没なんだよ。君をいつ迎えにいったのかも知らない。でもそれが彼だ」

2度目の訪問とはいえ説明の前に勝手に行動した僕も悪かったが、それにしても放り出して消えるのもどうだろう。

「それじゃもしも——あの宇宙人が言う通り、危険が迫っていた場合、どうするんです？」

「いつもの通りになるんじゃないかな。ここにいる3人で何とかする。できないなら——時間があれば味方を呼ぶ」

それじゃ呑気に過ぎるだろう。

「ふふふ、帰るかい？」

「それでもいいんですけど、あの宇宙人また来るんじゃないかと困るだけなんで」

港の時は周りはバカ騒ぎしていたのもあって、あの目立つ巨人に絡むようなのはいなかったが。連邦からミニッツメンを自称する連中が来ている今だと。次にまた来られたらとは考えたくない。

周囲から浮き過ぎているうえに個性が強く、違和感が凄すぎるのだ。

「それじゃどうする？Qが戻ってくるのを待つかい」

「うーん」

「あ、でもコスモスの部屋にはいかない方がいい。彼女もトシローに負けず籠るが。問題は自室だとほとんど彼女は裸で過ごしてる。い

つもなら不機嫌な顔をみつめてきて怒るだけだが、君の場合はやめたほうがいい」

「僕、彼女いるんですけど」

「ははははは、そういう理性つてのはあの部屋の中には存在してないと思うよ。君自身がトラブルを嫌うなら、特に近づかないことを勧める」

「——人恋しいのですか？彼女は」

「おそらく、ね。それで君が彼女にそれを与えてやると言うなら、好きにしたらいい。」

でも忠告するがあの娘は地上には降りないと思う。もうあの星に自分の未来が残っているとは信じられないから」

「僕が言うのもなんですけど、あなたやトシローがどうにかしようってことはないんですか？」

「ないよ。僕らは友人、戦友。そして家族ではあるけど他人だ。それは出会った時から変わらない事実だった。」

それぞれ抱えている事情は似てはいても同類とは思われたくない、困った奴らなんだ。トシローにとつて彼女は孫のようなものだし、僕にしても娘——と言ったら抵抗があるけど、それに近い存在だ。むなしい行為を重ねて問題は増えてもいいことがあるとは思えない。あの娘だってそう思ってるはず」

「女性が——というか、その、あなたは人肌が恋しくなることはないんですか？」

「随分と探ってくるんだね」

「すいません。好奇心が刺激されて、失礼でしたよね」

「いいよ。こんな会話は君のような来訪者が来てくれないとできないものだ。僕には随分と久しぶりの会話でもある。」

お察しの通り、僕も健全な男性だからね。時々こつそり地上に降りていくことはあるよ」

「ああ、なるほど」

「でもトシローは違う。彼は——もう諦めているんだろうね。ただ次の戦いが始まるのをじつとここで待ち続けている」

「……」

どぶろくに文句を言いながら、いつしか彼は自分の昔話を少ししていたつけ。父がいて、息子や娘たちもいると言っていた。酒と戦いと戦道具しか興味がなかったとも言っていた、きっと会えないとわかる今だと後悔しているのだろうと思った。

「キャプテン」

「ん？」

「キャプテンに会いたいんです。会えますか？」

「彼女を説得してQの騒ぎに力を貸す？Qはいつだつてあんな感じで騒いでいるような奴なんだ。放っておいても問題はないと思う」

「今回は乗ります。恩返しってわけじゃないけれど、下で助けられた借りの事を気にしてたんで」

「本気かい？キャピタル・ウェイストランドに行く？」

「知っているんですか？」

「ああ。楽しい場所とは言えない、キャプテンにとっては故郷だが。10年前はエンクレイヴだったか。色々とひどい状況で、あれからは少しマシになったとは思うけど。危険で最悪なのはあまり変わっていない」

「――」

「んん、わかったぞ。君はキャプテンに会うだけではなく。エルダー・マクソンについて知りたいんだろう？」

キャピタルでの今の彼らの存在感は以前とは比べ物にならないほど大きくなってる。それを直接、感じたいと思ってるんだね」

「お願いできますか？」

「わかった、準備をしよう。でも、気を付けるんだ」

「はい」

会話を終えて立ち上がると壁に広がるスクリーンの半分を埋める巨大な青い星を見た。

以前にも見て感動のようなものを抱いたその光景は今でも圧倒される。だが前回とは少し違う、別の者も感じている自分の変化にも気が付いた。これからの冒険でその正体がわかるだろうか。

キャピタル・ウエイストランド。

マクレディは言っていた。キャピタルB・O・S.の好きにされて
いる、もうなにもない土地。

ドクター・エリオットによればキャプテンは自分の心を読まれるこ
とを気にする人らしいが。彼女が大騒ぎをするQをあえて無視する
理由くらいは会って話せばわかるかもしれない。

そして——キャピタルB・O・S.のエルダー・マクソン。

今後に備えて彼の情報を彼の場所の中から探ってみるか試して
みよう。

カラー

——11年前、キャピタル・ウェイストランド

——テンペニータワー最上階

タワーの最上階、テンペニーの私室のドアが開くと一組の男女が無言で入ってくる。

片方は茶色の帽子に茶色と白のまじったスーツ。もう片方はV a u l t 1 0 1 のロゴが入ったスーツだが、レーザーアーマーが組み込まれた珍しい戦闘用のものを身に着けていた。

挨拶も口にせず、無言の客人たちはそこに誰がいるのかわかっているらしく。

部屋の中を無言で通りすぎるとテラスに出ていった。

「ミスター・テンペニー。ミスター・テンペニー？」

「ああ、私はここにいても友よ。おお、これはミスター・バーグだったのか。嬉しいよ」

この時代では珍しい真つ赤な椅子に腰を掛け、赤いスーツを着た老人は穏やかな笑みをうかべる。

戦前では高級ホテル。

だがキャピタルのすべてがそうであるように破壊の後は廃墟となり果てすべては失われたものとなるはずだった。しかしアリスティア・テンペニーはここに大金をつぎ込んだ。

ひとりの野心家による傲慢さから作られた平和と安心、そして廃墟の中から復活した文明的な閉ざされた世界。こうしてテンペニー・タワーは誕生した。

だが老人はそれで満足することはなかった。ラジオから流れるニュースで知った気に入らなかつた相手に暗殺者を文字通り気分で贈ったり。テラスから見下ろす大地をゆっくりと進む豆粒のような“ なにか ” を自慢のライフルで狙っては当たるか試したり。

常に深くは考えず、気分ですべてを決定する行為を繰り返す。決して満足することはないキャピタル・ウェイストランド廃墟の 中の国王。

「君がここに誰かと来てくれたということは——」

「ええ、ご紹介します。このキャピタル・ウエイストランドの新たなヒーロー」

「初めて会うね。君の武勇伝はラジオがいつもわめいているから知っている。そう、確か“Vault101のアイツ”だったかな？私はアリスティア・テンペニー。」

このタワーで静かにかつての文明の火を絶やさずにいる、滅んだ世界でも希望を忘れない気のいい文明人と思ってもらいたい」
「……」

「挨拶というものが世界にはまだ残っているのを知っているかね？自己紹介というものもある。」

今、私がやってあげたようなことだ。さ、君もやってみたらいい。ここでひとつ……」

「呼び方はどうでもいい。別に握手をする必要もない」

「——シンプルなお望みと言うことか。なるほど」

「そのスーツに仕事があるとしつこく誘われた。笑えない仕事だった」

「だが君は引き受けてくれた。そうでなければこの友人が君をこの部屋に連れてきたりはしない」

老人の言葉には彼女は興味がないようで反応はない。

「ここに登ってくるまでで私のタワーの素晴らしさは知ってくれたと思う。この場所を私の手で成し遂げたことに誇りを持っているよ。」

テンペニー・タワー、この名前で再びこの世界に文化の火が残されたと示すことができた。

だが同時に私はひどく心を痛めてもいるんだよ。この塔から見下ろす世界のすべてを見てほしい。

ひどいものしかない。塔の中で平和と文明を味わってここに来るたびに——失望を感じてしまう。もちろん悲しんだりはしない。なぜならこのタワーの繁栄は今も、この先の未来にも続くのだからね」

「失望、って言葉が重要ってわけか」

「君は良い勘をしている。そう、この世界は常に失望が繰り返される。私はそのたびに新しい決断を下す。今回もそうだった」

そこまで言うのと、いきなり立ち上がり。そばに置いてあったライフルを構えてスコープをのぞきこむ。

老人というには鋭い動きだったが男女は驚くこともなく。かわりにこの老人が塔の頂上から見渡せる荒廃した景色の中に何を見たのだろうと首を動かして探ってみる。

老人は目標については何も言わず。「よし、よし」とつぶやくように繰り返すばかり。

10秒後、発射音と共に火を噴いた銃口が直上に跳ね上がった。

「ハッハー！」

「——当たった。はぐれロボット」

「これからはただのガラクタだ。私はこの廃墟の中から危険な狂ったロボットをゴミにしてやった。良いことをした、気分がいい」

ロボットを撃った、とは言ったがそれが狂ったロボットだったかどうかなんてこの距離でわかるはずがない。

だがこの老人にはそれでいいのだろう。

「ああ、話が途中だったね——そう、気になっていたんだ。

この偉大な塔から見える、あの頭のおかしいふぎけた鉄くずの山。それを町だと言い張りのんきに住んでいる人々。ああ、そんなものがそこに存在するだけでこのタワーを侮辱している」

「と、思ったわけね。それが理由？それで——」

「そう、吹っ飛ばすんだ。彼らが目の前に放り出しているものがなんだったのか教えるついでに」

そう言いながらテンペニーはライフルをわきに置き、再び椅子に座る。今度はミスター・バーグが手に持っていたアルミケースを老人に差し出した。

「このミスター・バーグとは最近友情を深めあっていてね。色々と相談に乗ってもらっていたんだが、このことについても当然私は相談していた。

地平線に見えるあの不愉快なものを除去したい、とね。

最初はどうしたらいいのかわからなかったが話しているうちに、ふっ……とね、アイデアが」

「驚くべき、画期的なものでした。ミスター・テンペニー」

「ありがとう、ミスター・バーク。」

そう！自分でも驚いた。あの鉄くずの中にある核爆弾はまだ生きていて、それは当たり前のように危険であるということ。ほら、もうわかるんじゃないかな？」

「お望み通り機能は復活させてきた。でも爆発させればあの町の人々は死ぬわ」

「ああ、それについては心が痛む。人間ならば誰でも犠牲に心を痛めるもの。だがそれでいくつも問題も同時に奇麗に吹き飛ばされるのだから、この選択肢を無視することはない。つまり問題はないというわけだ」

「犠牲者が聞いたら泣いて喜ぶでしょうね」

「そうであることを期待しよう。さて、それではさっそく見てみようか」

老人に渡されたケースは核爆弾を操作する機能が備わっていた。老人は輝くような笑顔を浮かべながらためらうことなく機能を復活させ、最後のボタンを躊躇することなく押す。

地平線の先で轟音が響き、遅れて衝撃波が大地を駆け抜けていく。真っ青だった空は赤く染まり。不気味な黒いキノコ雲がモクモクと地上から立ち上がっていく。そしてこの瞬間から人々は思い出すのだ、世界を破壊したものはなんであったのかということ。

「はははっ、面白いものが見れたな。」

だがこうなるのも時間の問題だった。この厳しい環境の中でいつもおこっている自然淘汰——」

快哉をあげる老人とビジネスマンの間で“Vault101のアイツ”は素早く動いた。

饒舌に語る老人のそばに近づいたと思うと腕を動かし、すぐにその場から数歩離れた。なんの疑問も持たない、不自然ではあってもこの時ならば誰も気にならないような些細な動きだった。

次の瞬間。

爆発音とともに衝撃によって体を引き裂かれた老人はテラスから

飛び出し、空を舞い。地上へと墮ちていく。

ミスター・バークは体をこわばらせて何が起こったのか必死で理解しようとした。

「こ、殺したのか。糞爺イを、アリステア・テンペニーを！」

「仕事は終わり。だからこつちの用を済ませただけ」

「用を済ませただって？」

「WinnerWinの関係でしょ。クソ仕事を引き受けて、クソ野郎を始末する」

「テンペニーは大金持ちなんだぞ！」

「聞ってる。でも『問題はない』でしょ？」

「なぜ殺した!？」

「理由は本人が言ってたじゃない」

「なに？」

「ラジオ。スリドッグの放送で最近取り上げられているのはこの“Vault101のアイツ”。あのクソ爺イはメガトンを吹き飛ばすくらいに不愉快に思ったからそいつに暗殺者を送り続けた。ニュースが報じるたびに何度も、何度も」

「あっ、あっ」

「自分が暗殺者を送っている相手に汚れ仕事を依頼するなんてね。脳が腐りかけたグールだってそんな馬鹿なことは考えない」

「クソがつ、俺の未来はオシマイだ!どこが——」

「そういえばあんたも相談に乗ってたんだって？」

「あ？」

ビジネスマンは女が自分にむける目に危険な輝きを宿していたことに気が付く。

「老人に言われて今回みたいに力を貸したんでしょ？タロン社にわたしをつけた」

「そ、それは私じゃない！」

「死ぬ前のジャブスコはそうは言ってなかった」

なぜか彼女は——“Vault101のアイツ”はそう口にしながらミスター・バークからも距離を取ろうとする。

その意味に気が付き。ハツとなったミスター・バークは慌てて自分のスーツのポケットに手を突っ込むが。そこには覚えのない“なにか”異物が入り込んでいて。思わず握ってしまったバークの手の中でカチツと音を鳴らしてスイッチが入ってしまったようだった。

再び上がる轟音と衝撃、そして宙を舞う複数の人間のパーツ。

それらは前と同じように散り散りになって地上へと消えていく。すべてが終わっても彼女は不愉快そうな表情を浮かべたまま、やっぱり無言でタワーをあとにした。

数日とたたず、テンペニーと“Vault101のアイツ”の悪行はスリードッグのニュースで流れる。

「Vault101から来たアイツは名前をクソ野郎に改めなくなったらしい。ここで悲しいニュースと、嬉しいニュースだ。

まずは悲しいものから。

信じられない不幸な事故が起こったんだ。ああ、そうだ。みんなも知つての通りそこにはメガトンが、町があった。

そして世界を破壊した爆弾がひとつ、そこにドカンと居座っているのもみんな知っていた。悲しいことにそいつが自分に自分の役目を果たしてしまつたらしい。このGNRからも確認できたキノコ雲は、あの町のそばからだつたといくつも知らせが来ている。

次に嬉しい話。

奇妙なことにずっとあの町の事を気に食わないと公言していた。あの偉そうなアリスティア・テンペニーは友人と一緒にご自慢のタワーの頂上から空を飛ぶことに失敗したそうだ。

鳥に羽は生えているが、人間にも、あのスーパーミュータントにも羽は生えてない。これは子供でも分かる話だが忘れてしまつたらしい。

さて、ここで俺はこの2つの事件になにかしらの不正行為があったと思つてる。

どちらも誰かが、何かの理由で。ひどい汚れ仕事をやってのけたつてハナシだ。自分の心に手を当てて問いかけてみてほしい。みんな

も考えてみてくれ。

事件が起きたその場所に。なぜ、あの“Vault101のアイツ”の姿があつたのかつてな!!”

“ 真実は明らかにされることはなかったが、沈黙を守ることでもなかった。

常にはヒーローと“Vault101のアイツ”を賞賛するあのGNRのスリードッグが、公共の電波で彼女を叱る数少ない放送はキャピタル・ウエイストランドに暮らす人々の記憶にしっかりと刻み込まれたという。

そこは広大な荒野、廃墟。

キャピタル・ウエイストランド――。

キャプテンは2キロほど歩いたところにいるからとだけ言われ、僕は目を閉じ。風をほほに受け、体の間を吹き抜けていく音が聞こえるようになって目を開けると。すでにそこは地上の世界へ――あつという間に地上へと戻ってきていた。

だが、ここは連邦とは違う場所だ。積み上げられるガラクタと残骸の山。鉄や土を焼くくすぶり続ける炎の匂い。連邦にはあつた細かい木々はここには一本も見当たらない。どこまでも続く荒野の世界。

アキラはピップボーイが示す方角に向かって歩き始めた。

噂には聞いていたが、ここには本当に何もなかった。

そしてマクレディはここで生まれて育った。

野良犬、狼、モグラネズミとはここでも仲良く出来ないことがわかった。

いつもであればきつちりと皮をはいで骨と肉まで回収したいところではあるが死肉はその場に残していくことにした。

襲われながらの旅という、久しぶりの感覚を楽しみながら目的地へと着実に進んでいく。

そこでは昔、爆発があった。

クレーターが物語っている。戦争の後でも、全く関係ない時に。そこにはあの核兵器があったから。

そこには昔、町があった。

マクレデイはひとつの町が偏屈な爺さんの機嫌で吹き飛ばされたんだろうと皆が噂していたとか言っていた。真実かどうかはわからないと言いなながらも、彼もまたそれを疑うことなく信じていた。

そこには今、新しい町がある。

ガイガーカウンターは小さく鳴り続けているのに。押しつけられるように積みあがった瓦礫の山を壁として。クレーターに沿って半球状に広がる穴の中で人々はそこでの生活を当然のように爆弾があった時と同じような生活を続けていた。

マクレデイは言っていた。

そこは『名前のない町』。だが皆はニュー・メガトンと呼ぶことをやめようとしないうて。

クレーターを囲む瓦礫の壁の一部だけ開かれていて、そこがどうやらこの町の入り口だとわかった。

瓦礫の壁は一見無理をすればなんとなく越えられそうな気がしななくてもなかったが。少し手をかけ、足を突っ込むと壁はもろく崩れ。ガチャガチャと大きな音もたつことから。もし大勢がここを包囲しようとする中、中の住人たちに気づかれて騒がれてしまうだろう。

町の入り口には呑気にパラソルに寝椅子。机の上には食べかけのシユガーボムと飲みかけの水のボトルが置かれている。

一回りしてきてから町に入ろうとするとアキラに「なんだやっばり入るのか」というような目をした保安官が寝椅子から立ちあがると邪魔をしてきた。ここはいつも通り、味のついたメンタスが役に立つはず。顔を伏せ素早く準備する。

「——こ、こんにちは」

「ここになんのよう？」

「人を、人を訪ねに。友人……いや、知人の方が正しいのか。ここにい

るって聞いたんで」

「そのお友達をあたしが呼んできてやるって言ったらあんたどうする？」

「あー、お願いできます?」

「お断り。トラブルもお断り。あんた、マトモそうには見えないからやっぱり町に入るのもお断り」

この短パン姿の保安官はよく肥えた中年の女性。

手には改造した警備棒、腰にはピストル。よくは見えないが寝椅子のそばにはサブマシンガンらしいものが見えたような気がする。

サングラスで表情を読ませようとせず、声は義務というより事務をこなしているようだ。

僕はこのまま陽気で礼儀正しい青年を演じ続けることにする。

「銃は持ってます。ここは危険だからそれは当然でしょう?でもだからってあなたとあなたの町で騒ぎを起こす理由とは言えない。争いは嫌いなんです、あなたを困らせません」

「可愛い態度じゃないか……ん、あんたV a u l t居住者なのかい?」

「え、はい。わかるでしょ、ここにV a u l t88って書いてある」

正確にはV a u l t88の監督官を示すV a u l tスーツなのだがどうでもいいか。

「聞いたことのない場所だね。どこにあるんだい?」

「連邦です。中央から南寄り——聞いたことあります?」

「ないね」

そりやそうだよな、連邦でもまだ知られてない場所だ。

むしろこんな遠方まですでに噂だけが伝わってきてると言われたら、そっちの方が驚きだ。

「そうなるにあんたがここに来た理由ってのは。" V a u l t101のアイツ" か?」

「ええ、そうです」

「入んな。繰り返すけど、トラブルは御免だよ」

「了解です。保安官」

町の中はバラックや鉄くずを組み合わせたただけで中が丸見えの家

が多く、いくつかはどこからか持ってきたらしいコンテナをいじって住居にしているものもあつた。

さて“Vault 101のアイツ”こと彼女はどこに住んでいる？

クレーターの底に続く道を歩きながら街の様子を探っていく。

マクレディの話ではキャピタルでも連邦と変わらず人々は自分たちの生活のそばにグールを近づけることを嫌っているという話だったが。この町では人の中にグールも少なからず存在していた。そのかわりあちこちから怒鳴りあう声が聞こえてくるが。これがこの場所の普通、ということなのだろうか。

「おやおや、これは珍しいお客さんだ。こんなに目つきの悪い中毒患者をここに入るのを許すとは、今日は嵐でも来るのかもしれない」

「太陽を隠す雲は、まだ見えてませんね。いい天気だ」

「若者が老人のジョークを理解できることは嬉しいね。ああ、Vault 117居住者なのかい。それなら納得だ」

穴の底である中心部にたどり着く前に、頭頂部が禿げ上がった眼鏡で炭鉱夫姿の小さな老人が僕を見て声をかけてきてくれた。

「トラブルはおこさない、そうなんだろう？」

「もちろんです」

「そうであつてほしい。ここで騒ごうとする奴の運命はだいたい決まっているからね。とにかく、礼儀正しくまずは挨拶から始めようか。ニュー・メガトンへようこそ」

「——えっと、話に聞いたんですが。その人の話ではここは“名もない町”だつて」

「ああ、それは間違いじゃない。だが、皆はここをそう呼びたがっているのさ。違う名前にしようって声もないわけじゃないが、ガイガーカウンターを掲げればこれ以上びつたりの名前はないと皆、わかっている。時間が必要なんだろう」

「これも聞いた話なんです。キャピタル・ウエイストランドでもグールは集まって町を作ってるって。ところがここにはかなりのグールがいるのはなぜです？」

「それも間違つてはないな。以前にあつたメガトンはその名前の通り吹っ飛んじまった。そういう、いわくがあるせいで人もグールも、主に変人達ばかりが集まつてくる」

「問題はおきない?」

「毎日がトラブルだらけさ!ここにくるまでだつてあちこちで怒鳴り声が聞こえたる?でも銃声も死体もなし。そこがいいところだと思つてるね」

確かに罵り声が聞こえてはいるが。銃声は一発も聞こえてないし、死体を運んでいるところも、処理しているところも見えていない。

「放射能が怖くないんですか?グールになるとか」

「ああ、似たようなことはよく言われるね。グールなんかそばにいさせたら、人間を餌だと思つて皆食われるか仲間にされちまうつてね。でもそういうのはもう昔の話だよ。」

このキャピタルでは汚染されていない地域なんてほとんどないことはわかつてる。確かに10年ほど前に核爆発がおこつたここは他よりも少し放射能は高く残つてはあるが。

実際はどこも、そこがキャピタルならほとんどかわりやしないんだ」

「それじゃ、店もグールがやつてたりするんですね」

「ああ、モイラの店の事かい?あそこはあまり勧めない。扱つてる品も値段も悪くはないんだが、厄介な主人の性格が問題で騒ぎをよくおこす」

「町から追い出さないんですか?」

「グールのくせにアンダーワールドからも叩き出されたつていう有名な人でもあるからな。あんた知つてるかい?そんなモイラは人間だつたところから作家をしている。ウェイストランド・サバイバルガイドつて

「ああ!連邦で見たことがありますよ。かなり奇妙だつたけど、面白い本だつた」

「彼女が熱心に自分で売り込んだ作品だ。彼女はその後にも新作を出してる。そつちはまだ連邦にはしられてはいないのかな」

新作だつて？それは知らなかったな。

「なんて本です？」

「タイトルは『Vault 101のアイツ』。このキャピタルでは知らないものはいない、今はこの町に住んでいるひとりの女傑の物語だよ」

なるほど、それは面白そうな本だ。

本人の住居を探す前に、買い物をする時間くらいあるといいんだが。

彼女の家はクレーターの外円部にあった。

なんといくつもの階段で組み上げられた鉄くずビルディングの持ち主だったのだ。近所の人の話では、誰かに部屋を貸しているわけではないというからひとりで住んでいるのだろう。

入口では男性用ボイスのMr.ハンディが応対してくれた。

どうやらホテルマンのルーチンを与えられているようで会話はスムーズに、礼儀正しくすすめられた。最悪の場合はプログラムをハッキングして案内させようかと思っていたのだが、「知り合いで会いに来た」と伝えるとすんなりと中へ案内してくれたのだ。

「館長、お客様がいらっしやいました」

「——おやおや」

「どうしますか？帰ってもらいましょうか？」

「いやいい。仕事に戻って……彼とは確かに”知り合い”だから」

良かった。あの日、わずかにすれ違っただけといってもいい僕の顔を彼女は覚えてくれていた。

お茶にしようと言われたが、なぜか冷えたヌカ・コーラを手渡されてしまった。僕の好みを知っていたのだろうか？

「それでなんでここに？キャピタル・ウェイストランドに興味があった？」

「……お屋敷に住んでは知りませんでしたよ」

「部屋が多いだけだよ。ロボットがいるのは尋ね人の処理と、嫌いな掃除をやってもらうため」

僕はあえて的外れな感想から会話に入った。

つづいて現在の連邦の状況、僕やレオさんの近況を伝えた。2時間近く、ほぼ一方的には話し続けると。僕には2本目のヌカ・コーラが必要になっていた。

彼女は新しいそれを僕に渡しながら疑問をぶつけてくる。

「ひとついい？君の話に出てくる中で、このキャピタルから来た傭兵っていいのは——」

「マクレディです。ロバート・シヨゼフ・マクレディ」

「ふふっ、あの坊やか。驚いた、本当に連邦に行ってたんだね。息子を捨てたわけじゃなかったわけか」

「え？え？息子って——マクレディに子供がいるんですか？つてことは結婚してる!？」

「うん。聞いてない？」

知らなかった。知らなかったぞ！

子供だけが住む洞窟で暮らしてて、そこでは銃の腕が認められて市長を嫌々やってたとか。外に出るからは傭兵やってたとは聞いたけど、家族がいるとも結婚したともあいつは言ってなかった。

「家族を捨てた？マクレディが本当にそんなことを？」

「そう思ってた。子供はビックタウンで彼の友人たちが面倒見てる。病気を患って動けないんだ」

「——そう、でしたか」

「おかしなことを聞かせてしまったかな。あの坊やとは、昔から色々あった。でも自分の子供に言った通り連邦に行つて君と出会ったっていうなら、まだあの子にも希望があるのかもしれない」

「どういう意味です？」

「本人に聞いて。自分の事じゃないし、全部を知ってるわけでもないから」

この女性は僕とはまた少し違って、饒舌であることを好まない。

だが決して不愛想とは思わせない穏やかな強さといったらいいの

か。そんな魅力を持っている。不思議な女性だ。

「気を悪くしないでほしい。こういうことにはかなり敏感なんだ」

「わかりました。大丈夫です」

「——10年くらい前、君くらいの頃。ここは今以上に危険な場所だった。坊や——マクレディとはその時に出会った。生意気な小僧だった、懐かしい……。」

他にもいろいろなおことに首を突っ込んで回ったせいで、有名人って言われるくらい名前を売ってしまったけれど。別にそうなることを目指していたわけじゃない」

「ああ、そういうのわかります」

「君は自分に似ているのかも。有名人だったけど、善人ではなかった。馬鹿なこともやってた」

「本になるくらい？」

「ええ、本にされるくらい。モイラの店に行ったんだ。彼女から変な依頼されたんじゃないかな、ご愁傷様」

作者様のサイン入りのそれは今回、僕が連邦に持ち帰る大きな土産のひとつになる。

「モイラの書いた本の内容なら話してあげる——Vaultから父を追うように脱出した女はキャピタル・ウェイストランドをくまなく探して回った。ひどい目にあつてばかりで、何度も死にかけた。でも運がよかったからこうしてまだ生きてる」

「はい」

「父を失い、エンクレイヴとキャピタルB・O・S.の争いに関わった。最悪の時だった。」

テンペニーってふざけた爺さんがいたんだ。残骸の中に残ったホテルを大昔の時代の頃みたいに復活させたとびつきりの変人。ラジオが“Vault101のアイツ”のニュースを知らせるたびに暗殺者を送り付けてきた。特に理由もなくね」

「は？」

「訳がワカラナイでしょ？」

最初はこつちも怖くて近寄らないようにしてたんだけど——最悪

の時にも同じようなことをしてきたんで我慢できなくなった。ちよ
うどピットから戻ったばかりだったし、イライラしてた」

「まあ、そういうこともありますよね」

「今なら馬鹿なことをしたって思うんだけど、テンペニーに簡単に近
づく方法が思いつかなかった。で、深く考えずにメガトンを核で吹き
飛ばす計画に参加した。町ひとつ、住人全員を殺す計画に」

「……キツイですね」

「でも上手くいったんだ。テンペニーは思った通りナルシズムの強
い奴で、仕事の仕上げだからと直接会って一緒に見ようと言ってき
た。チャンスはそこしかなかった」

過去に後悔しているのだろうか？でも彼女の様子からそうは見え
ない。

「ホラ、自分は見ての通り小さいし。顔もそこそこ整ってるからナメ
られることが多かったんだけど。実は小さいころからひどい短気で
喧嘩ばかりしてた。だから君には正直に言うけれど——メガトン
に悪いとは思ってないんだ。」

彼らは忠告しても核爆弾の前でのんびりしていたし。その——飛
び出したVault 01がダメになってから、その住人達からも
逆恨みされるようになったね。メガトンで家を買ってたけど、
邪魔ものみたいに思われていて」

「ああ、なるほど」

確かに僕と似ているようだ。

ミニッツメンではとかく僕は問題児で、敵に回らないならいつ出
行ってくれても構わないと思われてる。

「ここに住処を戻したのは、別に町を再建しようとしたわけじゃない
んだ。別にひとりでも構わなかった。」

戦争が終わった後。今度はキャピタルB・O・S.とこじれてし
まった。そこでも厄介者扱いされるようになった。

元々はリオンズ親子との関係で付き合ってたっていうのもあった
からさ。手を切ればいいだけ、後悔はやっぱりしなかったな。でもそ
うなると新しい問題が出てくる。『さて次は何をしよう？』

「それがこの町？」

「違う——町ができたのは、たまたまだよ。

家を作つてさ。集めたコミック読みながら考えている間に、馬鹿どもが何人もここにやってきた。戻つてきたのもいる。最初はレイダーを真似して返り討ちにした連中の首かなにかをそこら辺のオブジェにして怖がらせた。

するとなぜか違う人が集まつてきて、数年で勝手に町を作つてしまったんだ。なぜか自分もそれに協力したつてことにされてる、なにもしなかつたのに」

「ああ、そういうこともありますよね」

「最初にこの家の事を聞いたね？」

実はここは新しい博物館にしようと思つてるんだ。まだ準備中なんだけど。キャピタル・ウェイストランドに残された不思議なものを集めて展示する。どう思う？」

「それは——興味深い計画ですね」

短気で危険な戦闘狂が考えた新しい目的が博物館——見た目と実力のギャップに負けない夢だ。

「これも昔話なんだけど、リベットシティに博物館をやっている老人がいたんだ。

別に面白そうとも思わなかつただけだよ。彼が死ぬとスカベンジャー達があそこに押しかけて展示されていたガラクタを奪い去つていってしまったんだ」

「そんなことが起きたら町は大騒ぎになったでしょう」

「ところがそうじゃなかつた。リベットシティはその頃には傭兵がいなくて、スカベンジャーたちの好きにさせたんだ。理解はできるよ、どうせガラクタだ。自分の命を懸けてまで守つてもしょうがない」

傭兵がない——マクレディはキャピタルのB・O・S. とはうまくやれないと吐き捨てていた。

キャピタル・B・O・S. は、エルダー・マクソンは自分たちが管理する土地に傭兵がうろつくことを嫌つていたということと関係があるのだろう。

「で、あなたが次の博物館長になる？」

「どうなるかはまだわからない。新しい噂を聞いたら出向いてみる、するとここに何かを持ち帰る。その繰り返し。昔の旅と同じでも目的は少しだけ違う、ここが大切なんだと思って——」

会話の最中、いきなり背後で扉が乱暴に開閉される。

僕の手はホルスターから銃を抜き、彼女はそばに立ってかけてあったライフルに手を伸ばしていた。だがどちらとも不振の目をそちらに向けるだけ。騒ぎはおこらない。

それもそのはずだ。

扉の前にはあのQがいた。なぜか来たばかりだというのに、もう怒ってる。

「なにをつまらない話をダラダラと続けている！宇宙に問題がある。だから行け、たったこれだけの言葉はいつになったらお前たちの間に出てくるんだ！」

「……盗み聞きしてた？外に聞こえるほど大きな声じゃなかったのに」

「いなくてもそんなことはわかってる！お前たちはこの星の住人だろう。なら、お前たちのための忠告をなぜ聞かない振りができる。いい加減にしろっ」

「不愉快そうなのはいつもの通りじゃない。Q、それと女性の家に勝手に入るのは失礼よ」

「ハー、もうわかった。根負けした、私がおまえたちをお願いしてやろう。全くおかしい話だがなっ。」

お願いだ、このどうしようもなく理解の足りない原住民共よ。お前たちのため、お前たちの星のために宇宙で戦ってこい。どこに誰がいるのかは教えてやったんだから」

「うーん、キャピタル名物の料理を食べた後でもいいかな？」

「冗談だろ？ここまで言わせて、まだそんなことを口にするのか」
僕の希望は却下されるらしい。

「状況は良くないぞ。だが、あとはお前達次第だ」

「急に他人顔になった」

「彼はいつもそう」

「真面目に話もできないのかっ!」

どうやらキャピタルに来た目的は果たされたように思える。

キャプテンは宇宙へ翔び、このアキラもそれに同行する。この壊れた世界で知られることのないスターウォーズが始まるうとしている。

クロダはキジマとの連絡を完全に断った。

だがニュークリアスから出ることもしなかった。

もはやアトム教に残ることなど無意味。しかしここを離れるということは全てを失う逃亡の旅を始めるということで、そうなれば自分の運命はひとつしかない――。

ノーラという自分が生み出した人造人間と快楽にふける日々。

だが、自棄になったわけではない。彼なりにある程度、覚悟が定まってきたということだ。

計画は失敗しつつある。だが、まだチャンスは残されているはず。

あのフランク・J・パターソン Jrはほぼ間違いないこのニュークリアスに来る。そこにはアキラもいるはず。

アキラの目を盗んで目標を狙うことは簡単ではないことだろう。なによりアキラ自身とクロダが直接対決する可能性は捨てきれない。

だがクロダは決めたのだ。

アキラを殺してでも、最初の目的は必ず仕留めよう。

――その結果を組織は決して認めることはないだろう。

――それどころか、こちらの意図を察知して先にこちらを叩き潰しに来るかもしれない

こうなるとキジマとの協調はむしろ邪魔にしかない。

そもそもあいつだってそのつもりでいたならば、この場所にクロダにかわって自分が入ると主張していたはずだ。勝手な話かもしれないが、もう相手を気にしていられるような状況ではないのだ。

そんなクロダの最後の意地はあっさりと打ち砕かれてしまう。

キジマの予告よりもはるかに速くフランク・J・パターソン Jr はアトム教徒の女と犬を連れてニューヨークiasにやってきた。そこにはなぜかアキラはいなかった。

そしてあるうことか奴は気難しいテクタス贖罪司祭を相手に能天気「ここには興味があつたので体験しに来た」と言い放って見せたと聞いた。

クロダのこのチャンスはいきなりニューヨークiasのアトム教徒にひっくり返されてしまう。

テクタスはこのような気分屋の信徒を激しく嫌っていた。

ただでさえ普段から信者の適正を気にするような男だ。レオのような態度から信心を探ろうと彼ご自慢の入門儀式に送り出してしまったのだ。危険な森の中をさまようことでアトムと会合するという正気とは思えない儀式、「普通の人間」であればこの時点で運命は決定したようなものだ。生きて帰れるはずがない。

だがこの男は一晩を過ぎて戻ってきた。

森の中で影と出会い、不思議な祭壇まで案内されたと正気とは思えない体験も口にしたらしい。

テグタスは自ら送り出し、帰還を果たした新たな信者の誕生に大変喜んだようだ。そしてこの新人をすぐに自分のそばに置き、重用しはじめる。

——なんだこれは

クロダは苦笑するしかなかった。

来た時と同様に、同じ場所で寝起きするはずが。数日で司祭の側用人として採用されてしまった。クロダやノーラに会う前に、自分たちと同じはずのこの新人はクロダの手に届かない高さまで飛んで行ってしまった。

——これがアキラの“資産”の力か

人とは思えぬ恐るべき強運の持ち主。

そしてキジマがクロダにもたらした予測は正しかった。レオ暗殺

計画は、やはり始まる前から失敗が運命づけられていたようだ。クロダは身動きすることもなく結局はすべてを失ってしまった事になる。

圧倒的な運命の流れ、それに介入することすら許されない。

ついにニュークリアスにとどまる理由は消滅してしまった。

ではどうする、どうしたらいい？

答えのないむなし時間の中、クロダはいつしかひとり。ニュークリアスの外で放射能を帯びた霧の中で心をさまよわせている。すると――。

「よかつたら、少し話さないかい？あそこにある席でどうだろう」

「――え」

「さあ」

まるでこちらを知っているというような笑顔でなれなれしく言われクロダは戸惑う。

昨日までの彼であればこの瞬間こそ待ちわびた時と冷静に飛び掛かることも考えただろう。だが今は……。

怪しまれぬよう、いぶかしげな表情を浮かべ。それでも離れることなく、示された席についてしまったのは失敗か。

「私はフランク・J・パターソン Jr、おそらく君は知っていると思う」

「なんのことかわからないが。ここでは同じ新入りで――」

「クロダ。君の事を知っている」

心臓が凍り付く経験というのは楽しいものではない。

クロダのようにあらかじめ計画をその通りに進めたい奴にとってそれはなおさらだ。

「いや、俺は――」

「自分をぐまかす必要はない。アキラから君のことは聞いている。

だが、もう知っているんだろ？彼は……アキラはここには来ていない。君は彼に会いたくなかったんだよね？」

「……」

心臓がバクバクと激しく脈打っている。「今すぐにも飛び掛かって首をへし折れ！」と叫ぶ自分がある。

すると急に冷静さが戻り始め、誰もこの近くにはいないかと軽く周囲の気配を探った。

異変はすぐに探知できた。

本当に小さくはあったが、どこからかこちらを見て警戒する獣特有の唸り声。このわずかな間に扉を抜けて静かに刺客の外、クロダの座る背後に移動しながらピストルを構えている女の存在。

これでは動いた瞬間には邪魔されてしまう。

これ以上はとぼけていてもしょうがない。

「俺の名を知っているのはなぜだ？」

「さあ？君の友人、コンドウ君から聞いたのかも」

「ふっ、冗談を言うな。アイツはそんなことはしない。だがアキラが知っているはずも——」

「……」

「ああ、ああ。そういうわけか、わかった」

会話することで急にすべてが整理され、今の状況に至ったカラクリも鮮明に見えてきた。

サカモトだ。奴が、どうやったかは知らないが自分やキジマを売ったのだ。

そもそも奴はアキラのそばにいるレオには近づくなと忠告して以降もなぜか観察者を真似るようにこの島にまでやってきていたのはなぜか？

クロダらの計画が崩壊する瞬間を利用し、アキラに自身の安全を含めて会見を申し込んだに違いない。

だとするならここにアキラが姿を見せず。この男からこちらを見つけて接触してきた理由も明らか。サカモトはクロダ、キジマらの処理を決める一方で、アキラとは何らかの取引を行ったというわけか。「ペットと女がいれば俺に勝てる」と考えるのは、無謀とは思わなかったのか？」

「コンドウとの殺し合いからそうは考えていないが。君が望むなら——今、この場で殺してやってもいい」

余裕の表情は崩さないか。ならばこれならどうだ？

「俺も女がいる……ノーラという女だ」

「そうか」

「ずっと抱いている。いい女だからな、飽きることはない——興味はないか？」

「ないよ。」

どうせそれは君が用意した人造人間なんだろう？ V a u l t l i l l
で眠る私の妻の姿を見たんだろう。

ちなみに聞くが、まさか私の妻の遺体になにかしたなら正直に今
言ってもらいたい。すぐに殺してやる」

「生きている女より、死んだ女が大切か？」

「違うな。その死んだ女というのは私の妻だった女性だ。」

お前たちの下品な遊びで生み出された人造人間とは別のものだ」

余裕は残していても、言葉の中にある激しい憎悪は煮えたぎる溶岩
のように熱いものだった。

もはや解凍することもできない死体などに興味はなかったが。こ
こでつまらない挑発でもしようものなら、目の前の男はその本性を見
せるつもりらしい。

「アキラから聞いたというのは嘘だな。」

お前がアキラから聞いて予想したんだろう。我らが死んだ女に何
かしたとわかった時のために」

「復讐鬼を演じ続けることはどれほど哀れであるかは自分がよくわ
かってるからね。」

友人としてはアキラには自分の憎悪と怒りに執着してほしくない。

そう、私のようにね」

「自分の都合というわけか。大した友人だな」

「あの若者は頭が良すぎる上に真似するのが好きだ。だからこちらも
大人として、こうやって狡猾さで太刀打ちしないと」

表情を変えることの少ないクロダが珍しく本心から笑顔を見せる。
それは少しばかり苦みが含まれてはいたが。

アキラがこの男を気に入っている理由が分かった。投げやりであ
るくせに、それを強引に大胆不敵に見せていく力を持っている。味方

であれば頼もしく、敵であれば本当に手ごわい相手だろう。

「最悪、ここで2人で会う機会があれば。間違いなくこの手で終わらせようと、そう考えていた」

「今はそれに近いかもしれない。試してみるかい？」

「ふふん、冗談はやめろ。俺はもう終わりだ。」

俺の情報についてアキラはもっと多くのことを伝えたはずだ」

あのサカモトが今更こちらにチャンスを与えようとするはずがない。

クロダやキジマが牙をむいた時、どのようなことに気を付けたらいいのか情報を与えなかつたはずがない。

「だがそうなると逆に疑問がわく。なぜ、こんな会話を望んだ？」

お前なら自分が有利に戦える状況を用意して、俺をそこに追い込めば殺せたはずだ。事実、お前が俺に接触してこなければ間違いなくそれは可能だった」

「私はアキラと少し違って狡猾だと言ったろ？」

実は君に相談があつて、協力してもらおうと思つてる」

「何を馬鹿な——」

「テクタス贖罪司祭に近づいたが、私の狙いは彼ではない。」

このニュークリアスにある指令センターで眠っている巨大な記録にアクセスしたいんだ」

「指令センターならもう出入りできてるだろう」

「ところが人の目があつて自由にはさせてもらえない。私はそこで少しいたずらをする必要があるんだ」

「なるほど。テクタスにつきあつて狂信者の縛り首には付き合いたくはないか」

「彼が自分と同じ信者たちをどうしようが構わないんだけどね。その銃爪は別に誰かにだけにぎらせるのを待つてたと言われても困るんだよ」

「——俺が本気でお前と協力するとも思うのか？」

「価値がないと捨てられたエージェントの運命はひとつしかない。だがそこに至る前に選べる選択肢にかわつたものがあるなら、もう一度

考えてもいいかもしれないとは思わないかな?」

「普通なら断る」

「なら君はもう私やアキラにとつても、君のお仲間にとつても何者でもなくなる。邪魔さえしなければね」

「考える時間が欲しい」

「残念だけどお互い、そう何度も出会う必要はない間柄だ。返事は今貰おう」

「それがどんなものでも、か?」

「決めればいい。好きにできる、今ならね」

なんとという皮肉か。

自分がここまでコケにされるとは。

「では聞かせてくれ、クロダ君」

「……ああ」

クロダは天を仰いだ。

放射能の霧で穢された世界はこの負け犬になにも教えてはくれなかった。

SCRUM I

「それじゃ、準備はいいかい？」

Vault101のアイツこと、キャプテンは気軽にそれを言う。操縦席に座るコスモスとエリオットの後ろに立つ彼女は自信にあふれていて、不安など全く感じてないみたいだ。

だけど僕たちの乗る宇宙船はこれから地球の重力圏から離れ。

歩くことが叶うならば往復するだけで20年以上の時間が必要な距離を途中、戦いながら無事に戻ってこなくてはならないのだ。

敵の兵力は決して侮れるものではなく。

こちらの戦力とは言えば、先の3人にくわえ。自称宇宙人、時代を間違えているサムライ。助っ人のつもりで来てしまった場違いな自分……これしかないのだ。

だがこのチームを率いてきたキャプテンによると「こういうの、いつものこと」らしい。

実は隠してはいるけど怖がっているのは僕だけ？

Vault111の怯えた記憶のない若者。なぜか今は地球を離れて月に向かい、そこで暴れようとしている。やっぱりなにかおかしいよ。

——狂ってるよなア

もう苦笑いもでない。

これから始まる宇宙戦争スターウォーズはのんきに鼻歌を歌いながら出かけるピクニックとは違う。キャプテン達の言うように「いつものように」戦い、勝てなければ。僕の未来の予定表は全部真っ白に塗り替えることになる。

「航路の計算を開始。エンジンスタート」

「了解、キャプテン」

船体がわずかに揺れ始めるのを感じる。

スクリーンの端にあった地球の青い海が消えて——月がセンターに。

「……」

振動を感じるとなぜか落ち着いてきた。不思議と色々なものを地上に置いてきたことに対して不安のようなものを感じない。開き直れたのか。

「航路、出ました。エネルギー出力安定」

「では楽しい月までのピクニックに、発進」

しばらくのお別れだ地球。

しばらくのお別れだ、ファーハーバー島。僕が戻ろうと、戻るまいと。その運命はもう止まらない場所。

ケイトのパンチで3人目の自称ミニッツメンは吹っ飛ばされた。

距離を詰められてからのフェイントにあっさり引掛かかってしまい。頭を打ち抜くストレートからダメ押しの変形のフックで勝負はついた。これが試合でレフリーがいたなら最初の一発でTKOを宣言してもらえたのだろうが、残念ながらこれは試合でも死んではなかったし。KOシーンなのに観客の反応も良くなかった。

砂場で倒れて動かない同志の姿に円を描くようにしてその一部始終を見せつけられていた男たちは黙っている。

数日前までは、目で將軍を追うふりをして。視線をケイトの体に向け、興味を引けないかとわざとらしくニヤニヤ笑い。髪を、目を、胸に尻をと好き勝手なことを楽しみながらお互いがひそひそと口にしていたのに。

このキャンプ——建設がついに始まったダルトン・ファームに來てからは全てが一変した。

ライフルを手にするマクレディ。見たことのない企業のプリントを施したT-51パワーアーマーを着て、レーザーライフルを手にするダンス。彼ら傭兵たちに連れてこられたこの場所で。ミニッツメンたちは“兵士としての訓練”とやらをやらされていた。

ちなみに今の科目はレクリエーションの時間。
情熱的な赤紙の美人とスパーリング。

「……終わったね。それじゃ、次は誰が来る？」

指を開いては閉じ、手首を回すケイトに表情はない――。

「なによ。女の尻に飛びつくことばかり想像するだけの坊やたちだった？少しはできるところを見せてごらんよ」

言いながらケイトは心の中で「ダメだ」と結論を出していた。

こういう男達ならよく知ってる。ボストンコモンなら掃いて捨てるほど目にしてた負け犬達。最初に自分たちを有能で強く見せるが。叩きのめして殺さないと、態度が真逆となって今度は娼婦のようにすり寄ってくる。なんなら自分から尻の穴を差し出してくるような連中。

自称・ミニッツメンの兵士としての練度は平均以下。

走らせれば動きは鈍く、酒と薬をやる奴が多いから息を切らせ足が止まり脱落していく。余裕は初日に失われたが、誰もまだ脱落していないのは別にプライドからではない。

この島のキャンプ地から外に出て連邦に戻る手段がないというだけだ。それでも逃げるといふならば霧に囲まれるという危険を生き延び、港で連邦まで送ってくれる船を探さなければならぬ。

誰も声をあげないのでケイトが次を指名して立たせる。

気合の入らない態度。これから全員が殴り倒されるだけのルーチン……。

ひどいな――マクレディと共に離れからこの様子を見ていたダンスは思わず正直な感想を口にしてしまう。

彼はレオの役に立つため。またアキラの要請から己の誇りでもあるB・O・S.のパワーアーマーを脱ぎ。マクレディのような傭兵ということでもミニッツメンたちの様子を伺いつつ。彼らを率いてエコーレイク製材所の制圧を行うつもりであったのに。

「あんたのお仲間とは大違いってかい？」

「現実的な話だ、傭兵（マクレディ）」

「別に驚くことじゃない。偉そうに口が回る奴も含めて、あいつらは勘違いしている若造だ。名声、女、キャップが重要つてのが本音だ。ああいうのは大抵は失望させる。戦いが始まると逃げるわけでも、撃

つこともできずに縮こまって動けなくなる」

「お前は随分と気楽なんだな。我々はそんな連中と化け物を居住地から叩き出さないとイケないんだぞ？」

マクレデイは余裕を崩さずに鼻で笑って見せる。

「連邦で武器を持つつてのそういうもんさ。レオもアキラもそのへん、ちゃんと考えてる。心配はいらねえよ」

「勝てる算段は付いているということか」

「まあ、そういうことではあるんだけどな。正解じゃない「？」

「製材所？そこは俺達なら勝てる」そういうことだ」

「よく、わからないが？」

「——わからないならそれでいい。攻撃にはまだ時間が必要だ。それまではこいつらをもう少しくらいは使えるようにしてやろうぜ」

マクレデイはあえてはつきりとは答えなかった。

ファームに流入する分の物資はアキラが連れてきた商人の女の手で北上中。だがもうひとつばかり拠点の面倒を見ることになったので、さらに多くのゴミ（ガラクタ）が必要と時間がかかっている。

攻撃準備完了は自分たちが決めるわけじゃない。

こんな訓練なんて……退屈おびのびぎなんだ。適当でいい。

5人目のミニッツメン、宙を舞う——。

もう役に立たないな、顎を真下から直上に貫く一撃はケイトに虚しさを抱かせた。

これまでは不愉快な目でケイトの体を見ていたはずの男達からは、もうこちらへの恐怖の視線しか感じられない。こっちは殴り殺さないうように優しくしてやっているというのに。

マクレデイたちも失望していることは雰囲気に分かる。

こんなのはただの時間つぶしだ。

だが時間つぶしというのも貴重なものだ、それが最近わかってきた。教えられてきたバンカーヒルの傭兵の知識に照らし合わせてみる

と——この仕事はもうすぐ終わる、ということがなんとなくわかってくる。

レオの奴は女記者と犬を連れてアトム教へむかってしまった。

自分なら、アトムなんて押込んで頭のおかしいアイツらはどうせ邪魔なだけ。さっさと皆殺しにしてしまえば簡単だというのに。そしてそれは“おそらくは出来る”だろうに、あいつはそれを選ばなかった。

アキラの奴もどこへ行くかも言わずに消えた。

キュリーは不安を押し殺し。マクレディはちよつと不機嫌になつてゐる。

なのにアイツは自分が仕掛けた仕事をここに残していった。ふぎけんな、自分の尻くらいい自分で拭けよ。そう思う一方で、これは“そういう仕事”なんだということもわかってきた。

そして行き先を伝えないってことは、追ってくるなということ。やっぱりなんか気分が悪くなりそうだ。

あの2人と付き合うとクソみたいな自分でも、しばらくして振り返ると誇つていいことをした気になれる。

一緒に戦うだけで仲間と呼んでくれる。だから勘違いしたくもなる。

——薬漬けのクソみたいな、短気な女

——もう誰もいない。なにもない

そんな女はあと何回こんな榮譽を手に出れるのだろう。最近はその思うと震えて眠れなくなる夜がある。

知り合つてもまだ1年とたつていないのに。友人たち、仲間たちの存在だけがようやく自分にもあると、大切なものと思えてきている。

あいつらは——。

いや、アキラは連邦はもうすぐ戦争がはじまると言っている。アイツらはどうするのかはまだ口にしていないけれど、この島を出るのが近いのなら。戦争とやらが始まってもどうするか、もう決まっているのかもしれない。

そして自分はどうするのだろうか？

もう、そんな必要はないと、いつものような悪態をそのまま実行する？

——友情？仲間？

——そんなあやふやなもので命をかける？本気かよ、ケイト。

殴りあい——いや、じゃれあいの最中にケイトは自分の考えてしまった事にキレた。

腰が引けている相手を容赦なく攻め。体が丸くなくても倒れることを許さずに腹を叩き続け、最後は意識を断ち切れるようにテンプレを揺らす。

白目をむいているであろう男の後頭部が。なぜか無様にも期待を裏切られたと嘆く自分の未来を見たような気がして——ケイトはついに目をそらす。倒れていく男の姿に、未来の自分を見た気がした。

サカモトは砂浜に降り立った。

目的地はこの先にある克蘭ベリー島の船着き場である。

克蘭ベリー島とは、このファーハーバー島の南部に位置するコジマのひとつで。他にも女獵師ハントラレスの島というのが隣にある。

この2つの島には面白い共通点があった。

霧の影響はもちろん受けてはいたものの。本島にあるまとわりついてくるような湿気と冷気はなく、かわりに止むことのない海からの強風とカラツとした乾いた空気に驚かされる。

また本島と違い。トラッパーやスーパームュータントの姿はここにはいない。かわりに霧の影響で狂暴化した獣たちの世界になっている。

「……これはこれは、荒れてますね」

ドックへと近づいていくと、その道の途中では群れを成していたであろう狼や野生化した犬の死体が積み上げられているのが見えてきた。

何者かの手で殺されて後、その死肉の匂いに我慢できずに近づこう

としたことで殺されたのだろう。骨になったのから腐ったもの、腐りかけているものなどからなぜこうされたのか、想像ができた。

サカモトは苦笑した。

彼はここにいるであろう仲間……いや、もうすぐ元・仲間となるキジマを看取るために来た。

この数日。ファーハーバー島の中で通信量が跳ね上がった。

いまではうっかりラジオのつまみをいじれば。雑音の中に時折、どこかで叫び声をあげるトラッパーのような男の声が聞こえたと勘違いできるほど多くなったのだ。

その元凶がここにいるであろうキジマである。

レオ暗殺を画策してここまで潜んできたキジマとクロダは、レオとアキラが予想を超える結果を出したことで一転して窮地に追い詰められている。

彼らにあるのは奇跡か、それとも残された時間をどう過ごすのかだけ。1分1秒を苦痛に感じているのだろう。

とはいえ、ここまで露骨に半狂乱になった姿を見せられるとはサカモトも考えていなかった。

キジマはひとりでするのかを勝手に決めてしまい、連絡を絶つたクロダに腹を立てているらしい。情緒不安になっていくキジマは罵り、懇願し、勇気づけ。空回りするだけの聞くに堪えないものになっている。

「私たちの使う通信機はやはり性能がいいですね！こんな島でもはつきりと君の声が聞こえましたよ」

「……サカモト、来たのか」

「あれだけ大声で叫び続けられては心配にもなります。大丈夫ですか？」

気遣うふりをしているのは明らかで、声になんの感情もない。

手斧を使い、革はぎ台の上に横たえたマイアークキングの首を熱心に斬り落としていたキジマは手を止め。サカモトはタイヤの山の頂上から見下ろしていた。

「こんなところで剥製ですか。ええ、悪いことではないと思いますよ、余裕を持つことは必要だ」「……」

「にしては数が多い。そこに見える竹籠に、同じようなのが詰められているようだ」「……」

「レイダーと呼ばれる連中の真似ですか？霧の影響を受けすぎて精神汚染にでも——」

「殺しに来たのか、俺を？」

斧を振り上げること数回、魚人（マイアラーキング）の首は見事に切断される。

「なぜそう思うんです？」

「とぼけるな。俺達がどうなったのか、どうなるのか。お前が知らないはずがない」

「ふん」

「なぜなら！お前がっ、サカモト。お前が俺たちをそこへと追い込んだ！」

「ええ。そうです、当然でしょう」

舌から吹き上げてくる怒りと殺意を正面から受け止め、サカモトは冷酷に断言してみせた。

「クロダがひとりでやる、それなら別に構うことはなかったんです。あれのメンタルは兵士に近い。命令（注文）は順守しますから。彼が『アキラには危害を加えない』と言えば信用する。」

「ですが君が彼と一緒に、となると話は変わる」

「俺の何が悪い」

「君は我ら”小さな宝物”では一番の殺し屋だからですよ。そう、メンタルからね。」

常に考えるのは報酬とリスク。死んだコンドウが君との関係を解除してからなんで動いたと思っているんです？彼が本当にフランク・J・パターソン J r暗殺だけを望んでいたのなら。2人がかりで、と言ったはず」

「それはあいつが自分だけ——」

「違います。コンドウが目指していた本当の計画Bは、アキラと同じ

ように騒ぎを起こして目立つ男を消すことで。アキラの資産と戦力を削り、来るべき戦争を口実に彼と彼の資産を組織に取り込むことだったのです。

そのためには暗殺の背後に我々がいると、知られるのはマズかった」

「ハッ、それが事実なら間抜けな話となるな。現実にはアイツ（コンドウ）は返り討ちにあい、アキラは暗殺の首謀者を知ったぞ」

「それは正確ではない。アキラは当時、彼を悩ましていた問題の裏側に我々がいたことを知られたのです。致命的だが、勝負に負けた結果なので、それからそれは仕方がない」

「どんな言い訳だ」

「ええ、理解できないでしょうね。だからこそ君は我々の最高の殺し屋なので、すから」

コンドウの計画は、サカモトも考えてはいた。

組織としての名前に傷はつくが、被害はそのくらいでむしろ得られるものを考えれば悪くはない。ただしそれには勝つことが絶対の条件となることから——コンドウほど直接の戦闘を好まないサカモトは忌避したのだ。

「そういえば今回の私の計画にはちゃんと気が付いていたようですね。感心しました」

「褒めることかっ」

「そう言わないで。ご褒美に全てを聞かせてあげますよ。」

君たちが健気にアトム教を利用しようと準備している中。私はこの島に来て、念願だったアキラとの直接の接触に成功しました」

「——嘘だ。そんなわけがない」

「そうでしょうか？」

「アレは俺たちを許さない。本当にそんなことをしたというなら、お前は生きてはいない」

サカモトは笑う。

確かにそう思うだろう。だが——あの瞬間にこそ唯一の突破口があったのだ。

ハーバー・グラウンドホテル。

そこはいつもであればスパーミュータントどもの住処として知られる危険地帯。

サカモトはそこを一晩かけてひとりで掃除し、翌朝に訪れるアキラを待った。

数時間後、混ざりあつた血と肉、死臭に満たされたプールサイドで物騒な面談が行われたのだ。驚いたことに両者は誰も、なにも用意せず。会談はすんなりと――始まった。

――メッセージを受け取ってくれたこと、感謝します。アキラ

――今更どうこう交渉できる関係と本気で思ってるのか？

――そのチャンスを引きずり出すためにここを用意しました。気が落ち着くでしょう？

――不愉快な場所だ

――ええ、“普通の人間”ならそう思う場所です。ああ、お伝えしてませんでしたね。私はサカモト、と呼んで

そしてサカモトはやり切つて見せたのだ。

今、向かい合っているキジマとは別の。全く異質で強大な怒りと殺意の塊との駆け引きを成功させてきた。

「アキラがこの島に来たのはアカディアでした。あそこに住む人間たちを持つ技術、情報のすべて。

彼はすでに“小さな宝物”がインステイチュートに近い秘密の存在であることを理解しています。だからこそ彼らが垂れ流している人造人間たちの情報とネットワークが欲しかった」

「そんなことはできない」

「いいえ、できますよ。忘れてませんか？

我々は少なからずインステイチュートとも接触しています」

「だからそんなものではない――」

「わからない男ですね。アキラの次の目標がインステイチュートの制圧だと言っているのです。

これはミニッツメンの將軍とも目的は合致するし。連邦での戦争

はもはや避けられない決定事項。それと同じようにこのままでは我々とアキラの全面対決は避けられない」

エルダー・マクソンはしきりとインステイチュートの凶悪さを強大と言葉をすり替えて語っているが。

インステイチュート自体は隠れ蓑を取り払われてしまえば、武力集団であるB・O・Sの相手ではない。キャピタルで10年前に起こったvsエンクレイヴと比べるべきではないのだ。

おそらく戦力を送り込まれた時点で、勝敗は決してしまうだろう。

「ならば余計におかしいだろう。なぜアキラと交渉ができる?」

「だから売ったのですよ、全部」

「売った、だと?」

キジマは何を、とは言えず。サカモトは何を、とは言わなかった。

売ったのはインステイチュートへと至る情報。

具体的にはグッドネイバーのメモリー・デンに預けられているケログの残骸の扱い方。今までならば恐々と扱って壊れないようにとひとりの研究者に全てを任されていたが。アキラが島から戻れば恐らく彼も解析に携わろうとし、彼の知る連邦の知恵者も集められて解析されてしまうだろう。

所詮は人の作ったものなのだ。

解きほぐしていけば、どこかで鍵穴にぴったりはまったように正解が転がり出てしまう。

なのでその解決方法を先にサカモトから提供した。

これでフランク・J・パターソン Jrのインステイチュートへの接触は避けられず、戦争開始への針が動くことになる。

これに始まり、サカモトは多くの情報や物を贈り物としてアキラに渡した。まさに連邦で取引される高額商品の大安売り（ビッグセール）だ。

その中には当然だが現在、フランク・J・パターソン Jrの命を狙って動いているクロダとキジマの情報も入ってた。ちよつとしたおまけのようなものだが、役には立ってくれた。

「サカモト。貴様、何をやっているんだ!」

「なにがですか」

「戦争と全面対決は不可避。そう言ったのはお前なのに、それを自分からはやめているだけなんだぞ！」

「ああ、そのことですか」

サカモトに動揺はない。

見上げると不思議なことに空を覆う雲が消えていき、この島では珍しい青空が見えてきていた。

「キンジョウと観測者がアキラの捕獲に失敗した時。あの丘で4人が集まった時、思えばあれがターニングポイントだったのですよ」
「？」

「捕らえることに成功していれば。君たちがフランク・J・パターソン Jr 暗殺の続行を口にしなければ。私もこんな叩き売りをするとはなかったのです」

「お前の間抜けな行為は、俺とクロダ。死んだコンドウのせいだと言うのか？」

サカモトは口を閉じた。答えてもキジマは理解できないだろうし、そもそも理解する必要はないのだ。

彼はもうすぐ役目を終える。

「お互い交わす言葉がなくなってきたようだ。そろそろおしゃべりの時間は終わりにしましょう」

「来るか、サカモト」

両の手に手斧とフックを持つキジマが戦いの空気をまとってようやく笑みを見せたが、サカモトはそれに応じることはなかった。

「決着はつけます。しかしそれはあなたと戦うわけではありません」

「じゃ、どうしてくれるんだ？」

「そうですね——クロダはフランク・J・パターソン Jrと接触し、一緒に行動しています」

「な、なにを言いだすんだ？」

「言葉の通りです。クロダは君たちの目標と共にここ数日、寝る間を惜しんで共に行動していますよ。おかげで連絡など聞いてはいないのです」

アキラとの接触後。

恐れを知らぬようにフランク・J・パターソン Jrはアトム教へと向かった。クロダも、そこに用意されていたの存在も知っていたのだ。

「仲良くやっているようですよ。テクタス聴罪司祭の新しいお気に入りとして認められそうです」

「嘘だ。そんなことは計画にはなかった」

「ではまた調べたらいいでしょう。こちらの情報が正しいかどうか、調べる時間ならある」

伝えるべきことは伝えた。

サカモトがここに来た目的は今、果たされた。

待て、キジマの声が震えていた。

「俺とは戦わないのか。俺を始末しに来たのではないのか」

「来ましたよ。でも戦いはしません。その必要もない」

「俺の通信を聞いてきたんだらう？なら、また俺は通信を始めるかもしれないぞ」

「そろそろ組織も君の立場を知ってこちらに目を向けている頃です。何をしても構いませんが、自分からみじめな最期を選ぶのはどうかと思いますかね」

「アキラを殺すかもな」

「結果は変わりません、そんなこともわからなくなりましたか。君たちがこの島にいられるのは悪魔でもあの丘での約定を守る限りは見ぬふりをする。それを破るといふならキンジョウが君たちの後任者を生み出し——つまりみじめな最期に到着です」

「じゃ、どうしろというのかっ」

「自分で決めてください。私にはどうでもいい事です」

サカモトはそれだけ言い残すと、本当に立ち去って行ってしまった。

残されたキジマはただただ呆然とするだけ。

それから1日の間その場から動けず。漂う死臭に空腹になった獣たちが我慢できずに再び集まり始めた頃。

何事かを決心したようにゴミの山の中に入っていく。一心不乱に何かを作り始める。

その姿は冷静とはいえず。目は血走っていた。

敗北者となることが待てない子の暗殺者は、これからなにをしようというのか。

『今夜もギャラクシーナイトは皆さもの安らかな眠りの前のひと時に音楽と楽しい会話をプレゼント。気持ちの良い最初のお手紙はラジオの少女のお話です——』

なんだよ、ギャラクシーナイトって。

自分はどうも他の人間からは賢い奴、みたいに思われているとなんとなくわかってる。でも実際は危なっかしい事ばかりするだけのどうしようもない奴なのだ。この世界ならどこにでもいるような奴。

連邦に出て、感情を抑えられずサンクチュアリを飛び出した時。

深く考えるわけでもなくレールロードへ参加を決めた時。

レイダーの王様とおだてられると、それにふさわしいと思わせるためにあえて奴らを喜ばせた時。

ほかにもいくつも思い出されてくるだろうけど、これらは大体が避けられた事態であったはずなのだ。

なのに——僕はそうしてこなかった。ひどい目にあってきた。

Vault 111、連邦、ヌカ・ワールド、ファーハーバー島。

その全てで起こったことにそれは言える。

だからこれも避けられないことだったのだろう。

宇宙——。

自称・宇宙人の立案した護衛のついた月面裏施設への攻撃。兵力差3倍の不利な戦いは、的確で苛烈な攻撃によって徐々に差が詰められていった。

ヒーローであるキャプテン・コスモスこそ自分だと口にする操縦者は宇宙船同士の戦いに勝利。

キャプテンやトシローは敵艦に乗り込んでいき、船内や施設内の宇宙人を徹底的に駆除。自称・宇宙人はシャトルに僕やキャプテンらを乗せて敵船までこっさり運んでくれたが——乗り移る最中に敵にバレ、シャトルごと吹き飛ばされてしまった。

結論から言おう。

月の裏側で待機していた2隻の敵船と作りかけていた施設は撃破。そして僕は——戦いを終え、宇宙空間でコントロールを失い漂っていた。

おそらくだがこのままだと数時間後になくなる酸素で窒息することになる。

——まさかこんなことになるとは

呼吸と心音しかわからない宇宙で漂う自分は、以外に冷静にこの奇妙な人生が終わることを受け入れることができていた。

本物の絶望を前にした時、騒がしくできるなんてまだまだ余裕がある証拠だ。

そんな体験をなぜかすでに何度も経験している僕には「またか」「しようがないな」となり。またあれが戻ってきたんだな、くらいの軽いものになってしまっている。

正直に言うと思い残すことはあまりなかったりもする。個人的なことを言えばキュリーにはすまないとは思いますが、人造人間となった彼女はどのみち僕とは別の道を歩く時が来ることは避けられなかったはずだ。

レオさんやそのほかの友人たちにも悪いな、とは思いますが。あの世界で突然の友人の死、なんてそんなに深刻に受け止めるものじゃないはず。すぐに過去という柵に僕の濃くは放り込まれ、彼らは再び歩き出すだろう。

だが後悔はない、と言いつつ。僕には悲しさは感じている。

目覚める前の記憶がない。ただこれだけのせいでVaultを出てからどこか恐怖し続け。貪欲になにかを吸い込み、怒りと憎悪を吐き出し、狂気を利用するふりをしてその激流に飲み込まれる喜びに浸ってきた。

なのに天秤で量るように、レオさんのようにどこかで正義を求め、半端な極悪人になってしまった。

良いことはできるが、それには常に悪いこともつけていく。それが僕だ、正義からは程遠い存在のくせにかっこつけている道化師。

それが地球を守るヒーローたちと一緒にになって暴れようとしたんだ。

そりゃこれくらい悪い最期が待っていたって不思議じゃない。善人になる気のない極悪人は人知れずに暗く凍える寒さの宇宙で苦しみに死ぬ。もうすぐそうなるし、希望はついに消え果てた。

——あなた、自分でも不思議に思っているのではないですか？

——なぜ“彼”に執着してしまうのか、とね

——だってそうでしょう？

——“本物”を目指すなら、すでにあなたは連邦で最悪の極悪人になれる

——あのジョン・ハンコック。グッドネイバー市長すら手駒にできる立場になることだってできた
うるさい。僕は静かに目を閉じる。

黙ってるよ。そんなことしてどうなるっていうんだ。

——王になれるんです

——余計なことをしない。簡単なことではないですか？

過去のない、クソったレな極悪人の誕生かよ。

それで喜ぶのは誰だ？レイダー共？スーパーミュータント？それとも……。

——いきなり手を差し出し、握手をしようとは要求しません

——誠意を示します。あなた、あなたのご友人の欲しがるもの叶う限りすべてを

——ですがね

——受け取るからには代償を求めます

それくらいの見返りはあっていい、わかる。ああ、わかってしまう。馬鹿を見るのは嫌なんだよな。

ひとりであっさり時間をかけて斬り刻むためにあの場所に向かっ

たはずだったのに。

僕はうつかりいつものように、握手を交わした穢れた手を握りしめ。怒りと憎悪を押し殺して黙って仲間の元へと戻っていく羽目になった――。

どれだけ時間がたったのだろう。

よくはわからないが。急に宇宙服を通して熱を、光を感じたような気がして目を見開いた。

体のどこかに光が、太陽が見えてきているのか？

なぜか目やにが大量に出ってしまったようで、開くのに苦勞する。ヘルメット越しでは手を使って払いのけることができなからだ。

いきなり重力を感じて地面に叩きつけられたような気がした。

受け身なんて取れなかったから、ひどくむせてしまい。宇宙服で動きにくいことがストレスになる。

「なんだよ……いてエ」

痛みに耐えながらそれでもゆっくりと体を起こしていく。目が開いてきて、とても不思議なものを見ることになる。

自分はまだ宇宙にいた。

いや、正確には宇宙の中にいるのに。巨大な“雲のような地面”になぜか叩きつけられr。そこから体を起こして座っていた？意味が分からないぞ。

「なんだ、コレ？」

腕に着けてあるピップボーイを覗き込むと画面には驚く表示が。え、空気があるだって？

これはまたおかしいことになった。宇宙の中に出てきた、雲みたいな白い板の上に座り。そこにはなぜか空気があるという。半球全方位が宇宙空間と考えると、ちよつとしたレジャー装置で遊んでいるみたいな錯覚を覚える。

こうなったら機械の故障、なんてことは考えない。

死を覚悟していた僕はモタモタしたけどもヘルメットを脱いだ。

おお、確かに呼吸できる。感動だ。

ヘルメットを脱ぐと、どうやらこの状態が理由があつて普通ではないことがなんとなくわかつてきた。

はるか遠くの星の見え方が、ここからだとはちよつとおかしい気がする。何か透明な——つまりヘルメット代わりのものを通してみている気がする。

となるとどういうことだ？

白い雲を地面として座っている自分の周りには、把握できないほどの大きくて透明なドーム状の空間で守られている、でいいのだろうか？

——動いたな？動いているな？

「Q!?!」

——声が出たな。よし、もう黙つてろ。それでいい。

「あんた、シャトルで僕らを運んだあと。取りついた戦艦の上で攻撃を受け。吹き飛ばされたよね？てつきり死んだと思つて……：：：：たんだけど」

返事はない。

無言だ。さっきのが会話の先を読んでの答えだとすると、何を言つても。返事はもらえないということになるが。

「自称・宇宙人つてことだったのに。本物だったんだ。皆はこのことを知ってる?」

返事ナシ。

「不気味な人だけどそれも個性つて思つてたけどさ。宇宙人的には——あの緑の連中とはどう違うの?いや、大きさが違うつてのはもう理解したけど。種族的な差異つてのが気になつちやつたんだよね」

これもダメか。

「でも生きててくれてよかつたよ。あんたが吹っ飛ばされた後はさ、ちよつと気合が入つちやつて。」

暴走したからこんな感じでひとり逃げ遅れて放り出されることに

——いや、ちよつと待て。あんた僕が逃げ遅れたことをどうして……：：：：ま、いいか」

ヘルメットを脱いだまま、雲の上で大の字になって寝そべった。

どうやら宇宙人が宇宙人に戻ったことで僕は助かった、ということなんだと思う。またまた死に損なったわけか。

正確には宇宙人に飲み込まれ（？）てって、それじゃ僕は食べられた？消化されてしまうかも？

いや、深く考えるのはやめよう。

どうせ返事はない。完全な答えは得られない。せいぜい自分で納得できるものを考えるしかない。それなら別の事をまじめに考えたほうがいいだろう。ハハ、なにがあるかな？

気が付くと僕はのんきに眠っていた。

夢うつつの中、視界に徐々に大きく迫ってくる宇宙船を始めて外から見たような気がする。

太陽の光を反射して輝く緑の船体の向こうに見える地球もまた、なぜか緑がかって見えたような気がした。色々あったけど、やっぱり僕はあの地球へ帰ることができた。

アイスブレイカー（LEO）

キングスポート灯台の光に導かれ、デューコンは船着き場に降り立つ。

ここの居住者たちも船に気が付いたのだろう。近寄ってくると、船長は船底から運んできた荷物を彼らに渡していく。同時に入れ替わるようにジャケット姿の男女が入れ違いに船の中へと入っていったのを見逃さなかった。

「——船長」

「あ？」

「船はこのまま島に戻るのかい？」

「なんであんた、そんなことを知りたがるんだ」

デューコンは警戒されないよう、笑顔を浮かべつつ。あくまでも軽い感じで質問を続けようとする。

「いや、今若い2人が入っていったからさ。あんたの帰りの荷物かと思っただけ」

「そんなところだ」

「はっ、そんな警戒するなって。ちょっと不思議に思っただけさ。それとも秘密を守らなきゃいけない。そんなワケありの2人なのかな？」

「そんなんじゃない。ああ、わかったよ。お前に教えても別にいいだろう。」

確かにあの2人は荷物だが行き先は島じゃない」

「他の場所？」

「ああ——南に行くことになってる」

とつさにデューコンはある農園の名前を口に出した。

「ほう、ワーウィック家の農園？いや、あそこには港が残ってた気がする」

「あんたあつちの方に知り合いがいるのか」

「3年ほど前にね。商売をまとめたことがあった」

「そうか。だが、この船が行くのはそこじゃない。ナントカ猫とか名

乗る変わったギャングの一団に会いに行きたいんだとき。その近くまで運ぶ約束だ」

「海岸だとマイアラーク共が隠れているからな、気を付けて」

「ああ、ありがとよ」

それだけ聞ければディーコンには十分だった。

行き先はアトムキャッツ。あいつが^{アキラ}お気に入りジャケットに入ってるロゴのアレだ。ということはあの男女のボスはアキラだ。何を画策しているのかわからないが、小さな島での暴れっぷりを思うと、そろそろ帰還の準備でも始めようとしているのかもしれない。

会話を切り上げると、そのまま誰にも何も言わずにディーコンは居住地を出る。

すでにしばらく留守にしていたボストンコモンの現在の方が気になっっていた。

数日をかけて南下すると、すぐにはレールロード本部には戻らず。近辺の様子を探る――。

さっそくおかしなものを見つけた。驚くほどあつさりど、だ。

旧世界では税関タワーとしてしられた建物の前は、ボストンコモンの騒ぎでつねにスーパーミュータントの人肉パーティー会場になっているか。もしくはレイダーどもの馬鹿騒ぎが出す“生ごみ”や“クズ鉄”が散らばっていた。

だが今日はちよつと違う――レイダーの死体、それもあまりこのあたりでは見られない装備をした連中だ。ディーコンにはそれが誰かはわからなかったが、死んでいた彼らはヌカ・ワールドからきたオペレーターズ。それがこんなところまで入り込んできている。ここから何ブロックか奥に行けばグッドネイバーがある。

(交戦して全滅。正面からぶつかるこのやり方はいかにもこの連中らしい、って感じだが)

何かおかしい。そう、死人の武器だけが綺麗に持ち去られている。

この辺で騒いでいる連中なら、いくら敵がいい武器を持っていたとしてもそれだけを奪い。死体に何の興味も示さずに放っていくというのは考えにくい行動だ。

デイーコンの背筋に冷たいものが流れた。

ボストンコモンにはミニッツメンは入ってこない。ということはいは
これは――B・O・S。だろうか？至急探る必要があるだろう。も
はや小さな変化は見逃すことはできなくなってきた。

――はあ

珍しくこの男から悩ましい色のため息が出た。

こと切れたシスター・グウィネスの傍らで私は彼女の残したホロ
テープを椅子に座りじつと聞き入っていた。

外はこの島特有の霧を伴う嵐の状態だが。同行者の話ではすぐに
やむだろうと言っている。なら耐えて待つのが一番安全だろう。そ
う思うとその場で見つけたものを調べて時間を潰すしかない。

――これは私の。いいえ、私たち全員が知っておかなくてはならな
いことだった

――つらいことだけど真実は受け入れないといけない

――戦前の書物に全てが記載されていた

アトム教の中から見る彼らの姿は、意外なことにアカディアや港の
人々から聞いていたこととは違い別の顔が見えてきた。

実際の彼らはひどく消極的でありながら、彼らなりに教義に従うこ
とで。外界から自分たちを守ることにとにかく神経を使っているこ
とが分かったのだ。

彼らが今まで手に入れられなかった装備を欲しがるのも。また、裏
切り者として綱紀粛正に血眼になるのも。

極端に自分たちを外からの脅威から守るために必要と考えた結果
の判断だった。

私は彼らをついに理解することはできたが。だからといって私の
彼らへの印象が大きく変わることも、同情することもなかった。

その理由は彼らが裏切り者、異端者と呼ぶ人々の血で私の手は汚れ
ていくせいだろう。

——嘘だったのよ！そう、アトムは嘘、テクタス上級贖罪司祭はずっとそれを隠してた

——聖なる霧の世界なんてものはなかった。それは死、何も無いもの

——輝ける光による支配なんてものもない！

——この嘘を正すため。嘘を吹き込まれている兄弟たちを救うため。私はここで立ち上がる

——私は理解した。ええ、ついにわかったの

——これこそ私が受けた啓示。嘘のない、新たな光の誕生。これで私は皆を救うのよ

残念ながら彼女の言葉はもう、誰かの耳に届くことはない。

「雨はやんだぞ。もうここもいいだろう？」

「わかった。これを持ち帰ってやれば、きつと彼らも安心して満足するだろう」

私はクロダにそう答えると、立ち上がった。

ここ数日、私はパイパーとカールをニュークリアスにとどめ。このクロダと組んで動いている。

テクタス上級贖罪司祭たちからの要求は次第に危険なものとなっていて、彼女をそんなところに連れ歩きたくはなかったのだ。

これは——よくないことだろう。明らかに自分に弱点を作ってしまったている。

お互いが新しい関係へ進もうと意識したことが大きく。正直に言えばここに連れてきたことすら後悔もしていた。

そんなこともあって、私は冗談のようだがクロダを相棒のように扱った。

信頼はない。何より相手は私を少し前まで暗殺しようとしていた大きな体の怪人なのだ。今だつて考えを変えた、とか言い出して襲ってきて不思議はない。

だが、それでも私は恐れたりはしなかった。

ニュークリアスで、私は彼を通して私を殺すはずだった彼女——
妻
ノラの姿を盗んだ人造人間とも話した。

彼女は私と話すことで何か違和感を感じた様子を見せたが。それだけだった。

それよりもクロダという男を見つめる目から私は別の事を察した。彼女は、この人造人間は恋をしているのだ。とても皮肉な状況ができている、だが私はそれに対して嫉妬も何も、心が動かされることはなかった。

当面、問題はないように見えた。

テクタス上級贖罪司祭は帰還した私たちの報告に「我らの中から異端者が生まれることはなかった」と気分を良くし。ついにニューヨークアスの危険地帯にして、禁止区域である指令センターへの出入りを「特別に」許してくれた。

そこに、私の目的であるディーマの失われた記憶が残されている。

「やはりここを目指していたか」

「さっさとすませてしまおう」

許可をもらえればもう気に入られる必要はない。

その足で私とクロダは指令センターへ向かい、入口をまもる守衛の前を笑顔を浮かべて当然のように中へと入っていく。

「電源を入れないと」

「そうなるらと防衛システムが作動するぞ」

「強引に押しとおる。アトム教も気にしたりはしないだろう」

「そうか。そうだな」

アカディアの真実がもうすぐこの手が届こうとしていた。

グッドネイバーはハンコック市長の意向から誰でも迎える。その約束があるとはいっても、だ。

その日の客人たちにトリガーマン達はさすがに身構えないわけにはいかなかった。

扉が開いてまず姿を現したのがロボ・ブレイン。それに続いて宙を浮く武装がほどこされたミスター・ハンディ達。

巷の噂では最近では狂ったロボット集団が人間たちに襲撃を繰り返しているとも聞いている。町に侵入してきた連中にトリガーマン達がすぐさま銃を構えて囲もうとしたのは当然の事だった。

『冷静にしろ。こちらは客だ』

「ロボットの客か。そりゃ珍しい」

『こちらからお前たちに危害を加えるつもりはない。銃を向けるな』

「どうだろうな。お前らを気分よくスクラップにした方が、後で悔やまずに済みそうな気がするぜ」

『好き勝手なことを言う。よし、いいだろう』

ついに本性が現れたか——トリガーマン達に緊張が走る。

だがロボ・ブレインの次の行動は彼らの予想、期待とは全く違うものだった。

チャリンチャリン

ロボブレインの周りで浮遊する2体のロボットが何かをばらまいたのだ。

それがキャップだとわかった瞬間に、それまで後ろで様子を見ていた住人たち——ジャンキー、スカベンジャーらが目の色を変えて前進してくる。

『これはお前たちの歓迎への感謝とでもいい。早い者勝ちだ』

ロボ・ブレインは——いや、ジェゼベルはこうやって無意味な衝突を華麗に回避して見せる。

ロボットにしては実に個性的なその性格にふさわしい、ひねくれた人間たちへの対処の仕方であった。

ファーハーバー島へアキラたちが向かった後。

ジェゼベルらロボット部隊“ローグス”とエイダは、元メカニストのイザベルと連携し。ローグスはイザベルが連邦に解き放つてしまった狂ったロボットたちの破壊、回収を担当し。エイダは時折それを手伝いながら、空港にとどまっているB・O・Sへの監視の目を光らせていた。

ジェゼベルらローグスたちはそのままKILL OR BE KILLEDの武器屋へと入っていく。

「あら、これは驚いた」

『我々は客だ』

「ならこつちも別に問題はないよ。同じような体をしているからね。それじゃ、キャップと品があるのか確かめても？」

『もちろんだ、どちらもある。付け加えると買い物仕方もわかってる』

「ではいかがしましょう、お客様」

『フュージョン・セル、コア。レーザーとプラズマ銃も、あるだけ全部』
「そうなるのかなりのキャップが必要になるんだけどね？うちの在庫に大量に揃ってる」

『ではリストを見せてもらう。こちらからは引き取ってもらいたい銃と弾薬がある』

「見てみよう。こちらの用意できるものも確かめてみて頂戴」

『了解だ』

奇妙なロボット同士の売買は会話も少なく、スムーズに進んでいく。

「これは——珍しいライフル。この連邦の外で使われているタイプだね、こんなに大量にどうやって手に入れたのか聞いても？」

『殺して奪った。なにか問題が？』

「うちは別に盗品でも構わないよ。ただ、このタイプのものはバンカーヒルの同業者たちが目の色を変えて持っていつちまうもんだからなかなかこつちに入ってくることはないんでね。ただの興味さ」

『襲ってきた間抜けなレイダーたちが持っていた』

「ああ、最近噂になってる外から来ている連中だね。この町の市長が留守なのをいいことに好きにポストンコモンに入ってきてるわけか」

『知らないな。どうでもいい奴らだった』

デーコンが見つけたオペレーターズを倒したのはローグス達だったのだ。

珍しくポストンコモンに入り込んでいた標的を壊滅した直後にくわしてしまったのだ。すさまじい火力の応酬が始まり、ローグスは

連戦を強いられたが勝利した。

とはいえダメージを負い、弾薬も失い。無視できない物資を大量に抱え込むことになってしまったため、ジエゼペルはこのグッドネイバーで補給と処分をすることを提案したのだ。

「かなりの重かっただろうに、よくここまで運んで来てくれたね」

「……リストのチェックは終わった。チェックしたものを貰おう」

「こちらを買取とれるものは全部見たよ。お望みなら全部を引き取れるけど、この店のキャップが足りないねエ」

『ほう』

「そっちがうちに寄付してくれるなら喜んで——」

『リストを修正する。あとライフルは2丁持っていく、返してもらおう』

「わかった。でも、残念」

取引は終わった。

ジエゼペルたちが店を出ると、再びトリガーマン達がいた。店の入り口から距離をおいて囲むようにして待ち構えている。

『こちらの用事は終わった。今から町を出ていく、邪魔をしないでもらおう』

「……見送るぜ」

『必要ないが。お前たちがそれで安心できるというなら構わない』

クレオの店をかさばる武器と弾薬を軽量のレーザー武器へのトレードすることができた。

ローグスはまだ戦えるだけの余力はあるが、出来ることならば戦闘は避け。一秘密基地《ロブコ・セールス&サービスセンターの地下施設》に戻らなくては。

（安全な土地ではなかったが。危険レベルがまたもや上昇した。全てはあの男の予想した通りに進んでいる）

ジエゼペルは今、アキラがこの連邦から離れていることを知っている。

個人的な興味でその理由をいくつか考えてみたのだが——おそらくだが状況が悪くなるよう。あえて留守にした、という可能性が一番

高いと結論が出た。

あいつは混乱を好むのだ。

ミニッツメンは身動きが取れず。巷を騒がすメカニストのロボット部隊は次第にその数を減らす。ライダーを始めとした武装勢力たちが緊張を高めていつている。

『まあ、いいだろう。どうせ人間たちが勝手にやることなのだ』

ジェゼペルはまだしばらくはこの任務を楽しむことにしている。

おかしな話だが、仲間と呼ぶしかないロボットたちとの行動を彼は驚くほど楽しむようになっていた。

補助電源のスイッチを入れると同時に全てが動き出す。

『侵入者がいます』

タイミングがぴったり合ったロボットの音声が、この場所のセキュリティシステムの復活を教えてくれる。

クロダと私にとっては待ちに待った瞬間だ。

通路に姿を見せた2体のアサルトロンは遮蔽装置を起動させてこちらに近づいてきた。

だがその性能を知る私にこの戦法は通用しない。空間に生まれる歪みを目ざとく見つけると銃口を向ける。

装甲が火花を散らし、撃たれながらもかまわずに前進してくる相手の前に、今度はクロダが立ちふさがった――。

かつて彼らの仲間と思われるコンドウという青年は異様な能力を見せ私を追い詰めようとしてきたが。このクロダにも同じような能力がある。

クロダは独立戦争で使われていた片手剣を手に、アサルトロン相手に近接戦を仕掛けていく。

その肌はゆつくりとはあるが浅黒い肌から、暗い灰色のものに変色している。

――そこにいるクロダにも常人にはない能力を持っているはずで

す

——貫くことのできない強靱な皮膚

——これに変化されると銃弾やレーザーの効果は大きく落ちてしまふようです

——でも、対処する方法はありません……

私は通路まで下がって壁際に立ち、撃ち尽くしたマガジンを交換する。

大きくもない空間の中でアサルトロン達は人外の動きから攻撃と防御をおこない、クロダは両者に剣と拳で応戦している。なるほど聞いていた通りだ。アサルトロン達の刃が何度もクロダに叩きつけられても皮膚を切れず、血も噴き出す様子もない。あれなら確かに私の銃弾をもらっても耐えられるだろう。

おっと、感心してばかりはいられない。

アサルトロンには強烈なレーザーアイがある。

それを発射されるわけにはいかない。普段ならば絶対にやらないことではあるが。

撃たれても死なない男であることを利用し、私は構わず乱戦中の彼らの背後からロボットたちの脚部を狙って撃っていく。

ロボットたちの関節部から火花が散り、よろけることでバランスが取れず、機動力は大きく落ちていく。クロダはそんな相手にこぶしを振り下ろして叩き潰し。剣をその背中に突き立て念入りに傷口をえぐっていく。

私は次の弾倉にかえると足ではなく、今度は残る片方の頭部を狙って弾丸を叩き込む。

細かく震える頭部は震え、輝くひとつ目が砕けちる。それでもあきらめない、聞いたことのあるあの不気味なエネルギーチャージ音が始まった。

——それは使われては困る

アキラが手を入れたライフルはいつもそうだが素晴らしい性能を見せてくれる。

リコイルはわずか、威力は高い。発射した弾丸のほとんど全部が再

び頭部に叩き込まれ、ついにアサルトロンの首が胴体から吹っ飛んで転がり落ちた。

「終わりだ」

「ああ——いい腕をしている。わかっていたことだが」

「そりゃ、ありがとう」

「モデルはわずかに違うが、これはアサルトロン・ドミネーターの亜種だ。俺がもう片方を相手していたとはいえ、これほど見事に破壊する奴は珍しい」

彼とはそれほど話したわけではないので、これほどはつきりと賛辞を送ってくるとは思わなかった。

私はどう返していいかわからず。無言で彼の横を通り過ぎ、奥を指す。

防衛システムは他にも何台かのプロテクトロンが残っていただけ。それらを排除するとターミナルの並ぶ部屋への侵入に成功する。ようやくここまで来れたんだ、しかし感動はない。

クロダは一通りターミナルを見てまわると「それでどうする」と聞いてくる。

私はそれには答えず、ターミナルにつながれたホロテープ用のディスプレイを探しだし。持ってきたホロテープをそこに放り込んだ。

あとは外部装置ビップボーイからの命令でこれを再生。その後、システムに侵入する——。

「ターミナルにこれから入る。このシステムはVR式とかいうので、ここにアクセスしている間は私の5感は外界から切り離されてしまう」

「ほう。ということはお前を殺すには絶好の機会というわけだな」

「……問題は侵入すると中のおもちや箱を派手にひっくり返すことになるから、システムが警報を発する可能性が高いということだ。つまり新しいロボットがここにやってくる」

「俺に無防備になっているお前を守れというわけか。本気か？」

「何が言いたい？」

「このチャンスを逃すと思っているのか？お前を簡単に殺せる、この

チャンスを」

まるで今、思い出したかのような言い草だな。

私がそれを聞いて不安そうな顔をすればこの大男は満足なのか？
それともここで「決着」をつけたいと？

「ここにきていきなり絡みだしたな」

「思い出してみろ。俺がここにいるのはお前を殺すという任務のためだ」

「ならどうして私の妻の墓を暴いてまで、その姿と声に似せた人造人間を用意した？」

「……」

「悪いがここで遊びに付き合うつもりはない。

アキラはどうか知らないが。私は君にもあの人造人間にも興味はない。相棒のふりをするのが飽きたのなら、ここからすぐにでも立ち去ってくれていい」

言い捨てると私はさっさとターミナルのボタンを押す。

頭部を覆うコネクターヘルメットがおりてくる中、画面には「アイズブレイカー、活性化OK」の文字が映っていた。

それは輝く光の迷路か。

それとも死の記録が詰まった巨大な倉庫か。

電子の世界に広がるソレはどこか味気なく、広いの息が詰まりそうに感じた。

「……この私の声を聞いているということは、私のメモリーバンク内に侵入できたということですね？」

ありがとうございます。でもここからが本番です。

このVRシステムであなたの感覚のすべてを使い。このデータの山から目的のものを探し出さなくてはなりません。周りを見ればわかることですが、選んで見つけることも。ここから抜き出すことも簡単ではありません。

ですが、大丈夫。我々が用意したプログラムがあなたをお手伝いできるはずです。床を這う虫が見えましたら、それが私たちが用意したワームです。彼らを使ってデータのサルベージをお願いします」
デューマの声だ。

ここまで来れると信じている、そんな言い方に聞こえるが。それがデューマがこの島で人間たちとの付き合いで学んだことなのだろう。それゆえそれをそのまま信じることは——危険だと今はわかる。

「どうやらデューマのメッセージは終わったらしい。
さてとりあえずどこから始めたらいい？」

ふと、生物のいるはずのない世界にオレンジ色の蝶が背後から飛んできたのを見た。

「これか？ 私は黙ってそれを見つめてる。蝶はこちらのそばを通り過ぎるとデータブロックの角において、羽をやすめだした。」

「レオさん、聞こえていますか？ アキラです。」

お願いしていたホロテープが正常に動いていれば、この蝶の姿見えているはず。

VRシステムはレオさんの感覚を支配し、デューマはそこから情報を見つけ出そうとします。

とりあえず今は彼の指示に従い。記憶を探してください。僕の方は勝手に進めています。作業時間に応じて必要な情報の選別まで行うので、装置を出た後は、忘れずにホロテープの回収をお願いします」

音声が終わると蝶は再び動き出し、幻想の世界の中へとひらひらと飛び立っていった。

(さて、何時間で終わるかな)

目的の記憶は間違いなく見つけて見せる。だがここでは時間の感覚まで失ってしまうようなので、それだけが心配だった。

キュリーはニックと共に港を訪れ、スモール・バーサと面談した。

これより数日のうちに彼女が望んだ居住地、エコーレイク製材所の攻略が始まることを伝えるため。そしてその前ではあるが、アキラと約束したバーサの弟がかぶっていた奇妙なヘルメットを引き渡してもらうためだ。

実はキュリーはこのためにわざわざニツクにも動向をお願いしていた。

誰にも言えずに黙っていたことだが、実を言うとキュリーはこのバーサという娘にいい感情を持っていない。

この島での計画に必要なキャップの大半はアキラが用意したものであった。

居住地攻略には資源に武器、弾薬に食料と必要なものは多く。時間をかけて回収するとはいえ、大赤字だったことは間違いない。なのに——である。

このバーサという娘は、子供だから仕方がないとはいえアキラにさらなる居住地攻略の依頼——それが以来と呼べるか疑問だが——を要求し、わずか15キャップと弟のヘルメットと引き換えに与えろと言ってきた。

そして港で生きる子供達なら仕方がない事なのかもしれないが。そんな大仕事を背負合わせた相手に、警戒と不信の目を向け。キュリーに言わせればくだらないヘルメットの引き渡しに渋って見せている。

どういう頭をしているのだろう。

アキラはこのために、アメリカ・ストックトンにさらなる物資の調達を命じ。マクレディたちは失った場所を命をかけて取り戻そうとしているというのに。

こうした思いをキュリーもまた捨てることはできなかった。

とはいえ、冷静な分だけキュリーは状況を理解していた。交渉事にはすぐれた能力持っている探偵が付いていくのなら、自分もきつと冷静にこの傲慢な子供たちと話すことができるはず。そう考えた。

この目論見は大成功だった。

キュリーは感情を殺し、ニツクが冷静な意見でバーサを説得するこ

とができた。

だが思わぬ悪魔がそこに潜んでいた――。

バーサの手からキュリーへとヘルメットが引き渡された時だった。それまでは気を付けていたお互いの不信感が、物を通すことで触れてしまったようだ。

受け取るキュリーの手に、バーサから力が。抵抗するものを感じてつい、カツとなつてしまった。

2人の口から「あつ」という声が出る。

信じられないことが起きた。

宙に放り上げられたヘルメットは、彼女たちに背中を向け。座つておもちやで遊んでいた子供の頭部に落下。するとヘルメットはボールのように素早くバウンドして――崩れかけた壁の残った窓を突き破り。海の中へ。

いきなりの頭部への衝撃と、遅れてきた痛みに反応して少年が鳴き声を上げ始めると。驚いて硬直していたキュリーは、自分がとんでもない失敗をしてしまった事を理解する。

「た、大変です。どうしましょう?」

「いやいや、キュリー。どうしましょうといつてもなあ」

さすがの探偵も困っている。

「ええと。ええと」

「なにもいうな、駄目だぞ。キュリー」

「な、なんですか?」

「君は今、子供たちにとって来いというつもりだっただろう?それはダメだ」

「……」

そう、探偵の言う通りだった。

キュリーはケイトから聞いたこの島の噂話の中に、島の大人たちが子供たちが荒れた波が押し寄せる危険な海岸沿いを子供たちが泳いでいる、という話を聞いていた。それなら――。

「行かない!行かせないからね!」

「――でも」

「泳げる奴は今はいない。泳げても、見ての通り子供しかいないんだ。お断りさ」

「キュリー、彼女の言うことはもつともだ。それに俺が見るところ波もここ数日は機嫌が悪いみたいだ。今、潜ればあのヘルメットは回収できるかもしれないが。潜らせた奴が無事に戻ってこれるか賭けになってしまう」

そう、ニツクは正しい。

相手の姿勢を不愉快だと言っていたのに、自分から理不尽なことを押し付けるのは何か違う。

落ち込んで今や砦となったロングフェローの島にキュリーが帰ってくる、さらに驚く事態が待ち構えていた。

マクレデイらと共に製材所攻略のため北に向かったはずのケイトがひとり帰ってきていたのだ。

「ケイト!?ど、どうしたのです?」

「なにが?」

「もちろん居住地の確保の件ですよ!」

ああ、あれね。ケイトはつまらなさそうにおざなりに答える。アホくさくなった、と。

まさかの答えに顔が引きつってしまふ。きつと残されたマクレデイたちも同じような顔をしていることだろう。

「マ、マクレデイたちには――」

「あ?別に何も言わなかったよ」

「ケイト!?!」

「だるい。もう寝るわ、なんか疲れたかも。おやすみ」

あまりの言い草にキュリーは口を開け、再び硬直してしまった。

なんでもないことのように彼女は帰ってきてしまったが。彼女の離脱からくる攻撃部隊の能力低下は無視できないものなはず。

(どうしよう。どうしよう、どうしたらいいんだろ)

急激に不安と心配が膨れ上がり、キュリーは冷静ではいられなくなる。

反応としてはかなり過剰だが、動揺しすぎてしまい。目に涙が浮かんできた。

とはいってもキュリーに今からできることなんてほとんどない。

そもそもはキュリーは荒事にはむかないとしてニツクと同じように留守番を言いつかつた身なのだ。この島の中も危険なのでひとりでは歩かないことを約束させられている。

自分の気分で好きに動けるケイトとは違うのだ――。

「だ、大丈夫なんでしょうか。マクレディたちに何も無いといいのだけれど」

現実と理性が冷酷に「キュリー、お前に何もできることはない」と繰り返してくる。胸を押さええて動悸よ静まれ、と願い。荒くなる呼吸を整えようとする。

アキラ――早く帰ってきてください。

そう願いながら、打ちのめされたキュリーは自分の弱さを憎んだ。

16時間後――。

背後のVR装置が動き出したことでレオが現実世界へと戻ってきたことをクロダは知った。

長い時間がかかったが、出てきたということは目的のものは手に入ったということだろう。つまり彼の任務は終了し、この後はニユークリアスから出て行って戻ることはないということだ。

「24時間かからなかったか」

「……」

「目的のものは手に入ったようだな」

「そうだ」

クロダの心の中に不思議とむなしさがわいた。この奇妙な関係はもう終わろうとしている、そこになぜか悔しさのようなものがあった。

すると困ったことにまた最初の問題に戻ることになる――どう決

着をつけるんだ、と。

「ではどうする?」

「ここを出ていく」

「そうだな」

「——面白い顔をしている。私たちのこの関係が気に入っていたのかい?」

「どうだろうな」

「私と一緒に来るか? 君もここにいる理由はないのだろうか?」

「それはできない……お前もわかっているはずだ。アキラは俺を許さない。」

自分なら俺たちの間にある憎しみを何とか出来るなどと思っっているのか?」

「いや、私もアキラを止めることはできない。わかってる」

「ならつまらないことを口にするな。」

俺は戦士だ、こんな世界でもずっとそう思っただけで行動してきた。多くを殺し、勝利を手にしてきた。必要だと思えばどんな屈辱にも耐えることはできるが。負けた自分を誤魔化すことで、夢物語が死をだませるなどと信じてはいない」

このクロダに残された最後の選択肢は——。

「クロダ、だったね。私とここで決着をつける、それについてはどうだ?」

「なぜそんなことを言う?」

「君にはもうそれしかないかもしれないからさ。ここで別れたら、もう私たちが再会することはない。そんな気がしている」

「ああ、そうだろうな」

「なら私を殺すならここがそうだ。違うか?」

(俺の手で——ああ、それができればな)

レオがニュークリアスを訪れた時、クロダはすでに土壇場で刑の執行を待つ身だった。

そこに今、この瞬間に狂ったのかレオが自らが登ってきてこちらを誘っている。

だがここで勝利したとしても——それはただの私刑でしかない。クロダの任務はやはり完了することはない。それでも戦うことを選んだとして、この両の手でレオの息の根を止めることができたという。

だが現実是不変なのだ。

サカモトらは無能が任務を放棄して勝手に暴走したのかと冷笑と共に自分を殺す暗殺者たちを放ち。

アキラは怒りと憎悪の塊となり。うなり声をあげてこの大男の姿を求めて追ってくるはず。どちらからも逃げられるはずもない。もはやレオの生死は、クロダにとってなんの意味もなさないものになってしまっていた。

「俺がお前を殺す、そう言ったらここで俺と戦ってくれるのか」

「だが私は死ぬつもりはない。だからここで君を殺す。ためらいはない」

「どうせアキラが俺を殺すための準備をしてきたんだろう？」

「確かに。だが使わないつもりだ。ここでは使えなくてね」

「ふっふっふっ、誤魔化さないんだな。自分を不死の存在とも思っているのか、自信過剰だな」

レオとは——ミニッツメンの將軍というのは面白い男だった。

そして結局は友人にも、仲間にもなることはできない存在だったのだ。そしてクロダの未来に希望は残っていない。

「どうやらお前との短い旅は楽しかったようだ」

「私もだ。もつといい出会いがしたかった」

「いや、それでも友人でいられなかつただろう。だが、最後にこの経験は貴重なものとなった」

クロダは目を閉じる。もうどうするのかは決まっている。

未来は存在しない。だからこの決断は自分の意思で決めたものだ、後悔はない。

——俺は選んだぞ……。

心にこの男の妻の面影が浮かんだ。

それは奇妙にも愛おしいもののように。クロダにはわからなかつ

た新しい気持ちを理解させていた。

SCRUM II

暗い意識の向こう側から機械の音声が聞こえる。

意識が戻ってくるのと同時にひんやりとした皮膚が、暑さと冷たさの微妙な間に戸惑っていることを感じる。宇宙に放り出された僕は“不思議な出来事”がおこったおかげでキャプテン達の乗る船に無事に回収され、今は治療中だが船は順調に地球への帰還の道を進んでいた。

その治療ががどうやら終わったらしい。

まぶたを開かせ、医師のような顔でエドガーが僕の顔を覗き込んでくる。

「お、目が覚めたね？」

「どのくらい寝て——」

「61時間だ。君は問題ないといってたけど、こちらの診断通り。たしいた重症者だった、それでもまだまだ足りないけど」

確かにそれは事実だった。

宇宙に放り出され、地球から持ってきた武器——獅子樺武！まさかこんなことになるなんて——をすべて失い。ダメージは肉体だけではなく精神的にもかなりきていた。

でも強がっていればなんとかなる。ずっとそうやってきたからと僕は問題ないふりをしようとしたが、キャプテンは馬鹿な若者の意見なんて聞くつもりはなかった。トシローと一緒にあって叩きのめされ、地面に激しくキスした記憶は残っているが。あの時の痛みはどこにも残っていない。

「不思議なものだろう？これは冷凍催眠療法というもので、ここで作り出した治療法なんだ。眠って、凍って、魔法をかけた後に解凍されるだけで回復する。簡単に説明するとそうなる」

「本当に回復してるみたいだ。かなり手荒に寝かしつけられたはずなのに」

「だろう？」

「60時間か——ということは、もう地球に戻ってきてる？」

「いや、まだ半日程度はかかるね」

「起こされたからてつきり……」

「そうそう人生は上手くは進まないものさ。君もそのうち学ぶ」

下着姿の僕は体を起こす。V a u i t の施設で目を覚ました時は冷水でもぶっかけられたみたいに体は凍え、水たまりの中で横になっていたのをレオさんに発見されたんだっけ。

だが似たような工程を体験してきたはずなのに。今の僕の皮膚は冷たさを感じても、筋肉を動かすことに難しさは全く感じていないのが不思議だった。

「この治療で君は95%、完璧になっているはずだよ」

「95%？完璧じゃない？」

「なにもかもスティムパツクのように手軽にはいかないのさ。残りは時間をかけ、リハビリする。それだけだ」

僕は2本の足で床の上に立つ。

「……具体的にはどんだけ傷があつて、治つたのか。教えてくれますか？」

「それはダメだ」

「なぜです？」

「——キャプテンの考えというのものもある。僕も今は彼女の意見に賛成しているから、というのもの？」

意味がワカラナイ、どうしてダメなんだ？これは患者自身である僕の問題であるはずなのに、教えてくれないとは。

「君はもしかして地上に戻ってから自分で自分の体にメスを入れ、中にあるものをしつかりと確かめてみたいと考えたりはしなかったか？」

「……えつと」

「感心しないな」

大正解だ。

自分一人では不可能だからと、すでにキュリーに協力を求めてもいた。

「自分の中をのぞいて何を見つめるつもりだったんだ？」

「……」

「たしか君は記憶を失っているといってたね。その手掛かりがあるか？」

「ないとは決めつけられないでしょ」

「君を〃生かしている〃技術からわかることは多くはないぞ。むしろ君のその勝手な思い込みは。怒り、憎しみを強くするだけだ」

「ほら、それでもちやんと新しい情報が得られているじゃないですか」
この程度の指摘に、なぜか浮かべる笑顔が固く強張ってしまう。

何を怖がる、僕は。

「はア……前回、ここに来た君は明らかに不安定だった。でも今回は――」

「今回は？」

「悪化したようだね。怒り、憎しみのために執着しているように見える。冷静とはとても言えない。冷静に見せかけることに慣れてしまったのかな」

悪いって、いやいやいや。

あまりにひどい言われように苦笑いしかないが。困ったことに僕の中から反論がすぐには出てこなかった。

「自覚症状があるんだろうね。でも、なにかをすると〃悪いことになりそうだ〃という感覚はあるんだろう？」

それ以上のことを君が知って、どうするつもりだい？君の悪い好奇心から手に入れた、君に施されていた技術。それを知って、誰に、どう使うつもりだい？」

「いや、別にそんな風には考えないですよ」

「本当かい？君はVaultとやらから出てきた後、多くを学んだと言ってたろ。自分の体に作られた傷、それを支える技術を手にしても。それを秘密のままにするって？それを他者に使わない理由が明確にあるって？」

「逆に、逆に聞きますけど。僕はあの世界じゃよくいる狂った科学者みたいなことをすると思うんですか？」

「思うよ。なぜなら君を助けたあと、私もここで学んだ技術を君に使ったからね。」

君も自分が技術者のはしくれだとわかっているのだろうか？なら——」

——使う。そうか、僕はやってしまうのか

——連邦に恐怖を振りまく、あのインスティチュートのように地上で言われたなら違う反応もしたかもしれないが。重力のないこの宇宙では、不思議と慌てるでもなく。落ち着いてそれを受け入れることができた。

自分で驚くほどの素直さではあるが——彼の言う通り、自分ですでにわかっていたことなのかもしれない。

「ふむ、どうやら自覚してたのかい？反発しない、素直だ」

「あなたには助けられればなしでした。反発だなんてそんな」

「それとも、すでに誰かにこのことを言い当てられた？」

「……そんなところですよ」

数日前、あの霧の島で不愉快な面会が実現した。

愚かにも僕は、自分の中の怒りをコントロールできず。相手を八つ裂きにしてやろうと企み、仲間に。友人たち全員に黙ってただひとりでその場所へと向かったのだ。

なのに……そこまで準備しておきながら、皮肉にもそこで血が流されることはなかった。それどころか、実り多い情報を取引きすることができた。

サカモトと名乗る、浅黒い肌なのに透き通るような青い目の男。僕は奴の思惑通りにしか、動けなかった。奴が取り出してきた取引はねつけることができなかった。

「あまり嬉しそうではないね」

「僕は……とても大切な友人から影響を受けている。いや、その模倣者ミミックだと言われたんで」

「それで納得した？」

「いくつか心当たりがあった、それは確かですけど——それほど真面目に受け取ってはいませんよ」

嘘だ。サカモトという奴の言葉は僕の短い記憶の中の人生に、新しい視座を与えた。

僕は最初、自分に起こったのは肉体の変化。あの始めてレイダーと交戦し、銃弾を胸に受けたことだと思ってきた。

だが、違いかもしれない。

僕はその前からすでにおかしな行動をとっていた。レオさんと別れ、強気になってサンクチュアリから飛び出していった。住人達との不和をその理由にしていたが。あんなに極端な行動に踏み切る理由は、なかった。

それでも行動した理由。

僕はレオさんが連れてきた、新しい人々の——いや、家族を奪われたことで苦しみ、恐れていたジュンとマーシー。ロング夫妻からの敵意に反応してしまったのではないだろうか？

「実は僕らが今の地上から時々だけでも、ここに招くことがある。そんなに多くはいないけどね。」

でもそのほとんど全員は、戻っていくと再びここに来ようとするなんて、まずしないものなんだ。前回、君を送り出した後。トシローのことがあったとしても、君も他の連中のようにここに来ることはもうないだろうと考えていた。

だが——違ったね。

あのQが君をここに招いた。そして君は、そのための準備までしていた」

「えっ、えっ」と

「本当に僕らがまた、君をここに呼ぶと思つたのかい？」

「どうでしょう。なんかそんな気がした、他に言い訳もできません」

エドガーはそうか、とつぶやいて続ける。

「君の考える通り、君は誰かの手が加えられている。かなりヤバイのもそこにある」

「ええ、でしょうね」

「だけど君はそれを知らない方がいいと思う」

「使うから？なんのためらいもなく？」

「そう——君はまだ若い。あの地上に厳しい世界があっても、きっと夢があるはずだ」

ある。だがそれはとても誰かに聞かせられるものではない。

自分を苦しめてきた奴らを燃やし尽くすほどの怒りの炎。血は流れ、苦痛は途絶えることはなく、大地には動かぬ死体が積み上げられていく。

「だが夢は——言い換えれば幻ともいえる。幻を追えば、夢も実現することもあるだろう。」

すると君は勝利する。勝利は君の予想通りの未来を与えるが。同時に余計なもの、別にほしくはなかったものまで手に入ってしまうものさ。

これが続くかどうか？徐々に君の幻は危険なものとなっていくはずだ。徐々にではあるが、確実に君を逆に誰かの脅威にしていこうとする」

「……」

「これは助言だよ、アキラ。」

君を脅威に仕立てるものは、必ずリスクとなって君に戻ってくる。幻は、夢は未来を予知するものじゃない。計算式のようにしっかりと割り切れないことばかりのはずだ」

「じゃ、もう立ち止まって考えろとでも？」

「そこまでは言わない。ただ、リスクが君の前に戻ってきたとき。君がそれから生き残ることができればいいと思ってるよ。そうだね、ここでひとつ希望を見せてあげよう」

そう言うときエドガーはディスプレイに誰かの内部写真を呼び出してきた。

「これは30前後、女性の体内映像だ」

「——キャプテン!?!」

「うん、良い勘を持っているね。そう、これは君も知るキャプテンのものだ。」

見ればわかるだろうが、普通の体とはとても呼べないものだ」

確かに変な形の内臓が見える。骨は自分も知っている、アダマンチ

ウムでコーティングされている。

埋め込まれたようなプラントらしきものも複数確認した。

「彼女は昔、キャピタル・ウェイストランドの戦争の中心に立っていた。そこから生きのびるためにこれだけの代償を必要とした」

「……」

「君もわかってるだろ？もうすぐ君の住む連邦でも戦争が始まる」

「自分が化け物にされたことは忘れてしまえ、と」

「冷静になるなら今だと思うけど。君は強いのはわかっている。だが戦争で生き残れるのは、目の前で起きたことに対処し続けることができる人だけだ。できないなら——それで終われる。君の妄執もここで終わる」

「奪われた。傷つけられた」

「だがこれから始まる戦争も同じことをしてくる、アキラ。今の君から奪い、傷つけてくるんだ。

キャプテンのように、君だってあのB・O・S. が吹聴している“コントロールされた戦争”なんてものは信じてはないのだろう？それとも自分に都合がいいからと、今から宗旨替えでもしてみるのかい？」

僕に返せる言葉なんてなかった。

「どうすればいいんです？どうしたらいい？」

「答えは教えられない。だが君が失ったもの、奪われたものは君を救いはしれないと思う」

「そんなことを言われても」

「君は賢い。冷静になって考えろ。まだ時間は少し残ってる、それを利用するしかないだろう」

「そんな簡単なことなのか？そんな簡単に済ませられることじゃないか。かかったじゃないか。」

「正直、この話は厳しいものではあったと思うが。これを君に伝えて再び帰らせることができることを本当に喜んでるんだ。というのもね、君はこの宇宙に死にに來たんじゃないかと思ってたから」

「僕の死に場所が宇宙、ですか」

「だが君は回収するまで」宇宙空間で生き延びた「サバイバー」だ。なら、このくらいの新しい課題は持って帰ってもいいだろう」

彼らの認識の中では、僕は宇宙に投げ出されたのに生き延びていたということになっている。

あの巨大で透明なイカとなつて僕を飲み込んだ宇宙人のことは、秘密ということになってる。すでに本人から宇宙人を自称し、誰もがそれを認めているのに。それを本物です、と証言しても何かおかしい。「うん、長く話してしまつたね。とりあえず用意した部屋に戻つて、普通のベットに横になつたらいい。君は休むべきなんだ」

「わかりました——お願いします。あと、ありがとう。色々」

エドガーは何も言わず、片手をあげていいんだと示すと。こちらに背を向けてコンソールに集中を始めた。

僕は素直に部屋から出ると、自分のために用意されたベットに向かつて歩き出す。

心の中に不思議な清々しさと、奇妙にグロテスクな重い感覚に憑りつかれていた。

いつしかボヤけてかすみ始めていた僕の夢、幻想は見違えるほどにフィットし。明確な目標となつて戻つてきてくれたというのに。気が付くとそこに向かう道は驚くほど危険で、僕はそのことに気が付いていなかったことが分かつた。

もういいだろう。

今は疲れた、とにかく疲れたのだ。

地球に、連邦に戻るまでは。しばらく僕は休んでおきたい。

ファーハーバー島西部に唯一にして人が住みうる居住地になる可能性があるとされたエコーレイク製材所。

パラディン・ダンスとマクレディは、攻撃を前に勝手に離脱するケイト。そしてうぬぼれのひどい弱兵ばかりのミニッツメンたちをもちいなければならぬと頭が痛いことが続いていたが。

彼らの想像以上に攻撃はうまくいき、勝利してしまう。

けが人はナシ。ただし死者は2名——製材所裏にある沼にマイアラークらを追い出しにかかった時。ひとり、勢いづいて膝の丈まで入ってしまったため。反撃を待っていたマイアラークハンター達に目をつけられてしまった。

沼の深い部分にまで引きずり込まれようとなり、その悲鳴と抵抗を助けようとした仲間が巻き添えを食ってしまったのだった。2人は特別仲が良かったわけではないとのことだが。ともに何とか引つ張り上げた時には、仲良く手足を失って絶命していた——。

とにかく任務は半分を完了。

あとはアメリカら商会が物資と人を連れてくれるだけ。だが、理想通りの未来はここまでだった。

占拠からわずか2時間後。

エコーレイク製材所はスーパーミュータントの襲撃をくらった。

土だ！土囊をもつと運んで来い！

仲間を声をかけるミゲルからすでに建物の陰に必死になって這いつくばっている情けない姿で威厳なんてものはまったくない。だがその向こうがわ——崩れた建物の壁の外では、まさしく製材所の正門から撃たれてもひるむことなく、戦闘の喜びの方向をあげて走っていく緑のモンスターたちが4人ほど列をなして突進してくる。

この場所への攻撃は、島の人間のアドバースとダンスによって練られてものであったから、戦力がひとつかけたくらいでは破綻はしなかったものの。

その後にごうして横合いから飛び出して漁夫の利を求める奴らに對してだと、防衛側はつらくなる。

先ほどまではミニッツメンらしい仕事を“ほぼ”完璧にやったのけたと大喜びしていた連中も。すでに闇雲に撃っているだけ自分は仕事している、そんな状態になってしまっている。

——こんな時にあのクソ女っ

建物の2階からマクレディは役立たずの隣で舌打ちをする。

ここにケイトが加わる理由として、こういう状況にならないように

するためだった。あの赤毛の繊細な爆弾女は、こういう時こそ頼もしくなる。

相手がなんであろうとも向かってくる相手がいるとわかると物騒な笑みを浮かべ。頼まなくてもこちらから相手を引き受けてもらえる。

(やることなくして退屈、だったんじゃねーのかよ)

そう思いながら、ついに愛用のハンティングライフルから。ストツクを切り詰めたレバーアクションライフルに変更し、物陰から立ち上がって撃つていく。

その頃、1階ではダンスは不愉快なものを目にする羽目になった。パワーアーマーとレーザーライフルで弱兵達の前に立ち、奮い立たせんと奮闘する彼の背後に異変を感じたのだ。

先ほどまで縮こまっていたミゲルらミニツツメン達が、一斉に立ち上がると勝手に移動を始めたのだ。戦いを放棄し、敵に背中を見せて走り出していく。

ダンスはてつきり、わめいてばかりでは仕方ないとあのミゲルでも理解し。兵士のリーダーとしてあるべき責任を果たすため自ら行動を開始したのかと思っただが――。

現実には、ついに恐怖におしつぶされた若者たちは深い考えもなく。この居住地の反対側から逃げ出したのだ。

自分の背後から人の気配が消え、戻ってこないとわかると。今度は2階の方が騒がしくなる。

(逃げ遅れ、置き去りにされたのだとわかったようだな。運がない、だがそう簡単に逃げてもらおうわけにはいかないからな)

マクレデイの怒鳴り声と共に銃声の音が変わったのが分かった――。

「裏だな、回り込まれたらそれで終わる」

上のことは傭兵マクレデイにまかせるしかない。兵士を率いるようなタイプではないが、なんとかかはしてくるだろう。

ダンスは物陰にまで後退すると、そこから数発を正門に向けて発

射。

次に回れ右をすると地面を揺らして走りだす。向かうは製材所の裏口、ボロボロの扉だ。

兵士としての勘が強引にやれ！と叫んでいた。

T-51のパワーはどれほどのものかはわからなかったが、裏口の壊れかけた扉めがけてショルダータックルを決める。

正解だった。

スーパースレッジやボードを手にしたスーパーミュータントたちが、狭い通路に入り込み。今、まさに扉を開かんとしているところに突っ込む形となったからだ。

『!?』

お互い声は挙げなかったが、反応は正直だった。

スーパーミュータントが戦いの開始の合図となる喜びの声をあげながら武器を振り上げる中、ダンスは片手でそれを邪魔しつつ。残ったほうの手にあるライフルを相手の腹に向けてトリガーを引く。

至近からのレーザーの連射は、さすがに強靱なスーパーミュータントの腹を裂いて内臓を通路にぶちまけていく。

「マクレディー！背後からも来てる、これ以上押し込まれるな！」

警告と指示を叫びつつ、ダンスは崩れ落ちていく相手の背後に控えたスーパーミュータントたちに猛然と向かっていった！

数時間後――。

アメリカ・ストックトンの商隊がエコーレイク製材所のそばまで近づいた。

彼女はいつものようにバラモンを引く。荷物はこの島で必死にかき集めた資材に、汚れた顔のひと組の男女。そして数人の港の子供たちだ。もちろん護衛としてロングフェローとストロングについてもらっている。

彼らは無言だったが、ストロングが足を止めるとロングフェローが声をかけた。

「どうした、デカイの？」

「……」

「なにかあるのか？」

「ストロング 戦イ 匂イヲ感ジル」

「——この先か？俺たちの進む方角」

ストロングはそれには答えなかったが、悩ましそうな溜息を吐くとつまらなさそうに「デモ モウナイ」とだけもらし。再び歩き出した。

どうやらなにかありそうだとロングフェローは逆にライフルの安全装置を解除する。

アメリカ達が製材所に到着すると、そこには少なくともスーパーミュータントたちの死体が倒れていた。

どうやらストロングはこれをわかつていたようだ。

そこには不機嫌な様子のマクレデイとダンスが向かい合ってなにごとかを相談し。

彼らの背後には精魂尽き果てた様子のミニッツメンを名乗る若者たちがへたり込んで迎える形になった。

「おう、予定通りの到着だったな」

「才前達 ブルイ！ストロング 戦イタカツタ」

「しようがないだろ。ケイトの奴がバカやったせいで、お前をこっちに参加させるわけにはいかなかったんだ」

「弱イ奴ラ ト 交代シター！」

ミニッツメン達と交代させればいい、ということが言いたかったようだが。それだけではできない。

どこまで信用していいのかわからない連中だったのだ、物資と人を預けるには信用ができない。

「大変だったようだが。見たところ数がだいぶ減っているな。死人が出たか」

「それならまだよかったぜ。死体はないぜ、なんせ腰抜けが泡食って逃げ出したからさっ」

マクレデイが苛立たしそうに吐き捨てると、座り込んでいたひとりのミニッツメンが立ち上がっていきなりマクレデイを糾弾する。

「お前だって仲間を撃つたくせに！」

「……なんだと？俺が仲間を、なんだって？」

「あんたが化け物に背中を見せるなら俺がぶつ殺すって言って——」

マクレデイはそれ以上は言わず、若者に近づくとライフルの銃床で重い一撃を食らわせ叩き潰した。

表情を変えずダンスはマクレデイにかわりミニッツメンたちを論していく。

「我々を置いて逃げ出す臆病者の裏切り者は仲間とは言わない。見事に戦い、生き残ったお前達こそ我々の仲間だ。あいつらに価値はない、同じだと考えるな」

共に戦おうと戦場で並んだはずなのに。残った連中には餌として自分が逃げるだけの時間を稼いでくれよ、と飛び出していった卑怯者。

あれがこれからどうなるうとも、どうしようとも関係ない。

「今日、お前たちはミニッツメンとなった。兵士となったんだ。

それに誇りに持つべきだし、だからこそ奴らの扱いを間違えるな。もう、あいつらは違う」

「ヒーローをやめて負け犬になりたいなら止めないぜ。だが、次に顔を合わせた時。なれなれしい態度をとりやがったら、ぶつ殺してやる」

ミゲルらの逃亡は防衛戦では皮肉なことに陽動となってくれた。

正門の外から様子を見ていたスパーミュータントたちは逃げていくオチョア達の追跡に数をわけてくれた。おかげで攻撃を押し戻すことで勝敗がついた。しかしだからといって感謝もしないし、礼など言うつもりもない。

偶然の産物、とはいえ。今頃は危険な森の中で追いかけてこでもしているのだろう。

そいつをわざわざ助けようなんて思わない。

「それでは、ですね。これからの指示を出しますね。

子供たちは私と荷物の整理、おふたりは何か使えるものが残ってないか探してください。ダンスさんは私が運んできたターレットの設置をお願いします。で、残りの人は見張りを頼みます」

「ふむ、それで俺たちはいつまでここにいるんだっけ？」

「5日ほどでしょうが、正確にはアキラ氏からのメッセージと共にスモール・バーサこの代表が港からくるまででしょうね。そこからは彼女がここを仕切るようになります」

アメリカの言葉にマクレディは思った。

(アキラの野郎。てっきりアメリカ嬢とよろしくやってるのかと思ったら、本当にひとりで行動してたのか)

勝手な話だがこんな小さな島の中で好きにやる、なんて言っただけで雇い主がひとり姿を消したら。普通は浮気心でも沸いたのかと思うものなんだが。

正体不明のヤバイ奴らに付きまとわれているっていうのに、要人が足りなさすぎやしないだろうか。これは戻ってきたらしっかりと説教が必要だろう、護衛として。

霧の夜が迫るころ。

製材所に人間の手で光が戻り、ターレットが霧の中に敵の姿を求めて動き始めた。

この島に生まれた新しいキャプテン達が残した任務はこれでなかば完了したようなものだ。

宇宙船はそれから1日をかけて地球に帰還し。

僕はその半分を睡眠に費やした。

エドガーは医師としてあと半月ほどはここで体調を戻してもいいと言ってくれ、彼の隣にはそれをかなり強引に進めてくれる美人がいたが。僕は躊躇することなくそれを断った。

島の一部、気になつていたエコーレイク製材所に人の姿が見えると聞かされたからだ。

あそこでは終わらせることを多く残してきている。万全ではないかもしれないが、動けるなら早く戻ったほうがいい。

地上とは違うこの終わりの見えない広大な宇宙には魅き付けられ

るものや謎があまりにも多く。

そこにしかももう目を向けていない彼らと長く一緒にいることは、恐らくだが僕にとっては良いことになるとは思えなかった。

再び再会できるかはわからないが——僕は自分の戦いに集中するべきだ。

別れの時刻が近づいていた。

美人のパイロットからは改めて楽しい会話に、ムードも何もない強引なハグとキスをもらい。そしてなぜか泣かれた。とても困らされた。

エドガーからは医師として固い握手と感謝の言葉を送られた。彼には再び不安定になろうとしていた僕にはつきりとした謎を見つけ出してくれたことには感謝しきれないものがある。

サムライとの別れもまた、さっぱりとしたものだった。

僕が地上から持ってきた最初で最後の美味しくもない酒は全部飲み干してしまったそうだ。

——これでもう、何も思い残すことはないわ

とは本人の言葉であるが。あんな調子では死神もまだまだ素直には死なせてはくれなさそうだ。

彼は酒の礼だといって、出所の明らかではないひとふりの日本刀を差し出してきた。ナマクラだからすぐに折れるだろうが、人は殺すにはこれが必要だと言った。

僕の武器は宇宙に放り出された際にすべて失っていたので嬉しかった。

このまま島に武器も持たずに帰れば、拾った棒を片手に人の住む場所までおっかなびつくり歩くことになるんじゃないかと思ってた。

キャプテンともやはり今回も多くは語らないまま別れることになった。

早速もらった刀を背中に担いでいる僕を見ると苦笑し、「これはいらなかったのかもね」と言ったが。用意してくれた贈り物はちゃんと

渡してくれた。

ひとつはエイリアンから手に入れたピストル型のブラスタ^{レーザー}銃^ザ。普通、エイリアンたちが使うエネルギーセルが必要な武器であるが、キャプテンは地上でも使えるようにとフュージョン・セルに対応させてくれたものだった。

「これも貰いものですが、ナマクラだからすぐに折れるって脅かされてたので。これで本当に安心して帰れます」

「それは良かった」

もうひとつは収集家となったキャプテンが古い軍事基地で手に入れたという新兵器のデータと設計図。

彼女は「生きるために武器は触るけど、自分でわざわざ作ろうとまでは思わないから」いらないのだ、と。これも僕はありがたくいただくことにした。

「では私が送り返してやろう」

「Q!?!」

「なんだ？お前がここに来たのと同じように、転送装置であの汚らしい世界に戻してやると言ってるだけだぞ。何を驚く、礼儀を知らないのか」

「いや、自称・宇宙人って義理堅いのかなって。ちよつと驚いたんだ」「フン……お前は今回は役に立ったからな。だが、言っておく。期待したほどの活躍はなかった、失望することも多かった、お前を連れてくるべきではなかったかも」

「そんなこと終わった後で言われてもね」

シャトルごと吹き飛ばされたはずのこの宇宙人は、いつの間にかシレつとした顔でこの船に帰ってきていた。

キャプテン達もそれはわかっていたようだが、驚いてもいないところを見るとこれが最初というわけではなかったようだ。

個人的には、あの巨大な透明の体が正体なのか？確かめたい気持ちがあったが。

なんかそれを聞いたら、またここに連れてこられる理由にされるかもと考えてしまい。触れないことにした。

ところが問題の不審な大男からこちらの耳元に顔を寄せ、そのことに触れてこようとすする。

「もうすぐお別れとはなるが。ひとつ気になることがある。

お前たち種族にあるその“ふしだらな好奇心”から、あの出来事について聞こうとしないのはなぜだ？」

「ふしだら？・なんのことやら、よくわからない」

「フン、いいだろう。まだ知性と良識、品格がお前たちの中でも成長していると考えてやる」

「そうだね。さようならだ、自称・宇宙人さん」

「態度がなれなれしいな。気を許すとお前たちは途端に評価を落とすてくる、なんと愚かな」

装置の上に立つと僕は目を閉じる。

耳の中にチリチリと空気がはじけるような音が聞こえ、わずかだが浮遊するような。不思議なあの感覚を味わう。

コンソールを操作するQがレバーで調整を終え、ボタンを押すと。宇宙船からアキラの姿が消えていった。

ニュークリアスからの脱出は想像した以上に簡単だった。

レオからのメッセージを受けとったパイパーは、カールを連れて正面から堂々とアトム教徒の目の前を笑顔を浮かべて通り過ぎ、出ていった。

新しいタグデスのお気に入りパーティナーとペット。その認識が役に立ったということだ。

遅れて合流してきたブルー^オは「次の目的地は——」と言ってヴィム・ポップ工場の名を出す。行かなくてはならない理由については教えてくれなかった。

島の住人たちの情報から、そこはかつてヌカ・コーラ社と競い合っていたヴィム社の所有する工場ということだったが。今では危険なスーパーミュータントが住み着く砦のような場所になっていると聞かされていた。

——なんでこんなところに行くんだろう

そこは噂にたがわず。やたらと興奮しやすい狂暴なスーパーミュータントしかいない場所であったが。

ブルーとカールは平然と正面から入っていくのにさすがにパイパーは戸惑ってしまふ。

「ブルー、あなたが頼れるタフガイってことは知ってるけど。なんでこんなところに来たの？こんなおつかない場所にさ」

「——知ってるの通り。私はアカディアのデーマと合意し、アトム教へ潜入し、目的のもの——デーマの過去の記録を見ることができた」

「うん」

「ここまで黙っていたことは悪かった。君にはちゃんと説明をするべきだったが、簡単に口に出せることではなかったんだ」

「別にいいけどさ。それで、何が見つかってここに来たのかを教えてくださいよ」

「ここには謎を解き明かす証拠を探しに来てる。それが本当に見つけることができれば——」

「問題は解決？」

「というより、難しい選択を迫られることになる。期待している、と言ってもいい」

「ふーん、わかった。よく、わかんないけど」

そうやって少し拗ねて見せたパイパーだったが——。

ヴィム・ポップ工場、階段を下りたそこには不自然にコンクリートが剥がされ土がむき出しになっている。

だがその長方形の大きさにはどこか見覚えもあった。

——ここだ

2人が土を少し掘り起こすとすぐに棺桶の一部が姿を現した。

掘り起こして中をあらためると、そこには複数と思われる人骨とパイピストルに弾丸、ホロテープが確認できた。

「ブルー、これが証拠？」

パイパーの問いかけにレオは答えない。代わりに骨に触れ、何かを

確認する。

「……人骨は同じものが複数。おそらく3人」

「わかるの!?!」

「ああ、女性がひとり。男性がふたり。骨に特徴がある。それに——」

「なに?」

「証言とも一致」している。間違いない」

「なんだ。わかってたんじゃない」

パイパーは明るく声をかけたが。レオはますます難しい顔になって立ち上がった。

「ど、どうしたの?」

「ニツクに、アキラとも相談することがたくさんできてしまった。情報に正しかった。これがここになればいいと思ったんだが」

「マズいの?」

「というより、さつきも言ったように難しくなった。

よし、危険だけど出来るだけ急いでファー・ハーバーの港に戻ろう」

「今?本気なの!?!外はもう夜だよ」

「わかってる。出来ることならやりたくはなかったが——何か悪い予感がするんだ」

たどり着いた真実、そしてそれがもたらすであろう危険な未来。

どちらも震えてもおかしくない尾曾らしいものではあるが。戦場での経験から、こういう時こそ横合いから飛び出してきたて殴りつけてくる、そんな経験は少なくなかった。

連邦でもそうであったように。

この小さな島でもレオもアキラも派手に騒ぎを起こしてきている。今まではうまい事、物事をコントロールし。申告に追い詰められかねないようなピンチはなかったが。

——そろそろ誰かの我慢も限界になるだろう

そんな風に考える自分がいる。

ならどこが一番危険だろうか、答えは実はずでに出ている。アカディアでカスミが見たという恐ろしいこの島の未来のひとつ。レオも、アキラも、友人たちも離れている今のファー・ハーバーの港だ。

「港が攻撃されるってどういうの!？」

「わからない。そんなことにならなければいいのだが」

パイパーに答えながら、私は島で回収した古い携帯ランプに油を入れ、火を灯そうとする。

ピップポイからマップを取り出し、ルートも確認。

「直線コースはできないが。今出れば、迂回ルートでも朝か、昼までには到着できる」

「深刻なんだね。わかった、こっちも覚悟を決める」

「大丈夫だ、そもそも無事に到着できなければ意味がないんだ。危険を冒すような真似はしない。そんなに気負わなくてもいいさ」

こっちがすこし深刻にし過ぎたのだろう。

パイパーがこれ以上不安がって体が硬くならないよう、笑顔で安心させようとした。

もうすぐ23時をまわったところだ。約10時間ほどの距離を、どれだけ短く出来るだろうか。

生死 1

異変の兆候に最初に気が付いたのは、恐らくアカディアだ。

人造人間達にとって昼と夜の違いなど太陽の有無程度でしかないこの場所では、日付が変わったばかりの深夜帯でも変わらずに動いている。

そのうちのひとりが画面を難しい顔をして見つめていた——フラデーである。

デーマはそんなフラデーを見て、いつものように「どうしましたか」と声をかける。それは彼が何か問題を見つけたから、というより。同じ家に住む飼い猫に顔を合わすたびに口にする挨拶に近いニュアンスだった。

「島の東海岸、今夜はなぜか様子が違うんだ」

「そうなのですか。具体的には？」

「波の高さ、気温に湿度も少し高い。風速の方は……」

「まあ、そういうこともあるでしょう」

「気にしすぎだと思うのか、デーマ？」

「この島では、少しぐらい寝苦しい夜なんて珍しくもないでしょう。そう思いませんか？」

「——そ、そうだね。確かにデーマの言う通りかもしれない」

「結論が出たようですね。では、こちらに来て電圧の調整をお願いします。機械も気温へ湿度で機嫌を悪くするものなので。下手をしたら朝までかかるかもしれません」

デーマが何の興味もいかなかったことでフラデーは自分が興味を抱いたことを忘れることにした。そうすべきなんだ。

しかし——それでいいのか？

気候の変動はこの深夜に突然始まったもので、どこか“人工的な作為されたもの”のようにも思えたのだが。

「フラデー？まだなにか？」

「なんでもない、すぐにテストにかかるから！」

こうしてアカディアは見ることをやめた。

キャプテン・アヴェリーが目を覚ましたのはいつものように日の出まであと少し、という時間だった。

老人になるとトイレと睡眠は嫌でも近くなってしまう。いちど目が覚めてしまふところから寝なおすには、いつものようにちよつとした儀式をしないと難しい。

花の絵がはいったポッドでお湯を沸かし始めると、アヴェリーは港の門の様子を確認する。

アヴェリーが顔を見せると、今夜の見張り役達は軽くうなづいてみせ、何事もないと知らせてきた。それだけわかれば十分だ。

アヴェリーは見張り台へと続く階段を上るのをやめ、今度は灯の落ちている港へと足を向けた。

大昔であればこの時間だと港に船は残らず漁に出ていったといわれているが。いまは明るくなり始めた頃に酒瓶と共に船長たちは沖に出て行つて、酒を飲むついでに仕事をすませている。

彼らは仕事漁のやり方を忘れたわけではない。

その証拠に時々ではあるが。思い出したかのように、または正気を取り戻したかのように。かつての海の男のように動く奴がいるからだ。

しかしそれも確認が終わると、港に戻ってきてまた酒瓶に手を伸ばしてしまふ。希望を再び見失つて――。

「波が高いね、嵐でも来るのか」

係留されている船がいつもより激し目に波間で暴れているように見え、思ったことを口にだしてしまふ。

いえ、そんなわけがない。すぐに意識の下から自分の言葉を否定する。

もし本当に嵐がこの港へと迫っているとすれば、あのアカディアの人造人間から警告というか忠告のようなメッセージが事前に届けられるものだが。そんな知らせは受け取っていない。

それにあいつらの力がなくても、ここにいる海の男達ならば。ひとめ見れば海に起こっている変事をすぐに嗅ぎつけて騒ぎになってしまうはず。だがそれにしても……。

アヴェエリーの中に葛藤が生まれる。

確認するのは簡単だ。

これから酒場にいったって、そこで飲んだくれていていつもの連中の尻を蹴り上げて外に叩きだし。大丈夫なのかと聞き出せばいい。

しかしそれだとこれから1時間はわめき続けなくてはならないし、答えが出る頃にはもしかしたら空が白じんでくるかもしれない。

気合を入れた2度寝の儀式を滞りなく行うなら、やりたくないというのが本音であった。

「寝苦しい夜ってことかね……」

何かを見落としている気がするが、そう考える根拠はなにもない。

船をいつも以上に激しく翻弄し、いつも以上に強く岩に高い波をぶつけている海に背を向け。アヴェエリーは彼女の耳に聞こえるものを気にしないことにした。

|||||

自分の体を揺さぶって起こそうとしているのがキユリーだと理解すると、ケイトは自分の体にまだ昨夜の酒が残っていることを感じて、まずダリイと思った。

「気持ちワルっ、なんなんだよオ」

「起きてください、ケイト」

「昨日の酒がまだ残ってるんだよオ。昼まで寝かせてくれりや大丈夫から、ほっというて……」

寝返りをうったが、そこにクソ^{ニッ}人造人間^クの声がする。

「ダメだ。それじゃあ手遅れになる、おそろくな」

「——あ？なに堂々と女の寝室に入ってるんだよ、爺イ」

まだ寝ぼけていたが、ケイトの声は一気に不機嫌なものとなる。なんなら飛び起きて襲い掛かってもおかしくないような空気が漂い始

めるが、ニツクはまったく動じることにはなかった。

「とりあえずしつかりと体を起こして、目を開けろ」

「あん!？」

いら立つ声を反動に体を起こすと、何かが変だとようやくケイトも理解する。

「嫌な感じ——」

キュリーはケイトが床に脱ぎ散らかした服を集めてくれていて、ニツクは窓際に立ってじつと外を見張っている。

「まず天気の話からしよう。ひどいもんだ、波は荒いまま、放射能を含んだちよつとした雨で嵐になりかけている」

「そんなことで起こした?ぶっ殺されたいのかよ」

「なのに様子がおかしい。陸は静かだ、何の動きもない」

「ならイイじゃん」

わざと下着姿のままケイトはニツクの隣に立つ。

確かに外の天気は最悪のようだ。雨は弱くなったり強くなったりと忙しく変わっているようで、暗く憂鬱な景色はなぜか太陽とは違う黄色の光に塗りつぶされた世界で妙に明るく見える。

「いつまでもそんな格好してないで、服を着て機嫌を直せ。この状況は見た目以上に深刻かもしれん」

「どういうことさ?」

「こうなったのはほんの数十分前。どんどん悪くなっている」

「そうなんだ」

「なのに隣の港や陸地が妙に静かだ。そして問題はな、おそらくこのままだと俺たちはここに閉じ込められて動けなくなるだろうということだ」「?」

「チツ、いい加減しつかりしろケイト。わからないのか、何かに備えるなら。動くなら今しかない」

「それがアタシに何の関係があるのさ」

話が進まない2人の会話に、服を差し出しながらキュリーが助け舟を出した。

「ケイト、ここに残っているのは私たちだけなんですよ」

「そういうことだ。俺は老いぼれた探偵、キュリーは医学者。レオ、アキラ、お前さんのほかに暴れられそうな連中は出払っていいいない。つまり俺たちが頼るのはお前だけ、ということになる」

「はア？なんでそうなるんだよ」

「思い出せ、あんたのボスがこの小島を物騒なものに変えたのはどうしてだ？あの港に閉じこもってる連中のためだと言ってただろ」

ケイトは大きく深呼吸をして、冷静になろうとした。

確かにニツクの言う通りだ。いつもならば自分じゃなく、アキラ、もしくはマクレディやレオ、ガービーなんかが引き受ける役目は。今の状況では戦闘が得意ではない2人ではなくケイトがやるのがお前だ……。

「具体的には、あたしはどうしたらいいと思う？聞かせて」

「ここに残ればとりあえず俺たちの安全は確保できるだろう。防衛システムは今も動いているが、これほど高い放射能の霧が蔓延しているとなると動かなくなる可能性はある。助けも呼べないし、おそらくだが助けを求めても期待できないかもしれないな」

ニツクの考えではどうやらこのままここにどまつていても安全ではないらしい。

「薬品に関しては商会の倉庫にまだ十分にあります。でもこの悪天候ですべてを抱えて移動することは——」

キュリーの言葉を聞くと、ケイトは自分たちの選択肢はほとんどない事に気が付いてしまう。

なら、悩むのはケイト姐さんの趣味じゃない。

「あたしは——すでにの指示に逆らってる。畜生、貧乏くじかよ！」
「そういうのはいいんだ、ケイト。今はお前の指示が必要だ。どうする？」

ニツクは何か起こるかのように言っているが、別にそうだという確証があるとは思えない。少なくとも今は。

しかしこの嵐の中で港に何かトラブルが起こったとすると、この小島に閉じ込められていたら、出来ることは確かに何も無い。

アキラなら、レオなら……あの甘ちゃんたちのお気に召すやり方な

らケイトには想像出来る。

出来るけど——ああ、クソつたれ。マクレデイにレイダーなら満点、新人傭兵としたら半分以下とクソ女には賢い方法とは思えない。どうする？

どうしたらいい？

|||||

まだ早朝にもかかわらず。サカモトは壊れかけたパラソル付きの机にティーセットを置き、椅子に腰かけ。夜明けに近い森林の中にたち込めていた霧が薄くなっていくさまを楽しんでいるかのように過ごしていた。

クロダ達の“処分”は終わっている。後のことを考えたら、そうであってほしいと思ってる。

それが正しく行われたと確認すれことができれば、もうサカモトがこの島にいる意味はない。この機会で不愉快な島の環境を楽しむのも数日だと思えば、愉快的気分には少しはなるかもしれない。

——とりあえずは“初めまして”でいいか。

(そうですね。お互い自己紹介はしていませんでしたから)

——それじゃこのまま“サヨウナラ”でいいな

(いいえ。まず握手をしましょう。それから少し話を。そのどちらも、私たちはやってはいないじゃないですか)

口元に笑みが浮かぶ。ああ、そういうことか。

このサカモトにとっての勝利の瞬間、それをもう一度味わいたくてこんなことをしていたようだ。

“小さな宝箱”ではどちらかという好戦的ではないとされるこのサカモトだが。

しかしだからといって修羅場を恐れて嫌い、背を向けたりなどしたことはない。勝つことに必要なら自分の牙をむける。とはいえ、あの面会に勝算があると理解はしていても。

正面からあの憎悪の塊となった悪鬼と化したアキラと、戦わずに会

話で生き残れたのは2人の仲間……いや、廃棄物らを犠牲にしたとて満足のいくものだった。気分がいい。

連邦に戻れはまずやることは――。

心の中で穏やかな未来の絵図を思い描いている時に、楽しい時間は過ぎていて。それを現実には知らせてくるというのは、よくあることだ。

森の中から、お茶を楽しむサカモトに近づく存在がいた。

訪問者の気配で自分の過去と未来を楽しむ時間が終わったことを知り。サカモトは不機嫌そうに小さくため息をつきながら、冷えてしまった紅茶を口に持っていく。

「なあ、なあっ！おいっ、あんた。よかったよ、ちゃんとここにいられたんだな」

「……」

「俺だ――ちよつと、泥だらけでひどい格好になってるけど。ミゲルだ、ミニッツメンの」

「らしいね」

「なんだよ冷たいんだな。まさか俺達を忘れたつもりだったか？それともだまそうとしたとか」

「俺達？君はひとりしかいないようだが」

「ああ、まあな。今は」そうだ。だから――」

「なぜここに？こちらは君たちの將軍の周りにいる友人の中に、“こちら”を良く思っていないのがいる。だから、よほどのことがない限り接触はしない。するとしてもこちらから。そういう約束だったのでは？」

「当然覚えているさ。それに、俺なら大丈夫だ。あんたのことを誰にも言っていないし、ここに来たことだってあの連中の誰も知らない。俺をナメてやがるからな」

「それを聞いて良かった。安心しました」

口調こそ変わらなかつたが、サカモトの中に徐々に怒りが湧き上がってくる。

連中は知らないだ？リーダーひとりでノコノコやってきておいて

?

「実はまさに緊急事態ってやつになった。あの緑色のクソ共、スーパーミュータントだよ。」

どこにいてもあの筋肉まみれの脳細胞で暴れるあいつら。俺たちは必至で戦ったんだが、あいつらここでもアホみたいな数が出てきてき。それで——」

「負けた」

「いや！ただ勝てなかったただけだ。それで追っかけられ。森の中でつきまわされて困ってる。振り払えなくて、ってこと」

「……」

「そこで俺は思い出したんだ。あんたの事。ここからちよつと先で部下がまだあの連中を引き付けて戦っている、助けてほしい」

「戦闘継続中と。だとすると不思議だ。部隊を指揮しているはずの君が、使者としてここにいる理由は？」

「そりゃ——こういつちやなんだが、あんたにとぼけられないようにするためさ。あんたとの契約、俺達がリスクを負ってるわけで……」
もういい。

素早く服の下から取り出したレーザーピストルを構えると、光の矢が3発。

ミゲルと呼ばれていた頭のない死者は、何かを伝えようとする身振りのまま。崩れ落ちる。

「終わりだ」そうサカモトが呟いた。

ミゲルとその仲間達（ミニッツメン）達はサカモトがクロダらへ知らせはしなかったものの、唯一の援護として用意した策であったのに。あろうことか、この無能な連中は上陸から失敗し、アキラに目的を見抜かれ。クロダ達にはまったく役にたたない。

何ならサカモトの面目を潰すだけではなく足すら引つ張った邪魔な存在として——役目を今、終えた。

もちろんミゲルの部下たちなどサカモトには知ったことではない。どうせこの島のスーパーミュータントらに追い回されているとい

うなら、遠からず遊ぶのに飽きた彼らがきつちりと死体まで含めて面倒を見てくれる。

気分をぶち壊されてしまった。

サカモトは立ち上がったが。その視線は東の空へとむけられた。いつにもまして暗い雲の向こう側から、近くであれば間違いなく特大と評してもかまわないであろう雷の唸り声が聞こえてくる。

——またひとつ、終わったか

考えていた以上にサカモトの帰還予定は早まりそうだった。

|||||

自分にしては珍しい話だけれど、時間の感覚がなくなる宇宙と違い。これから帰る地上には朝と夜があるわけで、今がどんな時間であったか。手元のピップボーイを見ればすぐにわかることなのに、確認していなかった。

だから普通に立っていただけなのに、いきなり足の裏が滑って盛大にひっくり返ってしまった。

こうなると予想もしていなかったせいで両足を振り上げ派手に——それでもなんとか背中から——地面に叩きつけられ、うめいた。

痛覚に耐えながら見上げる空は——なぜかおかしな色をしていた。空を覆う雲からは雨が降っていたが、なのに太陽とは違う不思議な明るさがあった。時間を認識できない。いや、もしかして視覚異常をおこしてる!?

不思議に思いながら、口と鼻から一気に空気を吸い込むと。

いつものような海や人の暮らしを感じるような匂いとは違う。土？泥？とにかくいくつもの匂いが混ざっている不快なもの生ごみのようなもので胸いっぱいにしてしまう。

おかしい、僕はファー・ハーバーへ戻ってきたんじゃないのか。軽いパニックを覚える中、痛みが引いていくのを感じ。だが痛みが消えるまで待てず、僕は強引に立ち上がろうと手近にあった木の机に左手を伸ばす。

それはもつと冷静であつたなら、決してやらなかつた迂闊な行為だつた。

いきなり指先に痛みを感じると同時に、机の向こう側からアキラの腕に飛びついて噛みつくのは幼生のマイアラーク達。腕を甲羅で覆い隠さんとするようにびっしりと張り付いてきた。

あまりに俊敏で、恐ろしく獰猛に噛みついてくる様に恐怖を感じる。

このままのんきに食われたくわないので、“肉を削られている”感覚に背中に悪寒が走る中、急いで立ち上がると僕は無言のまま片腕を振り上げ、机を真つ二つにするつもりで思いつき叩きつける。

まだ完全には引いていない体中の痛みと、新しい痛みが。パニックや恐怖をコントロールする役に立った。

顔をあげた僕の目と耳に入ってきた映像——それは怪物たちが人間を餌として貪る、狂乱の宴が開かれていた。

フアー・ハーバーの猟師たち、町の住人らは口々に咆哮し。迫ってくる海生生物らを振り払ってる。

マイアラーク種が中心となってるのか。

他にはハーミット・クラブ、ガルパー、虫などの姿を確認した気がした。

僕はそれを悪夢だと考えず、必死で現実だと受け入れようとした。だが穏やかな別れから、いきなり地獄の最前線に叩き落とされるというのは。簡単なことじゃない。

「ま、マジかつ。先日の報復ってわけじゃ……」

厳しい目の前の現実エラーを吐き出していた脳は再起動をはじめめるも、体は硬直したまま。ただ惚けたかのように突っ立っていた。狂乱の宴の中で、そんな間の抜けた奴を見つける奴は必ずいるものだ。

僕の死角から横滑りにマイアラークハンターが滑り込む。ちよう

どお互い、僕は口を開いたまま、顔を見合わせて一瞬。噴射益を顔面に直撃した――。

|||||

煉瓦の壁を突き破ってきたアキラは、勢いそのまま壁際までころがっていく。

家の中の壁に寄りかかり、片膝をつく彼は。「オエエエエエっ」と床に茶色な液体を吐き出していく。

噴射益は右顔面を焼き、同時に口の中にも入りこんでしまったのだ。

大ダメージにショックから体を震わせ始めたアキラは、しかしそれでも嫌なものを見てしまう。

アレン・アシュリー。

いつも不機嫌に、アキラたちを島の外の人間だと繰り返して挑発し。恐怖と不信感から視野が心の狭さが、不穏の言動と行動を繰り返していた。

そいつが小さ目なマイアラークののしかかられ、巨大なあぶくにも見える蠢く幼生の群衆に。やや〃生きたまま〃突かれ、貪られていた。

室内の様子から扉が何重にも閉じられているようだ。ということは一ひとりでここに立てこもったのかもしれない。

しかし床下を破壊してマイアラークらは侵入。閉じられた家の中に自分一人しかいなかった……そんなところか。

(こいつら。この野郎っ……)

だとしても自分だって状況は最悪、ひっくり返ってバカやって。大ダメージで痛いやら不快だわ。

しかも宇宙から持ち帰った武器は腰につるしていたレーザーガンだけで、剣はこの大騒ぎでどこかにいってしまっていた。

だがここが武器屋をやっていたアレンの店の中なら何かあるかもしれない――さっそく床になぜかピッチフォークが一本転がって

る。

それに手をのぼそうとしてアキラは自分の体の異変にも気が付いた。

濃い目の霧とおかしな天候ではつきりとは見えなかったが、幼生達に憑りつかれた片腕の傷口の下が光りだしてゐる気がする。そうなる
と鏡がないとわからないが顔と口の中も似たような状態になつて
いるのかもしれない。

だがそれについて考える暇もない！

振り上げたピッチフォークを思いつきり振り下ろす。貪ることに集中してこちらを気にしなかったマイアラークの背中の殻が音を立ててくだかれる。3本の突起は体を貫くだけではなく上下に引き裂き。そのまま動けなくなつていたアレンの胸板をも貫いた。

それまで魚の様に声にならない口を動かしていたアレン・リーは生命の最後の呼吸を終え、死んだ。

これが僕の慈悲、だというつもりはない。生半可に生き残られてはこの後、僕がすることがやりにくくなるから死んでもらつたのだ。

乱暴に家の中の棚を叩き落しながら目的のものを探す。

火炎放射器用の燃料を見つけると、それをアレンとそこから動こうとしないマイアラークラの上に振りかけ。そばに墜ちていた燃えて
いる板を放り込む。

カニになれなかつた幼生共の悲鳴は耳に心地よく。

アキラは武器を求め、アレンの家の中をさらにひっくり返し始めた。

壁に掛けられていたM79グレネードランチャー、改造されたスーパースレツジ、ハーブーンガンが気に入った。

ほかにも大小武器はそろつていたが、全てをここから持ち出す時間はない――。

縄の取っ手が付いた木箱に乱暴に手ごろな武器や弾丸を放り込む、
とりあえずこれでいいか。

いつの間にか、痛みを全く感じていないことに気が付いた。呼吸は
落ち着き、頭の中は信じられないほどはつきりとしている。

いつもの吹き上がる火山のような怒りはないが。冷酷に全てを狩りつくすという決意だけが明確にあった

外の雨が小降りになってきている。

「……ぶっ殺す。ぶっ殺して、終わらせる」

反撃が、この殺戮の役回りには変更が必要だ。

それは今から、ここからはじまる。

|| || || || || || || || || ||

アレンの家にある崩れた壁の中が気になって張り付いていたハンターが。不自然に後方へと吹き飛ぶようにしてすべると、すでに絶命していた。

アキラの放ったフレシエット弾が、エビのような体の中を文字通り粉碎して貫いていったのだ。

アキラは外へ出てくると、手当たり次第に攻撃を開始した。

ハーブーンガン独特の発射音のたびにアポミネーションたちは悲鳴を上げることなく体を粉碎され、次々と絶命していった。その影からは、信じられないという表情の人間たちがいて。アキラの姿を見た。

「立てえ！武器はこのアレンの家にあるぞっ」

リロードしている自分の横を通り過ぎようとする数人の中から、アキラはアレンの取り巻きだった若者に声をかけた。

「お前！お前が彼らをまとめるんだ」

「えっ、俺が!？」

「まだ生きている連中がいる。助けていけ、お前たち自身も互いを守れば大丈夫だ」

「そんな無茶な」

「出口はない！数が減らされたら全滅するだけだ。今は戦って生き延びろ——大物がいるな。どこだ!？」

「港の奥だと思う。最初に扉をぶっ壊して入ってきたから」

「なぜそっちに行った!？」

「戦えなかった——女、子供なんかが集められて。あんたの仲間も」
言われてアキラはようやくやく留守番組の事を思い出した。
そうだ、なんてことだ。うっかりしていた——クソ、キュリー。ま
さか来ていないよな。